

G S 芦 蛩 ！ 絶 对 幸 福 大 作 戦 ！ ！ ！    セ カ ン ド

混 沌 の 魔 法 使 い

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

GS 芦笛！絶対幸福大作戦!!の第二部になります

第一部はGS試験まで、セカンドはスリーピングビューティまでの予定となっております

一部よりも敵や人物の動きを重点的に書いて、仮面ライダーは若干低めで書いていけたらと思っております

それでは混沌の魔法使いがお送りする「GS美神」をよろしく願います

# 目次

|                             |     |
|-----------------------------|-----|
| キャラ設定                       | 1   |
| レポート1 初めの一步                 |     |
| その1                         | 21  |
| その2                         | 29  |
| その3                         | 40  |
| その4                         | 48  |
| その5                         | 60  |
| その6                         | 74  |
| その7                         | 85  |
| 別件レポート                      | 95  |
| レポート2 これは慰安旅行ですか? いいえ、修羅場です |     |
| その1                         | 101 |
| その2                         | 112 |
| その3                         | 123 |
| その4                         | 131 |
| その5                         | 145 |
| プチトトカルチヨ 開幕                 | 154 |
| 別件レポート                      | 164 |
| レポート3 父来る                   |     |
| その1                         | 172 |
| プチトトカルチヨ 結果発表               | 182 |
| その2                         | 189 |
| その3                         | 202 |

その4 | 214

別件リポート | 228

リポート4 保父さん横島

その1 | 235

その2 | 249

その3 | 261

その4 | 273

別件リポート | 286

リポート5 貴女はストーカーですか？いいえ、通い妻です♪

その1 | 292

その2 | 303

その3 | 311

その4 | 322

その5 | 337

別件リポート | 350

リポート6 原始風水盤を発見せよ

その1 | 358

その2 | 371

その3 | 381

その4 | 394

その5 | 406

その6 | 419

リポート7 鮮血のマタドール

その1 | 437

その2 | 449

|                    |     |
|--------------------|-----|
| その3                | 722 |
| その2                | 709 |
| その1                | 697 |
| レポート10 マスコットフライト開幕 |     |
| 別件レポート             | 689 |
| その6                | 675 |
| その5                | 662 |
| その4                | 650 |
| その3                | 637 |
| その2                | 626 |
| その1                | 617 |
| レポート9 神の山を捜索せよ     |     |
| 別件レポート             | 606 |
| その6                | 594 |
| その5                | 582 |
| その4                | 570 |
| その3                | 557 |
| その2                | 542 |
| その1                | 529 |
| レポート8 戻って来た日常      |     |
| 別件レポート             | 521 |
| その6                | 506 |
| その5                | 494 |
| その4                | 480 |
| その3                | 462 |

別件リポート

その7

その6

その5

その4

その3

その2

その1

リポート13 常世のだいそうじょう

別件リポート

その3

その2

その1

リポート12 束の間の平穩

別件リポート

その5

その4

その3

その2

その1

リポート11 新たな一歩

別件リポート

その6

その5

その4

976

963

951

937

923

910

898

888

880

868

855

845

838

824

813

802

789

778

771

761

748

735

その  
1  
1

その  
1  
0

その  
9

その  
8

その  
7

その  
6

その  
5

その  
4

その  
3

その  
2

その  
1

リ  
ポ  
ー  
ト  
1  
6  
竜  
の  
魔  
女

その  
7

その  
6

その  
5

その  
4

その  
3

その  
2

その  
1

リ  
ポ  
ー  
ト  
1  
5  
変  
る  
未  
来

その  
4

その  
3

その  
2

その  
1

リ  
ポ  
ー  
ト  
1  
4  
嵐  
の  
前  
に

12341221120611941181117211621149113711271115

1103108910731062104910361026

10171005 995 984

別件リポート

別件リポート

リポート17 嵐を呼ぶ男

その1

その2

その3

その4

その5

その6

別件リポート

別件リポート

リポート18 福の神 頑張る

その1

その2

その3

その4

その5

別件リポート

リポート19 魔狼の咆哮 その1

その1

その2

その3

その4

その5

その6

12511244

13441337132613111297128012701258

141814041388137513631354

148114681457144514321423



その7

\_\_\_\_\_

15091495

その8

\_\_\_\_\_

15091509

プチトトカルチヨ

\_\_\_\_\_

15201525

別件リポート

\_\_\_\_\_

15251533

リポート20 狼の居る日常 その1

その1

\_\_\_\_\_

15331546

その2

\_\_\_\_\_

15461561

トトカルチヨ結果発表

\_\_\_\_\_

15611582

その3

\_\_\_\_\_

15671597

その4

\_\_\_\_\_

15821609

その5

\_\_\_\_\_

16091623

その6

\_\_\_\_\_

16231634

その7

\_\_\_\_\_

16341649

その8

\_\_\_\_\_

16491656

別件リポート

\_\_\_\_\_

16561664

別件リポート

\_\_\_\_\_

16641685

リポート21 死線(デッドライン)のヘルズエンジェル

その1

\_\_\_\_\_

16851708

その2

\_\_\_\_\_

17081718

その3

\_\_\_\_\_

17181730

その4

\_\_\_\_\_

17301741

その5

\_\_\_\_\_

17411751

その6

\_\_\_\_\_

17511761

その7

\_\_\_\_\_

17611771

別件リポート

\_\_\_\_\_

17711781

17811796  
17961817  
18170816  
96168516  
85167416  
741664

|     |                                  |
|-----|----------------------------------|
| その8 | 20422021200519891975196319481933 |
| その7 |                                  |
| その6 |                                  |
| その5 |                                  |
| その4 |                                  |
| その3 |                                  |
| その2 |                                  |
| その1 |                                  |

レポート24 反逆者達の進軍

|      |                                          |
|------|------------------------------------------|
| その10 | 1919190418871870185418411825180918001789 |
| その9  |                                          |
| その8  |                                          |
| その7  |                                          |
| その6  |                                          |
| その5  |                                          |
| その4  |                                          |
| その3  |                                          |
| その2  |                                          |
| その1  |                                          |

レポート23 妙神山

|     |                  |
|-----|------------------|
| その4 | 1778176617541745 |
| その3 |                  |
| その2 |                  |
| その1 |                  |

レポート22 いざ、妙神山へ

その9

\_\_\_\_\_

2063

その10

\_\_\_\_\_

2082

その11

\_\_\_\_\_

2098

レポート25 横島家の非日常 その1

その1

\_\_\_\_\_

115

その2

\_\_\_\_\_

129

その3

\_\_\_\_\_

140

その4

\_\_\_\_\_

157

その5

\_\_\_\_\_

172

その6

\_\_\_\_\_

181

別件レポート

\_\_\_\_\_

2193

レポート26 妖怪病院

その1

\_\_\_\_\_

2197

その2

\_\_\_\_\_

2206

その3

\_\_\_\_\_

2217

その4

\_\_\_\_\_

2228

その5

\_\_\_\_\_

2239

その6

\_\_\_\_\_

2251

その7

\_\_\_\_\_

2265

その8

\_\_\_\_\_

2278

その9

\_\_\_\_\_

2292

その10

\_\_\_\_\_

2304

レポート27 同窓会

その1

\_\_\_\_\_

2314

その2

\_\_\_\_\_

2325

|                          |     |     |     |     |     |                                                              |        |      |      |      |      |      |     |     |     |     |     |     |     |     |     |           |     |     |
|--------------------------|-----|-----|-----|-----|-----|--------------------------------------------------------------|--------|------|------|------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----------|-----|-----|
| その6                      | その5 | その4 | その3 | その2 | その1 | レポート29                                                       | 別件レポート | その14 | その13 | その12 | その11 | その10 | その9 | その8 | その7 | その6 | その5 | その4 | その3 | その2 | その1 | レポート28    | その4 | その3 |
|                          |     |     |     |     |     | 新しい生活                                                        | 魔界での激戦 |      |      |      |      |      |     |     |     |     |     |     |     |     |     | 切り開け、己の未来 |     |     |
| 262626132601258925762563 |     |     |     |     |     | 255225422529251525012486247024542440242424092394238323722361 |        |      |      |      |      |      |     |     |     |     |     |     |     |     |     | 23492337  |     |     |

リポート30 陰陽寮

その1

その2

その3

その4

その5

その6

トトカルチヨ 予告

その7

リポート31 サイド東京

その1

その2

トトカルチヨ 絶対に興奮してはいけない横島家24時 朝編

2750

第231話

『トトカルチヨ 絶対に興奮してはいけない横島家24時 夜編』

2770

2761

27412731

27192715270326892676266226502639

## キャラ設定

【セカンド編 登場人物紹介】 ※1部から設定が変化したキャラもこちらにて加筆修正しております

横島忠夫 リポート1より

一部での蛭との出会いや、小動物とのふれあいにより煩惱が子煩惱に変化しつつある。そのせいか、やや天然属性を獲得するに至った。動物や自分よりも幼い相手に好かれやすい体質は徐々にパワーアップしており、蛭や美神の頭を悩ませる事になっている。原作の天性の反射神経や動体視力が修行によって大幅に強化されており、攻撃を見てからかわすと言う普通では信じられない技術と、牛若丸や信長、そして沖田に教わった事を独自に昇華させており、防ぐのも回避するのも難しい独自の体術を習得し始めている

鮮血のマタドール【リポート7】との戦いの中で2つの眼魂による暴走に近い強化フォームを使用可能としたが、その強力な力の対価としてか、闘争本能の肥大や魂に神魔の干渉を受けているなど不安定な魂の状態になっている

芦笛 リポート1より

今作のメインヒロイン……なのだが、自分よりもぐいぐい行く他のヒロインにやや遅れがち、横島への好感度も横島の好感度もぶつちぎリトップなのだが、肝心な所でへたれる残念ヒロインとなりつつある、だがその全ては前の時間軸での悲恋が理由であり、急いで動きすぎ、今の居心地のいい状況を壊すのを恐れているというのが大きな理由となっているようだ

美神令子 リポート1より

GS試験でのガープ強襲から横島と蛭を守らなければと言う想いが強くなっており、横島と蛭を守る為の投資には躊躇しなくなった（依頼者に対する金銭の要求もやや丸くなった）琉璃、冥華と協力しつ

つ、横島の情報の隠蔽に尽力している。だがその代わりに厄介すぎる冥華に貸しを作っている事が最近でのややストレスの種となっているようだ

おキヌ リポーターより

真っ黒く病んでる巫女さん幽霊。最近では幽霊と言う立場で横島の家同居している「信長」や「牛若丸」にも後れを取っていて

生き返りたいと想うが、記憶が無くなるかもしれないのは怖いとどうすれば良いのか悩んでいる節がある、だがその悩みのせいか黒い部分と病んでる部分が控えめになりつつあり、横島の好感度が上がってきていたりする

シズク リポーターより（元ネタおまもりひまり）

横島を見極めるという目的で横島の家に移り込んだが、今では横島に対して過保護気味の保護者と言う立ち位置になりつつある

見た目完全ロリだが、竜神で水神と言う二重神性の持ち主であり、その戦闘能力と知識、あとついでに料理や裁縫と言った家事のスキルも非常に高く、横島がロリオカンと呼ぶのも大して違和感がない。現在は料理と経済と言う観点で横島のやり繰りをしており、家主の横島を立てつつも、時に優しく、時に厳しく横島の家を管理している

織田信長 リポーターより（元ネタFGO）

ノスフェラトウ事件の時にカウンセラーとして現界した英霊。本来はそのまま消滅するはずだったが、現世が楽しいのと、横島を気に入ったので居候として横島の家に移り込んだ。見た目は少女だが、その口調はやや爺臭い。性格は明るく、お調子者だが戦国大名「織田信長」の名に偽りは無く、頭の切れと回転は恐ろしいほどに早い。ノスフェラトウの撃破によって本来の霊格を取り戻し、戦闘力も上級神魔に引けを取らず、むしろ相手が神魔であればより強い力を発揮する神殺しでもある。メロンパンを好み、美神の除霊の助っ人などもする

が、その代わりにメロンパンを要求する。だがメロンパンで破格の能力を持つ英霊の力を借りる事が出来る事を考えれば、それは安すぎる対価だろう。

牛若丸 リポート1より（元ネタFGO）

ガープに操られていた義経から分霊した幼い時の義経事牛若丸。霊体のダメージと霊力の消耗が激しく、操られてからかなりの時間が経過しているが、いまだに霊体化出来ていない。眼魂の姿で行動しているが、英霊として名を馳せたその実力は高く、直接戦闘に参加することは出来ないが、その戦術眼と戦略は健在で横島の体術の師匠などをしながら霊体の回復を待っている。現在はなんとか霊力で眼魂のまま空中浮遊できるほどには回復したので、霊体化出来るまで回復するのはそう遠くないだろう（リポート11現在）

タマモ リポート1より

横島家のマスコット兼ヒロインと言う微妙すぎる立ち位置に収まっている九尾の狐。尻尾は八本目まで戻っているのだが、9本目が戻る予兆なのか、強い睡魔に襲われている事が多く眠っている事が多い、リポート3父来るにて精霊石で人化出来る事が判った。正し、精霊石による人化は身体に負担が掛かる為。1度人化した場合、数日のインターバルが必要となる

チビ リポート1より

第1部で拾ったグレムリンの赤ちゃんが成長した姿。通常なら既に成体となっている時期だが、横島の家は霊力、妖力、神通力に満ちており幼年期（ハムスターサイズ）のまま強い力と知性を持つ変異体へと進化した。横島には非常に愛想が良いが、他人に対する警戒度は依然高いままである、本人の頑張りもあり強さと可愛さを兼ね備えたマスコットへと成長した。リポート10にて六道で開催された第1回マスコットファイトにてナナシを下し、初代覇者となった



※チビの進化の系譜

グレムリンベビー↓グレムリン（変異体）↓グレムリンロード↓グレムリンジェネラル（現在）

モグラちゃん リポート1より

横島家のマスコット3匹目。大きくなる、小さくなる、竜に変化するなど多才な技能を持つ土竜の赤ちゃん。性格はやや警戒心が強いが、懐けば人懐っこい面を見せる

リポート7 鮮血のマタドールにて、竜として成長する時期に至り妙神山へ戻る事になった。妙神山での修行で非常にパワーアップしており、妙神山の鬼門をフルボッコするほどの戦闘能力を獲得したが、人化の習得はやや遅れがちとなっていて、横島の所に帰りたいでやきもきしながらロンの元で竜気のコントロールの修行を日々行っている

神宮寺くえす リポート1より（元ネタおまもりひまり）

GS試験後から横島への執着が非常に強くなった。横島には非常に優しくなったが、その反面他の人間に対する攻撃性が増した。横島がいるからという理由で美神からの助っ人要請を断らなくなり、美神の除霊に助っ人として同行することも多い。横島のあまり人を疑わないと言う性格には不安を抱いており、騙されたり利用されたりしないか？と横島を過度に心配している様子。枢曰く、人間は恋をすると性格が変わるが、くえすほど性格が変わるのは本当に面白いねとの事

玄奘三蔵 別件リポート 星の三蔵ちゃん、白竜寺を再建するより

西遊記で名を馳せた非常に得の高い僧侶のだが、日常時はとんでもないポンコツ属性で白竜寺の面子に非常に負担を掛けているが、修行となれば、その英知と知識を生かし、厳しくも優しく白竜寺の復興を頑張っている。なお陰念が不運に巻き込まれるのは白竜寺全員の共通認識となっている

伊達雪之丞 別件リポート 星の三蔵ちゃん、白竜寺を再建するより

GS試験にてガープに操られていた事を認められ保護観察処分ではあるが、白竜寺へ戻された。GS試験で顕現した悪魔の影響を受けており、氷雪系の霊能にやや目覚めかけてはいるが、本人の性格もあり完全覚醒までの道程は非常に遠い物となっているだろう。横島との再戦を強く望んでいるが、今はそんな事が出来る状況ではないと判っているので三蔵ちゃんの元での修行に励んでいる

リポート6 原始風水盤を発見せよにて、仮GS免許の発効の為に神魔の依頼を受けて香港へと旅立ち、横島達ならば大丈夫と言う信用の元原始風水盤の針を日本へと郵送したが、ベルゼバブによって強奪され再び香港へと旅立つことになった

リポート7 鮮血のマトドールにて、魔人マトドールとの戦いを経て仮免許を発効されたが、圧倒的な力を持つマトドールとの戦いで自分の未熟さを思い知り、更に横島のみ強い負担を掛けた事を悔いており、より強くなる事を誓った

陰念 別件リポート 星の三蔵ちゃん、白竜寺を再建するより

ガープ襲撃事件の折の被害者でもあり、加害者でもあると言う非常に複雑な立ち位置にいる。横島の強制除霊によってチャクラなどがズタズタになってしまい。霊能者としての再起は絶望的と言われている。三蔵の元で修行に励み、霊能者としての復活を夢見ている

言動が荒く誤解されがちだが、情に厚く義に熱い熱血漢

犬塚クロ リポート3父来るより

原作ではシロの病を治す為に天狗と戦い片目を失っていたが、その戦いに横島が乱入したことで後日天狗との再決闘になった。愛娘も病も直り何の憂いも無く天狗との決闘に挑んだクロはその戦いに五体満足で勝利し、人狼の里での最強の剣士という立ち位置を確立させ

た。

横島に礼を言うために東京へ訪れたが銃刀法違反で逮捕された後に横島の家を訪れ、横島と百合子と言うよき息子と妻がいるのに不倫を繰り返す大樹に激怒し追い回した。騒動を起こした後はシロと共に東京を後にした

犬塚シロ リポート3 父来るより

名前の通りクロの娘。クロが天狗に薬を求める理由となった危険な発熱は逆行の記憶を思い出したことによる知恵熱。記憶を取り戻した後は横島に会いたくてクロに懇願し、親子で東京を目指して旅立った。自分の知っている横島とは雰囲気は違うが、それでも優しく、自分と父の恩人と言う事もあり横島に非常に懐く事になった。一度は東京を後にしたが、また横島に出会う為に里で力を付け、脱走してでも横島の所に行く事を考えている

ブラドール伯爵 リポート3 父来るより

原作と異なり、チューブラーベルの寄生によって目覚め操られていたが、美神達の活躍でその肉体支配から脱した。しかし強引な除霊だったため長い間療養しており、やっと傷が治り日本に来日した。吸血鬼特有の身体能力に中世の時代から生きることによる深い英知と魔法の知識を持ち、その実力は上級神魔に匹敵するとまで言われた最強の吸血鬼。自分を助けた横島への礼と、GS試験でガープが語った妻と養父の豹変の理由を知るために来日。大樹の事を知り、憤怒しクロと共に大樹を追い掛け回した。その後大樹に不義を行えば電撃が走る呪いを掛け、唐巢神父の教会の1室を完全に遮光使用にリフォームしその部屋に居住した。ピエトロに吸血鬼の力の使い方指導し、恋愛感情が暴走しているシルフィーに頭を悩ませながらも、日々を幸せに過ごしている

ブリュンヒルデ リポート4 保父さん横島より（元ネタFGO）

GS試験のうちに魔界正規軍から横島達の護衛及び、ガープ討伐の命を受けて人間界にやってきた戦乙女。魔界正規軍総司令「オーディン」の娘であり、役職は魔界正規軍副指令と言う立場。妹に「ワルキューレ」弟に「ジーク」がいるが、2人からは恐ろしい姉として恐怖の対象となっている。穏やかなで清楚な美女なのだが、英雄と認められた相手には病的に執着する悪癖があり、今現在は横島に強い興味を抱いている

アリス リポート4 保父さん横島より（元ネタ女神転生）

魔界の重鎮「ベリアル」「ネビロス」両名の愛娘でありゾンビ。ゾンビではあるがベリアル、ネビロスの丹精込めた術により腐敗を起こさず、その姿のまま存在し続ける存在。天真爛漫で明るく元気でそして無邪気な美少女ではあるが、友達が皆ゾンビなので友達だから死んで欲しいと言うなど無邪気さゆえの悪意も持ち合わせている。横島の事をお兄ちゃんとお変慕っており、リポート4でネビロス、ベリアルの両名が魔界正規軍に拘束されたおり、横島に預けられた。動物と会話する能力を持ち、チビ達とも非常に仲がいい

ハーピー リポート4 保父さん横島より

神魔の逆者に呪いの首飾りを身に付けさせられ、暗殺者となっていた魔族。本来は穏やかな性格で、料理や裁縫を好むという家庭的な面が強い女性。両腕を翼に変えた翼人の姿と美しい女性の2つの姿を持つ、ハーピーを慕う小鳥によって横島達に助けを求め、横島の機転によって神魔の両名を欺き、ブリュンヒルデ達の助力の下呪いの首飾りから開放された。その後はハーピーを気に入ったアリスによって、アリスの世話係としてネビロス、ベリアルの両名に雇われた

美神美智恵 リポート4 保父さん横島より

不慮の事故により、蛭の時代から逆行してきた。逆行の知識を生かして、前回よりもいい結末を目指している。アシュタロスを初めとし

た神魔と協力を取り、自分の人脈を生かして様々な情報を集めている。なお原作よりも丸い自分の娘に横島と螢が良い影響を与えたのだと非常に安堵している

#### ジーク 別件リポート神魔会議

魔界正規軍に所属する青年魔族。オーデインの息子ではあるが魔族よりに転生しており、オーデイン、ワルキューレとは姿が大幅に異なる。最高指導者が召喚した英霊「フローレンス・ナイチンゲール」によって意識を刈り取られ、強制的に病院に叩き込まれた

フローレンス・ナイチンゲール 別件リポート神魔会議より（元ネタFGO）

最高指導者が召喚した英霊。クリミアの天使の異名から心優しい女性を想像していたのだが、殺してでも治療をしようとするでもない狂戦士思考の持ち主だった。行動は非常に荒っぽいのが、その治療の腕は本物、これで性格が穏やかならば即横島の元に派遣されたが、その性格ゆえに派遣は保留となり神魔軍での治療を行っている。なお神魔から恐怖の存在として認識されているのは言うまでも無い

鬼道雄一 リポート4 貴女はストーカーですか？いいえ、通い妻です♪より

鬼道家の家長ではあるが、既に没落し、かつての名家としての面影すらなく、京都の山中のボロ小屋で暮らしている。かつて冥華に12神将を賭けた決闘を挑み破れ、完全に見下された事から六道を逆恨みに近い形で憎んでいる。平安時代では帝使えの優秀な術師だったが、とある一件から没落した。その理由は清姫により呪いによる物もあるが、雄一自身の鬼道家の思想による物が大きな理由を占めている。現在は精神異常者として幽閉されている

鬼道政樹 リポート4 貴女はストーカーですか？いいえ、通い妻です♪より

名前の通り雄一の息子。やや影のある長身美男子、虐待に近い灵力の修行を雄一によつて施されており着物の下は傷だらけである。

修行の時以外は部屋に閉じ込められていたが、自身の使い魔である夜叉丸を支えにし、精神を維持していた。情報などを一切遮断された生活をしていたため現在の情勢などには疎いが、霊能者としては非常に有能で六道の下で保護観察処分になっている。

夜叉丸は12神将と異なり人型の式神で、他の式神を武装として装備する能力を持つ。通常時も刀を使いこなし、符術師である鬼道の前衛を務める。現在は鬼道が保護観察処分のため、式神札の姿で冥華に預けられている。

清姫 リポート1より (元ネタFGO)

平安時代の陰陽師高島の下で一時期暮らしていた竜族の少女。竜神王の系譜に名を連ねる高貴な身分なのだが、高島を処刑されたことに怒り狂い、平安京を炎の海にした罪により幽閉されていた。ガープの手ほどきにより牢から脱したが高島と瓜二つの横島を見て、横島を高島の転生者と判断し、横島に強い恋慕を抱いた。ヒヤクメの元での保護観察中に自身を襲おうとした竜族の青年を去勢し、横島の下へ逃亡。再び天界へと戻されたが、竜神王が自身の落ち度を認め保護観察が終わり、その後は天界の屋敷で何百人と言う竜族を護衛にして暮らしているが、姫に相応しくない陰行術を生かし屋敷を脱走し横島の元へ向かう。横島を影から見つめるのも好きで本人曰く「隠密的にすら見える献身的な後方警備」と言う名のストーカー行為をしつつ、我慢しきれなくなったら横島家に突撃するなど、自由気ままに日々を過ごしている。なおかなり行け行けの性格だが、逆に攻められるとうろたえるなど純情な面もある。

ワルキューレ リポート6 原始風水盤を発見せよより

魔族側の逆行の記憶を持つ横島との早い再会を願っていたが、自身の姉であるブリュンヒルデが横島の護衛にいたり、美智恵の護衛を任されたりと色々と不憫な立場にある。香港での横島との再会を夢

見ていたが、やはり今回も邪魔が入りよこしまと出会う前に香港を後にした。色々と不憫すぎる過ぎる人物である

ベルゼバブ リポート6 原始風水盤を発見せよより

神魔大戦のおりにベルゼブルに魔装術を与えられた下級魔族の1体。他の下級魔族が与えられた力に耐え切れず自滅する中。ベルゼバブは自身こそが真の蠅の王であると思いつく事によって自我を保ち続けていた、ガープによって狂神石を与えられ、魔力を増大させ、香港での原始風水盤の起動を命じられていたが、体のいい生贄であり、マタドールが復活した際には目障りと言う理由で消滅させられた

魔人ペイルライダー リポート6 原始風水盤を発見せよより(元ネタ女神転生)

ガープ達による原始風水盤の起動を利用し、自らが仕える魔人姫の復活を目論見香港で暗躍している。怪馬に騎乗したローブ姿の骸骨で非常に強力なネクロマンサーであり、死の権能を持つゆえに生物に対して非常に有利になると言う特性を持つ。全ては魔人姫の思うままという考えであり、今の時代で神魔と事を構えるかはまだ決まっておらず、魔人姫の復活のために動いているが、横島達とも、神魔とも今の段階では事を構える気は無い様子だ

ルイ・サイファー リポート6 原始風水盤を発見せよより(元ネタ女神転生)

神魔の最高指導者の両方を経験したと言う恐るべき力を持つ墮天使。本来の名前は「ルシファー」だが、引退と共にルイ・サイファーと名乗り、神魔の陣営を面白おかしく引つ掻き回す事を楽しんでおり。色んな意味で神魔から恐れられている人物、青年、老人など様々な姿を持つが、今は金髪の美しい少女の姿を好んでおり、清楚なデザインの青いワンピースと白い日傘と見た目は完全に令嬢と言う感じである。神魔が注目している横島に興味を持ち、人間界へと向かった。彼女の号令で動く神魔や魔獣は万を超えるが、直属の部下として

「ベルゼブル」「ルキフグス」の両名がいる。

ベルゼブル リポート6 原始風水盤を発見せよより（元ネタ女神転生 容姿イメージネギまのエヴァンジェリン）

魔界の重鎮であり、真の蠅の王という異名を持つ恐るべき力を秘めた最上級魔族。今の神魔の争いをくだらないと断じ、隠居していたがベルゼバブの動きを確認し表舞台に出てきた。有名な姿は漆黒の全身鎧だが、その中身は幼子と言われても仕方ない身長 of 幼女。この姿を知っている神魔は数少ない。知識もさることながらその戦術、魔術も恐ろしい速度を持つ、なお神魔が恐れるルイ・サイファーの直属の部下であり、彼女の無茶振りに日々胃を痛める毎日を過ごしている

リポート7 鮮血のマトドル後はルイ・サイファーが横島を気に入ったという理由で日本に配属され、横島の護衛を勤めている。人間の姿の時は「高城雅」と名乗っている

近畿剛一↓近藤銀一 リポート7 鮮血のマトドルより

横島の幼馴染の青年。アイドルと俳優として活躍しており、香港には映画撮影に訪れていた。大阪にいた時は横島の親友であり、今でも横島の事を横つちと呼び友達だと思っていた。第1部のフィルムの中の剣士で意図せず映画デビューした横島の事を知っていて、横島もアイドルとしてデビューしていたんだなと思っていた。マトドルとの戦いの中で横島と意図しない再会をし、幼い時とお互いの姿が変わっているのにも関わらず、お互いを認識し、今もなお強い友情を見せた

リポート8 戻って来た日常にて横島を自分の事務所に誘うなど、また横島と馬鹿をやりたいと思っっている節がある。今のアイドルとしてのあり方にうんざりしており、横島の家遊びに行きたいなど時折電話で横島に愚痴っている

魔人マトドル リポート7 鮮血のマトドルより（元ネタ女神転生）



原始風水盤の起動によって復活した魔人の1柱。赤いカポータと細身のスパード。そして豪華な装飾に彩られた衣装に身を包んだ骸骨

卓越した剣術、風を利用した魔術、更に治療魔術まで使いこなす。戦闘においては魔人の中でも上位に位置する剣闘士。魔人は神魔の魂を砕く能力を持っており、本来なら時間を置いて復活する神魔を完全に殺す事が出来る存在でもある。魔人達が神魔の天敵と恐れられる中、戦闘狂のマタドールは魔人の中でも更に恐れられる存在となっている。血のアンダルシアと言う剣術を必殺技としており、大多数を薙ぎ払う赤い衝撃を放つ物と超神速の連激を叩き込む2つの物を使いこなす

横島の事を未熟な同胞と呼び、その力を覚醒させる為に横島を激怒させ、マスタードラゴンの開眼へと導いた

横島との戦いの中。勝利を確信し、剣を納めたが横島の決死の一撃を見て、自らの敗北を認め横島に勝利するまでは神魔と戦わぬと言う宣言をし、香港の地を後にした。その後は魔人姫にも絶縁状を叩きつけ、魔人陣営から離脱した

聖マルタ リポート7 鮮血のマタドールより（元ネタFGOより）

ドラゴン退治の聖女と名高い聖人。横島の護衛として天界から人間界に派遣された、聖女ではあるが快活でハキハキとした地の性格と聖女としての穏やかな口調を使い分けているが、結構な頻度で素の性格が表に出てしまう。聖句などでの浄化も英霊だけあり非常に高レベルなのだが、性格的に合わず霊波を込めた拳による物理的除霊を得意とする。現在は六道女学院で霊的格闘の教員として働いている。素でも問題なく受け入れられているため転職かもしれないと思っっている模様

魔人レッドライダー リポート7 鮮血のマタドールより（元ネタ女神転生）

魔人姫の復活と共に復活した魔人の1柱。巨大な大剣をその手に持ち、赤い怪馬に跨ったローブ姿の骸骨。ペイルライダー、ホワイトライダー、ブラックライダーの4魔人で終末の四騎士と謳われる魔人。争乱を司り人間界に闘争を巻き起こす、その権能の通り非常に好戦的な性格であり細かい事を考えるのは他の3人の役割と考えている節があり、戦い以外の場面では余り役に立たない凶暴な性格ではあるが、魔人姫の意にそって動くなど乱暴なだけの性格ではない。マタドールと横島の戦いを見ていて、横島の事を軟弱者と罵ったが、性格的には横島のような人間は決して嫌いではなく、他の2人に突っ込まれうるさいと怒鳴り返した

魔人ホワイトライダー リポート7 鮮血のマタドールより(元ネ  
タ女神転生)

無数の目のある白馬に跨り、王冠と弓矢を手にした魔人。絶対なる勝利の権能を司る、物静かな性格をしており他の3人と比べ無口な性格。魔人姫に予言を授ける事を己の使命とし戦うことは無いが、その理由は己が戦場に立ち、味方をした陣営が必ず勝利すると言う権能ゆえに魔人姫から戦場に出ることを禁止されているからである。戦闘スタイルとしては聖句、洗礼詠唱などの呪文攻撃に、手にした弓による狙撃であり中間距離と遠距離に特化している

魔人ブラックライダー リポート7 鮮血のマタドールより(元ネ  
タ女神転生)

天秤を手にし、黒い怪馬に騎乗した魔人。飢饉を齎す能力と地上世界の4分の1を支配する権利を持ち、相手が人であれば回避する事の出来ない死を与えるとと言う能力まで兼ね備え、対人間という側面で見ればブラックライダーは最強の存在である。だが本人は人間を殺す事を余り好んではおらず、神魔との戦いならば喜んで戦に出るが、人間相手では気が乗らないという理由で戦いに出ることは非常に稀である

魔人姫 リポート7 鮮血のマタドールより (元ネタ???)

復活した魔人達の頭領。魔人姫の名の通り、性別、姿共に女性だと思われるが、詳しい詳細は不明。以前の神魔との戦いを暇つぶしと断言するなど、独自の考えを持つ。ガープが非常に執着していたが、その姿を見せる事を嫌ったペイルライダーによってガープが到着するよりも先に香港を後にした。今は現在の地球を観察している、彼女に仕える魔人のうち「笛吹き」は行方不明となっている。と言うかそもそも姫である彼女を頂点にこそしているが、統率などまるで取れていないのが魔人陣営の実態である

芦・蓮華 リポート7 鮮血のマタドールより

あげはから遅れる事数ヶ月やっと目覚めた芦家の次女。本来はあげは同様逆行の記憶は持たないはずだったが、何故か断片的な未来の記憶と逆行の記憶を持って目覚めた。横島達を香港から呼び戻すと訴え、意識を失って倒れた

ヒヤクメ リポート8 戻って来た日常より

小竜姫同様逆行の記憶を持つ神魔。未来の己との融合を既に果たしており、原作よりも能力が全て1ランクUPしている。ただし、そのせいで仕事を大量に与えられ、やや社畜気味。横島が昏倒したと聞き、横島の魂の修復に着たが、横島の状態が思ったよりも悪く、神魔眼魂を使わせないと忠告し天界へと戻った。その後横島と全然話をしてないと涙したのは言うまでも無い

セイレーン リポート8 戻って来た日常より

美神の除霊依頼で出会った水場の精霊。本人が歌を歌いたいただけと言う願いも有り、横島が銀一に紹介し、アイドルデビューとなった。精霊である事を公表しているが、その整った容姿と霊力を使わなくても圧倒的な存在感を放つ歌声にトップアイドルになるまでそう時間は掛からなかった。事務所を紹介してくれた横島に強い感謝を抱い

ており、時折ライブチケットを郵送してくる

殺生院キアラ リポート8 戻って来た日常より (元ネタFG  
O)

冥華が呼び寄せたカウンセラー。ゆるくカールが掛かった黒髪の女性。穏やかな性格で常に笑みを浮かべて包み込むような母性を持ち合わせている。山奥で暮らしていたため東京に詳しくなく、迷子になっている時に横島と出会い六道女学院行きのバス亭まで案内された。聖女と呼ばれる人物が持つ魂構造をしており、人間ではあるが神魔に近い雰囲気を持っている

アン・ヘルシング リポート8 戻って来た日常より

ヴァンパイアハンターとして名高い、ヘルシング伯爵の孫娘なのだが、吸血鬼のピートに恋している少女。明るく元気なのだが、とんでもないうっかり属性を持ち合わせており、お土産を渡すつもりがにくパウダーを散布するなど、ピートにとっては致命的に相性が悪いが、自分を慕ってくれているので無碍にも出来ないと言う厄介な立ち位置にいる。霊具工学に秀でた才能を持っており、六道女学院に留学生として入学した

美衣 リポート9 神の山を搜索せよ より

ガープ達によって打ち倒された神獣が居た山で住む猫の妖怪。神獣に仕える一族で、先代の巫女でもある。息子のケイと、姪の緋鞠の3人で暮らしながら山を守っていた。最初は横島達を警戒していたが、能天気な横島の雰囲気巻き込まれ、気が付けば横島と川原でバーベキューをしていた。事情を聞いた後は横島達に協力し、神獣の社の場所を緋鞠に案内させた

ケイ リポート9 神の山を搜索せよ より

美衣の息子。外見年齢は7歳ほど、横島をあんちゃんと呼んで懐き、短い間だったが横島と楽しく過ごした横島が帰る間に残してくれた釣り竿や竹とんぼはケイの宝物となっている

緋鞠 リポート9 神の山を搜索せよ より(元ネタおまもりひまり)

神獣に仕える巫女であり、化け猫。外見年齢は16〜18歳ほど。美しい黒髪と凛々しい目付き、そして豊満なプロポーションと間違はなく美少女と言えるのだが、口調が些か古く侍口調。妖怪ではあるが、霊刀を用いた戦闘を得意としており、猫の俊敏性と反射神経から繰り出される刀の一撃は美神を持ってしてもギリギリ回避するのがやっとだった。霊能は頭で理解しているのではなく、感覚で理解しており霊視などが使えないなど穴は多いが、美神・くえすの両名からGS試験に出れば間違いなく合格すると言われるほど。山の中で暮らしているがゆえに今の日本の状況などを知らず、このまま山の中にいて良いのかと悩んでいる素振りを時折見せている

うりぼー リポート9 神の山を搜索せよ より(元ネタおまもりひまり)

猫又美衣とケイの棲む山で横島が出会った手のひらサイズの小さな猪。空腹で弱っていたのでチビ用のりんごを与えたら懐いたので連れて帰って来た。愛嬌たっぷりな仕草を振りまき、妙神山に帰ってしまったモグラちゃんの代わりの友達としてチビの友達となった。妖怪なのか、大きくなったり、小さくなったり、挙句の果てに増えたりする奇妙な猪。なお神獣の転生体では?と言う疑いがもたれている

神代琉璃 リポート10 マスコットファイト開幕(元ネタIS)

青い髪と真紅の瞳と言う神秘的な容姿の少女。歳若い身だが、GS協会会長と言う立場と神卸しの一族である神代家の当主と言う役職についている。ガープ出現によってガタガタになってしまった日本

のGS協会を立て直すことに尽力しており、徹夜や家に帰れないのはザラと言う非常に辛い生活を送っている。若いから議員や、他の霊能組織に舐められているが、冥華を持ってして女帝の貫禄が有るといわれるほど、生まれたときから人の上に立つ才能を持った少女である。

氷室舞 リポート10 マスコットファイト開幕（元ネタIS）

旧姓「神代舞」名前の通り、琉璃の妹に当たる。琉璃と異なり、水色の髪とやや薄い真紅の瞳を持つ。神代家の遠縁の氷室家に養子に出され、神代家のお家騒動からは遠ざけられた。神卸の才に長ける琉璃と異なり、神楽舞による除霊などを得意としており、その事もあり、養子に出されたが家に戻されることは無かった。また神楽舞のほかに妖使いの才に長け、ナナシと言う謎妖精を連れている。対人恐怖症の毛があり人見知りも非常に激しく、琉璃とは正反対の大人しい性格である

ナナシ リポート10 マスコットファイト開幕（元ネタ東方不敗）

舞が連れている自称妖精の小人。渋い声と人生観溢れる言葉を言うなど、外見はハムスターサイズだが、老人に近い言動をする。流派森林不敗という謎の武術を納めており、自分よりも遥かに巨大な妖獣や魔獣を制し、氷室神社がある森を制覇した。チビとの戦いには敗れたが戦い事態には満足しており、次は自分が勝つと行き込んでいる

チビノブ リポート10 マスコットファイト開幕（元ネタFGO）

竜気、神通力、霊力に溢れ変な磁場が生まれている横島の家でノツブがノツブ忍法影分身を披露した際に生まれた体長30cm強の謎生物。ベースは家精霊のシルキーをベースに周囲の霊力などを吸収し、影分身で生まれるはずだったノツブの情報を取り込んで生まれた。生物と幽霊の中間で生身の身体を持つ、頭は良いのだがノブと言う鳴き声(?)しか発する事が出来ないので意思疎通はやや難しめ、シ

ルキーの要素が混じっているので家事などを好み、シズクの手伝いなどをして日々を過ごしている。横島に懐いたのは家主であるからと、シズクに懐いたのは同じく家を切り盛りする存在だからである。家精霊なので、家主と家事をする人間に懐くと言う性質があり、ぐーたらなノツブとの相性はかなり悪目。なお例外的に横島とシズクの両名が居ない場合はノツブの言う事を聞く、普通の食事も出来る、ノツブ同様メロンパンを好む性質

六道冥子 リポート11 新たな一歩より

六道家の次期当主のだが、ほわほわとした天然系のお嬢様であり跡取りとしてはやや不安がられている。六道家に伝わる12体の式神を使役するが、キャパオーバーを起こして暴走させるなど常にトラブルを起こしがち、だが芯は強く、変わろうと思えば努力するなど駄目なままという訳ではない。補助除霊S級と国内最高の事前除霊の腕前を持つが、GSとしては除霊が苦手なのでそこまで評判が高いわけではない。本人の性格的に戦闘に向いておらず、優秀な前衛と組めばすぐに頭角を現すと証される、今回は変わるためと言う事で蛍と横島を助っ人兼見習いとして迎え入れ、2人が知らない霊能について講義している。なお裁縫に始まり、料理、お花、琴などは超が付く一流である。なお年下の横島が気になる模様

六道冥華 リポート11 新たな一歩より

六道家当主にして、日本の霊能・政治に強い発言力を持つ女性。口調は穏やかだが、その穏やかさの影に剣呑さが見え隠れするなど、六道の大狸と言われる。既に霊能者としては一線を引いているが、それでも式神使いや廃れている陰陽術などを知るなど、その実力は極めて高い。なお初代六道によって口調を矯正されただけであり、本来はバリバリのキャリアウーマンと言う感じの性格かつ口調である

初代六道 リポート11 新たな一歩より

平安時代から続く六道家の開祖。平安時代ではそこそこと言う家

柄だったが、懇意にしていた陰陽師から12神将を譲り受けてから急速に発展した。その陰陽師に想いを寄せていたが、その陰陽師は藤原の姫に手を出した疑いで処刑され、その恋が実る事は無かった。子供を作り、自分の娘に当主の座を譲り渡した後は、魂だけで六道の屋敷の社の御神体に宿り、子孫達に試練という名の暇つぶしをしていた、自分と瓜二つの子孫と想いを寄せていた陰陽師と瓜二つの横島を見て、今度の六道は彼の救いになれますようにと祈りを捧げたシズク、清姫とは顔見知りで、2人曰くめちやくちや黒いといわれ酷い〜と泣いて見せた。非常に頭が良く、その間の抜けた口調は自分を守る為に身に付けたものであり、その評価もあながち嘘ではない

古き神↓リン リポート12 束の間の平穏

ガープによって召喚された古き神。強い負の神性を持つ事から時代の移り変わりで死の概念の変化によって一部の権限を失っている模様

横島に興味を持ち、金髪、翡翠色の瞳へと自身の容姿を変化させ、リンと名乗り横島と出会った

魔人姫↓ネロ リポート12 束の間の平穏

原始風水盤の起動によって目覚めた魔人一派の頭領。魔人姫と呼ばれる正体不明の魔人、神魔を相手にした大戦では圧倒的な魔力と神通力を武器に他の魔人とは比べられない被害を神魔へと与えた。なお倒されて封印されたのではなく、飽きたという理由で戦闘意欲を失い封印された。非常に気分屋で楽しいことを好む性質。リンが横島に接触した事に対抗するように横島の元へと現れた

常世のだいそうじょう リポート13 常世のだいそうじょう

マタドールに続き、現れた第二の魔人。2つ名は「常世」、争乱の時代に即身仏となることで救済を願った非常に徳の高い僧侶だったが、極楽浄土に辿り着く前に、人間の世界の醜さ、終わることのない争乱



に絶望し、魔人へと変貌を遂げた。現世には苦しみしかない、故に安らかな死をと考え独善的な考えからの救済を行う。他の魔人と比べ戦闘タイプではないが、数多の術、絡め手を多く持ち支援及び間接的先頭を得意とし、揺るがぬ精神から齎される物理・霊波ともにダメージを大幅にカットする瞑想状態で行動する。

## リポート1 初めの1歩 その1

リポート1 初めの1歩 その1

GS協会から指定されたと言う除霊試験……私も横島も別々の場所での試験に挑むことになったんだけど

【「シャアアッ!!!」】

「ちよつとこれは洒落にならないわねッ!!」

突っ込んできた2体の悪霊の間をスライディングで潜り抜け、弾かれた神通棍を拾い上げて構える

(Cランクってレベルじゃないわね)

明らかにただの悪霊から変化しようとしている……美神さんから貰った指示書ではCランクの悪霊1体とDとEランクの雑霊が20弱と言う厳しくはあるが、単独でも除霊出来るレベルの相手の筈だった。所が蓋を開けてみれば雑霊を片っ端から喰らって変化している悪霊が2体。いきなりの奇襲で神通棍を取り落としこそしたがやっとなげと拾い上げる事が出来た

【「ゲツゲツ!!」】

嘲笑うように笑っている悪霊を睨みつける。奇襲でペースを崩されることになったが、今はもう大丈夫だ。落ち着いて対応できている……だけどある不安が頭を過ぎる

(横島は大丈夫なのかしら……?)

私の方でこれなのだから横島の方だっけきつと同じようになってる……そう思うだけで酷い焦燥感が襲ってくる

「時間をかけている場合じゃないわね!」

多分横島の事だから上手く逃げてくれていると思うけど……もしもと言う可能性もある

【「シャアアッ!!!」】

【「邪魔あッ!!!」】

突っ込んできた悪霊の頭を神通棍で殴り飛ばし、そのまま破魔札を殴りつけるように叩きつけ起爆させ強引に除霊する

【ギガア!?】

「お前も邪魔だあッ!!!」

相方が吹き飛んで動揺している悪霊に向かって霊波砲を打ち込み、こちらも除霊し慌てて除霊現場を後にし

「横島。無事で居てよ」

バイクに跨り美神さんの事務所へと向かおうと思ったのだが……

「いや待って、ここは横島の家ね」

怪我をしている可能性もある。ここは先に横島の家へ向かってシズクを拾いに行こう、それにシズクなら横島の居場所を知っている可能性もある。私はそう思って横島の家へとバイクを走らせるのだ……

蛍ちゃんが除霊試験に挑んでから1時間ほど経った時。琉璃が血相変えて飛び込んできて

「み、美神さん！横島君と蛍ちゃんを呼び戻してください！2人とも12時からでしたよね!」

「いや、横島君は8時だし、蛍ちゃんは11時からだけど?」

多分もう除霊始めてるんじゃないかしら?と思いつながらどうかした?と尋ねると

「2人の除霊試験の現場がGS試験会場と霊脈で繋がっていたんです!間違はなくガープの影響が出てるんですよ!」

「はあッ!?なにそれ!?ちゃんと調べて無かったの!」

「試験現場を決めてる審査官が調べてなかったんですよ!今日の書類整理で気付いて、慌ててこっちに来たんです!」

お茶なんて飲んでいる場合じゃない!椅子から勢い良く立ち上がると同時にもう1度事務所の扉が開き

「美神さん!横島の除霊現場はどこですか!」

「……ちいつ!?見ていると心配だから情報を遮断していたのが裏目に出た!場所はどこだ!?直ぐに跳ぶ!」

蛍ちゃんとしズク、それにチビとモグラにタマモまで事務所に飛び込んでくる。私は机の引き出しを開けて

「えーと確かここに控えが……」

横島君と蛍ちゃんの除霊現場の地図のコピーがあったはず、それを探していると

「おー……いてて……美神さーん……すんませーん……失敗しましたあ」

【ぬぐう……除霊試験と言う割には厳しくないか？逃げるので必死だったぞ？私も横島も……】

横島君がボロボロの様子で事務所に戻ってくるなり、その場に倒れこむ

「みむう!?みーみー!!!」

「うきゅー!?!」

「コーン!?!」

チビ達が倒れた横島君を見て絶叫している中。しズクが横島に駆け寄り

「……直ぐ治す。動くな」

「頼むわあ……さつきから右腕の感覚が無くてなあ……」

右腕を見ると黒っぽい靄が残っている……呪いの類を受けてしまったせいで腕の感覚が麻痺しているんだろう

「横島君。他に何か自覚症状は？」

呪いを受けているとなると適切な処理が必要になってくる。何か自覚症状が無いか？と尋ねると

「えつと……軽い頭痛とめまい……それと耳鳴りと……右腕の感覚が無いくらいです」

呪いのレベルとしては軽度ね。多分心眼としズクとタマモの加護のおかげで呪いに対する抵抗力が高かったんだろう

「おキヌちゃん！厄珍でこのメモの薬を貰ってきて。大至急！」

【は、はい！直ぐ戻りますー！】

横島君の症状を聞いて必要だと思われる薬品と材料をメモして、おキヌちゃんに買ってこくるように指示を出す。直ぐに飛び出していく

おキヌちゃんを見ていると

「大丈夫？他に痛い所は無い？」

蛍ちゃんが横島君の前にしゃがみ込んで尋ねる。すると横島君は「いや、痛い所は全然無い……痺れとか、妙に寒気はするけど……めちやくちやおつかなかつたわ……あの骸骨」

骸骨？横島君は一体なにと戦ったというのだろうか？呪いなんて仕掛ける事が出来る程の悪霊が東京都内にいるとは思えないが……心眼にどんな妖怪と戦っていたのか？と尋ねると

【恐らくだが……リッチだと思う】

リッチですって?! Aランク相当の要警戒レベルの悪魔じゃないの!? 良くそんな化け物から逃げ切ったと正直感心する

「……ふう、とりあえずはこんな物だな」

「ん、んーん？右手に痺れが残ってる感じがする……」

「……そんなに直ぐは呪いを完全に解除できない、少しの間我慢しろ」シズクでも治せないとは……相当強力な呪いを受けたみたいね……そんな呪いを受けて右腕の痺れだけで済んでいて本当に良かったと安堵の溜息を吐く、身体を起こした横島君が手を握ったり、閉じたりしながら私のほうを見て

「すみません、失敗しました。本当に逃げるので手一杯で……後その……追いかけてビルから出て来ようとしてたんで、精霊石とかもうむちやくちやに使って何とかビルに押し留めては来ました」

深く頭を下げる横島君。でもリッチ相手にGS試験が終わったばかりのルーキーが本当に良く無事で逃げてきてくれた

「横島君が悪いんじゃないわ。これはGS協会の実地試験の下調べが万全じゃなかったのが原因よ、本当にごめんなさい。それと無事で良かったわ」

申し訳無さそうに琉璃が謝るが、それを言えば琉璃の責任ですらないだろう。審査官の職務怠慢……全てがその一言で片付けられるだろう

「みむ？」

「うきゅー？」

「心配してくれてんのか？大丈夫やでー」

自分に擦り寄ってくるタマモやモグラちゃんを抱き締めて笑っている横島君。でも本当に無事に逃げて来てくれて良かった……自分の身体を抱くようにして青い顔をしている蛍ちゃんを見て、本当にそう思うのだった……

シズクに治療して貰い、漸く感覚の戻って来た右腕で頭を思わず掻いてしまう。美神さんと琉璃さんに謝られて、俺が相当危機的状况になっただというのを初めて実感した

(確かになあ、あれやばかったもんな……)

詳しくそのリッチの事を教えてと言われたので、紙にリッチの姿を描きながら

「えーと身長は多分170くらい……着てたのは……法衣？ん。多分法衣……って奴だと思えます。映画とかで見る奴……除霊しながら最上階を目指していたら社長室の壁が崩れて……えつと凄い法衣が飾られてたんだよな？心眼」

【ああ。除霊試験自体は自我崩壊しているという悪霊の除霊後屋上に到達し、封印式を書く事だったが……それらしい悪霊もいないのでどうしたんだらうか？と話しながら歩いていて、妙に嫌な予感がして社長室に向かったんだ】

そうそう屋上に続く道を歩いていて、強烈に嫌な予感がして社長室に向かって金とか銀の刺繍糸で縫われていた法衣があつて、それを見つめてたら

「急にそれが動き出して、骸骨が魔法陣って奴から現れて……ああ、そうだボロボロのスーツ姿の男の幽霊と合体して、ノロワレヨって叫んで襲って来たんっす」

心眼が逃げると叫んだので、そのまま背を向けて全力で階段を駆け下りたんだ、振るわれる杖に飛んでくる黒い弾丸を必死に避けて、逃げて……

「でも途中で上の階からぶち抜いて目の前に降りてきたんで……霊力

のあの籠手を全力で叩き込んだですけど……ぶよんつとした感じで全然効果なくて、しかもなんか飲み込まれそうになつて……心眼がビームで吹き飛ばしてくれた隙に階段を飛び降りるようにして逃げ、最後は持ってた精霊石と無地の札を20枚を使って結界を作つて閉じ込めて逃げてきました」

ここから出してはいけない、そう思つてむちやくちやに使いました。それつてやっぱ不味かったですか？と尋ねると

「いえ、良い処置よ。リッチはそこに存在するだけで死を撒き散らすわ、出入り口を封印したのは良い手よ。でもそこはやっぱり素人だから、結界の効力も不安だし後で装備を整えて除霊に向かうわ」

俺の除霊試験は？と尋ねると琉璃さんがごめんねと前置きしてから

「また今度受けなおしつて形になるわ。封印を屋上に書いてないから達成とは認められないわ」

やっぱりか……まあ逃げてきたからそうなるのは判つていた

「リッチは美神さんや唐巢神父クラスのGSでやつと対峙出来る悪魔だから、本当に良く無事で逃げて来てくれたわ。私としては合格と認めても良いけど、規則は規則だから本当にごめんなさい」

その変わり今度のもつと安全を確認してから実地試験の現場を決めるわと笑う琉璃さんを見てると

【お薬買って来ました!!】

おキヌちゃんが厄珍の紙袋を抱えて戻つて来る、おキヌちゃんは俺を見て

【良かった……大怪我じゃなかったんですね】

安堵の溜息を吐いているおキヌちゃんに心配してくれてありがとうと言うと

「本当よ。本当に無事でよかった……」

蛍が泣きそうな顔で言う。皆にこんなに心配かけて情けねえなあ……やっぱりちよつと単独除霊は早かったのか？と反省していると

「はい、これとこれを飲んで今日は帰りなさい。リッチの呪いは強烈だから後でどんな後遺症が出るか判らないんだから」

美神さんに早口に捲くし立てられ、薬の瓶を押し付けられ帰るよう  
に言われ

「……モグラ」

「うきゆうー！」

巨大化したモグラちゃんの上に乗るようにシズクに言われて

「いや、俺は大丈夫「……乗れ、お前の意見は聞いてない」

反論することは許さないと強いう強い口調のシズクに言われて、俺は  
モグラちゃんに運ばれて家へと戻る事になった……

(心配させたくなかったのにな……)

この除霊試験を達成して、皆にもう大丈夫だって安心させたかった  
のに……結果はこの有様

(本当。俺って情けねえなあ……)

心の中でそう呟き、美神さんに渡された薬を飲んだ事で睡魔が襲つ  
て来たので、そのまま目を閉じて眠りに落ちるのだった……

横島君の除霊試験の現場にいたリッチを対峙する黒いドレス姿の  
美女……くえすだ。くえすは怨嗟の言葉を叫び続けているリッチを  
見下すように

「愚か。その程度の魔術の扱いでこの私に勝てると思いですか」

くえすは薄笑いを浮かべながら、リッチが放った呪詛に塗れた炎を  
障壁で弾き飛ばし

「魔術比ベをする価値も無い、愚かで未熟すぎるリッチ」

リッチではあるが、リッチとしての格が低すぎる……敢えて言うの  
ならリッチになったばかりのスケルトンメイジ。さらに霊核となっ  
ているのはここ最近自殺した人間霊で、リッチと呼ぶには程度の低す  
ぎる……つまりくえすにとつては歯牙に掛けるまでも無い弱い魔術  
師としか思えなかった

「お前はここでDeathっちまえッ!!」

魔道書を開き無詠唱で呪文を発動させる。地面から走った蒼い光  
がリッチを包み込むと同時に周囲の気温が一気に下がった

【ギ、ギガア!?】



リツチの姿は氷の中へと幽閉され、その活動を永遠に停止させた……これが本来のリツチならばこの氷の中でも生存していただろうが、リツチになったばかりの出来損ないではその氷に耐える事が出来なかったのだ……

「さてつと……まあこんな物ですわね」

氷付けのリツチに手紙を貼り付けたくえすはニヤリと笑いながら「そろそろ頃合ですわね」

転移魔法を発動させくえすが消えてから数秒後フル装備の美神が突入してきて、氷付けのリツチとくえすの手紙を見つけ

「やられた……このタイミングで来る？」

リツチを閉じ込めた氷塊に残された手紙には

『若手GS研修制度として横島忠夫を神宮寺除霊事務所への研修を寄越して頂きます』

横島を自分の事務所へと研修へ来させるようにと書かれているのだった……

リポート1 始めの1歩 その2へ続く

## その2

リポート1 始めの1歩 その2

除霊試験に失敗して、そのせいで蛍やシズクに心配をさせて、美神さんにも迷惑をかけてしまった……その事が頭を過ぎってどうしても眠る事が出来ず

「ちよつと外でも見てこよう」

チビ達を起さないように気をつけてベッドから抜け出して、散歩に出掛けようとする

【止めておけ、横島】

背後から声を掛けられ驚きながら振り返ると、リビングでノツブちゃんが三日月を見つめながらお猪口を呷っていた。見た目少女が酒って正直どうなんだろう……そんな見当違いの事を考えていると

【邪気がまだお前の身体から抜けきっておらん。下手に出歩けば悪霊に囲まれるぞ】

「そ、それは不味いなあ……止めてくれてありがとう」

正直身体の痛みが酷い、今この状況で悪霊と対峙したら除霊する所か、逃げ切る自信も無い

【まあ良い、こっちに來て晩酌に付き合え】

自分の隣をぽんぽんと叩くノツブちゃんに

「俺未成年です」

【む？なんじゃそりや？】

あーノツブちゃんは戦国時代の人間だから知らないのか、ある年齢を超えないと現代じゃ酒は飲んじや駄目なのと説明しながらノツブちゃんの隣に座る

【面倒な事じゃな。どうじゃ？誰も見ておらん、ちつとだけ飲んでみんか？】

悪戯っぽく笑うノツブちゃん。まあ確かに興味が無いわけじゃないけど

「未成年だから駄目」

もし飲酒したとオカンにばれたら殺される。だから駄目と言うと詰まらん奴じやなあど苦笑しながら、またお猪口に酒を注いでいるノツブちゃんを見ていると

【りっちゅ?とか言うのから逃げたらしいの?】

今一番気にしていることを言われて思わず呻くと

【はっはっは!悪いな、ワシはそう言うのを気にする性質ではないの  
でな、それで逃げた自分が情けないと反省しておるんじゃない?】

なんでノツブちゃんは俺の考えている事が判るんだろうか?俺が首を傾げていると

【カッカツ!それくらい出来ねば、兵を束ねるなんて事は出来ぬわ!】

上機嫌に笑うノツブちゃん、見かけは可愛い少女だが、やはり第六天魔王と名乗っていただけはあると思っていると

【お前は逃げたと言うが、ワシはそうは思わんな】

いや、俺逃げたよ、殺されると思って逃げたと反論すると、ノツブちゃんは黙って聞け!と俺の反論を封じてから

【勝てぬから逃げる、それは間違ったことではない、生きていれば次があるからの。だからワシにとつて逃げるとはもう挑まないと言う、次に続かないと言う事じゃ、では聞くが横島、お前はもうじーえすとやらになる気は無いのか?】

確かに怖かった、怖かったが……俺はまだGSになることを諦めてはいない

【俺はまだ……【諦めてはいないじゃろう?、ならお前はまた逃げてはおらんと言うことじゃ】

また励み挑め、生きてる限り挑み続けろと笑うノツブちゃん。どうも彼女は俺を励ましてくれたようだ

【ありがとう】

【居候させてもらつておる礼じゃ!いつでも助言くらいしてやろう!また励めよ!横島】

そう笑うノツブちゃんを見ていると、自然と欠伸が出た。今なら眠れそうやな、俺はまだ飲むと言うノツブちゃんにお休みと声を掛け自分の部屋へと引き返すのだった……

「ワシで良かったんかの？」

振り返る事無く尋ねるノツブの後ろに腕を組んだシズクが姿を見せる

「……ああ、あれで良かった。私が言っても、付き合いが長い私の言葉では励ましにしか聞こえないだろうからな」

シズクも横島が起き出した気配を感じていたが、今は自分が何を言っても駄目だと判断したのか、ノツブに横島を励ますように頼んだのだ

【お前、良い女じゃなあ】

「……当たり前だ。それよりもだ、少し寄越せ」

ノツブの横に置かれていたお猪口を奪い、酒を飲み干すシズクは明らかに不機嫌そうだ。本来なら自分が励ましたい所を譲ったのだから不機嫌にもなるというものだろう

【おお！良い飲みっぷりじゃな！どれどれ！もつと飲め！】

それに対してノツブは一人で寂しく飲んでいたので、付き合ってくれるシズクに嬉しそうに笑いながら空になったシズクのお猪口に酒を注ぎ、自分の分にも注ぎ上機嫌に笑いながらお猪口を呷るのだった……

リッチを除霊しに行ったら既にくえすによって除霊されていた……くえすの独断だったので成功報酬は私の口座に振り込まれたが何もしていないのに報酬を貰うなどと言う真似は出来ない

「はい、これリッチの除霊費」

呼び出したくえすにリッチの除霊費5500万の小切手を渡そうとするが

「必要ありませんわ。これでも神宮寺家の現当主です、5500万なんて必要ありませんもの」

ぐっぐう……この女……本当に性格悪いわね……一緒に居た蜚ちゃんも顔が引き攣っている。現に国内有数の資産家である神宮寺。5000万程度必要ないというのは判らないでもないが、ハッキリ言って嫌味にしか聞こえない

「さてと、では本題に入りましょうか。今日から1週間。横島忠夫を私の事務所へと研修に寄越して貰います……ああ、言っておきますが、芦笛は必要ありませんので」

本人と顔を合わせているのによく言えるわね……蛍ちゃんの額に青筋が浮かんでいる

「今更NOなんて言わないでしょう？これは元々そう言う約束、私は横島が何故魔力を使えたのかを教え、魔力が暴走しない術を教える。本来ならば神宮寺家の秘伝を他人に伝えることはありません、それでも私はそれを教えると言うのに今更反故にすると？」

くえすが詰め寄ってくる。私くえすのこのどんよりと曇った眼苦手なのよね……目を逸らしながら

「判ってるわよ。ただ私は出来たら蛍ちゃんも面倒を「お断りですわ。大体殆ど完成している芦笛に何を教えろと言うんです？指導するだけ時間の無駄ですわ」

ぐっぐう……反論すら出来ないわね……正直に言えば蛍ちゃんは今でもGS免許を受け取れるほどに完成している、サイキックソーサー

に霊具を扱うセンスに体術と知識も高いレベルで纏まっている。そんな完成しきっている人間を指導するほど時間の無駄は無いだろ

う  
「横島君には伝えてないから、自分で横島君に伝えて。後はくえすに任せるわ」

おキヌちゃんがガタンつと机を揺らして反対の意思を示すが、今回ばかりは仕方ない。私も蛍ちゃんも横島君が魔力を使える理由を知らなければならぬのだから

「では私も約束は護るとしましょう。何故横島忠夫が魔力を使えたかをね？」

私の方でも調べてみたが、横島君に先祖には霊能者は存在せず魔力が混じる理由となるものは存在しなかった。それなのに横島君は魔力を使ったその理由を知らなければならない

「ブラドール島に向かう途中で飛行機墜落を覚えていますか？」

「そりやまあ覚えてるけど、それが何か関係しているの？」

奇跡的に負傷者も死人も出なかったのには正直感謝していると言  
うと

「その時。横島忠夫は死にました」

くえすの告げた言葉に目が点になる。何を言われたのか一瞬理解  
出来なかった

「今！横島は生きてるじゃない！横島は死んでなんか居ないわ！」

「そうですよ！横島さんは死んでなんかいません！」

蛍ちゃんとおキヌちゃんが凄いい剣幕で怒鳴っているがくえすは涼  
しい顔をして

「私が治療しましたから、心臓にガラスが刺さって即死でしたよ、芦蛍  
……貴女を庇ってね？」

蛍ちゃんが目を大きく見開く、そんな様子を見てくえすは笑いなが  
ら

「貴女は横島を守ると言った、だけど実際は逆で貴女が横島を死に追  
いやったのですわ」

「くえす！家の助手を追い詰めるような真似はしないで頂戴！」

畳み掛けるように言うくえすの言葉を遮って怒鳴る、だがくえすは  
涼しい顔をしたまま、話が逸れましたわねと笑い

「その時の治療の際に私の霊力の一部が横島の魂に移り、それが根付  
いてしまった。神宮寺の家に代々伝わってきたソロモン72柱ビュ  
レト様の魔力がね」

一瞬何を言われたか理解出来なかった、横島君の中にビュレトの魔  
力があると聞いてはい、そうですかと納得出来るわけが無い

「納得するしないは貴女達次第。ですがそれが事実ですわ……そう言  
う訳で私以外の誰も横島の魔力問題を解決できる人間はいないと  
言う事ですわ」

確かにソロモンの魔力をその身に宿す。そんな事が出来ているの  
は神宮寺家以外のほかに無い、くえすの言うことが本当ならば……だ  
が

「嘘は言っておりませんわよ？私は横島に関することに関しては嘘は

申しませんわ」

その目を見て判ってしまった。くえすが嘘をついていないという事が……

「判ったわ、横島君をお願い」

ただの魔力ならば唐巢先生でもお願いすれば何とかなると思うが、ソロモンとなれば話は違う。その魔力を宿しているくえす以外に指導できる人間はいない。ここは横島君をくえすに預けるしかない

「言われなくともですわ、私の事務所は家も兼ねておりますので、1週間の間横島は私の事務所まで寝泊りして貰います。その間に接触を取るのには控えて頂きます。では失礼を」

最後の最後に条件を加えて私の事務所を出て行くくえす。本当にいい性格してるわね……

「蛍ちゃん大丈夫？」

くえすに横島君が蛍ちゃんを庇って死んだと聞いて、明らかに気落ちしている蛍ちゃんが心配になり大丈夫？と尋ねると

「私は……横島を守っているつもりでした……でも……私のせいで……」「蛍ちゃん。くえすの言葉は全部鵜呑みにしたら駄目よ」

くえすは魔女だ。自分が欲しいと、求めた物はどんなことをしても手にしようとしてくるだろう。だからくえすの言ったこと全てが真実だと思っではいけない。ちよつとごめんねと声を掛けてから蛍ちゃんの顔の前で手を叩く

「……………えつと……………あれ？」

きよとんとした顔をしている蛍ちゃんを見て確信した。やけにフルネームで呼ぶなどは気にしていたのが幸いした。くえすの仕掛けを直ぐに気付く事が出来たのだから、あのままだとどんな悪影響が出ていたか、考えるだけでも恐ろしい

「くえすの言霊よ、必要以上にフルネームで呼んだのは言葉を介して呪いを掛ける為ね」

と言うか家の助手に呪いを掛けるとか本当に良い根性をしてるわ

「横島は大丈夫でしょうか？」

「横島さんの事だから、なんか簡単に精神操作されそうなんですけど

……]

自分でもこの有様なのだから横島君は大丈夫だろうか？と不安そうに言う蛍ちゃんに、さりと酷いことを言っているおキヌちゃんに苦笑しながら

「大丈夫だと思わよ。心眼が付いてるからね」

竜気で構成されている心眼が一緒だから心配する必要は無い。幾らくえすでも竜種相手とつて呪いを掛けるような事は出来ないだろうから

「1週間後、横島君が戻ってくるのを待ちましょう」

「そう……ですね」

明らかに気落ちしている蛍ちゃんを見て、蛍ちゃんはもしかすると横島君に依存しているのでは？と思ったが、それを口にせず

「じゃあ、今日の除霊の打ち合わせをしましょう。横島君やシズクがいないから何時も以上に厳しい除霊になるから気合入れて頂戴」

はいっと！元氣よく返事を返す蛍ちゃん。この様子なら大丈夫そうね……この1週間は簡単な物でもいいから除霊をずっと入れておきましょう。じゃないと蛍ちゃんは考え込みすぎるだろう、くえすはそれを計算して1週間の接触拒否を最後に条件に付け加えたのだから……

(こんなに不安に思うなら早く付き合えばいいのに……)

完全に彼氏、彼女の関係なのに、その実まだ付き合っていない横島君と蛍ちゃん。結局の所2人とも奥手すぎるのよね……とは言え本人同士の問題なので私が言う事ではない。私はそんなことを考えながら、今日の除霊の打ち合わせのための資料を机の上に並べるのだ……

どうしてこうなった？俺は明らかに俺みたいな小市民には場違いとしか思えない豪邸を見て、今日を思い返していた

「え？横島君。除霊試験失敗したの？」

愛子の言葉に軽くシヨックを受けながら頷く、大分頑張ったんだけどなあと前置きしてから



「リッチとか言うやばいのが出てきて逃げるのに手一杯だったんや」  
「リッチ!? 良くそんなのを相手にして逃げ切れませんでしたね!？」

ピートの反応を見ると、やっぱりやばい相手だったんやなあつと改めて実感しながら

(タイガーの母国ってどこなんだろうな?)

今朝のHRでタイガーは母国に帰ったので、休むと担任が言っていた。日本人にしてはタイガー寅吉つと変わった名前だよなあつと思っていたらハーフだったらしい。

「リッチって言ったら死霊を操る死霊。不死性も持つ悪魔だよ、横島君本当に無事に逃げれたね」

珍しく血を吸いに来ないシルフィーちゃんにもそう言われ、改めて自分が無事に生きていることに感謝していると

「あー。横島、お前にお客さんだ」  
担任が来て俺を呼ぶ。俺に客? しかも学校に? 俺が首を傾げていると

「御機嫌よう。横島忠夫」

長い銀髪を翻し、見慣れた黒いドレス姿の神宮寺さんが教室に入ってくる。

「あれ? 神宮寺さんじゃないっすか? どうしたんですか?」

ざわざわとざわめいているクラスメイトの声を聞きながら、どうしたんですか? と尋ねると

「本日から1週間。貴方は私の助手ですわ」

「はい?」

神宮寺さんに言われた言葉の意味が判らず、思わず尋ね返す。なお俺の肩の上で昼寝していたチビとモグラちゃんは

「う、うきゆうう」

「み、みむうう」

俺の制服のポケットの中に隠れてぶるぶる震えている。どうしてそんなに怖がるかな? 神宮寺さんは優しくして良い人なのに

「よ、横島君? その人知り合い?」

愛子が若干怖がった表情で尋ねて来る。なんで本当にそんなに怖

がるんだらうか？ピートもシルフィーちゃんも何か臨戦態勢に入っているし……俺は首を傾げながら

「神宮寺くえすさん。美神さんと同じプロのGSで色々アドバイスとか貰ってるんだ」

軽く紹介するとピートがああ神宮寺くえすが!?!とか叫んでいる。その反応は失礼だと思っていると

「今日から1週間。貴方は私の助手です、私の事務所で徹底的に除霊の事を叩き込んであげますわ。無論、美神令子には既に話を通してるので心配することはありません」

心配なんてすることは無いでしょ?と神宮寺さんに言う。神宮寺さんは凄いGSなのだから、そんな人が教えてくれるのに何を心配する必要があるんですか?と逆に尋ねると

「……え、ええ。そうですね。私に任せておきなさい、横島忠夫。次の除霊試験には必ず合格させますわ、では今から早速修行に入りませ、帰り支度をしなさい」

いや、まだ午前中なんだけど……担任も止めに入るが

「私に意見しようと言うのですか?」「よし、横島行け」

神宮寺さんに睨まれてさっさと意見を翻す担任に溜息を吐きながら

「そう言う訳みたいだから帰るわ、じゃーなー」

荷物をさっさと鞆に詰め込んで俺は学校を後にするのだった……

「え?1週間。神宮寺さんの事務所泊まりなんすか?」

「ええ、1週間しか時間ありませんから、時間が惜しいですからね。朝から晩まで徹底的に修行ですわ」

まじか……いや、それは構わないんだけど、神宮寺さんみたいな美人と同じ屋根の下って言うのは正直緊張するな……

「1週間分の着替えと普段使っている除霊具を持って来なさい、後使っている教本とかあればそれもですわ」

教本ってなると陰陽術の本と妖怪図鑑かな?あ、そうだ。これだけは聞いておかないと

「シズクとか、チビとモグラちゃんは一緒でもいいですか?」

家に置いて行くのは可哀想なので連れて行っていいか?と尋ねる

と

「そのグレムリンとモグラ、あと何時も連れてる妖狐も許可します。ただし水神シズクは駄目ですわ」

そっか……シズクは駄目なのか……一緒なら心強いのになあ……とは言え、この1週間は神宮寺さんが師匠なので逆らうわけには行かないか

【私は着いていくからな】

「当たり前だろ？心眼が居ないと調子が狂う」

神宮寺さんが駄目だと言っても心眼だけは絶対に連れて行くからと心眼と話をしていると、いつの間にか家の前に着いていた

「待っているから急いで準備をしなさい」

「判りました」

神宮寺さんの言葉に頷き家に入ると、シズクが首を傾げながら

「……早いな。何かあったのか？除霊か？」

除霊か？と尋ねて来るシズクに違うと返事を返して

「今日から1週間。神宮寺さんの所で修行だつてさ、美神さんの許可も取ってるらしいから、1週間は家に戻れんわ」

「……は？」

不機嫌そうなシズクメチャ怖えっと思いながら、部屋に駆け込み1週間分の着替えを用意し、リビングで昼寝をしていたタマモを抱き抱えながら

「詳しい事は美神さんに聞いてくれ、俺も正直よく判ってないから。

「急ぎなさい、横島忠夫！」っは、はい！今行きます！」

話している時間も無いらしい、呆然としているシズクに後は頼むと声を掛け、俺は家を後にするのだった……

「……あ、あの魔女の所で修行？……は、ははは……美神。どうやらお前とは話し合いをしなければならぬようだな」

【やば……あれやばいぞ……】

鬼の形相で笑っているシズクから隠れるように、ノツブは二日酔いで痛む頭に氷を押し当て、震えているのだった……神宮寺さんに案内された事務所と言うのは近所で幽霊屋敷と有名な豪邸だった。こん

な建物を自分の事務所にするなんて凄いなあと思いながら巨大な門をくぐり、屋敷の中に足を踏み入れる。外見はボロボロだったけど、中は新品同然だった。人の気配がまるでしない所だけが妙に気になった。

「2階が居住ブロックですわ、着いて来なさい」

神宮寺さんに案内されて屋敷の中を歩くが、やはり人間の気配がまるでしないなあと思っていると神宮寺さんが立ち止まり、ある一室を指差しながら

「その部屋を好きに使いなさい、今日の所は出来ることを確認するだけなので、流すだけの修行にしますので」

荷物を片付けたら、地下の修練場に来なさいと言って、去っていく神宮寺さんの背中を見つめながら、神宮寺さんに言われた部屋に入ると、めちやくちや広くて面食らった……やっぱり神宮寺さんはお金持ちと言うことを改めて実感しながら鞆を机の上に下ろして、陰陽術とかの本を取り出して

「よっし、行くぞ。チビ、モグラちゃん」

まだふるふると震えている2匹を肩の上に乗せ、タマモを抱き抱えて、俺は神宮寺さんに言われた通り地下の修練場を探して、広い屋敷を歩き出すのだった……

リポート1 始めの1歩 その3へ続く

## その3

レポート1 最初の1歩 その3

私は心の底から助けてと叫びたかった……蛍ちゃんに考える時間を与えないように除霊を多く入れ、2回の除霊を終えて事務所に帰ると

「……待っていたぞ、美神。どういうことか説明してもらおうか？」

髪の毛の先が蛇のようにゆらゆら揺れ、水の剣を手にしているシズクがそこにはいた……思わず完全に停止してしまった

「美神さん？どうし……じゃっ、私は帰りますので!!!」

【私は夕食の買出しがあるんで!?!】

「逃がさないわよ!?!」

事務所を覗き込んで逃げようとする蛍ちゃんとおキヌちゃんを咄嗟に捕まえる。ただでさえシズクは怖いのに、こんな状態のシズクと2人きりなんて冗談じゃないわ

「私だって嫌ですよ!?!めっちゃくちゃ怖いじゃないですか!?!」

【怒ったシズクちゃんは怖いんですよ!?!お願いだから放してください!?!】

逃げようとする2人を逃がす物かと捕まえていると

「……つとと入れ、そして説明しろ」

有無を言わさないシズクの口調に私達は声を揃えて、ハイつと返事を返しシズクの前に座るのだった……

「……そう言うことか……ちっ、忌々しい」

横島君の中にソロモンの魔力があるので、その抑制の修行の為にくえすに預けることになったと説明すると、シズクは不機嫌そうに舌を鳴らす、どうかした?と尋ねる。するとシズクは不機嫌そうに

「……繋がりを断ち切られた、水を仲介して横島の所に跳べるが、それも出来そうにないな」

水神であるシズクの力を断ち切る!?!シズクの言葉に私達が驚いていると

「……それに特化すれば神宮寺なら出来るだろう。あれは人間だが、人間じゃない。限りなくこちら側に近い」

神魔の領域に足を踏み入れている……神宮寺の実力は知っていたが、まさかそこまでとは

「シズク。横島の様子とかも判らないの？」

「……今の所は無理だな、時間をかけて繋がりを辿って見るが……多分結界で干渉を完全に拒絶していると思うぞ」

……私もしかしてめちやくちやばい相手に横島君預けちゃった？

「美神さん。もしかして神宮寺の事務所の場合とか知りませんか？」

「……ごめん、知らない」

事務所を開設したとは聞いているけど、場所までは……東京都内くらいしか判らないわ

「……だが歩いて行っただのだから、横島の家に近いのでは？」

確かにその可能性もあるが、くえすがそんなあまい手段でこっちの介入を妨害しようとしているなんて思えない、もしかすると歩いているうちに転移魔法で移動しているとか、結界を張っている可能性とかも十分考えられる

「時間も時間だから明日琉璃に場所を聞いてみるわ」

正直打つ手が何も無いので、私は疲れたようにそう呟くことしかできないうだった……

神宮寺さんに地下に来るようにと言われたが、場所が判らず屋敷の中をうろうろと歩き回る

「なあ？タマモ。元来た道判る？」

クウンつと鳴きながら首を振るタマモ。駄目かあ……やっべえ、こんな豪邸の中歩いたの初めてだからどこかサツパリ判らない……一応心眼にも聞いてみるが

【すまない。この屋敷の中は過度の霊力で満たされている。私も殆どこの屋敷の中を把握できていない】

マジで？戻る事も出来ないが、目的地に進むことも出来ない。完全

に困り果てていると

「……くえす様がお呼びです。どうぞこちらへ……」

いつの間にか俺の横に立っていたやたら顔色の悪いメイドさんが  
その声を掛けてくる。抜群のプロポーションの美人なのだが

(なんだ? なんか違和感が)

何かと言うことは出来ないが、妙な違和感を感じながらそのメイド  
さんに案内されながら廊下を歩いていると

「……この先の階段を降りて行ってください。そこでくえす様がお待  
ちになっております」

あれ? 俺いつの間に階段を下りたんだ? 俺達2階にいたはずだよ  
な? そんな疑問が頭を過ぎるが神宮寺さんが待っているので進むし  
かないか……

「案内して……あ、あれ!」

俺を案内してくれたメイドさんにお礼を言おうと思ったのだが、メ  
イドさんの姿がない。数秒目を逸らしたただけなのに!? 俺が混乱し  
きつていると心眼が

【落ち着け横島。あれは人間じゃない、恐らくは精霊や妖精の類だ。  
恐らく契約してこの屋敷の家事をさせているのだろう】

魔法使いつてそんな凄い事も出来るんだなあ、俺は改めて神宮寺さ  
んの凄さを感じながら地下へを続く会談に足を向けるのだった

「みむう」

「うきゅ」

まだぶるぶると震えているチビとモグラちゃんを抱き抱えて、階段  
を下りるとめちやくちや広い部屋に出た

「遅いですわよ? 迎えには会いませんでしたか?」

豪華な椅子に腰掛け読んでいたであろう本を閉じながら尋ねて来  
る神宮寺さんに

「あーすんません、チビとモグラちゃんが何かに怯えてて」

ずっと震えっぱなしのチビとモグラちゃんが可哀想で、途中で階段  
に座り込んでチビとモグラちゃんをあやしていたのだと説明しなが  
ら、頭の上のタマモを膝の上に乗せる

「ああ。それは無理もないですわね……ここは霊脈の上ですが、まだ完全に浄化が済んでいないので邪気が溜まりやすい立地になっています、それを敏感に感じ取って怯えているのでしょうか。弱い妖怪ですから」

軽い感じに説明されたが、それってめちゃくちゃ不味い状況なんじゃ……

「ああ、問題ありませんわ。明日にでも完全に浄化は済ませますわ、さてと、では横島。貴方が教本にしている物があればそれを見せてください。それで指導の方向性を決めるので」

俺は神宮寺さんに言われた通り、陰陽術の本と妖怪図鑑を神宮寺さんに差し出し、椅子に座って怯えているチビとモグラちゃんの頭を撫でながら、大丈夫大丈夫と何度も何度も声を掛けるのだった……

震えているグレムリンの幼生と土竜を撫でている横島を見つめながら、横島が教本として私に差し出した物を確認する

(これは……私が落札出来なかった……)

古今東西の妖怪の事を記した生きた文献。これを作った呪術師は人間よりも化け物を愛した。だから様々な妖怪と契約を結び、その当時にしては不可能だとされていた海外に渡り、その先でも神や精霊と契約を結び。その契約を元に書き記された全書……これを書き起こした人物は既に死んでいるが、その男と契約した者達は今も生きている。それらが今もなお全書に記し続けているのだ。男が描いた夢……怖れ、敬い、そして愛するべき人間の隣人を全ての人に伝えたいと言う願いを叶える為に

「あ、神宮寺さん。その本、なんか勝手にページが増えたりしてるんですけど、なんでか判ります?」

「それはそう言う特徴の物だからですわ。大事にしておきなさい」

本当なら私だって欲しい代物だが、この本が私を拒絶している。きつと横島とこの書物を書き起こした人物の性質が似ているのだろう、既に横島を主と認めているのでここに介入するのは不可能だ。どうしても気になったのならば、頼んで調べて貰えば良いだろう



「さてと。ではこちらはっ」と

稀少な陰陽術の文献。私は西洋術師なのでお門違いだが、何かに応用出来るかもしれない。そんな期待を込めながらページを開き……

「横島？これは写本ですわね？」

期待していた平安時代の文字ではなく、慣れ親しんだ文字並んでいるのを見てそう尋ねると

「え？あ、はい。なんか俺が見たら駄目だっって言っ取り上げられています。確かー高島って言う陰陽術師が書き記した本らしいっす」

高島……ですか、気のせいかな名前の響きが似ていますわね。それにしても横島が見てはいけないとは……

(魂だけの転生でしょうか?)

横島の一族に霊能者が居ないのは確認している。可能性は限りなく低いですが、魂だけの転生でしょうか？と推測をしながら写本を横島に返す、真作ならば得る物もあっただろうが、写本ではそんなのは期待出来ないので見ただけ無駄だ

「では横島。今貴方が出来るものを見せてみなさい。落ち着いてゆつくりと」

GS試験でも見たが、確認の為に使える物を見せてみなさいと言うと眼魂とか言う球体を取り出すので

「それは十分に見ましたので結構です」

え？そうっすか？と笑う横島に溜息を吐く、あんな私の常識を壊す物をこんな近くで見るともりはないと思っていると

【イーヒーヒー♪】

「あ、こちらー！ジャック！戻れー！」

球体が変形してかぼちや頭になって天井近くを飛び回る。私はそれを見て頭痛を感じながら

「好きにさせておけばいいですわ、まずは私の言った事をやってみなさい」

このままではどんどん脱線すると思ひ、先に使える霊能力を見せるようにと呟くのだった……

神宮寺と言う魔女の屋敷は異質すぎる建物だった。人間界にしては異常なほど霊力に満ちていた、チビとモグラが落ち着かなかつたのは、今まで暮らしていた横島の家とはまるで気配が違うから

(刺々しいな……この屋敷は)

近寄るものを拒絶する棘を持つ屋敷。しかし不思議な事にその棘は横島には向いていない、それは何故か？恐らくだが、神宮寺が横島に心を許しているからだろう

「サイキックソーサー！」

横島がそう叫ぶと、突き出した右手に六角形の霊力の盾が姿を見せる。いかんいかん、考え事をしていて横島の補助をしてなかった。少しだけ横島のチャクラの通りを良くする

「それは芦笛も使っていた物ですね？」

「うっす、最近出来るようになりました」

笛に教えられたと言うとその眉が小さく動く、目つきも鋭くなっているので不機嫌になっているのだと見るだけで判る

(お前は本当に変わった男だな)

見るからに訳ありと言う感じの女ばかりに好かれているなど苦笑している

「んで……うっ」

サイキックソーサーを握り潰すように拳を作ると、横島の肘までが霊力に包まれる

「それは伊達と戦った時とは違うものですね？」

「大本は同じだと思うっす、でもちゃんと握り込まないとアレにならないんですよ」

あの霊力の鎧とこの籠手は根本的には同じものだが、何がどうなったのか威力や能力がまるで違う

「んでこれをこうして、握り込んで行くと……」

凄まじい音を立てて今度は肩まで霊力の鎧で包まれる。神宮寺は興味深いですわねと呟き

「なるほど、面白い能力ですわ、それで陰陽術の方は？」

「えーと火と水、それと雷はギリギリってレベルですね。制御は正

直あんまり上手に出来てないんで、練習中です。水は最近霧を使っての攪乱と、水のレンズを屈折させて分身？見たいのが出来るようになりました」

あ、思いつきで武器に札張って使ったら、大変な事になりましたと笑う横島に頭痛がしたのか額を揉み解しながら

「大体判りましたわ。明日から本格的に修行に入りますので、今日はとりあえず自由にしなさい」

神宮寺が手を叩くとメイド姿の妖精が姿を見せる。横島がうおつと呻いて驚いているが、恐らくこの屋敷にいる間は結構見るので早いに慣れた方が良くぞと助言する。

「横島を部屋に案内しなさい、時間になったら浴場と食堂に案内しなさい。横島も横島で勝手に動き回らないこと、よろしいですわね」

勝手に出歩くなと念を押された後。修行の方針を考えるので部屋で呼ばれるまで休みなさいと言われた横島は思い出したように

「あ……その、GS試験の時に借りた指輪どっか行っちゃって……そのすいません」

そう言えば、あの霊力の籠手が具現化した時にあの指輪も粒子分解されて、横島の体内に吸収されていたな

「そうです。まあ別に構いませんわ、実験で作った物ですから大した物ではありませんし……気にしなくて良いですわ」

嘘だな、あれにはかなり緻密な魔術術式が刻まれていた。とても貴重な霊具だったはず、それを大した物ではないから、気にしなくて良いと言えるとは……かなり懐の広い女のような

「失くしちゃってすいません、今度何か埋め合わせをするんで……安物しか、買えないっすけどね。おーい！ジャック！部屋に戻るぞー」

【イッヒツヒート】

天井近くを飛び回っていたジャックを呼んでから立ち上がる横島を確認してから、妖精メイドは1度神宮寺に頭を下げながら、横島の案内を始めた

「判りました。どうぞ……こちらへ」

「え、あ。はい！じゃあ神宮寺さん！また後で」

妖精メイドに案内され地下室を後にし、横島の部屋へ戻る

【どうだ横島?ここでの生活には慣れそうか?】

チビ達のブラッシングをしている横島に尋ねる、すると横島は困ったように笑いながら

「なんかあの妖精メイドさんには慣れそうにないわ。ぽっと出てくるからめっちゃ怖い」

【そうだな。私でも感知出来ないしな】

急に出てくるあのメイドには驚くなど横島と笑いあいながら、この長い1週間をどうやって過ごすのかを横島と冗談を交えながら話すのだった……

なお横島がくえすの家に泊まり込みで修行となった初日

「あげは、横島がいないと寂しいの」

「わかるでちゅ、あげはもヨコチマにあえないと寂しいでちゅ」

自分よりも遥かに年下のあげはに慰められている蛍を見た優太郎は当然ながら絶句し

【え?まじこれで終わり?】

「……文句あるのか?」

横島がいないならとまともに料理する気の無いシズクはたくあんを切り、味噌汁を用意しただけで終わり

【はあ、横島さん……】

「おキヌちゃーん?鍋噴いてるわよ?」

【え?つきやああ!?!ごめんなさい!ぼんやりしていました】

おキヌは横島がいないので注意力散漫になっていた……

横島がいない、それだけでかなり致命的な悪影響が出ている事を、当然横島は知る由もないのだった……

## その4

レポート1 最初の1歩 その4

地下の広間から出て行く横島を見送ってから私は深く溜息を吐いた

「た、対応がわからない……」

た、確かに横島を自分の側に置きたいと思った。だから事務所兼自宅のこの屋敷に横島を招待した……だが現に横島が自分の側にいると落ち着かない、全く落ち着かない。私の意思に反して早鐘を打つ心臓の音がうるさい

「良くこんな状況に耐えれますわね」

芦蛭とか、シズクはこんな状況でよく平常心を保つことが出来ていると思う。いや、もしかして自分が初心すぎるだけ？と言う考えも頭を過ぎる

「どうしましょう……」

柩は適切な対応をすればと私に告げた。しかし急に会ったらパニックになってしまうと思えば勝手に出歩くことを禁止したが、それは果たして適切な対応だっただろうか？反省する点が多すぎる……

「……わ、私には早すぎたかもしれないですわ……」

ただ自分の側に置きたいってだけで行動に出たのは余りに浅慮だったかもしれない……短くて長い1週間でどうやって過ごすか……霊能力の修行中は意識を切り替える事が出来るから大丈夫ですが、それが終わると途端に横島を意識してしまう……

「本当にどうしましょう……」

これを機会に横島に私を意識して貰おうと思っていたのですが、自分が逆に意識しすぎている事に気付く私は早鐘を打つ心臓を手で押さえながらどうしましょうと呟く事しか出来ないのだった……

メイドさんが呼びに来るまで勝手に出歩いたら駄目だと言われた

ので部屋で待ち続けて2時間

「俺忘れられてる？」

【色々あるんだろう、もう少し待ってみろ】

幸い部屋の中にトイレが合ったから良かったけど、もし無かったら人間としての尊厳を失う所だった……

「みむう？」

大分屋敷の雰囲気にも慣れたのかちよこちよこと動き回るようになったチビを膝の上に乗せて

「もう大分落ち着いたみたいだなー。良かった、良かった」

「みむう♪」

顎をくすぐってやると気持ち良さそうに鳴く、さっきまでずっと震えていたので心配してたけど、落ち着いたみたいで本当に良かった。タマモはタマモで全く動じず俺の後ろの方で丸くなって寝ている

「うきゅっ！」

モグラちゃんもモグラちゃんまでベッドの上で跳ねたりして遊んでいるし、もう完全にこの屋敷の雰囲気にも慣れたみたいで良かったと安堵の溜息を吐いていると

「横島。入りますわよ」

ノックをしてから神宮寺さんが姿を見せる。メイドさんが迎えに来るって聞いていたので神宮寺さんが来て驚いていると

「少しばかり準備に手間取ってしまいましたいませんでしたわ。とりあえず屋敷の見取り図を用意しましたし、周囲の邪気溜まりも浄化しておきました。なので出歩いてても平気ですわよ」

穏やかに笑う神宮寺さん。俺がまだ見習いレベルだから安全を確保する為に出歩いたら駄目だと俺に念を押したのか……

「心配してくれてありがとうございます。やっぱり神宮寺さんは優しいっすね」

俺がそう笑いながらお礼を言うとそっぽを向かれた。解せぬ  
「あいだ!？」

さっきまでベッドの上で丸くなっていたタマモが急に頭の上に飛び乗ってくる

「グルルル」

しかもなんか唸ってるし……俺タマモ怒らせるような事したかな？

「狐の分際で」

しかもなんか神宮寺さんも怖い！つとと言うかこのままじゃ不味い  
と思い、多少強引だと思っただが

「神宮寺さんー！なんの用だったんですか？」

このままではタマモが危ないと思い、何の用事でしたか？と尋ねる  
「あ、ええ。夕食を作ったので呼びに来ただけですわ、屋敷の案内ついでに呼びに来ただけで他意はありませんわ」

「は、はあ？」

繰り返し呼びに来ただけと言う神宮寺さん。それ以外に何かある  
んだろうか？と思いつつながら、俺は神宮寺さんに案内され部屋を後にするのだった

「ここから先は私の私物などが置いてあるので立ち入り禁止です。まだ除霊していない骨董品や魔術書があるので下手に触って呪われても知りませんわよ」

そう言う道具の危険性は散々蛭に警告されているので、絶対に入らないようにしよう。チビやモグラちゃんにもちやんと駄目だと言っておかないとな、2匹とも悪戯好きの冒険好きだから、落ち着いてきたらこの屋敷をうろうろ動き回りそうで怖い

「ここが浴場。まあ、かちあう事もないでしょうから好きなタイミングで入ってください」

神宮寺さんはそうは言うけど、風呂場で遭遇なんてトラブルは避けたいので、そう言うのはちやんと気をつけておこう

「ではこちらです。そこそこの味だと思っっていますので、不味ければ残してくださいでも結構ですわよ」

そう言う神宮寺さんだったが、食堂に並べられたパスタやスープは抜群に美味しかった。蛭やシズクはあんまり洋食を作らないこともあり、物珍しさと空腹と言うこともあり、あつと言う夕食を終えてしまった

「その反応を見る限りでは不味くはなかったようですね。それともただ空腹だっただけか……なんにせよ、良かったですわ」

神宮寺さんが何か呟いたような気がしたけど、よく聞こえなかったな……尋ね返すべきかな？

「明日から修行を本格的に行いますので、今日早く眠りなさい。浴場の場所は先ほど案内したので覚えているでしょう？寝る前にちゃんと汗くらい流しておきなさい、汗臭いのは迷惑ですからね」

尋ね返そうと思ったのだが、また早口で言われ。口を挟む余地もなく、俺は食堂を後にするのだった

「なあ？心眼。俺って実は嫌われてるのかな？」

会話する余地もなかったので、俺は実は神宮寺さんに嫌われているが、事務所同士の話し合いで無理やり研修に来ているのではないだろうか？と思いい心眼にそう尋ねると

【女心は複雑怪奇だ。私にも判らない、横島おまえ自身で学べ】

頼りになる心眼先生が頼りにならないという初めての事態だ。と  
言うか女心を学べってどういう事やねん

「みふぁー……」

「むきゅー……」

かばあつと大きな口をあけて欠伸をしているチビとモグラちゃん。慣れない雰囲気であれたのか、普段よりもかなり早い時間で眠そうなる素振りを見せている。普段使っている籠が無いのでタオルとTシャツを適当に丸めてベッドの代わりにする

「ほれ、暫くはこれで我慢しな」

我慢しろと言ったが、嫌がる素振りも見せず丸めたタオルとTシャツの上で丸くなる姿を見て、これで大丈夫だと判断し、今度は自分の靴から着替えを用意していると

「コーン♪」

「わぷっ!？」

タマモが急に顔に飛びついてくる、結構な勢いで飛びついてきたのでその勢いでベッドにひっくり返ってしまう

「こーらー、急に飛びついて来たら危ないだろ？」



「くう？」

また私知らないよ？って顔をしてるなあ……誤魔化そうとしてると判っているのだが、その円らな瞳を見ると何も言えなくなってしまう。タマモをどけようとするが、俺の胸の上で丸くなって眠る気万全なので

(しゃーない、タマモが寝てから風呂に行くか)

チビとモグラちゃんも眠るまでは一緒に居てやった方が良いなど判断し、心眼に

「タマモ達が寝たら声を掛けてくれるか？多分俺も寝ちやいそうだし」

学校帰り、慣れない家、それに自分では判らないが霊力を消耗しているのかやたら眠い。だから心眼に起してくれるように頼み、少しだけ休もうと思いい目を閉じるのだった……

柱時計の午前零時を告げる音で思考の海から引き上げられる

「ついつい熱中してしまいましたわね」

横島の修行の予定を組んでいたのですが、横島の出来る事を考えているとあれも教えたらどうだろうか？いや、こっちも良いかも知れない？と次々に思いついてしまい、気がつけば6時間も考え込んでいた「可能性がありすぎるんですわね……本当に面白い男」

横島と言うのはアンバランスな男だ。潜在霊力は膨大だが、扱うことが出来無いのに、陰陽術や霊力の物質化と言う訳の判らない能力を使う。更に言えばあの眼魂とか言う霊的物質も魔法使いの観点から見るとありえないの一言しか出ない。あの眼魂と言うのは正直言っ使用わせる気は全く無い、あれはドーピングのような物だ。今はまだ良いが、いつどんな副作用が出るか判らない。そもそも美神があれを使わしている自体正気じゃないと言わざるを得ない

(まああれも使いようと思うべきですかね？)

あの鎧を呼び出さなければ特に問題は無い、ならば牛若丸の兵法を学ぶとか、剣術指導を受けるとか、できることは色々あると思う。最初の強い力を示したから、その使い方に目が行くのは仕方ないが、眼

魂はきつと本来はもつと別の使い方をすべき物ではないだろうか？それが私が考えて出た結論だ

「GS試験の時の事もありますし……あれは魂を納める器で……つといけないですわ」

あれは私は関与しないと決めたのですが、考え始めてしまうと眼魂の原理が知りたくなってしまふ。眼魂の事を考えるのは止め、調べた結果を机の中に戻す

「さてと……当面は陰陽術をメインにして見ましようか……私にも何かいい刺激があるかもしれないですし」

東方魔術と言える陰陽術。現在では失伝もしくは、一族の秘儀として必要以上に秘匿されている。確かに横島の陰陽術はまだまだと言うレベルだが、間違いなく陰陽術。これからどんどん発展していくだろう。その中に西洋魔術を組み込んだらどうなるのか？無論反発しあう可能性も考慮していますが、可能性は零じゃない。むしろ私と横島で新しい魔法の形を作ることが出来るかもしれないと思うと心踊る物がある。私だつて独自魔法は研究しているが、所詮は古い魔法を新しい形で作り直しただけ、完全なオリジナルとは言いがたいからだ。

「……汗だけでも流して来ますか」

大分汗もかいていますし、やはり淑女としては汗まみれと言うのは気持ちの良い物ではない、汗だけ流して来ようと思い。私は書斎を後にするのだった……

「ふう……さつぱりしましたわ」

横島にも風呂に入るように言っておきましたが、メイドとしてこの屋敷に召喚した妖精が湯を張り替えてくれたのだろう。綺麗な湯船で汗を流し、自慢の長い銀髪の手入れも行い、下着だけ身に着けてドライヤーで髪を乾かそうとした時。ガチャリと浴場の扉が開く、メイドかしら？と思い振り返ると

「え。えつと……えつと」

こつちを見て顔を紅くして絶句している横島の姿が視界に飛び込んでくる。一瞬私も呆けてしまったが下着姿を見られていると認識

した瞬間。一気に顔が熱くなり、それから遅れて羞恥心が襲って来て「つきやああああッ!!!」

反射的に右手で胸を隠し、突き出した左手から魔力弾を横島の顔面目掛けて打ち込む

「へぶろお!?!」

奇声を上げて吹っ飛ぶ横島に視線も向けず、左手で浴場の扉を掴んで閉める

「はあ……はあ……」

扉に背中を預けて呼吸を整えていると、扉がノックされ

「じ、神宮寺さん。すいません、えつとその覗くつもりとか全然無くてですね!?タマモとかと寝転んでいたらつい寝ちゃって、汗くらい流しておくべきかなあとか思つて「もう良い、もう良いですわ、これは事故です、お互いに忘れましょう」

早口で捲くし立てる横島の言葉を遮る、事故だと思つて忘れましようとは言いましたが、きつとお互いに忘れることは出来ないだろう。「着替えるので浴場の前から離れてください、10分ほどしたらまた戻って来てください」

横島の気配が遠ざかった隙にドレスに着替え、私は早足で自分の部屋へと戻った。魔法の研究とか、修行の準備とかやる事はたくさんあったのだが、とてもではないがそんな気分ではなくなってしまったから……

「はあ……」

ベッドに横たわり溜息を吐く、恥かしいと言う気持ちが強いのだが、少しだけ横島が自分を意識したということも判り嬉しいと思つている自分も居て、自分で自分の気持ちを制御できない今の状況に腹立ちを覚える

「今まではこんなに恥かしいって思つた事は無かったですわね」

自分の容姿には自信を持っている、相手の冷静な思考を奪う為に更に魅了の魔法を上乗せした事もある。まだ清い身体こそ守り続けているが色気を使う事は決して少なくはなかった。だが横島に見られた……それだけで動揺し、喜んでいる自分が居るのはどうしても理解

出来なかった

「これが恋って事なんでしょうか……」

横島に恋してしまったから、ここまで自分の心が乱れているのだろうか？

「でもまあ……下着姿を見られたのは良かったのかもしれないですね」

1つ屋根の下で居るといふ事ばかりを意識してしまい冷静さを失っていましたが、下着姿を見られたことを考えれば1つ屋根の下で居ることなんてどうでも良いと思えてくる

「これなら1週間くらい大丈夫そうですね」

それに下着姿を見た事で横島が間違いなく私を意識している。だからハプニングではあった物の、私にとってはマイナスではなく、むしろプラスになりつつあると思……と言うかそうでも思わないと羞恥心でどうにかなりそうだったので、自分に言い聞かせるようにそう呟き、目を閉じるのだった……

なお横島はと言うと……ベッドに座り込んで100面相をしていたりする……

「ああああ……駄目だあ、脳裏に焼きついている」

浴場で見た下着姿のくえすの姿を忘れることが出来ず、顔を赤くしたり、青くしたり忙しくその顔色を変えながら、頭を抱えて呻いていた……なお心眼はと言うと、苦悩している横島に助言……はせずに冷静にくえすの事を評価していた

【神宮寺くえすか……存外悪くないかも知れんな】

蛍と横島が付き合うことを応援していると言っていたが、口は悪いが横島の意味を尊重し、横島の可能性を十分に考え伸ばすことを考えているくえすもまた横島には良いかも知れないと呟いていたりする……

昨日の夜見た、神宮寺さんの余りに艶かしい姿が脳裏に焼きついて全然眠れなかった……

「みむうっ？」

「うきゅ？」

「くう？」

俺が欠伸をしているのを見て不思議そうに見つめてくるタマモ達になんでもないでと声を掛ける。まあ実際は何でもない所か、追い出されてもおかしくない失態を犯しているんだけどなあ……湯上りだったので白い肌が若干赤みを帯びていて、大事な所を隠している黒い下着までバツチリ見てしまった

(あうあう……駄目だ、これ暫く絶対忘れられん)

チビやタマモが居るから控えているが、俺だって健全な男子高校生だ。神宮寺さん見たいな美女の下着姿を見れば興奮してしまうのは当然だ

(頭冷やさないとなあ)

それに神宮寺さんにも謝らないといけな、そんなことを考えながら日課の散歩に出掛けようと思いい門に手を伸ばすと

「何をしているのです？私の元で修行中は私の屋敷から出る事は許しませんわよ」

背後から声を掛けられ、驚きながら振り返ると神宮寺さんが木陰で机と椅子を出して本を読んでいた。ぜ、全然気付かなかった……

「まあこちらへどうぞ。妖精メイドがそろそろ朝食と紅茶を用意するので」

向かい側に椅子に座れと笑う神宮寺さん。座るべき何だろうけど……

「チビとかの散歩はどうすれば？」

修行中だからと屋敷の外に出るのは許さないと言われても、チビ達の散歩はどうすれば？と尋ねると

「庭で好きに遊ばせて構いませんわ」

何なら庭で穴を掘つても構いませんわよ？と付け加えられたので、チビとモグラちゃんのリードを外して

「好きに遊んで良いってさ、俺は神宮寺さんと話をしないとイケないから少しチビ達で遊んでてくれるか？」

若干不満そうだが頷き、庭を走り回るチビとモグラちゃん。タマモ

だけは庭を走りに行かず、頭の上にしがみ付いている。そんなタマモに苦笑しながら神宮寺さんの向かい側に椅子に座る

「……」

時折紅茶のカップに手を伸ばしているが、無言で本を捲り続けている神宮寺さん。やっぱり昨日の事を怒っているのだろうか？誠意を見せるためには土下座するしかないか？どうやって許して貰おうかと考えていると

「昨日の事は事故。お互いに忘れましょうと言ったでしょう？それも責任取ってくれるんですの？」

せ、責任つて……えっえ……俺に出来る事って何があるだろうか？と考えていると、神宮寺さんの言葉から俺が何か失態をしたのだと悟ったタマモが

「グルウツ！」

「ぎゃあああ!?いであえええ!!」

全力で頭に噛み付いてきた。久しぶりのタマモの噛み付きに思わず涙を流しながら絶叫するのだった……

「面白いですわね。貴方の周りは」

痛む頭を摩っている神宮寺さんが口元に手を当てて、上品にくすくす笑っている。こういう素振りに、大きな屋敷を見ると神宮寺さんが良い所のお嬢様なんだと判る。

「修行中とは言え、屋敷の中に軟禁するのは些かやりすぎではないか？」

俺がそんなことを考えていると、心眼が修行の形式がおかしいと神宮寺さんに口論するが

「それは仕方の無いことですわ。芦菫や美神令子も横島の師匠です。私が教えている事と2人が教えようとしていることは別物です。下手な予備知識や偏見を持たれると指導しにくくなりますわ、少しの間は我慢してください」

そう言われると無理に屋敷を出る訳には行かないだろう。俺の我がままで神宮寺さんが考えている修行の予定を狂わさせる訳には行かない

【むう、そう言うことならば仕方ないか】

「ええ。そう言う訳です。納得して頂けたのなら幸いですわ」

穏やかに笑う神宮寺さんを見て、蛍や美神さんが神宮寺さんは危険だと良く俺に注意してくれていたが、やっぱり神宮寺さんは優しく良い人だと思ふ気持ちが強めた。大体昨日着替えを覗いてしまった俺に対して笑顔で対応してくれるなんて、常識的に考えたらありえないことだと思ふ

「朝食を……お持ちしました」

「ふおおっ!?!」

またぬつと現れたメイドに絶叫する。慣れろと言われたが、これは絶対慣れる事がないと思う……サンドイツチを俺と神宮寺さんの前に置くメイドさんだが、俺の前にだけかなり大目にカットした果物と油揚げが置かれる

「ありがとうございます」

タマモ達用の食事も用意してくれた事にお礼を言うが、溶けるように消えてしまう。

「メイド妖精に自我はありませんのでお礼を言っても無駄ですわよ?」

仮にそうだとしても、気持ち的にはお礼を言いたいじゃないですかと神宮寺さんに言いながら、庭を駆け回っているチビとモグラちゃんを呼び寄せてから用意された食事に手をつけるのだった。なんせ今日から修行が始まるのだから、ちゃんと動けるように食べておかないと思っていたのだが……

「あの?…これ本当に修行ですか?」

座禅を組んで精神集中からですと言われ、言われた通り座禅を組む「ええ、そうですわよ、霊力とは魂の力、まずは動じない精神力が必要ですよ」

いやまあ、それは蛍とか美神さんとかにも聞いているから知っているんですけど

(なんで俺は椅子に座っている神宮寺さんの前で座禅を組まないといけないんだ?)

見ようによつては土下座しているように見えるんじゃないかなろうか？それに平常心と言われても、神宮寺さんが足を組みなおしたり、伸びをする時に揺れる豊満なバストとかにどうしても視線が向いてしまい、平常心所じやないんだけど

「ガルルルル」

後ろでタマモが唸っているからそれもめっちゃ怖いし……反対側を向いたりしたら駄目なのかな？

「私の前から移動する事は許しません」

尋ねる前に駄目って言われた……もうこうなつたら出来るだけ意識しないようにして、座禅終わりって言われるまで耐えるしかないと思っただが……やっぱり男つてのは助兵衛な生き物な訳で……

（駄目だーどうしても視線が行ってしまう!!!）

足を組みなおす時に神秘の三角が見えないかな？とか、揺れる胸にどうしても視線が向いてしまう。こんな事咎に知られたら殺される、殺されるって判っているんだが、どうしても俺は視線を逸らすことが出来ないのだった……

なおくえすはくえすで100面相をしながら、座禅に集中しようとし、そのつど自分に視線を向けている横島を見て

（なんかこれ……良いですわ）

くえすは見せ付けるように動いているので、横島の視線がどうしても吊られてしまう、そして横島は横島で見たいけど、昨日の事もあるし、修行を見て貰っていると言う事もあり、罪悪感を感じ、目を逸らそうとするが、どうしても見ってしまうそんな横島の反応が、くえすのSっ気に直撃しており、本来30分で終わらせる予定だった座禅は予定を大幅に超え2時間近く行われるのだった……その2時間の間にタマモに横島が噛まれた回数は楽勝で3桁を超えていたりする……

リポート1 始めの1歩 その5へ続く



## その5

レポート1 始めの1歩 その5

「ふう……やっと終わった」

私の背丈よりも遥かに高い3つの書類の山を見ながら大きく背伸びをする。GS試験のガープに関する報告書を国連GS本部とバチカンに送り、ガープのアジトとして利用された白竜寺をどうするか？と言う問題。結構時間が掛かったけどやっと終わった

「まだノスフェラトウのが残っているんだけどねえ」

次の問題はノスフェラトウに関することだが、とりあえずこれは後回しにして、面会者との話をするべきだ

「ごめんなさいね、結構バタついてるのよ」

かれこれ1時間近く座って待っていてくれた3人の青年に謝る

「いえ、気にしないでください。忙しいのは判ってましたから……陰念先輩？陰念先輩？会長さんの仕事が終わりましたよ？」

東條修司が腕組をして眠っていた陰念を揺すると

「……ん？んあ？そうか……大分長かったな」

首を鳴らしながら姿勢を直す。まだリハビリ段階で聞いてたけど、松葉杖こそ必要としているが、自分でもう出歩けるようになってるなんて恐ろしい回復スピードね

「……ママに似ている」

……1人なんかおかしい事を言ってるのがいるのは気にしない方向で行きましょう。これ以上心労を積み重ねるような真似はしたくないので

「今日来ていただいたのは白竜寺の今後について話し合うためです」

GS養成所としての資格が剥奪されるのは決まっているが、その後どうするか？と言うのはまだ決まっていない。その為に現段階で白竜寺で最も長く修行していた陰念と伊達雪之丞を呼んだのだ。東條は陰念の付き添いとして同伴して貰っている

「二応兄弟子が何人かいたはずだが？どうなった？」

言いにくいことよね……でもまあいずれは判ることだから

「白竜寺を卒業したGSは白竜寺との絶縁を公表したわ。多分頼るところは出来ないと思うわよ?」

ガープに操られていたと言うことを考慮し、被害者として話を進めていたんだけど、自分の実績に傷が着くと思っただのかGS試験終了後から1週間も経たない内に絶縁するとGS協会に書類が届けられた

「ふん、まあそんな事だろうと思っていたがな……それで?俺達は今後どうなる?それに入院していると聞く勘九郎はどうなっているんだ?」

陰念がそう尋ねて来る、外見は粗暴だが、かなり頭は切れるみたいね……東條君は一生懸命手帳にメモをしているし……伊達は

「その長い髪も美しい。やっぱりママに似てる」

……この子はガープに操られていたほうが良かったんじゃないかしら?少なくともそっちのほうがまともに見えるんだけど……とは言え、冗談でも口にして良い言葉ではないのでその言葉を飲み込む  
「鎌田勘九郎については心配しないで、私も詳しくはないけど生きているとは聞いているわ」

ドクターカオスが預かっているから詳しい事は知らないんだけど、命に別状は無く手術に耐えるだけの体力が戻ったら手術すると聞いていると説明してから

「白竜寺の事に戻るわね。今のままだと白竜寺は解体されるけど、そうなるにあの霊地も一時的に国の所有物になるし、それに貴方達の住む所が無くなるわ」

白竜寺で修行している子供は基本的には孤児だったり、親との確執があり親と暮らすことが出来ない子供が団体生活を行いながら、勉強を学び、GSとしての知識を学び独り立ちしていくことを目標として開設された修行場だ。今も40人近くが暮らしていることを考えると解体と言うのは避けないといけない、それに霊地としても優秀なので出来ればGS協会の管轄に置いておきたいと説明し、その上で

「とりあえず私から言えるのは、解体されて全国の孤児院に散らばる、これはまず無しの方で行くつもり。んじゃあどうするかって言う

と……これ絶対に他言しちや駄目よ?」

当事者だから話すが、本当なら隠し通しておきたい話なのよね……だから絶対に他言無用よ?と前置きしてから

「ガープの襲撃の事もあって、近い内に天界から何人かの英霊が東京に派遣される事が決まっています。その英霊の1人が駐在する場所として白竜寺を指名しているの」

英霊と聞いて目を見開く陰念と東條君。まあこの反応は当然よね

「えつと英霊つての過去に偉業をなして人間霊から精霊になったつて言う……?」

「ええ、そうなるわね。よく勉強してるじゃない」

英霊は今のGS教本には記されていない。何故なら英霊が下界に降臨するだけの事件が起きていないし、降臨する必要も無い。だがガープが動いているのならその対策として派遣される事が決まっている

「寺を指名すると言うことは仏教関連の英霊か?」

「ええ。そうなるわ、えーとつと確か……」

天界から送られてきた資料の中に誰が来るか?と言うのが合った筈……それを探していると

「……こね!悟空に聞いたGS協会って言うのは!」

……なんかものすごく嫌な予感がするんだけど……会長室の扉が開きそこから白い法衣を着た女性が姿を見せる

「神代琉璃ちゃんね?小竜姫から聞いてるわ!これからお世話になるわね!この子達が私の弟子?」

……いや、いや待つて、待つて……まだ来るつて聞いてないんだけど……

「えつと貴方は?」

東條君がそう尋ねると法衣の女性は穏やかに笑いながら

「あたしは玄奘三蔵!これから貴方達のお師匠様として修行をつけるわ!よろしくね!」

三蔵法師……まさかのあの西遊記の偉人。そんな女性を目の前にして思った……もう駄目だ。これは私の許容範囲を超えている

……つと

「じゃ、東條君。陰念君……彼女を白竜寺に案内してあげて、そこからは彼女の指示に従うこと」

悪いと思っただが2人に丸投げすることにするのだった……なお伊達は

「……こつちもママに似ている、なんて美しい……」

玄奘三蔵様を見てママに似ていると呟いていた。それを見て、私は溜息を吐きながら

「ごめん、あと頑張つて」

さー修行よ！修行！功德を積んで立派な仏教徒になるのよー！と叫んでいる三蔵様とママに似ていると呟き思考停止している伊達を東條君達に押し付け會長室から追い出したのだが、その時の陰念君と東條君の恨めしそうな目は暫く忘れられそうに無かった……

神宮寺さんの屋敷で修行を始めて3日経った。蛍やシズクに会えないのは寂しいが、成長しているという実感を得ることが出来ていて、今度の除霊試験は合格できそうな手ごたえを感じていた

「はい、そのまま両手・両足に靈力を維持……そうですわね、10分で良いですわ」

俺は今水の上で靈力による干渉で水面に立ちながら、両手に靈力を展開していた。水の上に立つだけでも必死なのに、更に両手から靈力を放出してそれを10分維持しろとか……ほんとマジ厳しい……蛍や、シズクの教え方と違ってスパルタだが、教え方が俺に合っていたのか出来る事が徐々に増えてきている

「こらー集中が乱れていますわよ」

「つとつと」

神宮寺さんの声を聞いて足元を見ると、右足が沈んでいたのだから意識を向けると右足が徐々に浮かんでくる

「よろしいですわ、これが靈力のコントロールの基礎です。実践で水の上を走るなんて真似はしませんが、瞬発力の強化や蹴りの強化など応用が利きます。しっかりと覚えなさい」

うつすと返事を返す、心眼を身に着けていると心眼が補助してしまうので心眼も外しているので本当に必死だ、後2分で10分つと言う所で

「みーむー・みーむー」

「うきゅー！うきゅー！」

チビとモグラちゃんが前足を振って応援しているのを見て、思わずくすりと笑ってしまったのだが

「っ!?!冷てえ!!!」

その一瞬で集中力が途切れ、俺は水の中へと落ちるのだった……

「うーさむう……」

「クウ」

タマモの狐火のまえで暖まりながらそう呟く、今日は大分良い感じだと思っただが……流石に集中力が途切れると駄目だな。タマモにも気をつけなさいって言われてる気がすると思いきや苦笑する

「まあ霊力のコントロールは妥協点ですわね、5分持てば良いと思っ  
ていたのですが……よく持ったほうですわね

神宮寺さんが褒めてくれた事に驚いていると神宮寺さんは穏やかに笑いながら

「両手足から霊力を放出し、なおかつ水面に立つ。これプロのGSでも難しいですよ？私は魔法でやりますが、霊力だけでやるのは緻密な霊力コントロールが必要になり、並のGSでは出来ない技術ですわ」

そ、そうなの？そんな事を言われても俺には全然実感が無いんだけど……

「でもこの3日で横島。貴方の霊力の方向性が見えて来ましたわ」

俺の霊力の方向性……これは修行を始める時に聞いた、霊力にはある程度の方向性があると

例えば美神さんなら道具を仲介する事で、霊力の出力や形状を変える集束型。破魔札や、精霊石に霊体ボウガンに霊力を共有して破壊力や貫通力を上げるといふ戦闘スタイルをとるらしい。威力が上がる

反面破損率が上がる為、道具が嵩張るのが欠点らしいが、道具さえあれば安定した戦いが出来るのが利点らしい

エミさんなら自身の身体や、歩法などを組み合わせ靈力を増幅し、対象に向けて呪いと言う形で放つ、放成型。ちなみに神宮寺さんも放成型らしいが、集束も出来るらしい、詠唱や歩法を使うのでどうしてもタイムラグが発生し、護衛や事前に詠唱し遅延させるや、ある程度の威力の低下を覚悟し、無詠唱や歩法の省略をするなど頭を使った戦い方が要求されるらしい

眼鏡を外した唐巢神父やピートに雪之丞のように道具を使わず、直接手足に靈力を集束して戦う。靈波格闘型、道具を扱う集束型と違うのは、道具を仲介しないでダイレクトに靈力を扱える事と身体能力の強化にあるそうで、靈波を手足から放出する事ができるので、集束と放出のハイブリッドらしいが、威力も安定度も下がり、卓越した術者で無ければこちらもタイムラグが発生し、格闘の補助程度になるのが難点らしい

ある程度の型と言うのは最初だけで、慣れてくれれば集束も放出も扱うと言うのが当たり前。そこから派生するのは例を挙げれば切がないそうだが、大まかに分けるとこの3つに分かれるらしい。じゃあ俺はどんなタイプなんだろうか？

「横島。貴方の靈能は圧縮・形状変化だと思いますわ」

あ、圧縮？それに形状変化？教えて貰っていない事なのでということか判らず困惑していると

「靈力の籠手、そもそもこの時点で私は貴方の靈能が圧縮であると読んでいました。そもそも靈力にしろ魔力にしろ物質化させるのは非常に困難ですわ。見習いの段階でそれが出来る、それすなわち、貴方の靈力の方向性が圧縮であるという証明ですわ。そして靈力の翼なども考えると、1度圧縮した物の形状を変えると言う事も出来るでしょう。今までは無意識で使っていたと思いますが、これを意識して使えるようになれば戦術は大きく広がりますわ」

た、確かに……意識して籠手を変化とかさせた事はなかったな……じゃあもしかして

「籠手を変形させて剣とかにも出来るって事ですか？」

心眼を頭に結びながら尋ねる。神宮寺さんは理論上はですがと前置きしてから

「ガープを殴り飛ばしたあの籠手。あれは恐らくアレで完成しているので今から形状を変えようとするのは無理でしょう。ですがその前に使った霊力を拳に収束する、あの形態でしたら恐らく形状変化出来ると思うので、目標としては左腕を形状変化が自在に出来る籠手。右腕を高火力の籠手と言う形にする事ですわね」

左右で役割分担するのか……でも確かにそっちのほうが扱いやすくなるかもしれないな

「それと、先日の方は覚えていますか？」

先日の話？……あ、なんか寝る前に言われてたな……少し考えてから

「俺の霊力に魔力が混じってるって奴ですか？」

詳しくは判らないが、俺の霊力に魔力が混じっており。怒りや憎しみなどの負の感情で活性化し、暴走する危険性があるとされたのは覚えている。なんで俺の中に魔力があるかは判らないが……

「そうですね。良いですか？自分の意思で魔力をコントロールするのは非常に難しいです。今後時間を見てそれも指導して行きますが、この1週間では教える事が出来ません。応急処置として封印を施しますので、心眼抵抗しないでください」

そう言って神宮寺さんの指が額に伸ばされる。暫くすると軽い静電気見たいのが走った感覚がした……これが封印って奴なのかな？

「これで暫くは大丈夫でしょう。しかし、決して怒りに身を任せたりしないこと。魔装術で暴走した陰念よりも遥かに酷いことになりますわよ」

あれよりも酷い、想像するだけでも怖いので何度も頷く。絶対に魔力にしろ、霊力にしろ暴走しないように気をつけよう。魔力についての注意が終わるとまた霊力の形状変化とかの話に戻ったのだが、正直難しすぎて全然理解出来ない

「みみー」

「ずぶーずぶー」

チビとモグラちゃんは難しい話に着いて来れず、丸くなって眠っている。出来れば俺も眠りたい所だが……そんな事をするとうなるのか想像するだけでも恐ろしいので、判らないなりに自分なりに理解しようと努力している

【それは確かに得策かも知れんな。最終的には左右を自在に切り替えて展開できるようになれば、更に戦術は広がるな】

ウーン？そうは言われても、背中に翼の出る籠手は右腕じゃないと出来ないし、最終的につて言われてもいつになるか判らないな……

【では昼食を挟んで今度は陰陽術ですわ】

その言葉に思わずうげつと呻いてしまう。陰陽術は座って教本を見て、数式？見たいなのを延々と書くだけだし、神宮寺さんの話は難しくして全然理解できない。懇切丁寧に教えて貰っているのに理解出来ない自分の脳の残念さに思わず溜息を吐きそうになった時

「くひひひ！大分絞られてるみたいだねえ」

「のわあ！ひひ、柩ちゃん？」

いつの間にか俺の後ろに居てくひひつと笑っている柩ちゃんに俺は驚き、タマモ達を抱えて思いつき後ずさるのだった……

ど、どうやって入って来たんですの？私の結界をすり抜けて入って来たしか思えない柩に驚いていると柩は

「やあやあくえすーずいぶん頑張っているみたいだね！くひひひ、プリティなものも手助けに来てあげたよ」

「帰れ」

やっと横島を見て動揺しなくなったのに、何が悲しくて柩と一緒に横島の修行を見なくちゃいけないのか？と思いつくと柩はくひひつと笑いながら近寄って来て

(とても良い情報が未来視出来たから、態々教えに来て上げたのにそんな事を言うんだね。ボクは構わないさ、芦笛にその情報を流すだけさ)

それをされると非常に辛い……ニヤニヤ笑っている柩に殺意を覚



えながらも、情報は欲しいので仕方なく、本当に仕方なく

「特別に許可しますわ。横島、午後からは柩も一緒に貴方の修行を見ますので、では昼食としましうか」

「ボクも頼むよ♪お昼食べてないからね」

図々しくも自分の分も昼食を用意しろと言う柩に心底殺意を抱きながら、妖精メイドに1人分の昼食の追加の指示を出し、妖精メイドが昼食が終わるまで休憩となったのだった……

「え!?そ、そうなの?柩ちゃんの未来視ってずっと暴走してるの?」

ポリポリと錠剤を齧っている柩を見て食欲を失った私ですが、横島はそんな柩を心配してどうしてそんなに薬を飲んでいるのか?と尋ねていた

(なんか面白くないですわね)

横島が柩を気にかけているのを見てると胸がざわざわして不快感もそうだが、面白くない。今まで感じたことの無い感覚に眉を顰める

「そうなんだよ、だから薬で抑制しているんだけどね?くひひ、本当何とかして欲しい物さ、じゃないとボクも20歳くらいで死んじゃうからねえ……まあ短命なのは自覚してるけどさ」

「いや駄目だろ!?そんな簡単に諦めたら駄目だろ!」

横島に怒鳴られて目を丸くしている柩だったが、嬉しそうに笑いながら

「ああ、ボクの事を純粋に心配してくれた人間は随分と久しぶりだ。心配してくれてありがとう」

いつもの不気味な笑い声ではなく、年相応の笑みを浮かべる柩を見て、顔を赤くしている横島を見て

「昼食は終わりですわ!それと今日はもう休みなさい!」

思わず横島にそう怒鳴りつけ、私は書齋へと足を向けるのだった……だがこんな妙な雰囲気でもな講義が出来る訳もなく、18時まで予定していた講義を14時で終わりにし、今日はもう自由にしないと言っただけは自室へと逃げるように引き返すのだった……

うーん、この反応は流石のボクも予想外……ちよつとくえすをからかってやろう程度に思っていたんだけど、かなり怒らせてしまったよ  
うだ

「柩ちゃん……俺なんかしたかなあ？やっぱ馬鹿だから神宮寺さんの言ってる事を半分も理解出来ないから怒らせちゃったのかな？」

うん、それは違うよ？と即答する。くえすはただ面白くなかった、それだけだ。ボクを気に掛けている横島を見て、面白くなって、そして腹立ちを覚えた。それは余りにも幼い感情の発露。嫉妬と呼ばれる物だ

(くひひ♪本当に面白いね)

魔法の後遺症で感情のいくつが正常に機能していないくえすがここまで感情を露にした。それはボクからすればとても喜ばしく、そして面白い物だ

「横島。君は気にしなくて良い。親友のボクがくえすと話をしてくるよ」

親友所か、お互いに人に好かれていないGSってだけの腐れ縁なんだけどねえと心の中で呟いていると

「いや、俺も行くよ。謝らないと」

まあ横島の言っている事も判るんだけど、きつと今ボクと横島が一緒に居ると更にくえすの嫉妬心を刺激するだけなので止めておいた方が良い。しかし嫉妬しているなんて横島に説明したら、それこそくえすが憤怒するので

「女性の部屋に押しかけるほど失礼なことは無いよ。大丈夫さ、ボクがちやんと宥めておくから君は部屋で待っていると良い」

そこまで言われると流石の横島も着いてこようと思わなかったのか、部屋で待っていると消沈した様子で呟き、狐達を抱えて階段を昇って行った

「さーて、ボクは我侘な魔女様を慰めに行きますか」

このままだとくえすはきつと大変な事をしでかすだろう。それこそ魔法をいくつも使って横島を自分の屋敷の中に閉じ込めるくらいはするだろう。感情を上手く制御できていないくえすの感情の爆発

だ。どうなるか考えるだけでも恐ろしい、そのフォローをしておかないとね

「くえすー？くえすー？扉くらい開けたまえよ」

くえすの部屋の扉を叩くが反応がまるで無い、生命反応は感じているので、部屋の中にいるのは間違いないんだけどね

「良い事を教えてあげるからさあ？話くらい……くひひ♪良い反応だね」

扉が勝手に開く、これは入って来いって言う事だね……まあー確実に荒れているくえすと話をするのは正直めちやくちや怖いんだけど……

「やるしかないよねえ……」

確実に途切れていたくえすの人間としての未来を繋いでくれた横島。だけどそこから先は不鮮明でいつまた途切れるかも判らない不確定な物だ。なんせくえすの未来はガープに連れ去られ、魔族となる事で決まっていた。それを変えたのは横島だ、だがそれを換え続けることは横島だけでは出来ない。周りの環境、そしてくえす自身が変わって行かなければ容易くくえすの未来はまた元に戻るだろう

「ま、どうせ10代で死ぬ身だ。くえすとあのお人好しの為に頑張ろう……」

ボクはもう自分の死ぬ年齢も場所も知っている、ボクが最後の夜光院となる事も知っている。だから死ぬまでの後数ヶ月から1年未満……勝手に友達だと思っているくえすと、あのことまでのお人よしの馬鹿の為に頑張ろうと呟き、ボクはくえすの部屋へと足を踏み入れるのだった……

くえすの事務所に横島君が研修に行つて3日経つた……琉璃の所で住所を聞いて、くえすの事務所に行つたけどくえすの事務所は結界がめちやくちや張られてて進入不可能。なおかつ電話も出来ないのどうなっているのか判らないという状況だった

(ちゃんと修行してるのかしらねえ)

横島君は女好きなのでくえすと2人きりつて状況でちゃんと修行

しているのか？とかは確かに気になってはいる、気になってはいるんだけど……それ以上に今私が気にしないといけないのは今の事務所の状況である

「……」

「蛍ちゃん？蛍ちゃん？大丈夫？」

事務所のソファアームに腰掛けて全く動かない蛍ちゃんや

【ぶつぶつぶつぶ……】

なんか小声でエンドレスで呟いているおキヌちゃん、そして

「……………なんだ？」

普段の4割り増しで敵意むき出しにしているシズクをどうするか？って言う問題だ。横島君が居ないってだけでシズクはやる気無し、蛍ちゃんは注意力散漫。おキヌちゃんはポルターガイスト能力の低下……正直言って戦力外レベルになってしまっていた。それでも2日は頑張ってくれていた、だが3日目になると明らかにやばい感じになってしまった

(これ依存に近いわよね。大丈夫かしら……)

どうも私の見た所では全員が全員依存に近い。こんなんで本当大丈夫なのかしら？と不安に思ってくる、例えば蛍ちゃんと横島君が付き合えば良いと思っていたけど、そうなった場合のシズクとかの反応がめっちゃくちゃ怖い

「本当。協力してくれて助かるわ、ノツブ」

そんなわけで今私の除霊の助手として協力してくれているのはノツブだ。現代日本を楽しむ為に成仏しなかった彼女は大分霊力と力を失っているらしいが、それでも英霊は英霊。並みの雑霊なんかよりも遥かに強く、沖田ちゃんも協力してくれているので何とか除霊以来をこなす事が出来ていたが

【む？後にしてくれんか？このポンコツが】

【かぶっ、沖田さんはポンコツじゃ……無いですよ？】

吐血してる沖田ちゃんを看護しているノツブ。意図的に吐血を我慢していたせいか、昨日の除霊の後盛大に吐血し行動不能になってしまった

(不味いわね……)

今日の夜の除霊はかなり厳しい、何とかして蛍ちゃんとシズクにやる気を出せることは出来ないかなあ……ぺらぺらと保留になっている除霊物件を確認する。その中で1つやたら目を引くものがあつた(スライム……か)

某ゲームのせいで弱いと思われるスライムだが、実際は増殖するわ、巨大化するわ、水に溶けるわで非常に厄介な軟体魔法生物だ。それが住み着いているホテルからのスライムの駆除の依頼……報酬はスライムの駆除の適正価格の5000万の半分の2500万……その代わりに駆除すれば貸切でホテルの2泊3日の宿泊。露天風呂に温水プールもある高級ホテル。食事は3食高級食材を使った和・洋・中の食べ放題、しかも近くの遊園地のフリーパス……人数の指定も無い。全員で行って慰安旅行にしても良いと思える好条件だ

(これ案外良いじゃない)

スライム駆除はちゃんと万全の準備を整えればそう難しいものじゃない、寧ろ簡単な部類になるだろう。なんせこつちには水神のシズクがいる、スライムが水の中に居ても見つける事が出来るのだから「ねえ？蛍ちゃん？シズク」

声を掛けても反応0なのが悲しいわね、横島君が居ないと本当魂が抜け落ちたみたいな顔してるし蛍ちゃん……もうこんなことになるくらいならさっさと付き合ってしまったら良いのにと思いながら

「横島君が戻って来たらさ、この依頼受けてみない？高級ホテルに住み着いたスライムの駆除」

うん……やつぱりこの段階じゃ反応ないわね

「スライムを駆除すれば貸切で2泊3日の宿泊、しかも露天風呂と温水プールは使い放題。食事は3食全部高級食材を使った和・洋・中の食べ放題」

ノツブと沖田ちゃんが反応する。ノツブは大丈夫だと思うけど、沖田ちゃんの場合エミとかの助っ人要請があるからついてくるのは難しいわよね……同行できるなら連れて行ってあげても良いけど……ぴくりと僅かに反応を示した蛍ちゃんとシズク

「んでしかも近くの遊園地のフリーパス付き、依頼って言うより慰安旅行でどう？まあまずは今週の依頼を完遂してからに……」「美神さん！なにやっっているんですか!?早く準備しましょう!」え、ええ……」「弾ける笑顔を向けてくる蛍ちゃんと無言で水を大量に溜め込み始めるシズク。

【今なら私呪いも行けそうです!】

ポルターガイストが復活し、呪いまで行けそうですと叫ぶおキヌちゃんに頭痛を感じながら、これで今日の依頼は何とかなるわねと思いつつ、依頼を出しているホテルにその依頼を受けますという旨の連絡を入れる、幸いにも他にも引き受けるという言うGSが居なかったのですんりの依頼を受ける事が出来た

(まあ何か悪い顔してるけど、私には関係ないし)

もう何か凄い悪巧みしている顔をしてる蛍ちゃん達を見て、今くえすの所で研修を受けている横島君にきつと災難が起きるだろうけど頑張つてと心の中で呟き、今夜の除霊に必要な道具の確認をするのだった……

リポート1 始めの1歩 その6へ続く

## その6

レポート1 最初の1歩 その6

くえすと話をする為にくえすの部屋に入ったけど……

(これ半端ないね!?)

くえすの制御下から離れた魔力が逆巻いている。下手に雑霊とかが吸収したら大変な事になりそうだ……。もしかしたらガチで今日死ぬかも……。ボクはそんな恐怖を感じながらくえすの姿を探して部屋の奥へと歩き出した

「なんですよ」

(うわーお……。こんなくえす初めて)

超不機嫌の上に更に超がつくレベルで不機嫌だ。自分の魔力が制御出来ていないのに気付いていても制御しようとしな……。それだけ不機嫌と言うことだ

(良い傾向だと思っただけど、これはやばいかもね!)

魔法とソロモンの魔力を内包する後遺症で、くえすの感情のいくつかは正常に機能していない、例えば喜びや悲しみと言った感情だ、そして攻撃性や憎悪といった負の感情ばかりが発達している。ゆえにくえすは危険とされているのだ、今回の事で嫉妬とは言え少女らしい感情が出たと喜んだけど、この様子だと自分の感情ばかりを優先して、それこそ横島を拉致監禁しかねない……。まあそれは横島とくえすの問題なのでボクが言う事じゃないけどさ……。変わりすぎだよ。他人なんてどうでも良いって言ってたくえすがここまで執着するなんてねえ、まあ見ている分には面白いから横島がどう頑張るかをこれからも生きている限りは見ていようと思いつながら

「約束していた良い情報を教えてあげようと思っただけ」

ぴくりと眉が動く、その情報が欲しいからボクが屋敷に居ても良いと許可を出したんだ。不貞腐れていても反応してきた

「横島の除霊試験これが成功すると面白い未来に繋がるんだ。だから横島が除霊試験に合格出来るように鍛えておく、それがまず第一条

件」

ここで横島が除霊の実地試験に落ちると駄目だから、不測の事態に備え、対応出来るだけの知識をつけさせると良いねと付け加える。最近悪霊や妖怪のパワーアップが続いているのでそう言うのにも対応出来る様にしておく必要があるだろう

「その後に横島がくえすに会いに来るからそれを待つ事。そうすればきっと楽しい事が待っているよ」

うーん……これだけじゃくえすは納得しないか……まだ不機嫌そうにしている

「じゃあもう一つ。近い内に横島の母親が日本に来日するよ。師匠として面倒を見ていた時期があると話をすればいいんじゃないかな？」

このときにしつかりとした対応すれば、くえすもかなり気に入られるんじゃないかな？と付け加える。横島に気に入られることも重要だが、母親と繋ぎを作っておく、これも大事なことだとボクは思うよ。現に虫は何回か挨拶をして、既に大分気に入られているみたいだしね、急がば回れとも言おうと言うと

「まあそれなりに有益な情報でしたわ。それなりに……」

それなりの部分をかなり強調しつつ、周囲の魔力を自身の制御下におき始めるくえす。ちよつとは落ち着いてくれたみたいで安心した

「ま、一泊したらボクは帰るよ。お邪魔虫そうだからねえ」

「な、なあ!」

顔を紅くし動揺するくえすを見て笑いながら、ボクはくえすの部屋を後にしたのだが、出る直後に見た横島の母親に会うときにどんな服を着ればいいのかと右往左往しているくえすの姿を見て、更に笑いながらボクに宛がわれた部屋に向かって歩き出すのだった……

昨日の講習を途中で切り上げられてしまい、神宮寺さんが怒っていると思っていたんだけど

「何をしているのです？さっさと朝の修行をしますわよ？」

なんか偉い上機嫌で思わず面食らってしまった。許して貰えなくても謝ろうと思っていたんだけど、今までで最高に上機嫌だと判る。



なんか鼻歌も歌っているし……柩ちゃんがどうやって神宮寺さんの機嫌を直したのだろうか?と思い首を傾げていると柩ちゃんが近寄ってきて

(なにちよっとした……し……)

何かを俺に耳打ちしようとした瞬間。神宮寺さんの手元が光り、俺と柩ちゃんの間にはナイフが突き刺さっていた

「み、みむう!?!」

「チビーツ!?!」

ギリギリでかわしたチビを見て慌ててナイフを引き抜く

「み、みうう……」

セーフと言わんばかりのジエスチャーを繰り返しているチビ。しかし本当にギリギリだった。後ほんの数センチ下だったらチビに刺さっていた

「何か言いかけましたか?柩」

ニツコリとワラウ神宮寺さんに俺と柩ちゃんは敬礼しながら声を揃えて、何もありませんと叫ぶのだった……つかしってなん「うひいっ!?!」

柩ちゃんの言い掛けた事を考えていると、俺の顔の横にナイフが突き刺さった。エスパール!?!あ、いや魔法使いか!?!

「何か考えましたか?」

「何も考えていません!!!」

物凄いエガオの神宮寺さん。下手なことを考えるとヤバイ……俺は久しぶりに生命の危機を感じていた……なおそんな俺に気付いたのか、モグラちゃんにチビ、そしてタママが慰めるように擦り寄ってきて、それに少しだけ癒されるのだった……

「では柩も帰ったので修行を始めましょう。とは言え残りは金・土・日の3日間。そこで陰陽術を伸ばそうとしても中途半端になるでしょう。ならばその3日間、全てを霊力の操作と体術に当てます、空き時間は除霊の現場で考えられる状況全てを資料と共に説明します」

霊力の操作と体術か……訓練の方向性の変更は正直ありがたい。陰陽術は俺には難しすぎて理解出来ないからだ。しかし空き時間も

勉強とは……ううーん、でもやるしかないよな。折角忙しい中俺の修行を見てくれているんだから、我侂なんて言える立場に無いのだから「まあ……手加減は出来るでしょう。最初は死ぬ気で向かって来なさい」

ただね？ただ……なんで神宮寺さんは全身から光を放ちながら拳を握っているんでしょうか？

【魔力で強化してるんだ。虫よりも遥かに強いぞ、しっかりと構えを取れ】

いやいやいや！心眼先生！なんで俺と神宮寺さんが殴りあう事で決定しているんですか!?

「心配する必要はありませんわ。貴方の攻撃なんて私には届きません、私の攻撃を避けて、反撃する間合いを学びなさい。では始めますわよ？」

軽い感じで言う神宮寺さんだが、凄まじい踏み込みで放たれた肘打ちを咄嗟にしゃがみ込んで避け

(や、やるしかねえ)

女性に手を上げるなんて嫌だが、そんな事を言っている場合じゃない……俺は靈力を両手に集め籠手にし、神宮寺さんに視線を向けたのだが

「はっく、くげろ!？」

ドレスの裾を翻し放たれた顔を狙った回し蹴り、一瞬だけ見えたレース付きの黒い逆三角形に完全に意識を奪われ、神宮寺さんの蹴りが顎を打ち抜き。俺はそのままひっくり返り意識を失うのだった……

「あ、あら？久しぶりの体術で感覚が狂っていましたか？避けきれない攻撃じゃなかったと思うのですが」

おかしいですわね？と首を傾げるくえす。無意識で放った蹴りだったので、まさか横島が自分の下着を見て停止してしまったなんて思いつくわけも無く、どうしましょう？とくりかえし呟いていた、なお横島が起きた後に下着を見て動きが止まったと聞いて、横島が殴られたの言うまでもないだろう

なんだかんだありましたが、1週間と言う長いと思つた時間はあつたという間に過ぎ去つてしまった。そしてこの1週間で私が横島に抱いた感想は1つ

(恐ろしいまでの天才……)

自己評価は恐ろしく低い、間違いなく天才に分類されるタイプの人種だろう。陰陽術などは基礎知識が圧倒的に足りてないので理解出来ないと言っていたが、基礎知識を見につければ恐らく独自でどんな陰陽術を開発していくに違いない。更には現代では規格外としか言いようの無い、九尾の狐とミズチの加護。このまま順調に成長していけばAランク……いや、Sランクだって目指せるだろう……

(頭の回転が恐ろしく速く、そして奇抜なアイデアをどんどん思いつき、実行し洗練していく……その才は間違いなくトップクラスですわね)

木々の間を飛び回っている横島を見つめながら、純粹に横島を評価する。突き出した左手には霊力の籠手が作られており

「伸びろーッ!!」

横島の叫びと共に霊力の籠手の手の部分だけが伸びて、離れた木の枝を掴み

「あつはははー!おつもしれええ!!!」

ターザンのように自在に木々の間を飛び回っている。霊力でここまでの物理干渉をしようと思うと相当緻密な霊力操作が要求されるが、横島はそれを自然体で行っている。これはもう天賦の才としか言いようが無いだろう

「横島!面白いのは判りますが、まだやる事はあるんです!いい加減に止めなさい!」

霊力の圧縮・形状変化の仕上げとしてどこまで横島の意思で変化させる事が出来るか試させていたが、もう十分だろう。今日は他にも研修終了の手続きなどやる事があるのだから止めなさいと叫ぶと

「は、はひっ!直ぐ戻ります」

びくつと肩を竦め、ゆっくりと地面に降りてくる横島。着地すると

同時に霊力の籠手は霧散して消えている

「いやーすんません、あんまりに面白くて」

「霊力は玩具ではありませんわよ？容易く人を傷つける事も殺める事も出来る力です。遊び半分では困りますわよ」

すんませんと酷く落ち込んだ様子の横島。だがこれはちゃんと教えておかなければならない、私の様な人を殺す事に特化したGSになられては困るからだ

「判れば結構。それでその霊力の籠手の感じはどうですか？疲労感などはありますか？」

実験段階の霊能だ。霊力の消耗や体力の消費具合を尋ねると、拳を握ったり閉じたりしながら

「んー握力が殆どなくなっている感じっすね。後は息切れはしてないですけど、思いつきり走った後みたいな感じっすね」

ふむ、どうやら霊力の籠手の握力と横島の握力が連動しているみたいですわね。あのまま木々の間を飛んでいたら霊力切れの前に握力切れで落下していたかもしれないですわね、心眼にも尋ねて見ると

「私からはあまりお勧めできない使用方法だな。今の横島では霊力の操作が未熟すぎる、今はまだ余裕があるが、戦闘などで体力や霊力が減ってくれば自身を守っている霊力が弱くなる。あまり形状変化をせずに防具もしくは武器として使用する方が良いだろう」

流星は武神と名高い小竜姫の竜気から生まれた使い魔ですわね。実に冷静で確実な分析だ

「私も同じ考えですわ、実感は無いでしょうがあまり伸ばしたりするのは止めなさい、それと……剣とかの形状変化は出来そうですか？」

横島にそう尋ねると横島は小さく首を振る。何度か形状変化で剣や槍を作らせようとしたのですが、どれも失敗している。伸ばしてロープのように扱えるのだから、剣や槍にすることはもつと簡単な筈なのだが……

(これは仕方ないことかもしれませんわね)

横島は優しい、優しすぎるのだ。他人の痛みを自分の痛みのように受け止めてしまう、これは霊能者としては致命的だ。自縛霊などの影

響をダイレクトに受けてしまうからだ。それを防ぐ為に心眼を授けたのでしょね……横島は他人を傷つける事を恐れている。だから剣や槍と言った武器に変化させる事が出来ないのだろう

(とは言え、これは指摘しないほうがいいですわね)

横島を追い込むことに成りかねない。それは私としても望んでい  
る事ではないので、あえて口にはしない。

「1週間しかありませんでしたからね。これくらいでしょう」

陰陽術は無理でしたが、霊力の圧縮と形状変化の基礎を教える事は出来た。最低限のノルマはクリアしていると云えるだろう。書いておいた研修終了の書類を横島に手渡しながら

「1週間よく頑張りましたわ、除霊試験に合格する事を祈っています」  
次の除霊試験は恐らく合格する。よっぽど突然変異した妖怪や悪  
霊に遭遇しなければ間違いなく合格する

「あ、ありがとうございます」

笑顔で礼を言う横島にここからは貴方次第ですわよと言って書齋  
に戻ろうと思ったが。その前に言っておかないと思ひ振り返る

「陰陽術を学びたいなら偶に尋ねて来なさい。屋敷に居るときは教え  
て差し上げますわ」

ただし1人で来る事と付け加える。芦笛や、シズクが居ては面白く  
ないからだ

「はい！ありがとうございます!!時間が出来たら来ます、えっと電話  
すれば良いですか？」

本当は教えたかった陰陽術。それを教える事が出来なかった、やは  
り1週間と言う時間では短すぎでしたわね……とは言え、研修は大体  
1週間が目安となっているのでこれを延長することは出来ない。だ  
から自分の意思で学びに来なさいと言うと横島は頭を下げながらそ  
う尋ねて来る。そうですわねと返事を変えし、私の名刺を横島に手渡  
し

「私の名刺ですわ、これに電話番号も書いてあるので、前日にでも連絡  
を入れてください、では荷物を纏めて帰りなさい。中断していた研究  
を再開したいので……それと除霊試験頑張ってください」

私が教えたのですから落ちるなんて許しませんわよと呟き、私は書齋に、横島は1週間滞在した部屋へと歩き出した……

横島が居なくなつて普段通りの日常が戻つた。ただそれだけなのですが……

「静かすぎますわね……」

慣れ親しんだ静寂の筈なのに、やけに寂しく、静かに思つてしまつたのは……何故なんでしょうね……

横島君が研修に行つて1週間目の夕方

「はい、はい。ありがとう、今度はよろしくね」

琉璃から電話があり、くえすから横島君の研修が終わり、家に帰したと連絡があり、更に明日除霊試験の日程が決まつたと連絡が入つた「依頼の電話でした？」

慰安旅行の話をしてからはやる気に満ちている蛍ちゃんがそう尋ねて来る。明らかに空元気だけど、空元気でも元気と言うし……今日には横島君が戻ってくるから大丈夫でしょと思ひながら蛍ちゃんの問いかけに頷き

「研修が終わつて家に帰したつて、もしかすると帰る前に尋ねて……

【オーナー。横島さんが尋ねて来ましたが】

いいタイミングでいっちゃんがそう教えてくれた

「良いわ、事務所の中に入れてあげて」

【了解しました】

家に帰る前に挨拶に来た。結構そう言うところ生真面目なのよねと思ひながら横島君を待つ。蛍ちゃんが静かに扉の方を見つめているのを見ていると

「美神さん、今戻り「横島あツ!!」わ、わああああ!?なんや!?なんなんやああ!?!」

「み、みむきやあ!?!」

「うきゅー!?!」

「こーこーん!?!」

静かにしていたと思っていた蛍ちゃんが横島君の姿を見るなり、飛びついていく。その衝撃で頭の上に乗っていたチビ達が落ちてしまい、絶叫している姿を見て

(やっぱりなんだかんだで限界だったのね)

若干だけど横島君に依存している気配のある蛍ちゃんだ。大分我慢していたみただけで、横島君を見て押さえ込んでいたのが爆発してしまっただろう

「さてと、シズクに電話しておきましょうかね」

横島君が戻ったと連絡しておかないと、またそれで怒り出しそうだと思います。私は横島君の家に電話を掛けるのだった……なお途中で夕食の買出しに戻って来たおキヌちゃんも横島君を見るなり、抱きつきに向かい。横島君が鼻血を出して昏倒したのは言うまでもない……  
「それでどう？研修を受けて何か見えた？」

反省中の看板を首から下げて正座している蛍ちゃんとおキヌちゃんを見て溜息を吐きながら、横島君に実感はあった？と尋ねる。横島君は鼻にティッシュを詰め、抱きつかれた事で頭から落ちたチビ達を膝の上に乗せて背中を撫でながら

「えーと霊力の籠手で体術とかの稽古がメインでした。神宮寺さん魔法使いつて聞いてましたけど、体術もめっちゃ強かったです。何回絞め落とされたことか……」

若干横島君の顔が緩んでいる。絞め落とされた時の後頭部に感じたくえすの胸の感触でも思い出しているのだろうかと当たりをつける。つとと言うか絞め落とすって明らかに魔法使いの戦い方じゃないわよね。

「後は色んな除霊の現場とかの写真を見せてもらって、こういうパターンがあるとかを教えて貰って、陰陽術は色々教えてもらいましたが、難しく理解出来ませんでした！」

……きつとくえすは横島君には理解出来ない専門的な知識ばかりを教えようとして断念したのだろう。私はそんな気がした

「えーとあとは、あ、いっちゃん壁ちよつと借りていい？」

【どうぞ？しかし何を？】

壁を借りるといふ斬新な言葉に驚いていると、横島君の両手に靈力が固形化した籠手が現れる。しかしGS試験で使った肩までではなく、肘までの物だ

「セーの、伸びろーッ!!!」

突き出した右手の籠手が伸び、籠手が掴んだ壁の所まで一気に移動する。なかなかのスピードで一瞬だけ横島君の姿を見失う

「どうっすかー?結構面白い能力じゃないですかね?神宮寺さんに名前をつけろって言われたんで。栄光の手(ハンズオブグローリー)って名付けたっすけど?」

……それってあれじゃない、罪人の手を切り落として作る蠟燭……なんて名前を付けるのよ……

「こーやって伸びたりするんで壁とか、木の枝とか掴んでロープ代わりにしますし、伸ばして相手を殴るとかも出来ます!」

きつと横島君のこの弾ける笑顔を見て指摘出来なかったのねと推測する。正座している蛍ちゃんも顔が紅くなっている、子供のような純粋すぎる笑顔だ。これを見てしまったらそんな指摘なんて出来なかったのだろう

「本当はこれを剣とか、槍の形に形状変化させろって言われたですけど、全然出来なくて」

あははつと笑う横島君。剣とかに変化させるのはそのうち出来るようになるとして、確かに面白い能力よね、これで相手の頭上に移動して、陰陽術で奇襲するとか、戦略の幅は大きく広がったと言える

「ただあんまり長時間はぶら下がったりは出来ないっす。握力が無くなるんで」

そう言いながら掴んでいた壁から手を離し着地する横島君。時間制限があったとしても便利な能力ね……見た目通り打撃にも使えるんだから

「よし、じゃあ横島君。さっそくだけどこれ。明日の除霊試験の現場と事前情報。明日バシツと決めて来なさい!終わったら慰安旅行を兼ねての依頼を受けるんだからね!気合入れなさいよ!」

横島君が落ちたら慰安旅行所じゃないので、気合を入れていきなさい



いよ！と言いなながら現場の地図と事前情報を渡して今日はもう帰って休みなさいと言って横島君を家へと帰らせる

「み、美神さん？少し早すぎるんじゃない？」

足が痺れたのか、フローリングに蹲りながら尋ねて来る蛍ちゃん。まあその心配は判る、でも今回はちゃんと対策を取っている

「今回は視覚共用の式神が六道から貸し出されたわ。近くで待機して、異常事態になったら私達も手伝うって形。今回は達成しても失敗しても合格って琉璃から言われているし、前みたいな事にはさせないわよ」

除霊試験でリッチと遭遇なんて真似は絶対にさせないわよと笑いかけながら

「じゃ、蛍ちゃんも昨日の除霊レポートを出したら、今日は上がって良いわよ。でも横島君の家に行くのは駄目だからね」

近くで待機していると言っても、基本的には1人で解決して欲しいという気持ちもある。だから横島君の甘えになるかもしれないので会いに行くのは駄目よと言いなながら、呪縛ロープを投げる

【ふぎや!?!】

抜け出して横島君の家に行こうとしているであろうおキヌちゃんを捕まえ、ど、どうしても会いに行ったら駄目ですか？と半分泣きそうな顔をして尋ねて来る蛍ちゃんを見て私は思わず溜息を吐きながら

(これ完全に依存じゃない……本当これからどうなるのかしら)

仮とは言えGS免許が交付される直前に判明した。うちの事務所の面子のメンタルの弱さを実感し、頭を悩ませるのだった……

リポート1 始めの1歩 その7へ続く

## その7

レポート1 始めの1歩 その7

あー横島がおらんと食事が質素じゃなあ……今日も祿に料理のする気の無いシズクを見て思わず溜息を吐く。食事はそれほど必要ではなく、ただの娯楽としての意味合いが強いが霊力も回復するし、気力も充実する。味噌汁と沢庵……味噌汁が美味しいのでそこまで不満は無いが、横島が居た時の煮物や西洋料理を食べることが出来ないのは少しばかり悲しい

「……美神？なんだ私は……」

電話とか言う機械が鳴り響き、シズクがそれを手にし一言三言を話をする、シズクの顔色が変わり

「……ノツブ。横島が居ない間、食べた食事の事を口にしてみる。お前を殺す、良いな？判ったか？」

【お、おう……判った】

急に何があったんじゃ？ただ買い物籠を手にしているのを見て、横島が戻ってくるんじゃない。だから自分が料理をサボっていたことを言うなど言っただけ家を駆け足で出て行くシズクの背中を窓から見つめながら

【こりゃ、久しぶりのご馳走じゃな。つまみ食いは止めておくかの】

齧っていた煎餅を机の上に戻し、シズクと横島が戻るのをのんびりてれび？とか言う機械の箱を見つめながら待つ事にした。

「……ふう。よし、さっさと準備を終わらせる」

凄い荷物を抱え戻って来たシズクが慌てて料理を始める。今までのぐーたらとした感じが嘘のようだ

「ただいまー」

「みーむー♪」

「うっきゅー♪」

「コーン♪」

横島達が帰ってくると、キッチンから飛び出して

「……おかえり。大分疲れたようだな？風呂は用意してある、まずは汗を流してくると良い」

荷物を受け取り、風呂の準備が出来ていると言つて横島を風呂場に向かわせ、慌ててキッチンに戻ってきて料理を再開するシズクに

【まるで妻のよう「……黙ってる」は、はひいつ!?!】

妻のようじゃなとからかった瞬間。包丁が飛んで来た……よく見るとシズクの耳が紅くなっている

(照れ隠しが過激すぎるじやろ……)

普通に照れれば可愛げもありそうなんじゃがなあと思つた瞬間。氷柱が目の前を通過していく……

「……」

無言だが目が殺すと物語っていて、ワシはシズクをからかえば英霊であつても滅せられると本能で察知するのだった……

なおこの日の夕食は刺身や手巻き寿司に茶碗蒸しに小さな鍋と豪華な物だったが……

「あー洋食ばつかだからかめちやくちや美味く感じる」

「……横島！つ聞きたい」

なに？と言いなながら手巻き寿司を作っている横島にシズクが

「……洋食は神宮寺のほうが上手かったか？」

神宮寺？だれそれ……ワシの知らない名前に困惑していると、横島はそやなーと笑いながら手巻き寿司を頬張り

「そうやな。神宮寺さんの方が洋食は美味しかったかも？でも和食は絶対シズクの方が美味しい」

「……ピクッ！」

フオローは入っていたが、その一言でめちやくちや不機嫌になったシズクのせいで、味も何もよく判らないのだった……

久しぶりのシズクの和食に舌鼓を打ち、久しぶりの自分のベッドで眠つたのでめちやくちや熟睡出来た……そして今俺は二度目の除霊試験の現場の前に居た、リッチの時と同じくビルでの除霊および捜査が俺の除霊試験の課題だった

【横島。事前情報は確認しているな?】

心眼の言葉に頷く、昨日寝る前と起きた後に確認している

「除霊内容は自殺者も居ない、霊脈の上と言う訳でもないのに、何故か多発する雑霊の発生の調査と、地下と屋上に結界札の設置、もし強力な幽霊などが居た場合は封印もしくは討伐」

内容自体は前回と変わっていない。ただ前は3階だったが、今回は5階建てで、更に前は屋上だけだったが、今回は地下が追加されたと言うこと位だ

【面妖だな、怨念も何も感じないのに、ここまで雑霊が集まるとはな……何かあるかもしれん。警戒を緩めるなよ?】

心眼の警告に判っていると返事を返す、チビもモグラちゃんもタマモも無し、更には眼魂の持込も禁止。持っているのは破魔札と無地の札がそれぞれ15枚ずつ。それと精霊石の粉末4袋と支給された結界札が4枚……でも前回と違うのは神宮寺さんに教えて貰って身につけた栄光の手がある……

(今度は絶対やり遂げる)

皆で慰安旅行に行くと言っているのに、俺がまたこける訳には行かない。俺は気合を入れる為に頬を叩き、審査式神の紙を4枚折りたたむ。その瞬間燕になって飛び立っていく……これで試験を始めるというのは伝わっただろう

「しゃっ!行くぜ!心眼ッ!」

【ああ、今度こそ成し遂げるぞ!】

大きく深呼吸してから俺は廃ビルへ足を踏み入れるのだった……

「外観よりも大分綺麗だな」

外見はボロボロだったが、中は案外綺麗なのが目に付いた。調度品もそのままになっているし……まあ壁に穴とかが開いているし、廊下だけがボロボロの所もあるので廃ビルは廃ビルなのだが、どうして調度品だけは新品その物みたい綺麗で、どうして壁とかに穴が開いているんだろうな?と首を傾げながら、エントランスの中を歩き、ビルの形状を把握する事にする

「1階から屋上までは全部吹きぬけになっているのか、変わった作り

だな」

真ん中に空洞のあるビル……こんなので地震対策とかは大丈夫な  
んだらうか？壁とかにも穴が開いているので地震で一発で倒壊しそ  
うだなあ、除霊中に地震とか起きないでくれよと祈りながらどこから  
回っていか考えていると心眼が助言してくれた

【まずは地下を攻めて見るか？場所は狭いので危険性はあるが、屋上  
に向かってから地下に行くよりは効率が良いだろう】

そやな、先に屋上で体力を使ってしまったら、地下が原因だった場  
合除霊する体力が心配になる。俺は心眼の言葉に頷き、地下へ向かう  
階段を降り始めるが、やはり廃墟は廃墟なので階段が崩れている場所  
もあり

「うっし、栄光の手の出番やな」

幽霊を攻撃じゃなくて、移動つてのが少し悲しい所だが、両手に栄  
光の手を作り出し、離れている階段の裏目掛けて伸ばす

「よいしょっと！」

階段を掴んでいる栄光の手を基点にしジャンプする。ターザン  
ロープのような感覚で穴の開いている場所を飛び越える

「上手くいったけど……次は廊下がねえな」

今度は廊下にぽっかりと穴が開いている。正規のルートで地下室  
に向かうのは難しそうやな……

「なんか気付いたら教えてくれ」

心眼に周囲の警戒を頼み。栄光の手を壁に引っ掛けてロッククラ  
イミングの要領でゆっくりと地下へと降りるのだった……

「なんか変な感じだな」

【そうだな】

雑霊はとんでもない数居るのだが、俺を見ても攻撃して来ない。た  
だそこに漂っているだけだ……色んな除霊現場を見てきたし、神宮寺  
さんが教えてくれた除霊現場のパターンから見てもこんなのはあり  
えない

【……】

じつとこつちを見つめてくる雑霊。その視線は何かを訴えかけて

いるように見える

「なんだ？俺に何をして欲しいんだ？」

【おい！馬鹿！止めろ！】

心眼の静止の声が聞こえていたが、雑霊にそう尋ねると地下に漂っていた雑霊達が一斉に天井を指差し

「……………た……………す……………け……………て……………こ……………こ……………か……………ら……………だ……………し……………て……………」

途切れ途切れの声でそう呟き、消えて行った……………助けて、ここから出して……………か……………

「どうもこのビルにもなにかありそうだな」

雑霊が悪霊にもならず、ただそこに存在している。普通幽霊はそこに居るだけで負の感情を吸収し、悪霊へとなっていく……………これが全ての除霊に通じる基本の筈。そうじゃないと言う事は、このビルには何かあると見て間違いない

「そうだな。私もそう思う、まずはここに結界札を配置し、後の階を調べながら雑霊達がここに封じ込められている理由を調べるぞ」

結界札を地下に設置し、このビルの搜索を開始するのだった……………

横島の除霊試験を審査している式神の視点を映してくれている紙を見つめながら

「美神さん、このビルおかしいですよね？」

今横島が搜索しているのは3階。残っているのは4・5階と屋上の三箇所。だがここまで来るまで横島に襲い掛かった悪霊も雑霊も0。こんな事は常識的に考えてありえない

「そうね、何かあるのかもしれないわね」

霊脈も自殺者や他殺の現場になつた訳でもない。それなのに雑霊が増え続ける謎のビル……………何かが雑霊を集めていると思っただけど、今の所それらしい物は何も見つかっていない、考えられるのは隠し部屋や横島の見逃しだけ……………その可能性はかなり低い

「……………横島はちゃんと搜索している。見逃しとかは無はずだぞ？」

「ですよ、もの凄く丁寧に搜索してますよ?」

シズクとおキヌさんの言う通り、横島は必要以上に慎重に搜索している

『んー隠し部屋とかは無さそうだな。心眼は何か引つかかるか?』

『いや、何も感じないな。3階も外れだ』

壁を叩きながら念入りに隠し部屋が無いか調べてから、地図に×印を打った横島はうーんっと唸りながら

『ここまで本当に何も無いな。どうなってるんだ?』

『判らない、判らないが、何か在るのは間違いない。慎重に慢心せず進め』

心眼と相談しながら4階へ登って行く横島の背中を見つめていた式神が後を追って狭いビルを飛んで行く

「美神さん、これどう思います?上の階に何かあると思います?」

曰く付きの骨董品も無い、霊脈も無い、自殺や他殺も無い。それなのに雑霊が集まって行く……こんなの初めて見る

「うーん……色々考えているけど、何もそれらしい物は無いわよね。これ本当にどうなっているのかしら?」

美神さんも不思議そうに首を傾げている。確かに除霊が無いので横島が怪我をする心配は無いが、余りに静か過ぎて見ているだけで不安になってくる

「まあとりあえず見ていきましょう。何かあるかもしれないからね」

美神さんの言葉に判りましたと返事を返し、式神が見ている横島の除霊試験に視線を向けるのだった……

・  
・  
・

【何も無いですね……】

屋上まで本当に何も無く、横島が結界札を配置するまで本当に何も無かった。札を使う事も栄光の手は……崩れている場所や穴を飛び越えるときに使っていたが、戦うと言う本来の用途では使う事は無

かった

「ま、まあ、こういう現場もあるんじゃない？」

美神さんが引き攣った顔で笑う中。横島が腕組みしながら、納得していないという表情で屋上から降りてきて、ビルの吹き抜けを見た時。何かに気付いた様で手摺から身を乗り出して吹き抜けを覗き込む

『…これだーこれだったんだ!!俺がずっと感じていた違和感はず!!』

何？横島は何に気付いたの？式神が横島の後ろに移動した時。私達も気付いた

「何これ!?こんな事が起きる普通!？」

美神さんが動揺したように叫ぶ。でもそれは私も同じだった……5階の吹き抜けから下を見ると、奇跡的とでも言うのだろうか？各階ごとに結界の角になっていたのだ、更に調度品同士が微妙な角度で重なり合い、上から見ると結界を描いていたのだ……何の曰くも無いのに雑霊が集まる理由。それはこのビルに入った瞬間結界に囚われ、外に出る事が出来なくなり。それが何年も続き雑霊が集まり続けるビルとなったのだ

『じゃあーそうと判ればー!』

横島が階段を駆け下りて、調度品であった巨大な柱時計に体当たりするぶつかった瞬間。眩いばかりの光がビルを埋め尽くした

『うわああああ!?なんやこれええ!』

ビルに閉じ込められていた雑霊達が一気に成仏していく……へたり込んで成仏していく魂を見つめていた横島は穏やかに笑いながら『あー良かった、こんである人達も家族の所に逝けたよな?』『ああ、間違いない。成仏したいのに、成仏できずこの磁場に囚われた者達だ。迷わず成仏するだろう』

『そっか、良かった。これで一応除霊試験は合格だよな?』

『成仏させる事も立派な除霊だ。間違いない合格だ、お疲れ様。少し休んでから戻ろう』

横島と心眼のそんな会話を聞いていると式神が飛び立っていく、琉璃さんの所に向かったんだろうなと思いつつながら、椅子に背中を預け大



きく深呼吸をする。変則的な形だったが、横島はちゃんと除霊を成し遂げた。元々合格するのは決まっていたような物だが、今回の除霊の結果を見れば間違いなく合格だろう

「……合格祝いの食事の準備をするから帰る」

シズクは横島の除霊を見届けると、言うが早く体を水に変えて消えてしまった。なんか見ていると非常に面白くない、おキヌさんも同様で口をへの字にしている

「まあ何にせよ、合格したのは間違いのないわ。横島君に見つかるの不味いから、早く撤退するわよ」

まだビルの中で休憩している内に事務所に帰るわよと言う美神さんに頷き、駐車場に向かいながら、1度だけビルの方を振り返り

(おめでとう横島)

悪霊と戦う事は無かったが、除霊は除霊。初めて1人で除霊を成し遂げた横島に心の中でそう告げ、私はその場を後にするのだった……

式神が見ていた光景を見て、私は思わず苦笑してしまった。霊力を物理的に干渉できるレベルまで圧縮し、やって見せてくれたのがロツククライミングとターザンロープの真似事。本当なら戦闘に使うのを期待していたけど

(流石に攻撃は出来なかったみたいね)

まさかあのビルが1〜5階で結界を描き出し、雑霊を閉じ込めていたなんて想像もしてなかった。今後もこういう可能性があるとして、GS協会の除霊前の捜査マニュアルに付け加えておくべきね。除霊前の捜査チームに今後はこういうパターンもあるとして事前調査の徹底を義務付けましょう

「まあ文句なしで合格ね」

除霊としての戦闘はしていないけど、戦うことだけが除霊じゃない、ああいう不慮の事故で成仏出来ない魂を成仏させるのも立派な除霊だ。あれだけの数を除霊したのだから文句なしで合格基準は満たしている

「よっしっこんな物ね」

仮GS免許。横島君と蛍ちゃんの分の発行と、それに伴う受け取り書類を封筒に入れGS協会の判子を押してつと

「もしもし？悪いんだけど、美神除霊事務所の横島忠夫君と芦蛍ちゃんの仮GS免許を届けてくれる？うん、そうよろしくね」

神代家から連れてきた私の専属の部下にその封筒を届けるように指示を出し、背もたれに背中を預けながら大きく背伸びをしながら「結局仮免許を受け取ってくれそうなのって美神さんの関係者ばかりになりそうね」

プロのGSが何人も引退してしまったので、今回のGS試験の参加者で規定の数値を満たした参加者に仮免許を交付するという旨の手紙を送ったが、殆どが自分の力で行けるので遠慮すると言う手紙を送り返してきた。まあ本音はソロモンが動いている中で仮でもGS免許を受け取れば、自分達が招集されるかもしれないと言う事で、保身に走った行動だろう

「ピエトロ君とタイガー君だけじゃなあ……」

もつと戦力として動ける面子を確保したい。それが私の嘘偽りのない気持ちであり、その為ならば……

「叩かれるのも覚悟しないとね」

このままでは美神さんや唐巢神父だけに負担が掛かってしまう。だがこれ以上民間GSでの戦力増強は望めない……ならば、私に打てる手段はこれしかない、色々と考えたが本当にこれしか無かったのだ。

「まあ、ちょっとは不安は残るけど、仕方ないわね」

机の上の書類。そこには伊達雪之丞に仮GS免許を交付する為の書類ともう一つ

「地獄を見てもらう事になると思うけど、頑張ってもらいましょか」  
香港でまたソロモンが動いているという情報があり、まだ確定ではないが神魔から人員を貸し出して欲しいとの連絡があった。それに伊達君を送り出す事を決め、その時の功績を盾にして仮GS免許の交付を押し切る事を決めたのだ

「三蔵法師様の稽古でどこまで変わったかなあ」

今白竜寺の再建をしているであろう、三蔵法師様がどこまで性格矯正をしてくれたかな？と期待しながら、次の書類の山に手を伸ばすのだった……

一方その頃アシユタロスはと言うと、ガープ達の動く気配も無いと言ふ事で自分の興味を満たす研究を行っていた……

「失敗だぁ!!退避!退避ーッ!!!」

頭を抱えて地下の研究施設を走り回っていた。それから数秒後凄まじい爆発音が背後から響く

「けほっ!こほっ!うーまた失敗かぁ……何が足りないんだ?」

激しく咳き込むアシユタロスの視線の先には……横島のベルトと酷似した何かが組み込まれた巨大な機械が置かれているのだった……

別件リポート 星の三蔵ちゃん、白竜寺を再建するへ続く

## 別件リポート

別件リポート 星の三蔵ちゃん、白竜寺を再建する その1

天界から降臨した玄奘三蔵が白竜寺の再建を行い……ついている筈だったのだが

「羯諦（ぎやてえ）……いんねーん……たすけてー」

「あんたは！本当に英霊なのか!?このナチュラルボートラブルメイカーツ!!!」

実際は白竜寺の面子が玄奘三蔵……いや、三蔵ちゃんを助けながら生活していたりする……今日はそんな白竜寺の面子の日常を覗いてみよう……

白竜寺を取り壊さない為として天界から英霊が来てくれたんですけど……

「修二ね！おはよう！今日も良い天気ね」

西遊記で有名な三蔵法師様……僕も昔西遊記は好きで何度か見たけど……僕の想像と全く違っていて。よく笑って、明るく、皆を励ましてくれる。確かに暗くなっていた白竜寺は凄く明るくなったけど……

（女性だったんですね。三蔵法師様って……）

凄く徳の高いお坊さんで男性だと思っていたんですけど、実際は美しい女性で男所帯の白竜寺ではちよつと浮いた存在になっている。とは言え英霊で、なおかつ現白竜寺の住職となっているので性的な目で見ることはなく、正直どうやって接すればいいのか判らないというのが現状だ

「早速今日も修行よ！早く皆を起して準備させてね！」

門の所で待っているからと笑う三蔵法師様に頷き、弟弟子の皆を起す為に宿舎へと走るのだった……

「じゃあ、今日は軽く、この山の周辺を3周走ってきて、その後は読経とお寺の掃除、それから朝食よ」

穏やかに告げられるが、この内容はかなり厳しい、白竜寺がある山は霊脈の上であり、悪霊が発生しやすく、走っていれば間違いなく遭遇するし、それにここまで登ってくる道以外は全て獣道であり、周りを走るのも相当厳しい

「陰念はリハビリね？少しでも早く走れるようにならないと、今日は結構きつく行くわよ？」

「判ってる」

1人不機嫌そうな陰念先輩に頭を下げ、僕達は言われた通りランニングを始めるのだった……

「来たあ!!逃げろおツ!!」

「伊達先輩！伊達せんぱーいッ!?助けてええ!!」

走り始めて数分もせず、悪霊に憑依された猪に追い掛け回されることになり、僕達は必死で走りながら、伊達先輩の名を叫び助けを求めたのだった……なお伊達先輩は三蔵様がママに似ていると呟き、普段の倍以上の速さで走っており、僕達と合流してくれたのは助けを求めてから10分後の事であり、弟弟子が4人跳ね飛ばされた後だったりする……

「と、東條さん……俺、俺死にます……」

「頑張って！諦めたら駄目だ！」

4代前の住職様が山全体に结界を張ってくれているので、致命傷にはならなかったが、全身打撲で呻いている弟弟子を無事な弟弟子達と協力して担ぎ寺へと戻るのだった

「あら？おかえり、ちよつと時間が掛かりすぎね」

お願いします、三蔵様……もう少し優しい修行にしてくれませんか？と言いかけたが、それを必死に飲み込む。あの三蔵様が修行を見てくれている、その幸運が以下に稀少な物かと思えば反論など出来る筈もない

「すまねえ、ママ。今度はもつと気をつける」

「誰がママよ……あたしの事はお師匠様でしょ？」

「ああ、すまねえ。ママお師匠様」

……伊達先輩……頼りになる人なんだけど、本当にマザコンが過ぎ

るのではないだろうか？真顔でママお師匠様って何なんですか……  
「はあ……まあ、良いわ。次は読経よ、全員本堂へ集合してから始めなさい」

その言葉に判りましたと返事を返し、全員で本堂へ移動する中、僕は脂汗を流しながら座禅を組んでいる陰念先輩の姿を見た。並々ならぬ努力と己への厳しい訓練を科すことで松葉杖を有するが、歩く事が出来るようになった。だがそこから先はまるで見えていない、本当に物を掴んだり出来るか？や拳を握ることが出来るのか？そういう不安を間違いない、陰念先輩は感じているだろう。それでも必死に己を鍛え続ける陰念先輩に心の中で頑張ってくださいと呟き、僕は自室にお経を取りに戻るのだった……

三蔵法師様……いや、お師匠様の監視下で座禅を組み、ひたすらにお経を読み続ける。その都度身体が軋み、悲鳴を上げる  
「どう？チャクラの回復を受けた感想は？」

俺と本堂で読経をしている東條達を見ながらも、それでも右手で印を結んでいるお師匠様がそう問いかけてくる。だから俺は素直に感想を言うことにした

「身体が中から引き裂かれるかと思っただけ」

魔装術の後遺症でズタズタになっちゃった俺のチャクラの経路。それを修復できるかもしれないと言うお師匠様の言葉に一縷の望みを託したのだが、正直後悔している。身体の中に焼いた鉄の棒を差し込まれるような激痛……それなのに気絶が出来ないという地獄を体験していた

「まあ正直修復できたとしても確実に前ほどの力は発揮出来ないけど。少しでも霊力が戻れば、後は装備とかで補えるわ。苦しんでもお経を読み続けなさい」

心の中で鬼めと呟くと、棒で頭を殴られた。ぐっ……流石にこつちの考えていることはお見通しかよ！俺は観念し、再びお経を読み始める。再び身体の中で熱した鉄のような感覚が暴れ出し、激しい痛みと熱が俺を襲い始める。その痛みにも必死に耐えながらお経を読み上げ

続ける

(普段はドジだが、やはり英霊か……)

英霊の存在は俺だって知っている。人間から精霊へと昇華された上位存在。その中でも三蔵法師と言えば、仏教に関わる者からすれば名を知らぬ者が居ない英雄だ。確かに日常では何でもない所でドジを踏むし、トラブルも起す。だがそれ以上に修行に関しては真摯で、そして俺達の事を考えてくれていた。だからたった数日でお師匠様は信頼を手にしていた。これも1つのカリスマって奴なのかもしれないな……

「ん、皆も掃除が終わったみたいだから、今日はこれで終り。これは荒療治にも程があるから、明日は普通のリハビリ、明後日にまたやるわ。段階的にチャクラの修復をするからね」

脇に置いてあつたタオルを頭の上に被せ、俺の汗を拭いながら言うお師匠様に判ったと返事を返す。お師匠様に汗を拭って貰うなど本来は許されることではないが

「早く腕が動くといいわね。頑張りなさい」

「はい……ありがとうございます」

俺は生まれてからずっと白竜寺に居た。父も母の顔も名も知らない、陰念と言う名だつて本当の名前では無く、俺の面倒を見てくれていた住職様が名づけてくれた者だ。陰の念と人に誇れるような名ではないが、養父に名づけられた物だ。大事に思っているし、その名前に負けないように生きていたつもりだった……だが今回の事は俺のせいで色々な人達に迷惑を掛けてしまった……東條を逃がす為にガープの思惑に乗り、そして俺は無理やりに魔装術の契約を行い意識を失った……横島が俺を助けてくれたが、そうでなければ俺は間違いなく魔族となりそして死んでいただろう……

(今度はあんな無様は晒さない)

まともな霊能者に戻れる保証なんて無い。だが俺はこのままでは終わらない、仲間迷惑をかけ、皆の家である白竜寺を失う口実を与えた。そして何よりも俺は俺自身を許せない。誰が俺を許すと言っても、俺は決して俺を許さない。ここまで利用してくれた礼はなんと

しても返す、その為に俺はなんとしても自由に歩くことの出来る足と手を取り戻さなくてはならないのだから……そんな事を考えながら朝食の為に法師様と移動している

「ふぎやつ!」

「がっはあ!」

法師様の奇妙な声と俺の苦悶の音が重なる。法師様が転び、手にしていた棒が後ろに吹き飛んできて、俺の腹に命中し、法師様はそのまま転び、何がどうなったのか上半身が手摺の隙間に嵌っていて「羯諦(ぎやてえ)……いんねーん……法師様がピンチです……助けて……」

法衣の裾が捲かれて、見えている生々しい太ももが実に目に毒だ。俺だつて健全な男子なのだから、女性には興味がある。しかし法師様を性的に見るなんて真似はできない。何度か深呼吸を繰り返してから、太ももと下着を見ないように、必死に視線を逸らし、殆ど握力の残っていない右手で法衣を掴み、必死に引っ張りながら

「あんた本当に何でも無いところで転ぶんだよ!」

「羯諦(ぎやてえ)……ごめんねえ……」

くそっ!法師様として尊敬できる人っていうのは間違いないのに、なんでこんなにドジなんだよ!俺は心の中でそう叫びながら、片手で何とか法師様を引き上げるのだった……

なお陰念は知る由も無いが、彼の今後の人生が三蔵法師に振り回される事になる。そうかつての齊天大聖……いや、孫悟空のように……

そして天界でヒヤクメを通じて、白竜寺を見つめていた老師とロンさんはと言うと

「くっ……同情を禁じえないの」

「うむ。ワシもあの方には迷惑を掛けられた口じゃからなあ……」

再建に向かった筈が、日常で恐ろしいほどのポンコツと化している三蔵法師に振り回されている白竜寺の面子を見て、目頭を押さえながら

「強く生きるんじゃぞ」

これからもつと大変な事になると判っている2人は白竜寺の面子。



特に陰念に深い同情と共感を抱いているのだった……

レポート2 これは慰安旅行ですか？いいえ、修羅場です その1  
へ続く

リポート2 これは慰安旅行ですか？いいえ、修羅場です  
です

その1

リポート2 これは慰安旅行ですか？いいえ、修羅場です その1  
除霊試験を終え、美神さんの事務所へ向かう。本来なら審査の結果  
が出るまで数日掛かるらしいが、今回は2回目と言うことで直接美神  
さんの所に結果が伝えられると聞いている……

「俺大丈夫だよな？また落ちたりしないよな？」

一応除霊は出来た。でも戦闘をした訳じゃないので、そこで減点さ  
れるかもしれないという不安があり、心眼にそう尋ねる。すると心眼  
はこれで何回目だ？と若干呆れた様子で

「霊を力で無理やり成仏させる事も確かに1つの手段だ。だがお前の  
ように霊を封じ込めていた結果を取り払い、成仏させてやるのも立派  
な除霊だ。心配することは無い」

でもなー、美神さんや蛍の除霊を見ているとなあ……しばいてる方  
が多いんだよなあ……今まで見てきた除霊と全然違うのでやっぱり  
不安なんだよなあと思っていると、もう美神さんの事務所の前に到着  
して

(慰安旅行の前に落ちたとかじゃあ、皆盛り下がるしなあ)

そうなたら俺は辞退しようと思いながら、いっちゃんに声を掛  
け、俺は事務所の扉を開くのだった……

横島君よりも早く戻ってきて、慌てて除霊服から私服へ着替える、  
除霊のリポートを纏めているとお客様ですと言ういっちゃんの声に  
通してくれる？とお願ひし、リポートを一旦机の中に片付ける

「会長からです。どうぞお受け取りください」

壮年の男性が尋ねてきて、横島君と蛍ちゃんの仮GS免許を態々届  
けに来てくれたのだ

「ありがとうございます。態々お手数をおかけしました」

「いえ、元々はこちら側の不手際。お弟子さんに迷惑を掛けてしまい申し訳ありませんでした。今後はこのような出来事が無いように気をつけます」

私よりも1回りも2回りも年上の男性に深く頭を下げられ、困惑しているとその男性は会長が待っているのと笑って引き返して行った。その男性の背中を見ながら

「どうも琉璃も本格的に自分の部下を入れて、GS協会の改革を始めたみたいね」

ガープの襲撃で辞表を出した役員が多いと聞いていた、少しの間業務が滞ったみたいだけど、それで役立たずが減って有能な人材を入れる事が出来ているのなら、それはそれで良いんじゃないかしら？渡された封筒を開けて、中身を確認する

「どうでした？私と横島は……」

「落ちるわけ無いでしょ？合格よ」

仮GS免許とそれに伴う提出するべき書類を見せるとほっと安心した表情を見せる蛍ちゃん。に心配しすぎよと笑っていると

【オーナー。横島さんが戻りましたのでお通ししました】

いっちゃんが横島君が戻って来たというので、1度封筒に書類を戻す

「今戻りました……それでえつと俺……どうでした？」

戻ってくるなり、不安そうに尋ねて来る横島君。まあ確かに普段の除霊とは違う除霊をしたから、不安に思うのは当然ね。私は横島君の封筒を見せながら

「おめでとう。横島君も合格よ。除霊試験お疲れ様」

横島君の写真入りの仮GS免許を見せる。横島君は一瞬きよとんとした顔をしてから

「やったああああアツ!!!!!!」

両手を振り上げて叫ぶ横島君。余りの大声に眉を顰めてしまう、だけど……まあ叫びたくなる気持ちも判るから目くじらを立てるのは止めておきましょうか

「やった！やったやった!!ありがとう！ありがとう！美神さん！それにおキヌちゃん！皆が色々教えてくれたから合格できたんだ。本当ありがとう!!」

「えうあ!?あうあうあう」

【はうわ!?!】

感極まったのか蛍ちゃんとおキヌちゃんを抱き締めている横島君。突然の抱擁で顔を真っ赤にしている蛍ちゃんとおキヌちゃんを見て苦笑しながら

「横島君。喜ぶのはそれくらいにして、まだ色々と話す事があるんだから1回落ち着きなさい」

喜んでいる所に水を差すのは嫌だけど、まだ話すこともあるので私は横島君にそう声を掛けながら、机から別の書類を取り出すのだった

合格したと聞いて急に抱き締めてきた横島。本当に急だったので、完全にオーバーヒートしてしまつて変な反応をしてしまつて、恥かしくて隠りたい気持ちで一杯だったが。美神さんが真剣な顔をしているので、大きく深呼吸してから美神さんの話を聞く為にソファに横島と並んで腰掛ける

(あーやっぱ落ち着かないわね)

さつき抱き締められていたこともあり、普段あんまり意識しないけど、妙に横島を意識してしまつて全然落ち着かない。おキヌさんはおキヌさんで頬に両手を当てていやんいやんってまだトリップしてるし……逆に横島が妙に落ち着いているのがなんか理不尽だと思う。なお蛍は落ち着いていると思つている横島だが

(やらなかった……)

蛍とおキヌを抱き締めた時の柔らかい感触で顔が緩んでしまいうだったの、それを必死に耐えているだけだったりする

「さてと、じゃ、改めて除霊試験お疲れ様。仮GS免許の交付とそれに伴う書類があるから、時間のある時に家で書いておくと良いわ」

差し出された封筒を受け取り、開けていいですか?と尋ねる。美神さんに構わないわといわれたので横島と一緒に封筒を開けて、自分の

仮免許を手にする。こうして手にすると頑張ったんだなあって実感が湧いてくるわね……

「それでだけど、仮って付いているから判ると思うけど、ここからが長いよ。除霊法や年間除霊数とか……まあ色々あるんだけど、仮免許のまま終わるGSも多いって言えば判るかしら？」

仮免から本免許に変わるのが相当難しいって事は美神さんの言葉のニュアンスで判った

「まあ仮免の子で多いのは、師匠が許可を出さないのが原因の大半だったりするわ。ああ、安心してくれて良いわよ？ちゃんと独立できると判断したら私はちゃんと許可を出すから」

「独立かあ……全然そんなの想像出来んなあ……」

横島がぼそりと呟くと、美神さんは何言ってるのよと笑いながら「男なら一国一城の主くらい目指しなさい。頑張ればちゃんと本免許も独立の許可も出すんだから、真面目に勉強して、除霊の経験を積みなさい。特に横島君。あのベルトとか凄い力があるのは判るけど、それに頼り切るような真似はしっちゃ駄目よ？折角んな才能があるんだから、頑張って引き出しを増やすのね」

私なんかはどこまで行っても道具使いだから、その範疇から出ることは出来ないんだからと呟く美神さん。知識もあるし、応用力もあります。だけどどこまで行っても私は霊具使いと言う美神さんに、頑張りますと自信無さそうに呟く横島を見た美神さんは「蛍ちゃんもしっかりサポートしてあげると良いわ」

「判ってます。2人で頑張って本免許をもらえる様に頑張ります」

やっぱり最終的には夫婦で事務所を経営したいわよね……私の理想としては……

【わ、私も頑張って横島さんのお手伝いをしますから！】

あ、妄想の世界から帰ってきたおキヌさんがそう叫びだす、本当々イミング悪いわよね……この人……自分の欲望に忠実すぎるのも正直考え物だと思う

「それと仮GS免許の交付に伴い。再契約をするわ、これ新しい契約

書。2人とも目を通して書いて」

美神さんに差し出された新しい契約書を横島と受け取り、2人揃ってえっ!と呟いた。美神さんは私達の反応を見て苦笑しながら

「まー私は自分で言うのも何だけど、かなりの守銭奴だと思うけど……契約は契約だからね、キチツとするわよ?」

私や横島には甘い所があるけれど、やはり守銭奴な所は変わっておらず、契約金や違約金はキチンと取り立て、自分の霊具を買うときは値切り交渉をする所を見ていると本当っと思ってしまう

「これ除霊付き添いで1万……その後歩合給つてのは?」

2人とも除霊に付き添うだけで1万円。その後に除霊での内容に応じて歩合も出す……これは若手GSの中ではかなり破格の時給なんじゃ

「除霊助手の相場が8000くらいだから、ちよつと多いくらいだけど。横島君も蛸ちゃんも今回のGS試験でかなり活躍したから、引き抜きとか多くなりそうだからね。ちよつと色をつけたわ、それと歩合は2人ともだいぶ実力も知識も伴ってきたから当然よ」

そう笑う美神さんだけど、正直5000円以上の昇給には驚いた。しかもそれに歩合も付くとなるともしかすると都内のGS助手で一番貰っているかも……

「俺も良いんですか?」

実地試験1回落ちたのに?と横島がそろそろ手を上げながら尋ねると美神さんは苦笑しながら

「実地試験に落ちたのは協会側の不備でしょ?だからそれは仕方ないわ。公式記録にも失敗にはならないし、それに何より……横島君の同居人増えたでしょ?だからお金は必要じゃない」

その言葉に思わず、あつと呟く、チビ達の餌代に加えて、物を食べれる幽霊ノツブにシズク。普通に考えて4000円の給料では養っていけないだろう

「そういう訳。だから契約書に間違いはないわ、時間のあるときで良いからサインと判子を押して持ってきて。それで契約続行でGS協会に書類を提出するから」

美神さんの言葉に判りましたと返事を返し、仮免許の書類の封筒の中に契約書をしまうと美神さんはこれが本題よと笑いながら

「本免許に向けての勉強は追々考えるところとして、まずは慰安旅行からね♪ちよつと面倒な依頼もあるけどね」

そうそう！それがメインですよね！と心の中で返事を返す、スライムの除霊は大変だけど、除霊してからの2泊3日の宿泊と、温泉にプールにバイキングと心躍る内容だ

「面倒な依頼？なんつすか？それ」

内容を知らない横島がそう尋ねて来る。少し考えてから依頼の内容を説明することにした

「依頼の場所はリゾート地に今度オープンする高級ホテル。近くに遊園地があつて、ホテルの敷地にも温泉とプールがある。まあお金持ちが泊まるようなホテルね」

正直美神さんクラスのお金持ちが泊まるようなホテルだ。写真を見たけど一市民には程遠いなあつと思つてしまった

「所がそこにスライムが住み着いてしまつてオープン出来ないから助けてくださいって言う依頼よ」

「スライム？青くてぷるぷる僕は悪いスライムじゃないよ？つてやつ？」

ゲームとかのイメージが強いのか、あんまり強そうじゃないつすねえつと呟く横島に美神さんがそんな先入観は捨てなさいと前置きしてから

「実際のスライムはかなり凶悪よ？ほんの少しの細胞から増殖・再生するし、凄まじい強酸性の身体をしてるから取り込まれたら問答無用で溶解されてはい、さようならつてなるわよ？」

青い顔をしている横島。溶かされて死ぬ。それは考えられる中でも相当酷い死に方だろう

「まあ水に溶けるのがやばいけど、そこはシズクが居れば対応出来るだろうし、こういう厄介な相手との戦闘経験も貴重だから勉強だと思いなさい」

そう言われると嫌なんて言えないし、それに慰安旅行も楽しみだか

ら断るといふ選択肢は無い

「出発は明後日の月曜日。8時に事務所前ね？それと人数に制限とかないから友達とかを誘っても良いけど、危険って事はちゃんと説明してね？」

美神さんの言葉に判りましたと返事を返し、2人で事務所を後にする

「やったなあ……これからもっと頑張ろう」

仮免許を手にして笑っている横島。努力してきた物が形となったのが嬉しいのだろうか何回も財布から出して見ているので

「落としたりしたら洒落にならないからね？ちゃんとしまっておいた方がいいわよ？」

「うむ、蛍の言う通りだな。身分証にもなる。借金持ちとかは嫌だろう？」

私と心眼の言葉に頷き、財布にしまう横島。家に帰ってからゆっくり見れば良いわよと声を掛け

「そうだ。今日は横島の家に行っても良い？」

「うん？ええでー？シズクも多分良いって言うと思うし」

シズクが何か料理を作ると言っていたので、少しでも食べてその味の秘密を探ろうと思う。並んで横島の家へ向かいながら

(お父さんとあげはにも声を掛けてみようかしら……)

お父さんが居ればあげはは大丈夫だと思うけど……うん、スライムの事を考えるとなあ……誘って良いとは言われたけど止めた方が良いわね……何があるか判らないし……

「横島、危ないから霊能者以外は誘わないほうがいいわよ？」

「うん、判ってる。カオスのじーさんとかには一応声を掛けてみようかなって思ってるけどな」

ドクターカオスが来ると、マリアさんとテレサさんが来るのが面白いわね……でもそんな事を言う訳には行かないので、誘って見ると良いわよねと返事をし、夕日を見つめながらのんびりと歩き出すのだった……

なお、この日の夕食は



「……おかえり、横島。蛭も一緒か、丁度良い、準備が出来た所だ」  
リビングにはすき焼き鍋が置かれ、周りには油揚げや果物も用意されてお  
り。机では既にノツブが座っており

【楽しみじやな♪すき焼きつと言うのはてれびで見たんじや♪】

「みっみーむー！みむむ♪」

「うつきゅー♪うきゅきゅー♪」

「コーン♪コーン♪」

チビ達が楽しそうに鳴いているのと、机の上のすき焼き鍋を見た横島は嬉しそうに笑いながら

「すき焼きか！やったぜ！直ぐ手を洗ってくるからなー！ほら。行こ  
うぜー！」

横島の言葉に頷き、手を洗いに向かいながら私はきつと慰安旅行が  
楽しい物になると思った……だが、慰安旅行がまさかあんなとんでも  
ない事になるなんて、今の私は知る由も無いのだった……

月曜日から慰安旅行をかねてのスライム退治に向かうので、旅行の  
準備とスライムの事を調べると結構忙しい土日になってしまった

「……なるほど、水の妖怪になるのか……平安時代には見なかったな」  
「そうなの？」

シズクも一緒に妖怪図鑑を見ているので、興味深そうにそう呟く。  
シズクも見たことのない化け物か……水の中に隠れるのは探知出来  
そうだけど、奇襲を避ける事が出来るなら何とか出来るだろうか……  
？

「みーむー！」

「うつきゅー！」

俺とシズクが難しい話をしていると知っているので、チビとモグラ  
ちゃんの良い子にボールで遊んでいる。見ていると本当に和む風景  
だなと思いつつながら膝の上で丸くなっているタマモを撫でていると

【終わったぞー！いやー、疲れた疲れた】

ノツブちゃんが火縄銃を肩に担いで帰ってくる。俺は慰安旅行の  
準備があるし、除霊試験の事もあったのでノツブちゃんが代役で美神

さんの除霊の手伝いに行ってくれたのだ。しかし火縄銃を担いで歩いて銃刀法違反で捕まったりしないのだろうか……？と尋ねる疑問が頭を過ぎるが、捕まっていないから大丈夫なんだろうなと思いつつ

「お疲れ様。ごめんな？」

「構わん構わん、居候の身じゃしな！」

そう笑うノツブちゃんにもう一度ありがとうをお礼を言い、ノツブちゃんの黒い湯呑にお茶を入れて差し出す

「横島。旅行の荷物を買い足す必要があるだろうか？そろそろ出かけたらどうだ？」

心眼の言葉に頷き、旅行とスライム退治に必要な物を買い足す為にシズクとノツブちゃんに留守番を頼み、家を後にするのだった……

「うーん、こんなもんかなあ……」

図鑑で見たスライムの弱点とされる薬品と札を数枚厄珍で買い足し、旅行で使う水着や風船を買って家へ戻っていると心眼が

「風船は何に使うんだ？」

「あーこれ？チビとモグラちゃんの浮き輪代わりになるかなって」

バルーンアートの応用で浮き輪見たいのを作って、チビとモグラちゃんにつけてやれば浮き輪代わりになるだろ？言うとき心眼はお前らしいと言つて笑う。モグラちゃんは泳ぐの上手だけど、正直チビは未知数だから念のための準備は必要だと思ったのだ

「あ、そうだ。……ここまで来たんだから……誘って行こう」

カオスのジーさんには忙しいからと断られてしまった。今から誘いに行く人も断られるかもしれないけど、一応声を掛けておこうと思いついて、俺は来た道を引き返していくのだった……

そして月曜日、朝7時40分に美神さんの事務所へ向かう

「おはよう。今日は良い天気ね」

雲一つ無い快晴。旅行に出掛けるには最適だろうなあ。旅行だけじゃなくてスライム退治をまず優先してやらないといけないけど、やっぱり旅行も兼ねているので普段のように緊張したりしないな……でも浮き足立っていると危ないのでやっぱりスライム退治まで

はある程度の緊張感を保っていたいな……っと思っっているのだが

「みむー♪」

「うきゅー♪」

肩の上で楽しそうに鳴いているチビとモグラちゃんに。抱き抱えているタマモも尻尾を揺らして、上機嫌そう。はしゃいでいるチビとかを見ると、やっぱり緊張感が緩んでくるのが判る。恐るべし、小動物の癒しの力などくだらない事を考えている辺り、緊張感とか皆無だよなあ……

「……さっさと片付けてゆっくり出来ると良いな」

【ああ、そうだな。私とシズクの2人ならスライムを見失うことも無い。一気に片付ける事が出来るだろう】

一応名目はスライム駆除だけど、この面子なら多分大丈夫だよな。過剰戦力に近いような気もするし

【温泉温泉♪ワシはこれが楽しみでなー♪】

【本当幽霊なのに普通に飲食できるって反則ですよ……】

おキヌちゃんが暗い顔で言うけど、確かにその通りだよな。ノツブちゃんは幽霊として考えたら本当に反則だよな。ご飯食べて霊力に変換するとか凄いなと思う

「おはよう横島♪依頼もあるけど、本当良い天気で良かったわね」

蛍がスポーツバッグを2つ持って歩いて来たので、自分の鞆を車の近くに置いて蛍の荷物を受け取りに行く

「じゃ。皆揃ったし、荷物を積み込んでから出発しましょうか？」

美神さんがそう笑いながら言うが。まだ1人来ていない。やっぱり駄目だったのかな？と思っっていると

「どうも御機嫌よう」

いつもの黒いドレスを着て、美しい長い銀の髪を翻し颯爽と神宮寺さんが歩いてくるのが見える。手荷物が無いのは、やっぱり魔法で何処かに収納しているのかな？等と思しながら神宮寺さんに声を掛ける

「神宮寺さん。来てくれたんですね！」

「折角招待された物を断るのもおかしいでしょう？どうせ暇でしたか

ら顔を出しただけですわ」

正直駄目だと思っていたのに来てくれた神宮寺さんに手を振ると、小さく手を振り返えしてくれる。やっぱり神宮寺さんは良い人だ。ちよつと言葉に棘があるから誤解されやすいと思うけど、神宮寺さんはやっぱりいい人だと思う

「横島君？なんでくえすを呼んだのかしら？」

あれ？さつきまで笑顔だった美神さんの顔が引き攣っている……なんだろうと俺は首を傾げながら

「神宮寺さんにも除霊試験合格しましたって声を掛けに言つて。そのついでにスライム退治と慰安旅行の事を話したら時間があれば来てくれるつて【「なんで呼んだの!？」】「ええ……あかんかった？」

蛭達になんで呼んだの!?!と怒られたが俺としてはやつぱりお世話になつたし、報告するべきだと思つたんだけど……と言つと

「……これはもう、あれね。横島君のご両親の育て方だから仕方ないわ。とりあえず皆乗つてくれる?くえすは悪いけど助手席に乗つて……」

疲れたように言う美神さんに頷き、車に乗り込んだが。さつきまでの明るい雰囲気は消えて、妙に重苦しい雰囲気になつてしまったのだつた……

レポート2 これは慰安旅行ですか?いいえ、修羅場です その2  
へ続く

## その2

リポート2 これは慰安旅行ですか？いいえ、修羅場です その2  
スライム駆除の依頼があったのは軽井沢の近くに今度オープンする  
というレジャー施設とホテルの複合施設だ。車で約2時間ほどで  
最初はドライブ程度の気持ちだったんだけど

(く、空気が重い)

車の中の雰囲気異常に重い、バックミラーで後部座席を見てみると  
横島君はタマモ達を抱えておろおろしているし、蛍ちゃんは額に手を  
当てて何かを考え込んでいる。シズクはシズクでくえすを睨んで  
いるような、観察しているようなそんな視線だし、おキヌちゃんは思  
いっきり敵意剥き出しだし……ノツブは

【やっぱりメロンパンは美味しいの♪】

車の雰囲気を見捨ててメロンパンを食べている。マイペース過ぎるが、  
少女の姿をしているがそこは戦国大名織田信長。この程度じゃ動  
じないって訳ね

「もう少し先。左ですわ」

「え？あ、ありがとう」

そして予想外だったのは助手席のくえすが案外真面目にナビゲート  
をしていてくれる所だった。協調性とかゼロだから絶対ナビゲート  
とかしてくれないと思っていたので、これは正直驚いた

「この先。5キロで高速道路の入り口に入って、こっちのルートを進  
めば早いですわよ」

地図を広げながら、想定していたルートと違うルートの説明をする  
くえす。迷子になってもくえすには何の得も無いからそのルートが  
最短ルートなのねと思い、私は説明されたルートに向かってハンドル  
を切りながら

(まあ……これで馴染んでくれるといいんだけど)

蛍ちゃん達が一方的にくえすを嫌っている。私も正直苦手だが、G  
S家業なんてやっていければ気の合わない奴などとも仕事をしないと

いけない時もある。今回はその予行練習くらいになれば良いんだけどと思いつながらバンを走らせるのだった……

助手席に座って地図を広げている神宮寺くえすを見つめながら小さく溜息を吐く

(横島は悪気があった訳じゃないのよね)

1週間とは言え、面倒を見てくれた人に合格したと伝え。そのついでに慰安旅行に誘う、それはなにも悪いことじゃない。寧ろ百合子さんの教育が行き届いていると言う証拠だ。世話になったのだからお礼をする、それは至極当然の事だ

(私も慣れないといけないわよね……)

GSをやっていたら、大きな仕事の時とかは神宮寺くえすと一緒に仕事をする事だつてある。だから慣れないといけない……それは判っているんだけど……

(どう見てもなあ……横島のよろ好みなのよね……)

書類で確認したが、くえすは19歳で、海外の大学とGS育成所を飛び級で卒業し、14歳と最年少でのGS免許取得の記録者でもある。一時的にGS免許を剥奪されていたが、それも再交付されAーから美神さんと同じくA+に昇格する事が決まっていると聞いている。こうしてみると輝かしい経歴と暗い経歴の2つを持っている明らかに訳ありの人物だ

(1歳しか違わないのに、どうしてこうもプロポーションが違うかなあ……)

胸の大きさと良い、引き締まったウエストと良い。どうしても自分が劣っているように思える……横島が私を好いてくれているのは判っているけど、どうしても不安に思ってしまう

「えつと、えつと……誘ったらあかんかった？」

不安そうに尋ねて来る横島にうんつと首を振る。誘う事は間違っていないと思う、間違っているのは私自身で

(私って性格不細工だったのかな……)

自分でも知らなかった自分の側面を自覚してしまい、もやもやした

物を胸に抱え思わず溜息を吐くと

「車酔いした？大丈夫か？」

心配そうに尋ねて来る横島に大丈夫と言いかけたが、その言葉を飲み込み

「やっぱり調子悪いから、肩借りるね」

「うええ!？」

横島の肩に頭を預ける。横島が慌てている声を聞きながら私は目を閉じるのだった……

横島の肩に頭を預け眠る芦笛の姿を見て、思わず眉を顰めかけてしまったので軽く深呼吸をして平常心を保つ

(柩に言われてたから来ました……正直スライムは面倒ですわね)

横島が尋ねてきたら楽しい事があるからと聞いていましたが、内容はスライムの駆除が終われば高級ホテルに2泊3日の宿泊と温泉とプールに遊園地などのレジャー施設の使い放題……まあ内容的にはそう悪くは無いですが正直スライムは面倒だと思う

(立地的にはスライムに有利な場所が揃っていますし……)

先ほど美神から受け取った資料に軽く目を通したのですが、温泉・プールと水気が多いので既に分裂し増殖している可能性もある。水神シズクと心眼の索敵能力を頼りにしているようですが、奇襲される可能性が高く、私が得意としている炎系の魔法が使いにくいのが正直難点ですわね……まあ他の魔法も得意ですが、広域殲滅と火力の高さで言えば炎が最も優れているので最も好んで使っていた。施設の被害を気にしなければ最大火力で一瞬ですが、それでは折角のレジャー施設の使い放題の意味が無いので他の魔法を使う必要性が出てきましたわね

「まあそれも色々実験が出来ると思えばいいですか」

スライムは低級の魔法生物だ。人間界では魔法生物に会う事は少ないので、良い実験対象が出来たと思えばそんなにマイナスではないのですかね……

「あんまり派手なことしないでよ？私にも責任が来るかもしれないだ

から」

運転しながらあんまり派手なことをしないでくれと言う美神に善処しますわと返事を返しながら、スライムの事を脳の隅に追いやる。厄介ではあるが、この面子ならそう苦労する事無く退治出来るから考えないといけないのは退治した後の話だ

(それよりも本命は2泊3日ですわね)

温泉は……混浴ではないのでまずNG。プールは水着も持って来ているのでOK。遊園地は……保留……施設のパンフレットを見ながらどうやって過ごすかを考える

(横島の事を考えるならまず連れてくるグレムリンとモグラですわね)

芦笛やシズクと遊ぶことも考えているでしょうが、グレムリンとかと遊ぶことも考えている筈。ならばそっちを優先すれば誘いやすく、邪魔されないでしょうか……

(つて何でこんなに私横島の事ばかり考えているんですの……)

確かに横島に想いを寄せているのは認めています。ですが、こんなにも横島の事ばかり考えている自分を自覚してしまうと急に恥かしくなってきました。1度考え事を中断しスライム退治に考えを戻そうと思ったのですが、横島の事を考えてしまったせい。か、どうしても集中しきれないのだった……

2時間ちよつとのドライブで目的地としていたホテルに着いたのだが、俺の肩で蛭が眠っていたので何もしていないのに、何故か凄まじい疲労感を感じていた

「……長かったな、シズクタクシーなら一瞬だと言うのに」

シズクが若干不貞腐れたように言うが、あれは色々……本当に色々危険なので本当に最終手段の時意外は使いたくない

「じゃあ荷物を降ろして早速スライムを探しに行くわよ、さくつと片付けて休暇を楽しみましょう」

美神さんの言葉に頷き、皆で荷物を持って1度ホテルの中に入り従業員に荷物を預け、代わりに除霊用の荷物を詰めた鞆を持って依頼主



であるホテルのオーナーの部屋に向かうのだった……

「ご足労お疲れ様でした。依頼内容の確認ですが、私共のホテルに住み着いたスライム退治をお願いします。清掃員が3人ほど溶かされてしまい。とても開業できる状態ではないのです」

溶かされたと聞いて俺が青い顔をしているとオーナーが笑いながら

「最悪の事態は回避出来ていますのでご安心ください。前にこの地域の地鎮祭を行ってくれた霊能者がくれた札を全員身につけていたので死者は出ておりませんよ」

その言葉に安心した。そりやそうだよな……幾らなんでも死人が出ていたらホテルの開業なんて無理だよな。ただ美神さんと神宮寺さんの目付きがやけに鋭い物に変わったのが妙に気になった

「それではスライム退治のほう。よろしく願います」

頭を下げるオーナーに頷き、オーナーの部屋を後にする

「それでどうやってスライムを見つけるんですか？」

オーナーの部屋に向かうときのエレベーターでぱつと見ただけだがめちやくちや広い。プールも普通のプールに流れるプールやスライダーのある大きなプールもあるし、温泉も1箇所ではなく4箇所くらいあった。敷地の広さもそうだけど、これだけ隠れる場所があると見つけるのも大変だと思う

「そうね。流石に私もまさかここまでとは思ってなかったし……危険だと思うけど分かれて調べるしかないわね」

「でもスライム相手ですよ？分かれて大丈夫ですか？」

蛍が心配そうに尋ねる。飲み込まれたら溶かされる単独行動をして飲み込まれたらそれまでだ……ならまとまって調べた方が……俺の不安そうな顔を見た美神さんは笑いながら

「単独行動は危険だから流石にしないわよ。私と蛍ちゃんとシズク……あと、横島君。タマモを貸してくれる？妖狐の嗅覚ならスライムを見つけてくれると思うから、おキヌちゃんは悪いけど、ポルターガイストじゃ効果が薄いと思うから荷物の割り振りとかしてしてくれる？」

【判りました。お手伝いできないのは残念ですが、頑張ってください】  
確かにその通りだな。俺は頭の上のタマモを抱き上げて美神さんに手渡したのだが、明らかに不機嫌そうだった……終わったらその分遊んでやろう……

「それでくえすと横島君とノツブ、後心眼とチビとモグラちゃんでチームね。まずはプール2箇所を調べましょう、向こうも霊力を吸収して更に進化しようとするから仕掛けてくるわ。特に横島君！貴方は潜在霊力がとんでもないから間違いない狙われるからしっかりと警戒するのよ！こっちは普通のプールだから終わったら合流するから、じゃ、くえす家の助手をよろしくね」

「判りましたわ。お預かりしましょう、行きますわよ。横島」

わ、判りましたと返事を返し、俺は神宮寺さんとノツブちゃんと一緒に流れるプールなどがあるプールに向かって歩き出すのだった……

「なかなか広いですね……まあ施設が動いていないのは幸いです  
が」

流れるプールが動いているとスライムがそれで動き回るのであれば？  
ち思っていたので流れるプールが止まっていたのは正直ありがたい  
な

「心眼。近くに何か反応はあるか？」

【今の所は何も感じないな。もう少し奥を調べるべきだろう】

心眼の言葉に頷き、背負っていた鞆から無地の札を5枚ほど取り出す

「何をするつもりですか？」

「いや、思いつきなんですけどね？ちよつと試してみようと思つて」

取り出した5枚の札の内4枚を床に並べて、左手の親指を噛み切り、札の上に血を垂らし、右手で剣指を作る

「急急如律令ッ！水に潜みし邪悪を見つけよッ！！」

手にしていた札が浮かび上がり、そこから放たれた光が地面に落ちている札を照らすと札は勝手に浮かび上がり何かを探しているように宙を飛び始めた

「あいてて、思いつきだけど上手く行ったなあ」

噛み切った親指にバンソーコーを張りながらそう呟く。シズクの加護があるから水系の陰陽術は使いやすい、そして水の中に隠れているスライムを見つけることが出来るのは？っと思っただ

「なるほど、頭で理解していなくても血が知っていると云う事ですか……面白いですわね」

【ふむ、良いアイデアだな。良いぞ、横島】

神宮寺さんに面白いと言われ、心眼に褒められなんか気恥ずかしい物を感じていると

「みむっ！」

「うきゅー！」

チビとモグラちゃんが急に鳴きだしたので顔を上げると、俺が作った探知機がゆらりと動き始める。

「ほほう？もう見つけたのかも知れんな。見失うわけにはいかん、追うぞ」

ノツブちゃんの言葉に頷き、俺達はプールの奥。スライダーの近くへと走り出すのだった

【……………】

【二でかつ!?!】

スライダーの所にめちやくちやでかい青い塊が居て、俺とノツブちゃんの声が重なる。想像してたのより10倍くらいでかい。しかもよく見るとでかくなり過ぎて引っかかっているようにも見える

「あきれますわね……相当水を吸収して巨大化していますわ。ここまですごく大きくなったのは初めて見ますわね」

神宮寺さんでも見たことのない巨大なスライム、これだけでかいとどうやって攻撃すればいいのか判らず。神宮寺さんの判断を仰ぐとしてしていると神宮寺さんは指を鳴らす。それだけ、たったそれだけでスライムの周辺の水が凍り付きスライム本体すらも巨大な氷塊に変えた

【半端ねえ!?!ワシこんな初めて見たぞ!?!】

ノツブちゃんが驚愕の悲鳴を上げる。俺は驚きすぎて声も出ない

……魔法使いってやっぱ半端ねえ……

「みむっ……」

「うきゅー」

急に周囲の気温が下がって寒いのか、もぞもぞと服の中に潜り込んでくるチビとモグラちゃん。

「後は適当に殴っておいて下さい。それで終わりですわ」

「え。あ、はい」

神宮寺さんに言われて、栄光の手を作り氷塊を殴りつけると。そこから一気に輝が入り、スライムは粉々に砕け散った……

「さて、戻りますわよ。まだやるべき事が残っていますので」

「やること？スライムなら倒したんじゃない？」

それとは別ですわと神宮寺さんは笑い、その目に剣呑な光を宿しながら、あのスライムは自然発生じゃないですわ。誰かが人為的に作り出した物ですわと告げるのだった……

【え!?!ワシの出番は!?!】

颯爽と着いてきたノツブは自分が何も活躍してないことに気付くそう叫ぶ。なんと言うかとてもぐだぐだだった……

くえすのほうにもスライムが居たみたいね。私達の方も直ぐに見つけて退治したけど、反撃も逃げる素振りも見せないのにおかしいと感じていたが、くえすの方の話を聞いて私も確信した

「やっぱりこのスライムは自然発生じゃないわ」

スライムがアレほど巨大化すると言うことはまずありえない。まずあれだけ巨大化したのなら分裂し数を増やしに掛かる。所がそれをしない所か、攻撃されていても反応が余りに無さ過ぎた。

「地鎮祭をしたっていう霊媒師が怪しいわね」

「恐らくマッチポンプ。自分の名を売る為……もしくはホテルの収入を横から搔つ攫う目的だったんでしょね」

くえすが私が言おうとしたことを全部言ってしまった。最初にオーナーの話を聞いた段階で怪しいと思っていたんだ、スライムに襲われたが持っていた札のおかげで無事だった。そこがまず間違い

「札を持っていたから襲われた。それが正解よ、多分その札に反応して襲ってくるのね」

スライムはその気になれば生成できる低位の魔法生物だ。生成している段階で、その札を組み込めばそれにだけ過剰に反応する。それを利用して、何回もスライムを駆除し、ホテルから金を巻き上げる。典型的な霊能者の犯罪だ

「そんな事をする霊能者が居るんですか？」

信じられないと言う顔をしている横島君。まあ確かに信じたくないだろうけど

「事実よ。呪いを自分で掛けて、呪いを払うとか結構ある手口よ？」

GS試験に落ちたGSがよくやる犯罪の手口の1つだと説明しながら

「シズク。スライムの気配って辿れたりする？」

まずはその霊媒師を捕らえる事が最優先だ。くえすが凍らせたというスライムの欠片をシズクに渡してその中に混じっている霊力を辿れる？と尋ねるとシズクはその塊を手にして数秒で

「……こっちだ。案外近いぞ」

さっさと歩き出す。やっぱり人間とは違うわね、これだけ短時間で霊力の残滓を逆探知するなんてね……シズクの案内でホテルの中を歩いていると

「GSって困ってる人を助けるだろ？なんで自分の霊能で人を傷つけるんだ？」

「良い人間も悪い人間もいるって事よ横島。皆が皆善人じゃないのよ？」

判ってる。判ってるけど、俺は判りたくねえと返事をしている横島君

(甘いわね……)

優しいのは横島君の良い所だ、だが優しさと甘さは違う。そこを間違えると、簡単に人に利用され裏切られるだろう

(今回の良い経験かもしれないわね)

自らの霊能を使って悪行を行う。そんな霊能者を見る事も横島君

の良い勉強になるだろう

「しっかりと見て置くと良いですわ。この手の悪党の末路は……大抵決まっているような物ですもの」

私達が行動していても、何も反応を示さなかった。それはつまり……

「……ここだ。ここに隠し階段がある」

シズクが足踏みをする、芝生が盛り上がり階段が姿を見せたが……

「うげ……気持ちわる……」

私達全員が言おうとしていた言葉をノツブが口にする。階段は既に半透明のスライムで覆い尽くされており地下に降りることが出来ない状況だ

「これが末路。自分の霊能を悪事に使おうとした末路よ」

スライムを養成している間に暴走して飲み込まれたのだろう。これが霊能を悪事に使おうとした末路と言えよそれまでだが、若い横島君や蛭ちゃんにはちよつと早すぎた光景かもしれないわね

「くえす、後お願い」

メンタルケアをしないと駄目そうと判断し、このスライムの駆除をくえすにお願いする

「ええ、任せましたわ」

広げた左手に炎を作り出したくえすを見ながら、私は横島君達を連れて1度ホテルへと引き返すのだった……

霊能で悪事をする……そんな霊能者が居るなんて知らなかった。タマモ達を抱えながら、どうしてそんな事をするんだろうか?と思わず考え込んでいると

「人間だから迷っちゃうのよ。でもそこで引き返すことが出来るのも人間なのよ。判るかしら?」

隣のソファーに座ってそう言う美神さんに判りますと返事を返す。誰だって楽にお金を稼ぎたいって言うのはあるだろう、でもそんな悪いことをして稼いだ金で本当に良いのだろうか?その時は良くて

後で自分の良心が痛まないだろうか？

「GSって言うのはそういう事をしている霊能者と対峙することもあるわ。今回は手遅れだったけど、案外説得出来たりもするの、今回は最悪の結末を見ることになったけどね……」

俺を励ましてくれていた美神さんにありがとうございませと返事を返す

「ま、暗くなっちゃったけど、依頼は完了よ。慰安旅行を楽しみましょう？まずは夕食よね！」

明るく言う美神さんに頷き、美神さんと一緒にレストランへ向かいながら

(俺はあんな霊能者にはならない)

自分の力をあんな間違った方向で使いたくない。俺の夢は……今も変わらない、幽霊とか、妖怪とか、関係なくて。皆が手取り合って笑える場所を作りたい。だから俺は絶対あんな風にはならないと心に誓う

「横島！早く！皆待ってるわよ」

【横島さーん。本当色々あって美味しそうですよ！私は食べれないですけど】

「……早くしないと全部あの馬鹿が食べるぞ？」

【美味い！めちやくちや美味い♪】

レストランのほうから俺を呼ぶ蛍達の声に頷き、俺は美神さんと一緒にレストランへと向かうのだった……

レポート2 これは慰安旅行ですか？いいえ、修羅場です その3  
へ続く

### その3

リポート2 これは慰安旅行ですか？いいえ、修羅場です その3  
夕食の後、温泉に入りながら、私は今回の事件の事を考えていた今  
回は楽な依頼だった筈なんだがな……横島には現実を見るのが余り  
に早すぎた。私はそう思っている

(時間が経とうと、人間はそうは変わらないか)

平安時代。私が高島の世話になっているときも同じような事が  
あった。スライムではなく、餓鬼を使った事件だったが、それもまた  
使役者本人が餓鬼に食い殺されるという結末で終わった。高島は大  
人だったので自業自得だと笑っていたが、横島がそんな反応が出来る  
とは思えない

(落ち込んでいないだろうか……)

まだ横島には人間の闇を見るには早すぎる。やはりあの時、ああな  
る可能性を考慮して横島と蛍を引き返させるべきだっただろうか  
……いつかは対面しなければならぬ問題だが、幾らなんでも早すぎ  
た……

「……そろそろあがるか」

普通は水に入れば無意識に吸収してしまうが、熱湯なのである程度  
は意識して吸収しない事が出来るが、流石にこれ以上入っていると吸  
収してしまうそうなので温泉から出る。その瞬間に身体に付着して  
いた水が全て吸収され消えていくので、そのまま浴衣に着替えて横島  
の部屋へ向かう。空き部屋はいくらでもあるが、余り部屋を使いすぎ  
るのもホテル側に悪いと言う横島の言葉もあり、私と横島は同じ部屋  
で宿泊することになった。まあチビ達にノツブの奴も一緒だが……  
まあ普段と同じ環境に近くて落ち着くと思う辺り私も大分変わって  
来ているなど苦笑しながら部屋の鍵を開けて部屋の中に入ると部屋  
の明かりが消えていた

「……横島？もう寝ているのか？」

まだ21時。寝るには早い部屋の明かりが消えているので眠っ



ていたら起したら可哀想だと思い、小さく声を掛けてから部屋の中に入る。チビ達も籠で眠っているのが見えた。その部屋の奥を覗き込もうとすると窓際からノツブが声を掛けてくる

「おう、おかえり。横島はさっき寝てしまったぞ」

ワシは出番が無かったと自棄酒を煽っていたノツブがお前も飲むか？と杯を向けてくる。少し考えてからその杯を受け取る

【横島は……うん、良い奴だ。良い奴だが……甘すぎる。人間の負の面を知らなすぎる。これから先もつと人間の醜い部分を見ることもあるじやろう。ワシはそれを見た時の横島が心配でな】

杯を煽りながら言うノツブの言葉に頷く、人の痛みにも共感出来る優しさを持つ横島だ。だが世の中にはその優しさが通用しない悪人と言うのがどうしても存在する。それを見た時の横島が心配だと言うノツブ。

「……だから私は共に居るのかもかもしれないな」

側にいる限りは私は横島を守るだろう。最初は高島の転生者だからと言う理由で側にいたが、今は自分の意思で側に居ようと思ってる

【神をも魅了するか、かっか！おも「……失せろ」の、ノツブウウウウウウ!?!?】

ノツブが私をからかおうとしているのが判ったので、最後まで言い切る前に水鉄砲でノツブを窓の外へと打ち出し、そのまま鍵を閉める。幽霊だから勝手に入ってくる可能性が高いので、鞆から札を2枚取り出して窓と部屋の入り口に張っておく、これでノツブが入ってくる事は無いだろう

「……よく寝ているな」

今日の事があつたからもしかしたら眠れないのではないかと心配していたが、私の取り越し苦労だったようだ

「……私は結局どうしたいんだろうな」

眠っている横島の髪を指で梳きながら呟く。今日のことは横島には早すぎたと思う、横島が知るには人間の闇は深すぎる。今度の事が横島の心に深い影を落とさなにかが心配でしようがない……私は横

島が立派な霊能者になるまでは側にいると言った、だが横島が立派な霊能者になったとして……そうなったのなら私はどうすれば良いのだろう？今まで見捨てて来たミズチ達の元へ戻るのか、それとも天界へ戻り竜族としての勤めを果たすのか……それとも横島の元へ居続けるのか……

「……」

眠っている横島を見つめていると、とある欲求が沸いてくる……これはガープに出会った時から時折私を襲っていた

「……つつ……」

横島を喰らってしまいたいと、その血を飲み干したいと、その魂を取り込んでしまいたいと……邪龍としての本能がそれを願っている。そうすれば永久に横島と共にある事が出来ると

「……黙れ……私はそんな事を望んでいない」

頭を数回振ると、その声はだんだん遠くなっていつて暫くすると完全に聞こえなくなった。

「……厄介な物だな」

暫くすれば、この声も聞こえなくなるだろうが、それまでが怖い。無意識に横島にこの牙を突き立ててしまうのではないか？現に夢で何度か、その光景を見た。血塗れの横島と、血に濡れた自分の口……いつかそれが現実になってしまうのでは？それを考えるだけで恐ろしい、だがそれでも私は横島の側が良い、だが離れたほうが良いのでは？と思う自分も居る。自分で札を貼ってノツブを弾くようにしたが、私も外に出よう。横島に何かしてしまおうのが恐ろしい、そう思つて部屋を出ようとする

「……つと」

横島が無意識なのか私の腕を掴んでベッドの中に引きずり込む。抜け出すことは出来るが……

(……これはこれでいいか……)

神である私が一人で寝るのが怖いなんて実に愚かな事だが、実際そう思う。横島が側にいるととても安心出来た……神に名を連ねる者としてはあるまじき弱さだが、そんな弱さがあつても良い……私はそ

う思う。そのまま横島の腕の中で眠ったのだが、この日私は悪夢を見る事はなく、久しぶりに穏やかな気持ちで朝まで安眠することが出来たのだった……

(ただな……横島。お前は私のことをロリオカンと呼ぶが……私はお前の母じやない、判っているか？何故私がお前の側にいるのか？何故お前の世話をしているのか？その理由を……ほんの少しでも考えたことがあるか……?)

そう言う所は高島の中から変わらない、ただそんな横島だからこそ……人や物の怪が集まってくるんだろうな……私はそんな事を考えながら目を閉じて眠りに落ちるのだった……

なお翌朝、一緒のベッドで寝ている私と横島を見て蛍と一悶着あったのだが、それは本当に大したことではないので、態々語るようなことでもないだろう。ただ1つ言えるのは

「ロリコンじゃないのに……」

ロリコンと言われ目に涙を浮かべている横島を見て、何とか竜神としての力をもつと取り戻して、大人の姿を維持出来るようになれないか？と考え始めたと言うことだろうか

慰安旅行と言う事ですが、正直私はかなり暇でした。蛍ちゃんやシズクちゃんは生身の身体があるので一緒にプールで泳いだり、遊んだり出来ていますが私にはそれが出来ない。見ているだけがとても辛くて横島さんが昨日の事で落ち込んでいれば励ますとか出来たと思うんですけどそういう素振りも見せてないので私に出来る事は本当に何も無かった

(早く生き返りたい……)

これはずっと前から思っていた事。早く生き返って生身の女の子として横島さんに出会いたい。なまじ生き返る事が出来ると知っているだけに、その時間が長く思えて仕方ない。300年待ったと思えば、それは大した事の無い時間の筈なのにそれを我慢する事が出来ないのだ

(うとうっ………だんだん知らない人が増えていますし)

これが私の知っている人物だけなら、こんなに焦ることは無かったと思うのですが、神宮寺さんにシズクちゃんに琉璃さんとか、あの残念吸血鬼は……うん、大丈夫。横島さんがめちやくちや怖がっているから警戒する必要は零だ。寧ろ警戒しないといけないのは先日シズクちゃんから聞いた清姫と言う竜族の姫のほうだと思っうんです

『……横島が最近誰かに見られていると言う。間違いなく清姫の奴だ。あいつは天才的な隠形の持ち主だからな、目の前に居ても認識できない可能性がある』

それお姫様の特技としてどうなんですかね？……とは言え、横島さんを見ていると敵意みたいなのも感じるので近くに居るのは間違いないと思っうんですが、見つけられないって本当どういことなんですかね……まあこのホテルの周辺では感じないので大丈夫だと思っうんですけど……

「死津喪比女かあ……」

私の命を使って封印した悪霊……今の事務所のメンバーなら倒す事が出来ると思っうんですけど、まだ動き出していないのに、行きましょう！と言っう事も出来ない。それに蘇れば、横島さんの記憶を失ってしまう……ただ記憶を失っうだけなら良い。前はちゃんと取り戻すことが出来たから、でもそれで逆行してきた分の記憶を失っうしてしまうのが怖い。自分がどれだけ横島さんを想っうていたのか？その記憶を失っうのが怖い……

(もし記憶を失っうて……それでも記憶が戻らなかつたなら……)

あの時は記憶は割と直ぐに戻つた。でもそれがもし偶然だったのなら？もし蘇つて来なかつたら？もし蘇るのが遅かつたら？そう思っうと不安で押しつぶされそうになる……

「おーいーおキヌちゃん!!!」

不安に押しつぶされそうになっていると横島さんの声が遠くから聞こえてきた。顔を上げると何かの荷物を手にし、私に向かって手を振っている

「いやー、探したぜ。おキヌちゃん、チビ達が探してくれてやっと見つけれたよ」

「みむっ！」

「うつきゅー！」

「コン」

横島さんの足元や肩の上でチビちゃん達がふんすつと胸を張る姿を見ながら

【えっと、私に何か用事でした？】

呼ばれる理由が判らなくて、そう尋ねると横島さんは子供みたいなお純粋な笑顔で手にしていた荷物を私に見せながら

「一緒に昼飯食べようぜ！シェフの人に頼んでサンドイッチを作つて貰つたんだ」

昼食の誘いに、自分の顔が曇るのが判る。これがノツブちゃんとかなら一緒に食事が出るんでしょうけど、私は幽霊だから一緒に食事を取ることが出来ない。断ろうと思つたんですが

「あつちに丁度良い感じの木陰があるから行こうぜ」

私の言葉を無視して、手を取つて歩き出す横島さんに何も言うことが出来ず、私はそのまま木陰の方へと連れて行かれるのだった

「えーと、これとこれと……後これ」

広げたレジャーシートの上で何かの準備をしている横島さん。私に背中を向けているので何をしているのか判らない

(逃げたい……)

一緒に食事と言つても見ているだけだ。それが辛くて逃げようかな、でも逃げてても横島さんの事だからまた私を探しにきそう……我慢しているしかないのかなと思つていると

「よし、これでOK」

私の前にサンドイッチを置いて、その横にリンを置いて目を閉じて手を合わせながらリンを叩く、周囲に澄んだ音が響く……こ、これお供え物ですよね……若干自分の顔が引き攣つているのが判る。だがそれから数秒後

【あ、あれ!?!】

口の中にサンドイッチの味が広がつて来たのだ。焼かれたパンの香ばしさや、塗られたマヨネーズやケチャップの味。そして挟まれた

肉の味が口の中に広がっていく

「どう？味するかな？神宮寺さんとか、蛍に聞いたんだけど、ちゃんとお供え物をすれば味だけなら判るかも？って言われたんだけどさ？」

【し、します、サンドイッチの味がします】

私がそう言うのと横島さんは笑いながら自分もサンドイッチを鞆から取り出して齧る

「お、美味しいなー！さすが高級ホテルのサンドイッチ、味のグレードが違う！」

美味しい美味いと笑いながらサンドイッチを頬張りながら、チビちゃん達にも果物や油揚げを与えている

【あ、ありがとうございます】

「いやさ、最近おキ又ちゃん。元氣無かったからさ、俺としても氣になつてたんだよ。やっぱり美少女は笑顔じゃないとき！」

余りに横島さんらしい言葉に思わず笑ってしまう。横島さんのこの笑顔を見ていると自分の考えていた悩みが何でも無い様に思えてくる。そして確信したので

(例え私は記憶が戻らなくても、きっと横島さんを好きになる)

記憶が無くなっても、心が覚えている。このどこまでも優しい人の事を……横島さんの事を忘れるなんてありえない。だから不安に思うことなんて何も無かったのだ。私は何があっても、この人に恋をする……それを確信したから

「サンドイッチ食べ終わって、休憩したら、チビ達の散歩行くけどおキ又ちゃんも一緒に来る？」

鞆からごそごそとボールとかを取り出して、散歩の準備をしているチビちゃん達を見ながら尋ねて来る横島さん。私はその姿を見て迷う事無く即答した

【はいーっ！一緒にしますー！】

折角一緒に居れるのに、断る理由なんて何もないですから、確かに記憶を失うかもしれないのは怖いけど、だけどやっぱり私は……生き返って横島さんの隣に居たいから……だからきつと記憶は失つても、横島さんを想う心は決して忘れないと確信出来たから……だからも

う、なにも怖くないんです

【ところで横島さん？残ったサンドイッチはどうするんですか？】

「そりゃ勿論。お供え物は後で人間が食べるんだよ」

にかつと笑って私の目の前のサンドイッチを頬張る横島さんを見て、吊られて笑ってしまいながらこの人の隣に居たいと強く思うのだった……

レポート2 これは慰安旅行ですか？いいえ、修羅場です その4  
へ続く

## その4

レポート2 これは慰安旅行ですか？いいえ、修羅場です その4  
温水プールで遊ぼうという話になり、女子更衣室で着替えてるんだ  
けど、私は憂鬱な気持ちで一杯だった。何故ならば……

(私金槌なのよね……)

ルシオラとしても金槌だし、横島蛭としても金槌……泳ぎに関しては本場に絶望的なのだ。しかも神宮寺と美神さんはビキニに着替えてさっさとプールに行ってしまった。私が選んだのはバンドウビキニで、胸元にフリルが付いていて胸を隠すことが出来るタイプの水着だ。美神さんと一緒だからと胸の小ささをカバー出来る水着を選らんだのだが……

(美神さんだけだと思ってたのに)

美神さんも神宮寺も女性としては羨ましいと言わざるを得ない、黄金比の肢体をしている。そんな2人と比べると自分が女性としての魅力に欠けているとどうしても思ってしまう、思わず溜息を吐きながらパーカーを羽織ってプールサイドに出ると

「うきゅーうきゅー♪」

大型犬のサイズほどに巨大化したモグラちゃんが競泳用プールを音を立てて泳いでいた。酷く上機嫌で潜ったり、水面から飛び出してジャンプしたりして泳ぎをエンジョイしている。モグラちゃんって水陸両用だったのね……モグラちゃんが泳いでいるプールから少し離れたプールでは、美神さんがサングラスをしフロートを浮かべて、その上で寝転んでいた。なんかとても絵になっていたのが、妙に悔しい……横島はどこだろうかと探していると子供用のプールサイドに腰掛けて何かの準備をしていた

「なあ？横島？考え直してくれないか？私を頭に巻いたまま泳ぐのは不可能だと思うんだ。私は洗濯機は嫌なんだ」

「いや、でも仲間外れは嫌だろ？心眼も、濡れないように気をつけるし、泳ぎよりも後でスライダーとかあるほうで遊ぼうと思ってるから、平気平気」



「それは絶対私濡れるだろ……」

酷く憂鬱そうな心眼に対して、能天気には笑っている横島を見て小さく安堵の溜息を吐く、スライムの事で落ち込んでいないかと思っていたが、美神さんの激励が利いていたのかな？横島は直ぐ表情に出るの、見る限りでは落ち込んでいないという事が判り本当に安心した。横島の近くに近づくと横島はバミューダを穿いていて、膝の上でプールを覗き込んでいるチビを見ながら風船を膨らませている。風船で何をするつもりなんだろうかと思いついていくと

「何してるの？シズク」

「……何がだ？」

シズクは目を閉じて仰向けでプールを漂っていた。顔色の悪さもあり、水死体のように見えて思わずそう尋ねるが、シズクは何を尋ねられたのか判っていないようすで、これがシズクなりのプールの楽しみ方なのかな？と思う。若干間違っているような気もしなけど、シズク本人が楽しんでいるのならそれで良いかと思ひ子供用のプールサイドに向かう

「コン♪」

ぱちやぱちやと音を立てて犬掻きで泳いでいるタマモ。非常に楽しそうである、でも凄く泳ぐの上手よね……そこはやっぱリイヌ科の動物の特徴なのだろうか？

「みむう……」

「大丈夫大丈夫」

横島は膨らませていた風船でバルーンアートで浮き輪を作り、チビに装着させてプールの中に入れていた。明らかに怯えていたチビだが、浮いているのを確認すると

「みむ♪」

多分水面で短い足を必死に動かしているのだろう。ゆっくりとしたペースで前に進んで目を輝かせている。背中の翼もぱたぱたと動いているのが実に可愛らしい

「あ、蛩遅かったなあ……ん？パーカー？」

私に気付いた横島がパーカーを着ているのを見て首を傾げている。

プールで遊ぼうと言っているのにパーカーを着ているのはおかしいって判っているんだけど……パーカーを脱ごうか悩んでいると

「芦笛は泳がないようですから、私と泳ぎませんか？」

黒のビキニ姿の神宮寺が微笑みながら横島に声を掛けてくる。横島に微笑みかける前に私を見て嘲笑うかのように口元が動いたのは見逃していない……本当……いい性格をしてる

「え。あ……そのお……」

胸の谷間を見せ付けるような体勢をしている神宮寺を見て、顔を紅くしている横島……くっ……本当こういう所は純情で可愛いと思っ  
ているんだけど、自分じゃなくて神宮寺に対してその姿を見せているのが腹ただしい

「さ、行きましょう。折角のプールなのに泳がないというのは勿体無いですよ」

ぐいぐい押して行くわねえ……横島は押しに弱いので、このままでは不味い。ここで引いてしまえば、神宮寺の思い通りになってしまう、そうなってしまうたら、このままでは楽しい思い出は何も無いままに終わってしまう

「横島！私泳げないから！泳ぎ方を教えて欲しいのツ!!」

神宮寺に横島を連れていかせる訳にはいかない。私はパーカーを脱ぎながら、横島に泳ぎを教える欲しいと叫ぶのだった……

「んじゃあ。まずは手を持つてるから、浮かぶ練習をしようか？」

横島は私のお願いを聞いてくれて、神宮寺の誘いを断って私に泳ぎ方を教えてくれていた。神宮寺が物凄い目で睨んでいたが、そんなのは正直どうでも良かった。横島が私を選んでくれた、それだけで十分だ

「う、浮かべるの……？」

本当に金槌なので泳げるとか言う以前の問題で、浮かぶ事が出来るのか？と言う不安が大きかった

「大丈夫やって、ほら……な？人間は浮かべるやろ？」

私の手を離して、水の上に浮かんで見せてくれる横島……頭では判っているんだけど……ものすごく不安だ

「みむ？」

私の近くを浮き輪を使って浮かんでいるチビが不思議そうに見つめている。浮き輪とかあれば平気なんだけどなあ……とは言え横島が手を握っていてくれるなら、大丈夫よね……

「わっわあ……ほ、本当に大丈夫!？」

「大丈夫大丈夫。ワイもこうやってオカンに泳ぎ方を教えて貰ったから!絶対大丈夫やって」

自信満々に笑う横島に自分でも判っているくらい引き攣った声で返事を返し、私は横島に泳ぎを教えて貰うのだった……

3時間後……

「私……ずっと金槌だわ」

横島はとても丁寧に教えてくれたが、私の泳ぎは全くと言って向上することは無かった。もしかすると蛭魔ルシオラとして完全に金槌なので努力しても練習しても泳げないと言う可能性があったのだ。なんせ元々は虫をベースにした魔族だ、水を苦手とするのは当然の事……

「う、ううむ……いや、でも浮けるようにはなったやん?」

「水に顔を付けたら沈んじゃうじゃない」

練習して浮かぶようにはなれた。じゃあ今度は泳ごうって事で水に顔を付けたら、パニックになって沈んでしまった……慌てて横島が引き上げてくれたが、とてもじゃないが泳げるようになれるとは思わなかった

「うーん、水に顔をつけるのに慣れる必要があるのかもしれないな」

「だな。段階的に慣れていけば、泳げるようになるって!今日は無理でも、何回でも付き合うからさ」

横島はそう笑うと、泳ぎの練習はこれまでと笑ってプールから上がって

「じゃあさーあれ！あれやろうぜ！浮き輪で滑るスライダー！あれなら金槌とか関係ないと思うから」

私は横島の言葉に頷き、2人で手を繋ぎスライダーのある方向へと歩き出したのだった……

「でつか……こんな浮き輪初めて見た」

横島が驚いたように呟く、2人が並んで座るソファのような大きさの浮き輪。ホテル側の善意でスタッフを配置して動かして貰っているスライダーは高さもあり、曲がりが連続していて、もしかすると下手なジェットコースターより怖いかもしれない

「どうする……止めとく？」

「折角来たんだから、やりましようよ」

長い階段を昇って来たんだし、やらないで帰るとしたらまた長い階段を下りることになるので、それならば滑った方が良い。怖がりながら浮き輪に並んで座ると

「では、行きますよー？しっかり掴まっけて下さいね」

スタッフの言葉に頷くと、浮き輪が押される。そして凄まじいスピードで下り始める浮き輪

「う、おおおおお!?は、半端ねえ!」

「そ、そうねえ!?これ結構怖いツ!!」

【ああ、私は濡れるのだな……また洗濯機送りか……】

私と横島の悲鳴と諦めにも似た心眼の眩きを聞きながら、回転しながらスライダーの出口へと滑って行く……そして

「へ？」

私と横島の間抜けな声が重なった。出口はジャンプ台になっていて、私と横島は空中に飛び出していた

「おおおおお!?」

「つきやあああ!」

結構な高さから落ちる、その浮遊感に私と横島の悲鳴が重なりそのままプールへと着水したのだが

(!?)

手を繋いでいたのが原因だったのか、着水の衝撃が原因だったのか

？それともキーさんとサツちゃんの悪戯だったのか、それは判らないが、プールの中で一瞬……本当に一瞬だったが、横島と私の唇が重なった。甘酸っぱい味では無く、ただの水の味しかなかったが、私にとってはファーストキスで喜ばしい物だったが、人間は水の中で息をする事が出来ない。慌てて水面から顔を出す

「ぷっはあ!?こ、このスライダー危なすぎるやろ!」

「そ、そうね!?危ないわね!」

「……洗濯機確定だな……」

横島の言っている危ないと私の言っている危ないの内容は全く違うけど、これは危ない。本当に危ない

(胸が痛い)

トツプギアに入れたように心臓が暴れている。ただその痛みは苦しい物ではなく、心地よい痛みだった

「あれ?蛭?顔妙に紅くない?」

「え?そ、そそ、そんな事無いわよ!き、気のせいじゃない!」

そうかあ?と首を傾げる横島。このままだと私のほうがボロを出しそうだ……ど、どうしようか?と悩んでいると

「あ、居た居た。横島さーん、蛭ちゃーん。美神さんがそろそろお昼だから、1回プールから上がろうって言ってますよー」

ナイスタイミング!!私は心の中でそう呟き、横島と一緒にプールを出ながら

「判ったわ、今行くわねー」

「そっぴいあ、もう昼過ぎてるんだよな。道理で腹が空いてるわけだ」  
そう笑う横島の隣を歩きながら、唇に触れる。恥かしいけど、嬉しいといった複雑な気持ちを抱きながら、私はプールを後にするのだった……

なお昼食後。横島はと言うと

「すげー!モグラちゃんすごいぞー!」

「うきゅーん!!」

でかい浮き輪をロープで縛り、そのロープの先をモグラちゃんに啜えて貰って流れるプールを逆送していた

「あっははは!!これは良い!これは良いぞ!横島!ワシは泳げんから退屈していたが、これは面白い!!行け行け!モグラ!!」

【ひーん……怖いですよ……】

幽霊だから泳げないノツブとおキヌさんも浮き輪に乗っているんだけど、ノリノリのノツブに対して、おキヌさんは号泣している。私は凄く嫌な予感がしたので辞退したが、辞退して良かったと思う。

(こわ……)

私が怖いと思ったのは浮き輪の隣、シズクがうつぶせで1回も水面から顔を上げる事無く。その横をぴったりと付いている光景を見て、背筋が冷えるような感覚を味わうのだった……

横島に誘われて慰安旅行に付いて来たのはいいのですが、予想よりも芦荻などの妨害が激しく、横島と過ごす時間が取れていない……

(厄介な……私を完全に邪魔者扱いですわね)

横島自身は自分が誘ったと言う事もあり、私を気に掛けているようですが……それを邪魔するかのようには芦荻やシズクが動く……これでは慰安旅行に付いて来た意味が無い……

(温泉……混浴……いやいや、駄目ですわ)

そこまで仲が良いとは言えないのに、そんな事をすれば痴女扱いで終わりだろう。横島を観察して思っていたのは、女好きだが非常に純情なのだ。ある程度は色仕掛けも効果を発揮するだろうが、それ以上になると逆効果になる……なんとも厄介な性格をしている……

(どうしましうかね)

明日は全員で遊園地と聞いているので、そうなれば妨害を受けるのは必須なので遊園地で遊ぶと言う事も難しい……どうやって横島との時間を作ろうかと考えながら部屋の鍵を開けると

「……手紙?」

扉の間に手紙が挟まれており、扉を開けると私の足元へ落ちてきた。それを拾い上げ中身を確認した私は

「まあ妥協点として褒めてあげましょうかね」

それは横島からの手紙で、夕食後に少し時間をくださいと書かれ、ある場所で待っていると書かれていた。それを軽く丸めてから小さな炎で燃やす。これを見られてしまうと確実に邪魔をされると思ったから

「さてと態々夜に私の時間をくれとは何を考えているのやら」

本来夜に誘われれば警戒するだろうが、横島の性格を考えれば危険なことは無いと判断する。大体女性を襲えるような性格じゃないですからね、あの男は……まあ仮に襲われたとしても私ならば迎撃など容易いので、横島の誘いに乗る事にするのだった……

「あーすんません。態々」

夕食の後。1時間ほど時間を置いてから待ち合わせの場所に向かうと、横島がベンチに腰掛けて待っていた。周囲を確認するが、普段連れているグレムリン達の姿も額のバンダナも無いので横島1人だ。よく考えると横島が1人で行動しているのを見るのはこれが初めてかもしれない。

「いつから待っていたんですの?」

「え?30分くらいですかね?後で時間の指定をしてなかったと思って早めに来て待っていたんですよ」

夕食の後直ぐ動くとは思ってなかったなので、時間を置いてから来たのですが……ずいぶん待たせてしまっていたようだ

「全く……貴方は馬鹿ですわね?」

「あつははは……よく言われます」

そう言う意味で言った訳じゃないんですけどね……季節は春。まだ夜は少し肌寒い、そんな中で長時間待たせしまったと思うと悪い事をしたと思ってしまう

「仕方ありませんわね」

指を鳴らし炎を横島の前に発生させる。炎を見て仰け反る横島に「その炎は殺傷能力なんてありませんわよ。少し暖まりなさいな」

寒そうにしているのを見ると気の毒に思えてくるので、まずは身体を暖めなさいと言うと横島は微笑みながら

「やっぱり神宮寺さんは優しくて良い人ですね。ありがとうございます」

子供のような純粋な笑顔を向けられて、妙に気恥ずかしくなり、横島から目を逸らすのだった……

「折角の旅行に誘ったのに、蛍達がなんかすいません」

横島が最初に切り出したのは、芦蛍達の事に付いての謝罪だった。ですが私としてはその反応は余りに当然過ぎる反応だ

(色々やってきましたからねえ……)

暗殺や殺しもやってきた。元々私はそういう方面のGSだ。今は、通常のGSとしての看板を掲げているが、やはり今も暗殺の依頼をしてくる者が居ないわけではない、悪行と言うのは消えない。だから芦蛍達が私を警戒し、そして横島から遠ざけようとするのは当然の事だと思っっている

「俺は神宮寺さんが本当は優しい人って知ってます。だから俺は出来たら蛍やシズクも神宮寺さんと仲良くして欲しいって思っただけ、だからこの慰安旅行に誘ったってのもあります」

あ、勿論。最大の理由は神宮寺さんが俺の修行を見てくれたことに對する感謝ですからね！と言う横島に

「まあそういう事にしておきましょうか。仲良くするかどうかは別として」

うえっ!?!と呻く横島。だけど私も仲良くしようなんて思っていないし、向こうも当然仲良くしようなんて思っていないだろう。横島がいくら言った所で元々お互いが平行線なのだ、どうやっても交わる事なんてありえない

「それで?話はこれで終わりですか?そんな話をする為に私を呼んだんですの?」

夜に呼び出されるのだから、若干何かあるかと期待していたが、それも無くただ仲良くして欲しいなんて話なら、来る意味も無かった。だからそれなら帰りますわよ?と言うと横島は違います違います!と慌てて両手を振りながら

「えっとこれ、その無くしちゃった指輪の代わりにはならないと思



ますけど……」

差し出された小さな箱。割と丁寧に梱包されており、箱を縛っているリボンも安物ではないと判る。開けますわよ?と声を掛けてから梱包を開けると、そこには明らかに手作りであろう、本を模したシルバーアクセサリーのペンダントが納められていた

「いや、俺貧乏なんで高級な物とか買えないんで、手作りで作ってみましたですけどどうですかね?」

確かに私が普段身につけている装飾品とは比べるまでも無く粗悪な出来だ。だが作った横島の想いが込められている、世に2つと無い代物だ。緩みそうになる顔を鉄の自制心で押さえ込み、出来る限り平常心を保ったまま

「まあ悪くないですわね。気が向けば、身につけようと思える程度には気に入りましたわよ」

口ではそうは言ったが、家に戻ったらこれに魔力術式を刻み込んで護身用の魔道具にしようかと決めていた。

「気が向いたときで全然構いませんよ。いやあ、俺なんかの手作りだから捨てられるんじゃないか?ってビクビクしてましたし」

手作りと言う割には、かなり丁寧に作られている。もしかしたら売り物に出来るかもしれないと思うレベルの仕上がりだ

「貴方、なかなか手先が器用なんですのね。今度私が魔道具を作る時に助手でもやって貰いましょうかね」

私はあんまり造型には詳しくないので、指輪型しか作ってこなかったが、横島が手先が器用なら他の形の魔道具を作ることも可能だ。だから今後魔道具を作る時は声を掛けても良いかもしれない

「あ、じゃあ、これ。俺の家の電話番号です」

手帳に番号をメモして渡してくる横島を見て、溜息を吐きながら「あのシズクが邪魔をするんじゃないのですの?」

あつと呟く横島。美神令子は知らないですが、芦笛やシズクが私との関わりを持つことを良しとしていないのだから妨害される可能性が高いという事に今気付いたのだろう

「私の方から使い魔で連絡しますわ。その時はよろしくお願いします

わね」

「うつつ！任せてください！手先は器用ですから」

にかつと笑う横島に背を向けて部屋へ戻ろうと思ったのですが、部屋に戻る前に1つだけ聞いておきたいと思った事があった

「もしもですわよ？私が好きだと言ったらどうしますか？」

私がそう尋ねると横島は真顔で冗談ですか？と言いますと返事を返した。何でですか？と尋ねると

「いや、俺美形って訳じゃないですし、馬鹿ですし、助平ですし、神宮寺さんよりも遥かに劣っているのに好きって言って貰える訳が無いじゃないですか？琉璃さんのドツキリですか？」

そんな物ですわと返事を返し、冷えてくるので横島も部屋に戻りなさいと声を掛けてからその場を後にしようと思ったのだが、どうしても尋ねたいことがあり、その場で立ち止まる

「貴方は大丈夫ですか？」

「大丈夫ってどういうことですか？寒くないかってことですか？」

不思議そうな顔をする横島に藪蛇になるかもしれないと思いはしたが、私は聞かずに入れられなかった

「今回の事件の事ですわ。スライムとスライムを作っていた霊能者……それに関してはどう思っていますか？」

私がそう尋ねると横島は拳を作って、それを手の平に打ちつけながら

「どうしてそんな事をしたのかって聞きたかったですね。金に困っていたとか、このオーナーさんに恨みがあるとか、どうしてこんなことをしたのかってそれを聞いたただしかったです。霊能があるから助けられる人が居る、誰かを助ける事が出来る力なのにどうして誰かを傷つける事に使ったのかって思いました」

横島の言葉を聞いて私はそうではありませんわと呟いた

「良いですか？霊能は誰かを救う力ではありません。誰かを殺す力ですのよ？私の事は聞いているでしょう？」

「……暗殺とか、呪いを使うGSってのは聞きましたけど……でも神宮持さんは優しいじゃないですか」

優しい、優しいですか……横島が私に向けている信頼や好意を失うかもしれないが、横島は現実を知らないといけない

「貴方は優しいと言いますが、私は決して優しい訳ではありません。優しい人間が呪いや暗殺をすることを思いますか？」

「……何か理由があつたんじゃないですか？」

「理由なんてありませんわ。私は人に恨まれる事をして来ましたし、恨まれて当然だと思っています。私は自分が悪であることを自覚し、そして裁かれる覚悟を持っています」

悪である以上裁かれるだろう。だがそう簡単に裁かれるようなこととはしない、悪であるのなら、悪であるという誇りもある

「神宮寺さんは悪なんかじゃない！神宮寺さんは優しい人で……温かい人だから」

「ありがとうございます。貴方の言葉は嬉しいですわ。ですが、私は貴方と出会うのが遅すぎた」

もう少し、ほんの少しで良い。もう少し出会うのが早ければ違っていたかもしれないですね

「遅くなんか無い！人は変われる、変わって行ける！だから手遅れなんかじゃない!!」

感情的に叫ぶ横島に馬鹿ですわねと呟いてからその頭を撫でる

「ありがとうございます。貴方がそう言ってくれるだけで私は大丈夫ですわ」

世間がなんと言おうと、ただ1人の味方が居るだけでこんなにも心強いのですね……私はそれを今まで知らなかった

「ですが言葉で変われない人間も居ます。そういった存在はどうしても引き返すことなどは出来ないのです、ガープとかがですね。これからきつと人間の闇を見ることになるでしょう。ですが……どうか負けないで」

貴方は強いですわ、心が強い。だからそういう存在と対峙する事になっても負けないでください

「……ありがとうございます。神宮寺さんは俺のことを心配してくれましたね」

「ま、そうなりますわね。このペンダントのお礼ですわ」

そんな大した物じゃないんですけどどうもたえている横島に苦笑し、引き返そうとしたが、振り返り横島の前に移動する。横島は気付いていないようですが、物影に蛍やおキヌが居るのに気付いていたから

「えつとなんですか？」

私が目の前に来た事に驚いている横島の頬に両手を伸ばす。びっくりと肩を竦める姿に思わずくすりと笑ってしまいがちながら

「これはお礼ですわ。私を其処まで信用してくれてありがとう」

「うえっ!？」

額に口付けを落とすと額を押さえて意味の判らない事を言う横島に苦笑しながら

「では御機嫌よう。それとあんまり女を本気にさせると怖いですわよ?」

本気ってなんですか!?!と叫ぶ横島と私に向けて殺気を叩きつけてくる蛍達。だけど蛍達はこんな場所に偶然とは言えず出て来れないのを知っているのですその言葉の通りですわと笑い私はその場を後にした。部屋に戻る途中で横島の評価を付け直していた

(横島は自分への評価が低い)

どうも自分に対して酷いコンプレックスを持っているようですわね、この様子なら蛍と恋仲になるのは相当時間が掛かりそうですわね。それならば付け入る隙もあると言うもの……

(元より諦めるつもりなんてありませんでしたが……これは朗報ですわね)

蛍が横島を籠絡する前に、私が奪ってしまえば良い……そうだった時の蛍の絶望した顔がどんな物か?そして横島が私だけの物になった時を想像するだけで笑みが零れる。私はそんな事を考えながら自室へと引き返していくのだった……

なお関係ない話だが、この日からくえすの首元には、横島から送られた手作りのペンダントが下げられており。そのペンダントが無い日は1日も無かったのだった……

リポート2　これは慰安旅行ですか？いいえ、修羅場です　その5

## その5

レポート2 これは慰安旅行ですか？いいえ、修羅場です？ その5

……これは予想出来てた事態よね……慰安旅行の最終日にオープンする予定だという遊園地を貸切にして貰っていた。だから全員で遊園地と言う話になったんだけど

「まあまずはあれでしょ？ゴーカートとかどう？」

「……私はあれがいいと思うがな、幽霊屋敷。本物を知っているんだ、笑いに行こうじゃないか」

【ワシはこれじゃな！ジェットコースター！面白そうじゃ！】

【私……横島さんに憑いて無いと遊んでるって実感できないんですけど……】

「貴方が誘ったのに、私をほっておくのですか？」

横島君は顔を青くさせておろおろしてる。遊園地だから皆思い思いに遊ぶだろうと思ってる居たんだろうけど、そうじゃなかったみたいね

(と言うか、くえすが動いたから皆動き出したって感じよね)

1番最初にくえすが横島を連れて動くこうとした。だからそれを阻止する為に螢ちゃん達、そうなるのとどっちも引くに引けない状態で横島君の返答待ちとなってしまうのだ

(まあ……なんて言えばいいのかなあ)

横島君が悪いのか、それともくえすが悪いのか？誰が悪いか？なんて判らないが、横島君にとって誤算だったのは間違いないだろう。横島君は自分の評価が極めて低い、だから皆好きなように遊んで、偶然会って一緒に遊べば良い程度に思っていて、まさかこれほどまでに誘われると思ってなど居なかったのだろう。助けてと目が叫んでいる横島君を見て、私は溜息を吐きながら、さつきから準備して物を完成させ、それを適当にペットボトルの中に詰め込みながら

「はいはい。落ち着いて」

手を叩き私に視線を向けるんだけど、物凄い光を放っていて、正直めちやくちや怖い。なんで私がこんな事をしてるんだろう？と思いつつながら

「くじ引きで決めない？恨みっこ無しで」

このままだと埒が明かないし、女好きだけど純情な横島君があそこまで囲まれている状況にいつまでも耐えれると思えない。横島君の脳がキャパオーバーしてしまう前に私はそう助け舟を出したのだっただ……

なんでこんな事になったのだろうか？俺はそればかりを考えていた。遊園地の貸切……そんなの普通に考えたらありえない物で、どんなアトラクションも並ばずに遊ぶ事が出来る。だから、皆思い思いに遊ぶと思っていた……だけどいざ遊園地に来て見れば酷く殺伐とした空気となりみんなに誘われるという異常事態

(俺モテ期……とか言ってる場合じゃねえよ)

こんなのは予想外であり、こんな経験もした事も無いので対処法も判らない。ただおろおろしつつ、早く遊びたいと言わんばかりに尻尾を振っているチビとモグラちゃんにタマモを見ている事しか出来なくて……心眼は心眼で

【お前はもう少し自分の評価を改めるべきだと思っぞ】

俺の評価なんて、あれだろ？馬鹿で助平で臆病者……モテる要素なんて無い

【お前は……いや、何も言っまい】

心眼先生……なんで呆れてるんですか……？俺の味方じゃないんですか？

【学べ、お前自身の価値を。お前はそれだけ求められ、そして必要とされていると言う事に……私はそうだな。お前の霊力の調整でもしている。だから呼んでも返事は出来ないぞ】

心眼はそう言うのと黙り込んでしまった。呼んでみても反応の無い所を見ると助けてくれる可能性はゼロだ

「じゃ、横島君。くじ引いて、今の所シズクとくえすが1 蛍ちゃんと

ノツブ達が2。1を引いたらシズクとくえすと一緒に遊園地を回る。2を引いたら蛍ちゃんとノツブ達と回る。んで、その後にもう1回くじ引いて、午前と午後を決めるから」

背中に物凄い圧力を感じながら、俺は目の前にある2本のくじの1つを掴み引き抜くのだった……

「ふむ。幽霊屋敷大脱出ですか……些か陳腐な気配は感じますが、本物を知っている私達ならば笑い話にはなるでしょう」

「……案外本物が混じるかもしれないだろう？横島の除霊経験になる」

なるほど、それは良い考えですわと笑う神宮寺さんとシズクに先導されながら、幽霊屋敷大脱出に向かうのだが

(なんか仲良い?)

蛍やおキヌちゃんは神宮寺さんを明らかに敵としてみたが、シズクにはそれが無い。もしかしたらシズクは神宮寺さんが良い人だと判ってくれた？もしそうだったら良いなあと思いつつ、お化け屋敷は嫌だなあと思ったのだった……なお当然ながらくえすとシズクは仲良くなった訳ではない。ただ単純にお互いの利害の一致。その一点があったので一時的に協力しているに過ぎない

(お前はなかなか強かな女だ)

(お褒めに預かり光栄とでも言いましょうか?)

横島に聞かせないように小声で話すくえすとシズク。口元は笑っているが、目は一切笑っていないのが実に怖い……そして

その利害の一致の内容と言うのが……

(怯えている横島は可愛い)

(同意しましょう)

本質的にSっ気の強いくえすとシズクの性格上の同意と言うのがまず酷かったりする……

「……オレ。マッテル」

見ただけで判る。これはやばい奴や……思わず片言になりながら、待っていると云ったのだが

「行きますわよ。折角来たのですから」



「ふ、ふあい……」

神宮寺さんに腕を胸元に抱え込まれてしまったら、怖くても逃げることは出来ず。俺は男の性に思わず心の中で涙し、半分

引きずられながらお化け屋敷へと引きずりこまれるのだった……

横島君の恐怖を音声だけでお楽しみください

・  
・  
・

「いやあああああ！もうやだああああ!!オレ帰るううううう!!!」

「こんな作り物を怖がってどうするんです？夜の墓場でゾンビの方がよっぽど怖いですわよ?」

「……見ろ横島。チビ達だって怖がってないぞ?」

「うわあああん!!オレは怖いのも痛いのも嫌なんだよお!!!」

「みむう♪」

「うきゅー♪」

「ココーン♪」

このお化け屋敷の中で怖がっていたのは横島だけで、後の面子は笑って通り過ぎていた。なおお化け屋敷から出た後くえすとシズクがやけに満足げだったのは怖がっている横島の姿を十分に満喫出来たからであろう……

「もうお化け屋敷やだ……普通に遊べる所がいい」

チビ達を抱えながら別の場所が良いと神宮寺さんとシズクにお願いする、他にも心霊系のアトラクションがあるが、とてもではないが、俺の心臓が持たないので別の場所が良いと頼むが

「折角ですから、まだ他のも見に行きましよう」

「……だな。陳腐で面白い」

「嫌やー!!!」

まだ他の心霊アトラクションを回る気満々の神宮寺さんとシズクの言葉に思わず絶叫すると

「ふーん、じゃあ今度は私も付いていこうかしら?面白そうだしね」

「じゃな!色々遊ぶほうが面白いじゃろ!」

【……】

蛍達が俺の後ろに姿を見せ、さつきまでの笑顔を消し、無表情になったシズクと神宮寺さんを見て、俺は恐怖の余りモグラちゃん達を抱えてベンチに腰掛けるのだった……

おキヌさんに見ていて貰っていたけど、怖がりな横島を心霊系のアトラクションに連れまわすのは正直どうだと思った。まあ1箇所くらいならと思っていたけど、まだ回ると聞いて流石に黙って見ている事が出来なくなった

「何をしているのです？午前中は私とシズクが横島と回るはず、それを無碍にするのですか？」

一切のぬくもりを持たない声色でそう声を掛けてくる神宮寺。無論それは知っているし、無碍にするつもりも無い

「だから回ればいいでしょう？私もそっちに行って見るだけだから。誰も居ないアトラクションって正直詰まらなくて。邪魔はしないから向かう方向は一緒にいいでしょう？」

午前と午後に分かれて回るとい話をしたが、別に一緒に回っていないという話をした訳ではない。ただ一緒に話し合って、どのアトラクションへ行くか？と言う権利をシズクと神宮寺が持っているだけであり。私達がそれに同行してはいけないと言う訳じゃないでしょう？と言うと

「屁理屈ですわね」

目で殺してやると言っている神宮寺を無視して、話を進める。自分でもかなり強引だと思っているので、考える隙を与えてはいけないと思っただからだ

「屁理屈だろうと、間違つては無いわよ。大体横島が怖がつているのに心霊系のアトラクションばかり行こうとするのが気に食わないわ」

元々は邪魔しようなんて思ってた。だがあの横島の様子と妙に満足気なシズクと神宮寺の顔を見て確信した

(怖がつてる横島を見て楽しんでいる)

確かに横島は怖がりだ。怖い物を見ると錯乱して、泣いたりする。それは確かに可愛いと思うときもある、だがそれを見たいが為に横島を怖がらせるような真似を黙ってみている訳にはいかない

「なあ？シズクー？お前が横島を怖がらせてどうするんじや？」

「……すまないと思ってる。あまりに可愛いからつい」

可愛いって何っ!?!と叫ぶ横島。綿島今現状の自分の姿を見ると良いわよと言いたかった。半泣きでチビ達を抱き抱えてベンチに座っている。普通に可愛いじゃないの！と叫びたかった、だがそれをしては完全にシズク達側になつてしまうのでその言葉を必死に飲み込み「普通に遊園地で遊ぶのよ、怖がらせて、怖がって楽しんでる姿を見ようとするのよ。慰安旅行の目的が違うじゃない」

そう、これは慰安旅行であり、決して横島を怖がらせて楽しむ物ではない。だから私は邪魔に入ったのだ

「……目的を忘れていましたわ」

しまったという顔をして頭を抱えている神宮寺……それを見て思った。そして口にしていいか迷ったが、口にした

「あのさ？言いたくないけど……結構馬鹿なの？」

「……否定できませんわ」

……こ、これつてもしかして初恋で暴走してるだけ？……ルシオラの時に経験があるから判る。考える前に行動、そしてその結果悪い結果になってしまったときと同じだ。その気持ちについては同意できるが、今はここで畳み込む必要があるの、優しさなんて出さない

「そんなんじや横島に怖がられて、嫌われて終わりじゃないの」

「?!?!」

今気付いたと言わんばかりのシズクと神宮寺の絶望した顔を見ながら、漸く落ち着いた横島に

「ね？横島も怖い日より、皆で和やかに遊びたいよね？」

「ワイは全然そっちのほうがいい」

「みむー」

「うつきゅー!」

チビとモグラちゃんも横島の意見に賛成と言わんばかりに頷いて

いる。横島は根本的に争いが嫌いな人間だ、故に最初のくじの段階でも相当心を痛めていただろう。その証拠に標準語じゃなく大阪弁なのがそれほどに弱っているという証拠だ。なおタマモは

「クウン……」

心霊のアトラクションで心をすり減らしている横島を励ますように、頬に擦り寄っていた。横島はそんなタマモを見て励ましてくれてありがとなと笑っている。動物の身体と言うのをフルに生かした戦術だ……これは流石に真似できない。とりあえず今は横島が心霊アトラクションに連れて行かれないようにしないと……じゃないと横島が本当に泣き出してしまいそうだから

「と言う訳で皆で仲良くアトラクションを回る。それで良いでしょ？邪魔するとかしないとか、午前とか午後じゃなくてさ」

これは私にとっても苦渋の決断だ。なんせノツブとおキヌさんは幽霊。実質午後からは横島は私が独占できる。お化け屋敷で怖いと抱き付いたり、メリーゴーランドや観覧車を2人きりで乗ることも出来る。だがそれをする横島は気にするだろう、シズクや神宮寺さんは何してるだろう？と……そうなれば2人きりでも横島の意識は私じゃない別の人に向けられてしまう。そんな状態で2人きりになっても何の意味も無いのだ。だから嫌で仕方ないけど、皆で遊園地を回る。これが最も冴えたたった1つの答えなのだ

「と言う訳でまずは……巨大迷路とかどうかしら？皆でスタート地点が皆違うから、ゴールまで誰と合流できるか判らないって感じで」

かと言っても横島が私を見てくれないのは面白くないので、独占できる手段を考えるけどね！当然私の提案を聞いてシズクや神宮寺も同じ事を考えているのが判る。お互いを以下に出し抜くか？と腹の中で探りあいをしながら、巨大迷路に向かう中

「迷路かー。チビ達も遊べそうだな」

「みむっ♪」

「うきゅー」

「コーン♪」

【幽霊だから壁抜けで攻略出来てしまうのが問題じゃな】

「ですねー」

横島だけはのほほんと穏やかに笑いながら、タマモ達を抱っこしているのだった……無論ノツブとおキヌさんに出し抜かれたと気付いた時には完全に手遅れで、横島はおキヌさんとノツブ達と穏やかに迷路に挑戦しているのだった……

そしてその日の夕方。東京へ向かうバンの中で美神は穏やかな表情を浮かべながら、車のハンドルを握っていた

「はーまあ大体予想とおりよねえ」

美神はくじで午前と午後を分けて行動したら？と提案した物の結局皆合流すると思っていた。そうなると思っていたからそう提案し、彼女はホテルで休むことにしたのだ。帰りの道は多分自分1人になると思っていたから、横島達は確実に遊び疲れて帰る頃には力尽きていると思っていたから

「良い休暇にはなったかな……」

後部座席で、横島を真ん中に座らせて、両サイドに陣取って眠っている蛍とシズクを見た美神は優しい笑みを浮かべながら、少しだけ視線を上げて

「ギリギリで浮いてるのも怖いわね」

車の中で浮かんで眠っているノツブとおキヌを見て引き攣った顔でそう呟いていた。幽霊なのに寝ている、そして車体を突き抜けないように、横島君の腕に紐を通して眠っている姿に驚きながら、あんまり見ないようにしようと思き。そのまま隣に視線を向ける。そこでは腕を組んで眠っているくえすを見て

「もうちょっと素直になれば良いのにね」

慰安旅行で見えていた。蛍とくえすが口論する姿を、美神の知るくえすと言う少女は相手を見下し、祿に話もしない。そんな少女だった。そんなくえすが口論していた、それはそこまで蛍を嫌っているわけではなく、どう接すれば良いのか判らないから怒鳴る。もしくは自分が気に入っている横島が蛍にばかり気を掛けているから嫉妬している……そんな子供じみた姿に見えて……ふふつと小さく笑みをこ

ぼしながら

「くえす、貴女の欲しいと思っっている物は案外近くにあるかもしれないわよ」

異端の一族として迫害されていた神宮寺の家。だから彼女には当然心を許せる相手なんて、自分と同じ嫌われ者の枢しか居なかっただろう。でも今はくえすに向かって手を伸ばしてくれる人が居るのよ？と呟いた美神は

「ふあああ……音楽もなし、話し相手もないって言うのは辛いわねえ」

こうして独り言言うしかないんだからと呟き、ゆっくりと東京へ向かって車を走らせるのだった……

## プチトトカルチョ 開幕

プチトトカルチョ開幕その2

普段誰も訪れることの無い私の宮殿は常に静寂に満ちている。それが寂しいとか悲しいとか思った事は唯の1度も無い。私はここに座って本を開くだけで世界全てを見ることが出来る、ゆえにそれで良い。読んでいた本を閉じ、先ほど淹れたばかりの紅茶のポットを手に取りそれをカップに移しながら

「5……4……3……」

ゆっくりとカウントを数える。遠くの方で勢い良く開いた扉の音と凄まじい勢いで走ってくる足音。慣れ親しんだ静寂が薄れ、その代わりに騒音が近づいてくることに眉を顰める

「2……1……0」

カウントが終了すると同時に書斎の扉が開き

「プチトトカルチョの第2回を開催します！ダンタリアン！テーマをよろしくお願いしますう……」

最後まで言い切る事無く倒れたキリストとその後ろから

「すまんなあ、なんか極貧生活しとるらしくてなんかハイになってるんや」

サタンの言葉に知っていると返事を返し、まあとりあえず座れば良いだろう？と声を掛けながら、メイドに用意させたサンドイッチを机の上に置き

「サンドイッチがあるが「キシヤアア!!」獣か貴様は」

口を開いて突っ込んできた馬鹿の頭に本を叩きつけ。テーブルマナーも護れぬのならば何も与えんと言うと判りましたあつと土下座するキリストにこんなのが最高指導者で大丈夫なのか？と思わずサタンに尋ねるのだった……

がふがふがふ!!!犬のようにながつがつとサンドイッチを頬張っているキーヤンを見ていると、前回のトトカルチョのダメージがいかに大きい物だったのか容易に想像できる

(当てて良かったなあ)

かなりの備蓄を蓄えることが出来た前回のトトカルチョ。当れば天国、外れれば地獄……今回も慎重に行かんとなあと思いつながらサンドイツチの皿に手を伸ばすが

「キシヤアア！」

目を光らせて威嚇するキーやんに食べることは無理そうやなあと苦笑し、ダンタリアンが用意してくれた紅茶を飲んだ直後

「ゴバアアアア?!?!のふおが!?!のふおがあああ!?!」

キーやんが口から火を吹いてのた打ち回り始める。え? なんやこれ

「テーブルマナーも護れん駄犬には相応しい仕打ちだ」

デスソースと書かれたビンを机の上において笑うダンタリアンにやっぱこいつ怖いわつとワイは心の中で呟くのだった……

「ひひよいめにひやいました」

唇が真っ赤に張れたせいで何を言っているのか判らないキーやんに紙とペンを渡し、筆談してくれとお願いすると

『ガチで飢え死にます。もう少し炭水化物を恵んでください。マジでお願いします』

……余りに切実過ぎる言葉に流石のワイも絶句してしまう。土下座までしているのでどれだけ辛い生活をしているんやろうか? とめちやくちや気になったが、これがギャンブルの敗者の姿。下手に情けを掛けてこっちの運勢まで落とすわけにはいかなので無視していると

「ほれ」

ダンタリアンが指で金貨を一枚だけ弾いてキーやんの前に落とし

「ギャンブルの負けはギャンブルで取り返すが良い、10日で1割の利子で貸してやろうじゃないか」

……お、鬼や……鬼がおる。プチトトカルチョは結果が出るまで時間が掛かる。10日で1割なんて利子で借りたら地獄を見るで!?! 断れ! 断るんや! キーやん!

「あぎーっすっ!!!」



「何考えてるんや!？」

金貨を握り締めて敬礼するキーやんに思わずそう叫ぶと、キーやんは光を失った瞳でワイを見て

「貴方は知らないんですよ。毎日毎日モヤシとパンの耳だけを齧る生活のひもじさが!」

モヤシとパンの耳!?!ワイの予想を遥かに上回る貧乏生活だ……

「その上会議の時の弁当は私の分だけ存在していませんし。見せ付けるように肉を食われる怒りが判りますか!?!」

そんなん自業自得やん? 使い込みしたキーやんが悪いと思うのだが、だが今それを言うとは嘔まれそうなので喉元まで出掛けたその言葉を飲み込む

「ではこれが今回のトトカルチヨのテーマだ。ここから今度こそ当る事を祈っている」

その紙を大事そうに抱え込んで歩いていくキーやんの隣を歩きながら

(今回は抑え目で行こう)

キーやん見たいに破産するのは嫌なので今回は手堅く行こうと思いながら、ダンタリアンの宮殿を後にするのだった……

そしてその日の夜。第2回プチトトカルチヨのお知らせが神魔に配布された

第2回 プチトトカルチヨ 横島忠夫に最もボデイタッチしているのだーれだ!?

今回のプチトトカルチヨのテーマは横島に触れている回数が多い人物をばっちり当てて儲けましょう!

なお今回は特別なシステムを導入しており、横島に触れた場所、触られた場所によってポイントが発生します。そのポイントの一番高い方が勝者となります

※なお横島から触れた場合はポイント2倍となります

顔 2点

背中 1点

腕 1点  
腰 2点  
足 1点

※女性のみの得点

胸を当てる 10点

何らかのハプニングで下着を見られた場合は5点

なお今回はヒントとして各参加者が横島とどんな触れ合いをしているのか？（約1名を除き）と、その風景でどれだけポイントを獲得しているのかを試算するので、それを賭ける相手の決めるヒントとしていただければ幸いです

※期間は月々日の7日間の合計得点となります、期間が長いことも考慮し予想してください

芦笛 1・2倍

やはり今回も最有力候補。毎朝横島とランニングをしたり、除霊の稽古を行っているので必然的にボデイタッチの機会は多くなるでしょう。ただ非常に初心なのでラッキースケベ的なイベントは期待できない可能性もありますが、かなりの時間一緒にいるのでそれを差し引いてもやはり有力候補

シズク 2・4倍

水神シズクが今回はエントリー。横島の家頼れるロリオカンとして君臨するシズク、おはようからおやすみまで同じ屋根の下なのでやはりこちらも有力候補。しかしロリ属性なのが若干不安要素

神宮寺くえす 2・8倍

GS試験の折に横島を意識し始めたあの禁忌の魔女が参戦だ。海外で暮らしていた期間が長く、ボデイタッチに対する抵抗は非常に低く、更に横島好みのプロポーションを持つ上に非常に積極的かつ好戦的な性格をしており今後本命に名を連ねること間違い無し。しかしその反面今までの行いなどがあり、様々な仕事を割り振られているので横島と接触できる時間が非常に短いのでそこがやはり難点となるかもしれない

小竜姫 3000・7倍

まずありえないが、人数あわせでエントリー。妙神山にいたので会えるわけが無く、更に超初心なのでボデイタッチは不可能に近い。断言できるが、小竜姫の勝ち率は100%ありえない

その他 20・7倍

トトカルチョに表記されていない人物達の合計。トトカルチョに乗っているのが全てじゃない、とんでもないダークホースが隠れている可能性もあるので、今回限りの救済手段。倍率の高さを見る限り当選率は極めて低い上に、どれだけが対象者となるかも判らないので不安定要素が大きい。だが一発勝負狙いの勝負師にはお勧めだ

『小竜姫』

「むう……なるほど……」

修行の合間に下界に降りて買い漁った週刊誌などを読んで現在の人間界の情勢を勉強中。胃袋を掴むと早いと思っっているので主に料理雑誌を見ている模様

「よ、洋食ですか……やはりこういうのを覚えておくと良いんですかね？……老師に相談して精進料理じゃなくても良いですか？って相談してみましようか……」

レシピだけ見ても作れる訳ないのだが、妙神山はあくまで修行場なので精進料理がメインとなる。毎日じゃなくてもいいので洋食を作っても良いでしょうか？と相談する予定を立てている

「……少し飽きたの」

「そうか？ワシは美味いがな」

老師は精進料理に飽き始めており、洋食の許可が下りる可能性は高め。しかし妙神山に滞在しているロンと言う竜族が凄まじい食欲をしているので、洋食を作るとかなりの出費が掛かりそうである  
「……!?!、今の若い娘はこんな服を着るのですか!?!」

なお現代の人間界で流行しているファッションを見て、かなりの力

ルチャーショックを受けている模様だが

「こういうのを着れば……いや、でも恥かしいですよね……でもでも……」

その服を着てみれば横島に意識して貰えるかも？でも恥かしいと言う複雑な乙女心の間を揺れ動いている模様。もしもだが、ここで動く事があれば次回のトトカルチョで一躍本命に躍り出る可能性もある

なお当然の事だが、横島に触れていないのでOP

『芦蛩』

「はい、息吸って〜息吐いて〜」

「あいだだだ!!蛩さん!折れる!俺折れるからああああ!!」

霊力のコントロールの為の修行中。蛩に押されて折れるうと絶叫している横島の頭の上では

「みーむー」

「うきゆう」

チビとモグラちゃんが楽しそうに跳ねており、蛩に押されている上に頭からも衝撃が来ている横島は堪った物ではなく

「あいだだ!?!チビ!?!モグラちゃん!?!動いたらだめえ!?!」

痛い痛いと繰り返し絶叫している横島だが、チビとモグラちゃんはその揺れが楽しいのか、更に元気良く動き回り、その振動にギブウと叫んでいる横島に蛩が呆れながら

「もう!ちゃんと柔軟しておかないと後で痛いのは横島なんだからね」

このまま手で押していても横島は痛いと呼ぶだけだと判断したのか、ほんの少しだけ顔を紅くして横島の背中に胸が密着するように押すと

「ほわああああ!?!」

さっきまでの痛いと呼んでいたのが嘘の様に地面に上半身をつける横島。チビとモグラちゃんは急に体制が低くなったことに驚きながらも

「みつむ！」

「うきゅー！」

くるりとターンを決めて頭の上で器用にバランスを取っていた。実に器用な悪魔とモグラである

「ほ、ほほほ?!ほたりゆひゃん?!」

背中に蛍の胸が当たっているので、だらしなく鼻の下を伸ばし。顔を真っ赤にしながら振り返ろうとする横島だが、そうはさせないと蛍が更に胸を押し当てながら

「なーに?ほら、ちゃんと柔軟して。この後は破魔札の投擲練習とか、霊力の循環を意識する座禅とかやることたくさんあるんだからね」

「あうあうあう……」

蛍の胸の柔らかさを背中で感じている横島は顔を紅くししつつ青くすると言う奇妙な顔色をしていた

【やれやれ、横島。平常心の訓練と思え】

「無理ひゃす!心眼ひゃんせー!」

心眼がそうアドバイスをするが、遂に耐えかねて鼻血を噴出し、慌てて両手で鼻を摘む横島が半泣きでそう叫ぶのだった

背中×2回∥2点

胸を背中に当てる×3回∥30点

合計得点32点

『神宮寺くえす』

「あら、横島。奇遇ですわね」

「神宮寺さん?本当奇遇つすねえ」

高校の帰り、少し身体を動かしてから帰ろうとしていた横島にベンチに腰掛ながら声を掛けるくえす。若干その身体から魔力の粒子が漏れているのだが、横島は当然気付くわけも無いし心眼は心眼で神宮寺を信用して良い物かどうなのか?と考えていたので横島にその事を教えることも無かった……

「……」

「えつと?」

そして横島はくえすに手を向けられ、どうしたらいいのか困惑していた……

「全く女性に対するマナーを知らないのですか？」

「あ……えっと」

くえすの言葉に良いのかなあ？と悩みながら横島はその手を取って立ち上がらせる。しかしそんな事をした事が無い横島は思ったよりも強く引き寄せすぎ、くえすは眉を顰め

「女性のエスコートの術をもう少し覚えておく事をお勧めしますわ」

やれやれと肩をすくめるくえすだが、横島はそれ所ではなかった(すっげえ……)

抜群のプロポーションを持つくえすを引き寄せた時に、強く引きすぎその勢いで胸が当たり、なおかつ胸元が大きく開いたドレスを着ているので黒っぽい下着が見え、それらは横島には刺激が強すぎ、思考が停止していた

「ふむ、横島にはそれとなく伝えておこう。脳がオーバーヒートしている」

「……この男本当に女好きなんですか？」

この程度でオーバーヒートしているようでは、とても女好きとは思えないんですがね？余りに純情すぎてと苦笑するくえすは

「まあ良いですわ。除霊の前に良い気分転換が出来ました。では御機嫌よう」

にやりと笑い横島に背を向けたくえすだったが、思い出したように振り返り

「そうそう、小竜姫の使い魔」

「何だ？」

「いえ、大したことではないのですが……横島は大きく伸びる、精々大切に育てるのですね」

そして育ちきった時……私が奪い去りますわと言って溶けるように消えて行くのだった……そして残された心眼は

【横島お前は本当に人たらしと言うのか……なんとと言うのか。そんなのばかり引き寄せるな】

女難の相があるんじゃないのか？と疲れたように呟き、くえすが居なくなつたのを確認してから

「みむっ」

「うきゅー」

やっぱり学校に着いて来ていたのだが、くえすが怖くて隠れていたチビとモグラちゃんがひよっこと横島のGジャンの胸ポケットから顔を出すのだった……

手を取る 1回（横島からなので2倍） 2点

胸を当てる 1回（横島からなので2倍） 20点

下着を見てしまう 1回 5点

合計得点 27点

『シズク』

「……いい加減に起きろ」

普段は起こさなくても勝手に起きてくる事の多い横島だが、雨の日はランニングも散歩もないので寝坊することが多い。だからシズクが起こしに来たのだが

「……またか」

布団からひよっこと顔を出している大型犬程度の大きさのモグラちゃんと、腹の上で丸くなっているタマモに横島の頭の上で眠っているチビを見たシズクは顔を顰めながら

「……抜け毛が酷いのにな」

雨の日は散歩が無いと判っているチビとモグラちゃんは、雨が降ると動物的な勘で感じた時高確率で横島の布団に潜り込んで眠っている。抜け毛が酷いから掃除が大変だとぶつぶつシズクが呟いていると

「……むああ。もうちよい」

「……つとと」

何度も自分を揺するシズクが邪魔だと思ったのか、寝ぼけている横島はシズクの腕を取って布団に引きずり込む

「……むう……まあ良いか」

ぐーつと寝息を立てている横島。脱出は出来るがめんどくさいと思っただのか、シズクも目を閉じて眠りに落ちるのだった……なお螢が起しに来た時もそのままの体勢だったので、横島のロリコンと責められる事になり、チビとモグラちゃんに慰められる横島の姿がリビングにあるのだった……

腕を揺する 5回⇨5点

抱き抱えられる 1回『審議の結果10点相当と判定』+横島からなので得点2倍⇨20点

合計得点 25点

「まあこんなもんやなー。ま、ワイは手堅く……蛍にでも……」させるかああ!?!」なああああ!?!なにすんねんなああ!?!」

「お前も一緒に極貧生活しようぜええ!!」

そして最高指導者の執務室では手堅く賭けようとしていたサツちゃんの応募用紙を奪い取り、金貨3000枚を全て小竜姫につき込ませたラリったキーやんの姿があり、そこで壮絶な殴り合いが起きたりする

ギャンブルは人を狂わせるの良い例が神魔の最高指導者の執務室で繰り広げられているのだった……



## 別件リポート

別件リポート 星の三蔵ちゃん、白竜寺を再建する その2  
横島達が慰安旅行を行っている頃。白竜寺の陰念はと言うと

「はいはい、集中が乱れてるわよ。私が靈力を回して上げてるうちに靈力の循環方法を思い出しなさい」

三蔵をその背中に乗せ、滝の様な汗を流しながら片手で腕立て伏せをしていた……

(ぐっぐう……判っている。判っている筈なんだ)

靈力の循環の方法はこれでもかと訓練した。だから出来る、出来る筈なんだ……今俺の身体はお師匠様が触れている事によって靈力を供給されこうして動く事が出来ている。お師匠様が言うにはチャクラの経路の修復は7割終わったと……後は俺の意志で靈力を手足に供給することで、修復したチャクラの経路をより強固にしていくのだと

(ぐっぐう……駄目だ……)

徐々に手足に力が入らなくなって来る。今までと同じ方法で靈力を手足に流そうとするが、途中で何かに詰まったかの様な感覚がして、手足に力が回って行かない。それでも歯を食いしばり、靈力を通そうと努力していたが、限界が来てしまった……

「うっぐう……」

俺はお師匠様を背中に乗せたままその場に倒れた。お師匠様の重さがダイレクトに来てめちゃくちゃ痛い、意識はハッキリしているのに手足が動かない……お師匠様の重さの問題ではなく、俺の身体の問題だと直ぐに判った

「あいたたた……」

尻を摩りながら立ち上がったお師匠様は動けない俺を見て

「うーん。まだちよっと早かったかな……でも靈力を通さないと錆付いちやうし……」

どうでもいいけど、もう少し離れてくれないかな……俺の顔の近く

で立っているのです、見上げる形になっているのだがその際に法衣のし  
たからでも自己主張している胸にどうしても視線が向いてしまう

「よし、ちよつと痛いけど我慢してね」

（頼むから離れてくれ！）

今度はしゃがみ込んで来たのだが、そうになると今度は白い太ももが  
目の前に来る。女性をこんな近くに近くで見たことが無いので激しい動  
悸を感じていると

「あつがああああ!?!」

背中に当てられた手から電流が走ったような痛みが走り、その痛み  
に耐えかねて絶叫すると、俺の叫び声を聞いたのか東條や雪之丞が  
走ってくる

「ママお師匠様!?!なにやってるんだ!?!」

だからよ。雪之丞。お師匠様の前になんでママをつけるんだよ  
……いい加減にしろよこのマザコンやろう……

「お師匠様!?!陰念先輩に何してるんですか!?!」

雪之丞と東條にそう尋ねられたお師匠様は真剣な顔をして、俺の背  
中に手を当てたまま

「チャクラの経路の修復は終わってるのよ。でも霊力が循環しない、  
その理由を知りたいのよ。ちよつと黙ってて」

その声はいつもと同じ明るい物だが、妙に迫力があつた。雪之丞と  
東條は何も言えず、心配そうに俺を見つめていた

「なるほどね……雪之丞、修二。陰念を運んでくれる?とりあえずあ  
たしの部屋で良いから」

そう行つて歩いていくお師匠様と入れ違いで雪之丞と修二が近  
寄ってきて

「うっし、行くぞ」

「すいません。こんな運び方しか出来なくて」

雪之丞に腕を、修二に足を抱え込まれ、俺はお師匠様の部屋へと運  
ばれていくのだった……

おかしいと思っていた。陰念は霊能の才覚に長けた少年だ、幾らあ

たしの補助があつてもあれだけ短時間でチャクラの経路を回復させることは通常は不可能だ。それを成し遂げたのは単純に彼の才能だろう

(おかしい、本当におかしい)

あたしの霊力を陰念に与える事で、霊力の使い方を思い出させるつもりだった……だがあの時陰念に触れた時。あたしは思わず首を傾げたのだ

(霊力が全然譲渡されてない)

あたしは少しでも陰念が霊力を使えるようになればと思い、かなり多くの霊力を譲渡した。数字で言えば100だ。だけど陰念の身体にはたった10ほどしか霊力が譲渡されていない、幾らあたしの霊力を起爆剤として陰念の霊力を覚醒させようとしても元が余りに弱すぎた。これでは霊力の覚醒など促せるわけが無い

(どうなってるのよ……)

あたしが与えた霊力はどこへ消えてしまったのか？見た所陰念の身体には何の異常も無い、では何故あたしの霊力は消えてしまったのか？それがどうしても腑に落ちない

「お師匠様……俺はやっぱり、霊能者として再起は出来ないのか？」

腕で目を押さえて尋ねて来る陰念は震えていてあたしは言葉に詰まった。陰念は良く頑張ってきた、あたしの厳しい修行にも耐え、並の人間なら血反吐を吐いても不思議ではないチャクラの修復にも耐えた。今回ので霊能者として復帰出来るのだと言う光を見せようと思つた……だが結果は最悪の結果で終わってしまった。

(考えて、考えるのよ)

どうして陰念に与えたはずの霊力が消えてしまったのか？その答えが出れば陰念の霊力が回復しない理由が判つて来るはず……天界で見た小竜姫の報告書の内容を必死に思い出す……確か……そう！そうよ

「陰念。1つ聞いわ、貴方は魔装術の契約を複数行つたと言つたわね？何人と契約したの？」

複数の魔族と契約し魔装術を操る。それは本来不可能なはずだ、契

約する悪魔は1人。出なければただでさえ魂に過負荷を掛ける魔装術。あつと言う間に魂を喰われて死んでしまう。だが陰念はそれを成し遂げた、ヒントはそこにあるはずだ

「……確か……そうだ……2人……か？紅い炎は覚えている」

紅い炎……それはアスモデウスの得意とする炎。だがそれだけでは無い筈だ

「よく思い出して、他にも何かあるはずよ」

竜の首と紅い炎。そして4つ腕……それらは間違いなく異なる魔族の特徴のはずだ、だから思い出してと言うと

「そうだ……何かの刃物の金属片と暗褐色の籠手……それが目の前に置かれた」

刃物と暗褐色の籠手？思い出してくれたのはありがたいが、それだけでは情報が足りない

「何か言っただけだった？どんな些細なことでも良いから思い出して」

「……思い出す事に意味はあるのか？俺は……」「決め付けないで！貴方は霊能者として復帰出来る！あたしがそう保障する！だから諦めるな！」

言葉の中に含まれていた諦観の念を感じとり、陰念に怒鳴ると陰念はすいませんと謝ってから必死に何かを思い出そうとし

「そうだ……失われた同胞って」

「失われた同胞？」

それって他のソロモン72柱の事よね……確か72の内、半分ほどは消滅し復活を待っていると聞くんが、何かの金属片・暗褐色の籠手・4つ腕だけでは情報が少なすぎる

（考えられるのはその失われた同胞とやらの陰念の霊力が流れている可能性）

まだ完全に契約が断たれていない。だから陰念の霊力が回復しない、その可能性が極めて高い

（となるとまだ霊力を使わせるのは無理ね）

幾ら霊力を譲渡しても別の相手に流れていくのでは、陰念の霊力が回復するとは思えない。となると手足のリハビリとチャクラの経路

の回復を万全とする……今打てる手はこれしかない

「長くて辛いリハビリになると思うけど、あたしを最後まで信じるこ  
とが出来る？」

きつと結果が出るのは相当先になるだろう。それまであたしを信  
じる事が出来る？と尋ねると陰念はあたしに即答した

「俺はお師匠様を最後まで信じる」

あたしはおつちよこちよいでドジもやる。それでもあたしを最後  
まで信じると言ってくれるのならば、あたしはその信頼に応えようと  
思う。

(慕ってくれる弟子には応えないと)

それがお師匠と呼びなさいと言ったあたしの責任なのだから……

「とりあえず今日・明日は療養してて、あたしは少し知りたい事がある  
から白竜寺を出るわ。明々後日までには戻るから」

まずは陰念から聞いた情報に該当するソロモンについて調べる。  
そして次に日本よりも遥かに霊脈が強い場所を見つける、このまま  
は陰念の霊力は今なお契約している何者かに吸い尽くされ、回復する  
目処が立たなくなるからだ。だから日本よりも霊力の密度の高い所  
で療養させる必要がある

「判りました。お師匠様……お気をつけて」

まだ師匠と呼ばれるほどの事をしていないのに、師匠と呼んでくれ  
る陰念にありがとう、行って来るわと返事を返し、そのまま本堂で読  
経している雪之丞達に暫く白竜寺を後にすると伝え、私は人間界を後  
にするのだった……

な、なんだったんだ……？急に白竜寺を出て行ったままお師匠様の  
背中を見て困惑していると、弟子が伊達先輩にお客さんですと言っ  
て案内してきたのは

「伊達雪之丞君。私と取引しないかしら？」

神代琉璃……GS協会会長が不敵な笑みを浮かべて俺を見つめて  
いた

「取引だど？」

「ええ、取引よ。貴方に仮GS免許を交付しましょう、その代わりに一仕事して欲しいの……判つていると思うけど……命の保証はしない。寧ろ死ぬ可能性が高いわね、断つてくれても構わないわよ」

死ぬ確率が高いと聞いて、弟子や修二達が立ち上がるようにするが、それを手で制し

「違法じゃないのか？俺は霊犯罪のA級に該当するはずだ」

魔族に操られていたという恩情で刑務所には収容されていないが、それでも俺は記録上は犯罪者だ。そんな俺に仮GS免許を交付する、そんな叩かれると判つている事を何故する？と尋ねると

「戦力が足りない。ソロモンのグループ一派はまだ動いている。それに対して人間陣営はGS免許を返納した臆病者ばかり……それなら犯罪者だろうと、有益な人間を使う。それが上に立つ人間のやる事よ」  
毒さえも飲み干すってか……だが今の俺は弟子を守るという仕事……

「それとも貴方は横島君と決着も付けずに彼に死なれてもいいの？」

その言葉に胸がざわつく。俺はあいつに負けた、次は勝つと決めま  
マお師匠様に師事している。なのに奴が死ぬとはどういうことだ

「グループを殴つたのよ？どう考えたって狙われるでしょう？そうじゃなくてもグループは横島君を連れ去ろうとしていた。狙われる可能性も殺される可能性も高いに決まっていますでしょう？」

……それはそうだ……そんなこと考えれば馬鹿でも判る。それはつまり勝ち逃げされると言うことだ。当然ながら、そんな事を認める訳にはいかない

「伊達先輩。でも断るべきだと」

死ぬ可能性が高いと聞いて断るべきだと進言する弟子。確かにそれは正しい選択だろう……だが

「良いぜ、利用されてやる。俺はどうすれば良い？」

俺はあいつを終生のライバルと決めた。だから死なれたら困るんだよ、あいつが居れば俺はもっと高みに行けると判っているから

「OK！良い返事ね。近い内に迎えが来るわ、その時に詳しく聞いて。私は正直干渉できない立場にあるわ。でも……これだけは言える。」

これは神魔からの依頼で、貴方を名指ししているわ。もし成功すれば、貴方の罪も、白竜寺の責任も全て帳消しに出来るかもしれないわ」  
そいつはありがたい事だな……だがそれはあまりに分の悪い賭け。賭け金は俺の命か……だがまあ悪くねえ。それに神魔の後ろ盾を得れば、それこそ本当に白竜寺を無罪に出来るのなら、そんな賭けにも乗る価値が出てくる

(臆病者どもが)

俺達の責任問題ばかりを追及しようとする、GS免許を返納した者や、TVにはうんざりしていた。ならばそれを帳消しにするチャンスを手放すわけには行かない

「じゃあ頑張つてね。それと……こんな形でしか、救いの手を伸ばせない私を憎んでくれてもいいわ」

そう言つて白竜寺を後にする会長。だが正直言えば憎もうなんて思っていない、俺達を切り捨てる事がきつとGS協会にとつての最善。それでも俺達を救おうと尽力してくれた人間をどうして憎む事が出来ると言うのだ？俺はこの仕事をやり遂げる、だからその為には仕事までにやらなければならぬことがある

「今から特別訓練だ！誰でも良い！霊力の扱いを覚えろ!!」

今ここから俺が出て行くと、誰もこの山の幽霊と戦う事が出来る人間が居なくなる、いつ出発しないといけないのか判らないが、それまでに鍛えておく必要がある俺が死ぬかもしれないと聞いて、止めた方が良いという弟子達の声を聞いて俺は怒鳴り声を上げた

「俺を心配する前に自分達の事を考えろ！俺が無事に帰ってくる家を守り続ける！甘えは聞かねえ！自らを鍛え続ける！」

「「はいっ!!」」

「うっし！行くぞ！着いて来い!!」

俺は白竜寺を護る為にここを出る。だから俺が出た後はお前達が白竜寺を護るんだ。だが今のこいつらは自分達も白竜寺を護る力も無い、だから俺が出発するまでにこいつらを鍛えよう。きつと出発するまでにママお師匠様が帰ってくる、その後はママお師匠様に任せろ。俺は皆の為に命を賭けて神魔の依頼を達成してみせると強く誓

うのだった……  
レポート3 父来る その1



## リポート3 父来る

### その1

リポート3 父来る その1

慰安旅行の後は特に依頼も無いとの事で俺は高校に来ていた。やっぱりどこまで行っても学生は学生、留年しないように勉強くらいはしておかないとな。それに愛子とかには慰安旅行のお土産を買って来たのでそれも渡したいし

「ほい、愛子。お土産」

慰安旅行の時に愛子とピートにお土産くらい買って行くかと思いい、買って来た温泉饅頭とキーホルダーを愛子とピートに渡す。タイガーの分も買ってきたけど、まだ姿が見えないな。もう帰国したと思うけど、もしかしてエミさんと除霊に行ったのかな？

「あ、ありがとう。どこ行ってたの？」

「除霊試験はどうだったんですか？僕は昨日ギリギリで突破できましたけど」

愛子とピートの問いかけに鞆を机の上に下ろしてから

「除霊試験のほうはバツチリだったぜ。まあ除霊したんじゃなくて偶然結界が作られて閉じ込められていた幽霊を成仏させたんだけど」

正直普段行っている除霊とあまりに違うので少し不安だったけどなーと付け加える、するとピートは真剣な顔をして

「神宮寺くえすの指導の方はどうだったんですか？」

はあ……こいつも蛭と同じかよ……いやまあ俺も調べたけど確かに悪い話が多かったけど神宮寺さんは本当は優しくて良い人だと知っている。だからその誤解は解いておきたい

「神宮寺さんは凄く良い人だぞ？指導は丁寧だし、判らない所は判るまで教えてくれた。言われてるほど悪い人じゃないぞ」

そりやまあ悪い事をしたかもしれないけど、今は良い人だぞ？と話しながら、今度は愛子に

「スライム退治の依頼で今度オープンするって言うホテルに行ってきたんだ。2泊3日で食べ放題とか、レジャー施設使い放題でめちゃくちゃ楽しかった。まあ……俺みたいな庶民じゃもう行く事は無いと思うけどなあ」

一泊3万と聞いて、2度と行く事はないなと思ったぜと笑っていると、チャイムが鳴り担任が姿を見せたので自分の机に戻り、久しぶりに鞆から教科書と筆箱。そして

「よいしょっと」

「みーむ♪」

「うつきゅー♪」

当たり前のように潜り込んでいたチビとモグラちゃんを鞆から出して、教科書と一緒に机の上に乗せるのだった……

横島が久しぶりに高校を訪れている頃。蛭はと言うと……

「まだ起きないね、ベスパ」

地下の研究施設でまだ眠ったままのベスパの元を訪れていた。あげはが目覚めてから半年……しかしベスパはまだ目覚める気配も見せていなかった。だんだん不安になってきたのでお父さんと一緒に何か変わってないか?とと思ってきたがやはり何の変化も見られない

「うむ。何故だろうな……流石の私もそこまで判らないぞ」

無理に目覚めさせることも出来るが、それだと脳に影響を与える可能性があるので当然ながらそんな事は出来ない。出来る事と言えば脳波のチェックくらいと言うのが悲しい

(どうして起きてくれないの?)

あげはが起きたのだから、ベスパも直ぐに起きると思ったのに……もしかしたらこのまま眠ったままなのではないか?と言う不安が頭を過ぎる

「脳波は正常……いや、夢か?夢を見ているのかもしれないね」

夢?……まさかナイトメア?……いや、それはありえないか。あんな下級魔族がお父さんの結界を突破できると思えないし……しかしそうなる普通に夢を見ているわけで……それだけ長時間夢を見て

いる理由は何だろうか？少し考えてみたが、考えられる可能性は1つしかない

「逆行前の夢を見ているのかな？」

考えられるのはそれだが、それに関してはお父さんがNOを出した。私と違い、新しく作ったのだからそれはありえない。もしそうなら、あげはも逆行の記憶を持っている筈だから。あげはが違うのだからベスパが記憶を持っている可能性は限りなく0だと

「結局待つしかないのね」

早く姉妹が揃うと良いなと思いつながら研究室を出ようとする、ふと視線がある一点で止まった。それはGS試験で横島が陰念から飛び出た悪魔を封印した眼魂。それが機械にセットされ、周囲に何十にも魔法陣を展開されかなり嚴重に封印されていた。ここまでする必要があるのでだろうか？と思つていとお父さんがその理由を説明してくれた

「ああ、あれか。先日急に活性化してね。慌てて機械を作つて封印したんだ、そのままだと危険だと思つてね」

「活性化……？暴れだしたとか？」

私がそう尋ねると、お父さんはもつと酷いと前置きしてからおいでと言つて歩き出す。眼魂が封印されているのを近くで見ると私は絶句した

「な、なにこれ……」

そこには機械の残骸が転がっていたのだが、そのどれもが手や足を模した形状をしていた

「研究用の機械に魔力を流して、手足を作ろうとしていたんだ。正直本当に危ない所だったと思うよ」

手足を持った眼魂がどこへ行くのか？そんなのは考えるまでも無い、横島の所だ。そして横島の身体を奪おうとするだろう……

「これ何とかして壊せないの？」

「壊したら封印している悪魔が出てくる可能性のほうが高い。今はこうして封印するしかない」

確かにそれも危険だ。あの眼魂に何がいるのかは判らないが、相当

高位の魔族である可能性が高い、それこそ魔神の可能性もある訳で……壊すと言うのは早計過ぎるかもしれない

「これ……もしかして横島のベルト?」

入ったことの無い研究フロアなので周囲を見ると、2、3個だが横島のベルトに類似した物が転がっていた。それを拾い上げてみると煤けており、爆発か何かしたのが一目で判る

「ああ、これを利用して封印できないかな? って思ったんだけどね……構造が全く判らなくて……あははっ! まさかこの私が解明できない物があるとは……燃えさせてくれるじゃないか」

うん。研究者って大体こんな物よね。私も正直あのベルトって何だろうってずっと思っていたから再現して見たいと思っていた。とは言えこの爆発のあとを見るとそれも相当難しそうね

「とりあえずお昼ごはんにしましょう。あげはが待っているし」  
「そうだね。あげはがお腹を空かせて泣いてしまう」

気になることはあるがとりあえず後回し、まずはあげはの事を最優先しようと言う話になり、私とお父さんは研究所を後にするのだった……

「え? あ、はい、はい……判りました」

あげはにお昼ご飯を食べさせ、寝かしつけた頃。お父さんの部屋の電話が鳴る。かなり丁寧な対応をしているので上級神魔からかな? と思いつながらベルトの複製の為の図案を描いていると

「緊急事態だ蜚。百合子さんが大樹さんと離婚すると言って夕方の飛行機で日本に来るぞ……」

時差的に考えて夕方に到着すると言う事は、多分何処かで飛行機を乗り継いで日本に向かう飛行機に乗る前に連絡してくれたと思うんだけど……そこまで考えた所で離婚するから日本へ来るという言葉を理解し

「はっ?」

お父さんから語られたあまりに予想外の言葉に私は数秒思考が停止してから

「なんでそんな話!?」

「向こうで毎日不倫三昧だそうだ」

「死ねば良いんじゃないかな!？」

好きな人の父親だけど、私も女としてそんな自体を許せる訳が無く。即断でそう呟き、ソファアールから立ち上がって

「迎えに行く準備をするわ。お父さんは空港に使い魔を用意して、馬鹿親父が来たら教えて」

わ、判ったと引き攣った声で返事をするお父さんをお願いねと頼み。私は着替えて空港へと向かうのだった……

ノスフェラトウ事件の後、唐巢神父はと言うと、今まで以上にピートの指導に力を入れ光と闇の合一までの時間を短くするなどの精神的なトレーニングに重点を置き、本人は本人でかなりのハードトレーニングを自らに課していた

「はっ……はっ……くそ……本格的に鈍ってる」

ノスフェラトウの件で自分が錆付いていることは嫌って程痛感していたので鍛えなおしているが、たかが5キロの重りを手足につけ、軽く10キロ走り込んだだけでここまで消耗するとは……

「今まで楽な除霊ばかりをして来たっけか……」

除霊費を払えない貧乏な人達の為に朝から晩まで除霊を行っているが、それは精々Cランク程度……戦闘の勘などが著しく低下している……

「このままじゃ本当に足手纏いにしかならないな」

ふうつと大きく深呼吸してからもう1度走り出す。ソロモンの魔神が活発に動き出したのに対して日本のGSはその大半がGS免許を返納し逃げに入った。だからGS協会の中の人員の大半を神代家の息の掛かった人間に変える事が出来たのだ

(急がないと)

いつまた仕掛けてくるか判らない、その時の錆付いているなんて言い訳で足手纏いになる事は許されない。それになによりもガープは美神君の家族を狂わせ、そしてピート君やシルフィー君の母親までも

失わせた……美神君は事情を知りたいだろうけど、横島君と蛭君を育てる為に今は何も聞いてこない。そしてそれに少しでも安堵した自分が許せない、そして師匠だと言うのなら、私は強い自分に戻らないといけない。弟子を守り、共に戦うために……

「っー」

突然暗がりがかかってきた何者かの拳を咄嗟にしゃがみ込んで躲す

(魔族か!?)

闇その物を纏っているように姿を見る事が出来ない。だが敵であることは間違いない、拳を硬く握り締め応戦する

(は、速い……!?)

低い姿勢から連続で放たれる拳と蹴りは鋭く、受け止めただけでも手足が痺れる。強い、それも生半可な相手ではない。咄嗟に眼鏡を外し

「調子に乗るんじゃないぞ!!」

霊力を拳に集束し、それと同時に足に集束した霊力を爆発させ一気に間合いを詰め、全力で拳を振るう。胴に命中したはずだが……手応えが薄い……このまま離れて聖句を……いや、距離を取れば向こうがペースを掴む。私はそう判断し再び間合いを詰めようとしたが

「ふむ……流石我が息子の師匠と言った所か」

闇の中から聞こえた声に踏み出そうとした足が止まる。息子……?まさか!?!慌てて眼鏡を掛けなおすと同時に闇が弾けとび、そこから姿を見せたのは豪華な貴族服に身を包んだ青年の姿

「ブラドール伯爵!」

チューブラーベルに取り憑かれブラドール島で療養している筈のブラドール伯爵の姿だった

「手紙に感謝する唐巢和弘。傷も治った事もあり、我を助けてくれた青年に礼を告げるついでに息子の姿を見に来たのだが……教えてくれないかガープとやらが我が妻と養父に行った非道をな」

近況と、貴方の妻に起きた悲劇を伝えたが、まさか日本に来るとは思ってたなかった。人の良い笑みを浮かべているが、圧倒的なカリスマ

と場を制圧する雰囲気を持ち合わせているブラドール伯爵の前に

「すいません、魔力も少し抑えてくれませんか？」

「多分この魔力を感知してGS協会が動く。なんか申し訳ない気持ちになりながらそうお願いする

「むっ・そうか？だいぶ抑えているつもりなんだが……」

気をつけようと笑うブラドール伯爵の前に、遠くから聞こえてくる車のエンジン音を聞いて

（どうやって説明するかなあ……）

琉璃君にブラドール伯爵の事をどうやって説明しようかと頭を悩ませるのだった……

夕方チビとモグラちゃんの散歩を終え、リビングで温めたタオルでチビ達の足を拭いてやっているとチャイムの音がする

「ん？お客さんかな？ちよつと待っててな」

シズクは夕食の買い物に出かけているので、俺が出るしかないのでチビ達に待っていてくれとお願いし玄関を開けると

「やっほー忠夫♪」

「お袋ッ!？」

日本から遠く離れたナルニアにいる筈のお袋がキャリーケースを立てかけながら手を振って笑っていて、俺は思わずそう叫ぶのだった……

「GS試験合格おめでとう。よく頑張ったわね」

お袋に褒められたのはじめてかも知れん……どう反応すればいいのか判らず、タオルでチビ達の足を拭きながら

「あーうん。ありがとう……」

もう少し嬉しそうな反応出来ないの？と笑うお袋だが、本当褒められた覚えが殆ど無いので正直困惑するしかなかった

「ただいまー。あー疲れた……隣町までメロンパンを買いに行くじやなかったの……」

あ、ノツブちゃんが帰って来た……お袋の目がキラリと光る

「蛍ちゃんがいるのに女の子を囲ってるのかい？」

殺意すら感じられる眼に慌てて手を振る。と言うか蛍は確かに好きだけど、まだ付き合ってるわけじゃないし!?とか思っている

【ただい……おろ？誰じゃ？】

メロンパンの袋を提げているノツブちゃんの周りには人魂が浮いていて、説明するよりも目で見るほうが早い証拠があつて良かったと思わず安堵の溜息を吐く

「幽霊？」

「うん、幽霊。しかも凄い幽霊で物が食べれる」

それは凄いの？と苦笑するお袋に凄くないかな？と返事を返していると今度は

「……ただいま……？お客……」

シズクが帰ってきてソファーに座っているお袋とそんなお袋を指差しているノツブちゃんを見て

「……ふんっ！」

【ノツブウ!?】

ノツブちゃんの頭に全力で拳を振り下ろしながら、お袋に頭を下げて

「……どうもお久しぶりです」

「うん。シズクちゃんね。お久しぶり」

なんか物凄い他人行儀だ……俺はどうすれば良い？考えてみても判らないので足もとにじゃれ付いて来たタマモを抱き抱えることにした

【痛い……誰なんじゃ？】

「……横島の母親だ」

【え？マジ？あわわ!?申し訳ないの！ワシはその居候させて貰ってる織田信長じゃ！】

混乱しているノツブちゃんがきよきよきよしてる。こんな反応は初めて見たかもしれない、シズクはもう1度頭を下げたから荷物を持ってキッチンへと向かって行った。多分夕食の準備をするつもりなのだろう



「信長?……」

ノツブちゃんを見て信じられないと言う反応をしているお袋。まあ確かに男って伝わってるしな

「なんか信長を殺した悪魔が居てな?それを倒す為に天国から来て、そのまま俺の家で居候してるんだ。だから信長って本当は女の人なんだって」

本当?つと若干疑わしそうにしているお袋。でも事実は事実なのだから変えようが無い、それに俺にとってはノツブちゃんだからそこも正直どうでも良い。膝の上に乗って来たチビとモグラちゃんの頭を撫でながら、ずつと気になっていた事を尋ねる事にした

「お袋「お母さん」……お母さんはどうして日本に来たんでしょうか?」

態々俺に合格おめでどうと言いに来る為だけに日本に戻って来たとは思えないし、何かほかに用事があったんじゃない?と思いつつ尋ねると

「うん、優太郎さんと蛍ちゃんにも話したんだけどね?」

優太郎さんと蛍に?一体何の話をしたと言うのだろうか?湯のみを手を熱いお茶を啜ってからお袋は何でもないように笑いながら

「お父さんと離婚する事にしたから」

「はい?」

ちよつとそこまで買い物に行つて来るね?と同じ感じのノリで離婚すると聞いて、思わず思考が停止する。その間もお袋は

「蛍ちゃん空港に迎えに来てくれてたんだけど、長い話になりそうだったし、家族の問題だから蛍ちゃんは家に帰したわ、近くまでは送ってくれたけどね」

「くうん?」

なんで撫でてくれないの?と身をよじるタマモの行動で止まっていた思考が再び動き出し

「ええええええええ!!?なんでえ!!?」

結構喧嘩していたと思うけど、仲はそんなに悪くなかった俺の両親。それが急に離婚すると言い出したことに混乱して思わず絶叫し

ながら尋ねるとお袋は口元は笑っているが、目は一切笑っていないめちやくちや怖い笑顔で離婚を決めた理由を語ってくれた

「あの馬鹿向こうで毎日深夜まで帰ってこないわ、キスマークをつけて戻ってくるわでほとほと愛想が尽きたんだよ。忠夫、あんたはあんな馬鹿にはなるんじゃないわよ」

親父……あんなにやってるんだ……お袋の額に青筋が浮かんでいるのを見て心底恐怖しながら、俺は遠いナルニアに居る親父に心の中で馬鹿と呟くのだった……

「や、やっと辿り着いた……長かった……本当に長かった……」  
「ワン♪」

横島が自分の父親に馬鹿と呟いた頃、東京にはぼろぼろの着物姿の黒髪の男性とその男性に抱えられて楽しそうに鳴く白い子犬の姿があった……だが男性が腰に下げている2振り of 刀。彼らが銃刀法違反で逮捕されるまで後10分……そして美神の外見特徴を口にし、美神が迎えに来て釈放されるまで後10時間37分……

リポート3 父来る その2へ続く

## プチトトカルチヨ 結果発表

プチトトカルチヨ 結果発表その2

前回のプチトトカルチヨの案内から1週間後。参加者全員の下に結果発表と書かれた封筒が届けられた。今回は「蛍」が鉄板だと思っていた参加者達だが、その結果を見て驚愕することになる。では「蛍」「シズク」「くえす」の3人の最終結果を見て行こう……

『芹蛍』

「ふぁー疲れたなあ」

「ふふ、お疲れ様」

蛍と横島は早朝のランニングに来ており、額に大粒の汗を浮かべ、心眼も頭から外して手に握り、寝転がっている横島の隣では蛍が座り込んで微笑んでいた

「やめえ……くすぐりたい」

「はいはい」

寝転んでいる額をハンカチで拭われた横島は子ども扱いされていると思いきや、不機嫌そうに止めると呟く。蛍はそんな様子を見て更に楽しそうに笑っている。その姿を見れば完全に彼氏、彼女の関係なのだが、これで付き合っていないというのだから不思議な物だ

「みむ?」

「うきゅー?」

「コーン?」

今日は遊ばないの?とランニングについてきたチビ達が横島のお腹の上に乗って鳴くが、普段なら撫でたりする横島だが、ちよつと待ってえと呟くのが手一杯だった。その理由は心眼だった

【今日は私の補助なしだったからな、中々厳しかっただろう?】

普段横島の霊力の循環の補助をしている心眼がそれを行わなかった。自分で霊力を手足に循環させ走る。それを初めて行った横島は体力的にも精神的にも疲労しきっていたのだ

「メチャ厳しいっす。心眼せんせー」

【慣れて覚えろ。お前は既に出来るだけの素質はあるのだからな】

甘やかすだけではなく、厳しくする所は厳しくする心眼の教育方針だ、だがそれはそうしても大丈夫なレベルに横島がなりつつあると言  
う証拠でもあった

「はい、はい。今日は学校も休みだからちよつと休憩して行こうね」

「ほひやるひゃん!?!ひゃにしている!?!」

突然呂律の回らなくなった横島に対して、蛍は全然余裕と言う笑みを浮かべながら

「何って膝枕?膝枕横島は嫌い?」

嫌いじゃないですけど心の準備が!?!と叫んで顔を紅くする横島を見て蛍は更に笑いながら。優しく横島の頭を撫でるのだった……

「うむむ……はわわ……」

突然のスキンシップに顔を紅くしながら満更でもないと言う表情をする横島のお腹の上では

「みむ?」

「うきゅ?」

なんで横島がこんなに動揺しているのか判らないチビとモグラちゃんは不思議そうに首を傾げながら、横島のお腹の上をちよこちよこと歩き回り、タマモは蛍の方を見て牙を剥き出して唸っているの  
だった……

頭を撫でる 1点×4

膝枕 (審議の結果時間数(10分)×5点) 40分の膝枕だった  
ので20点

手を握る 1点×2

合計26点

週間得点296点

『シズク』

【ワシはケーキ食べ………消えろ】ノツブウウウウウ!?!?】

「ノブちゃん!?!?」

横島の家には信長が居候として住み付いた。横島がOKと言っているのに追い出すことは出来ないが、突然我俣を言い出す信長はシズクの水鉄砲で窓から外へと弾き飛ばされ、そんな光景を見た横島が絶叫する。これは最近割りと横島の家で起きていている事だ

「……さてと。では横島」

「はひ!? なんてしようか!」

シズクに声を掛けられた横島が背筋を伸ばし敬礼する。肩の上のチビとモグラちゃんも同じように姿勢を正している、その光景を見たシズクは苦笑しながら、横島の方に近寄り

「……別に私はお前に危害は加えないぞ?」

横島の顔を見上げながら穏やかに笑う。横島はそんなシズクの反応を見て顔を紅くしていた……枢の行動が生きており、徐々に、徐々にだが横島のロリボーダーラインが下がっているのを見て、シズクは心の中でほくそ笑む

(もう少しだな)

大人になるのも大事だが、今はこのままで横島の好感度を稼ぐのもいいかも知れないなどと腹黒い事を考えていた

「まあ。ノツブちゃんは置いといて買い物行こうか? いい加減に服買わないと行かんし、箆筒とかもいるやろ」

どうも今日はシズクの服とシズクの部屋に箆筒を置く為に買い物に行くらしい

「……私はそんなに気にしてないんだがな」

「あかんあかん、女の子なんやからちゃんとお洒落せな」

服なんてどうでも良いというシズクに駄目やでと注意し、横島とシズクは手を繋ぎ2人で近くのデパートへと向かうのだった……なおデパートでは試着を繰り返す度に抱き付いたり、どうだ? と上目目線で尋ねるなどシズクはかなり戦略的に横島の心の防壁を壊そうと動いていたりする……

「みむっ!」

「うきゅー?」

「くっ?」

「ヤヴァイナ……このままじゃロリになっちゃうぜ」

【外見はそうだが、精神年齢はお前よりも遙かに年上だぞ?】

「心眼先生、見た目って凄く大事だと俺は思うんだ……」

シズクのファツションショーに、その都度抱き疲れたりした横島はロリになっちゃうぜと真剣な顔をしながら、チビとモグラちゃんを抱きしめ、頭の上で上機嫌に尻尾を振るタマモと心眼とそんな話をしながらやばいやばいと呟いているのだった……

手を繋ぐ 1点

抱きつき（胸が当たっている）×4 40点

合計41点

週間得点247点

『神宮寺くえす』

くえすと横島の接点はかなり少ない。なのでその少ない接点を実に物にしようとかくえすは積極的に行動に出ることが多い。そして今回のくえすはと言うと……

「除霊お疲れ様でした」

横島の高校が終わる頃に除霊を終え、その足で横島と出会うと言う事だった。そして横島はそんな疲れた様子のくえすを見て立ち話もなんですからと近くの喫茶店に入る事にした。絶世の美女と、平凡と言う容姿の横島なので周囲の客から観察するような視線も向けられたが、それはくえすの一瞥で消えた。横島には優しいが、やはりそこはくえす他人に対しては一切の優しさを見せない

「安物ですわねえ」

注文したコーヒーを飲んで眉を顰めるくえすに対して横島は、付け合せのクッキーを小さく割ってチビとモグラちゃんに与えてから、コーヒーを啜って

「俺全然判んないですけどねえ?」

「それだけ砂糖とミルクを入れれば判らないでしょうが」

あはははと乾いた笑い声を上げる横島のコーヒーカップはカフェオレと言う感じになっており、それでは確かにコーヒーの味なん

て判らないだろう。しかしくえすの手が全然コーヒーカップに伸びてない事に気付いた横島は

「もうちょい別の店を探したほうが良かったですかね？神宮寺さんは本当ガチのお嬢様ですし……」

自分みたいな一般市民には丁度いいが、くえすのような天上人には合わない店を選んでしまったと後悔していたようだ。だがくえすがコーヒーに手を伸ばさなかったのには理由がある

(少々考え事をしすぎましたかね)

確かにコーヒーはあまり美味しい物ではなかったが、チビとモグラちゃんにクツキーを与えている横島の顔を見つめていてコーヒーを飲もうと思わなかったのが理由だった

「いえいえ、少々疲れたが出ただけですわ」

見惚れていたなんてくえすの性格から言う訳が無く疲れただけと返事をするくえすに横島は

「それだったら家まで送りましょうか？途中で倒れたら行けないですし……」

100%の善意で言われたくえすは断る事が出来ず、更に言えば前回くえすに女性のエスコート法を覚えておけと言われた横島は前回言われた事を学習し、くえすよりも先に席を立ち、手を貸しに回っていた。根本的に横島はフェミニストなので覚えておけと言われたことはちゃんと覚えていたようだ

「本当にここまで大丈夫ですか？」

屋敷の中まで荷物を運びましょうか？と言われたくえすだが、このまま屋敷に入れてしまうと横島を屋敷から出したくなくなってしまうので屋敷の門の前でここまで良いと言って横島から荷物を受け取り

「ええ、結構ですわ。学校で疲れているのにありがとうございますごいしました」「いやー俺殆ど寝てるだけなんで学校じゃ疲れないですよ？」

【寝るな、戯け物】

今まで黙り込んでいたので心眼ではないバンダナをしているのだろうと思っていたくえすだったが、急に目が現れ喋りだしたことに少

しだけ不機嫌そうな顔をしてから

「お疲れ様でした。では御機嫌よう」

目撃者がいるのは癪だが、このまま別れてしまつては自分を意識して貰えないと思つたのか。横島の頬に触れるだけのキスをし、屋敷の門を潜る。横島は横島で唐突なくえすに行動に思考が完全に停止していたが、復旧したら復旧したで

「ふあ!？」

奇声を発しながら赤面し、その場でひっくり返つて気絶した。純情すぎである

「やれやれ、本当にお前は女好きなのか?と私は常々思うよ。モグラちゃん、頼むぞ」

「うっきゅー♪」

そして気絶した横島は巨大化したモグラちゃんによつて、家へと運ばれるのだった……そしてその様子を見つめていたくえすは自らの唇に指を当てて

「……どうも自分の感情が制御できていないですわね」

口調は冷静だが、顔をトマトのように紅くしつ

「もう少し何とかして接点を作りたいんですけど……」

今のままでは駄目だ。蛭やシズクには勝てないと思い、何とかして横島との接点を増やす方法は無い物だろうか?と除霊を行っているときよりも真剣な顔をし作戦を考え込んでいるのだった……

横島にキスをした(頬) 20点

合計20点

週間得点198点

ここまで来れば蛭が296点と圧勝だったのだが……今回のみ追加されたその他枠……そこにとんでもない強者がいたのだ

週間得点2480点と言うありえない数値を叩き出した、今回のトカルチヨの勝者は

「みーむー♪」

「うっきゅー♪」



「ココーン♪」

チビ&モグラ&タマモ「マスコットトリオ」(その他枠)

「二〇〇おいしい?! マスコットじゃねえか?!」

その他枠にまさかのマスコット。これは誰も予想しなかった勝者だろうが、よく考えて欲しい。常に一緒に居て、擦り寄ったり、撫でられているチビとモグラちゃんの数値が高くなるのは当然だ。それにちゃんと映像にも映っているのだから、勘の良い人は気づいたかもしれないが、まさかのマスコット。これは誰も賭けた人物が神魔側に存在せず、当選者0と言う結果になり、そして今回の賭け金は全て次回のプチトトカルチョへと回されることになった。そして言うまでもなく今回だけでその他枠からマスコットの存在が除外されたのは言うまでも無い……!!

「■■■■ーッ!!!」

「落ち着けえー! 落ち着けえキーやん!」

そして今回払い戻しが無いと知った。キーやんはダンタリアンから借りている金貨の返済について困りきり、最高指導者でありながらどこぞのバーサーカーになってしまっており。それを必死に止めようとしていたサツちゃんだが

「あだっ……いっ! 加減にしろやああ!!」

「■■■■ーッ!!!」

暴れまくるキーやんに遂にサツちゃんも切れ、天界で凄まじいバトルを繰り広げ……会議室に作戦考案室など、重要な情報を管理している施設を全て粉碎したキーやんとサツちゃんはと言うと

「嘘やん……ワイも今月の金鉱山と銀鉱山の売り上げがばあ……?」

「あっはははは!! 一緒に落ちようぜええ!!」

破壊した天界の設備などの修理費で、金鉱山と銀鉱山を失い茫然自失しているサツちゃんと借金が増えすぎて精神崩壊しているキーやんの姿があった……

## その2

レポート3 父来る その2

百合子が日本に到着した頃、ナルニアでは

「はあ……はあ……やばい、やばいやばい……」

大樹が疲労困憊と言う様子でジャングルを走り回っていた。その理由は

「へーい、ボース?どこにいるんですかー?」

「早くでてきてくださいーい」

野太い声がジャングルに響く、それは大樹と百合子の部下であり、ナルニアの現地スタッフなのだが、気のせいかな語尾にハートマークがついているように思える。それもそのはず。今大樹を探しているのは俗に同性愛者と呼ばれるスタッフ達だった……今までは百合子がいたので守られていた大樹だが、百合子はナルニアを発つ前に離婚するので好きにするれば良いと現地スタッフに声を掛けていた。その結果がこれである、家に帰れば机の上には離婚届。そしてその直後に襲って来た現地スタッフ。肉体的にも精神的にも追い詰められている大樹は親指を噛みながら

「何とか日本に……」

日本に戻って百合子を説得しなければと呟いた直後。視界に影が落ちる、震えながら振り返る大樹の視線の先には2M近い黒人が居て「へーいボース♪」

「あ、来るなアアアアアアアア!!!」

ヤラれる、それを本能的に悟った大樹は絶叫しながら、隠れ場所から飛び出し全力でジャングルを駆け回るのだった……

朝4時40分に目が覚めた……一瞬何処かと思ったが直ぐに頭が動き始め

「そっか、日本か……」

ここは本来シズクちゃんの部屋らしいが、リビングで寝るので構わないと言ってベッドを貸してくれたのだ。悪いと思っていたが、ナルニアでの疲れもあり、久しぶりに息子の顔を見た事もあり安心したのか、ベッドに寝転がると同時に泥のように眠ってしまったのだ

(とりあえず、忠夫の朝ご飯とお弁当を……)

久しぶりに家に居るのだから朝ご飯とお弁当を用意しようと思い、着替えてリビングに向かうと

「……おはようございます……」

「シズクちゃん、朝早いよね？」

既にシズクちゃんがエプロンと踏み台を使って朝食の準備をしていた。キッチンから漂ってくる味噌の匂いに妙に落ち着く。やはり日本人は味噌汁よねと思いつながら

「私も手伝おうか？忠夫のお弁当とかもあるだろうし？」

今日は除霊の話が無いので高校に行く聞いていたのでお弁当の用意をしないと行けない筈だ。それにどうしても気になる事もあったし、手伝おうか？と尋ねるついでにその事も尋ねてみる事にした

「無理に敬語じゃなくても良いわよ？」

忠夫の母親と言う事で無理して敬語で喋っているように思えて、普通に喋ってくれば良いわよ？と言うとシズクちゃんはそうさせてもらおうと笑う

「……それなら心配ない。準備は直ぐに出来る、それよりも異国から来て疲れている筈だ。もう少し休むと良い」

口調は固いけど私を心配してくれているのが判った。でも母親としてやるべき事はやらないと

「じゃあ6時ごろに忠夫を起しに……」「ん？おはよー母さん。早いな」  
忠夫？」

前は起こしに行っても全然起きなかった忠夫が自分で起きてきた事に驚いていると

「……今日も何時も通りで良いな？」

「おう、7時には戻るなー？うっし！チビ、モグラちゃん、タマモー行

くぞー」

忠夫が呼ぶとチビちゃん達が忠夫の肩の上に乗れそうに鳴き。タマモだけは忠夫が抱き抱え玄関に向かっていく。その姿を呆然と見つめているとシズクちゃんが教えてくれた

「……朝空気の綺麗な内にランニングと霊力の循環トレーニングだ。いつも朝5時から7時頃までな」

そ、そうなんだ……私が知らない内に忠夫の生活習慣がかなり変わったって驚いた

「……後は6時頃に朝食の仕上げをするだけ、お茶飲むか？」

急須を向けながら尋ねて来るシズクちゃんにお願いと頼み。ソファーに腰掛けるのだった……

「ぐががああ……」

窓の近くに布団を引いて大鼾を書いて眠っている忠夫にノツブと呼ばれている幽霊。幽霊なのに布団が盛り上がっているのはどういう理屈なのだろうか……？それになんでGSなのに幽霊と同居しているのだろうか……と言う疑問を感じる。

「えつと忠夫って結構規則正しい生活してるの？」

今の忠夫の生活習慣を知らないのではどんな生活をしているの？とシズクちゃんに尋ねると

「……そうだな、かなり規則正しい生活をしていると思うぞ？毎朝5時に起きて蛍と合流してランニングに出掛けて、朝の内に軽く霊能力の訓練をして、7時頃に2人で戻ってきて朝食を食べて学校の時は出掛ける。そうじゃない時は家でまた霊能力の訓練をしているぞ」

そ、そうなんだ……それだけ必死に訓練しているって事は結構霊能力者として成長しているのかな？と思いつつ、蛍ちゃんも一緒に朝食つて……少し見ない間にかなり親しくなったようだ

「今の忠夫って霊能者的にはどんな感じなの？」

私は霊能なんて持ち合わせていないので全然判らないのでシズクちゃんにどんな感じ？と尋ねると

「……そうだな。知識の方はまだまだだが、戦闘力で言えば間違いなく横島はトップクラスだろうな。最近は陰陽術も大分使いこなす様

になって来ているし、チビ達も成長して横島を守ろうと頑張っている。後はまあ変な霊能力に目覚めたな……これだ」

差し出された新聞を見ると奇妙な鎧姿が映っていて、え？これもしかして忠夫？

「……ああ。横島だぞ？変な能力だろう？」

……これってどう見ても特撮よね……とても霊能力には見えないのだが、そうだと言うのだから間違いないだろうけど、これはかなり予想外だ

「……まあかなり有能な霊能者として注目されているぞ」

夢に向かって頑張ってるのねと安堵し、これからも頑張つて欲しいと思う。シズクちゃんの言う通り7時ごろに忠夫と蛍ちゃんが戻つて来て、運動している事もあり結構な勢いで朝食を食べ終え

「じゃあ、行って来ます！」

「みーむう♪」

「うつきゅー♪」

「ココーン♪」

チビちゃん達を頭の上や肩の上に乗せて、元気に学校に向かっていく忠夫……え？学校に連れて行ってるの……かなり驚いたがあまりに自然体にこれはいつもの事なのだと悟り黙って忠夫を見送り

「蛍ちゃん。忠夫の事教えてくれる？」

シズクちゃんに話を聞いたが、他の人にも話を聞きたい。師匠の美神さんとかにも今日は話を聞いて回ろうと思いつながらまず……

「はいっ！」

いつの間にか自分の茶碗などを家に置いている蛍ちゃんにも忠夫の事を聞こうと思い。そうお願いするのだった……リビングを見ると明らかに蛍ちゃんの私物と見られる物も置かれていて、明らかに同棲と言う雰囲気かしてるんだけど……忠夫……あんたこれで付き合っていないの？蛍ちゃんに手を出して無い様で安心したが、これで良いの？と思わざるを得ないのだった……

朝あんまり遊んでやる時間が無かったので、チビ達を連れて学校に  
来た

「みむみむ♪」

「うきゅー♪」

机の上でちよちよこと動き回るチビ達を見ながら、膝の上で丸く  
なっているタマモの背中を撫でる。学校ではあるが、妙に落ち着く  
な。これがきつと小動物の持つ癒しのパワーだろう

「横島君。暫く除霊は無いの？」

俺の机に腰掛けてそう尋ねて来る愛子にうーんつと首を傾げなが  
ら

「判らん」

今日は除霊は無いと聞いて学校に來ているが、急な仕事があればも  
ちろん学校を早退して除霊に向かうだろう。でも今の段階では除霊  
をすると聞いてないので多分大丈夫と返事をする

「そっか。今日はゆっくり勉強出来ると良いね」

ゆっくり勉強出来ると良いねと笑う愛子。俺の勉強が遅れている  
事を心配してくれているんだろうけど……正直あんまり勉強はした  
くない、何故なら休んでいる時間が多いので授業の内容が理解出来な  
いからだ

「もう、そんなに嫌そうな顔をしなくてもいいでしょ？私も勉強を教  
えてあげるから」

愛子が優しくそう言ってくれるが、やはりあんまり勉強はしたくな  
いなあ……とは言え、明日には除霊で受けれなかった分の補修テスト  
があるから勉強しないと赤点になりかねない。特に今はお袋が家に  
居るので赤点を取る訳には行かない、学校側もある程度配慮してくれ  
ると言っているが、ある程度の点数を取らなければ配慮所ではないだ  
ろうから

「おはようございます」

「おう、おはよう、ピート」

ピートが教室に入ってきておはようと言うので、イケメンなので正  
直挨拶なんてしたくないが、軽く手を上げて挨拶をしながら

「シルフィーちゃんはちゃんと見てるだろうな？」

周囲を警戒しながら尋ねる。何処から襲ってくる可能性が高いので、学校では全然心が休まらない。だから学校では勉強にも集中出来ないんだよなあ……こんなんで明日のテスト大丈夫なのか？と思わず不安になる

「いえ、それが……横島さんの靴を見ると姿を消してしまつて……すいません」

「お前よ！本当に自分の妹の手綱くらい握れないのか!？」

【その通りだぞ？兄として危険な妹の面倒は見ておけ】

油断していると本当に何処かから襲ってくるので、怯えながら周囲を警戒する。俺と心眼に怒られたピートはすいませんと言うが謝るくらいならもつと注意してシルフィーちゃんを見張つていて欲しい

「みむー！」

「うきゅー！」

シルフィーちゃんが居ると聞くとチビとモグラちゃんが遊ぶのを止めて警戒を始め。タマモも何かを探すように尻尾を立てている……本当頼むから学校に居る間くらいは穏やかに過ごせないかなあ……シルフィーちゃんはそんなに嫌いじゃないんだけど……怖がつて過ごすのは本当に嫌なんだよなあ……

「SHRを始めるぞー」

教師が来てSHRを始めるが、その間にシルフィーちゃんは教室に姿を見せることは無く。それが余計に俺に恐怖心と警戒心を強める結果へとなるのだった……

「本当に学校に来てるのか？」

3時間が終わつても姿を見せないのだから本当に来ているのか？とピートに尋ねると

「ええ。一緒に来たので間違いはないんですけど……」

「シルフィーちゃん。自分が留年の危機つて判つてるのかしら……」

学校にいる筈なのに姿を見せない……チビとモグラちゃんが小さく唸っているのでもしかして近くに居るのか？と警戒した瞬間

「ふぎやあつ!？」

シルフィーちゃんの悲鳴が聞こえたので振り返ると、黒いマントを着込んだピートとよく似た男性が俺の背後に居て、シルフィーちゃんの頭を鷲づかみにしていた。あれ……もしかして

【凄いやつだ。一応警戒して置けよ】

心眼がそう言うが、警戒する必要は多分無い。俺の勘だけど……俺の後ろに居るこの男性は……

「久しぶりだな。我が愚娘よ」

「お、おとおお……お父さん……」

あ、やつぱりブラドール伯爵だったんだ……ピートが絶句している中  
ブラドール伯爵は俺を見て

「我が愚娘が迷惑をかけていたようで申し訳ないな。後日謝罪に訪れよう、我を助けてくれた礼もしたいのでな」

いや別に俺そんなこと言われるようなことしてないんだけどなあ  
……

「では行くぞ。愚娘……お前には少々話をする必要があるそうだ」

「いやあああああ!? お話はいやあああああ!!! 助けてえ!!! お兄ちゃんツ!!!」

「父さん。シルフィーをよろしくお願いします」

「裏切り者おとおおツ……」

号泣し、断末魔のような叫び声をあげながらブラドール伯爵に引きずられていくシルフィーちゃんを見て、悪いと思ったが、これで少なくとも今日は穏やかに過ごせると思い俺は安堵の溜息を吐くのだった……そしてシルフィーちゃんがないので警戒する必要も無くなつたのか、チビ達は机の上で丸くなり寝息を立て始めるのだった……

「ただいまー」

授業も終わり、寄り道もせず家に帰る。帰る前にも言われたが、GS試験に合格している事もあるので、勉強が遅れている事も判っているのでボーダーラインはかなり低めにしてやるから、基礎の所をしっかりと勉強して置けよと背中を叩かれた。基礎なら蛍にこれでもかと教えてもらっているので大丈夫だと思うが、テストって雰囲気は本当に苦手なんだよなあ……と思いつつながら家に帰ると靴が玄関に置



かかれていた。誰かお客さんか?と思いながらリビングに入ると

「忠夫、お帰り。カオスさん?が来てるわよ」

カオスのじーさんが?なんの用事だろうか?と思い。鞆をソファアの横に置いて、抱き抱えていたタマモをフローリングに下ろすとカオスのじーさんは俺を見てにかつと人のいい顔で笑いながら

「おう。小僧ずいぶん待たせたな、頼まれていた品物が出来たぞ」

カオスのじーさんがお袋と何かを話をしていた。一体何の話を……と言うか待たせたつてもしかして!?

「ほれ、見てみる。チビとモグラちゃん用の新しい台車じゃ」

机の上に置かれた金属製の台車を見て、肩の上のチビが目を輝かせ、俺の肩から机の上におり台車を確認してから、台車を回し始める

「みーむうう♪」

めちやくちや楽しそうにぐるぐる回している。こんなに回転させて大丈夫なのかと見ていると

「心配ないわい、その程度で壊れるような柔な作りはしておらんわ」

かっかっかつと笑うカオスのじーさん。ここまで自信満々なら心配ないかなと見つめていると今度は机の上に水槽のような物を置いて

「これがモグラ用の玩具じゃ。好きに穴が掘れる、ここダイヤルを回すと土の固さを調整できる。そしてこの紅いボタンで砂をリセットでまた新品その物になるでの」

これは凄い……これならモグラちゃんも遊び放題だ。試しにダイヤルを適当に回して水槽の中にモグラちゃんを入れてみると

「うきゅー♪」

凄まじい音を立てて穴を掘り始める。物凄く生き生きしてる、やっぱりモグラだから穴を掘れると楽しいんだなあ……

「じゃあワシはそろそろ帰るかの」

「あら?折角ですから夕食を食べて行かれたら良いじゃないですか?」

お袋がそう笑ってカオスのじーさん呼び止めるが、カオスのじーさんは笑いながら手を振り

「娘が待つておるんでの、勝手に食べて行くわけにはいかんわい。いじけてしまうからの、ではな小僧」

そう笑って手を振るカオスのじーさんに手を振り返し、お袋になんの話をしていたのか？と尋ねると

「あんたがどれだけ頑張ってるか？つて話よ。美神さんとかにも聞いてみたけど、ずいぶん頑張ってるみたいで感心したわ」

そ、そう？お袋がそう褒めてくれたが、やはり褒められていない俺はその場に座り込み、足元に近寄ってきたタマモの背中を撫でるのだった……

横島が母親に褒められ困惑している頃美神はと言うと、琉璃からの連絡で深い溜息を吐きながら警察署へと訪れていた……なんで私かと思っただが、話を聞いて知ってるかもしれないと呟いたのが運の付き。そのまま半ば無理やり面倒ごとを押し付けられてしまったのだ

「何してるんですか、クロさん」

「あつははっ！すまぬ！まさか刀を携帯するのが行かん事とは知らなかったのだ！」

「ワンワンワン!!!」

昨晚銃刀法違反で警察に逮捕されたクロとシロの人狼の父娘の身元引受人となり、警察を訪れていた

「それで美神殿、申し訳ないが。横島殿の住居を教えるはござらぬか？娘が感謝を伝えたいと申しているのだ」

「ワンワン！」

クロの腕の中で吼える白い犬を見て、美神はまだ人化出来ないのねと呟いてから

「それは構わないですけど、刀は預かりますよ？また逮捕されたら面倒なので」

「う、うむ……それは仕方ないことでござるな」

若干不満そうに刀を差し出すクロから2本の日本刀を受け取ってから、美神は横島の家の場所の地図を描いてクロに手渡し

「これは事務所で預かります。事務所の場所は横島君に聞いてください」

判ったでござると返事を返し、恐ろしいスピードで走り出すクロを見ながら、美神は深く溜息を吐き、日本刀をコブラの後部座席に置き事務所へと引き返していくのだった……

いつになったら最後の尻尾が戻るのかな？横島の膝の上で丸くなりながらそればかり考えていた。霊力も妖力も回復し、自分で言うのもなんだが既にもう万全と言うレベルのだが、まだ最後の尻尾が戻らない。更にはこれだけ力が充実しているのに人化も出来ない

(暇……)

最近は満月の時でも雲が出ていて話も出来ないし、なんか妙に眠いし……本当に暇である

「みむー」

「うきやーツ!!!」

ぐるぐると台車を回して遊んでいるチビとモグラに子供は元気でいいわねーと心の中で呟いているとチャイムの音が響く

「お客さんかな？ちよつと見てくるわ」

横島がそう言って立ち上がろうとすると、ノツブが

「ああ。ワシが行こう。久しぶりの親子で過ごす時間じゃろ？ゆつくり話をすればいい」

横島を制し、玄関へ向かう。お調子者って思っていたけど、案外そう言う所はしっかりしているのね

【横島ー？なんか知らんおっさんと犬が来てるぞ？】

おっさんと犬？なんとと言う組み合わせだろうか？と私が首を傾げていると

「くははっ！おっさんは酷いなー！」

「ワンワン!!」

この声って!?思わず顔を上げると玄関のほうから白い子犬が走ってくる。間違いない

「コンー。(シローー)」

「ワンワン！（タマモ！）」

妙神山で出会ったとき見捨ててしまったシロの姿だった……

「ほほう。横島殿の母上でござったか。拙者は犬塚クロと申す。横島殿に助けられた人狼でござるよ」

「ご丁寧にも。忠夫の母の百合子です」

シロの父親だと言うクロと話をしている百合子を見ながら、私は近くに近寄ってきたシロに

「ココーン？（元気？）」

「ワンワン！（それなりにござるよ！）」

うんうん、元気そうでなによりね。ただ私が妙神山で見捨てたことは明らかに根に持ってそうだけど……

「ワンワンワン！（所であの動物は？）」

机の上からシロを観察しているチビとモグラについて尋ねて来るシロ。ああ、これは説明しておかないと駄目ね

「クウン！・コン！・ココーン！（横島が大事にしている妖怪。攻撃すると怒るわよ）」

横島がとても大事に育てているので危害を加えちゃ駄目よ？と説明する。それに2匹とも中々強いので戦うのも正直危険である。見た目はハムスター程度だが、実際はかなり強いのである

「……」

いぶかしげにこつちを見ているシズクの視線がどうも気になる、私とシロが仲良さげに話しているのが気になっているんだろう。シロもシズクを見て

「ワン（誰？）」

知らない顔が当然のように横島の家に住るので困惑しているシロに、めちやくちや危険な奴だから。小竜姫と同じく竜。ええええ！？と怯えているシロに気をつけたほうが良いわよ？と注意しておく

「所でクロさん。娘さんは元気に？」

「うむ、元気でそこを駆けているだろう？」

横島の視線がシロに移り、横島は何回か目を擦ってから

「犬ですけど？」

「はっはっは!!!娘はまだ人化が思うように出来んだ。それはほれ、こうすると」

クロがシロを抱き上げて首に精霊石のペンダントを下げると、ぽんっと言う乾いた音を立てて

「せっしやがシロでござるよー、せんせー」

「犬が幼女に!」

シロが人間の姿になり、手を振るのを見て驚いている横島。私はシロが首に下げている精霊石を見て、あれ?もしかして私も精霊石で人間になれる?とは言え狐の姿じゃ取ることなんて出来ないしなあ……

「せんせー、父上たすけてくれてありがとうでござるよー」

「いやいや、そんな大層な事をしたわけじゃないぞ?」

せんせーせんせーといわれて困惑している横島に対して笑顔のシロ。そう言えばなんであいつは横島の事を先生って言うんだらうか?

「元氣そうな娘さんですね」

「ええ、拙者にとつては命よりも大事な娘ですよ」

百合子とクロが話をしていると横島が立ち上がって筆筒から精霊石のペンダントを取り出して

「へー精霊石で人間に成れるのか。もしかしてタマモもそうかなあ」

のほほんと笑いながらペンダントを手に私の前に座る横島。なんと言う幸運……!横島の考えたら直ぐ実行と言う考えたかに感謝だ

「それは面白そうじゃな!やってみるぞ!」

「だよなだよな!」

【横島精霊石は遊び道具ではないのだぞ?】

私を遊び道具にしているのは正直困るが、これで人間になれるならと横島から首にペンダントを掛けられる。するとぽんっと言う音を立てて視界が高くなる。

「おおーやっぱりだ!良かったなタマモ!」

【ワシよりも少し年下って感じじゃな!】

シズクがしまったという顔をしているのを見ながら、首から下げた

ペンダントを外す。またぽんつと言う音を立てて視界が低くなる。これを数回繰り返してから

「……私の馬鹿あッ!!」

精霊石なんてずっと横島の家においてあったのに！今の今までこんな効果があるとは知らず、目の前にあっただにも関わらず触ろうともしなかった。もし触っていたらもっと早く人間の姿になって横島と話そうが出来た。その事に気付いた私は思わずその場に泣き崩れるのだった……

「た、タママモ!?急に泣き出してどうした!?どこか調子が悪いのか!?」

おろおろと慌てながら駆け寄ってくる横島に自分の馬鹿さに悲しくなまって泣いているとは言えず、ううつと泣き続けるのだった

「なんと妖狐でござったか。シロ、仲間だぞ?友達になっただらどうだ?」

「タママモとは仲良しでござるよ!父上」

「あら?可愛いわね。この際離婚するついでにタママちゃん養子にしちやおうかしら?」

泣き崩れるタママモの近くでクロ達がそんなのんびりとしたやり取りを行っている頃ナルニアでは

「アメリカのチケット1つ!!!」

「は、はいいい!!!」

大樹がボロボロになりながらも無事に空港に辿り着き、日本へ向かう為動き出しているのだった……

リポート3 父来る その3へ続く

## その3

レポート3 父来る その3

窓の外から聞こえてくる雀の鳴き声で目を覚まし、大きく欠伸をしていると気配も無く、拙者の隣に現れた影に気付き顔を上げる

「……シロだったな？よく眠れたか？」

死人のような顔色をした少女……タマモの話ではシズクと言う竜神がそう尋ねて来る。どうして竜神がせんせーの家に居るかは判らないが、きつと先生の人徳なのだろうと納得し

「ワン！」

鳴き声を上げることで返事を返す。寝てる間に首に巻きついたら危ないとの事でペンダントは外して父上が持っている、それがあれば人の姿になって話も出来るが……今は無いので無いもの強請りなので鳴き声で返事を返しながらも、脳裏に過ぎるのは父上の事だった……

(父上は大丈夫だろうか……)

村と違いすぎて落ち着かないと言って山で眠ると言って出かけて行った父上の事が少し心配だが、東京では危ない妖怪もいないので心配する必要も無いだろう。それよりも拙者が気に入らないのは

(理不尽でござるよ)

タマモはせんせーの部屋で一緒に眠っているのに、拙者はリビング。大きな軒をかく幽霊が居たので正直うるさかったし、あの幽霊の事もかなり気になった。見覚えの無い幽霊の少女に竜神の娘……一体どうなっているでござるかと考えていると

「シロちゃん。喉渴いていない？お水飲む？」

せんせーの母上がそう尋ねてくるので鳴いて欲しいと意思表示をすると目の前にお皿が置かれる。ペンダントがあれば人間になれるんでござるが、それもないので直接飲むしかないのが少し恥かしいでござるな

「母さんおはよう、じゃあランニングに……あ、そうだ」

リビングの扉が開き、頭の上にタマモを乗せ、両肩にチビと言う小悪魔とモグラの竜を乗せているせんせーが拙者を見て

「シロちゃんも散歩に行くか?」

散歩!? 散歩なんていつも無理やりせんせーに頼んで行って貰っていたのに! まさかせんせーから誘って貰えるなんて!

「ワンワンワン!!!」

行く! 行くつ! とせんせーの足元で鳴くと、せんせーは穏やかに笑いながら拙者を抱き上げて

「よっしゃ、じゃあ行こうな」

「ワン!」

前の世界のせんせーも優しく大好きだったが、この世界のせんせーはもつと優しく大好きになりそうだ

「……よ、横島? その白い子犬は?」

家の外では蛭が待っていた。せんせーと共にある為だけに逆行まですたのだからこれは当然の事だ。でも

(仲良くしたいでござるな)

未来では拙者も蛭に霊能を教えた。だから弟子になる訳で、敵対したいとは思えない。おキヌ殿や美神殿とも同じく、よりよい関係でありたいと思う。シロのこの考え方は人狼特有の物だ、仲間の危機ならば命を賭けてでも助けに向かう、情に厚く仲間を大事にする人狼だからこそ全員が笑っていられると良いなあと思うのだ

「昨日クロさんが家に来てな。シロちゃんがお礼を言いたいって言うてるからって態々尋ねて来てくれたんだ」

そ、そうなの? と引き攣った顔をしている蛭。うーむ、やはりこの姿では駄目でござるな、意思表示が出来ないでござるよ

「ま、とりあえずランニングに行こうぜ」

「え、ええ。行きましようか」

そう笑って走り出すせんせーの隣に並んで走っていると、逆行前の世界の事をどうしても思い出し、拙者は今がとても楽しいと思うのだった……



シロが来たのかあ……ランニングの時に横島が白い子犬を抱えていたのでもしかしてと思ったのだが、そのまさかだった

【中々複雑な所だな、蛍よ】

「そうね。見ている分には凄く良いんだけどね」

汗をかいていると言ふ事もあり、ベンチの上で乾かされている心眼がそう尋ねて来る。タマモにしろシロにしろ美神さんの事務所に来るのは相当後だった筈だ。だが原始風水盤の前に既に揃っている、いや別にそれは良いのよ。もう逆行の知識が役に立たないのは嫌って程痛感しているから……ただ

「あつははは！くすぐったい」

「ワンワンワンワン♪」

「ココーン！」

横島は基本的に動物とかは嫌いじゃない、今もタマモやシロにチビ達と遊んでいて実に楽しそうな顔で笑っているが、シロとタマモは精霊石を持てば少女の姿になると思うと複雑な気持ちになってくる（うーん……自分で言うのもなんだけど、性格ブスすぎる）

独占欲とか執着心が強くなりすぎている。自分でも実感しているが、かなり粘着質になっていと思う。これは良くない傾向よね

【仕方あるまい、お互いに幸せになれるという時の別れ、それはお前にもトラウマとして根付いている】

「そうだとってもこれは不味いでしようよ」

未来の知識を持つ心眼が居るから出来る話だ。ルシオラとして横島と幸せになれる、そう思った時に死に別れた。それは横島を失う恐怖として今も私のトラウマとして根付いている。だから横島が奪われると思うことに対して敏感になっているのだ

【それはお前の気持ちの問題だ。私がどうこう言える問題じゃない、ただ横島に迷惑を掛け、成長を阻害すると言ふのならいくらなんでもお前は私の敵だ】

ハッキリと言われて思わず溜息を吐く、心眼は横島だけの味方だ。心眼の基準で私が横島の障害となると悟れば徹底的に妨害してくるようになるだろう。今は味方だけど何時敵になるか？と思うと正直

怖いのが心眼だろう……そんな事を考えていると腕時計が音を立てる。時間を見ると6時10分……そろそろ帰り始めないと7時には家に戻れない、今日も横島は学校に行くので遅刻させる訳には行かない

「横島ー！そろそろ家に戻るわよー？」

「判ったー！直ぐ帰り支度するー」

遊んでいたボールを拾い上げ、チビ達に帰るぞーと声を掛けている横島を見ながら、今のままの性格じゃ駄目だなど思い、暗い気持ちになりながら私も帰り支度をするのだった……

「じゃ、蛍も除霊頑張つてな！俺は試験を頑張つてくるから」

横島の家で百合子さんの朝食をぐ馳走になり、家の前で別れる。今日は横島がテストらしいので、少しアドバイスはしたが合格するだろうかと言う不安はある

(学生法があるから大丈夫だと思うけど……)

これが除霊を専門にしている学校ならばそんな甘さはないが、横島の通っている学校は普通の学校だ。だから学生法の範囲である程度は試験の問題も易しくなっている筈……横島は馬鹿では無いので多分大丈夫だと思うがやはり心配にはなる

「まー心配しても仕方あるまいって、それよりも蛍。今日の除霊もサクツと終わらせるのでメロンパンを頼むぞ」

シズクは横島が来ないと協力してくれないが、ノツブはそうではない。本来の英霊としての力は無いらしいが、それでも恐ろしいほどに強く。そして戦略家でもある。単純に悪霊を力づくで除霊するのなら、シズクよりもノツブの方が良い。報酬はメロンパンで良い辺り実にリーズナブルだと美神さんは喜んでい

「はいはい、判ってるわよ。じゃ行きましようか？」

「うむーワシに任せれば万事解決よー」

ノツブのこの自信はどこから来るんだろうか？ただ大口を叩くだけの實力もあるのも事実なので、頼りにしてるわよ？と呟き自転車で美神さんの事務所へと向かうのだった……そして除霊を終え、ビルに戻った私にお父さんが真剣な顔をして告げた「大樹さんが後数時間で

帰国する」と、それを聞いた私は夕食はあげはと2人で食べて！と叫び、横島の家へと向かったのだった……

忠夫がいない間に部屋の掃除とかをしてみたが、エロ本などは一切なく。部屋も綺麗に整っていた

(うーん、これは少し予想外)

私が日本に居る間はエロ本だらけだったのだが、何時の間に処分したのだろうか？蛍ちゃんが良く訪ねてくるみたいだし、シズクちゃんも家に居るので見られると気まずいと思ったのか、それとも

「みむっ？」

「うきゅー！」

家の中を駆け回っているチビちゃん達に見られるのが嫌だったのだろうか？動物とは言え小さい子供、悪影響とかを考えたのだろうか？そんな事を考えながら家の掃除を済ませる

「シズクちゃん掃除上手なのね」

「……まあ……それなりに」

いつもシズクちゃんが掃除をしていると聞いたが、埃はどこにもないし、家全体がとても清潔で、掃除をしたと言っても軽く埃を払って、雑巾がけをしただけで終わってしまった。それだけ毎日しっかりと掃除をしているという証拠で正直好感が持てた、最初はおキヌちゃんと揉めていたが、それも帳消しにしてもいいかもしれないと思いがら

「なんでシロちゃんとタマモちゃんが足元で唸ってるの？」

大人しい筈の2匹が唸っているのでそう尋ねると、シロちゃんとタマモちゃんが私の足元で何かを訴えかけるように鳴きだす。何をしたいのだろうか？

「……精霊石があれば人間の姿になれるからそれを欲しいと言っているんだ」

「なんであげないの？」

そうすれば話とかも出来るんだからそっちの方が良いじゃない？  
と言うとシズクちゃんは

「……精霊石は高密度の霊力の圧縮結晶だ。正しい加工がされてないと爆弾と同じだぞ?」

そう言われると確かに欲しいと言っているからと渡す訳には行かないわね。私はしやがみ込んで

「危ないから駄目なんだって、ごめんね」

2匹の頭を撫でながらごめんねと呟いていると

【横島さんのお昼の準備に……って百合子さん!?何時の間に日本に!?】

おキヌちゃんが驚きながら尋ねて来る。壁から急に出てきたので私も少し驚きながら、一昨日よと返事を返す。忠夫のお昼ご飯を用意しに来てくれたおキヌちゃんに折角だから、一緒に料理しましょうか?と声を掛け、2人でキッチンへと向かうのだった……

「……私は甘やかさない。もしも精霊石が欲しいのならちゃんとなにか働きをするんだな」

「グルルルル」

なおシズクが精霊石を与えるのを拒否していたのは、危険物と言う事もあるが横島がシロとタマモに甘いのは目に見えていたので、それを阻止するためだったりする……

「ただいま……えつと母さん。お客さんが居るんだけど良いかな?」

12時少し前に忠夫が帰ってきて、気まずそうにお客さんが居ると言う。蛭ちゃんじゃないの?と思っていると忠夫の言うお客さんが姿を見せた

「横島のお母様ですね。私は神宮寺くえすと言います、少しの間ですが横島の師匠として霊能の面倒を見ておりました」

黒いゴシックドレスに身を包んだ、銀髪の少女がにこりと笑いながら、手にしていた紙袋を差し出しながら

「お子さんをお預かりした事もあり、1度ご挨拶をと思ひまして急に訪ねてきて申し訳ありません」

穏やかに笑いながら挨拶してくる神宮寺さんを見て、私が思ったのは1つ。この子は忠夫をずいぶんと気に掛けていると言う事だった

……

「……何故神宮寺を連れてきた？」

【そうですね!? どうしてですか?】

「い、いやあ、帰り道で偶然会って、そのまま話をしていたら母さんが家に居るって話しちゃって」

リビングの隅のほうでシズクちゃんとおキヌちゃんに怒られて、おろおろしている忠夫を見て溜息を吐きながら、とりあえず昼食にしましょうと強引に話を終わらせるのだった……

柩に横島の母親が近い内に日本に来ると聞いていた。とは言えそうタイムングよく出会える訳も無い、1度挨拶をと思っていたが、何時あえるか判らないので日持ちするお土産でも用意しようと思いい、買物を終えてから屋敷に戻っていると横島に会い。母親が来ていると聞いていいタイムングだったと思いい、横島に着いて来て、一緒に昼食を食べた後……

(凄まじいですわね)

覇気が凄まじい、それに観察するような視線を向けられているのも判る。それでもその視線に怯まず見つめ返す。おキヌとか言う幽霊は大変ですつと叫んで出て行った。多分美神に報告に行ったんだと思いいますが、些細なことなので無視をする。

「……シズクう。母さんと神宮寺さんの間に火花が見える。目の錯覚?」

「……残念ながらその通りだと思うぞ」

横島が怯えているので可哀想だと思ったが、ここで引いてしまえば一気に飲み込まれるので、少しの間だけ我慢して欲しい

「忠夫。神宮寺さんが師匠ってどういう事? 美神さんじゃないの?」

そう尋ねられた横島はうーつと言いいにくそうに、頬を掻きながら「GS試験の後の除霊試験でこけて、1週間神宮寺さんに色々教えて貰ったんだ」

こけたと聞いて何かを考え込む素振りを見せた横島の母親は

「もしかして美神さんの修行の方針が間違って「お袋!」黙ってなさ

い」

美神の修行方針が間違っていたと聞いて、横島が止めに入るが睨まれて黙り込む

「間違っていた訳ではないですわよ？ただ方向性の違いですわね。美神令子は道具使い、芦蛸も道具使い。それに対して横島は自らの霊力を圧縮・形状変化させるタイプの霊能者。どちらかと言うと魔法使いに近いタイプですからね。指導出来なかったのでしょうか、まあ基礎的な知識はしっかりと教えていたので、指導者として駄目と言う訳ではないですが」

ここで美神の指導が駄目だったというのは容易いが、それだと横島が反発するのでフォローを加えながら話を進める

「そうなんです、適材適所と言いますしね。態々時間を割いて教えて頂きありがとうございます。忠夫の母の百合子です」

ここで初めて自己紹介をしてくれ、そして纏っていた雰囲気も柔らかくなった。これである程度の信用を得る事が出来たと見て間違いないだろう

「いえいえ、横島はとて有能な霊能者ですからね、私も少しの間ですが指導出来て楽しかったですわ」

予備知識が少ないので、教えれば教えた分だけ吸収して知識をつけていく横島の指導は楽しかったですわと告げると

「……お前、帰れば良いだろう。仕事は良いのか」

「お生憎様。既に仕事は完了しておりますわ、だから暇なんですのよ」

明らかに追い出そうとしているシズクを睨むと睨み返してくる。

折角横島の母親に会えたのだからこのまま帰るつもりは微塵も無い、少しでもいいので自分を売り込んでおかないと

「忠夫、なんでシズクちゃんと神宮寺さんは仲悪いの？」

「えーと神宮寺さんは凄く優しく良い人だけど、魔法使いって事でこう、呪いとか？も使う除霊をしてるから嫌われてるみたい。美神さんと蛸も同じかなあ」

横島の説明を聞いた百合子さんは、私の方を見て優しい笑みを浮かべながら

「そう言うのも大変ね、ゆっくりして行ってくれて構わないわよ」

シズクのおかげで私にとって良い流れが来た事に内心笑いながら、  
ありがとうございますと言いなながら百合子さんに頭を下げるのだっ  
た……

「また奇妙なのを囲い込みましたわね。人狼ですか？」

横島の足元に居る白い子犬を見てそう尋ねると、横島はあはははっ  
と笑いながら

「妙神山に行った時。色々ありまして、その時にシロの父親と天狗の  
決闘を止めたんですよ」

よく止められましたわね……天狗は相当好戦的な妖怪だと言うのに  
……

「その時のお礼がしたいって態々尋ねてきてくれたんですよ」

父親と言う割には姿が見えないですが……人狼なので都会的な雰  
囲気に会わなかったのだろうか？と首を傾げているとチャイムが鳴  
る

「……最近客が多いな」

シズクがボヤキながら玄関を見に行き、暫くすると戻って来て

「……クロと吸血鬼が尋ねて来た」

シズクの後ろから姿を見せたのは人狼の男性とブラドール島で戦っ  
たブラドール伯爵だった。どうしてブラドール伯爵が？と困惑してい  
る

「横島の母親ですな。我はブラドール、ブラドール伯爵と言う吸血鬼です。  
貴女の息子に助けられたのでこうしてお礼に参りました」

深く頭を下げるブラドールに百合子さんはご丁寧にもどうもと頭を下  
げ返す。どうも邪魔者が多いですわねえと苦笑しながら、冷めかけて  
いるお茶に口をつけるのだった……まあそれなりに友好的な出会い  
も出来ましたし、今回はこれでよしとしましょうかね……

神宮寺さんがゆっくり出来ると言う事なので、折角なら夕食も一緒  
にと言う話になった頃。ブラドール伯爵とクロさんが尋ねて来た

「我を助けてくれた礼だ。安物だが、受け取ってくれ」

「いや、俺こんなの貰っても困るんですけど」

「明らかな金。そして宝石が埋め込まれた短剣を差し出されたが、こんなものどうすればいいのか判らない」

「むっ…これはちゃんと聖職者に清めてもらった品だぞ？GSとやらをやるなら武器は必要だぞ？」

「いや…そんな事を言われても…俺が困惑していると心眼が」

【貰っておけ横島。霊力が尽きた時の護身用の武器になるし、それを媒介に霊力の刃を使う練習にもなる】

「心眼の助言もあり、受け取ることにしたが、正直俺みたいな一般庶民が持つような武器じゃないと思う」

「おお、では拙者からも、人狼族に伝わるお守りだ。きつと横島殿を守ってくれるぞ」

クロさんからも牙か何かを使って作ったであろうお守りを手渡される。ブラドー伯爵のを受け取ったのにクロさんを受け取らない訳には行かないのでそれも受け取る

「ワンワン！」

それは良い物だよと言う感じで鳴くシロちゃんの頭を撫でていると、ブラドー伯爵が思い出したように

「そうそう我が愚娘が血を吸おうのを諦めないのな。牙を封印しておいた、これで安全だろう」

「本当ですか!？」

顔を見合わせる度に襲ってくるシルフィーちゃんの牙が封印された、これで血を吸われるかもと恐れる必要がなくなる

「血を吸おうと？横島。その話詳しく」

「やばい!?!神宮寺さんの目が物凄く剣呑な光を放っている。ブラドー伯爵に制裁されたのだから、これ以上は可哀想だと思う…とは言え、上手く話を変える事なんて出来ないし…どうしようかと思っ  
ていると」

「百合子さん！大樹さんが空港でタクシーに乗ったってお父さ…な  
んで神宮寺が居るの!？」



「おおぅ!?なんとも人が多いの……なー。横島、ワシ除霊で疲れた。メロンパン食べるから牛乳」

蛍が慌てて家の中に来て神宮寺さんを見て絶叫し、ノツブちゃんが牛乳をくれと言う。シルフィーちゃんの話は流れたけどカオス過ぎる

「あの馬鹿……私は離婚するって言ったのに、追いかけて来たのかい？あれだけ不倫不倫したいなら私に構わなくても良いだろうに」

「不倫だと?」

やばい!?お袋の一言でブラドーさんとクロさんの目に剣呑な光が!?!あんなのでも俺の親父なので死んで貰っては困る。ヒートアップする前に止めるべきだと思ったその時

「百合子お！俺が悪……」「貴様かあ?!妻が居るのに不倫をする愚か者はッ!!!」うおおおおつ!?!」

馬鹿親父いいいいッ!?!?!なんでこのタイミングで帰って来る!?!ブラドー伯爵とクロさんが目を紅く光らせて親父に襲い掛かる。窓ガラスの割れる音と親父の悲鳴とクロさんとブラドー伯爵の咆哮を聞きながら

「神宮寺さん!?大変なことだ!?!」「不倫をするような馬鹿は1度怖い目を見れば良いんですわ」「私も同意」

駄目だ!?!神宮寺さんと蛍は不倫をしている親父に対する対応が冷たすぎる!?!まあでも不倫するのは悪い事だと思うけど、このままだと親父が死んでしまうので何とかして止めないと

「……不倫とは何だ?」

【さあ?】

駄目だ!?!古い価値観のシズクとノツブちゃんは不倫がどんな物か理解していない!?!

「みーむう」

「うきゅー」

「コーン」

「ワンワンー」

あそぼーあそぼーと足元にじゃれ付いてくるチビ達。遊んでやり

たいけど、このままだと親父が死んでしまうので遊んでいる時間が無い！

「お袋おどうする!?!」

「はあ……離婚が成立する前に死なれたら困るね。とりあえず追いかけようか?」

心底嫌そうな顔をしているお袋と一緒に家を出ようとするすると神宮寺さんと蛍が止めに入る。不倫しているから死んでもいいって言うのは困るぞ!?!と叫ぶと違うわよと蛍は苦笑しながら

「待つて直ぐ追いかけない方がいいわ。夜だからクロさんもブラドールさんも血が高ぶっているから話で止めるのは無理よ」

「ですわね。美神にも連絡を入れて置いた方が良いですわ。私は神代琉璃に連絡を入れるので追いかけるのはその後で良いでしょう」

た、確かにそうかもしれない。このまま追いかけて求める手段が無い、1度美神さんと合流しようと思ひ。疲れているノツブちゃんに留守番を頼み、俺達はクロさんとブラドール伯爵を止める為に美神さんの事務所へと向かうのだった……

リポート3 父来る その4へ続く

## その4

リポート3 父来る その4

薄暗闇の中男性の悲鳴が街の中に響き渡る……言うまでも無く大樹だ。そして大樹を追いかけているのは勿論クロとブラドー伯爵の2人だ

「うおわああああ!?俺が何をしたああ!?」

空を飛びながらコンクリートを穿つ漆黒の弾丸を放つ男と両手から光の刃を出して追いかけてくる着物の男に向かってそう叫ぶと

「不義者死すべし、慈悲は無い」

目が紅く光っているのを見て、交渉するのは無理だと悟り。更に百合子から不倫の話を聞いたのだと悟ったが

(殺し屋を雇ったのかあ!?)

帰国して直ぐのこの急襲撃にそんな突拍子も無い事を考えながら、どうしたら百合子に許して貰えるかを必死に考えながら全力で走り続けるのだった……

おキヌちゃんから百合子さんが帰って来ている事とくえすも挨拶に来ているという話を聞いて、私はしまったと思った

(参ったなあ……除霊を入れるんじゃないやなかった)

ちょうど除霊に行くときに尋ねてきたので、かるく話をしただけで分かれてしまった。その後除霊の疲れもあり少し仮眠をしていたので完全にタイミングを逃してしまった

(とりあえず明日挨拶には行った方が良いわね)

横島君を預かっているわけだし、それに私が送った手紙の内容の事もある。横島君の両親がガープの人質にならないように手を打つ必要があるとは思っていた

【オーナー。横島さん達が凄いい勢いで階段を駆け上ってきました】

いっちゃんん言葉と私の事務所の電話が同時になった直後。応接

間の扉が弾け飛び

「美神さん！馬鹿親父が不倫してて、クロさんとブラドー伯爵が激怒して追い回しているんです！どうすればいいですか？」

血相を変えて叫ぶ横島君。恐らく電話の相手は琉璃で暴れているクロさんとブラドー伯爵を止めてくれと言う内容だと悟り私は深く溜息を吐きながら電話を取るのだった……やはり電話の相手は琉璃でクロさんとブラドー伯爵を止めてくれと言う内容で更に溜息を吐くのだった……

「んで？くえすも協力してくれるの？」

バンに乗り込んでいくくえすにそう尋ねるとくえすは肩を竦めながら

「乗りかかった船って奴ですわ。どうせ暇ですし、協力しますわ」

……これ絶対あれよね。百合子さんの評価を上げようとかそういうのを考えてるわよね。でもまあ……始祖の吸血鬼相手だからくえすが居るのは正直ありがたいし……

(横島君が居れば協力してくれそうね)

横島君が頼めば嫌そうな顔はしても確実に協力してくれるだろう。まあシズクとか蛍ちゃんも嫌そうな顔はするだろうけど……魔法使いとして最高峰のくえすが協力してくれるのは正直ありがたい。今後難しい除霊を入れるときに助っ人として協力要請をして見ても良いかもしれない

「それで不倫って聞きましたけど、そんなに酷かったんですか？」

運転しながら尋ねると百合子さんは目が全く笑ってない笑顔で

「私が確認しているだけでも10人以上ですかね？だから離婚するって言って日本に戻ったんですよ」

その言葉を聞いて私は死ねば良いんじゃないかな？と思った。多分くえすと蛍ちゃんも同じだろう、妻が居て、息子が居るのに10人以上と不倫。同じ女としては許せる訳が無い。離婚する理由として聞いても直ぐ納得できる

「俺も死ねば良いと思うんですけど……流石に本当に殺されたら困るし……」

横島君が気まずそうに言うと、シロとタマモが励ますように擦り寄っている……まあこれは横島君に関係の無い話だし、今回の事で不倫が駄目と思えば、大人になっても不倫をするような真似はしないだろう

「……ほら、横島。精霊石だ、クロの説得はシロが必要なはずだからな」

シズクから精霊石を受け取った横島がシロの首に掛けてやるとぼんつと言う音を立てて、白い子犬が着物を着た少女の姿になる

「せんせー、申し訳ないでござるよ。父上は本当は優しい人でござるが、母上と死に別れているので不誠実な男は死ぬほど嫌いでござるから」

「ごふつ……子犬が人間に……あ、そうか精霊石で霊力を増幅してるのね。シロが出来るならタマモも多分出来るはず……それならもつと戦力が安定するかもしれないわね」

【美神さん。街を出て行くみたいです。こっちですー！】

おキヌちゃんに先に様子を見てきて欲しいとお願いしてあった。なんせ移動しているのだからまず見つけることが最優先だからだ

「了解！飛ばして行くわよー！」

流石に民間人の殺害となるとGS協会も私も動かざるを得ない。ブラドール伯爵も、人狼族も味方にしたい、だからそれだけは阻止しなければ……不倫し、それが妻と死に別れた男の逆鱗に触れたなんて自業自得も良い所だ。本当なら助けるつもりなんて微塵も無いが、今後の事を考え嫌々だけど助けに向かう事にするのだった……

ちいつ見失った……我は翼をマントに戻して地面に降り立ちながら舌打ちを打った。横島もその母である百合子も良い人間だった。それなのにその夫は不倫を繰り返していると聞く、その様な不誠実な男を許すわけには行かない

(呪いを掛けてくれる)

不能にした上で、特定の行動をしたら全身に激痛が走る呪いを掛けてやると心に決め、追い回していたが、まさか見失うとは……横島の

父親なのだから普通じゃないと思っていたが、まさか閃光弾を落ちていたゴミで作り上げるとは……

「む？ウエアウルフか、お前はどうか？」

我と一緒に馬鹿を追いかけていた狼男にそう尋ねると、狼男はそれは違うと呟いてから

「ウエアウルフではござらん。人狼のクロだ」

同じなのだが、クロと名乗り。人狼と言うことに誇りを持っていると判ったので謝罪し、クロと名前を呼び

「それでどうだ？気配はするか？」

「いや、気配は感じないでござるな」

街中から林の中に追い込んだが、まさか吸血鬼と人狼の索敵をすり抜けるとは……正直恐ろしいな

「だが問題は無かろう。逃げることは出来ないのだから」

周辺の蝙蝠を使い魔にし、林の外に配置した。これで林から逃げることは出来ない、後はのんびりを追いながら

「不誠実の罪を償わせればいい」

「うむ、同意するでござるよ。横島殿も百合子殿も良い人間でござる、そんな息子と妻を裏切るような男は許せぬ」

やはりこの男は信用出来る。我自身も貴族であるが故に妾を取れという話があつたがその都度に激怒した。我には妻1人で十分だった。愛する息子と娘……それで十分であり、他に女が欲しいと思うことは無かった。夫として妻と子供、そして家を守るのは当然の事なのにそれを放棄する。断じて許せぬ

「追いつかれる前に処置しよう」

「うむ。その通りでござるな」

追いついてくれば我とクロを止めるだろう。その前に徹底的に恐怖を植え付け、そして呪いを掛ける。そうすればまた不義を行うと言ふことは無くなるだろう……

「ではまず燻り出すとするか。離れよ」

両手を広げ呪文の詠唱に入ると同時に、林の奥から何かが投げられる。それはにんにくであり、それを蹴り飛ばしながら

「くだらん」

始祖の吸血鬼ににんにくなど効くものか、流水だつて何の問題も無い。それ所か向こうから自分の居場所を教えてくれた

「では狩を始めよう」

「うおおおおおんツ!!」

呪文で炙り出す必要が無くなったのでこの後は直接追えば良い。クロも同じ意見なのか遠吠えを上げる、がさがさと逃げる音を聞きながら我とクロは愚か者を追い林の中を駆け出したのだった……

スーツをあちこち林に引つ掛けながら走る。ナルニアで逃げている時は10人からも逃げ切ったが、今日本で俺を追っているのは2人。たった2人なのだが、その2人が唯の人間ではなかったことが最大の問題となっていた

「さあ悔いろ！百合子の前に突き出す前に死の恐怖を教えてやろう！」

「あれほどのよき息子と妻を持って不義を行うとは、恥を知れツ!!」

明らかな人外だ。鋭く伸びた犬歯と犬の耳を持つ男。間違いない吸血鬼と狼男……恐ろしすぎる組み合わせだ。慌てて茂みの中に隠れて息を整える。流石に走り続けていて疲れた

(忠夫の奴か？忠夫の奴が呼んだのか!?)

手紙には忠夫は人外と仲良くなるのが上手いと書いてあった。だから俺が百合子を追って来ると悟って呼んでいたのかもしれない……そんな事を考えていると俺が隠れていた茂みが燃える

「あちちちちち?!」

スーツに燃え移ったので慌てて地面を転がり消火すると。今度は鋭い風切音と共に拳が振るわれる、頭を抱えてしゃがむと木がまるでだるま落としの様になり吹き飛ばす

(あんなの喰らったら死ぬぞ……)

柘榴のように頭が消し飛ぶ。そんな末路を想像し、思わず冷や汗が流れる

「妻が居るのに不義を繰り返すような男は不能にしてやるのが1番良

い」

ふ、不能?!そ、それでは折角向こうで仲良くなった女性と夜を過ごす事が出来ない。折角やつと口説き落とすというのに!?

「また不埒なことを考えているでござるな。刀が無いのが悔やまれる」

いかん……本当に去勢される……だらだらと冷や汗が流れるのが判る

「刀など無くても問題ない、これでも我は始祖の吸血鬼にして魔法使いだ。不能の呪いとそれに伴う激痛の呪いを掛ければそれで事足りる」

良い提案だと笑う狼男。全然良い提案なんかじゃないぞ?!何にせよ、逃げて逃げて、逃げまくって百合子と話し合わない……いや、許してくれる、くれないは別にしろ。このままこの2人が俺を追い続けていけば交渉の余地無く去勢され、殺されかねない。助かるためには百合子に会わなければ話にならない。だが紅い刃が喉元に突きつけられているので、動く事が出来ない

「それよりもだ。さつきから凄霊力がこつちに向かっているのがわかる。時間を掛けるとこの愚か者に制裁を加えることができない」

もしかしてGS協会から救助が来てる!?!もしそうならばここを逃げる事が出来れば助かるチャンスは十分にある。やはり人通りの多い所を逃げ回ったのは正解だった……誰かがその惨劇を見て通報してくれたに違いない

「そうでござるな。匂いからして横島殿と百合子殿が向かって来ている、時間を掛けるのは愚策でござるな」

百合子と忠夫がこつちに来ている、なんとか忠夫をこつちに引き込む事が出来れば助かる。その為にはまずこの首元の刃から逃れ時間稼ぎをしなければ!

「くらええ!!」

さつき拾ったゴミで作った最後の閃光弾を懐から投げる同時に、全力で走る。しかもただ走るだけではない。数秒で復帰し追いかけて来た男達の悲鳴が響く



「ふっははははっ!!!ただ俺が逃げ回っているだけと思ったかあ!」  
林に追い込まれたのではない、林を選んで逃げたのだ。そしてここで罨を仕掛ける、落とし穴に木の枝を作った槍を放つ罨。この程度の罨15分もあれば楽に設置できる。後は忠夫や百合子が来るまで逃げ続けるだけだ!その後は泣き落としでも何でもいいので許して貰う!それで何とかなる!俺はそう考えながら、罨を作動させながら林の中を駆け回るのだった……

林の中で追いかけてっことが起きていると聞いて居ただけ……事態はそれよりも遙かに酷い事になっていた

「これ火事じゃない」

林が燃えて、ぱちぱちと音を立てている。一体何があったと言うのだろうか……と言うか消防車!公衆電話を探していると

「シズク。出来る?」

「……任せろ」

シズクちゃんが一步足を踏み出し、両手を向けると大量の水が放たれ、一瞬で消火する。水神様ってこんなに凄いのね……目の前の光景に思わず絶句する

「ではせんせー!拙者が案内するでござるよー」

都内の林とは言え、中々入り組んでいる。逸れる可能性を考えたのか、鼻をヒクヒクさせて歩き出したシロちゃんの後を追って林の中を歩き出すのだった

「みむ。みみみうー」

「うきゅーうきゅきゅー」

頭の上にタマモを乗せ、腕の中にチビとモグラちゃんを抱えている忠夫だけど。チビちゃん達はその腕の中で暴れている、どうしたんだろうか?と思つて見つめていると

「駄目や。まだ火の粉がちらちらしとるから怪我するで」

ああ、どうやら林の中で遊びたかつたんだろう。だから下ろして下ろしてと暴れているのだろう。駄目つと怒られて大人しくなるチビちゃん達に思わず苦笑する

「えつとですね。横島さんのお父さんが追いかけられるので罨を仕掛けていたらブラドール伯爵が怒って」

【横島の父は馬鹿か？吸血鬼を怒らせてどうする？】

おキヌちゃんの話聞いて、忠夫のバンドナに目が浮かんで驚いていると忠夫があつと納得した様子で

「心眼先生って言うんだ。神様のお師匠様がくれた凄い使い魔なんだ」

神様の師匠って……いや、何も言うまい。ここ数日見ていたが確信した。忠夫がエロ関連を捨てて、優しくなった事で本来隠されていた部分が表に出てくるようになったんだろう。人を集める才能や人に好かれやすい人柄と言う所が……

(蛍ちゃんも大変よね)

話してみたが神宮寺さんも多分忠夫が好きだろう。シズクちゃんは言うまでも無い、もしかすると知らないだけでもっと大勢の人間に好かれているのかもしれない

「忠夫、あんたは不倫するような男になったら駄目だよ」

馬鹿亭主みたいになるんじゃないよ？と怒ると忠夫は笑いながら

「俺はそんな事はしないよ。俺、母さんが泣いてるの見たことあるし、結婚したら奥さんを大事にするよ」

隠れて泣いているつもりだったが、忠夫はそれを知っていたのか……ちよつと驚いた。私のそう言う姿を知っているから忠夫は多分不倫はしないだろう、あの馬鹿亭主がちゃんと反面教師になっていて良かった

「……」

蛍ちゃんと神宮寺さんが互いに睨みあっている。忠夫が不倫する心配は無い、なら後は妻になるだけだと思っっているんだろう……しかし忠夫はこの雰囲気気付いた素振りも見せず、周囲を見て顔を青くさせながら

「クロさんとブラドール伯爵ってなんかの罪になりますか？これちよつと洒落にならないと思うんですけど……」

地面から生えている巨大な槍を見て、忠夫が心配そうに美神さんに

尋ねる

「うーん……殺害とかしてないなら大丈夫だと思うわよ？ 放火はちよつと不味いけど、シズクが消火してくれたしね」

クロさんとブラドローさんの事を心配し、少しでも馬鹿亭主の心配をしていた。その光景を見て少し頭痛がした、子供の時から叱り過ぎたのか、忠夫は自己評価が恐ろしいほどに低い。これは間違いなく私の責任だ、叩いて伸ばす育て方をしていたのだが、叩きすぎて、伸びる前に忠夫が潰れてしまった……これは正直反省している。そして自分そのせいで自分が好かれているとも思えないのだろう……これで自分が好かれていると思って、手当たりしだいに手を出したりしなかったことに安堵しながら、やはり自分の教育方針が間違っていたということを目の前にして

(ごめん。私の所為だわ)

家の忠夫を好いてくれている蛍ちゃん達に心の中で謝る事しか出来ないのだった……

「ブラドロー殿。突然の雨で焼き土下座が出来ないでござるよ」

「仕方あるまい、また火を起すか、それともあれか、檜の上で檜土下座でもさせるか？」

林のかなり奥の方で土下座している馬鹿亭主と焼き土下座に檜土下座と言う恐ろしい単語を口にしてしているクロさんとブラドローさんを見て、ギリギリ間に合ったのかと安堵する

「父上！ 不義を行っているのが許せないのは判りますが、せんせーの父上を殺そうとするのは良くないでござるよ！」

「むっ……し、シロ……」

このままだと焼き土下座をさせようとする悟ったのか、シロちゃんが止めに入る。第3者の声が聞こえたので家の馬鹿亭主が顔を上げ、忠夫の隣の蛍ちゃんと神宮寺さんに美神さん、そしてシズクちゃんを見て

「忠夫ーお前それだけの美少女を侍らせて恥を知れ「恥を知るのは、お前やこの馬鹿亭主！」へぐう!？」

顔を上げた馬鹿の頭に踵落しを叩き込み、無理やり地面とキスさせ

るのだった……

「日本に来たなら丁度良いわ。離婚届はサインしたんやろ？」

離婚届にサインしたんやろ？と尋ねると馬鹿亭主の頭を踏みつけながら訪ねると

「むひやです（まだです）」

「はあ？そんなに不倫ばっかしたいなら、離婚して向こうで結婚せいや」

「ひやひや（嫌）」

どうして私はこんなのを好きになつたんだろうねえ……本当あの時の自分が判らない、ただ今も離婚したいと思ってるが、反省しているならと思う自分も居る。本当に人の心は複雑怪奇だ

「俺侍らせたりしてないよな？俺馬鹿親父と一緒に嫌なだけけど」

心底嫌そうな顔をしている忠夫。確かに傍から見れば忠夫が複数の少女を侍らせているように見えるが、実際は違うし……この馬鹿が余計な事を言うから忠夫が困っていると思ひ、頭を更に踏みつける

「そんな訳無いじゃない？気にしすぎよ」

「……私は居候だしな」

「私は唯の付き添いですし？」

「私は幽霊ですしね……横島さんの側が居心地良いんで一緒に居ますけど。そう言う風に思ったことは無いですよ？」

蛍ちゃん達もそんな風に思っていないので違うと言う、その言葉で安心したような表情をしている忠夫。女好きなのは馬鹿亭主に似てしまったが、ちゃんとしつかりとした考えを持ったことに安堵する。これで性格まで馬鹿亭主と同じだったら、それこそ蛍ちゃん達に手を出さなくて、それこそ妊娠とかをさせていたかもしれないと思うと、ゾツとする。それと同時に馬鹿亭主に似て無くてよかったと本当に安堵したが、もう少し女心を学んで欲しいと思つた、安堵した表情を見て蛍ちゃん達が面白く無さそうな顔をしているからだ

「ブラドール伯爵。今日本は大きな事件の後で混乱しているんです、軽はずみな行動は控えてください」

「むっ……すまぬ。頭に血が上つた」

美神さんの説得でブラドーさんが落ち着いた所で踏んでいた頭から足をどけると

「すまん！すまん！百合子！忠夫！すまん！俺が悪かった」

何度も土下座しながら謝る旦那。相当怖い目に合ったのか、ガチ泣きしてる

「なー？親父。本当不倫とか止めろよ？別に離婚するのは良いんだけど、離婚が嫌なら不倫なんてするなよ」

忠夫が呆れた様に言う。本当にその通りだ、不倫するって事は結婚生活に文句があるということだ。それなら離婚しても私は本当に構わないのだから。溜息を吐きながら旦那に問いかけた

「反省してる？」

「死ぬほど反省してる」

「不倫しない？」

「しない!!」

うーん。今までの離婚騒動の中では1番反省しているようだけど……ころつと忘れてまた不倫をするのがいつものパターンだ。だから、今回は罰を与えるだけで許そう……まあめちゃくちやきつい罰だけだ

「ブラドーさん。呪いだけ掛けてくれます？それで今回は許すって事で」

不能の呪いと不義を行うと放電する呪いを旦那に掛ける事で、とりあえず今回の離婚は取り消すことにし……

「私達夫婦の事で迷惑を掛けて、大変申し訳ありませんでした」

美神さんや蛍ちゃん達に迷惑を掛けた事に頭を下げながら謝罪するのだった……

親父の不倫の謝罪の後は皆でレストランで夕食を食べ、その後親父とお袋は美神さんと話があると言って事務所に向かい、俺は神宮寺さんを家に送ってから家に戻った。そして翌朝、朝一番で親父とお袋はナルニアへと帰って行った。親父が魂まで抜け落ちたかのような顔をしているが妙に印象的だった。まあそれもそのはず、その日今朝の

ニュースと新聞の一面には

『不倫を繰り返す亭主に制裁を加えた愛妻家「人狼」と「吸血鬼」』

『不誠実な人間よりも、誠実な人外の夫』

『自分を助けてくれた若きGSに恩返しのため来日』

などと言うニュース番組と派手な見出しの文字が躍っていて、お袋もニュースの音量をこれでもかと上げるので、普段は飄々としている親父も今回はかなり懲りたのか、肩を落として味噌汁を啜っていた。その姿がやけに印象的だった。ついでに言うところブラッド伯爵はと言うと

親父に不能の呪いに始まり、様々な呪いと制約を刻み込んだ契約書で親父の行動のほとんどを封じ込めた後。牙を見せ付けるように笑い

『暫くは日本に滞在し、ピエトロを鍛える。我が英知が必要な時は尋ねて来い』

と威厳たつぷりに言い放ち、帰って行った。多分唐巢神父の教会に居るだろうから今度困った事があつたら相談に行こうと思う。そして今俺は蛭と一緒にランニングの前にクロさん達の見送りに来ていた

「ではな、横島殿、これからも励み良き霊能者となれ」

「せんせー、もつと大きくなつたらせんせーの内弟子になりに来るでござるよー」

あまり長く里を開ける訳にも行かないとの事で里に戻ると言うシロちゃんとかロさん。とりあえず俺もお世話になったのでお菓子や飴などをシロちゃんのお土産として持たせる事にした。小さなリュックを背負っているシロちゃんに苦笑しながら

「内弟子って……俺そんなに強くないぜ？」

俺を師匠にするより、クロさんに教えて貰った方が強くなるだろうと思いつながら言うところシロちゃんは数回頭を振ってから

「せんせーはきつと強くなるでござるよ！だから拙者はせんせーに弟子入りするでござる」

にぱっと笑うシロちゃん。そんな風に言われてもなあ……とても

じやないが、強くなるなんて思えないが……その信頼に応えられるくらいには強くなりたいかなと思うのだった……

「じゃあね、シロ。元気で」

別れと言う事でタマモも精霊石の首飾りをして、人間の姿で別れを告げていた。精霊石は危ないので、ずっと身につけているわけでは無いが、これからはたまには精霊石の首飾りをして話が出来ると聞いて、正直俺は嬉しかった。最近満月の時に雨が降るので話が出来なくて寂しいと思っていたからだ

「うむ！ではなタマモ！またいずれ会おう！」

「ええ」

シロちゃんは元気だけど、タマモは冷静って感じで別れを告げるが、タマモが寂しそうにしているので、仲良くなったんだなあっと思いい、タマモの友達が出来たことに安堵した

「じゃあ、クロさん。これおにぎりと保存食の乾し肉。長い旅になると思うので、味噌などの調味料も用意しました」

「おおかたじけない！拙者では塩焼きや煮るのが手一杯なので、これは助かる。半月は走らなければならんから」

蛸が大量のビーフジャーキーの包みを渡している。その数20……これだけあれば多分暫くは大丈夫だと思う。と言うか半月も走ってきたのか……人狼ってすげえ……

「では失礼、またいずれ会おう」

「せんせー、さよならでござるよー」

シロちゃんを背負って凄いい勢いで走って行くクロさん。姿が見えなくなるまでは手を振っていようと思っただが、あつと言う間に姿が見えなくなったので手を下ろす。しかしこうして見ると、自分の親がいかに無茶苦茶だったか思い知らされたような気がする

(クロさんもブロードー伯爵もいい父親って感じだったよなあ)

俺が物を欲しいといえればカッターと木材を渡して自分で作れだったっけ……それにあんまり良い思い出も無い。別に両親を憎んでいる訳じやないけど、距離感が今一判らないよなと心の中で呟く

「じゃあ横島ランニングに行きましようか？」

ランニングに行きましよう。そう笑いかけてくる蛭に頷き、少し普段の時間より遅れたが、朝のランニングの為に走り出すのだった……

横島がシロとクロと別れを告げた頃。魔界では……

「死にたくなければ言う通りにするんだな。判ったな？」

どこか判らない暗い建物の中で大柄な悪魔の前に怯えた様子で座り込む女性の姿があった。その背に翼があり、足には鋭い鉤爪……この女性はハーピーと言われる悪魔だった

「うう……判ったじゃん……」

「泣くことはないだろう？これが終われば開放してやるのだからな、さあ、これが次のターゲットだ。確実に仕留めろよ」

写真を無理やり押し付け、泣いているハーピーを見てくつくくつと笑いながら悪魔が消える。悪魔が消えてから、ハーピーはよろよろと立ち上がり無理やり渡された写真を見て、更に涙しながら

「ううっ……もう殺しなんてしたくない……でも死にたくないよお……」

言う通りにしなければ殺される、だから殺したくないけど殺さなくてはならない。悪いことはしたくない、でも死にたくない。良心の呵責に押しつぶされながら彼女は涙しながらハーピーは空を舞う……その場に残された写真には幼い令子とその母である美智恵の姿が映されていたのだった……

別件リポート 過去と未来の私



## 別件リポート

「別件リポート 過去と未来の私

香港で原始風水盤や、魔族の事を調べていると唐突に思い出し、不味いと思わず声が出てしまった……

「あ」

「あつてなんだ？あつて……何かミスをしていたのか？」

ワルキューレと香港を調べている時。ふと思い出した、何かを調べている時のあつて言う声は1番聞きたくない物だ。口調の鋭いワルキューレに

「GS試験が終わったでしょ？そろそろ私が過去から令子を連れて来る筈なのよ。ハーピーから逃げるついでに……しかもそれであちこちの上層部に声を掛けてアシュタロスの情報を出して、自分の発言力を高める為に……」

私は今ここにいるが、私は逆行している。だから過去から私も来る筈なのだ……

「それは不味くないか？」

「めちやくちや不味いと思うわ」

過去の私はアシュタロスとの戦いに備えているが、今備えないといけないのはアシュタロスではなく、アスモデウス一派についてだ。これでもし今の時代の人が襲ってこないアシュタロスについて備えるは大変なことになる

「……仕方ない。最高指導者に連絡して、逆行の手はずを整える。雷があればいいのか？」

逆行は神魔としても禁止事項だが。これで計画が狂うと不味いと思ったのか過去の私に今の情報を流す為に逆行の許可が下り、その日の内に雷を操る事の出来る魔族の協力の元、私は過去へと逆行するのだった……

机の上に何冊も並べたノートを確認する。それは全て私が未来で

確認してきたアシユタロスの情報だ……これを国連や、オカルトGMエンに渡し、その時の指揮権を得る。そうすれば令子を救う事が出来る……そう考えていると家の外から雷の音が響き、それから少し遅れて「せ、セーフツ!!まだ未来に行ったら駄目よ!私!!」

必死の形相で家の中に飛び込んで来たのは私自身で驚愕に目を見開いていると

「ふー本当に焦ったわ、もしも未来に行かれてたら完全にアウトだったわ。悪いけど私の話を聞いてくれるかしら?」

……もしかすると未来で何かあつて、それを変える為に未来から来たのかもしれない。私はトランクに詰め込もうとしていたノートを再び机の上に並べ逆行してきた私の言葉に耳を傾けるのだった……

「そんな……これが全部役に立たない!」

未来の私が持ってきた資料を見て、私の集めた資料が役に立たないことを知り。私は悲鳴にも似た声を上げた。最初は偽者の可能性も疑ったが、話をすれば私だと確信した。そして私が告げた言葉は私にとって衝撃的な言葉だった……

「本当よ。歴史はもうかなり変わってるわ。アシユタロス戦後の未来から逆行してきた娘達でね」

アシユタロスを倒すことは出来た。だがそれは横島忠夫と言う青年の心に酷い傷を残しての勝利だった。それでも私の娘が無事ならば必要な犠牲だと思っていたが、今のままではその展開にすらならないという。横島君を不幸にする未来を否定する神魔は多く、逆行してきた神魔が協力体制をとっているというのは正直驚いたが、それ以前に与えられた情報が多すぎて正直混乱していた

「まず情報を整理させてもらおうわよ。私の知っている未来と違うのは、未来から逆行してきた人間が居て、そのせいで歴史が変わったと?」

ノートに書きながら1度情報を整理する。未来の私に尋ねると、未来の私は違うわと頭を振ってもう1度説明を始めてくれた

「そうだけどそうじゃないわ。神魔側は逆行してきた知恵を使って、過激派神族・魔族の制圧をしたわ。アシユタロス自身も未来の記憶を

得て、侵攻を中断。これで全部丸く収まるはずだったわ」

所が、その歴史改変の影響でアシユタロスよりも遥かに強力な魔族が過激派魔族を纏め上げている。アシユタロスはスパイとして活動しているが、派手に動くと自分も狙われるので思うように動けない、更に言えばG S試験でその魔族が暴れ回り、日本のG Sの大半はG S免許を返納したと

「最悪じゃないの……」

未来に向かい、オカルトGメンや日本の民間G Sを纏めて戦力とする計画が、その計画を実行する前に潰れてしまった……

「そうね。状況は今の段階では最悪だわ。でも備えも出来ている、霊界チャンネルは嚴重に護られているから破壊されることはないだろうから人間だけで魔族達と戦う必要はないわ」

だとしても歴史が変わっているので備えの使用が無い。じゃあ、私は未来に行くとしても、それよりも更に先の未来へ……向かってこの神魔大戦の結末を見てくる必要があるのでは？と考えていると未来の私は

「それは無理だわ。今進んでいる歴史は今作られている歴史。その未来からの逆行は出来るだろうけど、私自身はその未来にはいけないわ」

私の考えていることを言い当てられ、うっと呻く。情報が無い状態でアシユタロスよりも強い魔神と戦う……そんなのは正気の沙汰じゃない、どう考えても自殺行為なのだが、そうするしかないという状況になりつつあることに正直絶望した……

「ちなみにその襲つてきている魔神は？」

アシユタロス以外の魔神。恐らく特定できていると思い、その魔神の名前を尋ねると

「今の段階で判っているのは「アスモデウス」「ガープ」の2人のソロモンの魔神よ」

最悪だ。アシユタロス1人でも膨大な被害を出しつつ勝利したというのに、アシユタロスクラスの魔神が2人……どう考えても生き残れるとは思えない

「他にも魔人つて言う神魔の天敵も居る世界。備えを作る事は出来ず、今生きている皆で何とかして貰うしかないの」

そう言われてもはいそうですかと納得出来る訳が無い。私は娘を護らないといけないと言うのに！

「落ち着きなさい！令子も心配ないわ、今の令子は貴女の知る令子よりも強い」

きっぱりとした口調で断言した私は、今の令子に付いて話してくれた。2人の弟子を取ったことにより、良い影響を受け、金にがめつくなく、弟子の事を第一に考えている良い師匠だと。それに伴い、GS協会からの信用も得て前の世界よりも良い評価を受けていると……

「それに横島君のおかげで味方もかなり増えてるわ。少なくともアシユタロスの起した神魔大戦よりも戦力は充実する事は間違いないわ」

それを聞くと安心出来るが……それじゃあ私が未来に向かう意味が無くなって来るのでは……ハーピーに狙われている令子を守る必要があるが、それは今逆行してきた私に任せれば……

「ハーピーから令子を連れて逃げるでしょ？その時に私に令子を預けて欲しいの、私が令子を未来に連れて行く、貴方はそしたら未来に移動して隠れて」

確かにそれが最善だろう。私の記憶が役に立たないのなら、未来の記憶を持つ私が令子を連れて行き、未来の令子に少しでも助言をする。それがきつと最善だ

「でも私は今ハーピーなんて魔族には襲われて無いわ、悪霊とか、下位悪魔は断続的に襲ってきてるけど」

私の時はハーピーだったんだけど首を傾げる未来の私、こんな所でも差異が生まれているという事はきつと未来の私の言うとおり、もうお互いの情報は何も役に立たないという事の証明だった

「とりあえず、それは置いておいて、逃げることには変わりはないでしょう？だからその時に令子を預かるわ。私もそこまで長く令子を見ていることは出来ないわ、やらないといけない事があるからね」

「やらないといけないこと？」

私がそうたずねると未来の私は深刻な表情をして

「魔人。神魔の天敵とされる災厄の存在、その再封印。それが今私が神魔と協力している事よ」

魔人と紙に書いた私は酷く真剣な顔をしている。つまりそれだけ危険な相手と言うことだ……ソロモンの魔神だけでも大変なのに、更にそれ以上に凶悪な力を持つ集団が現れる……そう聞くだけで顔から血の気が引くのが判る……

「それにアスモデウス陣営も時間能力者を探しているわ。だから私に令子を預けた後は、南米で公彦さんと一緒に暮らして……私は神魔と協力して最悪の展開を防ぐために動くから」

確かにそれが最善なのだろう。アシユタロスと戦う事だけを考えていた今の私が指揮をとつても、アシユタロスではない相手では立っていた戦略が全て変わってくる。それに私が捕まって私の能力を利用される訳には行かない、ならば隠れて暮らす隠遁生活をするしかない……

「厳しい戦いになるのね」

私が知っている戦いよりも厳しい戦いになる。出来ることならば私が令子を護つてあげたかったが、今の私では足手纏い。ならば全てを未来の私に託すしかない

「私の……私達の娘をお願い」

「ええ、任せて、令子は護るし、あんな結末にはさせないわ」

力強く笑う私に安心し、私は全てを未来の私に託す事にし、私は未来の私が令子を迎えに来るのを待ち、令子を預けてから未来へ逃げ南米の公彦さんの所に隠れることに決めたのだった……

美智恵が過去に向かってから1時間。私は机の上の資料を並べていた

(おかしい……なんだこの違和感は……)

何か違うと言い切れるわけではないのだが、違和感を感じるのだ。その違和感が何か判らないので、その違和感を突き止めようとしていくと、雷の音と共に美智恵が姿を見せる。過去の自分の説得に成功し

たんだろうな……それ自体は良かったのだが……

「転移する場所を考えろ！この戯けが！」

時間転移の衝撃で折角机の上に並べていた資料がバラバラに飛び散る。慌てて椅子から立ち上がり、落ちた資料を拾い集める

「ぐ、ごめんなさいー！」

慌てて資料を2人で拾い上げ、再び纏めていると

「ん？」

私と美智恵の困惑の声が重なった。調査する前は要警戒など書いてあるのだが、調べた後は警戒する必要なしになっている

「お前のほうはどうだ？」

「ごっちもよ、どうして気付かなかったのかしら」

これはおかしい、どうなっているとと言うんだ……まさか……私も美智恵も既に精神攻撃を受けていたとでも言うのか……

「これは不味いな」

私も美智恵も顔が知られすぎている。だからこそ精神攻撃で狙い撃ちにされているのだろう、それだけ攻撃されているということはその間に調べて欲しくない何かがあるのは間違いない。だが私達で調べることが出来ないとなると……

「他の人間が必要ね」

調べたいエリアはあるが、そのまま精神攻撃を受け続けているとは調べたい物を調べることも出来ない。だが別の人間を用意するとしても香港のGSのレベルは低い。そんな連中の力を借りても、おざなりに調べられて終わりだろう……

「何かアイデアはあるか？」

私がそう尋ねると美智恵はうーんつと唸り、そうだった手を叩き

「GS協会に申請を出しましょうか……私は伊達雪之丞が良いと思うんだけど……」

「伊達雪之丞か……確かに良いかも知れないな」

未来の世界では人間以上と言われる実力者となっていた。今はガープの事もあり、謹慎処分らしいが……神魔からの要請となればGS協会も許可を出すだろう。私も美智恵も同じ結論になり、1度GS

協会に伊達雪之丞を香港に呼ぶ様にと要請書を出し

「そうと決まれば、資料を纏めなおそう。伊達雪之丞に判るようにな」  
伊達雪之丞は学校に行つてないと聞いているので、判るように資料を纏める必要があると思ひ。私と美智恵は再び資料を纏め始めるのだつた……

リポート4 保父さん横島 その1へ続く

## リポート4 保父さん横島 その1

リポート4 保父さん横島 その1

私は内心溜息を吐きながら、魔界のある宮殿に部下と共に訪れていた

「……そうか、まあこうなる事は判っていた」

近づいてくる我達の姿を見た宮殿の住人が宮殿の外に出てくる

「すまない、ネビロス」

中立宣言をしているネビロスとベリアルを一時的に監視下に置けと言う意見が多く、嫌々捕縛に動く事になったのだ。理由は勿論ベリアルがかつてアスモデウス、ガープと共に魔界の4公爵として名を馳せたことが原因だ。中立宣言をしているが、情報を流していると疑っている者が多すぎる

「構わんよ。何も疚しいことはしていない、一時的に私達を捕らえれば納得すると言うのなら、それに従おう」

我だって出来ればこんな事はしたくないが、ネビロスとベリアルに向けられる疑いの目が多すぎる。ならば捕らえて監視下に置くことで無罪を証明した方がベリアルとネビロスの為になると思ったからだ

「アリスまで捕らえると言うのならば貴様らを殺す」

ベリアルがアリスを連れて宮殿から出てきて凄む。かつての巨大な体軀は見る影も無いが、それでもその目は今なお強烈な光を放っている

「貴様やはり！」

「その娘も捕らえるのが道理だ」

「黙らぬか！」

愚かな部下が騒ぎ出す前に黙れと一喝する。魔界側も神界側のネビロスとベリアルが内通者だと思っていない。だが2人ともその経



歴が問題だった、かつてサタンの支配を拒絶して暴れまわった魔神と、数多の分霊を持ち、ソロモンにも属する最強の死霊使いにして、かつてのアシュタロスの相談役。その過去があるから疑われている……気持ちは判らないことないが、そんなくだらない事で2人を敵に回す危険性の事を理解していない  
「勿論だ。アリスは自由にさせる」

アリスは2人が目に入れても痛くないほどに可愛がっている娘だ。同じ親として2人の気持ちは判るし、最初から捕らえるつもりも無い  
「アリスがなーに？」

自分が置かれている状況を理解していないアリスにネビロスとベリアルは微笑みかけながら

「私もベリアルも暫く仕事で宮殿を空ける。その間横島の家でお世話になるといい」

「お兄ちゃんの所に行って良いの！わーい♪」

嬉しそうに笑うアリスの頭を撫でるネビロス。その姿を見てネビロスとベリアルがスパイを行っているとと思う者は居ないだろう。気まずそうに目を逸らす馬鹿達を見下しながら

「準備をして、人間界へ行きなさい。そしてブリュンヒルデにこの手紙を渡すんだ、いいね？」

今人間界の拠点を作らせ、無理やり休暇を取らせている娘に負担を掛けるのは嫌だが、信用出来るのはブリュンヒルデだけなので少しの間ブリュンヒルデにアリスを預ける。恐らく娘の所よりも横島を選ぶのは目に見えているので、こちらの状態を伝えるという目的もある  
「はーい♪じゃあ準備してくるねー♪」

スキップしながら宮殿に戻っていくアリスを見送ってから、ネビロスとベリアルは我の方を向き

「では行くうか？」

「くだらぬ些事だ。早々に済ませよ」

その堂々とした姿にネビロスもベリアルも敵ではないと確信したのか、今回の事は間違っていたと悟った部下達に深い溜息を吐きながら、我はネビロスとベリアルを連れ、魔界正規軍の本部へと連行した

が。連行したというのは形だけで来賓用の部屋に軟禁と言う形になるのだった……

離婚問題も無事に解決した次の日、いつものように朝のランニングに出る

【ふわ……まあ、たまには走るのもいいな！是非もなし！】

バスターと書かれたTシャツを着て走っているノツブちゃん。あのTシャツはどこからも出したのかが非常に気になる

「まあノツブは幽霊だから走っても意味無いけどね」

【気分転換じゃ！】

タマモを自転車の籠に乗せて走っている蛍の突っ込みにノツブちゃんがうるさいわつと叫んでから気分転換と怒鳴る

「みむ？」

「うつきゅーん」

いつものように足元を走っているチビとモグラちゃん。あんなに小さいのに、俺に追いついてきているのを見ると凄い体力と脚力だと思わず感心する

【横島。集中が乱れているぞ？】

「つとすまん」

心眼の警告に頷き、緩みかけていた意識を再び引き締める。心眼の補助無しで霊力を手足に循環させるには、今の俺にはかなりの集中力が必要なので。深呼吸を数回繰り返すと

【よし、それで良い。今は意識しているがそのうち意識しなくても出来るようになれ】

心眼は無茶を言うなあと苦笑しながら、長い坂道を見て内心溜息を吐きながら坂道を登り始めるのだった……

「ん？横島か？お前もこのコースをランニングコースにしていたのか？」

坂を上り終え、ベンチの上で休憩していると背後から声を掛けられ。驚きながら振り返ると伊達が首からタオルを下げて坂を上ってきた所だった

「伊達も「ああ、雪之丞で良い。伊達って呼ばれなれてないからな」  
そう笑う伊達に雪之丞と呼びなすと、それで良い。俺は横島って  
呼ぶからなと笑う雪之丞は俺の回りを見て

「お前本当にGSになるつもりか？」

「そうだけど？なんかおかしいか？」

周りを見る。チビとモグラちゃんがいつものように、原っぱを走っ  
ており。その上にはランタンがぶかぶかと浮かびイヒヒッと笑って  
いる。そしてノツブちゃんは人魂でお手玉をしてて

「いつも通りだが？」

どこもおかしいところは無いが……あ、ノツブちゃんが居るなど  
思っている

「芦菟だったよな？こいつ素なのか？ボケてるのか？」

「マジよ。でもまあこれが横島らしさだから」

蛭と雪之丞がひそひそ話をしているのを見て、なんかイラッとした  
物を感じている

「まあ良いけどな。俺は近い内に香港に仕事で行くから、その前にな。  
ちつと身体を本気で動かしておこうと思っとな」

香港？海外旅行とかか？と尋ねると雪之丞はニヤツと獰猛な笑み  
を浮かべ

「仕事だ。これを達成すれば俺も仮GS免許が交付される」

マジか……いやまあ、雪之丞は強かったからな。GSになっても活  
躍できるだろう、ただ蛭は香港と聞いて目付きが変わっていたが、香  
港だと何か不味いのだろうか？

「良い機会だ。軽く模擬戦しようぜ、横島」

「ええ……」

なんで朝から痛い目合わんと行かんの？蛭に助けると視線で訴え  
ると

「じゃあ、霊力なしで1ダウンで決着。時間は3分で」

「OK。そのルールで行こう」

……違います、俺はルールを決めてくれと思って視線を向けたん  
じゃないです……とは言え向こうがやる気満々だし、チビ達も応援す

る為に蛍の方に向かったので断ることが出来ない悟り。俺は溜息を吐きながら雪之丞と向かい合うのだった……

東條達の訓練をママお師匠様に任せ、別のコースをランニングしていると横島に会った。また幽霊が増えていることに驚いたが、まあそれはそれと置いておく事にし横島を模擬戦に誘った。嫌そうな顔をしていたが、蛍の奴がルールを決めて逃げられないと悟ったのか拳を軽く握って俺を見つめている

(あの時ほどの覇気は感じないな)

GS試験の時の覇気溢れた姿とは似ても似つかないが、ライバルと認めた相手だ。きつと戦っている内にエンジンが掛かるだろうと判断する

「じゃあ、始め！」

蛍の合図と同時に地面を蹴って拳を繰り出す

「うひっ!?!」

情けない悲鳴を上げながら、その拳を左手でいなし間合いに滑るように潜り込んで来る

「せいっー!」

「ぐっ!?!」

地面を踏みしめる音と同時に背中での体当たりが叩き込まれる。ダメージはそれほどではないが、今の動きは厄介だな

(中国拳法か?……)

あの踏み込みと背中での体当たり……動きは中国拳法に似ている……だがそれはGS試験での戦い方ではない

(この短い時間で何か掴んだのか?)

軽くステップを踏みながら、横島を観察する。顔には怯えが浮かんでいるが、その目は俺の動きから片時も離れない。俺も観察しているが、向こうも観察しているという感じだ。嫌な感じだ……初めての完膚なきまでの敗北した事を思い出した瞬間

「しゃっー!」

「ちっー!」

一気に間合いを詰めて蹴りを放ってきた横島の一撃を肘で受け止めるが、直ぐに体勢を立て直して拳を連続で繰り出してくる。それは型等ない喧嘩での拳、計算された物ではなく勢いに任せ放たれる乱打（ちっーこれは不味い）

横島は勢いに乗るとことん強くなる、横島のペースで戦わせてはいけない。そう判断し距離を取る為。前蹴りを繰り出した瞬間。横島の目がギラリと光る

（しまっ!?!）

そう思った直後。俺は脚を捕まれ、素早い動きで持ち上げられると同時に軸足を払われた。咄嗟に地面に手をついて腕力だけで無理やり体勢を直す

「マジで!?!今ので倒れないかよ!?!」

横島が信じられないと言う感じで叫ぶが、それは俺も同じだ。今は柔道か?いやそれにしてもは足の運びが……

（わかんねえな）

我流だと思うが、ここまで複数の格闘技の技が混じっていると動きが読めない。それにここまで武道を修めているのなら、どれか一つを突き詰めたほうが……

「はいー3分経過ーそこまで!」

考え事をしている間に3分過ぎてしまったのか……惜しい事をした。こんな事ならもっと仕掛けて横島の動きを見れば良かったと後悔しながら

「ありがとよ。楽しかったぜ」

「あーおっかなかった……こういうのは毎日嫌だぜ」

怖かったあと呟く横島に変わった奴だなと苦笑しながら、ベンチの上のタオルで汗を拭いながら

「お前師匠とかいるのか?空手とか、めっちゃくちゃ混じってるけど?」

横島の戦い方が気になって尋ねると横島はうーんっと唸りながら

「蛭とか、シズクとか、牛若丸とか、ノツブちゃんとか、沖田ちゃんに色々教わってるから判らん」

……追い待て、その中に聞き流せない名前があったぞ……眉を指で

揉み解しながら

「牛若丸って何だ？芸名か？」

まさか牛若丸本人じゃないよな。GSの中には歴史上の偉人の名前を借りる者も居るので、その口かと尋ねると

「いや本人。はい」

差し出されたのは陰念との戦いで使っていた球体が向けられる。そう言えば、これ何だろうな？と首を傾げるとチカチカと光りながら【主殿に武術を教えている、牛若丸です】

喋った!?その事に驚愕しながらも牛若丸に戦い方を習っていると、正直うらやましい

【後ワシじゃな。戦国時代の武術などを教えておる】

せ、戦国時代?……なんなのこの幽霊……俺が絶句しているとその幽霊はふふんつと笑いながら

【第六天魔王！織田信長じゃ！】

「え？女……」

マジで信長って女だったのか……と言うか話を聞いて、納得したそりや色々混じる訳だ。だからあれだけ変幻自在の戦い方をしてたんだなあと納得し、そしてライバルと認めたのは間違いじゃなかったと確信する。俺が香港で神魔の仕事を請けて強くなるつもりだったが、横島も今よりもなお強くなるだろう。それが楽しみで仕方ない、最高に強くなった横島に勝つ！それが今の俺の目標なのだから

「まあ良いか。今は引き分けだったが、今度は俺が勝つぜ！じゃあな！」

あんまり遅くまでランニングに出ているとママお師匠様に怒られるので、急いで戻らないとなと思ひ。横島にまた勝負しようぜ！と叫び白竜寺に向かって走り出すのだった……

お父様からアリスちゃんを迎えに来て欲しいと聞いて、私は慌ててアリスちゃんとの合流地点に向かっていた

「あ、お姉ちゃんー！」

大きなトランクの上に腰掛けて手を振るアリスちゃんを見つけて、

ほっと安堵の溜息を吐く。人間界の拠点としてマンションを借り、横島の警護の準備を整え、ご挨拶にとお菓子でも買いに行こうか?としている時の緊急指令、正直かなり焦った。慌ててアリスちゃんとの合流地点に走ったのは言うまでも無い、ベリアル様とネビロス様の娘、何かあれば間違いなくお2人とも人間界に来るのだから彼女の保護は最優先だ

「あのね、赤おじさんと黒おじさんから手紙だよ」

ポシエツトから差し出された手紙を受け取り、動かないでくださいね?とお願ひしてから手紙を確認する

(お父様でも止めれなかったのですね)

ベリアル様はアスモデウス一派の2人とかつて親交があり、ネビロス様はアシユタロスの相談役をやっていた。疑われるのは当然だが、このタイミングとは正直愚かとしか言いようが無い。魔界正規軍の再編成をしたりしないといけないと言うのに……

「お姉ちゃん。アリスね?お兄ちゃんの所でお世話になりなさいって言われてるの」

お兄ちゃん……横島の事ですね。私の所で保護した方が安全だと思いますが、本人が横島が良いと言っているのならば、横島の所で預けるべきですね。その後は横島の家の周りにルーン魔術で結界を張って何かあれば私も察知出来るようにすれば良い

「判りました。では行きましょうか」

「うん♪」

華のような笑みを浮かべるアリスちゃんと手を繋ぎ、私は横島の家へと向かうのだった。チャイムを鳴らすと水神シズクが姿を見せ、私とアリスちゃんを見て

「……面倒ごとか?」

「申し訳ないですが、その通りです。横島はご在宅でしょうか?」

いとと呟き、上がれと言ったシズクの後を着いてリビングに入り、驚愕した

「んお?客か?」

バスターと書かれた赤いTシャツと黒いズボンを履いた幽霊。だ

がそれは幽霊などではない、感じる霊力と纏う雰囲気から見て間違はなく英霊……何時の間に英霊と一緒に暮らし始めたのだろうか。横島はチビとモグラちゃんと遊んでいたのか、2匹を膝の上に乗せながら振り返りブリュンヒルデさん？それとも聖奈さんですか？と尋ねて来るので

「聖奈でお願いします」

人間界で活動する以上はブリュンヒルデではなく、聖奈の名前の方が良い。横島は判りましたと返事を返してから

「それで聖奈さんとアリスちゃん？どうしたんすか？」

「おっにいちゃーんっ!!!」

トランクを置いて、横島に突進して行くアリスちゃん驚きながらアリスちゃんを抱き止めた横島に

「すいませんが暫くの間アリスちゃんを預かって欲しいのです」

えへへっと笑いながら抱きついているアリスちゃんの頭を撫でながら横島は

「構いませんけど……どうかしたんですか？黒介さんと赤介さんは？」

偽名が適當すぎる……それがベリアル様とネビロス様の偽名だと知って頭痛を感じながら

「どうしても用事でアリスちゃんの側にいる事が出来ないのです。1週間ほどでいいので預かってください」

黒い噂も何一つ無い。だから直ぐに開放されると思うが、念の為に1週間お願いしますと言うと、横島は嫌な顔をせずに

「判りました。よろしくなーアリスちゃん」

「うんーお兄ちゃん」

これで暫くは安心だろう。水神シズクが居て、英霊も居る。恐らく人間界で今1番安全な所はここだろう

「では申し訳ないですが失礼します。他にもやる事があるので、終わりましたらまたお伺いします」

「気をつけてくださいいね。聖奈さん」

「ばいばーい、お姉ちゃん」



笑顔の横島とアリスちゃんに見送られ横島の家を後にする。家の外に出ると同時に横島の家にはルーン魔術の結界を設置する。これで何かあっても私が察知できると安心し、私は自分の拠点を整理する為に家へと引き返していくのだった……

今日は夜から除霊があるので横島君と蛍ちゃんを呼んだんだけど

「こんばんわー」

「……なんでアリスちゃんが居るの？」

横島君がアリスちゃんの手を引いて事務所に現れたので、そう尋ねると横島君はソファアに座っててねとアリスちゃんにお願いしてから

「なんか1週間くらい預かって欲しいって聖奈さんが」

聖奈ってブリュンヒルデじゃない……もしかして魔界で何か起きているのでアリスちゃんを避難させてきたのかもしれない

(凄く面倒毎になるような気がする……)

とは言え、アリスちゃん自身に罪はないので言っても仕方ないことだが……だが事務所に連れて来るのは正直止めて欲しかった

「横島？今から除霊をするのよ？どうしてアリスちゃんを連れてきたの？」

「だって留守番って言うのと泣いちゃったから、そのままにしておくの可哀想だろ？」

はあ……それは判るけど、せめて連れて来る前に連絡して欲しかったわね……溜息を吐きながら窓の外を見る

(かなり天気が悪くなってきたわね)

今日の除霊は公園に現れるワニの幽霊の除霊。だからシズクにも協力を頼んでいたが、雨が降れば雨の中も自由に行き来し襲ってくるだろう。そうになると全滅する危険性も出て来る

【美神さん。雨降ってきましたけど、どうしますか？】

心配そうに問いかけてきたおキヌちゃん。少し考えてから横島君達の方を向いて

「ごめん。呼び出したけど今夜の除霊は中止するわ。雨が本降りにな

る前に帰った方がいいわ」

折角呼び出して悪いけど、状況が悪い。幽霊のワニとは言え、牙もある。幽霊だから水滴の中から飛び出してくる可能性もある。こんな天気の日には戦うにはあまりに分が悪すぎる

「雷!?!ずいぶんと近いわね」

事務所の目の前に強烈な落雷が落ちる。それも1回じゃない、2回、3回と続いている……これだけ連続だとも怪しいと思う。幾らなんでもこれだけ連続で同じ場所に落ちるなんてありえない……

「……何かの攻撃かもしれないぞ?」

シズクがペットボトルを手にもう一回、確かに攻撃の可能性もあるわね。1度様子を見に行つた方がいいかもしれない……

「横島君。蛍ちゃん。念のために外の様子を見るわ、結界札と精霊石を持って着いて来なさい」

「はい!」

私自身も結界札と精霊石を持って事務所の外に出て、驚愕に目を見開いた

「マ……!?!」

落雷の後に立っていた1人の女性。トレンチコートを着て、子供を抱えた女性は私を見て

「じ、時間が無い。この子をお願いします、娘をよろしくお願いします」

私に子供を渡してくる。間違いない、私だわ……じゃあやっぱりこの人は!?!私の抱えている子供を見て、横島君と蛍ちゃんが目を見開きながら

「こ、子供の美神さん!?!なんで!?!」

「え。じゃあ、まさか貴女は!?!」

蛍ちゃんが目の前の女性の正体に気付くと同時に再び目の前に雷が落ち、その一瞬で女性の姿は光と共に消え去るのだった……眠っている私自身をしっかりと抱き抱えながら

「ごめん、ちよつと大変な事になるかもしれないから、直ぐに家に帰るのは諦めて」

何かある。私はそう判断し、家に帰るように言った蛍ちゃんも横島君にごめんねと言ってから、眠っている少女を抱き抱え事務所の中に戻りながら、アリスちゃんの事、そして過去の私自身の事を考え（なにか大きな事件が起きるのかも……）

また何か大きな事件が起きる前触れかもしれない……私はそんな嫌な予感を感じつつ、周囲を警戒してから事務所の扉を閉めるのだった……眠っている私をソファアーに寝かせてから

「多分だけど時間移動だわ。なにか過去で危険な事があって未来に逃げて来たんだわ」

【その線は濃いな、私のほうでも妙な霊力の流れを感知したからな】

心眼も同意してくれた事でやはり、時間移動だったのだと確信する。それにそうでなければ説明がつかない。何故ならママはずでに亡くなっているから。残念な事に子供のときの記憶はあやふやで覚えていないが、ママによく似た女の人に面倒を見て貰ったのをうつつらと覚えている。それがまさか自分自身だったとは……正直驚いた

「……今のお前の母親とは連絡が着かないのか？」

「それは無理ね。ママは私が中学生の時に亡くなっているもの」

除霊中に亡くなったので、遺体も何も無いのでもしかすると生きている可能性もあるけど、もう7年も経つから多分死んでいるわと呟くとシズクは申し訳無さそうに

「……すまない、辛い事を聞いた」

確かにママの死は私にとって辛いことだけど、過去のママだけであして姿を見る事が出来た。それだけでも良かったと思ひ、そしてママが私に助けを求めてきたのだから、その信頼に応えたいと思う

「良いわ、どうしようもない事だしね。それにしてもこの子どうしようか……」

よく眠っているので起きる心配は無いが、何時起きるか判らないし、ママがいないと判れば間違い無く泣く。

「うーん私と美神さんで一晩面倒見ましょうか？横島はアリスちゃんの方をお願い」

「え？いや、別に俺も残るぞっ」

ふあつと大きな欠伸をしているアリスちゃん、彼女もまた魔界から逃げてきた筈だ。1箇所複数のターゲットが集まるのは危険すぎる

「横島君。アリスちゃんも何か危険な魔族に狙われている可能性があるわ。勿論私自身も、だから1箇所に集まるのは危険なの、事務所ごと攻撃されたら手も足も出せないからね。明日早朝に今後の方針を連絡するから、それまでは自宅待機よ。判ったわね？」

全滅のリスクを避ける為にも分かれる必要がある。それに単独行動で人質にされる可能性もあるので自宅待機するように指示を出す。子供の私は私自身と蛍ちゃんを護るから、アリスちゃんはお願いと言とうと横島君は納得していないという表情をしながらも

「判りました。アリスちゃんの方は任せてください、さ、アリスちゃん帰ろうか？」

「んーおんぶー」

眠いのかおんぶと両手を広げたアリスちゃんの前にしゃがみ込んだ横島君に、アリスちゃんは欠伸を繰り返しながらおぶさる、雨は降っているけど、シズクがいれば濡れる心配も無いだろう。後は自分達自身の護りを固める事だ

「……水を通じて私も様子を見ておく。何かあれば跳んでくる」

【私も横島の家の周辺を警戒する、私の索敵能力なら仕掛けてくれば直ぐに判る】

シズクの言う飛んで来るが、水を媒介にした転移だと判り。頼りにしてるわと呟く、それに心眼も憑いているから奇襲を受ける可能性はかなり低いはずだ。ならば後は自分達のほうの警戒の準備をする必要がある、蛍ちゃんの方を見て

「除霊道具置き場からありたつけ結界札持って来てくれる？下手すると事務所を籠城することになるからおキヌちゃんは横島君と一緒に行ってくれる？電話が駄目になったらおキヌちゃんが頼りだから」

【判りましたーじゃあ横島さん、行きましようか】

「ああ、急ごう。何かあっても困るから」

「じゃあ私は結界札を取ってきます。美神さんは念の為に窓からは離

れててくださいよ

シズクとおキヌちゃんと一緒に事務所を出て行く横島君と、除霊具置き場に走る蛍ちゃんを見ながら、窓の外を見る。外は真っ暗でこれからの行く末を指し示しているようで流石の私も不安に思わずには居られなかった。私は頭を振って、その不安を振り払い、外から監視されない為にカーテンを勢いよく閉めながら……

「いっちゃんも悪いけど、周囲の警戒と結界の密度を上げて。霊力は回すから」

【判りました。オーナー！】

オーナーの椅子に腰掛け、いっちゃんに向けて霊力を供給し、事務所の防御を上げる作業に集中するのだった……

リポート4 保父さん横島 その2へ続く

## その2

レポート4 保父さん横島 その2

一晩眠らずに事務所と横島の家を警戒していたが、反応は何も無い。流石に初日に動く事は無かったか

(むう、眠る習慣がついたのが不味い)

神であるので基本的に眠る必要は無い、だが横島の家で暮らしている内に眠る習慣がついてしまったので、眠い訳ではないが欠伸が出てしまう……ノツブに頼んで少しの間仮眠を取るべきだろうか?と考えながらリビングに向かうと

「……なんでこっちで寝てるんだ?」

横島の部屋でも、私の部屋でもなく、リビングのソファアーの上でアリスを抱えて眠っている横島に少し困惑した。そんな所で寝なくても布団で寝れば体力も回復しただろうに……

【すーすー】

【ぐがああああ、ぐがあああああ】

……思いつきり鼾をかいて眠っているノツブとおキヌに若干の殺意を感じながら、私は朝食の準備を始めるのだった……

「シズク……おはよう」

朝食の準備を終えた頃に横島が起き出して、欠伸をしながらキッチンに姿を見せる

「……ああ。おはよう、水か?」

そうーと寝ぼけ眼で返事を返す横島にコップに入れた水を差し出す。それを受け取って、一気に飲み干した事で目を覚ましたようなので横島に尋ねて見る事にした

「……どうして自分の部屋で休まなかったんだ?」

私がそう尋ねると横島はあははっと頭を掻きながら笑い

「いやあシズクが頑張って起きて警戒してくれているのに、自分だけがーすか眠るってのがなんか嫌でな、1時くらいまでは起きてたんだけど、結局寝ちゃった」

アリスちゃんは多分シズクの部屋で寝ていたけど、目を覚ましたからリビングで寝てる俺に抱きついて来たんだろうなと苦笑している。起きたときめちやくちやびつくりしたと呟いている横島に

「……私の心配をしてくれるのは嬉しいが、休める時には休んでくれ。これから何日こんな生活をするか判らないからな」

それで横島が体調を崩しては意味が無いので強い口調で言う。横島は判ったと返事を返す、だがこの馬鹿の事を考えるところかするとそれでも起きているかもしれないなと思

「……ノツブが起きたら仮眠を取るつもりだ。だから私の事は心配しなくていい」

おキヌは戦力として数えるのが難しいので、ノツブと私で夜は警戒した方が良さだろう。だから横島は心配しないで眠ると良いと言おうと思っただけ

「……だから寝る時にはお前さえ良ければ側にいてくれ」

横島の霊力が近ければ回復する霊力が高いとそれっぽい嘘を言いながら言うと、横島は判ったと笑う。

(ちよつと羨ましかったな)

横島に抱き抱えられて眠っているアリスが少し羨ましかったので、これで良いんだと思いつつ

「……心眼を頭に巻いておけ。お前が頭に巻いてないと反応をあんまりしてくれないでな」

夜の警戒の為に横島に渡されていた心眼を返す。横島と一緒に時は饒舌だが、どうも基本的に無口な様で適当な話し相手にもなってくれなかった。これなら横島が持っている方が良さそう

「そっか、判った」

「む？横島か？おはよう、よく眠れたか？」

横島が頭に巻くと直ぐ反応を示した心眼に苦笑しながら、横島の方を見て

「……判っていると思うが、美神から連絡があるまでは家を出るなよ？」

「判ってるよ」

若干不貞腐れている様子の横島に判ってるなら良い。念の為だと  
言って私は朝食の準備を進めるのだった……

シズクに言われるまで正直家から出るのを禁止なのを忘れていた。  
やっぱり寝不足のせいで注意力が散漫なのだろうか？

「ふああ……むにやむにや」

ソファアーに座って欠伸をしているアリスちゃんの髪をブラシで梳  
いてあげて、青いリボンで結んでやっていると、ノツブちゃんは微笑  
ましい物を見るような表情で

【ほう！上手いな、横島。ワシも頼んで見るかの？】

「いや俺は別に良いけどさ？髪綺麗じゃん？」

髪を梳くのは構わないが、寝起きなのに髪が整っているのでどこを  
ブラシするの？と尋ねると

【整える所が無いな、是非もナイネ！】

朝からハイテンションのノツブちゃんにしようがないなあと笑い  
ながら、ブラシを机の上に置いて

「おキヌちゃんもおはよう。調子はどう？」

【幽霊だけど元気です！私も頑張りますよ！】

もし電話が通じない状況になったら、おキヌちゃんが頼りになる。  
元気そうで良かったと安心し

「チビ達もおはようなー」

「みーむう♪」

「うきゅー♪」

机の上に上って来たチビとモグラちゃんの頭を人差し指で撫でて  
いると

「コーン♪」

「あいた!？」

私も構えーと言う感じで筆筒の上から頭の上に飛び乗ってきたタ  
マモ。最近構って欲しい時の反応が激しいなあと苦笑しながらタマ  
モを抱っこして

「なーシズク。精霊石のペンダント貸してくれよー」



タマモにも精霊石のペンダントをつけて、人になって貰った方がシズクの負担も減ると思つて提案したんだけど

「……駄目だ。精霊石は玩具じゃない」

即座に却下された。きゆるるんつとした目で見つめてくるタマモに駄目だつてさ。ごめんなと呟きながらタマモの背中を撫でているとアリスちゃんが

「私も抱っこするー」

腕の中に抱えているタマモを見て、少しだけな？とお願ひしてアリスちゃんにタマモを渡すと

「狐さん♪可愛いねー」

頭も撫でられ嫌そうな顔をしているタマモに、両手を合わせてごめんと呟きながら、シズクの用意してくれた朝食を机の上に並べるのだった……

「(ご)馳走様でした」

「……うむ」

いつも通りの魚の干物と卵焼きとご飯と味噌汁。俺やノツブちゃんには美味しく食べることが出来たけど……アリスちゃんはどうか？いちおう魚の干物は骨をとって食べやすいようにしてあげたけど……

「変わった味だけど美味しかったよ！でも今度はパンがいいな」

パンかあ……確かにアリスちゃんは日本食ってイメージじゃないし、今度はパンとかを用意してあげたほうがいいかもしれないと思いつながら、食器をキッチンに片付けて戻るとチビとモグラちゃんがリードを咥えて尻尾を振っていた。確かに散歩の時間だけど、今は勝手に出歩くことが出来ないのだから、代わりに一杯

「ごめんな、散歩は美神さんに駄目って言われてるから、代わりに一杯遊ぼうな」

ボールとかの玩具をリビングの床に並べ、散歩の代わりにアリスちゃんと一緒にチビとモグラちゃんと遊んでやることにするのだった

「む？横島。昨日アリスを連れてきた女が訪ねてくるぞ？どうする

？」

昨日のバスターと書かれた赤いシャツではなく、黒い着物姿のノツブちゃんが天井から顔を出して尋ねて来る。もちろん聖奈さんは敵じゃないので家に入って貰い事情を説明すると

「なるほど……確かにその可能性は高いですね。別れて行動しているのは正解ですよ」

やっぱり1箇所に集まるのは危険だったんだな、でも美神さんと蛍も当然心配なので

「聖奈さん、美神さんの所に行けませんか？」

俺はアリスちゃんを見るので今の所手一杯だ。それに外出禁止とされているので動く訳に行かない、だから聖奈さんに応援に行つて貰えますか？とお願いすると

「ええ、構いませんよ。こちらにも直ぐ戻れるようにルーンを刻みたいのですが、良いですか？」

ルーン？戻れる？俺が言葉の意味を理解せず首を傾げていると心眼が教えてくれた

【シズクの水を使った転移と同じだ。ただブリュンヒルデはルーン魔術と言う古い文字を用いた魔術を使う。その文字を刻んでおけばいつでも転移出来る。だがそれはお前のプライベートを侵害する事になるから許可を取ろうとしているんだ】

うーん……確かに急に現れたらびっくりすると思うけど、それは今必要なことだ。

「判りました。大丈夫です」

何時何が起きるか判らないのだから、俺の安全はとりあえず二の次。まずはアリスちゃんの安全を確保する為にルーン文字を刻むことを了承するのだった

「美神に私も協力する事を伝えたら戻ります。私が戻るまでは出歩かないでください」

【じゃあ、私も聖奈さんに付き合います。話し合いで聖奈さんが戻れない時、直ぐに戻るように】

おキヌちゃんは連絡役として聖奈さんに付き合おうと言って、2人で

美神さんの事務所向かった。

「とりあえず高校は休むか」

今のこの状況では出歩く事も出来ないの、高校に休むと連絡を入れる為に受話器を手にするのだった……

一晩事務所で子供の美神さんの世話をしただけ。それだけで私と美神さんは疲労困憊に陥っていた

「ほ、蛭ちゃん……大丈夫？」

「な、なんとか……」

今は落ち着いて眠っているが、さつきまでは酷い有様だった。外に行きたいわ、ママに会いたい、パパに会いたいと泣きまくり。玩具はこれは飽きた、新しいのが欲しい。絵本を読んでも同じ本を何十回と読まされる

「子供を舐めてたわ……前の私とくえすでよく平気だったわね？」

パイパーの時の事を思い出してみると、私やおキヌさんじゃなくて横島が率先して面倒を見ていた

「……基本的に横島でしたね。美神さんも神宮寺も懐いてました」

私は玩具とか、そう言うのを用意するだけだったと思い出しながら言う和美神さんは疲れた表情で

「横島君の天職は保父さんなのかもしれないわね」

ありえる……横島は人外に好かれるが、それ以上に子供にも好かれる。もしかすると横島の天職は保父さんなのかもしれない……そんな事を考える辺り相当疲れているのだと自覚する

「オーナー。おキヌさんと聖奈さんが尋ねて来ました。お通ししても？」

「良いわよ。横島君への連絡はその後にするわ」

手に仕掛けた受話器を元に戻し、おキヌさん達を迎える準備をする美神さんを見て、私はお茶を用意するためにキッチンに向かうのだった……

「横島君の方も今は何も無かったのね？」

「はい、シズクちゃんが一晩起きて監視してくれていたようで、今の所

は何も……シズクちゃんは今仮眠を取ると言ってノツブちゃんと交代して休んでいます」

英霊と水神の居る横島の家はある意味要塞と言えるだろう。更にチビにモグラと悪魔に竜種も居る、もしかすると今一番安全なのは横島の家なのかもしれない

「とは言え、私達もそっちに行くわけには行かないしね」

空き部屋はあるが、荷物置き場や除霊具置き場になっている。それを片付けさせて私達が行くというのも迷惑になる

「ルーン魔術でゲートを作つてあるので転移は出来ます。許可を頂けるのならば、こちらにルーン文字を刻んでこつちにもゲートを作りますが？」

確かにそれは魅力的な提案だけど、お互いのプライベートの問題が……

「心配していることは判ります。この件が終わればルーンは消しますよ」

それならばお互いどちらかが襲撃されている時にどちらかのほうへ逃げる事が出来る、両方襲われた場合はシズクと合流して水で転移すればいい逃げる手段はいくつあっても困らない、美神さんもそう判断したのかルーンを刻むことを許可した

「判ったわ。許可する、ルーンを刻んだら一度横島君をこつちによこしてくれろ？」

「判りました。直ぐに戻ります」

事務所の床に大きなルーン文字が刻まれ、消える。そしてそれから数秒後

「ルーン魔術すげえ」

「ほんとだねー、お兄ちゃん」

「ぐー……」

アリスちゃんと手を繋ぎ、眠っているシズクを背中に背負った横島が現れ。私も美神さんも保父さんが天職なんじゃと思うのだった……

「れーこね。つよくてかつこいいママみたいなjeeえすになるの！」

「そっかー！・れいこちゃんなら成れるよ！」

「じゃあ、じーえすになつたらよこしまをじよしゆにしてあげるー」  
令子ちゃんはおきて直ぐは泣き叫んだりして大変だったのだが、横島が近づくと驚くほどあつきり懐いた。私達の苦労は一体……そして自分の助手にするーと言っている過去の自分を見て悶絶している美神さん。今この瞬間に美神さんの黒歴史が量産されている……横島と過去の自分によって……

「令子ちゃん！・チビとモグラちゃんも可愛いよー♪」

「ほんとだー♪ありがとう、アリスお姉ちゃん♪」

アリスちゃんと一緒にチビとモグラちゃんと遊んできやつきやつと笑っている令子ちゃん。そしてそんな2人の様子を見ている横島を見てノツブが楽しそうに笑いながら

【圧倒的な父性力じゃな！・こりや良い父親になるぞ！】

保父さんと言うことばかりを考えていたけど、確かにその通りかもしれない……と言うか、煩惱が収まって、子煩惱が活性化しているんじゃないかと本当に思う

「まあそれもあると思いますが、横島の天職はGSではなく、保父なのでは？」

聖奈さんの問いかけに私と美神さんも声を揃えてそうかもと呟くのだった……

安全の為に分かれたけど、もしかしなくても最初から横島君が居れば私も蛸ちゃんもこんなに疲れることはなかったんじゃ？と思わずには居られなかった。むしろ纏まっているほうが安全だし、逃げるときにルーンの転移で横島君の家に逃げる。それが安全かもしれないわね……今横島君が令子ちゃんとアリスちゃんを見ている間に今後の方針を固めないか

「戦力的にも、逃走の準備も調える事が出来たけど、今後どうするかよね」

私やアリスちゃんを狙っている魔族は間違いなく存在する。ならば自由に出歩く事も出来ないとなると、令子ちゃんとアリスちゃんに

ストレスが生まれる。その前に何とか蹴りをつけたいと思うのだが「聖奈。ちなみに魔族のほうでリストアップされてる暗殺者候補とか知ってたりしない？」

「すいません、私今強制休暇で……情報は殆ど無いです。魔界でも有名な暗殺者の名前位は言えますが……」

……強制休暇って……魔族にも労働基準法とかあるんだろうか？  
と思いつながら知ってる限りで良いわよ？とと言うと聖奈

「ではまず偽の蠅の王 ベルゼバブですね。真の蠅の王 ベルゼブル様に魔装術で力の一部を借り受けて増長し、自分こそが真の蠅の王と名乗っている小物ですが、無限に分裂する能力は正直厄介かと」

……厄介なんてもんじゃない……人間から見れば小物なんて言えない大物じゃないの……他にも色々名前が出たが、正直誰が相手になっても厄介なんて物じゃない  
(どうしようか……)

情報を集める必要があるが、出歩いて狙われる危険性を高めるリスクを考えると……そこまで考えた所で脳裏に浮かんだ父の姿だ。ママと一緒に居た親父ならこの時の事を何か知っているかもしれない、そう思つて受話器を手にする

「どこに電話するんですか？」

私が受話器を手にした事に気付いた蛍ちゃんがそう尋ねて来る。  
私は小さく溜息を吐きながら

「父さんによ、もしかするとこの時の状況を何か知っているかもしれないから」

あんまり話をしたくないんだけど、そうも言つてられない状況なので電話を手にする

『もしもし東都大学動物行動学教室ですが？』

「美神公彦の娘ですが、父は今大学に居ますか？」

暫くお待ちくださいと言う声と共に受話器から音楽が聞こえ、それから数秒後

『お電話変わりました。先生の助手の松井です』

聞こえて来たのは父さんの助手の声。やっぱり日本に居なかった

か……落胆の溜息を吐く

『申し訳ないですが、先生は南米で動物の研究に向かつておられます』  
「あ、そうですか、失礼』ですが、令子さんから電話があれば渡して欲しいと手紙を預かっています』

どうも父さんは私から電話がある事を知っていたみたいね。受話器を手にしたまま眉を顰めると

『なんでも亡くなった奥さんからの伝言らしいです。先生は奥さんをととても愛してらしたんですね、先生はととても寂しがって』

「お互いに大人ですし、忙しいですから。また時間があれば会いに行くとでも言っておいてください。じゃ」

松井さんは私達親子の関係にあまりに口を出してくるので正直嫌いだ。だから強引に電話を切り、聞き耳を立てていた螢ちゃんと横島君に

「そう言うわけだから東都大学に行つて来るわ。出来るだけすぐ戻るから事務所で待機してて」

令子ちゃんも横島君が居るから今の内に行つて来ると言つて、私は着替えて東都大学へと車を走らせたのだが……

「その前に……」

GS試験でグループが祖父母にママの事を言っていた事を思い出した。色々あつて聞きそびれていたけど、今の内に聞いておいたほうがいいかもしれない

(今まで先生が何も言わなかった理由も知りたいしね)

先生は私の祖父母とママに何か起きたことを知っていた。でもそれを伝えなかつたのは何か理由がある筈……今まではそれを避けて来たけど、いつまでも逃げている訳には行かない。私はそう決意し、東都大学に向かう前に唐巢先生の教会へとハンドルを切るのだった  
……

お兄ちゃんの所に来たらお友達が増えてとっても楽しい♪黒おじさんと赤おじさんに会えないのは寂しいけれど、お兄ちゃんと令子ちゃんが居るからアリスは寂しくないよ

【ほれほれ、面白いじゃろう?】

「わーすごーい!きれーい♪」

お兄ちゃんの家新しく増えた家族。ノツブと名乗ったその幽霊のお姉ちゃんは人魂で器用にお手玉をしてくれてる。手の上でどんな色を変えていくのが不思議でとても綺麗だ

「みむうー!」

「うきゅー」

そしてそのお手玉の前で踊っているチビとモグラちゃんもとっても可愛い。本当はタマモを抱っこしたいんだけどタマモはお兄ちゃんの側から離れてくれない。お兄ちゃんが抱っこしている時だけ、そしてタマモの機嫌がいい時だけアリスも抱っこが出来る

(どうして懐いてくれないのかな?)

お兄ちゃんにあんなに懐いているのに……ちよつと理不尽だ。それにお兄ちゃんにもたれるようにシズクもちよつと羨ましい

(私もお姉ちゃんか、お兄ちゃんが欲しい)

黒おじさんと赤おじさんは優しいけれど、ゾンビのお友達はたくさん居るけれど、ぐーちゃんも私の側にいてくれるけれど、お兄ちゃんはいつでも優しく私を受け入れてくれるけれど……何時も会うことは出来ない。だから今はたくさん甘えて、たくさん遊んでもらう。だけど魔界に帰ってもお兄ちゃんは居ない、それが寂しい……お兄ちゃんとは言わない、お兄ちゃんは今を生きている人間だから、死んでから魔界と一緒に暮らせる。長い時間だけど、私はそれが待てるから……でもね、黒おじさん、赤おじさん、私は寂しいの……出来るならお兄ちゃんと一緒に良いの。それが叶わないならお姉ちゃんが欲しいの、ふと見上げた窓から大きな鳥の羽が落ちてくるのを見ながら令子ちゃんが離れたのを見てから

「お兄ちゃん、あつそつぽーッ!!!」

「わわっ!もうーアリスちゃん。急に飛びついてくるから驚くじゃないか」

「えへへ、ごめんね?」

今はまだお兄ちゃんと一緒に居れるから、分かれるその時までは一



杯甘えて、一杯遊んで貰おうと思いつながらお兄ちゃんの胸に顔を埋めるのだった……

リポート4 保父さん横島 その3

## その3

レポート4 保父さん横島 その3

美神が自分の父に会いに行くと言って事務所を後にした。本来なら単独行動は危険だが、逆に言えばこっちにターゲットが集まっているので美神が狙われないという可能性もある。しかし今回美神が単独行動をした理由で思い当たるのは、やはり複雑な家族関係になるのかもしれないな……そう思うと、やはり強引に付き添う事が出来るわけも無い。シズクによる保険は掛けているが……

「……私は横島は護るが、それ以外は正直どうでも良いんだがな」

【そう言うな。美神が死ねば、横島が悲しむぞ?】

美神は念の為に水のペットボトルを持っていった。だからもし美神がピンチだったのなら転移してくれと頼んだのだが、シズクは思いつきり嫌そうだ。これが横島なら言わなくてもやってくれるんだがなと苦笑しながら

【どうだ?何かの気配は感じるか?】

【うーむ、今の所は感じないの!見つければ打ち抜いてやるわ】

火縄銃を肩に担ぎ、かっかつかと笑うノツブ。横島は今令子とアリスを寝かしつけているので、私を机の上において作戦会議を頼むと言って行ったのでこうして話し合っているが、いつまでも籠城を続けるわけには行かないし、難しい所だ

「なにか妙に鳥が集まっていますね?」

聖奈が窓の外を見てそう呟く、確かに事務所の回りを鳥が飛び交っている。しかもかなりの数だ

【なにか訴えかけているようにも見えますね】

その鳥達は代わり代わりに窓枠の近くにとまり、まるで懇願するかのように、窓と嘴で突きこちらを見つめ続けている。鳥達が何を訴えかけているのか?鳥の言葉を理解出来ない私達にはその何かを理解することが出来ないのだった……ただ1人、横島が寝かしつけようとしている1人の少女を除いて……

唐巢先生の教会に行くと、唐巢先生は私一人で来た意味を悟り、ピートと牙が封印されて半泣きのシルフィーちゃんに外出するように告げ私を教会の奥へと案内してくれた。ブラドール伯爵は不在らしいが、出来ればブラドール伯爵にも話を聞いて、もっと詳しく理解したいと思ったが、今の私の状況と時間が無い。また後日尋ねてくることを約束し、父の事。そしてチューブラーベルについてだけ教えて欲しいと頼んだのだ。

『判った、そう言うことなら簡潔に話そう』

自分が無理な要求をしていると判っていたのに唐巢先生は嫌な顔をせずに教えてくれた、ママと父さん……そしてチューブラーベルの事を……

「なるほどね、ふざけた真似をしてくれたじゃないの」

コブラに乗って東都大学に向かいながら、聞かされた話を再び頭の中で整理していた。元々美神の家は六道の家にも引けを取らない霊能者の一族だったらしい、所がママに取り憑いたチューブラーベルの除霊に失敗、祖父母は死に。ママもチューブラーベルに取り憑かれ余命も幾ばくも無かったと……それでもGSとして活躍し、祖父母の汚名を晴らそうと努力していた

「なんで教えてくれなかったのよ」

父さんの精神感應能力の応用でママに取り憑いたチューブラーベルを自身に取り込み、自殺する。そしてママを救う、それが父さんのやろうとした事で結果はチューブラーベルを倒したが、父さんは死ななかつた。そしてママの方から結婚を迫ったらしい……

「大体私を避ける理由がふざけるなって話よッ！」

ママは父さんと一時的に精神が繋がっていた事もあり、霊体が交じり合い。父さんの暴走している精神感應能力に耐性が付いた。でも私には耐性が無いので自分の娘の心を読むのが嫌だったとか、正直ふざけるなど言いたい

「絶対今度南米から戻ってきたら文句を言っつてやる。勝手に思い込むんじゃないわよ」

しかも父さんは父さんで私を避けながらも、私の生活費を振り込んだり、こつそり私の運動会や、授業参観、そしてGS試験までも見に来ていたと言う。唐巢先生は

『公彦さんは人見知りか激しい上に、物凄くネガティブなんだ、君に会いたいけど、嫌われるのが怖いって良くこの教会で隠れてたよ』

「知るかッ!!」と言うか帰国しているのなら顔くらい見せろ!!」と言うか、その時期には私も教会にいたし!唐巢先生も先生だ。幾らなんでも娘から逃げ回る父親がどうなのか?位は思っただけだった

「あー最悪、今までの父さんのイメージが崩れたわ」

鉄仮面と言う所で外見の印象は最悪だったが、縁に話もした事が無かったので性格などは想像するだけだったが、まさか人見知りかつネガティブで私に会いたいけど隠れているなんて思っても見なかった「と言うか!会いたくないなら会いたいで自分で電話しろおッ!!」

何時も時間はあるか?と電話してくるのは松井さんだった。だから私は父さんがママの事を忘れて松井さんと再婚するのでは?と思っていた。だから私に会いたいという電話を松井さんにさせてくれるのだと思っていた

「よし、決めた。一発殴ろう」

今から丁度東都大学に行く。そこで父さんのスケジュールをこつそりと聞いて、日本に戻ってきたら全力で殴ろう。その後は……

「ママの話をしながらご飯でも食べようかしら……」

「そうだ、それがいい。その為にもまずは……」

「とつとつ過去の私とアリスちゃんを狙っている魔族をしばき倒すわ」

私はそう呟き、アクセルを強く踏みしめるのだった……

「本当まどろっこしいことをするわね」

松井さんから渡されたのはかなり厚みのある便箋。態々送ってこないで、松井さんに預けていたのは……恐らく送付できない理由があった

「やっぱり、ママからの手紙だわ」

便箋の中からはボロボロになった便箋が出てきた。きつとこれに

ママを襲っていた魔族のヒントがある

『令子へ、貴女がこの手紙を読んでいると言うことは私から子供の時の貴女を預けに行った日の翌日の筈です。貴女には隠していました。私には時間を自由に移動する能力があります。しかしこの能力は歴史改変になり、あまり使いすぎると神魔に危険人物と判断され、処罰されることになり滅多に使う事の出来ない能力です。でも時々こつそりと貴女の事は見に行っています、2人の弟子をとって立派な師匠とし2人を導いているのですね。私はとても安心しました』

師匠か……正直私はまだ弟子を取るには早すぎたと思っています。でも横島君と螢ちゃんのおかげで私自身も成長出来ていると実感している。だから私は今後も2人の良き師匠として頑張って行きたいと思っっている、そしていずれは独立させて事務所を持たせてあげたいと思っっている

『今貴女の元には幼い貴女とアリスちゃんと言う少女がいる筈です。良いですか？令子、貴女自身もそうですが、アリスちゃんを護るので。彼女は魔界の重鎮の義娘なのですから……』

それは判っている。黒介、赤介と名乗る2人組みは私が逆立ちしたって勝てないほどの魔族だと

『今から指示する事を守りなさい。いいですね？敵は……』  
「なんですすって!?!」

読み進めている内に私は驚愕の悲鳴を上げた。そしてそれから数秒後

【美神さん！横島さん達が魔族に追われて事務所を出ました！早く合流してください！】

空を飛んできたおキヌちゃんの悲鳴にも似た声に頷き、私はコブラの元へ走り、その場を後にするのだった……

『くつくつく上手く行っているようだな』

令子がその場を後にしてから影から這い出るように現れた魔族は邪悪な笑みを口元に浮かべ、広がり始めた雨雲の中へと消えるのだった……

大粒の雨が降る中、俺は令子ちゃんとアリスちゃんを抱えて走り回っていた。シズクや聖奈さんとは分断され、蛍とはさつきコンクリートの橋を破壊された時に逸れてしまった……

「!!」

悲壮そうな顔をして翼の弾丸を飛ばしてくる翼のある魔族。執拗に足を狙ってくるその翼を避け続ける事が出来たのは心眼のおかげだ

「その場でターン！、10秒停止！右斜めに全力で走れ！」

指示は細かく、そして無茶な物が多いがそれでも俺の体力なら走り続ける事が出来た

(さ、流石にやばいか……)

だがそれにも限界が来る。幾ら軽いと言っても人間2人を抱えている、そういうつまでも逃げきれぬ物じゃない

「……」

俺達の前に立って辛そうな表情をする魔族……今こうして見ても、手が震えているのが判る

「お兄ちゃん」

「よこしま」

怯えて震えている令子ちゃんとアリスちゃんを下ろして、庇うように前に立つ

「あんた、ほんとはこんな事したくないんじゃないのか？」

足を狙わず、俺の頭なり、腹を狙えばそれで終わっていた。俺は死んで、アリスちゃんと令子ちゃんは恐らく怪我をして動けなくなる。誰が考えたってそれがもつとも賢い、だがそれをしなかった理由を考えると思いつくのは1つだけ、この魔族は人を殺したくない

「……でも殺さないで、あたいが殺される！ごめん!!」

謝罪と共に放たれた翼の弾丸が俺の左胸を……そしてアリスちゃんと令子ちゃんを貫く、その衝撃で吹っ飛ばされながら俺が見たのは、こつちに向かってくるコブラを運転する美神さんの姿だった……  
「良くやったハーピー」

「……」

目を見開き倒れている横島とその横島にすがり付いて泣いている子供2人を見ながら、空から1体の異形と男が降りてくる

「これであたいを開放してくれるんだろ？」

震えながら尋ねるハーピーに異形の方が喉を鳴らしながら

「ああ、開放してやるとも、辛い生からな」

「ごはっ……」

異形が手のひらを向けると、そこから槍が飛び出しハーピーの身体を貫く、口から大量の血液を吐き出しながら倒れるハーピーを見ながら異形は楽しげに笑いながら、ハーピーを縛り付けていた呪いの装飾品を踏み砕く

「これでデタントは崩壊。横島忠夫の死と美神の一族の根絶、そしてベリアルとネビロスの寵児のアリスの死で完成する」

異形が翼を奮うと、漆黒の翼が横島達を飲み込む、鋭利な形状を持つ翼だ。コンクリートを切り裂き、宙に舞う砂煙とコンクリートブロックを見て異形はほくそ笑む。これで全てが戦争に向かって流れていくと

「ああ、そうだな。これでくだらない仲良しごっこも終わりだ」

男の姿が水になり、次の瞬間には着物姿の竜神の姿になる。竜神はまだ離れてた所でコントロールを失うコブラを見つめ

「確定したな、美神令子が死んだから、未来の美神令子が消えた。これで私の目的も完了だ」

2人が後はつと同時に呟いた瞬間。第3者の声が響いた

「後は横島達を殺したハーピーを殺したとし、自分達の地位の確立と言う訳ですか？」

巨大なミスリルの槍を手にしたブリュンヒルデを見て、驚愕に目を見開く異形に今度は

「くたばれええええ!!」

コンクリートをコブラのタイヤで抉りながら、美神の怒声が響き渡り、2体を体当たりで弾き飛ばす

「ば、馬鹿な!? な、何故!？」

過去の美神令子が死んだのだから、未来の美神令子も死んでいる筈なのに目の前に居る。その事に困惑している2人に更なる声が重なる

「……私が横島を死なせるわけが無いだろう。馬鹿者が」

困惑している魔族に淡々としているが、凄まじい激情の込められた眼で睨みつけるシズク。そしてその影から

「あいてて、氷でも完全に防げねえとかはんばねえな……」

「ご、ごめんよ？あ、あたいも手加減したつもりだったんだけど」

死んだ筈のハーピーと横島が身を起し、火縄銃を担いだノツブと精霊石を手に行っている螢。そしてその背後で馬鹿にするように笑っているタマモを見た事で、自分達は嵌められたのだと今更気付くのだった……

少し時間は遡る、それは事務所に大量の鳥が集まっていた頃。横島によつて寝かしつけられようとしていたアリスが起き上がり叫んだのだ

「あの鳥さん達助けてって言うてるよ？優しいあの人を助けてって」

助けて？その言葉の意味が判らない横島達に対してアリスは窓を開けて

「うん、うんうん。判ったよ、お姉ちゃんやお兄ちゃんに伝えるから、貴方達はその人を連れて来て？」

鳴き声を上げて飛んでいく鳥を見ながらアリスは振り返り

「あのね？私達を殺せって言われてる人は脅されてるんだって、そんな事したくないって泣いてるんだって。お姉ちゃん、お兄ちゃん。助けてあげて」

涙を流しながら助けてあげると懇願するように言われた横島と聖奈はシズク達の意見も聞かずに

「任せろ。だから泣かなくて良いんだよ」

「ええ、任せてください。多少事情を聞く事になると思いますが、必ず助けます」

その言葉にアリスが頷き、横島がその涙を拭いていると

「えつと……鳥達に聞いたんだけど……あたいを助けてくれるって本当？」



数分後におどおどとした様子で訪れたハーピー。首から下げられた禍々しい魔力を放つ首飾りとその弱りきった姿を見て嘘ではなく、本当に助けて欲しいのだと悟った蛍達は事務所の中に招き入れ、そしてこの狂言を計画し、ハーピーを脅している何者かをおびき出す作戦を立てたのだ。美神の所におキヌが来た時に持っていたのはこの計画の内容を伝える手紙であり、全ては横島達の手の中で行われていたのだ

横島は凄いですね。私は愛用の槍を握り締め、背後のタマモ達の話聞きながら、目の前に居る竜族と魔族を睨みつける

「精霊石貸してくれたのは嬉しいけどさ？血生臭すぎるわよ？」

横島は氷で身を護っていたが、ハーピーはそうは行かないので九尾の狐のタマモに精霊石を与え、妖力を増幅し幻術を使ってもらおう。あの2人は分断したと思っていたようですが、実際は横島の直ぐ近くを走っていたのだ

「……それはすまなかった、でもそれしかなかった」

「ま、私は良いけどねー？これで横島と何時でも話を出来るし？」

精霊石のペンダントを握り締め、私にありがとうと笑うタマモ。加工した精霊石で無ければ装飾品として持てないので、私が所持していた精霊石のペンダントをタマモに与えたのだ。いざとなれば経費でまた手にすることも出来るのでこのままタマモに持っていて貰おうと思っっている

(しかし、本当に貴方は凄いですよ)

私やシズクの反対を押し切り、敵を誘き出すにはこれしかない。最後まで渋る蛍達を根気良く説得し、この作戦を作り上げた。チビ達は横島が危ないと思えば、勝手に動き出すので今回は可哀想だが、ケージの中に閉じ込めて来たが、それで良かったと思っている。アリスちゃんと令子ちゃんに危険性を説明し、自分が必ず護るからと約束し、私の用意した防具を全て2人に持たせ。自分はシズクの氷と防御符だけで身を護ることにし、自らを囷にする作戦を立てた。敵を追い

込む場所としてこのショッピングモールと雨が降る時間を待つと言  
い出した横島。そこには雨が降っていればシズクが自分を必ず助け  
てくれるという信頼と、私達が分断された振りをするのに適した立地  
を見出す戦術眼

(自ら動かぬ王に兵は従わぬと言いますが……貴方には王の資質があ  
る)

人を纏め上げるカリスマ、もし世が戦国時代や戦争などが起きる時  
代で、そう言う教育を受けていたのなら人の上に立つ素質は十分すぎ  
る。更には思い付きだと言っていたが、その柔軟な発想と機転は私か  
ら見ても十分に賞賛するレベルだ。横島は戦士としても軍師として  
も大成する素質もある。私が英雄と見定めたのが間違いではないと  
思い知らせてくれた。これだけお膳立てして貰ったのだ、後は横島が  
望むだけの成果を上げるだけだ

「そうですか、貴方でしたか。確か……ザックスでしたわね？」

それなりに武勲を挙げ、それなりに手柄を立て続ける魔族。そう言  
えば今回のベリアル様とネビロス様の投獄を提案したのもザックス  
だと聞いていた。なるほど魔族と結託して、その上で情報を得てお互  
いにお互いの情報を得て、派手な武勲ではないが、安定して武勲を挙  
げ続け発言力を高めていたと言う事ですか

「聞いていない！聞いていないぞ！ザックス！何故ここにシズク様が  
いる!？」

シズクの姿を取り乱す竜族を見つめていたシズクはそうかと呟き

「……お前はウーロンだったか？いや……シンだったか？……まあ  
どっちでもいい……横島に手を出したお前は殺す」

「ひ、ひいいい!？」

竜神が悲鳴を上げて逃げ出すが、雨が降っている以上この場所は全  
てシズクの領域だった。

「……タマモ」

「オーライ」

タマモにシズクが目配せすると、横島達の回りに奇妙な妖力の流れ  
が発生する。恐らく幻術で視界と聴覚を誤認識させられているのだ

ろう

「ツギやあああああ?!?」

雨全てが刃となり逃げていた竜族の全身を切り刻み、水溜りからは水の槍が大量に突き出されその身体を刺し貫く

(むちやくちや怒っていますね)

横島はシズクにとつての逆鱗だった。それに触れた敵をシズクは当然ながら許す訳も無く

「……魂ごと喰らってやる」

「あ、い、いやだあああああ?!?」

水溜りから顔を出した巨大な竜の頭が悲鳴を上げる竜族を飲み込む。肉を租借する音が数秒響いたと思うと竜の頭は水となって消えた……

「……もう終わったぞ? 聖奈後の処置は頼む。監獄にでも入れておいてくれ」

……横島達には喰らったと言いたくないと言う事ですね。その為の幻術ですか……まあ1人残っていれば問題ないですけどね、私はその判断し小さく領きながら

「ザックスと共に魔界正規軍で捕らえます」

もう喰われて存在しない竜族。本当ならもう少し情報が欲しかったが、仕方ない。目の前に居るザックスだけで良しとしましょう。手にしていた槍を消し去りルーン魔術を発動させる準備をする

「舐めるな! ルーン魔術」  
「ルーンを使うまでもありませんもの、だって貴方……もう終わっていますわ」

ザックスが振り返った瞬間。背後から飛んで来た無数の結界札と精霊石の矢がザックスの手足を打ち抜き、結界札で完全に拘束する。ここまでなれば態々私が手を下す必要も無く、自殺を防ぐために口にルーン魔術を施すだけで終わったのだから……

「さっすが、ママ。良く横島君の作戦を聞き入れてくれたわ」

「ま、最初は驚いたけどね? でも良く許可したわね?」

「ううん、許可なんかしてないわ。事務所に戻ったら説教よ」

軽く放電している若い美神美智恵に向かって笑いかけている美神

だが、事務所に戻れば説教の言葉にこの作戦を実行する協力はしたが、認めてはいないというのが良く判った。そんな2人の隣でおキヌが大きく深呼吸を繰り返していた

【はー……はー雷の落ちる所を探し回るのは疲れました】

姿が見えなかった、おキヌはどうも未来に転移してきた美神美智恵を捜しに行っているのか……本来時間移動は重罪だが

(許可が下りているんですね)

昨日ここ数日の間の時間移動の許可が神魔から下りている、それはもしかすると美神美智恵もまた最高指導者からの指示を受けて行動しているという証拠だ。ならば私は何も言わない、いう必要はない。そしてそれを美神に伝える必要も無い

「ではザックス。貴方はこれから魔界正規軍の元へ送ります。後はお父様にお任せしますわ」

脱走しようとしているザックスの頭を蹴りつけてから、私はルーン魔術でザックスを閉じ込めた檻を魔界正規軍の元へと送った。そして振り返ると

「やつば超いてえ……」

「きゃあああッ?!お、お兄ちゃん!?お兄ちゃんしつかりして!」

「ママー!お姉ちゃん!!よこしまがしんじやううううう!!」

いくらシズクが作った氷があつても、そこは魔族の攻撃を受けた横島。緊張の糸が切れ痛みが出てきたのか白目を向いてひっくり変える姿を見てアリスちゃんと令子ちゃんが悲鳴を上げて

「ご、ごめんじゃん……て、手加減はしたつもりなんだけど……」

おろおろしているハーピーに話は後と叫んだ蚩は横島を抱き抱えて

「意識は無いけど、脈もあるし……骨折とかもしてるわけじゃないわね……打撲と疲労かしら?と、とりあえず聖奈さん!事務所!事務所に跳んでください!」

事務所にルーン文字を刻んでおいて良かった。コブラに乗ってきた美神に先に戻りますと声を掛けてから、私は転移を発動させ、その場を後にしたのですが、消える寸前に見た人影を見て小さく苦笑した

(貴女もいたのですね。神宮寺くえす)

雷に照らされた人影、長い銀髪を雨風に揺らしながら横島を見つめている神宮寺くえす。それほどまでに心配するのなら合流すれば良かったのと思いつながら私はその場を後にするのだった……

レポート4 保父さん横島 その4へ続く

## その4

レポート4 保父さん横島 その4

アシユタロスと戦うつもりだった私と交代して、子供の時の令子を連れて来たけど……正直ちよつと驚いていた

(凄くしつかりしてるわ)

私の記憶の中にあるお金にがめつい令子よりも数倍しつかりしていて、私の理想とした令子の姿だった。だが

「令子？それくらいにしたら？」

「まだ足りないわ!!」

事務所に令子が戻ってきてから4時間説教が続いている。正座している横島君達の顔が実に面白い事になってるので、流石の私も助けを出すことにしたのだが、令子の怒りは相当深く

「でもあんまり説教しすぎても酷だね。横島君はかなり頑張ったのよ？」

令子が居ないからと言う事で作戦を考えた。助けて欲しいと訴えているハーピーも助け、自分達も助かる作戦を考え実行した。確かに自分と令子ちゃんとアリスちゃんを囿にしたのは正直駄目だったと思うけど、正直よく考えたと思う

(頭はやっぱり良かったのね)

この時の横島君は馬鹿な事をしていたと令子達には聞いていたが、それはお調子者の仮面を被っているだけだと思っていた。実際机の上に並べられた作戦の案を見ていると本当はかなり賢いと言うのが良く判った

「判ったわママ。とりあえず今後は独断行動絶対禁止！それと横島君は1週間除霊助手の仕事も無し！アリスちゃんの面倒を見てなさい、それと！蛍ちゃん！シズク！横島君は時々とんでもないことをやるんだからしつかり止めなさい!!」

「は、はい……判りましたあ」

「す、すいません……」

正座で足が痺れたのか事務所の床に崩れ落ちながら、頷く横島君と蛍ちゃんを見て怒った様子で自分の椅子に座る令子を見て、これなら大丈夫だと確信した。弟子の事を心配し、本気で怒る。横島君と蛍ちゃんのおかげで令子も成長していることを目の当たりにし、私は笑みを零しながら

「とりあえず軽く夕食でも作るわ。話はその後で」

令子達も疲れているだろうから私が夕食の準備をするわと声を掛け、私はキッチンに向かうのだった……

美智恵さんが用意してくれたパスタで軽く空腹を満たした所で事務所の隅で、ご馳走様でしたと手を合わせるハーピーを見つめる。酷く弱気でびくびくとしている。美智恵さんは時間移動の疲れもあると言う事で休むわと言って寝室に向かつてしまったので今にはここにはいない。無理に話し合いに参加してくれとは言えないので、仕方がないことだけど。出来れば美智恵さんの意見も聞きたかったわね

「みむー！」

「うつきゅー！」

「え。あ、う、うん……」

チビとモグラちゃんと会話出来るようだけど、一体何の話をしているのだろうか？

「パスタ美味しかった？」

「うん！すつごくおいしかった♪ね、令子ちゃん」

「うん、すつごく美味しかった♪アリスお姉ちゃん♪」

口の周りをケチャップでべたべたにしているアリスちゃんと令子ちゃんの口をハンカチで拭っている横島はとりあえず、話し合いには参加出来そうに無いわね

「魔界正規軍としてはハーピー。貴方を被害者として保護することは可能です、可能ですが……正直に言うとな身の安全を100%は保障できません。今魔界も天界もスパイ騒動でバタついていきます、あのザツクスや竜神を見れば判るでしょう」

確かにハーピーを脅しているのが魔族と竜族だなんて思ってもい

なかった。つまり今は魔界や天界は決して安全地域ではないということだ

「じゃあ、聖奈さん。ハーピーさんは人間界で匿えば良いんじゃないのか？」

散歩無しで不機嫌そうなチビとモグラちゃんをアリスちゃんと令子ちゃんと一緒にボールで遊んでいる横島が気楽そうに呟くが聖奈さんがそれは駄目ですねと呟いてから

「それも難しいですね。もし事情を知らない、魔界正規軍などに見つかれば間違いなく、話を聞く聞かない以前に抹殺されます」

抹殺と聞いて顔を青くするハーピー。詳しく話を聞きたいだろうし、何とかして彼女の身の安全を確保できないだろうか？

情報を持っているハーピーすらも抹殺対象になっているだろうし……かと言って魔界正規軍とかも安全とは言えないとなると……どこで匿うかが問題になってくる。最悪小竜姫様に事情を説明したら妙神山で匿って貰えるだろうか？と考えていると

【じゃああれはどうじゃ？眼魂の中に隠れて貰うか】

ノツブがそう提案するが、今までは幽霊だから隠れる事が出来たが、ハーピーが隠れる事が出来るだろうか？

「あ、あたいはどうすればいい？」

見捨てないでと濡れた目で見つめてくるハーピー。ここまで助けてと言っている相手を見捨てる事は出来ないし……

「いや私を見ないでよ。別に暫くの間匿うことくらいは構わないわよ？でも何時までもは無理よ」

【そうですね、私の結界は外からには強いですが、中の反応を完全に隠すことは出来ませんから】

私の事務所今人外率半端無いんだからと言う美神さん。ま、まあ確かに今事務所の人間の比率が少なすぎる。しかしいつちゃんが護りきれないと言うと、事務所で匿うと言うことは出来ない。それじゃあ彼女を匿う場所が無い……どうするか悩んでいると

「ねえ、お姉ちゃん。私が黒おじさんと赤おじさんに頼んであげようか？」



「え？」

誰もが妙案を思いつかず、唸っているとアリスちゃんがチビを膝の上に乗せ、頭を撫でながら

「黒おじさんと赤おじさんはとつてもとつても凄いの♪今はお仕事でお家に居ないけど、黒おじさんと赤おじさんが居ればお姉ちゃんもきっと大丈夫だと思うよ？オーデインおじちゃんも私が説得してあげるよ？」

オーデインおじちゃん？私達の視線が聖奈さんに集まる、聖奈さんの魔族としての名前はブリュンヒルデ。戦乙女ヴァルキリーだ。つまり……オーデインは聖奈さんの父親になるはずだ。そして聖奈さんは魔界正規軍の副司令……つまり……

「私の父で魔界正規軍司令です」

……それをおじちゃんと呼べるアリスちゃん。それはきつと黒おじさんと赤おじさんと言うのが魔界の中でも相当な重鎮と言う事で……そんな2人に匿われる。それは何よりも安全と言うことの証明だった

「ほ、本当？嘘じゃない？」

「うん！アリスね、お姉ちゃんが欲しかったの♪お姉ちゃんがアリスのお姉ちゃんになってくれるならお願いしてあげるよ」

なるなる！アリスちゃんのお姉ちゃんになる！と何度も頷くハーピー。よっぽど安心したのか、涙を流している。

「当たり前だけど、魔族にも感情があるのよね」

【何を当たり前前を言っている？生きているんだから感情があつて当たり前前だろう？】

美神さんの眩きに心眼が反応して厳しいことを言ってるけど、まさにその通りだ

「黒介さんと赤介さんは1週間ほど仕事が入っているので、1週間の間だけ人間界で暮らしてください。その後はアリスちゃんと貴女をあの方達の宮殿にご案内します」

何にせよこれで、当面の問題は解決したわね……安心したからか、どつと疲れが出てきた

「じゃあ、俺は家に帰るわ、アリスちゃん行くよー」

「はいい♪じゃあねれーこお姉ちゃん、また明日」

「うん、また明日あそぼーねー♪」

令子ちゃんに見送られながら横島達が事務所の床に刻まれたルー  
ン魔術で家に帰っていく、私はどうしようか?と思っていると美神さ  
んが

「蛍ちゃんも疲れてるでしょ?今日は泊まっていくと良いわ。おキヌ  
ちゃん、確か布団が余ってたわよね?」

「はい!今用意してきますねー、美神さんと蛍ちゃんはお風呂で汗を  
流してきてください」

除霊の関係で泊まる事もあるからって美神さんの事務所に着替え  
を置いておいて正解だったわね。雨と汗でびしょびしょで気持ち悪  
かったので、おキヌさんの言葉に甘えて私と美神さんは浴室に向かう  
のだった……

美神さんから除霊の付き添い禁止と言われたので、ここ数日俺は令  
子ちゃんとアリスちゃんの面倒を見ていた。蛍もあげはも同年代だ  
から一緒に面倒を見てくれる?と言うのは今日はあげはちゃんも一  
緒だ

「あ、あげはでちゅー」

「アリスはアリスだよー♪よろしくねあげは」

「れーこだよ♪」

ニコニコと笑いながら自己紹介をしているアリスちゃん達を見な  
がら、持ってた玩具を確認する

(ゴムボールとフラフラープ……めんこは無理かな?)

俺自身はめんこは得意だけど、アリスちゃん達じゃ無理かな?公園  
の遊具とゴムボールで遊ぶかな?と思いいボールを取り出して

「アリスちゃん、行くよー?」

「うん!」

来ーいと笑うアリスちゃんにボールを軽く投げ渡すとアリス  
ちゃんは今度はあげはちゃんに行くよーと笑い、ボールを投げ渡す。

そんな光景を見ているとふと思うアリスちゃんも懐いてくれているし、令子ちゃんも懐いてくれているので一緒にチビ達の散歩をしたり、公園で遊んだりしているとふと思うのだ

(保父さんって案外天職?)

GSになりたいというのは嘘じゃない、だがこうして令子ちゃんやアリスちゃんと遊んでいると気持ちが高揚するのにも本当だ。もし俺が虫に出会わなかったら、もしかすると保父さんを目指していたのかもしれないと考えながら、投げ渡されたボールを受け取り、渡してくれた子と別の子に渡して遊んでいると

「お兄ちゃん！ブランコ！ブランコ押してー♪」

「れいこもー♪」

ボール遊びに飽きたのか、ブランコに座って俺を呼ぶ令子ちゃんとアリスちゃんの声で思考の海から引き上げられる。

「うっし、じゃあ行くかタマモ」

「コン」

俺の隣で丸くなっていたタマモを頭の上に乗せてブランコに向かう。タマモは精霊石があれば人間の姿を取ることが出来るが、少ない霊力を精霊石で増幅させているだけなので長時間変化していると調子を崩す事が判った。事実急に狐の姿になってぐったりとしたタマモを見て絶叫した物だ

「明日は精霊石貸してやるからな？」

「クウン」

精霊石で人間になっていいのは、1週間の内3日。しかも連続では禁止と言われたので俺としてもそれに従うしかない。タマモは大事な家族なので弱った姿は見たくない、なのでタマモは欲しがりますが俺は精霊石を取り上げた

「みみむー」

「うきゅーー」

砂場で遊んでいたチビ達が足元に駆け寄ってくるので、拾い上げて肩の上に乗せて俺はブランコのほうに歩き出すのだった……

「「すー……すー……」」

「よいっしょつと」

遊び疲れたのかベンチで眠ってしまったアリスちゃん達を背負って家へ向かう。タマモも頭の上に乗っているし、チビとモグラちゃんも両肩で眠っている上に、3人も背負うと流石に重いしバランスを取るのが難しいなあと苦笑していると心眼が

【横島は子供が好きなんだな】

穏やかな声でそう尋ねて来る。俺は3人を落とさないように気をつけながら、ずり落ちてきたあげはちゃんをしつかりを背負いなおしながら

「そりや子供は好きやで？ロリコンとか言う意味じゃなくてな？子供は護ってやらなあかんからな。それに俺自身は怒られた記憶しかない。だからその分甘くなるのかもなあ」

お袋と親父には怒られた記憶しかない、だからその分甘くなるのかも？と苦笑しながら言う

【お前は両親が嫌いか？】

「いや？嫌いではないよ？ちよつと苦手だけだな」

親父とお袋が嫌いか？といわれると違うと断言出来る。確かに苦手意識はあるが、親が嫌いなんて思った事は無いよ

【そうか、それなら良い。厳しく育てる事がお前の為になると思っていたんだらうな】

俺としてはもう少し優しい方が良かったぜと呟き、令子ちゃんやアリスちゃんを落とさないように気をつけながら、帰路についたのだ

「はい、はい。判りました、じゃあ令子ちゃんは預かっておきますね」  
『ええ、ごめんね。近い内にはまた雷雨が来るらしいから、それまでは迷惑を掛けるけど宜しくね』

令子ちゃん達をソファアに寝かし、事務所に電話すると除霊の後の打ち合わせの話で暫く迎えにいけないので、預かって欲しいと言うので判りましたと返事を返し受話器を元に戻す、ルーン魔術の転移陣はもう消されてしまったのでそれで向こうに飛ぶって事も出来ないし、寝ているアリスちゃんを置いて出掛けることも出来ないの

美神さんが迎えに来るのを待つ事にし、空いているソファに腰掛け溜息を吐くと

「……子守で疲れたか？」

机の上にお茶とお菓子を置きながら尋ねて来るシズクに良いやと返事を返し

「全然。見ていると穏やかな気分になって落ち着いてくるよ」

子供の持つ癒しパワーは凄いと苦笑しながらシズクが用意してくれたお菓子に手を伸ばそうとすると

「つとっ？どうした？」

無言で膝の上に頭を預けてきたシズクにどうかしたか？と尋ねるとシズクは

「……お前が疲れていないのなら私を休ませてくれ、流石に疲れた」

ふあっと欠伸をするシズク。確かに魔族とかの襲撃は退けた、けどそれで終わりのな筈はないとずっと警戒してくれているシズクの疲労はきつと誰よりも重いはずだ

「判った。今はゆっくり休んでくれ」

「……ん」

目を閉じたシズクの髪を撫でながら、俺の変わりに除霊の助手に行っているノツブちゃんが帰って来るまではこうしていようと思っ  
た……

「ワシ、帰れないんじゃないか……」

なお既にノツブは横島の家まで帰って来たのだが、横島から見えない角度で鬼の表情をしているシズクに睨まれ帰るに帰れず、更に

「シズクう……そんなに私に見せ付けて楽しいですか？私を怒らせて楽しいですか……で、でも会いに行くにはタイミングが重要だって、そのタイミングって何時なんですか……誰か私に教えてください……」

(何これ怖い……)

白い着物姿の竜族の少女が隣で口から火の粉を撒き散らしているのを見て、ノツブは考えるのを止め、帰る予定時刻までの1時間をこの場で耐える事にするのだった……

今日の除霊はちよつと色々ハプニングがあつて、その後に問題があるって事で令子が依頼主の所に話し合いに行つてしまったので、今事務所には私と蛍ちゃんとおキヌさんの3人といつちちゃんと呼ばれている人工幽霊だけ……これは良い機会かも知れないわね

「さてと令子もいないし、1度おさらいしておきたい事があるからいつちやんだったかしら？暫くの間干渉しないでくれる？」

【判りました？では少しの間事務所などの結界の強化などを行います】

いつちゃんの気配が遠ざかったのを確認し、怪訝そうな顔をしている蛍ちゃん達を見ながら

「そんなに警戒しなくてもいいでしょ？蛍ちゃん、氷室絹さん」

私の言葉にまさかと言う顔をする蛍ちゃんとおキヌさんに

「お父さんが大好きだからつて逆行までするなんて、おばあちゃん流石にちよつと予想外だったわ」

ふうつと溜息を吐く、これは本当に祖母として心配せざるを得ない事態だ。私の言葉を聞いて私も逆行しているのだと気付いたのか

「お、おばあちゃん!?え?え?!なんでえ!?!」

【ま、まさか横島さんを狙つて!?!】

……頭痛を感じながら違うわよと眩き、鞆からノートを取り出しながら

「貴女達が逆行してからの事故でねえ。不意にこの時代に来ちやつたのよ。今は神魔と相談して人間界側の情報を集めるつて事で協力体制にあるわ、優太郎さんにも会つて話はしてるから、蛍ちゃんは一応伝えておいてくれる?直接行くのも難しいから、それと本来この時間軸に来るはずの私はもう南米で隠れてる。そのうち私と統合されるか、私が未来に戻るか?のどつちかだと思うけど、それは先の話だから今は考えなくても良いわ」

とりあえず対消滅しないつて事だけは判つているので心配する必要は無いわと前置きしてから

「とりあえず今私が得ている情報だけ教えるから、それを覚えて。時

間が無いから質問は無し。話し終わって令子が戻ってなければ一応は聞くわ」

令子はある事である除霊の依頼を受ける数を減らしている。いずれ帰ってしまうと判っているから、それまでは私と一緒に居たいと思っているのだろう。これは私が令子の為と動いて令子に与えてしまったトラウマの所為だ、だから時間は短い、残っている時間で私が得た情報を全て伝える事が出来ればいいんだけど

「まずは魔界からの情報だけど真の蠅の王ベルゼブルが近い内に人間界に来るらしいわ、自分の名を騙る偽の蠅の王ベルゼバブの討伐の為。多分干渉することは無いと思うけど、覚えておいて」

蠅の王の名に身体を硬直させる蛍ちゃんとおキヌさん、魔界の重鎮も重鎮だ。そんな相手が人間界で、しかも自分の名を騙る者を討伐に来る。それを聞くだけで硬直するのは当然だ

「そしてベルゼブルが動いているのは香港。ここまで聞けば判るわね？」

逆行している者しか知りえない、GS試験。そして香港これは重大なキーワードとなる

「……原始風水盤……」

「そうその原始風水盤事件の時に高確率で動くわ。もしかすると時間が左右する可能性もある、最優先で優太郎さんに伝えておいて」

令子を迎えに行く前にメモしておいた現在の調査状態を蛍ちゃんに手渡す。

「次にだけど、今香港では私とワルキューレの2人で調査しているんだけど、精神攻撃をされている可能性が極めて高いわ。調査前は警戒していたのに、結果は異常なしが多すぎる。それに今まで全然気付いてなかった、もしかするとガープ、もしくはそれに匹敵する高位魔族が香港に居るのかも知れないわ」

調べたいのに調べる事が出来ないジレンマ。確実な証拠が欲しいのに、それを目の前まで見つけながら妨害される。正直私もワルキューレもかなりイライラしている

「それで調べたらそこはかつての魔人襲撃の際や、神魔大戦の激戦地

だと聞くわ。何かあるのは間違いないし、香港自体にかなり古い魔術式が刻まれているからもしかするとそこに魔人が封印されているのかもしれないわ、魔人に付いて判っているのは殆ど無し、2つ名を名乗っているって事だけね1人は鮮血、もう1人は神魔殺しの死神、そして最後に原初の魔人姫、この魔人姫と言うのが頂点で後のはそれに従ってるらしいわ」

どうせなら名前だけじゃなく、詳細も知りたかったのだがその関連の書物は禁書として封印されていたのが、ガープによって既に強奪されていると言うと

「まさかガープの目的は封印されている魔人の解放？」

「その可能性が高いから困ってるのよ」

神魔のどちらも敵と認識し襲ってくる魔人。そんなのが開放されれば思うように動けなくなる、だからなんとしても再封印したいと言うのが神魔共通の意見だ

「とりあえず私はワルキューレと一緒に香港をまた調べるつもり。蚩ちゃんはそのを優太郎さんに渡しておいて」

一応は過激派魔族の頭領として活動している優太郎さんに直接会いに行けばスパイだと疑われる。だから蚩ちゃんに渡しておいてとお願いし、2冊のノートを手渡すと

「あ、美神さん帰って来ましたよ!？」

外から聞こえてくるコブラのエンジン音。何とか帰ってくるまでに全部話し終わったことに安堵し

「とりあえずお茶淹れて来るわ、何か世間話をしてたつて思わせる為に」

「ですね、じゃあ私はお菓子を用意します」

「あ、それならこっちに割と良いお菓子が……」

令子はどうも逆行してきたが、その記憶を封印しているようだ。それはきつと横島君についての後悔から来る物だろう。令子が記憶を持っていれば話は早い、そうではないので私達は慌てて世間話をしていたという風に見えるように偽装工作をするのだった……



依頼者がいちやもんをつけてきたので、その話し合いに向かい。契約書の内容に違反していないということを何度も説明しやつと帰って来れた精神的にどつと疲れてたのを感じながら、横島君の家によって子供の時の私と蛍ちゃんの妹のあげはちゃんを預かり事務所に帰る

「何の話をしてたの？」

寢室に私を寝かして所長室に入ると、和気藹々とした雰囲気話していたママと蛍ちゃんを見ながら、半分眠っているあげはちゃんを蛍ちゃんの隣に座らせながらそう尋ねると

「うん、令子も思わない？ 蛍ちゃんって押しが全然足りないと思うのよ」

「み、美智恵さん!?!」

押し？ ああ、横島君と蛍ちゃんの事ね。私はソファアに座りながら、机の上に置かれたクツキーに手を伸ばし

「確かにね、蛍ちゃんは押しが足りないわ、もっとぐつと行っても全然大丈夫だと思うけどね」

【余計なアドバイスしないでくださいよ!?!】

恋話だと判り、余りに奥手すぎる蛍ちゃんをママと一緒にからかいながら、ふと窓の外を見る

(もう直ぐお別れなのよね)

少しずつ広がっている黒雲を見て、ああ、もう直ぐママとは別れなんだと思うと寂しくて、悲しかったが、こうしてまた短い時間でもママと話をして、共に過ぐすことが出来た感謝するべきなんだと思つた……

「ママ、短い時間だったけど凄く楽しかったわ」

翌日朝から重い雲が降りていて、遠くから雷鳴の音を聞いた時、ああ、お別れなんだなつと思つた。横島君や蛍ちゃんは私の気持ちを汲んでくれたのか、付き添うことは無く。私だけで見送らせてくれた「おねえちゃん、よこしまとありすにありがとーって伝えておいて！ きれいこすつごくたのしかった!」

「ええ、判ったわ。ちゃんと伝えておくわ」

横島君とアリスちゃん。ずっと忘れていた私と遊んでくれたお兄ちゃん。女の子。それがまさかあの2人だなんてね……

ずっと年上だと思っていたのに、まさか年下だなんて思っても無かったと思わず苦笑してしまう

「令子、今だから言うわ。私の時間移動の力を使うには莫大なエネルギーがいるの、それが何かは判りますね？」

その問いかけに頷く、ママの言う莫大なエネルギーそれは

「雷ね？しかもそれを直撃で受ける事」

時間移動の理屈は私には判らない、でも時間を越えるとエネルギーが莫大と言うのは判る、そしてもう会えないって事も判った

「賢い子ね、令子。ママは安心したわ、時間移動はとても危険なの、だからもう会うことは無いわ。でもね、令子。私はずっと貴女を見守っています。貴女の事を信頼して、着いて来てくれる蛍ちゃんと横島君によって貴女も成長してるわ」

確かに横島君や蛍ちゃんを弟子にとつてからはあんまりお金に執着しなくなつたし、精神的にも落ち着いてきていると思つていた

「だから2人を大切にして導きなさい。それが令子にとつて素晴らしい事になるから、これからも頑張りなさい、令子。ママはずっと応援していますよ」

ママがそう笑うと目の前に雷が落ち、ママと私の姿が消える。今まで目の前に居たのにとつて、とても寂しかったし、もっと一緒に居て欲しいと言う事も出来た。でも私がそんなんじや、ママがいつまで経つても安心出来ない。思わず目に浮かびかけた涙を拭い

「さーて、帰りましょうか」

事務所まで待つているであろう皆の元へ帰ろう。私はもう1人じゃないから、だからもう大丈夫。

(だから心配しないでね、ママ)

心の中で天国にいるであろうママにそう呟き、私はその場を後にするのだ……

別件リポート 神魔会議へ続く

## 別件リポート

別件リポート 神魔会議

混成軍の再編成に動いていた神族と魔族だが、その日その2つの陣営に恐るべき刺客が放たれた。圧倒的な能力を持つ、その刺客に神魔混成軍は壊滅寸前に追い込まれていた

「ジークツ!!ここは俺達が食い止める!早く救援を!!」

「何を言っているのか判っているのか!? 4人で食い止めれるわけがないー!」

「心配するな!行けツ!!早く救援を!そうしなければ「うあああああああああツ!!」くっ!ジョニーがやられた!!本当に全滅する!その前に救援をツ!!」

「くっ!判ったツ!!」

仲間の声を聞いて、僕は1人で無線で救助を求める為。紅い光に満ちた基地をひたすら走った

「う、うわああああ!!来るな!来るなあアアア!!」

「カインツ!!くそおおツ!!この野郎ツ!!」

仲間の断末魔の叫びと怒りの咆哮と銃声を聞きながら必死に走る

「メーデー!メーデー!!緊急事態発生!緊急事態発生!!」

仲間の声が次々と途絶えていく中。無線室にたどり着き、救援を求めて必死に叫ぶ

「こちら魔界正規軍第二師団!現在襲撃を受けている!!誰でも良い応答してくれツ!!」

時間がない、このままでは僕を逃してくれた皆に申し訳ない。誰でも良い応答してくれと叫ぶ

『こちら第三師団!何があつた!現状は!!』

聞こえてきた声に思わず安堵の声が出るが、今は安心している場合ではない。情報の共有と救援をツ!

「敵は1人!繰り返し返す!敵は1人!」

『たった1人に壊滅させられたのか!まさかアスモデウスが動いたの

か!」

「違う! そうじゃない! 敵は最高指導者から派遣され……」「ここにいたのですね?」

背後から聞こえてきた声に僕の手から無線が零れ落ちる。震えながら振り返るとそこには小柄だが、強い意志の光を宿した女性と

「ケビンッ!!!」

「ぐあ……に、逃げる……こいつには……勝てない……」

僕に先に行けと言ったケビンがその女性にアルゼンチンバックブリーカーを極められ、悶えていたが

「ふんっ!!」

「ぐぼああ!!!」

「ケビンッ!!!」

その女性が飛び上がり着地した衝撃でケビンが泡を吹き意識を失う。ケビンをゆっくりを床に寝かせた女性が見つめる。血のようには赤い瞳に全身が震える

『どうした! 何があった! ジーク中尉! 何が起きている! 説明してくれ!!! くっ! 出撃準備だ! 急げ!』

落ちた無線から出撃準備と言う声が聞こえ、駄目だと叫びたかったが目の前の女性に見つめられ、僕は何も言えなかった

【大丈夫です。何も恐れる事はありません】

穏やかに笑いながらその女性は僕の肩に触れる。軽く肩に手を置かれただけなのに、肩の骨が軋んでいる

【私はただ貴方達を救いたいです。貴方達は疲れている、だが休んではくれない。それではいけません、疲労は重篤な病を引き起こします】

慈愛と狂気に満ちた視線に過呼吸に陥り、目の前が暗くなっている【過呼吸ですか、それは良くない。大丈夫安心してください、私は貴方を助けたのです、そう……貴方を殺してでも】

それが僕が聞いた最後の言葉であり、直後にまるで抱きしめるように首に回された手に、一切の抵抗が出来ず僕はその女性……英霊「フローレンス・ナイチンゲール」に絞め落とされ意識を失うのだった

……  
その日第一師団に続き、第二、第三師団がたった1人の女性によつて壊滅したのだった……

神魔会議室で映し出された映像記録を見ていた者達の視線が最高指導者の2人に集中する。2人は頷きあい、声を揃えて

「ちやうねん」

「なんで大阪弁だ！コラアアツ!!」

竜神王とオーデインの怒声が会議室に響き渡るのを見ながら、ワシは紫煙を吐き出すのだった……

「いや、横つちの護衛兼治療係って事でそういうのに特化した英霊にコンタクトを取ってみたんよ」

駄目で元々、最高指導者権限で英霊の座に干渉し、召喚されたのがナイチンゲールだった。クリミアの天使、これは横島の護衛に最適だと判断し、その前にお互いの正規軍の治療と言う名目で派遣したのだが、治療と言う名目で神界・魔界の正規軍の一部が壊滅した

「いや、あんな狂戦士だなんて思わないじゃないですか」

「まあな……と言うか治療する為に攻撃するって色々間違っていないか」

確かに予想外すぎる、ワシは報告書を見ながら

「じゃが回復しておるんじゃないか」

そうなのだ。確かに全員が一度は凄まじい打撃を受けたのだが、現在は回復傾向にある。しかも攻撃される前よりも絶好調になっている、自由に治療させるのではなく、スケジュールを組みアスモデウスの攻撃に耐えられるように部隊を分割して治療させるべきだ

「……でもあれ、横島が耐えられるのか？」

「……無理じゃないかな？」

オーデインの言葉にワシ達の無理っと言う言葉が重なる。確かにナイチンゲールの治療の腕は確かだろう、だが横島がその治療に耐えられるとは思わないので

「とりあえずナイチンゲールの人間界への派遣は見送りでもいいですか？」

「『異議なし』」

治療と言う名目で横島が死にかねないので、ナイチンゲールの派遣は見送る事にし、ナイチンゲールは神魔の中を順番に派遣しよう

「さてとナイチンゲールの事もあり、英霊の座に干渉するのはやはり危険性が高いな」

「ああ、そうだな。今回はまだいいが、反英霊が来てはアスモデウスに戦力を提供するようなものだ」

英霊召喚がガープよりも先に使えたのは大きいけど、その反面。安定性が極めて低い、膨大な魔力などを消費し、10回儀式を行い、英霊召喚に成功したのは1回。安定度が低すぎる

「やはり聖遺物などを用意し、触媒を用いての召喚でなければ安定度は無いに等しいですね」

「それに狙った英霊が引ける訳でもないしなあ……」

今回は触媒なしでの召喚で最高指導者2人の医師を求め心で召喚されたのだが、正直治療者としては優秀かもしれないが、話を通じないのは痛すぎる

「それに仮に護衛と言っても、筋肉ムキムキの男とかをイケメンを横島のそばに配置できると思うかの？」

これも無理だなと全員の意見が一致する。出来れば妙齡の女性かつ、武術に長けている人物と言うのがやはり良いだろう

「こちらからは天界に常駐していたマルタを派遣する事が決まりましたが、オーデインの方はどうですか？」

「ブリュンヒルデを派遣しているが、いつまでも置いて置く訳にも行かない。出来れば英霊を派遣出来れば良いが、魔界側の聖遺物はほとんど強奪されているしな」

元々聖遺物はコレクターの神魔の間で取引されていたものが多い。英霊召喚に踏み切るなんて想像もしてなかったからだ、いざアスモデウスに対抗しようと思えば殆ど残されていない

「となれば、ワシら自身を触媒にするか？ワシが触媒になれば多分西

遊記関連は呼べると思うぞ?」

「我なら北歐神話関係だな」

「私だと……すまないな、皆目見当もつかない」

ワシ達の中では一番若い。竜神王が触媒になったとして何が呼ばれるか判らないので、触媒として頼るのは厳しいだろう

「私ならキリスト関係の武人とかを呼べるかもしれないですね」

「ワイやと……多分反英霊やと思うなあ」

キリスト関連で女性となると候補はジャンヌダルクがやはり筆頭だと思ふんじやが、武人と言えるか?となると疑問が残るの、それに北歐神話は女性関連が多いが、英霊として召喚されると神としての側面が強くと人間の護衛を良しと言ってくれるか判らぬし……

「やはりハヌマン。お前が適任ではないか?」

「まあそうだと思ふんじやが……」

多分ワシが触媒になり、西遊記関連の英霊を呼び出すことが出来れば、特に沙悟浄、猪八戒が呼ばればお師匠様と一緒に旅をしていた事もあり、横島の護衛も引き受けてくれそうじやが……河童と豚……横島が嫌がる可能性もゼロではなく。候補として一番良さそうなのは……

「ナタかの?」

「ああ、ハヌマンのライバルかいな。確かに優秀やなあ」

自称ライバルじやが、実力はあるに強。性格も素直だし、蓮の精であり女性でもあるから横島が好みそうじやが

「あやつまな板なんじやよな」

「「「まな板か……」」」

女性が居ないから言える話題じやが、ナタはチャイナドレスを好むので横島も反応しそうじやが……まな板じやからなあ

「まあ今は力も蓄えなくてはいけないので、また召喚する機会があれば召喚するという方向性で」

「そやな、無理にやっても良い事無いしな。じゃあ今回の会議はこれで終わりや、皆お疲れや」

サタンの言葉にお疲れ様と返事を返し、早足でオーデインと竜神王

と共に会議室を出る。ワシらと入れ違いである女性が中に入る

「なるほど、司令官ともあろう者が、不健康とは嘆かわしいですね。しかし、大丈夫です。安心してください、私が助けましょう」

「ナイチンゲールウウウウウツツ!!?!」

2人の最高指導者の絶叫を聞きながら振り返り

「これで制裁完了じゃな」

「うむ、たまには反省してもらわなければな」

「その通りだ、我達の苦勞を理解して貰わなければな」

背後から聞こえてくる絶叫に笑いながら、ワシらはその場を後にし、別室にて再び手に入りそうな聖遺物や、横島と相性の良さそうな英霊についての話し合いを再開したのだった……

なお翌日、オーデインがナイチンゲールの強襲を受けたと聞き、そのまた翌日は竜神王……そして今朝

「ほほう、おう……くふう……利くなあ」

「若い時に相当無理をなされたのですね？大丈夫です。私が治しましょう」

「すまんのう……」

ナイチンゲールがロンの整体をしているのを見て、ワシは思わず絶句してしまうのだった……なおナイチンゲールが滞在する3日間、整体とゲームは1日1時間に加えて、厳しい監視下で身体は軽くなったのだが、ストレスを溜め込む事になるのだった……

そして妙神山が気に入ったのでここを拠点にすると、神魔の部隊を4つ壊滅させてから戻ってきたナイチンゲールに絶望したのは言うまでもない

リポート5 貴女はストーカーですか？いいえ、通い妻です♪その1へ続く



リポート5 貴女はストーカーですか？いいえ、通い妻です♪

その1

リポート5 貴女はストーカーですか？いいえ、通い妻です♪ その1

令子ちゃんが帰ってから2日後の日曜日の朝。聖奈さんが家に尋ねて来た、その意味を知ったアリスちゃんの顔が強張るのが判り、思わずその頭を撫でる

「アリスちゃん、今お父様から連絡がありました。黒介さんと赤介さんの仕事が終わりもう家に帰ったそうです」

それは本来喜ぶべき何だろうけど、アリスちゃんの顔を見ればまだ帰りたくないと思っっているのが一目で判り

「あのそれは直ぐ帰らないと不味いですか？」

「え、いえ、別に今すぐと言う訳ではないですが……お父様が謝罪の意味も込めて夕食にご招待したいと仰っているので、夕方までには帰れば良いと思います」

夕方までか……となると時間的な余裕は後8時間って所かな

「判りました。じゃあ16時ごろまでは時間をください」

「判りました、では16時に迎えに来ます」

穏やかに笑う聖奈さんにありがとうございませと頭を下げ、アリスちゃんの方を見て

「じゃあ今日は思いっきり遊ぼう！まずは朝ごはんを食べてから散歩だ！」

「うんっ！」

華の咲くような笑みで笑うアリスちゃんに頷き、折角朝早く尋ねてきたのだから

「聖奈さんもご飯食べて行きます？」

「え、あ。は、はい。よろしければ」

今日はハーピーさんも家にいるし、1人前増えても大したこと無いだろうと思い、シズクに聖奈さんの分の朝食もお願いして、その後諭吉さんを貰えるか交渉してみようと思いなから聖奈さんと一緒に家の中に入るのだった……

「たのしーねー♪」

「みむうー!」

「うっきゆう♪」

結果的に言えば諭吉さんは貰えた。それに夕方まで外出する許可も貰え、俺はチビとモグラちゃん。アリスちゃんに……そして

「お姉ちゃんは楽しくない?」

「あ、ううん。楽しいよ?でもなんかあっちこちから見られてる気がして落ち着かない」

「え?私?私は勿論楽しいわよ?」

人間に化けたハーピーさんとタマモと一緒にゆつくりと散歩しながら映画館を目指していた。シズクも誘ったのだが、掃除があるとか言って家に残っている。ノツブちゃんは限定メロンパンを買いに行くと言って出掛けて行ってしまった

(見られているのはあれだろうなあ……目立つもんなあ)

金髪の美少女2人と長身で切れ長の目のお姉さま1人、そしてチビとモグラちゃんに凡人の俺1人。うん、どう考えても目立つ布陣だな!しかも明らかに普通の人代表みたいな俺がいるから、なんでだ?つと言う視線も俺に向けられているが

(もう慣れた)

蛍や美神さんと一緒に居れば嫌でもこんな視線は向けられる。なのでこの視線には正直言つて慣れてしまっている、それにアリスちゃんとタマモと手を繋いでいても平常心を保っている、やはり俺はロリコンではないと確信出来た

「映画館はもう直ぐ?アリスね、映画見るの初めて♪」

「うん、もうちょよつとだよ?」

目的地にしている映画館は前に除霊を行った新極楽シネマだ。あそこのオーナーさんに電話したらチビとモグラちゃんもOKとの事

で本当に助かったと思いいながら

(子供向けの映画でつまらないと思いますけど、我慢してくださいね?)

(あ、うん大丈夫。あたかも映画って興味あるし)

大人のハーピーさんにはつまらないかも知れないと思っていたが、気にしなくて良いと笑ってくれる姿に安堵の溜息を吐き

(映画の後は、こっちのレストランに行って……お昼からは遊園地……あ、後黒介さんと赤介さんにお土産と……)

今日の夕方に帰ってしまうアリスちゃんのために目一杯楽しい思い出を作って、黒介さんと赤介さんに持って行って貰うお土産も買って……

(今日は忙しくなりそうだな)

俺は心の中でそう呟き、楽しそうに笑うアリスちゃんとタマモの手を引いて新極楽シネマまでの道を歩き出したのだった……なお、横島が美人・美少女揃いの中に混じっている凡人だから注目されていたと思っていたのだが、実際は

「あ、あれ新撰組に出てた男の子とマスコットだよね!?東京に住んだんだ」

「でもほら、あの子ってGS試験の今年の最年少の合格者じゃ?」

「だ、だよな?これほら、横島忠夫17歳……あのバンダナと違ってろそれだよな!」

映画の中で入って、映画に出演してしまった横島だが、今後注目と言われつつも映画もドラマにも出ず、更には本名も非公開となっており、正体不明の役者として注目されていた。更に今年の最年少GS試験合格者として雑誌に特集を組まれた事で本名が判ったが、その事で注目されていたのだが、当然横島はそんな事を知る良しも無いので、やっぱり俺は普通過ぎるよなあなどと考えているのだった……なおシズクの言う掃除とは

「……どこら辺で見た?」

【この辺だと思っくんじゃが、それよりワシメロンパン買いに行っつい?】

ノツブが昨日自分の隣で火の粉を吐いていた白い着物の少女の話をし、シズクがその少女の正体に気付き排除する事を指していたりする……

黒おじさんと赤おじさんがお家に帰っていると言うのもう帰らないといけないと思っていたのに、お兄ちゃんが夕方まで遊ぼうと言ってあちこち連れて行ってくれたのが本当に楽しかった

「つきやあー♪たのしいいー♪」

「あわわああああ?!」

「あつはははー♪横島変な顔ーツ!!」

お昼ご飯の後に行った遊園地も楽しかったし、何回もジェットコースターに乗って、青い顔で今にも倒れそうなお兄ちゃんを見てタマモと一緒に笑ったし

「アリス、あのぬいぐるみ欲しい♪」

「じゃ、私はあの犬」

「よっしや♪任せとけ!」

ゲームセンターとか言う場所でぬいぐるみも沢山取って貰った。もう本当に楽しかった……でも

「アリスちゃん。迎えに来ましたよ?」

……もうさよならなんだよね……お兄ちゃんが魔界に来てくれれば一番いいのに、でもお兄ちゃんは魔界じゃ暮らせない。それが寂しい

(タマモはいいなー)

毎日お兄ちゃんと一緒なのが本当に羨ましい、アリスもずっとお兄ちゃんの家で暮らしたいなあ……

「はい、アリスちゃん。これ黒介さんと赤介さんにお土産。お酒が好きて言ってたからワインとウイスキー、それとお摘みね」

紙袋に入った赤おじさんと黒おじさんのお土産を受け取る

「じゃあハーピーさん。お元気で」

「ありがとう。お世話になったじゃん」

お姉ちゃんと挨拶をしているお兄ちゃんを見ると、今度は何時

会えるのだろうか？と言う思いが強くなる

「はい、これはアリスちゃんに、ケーキを買って置いたからみんなで食べてね」

「う、うん。ありがとう」

色々なお土産を用意してくれたのは嬉しい、でもそんな物より、お兄ちゃんともっと一緒に

「難しいと思うけど、今度は俺がアリスちゃんの所に行くよ」  
「え？」

ちよつと直ぐは無理だと思うけど、何とかして絶対アリスの所に行くよと笑うお兄ちゃんはアリスの頭を撫でながら

「それとまたいつでも遊びにおいで、いつでも待ってるから」

「うん！また来る！絶対来る!!」

ぎゅつとお兄ちゃんに抱きつきながら言うとお兄ちゃんはアリスの背中に手を回して

「待ってるからな、元気で、黒介さんと赤介さん、それとハーピーさんと仲良くな」

アリスの事を心配してくれているお兄ちゃんにうんっ！と元気良く返事を返し、私は人間界を後にした

「だ、大丈夫？本当にあたいを匿ってくれる？」

お兄ちゃんのお土産と荷物を持ちながら尋ねて来るハーピーお姉ちゃんに頷く、お兄ちゃんと一緒に居て思った。広い宮殿で一人ぼつちは寂しい。だからお姉ちゃんが居てくれれば寂しくない

「アリス」

宮殿の前で手を振っている黒おじさんと赤おじさんに手を振り返し、走り出すのだった

「ベリアル閣下、今回の事は大変失礼しました」

「構わぬ。我らの疑いは晴れたのだから気にはしない。ネビロス、我はブリュンヒルデと話をする、アリスの事は頼んだ」

聖奈お姉ちゃんが赤おじさんと話をすると行って、アリスから離れる。これは正直チャンスだと思った、赤おじさんは優しいけどアリスを心配しすぎてあれも駄目、これも駄目と言ってあんまり話を聞いて

くれない。だから話を聞いてくれる黒おじさんを説得するほうがハーピーお姉ちゃんも匿って貰えると思った

「ほう？アリスは、このハーピーと一緒に良いと？」

黒おじさんが観察するようにハーピーおねえちゃんを見つめている。ハーピーお姉ちゃんが顔を青くして震えている

「うん、だって黒おじさんも赤おじさんも男の人でしょ？アリスお姉ちゃんが欲しい！」

私がそう言うのと黒おじさんはふむ、その通りだなと頷き

「1つ聞きたいが良いかね？」

「は、はひい！」

ぷるぷる震えているハーピーお姉ちゃんに大丈夫だよと言いながら手を握ると少し震えが収まった

「そう緊張しなくても良い、料理や裁縫は出来るかね？何か得意なこととは？」

「え、あはい。料理はそれなりに出来ます、裁縫とかは少し……得意な事は鳥と仲良くなることです」

ふむ。なるほどなるほどと頷いた黒おじさんは良いだろうと呟き

「ではアリスに料理を教え、裁縫などを少しずつ教える家庭教師兼護衛として雇い入れよう」

「あ、ありがとうございます！」

「良かったね！ハーピーお姉ちゃん！」

メイドさんみたいになってしまったのは予想外だけど、宮殿に居るなら絶対安全だから良かったと安堵の溜息を吐く

「あ、そうそう、これね。お兄ちゃんから赤おじさんと黒おじさんにお土産。お酒とかだって」

「ほほう。中々気が利くじゃないか、人間の酒は少し興味がある。ベリアル、聞こえてるか？」

「少し待て、ブリュンヒルデと話をしている」

聖奈お姉ちゃんと話をしている赤おじさん、これは邪魔をしたらいけないと思って

「お兄ちゃんが色々お土産を用意してくれたんだよ♪黒おじさんに見

せてあげる」

「それは楽しみだ。さ、行こうか？アリス。ハーピー。君も来るといい」

「は、はい!!」

赤おじさんが聖奈お姉ちゃんが難しい話をしているのを見ながら、  
宮殿の奥へと歩く中

「あのね、あのね！今度お兄ちゃんがアリスの家に来たいって。何とかなるかな？」

「ふむ……今すぐは無理だが、いずれは何とかしよう」

「やった♪黒おじさん大好き！」

「私もアリスが大好きだよ」

赤おじさんはお兄ちゃんが嫌いだから、こんな話は出来ない。でも黒おじさんはお兄ちゃんの事もそんなに嫌っていないので本当に安心した。

「またお兄ちゃんが泊まりにおいでって」

「ほう、それは良かった。では今度はこちらからお土産を用意しよう」

アリスは黒おじさんとそんな話をしながら、話をする為に談話室へと向かうのだった

アリスちゃんも令子ちゃんもいなくなってしまうと、妙に家がガランっとしてしまってなんか寂しかった

「みむ？」

「うきゅ？」

「あーうん、大丈夫。心配してくれてるんだよな」

膝の上に乗ってきたチビとモグラちゃんの頭を撫でてしていると心眼が

【お前は案外寂しがりやなのかも知れないな】

そう言われるとそうかも？と思ってしまう。今までは子供と言う事もあり、ばたばたと騒がしかった。それだけで家が明るくなったように思った。シズクにタマモ、ノツブちゃんも居るが、それとはまた違う明るさがあって正直楽しかったのだ

「もう、横島らしくないわよ?」

「つとと」

隣に座ってきたタマモが笑いながらそう言うが

「こーら、昨日精霊石で1日遊んだだろ?今日は駄目」

その首に下げられたペンダントを取り上げようとするが、タマモはそれよりも早くペンダントを胸の間に入れて

「どう?これでも取れる?私は別に構わないよ?横島なら触っても」

ぐっなんて卑劣な……取り上げようとする胸の間に手を突っ込むことになる。それは完全なセクハラだ、そんな姿を見せたらチビとモグラちゃんがぐれてしまう……しかしどうする?と言って悪戯っぽく笑っているタマモは可愛い、思わずクラッと来てしまう……

【横島?落ち着けよ?後ろの気配を感じているか?】

心眼の言葉に返事を返すよりも早く、ぽんっと言う音が響き

「グルルルルル!」

「……横島にまた心配を掛けるのか?この馬鹿狐」

シズクがタマモからペンダントを取り上げていた、もし取ろうと胸に手を伸ばしていたら頭に氷柱だったなど気付き安堵の溜息を吐く

【へたれー♪女に誘われたのだから胸くらい【心眼ビームッ!】ノツブウ!?!】

ノツブちゃんが胸くらいと言った瞬間。心眼がビームを打ち出しノツブちゃんを弾き飛ばし

【横島をそっちの道に誘うな。良い感じに落ち着いているのだからな】

良い感じに落ち着いているってどういう意味だ?と思っていると膝の上に精霊石のペンダントが落とされ

「……しっかり管理しておけ、私は馬鹿狐がどうなろうと構わないが、お前が心配するならちゃんと管理しておけ」

シズクの警告に判ったと返事を返し、精霊石のペンダントをポケットにしまうと

「くーん、くーん」

頂戴、頂戴と言う感じで足元にじゃれ付いて来るタマモを抱き上げ



て

「今日は駄目。タマモが調子悪いと俺悲しいから」

「くうん……」

「しょんぼりとした感じのタマモにごめんなど呟き、時計を見る。そろそろだな」

「うっしー散歩行くかー」

「元気良く鳴いて行くーと意思表示をするチビ達にリードをつけて、俺は散歩に出かけるのだった」

「あゝ横島君ゝ久しぶりねゝ」

「ワンワン!!」

いつもの散歩コースを歩いているとのんびりとした声と元気の良い犬の鳴き声が後ろから聞こえてくる

「冥子ちゃん、久しぶりだな」

結構一時期は良く会っていたんだけど、最近見なかった冥子ちゃんに久しぶりだなと言うと

「バウバウ!!」

「おわっとーあははは！やめえ！くすぐりたい！」

「ワンワン♪」

冥子ちゃんの手から離れて飛びついてくるショウトラを抱きとめると、顔を舐めまくられくすぐったいと言うがショウトラは舐める勢いを増したが

「みむっー」

チビが肩の上に着地して短い手を振るうとショウトラはびくつと身体を竦め、冥子ちゃんの後ろに隠れる

「みむっー」

チビに対して苦手意識を持つてる……チビって小さいけどめっちゃくちゃ強いんだよな。勿論モグラちゃんもだが

「コン」

よくやったという感じで鳴いているタマモを見て苦笑していると「今まではねゝ式神を操る練習をしたのゝ冥子も強くならないといけないからねゝ」

のほほんと笑うが、その声は自信に満ちていた。それだけ厳しい修行をしたんだなあ、俺ももつと頑張らないと

「ふふ横島君はこれからよく焦らないでね」

穏やかに笑いながら俺の頬を突く冥子ちゃんにドキッとすると、冥子ちゃんはふふーと笑いながら

「今日はお母様とまだ訓練があるからじゃあねーまた今度お散歩しましょうね」

「ワフ」

名残惜しそうにしているショウトラの頭を撫で、冥子ちゃんと別れを告げて散歩を再開するが

「んん？」

背後から視線を感じて振り返る。だが誰も居ない首を傾げて数歩歩くが、やはりまた視線を感じる

「なー？誰か俺を見てないか？」

さつきから視線が凄いんだけど？と心眼達に尋ねる。だが

【いや？私は何も感じてないぞ？】

「みみー？」

「うきゅ？」

「ココーン？」

チビ達も何も感じてないと言う感じで首を振る。うーん、アリスちゃん達の事で警戒する癖が付いたかな？と呟き歩き出そうと前を向くと

「好きッ♪」

「ほわあああああ!？」

白い着物の少女が目の前に居て、幽霊かと思ひ、俺は思わず絶叫し、足元のタマモ達を抱えて尻餅をつく。って言うか好きって何!？と困惑しながら声の主に視線を向ける

「ふふふふ。少し間違えてしまいました、横島様お久しぶりですわ」

白い着物の透き通るような青い髪……そしてその背丈からは想像できないほどに自己主張している胸と穏やかに笑うその顔には見覚えがあった

「あ、あれ？清姫ちゃんだったけ？」

「はい！清姫でございますー！」

ぱあつと華の咲くような笑みで笑う清姫ちゃん、敵意などは感じないので驚いたのを謝りながら立ち上がる

「なんでここにいるの？」

天界にいる筈なのにといいながら尋ねると清姫ちゃんは悲しそうな顔をして

「実は天界で若い男の竜神に乱暴されそうになり、怖くて逃げて参ったのです。少しの間で構いません、お側においてくれませんか？」

乱暴と聞いて俺の顔から血の気が引く、それと同時に天界も安全ではないと言う聖奈さんの言葉を思い出す

【横島。彼女は保護した方がいいかもしれない、彼女は相当な竜気を宿している。きっと彼女も狙われる可能性が高い。小竜姫様と連絡が付くまでの間匿った方が良い】

心眼に言われるまでも無い、それに助けてくれと来た相手を見捨てるわけにも行かない。事後承諾になるが、きっと美神さん達も説明すれば判ってくれると思い。

「判った。暫く俺の家に居ると良いよ」

震えている姿を見ると相当怖い目に会った筈だ。俺自身も男だからきつと怖いと思うが、シズクが家に居るからきつとフオーロししてくれると思い。家に来て良いと口にし

「案内するから着いて来てくれる？」

「はい、急に訪ねて来たのに受け入れてくれてありがとうございます」  
そう笑う清姫ちゃんに気にしなくて良いよと返事を返し、チビ達に散歩は悪いけど切り上げるな？と声を掛け家へと引き返すのだった  
……なお横島は気付かなかったが、清姫の口が弧を描き、邪悪な笑みを浮かべているのに気付いたのはチビ達だけなのであった……

リポート5 貴女はストーカーですか？いいえ、通い妻です♪ その2へ続く

## その2

レポート5 貴女はストーカーですか？いいえ、通い妻です♪ その2

ノツブが白い着物の少女を見たとき昨日行っていたので、見かけたという場所を調べてみると確かに強烈な竜気の残滓が残されていたので奴がいたのは確定だ

(あいつめ、大人しくしていると思ったら)

清姫は竜族の姫とは思えないほどの隠密行動のスキルを有している。横島が誰かに見られている気がすると言っていたのは間違いなく清姫が横島を見つめていたのだろう。しかしいつから横島の側にいたのが気になるな……

「……横島に間違いなく悪影響を与える」

昨日はほぼ1日掛けて探したが見つけれられず、今日も横島が散歩に行っている間に探してみたが、やはり見つからなかった。溜息を吐きながら家に戻り夕食の準備を進めていると  
「ただいまー」

いつもより随分早いな？エプロンで手を拭いながら、玄関に向かう

「……すまないが、まだ風呂の準備……備は？」

横島の隣でニコニコ笑う清姫の姿を見て

「……なんでお前がここにいる!?!」

思わず指を突きつけて叫んだ私はきつと悪くない……

「散歩中に会って、なんか天界で男の竜神に乱暴されそうになって逃げたって言うから」

乱暴？こいつならモギる位普通にするだろう？と思つて清姫を見つめると、確かに身体が震えている。少なくとも身体に触れられたのは間違いないだろう……

(嘘ではないか)

こんな性格でも竜神族のエリートとも言える血脈だ。手籠めにしとしまえば発言力が増すと考える馬鹿はどこにでもいるだろう。そ

れに清姫自身嘘をつく事を嫌う性格だから、嘘をついているとは思えない

「……判った。とりあえず上がれ」

横島が保護すると決めたのだから、私に反対する理由は無い。私も横島の家に住候している身だ、家主の決定には逆らえない。私は溜息を吐きながら、夕食の量を増やさないとないキッチンに足を向けるのだった……

「……で？急に出てきてどうした？」

夕食を終えた後。清姫の面倒を見てくれと横島が頼んで来たので、私の部屋に布団を増やし、清姫の寝床を準備した所でそう尋ねると「やっぱり横島様の側が良いと思っただけですわ」

じつと見つめるが清姫は穏やかな笑みを浮かべるだけ、高島の屋敷にいた時もそうだったが清姫は自分の気持ちを隠すのが上手い。唯一感情を露にするのは高島の前だけだった、だからきつと怖かったなどの弱音を口にするのは横島の前だけだと思ひ敢えては問いたさない

「……まあ良いがな。言っておくが高島と横島は違う、夜伽とかすれば絶叫するからな？余計な真似をするなよ」

「まあ、横島様は随分と奥手なのですね」

と言うか高島が性に奔放過ぎただけだと思いがなと小さく溜息を吐き、暮らす上の注意だけをしておく

「……まず横島が起きるのは朝5時、そこからランニングに出かける。朝食の時には蛍と言う女を連れてくるから敵対しないこと、横島が1番信頼を寄せている女だからな」

蛍を傷つけければ横島は激怒するだろう。私とすれば追い出す理由に丁度良いが、強い精神力で恐怖心を隠している清姫を見ると直ぐに追い出すのは可哀想だと思ひ、警告しておく

「……次に居候しているノツブ。判っていると思うが、英霊だ、事を荒げるような真似はしない事。それとおキヌと言う幽霊もかなりの頻度で尋ねて来るのでこつちも攻撃しない事」

横島は1度懐に入れたら相当甘くなる。だから攻撃すれば間違

なく怒る、これは幽霊だから死んでも平気とか言う問題じゃない

「……後横島が可愛がつている動物。これは絶対に攻撃するなよ」

蛍やおキヌは自分で反撃するが、チビ達は横島に怒られるので1回は我慢する。だが次は当然反撃するし、怪我をしているのを見れば間違いない横島は怒る。それも半端なく怒るので念入りに注意しておく

「判りましたわ。それにしても、何か昔を思い出しますわ」

「……確かにな」

高島の屋敷も幽霊屋敷やお化け屋敷と言われていた。数多の式神に行き場のない妖の面倒を見ていた、その時とは数も種族も違うが、似たような雰囲気を持っているのは間違いない

「なんだか今日は穏やかな気持ちで眠れそうですわ」

それは良かったなど返事を返し、布団に潜り込んで目を閉じる。隣の布団から僅かに聞こえてきた嗚咽と嫌悪勘の混じった声を聞いて（……泣きたいなら泣けばいい物を）

変な所で意地っ張りな奴だ。私は清姫の嗚咽を聞いてない振りをして、目を閉じ眠りに落ちるのだった……清姫の精神ケアは横島に任せおけば良いかと思いい、少なくとも平常心を取り戻せるまでは横島の側に置いておくしかないのだから……

昨日久しぶりに横島君と散歩帰りに会って話をして楽しい気持ちだったのに……

「お母様〜本当に決闘しないと駄目なの〜?」

ここ最近修行漬けだったのは、いざと言う時に足手纏いにならない為であり。決闘するためではない、お母様に取り消せないか?と尋ねるが

「無理よ〜?冥子。貴女が次の六道家の当主。当主となれば12神将を護る義務がありますから〜」

12神将の式神。六道の家と親交が深かったと高島と言う陰陽師が作成した12体の式神。現存する式神でシヨウトラちゃん達よりも強い式神は存在せず、決闘し式神を奪おうとする家が多い

「でも私はいく「冥子。いつまでも私に甘えないで」

いつもの間延びした喋り方ではなく、突き放すような強い口調のお母様。これはどれだけ頼んでも決闘が取り消される事はないと悟ってしまった

「今回は遊びじゃないの、鬼道の家からの挑戦状なのだから」

鬼道の名前に目を見開く、子供の時に何度か遊んだ男の子の姿が脳裏に過ぎる

「恥知らずにも12神将を寄越せと何度も何度も、いい加減にうんざりです。ここで徹底的に実力の差を見せて上げなさい」

鬼道の家は昔は陰陽師の名家として名を馳せていた、だが平安時代を過ぎてから急激に没落する。その理由は1つ、高島と言う陰陽師の殺害を一番先に叫び、そして碌な調査もせず殺し。そして一族全てに呪われた一族……それが鬼道

「大体12神将を手にした所で呪いは解ける訳もありません。一族全てが息絶えるか竜の怒りが鎮まるまで続くのですから」

鬼道の家に呪いを掛けた竜は高島と親交の深い竜だったと言う。そして竜は情が深い、その怒りが鎮まる事は恐らくない

「12神将を欲しているのは、これで仲直りをしたと言う証明の為。そしてあわよくば12神将を手にし、復権を企んでいるからです、冥子。もう1度言います、鬼道に力の差と言うのを見せてあげなさい」

2度と12神将を譲り渡せなどと言いつつ出せないようにとお母様は言う。確かにその話を聞いて私も怒りを覚えたけど……

(私はそんな事の為に頑張ったんじゃない)

GS試験の後お母様をお願いして修行に励んだ。それはまたガープ達が来た時、狙われているだろう横島君の手助けをしたと思ったからだ。決してそんな下らない事に使う為じゃない

「私は嫌よくそんなの絶対しないんだから!!」

シヨウトラちゃんの上に乗って、私はお母様から逃げ出すのだった……どこへ逃げよう? 考えて思いついたのは1つ

(令子ちゃんの所に……)

令子ちゃんなら私を匿ってくれる、もしかすると横島君もいるかもしれない。私はそんな事を考えながら、令子ちゃんの事務所を目指して逃げるのだった

「少しく追い詰めすぎたかしら？」

さつきまでの強い口調ではなく、緩やかな口調の冥華だったがその目は依然強い光を放っていた

「さてと〜逃げ場所は判っているから捕まえに行きましょうかね〜」

追い詰めれば令子の所に逃げると判っていた、だから追い詰め、令子達も巻き込む予定だった冥華はにやりと笑い、お抱えの運転手の元へと歩き出すのだった……

蛍ちゃんにほつぺたを振り上げられている横島君を見て思わず深い溜息を吐く

「横島はさ？もう少し自分の価値を知るべきだと思うの」

「いひやいーいひやいです！ほひやるひやん」

【それには同意しよう。横島は自己評価が低すぎる】

心眼と蛍ちゃんに怒られている横島君の隣でニコニコと笑う白衣着物の少女とその隣で何時も以上に険しい顔をしているシズク「えーと保護希望って事でいいのかしら？」

話を聞く限りでは天界で竜族に手籠めにされかけて逃走。その後頼れる相手と言えばシズクか横島君しか居ないとの事で東京に來たと言う清姫にそう尋ねると

「横島様の所で保護を希望です」

横島君の名前をやたら強調する清姫。それを聞いて蛍ちゃんの顔が更に険しくなるのを見て溜息を吐く

（聖奈に頼んでみようかしら？）

小竜姫様に頼むにしても、妙神山まで行かないといけない。当然そんな面倒なことは出来ないの、聖奈に小竜姫様に伝えて貰おうかな？と悩んでいるとシズクが足音を立てずに近寄って来て

（平気そうにしているが、精神的にかなり傷ついている。今横島と引き離すのは危険だ）



ニコニコと笑っているが、目が全く笑っていない。これは引き離したらどうなるか判っているんでしょね?と言っているように見える

【蛍ちゃん、横島さんをいじめるのは許しませんよ!】

「こんな所で自分の株を上げようとするな」

蛍ちゃんの言葉にぎくうつと言ってしまうおキヌちゃん。あの子は絶対悪巧みできないタイプね

「と言っても仕方ないでしょ?清姫は暫く横島君の所で保護、これは決定よ」

少なくとも小竜姫様と連絡が付くまでは横島君の所で預かるのは決まりと言うと、蛍ちゃんは

「こんなの理不尽すぎる、私よりも外見年下なのに、胸が大きいなんて」

【確かに理不尽ですよ。何でなんですか?】

崩れ落ちて泣いている蛍ちゃんとおキヌちゃん。確かに背丈は小学生程度だけど、凄まじいまでの自己主張をしている胸が凄い。蛍ちゃんとおキヌちゃんよりも大きいので、そのことに対して妬みもあるし、横島君の所で暮らすと言うのにも不満があるのだろう

【お主はなー?奥手すぎるんじや、男なら妻の1人や2人養って見せよ、それとも幽霊のワシで練習するか?」「黙ってるッ!!」「ノツブウ!?!」

「それ不倫じゃん!?」と言うか何の練習!?そしてリアアット半端ねえッ!」

戦国時代の価値観じゃ、別に妻が複数居ても気にしない。恐らくシズクと清姫も同じ価値観だろう、これが現代との認識の違いか……とは言え、これは横島君の問題なので口を出さない。蛍ちゃんとおキヌちゃんのWリアアットで吹っ飛ぶノツブを見て激しい頭痛を感じ、思わず額を揉み解す

「みっむー!」

「きゅー!」

「コンー!」

突っ込みで疲れたのか、座り込んでいる横島君に擦り寄るチビ達を見ていると

「令子ちゃん！横島君助けて！匿って欲しいのー!!!」

冥子が泣きながら事務所に飛び込んでくるのを見て、あ、これ絶対また面倒毎に巻き込まれたと悟るのだった……

「それで？どうしたんです？」

ノツブに封印札を貼ってから蛍ちゃんがお茶を差し出ししながらどうしたんですか？と尋ねると冥子は泣きながら

「あのね、あのね！お母様が決闘しろって言うから、逃げて来たの」

決闘から逃げてきたって……これ絶対冥華おば様も来るわ……

「決闘ってめっちゃくちやですね、逃げてきてよかったっすね！」

のほほんと笑う横島君の周りにはショウトラとアンチラを加えたチビ達の姿。動物に好かれる姿は正直嵌りすぎている

「あら？この式神……シズク」

「……お前の予想通りだ」

なんか私達には判らない話をしているシズクと清姫も気になるし、何？12神将に見覚えでもあるのかしら？

「これなんだけどねー？」

冥子に差し出された写真を皆で覗き込むと、袴姿で髪ポニーテールにした青年が写っていた

【えっと、これお見合い写真ですか？】

おキヌちゃんがそう尋ねる。うん、どう見てもこれお見合い写真よね？決闘！お見合い？なんて言う訳の判らない図式が脳裏を飛ぶ

「それね！お見合い写真じゃないのよ！」

「あわわ！お母様あ！」

聞こえてきた冥華おば様の声に冥子を取り乱し、横島君の後ろに隠れる。隠れられた横島君がえっえ？と混乱している中。冥華おば様はゆっくりと応接間に入ってくる

「えっと冥華さん、お見合い写真じゃないってどう言う事です？」

どう見てもお見合い写真なんですけど？と蛍ちゃんが眩きながら尋ねると冥華おば様はほっと笑いながら

「六道の家が所持している12神将を賭けて決闘しろって言う手紙と一緒に送って来たのよ。あの馬鹿鬼道の家が、一応式神使いの古い掟だから決闘は引き受けたけど、本当はもう決闘するのもめんどくさいのよ。」

笑っているがとんでもなく酷いことを口にしてている冥華おば様。ああ、そうだった。この人は笑って人に死ねって言える人だった

「鬼道？おかしいですわね、私が呪いを掛けたはずなんですけど、まだ存続していたのでしょうか？」

「……確か高島の処刑を叫んでいた貴族だったな。絞めておくか？」

……後ろで物凄く物騒な口り竜神の呟きは聞かなかった事にしよう。そして冥華さんはさも今思いついたと言う感じで手を叩き

「令子ちゃん達も応援に来てくれる。そうすれば冥子も頑張れると思うから。」

にこにこ笑っているが、目は全く笑っていない。私はこれを断る事が出来ない。と悟り

「判りました、私達も付き添います」

やっぱり面倒事になったと溜息を吐きながら、頷くのだった……

リポート5 貴女はストーカーですか？いいえ、通い妻です♪ その3へ続く

### その3

レポート5 貴女はストーカーですか？いいえ、通い妻です♪ その3

六道の屋敷の敷地の中に作られた陣の中で深呼吸を何度も繰り返す。この時を今か、今かと待っていたがいざその時になると緊張してしまう

(ボクは勝つ、そして鬼道の家を復興するんや)

平安時代にボクのご先祖様が六道の家と懇意にしていた陰陽師を殺した事で、鬼道の家は呪われた。この呪いを解く為には12神将の式神が必要なんや、鬼道の家を呪った龍と懇意にしていた陰陽師の式神が……12神将がッ!

【……】

「心配しないで夜叉丸、ボクらは勝つ」

心配するように現れた夜叉丸に大丈夫だと声を掛ける。何度も何度も死にそうな目に会いながらボクは自分を鍛え続けてきた、12神将と六道の家に護られて育てられたお嬢になんて負けるわけあらへん

「いいぞ、政樹。今のお前なら負ける訳がない、六道の家を潰し、我ら鬼道が再び日本の頂点に立つのだ」

「OK父さん、ボクに任せといて」

丁度あちらさんも来た様やし……気合を入れていこか！手のひらに拳を打ちつけ、気合を入れたのだが

(な、なんや!?この寒気は……)

紅いバンダナを額に巻いた男の後ろから入って来た白い着物の少女を見た時。全身に凄まじい寒気が走った……そして後に思った、この時感じた寒気と恐怖。それで逃げてしまえばあれほどまでに恐ろしい目に会わなかったのだと……

冥子ちゃんの決闘の付き添いに来たんだが、目の前の対戦相手を見て

(くそっ！イケメンかよ)

写真でも見たが、こうして見ると更にイラっとするイケメンだ。ああいう奴は死んでしまえばいいと思う

「鬼道政樹です、よろしゅう」

京都弁か……余計にイラツとするな。大阪弁と違って人を小馬鹿にしているようなイントネーションがして嫌いだ

「六道さん。助っ人を連れて来るのはどうかと思いますなあ？」

目の隈が酷い痩せた男が俺達を睨みながら言うと、冥華さんは

「助っ人〱冗談はよしてくださいよく終わったら皆で外食に行くから連れて来ただけですよ」

そんな話はしていないので当然挑発なのだが、その一言でその男の顔色が面白いように変わる

(駄目ね、あんな挑発に乗るようじゃ一流も二流よ)

美神さんが小声でそう呟く。俺でも挑発だと判るのだから、それだけ冷静さが足りないと言うことだろう

「ならばその夕食は敗北によってさぞ美味しい物になるでしょうなあ？」

「本当に冗談がお好きですね〱うちの子に勝てると思っっているんですか」

うふふふとははははっと言う笑い声が響くがどっちも笑っていないので正直怖い。

「横島こつちに椅子を用意してくれたみたいだから、座って見てみましょうよ？」

「……長い話をしそうだから座っておけ」

観客席と書かれた看板の後ろの椅子に座っている蛍達に呼ばれて、今行くと返事を返し俺は観客席の方へ歩き出すのだった

「まあ横島様〱私の隣に来てくれるとは感激です」

上機嫌に言う清姫ちゃんに思わず苦笑する。こう、なんと言うか様付けされるような人間じゃないので、なんか照れると言うか恥かしい

と言うかそんな感じだ

「これも勉強になるから、ちゃんと見ておくと良いわよ?」

「うむ、式神の扱い方を見ていれば、お前も式神を作れるようになるかもしれないからな」

左隣の蛍と心眼の言葉に頷き、膝の上にタママ達を乗せて勝負を見る準備をしていると

【なーワシ何時までこうしていればいいんじゃない?】

「知らない」

封印札を額に張られて転がっているノツブちゃん。札を剥がしてあげたいんだけど、蛍とシズクの視線が厳しいので剥がせないのをごめんと小さく呟き

「ほーれ、チビー♪」

「みむ♪みみー♪」

話が終わるまでチビ達と遊んでいようと思い。人差し指を振りじゃれ付いて来るチビ達と戯れるのだった……

「では掟は同じ、負けた方の式神を差し出す、これでよろしいな?」

「ええそれでいいわくどうせく式神は貴方達を認めないからく」

認めないと自信満々で言われてくつと苦しそうに呟く男を見ながら、深呼吸を繰り返している冥子ちゃんを見て

「美神さん、冥子ちゃんは大丈夫でしょうか?」

政樹と名乗った男の背後に待機している着物姿の式神。シヨウトラ達と違い、完全な人型でその手に刀を持っているので強そうだ

「大丈夫に決まってるでしょ?まあ、見ていれば良いわ」

大体冥子が負けるわけ無いしと笑う美神さん。普段の気弱な姿ばかりを見ているので、正直負けてしまうのでは?と思っていたが、美神さんがここまで言い切るのだから何か勝算あるのだろうと思ひ。俺は慌てるのを止め椅子に深く背中を預けた

「負けるわけありませんわ、12神将は鬼道の家には絶対に負けません、何が起きようと」

「……だな、負ける訳がない。あいつらは鬼道を憎んでいる」

鬼道を憎んでいる?シズクと清姫ちゃんの言葉に首を傾げる

「シズク、清姫。何か知ってるの？」

蛍がそう尋ねるが清姫ちゃんとシズクは説明することは無く、一言だけ見ていれば判ると呟いた。12神将には何か秘密があるのだろうか？そしてどうしてシズクと清姫ちゃんがそれを知っているのか？と考え込んでいると

【横島さん、始まるみたいですよ？】

おキヌちゃんの声を聞いて、指を動かすのをやめて正面を見ると、冥子ちゃんと鬼道が向かい合っていて、重苦しい雰囲気か2人を包み込んでいた、確かに勝負が始まる前って感じだ。思わず俺まで緊張して、冷や汗が流れてくる

「ではく掟に従い、勝負を始めます。お互いに正々堂々と式神使いとの誇りを持つて戦うこと〜」

冥華さんの間延びした声が響く、声こそ間延びしていたが、その声は真剣な響きを伴っていて

「冥子ちゃん！頑張つてー！」

俺の方を見て、小さく握り拳を作る冥子ちゃん。この感じなら大丈夫そうかもしれないと思った。そしてそれから数秒後

「試合開始〜」

その言葉を合図に冥子ちゃんの影からアンチラが飛び出し、人型の式神へと突進していくのだった……

ボクは負けない筈だった。六道冥子の事は知っている、子供の時に会って鬼道の家の事を馬鹿にされ、六道への恨みでおかしくなっている父さんの八つ当たりにも近い修行を何年も続けて、やっとこうして見返す機会を得たと言うのに

「アンチラちゃん、ターンしてジャンプ〜♪」

【シャーツ!!!】

冥子の間延びした指示に従い、はねるように夜叉丸の周りを跳ぶ兎の式神。耳が煌く度に夜叉丸の身体が引き裂かれる

【ギ、ギガア!?】

「くっ！夜叉丸！振り払え!!!」

霊力を更につき込み夜叉丸に振り払えと指示を出す。夜叉丸はボクの指示に従い振り払おうとするが

「させないわ〜バサラちゃん」

【ブモーツ!!!】

冥子の影から巨大な式神が姿を現し夜叉丸を吸い込もうとする。

夜叉丸は本能的に刀を地面に付きたてそれに耐えるが

【キシャーッ!!!】

【ギガガガッ!?!?!】

それは兎に対する防御を捨てると言う事で全身を一瞬に引き裂かれ、夜叉丸が膝を付く

「政樹！何をしている！相手は努力も何もしていない小娘だぞ！お前が何故押されている!!」

父さんが唾を吐き散らしながら叫ぶ、確かにそのはずだ。だから先手を取って式神を奪い、冷静さを失わせて一気に畳み掛けるつもりが、たった2匹の式神に夜叉丸はボロボロになっていた

「くつ努力も何もせず、式神に頼ったお前なんか!!!」

思わずボクがそう叫ぶと観客席のバンダナの男が

「お前よーさつきから黙って聞いてれば、冥子ちゃんが努力してないとか、なんでそうやって決め付けられるんだ!」

そう怒鳴られてハツとなる。ボクが冥子に会ったのは7歳の時、あれから14年経っている。あれ以来あった事もない、ボクが成長しているのと同じように冥子も成長していた?い、いやそんな事は無い。父さんは言っていた、式神の制御も出来ず除霊にも失敗続きだと。そんな式神の性能に任せたあいつに負ける訳が訳が無い

「ボクも夜叉丸も死ぬほどの修行をして来たんや!!もう2度と負けへん!!これで負けたらボクは何の為にッ!!!子供としての幸せも捨てて、何度も何度も死に掛けて来た意味が無意味になってまうやろうがあ!!!」

ここで負けてしまったらボクが今までしてきた事が全て無意味になってしまう。だから負ける訳には行かないと叫ぶと

「くだらないわね。冥子を逆恨みしたら強くなれるとでも思っていた



の？冥子はちゃんと努力して、式神を操れるように努力していたわ。冥子は何もしてないって決め付けていたみたいだけど、何を根拠にそんなことが言えるの？」

っ！その言葉に何も言えなくなってしまった。ボクは父さんからの言葉だけを信じて、冥子の事を調べようとしなかった

「くっそれでもなあ！それでもボクは負けられないんや！行け！夜叉丸！」

ボクの指示に従い、夜叉丸が式神ではなく、冥子本人を狙うが

「それはく判ってたわく」

【グオオオオツ!!】

交通事故のような音が響き夜叉丸が弾き飛ばされ、父さんの足元まで転がっていく

「そ、そんな……」

完全に奇襲だった、だが冥子は完全に反応して見せたただけではなく、式神で反撃までも指示していた。それは冥子の実力が本物だったと言う証拠で、それに何よりもこれ以上夜叉丸を傷つけたくなかった……ボクの唯一の友達だったから

「どうもく息子さんは戦闘放棄みたいねくじゃあこの勝負く「いや、まだだあ！政樹！夜叉丸ツ!!まだお前達は負けていない!!」

父さんがそう叫ぶと懐から瓶に入った紅い液体を取り出し、その瓶を開けると、紅い水はあつと言う間に紅い石へと変貌し

「夜叉丸！霊力をくれてやる！立てえ!!」

投げつけられた紅い石が夜叉丸に吸い込まれるように消えて行く。それと同時にボロボロだった夜叉丸は跳ね起き

!!

一瞬で間合いを詰めて、3体の式神を切り裂き、武具へと変換し身につける

「あ、あはははは!!これで形勢逆転やなあ!!残りの式神も全部いただきやあ！」

今の夜叉丸ならば負けない、ボクは目の前の変質した夜叉丸を見ずに叩き潰せと叫ぶのだった……

鬼道先生って昔こんな感じだったのね。六道女学院の名物教師の過去を何処か遠い目で私は見ていた。何度か相談に乗ってもらった事もあったけど、これがどうやったらあんな良い先生になるのか？人間というのは不思議だなと思った

「不味い！冥子！離れなさい！」

美神さんの怒声に思考の海から引き上げられる。鬼道先生の父親が持っていたのは血の様に紅い……石？まさか！狂神石!?!硬直したその一瞬で狂神石は夜叉丸に吸い込まれ、アンチラ、バサラ、ビカラが切り裂かれ、夜叉丸の装備になる。それを見た瞬間私は足元に転がっているノツブの前にしゃがみ込み

「ノツブ！」

ノツブの額の札を勢いよく剥がすと同時にノツブは弾かれた様に立ち上がり

【ちい！面倒ごとか！】

火縄銃を構えるが、それは冥華さんによって止められた

「これはく由緒正しい決闘よ！どっちかの式神が暴走するまでは手出しをしたら駄目よ！」

それは穏やかな声だったが、有無を言わさない迫力があつた。その威圧感に飲まれてもとの椅子に座りながら

「美神さん、これ物凄く不味いんじゃないですか？」

「不味い所の話じゃないわよ。下手をすると全員死ぬわよ！」

狂神石は神魔さえ狂わせる。それを式神がいつまでも耐えられる訳が無い、美神さんはこのままでは全員死ぬと判断したのか

「シズク。いざとなったらよろしく！」

「……判った」

乗り物酔い不可避のミズチタクシーを使用する事を決めた。私と横島の顔が青くなる中。冥子さんは

「うっ！サンチラちゃん！インダラちゃん！頑張ってる！」

式神を奪われたことがショックだろうに、まだ式神の指示を出して夜叉丸を取り押さえようとするが

【!!】

【ガッアアアアアア!!】

【ブ、ブツモオオオオオ!】

「そ、そんなあゝ」

夜叉丸が突き出した手から衝撃波が放たれ、サンチラとインダラそしてビカラが弾き飛ばされ、夜叉丸に吸い込まれていく

「鬼道!この様な手を打つとは、恥を知れ!」

「恥!?恥など無いわ!!鬼道の復興をするまではどんな非道も正義だ!!」

狂神石を手にしてから以上にパワーアップした夜叉丸を見て冥華さんが怒鳴るが、既に狂っているのか、正常な目をしていない鬼道が高笑いをしながら

「さあ!やれワシの最高傑作よ!!お前の手で六道を壊し、鬼道の栄光を取り戻すのだ」

それは自分の息子でさえも道具としか見ていないと言葉だったが、鬼道先生はニヤつと笑い

「判ってる!さあ!夜叉丸!後7体や!さっさと奪つ……【シヤアア!!】な!?や、夜叉丸……?」

夜叉丸が鬼道先生に刃を振り下ろす、それは完全に夜叉丸が狂神石に飲み込まれ、暴走を始めたと言う証拠だった

「冥華おば様!」

「この勝負鬼道の反則とする!!お願いします!」

このままでは大変な事になると悟った美神さんが冥華さんにそう叫ぶと、反則と叫びここに鬼道の反則が決まった

「俺も行くぞ!」

横島が美神さんの助けをしようとして立ち上がり握り拳を作るが、それよりも早く美神さんの怒号が響いた

「馬鹿!あんたは清姫と冥子と冥華さんを護りなさい!陰陽術も使つて良いから、護りを固める!!おキヌちゃんは琉璃に連れて来て!GS協会で逮捕させるわ!」

【わ、判りました!直ぐ戻ります!!】

慌ててGS協会へと飛んで行くおキヌさん。そして美神さんの冷静な指示を聞いて納得する、そうだ、それが今横島がするべきことだ。私のサイキックソーサーはあくまで攻撃用。防御はそれほど高くない、美神さんもそれは同じ。今この中で防御を担当出来るのは横島とシズクの2人なのだ、ならばその1人が前衛に出るのは愚策だ

【横島。清姫にしろ、冥子にしろ、向こう側に奪われるわけにはいかない。もしガープが夜叉丸を通して見ていたらどうする?】

心眼の言葉にハツとなったのか、横島は慌てて鞆から札を取り出し「シズク。頼む」

「……判ってる」

横島が親指を噛み切り、札に文字を書くのとシズクがペットボトルを飲み干すのは同時で

「急々如律令!水精招来ツ!!!」

横島が札を地面にたたきつけると、そこから大量の水が溢れ出し、シズクがそれを片っ端から凍らせて壁を作り上げていく。これなら横島達も無事だろうと判断し、暴走している夜叉丸と対峙する

「そんな、夜叉丸……ボクが判らんのか……」

茫然自失になり夜叉丸に何度も呼びかける鬼道先生を押しつけ、美神さんと共に夜叉丸の前に立つ

「どうすればいいと思います?」

「取り込んでいる狂神石を破壊すれば……多分」

狂神石で12神将を操る力をしているのなら、狂神石を破壊すれば元に戻る可能性はある。問題はどこにあるかだ……12神将を歪な形で取り込んでいる夜叉丸はもう元の外見を失っている。もし体内にあるとすれば、私と美神さんで肉を弾き狂神石を露出させる。トドメは遠距離攻撃でした方が良いと判断したのか美神さんが振り返りながら

「ノツブ!狙撃準備!私達のフォローと横島君達の防御できる!!」

「ワシを誰だと思っておる?そんなのおちやのこさいさいじゃ!!」

火縄銃を担いだノツブが自信満々で笑う。ノツブの射撃の技術なら、あの氷の防壁の上で陣取るだけで私達の援護と横島の防御が出来

る。これならば飛び道具で攻撃されても大丈夫だと安心する……安心してしまつた……

「冥子ちゃん！冥華さん！こつちへ！チビ！モグラちゃん！2人を助けに行つてくれ！」

氷の防壁から横島が一瞬顔を出したその瞬間

「貴様かあ!!死ねええツ!!」

六道の家紋の羽織を着た男性達に取り押さえられていた鬼道が、それを力づくで振り払い懐から銃を取り出し、横島目掛けトリガーを引く、霊能ではなく、まさかの銃。それに一瞬私と美神さんの反応が遅れた……

【ちいつ!!】

ノツブが慌てて狙撃をし、それを弾き飛ばしたが……弾き飛ばした方向が悪かつた

【ギガアツ!!】

横島を守ろうとしたノツブに非は無い、跳弾がどこに飛ぶかなんて判らない。射軸から逸らせばいい、そう判断したノツブは悪くないのだ、だが今回ばかりは運が悪かつた。弾き飛ばした先には夜叉丸がいて、夜叉丸がそれを更に弾き飛ばしたのだ……横島の方角に……

「え」

誰の警告も間に合わなかつた。一瞬のやり取り、弾き飛ばされた銃弾はまっすぐに横島の額に向かい、横島の身体が後方に弾き飛ばされる

「ふっははははは!!これで鬼道の栄光は……【死ねえ!!】がぼあ!!」

高笑いする鬼道をノツブの銃撃が貫き、弾き飛ばされる。その苦悶の声で我に返つた美神さんが

「蛭ちゃん！横島君の所へ！」

【ガアア!!】

夜叉丸の攻撃を防ぎながら叫ぶ美神さんに頷き、横島の元へ走る。

「横島あツ!!」

銃弾が額に当つた……当たり所が良ければ良いが、最悪の場合死……最悪の予想が頭を過ぎり、額から血を流している横島の名前を叫

ぶが反応が無い、ぐったりし、血まみれの横島の姿を見て全身から血の気が引くのが判る

「クウン！クウン!!」

タマモが必死に舐めて傷を癒そうとしているが、溢れ続ける血の勢いは増す一方だ。だが心眼は固く結ばれていて、解こうとしているのだが、全く解くことが出来ない

「横島君くショウトラちゃんく!!」

「ワフウ！」

冥子さんも泣きながらショウトラを呼び出す。次の瞬間、私は自らの死を感じた

「貴方達はまた私から横島／高島様を奪うのですね」

「……お前達はやってはいけない事をした」

ゆらりと立ち上がった清姫とシズクから放たれる、圧倒的なまでの殺意と憎悪に完全に飲み込まれた

「あの時呪いなどで妥協せず、全て殺してしまえば良かった……」

清姫の白い着物が喪服を連想させる漆黒に染まり、その髪も色素を失い白へと染まっていく……まさか清姫が鬼道の家を呪った竜神!? そのことに気付いた鬼道先生の顔が青を通り越して土気色になる

「……清姫、竜気を寄越せ」

「構いませんわ」

清姫がシズクと手を繋いだ瞬間。巨大な水柱が現れ、弾けとんだ瞬間大人の姿になったシズクがその目に憎悪を宿し、その手を鬼道達に向ける

「……貴様らは殺す、魂までも殺し尽くす。転生などさせぬ、ここで完全に消し去ってくれる」

「私の分は残しておいてください、焼いて、焼いて、引き裂いて、また焼いて、殺し尽くすのですから」

鬼道達は触れてはいけない物に触れてしまったのだ、シズクと清姫にとつての逆鱗に……

リポート5 貴女はストーカーですか? いいえ、通い妻です♪ その4へ続く

## その4

レポート5 貴女はストーカーですか? いいえ、通い妻です♪ その4

清姫が居なくなつてからヒヤクメは毎日毎日清姫を探していたのだが、見つける事が出来ないでいた

(あの子の事が判らないのねー)

お姫様なのに何故私の目をすり抜けるような逃走が出来るのか? これだけ必死に探しているのに見つける事が出来ない。その事に激しい疑問を抱きながら必死に清姫ちゃんを探していると

「つきやあ!?!な、なんなのねー!?!」

急に日本。しかも東京から桁違いの竜気を感じして、思わず悲鳴を上げる。だがもしかしたら清姫ちゃんかもしれないと思いつきその周辺を見て

「た、大変なのねー!?!」

横島さんが額から血を流して倒れていて、大人になつたシズクという竜神と清姫ちゃんが竜気を全開にしていた、あの2人の竜気を全開にすれば、それこそ日本に悪影響を出しかねない

「し、小竜姫ー!小竜姫ツ!!」

このままでは日本が大変な事になるが、天界正規軍や編成中。しかもスパイがいる可能性があり信用出来ない、つまり頼る事が出来る相手が小竜姫しかいないので私は慌てて妙神山へと向かうのだつた  
……

清姫とシズクの相性が悪い、それは2人の本質にその理由があつた。炎を司る清姫の本質は破壊であり、水を司るシズクの本質は護りにある。言うならば2人は盾と矛であり、竜気の相性は良くて性格には致命的なまでに不一致を起こしていた。しかし横島を殺されかけた、2人にとって逆鱗と呼ぶべき存在を傷つけられた。それにより2人はお互いの性格の不一致や気に食わないという思い全てを飲み込み、ある一点に置いて完全に協力していた……そう、鬼道を殺すと

言う。その一念で……

【ギガアアアア!!】

12神将を取り込み、更に狂神石までも取り込んだ夜叉丸はそれこそ、神魔に匹敵する霊力を有しただろう。だがそれは本来式神と言う扱われる存在が持つには分不相応な力だった、理性は弾け飛び、その魔力に突き動かされるように暴れ回る夜叉丸に対し、怒りが限界を超え、逆に冷静になっていた

「シズク」

「……ふん……」

だがそこはやはり犬猿の仲であることに変わりはない。夜叉丸と鬼道を潰す、その点に関しては協力こそしているが、その視線も態度も協力しているとは程遠い物だった

「……やかましい」

指を鳴らした静かな音が響いた瞬間。夜叉丸だけではない、鬼道親子の逃げ道も断つように氷の棘が現れる。夜叉丸に向かったその棘は、楽に消滅させるつもりは無いと言うシズクの意思を示しているのか、脚や肩とダメージは大きいだが、決して致命傷にならない感覚で放たれていた

【ギッ!ギギアアアアア!】

「シズク、余計五月蠅いですわ」

【ギッ!?】

駆け出した清姫が夜叉丸の頭を鷲つかみにする、その細い白魚のような肌は竜を思わせる鱗と爪に変化しており、夜叉丸の顔面を握りつぶさんと言わんばかりに締め上げていた

「効くと思います?」

苦痛に暴れる夜叉丸の蹴りを物ともせず、にやりと笑った清姫は夜叉丸の頭を掴んだまま地面に叩きつけ

「燃えろ」

【ギーイイイイイイイッ!!】

信じられない力で地面に叩きつけられ、逃れることが出来ない上に炎で焼かれている夜叉丸が苦悶の声をあげ、暴れまわるが清姫はそれ



を全く意に介せず炎で丹念に夜叉丸の全身をあぶり続ける

「や、夜叉丸!!」

自身の式神が言いように痛めつけられている、その光景を見て政樹が悲鳴をあげ

「黒い衣に……白髪……ま、まさか!」

怒り狂う清姫の姿に何かを思い出したように顔色を変えた雄一に、シズクはくだらないといわんばかりに鼻を鳴らし

「……清姫」

「はいはい、判ってますわよ」

【ギッ!】

夜叉丸をシズクの方に蹴り飛ばす清姫。体格は倍以上は違うと言うのに、夜叉丸の身体はまるでボールのように飛びながら、シズクの方へ向かい

「……くたばれ」

【ギ!?!ギギアアアアアアアア!?!】

「あらあら、もう少し痛めつけようと思っていましたのに……」

巨大な氷の槍で両手足を貫かれ、更に胴体にも氷塊を叩きつけられた夜叉丸を見て、清姫はもう遊べないですわねと呟き。夜叉丸の手足にシズクの氷の槍と重なるように、炎を纏った長刀を付き立て、まるで昆虫標本のように夜叉丸の動きを止めてから、恐怖に震える鬼道親子にシズクと清姫の怒りに燃えた瞳が向けられるのだった……

私は目の前の惨劇を見て完全に放心状態になっていた。シズクが桁違いの竜神と言う事も知っていたし、清姫も同じく膨大な力を持つ竜神だと言うことは知っていた。いや、知っていたつもりだった……

【ギガアア!ギガアアアアアア!!】

暴走している夜叉丸はシズクの氷と清姫の炎の長刀で手足を拘束され、更に炎の鎖で縛られ動く事が出来ず礫状態。止めようにも炎と水が嵐のように吹き荒れ、人間では到底止めに入るなど不可能な状態だ

「誰が気絶して良いと言いましたか？貴方達の断罪はまだ終わっていません」

「ぐっぎぎやあああああッ!!!」

鬼道の父は何度も何度も気絶をしているが、その度にシズクの水で起され、傷を癒され再び蹴られる。その都度に血反吐を吐き、苦悶の叫びを上げる。その余りの声に思わず耳を塞ぐが、それでも鬼道の父の叫びは聞こえてくる

「……いい悲鳴だ。だがその程度の苦痛が何だ、お前は横島を殺した」  
絶対零度の響を伴ったシズクの静かな声が響くと、鋭い氷の針が鬼道の身体を貫く、だが痛みこそ大きい、死ぬことも出来ない、気絶することも出来ない。蹴るように、痛めつけるように丁寧丁寧に針を突き刺していく、そのあまりに悲惨すぎる光景に冥子が悲鳴をあげ、蛍ちゃんも目を逸らす。私も直視したくないほどに酷い光景だった……

(これが逆鱗に触った者の末路か)

シズクも清姫も簡単に殺すような真似をしないだろう。何十回、何百回だって鬼道親子を癒し、叩きのめすだろう。身体ではなく。先に心を壊す、とても残酷で、そしてその表情さえも普段のシズクからは想像出来ない様な恐ろしい顔をしている

「お前も後で同じ目にあわせます。何度殺しても飽き足りない！鬼道の家は滅べ！高島様だけではなく、横島様までも私から奪うと言うのかッ!!!」

憎悪だけが込められた眼で睨まれた鬼道政樹が泡を吹いて気絶する。しかし鬼道と六道、そして高島という陰陽師……その全てが繋がっていた……平安時代からの因縁。そんな関係者同士がこの場所に一同に会した、こうなると判っていれば決闘に付き添うことなんて無かったのに！時折飛んで来る氷や炎を避けながら横島君の元へと走るのだった

「はっ……はっ！蛍ちゃん！横島君の様子は!？」

短い距離だったが、シズクと清姫の怒りに反応したのか、あちこちで地割れや木々が倒れてきて思うように走る事が出来ず、さらには無

差別に放たれる攻撃を防ぎながらの走りだったので体力を消耗してしまい、息も絶え絶えに蛍ちゃんに横島君の様子を尋ねる。当った場所は額。上手く当たっていれば命を失うことは無いが

「……駄目なんです、横島……眼を開けてくれないんです……」

へたり込んで涙を流す蛍ちゃんに最悪の結果が脳裏を過ぎる。慌てて横島君の側に駆け寄り……私もその場にへたり込んだ……

(そ、そんな……)

銃弾は横島君の額のだ真ん中に命中したようで、バンダナには深い穴が開いている。そしてその穴から止め処なく溢れる血液に血の気が引く、心眼も何も言わないのがその嫌な予想を強くさせる、心眼自身も横島君が死んでしまったから……？

「クウン！クウン!!!」

「ワンワン!!」

「みむー!!みみー!!!」

「うきゅー!」

チビとモグラちゃんが横島君に必死に呼びかけ、タマモとシヨウトラが必死にヒーリングを行っているが、ぴくりとも動かない。その隣では冥子が

「う、うえ……令子ちゃん、ごめん……ひつく……ごめんねえ……」

へたり込んでぼろぼろと泣きながら謝ってくる。違う、いらぬ、謝罪なんて欲しくない冥華おば様が沈鬱そうに目を伏せているのを見た瞬間

(うつ……頭が)

強烈な頭痛が襲ってくる、倒れている横島君と誰かの姿が重なって……何かを思い出しかけた時

【っはあ!!】

バンダナに心眼が現れ、そこから銃弾がはじき出される

【ぜえ、ぜえ……あ、危ない所だった。あとほんの瞬間遅かったら横島死んでいたぞ】

荒い呼吸を整えている(?) 心眼の言葉に私は思わずそのバンダナに顔を寄せて

「横島君は生きてるの!？」

「当たり前だ! 私が横島を死なせるものか!! ただサイキックソーサーの展開が僅かに遅れたから、酷い脳震盪で気絶しているが命に別状は無い!! 縁起でもないことを口にするな!!」

心眼の怒声で横島君が無事だと判った瞬間。全身から力が抜け、私はその場にへたり込んでしまうのだった……

『ありがとく●●様く』

『調子に乗るなよ、●●。お前なんて庶民の出の卑しい術師なのだからな』

『●●様。父は私を愛していないのでしょうか?』

『●●、あんまり派手に動くな。鬼道様がお前の事を嫌っているぞ』

『●●様! 私は貴方様に嫁ぎとうございます』

『……●●。こいつには気をつけろ、こいつの気性は激しいぞ』

『●●殿……』

「っはあ! はあ!!!」

目まぐるしく変わっていく場面。誰もが俺に声を掛けてきた……だがその呼ばれている名前はどうしても聞く事が出来ず、常にノイズが走ったように聞こえてた。どことなく冥子ちゃんに似た女性から始まり、シズクや清姫ちゃんの姿も合った。そして最後に現れた美神さんに似た女性の姿を見た瞬間。俺は荒い呼吸をしながら身体を起こした

「よ、横島あ!!!」

号泣しながら抱き付いてくる蛍の勢いに押され、再び地面に叩き付けられるのだった……しかしそのときの衝撃のせいか、さつきまではつきりと覚えていた夢の光景は綺麗さっぱりと忘れてしまうのだった……

「あいてて、蛍? どうしたん?」

「……横島が撃たれて、動かなくて、死んじゃったって……」

撃たれた……? 俺が? 倒れたまま美神さんの方を見ると額を指差

される。もしかして額に銃弾が当たったのか?と思い、額に手を伸ばそうとすると

【動くな横島。脳が揺れている、今動くのは危険だ】

心眼の言葉に動かしかけた右手を止めると、シヨウトラとタマモが額を舐め始める。暫くすると離れていくこれで治療完了って事か? シヨウトラとタマモの頭を撫でてからゆっくりと身体を起こすと、蛍が背中に手を回して起き上がりやすいようにしてくれる

「みむうーみむうううー!」

「うきゅーうきゅうううー!」

涙を流しながら突進してくる、チビ達と涙をハンカチで拭っている冥子ちゃんや美神さんを見て、俺が死に掛けていたのは本当の事だと悟る。しかし清姫ちゃんとシズクの姿が見えない。2人の姿を探そうと思いつち上がるうとすると

「無理をしないで、お願いだから動かないで、脳震盪は本当に怖いんだから」

「そうよ。横島君、今は動いたら駄目よ」

「倒れたりするとく危ないからく動いちゃ駄目よ」

蛍に美神さん、それに冥子ちゃんが動いた駄目だと繰り返す言う、それがどうしてもおかしいと思えてくる

「蛍、美神さん、シズクと清姫ちゃんはどこですか?」

俺が怪我をしているのにシズクが姿を見せないのはおかしい、だからどこに居るのか?と尋ねると露骨に目を逸らす美神さん達。これは絶対に何かあると蛍が止めるのを無視して立ち上がる。すると激しい耳鳴りと共に立ち眩みがする

「横島ーまだ立ったら駄目よ!」

蛍が俺に座れと言うが、俺はとてもじゃないが座ることなんて出来なかった

「お前は殺す、殺してやる!!2度も私から高島／横島様を奪おうとした罪。永遠に悔いろ!」

「……次は貴様だ。鬼道政樹……お前の父がやった事だ。お前も同罪だ」

漆黒の着物を着た清姫ちゃんと大人の姿になったシズクが鬼道親子を殺そうとしているのを見て

「なんで止めないんですか!？」

どうして人を殺そうとしているのに止めないんですか!と怒鳴ると冥華さんが

「横島君く貴方は彼女達にとって逆鱗なのよく彼女達は貴方が撃たれた事で我を忘れている。そんなく竜の前に出るのは自殺行為なのよく寧ろ生贄を捧げて鎮めた方が早いのよく」

生贄?……鬼道達が……?言われた事が理解出来ず一瞬思考が止まるが、直ぐに言われた言葉を理解し、冥華さんに詰め寄ろうとするが

「止めよ。横島。お前は穏やかな側面しか見てなかったのだ、寧ろあれこそが正しい姿と言える」

「うむ、確かにそうかもしれない……ああなってしまえば言葉など届かない、落ち着くまでほっておくかない」

心眼とノツブちゃんが諭すように俺に言うが、そんな事到底納得できる話じゃない。ゆつくりと爪を振りかぶり、心臓に突き立てようとしているように見えた……俺はそれを見た瞬間。蚩や美神さんの静止を振り切って、シズクと清姫ちゃんに向かって走り出していた

「止めてくれッ!!」

鬼道達の前に立ってシズクと清姫ちゃんに叫ぶ。2人は一瞬驚いた顔をしたが

「目を覚ましたのですね。良かったです、ですが……どいてください、横島様。この愚か者は殺さなければ何度でも同じ事をする」

「……そうだ、退いている。お前には……人の死は見るのは早い」

俺に退けと言うシズクと清姫ちゃんの目は黒く濁っていて、正直こうしているだけでもめっちゃくちゃ怖い

【馬鹿者!今の清姫とシズクの前に立つな!!お前まで殺されるぞ!!】

心眼がそう叫ぶが、今ここで俺が退けば鬼道達はシズク達に殺される。シズク達が人間を殺してしまう

「駄目だ。退かない、シズク、清姫ちゃん。俺は無事だ。こうして生き

ている。だからもう止めてくれ」

シズクはずっと俺の側にいてくれた、もう既に家族のような者だ。清姫ちゃんだって乱暴されかけて怖かったと怯えていた、そんな彼女を1人にして置けなくて、俺は家に連れて帰った。そんな2人が人を殺すなんて許せる訳がない

「駄目ですわ、横島様。鬼道に情けを掛けてはいけませんわ。この一族はまた貴方を殺す」

「……横島。清姫の言う通りだ。お前の優しさは知っている、だがお前を害する者にまで向ける必要はない」

シズクと清姫ちゃんは俺の名前を呼んだ。だがそれは俺に向けられた言葉じゃなかった。だから俺は2人の目を見て

「俺は横島忠夫だ。高島じゃない」

俺の言葉にシズクと清姫ちゃんの動きが硬直する。2人は俺じゃなくて、高島を見ていた。だから必要以上に鬼道達を警戒し、憎んでいた

「昔何があつたかなんて、俺には関係ない。俺は今を生きている、過去は関係ない。もう1度言う、俺は横島忠夫だ。高島じゃないッ!!」

2人が俺を通して誰かを見ているも良いさ。それは2人の思い出の中を生きている人間だから、だけどその死んだ人間の為に2人の手を血で汚して欲しくない

「頼む、止めてくれ。俺は……そんなシズクも、清姫ちゃんも見たくないんだ。だから止めてくれ、俺を思ってくれるなら殺すのを止めてくれッ!!」

俺は俺の側にいる人間には笑っていて欲しい、もしここで2人が鬼道を殺してしまえば、2人はきつともう心からの笑みを浮かべることが出来ない、そう思った。だから俺は必死にそう叫ぶのだった……

おキヌちゃんに案内され六道の家に来たけど、そこではとんでもない事が起きていた。式神が異形へとなり礫にされているし、氷の壁の中に隠れている美神さんや、蛍ちゃんの姿。そして何よりも

「頼む、止めてくれ。俺は……そんなシズクも、清姫ちゃんも見たくな

いんだ。だから止めてくれ、俺を思ってくれるなら殺すのを止めてくれッ!!」

身を裂くような叫びを上げる横島君と、そんな横島君の前に居る大人の姿をしたシズクと黒い着物の竜族の少女。そしてその後ろで頭を抱えてガタガタと怯えている鬼道親子

(一体何が)

おキヌちゃんの説明では、鬼道(父)が銃を紅い石……恐らく狂神石を取り出し、式神を強化したら暴走したと聞いていた。だが事はそんな単純な状況じゃ無くなっているのだと一目で悟った。横島君のそんな叫びから数秒後

「……すまない、頭に血が上った」

「そうですね。すいません」

シズクの姿が見慣れた子供の姿になり、竜族の少女の黒い着物が白に戻って行く。横島君はその姿を見て安心したのか

「よかつ……た」

膝を付いて崩れ落ちる横島君をシズクともう一人の少女が抱き止める。近寄って横島君の顔を見ると、血の気が引いていて青白い顔をしていた

「琉璃! 鬼道を殺人未遂で拘束して! そいつ横島君を銃で撃つたの!」

銃で! 横島君の顔が青白いのは銃で撃たれて出血したからだと悟り。連れて来た部下に

「鬼道雄一を拘束! その後GS協会で尋問するわ、聞くことが沢山あるから」

どうやって狂神石を手に入れたのか? もしかするとガープの手の者が居るかもしれない、そうなると横島君や蛍ちゃん達が危ない。入手経路や誰から入手したのか? それも知る必要がある

「鬼道政樹君。大人しく降参してくれるわね、貴方の父親が殺そうとしたら男の子が貴方を庇ってくれたのに、その恩を仇で返すような真似はしないわね」

ニコニコと笑っている冥華さんだが、目は全く笑っていない。断る



事が許さない雰囲気の中。鬼道政樹はがっくりと項垂れて

「判ってます、ボクの負けですわ……でも今の夜叉丸はボクのコントロールを受け付けません。式神をお返することも出来ません」

へたり込んだまま悔しそうに言う鬼道政樹。その視線の先では夜叉丸と呼ばれた式神が暴れ続けている

「令子ちゃん、あれなんとか出来そう？」

「すいません、無理ですね。高密度の霊体です、今の装備じゃあの身体から狂神石を取り出すことは出来ません」

狂神石を取り出せば、暴走は収まる。だけどその石を取り出す手段が無い、しかし早く取り出さないと夜叉丸は完全に悪魔へと変貌するだろう……

「横島!?横島!大丈夫!?返事をして!」

時間が無いと言えば横島君も危ないだろう。血の気が引いた顔で意識が朦朧としている、傷を治せるシズクだとしても血液不足を補う事は出来ない。かと言って救急車を呼んでいる時間は無い……あ、いや、冥子さんの式神が……でもインダラも取り込まれているっぽいから移動手段が無い

「……今ミズチタクシーで運ぶのは危険だ」

ミズチタクシーは転移の一種だが、上下左右から衝撃が掛かるので、今の横島君を運搬することは出来ない……だが一刻でも早く病院に連れて行かないと横島君が危ない

「ええい、琉璃、夜叉丸と鬼道の事は任せるわ!今コブラを回してくる!」

美神さんがそう叫んで駐車場に走ろうとした

「清姫様!見つけましたよ!」

小竜姫様が額から大粒の汗を流し私達の前に降りて来る。それを見た美神さんは慌てて小竜姫様に詰め寄り

「小竜姫様!横島君が危険な状態なんですツ!病院に連れて行ってください!!」

小竜姫様が蛍ちゃんに抱き抱えられている血の気の無い横島君を見て、相当危険な状態と悟ったのか

「判りました！まずは横島さんを病院に運びます。その前に……はっ！！」

腰から下げた鞘から神剣を振るう小竜姫様。その切っ先の先は夜叉丸が居て

【ギ、ギガアアアアアア!?】

胸が裂かれて狂神石が姿を見せたが、その瞬間。狂神石はひび割れ砕け散る……かなり綺麗な状態だったので無事に回収できると思ってたんだけど……

(やっぱり回収は出来ないのね)

徹底してこちら側に回収されないようになってい、今回はやっとサンプルを手に出れると思っていたのに……私が溜息を吐いている数秒の間に夜叉丸に取り込まれた冥子さんの式神が全て開放され冥子さんの影に吸い込まれて行き、夜叉丸はぼろぼろの状態でその場に倒れこむ

「ごめん、ごめんなあ……夜叉丸。苦しかったやろ」

【……】

鬼道政樹が夜叉丸を抱き締めて涙を流している。この様子を見る限りでは今回の事を相当後悔しているようだ、これなら事情聴取などにも素直に応じてくれるかもしれない。今私がするべき事はこの場で何があつたのか？それを全て把握する事だ

「少しの間よろしくお願いします！おキヌさん案内を！」

【わ、判りました！こっちです！】

横島君を背中に背負い、おキヌさんに案内されながら飛んで行く小竜姫様を見送り、私は溜息を吐きながら

「美神さん、冥華さん、詳しく話を聞かせてください」

この場所で何があつたのか？それを詳しく教えてくださいますようお願いすると、美神さんは

「私と冥子と冥華さんが残るから、蛍ちゃんとシズクと清姫とノツブは横島君の側に行かせてあげてくれる？」

ちらりと蛍ちゃん達を見るが、こちららも横島君と同じくらい血の気の無い顔をしている。そんな状態で話を聞くななんて酷なことは出来

ないので

「彼女達を病院へ送ってあげて、話を聞くのは横島君の容態が安定してからで良いわ」

判りましたと頷き、蛭ちゃん達を車に案内する部下を見ながら振り返り

「じゃあ詳しく、全部教えてください」

今日この場で何があったのか？その全てを教えてくださいと美神さんと冥華さんをお願いするのだった……

横島が運ばれた病院で医師は危ない所だったが、問題ないと教えてくれ、その言葉でやっと安心出来て病院の待合室で崩れ落ちた。チビ達も安心したのか、待合室の椅子の上で丸くなって眠り始めた。それだけ横島を心配していて、大丈夫だと判ったから緊張の糸が切れたのだろう

【良かったのう、これで安心じゃな】

【ほ、本当ですね】

ぷかぷかと浮かぶながら良かったと笑うノツブとおキヌさんに釣られて笑っていると

「シズク、清姫様。どうしてあんなことをしたのか教えてください。平安時代に何があったのかを」

小竜姫様がそう尋ねるとシズクと清姫は少し考えてから口を開いた。鬼道の家は平安時代の貴族で庶民の出だが陰陽術に長け、時の帝にも信頼されていた高島を憎み、高島が藤原の姫に手を出したと言う事を知ると、声高々に殺せと言い出したと

「……藤原の姫に手を出したと言っても高島は、親に見向きもされなかった哀れな姫の話し相手になっただけで手を出した事は無かった」「あの方。性に奔放でしたけど、傷ついている人を抱いたりする人じゃありませんでしたものね」

高島と鬼道の因縁は判った。そして処刑の理由の藤原の姫の境遇も判った。高島が性に奔放な酷い男ではあるが、優しさもあったと少し知りたくないことも知った。じゃあ今度は高島と六道の事を尋ね

ると

「……高島が特別に調整した12の式神。それが12神将だ」

え？じゃあシヨウトラ達が懐いているのは、創造主である高島に横島が似てるから？

「そうなると思いますわ、あ、後鬼道の家が廃れるように呪いを掛けたのは私ですわ。高島様を殺した人間なんて全員死ねばいいんです」

笑顔で死ねば良いのに言う清姫には全体的に賛同出来る。そして呪いを掛けたのも納得の理由だ、殺すのではなく、時間を掛けてじわじわと衰退させ、追い詰めていく。それだけ清姫の怒りが深かったと言ふ事だろう

【私もそれを知っていたら呪いを掛けてましたね】

【ワシなら不能にしてやるかもしれない】

貴族同士の権力闘争に巻き込まれて死んだ高島。確かに今の話を聞けば鬼道先生を憎んでいた理由も納得だ。現に私もそれを知っていれば、間違いなく同じような事をしていたと思うから、でも1つ気がかりな事が

(お父さんの話と食い違っている)

お父さんが高島を殺したと言っていた。しかし清姫は鬼道が先導し高島の抹殺を叫び、高島は処刑されたと言ふ。この食い違いは何だろうか？

(1度聞いてみる必要があるかもしれない)

この食い違いが後々大きな食い違いになっていくかもしれない。早い段階で判つたのだから聞いておく必要がある

「清姫様、事情はわかりました。ですが1度天界にお戻りください」

「嫌ですわ」

「清姫様「嫌ですわ」

天界に帰ってくださいと言う小竜姫様と帰りたくない清姫の話はきつとどこまで行っても平行線だろう。もし清姫が帰るとすれば、横島が説得した時以外ありえないと思う

「でもシズク。少しは反省してよ？あんなの何回もされたら止めれないし、美神さんと琉璃さんにも迷惑が掛かるんだから」

横島を殺されかけたから冷静さを失い、そしてそれを止める為に横島が動き倒れた。それに横島が叫んでいた、俺は高島じゃないと。それはシズクも清姫も横島ではなく、高島を見ていたと言う事に横島が気付いたからだろう、いやもしかすると血を流し倒れる横島の姿に、高島の処刑の前に動く事が出来なかつたと言うトラウマを刺激されてしまったのかもしれない

「……判っている。私も少し感情的になりすぎた」  
「ですね。判っていたつもりだったのですが……」

かなり反省している様子のシズクと清姫。だけど私達もシズク達を止める事が出来ないと決め付け、動くことがなかったので同罪だ。私達に清姫とシズクを責める権利はなく、それが出来るのは横島だけなので、それ以上追い詰めるのは止めにし私は待合室の椅子に背中を預け

「すいません小竜姫様……横島が起きたら、教えてください」

起きているのも限界だ。横島が死ぬことは無いと聞いたなら完全に気が緩み。私は横島と面会可能になったら教えてくださいと頼み、背もたれに背中を預け目を閉じるのだった……眠る寸前に私が考えていたのは、当事者達も知らない、過去の因縁……もしかすると今後もつとそう言う因縁が表に出てくるのかもしれない、そんな不安を抱きながら、私の意識は闇の中に沈んで行くのだった……なお、これから2時間後に面会可能になったのだが、横島は鬼道先生を殺そうとしていた、シズクと清姫に長い長い説教を始め、病院を私達が後にしたのは、それから更に2時間後の事だった……

リポート5 貴女はストーカーですか？いいえ、通い妻です♪ その5へ続く

## その5

レポート5 貴女はストーカーですか？いいえ、通い妻です♪ その5

疲れて帰ってきた表情の螢を見て、休むように声を掛けたのだが、その前にと強い口調で言われて何かあったのだと思い、事情を聞くことにしたのだが

「鬼道と六道と高島の関係かあ……すまないが、流石の私もそこまで……」

あの時は本気で……ん？んん……？頭の中で知らない記憶が動き出す。その違和感に眉を顰める、これがドクターカオスの言っていた特定のキーワードや人物と出会うことで発生する記憶の変化か……中々不快な感じだな……

「お父さんどう「待ってくれ、情報を整理する。知らないはずだったが、今は知っているな……」

私の言葉に目を見開く螢。私自身も驚いているが、鬼道・六道・高島の言葉を聞いて、ぼんやりとだが、何かを思い出してきた。それは過去が改変されたのか物による、記憶の修正なのか？それとも逆行による影響なのかは判らないが。平安時代の記憶であることは間違いないなかつた

「ああ、そうだ。鬼道は高島を憎み、蔑んでいた。その当時の最高の陰陽師。私も人間に化けて会いに行った記憶がある……ただその時には既に式神と置き換わっていたから、メフィストと逃亡していたのかもしれない」

横島君の前世である高島は非常に優秀な陰陽師だった。庶民の出ではあるが、柔軟な発想。妖怪に好かれると言う体質、そして天才的な閃き。それらをもち独自の陰陽術に式神作成のプロフェッショナルであり、時の帝や、上流階級の貴族にも顔が効いた優秀すぎた陰陽師だった

(いや、だがこれも違和感が残るか……?)

私でさえも高島が式神に変わっていることには気付いた。それなのに、清姫とシズク君が気付かないのはおかしい、それに記憶を思い出していると言っても、虫食いのように要所要所が欠落している。これでは私が思い出している記憶が正しい物なのか?と尋ねるのはどうしても疑問が残る

「鬼道はそれに対してどこまで行っても凡人だった。血脈があるから、帝お抱えの陰陽師だったが、能力は高島の遥か下。それに対して強い憎しみを持っていた……筈だ」

私の記憶なのだが、知らない記憶だからどうしても疑問系が残る、それに前の記憶としても、今思い出している記憶とは齟齬が大きすぎる。平行世界だからと言う言葉で思考停止して良いレベルの差異ではない、これはもはや別の世界、別の歴史となってしまうている

「当時の六道は鬼道よりも少し劣る家系だが、高島と懇意にしていた。だから12神将を作ってもらい、それを家宝として代々受け継いで来たんだろうな、それは現代の式神とはスペックから違うわけだ」

あの時代の平安時代は一言で言えば、魔窟だった。人が毎日の様に死に餓鬼が生まれ、陰陽師がそれを討伐する。そんな繰り返しをしていた、だからあの時代の平安時代の空気中の魔力は現代とは段違いだ。更には天才陰陽師が作ったことも加味すれば現代の式神とは根本的なスペックが違うのも当然だ

「それで藤原の姫って言うのは……?」

藤原の姫……藤原の姫……うーん、これは駄目だな。私は溜息を吐きながら

「私とは接点が無いね。彼女に関する記憶は無いが、彼女が高島の処刑に鬼道が踏み切った原因らしいね。ただ強行も強行、時の帝や陰陽寮に情報が入った頃には高島は斬首。荒れ狂う清姫に都は消滅寸前だった」

「鬼道馬鹿なんじゃないの?」

うん、馬鹿だろうね!寧ろそのときの事が原因で衰退して言ったと思っただけ……

「ん？嫌々、駄目だろ。これは駄目じゃないか」

更に浮かんでできた光景に思わずそんな事を呟いてしまう。蛍が怪訝そうにしているので、私は苦笑しながら

「横島君がアルビノの少女と黒髪の十二単の少女に取り合いさせられる」

「はあ!?!なんで!?!」

知らないよ……そんなの私が聞きたいよ……いや、確かに横島君と美神さんは平安時代にタイムスリップしてきていたけど……こんな事は無かった筈なんだが……

「おっとそこに鬼娘も入って来た。とても残念そうであほっぽいな」

なんか黄色い着物を着た角を持った幼女も入って来た。おかしいな？なんで私はこんな記憶を見ているのだろうか？一体これから平安時代で何が起きるのか？それが激しく気になった

「どうなってるの!?!」

いや、知らないよ、私が寧ろ聞きたいよ。そして最後に浮かんできた光景を見て、私は思わず思考が止まった

「私と私が居る」

過去の私と今の私。それは私自身も何らかの方法で平安時代へと跳び。過去の私自身を説得すると言う役目を背負っているのだと知り、更に今もまだ目覚めないベスパ……いや、蓮華の事もあり。私は背もたれに深く背中を預けながら蛍と共に深く溜息を吐きながら

「お父さん。これからどうなるのかしら?」

「さっぱり判らないよ……」

原始風水盤ですらどうなるか判っていないのに、それに加えてまさかの平安時代での出来事を今知らされてどうしろと言うんだ……どうせなら原始風水盤の事を知りたかった……私は激しい頭痛を感じながら深く溜息を吐くのだった……

「なんか入るには入れない雰囲気だね、これは」

そしてアシユタロスの部屋の前では妙神山から人間界に派遣されたメドーサが挨拶に来たのだが、入るには入れない雰囲気で部屋の前で困り果てていたりするのだった……



鬼道雄一と鬼道政樹の鬼道親子は陰陽寮に所属していたが、今回の事で陰陽寮からは追放処分になりGS協会預かりとなった。殺人未遂を犯した鬼道雄一はシズクと清姫の恐怖で発狂し精神病棟へ入院。しかも病室では国家防衛を任されている鬼道家当主になんと言う扱いかと怒鳴り散らしているらしい

(人間あそこまで行くと惨めね)

過去の栄光に縋り、犯罪に手を犯し、息子まで道具扱いにした。そして本人は精神異常者専用の牢屋に投獄。これで完全に鬼道家が潰れたのは間違いないだろう

「さてと鬼道政樹。貴方にはいろいろ聞きたい事があるわ」

逮捕される際も暴れる事無く、素直に応じた鬼道政樹は現在留置所で拘留中だ。後にGS協会の霊能関係の犯罪者の牢獄へ移されることが決まっている。その為に色々聞きたいことがあって、私は留置所に訪れていた

「神代会長さん……父さんが撃った青年は大丈夫でしたか？」

やつれた様子ながら横島君の安否を尋ねて来る鬼道に

「ええ、重症ではないわ。昨日輸血をして、そのまま自宅へ帰ったわ。命には別状は無いそうよ」

そうですか、良かったと呟く鬼道。雄一は完全な精神異常者だけどこっちは話が聞けそうね

「じゃあ色々聞かせて貰うわよ。辛いことだと思うけど、全部正直に答えて」

判りましたと返事を返す鬼道を見ながら、私は瓶に詰めた狂神石の欠片を机の上に乗せて

「これ、狂神石って言って神魔も狂わせる危険な道具として警戒されてるのよ。GS試験のガープ襲来の事は知ってるでしょ？あいつらが……って何その今知りましたって顔は？」

ガープの名前を聞いて目を見開いている鬼道に尋ねると、鬼道は乾いた声で笑いながら

「ボクは修行の時と学校に行かされる時以外は、ずっと窓も何も無い部屋に閉じ込められていましたから……父さんの言うことがボクの知りえる全てでした」

それっでもう殆ど虐待じゃない……鬼道も怪我をしていたので、怪我の状態を見た医者のお話では、日常的な虐待の痕と、今では効果が無いとされている霊力を増幅するツボを異常なほどに刺激された後があると聞いていた

(もう狂人じゃないの)

鬼道雄一。知りもしない平安時代の栄光を求め狂った男、その息子の鬼道政樹もその被害者だったようだ

「ソロモンが襲って来たって言うのに父さんは何をしてるんや……あんなことしてる場合じゃないやろ……本当すんません、父の代わりに謝らせてください」

深く、それこそ土下座しかねない勢いの鬼道を止める。虐待されてきた彼も被害者なのだから責めるのはお門違いであり、むしろ虐待されていたと言う事が判明したおかげでこつちに引つ張り込みやすくなった。その点に関して鬼道雄一に感謝しなければ……

「まあ、それは良いわ。それで狂神石の入手経路だけど、何か知っていることは無い？」

もし日本にガープの手の者が居て、没落した霊能者の家に渡して回っているなんて事になったら、内部分裂し、それこそガープに備えるなんて言っている場合じゃない。だからどこで手に入れたのか？と尋ねるが

「えつとさつきも言ったとおり、ボクは修行の時以外は閉じ込められていたので、父さんが何をしていたかは知りません。ですが決闘の数日前珍しく機嫌のいい父さんが酔って帰ってきた時に瓶に入れられた紅い水を見せられました」

決闘の時に判明した事だが、狂神石は液状にも変化すると言うことが判った。美神さんの目の前で瓶から出された狂神石が一瞬で固形化したと聞いていたから、しかし酔って帰って来たと言うのと、監禁状態だったと言う話ではどこで入手したかは判らない

「それで誰から貰ったとか、くれた人の特徴とかは？」

もしそれが判るなら指名手配とか出来るんだけどと思いつながら尋ねると鬼道はうーんっと唸りながら

「子供って言うてました。10歳くらいの子供で金髪……だったらしいです」

10歳くらいの子供で金髪……目立つ特徴だが、逆に目立ちすぎた。変装や幻術の可能性も高い、だがもしかするとそうじゃない可能性もあるので、一応地方のGS協会の支部に連絡だけは通しておこう  
「それとボクが住んでいたのは、京都の×××って所で、殆ど山の中ですよ」となると思ひに行つたのは街中って事ね？」

多分そうだと思います。と自信無さそうに言う鬼道。正直欲しかった情報は何も手にすることは出来なかつたが、鬼道政樹の人となりと、もしかすると日本の中にグループの手下が紛れ込んでいる可能性がある。それだけが判つただけでも良しとしよう。面会の時間も終わりなので立ち上がると

「すみません、こんな事聞けないのは判つてますが……えつと夜叉丸は……」

最後にそう尋ねて来た鬼道に私は振り返り、微笑みかけながら

「心配ないわ。今は六道の家で預かって治療中。今すぐは無理だけど、ちゃんと貴方に返してあげる」

「あ、ありがとうございますッ！今度はボクは自分で考えて、本当に正しい事をしようと思います」

泣きながら言う鬼道に別れを告げて、留置所を後にする。表で待つていてくれた部下の車に乗り込みながら

(鬼道はこっちに引き込めそうね)

鬼道をどうするか？と悩んでいたが、話をして見て判つたが雄一は狂人だったが、鬼道自体は気のいい青年という感じだった。あれほどの虐待を受けていながらも素直な性格をしている事に驚いたが、今回の事もあり六道の家に逆らうことは無いだろう、それに鬼道の家に保管されていた陰陽術と式神の資料は相当な物らしいので、鬼道政樹の知識も相当な物だろう。それに虐待の事が判明したので、そこを強調

して保護観察処分で押し切れれば優秀な人員を手にする事が出来る

(後はどこに配置するかね、冥華さんに頼んでみましょう)

私直属の部下にするって言う手もあるけど、それだと自由に動く事が出来なくなる。だからある程度自由に動けて、有事の際に備える事が出来る場所に配属させられると良いわねと思いつながら、私は会議の為にGS協会へ戻るのだった……

鬼道と六道の決闘の次の日。私は六道の屋敷を再び訪れていた、冥子は居ないので冥華おば様と一对一の話し合いに望む……正直言つて、あの狸と一对一の話し合いなんてごめんこうむるが、それでも今回はどうしても話をしないとイケない理由がある

(あの狸をどこまで相手に出来るか……)

私自身も修羅場を潜って来たつもりだが、冥華おば様はそれ以上。楽隠居みたいな立ち位置だが、日本の経済や政治に強い影響力を持っている。正直言つて、私でも逆らえばGS免許を取り上げられ、横島君と蛍ちゃんを無理やりでも冥子の事務所所属に出来るだけの権力を持つている。そんな相手に逆らう、本来なら自殺行為だが、今回の事はどうしても腹に据えかねているのだ

「令子です」

扉をノックにて入って良いか?と尋ねる。本来ならメイドや執事に案内されるが、それもないと言う事は向こう本気で話し合うつもりなのだと判る

「どうぞ〜」

いつもの間延びした声だが、声に冷たさが混じっていて背筋に冷たい汗が流れる。大きく深呼吸してから私は冥華おば様の部屋へ足を踏み入れたのだった

「昨日はごめんなさいね〜六道の家から横島君と令子ちゃんにに感謝料と迷惑料込みで2000万ずつを支払うわ〜」

話を切り出してきたのは冥華おば様だった。目の前に差し出された2枚の小切手。昨日の迷惑料と言っているが、実際は確実に口止め料だ。それだけの大金をぼんつと出す……それだけ今回の事は黙っ

ていて欲しいのだろう

「横島君への迷惑料と感謝料はありがたく頂きますが、私はお断りします。その代わりにいくつか質問をさせてください」

質問く？なにかしらくと笑っているが、目が全く笑っていない。このまま小切手を受け取って帰れとその眼が物語っている。凄まじいまでの威圧感にこのまま帰ってしまいたいと思いつながら

「清姫という竜族から聞きました、六道・鬼道・そして高島という陰陽師の事。失礼を承知で聞きます、貴女はあなる事が判っていて、私達を巻き込んだ。違いますか？」

六道の家の力を使えば清姫の事を知る機会は合っただろう、そして横島君に高島が残した陰陽術を託したのも、もしかすると横島君が高島の転生者ではないか？と考えたからでは？色々考え、自分で出した答えを口にすると思華おば様は

「今小切手を持って引き返すなら聞かなかったことにしてあげるわよく？」

凄まじい威圧感を放ちながら、小切手を持って逃げ帰れと告げる。私は真つ向にその目を見つめ返す。ここで引き返したらまた利用される、そんなことが何回も繰り返されるだけだと思ったから

「そうねくあなるって事は大体判っていたわくだからこそ横島君を呼んだわく清姫とシズクく桁違いの竜神が彼の側にいるって知らせるためにねく」

シズクと清姫の存在を知らせる？私が首を傾げると冥華さんは

「横島君はく目立ちすぎたわくあの眼魂くの力に霊力の物質化く今年のGS試験に参加するにはくレベルが高すぎたわくそれにくGS協会を辞めた人間がく横島君の陰陽術の事を話したからく今の彼はねく邪魔者扱いなのよく？」

その言葉に息を呑む、その可能性は十分に考慮していたつもりだった。けど私のはそのつもりだっただけで、横島君を護るには1手も2手も遅れていた

「だからくやりたくも無い鬼道との決闘を受けてく清姫とシズクがく怒りをむき出しにする相手を用意したわくただく横島君が撃たれ

ちやったのはく私としても予想外だったけどね？」

清姫とシズクのあの姿を見てちよつかいを掛ける人間はいないだろう。鬼道に向けられた殺意が全て自分達に向くと知って横島君を害する人間は居ないだろう。だけどそれだけじゃないはず

「それだけじゃないですよ？だって六道に利益が無いじゃないですか？」

そんな表の理由なんてどうでも良い、この人の良い顔の下で何を考えているのか？それを知りたいのだ

「ふふく簡単な話でしょく横島君は男で、冥子は女。天才陰陽師の転生者かもしれない、未知の力にく高レベルな霊力の圧縮・形状変化の技能くそれに妖使いくそれに日本経済を動かせると言われた紅井百合子の息子くこれだけ優秀な男の血を六道に欲しいと思つて悪いのく？だからくここで恩を売つておいたらく後々役に立つでしょく？」

全く悪びれず、笑顔のまま、冥華おば様は言い切った。横島君はどうでも良いが、その親と血を寄越せと

「貴女は！それを本気でやるつもりですか！」

横島君と蛍ちゃんを引き裂くような真似を本気でするつもりか！と怒鳴ると冥華おば様は

「貴女こそ理解しているの？横島君の価値を、あのGS試験で見せた力を！あの力を欲して、海外が動いているって言うことさえも知らない貴女がそれを言うの？」

間延びした声ではなく、強い口調で言い切った冥華おば様に驚いて、椅子に尻餅を打つ様な形で座り込むと

「良い？理解しなさい、横島君は貴女から見ればまだ見習い、けど他の人間からすれば稀有な才能をこれでもかって持ち合わせた天才児。横島忠夫の価値を知りなさい、今回は助けてあげたわ、でも次は無いわよ？」

そう笑つて小切手を2枚私に押し付け、帰りなさいと言う冥華おば様に何も言い返すことが出来ず、私はよろよろと六道の屋敷を後にした

(師匠としてだけじゃない、私にはまだやらないといけないことがあったのね)

横島君の霊能を導くだけではなく、横島君の価値を知り、奪いに来る相手から護る必要がある。今回はあえて悪者になってその危険性を教えてくれた冥華おば様に頭を下げ、私は事務所へと戻るのだった……

病院から退院して2日。俺はあることで困り果てていた。しかもそれが結構なトラブルの元なのが、余計に俺の頭を悩ませていた

「清姫ちゃん。1回天界へ帰ろうって小竜姫様が言ってるんだから、1回帰ろうよ?」

「嫌です。私は横島様の家で暮らすんです」

これだ。清姫ちゃんを迎えに来た小竜姫様と、絶対に嫌だと言う清姫ちゃん。この完全に平行線の話し合いに俺は困り果てていた

「力づくでやると私の立場が危ないんです」

「……性格はこれだが、血脈は竜族の中でもエリート中のエリートだからな、地位的には小竜姫の上だしな」

帰らないと清姫ちゃんが駄々を捏ねるので小竜姫様も俺の家で寝泊りしているのだが

(これは駄目だ。本当に駄目だ)

湯上りの小竜姫様の色気とか、外見からは想像できないほどに1部が成長している清姫ちゃんとかと暮らすには、俺の精神力が持たない。だから何とかして1度帰って貰わなくては

「へたれー」

「シヤラップッ!!!」

男なら女の3人や5人は纏めて面倒を見て見せろとか言って、笑いながらからかって来るノツブちゃん。正直居候だから家を追い出してやろうか何度悩んだことか

「ですが、主殿。夫とは複数の妻を「牛若丸はそんな事言ったら駄目!?!」……は、はあ……判りました?」

チカチカ光る眼魂にそう叫ぶ。ノツブちゃんの影響で牛若丸まで

もが！本気で追い出すことを検討していると清姫ちゃんが机の上の眼魂を見て

「気になっていたんですけど、これなんですか？」

ああ。清姫ちゃんは眼魂の事を知らないのか、俺はポケットからシズク眼魂を取り出して

「眼魂って言って、神魔とかの魂を込める事で、俺が使える武器になるんだ。んでこれはシズクの眼魂」

「……シズクの……では横島様。私も眼魂を作って貴方様の力に！」

ええ……眼魂ってそう簡単に作れるものじゃないんだけど……それを説明しようにも、さあ！さあ！つと手を差し出してくる清姫ちゃんに困っているとシズクが黒い笑みを浮かべながら

「……いいじゃないか、ブランクはまた作れる。こいつにも渡してやれ」

その目が物語っている。どうせ失敗すると判っている、それで絶対馬鹿にするつもりだろうと思いつながらブランク眼魂を手渡す。清姫ちゃんはそれを両手で握り締め、竜気と霊力を込めているが……

(あ、やっぱり駄目っばい)

普段なら眼魂が光り輝いて眼魂と変化していくのだが、その気配が無い。これは眼魂にはならないと判った

「ふう……ふう……これでどうですか？」

額に大粒の汗を浮かべている清姫ちゃんが眼魂を差し出してくるが、その色はグレーでスカッパードと判る

「これスカッパードって言って、失敗作になるんだ」

シヨックを受けている表情をしている清姫ちゃんを嘲笑うかの様な表情で見つめているシズク。ついには笑うのも我慢出来なくなつたらしく

「……ふふー」

「私を馬鹿にするのですかあ!!」

スカッパーを握り締めて、キシヤーっつと吼える清姫ちゃん。シズクはそれを見て笑い続けている……笑ってはいけないと思ったのだが、つられて笑ってしまう。清姫ちゃんが横島様!?と叫ぶのにごめんと



言いながら笑っているとノツブちゃんまでも笑い出す

【笑ってる場合じゃないですよ？横島さん本気で追い出そうとしてますよ？】

【え？マジ？からかいすぎた!?ワシ行くところないから追い出さないでー!!】

おキヌちゃんの言葉を聞いて、俺が本気だと理解したのか、号泣しているノツブちゃんを見ると追い出すのは可哀想か？という考えが頭を過ぎる

【メロンパン1週間禁止でいいだろう】

【ノツブウ!】

心眼の提案にノツブちゃんが奇声を発するのを聞きながら、これが1番効果的なんだと判断し

【じゃ、今回は1週間メロンパン禁止で】

ワシオワタと泣き崩れるノツブちゃんを無視して、清姫ちゃんの説得に戻る

「だからね？1回帰って竜神王つて人と話をするんでしょ？」

「嫌ですわ。監禁されて終わりですもの、私逃亡して来ましたから」

でもそれは乱暴されかけたからで、逃げるのは当然の事だよな？小竜姫様を見ると

「はい、乱暴しようとした竜族は魔界に左遷されました。もう安全ですよ。竜神王様も話を聞いてくれると思います」

うん、それなら安全だと思うのに、どうしてここに居たがるのか

「シズクがずるいですわ。ずっと同じ屋根の下、私もそれが良いですわ！シズクと一緒に部屋で良いので側において下さい」

いや、そんな事言われても困るんだけど、蛍がやっぱ横島は年下が好きなのよねー？とか目が全く笑ってない顔で微笑みかけてくるので、清姫ちゃんが居ると蛍に嫌われてしまう。それはどうしても避けたい

「みむう？」

「うきゅ？」

Gパン、Gジャンを傷つけないように器用に上って来たチビとモグ

ラちゃん。構ってあげたいが、今は清姫ちゃんを何とかしないといけないので少し待っていてほしい。この足りない頭でも必死に考えれば妙案の1つくらい……必死に考え込んでいると

「何そんなに悩んでるのよ？」

晩御飯の稲荷寿司を頬張っていて話し合いに参加して無かったタマモが、ご馳走様と手を合わせながら

「清姫はあんたの側にこれないのが嫌なんですよ？じゃあ来ていって許可がいつでも下りるんなら素直に帰ってくれるんじゃない？」

盲点！そっか、そっか……そっちの方向で説得すればいいのか、流石タマモだ。頼りになる

「清姫ちゃん。何時でも訪ねてきて良いから。1回天界に帰ってくれるかな？」

「何時でもですか？それは少し揺らぎます」

小竜姫様の目を見る。なんとしても1度説得してくださいと目が訴えかけているので

「うん、何時でも良いからさ」

「判りました。何時でも尋ねてきて良いんですね……つまりそれは通い妻」

なんかぼそりと清姫ちゃんが呟いた気がするけど、とりあえず大丈夫と言うと

「判りました。では今日の所は1度帰ります。あ、この眼魂は持って帰ります、いずれちゃんと眼魂として横島様に捧げますので！ではでは！」

清姫ちゃんから帰るといふ言葉が出て、安堵の溜息を吐き。シズクと共に清姫ちゃんと小竜姫様を見送ったのだが、それから数日後

「なあ。シズク、ずっと見られてる気がして落ち着かないんだ」

「……知らん」

その日以来かなりの頻度で誰かの視線を感じるようになったのは、言うまでも無いだろう……

別件リポート 動き出す神魔

## 別件リポート

別件リポート 動き出す神魔

「小竜姫。お前には特別任務を与える」

清姫様を竜神王様の元へ預け妙神山に戻ろうと思っていると、竜神王様に呼び止められた。一体何事だろうか?と思いつながら振り返ると

「魔族のワルキューレが人間側の協力者として美神美智恵と伊達雪之丞と共に香港の調査を行っている。悪いが、その助っ人に向かって欲しいのだ」

ワルキューレが居るのなら、助っ人が必要となる事は無いと思うのですが……私が怪訝そうな顔をしているのに気付いた竜神王様は「本来ならそれは必要の無いことだが、魔界正規軍の編成を見直す為にワルキューレが1度魔界へ戻される。それと交代と言うことだ、最初から交代と言う事で話を進めると神族が魔族の言い分を全て聞くのか?と騒ぐ馬鹿が出るだろう。だから助っ人という形で頼む」

アスモデウス達と戦わないといけないのに、今も神族と魔族の溝は深いままなのです。今はそんな事をしている場合じゃないと言うのに……

「判りました。小竜姫、確かにその命承りました」

頼むと言う竜神王様に頷き、私はそのまま香港へと飛んだのだ……合流地点とされていたホテルに向かい絶句した

「くっ、小竜姫か……助かった」

「ワルキューレ!? 一体どうしたと言うんですか!？」

ワルキューレは腕に添え木をし、三角巾で腕を吊っている。側にいる人間が美神美智恵なんでしょうが、もう1人GS試験で見た伊達雪之丞の姿も竜神王様2人も聞いたとおりその場に居たのだが、2人も疲労困憊という感じだ。一体何があったのか?と尋ねるが

「わ、判らない、ベルゼバブと戦ったのは間違いない。だが襲われた場所が思い出せない」

思い出せない？これだけの傷を負っているのに、戦った場所が思い出せない？そんな事はない

「違うのよ、小竜姫様。記憶が途中で何かに切り取られたみたいになってるのよ」

事情がまるで飲み込めない。このままでは話も何も進まないと判断し、私は詳しく状況を聞くことにした

「まず俺とこのママに似て美しい人で、こことこの工場を調べていた」

机の上に広げられた地図に印をつけながら、雪之丞さんが話を進めていく、ママに似てと言われて引き攣った顔をしている美智恵さんに心の中で同情する。ママに似ていると言うのが雪之丞さんの褒め言葉としても、それを嬉しいと思うことは出来ないだろう

「そこで大量の血痕を見つけたの、それで思い出したのが香港で有名な風水師の連続失踪事件よ」

連続失踪事件と大量の血痕……どう考えても風水師の殺害現場と言う所ですね

「そして運が良いんだか悪いんだか、何とも言えないのだが……偶然調査していた場所でベルゼバブとその手下と思われる何かが来た。そして原始風水盤を作ると高笑いするベルゼバブによつて風水師が殺され、私達も発見され負傷をした所で記憶が途絶えている。気が付いたら負傷した状態でこのホテルの近くに倒れていた」

それはつまり何者かがその場所に乱入し、ワルキューレ達をここまで運び、記憶を奪い取り。ベルゼバブも退けた……

「何か香港に居ると言う事ですね？」  
「ああ。何か得体の知れない何か居る」

精神操作を扱い、そしてベルゼバブを片手間で退けるだけの化け物がこの香港に居る……だがその何かは今敵ではないと言うことだろう。もし敵だと言うのなら、ワルキューレ達を助けるだけのメリットがない。なんせ殺した方が早いのに、精神操作を施し、態々チェックインしているホテルまで運ぶ。そんな面倒なことをするだけの意味が無い

「私はこの通り負傷している。現地で指揮を取ることは叶わない、重大な任務を与えられたのにそれを遂行することが出来なかった……」

ワルキューレが目を伏せ、肩を震わせながら言葉を口にする。軍人である事に誇りを持っていて彼女は途中で任務を放棄することが悔しくて仕方ないのだろう

「私の代わりにベルゼバブの陰謀と影に暗躍する何ものかの正体を突き止めてくれ」

「判りました。私にらせてください」

ここまで言われて断る事など出来る訳も無い。無論最初から断るつもりも無かったが、ワルキューレの意思は確かに受け取った。私の言葉に安心したのか、意識を失うワルキューレ。そんな状態でも自分の責務を果たそうとしていたその姿に正直感心する。だが私達には感心している時間なんて無い、もし原始風水盤が完成してしまえば、それこそ私達は人間界で活動することが出来なくなる。完成する前に原始風水盤の針の強奪、もしくはベルゼバブの討伐の両方を成し遂げなくてはならない、つまり私達に残されている時間は殆ど無いのだ  
「雪之丞さん。美智恵さん、まだ動く事は出来ますか？」

私もワルキューレも人間界で活動するに辺り、能力を大幅に下げるブレスレットを着用している。これのおかげで制限時間関係なく活動することが出来るが、その反面戦闘力は大幅に低下している。ワルキューレの骨折も恐らく、これが原因だろう。かと言って外せば3分しか全力で活動することが出来ない、だからお2人に動く事が出来るか？と尋ねると

「全然余裕だぜ。俺は白竜寺の存続の為にここに居る。この程度で引き下がる真似はしねえ」

「私も大丈夫です」

2人の頼もしい言葉に礼を言い、私達は直ぐにベルゼバブの発見と風水師を護る為に動き出すのだった……

「ふむ、相棒よ。あいつらを殺さなかったのは私のミスだと思うかね？」

「ブルルルル」

そんな小竜姫達を見つめるがらんどろの黒い眼……真向かいのホテルの屋上にたたずむ骸骨……ペイルライダーだ

「しかし不味い、このままでは不味いな。姫の目覚めが遅れる」

姫の目覚めの為に香港でその準備をしているペイルライダーだが、このままでは不味いと繰り返し眩く

「やれやれ、面倒だが。やるとするか」

壁に立てかけてある大鎌を手に振り返ったペイルライダーの視線の先には、相棒である怪馬の蹄によって完全に動きを封じられたベルゼバブの姿。完全に動く事の無いベルゼバブは既に死んでいる。既に死んでいると言うことはペイルライダーの支配の領域下に存在しているという事だった

「お前は我の傀儡となれ」

振るわれた鎌はベルゼバブの身体を切り裂くことは無く、代わりにその魂を引き裂いた

「我が主……私は何をすれば……良いのでしょうか？」

その魂にペイルライダーへの強い服従心を植えつけた。そしてペイルライダーはベルゼバブに使命を与え、影の中に溶ける様に消えて行くのだった……

ワルキューレからの報告書を見て深く溜息を吐く、ワルキューレは骨折し、更にはダメージが大きすぎて行動不能になったと長い謝罪の文が送付されていた。更には正体不明で暗躍している何者か？これはガープではないだろう、それならば生かしたまま返す意味が無い。つまり香港で暗躍する何者かは……

「生き残りの魔人と言うことだな？オーティン」

背後から掛けられた声に驚きながら振り返ると、そこには重厚な鎧に身を包んだベルゼブルの姿。その鎧姿からは想像出来ない鈴のような澄んだ声に思わず溜息を吐きながら

「お前本当に人間界に行くつもりか？」

考え直せと言うがベルゼブルはふんつと鼻を鳴らし

「何時までも我の名を騙る偽者に大きな顔をさせるものか。それに

ビュレトが居ないんだ、魔族としてガープ共を止めれる人員を送らなければ面目たんだらう」

確かにその通りだが、ベルゼブルが動くと言うのはそれだけで警戒されると思うんだがな

「それに仮に生き残りの魔人が居たとして、下っ端を送り出して態々殺されに行かせるのか？」

それを言われると反論出来なくなる。魔人の恐ろしい所は神魔の魂を砕く、そうになると復活出来るか出来ないか？は本人の資質に左右される。復活してない神魔が多く、バランスが大きく崩れた。それにより我が魔界に来たのだから、その事を忘れる訳が無い

「……判った。ただし名目はベルゼバブの完全なる粛清だ、終わり次第戻れ」

明確な期間を言わなかったのは理由がある。ベルゼバブは無数に増える、それは本体が死ねば、別固体がバックアップとなり再び活動を再開する。だが増えると言う性質上それは早々出来る物じゃない、私の真意に気付いたベルゼブルは判つてると凜猛な笑みを浮かべ

「じゃ我は人間界へ行く、ああ言っておくが、香港とか言う街に行くが協力をする気は無い。神魔にも言っておけ、我は誰にも組しない」

魔法陣を展開して消えて行くベルゼバブを見て深く溜息を吐く  
「やはりこうなるか」

ベルゼブルは元豊穰神と言うアシユタロスと似た経歴を持つ魔神だ。サタンの魔界統一もその気になれば、一人で覆すことも出来る。強大すぎる魔神、だがそれをしないのは興味が無いからだ。魔界を治めることにも興味は無いし、魔界正規軍や天界正規軍にすら興味も持たない。一応は私の話を聞いているが、本音を言うところまで聞いていてくれるのかさえ不安だ……そんなベルゼブルが今回動いたのはベルゼバブが目障りだからに他ならない

「面倒事にならなければ良いが……」

私の直感では確実に面倒事になるのだが、どうかそうならないようにと心の中で祈り、娘からの手紙の一番下の言葉に涙した

『やつと横島に会えると思ったらこの様ですよ。ふふふ……ふふふふ

……泣きそうです」

便箋が濡れているから泣きながら書いたんだと思うと、不憫すぎて思わず涙を流してしまうのだった……

やっと自由に動けるようになったので、遅れていた計画を一気に進める。香港での原始風水盤を設置しての魔人の解放、これが今やる最優先課題だ

「ガープ。今神魔の方から緊急連絡があったよ、人間界にベルゼブルが赴く。決して邪魔をするなってさ」

久しぶりに戻って来たセーレの報告に舌打ちする。あいつが動くとなると計画がすべて狂っってくる

「どうするガープ。あの馬鹿を戻すか？」

狂神石を渡したら案の定増長したベルゼバブ。少し考えたが、これから先戦力的価値が出てくるとも思えない。それにどの道切り捨てる駒の為に作戦を変える必要は無い

「生贄にするつもりだったから構わんだろう？ベルゼブルが来た事より成功率が高まると言う物だ」

ベルゼバブに狂神石を与えたのは単純に保有する魔力量を上げたかったからだ。原始風水盤が起動すれば、それで香港に封印されている魔人は目覚める。だがそれでは全ての魔人の開放は出来ない、満月と原始風水盤と生贄。その3つ揃う必要がある、かと言って生贄に出来るレベルの仲間を切り捨てるわけには行かない。故に切り捨てて良い存在としてベルゼバブを迎え入れたのだから

「それでどうする？我らは動くのか？」

「いや？動かないぞ？寧ろ何で動く？」

今回の事はベルゼバブの独断。我らは決して動かない、それが第一条件だ。騒乱や何かの影に必ず居ると思われては作戦が思うように進まない、下手に向こうの警戒心を煽ることはないのだから、寧ろ向こうが勝手に警戒し、疲弊してくれる方が都合がいい、だから今は動かないのが得策

「ああ、それであいつを選んだんだね？納得」



セーレが納得としたと笑う。ベルゼバブは権力欲に塗れている。そんな奴が原始風水盤を設置する。それは自分の力を強化する為と誰もが思うだろう。そして更に魔人を復活させ、その恩に応えて従えと言う事も容易に想像出来る。そうなればこっちに疑惑の目は向けられない、そしてその間に

「戦力を整える。アスモデウス、演説の内容を覚えろよ」

「むう……またか」

嫌そうにするアスモデウスだが、このメンバーの中で演説を行い。味方の鼓舞が出来るのはこの男だけだ、そもそもお前を旗印として集まってきているんだ、お前以外誰がするんだ？と諭すと判っていると  
呟く

「さてとではアスラ」

「……なんだ？」

戦わせると言ったが、まだ1度も戦闘に出ていないアスラが不機嫌そうに返事を返す。頃合だな、本当は戦いに出す事も出来たのだが、私の目的の為にあってアジトに残しておいた。それが功を奏したのか、不機嫌に加えて力も何もかも充実している、これ以上に無い最高のタイミングだろう

「協力しろ、我らの傘下に入ったが、裏切りを考えている者がいる。処刑してくれるよな？」

来る物拒まずだが、去る者は殺す。それが絶対のルール、あくまで私達はテロリスト。こっちの情報が流れてアジトがばれては折角の研究が無駄になる。だからその前に制裁を加える

「いいだろう、直ぐにでも構わないか？」

「ああ、好きにしろ。ただし1つだけ付け加える」

殺す事は決まっている。だがそれについて条件が1つだけある

「惨たらしく殺せ、裏切ろうなどと2度と思わせぬように徹底的にな」  
「獰猛な笑みを浮かべ出て行ったアスラを見送り、正面を向き再び  
キーボードを叩き始めると

「何をするつもりなんだ？いい加減に教えてくれないか？」

目覚めてからずっと私が研究している物が気になるのか、いい加減

に教えてくれと言うアスモデウス。ああ、確かに何時までも秘密にしていたのでは私の信用も危ないな。ただでさえ私の負傷で計画が遅れ始めているのだから、形になる成果を見せないと駄目か……私はそう苦笑し、1度作業を停止し作っている物を見せた

「む？それは……まさか？」

アスモデウスは一目で私が何を作ろうとしていたのか理解した。

「ああ、複製してみようと思つてな。あの横島忠夫が使うものをな」

私の視線の先には黒い球体が形成されようとしていたのだった

……

リポート6 原始風水盤を発見せよ その1へ続く

## リポート6 原始風水盤を発見せよ その1

リポート6 原始風水盤を発見せよ その1

小竜姫が私と合流してから2日経った夜。勢いよくホテルの扉が開き、敵襲か!と咄嗟に銃を構える

「どうした!?何があった!?!」

姿がぶれている小竜姫と酷く疲弊した様子の美智恵に肩を貸した雪之丞とが転がり込むようにして部屋に飛び込んでくる。その様子が只事ではないと、警戒度を最大まで高め小竜姫に何があったと問いかける

「くっ、油断しました……奇襲でブレスレットを破壊され……なんとか逃げて来ましたが……これ以上は……すいません」

小竜姫がそう言い残し消える。残った角を見て、霊力の回復に入ったのだと判断する

「何があった?説明しろ」

念の為に魔界正規軍から送って貰った高密度の精霊石を使い、結界を作りながら何があった?と尋ねると美智恵が

「危険を犯す事になったけど、それだけの価値はあったわ」

椅子に座り、何度か深呼吸を繰り返してから美智恵は机の上にある物をおいた

「それは……まさか!?!」

おぞましい魔力を放つ金属で出来た破片を見て、即座に理解した

「そうだ。ベルゼバブだったか?それが作ろうとしていた原始風水盤の針だ。命懸けで奪ってきた」

「でかしたぞ!これがあればあいつらは原始風水盤を起動できない!」

原始風水盤で最も肝心なのはこの針だ。何十人という風水師の血と魂を使って作り上げるこの針さえ奪えば、向こうの計画を完全に潰

す事が出来る

「でも問題はこれをどうするかよ……」

私は動く事が出来ず、美智恵も負傷。雪之丞は体力こそ有り余っているが、知力が足りない。

(ジークはまだか)

今日私はジークの迎えで魔界に帰る事になっている。だが未だに連絡は無く、連絡の後に合流地点に向かうつもりだったが、最悪の場合連絡を待たずに出発しなければならぬ可能性が出てきた……それに美智恵も雪之丞も保護させるか？と考えてたが

(いや、それは駄目か)

魔界正規軍にもスパイが居る可能性がある以上。魔界正規軍を容易に信用することは出来ない、美智恵は父上の宮殿に預ければ安全だが、針のほうはスパイに奪われる可能性が高い

「俺はこいつを日本に送るべきだと思う。美神令子や唐巢和弘……一流所のGSを呼んで、原始風水盤とやらの本体も壊すべきだ」

本体が残っていれば、また針を作られたらお終いだ。本体を壊すのが最優先だが、恐らく今の面子で破壊することは不可能だろう

「だがこれは神魔がやるべき仕事だ、人間では「その人間に頼らないとならねえんだろ？」

雪之丞の強い視線に言葉が詰まる。正直言つてアスモデウス陣営は人間界でも十全とまでは言わないが、それでも私達よりも強い力を発揮できる。そうなると戦力ではこちらが劣る事になる、だから増援を呼ぶのは必須だが、弱体化した神魔が何人来たところで無駄だろう。下手をすると人間の方が有利に立てる可能性もある

「迷ってる時間はねえ。俺はこれを日本に送る。そして俺自身も1度日本へ逃げる、戦力を整えて戻ってくるつもりだ」

それしかないか……小竜姫は霊力が回復するまで動けず、私も負傷。美智恵も負傷、この戦力で戦うことは不可能だ

「判った。お前の提案に従う、だが1つだけ言っておく。美智恵の事は言うな」

「判ってる」

美神美智恵は公式には死者となっている。だからこそ私達と行動を共にすることが出来ているのだが、美神令子に知られるとまずい事になる。だから言うなと口止めをしながら、逃走の準備を進める  
「雪之丞。小竜姫と共に日本へ向かえ、私と美智恵は悪いが、ここで撤退する」

小竜姫は霊力さえ回復すれば、再び活動出来る。だが私は骨折をしている上にダメージが大きすぎる、美智恵に至っては知り合いに見つかる訳には行かない。となるとここで撤退するしかない、雪之丞に小竜姫の角を渡し

「せめてお前に向く注意が減るように、私と美智恵が囿になる。後は頼んだぞ」

「……判った」

真剣な表情で頷く雪之丞の肩を叩き、痛む翼に顔を歪めながら翼を広げ

「行くぞ美智恵。私の弟が迎えに来る場所まで行ければ何とかなる」

合流地点は港。ここから約12キロ……全力で飛べば数分だが、雪之丞が逃げる時間を考えると遠回りする必要がある。負傷した身体でどこまで出来るか判らないが、やるしかない

「ええ、雪之丞君。後はよろしくね」

美智恵を抱え、私はホテルの窓を突き破って飛び出した。案の定ベルゼバブの嘲笑が直ぐに聞こえてきて、追いかけてくる気配がする。この騒動に紛れ、路地を走っていく雪之丞の姿を見ながら

（出来ればお前の顔を見ておきたかったが、それは後の楽しみに取っておくぞ）

この世界では既に戦士の片鱗を見せていると言う横島。今は会うことが出来ないが、今度会う時はより戦士として洗礼された姿を見ることになるだろう。その時を楽しみにしていると心の中で呟き

「どうした！私はこちらだぞ！これが欲しくは無いのか！」

ベッドの柱を削り、原始風水盤の針と同じ形状にした物を見せ付けると案の定馬鹿なベルゼバブが食いついてきた

（後はジークと合流するだけだ）

問題はそこまで私の体力が持つかだが……やるしかない、ダミーを美智恵に渡し私は全力で翼を羽ばたかせるのだった……

【はい、そこまでです。中々筋が良くなって来ましたよ】

「あ、ありがとう……」

手にしていた木刀を落として川原に倒れこむ、朝焼けの空を見つめながら荒い呼吸を必死に整える。霊力の訓練も重要だが、それ以上に身体を鍛えることも大事と言う事で、最近の訓練の中に体術の稽古が組み込まれたのだが、それが実に厳しい

【横島君はやっぱり才能がありますよ。どうですか？この際剣術をメインにしてみても？】

【む？偶にはまともな事も言うな人斬り。主殿、私も同意見です】

沖田ちゃんと牛若丸にこの際剣術をメインにしてみました？と提案される。しかし俺が返事を返すよりも先に心眼が口を開いた

【横島はまだ成長段階だ。今一つに絞るのは得策では無い】

訓練や稽古を繰り返して、自分の型を見つかるべきだと言う心眼。確かに今の俺は自分に何が一番合っているのか？それが判らないから色々やってみたいと思っっているしな

【いいもん、いいもん。現代じゃ銃なんて手に入らないし……】

(あれどうしよう)

ワシも鍛えるぞーと気合を入れていたのだが、当然今の時代に銃は銃刀法違反だ。つまりノツブちゃんの射撃を教わることが出来ない。俺に銃を教えるつもりだったらしく酷く落ち込んでいるノツブちゃんのフォローをしようと思うのだが、なんと言えばのか判らなくて

「帰りにメロンパン買おうぜ」

【メロンパン!?!いいのかわ!?!】

メロンパン禁止3日目だが、これだ落ち込んでいるのを見ると可哀想なので帰りにメロンパンを買おうと約束し、川原で沖田ちゃんと別れ家へと戻るのだった

「みーむうー」

俺が帰ると元気よく鳴いて飛びついてくるチビを抱き止める

「みーむーみみむー!!!」

短い手を振って何か抗議しているように見える。訓練だと危ないので家に置いていった事を怒っているんだらうなと思いつい

「ごめんな。でも今から遊んでやるからな?」

遊んでやると言うとはつと笑うチビ。うん、やっぱりマスケットの居る生活は穏やかでいいなあと思いつながら靴を脱ぐのだった

「……おかえり、直ぐ朝食にするか?」

キツチンから声を掛けてくるシズク。少し考えたが、今まで動き回っていたことを考えて

「少し休んでからにする。チビとモグラちゃんも遊んで欲しそうだし」

【「ヒヤッホー!久しぶりのメロンパンじゃーッ!!!」

足元で跳ねているモグラちゃんに苦笑しながら後にすると言うと、シズクは判ったと呟きエプロンを脱いでリビングに出てくる。いつもの指定席で煎餅を齧り始めるシズクに嬉しそうにメロンパンに齧りつくノツブちゃんの姿に苦笑しながらボールで遊んでやりながら、近寄ってきたモグラちゃんを撫でてしていると妙な違和感を感じた

(ん?あ、あれ?)

モグラちゃんの頭の横に何か小さくて硬い物が……もしかして角?よく見ようと思ったのだが、それよりも先にモグラちゃんがボールを追いかけ始める

(まあ竜だから角くらい生えるか)

小竜姫様も角生えてるしと思いつ。ボールを抱えて戻ってくるチビの頭をなで、もう1度ボールを軽く投げるのだった

「コーン」

チビ達が満足するまで遊んでやって、それから朝食を食べ始めたのだが、食べ終わる寸前に起きてきたタマモを抱き上げて

「どうしたタマモ、最近やけに起きるのが遅いな?」

「クウ?」

精霊石を与えれば喋ることが出来るが、シズクに叱られるし、それ

に何よりもタマモにも影響が大きい。なのでタマモの仕草で判断しようとするが

(駄目だな。判らん)

タマモ自身も判っていないのか、キョトンとしているだけ。理由なんて判りそうに無いなと苦笑していると、コンコンと家の窓を叩かれる。誰だろうか?と振り返ると険しい顔をした蛍と美神さんの姿があつて、これは何かあつたのだと思い。タマモをフローリングの上に寝かせ

「どうしたんですか?除霊ですか?」

窓を開けながら尋ねると美神さんは真剣な表情をしたまま

「唐巢先生の教会が襲撃されたわ、悪いけど調査を手伝って頂戴」

唐巢神父の!?!あそこにはシルフィーちゃんやブラドー伯爵も居るので、滅多な事は起きないと思っていたのに

「判りました。直ぐ準備します!シズク、ノツブちゃん!出掛けるぞー!」

チビ達を抱え上げながらシズクとノツブちゃんに声を掛け、除霊の荷物を詰めた鞆を背負い美神さんの運転する車で唐巢神父の教会へ向かうのだった……

朝一番で教会が強襲されたと唐巢先生から連絡があり、蛍ちゃんと横島君を連れて教会に来ただけど

「うわ、これは酷いっすねえ」

横島君がボロボロの教会を見て酷いと呟く。机や椅子が全部ひっくり返されている、それを直そうとする横島君を止める

「やめなさい、ここ相当濃い魔力が満ちてるわ。下手に触ると呪われるわよ」

霊糸グローブをつけなさいと言って、私自身も霊糸グローブを嵌めながら

「それでブラドー伯爵とシルフィーちゃんは?」

あの2人がいればここまで荒らされることは無かつただろうに、それか2人とも負傷しているのかしら?と思いつながら尋ねると



「シルフィー君は高密度の魔力で我を失いそうだからと言って休んでいるよ。ブラドール伯爵は少し気になることがあるって出てるよ」

なるほど暴走しない為の行動って訳ね。箆筒を直しているピートを見ると足を引きずっている

【ピートさん?どうかしたんですか?】

おキヌちゃんも足を引きずっているのに気付いたのか、どうかしたのか?と尋ねるとピートは険しい顔をして

「扉を開くと同時に強襲されまして、咄嗟にヴァンパイヤミストで霧化しましたがダメージを受けてしまつて」

霧になった吸血鬼にダメージを与える。これは並みの相手じゃないわね……

(またソロモンが動き出した?)

ガープは負傷して撤退したが、部下は居るだろうからそれが動いているのかもしれない

「とりあえず霊視で痕跡を探ろうと思う。手伝ってくれるかい?」

唐巢先生の言葉に頷き、鞆から霊視ゴーグルを取り出すように横島君に指示を出そうとすると

「あのー隣の者ですが、これ昨日届いたんですけど、居なかつたみたいなので預かってました」

「あ、ありがとうございます」

蛍ちゃんが何かを受け取って、私達の前に置く。それは霊視ゴーグルなど無くても凄まじい魔力を放っていて

「あつたわね、ヒント」

「ですね」

「あ、これ僕宛ですね……住所は香港?なんでそんな所から……」

何かする前にヒントが向こうから来たことに苦笑しながら、その包みを開けるのだった

「これ……なんですかね?」

包みの中身は黒い金属で出来た何かの部品。唐巢先生にどう思います?と尋ねると

「うーん……流石に私もこういうのは管轄外だよ」

もしかしたら唐巢先生なら知っているかな?と思っただけだなあ……シズクにも一応尋ねてみると

「……20人くらいの生き血を吸ってるな、これ」

「はあ!?!」

20人くらいの生き血と聞いて、思いっきりその部品から離れる。どう考えても呪われたアイテムか何かだ

「お前が頼んだのか?」

「違いますよ!?僕は血よりも薔薇の方が好きなんですよ!」

ピートが頼んだわけ無いわよね。つまり香港に居る誰かがピートを頼って荷物を届けてきたって感じかしら?」

【破壊するか?全力で銃撃すれば粉碎出来るかも?】

破壊、そうね。破壊してしまっただろうが後腐れないかもしれないわね……どっち道碌な物じゃないし……シズクとノツブに破壊するように頼もうとした瞬間

「よお……やつぱりお前を頼って正解だったな」

聞こえてきた声に驚きながら振り返ると、そこには黒尽くめの服装をした伊達雪之丞が居た。だが酷く疲労しているのが、この距離でも判る

「お、雪之丞。香港に行ってたんだろ?お前怪しい古物商からなんか買ったのか?」

横島君が雪之丞に気楽に声を掛ける。何時の間に仲良くなったのかしら……

「いや違う……それは神魔の依頼で……奪取しろと言われたブツだ」

神魔の依頼!?やつぱりまたグループが動き始めている!?

「お前達なら……奪われるようなヘマはしないと買ったんだが……すまねえ……俺がヘマだったぜ……」

音を立てて崩れ落ちる伊達雪之丞の後ろから、屈強な体格の大男が10人。そしてその中央に浮かぶ異形

「かっははははは!!手間取らせてくれやがって!だがそれもこれで終わりだ!この真の蠅の王!ベルゼバブ様が来たんだからなあ!!」

薄気味悪い声で叫ぶ蠅の姿をした悪魔。そしてその悪魔が名乗っ

た蠅の王の名前に背筋に冷たい汗が流れるのを感じた

まったく、随分と手間取らせてくれやがって……ガープから借り受けたゾンビに指示を出すと、ゾンビは大きく足を振りかぶり倒れている人間を蹴り飛ばす

「がはっ!？」

「雪之丞!？」

苦悶の声を上げて吹っ飛ば人間を抱き止める赤いバンダナの男を見て。俺は歓喜した

(なんて俺はついているんだ!)

間違いない、横島忠夫だ。あれも捕まえる事が出来るなら捕まえろとガープから指令を受けていた

(これで香港での失態は帳消しだ!)

原始風水盤の針を奪われ、やはりその程度かと言われた。だが俺自身のみスだったので、反論のしようが無かった。だが原始風水盤と横島忠夫を捕まえて戻れば、よりいい地位に登る事が出来るだろう

「はっはー!!お前らー!こいつら皆殺しにしなあ!!」

目撃者は消す。これが一番手っ取り早く、そしてあれだけの霊能者を殺して魂を奪えば、俺は更なる高みへ行ける!!!俺の指示に従い、美神令子達に向かっていくゾンビ達だったが

【甘いわあ!戯けがあ!!!】

美神令子達の前に躍り出た幽霊が右手を突き出すと、虚空から火縄銃が飛び出しゾンビ達を貫いていく

「これはゾンビ!?しかもただのゾンビじゃない!」

(ちいっ……バレちまったか)

ゾンビだと言うことがバレた事に舌打ちする。これじゃああのゾンビの両腕に仕込まれた毒針が何の意味も無い

「横島君!蛭ちゃん!下がるわよ!普通のゾンビはあんなに早くない!絶対何か仕込んでるわ!霊体ボウガンと破魔札!それで応戦するわ!」

「はいっ!!!」

ゾンビとバレた事で美神令子達が倒れている机をバリケード代わりにして籠城姿勢に入る。そしてその前には

「……さて、虫如きが私に勝てると思っていいのか？」

「さーて！じゃんじゃん撃つかの！またメロンパンを貰う為になー！」

「これだけ物があれば、ポルターガイスト使い放題ですよ！」

水神シズクと2人の幽霊が立ち塞がる。幽霊には当然ゾンビの攻撃など効かないし、水神シズクには近づく前にゾンビが両断か、凍結させられて終わりだろう。更には

「みーむうう!!!」

「ココーン!!!」

「うーきゅーッ!!!」

グレムリンと妖狐そしてでっかいモグラ。それらが電撃や炎を繰り出しゾンビを問答無用で消し炭にしている。

(おいおいおい、なんだあありゃあ)

グレムリンは下級も下級の悪魔。そんなのがあんなに強力な電撃を放てるなんて見たことも聞いた事もねえ。更にはあの狐……めちゃくちゃな妖力を放ってやがる、それこそ下級神魔に届きそうな勢いだ。そしてあのモグラ、ありやもしかして龍か？なんでこんな所に龍が居るんだよ……想定外の事が続いていることに舌打ちを思わず打つが、イレギュラーであるあの小動物を除けば、俺の計画は殆ど計画通りに進んでいると言える

(だが俺の思う壺だぜ)

……俺の目的は原始風水盤の針を取り返すこと、そして籠城させることも計算の内、籠城させて土角結界で全員を封印する、それで今後俺達の邪魔者は全員消える。その後はゆっくり原始風水盤の針を奪えば、それで全て解決するが

(それだけじゃ終わらないぜ)

俺にはクローンがある、それを呼び出し、一気に数を増やして制圧し、原始風水盤の針を奪い、撤退する間に土角結界で閉じ込めて絶望を与える。その絶望に歪む人間達の顔を想像し、にやりと笑いなからクローンを呼び出そうとした瞬間

「がっはあ!?!」

前と後ろから同時に攻撃される。俺自身はゾンビに護られているので攻撃される筈が無い、そう思っていたから予想外の攻撃に完全に混乱してしまった

「愚か者が、貴様如きが蠅の王を名乗るか、この痴れ者が」

「街中でこれだけ魔力を撒き散らせば、GSを呼び寄せるって事も判らないのですか?」

俺の目の前には貴族の装束に身を包んだ吸血鬼、背後には魔道書を開いた女の姿があつた

「神宮寺さん!」

「ご無事そうで何より、間に合つてよかつたですわ」

神宮寺くえすとブラドール伯爵。魔族の中でも高名な魔法使い……更に戦力が増えて来たか……これは好都合だ

(今がこれを使うときか)

ガープから預けられた土角結界を起動しようとした瞬間

「おっと、そうはさせないよ」

突然聞こえてきた第3者の声。そして俺に向かって飛んで来る何か、咄嗟に身を翻したが

「がっがああああ!?!くそがああ!!!」

肩に槍が突き刺さる、これは!この槍はあ!!!!

「メドールサツ!!!」

裏切り者の魔族。神族へと寝返った愚かな女がニヤニヤと笑いながら俺を見下ろしていた

「うるさいね。人の名前を勝手に呼び捨てにするんじゃないよ」

俺の肩に突き刺さっていた槍を呼び戻し、向かってきたゾンビを両断したメドールサは槍を肩に担ぎ、美神令子達の前に着地して

「天界からの応援だ。ま、元魔族だが……今はあちらとは関係ない。頼りにしてくれよ」

ニツと笑うメドールサに舌打ちする。土角結界を失い、向こうの戦力は完全にこつちを超えた。

「あーあ、こりや無理だな。今の俺じゃあ無理だ」

ゾンビも凍結されて動けない、戦力は向こうが完全に上。力技で針を奪い返すことが出来ない

「ここは逃げさせて貰うぜ、精々針を護るんだなあ!」

そう叫んで背を向けると同時に、背後から何かが砕ける音がし

【ガアア!!】

「そんな!?!地下から!?!」

驚愕する人間達を見て、遂に我慢していた笑いが込み上げて来た

「はっはー!!馬鹿が!!」

ゾンビは11体居た。その内の一体を地下に潜らせ、地面から針を奪わせる。保険として考えていたことだが、まさかここまで梃子摺るとはな……だがそれもどうでも良い、精霊石と結界札に切り刻まれながらゾンビが針を俺へと投げ渡す。それを受け取り

「くつくつく!じゃあな!!馬鹿な魔法使いに裏切り者!これで人間界は魔族の物だ!!」

原始風水盤が起動すれば全てが魔族にとって有利な世界になっていく、俺は高笑いしながらその場を後にしたのだった……

逃げられちゃった……飛び去っていくベルゼバブを見て舌打ちする。アシユ様と合流して原始風水盤の事について話し合い。魔力反応を感知したので慌てて来たが……まさかベルゼバブが動いているとは思ってなかった

(前は勘九朗だったんだよな)

勘九朗が居ないから、ダミアンの辺りが出張ってくると思っていたが、まさか臆病者の癖に権力欲が凄まじいベルゼバブが動いているなんて思っただけだった。完全に出し抜かれた事に舌打ちをしながら

「竜神王からの増援のメドーサだ。そこで気絶してる、雪之丞の元師匠になる。ただ完全に出遅れたみたいですまないね」

原始風水盤の針を奪い返されるとは……まさか地面からゾンビが襲撃してくるなんて思っただけだった。それが全ての敗因だろう

「増援って事は、今の状態と原始風水盤の事は教えてくれるのね?」

美神令子が一步踏み出し、横島や蛭を背中に隠しながら尋ねて来

る。それにブラドールと神宮寺くえすも臨戦態勢で完全に警戒されていることに苦笑しながら、両手を上げて敵対する意思は無いと言いな

がら  
「原始風水盤。これの起動の阻止は神魔の最優先課題だ。協力する、しないは強制しない。だがこれが起動してしまえば人間界も天界も壊滅一歩手前の大打撃を受けるだろう。話だけでも聞いてくれないか？」

判ったと返事を返す美神令子達にありがとうよと返事を返すのだった……そしてそれから1時間後。この時代での原始風水盤の起動を阻止するための話し合いが始まるのだった……

リポート6 原始風水盤を発見せよ その2へ続く

## その2

レポート6 原始風水盤を発見せよ その2

ここまで逃げ続けてきた事による精神的疲労と、胸を蹴られたことで意識を失っていたようだ。頭を振りながら身体を起こすと

「よう、雪之丞。元氣そうで何より」

ガープが白竜寺をおかしくする前の俺達の師匠。メドーサが俺に気付いて手を振ってくる

「あんたっ!?!いや、まあ生きているとは思っていたよ。メドーサさんよ」

驚きはしたが、殺しても死なない相手と思っていたので割りと直ぐに冷静さを取り戻し

(勘九郎の奴に教えてやりたいな)

どこに居るのか知らないが、いま療養中の勘九郎の事を思い出す、あいつはメドーサを慕っていた。元気で居ると知れば喜ぶだろうなあと思っているとポケットの中の小竜姫の角が熱を放つ、これは外に出せて事かと思いい机の上に角を置くと

「ふう、雪之丞さん。お疲れ様でした、針を奪われたのは痛手ですが、仕方の無い事でしたから」

机の上から下りて横島達を見る小竜姫に美神が納得と言う感じで頷きながら

「なるほどね、今回の依頼主は小竜姫様ってわけ?」

まあこの反応は当然か、誰だって知り合いから話を聞いた方が良いに決まっている。

「いえ、私だけではないです。魔界正規軍のオーデイン様、天界正規軍の竜神王様のお2人が依頼主となります。早速で悪いですが神魔からの依頼。受けて頂けますか?」

笑いながら言う小竜姫だが、目は全く笑っていないのを見て、こいつも良い性格してるな、それともまた未来のあいつに身体を乗っ取られたか?と思いながらこの場を小竜姫に任せることにするのだった



……

あの人は……小竜姫の隣に居る女性を見て正直驚いた。あの人は俺にこの霊力の籠手の事を教えてくれた人だったからだ……雪之丞の知り合いか？と尋ねられ、一応知り合いと返事を返す

「なんだ？お前もメドーサに指導を受けていたのか？」

「いや、一緒に喫茶店に入ってお茶をして」「そこの所詳しく」……後でね？」

喫茶店でお茶の言葉に蛍達が反応した事に心の中で涙しながら、右手に霊力の籠手を作り出しながら

「これを見せてくれて、色々試行錯誤して真似するようになった」

その時俺は何でも良いから霊能力が欲しかったので、色々試しながら真似をしたと言うと

「見ただけで真似をするって……貴方どれだけ規格外なんですか？」

なんか神宮寺さんに呆れられた。何でだ？普通見れば真似できるだろ？と雪之丞に尋ねると

「んなもん普通に出来るか」

蛍やシズク、神宮寺さんがうんうんっと頷いているのを見て

「なん……だと……」

俺の普通が普通じゃないと言う事に今初めて気が付くのだった  
……

「大体判ったわ、その依頼受けさせて貰うわ」

「ありがとうございます、断られたらどうしようかと思っていました」

美神さんと小竜姫様の話し合いを聞いていたんだけど、正直俺にはさっぱり判らなかつた。なので

「原始風水盤って何ですか？」

判らない事は質問しよう、そう思って挙手をして尋ねる。するとメドーサさんが説明してくれた

「霊脈は判るな？」

「え、あっはい、自然の霊力が通る道ですよね？」

霊脈については何度も教わったので判ると返事を返すとよしよし

と褒められる。なんか気恥ずかしい

「原始風水盤って言うのはその霊脈の流れを操作する道具だ。それを使うと、地震でも台風でもなんでも起せるし、魔界を人間界に出現させることも出来る」

……めちゃくちややべえ!?それは馬鹿な俺でも理解出来た、だからあの蠅の化け物があれだけゾンビを連れて襲って来た理由も納得だ

「原始風水盤か……となると私とブラドール伯爵は協力出来ないね」

「ああ。口惜しいがな」

え? 唐巢神父とブラドール伯爵が協力出来ない? その言葉に驚いているとブラドール伯爵が俺の方を見て

「悪いな、我もシルフィーもあまり強すぎる魔力に触れると暴走しかねない。現に、シルフィーが姿を見せないのは、襲撃者の強い魔力の所為で身体のバランスを崩しているからだ」

「そして私が協力出来ないのは、原始風水盤の周囲には高密度の魔力が満ちている。私の様に聖句や光の力で戦う司祭は力を発揮出来ない、正直足手纏いになるのが目に見えている」

ま、マジかよ……小竜姫様やメドーサさんが居れば大丈夫だと思っ  
ていたけど、まさか唐巢神父とブラドール伯爵が付き添うことすら出来ないなんて……

「となると香港に乗り込めるのは私、小竜姫様とメドーサ、それとくえすに……横島君と蛍ちゃん、それとピートと雪之丞にシズクにおキヌちゃんって辺りね」

「はい、本当なら横島さん達は危険なので置いて行きたいですが……もし別働隊で攫いにくる可能性を考慮すると最初から連れて行ったほうが安全かと」

攫うって誰を? 一瞬攫われるの言葉の意味を考えたが、神宮寺さんや蛍の事だと判り。それなら最初から確かに一緒に行動しておいたほうが安全だろう

(おい、こいつ気付いてないぞ?)

(判ってる。判ってるのよ、横島はまさか自分が攫われる可能性のあるターゲットなんて思っ  
てないから)

(自己評価の低さが問題ですわね)

なんか後ろで蛍達がひそひそ話をしているけど、何の話だろうか？と首を傾げていると美神さんが

「じゃ明日朝一で香港に向かうわ。横島君達はパスポートとかの準備！言つとくけど、今回はGS試験の時よりも危険な可能性があるわ。私も準備するけど、蛍ちゃんと横島君も自分で必要だと思いう霊具は準備しておくこと！領収書はこっちに回してくれば良いから、じゃ解散！急いで準備に入って！」

美神さんの指示に従い、俺達は唐巢神父の教会を後にする。とは言え、俺は何を準備したらいいのか判らず困惑していると

「私と一緒に買いに行きましょう。時間が無いからこのまま行くわよ」

「わ、判った」

切羽詰った表情をしている蛍に頷き、俺は蛍とシズクと共に厄珍堂へ向かい香港に向かう準備を始めるのだった……

教会を出て行った横島君と蛍ちゃん。そして雪之丞を見送り、溜息を吐きながら教会の机に腰掛ける

(神魔が出張ってくるような事件にこれだけ連続で巻き込まれるなんてね……)

普通これだけ神魔が出張ってくるような事件に人間が巻き込まれることは無い。だが現に私や横島君達がこれだけ巻き込まれる……そこに何か別の思惑があるような気がして仕方ない

(エミか冥子が居ればなあ)

助っ人としてエミや冥子を連れて行きたい所だが。エミは古代の呪いの品の除霊からまだ戻ってないし、冥子は冥子で鬼道家との問題で自由に動けない立場にある。頼みの綱は小竜姫様とメドーサになりそうね……

(ドクターカオスにも声を掛けておこうかしら)

原始風水盤の停止。それは専門の知識が必要になる、無論私のその知識がある訳も無いので、その道の専門家であるドクターカオスにも

声を掛けておいたほうがいいかもしれない。私達と一緒に行動すれば嫌でも目立つことになるので、遅れて合流して欲しいとお願いしよう、最悪の可能性として起動した場合の対処法を考えておかないといけないしね

「美神君。すまないね、また私は足手纏いになるようだ」

すまないと謝ってくる唐巢先生だが、今回は唐巢先生が悪いわけではない。単純に相性の問題だ、無理をして連れて行って唐巢先生が怪我をしたり、死んでしまったなら何の意味も無い

「くえすはどう？高密度の魔力のところでも大丈夫なの？」

むしろ私が危惧しているのはくえすの方だ。もしくはくえすが高密度の魔力で我を失い暴走してしまったら？それこそ全滅の可能性が爆発的に高まるからだ、私の心配にくえすはくだらないですわと笑いながら

「私の身体に流れる魔力はビュレト様の物。並大抵の魔力に悪影響を受けるような柔な身体ではありませんわ」

……確かにその通りね、ソロモンの魔神の魔力を宿しているくえすが普通の魔力に影響を受けるわけが無いか。これは私の余計なお世話だったわね

「我は付き添いたい所だが、我が愚娘も心配だ。許してくれ」

娘が心配だから残ると言うブラドー伯爵。出来れば協力して欲しい所だが娘が心配と言う父親の気持ちも判るので無理強いはしない。それにシルフィーちゃんが攫われて改造されるという可能性を考え、更に私達が居ない事で別働隊が動く可能性を考えるとやはりある程度の実力者が残ると言うのは当然の事だ

「ピートさんはどうしますか？無論協力して欲しいのは山々ですが、原始風水盤の影響を受ける可能性がありますよ？」

本人は人間の面が強いハーフだから大丈夫だと思っっているようだが、確かに影響を受ける可能性は高い、霧化能力で斥候を勤めてくれるにしろ、おキヌちゃんとシズク、そしてくえすが居ればより安全に調べることも可能だろう。酷な話だがピートが足手纏いになる可能性もゼロではないのだ、だから小竜姫様がやんわりと言うが

「父と唐巢先生の変わりにお手伝いをしたいのです、足手纏いにはなりません。もし僕が我を失うと言うことは未熟と言うこと、切り捨てられることも覚悟しています」

もし自分が暴走したのなら切り捨てろと言うピート、そこまでの覚悟をしているのなら、言葉で立ち止まることは無いだろう。私は溜息を吐きながら

「ブラドール伯爵。ご子息は私が責任を持って預かります」

横島君と蛭ちゃんまで正直手一杯なので、これ以上抱え込みたくないのだが、ここまで覚悟を決めている相手なら駄目だと言つても着いて来るだろう。それなら最初から監視下に置いておいた方がいい

「判った任せよう。だが我が息子が狂ったのならば切り捨てよ、良いな？そしてピエトロ、お前もだ。切られる覚悟を持っていけ」

「覚悟しております」

重い、重すぎるわ……こんな責任を負わされるなら、正直言つてピートには日本に残つて欲しいわね……とは言えもう断れる雰囲気じゃないので連れて行くしかないんだけどね

「まあ仕方ないんじゃないか？私達でフォローしてやればいいさ」

そう笑つて肩を叩くメドーサ。メドーサと小竜姫様が居ればそんな最悪の展開にはならないわよね……念の為に我がブラドール島より持つてきた霊具も貸し与えると言うブラドール伯爵にありがとうございますとお礼の言葉を口にしながら、今回もやばい山を引き受けてしまった事を改めて実感し、思わずこんな事を考えてしまったGS試験から立て続けに起きている強力な魔族や悪霊が起している事件。それら全てが私達が関係している、運命の中に私達はその戦いに巻き込まれることが決まっている……そんな馬鹿らしいことを一瞬考えてしまい思わず苦笑する。ただの偶然よね、うん。そうに決まっている（大体、なんで人間がそんなに巻き込まれるのよ）

そう言うのは神魔が解決する問題だ。今回は運悪く巻き込まれてしまっただけ、そう思う事にし

「くえす、ちよつと訳ありの霊具保管してるんだけど、除霊手伝ってくれない？」

「……仕方ありませんわね。その代わりに私が保管している霊具の除霊も手伝ってください」

お互いに念の為に保管したままになっている霊具。いずれ使うことになるだろうと思っていた霊具を香港に持ち込む事に決め、お互いの所有する霊具の除霊の為に小竜姫様とメドーサに準備があるので失礼しますと声を掛け、私とくえすは揃って唐巢先生の教会を後にするのだった……

日付が変わる頃、ワシはアシユタロスに呼ばれてあやつこのビルを訪れた。無論呼ばれた理由は判っている、香港の原始風水盤の件ではないだろう。それは大分前に話し合っているから態々こんな時間にワシを呼び寄せる意味が無い、無論その可能性も考慮しているのでワシも3日後に動くつもりではあるが、さてさて何の用事でワシを呼び出したのやら……

「ワシじゃ。入るぞ」

土偶に案内され入った最上階の部屋ではアシユタロスともう一人、メドーサの姿があった。なるほど顎の下に手を置いて

「逆行者か」

ワシを呼んでメドーサが居る。それすなわち、こやつも逆行の記憶がある。でなければワシを呼ぶ理由が無い。へえつと感心したような表情をしているメドーサを見ながら椅子に腰掛け、お互いに自己紹介をしてから、直ぐに本題を切り出した

「それでワシを呼んだ理由は何じゃ？」

原始風水盤の件なら動くつもりじゃぞ？と前置きしてから尋ねるとメドーサがワシの前に座り

「勘九郎が世話になっていてみるみたいで、師匠として礼を言っておこうと思っただけ。ありがとう」

勘九郎の件か……うむ、師匠とすれば弟子の容態が気になるのは当然の事じゃな。呼ばれた理由が判り納得する

「勘九郎は大分回復してきてな。そろそろ調整したメタソウルを生成する段階じゃ。そうでなければあやつが死んでしまう」

メタソウルと聞いて驚いた表情をするメドーサ。この反応は大体予想していたのでメドーサを見つめ

「弟子を人外の身体にしたワシを憎むか？」

「……いや、そうしないとあいつが死んでしまうんだろう？なら仕方ないさ。ただ女の身体にしてやってくれるかい？」

「本人の強い希望じゃ、そこら辺は任せてくれい」

先日あやつの希望する身体の調整が終わった。胸や腰回りの要求がかなり細かくて苦労したわいと苦笑しているとアシユタロスが話を戻しますと言う。確かに少し脱線しておったなと反省する

「原始風水盤ですが、確かに起動させることも目的の1つだと思いますが、その影にはまだ何かあると思っています。ガープは何度も香港を訪れている。原始風水盤なら設置すれば事足りる筈です」

あれは本体ではなく、針が重要な物じゃからな。本体は設置すればそれで終わる、態々何度も訪れる必要は無い

「それにこの世界では香港は神魔の決戦の地となっています。何かあると見て間違いないでしょう」

確かにそう言われるとそうじゃな。原始風水盤と言う規格外の装置を隠れ蓑にして何か本命の計画を進める。なまじ原始風水盤の危険性を知っているからこそ、有効な隠れ蓑じゃな、寧ろそれを隠れ蓑にするなんて普通は考えないだろう。そして仮にどちらかが失敗したとしてもどちらかは作戦決行できるという二段構え……なんともいやらしい戦術だ

「メドーサと小竜姫。そしておキヌさんが逆行の記憶を持っているのである程度の対策を練ることが出来ませんが、メドーサが味方なので大筋が変わってしまっている……かなりのイレギュラーが想定されま

す」  
メドーサがこつちに居る以上既に逆行の記憶は殆ど役に立たない、ある程度の参考になる程度じゃろう。となると小竜姫やメドーサを仲介し必要に応じて道具を送り援護出来る状態にしておく必要がある。しかしそれは1人に対応するには余りに厳しい、ワシはアシユタロスが言おうとしている事を即座に理解した

「状況に応じて臨機応変に対応しないといけないでしょう。少しの間で良いのですが私のビルで待機してくれませんか？」

そしてそれには1人で準備するには余りに厳しい、状況によって複数の霊具を作る必要もあるので、協力者が欲しいと思うのは当然だろう……そしてワシ自身も状態によっては香港に出発する時間を調整したり、護身用霊具を作る必要性も出てくる。それらを考慮すると少しの間でも2人で行動した方が良いと思うのは当然の事だ

「判った。出発までの3日間、このビルで研究をさせて貰う」

「ありがとうございます」

ガープの知力はアシュタロスと同格かそれ以上。そんな奴が原始風水盤を隠れ蓑にして動いている、そうなれば自分1人では対処出来ないと判断し、ワシに協力を頼むのは当然の事だ。ボケてなくて良かったと心底思う。この知恵があるから横島達の手助けが出来る……あんな結末を回避する為に協力する事が出来る……それが嬉しくて堪らない

「その代わりマリアとテレサの部屋を頼むぞ？」

直ぐに準備をしますと笑うアシュタロス、マリアとテレサになんて説明するかろう……とは言え必要なことじゃ、横島の名前が出れば納得してくれるじやろう

「ではアシュ様。私は小竜姫との話し合いに戻ります。何かありましたらいつもの方法で」

深く頭を下げて消えて行くメドーサ。恐らく超加速で見つからないように移動しているのだろうと判断し、ワシも立ち上がり

「マリアとテレサを連れてくる。もし護衛が居るなら回してくれ」

「私の使い魔をお貸しします。下手な神魔よりは頼りになりますよ」

そしてワシはアシュタロスの使い魔を借り、マリアとテレサを迎えに家へと戻り、必要となる機材などを全てアシュタロスのビルへと運び込んだ。かなりの荷物だったので運び終わる頃には既に朝日が昇っていた……そしてそれから数時間後。美神達は香港へと旅立つて行くのだった……



美神達が日本を出発した頃、魔界ではガープとアスモデウスが飛行機を見つめ笑っていた

「ガープ。美神達が日本を出たようだな」

「ああ、そのようだ。だがこれで計画が進む」

ガープとアスモデウスがベルゼバブを選んだ理由。それは愚かな道化だったからだ、そして奪われることも全て計算に入っており、原始風水盤の事を美神達を知る事も全て計画の中に組み込まれていたのだ。全ては予定調和……ガープとアスモデウスの手の上の出来事……それらを知る者は居ない……

そして香港の地にて再びガープの謀略の幕が再び開かれようとしているのだった……

リポート6 原始風水盤を発見せよ その3へ続く

### その3

レポート6 原始風水盤を発見せよ その3

私達は美神さんと一緒に飛行機で香港へ向かいました。飛んで行くことも出来るのですが、力に制限が掛かる以上温存する方向の方が良い美神さんとそしてメドーサが言ったので、初めて飛行機とやりに乗ることになったのですが、空港で荷物を回収しているメドーサを見つめる。かつては罪人、今は同僚……その事にまだ慣れないので警戒している自分に気付き小さく溜息を吐く

(メドーサと一緒に仕事ですか……)

いえいえ、彼女はもう罪人ではなく、私達の味方。偏見を持つてはいけませんね。変な偏見を持つとそれが軋みとなって、それは大きな乱れとなります。ガープが暗躍しているかもしれないのに、私情を挟む事は出来ません

「そんなに肩に力を入れたら、成功する仕事も失敗するよ？まずは落ち着きな」

私の肩をぽんつと叩いて、私に小さく行くよと声を掛け歩き出す。纏まって行動していると見つかる可能性が高いので、前ワルキューレが取っていたホテルではなく、別の高級ホテルで合流する手筈になっている。その理由は1度拠点にした場所だ。使い魔などで監視されている可能性があるので、あえて街中のホテルに宿泊の予約を入れたと美神さんが言っていた。資金は経費としてGS協会が出してくれるんだから、遠慮しないで行きましょうと笑う姿は記憶に新しい。遠くの方で集まっている美神さん達を見ながら、私とメドーサは空港を後にした

「それでベルゼブル閣下はもう香港へ？」

「さあねえ……私も判らないよ。あの人は人の話を聞くタイプじゃないしね。それに普段は全身甲冑に鎧兜、素顔は私みたいな下っ端は知らないしね」

ベルゼブル閣下。魔界の最高指導者に次いでその権力を持つ魔神。

偽の蠅の王の制裁に訪れると聞いてましたが、メドーサもベルゼブル閣下の姿を知らないのですか……もし知っているのなら、断られる可能性が高いですが協力してくれないか？と駄目元で頼んでみようと思っただんですが……そうも行かないみたいですね。

(ブリュンヒルデが動けないのが辛いですね)

日本にガープに対応出来る神魔が居なくなる。それを危険視したブリュンヒルデは協力したいですが残りますと行って日本へ残っている。彼女のルーン魔術はガープにも通用するので出来れば協力して欲しかったのですが……帰る場所が無いと言う自体になっても困る上に、優秀な霊能者を攫われても行けない。なのでブリュンヒルデには日本に残って貰った

「まああれだ。ベルゼブル様が実は女で横島が偶然街で会って連れて来る。なんて事がなければいいさ」

「そうですね」

……なんか物凄く嫌な予感がする。お互いに何故か無言になりながらホテルを目指して歩き出すのだった……なおこの発言が後に本当の事になるなんて、私もメドーサも予想もしてなかったのだった……

やつと香港に戻って来たか……白竜寺を救う為。今度はあんなミスは出来ねえ……絶対なんとしても成し遂げる

「あー良かった。チビ、モグラちゃん、タマモー。海外に行くのはこれだからやだなあ……貨物室でごめんなあ」

……俺の覚悟を根こそぎへし折る横島の声に苦笑する。その手の中にはケージがあり、チビ達が入っているのだが、それを大事そうに抱えている横島。空港で大分渋った挙句、美神が航空会社に無理を言っただけで貨物室ならと許可を出されたのだが、そんな事でごねるくらいなら最初から置いてきた方が良かったのではないか？と思う

「置いて来ても良かったんじゃないのか？あの動物」

一応俺達のリーダーと言う事になっている美神にそう尋ねると美神は苦笑しながら

「置いてくると横島君が落ち着かないみたいだからね。仕方ないのよ、それにチビとかも普通に強いから役に立つと思うわよ?」

そう言うもんかねえ……とは言え、俺は今回は美神の指揮下に入るんだから、美神がOKって言うのなら俺が文句を言うことじゃないな……ケージからチビとモグラを取り出して頭の上乗せて、タマモを抱き抱える横島を見て、こんなんで大丈夫なのか?と正直不安になった「……なんでそんなに早足で歩くんだ?」

「その台詞。そのまま返そうか」

俺とピートは早足でホテルを目指して歩いてた。地図を見ながらの移動なので、出来ればゆっくり移動したいのだが……それが出来ない理由もあった。その理由は一言で言えば、横島の側に居ると命の危険があると本能的に悟ったからだ

「へーなんか色々あるなあ」

「みーむう!みみー!」

「うきゅー!!」

「ココーン♪」

観光気分なのかタマモ達と香港の街並みを見て楽しそうに歩いている横島。それは良いだろう、通り過ぎる人も微笑ましい物を見ているような表情だ。だが問題はその後ろにあった

【「……………」】

無言で歩いている蛍や、くえず、シズク、そして1人だけ浮いているキヌの4人の桁違いの怒気のオーラだ。心臓の悪い人間なら死ぬんじゃないか?と思うほどに禍々しいオーラだ。周りに居る奴らもとんでもない美人揃いなのに、そのオーラに恐怖して誰一人声を掛けようとしていない。そしてそのオーラに気付いていないのは横島1人と言う状況だ……なんで気付かないんだ!大体お前の事だろうにと叫びたくなつた

(慣れた方がいいですよ?横島さんの側は大体こんな感じですよ)

(お前苦労してるんだな)

その疲れきった表情を見て、俺は何も言えず早くホテルで原始風水盤についての話し合いを始めたいと思った……難しいことを考える

のは苦手だが、この空気よりも数倍良い

「ん？人が多くなつて来たな。シズクはぐれるとやばいから手を繋ぐか」

「……そうだな」

人が多くなつて来たという理由とシズクと手を繋ぐ横島。それで蛍達の纏う空気が更に険悪になる

「急ぎましょう。目立たないつもりが目立ちすぎだから」

疲れたように呟く美神に頷き、急ぐぞと横島に声を掛け俺達はホテルへと歩き出したのだった……

なお雪之丞達は横島の取り合いで不機嫌だと思っていたのだが、実はそうではなく

（なんですか、この纏わり付くような死の気配……私達を見つめている？）

（この感じ……あの時の……）

くえすと蛍は自分達を見つめている何者かの気配を感じ取り、全神経を使って周囲を警戒しているのが理由だったりする……

ホテルに到着し部屋に結界を張った所で漸く一息つく事が出来ましたわね……

「本当なんだったのかしら、あの視線は」

「さあ？ただ小竜姫やメドーサが気付かなかったと言う事は私達だけに向けられた視線でしょうね」

芦蛍はやはり余り好きではないが、能力は優秀だ。それならば自分の好き嫌いで話をしないと云うのはあまりに愚か……ただ同室にチェックインする派目になったのは正直予想外でしたが、その代わりホテルのワンフロア全てを貸しきる事が出来たので私達の話を一一般人に聞かれることがない。そう思えば良いですね……荷物をベッドの上に乗せながら

「さてと……では美神達と合流しますか。今日の方角性を話し合う必要もありますし」

「そうね。あの視線の事も話しておく必要があるしね」

あの視線が何者かは判らないが、あれだけの死の気配を感じたと言う事はかなり力のある存在である事は間違いない、警告の意味も込めて話をしておく必要がある。香港のホテルと言う事でそれほど期待はしてなかったのですが、街中でしかも香港全体を見渡すことの出来る高級ホテル。談話室などもある本格派の高級ホテルだ、経費で泊まると言っていました、が、神代琉璃はきつとその経費で地獄を見ているのだろうかと思いつながら談話室に向かう

「そーれ。チビー」

「みーむー♪」

談話室では横島がチビ達とボールで遊んでいた。カーペットの上をボールを追いかけて走って行くチビの余りにほのぼのした姿に力が抜けるが、それで良かったかもしれないと思った。敵の拠点のある香港。そして到着と同時に感じていた死の気配……それらで必要以上に警戒していた力が良い感じに抜けた

「くえす、蛭ちゃん。こつち」

奥の方で小竜姫達と座っている美神に呼ばれそつちへ歩き出す。伊達雪之丞、ピエトロ、横島の姿が呼ばれていないのは外で動かすのを避ける為か……それとも頭が良くないので話しても理解出来ないかと判断したからか……それとも両方でしょうか？と考えながら空いている椅子に腰掛ける

「さてと、じゃあ今後の方向性だけ……原始風水盤が設置されている場所を見つける事が最優先だと思うわ」

出来るなら針の強奪もと言う美神。だが1度奪われた物を2度奪うことが出来るだろうか？そんなの考えるまでも無い不可能だ。以前よりも遥かに強力な警備が敷かれていると見て間違いない

「ベルゼバブの奴は馬鹿だ。自分で原始風水盤を設置できるような知性は無い、間違いなく裏にガープが絡んでいるぞ？」

メドーサが美神の計画を無謀だと呟く。だがそれは当然の事だ。仮に奪うことが出来たとしよう、ただ奪わせる事を囮としてガープが考えていたら？そうなたら逆に奪われている可能性もある、ガープを殴り、魔力を宿した横島忠夫を……

「それについて私と蛍から報告がありますわ。香港に到着してからやけにしつこい視線を感じています……しかしそれは私達にむけられた物ではありません」

「横島さんですね？」

小竜姫がそう尋ねてくる。その視線を私も蛍も感じていたが、それは私達に向けられた物ではない。あの人混みの中横島だけに向けられた視線だ

「となると横島君はまだ向こう側に狙われているって事か……うーん……となると、横島君はホテルに待機させるとして……針の奪取は諦めて原始風水盤を破壊する……それが一番かしら……」

それが確かに最善だろうが……そうなると問題が2つ生まれる。原始風水盤がどこに配置されているのか？それが判らないと言うとまた原始風水盤の本体を設置される危険性だ。最善は針の破壊なのだが……それが難しいとなると妥協案で本体の破壊と言う案が出るが、そうなるとグループが香港に来る危険性もある……正直言つてかなり不味い状況だ

「……しかしあまり時間を掛けることも出来ないぞ？満月が近い」

シズクが忌まわしげに呟く、満月……魔の眷属が1番力を高める日……原始風水盤を探すのに時間をかけていたら満月の日を向かえることになるだろう。そうなると起動と同時に原始風水盤は最大の力を発揮する……それは避けなければならない

「一応明後日にはドクターカオスが合流することになってるけど……合流する前に設置場所は見つけておきたいわよね……分かれて行動するって言う選択肢もあるけど……もし向こう側に見つかれば完全にアウトだし……」

「殺されるか、人質か……どっちにせよ悲惨な目に合うでしょうね」

折角小竜姫とメドーサが居るのに力が制限されていては意味が無い。もし可能なら2人をリーダーにして分かれて行動出来れば良いのですが……神魔は人間界で活動するには大幅に力を制限される。現在は蓄えている霊力を消耗して人間サイズで行動していますが、蓄えている霊力を消費しきれば装飾品か何かの姿になると聞いている。

そんな状態で戦闘すればその1回で行動不能になるだろう……：そう  
なると一気に形勢が不利になる。霊力を回復する手段……：それを何  
とかしなればならない

「霊力の回復が難しいですからね」

「ああ、力を制限して等身大で活動しているが、それがないと強制的に  
妙神山に戻されるか、人形サイズだ。なんとかして霊力を安定して回  
復出来ればまた違うんだが……」

私達がどうやって小竜姫とメドーサの霊力を回復させるか？それ  
で悩んでいると

「霊力つすか？そんなに悩まなくても良いと思いますよ？」

にへらと笑う横島が私達の話し合いに参加してきて、机の上に眼魂  
を置くとそこから黒い着物姿の幽霊が飛び出してきて

【横島！これは良いぞ！霊力に満ちているし、中は茶飲み部屋！菓子  
も茶もある！素晴らしい環境じゃ！】

あ、眼魂つて一体……：何なんですか？考えても判らない物質に頭を  
抱えたが、眼魂が小竜姫とメドーサの活動時間の短さを解決してくれ  
るかもしれない……：そんな希望が私達の中に生まれるのだった……

邪魔をしてはいけないと思い、チビ達と遊んでいたのだが、ボール  
が転がって行ってしまったのでボールを拾いに行くと、美神さん達が  
霊力を回復する手段が無いと悩んでいる小竜姫様とメドーサさんの  
話を聞いて、おキヌちゃんにボールを渡して、少しチビ達の面倒を見  
ていてと頼んで話に割り込むした。Gジャンから、出発前に優太郎さ  
んとカオスのジーさんに返して貰ったブランクの眼魂を2つ机の上  
に乗せて

「シズクちよつとごめんな？」

「……うん？どうした？」

もう1つシズク眼魂を取り出してシズクに謝ってから眼魂を頭の  
上に乗せると、シズクが眼魂の中に吸い込まれる

【……む？氷の部屋？……それにこれは天然水か……うん、悪くない】  
チカチカと光る眼魂を指差しながら小竜姫様とメドーサさんに



「眼魂に対応してる幽霊とか神様は眼魂の中に入れるみたいなんですけどね？なんか霊力とか満ちてる上に、好みの内装になるらしくて」  
ノツブちゃんが香港香港と騒ぐのでどうしよう？と思っていたら、八兵衛が眼魂に入っていたのを思い出して実験したら出来た。中では霊力が回復するし良い事尽くめらしい

「と言う訳なので、小竜姫様とメドーサさんが眼魂を作れば霊力回復するんじゃないですか？」

ちよつと待つてと言つて話し合う美神さん達を見てみると、シズクが眼魂から出てくる。その手にはアイスクリーム……眼魂から中の物を持ち出せるのか……新たに判明した事に正直かなり驚いた

「……アイスクリームが入っていた、食べるか？」

「え？あ、うん。ありがとう」

差し出されたバニライスを齧る。うん、普通のアイスクリームだ……本当眼魂の中つてどうなっているだろうか？

【余り考えないほうがいい。考えても判らないからな】

心眼の言葉にそりやそうだと頷いてると小竜姫様とメドーサさんが眼魂を掴む。話し合った結果眼魂を作ることと決まったのかブランクを握り締めながら

「作るつてどうすればいいんですか？」

「それを教えて貰わないと困るんだけど」

小竜姫様とメドーサさんの問いかけにはシズクが答えてくれた。なんせ俺は作る時は一杯一杯、どうやって作るのか？なんて覚えていない

「……神通力と霊力を全開で放出すればいい。ただ足りないと失敗する」

何度も何度もスカッパーになった経験から全力でやれとアドバイスをするシズク。小竜姫様とメドーサさんがブレスレットを外して霊力を眼魂に吸収させているのを見ると、神宮寺さんが何かを思いついたように

「それつて人間でも出来るんですかね？」

「さ、さー？それはどうだろう？」

今までは幽霊と神様だった。人間で出来るのか？それなんて考えたことも無かった。だけど人間だから多分無理じゃにですか？と眩きながら、チビ達のほうを見る

「もうちよつとで横島さん、戻って来ますからねー？もう少し大人しく待っててくださいいね？」

「む」

「きゅー」

おキヌちゃんが頑張ってるけど、チビもモグラちゃんも言うことを利く気ゼロ。半泣きになっているおキヌちゃんが可哀想になつてきた

「と言うか。神宮寺、どうやって人間は眼魂に入れないでしょう？あれはあくまで精神体が主になる、神族や幽霊だから出来るんじゃないの？」

「それは判っていますわ。魔力を眼魂に注ぎ込めばなる可能性があるのでは？と言う話ですわ」

人間では無理だが、魔力だけならどうですか？そう考えると可能性はあるのか？……いや、でもそれで神宮寺さんの魂が眼魂に入り込んでしまったら身体は死んでしまうのでは？寧ろそっちの可能性が高いんじゃない？とそんな事を考えているとバシつと言う音が響き振り返ると美神さんが見たことも無いような顔をして、あははつと乾いた笑いをしながら

「横島君。成功したみたいよ？」

驚いた表情で振り返る美神さんが指差す机の上には、緑と紫の眼魂が転がっているのだった……

本当に眼魂になっちゃった……目の前の2つの眼魂を見て数回瞬きしてから

「えーと大丈夫ですか？」

「ええ、全然大丈夫です。日本風の庭園のある部屋ですね、あら……お茶とお菓子まで……」

「こっちはあれだね。虎の敷物と大きな背もたれの椅子、おつとワイ

ンセラまである」

……眼魂の中ってどうなってるのよ……私は思わず天井を仰ぎ見てしまった。横島君のベルトの力を引き出す為の道具だと思っていたのに、中身がそんなことになってるなんて思っても見なかった。「あ、ワシ。霊力やばいから眼魂に戻るぞ？なんか用があつたら呼んでくれ」

「それじゃあ、話し合いの邪魔をしたら駄目なんで戻ります。方向性が決まったら教えてください」

そう笑って眼魂の中に戻って行くノツブ。横島君は信長眼魂とシズク眼魂を拾い上げて、Gジャンのポケットの中に戻し、シズクと手を繋いで離れていく。なんでシズクまで連れて……いやまああれは仕方ない、正直シズクは基本的に横島君の味方だから、私達と話し合いをするよりかは横島君の側を選ぶのは判りきっていた事だから……

「とりあえず蛭ちゃん。くえす、今日はまだ日暮れまで時間があるわ、小竜姫様の眼魂と私が、メドーサの眼魂をくえすが持って、私の方は蛭ちゃん、それとノツブ。くえすのほうは雪之丞とピート。それで分かれて一応調査をしましょう」

満月までは今日を除いて後3日。それまでに原始風水盤の設置場所を見つけ出し、原始風水盤の起動を阻止する必要がある。それに1度原始風水盤の針が奪われた事で恐ろくかなり警戒している筈。正直3日で見つける事が出来るか？と言う不安はあるが、香港の何処かにあるのは間違いない。霊脈の位置を調べて、それを辿って行けば見つけられる可能性は十分にある

「私は構いませんが、そちらは2人で大丈夫なんですか？」

雪之丞とピートの2人を連れて行けと聞いてくえすが大丈夫か？と尋ねて来る。以前なら絶対こんな事聞かなかったのに……横島君と出会った事でここまで変わったのねと思いつつながら大丈夫だと返事を返す

「シズクは水があれば跳んで来れるし、見ている事も出来るからね。ノツブもいざとなれば眼魂から出て来てくれるから戦力にはなるわ、

だから一応こっちのほうが戦力は上の筈よ。シズク、判つてると思うけど、遊ばせる為に香港に連れて来たんじゃないからね。横島君を護りつつ、こっちの様子も見ててよ」

「……判つてる」

「え？俺護られる側なの？」

横島君は間違いなくガープのターゲットになつている。くえすと比べてまだ戦闘経験も足りなければ、知識も足りない。連れ回して攫われる危険性を考えれば、最初からシズクを付けてホテルに残したほうが安全と言うものだ。キョトンとした顔をしている横島君に信長眼魂を貸してと言いながら横島君の役目を説明する

「良い、今回はガープが動いているとは言い切れないけど、その可能性があるわ。貴方はガープを殴り飛ばし、そしてあいつの計画を破壊した。狙われている可能性高いの、とりあえず少しの間はここで待機でもちゃんと仕事はやって貰うわ」

地図と原始風水盤の針が包まれていた針。そしてダウジングの為にペンデュラムとこの為に購入した携帯電話を机の上に置く

「ここに私とくえすの霊力を込めたクリスタルを置いて行くわ。これを地図の上に置けば、私達の動きとリンクするわ。これとダウジングを使って私達の進む方向を指示して頂戴、陰陽術と組み合わせれば貴方がこの中で唯一の完全索敵タイプなんだから」

私とくえすは補助程度の索敵能力だが、ペンデュラムに陰陽術そして地図と霊力の残滓の残った道具。これだけあれば知識が足りないとしても道具を使いこなし横島君なら間違いなく索敵タイプとして私達のフォローをしてくれるだろう。練習なしの一発勝負だが、今まで何度もこんな状況で横島君は霊力を覚醒してきた。だから今回もその可能性に賭けて見たいと思つたのだ

「おキヌちゃんは電波が通じない時の連絡役。良いわね？」

【は、はい！任せてください】

敵地の中で歩き回るというのは精神的にも肉体的にも負担が掛かる。そしてそんな状態で敵に遭遇すると浮き足だち、全滅する危険性が出てくる。それを避ける為には後方で支援してくれる人材が必要

になる

「初めてで不安だと思っけど、大丈夫。横島君なら出来るわ」

スライムを見つけた時も、レギオンに襲われた時も横島君の言葉によつて助けられた。だからこれは横島君にしか任せることが出来ない

「……っ！判りました。俺も頑張ります」

自分がどれだけ重要なポジションを任されたのか理解したのか、私の差し出したペンデュラムを両手で握り締め返事を返す。その代わりに差し出された信長眼魂をポケットに入れる。これで私の方の備えは万全ね……それに横島君にこの様子なら大丈夫そうだと判断し、私達は横島君とシズクをホテルに残し原始風水盤の設置場所を探す為にホテルを後にするのだった……

そして美神達が原始風水盤の設置場所を探して行動を始めた頃。香港の外れでは……

「……が香港か……」

誰も居ない廃工場に現れた人影。鎧に兜と現代には相応しくない姿をしたその人物は辺りを見回し、誰も居ないのを確認してから籠手やプレートメイルに手を伸ばす。するとそれらはまるで最初から存在しなかったかのように粒子へと変わっていく……勿論腰に挿した剣でさえ粒子となって消えて行く……そして最後に兜に手を伸ばし、それを魔力へと変換しながら

「我の名を騙る痴れ者の制裁とでも理由をつけねば魔界を出る事も叶わぬからな」

ふうつと溜息を吐きながら兜を完全に消し去り頭を振るう、すると兜の中に隠されていた美しい金髪が姿を現す。廃工場の窓から差し込む夕日が金髪に当たり、柔らかな光を放つ……あれだけ重厚な鎧を着ていたとは思えない細身の人影は遠くに見える街並みを見つめ楽しそうに笑いながら

「さてと、少しばかり人間界を楽しむかな」

その人物は帽子を被り、楽しそうに笑いながら廃工場を後にするの

だった……

レポート6 原始風水盤を発見せよ その4へ続く

## その4

レポート6 原始風水盤を発見せよ その4

美神さん達を見送り、談話室の大きな机の上に地図と渡されたペンデラムなどを並べた所で大事な事に気付いた

「なあ？シズク、心眼。ダウジングってどうやるんだ？」

美神さんと神宮寺さんの霊力を込めたクリスタルが動く中。俺はシズクと心眼にそう問いかけた。引き受けたのは良いが、俺はダウジングのやり方なんて知らない事に気付いたのだ。シズクと心眼にやり方を知っているか？と尋ねるとシズクは深い溜息を吐きながら

「……とりあえず原始風水盤を包んであつた紙を水に溶かせ。話はそれからだ」

【私のほうも何か考えてみる。まずはシズクの指示に従ってくれ】

判ったと返事を返し、コップに水を入れてその中に包み紙を入れて溶かす。なんかどす黒い色になったんだが……これ大丈夫か……？

「……それに筆を浸して札に文字を書け、そうすれば地図の上に反応するだろう。後は……もう1枚札を書いてスライムの時に探知機を作ったんだろ？それを札1枚で作れば。霊力を探知するはずだ」

なるほど、シズクのアドバイス通りに札を作り

「水精で良いよな？」

それで大丈夫だと言うシズクに頷き、2枚の札を4枚に裂き

「急急如律令ッ！水精招来ッ！都市に潜む邪悪を見つけよッ!!」

不思議な力で浮かび上がる2つの探知機と化した札を見つめ、俺は机の上の携帯電話へと手を伸ばすのだった……

地図を片手に私の靈感が囁くまま香港の街を歩いていたのだが、ホテルから離れた所で蛍ちゃんの方を振り返り

「蛍ちゃん。この状況どう思う？」

「異常ですね」

蛍ちゃんがそう即答する。香港はモグリのGSが多く、それでも生計を立てることが出来るほどに悪霊が多い土地なのだが、ここまで歩いていて悪霊も、浮遊霊も見かけない。これには少々肩透かしを喰らった気分だ

【確かにこれは少しおかしいですね……なにかヒントを見つけることすら出来ない】

どこかに必ず霊力の澱みが生まれる場所がある。それを見つけたつもりだったのが……くえすの方ももしかしたら同じ状況になつてるかもしれないわね。時間が無いから、早く原始風水盤の設置場所を見つけないだけで……

「もしかすると香港全体に結界を張っているのかもしれないわね」

普通ならそんな事ありえないと思うが、ソロモンに名を連ねる魔神が暗躍しているかもしれないと考えると、原始風水盤の起動を邪魔させない為に結界で漏れ出している霊力を封じ込めている可能性がある

「そうなるなら市内には結界の基点がないですね。レンタカーでも借りますか？」

蛍ちゃんの言葉に頷き、10分ほど前に通り過ぎたレンタカーショップの事を思い出し引き返そうとしていると携帯の着信音が鳴る

「つと電話か。思ったより早かったわね」

鞆から携帯を取り出し通話ボタンを押す。今回の事を考えて携帯を買ったけど、外でも電話を使えるのは正直便利ね。ただ値段が問題かな……

『もしもしお疲れ様です。今シズクのアドバイスで札を使って霊力探知をしているんですけど』

ばさばさと書類が何かを動かす音が聞こえる。横島君が動くにしてももう少し遅くなると思っていたけど、かなり真面目にホテルから調査をしてくれてるみたいだ

『それでなんですけど、原始風水盤の針を包んでいた紙を溶かした水で書いた札探知機のほうなんですけど、全くぴくりとも動かなくて、心眼が言うには結界で原始風水盤の周囲を結界で覆っているんじゃない



ないか？つて話で。それで街中に全然霊力が無いっと思うんですけど……どうもホテルの周辺を含めてかなりの広範囲で結界を展開しているみたいなんですよ」

シズクに別の地図ちよーだいっつとと言う横島君はえーつとつと呟きながら、少し待つてくださいね？と声を掛けてくる

『それで市外の方に探知機とペンデュラムをむけるとめちやくちや反応してるんです。結界の基点になってると思われる場所が……えーとひーふーみーと……12箇所です。こっちで場所のほうは逐一調べる予定ですけど、大まかに反応があるのが12箇所です。反応が弱いのを省くと8箇所なんですけど……強い、弱いで言っても、かなりの差があるから細かいことはちよつと自信が無いんですけど……美神さん……レンタカーとか借りれそうですか？歩きじゃ無理だと思っうんですけど』

確かに横島君を索敵要員と言う名目でホテルに残したけど、予想よりも遥かに優秀な能力を発揮していた。心眼とシズクの補助があるとは言え、この短時間でここまで調べたのは正直誤算も良い所だ。しかも私と螢ちゃんと同じく結界が展開されている可能性を考え、市内には基点がないと言う事まで確証を得ていた。

(ますます気をつけないとね)

冥華おば様に叱られたが、私は横島君の価値を理解していなかったのかもしれない。シズクと心眼の助言を聞いて、それを100%実行出来る発想力……それに自分の手持ちの能力をフルに使いこなすセンス。このまま成長していけばどうなるのだろうか？その先を見てみたいと正直そう思った

「レンタカーね。OK、直ぐに借りて折り返し電話するわ」

『あ、すいません。神宮寺さんの方にも電話するので、こっちから折り返し電話します。レンタカーを借りることを考えて……30分くらいで何とかかなりそうですか？』

看板にもう少し先にレンタカーの店があると書いてあるので大丈夫と返事を返すと、では30分後にと行って電話を切る横島君。私は携帯を鞆の中に戻し

「横島君。索敵タイプとして優秀すぎるわ。香港全体を覆ってる結界の基点を見つけたみたい、今からレンタカーを借りて1箇所だけでも潰すわよ」

電話をしている私を見つめていた蛭ちゃんは私の言葉を聞いて驚いた表情をしたが、安心した様子で笑いながら

「良かった。横島だから勝手に外に出るんじゃないか？って心配してたんですよ」

【横島さんは時々恐ろしい行動力を発揮しますからね】

蛭ちゃんと小竜姫様の言葉に頷く。横島君はいままで何度も命令違反をしているし、単独行動もしている。だけど今回はちゃんと私の言いつけを護っている様で私も正直安心してている

「さてとまずは足よ、時間が無いから急ぎましよう」

日暮れまではそう時間が無い。出来る事なら1箇所だけでも潰しておきたい、私は早足でレンタカーの店へと引き返すのだった……

街中に霊力が無い、それは結界で香港全体が封鎖されているのでは？霊力がどこにも探知出来ない事に私とメドーサは同じ考えに至り、足を確保する為にレンタカーショップへ訪れバンを借りて市外の調査へと向かっていた

「しかし伊達雪之丞。貴方が車の免許を持っているとは予想外でしたわ」

白竜寺で良く免許を取れましたわね？と声を掛けると伊達雪之丞は気まずそうに頬を掻きながら

「いや、無免許だ」

……無免許に運転させる。それは自殺行為とも思いましたが、私はバイクの免許はあっても車の免許はありませんし、メドーサは霊力回復中なので眼魂から出ることが出来ない。ピエトロは論外……少し考えた結果

「まあ任せますわ」

「おう！結構運転してるから事故なんて起きさねえよ！」

どうせ事故してもこの面子で死ぬようなのは居ませんし、もし警察

に止められたのなら暗示で通り過ぎれば良い。

「つと電話ですか、何か見つけましたかね？」

索敵要員と言う名目でホテルへ残した横島からの連絡。美神はもしかすると索敵要員として覚醒するかもしれないと思っていたようですが……どうになりましたかね？

「もしもし？」

『お疲れ様です、横島です。今美神さんにも連絡したんですけど……どうも市内全体を覆う結界が展開されてるみたいで、多分このまま搜索していても原始風水盤の場所を見つけないと思うんですよ』

横島からの電話の内容に驚いた。私達が搜索し、その上で気付いた香港に展開された結界。それをホテルに居たまま気付くなんて……（これは本当に化けたかもしれないですわね）

横島の才能を少々甘く見ていたかもしれない。姿勢を正し、鞆から紙とペンを取り出して横島からの情報をメモする準備をする

『それで今市外のダウジングをしているんですけど、そこからえーと多分もう少しすると脇道があると思うんです』

その言葉に視線を前に向けると確かに山の中に進む脇道が見えた

「伊達！その脇道へ入りなさい！」

「お、おう!!」

このままでは通り過ぎてしまう。そう判断し伊達へ怒鳴る、驚いた様子だったがハンドルを右に切り車は山中の中へ入っていく

「ミス・神宮寺。まさか横島さんからの指示ですか？」

「そうですね。どうもこの短時間で化けたみたいですよわね」

仮に索敵タイプとして覚醒するにしても今日は駄目だと思っていたのに……私は携帯を耳に当てながら

「確認出来ていると思いますが、脇道に入りました。この先に何があるんですの？」

『多分結界の基点だと思えます。同じ様な反応が12箇所あるんで、美神さんと神宮寺さんで分かれて貰って潰してもらおうと思つています。そうすれば原始風水盤の場所も判ると思うんで、ただ今日はも

う夕暮れが近いんで、その結界の基点を破壊したら戻ってください。夜は危険ですので』

誰に口を聞いていると言いたい所ですが、ガープが暗躍しているかもしれないこの状況。素直にこの基点を潰したら戻るべきですわね、それに横島が次の基点を教えてくれるとは思えないですし

『じゃあ俺は美神さん達のナビゲートに入るんで失礼します。それと余計なお世話かもしれないですが、怪我をしないでくださいね。雪之丞とピートにも伝えてください。じゃあ』

そう言つて通話が切れる。携帯を鞆に戻していると進行方向に廃れた館が見えてくる。この距離でも魔力を放っているのがよく判る【どうも横島は索敵にも向いてるみたいだねえ……本当びっくり箱みたいな男だよ】

点滅を繰り返す紫色の眼魂から聞こえてくるメドーサの声に同意する。あれほどまでに多才で多芸な奴は見たことが無いですわね(どうなるのか見て見たい……)

横島がどの様に成長していくのか？それを見て見たい、今はまだ無理だがその内陰陽術も開花させていくだろう。そして横島が最終的にどんな霊能者になるのか、それを見て見たい。だから今はこんな所で立ち止まるわけには行かない

「さて、横島が折角見つけてくれた結界の基点。さつさと破壊しますわよ」

「おうー！っかし、横島の奴は凄いいもんだ。どうやってこの場所を見つけたんだよ」

「本当ですね……同じ見習いのはずですが……どんどん置いて行かれる様な気がしますよ」

私達の存在に気付き、館から出て来たゾンビの群れを見据え。ニヤリと笑う……見習い、未熟者だと思っていた横島がこれだけの活躍をしたのだ。ならば横島の活躍に報いることの出来る戦果を上げて戻るだけ……

「さて、始めましようか……お前らはこいつでDeathつちまえツ!!

館がどうなるとかお構いなしにゾンビの集団の戦闘目掛け、全力で魔法を叩き込むと同時に館に向かって走り出すのだった……なお雪之丞とピートはと言うと

「俺らやることないんじゃないか？」

「そうかもしれないですね」

くえすの圧倒的な戦闘力の前に自分達はやる事が無いと溜息を吐いていたりするのだった……

「はい、お疲れ様でした。帰ってくるのを待っています」

携帯を机の上に置き、背もたれに背中を預けて大きく溜息を吐く。つ、疲れた……除霊の現場で走り回るよりも数倍疲れた……

【お疲れ様です。どうぞ】

「ありがと、おキヌちゃん」

おキヌちゃんに差し出された温めのお茶を飲んで一息つく。美神さんも神宮寺さんも結界の基点を破壊したらしく、2人が向かった地点にはペンデュラムが反応しなくなった。これで12箇所の結界の内2箇所は潰れたが、残り10箇所……先は長いな。その10箇所を全部破壊するまでこうなると思うと、正直気が滅入ってくる

「……横島。少し気分転換に散歩にでも行け。後片付けは私がしておく」

「え。でも……」

美神さんに勝手にホテルの回りを出歩くなと言われていた。だから散歩に出るわけには

「……心配するな、私なら水を仲介してお前の様子を見ることが出来る。いざとなれば水の中に引きずり込んででも回収する」

それはそれで怖いんだが……シズクの荒っぽい救出方法に思わず絶句する。だけど俺を心配してくれているのは良く判ったので

「判った、少し散歩してくるよ」

ああ。そうして来いというシズクと気をつけてと笑うおキヌちゃんに見送られ、俺はチビ達を抱えて談話室を後にするのだった……

「みむー！みみー」

「うきゅ、うきゅーん!!」

ホテルの近くに公園を見つけ、そのベンチに腰掛け楽しそうに駆け回っているチビとモグラちゃんを見ながら、膝の上のタマモを撫でる。夕暮れ時だから暑くも無く、寒くもないと言う丁度いい天候だ  
【精神的に疲れただろう?だがこれはまだ続く、適度に気を抜けよ】  
「ああ。判ってる」

美神さんと神宮寺さんの進んでいる方向を調べながら、原始風水盤の針に染み付いていた蠅の王とか言う悪魔の魔力に反応する探知機の様子を見ながら、魔力と霊力に反応する探知機とペンデュラムの3つを見ているのは流石に精神的にも疲れた……今日は美味しい飯を食べてゆっくり寝たいなと思う。俺はシズクと相部屋なのである意味何時も通りと言う感じで安心出来るしな……そろそろ戻るかと思つて立ち上がると視界の隅に金色が映りこむ

(あ……綺麗な子だな……)

腰元まで伸ばされた金髪と長めのスカートと遠目でも判る上品な白いブラウス……何処かのお金持ちの娘さんだろうか?……海外旅行にでも来ているのか?と思いつながらホテルに帰ろうとした瞬間

【横島・茂みの中隠れるー】

心眼の怒鳴り声が脳裏に響く、タマモ達を抱えて茂みの中にしゃがみ込む。何があつたのか判らず周囲を見ていると

(なっ!?)

木々の間に唐巢神父の教会で対峙した悪魔。ベルゼバブの姿があつた……どうしてこんな所に

「ちつ、どこに居やがるんだ……この近くにいる筈なんだが……」

舌打ちをしながら飛んで行くベルゼバブ。ま、まさか俺を狙つて……心臓が一気に脈打つのが判る。だがベルゼバブはゆっくりと俺の横を通り過ぎていく……その先にはさっきの金髪の少女の姿……そしてこの近くに居る筈と言う言葉を聞いて心の中で心眼に問いかける

(心眼……)

(無理を言うな、お前もターゲットなんだぞ!)

ベルゼバブは迷う事無くあの少女へと向かっている。もしかするとベルゼバブの目的はあの少女なのかもしれない……それともこの俺かもしれないが、もしあの少女がベルゼバブのターゲットだったとしたら、俺は阻止できる立場に居たのに見捨てる事になる。難しいと思っただが、助ける事が出来るなら助けたいと思っただ  
(不意打ちで行けないか?)

無理だと言う心眼。だがあのままではあの少女はベルゼバブに殺されるか、連れ去られるかもしれない……それを目の前にして何も出来ないなんて真似は出来ない

「水の陰陽術で何とか……」

【幻影か……だとしても相手の方が上だ。効果はそこまで期待できないぞ?】

それは判っているが、数秒あればいいのだ。そう俺が俺じゃないと認識されれば良いんだと呟く

【そう言うことか……やるだけやって見るか……最悪の場合水の中に飛べ込め。シズクが回収してくれる】

心眼の言葉に頷き、俺はGジャンの中から一枚の札を取り出し、それに血文字を刻み込むのだった……

「くつくーははははははっ!!!あの無能めツ!!あーっははははははっ!!!」

突然笑い出したガープ。その余りの笑いように気でも触れたかと思っただが、ガープのしているモニターを見て

「本当だな。あんな様でよく自分こそが真の蠅の王と言う事が出来るんだ?」

なにかの幻術で姿を変えた横島が金髪の少女の手を引いてベルゼバブの前を通り過ぎていく、必要以上に人間を殺すなど言っておいたが、あの程度の幻術すら見破れんとは……無能も無能だ。だが横島が手を引いている少女……あっちは問題だな

「真の蠅の王だな。どうする?」

我は一度真の蠅の王の顔を見たことがある。戦いの中、苦し紛れの

一撃があやつの兜を砕いた。そしてその下の少女の顔を我は確かに見た。だから断言出来る、あの娘は真の蠅の王 ベルゼブルだと……ベルゼブルが人間側についてしまうと少々不味い事になる。ガープにどうする？と尋ねるとガープは笑いながら

「何もしない」

「何？」

ガープの言葉の意味が判らずどういう意味だ？と尋ね返すとガープは笑いながら

「ベルゼブルが動いているのに下手に動けば、私達は抹殺される。だから動かない、どうせベルゼバブは捨て駒。原始風水盤を起動させ、魔人を目覚めさせる為の生贄。生きようが死のうが正直どうでも良い、ベルゼブルは魔界の重鎮ゆえ魔人が目覚めれば嫌でも魔界に戻らねばならない。なら今は手を出し敵対される必要がどこにある？」

そう言われると我は何も言うことが出来ない、モニターが映しつけている横島の姿を見つめる

『貴様。何をするッ！』

『黙って！あれを見てくれ、あそこに悪魔が居るんだ！早く離れたほうが良い！』

『な！あいつは！貴様放せ!!』

『駄目だッ!!』

ベルゼブルの一喝を受けても駄目だと叫び、無理やり引っ張って逃げていく姿を見て、やはりあの男は危険だと改めて実感するのだった……

ホテルに戻ってきた時横島君が散歩に出ていると聞いて凄く嫌な予感がした。そしてその予感は見事的中していた

「ええい！貴様！いい加減に我の手を放せ！この愚か者があッ！」

金髪の明らかに良い所のお嬢様と言う感じの少女を連れて戻って来た横島君。蛍ちゃんやシズクが荒れると思ったんだけど

（あ、あれ……？）

横島君が手を繋いで引っ張っている少女を見て、目を丸くして絶句



している。……まさかあの子の神魔とかの関係者とか言わないわよね？もしそうなら私も流石に完全にキャパシティーオーバーなんだけど……

「ベルゼバブがやけに狙っていた子です。保護とか出来ませんか？」

なんで横島君が外に出ると神魔に関わるトラブルになるの？もしくは人外と知り合いになるの？お願いだから、もう少し普通の人と知り合いになってくれないだろうか？それに連れて来た少女も無理やり連れて来たのか、目に見えて不機嫌そうな表情をしていた。横島君は心配しての事だと思うけど、本人の意思を聞いてから連れて来るべきだったと思う

「ええい！放せと言っておるだろうが!!」

横島君の身体が宙に浮いて、談話室の床に叩きつけられる。それは魔力でも神通力でもない単純な体術……だがその動きが余りに鋭い物だった……とても少女の繰り出した技とは思えないほどに鋭く、そして素早い動きだった

「みむ!？」

「うきゅー?」

「ココーン!」

「あいたたた……」

叩きつけられて呻いている横島君を心配して、Gジャンのポケットから姿を見せたチビ達が横島君に擦り寄っているのを見ながら、横島君が連れて来た少女を見る。シズクよりは年上そうだけど、蛭ちゃんよりかは年下そうね？中学くらいかしら？でも圧倒的なまでの存在感と威圧感に見た目よりも遥かに大きく見える……どこかの貴族の娘とか、王族の娘とか言わないわよね？もしそうだったら私達は誘拐犯になってしまうので、お願いだからそう言う関係者じゃありませんようにと心の中で祈る。そんな中くえす達はその少女を見て青い顔をしながら何か話をしていた

「……いえ、そんな。まさか……いやいや、ありえないですわ」

「……これは私の責任かもしれないな。すまない」

「いや、誰も想像しないと思うわよ?」

くえすとか蛍ちゃんかひそひそ話をしているのを聞きながら、その少女に声を掛ける。

「えつと貴女の名前は？」

「何故お前に答える必要がある？」

普段ならこのクソ餓鬼と言うレベルなのだが、その絶対零度の視線とそのオーラに押されて何も言うことが出来ない

「ふん、だがまあ、こいつに助けられたのもまた事実か……高城麗華だ。まああの化け物に襲われても困る訳ではないが、寝るところが無いと困るな、空き部屋を勝手に使わせてもらうぞ。それと私には干渉してくれるなよ、私は誰かに指図されるのが嫌いなんだ」

……えつととりあえず保護は受け入れてくれる？ って事？ それとも私達が借りているこのフロアの空き部屋を勝手に使うって事？ 私が首を傾げていると高城ちゃんは私達を見下した表情で見つめながら

「だが私はお前達と馴れ合うつもりは無い、私に構ってくれるな。目障りだからな」

そう言い放ち、談話室から出て行くその姿を私達は呆然とした表情で見送る事しか出来ないのだった……

リポート6 原始風水盤を発見せよ その5へ続く

## その5

リポート6 原始風水盤を発見せよ その5

サタンやあのお方が気に掛けていている横島の自分勝手な正義感の所為で、折角見つけたベルゼバブを見逃す羽目になった……

(不愉快だ。実に不愉快だ)

メドーサと小竜姫が私を見て驚いた表情をしていた。確実に私の素性に気付いただろう、私に関わってくれるなど命令したがそれどころまで従うか判らない。折角人間界で日頃の疲れを癒しながら、私の名を騙る愚か者を見つけて殺せばいいと思っていたのに、どうしてこんな事になってしまったのか……運が悪かったのか、それとも宇宙意思の干渉か……どっちにせよ面倒な事になってしまった

(顔を隠していたのが不幸中の幸いか)

私の姿は鎧甲胄姿でしか知られていない。魔力で私だと気付いたが、確証は無い。恐らくそんな感じだろう……

「だがまあ。あいつらと居ればベルゼバブの事も判るか」

ベルゼバブを倒すと言うのはあくまで人間界に来る為の名目だ。とは言え人間の姿をしている以上寝床と食事を取る事が出来る場所を確保出来たと思えば……

「べ、べ、ベルゼブル様。休暇中申し訳ありません……」

「なんだ」

考え事をしている中。部下が震えながら転移してきた、ここは既に結界を張っているので外の連中には判らないと思うが……こいつめ何を考えて転移してきた？私が睨みつけると部下は懐か手紙を取り出し

「あ、あのお方からの勅命で参りました。どうぞお確かめください」

「判った。御苦労」

消えて行く部下を見送り、手紙の封に押されている刻印を見て

「またあのお方に振り回されるのか……」

翼を模した「L」の刻印。一応息抜きで人間界へ来たが心労を溜め

る結果になりそうだ……私は深く溜息を吐きながら手紙の封を開けるのだった……

入浴と夕食を終え、明日も早いからと言う理由で横島君達をホテルの部屋に帰らせてから。私とくえすは横島君が連れて来た高城麗華と名乗る人物について小竜姫とメドーサに尋ねる事にした。私は判らなかつたのだが、くえすとシズクが言うには間違いなく神魔。しかもガープクラスの最上級クラスとの事だ、何か知っているのでは？と尋ねるとメドーサが重い口を開いた

「高き館の主様だ。それ以上は言えないよ」

……高き館……つてそれ!?冗談であつて欲しい、嘘だと言つて欲しかったが2人の反応を見れば本当なのだと判つてしまった。思わず座つていた椅子からずり落ち、自分でも判るくらい上擦つた声が出てしまう

「はあ!?な、ななな、なんでそんな大物が居るのよ!」

大物も大物。それこそバチカンが動き出してもおかしくない。それほどの大物だ、蠅の王……ベルゼブル。なんでそんな大物が人間界に……つとそこまで考えた所で思い出した。原始風水盤の針を奪つていた魔族は俺こそが真の蠅の王ベルゼバブと名乗つていた事を……そこまで思い出せば後は簡単な話だ

「なるほど、自分の名を騙る俗物の排除と言う事ですか?」

「そうなるのかね。かつての神魔大戦の折に最上級神魔と契約して魔装術を得た魔族は多い。大体は発狂して自滅したんだけど……どうもあいつは自分こそが真の蠅の王だと思ひ込むことで自我を保つていたみたいでねえ」

迷惑もいいたるところ何だけど……そんな大御所なら保護しなくても自分で何とかしたと思う。横島君はベルゼバブから逃げて来たと言つていたけど、それはベルゼブルの邪魔をしたつて事になる。横島君が制裁を受けたりしないか心配する

「ベルゼブル閣下は大変気難しい方として有名です。なのであの方の言う通り過度に干渉しないように」

「私はそのつもりだけど……」

横島君がどうするか判らないわよ?と呟くと、全員頭を抱える。そして考えて出た結論は

「とりあえず横島があの方を怒らせない事を祈るだけだね」

「神魔でも横島さんの才能は高く評価されているのでよっぼどでなければ大丈夫だと思っうんですが……」

横島君だからそのよっぼどをしそうで怖いのよね……私は深く溜息を吐きながら

「とりあえず今日はもう寝るわ。後3日しかないから、急いで回っていかないといけないしね」

満月まで後3日で壊すべき結界の基点は10箇所。ゾンビや罫で一筋縄で行かない上に、反応の強い弱いで場所の特定も難しい、連戦と言うことも考え、体力・霊力共に万全で挑みたい。竜神の装備と言う手もあるとは聞いているが、その反動も大きい。使い所を間違えば、行動不能になるから容易に切れる札ではない

「ですわね。小竜姫、メドーサ。貴女達も眼魂で休んで霊力を回復させておいて欲しいですわ、いざと言う時の為にね」

やるべき事は、これでもかとおある。だからベルゼブルの事は後回しにし、取り合えず今は原始風水盤の場所を隠している結界を破壊する。それだけに専念するわと2人に声を掛け、私とくえすは明日に向けて身体を休める為に部屋へと向かった。そして翌朝、私は予想外の物を談話室で見ることになった

「ほう?・ダウジングの精度としては規格外だな。貴様は」

「そうなの?・俺判んないぞ?」

……横島君の側にベルゼブルが居て、横島君の動きを見て興味深そうに見つめている。小さく笑みを浮かべているのがやけに印象的だった。そんな事を思わず考えてしまうほどに私は混乱していた、自分で構うなど言っておきながらなにをしているのだろうか……

「あ、美神さん。おはようございます。えーと、とりあえず今朝からダウジングした場所を美神さんと神宮寺さんの持つてる地図に印をつけておいたんで最初はそこから回って見てください」

私に気付いた横島君がおはようございますと笑うので返事を返し  
ながら、横島君から差し出された地図を受け取ると、確かに1箇所印  
が打つてある。そこが今日の目的地と言うのは判ったけど、一体何時  
から横島君はダウジングをしていたんだろう？今朝の7時30分  
……注意書きもしてあるので1時間やそこらではないと思うけど  
「俺が5時30分に起きて、走りこみに出かけるときにはもう起きて  
たぜ？」

雪之丞が欠伸をしながら呟く、これで少なくとも5時には横島君が  
起きていた事になる

「……私が5時に起きた時はもうベッドは冷え切っていたぞ？」

同室のシズクの言葉で横島君は今日少なくとも4時ごろには起き  
ていた事が判る。私達の視線が集まっていることに気付いたのか横  
島君は誤魔化すように口笛を吹き始める

「横島君。今日は許すけど、次は無いわよ？休むのも大事なことだか  
らね？」

「……うっす」

直接動いていないから、少しでも私達に情報を伝えようとしてくれ  
るのは判るけど、無理をされたら意味が無い。ここはキツク注意をし  
ておこうと思っているとベルゼブルがそれはどうかな？と呟き私の  
話に割り込んできた

「己の意思で動いている人間を止める権利は誰にも無い。私はお前達  
が何をしているなんてなんの興味も無いが、自分に出来ることを全力  
でやろうとしているこの馬鹿は好感が持てるぞ」

ベルゼブルの言葉に嬉しそうな顔をしている横島君を見て、蛍ちゃ  
ん達が面白くないという表情をしているのを見て慌てて蛍ちゃんの  
ほうへ走る。ベルゼブルを攻撃したそれだけで私達全員が殺されか  
ねないので蛍ちゃん達を暴走させないようにしないといけない

「横島君！じゃあ私達はレストランで食事したらそのまま街に出か  
けるから！また情報よろしくね！」

慌ててそう叫ぶと蛍ちゃん達の背中を押して、私は談話室を後にし  
た。なんで朝からこんなに気疲れしないといけないんだろう？と考

えながらも、時間が無いのでレストランで軽く朝食をとり昨日から借りているレンタカーで街の外へ向かう

「あの高城って言うのは出来るだけ怒らせないように」

運転しながら蛍ちゃんにそう話を切り出すと、蛍ちゃんは眉を顰めながら頷き、私が驚くことを口にした

「……判ってますよ、なんか高位の神魔って言うのは何となく……」

蛍ちゃんの不貞腐れた言葉に驚いていると蛍ちゃんは窓からホテルの方角を見ながら、でも面白くないんですと呟く

(横島君がくえすの所に行ってから嫉妬深くなつたわね)

精神面のケアも師匠の務めだが、私は正直恋愛の経験も無いので助言出来る事も無い。なんか助言出来れば良いんだけどなあと思いつつも、縁に言える事も無い事に気付く

「とりあえず、あんまりあの人を怒らせないように、どうせ直ぐに別れる事になるんだからね？まずは原始風水盤の起動の阻止。そしたら皆で香港で観光でもしましょう？」

「そうですね……」

明らかに空返事と判る蛍ちゃんの言葉、もう本当にそんなに不安になるなら早く告白でも何でもすれば良いのに……私はそんな事を考えながら、横島君が印をつけてくれた最初の場所へハンドルを切るのだった……

蛍からの通信鬼で現在の状況を聞き、今必要だと霊具の作成をドクターカオスと2人で徹夜で行っていた

「カオス。もう少ししたら休めよ？無理は良くないから」

「はい、テレサと軽食の準備をしたのでもう少ししたら持ってきますね」

助手として私とドクターカオスの手伝いをしてきている、マリアとテレサ。2人のおかげでかなりスムーズに準備を進める事が出来ている

「ベルゼバブ対策に殺虫スプレーの強化って役に立つのか？」

ドクターカオスの問いかけに苦笑しながら返事を返す

「ベルゼバブは魔族としては格の低い虫型魔族ですから、殺虫スペレーでも少し強化すれば十分に効きますよ」

満月まで後3日。今日で準備をし、明日の昼に香港へ向かい、夜に合流する。捜査に当てられる時間は1日と半日。しかもスムーズに合流できた場合でこれだ、予定通りに合流出来る保証も無く、かなり厳しいスケジュールで動いている。だが準備もなしにガープが暗躍している可能性がある香港に向かう訳には行かない。原始風水盤が起動してしまう事も考慮し、発見するだけではなく、機能を停止させる道具の用意も平行し不眠不休でここまでやってきたが、マリアとテレサの言う通り適度な休憩も必要か……2人の言葉に甘えて休憩しようかと考えていると突如部屋の温度が下がったような寒気が走った。そして部屋の中に充満するオーラに冷や汗が流れる……

「……ドクターカオス。非常に危険です、超高位の神魔の出現を確認……逃走を推奨します」

「……うあ」

マリアとテレサがその圧倒的な魔力に当てられて、機能を停止する。ドクターカオスが冷や汗を流しているのを見ながら私は手にしていた工具を机の上に置き

「ルシファー様。お戯れが過ぎますよ」

振り返る事無く背後に居る人物にそう声を掛けた。魔神ルシファー、サタンが魔界統一に乗り出す理由となった魔神。かつては神界ではもつとも位の高い天使として、魔界では最高位の墮天使として、そしてキーヤんとサツちゃんが最高指導者となる前に両方の最高指導者を経験したと言う経歴を持ち、そして最高指導者に飽きたと言って魔界に争乱を起すだけ起こしたら隠居宣言した。その際でサツちゃんは魔界統一に乗り出したのだ、その騒乱を収める為にそしてルシファーは今楽隠居として神魔両方の陣営にフラリと現れてはトラブルを巻き起こして去っていく。そんな相手が突然現れた、嫌でも警戒心が強くなる

「ルシファーと言う名は良くない、良くないな。アシユタロス、今の私はルイ、ルイ・サイファーさ」



楽しそうに笑う声が聞こえたと思うと目の前に腰掛けている。以前遠目で見た時は男性の姿をしていたが、今はドレス姿の女性の姿をしている

「ああ、これかい？前は子供や老人の姿もしていたんだが、うん。飽きたからね？ここで女性の姿を試してみたんだよ、美しいだろう？」

確かに美しいだろう、だがそれに関しては何も感じない。何故ここに現れたのか？それだけが脳裏を埋め尽くす

「ルイ様」ああ、ルイで良いよ。様なんていわれるとうっかり殺しかねないからね」

にこにこ笑っているが、殺すと思えば私達なんか瞬きしている間に殺される。心の中でも様づけをすれば不愉快と言う理由で殺されかねない……となりのドクターカオスにも小声で絶対に様付けを心の中でもしてはいけないと警告していると、ルイはドクターカオスを見て楽しそうに笑い始める。その笑顔に不吉な物を感じているとルイは嘲笑を浮かべながらドクターカオスに声を掛けた

「ヨーロッパの魔王だったね。人間の癖にと思っただが、うん。中々良いじゃないか？永い時の中、その目で何を見た？人の死かな？不死を悔いたか？愛した者を失う喪失を何度繰り返した？」

ん？私にその時の気持ちをお教えしてくれないか？と挑発する様に笑うルイにドクターカオスは冷や汗を流したまま

「後悔はしておらん、ワシは今まで生きてきた事で助けたいと、幸せになつて貰いたいと願う者の力になれる。故に後悔などしておらん」

マリアとテレサを護る位置に移動しながらハッキリとした口調で言い切った。ルイはそれを見て楽しそうに笑いながら

「うん。やっぱり人間は良いね、何時だって神魔を超えるのは人間だ、だから私は人間に試練を与えたくなるよ……特にそう……今神魔が注目している横島忠夫にもね？」

横島君の名前を聞いて思わず椅子から立ち上がろうとしたが、凄まじい重圧を感じてそのまま椅子に逆戻りなる

「そんなに警戒しなくても良いじゃないか？今は何もしない、何もしないさ。まだ彼は弱い、私が望む存在になるか、それをゆつくりと見

極めさせて貰う。今回尋ねて来たのは私の部下。ベルゼブルを彼の護衛につける、それを伝えに来ただけだよ」

一応この場所は君の管轄だからね。神魔全てを騙し、ただ1人の人間に幸福な未来をと望む君の顔を潰すわけにはいかないだろう？と小さな声で呟かれる。ルイは全てを知っている……相変わらず規格外の存在だ。同じ魔神でも圧倒的に格が違う

「もしベルゼブルが来たら、友好的に迎えてやってくれれると助かるよ。じゃ、私はこれで」

現れた時と同じ様に忽然と消えるルイ。それから数分後やっと身に纏わり付いていた重圧から逃れる事が出来た

「ルシファーか、なんとも恐ろしい奴じゃな。寿命が縮んだわ」

過剰魔力にオーバーヒートしているマリアとテレサの手当てをしているドクターカオスを見ながら、私はこれからどうするかを本気で悩んだ。横島君がルイに目をつけられた……それは何よりも恐ろしい事だ。あのお方なら口笛を吹くような手軽さで人間を魔族へと変えるだろう……

(どうした物か……)

私の権限で護る事が出来るなら何の心配も無いのだが、相手は私よりも遥か上の権限を持つルイ……サッチャんでさえも意見する事が出来ないそんな規格外の存在。GS試験で目立ちすぎたのがルイの耳にも届いたのだろうか？それとも神魔の動きを見て興味を持ったのだろうか？どっちなのかは判らないが、どっちにせよ状況はかなり悪いな……どうした物かと悩んでいると

「も、ももも！申し訳ありませんんツ!!!ルシファー様に代わって私が謝ります！ごめんなさいいいいッ!!!」

魔法陣からスライディング土下座で飛び出てきたルキフグスを見て、私とドクターカオスが何とも言えない表情になったのは言うまでも無いだろう……

香港とか言う街を覆っている結界の存在は感知していたし、それが

日ごとに弱くなっているのも判っていた。正直結界は目障りだったが、壊すのも面倒な上に、姫の目覚めが近い。それを向かえる準備をしなければならぬのにそんな些事に時間を掛けている暇は私には無かった

「ふむ……これは……なるほどなるほど」

GS試験と言う場所が姫の目覚めに関係すると黒いのと白いのに聞き見に行った時に見た者達の気配がする。大方原始風水盤の起動の阻止に来たという辺りか……

「原始風水盤を起動させるのを邪魔されては困るな」

正直原始風水盤にはそこまで興味が無いのだが、起動する事で竜脈の流れが変わり、姫の封印が緩む。その一瞬を待っている私にとつて原始風水盤の起動を妨害されるのは非常に迷惑な事だった。なんせ原始風水盤が起動さえすれば竜脈は乱れ、同胞達を封じる鍵となつている剣闘士が目覚めるだろう……そうならば後は連鎖的に同胞達は目覚めていく、だからそれまでは原始風水盤の起動を阻止される訳には行かない

「やれやれ、仕方あるまい」

指を鳴らし、何度か私を襲いに來た馬鹿な蠅の魔族を呼び出す、その数は4体……全て私の鎌で思考能力を奪い、私の指示を聞くように調整した者達だ

「散れ、そして適度に見つかり、気配を感じたら逃げろ。そして明後日の朝、原始風水盤の元へ向かえ」

領き散つていく蠅の魔族。まあ大して役に立たんが、人間相手では早々倒せる相手ではないし、無駄に機動力があるので場所を特定されず逃げ回る事が出来るだろう。これで探索や探知をしてる相手の感覚を潰せるので間違いなく時間は稼げる

「邪魔はする、邪魔はするが、その後は手伝おう」

ガープとか言う魔神が姫の回りを探っているのを知っている。本当ならこの手で抹殺してやりたいが、原始風水盤を起動するまでは殺す訳には行かない、なんせ姫の目覚めに関係しているのだから、自分の感情で処分する訳には行かない。それに人間には人間の都合もある

るだろう。満月の日の朝に知れば当然向かうだろうが、準備する時間なども考えれば日が沈むまでに起動を阻止する事は不可能。ならば邪魔をした分は詫びとして原始風水盤の場所を教えてやっても良い。私に私の都合があるように、向こうにも向こうの都合があるのだからな。懸念としては封印から開放された馬鹿が何をするかだが……あいつの性格を考えればそこまで問題は無いだろう

「まああの馬鹿が何をするかは判らんが、行き成り殺すという事は無いだろう」

戦いを好み、満足できる戦いをする為に相手を育てることもする馬鹿。だから原始風水盤の起動を阻止しに人間が向かったところで行き成り殺すという事はない。手足の1・2本は失うだろうが、死にはしないのだから安いものだろう。

「後で死のうが、生きようが、全て姫の気持ち1つなのだから」

姫が目覚め、何を望むか？その結果しだいでは人間達は全て滅ぶ。だから今死のうが、後で死のうが、それに際は無。何故なら全ては「我らが姫の思うがままに……」

神魔がそれを阻止しようと動こうが、人間が終焉に抵抗しようが、姫が滅べと言えば滅ぶ。栄えよと言えば栄える……それだけだ。姫が目覚めればそれだけで人間にはもう出来る事など何も無いのだから……

横島さんの指示で順調に結界の破壊は進んでいた。この調子ならば満月の日までに原始風水盤の場所を特定できる。そんな風に考えていたのですが……結界の基点を8箇所潰した所で暗礁に乗り上げてしまっていた

「今日も駄目そうね」

「……すんません」

昨日の夕方。今まで100%の的中率を誇っていた横島さんのダウジングがその精度を失い始めたのだ。地図の上で回り続けるペンデュラム、偶に場所を示すが、そこに結界の基点がない。恐らく、探知に特化した者がこつち側に居ることに気付き、妨害をしているのだ

と思うのですが……それが判つてもこつちに出来る事は殆ど無い。寧ろ8箇所結界の基点を潰す事が出来た、それだけでもかなりの成果だ。

「また空振りですわね。向こうもこつちの動きに気付いたと見て間違いないでしょうね」

反応があつた場所を見に行つていた神宮寺さん達が戻ってくるが、やはり空振りだったと告げる、美神さんと神宮寺さんで交互に反応のあつた場所を見に行つて戻ってくる。これで4回目だ……

「厄介だね。特定させて、場所を移動する。結界の起点を隠しに来ているのは判つたけど、鬱陶しいよ。これは！」

メドーサが不機嫌そうに怒鳴る。残っている結界の基点は4箇所、満月までは後2日の猶予を残しているが、場所を特定する事が出来ず、更に結界の基点を守っている悪魔やゾンビの事もあり、分散して調べる事も出来ず完全に手詰まりになつていた

「すみません、役立たずで」

申し訳無さそうに言う横島さんだけど、そんな事はない。ぶつつけ本番でよくここまで頑張つてくれた。8箇所も結界の基点を見つけてくれた、それは十分すぎる働きだ。起点の破壊で相手が防衛手段を打つて来た、それだけ横島さんのダウジングの精度が高いと言うことだ

「横島は凄く頑張つてくれたわよ。ただ向こうも対策を立てて動いて来てるだけ、8箇所結界の基点を破壊したんだから特定する事だつて不可能じゃないんだから」

蛍さんが励ますように横島さんに言う。しかしその通りだ、12箇所  
の基点を使つての結界。その内の8箇所を潰しただけでかなり結界としての効力は弱まって来ている筈だ。危険性はあるが、起動の前の準備段階での魔力放出で場所を特定できる可能性もある。その場合時間制限がかなり厳しくなるが、準備や装備を万全にして強行突破すると言う作戦も取ることが出来ますね……ただ出来ればそれは最終手段にしたいですが……

「となると結界の起点を破壊するんじゃない、直接原始風水盤を潰し

に行くって事か？そっちのほうが手っ取り早くて俺は良いけどな。チマチマ基点潰しをやってるのは性に合わない」

「それも可能性の1つだと思えますが、僕達で原始風水盤を破壊する事が出来るのですか？そう言うのに詳しい方は神魔側でいらっしやるなら呼んでからのほうが安全なのは？」

ピートさんと雪之丞さんが意見をを出してくれる。どっちもある意味正解なのだが、どちらも間違いでもある

「美神さん。枢ちゃんに電話で聞いてみるのはどうですか？」

「無理。そう考えて電話したけど、電話出てくれないわ」

横島さんが別の可能性として予知能力を持つ夜光院枢さんの名前を出す。電話に出てくれないのでは話にならない。ヒヤクメに調べてもらおう事も考えましたけど、ヒヤクメの強すぎる探知能力では逆探知から、精神攻撃をされる可能性がある。なのでそれも出来ない

「とりあえずこっちからGS協会とカオスに電話してくる。そういう関連に強いつて言ったらカオスクらいしかないし」

美神さんがそう言つて談話室から出て行くのを見送り、その間も原始風水盤をどうするか？の話し合いを続けるのですが、やはり良いアイデアは浮かんで来ない。起動する前に破壊、もしくは針を奪いたいのですが場所の特定が出来ない

「竜脈の近くだとは思いますが……」

「香港は竜脈が張り巡らされてる。竜脈を辿るって言うのも難しいだろうね……」

【シズクの探知では無理なのかの？】

「……水に魔力が染み出していれば何とかなるが、それも無いからかなり難しい」

基点を潰しているので結界の出力が弱まっているのだ。何とか見つける手段はあると思うんですが……

「カオスが明日にはテレサとマリアと一緒にこっちに合流するって、時間までは判らないけど色々準備をして来るって言うてるから今日は休みましょう」

電話を終えた美神さんが戻ってきて、今日は休みましょうと告げ

る。私はその言葉の後に続いて

「確かにそうした方が良いかも知れないですね。時間に追われながらの除霊は精神的にも肉体的にも凄まじい疲労となります。明日もしドクターカオスが来て、原始風水盤の場所を特定してくれる可能性があるある事を考えると、万全な状態で迎えるようにするのも大事な事です」

時間的余裕は無い。だが今何も手がかりが無い状態で動き回るなら、体力と霊力の回復に努めましょう。無理をしてガープの罠に掛かって全滅する可能性を考えれば、ドクターカオスと合流してから考えるのも1つの手段だ

「そうと決まれば今日は休むわよ。どっかの高級レストランでも行って良い物食べましょ？」

こういう時こそ、気持ちの余裕が大事だ。いざ原始風水盤の場所を特定出来た時の事を考え、今日一日休養に当てる事に決め、私達はホテルで見つけた観光ガイドを手にホテルを後にするのだった……

リポート6 原始風水盤を発見せよ その6へ続く

## その6

レポート6 原始風水盤を発見せよ その6

満月を明日に控えた夜。前祝と言う事でアスモデウス、アスラと共に酒宴を開く事にしたのだが……

「何故手ぶらで来た。アスラ」

諸事情で参加出来ないセーレでさえ、少しは酒などを用意してからアジトを出たのだが、アスラが手ぶらで来た事に気付きそう尋ねるとアスラは腕組しながら

「……散々酒と食料を提供しただろう？それなのに我にも用意せよ？と言うのか？」

むう……それを言われると辛いのだが、アスラは酒をかなりのハイペースで飲む。あのペースで飲まれたら私のコレクションが……

「アスラ。ガープの集めている酒はとても稀少な物だ。普段のような飲み方をするのなら控えて貰おうか？」

「……判っている」

アスモデウスの言葉に顔を顰めながら返事をするアスラ。正直心配だが、これから私達が本格的に動くその前祝いだ。飲みすぎるからと言う理由で仲間外れにはしたくなかった、まあ約一名滝の様な涙を流しながらアジトを出て行った馬鹿が居るが……

「セーレは残念だった」

「ああ、私も予想外だったよ」

あの馬鹿蠅が動き回った事で神魔混成軍も厳戒態勢。それに伴いセーレも召集されたのだ、一応セーレの分のワインは置いておいてやるか……泣くかも知れないからな

「GS試験で動いたのが良かったな。必要以上に警戒してくれていい」

「ああ。そうで無ければ意味が無い」

GS試験でアマイモンの腕を奪った、それだけの能力を持つと神魔が警戒した。それは本来警戒しなければならぬ所にむける意識を



別の所に向ける事になり、私達が余計動きやすくなるだけだ。向こうが勝手に警戒し、疲弊してくれる。これほど都合の良い事は無い  
「香港には神魔は派遣しないんだな……まあ何故か真の蠅の王が香港に居るらしいが、それはどうする?」

ある程度は戦力を送ってくる筈と予想していたアスラが拍子抜けと言う感じで呟く。私ももしかすると魔界正規軍辺りが何人か送ってくると思っていたが、それも無かった。予想外と言えば1つ。ルシファーが香港に現れた事と真の蠅の王ベルゼブルが香港に居ることだが、正直言つて向こうから干渉してくる事は無いと予想しているのだ、それも大した問題ではない。どうせルシファーの悪ふざけにベルゼブルが巻き込まれている。大方そんな所だろう……

「ああ、それか。正直真の蠅の王に関しては不安要素だが、向こうも魔界の重鎮だ。下手にちよつかいをかけなければ大丈夫だろう」

自分の名を騙る愚か者の制裁。それで動いていると言う話は聞いている。だから下手にこちらから手を出して、敵対しなければ今の所は問題無い。それが私の出した結論だ、そもそもベルゼブルは今の情勢に全く興味が無く、不干渉を宣言しているしな……

「そして神魔混成軍の増援だが、恐らくそれも無い。小竜姫とメドーサがいれば大丈夫だと考えているのだろうか?いくらオーティンや竜神王が増援を送ると言っても馬鹿共がそれに反対する。なぜならば人間を見下しているからだ、人間など死んでも痛手ではない。そう考えている神魔が多いのは言うまでも無いだろう?」

ボトルのコルクを空け、グラスに注ぎながら私の考えを口にする。私が今最も恐れているのは神魔混成軍などではない、GS試験で対峙した人間達の方がよっぽど脅威だと思っている……だが今死んで貰って困ると言う非常に厄介な立ち位置にあの人間達はいる

「どうするつもりだ?あの馬鹿は間違いなく殺しに掛かるぞ?」

ああ。ベルゼバブか、あれは正直どうでも良いんだが……狂神石で増長し、私達を殺し自分が我々の一団のトップになる。なんとと言う分不相応の野望を抱いているのも知っている……だが、だからこそそれで良いと言うと怪訝そうな顔をするアスモデウスとアスラに全部計

画通りだから気にするまでも無いと言い切る

「あの馬鹿が裏切る事も想定の内、最初から切り捨てる事を前提で計画を進めている。もつと言うとだな」

ここでワインを呷り、1度気分を落ち着ける。あんな馬鹿を一時的でも自分達の陣営に迎え入れる。それは苦渋の決断だった、なんせ私の計画にはある程度の魔力を持つ生贄が必要だった、しかしそれ達に目的に賛同し、集って来てくれた部下を使うのは流石に心苦しい、適度な権力欲を持つ馬鹿がいらないか?と考えているときにきたのがベルゼバブ。あいつは正しく飛んで火に入る夏の虫と入った所なのだ

「正直原始風水盤で魔界を人間界に呼び出すなんていう名目は正直どうでも良い。破壊されても良い、起動さえすれば良いんだよ……あれはな……鍵なのだから」

鍵?と尋ね返してくるアスラとアスモデウスにそうだと返事を返し、ワインを呷る。それだけで2人は私がこの事について私がこれ以上喋る事は無いと理解したのか、同じ様にワインを呷る

「ふむ。悪くない、良い味だ」

「……我には合わんな」

アスモデウスは気に入ったようだが、アスラは眉を顰めている。これは西洋と東洋の魔神の味覚の違いと言う事で我慢してもらおうしかないな。なんだったら自分の酒蔵から自分の味覚に合う酒を持って来れば済む話だ

「では今回はあの人間達は殺さない?」

「ああ、殺すつもりは無い。危険と判断すれば適度な所で邪魔に入るさ」

私の目的の為には今はまだ死なれては困る人材だからなと笑い、私はワインのボトルに手を伸ばすのだった……明日が来れば私達の計画を更に進む。何の支障も無く、自分の計画通りに物事が進んでいる。故に失敗はありえない、必ず成功する。そう確信するのだった……

カオスは予定した時間丁度に私達が滞在しているホテルに大量の装備を持ってマリアとテレサと共に尋ねて来てくれた。これなら今日の内に原始風水盤の場所に乗れり込めるかも……っと思っていたんだけど……私達は手分けしてあちこちの水を汲みに行っていた。原始風水盤の場所を特定する為らしいけど……これに何の意味があるのだろうか？

「うーむ……こっちは外れじゃな。おい、次の水をくれー」

次の水をくれと言うカオスに横島君が汲んできた水の入ったフラスコを手渡ししながら

「なーカオスのじーさん、これ何の意味があるんだ？」

「ん？ああ、お前も水の陰陽術を使ってダウジングをしていたじゃろ？水にはの、魔力や神通力と言った力が染み出しやすい性質がある。原始風水盤ともなればその魔力量は文字通り桁違いじゃ、ならば水を調べる事で場所を特定できるんじゃないよ」

錬金術の初歩じやなと横島君に話しながら、渋い顔をするカオス。この反応を見ると場所の特定はやはり難しいのだろうか？

「誰かAー7・Aー8の水をくれんか？Aー5に反応があった。ここから特定に入る、次にB・C・D・Eの5・6・7・8も頼む」

カオスの指示にしたがって、フラスコを手渡していく。その反応を見ながらカオスは地図の前に待機しているマリアとテレサにも指示を出していく

「Aー7・Bー8・Dー7・Cー5・Eー6の地点を線で繋いでくれんか？」

「了解しました」

地図に線が引かれる。そしてそれはかなり歪だったが線で繋がれ囲いを作り出した

「ふう、この囲いの中に原始風水盤がある」

場所は特定できた。それは良いことなんだけど、私達全員の表情が曇る。場所は香港の地下鉄の整備用の地下プラットホーム……政府に許可を取れば整備用の通路を進む事が出来るだろうけど……

「正規の通路じゃ間違いないですよね」

蛍ちゃんの言う通りだ。場所は地下鉄の整備用のプラットフォームだろうけど、人間が出入りする場所に原始風水盤を設置しているとは思えない。あの辺りは周囲がコンクリートで覆われているが、あちこちの空間がある。その何処かに人間が知らない通路があり、そこに原始風水盤が設置されているのだろう

「悪いがこれ以上の詳しい事は判らんぞ？」

カオスでこれ以上調べる事が出来ないのなら、恐らく横島君も同じ。しかしこれだけの範囲を調べて今日中に突入するのは明らかに無謀だ。原始風水盤を見つけたとしてもその前に体力も霊力も相当消耗してしまう筈、そうなれば原始風水盤の破壊はまず不可能だ

「とりあえずその周辺に監視用の使い魔を飛ばしましょうか。もしかすると出入りしている馬鹿を見つける事が出来るかもしれませんから」

「……無いよりはましだと思いますけど、今はそれに頼りましょうか」  
くえすと小竜姫様が溜息を吐きながら使い魔の準備をしているのを見ながら、私もこうしてはいられないと準備していた書類を封筒に入れて

「小竜姫様。私は香港のGS協会と政府の方に周辺の立ち入り禁止要請に行ってきます、少しの間横島君達をよろしくお願いします」

GS試験と同等かそれ以上の被害が出る可能性もある。それならば最初から周辺を立ち入り禁止にしまったほうがいい。巻き込まれた民間人なんて洒落にならないからだ。日本のGS試験の事はこつちにも伝わっているので、話を進めるのはそう難しい物ではないだろう

「判りました。ドクターカオスが持って来てくれた霊具などの確認をしながら待っています。美神さんも気をつけて」

小竜姫様の言葉にありがとうございますと返事を返し、私は香港のGS支部へと向かうのだった……

「すんなり行ったわね……ま、当然よね」

周囲の立ち入り禁止は2つ返事で了承してくれた。やはりGS試

験の事があったので、グループ一派が動く可能性があると言えば2つ返事でOKだった。丁度今日までその周辺で映画を取っている日本と香港のクルーが居たらしいが、それも今日の昼間に撤収しているのでは何の問題も無い。どうか香港を護ってくださいと言う香港の市長とGS協会の会長……応援に出せるほどのGSがいないので許してくださいと言っていたが、足手纏いは居ない方が良いのでそれはそのままで気にしていない。後は……横島君をどうするか?と言う問題は、ホテルに帰ってから話し合えば良いかと思い、私はホテルへと急いで引き返す事にするのだった……

だが美神は知らない、美神がGS支部を後にしてから数分後。映画のシーンの撮り忘れがあると行って映画の撮影チームが訪れた事を、そしてその場は引き下がった撮影チームが何かを企んだような顔をして、その場を後にした事を……

ドクターカオスとか言うジーさんが持ってきた霊具それを確認していたんだが、これめちやくちや面白いな!!

「お、これなんかお前に丁度良いんじゃないか?横島」

「なんでヌンチャクだよ?お前俺なんだと思っっているんだ?」

面白いと思っただがな、横島には不評だった……こいつ目が良いから使えると思っただけだな……

「それ美神さんに良いんじゃない?神通棍とか好きだし」

そうなのか?それならこれは美神用だな……机の上にヌンチャクを置いて次の霊具を確認する

「ワシ、幽霊だからなあ……自前で武器は用意できるが……面白い物ばっかじゃなあ……」

……GSの集団なのに、なんで普通に幽霊が混じっているんだろうな……俺の知っているGSとかとは全然違うな。横島の回りだけがそうなのかもしれないが……なんかその異常になれてきている自分が居るのが何か怖い

「これは僕が使わせて貰います。精霊石で出来たロザリオ……僕にぴったりです」

ロゼリオを手にして笑うピエトロ。だけどこいつ吸血鬼だよな……大丈夫なのか？

「ピエトロはハーフだから大丈夫なんだよ。普段反発する光と闇を同時に使って力を増幅させる。普通は出来ない事なんだぞ？力同士が反発して身体が弾け飛ぶ」

メドーサの説明に俺と横島の顔が青くなり、2人でピエトロの顔を見る。こいつそんな危険な事をしていたのかと

「あ、いや。そうらしいんですが、僕はシルフィーと違って人間の力の方が強いので出来るんですよ。同じハーフでもシルフィーは吸血鬼の力が強すぎるので出来ないらしいですし……ハーフとしても出来損ないの僕だからこそ出来た事かもしれないですね」

でもこの力があるから出来る事も多いので、別にハーフとかが嫌って事じゃないですよ？と笑うピエトロ。こうして話して見るとピエトロも案外苦勞しているのかもしれない……両親がいなくて白竜寺に拾われるまでは生きる事にやっとだった俺と似ているかもしれない

「皆さん、武器の確認も良いですが防具の確認も大事です。順番にこつちに来てください、ドクターカオスが作ってくれた防具の調整をします……まずは横島さんからです」

「そうだぞー、特に横島。思いつきで行動するお前は特に強力な防具だからなー」

カオスのジーさんの娘だという2人が横島を呼ぶ。横島は判ったと返事を返し2人の方に歩いていく横島の背中を見ながら

「結局横島も連れて行くのか？」

原始風水盤の破壊作戦に横島を連れて行くから防具を装備しろと言っているのだと思ひ、メドーサ達に尋ねる。

「……仕方ない。原始風水盤を凹にしている可能性もある。横島を奪われる訳には行かないんだ」

シズクが眉を顰めながら呟く。それに小竜姫やメドーサ、それに神宮寺まで同意しているのを見て

(横島には俺達も知らない何かがあるのか？)

だからここまで徹底して横島を守ろうとしている？あのお人よしに一体どんな秘密があるのだろうか？俺が首を傾げていると美神が帰ってくる

「どうでした？周辺の立ち入り禁止のほうは？」

「バツチリ。香港市長とGS支部会長が協力してくれるって、警察による検問と立ち入り禁止令を出すから大丈夫だって」

これで民間人が迷い込んでくる事は無いな。これで少し不安材料が消えたか……後は原始風水盤の場所を特定するだけだな

「終わったー。なんかめっちゃくちや凄いわ」

「うむ。だがあれだけの物ならば魔族の攻撃を受けても致命傷にはなるまい」

横島の防具のチェックが終わり、今度は俺が呼ばれる。ブレスレットなどを見て思わず

「こんなもんで防具になるのか？」

俺がそう尋ねるとマリアがまあ見た目は頼りないですがと呟いてから、機能の説明を始めてくれた。精霊石を埋め込んでおり。攻撃に反応して自動的に障壁を展開するらしい

「へーこれはあれか？魔装術を使っているても大丈夫なのか？」

「そう言う風に調整してあります。なので問題無いです」

それはありがたい。この防具を使っているから魔装術が使えないなんて事になるなら断ろうと思っていたが、俺の思い過ごしだったようで何よりだ。差し出されたブレスレットやペンダントを受け取ると美神から

「じゃあ防具の調整が終わったら夕食を済ませて身体を休めて頂戴。いつ出発になるか判らないからね」

早めに夕食を済ませて身体を休めておけと言う言葉に頷き、談話室の隅でチビ達を遊んでいる横島に

「一緒に飯に行こうぜ。1人で食っても詰まらん」

「OK。直ぐ行く」

横島と2人で夕食を済ませ、言われた通り早めに眠りについたのだが……その日の深夜と翌日の朝まで掛かっても原始風水盤の場所は

確認出来なかった。

「！美神さん！神宮寺さん！メドーサ！こつちへ！使い魔がベルゼバブの姿を捉えました！」

俺達がやつと原始風水盤の場所を知る事が出来たのは昼過ぎ。日が落ちるまで後6時間と言うかなり不利な時間になってからの事だった

「時間的にはかなり不利ですが、満月まで時間がありません。強行突入となります」

準備を整えてから小竜姫が話し始める。日が落ちると同時に起動するのは目に見えている、その前に原始風水盤を破壊するのは恐らく不可能。それが美神達が出した結論だ

「ドクターカオス。もし起動してしまった場合、機能を停止、もしくは効力を変えるが出来るんですね？」

「まあな、このワシに不可能は無い。但しそれ相応の時間が必要になるがな」

その話で判った。俺達の仕事は時間稼ぎもしくはカオスのジーさんの護衛だと

「ベルゼバブとの戦闘は私とメドーサが先陣を切ります。美神さんと神宮寺さん、そしてシズクはその支援をお願いします。竜神の装備は一応渡しておきますが、竜気は人間には強すぎます。美神さんと神宮寺さんの2人だけの装備だと思ってください」

「狭い空間での戦いとなるとベルゼバブの方が圧倒的に有利だ、背後からの奇襲を防いでくれるだけで良い。雪之丞達はカオスの護衛。こいつがやられたら原始風水盤の機能を停止させるのは無理だから重要任務だよ」

メドーサの言葉にうつす！と返事を返す。前衛で戦えないのは残念だが、護衛も重要なポジションだ。任された以上はベストを尽くすだけだ。だから後衛は俺と横島とピエトロとマリアとテレサ。前衛は小竜姫とメドーサと美神と神宮寺にシズク……戦力的に言えばもしかすると今世界で一番戦力を持っているのはこの集団かもしれないと苦笑する



「美神さん。ノツブちゃんと蛍はどうするんですか?」

【ワシハブ?】

「私も後衛でいいんですか?」

【私今回出来る事無いんですか?】

横島とノツブが手を上げて質問する。そう言えば、ノツブの名前は言われなかったな。忘れられてたのか?

「ノツブと蛍ちゃんは遊撃。前衛と後衛の両方を勤めて貰うわ、状況次第で前衛と後衛どっちかに入って貰う、厳しいと思うけど任せたわ、おキヌちゃんは後衛から霊具の運搬。但し無理はしない事」

おっと……2人だけ2倍仕事か……南無と心の中で手を合わせるが、正直な所英霊と俺よりも格上の霊能者。俺達よりもキツイ仕事に回されるといふのは予想していたので、頑張ってくれと心の中で呟き、俺は俺に出来る事をしよう。そう思い、ピエトロと横島、そしてマリアとテレサを呼び寄せる

「さてと護衛組みでのフォーメーションを決めるぜ。出発の前に役割を決めておこうぜ」

「判った。あ、そうだ。チビ達ってどうする?」

横島の足元のチビ達を見て、少し考える。チビ 電撃 モグラ 巨大化・火炎放射 タマモ 火炎と幻術 心眼は指揮……うん、俺よりもよっぽど強いよな。この小動物……それにあのバンダナ……横島は自分の戦闘力もそうだが、周りにも恵まれていると本当にそう思う「うっし、そいつらも陣営に入れよう。多分横島の言う事しか聞かないから横島の周りに配置する方向で」

「伊達さん。私とテレサはアンドロイドなので前衛で大丈夫です」

「あかんあかん、マリアもテレサも女の子なんだから怪我したら危ないやろ」

「大丈夫だよ、と言うか、私も姉さんもお前が前に出るほうが心配で心配で……だから今回は大人しく護られてくれ」

「いや、それって男としてはかなり情けないんだけど……」

……うーん。横島の回りはやっぱり女が多いな、あれが横島の人徳なのか?と思いつながら、出発までの15分間で簡単にフォーメーション

ンを決め、霊具の確認を済ませ。俺達はホテルを後にするのだった……

そして美神達がホテルを後にした30分後……

「さてと、では私も行くか。我の名を騙る不届き者を成敗する為にな」  
高城……いやベルゼブルの身体が一瞬で鎧姿へと変化し、ベルゼブルもまたベルゼバブに制裁を加えるという目的の元ホテルを後にするのだった……

人間達に原始風水盤の場所を知られた。それ自体は大した痛手ではない……問題は今俺が置かれている状況だった。狂神石

……アスモデウス達が持つ神魔の力を増幅させる紅い石。それを手にする為に俺は下げたくない頭を下げ、アスモデウス達に従いこの石を手にした。そして原始風水盤、狂神石と原始風水盤それさえあれば俺は無敵になる。それまでの辛抱だと繰り返し耐えてここまでやって来たと言うのに！

「ちっ！誰がやりやがったあ！！」

【（……）】

俺の目の前を飛んでいる俺のクローン体。そいつらが縦横無尽に飛び交い、俺を攻撃して来る。狂神石で能力が上がっているとは言え、俺と同じ能力を持つクローン……倒す事は出来るが、徐々にダメージが積み重なっていく

「ふっぎけんなあ!!俺は！俺こそが真の蠅の王！ベルゼバブ様だ!!俺を舐めるんじゃねえッ!!」

魔力を怒りに身を任せ放出する。それで向かって来ていた残りの2体のクローンが消し飛ぶが、凄まじい疲労感にその場に蹲る

「ちくしょうが……人間共も来ているって言うのによ」

もうクローンを作り出す余力も無い。不幸中の幸いは日が落ちるまで後数時間と言う事だ、ここに来るまでにゾンビや罫を大量に設置してある。だから時間は稼げるだろうが……起動が間に合うかどうかは正直五分五分と言う所だ……ガープ達に援軍を頼む事も考えたが、そうなれば裏切りを考えている俺を制止出来るガープ達が信用出

来る部下を寄越してくるだろう

(俺一人で何とかするしかねえ)

そして原始風水盤の魔力を持って、俺はアスモデウス達を殺し、俺があの一団のトップになるのだ。こんな所で倒れる訳には行かない。俺は身体を引きずる様に原始風水盤の中心へと移動する。既に魔力が集まり始めているので、体力の回復に役立つ筈だ……残っているクローン全てをこここの出入り口へと集めてから俺は目を閉じ、少しだけ眠る事にした。この状態で戦いになれば間違いなく起動まで持ちこたえる事無く、殺される。だから少しでも体力を回復させたかったのだ……ダメージの大きさに疲労もあり、俺は数秒で眠りに落ちるのだった……

「……来たか」

クローンからの警告の声が脳裏に響き、目を覚ます。さつきよりかは大分回復しているが、やはり本調子とは程遠い。だが日が落ちるまで1時間……短くて長い時間だなと苦笑しながら飛翔すると同時に小竜姫とメドーサを先頭に現れた人間達目掛け魔力弾を打ちだすのだった……

原始風水盤のある地下通路はコンクリートで舗装されていて非常に走りやすかった。途中にゾンビや罫やパズルのような結界と明らかに足止め目的の罫があったのだが、カオスのジーさんや神宮寺さん、それに小竜姫様にメドーサさんが居れば障害と言えるだけの罫ではなかったのだが、いかんせん数が多すぎた

「美神さん！日暮れまであと一時間です！」

「ああっもう！なんでこんなにギリギリになるかな!!!」

強行突破と速攻で原始風水盤の破壊！それとベルゼバブの討伐！

と叫ぶ美神さんに判っていますと返事を返しながら

「美神さん！神宮寺さん！蛍！替えのスペレー!!!」

肩から下げた鞆からスペレーの替えを取り出して投げ渡す。ベルゼバブは蠅の魔族と言う事で殺虫スペレーが非常に効果的らしいのだ。しかもそれはカオスのジーさんが成分を強化しているので余計

に強力。魔族ですら殺す殺虫スプレー……恐ろしすぎるが、それと同時に頼もしい武器である事は明白だった

「ジーさん、そろそろ着くぜ。大丈夫か？」

「お、おう……流石にこの年じゃ、走り続けるのは酷でな」

カオスのジーさんは途中で体力切れと言う事で雪之丞が背負って走り続けている。カオスのジーさんの方がでかいのに、よく背負えるなど正直感心する

「横島さん。もう一度言いますが、決して前に出ないでくださいね」

「そう言うこと、危ないからな」

【横島さんは私と一緒に後衛で頑張りましたよね！】

マリアとテレサ、それとおキヌちゃんの言葉に頷きながら走ると、視界が開ける。あそこに原始風水盤があるのか!?!と走る速度を速める

「ちっ!!」

神宮寺さんの舌打ちと共に通路に凄まじい衝撃が走る。どうやら向こうからの先制攻撃のようだ

「横島君達は予定通りカオスの護衛と原始風水盤に接近するための援護!・無理をするんじゃないわよ!」

美神さんの怒声と共に風を切る音が響く、多分小竜姫様とメドーさんが空を飛んだ音だと思う

「横島。今回はお願いだから無理をしないでね? 眼魂は出来るだけ使わない方向で」

【うむ、そうじゃぞ? 余り無理をすると今後に響くからな】

蛍とノツブちゃんが俺にそう警告して、先に広場に飛び出る。それから遅れて数秒後俺達も広間に出て、うげっと呻いた

「……はははははは!! 良く来たなあ! だがお前達には邪魔をさせない! 原始風水盤は起動し、俺は最強の力を手にするんだ!」

狭い空間にベルゼバブの笑い声が響き渡る。その空間全てを埋め尽くす蠅の大群……嫌悪感を流石に感じてしまう

「……氷柱で一掃する。横島! スプレーを投げろ!!」

シズクの怒声での指示に反射的に従う。雪之丞とピートも同じで

スプレーを投げると、シズクが氷柱を放ち、スプレーを粉碎する。辺りに充滿したスプレーの成分に蠅の悪魔達が地面に落ちていく

「弾けるお!!」

それに続くように神宮寺さんの怒声と爆発音が響く、狭い空間でこれだけの攻撃をして大丈夫なのか!?あまりの爆音に足が止まる

「馬鹿!止まってんじやないわよ!早く原始風水盤へ!起動を阻止するのよ!!」

美神さんの怒声に我に返り、打ち合わせの通り、マリアとテレサ、そして雪之丞を先頭にし、俺とピートがカオスのジーさんの脇を固めて原始風水盤へと走る。美神さんが破魔札を、神宮寺さんが魔法を、シズクが氷の矢を乱射し、天井を埋め尽くしている小さな蠅の悪魔を消し飛ばしていく。

「大人しくお縄に付きなさい!」

「昔の同僚の好だ。楽に取り押さえてやるよ!」

小竜姫様とメドーサが本体のベルゼバブを左右から攻撃し、動きを拘束する。その間に必死に走り続けもう少して原始風水盤つと言う所で

「させるかよお!!」

「うわっ!?!」

【地面から蔦が!?!】

ベルゼブルの叫び声が聞こえたと思った瞬間。足に何かが絡まり全員同時に転倒する、唯一無事だったのは幽霊のおキヌちゃんと俺の頭の上に乗っていたチビ達だけだ。走るのに自信のある俺は雪之丞達よりも前を走っていたこともあり、蔦に足を取られたマリアとテレサの方に倒れこんでしまったのだが反射的に目の前に手を伸ばして、掴める何かを掴んでしまったのだが、それが何なのかを理解した瞬間。顔から火が出るかと思うくらい熱くなった

「あいたた、横島も大丈夫そうで良かったよ」

「……」

右手がテレサの胸を驚つかみにしていて、左手がマリアの尻を掴んでいる。テレサは平然としているが、耳が紅くなっているので羞恥心

を感じているのだろう、その反応を見て俺自身も罪悪感を感じてしまう。と言うか、背後の雪之丞とピートの無いわーっと言う声と視線が物理的な威力を持つているのでは？と思うくらいで俺を見つめているおキヌちゃん。手を放さなくてはと思うのだが、吸い寄せられているかのようにその手を放す事が出来ない。こんな状態で何をやってるんだよ！と思うが、俺だって健全な男子高校生だ。チビ達の前ではエロは駄目だと我慢していたが、やはりその反応してしまうわけで……

「よ、横島さん。流石に恥かしいので手をどかしてください」

「あわわわ!!ご、ごごご!!ごめん!」

マリアの声で我に返り、マリアとテレサから両手を離す。俺を純真な目で見つめているチビとモグラちゃんの視線に罪悪感を感じ、頭を抱えていると

「横島!今はそんな事をしている場合じゃないから!早く原始風水盤を何とかして!、あと、後で絞めるから!!」

蛍の言葉に我に帰り、足元の蔦を解こうとするが、ギツチリ巻きついていて解く事が出来ない。と言うか絞めるってやっぱりマリアとテレサの胸と尻を触ったからですか!?!と泣きそうになりながら、蔦を解こうともがくが蔦はまったく緩む気配がない。あと神宮寺さんの視線もめちやくちや痛い!さっきのは事故だったのに!なんとかして弁解出来ないかと慌てていると今度はシズクとノツブちゃんの怒声が響き渡る

「……ちい!美神!小竜姫!私は横島達の護衛に回る!分身体が横島達を狙い始めた!」

【ああっ!鬱陶しいの!的が小さいから打ち落としにくい!】

動けない俺達を天井を覆い尽くしていた蠅達が一斉に襲ってくる。それをシズクとノツブちゃんが護ってくれるが、それは後衛からの支援が弱くなったと言う事で美神さん達も動きが一気に鈍くなる

「タマモ!炎で何とかしてくれ!」

マリアとテレサが私を先にと言うが、女性に火傷なんかさせる訳には行かない。まず俺からだ、タマモは俺の指示に少し悩んだようだ

が、俺の目を見て止められないと思ったのか俺の足元を睨みつけ大きく鳴き声を上げる

「コーン！」

タマモの狐火が鳶を焼く、その痛みと熱さに眉を顰めるが、これで動けるようになる。炎が消えたタイミングで立ち上がろうとするが、足は全く動かない。慌てて自分の足元を見て驚愕した

「嘘だろ!？」

鳶は焼ききれぬ事無く、今も俺の足を締め付けていた。なんで燃えないんだ!？」

「うきゅー!？」

「みむー!？」

モグラちゃんの爪とチビの噛み付きでもビクともしない、何だよ!？何なんだよ!？これは!!雪之丞も魔装術、ピートも霊力の刃で攻撃しているがビクともしない、こうなったら心眼に頼るしかない

「心眼!？これ何とかならないのか!？」

【今分析している!もう少し待て!!】

心眼でも駄目なのか!？時間が無いって言うのに!焦りだけが胸を埋め尽くしていく……このままじゃ原始風水盤が起動してしまう!俺も必死に足に絡み付いている鳶を攻撃するが微動だにしない。それが余計に俺を焦らせる

【えーい!こっちに来ないでください!!】

おキヌちゃんも地面に落ちている石を使って蠅の悪魔を攻撃してくれているが、文字通り焼き石に水状態だし、チビとモグラちゃんも鳶を切ることが出来ないと判ると蠅の悪魔の攻撃に入ってくれているが……

「みむうううう!!」

「うきゅー!!」

【(!!)(!!)】

電撃と火炎放射で蠅の悪魔を攻撃するが、蠅の悪魔の方の動きが早すぎて捉え切れていない。近づけさせないように連続で攻撃を続けてくれているが、何体かは打ち落としているが向かってくる悪魔の勢

いが強すぎて効果は殆ど出ていない

「クウ!!」

頑張って蔦を引き裂こうとしているタママだが、やはり蔦を断ち切るが出来ない。陰陽術で攻撃しようにも、札は転んだ時の衝撃で落としてしまい手が届かない。ピートと雪之丞は霊波砲で攻撃を繰り返しているがやはり大きな効果は出ていない

「くそが!相手の動きが早すぎる!!」

「立ち上がる事が出来れば、近づけさせない事は出来るのですが……」足を押さえられて動く事が出来ない。それだけでこんなにも劣勢に追い込まれるなんて思ってた……なんとかして立ち上がらなければ、栄光の手で何とかならないかと思いついて蔦を攻撃するがやはり効果は薄い。本当にどうなっているんだよ、この蔦は!!!

「さーお前達は人間を見捨てる事ができるかあ!ひゃーははは!!やれ!クローン共!動けない奴らを狙え!!!」

「(!!)(!!)(!!)」

ベルゼバブの指示で凄まじい勢いで蠅の悪魔が向かってくる。それを見た美神さん達はベルゼバブを追うのを止め、神通棍を手に蛍と神宮寺さんの名前を叫ぶ

「くえす!蛍ちゃん!」

「言われなくても!」

「小竜姫様!メドーサさん!後はお願いします!」

俺達を護る為に引き返してくる。5人で攻撃していたから、追い詰める事が出来ていたベルゼバブだが、3人抜けた事で小竜姫様とメドーサさんだけではベルゼバブを追い詰める事が出来ず……その時が来てしまった。地震のような音が響き、今まで俺達の足を締め付けていた蔦が、何度も俺達を襲っていた蠅の悪魔が何かに怯えるように消えて行く

「はーはっはは!!これで原始風水盤は起動した!これで俺は最強だあ!!」

原始風水盤から凄まじい光が放たれ、ベルゼバブが狂ったように笑い出し、蛍達を見て更に笑みを深め



「男は皆殺し、女は犯してから殺してやるぜえ!!!」

下種な笑い声を上げるベルゼバブに本気の殺意を覚える。こいつは生かしてはおけない、駄目だと言われていた眼魂に手を伸ばそうとしたが、それよりも早く動いた人がいた

「まだ力を利用する前なら!」

「……まだ間に合う!」

「メドーサー!」

「判ってる!」

神宮寺さんとシズクが飛び出し、小竜姫様とメドーサーさんの身体が光に包まれた瞬間。ガラスが割れたような音が周囲に響き渡る

「げばあ!」

「はあ!」

ベルゼバブの背後の空間が裂けて、そこから剣が突き出されベルゼバブを貫いていた。

「下種め、目障りだ。消え失せろ!」

怒りの籠った怒声が響いたと思った瞬間。ベルゼバブは細切れに切り裂かれ消失した。そして空間に現れた裂け目は徐々にその大きさを増して行き、ゆつくりと剣の持ち主が姿を現した。豪華な装飾が施された緑を基調にした衣装に身を包み、紅い布を片手に持った骸骨だった。優雅とも取れる仕草で俺達を見て、骸骨は楽しそうに笑いながら

「ほう、これは良い。目覚めて直ぐ不快な存在を目にしたが、貴殿達はあの下種とは違うようだ。ならば名乗ろう!我が名はマタドール!鮮血と喝采に彩られた最強の闘士!神魔よ!そして人間よ!素晴らしき闘争を再び始めようではないかツ!!!」

手にした剣を振り上げて叫ぶマタドール。その圧倒的な存在感と凄まじい圧力に俺は目の前が真っ暗になるのを感じたのだった……

リポート7 鮮血のマタドール その1へ続く

## リポート7 鮮血のマタドール その1

リポート7 鮮血のマタドール その1

香港の上空でたたずむ2つの影。1人は黒い鎧姿、もう1人は空中には不似合いなドレス姿の妙齢の女性

「ルシ」ルイだよ。ベルゼブル、幾ら君でもそれは許さないよ」失礼しました、ルイ様」

にこにここと笑っているが、その言葉に込められた魔力に気圧され深く頭を下げる。ルイ様は穏やかに笑いながら

「君には横島の監視と護衛を任せると決めた。だから君があの場合に向かうのは当然の事だ、だが今この時はそれを禁ずる」

自分で護れと指示を出しておいて何故……私が困惑しているとルイ様は笑みを浮かべたまま

「厄介な連中が動き出してね。少し手伝って欲しいんだ、ベルゼブル」背後から聞こえた3頭の馬の嘶きと魔力にまさかと思いつながら振り返る。そしてそこにいたのは最悪の存在だった……

「明けの明星と真の蠅の王か……これは久しぶりだな」

紅い馬に跨り、その腰に巨大な剣を挿した骸骨

「ふむ。それもまた然り、姫の目覚めの前に強大な敵と会う事は判っていた」

白馬に跨り、その頭に王冠、背中に弓矢を背負った骸骨

「……今は敵対の意思は無い。どうか通してくれ……我らは姫の下に馳せ参じるのみ……」

黒い馬に跨り、その手に巨大な天秤を手にした骸骨……信じたくは無かった。かつての魔人襲来の際に神魔が死に物狂いで封じた3柱の魔人

「レッドライダー、ホワイトライダー、ブラックライダー！何故お前達

がここに居る！」

ヨハネの黙示録に名を連ねる3柱の魔人。1体1体が神により特殊な権限を持つ事を許された存在……神魔の天敵が何故ここに！何故復活している

「面倒だ。蹴散らしてしまおう、白いの、黒いの」

「それは駄目だ。我らが勝手に戦う事は許されていない」

「……紅いの、気持ちは判る。だが姫が神魔をどうするかは判らぬ、我らの独断で事を構えることは出来ぬ」

前回神魔を敵にしたのは姫の気まぐれなのだからと言うブラツクライダーの言葉に殺意を抱かずに入られない、何百と言う神魔を屠り、今もなお目覚める事の無い神魔は多い。それが気まぐれだと言われ冷静でいられる訳が無い

「姫に会いたいののは判る、だが今は駄目だ。今ここを強引に通るというのなら……その魂を消滅されられる事を覚悟してもらおうか」

ルイ様が魔力を開放する。こんな場所だと慌てたが、何時の間にか結界が展開され私達が隔離されている事に気付いた

「……何故だ？我らは敵対するつもりは無いというのに、何故争う方向を求める？」

「私だつて争いたい訳じゃないさ。だけど……」

そこで言葉を切ったルイ様は悪戯っぽく笑いながら

「魔人姫が見初める男を見極めるのまた家臣の勤めじゃないのかな？」

魔人姫が見初める？誰を？まさかあの馬鹿をか!?ルイ様の言葉の意味が判り、ルイ様の方を振り返るがルイ様は笑っているだけで何を考えているのか判らない

「見初める男……そうか、姫の目覚めの鐘を鳴らした男か。ならば見極める必要がある」

「しかしだな。人間だぞ？」

「……我らとて元は人間。ならばその男もまた……我らと同じく魔人の末席に座る権利があるということ、ならば……見極めるのまた姫の為となる事だ」

闘志を納めた魔人達にルイ様は笑いながら手を叩き、空中に映像を映し出す。そこにはやはりもう1人の魔人マタドールの姿があった。「マタドールをどう退けるのか？ ゆっくりと観戦しようじゃないか？」

私は合流出来そうに無いか……あの偽者を成敗するつもりだったが仕方あるまい。ルイ様の背後に控え、空中に映し出された光景に視線を向けるのだった……

香港の状況を使い魔を通じてみていたのだが、状況は最悪の方向に向かっていた

「ルイとベルゼブルにヨハネの4騎士のうち3人!? 冗談じゃない!」

最上級神魔が5体。それが人間の街の上空で戦う……香港が壊滅的打撃を受けるのは間違いない。かと言って神魔混成軍が動けば、被害は爆発的に加速するだろう、魔人はたった8体で神魔に壊滅的打撃を与えた。1体1体でも脅威なのにそれが3体も揃っている。戦闘になればどうなるかなんて考えるまでも無い、人間界の壊滅だ……

「これがガープの目的だったのか!!」

原始風水盤の事ばかり考えていたが、原始風水盤すらブラフ。いや原始風水盤が生み出す膨大な魔力を使って魔人の封印を解除する。魔人を御すなんて事は考えていない、魔人なら放置するだけで神魔両方に戦闘を仕掛けてくる。そしてその間に自分の策略を進める

「なんて鬱陶しい手を打ってくるんだ」

自分達が襲われるリスクも当然考えているだろうが、アジトを一箇所に固定せず移動を繰り返しているガープ達ならば場所を特定され襲撃されるリスクは低い。そうなる場所が判っている魔界正規軍や天界正規軍の方が襲われる危険性が高く、人間界で活動される可能性もあるのでそちらにも神魔の警戒網を張らなければならない。そうなること必然的にガープ達か、魔人達かの警戒が疎かになる……自分達の労力を使う事無く、神魔を疲弊させる。凄まじくいやらしい一手だ……この状況をなんと伝えれば良い……必死にそれを考えている

と私の部屋の扉が開いた音がし、そちらに視線を向けると

「れ、蓮華!」

今まで目覚める事の無かった蓮華が培養液で濡れた身体でそこに立っていた。慌てて駆け寄ると蓮華は私を見て、苦しそうに口を開いた

「アシユ様。早く……早く……横島と姉さんを日本へ……」

父さんではなく、アシユ様と呼んだ……魔族として作り出したのではない。だから私の事をアシユ様と蓮華が呼ぶ訳が無い

(まさか蓮華も逆行の記憶を!?)

だから目覚めるのが遅かった? そう考えれば辻褄があう……だが今はそんな事を考えている場合ではない、調整もせず培養液から出て来た蓮華は弱りきっている。早く手当てをしなければ、何か障害が「私はいいから……早く、横島と姉さんを……日本に呼び戻して……じゃないと手遅れになる」

うわごとの様に蛍と横島君を日本に呼び戻せと言う蓮華。蓮華が何かを感じ取っているのかもしれない、口元に耳を寄せて蓮華の小さな声に意識を集中させる

「……魔人姫……魔人姫が横島を……それだけじゃない……誰かが……横島を姉さんから……奪っていく……戦わせたなら……駄目……横島が……横島じゃ……なくな……る」

蓮華はそう言うと言意識を失いその場に倒れこむ。蛍と横島君を心配して私に情報を伝えにきてくれた……私は気絶している蓮華を抱き上げる

「……もう間に合わない」

せめて1日早ければ……横島君達を日本へ呼び戻す事は出来たかも知れない。だがもう香港で横島君達は魔人と対峙してしまっている……私は表立って動く事は出来ない。出来る事と言えば、小竜姫とメドーサが何とかしてくれる事を祈るだけ……

「姉さん……横島……」

熱に浮かされたように苦しそうに呟く蓮華。大丈夫だと、心配ないと言ってやりたいが……それすらも出来ないとは……私は蓮華を再

び地下に運び、培養液の中に戻した。もう意識はハッキリしているの  
で目覚めた時の為の調整をするだけだ。設定を済ませその部屋を後  
にした私は、思わず自分の拳を見た。ソロモン72柱に数えられる強  
大な魔神……そうだと言うのに、今私には何も出来ない……それが激  
しい苛立ちとなり胸の中を埋め尽くしていく

「本当に私は……無力だな」

横島君達が危険だと判っているのに、一般の神魔達にはアスモデウ  
ス達と同じく過激派魔族として追われている。アスモデウス達の情  
報を得る為だと我慢してきた……だがッ!!

「くそがあッ!!」

娘達が危ないと言うのに動く事が出来ない。それが神魔と最高指  
導者達との契約……神魔同士の契約の拘束は凄まじい、どれだけ助け  
たいと願っても私は東京から出る事が出来ない。その歯がゆさと怒  
りに私は思わず拳を通路に叩き付けるのだった……

踊るGSの撮影の為に俺は香港に訪れていた。本当なら昨日の内  
に日本に帰る予定だったのだが、1つシーンの撮り忘れと言う事で予  
定を1日延長していた

「剛一君ごめんねー?」

「いや、いいですよ、マネージャーさん」

近畿剛一の名前にも慣れたもんやな。昔は自分の名前って思えん  
かったもんなあ……所属事務所が決めた芸名にも慣れたなあつと苦  
笑する。近藤銀一がどうやったら近畿剛一になるんやろなあ……い  
やまあ、自分の名前が少しずつ残ってるだけ我慢しないといかんよな  
あ……先輩とかには自分の名前とは全く違う名前を名乗ってる人も  
居るし、少しでも自分の名前の面影が残ってるだけ良い思わんと……  
「監督、本当に行くんですか?」

撮影クルーが監督に不安そうな顔をしながら尋ねているのを見な  
がら、2ヶ月前の映画雑誌を捲る

(横つちも俳優になってたんやなあ……)

新訳・新撰組の特集雑誌に懐かしい顔を見て、それから俺はこの

2ヶ月も前の映画雑誌をずっと持っていた。小学校の時に転校して行った横つちがまさか俳優になつてるとはなあ……これは今までで一番の驚愕かもしれない。動物と一緒に映画に出ていたのもまた横つちらしい、昔から横つちは動物に好かれとったからなあ……とは言え妖怪にまで好かれるのは予想外やけど……それも横つちらしいって思えるなあ

(夏子に見せたらどんな反応をするやろ?)

そんな事を考えながら雑誌を捲っていると、マネージャーさんが古い雑誌を見ているのが気になったのか尋ねて来る

「剛一君。なんでそんな前の雑誌を見てるの?」

「あ、ああ。これですか?俺の幼馴染なんですよ」

横つちが刀を振るっているシーンのアップを見せながら言うとマネージャーさんは驚いた顔をして

「ご、剛一君!そのこの名前知ってるの?」

「知ってますけど?」

どうしたんです?と尋ねると周りの映画の撮影スタッフの皆も真剣な顔をしてる。どういうことや?と俺が首を傾げているとマネージャーさんが説明してくれた

「その子ね、本名も住所も一切公開してないの。元々映画のエキストラだったらしいから当然なんだけど……あちこちの芸能事務所が探してる逸材なのよ」

……え。横つち俳優や無かったの?俺はてっきり横つちもどこかの事務所に所属してる物だと思ってた

「どこに住んでいるとか知ってる?連絡先は?」

東京に住んでいる事くらいしか知らないのだが、もう俺が住所とかも知っている流れになっていて、凄い剣幕で尋ねて来るマネージャーさん達に怯えていると監督が

「なに油売ってやがる!撮影を済ませるぞ!急げえ!」

「は、はいっ!!」

監督さんの一喝に怯えた声で返事を返す撮影クルーに安堵の溜息を吐いているとマネージャーさんが小声で

「撮影の後、住所と名前よろしく」

「は、はあ」

そんなに横つちをスカウトしたいのか？いやでもまあおんなじ事務所で知り合いが居るなら案外良い物かも知れないな、何なら横つちとコンビを組んで活動するのもいいかもしれへん。俺はそんな事を考えながら、地下鉄の整備用プラットフォームに向かっていく監督さんと撮影クルーの後を着いて歩き出すのだった……

「ふう、スケジュール調整が」

残されたマネージャーは、関係各所に電話をしてスケジュールの調整をしていたのだが、突如武装した公安に囲まれ、ここが立ち入り禁止区域になっていることを知り、慌てて剛一達を呼び戻そうとしたのだが、危険と言う事で強制的にその場から連れ出されてしまうのだった……

虚空から現れた骸骨、それを目の前にして私は背中に冷たい汗が流れるのを感じた。原始風水盤は既に砕け、その機能を失っている。そして私達の前に居る骸骨に視線を向ければ、背筋に冷たい汗が流れる（な、何なのよ。あれは……）

豪華な衣装に身を包み、上機嫌で足踏みをしている骸骨。魔人マタドールと名乗った存在から感じる威圧感は一瞬としかそれ以上だった……原始風水盤が起動した時に現れた。私の脳裏に過ぎたのは原始風水盤が囿だったと言う最悪の予想……

（無理よ……あれには勝てない）

勝つ事が出来ないか一目で悟り何とか逃げる事が出来ないかと考えているとマタドールが私を見つめ

「セニョリータ。逃げようなどとは思わない事だ、確かに私は目覚めたばかりで本調子ではない。だが逃げに回った人間を殺す事は造作も無いのだよ」

穏やかな口調だが、その言葉に込められた圧倒的な殺意に逃げる事が出来ないか本能的に悟る。マタドールはさてとつと眩き、手にした紅い布を振り回し、周囲に漂っていた魔力を消し飛ばし。満足げに頷



きながら私達を見据える

「さて自己紹介はこれで終わりだ、そろそろ始めようか」

ベルゼバブを一瞬で細切れにした剣をこっちに向けてくるマタドール。反射的に神通棍に霊力を通し伸ばす、戦わなくては殺される。それは本当に反射的な行動だった……くえすとシズクも同様で青い顔をしてマタドールに対峙する。横島君達だけでも何とか逃げたい所だけど、あの足を締め付けている蔦がある以上逃げられない。しかし今マタドールに背を向ければ殺される……横島君達を何とかしたいと思っっているのだが動く事が出来ない

(なんとか自力でどうにかしてくれないかしら)

足を押さえられ、立ち上がる事が出来ない横島君達も自分達で何とかしようと頑張っているのが見えているが、状況は良くなる所か、悪化しているのが判る。さつきまで足首だけだったのが、今は脛辺りまで蔦が伸びているのが見える

「魔界の蔦じゃ、霊力は使えない！蔦が余計に生長する！」

【じゃあワシじゃ無理じゃん!?ワシ幽霊じゃよ!?】

ドクターカオスの言葉にノツブがそう叫ぶ。幽霊であるノツブは常に霊力を纏っている、ノツブの刀で何とかして貰おうと思っっていたのに、それすらも駄目になってしまった

「動かないですよ！足とか切りかねないから」

「わ、判った！」

蛍ちゃんが横島君がブラドール伯爵から譲り受けたナイフを受け取り、蔦を切りつけているのが見える。あの様子ではまだ蔦の拘束から逃れる事は出来そうにない。マタドールの口調から正々堂々と戦うタイプっぽいけど……戦いの邪魔と言う理由で横島君達を排除しようとしてくる可能性がある。動けない横島君達を守りながらの戦い……しかも相手はガープクラスの圧倒的強者……状況は最悪を通り越して絶望的だ。くえすとシズクもそれが判っているが、守る為に背を向ければ自分達が殺される。それが判っているから動くに動けない……マタドールの視線が動いたのを感じて、精霊石を投げようとした瞬間

「はっ!!」

「ほう！行き成りかね！情熱的なセニョリータは嫌いじゃないぞ！」

小竜姫様が凄まじい勢いでマタドールに斬りかかって行く。両手で神剣の柄を握り締めた渾身の一撃、常識的に考えてあんな細身の剣で受け止めたら一撃でその剣を砕く……そう思っていたのだが、マタドールは楽しげに笑いながら小竜姫様の一撃を簡単に受け流し、ひらりと後ろへと飛びのく。その余りに身軽な動きと優雅な仕草に思わず感嘆の溜息が零れる……闘牛士の姿に相応しい魅せる戦いだと感じてしまった

「メドーサー……ここは私がか抑えます！横島さん達を拘束している  
馬を何とかしてください！」

マタドールに連続で攻撃を仕掛けて横島君達から引き離そうとしている小竜姫様の言葉にマタドールが倒れている横島君達の足元を見て

「ああ、なるほど。あの下種に人質を取られていたのか……」

「馬鹿な!」

小竜姫様の驚愕の悲鳴がプラットフォームの中に響く、マタドールはその切っ先で小竜姫様の剣を受け止めていたのだ。どんな反射神経と技術があればあんな細い剣であの大剣を受け止める事が出来ると言うの!?!しかも横島君達の事に気付かれた

「人質などに気を取られていては万全な戦いなど出来る訳も無い。道理で動かないと思っていたが納得した」

「させ……うつぐー」

マタドールが小竜姫様の腹に蹴りを叩き込み蹴り飛ばす、メドーサーがマタドールを止める為に飛び出しながら

「あいつらを護る準備をしろ！なんとか足止めはする！」

連続で槍を突き出し、マタドールの動きを封じようとするメドーサーだが、マタドールは紅い布で受け流しながら何かを呟いている。まさか魔法まで使えるって言うの!?!

「シズク！水の障壁！くえすは防御魔法とか出来る!?!」

「……言われなくても!」

「私を舐めないで欲しいですわね！」

私は精霊石で結界を作ろうと首から下げた精霊石のペンダントを引きちぎり、結界を作ろうとしたが、マタドールの方が早かった。紅い布が振るわれたと思った瞬間凄まじい暴風が巻き起こる、それは作られかけていた結界を簡単に砕き、横島君達へと向かっていく。発生した土煙で見えないが、横島君達は……恐らく、私達が睨みつけるとマタドールは肩を竦めながら

「ああ、勘違いしてくれるな。私は戦いを好む、卑劣な手段など使いたくない。そのあの中にも中々興味深い者達も居た」

土煙の中から凄まじい靈波砲が放たれる。マタドールはそれを見て楽しそうに笑いながら紅い布を振るい、それを弾き飛ばす

「やーつと動けるぜ！覚悟しな！骸骨野郎！」

「美神さん！小竜姫様！微力ながらお手伝いさせていただきます！」

魔装術を展開した雪之丞と法力と魔力を開放したピートが土煙の中から姿を現す。横島君は両手に札を持ち

「支援は任せてください！おキヌちゃん！じゃんじゃん札をくれ！」

【は、はい！】

おキヌちゃんから札を貰い、次々血文字で文字を書き投げ続ける横島君。その内の一枚が私に当たると急に身体が熱くなる、外から供給される靈力が私の靈力を底上げしてるのだと即座に悟る、だがそれはマタドールの前で横島君が補助などに特化した支援タイプだと悟られたと思えばマタドールを見るが、マタドールは横島君を見て楽しそうに手を叩きながら

「味方の助けをする。それもまた戦いの形、ふっふふ、これでそちらも万全。では改めて始めようか！心躍る素晴らしい闘争をッ!!」

手にした剣を振り上げそう叫ぶマタドールの目は横島君には向けられておらず、寧ろ横島君が私達の能力を高める事を見て、それすらも戦いを楽しむ要因だと言わんばかりにメドーサへと斬りかかって行く姿を見て、マタドールはガープよりも遥かに厄介な存在だと悟り。蛸ちゃんとシズクに横島君の援護と指示を出し、小竜姫様を先頭にマタドールへと向かっていくのだった……

一切の光が届かない闇の中で突如何が砕ける音が響く。その場所はガープが何度も訪れていた亜空間だ

「ふわあ……よく寝た」

水晶の中から姿を見せたのはふわりとした金髪をした小柄な女性の姿。透き通るような白い肌と身長とは不相応な大ぶりの胸。その美しい裸体を見せ付けるようにして歩く女性の近くに控える骸骨……ペイルライダーだ

「おはようございます。姫様、御召し物の用意は出来ております」

ペイルライダーが差し出したドレスを手にした女性は眉を顰め

「余のセンスにあわぬな。やはりお前ではなく白が良い」

こんなに堅苦しいドレス、美しくない。余の美しさを損ねるだけだと不機嫌そうに口にする、するとペイルライダーは深く頭を下げながら

「申し訳ございません、ですが下賤な輩が御身を何度も見ておりましたゆえ。この場を後にするまでの今一時は我慢の程を」

仕方あるまいと呟き女性は差し出されたドレスを着込んだ、だがやはり納得していないのかその顔は面白く無さそうだ

「それで？今の神魔の情勢はどうなっておる？また暇つぶしにはなりそうか？」

「神魔よりも面白い存在がおります、人間ではありませんが、育ち方次第では我らの末席に座る素質は十分かと」

ペイルライダーの言葉にはほろりと興味深そうな声で返事を返した女性は楽しそうに笑いながら

「前に神魔を使って遊ぶのは面白かったが、あれも飽いた。あれよりも面白いか？」

神魔にとつての最悪の戦いを遊びと言う女性。その目は何処までも澄んでいたが、その目には暗い色が浮かんでいた

「勿論でございます。丁度今マタドールが遊んでいる筈、どうかご覧ください、必ずや姫様も気に入るとこのペイルライダー自信を持って

進言いたします」

「うむ、そこまで言うのなら見極めようではないか、この魔人姫マザーハーロツトがな♪」

誰も知らないその場所で最高指導者に匹敵する力を持った恐ろしい魔人。魔人姫マザーハーロツトがどこまでも純粹で、どこまでも残酷な笑みを浮かべたのだった……

リポート7 鮮血のマタドール その2へ続く

## その2

リポート7 鮮血のマトドール その2

強い……私はマトドールの底知れぬ強さに恐怖を抱き始めていた。小竜姫とメドーサ、神魔の中でも相当な実力者が揃っている事。そして水神シズクに美神令子……戦力・人数的には圧倒的に有利だと言うのに勝てるビジョンが浮かばない

「ふっははっ！どうしたどうした！その程度かね！」

「くっ！強い……！」

「化け物か!？」

小竜姫とメドーサの挟撃を笑いながら弾き続けるマトドール。2人の攻撃は決して遅い物ではない、だがそれを余裕を持って弾き続けるマトドール。圧倒的な技術とそれに裏づけされた自信……このまま戦い続けるのは圧倒的に不利

（出来る事ならば撤退したい所ですが……それを許してくれるとは思えませんわね）

剣術と魔法そして体術……その全てが完全に高いレベルで噛み合っている。かりに撤退しようとしても魔法もしくは体術で回り込んでくるだろう

「神宮寺さん！次の魔法は!？」

「炎ですわ！」

横島の問いかけに炎の魔法を使うと叫ぶ。横島の陰陽術の支援、それにより私の魔法の精度と威力が上昇している。普段は相当集中しないと出来ない遠隔操作を普通の魔法と同じ感覚で使う事が出来ている。それだと言うのに

「ふっはははは！どうした！その程度の炎私には届かんぞ！」

カポータを振るうだけで私の炎を掻き消す、それだけじゃない。小竜姫とメドーサをも同時に吹き飛ばす、プラットフォームの壁が罅割れるほどの勢いで叩きつけられた2人がそのまま崩れ落ちる。遠目から見ても完全に意識を失っている、ダメージの大きさから見て2人

が意識を取り戻すまでは相当な時間が掛かるだろう

「くえす！2人が立て直すまで魔法乱射！」

「うるさいですわ!!」

美神の指示にそう怒鳴り返す。そんなこと言われなくても判っている、マリアとテレサも精霊石弾頭のマシンガンを乱射し私の魔法とシズクの氷柱による弾幕。それは通常の神魔ならば蜂の巣にし消滅させるだけの威力を秘めた攻撃だったが

「飛び道具など恐れぬに足りぬ！」

風のバリアを纏っているのか、弾幕を走りぬけ。私達を飛び越え横島達の方に走って行く

「マリアー・テレサ！銃器から近接武器に換装しろ！」

マタドールには何か秘密がある。飛び道具……もしくはそれに順ずる何かを無効化にする何か……風のバリアがあるとしても、そうで無ければあれだけの弾幕と魔法を交わせる理由にならない。

「了解しました！ドクターカオス！」

「姉さん！投げるよッ!!」

精霊石の刀身を持つ大剣を投げるテレサとそれを掴んでマタドールに駆けて行くマリアを見て、美神も走り出す。私達クラスでこの様だ、横島や蛍では何も出来ずに殺されると判断したのだろう……正直その判断は正解だ

「伊達！ピエトロ!!死ぬ気で足止めをしなさい！私の詠唱が終わるまでッ!!!」

通常の魔法では効果が無い。ならば魔力を圧縮して刀剣の形に収束、それを剣として振るう。正直やった事のない試みだが、射出・放出の魔法が効果が無いならこれしかない。死ぬ気で足止めしろと叫び、私はこの場で魔法の構築を始めるのだった……

小竜姫様とメドーサさん。そして神宮寺さんにマリアとテレサにシズクの攻撃を潜り抜け、俺達の方に向かってきたマタドールに背筋に冷たい汗が流れる。チビとモグラちゃんだけではなく、タマモまで怯えている姿を見るとそれだけ危険な相手だと判る。

「おつらあああ!!」

雪之丞が向かって来たマタドールに向かつて駆け出し拳を繰り出す。マタドールは突っ込んで来た雪之丞を見て笑みを深める。骨なのでその笑みもめちやくちや恐ろしい……

「いい踏み込みだ、気合も乗っている。良いぞ！来いッ！私を楽しませろッ!!」

「楽しむ所か！あの世に送ってやるよッ!!」

雪之丞の拳とマタドールの剣がぶつかり、周囲に凄まじい衝撃波が発生する。

「うっぐあ」

「ふ、若さだけでは私には届かぬよ」

雪之丞が拳を押さえて後ずさる。夥しい血液が流れているのを見て驚愕する。簡単に魔装術を引き裂いたマタドールの剣の切れ味に目を見開く

「雪之丞下がれッ!!」

マタドールが追撃に走り出そうとしたのを見て、ピートが霊波砲を放つ。二色の光りを放つそれを見たマタドールは再び嬉しそうに笑いながら

「光と闇の合一か……面白い！私を退けて見せろ!!」

「2人だけではないぞ！覚悟せよッ!!」

ピートの霊波砲に続くようにノツブちゃんが火縄銃から霊力の弾丸を放つ。だがマタドールはその弾幕を手にした紅い布で弾き、螢に向かつて走りだす。そうはさせないと俺は手にした札に血文字を刻み

「急急如律令ッ!!火精招来ッ！我が敵を喰らえッ!!」

俺の手から放たれたお札が炎の塊となりマタドールに襲い掛かる。

マタドールはそれを見てやれやれという感じで肩を竦める

「私に魔法は……ぬっぐおおおッ!!?」

魔法は効かないそう言おうとしたマタドールを炎が包み込む。今までの余裕の声ではなく、若干焦った声にやっとな俺達に合流した美神さんが効いてる!?!と驚いた表情で呟く



「そうか！陰陽術は魔法とは概念が違う！魔法に対しての抵抗力は桁違いでも、陰陽術に対しては抵抗力が薄いのか！」

魔法は効果は薄いが、陰陽術は効果があるって事か!?美神さんは心眼の言葉を聞いて

「横島君の前へ！マタドールを横島君に近づけさせたら駄目よ！」

蛍達にそう指示を出すと、雪之丞達が俺の前に集まり、マタドールから俺を隠す

「横島さん。頼みますよ、足止めはするので大きい頼みます」

「そう言うこつた。間違えても俺達に当てるんじゃねえぞ」

拳を握り締め、俺にそう声を掛けてくる雪之丞とピートに続いて、マリアとテレサ……そしてノツブちゃんが

「頼りにしています。陰陽術を使うまでの時間は私達が稼ぎます」

「私も頑張るから、横島も頑張つて」

「さーて、じゃんじゃん弾幕を張るかのう！横島！お前は自分に出来る事を全力で頑張れッ！」

穏やかに笑いながら俺に頑張つてくれと声を掛けてくれる

「ある程度ダメージを与えれば向こうも深追いして来ないわ。それに神魔の増援が来る事も考えられる、徹底して耐えるわよ！小竜姫様達も後で復活してくる筈だからね」

「……そう言う事だ。横島眼魂を使おうとするなよ」

美神さんとシズクがそう俺に声を掛けてくる。頼りにしていると言う言葉が嬉しかった

「そう言うわけじゃ。横島、ワシらに出来る戦いをするぞ！」

「横島とドクターカオスは私とおキヌさんが護るわ、2人だから頼りないかもしれないけど」

「でも横島さんには怪我はさせません！」

おキヌちゃんと蛍の力強い言葉にありがとうと返事を返した。だが、俺がマタドールに感じてはいたのは恐怖ではなかった……

(何なんだよ……これは……)

美神さんや神宮寺さん達と居る時のような不思議な安心感。それを敵であるはずのマタドールから感じ、俺は困惑しながらも、血文字

で札に文字を刻み、陰陽術を使い続けるのだった……

私に手傷を与えた人間を見つめる。他の人間達の顔に恐怖が浮かんでいるのに対して、その人間が顔に浮かべているのは困惑と言った表情

(なるほど、私と同じ物を感じているのか)

私も感じている、それは同胞と共に居る時の共鳴に近い。だがあれは同胞ではない、ただの人間だ。だが私もまたかつては人間だった  
(新しき我等が同胞か……)

今はまだ人間ではあるが、いずれ私達と同じ領域に足を踏み入れてくる。となれば……その力量・その魂を見極めるのもまた悪くは無いな……どの道目覚めたばかりで本調子とは程遠いのだから……

「ふふふ、面白い人間だ。お前の力を見せて貰おうか」

私の言葉を聞いて魔装術を纏ったニーニョが突進してくる。迷い無く、そして力強い良い目をしている

「おつらああっ!!」

「やれやれ、さつきその鎧を切り裂かれた事を忘れたのか?」

突き出された拳にあわせる様に、スパイダを振るう。これであるニーニョの拳は切り落とされる筈だった……のだが

「うむ?」

奇妙な手ごたえに思わず首を傾げる。鎧の突起を上手く使い受け流したのか……私のスパイダの動きに合わせてくるとは……良い目をしている。これからもっと成長していく事を考えると実に楽しみな……

「二度も同じ手を食うか!この骸骨野郎!」

「そうか、ではこんなのはどうだ?」

カポータを振るうと同時にそれは私の魔力で鋭い刃となる。驚きに目を見開くニーニョの胸板を切り裂こうとすると

「……突っ込むな馬鹿が」

地面から突如染み出した水が私のカポータを弾き飛ばす。先ほどから氷柱を乱射していた竜族か……まあそれも想定の内だがね。足

を振り上げニーニヨを蹴り飛ばし、スパーダを突き出そうとするが今度は恐らく姉妹がその手にした剣で私のスパーダを受け止める。止めたと言っても一瞬、この程度なら少し力を込めれば押し切れる。そう思い踏み込みを強めた瞬間、本能的にこれが罠だと悟り。そのまま地面を蹴り後方へ飛び

「気付かれた！マリア、テレサ！頭下げて！」

【でかいの行くぞおッ!!】

「なんでもう少し足止め出来ないんだ！伊達ッ！」

「うつせえ！文句言うならてめえがやってみろ！」

口論しているとは思えない、見事な連続攻撃が宙を飛んでいる私に投げられた精霊石と光と闇の混じった霊波砲そして凄まじい霊力が込められた砲撃が向かってくるのを見て、咄嗟にカポータで受け止める

(むうっ！これは凄まじい威力だ)

魔法や霊力に対して高い防御力を持つカポータ越しても凄まじい衝撃が襲ってくる。

(だがこの程度……どうと言う事は無い)

確かに凄まじい威力だ。だが私のカポータの護りを……そこまで考えた所で違和感を感じた。散々霊力と魔法を弾いている光景を見て居る筈……つまりこれは罠!!私にカポータを使って防御させるのが目的

「急急如律令ッ!!雷精招来！雷鳴よ！我が敵を喰らえッ!!」

目の前に迫ってくる札を見て咄嗟に切り払い……己の失策を悟った。切り払った札に霊力は込められておらず、ただ詠唱を加えただけ……そして術師の隣に居た水神が水の塊へと消える……良いタイミングで水の槍を伸ばして、攻撃をして来ていたのでまさか分身に変わっているとは思っても居なかった。実に巧妙でそして計算された動きだ、素直に賞賛に値する

「急急如律令ッ!!土精招来ッ!!大地よ！我が敵を捕らえよッ!!」

足元の地面が盛り上がり、私の足を拘束する。それは凄まじい勢いで腰元まで盛り上がってくる、逃れようにもここまで拘束されるとそ

う簡単に脱出する事が出来ない

「……傷は治した。行けッ!!」

「ありがとうございますッ!」

「ありがとうよ!」

姿を消した水神が私が魔法で吹き飛ばした2人の竜神の治療を行っていた。続けざまに放たれる攻撃に完全に気を取られていた。完全に傷を癒した竜神2人が光に包まれる、それは一部の神魔が使う超加速。以下に私と言えど足を拘束された状態では反応しきれない技だ

「くっ!ぐっ!?!」

上下左右から迫る光の一撃。動く事が出来れば受ける事も避ける事も可能だが、足が拘束されている以上思ったような動きを取る事が出来ない

「今よ!後先考えないで一斉攻撃ッ!!」

「おうよ!ぶち抜けッ!!」

「テレサ!行きますよ!」

「了解!姉さんッ!」

【三千世界に屍を晒すがよい……天魔轟臨!　これが魔王の三千世界じゃあ!!】

一斉に向かつてくる攻撃を見て流石にカポータでも防ぎきれぬと結界魔法を唱えた瞬間

「それは計算の内ですわッ!!」

ひたすら呪文を詠唱していた魔女が高密度に圧縮され、剣の形をした魔力を振るう。魔女の攻撃など恐れるに足りぬ、そう慢心したのは私。しかしそれは私にとって致命的な隙となった

(悔ったか……)

魔女は魔法を扱い、近接戦闘などを行わない。その先入観、そして術師を基点とした連続攻撃を即座に作り上げた人間達……目覚めたばかり、それは言い訳にならない、私は慢心していたのだろう。人間に負ける訳が無い、私に傷を付ける事が出来るのは神魔だけだと思。ここで人間に私の脅威を覚えさせ、より強くさせた上で戦おうと

考えていたのがいけなかったのか……何にせよ、私の油断と慢心がこの結果を導き出したのだ

「こいつでDeathっちまえッ!!」

その叫び声に思考の海から引き上げられる、魔女が手にしている竜の牙から伸びた光の刃は私の作り出した結界と一太刀で粉碎し、胴に深い傷を刻み込む、そしてそれに続くように目の前に迫る光の刃と靈力の塊。避ける事も、受け止めることも出来ず私はその光の本流の中へ一瞬で飲み込まれるのだった……

マタドールが光の中に飲み込まれて消える。その光景を見て思わず安堵の溜息を吐く、マタドールはこっちを見下し、そして遊んでいる。それが美神さんが感じていた事、だから波状攻撃と、陰陽術を攻撃に使えば向こうは警戒すると言うのを組み合わせ、動きを完全に束縛する。ぶっちゃけ土はあまり得意ではなく、ぶっつけ本番になったが成功してよかったと安堵の溜息を吐くと、そのまま力が抜けて倒れかける

「横島！大丈夫！」

「あ……うん、ありがとな、蛍」

今まで1人か2人に陰陽術で強化をした事はあった。だがこれだけの人数に強化をずっと施し続けるなんて初めての事であり、そしてその上に苦手な土の陰陽術による束縛……正直かなり一杯一杯だった

「かなりギリギリまで靈力を消耗している。これ以上の靈力の行使は難しいだろうな」

心眼の言葉にそうかなつと呟く、疲労感こそ凄まじいが眼魂を使った時よりかは大分疲労は軽いと思うと呟くと蛍が呆れたような表情をする

「普段そこまで靈力を使う事が無いのよ、普段自分がどれだけの無茶をしているのか知りなさい」

そうなのか？俺にとっては普段の事でそんなに危険な事をしていると言う実感は無かったんだけど

「横島。普通の人間は霊力枯渇になれば死ぬんじやよ？お前さんみたいに何度も霊力枯渇になつても生きてるほうがおかしいんじや」

カオスのジーさんの言葉にそんな馬鹿なと思いつつながら振り返ると神宮寺さんは額に手を当てて、深く溜息を吐きながら美神さんを見て「もう少し横島に霊力に関する知識を教えておくべきでしょう？」

俺のせいで美神さんが怒られている。神宮寺さんにそうじゃないと言うべきだろうか……

「ふうー魔装術も、もう限界だ。なんとかマタドールを退ける事が出来て良かった」

「ですね……僕も正直もう限界ですよ」

疲れたように呟く雪之丞とピート……俺の陰陽術で霊力を増大させていたので、その効果が切れれば疲労が出てくるのは当然だよな。

「ですが、美神さん達の協力のおかげでマタドールを退ける事が出来ました。皆さん、お疲れ様でした」

「本当だよ。あんな化け物が出てくるなんて予想外だったからね」

本当に全員無事で良かったよと笑うメドーサさんも相当の疲れの色が浮かんでいる。それだけあのマタドールと対峙するのは精神的にも、肉体的にも疲れが出たんだろうな。

「では荷物のほうは私とテレサで運びましょう」

「だね。皆で帰って休もう」

マリアとテレサだけに荷物を運ばせる訳には行かない。俺は護られていただけだから俺も手伝わないと

「じゃあ、俺も手伝うよ」

「馬鹿、横島も霊力の使いすぎて限界が来ているんだから大人しくしてなさい」

「……そうだぞ？私達よりもお前の方がよっぽど魂に負荷を掛けているのだからな」

蛍にこつんと額を叩かれただけでふらつく、自分でも思った以上に無理をしていたのだと気付く。結界の中に隠れているチビ達を結界の中から出そうとしてっていると煙の中から拍手の音が響く……その拍手の音は間違いなくマタドールがいた方角で……額に冷たい汗が

流れるのを感じる。

「嘘でしょ!?直撃だった筈!」

「……ありえない」

美神さんとシズクも信じられないと言う言葉の中。砂煙の中からマタドールが優雅な足取りで姿を見せる、その姿を見るととてもダメージを受けている様子は無い

「素晴らしい、素晴らしい連携だったが私を倒すには程遠い……しかし、あの連携も全てはお前が中心となっっているな?」

マタドールのがらんだ目の瞳に睨みつけられ、思わず後ずさる。小竜姫様達がマタドールに剣を向ける、するとマタドールは肩を竦めながら

「お前達の力はもう見た。だからもう良い、私が見たいのはお前達のカじやない。そのニーニョの力だ!」

振るわれたカポータから放たれた暴風が俺だけを避けて美神さん達を吹き飛ばし、全員を壁に叩き付ける

「さて、これで邪魔者はいない。お前の力を見せてみる、さもなくばお前の仲間を1人ずつ殺してやろう。そうすれば戦う気になるだろう?」

剣の切っ先を俺ではなく、倒れている美神さん達に向けるマタドール……あいつは殺すと言えば躊躇いなく殺す。美神さん達が目を覚ますまで、俺がここで足止めをしなければならぬ。そうで無ければ美神さん達が殺される

「心眼。やるぞ、ベルトを出してくれ」

陰陽術でも、あの霊力の拳でもマタドールには届かない。眼魂を使うしかない、心眼にベルトを出してくれと頼むが心眼は強い口調で駄目だと叫ぶ

「駄目だ!今のお前の霊力で眼魂を使うのは危険すぎる!陰陽術か霊力の籠手を使い!」

心眼の言いたい事は判っている。正直今の俺の霊力では眼魂の力を使うだけの霊力が足りていないと言う事は判っている。だがここで無茶をしなくては、俺は一生後悔する

「心眼ッ！俺は美神さん達に死んで欲しくないッ！ここで戦えなかつたら俺は一生後悔する！」

自分の命惜しきで美神さん達を見捨てたと一生後悔する。やらないで後悔するのなら、俺はやって後悔したい。たとえそれが俺の霊能者としての寿命を縮め、死に向かわせたとしてもだ

「……判った。だが無理はするな」

心眼は自分の言葉では説得出来ない悟ったのか、無理をするなど言うその言葉の後、俺の腰にベルトが現れる。マタドールはそれを見て満足げに笑いながら

「待っていてやろう。お前の力を私に見せてみろ」

「後悔しやがれ、この腐れ骸骨」

Gジャンからウイスプ眼魂を取り出し、ボタンを押し込んでからベルトのバックルを開き、ウイスプ眼魂を押し込む

【アーイツッ！シツカリミナー！シツカリミナーッ!!】

【イツヒヒー!!】

俺の周りを踊っているパーカーゴーストに視線を向ける。普段と違い、笑い声の中に勇ましきが混じっていて今の状況を理解してくれているのだと判った。

「変身ッ！」

【開眼ウイスプ！アーユーレデイ？】

ベルトのレバーを力強く引くと、ウイスプは空中でUターンをしてこっちに向かってくる。それに合わせて右手を掲げる、それと同時にウイスプが左手を突き出して降下してくる。

「行くぜ！ウイスプ！」

【イツヒヒー!!】

空中でハイタッチを交わすと俺の身体が鎧に包まれる。この力が使えれば、マタドールと戦う事だって出来る筈だ……勝つ事は出来ないかもしれないが、時間を稼ぐくらいなら十分に出来る筈だ

【OKッ!!レッツゴー！イ・タ・ズ・ラー！ゴ・ゴ・ゴーストッ!!】

パーカーが装着され、残り少なかった霊力が上昇していくのが判る。だがやはり霊力が減少しているのが原因なのか、普段よりもかな



り身体が重く感じるがやるしかないッ!

「それがお前の力か、面白い力だ!だがニーニヨ面白いだけでは私には勝てないぞ?」

馬鹿にするような口調のマタドールに頭に血が上りかけるが、それが挑発だというのは判り切っている。1度大きく深呼吸してから掌に拳を打ちつけフードを取り払う

「覚悟しやがれ、お前の好きにはさせないッ!」

美神さん達には手を出させない、ベルトから飛び出したガンガンブレードを手にマタドールへと走り出すのだった……

次回仮面ライダーウィスプは!

圧倒的な力を持つマタドールの前に横島の持つ眼魂は通用せず、それは神魔眼魂でもある「小竜姫」「メドーサ」の力を持つてもマタドールにダメージを与える事はかなわなかった

「魅せてやろう、我が奥義!血のアンダルシアッ!!」

「う、うわああああああ!」

マタドールの放った剣戟が紅い光を放ちながら、ウィスプの身体を大きく引く裂く。その余りのダメージに強制的に変身を解除された横島は体力も霊力も限界を超えていた。だがそれでも横島は覚悟を持って立ち上がる!!!

「限界だって言うなら……その限界なんざ……超えてやる!!!」

その腰に巻かれたゴーストドライバーと左腕のナイトランターンにセットされた「小竜姫」「メドーサ」眼魂。相反する2つの力が横島の身体を大きく蝕む

「横島さん!駄目です!そんな事したらッ!っう!」

「ち、近づけない!止める!横島!そんな事したらお前の身体がはじけ飛ぶぞッ!!」

「横島!やめて!お願いだから!そんなことしたら駄目ッ!!」

「止めなさい!横島君!聞こえているでしょう!止める!馬鹿!この横島ッ!私の言う事を聞きなさい」

「……くそっ!なんだこの霊力はあッ!!」

「止めろと言っているでしょう！私の声が聞こえないんですのツ!!」

蛍達の制止の声すらも横島には届かない。横島の心を支配していたのは強い怒り、蛍達を傷つけられた事に対する抑えることなど出来ない強い怒り。それは触れてはいけない力を呼び寄せる！その先に待つものは！

次回「シンガン・マガンでゲンカイガンツ!!!」

【願うは必勝、剣舞の双竜！マスタードラゴンツ!!!】

リポート7 鮮血のマタドール その3へ続く

## その3

レポート7 鮮血のマタドール その3

香港でマタドールが復活したと同じタイミングで人間界に封印されていた魔人達がいつせいに覚醒した。それは神魔にとって凄まじい衝撃を巻き起こした、2度と目覚める事の無かった災厄の存在が目覚めた。それはアスモデウス達以上の脅威が目覚めたと言う証であり、神魔に凄まじい騒動を巻き起こした

「……ふむ、拙僧は封印されたはずだが……こうして目覚めたと言う事は再び人類に救済を与えよと言う事か。ならば拙僧はその天命に従うのみ……南無阿弥陀仏」

富士山の近くで目覚めた袈裟を着込んだ骸骨はお経を唱えながら、空中に溶けるように消えて行き……

「ヤーハーツ!!最高の気分だ!!俺は世界最高の速さを手にしてやるぜえッ!!」

アメリカで目覚めた巨大なバイクに跨ったライダースーツを着込んだ骸骨は、高笑いをしながらバイクから炎を撒き散らしながらハイウェイを疾走する。その動きを確認した神魔は一斉に魔人に対しての対策を取る為に動き出すのだった……

「魔人が目覚めたと言うのにどいつもこいつも!」

「落ち着け龍神王」

「だがオーデインよ!」

「それは判っている。だからこそ落ち着けと言っている」

神魔の正規軍の司令はそれぞれ集まり、魔人対策についての話し合いを行っていた。だがその結果は保身に走った神魔が多く、それに對して龍神王とオーデインは激しい怒りを抱いていた

「魔人の脅威を知っているからこそその対応だ。だがルイ様が3柱の魔人をベルゼブルと共に押さええている」

「ルイ・サイファアがだど!?!」

驚愕の声を上げる龍神王にそうだと返事を返す。我としてもルイ

様を信用するのは危険だと判っているが、神魔の両方の最高指導者を経験したと言うその実力は圧倒的だ。だがその反面ルイ様の危険性は十分に承知している、信用する事が出来ない人物でもある

「だが足止めをしてきている事に關しては感謝しよう。その間に我達は我達に出来る事をする！斥候部隊に大僧正とヘルズエンジェルの追跡を命じる！」

「了解!!」

私の指示を聞いて出撃していく斥候部隊。凶悪な存在だからこそ、どこをめぐらしているのかそれを知り自分達が有利な条件で戦闘に入れるだけの備えをする必要があるのだ

「香港で原始風水盤を止める為に戦っている人間、そして小竜姫とメドーサに増援を出す、第一師団・第二師団出撃準備！」

敬礼して出撃準備のために走って行く総隊長達を見送り、我と龍神王は下界の様子を見るために呼んだヒヤクメに状況確認を頼む

「香港の映像を映してくれ、状況次第では我等が出る」

部下達では駄目だと判断したら我等が出る。そう口にした瞬間、周囲の気温が下がった

「それは駄目だね。オーディン、龍神王。君達がここから出ることは許可しない」

ルイ様……いや、あれは分身か!?分身が我達を見て笑いながら

「この場は私に任せて貰おう、なに人間達は死なせはしないさ。だから君達は決して動くな、動いたら……殺すよ」

その圧倒的な魔力と神通力の前に我も龍神王も喋る事が出来ず、領く事しか出来なかった。ヒヤクメにいたっては白目を向いて泡を吹き気絶してしまった

「そのヒヤクメ族には悪い事をしたね、謝っておいてくれ、ああ、そうそう動かそうとした部隊も戻すんだ。いいね?」

そう言って消えて行くルイ様の姿を見て、我と龍神王は背凭れに深く腰掛け出撃中止命令を出した。

「ルイ様が何かを企んでいるようだな」

ルイ様の圧倒的な魔力と神通力を伴った殺気に意識を保つ事が出来ず、我も龍神王も背凭れに背中を預けたまま意識を失ってしまうのだった……

今までは眼魂を使えば、互角もしくは同等に戦う事が出来ていた。だがマタドールには全く通用しなかった

「がっはっ！」

腹を膝で蹴り上げられると同時に、剣の柄で頭を殴られ地面に叩きつけられる

「ニーニョ。その程度か？私の買いかぶりだったのか？面白い力だと思っていたのだが、その程度なのか？」

マタドールの挑発にも似た声にうるせえっと叫びながら、ガンガンブレードを突き出す

「よし、そうでなくてはつまらない」

下から振り上げられた紅い布にガンガンブレードを絡め取られ、隙だらけの腹にマタドールのつま先が突き刺さる

「げぼおっ！」

その凄まじい威力の蹴りに肺の中の空気を強制的に吐き出され、マタドールから蹴り飛ばされる

（っ、強すぎる……時間稼ぎも何も出来ないじゃねえか……）

今までは劣勢に追い込まれる事はあった……だがここまで圧倒的なまでの力量さを見せ付けられたのは初めてだ

「ふむ。本気ではないか、ならば……ニーニョ。君の仲間を殺そう、そうすればニーニョ。君はもつと私に力を見せてくれるだろう？」

1番近くにいた神宮寺さんに歩み寄っていくマタドールにガンガンブレードを変形させ、マタドールの顔目掛け銃弾を放つ

「ほう？そんな玩具も持っていたか。だが……それでも私には届かないな」

判っていた。ウイスプでは勝つ事が出来ない……別の眼魂に手を伸ばすと心眼の叫びが脳裏に響く

「止めろ！別の眼魂を使うな！ウイスプが最も負担が小さいのだぞ

！」

ウイスプの負担が少ない事は判っている。だが自分の事を護ろうと消極的になってマタドールには勝てる相手ではない

「アーイツー！シツカリミナー！シツカリミナー!!!」

心眼の制止を振り切りシズク眼魂を取り出し、ベルトのバックルを開き眼魂を押し込む水色のパーカーが飛び出し、俺の回りを飛び回る「変身ッ！」

「カイガン！シズク！唸れ水龍！渦巻く水流！」

水色のパーカーを装着すると同時に、ガンガンブレードが変形し切っ先から水で出来た刀身が現れ、3つ又の槍へと変形する

「ほう？まだ面白い力があつたか、ならばまだ君の仲間を殺すのはやめよう」

神宮寺さんに向けていた剣を俺に向けて構えなおすマタドールに槍の切っ先を向ける

「はっ!!」

「良い踏み込みだが、遠いな」

全力で踏み込み、一気に間合いを詰めて槍を突き出すがマタドールは紅い布でその切っ先を防ぎ、反撃に振り下ろされた剣が肩に叩き込まれるが……

「ぬ？」

その刀身は俺を切り裂いたが、水の身体へと変化するシズク魂には物理はダメージとならない

「今の俺は水だ！お前に水を切り裂く事が出来るか！」

困惑しているマタドールに蹴りを叩き込む。鉄板でも蹴り飛ばしたような鈍い感触が足に帰ってくるが、マタドールを弾き飛ばす事は成功した。

「このおッ!!」

槍全体に水を纏わせ、圧倒的な水流を伴った一撃をマタドールに叩きつけようとするが

「悪くないコンビネーションだが、届かないな」  
「嘘だろ！」

俺の渾身の一撃を紅い布を上空に投げ片手で受け止めたマタドールは、反撃にと剣を突き出してくる。だが水になっている俺には……  
「うあああああ!? な、なんで!？」

水になって居る筈の俺を簡単に切り裂くその一撃に思わず叫び声を上げてしまう。するとマタドールは何を驚く事がある? と笑いかけながら

「卓越した剣士ならば水を切る事など容易い。残念だったなツ!!」  
「う、うわあああ!!」

胸を横一文字に切り裂かれ大きく弾き飛ばされる、地面を転がっている内にシズク魂からウィスプ魂に戻される

「驚きはしたが、その程度の小細工。1度見れば十分だ」

ゆっくりと降りてきた紅い布を片手で掴み、油断無く構えるマタドール。変身しているのに全然届かない、かすり傷をつけるのがやつとだなんて……

(シズク魂で水になれば美神さん達が起きるまで時間稼ぎ出来ると思っていたのに……)

だがここで倒れる訳にはいかない、美神さん達が目を覚ますまでは……なんとしても耐えてみせる。立ち上がろうとした瞬間肩と肘のアーマーが爆発する、その凄まじい激痛に思わず苦悶の絶叫を上げる  
「……う、うあああああ!!」

「横島! もう限界だ! 変身を解除しろ! 反動を抑える事が出来ない!」

アーマーから火花が散り全身に激痛が走る。こんな反動は初めてだ……だけどこんなので立ち止まる事なんて出来る物か……火花を散らし続けるアーマーに眉を顰めながら立ち上がり牛若丸眼魂を取り出す

「まだだあ!! 行くぞ! 牛若丸ツ!!」

「あ、主……わかりました!!」

「止める! もう眼魂を使うな!!!」

心眼がそう叫ぶが止まる事なんて出来る訳もない。マタドールへと走りながら俺は牛若丸眼魂をベルトに押し込む

「アーイツ！シツカリミナー！シツカリミナー！」

「変身!!」

【カイガン！牛若丸！シユバツと八艘！壇ノ浦ツ!!】

「おおおおおおツ!!」

「今度は剣士か、面白い。だが付け焼刃が私に届くと思っっているのか？」

俺は両手でガンガンブレードを握り締めマタドールへと駆け出していくのだった……

面白い、ここまで粘るか……たった1人で……体の限界なんてとっくに超えているだろう。だが立ち上がり続けているのは、強靱な精神力……惜しむらくは……出合いが早すぎたと言う所だろう

(もう少し遅ければより良い戦士となっていただろう)

後1年……いや、半年あれば違っていただろう。誰かを護ろうとする強い決意、身体の限界を凌駕するその精神力……正直賞賛に値する(目覚めさせるべきか……)

私の放った風の魔法には付与した効果である人間達は目を覚ます事は無い、先ほどの攻撃を防ぎ、傷を癒すのに相当な魔力を消耗したので魔法を使い続けるのは私にとって相当な負荷となっている……無論私としてはあの人間達を傷つけるつもりは無かった。傷つける振りをすればその闘志を燃やす、そして少しずつ、少しずつだが私を押し込んで来ている。恐ろしいスピードで成長している……その早すぎる成長速度に思わず笑みが零れる。今ここで目覚めさせ、横槍を入れられるのは面白くないか……まだ若い同胞へのハンデとして、魔法を維持することを決める

「おおおおおツ!!変身ツ！」

【カイガン！メドーサー！非情の邪心、忠義の蛇神ツ!!】

紫色の上着へと変化する。手にしていた剣が槍へと変化し、先ほどの水色の時よりも鋭い突きが連続で放たれる

「ふふふ、良いぞ、だがまだだ！まだ足りないぞツ!!」

スパードでその切っ先を受け流す、だが先ほどよりも一撃がかなり



重くなっていた。この短時間で……本当に恐るべき成長速度に正直  
驚愕する

(もつとだ。もつとその力を見せてくれッ!!)

心が歓喜する、神魔と戦っていた時よりも心が躍る。もつともつと  
その動きを見せてくれ、その力を私に見せてくれ

「ニーニョー！良いぞー！もつとだ！」

「おおおッ!!」

攻撃の勢いを徐々に、徐々に増させていく。だが先ほどまでは見切  
る事が出来ず、直撃していた攻撃が全て槍で弾き飛ばされる

「いつまでも俺を舐めるんじゃねえッ!!」

「ははははは!!楽しい！楽しいなあー！なあー！ニーニョー！お前は楽しく  
ないのか？」

これほどまでの強さを持つのに何故戦いを楽しまない？私がそう  
尋ねるとニーニョはふざけんなと私に怒鳴り返しながら

「戦いが楽しい訳ないだろうが！傷ついて！誰かが悲しんで！そんな  
物が楽しい訳あるかあッ!!」

「ぬつくおっ！」

突き出された拳に反応出来ず殴り飛ばされる。素晴らしい、私の予  
想を上回り、恐ろしいスピードで成長を続けている

(素晴らしい、素晴らしいぞー！ニーニョ)

才能がある者を見るのは好きだ。そしてそれが強い決意を持ち、私  
を乗り越えようとするのを見るのは更に好きだ……だが

「才能溢れる者をこの手で潰すのもまた、私の楽しみなのだよ!!血の  
アングダル……」

「させるかあッ!!」

【ダイカイガン！メドーサー！オメガドライブッ!!】

地面に突き立てられた槍から、紫色の光が放たれた瞬間。私の動き  
が急激に遅くなっていく……いや違う！これは！

(身体が石になっている!?)

紫色の光が当たっている場所が恐ろしい勢いで身体が石になってい  
く……

「アーイツ！シツカリミナーツ！シツカリミナー!!!」

ニーニヨの周りに緑色のパーカーが踊っている。更に姿を変えると言うのか!?これで4回目の姿の変化、その都度に違った能力を發揮している、ニーニヨの持つ能力に心底驚愕する、どれだけの引き出しを持っているのか?それすらも想像出来ない。だがその都度に強くなっていくニーニヨに既に私は魅せられていた。だからこそ、この手で倒すと決めた。目覚めて直ぐ、これほどの戦いが出来た。その幸運つまらない幕引きなどで終わらせるつもりは無い

「変身ツ!!!」

【カイガン！小竜姫！触れるな逆鱗、怒れる竜神ツ!!!】

民族衣装の衣装が施された姿に変化したニーニヨ。姿が変わったからから遅くなっていた動きが徐々に戻って行く

【ダイカイガン！小竜姫！オメガスラツシュツ!!!】

「おおおおおおツ!!!」

手にした剣には緑色の光が収束し、凄まじい勢いで突っ込んでくるニーニヨ。だがツ！既にボロボロのニーニヨの動きは遅い、だがそれは甘く見れば己が両断され地面に倒れ付す……その光景を私は見た  
「来るが良いニーニヨ!!!お前の力を見せてみる！」

まだ身体の動きは鈍いが、避けや守りに回れば両断される。それを悟っていたからこそ、引くのではなく、私は前に踏み出した。

（魔法を維持するのも止めだ！）

あの人間達を眠らせていた魔法を解除し、その魔力を全て石化しつつある私の手足の治療に回す、そのおかげかスパイダを握っている右手の石化が足よりも先に解除される。これでニーニヨを迎え撃つ事が出来る！スパイダを構え駆けて来るニーニヨを見て悟った。受け止める事は出来ない……ニーニヨの気力は恐ろしいほどの充実している。そして何よりも覚悟を決めている。刺し違えても私を倒すと覚悟をしている、ならば気力で押し込まれたら私は両断される。それだけの覚悟をニーニヨは持っている……

「魅せてやろう、我が奥義を！血のアンダルシアツ!!!」

故に私も全力を持ってニーニヨの一撃を真っ向から打ち破るだけ

だ！

「おおおおおッ!!!」

私の放った真紅の一撃とニーニョの一撃がぶつかり合い、この空間に凄まじい爆発音が響き渡った……

全身に走る激痛と痺れに顔を歪めながら身体を起した瞬間。凄まじい爆発音が響き渡り、そちらの方に視線を向ける、そこには眼魂を使ったのか変身した横島の姿とマタドールの姿があった

「うッ！うあああああッ!!!」

横島の悲鳴と絶え間なく続く爆発音。横島はマタドールの剣に弾き飛ばされ、火花を放ちながらプラットフォームの壁に叩きつけられる

「ごはっ!!う……ううう……」

【オヤスミー】

地面に倒れこむ間の数秒に変身が解除され、倒れた横島を見て思わず横島の名前を叫びながら立ち上がる。それは私だけではなく、小竜姫様やメドーサさん、それに美神さんも同じだった。地面に倒れた横島の姿と周囲の破壊の後を見ればどれだけの間横島が1人で戦っていたのかを一目で判ってしまった

「みむううー！むみー!!」

「うきゅー！うきゅきゅー!!」

「コーン！コーン!!!」

結界の中に閉じ込められているチビ達が必死に横島を呼んでいるが、横島はびくりとも動かない。完全に意識を失っているようだ、早く手当をしないと不味い事になる。それは判っているのだが、マタドールに背を向けた瞬間殺されそうで横島の元へ向かう事が出来ない。なんとかかして一瞬でも良いからマタドールの注意が逸らされないと向かう事など出来そうにない

「……横島に手を出したな……ッ！」

シズクにいたっては完全に切れてる。髪が伸びて竜の様に動く姿

は非常に恐ろしい……恐ろしいと言えば神宮寺も良い勝負だけど

「……」

表情こそ冷静だが、その身体から漏れ出している殺意と魔力を見ればシズクと同じかそれ以上に切れているのは一目で判る。寧ろ私も同じなのだが、シズクと神宮寺が切れているからか、頭には来ているのだが、どこか冷静になっていた。マタドールがシズクと神宮寺に気を取られた隙に横島の元へ走ろう、そう考えて何時でも走り出せる準備をしていたのだが、マタドールはシズク達には何の興味もない。そう言いたげな素振りしながら、横島への視線を逸らす事無く

「私はもうセニョリータ達に興味はない。ゆえにこれ以上戦うと言うのなら……命を捨てる覚悟をして貰おうか」

マタドールが放っていた殺気が一気に強まる。既に物理的に干渉してくるその殺気に思わず後ずさりかけるが、それを耐えマタドールを睨みつける

「横島さんは一人で頑張ってくれました。だから私が退く訳には行かないでしょう」

「ここで引いたら神魔として余りに情けないだろう？私を舐めるんじゃないよ、骸骨がッ！」

静かな口調だが、完全に目が据わっている小竜姫様と最初は冷静だったが、激情を抑える事が出来なかったのかメドーサがそう怒鳴りながら

「蚩！美神！横島の手当てをしな！こっちは私と小竜姫が引き受ける！」

メドーサの一喝にマタドールの視線が横島から逸れた。美神さんとアイコンタクトを交わし横島の方に走ろうとした瞬間。強烈な寒気を感じ足が止まる。私と美神さんの目の前を通過した風の刃はプラットフォームの壁を切り裂く

「誰がニーニョに近づいて良いと言ったかね？ニーニョは私の戦利品として連れて帰ることにした、もうお前達の仲間ではない」

「ふざけんじやないわよッ！横島君は私の弟子よ！あんたなんかに渡すわけが無いでしょうが！」

美神さんの怒声に続くように叩きつけられたときの衝撃で立ち上がる事が出来ていなかったマリアとテレサが横島を護るようにその前に移動し、雪之丞もピートも額から血を流しながらも立ち上がり「おうこら、骸骨。人のダチを物扱いするんじゃないやねえよ」

「その通りです……貴方には渡しはしない」

【こやつが行く末はワシが見届けると決めた。奪わせはしない】

私達が横島を護ろうとしているのを見たマタドールはやれやれという感じで肩を竦めたと思ったら、凄まじい怒気を放ちながら

「言いたいことはそれだけか？イデオータ（馬鹿者共が）……ッ!!」

その凄まじい怒気に飛び出そうとしていた小竜姫様達の動きが止まり、魔法の詠唱をしていた神宮寺の詠唱が止まる、それは一瞬にも満たない隙だったが、マタドールには十分すぎる隙だった。ゆったりとした素振りで剣を構えるマタドール、その切っ先から溢れる凄まじい魔力と殺気にあれを使わせたらいけないッ！咄嗟にそう判断し、霊波砲やシズクの水に神宮寺の雷、小竜姫様とメドーサがマタドールへと肉薄したが、マタドールは詰まらなそうに鼻を鳴らし

「消し飛べ、目障りだ……血のアンダルシアッ!!」

凄まじい速度で振るわれた紅い衝撃を伴う斬撃はマタドールに迫っていた全ての攻撃を弾き飛ばし、私達全員を飲み込んでまだまだ勢いを緩める事無くプラットフォームの壁を完全に砕き、私達を隣のプラットフォームに弾き飛ばした所でその勢いを止めた、つ、強すぎる。マタドールの圧倒的な強さに恐怖しながら横島の姿を探す

（よ、良かった……無事だ）

ノツブとおキヌさんが護ってくれたのか、2人の姿がぼやけているが、横島が無事だった事に安堵の溜息を吐く……だが事態は更に最悪の方向へと進んでいた

「か、監督!?これも演出ですか!」

「当たり前だ!!踊るGSの最大の見せ場だ!撮影を続けろッ!!」

立ち入り禁止区域である筈の地下プラットフォームに何故か居た映画の撮影チームと役者達の動揺した声が、プラットフォームの中に痛いほどに響き渡るのだった……

隣のプラットフォームからやけに凄まじい音が響いてくるな?と  
思っていたら突然プラットフォームの壁が砕け散り、人間が吹き飛ば  
されてくる

(な、なんやこれ!?これも映画……そんな訳無いやろ!?)

これだけ離れているのに漂ってくる血の匂い、そして苦しそうに呻  
いている姿を見て、とてもこれが映画の撮影とは思えない。思わず撮  
影に同行してくれている霊能者を見ると顔を真っ青にしてがたがた  
震えながら

「に、逃げろ!悪魔だ……皆殺される!早く逃げろおツ!!!」

そう叫んだ霊能者が真っ先に背中を向けて走り去る中。監督は馬  
鹿やろう!と叫び

「本物ならなお好都合だ!話の整合性は後で整える!撮影を続ける  
!!」

撮影を続けると叫ぶが、本物の悪魔が居るのに撮影なんて出来る訳  
が無い。悲鳴を上げて逃げていく役者仲間とスタッフに続いて俺も  
逃げようとしていると、舞い上がっていた砂煙が晴れ倒れている青年  
の姿が視界に飛び込んできた。赤いバンダナに青いGジャン……

「横つち!」

瓦礫の上で倒れている横つちを見て、思わずそう叫ぶ。いやそれだ  
けじゃない、女性は少女も倒れている

「誰か!誰か手伝ってください!」

見た所全員重傷を負っている様に見える。俺だけじゃなくスタッ  
フもそれに気付いたのか何人かが走り出し、倒れている女性を助け起  
している。それならつと俺は横つちを!小学生の時の渾名を叫んで  
駆け寄ろうとした時。俺の足はまるで地面に縫い付けられたように  
動かなくなつた……それ所か指一本動かす事が出来ない

「ニーニョ。君はそちらに居るべき存在ではない」

砂煙の中から姿を見せたのは美しい装飾が施された緑色の衣装に  
身を包んだ骸骨だった。その骸骨は動く事の出来ない俺の横を悠然  
と通り過ぎ、倒れている横つちに声を掛ける

「感じるだろう？判るだろう？ニーニヨ。君は私に対し、恐怖は抱いていないはずだ……そう、君が感じているのは親しみ。それであるはずだ」

この骸骨は何を言っている……横つちが骸骨に親しみを感じるわけが無い

「うる……せえ……」

「そう嫌ってくれるな、まだ未熟な同胞よ。お前は我らの末席に座る素質を秘めている、我ら魔人となるべく素質を持っているのだからな仲良くやろうじゃないか」

魔人？骸骨の言葉に思わず耳を傾ける。横つちがなんでこんな所に居るのか判らない上に、理解出来ない話をする骸骨に考えが纏まらない

「ふ、ふぎけるな……横島は人間だ……お前達の仲間なんかじゃない」

髪をショートボブにした少女がスタッフの手を振りほどき、立ち上がりふぎけるなど叫ぶ

「何を勘違いしているか知らぬが、私もかつては人間だった。魔人とは、外部的要因で神魔の力を得て転生した者を指す。そしてあらゆる時代、場所を超え魔人姫の元へ集う。ニーニヨ……君は人間だが神通力と魔力を持ち合わせている、ゆえに君は我らの同胞となりえる素質がある」

「うちの助手になんと言ってくれるのよ……誰があんたなんか」黙っていたまえ」あうっ!」

立ち上がった緋色の髪をした女性が苦悶の悲鳴を上げて倒れる。そして今度は瓦礫の中から氷と炎が骸骨に向かう、目の前で繰り広げられている光景に何が起こっているのか判らないが、あの骸骨が横つちを攫おうとしているとしていて、あの人たちがそれを阻止しようとしている。と言う事は判った

「やれやれ。往生際が悪いな、お前達は敗れた。敗れた者の意思等何一つ通る事は無い」

肩から提げた紅い布で氷と炎を弾き飛ばす骸骨はそのまま虚空に手を伸ばす。

「あぐっ！」

すると突然空中から赤髪の女性が姿を現し、骸骨によって首を絞められていた。骸骨はそのままゴミでも捨てるように女性を背後に投げ捨てる

「超加速状態なのに何で!?!」

どこかで見た女性がそう叫ぶと骸骨はやれやれと肩を竦め……消えた……

「超加速なら私も使える。大したことはない、こんな物は只の子供騙しだ」

「あぐっ!?!」

骸骨の膝蹴りが叩き込まれ、女性が転がっていく……これはどう見ても映画なんかじゃない、本物の戦いだ

「ニーニョ。君がこちら側に来ないと言うのはきつと彼女達が居るかだろう、ならば私は彼女達を1人ずつ殺していくとしよう。そうすれば君を縛る物は無くなり、新たな枷が君に嵌められる。憎悪と言う鎖がね……」

骸骨の言葉を聞いて横つちが立ち上がろうとしているのは判るが、動く気配は微塵も無い。このまま見ていけばあの人たちが殺される。何とかしないといけないと判っているのに、骸骨の気配に飲まれて動く事が出来ない

「君には憎悪が足りない、殺意が足りない、憎しみが足りない。私とて無抵抗なセニョリータを殺すのは趣味ではないが、それが君の覚醒を促すと言うのなら……躊躇いは無い」

手にしている細身の剣を振り上げ、倒れている女性の首に振り下ろそうした瞬間

「止めるオオオオオオオッ!!!!」

横つちが雄叫びを上げながら立ち上がる。だがその両眼は血のような真紅に光り輝いていた

「止めろと言うがな? 君は敗者だ。敗者はただ奪われるだけ、それともニーニョ。君は私を倒せるというのかね? その限界をとつくに超えている身体で?」



そう言われて横つちの身体を見ると、ここから見てもボロボロで破けたGジャンとGパン。そして額からは血を流し、立っているのがやっとと言う感じだ。それは横つちを護ろうとしていた人達も同じで立ち上がるなど叫んでいるが横つちは、ふらふらの足取りで骸骨の方へ歩き出す

「限界……が……なんだって言うんだ……皆……お前が……傷つけた……ッ!!俺の……仲間をッ!!」

「それがどうしたと言うのだ? ニーニヨ? 弱き者に生きる資格はない、弱き者は全てを失うのがこの世の摂理だ。だから弱いお前は……仲間を失うッ!!」

骸骨が倒れている女性に剣を振り下ろそうとした瞬間。横つちの姿が消え、肉を裂く嫌な音が響く

「よ、横島!」

振り下ろされた剣は横つちの肩を切り裂いていた……夥しい血液が横つちの身体から流れる。その余りに凄惨な光景に思わず意識を手放しかけてしまうが、必死に離れかける意識を保つ

「仲間は……皆は……失わないッ!俺は……お前を……殺すッ!!!」

「吼えるなよニーニヨ。その身体で何が出来る? お前は仲間を失い、私への憎悪だけを持ちただー人生き延びるのだ、それがニーニヨの運命」

「そんな運命誰が決めたあッ!!!」  
「うぐっ!」

横つちの拳が骸骨の顔面を捉え、骸骨が吹っ飛ばされる。今の内にとスタツフの皆に目配せをして、倒れている人達の元へ走る。俺は横つちが庇っていた女性に手を貸そうとするが

「横島!もう戦っては……行けない!貴方では!そちら側に踏み込めば戻る事が出来ない!止めなさい!横島ッ!!」

俺の手を振りほどき、横つちに止めると叫ぶ銀髪の女性。それだけじゃない、スタツフに抱えられている全員が止めると叫ぶ。だが横つちは振り返ることをせず

「銀ちゃん……だよな。違ったら……すまん。神宮寺さんを……頼

む。いや神宮寺さんだけじゃない美神さんや蛭。皆を……頼むわ」  
「……横つち……ああ、任せえ。スタッフの皆と協力して安全な所まで運んでみせる」

何年も会っていなかった。だが横つちは俺だと気付いてくれた、髪を染めて昔と全然違う俺だと言うのに気付いてくれた、そして俺に任せてくれた……俺はその信頼に応えたいと思った。だから

「横つちの頼みだから、貴女を連れて行きます」

「放せッ！横島！止めなさい！もう靈力を使っってはいけない!!横島！」

止めろと叫び、俺を殴りつける神宮寺と呼ばれた女性を無理やり抱え上げ、横つちから離れる。女性とは思えない力で暴れるその力にそれだけ横つちを気に掛けているが判る、でも横つちから俺は頼まれた。だから俺は彼女を安全な所に連れて行く責任がある。それに姉妹だと思われる揃いの服を着ている女性は足が折れているように動く事が出来ないでいるし、俺と同年代っぽい2人組みは頭を打っているように動く気が無い。早く安全な場所に連れて行かないと危険だ  
「その！手伝ってくれ！わしの娘を運ぶのを手伝ってくれッ!!」

老人が手を振り叫んでいる。それを見て力自慢のスタッフが駆け寄っていき、これであの人は大丈夫だと判断し俺は暴れている女性に落ち付いてくださいと叫びながら、その人安全な場所に連れて行くとうとしていると横つちの今までに無いくらい怒っている声が俺の耳に飛び込んできた

「限界だっけ言うなら……その限界なんざ……超えてやる!!」

「ほう……ならやってみろ。もう1度、お前の力を見せてみる、ニーヨ」

横つちが何か丸い物を取り出すと、腰と左腕に何かが現れていた事に気付いた

【止めろ！横島！もう眼魂を使うな！もうお前の靈力はッ！】

「判ってる！けどなあ……俺は！皆を傷つけられて、黙って引き下がれねえんだよッ!!!」

どこかから聞こえる女性の声も横つちを止めているが、横つちは手

にしている球体を腰のベルトに押し込む

【ア—イッ！シツカリミナー！シツカリミナー！！】

緑色のパーカーか？それが横つちの周りを踊り始める。それを見た神宮寺と呼ばれた女性が暴れ始める

「放せッ！これ以上横島に霊力を使わせたら死ぬ！だから放せッ！！」

鬼気迫る表情でそう怒鳴られ、思わず抱えていた手を放してしまう。横つちが死ぬ……再会したばかりなのに？言われた言葉が理解出来ず茫然自失となる

「またそれか。それはもう見飽きた……言っただろうが！限界なんざ超えてやるッてなあッ！！」

【ア—イッ！バツチリミナーッ！！バツチリミナーッ！！】

骸骨の言葉を遮り、横つちは左腕の機械にも球体をはめ込む、すると紫色のパーカーが現れ、横つちの周りを踊りだす

「あッ！ぐあッ！あああああああッ！！」

そのパーカーが踊る度に、横つちと顔の無い鎧を纏った姿が交互に変わっていく、だがその度に横つちの身体に紫電が走り、横つちの苦悶の悲鳴がプラットフォームの中に響き渡る。俺は何かとんでもない事をしてしまったのでは？その事に今初めて気付いた。俺が抱えていた女性は俺を振りほどき、横つちの方に走り出す

「横島さん！駄目です！そんな事したらッ！っう！？」

「ち、近づけない！止める！横島！そんな事したらお前の身体がはじけ飛ぶぞッ！！」

「横島！やめて！お願いだから！そんなことしたら駄目ッ！！」

「止めなさい！横島君！聞こえているでしょう！止める！馬鹿！この横島ッ！私の言う事を聞きなさい」

「……くそッ！なんだこの霊力はあッ！！」

「止めろと言っているでしょう！私の声が聞こえないんですのッ！！」

いろんな人がスタッフを振りほどき、横つちを止めようと駆け寄るが、何かに弾き飛ばされ近づく事が出来ない

【ア—ユーレディ？！】

「う、ああ！うぐッ！うあああああああッ！！うがあああああッ！！！！

……変……ッ身ッ!!!」

「シンガン！小竜姫！マガン！メドーサツ！！ゲンカイガンッ！！Wドラゴンッ！」

横つちの身体が鎧に包まれ、紫と緑のパーカーが螺旋状に回転しながら上昇していく。そしてそれは何時の間には1つパーカーへと変化していた……それは凄まじい光を放ちながら横つちの身体に被さり、翡翠色に輝く光の壁が現れそれがゆっくりと横つちの身体を通過していく

【願うは必勝、劍舞の双竜！マスタードラゴンッ!!!】

「覚悟しやがれマタドールッ!!!お前は俺が殺すッ!!!」

上半身にはパーカー、肩回りと腰周りには金属だろうか？リアスカートのような物が巻かれていた。肩と背中には竜の翼と牙を連想させる鎧……そのとても横つちとは思えない、それこそどこかの特撮の中から飛び出て来たようなその姿に思わず目が丸くなるのが判る。マタドールと呼ばれた骸骨はそんな横つちの姿を見て、暫く無言だったと思つたら急に頭を抱えて笑い出した

「ふっふははははは!!光と闇を1つに！ふははははははッ!!そうか！それがお前の力かッ!!!来い！ニーニョ!!ここで見極めてやるッ!お前が真に魔人と足りえる者かをなあッ!!!」

全身から紫電を放ちながら空中から現れた2振りの刀を持って駆け出す横つちと、そんな横つちを見て高笑いしながら走り出す骸骨。2人が手にした剣が交差した瞬間、凄まじいまでの衝撃がプラットフォームを駆け回る

「二二う、うわあああああッ!?」

「二二きやあああああッ!?」

その余りに凄まじい衝撃は骸骨と横つちを除き全員がその暴風に弾き飛ばされ、全員の悲鳴が地下に響き渡るのだった……

リポート7 鮮血のマタドール その4へ続く

## その4

リポート7 鮮血のマトドール その4

なんだこれは!?! 私は横島の心の中でそう叫んだ。普段の横島の心の中を良く澄んだ青空だとすれば、今の横島の心の中は嵐の中だ。凄まじい怒りと憎悪の感情が逆巻いている

【横島ー止めろ!! それ以上そちら側に踏み込むなッ!!】

横島は力を求めている。それは神宮寺に施された封印を力尽くで解除する程に強烈な願望……だが今の横島はもしそちら側に踏み込めば自力で戻ってくる事が出来ない。マトドールの言った通り、横島もまたあやつと同じ存在になってしまいかもしれない。そうはさせないと何度も横島に呼びかけるが、反応が何も帰ってこない。恐らくこの殺意と憎悪に嵐にかき消され、私の言葉が横島まで届いていないのだ

(もしもあの2つの眼魂に小竜姫様とメドーサの意思があれば!)

眼魂の中には2人の神通力と魔力しか込められていなかった。これがもし牛若丸や、信長のように眼魂に小竜姫様やメドーサが入った状態で変身していれば、ここに小竜姫様とメドーサが居た筈だが……そうではない。私に出来ることと言えば横島が正気に戻る事を祈りながら、必死に呼びかける事だけだ

(なんだ!?! なんだ何が起こっているッ!?)

横島の心に必死に呼びかけていると、ふと気付いた。横島の心に別の何かが流れ込んで来ている事に、そしてその別の何かが横島の憎悪と殺意を増幅させている事に今初めて気付いたので

「こ、これは……別の横島の記憶……?」

ありえない話だが、そうとしか言いようが無かった。色んな場所、場面……そして時間。その全てが異なっているが、共通している事がある。それは美神達が負傷もしくは死亡しており、それは奇しくもつい先程までの光景と合致していた。地面に倒れ、動かない美神達と「止めろーこれ以上横島の中に入ってくるなッ!!」

この記憶が原因だと、即座に悟り。小竜姫様、そして天竜姫様から譲渡されていた竜気を開放する。このままでは横島が狂ってしまう、そして本当に戻ってくる事が出来なくなる。私が竜気を放出した事で、濁流のように流れ込んでいた記憶の勢いを緩める事は出来た。だが完全にその流れを止める事が出来ず、少しずつだが、何者かの記憶は横島を蝕んでいく

「くそっ…これはどうなっていると云うんだ!」

私も横島も知りえるはずの無い記憶。それなのに、拒絶される訳でもなく横島の記憶として、一体化していく。それを必死に阻止しながら、私は理解出来ないこの現象に思わずどうなっているのだと怒鳴りながら、なんとかして横島の意識を呼び戻そうと必死に横島の名前を呼び続けるのだった……

マタドール……魔人と名乗ったその骸骨の圧倒的な強さの前に、私は完膚なきまでに叩き潰された。私達がどれだけ意識を失っていたのかは判らないが、その間たった1人でマタドールと戦っていた横島君の体は間違いなくボロボロの筈だ。いや、それだけでは済まされない事態になりつつある。マタドールの圧倒的な力に対抗するため横島君は2つの眼魂を同時に使った……1つでも信じれない負担を掛けるそれを2つ同時に……それがどれだけの影響を与えるのか?考えるだけでも恐ろしい早く止めないといけない、そう判っているのだが……

「み、美神……動けますか……?」

「ご、ごめん……無理みたい……」

最初の横島君とマタドールのぶつかり合い、それで発生した凄まじい衝撃波によって弾き飛ばされた私達はプラットフォームの壁に2度目の追突をした。酷い脳震盪と、打撲で起き上がる事が出来ない。くえすの言葉に無理だと返事を返しながら、必死に瓦礫を掴んで体勢だけでも立て直した私の目の前では私だけではない、くえすや蛍ちゃん。ドクターカオス……ほぼ全員が意識を失っているか、動く事が出

来ずその場に倒れていた。ノツブやおキヌちゃんの姿が見えないのは、凄まじい魔力と神通力のぶつかり合いで周囲の磁場が歪んで存在を維持出来ないからだと推測する。もしあの2人がいてくれたら真っ先に私達を助けに来てくれるだろうから、それが無いと言う事は今この場所に干渉出来ないという証拠だった……

「シズク……さん……治療は……無理……ですか……」

「……無理を言うな……今の私の……身体を……見てみる」

小竜姫様とシズクの声が聞こえて、自分の身体とは思えない身体を必死に動かして声の聞こえた方向に視線を向ける。そこでは上半身と下半身が瓦礫で分断されたシズクが横たわっていた

「ちよっ!?……シズク……あんた、それ……大丈夫なの!？」

大声を上げた事で全身に再び痛みが走る。だが重症所か死に掛けとしか思えず、自分の口から出たとは思えない上擦った声で尋ねるとシズクは顔を歪めながら

「……み、水が足りない……身体を……再構築……出来ない」

水が足りなくなつて身体を維持出来ないと呟くシズク。水を何とかしてやりたいが、自分自身もボロボロで動く事が出来ない。横島君だけを戦わせる訳には行かない。師匠として弟子にだけ負担を掛けるわけには行かない、そう思っているのに私の意思に反して動く事の無い身体に苛立ちだけが募っていく。そんな中私の耳に飛び込んできたのは横島君に対する罵倒

「だーっ！なにやっつてんだあ！そうじゃねえ！もつとあるだろうが！このトーシロがあッ!!！」

自分でカメラを抱えて走り回っている監督。どうしてこんな所に居るのか？こちら辺は立ち入り禁止にしたと政府は言っていたのに……しかしなによりも良い画が足りない！と怒鳴る姿に本気で殺意を覚えた。もし身体が動くのならば、殴り倒している

「ぐっ！ふっははははッ!!良い！良いぞ！ニーニョッ!!これほどまでのダメージを受けたのは何時振りかッ!!！」

「お、おあああああああッ!!！」

マタドールは楽しそうに笑っているが、横島君は絶叫しながら動い

ている。肩や足から火花が散っているのを見ると恐ろしい激痛が横島君を襲っているのを想像するのは容易い。早く止めさせなければと思うのだが、満足に動かない自分の身体に苛立ちばかりが募っていく

(早く、早く止めないと大変な事になるッ！)

見ているだけで判る。今の横島君は神通力と魔力を同時に扱っている……ピートとは比べるまでも無い、圧倒的な光と闇の力……そんな力を人間がいつまでも制御出来るはずが無い。早く止めなければと判っているのに身体が動かない……仮に動けたとしてもあの戦いに割り込んでいく事ができるなんて思っていない。だが横島君を止めないと、ここで止めないと横島君はきつとマタドールの言った通り、あちら側に踏み込んで戻る事が出来なくなる

「ぐつくう……動けえ……」

くえすが歯を食いしばって立ち上がりとしている、私も立ち上がろうと身体に力を入れるのだが私の意思に反して身体はびくりとも動かない。かなりの時間が経っているのに動かない事を考えるとダメーじだけではない、何か別の要因があるのかもしれない……そう考えると私達を助けようとしてくれた撮影スタッフと雪之丞とピートが意識を失っている事を考えるとその理由は容易に想像が付いた

「急急如律令ッ！業炎よッ！我が敵を喰らえッ!!」

「ぬっおおおおおッ?!?!」

普段横島君が使っている炎の陰陽術がマッチの火に思えるような、業火がマタドールを包み込む。その熱波に肌が焼かれるのを感じながら、私やくえす、蛍ちゃんだけが意識を保っている理由。それは霊力の有無……マタドールと眼魂を2つ使った横島君の霊力はそこそ神魔に匹敵する。それだけ膨大な魔力がぶつかり合えば、人間なんて意識を保っていられるわけが無い。私達が意識を保っていても動く事が出来ない理由としては十分だろう

「ぐっ……くっ……おい、シズク。血でも……水は水だよな……?」

「その手が……ありま……したか!」

メドーサと小竜姫様がシズクの元に這って向かいながらそう呟く



声が聞こえる。恐らく血液に含まれる水分と竜気を与えてシズクを回復させて自分達の傷の治療を行い横島君に加勢するつもりなんだろうけど……あんな状態のシズクが回復するのにどれだけの血液と竜気が必要だろうか？シズクが回復する前に2人が死んでしまう可能性が高い

(ぐっ！あそこにあるのに……)

除霊具をつめた鞆の中に入っている水のペットボトル。たった数メートルの距離だが、それが果てしなく遠くに見える。

「くっ……なんとか……あそこまで」

立ち上がる事ができないのなら無様でも良い、這ってでも……痛む身体に顔を顰めながら水のペットボトルの元へ向かう。蛍ちゃんも同様に瓦礫にあちこちぶつけながら向かっている

「がつ！？ぐっ！がはあッ！！」

「アアアアアアッ！！」

炎に包み込まれ、動きが鈍ったマタドールの懐に飛び込んだ横島君が紫電を放つ両拳を凄まじい勢いその身体に叩き込む。マタドールの身体がまるでピンポールのように左右に弾け飛ぶ、剣と布が弾かれたタイミングでその頭に剣を突き出そうとしたが……

「おおおおおおッ?!?!う、うがあッ!?!」

「くっふははは!!ニーニョ。已に余る力は身を滅ぼすぞッ!!」

突然聞こえた爆発音と横島君の苦悶の悲鳴に咄嗟に振り返ると、横島君の全身から火花が散っていて、限界が近いのが一目で判った。マタドールは当然そんな隙を見逃すわけも無く、手にした剣を振り上げ、そこから放たれた衝撃波が横島君を吹き飛ばす。このままではシズクが回復する前に横島君に限界が来てしまう……だが私達には出来る事が無い。その事に気付いてしまい、目の前が暗くなるのを感じた瞬間

「うっきゅうううッ!」

「みっむっ!」

「コーン!」

モグラちゃんが地面から飛び出してきて、その後からチビとタマモ

が姿を見せる。横島君の危機に結界の中に隠れてられず、地面に穴を掘って結界から脱出して来たのだろう。よく見ると、モグラちゃんの頭に短いがしっかりと存在感を放っている2本の角がある事に気付いた。だから結界を破壊できたのかと呟き、震える手で首から下げた精霊石のペンダントに手を伸ばす。これが最初で最後のチャンスだと……そして良く私の目の前に来てくれたと思いつながら首から外して、タマモに向ける。横島君から聞いていた、精霊石を与えれば、タマモは人に変化できると……まともに動ける面子がない中。タマモに頼るしかない

「タマモ、人化……したらシズクに水を運んで……そうすれば皆……動けるようになるから」

その精霊石のペンダントを首から下げるとタマモはぽんつと言う音を立てて、中学生程度の姿になったタマモは精霊石のペンダントをしっかりと首から下げて

「任せなさい。横島をこのまま見ているつもりなんてないわ。行くわよ、チビ、モグラ」

「みむっ！」

「うつきゅー！」

チビとモグラちゃんを頭の上に乗せて、飛んで来る衝撃波を交わし、瓦礫の上を跳ねるように飛んでいくタマモの姿に、頼んだわよタマモと呟くのだった……

強い……私はニーニヨを見て素直に感心していた。今の姿ではない、その心の強さにだ……

「あ、うあああああッ!!」

自分の中で荒れ狂う力に身体が耐え切れていないのか、苦悶の叫び声を上げながら振るわれる2振りの刀をエスパードとカポータで弾く。さきほどまで時折混じっていた奇妙な魔法は既に使われず、使えるだけの余裕が無いのか、持てる力の全てを斬撃にまわしている、その破壊力は凄まじく、受ける度に、打ち合う度に全身に走る重い衝撃に思わず顔を歪める

(これは受けるだけでも危険だな……)

私の核へと直接響く衝撃。光と闇の混じったその波動は本来私にとって心地の良い物なのだが、今は違う。私の核を侵食しようとするその魔力は文字通りの猛毒。打ち合う度に、攻撃を防ぐ度に身体の自由が利かなくなってくる

「その程度かね？その程度ではお前は何もかもを失うぞツ!!」

「だっ!!!まれえええええッ!!!」

実際私にはそこまでの余裕は無い、だが敢えて余裕を保ったまま挑発を繰り返す。怒りそして憎悪……ニーニヨにはそれが足りない、だから私への殺意そして憎しみ、憎悪……ありとあらゆる負の感情を抱かせねばならない。そうでなければニーニヨはこちら側に堕ちて来ない

(魔人姫に渡すのも勿体無い……これは……私の物だ)

魔人へと墮として魔人姫に献上する事を考えていた、だが惜しいと思ってしまった。ニーニヨが魔人へと堕ちれば記憶を失う、それは魔人となった者の共通の特徴だ。私とて生前の記憶は無い、ただどこまでも強さと名誉を渴望した事だけは覚えている。もしニーニヨが魔人となればどうなるのか？そしてどの様な魔人へと変貌していくのか？それを目の前で見ていたいと思った。戦いとは私が存在する理由、こうして考え事をしていたとしても私の身体は勝手に動き続ける「ぐっぐうううううううう」

獣じみた咆哮を上げながら振るわれる2振りの刀。それはがむしやらで技術も何も無い。ただ私を倒すと言う一念だけに突き動かされた攻撃。自暴自棄になった神魔が何度も行つて来た特攻によく似ていた。本来なら見るに耐えないと一蹴する所だが……剣を通じて感じていた、それは誰かを護ると言う強い意志、自分の中で暴れまわる神魔の力にも耐え。今も激痛で意識を失つてもおかしくないというのに……自分の為ではない。誰かの為に振るわれる剣に私は魅せられ始めていた……

(4騎士が相手だとしても、渡さない)

魔人姫を護衛する4柱の魔人。彼らも元は人間であったが、魔人へ

と変貌した際に特異な能力を身につけ、何処かの時代でヨハネの4騎士と呼ばれそれを自らの名前とした。私よりも霊格の高い魔人……決して勝てない相手だと判っているが、それでもニーニヨを渡したくないと私の手で魔人とし、そしてどうなっていくのか？それを見たい。戦いだけを望んでいた私が執着する存在など今まで居なかった。私を脅かす強敵をこの手で作りあげる、満足出来る強敵に巡り合う機会が減り、ただ敵を倒すだけだった。私と脅かす強敵などいないとそう思っていた……

「ツ！つぐうつ……素晴らしい！素晴らしいぞ！！ニーニヨツ！！」

剣が突然変形した槍が肩を穿つ、その傷から流れ込む力はまるで毒のようだ。今ここで殺してしまうには惜しい、ニーニヨはもつと強くなる。攫って、育て上げていつかは私を殺せるだけの力を手にする。それは確信めいた思いだった

「ははははっ!!はーっははははっ!!楽しい！楽しいぞ！ニーニヨ!!」

槍とスパーダが何度も交差を繰り返し火花を散らす。お互いに必殺の一撃の交差だと言うのに、それは何度繰り返そうがお互いを捉える事が無い。恐ろしいスピードで成長……いや、これはもはや進化だ  
「あああああーッ!!!」

私とニーニヨの叫びが重なる。スパーダとニーニヨの2刀が完全に拮抗し、お互いを押し返そうとするがぴくりとも動かない。力だけではない私の魔力のニーニヨの2つの力がお互いを飲み込もうとぶつかり続ける

「ぐっぬ!？」

突如背中に走った激痛にニーニヨから視線がずれる。振り返ると水神がその指をこちらに向け、その小さな両肩に手を置いた2人の龍神の姿……3人分の竜気が収束した水鉄砲が私のカポートの守りを貫いていた。いやそれだけじゃない、破魔札や精霊石が炸裂し、大きく体勢を崩す。ニーニヨは当然そんな隙を見逃す訳が無く、大上段で構えた剣を振り下ろしてくる

「あああああーッ!!!」

「ぬっぐううう!!!この様な終わりを認めるかあッ!!!」

私を両断しようとする刃を無理な体勢で受け止めながら思わずそう叫ぶ。最高の戦いに水を差された、その事に対する怒りが私の胸を埋め尽くす

「シズク！早く次の弾丸を撃て！」

「……無理を言うな……やつと体の再構築が……終わったばかりで全員の治療をしたんだぞ……余裕なんて無いんだ……」

「ならもつと竜気があればいいんですか!?それとも水ですか!?!」

決闘を邪魔した挙句。騒いでいる竜神達にいらつきがつのるがこのままでは横槍と言う余りに納得出来ない結果で終わってしまう。それは私としては本位ではない……心の中で仕方ないと呟き、肩から下げていたカポータを掴むと同時にその真の能力を開放すると同時に次の動きに入る

「がっはあぁ!?!」

「ぐっふう!?!」

使うつもりが無かったカポータによる絶対防御からのスパードの一撃と、絶対防御を誇るカポータを貫いた刃がお互いを捉え吹き飛ばす。今までは額がぶつかり合う距離で戦っていたが、先程の合い打ちで距離が出来た……それは奇しくもお互いが全力で攻撃を行う事が出来る距離

「いいだろう、ニーニョ。これで決着だ」

カポータを投げ捨て、スパードを構える。投げ捨てたカポータはそのまま空中で留まり結界を作り上げる、これで先程の様な横槍は防げる。次の一撃を決着としようと声を掛けるとニーニョは無言で左腕の機械のスイッチを押し、腰のベルトのレバーを引く

【ゲンカイダイカイガンツ!!マスタードラゴンツ!オメガスラツシュツ!!!】

私の言葉に返事を返すのではなく、全身から凄まじい力を放ちながら剣を構える姿。それがニーニョの返事だと悟り、私は被っていた帽子と首に巻いていたスカーフも投げ捨て、スパードに全魔力を注ぎ込む

「魅せてやろう。我が奥儀……血のアンダルシアの真の姿をツ！」

今まで使っていた血のアンダルシアは私を討ち取ろうとした神魔の雑兵達を薙ぎ払う為に作り上げた、衝撃波を飛ばすだけのただの遊びの技だ。今から放つのは真正正銘、私の奥儀としての血のアンダルシア……超神速で繰り出される8連激……これを見せるのは何時振りか……わが奥義を見せるだけの価値がニーニヨにはあった……スパーダの刀身が真紅に染まり、余剰魔力が私の背後で紅い炎となる。ニーニヨは背中から翼を思わせる形で魔力と神通力を噴出させて駆け出す準備をしている。ここまで来たら何も語る事はない、ただ全力で目の前の敵と打ち倒すまでッ！私とニーニヨの度重なる激突で限界が来ていたのか、崩れ落ちた天井の破片。それが地面に落ちると同時に私とニーニヨは示し合わせたかのように走り出すのだった……

タマモが精霊石で変化した事でシズクが水を補給できた。そのおかげでこの異常な力の磁場の中でも意識を保っている。私、美神さん、神宮寺の3人と小竜姫様とメドーサさんは動けるだけの治療を施され、マタドールと横島の戦いの助けになればと攻撃をした。それはマタドールの体勢を崩したが、それだけだった。マタドールは即座に体勢を立て直し、私達の干渉防ぐ為に結界を作り出していた。小竜姫様やメドーサさんがそれを破壊しようとしたが

「駄目だ。1度展開したら、外部干渉じゃ解除出来ないタイプだ」

「くっ、横島さんが戦っていると言うのに……」

神通力も魔力も弾かれ、外から解除出来ないと悔しそうに呟く、私と美神さんも精霊石で解除を試みたが

「駄目だわッ！精霊石の力まで吸収してる！」

「こんな能力まで持つてるなんて、どこまで反則なんですか……」

神通力や魔力は弾かれ、精霊石の純粋な霊力は吸収する。私達や神魔が作る結界とは根本的に格が違う……それならと神宮寺が凄まじい魔力を放つ魔道書を手に結界の解除を試みるが……やはり結果は芳しくないのか、直ぐに呪文の詠唱を中断する

「ちっ……あの骸骨。どこまで万能なのですか」

忌々しそうに舌打ちする神宮寺。マタドールが投げ捨てた赤い布

が結界となり、最後のぶつかり合いをしている横島達と私達を完全に隔てていた。今私達に出来る事、それは横島の勝利を祈るだけで、それが自分が何も出来ないと言われている様で嫌で仕方なかった

「おおおおおッ!!!」

お互いに必殺の意思を込めた一撃が何度も何度もぶつかり合う。その度に発生する魔力を伴った衝撃波がプラットフォームの中を駆け回る

「ちよっ……クウン……半端……こん……だけど!」

「み、みむう……」

「うきゅ……」

ぐったりとしているチビとモグラちゃんに加えて、タマモの人化すらまともに維持出来ていない。ノツブやおキヌさんが姿を見せないのはやはりこの力のぶつかり合いで、磁場が乱れているからだと判った。私自身もさっきから酷い耳鳴りと貧血のような症状が出ているからだ

「がっがあああああ!」

マタドールと打ち合っていた横島の身体から凄まじい火花が散ったと思った瞬間。鎧のあちこちが爆発し始める、マタドールは当然そんな隙を見逃すわけも無く

「残念だな、ニーニョ。天は君に味方しなかったようだッ!」

「ぐっ!ぐあああああッ!!!」

「横島あッ!!!」

禍々しい紅い光が8回煌いた……そう思った瞬間横島の身体が吹き飛ばされる。爆発しながら壁に叩きつけられ、崩れたプラットフォームの瓦礫と共にその姿が見えなくなる。横島の名前を叫んだのは私だけではない、神宮寺や小竜姫様もその名を叫んだが、横島からの返答は無く変わりに機械的な音声が続く

【オヤスマー】

それは横島の変身が解除されたという証拠。横島の元へ走りたいたいが、マタドールの作り出した結界に阻まれ、そちらへ向かう事が出来ない、それでも横島の元へ向かうとするが

「つきやあつ!?」

バチンつと火花が散って結界に弾き飛ばされる。そんな私達の様子を見ながらマタドールは優雅な素振りですげ捨てたスカートと帽子を拾い上げ

「何度も言わせるなセニョリータ。お前達は敗者、敗者は何も手にする事など……」「おおおおおおおおッ!!!」なっ!?ニニョッ!」

砂煙の中から横島が飛び出してくるが、左腕と右足はあらぬ方向に曲がり、額からは大量の血が今も流れ続けている。だがその目に強い光を宿した横島の右手はあの霊力の籠手で包まれており、背中から放出した霊力でマタドールとの距離を一気に詰める

「くたばれえええええッ!!!」

「くっ!?」

マタドールは剣を鞘に収めていた。紅い布は結界となっており防ぐ事が出来ない、横島は弾丸のような勢いでマタドールの懐に飛び込み右拳を繰り出す……凄まじい衝撃音が響く、そう思ったのだが……ぽすつと言う余りに弱い音が響き

「ちつく……しよう……」

ガラスの砕けた様な音と横島の悔しそうな声……ゆっくりと倒れる横島を抱きとめたマタドールは横島を横にし

「ふっふはははっ!!!私の負けだ!!くっくっ……勝利を確信し、剣を納めた。ニニョを侮った私の慢心だ……」

顔を押しさえて笑い出したマタドールが手を翳すと、柔らかな光が横島に降り注ぎ、折れていた左腕と右足。酷い切り傷があった額の傷が塞がっていく……回復魔法まで、どこまで規格外の存在だというの魔人って言うのは……私は改めて、マタドールの底知れない力に恐怖した

「神魔よ！私は今ここに宣言する！私は敗れた！ゆえに！この男に勝利するまでは神魔と戦うような無様な真似はしない！」

力強く叫んだマタドールは指を鳴らし、結界を解除すると倒れている横島に駆け寄ると、まるで眠っているような顔と穏やかな寝息に安堵の溜息を吐く



「……動かすなよ、見た目のダメージは回復していても、中に蓄積しているはずだからな」

「そうよね。揺らさないように運ぶには担架が必要かしら」

私は無事な姿を見るだけで安心してしまった。だがシズクや美神さんが脈を取ったり、まぶたを開いて瞳孔の動きを見ているのを見て、まだ安心出来る段階ではないと言う事に気付いた。それにマタドールもまだこの場所に居る、安心するには早すぎたと反省しマタドールに視線を向ける。

「横島さんに勝つまで、だが貴方はそれを何時でも出来る」

「不戦の宣言だとしても信用出来ないね。ここで身を引いておいてまた襲ってくるんじゃないのか？」

確かにその通りだ、横島に勝つまでと言ったが、今回相打ちに持つていったのは正直運の要素が強い、小竜姫様とメドーサさんもそれに気付いたのか横島を護る様にマタドールの前に立ち尋ねるとマタドールは笑いながら背をそむけ

「ニーニヨは強かった、だがまだ未熟。ならばより強くなるのを待たほうが楽しめる。精々大事に育てるのだな……ニーニヨは神を超えるぞ。間違いなくな、そして我らの同胞となるだろう。その時を楽しみにしている、ではアディオス」

神を超える？ありえない言葉に絶句している間にマタドールは紅い布を振るうと最初からそこにいなかったように消え去る。姿を消しただけかもしれないと周囲を警戒するが、マタドールの恐ろしいまでの死の気配は感じない。それでマタドールが完全にこの場を去ったのだと悟り漸く安堵の溜息を吐いたが、実際の所全員がボロボロで負傷者も多い。この戦いを撮影していた監督にも正直腹が立っているし、横島に何もかも押し付けた形になった事で自分達の無力さを思い知り、自分に対しても激しい怒りを感じていた。こんな有様では横島を護る事なんて出来ない、自分の言葉が口先だけだった事に気がつき、歯がゆさに唇を噛み締める

「とりあえず今は外に出ましよう。あの映画監督の事は後回し、意識が戻ってない人が多すぎるし、負傷者も多いからまずはこの場所を出

る事を考えましょう」

美神さんの言葉に頷いていると神宮寺が頭を振りながら近寄ってきて

「外に転移の魔法陣を刻んできましたから、マタドールがいなければ一気に脱出できますわ。全員を集めなさい」

転移……それが出来るのなら負傷者も一気に外に連れ出す事が出来る。シズクの治療で何とか動ける私達は重い足取りで負傷者を移動させ、神宮寺の転移魔法でその場を後にするのだった……

リポート7 鮮血のマタドール その5へ続く

## その5

リポート7 鮮血のマタドール その5

私はマタドールを退けた人間の姿を見て満足げに笑いながら、3騎士にも尋ねた

「どうかな？彼は君達の御眼鏡にも叶ったんじゃないかな？」

私の問いかけにブラックライダーが口を開く

「……良き男だ……仲間の為に己を……捨てる覚悟を持つ……良き魂の男だ」

「ふん、それは蛮勇と言うのだ。愚かな事だ」

「良く言うな？赤いの……あのような気質の男を好むのはお前だろうか？」

ホワイトライダーの突っ込みにうるさいと怒鳴るレッドライダー。口では厳しい事を言っているが戦いを見ていて、1番反応をしていたのはレッドライダーだ。横島には当然強い興味を抱いているだろう……それは私も同じ事だが……

(神魔のしかも神族と魔族の魂を同時に取り込む……ありえないな)

神魔の魂の容量は膨大だ。それこそ人間の器に入る物ではない、それは分霊でも同じ事だ。しかし横島はそれを受け入れて見せた。それも神族と魔族相反する二つの魂を1つにし、己の力とした。無論制御など出来るわけも無く、暴走に近い形だったが……

(素晴らしい、素晴らしい逸材だ)

神魔の魂を納める霊具を作るだけでも桁違いの能力だと言うのに、更に言えば人間が2柱の魂を取り込むなんて普通に考えれば不可能だが、それをやって退けた。そして……恐らく神殺しへと至る可能性も十分。ベルゼブルもまさかここまでやるなんて思っていなかったのか驚いた表情をしているのが面白かった。まさに規格外の男……本当に面白いと思う

「……今代の神殺し、そして英雄……となりえる素質は十分」

「いや、あの男ならば、その善意で神魔すらも仲間とするだろう……清

濁を飲み込む度量を持っている。我らの同胞に相応しい」

「軟弱だッ！己の力で戦えぬ者は弱者だッ!!」

ブラックライダー達も横島に興味を持ったようだが、今は不味いな。3騎士相手ならば今の手加減した姿でも戦う事は出来るが、ここに魔人姫まで加わると手加減などと言うことは出来ない。人間界を下手すれば消し飛ばしかねない……それにオーデインと龍神王に軍を引くように命じたのも私……ここで戦いを始めるわけにはいかな  
い

「しかし今は彼はまだ未熟。それにマタドールとの戦いで負傷している事もある、ここは君達を楽しませた事、そしてこの私の顔を立てて退いてはくれないか？」

神魔の正規軍だって引くように言っ  
て出撃させていないと言うと  
ブラックライダーはふむと呟き

「確かに……我等が居て神魔が来ないのは……お前が止めたからだろう……良からう、明けの明星。ここはお前の顔を立てよう」

「待て。姫に供物としてあの男を捧げるべきだろう、あの気質……姫も気に入る筈だ。弱っているなら丁度いい、ここで捕らえてしまいうべきだ」

「しかし、ここで争うわけにもいくまい。前回は姫が目障りと言う理由で神魔と争う事にしたが、今は判らない」

目障り、そんな理由で神魔が壊滅的な打撃を受けたとしてベルゼブルが殺気を放つが、それを手で制する。ここで私とベルゼブルが戦い、神魔全体と魔人の全面戦争へと舵を切らせるわけにはいかない

「……この場は退こう。明けの明星、蠅の王……いずれまた会おうぞ」  
不機嫌そうなレッドライダーと中立の立場のホワイトライダーを連れて去っていくブラックライダーを見送っているとベルゼブルが私の足元に膝を付いて

「ルイ様。今回の一件はいかように？」

「……そうだね」

横島は神魔にとつても切り札となりえるが、それと同時に魔人の器としての力を示してしまった。過激派の神魔に知られれば戦力とし

て引き込もうとするだろう、魔人となる前に排除しようと言う物も居るだろう。だが幸い私の結界で神魔の偵察部隊はこの戦いを知らない、神魔で知っているのは小竜姫とメドーサだ。私が直接赴けばその問題も解決するか……後は内密に最高指導者に話を通しておけば問題無い、最高指導者は横島を殺すつもりが無いのだから、あの2人に話を通すのが一番早い

「ベルゼブル、君はこの場で何も見なかった。良いね？」

「はっ」

私の決定に逆らえないベルゼブルは短く返事を返す、ベルゼブルにじゃあ行こうか？と呟くと最高指導者の元ですか？と返事を返され違うよと笑いながら

「君が高城つて名乗つて人間のホテルにいるだろ？ちよつとそこに居る人間に言いたい事があるんだ、案内してくれるよね？」

物凄く嫌そうな顔をしているベルゼブルに命令だよと言うと、わ、判りましたと震える声で返事を返され、私は笑いながらベルゼブルと共に横島達が泊まっているホテルへと向かう事にするのだった……

見ていたモニターの電源を切り、振り返ると絶句しているアスモデウスとアスラの姿が視界に入る。だが私も驚愕し、計画が狂った事に舌打ちをした

(まさか退けるとは……まだ甘く見ていたか)

マタドールの復活に巻き込まれ、全員とは言わないが横島の仲間が何人が死ぬ計算だった。それも恐らく力の弱い、伊達雪之丞か、ピエトロ・ド・ブラドーは間違いなく死ぬ。そして他の人間も死にはしないが、それに近い重症を負うと予想していた。そして横島はマタドールへの強い憎悪を抱き、そこを基点にこちら側に引き込む予定だったんだが……完全に計算が狂った。まさかマタドールが回復魔法を使えるなんて思っていなかったし、何よりも神魔に対して不戦の誓いを立てるなんて計算なんて出来る訳も無い

「どうする？魔人が暴れ回り、我達から視線を逸らせると言う手段はもう打てないんじゃないのか？」

アスラの言葉にそう判断するのはまだ早いと口にする、マタドールは不戦の誓いはしたが、他の魔人については全く情報が無い。恐らくは以前のよう単独行動を始めていると見て間違いないだろう

「暫くは様子見だ。魔人が復活した。それだけで神魔にプレッシャーを与える事が出来る」

魔人の恐怖は神魔ならば忘れる事など出来る訳も無いだろう。それは魔人が封印された後も同じ、神魔の魂に刻まれているのだ、魔人に対する恐怖と言う物は……復活が出来るはずの最上級の神魔が今なお復活していないのは、魔人に殺されたから。魔人は神魔を殺す力を持った第3勢力だ、私達の事を警戒していたとしても、魔人に対する警戒を緩める事は出来ないのだから

「それよりも今はもつと考えるべき問題がある」

「横島忠夫だな？」

アスモデウスの言葉にその通りだと頷く、私の結界を砕きこの顔に拳を叩きこんでくれたあの男。特異点らしき能力を持ち、必要不可欠の人材なのだが、まさか神魔の力を取り込み融合させるなんて思っても居なかった

「あれは脅威だな、制御の出来ていない今の内に殺すべきではないか？」

アスラの言う事は最もだ、神魔の力を吸収し、己の力とする。そしてその力は人間でありながらマタドールに匹敵するほど……危険度からすれば排除するのが最も得策だろうが、特異点を失う訳には行かない

「殺すのは駄目だ、あれは捕獲する方向で考える」

今後神魔の警戒は強まり、横島にも護衛が着くことは判っている。捕獲することが難しいことも重々承知しているし、逆に私達が捕まる危険性もあるが、その程度のリスクを恐れているは世界を変えるなんて事は出来ない

「横島は時期を見て捕らえる。今はまだ泳がせておく」

横島の成長速度は凄まじい、そしてまだ力の底も見えていない。今後より強くなる可能性を考えれば、もつとも強くなった所で捕獲し、

こちらの力とする方が得策だ

「お前がそう言うのなら我は反対はしないが、良いのか？お前の御執心の魔人姫のほうは？」

アスモデウスの言葉に深い溜息を吐く、マタドールの復活と共に魔人姫の元へ向かったのだが、そこは既にもぬけの殻。やっと眠っている姿ではなく、動いている姿を見ることが出来ると思っていたのだが……姿を消しているのなら今は諦めるしかない。

「仕方ない事だ。だがいざれ会う事もあるだろう、焦る事は無い」

こうして蘇ったのだ、動き出すのは間違いない。だから探し回るのではなく、動き出すのを待てば良い。そうすれば嫌でも会う事が出来るのだから焦るまでもない……最高指導者に匹敵する力を持っているのだから、動き出せば直ぐに判る

「それよりもだ。次の仕事に取り掛かるぞ、アスラ」

「む？我か？殺戮か？」

殺戮か？と言う馬鹿に違うと怒鳴りながら、アスモデウスに当面の計画を伝えアスラと共に人間界へ向かうゲートで移動しているとアスラが不機嫌そうに呟く

「破壊ではないなら、我に何をさせるつもりだ？偵察などには我は向かんで」

「そんな事は判っている。私としても申し訳ないとは思っているんだ」

アスラの力を十全に使える場合は戦場以外ありえない。だがアスラの力を雑兵の神魔に使う必要は無い、寧ろ集団戦法で消耗した辺りと同じくインドの神魔をぶつけられて捕らえられる訳には行かない

「だから少しでもお前のフラストレーションを発散できる相手と戦って貰おうと思ってるな」

「ふん、我が満足出来る相手など……」日本の荒神。英雄殺しそして神殺しの神獣でも物足りんか？」

面白いように顔色を変えるアスラ。丁度それと同時に目的地に到着する、人間が愚かにも木を伐採している現場。ここは決して手を触れてはいけない神域だと言うのに……だがそれだから好都合と言え

る

【貴様ら何をしにきた】

私とアスラの気配を感知したのか、即座に山の神が現れる。鋭い4本の牙を持つ、白い猪……その姿を見てアスラの顔が獰猛に歪む、私達を睨み付けている山の神を敢えて無視して話を進める。実際私は確信しているアスラなら負ける訳が無いと

「あれを我に倒せと？」

「そうだ。この極上の霊地。畜生のものとするには些か惜しい」

今私が研究している物を形にするにはもつと大量の霊力が必要だ。霊地を確保する必要がある、そして私が見つけたのは……日本の神獣の住処だった。霊地を奪い、あわよくばその神獣も手にすると言う計画だが、いかんせん、日本と言う土地では私やアスモデウスは本来の力を発揮できない。だからこそインドの神であるアスラを連れて来たのだ

【我を畜生と呼ぶか。小童……この乙事主をツ!!!】

私の言葉に怒りの咆哮を上げる乙事主。その霊力は流石に凄まじい、思わず気圧されるがアスラは逆に笑みを深め拳を握り締め

「下がっている、お前は邪魔だ」

「ああ、判っている。後は任せたぞ」

アスラにそう声を掛け、転移でその場を後にする、その直後に響いた凄まじい轟音にそのまま居たら私も巻き込まれていたなと冷や汗を流しながら、研究を進める為にアスモデウスがいるアジトではなく、私専用の研究施設へと向かう

「後は報告待ち……そして……」

振り返る私の視線の先には高密度の魔石を惜しげもなく溶かし、描いた魔法陣とその中心に安置された聖遺物を見て笑みを深める。魔人は確かに有益だが、戦力とするには弱いなんせ私の指示に従わないのだから味方などと考える訳にはいかない、だから呼び寄せるのだ、星と人間から望まれた存在を……神魔に匹敵する力を持つ最上級の霊を英霊を呼び起こすのだ

「英霊召喚の時は近い……」



魔法陣に蓄積していく魔力にその時は近いと確信した、だが今はまだ早い。魔人の復活であちこちのManaや霊力が弱くなっている今召喚するのは得策ではない。次の満月その時を待つべきだ、そう判っているのだが私の理論が正しかったのか？と試したいという気持ちもあり

「科学者と言うのは厄介だな」

理論を試したい、実験したいと言う気持ちが強すぎる。そんな気持ちを静める為に今はまだ早いと呟き、英霊召喚への未練を断ち切るためその場を後にし、もう1つの研究室へと足を向けるのだった……

マタドールと人間の戦いを見届けた所でペイルの忠告に従い、余が封印された場所を後にし、今の人間の社会と言うのを見たが凄まじい成長を遂げているなど感心した。山よりも高い建物に、夜も明かりが消えぬ街……人間の成長とは本当に凄まじい、ペイルが用意してくれたかなり高い建物（ホテルと言うらしい）の最上階で街の明かりを見ながら背後に控えているペイルに声を掛ける

「ずいぶんと人化が上手くなったな」

顔色こそ死人のようだが、黒いスーツとか言う服に身を包んだペイルの姿はどこから見ても人間だろう。ただあの馬がブレスレットの姿になっているのは正直驚いたが、何故生き物が無機物になるのか？それは正直かなり謎だ。だが本人が良いと思っているのならばまあ余が言う事では無い

「お褒めに預かり光栄です」

余がそんな事を考えているとも知らず、褒められたと思ったペイルが頭を下げながら、余の手にしたグラスにワインを注いでくれたのでそれを口にする。昔のワインよりも遥かに美味しいな、嗜好品も進化をしているのかと感心する。魔人となった時点でその者は時間も場所も超えて余の場所に来る。そしてその間に人間としての身体を失い、骨だけの体になる。そして自らの本能に従い、己を形作っていく。マタドールは闘争を、ヘルズは速さを、だいそうじょうは救済を望み様々な姿に変化しただが、ペイルにしろレッド、ブラックにしろ全員が

揃いの黒いローブ。後は僅かな装飾だけでマタドールやヘルズエンジェルと異なり馬に乗っていないと見分けが付かない。そんなペイルが今人の姿をしている事に正直驚き、そして人間だけではなく配下もまた成長していたのだと感心した

「それで姫様。横島はいかがでしたか？」

「うむ！気に入ったら」

あの奇妙な力も面白いが、勝てぬと判っているのに仲間の為に立ち上がり戦い続けたその闘志と護ると言う意思は凄まじいと正直感心した。人間は何処まで言っても己が一番の筈だ、それは決して悪い事ではない。人間として当然の本能だ、誰も死にたくないと思うのは当然の事なのだから

「ではお迎えに上がりますか？」

「ペイル、お前は少しばかり事を急ぎすぎるぞ？」

確かに十分に気に入った。手元に置きたいとも思った、だがそれと同じくらいまだ早いと思った。魔人と化した後は技術的な物はいくらでも身につけることが出来る。だがその力は魔人と化する前の強さで決まる

「成長するのを待つのも偶にはいい物だぞ？なんなら余が直接赴いても良い」

寧ろこの目で直接見てみたいと口にするのでペイルはそれが余の望みならばと頷く、良いものはこの目で見て愛でるに限る。ペイル達は余が望むものを献上してくれるが、それではつまらないと思うのもまた事実

「近いうちにあの男を見に行く、手筈を整えよ」

畏まりましたと頭を下げるペイルを見つめていると、ホテルの中に直接転移して来る気配を感じる

「……馳せ参じるのが……遅れて申し訳ありません……ブラックライダー……参上いたしました」

「今もなお美しい我等が姫様……再び予言を授ける為……ホワイトライダー……参上いたしました」

「貴女に害為す全てを破壊すると誓いし剣を振るう為……レッドライ

ダー……参上いたしました」

馬に乗らずローブ姿で参上した3人の配下もまたペイル同様骸骨ではなく肉を持った姿をしている事に笑みを零しながら、棚から4つのグラスを手にする。それを見たペイルを手で制し、4つのグラスにワインを注ぎ

「余自ら入れた、心して口にせよ。そしてこれからも決して変わらぬお前達の忠誠を願う」

差し出されたワインに驚いた表情をしつつ受け取るペイル達を見て余もグラスを手にし口をつける姿に笑みを零しながら、余もグラスに口をつけ、これから何をするかなと美しい夜景を見ながら、かつての神魔との戦いよりも愉快な事をしよう。人間を滅ぼすや神魔と戦い続けるのも良い、だがもつと愉快な何かを見つけることが出来るようなそんな予感を感じるのだった……

ルイ・サイファアの圧倒的な神通力と魔力に当てられ、意識を失った私とオーデインが目を覚ましたのは全てが終わった後で執務室ではなく医療室のベッドで目を覚ました。襲撃ですか？と血相を変えてたずねてくる部下に頭を振りながら

「違う、ルイ・サイファアだ。あの方が訪れて、私とオーデインの兵を下げろと命じた」

ルイ・サイファアの名前はある意味禁忌とされている。神魔の両方の最高指導者を経験し、そして今の情勢を知りつつ関係無いと宣言し中立宣言。神魔の要請も蹴り続けたところか、鬱陶しいの一言で交渉に当たっていた一団の基地を完膚なきまでに破壊した

「直ぐにオーデインと最高指導者の元へ向かう。暫くは混乱すると思うが落ち着いて状況整理に当たってくれ」

敬礼し走り去っていく部下を見送り、同じく目を覚ましたオーデインと共に最高指導者の謁見の間に向かう

「なるほど、どうして動かんかったか気になっとったけど……ルイ様かあ……」

「あの方が動けば仕方ないですね、ご苦労様でした。龍神王、オーデイ

ン」

私とオーデインの報告を聞いた最高指導者は2人揃って頭を悩ませていたようだった。最高指導者である2人よりも権力を持ち、そして実力も上……厄介すぎるお方だ

「魔人の復活の方はどうなっておりますか？」

「途中までは追跡に成功したけど、振り切られたそうや」

「そうですか……」

私とオーデインが意識を失い指示を出せなかった。やはりその影響は大きいだろう

「ですが仕方の無い事です。ルイ様が動いたのならば抗えるわけも無いですから、とりあえず偵察部隊からの報告を纏めてください。暫くの間は私とサツちゃんて指示を出します」

「気にしなや、ルイ様の悪ふざけは今に始まった事じゃないでな」

私とオーデインを気遣ってくれている最高指導者2人に頭を提げて執務室に戻ると

「やあ、良く私との約束を護ってくれたね」

ルイ様がにこやかに笑いながらティーカップを手にし私達を迎え入れた。余りに自然な姿に一瞬呆けたが、ルイ様を前に気を緩める事など出来る訳も無い。即座に意識を切り替える

「そうそう君達が約束を護ってくれたから、私からのプレゼントだ」

そう笑うルイ様の背後を見ると若い神魔が折り重なるように倒れていた。それを目を見開いているとルイ様は口元を少しだけ笑いながら

「横島忠夫の排除を考えていた若い神魔だ。もう少し自分の配下はしっかりと締め付けておくんだね」

人間如きと馬鹿にしている神魔は多いんだからね、彼を失う事は避けるべきだよ？と笑うルイ様

「ご忠告感謝いたします」

「うん、それで良いよ。心の中で何を考えていても笑える、それくらいの腹芸はしてくれないとね」

その言葉に顔を歪めかけるが、それすらもルイ様は楽しんでいる。

それが判っているから必死にそれを耐える

「ルイ様、態々お越しになられたと言うことは何か他に用事があるのでしょう？我と龍神王の何の御用でしょうか？」

オーデインが頭を下げながら尋ねるとルイ様はその顔に微笑を浮かべたまま

「ベルゼブルは日本におく、私から横島忠夫の護衛としてね」

「な!？」

真の蠅の王は魔界の重鎮だ、そんな存在を護衛としておく!?その言葉に思わず絶句する中ルイ様は優雅な素振りでカップを机の上に置き、日傘を開きながら

「これは私の決定だ。それを覆す事は許さない、そして横島忠夫を見殺しにしてみる？お前達を殺すぞ」

その優雅な素振りからは想像も出来ない圧倒的な怒気と殺気を放ちながら

「あれは私も気に入った。玩具として優秀だ、だからくだらない所で死なれては困る。お前達も信用出来る護衛なり英霊を配置する事だ、良いな？今回は見逃すが次暗殺騒動など起してみろ？死ぬのは貴様達だ」

有無を言わさない口調に頷く事しか出来ない私とオーデインを見て、それで良いと笑ったルイ様はそのまま消えて行った……分身なのにあそこまで芸の細かい事をすると思わず感心したが

「おい、なんでルイ様が横島を気に入ってるんだ？」

「知る訳無いだろう……？我の陣営だから書類があ……」

魔人の問題もあると言うのに、ルイ様の命令にベルゼブルの人間界への配置……オーデインの仕事量がどれだけ増えるかなんて判りきっているの項垂れているオーデインになんと言えれば良いのか判らず。とりあえず今私に出来る事として

「書類整理、手伝おう」

「……すまない」

そんなことしか出来なくてすまないと謝り返しながら、外で待機していた部下に書類を運び込んでくれと指示を出し2人で深い溜息を

吐きながら執務室の椅子に腰掛けるのだった。頑張れとデフォルメの似顔絵つきの置手紙と紅茶のポットに私と

オーデインが激しい殺意を抱いたのは言うまでも無い……だがその後、に激しい頭痛を感じて、監視されている!?!と私とオーデインが執務室を必死に調べたのだが、当然それらしき物を見つかる事は出来なかった

リポート7 鮮血のマタドール その6へ続く

## その6

リポート7 鮮血のマタドール その6

横島君の頑張りでマタドールを退ける事が出来た。だがそれは弟子に全てを押し付けた形になってしまったことの証明であり、これからの戦いで私自身が足手纏いになる可能性を如実に示していた。こんな様だから横島君が無茶をしてみました……だから私達の誰にも横島君を説教をする資格はなかった、本来横島君は助手であり、私の援護が仕事だ。ガープの時とは違う、横島君は私達が危ないから無茶をしたのだ。くえすの転移の魔法陣で地下のプラットフォームを脱出した私達は、自分達の所為で大変な事になったと言う撮影クルーの好意でホテルまで送って貰い。まだ目を覚ます気配のない横島君や伊達達をホテルの部屋で休ませ今後の事を話し合う為に、私と小竜姫様とメドーサ、そしてくえすの4人は疲労も身体の痛みもあつたが、まだ眠る訳には行かないと言う事で談話室に集まっていた

「今回はお疲れ様でした。私とメドーサの力不足で横島さんに無理をさせた事を深く謝罪します、申し訳ありませんでした」

神魔であるメドーサと小竜姫様が深く頭を下げるが、私もくえすもその謝罪を受ける訳には行かなかった。その謝罪をこの中で受け入れる事が出来る人間がいるとすればそれは横島君しかない

「私達も似たような物ですから、小竜姫様もメドーサも頭を上げてください」

魔人と言う存在の復活なんて誰も想像もしてなかった。もし小竜姫様達もそれが判っていたら、もっと戦力を集めて来ていただろう。原始風水盤と言う霊脈を支配する、巨大な霊具。それを隠れ蓑にしたガープの策略を読みきれぬ訳が無かったのだ

「神魔としての責任を果たさなかったのにかい？」

「責任があるというのなら、今後の対応を気をつければ良いでしょう？現に私達だって役立たずだった、マタドールを退けたのは横島1人。私達には貴方達の謝罪を受ける権利も、貴方達を責める権利も無

い。皆等しく役立たずだった、それが事実ですわ」

稀有な力を持つ、未熟すぎるGSに全てを押し付けてしまった。プロのGSである私とくえすも、神魔である小竜姫様とメドーサも、それが唯一つの事実。ここで何を話し合っても、何も変わらない。それなのに今私達が身体の痛みも疲労も我慢して談話室に集まっている理由は1つ

「魔人ってなんなの？神魔の力を後天的に身に付けたとか言ってたけど……」

あのマタドールは自らが魔人と名乗った。そして横島君を最も若き同胞と呼んだ。魔人なんて聞いたことも無い、魔人が何なのか？それを知る為だけに、私達は起きていたのだ

「魔人と言うのは私もそう詳しいわけじゃない。ただ神魔にとつての天敵、本来なら時間をおけば復活する神魔の魂を壊す事が出来る存在としか知らないよ」

メドーサの言葉を聞いて私もくえすも絶句した神魔を殺す存在。そんな存在がいるなんて今まで聞いたことも無かった

「聞いたことはある筈だよ。ヨハネの4騎士、バビロニアの大淫婦、終末の笛を吹く者……それらが魔人さ」

突然割り込んで来た少女の声に振り返ると、美しい金髪を腰元で結んだ、青いドレス姿の少女が居た。どうしてここに？と思う前に私は自分の死を感じた。くえすも同じ様で顔が真っ白だ

「ルイ様。人間には強すぎる力です」

「あ、ああそうだったね。龍神王とオーデインを虐めている感覚だったよ。いや、失敗失敗」

ルイと呼ばれた少女の後ろに控える高城の存在を見えますますこれがどういう状況なのか、理解出来なくなる

「あ、あああ……」

小竜姫様とメドーサが目大きく見開き、滝の様な汗を流しながら震えているのが見える。こ、この少女はいったい何者だと言うの？

「君が横島の師匠だね。君に言っておきたい事があってね。彼は人間にとつても神魔にとつても切り札となるだろう。だから大事に、大事



に育ててくれたまえ。これから馬鹿な神魔に彼も狙われる事があるだろう、だから彼の側に護衛を置くよ」

途切れそうなる意識の中。必死のその少女の言葉に耳を傾ける

「真の蠅の王ベルゼブルを日本に常駐させよう。横島を守るためにね？だから任せるよ、高城」

高城が真の蠅の王!?そんな相手に平然と命令出来るこの少女は何者だと言うの?その少女から感じる圧倒的な圧力に意識を失いそうになるのを必死に耐えているとルイはそんな私を見て笑いながら

「私は明けの明星と呼ばれる者さ、まあルイの名前の方が好きなんだけどね」

明けの明星!?神に匹敵する者と言われた天使であり、神に反逆し墮天使となったルシファー。その2つ名を名乗る少女が穏やかに微笑む。それが私が意識を失う前に見た最後の光景だった……

「美神さん?美神さん?大丈夫ですか?」

「ほ、蛍ちゃん?」

どれほど意識を失っていたかは判らないが、蛍ちゃんの私を呼ぶ声で目を覚ます。慌てて体を起すが、高城とルイの2人の少女は無く、変わりに部屋で横にしていた蛍ちゃんや横島君が心配そうに見つめていて

「大丈夫ですか?」

「え、ええ。大丈夫よ。ちよつと疲れが出て部屋まで戻れなかったみたいね」

高城とルイの話をする訳にはいかず、疲れが出て部屋まで戻れなかったと笑いながら言う

「小竜姫様とメドーサさん、それに神宮寺さんも同じ事言っていましたね。あんまり無理をしたらだめっすよ?高城さんも世話になったって手紙を残していなくなっちゃうし……」

「それは横島。貴方が一番言ったら駄目よ」

蛍ちゃんに怒られてしょんぼりしている横島君。見た所身体に異常が無くて良かったわと安堵の溜息を吐くが、明けの明星が横島君をかなり評価していた事を思い出し、私の知らない何か横島君にある

のかもしれない……もしそうならば私は強くなければならない。いつまでも弟子に護られていては師匠としての面目丸つぶれだ

「それよりよー、メドーサさんよ？皆起きたみたいだし、早く飯に行こうぜ？俺腹減った」

「お前はもう少し師匠に対する尊敬の念を持って！この馬鹿弟子がツ！」

メドーサに頭を叩かれて痛いと呼んでいる伊達。その隣でピートが苦笑いしながら

「流石に僕も今日は何かを食べないと不味そうです。話は夕食の後にしませんか？」

「……私もだな。流石に今回は疲れた」

シズクも珍しく早く食事に行きたいと苦笑いを浮かべている。そしてその後ろではノツブとおキヌちゃんが浮かんでいて

「あの桁違いの靈力で存在を維持出来ぬとは不覚、もっと靈力を回復させねばなー」

【私はまた横島さんにござ飯をお供えしてもらいましょうか】

「ワシは飯よりも酒が」

「カオス？ちゃんとご飯も食べないと駄目だぞ？」

「そうですよ？ドクターカオス」

わいわいとしたいつもの雰囲気があつて、私達が起きるのを皆待たせてくれたのだと判り

「よーしっーじゃあ今日はぱーつと行きましようか！」

マタドールの事もあり、とても心から笑える状況ではない。ただここで暗くなっても変わらない、皆で美味しいご飯を食べましょうと笑いながら皆で談話室を後にしたんだけど、元気そうな横島君を見て、私達は完全に油断していたのだ、普段は変身したら横島君を襲う後遺症が無い物だとそう思い込んでいたのだ。だけどそんな事はありえない、横島君の身体は確実に変身後遺症に蝕まれていたのだ……

ホテルのレストランを貸切にし、今回の事件の事を話しながら夕食

を楽しんでいた。

「横島君。今回は良く頑張ってくれたけど、あんまり無理や無茶をするのは感心しないわよ。まあ……そうなっちゃったのは今回は私達のせいだから、あんまりきつく言うつもりはないけど、皆心配するからそう言うのは本当にやめてよ?」

マタドール相手に私達は殆ど何も出来なかった。横島だけがマタドールと戦う事が出来た、だけどボロボロの姿で戦い続ける横島を見て本当に血の気が引いた。マタドールが何の気まぐれで治療したか判らないが、それが無ければ確実に横島は死んでいたのだから

「すいません、今後気をつけます」

「怒ってる訳じゃないのよ?心配してるんだからね?」

美神さんが怒ってる訳じゃないのよ?としょんぼりしている横島に笑いながら言う、寧ろ今回の私達は横島に護られていた。そんな私達が横島を叱る権利は無いのだ

「そうですね、横島さん。私達は怒っているわけじゃないんです。ただ心配しているんです、横島さんはこれから成長する段階です、ここで無茶をするとどんな障害が残るか判りませんから」

「そう言う事だな。まあ、役立たずだった私達が偉そうに言えることじゃないが、無理な事をするなよ?ま、これで話は終わりだ。こんな話をしてたら美味しいものも不味くなるからな」

小竜姫様とメドーサと話が続き、これでこの話は終わりだとメドーサが強引に話を終わらせて食事をとれと横島に言う

「うーん、でもあんまり腹空いてないんですよね……」

チビやモグラちゃんそしてタマモに食事を与えているが、自分はあんまり箸が進んでいないようだ

「……体力と魔力を使いすぎているはずだから、腹が空いている筈なんだがな?」

「そうですね……消耗している分は食事などで補うのが普通ですわよ?食欲が無いって言うのはおかしいですわよ?」

食欲が無いと言う横島にシズクと神宮寺がおかしいと呟く、あれだけ体力も霊力も消耗しているのだから間違いなくかなりの空腹の筈

だ

【あ、横島さん。これ結構美味しいですよ?】

「うん、それは良かった」

おキヌさんに料理をお供えしている横島が良かったと笑う。お供え物をしているのを見ているから食欲が出ないんじゃないのかしら? ?

「ちよつとおキヌさん離れてね」

【え? な、なんでですか! ?】

判らないという感じで叫ぶおキヌさんに溜息を吐きながら、料理に突き刺さっている箸や鈴を指差しながら

「流石にこれと一緒にじゃ食欲も出ないと思うのよ。横島も良いって言ってるけど、今横島は消耗しているから今だけは我慢して」

はつとした顔をして、判りましたとしょんぼりした様子で横島から離れていくおキヌさん。その姿を見て少し罪悪感を感じたが、おキヌさんよりも横島の方が心配だからこれは仕方ない。それにもう一つ気になっていることがある

(心眼はどうしたんだろう?)

普段なら横島にあれやこれやと言う心眼が無言なのが気になる。普段は横島に関しては饒舌になるというのに、ここまで黙り込んでいるのは珍しいなと思う

「おう、横島、これ美味いぞ? あわびだよ」

「ええ、僕はあるし、食事は好きじゃないですけど、これは美味しいですよ」

「横島さん。疲れているのなら料理は運びますよ」

「姉さんの言う通りだぞ? 疲れてるなら運んでやるよ?」

横島の回りに雪之丞やマリアさん達が集まるのを見て、やっぱり横島の周りには人が集まるのよね……ただノツブだけは1人でもくもくと食事を続けているけど、よっぽど今回の事が気になっているのかしら? ? と思いながら、手にしていた料理の皿を横島の前に置いて

「さつきから全然食べてないでしょ? 少しは食べた方が良くないわよ?」

水は口になっているが、料理を食べる素振りを見せない横島に食べた

方が良いわよ?と言う。横島は判つてると返事を返し

「モグラちゃんに食べさせている分が終わったら食べるよ、角が生えてから食欲倍増してるんだよ。モグラちゃん」

角?横島の言葉にモグラちゃんを見つめると確かに短いけど角がある……何時の間に角が生えてだろうか?

「え?も、モグラちゃんに角が!」

小竜姫様が慌ててモグラちゃんの方に駆け寄ってくる。つ、角が生えていると不味いのかしら

「うきゅー?」

「た、確かに角です……す、凄いですね。普通土竜変化の竜は角を得ないで一生を終えることが多いんですよ。それをこの歳で得るなんて……」

そうなんだ……竜と言えば角って思ってたけど、そうじゃないんだ……初めて知る事実に驚いていると横島が不安そうに

「それって不味いことなんですか?」

「私ではちよつと判りかねるので、後でロンさんに確認を取っておきますね」

モグラちゃんのおじいちゃん、今のモグラちゃんの状況が判るわよね。横島は小竜姫様の言葉に安堵の溜息を吐き、皿からローストビーフを手に取り嬉しそうに口に運び……

「ん?」

あれ?美味しいって笑うと思ったのに、横島は不思議そうに首をかしげ、今度は肉まんを半分に割り、口に運び。それを苦しうに飲み込む。おかしい、この反応はおかしい、あの肉まんは出来たてだから熱いあんなふうに飲み込める筈がない。横島はあわてた様子でスープを口に含み……今度は自分の腕に噛み付いた

「「横島ツ!」」

その突然の奇行に思わずその名前を叫んだのは私だけじゃない、横島を見ていた全員が横島の名前を叫んだ。横島は泣きそうな顔で震えながら

「あ、味も……熱さも……痛みも……な、なにも判らない……」

私はきつと油断していたのだと思う。平気そうに笑い、普段通りの横島の姿に何も後遺症が無いと思いついていた。だが今までも遙かに酷い後遺症が横島を襲っている事を今私達は初めて知るのであった……

痛みも何も感じないと言って泣いている横島さんを神宮寺さんの魔法で強制的に眠らせ、食事をしている場合じゃないと眠っている横島さんを談話室に運び横にする

「みるむ……」

「うきゅ……」

「クウン……」

心配そうに横島さんに擦り寄っているチビ達を見つめているとバنداに心眼が浮かび上がる

「心眼。横島さんはどうなっているのですか？」

「小竜姫様か……申し訳ありません。私にもどうなっているのかは……今の今まで横島の心を安定させる事に集中していた物で」

横島さんの心を安定させる？その言葉の意味が判らず、全員で首を傾げていると心眼は深刻な声色で

「横島の心に別の何かが流れ込んでいたのです。激しい絶望と殺意、このままでは横島が狂う。私はそう判断し、横島の心の安定を全力で行っていました」

横島さんの心に別の何か？その信じられない言葉に思わず絶句している雪之丞さんが

「じゃああれか？横島が横島じゃなくなるって事か？」

「その可能性はある。今はそうだとは言いつけれないが、そうなる可能性は高い」

横島さんが横島さんじゃなくなる、その言葉は余りにも重く私達に押し掛かった

「それは魔人が関係している？」

「恐らく、魔人の破壊衝動が横島に強い影響を与えていると思う。魔人と横島を接触させるのは危険だ、横島が壊れかねない」

魔人と横島さんにいったい何の関係性があるというのでしょうか……なにか私達の知らない関係性が、横島さんと魔人の間には存在しているのだろうか？

「それで、心眼。横島の痛覚障害と味覚障害の原因は？これも魔人なの？」

目を赤くした蛍さんがそう尋ねると心眼は違うと断言し、机の上に置かれている私とメドーサの眼魂を見つめて

「その2つの眼魂のせいだ、横島が受け入れるには容量が大きすぎた。今の横島には小竜姫様やメドーサクラスの神霊を受け入れるだけの器がない。それなのに同時に使い、更には2つの神霊を同時に取り込んだ、その神の魂に横島の魂が圧迫されている状態だ。暫くすれば元に戻ると思う」

マタドールを退けた力。それが横島さんにここまでの影響を……私とメドーサはその眼魂を拾い上げ

「この眼魂は私達が妙神山で預かるよ。横島はきつと持っていたらまた使ってしまう」

「そうですね、横島さんはこれを持っていない方が良いですね」

確かに強力な武器だろうが、今の横島さんには強すぎる力だ。これは持つていない方が良い

「魂の問題なら、私の知り合いにそう言うのに詳しい神族がいるので、近いうちに横島さんに会いに来るように伝えておきます。ヒヤクメと言う神族なんです、分析の専門家なので」

トラブルメイカーなので会わせるのは不安ですが、眼魂の使用で横島さんの魂に負担を掛けているのなら、ヒヤクメを頼るしかない

「よろしくお願いします。小竜姫様」

深く頭を下げる美神さんに大丈夫です、任せてくださいと返事を返し、今日は解散となった。このまま集まっても、暗くなるだけと皆わかっていたから……

「あら？横島さん？」

妙神山にいるときの習慣で朝早く目が覚めてしまい。軽く走ろうと思えばホテルの外に出ると横島さんがベンチに腰掛け肉まんを手

していた

「あ。小竜姫様。おはようございます、早いんですね」

「うつきゅー!」

「みーむー」

ベンチの上から手を振るチビとモグラちゃんに手を振り返しながら、肉まんを手にしてている横資さんを見てみると、横島さんはその視線に気付いたのか肉まんを頬張り

「あふっ……いやー熱いつすけど美味いつす。ぼんやりとだけど味がわかります」

その笑顔にそれが演技ではないと判り、1日で僅かでも感覚が戻ったのが判り、安堵の溜息を吐きながら、横島さんの座っているベンチに腰掛け、さっと横島さんの手にしている肉まんを取り頬張る

「……横島さん。これは辛すぎますよ?喉渴いていませんか?」

その肉まんの味は濃すぎた。食べるには身体に悪い……この辛さでぼんやりとしか判らないのですか?と尋ねる

「……良く判りません。味が判るって事で嬉しくて」

そんな辛いんですか?と言う横島さんに辛いですよと言って立ち上がり、水のペットボトルをかって横島さんに手渡し飲むように言う。ペットボトルの蓋を開けて水を飲んでいる横島さんに今の状態に成った理由を説明する

「横島さん、昨日味や痛みが判らなかつたのは、私やメドーサの眼魂を使用したからです。あれは危険なので、私とメドーサで預かる事になりました。良いですね?」

単体で使うならまだしも、2つを同時に使用したあの姿は最上級神魔にも迫る力を発揮していた。そんな力を人間が持つっていると判れば、横島さんにも危険が及ぶ。だからあの2つの眼魂は取り上げますと言うと

「そうっすか、でもまあ俺も判ってました。あれめちやくちや身体が痛むんですよ……使ってる時死にそうでしたから」

横島さんもその危険性を判っているので素直に納得してくれた事に安心し、モグラちゃんを見つめて



「ロンさんからですけど、モグラちゃんを一時妙神山に戻します」

「うきゆう!？」

「みむ!？」

えっえつと驚いているモグラちゃんは嫌々と首を振る。横島さんはそんなモグラちゃんの頭を撫でながら

「ちなみにどうしてですか？」

「角を得たことで竜として成長する段階に入ったそうなんです。竜気の暴走などを押さえる為に修練をする必要があると」

土竜変化の竜は竜としては最下位だが、それでも竜族に変わりはない。暴走する可能性を考えれば、今の内に修行をする必要がある

「もししなかつたら？」

「邪竜となり討伐対象になる可能性があります」

竜と言うのは簡単なことで属性を反転させる。子供のモグラちゃんならなおの事だ、討伐対象となり横島さんの心に酷い傷を与えるのならばと思った

「そっか、モグラちゃん。1回おじいちゃんの所に帰らないとな」

「うきゆう」

ぽろぽろと涙を流すモグラちゃんを抱き抱えながら横島さんは優しく撫でながら

「俺は待つてるから、モグラちゃんが戻ってくるのを皆で待つてるから。頑張って修行しておいで」

「みーむ」

横島さんとチビに言われたモグラちゃんは身体を震わせたが、自分が今力を持て余している事も自覚していたのか

「うきゆう」

寂しそうに頷いた。横島さんはモグラちゃんを抱き抱えたまま

「直ぐにですか？」

「私が妙神山に戻る時に一緒に連れ帰ります。多分今日の夕方には」

私の言葉にそっかど笑った横島さんはモグラちゃんを抱き抱えて

「じゃあ、今日は目一杯遊ぼうな」

「うきゆう!」

寂しいだろうけど明るく笑う、横島さんとモグラちゃんを見ながら辛い事を言う事になったと思っていると、蛍さん達が慌ててホテルから出てくるのを見て

「怒られそうですね。横島さん」

「……フオローお願い出来ます?」

その顔を見て怒られると悟った横島さんが助けてくれます?と笑うので、良いですよと笑いながらどうやって怒り心頭と言う感じの蛍さんとシズクを落ち着かせようかと私は考え始めるのだった……

モグラちゃんを妙神山に戻らせないといけないという話を聞いたその日の夕方、モグラちゃんは小竜姫様とメドーサさんに連れられて妙神山へと帰っていった。別れる前に大きな姿に戻ったモグラちゃんに予備のバンダナをリボンのように結んでやったがああ寂しそうな姿は当分忘れられそうに無い

「みーむう……」

モグラちゃんがないので寂しそうにしているチビの頭を撫でてから頭の上乗せてやる

「大分寂しそうですね」

「だよな……」

精霊石で人の姿になっているタママモとチビが寂しそうだよなと呟いていると、シズクが俺を見て

「……また変なの拾ってくるなよ。ノツブみたいなのを」

何故バレる……なんか山とか歩いていけば、普通に妖怪の赤ちゃんとか見つけそうなのでそれを拾おうかと考えているとシズクに言われて驚いた

「ワシは変じゃないわい!」

変なの扱いされたノツブちゃんがそう怒鳴るが、蛍達に

「「いや、物食う幽霊の時点で大分おかしい」」

【横島ー!皆がワシをいじめるーツ!】

泣きながら近づいてくるノツブちゃんだったが、おキヌちゃんがあ、手が滑ったと業とらしく本を落とす。それがノツブちゃんに命中

し、ガチで泣きながら眼魂に飛び込んだノツブちゃんを見て

「あんまりいじめないでくれる?」

結構打たれ弱い所があるからと話をしていると、台湾の政府と映画クルーへの対応に向かっていた美神さんと神宮寺さんが1人の青年を連れて帰ってくる

「横島君。近畿剛一が知り合いだから直接謝りたいから連れて行ってくれて土下座するから連れて来たけど、本当に知り合い?今売れっ子のアイドルでしょ?」

「私は嘘だと思っただけですけどね。余りに見つともないので連れてきました。人の通る往来で土下座されたから、私と美神への視線が酷かったですわ」

人気アイドルを土下座させる美女2人。確かに注目されるよなあつと苦笑しながら2人の後ろを見る。それは間違いなく、あの地下プラットフォームで出会った青年で、明かりの下で見るとしみじみと思っただ

「銀ちゃんよ、金髪にあつてないぞ?」

「やつぱ?ワイもそう思うんやけど、事務所の命令やから」

「大変やな、アイドルも」

「そやろー、大阪弁も禁止なんやで?横っち」

息苦しいわーと笑う銀ちゃんに苦笑しながら拳を突き出し

「久しぶりやな、銀ちゃん」

「おうー!元気そうだなによりや、つうか横っち、GSになってたんやな、驚いたわ」

お互いに拳を軽くぶつけ合い、久しぶりに会った幼馴染との再会に俺も銀ちゃんも笑い合うのだった

「ほー横島のダチか。俺は伊達雪之丞だ、よろしくな」

「あいだだだ!馬鹿力か!?手え潰れるわ!!」

「しかし横島さんは顔が広いんですね。驚きますよ」

雪之丞と握手をして手が潰れると叫んでいる銀ちゃんに、俺の顔が広いと苦笑するピートにそんな訳じゃないんだけどなど笑っている、蛍が銀ちゃんを見て驚いた表情で

「本当に知り合いだったのね」

「おう、小学生の時の親友やな、アイドルになってるのは驚いたけど」  
前なんかの雑誌でみて銀ちゃんやんって驚いたのは記憶に新しい。  
まあアイドルだと言ってもこの中に興味のある人間はいないので

「姉さん、有名人？」

「判りません。興味ないですし」

「……たまにTVで見るな。ドラマとかで、つまらないから消すが」

【ですよ。横島さんのほうが見てて楽しいですし】

一応アイドルで有名人の筈なんだけど、ぼろくそに言われている銀ちゃん。と言うかおキヌちゃんの俺を見ている方が楽しいって言う言葉は何か正直言って怖い

「いやーそれにしても……横つち……その頭の上と膝の何？」

だけど銀ちゃんは自分が注目されないこの状況に安心しているようで、心底リラックスした表情をしている。アイドルともなると心が休まる時間が無いんやなあつと苦笑しながらチビを抱っこして

「チビや、グレムリンの赤ちゃん。んでこっちは狐のタマモ、可愛いやろ？」

「みむっ！」

「コンツ!!」

動物に好かれるんやなあつと苦笑していた銀ちゃんだったが、真剣な表情になり

「本当今回はすいませんでした。あの馬鹿監督、あそこらへんが立ち入り禁止なのは知ってたのに、無理やり進入したみたいで、本当ご迷惑をおかけしました」

深く頭を下げる銀ちゃん。美神さんと神宮寺さんを見るとその事が本当だと判り

「銀ちゃんも大変やったな。怪我してへん？」

「わいは大丈夫やったよ。でもなあ……あそこで命懸けで戦った皆さんに申し訳なくて」

そうは言うが、それに関しては銀ちゃんも被害者に近い。だからそれに関して責めるのは酷だ

「この通り銀ちゃんも謝ってるんで許してやってください」

「判ってるわよ。撮影スタッフにめちやくちや怒鳴り倒して帰って来たんだけど、どうしても横島君に謝りたいって言うから連れて来たのよ」

銀ちゃんらしいが、そんなに気にしなくていいのにと苦笑しているとポケットベルの音が響く

「うっわ、もう時間かよ!?悪い無理を言って出て来たからもう戻らんと……TVの撮影に間に合わん!」

慌てた様子で叫ぶ銀ちゃん。時間が無いのに会いに来てくれた事が嬉しかった

「そーやー横っちー!住所か電話番号教えてくれや、今度OFFの時に遊びに行くから」

銀ちゃんの言葉に頷き、手帳に電話番号と住所をメモして渡すと、おおきにと笑って出て行く銀ちゃんを見送っていると、美神さんが出かけるわよと言って手を叩く

「出かける?除霊ですか?」

「何馬鹿を言ってるんですの?」

「除霊なんか出かける訳無いでしょ?香港にいるんだから観光旅行をして身体を休めるわよ。はい、準備して準備して」

と手を叩く美神さん。そう言えば俺はホテルに缶詰だったし、虫達も動き回っていたが、それは結界の基点探しでも観光と言う状態ではなかっただろう。それなら骨休みで観光をすると言うのも納得で、俺達は美神さんの言葉に判りましたと返事を返し、観光に出掛ける為の準備をする為に談話室を後にし、各々の部屋に向かって走り出すのだった……

別件リポート その頃日本では

## 別件リポート

別件リポート その頃日本では

私に蛍と横島君を助けてと言った蓮華はそれから丸1日眠り続けた。私はその間最高指導者と交渉し、香港に向かう許可を得ようとしていたが、当然許可が下りるはずも無く。東京で娘と横島君の無事を祈るしか出来なかった。そんな中地下の研究室からポット開封のランプが点灯する。それから数分後私の部屋の扉が勢い良く開き、蓮華が飛び込んでくる

「アシユ様！姉さんと横島は!?!」

その言葉に蓮華にも逆行の記憶があるのだと確信した。だがそうなるは何故あげにはその記憶が無いのだろうか？と言う疑問が残るのだが、蓮華にとあげには目覚めるまでに相当時間の差があった。その時間の差が逆行の記憶の有無に繋がっているのだと推測していた……つとそんな事を考えている場合ではない、涙目で姉さんと横島は!?!と叫ぶ蓮華に私は凄まじい罪悪感を感じながら

「香港だ」

私の言葉に目を大きく見開きその場にへたり込む蓮華は涙を流しながら

「だ、駄目なんだよ……横島は呼び戻さないで駄目なんだよ」

私は間に合わなかったと涙を流している蓮華。一体蓮華は何を知っているのか？それを尋ねようとした時。蛍の通信兵鬼から連絡が入る

「もしもし！蛍！今状況はどうなってる！」

状況が全く判らない事に焦りと不安を感じていて、私は思わず蛍の声が聞こえる前に半分怒鳴るような感じで尋ねてしまった。蓮華がひうつと怯えた様子を見せたことで冷静になり、そう言えば初めて蛍に怒鳴ったと思い、内心慌てながら

「もしもし？蛍？状況はどうなっている？」

今度は静かな声で再度そう尋ねる。だが蛍からの返事は無く、兵鬼の通信が切れたか？と思ったがまだ通信モードはONになっている。

「何かあったのか？横島君に何かあったのかい？」

私がそう尋ねるとやっと兵鬼から蛍の声が聞こえたが、その声は消耗しきっており、更にその声は震えていた

『横島が……痛みも、味も何も判らないって……2つ眼魂を同時に使って……その……後遺症……じゃないかって』

2つの眼魂を同時に使った。その言葉に私は思わず目を見開いた、眼魂というのはまだ分析段階かつ私の見解だが、神や英霊をこの世に留める為の道具であり、ゴーストドライバーは眼魂に宿った力をドライバーを介し横島君に再現する能力だと思っている。だがこれは本来ありえないことであり、人間よりも遥かに魂の容量の大きい英霊や神を身体に宿す。そのリスクは私達が想像しているのより遥かに大きいはず

「辛い事だと思うが、2つの眼魂を使ったときの事を教えてくれ、それと横島君の今の状況もだ。それに合わせて今の内に横島君に合わせて薬を調合する」

蛍と話をしたそうな顔をしている蓮華に今は駄目だと目配せをして、机から手帳を取り出し蛍の話聞きながら手帳に今の横島君の状態で使った力をメモしていく

- ・ マタドールとの戦いで、牛若丸・ジャック・シズク・小竜姫・メドーサの5種類の眼魂を使い、1度強制解除になったのを無理やりドライバーとナイトランタンを呼び出し、更には小竜姫とメドーサの眼魂を使い、強烈な光と闇の力を使っていた、その前にそれは剣を振るうだけで突風を巻き起こすほどの強烈な力だった。だけど横島が使いこなせる力ではなく、殆ど暴走に近く。その証拠に剣を振るうだけで火花が散り、苦悶の悲鳴を上げていた

- ・ マタドールはそんな横島を完全に押さえ込んでいて、更にその上で余裕を見せ付けながら、横島を同胞と呼んだ

- ・ 最終的には横島が変身を強制化除されながらも、霊力の籠手を突き出した。それは途中で霊力となって霧散したが、マタドールは己

の敗北だと叫び、横島を倒すまで神魔への襲撃を行わないと宣言し横島の治療をして去って行った

・ ホテルに戻ると横島は平気そうに歩き回り、笑っていたので今回は後遺症が無いと思っていた。だけど結果は痛覚・味覚障害と今までよりも遥かに酷い神経に関する後遺症が出ていた

『今は神宮寺が魔法で眠らせてる。小竜姫様が今度ヒヤクメを呼んで魂を見てくれるって』

話している内に落ち着いたのか、落ち着いた声色で放す蛭に辛い事を聞いたねと謝り。手帳を閉じる

「とりあえず、様子を見るしかない。何か判ったら連絡してくれれば良い、ただ直接見ていないから憶測で話をするしか無いのが申し訳ない」

直接見ていれば症状などから予測出来るが聞いているだけなので確証がない。とりあえず今私に出来る事とすれば、聞いた症状から予測される病状に効く薬を用意するだけだ

「とりあえず小竜姫の指示に従って行動して欲しい。思い込みや考え込んで行動しない事。いいね」

未知の力なのだから何が起きるか判らない、今回はそれがかなり強く出てしまっただけだと思いたい

『う、うん。判った、じゃあお父さん。横島への薬をお願いね』  
「ああ、判ってる心配ないよ」

私に任せてくれれば良いと返事を返し、通信兵鬼の電源を切ると同時に立ち上がり

「すまない蓮華、横島君の方でとても重大なトラブルが発生した。横島君が戻るまでに準備しなければならぬものが山ほどある」

内線ボタンを押してあげはの面倒を見ていた土偶羅魔具羅を呼び寄せる

「アシユ「お父さんだ」あ、はい。お父さん」

娘にアシユ様呼びは嫌なのでお父さんだときっぱりと言う、困惑しながらも頷く蓮華にそれで良いと笑いかけながら

「地下の研究施設に必要な物を用意する。だから暫くの間。土偶羅魔



具羅と協力してあげはを頼む、物凄い元気だからな。大変だと思いが頑張ってくれ」

蓮華の肩を叩き地下の研究室に向かう。時間的な余裕は1日か2日。その間に考えられる40通りの症状から必要とされる薬の調合のパターンを考えると確実に徹夜だがそんな事を言っている余裕はないな。私は早足で地下の研究室に向かうのだった……なお、アシユタロスの部屋に残されたベスパこと蓮華は

「蓮華ちゃんですか！あげはのお姉ちゃんが増えたでちゅー♪」

自分の周りを楽しそうに跳ねるあげはと、幻術で隠されているが、顔や足が欠けている土偶羅魔具羅を見て恐怖したのは言うまでもない。小さい子供は天使で悪魔と言う言葉を帰国後起きている蓮華を見て、絶句している蛍に蓮華はそう告げるのだった……

「やあ、やあ、会長殿」

「何しに来たの？」

柩がにやにや笑いながら会長室に尋ねて来た。それだけで猛烈に嫌な予感を感じた、探しているときは出て来なくせに、忙しい時にはふらりと現れ更なる面倒ごとを起していく。それが柩に関する私の評価だ、そして柩はそんな私の考えは当然判っているので笑みを浮かべている

「それで今回はどんな厄介ごと？」

絶対面倒な案件を持って来たに違いないと思いつつながら、書類を整理しながら尋ねると、柩はくひひつと笑うと思っていたのだが私の耳に届いたのは真剣な柩の声だった

「神代家が横島忠夫を利用するのならば神代の家は滅ぶよ」

その突然の言葉に書類から顔を上げる。その表情から笑みは消えている

「相談役が動いているの？」

神代家当主と言っても私はGS協会の会長も兼任している。ゆえに神代家の動きを全て知っているわけではない、神代家の分家に良い神降ろしの技を持つ10歳にも満たない少女が居ると聞いた。もし

私が解放されなければ、血脈と言う事で神代家の当主となっていだろ  
う

「どこの世界にも権力欲の強い馬鹿は居るさ、それが人間だからね。でも人間を唆すのは悪魔さ、組織は一枚岩じゃない、ちゃんとGS協会と神代家両方を纏め上げるくらいの度量は見せなよ」

最後まで笑う事無く会長室を出て行くこうとする柩。ああ、そうだ思  
い出したと言って振り返り

「横島は2つの神様の力を宿った眼魂を同時に使って痛覚障害・感覚  
障害・味覚障害を発症したらしいよ」

「なんですって!?!」

予想外の言葉に思わず声が大きくなる。だが柩は冷静な口調を最  
後まで崩す事無く私を見つめながら

「強い力には相当の対価を、当たり前の話だろう?横島は特別じゃな  
い、普通の人間さ。それを忘れない方がいい」

そう言うんじゃあねと呟いて帰って行った柩。私は直ぐに電話を  
手にし、本宅の私の教育係だったお梅さんに電話をする

「もしもし?お梅さん?」

『これはこれはお嬢様。お元気そうな声を聞けて婆は嬉しいですよ』

婆と言っているが、その声は若々しく力強さに満ちている。私が誰  
よりも信用する人……それがお梅さんだ

「急なお願いなんだけど良いかしら?」

『構いませんよ?どうなさいました?』

彼女だけは私を裏切らない。私が神代家に戻った時もみすみす封  
印されるような小娘に当主は相応しくないと言う相談役を一喝し、私  
を認めてくれた人だから。その後に関談役を解散させ、再結成したが  
恐らく私が斬り捨てた連中が今の相談役になんらかの指示を出して  
いる筈だ

「相談役が動いたら教えて欲しいの」

『……何か問題が起きていますね?判りました婆にお任せくださ  
い』

お梅さんにありがとうと返事を返し、受話器を置く。東京に居ては

神代家の本家で何が起こっているか知る事は出来ない、だが私は今GS協会を離れる訳には行かないのだ  
(うつつとうしい事になってきたわね)

GS免許を返納したGS達と退職届を出したGS協会の役員。そのおかげでGS協会の再編成は出来たが、そのせいでいらぬ火種を作り出してしまった

「これは冥華さんに協力を頼まないと無理かもしれないわね」

私だけでは抑えきれない、情けない話だが私では経験が足りない。長い間GS協会の役員として動いていた狸達と張り合うには経験が足りてないのだ、そう思い冥華さんに六道の隠居としてではない。正式に私の相談役として、GS協会に復帰して貰おうと受話器に手を伸ばそうとした時。会長室の扉がノックされる

(……まさか盗聴?)

一瞬その可能性が脳裏を過ぎり、返事を返すのを躊躇う。すると廊下からノックの音が小さかったかしら?と言う眩きが聞こえ、私の目の前で会長室の扉が粉碎された。そのあまりの光景に思わず絶句する

「あちゃー……ちよつと強く叩きすぎちゃったかしら?ううん違う違う、この扉が老朽化したのね、うん。きつとそう」

扉をノックだけで粉碎した何者かは失敗失敗と眩きながら、部屋の中を見て居るじゃないと微笑み残っていた扉も粉碎して会長室に入ってきたのは予想に反して女性だった。美しい紫の髪をし、同性でもうらやましいと言わざるを得ない完璧な肢体、そして強気そうな目つきをした女性は私を見て手を差し出す、私がそれを握り返すと女性は穏やかに微笑みながら自らの名前を口にした

「天界から日本に常駐するように命じられて現界した、聖女マルタよ。よろしく」

それは三蔵様に続く2人目の英霊が日本に現れた瞬間だった……

「あ、そうそう。なんか上の命令で教師をやれとか言われたんだけど、どこか良い学校ってある?」

きよ、教師ですかあ……それは恐らく人間側の戦力UPって命令よ

ね。私は少し考えてからどうせ冥華さんに電話するんだし、六道女学院でマルタさんを預かって貰おうと思った。あそこの生徒は少し実戦経験が足りない傾向にあるって良く聞くから、その解消にもなる。それに普通の学校じゃ、英霊が教師をやる意味が無いしね。霊能科のある六道女学院が最も適役だろう

「心当たりがあるので電話します。少し待って下さい」

ええ、良いわよと頷く姿に安堵の溜息を吐きながら受話器に再び手を伸ばすのだった……

「シルフェニア、お前には淑女としての嗜みが足りん」

「ひーん……」

ここ数日ずっと私の教会で行われている、親子のやり取りに微笑ましい物を感じながらも、本当はこんな事をしている場合じゃないんだけどなあと心の中で深く溜息を吐く。原始風水盤……起動してしまえば現世と冥界の関係さえも逆転させてしまう最悪の兵器と言える。本当なら私も付き添い、原始風水盤の起動を阻止する為に尽力するべきなのだが……原始風水盤は設置されるだけで周囲の環境に強い影響を与える。聖句は勿論その効果を発揮しないだろう、本気で戦ったとしても私の戦いの基礎は聖句で身体を強化しての肉弾戦にある。どのみち聖句を使うことが出来なければ私の実力は半減する、美神君たちの足手纏いになるわけにはいかないからこうして日本に残ったが、美神君達の事が心配で仕方ない

(情けない、なんと情けない事か)

本来ならば率先して戦うべきの自分が足手纏いになる。それの何と情けない事か……

「お前は父の恩人に迷惑を掛けた。お前はそのことを十分に理解していない、ゆえにお前の牙は我が良いと判断するまで封印する」

「酷い！牙返してくれないと横島君の血が吸えないよ!!」

「それが駄目だと言っているんだ！この馬鹿娘があッ!!」

ブラドー伯爵の一喝が教会に響き、窓がビリビリと揺れる。シルフィー君に至っては本気で泣く10秒前と言った感じだ

「どうも我はお前の教育を間違えていたようだ。血を吸う為に何度も襲い掛かるとは……恥を知れッ!!」

「ひょううっ!!」

教育をし直すと言ってシルフィー君をスパルタ教育で躰けなおしているブラドー伯爵。一体何時までこのやり取りは続くのだろうか？

「伯爵家の娘だが、状況次第では横島の元へメイドとして「メイド!」それはそれで……ふぎやつ!」

ブラドー伯爵の拳骨がシルフィー君の頭に叩き込まれ、教会の床に倒れこむシルフィー君を見ながら深い溜息を吐きながらブラドー伯爵は

「教えてくれ唐巢、我は娘の育て方を間違えたのだろうか? いや、確かに島を護る為に眠りについたのは我が悪かろう。だがメイド長にこういう風に育てよと命令を下しておいたのもまた事実。あの者は厳しい事で有名だったのだ……だから安心して任せた、何故こんな風に育ってしまったのだ」

沈鬱そうにどうしてだ? と尋ねて来るブラドー伯爵。だが私は独り身なので当然そんな事は判らず、シルフィー君が横島君が好きだと言っているのを思い出し

「あれじゃないですか? 初恋で暴走?」

そうだとしても酷すぎると嘆くブラドー伯爵。シルフィー君は頭にたんこぶを作って気絶中……なんだこれ……本当になんだこれ……: お願いだから早く美神君達帰って来てくれないだろうか? それか蝙蝠の使い魔でも良い、どうなったかな教えてくれないかな……

唐巢和弘は美神達が香港で観光を楽しんでいる間。シルフィーとブラドールの親子喧嘩に巻き込まれ、その胃を激しく痛めることになったのは言うまでもない……

リポート8 戻って来た日常 その1へ続く

## リポート8 戻って来た日常 その1

リポート8 戻って来た日常 その1

原始風水盤の起動を阻止する為に香港に向かい。そこで魔人と名乗る人外に遭遇し、横島君が眼魂を2つ使い、痛覚障害と味覚障害を発症……美神さんとくえすからの報告書を見ながら心の中で呟く

(休暇よ……さようなら)

舞ちゃんが東京に来たら一緒に観光旅行とか考えていたけど、また新しい問題。勝手に動いている神代家の一部に、魔人……どう考えても長期休暇を取る事は不可能だろう……もう観光旅行は諦めて、私の家に泊まって貰おうかな?とか考えていると私の部屋の電話が鳴る  
「もしもし?何か急用かしら?」

『神代会長。美神令子様が尋ねて来ましたが、アポイントメントが無いので時間が無いなら引き返すと仰っていますか?どうしますか?』

受付の女性からの言葉に少し考えてから通してくれる?と返事を返す。美神さんもくえすも一流のGSなのでリポートは正確だ、だがこうして尋ねて来たと言うことは……2人のリポートの1番最後の所を見る

(厄介な事になってるしね)

横島君が変身して戦っている所を映画の撮影スタッフに撮影されてしまった。映画のシーンとして使うと強硬姿勢を崩さない監督。しかもその監督は日本や海外の政治家と交友が深い上に、自身が台湾の有権者が親族であり、それを盾にして断固としてGS協会と事を構える姿勢を崩していないと聞く、だが映画のスポンサーや、撮影スタッフは命を賭けて戦っていたGSに対して失礼だと反対しているとあるが、それに関しての問題だろうか?そんな事を考えていると扉がノックされたのでどうぞと声を掛ける

「ごめんね琉璃。忙しかったでしょ?」

「いえ、大丈夫ですよ」

丁度一区切りついた所ですからと笑いながら、どうしたんですかと尋ねると美神さんはやはり私の考えていた通り

「映画の事をお願いしたいんだけど……」

「ああ、それですね。大丈夫ですよ、動く準備はしています」

GS協会としても圧力は掛けるつもりですし、どんなシーンを撮影したのか判らないが、美神さんやくえすがここまで危惧するのならそれは決して公開していい物ではないだろう。

「でもあの監督意地でも公開するって言っていたけど？」

「それなら冥華さんにも協力してもらいましょう。前の六道女学院での模擬戦の事でも緘口令とか色々やってくれましたし」

別の世界から訪れた人達との戦いを六道女学院で生徒に見せている。その時も色々協力してくれた、流石に日本の映画の撮影会社にそのシーンを使う事を禁止するくらい、六道女学院の全員に緘口令を敷くよりもっと簡単な事だろう。政治家との関係を盾にしたとしても、冥華さんと喧嘩する事を選ぶ政治家なんている訳ないし

「でもその事なら、電話でも済みましたよね？直接尋ねて来た理由は何ですか？」

この程度の内容なら電話でも済んだはずだ。こうして尋ねて来たのは盗聴対策や絶対知られたくない何かがある筈だ

「私とくえすは香港で明けの明星に会ったわ」

その言葉に大きく目を見開く。明けの明星……それが意味する神魔の存在は霊能に關係する者ならば直ぐに理解できる

「その明けの明星が自分の部下を日本に配置すると言ったわ。その部下の名前は「真の蠅の王」……横島君が關係してるわ」

その言葉に本気で泣きたくなった。どうしてこんな大事ばかり続くのだろうか？しかもその全てに横島君が關係している……どうして横島君の周辺にこんな事ばかり重なるのだろうか？私達も知りえない、何か横島君にあるのだろうか？そうでなければ、これだけ大きな事件が続く事に対して説明がつかない……だがその何か何かが判らない。ただ判っているのはこれから横島君が中心になって今回

のような事件が続いていくという事だろう……そしてこのままでは人間はその力に飲み込まれていくだけ、神魔でさえも抗う事の出来ない何かが起こりようとしている

「それと魔人の復活で私は実感したわ、私もくえすもだけど……このままじゃ、これからの戦いに私達は足手纏いになる。暫く東京を離れるかもしれないわ」

美神さんも私と同じ考えなのか、真剣な表情でそう告げる。目的地は言うまでも無く、妙神山だろう……目的地と強くなると言う意思、それらを全て知り、その上で聞いた美神さんの言葉に頷き、私は断言した

「それは流石に許可出来ませんね。美神さんの考えも判りません、神魔が動いている事も理解していません。そしてその上で言います、今は許可出来ません」

「……ちなみに理由は？ 勿論ちゃんとした理由があるのよね？」

美神さんの言葉にちゃんとした理由がありますと言いながら机から極秘と印の押された書類の束を取り出す

「本当は国際GS協会と、バチカンの関係者にしか閲覧許可に出していない物ですが……どうぞ」

世界レベルの極秘の書類……美神さんが真剣な表情をしてその書類を手にし、それを目を通していく。読み進めるに連れてその顔色を変えていく……私だつてこの書類を見た時は同じ様な顔をしていたのでその気持ちはよく判る

「……これは確かに、今東京を離れる訳には行かないわね」

声を出して言う訳にも行かない。それほどまでに深刻な問題が今日本で起きているのだ

「すいません、美神さん達の気持ちは判りますが、今は我慢してください。その変わり、先日日本に天界から2人目の英霊が派遣されました。彼女に話を聞いてみるのも、なにか言いヒントになるかもしれませんよ」

「彼女？ 女の英霊って事？……ちなみにその英霊は頼りになるのかしら？」



美神さんの言葉に間違いありませんよと返事を返しながら、その英霊の名前を口にする

「聖マルタ。ドラゴン退治の聖女様です、今は六道女学院で教員とし、人間に紛れて行動しています。時間を見て会いに行ってみてください」

英霊として活動すれば、人が集まり思うように動けなくなると言う事で、神通力や霊力をかなり制限して人間に化けている。それでも英霊としての実力も、知識も本物だからきつと頼りになると思います  
「……判ったわ。時間を見て会いに行ってみるわ、それで今回の事は少し時間を置いてから、引き受けるわ」

「すいません、負担ばかりを掛ける事になります」

今回の事件の事は間違いなく、美神さんや唐巢神父にしか頼む事が出来ない。小笠原さんは今フリーだけど、呪術師と言う除霊スタイルでは無理だし、冥子さんでは暴走して終わり、調べる物が破壊されて情報を得る事が出来なくなる。唐巢神父も今はフリーだけど、今は自分を鍛えなおしている段階で依頼は全て断っている、だから無理に依頼を頼む訳にはいかない

「別に良いわ、今動けるのが私だけって言うのは判っているから。琉璃もあんまり無理をしないでね」

そう笑って会長室を出て行く美神さんを見送り、私は机の上の書類を捲り溜息を吐いた

「本当、これからどうなるのかしら」

その書類に記されていたのは、日本のとある山の中で感知された膨大な魔力反応が2つ、そしてその2つよりも遥かに強い神通力の反応……神魔も把握していない荒神としての側面が強い神……しかも規格外の存在がそこにいた。しかし出現反応から数時間後に周囲に響き渡った断末魔の雄叫び……それは土砂崩れや、地震と言った災害を起し、その周辺は今立ち入り禁止区域になってしまっている

「まああの山を開発しようとしていた企業が撤退したのは幸いだけど……それでも、マイナスが大きすぎる」

その山の土地の所有権を強引な手段で手にした黒い噂の多い企業

が撤退したのはプラスだけど、神獣が倒れた事で周囲の霊力のバランスがおかしくなっている……そこで何が起こっているのか調べるという危険すぎる仕事を美神さんにまた押し付けてしまった。彼女にしか頼む事が出来ない今の状況に私は深く溜息を吐くのだった……

私は今日一部の最上級神魔との話し合いの場に召集された。私は過激派と言うことになっているので神魔の両方から追われる身だ。更に言えば、私の事を知られれば、どこにガープによつて操られた神魔が居るか判らず。ガープ達に私が敵と知られてしまうリスクが高く、手紙や通信による連絡が主になっていたが、今回はそうも言つてられなくなつたのだろう

「お疲れ様です。アシユタロス」

「すまんなあ、呼び出すことのリスクは承知しとるんやけど、今回ばかりはなあ……」

神魔の最高指導者に大丈夫だと返事を返しながら、会議室を見渡す。そこには大体予想通りの面子が揃っていた

(ハヌマンに龍神王。オーデインにビュレットか……)

GS試験の時以来魔界で療養していたビュレット。今もまだ壁に立てかけられている松葉杖や、包帯が巻かれているのが見えるのでまだ本調子ではないだろうに……

「おい、アシユタロス。話すなら早く話せ、座っているだけでも俺は辛いんだ」

だったら来るなよと思いながら、原始風水盤そして魔人について私を知りえた事を纏めたりレポートを全員に配つてから口を開くのだった

「原始風水盤何をするつもりだったか？それがずっと疑問でしたが、ガープの目的は魔人の復活だったようです」

私の時は魔界を呼び起こし、神族の力を削ぎ、魔族や悪霊の力を強化すると言う事を目的としていたが、ガープは魔界を呼び出すのではなく、その膨大な魔力を全て空間に干渉させる事で、亜空間に封印されていた魔人全ての開放。魔人を復活させる事ができなければ、その

魔力を用いての英霊召喚や、魔界の召喚、そして日本のある山での神殺し……考えられるだけでも4通りの利用方法を考えていたようだ

「規格外だな。流石にこれだけ策を用意されては読みきれんな」

「失敗しても、そのままの流れで自動的に他の策が起動する。厄介すぎるの」

オーデインとハヌマンが眉を顰めながらそう呟く、原始風水盤はある意味囷だったというのが正直な所最大の驚きだ。起動しようがしまいが、ガープにとつてはマイナスではなく、起動すればそれでよし、失敗しても原始風水盤なんていう規格外の魔導具の起動を阻止するために神魔が動き、更に言えば日本の有力なGSも香港へ向かう。何重にも策を張り巡らせ、幾つ物の布石を打ち、最終的には最大の戦果を上げた。恐ろしいほどに有能な軍師であり、策略家と言わざるを得ない。誰が原始風水盤を囷に使うなんて考える？あれだけの魔導具を囷にするなんて誰も考えない、だからこそ有効な一手として動き、GS試験に続き再び神魔の対応が遅れてしまった

「それと日本で殺された神ですが……特定は出来ていません。そちらのほうでは何か判りませんか？」

ガープが周囲にいるかもしれないので私は動く事が出来ていない。神魔のほうで情報を得てないですか？と尋ねると龍神王が完全に特定は出来ていないかと前置きしてから

「凄まじい神通力を伴った断末魔の叫びと、周囲の霊力のバランスの変化から相当長い年数を生きた神である事は判っている。そしてその神通力の分析だが、祟り神としての面が強い事までは判明している」

長い年数を生きて、祟り神としての側面が強い神……当然ながら日本には該当する神が多いので特定など出来る訳もない。そもそも日本は八百万の神と言う通り、かなりの数の神がいるのだから特定など出来る訳も無いか。となると……ガープの目的としては、どこにあるのか？神が死んだことである土地は霊脈としての効力を失っている

……

「神殺しに意味があったんですかね？」

「いやあ？意味無いやろ？人間が神殺しをするのは判るわ、その権限を手にするからな？でも神が神を殺しても特に意味は無いやろ？」

神殺しをした意味が判らない。霊脈を1つ潰し、神の権限を手にする訳でもない。どう考えても神殺しにかかる労力と手にする物の釣り合いが取れない……

「その神が動物だったらどうだ？横島に力を貸すことを阻止しようとしたんじゃないのか？」

ビュレトがそう呟く、確かにその可能性は僅かにあるが、その神が横島君に力を貸すとは判らないし、何よりもそんな不確定な事のため動く意味が判らない。

「考えても判らない、この件は保留にして真の蠅の王についてはどうなっている？」

「ああ。日本のどこかにいることは判っているよ。どこに居るかは判らないけれど……」

ふらりと酷く疲れた顔で訪れて、胃の辺りを押さえて暫く探さなくてくれと言って消えて行ったよと言うと全員が神妙な顔になり、全員の声が重なった

「「「そつとしておこう」」」

穏健派と名乗っていたが、実際は傍観派で、今回動いたのだから自分の名を騙る痴れ物を潰す為だったと言うのに、ルイ様に横島君を護れと命令され、魔界に帰りたくても帰れないベルゼブル。きつと有事の時には協力してくれると思うので、それまではそつとしておこうと全員の意見が重なった

「さてと、ではここからは原始風水盤について蛍さんからのレポートを受け取っていますよね？」

キーやんの言葉にはいつと返事を返し、蛍のレポートを靴から取り出し、先ほどのレポートと同じ様に全員に配る。魔人の復活は全員が知っている、今知りたいのは香港で何があったのかだ。私は蛍から預かっていた記録用の通信兵鬼を取り出し、会議室の椅子に座りながら「映像はそれほどいい物ではないですが、ここに戦闘の一部の記録データがあります。そちらのほうを再生しますね」

会議室の面々にそう声を掛けてから、私は目の前のスクリーンに香港での戦いを映し始めた。画質は悪く、音声にもノイズが混じっていたが横島君が相当な無茶をしたこと……そしてマタドールが横島君を同胞と呼んだ事を含む、戦いの結末を見終えた面々は無言で私が提出したりポートに目を通す。2つの眼魂を使い、しかも神族と魔族と相反する力を取り込んだ横島君は魂に過負荷が起き、大分ましになったとは言え、まだ感覚障害や味覚障害が残っている。だからヒヤクメの派遣し、横島君の状態を調べて欲しいと頼むとキーやんは真剣な表情のまま頷き

「判りました。近い内にヒヤクメを派遣します」

「よろしくお願ひします」

私の方でも調べる事は出来るが、魂は私の専門ではないし、それに私はあくまで人間として横島君に接している。そこまで専門的な道具を使うことが出来ないと言う事もあり、ヒヤクメを派遣して貰える事になって安堵の溜息を吐いていると龍神王が顎の下に手を置いて沈鬱そうな表情で

「馬鹿な部下が暴走しないか不安だ」

「同意する」

魔人が同胞と呼んだ。それだけで危険だと判断する馬鹿もいるだろう、現にルイ様がそれを炙り出し全部捕えるという話も聞いているが、何処にも馬鹿と言うのは存在する。その全てを捕えるのは難しい事だと思うが、それでもやって貰わなければならない

「そこは自分の部下なのでしっかりと手綱を握って下さい」

「そやでー？上司としての責任は果たしい」

最高指導者に言われて深い溜息を吐く龍神王とオーデイン。それについてビュレトが口を開く

「魔族からも護衛を増やすべきだな。横島は今回の件もそうだが、GS試験の事もある。あいつが鍵となっていているだろう」

ガープも一目起き、そして今までの事件に何らかの形で関係している横島君。彼を警護するそのは最重要だが、それに関して、天界から英霊が2人、魔界からは、メドーサとブリュンヒルデにベルゼブル。

戦力的には相当数を横島君の周りに配置している、今重要なのは警護を増やす事ではない。今最も重要なのは横島君達自身が強くなる事だ、それは斉天大聖も判っているのかキセルの灰を落としながら真剣な表情で

「近い内に妙神山に向かわせてくれい、ワシが面倒を見る」

神魔が動いたとしてもどうしても初動に遅れが出る。となれば神魔が動く準備が整うまで人間達で持ち堪えてもらう必要がある。となれば妙神山で修行して貰うのが一番確実だ、当面の動きが決まった所で私だけ先に人間界に戻り、神が死んだと言う山の調査に遠隔操作式の兵鬼を飛ばした後椅子に腰掛け、引き出しの中にしまっておいた物を取り出す

「実験をしている場合じゃないか……」

ドクターカオスから提供して貰ったメタソウルのおかげでやつと複製する事ができたゴーストドライバー。無論変身できるという保証も無く、安定感や使用者の身の安全も保証されていない。今のこの状況で実験する事は出来ないなと溜息を吐きながらそれを机の中に戻すのだった……

香港から戻って2日。本当なら学校に通っているのだが、俺は自宅療養と言う事で学校を休む事となっていた。その理由は香港でのマタドールとの戦いで眼魂を2つ使ったマスタードラゴン魂の後遺症……つまりは味覚障害・感覚障害・痛覚障害の3つだ。魂に過負荷が掛けられた事により、霊体が麻痺しているのが原因だと聞いている。これは時間を掛けて身体を動かす事で徐々に馴染ませて行く必要があるらしく、カオスのジーさんが出してくれた薬を朝昼晩のみ、ずつとリハビリを繰り返していた。それに感覚障害と痛覚障害よりも深刻なのが味覚障害だ。香港では味が判ると言っていたが、日本で味噌汁を飲んだら味が殆ど判らなかつたし、痛覚などもかなり麻痺してどこかで怪我をしたら危ないと言う事で自宅療養となったのだ。今もリハビリを終え、昼食になったのだが……

「うーん……」

シズクが用意してくれた小さなお椀に入れられた味噌汁を口にす  
る。味噌の香りは感じるのだが、口に残るのは暖かいお湯と言う感じ  
で全く味が判らない。香港での料理は味が濃いから認識出来たよう  
だが、和食関連は殆ど味が判らない……日に日に味は感じるようにな  
って来ているが、それはかなり味の濃い洋食や中華ばかりで、今日  
こそはと思ったのだが……やっぱり今日も駄目だったようだ

「……やっぱり駄目か？大分濃い目にしてあるんだが……」  
【確かに、これなんか結構辛いぞ？いや、美味いんじゃないか？】

味噌汁を飲んでいゝツブちゃんがそう笑うが、やっぱり味が判ら  
ない。自分の感覚ではなんとも無いのに、どうして味を感じる事が出  
来ないのか？それが不思議で仕方ない、そして食事を用意してくれる  
シズクに本当に申し訳ないと思う

「じゃあ、横島くっちはどうかしら？」

【和食で駄目なら、洋食です！】

蛸とおキヌちゃんが用意してくれたのはケチャップベースで煮た  
ソースで煮たミートボールと、かなり色が濃い肉じゃが。先にミート  
ボールに箸を伸ばす。良い香りがするんだけど、これで味を感じない  
最悪だなど思いながら口に運ぶ

「あれ？」

味は僅かに感じるってレベルなのだが、歯に当る食感がやけに強  
い、それに香辛料の香りがかなり強く、味をあんまり感じないので美  
味しく感じた。俺の反応に気付いたおキヌちゃんが笑いながら説明  
してくれた

【どうですか？ミートボールの中に蓮根とかを入れて食感を強くし  
て、ケチャップベースのソースにも色々と香辛料とかを色々加えて見  
たんです。美味しいですか？】

ここまで色々工夫してくれた事に胸が一杯になりながら、美味しい  
と口にする。味を殆ど感じないので、飲み込む形が最近多いので、余  
計に美味しく感じる

「……なるほど、食感と香辛料か……味を感じないなら、そっちの方向  
性で……」

【おおーこれは行けるッ！食欲が進むな】

ミートボールを味見して、ぶつぶつ呟いているシズクと、美味しい美味いと食べているノツブちゃんを見ながら今度は肉じゃがに箸を伸ばす。

「あ、美味しい」

肉じゃがは出汁を使う料理なので味を感じるか正直かなり不安だったのだが、一口目からしつかりと味を感じて驚いていると蛍があんまり体には良くないんだけどねと呟いてから

「水も出汁も使わないで酒と醤油と砂糖で煮詰めたのよ。肉じゃがつて言うよりもかなり味の濃いすき焼みたいな感じね」

そっかあ……だから味をかなり強く感じたのか。とは言え、水も出汁も使っていないので、かなり味が濃いのでそう連日食べれる物じゃないけど、ここまで味を強く感じると食欲が出て来る。久しぶりに強く味を感じる料理を用意してくれた蛍やおキヌちゃんに感謝しながら、俺は食事を進めるのだった……

「焦らないでいいから、ゆっくりね？」

昼食を終えて、少し休憩してから再びリハビリを再開する、今やっているリハビリは物を掴んで、動かすという物なのだが……手の中でめきりと音を立てる割り箸に眉を顰める

「……落ち着け、ゆっくりだ」

シズクが俺の手を取って、握り拳をゆっくりと解いて割れた割り箸を取って、新しい割り箸を握らせてくれる。感覚障害と味覚障害と痛覚障害、3つの障害が今俺を襲っているのだが、1番問題として大きいのが、感覚障害だ。物を掴んだりしても感触を感じないので力を入れすぎてしまい、物を壊してしまったり、何かを壊して、それが手に刺さっていても痛みを感じないので危険だと蛍やシズクがかなり心配しているのがこれだ。さっきの食事では壊れないように金属製の箸を使っていたが、プラスチックとかでも握り潰してしまうので学校に行くわけにも行かず、更に言えば

「みーむう……」

「コン」



チビを撫でたり、抱っこする事ができない。握り過ぎてチビやタマモに怪我を負わせるかも知れない思うと怖くて触る事が出来ないし、チビもタマモもそれが判っているので近寄って来ない。寂しい思いをさせているのが判っているので早く感覚を取り戻したいと思うのだが……

【横島。焦るな、徐々に良くなって来ている。ここで焦って怪我をしては意味が無いぞ】

【そうですよ？前は手に持ったら直ぐに握り潰していたじゃないですか】

心眼とおキヌちゃんに焦る事はないと励まされるが、前は意識しなくても出来ていた事が今は出来ない、それがもどかしくて、焦りばかりが募って行く。あの時マタドールを退ける為に小竜姫眼魂とメドーサ眼魂を同時に使ったことは間違いではないと思っっている……だけど俺のせいでシズクや蛍達に負担を掛けていると思うと自分が情けなくなつて

「あいたツー」

思考がどんどん暗い方向に向かっていた時。蛍にでこぴんをされて思わず顔を上げると悪戯っぽく笑う蛍の笑顔が目の前にあって

「だから焦っても仕方ないでしょ？時間はあるんだからゆっくり、身体を治しましょう？」

シズクとおキヌちゃんにもその通りだと言われて、1人焦っていた自分が何か恥かしくなつて来た。蛍の言う通りだ、美神さんもカオスのジーさんも時間を掛けなければならぬと言っていた。それを2日程度でどうにか出来る筈が無いのだ、時間を掛けて少しずつでも進んでいくしかない

「判った。ゆっくり頑張ってみる」

今度は割り箸ではなく、指先の感覚を掴む為のルービツクキューブに手を伸ばし、蛍達が見守ってくれている中必死で手の感覚を取り戻す為。日が暮れるまでルービツクキューブを触り続けるのだった……

横島がリハビリに奮闘している頃。神界では1人の神族が人間界に向かおうとしていた、目を模したアクセサリーを身につけた女性……ヒヤクメだ

「ふっふっふ、やっとなのねー♪」

愛用のトランク型のPCを引つ張りながらヒヤクメは笑う。早い段階で未来の自分との記憶同期をしており、横島に会いたいと思っていたが、今までチャンスが無く。自身の能力でこっそりと見ている事しか出来なかった（人それを盗撮と言う）それがやっとなと会うことが出来る。そう思うとヒヤクメのただでさえ高いテンションは更に高い物へとなっていく

「楽しみなのね〜♪」

横島の治療とマタドールを退けた褒賞で何を求めるのか？と言うことを聞く事が仕事なのだが、それを覚えているかも怪しいテンションで人間界へ向かっていくヒヤクメ。未来の記憶と同期した事で少しだけ落ち着いた性格になり、そして仕事のミスも少なくなったと評価が上がり始めていたヒヤクメだが、今の様子を見られた事でやっとなりヒヤクメはヒヤクメかと、再び評価が少し下がる事になったのだが、会いたいと思いつけていた横島にやっとなと会うことが出来る。それしか考えていないヒヤクメにはそれは余りに些細な事だった……鼻歌交じりで人間界へ向かって行ったヒヤクメが仕事を覚えているか？それで神族の間で賭けが行われている事を知らないのは本人だけだったりする……

リポート8 戻って来た日常 その2へ続く

## その2

レポート8 戻って来た日常 その2

蛍やシズク達にリハビリを見て貰っている間。美神さんは自分一人で除霊をやると言って蛍やシズクを俺の側に置いてくれていたのだが、今日はどうしても蛍達の助けが居ると言う事で香港から戻って初めて俺1人になっていた

「ごめんなー、散歩とか、抱っことかしてやれなくて」

「みーむー」

猫じゃらしで遊んでやつたり、リンゴを与えるのがやつとでモグラちゃんが居なくなつて寂しい思いをしているチビに構つてやれない事を謝るとチビは大丈夫だよと言う感じで前足を振る。その姿を見ると早く手の感覚だけでも戻らないか?と思っていると頭を叩かれる

「そんな事を考えても仕方ないでしょ?チビは賢いから判つてるわよね?」

「みつむー」

俺が1人だと無理なりハビリをするかもしれないと言う事で、精霊石を貸し与えられ人化しているタマモがどこから取り出したのかハリセンを手に悪戯っぽく笑っている

「タマモの言う通りだ、チビは恐ろしく賢い。確かに寂しくは思っているだろうが、お前の体の事を心配している。いらぬ事を考えるな」  
心眼にもそう言われ、俺を見てにぱつと笑うチビに心眼とタマモの言っている通りだと判り

「じゃあ調子が良くなったら一杯遊ぼうな」

楽しみにしていると言わんばかりに両手を振るチビを見て笑っていると、牛若丸眼魂が光ながら

「早いといえば天狗殿の薬を分けて貰えれば、回復は早くなると思いますよ。この牛若もそれで生死の境目から脱しましたから!まあ、天

狗殿の腕試しで挑んでその状態に追い込まれたのですが……」

……いや無理やん？今霊力も使えない俺じゃ天狗のおっさんには勝てないし、美神さん達にそんな話をする訳にもいかない

「とりあえず、それは最終手段と言う事で」

【はい！心の片隅にでも留めておいてくださいれば結構です】

恐らくはじける笑顔をしているであろう牛若丸。悪い子ではないと思うのだが、こういうと何だがどこか抜けてる気がする。心眼も何も言わないし、タマモも呆れたような表情をしているし……悪い子ではないが、ちよつとアホの子。それが俺達の中の牛若丸の評価となりつつあることに少しだけ苦笑する。英霊と言う凄い存在をアホの子と言うのは流石に罰当たりかなあ……俺が苦笑していると、チャイムが鳴る

「お客さんかしら？まあ良いわ、私が見てくるから、大人しくしてなさいよ」

「判ってるよ」

俺を指差して大人しくしてなさいよと言うタマモ。狐の時は良く甘えてくるけど、人化するとなんと言うか、少し背伸びしている妹の様に見えるんだよなあ、タマモに言ったら怒りそうだけど、そんな事を考えながら、猫じゃらしでチビと遊んでいるとタマモが誰かを連れて居間に入ってくる

「誰？」

【む？お前は……】

それは見覚えの無い女性だった。眼を連想させるアクセサリーを見につけた、民族衣装を着込んだ明るい雰囲気的女性……見覚えなどある訳も無く、誰？と呟く。心眼はその女性を知っているようだけど、どこか困惑したような表情でそれ以上を口にしない。知り合いなら教えてくれれば良いのにと思っているとその女性は手にしていた鞆を机の横に置いて

「小竜姫から聞いてると思うのね、貴方の魂と霊体の様子を見に来た神族のヒヤクメなのね、よろしく」

にこにこ笑いながら手を差し出してくるヒヤクメ……様の手を

握り返しながら

「えつとヒヤクメ様」あ、ヒヤクメでいいのね。私は神族って言っても元妖怪上がりだから様付けは好きじゃないのね。……じゃあヒヤクメさん……よろしくお願いします」

神様にもこんな軽い人が居るんだなっと思いつながら、今日はよろしくお願いしますとヒヤクメさんに頭を下げるのだった……

ちよつと新鮮なのね。私はトランク型のPCから伸びたコードを横島さんに額や腕に貼り付けながら心の中で呟いた。前の記憶では飛び掛られた記憶があるが、今の横島さんにはそれがない。

（大分落ち着いてるって感じなのね）

私の知っている横島さんで言えば、結婚して直ぐの横島さんに似ていると思った。それと比べるとまだ荒いが、それでも助平なのが大大収まり、好感を持ちやすくなっていると言える

（んー周りに女の人が多いから？それとも美神さんも大分変わったからなのね）

蛍さんが逆行して横島さんの側にいるから、こんなに落ち着いているのかな？と考えながら

「はい、これで準備は終わったのね。じゃあここから魂を調べるから、ちよつとピリツとするけど我慢してなのね」

「わ、判りました」

引き攣った顔で返事を返す横島さんにそんなに怖がる事ないのね。と返事を返す。大体、タマモちゃん私が何かすれば排除する気満々だし、心眼も警戒しているような目をしているし、それに何よりも

「みむう」

放電しているグレムリンがめっちゃ怖いよね。下手をすればこのPCが壊れるかも、と怯えながらキーボードに手を伸ばす

（え？な、何これ!?!）

画面に映った横島さんの魂の状態を見て、思わず叫びそうになるのを必死に耐えて、キーボードを叩き続ける。そして解析が進めば進む

ほどに自分の顔色が悪くなっていくのが判る

(こ、これやばすぎるのね)

横島さんの感覚障害・味覚障害・痛覚障害の3つの原因……

(魂が侵食されてる……！)

眼魂と言う霊具で神魔や英霊の力を使うというのは聞いていたし、私も見ていた。だけど香港で使ったというマスタードラゴン……それが最悪の結果をもたらしていた。小竜姫の神族の魂の欠片と、メドーサの魂の欠片が今もまだ横島さんの魂の中に残っており。それが横島さんの魂を侵食していたのだ……横島さんの障害は全て神魔と人間の感じ方の違いが魂の差異を生み出し、それが感覚・味覚・痛覚の3つの障害を巻き起こしていたのだ

(と、とりあえず、このレベルなら)

調薬のボタンを押して、その症状を抑制できる薬の調合を始める。そしてそれと同時に眼魂の危険性……しかも神魔系の眼魂の危険性を知った。今はまだ良い、それほど酷い症状も出ていないし、横島さん自身の魂の抵抗力で、小竜姫とメドーサの魂が少しずつその侵食範囲を狭めているから……だけどいつかはそれでも抵抗出来なくなる時が来る……そして横島さんの魂の防衛本能が弱くなれば……眼魂からの侵食に耐え切れなくなり……

(横島さんは人じゃなくなるのね……！)

人間の魂は弱い、神魔の力にいつまでも耐えられる物ではない。眼魂の中の魂はそれほど強い物ではないが、何回も何回も使っていれば、侵食は進みいずれば耐え切れなくなる。これは最高指導者に必ず報告しなければならぬ、神魔の眼魂は危険度が高すぎる、たとえ神魔からの協力する手段だとしてもリスクが高すぎると進言する必要がある

「えつとどこか不味いんですか?」

「あ、ううん!大丈夫なのね!ちよつと魂が弱っているだけだから、薬を出しておくから、朝・昼・晩って3回食前・食後に飲んで欲しいのね!」

私の顔色を見てなにか大変な事になっているのでは?と青い顔を

している横島さんに大丈夫なのねと笑いながら、キーボードの操作を続ける

(初期段階でよかったのね〜これくらいなら! まだ全然大丈夫なのね〜!)

とりあえずこのレベルなら薬を飲んでいてくれれば、近い内に収まる。今も魂を調整したから感覚障害とかも徐々に収まっていく筈なのねと笑いながら、心の中で溜息を吐いた……折角横島さんに会えたのに大変な事になってしまった。それに……

(他のみんなには気付かれるのね)

心眼とタマモは私の様子を見て何か不味いことになっていると理解している。だけど横島さんに聞かせる訳にはいかないと思っっているのか問い質して来ない事に安堵の溜息を吐く。そして後で螢さんとかも集めて、神魔眼魂の危険性の話だけしておこうと決めた。話す前に最高指導者に話を通す必要があるの、後で話をする時間を取って貰おうと考えているとPCから薬が出されたと同時にPCを元に鞆の形状に戻して

「薬の飲み忘れをしないようにするのね〜調子が良くなっても薬が無くなるまではずっと飲むのね」

「判りました、ありがとうございます」

薬を受け取って頭を下げる横島さんを見てると嘘をついているような罪悪感を感じて、私は慌てて話題を変える事にした

「今回の香港の事件の事で神魔から褒美が出るのね〜横島さんは何が欲しいのね?」

手帳を開き褒美に何が欲しい?と尋ねると横島さんは質問いいですか?と尋ねて来る。何なのね?と尋ねると

「神様の中で未来視とか、予知能力を持つてる人でそれを抑えられる人とかいませんか?」

「ん〜いるのね。ヒヤクメ族はそう言う能力持ちが多いけど、子供の時は制御出来ないから抑制の道具はあるのね〜?それがどうしたのね?」

私がそう尋ねると横島さんは少し考える素振りを見せてから、何か

を決めた表情をして

「じゃあその道具をください」

「ちなみに聞くけど何で必要なのね？」

私がそう尋ねると横島さんは内緒ですよ？と前置きしてから

「柩ちゃんって言う未来視とか、予知能力とか持つてる子が居るんですけど、それが暴走してるから寿命が長くないって聞いたんです。なんとかしてあげたいと思ってて、それでその道具で能力を抑制出来るなら……柩ちゃんも人並みの寿命をもてるんじゃないかって思って」

その言葉に横島さんは変わってしまったと思っていた自分が恥かしくなった。彼は何も変わっていない、どこまでも人の痛みに共感出来る優しい人のままだ。いや、私の知っている横島さんよりももっと優しく、思いやりに溢れている人だと思った

「横島？それで本当にいいの？神界からの褒美を自分の為に使わなくて？」

【後悔しないか？】

タマモちゃんと心眼が横島さんにそう問いかけると、横島さんは全然と言い切り、笑顔で告げたのだ

「俺は知り合いが死んじゃうのが凄く悲しい、それで今何とか出来るならそれを何とかしたい。柩ちゃんにも色々助けて貰ってるし、俺結構あの子の事好きだから。死なれるのは悲しいからさ」

好きだから、そこに異性が好きと言う意味は込められていない。知り合いだから、助けて貰ったから今度は俺が助けてあげたいと言う善意だけがそこにあつて、私は笑いながら

「判ったのね、横島さんの褒美はそれで行くのね。アクセサリーの形になるから、柩ちゃん？にどんな形がいいか聞いて欲しいのね、この紙に書いてくれれば、私の方に来てくれるのね、判ったら書いて欲しいのね！」

簡易使い魔を作る紙を横島さんに手渡した所で、ただいまと言う声とお邪魔しますと言う声が聞こえる

「……誰だ？」

「え？」



【横島ーワシ疲れた〜メロンパンくれえ】

困惑しているシズクと驚いた表情をしている蛍さん……私を完全に無視視している英霊は気にしないことにして私は笑いながら自己紹介をした

「神界から横島さんの様子を見に来たヒヤクメなのね〜よろしくなのね〜」

蛍さんとシズクに神界からの褒美の話をし、少し世間話をした後。蛍さんに小声で

（明日にでも横島さんの今の魂の状態を説明するのね〜美神さんにも伝えておいて欲しいのね。後横島さんには内密で、教える訳には行かないから）

判りましたと頷く蛍さんによろしくなのねとお願いし、私は横島さんの家を後にし、魔界から派遣されているブリュンヒルデの所にお世話になろうと思ひ、そちらの方向に足を向けるのだった……

香港での依頼を終えた俺は特例として仮GS免許の交付と白竜寺の取り壊しを白紙に戻すという成果を手に、白竜寺へと戻って来た。だが……俺は結局の所何も出来ていない。香港で活躍したのは横島だ、自分の命を捨てる覚悟で魔人へ挑んだ。その時俺は無様に気絶しているだけで……見つともなくて、情けなくて俺は日が昇っている間白竜寺へ帰る事が出来ず。日がくれ、そして日付が変わる少し前に白竜寺へと戻った。誰にも見つからぬようにママ……いや、三蔵法師様の部屋の扉を叩く

「どうぞ」

その声を聞いてから三蔵法師様の部屋に入る。机の上には巻物と筆、そして墨が置かれていて、何かの作業をしていたのだと判った。三蔵法師は俺の顔を見た時驚いた表情をした物の直ぐに笑顔になり「おかえりなさい、雪之丞。香港での仕事は終わったのね」

無事で良かったと笑う三蔵法師様の前に膝を着き蹲る

「どうしたの？どこか怪我をしたの？」

心配そうに尋ねて来る三蔵法師様に俺は顔を上げる事が出来ず俯いたまま

「俺は……何の役にも立てませんでした。三蔵法師様……香港では横島だけが魔人と戦う事が出来た。そのせいであいつは感覚や味覚障害を起しました……俺はあいつが命を賭けて戦っているとき無様にも気絶していたんです」

俺は何も出来なかった。1人に何もかも押し付けて無様に気絶していた。それが情けなくて、みつともなくて、香港で頑張ってくると言って白竜寺を出たのに何も成し遂げる事が出来なかった。それが悔しくて、情けなくて……俺は皆が起きている時に戻ってくる事が出来なかつたんです

「三蔵法師様……お、俺は「ママお師匠様でしょ？」……え？」

それは確かに俺が香港に旅立つ前に三蔵法師様をそう呼んでいた。だが俺は今自分が情けなくて、とてもそんな風に三蔵法師様の名前を呼ぶことが出来なかつた

「で、でも俺はその……」

俺がしどろもどろになっていると三蔵法師様は手にしていた筆を机の上において、俺の方に向く。その目は普段の優しい目ではなく、力強い光を放っていた。この時俺は改めて目の前に居る女性が英霊なのだと理解した

「貴方は挫折を知りました。自分の無力さを知りました、そして己を情けないと思いました。それでどうするのです？伊達雪之丞。貴方はそのまま逃げるのですか？」

俺は投げかけられる言葉に返事を返す事が出来なかつた。いや、返事を返そうとは思った、だけど目の前の三蔵法師様の靈力に完全に飲み込まれていた

「しつかりしなさい！伊達雪之丞！情けないと、無様だと思うのなら後悔して立ち止まっている場合ではないでしょう！横島君に全てを押し付けたと言って立ち止っていたらずっと彼に全てを押し付けたままよ！それが情けないと思うのなら、何も出来なかつた自分が無様だというのなら！貴方は前に進みなさい。無様でも、みつともなく

てもいい。前に進みなさい」

その一喝の後三蔵法師様は普段の柔らかい笑みを浮かべながら、俺の頭を撫でて

「陰念も自分のせいであって後悔して嘆いていたわ。でも後ろを見ても何も無いの、苦しくても前に進むの。そうすればきつと道は開けるわ、それよりも戻って来たのなら、明日からは厳しく修行をつけてあげる。判ったら、早く休みなさい」

「は、はい！判りました！ママお師匠様！」

俺は普段通りの呼び方をしてしまい、しまったと思ったがママお師匠様は柔らかく微笑み。厳しく行くからねちゃんと休んでおきなさいと笑うだけだった。俺はそのまま自分の部屋へと戻り、明日の修行に向けて少しでも身体を休める為に目を閉じるのだった……

そして翌朝

「こひゅー……こひゅー」

「おい？雪之丞。生きてるか？水いるか？」

陰念の言葉に手を伸ばすと、ペットボトルが渡されその中身を一気に飲みすることでやっと落ち着いた。陰念がそんな飲み方をするな身体に悪いと言っているのが聞こえるが、とりあえずそれはスルーする「ど、どうなったんだ。これは」

普段と同じトレニングなのに、疲労感も霊力の消耗も半端無い……俺はタオルで汗を拭いながらどうなってるんだと呟くと、陰念は馬鹿でかいルービツクキューブを弄りながら

「魂に過負荷を掛けるんだとよ。妙神山と似た空気を結界の中に作ってるらしい。まあ、妙神山を知らないから、何とも言えないが」

妙神山か……霊能者の修行の場って聞くけど、どんな所なんだろうなと思いつつ陰念を指差して

「お前、楽しんでね？」

ルービツクキューブを弄っているだけなのでそう尋ねると、陰念は暗い笑みを浮かべて

「だったらやってみろ」

差し出されたルービツクキューブの面を動かそうとするが、ビクと

もしない

「うぐぎぎいいいい!? な、なんだこれ!？」

「靈力を指先に集めて、それでやるんだ」

動かし方を聞いたので言われた通りやってみて、直ぐにルービックキューブを落とした。靈力が恐ろしい勢いで吸い取られ、持っていたれなくなったのだ

「な、なんだこれ……」

「俺の魂に負荷をかけて、チャクラの回復と、指先の感覚を取り戻す為の物だ。とんでもないだろ」

とんでもないってレベルじゃねえよと倒れこみながら呟く、ずっと座っている陰念の額に滝のような汗が浮かんでいるのを見て、楽しんでるって言って悪かったと謝ると、気にしてないと返事を返す陰念にそうだと呟き

「香港でメドーサに会ったぜ、何にも出来なくて悪かったって」

「……そうか、あの人は死なないと思っていたが、こうして生きていると聞くと嬉しい物だな」

厳しい人だったが、優しい所もあって面倒見も良かった。何より俺達をここまで強くしてくれた人だから、今でもやっぱり尊敬していると言える

「今度機会を見て、会いに来るってさ」

「皆喜ぶか、泣くか、悩む所だな」

「勘九朗なら泣きながら喜ぶんじゃないか?」

違うないと笑いあう、生きているらしいがまだ会うことが出来ない兄弟子。何時になったら白竜寺に戻って来れるんだろうかと考えながら、呼吸が整った所で立ち上がり訓練を再開する。今度は足手纏いにならない、横島の助けになれるようになる。そうでなかったらみつともなくて横島のライバルなんて言えないからな!俺は靈力を放出した事で、一気に空気が重くなるのを感じながら、ゆっくりと地面を踏みしめるように白竜寺の拳法の型を始めるのだった……

オフィスで書類を整理していると扉がノックされ、外から声が掛け

られる

「タイガー寅吉です、今帰りました、エミさん入っても良いですか？」  
「良いわよ。丁度一区切りついた所なワケ」

私の声を聞いてからタイガーが部屋の中に入ってくるが、その顔を見て良かったと心の中で呟く

(良い面構えになってる)

辛い思い出しかなはずの母国へ戻ったタイガー。2週間経つまでに帰れと言っておいたが、遺跡の品の除霊を明後日に控えていたので、何かトラブルがあつたのでは？と不安に思っていたが、こうして無事に戻ってきてくれて、そしてどこことなく精悍な顔つきになつているのを見て忙しい時期にタイガーを母国に帰した意味があつたというものだ

「それで何かヒントは見つけることが出来たワケ？」

態々墓参りだけに戻ったとは思えない、何か自分の霊能力でヒントを見つけたか？と尋ねるとタイガーは苦笑いを浮かべながら

「申し訳ないですケン……まだ触り程度ですのじゃ……」

頬を掻きながら言うタイガー。その自信無さげな言葉の割には顔には自信が満ちていて、何か手ごたえを掴んでいるように思えた  
(母国で何か見つけたワケ?)

態々飛行機で戻ったタイガー。きつとそこで自分の霊能に関する何かを見つけたのだろう。どんな力を見せてくれるのか？を楽しみにしながら、最後の書類に手を伸ばしながら

「じゃあ。明後日から除霊だからね、それまではゆっくりしてるというワケ」

「え、エミさん？良いんですのジャー？」

今まで休んでいたのに、更に休んでいいのか？と言うタイガーに構わないと笑う。正直な話、明後日の除霊に向けて今日と明日は除霊を断るつもりだった。今書いている書類だって、2週間前の依頼を受けないという旨の書類を完成させるためでそうで無ければ今日だってオフィスに出て来るつもりも無かつたのだから、後はこれを琉璃にファックスに送信した後は家に帰ってゆっくりと休むつもりだった

のだと説明する

「異物の除霊は長丁場になるワケ、明日は学校に行っても良いけど、そこはタイガーの判断に任せるワケ、それと精神感應能力が頼りなんだから、ゆっくりと休んで疲れを取って除霊に備えるワケ」

私の言葉に判りましたと返事を返してオフィスを出て行くタイガー。若干拍子抜けしている表情を見る限りでは、多分除霊に連れて行かれると身構えていたのだろう

「タイガーのおじいちゃんか……」

タイガーがいない間に調べたのだが、タイガー寅吉の祖父はタイガーの母国では相当有名な霊媒師だった事が判った、しかも日本人だったと……しかしタイガーが悪魔憑きとして危険人物にリストアップされた時期に急にその力を失ったとあった。しかもその時期を前後して歩く事も出来なくなったと

「力を使いすぎた？」

前から思っていたことだが、タイガーの体格はかなり恵まれている。チャクラも手足が発達していて、本来ならば近接戦闘に特化したGSになる筈なのだが、タイガーの霊能力は強力な精神感應……本来の霊能力を封印され、そしてその中で生まれたのが精神感應能力なのでは？と私は推測している。そしてタイガーの祖父はタイガーのその力を封じるのに霊力を使い果たし、急速に衰えたのは？と私は考えている

「ま、考えても仕方ないか」

タイガーは今成長しようとしている。ならば私があればやこれやと口にして迷わせるような事はしないほうが良い、それにあんなに自信がありそうなタイガーは初めて見た。ならばタイガーが自分オリジナルの霊能力を開眼するのを待ってみるのも一考かもしれない

「流石に横島みたいなびっくり箱じゃないだろうしね……」

少し目を離していたらとんでもない霊能力を見につけている横島とは違うだろうと呟き、琉璃に小笠原除霊オフィスは少しの間除霊のため東京を離れるという旨のファックスを送り、除霊に備え身体を休める為にオフィスを後にしたのだった……

僕は目の前の光景を見て。暫く絶句していたが、何度か深呼吸を繰り返して、気持ちを落ち着けてから

「父さん？シルフィーに何をしたんですか？」

「……シルフェニアは言葉や躰で性格を矯正できるレベルでは無くてな。不本意だが、魔法を使うことになった」

「なにしてるんですか!？」

シルフィーが暴走しがちなのは知っていたけど、魔法を使うまでとは思っていなかった。鼻歌混じりで掃除をしているシルフィーは僕に気付いた

「お兄様。おかえりなさい」

笑顔で小さく手を振る……これはもう別人のレベルだ。自分の娘に何をしているんですか!?!と怒鳴ると唐巢先生が僕の肩に手を置いて、首を左右に振り

「これは正しい処置だったと言わざるを得ない。なんせ……黒魔術と横島君の血を使って何か怪しい儀式を行おうとしていたから」

し、シルフィー……お前は何がやりたいんだ？唐巢先生の言葉を聞いて、父さんの処置が間違いじゃなかったと知って思わずその場に崩れ落ちるのだった……

「魔法を使ったと言っても、シルフェニアの横島への恋慕を少し抑えただけだ」

その言葉にどこか納得する。シルフィーは島ではあんな感じだった。ただ横島さんに出会って、少しその……暴走気味になってしまっただけで

「我としてもとても心苦しかったのだが、あんな適当な呪文と魔法陣で異界の神を呼び出してな。あと少し遅かったら危なかった……」

「ああ。恐ろしい、蛸みたいだな……こう見てるだけで正気を失いそうだな……そんな足だった」

……それってまさかクトウルフの旧支配者とか言う奴なんじゃないかろうか……シルフィーは一体何をしているのだろうか……恋をす

るところここまで暴走してしまう物なのだろうか？なにはともあれ、そんな存在が召喚されなくて本当に良かった

「とりあえずは大丈夫だと思うが、ピエトロ。お前も学校ではシルフェニアを少し気に掛けてやってくれると助かる」

学校であんなの召喚されたら大変な事になるからなと呟く父さん。唐巢神父は懐から薬の包みを取り出して

「私もね、今回の事は賛成しているよ。あれだよ、初恋は拗らせると怖いんだよ。物凄くね……」

遠い目をしながら薬を飲む唐巢先生。その言葉には凄い重みがあつて、もしかして経験談なのでは？と思つてしていると唐巢先生はそうだと笑い

「胃薬分けてあげようか？これは良い薬なんだよ」

今まで見たことの無い笑顔で笑う唐巢先生。僕が香港に行つている間に父さんとシルフィーの間で何があつたのかは判らないが、並大抵の事は笑つて許せる唐巢先生が胃薬を飲むと言う自体にこれから自分も巻き込まれると判つた僕は

「お願いします」

「うん、直ぐに持つてくるよ。ダンボールで3箱買ったから1つあげよう」

……ダンボールで3箱？……いっただいどれだけの心労を父さんとシルフィーに与えられたのか？と思ひながら振り返る

「お父さん。紅茶美味しい」

「うむ、前よりも数段良くなった」

嬉しいと笑う島に居た当時のシルフィーの姿と、紅茶のカップを手にしている父さんの姿……今はまだ平和だが、もしこれで横島さんを見てシルフィーがまた暴走するのでは？と思つた瞬間。胃に鈍い痛みが走るのを感じて

(学校では大丈夫でしょうか……)

今回の香港での一件で横島さんに対して今まで以上に過保護になつている蛍さん達の事を思い出し、僕は鈍い痛みが鋭い痛みに変つていくのを感じながら、どうか平和に過ごせますようにと心の底



から祈るのだった……  
リポート8 戻って来た日常 その3へ続く

### その3

レポート8 戻って来た日常 その3

横島君が学校に来ない事はそう珍しい事じゃない、除霊の関係や、修行と言う事で学校に種類を提出して休むのは結構多い。だから横島君が居ない事に関しては大して問題じゃないんだけど

「おはよー♪」

笑顔で手を振るシルフィーさんとその後ろで非常に疲れた顔をしているピート君。横島君が居なければ暴走する事もなくて、普通に良い子なんだけど、それを差し引いてもシルフィーさんの雰囲気がおかしいと思つて

(ねえ?彼女どうしたの?お父さん来てから全然見てなかったけど)

横島君の血を吸おうとして、父親に頭を掴まれて姿を消してから見てなかったけど、別人にしか思えないと思いつつながら尋ねるとピート君は深い溜息を吐きながら

(なんか適当な呪文と魔法陣でへんな神様を呼び出そうとして、危険だつて事で父さんが処置をしたそうで記憶とかを弄つてる訳じゃないんですけど……その、横島さんに対する恋慕の気持ちを少し控えさせたとか……?)

……あの子なにやってるだろ?え?適当な呪文とかで神様とかつて召喚出来る物なの?……ピート君の話を聞いて絶句していると

「おはようですジャー」

ガラッと教室の扉が開き、その巨体を小さくしてタイガー君が教室に入ってくる。母国に帰国すると言つて暫く見てなかったんだけど……彼もどこか雰囲気が変わつてる気がするわね

「はよーっす」

「みっむー!!」

それから少し遅れて横島君が久しぶりに教室に入ってくる。肩の上で手を振るチビちゃんが可愛い

「あ、おはよー」

「お、おはよう?」

「みーむ?」

顔を見ると血を吸われかけている横島君が普通に挨拶してくるシルフィーさんに驚き、チビちゃんが怪訝そうに首を傾げる。そのままこつちに歩いて来た横島君は

「あれどしたん? 罨?」

【あんまり信用するなよ? 後ろから襲ってくるかもしれない】

……そこで罨を疑い、心眼も後ろから襲ってくるかもしれない警戒する当り、シルフィーさんをどれだけ恐れているのか? と言うのがよく判る

「シルフィーは父さんの躰で人格矯正中です。牙も無いですし、もう恐れる事はないと思いますよ、それよりも横島さん、元気そうで何よりです。もう身体は大丈夫なのですか?」

身体は大丈夫? ピート君の言葉に、私とタイガー君が首を傾げると横島君はああと頷き

「香港で色々あつて、痛覚とか、味覚とか、感覚とかが無くなつてな」「はい?」

予想外の言葉に私とタイガー君の間抜けな声が響く中、横島君は更に説明をしてくれた。とんでもない強さの魔人と言う神魔の敵に会つて、それを何とかする為に無茶をしたらなんか色々おかしくなつたつと

「んで今は神様が出してくれた薬を飲んでるから、大分まし、なんと味噌汁の味が判る」

【横島? 何故それを言つて、こいつらが心配しないと思うんだ?】

心眼の言う通りだ……味噌汁の味が判らないほどの障害が出てたと聞いて私もタイガー君もピートも絶句する。それに気付いた横島君が慌てた様子で

「いや、今は全然大丈夫なんだぞ? 心配しなくても大丈夫だつて!」

そうは言うが、今は大丈夫なだけで、今後どうなるか判らないと思うと心配するのは当然の事だと思ふ。

「授業始めるぞー。ん? タイガーと、横島とピートも復帰したか。つ

たくまた問題児が揃いも揃って俺にどれだけ心労を掛ける気だ？」

「「え？俺（ワシ）（僕）問題児？」」

1人称こそ違うが、全員が同じ事を言うと言任が冗談だ。冗談と笑いながら出席を取るぞーと言うので皆自分の席へ戻っていくのを見ながら私は思わず溜息を吐いた

（でも私は見ているしかないのよね……）

私は机妖怪。どれだけ心配しても机の側から離れる事が出来ない。こうして全てが終わった後に誰かから話を聞くことしか出来ない……

（私も横島君が心配なのに……）

逆行した記憶がこうなつてくると邪魔に思えてくるから不思議だ。これからこんな事が起きる、あんな出来事があるって判っているのに自由に動く事が出来ない私にとってそれは気を病む物にかなりえない

「愛子、机妖怪愛子」

「はい！」

私の名前を呼ぶ担任に反射的に返事を返しながら、この身体を何とか出来ないかと真剣に考えるのだった

「自由に歩きたいかあ……」

お昼休みにお弁当を食べている横島君にそう相談してみる。ピート君とタイガー君も腕を組んで考え込んでいる

「確かに自由に歩けた方がいいですけどん」

「ですね。しかし愛子さんは机妖怪ですし……そこがネックですね」

「お父さんじゃ駄目かな？」

シルフィーさんのあの性格をここまで矯正した2人の父親なら何とかできるかもしれないけど、それも何か怖い

「あ。カオスのジーさんに相談してみるか？結構有名な錬金術師見たいやし、何か良い方法を見つけてくれるかも」

ドクターカオスの名前に大丈夫？と言い掛けるが、横島君がこういうということはもしかしたらドクターカオスも逆行してきて居るのかもしれないと思ひ。その言葉を飲み込む

「ああ、確かにドクターカオスなら何とかしてくれるかもしれないですね」

「エミさんも言ってますんじやー。霊具ならドクターカオスって、愛子さん、きつと何とかしてくれると思うんじやー」

ピート君とタイガー君もそう言うのなら間違いなくドクターカオスにも逆行の記憶があり、ボケていないと頼りになる見たいねと思いつながら、机の上でりんごを齧っているチビちゃんを見ながら

「横島君。モグラちゃんは？」

姿の見えないモグラちゃんの事を尋ねると、横島君は少し寂しそうな顔をしてから

「角が生えたから、妙神山で修行するんだって」

「みーむう……」

寂しそうなその姿に聞いてはいけない事を聞いてしまったと私は反省し、それから妙に重苦しい雰囲気の中での昼食となり私は私の馬鹿と心の中で呟くのだった……

「参ったなあ……」

下校時間となり、日が落ちた暗い教室で1人で残りながら今日は失敗したと反省する。可愛がっているモグラちゃんが居ない事が気になって尋ねてしまったが、それが横島君を悲しませる結果になってしまった事を反省していると

「ミス愛子？」

「え？あ、マリアさん」

横島君がドクターカオスに伝えてくれたのか、首から入校許可証を下げたマリアさんが居た。考え事に集中していて、その気配に気付けなかった事を反省しながら振り返るとマリアさんは柔らかな微笑む。そしてその時に気付いた私の記憶のマリアさんと異なり、普通の女性のように見えるその姿に

「横島さんのお願いで来ました。本体を何とかして外を自由に歩けるようになりたいと、それで間違いないですか？」

「はい。何とか出来ますか？」

若干の不安を感じていたが、今のマリアさんを見て大丈夫だと判

り。私はマリアさんに外を出歩けるようになりたいと伝えた。するとマリアさんは柔らかに微笑み

「判りました。ドクターカオスに伝えておきます、近い内に2人で訪れますのでその時を待っていてくださいね」

そう笑って教室を出て行くこうとするマリアさんに

「待って、マリアさんも……その」

逆行の記憶を持っているんですか？と尋ねる事ができず、口ごもっているマリアさんはくすりと笑い

「貴女の想像の通りですよ。またお会いできて嬉しいです、今度は日の出ているとき、学校とは違う場所で会いましょうね」

彼女も逆行の記憶を持っているのだと判った。多分この様子ならドクターカオスも逆行の記憶を持っているんだろうなと思いながら、マリアさんに向かって手を振りながら

「はい、よろしく願います」

少なくとも外を自由に歩けるようになれば、ただ待っているだけという今の自分を変えることが出来る。私はそう思い、よろしく願いますと深くマリアさんに向かって頭を下げるのだった……

学校から帰り、チビの散歩に出かけている途中に買い物をしているマリアを見つけて、愛子の事を頼むと快く引き受けてくれた。もしかしたら断られるかもしれないと思っていたので正直かなり安心した。まだ買い物があるというマリアと別れ、公園に向かって歩いていると「やあ、やあ、横島元気そうだね」

枢ちゃんが反対側からたい焼きを手に歩いてくるのが見えた。なんて良いタイミングなんだと思いつつながら

「枢ちゃんも元気そうだな」

「くひひ、ま、それなりに元気だよ」

くひひっと笑い焦点の合っていない目。パツと見不気味なだけでなく、俺はこの子が良い子だと知っているので恐怖や嫌悪感を感じる事無かった。暫く立ったまま世間話をしながら、自然な流れで尋ねてしまおうと思い

「あ。そうだ、前の恩返しに何かお返ししたいんだけど、何か好きなアクセサリーとかある？」

「アクセサリー？んーそうだね、チョーカーとか好きだよ」

チョーカー？聞き覚えの無いアクセサリーの名前に首を傾げながらも、柊ちゃんが欲しいと言っているアクセサリーが判った事に安堵の溜息を吐きながら

「判った。じゃあ今度プレゼントするよ」

「くひひ、楽しみにしてるよ。横島」

チビの散歩の途中だからと柊ちゃんと別れ歩き出す。なお横島は気付かなかったが、歩いていく横島を見て、柊が悪い笑みを浮かべていたりするのだが、横島はそれに気付く事はなかった

「おーチビは元気だな」

「みーむう♪」

俺の顔の周りをぴこぴこ飛んでいるチビを見ながら、ゆっくりと歩いていると背後から鈍い衝撃を感じて振り返る

「えへへ、よこちま」

「あげはちゃんか、もう学校は終わったの？」

しゃがみ込んであげはちゃんの頭を撫でながら尋ねると、うんつと元気良く返事を返すあげはちゃんの笑顔に釣られて笑っているとその後ろから蛭ともう1人が走ってくるのが見えた

「あげは！勝手に走って行ったら駄目よ」

「ったく、ちよこまかと足が早いね」

蛭よりも少し背の高い人はもしかして蛭のお姉さんだろうか？と思いつつ、俺の名前を呼ぶあげはちゃんを抱き抱えながら立ち上がるのだった

「横島。ありがとう、あげはを捕まえてくれて」

「いや、良いよ？俺を見て走ってきたみたいだし」

「うん！」

俺の腕の中で元気良く返事をするあげはちゃんに苦笑しながら

「蛭。その後ろの人誰？お姉さん？」

俺がそう尋ねると美神さんほど鮮やかではないが、オレンジ色の髪

をした女性が笑いながら

「あげはの姉で蛍姉さんの妹で蓮華って言うんだ。姉さんから話は聞  
いてるよ、横島で良いよな？」

見た目通りの強気な性格のようだ。しかし蛍の妹か……結構長く  
いるけど見たことも聞いたことも無かったんだけどなと首を傾げて  
いると蓮華が俺の疑問に気付いたようで

「ああ、あたしは海外留学してたんだ。姉さん達が香港に居る時に丁  
度戻って来たんだ」

そうなんだ。間が悪いときに帰ってきたんだなと思っていると  
抱っこしているあげはちゃんが

「よこちまー、あげはもチビと一緒に散歩するー♪」

「みーむうー」

俺が返事を返すよりも早く、良いよーと言わんばかりに手を振るチ  
ビに仕方ないなと苦笑しながら

「あげはちゃんも散歩に連れて行っていい？2人が用事があるなら、  
後で家まで送り届けるから」

俺がそう尋ねると夕方まで時間があるので蓮華に街の中を案内す  
るのを兼ねて散歩していると聞いて、蛍達も一緒にチビの散歩をする  
事になったのだった

「そうでちゆか、もぐらちゃんお家に帰っちゃたんでちゆか、チビ寂し  
いね」

「みーむう……」

あげはちゃんに抱っこされて寂しそうに返事を返すチビ。今まで  
一緒に居た友達が居なくなるのはとても寂しい事だろう。とは言え、  
モグラちゃんが何時帰ってくるかも判らないし、そうそう妖怪なんて  
拾える物じゃないし、我慢してもらおうしかない

「横島？また妖怪拾えないかな？とか考えてない？」

【横島？駄目だとは言わないぞ？だが安全な妖怪かどうかは良く考え  
ろ】

なんで俺の考える事はばれるんだ？俺ってそんなに判りやすいか  
？？と思いつつ、ごまかすように咳払いをしてナツプザックからボー



ルを取り出して

「よーしあげはちゃん！ボールで遊ぼうかー」

「わーい！遊ぶー♪」

嬉しそうに手を振るあげはちゃんを連れて、俺は蛍から離れあげはちゃんとチビとボールで遊び始めるのだった……

公園で楽しそうに遊ぶ横島達を見て蓮華は穏やかに微笑む。なんの因果か逆行の記憶に加えて、これから起きるかもしれない事件の記憶を手にしてしまった蓮華にとっては最悪の結果を知るだけに、今のこの穏やかな時間がとても幸せな物に見えたのだ

「姉さんは混ざらないの？」

「いやー流石に浮くでしょ？私だと」

あげはとチビと遊んでいる横島に自分が混ざると浮くと呟く蛍に、蓮華は溜息を吐きながら

「そんな事を言っていると出遅れるだけだと思っただけ。あたし」

「うぐっ、や、やっぱり？」

横島と添い遂げる為に逆行しているのに、こうして足踏みしてて良いの？と蓮華に言われ、蛍は不味い所を突かれたという表情になる

「あたしはなると思っただけね。ほらチャンスじゃない？」

足元に転がって来たボールを蛍に手渡した蓮華は混ざるチャンスだよと、横島とあげはの方に向かって蛍の背中を押して、蛍が横島達の中に混ざるのを見て、嬉しそうに笑いながら

「前はあたしが邪魔しちゃったからな」

自分のせいで蛍が逆行をする事を望み、そして全員が心を傷つける結果になった事を蓮華は心から悔いており、こうなったら蛍と横島が相思相愛になるように頑張るぞと気合を入れていたのだが、蓮華は知らない。トトカルチョに10.7倍で自分の名前が刻まれている事を……

横島がチビの散歩を終えるまで後1時間つと言う所か……私は煎餅を食べる手を止めて、立ち上がりお風呂に湯を入れるに向かう。そしてその足でキッチンに向かい、夕食の準備を始めると

「なーシズクはずつとこの家に居るつもりなのか？」

買ってきたメロンパンを齧りながら尋ねて来るノツブ。どうして急にそんな質問をして来たのか？と首を傾げると

「いやなあ？横島の側は凄まじく居心地が良い。けどな、ワシはたまに思うんじや、ワシらの存在が横島に影響を与えているのではないかと」

豚肉の筋切りをしていた手を止める。それはあえて私も考えないようにしていた事だ、チビがあそこまで強くなったのは私達の影響だと言えるだろう。だからその内横島にも影響を与える可能性を考えると確かに怖い

「……だが私達が家を出たとしよう。それで横島はどうすると思う？」

筋切りを終えた豚肉に塩・胡椒で下味をつけて、小麦粉を叩きながら尋ねる

「悲しむかの？」

「……残念。外れだ」

溶き卵に豚肉を潜らせ、パン粉を付けながらノツブを見つめて

「……あいつは私達を探すぞ。絶対にな」

横島は高島よりも懐に入れた存在に甘い。高島が来る者拒まず、去る者追わずだったが、横島は違う。横島は来るもの拒まず、去る者は追うだろう

「……あーそう言われるとワシもそんな気がする」

「……1度あいつの側に身を置いた以上あいつは自分から去るのを認めない」

危険だからと言う理由で私達が身を引いたとしても、横島はそれを追いかけてくるだろう。横島は強欲な男だ、1度自分の側に置いた者を手放すような真似はしないだろう、それで居て虫に想いを寄せているとは、本当に強欲な男だ。けど……それもあいつらしきなのかもしれないと笑いながら、加熱した油の温度を確認し、トンカツを揚げながら

「……それで私を追い出そうとして何をするつもりだ？」

「ノツブウ!?!いやいや、ワシはその……な?あれだ。わははははは」  
誤魔化すように笑うノツブを睨みつけるとすまんと呟くノツブ。  
こいつも強欲だ、一緒に居る間に横島の価値を見出し、独占したいと  
思ってしまったのだろう。誤魔化すように笑うノツブに今日はお前  
のトンカツは無しだなと言うと

【いやいや!すまん!マジでスマン!飯抜きは嫌じゃ!】

「……お前英霊としてのプライドとか無いのか?」

【プライドで腹は膨れん!!】

土下座しながらそう叫ぶノツブに苦笑しながらトンカツを揚げる  
のと平行して、味噌汁の用意を始める

(あれもまた魔性とでも言うべき物なのだろうな)

人間にとつては横島はそれほど魅力的には見えないだろう。こう  
いったら悪いが、横島はこちら側の存在だ。ゆえに魔性を惹きつけ  
る、そして1度近寄ればその側を離れたくないと思ってしまう。なん  
とも性質の悪い男だと苦笑している

「ただいまー!」

「みーむう!!」

横島の声が続いてチビの鳴き声が聞こえてくる。揚げ終わったト  
ンカツをトレーの上に乗せながら

「……横島。汗をかいているだろう。風呂に湯を張ってある、先に汗  
を流してくるといい」

廊下から判ったーと返事を返す横島の声を聞きながら、指を鳴らす  
と

【ふぎやつ】

部屋の中に2人分の奇妙な鳴き声が響く、私は水で洗った野菜をま  
な板の上に並べながらリビングで倒れこんでいる馬鹿幽霊2人に視  
線に向けて

「……氷土下座するか?」

【ごめんなさい!!もうしません】

どうせ背中を流すとかで突入しようとしていたんだろうが、おキヌ  
はどこから出てきたんだろうなど。全く頭の痛い問題だ

「横島様！お会いに参りましたー！お土産におはぎ等を買って来ましたよー！」

「……帰れ」

リビングの窓を開けて勢い良く叫ぶ清姫。更に頭の痛い問題が来たと本気で溜息を吐きながらも、こんな慌しい日常も悪くない私はそう思い笑いながら、風呂場に突進して行こうとする清姫に向かって馬鹿幽霊達を拘束しているのと同じ水の鎖を伸ばすのだった……それから数分後風呂から出てきた横島が、足に鎖を巻かれ倒れているおキ又達を見て何事?!と叫び、おろおろしている横島を見て、私では自分でも珍しいと思いながら声を上げて笑ってしまうのだった……

横島君の魂の状態を見てくれた神の話を聞くことになったのだが、私と琉璃の時間が取れるのが夜だったので、夜まで待つて貰う事になった

「すいません、お待たせしました」

【私だけで良かったのか?】

蛍ちゃんと言眼が事務所に来たのとほぼ同じくらいに、事務所の中に突如女性が現れる

「初めましてなのね、私は神魔軍の情報部のヒヤクメなのね」

どこことなく冥子に似ている雰囲気的女性はにこやかに笑っているが、神と言うだけあって中々強い威圧感を感じた

「貴女が神代琉璃さん、そして美神令子さんなのね?小竜姫から話は聞いているから直ぐ判つたなのね、じゃあ、早速、横島君の体調不良の原因だけど、一言で言うと、小竜姫とメドーサの眼魂のせいなのね」

それは私も考えていた事だ、小竜姫とメドーサと言う強力な神魔の眼魂をインターバルも無しに連続で使用すれば何らかの後遺症が出るのは判りきっていた。しかもそれを2つ同時に使用すれば悪影響が出るのも当然だ

「判っている事はそれほど多くないのね、ただ神魔の眼魂は極力使わせないほうがいいのね」

「その理由は？」

「英霊はまだいいのね。元は人間だから魂が似ているから、でも神魔は違う。人間よりも上位の存在なのね？それを受け入れる器は人間に無いのね。最初はいいのね、でも何度も何度も使っていれば、いずれは……」

そこで言葉を切ったヒヤクメは大きく深呼吸をしてから、目を開く、その目には強い光が宿っていて、私達を射抜いていた。そのあまりの迫力にやはりヒヤクメも魔族なんだと思い知らされた

「横島君は人間でも、神でも、魔族でもない、全く異なる種族に変性する事になるでしょう」

その言葉に思わず絶句する。横島君が人間で無くなる!?私達が目を見開いていると、琉璃がソファアに背中を預け

「神代家でも稀にそんな存在が出たという話は出ていました。神の力に耐え切れず、発狂する者。神卸しで栄えた神代家ですが、神卸しで滅び掛けたこともある。横島君は大丈夫だと思っていましたけど、そうじゃないんですね？」

琉璃の言葉にヒヤクメはゆっくりと頷き、私達を見て重い口調で

「横島さんの力は神魔の間でも稀少と言える能力だと思います。ですがそれにはリスクが付き纏います、今は神魔眼魂は韋駄天を除き、妙神山にあるので大丈夫だと思えますが、横島さんは眼魂を作る能力がある。止める事は難しいと思いますが、貴方達でも止めるように努力してください、もう一度言います。横島さんに神魔眼魂は極力使わせないでください、さもないと本当に大変な事になるのね」

ヒヤクメはそう言うのと神魔の上層部にも報告しないといけないからと呟き、現れた時と同じ様に消えていった。残された私達の間には重苦しい沈黙だけが残され、誰も口を開けずにいると心眼が

「私の方で横島の魂の安定を図るし、眼魂についても制限させる。お前達はこの事は横島には話さない様にして欲しい、無論態度に出すのもだ」

「判ってるわよ、こんな話横島に出来るわけがない」

蛍ちゃんがやつと搾り出したかのように呟く、横島君が人間じゃな

くなると聞いてしまえば、神魔の眼魂を使わせる訳には行かないと判る。いや、他の眼魂だって危険かもしれない。だけど私達が幾ら駄目だと言っても、横島君は眼魂を手にするだろう。そうする事で助ける事が出来るのなら、横島君は躊躇う事無く眼魂を手にする。それが判っているから、私も、蛍ちゃんも、琉璃も心眼も……何も言う事が出来なかった

「ガープ達に、魔人に加えて、眼魂の問題……本当問題ばかりが増えていくわね」

「ですね……本当、これからどうなるんでしょうか……」

私の言葉に疲れたように相槌を打つ琉璃と、心眼を握り締めて黙り込む蛍ちゃん。私自身も問題が解決するどころか、新しい問題を知ってしまい、頭痛を感じながら深く溜息を吐くのだった……

レポート8 戻って来た日常 その4へ続く

## その4

レポート8 戻って来た日常 その4

ヒヤクメから伝えられた情報をお父さんに話すと、お父さんは目を伏せ、背凭れに背中を預けながら呟いた

「やはりそうだったか……」

「やはり!?!やはりって何!?!こうなる事が判つてたの!?!」

私がそう怒鳴るとお父さんは溜息を吐きながら、閉じていた目を開き

「あくまで可能性の段階だけだね。そもそもだ、蚩。何故神魔が霊界チャンネルを使わなければ人間界で十分に活動できないのか考えた事はあるか?」

「え……えつとお?」

逆行の記憶の中では、霊界チャンネルを破壊すれば神魔の力を削ぐ事が出来るとしか聞いてなかったような……私が首を傾げているとお父さんは良いかい?と前置きしてから

「そもそもだね、神魔の力は膨大だ。人間界に容易に顕現すれば生態系に凄まじい影響を与える」

例えば、悪霊や魔獣のパワーアップや、霊能力に覚醒する人間の増加とかね

「それを世界は嫌うんだ」

「世界が嫌う?」

予想外の言葉に思わず鸚鵡返しで尋ねるとお父さんはそうだと断言する

「だから人間界・天界・魔界と分かれているんだ。霊界チャンネルとは、人間界とそれぞれの世界を繋ぎ、空きリソースをその世界に繋げる為の物なんだ」

リソース?世界を繋ぐ?意味不明の言葉の目を白黒させていると、お父さんは紙に3つの円を書いて

「人間界が、これくらい、天界と魔界はこれくらい」

円の殆どを黒で塗りつぶし、その左右の円を半分くらいまで色を塗り、その下に人間界・天界・魔界と文字を書きこみながら

「こうしてみれば判ると思うが、人間界の容量はかなり一杯一杯まで来ている。そこに人間よりも魂の容量が多い、神魔が来れば人間界はパンクする。だから霊界チャンネルを用いて」

霊界チャンネルと書かれた管が天界と魔界から書かれた円を繋ぐ「こうすることで、神魔は人間界に現れる事が出来る訳だ。そして人間よりも魂の容量が大きい、神魔の魂の欠片と言え、それが人間と言う器に入り込むんだ。人間に負荷を掛けるのは当然の結果だ」

私としては眼魂とゴーストドライバーがそこを解消してくれるのでは？と思っていたんだけど、そうじゃなかったみたいだしねと苦笑したお父さんは私のほうを見て

「私の方でもゴーストドライバーは分析して、解析してみる。そこまです心配しなくてもいいさ、それに今すぐどうこうなる訳じゃないんだしね」

確かにヒヤクメも今すぐどうなると言った訳ではないけど

「寧ろ心配しすぎる方が良くないよ、横島君はあれで勘がいいからね。下手にそわそわしていると何かあるんじゃない？って逆に気付く事になるよ。だから今は気にしないで、横島君の所にでも行っておいで。そっちの方が気分も落ち着くと思うよ」

「う、うん……判った」

笑顔のお父さんに言われ、私はどこか納得しないものを感じながら横島の家に向かったのだが……

「あ、蛍。おはよう」

「おはようございませすわ」

「なんでいるの!?!」

いつもの食卓に居る筈の無い白い着物姿の清姫が穏やかに手を振るのを見て、思わずそう叫ぶと

「……昨日おはぎを持って突撃して来た。なんか1日自由だから泊まりに来たと」



じ、自由すぎる……龍神王の血統に名を連ねる姫だと言うのに……危険意識が足りないんじゃないじゃ？と思いつつ溜息を吐きながら横島の真向いに座り

「どう？調子はいいい？」

「おう。全然元氣！学校に行こうと思っただけど、折角清姫ちゃんが尋ねて来てくれたし、休んで街の案内でもしようかなって」

「んーまあ。それもいいんじゃない？私も付き添う事になるけど」

これから突撃してくる事があるのなら、いざと言うとき逃げ込める場所とかを教えておくのも悪くないかもしれない。それに清姫と横島をデートさせるつもりなんてないし、清姫は嫌かもしれないけど……

「ふふ、昔を思い出して楽しいですわ」

「……だな」

……あ、そっか。平安時代の価値観の清姫とシズクには1人の男の周りに複数の女性がいても全く気にしない。寧ろそれが普通だと思っっている訳で、私がいようが、タマモがいようが、ノツブがいようが全然気にしてない。もし襲おうとかすれば話は別になるだろうけど……色々思う事、考える事はあるがとりあえず今私がやるべき事はそれじゃない

(この子、危険すぎる！)

「ささ、横島様。どうぞどうぞ、天界でも有名な和菓子屋の一品ですから美味しいですよ」

ぐいぐい押している清姫に横島はたじたじと言う感じだ。それなのにやましきなどは感じず、気品とでも言うのか、不思議な雰囲気をしている清姫に正直驚く、横島は横島で混乱しているのか

「天界にも和菓子屋はあるの？」

「……あるぞ？普通に」

シズクが清姫の代わりに答えてくれたが、あるんだ……和菓子屋……その事に驚きながら、私にもどうぞと差し出されたおはぎを頬張りながら、私に足りないのはこの押し強さなのだろうか……もしそうならこれを見習わないといけない訳で……

(私には難しいかも……でもなあ。このままだと……)

蓮華にも私には押しが足りないと言って怒られてしまったし、かと言って私にはあれだけぐいぐい押ししていくのは無理

(本当どうしよう……)

言いようの無い不安を感じながらも、近所の有名な和菓子屋さんよりも遥かに美味しいおはぎに舌鼓を打ちながら

「ここら辺がいいんじゃない?」

「あ、やっぱりそう思う?」

清姫に東京を案内する時の道を横島と話し合いながら、なんでこんな事をしてるんだろうと内心溜息を吐く事になるのだった……

蛍とシズクと一緒に清姫ちゃんに東京を案内していたんだけど

「はー、前来た時はシズクを焼くことしか考えてなかったのんびりと見てませんでした、人間の進歩って凄いですわ」

ビルなどを見て感慨深そうに呟く清姫ちゃんだけど、その言葉の中の物騒すぎる言葉に思わず絶句する

「……まあ私とこいつはずっとこんな感じだ。高島の家も3回ほど吹き飛んでいるが、気にするな」

「……お願いだから、家では喧嘩しないでくれよ?」

気にするなと言われてもそれは無理な問題だ。家が吹き飛んだと聞いて気にするなと言われて、判ったと言える人間は居ない

「大丈夫ですわ、家が吹き飛んでも天界から新しい屋敷を用意させて頂きます」

「そっか、それなら安心……な訳あるかあ!!」

おおぅ……蛍がノリ突込みを……目の前の光景に何故か感動している自分がいて、思わず苦笑する

「クウン?」

「ん?なんでもない」

出来るならタマモにも精霊石で人間に化けて貰ってとも思ったのだが、シズクが了承しなかったのでもの狐フォームで俺の腕の中だ。円らな瞳で見つめてくるタマモの背中を撫でると気持ち良さ

そうに身を振る

「じゃあ今度はこつちな。美神さんの事務所、なんかあったら逃げてくれれば良いから」

観光も兼ねているが、メインは清姫ちゃんがこつちに来た時に逃げる場所を教えるという事だ。唐巢神父の教会は案内したので、今度は美神さんの事務所へと話をしている

「ぜはー……ぜはー……み、見つけたあ!!」

「メドーサさん?」

背後から聞こえて来た声に振り返るとメドーサさんが、膝に手を置いて荒い呼吸を整えていた。神魔なのにと思ったが、人間界に影響を与えない為に力を制限していると小竜姫様が言っていたのを思い出し、それで疲れているのかと思っていると今度は

「い、いましたか!?清姫様は!」

ブリュンヒルデ……いや聖奈さんがやっと見つけたと言って駆け寄ってくるのが見えた。俺と蛭が振り返ると、清姫ちゃんはいたずらっぽく舌を出してえへつと笑っている。可愛い事は可愛いが、可愛いだけで全てが許される訳ではない

「もしかしてまた逃げて来たの?」

「はー!」

弾ける笑顔で逃げてきましたと言う清姫ちゃんに俺達が頭を抱えたのは言うまでもない……

「はあ、とりあえずブリュンヒルデ、私は見つけたって報告してくるよ。横島達と清姫を頼む」

メドーサさんはそう言うと言った様子で裏路地に入る。暫くすると空を飛ぶ姿が見えた、ああ、街中で飛ぶわけには行かないから1度隠れたのかと納得していると

「清姫様。お願いですから、天界のお屋敷から逃げるとい事はしないでください」

「嫌です、私は横島様のお側がいいんです」

手を伸ばす聖奈さんから逃げるように、俺の背中に隠れる清姫ちゃん。俺を盾にして、器用に聖奈さんの手から逃れ続けているが

「……おい、この馬鹿。お前が逃げてくると、横島に迷惑を掛けるんだぞ」

「え?」

シズクのその言葉に足が止まった清姫ちゃんの手を掴む聖奈さん。多分このまま帰るのが1番正しいと思うんだけど

「ちよつと待つてくれませんか?多分ここで無理やり連れて帰ってもまた逃げちゃうと思うんですよ」

駄目だ、いけないと言われてる事ほど子供ってやりたがるじゃないですか

「横島。清姫ちゃんは見た目通りの年じゃないのよ?」

そりや平安時代から生きているから俺よりも年上の事は知ってる。

「でもほら、精神は肉体に引つ張られるって言うし」

全員に深く、深く溜息を吐かれる。なんでや……ちゃんと霊能の本に書いてあったで……

「なんか気が削がれてしまいましたわね、わかりました。横島は清姫様に街を案内したい、そして清姫様は案内が終わるまでは帰りたくない……と言う事ですね?」

聖奈さんの言葉に俺と清姫ちゃんが頷くと聖奈さんは溜息を吐きながら、判りましたと頷き

「私の付き添いを許可してくれるなら、今すぐに天界に連れ戻すようなことはしません」

聖奈さんが妥協してくれた!俺は全然問題無い、美少女に美女が追加されるのだからむしろ嬉しいと言える。蛭と清姫ちゃんの顔を見ると

「まあ聖奈さんがいれば襲われても大丈夫よね」

「私は構いませんわ、護衛が増えるなら、私と共にいても横島様も安全ですし」

え?俺と清姫ちゃんが一緒に居ると俺危ないの?思わず清姫ちゃんとシズクを見るとシズクが

「……知らない事がいい事もあるんだ」

「何が!?俺は今身の危険に瀕しているのか!?!」

「何!?!横島は今狙われてるの!?!」

どうして教えてくれないんだと蛍と一緒に叫ぶがシズクと清姫ちゃんは穏やかに笑うだけで答えてくれず

「では参りましょう♪」

「……そうだな。行こうか」

俺の手を取って歩き出す、シズクと清姫ちゃんは答える気が無いようにでぐいぐい引つ張っていく、俺はシズクと清姫ちゃんと一緒に居ると危険なのか?と言う恐怖を感じながら、東京案内を続けるのだ。当たり前だが、聖奈さんと合流する前の穏やかな空気の観光なんて当然無理で、俺も蛍もぴりぴりとした空気の中。ゆっくりと歩みを進めるのだった……なおシズクと清姫の言う危険とは、龍族の中でも屈指のエリートとも言える清姫とシズクと懇意にしている横島に対する嫉妬上の危険性だが。シズクの目が光っているので、この状況で仕掛けてくる馬鹿……もとい勇者は誰もいなかったりする……

琉璃からファックスで送られて来た書類に目を通す。それは私の予想通り山崩れなどの自然災害を起している山の調査結果。直ぐに行けというのではなく、先に調査結果を送り、それに合わせて準備をしろって事ね

「六道女学院か……」

六道女学院に居ると言う英霊マルタ。なんでも祈りで龍を退治したって言う高名な聖女様か、正直あんまり私とは相性が良く無さそうに思えるけど1度会って話を聞いておいても良いかも知れないわね……と思いつつFAXが止まると同時に送られて来た調査結果に目を通す

「……まあ、良くやるわね」

調査結果としては過疎地の村の村長が独断で自分の所有する山を売却。それをゴルフ場として開拓する予定だったらしいのだが、いざ工事が始まれば地震や、山崩れなどの自然災害が多発……なんでもその山は高名な神獣が住まう山として触れてはいけないとされていた神域だったと……

「まあ神罰つて所ね。この時に依頼を受けなくて良かったわね」

なんでも神域と言う事を隠し、妖怪が暴れて居ると言う名目でGSに依頼していたとあるが、これって一応詐称になるのよねと思いがら書類を確認しているところ

「なんですつて?」

最後のほうの調査報告。そこには85%の確立でガープがこの山を訪れていたとある、それは残留している霊力によって分析された結果だろう

「時期的には……私達が香港に居るとき」

私達が香港に居る時に日本で自分と同格の魔神と神殺しを行っていた……原始風水盤を香港に設置した目的は自分達から注意を逸らすため?しかしそうだとしても、神獣を殺し霊脈を潰した……

「失敗した……?」

神殺しをするつもりでも、霊脈を破壊するつもりでもなかった。何か異なる別の目的が合ったが、止むを得ず神殺しを行い、霊脈を潰した……考えられるのは神獣の抵抗が予想よりも激しかった事だろうか

「……これはなにかありそうだわ」

もしかすると念入りに調査すれば、ガープが何をしようとしていたのか?それを知る為のヒントを手にする事が出来るかもしれない。どの道詳しい調査には私を指名すると聞いているのだから、近い内にこの立ち入り禁止の元霊山に足を踏み入れることになる

「となるとやっぱり行く前に、六道女学院に行つて……それと……」

英霊に話を聞いて、精密調査の為に霊具を用意して……それに横島君と蛭ちゃんも連れて行くことになるだろうから、2人を護る為の人員も必要になってくるわね……

「シズクはもちろんだし……くえすは協力してくれるかしら」

もし可能ならくえすにも声を掛ける必要があるかもしれない。魔術に関して知識の深くくえすも出来れば協力して欲しいし……色々準備しないといけない事があるわね。そう判断し、書類を全て封筒の中に納めて立ち上がる

【美神さん。そろそろ夕食の準備を始めますねー】

「ごめん、おキヌちゃん。今日夕食いらないわ」

買い物帰りのおキヌちゃんに夕食はいらないと声を掛け、上着を羽織りながら

「横島君の所にも行って頂戴。次の仕事の打ち合わせがあるから、あ、そのステーキ。差し入れにしちやって良いわ」

晩酌用にと頼んであったステーキだけど、食べている時間が無いから横島君への差し入れにして良いわ。霊能者は身体が資本、上質な肉を食べるのも体を作るのに大事だからね。ちよつと勿体無いとも思っただけど、香港で頑張ってくれた横島君ご褒美って事で奮発してしまおう

【き、急ですね。でも判りました。気をつけて行ってきてくださいね】  
そう笑って手を振るおキヌちゃんにありがとうと返事を返し、私はガレージのコブラに乗り込み事務所を後にするのだった……

東京案内が終わると、清姫ちゃんは聖奈さんに連れられて帰る事になったんだけど

「また遊びに参りますわ〜」

「……はあ……」

華の咲くような笑顔を浮かべていた清姫ちゃんとは対照的に、疲れ切った表情で溜息を吐いている聖奈さんの姿がやけに印象的だったなあっと思いつながら、机の上にバイクの免許の教習本を広げる。GSの勉強の合間合間に勉強していただけなので、少し不安要素はあるが。大分覚える事ができたし、そろそろ1度バイクの免許の試験に挑戦してみようと思っっているのだ

「どう？試験合格できそう？」

「んー大丈夫だとは思っただけだなあ……」

自分の私物を持ち帰る準備をしていた蛍にそう尋ねられ、多分大丈夫だと思っとうと返事を返すと蛍は笑いながら

「GS免許と比べればかなり簡単よ。それに仮とは言えGS免許を交付されてるから、ある程度は免除されるのよ？」

「え？マジ？」

蛍に言葉に驚きながら尋ねると本当よ？と蛍は笑いながら説明してくれた。GSは除霊現場に急いで向かう必要もあり、その為の移動手段として車やバイクの免許が取りやすいようになってきているのだと、勿論これは仮免許にも適応され、試験の時に提出すれば試験の合格率が少しだけ上がると聞いて安堵の溜息を吐く

「後は、基本的な道路交通法とかを覚えて、ある程度運転できればOKよ。じゃ、明日試験頑張つてね」

「おう。ありがとうな」

バイクの免許を取って早く一緒にツーリングに行こうと約束しているので、頑張つて免許を取れるように頑張るよと返事を返し、蓮華が海外から帰って姉妹が揃ったと言う事で外食に行くと言う蛍を送り。手にしていた教習本を閉じる

「ん？勉強しなくていいのか？」

メロンパンを齧っているノツブちゃんがそう尋ねてくる。道路交通法は正直覚えているし、バイクの扱いについては少し不安な所もあるが、あんまり不安で勉強していると余計に失敗しそうなので、ここで終わると返事を返し、割り箸とカッターを取り出して割り箸細工を始める

「みむ？」

台車をくるくると回していたチビが俺が何かを作っているのを見て、台車を回すのを止めてこっちに歩いてくる。んーっとこれくらいかな？と割り箸を半分に切つて、軽く削つてつと爪楊枝を輪ゴムで止めて……

「何をするつもりなんだ？」

「チビの玩具を作ってる」

「みむうー！」

何を作っているんだ？と尋ねて来る心眼にチビの玩具を作っていると返事を返すと、本当？と言う感じで目を輝かせて尋ねて来るチビにそうだぞーと返事を返し、軽く紙やすりで角を取って

「ほれ、チビ」



「みーん♪」

チビが良く鉛筆や爪楊枝を振り回しているのを見たので、割り箸と爪楊枝で剣の形を作ってみたんだけど、気に入ってくれたみたいだ（あんな小さい手でもめちやくちや器用だしな）

TVとかを解体するチビだ。あんな短い手でも器用に使いこなすはずだ

「みーむ！みみーん!!!」

【器用じゃな、あんな短い手で】

【信じられん。チビは本当にグレムリンなのか……】

振り下ろし、切り上げ、回転切り……俺の予想よりも遥かに使いこなしている、余った割り箸を拾って

「ほーれ、チビー」

「みむっ！」

割り箸を振ると斬りかかって来た割り箸を受け止めると、今度は薙ぎ払って来る

「みふー♪」

「おお、器用だ」

チビに打ち込む訳には行かないので、受け止めているだけだが、あんな短い手でこんだけ器用に割り箸を振るうとは……凄いと正直感心する

「てい」

「みむっ!？」

とは言えチビの力はそれほど強い物ではないので、下から切り上げるとチビの手から割り箸がくるくると回転して吹き飛ぶ。だけどチビは空を飛んでそれを両手で掴み再び机の上に着地しながら割り箸を構える

「みーむー！」

「おおッ！」

気合満点の声にもう少し遊んでやろうかと思っているとフライパンを叩く音が響き

「……夕食だ。遊びはそこまでだ」

【美神さんが急な仕事で晩御飯要らないそうなので、美神さんに出すつもりのお肉も持ってきましたよー】

美神さん用の肉!?!俺が普段食べているような肉ではなく、もつとグレードの高い肉だろう

「遊ぶのは晩御飯の後な?」

「みーむうー!」

元気良く返事を返すチビを見て笑いながら机の上を片付ける。シズクとおキヌちゃんが並べてくれた夕食を見ると、味噌汁にサラダに白米。そして机の中心の厚いステーキ肉にノツブちゃんを輝かせ、いただきまーすと大声で言っつてステーキ箸を伸ばすのだった

……

「みむふう……みむふう……」

夕食の後チビともう少し遊んでやって、眠そうに欠伸をするので籠に入れると割り箸で作った剣を大事そうに抱えて眠っている姿に笑みを零しながらベッドに入ると

「くうん?」

「つたく、しゃーねーなー」

ベッドの中で丸くなって待っていたタマモに苦笑しながらベッドにもぐりこみ、心眼を外してベッドの横の机の上に乗せる

「じゃあ。お休み、心眼」

【……ああ。おやすみ横島】

穏やかな声でお休みと言いつ返す心眼の目が閉じたのを確認してから電気を消して

「おやすみ、タマモ」

「コンー!」

抱き抱えたタマモが腕の中で眠りやすいように動くのに、苦笑し俺も目を閉じて眠りに落ちるのだった……

リポート8 戻って来た日常 その5へ続く

## その5

レポート8 戻って来た日常 その5

目覚まし時計がなる少し前に目を覚ました。試験つて事で緊張していたのかもしれない、目覚ましが鳴るまでは布団の中でまどろんでいるように思い。タマモを抱きなおそうとした時……

(んお?)

もこもこした毛皮の感触ではなく、ふにつとした柔らかい感触をぼんやりとした意識の中で感じて目を開き

「?!?!」

俺は思わず声にならない悲鳴を上げた。腕の中にいたのは見慣れた子狐ではなく、人間の姿をしたタマモだった。予想外に加えて、心の準備も出来てなかったのでうろたえていると

「うーん、うるさい。ちょっと静かにして……」

「ア、ハイ」

薄く目を開いたタマモの静かにしてという言葉と凄まじい目力に思わず敬語で返事を返す。タマモが腕の中でもぞもぞと動いて、丁度良い位置を見つけたのかまた穏やかな寝息を立てるのを見て

(寝起きだったから驚いただけか?)

寝起きで美少女のタマモの顔が直ぐ近くにあり、動揺したが……意識がハッキリしてくると普段の子狐のタマモと同じ感じに思えてくるので不思議だ。寝ている間に精霊石を取ったのかな?と思ったが、首に精霊石のペンダントもないし……最後の尻尾が増えてきたのかな?と思いつつ朝のランニングの時間まではこのままで良いかと思いつつ、気持ち良さそうに眠っているタマモの姿を見て笑みを零すのだった……

「……なんで私……人の姿になってるの?」

「さあ?」

目覚ましでタマモも起きたのだが、自分が人間の姿になっているのに今気付いたらしく、ベッドに腰掛けなんで?と尋ねて来るが俺が知

るわけも無いので、さあ？と返事を返すとタマモは自分の身体を確認するために立ち上がる

「んー無意識に服込みで変化してるわね……私寝る前に何してたっけ？」

パーカーに膝丈のスカート、若干吊り目も満月の時や、精霊石のペンドアントを見につけている時と同じだ。なんで私人の姿になってるの？と不思議そうにしているタマモを見ていると、部屋の扉が開き

「……横島まだ……なんで人の姿になってるんだ？狐」

俺がまだ寝ていると思ったのかシズクが起しに来て、人間の姿をしているタマモを見て驚いた表情をしている。シズクのそんな顔は珍しいなと苦笑しながら、ベッドの横の机の心眼に手を伸ばすのだった……

「クオン……」

「しゃーないって、落ち込みすぎや」

顔を洗って、いざ朝食と言う段階でタマモは子狐の姿に戻ってしまった。尻尾も垂れて、声にも元気が無いのを励ますが、溜息交じりの鳴き声にどうした物かどこがちが溜息を吐きそうになる。

【恐らく霊力が一時的に高まっていたのだろう、尻尾に戻る前兆か、それとも尻尾は戻らないが、霊力を高いレベルで維持出来るようになる予備段階なのかもしれないな】

心眼も励ますように言うが、タマモは俺の膝で丸くなったままだ。よっぽど狐の姿に戻ったのが嫌なんだろうなと思いつつながら、鮭の塩焼きに箸を伸ばす。今日は朝からバイクの試験に、お昼から六道女学院で何か会う人があるとかで今日は結構忙しいので、タマモが心配だけど構っている時間が無い

「みーむ♪みーむむー♪」

上機嫌でりんごを齧っているチビ。良く見ると輪ゴムを使って背中に剣を背負っている、勿論俺はそんな事をしていないので、チビが自分でやったんだらうな。予想外の進化に喜ぶべきなのだろうか？俺はそんな事を考えながら、膝の上で不貞腐れているタマモの背中を時々撫でながら、試験大丈夫かなあつと思いつつ朝食を進めるの

だった

【主殿ー頑張ってくださいねー】

【バイクは良さそうじゃな、馬の変わりになる。頑張ってくださいよ】

【バイクは馬なのですか？】

【現代の馬じゃな、鉄の馬だ】

なんとそれは凄い、じゃろじゃろつとなんとも気の抜けた会話をしている牛若丸とノツブちゃんに苦笑しながら

「じゃ、行ってくる」

「……頑張つてな」

【私も付き添いは出来ぬ、頑張つて来い】

心眼はカンニングになる可能性があるという理由で今回は予備のバンドナを頭に巻いていて、心眼はスカーフのようにシズクの首から下げられている

「みーむーみーむーみーむー」

「……何時準備したの？それ」

「みむう？」

爪楊枝に紙を張って、旗のように振るっているチビ。何時準備したのだろうか？そしてどうやって爪楊枝に貼り付けたのだろうか？と言う謎は残るが、応援してくれているのは良く判ったのでありがたいなど声を掛け、俺は自転車で教習所へ向かうのだった……

「……なんか拍子抜けだったな」

GS免許を提出するとまず教習所は合格するらしい。何故ならば、除霊などの現場は交通の便が悪いのが常識なのでバイクなどを使う人が多いらしい。教習所はまさかの一発合格で、後は試験場での適正試験と技能試験で中型二輪免許が貰えるらしい

「バイクを使うGS多いんだなあ……」

美神さんの運転する車で現場に行く事が多いが、フリーのGSはバイクを使う人が多いらしい。なので教習所はほぼ合格らしい、後は試験場かあ……

「蛭に教えてもらおうかな」

技能試験でどんな事をするのかとか聞いてみよう。バイクの免許

を取って一緒にツーリングしようと言う約束をしているので早くバイクの免許を取りたい……あ

「……バイク買わないとな」

免許があってもバイクが無いと駄目じゃん……中型二輪のバイクの値段ってどれ位するんだろう？それも蛍に相談してみよう

「ってやばっ！」

お昼から六道女学院で人と会うと聞いていたので、あんまりたたらしているとは昼も食べている時間が無い。結構頭を使ったので、腹が空いている。早く家に帰って飯にしようと思い、自転車で家へ向かうのだった……

お昼からポイントメントを取っているので、13時までには事務所に来るようにと蛍ちゃんと横島君に伝えてあったんだけど、蛍ちゃんは30分前に事務所に来た。書類を纏めていた私はペンを走らせながら

「そんなに焦らなくても良いのよ？」

除霊の仕事ではないので準備をする事も無い。10分前くらいで良かったのと言うと蛍ちゃんはいえ、実は相談がありましたと言う。蛍ちゃんが私に相談……横島君の事かしら？私は書類を1回机の中に戻し

「おキヌちゃん、お茶お願いねー」

【はーい、判りましたー】

出発まで時間があるし、お茶でも飲みながら話をしましょうと声を掛け、私はソファアに腰掛けている蛍ちゃんの前に座る

「それで相談って何？」

「えっとですね……これなんですけど」

蛍ちゃんが差し出して来たのはバイクのカタログ。それを見て何を相談したいのか判った

「横島君のバイクね。確か中型二輪だっけ？それなら……これとかいいんじゃない？」

あんまり大きいのだと初心者じゃ乗りにくいだろうし、そこそこの

大きさのバイクを勧めたら？とと言うと蛍ちゃんはいえそうじゃなくてですね……と眩き、カタログのページを捲つていく

「お待たせしました。あれ？美神さんと蛍ちゃん、なに見てるんですか？模型ですか？」

おキヌちゃんが不思議そうに尋ねて来るけど、それは私も同意見だ。カタログの最後のページの方にバイクの素体として紹介されているエンジンやフレームを見せられても、良いんじゃない？とかとてもじゃないけど、言う事は出来ない

「これで横島にバイクを作つてあげようと思つて、美神さんのGS免許で安く買えるんですよ！手伝つてくれませんか？」

「……作るの？バイク？」

「はい！私機械弄り好きなんで！私のバイクも自分で組み立てたんですよ！」

弾ける笑顔の蛍ちゃんに苦笑する。そう言えば、蛍ちゃんのバイクって見たこと無い形だと思つていたけど、自作だったのね……結構前からこのメーカーだろう？つて思つていた疑問が解決した。自作バイクなら見た事が無くて当たり前よね

「バイクをプレゼントするんですか。きつと横島さんも喜ぶと思いますよ」

「手作りのプレゼントは喜ばれやすいから、きつと喜ぶわ」

嬉しそうに笑う蛍ちゃんとおキヌちゃんだけど、手作りのバイクを貰つて果たして喜ぶだろうか？とは思つたが本人がそう言うのなら駄目とは言えず

「判つたわ。協力してあげる」

「ありがとうございます！お父さんとドクターカオスも手伝つてくれるつて言ってるんですよ！のが出来ると思いますよ！」

……どんな魔改造バイクが生まれるのかと尋ねようと思つたのだが、丁度そのタイミングで横島君とシズクが事務所に来たので、尋ねる事が出来なかった。それに

「教習所一発でした！次は試験場ですつて！」

「本当。良かったわね！」

【おめでとうございます】

教習所を受かったと喜んでいる横島君を不安にさせるような事をもとても言う事が出来ず、少し温くなったお茶を一気に飲み

「じゃあ六道女学院に行きましようか？」

バイクの話題を強引に打ち切り、そろそろ時間だから六道女学院に行きましようかと声を掛け私達は事務所を後にするのだった

「それで美神さん。冥子ちゃんに何のようなんですか？あ、それとも冥華さんですか？」

膝の上にタマモとチビを乗せて尋ねて来る横島君。六道女学院だから冥子か冥華おば様ですか？と尋ねる横島君に違うわと返事を返しながらハンドドルを切る

「琉璃から霊能力に詳しい人が新しく六道女学院の教員になったって聞いたから、横島君と螢ちゃんを紹介しようと思ってね。私も何か霊能力のヒントを得れるかもしれないし」

英霊に会いに行くとは言えないので、多少誤魔化して伝える。人間としていると聞いているので、変に敬語とか使うわけにも行かないし……ちよつと面倒よね

「それで横島。なんでチビ背中に割り箸の剣を背負ってるの？」

【可愛いですけど、横島さんがやったんですか？】

「いや、昨日割り箸で剣を作ってやったら、自分で輪ゴムで背中に背負ってた」

「みっむー！」

後部座席から聞こえてくる和やかな声を聞きながら、六道に居ると言う聖女マルタってどんな人なのか？聖女って言われるくらいだからやっぱり穏やかな人なのだろうか？私みたいにお金の事を気にする人間とは相性が悪いかしら？そんな不安を抱きながら向かった六道女学院で私が見たのは

「はい！そこ！無駄口聞かない！そっちはペースが落ちてるわよ！サボらないツ！！」

「はいっ！お姉様ツ！！」

美しい紫色の髪を腰元まで伸ばし、赤いジャージと竹刀姿の女性



……あ、あれが……英霊？ちよつと……いや、かなり私の想像と違うんだけど……横島君や蛍ちゃんも走りながらもその女性に熱い視線を向けている生徒に気付き、絶句していて。シズクはシズクはふうつと小さく溜息を吐きながら

「……何時の時代も女だけの社会は怖いな」

「え？昔もこんなのがあったの？」

「……知らないほうがいい、閉鎖空間と言うのはな。危険なんだ」

……私もこの学校の卒業生だけど、確かに異性と触れ合う機会が少ないので同性に走る同級生って少なからずいたわね……思い出したくない黒歴史を思い出しそうになり顔を歪めていると竹刀を手にしている女性が振り返り

「ん？あー！琉璃と冥華から聞いてるわ！美神令子と芦蛍、それと横島忠夫ね！もう少して授業が終わるから待っててくれる？」

その女性が私達の名前を呼んだ事で、私達にまで熱い視線が向けられ授業が終わるまでの10分間。私と蛍ちゃんは居心地の悪い物を感じながら、指差されたベンチに腰掛け授業が終わるのを待つのだった……なお横島君はそんな視線に気付かず、シズクはその視線を完全に無視し

「……良い天気だな」

「だなー、日向ぼっこには最適かもしれん」

ベンチに並んで腰掛け、膝の上にタマモとチビを乗せてのんびり日向ぼっこと言う感じで、その視線に気付いていない2人が羨ましいと思ってしまうのだった……

これが横島忠夫か……授業も終わったので、話の為に教員控え室に迎え入れ冷たいお茶などを用意しながら、横島を観察してみる。見た感じは普通、普通過ぎる。でもその周りを見ると、異常とも言える霊力を纏っている

(うーん……異端者って感じなのかな……)

霊力なのは間違いないのだが、その霊力の質が少しおかしい。だから妖怪や幽霊に好かれるのだろうか？

【はあ……横島さんの側は落ち着きますねえ】

「ちよつとはーなーれーなーさーいッ!!」

巫女服の幽霊を引き離そうとしている短い黒髪の少女と、その少女に挟まれておろおろしている横島。報告書では女好きって聞いてたけど……こうしてみるとそうは見えない。寧ろ女好きならば、幽霊とは言え美少女に抱きつかれても嬉しいはずだ、霊能があるから抱きしめた感触とかするだろうし……女好きだけど、迫られるのは弱いのか、それとも自分の側にいる女性にはそう言う邪な視線を向けるのが嫌なのか、私の観察した印象では変わった奴。それが私の横島忠夫に対する初見での感想だった

「じゃあ初めまして、私はマルタ。先日から六道女学院の体育教師として赴任してるわ」

「どうも初めまして、美神令子です。こっちは私の弟子の横島忠夫君と芦菫さん、こっちの幽霊がおキヌちゃん、横島君の隣の少女が水神のシズク」

私と握手をしながらメンバーの紹介をしてくれる美神。琉璃の紹介では私が英霊だと伝えているので、私の正体は知っている筈だ。後に私に気付いていそうなのは……シズクとあのバンダナかしらね。とは言え、その2人も私の正体を言おうとはしない。横島に危害を加えないのなら様子見と言う所だろうか

「えっと、マルタさんでしたっけ？霊能に詳しいと美神さんに聞いてますけど、どんな事が専門なんですか？」

ここで聖句とかがあって言うところの格好つと違いすぎるでしょって突込みを受けそうね。私は少し考えてから拳を握り

「霊力を手足に収束しての近接戦闘術よ。基礎体力とかが必要になるから、今は生徒にランニングとかをさせてるけどね」

杖や聖句を使うのも得意だけど、今は体育教師として赴任しているので、近接戦闘術の教師よと言うとシズクがこっちを見て

「……近接戦闘か……ふーん」

観察するようにこっちを見つめている。もしかして龍族だから、私の事を知っているのかしら？シズクは暫く私を見つめていたが、その

うち視線を逸らして、膝の上の狐を撫でている横島の方を向いて「……中々筋が良さそうだ。横島も近接を修行するべきだから話を聞いておいて損はないし、指導を受けるのもいいと思うぞ」

「シズクの言う通りだな。美神や、蛭に霊能を教わるのも良いが近接を磨くのも必要だ。知識ではなく、己を鍛える事もこれから必要になる。良い指導者に出会えたな」

私が英霊だと気付いているからの言葉だろう。現に私は横島の護衛権指導を最高指導者から命じられている、それに向かい合って座っているとは良く判る。向上心や、やってやろうって言うのがひしひしと伝わってくる

「どうする？今から私1時間休憩だから暇だけど、折角来たんだから訓練していく？」

「良いんですか？休憩時間なんでしょう？」

蛭が口では申し訳ないと言っているが、その目が爛々と輝いているのを見てやる気満々だというのは良く判る

「体術、体術かあ……やっぱり必要だよなあ……」

横島は横島で腕を組んで何かを考え込む素振りを見せている。膝の上ではグレムリンが同じ様に腕を組んで唸っているのが見える、なんとも人間味に溢れるグレムリンだ。あんなグレムリン見た事が無い

「えっとマルタさんが良ければ、指導して貰えると嬉しいっす」

「私は全然OKよ。じゃあ、早速行きましょうか」

どうやって接触するかなあっと思っていたので向こうから来てくれたのは正直ありがたい。それにガープに襲われる可能性を考慮して、自分で自分を守る程度の能力は必要だ。それを強制するのではなく、自分で決めてくれたのだから挫折する心配もない。フィンガーグローブを控え室の戸棚から出して横島と蛭に渡す

「ある程度は手加減してよ？まだ成長途中なんだから」

「判ってるわ、心配しなくていいわよ」

口調も容姿も似ている美神の言葉に心配しなくてもいいわよと返事を返してグラランドに出ただけ……訓練に熱が入って来た頃

「姉さん。はんぱ「姉さん言うなあッ!!」へぶろっ!?……」

「よ、横島あッ!」

【横島さはーんッ!】

「ちよつと手加減しろって言ったでしょ!?なにやってるの!」

「みむー!!みむううー!ーッ!」

「ココーン!」

「……治療の準備だ。全く、何をしてくれるんだお前は!」

横島が姉さんと呼んだのに反射的に拳を振るってしまい、宙を舞う横島に全員の悲鳴が上がり、そして私に向けられた冷めた目に凄まじい居心地の悪さを感じ……

「ごめんなさい」

自分の非を認め素直に謝罪するのだった……なお完全に余談だが横島はどきりと地面に落ちたが、けろっとした表情で立ち上がったくれたことで、わずかに批難の視線が弱まり、やりすぎたと思っていた私は心底安堵の溜息を吐くのだった……

横島達がマルタに出会っている頃……ドクターカオスはと言うと……滅多に見ない真剣な表情で地下の研究室にいた

「さて、勘九朗。ワシの声が聞こえるかの?」

コンコンとガラスが叩かれる。かなり時間を有したが、勘九朗の容態はかなり回復して来ているといえるじやろう。それでもこの培養槽の中から出れば確実に死ぬじやろうが、確実に死ぬというあの容態から、ここまで回復しただけでも十分奇跡的じやな

「身体を移し変える件で話が合ってた。とは言え、まだメタソウルの準備が出来ていないので直ぐ出来ると言う訳ではない」

移し変える身体の準備は出来た。勘九朗の好みに合わせ、身長160ちよい、髪は肩元まで、胸は小さめとかの本当にかなり細かい所まで要求があつて身体を作るのにも時間が掛かった。人道的には認められる物ではないが、GS試験でのガープ襲来の被害をかなり抑える事が出来たのは勘九朗の働きによる物が大きい。だからそのまま死

なせる訳には行かないと思つたのでこれくらいの苦勞はしてやつてもいいだろう

「メタソウルの素材も数日の間に準備する。少なくとも今月中にはメタソウルの準備も終わる、だからこそ問うぞ？ 鎌田勘九郎……今まで生きたという証を全て捨て、新しい人間として生きる覚悟はあるか？」

19年と言う時間は決して短い物ではない。ワシのように不完全な不老不死となり長い年月をかけて少しずつ老いて行く身だから言える。今までの己を捨てる覚悟はあるかと

「念の為に、本当に念の為じゃが……お前さんの今の身体と同じ素体も用意してある」

女として生まれ変わる事を望んでも、躊躇うかもしれない。そう思つて余計なお世話と思われるかもしれないが、男と同じ身体も準備したと言うと、激しくポッドが叩かれる

「覚悟は出来ている。そう言いたいんじゃない？」

ポッドの中で何度も頷く勘九郎。この返事が来る事は判つていた、きつと勘九郎の決意は変わらないと……

「判つた。ではメタソウルの生成が終り、次の満月の晩にお前さんの魂をメタソウルに移す。そうそう、戸籍に関して何じゃがな」

鎌田勘九郎と言う存在は死ぬので、そのままでは生きていても死んで居ると言う状態になる。それに人間と同じ機能を持つアンドロイドとは言え、年を取るといふ概念はない。だから普通に人間の中で生きていく事は不可能に近い、更に言えば同じ存在と言えるマリアとテレサじゃが、勘九郎の頼みで日本人系の顔立ちにしたので姉妹と言うのも無理がある

「ワシもだいたい悩んだんじゃないがな？ 御主が慕つておるメドーサの妹か、娘として戸籍を作る事になる。無論、メドーサの秘書として行動を共にする事もあるじゃろう。それで良かった……聞くまでもないか」

ポッドの中で嬉しそうに何度も何度も頷く姿を見れば、それで良いと言っているのが良く判る

「では無理をさせてすまなかつたの、もう少し眠っていてくれ、ワシは戸籍やメドーサとの話を進めておくのでな」

勘九朗にそう声を掛けて、地下の研究室を後にし応接間に向かう。そこで待っていたメドーサが

「どうだい？勘九朗は私の家族になることを了承してくれたかい？」

「凄まじく嬉しそうじゃったよ」

ワシの言葉にそうかい……っと安心した表情を見せるメドーサ。余りに人間らしさの強い姿に、神魔もまた変わって行くんじゃないやなど当たり前な事を考えながら、メドーサに魂をメタソウルに移し変える手術の流れ、素体にメタソウルを組み込むまでの流れを説明する。

「手術の日に連絡するから、出来れば来てやってくれると嬉しいんじゃないが？」

「判ってるよ。何とか都合をつけて付き添いに来るよ、今抱えている案件を全部片付けてな」

ゆっくりしている時間は無いから行くよと言って家を出て行くメドーサを見送り、ワシは机の上の電話に手を伸ばす。マリアやテレサのメタソウルとは違う。今まで生きて来た人間の記憶や技術を完全に転写するには今までのメタソウルとは根本的に質量が変わってくるし、かなり緻密な計算も必要になってくる。その間は霊具の作成の依頼を受ける事が出来ないという旨の連絡をGS協会と厄珍そして美神に伝え、勘九朗の魂を受け入れるメタソウルの大きさや計算を始めるのだった……そしてそれが終わった時。

鎌田勘九朗が死に、新しく生まれ変わる日はもう直ぐそこまで近づいているのだった……

リポート8 戻って来た日常 その6へ続く

## その6

レポート8 戻って来た日常 その6

琉璃に神獣が死んだとされている山の調査をいずれ依頼すると聞いて、正式に依頼される前に事前調査……つと云っても今は立ち入り禁止エリアになっているので、その周辺の土着の神話や避難して来た人の話を聞いたりしながら遠征にならない程度の近所の除霊などを行っていた。間違いなく神獣が死んだ山の調査は難航するだろう、それに悪霊などの出現の可能性も極めて高く。更に言えば神獣が死んだ事で怨念が残り崇神となっている危険性も高く、危険な案件となるだろう。エミや唐巢先生に冥子が居ても私達に声が掛かった理由は色々あると思うが、やはり一番大きいのは……

「横島君よねえ……」

【横島さんがどうかしたんですか？】

事務所に掃除をしてくれたおキヌちゃんになんでもないわよと手を振りながら、頭の中では別の事を考える。横島君が来れば水神で龍神と言う規格外の神魔のシズクは付いてくる、それに霊視と悪霊などの知識に特化した心眼に、英霊のノツブ。それに頼みさえすれば沖田ちゃんやくえすも同行してくれるだろう。更に言えば……人外に好かれやすい横島君ならば、可能性は低いけど死を偽装して生き延びているかもしれない神獣にも遭遇出来るかもしれない。これでもし横島君の除霊の知識と実力が伴っていれば間違いなく横島君1人に出される依頼だろう。だが今横島君には知識も何もかも足りないの、私と螢ちゃんにも声が掛かっていると考えるべきだろう

(規格外の才覚……か……)

私や螢ちゃんとは根本的に違う才能。いや……全てのGSから考えても彼と同じタイプのGSは存在しないといえるだろう。だってそうだろう？失伝している陰陽術を本能で使いこなし、霊力を物質として固形化させる。妖怪や神魔と心を通わし、そして更には眼魂を使いい、一部分的にだが、神魔や英霊の力を使う……そんなGSが居るわ

けない。

(でもこのままでは駄目だわ)

ヒヤクメも言っていたが眼魂……それも神魔のものだが、それを使えば使うほど横島君の魂は消耗し、そして人間としての感性を失う。横島君の才覚は確かに規格外だろう、だがかれはまだ17歳だ。珍しい力を持っているから、強い力を持っているからと使い潰して良い訳ではない。正直、国内外から横島君を迎え入れたいと言うGSは多くいる、移籍金もそれこそ兆単位で出してもいいと言っているGSも居る……正直蛭ちゃんと横島君に出会う前の私ならば、その法外な金額に目がくらんで横島君を移籍に出していたかもしれない。だけどそんな気持ちは私の中には今は存在しない

(なんなんだろうなあ……)

霊感がささやくとはまた違う感覚。ここで横島君を失えば、何もかも終わってしまう。そんな予感と2人を手放してはいけないという執着にも似た感情が私の中に生まれていた……今までこんな事になかったのに、どうして横島君と蛭ちゃんはここまで手放してはいけないと思うんだろう?と思いつながら送られて来た調査報告を見ているとおキヌちゃんが両手に郵便物を持って

【美神さん、お手紙ですよー】

「ありがと」

追加の報告書かな?と思いつながらおキヌちゃんに手渡された郵便物を確認していると

「あらっ…これって……」

中々上質な便箋。宛名は美神除霊事務所で、差出人は……「セイレーン」……その名前を見て思わず苦笑しながら、セイレーンの除霊と言うか説得の事を思い出した

【だーかーらー、私は歌を歌いたいだけなのよ。ただ、それで歌うと船乗りを吸い寄せて、船を沈めちゃうから困ってるのよ】

「そーなんかー。それは辛いなあ」

「みーむーむー」

【殺さないように、船を沈めても直ぐに助けてるんだけどね?でも



さー船を沈めてるから私も危険妖怪扱いなのよ。私はただ歌を歌いたいだけなのに、だからさ人の居ないときに歌ってるつもりなんだけどさ、たまーに運悪く近くに居たりするわけよ。本当私は歌いたいたいで、殺したい訳でも船を沈めたい訳でもないのに」

……東京湾の近くでセイレーンによる被害が出ていると聞いて、除霊に向かったままでは良かったんだけど、今はボートの縁でセイレーンと話をしている横島君と暗い顔をしているセイレーンを慰めているチビを見ているという自体になっている。どういうことよ……

「美神さん、これってどうなります?」

「……なんか、これ退治するって言う雰囲気じゃないと思うんですけど」

蛍ちゃんがどうします?と尋ねて来て、おキヌちゃんが退治って言う雰囲気じゃないですねと苦笑する。正直私もどうしたら良いかなんて判らない。セイレーンを退治するには歌合戦と言う事で、ウォークマンを用意して来た。今回は水辺の除霊だが歌と言う事でシズクは今回留守番になっているが、この光景を見るとどうも歌合戦をする雰囲気ではないし、かと言って戦うと言う雰囲気でもない。正直どうすればいいか?なんて私だって教えて欲しいレベルだ

「私は楽しく歌を歌って、それで聞いて貰えれば満足なんだけどね」

「うーん。美神さん、セイレーンってそう悪い妖怪じゃないっぽいんですけど?」

「みーむ」

セイレーンと話をしていた横島君とチビが振り返りどうします?

と尋ねて来る。私は少し考えてから

「海の上じゃないと貴女って死んじゃうの?」

「ううん?全然平気だけど?あ、でも水の妖怪だから水の近くの方が調子が良いってだけで、後陸地なら水を操る能力も弱くなるし、陸地でも私は全然平気。でも知り合いも居ないし、妖怪だから街に行っても危ないし」

陸上でも大丈夫つと……とりあえずセイレーンに少し待ってと声を掛け、横島君達を近くに呼ぶ

「歌を歌いたいだけって言うてるし、私達が相談してる間は歌わな  
いって言うてるし、話せばわからない妖怪じゃないと思うんだけど」  
「居る場所が問題って事ですよね、美神さん」

水の近くじゃなくても大丈夫なら陸地で歌う場所を作るって言う  
事も出来るんだけど、楽しく歌って歌を聞いて欲しいって言うのが  
ネックよね

【だが、比較的友好的な妖怪の様だ。除霊をすると、海辺の妖怪を敵に  
回すぞ】

心眼の言葉も最もだ。セイレーンの周りには水棲の妖怪や精霊が  
集まっている。無理にセイレーンを除霊すればそれらが牙を剥くだ  
ろう、そうなればここから陸地に戻る事も難しい。

「あ、美神さん。俺に提案があります」

「……横島君の家で面倒を見るって言うのは駄目よ」

正直横島君の家はどんな妖怪や英霊が来て大変な事になってい  
る。前仕事だから迎えに行ったら縁側で沖田ちゃんが昼寝をし、ノツ  
ブがメロンパンを齧り、清姫が頭に布巾を巻いて掃除をしている光景  
を見て蛍ちゃんと絶句したのは記憶に新しい。半分幽霊屋敷になっ  
ていると言えなくもない

「いやいや、違いますって、ほら、台湾で銀ちゃんに会ったじゃないで  
すか」

銀ちゃん？一瞬誰？つとなつたが、それが近畿剛一だと判り横島君  
が何を考えているのか判った

「アイドル事務所に紹介するつもりなの？横島？」

蛍ちゃんが嘘だと言ってよと言う表情で尋ねると横島君は嬉しそ  
うに笑いながら

「うん。銀ちゃんの事務所の電話番号は知ってるし、電話で聞いて見  
ようと思うんだ」

……どこの世界に人間のアイドル事務所に精霊を紹介するGSが  
居るのか？思わず私と蛍ちゃんは天を仰いだ

【それ良いかも知れないですね！】

【うむ。人外Ⅱ危険と言う図式を崩すきっかけになるかもしれない

な」

「だろだろ？良いアイデアだろ？」

「みむうー！」

心眼とおキヌちゃんは良いアイデアと言うし、横島君は嬉しそうだし……私は深い溜息を吐きながら

「知り合いに芸能事務所があるから、話をしてみるわ」

【本当ーありがとうー楽しみに待ってるー！】

そう笑って水の中に帰っていくセイレーンを見送り、港に帰り横島君が近畿剛一の事務所に電話するのを見る

「あ。もしもし？●●プロダクションですか？俺、近畿剛一の知り合いで横島って言います。ちよつと代わってくださいますか？」

それで代わってくれる訳無いだろう？と正直思ったのだが

「あ、もしもし？銀ちゃん？俺俺、ちよつと頼みがあつてさ。え？俺がデビュー？ちゃうちゃう、今除霊でき、歌を歌いたいただけなんだけど、歌う場所がなくて困っている妖怪が居るんだよ。歌も上手いし、綺麗だし、どう？え？面接？あ、うん。うん……写真つきの履歴書と歌を3曲？……OK OK」

……しかし私の予想に反して交渉はかなりスムーズに動いていた。電話しながら手帳にメモしていく横島君を見ながら振り返り

「……ねえ？なんで妖怪なのに面接OKになるのかしら？」

「わ、判りません」

事務所に妖怪を紹介するGSもGSだが、それを自然と受け入れる事務所も事務所だと心の底から思った

「日時は4日後？東京の事務所でだな？OK OK、その人と一緒に俺も行くわ。え？ついでに俺の面接？いらんいらん、俺はGSになるからアイドルにはならねえよ。ん、じゃあな、急に電話してごめん……あ、美神さん。面接OKですって！」

弾ける笑顔の横島君にもうどうにでもなれと私と蛍ちゃんが諦めの境地に達したのは言うまでもなく、更にセイレーンも一発で面接をとおり、その次の日にはアイドルデビューをしていた事に私は驚愕する事になった

「……お礼の手紙かしらね？後で横島君に届けてあげましょう」

事務所宛にはなってるけど、間違いない横島君充てだと思うのである。けるのは失礼だと思い。封をそのままにして引き出しの中にしまい、他の郵便物を確認する。やはり大半が神獣が死んだとされる山における調査報告であり、それを確認しながら調査に必要なであろう霊具。調査のスケジュールなどを念入りに調整しつつ、今回の一件はGS試験や原始風水盤の時の様な事にならないようにと心の底から祈るのだった……

セイレーンさんもアイドルデビューが出来たみたいで良かった。歌を歌いたいだけって言うのに退治するのは可哀想だしな。たまにTVで見るその姿に良かったと思う、それに今朝俺の家の郵便受けに入っていた手紙はハーピーさんからで、アリスちゃんつきのメイド兼お世話係として頑張っていると書いてあって二重で良かったと思う。

「うーし、チビ散歩行くかー」

「みーむうー」

両手をぶんぶんと振って飛んで来たチビの首輪にリードの紐を繋ぎながら、リビングで伏せているタマモに

「今日はタマモはどうする？」

「くう」

顔をあげはしたが、ふわあつと欠伸する姿を見て散歩に着いて来る気がないと判り、今日はタマモは留守番だなつと呟く

「あ、ワシ。途中までついていくぞ！メロンパンをかうのじゃー！」

「本当ノツブちゃんはメロンパンが好きだな」

結構な量を消費しているのを知っているのでそう呟くとノツブちゃんは黒いスカートに赤いシャツ姿で

【現世で食べた中であれは相気に入った！良い食べ物じゃ】

嬉しそうに笑うノツブちゃんを見ながらキッチンで夕食の準備をしているシズクに行つて来ると声を掛け、俺はノツブちゃんと共にチビの散歩に向かうのだった……

「みっみーみむー♪」

上機嫌に鳴きながら目の前を飛んでいるチビを見てみるとやはり気持ちが悪くなる。リードを長めにしているので、宙返りや先回をしている姿を見ると、ポケットからかぼちや頭の姿に変身したウイСП眼魂が出てきて

「イッヒー♪」

「みむみむ♪」

楽しそうに笑うウイСП眼魂とチビを見てみると、横から視線を感じて振り返ると、ノツブちゃんが見て楽しそうに笑っている。「どうかした？なんかついてる？」

それか寝癖とか？つと尋ねるとノツブちゃんは更に楽しそうに笑いながら

「ん？いやあ？お主はやっぱり面白いと思つてのう」

面白い？俺が？……ノツブちゃんの評価になんと反応すれば良いのか？それとも何処が面白いのか尋ねるべきか？と考えていると

「じゃ、ワシはメロンパンを買いに行くのでな」

「あー行つちまつた」

シユタつと手を上げてパン屋に走っていくノツブちゃん。考えるよりも先に訪ねるべきだったな、まあどうせ家に帰ってくるんだからその時に聞けば良いかと判断しチビの散歩を再開する

「あ、横島ー！」

「テレサー？どうしたんだ？」

買い物に向かう所なのだろうか、空の買い物袋を振り回しながら走ってくるテレサにどうしたんだ？と尋ねる

「姉さんにお使いを頼まれて、商店街に行く所なんだ。チビの散歩だろ？途中まで私も一緒に行つても良い？」

別に断る理由もないし、構わないと返事を返し。予定していた川原への散歩コースではなく、商店街から公園に向かう散歩コースに変更し、テレサと並んで商店街の方へと歩き出す

「みーむみーむみむ、みみーむー♪」

「イッヒ、イヒヒヒ、イヒヒーツ♪」

なんか歌っている。なんか歌っているのは判るのだが鳴き声なの

で何を言っているのかわからない、でもまあ楽しそうだから良いかとチビのリードだけを掴んで勝手に飛んでいかないように注意しながらテレサと話しながらのんびりと散歩をする

「カオスのジーさん、最近見ないけどどうしたんだ？」

「あーカオスか、なんか難しい研究をしているとかで姉さんしか研究室に入ったら駄目だって聞いてる」

そうなのか、たまに散歩している時に会ったけど、そんなに大事な研究をしているのかと呟いていると、テレサはチビ達を見て

「また今度遊びに行っても良い？姉さんもないし、カオスは研究している暇なんだ」

「別に全然構わないぞ？いつでも訪ねて来ても」

俺はいなくてもシズクはいるだろうしと言うとありがとつと笑ったテレサは商店街の方に視線を向けて

「じゃあ私はこっちだから。夕方になってくると幽霊が多いから、気をつけないと駄目だよ？まあ、心眼が居るから大丈夫だと思うけど。気をつけてね」

心配してくれているテレサにありがとうと礼を口にし、判れた所で心眼に声を掛ける

「テレサ、前は気付かなかったのにな」

「うむ、テレサも精神的に成長しているという事なのだろう」

心眼は竜気で構成されているので毎日身につけている訳ではない。周囲にも影響を与えるし、俺にも影響を与えるからだ。2日おきとか、3日おきとかの普通のバンダナに交換にしている。今日は心眼だが、姿を見せず沈黙していたのに心眼に気付いていたテレサ。前は心眼を見て驚いていたのになあ……と思いつながら早く早くと言わんばかりに目の前を飛んでいるチビに頷き、公園に向かって歩き出すのだった

「よー、横島今日も散歩かい？」

公園の近くまで来た所で大柄な女性の幽霊に声を掛けられる。なんか最近人間よりも幽霊とかの知り合いが多いような気がするなあと苦笑しながら

「チビは散歩好きだからな、石神さんは？」

【私は巡回だよ。ここら辺はおキヌちゃんのシマだからね】

その言葉に更に苦笑する。石神さんは幽霊ではなく、名前のとおりれっきとした神様だ。何でも元は隣町の祠に祭られていた石に宿る神様らしいのだが、工事してこの公園の近くに祠が移動して来たのでそれと共にこっちに来たらしい

【おキヌとの戦いは疲れたか？】

【まあねえ。あんな小娘だけど、私よりも霊格が上だからね。それに約束も約束だ、口にしたことは護るよ】

石神さんは守護するものとして浮遊霊などを襲い、追い出していたが、おキヌちゃんがそれを止めたのだ。幽霊同士の戦いは霊力の戦い、300年幽霊をしていたおキヌちゃんの霊力はやはり凄まじいらしく、石神さんを撃退して見せたのだ。何故か……プロレス技で、その後は浮遊霊などをむやみに襲わないなどの約束をしておキヌちゃんの部下みたいな感じで悪霊などが子供を襲わないように巡回してくれているのだ

【ここら辺は事故現場が多い。そう言うのに惹かれないように私が面倒を見るから心配ないよ】

どんつと自分の胸を叩く石神さん。大柄な体型に大きな声と頼もしい限りだなと思いつつながら、公園に入り

「うーし、チビ、行けー！」

「みーむうー♪」

【イヒヒー♪】

「いや、なんでジャックまでいくんや……」

ボールなどでチビとジャックが満足するまで遊んでやり、遊びつかれたのか、欠伸をしているチビを胸ポケットに入れ、夕日を見ながらのんびりと家に向かって引き返していると

「もし、そこのお方」

「はいっ？」

背後から声を掛けられる。今時間がない喋り方に幽霊？と思いつながら振り返ると、そこにはああ、良かったと穏やかに微笑む黒髪の女

性が居た。幽霊……じゃないな。緑色のジャケットに白のシャツとズボン、長い黒髪は天パ気味なのかゆるいカールを巻いている。色んな美人を見てきたと思うが、この人も物凄い美人、美人なんだけど……こう、なんと言えば良いのか判らないが、小竜姫様とかと同じ様な気配がするような……とりあえず観察するのは後にして何の用事か尋ねようと思い

「どうかしましたか？」

「ええ、少々道に迷っておりまして、六道女学院への道は判りますか？田舎から出て来たばかりでして、地図はこうしてもらっているのですが道が判らないのです」

道に迷っていると聞いて、気の毒になりバス停の近くまで案内する事にしたのだが、口は開かないが妙に心眼が驚いているような気がしてどうしたんだらうか？と思いつつ、俺はその女性をバス停の近くまで案内するのだった

「六道女学院だったら、あそこのバス停で終点まで行けば直ぐ近くですよ」

「まあ、ご親切にどうも。六道女学院に今度カウンセラーとして招かれたのですが、東京まで出てくるのがやっとだったんです。本当に助かりました」

田舎から出てきたのか、キャリアつきのトランクケースを引っ張っているから旅行者かな？って思ったんだけど、どうも違うようだ。しかしカウンセラー……か、やっぱり霊的な面でのカウンセラーなんだろうか？と思いつつながら帰る時間を大分ずれている事に気付き、早く帰らないとシズクが心配すると思い

「じゃあ、俺はこれで」

「あ、お待ちになつてください。貴方のお名前は？」

「横島です。横島忠夫」

「横島さんですね、今日はとても助かりました、私の名はキアラ。殺生院キアラと申します、またご縁があればどこかで」

穏やかに手を振るキアラさんに別れを告げ、俺は家に向かって歩きながら心眼に声を掛けた



「しかしなんか変わった人だったな」

カウンセラーって言ってたけど、霊力も感じたし、それに雰囲気も変わった人だなと思っただので心眼にそう尋ねる

「あれは聖人と呼ばれるタイプの人種だ、死後魂が昇華されやすい人間だな」

「へーじゃあ英霊って奴になるのか？」

牛若丸や、ノツブちゃんと同じ風になるのかと尋ねると心眼はまさかと笑いながら

「現代ではそれも上手く行くまい、あれが中世や戦国時代の生まれで日本人でなく、外国生まれならば英霊に至ったかもしれないがな」

ふーん、そう言う物なのか。俺と心眼はそんな話をしながら遊び疲れてポケットの途中で眠っているチビを起さないように気をつけながら、帰路を急ぐのだった……

横島が若干慌てて家へと引き返している頃。唐巢神父の教会ではある来客者が来ていた

「ピートおにいさまー！お帰りなさいー」

「……アンちゃんがなんで居るんですか？」

ヴァンヘルシング教授の孫娘「アン・ヘルシング」が尋ねてきており、笑顔で手を振るアンに対してピートの顔は引き攣っていた

「日本ではGSが今減りつつある。国際GS協会の決定で六道女学院などで若いGSの面倒を見ることが決定した、それで彼女も来たんだよ、ピート君」

「そ、そうなんですか……」

唐巢神父の言葉に引き攣った笑みで返事を返すピート、その視線の先では

「シルフィーお姉ちゃん。久しぶりです」

「そうだねー元気にしてた？」

「はいー！ピートおにいさまにもシルフィーお姉ちゃんにも会えて嬉しいです。今お土産を出しますね」

横島を思う余り適当な呪文で異界の神を召喚しようとシルフィー

と、中学生で思春期真っ只中のアンが楽しそうに話をしている、基本暴走思考の2人が出会うことで更に暴走するのではないか?という不安を抱き

「まあお前を慕う娘だ。仲良くしてやれ」

「あの、父さん。彼女ヴァンパイアハンターですけど?」

「毒を抱えてこそ、一人前の領主。それを制御する事もまたお前がブラドール島を治めるのにいずれ必要になるだろう」

……み、味方が居ないと嘆くピートだったが、次の瞬間血相を変えてしやがみ込む。その頭上を通り過ぎる銀の弾丸

「えへ、銃が暴発しちゃいました♪ごめんなさい」

お土産を出そうとしていた筈なのに、何故か銃を取り出し、それがピンポイントで暴発し、自身の頭に向かって来た事に蹲り、アンは舌を出してごめんなさいと笑う

「……まあ我には関係無い事だ。頑張れピエトロ」

自分には関係無いと言ってヴァンパイアミストで逃げて行くブラドール伯爵にピートが血相を変えて、そうはさせないと捕まえに入るが……

「父さん!それは余りにつてうわあ!」

逃げた父に抗議するピートだったが、今度はニンニクの瓶が飛んで来た事に気付き、慌てて両手で受け止めるピート。神の家だが、始祖の吸血鬼1人に半吸血鬼2人とニンニクは最悪の兵器足りえる存在になっていた

「とりあえず、今日は顔を出しに来ただけだから大丈夫だと思うよ」

「僕には毎日尋ねてくるようにしか思えません」

頑張りなさいと肩を叩く唐巢神父にピートはがっくりと項垂れるのだった。そして案の定毎日アンが尋ねてきて、何らかのトラブル(ピートに深刻な被害)を起し続け、ピートがやつれたの言うまでもないだろう……

別件リポート ただいま修行中へ続く

## 別件リポート

別件リポート ただいま修行中

薄暗い部屋の中で蠟燭の炎が揺らめき、ゆっくりとした深呼吸の音だけが部屋の中に響き渡る。その呼吸の主である陰念の額からは凄まじい量の汗が流れ落ちている……陰念はその汗を拭おうともせず瞑想を続ける

「よし、今日はここまでよ」

「……はい。お師匠様」

闇の中に響き渡った女性の声と共に陰念は目を開き、ゆっくりと立ち上がり。自らの手でタオルを掴み、汗を拭い始める

「大分手足の感覚は戻って来たみたいね」

「お師匠様のおかげです」

用意してあった水を飲みながらお師匠様……つまりは三蔵様のおかげだと感謝を口にする。悪魔の憑依と強制除霊で手足の感覚は長い間あやふやで、しかもチャクラもボロボロで霊能者としては勿論再起不能寸前。普通に生活するのも不可能に近いと言われていたが、お師匠様のおかげでここまで回復できた。お師匠様にはただただ感謝するばかりだ

「でもまだまだこれからのよ。手足の神経は大分回復して来てるけど、チャクラのほうはまだまだこれからよ。ハッキリ言うけど、普通の方法じゃ霊能者としてカンバックするのはまず無理よ」

……判っていた事だが、ハッキリ言われると辛い物があるなと思っただが、普通の方法ではなければ復帰出来ると言う事なのだろうか  
「二応その普通じゃない方法での復帰と言うのを目安に考えているわ。これなら早ければ後2ヶ月ほどで霊能者として復帰できるかもしれない……でも尋常じゃないリスクを伴うわ」

「リスクがあっても良い、霊能者として復帰出来るならば！俺は復帰したい！」

ニュースや新聞で何度も見ている。ガープの出現に伴い、日本のG

Sは有名所を除き長期休養や、GS免許の返上を行い。苦肉の策として仮GS免許の交付に踏み切り、霊能者の育成施設としては取り壊される予定だった白竜寺もお師匠様と雪之丞のおかげで残る事になった。絶望的な状況でも皆が出来る事を全力でやっているのだ、ならば多少のリスクなど……

「GS試験の時みたいに完全に悪魔になって2度と戻れないとしても？」

「……ッ！」

お師匠様の言葉に思わず息を呑む。悪魔に魂を喰われる激痛と恐怖は今もまだ俺の中に残っている。俺が硬直しているとお師匠様は意地悪が過ぎたわねと呟き

「勿論行き成り悪魔になるリスクがある訳じゃないわ。まだ可能性の段階だし、もし実用段階に入るならその前に幾つも保険策を用意する。ただ暴走すれば、悪魔になる。戻って来れる保証がある訳でもない、霊能者として復帰は出来るだろうけど、何時爆発するかも判らない爆弾を抱えての復帰になるわ。それでも直ぐ復帰したい？時間を掛ければ……そうね。10年……20年……もつと掛かるかもしれないけど、安全にそして確実に復帰出来るわ。それでも直ぐにでも復帰したい？」

確かにそこまでのリスクを背負うのならば時間を掛けるのが一番なのだろう。俺もそれは判ってる、判っているが……

「俺はそれでも早く復帰したいです」

リスクがなんだというのだ。俺は色々な人間に迷惑を掛けている。そんな俺が自分の身を護ろうとするなんておかしな話だ、俺は少しでも早く復帰したい。この気持ちを偽る事なんて出来はしない

「……判ったわ。貴方の意思を尊重してその方向で調整します」

「よろしくお願いします」

俺の無理な要望を聞いてくれたお師匠様に頭を下げる。するとお師匠様はしようがないわねと苦笑しながら

「覚悟を決めた人間を止めるのは無理なのよ。私も同じだったしね、だから私は止めない。でも、リスクを少しでも減らせるように今まで

以上に鍛えるわ。と言う訳で、今日は今から滝行よ！」

「う……うつす!!」

さー行くわよーっと笑うお師匠様に頷き、俺は滝行の為に白竜寺を後にするのだった……

「うあー……」

「おう、大丈夫か？」

同室の雪之丞に大丈夫に見えるか？と返事を返す。お師匠様の修行は普段も厳しいが、今日はそれをはるかに超えていた。滝行に瞑想それに殆ど動かない手足での組み手に走りこみ、限界を超えていると言える。そして更に宿題として読経も与えられている

「読経なのか？それ？」

「知らん」

普段読むお経とはまるで違う。雪之丞にそう尋ねられても知らんとしか言いようがなく、言われた通り読み終えて眠る準備を整え、布団に横になり拳を握り締める。まだ感覚は弱いが拳は握れるし、腕も上がる……少しずつだが己が回復しているのは判っていた、だが焦りが募って行く今の状況でのんびりハビリをしている精神的な余裕が俺には無かった

(少しでも早く復帰してやる)

その為ならば過酷な修行にも、リスクだって背負ってやる。俺はそんな覚悟を決め目を閉じるのだった……

「あ、悟空。急にごめんね」

【どうなさいましたか？お師匠様？何か問題でも？】

「んー問題って言うか、うん。そうね、私の我俣かな……」

【我俣ですか……それはいつもの事ですな】

「ひどいなー」

早朝三蔵と悟空の楽しげな会話が三蔵の私室で行われていた。穏やかな雰囲気だったが、それは最初の方だけで最後のほうでは凜とした口調で三蔵は言い切った

「スパイとして活動しているアシユタロスと接触をとりたいの」

【……それはまた難しい頼みですな】

「それは判ってるわ。でも必要なの」

【……判りました。連絡がつかましたらご報告を入れます】

「よろしく、悟空」

その言葉を最後に悟空の声は遠ざかり、三蔵は深く溜息を吐きながら天井を見上げ

「仕方ないわね……私には止めれないわ」

覚悟を決め、信念を持つ人間を止めることは出来ない。なら少しでも手助けをしたいじゃないと呟いた三蔵は立ち上がり

「さてと、じゃあ今日もしつかり鍛えますか」

今日はどういう修行にするかなーと呟きながら、三蔵は私室を後にするのだった……そしてこの時の連絡が陰念の運命を大きく変える事になることを今は誰も知らないのだった……

お師匠様からの連絡に深い溜息を吐く、アシユタロスに接触を……それはつまり何らかの魔具の作成依頼だろう。

(やれやれ……)

ワシは年を取ったが、お師匠様は英霊であるがゆえにまだ若々しく、そして以前のままだ。思いのまま進む、そしてワシ達はその尻拭いをする。いつもの事だ……ああなつては止めることは出来ない。あまり気は進まないがアシユタロスに連絡を取るかな

「まあ、まずは朝食じゃな」

連絡は何時でも取れる。まずは朝食じゃなと呟き、ワシは自室を後にするのであった……

「良い具合じゃな」

「うむ」

朝食の後アシユタロスに連絡を取ろうとしたんじやが、出ていると言う事で後で連絡すると伝言を頼み、ロンの孫のモグラの修行を見に来たんじやが

「うっきゅいー!!!」

巨大な岩石を鼠程度の大きさのまま粉碎するモグラ……凄まじい強さじゃな。しかもまだまだ成長するのが判っているので、もしかす

るとロンの一族の中で最強になる可能性もあるの

「きつとあれじゃな。横島殿の所に帰りたいんじやろ」

「寂しくないか?」

少し寂しいと呟くロン。孫が自分よりも人間に懐き、そしてその人間のために強くなるうとするのは複雑じやろうなあ……だが横島と関わったおかげで角が生え、恐ろしい強さを発揮しているのだから文句など言えるわけも無い

「とは言え、修行はまだまだ始まったばかりじゃがな」

「こ、これでですか!」

素振りをしていた小竜姫が驚いたように振り返る。そしてその視線の先では

「うきゅーうきゅうきゅうきゅーうきゅーうきゅーツ!!!」

連続パンチからの飛び蹴りで岩山を粉碎しているモグラ……格闘ゲーム見せすぎたかの?その内竜巻旋●脚や昇●拳を使いそうで怖いんじやが……と内心戦慄しながら

「お主は元々人じゃが、普通の竜族は竜の姿から人化を覚えるんじやよ?」

「あっ」

ロンの言葉に今気付いたと言う感じで口に手を当てる小竜姫。妙神山にこそ括られているが、小竜姫もまた天界の竜族の中ではエリートと呼ばれる血筋だ。ゆえに生まれた時から人間の姿じゃが、普通の竜族は違う。長い時を生きて、そこから竜に変化するのだ。鯉や土竜から竜変化は当然竜の姿もしくは暫くは鯉や土竜の姿で生活し、竜気を蓄え本格的な竜へと生まれ変わっていく、そして其処からさらに人化を覚えて竜族へと変化していくのだ

「あやつのように竜になるのではなく、小さくなるという方向性での進化は驚きじゃ」

「……横島さんの側によつぽど居たかつたんでしようね……」

横島は人外に好かれやすい、しかもそれが子供ならなおの事。モグは横島の側に行きたくて、竜としてではなく、マスコットととしての進化を始めている。それが間違いとはいえないが、正直少し判断に

悩むところだ

「竜化をコントロールし、人化を覚えたら横島殿の元へ返すと約束したからの」

「竜化はともかく、人化は難しそうじゃなあ」

火炎放射なども使っているのを見れば、竜化は早そうじゃが、人間化は難しいかもしれんのうとロンと笑いあいのだが、丁度その瞬間

「うきゆうきゆうきゆうー!!」

「あちちちーツ! つぎやああああッ!!!」

トドメと言わんばかりに吐き出された炎にこんがり焼かれて鬼門を見て、ロンにそろそろ肉体的なトレーニングを終わりにして、そう言う術系統の訓練に移行したらどうじゃ?と問うべきか、どうなのかと悩みながら真面目に修行に取り組んでいるモグラと小竜姫を見つめるのだった……

「ふう……こんな感じかな」

日付が変わる少し前に終わった書類整理に溜息を吐きながら、背凭れに背中を預け大きく背伸びをした。横島君に憑依に対する訓練を着けると言う約束も護れていないし、舞ちゃんも本当ならもうこっちに來てる予定だけど、まだ忙しいと言う事でまだ呼べていない。頑張っているつもりなんだけど、トラブルが本当に重なり続けていて、本当に嫌になってしまう

「エミさんと唐巢神父も頑張ってくれてるんだけどなあ……」

白竜寺は英霊三蔵法師様と伊達君の活躍で盛り返しつつある、エミさんはタイガー君に攻撃系の霊能力を教えるのでそれに伴い、訓練施設の貸し出し要請。唐巢神父は唐巢神父でブラドール伯爵と組み手を行うので、魔力を検知しても動かないで欲しいと言う頼み。GSが減った事で負担が大きくなってきているが、それでも弟子を鍛え、己を鍛えガープの再出現に備えてくれているのには本当に頭が下がる思いで一杯だ。だが安全な所で文句を言ってくる国際GS協会やバチカンはこれでも納得しないと問うのだから鬱陶しい物だ



「そつちでもソロモンが動いてみるって言うのよ」

中にはガープの出現などガセネタでその様な状況でも自分はちゃんと働いているってアピールだろうって言う馬鹿も居る。こんな事になるのならGS試験の時に招いてやれば良かったと心の底から思う。私が若すぎると言う事で荒を探してくる連中が多すぎて本当に嫌に成ってくる

「……そろそろ舞ちゃんも呼びたいし、横島君の訓練の事もあるし……」

休暇もなしで頑張つて来たけど、そろそろどこかで休暇を取らないと潰れてしまいそうだ。1日や半日と言う休暇は程ほどにとつているが、それでは溜まりに溜まった疲労が取れるはずも無い。出来る事なら1週間ばかり休暇を取れないか?と思うがそれも難しいだろう  
「いつその事どこかの学校での除霊実習の視察とかで動くかなあ」

霊能科のある学校の除霊実習は温泉とかを兼ねているので、それで動いてみるかなあつと考えていると扉がノックされる音がする。もう誰もいない時間のはずなのに?私は警戒心を強めながら

「どちら様ですか?」

破魔札と精霊石を手に訪ねるが返答は無く、代わりにドアの隙間から封筒が入れられ

「私なりに調べ、動いた結果です。上手く使えるかは貴女次第よ」

聞き覚えの無い女性の声。椅子から立ち上がり扉を開けるが人の気配は無い。私は足元の封筒を拾い上げ

「なにかしらね?」

上手く使えるか私次第と言われた封筒を警戒しながら開ける、中身を見て私は驚いた

「っ、これって!?!」

思わず大声を上げかけたが、それを堪え封筒の中に書類をしまい。靴の中に入れてGS協会を後にし、自宅で封筒を開けゆっくりと確認しもう1度驚いた

「あの声の何者?」

それは決して表に出してはいけない物。各国のGS協会の理事長

や支部長が行っている不正などのデータに不倫などの証拠の写真。上手く生かさせて……こんな物どう使えつて言うのよ。脅しには使えるかもしれないけど

「一回冥華さんに相談してみよう」

これは下手に使えば私自身の身を滅ぼすかもしれない。それほどの武器だ、とは言え、これらが無ければ長い間権力争いの中で生きて来た狸達を相手にすることなんて出来る訳もないし……冥華さんに助言を求めて見よう。あの人ほどの狸を私は知らないし、それに政治的な面でもあれほど頼りに成る人材は居ないだろう

「もしかすると勉強会とかになりそうね」

主に狸と話し合いをする時の相手の心の読み方とか、カードを切るタイミングとか、そう言う政治的な面での勉強をする必要があるかとも思いながら、今日は休む事にした。翌朝、冥華さんに連絡を取ると「うふふ〜いい〜物を持って来てくれたわあ〜これは私が〜有効に使ってあげる。琉璃ちゃんが休めるようにね〜」

「お、お願いします」

笑っているのだが、もの凄く不吉に思えて思わず引き攣った声で返事を返してしまった。そしてその後GS協会で書類整理をしていると、今まで却下されていた私考案のアイデアが通ったなどの連絡が次々に来て

「あの人……何をしたんだろう?」

まだまだ私が勉強しなくてはいけない事が多いと思いつながら、あの人が敵じゃなかったことに安堵の溜息を吐き

「これでやっと動ける」

神獣が死んだかもしれない山の調査。あの山は利権の関係では中々調査の許可が下りなかったが、今回の事で許可を強引に手にすることが出来た。へんな横槍が入らないうちにと、私はこのタイミングで正式に美神さん達にあの山の調査の依頼を出すのだった……

一方その頃。とある山中の中の人狼の里では

「てえい！」

「うわ！」

「そこまで！勝者犬塚シロツ!!!」

自分よりも遥かに大きい人狼族の少年を木刀で吹き飛ばすシロを見て、満足そうに頷きながら判定を口にするポチ

「修行が足りん。走りこんで来い」

「はい、先生」

落ち込んだ様子で走っていく少年を見ながら切り株に腰掛けているシロに

「良い腕だ。動きも良い、クロの仕込みか？」

「そうでござるよ。ポチせんせー」

まだ幼い少女だと言うのにな、このまま行ったら女の身でありながら里一番の剣士になるではないだろうか？と思いつながら木刀を片付けているシロに気になった事を尋ねてみた

「何ゆえそこまで焦る。クロもそこまで強くなれとは言わないだろうに」

人狼は鬨いの中に身を置くが、いくらなんでもこの齡で剣を取れとは言わない。女友達は居ないだろうが、まだ遊んでいてもおかしくない頃合だというのにシロはやけに焦っているように見えそう問いかけると

「拙者は村の外でやりたい事があるのでござるよ。だから強くなるでござる」

「掟はどうするつもりだ？」

村の外へ行きたい。それは子供が夢見る事だが、それが許可された事など無い。子供の夢なのか、本当に村の外に出るつもりなのか？と思いつながら問いかけるとシロは真剣な表情で

「父上を助けてくれた方の元へお礼奉公に行くでござるよ。掟よりも、もっと大事な物があるのでござるよ。だから拙者は誰に認められずとも、カづくで村の外へでるでござる」

秘密でござるよ？と笑い駆けて行くシロを見ながら

「お前の娘はお前を救った人間に恋をしているのか？」

「そうかも知れぬな。横島殿は気持ちの良い男だった」

シロは気付いていなかったようだが、クロもこの近くに居た。茂みから顔を出したクロに

「お前から見てもか？」

「うむ。才覚だけではない、人格もまた良い」

少し色欲が強すぎる気がしない訳でもないがなと笑うクロにそうかと呟き

「お前の娘が人狼の歴史を変えるやもしれんな」

「ん？なんだお前の事だから駄目だと言うと思っただぞ」

確かに村の外に出ると言う事を認めるつもりは無い。だがあの目を見て悟ってしまった

「あれは止まらんよ。自分の目的に向かって走り続けるだろう、だからどこまで行くのか見てみたい」

恐らく今の人狼の里で最強の剣士としての才覚を見せているシロだからこそ、見てみたいと思っただけで先を……だから

「おい、村を出て行くときは声を掛ける。俺も横島を見てみたい」

「……判った」

どうせ長老が許可を出す訳無い。だからこそ脱走すると判っているクロに俺にも声を掛けるよと呟き、切り株に立てかけてあった刀を抜き放ち

「久しぶりにどうだ？」

「いいだろう、では負けた方が夕飯を取りに行く、それでどうだ？」

「乗ったぞ。では1つ手合わせ願おうかッ!!」

「来い！ポチ!!」

夕暮れの光の中、背後から聞こえて来た金属音に立ち止ったシロはポチとクロの手合わせの姿を見て、近くの切り株に腰掛け脚を揺らしながらぼそりと呟いた

「ポチが良い人なのは驚きでござるよ」

記憶の中では父を斬り殺した悪人だが、今はそんな気配も無く父と仲の良い姿を見せているポチに平和でござるなと嬉しそうに微笑むのだった……

リポート9 神の山を搜索せよ その1へ続く

## リポート9 神の山を搜索せよ その1

リポート9 神の山を搜索せよ その1

ここはどこなんだろう……？判らない判らない判らない……  
なにか、そうとてもとても大事な事があつたはずなのに……  
痛い、身体が痛い……なんでこんなに痛いのか判らない……

お腹が空いた、もう動きたくない。でも動かないと死んでしまう  
判らない、判らない、どうしてこんなに苦しいのか、どうしてこん  
なに焦っているのか、何もかもが判らない

暗い山の中声にならない何かの声が延々と響き続けているのだつ  
た……その声は誰にも届く事は無く、延々と深い森の中に響き続ける  
のだった……

「ふー……ふー……結構きつい運動してるんじゃないやなあ、横島さんは」

ゴールとなつている広場で蹲り息を整えているタイガーの呟きを  
聞いて、隣でストレッチをしている雪之丞に

「きついかな？これ？」

「いや？普通だろ？」

だよなあ？寧ろ準備運動じゃね？と2人で話しているとストツ  
プウオッチを手にしていた蛍がノートに何かを記録しながら

「タイガーさんはあれじゃないかしら？霊力の循環が上手く出来てな  
いのが原因じゃないかしら？」

まあでもそれはエミさんの指導の範囲だから私は何も言えないけ  
どと言う蛍。今日は毎朝走りこみとトレーニングをしていると言う  
話をしたらタイガーがどんな運動をしているのか興味があると言う  
事で早朝5時に近くの公園で待ち合わせて一緒に走り（本当は蛍と一  
緒が良かったので嫌だったが、同期のGSと言う事もあり、お土産な  
どもくれたので断るに断れなかった）途中で雪之丞も合流し、結構な

大所帯での走りこみとなった

「みーむ！みみーむ!!」

「ゴン、ココーン!!!」

今日は珍しくタマモもついてきて、チビと追いかけてっこをしている。モグラちゃんが居なくて寂しそうなので、励ますために付いて来てくれたんだと思うんだが

「ゴン」

「みむう!？」

「ココーン」

頑張つて逃げているチビに回り込み、尻尾で視界を塞ぎ甘噛みをすする。チビが楽しそうだから良いんだが、少し苛めているようにも見えなくも無い……のが正直少し不安なところだ

「うっし、横島やるぞー!」

「ええーやめようぜ?」

拳を掌に打ちつけやる気満々の雪之丞に止めようぜ?と呟く。雪之丞は良く走りこみに参加してくれるが、その代わりに組み手をやろうぜと毎回言ってくる。雪之丞は俺と違い正式に武道を修めているだけあり、俺よりも近接の技術は高い。霊力無しでは分が悪すぎるので断りたいのだが……

「じゃあ、いつも通り時間は3分。使つて良い霊力は身体強化のみで良いわね?」

【横島。お前は近接の技能が弱い、これも修行だ】

心眼と蛭に言われては断る事は出来ない。俺は深い溜息を吐きながらベンチの上のリュックからオープンフィンガーグローブを取り出し、雪之丞と対峙するのだった……

向かい合つた横島を見ながら軽く右足でステップを踏みながら。小さく舌打ちする

(ちっ……またかよ……)

心眼の補助もない、陰陽術による強化も無い。霊力の籠手による超火力も無いし、眼魂も無い……ベストな状態とは程遠い横島だが、鏡

写しの様に同じ構えを取る横島……自身に格闘術の経験が無いから俺の真似をしているのだが、その真似を完全に取り込み自己流に強化していく

(つたく……これだから止められない)

俺だって毎日毎日訓練を積んで強くなっているつもりだ。ママお師匠様にも筋が良いって言われたのだが……

「うひっ！おっかねえ……」

情けない声を上げながらも俺のリードジャブを的確に弾く横島。距離感を掴む為のジャブなのに、それすらも当たらない。技術が無い横島にある物。それは技術のある俺には無い物だった

(化け物め……)

それはその目だ。俺の拳は決して遅くは無い、寧ろプロボクサーと比べても早いと言う自負はある。だが奴は、それを目で見てから打ち落とすと言う化け物じみた事を平気でやっている。それは目の良さも去ることながら、見てから反応できるだけの反射神経を持ち合わせていると言う事だ

「はー、ワツシには全然見えんですのジャー」

【お前はもつと靈力のコントロールを意識しろ。漫然と使うな、己と力として十全にコントロールせよ】

心眼は組み手の間だけだが、タイガーの訓練を見ている。あれだけの体格だと言うのに近接がからつきしって言うのは勿体無い事だな……そんな事を考えながらもずつとジャブを繰り出しているのだが

「よつつと、えつと……こうか！」

「ぬおっ!？」

手の甲で俺のジャブを受け流しながら懐に入り込んで来た横島を引き離す為に、右を打ったがその右を掴れ投げ飛ばされる。決まりが浅かったので片手について態勢を立て直す

「なんかちやうな、こう？いや、こうだったか？」

両手を握り締め、足を動かす横島を見ながら舌打ちする。どうもまた眼魂の中に居ると言う牛若丸か信長に何かを教わっていたのだろう。決まりが浅くて良かったと安堵する、アレは完全に決まっていた



らつかまれていた右腕をへし折られていた。

「後1分30秒」

審判の笛の声を聞いて、このままでは組み手の意味が無い。今までずっとお互いに有効打無しの引き分け。今日こそは有効打を取る

「おつらあ!!」

「とっ!おっおおう!?あ、あぶねえ!!」

連続で放つジャブをパリイやダッキングでかわす横島。完全に逃げに回っているのは判ったが、このまま逃げさせるつもりは無いジャブを放ち、引き戻した瞬間

「シッ!!」

「!!」

完全に左を戻さず、体重移動と右手を後ろに引く動きを利用しジャブから強引にフックに切り替える。今までのパターンと変わり、当たたと確信したのだが横島はダッキングでそれをかわす

(癩だが、かわされるのは想定範囲内だ!)

ママお師匠様にも褒められた一撃だが、それと同時に言われていた。横島ならそれを避けると、だから避けられるのは想定範囲内

「ぶつとべえッ!!」

今度は左腕を引いた勢いと踏み込んだ勢いを利用し、右腕を強引に振り上げる。ダッキングで避けた先、立ち上がるにも、避けるにも間に合わないタイミング。完全に取ったと確信したのだが

(て、手応えが薄い!)

当たたはずなのに拳に返って来る感触が余りに弱い。なんだ!あいつは何をした!?

「おーいちち……舌噛んだ……」

痛いと言っているが、有効打とは言い難い。蛸もそれが判っているから有効打と言わない、完全に当たったはずの一撃をいなされ混乱した数秒の間に

「はい、そこまで!今日も引き分けね」

手を叩きながら言う蛸の言葉に悔しい物を感じながら、横島に詰め寄り

「お前。最後何をした？アッパーは完全に入っていたはずだ」

最後の一撃の手応えの無さ。横島が何かをしたのだと思い、何をしたらと尋ねると横島は

「こう両手でそれを受け止めて、顔だけを後ろに逸らした？って感じ」  
両手で受け止めて、顔を逸らした!?それをあの一瞬でか!?完全に隙を突いた筈なのに横島の目はそれを完全に捉えていたのだ

「そうか、謎が解けたぜ。次は絶対俺が勝つからな!じゃな!!」

もう組み手はしないぞーっと言う横島の怒鳴り声を聞きながら、俺は白竜寺に戻る為に走りだすのだった……とりあえず今度はもつと不意をつけるコンビネーションか……

「霊力ありにして貰うかあ?」

いつまでも身体強化だけでは埒が明かない。蛭に相談して、霊波砲くらいはOKの組み手にして貰うか?などと考えながら、横島の不意を突けるコンビネーションを必死に考えるのだった……

横島が学校に行っている時間帯に私は美神さんに呼び出された。何事だろうか?と思いつながら事務所に行くと神宮寺がソファアに腰掛け書類に目を通していた

「また厄介ごとですか?」

「ええ、しかも超特級品のね」

神宮寺は基本的に誰とも組まないが、横島が居るから美神さんとは協力体制を取る。それが本当に面白くないのだが、必要な事なので我慢する。横島の信頼を得ていて、しかも神宮寺自身も横島を気に入っている。彼女は非常に危険だ

「蛭。貴女も目を通しなさい、横島では理解できないと思いますが貴女なら判るでしょう?」

差し出された書類を受け取り目をざっと通し、直ぐに理解した。それはとある山周辺の霊力や悪霊の発生のグラフ

「これ……どういふことなんですか?本当に同じ場所なんですか?」

とても同じ場所には思えなかった。霊力も激減し、悪霊も増えてい

る。極上の霊地だった筈の土地が、1晩で並以下の霊地になってしまっている

「琉璃の報告によると、私達が香港に居る間日本に強力な魔族の反応があったそうなのよ。ガープともう1柱がこの山で何かをしたって言う話。そして私達に調査の依頼が出たって訳」

「じゃあ神宮寺は？助っ人ですか？」

「そうなりますわね。魔術的な観点から見れる人間も必要ってことですわ」

確かに魔法使いとして神宮寺は最高峰だ。調査に同行して貰えば心強い事は間違いない

「周辺の都市伝説として、どうもこの山には強力な山の神が居て守護神として祭られていたみたい。だからこの周辺の工事なども出来ないレベルだった事を考えると、規格外かつ、知られていない神、もしくは神獣が居た山らしいわ」

神か神獣か……どっちにせよ。強力な神が居たから護られていた土地……その神の死もしくは、弱体化により周辺の霊力のバランスが崩れたって事ね

「やはり長丁場になりますわね、少なくとも1週間は見積もるべきですが、宿泊施設などは？」

「一応その周辺にも村があるからそこに拠点となる場所を作っているって聞いているわ」

拠点……少なくとも霊力の調査が出来る施設なども準備してきているって事ね。流石に持ち込むのは難しい機材が多いはずだから向こうで用意してくれるのはありがたい

「それと横島君が間違いなく鍵になるわ……調査では恐らく、神獣と推測されているから」

「横島を囿に使うということですか？」

私と神宮寺の視線に気付いたのか美神さんが慌てた様子で手を振りながら

「そんなつもりはないわよ！ただね……横島君の今までの事を考えるとね……」

美神さんの言葉に少し考えてみた。チビ、タマモにモグラちゃん  
……シズクにノツブ……

「向こうから寄って来そうですね」

「横島が拾いそう……」

動物に好かれる特性を考えると横島の側に近寄ってくる可能性が高い。いや、寧ろ横島がそこに居れば向こうから飛んで来る可能性が……

「ね？なんかそんな気がしない？」

神だとしても、神獣だとしても人外に好かれる横島の事を考えると、その行方不明の神にしろ神獣にしろ横島が居るだけで解決しそうな気がしてしまうのだった……

「とりあえず仮に神獣を見つけたとしても、他にも調査する事は沢山あるわ。出発する2日までに準備を整えるから蛍ちゃんもくえすもちゃんと準備をしておいて、横島君にはこっちから電話をしておくから」

美神さんの言葉に判りましたと返事を返し、調査のスケジュールや周辺の民謡などからその山に住まう神の特定など、様々な話し合いを行い。厄珍などで霊具を集め、2日後。美神さんの運転する車でその山へと出発するのだった……

足踏みをして苛立ちを隠せないガープ。神獣を捕獲する筈だったのだが、霊力を放出され、ガープもアスラも手痛い反撃を受け逃げ帰ってきてからずっとこの調子だ

「神獣は逃げた訳ではない。また捕らえればいいだろう？」

「違うー！そうではない！あいつめ、私に利用される事を恐れ蓄えている霊力を！神核を捨てた！！既にあの土地にも神獣にも利用価値はないのだ!!」

生きている訳ではないのか？ガープの言っている事を今一理解出来ず首を傾げるとガープは深い溜息を吐きながら

「私にしろ、お前にしろ、存在の基点となる核がある。それがあからこそ、私はガープであり、お前はアスモデウスなのだ。ところがあの

神獣め！その霊格を捨てたのだ！あやつが居たから栄えていた霊脈は機能を失い、あいつ自身も恐らく数千年は力を取り戻すことは無い！それが問題なんだ」

計画が狂った。これだから畜生は計算出来ないんだ！とかぶつぶつ呟いているガープ。これは暫くは不機嫌なままか？と溜息を吐いていると

「ガープ。その失態は我の物だ。ゆえに、詫びの品を持ってきた」

アスラがその巨体を小さくして部屋に入ってくるなり、机の上に何かの液体が入った小瓶を置く

「まさか……それは……!？」

「何なのだ？それは？」

ガープはそれが何か知っていたようだが、我は知らぬ。それが何なのかと尋ねるとアスラはニヤリと笑いながら

「不死の霊薬。アムリタの上澄だ。本来の不死を与える霊薬としての効果は残念ながら無いが……これ自身膨大な霊力を蓄えている。これあの霊脈の代わりになるだろうか？」

こんな小瓶の液体で霊脈の変わりに？幾らなんでもそれは無いだろう。見てみるガープだって肩を震わせて……

「素晴らしい！素晴らしいぞ！アスラ!!アムリタ……まさかそれを手にすることが出来るとは……霊脈の変わりになるところか、あの霊脈以上だ!!」

今まで見たことが無いくらいに喜んでいるガープ。機嫌が治った用で何よりだが、本当にこれで霊脈の変わりになるのだろうか？

「これで実験が再開出来る。成功するとは言い切れないが、やるだけの価値はある」

アムリタの小瓶を手に立ち上がるガープに何をするつもりなんだ？と尋ねるとガープはにやりと笑いながら

「英霊召喚さ、前々から思っていたが、この軍団には脳筋しか居ない!!!私が不在と言うだけで致命的なことになりかねない！だから軍師が出来る英霊を呼び出すのだ」

……脳筋と言われてアスラと顔を見合わせるが、確かにその通りだ

とお互いに思い、上機嫌で出て行くガープを見送りながら

「お前知り合いに頭脳派とか居ないか？」

「居たら誘っている」

だよな……とお互いに深刻な表情で頷き合い。これからもし増える人材が居るとするのならば、ガープのフォローを出来る頭脳派が来てくれれば良いのだがとアスラと揃って溜息を吐くのだった……

リポート9 神の山を搜索せよ その2へ続く

## その2

レポート9 神の山を搜索せよ その2

車に揺られる事4時間。到着した村を見て俺は思わず大きく背伸びをしながら

「すっごい綺麗な所ですねー」

時代劇とかに出てきそうな木造の家。高い木々に村の中を通っている透き通った川……調査依頼じゃなくて、普通にキャンプとかで来れたら良かったのにと思える場所だ

「そうね。こんな綺麗な場所だとは思わなかったわ」

【ですねー空気まで綺麗ですよ】

運転しているときは険しい顔をしていた美神さんだけど、美神さんも車を降りて周囲を見ると穏やかな表情で笑う。車の中で説明は聞いていたが、とてもこんな所にガープとそしてガープと同格の魔族が居たなんて聞いても信じられないなあ

「みむーみみーむうー!!」

「とっとーまだ駄目だ。待て待て」

自然を見て、興奮した様子で飛び立とうとするチビを慌てて捕まえる。散歩の許可は得ているが、まずは調査が先だから待てと言うと詰まらなそうに鳴くチビに後で遊ぼうなと声を掛けてからGジャンのポケットの中に入れてやる

「ここはまだ靈力減退の被害が出ていないと言う所でしょうね。拠点としては最適ですわね」

「そうなんですか?」

靈力減退と聞いても俺はそれがどんな事なのか判らず、周囲を見ていた神宮寺さんの言葉にそうなんですか?と尋ねる。今回は魔術的な捜査も必要と言う事で神宮寺さんも同行してくれているし、シズクも居る。ただノツブちゃんだけは東京を手薄にする訳には行かないと言う理由で残ってもらった。ノツブちゃん自身も

【田舎より都会が良い!】

と言う理由で残ってくれたので、置いてきた訳ではないので気持ち  
がかなり楽だ

「ここはまだ平均的な霊力量だけど、山の中はかなり霊力が減って居  
る筈よ。まあ山の中に入れば判ると思うわ」

「…………ふむ…………確かにそれっぽい気配はあるな。水の中の霊力が激減  
している…………上質な水だが、取り込んでも旨みが少ないな」

川の中に手を入れていたシズクが小さく首を振りながら呟く。上  
質な沸き水だというのに勿体無いと呟いている姿にやっぱりこの周  
辺の霊力が少ないのだろうか？と考えていると美神さんが手にして  
いた双眼鏡をポーチにしまいながら

「拠点を見つけたわ。村の外れ、山の入り口当りに設営してるみたい。  
とりあえず拠点に荷物を置いてから今日の方針を決めましょう」

美神さんの言葉に判りましたと頷き、後部座席で丸くなって眠って  
いたタマモを膝の上に乗せる。ゆっくりと走り出す車の窓から山の  
ほうを見つめながら

(なんだろう？この感じ)

上手く説明出来ないが妙な感覚を感じる。これがもしかして霊力  
が減っているって事なのかな？と思いつながらポケットから出てきた  
チビが車の窓から山を見て尻尾を振っている姿に笑みを零すのだっ  
た……

書類で見えていましたが、こうしてその山の近くに来るとその異質さ  
が良く判る。本来なら霊地として日本の中では5本の指に入るほど  
の霊地が見るも無残な姿です……

「琉璃の話では拠点となる場所は式神を応用したセーフハウスで、大  
勢で使用することを前提にしているから部屋数は多いわ。とりあえ  
ず1人1部屋はまず間違いないわ、眠っている間も自衛機能があつて  
安全な寝床って言えるわね」

長期間の調査になるのだから拠点の安全性が高いのは当然だ。そ  
れよりも私が気になっているのは装備だ。こんな山の中では霊具の  
補充は難しい、それに調査機器を失えば調査が遅れてくる。それに



ガープの大魔術の痕跡が残ってはいればいいが、それは周辺の悪霊の凶暴化をもたらす危険性もある

「美神。装備については？」

「とりあえず持ち込みの霊具に加えて、琉璃が用意してくれたA級の装備で固めてるわ。拠点に着いたらそれも確認しましょう。食料は多めに2週間分用意されているから、時間ギリギリまで調査するか、それとも適当なところで切り上げるか、それも重要になってくるわね」

調査期間、それも重要になってきますわね。意味も無く調査するか、それとも短時間で調査をするか。それは現場を見て判断するべきですわね、一応切り札はこっちの手元にあるのですから……人外に好かれるという特性を持つ横島は間違いなく今回の調査でも重要なポジションとなるだろう。横島を護る事、それも今回の調査では重要な事ですわね……私はそんな事を考えながら、遠くに見える山を見つめるのだった

「結構良い感じじゃない」

「ですね、セーフハウスって言うからプレハブ小屋見たいのを想像してましたね」

GS協会が用意したと言うセーフハウスはホテルと言っても十分通用するレベルの建物だった。リビングに部屋数は6つ、調査する期間の拠点とするのは丁度良いと言える

「うーん……なんか私は息苦しいですね」

「チビもさつきまで元気だったのにな」

おキヌと元気の無いチビ。安全を考慮しすぎて、幽霊や悪魔を連れて来る前提ではなかったのでしょうか

「後で私は横島の部屋だけ調整してあげますわ。少し待ってなさい」

窓は外から魔術で強化すれば問題無い。グレムリンや妖狐を連れられている横島の部屋の境界のレベルを少し下げて……となると安全が心配になってくるわけで

「シズクはどうせ横島の部屋に行くのでしょうか？」

「……当然」

基本的に横島とシズクはワンセットだ。香港でもそうだったし、慰安旅行の時もそうだった。結界のレベルを下げてでもシズクが護るなら問題無いでしょう、正直な話シズクの方がこの結界よりも数段上の結界を用意出来るのだから

「とりあえず荷物を運び込んで、今日の調査の方向性を決めましょう。期間は多めに取ってるけど、それでも迅速に調べないとね」

美神の言葉に頷き、車から荷物を拠点の中に運び込み。休憩するよりも先に今日の調査の方向性を決めるための話し合いを始めた

「とりあえず事前の調査から、ここ。ここが特に凄い魔力の痕跡を残しているらしいから、明日朝から調べましょう」

広げられた地図に赤い丸がつけられる。拠点からそこそ離れた山の中……今日向かうには少々厳しい場所かもしれない

「じゃあ今日の調査の方向性としては拠点周辺の安全確保ですか？」

「そうね、それがベストよね。もう昼も過ぎていて、遠出すると夜になるからね。じゃあ軽く昼食を取って周囲の偵察に向かいましょうか」

美神の判断は私と同じだったので異論を告げず。軽い昼食を済ませ、私達は周囲の調査に向かうのだった……

ハムと卵のサンドイッチで昼食を済ませ、拠点周辺の搜索を始めたんだけど……正直言って拍子抜けに近い

「悪霊も何も居ませんね」

「そうね、拠点を作るときに1度除霊したのかもしれないわね」

もしかしたら拠点の近くにまで悪霊や魔物化した動物が来ているかもしれないと思ったんだけど……それも無い見たいね

「ふむ、拠点を作る際に除霊を行ったとみて間違いないですわね。それならば結界の強化及び補強をしておけば更に安心でしょう」

神宮寺の言葉の美神さんがそうねと頷く。到着したのが昼過ぎなので今日はそれほど調査は出来ない、今日は結界の強化とかをすれば良いわね。私達が今日は結界の強化をしましょうと話をしていると

【横島さん?どうしたんですか?きよろきよろして?】

「……何か感じるのか?」

おキヌさんとシズクの声に振り返ると横島がタマモを抱き抱え、頭の上にチビを乗せて周囲をしきりに見回していた

「どうしたの横島?何か感じるの?」

私達には感じる事の出来ない何かを感じているのかもしれない。そう思つて尋ねると横島は首を傾げながら

「うーん……誰かに見られてる気がするんだよなあ……」

見られている?その言葉を聞いて周囲を警戒するが、そんな気配は感じない。横島の気のせい……とは言い切れないわね

「心眼。貴方はどう?何か感じる?」

破魔札を手にしている美神さんが尋ねるとバンダナに目が浮かびあがる

【いや、私も感じない。横島の気のせいではないか?】

心眼も横島の気のせいではないか?と言うと横島はそうかなあつと呟くが、どうも納得は行っていないようでしきりに首を傾げている「横島君。また何かを感じたら教えて頂戴」

「うつつ……うーん……」

美神さんの言葉に返事は返した物の腕を組んで周囲を見ている横島。暫くそのまま周囲を警戒したが、何の気配も感じないので今日の目的である結界を作る為に私達は移動を始めるのだった……

「……で3箇所目ね、くえすお願い」

「ええ、判りましたわ」

結界の種類は精霊石を応用した霊を拒絶する結界だったので、それはそのままにして、その結界の基点に魔術防御の結界を展開し、お互いの相乗効果で結界の強度を上げる事にした。これは神宮寺にしか出来ない事なので、その間私と美神さんは周囲を調べていた。その理由は事前の調査報告と余りに差異があったからだ

「悪霊も魔物の気配もなし……か、結界が近くにあるから近づいて来ていないのかしら?」

「報告書では悪霊の数も増えているって言っていましたよね」

GS協会の報告書では村周辺にまで悪霊が来ているとの事だったのだが、2時間周囲を調べても悪霊のあの字もない。これは少しばかりおかしいと言える

「……山の奥に逃げる必要は無いだろう？結界の効果の薄いところに集まるのが自然だ」

「そうよね……本当どうなっているのかしら？」

悪霊が結界があるから逃げるなんて事を考えれるとは思えない。どこか結界の弱い所は無いか？と結界の外に集まるのが普通なのに……

【美神さん。周辺を見てきましたけど、やっぱり悪霊の気配は無いですよ？もっと奥まで行けば判らないですけど】

空を飛べるおキヌさんの報告を聞いてやっぱりおかしいと判断する。あれだけの装備を用意していると言うことは相当数の悪霊が居ると琉璃さんは知っていた筈だ、でなければあれだけの破魔札に霊体ボウガンを用意する必要が無い

「あ、こいつかあ、俺達をずっと見てたのはチビ偉いぞー」

「みーむう♪」

なんか横島が話をしているのが聞こえるが、今はそれ所ではない。悪霊が居ない理由、それを知る必要があるのだから

「この感じだとまるで誰かが除霊をしたみたいな……そんな感じよね？」

「ですわね。しかし破魔札や精霊石を使った除霊ではないと私は考えますわ」

結界の強化を終えた神宮寺が自分の意見を口にする、私も同意見だった破魔札や精霊石を使えばその痕跡が残る。だがそれがないと言う事は考えられるのは1つ

「霊刀を所有しているか、それに順ずる武器を持っているって事ですかね？」

「多分ね」

自身の霊力と霊刀などを用いた除霊。自身の霊力を増幅する物を一切使わない一昔前の除霊スタイル……だがこの周辺にはそれらし

い一族はおらず、除霊が出来る人間はいないと聞いている。だから……

「おーよしよし、チツチ、おいでおいで」

「にゃーん？」

「みむう」

「おお、白猫だ。可愛いなあ」

「ふーっ!!」

「あだだ!!あー行っちゃまった。撫でたのが駄目だったか……」

真面目な話をしているのに、山の中で猫を見つけて捕まえようとしていた横島に溜息を吐きながら

「横島！ちよつと真面目にしてなさい！」

「横島君！ここは危険な場所なのよ！」

「少しばかり気を緩めすぎているのではないですか？」

「は、はい!!」

私達に怒鳴られた横島が背筋を伸ばし怯えた様子で返事を返す。だがあんまり気を緩められると危ないので、結界の強化が終わるまではもう少し緊張感を持って行動して欲しい。何が起きるのか判らないからだ

「じゃあ次の結界の場所に移動するわよ。夕暮れまでには結界を強化して拠点に戻りたいからね」

夜になればまた違った姿を見ることになる。明るい内に作業を終えて帰りましょうと言う美神さんの意見は当然の事だ

「シズク、おキヌちゃん。それにタマモは横島をお願い、横島も少しは緊張感を持って行動して頂戴」

横島にまで気を掛けている余裕が無いのでシズクとおキヌちゃんにタマモに横島の護衛を頼み。横島自身には何かを感じたら教えてくれと声を掛け、私達は結界の強化を周囲の搜索を再開するのだった……

周囲の結界の強化をして安全が確保されたので日が落ちる1時間ほど前に散歩の許可が降りたのでチビとタマモを連れて散歩に向

かった

「みーむうーみみー!!!」

「クウン」

広い山と言う事もありリードもなしであんまり遠くに行くなよと声を掛けながら、ゆっくりと村の周りを歩く

(本当に綺麗なところだよなあ)

東京に居るから余計にそう思うと思うのだが昔ながらの家に畑、綺麗な川に緑が美しい木々。本当に良い所だと思う

「タマモも走つてもいいんだぞ?」

「グルル」

子ども扱いするなと言いたげに唸るタマモにごめんごめんと謝りながら、チビの後を追って進む

「みーむう♪」

木の枝の上で楽しそうに前足と尻尾を振るチビ。やっぱり東京みたいな場所よりも自然の方がチビも好きなようだ、普段よりもずっと元気だから余計にそう思う。タマモもタマモでゆっくりと歩いていけるが、尻尾が揺れているのを見ると自然の中で気分が高揚していると言う事が良く判る

「はー夕暮れも綺麗だなー蛭も来れば良かったのに」

蛭は夕日が好きなのだが、明日の調査の事もあり拠点に残っていた。シズクとおキヌちゃんは夕食の準備で忙しいし、美神さんと神宮寺さんも明日の調査で忙しいと言っていたがこの光景は見たほうが良かったと思う

【素晴らしい光景だな、美しい】

「そうだよなー」

心眼も素晴らしい光景だと言う。その声が穏やかなので心眼もこの光景を見て気分が落ち着いているのだろう、今日1日緊張感を持って行動していたのだからリラックスできるのは大事だと思うんだけどなどと思いながら、近くの切り株に腰掛け。出発の前にシズクに用意して貰った、りんごやバナナを入れたタッパーをリュックから取り出しているのがさつと背後の茂みが動く音がした。

「みむうー！」

「グルウ」

チビとタマモが俺の前に移動し、警戒する仕草を見せると同時に茂みから何かが姿を現した

「ぴ……ぴぎい……」

弱々しく鳴きながらぼてっと倒れるチビよりも少し大きい茶色い生き物……チビとタマモもその姿を見て警戒を解く。俺は取り出したタッパーを手にその生き物に近づいた

「猪？いやうり坊？」

猪の子供とされる小さな小さな猪のうり坊だ。相当弱っているのだろうか？動く気配が無い、死んでしまったのか？と思いつながら生きているか確認しようと思ひ。タッパーをうり坊の側において近くにしゃがむと

「ぶぎい？？ぴぎい……」

ふんふんつと匂いを嗅ぐ素振りを見せる。生きていた事に安堵すると同時にもしかして空腹なのか？と思ひチビのほうを振り返り

「拠点に帰ったらまた用意するな？」

「みむう」

チビの為の果物だが、余りに可哀想な姿に気の毒になりタッパーから出したりんごをうり坊の前に置く。するとうり坊は鼻を動かし、ゆっくりと目を開き、目の前に果物があるのを見るとがばつと立ち上がり

「ぶぎい…ぴぐうー！」

尻尾を振りながらガツガツと食べ始める。よつぽど腹が空いていたのか……周囲を見るが親の猪の姿は無い

「心眼。近くに猪の気配とかするか？」

【いやしないな。生き物の気配は無い】

となるとこのうり坊の母親は居ないのか……とは言え野生の動物だ。拾うわけにも行かないよな、タッパーの中身をうり坊の側において、夢中で食べている間に俺はタマモとチビを抱えてその場を後にするのだった……

「どうしたんだろうな、あのうり坊」

「もしかすると悪霊の大量発生で母親を亡くして逃げていたのかもしれないな」

悪霊か……美神さん達の調査の結果では霊刀を所有した何者かが除霊を行ったと言っていた。だけどこの周辺には村はあそこしかないし、他に生活出来る場所も無い。誰が悪霊を除霊したんだろうなと思いつながら、拠点に引き返しているとガサガサッと再び横の茂みが音を立てる。咄嗟に茂みから離れ身構えるが

【待て、この気配は……】

心眼の言葉とチビとタマモが警戒態勢に入らない事を不思議に思っている、茂みから姿を現したのは先ほどのうり坊だった……

「びぎいー」

先程よりかなり元気な鳴き声を上げて足元に近寄ってきて、頭を擦り付けてくる。思わず下を見ると、うり坊も顔を上げていて、まん丸な目が俺を見つめている

「みむうー」

「ぶぎいー」

チビがうり坊の前に立って前足を上げるとうり坊も楽しそうに鳴きながら返事を返す。ただタマモが目の前に来ると

「ぴ、びぎいー!」

「コン」

狐だからか明らかに怯えた素振りを見せて後ずさるが、チビが大丈夫だよと言いたげに背中を撫でるとびくびくとしながらタマモに近づかうり坊

「びぎいー」

「コン」

噛まれないし、襲われないと判ったのか怯えた素振りを消し、暫くチビとタマモと鳴き声で話をしていたうり坊。その姿を見つめているとうり坊はとことこ俺の足元に来てまん丸な黒い瞳で俺を見つめながら

「びぎいー」



鼻を動かして俺のズボンの匂いを嗅ぎながら擦り寄ってくる姿を見て

「……懐かれた？」

【だろうな】

ぶぎい、ぶぎいつと鳴きながら後ろ足で体を支えて、前足で靴にしがみ付く姿を見てとてもではないが振り払えないと思った。美神さんに怒られるかなあつと悩みながら、俺は足元にじゃれ付くうり坊に視線を向けるのだった……

横島がうり坊をどうしようかと頭を悩ませている頃。山の奥深くでは

「どこにおられるのだ、山神様」

深い森の中には似つかわしくない少女の姿があった。勝気な性格を現すツリ目に美しい黒髪をポニーテールに結び、同年代の少女なら羨ましいと思うほどに自己主張をする胸に括れた腰……そして均整の取れたその肢体を覆うのは黒と赤の着物……そしてその腰に携えた一振りの日本刀……

「人間が再びこの土地に訪れ、山神様は姿を消した……何が起こっているんだ」

その少女はその顔に強い焦りの色を浮かべ、巨大な樹木の枝の上から上へと移動し、信じられないスピードで山の奥へと消えて行くのだった……

リポート9 神の山を搜索せよ その3へ続く

## その3

レポート9 神の山を搜索せよ その3

搜索結果を美神さんと神宮寺と一緒にまとめながらふと顔を上げると夕日が完全に沈もうとしていた

「横島遅いですね」

「ん？ああ、そういえばそうね。夕暮れ前には帰りなさいって言ったのに」

手帳から顔を上げた美神さんが仕方ないわねと言う感じで呟く。チビとタマモの散歩の時間なのであんまり遠くに行かず、夕暮れ前に戻って来るように言って言っておいたのに

「まあもう直ぐ戻ってくるでしょう。何でしたら使い魔を飛ばしますわよ？」

神宮寺に使い魔を飛ばしてもらおうように頼もうかと悩んでいるとシズクがキツチンから顔を出して

「……横島の気配が近づいているから戻ってきているから、心配ない」

結果もあるし大丈夫だというシズクの言葉に頷き、周辺の搜索結果のまとめ作業を再開する

「私の見解ですが……やはりこの周辺には何者かが存在していますわね。低く見積もってもC級、もしかするとA級クラスのGSに匹敵する何者かが潜んでいると思います」

「そうなるわね。獲物は恐らく霊刀。それもかなりの業物……蛍ちやん。ここら辺周辺で神社とかはないわよね？」

美神さんに言われてセーフハウスに用意されていた周辺の地図を確認するが

「それらしいのはないですね。勿論登録されているGSや霊媒師のデータもないです」

地元では神の山と呼ばれており、悪霊などの出現もなく護られた土地と言われていた。だから霊媒師などは存在せず、また神が居られる山に神社を作るのはおかしいと言う事で神社などが建てられた記録

もない

「周辺の聞き取り調査で祠があるくらいですね」

「となると人間じゃない可能性も出てくるわね。この山の神の眷属……それがいるのかも」

神の眷属……か。口で言うのは簡単だけどいざ対峙する事になると恐ろしいわね

「山の神の不在もあり、山の神を探しているのかもかもしれませんわね。話し合う余地があればいいんですけどね」

「山の神の眷属だから知性もあると思うわよ？話を聞いてくれるのは別だと思うけど」

もし話を聞くことが出来ればこの山の神が何か判るんだけど……話を聞いてくれる余地があるかが不安か

「とりあえず、明日は朝から魔力反応があるって場所に向かって見おうと思うんだけど蛍ちゃんとかえすはどう思う？」

机の上に広がれた地図を指差して私と神宮寺に意見を求めてくる美神さん

「確かに早い段階で調べたほうが良いと思いますが……この魔力を吸収して突然変異が生まれている可能性もありますわね」

「でも遅くなると魔力の残滓もなくなってしまう可能性もありますね」

危険性はかなり高い場所と言える。しかし調べておかないとガープ達の痕跡が無くなってしまいう可能性が高い

「私なら横島は残します。引かれても困りますからね」  
「ですね。横島自身の霊的防壁が不安要素になりますね」

横島を連れて行かないのが1番安全ではないですか？と私と神宮寺がそう言うのと美神さんはそうなるわよねと呟き

「丁度この近くに綺麗な川があるからそこで魚でも釣って貰ってましようか？川ならシズクが離れていても判るし。おキヌちゃん食料ってどんな感じ？」

貯蔵庫から食料を持ってきていたおキヌさんに声を掛ける美神さん。おキヌさんはえーつとと呟きながら

「お肉とかは保存が良くベーコンとか、ハムでしたね。野菜はたっぷりありますけど……到着から逆算して用意してくれたんですかね？」  
「ありがと、料理に戻ってくれていいわ。よろしくね」

事前に用意してくれていた物だからそんなものよね。でもこれはある意味好都合と言える、食料調達の名目で安全な場所に横島を置いておく事が出来るのだから

「じゃあ横島君に食料調達を頼んで、私達とシズクで山の中腹に向かう。それで良いわね？」

「私は異論はありません。不安なら、川原周辺に結界を追加で用意すればいいですしね」

「私もそれでいいと思います」

魔力が横島にどんな影響を与えるか判らない。マタドールとの戦いでは味覚障害なども起していたのだから、もしも、もしもだが横島の中にあるビュレトの魔力がガープの魔力と反応して何が起きるか判らないのだから、ここは無理をしないほうがいいだろう

「神宮寺。ビュレトの魔力のほうって正直どうなの？」

「その神宮寺って言うのはいい加減止めて欲しいですわね、くえすで良いですわ。私も蛭と呼びます。ギスギスとした空気を作るのは避けるべきですからね」

まさかの神宮寺からの譲歩に驚きながらも、ここまで言われたら意地を張ることなんて出来る訳も無く

「判ったわ、くえす。それで魔力のほうは？」

「今の段階では完全に小康状態ですわね、ただ完全に消えるという気配は全く無いので、何らかのきっかけで活性化する可能性は十分にあります」

専門家のくえすが活性化する可能性があると言えば、やはり横島に無理をさせる訳には行かない。残す方向で説得するしかないわねと思っ

「ただいまー」

「みーむー」

「ココーンー」

横島とチビ達の声が聞こえてくる。完全に暗くなる前に帰ってきてくれて良かったと安堵の溜息を吐いたのだが、リビングに入ってきた横島を見て

「おかえ……捨てて来なさい。横島君」

「……どうして拾って来たんのですの?」

「横島……野生に返してあげたほうがいいわ」

「……捨てて来い、横島」

【捨てた方がいいと思いますよ?横島さん】

「全員で捨てた方がいいって言わないでくれよ!こんなに可愛いんだぜ!」

「ぴぐう♪」

小さなうり坊を大事そうに抱えている横島を見て私達は深く溜息を吐きながら、やっぱり変なのを拾って来たと呟くのだった

捨てて来なさいという美神さん達を何とか説得してうり坊をシャワーで綺麗に洗って、乾かしてからリビングに戻る

「ふぎ、ふぎいー♪」

リビングの机の上に置くと楽しそうに鳴きながらちよちよこと歩き回り、チビと遊んでいる。本当に凄く仲良くなっているなあと思っていると美神さんがうり坊を見ながら

「ちなみにそれどうしたの?」

「えっと散歩したら茂みから出てきて、チビの餌のりんごを分けたら懐いちゃって」

駄目と言ったんだけど、どうしても付いて来るのでやむを得ずという深く溜息を吐かれた

「確認するけど、近くに親は居なかった?」

「心眼と一緒に調べました。でもどこにも居なくて、それに酷く弱っていたので親と逸れたか、親が死んでるんじゃないかって思います」

膝の上にうり坊を乗せてやると、数分もしない間に眠り始める。元気良く鳴いていたが、やはり相当消耗していたのだろう

「見た感じでは普通の猪ですわね」

「……妖怪ではないと思うんだが」

神宮寺さんとシズクがうり坊を見て普通の猪と言う結果が出た。普通の猪となると大きく成長してしまうのでやはり長い時間一緒に居ることは出来ない

「とりあえず、今日一晩は良いけど、明日には野生に返すのよ」

「はい」

妖怪とかならチビと一緒に連れて帰ることが出来るけど、普通の猪では仕方ない。一晩面倒を見て、元気になった段階で野生に返すべきなんだろう

「みむー」

「うーん。流石に普通の動物じゃあ難しいからな」

しよぼーんつとしてしているチビにごめんなど謝っていると神宮寺さんが俺の方を見て

「横島。香港の時に使ったダウジング、あれは今もまだ使えるのですか?」

「え?あ。はい、大丈夫ですよ?何か探すんですか?」

香港での原始風水盤を探すときに使ったダウジング。あれのコツは掴んでいるので使える筈、何か探すんですか?と尋ねると地図を広げられて

「ここがガープが居たとされる魔力が観測されている場所なのよ。他にも反応があるかどうか見て欲しいんだけど?」

「判りました、えーとっ……あつたあつた」

Gジャンからペンデュラムを取り出して、地図の上に翳すが……

「うん?んー……」

ペンデュラムは地図の上でぐるぐると回る。暫く続けてみたが反応は変わらず、俺はペンデュラムを回収していると心眼が

「あの時は原始風水盤の針を包んでいた紙を媒介に陰陽術を併用していた。もし詳しい結果が欲しいなら、この周辺の葉っぱを回収してくればダウジングの精度が上がる筈だ」

なるほど……陰陽術と平行していたからあの精度だったのか、心眼の言葉に納得していると蛍が唸りながら

「じゃあ何の手掛かりもない。この周辺に居るかもしれない霊能者を見つけるのは……?」

【無理だな。横島もまたダウジングを学び始めたばかり、手掛かりも無しでは見つける、見つけない以前の問題だ】

「なんか役に立てなくてすみません」

出来ると思っていただけで、まさかそんな条件があるなんて思っても無かったと謝ると美神さんが

「ううん、こつちが無理を言ってるのは判ってるわ。そりや1回、2回の練習でそんなに精度の高い物を要求するこつちがおかしいのよ。もう少し手掛かりを集めてきたらまた頼むわ」

「判りました。次は頑張ります」

今度は結果を出せるように頑張りますと返事を返しているとキツチンからおキヌちゃんとしズクが鍋を持ってきて

【明日も搜索がありますからね。今日はしっかりご飯を食べて、明日に備えてくださいね!】

「……今日はかなり汗をかいていたからな、塩分を濃い目にしてある。辛かったら教えてくれ、お湯を回す」

しズクの言葉は聞こえているようで聞こえていなかった。鍋からただよう良い匂いに腹が鳴るのを感じうり坊を起さないように気をつけて、俺は夕食に箸を伸ばすのだった……

「とりあえず横島。明日の予定だけど、横島はこの近くの川で食料調達をしてくれる?」

「食料調達?」

蛍の言葉に思わず尋ね返す。久しぶりの自然の中で疲れたのかチビとタマモは既に舟を漕いでいるので、起さないように気をつけながら尋ね返すと美神さんが

「食料は野菜中心と保存の利く燻製肉が多いのよ。ここら辺の川は全然大丈夫らしいから魚を釣って欲しいんだけど、横島君は魚釣りは出来る?」

「そりやまあ、親父と釣りはしたことありますよ?」

それほど上手いって訳ではないと思うけど、人数分位は釣れると思

いますと返事を返しながら

「美神さん達は明日はどうするんですか？」

「私達は明日は山の中腹の搜索です、全員で搜索するのが当たり前だと思いますが、1人は拠点に残さないと何があるか判りませんからね。川の近くならシズクが監視してくれていますし、水で直ぐに跳んで来ること出来る。そういった事を考慮して横島を残す事にしたのですが不服はありますか？」

「不服はありますか？と言われてれば置いていかれる事に対しては多少納得行かない部分もある。だが食料調達と拠点防衛と言われれば不服だと言えるわけも無い

「いえ、大丈夫です。それで拠点に残るのは俺とおキヌちゃんって事でいいんですか？」

「そうなるけど、水の近くだからシズクも実質居ると考えて良いわ。眼魂は極力使わないでね、精霊石とか破魔札を用意しておくからそれで対処して頂戴」

美神さんの言葉に判りましたと返事を返し、今日の所は解散となった

「よし、チビもタマモも寝ようなー」

持ってきた籠の中にチビとタマモをそれぞれ寝かせ、うり坊は人間の匂いがつくと自然に帰れないという美神さんのアドバイスを聞いて、新品のタオルで包んでやる

【横島。多少の不満はあると思うが、拠点を護るのは大事な仕事だぞ？】

「判ってるよ、無理もしないし、ついて行こうとも思わないから大丈夫だ」

心眼の言葉に大丈夫だと言ってから隣のベッドを見て

「おやすみ、シズク」

「……ああ。おやすみ」

なんかシズクと当然のように一緒の部屋で寝てるなあと思いがながら、俺は部屋の明かりを消してベッドの中に潜り込むのだった……

「びびっ」



そして横島が寝入った深夜0時過ぎ。もぞもぞとタオルから抜け出したうり坊の瞳が怪しく光るのだった……

「みーむうーみむー!!!」

「コーン、ココーン!!!」

チビとタマモの慌てた声とぺちぺちと顔を叩かれる感触で目を覚ます

「うなあ？なんだどうしたあ？」

普段こんな事しないのにと思いながら目を擦りながらベッドから身体を起す。シズクはもう起きているのかと思いつつ大きく欠伸をしながらベッドから降りようとして気付いた

「」「」「ぶぎい？」「」「」

「……増えてる!?!」

足元を埋め尽くさんばかりのうり坊の姿に眠気は一瞬で吹き飛んだ。ぶぎい、ぴぎーつと言う鳴き声が響く中。足元を埋め尽くしているうり坊を見つめるが判らないので心眼を頭に巻く

【なんだ横島？もう……増えてる!?!】

「だよな、その反応するよな」

俺と全く同じ反応をする心眼になんか俺に似てきたなと思いつつ

「全部本物か？」

【あ、ああ。少し待て】

心眼の言葉に判ったと返事を返し、ベッドの上でおろおろしているチビとタマモの背中を撫でていると心眼が

【あの机の前のが本体だ】

「よし判った」

栄光の手を伸ばしてうり坊を捕まえる。足元のうり坊は消えるかと思つたが、まだぴぐぴぐ鳴いている。これ影分身とかそう言うのかな？それとも本当に増えているのだろうか？と思いつつ捕まえたうり坊に視線を向ける

「ぴぎいー」

なーに？と言う感じでこつちを見るうり坊の円らな瞳に苦笑しな

がら

「そっかーお前も妖怪だったのか。どうする？これからも俺達と一緒に来るか？」

「まあ妖怪なら仕方ないだろう。戦力としては不安だが、チビも喜ぶだろうしな」

心眼も別に構わないだろうと言うのでうり坊にどうする？と問いかけるとうり坊は元気良く尻尾を振りながら。俺の腕の中で前足と後ろ足をばたばたと動かす

「ぴぎーぷぎー!!!」

野生の猪なら駄目だけど、妖怪の猪なら大丈夫だろう。俺の問いかけに元気良く返事を返すうり坊に了承の返事だと判断し、鞆から新しい赤いハンカチを取り出しそれを首元に結んでやりながら

「よっし、よろしくな。うりぼー」

「ぴぎっ♪」

うり坊のうりぼー。容易な名前だけど可愛いよな。俺の腕の中でぷぎぷぎ鳴いているうりぼーを抱きかかえ、肩の上にチビ、頭の上にタマモを乗せてリビングに向かうんだが

「「「「ぴぐぴぐ」」」」

「……ま、いつか」

ぞろぞろとついてくるうりぼー軍団をどうやって美神さん達に紹介しようかと思いつつながら、俺はリビングに向かうのだった……

朝から今日の搜索の準備をしていると、私達から少し遅れて横島君が起きて来たんだけど

「おはようございませす」

「みむー」

「コーンー」

「ぴぐうー」

チビ達を抱えて入って来た横島君の後ろから

「「「「ぴぐぴぐ」」」」

大量のうり坊が列を成してリビングに入って来たのを見て、思わず

思考が停止した。

「横島？それ……どうしたの？」

蛍ちゃんがうり坊の群れを指差しながら尋ねると横島君は笑いながら

「朝起きたら増えてました。うりぼー妖怪だったみたいですよ」

「ぴぎん♪」

横島君の腕の中で前足を上げるうり坊を見て、私はゆっくりと振り返り

「普通の猪って言っただけだった？」

「霊力とかは何にも感じませんでしたわよ？今は何故か霊力を発しています……」

「……それは間違いない。もしかすると霊力が完全に枯渇していたから気づけなかったのかも……」

【私も探知出来なかった。本当にギリギリまで消費していて、食事とかで回復したと思われる】

私も気づけなかったから責める事はお門違いなのだが、まさかあのうり坊が妖怪だなんて……

「って言うか、横島。うりぼーって」

「おうーうり坊のうりぼー！。可愛いだろ？」

……な、名前まで……これで完全にあのうり坊は横島君の使い魔になってしまった……やっぱり横島君を単独行動させたのは失敗だったかしら？と後悔していると

「ぴーぐーぶぎゅうっ！」

「[[「ぴぐぴぐぴぐ」]]」

横島君の腕の中のうりぼーが勇ましく鳴くと、リビングをチョコチョコ動き回っていたうり坊達が集まり始める

「な、何をするつもりなんですかね？」

「凄く嫌な予感がしますわ」

引き攣った顔をしているおキヌちゃんと眉を顰めているくえすの前でうり坊達が組み体操のようにピラミッドを作る

「……霊力が増大している」

「うむ、凄い反応だ」

ぼそりと呟いたシズクと心眼の言葉に危険を感じて、うり坊達から離れた瞬間

「ぴーぐうー」

横島君の腕の中のうりぼーがピラミッドの上に着地した瞬間。ぽんつと言う爆発音と煙で視界が一瞬塞がれ、煙が晴れたときりビングの真ん中には

「ぴぐう？」

「「でかつ!?!」」

元が抱き抱える事ができるサイズだったうりぼーからは想像も出れない、縦2メートル、横3メートルはあろうかと言う大きさになったうりぼーに思わずそう呟く

「おーでつかいな。でも小さい方が可愛いな、小さくなれる？」

「ぴーぎゅ」

全く動じない横島君が小さくなれる？と尋ねるとしゆるしゆると小さくなつて行き、チビと同じサイズになったうりぼーがぴぎいつと鳴くのを見て私は思わず頭を抱えながら

「とりあえず、そのうりぼーの面倒は横島君。ちゃんと見るのよ」

「うっす！うりぼーは人懐っこいから大丈夫ですよ。なー？」

「ふぎいー！」

「みみー！」

足元のうりぼーとチビを抱き抱えてのほほんと笑う横島君。その姿にまた私の事務所の人外率が上がる事に深い溜息を吐きながら

「シズク、おキヌちゃん。朝ごはんにしてくれる？出来れば昼過ぎには戻って来たいから」

私達でも長時間魔力溜まりに居るのは危険なので、朝から出発して昼過ぎには戻ってくるつもりなのでうりぼーと横島君に時間を掛けている余裕は無いので、朝ごはんの用意をしてくれる？と2人に頼むのだった

「ふぎい？」

「あ。本当だ、凄く人懐っこい」

「ですわね」

朝食の準備が終わるまでの間うりぼーを観察していた蛍ちゃんとかえすけど、珍しく懐いて擦り寄ってくる姿に頬が緩んでいるのが判る。そして私も

「ぴぐ?」

「……ほんとね。人懐っこい」

チビは未だに懐かず、モグラちゃんは怯える中。きらきらとした円らな目で私を見つめてくるうりぼーを思わず撫でてしまうのだった……

「じゃあ、横島。食料調達よろしくね」

「最低ノルマは人数分ですので、しかしあんまり遠くは行かないように」

「……川の流れは速いからな、緩やかと思っても入るなよ」

「横島君も子供じゃないから大丈夫よ。それよりも行くわよ」

朝食の後。横島君とおキヌちゃんを川原に残し、食料調達を頼み、川に注意するように言う蛍ちゃん達に行くわよと声を掛け私達は山へと足を向けるのだった……

荷物を持って山を登っていく美神さん達を見送り、セーフハウスから持ち出した溪流竿を伸ばし、魚を釣る準備をする

「みーむ?」

「ぶぎゅ?」

初めて見る道具に興味津々と言う感じのチビとうりぼーに危ないぞーと声を掛けながら、テグスを結んでウキを取り付けて最後に釣り針を結ぶ

「よし、これでOKっつと」

【中々手際がいいな。釣りは得意なのか?】

心眼の言葉にそこそこかなーと返事を返し、1度釣竿を置いて、川の浅い所に入って石をひっくり返す

【何してるんですか?】

「ん？餌取ってるんだ。川虫がいい餌なんだよ」

岩の下に居た虫を捕まえて見せると、きやつと悲鳴を上げて逃げおキヌちゃんに幽霊でも虫は怖いんだなと苦笑しながら瓶に水を入れて数匹入れておく。足りなくなったらまた捕まえれば良いので、そんなにいつきに捕まえる必要は無いしな

「クウン？」

「おう、今から始めるよ」

セーフハウスから持ってきた椅子の上にタマモ達を乗せて、危ないから川に近づいたら駄目だぞ？と声を掛けてから

「よっしゃ。おキヌちゃん、魚釣り始めるぞー」

【はーい♪】

ポルターガイストで釣り竿を構えるおキヌちゃんに器用だなあと感心しながら、俺は仕掛けを川の中へと振り込みながら、久しぶりだからちゃんと釣れるかなあと言う不安を抱きながらも、久しぶりの釣りに心を躍らせ、何とか全員分だから5匹は釣りたいなあと思いつつウキを見つめるのだった……

リポート9 神の山を搜索せよ その4へ続く

## その4

リポート9 神の山を搜索せよ その4

ゆつくりと流れていくウキを見つめ、穏やかな川の流れる音を聞きながら横島さんと一緒……だと思っていたんですが

「やった。また釣れた♪」

「おー、タマモは上手だな」

シズクちゃんが居ないと言う事で、自分の持っていた精霊石をタマモちゃんに与えて、タマモちゃんが人の姿になった所で風向きがおかしいと思い始め、そして今は私の予想通りになっていた

【私……空気】

横島さんと一緒なのに、物凄く切ない気持ちになってくる。時々タマモちゃんが勝ち誇った表情を向けてくるのも正直イラっとする

「ぴぎん♪」

「みむ」

川原でちょこちょこと遊び回っているチビちゃんとうりぼーを見て、思わず溜息を吐きながらウキを見つめる。どうせなら釣れてくれれば気分転換にもなるんでしょうけど、横島さんが3匹、タマモちゃんが2匹、そして私が0匹。魚も連れないのでどんどん気落ちしていく

「おーい、おキヌちゃん？」

【え？あ、は、はい!?!】

考え事をしすぎていて、横島さんが近くに來たのに気付かなかった事に恥かしいと思いつつながら返事を返すと

「連れてないみたいだからアドバイスに來たぜ。タマモはもう釣れるみたいだし」

「……」

ぷーっと頬を膨らませているタマモちゃんに今度は私が勝ち誇った笑みを浮かべてしまった。横島さんは私の竿を見て、場所が良くないなど呟く

「もう少し上流のほうに振り込んで、下流まで流すんだ。そうだな……あの石の影を狙うと丁度いいかもしれない」

アマゴとかハヤだから足音とかは気にしないで良いからと笑う横島さんに頷き、言われた場所に仕掛けを振り込んで数秒

【き、来ました！】

さつきまでうんともすんとも言わなかった、ウキが勢い良く水中に沈んでいく

「穂先を上げて、無理に引っ張るなよ」

【は、はい！】

横島さんのアドバイスを聞きながら、おどおどと竿を動かす。それから数分後

「おっ！アマゴだな。しかも結構でかい！」

【や、やりました】

20センチ強のアマゴが川原に引き上げられる。横島さんは針をアマゴの口から外して、びくの中に入れながら

「よーし、これで全員釣れたな。そうだ、折角だから沢山釣って、今日の昼飯にしようぜ」

【ですね。釣り立ては美味しいですしね】

横島さんの提案に頷き、再び仕掛けを川の中に振り込みながら今日のお昼ご飯は川原で魚を焼きましようと話しながら、再びウキを見つめるのだった……

地図を頼りに山を登って来たけど、これは予想以上にきついわね……悪霊の数も、魔獣も数も質も桁違いだ。それに何よりも瘴気が酷い、靴から簡易結界を取り出して、それを木々の間に巻きつけ、精霊石で瘴気を浄化してからやっとその場に座り込む

「これはかなりきついわね、くえすも蛍ちやんも大丈夫？」

自分のウエストポーチから水筒を取り出して2人の様子を尋ねる。私自身も霊力はそれほどだが、霊具の消耗は激しい、ここから先は目視でも瘴気が濃いのでその前に状態を尋ねるのは必要だと思ったのだ



「私は破魔札が残り20枚と霊体ボウガンの矢がワンセットですね」  
「私は問題ありませんわ。どっちかと言えば、ここは魔の眷属たる私には好都合の立地です」

その代わり暴走しないように気をつけないといけませんかと呟くくえす。目的地のガープが居たであろう場所まではまだ大分時間が掛かる。GS協会の調査は恐らく式神を使ったんだろうなと思いつながら

「シズクはどう？今の段階で何か感じる？」

「……霊脈がおかしい。どこかで流れが乱れて悪霊を呼び寄せている」

地面に手を当ててそう呟くシズク。水神だからこそ判る霊脈の乱れなのだろう……。しかしこのレベルで霊脈が乱れていると考えるとこれは数年……うん、何百年ってレベルをかけないと元の霊脈に戻らないかもしれない

(とりあえずこの山の周辺を立ち入り禁止に出来るからいいか)

この山を危険区域として隔離出来るだけの分析結果を得る事が出来そうだし、それも1つの収穫と言えるだろう

「シズクは水は大丈夫？」

「……問題無い」

無愛想だけど横島君がいないとシズクはこんな感じよね。とは言えこの山の搜索に乗り出す事が出来るのはシズクが居てくれるおかげなので文句なんか言わないけど

「じゃあ悪いけど、くえすとシズクが今度は先頭になってくれる？」

「構いませんわ。時間を掛けるのは危険ですからね、急ぐ必要がありますし」

「……まあ。いいだろう、早く搜索を終えて戻りたいしな」

この質の瘴気が充満している事を考えると長時間の活動は危険だし、しかし悪霊が多すぎて思うように進めない。しかし調査をしないわけにもいかないとすると瘴気に耐性があり、なおかつ魔力に対して深い知識があるくえすとシズクに先頭を進んで貰い対策を取るしかない

「では行きましようか。この結界ももう持ちませんし」

「そうね、美神さん。急ぎましよう」

結界を石等を叩き付ける悪霊にもうじきこの結界が破壊されると判断し、急ぎましようと言うくえすの言葉に頷き結界を内側から破壊し、その衝撃で悪霊が吹き飛んだ隙に目的地に向かって走り出すのだった……

「これは……酷い」

悪霊をいなし、時に逃げながら進み続ける事1時間。やっと目的地に到着したのだが、その光景を見て思わずそう呟いてしまった

「これは何が起きたらこんな事になるの？」

蛍ちゃんも周囲を見ながら信じられないとそう呟く。ガープの反応があつてから数週間経っていると言うのに、今もなお強く残る魔力の残滓と地盤事捲られている山……その光景はどこからどう見ても天変地異が起きたとしか思えないほどに凄惨な光景だった

「……神通力と魔力が渾然としているな。ここら辺を封鎖しないとどんな突然変異が生まれるか判らないぞ？」

周囲を見ていたシズクがここら辺を封鎖しないと大変な事になると告げる。魔力と神通力を持ったキメラなんて物が生まれても困るがこの範囲を封印するのは精霊石も装備が足りない。時間と共に魔力が薄くなると思っていたが、そんな事はありえないこの周辺はもう何百年もかけないと浄化されないだろう。

「シズク何とかできる？」

「……地下水脈が流れているから結界は作れる。だが長時間は持たないぞ？」

長時間持たないぞ？と言うシズク。勿論それは判っているが、今の装備ではこの範囲を囲う結界が作れない。それなら短時間しか持たないにしろ今作れる結界で妥協するしかない

「一時的に良いわ。東京に戻ったら直ぐ琉璃に報告して、精霊石の結界柱を用意するから」

「……判った。搜索が終わったら封鎖しよう」

これでとりあえずキメラの出現は防げるかしら？と考えながら周

囲を調べていると背後から蛍ちゃんの呆然とした声が聞こえて来た  
「これ……拳ですか？」

「え？」

周囲を調べていたくえすの言葉に振り返り、くえすの元へ走る。くえすが見つめていた大穴は確かに握り拳が命中した跡だったのだが、その数と大きさが問題だった。拳の跡が4つ、しかも1つ1つが軽自動車よりも大きい。……空振りしたのだろうかこれはまさか

「同時に攻撃した？しかもこの大きさ……並外れた巨体の持ち主ですよね？」

「複数の腕を持ち、並外れた巨体……」

「……しかもこれは魔力じゃないな、神通力だ。間違いなく神族だな」  
くえすと蛍ちゃんの言葉に脳裏に浮かんだのは日本の仏像の姿。そしてシズクの言葉に日本の仏像の原典を考え

「もしかしてガープの陣営にはインドの神がいる？」

日本の仏の多くはインドの神々が関係している。そしてインドの神々の中には悪神と呼ばれる者も多い

「その可能性は十分に考えられますわね。最悪の予想ですけど」

「予想じゃなくて確定だと思いますよ、これ」

「……神族の中にも過激派は多い、ガープの思想に共感する神が居てもおかしくはないが、不味いといしか言いようが無いな」

予想なんて楽観的な感想を抱く事はできない。確実にガープの陣営にはインドの神に属する何者かがいる……

「とりあえず石を拾って……ッ!!」

石を拾って帰って横島君にダウジングを頼もうといおうとした瞬間。茂みの中から何者か飛び出してくる、反射的に後ろに飛びのきその一撃を交わすが、その鋭い一太刀に背筋の凍る物を感じた

「……逃がすか！」

シズクが捕らえようと水の触手を伸ばすが、それを手にした刀で打ち払った何者かは忌々しそうに舌打ちすると

「ちっ!!!」

攻撃がかわされると判断すると同時に再び茂みの中に姿を消した

何者か。一瞬見たただけだが巫女服姿の長い黒髪の少女だった

「美神さん！大丈夫ですか!？」

一瞬の奇襲だったので蛍ちゃんもくえすも反応し切れなかった。私を狙ったのは多分、この中でリーダーだと向こうが判断したのだろう。数が圧倒的に不利なので奇襲を選び、失敗したのなら逃げる。奇襲の鉄則だが、そのあまりの速さに全く反応できなかった

「今の人間ではないですね」

「確実にね。多分……変化が出来る妖怪、それよりも早く戻りましょうッ！」

あの妖怪が逃げていった方向はセーフハウスの方角で、横島君達がいる方角だ。間違いなくあの相手では横島君では対処しきれない

「……私は結界でここを封鎖してから水で跳ぶ。先に行けッ!!」

シズクの怒声にお願いと頼み、私達は瘴気の薄い所まで駆け出した。くえすの転移でセーフハウスに跳ぶ事は出来るが、ここでは瘴気が濃すぎて転移が失敗する可能性が高いからだ

「美神さん。横島は大丈夫でしょうか？」

「無事だと信じるしかないわよ」

いくら妖怪だと言っても短時間で向こうに移動出来るとは思えない。少しでも早く移動して妖怪が向こうに辿り付く前に戻りましょうと叫び、来た道を慌てて引き返すのだった……

美神達が慌ててセーフハウスに引き返そうとしている頃。川原では……

「アンちゃん！美味しい！」

「そっか、良かったな。ケイ、もっと喰うか？」

「良いの!?!ありがとー」

「よしよし、ケイは一杯食べてでっかくなれよ。美衣さんもどうですか?」

「え?あ。はい、ありがとございます」

化け猫親子と釣った魚とセーフハウスで用意された食材でバーベキューをしていた……昼だからと横島達が川原で魚を焼いていると

その匂いに釣られて息子のケイが飛び出てきてしまい、私も戦うしかないと出て来たのだが、川原で食事を作っている一団を妖怪退治かと警戒していたのだが

「みむ?」

「ぶぎい」

「何?猫変化?お腹空いてるの?」

「ん?おお、この辺りに詳しくそんな人だ。これは幸運だったな、言うかタマモ、この人達妖怪なのか?」

「うん、猫変化ね、妖怪としては中の上くらいかな?結構強い妖怪よ」

【横島……お前は……いや、何も言うまい】

【あ、食べる人増えてますね。セーフハウスからベーコンとって来ましょうか?】

人間は居たのだが、グレムリンはいるわ、明らかに妖怪のうり坊は居るわ、狐変化は居るわ。額当てに目は浮かんでいるわ、幽霊は居るわで完全に混乱し、気付けば私達も川原での食事に参加させられていた

「えつと横島さんは妖怪退治では?」

「妖怪退治?いや、俺はGSですけど、別にむやみやたらに妖怪を退治するわけじゃないし、ケイも美衣さんも会話してくれるじゃないですか?なら話し合いで解決するならそれでいいかなって、それに俺達妖怪退治じゃなくて調査に来ただけなんですよ?」

のほほんと笑いながらグレムリンに果物を与えている横島さんに驚いていると、狐変化が

「まあこいつはこういう奴よ。人間だけど、どっちかと言うと私達寄りの考え方をしてるわ」

「そ、そうなのですか?」

と言うかそんな人間が居るんですねと驚きながら木の枝に刺されて焼かれた魚を齧るのだった……

「うめー、本当にこんなに食べていいのか?アンちゃん!」

「おう、いいぞー。一杯食べるよー?」

【はい、お魚やお肉だけじゃなくて野菜も食べてくださいね】

ケイと揃ってうげえつと呻く横島さん。変わった人間も居るのですねと思わず、苦笑してしまうのだった

「では横島さん達は、この山の調査に来たのであって私達を退治に来たのではないですか？」

「うつつ、なんかこの山でやばい魔族が暴れた痕跡があるって言うんでその調査と、えーとこの山に居たって言う神様の安否の確認に来たんです。今俺の師匠達はその周辺の調査に向かって居る筈です」

昼食の後に横島さんの話を聞くと私達を退治に来たのではなく、山神様の安否の確認とこの山の調査に来たのだと教えてくれた

「不味いですね」

「不味い？なんかあるの？」

横島さんの隣に座っている狐の変化。タマモさんがなんかあるの？と尋ねて来るので私はこの人達なら信用出来ると思ひ

「実は私の姪に緋鞠と言う子供が居るのですが、人間がまた山を荒しに来たと戦いに……あの子は剣の達人で巫女なのです」

私はあくまで化け猫としての力を使うが、緋鞠は山神様の巫女なので噛み付きや引つかきで戦う訳にはいかないと符術に剣術を学び、妖怪でありながら退治家のような戦い方をするのですと言うと横島さんは引き攣った顔で

「……それめっちゃやばくね？」

「やばいわね。美神はともかく、くえすは攻撃されたら間違いなく反撃するわよ？」

【いまからでも私が伝えに行きましようか？】

【いや、もう間に合わないだろう。間違いなくどこかで遭遇しているぞ？双方に被害が無ければ良いのだが】

緋鞠は猪突猛進な所があるので、話し合う余地は無いだろう。これだけ話の判る人間なら最初から話に来れば良かった……と思わず深い溜息を吐いてしまった

「みーむー！」

「わーははーチビボール投げ上手だなー！」

「ぶぎぎゆうー！」

川原で遊んでいるケイ達を見ながらどうしましょうと話し合っていると背後の茂みがかざりと動き

「ケイ!?美衣さん!?なんで人間と一緒になんじゃ!？」

着物にブーツ姿の緋鞠を見てどこも怪我をしていない事を悟り、良かったと安堵の溜息を吐く、疲労の色こそ表情に浮かんでいるが瘴気の濃い所に向かっていたのが原因だと思いたい。どうか横島さんの師匠と戦っていませんようにと祈る、これだけ話の判る横島さんの師匠なのだから、悪い人ではないと思うから

「すげえ美人……あいだ!？」

横島さんがぽーっとした感じで呟く、緋鞠は背も高く、発育も良い。横島さんのような若い男なら目が惹かれるのも当然だと思うのだが、生憎横島さんの回りの人はそれを許してくれる人ではなかったようだ

「横島ー?美人を見たら飛び掛ろうとするの止めなさいよ?」

【蛭ちゃんに言っちゃいますよ?】

タマモさんとおキヌさんに耳を捕まれながら、すいませんと謝っている横島さんに苦笑しながら

「緋鞠こつちに來なさい。どうもこの退治家の皆様はこの山の調査と山神様の安否の確認に來たのであつて敵ではないようですよ」

「……本当ですか?」

「本当です。現に私もケイも話を聞かせただけで食事に招いて貰いました。まさか山の中の横島さんの師匠達を斬り殺してはいないでしょうね?」

「え、はい、奇襲に失敗したので撤退を……」

緋鞠の言葉に良かったと安堵の溜息を吐いていると、横島さんが焚き火の準備をしながら

「えーと緋鞠……さん?お腹空いてない?魚しかないけど……焼こうか?良かったら、その後で話を聞かせて欲しいんだけど?」

「……お願いするのじゃ」

マイペースな横島さんに疲れたように溜息を吐いて近づいてくる緋鞠を見ながら

「師匠さん達の説得って出来そうですか？」

「……多分なんとかなると思います」

殺してないなら話し合いの余地はあると思います。と言うかあると思いたいですという横島さんに、横島さんは穏やかな人なのだが、師匠達はもしかすると怖い人なのかもしれないと不安を抱きながら、横島さんの師匠さん達が戻るのを待つのだった……

私達が慌てて川原に引き返すとそこには横島以外に3人の人物の姿があつた。しかし敵対している素振りは無く、普通に会話をしていると思いつき脱力した

「……横島を妖怪の集落に連れて行くだけで、その集落を味方に出来ると思うのだが？」

「止めて、お願いだから止めて。これ以上人外は増えなくていいわ」

美神さんが本当にお願いと呟く、集落全体を味方に出来る代わりに横島の周辺に人外が増える……それは私としても本当に止めて欲しかったと言うか、現在進行形で止めて欲しいと思った

「ほう、妖怪退治でありながら、妖怪との共存を目指すか。面白い男じゃな」

「そう？人間にもいい奴と悪い奴がいるだろ？妖怪でもそれは同じだと思うだけで、妖怪だから悪い、幽霊だから危険つてのが嫌なだけなんだけどな」

横島の隣の巫女服の少女。刀が近くに立てかけてあるから、間違はなく美神さんを襲った妖怪に間違いない。なんでそんな相手と仲良く会話しているのか、そして何故そんなに親しげなのかと思ひ半分怒りながら、川原に向かうと私達に気付いたのか横島とおキヌさんが駆け寄ってくるのが見える

「蛭！シズク！神宮寺さんに美神さんも！無事で良かった。怪我とかしてないですか？」

【お疲れ様です、怪我とはしてないですか？】

話を切り上げて大丈夫ですかと駆け寄ってくる横島とおキヌさん。背後を見ると自分が話をしていたのに、と面白く無さそうにしている



巫女服の少女にざまあみろと思いながら

「私達は大丈夫よ、それよりも横島。あの人達は？」

「ああ、なんかこの山の山神様に仕えていた巫女の緋鞠さんと、その一族の美衣さんとその子供のケイ。この山を地上げしようとする企業と戦ってて、それを手伝う妖怪退治だと勘違いしてたつて言ってます」

勘違い……それで襲われた訳……幸い怪我とかもしてないけど、一歩間違えば最悪の結果になっていたかもしれないだけにはい、そうですかと言う訳にはいかない

「横島的にはどうですか？信用出来そうですか？」

「結構良い人だと思います。山の地上げをしないなら、こっちの知っている情報を提供するから、これ以上山を荒らされないようにしてほしいと」

この山が住みかの妖怪なら、私達が知りたいたいと思っている情報を教えてくれるだろう。どの道この山の周辺は封鎖する事で決まっているが、妖怪まで追い出す訳ではないから静かに暮らしたいと言うあの人達の願いは叶うだろう。

「……ではお前は危害は加えられていないんだな？」

「うん、普通に一緒に川原で魚焼いたり、野菜焼いたりして話をしながら飯を食ってただけだぞ？シズク」

【ああ、それは私も保証する。向こうに敵意は無い、勘違いをしてすまない事をしたと謝るつもりでいる】

横島と心眼の話を聞いて美神さんが溜息を吐いているのが見える。だけどその気持ちは良く判る、危険だから置いて行つたのに、なんで妖怪と一緒にご飯を食べているのだろう？正直理解に苦しむ

「アンちゃん！アンちゃんも遊ぼうぜー！」

「ちよつと待つてなー？今難しい話をしてるから」

はーいっと返事を返す子供の妖怪と、その周りで遊んでいるチビと  
うりぼー……結局何処に居ても横島は人外に出会う確率は変わらないのか、そして仲良くなるのは殆ど決まっているのかと深い溜息を吐きながら

「とりあえず、緋鞠さんと美衣さんと話をする前に昼食にするわ」  
「あ、じゃあご飯の用意をしますね。一杯魚が釣れたんで塩焼きにしますねー」

そう笑って川原のほうに向かっていくおキヌさんを見ながら私達も川原に向かい、こつちの様子を観察していた緋鞠と美衣と言う化け猫の妖怪の元へと歩き出すのだった……

リポート9 神の山を搜索せよ その5へ続く

## その5

リポート9 神の山を搜索せよ その5

横島と師匠達が戻ってきた所で私は椅子代わりにしていた石から立ち上がり

「この度は勘違いをし、襲撃してしまった事深くお詫び申し上げます。申し訳ない」

深く深く頭を下げる。今までの妖怪退治は話も聞かず襲ってきた。それと同類だと思ってしまっていたことを深く謝罪する

「まあ誰だって勘違いはするものだし、えーつと緋鞠さんで良いんだっけ？」

私が奇襲した女性がそう尋ねてくるので頷きながら

「化け猫の緋鞠じゃ。この度の無礼、まことに申し訳ない」

ただ戦闘力の弱い美衣さんや、子供のケイのことも必要以上にピリピリしていたと説明すると仕方ないと言われ、正直拍子抜けしたが

(これはもしかすると横島のおかげか?)

もしかすると私の様な妖怪なども出会っている横島のおかげで、仕方ないかという空気になっているのかもしれないと思い。本当に変わった人間だと私は小さく苦笑してしまうのだった。そしてそんな横島はと言うと

「横島！妖怪とかに会いやすいのは判るけど、すごい人って信用するのは正直どうかと思うわよ?!騙されているとか考えないの!」

「そうですねよ、妖怪……特に鬼と呼ばれる種族は笑いながら人を斬るような種族です。あれは違うと思いますが、すぐ信用するのは止めなさい」

「は、はい……すいません」

川原で正座し蛭とくえすの2人に説教されていたりするのだった

……

横島君が危ないと思いき焦ってセーフハウスに戻って来たのだが、この山に住むと言う化け猫の妖怪と仲良くなっているのは正直驚き、そしてもう少し警戒心を持って欲しいと思った

「……かなり釣れたみたいだな？」

「魚影めちゃくちゃ濃いからなあ。俺とタマモとおキヌちゃんです30匹くらい釣ったんじゃないかな？ だいぶ食べたけど」

それでもまだかなり魚籠に残っているのを見ると相当な釣果だったのだと一目で判った。人数分釣れば御の字と思っていたけど、これも正直予想外だった

「……うん。悪くない、良い具合に脂が乗ってる」

「そうね。白身で凄く美味しい」

「……丸かじりなんて初めてですわね」

焚き火で焼かれた魚を食べている蛍ちゃん達を見ると、美衣さんが焚き火のほうに手を向けて

「どうぞ食事を先にしてください、私達は待つておりますので」

その言葉にすいませんと返事を返し、おキヌちゃんと横島君が焼いてくれていた焼き魚に手を伸ばすのだった……大きさは20センチくらいだったがかなり肥えている上に脂が乗っていて確かにかなり美味しい魚だった

「失礼しました。それでこの山の神に関してなのですが、何か知っていることはありませんか？」

横島君にダウジングを頼むことも考えていたが、山の内情を知っているのならその人に話を聞いて、そこを直接搜索した方が早いと思いき美衣さんと緋鞠にそう尋ねる

「なー。アンちゃん。おいらつまらない」

「うーん。美衣さん、ケイ少し預かりますね？」

「あ、それでしたら、この近くに安全な竹林と広場があるのでそちらで」

ケイはこの話についてこれず、つまらないつまらないと騒いでいるので横島君が面倒を見てくれるのはありがたい。話をしていたが、この人達に私達を騙そうという意思は感じないので大丈夫だろう……

だけど

「おキヌちゃんとシズクも一応付き添ってあげて？」

「……良いだろう。いくぞ、横島。ケイ」

「じゃあ、行つてきますねー」

ほかの妖怪の事もあるので、シズクとおキヌちゃんを横島君達の護衛につけ、私達はこの山に関しての話し合いを始めるのだった

「じゃあ、緋鞠もこの山の神については知らないの？」

「ああ。姿を見ることは許されていないからな、ただ気配だけは知っているんじゃない。どこまでも大きく、そして厳しく、威厳のある方じゃない」

緋鞠さんと螢ちゃんの話聞いて、小さく溜息を吐く。山神の巫女と言うので姿を知っていると思つていたのが、姿を見ることが許されていないので声と気配しか知らないと言われれば特定出来ると思つていたので正直ガツカリする

「ですが、その方が作つた聖域はまだ生きております。私達の住処と、そして横島さん達が向かつた竹林。最後に山神様の祠です」

「聖域ですか、それなら山神の何かが残っている可能性は十分にありますわね」

「うん。私もそう思うわ」

結界の触媒として何かが残っている可能性は極めて高い。そこから山神を特定出来る可能性は極めて高い、ガープの事を調べるよりも先に山神の特定をしたほうが良いかもしれないと話していると、緋鞠さんがストップを掛けた

「今から出発するのは止めた方が良くぞ？山の奥のそのまた奥じゃ、もし向かうなら案内はするが、人間でそこまでたどり着けるかどうか……」

「そうね。そこが心配ですね……ですが車とかが通れる所ではありませんし」

緋鞠さんと美衣さんがうーんっと唸る。手がかりはあるのだが、そこに辿り付けるかどうかと言われるとやはり人間と妖怪のポテンシャルの差が出てくるだろう

「調査しない訳には行かないから多少無理をしても行くわ。案内はしてくれるんでしょ？」

「まあ、この山を荒らされない様にしてくれる為に必要だと言うのなら案内はするが……大丈夫かの？」

心配そうにしている緋鞠さん。でも調べない訳には行かないので多少の無理はするし

「こっちにも移動手段はあるわ」

「私の事言ってます？」

ほかに誰がいるの？と逆にくえすに尋ねる。魔法使いなのだから飛行魔法とか、転移魔法とかは取得している。それなら緋鞠と美衣さんに案内してもらい、くえすが先行。そこから転移で飛ぶと言うのが一番効率が良いだろう

「はあ……まあ仕方ないですわね」

「頼りにしてるわよ」

シズクタクシーという手段もあるが、あれは体力も霊力もかなり消耗するので最後の手段にしたい。と言うか、出来ればあれはやりたくない、絶対にお断りというレベルなのだから

「蛍ちゃん。地図をお願いします」

「はい、判りました」

とりあえず地図で場所の確認。それとどんな些細な事でも良いからガーブが現れた時の話を聞かせて欲しいと頼み、私達は日暮れまで美衣さん達と話し合いを続けるのだった……

ケイに案内されてきた竹林と広場は相当な広さがあった。まさかセーフハウスの近くにこんな所があるなんて全然気付かなかったと驚いていると心眼が教えてくれた

「ここはなんらかの方法で隔離されている。知っている者がいなければ気付く事は出来ないだろう」

「……ああ。かなり格の高い神霊が何かをしたんだろうな、結界では無いのは判るが何だろうな」

心眼とシズクが判らないなら、俺に判る訳ないかと思ひ。背負って

きたりユツクからナイフを取り出して背の低い竹を切って座り込む  
「アンちゃん？何してるの？」

「みむっ？」

「ぶぎっ？」

遊んでくれると思っていたのに、俺が座り込んだ事で不満そうな顔を  
しているケイ達にちよつと待つてくれなーと声をかける。

「タマモ。ロープくれ」

「これでいい？」

OKOKつとタマモの差し出してくれたロープを受け取り、切った  
竹の細工を始める

「横島さん。ナイフで切れるんですか？」

「無理」

そもそもナイフなんかで竹を切れると思ってないし、背の低い若い  
竹ならまだしも普通の竹は無理

「じゃあどうやって切るんですか？」

「いや、そこはほら。こうやって……」

ナイフに札を貼り付けて、指に少し傷をつけて血を垂らしてつと

「急急如律令ッ!!火精招来ッ!!」

ナイフの刀身が赤くなつたのを確認してから、大きめの竹の前に  
立って

「ていッ!!」

軽い手ごたえと共に竹がゆっくりと倒れてくる。おお、成功成功。  
火の陰陽術で切れ味を強化出来ないか？と思っただけど成功した  
ようだ。数本竹を切って、再び座り込んで細工を再開していると

「……お前何をするつもりなんだ？」

俺が竹を切り倒しているのを見て、シズクが何をするんだ？と尋ね  
てくるので俺は竹の長さを手で測りながら

「玩具づくり。まずは……これから仕上げるか」

最初に切った竹をナイフで切って削り、棒と長い板状の物を作り。  
竹の破材を積み上げて

「タマモ。ここで火をつけてくれ」

「横島。私の事便利な道具とか思っていない?」

「いやそんな事思った事ないけど? 大事な家族だろ?」

俺タマモのことは道具だなんて思っていないし、大事な家族だと思っ  
ていると告げると、タマモがそっぽを向きながら破材に火をつけてく  
れる。なんでそっぽを向いたんだろうなと思いつながら、切り分けた材  
料を火の上にかざして乾かしながら、角度などを調整する

「すげー、アンちゃん。何作ってるんだろうな?」

「みー?」

「ぴぎい?」

俺が玩具を作っていると言うと、興味深そうに俺の手元を覗き込ん  
でくるケイ達に苦笑しながら、最後の仕上げをしてっつと

「よーし、出来た。それッ!」

作った竹とんぼを飛ばすと判りやすいくらいケイの顔が輝き、地面  
に落ちる前に拾ったケイは

「アンちゃん! これ貰って良いのか!」

「良いぞー。まだ作るから、しばらくそれで遊んでくれ」

判ったと叫びチビとうりぼーと一緒に竹とんぼを飛ばして、広場を  
走り回っている姿に思わず微笑みながら、俺は竹細工の玩具づくりを  
再開した。材料は嫌ってほどあるし、ロープもある。竹ぽっくりとか  
も面白いかもなあと思いつながら次の細工をしているとシズクとタマ  
モが俺の隣に座り込んで俺の手元を覗き込む、おキヌちゃんも面白い  
ですねーと呟きながら俺の前を浮かんでいる

(なんか落ち着かないなあ……)

大した物を作っている訳じゃないんだけどなあ……どうしてこん  
なに見られているんだらう? 俺は落ち着かないのを誤魔化す様に竹  
細工作りに意識を向けるのだった……

翌日。セーフハウスに泊まってくれた緋鞠さんがくえすを案内し  
て山へと向かった。くえすが先行して、私達を魔法陣で運ぶ準備をし  
ている中。私達もまた搜索の準備をしていた、今回は横島も連れて行  
くので装備は昨日よりも重装備になる



「これは瘴気避けのペンダント、こっちは呪に強い装備。こっちは毒とかよ、ちよつとガチャガチャするけど我慢して」

「これでちよつとなの!？」

驚いている横島にそうよ?と返事を返す。心眼にタマモとシズクのおかげで装備を少なく出来ているが、自前で瘴気避けや、呪に対抗できないのなら装備で補うしかないのだ

「くえすの転移で山の奥に直接移動。そこから移動する事になるんだけど、美衣さん。山の奥は悪霊もそれほど多くないんですね?」

確認という感じで美衣さんに尋ねる美神さん。美衣さん達が普段暮らしている周辺に移動するのでケイに美衣さんも同行する予定になっている

「ふぎ」

「うりぼーすげー♪」

ケイは子供という事もあり、大型犬程度の大きさになったうりぼーの上に座っている。昨日1日で仲良くなったチビもケイの頭の上に座っている、タマモは昨日1日精霊石で人化していた事もあり、今は横島の背負っているリュックの中だ

「ええ、奥に行けば行くほど山神様の領域となっているので安全性は高くなります。ですが、そこまで辿り付くまでは悪霊なども多いので装備は用意した方が良いでしょう」

それでも多少の悪霊は出ますが、ここよりは断然安全ですと断言する美衣さん。ここまで言うのなら本当に安全なんだと思うけど、念の為に私も装備を身に着けておく

「……早々抜かせるつもりはない。だから心配する事はない」

シズクがいれば確かに安全性はかなり確保されると言えるだろう。山の中なので地面の中や溪流から水を取り込んでるので、普段よりも数段パワーアップしている。これなら霊団がいたとしてもシズク1人で対応出来るかと思っていると、川原の真ん中の魔法陣が浮かび上がる

「準備が出来たみたいね。行くわよ」

「私は瘴気があると思っていけないので、ご飯の用意をしますね。」

気をつけて」

おキヌさんの言葉にありがとうと返事を返し、私達が魔法陣の中に足を踏み入れると同時に何かに引っ張られる感覚と共に、私達は川原から一瞬で山の奥深くへと移動した

「ほー、西洋の術は凄いの、こんな事も出来るのか」

魔法陣の外で待っていた緋鞠さんが驚いた表情でそう告げる。魔法陣で移動すると聞いて本当に出来るのか？と言っていたのでこうして実際に目の当たりにして驚いているのだろう

「お疲れ、くえす。大丈夫？」

「疲労はそれほどでもありませんわ。悪霊も確かに多かったです、飛んで移動していたので戦闘にもなってます。魔力の消耗だけです」

その言葉のとおり、くえすの顔に疲労の色はない。これだけの人数を魔法で移動させても消耗していない、偉そうな事を言うだけあつてくえすの実力はやはり桁違いなのだと思えて実感した

「確かに空気が澄んでいるわね。聖域って言うのもあながち嘘じゃないかも」

山の中腹辺りが瘴気溜りになっているとはとても信じられない位に空気が澄んでいる

「なんか木まで光ってるように見えるな」

「いや、実際に光っているぞ？神通力を溜め込んでな」

横島と心眼の会話に驚きながら木々を見ると、確かにぼんやりと光っている気が見られる。それらが神通力を放ち自然の結界を作っているって事ね……これはまさしく聖域と言わざるを得ない

「ここから少し先に私達の家があります。私達はそこで待っているの、緋鞠に案内して貰って山神様の祠までは移動してください」

美衣さんの言葉に頷き移動すると、開けた場所に古い民家があった。これが美衣さん達の家なのね。古きよき日本家屋って感じどこか懐かしい感じのする建物だ

「アンちゃん。玩具ありがとうな、気をつけて」

「ありがとうな。ケイ」

危険と言うことで美衣さん達を家に残し、私達は緋鞠さんの案内で山の奥へと足を向けるのだった

「よいつしよつと、ほら。蛍」

「あ、ありがとう。横島」

人間がたどり着けるかと緋鞠さんが心配していた理由がよく判った。急勾配なものも去ることながら巨大な木々が道を塞いでいて、移動が非常に困難だったのだ。横島が木を乗り越え、手やロープで私達を引き上げてくれているのだ。悪霊は時々出てくる程度だが、完全に出現しないわけではないから装備をそこまで使う訳じゃないんだけど、ここまで重装備じゃなくてもよかったかもと若干後悔した

「ふう。結構しんどいわね」

「ですネ」

木を乗り越えたところで大きく深呼吸をする。体力には自信があるが、それとこれは根本的に違う握力や脚力を要する純粋な体力勝負な所がある。こうなってくると横島の方が有利な部分が出てくる

「もう少しじゃ、頑張れ」

「……力が強くなっているな。目的地は近い」

化け猫と言う事もあり、軽々と木を乗り越えて進んでいく緋鞠さんと地面の中に潜って移動するシズクにずるいと思いつながら、最後に木を乗り越えたくえすと横島が降りてきた所で緋鞠さんが森の中を進んでいく。この後も岩や、木々を乗り越え、体力的にきつい物を感じた頃

「ここだ。ここが山神様の祠じゃ」

山の中なのに開けた場所。そこに巨大な何かの動物の牙と骨。そして石で出来た祠があった、かなり離れているのに凄まじい力を感じた

「これは山神様の牙なのですか？」

「いや、これは違う。山神様とこの山の支配を掛けて戦った狼の牙じゃ、良く見てみる頭の骨格が見えるじゃろ？」

狼の牙？そう言われて近くの動物の骨を見ると確かに犬のような頭の形状をしていた。しかしその大きさが異常だった、軽く見積もつ

てもトラックよりも大きい。生きていた時は一体どんな巨体だったのかと恐ろしく思う

「……神同士の利権の争いか……この感じを見ると相当前だな……」  
風化しないで残っているのは、骨自身が持っている神通力の影響だなど呟くシズク。周囲を警戒しながら、祠の方に足を進める

「なんかぼかぼかする……凄い穏やかな気分になりますね。美神さん」

横島が穏やかな表情でそう告げる。確かに今までの疲れが抜け落ちていくような……暖かい日向の中にいるような気持ちだ

「凄いレベルの神域よ。ここまでとなると妙神山よりも上かも」

妙神山よりもさらにレベルの高い神域……それがこんな所にあるなんてと驚いていると、くえすは近づこうとしないのでどうしたんだろうか？と見つめているとくえすが肩を疎めながら

「私はビュレト様の系譜ですから、ここまでの神域には入ることは出来ませんわ。申し訳ないですが、調査は3人でお願います」

下手をすると力を失うかもしれないとまで言われては、無理に頼むことは出来ず、私達で祠の周辺を調べることにするのだった……

美神さん達が祠の周辺を調べているのを見ながら、俺はリュックから出したチビ達と共に牙の周辺を調べていた。全員で祠を調べても無駄だろうし、もしかするとチビ達が匂いか何かで何かを見つけられるかも？という期待もあったからだ

「みむ？みむう？」

「ぴぎぎー！」

「コンー！」

「ん？なんか見つけたか？」

ちよこちよこ動き回っていたチビ達が急に止まり、鳴き声を上げるので駆け寄る

「みむみー」

「ぴぎぎぴぎぎー！」

「ココーンー！」

何かを見つけたと言わんばかりにその周辺を走っているチビ達。この感じ本当に何かを見つけたっぽいなと思いつくと

「なんじゃ？何か見つけたのか？」

「俺じゃなくて、チビ達だけだな」

緋鞠さんもその反応に気付いたのか、駆け寄ってきて2人でチビ達が見つけた何かを調べる。それは地面に突き刺さっている錆びた金属片のような何かと、割れたお面の欠片のような物だった

「緋鞠さん。見覚えは？」

「いや、無いな」

もしかして緋鞠さんの所有物では？と思ってお面を差し出すが、違うと言われたのでリュックから取り出した袋にそのお面をしまう。何かの手がかりになればいいんだけどな……

「んっぎい……ぐぎいいいいい！だ、駄目だあ……ビクともしない」

「どれ、今度は私がふっ……ぐっ……くうう……だ、駄目じゃな」

2人で全力で引っ張ったが、全く抜けない。何かの手がかりっぽい感じなんだけどな……

「……どうした？何か見つけたか？」

「ああ。なんか地面に刺さってる金属見たいんだけど、これ何かの手がかりになるか？」

俺と緋鞠さんが引っ張り出そうとしている物をシズクに見せると、シズクはその金属片を観察して

「……それは抜けないな、見た感じは金属だが、あの動物の骨と同じ気配がする。確実に引き抜けるものじゃないぞ」

そうなのか……見た感じ金属っぽいから何かの手がかりになると思っただけだな。あ、じゃあこれはどうだろうか？と先ほど拾ったお面を見せながら

「これも見つけたんだけどどうだろうか？」

やはりこれも手がかりにはならないだろうか？とシズクに尋ねると、シズクはそのお面を見て

「……これは見たことがあるぞ。ずっと前……私がまだ神界にいた時に……そうだ。特定の神の眷属だとを証明するお面の筈だ」

「え？」

シズクがいつまで神界にいたかは知らないが、これは相当古い品物だと言う事が判った。

「……残りを探した方が良い。もう少し揃えれば何の神に関係するかお面か判る筈だ」

他のかけらもこの付近にあるかもしれないと言う事になり、俺と緋鞠さんはチビ達に協力して貰い地面の中や茂みの中に落ちている。山神の眷属が所持していたとされる装飾品の搜索を始めるのだった……

「んーお面とナイフかな？それと勾玉に腕輪……これっは剣っぽいな」

「統一性が無いの。もしかすると山神様と戦った神の眷族の遺留品も残っているのかもしれん」

いろいろ探してみたが大半が地面の中に隠れており。うりぼーが掘り返してくれた事で見つける事は出来たが、統一性が無く、そして破損も酷いな。もしかすると山神様だけではなく、戦ったと言う神の眷属の所持物かもしれない

「……その可能性は高いが、年代が特定出来れば、もしかすると私の知っている神かもしれない。明るい所で調べないと確実なことは言えないが、たぶん平安時代よりももつと前の時代物だと思う」

竜神の時はかなり神としての地位も高かったからなと言いながら、平安時代よりも前の物だと言うシズクに

「でもそれだけ古くて、風化してないっておかしくないか？」

「いや、おかしくは無いぞ。神域に達していて、周囲は聖域だ。邪気や風の流れを遮断して存在を維持していたと言っても不思議は無い」

それによほどの事が無ければ神の眷属が持つ道具は不変だ。自然風化などはないえなといわれ、やっぱり神様って凄いなと思いつつながら頑張ってくれたチビ達にありがとうと声を掛けていると祠の搜索をしていた美神さんと蛭がやってきて

「横島君達も何かを見つけたのね。こっちも収穫はあったわよ」

「お疲れ様です。俺はこの通り装飾品みたいです、美神さん達は何を

見つけたんですか?」

俺はそう尋ねると目に見えた収穫は無いけどねと螢は笑いながら「残っていた神通力とか、そう言うのでどういうタイプの神様がいたのか?とかそういうのは特定出来たわ。横島の見つけてくれた道具と合わせればもつと詳しい特定が出来るかもしれないわよ」

とりあえず一度セーフハウスに帰ろうという話になり、結界の外に出る神宮寺さんが魔法陣を地面に描いていて

「ここから直接セーフハウスに跳べる準備をしましたわよ。もう帰るのですか?」

「緋鞠さんはどうする? 私達は一度拠点に戻るけど?」

「私は今日は美衣さんの所に戻る。明日また尋ねさせて貰う。どうも電化製品?とやらの気配は落ち着かなくてな」

そう言つて木々の中に消えて行く緋鞠さんを見送り、俺達は神域で見つけた物を手にセーフハウスへと戻るのだった……

リポート9 神の山を搜索せよ その6へ続く

## その6

レポート9 神の山を搜索せよ その6

神域から持ち帰った装飾品をセーフハウスで美神さん達と調べながら、肩の上に乗せた透明な通信兵鬼でお父さんにも同じ情報を送る。美神さん達の知識が劣っている訳ではないが、魔族の観点からも調べて欲しいと思ったからだ

「……うーん。やっぱりこれ、どこかで見たことがあるぞ？どこだったか？」

机の上に並べた装飾品にシズクがしきりに首を傾げる。どこかで見たことあると言っているのだが、それを思い出せないでうんうん唸っている。シズクが見たことがあると言うことはやはり神族の持ち物であることは間違いないので、それを思い出して貰うのを待ってしよう。なお横島は専門的ない知識がないこともあり、現在はシャワーで山の中を駆け回り、汚れているチビ達を洗っている

「神の眷属……年代的には相当前。巫女やシャーマンではないでしょうね」

「うん。それは私も思う、仮に巫女やシャーマンがいたならあの神域にそれらしい痕跡があるはずだしね」

巫女やシャーマンの可能性はないと思うと言ってくえすと美神さんの言葉。これは私も感じていたことだ、山の奥深くの神域。通常ではたどり着けないその場所は石の祠こそある物の自然その物だった。もし巫女やシャーマンがいて、神と交信していたのなら僅かでも人間が作った道の痕跡がある筈だが、それも無い。それから導き出される答えは一つ

「つまりこの装飾品は人間の物ではないって事ですね？」

「多分ね。装飾品にこれだけ神通力が残っているって事を考えると、低級の神か、眷属を人型に変化させて戦っていたかだと思う」

かなりの骨董品であるはずの装飾品がそのまま残っている。それ



は通常ではありえないので、神に属する何者かの装備と見て間違いないだろう、私は机の上の装飾品を見て

「剣とナイフ……どっちのものなんでしょうね」

この山の支配権を賭けて戦い勝利し、この山の神となり、現代まで生きていた山神と、あの祠のある場所に残された巨大な狼の頭蓋骨と牙。どっちがどっちの眷属の装備だったんでしょねと呟く。強大な神通力を持ち、残っていた骨と牙から。この山にいたのは、おそらく神獣。それもかなり年月を生きた規格外の存在で、なおかつその性質は荒神に近く、人間の味方ではない。それが私達の調査で判った事だ

「荒神で巨大な動物……該当するのが多すぎるわ」

「ですよ。それに長い年月を生きて、神格得た動物っていうのも考えられますし……」

「まあ結論を言えば特定は出来ないって事ですわね」

調査をしても判らない事が多すぎる、この山の支配権を掛けた神獣同士の争い。妙神山に匹敵する神域がある。そして山神に仕える化け猫の妖怪の一族……調査をして、判ったのが特定不能って言うのは本当に何の意味があったのか？と思うレベルだが、逆に言えば神族や魔族にも見つからず、ひっそりと暮らしていた神獣つと考えると神話や伝説に出てくるような神ではなく、長い間生きて神格を得た動物っていう可能性が高い

「猫の神獣ですかね？」

「まー緋鞠とかの事を考えるとその可能性が高いんじゃないかしら？狼の骨もあつたし」

犬科の狼と長い年月を生きた化け猫の縄張り争いじゃない？と美神さんが笑う。私も同意見だ、だって猫の神様なんてそれこそエジプト神話ですよねと美神さん達と話をしていると、シズクが思い出したと手を叩き

「……そうだ。人間嫌いで神嫌いの乙事主の眷族の面だ」

「「え？」」

私と美神さんとくえすの言葉が重なる。乙事主？……それって日

本神話や古事記に出てくる猪の神様じゃ……

「それってあのヤマトタケルを瀕死にした？」

「……ああ。そうだな、神殺しと英雄殺しの……猪……猪？」

シズクの言葉が途切れ途切れになり、まさかと最悪の予想が脳裏をよぎり、私達の中に重い沈黙が降りる中、リビングの扉が開き

「よーし、じゃあうりぼー、チビ、タマモ。ドライヤーしような？」

「ぴぎー♪」

「みーむー♪」

「コン♪」

横島がお風呂で綺麗にしたチビ達を抱えて戻ってくる。その腕の中にいるうりぼーを見る。猪だ、間違いなく猪でとっさに全員で頭を寄せて

(ね、ねえ？シズク。あれ……じゃないわよね？)

(……わ、判らない。だが神通力は感じないぞ？)

(し、新生してまだ神通力が目覚めていないだけでは？)

(だ、大丈夫ですよ？普通の猪の妖怪ですよ？)

まさかあれが生まれ変わった乙事主じゃないよね？と美神さん達と話をしている中。横島が鼻歌交じりでうりぼーにドライヤーを掛け始める、

「ぶぎぎゆううー♪♪」

「もー何やってるんだ？ドライヤーに息吹きかけて面白いのか？」

「ぶぎぎゆうううー♪♪」

ドライヤーの風に向かって息(?)を吐きかけて、エコーする声に上機嫌なうりぼーに何やってるんだよ？と苦笑しながらブラシで毛並みを整えている横島を見て、どうか普通の猪の妖怪であって欲しいと心の底から祈るのだった……

翌日。緋鞠と合流してから私達は山の奥へと再び足を向けていた、しかし今回の目的地は神域ではなくガープがこの山で何をしているのか？それを調べる為の搜索だった。

『その近くの川を下流へ……えーつと多分2キロぐらい進んでください』

「2キロね。了解」

ガープの残した魔術の痕跡を求め、横島にセーフハウスでダウジングして貰いながらの山の搜索だが、原始風水盤のこともあり、横島の索敵能力は非常に高い、そもそも昨日の神域探しに横島を連れて行ったのは神域を見せるという目的と、チビ達の探索能力を買ったの事であり、横島自身がガープや魔人に狙われていることを考えると安全な場所に残すのがベストであり、連れ回すのは細心の注意を払う必要がある。なんとも困った存在でもあるのだから……横島の指示通りに進んでいるとどう見ても普通では乗り越える事の出来ない巨石が姿を見せる

「緋鞠。ロープお願い」

「心得た」

横島は地図でダウジングをしているのであり、進める進めないは判らない。目の前の巨大な岩を上るのは骨なので緋鞠に登って貰いロープを縛り付けて貰うのを待ちながら目を閉じて意識を集中する

「……どう？何か感じる？」

「まだ遠いですが、魔力の波長をうっすら感じますわね」

進んでいる方向が正しいのか？それを知る為に魔力を辿ってみた。結界か何かで隠されているが、魔力の波長を感じる。方角的にはこの方角で間違っていないようだ

「じゃあ方角はこっちで良いのね。しかし、これ厳しいですね」

蛍が呼吸を整えながら呟く、悪霊の数は少ないのだが、山の起伏が激しい。川と言っていたが、実際は急流で進むのもかなりの体力を要した

「ほれ、上って来い」

岩の上から降ろされた縄梯子を見て、今行きますわと返事を返し私は縄梯子に手を掛けるのだった

『そこからえーつと……反応が強くなってますけど、何かありますか？』

「何かと言うか、何も無いわよ？ 本当にあつてる？」

『はい、そっちの方向であつてますけど……周りに何か無いですか？』

横島の案内で進んできたのだが、今私達がいるのは崖の手前。その先と言われても何も無い、無線機で美神が周りを調べてみるから少し待つてと声を掛けているのを見ながら、崖ぎりぎりの所まで足を進めると、妙な気配を感じる。振り返り同じように周辺を調べていた蛍に「蛍。貴女は幻術系の術師でしたわね。解術は出来ますか？」

一緒に搜索すると言うことで聞いたのだが、蛍は本来は幻術などに特化したタイプで、道具使いとしての姿はフェイクらしい。元来幻術使いや、魔法使いは後方待機だ。それを隠すと言う意味ではいい隠れ蓑を選んだと思いつながら尋ねると

「ちよつと待つてくれる？」

崖の方から手を伸ばした蛍は閉じていた目を開き

「美神さん。幻術で隠されてますけど、道があります、見えないから怖いと思いますけど、私の後を着いて来てください」

蛍の姿がゆつくりと消えていく、幻術の中に足を踏み入れたと言う事ですか……しかしここまで近づいても察知出来ない幻術……ガープが何かしたと見て間違いないですわねと思いつながら、私も崖の方へと足を踏み出したのだ……

「み、見えないって言うのは、怖い物じゃな」

「緋鞠さんは霊視は出来ないの？」

怯えながら着いてくる緋鞠に美神がそう尋ねる。幻術は最初だけで、中に入ってしまうえば霊視で山の中を歩いているのが判った。だから怯える必要など無いのだが

「霊視？ なんじゃそれは？」

「……どうも彼女も横島君と同じタイプみたいね」

優秀な力を持つているが、頭で理解して使っているのではなく。感覚で使うタイプ、多分刀に霊力を通して振るうのも感覚で使っているだと判った

「妖怪だけど、望むならGSって道もあるかもしれないわよ？」

「……いや、結構。私が今望むのはこの山の平和を確保することじゃ

からな」

そうつと少し残念そうに呟く美神。今有力なGSが少ないことから、妖怪をGSするのは気分的に嫌だけど、戦力確保のために説得しようとしたんだらうなと思っっていると先頭を歩いている蛍が

「これ……何？」

その呆然としている声が聞こえたと思っただ瞬間。周囲の幻術が解除され山の中の光景が視界に現れる、だが私はそれを気にも留めず、足元に描かれた真紅の魔法陣を見て

「……これはなんですか？」

今まで見たことのない魔法陣に困惑の声を上げながら、その場にしやがみこみ魔法陣を調べ始めるのだった……

横島君のダウジングによってたどり着いたその場所は異質としか言えなかった。昨日の神域と似ているのだが、その方向はまるで逆……深い闇の中にいるような重苦しい気配に満ちている

「蛍と美神、それと緋鞠は精霊石の結界の中にいるべきですわ。この空間は人間が踏み入れてはいけない場所ですわ」

くえすの忠告を聞いて、昨日の神域と逆なのだ判断し精霊石で結界を作りその中に隠れる。本当なら詳しく調べたい所だけど、ここはくえすに任せよう

『何か見つけましたか？』

「ええ。ガープの実験の後を見つけたわ、これから調べてそっちに帰るから。じゃあ無線を切るわ」

気をつけてという横島君にありがとうと返事を返し無線の電源を切る。

「ここからだと思っけど、現場写真を撮るわよ」

「はい。判りました」

蛍ちゃんにポラロイドカメラを渡し、結界の中から写真を撮る。画質はそれほど良くはないけど、それでも十分魔法陣の全容が判る。範囲はかなり大きい物で、森林を切り倒し描かれている。魔法陣は真紅に輝いており、血もしくは狂神石で描かれていると思われる

「……だめですわ。時間切れです」

くえすの小さな呟きが聞こえた瞬間。魔法陣の輝きは失われ、魔法陣そのものが消え去った

「な、なんじゃ？なにが起きてるんじゃ？」

理解できないと困惑している緋鞠さんには悪いけど、説明している時間が無いので結界の中から出て

「調べて何か判った？写真は全部じゃないけど、撮れてるけど？」

「私も見たことの無い魔法陣ですが……恐らく」

ドレスの裾を払いながら立ち上がったくえすは鬼気迫る表情で告げた

「何かを召還する魔法陣……この規模だと恐らく、神霊や、英霊を呼び寄せるための物でしょう」

神か英霊を呼び出すための魔法陣……!?その言葉に思わず絶句する。ただでさえ強いガープ達の下へ英霊が召喚される、それはなんとしても避けなければならぬ事態だった

「ど、どういうことじゃ？判る様に説明してくれ」

緋鞠さんが私達の顔を見て、危険な状態なのだ判ったのか判るように説明してくれと言う

「ごめんなさい、詳しく説明している時間は無いの。ただこの山の神を殺した相手がこの山に来る事はもう無いわ、それだけは安心して」

神獣が死んだことにより、霊脈が機能を失い召喚術を失敗させた。だがそれはほんの少しの時間稼ぎにしかない、他の霊脈で同じ事をガープがやろうとするのは間違いないのだから

「私達はすぐ東京に戻るわ。協力してくれてありがとう、詳しく説明出来なくてごめんなさい」

「何か、この国で起きようとしているのか？」

「起きようとしているのではなく、もう起きていますのですわ」

「緋鞠さん、色々ありがとう。私達はやることがあるから、また縁があれば会いましょう」

くえすの魔法陣でセーフハウスに飛びながら、緋鞠さんに別れの言葉を告げ、私達はその日の内に東京へと引き返していくのだった……

1人残された緋鞠は美神達の姿が消えてすぐ、セーフハウスへと走ったが美神達の姿は無く、セーフハウスの机の上に置かれていた手作りの竹竿と

「ケイ君にさよならを言えなくてごめんと伝えてください、横島。追伸 これはケイ君へのプレゼントです」

残された手紙と釣り竿を手に取り重い足取りでセーフハウスを出た緋鞠は蒼く澄んでいる空を見上げ

「誰か私に何が起きているのか教えてくれ……」

何をすればいいのか、どうすればいいのか？それが今の緋鞠には判らなかった。山で暮らし、山を荒らす人間と戦い、山神へと祈りを捧げて生きていた緋鞠には今何が起きているの知る由も無く、自分が何をすればいいのか判らず深い溜息と共に山の中へと消えていくのだった……

ガープが何かをしていたと言う山の搜索に向かった蛍につけていた通信兵鬼が先に戻ってきて、兵鬼が持っていた写真を見て

「ついに動き出したか……」

ガープが聖遺物を集めていたのは英霊を召喚する為だと判っていた。だが英霊は元来人類の危機にのみ召喚される星の抑止力であり、そう簡単に召喚出来る者ではない。横島君のそばにいる牛若丸と信長が異質なのだ

「この規模の魔法陣とあの山の霊脈……呼び出そうとしていたのは神霊か？」

なににせよ、これは早く最高指導者に報告しなければならぬ。私は写真を手に、人間界を後にし最高指導者の下へと跳ぶのだった

「ガープは既に英霊召喚を可能としていたのですか……」

「こりゃあ不味いつて物じゃないで」

アポイントメントも無いが、緊急事態だと告げるとすぐに会議室に来てくれた最高指導者に写真を見せながら

「英霊の座には干渉出来ないのですか？」

最高指導者としての力で英霊の座に干渉出来ないのか？と尋ねる。

だが2人の返事は望んだものではなく

「英霊の座は私達とは概念が違いますからね」

「元々星の抑止力やし、魂の牢獄と似た性質やけど、似て比なる物だから干渉は出来るけど、ナイチンゲールみたいにくっこの言う事を聞いてくれない相手が出てくるかも知れへんし」

ナイチンゲール？それは知らないが、どうも最高指導者も英霊召喚を試みたのだろう。結果はどうも失敗らしいが……むしろ私が望んでいたのは2人が干渉して英霊召喚を阻止の方なのだが……

「ただ英霊召喚を可能としても、この魔法陣では制御は出来ないでしょう」

「そやな」

「どういうことですか？」

私も写真で見ただけだが、これは魔法陣としては十分に成立している、十分な魔力さえあれば召喚が可能なのでは？と尋ねると最高指導者達は

「それだけでは足りないのですよ、確かに呼び寄せることは出来るかもしれないですが」

「呼び寄せても制御出来るかは別問題や、仮にも英霊と呼ばれ人類史にその名を刻まれた英傑がそう簡単に操れると思うか？」

2人の問いかけにあつと呟く、確かに召喚は出来るかもしれない。だがその先は？呼び出せても従うとどうして思い込んでいた

「恐らく神代琉璃も気付くでしょう、彼女は神卸の巫女としては知識も技術も非常に高い」

「呼び出せると制御できるは別物やと証言してくれると思うで」

その言葉に思わず安堵の溜息を吐く、英霊の戦闘力ばかりに気を取られていて大事な事に気付いていなかった。英霊にも意思がある、おそれと操れる訳が無いのだ

「案外召喚しても、反逆されてるかもしれないですよ」

「そやなー、ワイもそんな気がするわ」

「そんなに樂觀視して大丈夫なんですか？」

思わずそう尋ねると最高指導者の2人は真剣な表情をして



「確かに後にガープが支配する英霊が現れることでしょう。失敗してもそのままにするなんて愚かな真似はしないでしようからね」

「ただそうなれば、星も動くし、宇宙意思も動くって事や」

「抑止力が動くと言う事？」

その通りと笑う最高指導者。星の抑止力と宇宙意思をそう簡単に欺くことは出来ない。よく知っているはずだと言われれば、確かにその通りだ

「こつちも対策は練ります。英霊の座に呼びかけてみることも考えております」

「だから英霊に関してはこつちに任せ」

その言葉によりしくお願いしますと返事を返し、会議室を後にしようとする肩をすごい力で掴まれた

「そうそう、アシユタロス。いい加減にトトカルチョが動かないと面白くないんですよ」

「だからいい加減に蛍を少し刺激してくれへんかなー？ 具体的には横つちとのデートとか？」

真面目な話をしていると思っていたのに……ッ!!とは言え、私の肩を掴んでいるその力と目力が凄くて、何とかしますと言って人間界へ戻り

「と言う訳で、蓮華。何かアイデアは無いかな？」

「なんで姉さんと横島の恋愛を賭けにしているんだよ……」

崩れ落ちる蓮華に蛍に聞いてくれと言うと、姉さん何考えているんだ。私には姉さんが判らないと嘆いている蓮華に私も判らないと眩きながら、横島君と蛍の恋愛が進むようにと蓮華と話し合うのだった

……

山の搜索を頼んでいた美神さん達が血相を変えて、会長室に飛び込んで来たので整理していた書類を机の中にしまい

「6人分のお茶を用意してくれる？」

秘書にお茶を用意してくれるように電話で頼み。搜索内容の報告に耳を傾ける前に

「横島君？抱きかかえてるの何？」

頭の上にタマモ、肩の上にチビはいつも通りなんだけど、何故か小さな茶色い何かを抱えている横島君にそう尋ねる

「うり坊のうりぼーです。なんと、増えて、大きくなって小さくなる妖怪です！あ、保護妖怪申請いいですか？」

「ぶぎゅ♪」

前足をピコピコ振るうりぼーを見ながら、後でねと引きつった声で返事を返し

「美神さんって事務所を幽霊屋敷とかにするつもりですか？」

「するつもりはないのよ？ただ横島君がね……」

ちよこちよこ動き回るうりぼーを抱きかかえて大人しくしてろよー？と言う横島君を見て、美神さんも蛍ちゃんも大変ねと思うのだった

「魔法陣……ですか、確かにこのサイズだと神を召喚出来るでしょうね」

ポラロイドカメラの写真を見て、そのサイズと術式を見て確かに神を召喚する為の魔法陣だけど

「そんなに心配することは無いですよ。今の段階では」

えつと驚いた表情をする美神さん達に魔法陣の写真を机の上に並べて説明する

「神卸の魔法陣って言うのは非常に膨大な物になるんですけど。緻密かつ、正確性が必要になります。こことここ、線がぶれてますし、術式の文字が途切れ途切れになってます。これから仮に召喚に成功したとしても制御出来ませんよ」

勝手に制御下を離れ好き勝手するだろう。無論敵になる可能性もあるが、召喚された段階でガープに反逆する可能性が高い

「えつとでもノツブと牛若丸の事はどうなるんですか？」

「信長はノスフェラトウに関する抑止力、牛若丸は多分現世に残っていたのを操っただけで、直接召喚はしてないと思うわ」

おキヌさんの質問にそう答えながら魔法陣を見つめる。今の段階では危険性は低い、いずれどうなるかは判らない

「ではもし悪神と呼ばれる者が召喚されたらどうするのですか？」

「……自分で言うのもなんだが、悪神や邪龍は多いぞ？」

くえすとシズクの質問にうーんつと唸りながら、その可能性は高いけど前置きしてから

「でもそういう存在はガープ達よりも上位の存在だわ。そんな存在が分不相応に呼び出したとすればどうなると思います？」

「怒り狂う？」

「それで済めばいいですけどね」

確実にその怒りの方向はガープに向くだろう。下手をしたらそれで向こうの陣営は壊滅的な打撃を受けて自滅するだろう

「えーとつまりガープは馬鹿？」

【お前、時々とんでもないことを考えるな】

横島君の質問と心眼の突っ込みに苦笑しながらも頷き

「魔術の専門家でも召喚術は別物だからね。今頃もしかすると失敗して大変なことになってるかもね」

楽観的観測だが、そうなっていてくれれば、ガープの動きが鈍くなり。その間に反撃の準備を整えることが出来ると思いつながら

「とりあえず今の段階ではそう危惧することもないですが、とりあえず三蔵法師様に連絡を取って神族に伝えて貰いますね。今回はお疲れ様でした」

ゆっくり休んでくださいと声をかけ、机の中から保護妖怪申請書を取り出し横島君に差し出す

「はい、じゃあこれ。ちゃんとサインして提出してね」

「はい！ありがとうございます!!帰ったらうりぼーの家も用意しないとなー」

「ぴぎゅん」

横島君の腕の中で嬉しそうに鳴くうりぼーを見て思わず笑いながら

「あ、そうそう。搜索で疲れていると思うけど、横島君。今週の日曜日憑依に対しての防衛術を教えるから、時間を空けておいて」

「えっ？あ。はい判りました」

手帳に日曜日に入事と書いている横島君を見ていると美神さんが「良いの？休みなのに」

「約束は約束ですし、やっと時間が取れましたからね」

いつまでも横島君の憑依に対する防御が低いままだと大変なことになるかもしれないので、その前に対策を授けておきたいんですよ。何か起きてからじゃ遅いから

「ごめんね。横島君の事お願いね」

「……琉璃なら信用出来るか、横島のことを頼む」

美神さんとシズクの言葉に任せておいてくださいと笑いながら、受け取った捜査記録を机の中にしまい

「では後の事は任せてください。本当にお疲れ様でした、ゆっくり休んでください」

後はこつちと神族で引き受けますと美神さん達に声をかけ、出て行く美神さん達の姿を見送り

「とりあえず、聖奈さんからね」

電話を手にし、魔界正規軍から横島君の護衛に来ている。聖奈さん事ブリュンヒルデさんに連絡を取るのだった……

そして一方魔界では……とんでもない事が起きていた

「ぐあああああああッ!?!」

「ふぐっ!?!お前! 召喚したら制御出来るとか言ってたか!?!」

「つ、強い……これが別の次元に隠居した神の力か!」

【■■■■■■■■■■ツ!!】

魔法陣から現れた巨大な悪霊にガープとアスモデウスそしてアスラはフルぼつこにされていた。如何にソロモンの魔神と言えど、異なる時空に隠居していた神を強引に呼び出し、その怒りを買えば対処する力を持たなかったのだ

「ぐっ! 神霊を呼び出すには情報が……足り……げぶっうっ!?!」

「ポンコツか!?!ぐはっ!?!ぐふうう……」

「ぐばあっ……アスモデウスを鈍器……にするだと……」

アッパーを喰らい動かなくなるガープと、巨大な掌で押しつぶされ

たアスモデウスをアスラに振り下ろし、アスラが意識を失った所でその巨大な悪霊は膨大な神通力を撒き散らしながら、その巨体を小さくして行き

「全く、無理やり呼び出して何を考えているのかしら……まあ良いわ、せつかく現界したんだから少し外を見てみようかな。私の世界もないし……今なら制約も働かないわよね！」

うん、そうしましょうと笑った何者かはフードつきのマントで顔を隠し、魔界から姿を消すのだった……

「なにこれ!?何があったの!?!」

神界と魔界でガープに英霊召喚の気配があると聞いて警戒態勢に入ったことを聞き、それを伝えに来たセーレが気絶しているアスモデウス達を見て絶叫するのだった……そしてその日から3人の治療および、壊滅的打撃を受けた研究施設の復旧などでアスモデウス陣営の動きが止まったのは言うまでもない

別件リポート 娘と父と妹の認識の違いへ続く

## 別件リポート

別件リポート 娘と父と妹の認識の違い

最高指導者との話し合いの中で何故かトトカルチョを少しは動かせという話になり、私は蓮華と話し合いをしていた

「あたしは姉さんってかなり有利な立ち位置にいると思うんだ」

「それは私も同じ意見だ」

他人への承認願望に飢えていた横島君にとって一番最初に自分の価値を認めてくれた蛍の存在はとても大きいはずだ。それに霊能者と言う進路を示し師匠としてもがんばっているし、横島君の家には蛍の私物もあつて、布団も用意され同棲している状況に近い。そう考えれば普通に考えて蛍は他のトトカルチョの参加者よりも遥かに有利な場所にいるはずなのだが……

「なんで進展が無いの？」

「知らん」

よく考えてみるとこれはおかしくないだろうか？むしろ何でここまで来ているのに付き合っていないのか？と思わずにはいられない

「1回姉さんに話を聞いてみようか」

「そうだな。そうしよう」

山の搜索をした後なので今日は除霊も休みなので戻っている筈。

そう思い蛍の部屋に蛍の姿は無く、横島君の家に出掛けたのだろうか？と思っているとあげはが土偶羅魔具羅と手を繋いで歩いてくる

「蛍ちゃんなら、ガレージでなにかしてたでちゅよ？」

「ええ。優太郎様、蓮華様。私はあげは様と買い物に行くので失礼します」

「おやつ買ってくれるでちゅか？」

「200円までですよ？」

わーいっと喜ぶあげはと歩いていく人間に化けた土偶羅魔具羅はどこから見てもおじいちゃんと言う感じで、少しの間蓮華と沈黙した後。2人に言われたとおりガレージに向かうと

「ふー……フレームはこんな感じかなあ？」

「なにやってるの!？」

ツナギを着て、溶接用のマスクをして金属の溶接をしている蛍の姿を見て、思わず私は蓮華と一緒にそう叫ぶのだった

「いや、横島が仮GS免許取ったし、バイクの免許を取れそうだから手作りバイクをプレゼントしようと思って」

蛍の嬉しそうな笑顔に私と蓮華は揃って絶句した後

「ちよつとこつち来なさい!!」

「ええ!?お父さん!?蓮華!?何!何なの!？」

私と蓮華に襟を掴まれ引きずられている蛍が混乱している中。私と蓮華は理解した。蛍と横島君が彼氏、彼女の関係にならないのは蛍の思考回路が理由だとどこの世界に意中の相手に手作りバイクを贈る少女がいると思いつつ、蛍を会議室へと引きずっていくのだった

横島の為にバイクを作っていると、お父さんと蓮華に無理やり会議室に連れてこられた。私は何をしたって言うのよ……せめて今日中にフレームだけでも仕上げたかったのにと呟いていると

「色々見ていて思ったんだが、このままだと横島君が別の女性と付き合いそうなので」

お父さんはそう呟きながらホワイトボードに赤い文字で「緊急家族会議」と書き

「蛍の駄目な所と今後やるべき行動を話し合っというと思う。なお発案者は私ではなく蓮華だ」

えつと蓮華を見ると蓮華は沈鬱そうな表情で頷きながら

「姉さん。1つ聞くけど、自分が出遅れてるって思ったこと無い?」

「そんなこと……」

そんなこと無いと即座に言おうと思ったが、くえすやシズクのことを思い出し……

「あるかもしれない」

「でしようね」

声を揃えてでしようねと言うお父さんと蓮華に軽い殺意を覚えな

がら

「でも割と私って横島に好かれていると思うんだけどね」

うぬぼれじゃなくて、私は結構横島に好かれていると思うと言うとお父さんはそれは間違いないと思うけどと言いなながら

「横島君の好感度は高いと思うよ。それは間違いないと言える、でも逆にそれが私が嫌われる訳が無いって言う慢心に繋がっているんじゃないかな？」

慢心に繋がっている？その言葉の意味が判らず首を傾げると蓮華が多分って前置きしてから

「美神が横島に興味を示してないし、逆行する前のことの印象が強すぎるんじゃない？美神がいなければ大丈夫って安心しきっているのかも」

そ、そう言われるとそんな気がする。美神さんが優しくして、良い師匠として私と横島を導いてくれている。それに私を応援してくれているような事も言ってくれるから、美神さんは横島を好きじゃないって思ったら安心したのは確かに事実だ

「確かに蛍に対しての横島君の信頼度は高いし、好感度も高い。でもそれに安心しきるのは明らかに愚策だね。ちなみにここ最近何か進展的なことは無かったかな？」

お父さんにそう尋ねられて考えてみるが……ぱつと思いつかぶのは、慰安旅行での事故キスくらいでしかもそれは横島が知らないので意識しているのは私だけ……

「……何も無い……かな？」

「駄目じゃないか……」

あきれた視線を向けてくるお父さんと蓮華。最初はイラつとしたけど、私を心配し、真面目に私の恋路を応援してくれているのが判った

「姉さんって多分恋愛奥手なんだと思う」

「そうかな……」

「それかあれだな。逆行する前のことが忘れられないか……だと思っけど、どつちにせよこのままだと状況は良くない」



今まで意識してなかったけど、お父さんと蓮華にそう言われて急に不安に思ってしまった

「とりあえず、蛍が普段横島君の家で何をしているのとか、横島君が好きな物とかを考えてそれで作戦を考えようか」

「そうだね。とりあえず、2人でデートするくらいの予定は組まない」と姉さんがどんだん出遅れちゃうよ」

私のことを真剣に考えてくれている2人にありがとうと呟き、今後どうするかと言う話し合いを始めるのだった……

姉さんの話を聞いて、ますますどうして付き合っていないの？という疑問は生まれたが、それ以上に気付いたことがある

「やっぱりシズクとノツブが問題だと思うね」

「うん。それは私も同意見だ」

横島の家に住候している竜神と英霊。その2人の存在がやはり今一番危険視するべき相手だと判断する、特にシズク。ロリおかんと呼ばれ、基本的に横島の家の家事をすべて引き受け、泊りがけの除霊では当然のように横島と同じ部屋

「いや、シズク危険すぎるでしょ？なんでそんなに警戒してないの？」

「いや、横島はロリコンじゃないって言うし……」

姉さんの言葉に深く深く溜息を吐きながら

「でもさ、逆行前のことを考えると姿は同年齢くらいだけど、私達0歳だったじゃん」

……忘れてたあつと叫ぶ姉さんに溜息だけじゃなくて頭痛まで覚え始めた。ルシオラじゃなくて、実は横島蛍としての認識が強いんじゃないかな？と思いつながら

「とりあえずそれはおいといて、ノツブも怖いと思うね。戦国時代の価値観の人間だから何をするか判らない」

「普通に一夫多妻の時代だからねえ……それを言うと言魂の中で療養中の牛若丸も案外やばいかも」

だよ、戦国時代の英霊1人に平安時代の英霊1人。間違いなく、正室・側室とかの一夫多妻を普通に受け入れる事の出来る相手だ。ま

だそういう感情は無いにしろ、警戒するべき相手なのは間違いない。くえすと言う魔法使いも厄介だと思うが、それよりもまずは横島が日常的に会う相手を何とかするべきだと思う

「後はマスコット軍団か」

「あーそれが普通に厄介だよな」

横島が可愛がっているマスコット軍団。出掛けるにしろ間違いないく付いてくるのは目に見えている。しかし問題は姉さんはマスコット軍団には好かれていないということだ

「でもチビとかは基本的に横島にしか懐いてないわよ?」

懐かれていないのは私だけじゃないという姉さんだけど、父さんが調べた情報の中には

「でもシズクと冥子だっけ?それには懐いているんでしょ?」

うぐつと呻く姉さん。確かに基本的には横島にしか懐いていないかもしれないが、別に懐いている相手がいるのだから姉さんも頑張れば懐かせることが出来るのではないだろうか?

「頑張ってるんだけどね……全然懐いてくれないのよ」

横島も気難しいって言ってるし、むしろ懐くのがおかしくて、懐いていない今の状態が普通みたいなのよと呟く姉さん。

(案外人懐っこい気もするけどな)

横島とチビを見ていると人懐っこい気もするけど、それは見た目だけなのだろうか?あんまり横島と話をしたことが無いので、そこら辺が全然わからない

「まあほぼ同棲状態でも進展が無いのはお互いにお互いの警戒態勢にあり、そしてなおかつマスコット軍団の警備能力の高さか……」

「普通は同棲まで進めば決まったような物だけどね」

シズクと姉さんがお互いを警戒し、お互いの動きを封じる。仮に出し抜けたとしてもマスコット軍団がいるので色っぽい雰囲気になるのは無理……

「案外横島って難攻不落なんじゃないの?」

話を聞いて、状況を聞いて思ったのだが、見た目以上に横島って彼氏にするには難易度が高い相手なんじゃない?と呟くと姉さんと父

さんは腕を組んで

「そうかもしれない」

逆行前は女好きだったが、今の横島はだいぶ落ち着いている。これは多分姉さんとマスコット軍団の力が大きいだろう、だが逆に落ち着いてきていることで攻略する難度が上がっている気がする

「とりあえずバイクは後回しにしたほうがいいと思う」

「え？でも手作りプレゼントは喜ばれるんでしょ？」

それは確かにそうだと思うけど、バイクをプレゼントされて嬉し  
いって言えるだろうか？

「無難にまずはマフラーとかはどう？」

「マフラー……その発想は無かったわ」

……なんか姉さんと横島が上手く行かないのって姉さんの思考回路が残念なのが原因な気がしてきた。普通マフラーとかセーターをプレゼントするのが普通だと言うのに

(が、頑張ろう。姉さんと横島が上手く行くように)

姉さんと横島が悲恋になってしまったのはあたしのせいだ。だから今度こそ、上手く行くように頑張って手伝いをしようと再度心に誓うのだった……

長時間話し合って判ったことだが、蛍と横島君が上手く行かないのは横島君が鈍感である以上に蛍が残念だったのが原因だと判明した  
「とりあえずバイクは今度私も手伝うから後回しにして、手作りのマフラーとか手袋といったプレゼントがやはり有効的だと思う」

「私編み物とか苦手何だけど」

そこは練習してくれというしかない、間違っても毛糸を自動的に編む機械とかを作らないでくれるといいのだが

「ただ定期的にもうマフラーとかの時期じゃないし……クッキーとかも良いかも知れないね」

チビ達の餌付けにもなるしと提案する蓮華。横島君を落とすにはまず、その周りから、特にマスコットに懐かれる事が急務なのは間違いないだろうが、それよりも今優先するべき案件が一つ

「とりあえず蛭」

「何？」

「横島君をデートに誘おうか？」

「■▲●?!?!」

顔を真つ赤にして理解できない言語を喋る蛭に蓮華と揃って溜息を吐く。この調子だとますます出遅れて行くなと悟り、やはりこのままでは駄目だ。少し後押ししないと

「このままだと蛭はどんどん出遅れるだろう。特に神宮寺、彼女は危険だ」

行け行けでぐいぐい押していく性格の神宮寺くえすは危険だ。しかも横島君自身も色々教えてくれた優しい人と慕っている面もあり、そういう面では蛭にかなり近いポジションに陣取っている

「マスコットに懐かれるというのも大事だが、まずはやはり横島君だ。買い物でも遊園地でもなんでも構わない、横島君と2人だけで出掛けて見よう」

しかも済し崩しで出掛けるのではなく、横島君から誘われるのでもなく自分から誘ってみようと言うと

「でも断られるかもしれない」

「そんな事言つてたらどこまでも出遅れるだけだよ!!大丈夫だよ、横島は姉さんの事が好きだから、絶対うんつて言うよ」

そうかな?と不安そうな蛭と大丈夫だよと励ます蓮華を見ながら、私よりも蓮華のほうが蛭へのアドバイスに適しているなど思いながら、夕方まで蓮華と共に蛭にアドバイスをし、自分の部屋に戻ると夕イミングよく神界から通信が入る

「はい、アシユタロスですが？」

『すまんの、ワシじや』

「どうしたんですか?斉天大聖?それともハヌマン?」

よく考えたらあまり話をする機会が無く、なんと呼べば?と尋ねると好きな方でいいと言うのでハヌマンと呼ぶ事にする

「それで何のようですか?緊急事態でも?」

私は一応アスモデウスと同じく過激派となっている。そんな私に

通信してくるなんて何かの用事ですか？と尋ねると

『お師匠様がな。お前と話をしたいといっておる。近いうちに白竜寺に赴いてはくれぬか？』

「それはまたどうして？」

面識は無いはずだが？と思いつながらその理由を尋ねるとハヌマンはすまんと繰り返して頭を下げながら

『あの人は言い出したたら人の話を聞かん。それでいて当事者にしか話をしないから困るんじや、だから話の内容はわからぬが頼めぬか？』  
「まあ……いいでしょう。一度伊達君とかの様子を見ておきたかったですし、時間を見てこつちから伺うから、2〜3日時間をくださいと伝えてください」

恩に着ると言つて通信を切るハヌマン。真つ黒いモニターを見て「凄まじく嫌な予感がする」

引き受けたは良いが、とんでもなく嫌な予感がすると眩きながらも、向こうから突撃されてこつちの正体がばれても困るので近いうちに訪ねる事を決め、少し一区切りしたこともあり

「もう少しデータを集めてみるか」

複製したゴーストドライバーを解析する為に、ゴーストドライバーを封印したトランクケースを片手に、地下研究室へと足を向けるのだった……

レポート10 マスコットファイト開幕 その1へ続く

## リポート10 マスコットファイト開幕 その1

リポート10 マスコットファイト開幕 その1

美神さんにだいぶ前に頼まれていたんだけど、中々時間が取れずやっとな横島君に憑依に対する防御を上げる術を教える事が出来た。とは言え、これも神代家の秘術になるので美神さん達の同席も断り。近くの川原に何十にも結界を張った上で横島君に指導をしていた「良い、今ぼんやりと何かが自分の身体を包んでいるのは理解してる？」

「はい、なんか冷たいんだが、暖かいんだかよく判らないですけど」  
よしよし、ちゃんと探知してくれてるみたいで良かった。横島君が今座禅しているのは特殊な魔法陣の中だ。これは神卸しの儀式の修行の1つ。擬似靈魂を作り出し、それを憑依させ、それを弾き出す為の修行だ

「それは擬似靈魂よ。今からそれが横島君に憑依するわ、それを受け入れ自我を保つのはよ。イメージとしては自分の中に区切りのある箱をイメージするといいわ、半分は横島君。もう半分は靈魂。靈魂が自分のエリアに入ってくるのを防ぐの、自分の中に他の魂があっても、自分は自分だと認識することが大事なのよ」

とは言え、そこまで指導する必要は無いかと心の中で呟く。別に指導する時間が惜しいとかそういう訳ではない、横島君は既に知っているのだ。知っていてもそれを実行出来ないだけ

「あーなんか入ってくる感じがしますね。それとなんか甘えてくる気がします、猫ですか？」

「……いや、知らないけど、擬似靈魂は動物靈が多いわね」

擬似靈魂は周囲の動物靈を一時的に使役する。だから動物靈だとは思うけど、その種類までは判らない。と言うかそれを自覚できる辺り既に憑依対する防御の術を無意識に使っているのだ

(まあ当然よね)

規格外の使い魔「心眼」もまた横島君に憑依していると言える。それと会話している段階で、横島君は無意識に憑依に対して防御する術を持っているのだ

「うん、やっぱりね。横島君は憑依に対しての防御力を持つてるわ、でもだからと言って簡単に幽霊に身体を貸したら駄目よ」

美神さん達が危惧している霊的防御の低下。これも心配ないだろう、多分だけど横島君は牛若丸や信長だから身体を乗っ取られる事は無いと無意識に判断して防御を下げているのだろう

「理想としては身体のコントロールは横島君。牛若丸や、信長に憑依される時は心眼と一緒にいる時みたいに関心の中で会話する感じにすると思おうわよ」

憑依されて相手に勝つても、それは憑依した相手の実力だ。もし牛若丸や信長が成仏した時にその力を使えないのでは意味が無い、自分でその力を使いこなす努力をすると良いわと言いながら魔法陣を足で消す。

「あ……居なくなつた」

「まあ教えるほどの事も無かつたしね。とりあえず鍛えるには心眼を身に着けて、座禅するときには干渉して貰うと良いと思うわよ」

今回は心眼にも見せたくなかつたので、残っているようにお願いしたので家に帰ったら相談してみると良いわと声をかける

「判りました、心眼に相談してみます」

「うんうん、やる気のある事は良い事よ。所でお姉さんは1つ聞きたいのよ」

何をですか？と首を傾げる横島君を見ながら、その背後を指差して

「あれなに？」

「さあ？」

私達の背後ではチビが20匹くらいに増えたうりぼーに対して

「みーむー」

「「「ぶぎゅッ!!!」」」

腕を振り、鳴き声を上げるとその指示に従いうりぼーがざっと散

り、綺麗に整列し

「ぴぎ」

順番に鳴きながら座っていく。一糸乱れぬその動きに思わず拍手が出る

「なんかTVで見て覚えたんじゃないですかね？チビは賢いから」

賢いって言葉で片付けて良いレベルじゃないと思うけどねと心の中で呟きながら

「横島君。お姉さんからお願いが1つあるんだけど良い？」

「俺に出来る事なら良いですけど？」

横島君の言葉にありがとうと返事を返し、ポシエットから写真と手紙を取り出して

「明日私の妹の舞ちゃんが東京駅に来るのよ、私が行けたら良いんだけどちよつとどうしても用事があつて行けないの。私の代わりに迎えに行ってくれない？美神さんには話を通してあるから、そのまま東京を案内しながら、夕方にGS協会に来てくれればいいから」

判りましたと返事をしてくれた横島君に写真と手紙を手渡しよろしくねともう一度お願いし、横島君と別れたところで電話を取り出して

「もしもしお梅さん？こつちも神代家の相談役の尻尾を捕らえたわ、そつちは？」

『こちら準備が出来ております』

「ありがとう。お梅さん、じゃあ……くだらないことを考えてくれた愚か者達に制裁を加えましょうか」

本当なら舞ちゃんは私が迎えに行く予定だったのだが、やっと掴んだ神代家の相談役の悪巧みに許容できない物があったのだ、神卸しこそ出来ないが霊能者として有能な舞ちゃんと横島君を攫う計画……実行する前に潰す為に明日せつかく取った休日は返上になった

「私をいつまでも小娘と甘く見たツケ……きつちり払って貰おうかしら」

自分の下に付くべき組織が私自身を狙っている。そんな笑えない状況をいつまでもそのままにしている趣味は無い、相談役の狸共が目



に物見せてやる……別の番号をプッシュしながら車に乗り込む

「もしも冥華さんですか？計画を実行します」

『判ったわくそろそろあの相談役も目障りだったのよねく安全なところでぎやーぎやーぎやー喚いてくここら辺で身の程を教えてあげましようか』

のほほんとした口調だが、その裏にある激しい怒りを伴った声にやっぱりこの人は怖いと思いつながら、冥華さんと合流するべく、六道の屋敷へと向かうのだった……そしてそれから数日後、数多の証拠を手にしたことにより私は前々から考えていた査問会を開く事を決定するのだった……

お姉ちゃんからの手紙に送付されていた地図を手に私は東京駅へと来たのだが

(ひ、人が凄い……！)

今まで田舎に居たからか、物凄い人の数に思わず気分が悪くなってくる。こんな様子でお姉ちゃんの所に辿りつけるのか心配になってきた

「東京は怖いところだから気をつけるんだ」

私の義姉となつてくれていた早苗お姉ちゃんが私を心配し、大丈夫だよとは言った物の、これは大丈夫じゃないかもしれないと不安になつてきた

(落ち着け舞。案ずる事は無いぞ)

落ち着くように声をかけてくるナナシに大丈夫だと小声で返事を返している

「お？おーい」

「え？」

私に向かつて手を振る紅いバンダナの私よりも少し年上の少年がいた、誰か居るのかな？と振り返るけど誰も居ない。人違い？と首を傾げているとその少年は私の目の前に来て

「えつと氷室舞ちゃんの良いのかな？琉璃さんから迎えに行くように言われて来たんだけど」

「お姉ちゃんに?」

お姉ちゃんが迎えに来てくれると書いていたので少しがっかりしている。目の前の少年は

「あ、俺は横島ね。横島忠夫、んでこつちがチビとうりぼーとタマモ」よく見ると横島君の頭の上には狐、肩の上にはグレムリン、その反対には小さな猪が乗っていて、お姉ちゃんがこの人を迎えに寄越したのは私と同じだからだと理解し

「氷室舞です。こつちはナナシです」

「うむ、ナナシじゃ。よろしく」

「喋ったあ!?!と言うか声渋いッ!?!」

私の肩の上に姿を見せたナナシが喋ったと驚く横島君に思わず笑ってしまうのだった

「へー舞ちゃんも妖使いなのかー、俺自分以外の妖使い初めて見た」

「そうなの?稀有な技能だけど、結構いると思うけど」

でも使い魔じゃなくて一緒にいてくれる家族みたいなんだよ、ナナシはと言うと横島君はうんうんと頷きながら

「判るわー、俺も使い魔とか言われるよりも家族みたいなものだしなあ」

鳴き声を上げながら手を振るグレムリンのチビやうりぼーと複数の妖怪を連れているのは初めて見たけど、強い信頼関係があるのがよく判る

「ほー見た目よりも強いぞ、このグレムリン」

「みーむう?」

ナナシがチビを観察しながら呟き、チビが何?と首を傾げるのを見てまた笑っていると

「あ、そうそう、これ琉璃さんからの手紙ね。内容は見てないから」

差し出された手紙を見る為に近くのベンチで腰掛ける、私が手紙を見ている間横島君はナナシに色々聞いていた

「妖精は喋れるのか」

「まあ一応な、ワシは舞の護衛じゃから、と言うか妖精は見たこと無いのか?」

「ないな、そう言えばやっぱり妖精は山の中とかにいるのか？」  
「隠れてくらしておるぞ?。」

なるほどなーと初めて見るらしい妖精のナナシと会話をしているのを聞きながら手紙を見る。内容は横島君にGS関係の場所を案内して貰い、GS協会に最後に来るようにとそれくらいにはお姉ちゃんの用事も終わっているとの話で、大事な話もあると書いてあった  
(大事な話ってなんだろう)

とは言えやつとお姉ちゃんに会えるのだから、そこまで気にする事も無い。お姉ちゃんに会えば、お姉ちゃんがきつと説明してくれるだろうから

「えっと小笠原ゴーストスイーパーオフィス、唐巢神父の教会、美神令子除霊事務所って案内して貰ってからGS協会へおいでって」

「あ。そうなの?じゃあ、ここからだどエミさんの所が近いから行くのか?居るかは判らんけど」

そう笑う横島君にお願いしますと頭を下げ、2人で小笠原ゴーストスイーパーオフィスへと足を向けるのだった……

「……あの野郎、また別の女の子と……くそがあ」

なお横島は気付かなかったが、近くに同級生がおり舞と並んで歩いている所を見られ、翌日学校に向かった際その事を問い詰められる事を今の横島は知らないのだった……

うーん、琉璃さんの妹と聞いていたから、もっとこう活発な子だと思っていたんだけど、大人しい子だったので正直少し予想外だった。しかも俺としては冥子ちゃんとは別に妖怪をつれている相手ですれにも少し驚いたが

「みむう?。」

「うん、ごめんね?私には何を言ってるか判らないよ」

「み?。」

あの気難しいチビが割りと友好的なのに驚いた。チビが初見で懐いたとか、友好的だったのは冥子ちゃんか、シズクくらいだから……俺は頭の上のタマモに声を掛ける。今日は心眼は家においてきた、俺

の霊への抵抗力を上げる訓練を頑張ってくれたのだが、少し疲れたと言うので家で休ませる事にしたのだ

「チビもだいたい丸くなったのかな?」

「クウー!」

鋭い鳴き声に違うと思うわよと言われてしていると理解し、冥子ちゃんとかシズクに似た要素があるのかな?と思いつつ

「肩の上で大きくなるの禁止……重いから」

「ぴぎい?」

ちよつとずつ大きくなっているうりぼーに大きくなるの禁止と声を掛け、うりぼーがまた小さくなっていく

「その猪、身体のサイズ自由自在なのだ」

「ああ。少し前に居たモグラちゃんも同じだったけどな。ナナシは無理なのか?」

ナナシも大きくなれるんじゃないのか?と尋ねるとそんな訳あるかと怒られた。妖怪って身体のサイズ自由自在じゃないのか?と思っているとエミさんのオフィスがもう目の前であって、駐車場で作業しているタイガーと目が合う

「横島さん。どうしたんですジャ?」

「おう、タイガー。エミさんは?」

車に荷物を積み込んでいたタイガーが手を振るので振り返しながらエミさんは?と尋ねると背後から声を掛けられる

「どうしたワケ?横島。令子の所をやめてこっちに移籍する気になったワケ?」

エミさんの言葉に違いますよと笑いながら言って、俺の後ろに居る舞ちゃんと立ち位置が変わる

「お、女子!」

ささつと車の陰に隠れるタイガーに苦笑しながら「琉璃さんの妹さんだそうで。案内しているんです」

「へー?琉璃の妹ねえ?」

「ど、どうも。氷室舞です」

「ナナシじゃ」

横島と同じ妖怪をつれてるのねと呟いたエミさんはしばらく舞  
ちゃんを見つめていて

「ま、もしGSになるんだったら家のオフィスも考えておくと良いワ  
ケ。多分琉璃もそのつもりで見て回れって言ってると思うし」

「そうなの？」と2人で首を傾げるとエミさんはそうじゃなきゃ、見て  
回れなんて言わないワケと笑いながら

「まあこれから除霊だからあんまり話している時間は無いけど、色々  
見て所属したい事務所を決めると良いワケ。ただ冥子の所は止めと  
いた方が良いワケ」

「大丈夫です。冥子ちゃんの所は見学に入ってます」

「だろうねと笑うエミさんと舞ちゃんから隠れているタイガーに別  
れを告げて、今度は唐巢神父の教会へ向かう

「あの人が知ってる？」

「は、はい、知ってます。小笠原GSですね、呪いや魔術に長けている  
と聞いてます」

「じゃあもしかすると舞ちゃんは美神さんの事も知ってるかもなあ  
と思いつながら、曲がり角で立ち止まる

「あれが、唐巢神父の教会」

「あの、近づかないんですか？」

「近づかないのか？」と尋ねてくる舞ちゃんに俺は思わず苦笑しなが  
ら

「シルフィーちゃんって言う吸血鬼がいるんだけど、今は落ち着いて  
るけど、たまに襲ってくるから怖くてな」

「よし、舞。引き返せ、ここは見学する価値がない」

唐巢神父は良い人なんだけどなあシルフィーちゃんは少し問題  
ありだ。ナナシの言葉に頷き引き返そうとすると

「横島か、何をしている？」

「ブラドール伯爵、どうもこんにちわ」

黒い日傘にサングラス姿のブラドール伯爵に頭を下げる。ブラドール  
伯爵は舞ちゃんを見て

「若いGSを紹介しに来たのか？だが唐巢もピエトロもシルフェニア

もおらぬ。また出直して来い」

ではなとマントを翻し、教会の中に入っていくブラドール伯爵。その姿は確かに格好良いと言えるものだが、その背中に背負っている巨大なリュックがすべてを台無しにしていると思っただ。また隣の安いスーパーに買出しに行っていたのだろうか？

「えつとあの人は？」

「吸血鬼のブラドール伯爵。ちょっと怖いけど良い人だよ。魔術とか教えてくれるときがある、理解出来ないけど」

魔法なんて俺には全然理解出来ないの、教えがいの生徒で無くて申し訳ないと思うよなあと思いつながら

「じゃあ次は昼飯食べて、少し休憩してから移動しようか」

時間も一時を少し過ぎたところだし、どこかのコンビニでお昼を済ませて、少し休憩してから美神さんの事務所に行こうと提案し、俺は近くのコンビニに足を向けるのだった

「横島君とチビは仲良しだね？」

「ん？だいたい長い事一緒にいるからなあ」

焼肉弁当を食べ終え、チビとうりぼー用の果物とタマモにお魚のソーセージを与えていると舞ちゃんがサンドイッチを両手にもってそう呟く。仲良しと言われればそうだと思うけど、意識してなかったと思う

「みーむ」

「ぶぎ」

仲良くバナナを食べているチビとうりぼーを見ながら、みかんを剥き、チビ達の近くにおいてやりながら

「舞ちゃんとナナシも仲がいいと思うけど？」

そう言われるとそうですねと笑う舞ちゃん。言われると妙に気恥ずかしい物があるとお互いに苦笑しながら

「このまま舞ちゃんは東京に残るの？」

「お姉ちゃんと相談になると思います。GSなるなら東京の方がいいですけど、氷室さん達も好きです」

そっか、舞ちゃんも考える事が多くて大変だなとお互いの近況を話

し合い

「じゃあそろそろ行こうか、今度は美神さんの事務所だから、仕事から戻っていれば居ると思うけど、どうかなあ」

「はいー」

「若手NO. 1GSとやらか、どんなものか楽しみだな」

ふっふっふと笑うナナシが少し怖いなど思いながら、俺は舞ちゃんと一緒に美神さんの事務所へと向かって歩き出した

「あーまだ戻ってないか」

車がないのでまだ戻ってないと呟く、昼くらいには戻るって聞いてたけど、もしかして案外苦戦しているかもしれないなど呟く

「横島君はここで修行しているんだよね？」

「そうそう、俺と蛭が今美神さんの助手だよ」

しかし案外除霊雑誌にも俺とかの情報って載ってるんだな、今度買って見て見るかな、何かの参考になるかもしれないし

「じゃあ。GS協行こうか」

気が付くと結構話し込んでいて時間は3時を回っていた。案外話していると時間が経つのが早いなど苦笑しながら立ち上がる。やけに静かだなと思うと、俺と舞ちゃんが話している間暇だったのか、チビ達はベンチの上で丸くなって寝ていたので、チビとうりぼーはGジャンの胸ポケットに入れ、タマモを抱きかかえる

「お姉ちゃん居ると良いんだけど」

琉璃さんが居なかったら近くの本屋にでも案内するよと話しながら、俺達はGS協会へと向かうのだった。GS協会に着いたのは4時を過ぎていているかもしれないと話しながら受付の人に聞くと

「神代会長ですか？ちようど戻られていますよ」

良いタイミングだったみたいだなと思わず安堵の溜息を吐き

「じゃあ、舞ちゃん。俺はここまでだから」

「はい、ありがとうございます」

「助かったぞ、横島」

舞ちゃんとナナシの言葉にどういたしましてと笑い、チビ達を肩に乗せたままGS協会を出て

「んーもう夕暮れだし、このまま散歩行くかー」

良い頃合だし、このまま散歩に向かう事にしうりぼーを地面の上に降ろし、そのまま散歩に向かう事にするのだった……

横島君に舞ちゃんを預けたのは正解だったかもしれない。神代家の相談役達が計画を実行する前に潰し、当主としての処罰を与えてからGS協会に戻ったのだが、舞ちゃんがそれからすぐ尋ねて来たとき、今日はもう帰る事にしたのだが、夕食の時も今も楽しかったと笑っている姿に横島君を選んで正解だったと思った

「それで貴方がナナシね？」

小さな妖精にそう問いかける。手紙で何度も聞いていたけど、こうして見ると変異種の妖精なのだと一目で判る

「舞の護衛などをやらせて貰っておる。琉璃の話は良く聞いていた」

見た目こそ小さいが、その力強さは妖精とは思えなくてナナシが居れば舞ちゃんが安全だと直ぐわかった

「それでお姉ちゃん。大事な話って？」

「そうね、強制はしないけど、舞ちゃんがGSになりたいなら六道女学院を紹介出来るわよって話」

今日は月曜日だが、急用と言うことで1週間学校を休んできてくれた舞ちゃん。だいぶ東京での安全も確保出来たし、そろそろ呼び戻しても良いかもと思ったのだ。とは言え、それは私の気持ち。舞ちゃんが嫌がるのに強制するつもりは無い

「氷室さん達は？」

「それも含めて舞ちゃんが東京に残るなら話をするわ。もちろん強制じゃないわよ？舞ちゃんがどうしたいかで良いわ」

悩むそぶりを見せる舞ちゃんの頭を撫でながら

「今焦って決める事も無いわよ。1週間こっちにいるんだから、よく考えて自分がどうしたいかで決めれば良いと思うわ。それよりも長旅で疲れたでしょう、今日はもう休みましょう？」

「うん……あ。お姉ちゃん、一緒に寝ても良い？」



駄目かな？と尋ねてくる舞ちゃんに良いわよと返事を返し、客間から布団を自分の部屋に運ばないといけないわねと思い舞ちゃんに先にお風呂に入るように声を掛け

「さてと、さっさと片づけしましょう」

リビングは掃除してあったけど、正直私の部屋は書類などで足の踏み場も無い状態で舞ちゃんがお風呂から出る前に片付けようと思い、慌てて部屋の掃除を始めるのだった……

琉璃が姉としての尊厳を守る為に、大慌てで掃除している頃。六道の屋敷では

「ちよつとくこころ辺で面白い事でもくやってみようかしら」

神代の名前を使って暗躍していた相談役を一掃し上機嫌の冥華は机の上に並べた資料を見て楽しそうに笑っていた。それは現段階で六道女学院に所属する使い魔もしくは契約悪魔を持つ生徒と横島の写真付きの書類が並べられているのだった……

レポート10 マスコットファイト開幕 その2へ続く

## その2

レポート10 マスコットファイト開幕 その2

昨日は琉璃さんの頼みで学校を休んだので今日こそは普通に学校に来たのだが

「来やがったなーこの喪男の敵め!!」

「なんだあ!」

教室に入るなり襲ってきたクラスメイトに思わずそう叫ぶのだっ  
た

「みーむー!」

「しーん……」

なお俺を襲ってきたクラスメイトは、チビのかなり手加減した電気  
ショックで全員床に倒れ痙攣する事になった

「なんで俺いきなり襲われてるの?愛子?」

「みむう!」

助けてくれたチビの顎の下を撫でながら何でだ?と尋ねると愛子  
は若干面白くなさそうな顔をしてから

「なんか昨日横島君と見慣れない女の子と一緒に歩いているのを見  
たって言ってるね?」

なんだ見られてたのか、と言うかなんでそれで襲われるんだよと  
思っていると心眼が俺が口を開くよりも早く

【舞の事だな、GS協会の会長の妹で横島が案内を頼まれていただけ  
だ】

案内っ!?!と叫ぶクラスメイトにそうだけど?と振り返りながら言  
うと、なんだガセネタかとか言う声があちこちから響き、俺に向けら  
れていた敵意の視線が弱くなる。本当になんだよ、意味判らないな

「なんか朝から疲れたなー、タマモ」

「コーン」

今日は珍しく着いて来たタマモを抱きかかえ、朝から何でこんなに  
疲れているんだろう?と思いつつ喉を鳴らすタマモの背中を撫で

ていると

「しかしなんで横島さんが頼まれたんでしょうね？自分の部下に頼めば良いのに」

ピートがおかしいですねと首を傾げながら言う、それは俺も感じていたが何か事情があったんだろうと思う

「おはようございます、横島さん」

「う、うん。おはよう」

ブラドー伯爵が何かしてくれたおかげで大人しいけど、やっぱりそれでも怖いなあと思っていると鞆がぶるぶると震える

「そうそう、新しい妖怪を拾ったんだ。紹介するぜ」

鞆の口を開けて、床の上に置くとピート達が何してるんだろう？と言う顔をする。まあ普通はこの反応だよな

「みーむー」

机の上からチビの気合の入った声が響くと鞆の中から、うりぼーが綺麗に整列しながら鳴きながら出てくる

「「「びぐびぐびぐ」」」

「「「多いッ!?!」」」

この鞆の中にどんだけ居たんだよ！と叫ぶ声が響く中鞆から大量のうりぼーが姿を見せる

「みーむーみッー」

「「「びぎゅ!!」」」

一糸乱れぬ団体行動で整列し、先頭からびぐびぐ鳴いて座っていくうりぼー。何回も見たけど、やっぱすげえな、これ……

「みーむー」

「「「びぎゅーー」」」

整列の後チビの合図で集まったうりぼー達の天辺にスカートつきのうりぼーが登場して行き

「びぎゅう♪」

ぼふんつと言う音と共に巨大なうりぼーになる、それを見た愛子達は数回目を擦ってからうりぼーを見て

「「「でかつ!?!」」」

と声を揃えて叫ぶのであまりにおかしくて、俺は笑いながら

「大きいままだと邪魔だから小さくなる」

「ぴーぐー♪」

しゅるしゅると音を立てて小さくなったうりぼーを摘み上げて、机の上に乗せて

「なんと大きくなって、小さくなり、そして増えるうりぼーを拾った」

「二「拾うなッ！んなもん!!」」

クラスメイト全員から拾うなと言う突っ込みが響くが、俺は全然気にせず

「ほら、愛子撫でてみるよ？うりぼーは人懐っこいぞ？」

「え？本当？」

恐る恐る愛子がうりぼーに手を伸ばして撫でる。うりぼーは抵抗せず、ぴぎーと鳴いている

「あ、私が撫でてでも平気だ」

シルフィーちゃんが撫でてでも気持ちよさそうに目を細めるうりぼー。本人懐っこい性格をしてるよなと思っていると腕の中のタマモが制服を噛む

「はいはい、今日は甘えん坊だな」

「くうん」

構えと言っているのがその態度と尻尾の振り方で判り、顎の下を撫でているとチャイムがなり、教師が姿を見せ

「ふむ……」

机の上のチビとうりぼーを見て、頷いた後。俺を指差して

「妖怪を平然とつれてくるなあッ!!」

「だが断るッ!!」

と言うか勝手に付いて来るので俺にはどうしようもないんですよ  
と言うと、教師は疲れたように溜息を吐き

「どうして俺はこんな問題児ばかりの担任になってしまったんだ」

と呟いた。俺達は絶対問題児じゃないと思うんだけどなと思いがら、構え構えと鳴くタマモの膝の上に乗せてその背中に撫でるのが  
だった……なおチビとうりぼーは筆箱の横でちよこちよこと動き回

り、楽しそうに遊んでいるのだった……

久しぶりに舞ちゃんと話をして、一緒にご飯を食べて長い事会う事の出来てなかった姉妹と会えたと言うのは予想以上に嬉しいもので幸せな物だった

「舞ちゃんどうする？1人でいても詰まらないでしょ？どこか出掛ける？」

今日は午前中だけ冥華さんと合う用事がある。舞ちゃんは流石に連れて行けないのでどうする？と尋ねる

「わ、私は家でお姉ちゃんが帰ってくるの待ってる。1人で出歩いてもどこに行けばいいかわからないし、お姉ちゃんが帰って来てから一緒に出掛る」

「そう、じゃあTVとか好きに見てくれて良いし、隣の部屋の本も好きに見ていいから」

出来るだけ早く帰るわと舞ちゃんに声を掛け、私は迎えに来ていた六道の車に乗り込み六道の屋敷へと向かうのだった……

「琉璃ちゃん、待ってたわよ」

にこにここと声を掛けてくる冥華さん。本当に見た目は穏やかで優しい人なんだけど、昨日の慈悲も情けもない姿を思い出すと少し怖い「昨日はどうもありがとうございました。とても助かりました」

「いいのよ、あの狸を一掃出来ただけで六道にも十分なメリットがあったわ」

メリットか……それが無かったら絶対この人の協力を得る事なんて出来なかったわねと心の中で呟く。本当にこの人を敵に回さなくて良かったと心の底から思う

「それで今回私を呼んだ理由は何でしょうか？」

昨日のうちにやるべき事は全て終わっている筈だ。だから私を呼んだのには何か理由があるはず、色々考えては見た物の、その理由が判らず私に何の用でしょうか？と尋ねると冥華さんは嬉しそうに笑いな

「六道女学院にも妖使いとまでは言わないけど呪札使いや、使い

魔を持つてる生徒が居るでしょくその子の使い魔同士を六道女学院でく戦わせてみようと思うのくもちろん氷室舞ちゃんも参加して欲しいわく」

参加して欲しいと言っておきながら断れない雰囲気を作っておいて……私は思わず溜息を吐きながら

「それは舞ちゃんを六道に入れるという事ですか？」

「ううんくそれは違うわく正直ねく六道の生徒の使い魔に関する扱いが良くないのよく」

道具扱いで替えが聞くとか思っている生徒が多くて困ってるから、横島君や舞ちゃんみたいに使え魔と友好的な関係を築いている人間と自分たちの差って物を教えてあげようと思うのと笑う

「まあそれは確かに横島君と舞ちゃん意外に適任は居ないと思いますけど……」

とは言え舞ちゃんが了承してくれるか判らないし、それに人見知りも激しいから渋ると思うんだけど

「もしもく舞ちゃんが六道女学院に入るって言うならく顔見せくらいはやっておいたほうが良いと思うわよく」

それを言われると確かに顔見せはやっておいたほうがいいだろう。もしも六道女学院に編入しないとしても、他の人間との接触は必要かもしれない

「判りました。断られるかもしれないですけど、声は掛けてみます」

強制はしないと云っているから、舞ちゃん次第ですよ？と云うとそれでかまわないわくと笑った。冥華さんに思わず安堵の溜息を吐くと、冥華さんは良い事を教えてあげるわくと笑い

「今度ねく日本にもオカルトGメンの支部が出来らしいわく」

「はあ!?聞いてないですよ!?!」

その言葉に思わずそう叫ぶ。それでも私はGS協会の会長だ、そんな私が何も聞いていないのは明らかにおかしい

「私のネットワークくでの情報だからねえくもう少ししたら琉璃ちゃんにも情報が来ると思うわくそれでその支部の責任者だけく令子ちゃんのお母さんの弟子の西条って子が来るわく」

「オカルトGメンはGメンでもこつち側の人間が来るって事ですね？」

結構やつかみをかけてくるGメンの人間は正直嫌いだ、美神さんのお母さんの弟子ならばそれらとは全く関係の無い人物と見て良いだろう

「うん、本当なら来る筈だったヨーロッパの人間の汚職を摘発して、自分が成り代わった所を見るとね、多分こつちの味方よ」

「ありがとうございます。良い情報でした」

同じ日本の中で敵対するなんてそんな愚かな真似をしなくてすむならそれに越した事は無い。こうして先に聞いておいた事でこつちも色々と準備が出来る事に感謝の言葉を告げ、私は六道の屋敷を後にするのだった

夕方いつもの時間にシヨウトラちゃんの散歩をしていると、シヨウトラちゃんが急に慌しく尻尾を振りながらそわそわし始める

「あらく横島君が近くに居るの？」

「バウ」

残像が見えるくらい尻尾を振っているシヨウトラちゃんの頭を撫でていると、曲がり角から横島君が姿を見せたんだけど……

「あらく新しい妖怪を保護したの？」

シヨウトラちゃんと同じくらい大きい猪を連れてくる姿を見て、私は笑いながら横島君にそう問いかけたのだった

「冥子ちゃん。久しぶりっすね、除霊に行っていたんですか？」

「ん、お母様の言いつけで修行をしていたのよ」

横島君にうりぼりの事を紹介して貰ってから、せっかくだからと2人でのんびりと散歩しながら世間話をする。今までずっと1人でシヨウトラちゃんの散歩をしていたので、誰かと一緒と言うのはそれだけでとても楽しい物に思える。散歩コースの中に公園があるので、そちらに足を向けベンチに座り、あんまり遠くに言ったら駄目と声を掛けてからリードを外す。

「ワン！」

「ぴーぎゅー」

シヨウトラちゃんも新しい友達が出来た事が嬉しいのか、うりぼーちゃんと楽しそうに話をしている。嬉しそうなのは、横島君も一緒と言うのが大きいと思うけど、楽しそうなその姿を見ると私も楽しくなってくる

「みむうー」

「チビちゃんも元気そうね」

横島君の肩の上で小さい手を振るチビちゃんも元気そうだ。それにとっても幸せそうに見える

(やっぱりね〜六道の子は駄目なのね)

私の後輩になる生徒だけど、今の子は使い魔に対する愛情が足りないと思う。ケージに入れて、訓練するときだけ外に出すではあの子達が可愛そうだ。妖使いや使い魔持ちは確かに珍しいけれど、それだけでは何の意味も無いという事を判って居ないと思う

「なにか考え事ですか？」

「ん〜ちよつとねえ。でも大丈夫よくお母様が何とかしてくれると思うわ〜」

正直言うと恥ずかしいのだが、私はあんまりGSとして活躍出来ない。依頼達成率もそれほど高くないし、従業員も六道の傘下の人達だし、弟子も居ないし……そんな私が六道女学院に講師として行っても発言力は無いに等しく、ましてや使い魔の扱いがひどいなんて言っても誰も言う事なんて聞いてくれないし……私も横島君とか蚩ちゃんみたいな弟子が欲しいなあつとは思っただけだね……

「なんか悩み事ですか？」

「そういう訳じゃないんだけどねえ〜」

私が溜息を吐いているのを見て、悩み事ですか？と尋ねてくる横島君にそういう訳じゃないのよ？と言いなながら、公園の中を走り回っているシヨウトラちゃんとうりぼーを見つめる

「みむう？」

「本当大丈夫ですか？」

横島君とチビが心配そうに尋ねてくる。とは言え、これは私の問題



なので話す訳にも行かず

「今度六道女学院で何かお母様がやるらしいのよ、それが少し心配だね」

誤魔化すようにそう笑い、横島君もあの人ならなにかやるかもしれないですねと苦笑する横島君に

「じゃあ、私はそろそろ戻るわ、また今度一緒に散歩をしましょうね」

「ワンワン！」

横島君はのほほんとしているけど、その実結構勘が鋭い、このまま一緒にいると悩んでいる事を全部言ってしまうそうだと思います。私はシヨウトラちゃんを呼び寄せ、逃げるように公園を後にした。横島君に相談してもいいと思っただ、でもそれは余りに情けないと思っただ。どうせなら頼りにして貰える人になりたいと、だから情けない姿は見せたくないと思っただ。

(このままじゃ駄目……)

今まではただただGSとして過ごしていた。だがそれでは駄目なのだ、このままでは自分は駄目になると……冥子は初めて自分の弱さを受け入れ、そして強くありたいと思っただ。冥子もまた横島との出会いが心境に大きな変化をもたらしていたのだった……

普段はのんびりと散歩しながら帰るんだけど、逃げるように帰って行った冥子ちゃんの背中を見て

「何か悩みがあったのかな？」

「みむう……」

やっぱり俺では相談出来ないと思っただ、逃げてしまったのだろうか？今度それとなく美神さんに冥子ちゃんが悩んでいたと伝えるべきだろうか？

【横島。考え事もいいが、良いのか？うりぼーは】

冥子ちゃんと話している間黙り込んでいた心眼の言葉に顔を上げると、公園から出て行くこうとしているうりぼーの姿が……ってやべ

えッ!

「駄目駄目駄目!!外に出たら駄目ー!!」

「みーむうー!!!」

俺は慌ててベンチから立ち上がり、公園の外に出て行くこうとしているうりぼーに駆け寄り、その首輪にリードを繋ぐのだった……

「ぴぎゅー♪」

楽しそうに鳴きながら歩いているうりぼー。結構大人しいと思っていたけど、案外やんちゃな所もあるんだな。散歩の時は気をつけておくべきかもしれない

「みーむう」

うりぼーの頭の上でセーフと言わんばかりに汗を拭うそぶりを見せているチビ。その姿に思わず笑ってしまいながら、家へとゆっくり歩く

【私の見解だが、冥子は今変わろうとしているのだと思う】

変わろうとしている?心眼の言葉に首を傾げると心眼はしようのないやつだと苦笑しながら

【同期の小笠原や美神は助手を持ち活動しているが、冥子は2人ほど活躍もしていないだろうし、知名度がある訳でもない。GSになれば何もかも順風満帆に進む訳ではないのさ!」

そうなのか……あのスライムの時も美神さんが言ってたな。GSとして上手く活動出来ず、犯罪に手を染めるGSも居る。とそれきつとGSになればぶつかる壁なのかもしれない

【心配になると思うが、今はほっておいたほうがいい。本人が自発的に変わろうとしているんだ、今は黙って見守ってやれば良い。もし協力して欲しいと言うのなら手を貸せばいい。小さな親切余計なお世話とも言わない】

後を追いかけてやろうと思っていたのだが、心眼の言葉に足が止まる。俺の善意でも冥子ちゃんにとって迷惑になってしまいかもしれないのなら、自分の感情だけで行動するわけには行かない

「冥子ちゃんなら大丈夫だよな?」

壁にぶつかってもきつと乗り越えられるよな?と心眼に問いかけ

る。俺ならまだしも、冥子ちゃんは凄い人だ。だから大丈夫だよな？と尋ねると

【ああ、大丈夫だろう。それにだ、横島。お前が他人の心配をするなぞ、100年早い。まずは自分が1人前のGSになる事を考えろ】

言動こそ幼いが、お前よりも年上でそしてGSとしての知識も豊富なのだからなと心眼に言われる。そうは言うけど、やっぱり心配だよなど思いながら俺は家へと戻るのだった……

「……おかえり。タオルは用意しておいたぞ」

洗濯物を割り振っていたのか、シズクが自分の部屋から出てきながら、靴箱の上を指さす。そこには湯気を出しているタオルが畳んで置かれていた

「ありがと。シズク」

「……気にするな。夕食までは時間がある、風呂に入るなり、TVを見るなり好きにしろ」

そう言ってからリビングに入っていくシズクを見送り、暖かいタオルを手にとってから玄関に座り込み

「おいで、チビ」

「みむー」

ちよこんつと俺の手の上に着地したチビの足を綺麗に拭いて、今度は小さくなつたうりぼーを抱き上げて足を拭こうとするのだが……

「ぴぐうーぴぎーー」

「はいはい、暴れない暴れない」

くすぐったいのかじたばたと暴れるうりぼーをしつかり捕まえ、足を綺麗に拭いてからリビングに入る

【どうじゃー！横島！どこかわわっていると思わないか？！】

ノツブちゃんじゃーんつと両手を広げる。どこかわわっているのかな？と思いいその姿を観察する。するとすぐ気付いた、普段着ている赤いバスターのTシャツが青のアーツに変わっている

「胸のバスターがアーツになってる」

【そうそう！ってそうだけ違うわッ!!】

なんかノツブちゃんつてノリがいいからやりやすいんだよなあと

思いながら、真面目にどこか変わっているか？と観察するが、それらしいところは他に見えず

「どっか変わってる？」

「いや、見た目は変わってないんじゃない？」

「判るわけないやん！」

あつはははとお互いに笑い合いながら、イエーイツ！とハイタッチする。変わってると思わないか？と尋ねながら、外見の変化は無いなんて判るわけない

【お前ら仲良いな】

あきれた様子で苦笑する心眼には慣れてもらおうしかないなと思しながら

「それでどこが変わったんだ？」

【霊力が増えたからノツブ忍法影分身が使えるようになったんじゃない！】

「なにそれすげえッ！」

ノツブ忍法が何かは判らないが、影分身は普通に凄いと言うとノツブちゃんはそうじゃろそうじゃろと自慢げに笑いながら

【よし！見せてやろう！このノツブ忍法をな！】

ノツブちゃんの前にチビ達と座ってノツブ忍法影分身とやらの見学をしていると、ノツブちゃんが印を結んで何か呪文を唱える

【きえーいっ!!】

ぼふんつと煙がノツブちゃんから現れ、その煙で視界が塞がる。なんか忍法って感じで期待が持てるなど思いながら、煙を手で振り払っている

「…………お前ら何をやってる？」

キツチンから姿を見せたシズクにごめんごめんと謝っている内に煙が晴れていき、煙が完全に消えた時。ノツブちゃんの隣には

【ノブウ？】

【「なに……………これ？」】

【みむう……………？】

【ふぎゆ？】

ノツブちゃんをデフォルメしたような姿の小さな小人がそこにはいたのだった……当然俺達の困惑した声がリビングに満ちる

「なにこれ!?影分身ってこれ!？」

もつとこう本人に近い何かじゃないの?これじゃあ影分身所か全く別の生き物じゃないか!

「いやいや!?こんなの出るなんてワシも知らないよ!?おかしいな、昔はもつとこうワシと瓜二つなのが出て来たんじゃないか……」

意味不明な謎の生き物に思わず上ずった声が出る。影分身の筈なのに、何がどうしてこうなった。しかもその小人はよいしょつと言う感じで立ち上がり歩き出し、チビ達の方へと向かう

【のーぶー!】

「みむ?」

「ぶぎい!」

片手を上げて話しかける小人。そしてチビ達は若干警戒しながらその小人と話をし、数分後には

【ノブノブー】

「みーむー♪」

【びぎー♪】

そしてその謎の生き物は、チビとうりぼーと仲良く遊び始めた。本当になんだこれ……

「……霊力とか、妖力とか混じって分身と言うか、これは……」

【生きてるな。これ】

【「はい!？」】

え?時間が経ったら消えるとかじゃないの!?俺とノツブちゃんはシズクと心眼の分析を聞きながらチビ達と仲良くリビングを歩き回る小人を見て

【「どうすんの、これ……」】

【のーぶー♪】

はじける笑顔の小人を見てどうしようかと俺とノツブちゃんは途方にくれる事になるのだった……

リポート10 マスコットファイト開幕 その3へ続く

### その3

レポート10 マスコットファイト開幕 その3

朝から六道の使いが尋ねて来て持ってきた手紙。それを見て絶対裏があると判りつつも、冥華おば様には横島君の事で借りがあるので断る事も出来ず、夕方学校が終わってから事務所に来るようにと横島君と蛍ちゃんに連絡したのだ

「またあの人ですか……」

蛍ちゃんは海外の学校を飛び級で卒業している事もあり、16時ちようどに尋ねて来てくれた。横島君は17時前になるかしら?と思いながら呼び出した内容を説明すると嫌そうな顔をする蛍ちゃん「そうなのよ、しかも今回も断れない案件ね」

はあーっと深い溜息を吐く蛍ちゃん。あの人の怖さを知っているからこそその反応だ、昨日TVでニュースを見て思わず吹いたのだが日本の霊能関連で強い発言力を持つ議員や、企業の会長が軒並み逮捕と言う事件があった。逮捕の内容は違法献金や、自分達が知りえた情報を無断での流出にGS協会に対する離反疑惑など例を挙げればきりが無い。これだけまとめて逮捕するだけの証拠を掴めるのは冥華おば様しかおらず、今回の事で冥華おば様に対立していた人間もほとんどが逮捕され、その発言力はますます強い物となった

「根は悪い人じゃないのよ?良い人なんだけど……ちよつとね」

悪い人ではないのだ、冷遇されているGSや、若手GSの育成にも尽力しているし、歳をとつてもGSとしての実力も高い。しかしそれゆえに冷酷な部分もあるのだ、多分今回逮捕された面子はGS協会を金儲けの為の手段として考え、琉璃の失脚を企んでいたから排除したのだろう。本当に怖い人だ、一度懐に入れた人間は徹底して守るが、その手段は相変わらず残酷かつ、他の人間を恐怖させる

「あのオーナー。横島さんが来られたのですが、奇妙な霊力を放っているのですが……」

いっちゃんんの報告に蛍ちゃんと揃って深い溜息を吐く、また何か

拾ってきたのねと思いいながらとりあえず通してくれる?」といったやんに指示を出し数分後

「おはようございます。えつと美神さん、ちよつと相談があるんですけど……」

「なに? また何か妖怪でも拾ったの?」

いえ違うんですけど、違わなくてとしどろもどろの横島君は背負っていたリュックを机の上に降ろして

「昨日ノツブちゃんが霊力が回復したからって、ノツブ忍法つてのを見せてくれたんですけど」

何よ、ノツブ忍法つて……横島君の後ろで気まずそうにしているノツブに視線を向けると思いつきり逸らされた。あ、シズクに氷で頭を殴られて悶絶している、シズクがここまで怒るつて本当に今度は何をしたつて言うのよ

「それで影分身つて言つてたんですけど、なんか失敗したのかな? 判らないんですけど」

リュックに両手を突つ込んだ横島君はそう話しながら、リュックの中身を取り出した

「は?」

「今お茶を……?」

私と蛍ちゃんの呆然とした声が響き、横島君と蛍ちゃんにお茶を用意していたおキヌちゃんの手からお盆が滑り落ちる

「なんか奇妙な生き物が生まれちゃつて、どうすればいいですかね?」

【のつぶう!】

30センチくらいの大きさの小人がリュックから取り出され、両手を振る姿を見て思わず言葉を失うのだった……

横島君のリュックから出てきた謎の生き物。デフォルメされたノツブのような格好をしてるそれは、ちよこちよこ事務所の中を歩き回っている

「なんでああなるの? 影分身したんでしょ?」

「そ、そのはずなんじゃが、なにがどうなったのか判らないが、ああなった」



やった本人でもわからないってこれどうなってるのよ……横島君も困っている様子で全く意図してなかった事態らしい

【のーぶうー】

【え、はい、よろしくです】

おキヌさんに手を伸ばす小人、おキヌさんは驚いた様子で握手を交わす。そして今度は私の方に歩いてきて

【のぶっ！】

「あ。うん、よろしく」

差し出された手を握り返す、ぷにぷにとして暖かい。これってもしかして幽霊とかじゃなくて生きているんじゃない？私の考えている事が判ったのかシズクが溜息を吐きながら

「……そう、生きているんだ。完全に生物として成立している」

【どうしてこうなったのかは、私もシズクも判らない】

シズクと心眼が疲れた様子で呟く、なんで影分身が自我を持ってしかも生きてるのよ。と言うか、どうしてこんな事になるのよ

「チビノブ。おいで」

【のつぶう♪】

横島君が手を叩くと横島君の方に移動して膝の上に座り込んで、うりぼーを抱きかかえ、頭の上にチビを乗せている。チビノブ……

「あれ、消せないの？」

【無理。なんか生きてるし、ワシの言う事聞かないしな】

なんで生み出した本人の言うことを聞かないのよ……と言うか横島君に懐きすぎじゃない？子供の落書きみたいな顔をしているけど嬉しそうにしているし……

「……とりあえず、そのノツブ忍法影分身って言うのは禁止」

【判ってるわい、昨日めちやくちやシズクに怒られたからの】

ふうつと疲れた様子で溜息を吐く、ノツブに溜息を吐きたいのはこっちよと溜息を吐きながら

「横島君。六道女学院から招待が来てるから行くわよ」

「六道女学院へですか？また何かの用事ですか？」

チビノブの頭を撫でながら、ふてくされているタマモを宥めながら

尋ねてくる横島君にそうよと返事を返しながら

「六道にも使い魔を持つている生徒が居るから、使い魔同士の模擬戦をするからぜひ横島君も来てくださって」

使い魔同士の模擬戦と聞いて露骨に嫌そうな顔をしている横島君。絶対納得してくれないわよねと思いつながらどうやって説得しようか私は頭を悩ませるのだった……

使い魔同士の模擬戦ってチビとうりぼーを戦わせるという事で、いくら美神さんの頼みでも、はい、そうですかと素直に納得する事は出来ない

「……お前。自分が何を言っているのか判ってるのか？」

【流石に横島もそれは承諾しないぞ】

シズクと心眼の厳しい口調に美神さんも判っているし、本当は私も断りたい所なのよつと言いなながら

「手紙の内容によるとね、六道で使い魔を持っている生徒の質が悪いらしいのよ」

六道女学院は優秀な霊能者を育成する学校だろうか？質が悪いってそんな事あるのか？と首を傾げると蛭が深刻な表情で

「使い魔に対する扱い、育成に難があるそうだね。使い魔を道具扱いしている生徒が多いから、それを懲らしめる為にも大事に育てている横島の力を借りたいそうなのよ」

使い魔を道具扱い？その言葉を聞いて俺は信じられないと思った。どうしてそんな事をするのか判らず美神さんを見ると

「使い魔を扱うにも、妖怪と契約するにも本人の資質が物を言うのよ、だから自分は偉い。自分は凄いつて調子に乗るのよ。いくらいつても話を聞かないから懲らしめる為に力を貸してほしいって言う頼みなのよ」

俺は机の上でこっちを見ているチビとうりぼーを見つめる。確かに俺としてもそんなのは許せる物ではない、だけど俺と違って戦うために育てている使い魔にチビ達が勝てるだろうか？と不安が頭をよぎる

「……生きている物を道具扱いか、酷い物だな」

「……うむ、そういうおごっている連中は同じ土俵で敗れなければ決して人の話は聞かないだろう」

「ううむ。そういう連中は一度きつい灸を据えてやらねば、性根は変わらないな」

どうしてそんな事が出来るのか、俺には判らなかつた。何とかしてやりたいと思うけどチビ達を戦わせるのはやっぱり嫌で……俺が悩んでいると

【横島さん、チビちゃん達を見てください】

おキヌちゃんに言われて机の上のチビ達に視線を向けると……

「みーむー！みみむー!!」

「びぎー！ぶぎゆぶぎゆー!!!」

【ノブノブ！ノーブー!!】

「コン！ココーンツ!!」

両手をぶんぶんと振るチビに力強い鳴き声を上げるタママ達、これはまさか……戦うって言ってるのか？

「お前やるって言うのか？」

「みむう!!」

力強い鳴き声には怒りの声が混じっていて、そして何よりもその強い眼差しが俺に心配無用と言っている様な気がした

「チビはやる気みたいね。どうするの？横島」

蛭がどうするの？と尋ねてくる。俺はやっぱり、チビにそんな危険な事をして欲しくないが、チビのやる気と俺とチビにしか出来ないのなら……

「判りました。行きます」

「うん……ごめんね、横島君。私も本当はやらせたくないのよ」

美神さんの顔を見ればそれは判る。俺は本当は断りたいが、チビ達がやると言っているのだ。俺が止める訳には行かない

「大丈夫です。チビ達ならきつとやってくれると思います」

任せると言わんばかりに鳴いているチビ達を抱き抱え、どうか怪我だけはしないで欲しいと思った。そしてもう一つ、自分と一緒にいて

くれる使い魔を道具扱いするような連中をそのままにはしておけないと思つたから、俺も参加すると言つたのだ

「大丈夫よ横島。横島が大事に育ててるチビ達は絶対に負けないわ、そして六道の生徒に正しい使い魔達との付き合い方と言うのを見せれるわ」

「……ああ。心配するのも判るが、大丈夫だ。チビ達は負けない」

螢とシズクの言葉に判つてると返事を返した物の、俺はどうしても大丈夫と直ぐに安心する事が出来ず。ぼんやりとしたまま美神さんの事務所を後にするのだつた……

翌日横島を美神さんと迎えに来ただけど、やっぱり暗い顔をしている。チビ達やる気みたいだけど、横島は心配で心配で仕方ないという感じに見える。元氣なく車に乗り込んだ横島は出発してくださいと口にする

「シズクちゃんとノツブちゃんは良いんですか？」

いつも一緒のシズクとノツブちゃんは？とおキヌさんが尋ねると横島は

「ぶち切れて更地にしそうだから残るって」

……それは十分にありえる。と言うかその光景を容易に想像出来て、思わず黙り込んでしまふのだつた……

「とりあえず行きましようか」

はいつと暗い声で返事を返す横島を乗せて美神さんのバンは六道女学院に向かって走り出すのだつた……

「あ、よ、横島君。お、おおお……おはよう」

「舞ちゃん。人見知り少し治した方がいいわよ？」

駐車場に車を停めて校舎に移動していると琉璃さんとその後ろに隠れながら挨拶をしてくる少女にあつた。彼女が一昨日横島が迎えに行った琉璃さんの妹か……琉璃さんよりも髪の色も目の色も少し薄く、少し癖のある髪が特徴的だつた

「舞ちゃんも参加するの？」

「う、うん……私は正直あんまり……来たく無いんだけど……ナナシ

が

「ナナシ？舞さんの口から出た言葉とほぼ同時に舞さんのポケットから

「使い魔を道具扱いとは嘆かわしい、制裁を加えてくれるわツ!!!」

見た目物凄いファンシーなんだけど、やたら声が渋い妖精が顔を見せる。

「あ、おはよう。ナナシ」

「うむ、おはよう。お前も参加するのだろうか、チビ」

「みーむうツ!!」

「良きかな良きかなと言うナナシと言う妖精。と言うか何の妖精なのだろうか？と首を傾げていると

「あら？まあ横島さんじゃないですか」

「ここにこと笑う黒髪の女性が横島を見て嬉しそうに笑う。思わず横島を見ると

「あ、どうも。キアラさん、おはようございます」

「はい、おはようございます」

「凄く穏やかで綺麗な人なんだけど、どこで出会ったのだろうか？と言うかなんで横島は女性と知り合いが多いのだろうか

「えつと横島君。知り合い？」

「ちよつと会っただけですけど、迷子になつて言うんでここに来るバス停まで案内したんですよ」

あの時はとても助かりましたと笑う女性は私達を見て

「初めまして、六道女学院でカウンセラーを務めている殺生院キアラと申します。今回は理事長室までの案内を任せられて参りました」

「カウンセラー……？六道女学院は寮もあり、そこで暮らしている生徒のカウンセラーをしているのだろうか？と思いつつながら、私達はキアラさんに案内され理事長室まで案内されるのだった

「なんか性格違うくない？」

「……えつと、私は……人見知りきついから……よ、横島君はチビとか、うりぼーとか一緒に平気だけど」

琉璃さんとは性格がまるで違う舞さんはその言葉の通り、人見知り

が激しいようで琉璃さんの背中に隠れながら横島と話をしている  
(なんかこう……何も言えないわ)

あの反応を見るとまるで自分が虐められているように見えて、なにも言えない。なんと言う小動物のような少女だろうか……

「こちらです。では私はこれで」

案内を終えて、手を振り階段を下りていくキアラさんを見送り私達は理事長室に足を踏み入れるのだった

「おはよう〜皆々横島君も舞ちゃんも来てくれてありがとうございます」

人の良い笑顔でおはようと笑う冥華さんにおはようございますと返事を返す美神さんと琉璃さんは

「じゃあ、横島君。後は冥華さんの話を聞いて打ち合わせをして、私と蛭ちゃんは今回の事で来賓としてグラウンドで打ち合わせしないといけないから」

「え？…そうなんですか?」

聞いてなかった来賓としての仕事があるんですか?と言うと美神さんと琉璃さんはそうよと声を揃えて言う

「じゃあ何かあったらおキヌちゃんに伝えてくれれば良いから」

「舞ちゃん、横島君。頑張つてね」

私の背中を押して逃げるように言う琉璃さんと美神さん。理事長室から離れた所でその理由を尋ねてみると物凄い悪い顔で笑っていた(美神さんと琉璃さん視点)のでこのままだと大変な事になると思い、横島と舞さんには悪いと思ったが逃げたとの事

「絶対何か押し付けられるわ」

「同意します」

……ああ、そっか。あの人見た目は凄く穏やかだけど強かつ、腹黒い人ですよ。逃げるのは当然かと3人揃って溜息を吐き

「じゃあ下のテントの下に行こっか?」

出来れば行きたくないけどなあと思いつつながら、私は美神さん達と一緒にいつの間にかグラウンドに設置されていたテントの元へと歩き出すのだった……だが美神達はこの時とんでもないミスをしていた。自分達が巻き込まれないように逃走したのだが、それを見て嬉しそう

に笑う冥華の姿に、3人が逃亡するのは折込済みで横島と舞が理事長室に残った。それこそが冥華の作ろうとしていた状況だったのだ……

今日理事長が使い魔を持つ生徒が参加する特別授業を行うと聞いて、私を含む16人の生徒がグラウンドに呼び出された

「皆さん。おはようございます」

理事長先生のおはようございますという言葉におはようございませと返事を返す。今回の特別授業で良い成績を出せば、卒業後のGS事務所の斡旋に、GS協会への就職とこれでもかと言うくらい利点がある。私含めて全員の視線がギラギラとしているのが判る

「今回は若手GSNO. 1の美神令子GSと今年のGS試験で好成績を残した芦菫さん。それとGS協会会長の神代琉璃さんに特別ゲストとして来て貰っているわ」

その言葉に観戦に来ていた生徒から喜びの声上がる。六道女学院の卒業生の中で今一番有名なお姉様に、GS協会の若い会長の神代琉璃さん。そして同年代ながら既にお姉様の事務所で活躍している菫さん、誰もが接点を欲しいと思っている人達だ

「特別授業の内容は使い魔同士の模擬戦だけどそれは授業でやっているから、特別参加として横島忠夫君と琉璃さんの妹の舞ちゃんの2人が参加するわ」

上がって来てと挨拶台の上が上がって来たのは赤いバンダナ姿の男子と私よりも年下に見える少女。2人とも肩の上に妖精とグレムリンを乗せている。しかしそれにしても横島忠夫か……今回のGS試験で異質な力を持つと評判で、稀少技能をこれでもかと持ちながら霊能者として勉強し始めたのが遅く知識不足を指摘されているが、それさえ克服すれば若手の中でも最高峰といわれている。それに以前にその異質な霊能を使う模擬戦を見せて貰ったが、とんでもなかったというのは良く覚えている。現に並んでいる生徒の中からは

「家から接触を取れるならって言われてたわ」

「私も、陰陽師としての才能もあるって」

と言うひそひそ話が聞こえてくる。現に私も接触を取れるなら自己紹介位しておけと家から手紙が来ていたっけ……見た目は平々凡々。だけどその実規格外の霊能の所持者、今回で接触を取れたのは幸いかもしれない

「横島君と舞ちゃんを入れて18人だから8人、8人で順番に横島君達の使い魔と戦って貰うわくただしく負けたら、生徒全員は使い魔を没収。そしてその上でその使い魔は横島君と舞ちゃんに預けるからね」

笑顔で告げられたルールに言葉を失う、使い魔の没収?……ざわざわとグラウンドに動揺する声が響き始める

「使い魔は道具じゃないの、貴女達が道具として育てた使い魔と横島君達が大事に大事に家族として育てた使い魔、その差って物々しつかりと学ぶといわくもちろん、これは貴女達の家にも話は通してあるから逃げることは許さないわよ」

音を立ててグラウンドを囲む黒服達に逃げ道は無いという事を嫌つというほど知らされ、無作為に分けられ、私は横島のグループに回された

「ではお前からだ。燐、言っておくが疲労で消耗など言う集団戦術はさせない。一戦ごとに30分の休憩を挟む、先だろうが、あとだろうがその差は無いぞ」

向こうは1人なのだから後半が有利だと話していた生徒を睨み付けるように言う使い魔学科の教師。私はケージから

「ほら。カソ、出ておいで」

「キキ」

青黒い炎のカソがケージから出てくる。かぐや姫で有名な火の鼠のカソ、それが私の使い魔だ。俊敏な動きと炎、それをもつカソは使い魔学科の中でも優秀な成績を残している。しかも本来の炎は鮮やかな緋色なのだが、私のカソの炎は青色と火力も強い、見た目の美しさもありかなり評判が良い

「よし、チビ。頑張れよ」



【頑張ってくださいね、チビちゃん】

GSなのに幽霊と一緒にいる横島。GSと言う仕事をなんだと思っているのかと思わず私の視線がきつくなる、だが横島は私の視線に気付いていないのか、前に出たグレムリンに頑張れよと声を掛けている

「みーむー」

やる気満々の鳴き声をしているが、横島の使い魔はグレムリン。あの弱くて戦闘能力を持たないというグレムリンだ、そんな相手にカソが負ける訳が無い

(舐めているのね)

横島の近くには明らかに妖怪の猪に狐、恐らく妖狐だろう。それほど強い使い魔を持っているのにグレムリンを出してくる。それはこつちを甘く見ているという証拠だ。控え席の生徒も甘く見ているなど嘲笑う声が聞こえてくる

「ではこれより第1試合。横島GSの使い魔チビ対藤村燐！使い魔カソの試合を始める！双方準備は良いか？」

旗を手にしている審判に大丈夫ですと返事を返す、横島の方は少し驚いたそぶりを見せてから大丈夫ですと返事を返す。その様子を見て使い魔同士の戦いもしたことがないに違いない。そんな相手に負ける訳が無い、そう思っていた

「行きなさい！カソッ！」

試合開始の合図と共にカソに指示を出す。私の指示にうなずき弾丸のように駆け出すカソに対して、グレムリンは欠伸をしているし、横島も指示を出さない。これは私の勝ちだ、戦闘用に育ててない使い魔になんか負ける訳が無い

「みーむー！」

「きい？」

カソの突進を軽々と交わしたグレムリンはそのまま4つ這いで動き出すのだが、早い。カソの周りを素早く移動し、カソを完全に翻弄している

「カソ！炎で焼き払いなさい！」

「チビ！怪我しないように頑張れ！」

私の指示と大して応援するだけの横島にこんな相手に負ける訳が無い。その思いが強くなる、カソは私の指示に従い炎を吹き出す。「みッ!!」

素早く地面を蹴り飛翔したグレムリンにその炎は当たらず、グレムリンの身体が光ったと思った瞬間。静電気のような音が響き

「……きゆう」

弱弱しい鳴き声を上げて倒れこむカソ。そんな……電撃を使うグレムリンなんて聞いた事も無い。子供の時は戦闘能力を持たない、それがグレムリンのはずなのに

「カソ！戦闘不能！チビの勝ち!!」

審判が動けないカソを見てチビの勝ち名乗りを上げる、とつさにカソに駆け寄ろうとするが肩を掴まれる

「ルールは先ほど説明したな？使い魔は没収の上、横島GSに預ける」

「か、カソは返してもらえるんですか？」

もし駄目ならまた別の使い魔を捕まえに行かなくてはいけない、そうしなければまた一から躡けるのが面倒と思いつながら教師に尋ねると、教師はそれはカソ次第だと告げる。だがその言葉に私は大丈夫だと思った、カソはずっと私に従ってきた。だから心配するまでもなく、私の所に戻ってくると横島に懐く訳が無いと、没収されたままじやないかと安心し、私は控え席に戻る。グレムリンだと甘く見たのが私の敗因だが、今の戦いを見て次の生徒は警戒を強めるだろう。そうならばグレムリンなんて弱い悪魔が私達の使い魔に負ける訳が無い

「では横島GS。カソを受け取ってください」

「え、あ……はい」

気絶しているカソを受け取る横島を見ながら、その腕の中のカソを見て。カソは絶対私の所に戻ってくる、だから心配する必要は無いと思いつ、それよりもグレムリンに負けるなんて、私の手元に戻ってきたら今までよりも厳しく鍛えないといけないと思いつながら、次に横島と試合するクラスメイトを見て

(あいつも負けるわね)

私達と違って、使い魔を友達同然に育てているあの子が勝てる訳が無い。横島だつてきつとそうだ見かけは優しく接しているが、きつと厳しく躰けているに違いない。この特別授業が終わったらその方法を教えて貰えるのだろうか？と思いつながら私は椅子に座り目を閉じるのだつた……

なお使い魔同士の戦いが繰り広げられている頃。横島の家では

【のぶのぶー♪】

「……よしよし、お前は中々筋がいいぞ」

【のぶう♪】

チビノブがシズク教導の元掃除を学び、シズクに褒められて嬉しそうに笑っていた。チビノブはあんな姿をしているが、勤勉で朝から雑巾で廊下で水拭きや竹箒で庭の掃除をするなど非常に真面目かつ頑張り屋だった

【なんでワシの言う事を聞かないんじゃ……？】

そしてそんな光景を見て、ノツブが何でワシの言う事を聞かないんじゃ？と項垂れているのだつた……

リポート10 マスコットファイト開幕 その4へ続く

## その4

レポート10 マスコットファイト開幕 その4

横島君は順当に1勝か。見ていて私は当然かと小さく呟いた、正直な所六道女学院の生徒の使い魔のレベルは相当低い。いや、チビって言う規格外を見ているからそう感じるって言う線もあるか……実際チビは強い、強すぎるくらいに

「結構育成カリキュラムとか組んでいたんだけどね、横島君のほうが育成が上手ね」

そう笑う冥華おば様だけどこれは育成とかじゃないと思う

「お言葉ですけど、私は六道の生徒の使い魔は信頼関係が無いと思います」

私が言いたかった事を琉璃が口にする。生徒の使い魔はせまいケージの中に押し込められ。触れる時もまるで腫れ物に触れるように手袋越し、そんな方法ではどう考えても信頼関係なんて築けるとは思えない

「と言うか、横島って放任主義だから躰とか、育成とか全然してないですけどね」

ご飯を食べるときとかの躰はするけど、それ以外の躰とか全然してない、チビ達が自発的に強くなっていると強えると言えるところと、その言葉が予想外だったようで絶句している冥華おば様を見ながら並んでいる生徒を観察する

「横島みたいに触れ合っている生徒も少ないけど居るみたいですよ？」

16人居る生徒の中で2、3人だが、確かにそういう生徒も居るみたいだけど……横島君みたいとは言いがたいだろう

「横島君って育成とか躰とかかしてらんじゃないの？」

「全然全く何もしてないですよ？横島が用意したのボールとか、ハムスター用の台車とかそんなんですよ？」

どうしてそれで強くなるのかしらと呟く冥華おば様。横島君が

思いやりを持って接しているから、チビ達がそんな横島君に応えようとしていると私は思うのよね

「見てください、横島がカソをもう手懐けてますよ」

「……本当ね」

もうチビが倒したカソは横島君に懐いているそぶりを見せていて、やっぱり横島君が妖怪に懐かれるのは異常のレベルだと改めて実感するのだった……

私とナナシの初戦の相手は管狐だったのが、目に見えて凶暴性が見えている。管狐は飼い主の影響をもらに受ける

「さー妖精なんかには負けないですよ?」

【ガルルルル】

牙を剥き出しにして唸っている所を見ると、既に魔に染まりかけているのかもしれない。管狐は精霊に近い、このままだとあの人の言う事を聞かなくなるのは目に見えている

「では飯綱使い、葉月志穂の使い魔管狐対氷室舞、妖精ナナシ。試合開始!!」

審判の合図と共にナナシが走り出すが、腰に挿している木の枝の剣も背中に背負っている木の葉の盾も使う気配が無い

「妖精なんかには負けないでしょうね!やりなさい!!」

【キシヤアアアッ!!】

葉月さんの指示で管狐が飛び出してくるが、その目は真紅に染まっ  
ていて既にかなり凶暴化しているのがわかる

「ふん!主にただ従うだけが使い魔のあり方ではないぞ!!」

【ぎゃんツ!!】

ナナシが前に踏み込み管狐の鼻に拳を叩きつける。ナナシが喋った事にも、拳で戦った事に驚愕の声があちこちからあがる

「武器など、拳の延長戦に過ぎんわあッ!でやあッ!!」

【ぐぎやあ!?!】

「うそでしょ!?!どんな妖精よ!それ!!!」

すいません、知りません。ナナシは名前も種族も無いからナナシと

呼んでいるだけで、妖精と言うのも自己申告なので実は全く別物の可能性もある

「正拳！肘うち！裏拳！！でやあああああッ！！！」

ハムスターサイズの妖精が大型犬サイズの管狐をその短い手足で叩きのめしている。徐々に管狐の目におびえの色が混じってくる

「ワシはな十分手加減している。この剣を使えば、お前は死んでいるのだからな！」

【ウルルル……】

ナナシの強さは私は良く知っている。シズのいた森は神通力に満ちていて、不思議な獣が多く。私も襲われた事が多かったが、ナナシがその度に撃退し、気が付けばナナシはあの森の覇者みたいになっていた。あの森の獣と比べればナナシからすれば、敵ではないのだろう。管狐はその気迫に飲み込まれ鳴き声も弱々しくなっている。これならばもう数分もしないうちに決着が付くだろう

「あの、すいません」

「はい？なんででしょうか？舞様」

周りで監視をしている神代の紋付きの制服を着ている男性に声を掛ける。どうもこの人は私を知っていたようだ、それなら話が早い

「綺麗な竹を用意してくれますか？」

「竹ですか？……判りました」

不思議そうに首を傾げながらも頷いてくれた事に感謝し、ナナシの方に視線を向ける

「火を噴きなさい！それで動きを抑えるのよ！！！」

【カーッ！！】

怯えながらも口を開いて炎を吐き出した管狐だが、ナナシは全く動揺せず背中盾に手を回し

「ふんっ！！」

「嘘でしょ？！」

ナナシがその盾で炎を受け止めるのを見て、周りの人も動揺した声を上げる。管狐が炎を吐いていた時間は数秒だったが、完全に炎を防ぎきるナナシ。その盾は全くの無傷だ、葉っぱの盾なのにどうして炎

を防げるのだろうか？これは本当に謎なのだが、木の枝の剣で悪霊を消滅させるのも見た事があるので何か特別な力が働いているのかもしれない

「かあああああッ!!!」

ナナシが突き出した左手が光り輝く。原理は判らないが、ナナシの得意技だ。あれで悪霊も獣も薙ぎ払ってきた、ナナシの必殺技のようなものだ。管狐に向かって恐ろしいスピードで間合いをつめるナナシ。管狐は逃げることも出来ず頭を掴まれ

「でやああああッ!!!」

【きゃうーんッ!!!】

その手から放出された力に吹き飛ばされる。審判が駆け寄り、気絶しているのを確認し

「勝者！ナナシ！」

「当然だな」

「そ、そんな……わ、私の管狐が……」

自分の勝ち名乗りに満足そうにしているナナシと、自分の使い魔が負けた事が信じられないという顔をしている生徒を見ると、先ほど竹を頼んだ人が戻ってくる

「どうぞ。しかし、何に使うんですか？」

「ちよつとね」

口で説明するの難しいので、ちよつとねと口にし、審判から受け取った管狐を見て確信する

（やっぱり、適切な育成がされてない）

管狐が邪気を溜め込む性質を持っている。それなのに、それが払われていない。多分邪気を溜め込んで大きくなり、強くなっているのを見て邪気払いをしてなかったのだ。受け取った竹に素早く管狐を入れ、その身体に溜まりきった邪気を払うおうと思い

「ナナシ！行くよ」

「うむー今行く」

地面を蹴り私の肩に飛び乗ったナナシを確認してから、私はその竹の管を持って精霊石を借りる為にお姉ちゃんの元へと走るのだった

…

使い魔同士の戦いと聞いて心配していたのだが、それは全くの杞憂であつた。チビは身内の俺から見ても強かつたのだが、どうも六道の生徒から見てもかなり強かつたようではほぼ無傷かつ疲労もなく完全勝利を続けていた。チビの強さは知っているつもりだったが、まさかここまでとは思つても居なかつた。そしてチビが勝ち続ける中。俺は冥華さんが俺を参加させた理由は戦わせる目的ではないという事も判つたのだ

【キギイ】

最初に戦つたカソはまだ怯えの色を見せているが、少しずつ近づいて来た。うりぼーとタマモの説得が聞いたのだろうか

「よーし、よし。大丈夫だ、怖くない。怖くないぞ」

近寄つてきたカソを抱きかかえ、大丈夫怖くない、怖くないと声を掛けると、青い炎が徐々に赤い炎に変わっていく。それでもまだ青みが掛かっているが、それでも明るい色になりつつある事に安堵の溜息を吐く、チビは圧倒的な強さもあり今まで7戦。すべて勝利し、生徒の使い魔を俺は受け取っていたのだが、ツチノコと猫又の2匹を除き酷い、怯えと恐怖を見せていたのだ。ちなみにツチノコと猫又はと言ふと

「シャア？シャア!!」

「にやーにやにやーん」

俺の回りを楽しそうに鳴いてぐるぐる回ってる。チビとかもやるけど、これは何なんだ。何か意味のあることなのだろうか？

【人間を恐れている、それほど厳しく躰けられているのだろうか】

心眼の言葉が最初信じられなかつたが、暴れるや涙を流す姿を見て本当に人間を怖がっているのだと理解した。妖怪凶鑑とにらめっこしながら必死にケアを施す。カソとサラマンダーの青い炎は怯えと恐怖の証であり、カマイタチが風を纏い続けているのは触れられる事に対する恐怖による防衛。ブラッグドックことヘルハウンドの凶暴



性は邪気を溜め込みすぎた事による凶暴化。シーサーの本来の体色が黄色なのに、灰色が掛かっているのも同様の理由だ

「おキヌちゃん、悪いけど、美神さんに言って精霊石の粉末とか少し分けてくれて言って来てくれる？」

【判りました、すぐ戻りますね】

さつき貰ってきて貰った分はもう無いので追加で持って来てくれとおキヌちゃんに頼み。道具も無いので座り込み一息ついていると

「シャー？」

「みゃーん？」

「あー後でな」

ツチノコと猫又は飼い主の女の子と友好的に過ごしていたのか、人懐っこく俺の周りを這い回っているが、他の動物のケアが大変すぎる。だいぶ落ち着いてきたけど、ヘルハウンドが全然近づいてこないののでうりぼーとタマモに声を掛ける

「うりぼー、タマモ。説得よろしく、ヘルハウンドを説得してくれ」

タイガーなら動物と話をする事も出来るだろうが、俺には当然そんな能力はないのでうりぼーとタマモにヘルハウンドの説得を頼み、その間に妖怪凶鑑を見て、溜め込んだ邪気を払う方法を調べる

（えっと精霊石の粉末を水に溶かして……霊力を放出しながら背中を撫でる）

使い魔を持つ生徒の対応が悪いと聞いていたが、これは本当に悪すぎるだろう。下手をすると魔獣化して大惨事になる手前だぞと溜息を吐く

【恐らくは家からは適切な育成法は聞いていたが、それよりも強さを優先してしまったのだろう】

「強さを優先する以前に、苦しんでいるとか変わってるとか気付かないもんか？」

今日来たばかりの俺でも判るのに、一緒にいる人間がどうして気付かないんだ？と心眼と話をしていると審判の人が近づいて来て

「横島GS。そろそろ次の試合の準備をしていただけますか？」

この横島GSって言うのは慣れないなあ。俺どっちかと言うとま

だ見習いでそんな風に呼ばれると何だか恥ずかしくなってくる

「あ。はい、判りました」

うりぼーとタマモが凶暴化しているヘルハウンドに話しかけているのを見ながら、試合の準備をする

「みーむー」

「いつの間に着替えたの?」

チビのほうに行くと、前のクリスマススの俺のバンドナとGジャンのチビサイズの物に着替えていた。俺が着替えさせた訳ではないので、チビ本人が着替えた筈だ。あんな短い手でどうやって着替えたのだろうか?と言う疑問が残る

「横島GS使い魔チビ対篠村薫使い魔キョンシー! 試合開始!」

キョンシーと言われて人型を想像していたんだけど、チビノブみたいなサイズで思ったよりも大きくない。しかも額に札を張ってるから視界が悪いのか

「なにやってるの!ちゃんと狙いなさい!」

「……」

頑張って手足を動かしているのだが、チビはするする避けながら俺の方を見る。反撃していいのかな?と尋ねているように見える

「だからー!そこだつて!もつと早くツ!!」

生徒の方は興奮して指示を出しているが、キョンシーの反応は芳しくない。それ所か小さい肩を震わせていて怒っているように見えなくも無い

「ちよつと様子見」

「ああ、それがいいだろうな。もしかすると何もしなくても決着がつきそうだ」

「みむっ!」

振るわれる手や足をしやがんだり転がって回避するチビに対戦相手の生徒が冷静さを失い、次々指示を出すのを見ていとおキヌちゃんに戻ってくる

【横島さん、貰って来ましたよ】

「ありがとう、おキヌちゃん」

受け取った精霊石の粉末をペットボトルの中に入れて振る。後はこれを飲ませて、霊力を与えながら撫でればヘルハウンドも落ち着くだろう

「みーむー!」

「もう!なにやってるのよ!完全に馬鹿にされてるでしょ!真面目にやりなさい!」

キョンシーの攻撃を回避したチビがその手の上に乗るのを見て、篠村が怒鳴った瞬間。それは起きた

「!!!」

「え!?!」

キョンシーが切れて額の札を自ら引きちぎり、俺のほうに歩いてきて両手を広げる

【これ、拾ってくれて言っているように見えるぞ?】

心眼の言葉に俺もそう思うと返事を返し、Gパンのすそを引っ張っているキョンシーに視線を向ける

【……】

札で隠れて見えなかったのだが、札が無いので円らな目と視線が合い、とりあえず抱き上げると生徒の方を見てキョンシーはべーつと舌を出す

「キョンシー試合拒否!よって横島GSの勝ち!」

「うそ……」

そしてチビの最後の試合はキョンシーの試合拒否および篠村薫に愛想をつかした事による不戦勝となるのだった……

「そこまでく横島君と舞ちゃんはお疲れ様〜」

舞ちゃんの方も決着がつけたいらしい、舞ちゃんの方に視線を向けると俺と同じように8匹の妖怪がいた。ナナシもチビと同様に全勝したらしい、冥華さんが特別授業の終了の合図をする中

「はいはい、ちよつと暴れないな〜」

「しゃ〜」

「みゃ〜」

ツチノコと猫又はご主人の所に帰りたいのか、ばたばたと暴れてい

るのを抱きかかえる。ほかの使い魔はご主人の方に見向きもせず

「きゅーい」

「バウバウ！」

「ふしゅー」

「わんわん！」

「ぷぎゅー！」

「ココーン！」

「みむう！」

チビ達と何かの話をしながら遊んでいる。ヘルハウンドもようやく落ち着いてくれたようで良かった

「貴女達とく横島君、舞ちゃんの違いはあとで説明するけどくその前にく横島君、舞ちゃんく」

にここにこと笑う冥華さんと目が合い、なんか強烈に嫌な予感があった。舞ちゃんも同じようで嫌そうな顔をしている

「特別試合って事でくチビちゃんとナナシの試合をやって欲しいなあく？」

お願いと言っているが、その目が凄まじい光を放っているのを見て、俺と舞ちゃんは反射的に頷いてしまうのだった……あとで思ったのだが、あれは笑顔だったが、人に絶対的な恐怖を与える恐ろしい笑みだと後に舞ちゃんと2人で美神さんと蛍と琉璃さんに言うのだった……

チビが強いのは私も知っていた。だがこうして使い魔同士の戦いモニターで見ながら、その認識を改める事になった

「ねえ？蛍ちゃん。野生のグレムリンもあそこまで強くなるのかしら？」

「そしたら特A級の危険妖怪ですね」

どこの世界に、自分よりも種族的に強い魔獣をフルボッコにするグレムリンが存在するだろうか？サラマンダーはまだ判る、電撃と火炎放射の打ち合いで電撃が押し切り麻痺して動けなくなり勝利判定。これはまだ判るのだが……

「カマイタチと戦ったとき凄かったですね」

「そうね、まさか強風で吹き飛ばされた後。結界を走りながら放電して、体当たりするとは思わなかったわ」

使い魔同士の炎や風の刃から生徒達を守る為の結界なのだが、チビはカマイタチの暴風に吹き飛ばされ、結界を垂直に走りながら、放電し、そのままの勢いで突進しカマイタチの風の障壁を完全に吹き飛ばしたのだ

「賢いってレベルを超えていますよね」

疲れたように呟く琉璃さんに美神さんと揃って頷く、カマイタチの暴風で弾き飛ばされたように見えたが、火力不足を補うために態と吹き飛ばされたように見える。そうで無ければ、弾き飛ばされてすぐ結界を走るなんて真似はしないだろう。チビにとつてすべて計算づくだったのだろう

「でもチビも強いですけど、ナナシってあれ……本当に妖精だと思えます?」

「思わない」

美神さんと琉璃さんが声を揃えて思わないと言う。舞さんは妖精だと言っていたけど、どこの世界にあれば言葉喋り、恐ろしいほどの

格闘技術を持っている妖精が存在するだろうか?

「あんなのがたくさん居たら人類は全滅するわ」

この言葉冗談と言う事は出来ない。チビもナナシもハムスターサイズなのにその戦闘能力は異常すぎる、もしあんなグレムリンと妖精が増えていけば、簡単に人間は全滅するかもしれない。冗談抜きで思うほどに強いのだ

「まあこれで終わりですね」

チビとナナシの試合はこれで全部終わった。後は説教とかで終わりですよね?と美神さんと話をしていると冥華さんが再び指令台に上る

「……なんか凄い嫌な予感がするわ」

「私もです」

その顔を見ると何か考えているのが一目で判る。これ以上何を  
……

「まさかチビとナナシを戦わせるとか言わないですよね?」

私の呟きに沈黙で返す琉璃さんと美神さん。いやいや、チビとナナシと圧倒的な戦闘能力を持つ使い魔が戦えばどんな事になるか、考えるまでも無く大変な事になるはずだ。冥華さんもそれは判っているはずだから、まさか戦えなんて言わないわよね?と言うかお願いだから言わないで欲しいんだけど……そんな祈りを込めて冥華さんをお願いしますと言う視線を向ける

「貴女達とく横島君、舞ちゃんの違いはあとで説明するけどくその前にく横島君、舞ちゃんく」

にここにこと笑う冥華さんと目が合い、なんか強烈に嫌な予感がした。私達の願いは決して届かないと理解してしまった、むしろこれからがメインイベントなのだ……

「特別試合って事でくチビちゃんとナナシの試合をやって欲しいなあく?」

やって欲しいなあつと言いつつ、恐ろしい眼力を放っている冥華さんに横島も舞さんも怯えながら頷いてしまった

「……美神さん、これ大丈夫ですかね?」

「大丈夫だと祈るしかないわ」

今ここに六道と神代家の関係者しかいない事に心底感謝した。もしここにオカルトGメンとか居たら危険だとか騒いで、チビもナナシも横島と舞さんの下から取り上げられない事になっていたのだろうか

ナナシとチビの戦いかあ……ちらりと見ていたけど、これ大丈夫なのかな?チビもそうだけど、ナナシもかなり強い。だが断ることが出来なかったのでもうさら戦いをやめるとは言えなかった。それに何よりもチビ達がやる気満々なのだ

「コンー・ココンー・コーン!!!」

「ぴぎゅー・ぱぎゅー・びぎゅー……」

「みむうっ!!」

うりぼーとタマモに激励されてやる気満々のチビ。とりあえず俺も激励したが……

「頑張つてなチビ。でも怪我とかはしないような?」

今までの試合でも不安だったのにナナシはかなり強いので、本当に怪我をしないでくれよと声を掛ける

「みむうー!」

ふんすつと気合満々の表情で頷き、結界の中に入っていくチビを送り。足元に居るうりぼーとタマモを抱きかかえ、椅子に座るのだった

「行くぞー!チビー!」

「みむっ!」

ナナシも気合満々の表情でチビに声を掛ける。その後ろで舞ちやんがナナシがやる気満々でごめんなさいと声を掛けてくるが、チビも気合満々なのでお互い様なので何も言う事が出来なかった

「横島GS使い魔チビ対氷室舞使い魔ナナシ!試合開始ツ!!」

「みつきやああああツ!!」

「チビーツ?!?!」

試合開始の合図と共にいきなり破壊光線を打ち出すチビ。やる気満々ではなく、殺る気満々のチビに思わずその名前を叫んでしまう

「ぬうううツ!!かあああああツ!!!」

だがナナシもナナシで全く動揺しない所かにやりと笑い、大きく息を吸い込んだと思つた瞬間。その大きさからは信じられない大声で破壊光線を明後日の方向に弾き飛ばす

「弾き飛ばしたあツ!?!」

鬼門を撃破したチビの破壊光線の威力は桁違いなのだが、それを声だけで弾き飛ばすなんて……信じられない妖精だ

「みむ……」

だがチビは予測していたのか、やはり通用しないかと言わんばかりの反応だ。まさか今の破壊光線で相手の実力を測つたとも言えるのか?

「ふっふっふ、飛び道具が通用すると思うか。拳で来い」

右足を上げて拳を突き出す武術の構えを取るナナシ、それに対してチビも同じように拳を突き出す構えを取る

「かあーッ!!!」

「みむうううッ!!!」

ハムスターサイズとは思えない激しい打撃音が響くのを見て、俺は思わず心眼に

「なあ？これ大丈夫かな？」

「……私は大丈夫じゃないと思う」

鋭い風切り音と共にチビとナナシの姿が消え、全く違う場所に現れ拳と蹴りのラッシュで戦う姿を見て、俺も大丈夫じゃないと思うと小さく呟く、チビとナナシの戦いはまだ始まったばかりだ……

「……食べるか？」

【のーぶーツー！】

一方その頃横島邸ではシズクとチビノブが縁側に揃って座り、せんべいを齧っていた

「……お前頑張れば、良い使い魔になるぞ？」

【のぶ？のぶのぶ!!】

「……よしよし、頑張れ」

のぶのぶ言ってるだけだが、シズクにはその言葉が判るらしく頑張れと言いながら頭を撫でていた。六道女学院で大変な事が起きているのだが、横島家は平常運転で平和な時間が流れているのだ……

リポート10 マスコットファイト開幕 その5へ続く



## その5

レポート10 マスコットファイト開幕 その5  
相対する2匹の獣……

自らを育てて慈しんでくれたご主人の為に強くなったグレムリン  
……「チビ」

舞を守れという命を受けた謎多き名も無き妖精……「ナナシ」

圧倒的強さ持ち他のマスコットを一蹴し続けた最強のマスコットの戦いが今始まるツ!!!

マスコットファイトオツ!!!レディ……ゴーツ!!!

風を切り、振るわれる拳を首を傾けて回避する。反撃にと蹴りを繰り出す、素早く後退し、4つ這いになり目にも止まらぬスピードで動き出す

(こやつ……強い!)

横島の使い魔というチビと言う名のグレムリンの強さは今まで戦ってきた相手とは別格だった。速さもそうだが、頭が良い。戦術と自らの速度を利用したヒット&アウェイ。信じられないが、ワシの目をしても見切れぬ。だがその程度で敗れる

「このワシでは……なにい!？」

「みーむツ!!」

気配を感じ取り手刀を繰り出す、そこにチビの姿は無く目の前に迫ってくる電撃の塊。そしてその後ろで笑っているチビ

「ぬおおおツ!!!」

反射的に両手で電撃を防いだが、身体が感電して思うように動けない

「みむむむむむツ!!!」

「がっ!?!ぐっ!?!ぐはあああッ!!!」

チビは当然その隙を見逃す訳も無く、一瞬で間合いをつめ連続で拳を叩きこんで来る。避けたと思っても感電した身体では思うように

動けず、良い様に殴られ続ける

「舐めるなッ!!!」

「みぎやつ!」

踏み込んできた勢いに合わせて拳をカウンターで叩き込む。凄まじい衝撃と共に後ずさるチビ……やはり強い、圧倒的な強さと防御力。しかもそれを本能で使うのではなく、知性で使う

(強敵だ……やぶれぬかもしれない)

しかも負けないという強い意志を感じる。何よりも恐ろしいのはこの闘志だ、痺れも取れてきた所で拳を握る

「来いッ!如何にお前が強かろうが、決して越えれぬ壁と言うものを教えてくれるッ!!」

「みぎやああああッ!!!」

再び4つ這いになり恐ろしいスピードで移動を始めるチビ。これに電撃の塊を交えたフェイントを織り交ぜる、確かに有効な手段だが「二度も喰らうかッ!この間抜けがあッ!!」

「みぎつ!」

向かってきた電撃を回し蹴りでチビめがけて打ち返す。まさかの攻撃にチビの動きが止まったその瞬間

「貫ったあッ!!!」

左手に靈力を収束し、一気に間合いを詰めチビの頭を掴む

「チビッ!!」

横島のチビの名前を呼ぶ声がするが、もう遅いッ!!!

「くらえいッ!!!」

溜め込んだ靈力を零距离で放出する。凄まじい衝撃と共に吹き飛ばすチビ。結界に叩きつけられた音と煙にこれで決まった

「貴様は所詮どこまで行っても獣よ!技術を使いきれぬ!!!」

ワシとチビの圧倒的な差。それはその姿だ、確かにチビは翼を持ち、尾を持ち、牙と爪を持つ。それは戦闘力としては十分すぎるものだろう、2足歩行なども出来るが基本は4つ這いの獣。どうしても打撃戦になれば手足の拳動が怪しい物となる

「みむううううッ!!!」

「なにいつ!?!」

煙の中から放電したチビが姿を見せる。完全に決まったはずなのに、意識を刈り取るまでに至っていないかった。いや、それ所か凄まじい覇気と闘志に満ち溢れている

「ふっ！だが何度立とうが同じ事ツ！お前ではワシには勝てぬツ!!」

その放電を放出しようが、広範囲に放とうが届かない。飛び道具など恐れるに足りぬ、いつ攻撃をされても大丈夫なように警戒しているとチビがその姿勢を低くする

「まづっ！ぐはあッ！」

危険だという事を悟り動き出そうとした時にはもう遅かった。何かに激突され、ワシの身体は宙を舞っていた

「みっみむむううううッ!!」

「ぐっ！うおおおおおッ?!?!」

いつの間にか上空に回りこんだチビが放電しながら飛び蹴りを叩きこんで来る。ガードも出来ず弾き飛ばされ、今度はワシが結界に叩きつけられた

(ぐううう……こんな隠し玉があったのか……)

目の前で放電しているチビを見つめる。過剰電圧で自身の身体能力を強化……電気を操るグレムリンだから出来る事だ

「ふっふっ……良い、良いぞ！」

この身体になってからこれほど血が滾った事はない。拳を硬く握り、再び電撃加速に入ったチビの気配を探り、縦横無尽に駆け回りながら電撃の爪を繰り出してくるチビの姿を見る事は出来ないが、肌を突き刺すような闘志に笑みを溢しながら向かってくるチビの気配だけに意識を傾けるのだった……

テントの特別観戦席で私達は全員絶句していた。チビとナナシの戦い、それはもう使い魔のレベルの戦いではなかった。離れていても見えるように冥華おば様が用意してくれたカメラで撮影された戦いが特設モニターで大きく映し出されているが、余りに早いのと凄まじすぎる戦闘に六女の生徒は完全に呆然としていた

「……美神さん？グレムリンってあんな規格外でしたっけ？」

「断じて違うわ」

あんなグレムリン恐ろしすぎる。前々から言っていたが、横島君の家の環境により突然変異していたチビが初めて全力を出したのだらう。横島君もその姿を初めて見たのか、大きく口を開いて絶句しているのが見える

「凄いつていうか怖いですよ、あれ」

放電したまま恐ろしいスピードで駆け回るチビとそのスピードを眼を閉じて見切っているナナシ。正直どっちもどっちのレベルだ。これでもう少し大きかったら被害はもつと大きい事になっていただろう

「うん〜これは予想外〜でも凄く都合だわあ〜」

にこにこ笑いながら好都合と呟く冥華おば様に視線を向けると、冥華おば様は穏やかに笑いながら

「これが〜主人と心を通わせた使い魔の強さ〜って言えるでしょ〜」

いや、確かにそうかもしれないけど、こんなレベルの使い魔が増えたらそれこそ大変な事になると思うんだけど

「見切ったあ!!」

「みぎっ!?!」

ナナシの見切ったという声が響くと電撃加速をしていたチビがナナシに捕まっていた

「……舞ちゃん。あの妖精どこで見つけたのかしら？」

呆然とした様子で呟く琉璃。確かにそれは気になるかもしれない、皆ナナシみたいに強いのなら本当に大変な事になると思う

「どりゃあああ!」

「みむっうううう!?!」

一本背負いの要領で投げ飛ばされるチビ。あれは攻撃するためだに投じたんじゃない、あれは攻撃する為の隙を作る為に投げ飛ばしたのだ

「はあああああ!!」

ナナシの左手が緑色の光に包まれる。本来なら投げ飛ばした所で

空を飛べるチビには何の痛手でもない、だが今までのやり取りを見ていて判ったのだが、電撃加速をしている時は空を飛べないのだ。恐らくあの速度に翼がついていけない

「チビ!?避けるッ!!」

横島君が避けると叫ぶが、投げ飛ばされて回転しているチビにはどっちが上か下も判らないだろう

「これで決まりですね」

「多分ね」

横島君が心配するから、大怪我する前に決着が付いて良かった。どちらもヒートアップしているから簡単には止まらないし、止められない。どっちかが大怪我する前に終わって良かったと蛍ちゃんと安堵の溜息を吐いていると

「まだですーチビはまだ何かをやるつもりですよー!」

琉璃の言葉にまさかと思いなながら結界の中に視線を戻す。さつきまで身体を覆っていた電撃も消え……いえ、違う!?これは!

「右手に電撃を収束してる!」

右手だけが眩い光に包まれている、それはナナシと左右の手こそ違えど、同じ技の様に見えた

「猿真似かーだが無駄よ!!流派森林不敗が奥義そう簡単に真似出来る物かッ!!」

流派森林不敗!?なに!?ナナシの武術に流派ってあったの!?と言うか森林不敗って何!?思わずそんな叫びが私の口から飛び出した。無論それは私だけではなく、蛍ちゃんと琉璃はもちろん観客席も同じだ「フェアリーフィンガアアアアアアーツ!!」

「みっむうううううーッ!!!」

結界を蹴って加速したチビの右手とナナシの左手がぶつかりあう。

それは凄まじい余波を巻き起こし、結界の中を暴れまわっていた

「馬鹿な!?ここまで再現しているだどッ!!!」

「みむうううううッ!!!」

ナナシの驚愕の叫びとチビの雄たけびが聞こえた瞬間。凄まじい音が響き、二匹とも大きく弾き飛ばされ、結界に叩きつけられる。審

判が結界の上から2匹意識の有無を見ようとした瞬間。

「まだまだーこれからよッ!!」

ナナシが腰に下げた木の枝の剣を構える。見た目は間抜けなのだが、今までの戦いを見ていると木の枝と馬鹿にすることは出来ない

「みーむうーッ!!」

「ぶぎゅーッ!!」

チビが立ち上がりそう叫ぶと、うりぼーが割り箸を結界の中に投げ込む。木の枝に対抗して割り箸!?

「みーむうっ!!」

ジャンプして割り箸をキャッチして構えるチビ。見た目はファンシーなのだが、その気迫の凄まじさから可愛いとかそういう感想は沸かず。これからどうなるの?と思わずに入られなかった……

「みーむーッ!!」

割り箸を手に空を飛ぶチビ、上空からの連続攻撃が何度も何度も振るわれるのだが

「無駄無駄ッ!!」

ナナシは死角からの攻撃だというのにその全てに対応していた。やはりナナシの言うとおり人型と獣の技量の差なのね

「でもなんか、あれわざとぽくはないですか?」

蛍ちゃんにそう言われて、良く見ると確かにチビの攻撃は単調で、防がせるように見える

「チビの知性から考えると、あれは囷って気がしますね」

「……ハムスターサイズなんだけどね」

ハムスターサイズの悪魔なんだけど、一体どこまで考えているのだろうか?そう思った瞬間。チビが大きく動いた

「みつきやあああああ!!」

「ぬっ!」

空中からの破壊光線。それを薙ぎ払うかのように広域に繰り出す、ナナシはとっさに回避したのだが、破壊光線がえぐった地面から砂煙が上がる

「味な真似を！」

ナナシの獰猛な笑い声が響く、勝負を決めるだけの威力のある技を目晦ましに使う。予想外に加え、そこから何をしてくるのか？と言う警戒心がいやでも強まる。チビの賢さと技術、それが今発揮される時ののだろうか。そしてチビの次の一手は予想を遥かに超える一手だった

「みーむうううううー！」

放電したチビの手にした割り箸に電気が伝わっていく、え？まさか……嘘でしょ？

「割り箸と電撃を組み合わせるなんて」

「……どうしたらあんな攻撃が出来るの？」

信じられないという蚩ちやんと呆れた様子 of 琉璃の見る中。チビは翼を大きく羽ばたかせ、凄まじい速度でナナシに向かって降下しながら、帯電した割り箸を振るった

「ぬんっぐうー！来ると判っていればアア！耐えることなど容易いわあッ!!」

「みぎやあつ!？」

チビの割り箸が命中した瞬間。ナナシの木の枝もチビを捕らえ、2匹がごろごろと結界の中を転がる。コレはもうハムスターサイズの動物の戦いじゃないわよ……

「み、みむうう……」

「まだ……まだあー！」

ふらふらと立ち上がったナナシが指をくわえる。何を？と全員が見つめる中、ナナシが息を吐くと、ぴーつと指笛の音が響く

「チュウツ!!」

「えっ!?服の中にいたの!?!」

舞の服の中から白い何か飛び出して、結界の中に突入していく。それはよく見ると白い毛と赤い眼をしたネズミ……

「ニハツカネズミツ!」「ニ」

なんとハツカネズミが飛び込み、ナナシの横で止まる。するとナナシが跳ね起き、ハツカネズミの上に跨り腰の木の枝を手にする

「お前の機動力は脅威！だが今のぶつかり合いでお前はその機動力を失ったも同然ツ!!このまま決着を……」「みーむー……ツ!!」

ナナシの言葉を遮りチビの呼び声が響き渡る、すると横島君の膝の上で大人しくしていたうりぼーが横島君の手をすり抜けて結界の中に飛び込む

「うりぼー!?!」

まさかの行動に反応の遅れた横島の手をすり抜けて、うりぼーがチビの元に駆け寄る

「みむー!みむうう!!」

「なるほど、お前にも相棒がいたか！ならば勝負はまだ終わらぬぞツ!!」

「みむうツ!!」

ハツカネズミとうりぼーが走り出し、ナナシとチビの剣が何度も交差する。それを見て思考停止していた横島君と舞ちゃんが再起動し

「大変な事になっている!?!」

声を揃えてそう叫ぶ。だが私は心の中で呟いた、もう遅いと……

計算を違えたか……フェアリーフィンガーのチビの攻撃がぶつかり合い、更にさっきの相打ちと、チビが明らかに機動力を失ったので今が勝機と踏んでハツカネズミ（未命名）を呼び出したのだが、チビもまたうりぼーに騎乗し、割り箸の剣を叩きつけてくる

「チ、チュウ……」

うりぼーに対してこっちは普通のハツカネズミ。妖怪であるうりぼーとは体力も機動力にも差がある

「かあああツ!!」

「みむうツ!!」

横から振られた剣を受け流し距離をとるが、うりぼーのダツシユ力（くっ！距離は取れないか！）はハツカネズミよりも上で再び距離を詰められる

（くっ！距離は取れないか！）  
ダツシユ力に差がある以上、距離を取る事はできない。しかし中途半端な距離では、遠心力のついたチビの剣の射程圏内だ



(ならばッ！)

ネズミの背を撫でると、ワシの意を汲んだのかうりぼーに向かって走り出す

「みむ!?」

間合いを詰めてきた事に驚くチビに向かって剣を突き出す、中途半端な距離では向こうの剣のリーチのほうが上、ここまで踏み込んでしまえば!

「その剣も無用の長物よッ!!!」

背中の中も装備し、振るわれる剣を受け止めながら、剣を振るう。剣自身の重さとうりぼーの機動力で遠心力をつけて最大の威力を發揮するチビの剣は中距離に対して強い、ワシの剣は短く、軽いがそれゆえに近い距離で最大の威力を發揮する

「残念だったな!最後は経験の差よッ!!!」

チビはあの剣に慣れていない。だからこそこの勝機なのだ、これで扱いに慣れていけば、この距離でも十分に戦う事が出来ていただろうが

「みむう!みみー?」

「ぶぎゃ?びぎゆう!?」

チビ自身が剣の扱いに慣れていない上にうりぼーとの連携も上手く行っていない。さっきまでは勢いの乗っていたからこそその怒涛の攻撃だったが、こうして勢いを止めてやれば!!

「そらッ!そらそらッ!!!」

「みむ!みみう!みむうッ!!!」

ワシの突きを必死に防いでいるが、ここでもやはり獣と言う姿がチビとワシの完全な人型としての差になる。なんとか剣を握っているが、本来チビの手はその様に使うようには出来ていない。だから振り下ろすやなぎ払うという使い方しか出来ぬ、それは到底剣術と呼べぬ代物

「楽しかったぞ!後でお前のご主人に怪我を治してもらおうが良いわッ!!!」

ワシは舞の護衛と言う任を受けている。だからこそこのような場

で負けるわけには行かぬ、チビの胴目掛けて突きを繰り出そうとした瞬間

(い、いかん!!)

久しぶりに満足の行く戦いに完全に浮かれていた。チビの眼はまだ死んでおらず、それ所かチビは上手くワシの目を剣だけに集中させていた。チビの手が光っている事に気付いた時それは完全な手遅れだった……

「みむきやーッ!!!」

「ち、ちゆうう?!」

「しまった!」

突き出された右手から電撃が放たれる。ハツカネズミに対してなごの手加減はしたようだが、感電したネズミが倒れ、ワシの身体が宙を舞ったその瞬間

「ぷーぎーびぎやーッ!!!」

「みーむーッ!!!」

「ごほおっ?!」

うりぼーの回転で遠心力のついた一撃が叩き込まれる。だがそれでは終わらず、うりぼーの回転とチビが剣を回転させる事でワシの身体は完全に捕らえられる。回転は徐々に速まって行き逃れる事ができず、遠心力によって上へ上へと弾き飛ばされる

「みむうッ!!!」

「ぐっぐうっ?!」

突如下からの切り上げに反射的に防いだが、更に上へを弾き飛ばされる。蓄積したダメージで体勢を立て直す事など出来る訳も無い

「みむうー!」

「ぶぎーッ!!!」

そんなワシに追撃にと地面を蹴ったうりぼーが弾丸のような勢いで突っ込んでくる

「(……)(……)までか……」

「みむううううッ!!!」

ワシが最後を見たのは勇ましく吼えるチビの声と目の前に迫る割

り箸の姿だった……

【竜巻割り箸、魔猪一閃】

それがチビとうりぼーの合体技の名前だった……

審判が気絶しているナナシを見てから俺の方を見て

「勝者！横島GS使い魔チビ&うりぼー!!!」

その勝ち名乗りを聞いて安堵の溜息を吐く、ナナシとの戦いは凄まじくどこか怪我をしてないかと心配してチビに視線を向けると

「みーむー♪」

「ぷぎ♪」

結界から出てきたチビとうりぼーに怪我をした素振りは見えなくて、混乱していると審判の人が苦笑しながら教えてくれた

「使い魔同士の戦いはこの結界の中ならお互いの霊力などの削りあいなんですよ。だから怪我はしないんですよ、ご存知じゃなかったんですね」

その言葉に良かったあつと呟きながらチビとうりぼーを抱き上げる。うりぼーの参加は最後のほうだったから怪我はしてないが、チビはナナシにぼこぼこ殴られていたので、正直気が気じゃなかったんだけど、怪我をしてないみたいで本当に良かった

「強かったな。チビ」

【ああ、強かったな。恐ろしいほどに】

チビが強いのは知っていたけど、まさかここまでなんて思っただかった。心眼とチビは強かったなと呟きあう、チビが俺を守ろうとしてくれるのもこの強さがあるからかと思わず納得してしまった

「コン！ココーン！ココン♪」

タマモも褒めているのか、チビは俺の声とタマモの鳴き声を聞いて、少し恥ずかしがるような素振りを見せてから俺の方を見て

「みむう♪」

にぱっと笑うチビが褒めてと言っている様に見えて、頭を撫でているとコツンっと言う音がした

「み？みぎゃあ!？」

「あー折れてるなあ」

チビに作ってやった割り箸の剣が中ほどからぼつきり折れている。と言うか、良くここまで耐えたと思うよ、割り箸が

「みぎぎゆ……みぎや……」

折れた割り箸を何とかしようとしているが、当然治る訳も無い。ありあわせで作った玩具なのだから当然だ

「今度はもつとちゃんとした木で作ってやるからな？」

「みむう……」

意気消沈した様子のチビの頭を撫でる。とりあえず割り箸なんかじゃなくて、もつとちゃんとした木を見つけて、それからチビサイズの剣の形に削ってやろう、そんなことを考えていると舞ちゃんがナナシを抱えて歩いてくる

「大丈夫？」

かなり良い感じと言うか死んだんじゃないか？と心配になる一撃だったので、大丈夫？と尋ねると舞ちゃんは大丈夫だよと笑う

「ちよつと気絶しているけど、嬉しそうだから」

嬉しそう……？ナナシを見るけど、とてもそうは見えないんだが……いや、俺に判らないだけで舞ちゃんから見れば笑っているように見えるのかも

「横島君く舞ちゃんくお疲れ様くじゃあ最後にお話をするからく使い魔学科の生徒と令子ちゃん達は体育館に集合く他の生徒は教員の指示に従って下校してねく」

冥華さんの放送を聞いたが、俺も舞ちゃんも体育館なんて知らないし、美神さん達と合流しようか？それともおキヌちゃんが迎えに来てくれるだろうか？生徒から取り上げられた使い魔達もケージに入れられて連れて行かれたし、どうせなら俺達も案内してくれと考えていると

【心配ないぞ、迎えが来た】

迎え？おキヌちゃんが来てくれたのかな？と振り返るとマルタさんが手を振ってる

「マルタの姉御」

「姉御言わない。殴るわよ」

拳を握るマルタさんにすいませんと即座に謝る。この人はやる、やると言えば絶対にやるので即降参だ。なお舞ちゃんは人見知りなので、マルタさんの姿を見た瞬間俺の後ろに隠れている

「じゃあこっち、案内するわ」

笑顔のマルタさんにお願ひしますと頭を下げ、俺と舞ちゃんはマルタさんに案内され体育館へと足を向けるのだった……

リポート10 マスコットファイト開幕 その6へ続く

## その6

レポート10 マスコットファイト開幕 その6

横島と舞を体育館に案内しながら、私はさつきの使い魔同士の戦いを思い返していた。一言で言えば、どちらも規格外、特にナナシを退けたチビは間違いなく規格外だろう

(横島のあり方かなあ)

変わった人間だと聞いていたが、これだけ妖怪と心を通わせる人間と言うのもまた珍しいだろう。肩の上で透明になっているタラスクにもどう思うと尋ねる。するとタラスクは

(好ましい人間だな、人間だが本質はこつちに近いかもしれない)

と、私と同じ答えを出してきた。人間なのは間違いない、だがその本質は妖怪などに近い、それこそ神魔に近いと言えるかもしれない。そして何よりもその心のあり方が好まれるだろう、妖怪だから、神族だから、魔族だからと言う偏見が無く、その人個人を見る。そしてその人の心の中に自然と入り込んでいる……不思議な人間よね

「みむー♪みむうー♪」

「危ない危ない!?!前見えないから!」

「ぶぎー♪」

「今度は重い!?!肩の上で大きくなるの禁止!?!」

「コン♪」

「前が尻尾で見えねーツ!!!」

使い魔達に悪戯されて叫んでいるのを見て、思わず笑ってしまう。それは私だけじゃなくて、舞も一緒でくすくす笑っている

「ちよつと舞ちゃんに姉御!笑うなら助けて!」

また姉御と言う横島を見つめると、いやいや、すいませんすいませんと謝る横島。なんかこう、悪戯坊主みたいな感じでどこと無く弟に似ているような気がしなくも無い。

「姉御は駄目よ、姉(あね)さんくらいなら良いけどね」

「え?あ、はい!判りました姉さん」

まあ良いか、これも横島の人たらしと言うか個性みたいな物よね。  
とは言え、英霊の私までもかあ……

(本当面白いやつ)

私はそう笑いながら、横島達を体育館へと案内し、私自身も六道理事長の後ろへと移動するのだった……

俺は何故か舞ちゃんと一緒に冥華さんと一緒に壇上に並ぶように  
と言われ、困惑しながら並ぶ事になった

「さてく使い魔学科の生徒の子はく自分達と横島君と舞ちゃんの違  
にく気付いたかしらく？」

笑っているのだが、鋭い視線を向けられ、俯いている使い魔学科の  
生徒を見ていると冥華さんが俺の肩に手を置いて

「じゃあ横島君。後はお願いね？」

「はい。」

え？俺？俺に何を言えつて言うんだ？俺馬鹿だし、こんなちやんと  
した所で学んでいる人達に何か言えるような立場に無いしと慌てて  
いると、冥華さんは俺に笑いかけながら

「気取る必要は無いわく自分が感じた事を、感じたままに言えばいい  
のく取り上げた使い魔もく横島君に任せるわくだからよろしくねく」  
俺に何を伝えろつて言うんですか？と尋ねたかったが、冥華さんは  
もう後ろに下がってしまった。舞ちゃんもそそつと後ろに逃げてし  
まった……俺はこつちを見つめている、使い魔学科の生徒とその後ろ  
の美神さん達を見てどうすれば良いんだよと心の中で呟く、チビ達も  
難しい話だと思ったのか静かに俺のポケットの中に入り、タマモだけ  
は俺の足元から俺を見つめている。その視線にプレッシャーを感じ  
ていると心眼の声が頭の中に響く

「あんまり難しく考えるな横島。お前が感じたまま、お前が言いたい  
事を言えば良い。気取る事はない、自分の心が命じるまま、思ったま  
まの事を言えば良い」

心眼が大丈夫だ。お前の言葉きつと届くと告げて沈黙した。ここ  
から先は俺だけかよつと心の中で小さく溜息を吐きながら。こんな

のは自分の柄じゃないと思いつつ口を開いた

「えつと俺は未熟だし、馬鹿だし、格好良い事なんて全然言えないと思うし、こんな場所で喋った事もないからなんて言えば良いなんて全然判らない」

むしろこういう場面で喋るのは蛍や美神さん、それに神宮寺さんのほうがよっぽどむいていると思う。ああ言う人が人がきつと人の上に立つべき人間なのだと思える。俺でも判る。だけど俺は人の上に立つような人間じゃないだろう、六道女学院と言う名門で霊能について学んでいる人に霊能について何かを言う事なんて出来ないだから俺はチビやうりぼー、モグラちゃんにタマモと一緒に暮らした人間として語る「君達は気付かなかつたのか？サラマンダーにしろ、カソにしろ、ヘルハウンドにしろ助けを求めていた事に」

俺でも気付けた。言葉を持たないから行動で、その姿で助けを求めていた。それにどうして気付けなかつたのかと

「俺は使い魔と言う言い方は好きじゃない、生き物は道具じゃないと思うから」

使い魔、使い魔と聞かされた時に俺は嫌だと思った。だってそうじゃないか、それではまるでその生き物は道具だと言っているような気がするから

「道具と思っている、思っていないは正直俺はなんとも言えない。ただ俺は嫌だと言うだけで、それを責めるつもりは無いし、それを變えろとも言えないだから俺はこう言いたいんだ。最初から君達にとつて妖怪は道具だったのか？つて」

俺はチビ達を道具なんて考えたことは一度もない。毎日毎日一緒に過ごして、家族だと思つて過ごしてきた。だから疑問に思うのだ、どうして道具のように扱うのかと

「言葉を持たないからこそ、純粹なのだと思ふ。自分が心を開いて接していれば、向こうだって心を開いて接してくれる。信頼関係があるから言葉は必要とならないと思う」

チビ達と言葉を交わせたらなと思つた事が無いわけではない。だけど、そうじゃない、そうじゃないと思うんだ



「ずっと一緒にいたはずだ。どうして苦しんでいる事に気付けなかったのか？それはきつとカソ達の事をなんとも思っていないからだからと思う、大事に思っていれば、その変化に気付けた筈だから」

大事にされていた猫又やツチノコはご主人の方に見向きもしなかった。それはもう見限っていると思つていけば、少しでも思っていれば、今日来たばかりの俺よりもご主人の方を見るはずだから

「だから俺は今猫又とツチノコは返そうと思う。カソ達が帰るかどうかは俺が決めるんじゃない、カソ達が君達の所に帰りたいと思うかどうかだと思ふ。だからカソ達が帰らないって言うなら俺が引き取つて育てる」

ケージから猫又とツチノコを出すと、俺の方を見て鳴いてから自分の主人である生徒の元に跳ねていく

「俺が命令したわけでもない、冥華さんが命令する訳でもない。カソ達が帰りたいと思えば、君達の所に帰ってくると思う。俺から言いたいのは1つだけ、思い出して欲しい。最初にカソ達に出会った時の事を、どうして過ごしてきたのかを思い出して欲しい。そのときの気持ちを思い出せれば、きつと大丈夫だと思う。やり直す事は出来ると思うから」

俺はそう言うのと足元のタマモを抱き抱え、生徒達と冥華さんに頭を下げてから舞ちゃんと共に美神さん達の元に向かうのだった……

「じゃあ〜皆おいで〜、自分の使い魔と話をしてみ、自分達の所に戻つてくれるか〜試してみると良いわあ〜」

絶望的な顔ですれ違ふ生徒達を見て、やっぱり返して上げた方がと思つたが、嫌々世話をするくらいなら俺が面倒を見たいと思つた。嫌々世話をするならお互い嫌なだけだと思ふから

「横島。良かったわよ」

「ええ、よく考えたわ」

美神さんと蛭に褒められて気恥ずかしいものを感じながら、ケージから出たカソ達と対面している生徒を見つめる

【横島さんは使い魔の子が皆の所に帰る方が良いと思ひますか？】

「それを決めるのは俺じゃないと思う」

椅子に座り、チビ達の頭を撫でながらおキヌちゃんの言葉にそう返事を返す。もし信頼関係が築けていれば、きつとカソ達は生徒達の下へ帰るだろう。もしそうでないのなら俺が引き取って面倒を見る。その言葉に嘘は無い、嘘は無いが……

「餌代だけって支給ももらえます?」

「まあ考えてあげなくは無いわ」

「舞ちゃんも引き取るの手伝って上げてくれる?」

「う、うん。私は全然構わないよ?」

一気に増えるのでとても今の時給では養う事が出来ないの、餌代の支給を頼むと琉璃さんが舞ちゃんにもカソ達を引き取ってくれるように頼んでくれた。流石に面倒見切れない可能性もあるので、そう言って貰えて良かったと思う

「でも大丈夫だと思うわよ?ほら」

「うん。俺も大丈夫だったって安心してる」

ケージから出したカソ達の前にしゃがみこんで、ごめんねごめんねと泣きながら謝っている姿を見て、きつと大丈夫だと思った。きつとやりなお……

「……」

「へぶぅっ!」

……キョンシーがアッパーで女子生徒を殴り飛ばし、頭を蹴りながら仕方ないという様子で額に札を張るのを見て

「美神さん、皆やり直せると思うんですけど、俺の楽観的願望でしょうか?」

「……あのキョンシーだけだと思うわ」

……そうだと良いなあと思いつつながら、俺は六道女学院を後にしたのだった。なお後日チビ達の散歩中に冥子ちゃんに会い

「使い魔学科の子のく特別講師で暇な時で良いから来て欲しい〜ってお母様が言ってたわ〜」

と聞いて、俺は美神さんにどうすれば良いか?と相談する事になるのだった……

家のソファ―にちよこんつと座る舞ちゃんは両手でマグカップを持って、ちびちびとココアを飲みながら

「お姉ちゃん。私、東京に来ようかなって思う」

「私は嬉しいけど、良いの？」

姉妹でありながら別姓になってしまった事は悲しいが、それでも姉妹だから一緒に居れると嬉しい。だが氷室家の人達は良いのか？と尋ねる

「良いって訳じゃないけど、霊能者として頑張るならこっちの方が良いし、何よりナナシが負けっぱなしは気に入らないって言ってるし」

あーチビに負けたのに納得して無いって事ね。とは言え、ナナシに勝てるチビって本当に規格外よねと苦笑しながら

「判ったわ、氷室の家にはこっちから話は通すけど、いつくらいからにする？今学期終わってからにする？」

元々氷室の家の人も、霊能者として成長するなら東京の方が良いと言ってくれていた。だからそこらへんは大丈夫だと思うけど、何時位から編入するつもり？と尋ねると舞ちゃんはうんつと小さく呟きながら

「今学期が終わって新学期になるくらいに編入したいと思う」

「まあそれがベストよね」

向こうの人のとの別れの話もあるだろうし、それに急に編入って言うのも六道女学院に迷惑をかけるしね

「それでお姉ちゃんだけに言っておこうと思うんだけど、これ見えてくれる？」

舞ちゃんに差し出されたブレスレットを見て、思わず硬直した。凄まじいまでの神通力を放つそれを見て冷や汗を流しながら

「それどうしたの？」

「うん、氷室の神社の近くに捨てられた社があつて、そこに住んでいるシズって言う神様に貰ったの、名も地位も無い、神霊だけどガープが動いているなら危ないんじゃないかって思って、保護とかがって出来るかなあ？」

地位も名も無い神霊……ガープ側になられると危ない。それに霊脈やその神通力を利用しては大変な事になる

「今直ぐにじゃないけど、神魔に連絡してみるわ」

「うん、お願い。シズはちよつと意地悪いけど、優しい神様なんだ。ナシをくれたのも、シズなんだ」

ナナシをシズと言う神様から貰ったか……もしかするとナナシは妖精じゃなくて、その神霊の分霊かもしれないわね。だからこそそのあの強さなのかもしれない。そんなことを考えていると電話が鳴る

「ごめん、舞ちゃん。ちよつと静かにしてて？」

判ったという舞ちゃんにありがとうと言いながら電話を取る

「もしもし神代琉璃ですが？」

『会長。休暇中申し訳ありません、ただどうしても伝えておきたい事があります』

私に伝えておきたい事？私は手帳を手に取り

「メモする準備が出来たわ、それでどうしたの？」

『はい、オカルトGメンの日本支部の担当者の西条輝彦と言う方から連絡が欲しいと電話番号を預かっています。申し訳ありませんが、1度ご連絡を』

部下から聞いた電話番号をメモして、私は仕事の話と言ってリビングを後にして自室に向かい。そこで教えられた電話番号をコールした

『もしもし』

「部下から連絡を頂きました、GS協会会長神代琉璃です。西条輝彦さんでよろしいでしょうか？」

『はい。西条輝彦本人です。休暇中申し訳ありません、神代会長』

声からして20代後半って感じからしらね

「それで何の御用でしょうか？」

わざわざ休暇中に連絡してきた、その理由を尋ねると内密にお願いしますと言ってから西条さんは恐ろしい事を教えてくれた

『先日人間界に強烈な負の霊力と神通力を持つ神の反応が現れました。オカルトGメンはそれを誤認識とするつもりのように伝える気』

が無いようですが、その神通力の反応は日本へ向かっているようです。それと同時期に今度は計測不能の霊力を放つ5つの反応が日本に向かっています。ただ数秒で消えたのでこれも誤認識とするつもりなのですが……警戒を強めてください』

規格外の霊力の反応が6つ。日本では観測出来ていないという事は恐らくその反応があつたのは、ヨーロッパなどの日本から離れた場所だろう

「良いんですか？オカルトGメンがそんな事をリークして」

『良いんですよ。人間同士で足を引っ張り合っている場合じゃないですし、それに何よりも私はまだただの西条輝彦です。オカルトGメンの日本支部を任された訳でもないですしね？』

物は言い様ですねと苦笑すると、そういう事ですよと笑いながら

『私はこの件でオカルトGメンの上役をすりかえるつもりです、その為には……』

「日本で被害を出さない事ですね？」

もし被害があれば、日本のGS協会の不手際を責める材料になる。だからこそその連絡をしないと選ぶ選択を取ったオカルトGメンを攻撃する材料を提供してくれたのだ。このことには素直に感謝しかなく、それと同時に人間同士で争ってどうするんだと思わず眉を顰めてしまった

『難しい事だと思えますが、よろしくお願いします。ではここで』

「ええ、ありがとうございます」

受話器を元に戻し、私は今度はGS協会に連絡し、ドクターカオス製の先日搬入されたばかり霊波探知機を起動するように指示を出すのだった……

「先生、これで良かったんですか？」

「ええ、ありがとう」

日本から遠く離れたホテルの一室では、姿を見せないようにしている女性と受話器を手にしている男性の姿があつた

「しかし先生はご存命だったのですね」

「死を偽装したからこそ出来る事があるのよ、西条君。悪いけど私に

は時間が無いの、後はその指示書に従って行動して」

その言葉を最後に消えていく美知恵を見送った西条は机の上に並べられている資料に目を通し、美神と横島を見た瞬間。

「うっぐう!!!」

頭を押さえそのまま椅子から転げ落ち、しばらくの間苦しんでいたが、荒い呼吸を整えながら身体を起こした西条はもう一度その書類を見て、穏やかに笑いながら

「……葛の葉に……高島……そうか、そうなのか……神は私にやり直す機会をくれたのだな」

その言葉は先ほどまで美知恵と会話していた物と異なる響きを持ち、しばらくすると再び頭を振り

「なんで書類を落としているんだ？」

どうして書類が落ちているのか？そしてどうして椅子が倒れているのか？と言うことに疑問を抱きながらも、落ちていた書類を拾い、椅子を元に戻し日本に戻る前にと、もう一度書類に目を通し始めたのだった……

西条輝彦と神代琉璃が密かに動き出した頃。日本にはある存在が現れていた……

「ふむ、ではお前は余には従わず、単独で少しの間行動したいと言うのだな？」

赤と黒で作られたドレスを身に纏った少女の前に跪く袈裟を纏った老人は顔を上げることなく

「非礼にして無礼は承知の上、ここで4騎士に粛清されたとしても、拙僧にはやらねばならぬ事があります」

少女の後ろにいる4人組の殺気が強くなるが、少女は良いつと4人を手で制し

「構わぬぞ、だいそうじょう。余は許そう、ヘルズの馬鹿も笛吹きもおらぬし、マタドールに至っては離縁状を叩き付けて行きおった。あの時とは時代も、立場も違う。お前が成し遂げたい事があるならやつて見せよ、そして余を楽しませろ」

「御意。魔人姫様の温情に深く感謝いたします」

影に溶け込むように消えていく老人を見ていた少女は振り返り

「余の決断に何か文句があるなら申せ。されば、4騎士の任を解任しよう」

少女の言葉に文句などありませんと口を揃える4騎士に笑みを深めた少女は嬉しそうに笑いながら、高層ビルの縁まで歩いて行く

「美しい、人間はここまで来たか。良い良い、なあそうは思わぬか？女神よ」

「まあね。美しいわね、私は闇しか知らないから余計にね」

振り返った少女の視線の先には、フードつきのローブを身に纏った何者かが同じように人の営みを見つめていた

「して女神よ。お主は余と事を構える気か？」

「冗談。私は私の世界が無いから今自由なの、初めて手にした自由を楽しむ前に消えるつもりは無いわ。666の女帝と争うつもりなんて無いわ」

ビル風で何者かのフードが弾け飛ぶ、夜の中でも生える美しい金髪の少女を見たドレスの少女は笑みを溢し

「ならばお互いに不干渉と言う事で良いな？」

「構わないわ、女神は嘘はつかない。お互いに不干渉、それで行きましょう」

フードを被り直した少女はビルの上から飛び降りるとそのまま溶けるように消えて行った

「うむ、消えた女神が現界か、良い良い、それもまた楽しみよ。では行くか」

「「はっ！」「」」

そして少女と4騎士もまた闇に溶ける様に消えて行った。ガープ達と異なる、第三者が日本で動き出そうとしているのだった……

別件リポート 近づく新生へ続く

## 別件リポート

別件リポート 近づく新生

寺へと続く長い階段をゆっくりと上りながらも周囲の警戒を一切緩めない。ガープが一時拠点としていた場所だ、どこにガープの目が光っているか判らない

(スパイなんてばれたら洒落にならない)

今も魔界の過激派の会議に参加し、情報を集めているのだから三蔵法師と会談しているのを見られる訳には行かない。魔道具と魔術を併用して自らの存在を完全に消し、白竜寺へと足を踏み入れる

「お客様でしょうか？白竜寺になんの御用でしょうか？」

境内の掃除をしていた4人の少年のうちの1人。確か東條修二に声を掛けられる

「苜優太郎と言う、三蔵法師様に伝えてはくれまいか、貴女のお弟子に言われて参ったと」

「……判りました。少しお待ちください」

顔色を変えて寺の中に入っていく東條君を見ながら寺の中を観察する。

(高レベルの結界と護符……そして三蔵法師の存在がこの寺自体を要塞にしている)

ガープを警戒していたが、これだけの防衛をしていれば流石のガープも手を出せないと悟り、身体に入れていた力を抜いて深呼吸をする「お待たせしました。お師匠様が部屋に案内してくれと言っていますので、ご案内します」

「ああ。よろしく頼むよ」

緊張した面持ちの東條君に案内された一室に入ると法衣姿の三蔵法師が私を待っていた

「修二君。しばらくの間、この周辺は立ち入り禁止よ。後の事は雪之丞の指示に従いなさい」



判りましたと頭を下げ、掛けて行く東條君を見て微笑ましいなど思いながら、手にしていたアタツシユケースを机の上に置き。三蔵法師の前に座る

「まずは感謝を、あたしの無理を聞いていただき感謝します」

深く頭を下げる三蔵法師に少し驚いた。三蔵法師は英霊だ、本来ならば私と敵対する存在と言える、それなのに礼節を尽くす姿に正直好感を持ってた

「いえいえ、こちらこそ尋ねるのが遅くなり申し訳ありませんでした」

霊具などの調整で訪れる時間が遅れた事を謝罪してから、私と三蔵法師の会談は幕を開けるのだった

「あたしの頼みと言うのは、弟子の1人。陰念の霊力回復についてですが、何か手段はありますか？」

ガープの実験の被害者……出来る事ならば、私とて彼の霊能者としての復活の手助けはしたいと思っていた

「方法は2つと言ったところでしょうか」

「1つはあたしと同じですね？」

その問いかけにうなずく、時間をかけての治療。これが一番確実で安全だ。副作用の心配も無い、だがそれに本人が納得しないのならば残っている手段は1つだけ

「ここに陰念君に取り憑いていた悪魔を封じた眼魂と試作段階でどんな副作用があるかは判りませんが、ゴーストドライバーがあります」アタツシユケースを開け中身を見せる。横島君のゴーストドライバーと比べると若干黒が掛かった試作ドライバーと、札と鎖で封印した眼魂を見た三蔵法師は

「これを頂いて良いと？」

「はい、構いません。私よりも聖者である貴女の方がこれを封印するのに適しているでしょう、それに眼魂も持っているんでしょ？」

蛍から聞いたが、別の世界の横島君が来た時に三蔵法師が眼魂を持って行ったと聞いていると言うと持つっていると頷く

「私は道具は提供できません、ですが繰り返し返しますが、これは試作段階であり、どんな副作用があるかも判りません。それに稼動データも無い

から改良の余地も無い、陰念君を実験台とすることになりますが、靈力を得て戦う事は可能となりますが、その後どうなるかは一切の責任が持てません」

横島君の変身の事を考えると、そのデメリットは間違いなく深刻なレベルだから、使えとは言わない。言える訳が無い

「貴女がどうするか、全てを貴女に託します」

「責任重大ね……でも、頼んだのはあたしだから……預かります」

アタツシユケースに蓋をして、札を貼ってから押入れにしまう。出来れば使う事が無ければ良いのだがと思わずにはいられない

「ありがとう。どうするかはよく判断させてもらおうわ」

重荷を与える事しか出来なかった私を笑みで見送ってくれた三蔵法師に頭を下げ、私は白竜寺を後にしたのだった……

目の前で鈍い光を放つ鉱物を見て、大きく深呼吸をしながら背凭れに背中を預ける。今になって不眠不休の疲れが出てきた

「お疲れ様です。ドクターカオス」

「うむ、流石に疲れたの」

マリアやテレサの為に作ったメタソウルとは違う。勘九郎が今まで生きてきた記憶。身につけた技量に知識、その全てを受け入れるメタソウルの生成はワシと言えど骨だった。質量からしてマリアとテレサの倍以上だ。そしてそれを壊れないように生成するのは困難を極めたが

「これであいつも生き返れると言うものじゃ」

今は培養液の中で生きているが、外に出れば死んでしまう。生きているが、それと同時に死んでいる。それを救う手立てが出来た事に素直に安堵する

「しかし、ドクターカオス。名前や戸籍はどうするのですか？」

まあ戸籍上は死んだ事になるので新しい名前などが必要になるだろうが

「メドーサの下にすることを望んだ。ならば戸籍は必要ではあるまい

よ」

人造人間なのだから、寿命は関係ない。それに姿も形も体の機能も人間と同じだ、まあ流石に歳を取るのは無理だが、当人が望むのなら子供を生む事だって出来る、だが勘九郎がそれを直ぐに望むとは思えない

「姉の様に慕い、母のように尊敬するメドーサの側にいるのが望みなら、戸籍はむしろ邪魔じゃ」

人間として存在するのは間違いない勘九郎の進む道に邪魔になるだろうし、名前だつてきつとメドーサに繋がる物を望む。ならばワシはそれに口を出す権利は無いよと笑うとメドーサは「一つだけ聞いても良いですか？」と前置きしてから

「私とテレサに戸籍はありますか？」

その言葉に思わず笑つてしまひながら安心せいともう一度笑い「しっかりと準備をしておるよ」

横島と共にあることを望むメドーサと今はまだ判らないテレサ。だがいずれは戸籍は必要になると思ひ用意してあると笑い、大きく欠伸をして

「少し休む、起きたらアシタロスの元へ向かうぞ」

判りましたと返事をし、ゆっくり休んでくださいというメドーサにありがとうと声を掛け、ワシは深い眠りにへと落ちていくのだった……

「おはよう。久しぶりだな、カオス。ご飯食べれるか？」

起きて行くとテレサがそう尋ねてくる。メドーサと違い、少し男勝りな性格になりつつある事に、テレサも成長しているのだなあと実感しながら

「それほど腹が空いているわけじゃないからの、スープだけ貰おう」

ちやんとご飯を食べないと駄目だぞ、シズクが言つてたというテレサにテレサらしからぬ言葉はシズクの影響かと苦笑し

「ではおにぎりと漬物も一緒に頼むかの」

「ん、判った。すぐ準備する」

嬉しそうに炊飯器の蓋を開けるテレサに笑みを溢しながら、ワシは地下の研究所に籠もっている間の情勢を知る為にメドーサが残してお

いてくれた新聞に手を伸ばすのだった……

「わざわざありがとう、ドクターカオス。ちゃんとメドーサに伝えておきます」

「うむ、満月の日は近い。出来るだけ早めに頼む」

食事を終えてから散歩を兼ねてアシユの元へ向かいメタソウルの事を伝える。満月を2日後に控えているので、出来ればその時に来てくれるとありがたいと告げる

「それにしても、ずいぶんと焦っておるの？どうしたんじや？」

机の上に大量の資料や分析の機械が並んでいるのを見てどうした？と尋ねるとアシユは真剣な表情をして

「奇妙な神格を感じたんですよ、それも古代の神格です」

古代の神格……それを聞いて脳裏に過ぎつたのは1つ。そしてそれはアシユにとって因縁が深いはず

「メソポタミアか？」

「判りません。ですがそれに近い何かだと思っています」

判りませんと言っておきながら、その顔を見れば判る。恐らく既に確証を得ているんじゃないだろうが、それを口にしないうことは言いたくないという事、ならば問いただす事もあるまい

「ならばワシの助力が必要なきはいつでも声を掛けてくれ」

「……感謝します」

アシユの言葉にお互い様じやと呟き、ワシはアシユの拠点のビルを後にするのだった……

妙神山・人間界を交互に行き来しているメドーサが数日振りに妙神山を訪れるとそこでは

「折れるウー！折れるウウウウウ!!!」

「ゲームのしすぎで猫背です！武神ともあろう者が情けないッ!!!」

ハヌマンが見覚えの無い女の英霊に身体を折られていた。私は一体何が？と思いつつも、その横を通り過ぎようとして

「待ちなさい！あなたも睡眠不足と休養不足です！しっかりと休みなさいー」

「あ、ああ。心配してくれてるのか、ありがとう。でも休暇前に荷物を取りに来ただけだよ」

これから休む所さと言うと、その女はそうですかと柔らかく微笑み、ハヌマンの腕と足を取る。その姿を見て、私は巻き込まれまいと慌ててその場を後にするのだった

「メドーサ。お疲れ様です」

「ああ、お疲れ」

ここ最近やつと落ち着いて話を出来るようになった小竜姫に安堵の溜息を吐く、私が横島の警備と聞いて荒れに荒れていたので、本当に落ち着いてくれて良かったと思いつつながら

「じゃあ短いけど、休暇を取るよ。何かあったら連絡してくれ」

判りました、ゆつくり休んでくださいと言う小竜姫にありがとうと声を掛け、自分の部屋に向かう前にロンの部屋へ向かう

「ロン？いるかー？」

「ん？メドーサか、お帰り」

なんかお帰りって言われるのが多くなっているなと思った。今まではこんな事が無かったので新鮮な気持ちになりながら、部屋の中を見るとモグラは鼻提灯を作って寝ていたので仕方ないと笑い

「これ、横島の写真。寂しがつてると思ってた」

「おお、気遣い感謝します」

モグラは横島好きだからなと苦笑しながら、写真をロンに手渡し、今度こそ自分の部屋に向かう

「これって？」

机の上に置かれていたアシュ様の紋章入りの封筒の中を空け、その手紙を見た瞬間。私は荷物を慌てて纏めて来た道を引き返した

「メドーサ？どうしたんですか？そんなに慌てて」

せんべいを齧っている小竜姫に振り返ることなく私は

「勘九郎の最後の手術があるから付き添ってってくれて手紙が来てたんだよ！もう落ち着いてる時間は無いんだ！」

少し休んでから動くこうと思っていたが、最後まで私を慕って行動してくれた弟子の手術が近づいている今、どうしても落ち着くことなど

出来なくて、私はアシユ様に貰っていた認識障害のマントを慌てて羽織り、女の英霊にべられて、ギブツ！と叫んでいるハヌマンの横を駆け抜け、そのまま人間界へととんぼ返りで引き返して行き

「アシユ様あー！勘九郎がいるのはどこですか!?!」

「……メドーサ。まず落ち着け、明日案内する。今日は少し休め、お前がそんな様子では勘九郎も心配する」

その言葉に納得はしなかった物の、わかりましたと返事を返し与えられた部屋で目を閉じたのだが、眠る事等出来ず私は夜が早く明けろと思いつながら、ほんの僅かの時間身体を休める事にするのだった……

「新生の時はもう直ぐそこにまで迫っていた……」

リポート11 新たな一歩 その1へ続く

リポート11 新たな一歩  
その1

リポート11 新たな一歩 その1

横島が美神さんに冥子ちゃんから冥華さんに使い魔学科の特別講師と来てくれと言う話があったのでどうすれば良いですか?と尋ねると、美神さんの返答は以外にも良いんじゃない?だった。思わず美神さんの顔を見ると

「マルタが霊的格闘を見てくれるって言うたでしょ?それを見て貰って、帰りに少し指導すれば良いわ。横島君だってそんな指導って言われても何を言えば良いか判らないでしょ?」

美神さんの問いかけに横島はその通りですと頷いた。専門的な事を学んでいる六道女学院の生徒と一般の高校で勉強している横島では基本的に知識量が違う。だから特別講師なんて出来る訳が無い  
「マルタに指導を受けて、そのついでに使い魔との正しい付き合い方を少し教えてあげて帰ってくれば良いわ」

なんなら今日からでも良いわよ?と笑う美神さんに横島は頷き、それから

「蛍一緒に来てくれるか?」

その問いかけに私は迷うことなく、良いわよと返事を返し、バイクで六道女学院に向かうのだった……

「ふーん、令子から電話で聞いているから良いわよ」

マルタさんは私と横島の到着と理由を聞いて、良いわよ?と笑い、グラウンドの教師控え室に案内してくれた。しかしマルタさんはグローブではなく、ホワイトボードを用意する

「えつとどうしてホワイトボードなんですか?」

横島が手を挙げて尋ねるとマルタさんは笑いながら

「身体で覚えるのも大事だけど、頭で理解するのも大事だわ。時間も時間だし、今日は理論について説明するわ。理論と言ってもそんなに

難しい事じゃないわよ、基礎中の基礎よ」

そう笑ったマルタさんは霊的格闘の理論について説明を始めてくれた

「じゃあまず、横島。霊的格闘だけどなんで打撃で悪霊を除霊出来ると思う？」

「殴った衝撃でですか？」

「違うわよ」

思わずマルタさんと同じ言葉が口から飛び出した。確かに霊的格闘と言うけれど実際は格闘ではないのだ

「悪霊は自らを存在させるのに一定の霊力が必要なの。それが霊核つてやつで攻撃や、物を動かすのに使う霊力じゃなくて、もつと根底的なもの、今現世に存在するのに必要な霊力になるの、霊的格闘つて言うのは霊力を込めた打撃で存在するのに必要な霊力を削り、浄化するのが一般的ね。ここで教会の人間となると、拳に霊力を集めるのは一緒だけど、聖句を応用して打撃と共に浄化するつて事も出来るわ」

有名な所だと唐巢神父とか言峰神父ねと笑うマルタさんに

「じゃあ私達も聖句を覚えろとかですか？」

「うん？違うわよ？あくまで一例ね、それに付け焼刃の聖句なんて効かないわよ？」

まあ私は元々キリスト教だけどと笑うマルタさん。キリスト教のマルタ……聖女マルタを思い出すわねと心の中で呟き講義に耳を傾ける

「じゃあ信心の無い人間はどうするかと言うと霊視と組み合わせるの。悪霊の霊力の通り道を見極めて、其処に打撃を加えれば」

シュツつと鋭い風切り音と拳を突き出す音。信じられない事だが音が遅れて聞こえてきた、一体どんな動きをすればそんな事が出来るのだろうか？

「少ない霊力でも悪霊をぶちのめ……こほん、浄化できるのよ」

「姉さん、今ぶちのめすつて「気のせいよ」

横島の質問を強い口調で制したマルタさんは時計を見て、使い魔学科の生徒の事もあるから講義はここまで、今度は実践で教えてあげる



わと笑う、マルタさんにお礼を言って私と横島はそのまま使い魔学科の生徒の下へと向かうのだった

「あーどうも、冥華さんに言われて来たんだけど」

横島が教室に入った後に続けて入ると明らかに落胆した様子を見せる生徒がいて

(危なかったわ)

まさかこんな所に私から横島を奪おうとする相手がいるなんて

……横島1人で行かせなくて良かったと安堵した

「カソ達と仲良くなるので大事なのはやっぱり散歩だと思っただ」

「散歩ですか？」

「うん、散歩。俺は朝と夕方2回散歩に行つて、遊んでるよ？やっぱり運動は大事だから」

手帳に横島の言う事をメモしている生徒を見ながら、どこか抜けた事を言う横島に思わず苦笑してしまうのだった

「あと猫じゃらしとボールこれは必須。小さい子はハムスターの台車がいい、チビとうりぼーは大喜びだ」

「「猫じゃらし……？」」

横島の独特の価値観に困惑している生徒達にご愁傷様と思いがら、やはりこのままでは駄目だと思うのだった。お父さんと蓮華にも言われたけど、ここら辺でデートに誘うくらいいしないと！大きく深呼吸してから横島の方を見る

「あの子、横島」

「ん？何？」

臨時講師として猫じゃらしとボールの有効性(カソ・ヘルハウンド・ツチノコが大喜びだった)を証明し、横島を家の前に送った所で声を掛ける。どうした？とこっちを見つめてくる横島に心臓がバクバクと音を立てるのを意識しながら

「明日さ、2人だけで遊びに行かないかな？買い物とか付き合っただ欲しい……駄目？」

「全然OKだけど、2人きりってチビとかは駄目？」

……うん、これが横島よね。私知ってると思いがら

「出来れば完全に2人きりが良いな。それとも私と2人だけでデートは嫌？」

で、デート!?と上ずった声で返事を返した横島はしばらく100面相してから

「判った。じゃあ明日えつとどこで待ち合わせる？」

「駅前の噴水広場で」

判ったと言う横島に背を向けてバイクに跨り、私は慌てて家に帰り、蓮華の部屋に駆け込み

「明日横島と2人きりでデートする事になったから、服を！服を一緒に考えてツ!!!」

「よっしゃあー！姉さん横島を誘えたんだね！良かった！直ぐ準備しよう!!」

自分の事のように喜ぶ蓮華と一緒に服を選び始めたんだけど、この時は失念していたのだと思う、横島が1人で動くのにシズクが怪しくない筈が無いと言う事を……

まさか蚤にデートに誘われるなんて思ってたからおしゃれな服なんてないし、いつものGジャンとGパンで大丈夫かなあつと思いながらこれしかないのです、今後服を色々集めてみようと思いながら朝食の席で

「今日高校の同級生と遊ぶ約束をしているから出掛けてくる。悪いけど、チビ達はお留守番な？」

「みむう……」

「ふぎゅ……」

寂しそうにしている2匹とじつとこつちを見つめてくるタマモにごめんと謝る。シズクは味噌汁のお椀を机の上に置き

「……別にそれは構わないが、帰って来る時間は？」

見た目幼女に帰ってくる時間を聞かれる俺って何なんだろうな？と苦笑しているとノツブちゃんが呆れた様子で

【お前は横島の保護者か、子ども扱いは良くないぞ？】

ノツブちゃんの言葉にむっとしてしているシズクだが、それもそうかと

笑い、諭吉さんを一枚くれた

「日暮れまでには帰るから、じゃ、行って来る」

「みーむー」

「びぎー」

玄関まで見送りに来たチビとうりぼーに手を振り、俺は駅前へと走るのだった

「……さてと行くか」

【お前何する気じゃ?】

「……心眼も無い、チビも居ない、うりぼーも居ない、タマモも居ない……何かある。だから監視する」

【……横島。強く生きろ、良し、チビ、うりぼー、メロンパンを買いに行くぞ!チビノブはどうじゃ?】

「みむ!」

「ぶぎー!」

【のぶのぶ!】

その返事を了承としたノツブはマスコット軍団を連れてメロンパンを買いに行き、シズクはその身体を水に変えて姿を消したのだった

「ごめん、少し遅れた」

「ううん、全然大丈夫!行きましょう」

噴水広場で待っていた蛍と合流し、俺は蛍と一緒に買い物に出掛けるのだった

「んーこっち、んー駄目。やっぱ、こっち」

「あの?蛍さん?なんで俺の服を選んでいるんですか?」

蛍の買い物じゃないの?と尋ねると蛍はそれもあるけどと笑い

「横島はGパン、Gジャンが似合ってるけど、やっぱりね他の服も着て欲しいのよ。だから服を選んでるの、あ、これ良いわね。横島は黒は嫌い?」

いや、考えた事無いからわからんと言うと蛍は仕方ないわねと苦笑しながら

「じゃ、この黒のジャケットで決まりね」

「いや、高いぞこれ?」

ぱつと見ただけだが、1万は超えていたと思う。だからそんなに高いのはいらぬというとなんか

「合格祝いでプレゼントよ、それに横島の財布って基本シズクでしょ？」

「まあ、そうだけど。良いのか？」

全然大丈夫と笑う蛭に良いのかなーと思いつつ、嬉しそうにレジに歩いて行く蛭の背中を見て

(デートってこんな感じなのかなあ?)

デートって言う事がよく判らない、蛭の事は間違いなく好きだ。本当に好きだ、だけどいざこうして2人でいると手も繋げないし、ろくな話も出来ない。買い物とかじゃなくて、遊園地とか、映画ならまだ色々出来たかもしれないけど……このままで良いのかと悩んでいる

「じゃあ横島行きましょう！今度は揃いのペンダントでも買ってみる？」

そう笑って俺の手を引いて歩き出す蛭に、やっぱり何も言えなくて。俺は蛭の手を握り返す事しか出来ないのだった……

蛭に手を引かれて歩いている横島と手を繋いで嬉しそうに笑っている姉さんを見て、笑みが零れるがいつまでも笑ってはいらぬ

(もしもし父さん、邪魔者の気配は?)

(するね、しかも結構近いよ)

横島と姉さんの邪魔をする物を許す訳には行かない。今日はなんとしても私がそれを阻止しなければ

「乱入してぶち壊してやりたいと思うのですがどうでしょうか？」

「……お前のそういう所。私は結構好きだ」

それはどうもと危険な会話をしているくえすとシズクに向かつて境界石を転がす、それが2人の足元に転がった瞬間境界が展開される

「これは!？」

「……私が気付かなかつただと……!？」

「今日の姉さんと横島の邪魔はさせない」

自分達が気付かなかった事に驚愕し、次に恐ろしい密度の結界に驚くシズクとくえすに対してあたしは2人の前に立ち冷静な声で

「時間性の結界だ。夕暮れ時までには絶対壊れないし、脱出出来ないから大人しくして貰えるありがたい」

なんせ父さんの自家製の結界だ。水神と神魔に近い魔法使いとは言え突破出来る代物ではない

「蛍を姉と呼ぶ……なるほど、姉妹ですか」

「……ちっ。あげはの他に妹がいたか」

忌々しそうに言う2人の近くに座り、結界の発生装置を握り締める「時間で解除されるが、離れれば結界は解除される。だからあたしもここで監視する、その間に話をしようじゃないか」

姉さんが横島を好きなのは知っている。だけど直ぐ彼氏、彼女になるわけじゃない。だから初めてのデートの邪魔をしないで欲しいだけなんだと言うと

「それで付き合うことになったらどうするつもりですか?」

「そうなればあたしとしては凄く嬉しいけど、多分無い」

姉さんは横島と2人きりと言う状況に舞い上がっているから絶対其処まで頭が回らない。むしろ告白してゴールして欲しいと父さんと一緒に祈っているが、その確率はかなり低い。だからこそ今日のデートの邪魔はさせたくないのだ、姉さんの認識が変わるきっかけになると思うから

「姉さんは……少し残念なんだ」

あたしの言葉に何も言わないくえすとシズク。それは2人もまた姉さんが残念だと知っているとこの証拠でとても悲しくなった

「……お前は蛍の味方じゃないのか?」

「いや味方だよ? うん、味方。んでへたれる姉さんには刺激が必要だと思っっている」

むしろ姉さんの場合どうやっても自分で告白する流れにはならないだろうから

「だから少し姉さんを焦らせる位の人間は欲しいと思うのよ」

「この私を道化扱いですか、死にますか?」

怒っているくえすにそういうつもりじゃないんだけどと謝りながら

「とりあえず、奢るよ。何飲む?」

ちようどオープンテラスのカフェなのでメニューを2人に向けながら、あたしはそう笑うのだった……

シズクやくえすの邪魔があると思ったけど、それも無くて横島と一緒に入れてとても楽しかった

(ここで告白……は……無理かなあ)

横島とデートできただけで私は満足しきっている。そしてそこから先に進もうと思っていない、こんなんだから駄目と怒られると思うのだが、本当に満足しきっている。2人で買い物をして、馬鹿話をし、そして揃いのペンダントも買った。私がやりたかった普通の同年代同士のデート……ルシオラでは出来なかった事をこうして成し遂げる事が出来た。それに満足しきってしまったのだ

「夕日が綺麗だなあ」

「そうね、横島は夕日は好きだったの?」

蛍が夕日が好きだから好きになったと笑う横島に思わず顔が赤くなるが、夕日のおかげか横島がそれに気付いた様子も無い事に安心した

(ああ。やっぱり私は横島が好きなんだ)

好きで、好きで何よりも愛しくて何よりも大事で、自分だけを見て欲しいと思っているのに、それでは嫌だと自分勝手な事ばかり考えている。横島が横島だから好きなのだ、ちよつと助平だけど、誰よりも優しく、皆に優しい横島だから好きなのだ

(ここで告白をしたら、きつと横島はうんって言うてくれる)

自惚れる訳じゃない、横島が私に抱いている好意は私と同じ物だ。だから告白してしまえばきつとお互いに望むような関係になれるだろう……だけど、だけどそれでは嫌なんだと今回のデートで判ってしまった

(私はまだ見ていたいんだ)

告白すれば横島は私だけを見てくれる。それはきつとルシオラとしても蛸としても歓迎し、喜ぶべき物なのだ。だけど今はまだ早いと思ってしまうのだ、まだ自然体の横島を見ていたいと思ってしまうから……

(危機感を感じているのに、何を悠長な事を思っているのかしら)

くえすに、冥子さんに、おキヌさんに、シズク、横島を私から奪おうとする相手はこれでもかと居る。それなのにそれが楽しいと思ってしまうのだ、嫉妬して、羨ましいと思つて、自分の方がもっと好きなんだとそんな喧嘩をしたいと思つてしまったのだ

「おーい、姉さん〜？今から帰り？」

蓮華の声に振り返ると、くえすとシズクも一緒に居るのを見て変な組み合わせと思つた

「あ、そうだ。横島荷物を置いたら皆でご飯食べに行きましょう」

ここであつたのも何かの縁だからと言つと横島はそうだなと笑う、もう少しだけ、もう少しだけこのままで良いかと思いくえすとシズクも誘つて、家で待つていたチビ達とノツブを連れて全員で夕食に向かうのだった。なお帰宅後そう思っているというところ

「へたれ」

「良いじゃない！今日は楽しかつたんだから!!」

今日告白しなかつた事で蓮華とお父さんにへたれと言われて、やっぱり自分でもそうかなと思つていたので思わずそう怒鳴り返すと

「じゃあ今度は遊園地だね。デートの定番」

「あたしは映画が良いと思うよ」

次のデートの計画を立て始める蓮華と父さんに慌てて

「ちよつとーちよつと待つて！何でそんな話になるの!？」

「もつと慣れないと告白なんて絶対無理だと思うから」

声を揃えて言う蓮華と父さんにそんな事無いと言いたかつたが、また横島とデートと考えると顔が熱いほど紅くなり

「続けてデートしたら爆発しちゃう」

「何がッ!？」

乙女心とか、その他もろもろが制御不能になるといふと疲れたよう

に溜息を吐く蓮華と父さんは私の肩に手を置いて

「もう少し頑張ろうか？」

「……はい」

私は紅い顔を買った物袋で隠しながら何とかしますと返事を返すのがやっとなのだった……

時間は少し過ぎ、横島達がわいわいと外食をしている頃

「令子ちゃん、お願いがあるの〜」

アポイントメントも無しに尋ねてきた冥子にまた面倒事かしら？  
と思いつながら、内容によるわと言うと冥子は真剣な表情で

「難しい事は判ってるの〜私の我侷って言うのも全部判ってるの〜1週間。1週間だけで良いの〜横島君と螢ちゃんを貸して欲しいの〜」

横島君と螢ちゃんを？また六道の面倒ごとか思ったが違う、それは冥子の目を見たら判った

「今までは〜優秀って言われるGSや、名家の子が私の助手に来てくれたわ〜でもね〜その子達は私を邪魔者扱いしたの〜」

所長だからって言う名目で何も出来なかったのだと言う冥子の目には涙が浮かんでいた

「私は〜自分が駄目って判ってる。でも〜今のままじゃ駄目なの、令子ちゃんやエミちゃん、それに横島君達の足手まといになるわ〜だから私は強くなりたいの〜」

「それは判るけど、なんでそこで横島君と螢ちゃんなの？」

別に家の助手じゃなくても良い筈だと言うと冥子は2人じゃないと駄目なのと言いつつ切った

「他の人の助手だとしてどうしてもお母様の息が掛かるわ〜それじゃあ駄目なの、駄目なのよ〜それじゃあ私は変わらないの、六道の次期当主の六道冥子じゃなくて、

ただの冥子として接してくれる人じゃないと駄目なの」

なるほど、冥子は冥子なりに考えてるって事か……冥華おば様の指示なら断るけど、冥子自身の頼みだと言うのなら無碍に断ることも出



来ないか

「良いわ、新人研修で2人を行かせる。期間は一週間、それでいいわね？」

ありがとうと笑って涙を拭い出て行く冥子の背中を見ているとおキヌちゃんがひよこつと顔を出して

【良いんですか？2人に相談もしないで決めて？】

おキヌちゃんの言葉に2人に相談じゃなくて、横島君が私の事務所に来ないのが嫌なんでしょ？と言うと口笛を吹いて誤魔化すおキヌちゃんに

「いいのよ、今まで流されるままだった冥子が自分から動こうとしてる、ならそれは悪い事じゃないわ」

今は少しでも優秀なGSが欲しい、冥子は知識と技術があっても、それを使いきれなかった。そしてそれで良いとして来た、そんな冥子が自ら変わろうとするのならそれは間違いなく良い事だ。それに横島君と蛭ちゃんにとって良い経験になる、それに冥子に足りないのは自信だ。2人といれば何か変わるかもしれない

「でも明日からの除霊どうしようかなあ……」

ノツブと沖田ちゃんに助手を頼もうかなあつと呟きながら、私は横島君と蛭ちゃんの冥子の所への新人研修の書類を作るのだった……

リポート11 新たな一歩 その2 へ続く

## その2

レポート11 新たな一歩 その2

朝のチビとうりぼーの散歩の為に起きて顔を洗おうと思い自室を出る。すると目の前を掛けて行く小柄な影

「チビノブ?」

【のつぶ?のつぶのつぶ!】

頭に三角巾を巻いて、手には雑巾。腰にははたきと完全掃除姿のチビノブに声を掛けると、おはよーと言わんばかりに手を振るチビノブ  
「みーむうー!」

「ぶぎー!」

「うん、おはよう。シズクの手伝いか?」

チビとうりぼーの挨拶の後にはようと声を掛けると、チビノブは首から提げた何かを差し出してくる

「うん?何なに……メロンパン?」

【のぶのぶー!】

よく見るとお手伝いでサイン1つ、10個でメロンパンつとシズクの文字で書いてあった。3つシズクのサインが入ってるのを見て、判ったと頷き、忠夫とサインすると嬉しそうに笑い、首からまたその紙を下げて雑巾で廊下の掃除を始めるチビノブ

(……なんだろうな。俺の家って今後どうなるんだろう?)

美神さんの言う通り俺の家がどんどん魔窟になるのではないだろうか?と雑巾をスケボーのようにして滑っていくチビノブを見て、俺は初めて自分の家が大変な事になっていると自覚するのだった……

「今更じゃない?」

「今更じゃないか?」

「今更だと思っんですじゃー」

「やっぱり?」

朝のランニング中に合流した雪之丞とタイガーにも同じ事を言われてしまった。けどなあ、足元のうりぼーを抱き上げて

「でもこんなに可愛いんだぜ？」

「ぶぎゆうー！」

小動物の癒しのパワーを知ってしまおうと、そしてその円らかな瞳を見てしまおうと駄目なんだとうりぼーを蛍達に向けながら言うと、こっちにむけるなど言うので、そのパワーはやはり絶大だ

「多分、俺魔窟になっても良いから小動物は拾い続けると思う」

チビもうりぼーも喜ぶしと言うと、拾うなよっ！と言う雪之丞の突っ込みが聞こえたので、とりあえず嫌がらせにうりぼーに増えて雪之丞を取り囲めという

「止めろ！そんな目で俺を見るな!!」

「「「ぶぎぶぎッ」」」」

やめろおおおつと嘆く雪之丞を見ながら、俺は振り返り

「んで？俺と蛍と心眼に相談って何？」

珍しく朝のランニングに参加してきたタイガーが合流した時に俺達に相談だと言っていたので、それが何なのか？と尋ねると

「昔は出来た霊能が今は出来ないんですジャ、その事でどうすれば良いか教えて欲しいんですジャ」

珍しく深刻な顔をしているタイガーに、これは真面目に相談に乗らないかと思いい、俺は額に心眼を巻きながら姿勢を正したのだった……

ワツシの悩みは結構深刻だった。母国のジャングルで修行し、少しでも感覚を取り戻そうと思っていたのだが、ある程度は出来るのだが進展は無く、朝の横島さんのランニングの時間に迷惑だと思ったのですが、押しかける事にしたのだ

「昔は横島さんみたいに霊力の物質化が出来たんジャ。じゃけど、今はこの有様ですけん」

手首までを物質化した霊力で覆っているがそれだけだ、それを攻撃に転用出来るようには思えない

「俺はがーってやっとうーってやってるからなあ？」

「擬音じゃ判らんですじゃ？」

ワツシは横島さんみたいに感覚でやるタイプではない、何かアドバ

イスを求めたが、横島さんはすまん、力になれないと謝ってくる  
「イヤイヤ、ワシが急に押しかけたですから、気にせんで下さい」

何かのヒントになればと思っただけだからと横島さんに言っていると、心眼がワツシを見つめながら

「ふむ、心の持ち方ではないか？何か過去にあつたのだろうか？それがあるからこそ、霊力の集束が阻害されている」

ワツシの内面を見つめているよな、心眼の視線に思わず身震いがし、それから昔の事が脳裏によぎる

「大丈夫か？冷や汗出てるぞ？」

心配そうに尋ねてくる横島さんがこつちに手を向けてくるのが怖かった。横島さんはそんな事をしないと判っていたのに、恐ろしかった。慌てて立ち上がり、横島さんから距離を取る

「いや、大丈夫ですよのジャー。自分でもそんな気はしていたんジャ、こうして面を見て言っただけで貰えて良かったんジャ」

自分でも判っていた事だった。それを他人から指摘される事で、やっぱりそうだったのかと納得したワツシ

「また困ったら相談に乗って欲しいんジャー」

無理にそう笑い、心配そうにしている横島さんから逃げるようにその場を後にするのだった

（怖い、ああ……そうだ。ワツシは他人が怖いんじや）

ワツシは頑張った。村を襲っている悪霊から皆を守りたくて頑張った、だけど村の皆がワツシにしてくれたのは事は何だ？

悪魔だと攻め立て、石を投げ

お前のせいだとワツシを罵倒する村の女達

悪魔の子は死ねと追い立てる村の住人と全てが終わった後にやってきた霊能者……

（ああ……ワツシは怖いんじやなあ……）

横島さん達はそんな事をしないと判っているのに、その時の恐怖がワツシの心を強く蝕んでいるのだと……

（じいちゃん……ワツシは……ワツシはどうすればいいんじや……）

皆の助けになりたいという気持ちは嘘じゃない。でも今のままで

は助け所か足手纏いにしかならない……

「……ワツシは……どうすればいいんじや……」

やりたい事は判っている、それなのに恐怖で前に進む事の出来ない自分が情けない……ワツシは憂鬱な気持ちになりながらエミさんが借りてくれたマンションへと足を向けると

「タイガー。今日は朝から夜まで仕事なワケ、朝食を食べたら出発するわよ」

「……ありがとうございます」

ワツシが考え込みすぎてしまう事を知っているエミさんが仕事だから準備しろと言う。その言葉に感謝し、水で無理やり飯を流し込み、エミさんの車に乗り込むのだった……

なおタイガーが帰った後の広場では

「みむー♪」

「ぴぎゅ♪」

「この野郎！馬鹿にしゃがって!!」

高速移動するチビと大きくなったり小さくなったり増えたりするうりぼーに突かれた雪之丞が発狂し、なんとか捕まえようとしていたのだが

「みーむ!!」

「くそおおツ!!」

「ぷぎゅうっ!」

「んげいふっ!」

チビにおちよくられ、うりぼーに背後から突進され、完全に遊び道具にされていたりするのだった……

珍しく学校に来ていた横島さんと昼休み屋上で昼食を取っていると横島さんが気になる事があるんだけどと前置きしてから

「精神状態で今まで使えてた霊能力が使えなくなるとかあったりするの?」

横島さんに尋ねられた事に僕は少し考えてから

「ありえますね」

と返答をした。横島さんの質問。それは精神状態で霊能が使えなくなるのか?と言うものだった

「そもそも霊能とはその人の魂の力です、精神が弱っていれば当然力は弱くなりますし、発動しなくなる物もあります」

僕も半吸血鬼とコンプレックスを持っていた時は碌に力を使えなかったと言うと

「じゃあピート。お前はどうかやって克服したんだ?」

「時間としか言いようが無いですね。僕はこれでも横島さんの倍以上生きていますよ?」

精神が弱った事での霊能の使用不可。これは非常にデリケートな問題で、そして下手をすると一生治らない可能性もありますと言いなから弁当箱を置いて距離を取る

「なんでそんなに怯えているんだ?」

「いえ、アンちゃんとシルフィーの料理と思うと怖くて怖くて」

アンちゃん?と首を傾げている横島さんに、ああ、そうでしたねと笑っているとシルフィーが

「アンちゃんはお兄ちゃんの事が大好きな吸血鬼ハンター見習いの子だよ?」

【それは大丈夫なのか?】

心配そうに尋ねてくる心眼さんに、大丈夫だと信じたいですと返事をしながら身体をヴァンパイヤミストで霧にしながら蓋を開けると

【キシヤアアアアア!!】

「うわあああ!?!がお!?!ぼごおおおお!?!」

弁当箱の中身が奇声を上げて口の中に飛び込んで来た。弁当なのに熱いし息も吸えない。恐ろしい弁当の襲撃にやはり大丈夫じゃなかったと落胆する

「ピートおおおおお!?!」

「お兄ちゃん!?!」

横島さんとシルフィーの絶叫を聞きながら、僕は意識を失うのだった……

「美味しかったです」

「美味しかったの!？」

喉越しとか、その他もろもろなのは最悪だったが、味は良かった。横島さんが美味しかったの!?!と驚いてるけど、僕自身も美味しいと感じた事に正直驚いていた

「おかしいね? 私は普通に料理をしてただけど……?」

「え? シルフィーちゃんじゃないの?」

横島さんがシルフィーの料理じゃないの?と驚いているが、シルフィー自身はそこそこの料理は上手なのだ

「アンちゃんは料理は大して上手じゃないんですが、色々混ぜたがるんです」

「料理させないほうがいいんじゃないか?」

僕もそう思いますと苦笑しながら底に穴が開いている弁当箱に恐怖を感じながら、布巾で弁当箱を包むのだった

「じゃあ友達が呼んでるから、私は先に行くねー」

そう笑って屋上から出て行くシルフィー。父さんのおかげで以前までの暴走の傾向は一切無い

「横島さん、正直聞きますけど、今のシルフィーってどう思いますか?」

シルフィー本人がいないので正直に教えてくださいと横島さんはうーんっと唸りながら

「やっぱり違和感があるな」

襲ってくるのは嫌だったし、血を吸おうとするのには困っていたけど……今のシルフィーちゃんはなんか嫌だと言う横島さん

「そうですか……」

異界の神を呼び出そうとしていたから精神を封鎖したと聞いたが、やっぱり違和感を感じるのかと頷く

「なんでそんな事を聞くんだ?」

不思議そうになっている横島さんに僕はどうしても気になってと言いながら

「僕は実は不思議に思っていたんです。確かに横島さんは父さんを助けてくれましたし、僕達兄妹にも余り偏見がありません。それは嬉し

いですが、そこまで執着する物なのかと思うのです」

それが嬉しくて横島さんに恋をしていると思いはしたが、それだけではいくらなんでも理由が弱くないだろうか？僕と同じ時間を生きてきたが、シルフィーはそれほど惚れっぽい性格ではなく、むしろ恋愛否定派だった

【だがシルフィーの行動は正直目に余っていたぞ？】

「ええ、それは僕は思います」

初恋だからと言う言葉で簡単に片付ける事は出来ないと思う。僕自身も横島さんに強い信頼を抱いている事から何か、何かもつと別の理由があるんじゃないかと思ったのです

「もしブラドール島に戻る事があれば、調べてみようと思います。僕とシルフィーの過去に何か理由があるんじゃないかって」

それを調べればもしかするとシルフィーが横島さんに拘る理由も判ると思う。

「まー俺にそんなに迷惑が掛からなければ良いよ。別にシルフィーちゃんは苦手だけど、嫌いつて訳じゃないんだし」

「そう言つて貰えるとありがたいです」

横島さんと僕とシルフィーに何か関係性があるとは思えないんですが、何かあるんじゃないかと思うんですよねと横島さんと話をしていると予鈴が鳴り始める

「つとやべえ、急いで戻るぜ」

「そう……！」

慌てて走つていく横島さんの背中と重なるように何かを見た。ずつと前にこれと同じようなことがあったような……何だ？僕は今何を見た？

「ぼんやりしていると遅れるぞ？」

「え。あつーはい！今行きますー！」

横島さんの言葉に判りましたと返事を返し、後を追って走り出したのだがあの一瞬に見た何かはどうしても脳裏を離れる事は無かった。

（白昼夢……かな？）

寝ぼけていたのだろうか？と思いながら僕は教室に向かつて走り



出すのだった……

なおその日の夕方シルフィーにとってある運命の出会いがあった

「うーん、気になる」

横島が気になって仕方ないシルフィーはこっそりと横島の後を付けていたのだが

「駄目ですわ。なっていないですわ!」

「え!?誰!」

「横島様の隠密的にすら見える献身的な後方警備をしている者です! 貴女はなっていないですわ!ですから教えてあげます!隠密的にすら見える献身的な後方警備のやり方を!」

「え!?それってストーリー」隠密的にすら見える献身的な後方警備ですツ!  
「え、あ、は、はい!!」

運がいいのか、悪いのか、シルフィーは偶然清姫と遭遇し隠密的にすら見える献身的な後方警備について教えられる事になる。そして後日トトカルチョにストーリーキングヴァンパイヤ&ドラゴンつと言う初の連立の組み合わせが追加される事になる……

学校を終えた横島と合流して美神さんの事務所に向かうと、冥子さんが待っていて、また面倒事か思ったんだけど

「明日から1週間。横島君と蛍ちゃんは冥子の所に新人研修ね」

え?新人研修?私と横島の声が重なる。冥子さんを見るとおどおどしていて、大丈夫か?と不安になる。研修じゃなくて、私達が面倒を見るんじゃない?と思っていると美神さんが

「勘違いしてるかもしれないけど、冥子は優秀なGSよ?まあ……冥子は除霊はご存知失敗続きだけど」

「ひどいわ〜!!!」

「本当の事だから黙ってなさい。索敵・事前調査・霊地の浄化はGSの中でもトップクラスなのよ?」

えっ!?つと私と横島の驚愕の音が重なる。冥子さんと言えば式神暴走で大惨事と言う印象しかなかったんだけど

「そもそもねー、冥子を前線に出すのが間違いなのよ。冥子の本質は

フォローに特化してるからね。私とは真逆のタイプだから、2人にとつても良い勉強になるわ」

今後後方特化のGSと組む事があるかもしれない、だから今のうちに勉強って事ね

「横島君く螢ちゃんくよろしくね」

にこにここと笑う冥子さんによりしくお願いしますと頭を下げ、早速私と横島は冥子さんと共に美神さんの事務所を後にした

「所で冥子ちゃんの事務所ってどこにあるの？」

「私の事務所？無いわよ」

私と横島の動きが完全に止る中。冥子さんはにこにここと笑いながら

「前はあつただけど〜いつのまにか更地になってたわ」

それはぶつつんしたのが原因なんじゃ？本当に冥子さんの所で研修して大丈夫かしら？と不安が強くなった

「だけど〜大丈夫よ〜六道の屋敷の離れが今の私の事務所だから」

……冥華さんの膝の元で研修……凄く嫌な予感がするわね。とは言え、美神さんが決めてしまったから断る事も出来ない。私は不安を抱きながら冥子さんの後ろを歩くのだった

「えつと研修の時間は朝9時から〜17時で休憩1時間の7時間ね〜1日日当8000円になるわ」

研修契約について説明してくれる冥子さんの話を聞いているのは私だけだ、横島はと言うと

「や、やめえええ!!」

「わんわん!!」

「!!!」

「ぶもおおおお」

式神の中に埋もれていた。人外に好かれるのは知ってるけど、出来れば話をしている間は式神を召喚しないで欲しかった

「研修中にメインになるのは〜霊視による除霊現場の事前調査と〜GS協会からの依頼の霊地の浄化ね〜後偶に除霊かなあ〜」

美神さんと除霊する時は基本的に悪霊を倒す事がメインだ。アフ

ターフオローは初めてだから勉強をさせて貰いましょう、私と横島にとってプラスだから美神さんも研修をOKした筈だから、しっかりと勉強させて貰おう

「それとシズクちゃんとかチビとかうりぼーは当然連れて来ていいわ〜シヨウトラちゃんとかも喜ぶし〜」

「わ、判りましたああ……やめえ！本当に舐めるの止めてええええ！」

【私の攻撃が効かない！がんばれ横島！】

何を頑張るんだ!?!と叫ぶ横島に苦笑していると、離れの扉が叩かれる

「冥子はん、明日の……君達は……」

着物姿の鬼道政樹が離れに入ってきて、私と式神にもみくちやにされている横島を見て

「はいはい、話の邪魔をしない」

ぱんぱんっと手を叩くと式神は名残惜しそうに冥子さんの影に入っていく、私は荒い呼吸を整えている横島に駆け寄り、大丈夫？と声を掛けながら背中を撫でるのだった

「僕は今冥子はんの所で保護観察処分中であ……今回の研修にも参加するように言われてるんや」

晴れやかな表情で笑う鬼道先生。その顔は私の知っている鬼道先生の表情に近く、かなり落ち着いているように見えた

「えっと参加って言うのと、鬼道も勉強中なのか？」

「違うで、どっちかと言うと講師側やな。冥子はんを含めて」

保護観察の人間が講師？鬼道先生は私の疑問に気付いたのか苦笑しながら

「夜叉丸は流石に没収中やけど、僕は符術も得意なんやで？んで符術の講師を今冥子はんにしてるんや、興味があれば教えたるで」

そう笑った鬼道先生はまだやる事があるで、これでつと頭を下げて出て行った

「マー君に教わるんなら〜符術の講義もしてくれるって〜」

「符術って陰陽術みたいな物なの？」

横島がそう尋ねてくる、確かに札を使う面では同じ術って言えるけ

ど、厳密に言うとは違う。どうやって説明しようか考えていると冥子さんが穏やかに笑いながら

「陰陽術は自然の力を借りてく符術は自身の霊力を使うのよく陰陽術は制御が難しくて高出力、符術は制御は簡単だけど威力が弱いく簡単に言うとうく陰陽術がバイクでく符術が自転車なのよく小回りが利くから補助程度に覚えておくと便利かもねく」

判りやすい説明になるほどなと横島が納得している。もしかすると今まで駄目な所ばかり目についていたけど、冥子さんは恐ろしいほど優秀な人だったのかもしれないと私は冥子さんの評価を改めるのだった

冥子ちゃんの所で研修の話をし、夕食に誘ったんだけど、あげはちゃんと蓮華さんが待っていると言う蛍と判れて数分後

「横島様あー会いに参りました!!」

清姫ちゃんが突撃してきた。竜族のお姫様なのに、本当に良く抜け出してくるなあど苦笑しながら

「今からチビとうりぼーを迎えに行つて散歩に行くんだけど、一緒に来る?」

普段は駄目と行つても学校についてくるのだが、雪之丞と遊んで疲れたのか家に帰ると眠ってしまったチビとうりぼーを迎えに行つてから散歩に行くんだけど一緒に来る?と尋ねると

「行きますー!横島様から誘われるなんて感激ですわー!」

清姫ちゃんに苦笑しながら一度自宅に帰ると玄関でチビとうりぼーがリードを持って待機していた

「よし、散歩行くぞー!」

「みーむうー!」

「ぶぎゅー!!!」

嬉しそうに返事を返すチビとうりぼーの首輪にリードを付けて。

俺は清姫ちゃんと散歩に出掛けたんだけど

「よ、横島様あー!た、助けてええー!」

「ぶぎゅー!」

「うりぼー！ストップ！ストップだ!!!」

散歩がよつぽど嬉しいのか、全速力で走るうりぼーとうりぼーのリードを握っている清姫ちゃんの助けを求め悲鳴を聞いて、俺は必死に走りながらうりぼーに止るように声を掛け続けるのだった

「怖かった、怖かったです」

「ごめん、大丈夫だった？」

清姫ちゃんがリードを持つと言っただけで、まさかあんなに暴走するなんて思ってた。散歩開始数分後にエキサイト開始。そこからの全力疾走はめっちゃ早く早かった、まさしくロケットスタートと言わんばかりの勢いだった

「みーむーみみーむーみむッ!」

「ぴぎゅう……」

チビに怒られて文字通り小さくなっている。今後うりぼーの散歩は気をつけよう、あのダツシユ力は脅威過ぎる。そのまま逃げられるととても捕まえられるとは思えない

「怪我とかしてない？大丈夫？」

地面に座り込んでこつちを見つめている清姫ちゃんに大丈夫？と尋ねる。清姫ちゃんはぶくうつと頬を膨らませて、外見通りの素振りで怒った様に俺を見て

「足が痛いですわ」

ぶうつと頬を膨らませている清姫ちゃんの前にはしゃがみこみ、うりぼーの事を謝りながら

「おんぶで良い？」

「はいー」

嬉しそうな声と同時ににおぶさつて来る清姫ちゃんに苦笑しながら、うりぼーとチビのリードを手に俺は来た道をゆっくりと引き返していくのだった……なお家に帰った後一悶着待っている事を今の俺は当然知る由も無いのだった……

「……おか……なんでこいつがいる？」

玄関に迎えに来てくれたシズクだが、一緒にいる清姫ちゃんに眉を吊り上げ、清姫ちゃんは清姫ちゃん

「遊びに来たのです！そんな事も判らないですか？」

と煽りに煽りまくる。まさに水と油と言わんばかりに仲が悪い、2人におろおろしているとノツブちゃんがりビングから顔を出して

【とりあえず風呂に入って汗を流せ、その2人は……是非も無いね!!】  
お手上げと言うポーズをとるノツブちゃんに確かにその通りかとも  
と思

「……お前は横島の迷惑を考えない」

「まな板が何か言ってますね、何年経っても貧相すぎですね！」

「……そうか死にたいのか、覚悟は出来ているのか？」

「はっ！返り討ちですわッ!!」

文字通り火花が散っている清姫ちゃんとシズクの前を通り、俺はチビとうりぼーを抱えて風呂場へと逃げるように向かうのだった……  
なお俺の家が吹き飛ぶという自体は起きなかったのだが、風呂上りにお互いの頬を掴んでごろごろ転げ回っている清姫ちゃんとシズくと、  
吹き飛んでいる家の扉に俺が絶句したのは言うまでも無い

そして翌日

「なんでシズクと清姫がいるの？」

「いや、うっかり鬼道が居るって言ったたら着いて来るって……」

面倒事になったと天を仰いでいる蛍にごめんと謝りながら、背後で人を殺せるような眼光を放っているシズクと清姫ちゃんを見てどうしようと思いつながらも、解決策など出てくる訳も無く

「くう？」

「ぶぎゅ」

「みむー」

抱き抱えているチビ達に視線を向けて、俺は自分では解決出来ない問題から逃げるという選択肢を取り。鬼道が死なず、六道の屋敷が吹き飛ばない事を心から祈るのだった……

リポート11 新たな一歩 その3へ続く

## その3

リポート11 新たな一歩 その3

冥子ちゃんの所に研修に来ただけで、シズクと清姫ちゃんも同行してしまった。そして運の悪い事に出迎えに来ていたのが鬼道で2人を見て青色を通り越して白い顔の鬼道は

「真に、真に申し訳ありませんでしたッ!!!」

2人に対して土下座しながらの謝罪を始めた。見た目は幼女2人に土下座する青年とやばい姿だが、実際は2人は竜神だ。それを知っているからこそこの対応であるが、俺自身は罪悪感を感じていた

(俺のせいかな?)

(横島と言うよりか、過保護気味のシズクのせいね)

鬼道に悪い事をしてしまったと思うのだが、2人の怒気に口を挟むことなど出来なかった

「謝罪は受けません。鬼道の家を憎む事を私もシズクも止めないでしょう」

「……だがまあお前はまともなようだ。呪いはお前次第だな、横島を次裏切ってみろ」

「魂まで喰らってくれる!」

清姫ちゃんとシズクの凄まじい怒りの込められた一言に離れた所に居る、俺と螢も身震いした。鬼道はもつと恐ろしいだろうに、土下座の姿勢を崩す事も無く、また怯えた声でもなく

「肝に銘じます。鬼道の名を持つ者としての罪は負います。責任も受け入れます、そしてどうか見定めてください。そして僕が道を踏み外したと言うのならば……この魂と命を捧げましょう」

しゃんとしたその声にシズクと清姫ちゃんは少しだけ怒気を納めて話し合う

「……様子見だな。こいつは割りともともだ」

「ですね。鬼道の家的气狂いとは違うようですしね、横島様!何かありましたら教えてください、あの肉体を引き裂き、魂を喰らいますよー!」

全然良くないのだが、俺はシズクと清姫ちゃんの迫力にはいつと思わず返事を返してしまうのだった……

「横島君く蛍ちゃんくおはようくマー君顔色悪いけどどうかしたく？」

「いや。大丈夫や、冥子はん、僕の事は気にしんといて」

荒い呼吸を整えている鬼道にそうくと笑った冥子ちゃんは俺と蛍に書類を3枚手渡してきた。付き添いのシズクと清姫ちゃんとは言うとうと

「……難しい話をしているから少し待て」

「みむ……」

「ぴぎゅー……」

ちよこちよこ歩いてるチビとうりぼーを捕まえてくれているし、清姫ちゃんは懐かしいとでも言いたげな顔で

「元気でしたか？」

「わふっ！」

「そうですね。良かったですね」

シヨウトラの頭を撫でながら、俺には判らない話をしていた。一体何の話をしているのだろうか？なお元々大人しいタマモは俺の頭にしがみついている

「これねく今日事前調査をする所の資料よく2人には現場に行つて霊視をしてもらうわく」

事前調査？と俺が首を傾げていると冥子ちゃんはそうねくと笑いながら

「悪霊が生まれる前にく独特な霊波を放つのは知ってるく？」

「いえ。すいません、知りません」

「私は話だけは」

俺が知らないと言つて、蛍が話だけはどうと言うと冥子ちゃんは令子ちゃんは除霊専門だからねえくと笑いながら

「GSと言つてもく令子ちゃんみたいに除霊を専門にしてる人はく結構少ないのくアフターフォローや、土地の浄化とかで利益を上げるのく」



令子ちゃんみたいに1日に2回も、3回も除霊をする人は少ないのよ〜と笑う冥子ちゃん。そうなのか、研修と言っても、神宮寺さんの所では修行だったので他のGSの仕事の流れなんて知らないし

「それでね〜GSの中でもやっぱり戦闘に適さない人っているのよ〜ほら、これ見て〜?」

冥子ちゃんが差し出してきたのは写真入りのGS免許。よく見ると美神さんの免許と一部文字が違う

「補助除霊?」

美神さんのA級除霊なんちゃらだったと思うが、冥子ちゃんのはS級補助除霊師と書かれていた。ちなみに俺と蛭は研修中になっているのでその差にすぐ気付いた。あと免許証に金色が入ってる、俺の記憶通りなら美神さんの銀色だったと思う

「そう〜補助除霊〜つまり戦闘専門のGSのフォローをする人員って事よ〜これもGS免許の亜種で〜試験をやるのよ〜まあ私はシヨウトラちゃんとかもいるけど、基本的に〜後方支援なんだけど、お母様がねえ〜除霊の経験も〜って言うの〜これじゃあ何の為にS級の補助除霊の免許を取ったか〜判らないわ〜」

「冥子さんは性格的に戦闘に向いてないんや。除霊前の事前調査とかの達成率と正確性はほぼ100%なんやけど、それだけだと業界では生き残れないんやなあ……」

結構厳しい世界なんだな。GS業界って言うのは……知らないGSの一面を見て俺は厳しい世界なんだなと改めて知った

「話を戻すけど〜悪霊になる前の幽霊って言うのは独特の磁場を出すの〜それを霊視して、現れるであろう悪霊の数や、ランクを事前に調べお仕事よ〜慣れるまでは難しいけど〜大丈夫〜私がいるから、失敗しても大丈夫だから気楽に行きましょう〜?」

「まあ私もフォローするから大丈夫だぞ」

心眼と冥子ちゃんの言葉に判ったと返事を返し、鬼道の運転する車で1件目の霊視現場へと向かうのだった……

霊視の仕事かあ……こういう裏方の仕事もあるのね。横島と一緒に古いビルを見上げる、靈感に来るものは無いけど、本当にここに悪霊が生まれるのかしら？

「悪霊が生まれる前なら、今のうちに浄化すればいいんじゃないのか？」

横島が心眼にそう尋ねると心眼は苦笑したような素振りを見せてから

「磁場はまだ形成されていないが、それらしい物が生まれかけていると言う段階だ。この段階では除霊などは出来ないのだ、冥子余計な事を言ってしまったか？」

「ううん、別に良いわよ」

心眼が今日静かなのは冥子さんの修行の方針に口を出さないためか……今のは横島に聞かれたから答えたって訳ね

「今日は心眼じゃなくて、冥子さんに質問すると良いわよ？」

いつもの癖で心眼に尋ねると、冥子さんのやる事がなくなるからねと小声で注意していると鬼道先生が現場の見取り図を持ってきて

「現場は12年前に殺人があったとされる廃ビルや、事件の起きた時期が近いから悪霊が生まれやすいと推測されるで」

差し出された見取り図を受け取ると鬼道先生が現場の事前情報を教えてくれる

「冥子ちゃん、質問。時効が近いと悪霊が生まれやすいの？」

「ん、一概には言えないけど、時効が近くて、犯人の手がかりも無いとなると、悪霊になりやすいわ、犯人に対する憎悪とかでね、でも」

逆に犯人の手がかりを教えてくれる事もあるし、結構難しいところなのよ？」

と間延びした口調ながら適切な説明をしてくれる冥子さん。やはり六道の跡取りとしてその実力は本物だったのだ

「……まあ気楽にやれ。悪霊が出るわけじゃないからね」

「ただ幽霊に同情してはいけませんわ。憑依されますからね？」

シズクと清姫の忠告に頷き、私と横島は見取り図を見ながら、建物

の霊視を始めるのだが

「冥子ちゃん、霊視つてどうすればいいの？」

「あく横島君は其処からなのね？ 霊視は目に霊力を集めてく集中すればいいのよ。横島君は霊力のコントロールが上手だから、直ぐ覚えれるわ。それに香港で原始風水盤を見つけたんでしょ？ その時の感覚でいいのよ。」

そう言えば、横島には霊力の循環やコントロールは教えていたけど、自然に霊視をしていたから詳しく教えた事無かったわけ……冥子さんの所に研修に来てなければ気付かなかったかも……私は冷や汗を流しながら良かったと小さく呟いたのだった

「はい。じゃあ蛍ちゃんからね？」

私が霊視して見取り図を渡す。私の霊視ではビルの最上階に強い反応が1つ、2階に2つと、1階に1つと言う結果だった

「じゃあ今度は横島君ね。」

「あんまり自信ないですけど。」

不安そうに冥子さんに見取り図を差し出す横島。うんうんつと頷きながら見取り図を見ていた冥子さんは

「残念だけど2人も外れ。正解は最上階に強い反応が1つと微弱な反応が2つ、2階に2つと微弱な反応1。1階に0よ。多分1階だと勘違いしたのは2階の微弱な反応を探知しちゃったのね。」

まあ初めてなら上等よと笑う冥子さんは自分で調査した見取り図を私と横島に差し出しながら

「さ。次の現場よ。これはとにかく回数をこなしてコツを覚えるしかないわ。どんどん行くわよ。」

そう笑う冥子さんに判りましたと返事を返し、私と横島は再び車に乗り込み。次の現場へと向かうのだった……

冥子ちゃんに3件の現場に連れて行って貰ったけど、俺も蛍も1度も冥子ちゃんと同じ結果にならなかった。その事に溜息を吐いていると

「冥子はんの霊視はクビラの力が大きいからなあ。その正確性は桁違いやよ、まあそんなに気を落とさんとない」

符術の講義と言う鬼道の言葉にわかったと返事を返し、ノートとシャーペンを手にする

「じゃあ、符術について講義させて貰うで」

清姫ちゃんとシズクに怯えた素振りを見せながらも鬼道の符術に対する講義は始まった

「えつと符術には血液媒介はいらなくて事？」

「ああ、使わへんな。むしろ符術に血液媒介をすると霊力が多すぎて暴発するんや」

俺の陰陽術との違いを知って興味がわいて、質問する事が多くなった。俺は殆ど感覚で使っているが、頭で理解することでより高度な術を使える様になると言われれば、知識を増やす為に気になる事は質問したくなる。

「符術は言霊と剣指が重要になるな、慣れてくるとほい、こんな按配や」

鬼道が剣指を振るうと、鬼道の前に霊力の壁が作られる

「初歩的な防御符術やな、僕は式神使だから防御系の符術は結構覚えとる。攻撃はあんまりやな」

制御するのが難しい陰陽術よりもこっちの方を覚えるほうがいいのか？と考えているとシズクが

「……陰陽術をスケールダウンし、使いやすくしたのが符術だ。横島、お前が覚える必要は無いぞ？」

「ですね、元々強いほうを扱えるのですから弱い方を覚える必要は無いですわ」

ん、んーそれも正論だよな。俺が悩んでいると今度は心眼が

【清姫とシズクの言っている事も判るが、符術を覚える事で陰陽術のアレンジも利くかも知れないぞ？知識は力、無駄にはならない】

むむうう……いや、そんな事を言われても困るんだが……俺が困っているのを見て蛭が

「いいわ、私が覚えておくから、今度陰陽術と組み合わせてみましょう

？」

「ごめんなあ」

俺馬鹿だからこうしてメモしているけど、正直そこまで覚える事が出来ない。蛭に負担を掛ける事を謝っていると鬼道が

「いや、相性が悪い可能性もあるでな？横島君は陰陽術を使えるやろ？」

「あんまり使いこなしているとは言えないですけどね」

使えるってだけで使いこなしているか？と言われると疑問が残ると返事を返す

「シズク様も言ったとおり、符術は陰陽術の劣化版や、陰陽術の術式が横島君の頭の中にあるから、覚えにくいってのも考えられるで」

術同士の反発って言うんやつと説明してくれる鬼道。術同士の反発？と首を傾げていると、シズクがチビとうりぼーを連れて来て

「……これが術同士の反発だ」

チビが電撃を出しながら右手を伸ばし、うりぼーが光りながら牙を突き出すとばちんつという音がする

「チビは妖力、うりぼーは自然の力。似てはいるが本質が異なる、だから反発しあうのだ。磁石の同じ極同士と言う風にな」

心眼の解説になるほどなーと頷きながら、右手と牙が痛むのか頭を振っているチビとうりぼーを膝の上に頭を撫でていると今度は清姫ちゃんとシズクが前に来て

「ですが反発もしあいますが、混ざり合うのもまた力の特徴です」

「……こんな風にな」

シズクと清姫ちゃんが嫌そうに手を繋ぐと、霊視をしなくても目視出来るほどの力が2人から放出される

「プラスになるか、マイナスになるかは相性しだいって事なのね？」

「……そうなる、私も清姫も嫌だが、性格は絶望的に合わないが」

「竜気自体の相性は抜群なんです。火と水なんですけどね」

不思議ですわと呟く清姫ちゃんとシズクは再び俺の後ろに用意された椅子に座り、鬼道を観察するような視線を向ける

「術同士の相性って言うのは本当に難しいものなんや。とりあえず今

日は基礎の符術の詠唱と、劍指の動きを覚えてもらって、明日からは術を実際に使って実習していこか。これを使いこなすといろいろな事が出来るようになるんやで」

色んなことが出来るか……美神さんにも除霊の為に色々引き出しを増やしておけて言われたよな

「ちなみに色んなことってどんな事が出来るんだ？」

「そうやな、破魔札で言うて普通は投げるだけやろ？」

まあそうやって使うって虫にも美神さんにも教えられたと頷くと、鬼道はまあそれが基礎的やけど

「符術使いはこんな事も出来る、念を持って破邪を両断せんツ！急急如律令ツ！」

鬼道が詠唱しながら、左手で劍指を作り、空中に何かの文字を描くと握り締めた破魔札から霊力の刃が現れる

「破魔札の霊力を放出するじゃなくて、劍の形に固定した？」

「お、いい目をしとるな。そういうことや、ただこれは圧縮してるやなくて、放出されるはずの霊力を、劍の形にしてるだけやから……よつと!!!」

鬼道が数回振るうとその光は完全に消え去り、破魔札は黒くなっていた

「中の霊力を使い切ると、当然効力を失う。今のは1000円分やつたから数回分やな」

「でもそれだと使い捨てになるよな？」

俺がそう質問すると鬼道は満足そうに笑いながらホワイトボードに指の動きを書きながら

「もちろん使い捨てや、神通棍などと比べれば威力も低い、リーチも低い、安定性も無いと無い無い尽くしやけど利点もある」

その話を聞いていたではどう見ても利点なんて無いと思えるんだけど……

「悪霊の中には風を使うやつや、魔獣にはもちろん鳥型もおる。そういう相手に投げて届くと思うか？」

「あ」

俺と蛍の声が重なる。確かに今までそういう相手に遭遇した事は無いが、確かにそう言う妖怪もいるわけだ

「総じてそう言う妖怪は中位、もしくは上位固体で部下を持ってることが多い。そしてそういう部下は近接特化してたりするんや、そういう時に使えない破魔札を投げても意味は無い、なぜなら既に間合いを詰められてるからな」

一流所は精霊石を使うけど、皆が皆持てるわけじゃないし、精霊石が無い時の備えとして覚えておいた方がいいと言われ、なるほどと納得し、俺は鬼道の説明とホワイトボードの文字、そして図で描かれた指の動かし方を必死にノートにメモするのだった

「あ、ちなみに鬼道さん。明日の実習ってどうなるんですか？」

「んーとりあえず、符術での防御術を覚えて貰って防御する練習やな、攻撃は最大の防御って言うけど、僕はそう思わんし」

敵を倒すよりもまずは命を護る事。それが一番大事やと笑った鬼道は最後に帰りに厄珍によって安い練習用の破魔札を買おうと良いと俺と蛍にアドバイスして

「じゃあ冥子は人も戻った頃やと思うから、今日はどうするか聞いて来ると良いで」

じゃあ1週間頑張りやと笑う鬼道と別れ、俺達は冥子ちゃんの部屋へと向かいながら、今日1日勉強した事を思い返していた

「結構奥が深いんだな」

美神さんの所で結構勉強しているつもりだったけど、知ってる事よりも知らない事が多かった事に驚いた。美神さんの教え方が悪いのではなく、専門かそうじゃないか？の違いらしいが、GSと一言に言ってもかなり奥深い世界なのだと改めて知った

「そうね、結構知らない事も多かったわね」

冥子ちゃんの所に来たことで知った事が多いなと蛍と話しながら、今まで放置していたので構え、構えと鳴くチビやうりぼーとタマモに苦笑しながら帰ったら散歩行って遊びに行こうなあと声を掛けるのだった……

横島と蛭が冥子の所での研修を順調に始めた頃。ドクターカオスはと言うと

「慎重にな、ゆっくり、ゆっくりじゃぞ?」

「判っています。ドクターカオス」

自分の家では十分な電力と魔力を得る事が出来ないと言う事で、アシタロスの下で勘九朗の魂をメタソウルに移し変える為に慎重に勘九朗の眠る培養液と新しい勘九朗の身体を運び出していた。テレサでは細かい力の調整が出来ないと言う事で、マリアのみを助手としての行動だ

「しかし、写真で見ただけど、良くここまで治療出来たな」

「まあ運が良かったんじゃない、勘九朗の生きるという強い意志が奇跡的な回復を遂げたのじゃろう」

普通なら死んでいてもおかしくないが、ここまで生きる事が出来たのは単純に勘九朗の意思が大きい。そうで無ければ、ここまで来るまでに死んでいる

「今日は満月じゃ、メタソウルに勘九朗の魂を入れて復活させる」

「よろしく頼むよ」

心配そうに見つめてくるメドーサに任せておけと返事を返し、ワシはトラックでアシタロスのビルへと向かうのだった

「電力を、もう少し高めて……もう少し、良しストップじゃ。電圧はそのままにしてくれ」

「判りました」

ビルの地下で凄まじい放電をしている機械の調整とマリアとアシタロスに頼み。

「マリア、培養液の中の魔力量を-40、次に竜気と神通力をプラス15」

「了解しました」

新生させると一言で言ってもその難易度は文字通り桁違いだ。新生させると言っても人間として復活させるのではない、魔力と神通力と竜気この3つを複合し、消えかけている勘九朗の魂を修復してメタソウルに移す。少しでも間違えれば、勘九朗の記憶を持つ別物にな



る。めまぐるしく変わるグラフを見つめ、その魂の波長が人間の波長と重なった瞬間呪文の詠唱を行う

「万物は流転し、生は死、有は無に帰す者なり！ならば死は生、無は有に流転するもまた真たらんや!!!」

「ここまでは通常とおり、問題はここからだ

「この者、死へと至る者なれど！命を賭した行いに正当なる報酬を！わが祈りと魔の力より新たな肉体と命を与えん!!生命に形あれば形にもまた生命のあらん事を!!」

勘九郎の身体がびくんと動き、培養液の中から魂が抜け出る。そしてそれは導かれるようにメタソウルを露出している新しい肉体へと吸い込まれていく……

「後は……神のみぞ知る」

手ごたえは感じている。後は神がワシの行いを認めれば成功する筈……ワシ達が固唾を呑んで見つめる中

「うっ……くうっ……ん、ここは？私は……」

ゆっくりと身体を起こした女性の身体。意識はまだぼんやりとしているようだが……間違いない魂はメタソウルに完全に定着している

「成功じゃ」

魔力をだいぶ消費したので大きく深呼吸すると同時に倒れ掛ける身体をマリアが支えてくれる

「勘九郎。私が判るか？」

「め、メドーサ……様……ああああ……良かった、良かった。また会えました」

メドーサの姿を見て大粒の涙を流す姿を見て、アシユタロスに視線を向けると判ってますよと呟きながら頷く、ワシ達はメドーサと勘九郎の邪魔をしない為に足音を立てないようにその場を後にするのだった……

リポート11 新たな一歩 その4へ続く

## その4

レポート11 新たな一歩 その4

冥子さんの所で2日目の研修……なんだけど……目の前の光景を見て、本当に研修でいいのかなあつと思いきわらず冥子さんに尋ねてしまった

「冥子さん、これ本当に研修ですか？」

「研修よ〜？」

にこにこ笑いブラシでショウトラの毛を梳かしている冥子さん。蛭ちゃんもくと差し出されたブラシを手に私は思わず溜息を吐くのだった

「よーし、うりぼー。大人しくしてろよー？」

「ぴぎゅう……」

横島はこの研修を自然に受け入れていて、大きくなったうりぼーの毛を丁寧ブラシで梳かしている。その後ろではタママやクビラが順番待ちしており、ほのぼのとした光景なのだが、これで良いのか？と思わず頭痛を覚えた

「まー見た目は研修には思えんけど、意思のある使い魔や式神と仲良くなるのも探知系のGSでは重要な事なんやで？」

鬼道先生もブラシを手にしてハイラの毛並みを整えている。鬼道先生の言う事は判る、意思のある使い魔や式神と友好な関係を築くのも術者としては必要な事だ。だけど私使い魔いないし……どうすれば良いのよ

「えーと、じゃあブラシ掛けても良いかしら？」

「グルウ」

私の足元で吼えて蹲るメキラに私はゆつくりとブラシを掛けるのだった……

「じゃあブラシも終わったから〜皆で昼寝ね〜」

……昨日は凄い人だと評価を改めたんだけど、やっぱりこの人大丈夫かしら？と言う不安を抱きながらも、横島に呼ばれたので不満を言

うのは止めた

「ほら、蛍もこっち来いよ。うりぼーもふもふで気持ちいいぞ?」  
「ぶぎゆる」

巨大化したうりぼーに背中を預け、タマモとチビを抱きかかえ、心  
眼をアイマスク代わりにして眠る気満々の横島に溜息を吐きながら  
も、冥子さんが眠って良いって言うんだから良いかと思ひ横島の隣で  
うりぼーに背中を預け2時間ほど昼寝をするのだった……

なおうりぼーは高級羽毛ベッドよりもはるかにもふもふで尚且つ  
暖かく、自分でも予想以上に寝入ってしまうのだった……

目の前に座っている少女を見て思わず苦笑する。ドクターカオス  
の娘と同じ素体を使うと聞いていたので私と同じくらいの身長で、金  
髪の外人の様な容姿だと思っていたんだけど、黒い目に黒髪に150  
ちよいと言う小柄な身長と日本人のような姿をしている

「その姿でよかったのかい?」

「はい!私の理想通りです!!」

前の野太い声と違い、澄んだ少女の声にこれは暫く慣れないと駄目  
かもしれないねえと思わず苦笑する

「ふむ、どこかおかしい所は?違和感を感じるところは無いかの?」

「全然大丈夫です!ただ、ちよつと……前と距離感や視点が違うのが  
気になります」

まあ元が2M近い大男だったからね、急に150ちよいの小柄な少  
女の姿になれば違和感を感じるだろうね。とは言え、メタソウルとや  
らに魂を移し変えた後遺症かもしれないと思ひ、カルテを書き込んで  
いるドクターカオスに

「ドクターカオス。これは大丈夫なのか?」

「調査で魂の拒絶反応も無い、完全に一体化しておるし問題ないわい。  
少しリハビリすればもう歩けるようになる」

専門家の言葉に良かったと安堵の溜息を吐いていると、勘九郎が拳  
手をして

「あのメドーサ様。1つ質問よろしいでしょうか?」

「構わないよ。なんだい？」

私がそう尋ね返すと勘九朗はアシユ様の方を見て

「どなたでしょうか？ドクターカオスとメドーサ様と一緒に考えると、神魔とかの関係者の方なのでしょうか？」

……しまった。アシユ様のことをなんて説明すれば良いか考えてなかった、私とドクターカオスとマリアがどうしようか？と考えているとアシユ様は

「まあそんなものだね。余り私のことは気にしないでくれたまえ、私は少々訳ありだね。名前を名乗るわけには行かないが、そうだね……神魔であることは否定しない、それに今の人間界でもそこその発言力もある。君の戸籍とかも用意する準備が出来ている、その代わり」

「余計な詮索はするなと言うことですね？」

アシユ様の言葉を遮って言う勘九朗にアシユ様はその通りと笑い戸籍標本を取り出して

「二応こつちの方で名前としては蛇神（へびがみ）と言うのを用意した。後は名前だが……どうするね？」

アシユ様にそう尋ねられた勘九朗は少し考える素振りを見せてから

「クシナ、片仮名でクシナで、蛇神クシナでお願いします」

クシナと名乗る事にしたらしい勘九朗。迷う素振りも見せず名乗った事から、考えていたのかい？と尋ねると語呂合わせですけどと笑い

「勘九朗は死んで無いで、九・死・無でクシナです。おかしいでしょうか？」

「いや、おかしくは無いよ。良いんじゃないかな？」

日系ハーフと言うことすれば全然問題ないし、私の義娘とするには丁度良いかも知れない

「では蛇神クシナで戸籍を作っておこう。私は他にやる事もあるので失礼する、あとはメドーサとドクターカオスに聞いて行動するとい

そう笑って出て行くアッシュ様を見送り、勘九朗……じゃなくてクシナに

「じゃありハビリに行こうか、早く白竜寺にも帰りたいだろう？」

「はい！メドーサ様、ドクターカオスさんにマリアさん。よろしく……つとお願いします」

勢いよく立ち上がるうとして、尻餅をついたクシナに苦笑しながらドクターカオスとマリアはよろしくと笑いかけ、私は手を伸ばして「ほら、立ちな。私に着いて来るんだろ？」

「はい！少し時間を頂きますが、直ぐに追いつきます！」

なんの揺らぎも無い、私の対する100%信頼の視線を向けてくるクシナをドクターカオスに預け、2日後にまた来ると言って私はアッシュ様のビルを後にし、ブリュンヒルデと情報を交換する為に連絡を取るのだった……

神界と魔界から送られて来る書類に目を通し、思わず小さく溜息を吐いた。

「やはり護衛の配備は時間が掛かりそうですか……」

横島の護衛として私が人間界に常駐しているが、横島の護衛を代わるだけの人材がないと言うのがお父様の返答だった。ジークは神界との交渉および、同じ部隊に配属しスパイや怪しい者を探し、ワルキューレは美智恵と言う時間移動能力者と監視と護衛を勤めている。神界から派遣された三蔵法師は白竜寺の再建。聖女マルタは六道女学院で戦力になりそんな人間の見極めと、尋ねてくる横島を鍛えると言う業務についている。直接護衛としておいておけるのが私だけとは……やはり判っていた事だが、神魔はアスモデウス陣営に対して完全に出遅れている

(それだけ信頼出来る部下がないと言う事ですか)

ガープの使う狂神石。それによって正気を失う者、過激派のスパイとして活動する神魔も居る。状況は一向に良くなる兆しが無い、私を残しておくのは一重にルーン魔術でこうして離れていても横島の現

状を知る事が出来るからだろう

(このまま人間界で書類整理をしながら護衛と言う名目の監視ではない意味が無いですね)

独断になるかもしれないですが、直接横島を鍛えておいた方が良いかも知れない。短期の護衛と思っていたので必要以上の接触は避けたいましたが、ここまで長くなるのなら直接横島を鍛えておいた方が良いかも知れないと考えていると、突如部屋の中に魔法陣が浮かび上がる。とつさに身構え

「ベルゼブル閣下？大丈夫ですか？」

明らかに疲労困憊と言う様子のベルゼブル閣下が姿を見せる、珍しい事に鎧姿ではないので素顔と女性と言うのが判る服装をしている

「……すまないが、胃薬と水をくれ」

「判りました」

ルシファー様にまた何か押し付けられたのだと理解し、私は直ぐに医薬品の箱の中から胃薬を取り出すのだった

「すまない、いきなり押しかけてきて」

「いえ、別に構いませんが……どうしたのですか？」

魔界の重鎮たるベルゼブル閣下がどうして人間界へ？と尋ねるとベルゼブル閣下は知らないのかと呟き

「ルイ様が横島を気に入ったという理由で私個人を横島の護衛にな」

「心労お察します。なにか甘い物でも召し上がりますか？」

本来なら魔界の重鎮であるベルゼブル閣下を人間界に置くなんて事は許されない事ですが、ルシファー様の指示ならば断る事など出来るわけが無い。心労も凄いと思ひ私は今度はチョコレートを取りにキッチンへと向かうのだった……

「なるほど、天界から英霊が2人来たが、直接護衛ではないのだな」

「ええ。やはり直接護衛につけると言うのも難しい問題でして」

横島にバレず、間接的に護衛するという形にどうしてもなってしまう。横島の学校に教師として潜り込もうにも横島の学校には霊能科がない、生徒としてもぐりこむにも……

「その年齢と言いますか」

「皆まで言うな」

はいつと頷く、年齢的にも学生として潜り込むのも無理。ルーン魔術による遠隔護衛と言う形になっている

「私は必要以上に干渉はしない、ただ部下からの情報を届けに来る。それで良いな？」

「はい、十分です」

ベルゼブル閣下に直接護衛をして貰う訳にはいかないですし、動き回られてもガープの注目や神魔のいらぬやつかみを受ける事になるだろう。それならば護衛と言うよりもベルゼブル閣下の広い人脈を生かしての情報収集をして貰うのがベストだろう

「多分ルイ様が動けば、生徒として潜り込めと嬉々として言うだろうからな……それまでは休暇と思つて、あちこちの土着の神の所でも行ってくる」

「……あの、それも少々厳しいのでは？」

判つてると深い溜息を吐くベルゼブル閣下。鎧姿の時は2M強だが、鎧の無い時は120ちよい……高校生としてもぐりこむのも難しいだろう。だがルシファア様の事だ、無理やりでもねじ込む方法を考えるでしょうね

「ではな……また何かあれば立ち寄らせて貰う」

「お氣をつけて」

暗い影を背負っているベルゼブル様にかける言葉が無い私は、お氣をつけてと呟く事がやつとなのだった……そしてそれから数分後メドーサが尋ねて来て

「勘九朗の魂をメタソウルに移し変えるのが終わったんだ。これから2人で向かう調査の後で良い。悪いけど、1度見に来て貰えるかい？」

魂の定着と新しい身体に適合する為にルーン魔術を使って欲しいというメドーサの頼みに構いませんと返事を返し、出掛ける準備を整えながら

「しかしそれなら先に見てもいいのですよ？」

「いや、ドクターカオスが様子を見てる。それでも駄目ならって話だ

から」

ドクターカオスでも駄目な場合な保険と言うことですが……しかしドクターカオスなら心配ないですよと笑う。あの人はとても優秀な科学者だ。なんせあのお父様が智の探求者と認めた相手だ、その知識と技術は神魔に匹敵するのだから

「それでメドーサ、今回の調査の場所は？」

「日本の各地で古い神の神通力が探知されてる、それが何者なのかの特定だ」

古い神ですか……それは正直2人で当たるのは厳しいですが、仕方ありませんね

「願わくば話の通じる神だと良いですね」

「全くだ」

同じ神魔といっても現代の神魔と古き神魔ではその本質は全く異なる。根本的から強さの基準が違うのだ

「とりあえず調査は調査だ、交渉でも討伐でもない。痕跡発見したら回収して分析さ、そこまで緊張する事も無いと思う」

それしかないですねと笑い、私はメドーサと共に古き神魔の搜索へと向かうのだった……

求めていた女性の体をやっと手に出来た。それに対しては喜びしがなく、辛いリハビリも全く苦ではなかった

「ふむ、どうじゃ？ だいぶ感覚に慣れてきたか？」

カルテを手に行っているドクターカオスに首を振る。早くメドーサ様の役に立ちたいという気持ちはあるのだが、気持ちに反して身体が着いて来ないのだ

「まあ身体が変わってまだ1日じゃ。馴染むまで時間も掛かるだろう」

別人と言うほど骨格が変わっているから魂が馴染んでいないのじゃろうと笑うドクターカオスに思わず溜息を吐く

「焦る事は無い、魂は完全に定着している。後は魂が身体の動かし方を覚えれば良い」



「何かヒントとかは無いんでしょっか？」

今の私では握力は0か100。と言う風に全く調整が聞かない、歩いているつもりでも走ってしまうという風にちょうど良い力加減が出来ないのだ

「クシナさん。それはドクターカオスよりも私の方がアドバイスできると思えます」

「マリアさん……お願いするわ」

私とは違うけれど、メタソウルを持つマリアがアドバイスをしてくれるというのでその言葉に耳を傾ける

「大事な事は1つだけ、1つだけです。何をしたいのか？何を望んでいるのか？それが一番大事なのです」

「何をしたいか？何を望んでいるのか？」

それは迷う事も考えるまでも無い、メドーサ様の役に立ちたい。それだけですと言うとマリアさんはそうじゃない筈ですと断言した

「それでしたらもう貴女は自分の思うように身体を動かさせている筈です。確かにメドーサさんの役に立ちたいと思っっているのかもしれない、しかしそれは貴女の意味による物です。魂から望んでいる物、それが必要なのです」

私が魂から望んでいること？……メドーサ様に役に立ちたいそれだけじゃなくて、もつと魂から望んでいること？それが何なのか必死に考えているとマリアさんは穏やかに笑いながら

「私はとても好きな人が居ます。人間ではない私ですが、その人と共にありたいと願っています。だからこの人間と同じ身体を得ました」  
「それは……もしかして横島の事？」

マリアさんと話す機会はそれほど無かった。マリアさんから横島の名前を聞いた訳でもない、ただその顔を見ていたら横島の顔が思い浮かんだのだ。そう指摘するとマリアさんは顔を紅くし俯きながら小さな声ではいつと呟いた

(……なんて綺麗なの……)

赤面し、恥ずかしそうにしているその顔が何よりも美しく、そして綺麗に見えた。

「私はあの人がとても好きなのです。共にありたいと心から願っています、それだけを考えて私は今の新しい身体に慣れました」

時間はそれほど掛かりませんでした、ただ横島さんの事を考えているだけで私は上手く行きましたと恥ずかしそうに笑うマリアさん

(恋心ね……)

確かに恋心は乙女の最大の武器だ。恋をしているだけで、その少女は光り輝くと何かの本で見た気がする

(私が本当にしたいこと……)

メドーサ様の役に立ちたいと願うのは私の意思。じゃあ私が何をしたいか……

「きつとある筈です。クシナさんがここまで生きたのもその願いがあったからではないのですか?」

生きる為に私が考えていた事……それを言われて脳裏を過ぎったのは白竜寺の皆の姿だった。それを思い出した瞬間、すんと胸の中に何かが嵌った様な気がした……

「ああ。そうか……そうだったのね……」

親から捨てられた子供、親も知らぬ子供、それが白竜寺の面々だった。私のように両親を知っているが、両親……特に父親と仲が悪く、霊能者となる為に白竜寺に預けられた子供は少なかつた。殆どが孤児院の生まれや、霊能者と言うことで親から捨てられた子供だった

「そうだ……そうだったんだ」

元々私は性同一性障害と言われ、一族の恥として父親に罵倒されて育った。唯一私の理解者であり、そして父にとって利用価値のあった母が死に。その後は直ぐに白竜寺に預けられた……母の遺影と位牌と少しの着替えだけを手に白竜寺に来たのは14歳の時。優しく迎え入れてくれた先代の住職様……母の遺影と位牌に手を合わせている時に幼い弟子に聞かれたのだ

【お母さんってなに?】

とその言葉を聞いて、呆然としそして住職様にその理由を尋ね愕然とした

【一般家庭で生まれた霊能者は親に捨てられる率が高い、親が一般人

だからこそ霊能者を理解出来ない、そう言った子供は生まれて直ぐ孤児院に預けられ、全国の霊能者を育てる施設に預けられる。ここまで言えば判るだろう、ここ白竜寺も例外ではない。親を知らぬ子供がこの大半を占める、残りは親に暴力を振るわれ逃げた者。お前のように霊能者として修行するために預けられると言う者は少ない」

その言葉を聞いた私は思ったのだ、この子達の母親になりたいと思っただのだ。家ではおかしいと罵倒され、病気だと罵られ、庇ってくれた母を失えば修行と言う名目で捨てられた。父に言われるまま自分はおかしいと思っていた、だが白竜寺に来てずっと自分の中に押さえ込んでいた物を開放する機会を得たのだ……

「ああ……そうか……私は母親になりたかったの」

カルテを手に行っているドクターカオスとマリアさんが母親!? って叫ぶのが聞こえるが、そんな事はどうでもいいのだ。私が望んでいたのは

「そうよ！ 私は母親になりたかった。だから女の身体が欲しかった!!」

女の身体になるために魔装術を極限まで極めるという道を示してくれたメドーサ様に心酔した、最初はそれだけだったが後にその強いあり方に、誇り高い姿に心酔して行っただのだ。

「あのクシナさん？ 母親って？」

「ありがとう！ ありがとう！ マリアさん!!」

一番大事なことを思い出した。私の本当の願いを思い出したのだ、確かにメドーサ様は尊敬している、これは変わらない。だけど私の本当の願いを思い出せた

「ありがとうドクターカオス、マリアさん。答えを得た……私はこれから頑張っていけます」

答え!? 答えが母親ってどういう事と叫ぶマリアさんとドクターカオスを無視して、私は自分自身の本当の願いを思い出せた事に安堵し、心の底からの笑みを浮かべたのだ……

なお後日。神々の搜索を終えたメドーサが戻った時、クシナが白竜寺に向かいたいと頼み込んだのは言うまでも無い……

一方その頃冥子の所で研修をしている横島と蛍はと言うと……

「美味しい！冥子ちゃん料理上手なんだな」

「うん、料理とか、裁縫とか、お花とか、そういうのは得意なのよ」

夜も勉強をしようと言う事で六道の屋敷に泊まる事になり、冥子の手料理に舌鼓を打っていた

「ぴぎゅー、ぴぎゅー!!」

「みみむ」

チビとうりぼーもグレードの高い、新鮮な果物に大興奮しており。

12神将と共に仲良く、そして楽しそうに食事をしていたのだが

(うつ……これも負けてる、あつちも……れ、レベルが違う……)

蛍は冥子の普段のぽわわわして、見ている大丈夫か？心配になる冥子が作ったとは思えない、グレードの高い料理に半分涙目になっていた……

「食べ終わったらまたお勉強ね、♪今度はビデオで、霊視のお勉強よ」

冥子の言葉に頑張りますと返事を返す横島を見つめながら、蛍は深く、深く溜息を吐くのだった……それは敵として考えていなかった相手が恐ろしいほどの戦闘能力(母性)を持ち合わせていた事を知ったからの物だろう……

リポート11 新たな一歩 その5へ続く

## その5

レポート11 新たな一步 その5

冥子さんの依頼の大半は調査と言ってもそれだけではGSとしての活動が認められないので、今日は久しぶりに除霊に訪れていたんだけど……予定の除霊開始時間を大幅にオーバーしてしまっている

「ああ……怖いわ〜私除霊とかやりたくないのよ〜」

「大丈夫ですって、冥子ちゃんなら出来るよ」

横島が頑張りましょうと声を掛けているのだが中々車から降りてくれない、思わず溜息を吐いてしまう。鬼道先生はここまで送ってくれたけど、まだ保護観察処分なので正式な除霊に参加する事は出来ないで私と横島と冥子さんとチビとうりぼーでの除霊だ

「う〜判ったわ〜私頑張る〜」

「頑張ろう。冥子ちゃん」

横島の説得でやつと車から降りてくれた冥子さん、これからねと思いを降りようとすると思道先生が

「冥子はんは横島君が居るからちよつと甘えとるんや。こういうときぶつつんしやすいで気をつけたって」

判りましたと返事を返しはしたが、横島がいるから甘えてるってどういうことよ……あの私達より年上でしようよと思いなながら除霊現場へと足を踏み入れるのだった……

「きやくきやくやだやだ〜!!!」

「冥子ちゃん!落ち着いて!お願いだから落ち着いて!!!サンチラとアンチラも暴れない!!!」

「これあれよりも先に式神にやられるわよ!?!」

浮遊霊の除霊だったのだが、それがこの廃墟の中で死んでいた動物と融合してケルベロスもどきになったのを見てパニックになっていく冥子さんを必死に宥めているのだが、パニック状態の冥子さんには言葉が届かない。ケルベロスもどきと式神の攻撃に悪霊の前に味方の攻撃で重傷を負いそうだ

「蛭、言葉で説得するのを諦めろ！気絶させるんだ！」

「判った！」

心眼に言われるまでも無く、このままでは駄目だと思っていたので  
すいませんと謝ってから、冥子さんの額を掴んで霊力を流す

「はう!？」

外から霊力をチャクラに流された事で気絶した冥子さんを抱き抱  
える、式神も冥子さんが気絶したから消えているがああケルベロスも  
どきは残っている

「横島！冥子さんを運んだら手伝うから、少しの間頑張つて！」

チビとうりぼーと心眼に陰陽術。これだけあれば動物の死骸に憑  
依した悪霊と戦っても時間稼ぎが出来る、そう思い横島にそう頼むと  
うりぼーが

「ぶぎゅう!!」

自分が戦うと言わんばかりに前に出る。そして横島を見て指示を  
くれと言わんばかりの表情?……とにかく表情だと思う。やる気  
満々と言うのがよく判る、うりぼーは増えるし、大きくなるし、ケル  
ベロスもどきなら楽勝だろう。横島もそれを理解したのかよしつと  
頷き

「良し！うりぼー！ビームだっ！」

「ぶぎゅ……びぎゅう!？」

「ビーム!?なんでビームなの!？」

突進とかじゃなくてなんでビームなの!?!私の突っ込みとうりぼー  
の困惑した声があるが横島は力強く頷きながら

「出来る！うりぼーなら出来る！」

「みーむうー！みみむー!!」

謎の信頼とチビの声援。そして向かってくるケルベロスもどきに  
うりぼーは困惑した素振りのまま、ケルベロスもどきの方を向いた  
……そして

「ぶーぎゅー……ー……ツ!!!びぎいっ!？」

「ビーム出た!？」

うりぼーの牙の先に霊力が集まり、そこから打ち出された光線がケ

ルベロスもどきの頭を吹き飛ばす。まさかの攻撃に断末魔の悲鳴を上げる暇も無く消えたケルベロスもどきに私は絶句し、うりぼーは自分自身がビームを打てた事に驚き。横島とチビはうりぼーに駆け寄り

「凄いぞー！うりぼー！ビームできるじゃないか！」

「みむー！みむみむ!!」

「ぴ、ぷぎょう……」

凄いぞとうりぼーを褒めている横島とチビ、そして照れているうりぼーを見て思わず溜息を吐きながら、私は足元で気絶している冥子さんを見た。想定外の事に対して弱すぎる、霊力と知識は豊富なのだろうか後2日の研修期間中にこの弱い精神力を何とかして、ガープと戦う時の戦力にできないかと頭を悩ませるのだった……なお今日の横島の除霊報告書の最後に行に謎の言葉が書かれていた

【真のうりぼーに牙など不要。真のうりぼーは目で殺す】

と言う謎の横島の格言が書いてあり、頭痛を覚えたのは言うまでも無いだろう……

冥子の所から横島君と蛭ちゃんの除霊報告書が来たんだけど……

【なんじゃそら】

「私が聞きたいわ」

シズクは清姫がいるし、横島君がいないので協力してくれる訳が無い。必然的にノツブが協力してくれているんだけど、私の手元の報告書を見て苦笑している

「何なの？この【真のうりぼーに牙など不要。真のうりぼーは目で殺す】って……」

「何が起きてるんじゃ？向こうで？」

【なんか変な攻撃を覚えたんでしようか？】

激しく不安になってきた……研修としてちゃんとプラスになっているのだろうか？よし丁度最終日だし見に行きましょう

「見に行きましょう」

何か手遅れになってはいけない、私はそう思い冥華おば様に連絡を入れて出発しようとした所でノツブに

「シズクと清姫呼びに行った方が良いかしら？」

「かもしれんの、横島にあわせれば落ち着くだろうしの」

犬猿の仲と言えるシズクと清姫の喧嘩に付き合つてられない、という事でここ数日私の事務所に寝泊りしていたノツブの言葉に頷き

「おキヌちゃんはと思う？」

【呼びに行きましょう。後で怒るって判ってますから】

横島君に対しては限りなく過保護なシズクと横島君命の清姫。会いに行っていると知られたら後で大変な事になるわね……

「じゃあ横島の家に行つてから行きましようか」

はいつと返事を返す、ノツブに先にシズクと清姫に声を掛けておいと頼み。私は車の準備の為にガレージへと向かうのだった……

令子ちゃんからの1度横島君と螢ちゃんの様子を見に来ると言う連絡に私は思わず笑みを深めた。今回の横島君の除霊報告書は正直謎だったが、その謎さが令子ちゃんの不安を煽り様子を見に来ると言う決断をさせてくれたのだから

(私から見ても冥子は大分成長したけどね)

横島君と螢ちゃんの前でいい格好をしたいと思っているのか、私にどういう指導をすれば良いのか?とか熱心に聞きに来てメモをしていたし、保護観察処分中の鬼道君も指導者としての才覚を見せてくれた。ただ致命的に問題だったのは冥子のメンタル面の弱さと想定外の事に弱すぎる点だ……

「ちようどいいわ、令子ちゃんも来るんならあれをやりましよう」

六道に伝わる死の試練。今までは冥子にさせようとは思わなかった、初代六道から伝わり続けた修行法。失敗すれば亜空間に投げ出されるという試練だが、冥子は今変わろうとしている。本人だけでは恐らくパニックになり逃げようとするが、横島君達を巻き込めれば信じられないほどに強い精神力を發揮する。その試練をする事で、冥子が



精神的に大きく成長すると思い、私は令子ちゃんが尋ねて来たらその試練をやらせる事に決めたのだが、そこで私は想像もしない物を見る事になるのだった

「横島様！お元気そうだなによりです！修行は順調でしょうか？」

「……無理はしてないな。あまり霊体と身体に負荷をかけるなよ」

令子ちゃんは清姫とシズクちゃんも連れて来たのねえ……ちよつと失敗したら大変な事になるかも」

「冥華おば様。修行は順調そうで安心しました、今回はうちの助手の除霊研修ありがとうございます」

私を見て挨拶をしてくる令子ちゃんにそうねくと笑いながら返事を返す。横島君と蛭ちゃんだけではなく、冥子にとつてもいい修行になつているみたいだからお互い様よくと笑いながら

「実は六道の家に伝わる特別な霊能の修行があるの、良い機会だから横島君達もく見学してみない？」

六道に伝わる特別な霊能の修行と聞いて令子ちゃんの顔色が変わる。私になにか別のことを考えているのではないかと探るような視線を向けながら

「部外者に見せてもいい物なのですか？」

「ええ、令子ちゃん達ならく見ても口外しないでしょう？」

口外すればどうなるのか判つているんでしょね？笑顔に圧を加えると冥子が首を傾げながら

「お母様？私そんなの聞いたこと無いよ？」

「ええ、だつてまだ伝えてないですもの、六道の式神「12神将」を正式に継承する試験ですからね」

私も冥子と同じくらいの時にやったのよくと笑いながら言うと、冥子はじゃあ私もやるくと返事を返してくれた。今までだったらお腹痛いとか頭痛いつと言つて逃げていたからやっぱり今回の研修の話は冥子にとつてもプラスだったわくと笑みを深める

「横島さん。どうですか？何か手ごたえはありましたか？」

「と言うか真のうりぼーに牙など不要。真のうりぼーは目で殺すつて何じゃ？」

「俺に手ごたえって言うか、うりぼーがビームを覚えたんだ。な？うりぼー？」

「ぶぎゆうツッ！」

おキヌちゃんやノツブと話をしている横島君がうりぼーを抱き抱えると、うりぼーの牙の間が光り霊波砲が発射される。一家の娘は横島君になんの修行をしたのかしらくと首を傾げながら

「こっちよ〜」

ビームで吹っ飛んだ木々を見て、絶句している令子ちゃん達を六道の屋敷の外れにある修行場へと連れて行くのだった……

家では毎日会っているのに、どうしてここまでシズクと清姫ちゃんは俺のことを心配するんだろうな？と首を傾げながら、冥華さんの後ろを着いて歩きながら

「やっぱり一族秘伝とかは普通は秘密にするものなのか？」

六道に伝わる特別な修行の見学をさせてくれると言っていたのを思い出しながら虫に尋ねると、虫は当たり前前よと頷き、シズクも頷く「その家が発展してきた証みたいな物だからね。正直見せてくれるって聞いて驚いてるわ」

「……その通りだな。何か別の思惑があるかもしれないから気をつけておけ」

「私とシズクがいるから下手な事をすれば、六道が減ぶと判っているでしょうから大丈夫ですわ」

……清姫ちゃんとシズクだけで正直過剰戦力といえ、過剰戦力だろう。そして六道の家を滅ぼせるというのも嘘ではない

「心眼先生。大丈夫かな？」

「……知らん……」

心眼先生にも知らないと言われ、俺は本当に大丈夫かなあつと思いつつ、現実逃避気味に横を見ると

【うむ、良いぞ。その調子じゃ】

「ぶぎゆう♪」

「みむうー♪」

割と大きくなつたうりぼーの上にノツブちゃんが跨り、うりぼーの頭の上にチビが座っていて楽しそうなのを見てしまい。俺は抱き抱えていたタマモに

「俺ちよつとノツブちゃんが判らないや」

「クウン？」

「それって多分今更だと思おうわよ？」

「……私もな、そう思う」

「迷惑をかけてるなら焼きましようか？」

物凄く物騒な事を言う清姫ちゃんに焼かなくて良いと返事を返し、ノツブちゃんが楽しそうなら良いかと呟くのだった

「あ、横島さん。見えてきましたよ」

おキヌちゃんの声に顔を上げると、巨大な山のような物と社が見えて来た。俺は思わず本格的だなと呟くのと同時に、本当に六道に伝わる修行を見るのだと判り気持ちを引き締めるのだった……

「ここは～普段は封印されてるの～今から封印を解除するから待ってね～？」

冥華さんはそう笑うがその顔は真剣で嫌でも緊張感が高まるのが判った

『古より六道の者に伝わりし禁忌の地よ！試練の時は来た！扉を開き、我が一族の娘を試したまえッ!!』

冥華さんの呪文と共に封印された扉が開いた瞬間。扉の近くに半透明な誰かがいた

【あら？懐かしい気配と思って見にきたら～清姫にシズクじゃないの～それにこの人は高島様にそっくりね♪】

にこのこと笑う冥子ちゃんにそっくりな12単衣の少女の幽霊が穏やかに手を振ってくるので、思わず手を振り返しながら

「知り合い？」

清姫ちゃんとシズクに知り合い？と尋ねるとシズクは額に手を当て溜息を吐き、清姫ちゃんは穏やかに笑いながら

「知り合いですわ、私が高島様の屋敷にお世話になっている時。高島様から式神を作って貰った六道の人間ですわね」

「……お前成仏してなかったんだな……」

2人の知り合いと言うと平安時代の幽霊?!穏やかに笑うその少女の幽霊に冥華さんが

「あの初代様?私の時と修行の内容が違うのですが?」

「ん?ああ!昔の口調に戻ってるわよ!六道の人間は!この喋り方じゃないと駄目!って散々言っただしよ!」

初代六道さんの言葉に冥華さんが顔を歪める。え?昔はもっと凛とした喋り方だったの?と思わず思ってしまった

「ま!立ち話もなんだから!どうぞ!どうぞ!暗いし、じめじめしてるけど!外と違って涼しいわよ!」

そう笑い社の中に入っていく初代六道さんを見ていた美神さんが引き攣った顔で冥華さんの方を見て

「あの……私達はどうすれば?」

「と、とりあえず!中で話を聞いて見ましようか?」

そう話しているのに、歩こうとしない美神さんと冥華さん。俺はどうすれば良いのか?と悩んでいるとおキヌちゃんとノツブちゃんが深刻そうな表情をして俺に気をつけろと声を掛けてくる

【横島さん。あの人……見た目は穏やかですけど、危険ですよ】

【うむ、怨霊になっていてもおかしくない存在じゃ、気をつけよ】

平安時代の幽霊がここまで自我を保ち、狂っていないのはおかしいと言うおキヌちゃんとシズク。それに続くようにシズクと清姫ちゃんも注意するようにと警告してくる

「……あいつは高島に恋慕していた。自我はしっかりしているようだが、気をつけろ。何をきっかけに凶暴化するかわからないぞ、狐もそう言っているだろう?」

さつきから腕の中でタマモが唸っているのは俺に気をつけろって言う意味だったのか……

「性格的には私ととても良く似ています。悪い人間ではないですが、どうかお心を許されないように!」

悪霊や怨霊は強かに魂の隙を狙っているのですから、その口調に脅しなのではないと悟った。本当に危険なのだ

「シズクや清姫が来てくれたのは本当に良かったわね。警戒しながら行きましょう、心眼もよろしくね」

【ああ、判っている。お前自身も気を緩めるなよ、横島】

緊張した面持ちの蛍と硬い声をしている心眼に判ったと返事を返し、心配そうに足元に駆け寄ってきたチビとうりぼーをGジャンのポケットに入れて。俺は美神さん達の後を着いて社の中に足を踏み入れたのだった……

この社の中に眠って何年経つただろう？もうほとんど何も覚えてない私だけど……高島様とシズクと清姫……それとあの2人の事ははっきりと覚えている。喧嘩もしたし、泣きもした。だけど楽しかったと言える毎日は今でもしつかりと私の中に残っている

(高島様にそっくり……それに名前も)

しかもシズクと清姫もいるから余計に横島と言う少年が高島様に思えてくる。しかも妖怪の子供がその側にいるのを見て、余計に高島様に似ていると思ってしまう。あの人の側も妖怪が沢山いたから。そして私の子孫だと言う少女は私にとても良く似ていた……私は確かに死んだ、死んだけど死んでない。初代六道として子供を生む前に、切り離れた楽しかった高島様との思い出、それが私を形作っている。だから私は確かに初代六道ではあるが、初代六道ではないのだ。【そんなに警戒しなくてもいいわ、私は害をなすつもりなんて無いんだから〜】

私が怨霊である可能性を考慮して警戒している子孫の2人と横島君を囲んでいる幽霊や、シズクや清姫に笑いながら言う。確かに彼はこの中に閉じ込めてしまえば、一緒に居れると言う気持ちは無い訳ではない。だけど、私は高島様に似ている横島君に害なすことはしたくなかった

「その言葉に嘘は無いですね？」

「……お前は清姫に似てるからな」

昔馴染みとのやり取りに思わず笑ってしまう。死んでいるけど、昔の生きていた時のことをどうしても思い出してしまう。まるで昔に

戻ってみたい

【嘘はつかないわ。私は高島様は愛しているけれど、彼は違うでしょう？そんな事はしないわ〜】

高島様を愛しているから私はこうして幽霊となる事を選んだ。私のはあの人の妻にはなれなかったけれど、遠い未来にはもしかしたら〜と思っていました。私ではない私が高島様ではない高島様と添い遂げる……それを私は見たかったのだ

「では初代様〜六道の試練とやらをやりたいのですが〜？」

【試練？ああ……私の暇つぶしね。12神将で亜空間に落ちるのを食い止めるってやつ〜】

今まで暇だったし、私自身も自分で言うのは何だが精神力が弱い方なので子孫を鍛えると言う意味でやっていただけ……高島様の転生者かもしれない横島君を巻き込むわけには行かないし、シズクと清姫に会ったからか、昔を思い出して仕方ない

「亜空間!?!冗談じゃないわよ!」

緋色の髪をした女性が冗談じゃないと叫ぶ。私はその姿を見て、彼女は葛の葉に似てるわねと苦笑しながら

【そんなの出来ないわよくただの脅し文句と〜暇つぶしなんだから〜】

12神将をコントロールする精神力を鍛えるための訓練なのよ〜？まあ私の暇つぶしをかねてるけどね〜と言うと冥華が信じられないという顔をして尋ねてきた

「ひ、暇つぶしだったのですか〜？」

【うん、暇つぶし。特に貴女はガチガチで面白くなかったわ〜】  
何をやっても悲鳴を上げない、強い精神力を持っている冥華は正直面白くなかったわ〜と笑う

「なんかこの人ちよつと怖いな」

「うん、私もちよつと苦手かも……」

横島君とその隣の少女が私のことを怖いとか苦手とか言っているのに正直少し傷ついた。特に横島君に言われたのは寂しかった

【うう……凄霊力です……なんか怒っているんじゃないですか?】

「うむ、英霊とまでは言わぬが、この幽霊も中々の力を持っているぞ？」

つといけないいけない、思わず感情に任せて靈力を放出する所だった。そんな事をすれば攻撃したと思われかねないと思い、慌てて靈力を抑えるとシズクが苦笑しながら

「……怖いというか、こいつは黒いんだよ」

【ひどいゝそんな風に言わなくてもいいじゃないゝ】

正直六道の家は靈力だけある家系だった。だから子供を生むための母体としてしか評価されなかった、高島様がいなければ、きつと六道の名前は長い歴史の中に消えていたと思う

「じゃあ私の修行はゝ」

「うゝん？無しでいいわゝ懐かしい人に会えてゝすつごく嬉しいからゝ特別に大事な事を教えてあげるからゝこつちに来なさいゝ」

おいでおいでと私にとても良く似ている冥子と言う子孫を呼ぶ。私と高島様は高島様の方が年上だったけど、横島君と冥子だと冥子の方が年上なのねと思わず笑ってしまう。そして近づいてきた冥子を抱きしめて

（あのね、私は好きな人と添い遂げる事が出来なかったのゝ辛くて、悲しかったわゝそれにあの人は手の届かない所に逝ってしまったから）私には高島様を助ける事が出来なかった。権力を得てからもその時の後悔はずっと私の胸に残っている

（貴女にはゝそんな想いをして欲しくないのゝだから強くなりなさい、身体じゃない、心よゝ）

「心ゝ？」

不思議そうに言う冥子にそうよ、強い心と笑う。冥華もそうだけど、私の子孫は誰一人12神将の真の姿に辿り着いていない。それは心が弱いからだと思う

【だから自分が何をしたいのか？何をしたいと願っているのか？それをしっかりと理解しなさい、そして強く心を持ちなさい。貴女は私にとても良く似ているゝだから貴女はきつと辿りつけるわ。六道の真の力に】

今まで見てきた子孫にこんな言葉を掛けた事は無かった。だけど冥子は違う、きつと辿り着けると思った。そして違うかもしれないけれど、高島様の転生者と同じ時に私に似た子孫がいるのは運命だと思っただ

（貴女は私みたいな想いをしないで？護られるだけじゃないの、護れる存在になつて）

私は護られる存在だったから高島様を助ける事ができなかった。そして私自身が12神将の真の力を知ったのは、高島様が死んでから何年も経った後だった。後悔したし、泣きもした。どうしてあの時にこの力が無かったのかと心から嘆いた。私に似ている冥子にはそんな想いを抱いて欲しくなかった

【強くありなさい、そして大事な者を見つけるの、そうすればきつと大丈夫だから頑張つて？】

そして私のような悲しい想いはしないで？と冥子に小声で呟き、この社から出るように言う。

【私はいつもここにいるわ、だから何か困った事があつたらしく相談に来るといいわ、初代六道の名において貴女達を助けましょう、私の知識が貴方達の助けになりますように】

ゆつくりと閉まっていく扉。最後に出ようとした横島君の姿が一瞬高島様とダブる……それを見て確信した。きつと彼が高島様の転生者なのだと思信した。だがそれを口にする事はしない、光の中に消えていく横島君の姿を私はずっと見つめ続け、慣れ親しんだ闇が戻つて来たとき……

【良かった……良かったあ……蘇る事が出来たんだ……】

ずつと待つていた、長い時を待つていた……それなのに一度も高島様の転生者と会う事は無かった。今こうして気の遠くなるような未来で高島様の転生者と出会う事が出来た、そして私に良く似た子孫がその側にいる。その事に私は涙をこぼし、そして呟いた

【どうか、今度こそ高島様の助けになれますように】

護られるのではない、護れる存在になつてほしいと心から願うのだった……



初代様との話からお母様が落ち込んでいたようだけど、私は良い事を聞けたと思っていた。最終日と言うこともあり、令子ちゃんと帰ってしまった横島君と蛍ちゃん。だけど彼らが研修として来てくれている間に私は少しは変わったと思う

「ショウトラちゃん」

ベッドに寝転びながらショウトラちゃんの名前を呼ぶ。ベッドの上が上がってきたショウトラちゃんを抱きしめながら

「初代様寂しそうだったね」

「わん……」

高島様を私は護れなかったと泣いていたその姿が脳裏に蘇る。私はショウトラちゃんを抱きしめてもしも横島君が死んでしまったらと思った。それも自分の力が足りないせいで死んでしまったと想像する

「私はくやっぱり除霊は苦手だけどく強くなりたいわ」

護られるんじゃない、護れる存在になりたい。だけど私は令子ちゃんや蛍ちゃんのように自ら戦える訳ではない

「私はくもうぶつつんしない、もつと精神的に強くなるわくだからショウトラちゃんくそれに皆も」

「ワン！」

腕の中で元気よく鳴くショウトラちゃんの頭を撫でながら、他の皆を呼ぶ。私が寝転んでいるベッドを囲んでいる12神将の皆を見つめながら

「私も強くなるからく皆もく私と一緒に強くなりましょう」

放電したり、ジャンプしたりする皆の動きを返事だと思い。ありがとうと呟き皆を影の中に戻し、ショウトラちゃんを抱きしめながら目を閉じるのだった……

「すーすー……」

「くう」

冥子が寝静まった頃、ショウトラの身体は淡く光り始めていた。それは冥子の変わりたいと強く思う心と決意にショウトラが呼応する

かのように……ゆっくりとしかし徐々にその輝きを強くしていた  
……のだが……

「くうん……」

寝返りを打ったシヨウトラの動きと共にその光は霧散して消えて  
いく……覚醒の時はまだ遠い……

別件リポート 別件リポート 星の三蔵ちゃん、白竜寺を再建する  
その3へ続く

## 別件リポート

別件リポート 星の三蔵ちゃん、白竜寺を再建する その3

お師匠様が白竜寺の住職様になってから2ヶ月と少し。たったそれだけで俺達の白竜寺は復興された、やはりそれはお師匠様の人徳も非常に大きいと思う。確かになんでもない所でコケたり、ミスをした。自分の容姿を気にせずスキンシップを取ってくるなどトラブルも多いがそれ以上に優しく、そして指導力もある。白竜寺が復興するのは当然の事だった

「ふー……」

「よし、今日は其処まで」

お師匠様の言葉に全員でありがとうございましたと一礼する。お師匠様の治療のおかげで日常生活には支障のないレベルまで回復した、二度と歩けないなどの事を言っていた霊能関係の医者が奇跡だと騒いでいたのは記憶に新しい。立ち上がり朝食に移動しようとした時お師匠様が俺の方を見て

「陰念だけ残るように」

「判りました」

東條達に行けと言って再びその場に座り込む。追加の修行だろうか？と身構えているとお師匠様は書類を並べて

「一応意見だけ聞いておこうと思っただけ。これどう思う？」

並べられた書類を見て、額に青筋が浮かんだのが直ぐに判った。それは白竜寺がバッシングを受けている時に関係ないと宣言していた兄弟子達の復縁を望む旨の手紙だ。しかもその内容はぜひ三蔵法師様にご指導ご鞭撻を望んでおりますと言う言葉と地図つき

「お断りするべきだと思います」

「うん、やっぱりそう思う？」

お師匠様の言葉に思いますと即答する。白竜寺から離縁し、他の霊能関係の修行場と契約した兄弟子達、もしこれでお師匠様が行けば白竜寺なんて場所よりもこっちはへっというのは目に見ている。どこか

ら情報が漏れたか知らないが、2ヶ月の間良くお師匠様の存在を隠し通せたと思う

「じゃあ全員断るとして、次の話よ。一番長く白竜寺にいる陰念にどうしても聞きたくてね」

物心ついた頃から白竜寺にいる、俺よりも長い事白竜寺にいたのは勘九郎くらいではないだろうか？それ以外の弟子は大体16くらいで自立して別の霊能の修行場所に移動する事が多かったからな

「メドーサって言うのが1度白竜寺に来るって言ってるんだけど、どうする?」

「どうするとは?」

どうするっと言う言葉の意味が判らず尋ね返すとお師匠様はあははっとなんて笑いながら

「今メドーサは天界と魔界と人間界で動いていて忙しい人だけど、やっぱり元は白竜寺のお師匠様だし……あたしがまだお師匠様でいてもいいのかなあって?」

「何を言っているんですか?」

その言葉に思わず語気を強める。確かにメドーサには俺達全員が恩があると言える、だけど今のお師匠様は三蔵法師あなたしかいない「恩があるから会いたいとは思いますが。だけど今の白竜寺の住職は貴女で、そして俺達の師匠です。冗談でもそんな事を言わないでください」

「陰念!ありがとうございます!私ドジだけど!これからも頑張るからーツ!!!」

「わぶっ!」

俺の言葉に感極まったのか急に抱きついてくるお師匠様に目の前が赤くなる。柔らかい感触とか、甘い臭いとか、とても幽霊には思えない……じゃなくて!

「離れて!離れてくれ!」

「あたし頑張ってもっと立派なお師匠様になるから!」

駄目だ話を聞いてねえ!!!なんとか引き離そうとするのだが、女性の姿をしていても英霊だ。その力は凄まじく、とても引き離す事ができない

「お師匠様、陰念……失礼しましたッ!!」

「違う！馬鹿野郎!!もどれええええッ!!」

話が長いからこっちに食事を運びましょうか？と尋ねに来た弟弟子が俺に抱きついてしている師匠を見て、顔を紅くして脱兎のように逃げていく、戻れッ！と叫んだがその弟子は戻ることはなく、そして俺がお師匠様に抱きついていた、お師匠様が俺を抱きしめていたという噂が白竜寺に広がったのは言うまでも無い……

クシナを白竜寺に戻す前に三蔵法師と話をする時間が取れた。白竜寺でも思ったが、どうせならクシナと一緒に良いと思いたい。近くの喫茶店で待ち合わせることにした

(痕跡は少しか……)

先日までブリュンヒルデと古い神の痕跡の搜索をしていたが、見つかった物はほとんど無く、判ったのは2つと調査結果としては辛い物となった。足跡が僅かに残されており、そのサイズから身長は非常に小柄で地面にそれほど足跡が残っていない点から体重も軽い。恐らく少女と呼べる姿をしているのではないか？と言う点と、もう1つ。蒼い粒子の細かい砂があったと言う事だ、それ自体も強い神通力を持っていたからその神の所有物だろうという話で詳しい分析の為に今ヒヤクメの元に預けられている

(これからどうなるんだろうね)

知らない事起きなかった事件が最近多すぎる。これからどうなるのか？と言う不安ばかりが募っていく。私が思わず溜息を吐いていると

「お待ちせーごめんね！」

そう笑いながら三蔵が姿を見せる。前に見た法服ではなく、Gパンとシャツと言う服装で良かったと思わず安堵の溜息を吐く。あの格好で待ち合わせに来たらとてもではないが内緒話を出来る雰囲気ではなくなくなってしまったからだ

「じゃあ改めて、今白竜寺の住職をしている。玄奘三蔵です」

「メドーサだよ。よろしく」

手紙や通信兵鬼で話をしたことはあるが、こうして顔を合わせたの初めてなのでお互いに軽く自己紹介をしてから、結界を張って話を聞かれないように準備をする

「それで直接あつて話をしたい内容って？」

「鎌田勘九朗の事は聞いているかい？」

あいつは面倒見が良かった。だから話に出ているとは思うが、弟子から聞いたことはあるか？と尋ねるとええつと頷く三蔵

「男の人だけど、お母さんみたいに優しく料理が上手で裁縫をしてくれて、早く元気になってほしいって言ってたわ、雪之丞や陰念はなんとも言えない顔をしてたけどね」

……良かったなクシナ。お前弟子には好かれてるぞと呟く、子供だから優しくしてくれる人間には好く懐いていたんだろうね。私はどっちかと言うと怖がられていたけどねと思わず苦笑する

「もしかしてその子が死んじゃったとかじゃないわよね？」

「違う違う。とりあえず写真を見てくれる？」

クシナの写真を見せると三蔵はきよとんと首を傾げる。まあこれを見ただけじゃ理解出来ないよな

「勘九朗はガープの攻撃を受けた事で身体がボロボロでな、この女性の身体……と言っても機械で出来た身体で人造人間として生まれ変わったんだ。名前をクシナに改めてな」

「ナタみたいな物かしら？」

ナタ？ああ、あれは蓮の精霊として蘇ったって言う。同じ中国系の神魔で良かったと思いなながら

「そんな感じだな。今リハビリ中だが、身体が治ったら白竜寺に行きたいと言っているんだが良いか？」

もしかするとそのまま住み込むかもしれないと言うと三蔵は弟子が増えるから良いわ！と喜んでいたが

「いや、三蔵の弟子にはならないと言っているんだ。勝手な事だとは判っているんだが……弟子としてではなく、生活の手伝いとしてお邪魔したいと言っているんだ」

かなりむちゃくちゃな事を言っているという自覚はある。それで

もクシナは私の弟子が良いと言っているんだと言うと

「しようがないわね。あたしはそれでも良いとしか言えないわ。だって皆会いた行って行ってるし、最年長の弟子なんですよ？ならもう免許皆伝って事で良いでしょ？」

「すまない、我俣を言う」

同郷の好だから全然良いわよつと笑う三蔵に良かったと心の底から安堵の溜息を吐きながら、私はクシナと共に尋ねる時の日程を三蔵と話し合いながらふと思いついた

「そう言えば、眼魂と試作ドライバーを貰ったんだっけ？」

「……………そう、そういう事なのね」

遠まわしに私もアシユ様と繋がっていると三蔵は真剣な表情をして

「確かに受け取ったわ。受け取ったけど、使われないことを願ってるわ」

「私も同意見だよ」

横島とマタドールの戦いの後の後遺症を見れば、あれがどれだけ危険な物か知っている。陰念が霊能者として復帰したいと願っているのは知っているがお互いに使わせたくないねと呟き

「とりあえず、それは隠しておく事を勧めるよ」

「うん、そうするわ」

力を望む人間は何をするか判らないからね。何かあれば陰念は持ち出してしまいかもしれない、だからそうならないように隠しておくの良いよとアドバイスをし

「それで今リハビリ中だけど、多分近い内にクシナと一緒に尋ねる事にするよ」

「うん。判った、楽しみに待ってる」

私と三蔵は意図的に眼魂の話から離れた。神魔が口にすれば結果をもたらす、使わせたくないと思っていても使わせる結果になるかもしれないと思ったからだ。それからは私と三蔵はいつクシナと会いに行くか？と言うスケジュールの話をするのだった……

ガタツ!!!

「不吉な……」

メドーサと三蔵が話をしている頃、白竜寺では勘九郎の写真立てが倒れ、それを見ていた陰念と雪之丞と東條の不吉なと言う声が重なり、別の部屋では勘九郎が愛用していたマグカップが割れたりしており

「まさかあいつ死んだとは言わないよな？」

「いや、あいつは殺しても死んだりしないだろう。それよりもだ、陰念。お前ママお師匠様と抱き合っていたそうだな、どういう見だ」「違いわ！このマザコン馬鹿！お師匠様があたしが師匠でも良いかな？って言うから、俺達の師匠はあんたしかいないって言っただけだ！」

「ええ、本当かあ？」

「てめえ、ぶん殴るぞ。この野郎」

信じられないという顔をする雪之丞と睨み合う陰念を見ていた東條は落ち着いてくださいと2人を止めに入った後

「お師匠様は自分がお師匠様で良いかと不安に思っているのなら、みんな歓迎会でもしませんか？丁度お師匠様も出掛けていますし」「それだ！」

お前良い事言うなと陰念と雪之丞に褒められた東條はそ、それほどでもと照れくさそうに頷き、そしてその後三蔵ちゃんか帰る前にと全員で買出しに出掛け、歓迎会の準備に白竜寺の面々が走ったのは言うまでもない……そして帰宅した三蔵が歓迎と言う横断幕と料理を見て、感涙する事になるのだった……

白竜寺でそんな事が起きているなんて知る由もない、勘九郎事蛇神クシナはと言うと

「スカート……それにブラウスどれが良いかしら？」

今まで着る事の出来なかった女性物の衣装を大興奮で着替えを繰り返しており、私だつて皆気付けてくれるかしらくと鼻歌を歌いながら再会の時を楽しみにしているのだった……

一方その頃東京の高級ホテルの一室ではある騒動が起きていたり



する……

「姫様を知らないか？」

「いや見てないが？」

「黒いのが一緒ではないのか？」

「……呼んだか？」

ホテルの一室に嫌な沈黙が広がる。そして数秒後4人の男達の激しい口論が始まる

「なぜお前は監視をしていなかった！紅いの！」

「俺のせいにするな！大体監視は白いの黒いのの仕事だろう！」

「……予言をしていた」

「……姫様が好むワインを買いに行っていた」

ぎゃーぎゃーつと喚きあう4騎士達の視線の先には、手紙が貼り付けられており

【余は暇なので遊びに行く、この目で人間界を見てくる♪お前達も好きにするが良い！】

「……姫様あッ!!」

仕えるべき主の姿がない事に気付いた4騎士達の嘆きの悲鳴が重なっている頃、東京では

「うむ、やはり部屋の中よりも外の方が良いな！」

ドレス姿だと目立つつという理由でワンピースへと着替えた魔人姫が鼻歌を歌いながら散策に繰り出しているのだった……

そして奇しくも魔人姫が散策に乗り出した頃。運が悪いというべきなのか、それとも運がいいと言うべきなのか……

「なんかここやっぱ不思議な気配がするのよね」

フードを被った古の神霊もまた東京に現れているのだった……

リポート12 東の間の平穏 その1へ続く

## リポート12 束の間の平穏 その1

リポート12 束の間の平穏 その1

冥子ちゃんの所での研修も無事に終わった次の日。俺はダンボーと新聞を用意して工作の準備をしていた

「みむ?」

「ぶぎゅ?」

何するの?何するの?と言う感じで俺の周りをチョコチョコ動き回っているうりぼーとチビに苦笑しながら

「タマモ。ちよつと危ないから面倒を見ててくれ」

「コン!」

カッターなどを使うのでチョコロチョコされると危ないので、タマモに面倒を見てくれと言うとその尻尾で俺からチビ達を遠ざける

「みむ!」

「びぎ!」

横暴だと言わんばかりに抗議しているチビとうりぼーだったが

「グルウ」

俺から見えないようにして威嚇をするタマモに怯えたそぶりを見せてから、ボールで遊び始める。一体どんな顔をしていたのだろうか?と思いつつカッターの刃を出して工作を始める

(やつぱりいつまでもあれじゃあ可哀想だからな)

モグラちゃんの籠は押入れにしまつてあるが、うりぼーのベッドはいまだにボロボロのタオルを丸めたものなので、それでは可哀想だと思ひ。休みのだからとうりぼーのベッドを自作する事にした、野性のうりぼーは落ち葉の上で眠るそうなので、落ち葉は丸めた新聞を切つて代用する

「んーこんな感じかな」

小さくなれると言つてもあんまり小さいと可哀想なので30cm

くらいの幅の板を4本切って、それをガムテープと接着剤で固定する。床は寒いといけなないので襪襦切れを張ったダンボール板にする。「やっぱり多い方がいいな」

ふかふかするようにと新聞を丸め、3cm幅でどんどん切ってダンボールに詰めていると、扉がノックされる

「どうぞー」

【のつぶー】

開けていいよと言うとチビノブが手を上げて部屋の中に入ってくる。その頭の上には俺のTシャツやズボンが畳まれた状態で乗せられていて

【のぶのぶーん】

器用に筆筒を開けたチビノブはその短い手を伸ばし、着替えを筆筒の中に詰めていく。そしてその後は俺のほうに来て

【のぶうん】

サイン頂戴♪と紙を差し出してくるチビノブに苦笑しながら、1度作業を止めて机からボールペンを取ってサインをしようとして

(あ、もう全部埋まってる)

19個のサインが埋まっていて、俺のサインでジャスト20個だ。清姫ちゃんのサインも2個あり、料理の手伝いをしたのかな?と思いつながらサインをし

「じゃあ今日の夕方の散歩の時に買いに行こうな?メロンパン」

【ノックうん】

嬉しそうに笑うチビノブの頭を撫でると、ペコりと頭を下げて部屋を出て行く。喋れはしないけど、表情豊かだよなあと思いつながら俺は最後の新聞を切り終えて

「うりぼーおいで」

「びぐ?」

なーに?と言う感じで尻尾を振りながらやってきたうりぼーに作った寝床を見せながら

「うりぼーのベッド。どうだ?」

「びぎゆうー」

嬉しそうに鳴いて寝床に入るうりぼー。新聞紙の中をちよこちよこと動き回り、時々顔を出して嬉しそうに鳴くのを見て、作って正解だなと笑っている。足元にボールが転がってくる。転がってきた方向を見るとチビがこつちを見上げながら尻尾を振っていた

「ほれ、チビー行くぞ?」

「みむうー!」

俺の工作が終わるまでの間大人しく待っていたチビと遊んでやろうと思ひ、ゴムボールをチビの方に転がすのだった……

横島の部屋に着替えを持って行ったチビノブが帰ってきて、私にスタンプカードを見せる

「……そうか、もう全部集めたか」

20個の枠全部にサインが入っている。チビノブは働き者で、そして頑張り屋だ。よしよしと頭を撫でながら

「……じゃあ今日の買い物時にメロンパンを買ってこよう」

【のぶのぶ】

買って来ようと言うとチビノブが首を振る。いらないうことか?と首を傾げていると横島の部屋を指差す

「……ああ、横島と買いに行くんだな?」

【ノブー!】

それなら私が買いに行くのは余計だなと笑い、引き出しから新しいスタンプカードを取り出して

「……じゃあ、また頑張り」

【のーぶー!】

新しいスタンプカードを首に掛けてやると元気良く返事を返してリビングを飛び出て行くチビノブを見ながら

「……お前も少しは働いたらどうだ?」

【えええ? ひどくないか? 横島が研修に行っている間、ワシちゃんと働いて家に給金を入れたじゃろう?】

まあそれもそうだが、チビノブが私の手伝いをしているのに、ぐーたらしている姿を見ると手伝いしたらどうだ?と聞いたくなる

「どうして横島様はこんな幽霊を家に置いているのでしょうか?」

理解出来ませんわと首を傾げている清姫だが、その言葉はそっくりそのまま清姫にも帰ってくるという事を理解しているのだろうか? と言うかこいつはいつまでここにいるつもりなのだろうか? とは言え横島が構わないと言っているので追い出す訳にも行かないのが実に面倒だ。実力行使OKならさつきと追い出しているのに

【主殿の所は本当に面白いですね】

ちかちかつと光る牛若丸眼魂。最近では霊力も回復してきたそうので自力で移動できるようになったらしい

「……お前いつになったら身体が具現化できるんだ?」

【もう少しだと思いますが?】

それが何か? と尋ねてくる牛若丸に大した事じゃないと返事をす。最近では横島の周りが静かだったから、そろそろ何か起こるのではないか? と言う不吉な予感がしてくる。その時の為に戦力になるか? と思っただけで。まだ霊体を構築出来ないのならば本人も気にしているだろうし、わざわざ言うまでも無いだろうと思っただけだ。そんなことを考えていると、チャイムが鳴った

「……ヒヤクメ? 清姫を迎えに来たのか?」

神族のヒヤクメが手を振っていて、迎えに来たのか? と尋ねるとそれもあるけどと笑い

「横島さんにも用事があってきたのね! 横島さんはいる?」

「……ああ。いるぞ? いいタイミングだったな」

先日まで冥子の所に研修に行っていたので良いタイミングで訪ねて来たと言うと、丁度良かったのねと笑うヒヤクメを招き入れる

「あ、清姫ちゃん。竜神王様からそろそろ帰ってくる様について伝えてくれていますわね。私と一緒に天界に帰るのね」

「もうですか? ……今回の脱走は失敗でしたわ」

また脱走してきたのか? ……こいつは自分が竜族の姫と言うこと判っているのか? だがまあ今回は横島が研修でほとんど家に居らず、詰まらない思いをしてきたのでご愁傷様だったなと思わず笑いなから

「……横島は奥の部屋だ」

「ありがとうなのね」

横島1人に用事があつてきたと言つていたので、私が同席する訳には行かないと思ひ。横島の部屋の場所を教え

「はあ……」

「……そう落ち込むな。また来れば良いだろう」

横島が来て良い言つているのだから私が拒むわけには行かない。なんだかんだ言つても私も居候だ、家主の横島の意向に従わない訳には行かない。それになんだかんだ言つて清姫は昔馴染みだしな

「かかか、仲良く喧嘩しなつて」「……やかましい」「うるさいわですわ」  
……ノブうう!!」

私と清姫をからかおうとしたノツブに私の水鉄砲と清姫の火炎弾が直撃し、悲鳴を上げながら吹つ飛ぶノツブを見ながら、私は家事を再開し、清姫は帰り支度を始める。その光景を見ていた牛若丸は

「口は災いの元ですね……」

やはりこの家でシズクに逆らうのは危険ですねと小さく呟いてゐるのだった……

最高指導者が召喚した英霊「フローレンス・ナイチンゲール」人間界ではクリミアの天使と呼ばれる人らしいのですが、人の話を聞かず医療行為も強引に行う人でしたが、誰かを助けたいと思う気持ちに偽りは無いと思つた

「では小竜姫。次の病人の元へ向かいます、それが終わりましたらまた帰つて来ますね」

「いえ、こちらこそありがとうございました」

ロンさんの曲がつた背骨を矯正し、古傷もほとんど痛まないレベルに治療をしてくれ。老師もここ最近乱れに乱れていた生活習慣の改善とゲームのやりすぎで悪くなった視力を矯正する眼鏡と背骨を矯正してくれただけでなく、私の診察もしてくれた

「小竜姫。貴女のその生真面目な性格はとても好感が持てますが、休養もまた修行だと思つてください」

「判りました、ちゃんと処方された薬も飲むようにします」

私は全然気付いていなかったのだが、筋組織に傷が入っており、修行のしすぎに気をつけろと怒られてしまった。処方された薬と無理をしないようにしますと言うとナイチンゲールさんは穏やかに笑いながら

【ではお大事に、それでは次の患者の元へと向かいましょう】

今度は魔界で医療行為を行うと言って、迎えに来ていた魔界正規軍の軍人に連れられて移動するナイチンゲールさんの姿が見えなくなるまで見送つてから私は道場の中へと戻るのだった

「うむ、その調子だ。良いか？ 竜である、己と人である己を制御するのじゃ」

「うきゆ……うきゆうううう」

ロンさんの前で竜氣のコントロールを頑張っているモグラちゃんを見ながら

「どうですか？ 調子は？」

「まだまだじゃなあ。戦闘に特化しすぎておる」

本来成長に回す分の戦闘に回しているからか、竜氣のコントロールが下手糞じゃと苦笑するロンさん。モグラちゃんの肉体的な強さはもう十分なので昨日から竜氣をコントロールする修練を行っている

「うきゆう……」

「また最初からじゃな」

ぽすっと言う気の抜けた音と共にモグラちゃんの集めていた竜氣が霧散する。とは言え、幼いこの年齢を考えれば十分にコントロール出来ていると言えるレベルだと思っただけですけどね

「また戻るのじゃろう？ 頑張るんじゃ、絶対出来る」

「うきゆっー」

横島さんの所に戻る。それだけでモグラちゃんのモチベーションは恐ろしいほどに上がっている、また竜氣の集束を始めるのですが、その速度が段違いに速い。そしてさっきよりも緻密なコントロールが出来ている

「よほど横島殿が好きなんじゃな」

「そうみたいですわね」

恐ろしい集中状態に入っているのか、私とロンさんの声が聞こえていないようだ。これだけの集中状態に入っているとところを見ると、もう直ぐ竜気を完全にコントロール出来るんじゃないか?と思ってしまう

「恋慕か親愛か……どっちじゃろうなあ……」

恋慕か親愛か……ですか、それは正直私には判らない。モグラちゃんや横島さんにどんな想いを持っているのかなんて判る訳がないが「親愛じゃないでしょうかね?」

横島さんを兄か親のように慕っている姿を見た。だから私は親愛だと思えますと言うと、ロンさんはふむっと頷き

「それはお前さんがそう思いたいだけではないのかの?」「え?」

私がそう思いたいだけ?と言われて思わずどうしてですか?と問いかけるとロンさんは私を見つめて

「ワシにはお前さんのほうが横島を慕っている風に見えるがの?」「え?え?な、何ですかあ!」

思わず声を荒げるとロンさんは鏡を見てみるといい、顔が真っ赤じゃよ?と笑う。鏡なんか見なくても判っている、自分の顔が妙に熱いから……

「神だ、竜だなんて正直些細な事じゃろうなあ。横島殿にとっては小竜姫は尊敬するべき師であり、我が孫は護るべき存在じゃ」

人間である横島殿が護られる存在じゃが、その心意気は買うのつと笑ったロンさんは煙管に火をつけ紫煙を吐き出しながら

「人間だから、神だから、竜だからなんて下らん話よ。大事な事はそうではない、そうではないんじゃない」

「大事な事……ですか?」

大事な事つとは何ですか?と問いかけるとロンサンはそうじゃなつと穏やかに笑いながら

「自分が何をしたいか?自分がどうしたいか?じゃとワシは思う。その上で小竜姫、お前さんに聞こうかの?お主は横島殿のことをどう



思っているんじゃない？」

どう思っているって……人間にしては筋が良いし、それに割と好感が持てる人ってであると言える。それに臆病だが、大事な時には勇気を持って前に踏み出せる人だと……

「わ、私は横島さんをどう思っているのでしょうか？」

自分でも思っている以上に横島さんに対する好感度が高い事に気が付き、ロンさんにどう思っているんでしょうか？と尋ねる

「ワシが知るわけ無いじゃろう？」

ええ……ロンさんに言われたから考えて横島さんを意識してしまったのに、知らないと言うなんてなんて無責任な……

「カカカカ！せいぜい悩むんじゃない」

「う、うー……私、私はあ……」

妙に横島さんの事を意識してしまい、顔が赤くなる。そしてロンさんがそんな私を見て笑う、それでさらに顔が赤くなるというループに陥ってしまった私が正常な思考に戻るまで相当な時間を要したのは言うまでも無い

「うきゆう？」

「なんで角が伸びるんじゃない？」

「うーきゆう？」

なお竜気のコントロールの修行をしていたモグラちゃんは何故か角が伸びるという謎の現象を起こしており、赤面し悶えている小竜姫の隣で揃って首を傾げているのだった……そして老師は老師で

「来た来た！ついに現在の小竜姫のトトカルチヨの倍率変動中になつたあ！」

今までほぼ大きな変化の無かった小竜姫の変化。それが大きい物になれと声に出しているのだった……

小竜姫が赤面し悶え、何故かモグラちゃんの角が伸びている頃。横島はと言うと

「わーい！うりぼー凄いでちゅー！」

「ぴぎゆうー！」

散歩の時に偶然であった蛍とあげはと一緒に散歩をしていた。うりぼーの事をあげはは大変気に入り、大きくなったうりぼーの背中に乗って大はしやぎで、うりぼーもあげはを気に入ったのか落とさないようにゆっくりと歩いていった

「横島。なんでチビノブも一緒なの？」

清姫ちゃんを迎えに来たヒヤクメから受け取った物を大事にしたい、普段より少し遅めに散歩に出たのが功を奏したのか蛍とあげはちゃんにあつて大所帯で散歩をしていると蛍がそう尋ねてくる

「ん？お手伝いスタンプが全部溜まったからメロンパンを買ってやるって約束だから」

だからってチビノブをあんまり外に連れ出すのはどうかと思うわよ？と言う蛍にそうかな？と呟く

【のーぶのぶ、】

楽しそうに歩いている姿を見るとたまには外に連れ出すべきだと思うし、周りの人も俺を見て、ああまたかっと言う表情をしている

「大丈夫じゃないかな？」

「横島？もう少し慎重に行動するべきだと思うわよ？この状態になれちゃってどうするのよ？」

うーん……そうなのかなあ？上機嫌のチビノブや楽しそうに俺の顔の周りを飛んでいるチビを見て

「無理じゃないかな？」

「……即答しないでくれる？」

はあつと深い溜息を吐く蛍にごめんごめんと謝るが、多分これからもチビ達みたいな妖怪は増えると思うし、俺自身も拾ってしまうと思う

「タマモは駄目だと思う？」

「くうん」

あ、タマモも呆れきった鳴き声をしてるな。心眼はと言うと心眼でさえも呆れたように笑いながら

【もう諦めるしかないさ蛍、これが横島の個性だ】

「強烈過ぎる個性ね」

呆れたように笑う蛍と心眼にごめんと思いつつも

「コン？」

「みむう？」

「もうタママもチビも可愛いなー♪」

小動物の居る生活に慣れてしまった俺はきつとこれからも小動物を拾っていくと思う。俺はチビとタママを抱き抱えながらそう思うのだった……なおこれから数秒後

「ぴーぐー」

「あげはも抱っこー♪」

【ノブー♪】

「ぐっふうう……」

【よ、横島あぁッ!?!】

自分達も抱っこーと突っ込んできたうりぼーとあげはとチビノブに吹き飛ばされかけたが、なんとか気合で踏みとどまり

「よっしゃー！抱っこしてやろうなあー！」

わーいつと喜ぶあげはちゃんと嬉しそうに鳴くうりぼー達に俺も笑ってしまいながら、順番であげはちゃん達を抱き上げるのだった……

「なんか面白いやつが居るわね？」

そしてその光景をビルの縁に腰掛けて見ていた存在が居た。メドーサとブリュンヒルデが探していた古き神霊だ。古き神霊は横島の周辺を見てくすりと笑う

「ずいぶんと面白い人間が現代にも居るのね。名前はなんて言うのかしら？」

騒がしくも穏やかな横島の回りを見てその笑みを深めていた……古き神と横島が出会う時は近い……？

レポート12 東の間の平穏 その2へ続く

## その2

レポート12 束の間の平穏 その2

昨日ヒヤクメが尋ねてきて、枢ちゃんが欲しいと言っていたチョーカーを初めて見たんだけど

「これやばくね?」

【私はやばいと思うぞ】

だよなと心眼と呟きあう。俺の目の前にあるのは精霊石が埋め込まれた黒革の首輪……このデザインにした神族がおかしいのか、それともチョーカーを要求した枢ちゃんがおかしいのか?俺にはその判断がつかなかった

「俺にはこれが首輪にしか見えない」

【誰がどう見ても首輪にしか見えないと思うぞ?】

つまり俺の見間違いではないと……俺はそれを枢ちゃんが見に着けている光景を想像して。そして俺が渡した事を知られれば

「逮捕案件かな?」

【……弁明の余地はあると思う】

中学生の枢ちゃんに高校生の俺が首輪を渡す。普通に逮捕案件に思える、だがこれがあれば枢ちゃんの暴走している霊能力を抑制出来るようになるので機会を見て何とかして渡したいなと思いつながら箱の中に戻して引き出しの奥にしまう

【それで横島。今日はどうする?】

「そうだなあ……」

研修の後。少しの間身体を休めるようにと言われていたのでランニングや修行は中断している、美神さんの除霊の手伝いはノツブちゃんが同行してくれる。それに俺が美神さんの心配をするなんて10年早いと思う。何の心配も無いだろう、しかし今日は何をやるかなあ?昨日はうりぼーのベッドを作って……じゃあ今日はどうするかと考えているとチャイムが鳴る

「とりあえず見に行ってみるか」

シズクが出れないかもしれないと思い部屋を出て玄関に向かい、そこで俺が見たのは

「ノブ？ノブのぶ？」

マジックハンドで玄関を開けたチビノブが応対しているんだけど、のぶのぶ言ってるだけなので、お客さんの困惑した声が聞こえてくる「ごめん。私には何を言ってるか判らないんだけど？」

「テレサ？ごめんごめん、チビノブ。おいで」

のぶう……応対出来なかった事に落ち込んでくるチビノブの頭を撫でながら

「テレサ何の用事？」

「あ、ああ。シズクに料理を教わりに来るついでに伝言があつて来たんだけど……横島。その小さいの何？」

チビノブを抱き抱えている俺を見てそう尋ねてくるテレサにそう言えば紹介してなかったなと思いつつながら

「ノツブちゃんが影分身したら出てきた。チビノブだ、可愛いだろ？」

【ノブノブ♪】

「あ、ああ。可愛いけど、横島の周りは何時見ても凄いな」

そう苦笑するテレサを招きいれリビングに向かう。リビングでチビと遊んでいたうりぼーを見て

「また可愛い動物が増えてるね」

「ぶぎゆう♪」

テレサを見て愛想良く鳴くうりぼーに微笑むテレサにうりぼーだよと名前を教えながらキッチンを覗き込んで

「シズク、テレサが尋ねて来てるけど？」

「……ああ、料理を教えるって話をしていたな。少し待ってくれと伝えてくれ」

何かを作っているシズクにわかったと返事を返す。一体何を作っているんだろうな？ゼリーの型とか置いてあったけど……

「ちよっと待ってくれってさ、先にカオスのじーさんの伝言を聞くよ。なんだって？」

カオスのじーさんの伝言を先に教えてくれるか？と尋ねる。テレ

サは人懐っこく擦り寄ってくるうりぼーを嬉しそうに抱きしめながら

「うん、ほら前にタケルの道具をコピーしたの壊れちゃっただろ？」

そう言えばそうだな。修理して届けてくれるって聞いてたけど、もしかして修理が終わったのかな？と思っているとテレサは

「結構複雑で安定して使えるようにするのは時間が掛かるから、どれか1つに絞り込むって話でどれを修理する？」

あー何を修理するって言われてもほとんど使った記憶が無いから、どれって言われても困るな……

「ちなみにカオスのジーさんはどれが良いって言ってた？」

「ん？電話の機能とか色々あるトカゲデンワが一番良いんじゃないかって」

連絡とかそういうのがあるから便利だと思うよ？と笑うテレサ。

他のは？と一応聞いてみたが、攻撃用の武器のハットクロックと悪霊捜索に使えるムササビランタンと聞いて、その中なら電話とかが出来る道具の方が良いなと思いつつトカゲデンワを最優先で修理して欲しいとお願いする

「……待たせたな。羊羹を冷やしていたんだ、じゃあテレサ。今日も料理の勉強をするか」

「うん！よろしくー！」

嬉しそうに笑うテレサ。料理の勉強するのに俺がいたら邪魔になると思

「じゃあシズク。俺は散歩にでも行って来るよ」

気をつけてなど笑うシズクに判っていると返事を返し、俺はタマモとチビとうりぼーを連れて散歩に向かうのだった……

「さてと、タマモ。これなくんだ？」

「コン！コン!!!」

ポケットから精霊石のペンダントを見せる。すると大はしやぎで跳ね回るタマモに苦笑しながら、その首にペンダントを下げてやる

「ありがと♪んー！やっぱりこっちの姿のほうがいいわー」

背伸びして気持ち良さそうに笑うタマモにどういたしましてと笑

いながら

「うりぼーとチビの散歩しながらふらふらするだけけど良い？」

「帰りに油揚げ買ってよね？」

悪戯っぽく笑うタマモに判った判ったと返事を返し、チビとうりぼーの散歩をしながら俺とタマモはのんびりと歩き出すのだった……

横島にしては気が利てるわねと心の中で呟く、心眼にうりぼーにチビにシズクにチビノブにノツブ。最近横島の家はがやがやと騒がしく落ち着かないし、満月の日に限って雨降るし……しかも何故か私はやたら眠くて寝ちやうし、とにかく最近踏んだり蹴ったりだった。チビとうりぼーの散歩と言うのは正直アレかなって思うけど、一緒に居て言葉を交せるのは本当に嬉しいわね

「ずいぶん楽しそうだなタマモ？タマモもやっぱり散歩好きか？」

……1つ気の利いた事をしたと思っただらこれだ。女好きなのに、致命的な所でどこかズレている

(いやまあ、ズレてるから良いのかしら)

もしこれで普通の感性をしていたらとつくの昔に螢と交際していただろう。だからズレていて良いのかと思いはしたが、やるせない気持ちになったので

「あいだあ!?な、なんで足を踏むんだよ！」

「もう少し女心を知りなさい、このバーカ♪」

女心って何だよとぶつぶつ言っている横島にくすりと笑いながら、足元からこつちを見ていたチビとうりぼーに目配せする

「みーむうー♪」

「ぶぎゅー♪」

チビとうりぼーが歩き出し、リードがグイッと引かれる。横島がとつとつと言ってバランスを崩したのでその手を握り

「しようがないわね、チビとうりぼーは散歩したくてしようがないみたいよ。行きましようっ！」

「あーうん、なんか納得いかないけど、良いか。行こうぜ」

私の手を握ったまま歩き出す横島。ちらりとこつちを見たチビと  
うりぼーに小さくウインクすると小さく鳴いて動き出す

(ま、のんびり散歩って言うのも悪くないかもね)

やたらめつたら女の人に飛び掛る横島よりも今の落ち着いている  
横島のほうが好感が持てる。ただちよつと私よりもチビとうりぼー  
とかに優しくすぎよね、そこが正直あんまり面白くないけれど……今が  
凄く楽しいから良いかと小さな声で呟く

【……】

心眼がこつちを無言で見つめてきているのに気付いて口元に指を  
当ててシーつと言うジェスチャーをすると、心眼はすつと消えていつ  
た。言いたい事があっただろうけど、黙ってくれた心眼に感謝しなが  
ら2人でのんびりと広場に向かって歩く。熱くも無く、寒くもない丁  
度いい天候で実に良い散歩日和だ

(横島の側は相変わらず良い所なんだから、早くあんたもこつちに来  
なさいよ。シロ……)

今はまだ人狼の里に居るであろうシロに心の中でそう呟いている  
と横島がこつちを向いて

「タマモー、移動のクレープ屋だってよ。どうする？寄るか？」

広場のほうで移動式のクレープの屋台が出ているのに気付いた横  
島が私にそう声を掛けてくる。私は少し考えてから

「当然寄るわよ！買ってくれるんでしょ？」

おう！つと笑う横島と一緒にクレープの屋台に並ぶ

「はー結構あるんだなあ」

横島が感心したように呟く、値段は一律400円とかなりお買い得  
で、イチゴにチョコにブルーベリーとにかく種類が豊富だ

「おっちゃん、なんでゴーヤとアボガドのクレープがあるんだ？」

「健康志向ってやつだな。ちなみに売れたことは一度も無いぜ！」

バンダナをしてくっかつと笑う店主。どうしてそんな味を作ろうと  
思ったんだらうか？と首を傾げながら

「ストロベリーっ」

「はいよ、ストロベリーっね。注文はこれで終わりかい？」



店主が横島にそう尋ねる。横島はあんまり甘いものを食べないの  
でうーんつと唸りながら、それほど甘くないチョコレートを頼もうと  
すると、チビとうりぼーがメニューの写真の上に立つ

「お？フルーツクレープ食べたいのか？」

「みむうー♪」

「ぶぎゅ♪」

これこれっ！って言う仕草をしているチビとうりぼーに横島は苦  
笑しながら

「フルーツミックス一つで」

「はいよ、ちよつと待ってな？」

慣れた手つきでクレープを焼く店主。まずは私の方から焼きあが  
り、差し出されたストロベリーのカレープを受け取り

「ベンチで待ってるわね？」

「おう。先に食べてもいいぞ」

そう笑う横島に待ってるわよと呟き、近くのベンチの腰掛けて待  
つ。それから数分で横島が私のクレープよりも大分大きいクレープ  
を持ってやってくる

「大きくない？」

「でかいよ、これは」

こんなに大きいとは思ってなかったと苦笑する横島だが、チビとう  
りぼーはフルーツがたくさん入っているのを見て大興奮と言う感じ  
だ

「クレープ食べたってことは内緒で」

「はいはい、判ってるわよ」

シズクやノツブも食べるって言ったら困るもんねーと笑いながら  
クレープを齧る。思ったより甘くなくて、イチゴの酸味が良く利いて  
いて美味しい

「みむうー♪」

「ぶぎゅー♪」

チビとうりぼーも横島から与えられる果物に満足そうだ。今日は  
散歩に来て正解だったわねと笑いながら、横島と並んでクレープを頬

張ばって居ると

「こんにちわ、ちよつと良いかしら?」

赤のワンピースと黒いミニスカート姿の高校生くらいの少女が声を掛けてくる。緑色の目と金髪から日本人じゃないかもしれない、横島がミニスカートの下から見える太ももに目を引かれているのに気付き、肘打ちをわき腹に叩き込みながら

「なんか用?」

不機嫌ですつて言う素振りを見せ、刺々しい口調でそう返事を返す。だが目の前の少女はくすりと小さく笑いながら

「少し道に迷ってしまったの、逢引の邪魔をしては悪いと思うんだけど助けてくれないかしら?」

逢引?と首を傾げる横島に対して、私はな、なあつと上ずつた声を上げてしまう

「ちなみにどこへ?」

「GS協会よ、近くまでで良いから案内してくれるかしら?」

駄目よ断りなさいと心の中で念じるが、チビやうりぼーやモグラとの生活で煩惱が弱まりつつある横島は邪気の無い笑顔で笑いながら

「いいですよ。近くまで案内しますよ」

「ありがとう。助かるわ」

案内する事を了承してしまい、私は逢引と言われて混乱した事を悔い、チビとうりぼーが慰めるように肩に前足を乗せてくる。こいつはやっぱり困ってる人を見捨てられない奴なのよね……はあつと私は溜息を吐きながらこれも横島らしさだから仕方ないわねと呟くのだった……

面白い人間と言うことで直接接触を取ってみようと思い。神通力などを完全に隠し人間の姿に擬態して接触してみたけど

(変な人間ね)

人間である事は間違いない。間違いないのだが、その魂が実に複雑に入り混じっている。竜気に妖気に……これは何かしら?へんな魂が混じっている。人間か?と言われるとそうではないという印象を

受ける

「あの？何か？」

「え？ああ、うん。気にしないで」

知らないうちに顔を見つめていたのか、それに気付いたのかどうしました？と尋ねてくる人間になんでもないわと笑いながら

「さつきバンドナに眼が浮かんでるように見えたけど、気のせいだったみたいね」

「そ、ソウデスカー」

引き攣った顔で返事を返す人間。どうもこの人間は人騙すとか、嘘をつくとかが少し苦手なのかもしれないわね

「まあそれはいいわ、それでどうしてGS協会に用があるの？」

人間を護るように前に出る妖怪に思わず笑みを浮かべる。人外が人間を護る、そんな珍しい光景を初めて見た。それに

「みむう？」

「ぶぎゅ？」

こつちを観察するように見ているグレムリンと猪もだ。契約で縛り付けている訳ではない、ただただ単純に強い絆。それがこの人間とこの人外達を結んでいる。私の世界が合った時もこんな人間は居なかったわねと思いつつながら

「日本へ留学する予定なので見たいと思つたのよ」

今の世界の情勢は調べて全部頭に叩き込んでいる。退魔師や巫女は全てGSと括られる様になったとか、唯一神を崇める宗教が最有力とか。そういうのを調べた、そして私が自由な理由も判った。まさか自分が属する神話が廃れており、それに伴い神性の低下をしているなんて思っても無かった

「えっと……なんて呼べばいいですかね？」

ああ。自己紹介をしてなかったわねと苦笑するが、内心は笑みを浮かべる。この人間がこう質問してくると予想して名乗らなかつたのだから

「リンって言うのよろしくね」

「リンさんですか、どうも、俺は横島です。こつちはタマモ、それとチ

「ビどうりぼーです」

邪？変わった名前です全然邪な感じはしないけどと思いつながらよろしくねと返事を返す。しかし2匹の小さい妖怪の名前が適当な様な気もするが

「みーみー」

「ぴぐー」

その名前を気に入っているみたいだから別に良いか。本人が気に入っているなら別に良いか

「タマモ？どうかした？」

「いえ、別に？」

ただ邪の隣の人外は怪訝そうな顔をしている。神通力とかは全部隠したつもりだけど……探知されたか？と考えたのだが、ふてくされたようにも見えているので逢引を邪魔されたのを怒っているのだと思ひ、小さくごめんねと呟き

「じゃあ、GS協会までお願いするわね」

判つてます。こつちですと笑い歩き出す邪の後ろを歩きながら

「邪って変わった名前ね？」

「ん？変わった？俺の名前は横島ですよ？」

「だから邪でしょ？」

……なんか意思疎通が出来てない？私は首を傾げていると、横島はああ、日本語は上手くても字は知らないパターンかと呟き、手帳とペンを取り出して

「これで横島です。邪じゃないですよ？」

「あら、ごめんなさい。私は邪だと思つていたわ」

イントネーションの違いますかねえと笑う横島にごめんなさいともう1度謝り、私は横島とタマモに案内されながら東京と言う街と現代の人間の観察を再開するのだった……

「リンさんもGSになるんですか？」

「どうかしらね？霊能力があるからって一応留学するってだけよ。今日本に留学で来る生徒が多いの知らないの？」

知らないですねーと呟く横島。おかしいわね、結構どこの国でもそ

ういう話は出ていたんだけど……これを理由にしようと思っただから、知らないと言われるのは想定外だった

「美神か蛭にでも聞いてみたら？横島ってそういう新聞とか見ないでしょ？」

「かな？GS新聞。俺も取ったほうが良いかな？」

なんだ、ただ横島の情報収集能力の問題かと安心する。これがあんまり知られて無い情報だと疑われる原因になっちゃうし良かった

「そういう横島はGSなのかしら？」

「見習いですけどね。一応GSです」

見習い？横島が？その言葉を聞いて思わず横島を見る。内包している霊力は桁違いだし、人外から護られている横島が見習い……正直信じられないと言うか、現代のシャーマンはよっぽどみる目が無いのかしら？と思う

（現代は神代の時代よりも厳しいのかしら？）

私の時代ならば間違はなく優秀なシャーマンとして重宝されたはずだけど……現代だと認める基準が違うのかしら？

「いやー、俺はまだ勉強中ですからねえ。知識が足りないらしいです」

「知識ね……まあそれなら勉強すれば大丈夫なんじゃない？」

知識不足で見習い扱い……か。じゃあ知識をつけたらどうなるのかしらねと考える。現代の人間にしては規格外の霊力を持っていて、人外と親しくなる能力を持つ横島。それを長所として伸ばしたらきっと面白い事になると思う

「あ、リンさん。あそこがGS協会ですよ」

考え事をしている間にGS協会についてしまったようだ。会って話をして、横島の人間性とかを知ろうと思っただけけど、この短時間だと面白い人間としかわからなかったわね

「ありがとう、これ。お礼に上げるわ」

小瓶に詰めた青い砂を手渡す。太陽の光に当てて綺麗ですねーと笑う横島が私のほうを見て

「これなんですか？」

「私の地元のお守り。ご利益があるから大事にしなさい」

ありがとうございますごきますと笑う横島と別れ、GS協会の方に歩き出そうとしたんだけど

「おい、女神よ」

むっとした少女の声に呼び止められる。私は溜息を吐きながら

「何かしら？」

「あれは余が面白いと思いい見ていた者だぞ！なぜ横槍を入れる？」

横島に声を掛けたのが気に入らないと怒る少女。だけどそんなのは私には関係の無い話だ

「偶然会って、偶然話をしただけよ」

お互いに不戦の契約をしただけで、それ以外はお互いに何も取り決めなどしていない。どんな人間に興味を持とうが、それを咎められるいわれは無い……無いんだけど

「信じられぬ」

GS協会に潜り込んで調べようと思っていたけど、この様子だとずつついてくるわね。それに我侭な女帝だから何時契約を無かったことにするといい出すか判らない、今回はこれまでにしておきましよう

「はいはい、判ったわよ。ちょっと興味があっただけ、観察したいと思っただけよ。後は好きにすると良いわ」

まだ観察している段階だからなんとも言えないしねと呟き、それに太陽の下で十分に楽しんだし、今回はこれで引くとしましようか。あの女帝と事を構えるにはまだ私の力が足りないしね。私は地面を蹴ると同時に封印していた神性を開放しそのまま姿を消すのだった……

「むう、逃げおった」

残された少女はリンが消えていった方角を見つめていたが、完全に気配を消したリンの後を追う事ができず、面白くなさそうに呟く

「まあ良い、今はあやつは手を引いた。それで十分、次は余が見定めるとするか！」

横島が歩いていった方向を見つめていたその少女は楽しそうに、だがそれで居て邪悪のような、穏やかな相反する2つの様相をしながら

その場から溶けるように消えていくのだった……

リンの自身の神性を隠す技術は完璧だったと言える。GS協会の探知機にも、神魔の探知網にも引掛かる事が無かった。その点では完璧だった……だが彼女にとっての不運が1つだけあった

「今の感じは……」

アシユタロスだ。アシユタロスの存在を知らなかった、それが唯一の彼女の不運であり、幸運でも合った。自室で研究をしていたアシユタロスは一瞬だけ放たれたその神通力を察知したのだ

「まさか、いやそんな……ありえない」

アシユタロスが知っている知識ではない、だがアシユタロスを形作る核が知っているのだ、その存在を、その力を……ガープに天舟アマノナを見せられた時のような苦痛に満ちた表情を浮かべたアシユタロスは

「古代メソポタミアの神が顕現したのか？」

ただリンにとつても幸運だった事がある。それはアシユタロスの知識にはその霊基や神通力のパターンがあった、だがそれは知識だけであり、そして本人がありえない、そんな事はありえないと強く思っていたことも影響していた。彼女が何者なのか？と特定する事は出来ず、判つたのは古代メソポタミアの数多居る神族の1人が顕現しているかもしれないと言う可能性だけ……

「いや、ありえない、そんなことはありえないだろう。だが……いや、どうなっているんだ」

大勢居る古代の神をアシユタロスは知っている訳も無く、そして確信も持てない。ありえないと信じたい気持ちも強かった……だから「気のせい……だよな」

古き神々であり、そして強烈な性格をしている古代の神が大人しくしている筈が無い。そして感じたのも一瞬であり気のせいだと思ふことにしてしまった……しかししも、横島がリンから貰ったお守りを彼が目にしたのなら、苦渋に満ちた声でその瓶に詰められた物の名前を口にしただろう……『冥界の砂』……と

リポート12 東の間の平穩 その3へ続く



### その3

レポート12 束の間の平穩 その3

夕方からは散歩なのでそれまでは自室でチビとうりぼーと遊ぶつもりだったのだが、シズクと心眼に部屋を追い出され、タマモも取り上げられてしまった。シズクとタマモと心眼。その面子で何をやるのだろうか？と思ったのだが有無を言わさない迫力があつたので逃げるように部屋を出てしまった。とりあえず散歩の時間まではリビングでうりぼーとチビと遊ぶ事にしたのだが、そこで予想外の出来事が起きてしまった

「みむう？」

「ぶぎゅ……」

チビはすると俺の肩の上まで登って来たのだが、うりぼーは頑張っではいたんだが、登る事が出来ず俺の足元で鳴いている

「蹄じゃ無理か……」

多分掴む事が出来ないので登る事が出来ないんだと思い、抱っこしようとするが

「ぶーぎゅーー」

諦めないと言う感じで俺の手をすり抜けて再び登ろうとするうりぼーだが

「ぶぎゅうううううう……」

ダツシユが利いている間は登れるのだが、その勢いがなくなった瞬間ずりずりと落ちてくるうりぼーを両手で受け止める

「ぶぎゅ……」

「とりあえず、チビも降りようか？」

恨めしそうな顔でうりぼーが自分を見ているのに気付いたのか、チビは直ぐに俺の肩から降りる。俺はそれを見ながら近くに転がっているボールに手を伸ばし

「ほれ。うりぼー」

「びゅっ」

ボールにヘディングをしてこっちに返すうりぼーに器用な奴だな  
と思いな

(もう少し何か遊ぶ道具を考えてやろうかなあ)

チビと一緒に台車とかを回しているけど、モグラちゃんほど手先？  
いや前足か？……まーよく判らんが多分前足が器用ではないので、  
ボールでキャッチボールとかは出来ないの、そのまま走って遊べる  
何かを用意したほうが良いかな

「みむう？」

「ぶぎゆう……」

「あーごめんごめん」

遊んでくれないの？とボールを抱えながらこっちを見つめている  
チビと不満そうなうりぼーを見て、1度考え事を中断してチビとうり  
ぼーと一緒に遊ぶ事にするのだった……

【横島ただいまー。近くで沖田と会ったから饅頭を買って来たぞー。  
茶にしよう、茶に!!あ。ワシ、メロンパンも食べるからホットミルク  
もな!】

【のーぶー♪】

【横島君。お邪魔しますね】

ノツブちゃんとチビノブが騒がしく帰宅し、少し遅れて沖田ちゃん  
が部屋に入ってくる。ノツブちゃんとチビノブはあんまり仲良くな  
いのだが、メロンパンを買いに行くときはめちやくちや仲が良くて、  
なんか知らないけど、ノツブちゃんと沖田ちゃんって仲良いんだよ  
な。やっぱり相性とかかな?と思いつながら膝の上のチビとうりぼー  
を1度机の上に乗せて立ち上がりながら

「緑茶でいいよな?」

お茶菓子とメロンパンを買って来てくれたのだからお茶くらい用  
意しようと思ひ、緑茶で良いよな?と尋ねるとそれで良いという返事  
が返ってくる。シズクがお茶の淹れ方を教えてくれたからなあと思  
いながら急須と湯飲みを用意していると

「みむ」

「ぶぎゆう」

チビがうりぼーを抱えて目の前に浮かぶので、俺は苦笑しながら冷蔵庫を開けてりんごを取り出して

「ちゃんとチビとうりぼーの分のおやつも用意する」

やったーつと嬉しそうに目の前を飛ぶチビとうりぼーが縁側に向かうのを見ながら、やかんでお湯を沸かしながらりんごの皮を剥き

「早く牛若丸も一緒にお茶出来ると良いな」

【全くです。もう少し具現化できると思いますが……】

ちかちかと光りながら頑張りますと言う牛若丸に無理はするなよ？と声を掛け、お盆の上に急須と湯のみそれとチビ達のおやつりんごを乗せて縁側に座っているノツブちゃんと沖田ちゃんの下へ向かうのだった……

横島達を部屋から追い出し、机の上に置かれた小瓶を私と心眼とタマモで見つめる。見た目は小さな小瓶と青い砂で、どこかの土産のように見えるが、判る人間ならば判るし、私でも一目で理解した。これには恐ろしいほどの負の神通力が込められている事に

「……お前。会った時に気づかなかったのか？」

「無理言わないでくれる？精霊石で霊力を増幅してるのよ？周りの探知能力とかに期待しないでよ。むしろそれを言うなら心眼でしょ？」

【すまない。私も感知は出来なかった、私の感知できる範囲を超えていたか、それを潜り抜ける程に力を下げていたのかもしれない】

タマモはともかく心眼が気付かなかったか……となるとやはり相当高位の神霊の持ち物なのだろうか

「……負の神通力を持ちながらも、清らかな神性か……となると相当限られた存在だな」

死神とかなと呟くとタマモが首を傾げながら

「いや、死神ってどう考えても邪悪でしょう？」

……その言葉に軽い頭痛を感じたが、そう言えばタマモは神魔からは一方的に距離を取っていたから知る由もないか、だが説明するのも面倒だな。心眼を見ると心眼は私の考えている事を悟ってくれたの

か、死神についての説明を始めてくれた

【死神は限りなく善性に近い性質を持つ負の存在でもある。人間の魂は輪廻転生、死期が近づいた魂を安らかに冥府へと導く存在だ。確かに人は殺すが、その存在は悪とは程遠い】

「……そういう訳だ。だから負と正の性質を持つ事が出来るが……これは一体なんだ？」

横島の話ではお守りと聞いていた。確かにお守りとしての効能はあるだろうが、この砂が何か判らない

【悪意はないと思う、横島を守ろうとしているのは間違いない】

心眼と私で調べたが、間違いなくお守りとしての効果はあるだろう。だがこれだけの物を渡せる存在となると無償とは思えない

「……タマモ。これをくれたのはどんな奴だ？」

「金髪のツインテールで翡翠色の眼をした横島と同年代っぽい女だったわね」

金髪と翡翠の目……当然ながらその外見をしているとは思えないし、姿を変えている可能性も高い。だから容姿と言うのは全く当てにならない

「……とりあえずだ。これをどうするかを考えよう」

渡した神が気になるが、特定出来ない上に探す手段がない。なので神については保留にする事にする

【私はお守りとして持つておく事に問題はないと思う】

強い神通力を放っているから横島の防御を上げるのに役立つと提案する心眼に対して私は首を横に振った

「……神が無償で物を与える物か。お守りである事は認めるがリスクを考えろ」

そういうあなたはどうかの？と笑うタマモを無視して神から無条件で力を借りることに対する危険性を話すが

「でもさ、死神がくれたお守りなら何かに役立つかも、ガープとか何をしてくるか判らないし」

それを言われると辛いけど、だがその神がガープの手の物ではない保証も無いと最後まで反対したが、最終的に役立つ物かもしれないので

横島に渡しておく事に決定した

「お礼とか言ってたし、多分其処まで害は無いと思うわよ」

【敵意があるなら私もタママも気付くしな】

多数決になってしまえば私はここからひっくり返すことなど出来ない。ただ今度からは散歩とか、横島が出かけるときは水で様子を見ようと心に決め、その小瓶を机の上に乗せてリビングに戻るよ

【はー、良い天気ですねえ。お饅頭と熱いお茶が美味しいです】

【ワシはメロンパンじゃからホットミルクじゃがな】

「でもこの饅頭餡子がいいから美味しいな。どこで買ったの？」

【のーぶー♪】

「みむみふ」

「ぶぎゆう♪」

縁側で横島達が並んで饅頭を齧りながら話をしていて。散歩に出ているノツブは判るが、沖田までいるのか……

「あ。シズク話は終わったのか？シズクの分もお茶と饅頭残してあるぞ」

「……貰おう」

チビとうりぼーを持ち上げて横島の隣に座り。私の湯飲みと饅頭を取り分けてある皿に手にする

「何の話をしてたんだ？」

「……あのお守りとか言う小瓶を袋に入れて首から下げられるようにするかとかそういう話だよ」

横島が気にする事じゃないと笑うと、それなら俺がいても良かったんじゃないか？と言う横島

「……部屋の掃除もついでにしたからな。チビもそうだが、うりぼーとタママの抜け毛がひどいぞ」

「……それはしようがないんじゃないかな？」

人間の姿では座るところが無いと判断したタママが私の横をすり抜けて、横島の膝の上で丸くなる。横島がそんなタママを抱き抱えながらしようがないと笑うのを見て誤魔化すことは出来たかと思いい饅頭を齧る

「……………ん？美味しいな」

【そうじゃろ？隣町で美味しいって有名な和菓子所から買ってきたからー！】

【のぶー！】

メロンパンを買いに行くついでに良い店を見つけたと言う事か、今度その場所を聞いておこう。いい和菓子だからお茶受けに丁度いい【良い日向ぼっこ日和でお茶もお饅頭も美味しい……………もう言う事ないですねえ】

「だなあ……………」

縁側に並んで座りのんびりとした時間を過ごす。横島の家は今日も平和……………

【かふっ!?!】

【突然の吐血!?!】

「あああ……………シズク！座布団！座布団持ってきて!!!」

「……………つたく。しようがないな」

1 悶着ある物の、今日も横島の家は平和なのであった……………

夕方。日も暮れてきて、良い具合になってきたのでチビとうりぼーを連れて散歩に出掛けることにした。タマモに声は掛けたんだが「くうん」

ソファで寝転んで起きる気配が微塵も無いので、今日は付いて来る気がないと判断しチビとうりぼーだけ散歩に連れて行くことにした。チビノブは

「……………そう。上手だ、猫の手だぞ」

【のつぶうー！】

シズクに教わりながら人参を切っていた。チビノブは知識欲が凄いのか、いつもシズクに何かを教わってると思う。そんな訳なので散歩に誘うのは止めにしたのだ

「ぶぎー…ぶぎぎぎー!!!」

公園で走り回るうりぼーとその上を飛んでいるチビ。楽しそうに何よりだが、砂場にも突撃しているので帰宅後風呂だという事に気付

いているのだろうか？野性の本能的な物でそれが判つていても砂場に突撃せずに入られないのだろうか？其処が少し気になる所だ

「ぶぎゆうツ!!」

ざくざくと音を立てて砂場に潜っていくうりぼー。その早さはモグラちゃんと同じか、それ以上に早く。うり坊も穴を掘るのは得意なんだなあと感心しながらポケットに手を入れる

「ランタンはいいのか?」

「イヒヒ」

念の為にGジャンのポケットに入れていたウイスポ眼魂を出して遊ばないのか？と尋ねるがちかちかと光り元気の無い返事を返すだけ

(なんか最近元気ないよな。何でだろ?)

眼魂も風邪とか引くのかな？などと考えていると砂場で穴を掘っていたうりぼーがこっちに突撃してくる

「待て待て！砂まみれで突っ込んでくるな!!」

「ぶーぎゅー♪」

嬉しそうに跳んで来るうりぼーがもう少しで俺の服に飛び込んでくるという瞬間。まさかの襲撃者が現れた

「かー」

「え?」

「ぶぎゅー」

「みむ?」

空中から降りてきたカラスがその爪でうりぼーを捕まえ飛び去っていく。一瞬呆けたが、上空でうりぼーの声を聞いて我に返る

「う、うりぼーーーー!?!」

「ぶ、ぶぎゅううううう!?!」

まさかの強襲劇このままではうりぼーが食われてしまうと気付き、俺は慌ててチビにうりぼーを追いかけるように指示を出す

「チビー・ゴーツー!」

「みむー!!!」

慌ててカラスを追いかけて行くチビの後を追って、俺も全力で走り

出すのだった……

「かーかーかー!!」

チビの威嚇放電で慌てて逃げていくカラス。その前足から落ちたうりぼーの落下地点に向かって頭から滑り込む

「ぴ、ぴぎゅう……」

「せ、セーフ……超セーフ……」

手の中でふるふる震えているうりぼーを見てセーフ、超セーフと繰り返して呟く。まさかカラスが襲って来るなんて想定外も良い所だ……今後気をつけなければ

「あははっは……はははは！面白い見世物だったぞ」

突然聞こえてきた声に思わず顔を上げると目の前に白い足があり、更にその視線を上にと上げるとスカートの裾が見えた

「わわわああ?」

うりぼーを抱き抱えて慌てて後ずさる。完全に不意打ちだったので煩惱とかそれ所ではなかった……

「ははは、愛い奴め」

俺のその反応を見て笑っている少女は夕暮れの光を浴びているせいか、まるで舞台の上に乗っているように見えた。明るい色調のワンピースと鮮やかな金色の髪を翻し笑うその姿は無防備なのにまるで隙が無く、威圧感や人の上に立つべき存在とでも言うような強烈な存在感を持っていた。彼女は笑いながら近づいて来て

「何時までも座ってないで立ち上がれ」

「え、あ……ありがとう」

立ち上がってみると先ほどの威圧感はずさほど感じず、思ったのは小さいだった。俺が176cmなのだが、頭1つ分は背が低い、150cmくらいだろうか

「うむ。では行くぞ」

「はっっ。」

付いて来いと言う少女に困惑気味に返事を返すとその少女は小さく舌を出して

「観光に来たのは良いのだが、帰り道が判らぬ。この××ホテルなのだ



が、案内してはくれないか？」

「あ、それなら場所知ってるから案内する……暗くなる前に戻れると思うよ」

助かると笑う少女。見ている短い時間でころころ表情が変わるな、会ったばかりだけどなんか古い知り合いみたいに思える……不思議な気配をした少女だな

「しかし悪魔を連れているとは、お前もGSなのか？」

「まあ一応かな？と言うか、お前も？って？」

もしかして彼女もGSなのかなと思っていると、少女は楽しそうに笑いながら

「女は秘密の多い物だ。だから秘密だ！余は観光に来ている。それだけは教えてやろう！」

思わず息を呑むような怖い顔をしたと思ったら、今度は邪気の無い見かけ相当の優しい笑顔を浮かべる。掴み所が無いような、でも親しくなれそうな……凄い不思議な気配の少女だ

「みむう？」

「ぶぎゅ」

チビとうりぼーも警戒すれば良いのかそうじゃないのか、判らないようでしきりに首を傾げている

「ふっふっふ、そんなに悩むものでもあるまい。大事な事はな、常に1つだけなのだ！」

教えてやろうか？と悪戯っぽく笑う少女に思わず頷く、するとその少女はうむつと胸の下で腕を組む。その時ぶるんつと揺れた胸に思わず目が行きかけてしまったが、チビとうりぼーがこつちを見ているのでそれを必死に耐えていると、目の前の少女はそんな俺を見て楽しそうに笑いながら

「本当に大事な事は心で決めるのだ。そう決めていれば迷う事などない」

自分の心に逆らえば、それは追々遺恨を残す。ならば自分が今本当にやりたいことをやれば良いと笑う少女に

「それ凄い自分勝手じゃない？」

「そんな事は知らん！余の管轄外だ！」

ドヤ顔をする少女だが、その言葉は妙に説得力があった。暫くそんな話をしていると、ホテルが見えてくる

「ここまで来れたら大丈夫だ！感謝するぞ」

「いや、別に良いけど……知らない所なら一人で出歩かないほうが良いと思うぞ？えつと……」

今回はなんとも無かったが、毎回そうとは限らない。だから気をつけるように言おうとして、少女の名前が判らず口籠っていると

「ネロだ、今回は助かったぞ。横島……ではな！また会おう!!」

「あ。まつ……行っちゃったか……」

あつという間に駆けて行ってしまったネロの後姿を見て、追いかけて言うのも変な話だよなと思い散歩を続行しようとして

「あれ？俺名前乗ったつけ？」

なんでネロは俺の名前を知っていたんだろうな？俺はその事が気にはなった物の、チビとうりぼーの散歩が残っているので話の中で名乗ったかな？と思い。チビとうりぼーを連れてその場を後にするのだった……

なお帰宅後は言うまでもないが一騒動あったのは言うまでもなく

……

「お風呂の時間です」

「み、みむうー!!!」

「ぶぎやーツ!!!」

「逃がすかッ!!!」

お風呂と聞いて逃げようとするチビとうりぼーを栄光の手で即座に捕まえる。こうやって見ても泥まみれだ、本当に良くここまで汚れたなと感心するレベルだな

「……横島。チビとうりぼーが汚れているならリビングに入れる前に風呂に入れろ」

「判ってる」

じたばたと暴れるチビとうりぼーに大人しくしろと声を掛け、まだ逃げようともがいているチビとうりぼーをお湯を汲んだ桶の中にほ

り込んで、手にボディシャンプーをつける

「み、みぎいいいいいい!!」

「ぷ、ぷぎやあああ!!」

「はいはい、暴れないシズクに怒られるぞ」

泡に包まれ暴れているチビとうりぼーだが、シズクに怒られると聞いて大人しくなったので一気に泥を洗い流す

「みむう……」

「ぴぐう……」

桶の中で気持ち良さそうにするチビとうりぼー。お風呂じやなくてシャンプーが嫌いなんだよなと苦笑しながら、俺はタオルとドライヤーを用意しチビとうりぼーを乾かす準備をするのだった……

「さてと、だいそうじよう。いるな?」

横島から背を向けて走っていたネロがそのスピードを緩めながら問いかける。澄んだ鈴の音の後に物陰から小柄な老人が姿を見せる……だがその顔には生気が無く、皺くちゃの顔と生気の無いその表情からとても生きているようには見えなかった……だがその落ち窪んだ目が放つ異様な光が老人が生きていると言う証だった

「拙僧に何かござようでしょうか?」

「うむ。好きにやれと言ったが1つだけ命令をしようと思つてな」

そう笑ったネロは振り返り、横島が歩いて行く姿を見て邪悪な笑みを浮かべ

「余はあれが気に入った。だがまだ若いし、力も足りぬ。1つ試練を課してやれ、そしてその力を開眼させよ。死んだら死んだ時、その程度の器として諦めよう、徹底的に追い詰めよ」

「姫のお心のままに……」

現れた時の様に鈴の音と共に消えていく老人にネロは満足げに笑い、もう1度横島のほうへと視線を向け

「ここまで来い。余と共にあれるほどに強くなって、もう1度余に会いに来い」

ネロはそう呟くホテルへと足を向け、ゆっくりとその場を後にした

……魔人が再び現れる時はもう直ぐ其処に迫っているのだった……

別件リポート 査問会へ続く

## 別件リポート

別件リポート 査問会

冥華さんが開催した使い魔同士の戦いが終わった後。それからが私にとつての戦いの舞台だった……深呼吸を繰り返し、気持ちを落ち着けさせる……誰かが持つてきた現在の霊能に関する上役の不正、それに神代家の相談役の悪巧みの証拠。その全てを全部手元に揃えた……それでも不安は胸に募る

(一番不味いのは叔父さんの事を突かれる事)

私が叔父さんに幽閉されていた。その事実が私にとつての不利な点となる、そしてそこが私の最大の弱みとなり、それを知っている上役達はその様な経歴を持つ私がGS協会の会長に相応しくないと責めて来る。正直唐巢神父、冥華さん、それに令子さんやエミさんと言う存在がいなければとつくの昔に協会長の地位を奪われてもおかしくないという状況だった

(このままじゃ行けない)

いつ地位を剥奪されるかと言う不安を持っていては自分の政策に思い切りのいい一手を打つことは出来ない。そしてGS協会の改善をしても、良いタイミングで私を蹴り落とし自分がその地位に入ろうとしている上役は多い。神代家のつながりで信用出来る人間が増えたからこそその自体だ

「琉璃ちゃん、緊張しすぎよ」

冥華さんが部屋の中に何時入ってきたのか気付かなかった。私はそれほどまでに動揺していたのかと今初めて知った

「ですが……」

「確かに琉璃ちゃんは弱点多いわく幽閉された事、強引とも言えるGS協会の方向転換、それに伊達君や陰念君とかへの仮GS免許の交付」

強引である事はわかっていたし、自分への弱点になる事も理解していた。だがGSが減っている今、多少前科があったとしても、それは

人知を超えるソロモンの魔神ガープによるものだ、それを罪として責める方がおかしい

「良いく今の上役はくGSを金儲けとしかく見てないわく」

大物政治家とかと癒着もしてるしねくと笑う冥華さんだが、目が全く笑っていない。その圧倒的な眼力に思わず息を呑む

「それに今回の査問会だって不服としてるわく小娘が私を抱きこんで何かを企んでるくとか言ってるみたいね」

「迷惑をおかけします」

正直言つて今回査問会を開く事ができたのは冥華さんの力が大きい。今回の査問会だって失敗すれば、冥華さんの日本国内のGSの本本と言う地位に大きな傷をつけるかもしれない、それが不安で仕方ない

「琉璃ちゃんく貴女なら出来るわく貴女が思うように、そして貴女を甘く見ている馬鹿達に格の違いを見せ付けてやりなさい」

間延びした口調からはきはきとした力強い口調になる冥華さんに判りましたと返事を返すと同時に

「会長。お時間です」

「ありがとう、今行くわ」

迎えに来た部下に頭を下げ、頑張つてねと笑う冥華さんに行つて来ますと返事を返し私は査問会へと向かうのだった……

査問会が始まって2時間ほど経つてから会議室に入室する。その中では事前の予想と異なり、堂々とした表情と仕草で査問会に呼ばれていた上役に神代家の相談役と対決している琉璃ちゃんの姿があった

(うん、やっぱり私の見立ての通りね)

その表情と狸共を相手にペースを渡さず、自分の流れで話を続けている琉璃ちゃんを見て思わず笑みを浮かべる。人には分相応の地位と言うものがある、そして上に立つ人間には特別な才能が必要になる。その点では琉璃ちゃんは人の上に立つ才能を持ち合せている

「神代会長。そこまで私達を責められるのならば、私も言わせて貰い

ましょう！白龍会の前科持ちの人間に仮免許を交付するなんてどう  
いうおつもりですか！」

GS免許の発行と登録を任されている50名の男性職員がそう叫  
びを上げる。周りからはそうだそうだという声が響くが

「お静かに、白龍会の前科もちの人間と仰られますが、人知を超えたソ  
ロモンの魔神ガープに人間が抗う事が出来ると思えますか？」

「まずそれがでっちあげだ！日本なんかにそれだけの魔神が現れる者  
か！」

海外のGS協会から派遣されている職員が即座にそう叫ぶが、お静  
かにと言う琉璃ちゃん言葉に強制的に黙らせられる

「では貴方は天界と魔界から派遣された神魔が嘘をついている。そう  
言うのですね、判りました。ではその時現場に居てくれた神魔をお呼  
びしましょう」

「そ、その様な無礼な「いえ、無礼ではありませんよ？査問会を行うと  
決めた段階で連絡をいれ、来てくださるようお願いしておりますま  
だ到着しておられないようですが、……妙神山の管理人「小竜姫」様  
と魔界正規軍副指令「ブリュンヒルデ」様の両名が到着しだいお呼び  
しても宜しいでしょうか？」

その言葉に顔から血の気を引かせ、い、いえ結構ですと引き攣った  
顔で眩き座り込む職員。この言葉に更に笑みを零した、小竜姫様もブ  
リュンヒルデも呼んでいない、完全なハツタリだが自信満々に言われ  
るとまさかと思う。これは非常に効果的なハツタリだ

「では議題を戻します。人間が人知を超えたソロモンの魔神に抗える  
わけが無い、そもそも彼ら自身も被害者であり、彼らを加害者としよ  
うとする、それがまずおかしいと思うのです。それに白龍会について  
は神魔から無罪放免の処置と連絡が入っているはずなのですが、いつ  
まで彼らを前科持ちとしているのですか？先週それを取り下げるよ  
うにと連絡を入れたはずですが？」

やるわねえ、査問会が始まるまではびくびくしていたがいざ生まれ  
ばきつちりと意識を切り替えている

「そ、それは私の方まで、連絡が「職務怠慢なのではないでしょうか

？霊能犯罪科の局長として職務を理解していますか？」うぐつ」

笑顔で言われ言葉に詰まる局長。他にも何人も青い顔をしているのでかなり痛い所を突かれているのだろう

「そうそう、局長にぜひお聞きしたい事があるのですが？」

「な、なんだね！わ、私に疚しい事など何も無い!!」

必要以上の大声で返事をする。馬鹿な奴だ、あんな様子ではやましい事があると自白しているような物と言うことに気付いていないのだろうか？

「大手建設企業から、白龍寺のある山を貴方から買うという話があり、前金を払ったのと言う苦情が出ております。そちらの業者の方には詳しく説明をし、あの山は競売に出ないと説明しましたが、これに關してはどういうことなのでしょう？」

金魚のように口をパクパクさせる局長。インサイダー取引ね、これであの男も終わりつと……

「いい加減にしていたくださいですな、当主殿？我ら相談役がこの場に呼ばれた理由が判りませんが？」

相談役の長が琉璃ちゃんを見てにやにやと笑いながら告げる。それは自分がやろうとしていた犯罪がバレる訳が無いと言う絶対の自信があるから浮かべる事の出来る嘲笑だろう

「理由ですか。本当に無いといえますか？相談役長神大司さん」

「ありませんな。私達はお家の繁栄の為に動いております故」

自信に満ちた表情をする神大に琉璃ちゃんはそうですかと呟き

「出来れば自供して欲しかったのですが……まあ良いでしょう」

今回の査問会には警察の霊能犯罪科や公安それにオカルトGメンでも信用出来る人物が同席している。さっきから若い職員が出たり入ったりしているのを見ると逮捕する為の準備をしていると見て間違いだらう

(一気に上層部が入れ替わるわね)

それはそれで混乱を呼ぶだろう。だがいつ牙を剥くかわからない相手をそのままにする方がよっぽど危険だ

「今年のGS試験で合格した横島忠夫、そして私の血を分け、現在氷室



舞と名乗っている旧姓神代舞の誘拐については覚えがないと?」

「……ありませんな。どこから出た話ですか?」

一瞬間があつたわね、流石神大の狸だ。動揺しても表情を変えることが無いとは

「私の乳母の梅さんと、貴方の元から逃亡してきた神大の人間を保護しております、それと彼が持ち出した資料。出来れば貴方と筆跡鑑定をしたいと思います」

筆跡鑑定。確かにそれは証拠となるだろう、だが少し札を切るタイミングが早かった……思わず顔を顰める

「保護? ああ、そう言えば先日から行方不明になっている部下が居りましたね、保護していただけで感謝しますよ。それで彼が持ち出した資料の文字と私の筆跡鑑定ですね? 受けますよ。どうぞ」

にここにこと笑う神大が自分の筆跡を提出する、その仕草は勝利を確信した表情だ。まさか……偽の資料を掴まされた

「ああ、良かったです。実は保護したって言うのは嘘なんですよ、彼自身で自分は囷だからと証言してくれました」

査問会が行われている会議室の雰囲気が一変した。笑顔のまま告げる琉璃ちゃんに査問会に呼ばれた全員の視線が集中する

「その後彼が正しいアジトの場所を証言してくれました。さて……今何時ですかね?」

時刻は丁度15時を回った所……そして琉璃ちゃんの言葉と同時に会議室の扉が開き

「会長! 見つけました。神大相談役長が計画していた犯罪の実行書と、監禁するために用意された牢屋など全て発見しました!!」

飛び込んできた若い職員を見て勝利を確信した琉璃ちゃんが笑みを浮かべる。それに対して神大はその顔を真っ青に染め

「こ、この小娘があああッ!!!」

唾を吐きながら怒鳴り散らすその姿に先ほどまでの余裕に満ちた表情は無く、完全に動揺しきっているのが判った

「いつまでも小娘、小娘と侮っているからこんな事になるんですよ、私は本気で今の日本のGS協会を変えようとしている、その為ならば

非道と言われる手も打ちましょう。何故ならばまた何時ガーブが襲ってくるかもしれない、どんな脅威が起きるかも判らない。そんな状態でお互いの足を引っ張り合うつもりはありません」

琉璃ちゃんはその笑うと会議室の中心までゆっくりと歩き

「小競り合いで全滅したいのならどこか別の所でやれ、お前達の利益の為に何百人、何千人と言う死者を出すつもりは無いッ!!」

その一喝は完全に会議室を支配した。女帝としての貫禄を見せつけ、自分がただの小娘ではないという事を証明した琉璃ちゃん。それは彼女の人の上に立つ才能が完全に開花した瞬間だった……

査問会に来ていたオカルトGメンや公安によつて何十人も逮捕されるのを見て、ご協力感謝しますという言葉に見送られ執務室に戻る「っ、疲れた……」

精神的にも肉体的にも疲れた。しかし本当に長い間を生きた狸共は厄介ね、途中何回も足を掬われかけた……こんな相手と戦ってれば、冥華さんがあれだけ強かになるのも納得だ

「お疲れ様〜」

「冥華さん」

ノックと共に入ってきた冥華さんの姿に思わず安堵の溜息を吐く。何人も罫に嵌めた、そのせいかさつきから胃が痛くて仕方ない

「ゆっくり休みなさい〜って言いたいけど〜そんな時間は無いわよ〜?」

「判ってますよ」

これが終わりではない、これからが始まりなのだ。腐った上層部は予定通り全員排除する事が出来た、全てはここから始まるのだ

「これ〜六道家で信用出来る〜霊能者のリストよ〜」

「ありがとうございます。正直私の知り合いだけでは全然足りませんでした」

神道家の霊能者は全員有能だが、それだけでは全然足りないのだ

「それに〜今回の事のニュースも騒がしくなるわよ〜?」

「それも判っています」

人数にして21名。それだけの人間が今回の査問会で逮捕された、中には10年も役員をやっていた男もいたし、海外から派遣されている職員も何人も居た

「どうして、こんな事が出来るんですか？」

今は日本だけではなく、世界的な危機だと言うのに、どうして自分の利益を求めて行動できるのか？それが私には判らない

「自分に被害が出ないからよく自分に実害が出ないのならばよく何も不安に思うことは無いでしょう？」

「対岸の火事ですか……」

「そういうことく後は自分の利益を持つてく逃げるだけく、あく後持ち出した情報もお金になるわねく」

これから日本で何かが起きることは判っている。だから危険を感じたら逃げる、そしてその情報売ってお金にする、最悪ともいえる悪循環だ

「でもその悪循環はく断ち切ったわくここからが琉璃ちゃんく貴女が頑張るところよく？」

「判っています。またお力を貸して貰えますか？」

私には知識が足りない、経験が足りない。今回は上手く行ったが、これからも上手く行くなんていう保証は無い。だから力を貸してくださいと言うと冥華さんは何を言ってるのくと笑い

「力を貸すのは当たり前よくこれからが大変なんだからね」

にこにここと笑う冥華さんにありがとうございませと笑う。冥華さんはよく頑張ったわく少し休みなさいと言うので私はその言葉に甘え、背もたれに背中を預け、目を閉じるのだった……

翌日新聞やニュースでGS協会会長神代琉璃と六道冥華による、強引とも言える。上層部の入れ代わりに関するニュースが報道され、強引と言う批判をする有識者も多かったが、その大半はGS試験に参加していた評論家や有識者それに、議員による、強引だが、しかしこれから起きるかもしれない災害に対しての備えとし、有事の際の足の引つ張り合いを避ける為の手段として有益。そして彼女自身も苦渋

の決断だったと言う言葉により徐々に琉璃を批判する声は小さく  
なっていくのだった……

「やっぱり彼女は指導者としての才能があるわ」

そして日本ではない何処かで今回の査問会の立役者である女性は、  
日本語ではない文字で書かれた新聞とそれに写っている琉璃を見て  
小さく笑い、その新聞を公園のゴミ箱の中にいれ歩き出すのだった  
……

リポート13 常世のだいそうじょう その1へ続く

## リポート13 常世のだいそうじょう その1

リポート13 常世のだいそうじょう その1

チリーン……チリーン……澄んだ鈴の音は闇の中に響き続ける。そしてその音色から遅れてしわがれ声でお経が唱えられる

「南無阿弥陀仏迷わず、天上楽土へ向かうが良い」

闇の中を進む黄色の法衣に緑の袈裟を身に纏った異形は進み続ける、その後ろに安堵しきった表情で倒れる数多の人達を置き去りにして歩み続ける

「拙僧が救おう、この苦しみしかない現世から、生き続ける苦しみから拙僧が救ってしんじょう」

何も映さない空虚な瞳で遠くに見える街の明かりを見つめ、異形……だいそうじょうは溶ける様に消えていくのだった……

「またこれか……」

私はGS協会から回されてきた資料を見て深く溜息を吐いた。深夜に発生する何百人と言う謎の突然死、この情報が回ってくるのもこれで4件目だ。死者は既に1000人を超えているとTV局などは好き勝手報道してくれている。何も知らない素人と言うのはこれだから嫌なのよ

「でも美神さん……「死んで」ないんですよね？」

「ええ、心臓は止っているし、脈も無い。だけど「死んで」はいないのよ」

私が机の上に置いた資料を見て蛍ちゃんがそう尋ねてくるのでそう返事を変えず、まるで謎掛けだがそれが事実なのだ。確かに脈も心臓も止っている……医学的には死んでいるといわざるを得ない状態なのだが、魂の尾が繋がっている。魂の尾が繋がっているそれはすなわち死んでは居ない、もしくは蘇る事が出来る段階にあるのだ。それ

が判らないTV局などが騒ぎ立てているが、霊能の観点から見れば今はまだ死者は出ていないと言える。色々調べた結果から確信を持っている

「多分何らかの術で強制的に魂と肉体を切り離されていると思うのよ」

「つまりその術者を倒せば……生き返る？」

琉璃やくえすの分析の結果だ。術者によって強制的に魂を切り離されていると見て間違いない、だから術者を倒せば助ける事が出来る。だがその場合術者が切り離れた魂で自身を強化していたり、術具を作っていたりすればその魂は元には戻らない。何の目的があつてその術者が魂を集めているのか？それを知らなければならぬ

「まずは情報を集めるわ、蛍ちゃん付き合つて」

「良いんですか？」

蛍ちゃんの大丈夫ですか？と言う意味が込められた言葉に笑いながらジャケットを羽織り

「関係ないわ。何も知らない素人が騒いでもね」

GSなら早く犯人を見つけろとか言う馬鹿や、GSの反応がごてに回っている事ばかりを責めるTV局なんて気にするまでも無い

「判りました。とりあえず、昨日の大量死の現場に行つて見ますか？」  
「それで行きましょう。GS協会の調査団も動いているだろうからね」

じかに現場の人間に話を聞いたほうが何か判るかもしれない。まずは情報と手がかりだ、それを得ない事には動き方なんて判らない

「横島はやっぱり待機ですか？」

「今のところはね」

横島君は人外と遭遇する確率が高すぎる。今何の手がかりも無い状況で動かして良い手駒ではない、もう少し対策などが出来てやつと動かせる駒だ。だから今は待機させるしかない

「とりあえずダウジングとかは頼むわ、おキヌちゃんを連絡係りでつけているからある程度は大丈夫よ」

シズク達が居るから横島君の護りは万全だからねと笑い、事務所を

出ると同時に駆け寄ってくるTVクルーを見て大きく息を吸い込み「やかましい!!今調査に出るのよ!邪魔するなら全員しよつ引いてもらうわよツ!!」

霊能者に過度に付きまとう行為はれっきとした犯罪だ。向こうが何かを言い出す前にそう叫ぶと慌てて引き返していくクルーにざまあみろと思いつながらガレージを開けて

「じゃあ、行くわよ。移動中に携帯で横島君に連絡して頂戴」

元気よく返事を返す蛍ちゃんを見ながらコブラのエンジンキーを挿しながら、今回の敵の正体について考えていた。ガープは真つ先に名前が上がったが消えた、ガープなら魂の尾を残すなんて真似はしないだろう。しかし並の悪霊や魔族が出来るだけの規模ではないと言うのはブラドール伯爵が証言した少なくともガープクラスの上位神魔が関わっていると……

(マタドールの仲間とか言わないわよね)

香港で戦ったマタドール。数は少ないが、複数存在している魔人。その内の1体が日本で動いているとかだったら最悪ね……私はそんなことを考えながら昨晚の大量死の現場に向かってコブラを走らせるのだった……

謎の大量死のニュースを報道していたTVに思わず溜息を吐く、4日前ほどから発生しているこの大量死、恐らく神魔の攻撃だという事で美神さん達が調査に出ている。俺も協力しようと思ったのだが、待機するようになるときつく言われてしまえば動く事が出来ず家で大人しく待機する事になった。これはタイガーやピートも同じで、何らかの進展があるまでは待機となっている。その理由は霊能者は異能に遭遇しやすいという事もあり、下手に出歩いて大量死を起こしている神魔に遭遇してはいけないという措置によるものらしい

【のぼるのーぼるー】  
「つとこ」

てやーつと言う感じで背中に突撃してきたチビノブに考え事から引き上げられる。俺は溜息を吐きながら手を後ろに回して

「どうした？」

【のぶう♪】

チビノブが悪戯をするなんて珍しいと思いだうしたと尋ねるが、チビノブはにぱつと笑うだけで何を考えているのか判らない

【あれじゃないですか？チビノブちゃんはあるんまり考え事しても駄目だよって言いたいのかももしれないですよ？】

【のぶのぶ♪】

おキヌちゃんがそう言うのとチビノブはその通りと言わんばかりにコクコクと頷いている

「そっか、ありがとなー」

【のぶう♪】

頭を撫でると嬉しそうに目を細めるチビノブ。ふと振り返ると、目を細めながらメロンパンを齧っているノツブちゃんと視線が合う

【なんでワシを見る？】

「いや、なんとなく」

チビノブもノツブちゃんだから……本質的には甘えん坊なのだろうか？などを考えていたのだが、その目力に余計な事を言ったらやばいと本能的に悟り

「チビー、うりぼー、おいで」

とりあえず美神さんから指示があるまでは言われた通り大人しく待機していようと思い。部屋の中でちょこちょこと動き回っていたチビとうりぼーを呼び寄せ遊んでやることにするのだった……

【ワシから言わせて貰えばじゃが、この大量死は卓越した術者によるものだと思う】

うりぼーとチビが遊びつかれて眠った所で今回の事件の考察をノツブちゃんに尋ねるとノツブちゃんは地図を机の上に広げながら

【事件が始まったのがここじゃ、次がここ、その次がここで、昨日がここ……これを見てお前は どう思う？】

赤い丸で囲われた場所を見る。場所が離れすぎていて、共通点が見えないよな……と呟くと

【そう、そこじゃ、距離が離れているのは術者が移動を繰り返している



から。人間が同じことをやろうと思えば拠点が必要じゃが、神魔には自身が内包している力で事足りる。術者が移動を繰り返し、移動した先で人間を殺していると見て間違いない。横島、お前のダウジングで特定できるんじゃないかの？」

「う、うーん……どうだろう？」

俺のダウジングは無鉄砲にやって出来るものではない、事前調査や何らかの触媒が必要になる。そうじゃない場合の安定度はめちゃくちゃ低く信憑性も少ない

【焦ることはない、情報が集まっただけからでも十分に間に合う】

「……まずは連絡待ちだ。下手に動くなよ」

「横島。あんたは怪異に遭遇しやすいからね、むやみに出歩くんじゃないわよ」

シズクとタマモ、そして心眼の言葉に判ってるよと返事をする、ちやうどそのタイミングで電話が鳴る

「もしもし、横島ですが」

美神さんからの連絡かもしれないと思い素早く受話器を取り、横島ですがと口にするを受話器から聞こえてきたのは蛍の声だった

『もしもし横島？今私と美神さんと昨日の大量死の現場に来てるんだけど、メモする準備出来てる？』

「あ、ちよつと待ってくれ、手帳を用意する」

手帳を開いて、ボールペンを握ってから大丈夫と蛍に言うと、蛍が現場の事を教えてくれた

『犠牲者は全員安堵しきった表情で眠るように魂を肉体から引き離されているわ。それでなんだけど、全くと言っていいほど痕跡が無いのよ』

「それってよっぽど証拠隠滅能力が高いってことじゃないのか？」

『それでも異常よ。全く痕跡がないなんてことはありえないの、逆にそれが手がかりになるんじゃないか？って言うのが私と美神さんの見解』

痕跡が無い事が逆に手がかりと手帳にメモをし、蛍と美神さんが調べた結果をひたすら手帳にメモをする

『とりあえず1度迎えに行くわ、30分くらいで着くから準備しておいて、シズク達にも声を掛けておいてね』

「判った。だけど持っていく物は無いのか？」

ダウジングの道具とかと尋ねると螢は今はいらないわと言って電話を切った

【美神さんと螢ちゃんなんだって言っていました？】

「迎えに来るから出発の準備をしてくれってさ、シズクとノツブちゃんも悪いけど一緒に来てくれるか？チビノブは危ないからお留守番な」

構わないと笑うシズクとノツブちゃんにありがとうと笑い、眠っているチビとうりぼーを起こさないように気をつけて毛布を被せる、これで多分帰ってくるまで起きる事は無いだろう。玄関まで見送りに着てくれたチビノブに手を振り、家を出ると薄汚れた僧衣姿のお坊さんが手に鉢を持ってこつちを見つめていた

「えっと……」

知っている人物ではないので困惑しているとタマモが俺の脇を突いて

(托鉢よ、何か恵んで上げるといいわ)

功德って言う善行を積む修行だからと教えてくれたタマモにありがとうと呟いて、財布から500円玉2枚と飴玉を取り出してお坊さんの手にしている鉢に入れると

「……」

小さく頭を下げぶつぶつと小さい声でお経を唱え、手にしていた鈴を鳴らし歩き去っていく

「お坊さんも大変なんだな」

【まあな、僧侶の修行は厳しい物が多い、特に托鉢は厳しい物だぞ】

初めてあんなのを見たけど、お坊さんも大変なんだなあと呟くと心眼が僧侶の修行は厳しい物だよと教えてくれる。ゆっくりと歩いて行く老僧の姿を見つめながら思う。あんなボロボロの服では寒いだろうに……さっきの500円で何か温まる物を買ってくればいいけどと思いつながら俺はタマモと一緒に美神さん達が迎えに来るのを

待つのだったが……

(なんかやけにあのお坊さんが気になるな)

会話した訳でもない、それなのに妙にあの托鉢をしているお坊さんの姿が脳裏に残っているのだった……

アシユタロスの使い魔から運ばれて来た分析結果を見るが、結果はやはり芳しくないようですね

「一体何者のですか……」

横島忠夫の護衛と言う事で東京に駐在している私のルーン魔術すらもすり抜け毎夜人を虐殺している謎の相手。その正体が掴めない事に徐々に私は苛立ちを覚えていた

「なにか手掛かりがあればいいのですが……」

前にメドーサと共に古の神の搜索に出た時も結果は散々なものだった。相手が自分よりも高位の神魔だからと言うのは言い訳にはならないのだから……

「横島の周辺で何かが起きると見るのが正解なのでしょう……でもそれでは」

横島を囷にしているようで嫌な気持ちになる。確かに彼は臆病で女好きの面もあるが誠実でいざと言うときには前に出る勇氣もある。私としては非常に好感の持てる人間で、しかも英雄としての素質は十分……

「出来れば危険な目に合わせたくないのですが……」

今はまだ彼は成長している段階だ。その段階で彼が潰れる様な姿は見たくない、彼がどこまで成長するのか？それを見たいと私は思っているのだから……

「ガープではないとなると魔人……いえ、新たなガープ陣営に加わった神魔と言う可能性も……」

ガープならば人間の魂を切り離すなんて真似はしない。そのまま殺して魂だけを集めるだろう、だからガープではない。人間の魂に強い影響を持つ神魔と言えば真つ先に名前が挙がるのが死神だが……彼らはむやみに人間を殺すような存在では無いので死神も除外され

る

「魔人は資料が少ないですし……」

そもそも魔人は神魔の天敵とされる存在の筈だが……固体差が激しいのも判っている。魔人の中には人間に強い影響力を持つものもあるかもしれないですが……情報が無いのでなんとも言えない……

「直接護衛につくべきしか無さそうですね」

このままここで調べていても結果は後手に回るだろう。それならば横島の側で護衛していた方が安全だし、确实だ。ここは私の判断で動こう

(メドーサやマルタもいますし、1人は横島の側にいるべきでしょう)

待っていた使い魔に横島の近くで護衛するという手紙を渡し、私は横島達と合流すべく自宅を後にした

(しかし本当になぜ横島にばかり……)

GS試験、原始風水盤に今回の謎の大量死……その全てに横島が関わっているとお父様や最高指導者は考えている。だから私や英霊が直接人間界に赴いて横島の監視と護衛を務めている。これは相当特別な扱いだろう

(私達にも知らされていない何かがあるんでしょうね)

それはきつと私だけじゃない、マルタやメドーサだって感じているだろう。そうで無ければ神魔と英霊を人間の護衛につける理由が無い

「横島にはまだ秘密があるのでしょうか……」

眼魂に靈力の固形化と言うだけでも異質なのに、他にも何かあるのだろうか？それこそ神魔の最高指導者兩名が気に掛けるような特別な何かが……

「これは!？」

考え事していると突然街中に膨大な靈力の反応に強引に意識を切り替えられる。その圧倒的な反応はそれこそガープクラスの神魔で無ければ発生させることの出来ない靈力……まさか謎の突然死を引き起こしている犯人が現れた!？」

「急がないと!？」

こんな真昼間からこれだけの霊力を発するという事は戦いが起きていると見て間違いない。もしかすると横島達が戦っているかもしれない私は鎧と槍を呼び出し一直線にその霊力の元へと向かうのだった……

ブリュンヒルデが霊力の元へ向かっている頃。横島達はブリュンヒルデの予想の通り、大量死の犯人と対峙していた

「かかか、こうして会ったのも何かの縁……拙僧が救ってしんじよう。迷うことなく、天上楽土へと参られよ」

横島達の目の前で座禅を組んだ姿勢の間々浮かび上がる異形。黄色の僧衣に緑の袈裟を身に纏っただいそうじょうの瞳に射抜かれた美神達の足が止る。枯れ枝のような手足をくださいそうじょうに完全に威圧されてしまったのだ

「お前が大量死の犯人ね！こうして目の前に来た以上これ以上好きにはさせない！」

威圧された自分を恥じるかのように叫ぶ美神だが、だいそうじょうはかかかかと笑いながら

「かかかかっ!!大量死とは言ってくれる、拙僧は殺してなど居らぬよ。ただ導いたのだ、苦しみしかない現世から天上楽土へとな」

その手にした鈴を鳴らしながらおキヌとノツブを見つめただいそうじょうは

「現世を迷って居るか、哀れ。汝らも救おうぞ、この拙僧がな……安らかに成仏いたせ」

【余計なお世話です!!】

【その通りじゃ！ワシは好きで現世にいるのだからな！迷ってなどは居らんわッ!!】

おキヌとノツブのポルターガイストと霊力弾を身を翻しかわしただいそうじょうは、そのまま右手を突き出しただいそうじょうは小さな、しかしはつきりと響き渡る声でお経を読み上げていく

「そうはさせない!!」

「精霊石よッ！」

このお経で何かしようとしていると判断したくえすと蛍がそれぞ  
れ魔力弾と精霊石を放ち

「一気にカタをつけさせてもらおうよッ！」

「……お前には何もさせない」

マタドールと同じ存在。その強大さと底知れなさは嫌と言うほど  
美神達に刻み付けられていた。だからこそ動き出す前に一気に仕留  
ようとした。だがそれは油断していたのだろう、マタドールのよう  
な威圧感も、圧倒的な殺意も持たず、枯れ枝のような手足をしたミイラ  
のようなだいたいそうじょうが動き出す前ならば勝てる、もしくは手傷を  
負わせる事が出来る。そう思ってしまったのだ。

「かかつー愛らしい事よ、その程度の攻撃で拙僧を打ち倒すつもりか  
？」

迫る水鉄砲に精霊石から放たれたエネルギーの塊……それは直撃  
すれば神魔ですら倒せたかもしれない弾幕だったが、だいたいそうじょう  
はその弾幕を見て楽しそうに笑いながら手にしていた鈴を軽く振る  
うだけでその衝撃を全て吹き飛ばした

「南無阿弥陀仏……汝らの救済この魔人「常世のだいそうじょう」が案  
内仕る」

マタドールに続く第2魔人はその空虚な瞳に強い意志の光を宿し、  
美神達を見据えながらそう告げるのだった……

リポート13 常世のだいそうじょう その2へ続く

## その2

レポート13 常世のだいそうじょう その2

蛍の電話の通り30分くらいで美神さんと蛍が迎えに来てくれた。俺がバンに乗り込むとバンは事務所とは違う方向に走り出す

「美神さん?どこに向かうんですか?」

てつきり事務所に行くと思っていたのでどこに行くんですか?と尋ねると助手席の蛍が何かが入った瓶を俺に見せながら

「やっと見つけた手掛かりの一つを調べるためにくえすの所に行くのよ」

「手掛かりがないのが手掛かりって言っただけだったか?」

手掛かりあるじゃんと思いつつながら尋ねると蛍は肩を竦めながら

「GS協会の捜査の人間も近くにいたからね。証拠品として押収されなくなかったのよ」

「押収とかあるんですか?」

折角見つけたのに?と思いつつながら尋ねると美神さんは当たり前前よと笑う

「大規模捜索だからね、手掛かりは共有よ。でもそれをしてたら間に合わないって判断したからの強攻策よ」

後でGS協会に提出しないとイケないからスピード勝負よと言う美神さんはアクセルを踏み込み、バンを更に加速させる。皆で協力して捜査するのは色々面倒な事があるんだなと思いつつ、俺はバンの背もたれに背中を深く預けるのだった

「所で横島。なんでタマモが人化してるの?」

「いや、今日は人化して話をしたりする日だから」

「ま、そう言う訳だから人の姿で行動するけどちゃんと協力するから安心してよ」

俺の隣で上機嫌で笑うタマモとぶすつとしていた蛍を見ながらも、俺の脳裏には出発前に出会った老僧の姿が浮かんでいた

「……横島?どうかしたのか?」

「ん？ああ、なんでもない」

シズクにどうかしたのか？と尋ねられたが、托鉢していた老僧が気になるなんて言っても気にしすぎと言われると思い、なんでもないと返事を返したのだった

「ようこそ、それで見つけた手掛かりとは何ですか？」

神宮寺さんの屋敷に到着するといつもの妖精メイドに案内され、神宮寺さんの書斎に案内される

「これなんだけど、くえすはどう見る？」

美神さんが瓶に入った何かを机の上に乗せる。俺もその何かを覗き込んで

「えっとこれなんですか？」

そこにあつたのは鈍い光沢を放つ赤い何かの塊だった。これが手掛かり？俺には到底そうは見えないんだけど……

「な、なんだそれは……!？」

「つつ……本当よ。何それ……頭痛い」

「……!!ぐっ……私もだ……なんだそれは……ツ!？」

心眼の驚愕の声に続いて、タマモとシズクの苦悶の音が響く。だがおキヌちゃんとノツブちゃんは苦しんでいるタマモとシズクを見て不思議そうな顔をしている

「それがどうかしましたか？」

「ワシにはゴミにしか見えんが……？」

どうしてそれを見て苦しんでいるのか判らないという表情をしている。神宮寺さんはと言うと眉をしかめながら瓶の中にその赤い塊を戻す。すると苦しそうにしていたタマモとシズクが床の上に座りこんで大きく深呼吸をする

「大丈夫か？」

その余りに苦しそうな様子に大丈夫か？と尋ねながら手を差し出す

「あ、ありがとう。なんかよく判らないけど……自分って言う存在に干渉されたような……横島。精霊石返すわ、気分悪い」

人間の姿から子狐の姿になったタマモを抱き抱えるが、やはり調子



はかなり悪いようだ

「……恐ろしいほどに不快な感じだった」

【ああ、形容しがたいが……気持ちの良い物ではなかったな】

心眼とシズクが顔を歪めながら呟く、だけど俺達には何の影響もないし、おキヌちゃんとノツブちゃんにも影響が無い。シズクとタマモの共通点といえば……妖怪って所なのか？

「あれは恐らくですが、高密度の何かから零れ落ちた欠片でしょうね。……多分蠟燭じゃないでしょうか？溶けた痕跡とかもありますし」

「『蠟燭？』」

俺達の疑問を伴った声に神宮時さんはええ、蠟燭ですわと言いなながら瓶に仕舞われた欠片を見て

「とは言え普通の製法の蠟燭ではないでしょうね。複雑に入り混じった神通力と魔力……恐らく高位神魔の所持品と言う所でしょうか」

高位神魔の所持品の蠟燭、そんな曖昧な情報で犯人を特定する事なんて出来るわけが無い。俺はそう思ったのが、美神さん達は違ったようで俺を置いてけぼりにして話し合いを進めていた

「上位神魔の持ち物の蠟燭ね……ビフロンスとかかしら？」

「可能性はありますが、ビフロンスですか……確かに可能性は高いですが……」

ビフロンス？美神さんと神宮時さんは悪魔の特定が出来ているみたいだけど、俺にはさっぱり判らない

「ビフロンスはガープと同じでソロモン72柱の悪魔よ。蠟燭を持っていてネクロマンシーを使うとされるわ、だから今回の大量死に関わっている可能性は高いと思うけど……」

「けど？」

そこまで特定出来ているのなら琉璃さんに話を通して、聖奈さんにも報告すれば良いじゃないか？と言うとシズクがペットボトルの水を飲み干してから

「……ガープ陣営の行動ならば、人間の魂だけを抜き出すなんて面倒な真似をする意味が無いと言う事だ」

シズクの言葉を聞いて俺があつと呟くと美神さんが瓶に札を張り

ながら

「ビフロンスの可能性が高いけれど、ビフロンスならそんな面倒な事をする必要が無い。とりあえずこれをGS協会に証拠として提出して

次の策を練りましょう。くえす、悪いけど一緒に来てくれる?」

「面倒ですが、良いでしょう。どの道対策を考える必要がありますからね」

神宮寺さんが了承してくれたので良かったと思っていると、神宮寺さんは俺に手を差し出してくる

「えつと?」

「とは言え、こちらこそ慈善事業ではありませんから? 対価を頂きたいですわね」

え? 対価? しかも俺? 美神さんじゃなくて!? 俺が混乱していると蛭が神宮寺さんに詰め寄りながら

「こんなときに何を言ってるの!?!」

この緊急事態に対価を要求するなんて何を考えてるの? と神宮寺さんに怒鳴るが、神宮寺さんは涼しい顔をしたまま、俺に手を向けたまま口を開く

「こんな時だから言っているのですわ、横島。お前の持っている中身の無い眼魂を一つ寄越しなさい」

眼魂を寄越せと言う神宮寺さん。俺はポケットからブランク眼魂を取り出しながら

「でもこれこのままじゃ、ただの球体なんですけど?」

「興味があるから分析したいだけですわ。知的好奇心を満たすと言う所ですわね」

ブランク眼魂を受け取りにやりと笑った神宮寺さんにやっぱりこの人は魔女なんだなあと思った。しかし知的好奇心を満たすって眼魂で何をするつもりなんだろうか? そこがかなり気になる所だ

「それで協力してくれるの?」

「ええ、対価は貰いましたからね。行きましようか」

まあなんにせよ協力してくれるって事は心強いから良いか、神宮寺

さんみたいないないGSの力を借りれるんだから、何か対策も思いつくだろうと思いい神宮寺さんの屋敷からGS協会に向かう為にバンで移動している

「あ」

「……………どうかしたのか？」

車窓から托鉢していた老僧を見つけ、思わずあつと呟いてしまった。シズクがその呟きを聞いて窓の外を見て

「……………托鉢か。珍しいな」

托鉢と聞いた美神さんがバンを停めて、後部座席の俺達を見る

「ここは一番最初の現場に近いわね、もしかしたら何か見ているかも、話を聞いて見ましようか」

確かにその通りだ。もしかしたら何かを見ているかもしれないから話を聞いてみようと言う流れになった

「ほう……………また会ったな、先ほどはありがとう。感謝する」

俺を見てしゃがれた声で感謝すると笑う老僧に美神さんが近づいて

「お爺さん。一昨日だけど、この周辺で大量死があったと思うんだけど何か見てない？」

「ふむ。そうさな……………」

美神さんの問いかけに顎の下に手を当てた老僧は俺を見て

「先ほどの施しの礼の事も。教えてしんじよう」

そう笑った老僧は楽しそうに笑いながら手にしていた鉢を置いて、代わりに鈴を手にする

「ワシは見たよ。ああ、見たさ、ずっと見ているよ。苦しむ人間を、嘆き苦しむ人間の姿を、現世にある悲しみと苦しみに耐え続ける人の姿をずっと見てきたよ」

その鈴を鳴らしながら小さな声で呟き続ける老僧……………

「な、なにこれ……………」

「うっ、き、気持ち悪い……………」

「うっ……………頭……………いてえ……………」

鈴の音が響く度に身体が重くなり、頭痛が俺達を襲う……………なんだ、

何が起きているんだ。まさかこの近くに大量死の犯人がいるのか!? 老僧に視線を向けるが楽しそうに笑っているその姿を見てまさかと言おう考えが頭を過ぎる

「お前!!」

「……させるか!」

【なんか知らんが、くらえい!!】

神宮寺さんの炎が、シズクの氷塊が、ノツブちゃんの剣撃が老僧に迫るが、老僧はかかかかと笑いながら跳躍しその攻撃を回避する。だが驚くべきことに老僧はそのまま空中に立ち、ゆつくりとした素振りで座禅を組む……

「嘘……」

その光景に絶句し、その次の光景で思わず悲鳴を上げた。しわくちゃの痩せこけた老僧の顔が突如溶け出し骸骨の姿へと変わっていく。まさか……この爺さんが大量死の犯人!? 美神さんが神通棍を構え、蛩が破魔札を手にするが、老僧は全く動じた素振りを見せず、穏やかな声で笑いながら名乗りを上げた

「かかかか、では名乗ろう。わしはだいそうじよう、魔人常世のだいそうじよう……布施には感謝しておるよ。小僧、ゆえに……礼をしよう。迷わず天上楽土へと導いてしんじよう……」

どこまでの澄んだ鈴の音色……戦いとは無縁のその音色が俺達とだいそうじようの戦いの始まりを告げる音となるのだった……

強い……戦う事を想定していなかったので破魔札や精霊石の数が少ない事を差し引いても、だいそうじようとな乗った魔人は強かった「抵抗は無意味だ。暴れてくれるな、拙僧は傷つけたい訳ではないのだから」

その言葉に思わず嘘だと叫びたくなった。だいそうじようは常に浮遊を続け、こちらの攻撃を回避し続け、時折思い出したかのように放ってくる札による攻撃。その破壊力は私達の倍以上であり掠っただけでも致命傷になりかねない威力を秘めていた。勝つ事は不可能、なんとかして退けて撤退しないと全滅する

「抵抗は無意味。大人しく救済を受け入れよ……南無阿弥陀仏！」  
だいそうじようがお経を唱えた瞬間。後ろから誰かが倒れる音がする

「横島！」

マタドールとの戦い事もあり後ろに下げていたのは横島だけだ。とつさに振り返ると横島が両手で頭を抱え大粒の汗を流しながら

「うっ……うぐう……痛い……あ、頭が……割れる……」

「ぐっ！なんだこの強烈な思念は！私だけじゃ防ぎきれない!!」

苦しむ横島の声と心眼の焦った声……状況はますます悪くなる一方だ

【てええい!!】

「ほう！自ら飛び込んでくるか、カカカカ、良いぞ、天上楽土へと導いてやろうぞ」

【余計なお世話じゃ!!横島に向けている思念を止めろッ!!】

ノツブがだいそうじように斬りかかる。私や美神さんでも反応できないであろう。嵐のような連続攻撃を軽々とかわしながらだいそうじようは笑う

「我らの末席に座れる存在である人間よ、あのものはお前達の陣営にいるべきものではない。我らの陣営にあるべきものよ」

こいつもマタドールと同じ事を！やはりなんとしてもこの場でだいそうじようを退けないと、横島が奪われる

(蛍ちゃん！落ち着きなさい！)

飛び出そうとした私の肩を美神さんが掴む。どうして止めるのかと怒鳴ると美神さんはもう一度はつきりとした声で

「落ち着きなさい！道具使いの私達が道具も無いのにどうやって戦うのよ！」

ぐうの音も出ない正論に言葉が詰まる。調査のつもりだったので戦う道具を持って来なかった……だけどこのままだと横島が

「つつっ!!」

「落ち着きなさいって言ってるでしょうが！」

頭に拳を叩き込まれ動きが強制的に止められる。美神さんは顔を

歪めながら

「くえすもシズクもだいそうじょうを退ける術がないのは判っている。けどなんであれだけ攻撃しているか、それをよく考えて見なさい」

そう言つて横島の側に駆け寄つて精霊石を横島の額の上に乗せる美神さん。痛む頭をさすりながらだいそうじょうに視線を向ける

「我が意に従い、敵を切り裂けッ!!」

「……お前の好きにはさせない」

くえすが無数の風の刃を飛ばし、シズクが氷柱で弾幕を張る。それは普通の相手ならば消滅させる力を秘めた波状攻撃だが

「カカカカ!!止めよ、お前達の刃は届かぬ」

だいそうじょうの身体にはその一切が届かない。やつぱり無駄……そう思つた時ふと気付いた

(いない?)

【三千世界に屍を晒すがよい……天魔轟臨! これが魔王の三千世界じゃあッ!!】

ノツブの召喚した火縄銃から放たれる圧倒的な弾幕。それを見てだいそうじょうが初めて顔色を変えた

「つちいっ!」

舌打ちと共に射軸から大きく身を翻したのだ。その間に横島に応急処置をしている美神さんに駆け寄り

(美神さん、おキヌさんは!?)

おキヌさんの姿が無い。それに気付いたのだ、くえすやシズクの攻撃は人数が減っていることに対しての目くらましなのだと判った

「今助けを呼びに行つてるわ、この状況で助けになる存在を呼びにね……横島君。大丈夫?私ができる?」

「う……うああ……み、美神さん……な、なんですか……これ……」

精霊石と心眼そして横島の側で霊力を放出しているタマモのおかげか。さつきまでの苦悶に満ちた表情ではなく、少し落ち着いた顔色をしている横島に思わず安堵の溜息を吐く

「だいそうじょうの攻撃みたい、横島。大丈夫?」

「蛩……っぐう……わ、悪い……だ、大丈夫じゃない……あ、頭が……割れる……」

「菌を食いしぼり悲鳴を上げるのを堪えている横島を見て、これ以上は危険だと判断した」

（お父さん、なにやってるのよ……動いてくれないの？）

東京だから直ぐ応援が来てくれると思っていたのに……それともだいそうじようには強力な結界を張る能力でもあるのだろうか？どちらでも良いのだが、このままでは不味いのは確実……なんとかしてこの場を逃げなければ。そう考えた瞬間小さな声だが、やけにはつきりと聞こえる声が周囲に響き渡った。顔を上げるとそこには太陽を背にした聖奈さんの姿があった

「間に合って良かった……離れてくださいッ!!ブリュンヒルデ……口マンシアッ!!」

青い炎と共に投げられた巨大な槍がだいそうじように一直線に迫り

「ぬっ、ぬおおおおお!!?!」

「よ、横島!」

「横島君!」

初めて動揺しきつただいそうじようの音が周囲に響き渡る中。動くことが出来ない横島をとっさに私と美神さんが最後に取つておいた結界札で自分達を覆った次の瞬間。凄まじい爆発音が周囲に響き渡るのだった……

「けほ……こほ……と、とんでもない事をしてくれますわねッ!!」

障壁を張るのが少し遅れていたら私も巻き込まれていた。咳き込みながら立ち上がる

「……ま、全くだ。手加減と言う言葉を知らないのか……」

水から人間の姿に変化した水神シズクがそう呟く、周囲の被害も大きいのが、今の一撃が利いたのかだいそうじようの姿は無い

【あちちちち!!な、あんじゃこりゃあああ!!】

一番前線で頑張っていた信長のマントに炎が燃え移り、地面を転げ

回っている姿を見て溜息を吐いているとブリュンヒルデが空中から降りてくる

「助かりましたが、もう少し周囲の被害を考えて行動してくれませんか？」

「……す、すいません……ですが、全力でなければ届かないと判断したのです」

そう謝るブリュンヒルデ。だけど言うとおりですわね……だいそうじょうには何か特殊な守りがあったのは間違いない。私の炎も雷もシズクの水も氷をも完全に無効化していた……あの守りの正体を知らない事にはだいそうじょうを倒すことは出来ない。今の攻撃で向こうも逃げていてくれればいいのですが……

【美神さん、蛍ちゃん！間に合って良かったです】

「おキヌちゃん、ナイスよ……よく間に合ってくれたわ」

姿が見えないと思っていた幽霊巫女がその姿を見せる。なるほど、ブリュンヒルデが来たのはあの幽霊が呼びに行っていたからです……余りに良いタイミングで来てくれた理由が判ったが、今はこの場所話している場合ではない

「ブリュンヒルデ。ルーン魔術を、早くこの場所を離れましょう」

「判っています」

あの攻撃でだいそうじょうを倒せたとは思えない。ダメージを受けて動かないうちに撤退することにしよう、もしかすると周辺で被害が出るかもしれないが……だいそうじょうを倒せる可能性がある私達が倒れる訳には行かないのだから、ルーン魔術と私の魔法で早くこの場所を後にしましょう。高速で術式を組み上げる……転移する場所はGS協会の神代琉璃の部屋にしましょう。どの道行く場所ですし、話を他の人間に聞かれない場所でもありますから

「美神！蛍！横島！こちらへ、転移でこの場所を離れますわよ！」

術式が完成した所で美神達を呼び寄せ、転移しようとしたその瞬間「色即是空 空即是色……カーツ!!!」

突如だいそうじょうが現れ、お経と共に眩い光を放つのと私達が転移で場所を移動したのはほぼ同時であり



「な、何!? え? え!? なにどうしたの!」

突然自分の部屋に私達が現れたことに動揺している神代琉璃には申し訳ないですが、ギリギリで間に合っ……

「え? よ、横島? 横島!」

どさりと音を立てて倒れた横島。側にいた蛍がその身体に触れて、慌てた様子で口元に手を当て、首に手を当てると同時に大粒の涙を流し始めた……その反応を見て全員の脳裏に最悪の予想が過ぎる

「よ、横島君!? ちよつと!? 横島君!」

「……横島ツ!? おい! 横島ツ!? 返事をしろ!!」

【横島さん? 横島さん? 嘘ですよね? 冗談ですよね? また起き上がるんですよ? ね? そうですよね?】

【……くっ……駄目だったのか】

「ちよつ! よ、横島! じ、冗談よね! ね!? そうでしょう!!!」

美神とシズクが駆け寄り声を掛けるのを見て、私もよろよろと近づきその首に手を当てて目の前が真っ暗になるのを感じた

「みや、脈が無い……!」

「そんな!? 間に合わなかったのですか!」

転移は間に合ったはずだ。だから私達は無事だ……なのにどうして……どうして横島だけが……

「まさか大量死の犯人に遭遇したのね!? そうなのね!」

神代琉璃がそう叫ぶのがやけに遠くに聞こえる……心臓に当てた手には何の鼓動も感じられず……呼吸もしていない、脈も無い、心臓も動いていない……それらの事実が私達に嫌と言うほどに受け入れがたい現実を突き付けていた……

「横島が……死んだ……」

横島がだいそうじようによつてその魂を肉体から引き離され、その命を終えたと言う現実が私達の前に重く、そして大きく押し掛かるのだった……

横島は死んだ。それは紛れも無い事実……だが美神達は気付くことがなかった。横島が首から下げている青い小瓶が淡い光を放っているということに……それが何を意味するのか、今はまだ誰も知らない

い……

リポート13 常世のだいそうじょう その3へ続く



て？

「まさか!？」

タマモでさえこの状態だ、となれば間違いなくシズクも怒りに囚われて暴走する！

「……許さない、許さない、ゆるさないゆるさないゆるさない……殺す、クロス、クロスクロスクロス……殺してやるッ!!」

シズクもまた暗い神通力を放ちながらその瞳を真紅に輝かせる。完全に正気を失っているのが一目で判る

「み、美神さん!?!これ不味いんじゃないですか!？」

「ま、不味いに決まってるでしょう!!」

九尾の狐のタマモと水神のシズクが怒りのまま靈力を発すればどうなるか？そんなのは考えるまでも無い、属性が反転する。神族から魔族へと、善から悪へと反転する。そうなればだいそうじょうを殺すまで2人が正気に戻る事はありません

「ちよつとー2人とも！落ち着きなさい！お願いだから!!」

おキヌちゃんとノツブはその2人の圧倒的な靈力の前に存在を維持出来ないのか、ノイズ交じりの姿になっている。何か言っているのだが、声も何も聞こえない、下手をすればこのまま消滅しかねない勢いだ

「くえす！琉璃！聖奈！蛍ちゃん手伝って！このままじゃ大変な事になる！」

私1人では抑えきれない、そう判断しみんなに手伝ってくれと叫ぶが

「今はそれ所ではありませんわ！芦蛍は……先祖がえりだったんですの!?!」

「え!?!」

くえすの悲鳴にも似た声に振り返ると、蛍ちゃんからもどす黒い靈力が発せられていた。それには魔力が混じっていて、蛍ちゃんが先祖がえりだと言うのをこれでもかかとしていた

「くっ……これは私でも抑えきれない……!?!」

くえすと聖奈の2人掛りでも抑えきれないほどの圧倒的な魔力の

混じった霊力……シズクとタマモの暴走だけでも厄介なのに、蛍ちゃんまでも……このままではGS協会が崩壊するだけではなく、だいそうじょう以外にも恐ろしい脅威が生まれる事になる……

「琉璃！精霊石！精霊石を持ってきて!!」

言葉では抑える事ができない。だから精霊石で封印するしかない、そう思って琉璃に精霊石をくれと叫んだ瞬間。信じられない声が私の耳に届いた。それはもう聞こえる筈の無い声だったから……

「う……うとう……」

荒れ狂う霊力と魔力の中でもその小さな声は確かに聞こえた。まさか……そんな……!?

「横島君!？」

思わずその名前を呼ぶと横島君がその身体を僅かに動かす。もしかして息を吹き返した!?

「蛍ちゃん！シズク！タマモ！横島君が息を吹き返しかけてるから止めなさい!!!」

聞こえるか五分だと思っただが、私の声はしっかりと届いたように激んだ霊力を放っていた蛍ちゃん達の身体から霊力の放出がぴたりと止

り横島君に駆け寄る

「……みや、脈が……よ、弱いけど……ある……」

「心臓も……動いてる……こ、呼吸も弱いけど……ある……」

「……横島。戻って来い……死ぬな……戻って来い」

「本当ですわね……脈が戻って……心臓が動き始めてる……」

「ルーンで心臓の動きを活性化させます、少し離れてください」

横島君が生きようとしている。それが暴走していた蛍ちゃん達の正気を呼び戻してくれた……聖奈が横島君の応急処置をするのを見て、私は思わず私は安堵の溜息を吐きながらソファアに腰掛ける

「えつとどういう状況なんですか?」

「ちよつと待って、私も一杯一杯だから……横島君が無事に息を吹きかえすまで待って……」

いきなり琉璃の所に転移ってきて、これだけの大騒動を起こしてお

いて待つてくれと言うのは都合の良すぎる話だが、私も混乱しているので整理しなければとても話が出来る状況じゃない。琉璃も私に余裕が無いのが判ったのか、判りましたと頷いてくれた事にありがとうと呟き、横島君に頑張つて、戻つてきてと声を掛け続けている蛍ちゃん達と横島君に視線を向け

（良かった……本当に良かった……）

まだ完全に息を吹き返したわけじゃないが、シズクや聖奈の治療で顔に徐々に赤みが差している。この様子なら大丈夫だろう……私は横島君がまだ死んでない事に心の底から安堵するのだった……

なんだろうか……ここは……なにも見えない、何も聞こえない、寒いのか、暖かいのか……何もかも判らないが……

（気持ちいい……）

何かに包み込まれているような、不思議な安心感がある。適度な振動があるせいか、余計に眠くなってしまう……このまま目を閉じて眠ってしまったらきつと気持ちいいだろうな……そう思つて目を閉じようとする、さつきまで何も聞こえなかったのに俺の近くに誰かが立ったような音が聞こえた

「そう……もう死んでしまったのね」

死んだ？俺が……？いや、でもそれでも良いか……ぼーっとしていて、何も考えることが出来ない

「生きている人間は気持ち悪いけれど、死んでいるのなら……まあいいわね」

誰かが俺の頬に手を当てる感触がする。冷たいのか、暖かいのか判らないが気持ち良い……

「？まだ誰かが魂を持って行こうとしてるわね。まあ……今回は特別に助けてあげる」

シャツと言う鋭い風を切る音が聞こえたと思ったら、身体を包み込んでいた温かい感覚が消え去り、うっすらとだが手足の感覚が戻つてきて、ぼんやりとしていた思考が纏まってくる

「多分、あの女帝の配下の仕業だと思うけど……私はまだ貴方が何を  
するのか、何を成し遂げるのか、それを見ていないわ。このまま連れ  
て行ってしまおうには、私は貴方を知らない。だから今回は助けてあげ  
るのかわ」

ぼんやりとしていた意識が徐々にだが、はつきりしてくる……顔を  
上げるとフードを被った誰かの姿が見える

「もう何の権限も無い女神だけど、与えられた恩は返します」

恩?……女神?……何の事だか、判らないし、俺に思い当たる人物  
はいない……

「だ……れ……?」

「……驚いたのかわ……喋れるなんて……」

俺の言葉に本気で驚いた反応を見せるフードの人物が小さく笑う  
声が聞こえた

「私の事は蘇れば忘れるでしょう。そういう物ですから、正し無償で  
助けるのはこの1回だけ……それも特別にですからね。それを努々  
忘れないように、人間の命は1度きり、2度目は無いのですから」

そう言つて俺から背を向ける歩いて行く姿に思わず手を伸ばしな  
がら起き上がる

「待つてく……え」

その何者かを呼び止めようと起き上がり、呼び止めようと両手を伸  
ばすが、伸ばした手はその謎の人物には届かず、柔らかい何かを驚搦  
みにしている

「うえ?」

ぼんやりとした思考でも蛍と神宮寺さんの胸を驚搦みにしている  
事に気付き、顔から血の気が引いたが

「横島あッ!!!」

「うあああ!?!な、なんだああ!?!」

蛍や神宮寺さんだけではなく、シズクやタマモ、それにおキヌちや  
んやノツブちゃんにも突撃され何が何だか判らない内に俺はもう1  
度意識を失うのだった……

「え?…心臓が止つてた?」

意識を取り戻したと同時に胸を鷲掴みにしたことを謝ったのだが、そんなことはどうでも良いと言われ良かったと号泣する蛍達に訳が判らず困惑していると美神さんが教えてくれた

「ついでに言うと呼吸も止ってたわ。完全に死んでたのよ」

……まじかよ……思わず心臓に手を当てて、心臓が動いているのを確認して安堵の溜息を吐く

「考えられるのは……転移する瞬間だったので、魂を完全に切り取られずにすんだのでしようね、それにしても……よく蘇生してくれました。貴方の生きるといふ意思があったから私のルーン魔術も効果を発揮してくれたのですよ」

聖奈さんが柔らかく微笑みながらも、良く現世に戻ってくれましたと言う。俺にはまるで実感が無いのだが、ここまで言われると本当に死んでいたのだと嫌でも理解した。蛍に心配掛けてごめんと謝ると蛍は涙をハンカチで拭いながら

「謝らなくて良い……横島は何も悪くないもの……でも……良かった……横島が死んじやった……って思ってた……ぐすつ……良かった……本当に良かった……」

「……本当に良かった……お前はまだ死ぬには早い」

涙を拭っているシズクと蛍。タマモは無言で背中に抱きつき、俺の背中に顔を埋めている……本当に死に掛けていたのか……俺……

「良かったです、本当に良かったです。まだ横島さんには死んで欲しくないですから」

「うむ、死んでワシらの仲間になるには早すぎるからな、人生50年も生きてない内に死ぬでないぞ」

おキヌちゃんとノツブちゃんにも死ぬには早いと怒られ、本当に危ない所だったんだと判り、背中に冷たい汗が流れるのが判る

「それで横島。待ってくれと言っていましたか、何かを見たのですか？」

「え、あ……はい。ぼんやりとですけど……」

胸を掴んでしまった事もあり、気恥ずかしくて神宮寺さんの顔を見れないまま、そうですと頷きながら

「心眼？聞こえるか？」



心眼に聞こえるか?と声を掛けるが反応が無いことに若干の不安を抱く、もしかして心眼が俺の身代わりになったとか無いよな……そんな最悪の予想が脳裏を過ぎる

「横島君。三途の川とか見たかしら?」

「いえ……なんか寒いんだが、暖かいんだがよく判らない場所でしたよ?」

琉璃さんの言葉にそう返事を返すと、美神さんと神宮寺さんが思案顔になる。俺が困惑していると美神さんがこれだけ確認させてと俺の方を見る。その目は赤く、美神さんも泣いていた事が判り。こんなにみんなを悲しませてしまったという事を改めて実感した

「三途の川もおばあさんも見てないのね?」

「はい。見てないですね……あ、そうだ……もう権限も無い女神とか……言ってたような……」

もうぼんやりとしか思い出せないので、絶対とはいえないですけどと言うと美神さんは真剣な表情で

「ありがとう、もう良いわ。琉璃、信用出来る職員で横島君とシズクとタマモを家まで送ってくれる?」

「いや、大丈夫で……あ、あれ……」

送って貰わなくても帰れると言おうと思いつき立ち上がろうとすると、足に力が入らずその場に崩れ落ちるかけると蛍が危ないと叫んで俺の身体を抱き止める

「横島。無理をしたら駄目よ、霊体と魂が無理やり引き離されていたから手足とかに違和感があるはず。ここは大人しくGS協会の人に家まで送ってもらって?」

心配そうに俺を見つめる蛍。それに神宮寺さんやシズクの視線……それに今ので判ったが、多分家まで歩くことが出来ないと言うのも判った

「ご迷惑を掛けますけど、よろしくお願いします」

迷惑なんて気にしなくて良いわよ?と笑う琉璃さんにありがとうございますと頭を下げ、俺はシズクとタマモに連れられGS協会を後にするのだった……

横島君とシズクとタマモが会長室を出て、念の為の護衛として憑いていくと言うノツブとこの場所についても役に立たないから横島君の家に行きますと言うおキヌさんを見送り、きっきの出来事に関してと美神さん達が遭遇したと言う大量死を引き起こしている犯人についての話し合いを始める

「美神さん、きっきの話どう思いますか？」

「……多分だけど、神性を持っている相手が干渉したのは判るわ」

横島君の身体には僅かだが、シズクとは異なる神性の残滓が合った。本人は夢だと思っているようだが、死んだ時に何らかの神に遭遇したのは間違いない

「ダツエバじゃない存在って何かいましたっけ？」

三途の川なら特定も楽だ。だが横島君は三途の川を見ていないと証言している、それが特定を難しくしているだろう。

「横島を救った神よりも今は考える事がありますわ。蛭、貴女何か隠していますね？良い機会ですから教えなさい」

あえて私と美神さんが話を逸らしていたが、くえすが真剣な表情でそう切り出す。蛭ちゃんは少し考えてから

「その……私は……ちよつと先祖がえりみたいらしくて……ドクターカオスの作ってくれた、この魔力を抑えるブレスレットで押さえ込んでいるんですけど……」

蛭ちゃんが右手を差し出すと、確かに手首に精霊石が加工されたブレスレットが嵌められていた

「先祖がえりはGS免許にはマイナスにもなるから隠してたのね？」

「ええ……まあそうなりますね」

先祖がえりは強い霊力や特殊な技能を持つがその反面、人間ではないう事だGSや霊能関係に関する仕事に就職しにくいというデメリットもある。それを考えて隠したのは当然だと思うけど

「今度正式に書類を作り直すからね。もし他に隠してる能力があれば今のうちに申告してくれる？」

「霊力と魔力を使った幻術がその……使えます」

幻術系の能力者か……なるほどね、美神さんと同じで道具使いと言う戦闘スタイルを選んだのは自分の能力をカモフラージュするためって事ね。と言うか美神さんが尋ねないという事は、美神さんは蛍ちゃんが幻術使いって知ってたってことよね。思わずジト目で見つめると美神さんは誤魔化すように笑いながら

「GS免許の剥奪はしない方向でお願いするわよ？隠していたのは悪いけど、当然の事だし」

「大丈夫ですよ。ちゃんと考慮します」

むしろそんな事で優秀なGSな蛍ちゃんのGS免許を剥奪するほうがデメリットが大きい。幻術系能力者と言う事で処理してしまえば良いからね

「それで聖奈さん、だいそうじようでしたっけ？戦った感想はどうでしたか？」

僧の最高位である大僧正を名乗る魔人。その力はどんなものでしたか？と尋ねると聖奈さんは険しい顔つきで

「私は全力で、殺す気で攻撃しました。中級の神魔なら一撃で滅する事が出来る私の最大の力で攻撃しましたが、恐らくほぼ無傷でしょうとは言え、追いかけて来ない事を考えると防ぐのに力を使い果たし、最後の力で使った術が運悪く横島に当たったと考えることが出来ると思います」

神魔の中でも上位存在の聖奈さんの攻撃を無傷でかわす。それを聞いただけでどれだけ魔人というのが規格外なのか嫌でも思い知らされる。しかし最後の力を振り絞った攻撃が命中するなんて横島君はもしかすると運が悪いのかしら？

「その前に琉璃。15時ごろ、街中に神通力でも、魔力でもいいわ。その反応は無かった？」

「いえ。何も感知されてません」

秘密と言われているので口にはしていないが、西条さんのリークで今GS協会は嚴重警戒態勢にある。それだから余計に、街中に魔人が現れたと言うのが理解できないのだ

「それは私の憶測ですが……魔人の神通力や魔力は感知しにくいので

はないでしょうか？」

感知しにくい神通力と魔力？その言葉に私達が首を傾げると聖奈さんは合流する前のことを話してくれた

「私は横島の護衛をする為に横島の元に向かっています。だから感知することが出来たと思うのですが、魔人の力が探知できたのは数秒と言う短い時間だったのです」

数秒だったので完全に探知する事は出来ず、近くまで来た所で迷っていたのをおキヌさんと合流出来たので運よくギリギリで間に合いましたと言う聖奈さん。規格外の力を持っていて、探知が出来ない。オカルトGメンが協力するつもりが無いから探知結果を伝えないと思っていたのだが、どうもそれは違うらしい

「美神さん。確かマタドールが言っていましたよね？魔人とは後天的に神魔の力を持った者が転生した存在だった」

蛍ちゃんという言葉に私達の脳裏に最悪の予想が過ぎる。まさか魔人は人間としていけば神魔の魔力を発しないって事？もしそうならばレーダーとかで探知が出来ない？強大な力を持っていると判っているのに対策を練る事が出来ないという事？

「その可能性は極めて高いですわね。幸いな事に、だいそうじょうが変身していた人間の姿はしっかりと私達が見ています。それを手掛かりに、人海戦術などで場所を特定。警備体制を作るとしても……」

「倒す手段が無い」

見つけることが出来たとしてもだいそうじょうを倒す手段が無い。横島君の眼魂ならばダメージを与えることが出来るかもしれないが、無理やり肉体から霊体が引き離された事による体調不良が容易に想像できる以上横島君は出来ればだいそうじょうとの戦いに参加させたくは無い

「くえすから見て、だいそうじょうの無敵の秘密って何か予想がつく？」

「……難しい所ですわね。確かに魔法には相手からの干渉を完全に防ぐものがありますが、あれは高度な術式と魔法陣が必要で実用的ではないですし……私の予想ですが魔法のほうで探すのではなく、密教の

ほうで探るべきではないでしょうか?」

だいそうじょうと名乗り、法衣と袈裟を身に纏う魔人。その姿から密教の方に力の秘密があるのかもしれない

「恐らくだいそうじょうは今日は動かないと推測します。明日早朝から白竜寺に向かつてください、三蔵法師様に何か聞いてみると攻略法を見つけることが出来るかもしれません」

今の段階ではだいそうじょうを倒す手段が無い。だいそうじょうの正体を探り、あの無敵の秘密を探る。一見遠まわしに思えるが、それが最大の近道になるのかもしれないのだから……

「判ったわ。今日の所は私達も身体を休める……あ、後これ……だいそうじょうの持ち物だと思われる何か、一応何かの手掛かりになるかも」

美神さんから差し出された瓶に入れられた紅い塊を受け取ると美神さん達は疲れ切った表情で会長室を出て行った。会長室に1人残された私は目の前の瓶を見て

「なんか恐ろしい気配を感じるわね」

魔力とか神通力と言う話ではない、これはここにあるだけで不吉な何かを引き寄せる……そんな気がしてならず、私は机の引き出しから封印札と精霊石を取り出してその瓶を更に嚴重に封印し、これを明日にでもドクターカオスに渡して分析して貰う事にし、だいそうじょうが今日は動かない事を祈りながら、エミさんや唐巢神父に渡す為の美神さん達とだいそうじょうの交戦記録の資料を纏め始めるのだった

GS協会を後にした美神達はその後、琉璃の好意で呼ばれていたタクシーでそれぞれの事務所や家へと帰る事になった。蛭は帰宅後ベッドに倒れこんで眠りたいのを我慢して優太郎の部屋に向かっていた

「……権限の無い女神……そういったのかい?」

「うん、横島がそう言ってた」

優太郎は蛭達がだいそうじょうと戦っている事はやはり知らず、魔

人が神魔の探索結果をすり抜ける能力を持っていることが判明したのだが、優太郎が顔色を変えたのはだいそうじようと戦っていたという事ではなく、臨死体験から生還した横島の言葉を蛍から聞いたときだった……

「お父さんは何か心当たりがあるの？」

その反応に何か知っているのでは？と感じた蛍がそう尋ねると優太郎は信じられないという顔をして

「心当たりはある。だがそれは決してありえない存在のはずだ……これに関して私は私が直に動いて調べる。蛍も今日はもう休みなさい」

精神的、肉体的に疲れているはずだと言われた蛍はこれ以上尋ねても教えてくれないと言うことが判り

「判った……今日はもう寝るわ……あげはの事お願いね……」

「ああ、心配ないよ。早く休みなさい」

ふらふらと出て行く蛍を見送った優太郎は真剣な表情で、暗闇の中浮かび上がる満月を見つめ

「まさかガープが呼び出したのか……可能性は……ゼロじゃないが……」

先日感じた懐かしい古い神通力。そして横島の証言の権限を失った女神……もしも、もしも自分の予想が当たっているのなら、もしもこのガープが霊脈がある山を支配しようとした目的が神霊召喚にあるのならば……

「見つけることが出来るのは私しかない」

メドーサや、ブリュンヒルデでは見つけることは出来ない。索敵に特化したヒヤクメだつて見つけることは出来ないだろう、見つけることが出来るのは優太郎以外の神魔では不可能だった。数多い神魔の中でも優太郎にのみその女神を見つめることが出来る、とある神霊から分かれた霊基が己を作る最も根底に存在しているから、そしてその神霊と今いるかもしれない女神は姉妹だから

「女神エレシユキガル……まさか……本当に……？」

メソポタミア神話に登場する冥界の女神。そして優太郎……いや、アシュタロスを形作る霊基である女神イシユタルの姉妹。絶対なる

死の支配者であるエレシユキガル……それが今日本に存在するかもしれない、その可能性が横島の死によつて僅かにだが、証明されつつあるのだった……

「うーん……やっぱり感じる、微弱だけど同郷の気配……でもこれは……」

そしてアシユタロスがエレシユキガルの存在を感じているのと同じく、エレシユキガルもまたアシユタロスの存在を感じていた

「イシユタルって感じじゃないわね……本当。今の神魔つてどうなつてるのかわ？」

呼び出されたエレシユキガルには現在の神魔の知識が無く、自分と同類の気配を感じるが、それに妙な混ざり物があるような……ノイズのような何かが混じつた不明瞭な何かに妨げられ、その存在を感知することは出来なかった

「まあ良いのかわ。私の冥界が無いのは残念だけれど、こうして日の当たる世界を見ることが出来る。それも悪いものではないし……ね」

そう笑つたエレシユキガルは真紅の瞳で東京を見つめ、そしてそのまま闇の中に溶ける様に消えていくのだった……

アシユタロスとエレシユキガルが会おう日は近い……

リポート13 常世のだいそうじょう その4へ続く

## その4

レポート13 常世のだいそうじょう その4

琉璃さんの好意で用意して貰った車で家に戻って来たのだが、そこでまた1つ大きな問題が発生した。それはシズクとタマモ、それにおキヌちゃんとのツブちゃんの力を借りなくては、俺は車から降りる事が出来なかったのだ

「な、なんだ……これ」

自分の意思を関係無しに痙攣する手足に自分が初めて重症だったと言うことを知った

「……無理をするなよ？ 数日は動くのも大変なはずだ」

「すまん」

まさかここまでではとは思っても見なかった。シズクとタマモに肩を借りて家に入ると流石に時間も時間なので、昼寝から起きたチビとウリぼーがフローリングを走って来たのだが……今の調子では受け止める事が出来ないと思わず引き攣った顔をした瞬間

「みむうううう!!」

「ぶぎゅ？」

飛びかかろうとした瞬間チビが踏み止まり、自分の横を駆け抜けていこうとしたウリぼーの尻尾を掴んで静止する

【流石チビじやな、横島の体調不良を見抜いたか】

「みむうー」

マジで？チビ俺の体調不良に気付いて止ったのか？チビを見つめると真ん丸の瞳が俺を見つめ返してくる。その視線からは俺を心配しているのがよく判った

「チビの知性は相当な物だからね、気配とかで感じ取ったんだわ」

それよりも早く、身体を休ませる事に集中するべきだわと言うタマモに連れられ、俺の部屋ではなくリビングに連れて行かれる。

「えっと俺自分の部屋で良いけど？」

【駄目ですよ？横島さん。何かあるか判らないですし、心眼もまだ返



事をしてくれないでしょ？何かあったら直ぐ判る場所の方が良いですよ」

自分の部屋で眠ろうと思ったのだが、おキヌちゃんに制止され、シズクが運んでくれた来客用の布団に横になる

「みむう……？」

「ぴぎゅ？」

大丈夫？大丈夫？と言わんばかりに俺の回りを動くチビとうりぼーに大丈夫だよと笑うが、直ぐにノツブちゃんに頭を叩かれる

「大丈夫な訳あるか。かなりの重症なんじゃから大人しくしておれ」

その強い口調と眼差しに何も言う事が出来ず、はいつと俺は弱弱しく返事を返し

【のーぶー？】

チビノブが運んできた雑炊をゆつくりと口に運び。食べ終わると同時に今日はもう寝ろと言われ、眠くないのにも思いつながら布団に寝転がる

「いや、そんなに見られると寝づらいから」

【でも何があるか判りませんから】

いや、ここまで来て心配することなんてないと思うんだけどなと思っっていると、シズクも同意見なのか俺を見つめているおキヌちゃんの頭を叩いて

「……馬鹿は連れて行く。チビとうりぼーとタママは置いていくから、ゆつくり休め」

「うむ。そうじゃぞ、横島。今日はワシもシズクの部屋で寝る、ゆつくりと休むのじゃぞ」

【ひーん……横島さーん……】

涙を流しながらシズクとノツブちゃんに引き摺られて行くおキヌちゃんを見て、溜息を吐きながら横になる。すると眠くないと思っただけなのに、目を閉じると同時に俺の意識はぷつりと途絶えそのまま深い眠りへと落ちていくのだった……

なおおキヌが馬鹿をやり、横島をリビングに残す理由を作り。シズクとノツブが部屋を出たのは、横島を殺しただけそうじょうに對する

激しい怒りと憎悪に満ちた表情を見せまいとするシズク達の配慮であり。そして鬼神のような威圧感に横島だけを避けて発せられており、横島の家の前を通った近所の住人が慌てて歩き去ると言う異様な気配を放っていた。3人がどんな顔をしていたかは……3人以外知る者はおらず、横島も朝まで目覚める事が無かったので誰も知らないままとなり、お互いにその時の事を口にしないのだった……

深夜、ブリュンヒルデの攻撃によってクレーターが出来た広場の中心の瓦礫が音を立てて崩れ落ち、その隙間から生気の無い細い腕が現れる

「やれやれ、危ないところじゃった……」

それは胴体に風穴の開いただいそうじょうの右腕だった。拙僧は瓦礫から這い出しながら風穴の開いている己の身体を見て

「修行が足りぬな……カカカカ」

神魔と戦っている時もこれほどまでのダメージを受ける事は無かった。救済と言う使命を果たす為に生き長らえて来たが、いやはや、1000年所ではまだ修行が足りぬらしい

「さてさてどうしたものか……」

身体が修復するまでの間。手にした数珠を見つめる、これには拙僧が救った人間の魂が封じられている。だが転移魔法で逃げる寸前だったバンダナの小童の魂が無い

「おかしいな」

確かに魂の緒を切った手応えはあった。だが魂は手元に無い……拙僧が思うよりも深くダメージを受けていたのか、それとも転移が拙僧の術を邪魔したのか……少しばかり気になるな

「ふむ。まあ良かろう」

確実に成功する術ではない。姫様に試練を与えよと言う事で試しただけ、術の決まりが浅かったのか、それとも何らかの加護か……どちらにせよ決まりが薄いと言うのならば

「力づくじゃな」

姫様に捧げなければならぬ存在だ。拙僧の独断を許して貰ってい

る以上、なんらかの土産が無ければ4騎士殿に何を言われるか判らぬわ

「未熟な同胞……か。さてさて、どうなる事やら……」

魔人は生まれたときに既に完成している。未熟な同胞と言うのは初めてやも知れぬ……白騎士殿の話では珍しい能力を持っていると聞く、今度合間見えるときはその能力とやらを見ることが出来ればいいのだが……

「なんにせよ、今は休むとするか」

身体の修復は済んだが、神通力と魔力を相当消耗している。このまま戦えば敗れるのは自明の理、なればこそ身体を休めるとしよう……「すこし気がかりな事もあるからな……ゆつくりと休むとしよう」

この街には色々な神性が集まっている……下手に動けばそれらが出張ってくる可能性もあるが、それもまた良し。この身は魔人なればこの身に敗北などありえないのだから……

やはりだいそうじょうは大きなダメージを受けていたのか、昨晩は深夜の大量死の報告は一切無かった。だがこれに安心する事など出来る訳も無く、だいそうじょうへの対策を確かな物とする為に早朝から私はくえすと共に白竜寺を訪れていた。蛭ちゃんを呼ばなかったのは、横島君の様子を見てきて貰う為だ。今回は横島君が一番の被害者となっている。今まで以上に警戒し、護りを強固にする必要がある「神代会長から話は聞いています。どうぞ、お師匠様が待っています」山の頂上と言う事もあり、朝靄に満ちた境内の中。掃除をしていた少年が私とくえすを見て頭を下げ、境内の中を案内してくれる「しっかりと行き届いていますね」

「そうね。しっかりと白竜寺は再建されてるみたいね」

雪之丞も仮GS免許を交付されているみたいだし、まだまだこれくらいだけど、英霊である三蔵法師がいるのだから栄えていくだろうし、弟子も増えるだろう。その中で味方が増えるのは良い事だと思いがら、案内された部屋に足を踏み入れる

「マルタ……貴女も来てたの」

三蔵法師ともうひとり英霊の姿があつた、六道女学院で教鞭を振るうマルタだ。だがジャージ姿ではなく、白を貴重にした法衣を纏っており、これが英霊としてのマルタの姿だと理解する

「英霊マルタですか……竜を鎮めた聖女……ですね」

魔女であるくえすはマルタを怪訝そうな顔で見つめているが、マルタは人の良い笑みを浮かべながら

「今はそういうのは無しで行きましょう。魔人をどうするか？そこが重要でしょうか？」

異教徒とか、魔女とか聖女とかは今は無関係ないわとマルタは笑う。サバサバした性格なのは知っていたが目的の為には相反する相手とだって手を組む。この柔軟性に少し驚きながらも頼もしいと思ひ用意された座布団に座る

「早朝から申し訳ないですが、早急に対策を練りたいので伺わせて頂きました」

「話は聞いてるわ。其処まで硬くならなくていいから、私もマルタも天界から横島君の事は気に掛けるように言われてたけど、今回は完全に出遅れたわ。まさか横島君が1度殺されてしまうなんて……これについてはこちら側の不手際でした。申し訳ありませんでした」

お互いに謝り、そこからだいそうじょうように対しての話し合いが始まった

「攻撃が効かないかあ……多分だけど、特殊な瞑想状態で外界からの干渉を遮断していると思うわ。そもそも即身仏を行った高僧でしよう？功德は足りているんだと思うんだけど……」

だいそうじょうと言う名乗りは伊達でもなんでもなく、そのまま大僧正と言う密教の最高峰の存在だったらしい、現に各地の寺の文献を調べたらだいそうじょうと同じ袈裟と法衣を来た老僧が即身仏を行ったと言う記録が合ったらしい

「でもそれだけの高僧が何で魔人なんて物になるのよ？」

その記録の人物とは別人じゃない？と私が言うとマルタは確実に同一人物よと断言し、そしてその上で魔人になった理由についての意見を教えてくれた

「即身仏が何かは判らないけど、多分殉教者と同じね。神の教えの為に命を捨てる、それは私の信じるキリスト教にも良くある話だわ。そしてその上で言わせて貰うけど、多分その人は見てしまったと思うの、そしてそれを見て狂ってしまった」

見てしまった？私とくえすが首を傾げていると三蔵法師がマルタの話を引き継ぐ

「私自身何度も死んで、何度も転生して、やっと天竺に辿りついたわ。その過程で私も見たんだけど……死んだ魂や、焼かれた村に飢饉で死んでいく子供達……そう言った者を何度も見たわ。そして気高い理想を持つからこそ、その現実を知った時その魂は容易く闇に落ちる」  
強い精神力を持たなければ即身仏を行ったとしても失敗すると言う事なのだろうか？だがもしそうだとしたらなんと皮肉な話だろうか

「ではだいそうじょうは苦しむ民の姿を見て、苦しむくらいならば安楽死と考え、人間の魂を刈り取っている？」

「多分だけどね、生きていても苦しいのならば死後の世界で救済を、かなり偏った考えだけど、救済したいという思いはそのままだと思うわ」

ただその方法が致命的に間違っているけどねと三蔵法師とマルタは沈鬱そうな顔で告げた。救済を願って、破壊を行っている、なんと皮肉な話だろうか……もしかすると他の魔人もそういう経歴があるのかもしれないと思うと少し複雑な気分になった

「たとえ生前がどうであれ、今は敵として立ち塞がっている。私にはだいそうじょうの経歴なんて何の興味もありません、打開策があるのか。どうなのか？そこだけですわ、何も無いのなら私はここにいる意味が無いと判断します」

横島君を殺された事に強い怒りを抱いているくえすがだいそうじょうの経歴なんて関係ないと断言し、対策はあるのか？と尋ねる。かなりきつい言い方だが私も同じ意見だ、だいそうじょうの経歴には同情するし、その願いが間違っていないと言うのも判るが

「それでも救済を謡い人を殺すのは間違ってるわ。何か対策があるの

なら教えて頂戴」

「そうでないのなら帰ると言うマルタは推測だけだと呟いてから  
「高密度の霊子で身体を構築していると思うわ、だから放出する魔法  
や魔術、それに霊波砲とかの効果は多分望めない」

自分の体の構築を即座に変換して攻撃に対応するから、遠距離攻撃  
は目晦まし程度の効果しないと断言したマルタは拳を握り

「霊力を集束した拳や武器で攻撃するしかないわ。とは言え、これも  
劇的な効果があるとは言えない。何度も何度も攻撃を繰り返して、だ  
いそうじょうの霊子の結束を破壊する事で、やっと攻撃が有効になる  
と思う」

「つまり武器を使った攻撃をするしかないか？あれだけの波状攻撃と  
回避能力を持つだいたいそうじょうに対して？」

くえすの問いかけにマルタは頷く、昨日対峙したがだいそうじょう  
の回避能力は驚異的なレベルだった。そんな相手に対して接近戦を  
挑むなんて正気とは思えない、それこそ事前に準備をして結界などで  
向こうの機動力を落とさない事には接近戦に持ち込むのは不可能に  
近い

「もう一つ方法はあるわ。だいそうじょうの霊的防御を貫くほどに高  
密度に圧縮した攻撃なら、だいそうじょうの防御を貫ける」

早朝から話を聞きに来て判ったのは効果は薄い但し霊力を通した物  
理で殴るか、高密度に集束した霊波を伴う攻撃だけか……あまり有益  
な情報ではないが、だいそうじょうが動き出すまでの時間があるのな  
らその間に準備を整える事が出来る

「それと私とマルタ。どちらかは其方の応援に付きます。ただ天界・  
魔界からのこれ以上の増員および武具などの支援は無理だし、両方動  
くとグループに東京に集まっている戦力を悟られてしまうので、どちら  
かだけ」

一番最悪なのは、グループと魔人が手を組んでいる可能性だ。それを  
考慮しつつ、それでもマルタか三蔵法師がだいそうじょう撃退に協力  
してくれる。それは私にとって非常にありがたい言葉だった、マタ  
ドールで魔人の強さは知っていたつもりだったが、つもりだったの

だ。魔人は人間だけでは決して撃退出来ないと言うことを改めて知る事になった。だから協力してもらえ、それだけでも十分すぎる支援だ

「それでもありがたいわ」

ブリュンヒルデに英霊が2人。戦力的には前回戦ったときよりも充実していると言える。それに急に遭遇するのではなく、対策を練る時間があるというのも非常に大きい。私とくえすは三蔵法師とマルタに別れを告げ、白竜寺を後にした

「横島が戦えれば非常に有利な条件ですわね」

「でもそれは出来ないわ」

話を聞けば聞くほど眼魂を持つ横島君が必要な戦いになる。だが魂の緒を切られ、肉体的にも霊体的にも重傷者の横島君を動かす訳には行かない。だから私達で何とかするしかない

「私は文献を見て、新しい魔法の準備をしますが、美神。貴女はどうするのですか？」

「私はちよつと強引な手段になると思うけど、どこかの神社とかに祭られている御神体を借りれないか、琉璃に相談してみても、どこで何をしているか判らないけど、柩にも声を掛けてもらおうつもり」

ドクターカオスや優太郎さんの用意してくれる霊具の質は高いが、相手が相手だ。物自体に強力な霊力が宿っている武器でなければ効果を期待できない。その条件を満たすのはやはり何処かで祭られている御神体を借りるのが一番早い、そして何時襲ってくるか判らない相手に警戒するのは精神的にも肉体的にも辛い。もし可能ならば柩の未来予知である程度の予想を立てたいと思っている

「だいそうじょうが何時動くか判らないから、ここからはスピード勝負よ」

「判っていますわ」

聖奈の攻撃でどれだけのダメージを負っているか？そこが重要になってくる。後は托鉢をしている老僧が何時東京に現れるかだ。柩に協力を得ることが出来ればある程度は大丈夫だが、柩の未来予知は8割とほぼ当たるが、稀に外れる。未来予知に加えて、人海戦術によ

る警戒網。それを用意する必要があると私は考えている

「琉璃にG S協会の人員を用意して貰って警戒する必要があるわね」

「そうですね」

今の時代に托鉢をしている人物は少ない。人員や警察と協力して托鉢をしている人物がいらないか、警備してもらおう必要があるわねとくえすと話をし、G S協会の近くでくえすと別れ、私は琉璃の元へ向かうのだった……

だいそうじょうの攻撃で横島が1度死んで1日経ったが、その後遺症は根太く、そして深刻に横島を蝕んでいた。早朝にも関わらず尋ねて来てくれたカオスが深刻な表情で告げた言葉を思わず思い出す

「魂の緒だけじゃなく、霊体と魂にも深いダメージを受けておる。とりあえず、霊薬を処方しておく、横島が起きて、霊体が安定していたら飲ましてやって欲しい」

「……よ、横島さんが起きたら、マリアとテレサが心配していたとそう伝えてください」

「あたしは焦らないで身体を治してくれて伝えてくれ」

マリアとテレサも意識の無い、人形のように脱力した横島を見て、小さく悲鳴を上げていた。私もこのまま死んでしまうのではと不安に思ったからこの反応は当然かと思う。横島が起きて意識がしつかりしていたらその伝言を伝えようと思う

「私は1度帰るわ。お父さんに霊薬とかの相談をしてみる」

「……頼む」

朝から尋ねて来て横島の様子を見ていた蛍は、昼前に一度帰ると言って帰って行った。時間で回復すると判っているが、それでも心配になるし不安にもなる。それに蛍が父と思っているのはあのアシユタロスだ、何か効果的な道具をくれるかもしれないと期待し、見送ったのが30分前。それから昼食の準備を始めたが、10分ほどで終わってしまった

「……こんなものだな」

固形物では喉に詰まらせる危険性があると言う事で、ノツブの事を



一切考慮せず。フードプロセッサーとか言う道具で野菜などを細かく切り刻んで作ったスープを作った。そもそも霊なのだから、食事は必須ではないのでまずは横島を優先した。具材は少ないが、味はそれほど悪くないな、スープの味見をしてから、コンロの火を切り、キッチンから横島を見る

「……………ん、んー？」

ぼんやりとしている様子だが、意識はあるようだ。だがその様子ではカオスから受け取った薬は飲ませれそうに無いな、と思い次は掃除でもするかと考えていると突如ごとんつという重い音がしたので慌ててキッチンから飛び出す。横島が糸の切れた人形のように机に突っ伏していた

「……………大丈夫か？」

慌てて駆け寄って身体を揺する。暫く揺すっているとようやく横島が反応を返した

「え、あ……………あ、うん。大丈夫」

焦点の合っていない視線と、何処かたどたどしい口調……………だいそうじょうに魂の緒を切られた後遺症は予想よりも遥かに深刻であり、横島を蝕んでいた。

(心眼はまだか……………)

心眼は言葉こそ発していないが、神通力をずっと放出している。恐らく横島の魂の緒の修復に全精力を向けているので話をしている余裕も、具現化する余裕も無いのだろう

「みむう？」

「ぴぎゅ？」

チビとうりぼーが心配そうに横島に擦り寄り、タマモが膝の上に丸くなって溜め込んでいた霊力を放出している。チビやうりぼーは身体が小さい事もあるし、力を蓄える事が出来る訳でもない、そして更に言えば横島が無意識に吸収出来るように霊力を放出できる訳でもない。その点タマモは尻尾が8本あり、それぞれに霊力を蓄積している。そして横島と暮らしている時間も長いのでそういう細かい調整をしつつ、横島に霊力を譲渡している。9本目が戻るのが遅くなる

が、自分よりも横島を優先した訳だ

【ワシの霊力を渡す訳には行かんからなあ】

「……私もだがな」

横島の今の魂の状態は極めて不安定な状態になっている。何時魂の緒が再び切れるか判らない状態に加え、魂自身の損傷も酷い。そこに竜族であり神霊の私の神通力や竜気。ノツブの英霊としての霊力を譲渡すればどんな反発があるか判らない、出来る事ならば私も神通力を譲渡し、少しでも横島の回復の手助けをしたい所だ。しかしそう願ってもそれが出来ないもどかしさ、そしてそのもどかしさは横島を殺しただいそうじょうへの強い怒りへと変わる、そしてその場にはいなかったが、私達と同様の怒りを抱いている物がいた

【私は自分がこれほど情けないと思った事はありません】

牛若丸眼魂が光る。長い間霊力の回復に努めているのに今もまだ具現化出来ない。横島を守る事が出来ない、それが牛若丸にとっては己のふがいなさの証拠で、自分自身にもだいそうじょうにも強い怒りを抱く理由となった

【じゃが無理は出来んじやろ。霊核が損傷したら消えるぞ?】

【それでも私は主殿の為に戦いたい】

生真面目な性格の牛若丸がもし具現化出来るようになれば、横島の安全は更に高まると言える。だからその為にも

「……今は無理をするな。確実に霊力を回復させろ」

【……ッはい……判っております】

絞り出すような声でわかっていると返事を返した牛若丸眼魂は沈黙する、ふと視線を上げ、視界に納まった物を見て小さく苦笑した（しかし、あれには助けられたな）

机の上に置かれている青い小瓶。私が横島に持たせるべきではないと反対した謎の神の所有物。それが横島を救っていた、溜め込んでいた神通力を全て放出し、今はただの砂となっているがその砂に溜め込まれていた神通力が1度死んだ横島の魂を呼び戻した

（死神だったか?）

横島にあれを渡した神魔が何者かは判らない、だが死者を呼び戻す

程の力を持つ物はよほど特殊な神魔で無ければ用意出来ないだろう。まだ警戒している事に変わりはないが、もし会う事があるのなら感謝くらいはしてもいいなと思っっていると再び重い音を立てて横島が机の上に突っ伏す

「みむーみむーみむむー!!」

「ぴぎー・ぷぎゅー!!ぴぎ!!」

チビとうりぼーが必死に横島の頬を叩くが反応が無い、私とノツブが慌てて横島の身体に触れようとした時。バンドナに目が浮かび上がり

「やっと終わった。心配ない、横島の魂の緒と魂の修復が終わった所だ」

心眼の言葉に思わず安堵の溜息を吐いて、その場にへたり込む……情けない話だが、安心しすぎたせい……腰が抜けたのか暫く立てそうに無い。自分らしくないその失態だが、自分でも思っている以上に横島を心配していたと言うことを実感した

「タマモの霊力譲渡が役に立った、タマモは横島と暮らして長いからな、横島の霊力や魂と親和性が高かった」

だからここまで早く修復できたという心眼。だがそれではなぜ横島は意識を失ったのか?と言う疑問が脳裏を過ぎる

【魂の回復がすんだんじやろ?なんで気絶したんじや?】

【私が眠らせた。霊体となじませる必要があるからな、起きている時よりも眠っている方が回復力が強まる】

心眼の説明に納得すると同時に、やっと足に力が入るようになったのでゆっくと立ち上がり

「……チビノブ、手伝え。横島を休ませる準備をする」

【のぶー】

家の掃除をしていたチビノブが敬礼して、その小柄な姿からは想像も出来ないスピードで走り出す。私はその姿を見ながら机やソファーを移動させ、布団を引く準備をしていると美神に横島の状況を報告に行ったおキヌが戻って来たのだが、意識のない横島を見てたださえ青い顔を青くしている

「……大丈夫だ。心配ない、心眼の治療で横島は眠っているだけだ」  
【そ、そうなんですか……よ、良かった……】

その目に涙を浮かべて良かった良かったと繰り返すおキヌに悪いと思っただが

「……また直ぐ美神の所に戻ってくれるか？横島の霊体が安定したと伝えて欲しい」

【判りました！直ぐ行って来ます!!】

壁を抜けて空を飛んでいくおキヌを見送っているとチビノブが布団を担いで戻ってくる

「……ご苦労。横島を横にしよう」

【ノブうー！】

チビノブに布団を引かせ、私は意識を失い完全に脱力している横島を起こさないように気をつけながら移動させるのだった……

一方その頃。都内の高級ホテルではあるやり取りが行われていた

「姫様。進言します」

「何だ？」

ワインを手に上機嫌で音楽を聴いていた魔人姫にそう声を掛けるレッドライダー。ネロはどうしたと笑いながらレッドライダーの言葉に耳を傾ける

「だいそうじょうはしくじりました。やはり自由にさせたのは失敗ではないのでしょうか？」

「はは、そんな事か、物事なにかも思い通りでは面白くない。そして失敗したとしても、その失敗を生かし反省すればそれはそれで良い」

愚か者とは失敗をしても反省せず、後悔せず、同じ過ちを繰り返すものだと笑う魔人姫は手にしたグラスに再びワインを注ぎながら

「この街は面白い人間が多い、それを見て楽しむのも一興。数日のうちに再びだいそうじょうも動くだろうからな」

その時はレッドライダー、お前がその眼で見えてきて、余に戦いを見せよと告げる魔人姫。レッドライダーは片膝をつき

「仰せのままに」

「うむーそれでよい、さてさて……どうなるか楽しみだな!!」

魔人姫はその目に喜色の色を浮かべ、窓の外を見つめる。その視線は窓の交差点を歩く人間に向けられていたが、その目はそこではないどこかを見つめているのだった……

リポート13 常世のだいそうじょう その5へ続く

## その5

レポート13 常世のだいそうじょう その5

琉璃に何とか廃れた神社などで保管されていた装飾品を借りる許可を何とか強引に取り付け、事務所に戻る。御神体となっている装飾品でどれだけ防御が上がるか判らないが、それでも無いよりは絶対に効果があるはずだ

【オーナー。お客様がお待ちです】

「お客様？いつちゃん。依頼は引き受けることが出来ないって言うって行ったわよね？」

朝出発する前に依頼者には悪いけど、今は依頼を引き受けることが出来ないって伝えてくれって言ったわよね？と尋ねるといつちゃんは

【はい。存じております。ですが、依頼人ではなく、同業者ですので……夜光院枢様がお待ちです】

「枢が!？」

未来予知能力で面倒ごとを避けるかのようにふらふらしている枢。本来なら連絡を取るのさえ難しいあいつがどうして……まさか何かあったのではと思ひ慌てて階段を駆け上がる

「やあやあ、焦らせたようで悪いね。くひひひ」

いつもの焦点の合わない瞳。そして不気味な笑い声と全く普段通りの姿に安堵の溜息を吐きながら

「今どういう状況下知ってるでしょ？何しに来たの？」

枢の事だ。だいそうじょうの攻撃で横島君が死んだことも知っているはずと思ひ尋ねると、枢はくひひと笑いながら

「まあ大体は知ってるよ。横島が無事で良かったよ、ボクは彼に凄興味があるんだ」

興味？……まさか恋愛感情とかだったらまた一騒動になるわねと思ひながらも、藪を突いてなんとやら、あえてそれを問いたですような真似はしない

「もう直ぐここに最高の知らせが来るからね、ボクもそれに同席したいと思ってるね」

最高の知らせ？ 柩にその言葉の意味を尋ねようとしたとき。目に涙を浮かべたおキヌちゃんが壁から顔を出して

【横島さんの魂の緒の修復が済んだそうです。もう心配は無いと心眼さんが言ってます】

その報告は柩の言うとおりの最高の知らせであり、私は来客用のソファアーに腰掛け

「良かったわ。このまま悪いけど、蛭ちゃんにも教えてあげてくれる？ 彼女も心配していたから」

判りましたと元気よく返事をし、姿を消すおキヌちゃん。その速さに苦笑しながら

「それでこの後はどうするつもり？」

態々柩が出てきたのだ。これで終わりではないはずと思いこの後はどうするつもりなのか？ と尋ねる

「くひひッ!!後でどうせ対策を練るのと、横島に動かないように釘を刺しに行くだろ？ それに同席させて貰うよ」

くえすの安心しきった顔を見たいしね！ と笑う柩にそうなのと返事をしながら立ち上がり

「何か飲む？ 後で未来予知の結果を教えてもらおうけど」

「ぜひお願いするとも」

とりあえず横島君の容態が安定し、そして未来予知が出来る柩も訪ねて来た。これでだいそうじょうへの対策が出来る、もしかすると襲撃してくる時間まで判るかもしれない。私はそんなことを考えながら2人分のコーヒーの準備を始めるのだった……

シズクに言われたと言うこともあり1度家に帰ったが、正直シズクが期待しているような霊薬などは無いと思う、もしあるのなら横島の家に行くときに私に渡してくれているだろうから、それでも私が1度家に戻ったのは理由がある。確かに霊薬などは無いかもしれない、だ

が霊具ならあるかもしれないという期待だ

(もしもだいそうじょうの人間を即死させる魔法が連続で使えたのなら……今度は全滅する)

1度目の戦いで逃げる事が出来たのは向こうも様子見と言う感じだったからだ。息を吹き返したがそれでも横島が死んだ……2回目の戦いで様子見なんて真似はまずしてこないだろう……ならば必要なは即死魔法を回避するための装備であり、お父さんも探してみると言っていたのでその結果を聞こうと思ったのだ

「ただいま」

「おかえり、蛍。大分探してみたんだが、やはり即死に対する防御を上げる術や道具はないね。今から作る事は出来ると思うが……即席の道具となると信用性が問題になると思う」

お父さんの言葉にやっぱりと心の中で呟きながら、ソファーに腰掛ける。道具のコレクターでもあるお父さんが持っていないとなると、神魔に協力を要請しても多分そういった道具は手に入らないんだろうなと理解した

「すまないね。魔人と神魔は似て非なる存在だ。魔人の扱う術は神魔でも理解できない物が多い」

「判ってるわ、もしかしたらって思っただけだから」

もしかして即死などに関係する道具が無いかとかつてに期待しただけだから……無くて当然と思っていただけから、無いと言われても思ったよりも落胆していない

「すまないね。ところで蛍。美神さんと一緒にだいそうじょうの持ち物らしい物を見つけたらしいね」

どうして?と思ったが、ドクターカオスから聞いたのだろうと思いい、その通りと返事を返す

「あれは見ているだけで自分の力が活性化するのを感じたけど……あれは何かの霊具なの?」

「いや、それに関しては判らない。私とて万能ではないからね、だけど蠟燭と言う形に何か意味があるのだと思うよ」

蠟燭は普通に使えば溶けて消える。霊具としては使い捨てになる



筈だ、蠟燭で作る意味は少なく、態々蠟燭で作ったその事に意味があるのでは？と考えるのが普通だ

「考えられるのは魂を集める、魂を呼び寄せただが……他に考えられる物として一つある。それは魔人であるという証明だ」

「魔人であるという証明？」

お父さんの言葉に思わずそう尋ねかえるとお父さんは自信満々の表情でそうだと言う

「そもそも私はソロモンの魔神と言う括りを持つし。小竜姫は密教や道教。ブリュンヒルデは戦乙女……神魔にはその神魔である証明と言うものがある」

まあ一言で神魔って言ってもその種類や姿は千差万別だ。メドーサだつて名前こそメドーサだが、その姿は中国系でギリシヤ神話のメデューサとは似ても似つかないし……

「つまりその蠟燭は魔人である己を証明する為の道具であり、更には何らかの効果を持つのでは？と私は考えている」

「そうなるともしかしたらマタドールも所持している可能性が？」

あると思うねとお父さんは呟く、魔人同士は数が少なく稀少だと言っていた。恐らく仲間意識は強いだろうし、集まる時に目印となる道具をお互いが持つていてもおかしくは無い

「とは言え、確証がある訳でもないからあくまで推測だがね」

仮に強力な霊具としても蠟燭と言う形状上。そう何度も使える道具ではないだろうし、蠟燭ならば火を消せばいいと笑うお父さんに「やっぱりもしいそうじようが現れても？」

「ああ、私は協力出来ない。私は過激派と思われていなければならぬから」

判っていたのだが、こうして言われると少し辛い物がある。だいそうじよの強さは1度の戦いで理解した、次は生き返るという保証も無い。出来る事ならばお父さんに協力して欲しかったのだが……

「一応ドクターカオスと協力して、霊力の集束能力を強化した神通棍などは用意するつもりだし、可能ならばメドーサを応援に回すが……彼女も彼女で魔界での情報収集に忙しい、私から用意出来るのはある

程度の装備だけになると思う」

「ありがとう、それだけでも嬉しい」

だいそうじょうに有効的な攻撃が不明なので手札は多い方が良いのは明白。それに強力な武器と言うのはそれだけでもありがたいのだ

(詠唱させる暇を与えないっていうのも1つの手段だろうしね)

転移する瞬間に聞こえたのだが、だいそうじょうはお経を読み上げていた。つまりそのお経こそが即死魔法発動の鍵なのでは？と考えるのは当然。つまり連続で攻め続ける事で読経をさせない、単純な上に対策とは言いがたいが、それこそが即死を防ぐ最大の守りなのかも知れないと考えていると土偶羅魔具羅が失礼しますと声を掛けてからお父さんの部屋に入ってきて

「幽霊のおキヌが尋ねて参っております。なんでも横島が完全に意識を取り戻したと」

「お父さん！私出てくるから！」

横島の家には居る時は意識がはつきりしておらず、私を見て誰？と言われたのは正直堪えた。だけど完全に意識を取り戻したと聞いて私はじつとしていた事が出来ず、土偶羅魔具羅の横を駆け抜けエントランスへと続く階段を駆け下りていくのだった

「やれやれ、虫には困ったものだ。教えてくれてありがとう、土偶羅魔具羅。下がってくれて構わないよ」

「では失礼いたします」

虫の出で行った部屋で優太郎が穏やかに微笑み、土偶羅魔具羅に退出を促し、奥の部屋で待っていてくれた客人の元へ向かう

「大丈夫かい？」

「い、胃がいたい……横島が死んだとルイ様に報告が入って、こっぴどく怒られた」

机に突っ伏しているベルゼブルに優太郎は無言で胃薬の瓶を手渡し、そのままベルゼブルが入手してきた情報と自分の情報を交換する、ベルゼブルはどうしてこんな事にと眩きながら去っていき、残された優太郎は通信兵鬼を手にし、ある場所へとコールする

『電話してきたということは緊急事態か』

「そうなんだ、実際負傷の所はどうだい？」

『問題ない、既に回復している。どうする？俺が出るか？』

「すまないが、頼めるか？ビュレト」

『任せておけ。直ぐに魔界を発つ』

確かに優太郎自身は戦う事は出来ない、メドーサを応援として送り出すことも難しい。だが得た情報を元に動く事ができる。こうして応援を呼ぶ事もまた、優太郎が出来る戦いであり、そして今優太郎が出来る精一杯の応援だった

「さてと、後は間に合うかギリギリだが準備をするか」

ビュレトと連絡を取った優太郎はそのまま荷物をまとめ、自らの拠点を後にした。逃亡などではない、ドクターカオスと協力し、新型の神通棍を作る。その為にドクターカオスの家へと向かうのだった……

自分では起きていたつもりなのだが、何度も気絶を繰り返していたとシズクと心眼に聞いて、霊体への直接攻撃のダメージの大きさを知った。変身でダメージを受けたのは自覚しているがそれを超えるダメージを受ける……霊体を直接攻撃できる相手と戦う危険性を身を持って知る事になった。

「……でも良かった。これで安心だ」

「うむ、本当にな。安心した、魂が何度も抜け掛けておったからな」

良かった言うシズクと、怖い事を言うノツブちゃん。2人が心配してくれているのがよく判る、心配掛けてごめんと言うと、お前が悪くないのに何で謝ると言われ謝る事も出来ない

「みむう……」

「ぴぎゅー」

「くう」

心配そうに擦り寄ってくるチビ達の頭を撫でているとチャイムの音が鳴る。反射的に立ち上がりかけたがシズクの凄まじい眼力に浮き上がりかけた腰を元に戻すと、それで良いとシズクが呟き玄関へ向

かう。俺はノツブちゃんとかチビ達と一緒にリビングに残される

【まーあれはかなり心配性だからな、暫くは動かん方がいいぞ】

「……うん。判ってる」

何かしようとするたびにあんな目で睨まれては精神的にも宜しくない。とりあえずシズクが見に行ってくれてくれるなら大丈夫だと判断し、俺は膝の上に乗ってきたチビとうりぼーの背中を撫でながらシズクが戻ってくるのを待つのだった……

「やあ、横島」

ここ最近姿を見なかった柩ちゃんを先頭に美神さん、蛭、神宮寺さん、シズクの順番でリビングに入ってくる

「柩ちゃん？それに美神さんに蛭に神宮寺さんも……」

訪ねて来た面子に驚く、美神さんや蛭が来るのは判るんだけど……どうしてこれだけ大人数で訪ねて来たのか？と思わず首を傾げる

「横島の容態が安定したと聞いたので様子を見に来るついでにだいうじょうと戦う時の話をしにきたのですわ」

俺の疑問に答えてくれる神宮寺さんにありがとうございませと呟く。美神さんや蛭が真剣な表情で俺を見ているのは霊視をしているからかと納得もした。なんか睨まれているように思えて、怖かったんだよなと心の中で呟く。

「今回は無事ですんだけど、横島君。だいそうじょうと戦う事になるけど、横島君は自宅待機よ」

シズクがお茶を持って来てくれてからだいそうじょうと戦う事に対しての話になったのだが、やっぱりと言うか、俺は自宅待機となった……と言うか

「……この状況の横島を戦わせるというのなら、私はお前達を殺す」

【過保護すぎー是非も……「黙れ」ノツブウウ!?】

逆立った髪を揺らめかせるシズクに心底恐怖し、過保護すぎと笑ったノツブちゃんがシズクの髪に殴り飛ばされた……そのとんでもない光景に俺は思わず絶句してしまった。しかしシズクが言うまでもないのか美神さん達も戦わせるつもりは無いときっぱりと断言した

「理由は説明するまでも無いと思いますが、霊体へのダメージの事が

最大の理由ですわ」

「今無理をすると霊能者として再起不能になる可能性も高いし、だいそうじょうが横島を狙っているのは明白だから大人しく家に居てよ？」

神宮寺さんと蛭にそう言われるが、それは勿論判っていた事だ。だけれどそれは俺だけの話じゃないはず

「でも美神さん達は大丈夫なんですか？」

だいそうじょうの即死攻撃を受けたら駄目と言うのは美神さん達も変わらない条件の筈だ。美神さん達は大丈夫なんですか？と尋ねる

「一応対策としては高純度の精霊石とかで身を護る予定よ。後は三蔵法師達が協力してくれるって話になってるし、ノツブや沖田ちゃんにも協力を頼む予定」

元から死んでいるから、生者よりも即死攻撃に対応できる可能性があるとの事だ

「くひひ、まあ仕方ないさ。横島、君がいないのは確かに痛手になるが君が死んだほうがリスクが高い」

「俺が死んだ方が？」

枢ちゃんの言葉を鸚鵡返しで尋ね返すと、蛭が気まずそうな顔をしながら

「シズクとか、タマモが暴走しかけたのよ。もしそうなればだいそうじょうなんて目じゃない脅威が生まれる事になるのよ？」

水神で竜神のシズクと九尾の狐のタマモが激情のまま暴れるリスクを聞いて、確かにそれは不味いなと思った。だけれどそれ以上にそこまで心配させてしまったことに申し訳なさを覚える

「人数の方はこれから唐巢神父やエミに連絡して戻って来て貰う予定です」

そう言えば、エミさん達も除霊で東京にいないって言ってたっけ……だいそうじょうがまた現れる前に戻って来てくれると良いんだけど

「横島さん、美神さん達が心配なのは判りますけど、横島さんの方がま

だ危険なんですよ？まずは自分の身体の心配をしてください」

おキヌちゃんに心配そうに言われ、神宮寺さん達にもその通りと言われる。

「それにまだ横島君が私達の心配をするのは100年早いわよ」

「その通りですわね。見習いなものだから、私達が無事に勝つと信じていれば良いですわ」

自信満々の美神さん達の表情に悲壮感や不安の色は無く、何か勝算があるのだと判り俺が心配するのは確かに早いなど苦笑する

「とりあえずだいそうじようが襲ってくるまでは、まだ数日の猶予がある。だからそれまでに横島の体調が回復すれば、合流する事も出来るさ、いや、むしろ横島がいないとだいそうじようが現れないかもしれない。ま、それは今後の未来予知の結果次第だけど……くひひ、まあ、まずは自分の身体を治す事に集中しなよ」

柩ちゃんにも安静にしているように言われる。皆に心配させていることが申し訳ないと思うし、でもそれだけ心配して貰えて嬉しいとも思いいろいか複雑な気分だ。ただ俺がいないとだいそうじようが現れないかもしれないと言うのは美神さん達も初めて聞いたのか、柩ちゃんに視線を向けて

「そんな話聞いてないけど？」

今見えた未来だからねえと飄々とした表情で言う柩ちゃん。それに対してしかめ面をしている美神さん達……どうすればいいのかおろおろしていると美神さんは深い溜息を吐きながら

「とりあえずの流れは説明したから、私達は霊具とかの準備に柩の未来予知に合わせてだいそうじようで戦う準備をするから帰るわ」

俺の事はとりあえず保留。出来る限り待機できる方向で調整すると俺の言うのと、だいそうじようのとの戦いの準備の為に帰ると聞いてちよつと待つてと欲しいと美神さん達を呼び止める

「柩ちゃんに渡す物があつたんだ。ちよつと待つててくれ」

「……私が持つてくるぞ？」

シズクがそう言うてくれるが、自分で取りに行きたいとシズクの申し出を断り俺は自分の部屋へ向かった

「はい。これ」

美神さんや神宮寺さんもいるので渡すべきか悩んだが、また何時会えるか判らないので今渡しておく事にした

「柩にプレゼント？横島って柩とそんなに仲良かった？」

怪訝そうな顔をしている蛍に何と説明すればいいのか困惑していると、柩ちゃんは俺の渡した箱を開けて

「黒皮のチョーカー？くひひ！年下にプレゼントするにはいささか相応しくないものじゃないかなあ？」

それは俺も思っている。美神さん達の険しい視線と蛍の小さい口リコンの上にS？と言う眩きに慌てながら

「いや違う違う！柩ちゃんの能力が暴走してるって聞いたからヒヤクメさんに用意して貰ったんだよ」

だから俺が買って来た訳じゃないと叫ぶ。だが美神さん達はまさかと叫び

「横島君、貴方まさか原始風水盤の報酬で!？」

「なんで自分の為に使わなかったの!？」

蛍や美神さんに詰め寄られるのだが、その圧力と迫力に気圧される。チビやうりぼーはその迫力に完全に怯えて身体を小さくしている、俺も出来たら隠りたいなあとか思いながらも、説明しなければ終わらないと思いい理由を説明することにする

「そりゃ確かに悩んだけどさ。このままじゃ柩ちゃん若くして死んじゃうって聞いたら……さ。何とかしないと死んで」

確かにヒヤクメさんに頼む前は悩んだ。だけど知り合いが死ぬのは嫌だったからと言うと心眼も

「私も考え直せと言ったんだがな。目の前で助けられるかもしれないのに、何もしないのは嫌だと言う横島に押し切られてしまった」

俺と心眼の言葉に美神さん達が深い溜息を吐く中。柩ちゃんはそのチョーカーを首に巻いて

「……全く、こんなのが貰えるなんて思っても無かったよ」

「本当に暴走している能力は止ったんですの？」

神宮寺さんの問いかけに柩ちゃんは見た事のない綺麗な笑みを浮

かべながら

「ああ。完全に止ってるよ、脳に直接やすりを掛けられているような痛みも綺麗さっぱりない」

脳に鑢!?!その余りの表現に思わず絶句する、平気そうにしているが、まさかそこまでの痛みに耐えているなんて思っても見なかった「横島ありがとう、このプレゼントは嬉しいが……流石にここまでされる何でお返しすればいいのか判らない」

「いや、俺が勝手にした事だから」

だからお返しなんていらないと言うと柩ちゃんは悪戯っぽく笑いながら

「……ボクの身体でお返ししようか?」

「いやいやいやいや!?そういうつもりじゃないから!!!」

ずいっと詰め寄ってきた柩ちゃんにうろたえていると、螢が鬼の形相柩ちゃんの肩を掴んで俺から引き離す

「はい!離れる!じゃあ!横島!だいそうじょうの事は気にしないでいいから!自分の身体を治す事を考えてね!」

早口でそうまくし立て、美神さんと神宮寺さんに行きましようと言つて柩ちゃんを連れて行ってしまう。玄関の扉が閉まる大きな音が聞こえてきた所で、俺はゆっくりと深呼吸をして

「俺何か間違えた?」

「いや。何も間違えてはいないさ」

「……助けたいと思う気持ちは間違っていないと思うぞ?」

「そういう所も、横島さんらしさだと私は思いますよ?」

だよな……?まあ自分の報酬を他人の為に使うのは確かに馬鹿だったと思うけど、これで柩ちゃんが長生きしてくれるなら良いよな「それよりさ、シズク。腹すいたんだけど……なんか作ってくれるか?」

食欲が出てきたのか、さつきから腹が鳴いてるんだというシズクとおキヌちゃんが柔らかに微笑みながら、準備してくれると言つてキッチンに向かう。俺はチビとうりぼー、それにタマモを抱き抱え、リビングに寝転がりながら2人の料理が出来るのを待つのだった



……なお横島が柩を助ける事が出来たと満足げに笑っている頃。横島の家の外では

「柩、貴方がまさか横島とそこまで懇意にしているとは思いませんでしたわ」

「……あんまり横島に近づかないでくれると嬉しいなあ……」

くえすと蛍の凄まじい迫力に対して柩は余裕綽々と言う笑みを浮かべて

「恋愛は自由意志さ。だからどうこう言われる筋合いは無いよ！ま！このまま一緒だと殺されかねないからボクは帰るよ！」

逃がすかと言わんばかりに伸ばされたくえすと蛍の手をするりと回避し、そのままバックステップで距離を取った柩はいつも通りの飄々とした表情で

「だいそうじょうが現れるのは明後日の夕暮れ時だ。その時まで準備を終わらせると良いよ、じゃあね！」

だいそうじょうが現れる日時を伝え、また明日美神の事務所に行くよと言って蛍達の前から姿を隠すのだった……

「とりあえず、柩が横島君に恋愛感情を持つてるかは別にして、だいそうじょうに備えるわよ」

柩の消えていったほうを鬼の形相で見つめている蛍とくえすに美神はそう声を掛け、2人をバンに乗せて横島の家の前を離れるのだった……なお柩は柩で横島がヒヤクメに頼み用意して貰ったチョーカーに触れて

「……………、……………までされると、流石のボクも……………」

その青白い顔を鮮やかな朱色に染め上げ、恥ずかしそうに、けど嬉しそうに笑いながら横島の名前を呟くのだった……

身体も神通力も回復した。人間だった時の姿に戻り、托鉢の為の鉢を手に街を歩いていたのだが……

(ふむ……………これは拙僧を追い込むための)

最初こそ大勢の人間の姿があつたが、今は人の気配はなく、そして拙僧を誘い出す為の神通力……十中八九拙僧を倒すための罠……引

き返すかと言う考えが一瞬脳裏を過ぎるが……

(これ以上の失態は流石に無理じゃな)

拙僧の探知エリアに赤騎士殿の気配がする。恐らく姫様が拙僧の戦いを見ているだろう……なればこそ引き返すと言うことはありえぬ。ならば進むしかありえまい

「さて、またまみえたな。人間よ」

広い広場に出た所でそこで待ち構えている人間を見てにやりと笑う。拙僧が魂を刈り損ねた小僧の姿もあるが、嚴重に護られているその姿を見ると拙僧を誘き出す為に連れては来たが、戦わせるつもりは無いと言うところか……次に周りにいる人間に視線を向ける神聖な気配を放つ霊具などで完全装備している人間の姿を見てやはり誘い込まれたかと笑いながら魔人としての姿をとる

「高僧だいそうじよう。貴方の救済は間違っているわ」

「あの時は不意打ちでしたが……今回は真っ向から参ります」

「ほほう。英霊も戦力にしておるか……カカカカ！よかろう、よかろう」

両手に鉄甲を嵌めた白い衣装の英霊……その身に纏う清廉な気配から天界に属する英霊だと確信する。更には拙僧の腹に風穴を開けた槍を持つ魔族……確かに戦力は前よりも充実しているだろうし、何よりもここに誘い込んだという事は何か勝算があるのだろう。だがその全てを真っ向から叩き潰してこそ、どこかで見ている姫様を楽しませる事が出来るだろう

「我が信じる道に一切の迷いなし……汝らの救済……この常世のだいそうじようが案内仕る……」

夕暮れの中に響く鈴の音色……それがだいそうじようとの2回目の戦いの始まりを告げる音色となるのだった……

次回仮面ライダーウィスプは！

聖女マルタ、戦乙女ブリュンヒルデ、英霊信長の3人を加え、更にはドクターカオス、優太郎作成の新しい霊具……準備出来る万全の戦力と人員を集めた美神達

「南無阿弥陀仏……大多数戦こそ我が英知が輝くと言う物」

しかしだいたいそうじょうの不可思議な術の前にその能力を押さえ込まれ、徐々に戦いのペースを奪われていく

「オラアアー!」

だいたいそうじょうの手が横島を護っている結界に伸ばされ掛けた時。ビュレトがその戦いへと乱入する。ビュレトの登場で戦いの流れが美神達への方へ傾きかける……がそれもまただいたいそうじょうの計算の内だった

「色即是空 空即是色」

だいたいそうじょうに詠唱をさせない。それが美神達の一貫した戦術だったが、一瞬の間隙について唱えられただいたいそうじょうの呪文が美神達の動きを大きく束縛する

「くそっ!こうなったら……!」

美神達が危ない、戦ってはいけなと言われていた横島だがそんな状況を見て眼魂を手にした瞬間

「病人が戦おうとするんじゃないやねえ」

「お、お前は?」

新たな乱入者が横島を静止する。その腰には暗い色合いのゴーストドライブバーが巻かれていた。その手に握るは呪いの眼魂

「ここからは俺が相手だ、骸骨野郎」

【カイガン!ホロウ!心中!ゲツチュー!ガクガクゴーストツ!!!】

次回 新たなライダーへ続く

レポート13 常世のだいたいそうじょう その6へ続く

## その6

リポート13 常世のだいそうじょう その6

夕暮れの光の中。不可思議な力で浮かび上がるだいそうじょう。その空虚な瞳はどこを見ているか判らないのだが自分を見ているのでは？と言う恐怖に駆られる

「英霊とは言え、霊。我が法力に耐えられるかな？」

澄んだ鈴の音が響くと同時に駆け出そうとしていたノツブの動きが止る。それを確認しても私は止らない、だいそうじょうの術を封じる最大の術は接近戦を仕掛ける事だ。人間・魔族・英霊と3つの種族が揃っている、どれか1チームはだいそうじょうへと接近戦を仕掛ける。正直言つて特攻としか言いようの無い戦術だけど、装備・戦力などを考慮して私達が取れる戦術はそれしかなかった

【ぬっぐう……厄介な術を使うなッ!!】

「その程度で止ると思うッ!!」

ノツブはだいそうじょうの鈴の音で動きを止めているのだが、マルタは違う。両手を組んで祈りを捧げるように目を閉じる。数秒で力強く目を見開き駆け出す

(これが聖女の力……)

祈りだけで竜退治を行ったと言うのも嘘ではないと思う。ただその戦い方を見て、聖女？って言う疑問はどうしても頭に浮かぶけれど「ハレルヤッ!!」

「……おっと、危ない危ない」

拳を繰り出してから数秒後に聞こえる拳を振るう音。その物理法則を無視した攻撃に、本当に祈りだけでドラゴンを倒したのだろうか？と言う疑問が脳裏を過ぎるが……

(エミも唐巢先生も無理だったから、あの強さは正直頼りになるわ)

魂を失った肉体を狙って悪霊が大量発生している事もあり、エミも唐巢先生も東京に戻ってきてくれていたが、もしかしたら生き返るかもしれないだいそうじょうの犠牲者を護る為にと琉璃から依頼が出

ており協力を頼む事が出来無かった。そして幽霊としては規格外でも、戦う能力の低いおキヌちゃんも危険と言う事で、2人に協力すると言う三蔵法師の手伝いをするようにと指示を出し預けてきた。戦力の低下に道具の運搬に不安が残るのは琉璃も判っていたのか、かなり強引な方法を使った様だが廃れた神社や有名な神社の神主に事情を説明し、借りることが出来た御神体や有名な霊具を借りて私達や横島君の霊的抵抗力を上げている。並みの悪霊の攻撃はもちろん、下級神魔の攻撃も無効に出来る。それこそ規格外の装備だが、それでも相手が相手なので不安ばかりが脳裏を過ぎる

(本当なら横島君もこの場に連れて来たくは無かった……)

くえずや蛩ちゃん、そしてもちろん私も反対していたのだが柩の言葉で決断せざるを得なかった

『君達が戦いに出て、だいそうじようを探している内にだいそうじようの仲間が動いたらどうする?』

だいそうじようにマタドール。遭遇した魔人は2体だが、数は特定出来ていないがまだいると聖奈に聞いて陽動や囮の可能性が浮上した。何故か魔人は横島君を同胞と呼び、仲間にしようとしている。横島君を家に残すほうが危険だと思ったのだ

「神宮寺さん!大丈夫ですか!?!」

结界の中から横島君がそう叫ぶ。チビやうりぼーは当然ながら留守番である。その代わりに横島君の護衛として

「下手に大声出さない!向こうの注意を惹きつけるんだから!」

【心配なのは判りますが、自分の心配をしてくください】

精霊石で人化しているタマモと沖田ちゃんの2人だ。タマモは九尾の狐なので言うまでも無く、霊体攻撃に強い耐性を持ち、沖田ちゃんは最悪の場合……つまりだいそうじようが横島君の前まで来た時。シズクがミスチタクシーで横島君を連れ出すまでの時間稼ぎとして配置している

「私の心配をするよりも、自分の心配をしなさい!」

「絶対戦おうなんて思ったら駄目だからね!」

くえずと蛩の怒鳴り声に横島君の顔が悔しそうに歪む。確かに霊

力はある程度回復している、むしろ陰陽術を使えるレベルには回復している。だけど横島君の仕事はだいそうじようをこの場に誘い出すことで完了している、これ以上は横島君に負担を掛けるだけだ  
(でも安全を確保できるなら、横島君をこの場に連れて来たくは無かったわね)

横島君は臆病だが、その癖。度胸と思いい切りがある。私達の誰かが命の危険だと思ったら迷わず戦いに出るだろう、そしてまた霊体に過度の負担を掛ける。今はまだ若いし、霊体も強靱だから大丈夫だが、そのうち取り返しのつかない事になるかもしれない、そしてまだ未熟な横島君にそんな心配をかける自分が情けない

「だいそうじよう！私があんたを極楽に送ってあげるわ！」

「カカカカ!!吼えるな小娘、拙僧が代わりにお前を天上楽土に導いて進ぜよう……む？」

私に向けて鈴の音を鳴らそうとしただいそうじようだが、広場の床の隙間から伸びた水の触手がその腕に巻きつく

「ブリュンヒルデー・蛍ちゃん！」

「はい！判っています！」

この広場を選んだのは理由がある。それは噴水だ、水がこれでもかとあふれている。それはシズクが最大の力を発揮する為のフィールド……だいそうじようが困惑した素振りを見せたその一瞬の間を見逃すわけには行かない。私と蛍ちゃんの背中に刻まれたルーン文字……車輪を意味する「ラド」これは移動を意味し、私達の速さを強化する。そして雷を象徴する「ハガル」これは強い魔除けの力を持ち最後に戦士を意味する「テイワズ」人間に複数のルーン魔術を施すのは危険と言う事で3つのルーンで速さと身体能力、そして魔除けの3つが大幅に強化されている私と蛍ちゃんはさつきまでのだいそうじようを油断させるための走りから全力の走りへと切り替え、アスファルトに足跡を残しながら、大きく地面を蹴る。

「ぬっ！面妖な……！」

一番おかしいお前に言われたくないと心の中で言いながら、10メートルちかい距離を一気に縮める。だいそうじようがこれはいか

んと自由な左腕で印を結ぼうとするが

「せいッ！はっ!!」

「お主！本当に聖女か!」

そうはさせないとマルタが正拳から飛び膝蹴りへと繋ぎ、だいそうじょうの驚愕の声には同意するが、そのおかげでだいそうじょうが発動しようとした術の詠唱が中断される。右腕をシズクに封じられ、左腕はマルタの攻撃を防ぐのに使用し、隙だらけのだいそうじょうの胴体に私と蛍ちゃんも神通棍がめり込み、だいそうじょうの枯れ木のような体を大きく吹き飛ばす、間合いを放す……それは当初の予定と異なるが、これでいい。地面を大きく踏みしめ、もう1度駆け出す準備をする

「アンサズー！」

「吹っ飛ベツ!!」

「ぬ、こ、これは!」

ブリュンヒルデのルーン魔術による炎。そしてくえすの放った氷弾……氷が炎によって急激に溶かされる。その温度差で生まれた霧を突っ切り再び私とマルタ、そして蛍ちゃんはだいそうじょうへと肉薄するのだった……

美神達がいそうじょうと戦っている頃。白竜寺では……

「……すまねえ、お師匠様」

三蔵法師の部屋に隠されていた、優太郎から託された眼魂と試作ゴーストドライバーの納められたトランクケースを持ち出す何者かの姿があるのだった……

直撃すれば拙僧の頭蓋など簡単に打ち砕くであろう豪腕を首を傾けて回避し、そのまま後退しようとするが……そうはさせないと緋色と黒髪の女が踏み込みながら棍を振るう。

(1戦目の反省と言う所かの)

拙僧の術はどれも基本的に詠唱や指の印を必要とする。こうして間合いを詰められ攻撃を繰り返されると印を結ぶ時間も詠唱する時間もない

「悔い改めろつての!!!」

「言つたはず、拙僧に一切の揺らぎなしとな」

風を切る豪腕を受け流しながら聖女の懐に潜り込む。本当ならここまで潜り込んだのなら詠唱と共に掌底打ちを打ち込み靈氣をかき乱してやるんじゃないが……ちらりと噴水に視線を向ける

(あやつが厄介じゃな)

噴水の中に隠れている水神。この広場全体を掌握しているのか、どこからでも水の触手を伸ばしてくる。そんな状況で詠唱をしている時間は無い

「ぐっー!」

「すまんの」

距離を取れば魔法、かといって間合いを詰めて戦うには時間が無い。ならばと聖女の首を絞め棍を振るっている女2人に投げつける

「嘘?」

拙僧がこんな力任せの術を使うと思っていなかったのか、足を止める2人。だがそれは隙とはなりえない

「はあッ!!」

「戦乙女殿か……やれやれ拙僧は1人だと言うのに」

拙僧の頭蓋を打ち砕かんと振るわれた槍を片手で受け止める。こやつらの狙いはわかつている拙僧の身体を構築している靈子の結びつきの破壊……拙僧はマタドールやヘルズエンジェル、そして4騎士殿と比べて戦闘に関して生前に近い。マタドールのような卓越した剣術を持つ訳でもない、ヘルズエンジェルのように一芸に特化しているわけでもない。拙僧の武器は一定上の靈力・神通力を超えなければダメージを受けないこの特異な身体とかつての戦の時に身に着けた乱戦に対する戦闘技術

「やれやれ、仕方あるまい」

このままでは姫様に更なる失望を抱かれるかも知れぬ。いやそれよりも早く何処かから見ている赤騎士殿に肅清されるかも知れぬ

……

「安らかな救いは止めじゃ、ここからは……死をもって汝らに救済を



与えよう。喝ッ!!」

苦しまぬよう天上楽土に送つてやろう。そう思っていたのだが、どうも拙僧の想いは届いていないようじゃ。ならば甘い理想は捨てるでしょう……己を律するように喝と叫び拙僧は頭の中を一瞬で切り替えるのだった……安らかな救済から、死と言う名の救済へと……

だいそうじょうの気配が一変した。今までは私達に向けての殺意や殺気は無く、哀れむようなそんな気配を発していたのだが、今は肌を突き刺すような殺気が放たれている

「では参ろうか。ここからは救済などではない、命の奪い合いだ」

だいそうじょうの空虚な瞳が私に向けられた。その瞬間、私の身体は何かに殴り飛ばされたように大きく吹き飛んだ。その凄まじい衝撃に意識が飛びかける

「蜚!」

結界から横島の私を呼ぶ声がする。その声のおかげで途切れかけた意識を何とか繋ぎ止める。神通棍を広場の床に叩きつけるようにして態勢を立て直す

「え……嘘!?なんで!」

何かが碎ける音と共に首から下げていたお守りがありえないほど粉々に碎け散る

「その程度で拙僧の法力を止められると思うか?となれば、愛い事よ。子供の児戯は何時見ても愛らしいものよな」

カカカカつと笑うだいそうじょうにマルタさんと美神さんが殴りかかるが

「うっ!?な、何これ……」

「か、身体が動かない」

一瞥。その一瞥で美神さんとマルタさんの動きは完全に止められる。だいそうじょうが両手を持ち上げると2人の身体が浮かび上がり

「先ほどまでと拙僧は違うぞ、安らかな救済は仕舞いじゃ」

腕を振り下ろそうとするその仕草を見て、広場から水が飛び出し、

聖奈さんがルーン魔術を、くえすが魔法を、ノツブが霊力弾を、恐ろしいまでの波状攻撃が放たれようとした瞬間。だいそうじょうは不可思議な力で捕らえていた美神さんとマルタさんを投げ捨て、鈴を手にする。危ないと思った時はもう遅かった……広場に涼しげな鈴の音が響く……その瞬間激しい頭痛が襲ってきて思わずその場に膝を着く

「ぐっ……な、なんですの……こ、これは……」

「……強引に……液化化を……解除された……だと」

【あ、頭が割れる……】

くえすの動揺交じりの苦悶の声に、シズクが姿を現しくえすと同じように頭を抱えている……こ、これはあの時の……でもあれよりも遥かに効力範囲が大きい……

「言ったはず。安らかな救済は仕舞いだと……ここからは死を伴う救済を与えようぞ。色即是空……」

激しい頭痛の中でもだいそうじょうの詠唱の声が聞こえる。不味い不味い不味い……その詠唱を中断させなければ……だけど身体が動かない……

「オツラアアアアツ!!!」

「ぬ!?!増援か!?!」

ここには居ない筈の第三者の声が広場に響き渡り、上空から流星の様而降下してきた何者かの一撃がだいそうじょうの左腕を斬りとばす。そのおかげでだいそうじょうの手にしていた鈴がその手から離れた

「おう。大丈夫か、お前ら」

だいそうじょうの手から鈴が離れたおかげか、先ほどまで私達を襲っていた強烈な頭痛は消え去っていた。だが消耗した体力は戻らない、ぼんやりとした意識の中身体を起こし、だいそうじょうを攻撃している何者かの姿を確認する

「ビュレト様ー!」

くえすの悲鳴にも似た声が周囲に響く、そこにいたのはGS試験で負傷し、魔界へ帰還していたビュレトさんの姿だった

だいそうじょうの気配が変わったと思った瞬間。その戦い方が大きく変化した、今までは避けて、防ぎ、時折魔法を放つただのだが、凄まじい広域に作用する何らかの術に見えない何かによる強烈な打撃。蛸や神宮寺さんが吹き飛び、美神さんと英霊だったというマルタ姉さんが見えない手に掴まれた様に浮かび上がる姿を見て、思わず飛び出しそうになったが

「横島！動いたら駄目」

「そうですね、横島君……」

唇をかみ締めたタマモと沖田ちゃんに駄目だと言われ、飛び出しかけた足が止る。何も出来ない、自分の無力さを思い知らされているような気がして、拳を握り締めた時

「オツラアアアッ!!!」

上空から響いた誰かの声と共に凄まじい衝撃音が広場に響き渡る。その声には聞き覚えがあつた、マルタ姉さんが応援は多分無いと言っていたのに……

「おう。大丈夫か、お前ら」

砂煙が晴れた時其処にいたのはGS試験でガープと戦ったビュレトさんの姿だった

「説明は後だ！まずはこいつを叩く！」

「魔界公爵のビュレトか……カカカ！これは予想もしない、大物が釣れたな」

「言ってる骸骨野郎」

凄まじい魔力と闘気を放つビュレトさんに対して、涼しい表情のだいそうじょう。だがやはりマタドールと同じく恐怖や嫌悪感ではなく奇妙な安心感を覚える自分自身に腹立ちを覚える。自分が何か別の存在になってしまっているのでは？と言う恐怖が嫌がおうにも脳裏を過ぎる

「まさかこうして魔界の重鎮と肩を並べるとは思っても見なかったわ」

「はっ！それはこっちの台詞だ。マルタ」

ビュレトさんとマルタの姉さんの連続攻撃は流石のだいそうじょうも片腕を失っている事もありさばき切れないのか、徐々に劣勢に追い込まれているように見える

「…………この隙に一気に決める…………ツ！」

【ワシ、相性ゲーつか得意なんだよねツ!!】

「そうですね。この好機を逃す馬鹿はいませんわッ！」

シズクと神宮寺さんの波状攻撃がだいそうじょうを追い立てる。喋っている余裕が無いから黙り込んでいる…………そう思いたいのだが、嫌な予感がどうしても払拭できない

「行ける！神魔の天敵と言われている、ここまで流れが変われば！倒せる！」

「だいそうじょうの応援が来る前に一気に倒しましょうッ！」

蛍と美神さんのその言葉を聞いて、異変が起きている。俺は焦りと共にそれを感じた

(おかしい、美神さんと蛍が最初に言っていた事と違う)

この結界の中に入れられる前に聞いていた話と違う。だいそうじょうは倒すのではなく、封印する。その方向性の筈だったはずだ、魔人の情報は無い。だから倒すのではなく聖奈さんとマルタの姉さんの力で封印する、その為に純度の高い精霊石を用意した筈…………

「心眼。何かおかしくないか？」

【ああ、これは不味いかもしれない】

心眼も俺が感じている違和感を感じていたようで、普段冷静なその声に焦りの色が混じっているのが判る。封印ではなく、倒す方向に切り替えたのか？いやそれならそれでも良いだろう。相手の強さがこっちの想像を遥かに超えているいつ封印を敗れるか判らないのなら、情報を得れないとしてもここで倒してしまおう。それも確かに1つの手段だろう…………それは間違っていない。そう判っているのだが…………

(なんだ、なんだこれ…………)

だいそうじょうはこっちを見ていない、それなのに誰かに見られて

いるかのような寒気が止らない

「タマモ、沖田ちゃん。大丈夫だよな？」

結界の中から2人に大丈夫だよな?と尋ねる。タマモが心配性ねと笑いながら

「術者が腕を失ったら戦力はガタ落ちだわ。確かに封印する方向から倒す方向に持っていつているのは気になるけど……封印だと何時暴れだすか判らないから、倒してしまえばその心配は無くなるし」

【沖田さんもそう思いますけど、何か嫌な予感が……】

タマモの言っている事は合っていると思う。だが沖田ちゃんの言うとおりの嫌な予感が止らない、饒舌だっただそうじようが黙り込んでいる事も引つ掛かる……隻腕だから喋って……隻腕だから？

「腕は！腕はどこだ!!」

ビュレトさんが斬り飛ばした腕はどこだと思わず叫ぶ。落ちていなければならぬだそうじようの腕を捜すが、その腕はどこにも見当たらない。俺でも気付くんだ、美神さん達がおかしいと思わないのは明らかに異常なのだ

「美神さ……色即是空 空即是色。もう少し早く気付くべきだったな」

美神さんの名前を呼ぼうとした瞬間。静かなだそうじようの眩きが広場に響く……その後に遅れて響いた鈴の音が響いた。その瞬間ビュレトさんとマルタと聖奈さんを除く全員が地面に倒れる。まさか死んだ……俺が死んだという術ならば美神さん達も死んでいるかもしれないと言う予想が脳裏を過ぎり顔から血の気が引くが、立ち上がるようにしているその姿を見て生きていると安堵したが、状況は最悪と呼べる状況になってしまった

「カカカカ。分身と本体を見抜けぬか? いやいや、凶暴化の術を使つたから当然といえば当然じゃが、いささか拍子抜けじゃな」

美神さん達が戦っていただそうじようが煙になって消え失せ、上空からだそうじようが笑いながら姿を見せる

「ちっ、このくそ爺。てめえいくつ手札を持ってやがる」

「カカカカカ! 歳の数と言っておこうかの?」

動けない美神さん達を護られなければいけないビュレトさん達は思うように動けない。そうなればだいそうじょうの即死魔法を防ぐのは不可能……

「くそっ……こうなったら……」

眼魂を手に結界を出ようとした時、顔面に強い衝撃を感じ結界の中に叩き込まれる

「半死人が戦おうとするんじゃないやねえ、馬鹿が」

「お前は……陰念ッ!？」

俺を結界の中に叩き込んだのは、GS試験でガープに操られていた陰念であり、その手には濃い青色の眼魂が握り締められているのだった……

手足の自由を奪い、同胞となりえる資質を持つ人間が出てくる状況を作り出したのだがそれは顔に傷のある小僧によって妨げられた

「ほほう。この場に来たと言う事は救済を求めてきたのか？」

「救済？はっ！んなもんいらねえよ。俺は借りを返しに來ただけだ」

借り？あの小僧に何か貸しがあると云うことか……だとしても弱々しい靈力しか持たない人間など拙僧の敵ではない

「こつからは俺が相手をしてやる」

「吼えるのは止めよ。主は今戦えんじゃないやろうに」

ここから見てもチャクラはずたずた。そんな人間が戦える訳が無い

「せつかく拾った命を捨てるんじゃないやねえッ！」

ビュレトがその小僧に怒鳴る。魔界の公爵その威圧感は凄まじい物がある。それなのにその人間はまっすぐに拙僧へと向かってくる……

(あれは白騎士殿が言っていた)

腰に巻かれていたベルトとその手に握られた球体。それはあの結界の中の小僧が持っている物と同じ

【アーイツ！オソレテミーヤー！オソレテミーヤー】

ベルトから飛び出した濃い青の服が人間の周りを踊りだしたと

思った瞬間。反転し、その紐のような腕を人間の首に伸ばす

「うっ！ぐうっ!!」

【ガツハハハハハハツ!!】

高笑いしながら人間の首を締め上げる服。それを見て聖女が駆け出したが

「舐めるんじや……ねえッ!!」

【ガハツ!?!】

首を絞められていた小僧はその服の頭を掴んで地面に叩きつける。爛々と輝くその瞳が拙僧を捉えたその瞬間、小僧の姿は金属の光沢を持つノツペラボウの姿へと変わる

「変身ッ!」

【カイガン!ホロウツ!心中ツ!ゲツチュー!ガクガクゴーストツ!!】

叩きつけていた服を纏うと同時に凄まじい霊力と魔力が小僧から溢れ出るが、空中に現れた錠前が胸に触れた瞬間、そこから鎖が飛び出し小僧の両手足を締め上げる。その鎖が封印なのか魔力は収まったが、霊力は今も凄まじい力で発せられている

「あいつめ……なんて物を作ってやがるッ!」

ビュレトの怒鳴り声が聞こえるが、拙僧はそれに対して何の興味も無かった。目の前の小僧の立った一言。そのたった一言で拙僧はその小僧しか見えなくなった

「同じ仏門の人間として、あんたの間違いを正してやるぜ。だいそうじよう」

「ほほう?..ならばその間違いとやら、教えて貰うとするかの」

そうなれば他の人間は邪魔だ。拙僧は鈴を鳴らし目の前の小僧と拙僧を覆う結界を作り出しビュレトや聖女をその結界から弾き出し、小僧と1対1で戦う状況を作り出すのだった……

リポート13 常世のだいそうじよう その7へ続く

## その7

レポート13 常世のだいそうじょう その7

結界の外からビュレト達が攻撃しているのが見えるが、その程度の攻撃では拙僧の結界は破れない。だから拙僧は目の前の小僧との戦いに集中できる

「拙僧は常世のだいそうじょう。お前の名を聞こうか」

「陰念」

陰の念……なんとも言えん名前じゃなと苦笑しながら、手にした鈴を陰念へ向け

「ならば陰念、呪われた者よ。汝の魂の救済……このだいそうじょうが引き受けよう」

「いらねえよ。大体あんたが本当に魂を天上楽土に導けるかも怪しいぜ、致命的に間違っているあんたによ」

「ここに来ても拙僧を挑発する陰念だが、決してカツとならず冷静に同じ仏門だというのならば、拙僧の功德が判るだろう?」

「ああ、判るさ。だから言わせて貰うんだよ。あんたは致命的に道を間違えたってな」

仮面越しだがその視線に哀れみの色が混じっている事に気付くが、そうかとあえて笑う

「では陰念。拙僧の間違いとやらを教えて貰おうか!」

「ああ、教えてやるさ。この拳でな!」

拙僧が鳴らした鈴、それが戦いの合図となり、夕日が沈み闇の世界になりつつなるこの広場で魔人対人間の戦いが幕を開けたのだった  
……

結界に何度か結界崩しの術式を刻んで剣を叩き付けるが効力は発揮されたように思えない。俺達の使う結界とは根底から異なる結界かと舌打ちする。復帰戦と言う事で意気揚々とこの戦場に乗り込んできたが、だいそうじょうの手の平で踊らされていたと言う事実が気



付き激しい怒りを感じたが、致命的に相性が悪い相手だったという事にいまさらながら気付かされた

(大多数に特化した術師か)

俺やマルタには効果が無かったが、人間の正常な思考を奪う術を広域で展開した。それによって防御を忘れた美神達はまとめてだいそうじょうの術に落ちた

「ブリュンヒルデー・マルター！美神達の治療に当たれ、俺は周囲の警戒をする！」

結界の中で何かを話しているのが判るが、向こうの声が聞こえないと言うことはこっちの声も聞こえない。そしてこちらは向こう側に干渉出来ない。本当ならば助太刀をする所だが、それすらも出来ないのならばだいそうじょうの術中に嵌っているであろう美神達の治療が最優先だ

「美神達の精神状態が心配だ。俺には回復は使えない、ブリュンヒルデーとマルタだけが頼りだ。だいそうじょうが齎した被害は聞いていないのか？」

呆然としているマルタとブリュンヒルデに連絡くらいちゃんとしておけと心の中で怒鳴りながらだいそうじょうが齎した被害を説明する

神魔の天敵と言われる魔人だが、その中でもだいそうじょう自身の神魔の殺害数はさほど多い者ではない。だが決して神魔を殺していない訳ではない。神魔同士の精神を狂わせ同士討ちをさせたのだ、恐らく美神達も何らかの精神操作を受けている

「判りました、直ぐに治療に入ります！」

「即死だけじゃなくてこんな絡め手も使う相手だったなんて」

俺やマルタではなく美神達だけを狙っての精神攻撃。神魔を狂わせる攻撃だ、人間では抵抗するまでも無く術中に落ちるだろう。早くしなければ精神に重大な後遺症を残すかもしれない、治療を急げと指示を出し周囲の警戒の為に広場を飛び出し

(ちっ！やっぱり居やがった)

視線を感じるのどこかで誰か見ていると思ったのだが、ビルの縁

に腰掛けて戦いを見ているルシファー様の姿に舌打ちする。だが視線の主はルシファー様だけではない、もう1人存在するはずだ。上空でその視線の主を探し見つける

「よう、争乱の赤騎士様が1人でなにをしてるんだ？」

「……ビュレトか、引くが良い。今は戦うつもりは無い」

真紅の化馬に跨った骸骨……レッドライダーが俺を見つめるが、興味がないように視線を逸らす

「お前が乱入しないって言う保障はねえ。ここで監視させて貰うぜ」

「……ちっ、あの方の命令さえなければ、貴様の首を刈り取ってやるものを……」

腰から下げた剣に手を伸ばしかけたレッドライダーは不機嫌そうに腕組みをし、お互いにお互いを警戒し、どちらかが剣を抜けば即座に臨戦態勢に入れる準備をしながら、だいそうじょうと陰念の戦いに視線を向けるのだった……

美……かみ……美神さ……ん……美神さん！すっかりしてください!! 必死に私を呼ぶ誰かの声にぼんやりした意識の中ゆっくりと目を開く。そしてその瞬間に感じたのは頭が割れるかと思うほどの激しい頭痛だった

「……よ、横島君?……なんで結界の……外に？」

結界の中にいると言った筈の横島君が何で結界の外に?それになんで私は倒れているのか?だいそうじょうはどうなったのか?と言う数々の疑問が脳裏を過ぎるが、頭痛があまりに激しくて考えが纏まらない

「マルタの姉御!美神さんが意識を取り戻しました!」

「姉御言うなあ!とにかく!直ぐ行くから、待ってなさい!」

マルタの怒声と横島君の泣きそうな声に困惑しながら身体を起こす。頭痛に顔を歪めながら周囲を確認すると蛍ちゃんやくえすも同じように倒れていて、マルタとブリュンヒルデの治療を受けているが見える

「美神さん。横になつてください!」

「な、なにが……あつた……の」

だいそうじょうに攻撃していた記憶はある。だけど、それ以降の記憶が無い。何があつたのか?と尋ねると心眼が何があつたのか教えてくれた

【だいそうじょうの精神攻撃を受けていたのだ。攻撃性が強化されていた】

精神攻撃?だいそうじょうは即死魔法だけではなく、そんな攻撃も出来たのかと驚愕する

「だい……そうじょうは?……逃げたの?」

そうでなければ治療をしている時間なんて無いはず。ビュレトが応援に来てくれたのは覚えている、ビュレトとブリュンヒルデとマルタで撃退してくれたのか?と思っていると横島君は信じられないという表情で

「陰念がゴーストドライバーと眼魂を使って戦っています」

「なんですつて?!?うっ……」

横島君の言葉に慌てて身体を起こしたが、激しい頭痛に再び倒れこむとマルタが駆け寄ってくる。

「今治療するわ。言っておくけど、霊力はギリギリまで消耗しているから戦えるなんて思わないでよ」

マルタから戦える状態じゃないんだからねと注意されてから、マルタが手にしている杖を振るう。その杖から放たれた光を浴びていると頭痛が徐々に治まってくる

「ありがとう横島君。もう大丈夫だから」

頭痛が治まったのでゆっくりと身体を起こす。横島君が心配そうに無理をしないでくださいねと言うので大丈夫だからと声を掛ける

「本当ね……どうして」

横島君の変身した姿とはだいぶ違うが、確かに良く似ている。肩のプロテクターさえなければ、どう見ても同じ装備にしか思えない

「!!!」

結界の中で何かを叫びながら戦っているのは判るのだが、何も聞こえないし、向こうからの衝撃も来ない。マタドールが展開した結界と同じタイプの結界だと判断する、もしかすると魔人全員が所有している能力なのかもしれない

「美神さん、無理をしないほうが良いですよ」

「横島の言うとおりよ。シズクもダウンしているし、術の後遺症が残ってるはずだから」

横島君とタマモが無理をしないほうが良いと言う。大丈夫と言って立ち上がろうとするが、貧血と似た症状と共に倒れこみ横島君のタマモに慌てて支えられ、再び広場に横にされおきてないといけないと判っていたのに私の意識は深い闇の中へと沈んでいくのだった……

拙僧の放った幻術も精神操作も防ぎ、殴りかかっっていくる陰念。神魔と比べればその圧力は恐れる物ではない。恐れる物ではないはずなのだが……陰念の身体を覆っている鎧。それが拙僧とは致命的に相性が悪かった

「くっ！」

「どうした、避けてばっかりじゃねえか」

振るわれた拳が靈子を乱される感覚がする。その鎧は拙僧の靈子を砕くだけの能力を秘めていた

(マタドールが離反した理由も判るな)

あの戦闘凶の事だ。自分を滅する可能性を持つ何かに強い興味を抱いたのだろう、そして自分を倒せるまで育つのを待つ事を選び離反したのだろう。あやつらしいと言えばそうなのだが1度失態を犯している拙僧に敗北は許されない

「仕方あるまい」

鈴を懐に仕舞い。印を結ぶそれと同時に陰念の身体が炎に包まれる

「ぬっーぐ、ぐうううう!?!」

地面を転がり必死に火を消そうとしている陰念。その僅かな隙に使える全ての強化を拙僧自身に付与する

「ふんっ！」

起き上がった陰念の頭目掛け、掌底を繰り出す。肩まで突き抜ける衝撃と共に陰念の身体が吹き飛ぶ

「ぐはっ！」

「確かにその鎧は強固だろう。拙僧の力では碎けぬよ」

拙僧はあくまで術者。ゆえにその打撃力は他の魔人の中でも最下位だ……だが霊力や神通力の扱いは魔人の中でも上位であるという自負がある

「打撃と同時に拙僧の力を叩き込む、鎧は壊せぬが……お前は何時まで耐えられるかな？」

「はっ！とんだ、くそ坊主だ。こんな隠し手を持ってやがるとはな」

咳き込みながら立ち上がった陰念。その気迫は先ほどよりも強くなっておりマタドールと同類かと心の中で呟き

「今その鎧を解除するのならば、安らかに天上楽土へと導いてしんじよう」

拙僧が求めるのは人類の救済。ゆえに人間を痛めつける事は好きではない、ゆえに抵抗するなど宣言するが

「まだそれを言うか、自分が間違っているのにも気付かないで」

「拙僧は間違つてなど居らぬ。苦しみしかない現世から救うこと、それのどこが間違っている？」

拙僧は見た。争いで、飢餓で、疫病で、苦しみながら、血を吐きながら死んでいく者達の姿をそれを苦しみから救ってやりたいと願つて何が悪い

「それが間違つているんだよ。人間はいずれ死ぬ、ああそうだ。どんな人間だって必ず死ぬき、寿命で、病気で……人間なんて神魔やあんたからすれば簡単に死ぬ存在だろうよ」

魔やあんたからすれば簡単に死ぬ存在だろうよ」

「だからこそ拙僧は苦しませぬように天上楽土へと導いてやるのだ」

弱い存在だから、簡単に死んでしまうから。苦しまないように拙僧の術で眠っている間に救済してやるのだ

「人間は死ぬために生きている、ああそうだ。何時死ぬかも判らない、

簡単な事で死ぬさッ！」

「だから拙僧は救うのだ、人類を」

走りながら繰り出された拳を受け流し、距離を取って放たれた回し蹴りを受け止めそのまま投げ飛ばす

「ぐっふー」

結界から背中に叩きつけられせき込む陰念だが、直ぐに立ち上がり拳を繰り出してくる

「確かに苦しめないで死ぬるのならそれは幸せかも知れねえ。俺は実際に掛けたさ。ああ、そうだ。魂を悪魔に食われて死に掛けた、死ぬほど苦しかった。さっさと死にたいときえ思った」

「そうだろう、そうだろう。抵抗は止めよ、拙僧の救済を受け入れよ」  
「だけどな！逃げたら駄目なんだよ！」

血を吐くような叫びが陰念から放たれる

「現世には苦しみしかない、ああ。そうだ。だがそれが己の魂を磨く事になる、生きる事、苦しみに立ち向かう事！それこそが最大の修行の筈だ！そしてそれが生きてるっていう事だッ！」

「そ、それは……」

仮面のせいで見えないが、凄まじい眼光を放つ瞳を見たような気がした

「あんたの言う救済は逃げだ!!辛い事、苦しい事から逃げてその先に何がある!!どうだ！答えてみろ！だいそうじょうツ!!」

「だ、黙れえええッ!!」

これ以上この男を喋らせてはいけない。そうで無ければ拙僧が拙僧でいられなくなる

「あんたの間違い。この拳で砕いてやる」

【ダイカイガンツ！ホロウ！オメガドライブツ!!】

腰のベルトのレバーを引いた陰念、その瞬間胸にある錠前から伸びた両腕の鎖がはじけ飛ぶ

「はあああああッ……」

両腕だけではない、肩当が拳へと変形し陰念の動きをなぞる  
「おおおおおッ！」

「ガハッ!？」

激情のまま飛び出した拙僧の腹に陰念の右拳が突き刺さる。その一撃は拙僧の霊子の護りを簡単に貫いた、だがそれだけでは終わらない

「ぐぶっ!？」

4本の腕による強烈な打撃の嵐。だが不思議な事に身体はさほど痛まない、拳が叩き込まれる度に痛むのは拙僧の魂だった

「とつとつ、目を覚ましやがれえッ!!!」

大きな踏み込みと同時に放たれた右拳が拙僧の顔面を打ち抜く。その凄まじい衝撃に拙僧は背中から結界に叩きつけられる、だがその威力はそれで留まらず拙僧の結界さえも完全に砕く

「くつくつく……どうも拙僧とお前は相性が悪いらしい」

地面を抉りながら転がり、何とか体勢を立て直し陰念へと言葉を投げかける

「そうかい、ならこのまま決めてやるよ」

錠前から再び鎖が伸び、両腕を縛り上げると両肩の腕は再び肩当に変形した

「この場は引かせて貰うとしよう。いずれまた会いまみえようぞ」

待ちやがれと叫び走ってくる陰念の姿を見ながら、拙僧はその場から転移し逃亡するのだった……

「だいそうじょう。あの男はどうだった？」

「こ、これはこれは姫様。無様な姿をお見せして申し訳ありません」

拙僧の逃亡先に先回りしていた姫様の姿に気付き、慌てて頭を下げようとするが姫様は良いと笑い

「お主の魂を震わせたか、此度の人間は面白い」

「そうやもしれませぬ」

救済の為だけに生きていた拙僧の胸には確かな熱があった。忘れてた何かを思い出しそうになるほどに、胸が熱かった

「此度の敗北は許そう。今の人間の強さを見た、それだけで余は満足だ！」

「姫様の温情。真に感謝いたします」

粛清される事を覚悟していた、だからこそ姫様の温情に深い感謝の言葉を告げる

「良い良い、ホワイトライダー。だいそうじょうを運んでやれ、その傷を癒してやるのだ」

「畏まり……ました」

白騎士殿によってその愛馬の上に引き上げられる。白騎士殿は拙僧と仲が良いので姫様の采配にはただただ感謝するだけだ、蹄が地面を蹴る音を聞きながら拙僧は陰念とああして出会う事が出来たのは幸いだつたと心の中で呟き

(修行のやり直しじゃな)

あれほど若い男に諭されるとは、まだまだ拙僧も青いと思わず笑つてしまうのだつた……

だいそうじょうを退けた翌日。ニュースや新聞で大量死したはずの人間が全員息を吹き返したと報道された。そのニュースの中で私やくえすの名前が出たが、結局の所何も出来てないので、報道するのは勘弁して欲しい所だつたが必要な事だつたと思ひ抗議をするのは止めた

(流石に強引過ぎたからね)

霊能に關係していた政治家や長い間霊能に關する事に関わつていた人間のほとんどを査問会に呼び出し、懲戒免職にした琉璃。その強引な手腕は批判の原因となつている、だからそれを覆すのに今回の事件の解決に導いたとして、報道する事を選択した琉璃の判断を私は支持したい。綱渡りなんてものじゃない、一步間違えば自分が死んでもおかしくない。それだけの重責を背負つている琉璃を応援したいと思つたのだから

「お疲れ様でした。美神さん」

「ええ、そつちもお疲れ様。琉璃」

朝のニュース番組と昼間の霊能特集での生出演を終えてから私はGS協会に訪れていた……今回の反省と今後に生かす話し合いの為にだ。私達は出来る限りの準備をしたつもりだつたが、だいそうじょう



うの手の平の上だったと言う事をいやと言うほど思い知らされた。更に言えば、いそうじようを退けた陰念は

『借りは返した』

その一言だけでその場を後にした。彼のいう借りとは横島君に助けられた事だろう。粗暴な外見と違い律儀な性格だったようだが、謎が1つ残った、それはなぜ彼が横島君と同じベルトを所持しているかと言う事だった

「芦優太郎とドクターカオスが作成した試作型のゴーストドライバーを白竜寺に預けてるなんて聞いてないけど」

「私も聞いてませんでしたよ。三蔵法師が動いたらいいですけど」

琉璃と揃って溜息を吐く、三蔵法師は考えるよりも行動と言うタイプらしいが、そういう物を所持しているなら、しっかりと報告をして欲しかったと呟く琉璃

「それで御神体のほうはどうなりそう?」

「……正直あんまりいい状況じゃないですね」

だいそうじようの即死攻撃を警戒し、借り受けた御神体だがその大半が壊れてしまった。恐らく私達の身代わりになってくれたんだろうけど、返却しなければならぬ品だったのだ。まさか砕け散ってしまふなんて夢にも思っていなかった

「賠償金とか大丈夫?」

最悪の場合私の金庫から賠償金を出しましょうか?と琉璃に言う琉璃は楽しそうに笑いながら

「あははは、大丈夫ですよ。ビュレトさんにマルタさんがそれぞれ掛け合って新しい御神体を用意してくれるそうです、それと神魔から何人かが暫くの間神社に滞在することでも何とかかなりました」

それはそれで問題はあるだろうけど、正直神魔の方で準備してくれるのならそれに越した事は無いだろう

「でも今回も私達は何も出来なかつたわ」

樞の予知に加え、出来る限りの準備をした。だが結局は今回も何も出来なかつた

「相手が相手でしたからね、ビュレトさん達の話では神魔の天敵と呼

ばれているそうですし」

魔人は数こそ少ないが、神魔の大量虐殺を行ったと聞いている。その強さは最上級神魔と同格かそれ以上だと、戦いの後に神魔さえも狂わせるんだ、人間では抵抗できないもの当然と慰められたが自分の無力さを思い知らされたみたいだ

「はーやっぱり1度妙神山に向かおうかしら……」

「お願いですからもう少し待ってください」

琉璃の必死の表情に判ってるわと呟く、妙神山での修行は前々から考えているのだがこれだけ立て続けに問題が起きるとそうそう東京を離れるわけには行かない

「まあ、もう少しの辛抱ですとだけ言っておきますね。美神さんだけじゃなくてエミさんや唐巢神父も楽になると思いますよ」

「えらく具体的ね？何かあるの？」

私がそう尋ねるが琉璃は流石に話す訳には行かないのでと笑う。その反応だけでも大体判った、大方国際GS協会とか、オカルトGMンと言うあたりの組織の支部が日本にも出来ると言う所だろう

「だいそうじょうの逃亡の事もありますが、ビュレトさんも東京に残ってくれるらしいので、戦力は徐々に整いつつあります」

「そうね。でもそうなるとガープの動きが無いのが気になるわ」

原始風水盤、そして神の山の搜索以降動いている気配の無いガープの事が気がかりだ

「どうしても対応が遅れるのは仕方ない事です。相手が相手ですからね」

「判っているんだけどね」

そう判ってはいるのだ、人間ではよほどの奇跡が起きなければ神魔には勝てないと……それでも負け続けは性じやないと思うのだ

「無理せず、対応出来るだけの戦力を整えましょう」

会議があるのでと言う琉璃に別れを告げ、GS協会を後にしゆつくりと事務所に向かいながら、暫く依頼は引き受けずに横島君と螢ちゃんの地力を上げる為の修行の時間を取る事に決め、東京で出来る修行の日程とそれに伴い、エミや唐巢先生にも声を掛け、ピートやタイ

ガーそれに雪之丞とかも交えての修行をするのもいいかもと考えながら歩き出すのだった……

私は自室の床で正座し、蛍とビュレトの説教を受けていた。内容は言うまでも無い、試作ゴーストドライバーの件だ

「いや私としては三蔵法師に預けただけなんだよ？使う危険性も説明したし、リスクも話した。なんで陰念君が持つてるのかなんて知らないよ」

「どしてもあんな危険な眼魂を渡す馬鹿がどこにいるツ!!」

蛍とビュレトの怒鳴り声に思わず耳を塞ぐ。ま、まあ確かにその危険性は理解していたつもりだ

「それについては謝るよ。すまない」

だが陰念君が変身出来たのはやはり眼魂との親和性が高かっただろう。元は陰念君に憑依していた悪魔だ。その親和性は恐らく最高レベルのはずだ

「一応ベルトに安全装置は搭載しておいた。錠前を見ただろう？」

悪魔が暴走しないようにと錠前で力を封印するように設計してあると言うと、蛍とビュレトは深い溜息を吐きながら

「それで？預けた本当の理由は？」

……本当のことを言えと雄弁に物語っている瞳に私は溜息を吐きながら

「陰念君が普通に霊能者として再起するには70年かかる試算だった」

彼の才能はかなり秀でている。再起したいと努力していると聞いて、70年も必要だとどうして言える？リスクや危険性は十分に考慮した、そしてその上で三蔵法師に預けたのだ

「お前は努力が実を結ばないのが嫌だったのか」

「まあね、彼もGS試験では文字通り命を懸けて時間を稼いだ。それに見合う報酬とは言いがたいが……手助けはしたかった」

多分陰念君が持ち出すことも考慮していた。粗暴な外見だが律儀で真面目な彼の事だから、何時までも燻っているとは思えなかった

「安全装置の精度は？」

「仮に暴走したとしても、霊力が底を付けば強制的に変身を解除するように設定してある」

とは言え、明日にでも再調整に行くつもりだと言うと、ビュレトと蛍は深い深い溜息を吐きながら

「そういう事なら先に話しておいて、あとで聞いて凄くびっくりしたんだから」

「ああ。俺も驚いたぞ」

「すまん」

せめて報告をするべきだったなと苦笑いを浮かべたその時。周囲の時間が止った……実際に止ったわけではない。それだけの威圧感をもつ存在がこの場所に現れたのだ

「んーやつと見つけたんだけど……イシユタルじゃないわね？貴方。何者なのかわ？」

赤いフードつきのマントが部屋の中を荒れ狂う神通力によって生じた風で吹き飛ばされる。その下から現れた美しい金髪と血のように紅い瞳……突然の乱入者に声も無い蛍とビュレトを庇うように立ち上がり、その神通力の主の名を呟いた

「冥界の女主人……エレシユキガル……！」

女神イシユタルの霊基から分かれ誕生したアシユタロスと冥界の女主人エレシユキガルが合間見えるのだった……

別件リポート 星の三蔵ちゃん、白竜寺を再建する その4へ続く

## 別件リポート

別件リポート 星の三蔵ちゃん、白竜寺を再建する その4

だいそうじょうとの戦いの後。広場から離れた所で俺は立っていられず、その場に崩れ落ちた。横島が1度死に蘇ったが、戦うだけの力は無いと聞いて、そして眼魂を使うのがだいそうじょうに有効の可能性が高いと聞いて、俺はお師匠様が居ない間にお師匠様の部屋からトランクケースに納められたベルトと眼魂を持ち出した。その道具のおかげで霊力を扱い、戦うことが出来たが、その反動は俺の想像を遥かに超える物だった……

「はー……はー……つば、化け物め……」

額から零れ落ちる大粒の汗を拭う気にもならない。全身がばらばらになりそうな痛みと激しい吐き気それに思うように動かない足……俺は横島の事を初めて化け物として認識した。これだけの疲労を霊体痛で終わらせるとかありえねえ……少しでも油断したら意識を失いそうだ

(ベルトは……消えた。いや、吸収されたのか……)

ベルトが巻かれていた腰に手を伸ばすが、手に当たる感触はない。壊れて消えたのか、それとも俺の体の中に吸収されたのか……俺としては多分後者だな。そこには無いのだが、確かに腰に何かあるような感触があるから

「ふーっ……」

壁に背中を預け、大きく溜息を吐く。俺が契約していたという悪魔が封じられたという眼魂が暴れる気配は無い。いや、暴れる理由が無いと考えているのかもしれない。悪魔の寿命からすれば人間の寿命なんて一瞬に等しいはずだ……だから俺が死んでから、いや意識を失った時に身体を奪えば良いとでも考えているのかもしれないか……何にせよ、これで戦える事が判ったが、連続で戦うにはリスクがありすぎる……

「お師匠……様」

ふと視界に入り込んだ影に顔を上げると、お師匠様の姿があった。逆光で顔が見えないが勝手に持ち出した事に怒っているかもしれないと考えていると

「お疲れ様陰念。よく戦ったわ」

「……お師匠様？」

まさか褒められるとは思ってなかったので、困惑しながらお師匠様の顔を見ると、お師匠様は穏やかに笑いながら

「勝手に持ち出されたのは流石に驚いたけど、元々渡すつもりだったから予定が前後しただけよ。それしか霊能者として復帰できる道は無かったしね」

そう笑ったお師匠様は俺に手を差し出す。痛む身体に顔を歪めながら、その手を握り返すと身体の痛みが少し和らいだ

「どうして」

「霊力の枯渇による痛みだからね。あたしの霊力を少しわけてあげたのよ。さ、帰りましょう。白竜寺の皆が待ってる」

多分勝手に抜け出した俺の事を東條は探しているだろうし、雪之丞が飛び出そうとしていたのを止めるから絶対文句を言われるだろうなあと思いつながらお師匠様と白竜寺へと続く道を歩いていると

「あ、そうそう、ベルトを使ったからチャクラが回復していると思うから、明日から修行のレベルを上げるわね」

……笑顔でそう告げるお師匠様に実は怒っているんじゃないだろうか？と俺が思ったのは言うまでも無い……なお三蔵はと言うと、そんな事は微塵も考えておらず

(これからが本番ね)

今まで基礎的なことしか指導出来なかったが、チャクラが回復した事でより高いレベルの指導が出来るかと張り切っているだけだったりする……

勘九郎……いや、クシナのりハビリを兼ねて2人で人間界の土着の神や精霊への情報収集を終え、東京でブリュンヒルデと合流した。私達の報告の前にブリュンヒルデが自分の報告をしてくれたのだが、そ

の報告を聞いて思わず声を荒げる

「魔人が現れただつて!?なんで私を呼び戻さなかった!」

香港で戦ったマタドールの強さを忘れる訳が無い。マタドールと同じ魔人……その強さは容易に想像出来る。東京に三蔵法師やマルタがいたとしても戦力は多い方が良い。私が居れば何か変ると言う訳ではないが、それでも何かの足しにはなった筈だ。なんで私を呼び戻さなかったと怒鳴るとブリュンヒルデは落ち着いてくださいと言いな

ながら「アシユタロス様の指示です。戦力増強も大事ですが、それ以上にだいたいそうじょうを隠れ蓑にしてガープが動く可能性を考えてと」

それを言われるとブリュンヒルデに強く物を言う事が出来ない。

私はソフアーに座り込んで深呼吸を数回繰り返してから

「すまん」

構わないですよと笑うブリュンヒルデにクシナと共に今回入手できた情報を纏めた資料を手渡す。

「今回の情報収集で判った事なのですが、ガープ一派とは関係ない可能性もありますが……不審な人物の話が多く出てきました」

今回は東京から北海道のほうに移動しながら、情報を集めていた。そして土着の神や、精霊がある共通した特徴の人物を見たと言っている

「私とクシナは見ていないが、黒いバイクに跨った人間が海の上や、上空を走っていたそうだ」

「それはあからさま過ぎませんか?」

確かにあからさまに怪しすぎる。だからガープと関係していると判断出来ない……だがこれがガープではなく、魔人陣営ならば話は変わってくる

「確か魔人の中にはバイクに騎乗しているのが居たはずだよな?」

「……ヘルズエンジェルですね。確かにあの魔人はバイクに騎乗していましたが……それでヘルズエンジェルとは特定出来ないのでは?」

ガープではなく魔人、魔人ではなくガープ。そういうミスリードを仕掛けている可能性はもちろん高いが

「それでもだ。情報はいくつあっても足りない、あからさまに怪しいとしても、そこに何かの手掛かりがあるかもしれないだろう」

流石に私もそこまで単純ではない、ミスリードの可能性は十分に考慮しているさ

「その謎の人間は？」

「北海道上空で消息を絶っています。海外へ行ったのか、転移したのかは不明ですが……」

クシナと共に調べたのだが、そこから先の足取りは掴めていない。高速でUターンしたや、転移などの痕跡も無い。正真正銘忽然と消えたのだ

「二応魔界正規軍の諜報部に情報を回しておいて欲しい」

こういう情報は共有しなければ意味が無いからな。よろしく頼むとブリュンヒルデに頼み込み、次の資料をクシナに出すように頼む「次はこれなのですが……どう見えますか」

クシナが鞆から取り出したのは古代文字の刻まれた金の指輪。私は本来破壊工作に特化しているので、こういう物にかんしての知識はさほど無い、ルーン文字に見えなくも無いのでブリュンヒルデにどうだ？と尋ねる

「間違いないですね。ルーン文字です、この金属自身も魔界の物ですね。これはどこで？」

やっぱりか……魔界でルーン文字となると十中八九ガープが関係しているな

「これは青森の方の非合法のGS家業をやってる連中から取り上げたのさ。特別な効果は発揮してないようだけど……何があるか判らないだろう？」

ガープの事だ。時限式の何かを仕込んでいてもおかしくは無い、これも何かの手がかりとして嚴重に保管し、調査する必要がある「なるほど、それでその人間は誰から買ったと？」

「15〜18前後の若い外人から買ったそうさ。外見的特長は覚えてないそうさ」

購入した相手の事を覚えていない。これはどう考えても怪しいだ



ろう

「判りました。こちらも魔界正規軍に証拠して回します。後は何かありますか?」

「いや、今回はここまでだな」

人間界だとやはり情報の集まりが悪い。今度は魔界の方で情報を集めたいと思っている

「それとだ、そろそろクシナを白竜寺に戻したいんだ」

本人の希望でもあるし、何よりも歩くや走るというのは既に問題ないレベルだ。後は霊力などの訓練ならば、馴染みの人物の多い白竜寺の方がクシナの喜ぶだろう

「それに関しては私からもお願いしたいと思っていました。アシユタロス様にも話は通していますよ」

その早い対応に白竜寺に何かあったのか?と尋ねるとブリユンヒルデは溜息を吐きながら

「陰念がゴーストドライバーと眼魂を持ち出して使いました」

「はあ!」

予想を遥かに超える事態に思わず間抜けな声が出る。クシナは心配そうな顔をして

「陰念は大丈夫ですか?あれは後遺症がひどいと聞いていますが……」

「後遺症も出ています。ですからクシナに白竜寺に居て欲しいのです」

一応白竜寺の長兄だし、そういう事情ならクシナ以上の適任は居ないだろう

「頼めるかい?クシナ?」

「はい!私に任せてください!姉弟子としてきっちり覚えてきます!」

弾ける笑顔のクシナ。身体が女になってから性格が変わって来ている……いや、これがクシナの本来の性格なのかもしれないと苦笑しながら。メると言っているクシナに陰念がどうなるか?と言う不安は残る物の、翌朝クシナを白竜寺へと送り出す事を決めたのだった……

白竜寺に新しい弟子が来るとママお師匠様から朝の座禅の時に報告があった。これも白竜寺が再建されつつある証拠かと思っただが……その報告を聞いてから何故か寒気が止らない自分が居る

「風邪か……」

「馬鹿は風邪引かないだろうが」

額に手を当てて風邪か？と呟くと、隣で組み手のグローブを磨いていた陰念が馬鹿は風邪を引かないと言う。誰が馬鹿だあつと怒鳴ろうと思っただが、陰念の手が小刻みに震えていて、汗も酷いのに気づいた

「お前眼魂とか使った後遺症出てるんじゃないのか？」

だいそうじょうと言う魔人が現れた時に眼魂と複製のゴーストドライバーを持ち出した陰念。横島を見て、後遺症があるということは知っているの、それじゃないのか？と尋ねる

「……いや、それは確かにあるんだが……違う」

何か、上手く説明出来ないんだが……恐ろしい何かを感じると言う陰念。それは奇しくも俺も感じている事で靈感が囁いているのだろうか？と陰念と話をしていると東條が部屋にやってきて

「陰念先輩、伊達先輩。新しい弟子の方が先ほど訪れたんですが……」

そこで言葉に詰まる東條にどうした？と尋ねると東條はえっとですと少し言いにくそうな素振りを見せながら

「女性の方なんです」

ママお師匠様こそ居るが、白竜寺は基本女人禁制の修行場だ。それなのに何故？ママお師匠様の知り合いとかそういう物なのだろうか？ありえない話ではないと思うが……何かが妙に引つ掛かる。まあ後で紹介してくれるだろうと思ひ、ママお師匠様の呼び出しがかかるまで腹筋や腕立てのトレーニングをする事にするのだった……

「じゃあ皆、今日から白竜寺と一緒に修行をするクシナさんです。あたしの弟子って扱いじゃなくて、あたしの知り合いの弟子って事になるけど皆仲良くしてね」

ママお師匠様が紹介してくれた新しい弟子。女性だから仕方ないと思うのだが、小柄に艶のある黒髪……日本人だよな

(なんでこっちを見てるんだ?)

正確には俺と陰念を見つめている気がする。しかも何か怒っている様な気がする……。しかし初対面の人間に恨まれる理由もないし、俺と陰念はずっと白竜寺で暮らしているから幼馴染と言うのもありえない

「蛇神クシナです。得意な事は炊事洗濯に裁縫、後家事一般です。霊力は昔使えたんですけど、今はちよつと使えなくてそれを取り戻すために白竜寺に来ました」

昔霊力を使えたが、今は使えない。それは別段珍しい事ではない、実際成長と共に霊力が弱くなると言うのは良くある事らしい

「お近づきの印に今日の昼食を用意させて貰いました。お口に合えば幸いなのですが」

「じゃあ皆ー配膳を手伝ってねー」

お師匠様の言葉に判りましたと返事を返し、全員で昼食の準備をするのだが……

(なんか懐かしいなあ……)

準備が懐かしいのではない、今日の昼食のメニューを見て思わず懐かしいと思ってしまった。牛肉無しの肉じゃが、小さい弟子が食べやすいようにウサギや花の形にくり貫かれたにんじんと、出汁を利かせているから色の薄いその煮汁。卵焼きにたっぶりの野菜と煮詰めたあんかけ。それに豆腐を使ったハンバーグ、甘いケチャップソースに香りがする。そして最後に、豆腐とネギとわかめの白味噌汁……勘九郎が良く作ったメニューだ

「ではいただきます」

「いただきます」

ママお師匠様の合唱の後に手を合わせ、あんかけが掛けられた卵焼きを口に運び。目を見開いた……陰念は肉じゃがを口に運び同じように目を見開いている。メニューが似ているだけじゃない、味も何もかも同じだ……弟子達もそれに気づき、中には勘九郎先輩と呟き涙

しているやつもいる。年少の弟子にとって勘九朗は兄であり、姉(?)であった。懐いていて奴も多くて……ってじゃなくて!!

「んーやっぱり料理って個性が出るから判っちゃったかしら?」

悪戯っぽく笑うクシナ。その仕草は大男と小柄な女性と言う差はあるが、勘九朗の仕草と同じで……俺だけじゃない、陰念や東條もクシナを指差して肩を震わせている

「元の身体じゃ死んじゃうから、女の身体で蘇って来たわよ。ただいま、皆。今まで本当よく頑張ったわね」

その言葉の後はもうむちゃくちゃだった。なんだかんだ言っても、俺は勘九朗の事は嫌いじゃなかったし心配もしていた。男から女になつていたのは心底驚いたが、こうして帰って来てくれた。白竜寺の皆が揃った、それが何よりも嬉しかった

「あ。そうそう、陰念。眼魂使つたらしいわね?後でお説教ね」  
「……っはい……」

ただ勘九朗……いや、クシナと呼ばれば良いのか?が陰念を見て凄いエガオで告げ、陰念が青い顔で震えながら頷くのを見て。クシナの帰還を喜んでいた俺達が沈黙したのは言うまでも無い……

リポート14 嵐の前に その1へ続く

## リポート14 嵐の前に

### その1

リポート14 嵐の前に その1

私は今異様な緊張感の中に居た。お父さんと向かい合うように座っている紅いローブを身に纏った金髪の少女……姿形は人間だし、私の同年代に見えるが違う。小竜姫様やメドーサさんを超える圧倒的な存在感と神通力を放っている

(冥界の女主人……エレシユキガル)

お父さんの霊基の一部である、女神イシュタルの姉妹。今は顕現していない筈の古き神……それがエレシユキガルだ

「なるほどね……イシュタルの気配がすると思っていたけど……霊基の一部……か。貴方えつとアシユタロス？私の事は判る？」

「知識としては把握していますよ。それだけですけどね」

知っているけど知らないっというやつだ。お父さんの魂は知っているが、お父さん自身にその記憶は無いと言うやつだ

「聞かせてくれ、女神エレシユキガル。お前は何故現界しているんだ？」

ビュレトさんがそう尋ねるとエレシユキガルは優雅な仕草でカッブを手に取り、紅茶を口に含んでから

「別に答えるのは構いません、私も情報が欲しいと思っっている所ですからね。私を現世に呼び戻したのは3人の神魔でした」

3人の神魔……？その言葉にガープ達の姿が一瞬脳裏を過ぎった  
「魔界のどこかで……えつとそうそう、ガープとか言ってたわね。なんか私に従えとか言ってたから叩き潰してきたけど」

叩き潰した。そう聞いて一瞬これでガープ達の脅威に怯えなくていいと安堵したが、ガープ達の友人だったビュレトさんが居るから喜ぶ事が出来ない……でも、これで本当に死んでいるなら脅威が魔人だけになり、挟撃や謀略をいくつも用意するガープを警戒しなくていい

と言うのは喜ばしい事だ

「ガープ達は死んだのか？」

ビュレトさんが沈鬱そうな顔で尋ねる。だがエレシユキガルは殺してないわよ？と明るいい口調で呟く

「従えとか言って指図を出して来たから身の程を教えただけ、殺しては無いわ」

殺していない、その言葉に明らかに安堵しているビュレトさんの姿に敵対はしていても、かつての友人の事を思っているのがよく判った「場所とかは判らないよな？」

「直ぐその場を後にしたので覚えていませんわ」

ちよつと残念と思わず心の中で呟いた、これでガープ達のアジトが判れば奇襲攻撃を仕掛けることが出来たのにと……

「それで？貴方の聞きたい事は終わりかしら？」

「あ、ああ。感謝する、女神エレシユキガル」

ビュレトさんはエレシユキガルに頭を下げると考えたい事があると言つて、お父さんの部屋を後にした。残されたのは私とお父さんとエレシユキガルの3人だけ……数の上では有利でも、どう考えても勝てるとは思えない。だからこの話し合いがこじれ、戦いになるような事にはならないでと祈っていたのだが

「その失礼だが、私の記憶ではもう少しその……なんだ。貴女は大人であり、豊満な肢体をしていたはずだ。それに性格もその……もつと暗く、陰湿な物だったと記録しているのだが」

「お父さん!？」

まさかの質問に思わずお父さんと叫んでしまった。だがエレシユキガルはくすりと上品な仕草で笑い

「それを言うとお父さんが筋肉達磨になつて驚いているんだけど、まあ良いわ。答えてあげる。向こうは向こうで私を制御するもしくは、制圧できるようにと、この器……多分ホムンクルスを用意していたのだわ。とは言え、その程度で私の力を削ぎ落とす事は不可能だったけどね……まあ本来の身体の半分位かしら？あと性格のほうは肉体の無垢な魂と同化してるから丸くなつてるって所ね。自分で

も私ってこんな性格じゃないわよねって思ってるくらいよ」

本来の半分!?!この力で!?!どれだけ古き神々と言うのが規格外なのかと言うのを思い知らされるのと同時に、ガープが支配出来なくて良かったと安堵していると、お父さんが更なる爆弾をこの場所に投下した

「死んだ横島君を助けたのは、貴女ですね?女神エレシユキガル」

「ええ、そうよ。私は女神ですから、横島は私にこの街を事を案内してくれました。だからお礼として冥界の砂を渡しました、まさかこんな短時間で死んでしまうとは思いませんでしたか……」

お父さんの問いかけを理解し、エレシユキガルの返答を理解するまで私は数分の時間を要し、そして止っていた思考が動き出した時

「貴女が横島を助けてくれたの?ありがとうございます、ほ、本当にありがとうございます  
ございます」

私は涙を流しながらエレシユキガルに感謝するのだった……

ありがとうと涙を流して感謝の言葉を口にする少女……この反応を見れば横島に想いを寄せているのがよく判った。人間にしては魂が綺麗だなあっと思っただが、なるほど彼は人に好かれやすい体質なのかもしれないわねと心の中で呟く

「言っておきますが、あれは特別です。毎回救うなんて思わないで欲しいのだから」

横島は無償で私を案内してくれた。それだけ、本当ならそのまま死なせるのが冥界の神としての仕事だろう。ただそのままと言うのが女神として納得出来なかったただけだ

「判ってます……も、もう私は……横島を死なせません」

普通逆では?と思っただがそれを口にはしない。横島は確かに相当な潜在能力を持っていたが、それが目覚めるかどうかとも判らない。今の段階では目の前の少女の方が強いのであるから

「さてと、私もいくつか聞きたい事があるわ」

「答えられる範囲でなら」

イシユタルの気配を感じてこの場所に来た。だけどそこに居たのはイシユタルではなく、イシユタルの霊基の一部を得て、男神とされたアシユタロスと言う魔神。イシユタルが居ても困るが、これには正直面を食らったが、イシユタルほど性格が悪くなく、落ち着いた性格をしているので情報を得るのにこれ以上相応しい相手は居ないと心の中で呟く。流石に筋肉ムキムキで、エツ、誰? と思っただが、少なくともイシユタルよりかは信用出来そうだ

「今の神魔の情勢はどうなっているのかしら?」

「貴女を現世に呼び戻したグループ達と神魔、そして魔人との戦いになっていきます。その戦場が人間界となつていけると言う所ですね」

その話を聞いて傍迷惑ねと思わず呟いた。神魔同士で戦うのなら天界か魔界で戦えばいい物を……

「冥界の住人が……あ、そっか。もう冥界は無いんだ」

私が別の次元に隠居している間に色々と変わっている。私の世界が無いからこうして陽の当たる世界を見て回っているのだ……

「死後の世界の概念の変化ですね、心中察します」

「別に構わないのだから」

私の世界が無いのは正直残念だが、それのおかげで出来る事もある。ある意味冥界の女主人と言う立場から開放されて、今私は自由なのだ。生まれて初めての自由を楽しみたいと思っただが、それでもやはり私の世界が無いのは悲しいと思う。自分でも理解出来ない感情の機微だ、このホムンクルスの器に押し込められたのが原因だろうか?

「ありがとう、でももういいわ、あんまり詳しく聞くと……ね」

私は決していい女神ではないだろう。人の死を司る女神、ゆえに人間からは恐れられる存在だ。生きてる人間は余り好きではない、だがそれでも……それでも完全に人間に情が無いわけではないのだから「これからどうするのですか?」

「陽の当たる場所を見るのよ、それから知らないわ」

何をするのか? 何をしたいのか? なんてまだ何も決めていない。だからどうするのか? と言われても答えようが無い。1つ答えれる



とすれば……

「私はどちらにも協力しないし、組するつもりも無い。それでいいでしょ？お互いに今は不干涉、それが一番だわ」

私は今は神格の無い野良女神。だからこそ中立を貫く事が出来る  
「判りました。ではまたいずれ、お茶の相手くらいならお付き合いしますよ」

「ふふ、ありがとう。アシユタロス……だったわね。イシユタルの一部を持つてみたいけど、少しは好感を持てるわよ」

イシユタルは嫌いだ、アシユタロスは別人なのだから毛嫌いする理由は無い

「あ、そうそう。貴女、名前は？」

アシユタロス之父とを呼ぶ少女。魔神の娘と言うのは興味があった。だから名前は？と尋ねた

「ほ、蛭です。芦蛭」

「そう、蛭ね。覚えておくわ、じゃあね」

横島を助けてくれてありがとうございませう！ともう1度頭を下げる蛭に手を振り、私はその場を後にするのだった

「ふう、疲れた」

エレシユキガルが消えた後優太郎は深く溜息を吐いた。今の神魔とは根本的に強さの異なるエレシユキガル、味方に引き込めなかったのは残念だが、お互いに不干涉と言う事を約束できただけでも十分だった

「私は出来れば敵対したくないかな……横島を助けてくれたし」

「そうだね。出来ればこのまま、敵にも味方にもならず不干涉でいければ一番かもな」

古の女神との会談を終えた蛭と優太郎は小さくそう呟き、エレシユキガルと敵対しない事を祈るのだった……

優太郎と蛭がエレシユキガルと異様な緊張感の中お茶をしている頃。横島の家では……

「おじやましませーす」

「いらっしやい、テレサー」

シズクに家事を習っているテレサにリビングからいらっしやー  
いっと声を掛ける。テレサも結構な頻度で尋ねてくるから、最近  
は急にあつても驚かなくなつたよな……人間の適応力つて凄いなと  
呆れながらに感心する

「横島。大分元気そうだね、もう大丈夫？」

荷物を手にリビングに入ってきたテレサが、心配そうに尋ねて  
くる。俺はカーペットの上に座り、完治とは言いがたいけどと前置  
きしてからテレサに返事を返した

「大分楽かな。美神さんにはもう少し療養してろって怒られてる  
けど」

だいそうじようと戦つた時は俺自身は囧で体調自身は6割つと  
言つた所だったが、今は大分回復しているという実感もある。もう  
少しで完治するんじゃないかな？と思つているというキッチンか  
ら鋭い眼光が飛んでくる

「……まだ大人しくしている。良いな？」

「……はい」

その恐ろしい眼力に大人しくしていますと呟き、机の上をちよこ  
ちよこ歩き回っているうりぼーとチビを見つめる

「ぴぐー！」

「みむっ！」

机の上で鼻を突き出すうりぼーを避けて、背後に回るチビ。だがそ  
うはさせないと回転してチビのに向き直るうりぼー

「心眼。あれなにやってるのかな？」

「トレーニングじゃないか？」

……トレーニング？あれが？……首を傾げながらチビとうりぼー  
に視線を向ける

「みむう！」

「ぴぐう！」

鳴き声にめちやくちや気合が入っているが、どこからどう見ても遊

んでいるようにしか見えないんだが……

「まあ、チビとうりぼーなりに色々考えてるのよ。はい、シズク。洗濯物干し終わったわよ」

窓を開けて部屋の中に入ってきたタマモが洗濯籠を置きながらそう言う。最近では家の手伝いも良くしてくれているのでブリュンヒルデさんが貸し与えてくれた精霊石のペンダントで人の姿をしている事が多い、でもやはり長時間人の姿になっているのは負担となるらしいので、あんまり無理はしないで欲しいと思う

「……判った。少し休憩して良い」

シズクがエプロンで手を拭きながらリビングに来ながらそう言う  
と、タマモは首から下げたペンダントを外す

「コン♪」

ぽふんつと言う気の抜ける音と共に、子狐の姿になったタマモが精霊石のペンダントを啜えて駆け寄ってくる。

「お疲れ様」

「くーん♪」

タマモの啜えていたペンダントを受け取り、タマモを抱っこすると嬉しそうに鳴き声を上げる。人間の時はあんまり甘えてこないけど、子狐の時は物凄く甘えてくるよな。まあ悪い気はしないのでそのままタマモの背中を撫でる

「……じゃあ、今日は裁縫と簡単な汁物を教えよう。チビノブも良いな?」

【ノツブウ!】

「あのきシズク。チビノブってこの手で裁縫できるの?」

やる気満々のチビノブを見て、テレサが裁縫出来るの?と尋ねるとチビノブはその指も何も無い、どこから手なのか、腕なのか判らないその手を振るい、裁縫糸を針に通す

【ノブウ!】

「す、凄い!」

ドヤ顔をするチビノブと目の前の光景を見て凄いと驚くテレサ。  
俺も最初見て驚いたよなあと思っているとふわあつと大きく欠伸が

出る

「先ほど飲んだ薬が効いてきたのだろう、無理して起きてないで昼寝をすると良い」

カオスのじーさんの処方してくれた薬のおかげで回復が早いが、その変り眠くなるんだよな……とは言え、いつもはソファアで昼寝をするが、テレサとチビノブが裁縫をしているし……

「うりぼー、大きく」

俺が呼ぶと机の上から飛び降りて、俺の近くに寄って来たうりぼーはその身体を震わせる

「ぴぎゅー」

ゆっくりと大きくなって行くうりぼーはソファアくらいの大ききで止り、カーペットの上に伏せて身体を揺すって丁度良い位置を探すように身体を動かす。そしてちょうどいい位置を見つけたのか、身体を揺するのを止め目を閉じるうりぼーに背中を預け

「チビ、タマモ。おいで」

「みむー♪」

「コン♪」

小さな翼で飛んできたチビはそのまま、俺のGジャンのポケットに入る。タマモを抱き抱え、風邪を引かないようにタオルケットを被つて目を閉じるのだった……

夕方。横島と一緒に夕食をと、材料の買出しを終えた蛍が横島の家を訪ねて来た時も、横島とタマモ達は昼寝をしており

「なんか、あれを見ると安心するのよね」

大きなうり坊に埋もれるように眠る横島の腕の中にはタマモが大事そうに抱えられていた。ソファアよりも大きいうり坊の姿は日常とは程遠い物だったが、何故か日常を連想させる光景で……蛍はその不思議な光景に小さく笑い

「シズクー。言われてた材料買ってきたわよー？」

「……助かる。テレサとチビノブに料理を教えていたから、買出しに言っている時間が無くてな」

蛍がキツチンを覗き込むとそこにはテレサとチビノブがいたのだ

が

「あわわわ!? 嘔いてる! 嘔いてる! ど、どどどど、どうすればあ?!?!」

「ノブノブ……?!?!」

大きな鍋を嘔きあがらせてパニックになっているテレサとチビノブを見て、蛭は溜息を吐きながら、エプロンを身に着けキッチンに向かう

「手伝うわ。1人じゃ面倒見切れないでしょ」

「……助かる。簡単なスープなら行けると思っただがな……まだ2人だけでやらせるには早かったか……」

わわわー!! のぶのぶーっ!! と言う悲鳴がキッチンから響く中。横島はまだ穏やか寝息を立てていた。他の人間が見れば非日常といわれるこの風景こそが横島家にとつての日常であり、騒がしくも穏やかな日常がそこにあった……

薄暗い研究室の中キーボードを叩く音だけが響き渡る。その部屋の主ドクターカオスは背もたれに背中を預け、大きく背伸びをしながら

「判らないと言うことが判っただけか……」

香港で戦ったマタドール、東京に現れただいそうじよう。魔人と言う種族と言うことがわかっていてだけで、それ以外は全く判らないという分析結果に終わった

(通常の神魔と異なる霊波のパターン……これがヒントなのかの?)

神魔の天敵と恐れられる魔人。霊力・神通力・魔力……その3つの特徴を併せ持つ独特な霊気のパターン……これだけ判っていれば、事前に魔人の襲撃を察知出来そうな物だが……

「人間の姿を取っている時は人間と同じと来たか……」

だいそうじようが人間の姿をしているときに接触した。ブリュンヒルデ、マルタ、そして美神の報告を聞いたが、人間の時は人間と同じ霊力を放っていたそうだ。後天的に神魔の力を手にしたと言っていたが、まさか人間の姿と魔人の姿を使い分ける事が出来る等とは夢にも思っていなかった……

(こうなると人間全てが警戒の対象に……)

魔人を特定する事の難易度は言わずもがな、そしてその戦闘力は並の神魔を超える……何とかして人間に擬態している時でも魔人と特定する術を見つけることが出来れば……

「ん？……くっ……これは……」

魔人を特定する方法を考えている時。強烈な頭痛が襲ってきた……そしてこの痛みには覚えがあった。ブリュンヒルデと初めて会った時と同じ現象だ……

「ぬう……これは……馬鹿な、どうなっているんじや」

急に蘇ってきた記憶。それは若い時のワシとブラドー伯爵、そしてワイズプに変身した横島とガープの姿……美神と蛭の姿もある……

「これは何時じや、何時の記憶じや……あれか？マリアを充電……いやじやが、今のマリアは充電は必要と……」

場所と時代的に恐らくマリアの充電の際に横島と美神がタイムスリップした時に近い……か？だがこれは言うならばありえない話だ……ブリュンヒルデの時とは根底から異なっている。今から歴史が変わる？それとも……

「これは1度ブラドー伯爵の所に向かうべきじやな」

恐らくこれは今から美神達が経験する出来事の筈。となれば美神達に相談しても何も手掛かりは無いだろう……そうなればもう1人の当事者になるブラドー伯爵に話を聞こう。事情を話せば、仲間になってくれる可能性もある

「ドクターカオス。どちらへ？」

買い物籠を手に帰ってきたマリアと玄関で鉢合わせする。マリアも当事者となる可能性がある……同行させる事も考えたが、マリア1人では知っている事を知らないように振舞う事は出来ないかもしれない、そういうことをするにはまだマリアには経験が足りない

「少し急用が出来た。暫くは戻らない、2人だけで食事をしてくれ」

マリアの返事を聞かずに家を出る。マリアの事だから自分も同行すると言いつくすのはわかっていた、だからマリアが返事をする前に家を出る事でワシ1人で向かうと言うことを態度で示したのだ。ワシ

は手にしていた帽子を被り、唐巢の教会へ向かって歩き出すのだった  
……  
リポート14 嵐の前に その2へ続く

## その2

リポート14 嵐の前に その2

リビングで洗濯物を畳みながら横島とうりぼー達のほうに視線を向ける

「[[「ぴぐぐー♪」]]」

「みむーッ!!」

分身したうりぼーがチビの指示で横島に突進していく、攻撃している訳ではなく甘えている訳なのだが

「くすぐりたい!くすぐりたいから!!あはははっ!!」

「[[「ぴぐぐッ♪」]]」

見た目通りふわふわのうりぼーに群がられるとくすぐったいらしく、横島がくすぐりたいと笑っている

【のーぶ……】

こそこそと背後に回りこんで横島をくすぐっているチビノブを見て、やれやれと溜息を吐きながらも笑っている自分が居る

(私も変わったものだな)

横島と一緒に暮らしているうちに自分でも判るくらい丸くなっているなど思わず苦笑する

「こーの!悪戯猪めッ!」

「ぴぎゅーッ!!!」

横島が反撃に出て、今度は逆にくすぐられているうりぼーが身悶えする。その隙にとチビノブが逃亡を図るが

「コン」

【の、のぶぶぶ!】

タマモに回り込まれ逃亡失敗し、お仕置きなのか頭を噛まれて目を白黒させている……そしてチビはチビで

「み、みむう!?!」

【イツヒヒッ♪】

ジャックランタンに上空を押しえられ、逃亡できず。くすぐられす



ぎて、うりぼーがぐったりしたタイミングで横島に掴まったチビの悲鳴がリビングに響き渡るのだった……

「みむみむ」

「びぎゅ」

結局の所チビもうりぼーも横島に構って欲しかったただけだ。一通り遊んでもらった後は楽しそうに2匹でボールで遊んでいる、広いリビングをボールを追いかけて走り回る姿は元気一杯と言う感じだ

「タマモー、チビとうりぼー元気だなあ」

「コン」

ソファアに腰掛け、膝の上のタマモの背中を撫でている横島がちらりとこつちを見る。その視線の意味が判っている私は最後の洗濯物を畳んで

「……チビノブ、いつも通り、横島の部屋と私の部屋。これは脱衣所だ、良いな?」

【のぶー!】

頭の上に洗濯物を積み上げてリビングを出て行くチビノブを見送ってから、横島の方に向き直りきっぱりと宣言する

「……まだ駄目だぞ」

【まだ早い】

「……はい」

霊力を使う修行を再開してもいい?と言っているように見えたので、心眼と口を揃えて駄目だと言うと横島は明らかに落胆した素振りを見せた。確かに回復してきているといえるが、横島は常に生と死の間を行き来する戦い方をする。良い機会だから、徹底的に疲労抜きをするべきだと思ったのだ。

【休養もまた立派な修行ですよ?主殿】

牛若丸の声が聞こえたのだが、いつもよりも声の位置が高い。ん?っと横島と一緒に声をしたほうを振り返り

「二服を着ろー!ー!ー!!」

思わず横島と一緒に叫んでしまった。そこに居たのは宙に浮かぶ眼魂ではなく、完全に具現化している牛若丸の姿だったのだが、その

格好には致命的な問題があった

【はい？どこがおかしいでしょうか？】

上半身はほぼ裸で、袖だけの着物と僅かな胸当て、下手に動いたら一瞬とはいえ、上半身が裸になるという危険な装いだ。それに下半身も下半身で問題しかない、下着こそ穿いているがズボンや着物は無く、甲冑の鎧の一部を装着しているだけ。おかしい所しかない

【これは戦装束で「良いから着替える！お父さんそんな格好許しませんよッ！」いやいや、主殿は牛若の父では】

良いから着替えるの！早くッ！と顔を赤面して叫んでいる横島に、こいつは本当に女好きなのかと苦笑しながら

「……主人の意向に答えるのが武士だろう、来い。服を貸してやる」

【は、はあ……判りました】

私よりはまあ大分背が高いが、アリスみたいの一部に差がある訳じゃない。少々きついだろうが、入るだろうと判断し牛若丸を自室へと連れて行く事にするのだった

シズクに連れられてリビングを出て行った牛若丸。その姿が完全に見えなくなった所で深呼吸を繰り返す……上半身も下半身もほぼ裸で、鎧や着物の一部だけと言うその服装は俺には目に毒過ぎた。チビやうりぼーと居ることで収まっていた煩惱が暴れだすのを感じた（と言うか、昔の人は何も言わなかったのか？）

戦装束と言っていたが、あれでは思いつきりただの痴女である。魂の中か記憶の中は判らないが、その時はちゃんと着物姿だったのにと思わずには居られない

「みむっ…」

「びぐっ…」

俺とシズクが怒鳴っていたのを見て、どうかしたのか？と近寄ってきたチビとうりぼーの頭をなで、何でも無いと呟き

「ほれ、とってこーん」

「びぐーん」

「みむーん」

俺が投げたゴムボールを追いかけていくチビとうりぼーの姿に平常心が戻ってくるのを感じながら、心眼に尋ねてみた

「あの格好は無いと思うんだけどさ。心眼はどう思う？」

「……時代だな。牛若丸は平安時代の武将だ、馬の機動力を上げる為、近接戦で相手よりも早く動く為に可能な限り軽量化したんだろう」

言ってる事は判るよ？多分正論だと思うんだけどさ……

「女の子として捨てちゃいけないラインってあると思う」

煩惱が湧き上がるのを感じたが、それよりも脳裏を埋め尽くしたのは牛若丸に対する心配の気持ちだった。いくら軽量化って言ってもあの格好は無いと思う

「……誰も言ってくれる人が居なかったんだろう。目の保養とも思っていたのかもしれない、平安時代はな……夫が50で、妻が10歳とか当然だったんだ」

……平安時代はロリコンばかりだったと言う、知りたくない事実を心眼から教えられた俺は膝の上のタマモを抱き抱え

「平安時代って怖いな、タマモ」

「くうん？」

何の話？と言わんばかりにタマモに昔の日本が怖いって事と言いながら、タマモの毛並みを手櫛で整えるのだった……なおチビとうりぼーは

「みむうー！」

「ぴぎゃー!!」

俺が取って来いと投げたボールをどっちが俺に持っていくか？と言う感じで揉めているように見えたので、近くに転がっているボールをもう1個拾って喧嘩しないようにチビとうりぼーの方に向かって転がすのだった……

【あ、主殿……この様な格好落ち着きません】

赤のスカートにフード付きのパーカーと普通の格好なのだが、そわそわと落ち着きなさそうにしている。いや、絶対さっきの格好のほう落ち着かないと思うんだけど……

「その格好になれるの、戦装束は基本的に禁止」

【そんな！では私はどうやって主殿を護れと!?】

……普通の格好で、普通に戦ってくれば良いから。あんな痴女見たいな格好認められないからと言うが、牛若丸は判りましたとは言ってくれたが、その目はめっちゃくちや不満そうだ

「……主の意向に従うのも兵の務めだろう？主の意向に逆らうのか？」

いやいやシズクさん。俺は主とかそういう立場の人間じゃないからと言おうと思ったのだが、牛若丸にはその言葉が聞いたのか

【ツ！判りました！この牛若丸。この服装でも十分な首を刈って来て見せます】

首？……あーそう言えば、昔って対象の首を取ってくるのか……

「首はいらないかな……」

【じゃあ心臓ですか！】

……どうしよう？この子、怖い……悪い子ではないと思うんだけど、目がキラキラしてるんだけど言ってる事が物騒すぎる。なんとも言えない空気の時電話が鳴る

「……もしもし。なんだ美神か？依頼が難しいからノツブだけじゃないか、私も？……少し待て。横島、美神が応援を欲しいと言っているが……どうだ？牛若丸を試してみないか？」

やる気満々と言う感じの牛若丸……それに強いことも判っているし……

「牛若丸。俺の代わりに頼めるかな？」

【全てこの牛若丸にお任せください！】

そのやる気に満ちた返事に若干の不安はあった物の大丈夫だろうと判断し、頷くとシズクは

「……私の変わりになる人材を用意した。迎えに来てくれ」

美神さんにそう返事を返し電話を切る。そして振り返って牛若丸を見て

「……横島の代役だ。きっちりと戦果を上げて来い」

【首を刈って来れば良いですか!?!】

……はじける笑顔の牛若丸にシズクと揃って違うと呟き、悪霊とか

を倒してくれば良いからと説明する

「美神さん、牛若丸が人の姿を取れるようになったので、1度能力を見てくださいと嬉しいです」

「……また人外が増えるのね……ま、まあ良いわ。乗って、現場に向かいながら説明するから」

美神さんの運転する車に乗り込む牛若丸と窓から手を振る、蛍とノツブちゃんに手を振り返し美神さん達を見送りながらぼそりと呟く

「大丈夫かな？」

「……大丈夫だろう？多分……」

……なんかすつごい不安だけど、大丈夫だよなと思いつつながら俺とシズクは家の中に戻るのだった……

なお除霊後ノツブちゃんと牛若丸を送って来てくれた美神さんだけ……

「靈力切れでガス欠したみたい、除霊は終わった後だけ……今度からシズクでお願いね？」

【あ、主殿……面目ありませぬうう……】

眼魂から悲しそうな牛若丸の声を聞いて、この子ちよつと残念な子だと俺とシズクは確信するのだった……

手にしていた紅茶のカップを机の上に戻す。我の好きな茶葉なのだが、どうしても飲む気になれず完全に冷めてしまった

(あれは何なんだ……)

我が英知は神魔にも劣らないと自負しているが、今回の事は全く持つて意味が判らない。目覚めたら知らない記憶が次々と脳裏に浮かぶのだ……それならばまだ良い。眠っていた間に忘れていた何かを思い出している、自分で言っておいて厳しい内容だが……納得出来ない訳ではないただ思い出しているだけならば……だが

「記憶の齟齬が生まれている。我がカオスと戦った時横島の姿は無かった」

だが今朝起きてから脳裏に浮かんでいる記憶には、横島や美神の姿があった。そして何よりも最大の違いは……

「ガープ……」

我が養父の心を動かし、そして我とカオスが戦う原因となった。忌まわしき魔神……我とカオスが戦った時にあやつのはもちろん無かった……この夢の意味が判らない、私の願望なのか？冷め切った紅茶を見つめていると私の部屋の扉が叩かれる

「お父さん？ドクターカオスが内密な話があるって尋ねて来ているけど……どうする？」

私の人格矯正と言うか……娘にやるにはひどい仕打ちだと判っているが、訳の判らない存在を呼び出されては困る。横島への恋慕が悪いとは言わない。だが。完全にその方向を間違えているシルフェニアの記憶を少し操作することで落ち着きが出てきた

「私も尋ねようと思っていた所だ。通してくれるか？」

判ったと返事を返し走り去っていくシルフェニア。私は冷め切った紅茶を一気に飲み干し、カオスを迎える為に新しい紅茶の準備の為に席を立つのだった……

「老いたな、カオスよ」

「不完全な不老不死じゃからな、老いもする」

クツクツと笑うカオスだが、その目は鋭い光を放っている。確かにカオスは老いた、我と正面から戦った時の力は無いだろう。それでもなお健在だと、我に脅威だと思わせるその知力は微塵も衰えていない「こうして2人だけで顔を合わせるの初めてやも知れぬ」

「大体小僧か美神が一緒じゃからの」

シルフェニアとピエトロも我とカオスの話し合いと聞いて心配そうな顔をしていたが、我とカオスが殺し合いをする事になったのはガープの卑劣な策略が原因だ。だから今の我にはカオスを憎む理由が無い

「回りくどい話をしている時間は無い、単刀直入に聞こう。ブラドール……お主、知らない記憶を思い出しては居らぬか？」

私の尋ねようとしていた事を尋ねてくるカオス。なるほど、その理

由をカオスは知っているという事が……

「仮にそうだったでしょう。だが余人が聞けば、お前が呆けたのでは？と心配するのではないかな？」

「そうかもなあ。だとしてもじゃ、ワシには尋ねる事しかできぬよ。ブラドール、お主も記憶に齟齬は無いか？」

真剣な眼差しに笑い話やふざけているのではないと察し、我は溜息を吐きながら

「今朝目覚めてから訳の判らぬ記憶に悩まされている。これは何だ？」

知っているなら教えろと言うとカオスは我の目を見つめ返す。吸血鬼の目を見る、それは操られても良いという覚悟が無ければ出来ない

「教えてやってもいい、その代わりワシに協力しろ。さすれば答えよう」

ここで我が魔眼を使えば簡単に求める情報は手に入るだろう……だがカオスは覚悟を見せた。それだけの覚悟を見せたと言うのに、この我が！始祖の吸血鬼たる。このブラドールが！自ら引くような真似が出来る訳が無い

「良からう、お前に協力しよう」

「そういうと思ったわ」

上機嫌に笑うカオスは、信じられないと思うが全て真実だと前置きしてから話し始めた。この世界が2度目の世界であり、1度目の世界はたった一人の人間の心を犠牲に作られた偽りの平和の世界となった。それを良しとしない、神魔の最高指導者が1度だけ世界規模の時間逆行を許可した。だが何故か差異が生まれ、そして大きな脅威が生まれつつある……

「なるほど……な。そう言われれば心当たりが無い訳ではない」

違和感と言うものは感じていたが、それが何か判らなかつた。だがカオスの話を聞いて、その漠然とした違和感の正体が判つたような気がする……

「だがそれは今は置いて置く事にしよう。こうして訪ねて来たその本

当の目的はそれではあるまい」

カオスの話は確かに信じがたい話だったが、我はその言葉を自然に受け入れていた。魂が真実だと理解していた

「信じてくれてたすかるわい。今回の事じゃが……ワシの予想だが、もしも、もしも最高の形になれば……」

「どうした？…続きを言うがいい」

それだけ期待するような事を言っておきながら、言葉に詰まったカオスに続きを言えと促すとカオスはゆっくりと頷き

「……お前の妻の遺骨や遺品を手に来るやも知れぬ」

その言葉に我の記憶の最も忌まわしい部分が蘇った。カオスとの戦いの中、何故か発生した火災。それで我が養父の城は燃え尽き、我が妻は遺品も骨も何も残らず消えてしまった

「どういう……事だ」

冗談や嘘ならば許せる訳が無い、爪をその首に向けながら続きを言えと促す

「ワシの記憶とお主の記憶の齟齬をすり合わせる必要があるが……ワシの記憶では、お前の妻の遺体はガープが持ち去ろうとしていた」

「……我の記憶ではガープと横島が対峙していた」

ぼんやりとした記憶なのではつきりとしていないがと言うと、カオスはそれで良いと笑う

「横島達がワシとお主の戦いの場に居るわけが無い、中世と現代。年代が離れすぎている、じゃが……ワシは知っている。横島達は近い内にワシ等の時代に跳ばされる。事故でな……そしてそこから作られる記憶と歴史じゃ、だからワシとお主の記憶が今あやふやになっている」

たった2人しか生きていない生き証人なのだからとカオスは言う。ピエトロとシルフィーも生まれているが、その齢は3歳か4歳と言う所だ、仮に見ていたとしても覚えている訳が無い

「未来が変わる可能性は？」

「判らん。だが……何もやらないでお前はあの悲劇を受け入れる事ができるか？」



カオスの問いかけに返事は返さない、返すまでも無い。受け入れる事など出来ることの出来ない結末なのだから……だが歴史をかえるにしても大きな問題が横たわっている……何も知らない我とカオスの下に未来からの来訪者……きつと横島や美神ならば我とカオスを説得するだろう、だがきつとその言葉は我達には届かない。妻の遺体を奪われた我にはそんな話を信じられる訳が無く、カオスにはカオスで信じるだけの証拠が無いのだから……だが信じる事が出来るだけの証拠があれば？どうだ？全盛期の我とカオスが居れば、ガープと同等とまでは言わないが……一矢報いる事が出来るのではないだろうか？

「ガープの事を伝えるのだな？」

「それしか手はあるまい。分が悪い賭けじゃが……どうする？乗るか？降りるか？」

その問いかけは我にとつては愚問だった。椅子から立ち上がり、2枚の羊皮紙と羽ペン。そしてインク瓶を手にカオスの元へ戻り

「手紙を用意しよう、かつての我とお前に……」

受け入れがたい絶望と慟哭。それを覆す事が出来るやもしれぬと言うのなら……それがどれほど低い可能性だとしても、我はそれに縋りたい

「そう言ってくれると思っていた……変えてやろう。あの悲劇の過去を……」

その言葉に力強く頷き、我とカオスは手紙を書きだした、羊皮紙1枚では足りない、何十枚にも及ぶ手紙……それは今日1日では足りず、一晩経つても私の部屋からペンの音が途絶える事は無かった……

リポート14 嵐の前に その3へ続く

### その3

レポート14 嵐の前に その3

海外から日本の六道女学院で有能な若い霊能者を育てる制度で私は日本に来た。海外の霊能学科の同級生には日本に行くなんて可哀想だねとか、海外のほうが良い先生が多いのにとか、私に同情している人が多かつたけど……私は日本に来て良かったと思っっている

(シルフィーお姉ちゃんも居るし、ピートお兄様もいるし)

ヴァンピールの大好きなお姉ちゃんとお兄様も居るし、それに六道女学院の先生だって私はアメリカの講師の人よりも親身になってくれるし。私個人の才能を伸ばす事に協力してくれる、そう考えるとオックスフォードの霊能学科よりも遥かに六道女学院のほうが優れていると思っっている

「アンちゃん。今日はずいぶんご機嫌だね」

「だってピートお兄様とお出かけなんですよ！すつごく楽しみにしていたんですから！」

ピートお兄様に知り合いの霊能者と一緒に修行をするんだけど、一緒に来るかい？と尋ねられたのが昨日。もちろん私が即答したのは言うまでも無いんだけど、その知り合いの霊能者って言うのがなんでも同級生で、嚴重警戒態勢となっていた理由。魔人だいそうじょうの攻撃で霊体にダメージを受けていたんだけど、それが回復したからリハビリを兼ねて訓練に付き合ってくれないか？と頼まれたらしい

「はは、そこまで楽しみにしてくれるのは嬉しいけど……基礎的な訓練だよ？」

「判つてます！でも基礎は何よりも大事ですから！」

基礎がしっかりしてなければ、出来る事は増えると唐巢神父様も教えてくれますから！と言うとピートお兄様は苦笑しながら、その通りだねと笑う。荷物を手にどんどん街中を進む……オフィス街を抜けて……商店街を出て……バス停を通り過ぎて……

「ピートお兄様？どこへ行くのですか？」

私の予想ではバス停からどこかに向かうと思っていたのに、バス停も通り過ぎたのでどこまで行くんですか？と尋ねる。するとお兄様は近くに見えてきた河川敷を指差して

「あそこだよ、あそこで良く横島さんが訓練してるんだよ」

横島さん？……どこかで聞いたような……少し考えて思い出したと手を叩く

「使い魔学科の臨時講師の人ですよ。猪と、グレムリンと狐を連れてるバンダナの人！」

私は霊具学科なので講師を受けた事はないが、クラスメイトの使い魔学科の子が言っていた。ちよつと不思議な事をいう時があるけど、妖使いとしては凄い人だと

「そうそう、その横島さんだよ。チビ達を連れてるから、こういうところで修行してるんだよ」

確かに妖怪や悪魔を連れていると周りに被害が出ない場所や、安全が確保されてる場所じゃないと訓練出来ないですね

「多分もう来ていると思うから、少し急ごうか？」

「はいっ！」

実は私は少し横島さんに興味があつた。今年のGS試験での特殊な霊能力を見せた事もそうだけど、GSに関する雑誌でも特集が組まれるくらい今年注目されている人だ。授業中に姿を見ることがあつたけど、話す事が出来るのは使い魔学科の生徒だけだから、こうして話す機会があるの嬉しい

「まあ横島さんの周辺は少し変わってるけど、驚かないように」

ピートお兄様にわかりましたと返事を返し、河川敷に近づいた所で私の足は止った。かなり距離はあるが、この距離でも判る

「……あのピートお兄様……凄い霊力の幽霊が2人と巫女さんの幽霊が居るんですけど……」

GジャンとGパンそれに紅いバンダナ……横島さんのいつもの格好だ。その隣には横島さんと同じで今年の最注目GSと言われている芦菫さん……この2人はいつも一緒に見かけるので驚かないんだけど……黒いシャツと赤いスカート姿の幽霊と、その隣のパーカーと

スカート姿の幽霊に近くを飛んでいる巫女服の幽霊……この距離でも凄い霊力を放っているのが判る。ピートお兄様に尋ねるとピートお兄様は溜息を吐きながら

「……うん。1人増えてるね……横島さん何やってるんだろう?」

GSなのになんで幽霊と一緒に居るんだろうか? 変ってるって聞いてたけど、これは正直予想外……

「それに……なんか川の水で何か作ってる人も……」

「うん、シズクさんだね。水神で竜神様の……怒ると凄く怖いから気をつけて」

……ピートお兄様と一緒にだから喜んで来たけど……もう少し考えて返事をするべきだったかもしれない。ま、まあそんなに怖い所じゃないだろうと思いい階段を下りていると

「みむう!!」

放電していたグレムリンが気合満点の鳴き声を上げ、2M近い氷塊に飛び蹴りを叩き込むが、サイズの差もあるので氷解はびくともしない

「みむむむむーッ!!!」

と思っていたのだが、放電したまま短い足を連続で叩き込む、途中で回転して回し蹴りやオーバーヘッドキックも組み合わされ、見る見るうちに氷塊は削られ、挟られて行く……その凄まじい現象に何処から決め技ッ!と聞こえた気がした

「みむーッ!!!」

とどめと言わんばかりの勢いをつけた蹴りが氷解に叩き込まれ、グレムリンは氷を貫通する。そしてボロボロにされた氷柱がはじけ飛ぶのを見て

「……ピートお兄様。オックスフォードじゃグレムリンは弱い悪魔って聞いてたんだけど……」

「横島さんのグレムリンだけだと思うよ? あんな規格外のグレムリンは……」

もしあんな強力なグレムリンが自然に大量発生するなら、GSが束になっても勝てないんじゃない? ……と言うかどんな風に育てばあんなに

恐ろしいグレムリンに育つのか……私はそんなことを考えながら、ピートお兄様と一緒に横島さんの方に向かうのだった……

シズクからやつと身体を動かして良いと許可が出たので、早速鈍っていた身体を鍛え直す事から始めた。訓練に付き合ってくれるかなあ?と思いきや雪之丞とタイガー、それにピートにも電話で声を掛けたのだが……

『横島さん。すまんこつてす。明日からエミさんと除霊なんジャー』  
『誘ってくれたのは嬉しいが、白竜寺は今バタバタしている。また今度誘ってくれ』

2人とも忙しかったらしく、OKを出してくれたのはピートだけだった。まあ急な話なので、断られて当然と思っていたのでピートだけでもOKしてくれてよかったと思っている

「あんまり無理をしないでゆっくり霊力を循環させてね」

【急にやるとチャクラに負荷を掛けるからな】

蛍と心眼の言葉に頷きゆつくりと霊力を循環させていく。上手く説明出来ないのだが身体の中から暖かくなっていく……そんな感じだ。

【チビツエーッ!】

【本当ですね!チビの強さなら主殿を護れますよ】

チビとうりぼーも川原で訓練をしているのだが、まあめちやくちや強い。2Mの氷塊を粉碎するハムスターサイズの生き物……

「チビとうりぼーってさ、俺より強いかも?って思うんだが」

思わずそう呟くとシズクがそんなことはないぞ?と呟く

「……チビもうりぼーも体格相当の霊力しか蓄えることは出来ない。短い時間全力を出しているだけで、持久力はそれほど高い訳じゃない」

見てみると言われてもう一度チビとうりぼーに視線を向けると。川原に寝転がり眠る準備をしている

「霊力を使いきったから眠るのよ。全力で動けるのは数分って所だけ」

ら、それで考えると横島のほうが強いわよ?」

まあ爆発力は認めるけどと苦笑する蛍。短時間だとしてもあの攻撃力は正直脅威だと思うんだけどなあと思っっていると

「横島さん。お待たせしました」

「おう、ピート……と誰?」

ピートが来たのだが、隣に見覚えのない少女の姿がある。しかも何か怯えている様な素振りを見せていて首を傾げる

「横島さんの周囲に驚いているんですよ」

あーつと納得する蛍。そんなに俺の周辺っておかしいかな? チビにうりぼーに妖怪狐と英霊2人に……巫女幽霊

「あれ? 俺の回りってこんな混沌つとしてたっけ?」

思わずそう呟くと、今更と全員に言われてしまうのだった……まあそうは言われても、俺自身はこのこの環境を気に入っているので、別にどうこう言いたい訳じゃないんだよなと苦笑するのだった

「それでその隣の子誰?」

一緒に来ているって事は霊能者だよな? でも見覚えがない子だから誰? ともう1度尋ねる

「六道女学院の霊具科に留学している、アン・ヘルシングです! 今日はこちらよりしくお願います!」

六道女学院の子か……結構六道女学院にはお邪魔してるけど、使い魔学科の子くらいしかあったこと無いんだよな。色んな学科があるとは聞いてたけど、他の学科の生徒を見るのは初めてかもしれない。よろしくと頭を下げると、もう1度よろしくお願いますと頭を下げるアンちゃんに礼儀正しい子だなと思い、それから3時間。俺と蛍、それにピートとアンちゃんて霊力の循環の訓練を始めるのだった

「ふう。たまにはこういう基礎的な訓練もいいですね」

ピートが隣に座って座禅を組みながらそう呟く。霊力の練り上げと循環……霊能者の最も基礎的な訓練だが、これを疎かにしてはいけないと散々美神さんと蛍に言われてるからな

「んーんんーっ!!」

「大丈夫?」

「アンちゃんが顔を赤くして唸っているのだが、全然上手く行っている様に思えない。六道の生徒でも出来ない事があるんだなと思った」「えへへ……あんまり霊力の循環って得意じゃないんですよ。私はこういうのを武器にしているんで」

ポシエットから取り出されたのは銀色に輝く拳銃……本物つと思わずアンちゃんから距離を取る

「あ、それ見たことあるわ。霊力を持たない人でも悪霊と戦えるって奴よね？もう実用化されてたんだ？」

「はい！お詳しいですね！ヘルシングの家で研究していた霊具なんですけど、そのデータ取りをしてるんですよ」

蛭とアンちゃんが楽しそうに話を始める。見ている分には華やかな光景なんだけど、話している内容がいささか物騒すぎる。霊体ボウガンよりも強力で扱いが楽って言うので拳銃型なんです！と言うアノンちゃんと、興味あるわね。私もデータ取り手伝いましょうか？美神さんも喜ぶと思うけど？本当ですか!?!是非お願いします！と言う物騒な会話に軽く頭痛を覚える

「……横島あんまり根を詰めすぎるなよ？病み上がりと言うことを実感しろ」

「そうですね、横島さん。適度に休憩と水分補給をしてくださいね」

シズクとおキヌちゃんに休憩しろと怒られ、昼時も近いという事でそのままお昼休みにする事になった

「ほう……見たことない料理ですが、美味しいですね！」

「味も良いし、霊力も回復する。本当に横島の家人居候出来て正解じゃな！」

美味しいと笑いながらから揚げを食べる牛若丸と煮物を頬張るノツブちゃん。そんな2人を見てアンちゃんが目を白黒させながら

「なんで、幽霊なのに物を食べれるんですか!?!」

「凄い幽霊だから」

凄い幽霊だと物が食べれるんですか!?!と騒いでいるアンちゃん。やっぱり牛若丸とノツブちゃんって普通じゃないんだなあと改めて実感する

「みむー♪みみー」

「ぶぎゅー♪」

昼寝を終えたチビとうりぼーが擦り寄って来る。俺はシズクに手を伸ばしながら

「チビとうりぼーのご飯くれ」

「……ほれ」

トートバックからタツパーを取り出すシズク。それを受け取りチビとうりぼーの前に置く

「みむー♪」

「ぶぎゅー！」

手を合わせてからタツパーを覗き込むチビと少し大きくなってタツパーを覗き込むうりぼー。良い天気で日差しも風も良い感じだからピクニックに来ているって感じだなと思う

「はい、横島。ジューズ」

「ありがと、タマモ」

丁度喉が渴いたと思った所なんだよなと思い、精霊石で人化していたタマモが差し出してくれた紙コップを受け取る。アンちゃんが狐が女の子に!?!と驚いているのを見て、これ普通は驚く所なんだと初めて知るのだった……

「アンは霊具に頼りすぎだな。もう少し霊力の扱いを覚えると良い、身体強化くらいは習得しておいて損はないぞ?」

昼食の後心眼から色々とアドバイスをして貰っているんだけど、アンちゃんはバンダナから眼が!?!とまた驚いていた。なんかアンちゃんが居ると自分がいかに普通じゃないかと思いき知らされるような気がする。あとタマモ・チビ・うりぼーは昼食後、俺の膝の上でガチの昼寝を始めてしまったので、お昼からの訓練は中止となり、夕方から訓練を再開する事で決まった

「それとピートは良い具合に力を混ぜる事が出来るようになってきたな、その調子だ」

「ありがとごさいます。心眼さん」

つとこんな風にあドバイスをしてくれる心眼の話を知っていると、



背中にひんやりとした感じがして振り返る

「どうかした？」

「いえ、元気になってくれて嬉しいなって。心配してたんですよ？」

美神さんの仕事を手伝うのが忙しいと言っていたおキヌちゃん。あんまりお見舞いに行けなくて心配してたんですよ、皆に心配を掛けてばかりだなと改めて反省する。せめてもう少し心配を掛けないようになれば良いのだが……

「……あんまり焦る事はない。ゆっくり時間を掛けて成長すれば良い」

【そうですよ、主殿。無理は禁物です】

シズクと牛若丸に焦るな、無理をするなと言われやっぱり心配を掛けてるなと苦笑する。ノツブちゃんは満腹満腹と言って、さつき昼寝を始めた……相変わらず自由なのだが、それでこそと思う。ノツブちゃんの人徳と言う奴なのだろうか、いい天気だし、修行もこれで終わりなら俺も少し昼寝するかと胡坐をかいたまま寝転がると、バナダナを少しずらしてアイマスク代わりにする。近くにひんやりとした空気を感じるから、おキヌちゃんかシズクが側に来たんだろうと思いつつ昼寝を続けるのだった。実際は両サイドにおキヌちゃんとシズクが居て、文字通り両手に花（猛毒）状態だった

「なんとも……言えないですね」

幽霊と水神に悪魔に妖怪に妖狐と人外に囲まれて平然と昼寝をする横島。その姿にピートは苦笑する事しか出来ず。この状況で怒るはずの蛸はと言うと

「横島さんって使い魔学科の生徒に割りと人気なんですよ？」

「その話詳しく」

六道女学院に通っているアンから横島の人気などを聞いていて、昼寝を妨害する余裕は無い状況だった……なおこの訓練の後、横島が単独で六道女学院へ向かう事が禁止になったのは言うまでもない……

だいそうじようを退ける事が出来たとブリュンヒルデとマルタか

ら報告書が上げられた。この時の報告書とアシユタロスからどうしても報告する事があると言う事で、再び最高指導者の会議室で会議を行うことになったのだが

「やあ、遅かったね」

紅茶のカップを手に、早く座りたまえよと笑うルイ様に我達全員的心が行き成り折れかけたのは言うまでもなく、幸先不安な状態での会議が幕を開けたのだった……

「それにしても思い切った作戦を取るね。アシユタロスをスパイとして過激派として追いつつ、その実は神魔のスパイとして扱う。うん、思い切りのいい一手だよ、そしてこのトトカルチョ、これも面白いよね」

……我とハヌマンと竜神王の刺すような視線が最高指導者に向けられる。隠遁している神魔を協力者にするという目的は間違いではない、だが最も危険な相手を引き寄せてどうすると思わず叫びたくなかった

「後日トトカルチョには参加させて貰うとして、今回の魔人と何か大事な話があるんだろ？私にも教えてくれないか」

にこにここと笑うルイ様になるようになれと思い、我はブリュンヒルデとマルタの報告書をスクリーンに映し、魔人についての話を始めるのだった……

「ブリュンヒルデ、マルタ。両名の報告では魔人は事前に探知が出来ず、しかも人間に擬態するらしく発見が困難との事だ」

神魔の諜報班が追跡をしていたが、見失ったのは人間に擬態された事だと推測される

「ふむ、それは厄介ですね。警戒態勢を強めるにしても……」

「何時現れるかも判らない相手に神魔の戦力を分散する訳にはいかんしなあ」

キリストとサタンが腕を組んで唸る。最近ではガープの動きも無い、だがガープと魔人の両方に警戒態勢を取り続けなければこちらが疲弊していくだけであり。かと言って警戒を緩めれば、その隙に強襲や異常な魔術実験を行う可能性の高いガープの警戒を緩めるわけには……

「それについては私から報告がある。ガープ達の陣営は暫く首脳陣が表立って動けない壊滅的な打撃を受けている可能性がある」

アシユタロスの報告を聞いて、流石の最高指導者も、ハヌマンも勿論我も顔色を変える。

「へー壊滅的な打撃……その根拠は？」

「先日私の人間界の拠点に古き神が訪ねてきました。冥界の女主人エレシユキガルです」

その言葉に慌ててアシユタロスから提出されたりレポートに目を通すと、女神の写真が添えられていた。写真越したが、圧倒的な神格を持つその女神は間違いなく古き神々だろう……だがどうして？古き神々は別の時空に居るはずなのだが

「ガープが英霊召喚を用いて、神霊召喚を行ったと。自分を制御、もしくは制圧する為にホムンクルスに押し込められた物の……不敬と言う事で制裁を加えたと彼女は言っていました」

女神エレシユキガルの気性の荒さは有名だ。自分のいた世界から無理やり呼び出され、更に従えなどと身の程を弁えずに言われれば憤怒するのは当然だ、だがそこまでのダメージを受けているのなら一気に畳み掛けるチャンスだ。そうすれば、横島達に起きるかもしれない悲劇を全て回避する事ができる

「アジトの場所は？ダメージを受けているなら一気に畳み掛けるべきだ、横島達の安全も確保出来る」

ここに居る全員が同じ考えだ。そして竜神王が問いかけるとアシユタロスは溜息を吐きながら、

「私もそう思ったのですが、ホムンクルスの器に押し込められ、神性などが半分になっていてもそこは死の女神。どちらかに過度に味方することはしないとと言う事でお互いに不干渉であると契約する事になりました」

何を勝手など言い出すことは誰も出来なかった。古き神の力は我々を超えている、下手に敵対する訳には行かないのだから

「それで、ガープ達は神の逆鱗に触れた。そのダメージの具合は？」

「恐らくは直接戦闘に出れるレベルではない筈。もし直接戦闘に出れ

るのなら、だいそうじょうの出現で浮き足立っている神魔に強襲を仕掛けるはず」

推測とこうあつて欲しいと思う言葉だが、アシユタロスの言っている事は的を射ている。数で劣るアスモデウス陣営の基礎戦術は終始強襲か、罨をいくつも用意し、準備に時間をかけた物だ。前者はアスモデウスが実権を握り、後者はガープが準備をする。知略に長けたガープと軍略に長けたアスモデウス。その2柱が健在だからこそ、アスモデウス陣営は脅威となっている

「仮に回復していたとしても、負傷、もしくは激怒した死の女神の神通力に触れたアスモデウス達の戦力は半分以下の筈。直接的に動く可能性は低いです……しかし」

「能性は低いです……しかし」

「しかし……あれだね？英霊召喚を試みて戦力としている可能性がある」と

言葉に詰まったアシユタロスにルイ様がそう尋ねる。その通りですとアシユタロスは頷く

「勿論英霊もまたそう簡単に屈する事はないと思いますが……ガープの魔術を考えると、属性反転は十分にありえる話です」

属性反転。神魔でさえも属性が反転し、天使が悪魔となり、悪魔が天使となる。それは肉体ではなく、魂こそが自らを作り上げている神魔にとって常に想定しなければならぬ現象だ

「対策としては異常な魔力や神通力の流れに警戒する事になると思います」

神魔が手を尽くしても発見する事が出来ないガープ達の拠点を見つけることが出来ない、その不甲斐なさに思わず唇を噛み締めた

「今出来る最善を尽くすべきですね、どうやっても私達は後手に回る」  
「護りって言うのは難しいものやからなあ」

攻める方は自分の好きな時に、好きなタイミングで仕掛けることが出来る。だが護りは違う、いつ攻めてくるかも判らない相手を常に警戒し、相手よりも強靱でなければならぬのだ。

「魔人とガープ達が相手だからは言い訳にはならない。次は我らが先

手を取る、その為に我は更なる神魔を人間界に駐在させる事を提案する」

「神魔だけではなく、可能ならば英霊召喚を試みるのもいいかもしれないですね」

「博打やけどな」

そこからは会議はより白熱した物となり、ふと気が付けばルイ様の姿がない事に気付く者は居らず、会議は予定された時間を超え深夜まで続いた

「ベルゼブル、私も横島と話をしてみたい。準備を」

「ルイ様!?!」

突然人間界に現れた自身直属の上司の登場に悲鳴を上げた中間管理職の姿を知る者は誰も居ない……

レポート14 嵐の前に その4へ続く

## その4

レポート14 嵐の前に その4

美神さんが除霊の打ち合わせがあるから迎えに来ると聞いていて、言われていた時間の少し前に電話がなった

『ヤッホー、横っち。元気か?』

それは東京の事務所でアイドルと映画俳優をしている銀ちゃんからの電話だった。香港で再会して、歌いたいと言うセイレーンさんを紹介して……顔を見合わせることは少ないが、大阪に居たときの友人からの電話と言うのは正直楽しい。だが除霊の打ち合わせの時間だから電話を切ろうかと悩んでいるとシズクとノツブちゃんが

「……除霊に行くわけじゃない、私とノツブで話を聞いてくる」

「友は大事じゃよ?語り合えるときに話しておかんと、家を放火されるらしい。と言うか、ワシの歴史書見たけど、あれヒドイネ!」

ケラケラ笑うノツブちゃんと美神には私が説明しておくと言うシズクの言葉にありがとうと眩き、俺は久しぶりの銀ちゃんとの会話を続ける事にしたのだ

『横っちもマジでうちの事務所に登録しいひん?新撰組でめっちゃくちゃ噂一人歩きしてるのしつとる?』

「いや、知らんし。あれ、映画の中に引きずり込まれたんだぜ?」

マジで!?!と驚く銀ちゃんにマジマジと繰り返し、その時の話をする  
と銀ちゃんは引き攣った声で

『災難やったなあ』

本当にその通りだ。どこの世界の人間が映画の中に引きずり込まれると思うだろうか

「あ、でも、沖田を演じた女優さんの外見の幽霊と友達になったぞ?よく吐血するけど」

『あーあの人か、あの人もう女優さん引退するらしいぞ?地元の剣道場を継ぐとか』

ガチの剣士らしいんだけど、知り合いの事務所の社長さんの熱意に

負けたりしいと教えてくれる銀ちゃん。どうもあんまり映画やドラマには興味のない人らしい、仕事だからやっていると言う感じと聞いて驚いた

『あーそれとなあ、横っち。頼みがあるんやけど?』

「金はないし、アイドルにはならんぞ?」

金はあるにはあるのだが、ノツブちゃんに加えて、牛若丸。それにうりぼーも良く食べるので食費がちよつとやばい、今後美神さんに相談する方向性ではあるが、GSだから金があると言う訳じゃないし、俺はGSになりたいんであつてアイドルになりたい訳ではない

『いや違い違う、あ、でもそんなに違わん?』

「切つて良い?」

受話器越しに待つてくれつと叫ぶ銀ちゃんは疲れ果てた声で

『俺もさあ、毎日横っちを何とか事務所にとかわれるの嫌なんよ、疲れるし、横っちがアイドルになりたくないのはよう判っているし……今やつてる映画とドラマと歌の収録終わったらさ、雲隠れするから匿つてくれ』

……切実過ぎる。俺としても幼馴染だし、手助けしてやりたいと思うが……

「除霊とかで家を開ける場合もあるぞ?」

『そんな時は邪魔せんから、俺も連れてつてくれ、役作りの勉強してたで押し通すから』

そんなことを言われてもなあ、俺は美神さんの所の助手だ。それは俺が返事をして良い話ではない

「俺の所に泊まりに来るのはまあ良いわ。色々居るけど良いよな?」

『……ちなみにその色々って?』

水神様が1人、幽霊2人、グレムリン1匹、増える猪1匹、狐1匹と言うと。どういう生活してるん?と言う銀ちゃんの呆れた声が出たが

『全然ええよ。むしろ、それこそ役作りに役立つやろ』

「じゃあ泊まりにくるのはOK。でも除霊についてくるのは、俺じゃ決めれん。美神さんとか琉璃さんと直接交渉してくれ」

多分駄目だと思うけどなと心の中で呟く、除霊と言うのは危険な仕事だ。霊力があるならまだしも役作りでは許可は下りないと思う

『駄目もとって判ってるから十分や、もし駄目ならどつかのホテルにでも泊まるわ……えっ！あ、はい！今行きます！すまん、横つちもつと話をしたいけど撮影の時間やから、また詳しい日程が決まったら電話する！』

慌しく電話を切る銀ちゃん。やっぱりアイドルって忙しいんだなと思っていると今度はチャイムが鳴る

「はい、今行きます」

リビングから今行きますと声を掛けて玄関に向かい。どちらさまですかー？と言いながら扉を開く

「あれ？高城さん？」

そこには香港で出会った金髪の少女と、その後で青いワンピース姿で微笑むお嬢様と言う感じの少女の姿があった……

胃が痛い……私は何度目になるか判らない溜息を吐いた。横島の護衛で出遅れたのは認めよう、だいそうじようと戦っている間に合流出来なかったのは私が悪い。だからと言って何で私まで横島の家に「麦茶でいいですか？紅茶とか淹れれなくて」

「ああ、構わないよ。急に訪ねて来た私達が悪いのだからね」

横島から麦茶の入ったコップを受け取り、このまま胃薬を飲んでしまいたいと思った。だが尋ねて来て、その人物の家で胃薬を飲む……どう考えてもちよつとおかしい人間なので我慢する事にする

「えーつとそれで何の御用でしょうか？美神さんに仕事の依頼ですか？」

明らかに困惑している様子。そりやそうだ、香港で会った私が急に訪ねてくれば警戒して当然だろう。姿は現していないが、横島のバナナからも観察しているような気配を感じる

「ああ、君に会いに来たのはこれや」

ルイ様が笑って横島に差し出すのは、何かの雑誌。それには横島の写真が写されていた



「……なんですか？これ」

「今年の若手GSの紹介雑誌だね。面白い霊能を持っていると書いてあったので会いに来たと言う事さ。ああ、それと自己紹介が遅れたね。私はルイ、ルイ・サイファーと言う。一応これでも海外で霊能関係の仕事をしているんだ」

ルイ様!?!何時の間になんな設定を付け加えたのですか!?!しかもなんでですか!?!その名刺は何時用意したんですか

「サイファー・ゴーストカンパニー社長!?!え、え？年上?」

名刺とルイ様を交互に見て困惑している横島。ついでに私も見ているが、私自身も困惑しているのでこっちを見ないで欲しい

「まあこうして訪ねて来たのは、君をスカウトしようと思ってるね。美神令子が君に払っている給料の10倍、それと様々な福利厚生と住居を用意しよう。そう悪い条件じゃないと思うよ?」

……どうしよう、本気で胃薬が飲みたくなって来た。なんで横島をスカウトしているんですか?私そんな話聞いてないですよ?最高指導者の許可は得ているんですか?とか色々尋ねたい事は山ほど出てくる。

「そういうのは結構です。そういう用件で訪ねて来たのなら、お帰り願えますか?」

ルイ様のスカウトに対して横島の返答は拒絶だった。丁寧な敬語には強い不信感が込められているのがよく判る。それに……部屋の中にいるグレムリンと狐それに猪?猪が唸り声を上げて警戒態勢に入っている。無論脅威とは思っていないが、この状況は余りにも良くない

「ちなみにその理由だけ聞かせてもらっても良いかな?」

「俺は美神さんに師事しています、契約の条件が良くても、どれだけ高待遇でも俺は貴女の所に移籍するつもりはありません」

きっぱりとした口調で横島が告げるとルイ様は楽しそうに笑いながら、名刺を破り捨てて

「あはははは!!冗談、冗談だよ。私みたいな小娘が会社なんて持つてる訳がないだろ?」

その笑い声に今までの話が冗談だったと横島は悟ったのか

「そうだったんですか、いやー、本当どうしようかと思いましたが」

と先ほどまでの警戒心むき出しの顔から人の良い顔で笑い始める

「それでルイさんと高城さんはどうして日本へ？」

「観光旅行に来たのさ、その中で君の事を雑誌で知って見に来たって所だよ」

海外旅行ですか、お嬢様って感じですよねーつと能天気にならう横島。とりあえず、これで安心かと心の中で小さく溜息を吐く

「いやー照れるつすねえ、イケメンじゃないのに」

頭をかきながら笑う横島。確かに整った顔と言うわけではないが、愛嬌があつて、2枚目ではないがそれほど悪い顔と言う訳ではないと思う。むしろ魂を重要視する神魔からすれば十分すぎると言える

「おや？顔はそれほど大事かい？まあ良ければいいかもしれないが、大事な事はその心だと思うよ。顔が良くて、性格が悪いなら私は君のような人間のほうがよっぽど好感が持てるよ」

ルイ様にウインクされてうろたえる横島を見て、ルイ様は更に上機嫌に笑いながら

「社長と言うのは嘘だけど、私はこれでもそれなりの名家の出でね。彼女も勿論私と同格か、それくらい有名な所のお嬢様だ」

突然自分が金持ちだと言い始めたルイ様の真意がわからない、横島もその言葉の意味を判らず困惑している

「色々いわく付きの霊具を持っているんだが、その除霊を頼むかもしれないね。良ければ、美神除霊事務所の連絡先を教えてはくれないか？」

横島から美神の所の連絡先を手にいれ、上機嫌で横島の家を後にするルイ様に先ほどの言葉の真意を尋ねる

「うん？女好きと聞いていたが、私とお前に鼻の下を伸ばすわけでもない、金に眼が眩む訳でもない。マタドールとの戦いを見ていたが、中々好感の持てる人間だ。だが私が直接何かをする訳には行かないだろう？」

今でも強い発言力を持っているが、ルイ様は既に隠居した身。表

立って動く立場にはない

「だけど横島を浚われる、もしくは殺されればこっちの負けだ。彼は特殊な力を持つているからね」

眼魂もそうだが、横島は普通の霊能者とは違うと断言したルイ様は楽しそうに笑いながら

「彼にはもつと強くなつて貰いたい。だから適当な霊具に呪いをかけて、預ければいいさ」

霊具の除霊という名目で美神達に霊具を預け、呪われた品だからとそのまま譲り渡す

「畏まりました。何か適当な霊具を見繕っておきます」

武器よりも防具を重点的に頼むよと言うルイ様にわかりましたと返事を返し、その後ろを歩きながら

「それでどこへ向かうつもりなのですか？」

「うん？オーデインの娘をからかいに行こうと思つてね」

……ブリュンヒルデすまない、私はルイ様に逆らう事が出来ないんだ。決して道づれとか思つていないからな？と心の中で呟きながらルイ様をブリュンヒルデの家まで案内するのだった……

「なんか怖い人たちだったなあ……」

横島はと言うと、ルイから預かった2人分の連絡先をメモした紙を机の上に置き。2人をずっと警戒していたチビ達を抱き抱える

「チビ達も怖いって思つたんだよな？」

「みーむうー！」

「ぶぎゆうー！」

「コーンー！」

腕の中でその通りと鳴くマスコット軍団にだよなーと頷き、今度は心眼にルイと高城の評価を尋ねる

「心眼はどう思う？」

【悪い人間ではないと思うが、信用するにはまだ足りないな。常に警戒して接触するべきだ】

心眼も自分と同じ考えと知つた横島はそうだよなと笑う。横島の中でルイと高城は悪い人間ではないが、警戒するべき人間として記憶

される事になるのだった……

英霊召喚ではなく神霊召喚の実験を行った。それはよかつたのだが、古き神々の力を見誤っていた。それが最大の誤算だったが……ホムクルスの器に入れたと言うのにあそこまでの力を発揮するとは想定外だった。アスモデウスとアスラのダメージは私よりも遥かに酷く、今だ動けるレベルではない。私は幸いにも軽症だった事もあり、こうして動いているがまだ神魔同士で戦えるレベルではない。人間相手ならまだしも、ここで戦うのは自殺行為だ

(好機を逃したな)

だいそうじようが暴れている間に襲撃をかければ、かなりの戦果を上げることが出来たと言うのに……だが過ぎた事を悔いても仕方ない。全ては私の計算違いが引き起こした問題なのだから

「これで良しつと……」

作っていた機械の最後のボルトを締め上げる。作り上げたのは地獄炉だ、本来は人間界で魔族の力を最大に発揮する為の道具であり、魔力を自動生成する為の道具だが……私はこれを本来の使い方で使うつもりはなかった

「地獄炉同士をリンクさせ、擬似的なタイムホールの生成と擬似時間移動の実験」

地獄炉と言うのはそれ自身が膨大な魔力炉だ。仮に破壊されたとしてもその周辺には何百年経っても消せない痕跡が残る。その魔力路の痕跡と私の作り上げた地獄炉の波長をリンクさせる。それにより地獄炉の魔力を用いた自身と全く同じ複製を作り出し、意識のみを時間移動させる

「私にとって都合のいい時代からな」

地獄炉を作れる存在となるとかなり数は限られる、まずはこの私、ガープ。次にアシユタロス、そしてプロフェッサーヌルの3人くらいだろう、そして今時間移動を出来る条件を満たしているのはヌル1人だけだ

「惜しい事をした」

プロフェッサーヌルは個人的に会った事がある。1242年……人間との共存を願った愚か者の始祖の吸血鬼「ブラドール」に深い絶望と嘆きを与えるために、その養父を狂わせた時。ドクターカオスが拠点としていた片田舎で話をしたのだ

「全世界に人造魔族を供給して争わせる。それ自体は有益だったんだがな……」

ただドクターカオスの妨害に会い、死んでしまったのが惜しいと思っていたが……地獄炉同士をリンクさせ、私自身が過去へ跳ぶ事で有益な人材を引き込み、魔力などが満ちていた時代での実験を行う。今は前線で指揮をとるアスモデウスが負傷、アスラは……そういうのが無理な上に実験に同席した中で一番重症だ。とても動ける段階ではない、つまり今の私達の陣営は雑兵が多いがリーダー格が不在なのだ。これでは組織としては成り立たない

「まずは遠隔によるヌルとの通信、次にヌルに英霊召喚をさせる」

地獄炉での時間移動の利点は地獄炉を用いての時間移動は意識だけの時間移動。これならば最高指導者に見つからないという利点があるが、その反面本体での時間移動ではないので、何らかの後遺症を負う可能性がある。ゆえに段階を踏んで実験を行うのだ……

「さてと召喚する英霊だが……まずは自分で試してみるか」

神霊召喚は失敗した、過去でやるにもまずは実証データが必要か……幸いにも動けない間集めておいた魔力はこれでもかとおる

「さてとそうとなれば触媒は……」

過去でヌルに召喚させる英霊は決まっている。これも当然実験の為に色々試すつもりだが、失敗したのでは意味が無い。私の作り上げた理論で英霊を召喚出来るか？そこが一番重要なのである。一度召喚さえ出来れば後はいかようにも改造出来る、だが召喚出来なければ全ては無意味なのだ。そして今の私達の陣営に足りない者を召喚しなければ意味が無い

「ふむ。ではこれを使うとするか……」

私が長年コレクションとしていた聖遺物から2つの品を取り出す。

1つはボロボロの旗、そしてもう1つ金属で出来たカメレオンの装飾を取り出し、私は地獄炉の起動設定をすませその場を後にするのだ  
た……

リポート15 変る未来 その1へ続く

## リポート15 変る未来

### その1

リポート15 変る未来 その1

テレサに気付かれないように地下研究施設に来るようにとドクターカオスに命じられた。これは今までとは全く違う、テレサを研究施設に入れてはいけないとは言われていたが、気付かれるなど言うのは初めてだった

「じゃあ姉さん。横島とシズクの所に行つて来るから」

「はい、気をつけて行つて来て下さい」

どうやってつと思つていたが、それは思つたよりも遥かに簡単だった。テレサが横島さんとシズクさんの所に最近良く出掛けている、気付かれないようにと言われたその日にテレサが横島さん達の所に出掛けてくれたのだ。これで大丈夫だと安心して地下研究所に向かう

「思つたよりも早かつたな、マリア」

「はい。テレサが横島さんの所に行くと言うので」

そうかと笑つたドクターカオスだが、次の瞬間には真剣な表情になり自分の前に座るようにと言う。その異様な雰囲気には只事ではないと思ひ、緊張しながら座るように言われた椅子に腰掛ける

「マリア。お前は覚えているか？横島と美神と共に過去に行つた事を」

「勿論覚えています。ドクターカオス」

私は人造人間だ。記憶を忘れるようには出来ていませんと言うとそうじゃなつと笑う

「では単刀直入に言おう。もう直ぐお前達が過去に行くときが近づいている。その時と今の違いは判っているな？」

……それは勿論判つている。横島さんと過去に行つた時は私は電力で稼動し、機械的だった。だが今の私は人間に近い身体をしている、あの時とはまるで状況が違うのだ

「逆行し、世界が変わつたが大筋は変わらない。だからお前は近い内に、そ

う確実に横島達と共に過去に行くじやろう……ワシとブラドローは知らない記憶を思い出した。それがきつと過去に横島達が向かった事で生まれた差異だと思う」

知らない記憶……ブリュンヒルデさんと出会った時のような、頭痛を伴う世界の修正力の事ですね

「お前ももしかしたら思い出すかもしれないが、ワシとブラドローが見たのは、ブラドローの養父と共に居るガープの姿じゃった。そう、あやつの謀略でワシとブラドローが戦うことになった時の話。お前がまだ完成していなかった、だから知る由も無いと思うが……ワシもまたガープの謀略に巻き込まれ、いらぬ戦いとブラドローとピエトロ達を悲しませる理由となってしまうた」

ブラドロー伯爵は死んだ妻の遺体を受け取りに来た、だがガープによつて狂わされていた養父はブラドロー伯爵を悪としてドクターカオスを雇った。それがガープの謀略とも知らずに……

「前の転移とは異なる場所、異なる時間に転移する可能性が極めて高い。若いワシやブラドローに先に遭遇するかもしれない、だからお前にこれを託す」

私の前に差し出されあのは分厚い2通の便箋。それぞれにドクターカオスとブラドロー伯爵のサインと刻印が刻まれている

「これがあればきつとワシもブラドローも話を聞いてくれるじやろう。ガープがワシとブラドローを争わせたのは、ワシとブラドローが手を組む危険性を考慮したと考えている。じゃから過去に行くのなら……ワシとブラドローを味方につけよ。そうすればガープとだって戦える」

差し出された便箋を大事に胸の中に仕舞う。これは賭けであり、今の歴史を変えること。だけどそれで救える者があるのなら私はそれを救いたい

「それとこれじゃ、トカゲデンワ。もし分断された場合霊波通信で連絡が取れるし、念の為にワシとブラドローのメッセージも吹き込んである。これも説得材料になるだろうし、美神達に見せれば現状を理解させるのに役立つじやろう。実験段階の未来予知システムとでも言い訳しておけ」



出来れば使って欲しくは無いがなと笑う、ドクターカオスの手から飛び立ったキュウイーつと無く赤い機械的なトビトカゲは、空中で携帯電話の形に変形する。それを受け取り

「判りましたドクターカオス。私は託された使命を成し遂げて見せます」

頼んだぞマリアと笑うドクターカオスに任せてくださいと頭を下げる。するとドクターカオスはこれは備えじゃと言いながら、私に両手を差し出すように言う。言われた通りに差し出すと、ドクターカオスは私の腕部装甲を展開し、擬似筋肉に包まれた骨格に何かをセットする

「精霊石を装填する事で、精霊石の霊力をお前の霊力として扱う事が出来る。じゃがこの技術はワシにしか出来ぬ、中世の全盛期のワシですら再装填は出来ないじゃろう。良いか？それはお前の切り札となる、使い所を間違えるな。良いな？武装は中世のワシに用意して貰うんじゃ」

視界の1部に表示されたゲージ、これが精霊石の残存霊力なのだろう。私を心配し、様々な装備を用意してくれたドクターカオスの姿に、私は歴史を変えてみせると強く誓いを立てる。何時過去に行くかは判らない、だが必ず行く事になる。

「私は必ず成し遂げて見せます」

「ああ、頼む。我が愛しき娘よ」

柔らかなく微笑むドクターカオスに任せてくださいともう1度言い、私は地下研究施設を後にするのだった……

「先日ドクターカオスから連絡があつた。中世に跳ばされる時期が近づいていると」

お父さんに呼び出され、告げられた言葉は私の知らない事件の内容だった。お父さんとガープに匹敵する魔界工学の権威らしいのだが、過激派であり中世で地獄焔を使った実験をしていたと聞いている

「何時飛ばされるか全く予想が付かないが、横島君、美神さん、螢、マ

リア、ドクターカオスの5人が揃っている事が条件になっている。

常に破魔札、精霊石、神通棍は携帯しておいた方がいい」

中世といえれば現代よりも霊力も魔力も桁違いに濃い場所。そんな所に軽装で行けばどうなるかなんて火を見るより明らかだ

「判った。ちゃんと持っておくね」

それで良いと笑ったお父さんにありがとうと呟き、美神さんの事務所に向かう。除霊がある訳ではないが、念の為に美神さんにも道具を持っていて欲しいと思ったからだ

「あら蛍ちゃん、いらっしやい、今日は仕事無いけどどうしたの？」

書類整理をしている美神さん。上機嫌なのか、鼻歌交じりで書類にずっとサインを書き込んでいる。さて霊具を持っておいて貰うのに都合の言い訳は……つと考えたのだが、美神さんは精霊石のペンダントにピアス。それに服の下もプロテクターを着込んでいるのが見えた

「美神さん。その装備どうしたんですか？」

仕事が無いと自分で言っていたのに、なんでそんなに重装備なんですか？と尋ねる。すると美神さんはそう言えば、そうねと呟き

「昨日の夜柩から電話があつてね。また何かに巻き込まれるかもしれないよって一方的に伝えてきたのよ」

後で横島君にも伝えようと思っっているんだけどねと言う美神さん。

私は心の中で柩にナイスと呟いた

(チョーカーを貰って、これでボクは横島の所有物だねっとか言っただのを許すわ)

キチガイと言うのは判っていたが、まさか自分でチョーカーを要求して、首輪だからとか言うなんて想定外レベル……あ、いや、ちよつと良いかもっじゃなくて!!!一瞬脳裏に過ぎった危ない妄想を振り払い。横島を護ろうとしてくれた事に感謝する

「二応、これ蛍ちゃんの分のペンダントとピアス。最高レベルとは言わないけど、それでも結構の純度の物よ?」

ケースに収められたペンダントとピアスを受け取り、ありがとうございませすと頭を下げる

「横島はどうするんですか？」

横島はペンダントはクロさんから貰った牙のペンダントをしている。それにピアスは横島には似合わないと思う

「一応ブレスレットと指輪を用意してるわ。ほら、GS試験でそういうのを媒介にしてたし」

ああ、そう言えばあの時はペンダントに指輪とかがあの霊力の籠手になっていたっけと思ひ出す。

「防具にもなるし、武器にもなるか？」

「まあね。横島君の場合何をしでかすか判らないから」

それには同意する。最近横島に不思議属性が追加されたと思う。どうしてあれだけ幽霊とかに遭遇出来るのかが判らない

「あと出来ればこれを使わないで良ければ良いんだけどね。保険として持つておこうと思うわ」

美神さんが机から取り出したのは漆黒に金の縁取りをされた眼魂……ノーフフェイスと戦った時現れた謎のライダーが横島に手渡した眼魂だ

「良いんですか？本当に」

非常に強力な眼魂だが、その反面副作用も強いと思われる眼魂を本当に持つていくんですか？と尋ねる。だが美神さんはきっぱりとした口調で断言した

「何が起きるか判らないからね、最悪の場合の保険としてよ。使わせるともりは無いわ」

それなら良いんだけど、なんか妙に嫌な予感がする。靈感が囁くという奴だ。美神さんもそれが判っているのか、この眼魂の話はこれで終わりと言って強引に話題を切り替える

「後牛若丸が物食べれるから、食費支給を頼んで来たわ」

「……払ってあげてくれますか？」

横島一人ならきつと余裕だろう。だけどチビとタマモとうりぼーに、シズク、ノツブ、牛若丸。それに偶に私。エンゲル係数が凄い事になっていと思う。

「食費支給しましょうか」

是非お願いしますと私は頭を下げる。多分1人暮らしでは十分だ  
と思うけど、あの人数じゃ今の給料じゃ厳しい物がある。横島に食費  
の追加支給が決まった時。事務所の扉が開き、横島を先頭に、マリア  
さん、テレサさん、ドクターカオスと入ってくるのだが……最後に  
入ってきた大きくなつたうりぼーの背中にはぐつたりとした老齡の  
紳士の姿が

「横島君？それは？」

「なんか川に流されてまして……」

……なんで横島つてこういう面倒ごとを巻き込んでくるんだろう  
？私は溜息を吐かずにはいられなかった……

時間は少し巻き戻る。学校での追試を終えた横島は昼食の前にと  
うりぼーとチビとタマモを連れて散歩に出掛けていた

「あー良い天気だなあ」

ぽかぽかと暖かい陽気。普段は夕方に散歩なのだが、昼間に散歩に  
行くというのもいい物だなと呟く

「ぶぎゅ、びぐー♪」

「みむむー♪」

リードを繋いでいないが、チビもうりぼーもそれほど離れる事も無  
く近くをチョコチョコと走り回っている。タマモはゆっくり歩いて  
いる俺の歩幅に合わせて隣を歩いている

「精霊石も持って来れば良かったか？」

「コンー」

精霊石があれば人間の姿で散歩出来たのになと思っただのだが、タマ  
モ自身は動物の姿でも楽しいらしく揺れる尻尾が上機嫌だというの  
を示していて安堵していると

「あ、横島ー」

背後から声を掛けられ、振り返るとテレサが手を振っていて、その  
後にマリアとカオスのじーさんの姿が見える

「横島さん。こんにちわ」

「小僧。こんな時間にどうした？サボりか？」

にやつと笑いながらサボりか？と尋ねてくるカオスのjeeさん。まあ確かにそう思われるかもしれないけど違う

「追試が終わったから帰れって言われたんだ。授業についていけないから」

休む事が多いのでどうしても授業についていけない。だから落第を回避する為のテストと課題を渡されて帰らされたのだ、カオスのjeeさんは俺の返事を聞いて笑いながら

「お前も大変じゃなあ。家庭教師してやろうか？」

「冗談止めてくれ。あんまり勉強ばっかりしたくないんだ」

判ってるわいつと上機嫌に笑うカオスのjeeさん。なんだからかわれただけかと思いつながら

「それにしてもカオスのjeeさんが散歩しているほうが珍しくないか？」

マリアやテレサは良く見るけど、カオスのjeeさんが一緒なのは滅多に見ない。だから珍しいと言うとカオスのjeeさんは苦笑しながら

「あんまり研究ばかりして閉じこもっていると健康に悪いとマリアとテレサに連れ出されてしまったな」

そう笑うカオスのjeeさんだが、マリアとテレサの言うとおりだ。「それなら一緒に散歩しよう。うりぼーのリード持つ？全力で走るか必死に追いかけることになる」

老人を虐待するつもりか！と言うカオスのjeeさんに冗談だよと笑い。カオスのjeeさん達と一緒に散歩を始めるのだった

「ぼー川の流れる音と言うのも悪くないのー」

いつも散歩コースなのでゴールは河原だ。ベンチに腰掛けて川の流れを聞くのも良いと笑うカオスのjeeさん、老人とか言っておきながら額には汗が無い。やっぱり普通じゃないなと苦笑する

「うりぼー待てー」

「ぴぎゅー」

川原で大きくなったうりぼーを追いかけているテレサも楽しそう

だ。俺だと直ぐバテてしまおうが、テレサならうりぼーが飽きるまで追いかけてやれる。普通に走るよりも追いかけられるほうが楽しいのかうりぼーは楽しそうに川原を走り回っている

「横島さんは良くこのコースで散歩をするのですか？」

「朝と夕方だけな、このコースが一番いいんだ」

公園もあるし、川原もあるし、帰りに商店街にも寄れるのでシズクのお使いも同時に済ませることが出来る

「そうですか、ではまた今度散歩にご一緒してもいいですか？」

マリアのお願いに俺は全然構わないと返事をした。1人よりも2人のほうが楽しいし、チビ達もマリアの事は嫌っていない、むしろ懐いているように見える

「みむー！」

「あ、チビが初めて私の肩の上に」

警戒心が強いチビが自らマリアの肩の上に止った。それは警戒心を解いた証拠だ、チビは元々テレサと仲が良い。だからテレサの姉のマリアも敵じゃないと判断したのだろう、頬に擦り寄るチビにマリアが柔らかい笑みを浮かべる。この調子で蛍とかも仲良くなってくればいいのになと思いつつながら川に視線を向ける

「ん？」

目の前をゆっくりと流れていく老人の姿。眼鏡にベスト、それに杖……なんか紳士って感じだな

(疲れてるのかな)

あんな見事な老紳士が川を流されているわけが無い、疲れているのか？と思わず頭を振るが

【横島何をしている！夢じゃないぞー！】

心眼の一喝にマジかよ！と叫び栄光の手で老紳士を掴み、マリアとテレサに手伝ってもらって川から引き上げ、そのまま美神さんの所に向かったのだ

「人間じゃないな、マルタと同じく現界した英霊じゃろう」

英霊!?この老紳士が!?……いや確かに普通じゃないかもしれないけど……英霊って感じには見えないんだけど

【靈力を極端に消耗しているのかもしれない】

靈力を消耗しているから英霊として認識出来ないのかもしれないという心眼。普通に散歩していただけなのに、どうして俺はこういう存在によく遭遇するのだろうか？マルタの姉さんが英霊と聞いたときも驚いたが、どうして散歩しているだけで川に流され居る英霊に遭遇するのか？自分で自分が判らなかつた

【横島さんは人外ホイホイなのかもしれないですね】

からかうように言うおキヌちゃんだけど、実際そうかもしれないので黙りこんでしまう。最近妖怪とかに会う頻度凄いいし、その通りかもしれないと本当に思った

「はあ、とりあえず琉璃に連絡するとして、ドクターカオス。本当にその老人が英霊なのか確かめれるの？」

「勿論じゃ、マリア。靈力の測定を頼む」

判りましたとマリアが老紳士の手に触れて目を閉じる。これで測定しているのだろうか？でもきつとそうなんだろうなと思っ

「！異常な靈力の増大を確認！これは……!?!」

マリアと老紳士の周囲に目視出来るほどの靈力の磁場が生まれる。そしてその磁場の中にマリアが吸い込まれそうになっているのを見た瞬間。考えるよりも先にマリアに手を伸ばし、その手を掴むが、俺までもその謎の磁場に吸い込まれ始める

「うおっ！や、やばばばばば！す、吸い込まれるう!!!」

「み、みむううううッ!!!」

「ぶ、ぶぎゅううううッ!!!」

「ココーンッ!!!」

謎の空間に吸い込まれ、俺の悲鳴とチビ達の悲鳴が重なる。こ、これやばい！ほ、本当に吸い込まれる！とつさに美神さんと螢のほうに手を伸ばしてしまった

「よ、横島あッ!!!」

「横島君！螢ちゃんッ!!!」

俺の手に螢と美神さんの手が触れた瞬間。謎の磁場はその力を増

させ、おキヌちゃんやテレサの悲鳴を聞きながら、俺達はどこかへと落ちていくのだった……

「よ、横島……ね、姉さん……」

「そ、そんな……き、消えて……」

さつきまでこの事務所に発生した磁場が消えた。事務所には目に涙を浮かべ膝を突くテレサとおキヌの嘆きの声と機械的ないつちやんの声

【超局所的な時空震を感知しました。時間移動の確率97.8%です】

その声にドクターカオスはこのタイミングだったかと唇を噛み締める。確かに準備をしていたが、予想よりも数段早かった。謎の老人も居る、テレサも居ると安心してしまった。まだその時ではないと思いついでいた。美神の事務所には重い沈黙と横島が川から引き上げた謎の老紳士が残されているのだった……

リポート15 変る未来 その2へ続く



## その2

レポート15 変る未来 その2

何かに吸い込まれ、遠ざかっていく景色に思わず手を伸ばすが……届くわけも無い。数秒の浮遊感の後、どこかに落ちていく感じがし思わず身構えたが

「ぶぎゅー」

「きやつ!?!」

私の身体に返ってきたのは柔らかい感触とうりぼーの声。予想外の衝撃に思わずきやつと言う悲鳴がこぼれる

「ああ、良かった。美神さんも一緒だったんですね。うりぼー、お疲れ様」

「びぎゅー♪」

横島君の声が聞こえるが、巨大なうりぼーの上からではどこにいるのか判らない。多分横島君も声で判断しているんだと思う

「横島君。ここから滑り降りるけど、下に居ない?」

大丈夫ですーつと言う横島君の返事を確認してからうりぼーの上から滑り降りる

「美神さん、無事だったんですね。良かった」

マリアが私を見て柔らかく微笑む。マリアの前には焚き火があつて、周囲は森……私はどこに来てしまったのだろうか?と考えていると上空から

「きやあああああッ!?!」

「ぶぎゅー!」

蛍ちゃんの悲鳴とうりぼーの鳴き声が聞こえた。とりあえず、全員は揃ってるみたいね。分断とかされて無くて良かった

「蛍ちゃん、うりぼーの上から降りてきて、現状確認するから」

「わ、判りました!今降り……つとと」

うりぼーの毛皮は予想よりもモフモフで手をおいた所が毛皮に飲み込まれる。蛍ちゃんは苦戦しながらうりぼーの上から滑り降りて

くる

「お疲れ様うりぼー、小さくなっただけいいぞ」

「びぐ」

全員を確認したので大丈夫と言うとうりぼーが小さくなって行き、チビサイズになる。横島君はうりぼーを抱き抱えながら、空を見上げて

「さっきまで昼間でしたよね。でも今は夜……これどうなっているんですか？」

私なら知ってると思って尋ねてくれたのは判る。だけど私自身もこんな現象は初めてだから、何がどうなっているのか判らない

「と、とりあえず焚き火で温まりながら考えましょう」

夜と言うこともあり、非常に寒い。現状を把握するのも大事だが、このままではろくに移動も出来なくなる。まずは身体を温めてから考えましょうと言って私は焚き火の近くにしゃがみ込み、手を翳すのだった……

「皆さん。いい知らせと悪い知らせがありますが、どっちが聞きたいですか？」

大分身体が温まって来た所でマリアがそう切り出してくる。悪い知らせと良い知らせ……

「とりあえず悪い知らせから」

良い知らせを聞いてから悪い知らせなんてとてもじゃないが聞きたくない。だからここは先に悪い知らせを教えてくださいと

「では現在地ですがフランス、名前は判りませんが、どこかの都近くです、時刻は21時25分と38秒……10月25日」

10月25日!?それにフランス!?マリアの言葉に思わずそう叫んでしまう。

「いやいや、無いだろ?3月の間違いじゃないか?」

「そ、そうよね、暖かくなり始めてたし」

今日も暖かいのではなく、暑い位の天気だったと思いつながらマリアに間違いじゃないか?と尋ねる。だがマリアは頭を振って

「西暦1242年です、更に言えば微弱な時空震も感知しています。」

私達は時間移動をしたと思われます」

時間移動ですって!?! 淡々と告げられた言葉に嘘だと叫びたかったが、その反応を見ればマリアが真実を告げているのが判る。そして思わず自分の手を見つめる

(まさか私?)

ママも時間移動の能力を持っていた。まさか私も? だけど、ママは雷を媒介にしていた。あの時は異常な霊力により磁場が発生していたが、そこまでのエネルギーではなかった。私が原因と言う可能性は低い、しかし横島君が拾ってきた老紳士が原因かと言えばそれも違うだろう。時間移動してしまった理由が全く判らない

「ど、どうすればいいのよお……」

別に場所に移動してしまっただのならまだしも、時間移動。どうやつてもとの時代に戻ればいいのかよ。蛍ちゃんも横島君の前だが、思わずうろたえてしまう。こんな事想定外も想定外だ、こんな現象を予想出来る訳が無い

「ち、ちなみにマリア。いい知らせって言うのは?」

うろたえている私を見て、相当やばい状況なのだど理解した横島君が引き攣った顔でマリアにそう尋ねる。

「はい、現在この近くにドクターカオスが駐在しているという風に記録されています。そしてもう一つ、私に記録されていた情報ですが……ブラドール伯爵の妻が病気で倒れで、死去する一週間前です」

その言葉に思わず息を呑む。今私達が居る時代、それはブラドールとドクターカオスがガープの謀略で殺し合おうとする、ほんの少し前の時代だった

「私はこの時代のドクターカオスに協力を要請することを提案します」

今の老人の姿でも頼もしいドクターカオスだ。若ければ更に頼りになるだろう、だがそうだととしても

(ガープとやりあう可能性が)

人の苦悩と絶望を楽しんでいるガープ。ドクターカオスに助けを求めれば、ガープと遭遇するその危険性と綱渡りの状況だ

「美神さん、私はドクターカオスに協力を頼むべきかと、私達だけじゃ何にも出来ないですよ?」

「俺もそうした方が良いと思います」

横島君と蛍ちゃんの見意見を聞いて、私は溜息を吐く。それしかないと判っている、判っているんだけどどうしてもガーブの存在が脳裏を過ぎる

「それしかないわね、明るくなったらどこからからの民家で服を拝借して、そこからドクターカオスを探しましょう」

服?と首を傾げる蛍ちゃんと横島君。私は自分の服を指差して

「今の時代にこれだけ肌を露出してたりすれば、異教徒とか言われて、証拠もなしにほぼ100%有罪の裁判送りよ」

魔女狩りが活発になるのは15世紀からだけど、今でも十分危険なのだ、更に言えば

「カトリックの教えからそむけば、まず有罪。横島君、移動する間絶対にチビ達を見つかったらいけないわよ」

悪魔と一緒に居る。それだけで100%アウトだ、引き攣った顔をしている横島君に細心の注意を払いなさいともう1度言う

「明るくなるまでは森の中で過ごすという事ですね?食料はどうしますか?」

1食くらいと思うが、飛ばされる前の時間は昼前……これで一晩は厳しいわね。どこかで木の実や川を見つけないと

「川なら近くにあるのを感じていますか?」

マリアの言葉に良かったと呟く、川があれば水も魚も取ることが出来るかもしれない。水分補給と食事をすれば当面の不安は無くなる「じゃあ全員で川の近くに移動。そこから魚がいるかとか、水の確認をしましょう。良い、周囲の警戒を忘れないで」

今現地人に見つかるのは危険すぎる。だから周囲の警戒を忘れないようにと繰り返し口にし、私達は川へ向かって歩き出す

(憎たらしいくらいに星空ね)

東京では決して見ることが出来ない美しい夜空。だけどそれが自分達のいた時代ではないという事をこれでもかと教えていて、私はこ

れからどうなるんだろうという強い不安を抱かずには居られないのだった……本当にドクターカオスを味方に出来るのか、それに加えてガープに遭遇しないですむのか……次々に浮かぶ不安に押しつぶされそうになりながら、夜の森を進むのだった……

おかしい、我はそれだけを考え養父の領地である城の中を歩んでは。吸血鬼である我と妻であるソフィアの婚姻を認めてくれただけではない、我に地中海にある無人島を我が領土として与えてくれた。今のカトリック全盛の時に吸血鬼を認めると言う破格の人格者であり、更に言えばローマや教会の圧力にも屈しない高潔な人物だった養父ノア。吸血鬼である我に学問を学ぶ機会を与えてくれた、人間ではあるが尊敬している

「ブラドロー様。ノア様は面会をお断りすると言っております」

これだ。ソフィアが病気に倒れてからノアは私を避けるようになった、それ所かピエトロとシルフェニアも何処かに隔離してしまっただ

「今日もなのか？」

この執事セバスとは付き合いも長かった。吸血鬼と言う種族に偏見も無く、我とソフィアの婚姻を喜び。ピエトロとシルフェニアの教育係も勤めてくれていた

「はい、真に申し訳ありません」

セバスはそう言うとおかえりくださいと言いつつ、ポケットから何かを落としそれを拾う素振りも見せず。ノアの私室に引き返す

「ふっ、全く態とらしい」

その手紙を拾い上げ、城を後にしようとするのと丁度我と入れ違いで1人の男が入城して来る。この男も人間ではない、その内に秘めた力は我に匹敵すると言える。男の名前はカオス、並外れた錬金術の知識を持つ科学者であり、医者だ。今はソフィアの主治医をしている

「ブラドロー伯爵か、やはり今日もノア領主は会ってくれんのか？」

「ああ、また門前払いだよ」

そうかと呟いたカオスは私の耳元に顔を寄せ、小声で尋ねてくる

(お前の妻ソフィアは呪われている)

呪われているその言葉に思わずカオスの顔を見ると、その目には疑いの色が浮かんでいる

(違う、何故我が愛する妻を呪う)

カオスは私の言葉を聞くと一歩下がりに、それもそうだなと呟き

「とりあえず最善は尽くすが、最悪の結果も覚悟しておけ」

そう言うのとマントを翻し城の中へと消えていくカオス。ソフィアにも会えん、ノアにも会えない……そして愛する子供は行方知れず……今まで信じていた物が全て崩れ落ちていくのを感じる。セバスが落とした手紙を広げる、そこには

『私以外の全員が受け入れていますが、数日前突然現れた男が相談役としてノア様の側仕えになっている』

我はその手紙を握りつぶすと同時に炎で焼き尽くし、背後を振り返り城を見つめる。美しいノアの城が暗く歪んだように見えた

「……少し調べてみるか」

魔族が動いている可能性もある。もしも、その魔族の目的が我とカオスを同士討ちだとするのなら……私は妻と養父と子供を人質にとられた状況にある。嫌だと思っても、家族を人質に取られては戦う以外の道は無い。例えば家族が私の手元に戻ってくる事が無いとしても

だ  
(始祖の我を陥れようとする……最上級神魔か)

中級の神魔程度ならば我でも滅する事が出来る。だがここまで堂々と喧嘩を売ってくるとは思えない、そうなると私の敵として浮上するのは最上級神魔か上級神魔しかありえない、我もどちらかと言えば魔族よりだが、人間との共存を望んだ。その事で裏切り者と言う認識を抱いている魔族が多いだろう。それでノアに何かを仕掛けている可能性もある

(なんとかしてピエトロとシルフェニアの居場所だけでも掴まなければ)

セバスの手紙で我の中にあつた疑いは確かな物となった。まずは

情報を集める事を決め、ノアの城を後にするのだった……

ノア領主に依頼され、娘と言うソフィアの容態を見ているのだが、やはり状況は悪いとしか言いようが無い。流行の風土病に良く似た症状だが、ソフィアの身体には確かに魔力の痕跡が見て取れた

(ブラドローも疑いはしたが、違うな)

ブラドローがノアの領土を得る為に何かをしているという事は考えたが、あの顔を見る限りではそんなことを考えているようには見えなかった。ブラドローは確かにソフィアを愛している、だから奴がそんな事をしているようには見えないのだが……

(この首筋の痕はどう見ても吸血の痕……)

調べれば調べるほどにブラドローが怪しい、そしてブラドローへの疑いが強くなっていく

「お医者様、私は治りますか？」

弱々しい声で尋ねてくるソフィア。今のままでは確実に衰弱死する、だがそれを口にするには出来ない

「勿論ですとも、必ず治りますとも」

「そう、嬉しいわ。ピエトロにシルフェニア、それにブラドロー様とまたピクニックに行きたいわ」

楽しかった時を思い出しているのか目を細めるソフィア。自分の命が残り少ない事を知っているのか、その笑顔は儚げで今にも消えてしまいそうだ

「また薬を処方しておきます。大丈夫、私に任せてくれれば確実に治りますよ」

繰り返し治りますとソフィアを励まし、生命力と霊力を回復させる薬を処方し部屋を後にする

「これはカオス。ソフィアお嬢様の容態はどうですか？」

ノア領主の側仕えだと言う執事。名前は確かアレン……モノクルに仕立てのいい服装から執事ではなく、どこぞの貴族を思わせる  
「安静にしておれば快方する」

「そうですか、それは良かった！しかしですね、カオス。私はノア様の義息子ブラドローが原因ではと思うのですが、専門家としてはどうでしょうか？」

アレン、この男は好かん。本能とでも言うのか、どうしてもアレンに対しては警戒心が強まる。ブラドローが悪いと言う方向に私を誘導しようとしているようにしか思えないからだ

「確かに私は異形狩りもする、だが今は医者としてこの場所にいる。ブラドローと戦う理由は無い、では失礼する。薬の処方をするのでな」  
これ以上話す事は無い。私はアレンの横を通り過ぎ城門へと向かいながら、ソフィアの事、ブラドローの事、そしてアレンを通してしか話す事の出来ないノア領主の事を考えていた。状況的にはブラドローが怪しい、だがそれは素人考えだ。ブラドローが怪しいと思わせること自体がミスリードのように思えてくる

「ええい、これほど面倒な案件だったとは！」

病気の娘を助けて欲しいと言う依頼だったので、ここまで出てきたが、ここまで面倒な人間関係に、政治的なやり取りが関わってくるのならマリア姫の所で素直に居た方が数倍楽だった。より良いパトロンを求めて来たのが間違いだっただかと後悔しながら歩いていると何処かから視線を感じ、そちらに視線を向けて驚いた

(マリア姫!?)

私を見つめている視線の主、それは髪の色こそ違えどマリア姫と同じ容姿をしていた。一瞬マリア姫に会いたくて見た幻かと思ったが、確かに私を見つめている。私と目が合ったその女性は裏路地へと走っていく、私は無視すれば良いと判っていたのに、どうしてあそこまでマリア姫に似ているのか？見間違えているだけなのか？ここに居るはずが無いと冷静な自分が言っているのを無視し、常に冷静であれと言う自分の信条ではなく、感情でマリア姫に似ている女性を追いかけて裏路地へと走り出した

「どうして逃げるのですかな？お嬢さん？それとも追いかけてこはもう終わりですか」

本気で逃げている訳ではない、私が追いつける速度で走っている女



性がやつと立ち止まったのでそう声を掛ける。すると女性はゆつくりと振り返ったその顔を見て、更に驚愕する

(マリア姫と瓜二つだ……)

髪の色こそ違うが、その整った容姿はマリア姫と瓜二つだ……マリア姫と瓜二つの女性は私に深く頭を下げ

「初めましてドクターカオス。私はマリアと言います」

洗礼されたその動きにも驚かされたが、その名前にも驚かされた。だが何よりも驚かされたのはそれではない、彼女からは機械の駆動音がしていたのだ

「お前は何者だ……私以外に人造人間を作れる物が居るわけが無いッ！何故その名前を名乗るッ！」

マントから銃を取り出し、その銃口を向ける。だが目の前の人造人間は柔らかく微笑み

「おかしなことを聞きますね？ドクターカオス。我が創造主、貴方は知っているはず。私を」

創造主と言われたが、それは違うとありえないと即座に判断する。創造主と言われ私の脳裏に過ぎたのは、今研究段階の人造人間試作M-666の姿だ。だがまだフレームを組み上げただけであり、何よりもあそこまで人間と同じ仕草や、姿には出来ない。もっと機械的な仕草と言葉になる筈なのに……

(私以上の天才が居るといふのかッ！)

私の思考を読んだのか人造人間は違いますがときっぱりと口にし、もう一度私自身が製作者だと口にした

「NO. それは違います、私を作成したのはドクターカオス。貴方です……これをドクターカオスから過去のドクターカオスへ渡す様に言付けをされています。どうぞお確かめを、私はこの街の外れの森で待っています、貴方ならば私を発見出来るでしょうから」

投げ渡された便箋に視線を奪われたその瞬間。目の前の人造人間は垂直に飛び上がり、屋根の上を走って森の方へ走っていく……追いかけるのは無理か……

「時間移動？馬鹿馬鹿しい、そんなことありえるものか……」

時間移動なんて代物、いかに天才である私だったとしても、不可能の神の領域だ。だからこの手紙もフェイクだ、私を誘き寄せようとしている罠に違いないと思い、便箋をひっくり返し目を見開いた

「こ、これは……」

見間違える訳が無い。私と同じ筆跡にサイン、そしてマリア姫の紋章が確かに記されていた……

遠くに見える街に潜入する事を考えたのだが、言葉が通じない可能性と周辺に村や民家が無いので服を着替える事が出来ない。この2つの理由から私達よりも遥かに高速で移動出来るマリアさん1人で街へ向かって貰った。……のだが、昼を過ぎても帰ってくる気配が無い、ドクターカオス作のトカゲデンワにも連絡が無いので流石に心配になってきた……ドクターカオスがいるかもしれないから、探してみるとは言っていたけど……あんまり無理をしてないと良いんだけど……

「駄目ね。考え込むと悪い事ばかり考えちゃう」

ただでさえ悪い状況なのに、悪い事ばかり考えていたら気が滅入る一方だ。横島と美神さんの居る川の方へ歩き出す

「よし！チビ！電気ショック！」

「みむううううッ!!」

横島の力強い声とチビの鳴き声、そして放電音が響き渡り、感電した魚が次々に浮かび上がる。これで網があればと思った瞬間

「いっけーッ!!」

横島の両手が淡く輝く霊糸で組まれた網が飛び出し、浮いている魚を包み込む。私はその光景を見て、思わず美神さんに

「横島の汎用性が半端無いんですけど？」

散歩中だったので眼鏡はウイスプだけ、更にはシズクも居ない。チビ達はいるが横島の状況はかなり悪いと思っていたのだが、予想よりも遥かに柔軟で、そして幅広い対応力を横島は発揮していた

「……気にしたら負けだと思っわ」

美神さんも深く溜息を吐く、どうも私よりも先に横島の汎用性について考えて、そして考えるのを放棄したのだろう。横島は私と美神さんの沈んだ表情に気付かず、霊力の網で捕らえられている魚を嬉しそうに掲げ

「美神さん、蛸！昼食GETしたぜツ!!」

その弾ける笑顔に私も美神さんもお疲れ様と言うのがやつとなのだった……

「ほえ？なんで網に出来るかですか？」

タマモの狐火で焚き火を起こし、ブラドー伯爵から譲り受けたナイフで木の枝を削り、魚を焼いている途中で横島になんてあんな事ができたのか？と尋ねる。私も美神さんも横島にそんな事は教えていないし、私も霊力の籠手は使えるがとてもでは無いが、あんな事は出来ない。横島は電気ショックで魚を気絶させてくれたチビと昨日から火を起こしてくれるタマモの背中を撫でながら

「いや、神宮寺さんが教えてくれたんですけど、出来て当然と思う事と想像力が形状変化に最も必要だつて、だから出来るつて思い込んだけ」

【私もフォローしたかな】

心眼がフォローしたとしても、想像力だけで霊力の形状を変化させる。そんな事が出来るのは霊能者の中でも横島だけだろう。圧倒的に知識が無いから、言われたら出来るという思い込みと柔軟な発想。多分私では絶対に出来ない芸当だ

「それよりも、はい。美神さん、蛸。魚焼けましたよ？塩ないから素材その物ですけど」

木の枝に刺されて焼かれた魚を受け取り頬張る。確かに塩が無いから味はぼんやりとしているが、今のこの状況で食事が出るだけ本当にありがたい

「木苺でごめんな？」

ここら辺を歩き回り見つけた小さな苺をチビとうりぼーに与える横島。草食のチビは魚を食べる事が出来ない、小さな木苺を頬張り

「みむー♪」

「ぶぎゅ♪」

大丈夫だよと言う感じで鳴いているチビとうりぼーを見ると早くこの状況を打破したいと思うんだけど、妙案は何も浮かばない

「マリアが戻ったら移動しましょう。このままだと体力を消耗するばかりよ」

美神さんの言うとおりで。10月だが、ここら辺は非常に寒い。この服装では危険かもしれないが、街に向かうべきだと思う

「大丈夫ですか？」

「なんとかなるって思うしかないわ」

不安そうな横島だが、このままこの場所で手を拱いていても、何も変らない。リスクがあっても行動するしかない。その為にはまず体力と空腹を満たす事が最優先だ、私は横島が焼いてくれている2匹目の魚へと手を伸ばすのだった……

「皆さん。お待たせしました」

昼食が終わった頃合で茂みを揺らしてマリアさんが帰ってくる。無事に帰ってきてくれたんだと思わず安堵の溜息を吐く、私も美神さんも破魔札や、神通棍は所持している。だが靈力に満ちたこの時代では出力が上がる代わりに、敵も強い。やはり早くゆっくりと休息できる場所を見つけるべきだ

「とりあえずマリアさんも少し休んでください」

見た感じでは疲労しているように見えないが、走り続け、更に見つからないように行動していたのだ。その精神的、肉体的疲労は相当な物だろう。人造人間だが、より人間に近い今。間違いなく疲労を感じているはず

「ありがとうございます、少し休憩させて貰います」

出発する前にマリアさん自身が切り倒し、用意してくれた木に腰掛けるマリアさん。少し休憩して貰ってサーモグラフィーとかで動物とかん人間の気配を探知して貰って隠れながらの移動になるか

「グルルルッ!!」

「プギユウツ!!」

マリアさんと合流して30分ほど経った時。今まで大人しくして



## その3

レポート15 変る未来 その3

人造人間から託された手紙。何枚もの羊皮紙と見間違える訳が無い、私自身の筆跡とマリア姫の刻印

「騙すにしては手が込んでいるな」

ソフィアの治療の為。私に与えられてた屋敷で手紙を開く、一番最初に目についたのは綺麗な1枚の絵だ。老人とマリア、それとマリアと同じ人造人間と思われる少女と今からは考えられない建物の姿

「ほう……これは中々」

本当に未来の私からの手紙かもしれないと思い。その絵(手紙に記されていたが写真というらしい)を懐に仕舞う、何年先の未来かは知らんが、やはり私の不老不死は不完全かと残念に思った。しかも、そのままの姿と言うことは若い別の体に移ったとしても解決出来ないと言う事

(無様に老いぼれて行くか、それとも老いぼれても我が英知はそのままか……これも一興か)

物事にはどうしようもない現実と言う物がある。抗つても無駄だというのなら、その流れに逆らわないのもまた一興。私はそんなことを考えながら癖のある自分の文字を見る。他人に見せることを前提にしていない、その文字はまさしく自分の筆跡だ

「……馬鹿な、そんな事が起きると言うのか」

信じられない、いや、信じたくないのだ。ソロモン72柱の魔神が裏で手を引いているなんて……だがそう考えると一気に氷解する謎がいくつもある

「美神令子……芦笛、横島忠夫……ここより遥か東方の地の住人」

老いた私から霊具を買い、生活費を工面してくれている美神令子。若いが天才的な閃きを持つ科学者見習いの芦笛。そして

「人造人間を人間にした……か」

横島忠夫。稀有な才能を複数持つが知識や技術が足りないアンバ

ランスな少年であり、これから育つのが楽しみだと書いてある。そしてそんな彼が持つ稀有な才能の1つに人外に好かれやすいと言う物があり、純粹で自然体で人造人間に触れ、会話し、過ごしその心を大きく成長させた……

(ありえない話ではない)

私1人ではきつとメタソウルの成長を促す事は出来ない。何故なら私は探求者だ、知恵を求め。無垢な魂を育てるなんて真似は出来ないだろう

「助けてやって欲しい……か」

未来の自分からの手紙。最初は信じていなかったが、今はもう信じている。そしてこれから起きるかも知れない事、ガープと戦う事になるかもしれないという事。そしてブラドローに渡す手紙を人造人間……いやマリアが手にしている事……

「冷静に考えれば逃げるのが最善だ」

いかに私と言えどソロモンの魔神と事を構えるような真似はしたくない。何故ならば最上級神魔と戦うのは無謀を通り越して蛮勇だからだ……だが

「見て見たい」

未来の私をもつてしても稀有な才能と言う横島忠夫を、ガープが特異点と呼び、警戒していると言う横島忠夫を見てみたいと思ってしまった。興味を、好奇心を持ってしまった、こうなっては駄目だ。止れない、止りたくない

「行くか」

脚力強化の脚甲と持って行って欲しいと書かれてたこの時代の男女の服を鞆に詰め込み、背中に背負う。そして最後にマリアを探知するセンサーを取り、私はマリアが自分で居ると言っていた森へ向かって走り出すのだった……

(中々と言うべきか……)

写真のおかげで誰が誰かは判っている。しかし横島の周辺は凄いな、凄まじい妖力を発揮している狐にあれば神通力か？神通力を持つ猪に放電しているグレムリン……これも私が言っていた稀有な才能

と言う奴かと苦笑しながら背負っていた鞆を目の前に下ろす

「服を用意した。これに着替えてくれ、私に与えられている屋敷で話をしようじゃないか」

この様な場所ではゆっくり話も出来ないからなと笑い、女性陣が茂みに入っていくのを見送り、男なので手早く着替えた横島忠夫に「初めましてと言うのはおかしいか、マリアから話は聞いている。ドクターカオスだ、よろしく」

まずは友好的な接触をと思いい手を差し出す。横島は私の手を握り返す、手を通じて流れ込んできた横島の霊力に目を見開く

(凄まじいな)

霊力の質も、その量もかなりの物だ。これは確かに稀有な才能の持ち主と言われても納得出来る

「カオスのjeeさん、若い時もでかかったんだな……」

「jeeさん!?!私はまだ若いぞ?!」

まさかの言葉に思わず叫んでしまったが、とりあえず友好的な接触は出来たと思う……なお未来の私はカオスのjeeさんと呼ばれているらしく、更に猪のうりぼーや、グレムリンのチビと言う凄まじいネーミングセンスに、横島が独特な感性を持っている事を知り、苦笑したのは言うまでも無い……

若き日のドクターカオスに案内された街の領主はノアと言う男の領主だった。カトリック全盛のこの時代に吸血鬼と疑われているブラドールと娘の結婚を許した、領地まで与えた人物らしい。門番まで居て、かなりの民思いの領主だと言うのはよく判った

「まあブラドールの奴は始祖だからな。日光は不快らしいが、灰になるほどではない。だから吸血鬼と言う噂は一時期消えていたんだがな、最近その噂が流されている。これは意図的に流されていると私は考えている」

飲みたまえと差し出されたカップの中を見る。黒く濁った液体、この時代にはコーヒーは無いはずで……思わず手が止る



「ああ、これかね？疲労回復の霊薬だよ。味はまあ……察してくれると思うが」

一口啜って眉を顰めるドクターカオスだが、ニヤッと笑い「毒ではないよ」

目の前で飲まれて、それでも飲まないという事は出来ずカップを手に取り、口に知る

(あれ？これコーヒーだ)

味わいは少しおかしいけど、ブラックコーヒーと思えば飲めない事は無い。普通に飲む私と蛍ちゃんに対して横島君は

「砂糖欲しいなあ……牛乳でもいいけど」

ブラックコーヒーが苦手なのか、そんな事をぶつぶつ呟きながらコーヒーみたいな味のこれを口に行っているのだった

「ほほう？これと同じ飲み物が現代にあると……ふんふん、興味深いな」

羽ペンで羊皮紙に私達の話を書いてメモをするドクターカオス。なんと言うか知識欲の塊と言う感じだ

「横島さん。お待たせしました、果物を買ってきました」

マリアが果物を抱えて帰ってくると、横島君は凄い勢いで立ち上がり

「ありがとう！マリア！はー良かった、これでやっとチビとうりぼーにご飯を……良かった」

あの森では果物はほとんど自生しておらず、チビとうりぼーに餌を与えない事を悲しんでいた横島君が嬉しそうに笑う

「えつと、すいませんドクターカオス。多分暫く横島は話し合いに参加できないと思うので、無しにしてくださいませ？」

ナイフでりんごの皮を剥いている横島君は完全にそれに集中している。多分私達の話し合いに参加出来ない

「構わない。横島よりも君達の方が知識が豊富なのだろう、ならば君達と話し合うほうが有益だ」

ドクターカオスの言葉に良かったと安堵の溜息を吐く私と蛍ちゃんの後では

「はい、チビ。あーん」

「みーむう♪」

「ぷぎゆうー！ぷぎー！！」

ナイフで小さく切ったリングをチビに与える横島君の声と嬉しそうなチビと自分も自分もと言っているうりぼーの声が聞こえてきて、脱力してしまったのは言うまでも無い

「謎の霊力の磁場か……ふむ、考えられるのは1つだな、何処かで超級の魔力炉が稼動しただ」

「超級の魔力炉？」

私と螢ちゃんの声が重なる。魔力炉なんて言われても覚えも無いし、そんなのは私の事務所にも無い。何かの間違いではと思うのだが……

「変な英霊が流れてきて、それを触っていたら磁場が生まれたから、英霊が原因だと思っていたんだけど」

あの老人を調べていたから、彼が原因だと思っていたんだけどと言うと、ドクターカオスは笑いながら

「確かに英霊は人類の守護者、星の抑止力と称されるが、空間を歪めるほどの力を持つ者はごく僅かだ。それこそ半神半人くらいの神性持ちでなければ不可能だろう。運が悪い事に、調べているうちに何処かの魔力炉の起動の余波がお前の事務所に展開されたんだろうな」

霊薬のお代わりは？と尋ねてくるドクターカオスにお願いするわと言ってマグカップを差し出す。しかしそれにしても運が悪いとか、そういうレベルじゃないわね。本当に……

「いろいろ知っているが、魔族といえばやはり地獄炉だな。地獄の魔力を循環させる悪性の魔力炉だ、その出力は凄まじくてな。例えば現在に存在して無くても、その影響力は強い。可能性の段階だが、この時代に地獄炉があり、そしてお前達の時代でも地獄炉が作られた。その2つの地獄炉が共鳴した場所が運悪くお前の住居だったと言うわけだ」

黒板みたいな物に何かの数式と図形を描く、ドクターカオス。物凄く判りやすいけれど、タイムスリップの理由を知らされてもどうしよ

うもないという現実が肩に重く押し掛かる

「現代の地獄炉……もしかしてガープでしようか？」

「可能性は高いわね」

地獄炉と言うのがどんな物かは判らないけど、超級の魔力炉。そんな物を作るのはガープしかないだろう

「ガープが地獄炉を作り、私とブラドローを争わせる為に意図的に噂を流す。考えられる話だ」

自分で動くよりも人の心を傷つける事を好むガープ。ブラドロー伯爵とカオスを争わせ、更にブラドローの養父と妻の命を奪う。GS試験で本人が言っていた事だが、非道を通り越して外道だ

「それでドクターカオス。私達は元居た時代に帰れますか？」

それが今もつとも重要な所だ。元居た時代に帰れるか？と尋ねる。ガープと戦うことは既に覚悟している、だが倒しても帰れないのでは何の意味も無い。だから現代に帰還することは可能ですか？と尋ねる。するとドクターカオスは暗い表情で

「今の段階では不可能だ」

「そ、そうですか……」

判っていた事だが、こうして面と向かって言われると辛い物がある。だがドクターカオスは更に言葉を続けた

「この時代で稼働している地獄炉を発見すれば何とかなるやもしれん。だがその前に私もお前達に協力して欲しい事がある」

ドクターカオスは真剣な表情で私達を見つめる。ドクターカオスが協力して欲しいと言う案件……それは相当な物だろう

「今このノアの領地にガープが潜伏している可能性がある。そしてブラドローの妻もまた病に伏せているんだ、まずそれを何とかしよう。私の知恵だけでは足りん、始祖の吸血鬼ブラドローの協力を得ることが出来なければ……だが、ソフィアを救う事が出来なければ協力を得ることは難しい。そうなれば……」

お前達は未来へ帰ることが出来ない。そのたった一言が私達の肩に重く押し掛かるのだ……

「あ、ブラドロー伯爵の説得、それならば私と横島さんで何とか出来るか

もしれません」

「「え?」」

マリアのその一言で重かった空気は払拭され、更に私と螢ちゃんとドクターカオスの間抜けな声が響く中

「みむう」

「ふぎゆう」

「お腹一杯になったか、良かった良かった」

マリアの買ってきた果物を全て食べつくしたチビとうりぼーの満足したという鳴き声と、安心しきった横島君の場違いな声が部屋の中に響き渡るのだった……

太陽が落ちた頃。我は活動を始めた、日中でも活動出来るが夜の方が視力や聴力が強化されるから都合がいいのだ

(……やはり妙だな)

セバスからの手紙にあった謎の男……アレン。旅人だと言っていたが船着場ではそれらしい男が来たと言う話は聞けなかったし、門番も見えていない。突然ノアの城に現れ、ノアに側仕えとなった執事……「何者なんだ」

我はアレンに会った事も、言葉も交わした事も無い。だがアレンからの明確な悪意を感じる、恐らく最近街に流されている吸血鬼の噂。それはきつとアレンの仕業だろう

「さて……どうするか」

遠くに見える城。我の視力を持ってすれば、この距離でもノアの寝室を見ることは出来る。流石に眠る時までアレンは側にいないと思う、ノアと直に会って言葉を交したい。そうすればノアの異変も判ることが出来るだろう……だがそれは出来ない

(もしアレンが魔族ならば)

こうして1人にいるように見えるノアすらも畏かもしれない。姿を見ることが出来ているのにその姿はあまりに遠すぎる

「みむう?」

「うん？なんだ、お前。親と逸れたのか？」

何時の間にか我の目の前に居たグレムリンにそう尋ねる。グレムリンは弱い悪魔だ、成獣となるまでは親と一緒に活動する。そんなグレムリンの幼生が1人でいることに違和感を感じながらも、逸れたのか？と尋ねる。するとグレムリンは自分の首元を指差す

「首輪？」

それは確かに首輪だった。紅い皮の首輪が巻かれていた、グレムリンは我に背を向けて移動する。時折こつちを見つめ、再び移動を始める。それは我をある場所に案内しようとしているように見えた。普通に考えてあれは罠、グレムリンを飼える存在なんて人間ではありえない。だからあれは罠だろう……だが今は何の手掛かりも無い。例え罠だとしても、その罠を正面から突き破れば良い。始祖の吸血鬼である我にはそれが出来る、我はその罠に乗る事を決めグレムリンの後を追って闇夜を駆ける。暫く走ると、男と女の姿が見える。グレムリンはまっすぐに男へ向かい頬に擦り寄る

「みーむう♪」

「んーお疲れ様。おかえり、チビ」

「みむう♪」

尻尾と翼を小刻みに動かすその姿は主人に懐いている様に見えた。今の時代にグレムリンを飼いならす人間が居るなんてと驚愕していると、女の方が我に頭を下げて

「初めまして、ブラード伯爵。私はマリア、貴方に手紙を持って参りました」

恭しく頭を下げる女を見つめる。この女は何だ？外見は確かに人間だが……

「貴様人間ではないな？何者だ」

あの女からは生気を感じない。それに身体の中から機械の駆動音が聞こえる、それに気付いた段階で目の前の2人に対しての警戒心が跳ね上がる。差し出された手紙に視線すら向けず、爪を2人に向ける「私はドクターカオスによって製造された人造人間です、彼は私の個人的な友人の横島忠夫と言います」

人間と人造人間の組み合わせ、敵意は無いようだがどうしても不信感とそして疑いが強くなる

「ブラドール伯爵。これに見覚えは無いか？」

「そ、それは!？」

額に紅い布を巻いた男が差し出したナイフを見て、不信感と警戒心は困惑へと変る。マントの中に手を伸ばしナイフを手にする

「私のナイフ……ありえん、ありえんぞ!!それは特別な品。2品と存在しない!」

金と宝石。そして神官によって洗礼詠唱されたこのナイフは、武器としても、魔法の触媒としても最高の品だ。そんなこのナイフが2つ存在する訳が無い

「えつとその……ブラドール伯爵に貰いました」

「なに?」

我がこの人間にこれを?……では私の手元にあるこれは何だと言うのだ。ますます頭が混乱してくる、人間よりも遥かに知恵があると自負しているこの我が混乱している

「それらの疑問全てもこれに記されています。どうぞお確かめを」

再度差し出された手紙を受け取り。差出人の名前を見て目を見開いた

(我だど!?)

その文字とサインを見間違える訳が無い。思わず二度見したが間違いない、私の文字だ。便箋の封を開け、その手紙に目を通すのだ……

めっちゃ怖い、それが俺の考えている全てだった。未来から来た事を信じて貰う為のブラドール伯爵から貰った短剣と共にマリアと説得に来たのだが、俺の知っているブラドール伯爵とは雰囲気から、服装まで全てが違い。威圧感が半端無い

「……はは。はははっ!!!はーははははははっ!!!」

突然笑い出したブラドール伯爵に思わず背筋を伸ばし、腕に抱き抱えたチビを抱きしめる。タマモとうりぼーは戦力と思われてはいけな

い為カオスのジーさんの家に預けてきたし、眼魂も持っていない。今の俺は戦闘力はさほど無い訳で、これが俺達に対する怒りだったらどうしようかと震えていると

「横島と言ったな？」

「は、はい!!」

威厳たつぷりのその声に思わず敬語で返事を返すと、ブラドー伯爵は柔らかい笑みを浮かべ

「未来から来たと言う話。信じたいと思う、だがその前にだ。確認させて欲しい、我が息子と我が娘の名を言えるか？」

「ピート……っじゃなくて、ピエトロ・ド・ブラドーとシルフェニア・ド・ブラドー」

いつもの愛称で答えそうになり、1度深呼吸をしてから2人のフルネームで言う。するとブラドー伯爵は手にしていた手紙を炎で燃やしなから

「信じよう。お前が未来で我が息子と娘の友であり、そして我を救ったと言う。未来の我自身の言葉を信じよう、そしてその上で問う。ガープと戦う事になる事に対して恐怖は無いのか？確かにお前は我を知ってるかもしれない、だが今の我とお前は知人でも何でもない、それでも絶望的な戦いに恐怖は無いのか？」

ガープの恐ろしさと強さは身を持って体験している。だから怖くないなんて嘘でも言えない、だけど

「怖いです。本当に怖いですが、でも……やらないで後悔するなら、やって後悔したいんです」

遺品も何も無いと寂しそうに語っていたピートとシルフィーちゃん。何をしても死んでしまうかもしれない、だけど救えるかも知れないのなら、ほんの僅かでも未来を変える事が出来るのなら……俺はそれに挑戦してみたい

「そうか、ありがとう。怖くない等と言う人間は信用出来ない、我だつてガープと戦う事を考えれば恐ろしいのだからな。だがお前は自分の恐怖を口にした、それは信用出来る言葉だ。案内してくれ、お前と共に未来から来た者とドクターカオスの下へ」

その言葉安堵の溜息を吐く、ブラドー伯爵が協力してくれるように説得する。それが俺に出来る仕事だったから、これで対策を練る事が出来る。俺はその事に心底安堵し、マリアと共にドクターカオスの家へ向かうのだった

「怪しい相手は見つけている。だがそれがガープなのか、それともガープの部下なのかが判らない」

挨拶もそこそこに城に居ると言うアレンと言う謎の男と様子のおかしい養父のノア。そして奥さんのソフィアさんについての話し合いが始まった

「ガープの魔術の腕を考えると本人が変身しているって言う可能性もあるけど、違った場合大変な事になるわね」

「ガープの分身とガープ本体に挟み撃ちなんて冗談じゃないですからね」

美神さん達の話し合いと作戦が高度すぎて、何を言っているのか、何を考えているのかまるで判らない

「私は人質とされているであろう、ピートさん、シルフィーさんの居場所を発見するべきかと」

「それは我もずつとしているが、発見出来ない。我はやはりアレンがガープだと考えている」

「いや、そうだと決断するには早い。もう少し情報を集めるべきだ」

慎重に動きたいカオスのじーさんと家族が人質になっているブラドー伯爵は早く行動したい。この意見の対立が大きい物となっている

「人質も助けたと言って、ガープが何もして無い可能性は低いわよ？むしろ絶対何か仕掛けてる」

人の心傷つけるのを好むガープがただ人質に取っている訳が無いと美神さんが言う

「場所もここら辺じゃなくて全然違う場所にいるかも」

人質にも何か仕掛けを施している上で別の場所に監禁しているかも知れないと蛭が言う

（やっぱり普通に戦ってくる相手よりも、ガープは危険度が高いのか



?)

頭の中で心眼にそう問いかける。美神さんや蛭にはとてもではないが、今尋ねる事が出来ないからだ

「勿論そうだ。特にガープは1つの作戦で複数の戦果を得れるように、綿密に作戦を立てている。その全てとは言わないが、ある程度は予測を立てておかないと全滅する可能性が高い」

そっかあ……俺はガープの強さばかり考えていたけど、強さだけではなく、絡め手も打って来る相手だから美神さん達がこれほど警戒しているのかと改めて理解した。膝の上で寝息を立てているタマモやチビの背中を撫でながら、理解出来た範囲で美神さん達の話の反芻する

(ピートとシルフィーちゃんが人質で……場所がどこにいるのか判らなくて……)

「だが我はノアが完全にガープの術中に嵌っているとは思えない。ノアはガープに操られているかもしれないが、自分の孫を隠している筈だ」

「確かに、子供が行方不明と言っていたが……」

「だから今動くべきなんだ。ノアがガープの術中に完全に嵌る前に匿ったに違いない、だから今見つけ出すべきなんだ」

「それは判りますけど、見つける手段が無いんですよ?」

「もしブラドール伯爵の言う通りだったとしても、どこに匿われているか判らないじゃないですか」

「どこかに隠されているとして、私のセンサーで見つけるにしても、隅から隅まで探している時間はありません」

ピートとシルフィーちゃんを見つけるべきだと言うブラドール伯爵。だが見つける手段が無いと言う美神さん達の話聞いていて

(あれ?これ俺見つけられるんじゃないやね?)

ピートとシルフィーちゃんの事はよく知っていると云える。クラスメイトだし、良く話もする。2人の霊力は心眼は覚えているだろうし、後は何か2人が所持していた物さえあれば

「俺、どこにいるか、見つけられるかも」

「「「は？」」」」

俺のその思いつきの言葉に10の殺気だった瞳を向けられ、俺が怯えたのは言うまでも無く、昼寝をしていたチビ達が臨戦態勢に入り、その殺気に怯えて丸くなる中。俺自身震えながら見つけられるかもしれないという根拠を説明すると、それだと言って行動を始める美神さん達に安堵の溜息を吐きながら心眼に

(今度から何か言う前に心眼に相談していい?)

構わないと言う心眼の言葉に、今度から思いつきで何かを言う、ついでに行動する前に心眼に相談しようかと心に決めるのだった……

リポート15 変る未来 その4へ続く

## その4

レポート15 変る未来 その4

「……それでどういうことだ」

おキヌから横島達が消えたと聞き、脳裏に浮かんだのは神魔の奇襲だった。カオスが事情を知っていて、美神の事務所待っていると聞き、おキヌを置き去りにして事務所直接跳んだ。事務所の中が水浸しだが、それは意識して無視をする

「早かったな。事情としては簡単だ、どこかで稼動した超級の魔力炉と過去に存在した魔力炉が共鳴して、時空の裂け目が生まれた」

魔力炉と聞いて脳裏に浮かぶのは八卦炉だが……それを持つのは神族になる。魔族だけではなく、神族までも敵になるのか？と不安を抱きながら、稼動した魔力炉はなんだ？とカオスに尋ねる

「……稼動したのは八卦炉か？」

何かの機械で分析しているカオスは私に視線を向けず、違うと断言した

「恐らくは地獄炉。そして横島達がどこにいるかも大体予測がつく、テレサ。分析の結果は？」

「……ぐすつ、う、うん……こ、これ」

泣きぐずっているテレサ。もしかすると目の前で横島達が消えたので相当な精神的ショックを受けているのかもしれない

「……大丈夫か？」

「……て、伸ばせなかった……掴めたかも知れないのに、ごめん……」  
ぼろぼろと涙を流すテレサに大丈夫だと声を掛けながら頭を撫でる。ぼんやりとしていて確かではないが、横島の存在を遠くに感じる。だから大丈夫だとテレサを励ましていると、事務所の扉が文字通り吹き飛び

「おキヌから聞きましたわよ。どういうことですかの!？」

「く、首い……ゆ、幽霊だけど……し、死んじやい……ます……」

おキヌの首を鷲づかみにして、目から光の消えたくえすが煙の中か

ら姿を見せる

「……とりあえず、おキヌを放せ」

幽霊だから死ぬ事は無いが、目の前で苦しんでいるのを見る趣味は無い。放せと言うとくえすは舌打ちをしながら

「それでドクターカオス。どういうことなのですか？」

「簡単に説明するぞ、魔界……恐らくガープが地獄炉を起動した。そしてワシとブラドローが戦った時代でも地獄炉は稼動していた、2台の地獄炉が共鳴し時空の裂け目が生まれ、美神達が吸い込まれた。多分だが……ワシとブラドローが戦った1200年代にいるはずじゃ」

その言葉に舌打ちする。現代ならばどこにいても、横島の側にいる。だがそれが出来ないという事はこの時代に居ない可能性を考慮していたが、まさかそんな昔に在るなんて夢にも思っていなかった

「……横島達を連れ戻す手段は？」

「悪いが、「今の」ワシには無い」

今と言う言葉を強調するカオス。その言葉の真意は直ぐに判った「大丈夫なのですか？若い時の貴方達は？」

それは横島達がいる時代のドクターカオスとブラドローが何とかするということだ

「大丈夫じゃろう。美神の母が時間移動者と聞いている、霊能は子供に遺伝しやすい、恐らく美神も同じ能力を有しているはずじゃ」

仮に無理だったとしても、地獄炉同士の共鳴を使えば、この時代に送り返すことも可能。ワシとブラドローが協力すれば、時間軸の特定も可能だ。だから戻ってくる事は出来る、その言葉を聞いて安堵の溜息を吐きかけるが、次の言葉で息を呑んだ

「ただ懸念材料もある……ワシとブラドローを戦うように舵きりしたのがガープ。過去のガープと遭遇する可能性が高い、それだけが懸念材料じゃな」

聞くと思っていなかったガープの名前。そして横島達の前に現れるかもしれないと聞き、その場所にいけないこと、そしてこの場所で横島の無事を祈る事しか出来ない、眼魂はウイスプしか持たず、他の眼魂は全て家に保管されていた。戦力はガタ落ちだが、それでも横島

は戦おうとするだろう、心眼や美神が上手く止めてくれると思うが、不安が私の胸から消える事は無い

(どうか、無事に戻ってきてくれ)

無事に戻ってきて、元気な顔を見せてくれと祈ることしか出来ない自分自身に激しい怒りを抱くのだった……

「どうやってピートとシルフィーちゃんを見つめるか？」という話し合いをしている中、横島君が呟いた見つけられるかも？つとと言う言葉に私達全員の視線が横島君に向けられる。

「えっと……そのですね」

私達の視線に耐えかねたのか、横島君はタマモを抱き枕のように抱えながら

「ピートとシルフィーちゃんのどちらかが持ってた物があれば見つけられると思うんですよ。ダウジングで」

人探しはやった事無いですけど、多分大丈夫ですよと言う横島君はGジャンの内ポケットからクリスタルのペンデュラムを取り出す

「それにもし周囲に反応が無いなら、この周辺の地図とお城の見取り図があればの話なんですけど……」

自信無さそうに言う横島君だが、実際問題横島君のダウジングの精度は相当高い

「それでどうなんだ？お前の弟子のダウジング能力は？」

「正直言って最高レベル。神魔の結界を突き抜けて、目的地を2回見つけてくれたわ」

私の言葉を聞いて照れている横島君だが、正直事実だ。過大評価しているわけでもない、過小評価しているわけでもない。純然たる事実だ。問題は

「人探しは出来るの？」

物を探すのは驚くほどに正確だった。だけど、それは規格外の霊力の反応が合ったからとも言える、まだ幼い2人を見つけれられるの？と問う

「2人の事はよく知ってるし、見つけて見せます」

不安そうな顔をしているが、見つけて見せますと断言する横島君。ここまで言うのなら、信じてもいいが何を頼りに探すつもりなの？と尋ねようとすると、それよりも早くブラドール伯爵が口を開いた

「ふむ、判った。では横島、何を用意すればいい？」

「この周辺の地図とお城の見取り図、それとピートかシルフィーちゃんの持ち物があれば……」

この時代では地図と見取り図は非常に貴重な品だ。何時戦争が起きるか判らない、そんな状態で自国の地図や城の見取り図は極秘レベルの貴重品だ

「ブラドール伯爵、ドクターカオス。どうですか？横島が必要としている物用意出来ますか？」

【横島のダウジングは地図や探す人物の道具がなければ、その精度は4割ほどに低下する。地図などがあれば8割は当たると見て間違いない】

蛍ちゃんも心眼の言葉を聞いたブラドール伯爵とドクターカオスだが、その顔色はやはり芳しくない

「ピエトロとシルフェニアの所有物。それはここにある」

ブラドール伯爵が懐から取り出したのは孔雀の羽が美しい羽ペンだ。中世の時代って感じがするわね、この美しさと無骨さが両立したデザインって……差し出されたそれを手に取り、思わずいくら位かな？とを考えてしまう

「だが地図。これは難しい、お前達の時代と違うのだ。この時代では地図や見取り図は国家機密となる重要な品だ、いかに私とブラドールだったとしてもおいそれと手に出来る品ではない」

やっぱり地図の入手は難しいとなりかけたとき、話を聞いていたマリアが手を上げて

「ドクターカオス、ブラドール伯爵。私が測量し、分析し、地図を書き上げると言うのはどうでしょうか？」

人造人間特有の提案だが、それはあまりにリスクが高い

「マリア、判ってる？下手をすれば、一番危険なのよ？」

人間ならまだしも、神魔ならばマリアが人間ではないと一目で悟るだろう。この時代で人間ではない、それが露見する事はリスクが高すぎる

「リスクは承知です、リスクを恐れ動かなければ何も手にすることは出来ないです」

確かにその通りだ。今の私達は敵の支配圏にいる、自由に動くのは危険だがじつとしては手遅れになる

「判った。ではマリア、明日私がソフィア姫の治療に向かう際に同行し、城の分析をしてくれるか？」

「お任せください」

にこりと微笑むマリアを心配そうに見つめている横島君。マリアは大丈夫ですよと笑いながら、横島君の手を取って

「大丈夫です、私はちゃんと無事に戻ります。だから心配しないでください」

「……うん、判った。気をつけてな？マリア」

【細心の注意を払ってくれ、気をつけてな】

「みむう……」

「びぎゅ……」

横島君の声に続いてチビとうりぼーが心配そうな声を掛ける。タマモは声には出さないが、その目をマリアに向けて心配そうにしている

(横島はどういう人間だ？何故小悪魔などを連れてくる？)

気になっていたんだが、話し合いに関係ないから尋ねるのを待っていたんだがと言うドクターカオスに私は少し考えてから

(人間以外にとっても好かれやすいんですよ、彼)

敵対しない人外とはほほ仲良くなると言うのと、流石のドクターカオスとブラドー伯爵も呆れ顔だ

(なるほど、我が好意とまでは言わないが、それなりに話を聞こうと思っただのはそれか)

(人外種限定の魅惑でも持っているのか?)

それは私が知りたいと思いつながら、マリアと話を見て面白く無さそ

うにしている蛍ちゃんの中を押す。この子ってあれなのよね、嫉妬とかそういうの我慢しちゃうのよね。とは言え、溜め込みすぎると良くないので背中を文字通り押しあげてあげる

「マリアさんも気をつけてくださいね？」

「はい、大丈夫です」

横島君に対する返事よりも刺々しい返事。横島君はマリアと蛍ちゃんに挟まれておろおろしている……私は小さく溜息を吐いて

「じゃあ、私達は話し合いを続けましょう。領主のノアさん？それとソフィア姫についての話を聞かせて欲しいわね」

あの3人は今はとりあえず、ほっておきましょうとドクターカオスとブラドール伯爵に声を掛け、この領地の領主と姫の話を聞き、人間関係などの話を纏める事にするのだった……

扉も無い、窓も無い。そんな部屋で何日過ごしただろう？薔薇の花壇がこれでもかと用意されていたので飢える事は無い。だけど、暗く、寒いこの部屋にずっといると流石に頭がおかしくなってきたそうだ  
「お兄様。なんでおじい様は私とお兄様をここに閉じ込めたのかしら……私達の事をお嫌いになったのでしょうか？」

僕に抱きついて震えるシルフェニアに大丈夫だよと声を掛ける。震えるその身体を抱きしめて

「おじい様が僕達の事を嫌いになる訳が無いよ、だって言っていたじゃないか。危ないから、ここに隠れていなさいって」

これから大変な事になるかもしれない、お父様が戻って来るまではここから出てはいけないうって言われただろう？と言うとシルフェニアは

「で、でも、お母様は……？」

「お母様も大丈夫。ここでちゃんと良い子で待っていれば、2人でちゃんと迎えに来てくれるよ」

シルフェニアでは自分に言い聞かせるように、僕……ピエトロ・ド・ブラドールは何度も何度も大丈夫だよ、心配ないよとシルフェニアに



言って聞かせるのだった……事の始まりは何時だったか……お母様が病気で倒れ、おじい様のお城に来てから、何かおかしいと感じていた。見知らぬ執事に、刺々しいメイド。僕達に普段通りに接してくれたのはセバスだけだった

(本当にどうなっているんだ……)

涙を流しながら眠っているシルフェニアの髪を撫でる。僕だって本当は泣きたいし、叫びたい。でも僕が泣いたらシルフェニアまでが悲しんでしまう、だから僕はお兄様だから泣いてはいけないんだ

(お父様……お母様)

姿の見えない両親と必死の表情で僕とシルフェニアをここに隠したおじい様の真意が判らない。子供だから判らないと言えばそれまでなのだが……それしか考えることが無くて頭の中で同じ考えがぐるぐると回っている

(明日も、明後日もこうなのだろうか)

変らない毎日がこれからもずっと続くのだろうか、何時になればここから出る事が出来るのか……そんな不安を抱きながら、僕はシルフェニアを抱きしめて目を閉じるのだった……

眠って起きて、薔薇から生気を貰って……今日も変わらないそんな毎日だと思っていた、だがズシン！ズシンツツ!!と重い振動が響く

「お、お兄様」

「だ、大丈夫。大丈夫だよ、シルフェニア」

外から聞こえてくる唸り声と重い衝撃音にまさか、カトリックの司祭だろうか言う不安が脳裏を過ぎる。おじい様が僕達をここに隠した理由は異端審問だったのかと考えている中。ガラリつと音を立てて壁が崩れる、そして逆光の中から姿を現したのは

「ぴぐう♪」

まん丸とした目をした巨大な猪の姿だった。予想外すぎるその姿に僕もシルフェニアも困惑していると

「うりぼーお疲れ、ピエトロとシルフェニアちゃんの良いんだよな？」

ブラドール伯爵に言われて助けに来た。おいで」

肩の上にグレムリン、頭の上に狐を乗せた人の良い顔で笑うその姿

に助かったのだと思う前に

「本当にお父様の知人ですか？」

どう見てもこちら辺の人間ではない、嘘かもしれないと思い警戒しているとその人は大丈夫ともう一度笑い

「ほら、これ。ブラドール伯爵から預かってきた」

差し出されたのはお父様の紋章が刻まれたブローチ……それを見て、この人が本当に助けに来てくれたのだと判り、僕もシルフェニアも暗い部屋から逃げるように飛び出し、その人に抱きつく

「怖かったな、よく頑張った。ほら、おぶさって」

背中を向けるその人の背中に僕が困惑していると、シルフェニアはえいっと言って背中にしがみつく

「ほら、ピエトロも急いで、早くしないと大変な事になる」

その言葉に困惑している時間が無いと悟り、僕もその背中に両手を伸ばす

「よし、ちゃんと掴まっててくれよ。うりぼー！GOッ！」

「ぴぐーッ!!」

可愛らしい鳴き声から想像出来ない重い足音で走り出す猪の後を追いかけて、走る青年の背中にしがみつきながら

(お父様、お母様)

いまこのお城で大変な事が起きている。それしか判らない、今僕に出来る事は両親の無事を祈ることだけだ……

……  
横島がピートとシルフェニアを救出した頃。美神達はと言うと

「困りますね、ドクターカオス。何故吸血鬼と人造人間を連れているのです？」

目の前の20歳くらいの青年からは刺すような殺気が放たれている。人のいい顔で笑っているが、その目は全く笑っておらず、私達すら見つめていない

(横島は大丈夫かしら)

ソフィアさんの所にガープ本人か、ガープの手下がいるという予測。そして横島は潜在霊力こそ高いが、霊力はさほど無い。私たち自身と囿にし、横島がピートさん達を助けるという計画だったが、本当にガープを退ける事が出来るのかと言う不安が脳裏を過ぎる

「困る？ソフィア姫の夫を連れて来て何が悪い？お前にそこまで口を出す権利があるのかな？」

執事の癖に？とドクターカオスが挑発するような口調で言うが、目の前のアレンはにこりと微笑み

「勿論ですとも、ね？ノア様」

「そうだ……私が許可をしている」

カーテンの陰から姿を現した老人……だがその身体はとても老人とは思えないほどに鍛え上げられており、その腰には剣が携えられている

(やっぱりこうなったわね)

美神さんが忌々しそうに舌打ちする。アレンがガープ本人なのか、ガープの手下なのかは判らないがこの城は既にアレンの手中に落ちている

「我が養父ノアよ。何故我はソフィアに会いに来てはならぬ？教えてくれ」

「……」

ブラドール伯爵の問いかけにノアは何の反応も示さない、それ所か視線すら合わさない……その後でニヤニヤ笑うアレンに確信した。ノアに今自分の意思は無い……アレンに完全に支配されていると……

「相変わらず、回りくどい上に人間を玩具にする戦い方をするのね、アレン……いえ、ソロモン72柱ガープ」

美神さんが静かにそう問いかけるとアレンは顎の下に手を当てて

「はて？何処かでお会いしましたか？何故貴女は私を知っているのですか？」

口調は丁寧だが、先ほどの比ではない殺気がアレンから放たれる。その殺気は物理的な威力を持ち、部屋の中を荒らしまわる

「マリアー！当初の予定通りだ！ソフィア姫を護れ！」



魔の部隊が動いてくれることを祈りながら

「あんにめちやくちやにされた、私の家族の分までぶん殴ってやるわ！」

「それは良かった。ではもつとめちやくちやにして差し上げましょうか？」

安い挑発だと判っているが、その声を聞いてから走り出す、ガープ相手に後手に回れば何も出来ずに封殺される。例え有効打を入れることが出来ないとしても攻め続けることしかガープの動きを封じる術は無いのだから……

リポート15 変る未来 その5へ続く

## その5

レポート15 変る未来 その5

ピートとシルフィーちゃんの救出作戦の案を組み上げるまで3日の時間が掛かった。その内2日はマリアによる、城の見取り図作成と周囲の地図を作る事だった。では2日間俺達が何もしてなかったというところでは無い

「東洋魔術か、興味深いことだ」

「いや、俺全然詳しくないんですけどね」

そうなのか？と尋ねてくるブラドール伯爵。俺は陰陽術は使えるが、知識不足がかなり大きく響いている。

「そこ文字を間違えてるわ、集中して」

「は、はいー」

美神さんの注意にしまったと思いつつ、手にしている筆に意識を向ける。この時代では破魔札や、防御札の入手は難しいと言いかまわず無い。と言う訳で俺が追加で書き足すことになった

【良し、いい調子だ。ゆっくりで良いぞ】

心眼の助言と美神さんの言葉を聞きながら、額に汗を浮かべながら札を書き上げる

「よし、それをこっちに回せ」

「はい、お願いします」

そして俺が書き上げた物を蛍とカオスのじーさんの2人で更に術式を加え、俺の未熟な札作成を補ってくれる

「ふー……」

書き上げたのはたったの10枚。それでも疲れて、背もたれに背中を預けて溜息を吐く

「はい、お水よ。大丈夫？」

「大丈夫つすけど、これなんかすっごい疲れます」

文字を書いているだけなのだが、疲労感が凄まじい。失敗が許されないという緊張感による物だろうか？

「文字を書くときに霊力を消費している。だから疲れるんだ、そもそも札系が高価なのは手書きによる物だからだ」

心眼の言葉にあれ手書きだったんだと呟くと、美神さんは違うわよ？と笑う

「安い廉価版はインクだけ特別な物にしてるのよ。高い奴は手書きで、しかも札自身も清めてる。値段にすれば10倍くらい差が出るわね」

「へーそれじゃあ、俺がこれを作って売れば美神さんの道具を買うのも楽になります?」

道具が高いとぼやいているのを良く聞いているので、軽い感じで尋ねると美神さんの顔が一気に険しくなった

「横島君、それだけは絶対にやっちゃ駄目よ? 札系の霊具は陰陽寮って言う所が取り仕切っているんだけど、利権にうるさいのよ。もうそれしかとりえの無い組織と言えるし、それこそ裁判沙汰になるわ。だから絶対にやったら駄目」

陰陽札は技術は喪失してるから問題ないけど、他の札はその9割が陰陽寮の元で作られている。残りの1割も六道家が主導だから、文句を言わないが、ポツと出が商売に使うとすれば大騒ぎになると教えてくれた。そして今回が特別なのだよと言う言葉に俺は引き攣った声で判りましたと言うのがやっとなかった。こんなに鬼気迫る表情をするのは初めてだったかもしれない

「お、お待たせしました、見取り図が書き上がりました」

奥の部屋で見取り図をかいていたマリアがやってきて、机の上に地図を広げる。地下もあるし、塔もある。非常に広い地図だ

「じゃあ、やってみます」

「頼むぞ」

ブラドール伯爵から差し出された羽根ペンを地図の上に置いて、ペンデュラムを手にする。地図の上をゆらゆらと動き回るペンデュラム……そのペンデュラムを徐々に徐々に下から上に向かって移動させていく

「地下じゃないのか」

カオスのじーさんの声が遠くに聞こえる。ペンデュラムを通じて、何か伝わってくるのだが、何かノイズが混じっていて上手く感じ取れない。意識を集中させて、そしてゆっくりと地図の上を滑らせていく

(マリアが頑張ってくれたんだ、絶対に見つける！)

マリアの頑張りを見事に無駄にしたいくない、そう思いペンデュラムを動かす……だが城の何処にも反応がなく、駄目なのかと思った時。ペンデュラムに大きな反応があった。俺の手を引っ張るような強烈な反応

「(こーこー)ですー！」

ペンデュラムが回転したのは城の外れの方にある塔の中腹だった

「私が行った事が無いな。ブラドローここは？」

「兵士の装備が備蓄されている塔だ。とは言え、もう10年近く使うことは無かったらしいが」

兵士の装備の備蓄……そんな人気の無い所に居る、子供の時のピートとシルフィーちゃんを早く助けてあげたいと思った。ブラドロー伯爵も同じ気持ちだと思っただけだが

「無事ならばいい、計画と装備を整えよう」

そのまさかの言葉に顔を上げたが、ブラドロー伯爵を見て反論する気はなくなった。口元を引き絞り、拳を震えるほど握り締めている姿を見れば何も言える訳が無い

「準備と作戦は出来るだけ早く立てる、もう少し待っていてくれ」

今出来るのは無闇に行動することでは無い。安全と相手の手を予測する事だと言うカオスのじーさんとブラドロー伯爵を筆頭に作戦を立てること

「幸いと言うべきか、この周辺諸国にはバチカンなどの神族の駐在所が多い。暴れていけば様子を見に来る者は必ず居る」

「守護天使とかね、確かにそうね」

駐在所……妙神山みたいな場所の事を言うのだろうか

「でも、ガープが対策をしていないとは思えないんですけど」

「そこは横島の持っている。トカゲデンワ、あれで戦いを記録する。」



お前達の記録が神魔の元に残るが、そうしなければブラドールが犯人に仕立て上げられてしまう」

Gパンのポケットからトカゲデンワをカオスのジーさんに渡す。これで戦闘の記録は作れる、ブラドールの無罪を証明する事になるだろうと笑う

「鬱陶しい輩だ、暴れても自分に被害が出ないようにしている辺りが実に悪辣だ」

忌々しそうに言うブラドール伯爵。でも事実その通りだと思う、養父とお嫁さんを助けようとして、自分が犯人にされては堪ったものじゃないだろう

「じゃあ徹底的に耐久ってことになるのかしら？」

「攻撃よりも防御に重きを置くつもりだが、それもどこまで通用するか」

「相手はソロモンの魔神。最上級神魔だからな」

対策は用意するが、それでも何処まで通用するか判らないというブラドール伯爵とカオスのジーさん。その深刻な顔を見て、ガープと存在がいかに強大なのかと言うのを改めて思い知らされたのだった

……

(くそお！途中までは成功だったのに!!)

背中に子供の時のピートとシルフィーちゃんを背負って長い廊下をひたすら走る。2人が怖がるからと心眼はバンダナに現れずに、俺の頭の中に直接声を掛けてくる

(やはり懸念していた通りだ。ここの塔全体に魔力が流されているぞ)

そうなるだろうと予測していたが、実際にそう言われると不味い状況になってきたと思わず舌打ちする。ピートとシルフィーちゃんの羽ペンと城の見取り図で2人のいる場所は判った。言うまでも無く、監視されている筈だ。そしてカオスのジーさんとブラドール伯爵、そして美神さんと言う3人の頭脳派が出した作戦は美神さん達が敵陣の真ん中に突っ込み、俺とうりぼー達による強襲と即時離脱。その後美神さん達と合流するという計画だった。だがそれはいきなり大きく

躓いた、カオスのジーさんとブラドール伯爵の用意してくれた結界を砕くナイフ。これが不発だったのが大きく響いている

(時間を掛ける訳には……ッ！)

美神さん達の方に合流しないといけないのに、この塔に隠されていたギミックが作動したとなると思うように移動は出来ないだろう

「横島！こっちは駄目ッ！！」

「タマモ!? どういうことだ!?」

入り口を護っていたタマモが階段を駆け上がりつつくる。俺だけでは当然不安が残る、だから精霊石で人化して貫つたのだ

「鎧とか全部ガーゴイルよ！下から順番に動いてる!!上から外に出るしかないわよ!」

ずいぶん鎧とか多いよなっと思っていたけど、兵士の装備の備蓄庫だからかなって思ってたけど、それ自体が悪魔かよ！舌打ちしながら「大丈夫だから！絶対大丈夫だからッ！」

背中であざけているピートとシルフィーちゃんに大丈夫だを声を掛け、俺は下に続く階段ではなく上に続く階段を駆け上がる

「うりぼー！ビーム連打アッ!!チビ電気ショックッ！」

「びぐびぐーッ!!」

「みむううッ!!!」

階段の上でも動き出した鎧に不味いと判断し、うりぼーだけではなく、チビにも攻撃の指示を出す

「横島、上は上で危険だけど、下よりかは安全だと思うわよ！狐火ッ!!」

壁に立てかけられた絵画から飛び出てきた悪魔にタマモが炎を叩きつけ、焼き尽くす。炎の横を通り過ぎ、そのまま上へ上へと走る  
(くっそお！美神さん達は大丈夫なのか!?)

俺でさえこの有様だ。美神さん達は大丈夫なのかと言う心配が頭を過ぎるが、今は自分の事を何とかするしかない。俺はひたすらに足を動かし階段を駆け上がり続けるのだった……

目の前を過ぎる銀の閃光に舌打ちしながら後退する。切り落とされたマントが邪魔なので、そのまま脱ぎ捨て拳を握る

「おい、カオス。洗脳解除の道具とかは無いか」

「あつたら使っているッ!!」

それは道理か……尋ねるだけ愚問だったか。ガープによって操られているノアは老人とは思えない速度と破壊力で矢継ぎ早に剣撃を繰り出してくる。神官によって刀身を洗礼されたその剣は我にとつては致命的な一撃を与え、無論カオスにも大ダメージを与える品だ

「さあ?どうしたのです?私を殴るんじゃないですか?」

「ちっ!詠唱時間が短い!」

「遠距離も駄目、近距離も駄目!本当に化け物ッ!」

ガープの魔術に美神と蛭も思うように動けていない。詠唱までのタイムラグが短すぎる……あのレベルとなると最高位レベルだ(ちっ!この分けは失敗だったかッ!)

我が美神か蛭と組んでいれば、完全とまでは言わないがある程度はガープの魔術を無効か相殺が出来ただろう。そして美神か蛭のフロローが出来た。そしてそれは逆も然り……養父だから我が止めたいと思った。その心情すらも完全にガープの手の内だったのだろう

(ノア……ソファイア……)

私の宝が今同時に失われようとしている。それだけは、それだけは防がなければならない……

(命に代えても……ッ!)

未来の我から綴られた手紙には我はカオスと相打ち同然に破れ、失意のままブラドー島に戻り。島を封印する眠りについたと……ノアはその後ソファイアの後を追うように病死……それすらもガープの呪だっただろう。私の家族をめちやくちやにしたガープを許す事は出来ない

「ノア!私の声が届かないと言うのかッ!!返事を返してくれ!!」

「……ッ!」

光を灯さない目で我を睨みつけるノア。それは我が見たことの無い目だった……凄まじい踏み込みと共に振るわれた銀の剣。ノアの

目に威圧され反応が遅れた

「くっ！何をしている！呼びかけるにしてもまずは無力化してからだろう！」

カオスが割り込みノアの剣を弾き飛ばす。だがノアはそんなことをお構い無しに腕を伸ばし

「がっ！ぐうっ！」

カオスの首を締め上げ、床に叩きつける。カオスが叩きつけられた場所が蜘蛛の巣状にひび割れる。それはとても人間に許された膂力ではない、その証拠に攻撃したノア自身も指があらぬ方向に曲がっていた

「これは何事ですか!？」

「セバス！来るなッ！」

騒音でセバスや衛兵がソフィアの部屋に雪崩れ込んで来て、ガープの姿を見て絶句する

「最上級神魔だ！ノアはあいつに操られ、ソフィアは呪われたッ!!」

ガープの使い魔は蝙蝠だ。我が吸血したと思わせ、蝙蝠でソフィアに呪をかけていた

「ノア！止める！」

カオスに止めを刺そうとしていたノアの後ろに回りこんで羽交い絞めにする。だがその圧倒的な力は我を簡単に弾き飛ばし

「ごはっ!？」

腹に肘打ち、そこから剣のなぎ払いが振るわれる。命中する寸前にヴァンパイヤミストで霧化し、床に叩きつけられていたカオスと共に距離を取る。我とカオス、そしてノアとガープを交互に見ている衛兵に向かってカオスが叫ぶ

「私はスイス領の領主の娘！マリア姫の騎士！カオスだ！私が証言する！ブラドール伯爵は私達の味方だ!!お前達では何も出来ん！城の人間と共に避難せよ!!」

スイス領の領主の娘の騎士。その地位にある人間の言葉に衛兵達はやっと私の言葉を信じたのか、背を向けて走り出す

「お前、騎士の称号を持っていたのか？」

「まだだが、私もお前の言葉も信じないだろう？ならばそう名乗るが得策だったという事だ」

ニヤツと笑うカオスだが、直ぐにその視線をノアに向ける。壊れた人形のようにこっちを見つめるノアの顔は青白く死人のようだ

「このままではノアは死ぬ。その前に取り押さえなければ」

「取り押さえると簡単に言うがな、ノアの力は我とお前よりも上だぞ」  
ノア本人ではなく、ガープの術で強化されているノアが強すぎるのだ。文字通り命を削り、振るわれる一撃は我とカオスの命を刈り取るには十分すぎる代物だ。マントの中に手を伸ばす、美神から借り受けた精霊石……これを使えばノアの動きは封じれる。だがさつき羽交い絞めにした時は強引に拘束を振り解いた……精霊石で閉じ込めたとしても暴れ、そして自らを傷つけるかもしれない

「カオス、なんとしてでもノアの意識を呼び戻す」

「……私は反対だ。手足を折り、拘束することを提案する」

カオスの提案は至極当然の事だ。我だってそれが正解だと言う事は判っている

「それは承知だ。だが我はそれをしたくない」

我は伯爵と名乗っているが、伯爵と言う名を授けてくれたのはノアだった。更に言えばある満月の晩に偶然であったのがソフィアであり、強引に我をここまで連れてきた。そして我はこの城で人間の知恵を、知識を、常識を学び。伯爵と言う地位とブラドー島を得た

「我はな、孤独だったのだ」

始祖は地球や、抑止力が生み出した存在だ。適度に災害を起こし、人間を間引く。そのための英知と術は得ていた。我は最初からこの姿であり、何百年も生きた。たった一人で生きる事が当たり前だと思っていた。それを変えてくれたノアとソフィアを失いたくないのだ

「我は家族を、友を得た。我はその恩人であるノアを傷つけたくは無  
い」

始祖の吸血鬼がずいぶん甘い事を言うとカオスは笑ったが……

「その甘さは嫌いじゃない、そこまで言ったんだ。ノアの意識を呼び

戻せ」

「言われるまでも無いッ！」

地面を蹴りノアに向かって走る、孤独だった我が手にした宝……それを奪われる訳には行かない

(なんとしてもこの手に取り戻す)

ソフィアもノアもガープの思い通りになどさせてたまるか、絶対にこの手に取り戻す……ッ!!

城の床を転がりガープの魔術を回避し、思わず舌打ちをする。魔術と魔術のラグが短い……高速詠唱、いや、あれは神速詠唱とでも言うべきものだ

「どうしたのかね？私を殴るのではないのかな？」

私はここから動いていないぞ？と挑発してくるガープ。殺そうと思えば私も美神さんも死んでいる、それでもまだ生きているのはガープが私達を嬲り殺しにするつもりだからだろう

(何とか逆転の一手を……)

詠唱までのタイムラグが無く、遠距離・中距離ではまず勝機は無い。更に言えば近接を挑んでも白兵戦に無詠唱の魔術を組み合わせている……打撃の威力は耐えられるのだが、追加のその魔術が厄介すぎる「来ないのならこっちから行くぞ」

ガープの口元が動き、ガープの正面に6つの魔法陣が展開される。それを確認するよりも早く地面を蹴ってガープからの距離を取る

(駄目だ。距離を詰められない！)

圧倒的までの戦力差。無詠唱の魔術と打撃の方がまだ対処出来る、火球と氷の飛礫を防御符で弾き、分断された美神さんの方へ走る

「蛭ちゃん。まだ防御符残ってる!？」

「あと3枚です！」

魔法の余波だけで弾け飛ぶ防御符。用意した中では最高級品だと言うのにガープの魔術は耐えれないのだ、30枚あった札はもう殆ど残っていない、それに横島が作ってくれた物も残り少ない。美神さん

私は後1枚だわと言うので、3枚のうち1枚を手渡す

(距離を取ったら私達じゃ対処出来ないです)

(悔しいけど、その通りね)

防ぐ事も出来ない、避けても致命傷になり兼ねない。もし私ではなく、ブラドール伯爵ならば相殺もしくは威力の軽減は出来たかもしれないが、それはかもしれないだ。ブラドール伯爵の魔術でも相殺出来ない可能性もある

(距離を詰めて打撃に警戒しかないと思うんですけど、どう思いますか?)

美神さんも同じ意見なのか、リスクしかないけど、距離を詰めない事にはこのまま押し切られる。リスクは覚悟の上、それでも前に出るしかない。私と美神さんは同時に地面を蹴りガープへと駆け出す

「玉碎覚悟かね?だが無駄だ」

地面を走る電撃に同時に防御札を翳す。数秒防御札が耐えたが、一気に黒くなる。だがその数秒で十分だった、防御札の横を駆け抜ける「ほう……」

ガープの馬鹿にしたような眩きが聞こえるが、それは気にならない。少しでも当たれば死ぬ、その緊張感は極限の集中状態にはいるには十分な切っ掛けだった……全てギリギリで回避し、神通棍も1本犠牲にし、最後の防御符と精霊石のイヤリングでガープの魔術を防ぎ、ガープに手が届く範囲まで飛び込む

「ふむ。……ここまで来たか、ダンスでも踊るかね?マドモワゼル?」

両手がこれでもかと怪しく光るガープ。ダンスはダンスでも死のダンスとか言うのだろうか

「お断りよッ!」

予備の神通棍を取り出し、それを伸ばしながら殴りかかる。美神さんも同時に振るっているので、挟み撃ちの形になるがガープは周囲に展開したバリアでそれを完全に防ぐ

「人間では私に傷をつけることなど」だーらっしやあああッ!!」ぐっふうっ!」

私には効かないと自慢げに言おうとした瞬間。ガープの横の窓が

砕け散り横島が飛び出してきて、顔面に蹴りを入れてガープを吹き飛ばす、それから遅れてタマモも窓からスカートを抑えて飛び込んでくる

「横島君!?!」

「横島ツ!?!」

なんで窓から!?!とかガープになんでダメージをとか、色んな疑問は残るが……大きな問題が生まれてしまった

「このに、人間風情があツ!!!よくも、この私の顔を足蹴にしてくれたなあツ!!!」

今まで余裕と言う素振りでごつちを挑発していたガープがマジ切れしてしまった。と言う最悪な展開になってしまったのだ……だが横島は横島で

「やつとあの無限階段を脱出できたぞツ!!!……あれ?美神さん?蛍?……(こごとこ?)」

「脱出は出来たけど、とんでもない事になっちゃったかもしれないわね……」

どうもガープの罠に嵌っていたのか、背中にピートさんとシルフィーさんを背負ったまま、周囲をきよろきよろと見回していたのだった……

背中にピートとシルフィーちゃんを背負ったまま、俺は困惑していた。あの後階段をひたすら登り続けていたのだが、何時まで登っても頂上に着かない。うりぼーとチビも攻撃する気力が無くなり掛けていた頃

【無限通路かもしれない】

一定の距離を進むと元の場所に戻される罠だと心眼が説明してくれた、なんつう厄介な罠を……

「タマモどうしたらいいと思う?」

このままではいつまで経っても美神さん達と合流出来ない。タマモに何かいいアイデアは無いか?と尋ねるとタマモは窓を見つめて、



覚えてる？って尋ねてくる

「覚えてるって何を？」

「美神の所に入社するときの試験」

……あ、ああ！あれか！レギオンとかいうやつが出てきた奴！覚えてるといってタマモは窓の外を指差して

「あの時と同じか賭けるつもりはある？」

塔の中は無限通路。外までは同じとは言い切れないけど、何か仕掛けがあるかもしれないとタマモが言う

「しかしリスクがある。全く別の場所に跳ばされたらどうする？」

「でもこのままだと、消耗してガーゴイルに殺されて終わりよ？それとも美神達が助けに来るまで逃げ回る？」

それも1つの手段だけど、全滅する可能性は高いわよ？とタマモが断言する。それは俺も判っている、チビとうりぼーが奮闘してくれたが、いつまでも持つ物じゃない。打破できるかもしれない以上やってみる価値はある

「お、お兄さん。止めたほうがいいと思うよ」

「う、うん……私達は大丈夫だけど、お兄さんは死んじゃうかもしれないよ？」

シルフィーちゃんとピートが止めた方がいいと言う。確かにその通りだろう、ピートやシルフィーちゃんならこの高さから飛び降りてもしにはしないが、俺は死ぬ。それは間違いないだろう

「いざとなれば、私に変化して掬いあげるわ」

「ありがとう」

横島に死なれたら困るものと笑うタマモにもう1度ありがとうとお礼を良い、小さくなっていたチビとうりぼーをポケットに入れて

「シルフィーちゃん、ピート。まあ確かに君達の言う通りだと思うけど、このままじゃ駄目なんだ。だから俺はここから飛び降りる」

顔色を変えるピートとシルフィーちゃん。俺を心配してくれているのがよく判る……

「やらないで後悔するなら、俺はやって後悔する」

あの時ああしていれば、こうしていればと思うくらいなら、やって

後悔したい。やらないで後悔するなんて真似はしたくないのだ、ピートとシルフィーちゃん頭の頭を撫でてからもう一度背負う

(あ、やっぱ怖い)

駄目かもしれないという恐怖が首を持ち上げるが、ここで怯えて動かなかつたら結局死ぬのだ

「しゃあ行くぜツ!!だーらっしやあああッ!!」

自分を鼓舞する為にそう叫びながら窓から飛び降りたのだ……俺は目の前で激怒しているガープを見て

(どうしてこうなった……?)

やらないで後悔するなら、やって後悔する。それは間違いない、だが何故飛び降りた先にガープがいるんだ……俺か?俺の運が悪いのか?……いやいや、まずあの塔を脱出できたんだ。それでよしとするべきなんだ……

(タマモ、ピート達を頼む)

(……無理しないでよ?他の眼魂も無いんだから)

俺の考えている事を理解してくれたタマモがチビ達とピートを連れて離れていく

「消え失せろッ!」

「行くぜウイスプ!」

ガープが火球を放つのと俺がウイスプ眼魂のボタンを押すのはほぼ同時だった。美神さんと蛭の悲鳴が重なるが

「美神さん!蛭!フォローお願いしますッ!」

俺には正直魔法なんて言われてもそれを判断する知識が無い。魔法に関してはウイスプの防御力が高いので、ある程度は無効化出来る。だから俺が近接を勤めるから二人にフォローをお願いしますと叫ぶ

「イツヒツヒーツ!!」

そしてウイスプは炎の中で大きく回転し、ガープの炎を弾き飛ばす。楽しそうに笑っているが、パーカーの裾が少し焦げている事は言わない方が良さそうだろうな……多分

「なんだそれはあッ!!」

ウイスプを見て驚愕しているガープ。確かにこれは所見では動揺するよな、とは言え、答える義理は無いけどな！

【アーイツ！シツカリミナー！シツカリミナー！】  
「変身ッ!!」

ガープの炎を弾き飛ばし、空中で踊っていたウイスプが反転し、一気に降下してくる

【カイガン！ウイスプ！アーユーレデイ？】

【イヒヒー♪】

「行くぜ！ウイスプ！」

空中でハイタッチすると、もう慣れてしまったノツペラボウの姿に変わる。そしてパーカーに変形したウイスプが被さる

【OK！レッツゴーッ！イ・タ・ズ・ラー！ゴ・ゴ・ゴーストッ!!!】

フードを取り払い、拳を掌に打ち付ける。カオスのじーさんとブラドー伯爵それに、ピートとシルフィーちゃんに母親のソフィアさんに、祖父のノアさん……色んな人の気持ちを踏みにじったガープ  
「何度だつててめえの顔を殴つてやるッ！」

こいつだけは絶対に許せない。許す事など出来る訳が無い、俺は拳を硬く握り締めガープへと駆け出すのだった……

痛む身体に顔を顰めながらベッドから体を起こすと私を護つてくれているマリアと言う人が駆け寄ってくる

「いけません、ソフィア姫。動いては命を縮める事になります」

命を縮める……か。確かに普通ならこのまま動かないで、終わるまでじっとしているのが正しいのよね

「マリアさん、私の愛しい方と息子と娘が必死にお父様に声を掛けているの……私はここでじっとしてはいられないわ」

ガープと言う悪魔に操られていると言う父。そしてそんな父に負けるなど声を掛けるブラドー様と、そんなブラドー様に抱えられ、おじい様と声を掛けているピエトロとシルフィー……家族があんな目に合っていると言うのにじっとなんかしてられない

「ソフィア姫」

「マリアさんにも大事な人が居るなら私の気持が判るはず。お願い、私を連れて行って」

私も加わればもしかしたらお父様にも声が届くかもしれない、それにこのままじつとなんかしてられない。お願いだから、連れて行ってとお願いするとマリアさんは判りましたと頷き

「ただし、命の保障は出来ませんよ?」

「覚悟の上です」

どの道ガープと言う悪魔を退ける事が出来なければ、私はあの悪魔の呪いで死ぬ。早いか、遅いかの違いならば、恐れることは無い……(ほんの少しの可能性でも、それに賭ける事が出来る)

お父様とブラドール様の戦いなんて見たくない、だから少しでも止める事が出来る可能性があるのなら……私はそれに縋りたい……家族を救う為ならば……私は命を賭ける事が出来るのだから……

次回仮面ライダーウィスプは!

「くっ! やっぱり! 強い!」

美神と蛍の代わりに前衛に入った横島だが、やはりガープの圧倒的な実力の前に徐々に、徐々に劣勢へと追い込まれていく。そしてノアと対するブラドール達も

「ノア! 我の声は……届かないのか!」

「おじい様!」

「くっ……これ以上は耐えられんぞ!」

必死にノアの洗脳を解こうとするブラドール達だが、その声はノアへと届かない

「お父様……私の声も届かないのですか?」

マリアに背負われ、ソフィアがノアへの説得に加わった時。ノアに僅かな知性が戻る……

「人形は人形らしくしていればいい」

ガープが指を鳴らした瞬間ブラドールを狙い、地面から血の槍が飛び出す

「ノ……ア……何故だ!? 何故我を庇った!」

串刺しにされるはずだったブラドローを庇ったのはノアの姿だった

「貴様あああああッ!!!」

「吼えるなよ。全てはお前が撒いた種だ」

激昂するブラドローだが、怒りを持ってしてもガープには届かず、反撃に放たれた一撃でブラドローは倒れる

「ブラドロー伯爵、俺じゃああいつを倒せない、貴方でも勝てない。俺に力を貸してくれないか」

ガープの一撃で吹き飛ばされた横島がブラドローに差し出したのは、白い眼魂

「力を貸せば……勝てるか？」

「……1人で無理なら、2人なら」

横島の提案に悪くないと笑ったブラドローは横島の手を握り、白い眼魂の中へと吸い込まれていく

【カイガン！ブラドロー！純潔貴族、吸血鬼族ツ!!】

「俺は／我は……お前を……許さないッ！」

リポート15 変る未来 その6へ続く

## その6

レポート15 変る未来 その6

なんだこの男は……振るわれた拳を手で弾き。そのまま後退する、私の顔を蹴った人間の姿が変わった……それはいい、それは良いのだが……

(なんだこいつ……)

霊力だけじゃない、神通力に妖力に魔力……複数の力が混じっている……なんだこの奇妙な男は……これだけ混ざっている。本当に人間か……？

「なるおッ！」

打撃では届かないと判断したのか、男がベルトに手を翳すとそこから剣が現れる。それを見て舌打ちしながら、距離を離そうとしたが(こいつらチームかッ！)

そうはさせないと放たれた矢を防ぐ為に立ち止まってしまった。私と戦っていた2人組みの女、2人とも中々の霊力の持ち主で息も合っていたが、この男と組むと格段に動きが良くなった。それは本来はこの3人で1チームだという証……

「せやあッ！」

「ええいっ！うっとうしいぞッ!!」

型も何も無い我流の剣術と体術だろう。それなのに脅威となつている、私の本能が悟っているのだ。この男の打撃を受けてはいけないと……もつとも安全なのは距離を取つての魔術だろうが、この男も馬鹿ではない。距離を開けられないように、計算して立ち回っている(ならばッ！)

詠唱している時間は無い。魔術師としてのプライドが許さないが……今はコレしかない。魔力を放出する、技でも、魔法でもない。単純に膨大な魔力を放出するだけだ。だが私の力量になればたったそれだけの事だったとしても

「うわあ!？」

魔力によって発生した風と衝撃で剣を振るおうとしていた男の体勢が大きく狂う

(ここだッ！)

今が好機！そう判断し一気に間合いを詰め、男の胸に手を当てる。手に返ってくる感触は見た目のとは違い霊力か何かで生成された何かと言う感じだ

「精霊石よッ！」

「遅いッ！」

私とあの男を分断しようと精霊石を投げ込んでくるが、もう遅い。数秒の詠唱と溜めによって増幅された私の魔力が魔術としての形となり目の前の男を吹き飛ばす。だが空中で体勢を立て直し、強引に着地する。着地する前の数秒の動きを見て、思わず私は感嘆の声を上げた

(霊力の壁を作り上げたのか)

空中で霊力の壁を作り、それを蹴って体勢を立て直した。あのベルトが恐らく強力な道具なのだと思うが、その道具に頼り切った戦術ではない。本人のセンスも素晴らしいと言わざるを得ない

(あれは欲しいな)

始祖の吸血鬼ブラドー。本来の調停者としての役目を捨て、人間のように生きる事を選んだ愚かな吸血鬼。その身边を、その家族を奪う事で本来の血に飢えた吸血鬼としての側面を呼び戻すつもりだった。そんな簡単な些事で来たのに、いざ蓋を開けてみれば優秀な素材がこれほど揃っているとは、誰が想像しただろうか

「私は確かに人間界では十分に力を発揮出来ない」

霊界チャンネルで神魔の力は大きく束縛される。それはこの私も例外ではない、今はその束縛から逃れる術を研究しているが実用段階になるのはもつと先だろう。

「だがお前は積極的に攻めてこない、その理由を当てて見せようか？」

仮面の男……いや、その背後の2人に声を掛ける

「この周辺はバチカンなどの神の国と近い国が多いな、確かにその国には守護天使や駐在している天使もいるだろう」

ほんの僅か、ほんの僅かだが動揺の色が走る。

「だがそれを私が把握していないと思うか？ 答えは否。そんな事は100も承知、だから私は噂をばら撒いた、吸血鬼がこの城にいると」人間は何を馬鹿など言うだろう。だが人間で無ければどうだ？ そう、例えば神族。私がそう問いかけると女の顔色が変わった

「そう神魔は承知している、この国に、この城に、最上級神魔と匹敵する力を秘めた吸血鬼が居ると。そして仮に強大な魔力が発せられていても、それを脅威と、魔族が現れていると考える物がどれだけ居るかな？ ああ、あの国には始祖の吸血鬼が居るからか、それで済むとは思わないかな？」

私の言葉に全員の顔が引き攣る。この周辺の国の守護天使や天使は決して勤勉とは言えず、職務にも誠実とは言えない。だから

「だから私はこの国を選んだ。神魔の横槍が入らない国としてな」

始祖の吸血鬼に制裁を与え、本来の役割を思い出させる。それが私の目的、だが邪魔をされ、神魔に私達が暗躍していることを知られては、計画の変更が必要となる。そんな極めて初歩的なミスを私がするわけが無い、バチカンから再三警告を受けても、この国には吸血鬼など居ないと言い張ったノアという存在自体も神魔が動かない理由となる

「つまりお前達が期待している増援等はありませんと言ふ事だよ。さて……と、ここから魔術師ではない、魔法剣士としてお相手しよう。人間よ」

「うっ……」

虚空から杖と剣の役割を持つ剣を取り出し構える。私は本来は剣士ではないし、こうして表に立つて戦闘することも嫌いだが……そのような自分の好みで優秀な研究材料を見逃すような真似はしない、私が剣を構えるのを見て呻く男。やはりこの男は見た目の戦闘力からは想像できないが、直接戦ったことは少ない。私のような素人剣士の構えに威圧されているようでは間違いない。後は適当な自動発動の魔術を2つ起動させれば、女の方も分断できる、そうなれば後は作業をするような手軽さで制圧できるだろう



(ブラドールの方には既に仕掛けを施している)

だから一々気に掛けるまでも無い、今は目の前にいる優秀な研究材料だ。ここで見逃すには惜しい逸材をこの手に捕らえる、そしてより優秀な素材を手にする方がよっぽど重要だ。私は心の中で笑みを浮かべた、ブラドールの方に仕掛けた罠が起動した時。こいつらがどんな反応をするか……想像するだけで心が震える。私は数分先に起きるのであろう惨劇に心を馳せながら、その手に剣を握り締めるのだった……

私は舌打ちしながら、マントの中に手を伸ばした。そこに収められているのは私が直接作成した最高レベルの防御符

「ブラドール！もう残り数枚しかないぞ！」

ブラドールの意思を尊重し、ノアの意識を取り戻す。その事に協力してきたが、札が尽きればこれ以上の耐久戦は不可能だと叫ぶ

「判っている！ノア！頼む！私の話を聞いてくれ！いや、我だけじゃない！ピエトロとシルフェニアもいるのだぞッ!?本当に判らないのかッ！」

「おじい様。僕が、シルフェニアが判らないのですか……」

「おじい……様……嘘ですよね？」

横島は自分の仕事を成し遂げた。監禁されていたブラドールの息子と娘を無事に救出してきたのだ、ブラドールだけではと思っていたが、これでもしかしたらと思ったのだが思ったよりも効果は出ていない(もしやノアの自我はもう完全に死んでいる?)

精神は既に死に、肉体だけが生きている。その可能性が脳裏に浮かぶ、そしてその可能性はかなり高いだろう。神魔が人間の意志を残す事に意味を見出すとは思えないからだ

「考え事は後！あの3人を護るのが最優先なんですよ！」

後から蹴りを入れられ、思考の海から引き上げられる。妖狐のタマモ……横島が連れていた子狐だが、精霊石の霊力で人化している

「あーもうっ！こういうのは得意じゃないんだけどッ！」

文句を言いながら手を叩きつけると、ブラドー達の前で地面が盛り上がり、ノアを剣を横に逸らす。苦手と言っておきながら、その能力の汎用性、そして発動までの時間。その全てが非常に優秀だ、横島は直ぐ人を信じるが、それでは良くないと斜に構えているのがタマモなのだろうと思っているとマリアがソフィア姫を背負い精霊石の結界から出てくるのが見えた

「マリアー！お前何をしている!?!」

ソフィア姫まで危険にさらしてどうする!?!と叫びながら防御符を飛ばす、マリアはその間に私に駆け寄ってきて

「カオス様。マリアさんを責めないでください。これは私の意思です」

どうせ死ぬのならば、家族の為に命を賭けると決意をした私の意思を尊重してくださいと、穏やかな口調だが、強い意志が込められたその眼に圧倒される。それはマリア姫とは違う、女帝と言うべき風格……その威厳に思わず退いてしまった。私の半分も生きていない、女性の威圧感に完全に圧倒されてしまったのだ

「判ってくれたのですね、ではマリアさん。お願いします」

私の前を駆け抜けていくマリアを呆然と見送る。今マリアの背中に居るソフィア姫は病床に伏せている姿からは想像出来ないほどに力に満ちていた

「あれならば……始祖の吸血鬼を変えてもおかしくは無いな」

あの力強さと意思の強い瞳。地球に作られた調停者であり、本来は人間ではなく、声の無い自然や獣の味方であるはずのブラドーの心を揺り動かす事ができたのは当然。

「タマモー！マリアとソフィア姫をノアの前へ！ソフィア姫ならばノアの意思を取り戻せるかもしれない!」

「はあ!?!なんでそんな話につて!?!もう目の前まで行ってるし!?!」

タマモの驚愕に悲鳴に私も思わず悲鳴をあげそうになった。ついさっきまで私の目の前にいたのに!?!如何にマリアが人造人間とは言え、流石にそれは不可思議すぎる。なんだ?ソフィア姫には何か特別な能力でもあったのか?と思うレベルだ

「お父様……私の声も届かないのですか？」

悲しげなソフィア姫の声。ノアは振り下ろそうとしていた剣をゆっくりと地面に向かって降ろした

「……ソ……ファイ……ア……ブ……ラドール……ピ……エ……トロ……シル……フェ……ニア……」

片言で途切れ途切れの言葉だが、全員の名前を呼んだ。紅い瞳には確かに知性の色が戻って来ている、それを見たブラドール達がノアの名前を呼ぶと、その知性の色がゆっくりとだが、確実に強くなっている「タマモール……ここでないかあるはずだ！探知を！」

ガープがここで終わる筈が無い、更に何かを仕掛けているはずだ。家族が元に戻ろうとしている、それを妨害させる訳には行かない

「人形は人形らしく、踊り狂って死ね」

ガープの冷たい宣告と指の音が聞こえた瞬間。石材の床が盛り上がり、何かはブラドール達のほうへ向かっていく

「タマモール！防げえッ!!!」

「言われなくても！」

叫ぶと同時にそれを防ごうと防御符と精霊石による結界を作り上げる……だがその何かは私とタマモの防御を簡単に貫く

「ブラドール！ヴァンパイアミストで逃げろッ!!」

思わずそう叫ぶ、ブラドールがノアとマリア達の肩を掴んだ所で、その顔が驚愕に染まる。

（転移障害だとッ!?!）

ブラドールだけの絶大な効力を発揮するその術。今まで発動できていた術が使えない、そう悟ったブラドールはノア達の前に立つ。不死身の身体を盾にしようとした。その瞬間

「な……ん……!?!」

ブラドールを突き飛ばし、ノアがブラドールの前に立つ。そして次の瞬間地面から伸びた鮮血の槍がノアの身体を刺し貫いた……

目の前で血の槍に刺し貫かれたノア。何が起きたのか理解出来ない

かった……

(なんで……我を……)

不死身のこの身体を盾にするはずだった……なのになんで、ノアが倒れている。目の前の現実が理解できず、呆然とするが泣き叫ぶピエトロとシルフェニアの声に我に変える

「ノ……ア……何故だ!?何故我を庇った!」

血の海に沈むノアの身体を抱き上げる。その瞬間に理解してしまった、もうノアは助からないと……もうその命は終わろうとしていくと……始祖の吸血鬼たるその能力がノアの死を如実に我に伝えていた

「……親が……子を……護るのに……理……由……が……いるのか?」

「馬鹿かお前は!我は不死身にして不老の吸血鬼だぞ!」

そうだったか?と笑うノアの目の焦点は合っていない、急速に冷たくなっていく身体に自らの顔から血の気が引くのが判る

「おじい様……やだあ……死んじややだあ……」

「おじい様……いやだ……やだあ……」

泣きじゃくるピエトロとシルフェニアになんと声を掛ければ良いのか判らない。マリアから降りたソフィアはノアの手を握り

「お父様」

涙を流してはいるが、ソフィアは毅然とした態度でノアの手を握り締める

「ブラ……どー……見え……るか……」

ノアが手にしていた剣を我に差し出す。その柄には「LUCK」幸運と刻まれていた……

「私は……もう……死ぬ……だから……お前に……これを授け……る……」

ノアは自らの血でLUCKの前にPを書き加える、「PLUCK」勇氣を……

「負け……るな……我が……息子……よ……誇り……高き……男よ」

ノアの手が血の海に沈む。我はノアから差し出された剣を握る……幸運と勇氣を……か……最も我に程遠い言葉だ。その言葉は

きつとノア。お前に何よりも似合っていた言葉だろう

「ブレード……」

「カオス……ノアを頼む」

「このような姿で死なせたくないのだと言うとカオスは判ったと頷き

「このままこの場所においてはブレード達の邪魔になる。マリア、ソフィア姫達を頼む」

「はい……判りました。タマモさんも手伝ってください」

「……判った」

争いに巻き込まれないようにとソフィア達を連れ出してくれたカオスに心の中で感謝を告げる。そしてノアから託された宝剣を握り締めると同時に長年押さえ込んでいた吸血鬼の力を解放する

「貴様ああああッ!!!」

怒りの咆哮と共にガープへと駆け出す。横島が既に戦い、美神と螢がその応援をしているが、それでもガープには届いていない

「吼えるなよ。お前が撒いた種だ。始祖の吸血鬼としての責務を果たさなかった……お前自身の責任だ」

「黙れえええッ!!!」

魔力を刀身に纏わせ怒りのままに振り下ろす。だがガープは手にした細身の剣で我の剣を簡単に受け止める

「なるおッ!」

横島が我の剣を受け止めているうちにと攻撃を繰り返すが

「甘い」

「何!?!」

ガープと横島の上に透明な壁が現れ、横島の身体を大きく吹き飛ばす。それは今までガープが使わなかった防御魔法だった

「吸血鬼と人間風情が、本気で私に勝てると思っているのか」

「がぼあ……」

無造作に振るわれたその刃が我の上半身と下半身を切り裂く。とっさに防ぎはしたが、背骨でかろうじて繋がっていると状況でもう動く事が出来ない。たった一撃……たった一撃で格の違いをこ

れでもかと思せ付けられたが

(終われるか……こんな所で終わってたまるか……)

震える腕をガープへと伸ばす。だがガープは煩わしいと言わんばかりに我を投げ飛ばす……

「がは……」

地面に叩きつけられ、血反吐を吐く……不死身であるが故に死にはしない。だがこのダメージは数分では回復しない

「ブラドール伯爵、俺じゃあ……あいつを倒せない、貴方でも……勝てない。俺に力を貸してくれま……せんか」

投げ飛ばされた場所はガープが狙っていたのか、投げる先までは意識してなかったのか、幸か不幸か横島の直ぐ側だった

「力を貸せば……勝てるか?……この……死に損ない……で」

背骨で辛うじて、上半身と下半身が繋がっているだけの我で何が出る?と横島に問いかける。美神と蛍の攻撃を完全に無視をして、悠然と歩み寄ってくるガープに舌打ちしながら問いかける

「……1人で無理なら、2人なら、これに……1度入って貰えば……」

横島が差し出す白い球体……その玩具で何が出来るとは思わなかった。横島の言葉が真実だと、本能的に信じた

「悪く……無いな……」

横島が手にしている白い球体に手を重ねると、どこかに吸い込まれるように我の意識が消えていくのだった……

純白の眼魂が黒と赤の眼魂へ変化する。痛む身体に顔を歪めながら立ち上がる……いつの間にか、左腕にナイトランタンが現れているの気付く

「ブラドール伯爵。俺に力を……」

【アァー! バッチリミナー! バッチリミナー!!!】

マントを連想させるボロボロの漆黒のパーカーが俺の周りを回転する。目の前に突き刺さっているノアさんの剣を見つめて

(ノアさん……俺にも力を貸してください……)

「変身ッ！」

【カイガン！ブラドール！純潔貴族、吸血鬼族ッ!!】

ウィスプよりも強い力を感じる。それにこれはブラドール伯爵のガープへの強い怒りを感じる

「俺は／我は……お前を……許さないッ！」

目の前の剣を握り締めそう叫ぶ。俺の声だけではなく、ブラドール伯爵の声も聞こえた気がする。牛若丸やノツブちゃんとは違う、そう……これは……

(八兵衛の時と似てる)

身体を貸し与えるのではない、まるで一体化したような……そんな感覚だ。

「ほう？どうもお前の力はまだ引き出しがあるようだな。いいだろう、見せて見るがいい」

ガープの目の前に魔法陣が展開される。それは神宮寺さんと同じような膨大な力を見せていた、防御する事も避ける事も出来ない

【横島、そのままだ。術式制御と展開はこつちでやる！お前とブラドールは前を見ろッ!】

心眼の言葉に頷く、心眼がそういうのなら間違いはない。俺自身に魔術の知識は無いが、ブラドール伯爵と心眼ならば……あの魔法に対抗する術を知っているかもしれない。だから俺はッ！前に進むだけだッ!!

「オオオオオオオッ!!」

背後から美神さんと蛍の俺を呼ぶ声が聞こえる。ガープは特攻かと嘲笑う、心配される必要も、馬鹿にされる理由も無い。俺は判っている、あの魔法は防げる。この剣はガープに届くと確信していた

「遊びはここまでだッ！」

ガープの放った電撃が目の前を白く染め上げる。だが不思議と恐怖は無かった

「オラアアアアッ!!」

眩い光に向かって白銀の剣を振るう。妙な手応えと同時に目の前に迫っていた白い光は両断され、そのまま霧散する

「馬鹿なッ!？」

「オアアアアアッ!」

驚愕するガープに袈裟切りの一撃を叩き込む。だがそれはガープの手にした剣で防がれる

「懐に飛び込んで来た所で私に隙は無い」

ガープの掌が俺の顔に向けられる。だが俺は反射的に右手をガープの手に向ける

(魔法陣が……)

それは本能だった。右手を突き出せば、安全だと言う確信めいた予感。そしてそれは的中していた。バチンっと言う凄まじい衝撃音と共にお互いの魔法陣が相殺しあい消し飛ぶ

「おりゃあぁッ!!」

「ちいっ!」

俺の大上段からの振り下ろしと、ガープの切り上げが同時に放たれる。激しい金属音と共にお互いの身体が大きく弾かれる、そして今度は俺が左手、ガープが右手。まるで鏡合わせのように腕を突き出し、同時に展開された魔法陣がまたも激しい衝撃音と共に霧散する。それを確認するよりも早く頭を下げると、俺の頭の上を風を切り裂いてガープの右足が通過する。頭を上げると同時に右腕を突き出すのが、ガープは肘で俺の右腕を打ち落とす。ならばと片手で剣を振るうが、ガープも同じように剣を振るい再びお互いの剣を持っている腕が大きく弾き跳ぶ、だがコレは考えての動きではない、こうすれば安全だ。こうすれば美神さんと蛭に被害が出ない、それが判っている。頭で理解するのではない、身体が理解しているのだ

【よし、そのままだ。決して無理をするな、持久戦に持ち込め】

心眼の声はつきりと聞こえる。無理に攻め込めば、そのまま返して反撃される。今拮抗できているのは向こうが動揺しているからだ、向こうがこつちの動きに慣れれば。また劣勢に戻る、ここはこの超近距離で戦い。向こうの攻撃と反撃を全て潰す、それがもつとも生存率が低いはずだ

『行くぞ、前に出るんだ』



心眼とは違う声。ブラドール伯爵の声だ……心眼とブラドール伯爵の声……どつちに従うか迷い、そして俺が出した結論は

「オオオオオオオッ!!!」

前に出る事だった。向こうが撤退するとは思えないと思ったのだ、それにノアさんや、ブラドール伯爵にした非道を俺は許せない。

「ふっ馬鹿がッ!」

振るわれる剣の刀身が2つにぶれる……このまま突っ込めば両断される。だがそれでも前へ、前へッ!それしか俺は考えてなかった。そして命中する寸前。自分の身体なのに、自分の身体じゃない感覚になつた

「消え……霧化か!」

ガープの動揺した声が聞こえる。攻め込むなら、ここだと。そう感じた

「喰らええええッ!!!」

空中で反転し、勢いをつけた踵落としをガープの頭上目掛けて降り降ろす

「ちいっ!」

舌打ちしながらガープが剣を横にして、俺の一撃を防ぐ。火花が散るのが見える……だがそんな事は関係ない。このまま蹴り碎くッ!!!

「おーりゃあああああッ!!!」

裂帛の気合と共に踵を振りぬく。確かな手応えと金属が碎ける音がする、着地と同時に剣を振るう

「くっ!」

ガープが苦しそうに呻き後退する。初めて攻撃がちゃんと命中した手応えを感じた、ガープは右手で胸を押さえ傷口を押さえていた。そしてその左手には柄だけになった剣の姿がある、今ならガープは俺の攻撃を防ぐ事が出来ない。今が一気に攻めるチャンスだ

「舐めるなよッ!人間ッ!」

ガープの両手に魔力を集める。禍々しい光を放つ両拳が目の前で振るわれる、それがもし命中すれば俺の頭蓋なんて簡単に砕け散るだろう。床を強く踏みしめ、体勢を無理やり低くする。頭上を通過する

拳を紙一重で交し反撃に拳を繰り出す。だが返ってくるのは金属でも殴ったような重い手応え……バリアか。何かは判らないが、俺の攻撃が効かない事は判った。それ所か下手をすれば、この剣が折れてしまいかもしれないとも……ノアさんの遺品だ。コレを壊すわけには行かない。そう判断した所で剣を投げ捨てる

「行くぞー！オラアッ！」

ならこの両拳でこの野郎の顔面をぶち抜く。それだけを考える、霧化し、ガープのゼロ距離の魔術は心眼とブラドール伯爵の力で相殺する。超高速の打撃戦が何分も続いた……いや何秒かもしれない。でも俺にはとにかく長い時間を感じた。

「ぐっふうっ……」

ガープの拳を交わして、突き出した俺の拳が、ガープの顔面を打ち抜いた、僅かな隙に繰り出した拳がガープの顔面を捉えたのだ。ガープが大きく仰け反ったその隙を逃すわけには行かない、ここで決めてやる。殆ど無意識でナイトランタンのレバーを引いた

【ダイカイガン！ブラドール！オメガドライブッ!!】

「俺／＼の怒りを知れッ!!」

仰け反ったガープを左足で大きく蹴り上げ、空中へと弾き飛ばすと同時に、右足で床を蹴って大きく跳躍する。その蹴った床が大きく蜘蛛の巣状に割れた気がするが……このチャンスに逃す訳には行かなかった

「おおおおおおおッ!!!」

俺の目の前に俺がいる、いや、右隣にも、左隣にも俺がいる……更に言えば下にも分身した俺の姿が見えた。そのありえない現象に一瞬混乱するが、ヴァンパイヤミストでの分身なのだろうと無理やり納得する。空中で1回転し、空中に作り出したサイキックソーサーに1度着地し、両足に力を込める。そしてサイキックソーサーを思いっきり蹴ると同時に爆発させる

「オオオオオオオオオッ!!!」

爆発的な加速と上下左右に現れた黒い分身を伴った360度から放たれた必殺の一撃がガープの作り出した障壁をぶち抜き、そのまま

ガープの身体にめり込む感触を感じながら、城の床を削りながら着地し振り返る。そこには不可思議な紅いオーラで空中に縫い付けられているガープの姿があった。

「地獄へ落ちろ」

「ぐっ！うおおおおおおおッ?!?!?」

ガープから背を向け、親指を下に向けると同時にガープを拘束していた24の魔法陣が同時に起爆し、ガープの姿と絶叫は爆炎の中へ消えていくのだった……

リポート15 変る未来 その7へ続く

## その7

リポート15 変る未来 その7

私は目の前の激しい戦いを見て、その場から動く事が出来なかった。ブラドー伯爵の眼魂……その強さは今まで見た眼魂よりも圧倒的な強さを持っていた。あの力に近いと言うと、香港で見た小竜姫様とメドーサの眼魂の同時使用のマスタードラゴンしか思い当たる力が無かった

「オオオオオオッ!!!」

横島君とブラドー伯爵の怒りに満ちた咆哮が城の中に響き渡る。ガープの神速とでも言うべき一撃を紙一重で交し、無詠唱の魔術と同時に発動させ相殺する。そこに私や蛍ちゃんの入り込む余地は無い、あの速度で動き回っていれば援護をするつもりでも足を引つ張る結果になりかね無い

「美神さん、横島は大丈夫でしょうか……」

不安そうに蛍ちゃんが呟く、あの時のような味覚障害や感覚障害が起きないか？ 蛍ちゃんがそれを危惧しているのはよく判る。だけど、今は横島君で無ければガープとまともに戦う事が出来ないのも事実（やっぱり妙神山に行かないと……）

眼魂とゴーストドライバーなんて規格外な道具が欲しいとは思わないし、使いたいたいと思わない。だが師匠として弟子が戦っているのを見ていることしか出来ない。このままで良いなんてとてもではないが言える訳が無い、今東京を離れる事が出来ないと言う事は知っている。それでも何時までも弟子に負担を掛けるわけには行かないのだ

【ダイカイガン！ブラドゥーッ！オメガドライブッ!!!】

「俺／＼の怒りを知れッ!!!」

一瞬の交差。その一瞬を制したのは横島君だった、その拳がガープの顔を捉え。ガープが大きく仰け反る。そして横島君が大きく左足を振り上げる、凄まじい衝撃音と同時にガープの身体が上空へと弾

き飛ばされ、左足を振り上げた体勢のまま、右足の脚力だけで横島君の身体がガープを追って跳び上がる

「おおおおおおおッ!!!」

横島君とブラード伯爵の雄叫びが重なって響くと上下左右に漆黒の分身が現れる。数えるのも馬鹿らしくなる数だ、下に現れた分身は左足を引いて跳び上がる体勢を作り、腰を深く落とす。そして上空にいる横島君と分身は空中に作り出したサイキックソーサーに着地し、逆さ吊りになったその瞬間。凄まじい爆発音が響く、それはサイキックソーサーを爆発させての超加速

「オオオオオオオオッ!!!」

360度から放たれる超威力の一撃がガープを次々と捉え、私と蛍ちゃんの目の前を轟音を立てて横島君が滑って行く、空中では凄まじい数の魔法陣に囚われ、空中に縫い止められたガープの姿があった

「地獄へ落ちろ」

「ぐっ…うおおおおおッ!?!?」

横島君が親指を下に向けるとガープを拘束していた魔法陣が同時に起爆し、ガープの姿と絶叫が炎の中に包まれて消えていく……

「はっ……はっ……はっ……」

横島君がぐんつと崩れ落ち、膝をついて荒い呼吸を整えている。その姿は漆黒の吸血鬼を思わせる姿から、黄色のウィスプの姿へと戻っている。慌てて駆け寄る

「横島君!?大丈夫!?!」

「横島早く解除してッ!」

変身を解除してくれと蛍ちゃんが言うと、横島君は震えながら立ち上がり

「ま、まだ……終わってない……」

よろめきながら立ち上がり、拳を握った時。煙が弾け飛びガープが姿を現した

「ぐっ……よ、よくもやってくれたな……」

腕を押さえ、全身から血を流しているがガープはまだ健在だった。その目に強い怒りの色を映しながら、横島君を睨みつけ

「その姿覚えたぞ……次はこうは行かんぞッ！人間ッ!!」

翼を大きく広げ魔法陣を展開すると、ガープの姿はその場から消え去った。転移……したのよね？なんとか退ける事が出来た見たいね。(今回も横島君に全部押し付けた形になったけど)

また私は何も出来なかった。師匠だと言うのに、何も出来ない自分の無力さが重く押し掛かってくる。そんな気がした……

【オヤスミー】

ベルトから聞こえた機械合成音に振り返ると、横島君とブラドー伯爵の姿が現れる。横島君はそのまま崩れ落ちたが、ブラドー伯爵はふらつきながらも立ったままだった。ブラドー伯爵も心配だが、横島君のほう心配だった

「横島、大丈夫？」

「蛍……あ。うん……大丈夫」

蛍ちゃんが横島君の前で手を振る、指を追って視線が動くのと疲れ切った声だが返事があるのを見て、意識があると安堵する

「ふっ……人間の強さを……まだ……見誤っていたか。案ずるな……横島の負担は……こっちで……引き受けた……」

「ブラドー伯爵!？」

まさか横島君の負担をその傷だらけの身体で引き受けたの!?ブラドー伯爵が重い音を立てて倒れるのと、ドクターカオスとマリア。そしてタマモがこっちに駆け寄ってくるのはほぼ同時の事だった……

ドクターカオスに与えられた屋敷の中においても、ノア領主の突然の死を惜しむ声が聞こえてくる。出来る事ならば葬儀に参列したいという気持ちはあった。だけど私も横島も美神さんも異邦人だ、ドクターカオスでさえ参列を許可されていないのだ。私達が参列出来る訳が無い。しかし下手に出歩くことも出来ないので2日。この屋敷で缶詰状態になっていた

「ガープは退けた。また仕掛けてくることは無いだろう」

ブラドー眼魂を分析しながら、ガープが2度と仕掛けてくることは

無いだろうと断言するドクターカオス

「それってなにか根拠があるの？」

ドクターカオスが提供してくれた、新しい霊具の確認をしていた美神さんがそう尋ねる。ドクターカオスは勿論だと笑い

「私が作ったマリアが時空震を感知している。最上級神魔が気付かないと思うか？」

「思わない」

そう言われると気付かない訳が無いと思う。普段変身したら動けなくなる横島もブラドール伯爵が変身の負担を引き受けてくれたらしく、座り込んでチビ達と遊んでいる

「みむー♪」

「ぶぎゅー♪」

「……何がしたいんだ？」

自分の周りを高速で回転してるチビとうりぼーに不思議そうな顔をして、タマモを撫でている横島。遊んでる……のよね？多分

「私達が元の時代に戻ったら仕掛けてくる可能性があると？」

「それは判らんが、少なくともこの周辺は安全だな、ブラドールが居るから直接神魔が出張って来る事は無いと思うが、空間封鎖などで転移妨害や、監視体制の強化。少なくともこの城周辺はもう安全と言える」

あの手のタイプはプライドが高い。1度失敗した所に2度仕掛けて来る事は無いだろうし、仮に動くとしても確実に抹殺できる状況か、こつちを精神的に追い詰めるときにしか仕掛けてこないと思うぞ？と言うドクターカオス。出来る事ならば、ガープと戦うような状況にはならないで欲しいと切に思う

「むしろ、ここら辺周辺を監視していた天使の職務怠慢というのか、うん、言い方が悪いな。既に墮とされていた」

ガープは自分が活動する上で障害となるであろう、天使達。バチカイン全盛のこの時代の現代とは比べ物にならないほど強力な天使を纏めて墮天させていたらしいのだ

「二昨日の夜の異常な神通力はそれね？」

「うむ、余りにおかしいと言う事で見に来たのだろう。そしてその結

果を知り、高司祭を派遣した」

あれだけ暴れても神魔の応援が来なかったのは結界とそしてブラドー伯爵の規格外の魔力による物と、すでにガープの手に落ちていた天使による報告と連絡の無視。ブラドー伯爵を陥れるためとは言え、とんでもなく、複雑な一手を打って来ていた

「まあとにかく、ここら辺はもう安全だ。今はお前達が無事に帰る事を考えればいい」

現代に帰る事を考えればいいと笑うドクターカオスの言葉に頷き、ソフィア姫様からの連絡が来るのを待つのだった

「ドクターカオス様。レイコ様、ホタル様、タダオ様。ソフィア姫様がお呼びです、どうぞ城にお越しください」

昼過ぎに訪ねて来た老執事。セバスさんからソフィアさんに呼ばれていると言う通達があり。用意された馬車で城に向かいながら

「私はノア領主のパトロンが欲しくてここまで来たが、お前達はやらないほうがいいのは判っておるな？」

何時戻れるか判らん、この後はマリア姫の元に戻るので紹介はするが、ここで下手に人脈を作るなどドクターカオスが言う

「やっぱりですか？」

「うむ、天使が動いておるし、下手に関わると厄介なことになる。後ろ盾としてソフィア姫が立つてくれるが、それ以外は接触しないほうがいいだろう」

「戦争時代ってのは厄介ね」

私達の話をよく判っていない横島は置いておいて、ソフィアさんと仲良くしておく事は間違いじゃない、だがそれ以外が問題となる。この時代は天使と悪魔が戦っていた時代だ、下位の役人とかに無理に徴兵されても困る

「だがお前達は運がいい、高司祭が訪れていたが、神のお告げの通りと言われたのだからな」

ノア領主が死んだと言う事で、高司祭と名乗る人物が昨日訪れたのだが、私達を見て

「神のお告げの通りでした。黒髪、黒目の少年と少女が1人、緋色の髪



の女性が1人。それがこの地に現れた悪魔を退けた、神に仕える者として貴方達の勇氣に心より感謝します」

どうも過去の時代に神魔にも私達の事は伝わっていたようで、魔女狩りとかにならず聖人扱いで救世主とか何とか凄い騒ぎになりかけた。特に下つ端の神父とかが凄い騒ぎだった、是非バチカンへと五月蠅かったのだ

「バチカンに行ったら、それこそ帰れなくなる所だわ」

「はは、それもそうだな」

美神さんが、まだ神から言われている使命があると言った上に、高司祭の使命の邪魔はしてはなりませんと言う言葉に、他の教会関係者は帰らせたが、実際はかなり危ないところだったと思う

「まあ、この地では下手にパトロンを作るのは得策では無いな。ソフィア姫の命の恩人というくらいが妥当だろう」

だから余り仲良くなりすぎるんじゃないぞ?と言うドクターカオスの助言に頷く

「それより、カオスのじーさん」

「なんだね?横島?」

未来の自分での呼び方なら仕方あるまいと、カオスのじーさんと言う呼び名を認めてくれたドクターカオス。横島は馬車から外を見ながら

「ソフィアさんは大丈夫なのか?呪いの方は?」

「ああ、それならば心配ない。マリアを護衛に残してきているし、何よりもあの呪いはガープが近くにいる事で最大の効力を発揮する。もう心配は無いよ」

その言葉に安堵すると同時に、一抹の不安が脳裏を過ぎる。未来ではソフィアさんは死んでいるのだ、これは歴史改変になるのではないか?と言う不安だ。

(大丈夫なのかな?でももう逆行しているし)

逆行している私が居るから、それも歴史の差異って事で修正されるのだろうか?それともこれは現在進行形での歴史改変になるのだろうか?そんな不安を感じるが、今更同行できる問題ではないのが更に

私を不安にさせるのだった

「お兄さん！案内してあげる！」

「助けてーッ!!」

横島が出迎えに来たピートさん&シルフィーさん（幼）に拉致された。横島の悲鳴がドップラー効果で遠ざかっていくのを呆然と見送ってしまった。その後を追いかけていく、マスコット軍団。その姿を見て正気に戻り、私も追いかけていこうか悩んでいると

「横島君なら大丈夫よ。きっと保父さんとしてのスキルを最大限に発揮してくれるわ」

「それはそれでどうかと思うんですけど……」

もしかしてこれが原因でシルフィーさんが横島に強い執着を抱くんじゃない？私はそんな不安を抱く、このままにしてはいけないと思うのだが

……ソフィアさんに呼ばれている以上。横島の後を追っていく訳には行かない

「まあ大丈夫だろう。横島は子供に好かれやすい性質を持っているようだしな」

それは知ってるんだけど、もし城を出るときに。それで問題が起きるんじゃないか？と言う不安を抱きながら、セバスさんに先導され、ソフィアさんが待つという部屋へ案内されるのだった……

凄まじい頭痛と共に脳裏に浮かんだ記憶に困惑し、ヌルとの話を中断してしまった。ヌルは優秀な科学者だ、私の意図を汲んで、そして私の望む以上の結果を出してくれていた。過去ではなく、現在にいるのなら即スカウトするレベルの優秀な人材だった

『どうしましたか？ガーブ様？』

地獄炉同士の共鳴によって過去に繋がったタイムホールからヌルが声を掛けてくる。私は突如思い出した記憶に忌々しさと私の予想が当たっていたと言う2つの喜びから、思わず笑い出してしまった

（やはり、やはりか！）

特異点だと思っていた横島忠夫。そして今唐突に思い出した記憶、いや、時間の修正力によって生まれた記憶。ブラドローの養父を狂わせ、妻と養父を失わせる。その時私は自ら動いた、だからこそ横島忠夫の力の対象に入ったのだろう、過去が改変された

「くつくくっ！ははッ!!ははははははははははははッ!!」

顔を殴られただけではなく、顔を蹴られ、叩きのめされ撤退に追い詰められた苦い記憶。だがそれすらも甘美な物となった、歴史を変えられることが出来る存在。それを知っただけでも十分な成果だろう

『本当にどうなさいましたか？私は貴方の望み通りに動く事が出来るのですか？』

ヌルが不安そうに尋ねてくる。正直ヌルの動きはまだ現在に何の影響も与えていない、いや、ヌルでは歴史改変を行うことが出来ない。その可能性が浮上した時に、横島によって歴史改変は行われた。しかも、ヌルがいる時代でだ

「いや、なんでもない。それよりもだ、召喚した英霊はどうなっている？」

『憎悪と復讐心で暴れております、素晴らしい力を発揮しておりますよ』

ふふっそうか、英霊の存在をゆがめ、本来存在しない存在として現世に呼び出す。最初に召喚した英霊は反英霊に属する英霊だったが、私に逆らったので力と記憶を封じて何処かに飛ばした。どこかで消滅しているだろう、しかし反英霊ですら逆らうのならば、まともな戦力として運用する事はできない。ではどうするか？考えて出た結論は本来の英霊としての存在を歪め、反転させ、オルタナティブとして召喚する事だった

「それは素晴らしい、ならばヌルよ。私の写し身を早急に仕上げろ、私自身がそちらに向かう為にな」

聖女と呼ばれ、善なる存在となるべき英霊が復讐者になる。これほど面白い事は無いだろう、それにその時代に横島達がいるのなら、それもまた好都合。神魔が横島を護っていない時間にいるのなら、その時間に浚ってしまえばいい。

『畏まりました。直ぐにご用意します、完成しましたら連絡を入れま  
す。それでは失礼いたします』

私の指示を実行する為に連絡を遮断したヌル。逆探知で神魔に見  
つからないようにする点まで、完璧な処置だ。どうしてこれほどの人  
材が過去で敗れて消滅してしまったのか？と思うと残念でならない  
「さてと、私も準備をするか」

意識だけの時間移動。肉体は残るが、精神は存在しない。その間私  
は完全に無防備になる、その上の注意と意識が無い時の自分自身の防  
衛……やるべき事はこれでもかとおある。だが私はそれすらも楽しん  
でいた、歴史を変える存在としての力を発揮した横島と、反転し歪ん  
だ英雄。それを見ることに楽しみを見出していたのだ、私は自分でも  
珍しいと思う鼻歌を歌いながら、過去へ精神を飛ばすための準備と自  
分を護る準備。その2つを平行して行うことにするのだった……

ノアに対するお悔やみの言葉と簡単な世間話の後。ソフィア姫は  
意を決した表情で、美神達にある提案を持ちかけた。この時代で考え  
れば破格過ぎるいくつもの条件……それに対する美神の返事は私の  
予想通りの物だった

「お気持ち嬉しいですが、私達にはやるべき事があるので、その話は  
辞退させていただきます」

「そう……ですか、残念です」

ソフィア姫の勧誘をきっぱりとした口調で断る美神。ソフィア姫  
の勧誘の内容は、ピエトロとシルフェニアが横島を気に入っているの  
で、2人の子守として横島を雇い、更に美神と蚩を霊能関係の責任者  
として、金貨の先払いで10年雇い入りたいと言う破格の条件だっ  
た。3人がこの時代の人間ならば、間違いなく飛びついたと思う。だ  
が3人は未来の人間なので元の時代に戻る術を見つけなければなら  
ないのだ

「お兄さん。行っちゃうんですか？」

「うん、ごめんな。俺も美神さん達もやららないといけないことがあ

るから」

横島がごめんと謝ると、悲しそうな顔をする双子だが、横島のやる事を邪魔してはいけないと思ったのか。また遊びに来てくださいかねと健気に笑う。ここではない、未来で友人関係になるらしいが……なんとも不可思議な縁の強さだと思う

「だから言っただろう。ソフィア、こやつらは止らんよ」  
「でも、いてくれると心強いと思ったのです」

ブラドローはまだ動くだけの体力が回復しておらず、ベッドの上でそう笑う。今話し合いに来ているのは、ブラドローの私室だ。王座は崩壊しており、ブラドローとソフィア姫が領主となっている。話し合いにこの場を選んだのは当然だ

「私達の目的を遂げる為に、ブラドロー伯爵の知恵を貸して欲しいのですが?」

「それは構わん。我も助けられたからな」

これで美神達が元の時代に戻る為の準備は出来た。後はこのまま、ソフィア姫の援助の元3人を未来に戻す研究をすれば良い、私はそう思っていた。ガープは退けた、ならば脅威は無い。そう思っていた、だが……ガープの侵攻が終わって直ぐ、新たな脅威が直ぐそこに迫っていたのだ

『カオス様!聞こえますか!?!』

「マリア姫!」

ブレスレットから聞こえてくる雑音交じりのマリア姫の声に驚く。

これは緊急時にバロンから送られてくるSOS信号

『良かった、カオス様!助けてください!私達の領地にドラゴンと魔女が現れたのです!このままだと全滅してしまうッ!』

全滅!?そんな馬鹿な、私が旅立つ前に十分な装備と護衛は残してきた、それなのに全滅するなんて

「ソフィア姫。申し訳ないですが、マリア姫の危機。私はこの場で失礼します」

美神達は、この城にいれば安全だ。私1人で行けば良い、今から向かえば、1時間以内に戻れる。ギリギリ日が落ちるか、どうかと言う

時間だが……それでも向かわないという選択肢は私には無かった  
「待った！ 私達も行くわよ」

美神が私を呼び止める。その言葉に私は思わず正気かを叫んでか  
ら

「この城で起きたかそれ以上の惨劇が待っているのかもしれないのだぞ  
!？」

もしこの時代で死んでしまえば、美神達の存在はなかったことにな  
ってしまふ。そうなれば、今回の事以上の大きな歴史改変になる

「それよ、それこそ正気か？ って私は言いたいだよ。ドクターカオス、  
貴方がそれで死んだら私達はどうすればいいの？」

その言葉にマリア姫の危機と言う事で、動揺していたことに気付  
く。私が死ねば、美神達は戻れない

「私はドクターカオスの助手ですが、そこまでの知識は持ち合わせて  
おりません」

マリアが残っていて、ブラドールと協力したとしても美神達はもとの  
時間に戻れない可能性が高い。なら私がやるべき事は……

「力を貸して貰いたい。報酬はきっちり支払おう」

協力者として、美神達を雇う事だ。私1人ではきつと対処しきれな  
い問題だ、私が残した護衛が全滅しかけているのだから、私1人戻つ  
たところで何も変らない

「OK、雇われるわ。そういう訳だから、横島君と蛭ちゃん。急いで準  
備、10分で出発準備をして」

判りましたと返事を返し、失礼しますと頭を下げてブラドールの寝室  
を出て行く、横島と蛭。横島だけは出る前に、双子に小さく手を振つ  
て、またなと笑って出て行ったが

「それで移動の手段はあるんでしょうね？」

「勿論だ。カオスフライヤーで最短距離を突っ走る。マリア、手伝つ  
てくれ、装備を運ぶためのアタッチメントと、座席を追加する。1時  
間以内に出発するぞ！」

「判りました。ドクターカオス！」

本当はもう少しゆっくりしていたかったが、そんな時間は無い。急

いで戻らなければ……

「お待ちください、出発を30分遅らせてください」

ソフィア姫から出発を遅らせてくれと言われ、どういうことですか？と語気を強めながら尋ねる。ソフィア姫は真剣な表情で私を見つめ返して

「こちらから支援物資をご用意させて頂きます。食料に関しては僅かですが、武器などはご用意出来るかと」

それは願っても無い提案だった。武器自体を強化すれば、襲ってくる相手に有効な武器になるかもしれない。一から作るよりよっぽど早い

「お願いします。与えられた屋敷で待っていますので！」

直ぐにご用意をして届けますと言うソフィア姫の声を背中に、私と美神はブラドールの寝室を後にするのだった……

そしてこの地から遠く離れたマリア姫の領地では……空を飛び交う、大量のワイバーンとガーゴイル。そしてそれを率いる漆黒の鎧と旗を持つ魔女の姿があった

「あはっ！ははッ！ははははははははははッ!!!」

燃える森、逃げ惑う民。それを見て狂ったように笑う女の嘲笑が響き渡っているのだった……

t o b e c o n t i n u e d

リポート16 竜の魔女 その1へ続く

## リポート16 竜の魔女 その1

リポート16 竜の魔女 その1

カオスフライヤーと言う機械で向かうと聞いていたが、それを目の前にして私が抱いた感想は1つだった。

「飛行機ね。これ」

中世の時代には存在しない筈のオーパーツである飛行機。それがカオスの屋敷の庭で、飛行機と同じくオーパーツである。電灯で明かされながら急ピッチで組み上げられている機械の数々を見つめながら、私も屋敷の倉庫から取り出した飛行機のパーツを庭に並べる

「ふむ。未来でも同じような物があるのか、興味深いが話は後だ。マリア姫が危ない」

緊急通信で助けを求めてきたと言うマリア姫。確かに今はゆっくり話している時間は無い、私も積み上げられている部品に手を伸ばす。見かけよりも遥かに軽いそれに驚きながら

「これはどこに持っていけばいいの？」  
「そつちに頼む、私1人で来たからパーツを殆どオミットしているんだ」

1人乗りの早いし、消耗も少ないが。お前達の力を借りなければというカオスにわかつてると返事を返しつつ

「横島君は安静にしてなさいよ」

「……うつす」

変身後遺症が普段より弱いとは言え、横島君はかなり消耗している。本当ならここに残しておくのがベストなのだが、護れる戦力がこの城にはなく、横島君を護る理由も無い兵士に護ってくれと言うのはいくらなんでもあつかましいと言う物だ

「横島さん、心配ないですよ。もう直ぐパーツの並び替えは終わりますよ」



す。そうならば、美神さんも蛍さんも休憩ですから」

マリアがにこりと笑いながら大丈夫ですよと笑う。横島君はまだ納得して無い様子だったが

「それなら横島は霊具の確認をしてくれる？それとソフィアさん達が用意してくれた物資の確認もして欲しいんだけど」

このままでは駄目だと判断したのか、蛍ちゃんが横島君に仕事を頼むと、判ったと返事を返しタマモ達を連れて歩いて行く横島君

「横島はあれで責任感が強いですからね」

出会った時とは比べるまでもなく落ち着いている。それにふざけた言動もあるが、その実は良い具合に息抜きのタイミングでふざけてくれる。そして気がつけば、懐の深いところに入り込んでいる人の良さ。それに頭の回転も速いし、機転も利く。蛍ちゃんとは違い、ムードメーカーであり、裏方や支援で最大の力を発揮する。それが横島君への私の評価だった、そして責任感が強いと言うのも納得だ。蛍ちゃんの言葉に判ってるわと返事を返し、2人でカオスフライヤーに組み付ける部品の運搬作業を再開するのだった……そしてそれから20分後。私達はカオスフライヤーでマリア姫の領地へ向かって飛び立つのだった……

それは突然の出来事だった。カオス様が依頼を受け治療に出て、数日の間に父に取り入ったヌルと言う旅の錬金術師を名乗る謎の男。それから父は変ってしまった。私と私の警護を勤めていた騎士と共にこの村に視察と言う名目で追い出されてしまった、今父が何をしているのか判らないが、カオス様よりもヌルに強い信頼を向けているのが判った

「マリア姫様。あのヌルと言う男、本当に錬金術師なのでしょうか？」  
「……判らない」

私はカオス様の錬金術は見たことがある。だがヌルの錬金術は見ることが無い、本当に錬金術師なのか？と言うのは確かに感じている。それに私達が城を追い出されてから出脱するようになったガー

ゴイルや謎の異形の存在も気になっている

「カオス殿はまだお戻りにならないので？」

騎士団長の問いかけに溜息を吐きながら頷く。カオス様がいれば今何が起きているのか？それが判るだろう、だが今カオス様はいない、それが事実であり、私達には知識も足りなければ、皆を統率する指導力も無いのが現実だ

「1度戻って来てくれるとありがたいのだが……それも難しいかもしれん」

温厚で異端の物にも優しいと名高いノア領主の娘の治療に出ている。おいそれと戻ってくる事は出来ない……いやもしかすると戻ってこないかもしれない。カオス様はパトロンを欲していた、私や父よりもノア領主の方がパトロンとして頼もしいだろう。だから戻ってこないかもしれないという不安が脳裏を過ぎる

「クーン？」

「ああ、バロン」

カオス様が私に作ってくれた狼のゴーレムが足元に擦り寄ってくる。バロンの頭を撫でながら大丈夫だと呟く、仮にノア領主の元に向かうとしても、きっとカオス様は一度は挨拶には戻って来てくれるはずだから

「それよりもだ。カオス様が残してくれたゴーレムは大丈夫なのか？」

この村を護る為にカオス様が残してくれたゴーレム。私達にゴーレムを治す術は無い、ゴーレムは無事か？と問いかけると騎士団長は暗い顔で

「40のうち、残り17です……」

「そうか。半分を切ったか……」

並みの相手なら大丈夫と聞いていたが……それほどまでに敵の攻撃は激しいと言うことか……前まではゴーレムとガールだけだった。だが最近はそのワイバーンが混ざり、そしてそれを統率する黒い魔女がいると聞く……

「正直に聞こう。この村は耐えられるか？」



「魔女め……ッ！」

思わずそう呟く、もしやあの魔女がヌルと結託し父を狂わせているのかと考えたが、空から襲ってきて民達を空中に連れ去るワイバーンを見て考え事をしている時間は無いと即座に理解した

「森へ逃げろ！平地にいるな!!竜の餌食になるぞ!!纏まって逃げるな！散開しろ!!そして前に伝えた隠し砦に籠城するのだ」

判っていたのはこの村はもう持たないということ、そして私自身も死ぬかもしれないと言う事実。私は民達に逃げるように指示を出すと同時に、バロンにあの魔女を攻撃するように指示を出す

「へえ？」

バロンの放った銃弾は魔女の手にしていた剣に弾き落とされる、黄金の瞳が私を見据える。その光の無い瞳に恐怖する、それが人間のする目かと思った。その瞳に恐怖しながら、背を向けて走り出す。背後から何かを追ってくる気配がする、闇その物が追いかけてくるような気配に自らの死を覚悟しながら、自分がこうして囿になる事で救える民がいるかもしれない。それだけを考え、私はバロンと共に森の中を駆け続けるのだった……

カオスフライヤーを全速で飛ばし、マリア姫の領地に到着した時。既に日は沈み、周囲は闇が支配していた。だが遠くに見える光に舌打ちする。それは焚き火などではない、森が燃えているのだ

「しくじった、まさかワイバーンとは……ドラゴンではないだけ、救いはあるか……」

森と天然の要塞とし、ゴーレムと連携させて村を護る。それが私のプランだった。マリア姫は活動的な方で城にいる事は余り好きではなかった。だから外で活動した場合に隠れ場所としてあの村の警護を強くしたというのに……完全に裏目に出た。まさかワイバーンを戦力にするとは、ガーゴイルやゴーレムならいくらでも耐えるが、炎を扱うワイバーンは駄目だ。あの天然の要塞がマリア姫達を閉じ込める檻になってしまっている

「カオスのじーさん。ワイバーンつとドラゴンつて種類が違うのか？」

横島の言葉に、美神を見るが美神もいまいち理解していない様子だ。私はマリアに目配せをする、マリアが小さく頷くのを見て、説明を頼むと呟く

「竜種の上位と下位の差と言う所ですね。ドラゴンは群れません、単独で恐ろしい強さを持つので群れる必要も。仲間も作る必要はありません。ワイバーンは竜種に属しますが、前足が翼であり蝙蝠に似た姿をしています。ドラゴンと比べれると小型ですが、凶暴性が高く群れて行動します」

厄介で強力なことは間違いないですが、ドラゴンと比べればワイバーンのほうが弱いですねとマリアが締めくくる

「だとしても、今の装備だと大分苦しいわね」

美神の言う事は最もだ。ワイバーンは下位の竜種とは言え、竜種としての驚異的なスタミナと凶暴性を持ち合わせている。専用の装備で身を固めていたとしても、五分かと言うレベルの強敵だ。今の間に合わせの装備で戦うには無茶と言う物だ

「それはすまない、マリア姫さえ救出できれば、後は逃走だ」

マリア姫はクイーンだ。決して失つていい存在ではない、私自身彼女を救いたいと願っている。ゆえに彼女を救う事が出来なければ、ここまで来た意味が無いのだ。だからマリア姫を回収した後は回収出来るだけ、救えるだけの民を回収し逃亡する。この村を拠点として防衛する価値は無い、それならば逃げたほうがよっぽど得策だ

「美神さん！あれ！見えますか！」

背後で蛭が騒いでいるのが聞こえる。だが私には見る余裕は無い、なんだ？蛭は何を見つけた？視線はマリア姫に渡したバロンの反応を探知するレーダーに向け、耳で何を見つけたのかと意識を向ける

「あれ……鎧と……旗？ですかね？それがワイバーンの背中に乗ってません？」

「そう見えるわね……遠目だけど女に見えるわね、何者かしら？」

竜を使役する女……そんな存在がおいそれと存在するわけが無い。

そもそもこの土地にはワイバーンは本来生息していない、どこから連れてきたのか？どうやって使役しているのか？疑問は残るが、今は謎の女よりもマリア姫だ。必死にセンサーに視線を向けているとやつと反応が返ってきた

「見つけたーだが……不味いぞ」

魔力反応に追われている。この大きさはゴーレム……いやガーゴイルかもしれない。だが問題はそこではない、この森林では、カオスフライヤーで着地出来る立地ではない

「どうするのカオス」

「カオスフライヤーでの射撃は駄目だ。巻き込みかねない」

木々をなぎ倒して着陸……いや駄目だ。もしそれをすれば、飛び立つのに時間がかかる。その間に囲まれては意味が無い……

「マリア！飛行ユニットは内蔵していないのか!？」

私の設計図では足と背中にバーニアを搭載していたはず。それならばと思いきや問いかけるが、マリアの飛行能力に希望を託すが

「……申し訳ありません。以前の身体ならまだしも、今の肉体に内蔵機器は搭載していません」

人間に近い身体に換装した。現代で暮らす術だったとしても今は完全に悪手だ、着陸したら逃げる場所が無い、かと言って援護攻撃は巻き込むリスクが……

(考える、考えるんだ。何かある、何かあるはずなんだ)

ロープで吊り上げる……いや、駄目だ、今の消耗しているマリア姫にロープで自分を支えるだけの腕力は無い。バロン……これも駄目だ。バロンに飛行能力は無い、時間を掛ければ掛けるほどマリア姫の死が近づく、早く、早く妙案を……そう思えば思うほど考えは纏まらない

「カオス！高度を下げて！私と蛍ちゃんが飛び降りる！」

美神がそう提案するが、それも出来ない。高度を下ければガーゴイルやワイバーンに見つかる、それに地面に着地する前に襲撃されるリスクが……

「カオスのjeeさん！ドアを開けてくれ！俺が行く!!」

「横島君！貴方何を言っているのか理解してるの!？」

「眼魂は使わせないわよ！」

美神と螢が怒鳴り、駄目だと言うが横島は考えを変えない。横島は自信に満ちた表情で拳を突き出して

「栄光の手の上の俺の霊能力で出来る籠手、爆発的な加速を使う翼を3つ全部使えば短時間なら飛べる筈。それにサイキックソーサーを空中で作って踏み台にする、追いかけているゴーレムとガーゴイルをぶっ飛ばして、うりぼーに載せて貰って離脱する」

他に何かアイデアがありますか？と横島が静かな口調で呟く。それは一発勝負の大博打、分が悪いなんてレベルではない。10回やったとして、1回成功すれば儲け物と言う大博打だ

「横島さん。それは無謀です、制御できる確信も無いでしょう」  
「でも手を拱いていたらマリア姫が死ぬ。時間が無いんだ」

横島はマリア姫の為に命を掛けようとしてくれている……それも師匠や想い人の制止も振り切って……救おうとしてくれている

「カオス！駄目よ！そんな事許さないから！」

「サイキックソーサーを踏み台にするなら私も出来る！だから駄目よ！」

「横島！無謀な事は止めろ！命を捨てかねない作戦を許せると思うかッ！」

「カオスのじーさん！早くドアを開けてくれ！今ならまだ間に合う!!」

美神達の駄目だと言う声と横島のドアを開けてくれと言う叫び……そしてバロンに内蔵された通信機から聞こえたマリア姫の小さな声

『……死ぬなら……カオス様にもう1度……』

死を覚悟したその声を聞いた私はすまんと叫び。ドアの開閉レバーを引いた、凄まじい強風がカオスフライヤーに吹き荒れる中。横島はドアの開いた数秒の間にカオスフライヤーから飛び出して行った……

「うおおおおおッ!?や、ややややつ!!やべええええええ?!?!」

カオスフライヤーから飛び出したのはいいが、パラシユートなしのスカイダイビングに絶叫する。風切り音とか半端ねえな!!

【お前は馬鹿かーいや、馬鹿だったなーもう少し考えて行動しろ!!】

心眼の怒鳴り声が聞こえるが、返事を返す気力は無い。と言うか、返事を返している余裕は無い。スカイダイビングをしながら、集中して霊力の籠手を作れるか? 答えは簡単だ。NOだ

「やややややや!!」

やばいと叫びたいのだが、落ちている衝撃で言葉にならない。早く霊力の籠手を作らないと地面に叩きつけられてトマト確定だ、俺自身も死に、マリア姫様も死ぬ。それは絶対に駄目だ、心眼の馬鹿と言う叫びは無視し、スカイダイビングにひやつとなりながら意識を集中する

(出来る出来る出来る出来る)

出来ると思ひ込め、不安に思うな。出来ると思え、自分に言い聞かせるように呟く。自分の霊力なのだ、出来て当然。使えて当たり前! 迷うな! 不安に思うな! 出来ると思ひ込め!

「出来る出来る出来るッ! 出来て当たり前! 俺の力だ! 使えて当然ッ!!!」

自分に言い聞かせるように叫ぶ、揺らぐな、迷うな、不安に思うな! 自分に言い聞かせるように叫ぶ

「おおおおおおお」

空中で何とか体勢を立て直し、叫びながら右手首を左手で掴む。右手に霊力が集まっていくのを確認すると同時に集まった霊力を握りつぶす

「しゃあ! 出来たあ!!」

肩まで覆い尽くす籠手と背中の翼。霊力が完全ではないので、翼は2枚だけが出来た事は出来た。出来て当然と思うこと、それが大事だと神宮寺さんに聞いておいて良かった

「心眼! マリア姫様は?!」

残念ながら俺の視力ではマリア姫を確認出来ない。心眼にどこだ



と叫ぶ

「10M前方だ！急げ！ゴーレムとガーゴイルに追い詰められている！」

心眼の言葉に判ったと叫び足先に意識を向ける。空中にサイキックソーサーを作る、しかも落下しながら……その極限状態に冷や汗を流しながら出来て当然と思いい込む。脚に固い何かが当たる感触を感じると同時に強くそれを蹴る、何かが炸裂する音と同時に爆発的に加速する、だがそれだけでは間に合わない

「滅殺のおおおおおッ!!!」

右手の甲の光が2つ消え、背中の翼も2枚全て砕け散り、更に凄まじい加速が全身を襲ってくる。だがそのおかげか、視線の先に木に背中を預けている女性とその女性に向かって拳を振り下ろそうとしているゴーレムを捉えた

「ファイナルブリッドオオオオオオオッ!!!」

俺はその爆発的な加速を伴ったまま、右拳を突き出した……何かを砕いた音と木々を巻き込みながら着地する。めちやくちやいてえ!!! やっぱり変身して直ぐ、霊力の籠手を使ったのは失敗だったかもしれない……地面をえぐりながら叫びだしたいのを必死にこらえる

「な、何が……お、お前は何者だ……」

警戒しながらそう問いかけてくる女性。髪の色こそ違うが、マリアと瓜二つのその容姿に彼女がマリア姫様なのだと判った

【グルルルル】

俺を見て唖っている機械の狼に内心冷や汗を流しながら、痺れた足に顔を歪めながら振り返る

「カオスのじーさんに言われて助けに来ました」

「カオス様にな？」

カオスのじーさんの名前にその女性の表情が和らぐ、だがまだ警戒している素振りを見せているが

【グルルルル】

機械の犬が吼える。これがバロンって奴か……話には聞いていたけど、こうして見ると凄いな

「バロンで良いんだよな？カオスのジーさんが待ってる」

【グルウ】

自分の名前を呼ばれて困惑してるバロン。俺みたいな奴が急に話しかけて困惑するのは当然だと思うが、今は時間が無い

「俺の事が信用出来ないのは判る。でも信じて欲しい、俺は助けに来た。それに嘘は無いんだ」

戻った所で美神さんや蛭に怒られるのも覚悟してここに来ている。それなのに、マリア姫様が死んでしまつては意味が無いのだ

「本当にカオス様の使者なのか？」

本当ですと返事を返す。マリア姫様は考え込む素振りを見せてから、1つ聞かせて欲しいと言った。時間が無いから、早くついてきて欲しいと思つたのだが、判りましたと返事を返す

「ソフィア姫様は？」

ピートとシルフィーちゃんのお母さんの事。その事を確認としてくれた事に安堵する。もつと詳しいカオスのジーさんの話だったら、俺では言葉に詰まつていたと思うから……俺は内心安堵の溜息を吐きながら笑顔を浮かべ

「無事です、カオスのジーさんの治療が間に合いました。それとソフィアさんから、救援物資も預かっています」

だから一緒にともう1度言おうと、やつと判つてくれたのか一緒に行くかと返事を返してくれた。そのことに安堵し、Gジャンのポケットからうりぼーを出す。タマモは飛び降りるときに危ないので残して来た。Gジャンのポケットに入る、チビとうりぼーだけが安全に運べるのでその2匹を連れてきたのだ、特にうりぼーは移動する足になるので連れて来て大正解だ

「うりぼー、分身1体出して、大きくなってくれ」

「ぶぎゅー♪」

俺の腕の中から飛び降りたうりぼーが分身しながら大きくなる。馬とまでは言わないが、跨るには十分な大きさだ

「ハ、これは？」

流石に増えて大きくなる、うりぼーを見れば困惑するかと苦笑しな

がら、うりぼーのことを説明する

「俺の家族のうりぼーです。急いで移動しないといけないので、乗ってください」

上空を飛んでいるカオスフライヤーを見失っては合流所ではないと言うと、マリア様は判ったと返事を返し、おっかなびっくりと言う感じでうりぼーに跨ったマリア様を確認し、俺もうりぼーに跨り。上空を飛んでいくカオスフライヤーの後を追って、うりぼーを走らせるのだった……

リポート16 竜の魔女 その2へ続く

## その2

レポート16 竜の魔女 その2

真つ直ぐにカオスのじーさんと美神さん達と合流する、それが俺の考えていたシナリオだが……それが希望的観測だと言うのはいやと言うほど思い知らされた。木に隠れ、進行方向を確認する

【(……)】

石で出来た巨躯の悪魔が誰かを探すように歩き回っている。言うまでもなくマリア姫様を探しているのだろう、息を殺しながら元いた場所に戻る

「横島。どうだ?」

「ちよつと移動は無理そうですね」

隠れながら進んでいる間にマリア姫様と自己紹介は軽くだが済ませておいた。マリアと髪の色と口調が違うが、それを除けば本当に瓜二つだ

(カオスのじーさんはマリア姫が好きだったのだろうか?)

そうでなければここまで瓜二つに作らなかつたのではないかと  
言う疑問が頭を過ぎるが、それは口にしな。余計なお世話と言う奴  
だろう

「カオス様やお前の師匠とやらには連絡は取れないのか?」

「取れるとは思うんですけど……」

出発前に渡された赤い機械を手にするが……はつきり言おう。使  
い方が判らないのだ、どうした物かと困惑していると

「おわ!?!」

【ぎゅーう】

俺の手の中からその機械が飛び出し変形する。トカゲ?でも飛ん  
でるな?なんだこれ……

「みむう?」

「ぶぎゅ?」

【グルウ?】

珍しい機械に興味津々と言う感じで見つめているチビとうりぼり、そしてバロン。突然飛んだ機械に困惑しているマリア姫様と、唸り声を上げるバロンを見ながら目の前を滞空するトカゲを見つめているとその目が輝き、空中に何かを映し出す

『横島!?無事か!』

「カオスのjeeさん!」

それはカオスフライヤーを操縦するカオスのjeeさんの姿だった。凄い機械だと感心する、そして生きているように動くその姿にも驚かされる

『横島。大丈夫!?怪我とかはしてない!?』

『横島君!貴方はいつも独断専行して!戻ったら説教だからねッ!』

『やめんかあ!墜落するぞ!』

心配してくれている蛍と激怒している美神さん。そして操縦席から叫ぶカオスのjeeさん……

「私?」

『どうも初めまして、私はドクターカオスに作成された人造人間試作M-666……マリアと申します』

マリア姫様が見て困惑する中。マリアは優雅な素振りでお辞儀をする、本大口調だけ違うだけで双子みたいに見えるな

『横島。そっちはどうだ?こつちと合流出来そうか?』

マリアについては後で説明しますとカオスのjeeさんが問い詰めたようなマリア姫の言葉を遮り尋ねてくる

「ちよつと厳しいかもしれないです。岩で出来た悪魔見たいのがうろうろ歩き回っています、ただワイバーンの姿は無いです」

あれほどまでに空を飛び交っていたワイバーンの姿は無いですと言うと、カオスのjeeさんはカオスフライヤーを操縦しながら

『こちらもワイバーンの姿を確認していない、後詰めでガーゴイルとゴーレムを送り出したのかもしれないな』

後詰め……飛行能力と火炎を吐き出すワイバーンが居ないが、その代わりに石でできたゴーレムとガーゴイルではとても安心とは言えない

『横島君。ゴーレムとガーゴイルも索敵能力はさほど広くないわ。それに視覚も広いわけじゃない、隠れながら移動すれば十分に逃げ切れる相手だわ』

だから難しいと思うけど、なんとかしてその場所から移動して合流して頂戴と言われる

「カオス様。迎えに来るのは難しいのですか？」

『申し訳ない、マリア姫。その場所は樹木が生い茂っていて、カオスフライヤーで向かうには些か難しいです。マリア姫は覚えておいでですか？念の為に村から離れた場所に隠している砦の場所を』

砦？そんなのがあるのかと心の中で呟く、隠れる場所があるならそれに越した事は無い

「一応あの村の者全員にそこに向かうように指示を出しています」

『ではそちらに向かう途中に森林が開けた場所がありますね？そこでカオスフライヤーを上空で待機させます。そこを合流地点としましょう。私達は先にそちらに向かい、周辺の悪魔などを倒しておきます。横島、マリア姫を頼むぞ』

カオスのじーさんの言葉に任せてくれと返事を返す。通信が切れたのか、トカゲの姿からまた機械の姿に戻ったトカゲみたいなのをGパンのポケットに突っ込み

「マリア姫様。行きましょう、早く合流したほうが良いですから」

敵の増員の可能性もある。もう少し休みたいところだが、ここは無理をして動くべきだ

「判っている、こつちだ」

うりぼーで移動したい所だが、ガーゴイルとゴーレムの数が多すぎる。ここでうりぼーに乗るのは自殺行為だ、隠れて、周囲を警戒しながら進もう

「バロンの手伝いをしてな？チビ、うりぼー」

「みむー」

「びぐうー」

【ガル】

バロンを先頭にし、その頭上をチビ、俺とマリア姫様の後にうり

ぼーという隊列で俺達は暗い森を歩き始めた

「それで横島。さきほどのゴーレムを殴り飛ばした拳はもう無理なのか？」

「すみません。ガス欠です」

変身した後に使用したので暫くは使えない。威力は下がるが、栄光の手は使えるし、陰陽術の札もある

「一応魔法見たいの使いますけど、魔女狩り見たいのは勘弁してください」

「命の恩人とカオス様の仲間になんか事はしない、合流地点まで頼むぞ。横島」

私にはこの剣しかないからなと言うマリア姫様。バロンとチビとうりぼー、それと栄光の手と陰陽札が10枚……戦力も道具も乏しいが、これで何とかするしかないな

「じゃあ行きましょう。俺に少し考えがあるんですよ」

香港での幻覚による認識障害。効果は短時間だが、魔族の視界さえも誤魔化す事が出来る。それならゴーレムやガーゴイルの視界を誤魔化す事ができるだろう。隠れながら前に進みどうしても見つかる場所では陰陽術を使おう。俺はそう判断し、息を殺しながら夜の森をゆっくりと進み始めるのだった……

横島君は無謀だと思われた、ゴーレムやガーゴイルが闊歩する夜の森とマリア姫様を護りながら、無事に合流地点まで護衛する事に成功した。横島君は酷く疲労していたが、その無理難題をよく成し遂げたと正直感心したが

「横島君！貴方は本当にいつも私の指示を無視して！本当に反省しなさい!!」

「す、すすすす、すみません!!」

横島君は臆病なくせに思い切りが良すぎる。自分だけの問題なら迷う事無く逃げの一手を打ってくれるのだが、知人や知り合いの危険となると簡単に逃げることをやめ行動に移す。これは危険な傾向だ

「良い、横島君。貴方はまだ見習いで私の弟子なのよ？ 師匠には弟子を護る責任がある。それなのに勝手に私の側から離れられると困るの、それに私だけじゃないわ。蛍ちゃんにも心配させるのよ」

横島君の良心に訴えかける説教に切り替える。怒るのではなく、こういう風のほうが横島君には効果的だと判断したのだ

「美神さんの言うとおりよ。マリア姫様を助ける事が出来たけど、その為に横島が怪我をしたら私は悲しいわ」

蛍ちゃんは私の意図を読んでくれたのか、悲しそうにそう呟く。私もそれに合わせるように

「私も当然悲しいし、危険な事に巻き込んだことに責任を感じるわ。だから本当に独断専行はもう止めて頂戴、良いわね？」

本当はもう少し説教したいところなのだが、マリア姫様達の村を焼いた魔女の正体や話し合うことも多い。ここで説教を切り上げようと思ったのだが……

「カオス様。どういうことなのか説明をお願いしたいのですが？」

「……いえ、そのあの……なんと説明すればいいのやら……」

自分をモチーフに作られたというマリアを見て複雑な表情をしながら、ドクターカオスを問い詰めているマリア姫様を見て、向こうの説明が終わるまでは無理そうだと判断し、横島君への説教を再開するのだった……

「未来から？ そんな……いやしかし……見慣れない服装や……持ち物を見れば……」

マリアの説明を聞いて信じられないと呟くマリア姫様だったが、横島君の行動や、私達の服装を見て真実なのかと呟いている

「未来のドクターカオスからの応援として参りました。私の顔はマリア様をモチーフに作られていると、私が良くして貰った様子を忘れないようにと、想いが込められていると聞いています」

「う、うむ……そ、そうなのか？」

気恥ずかしそうにしているマリア姫様と吐きそうな顔をしているドクターカオス。自分をモチーフにした人造人間を作るのだから、自分分は好かれているのだろうか？ と呟いているマリア姫様と助けてく



れと目が叫んでいるドクターカオス。今の自分ではなく、未来の自分の行動が恥ずかしくて仕方ないのだろう

「それでマリア姫様。貴女達の村を襲った相手と言うのは？それとその死者の方は……？」

流石にこれ以上脱線するわけには行かないので、ワイバーンを操っていた女が村を焼いたのですか？と尋ねる

「いや、あの女は確かに竜を支配していたが、不思議な事にあの竜は殆ど攻撃を仕掛けてこなかったし、負傷者こそいるが死者は居ない。

殆ど全員が無事にこの砦に到着出来ている」

攻撃してこなかった？それに死傷者も居ない？これはおかしい。ガーゴイルやゴーレムをマリア姫様の追っ手に出し、ワイバーンは生存者に対する攻撃要員と考えていたんだけど

「それにあの女……竜の魔女と名乗った女もどこか様子がおかしかった、フランスがどうか……神の救いがありますようにとか……殺戮を蹂躪をとか叫んだと思ったら、怪我人の救助をとか訳の判らない事を言っていて、急に頭を抑えてワイバーンに乗って去って行ったんだ」

フランス？それに神の救い？殺戮を行うと言っておきながら、怪我人の救助その矛盾的な発言と行動は明らかに正常ではない

「あ。あとそうだ……逃げ帰る時に、気のせいかあの女の身体が透けていたような……見間違いだとは思いが……」

身体が透けていた。その言葉を聞いて、私の脳裏に最悪の予想が過ぎった

「英霊……？」

牛若丸や、ノツブに続く英霊。だが味方ではなく、ガープによって呼び出された存在である可能性が浮上した。だけど、竜を操る女なんて聞いたことがない

「可能性はゼロではないが……いや、今は情報が足りない、推測にしかならん。そんな事をする時間があるのなら、この砦の防御と武装の準備を行うべきだ」

竜の魔女と名乗る英霊と思わしき存在。しかし矛盾発言と安定し

ない容姿……村や木々は焼いたが、人間を襲わないワイバーン……謎ばかりが増えてしまう中。横島君がぼつりと呟いた

「なんか。義経に似てるな」

義経に似ている？ 狂神石によって狂わされ、幼い自分と分裂した……そこまで思い返した所で横島君の言いたい事が判つたのか蛍ちゃんが更に横島君に問いかける

「もしかしてその竜の魔女も狂神石で暴走しているって思ってるの？」

「う、うん？ いや、見たわけじゃないし、似てるかな？ って思っただけだぞ？」

単純で思いつきに近い発言。だけどそれはありえない話ではないし、その可能性も極めて高い。先入観や危険性ばかりを考えたのではない、単純に思いついたという横島君

「なんにせよ、1度私達も会って見ない事にはなんとも言えないわね」  
出来れば会いたくないけども呟く、狂神石で暴走しているかもしれない、英霊かもしれない。そんなかもしれないという可能性で行動するには些か危険すぎる相手だ。それにマリア姫様には霊能がない、透けて見えたと言うのも見間違いと言う可能性も高いのだ。だから今はソフィア姫から貰った武器や支援助物資を避難して来ている村人に配給し、更に貰ってきた武器をゴーレムやガーゴイルにも通用するように改造するべきなのだ

「蛍さん。料理を手伝って貰えますか？ 少し冷えて来たのでスープを作って配ろうと思うのです」

「それいいアイデアだと思うわ。判った手伝うわ」

「あ、じゃあ俺材料とか運ぶの手伝う」

避難してきた村人の事を引き受けてくれたマリアと蛍ちゃん。それに横島君、横島君が行けばチビやモグラちゃんも当然ついて行く、子供も多かったので、横島君が行ってくれたのはありがたい。まだ泣いている子供も多いからだ

「カオス様、ガーゴイルやゴーレムに有効な武器と言うのはあるのですか？」

「ワイバーンはちと相手取るには厳しいが、ガーゴイルやゴーレムに有益な武器はある。ハンマーやメイスだな」

石で出来ている身体を持つガーゴイルやゴーレムには剣よりも打撃武器が良いって事ね

「私の神通棍は？」

「それだと打撃面積が問題じゃな。メイスとハンマーどっちがいい？」

ドクターカオスの問いかけに、メイスでお願いと頼み。避難民の確認と戦力の再確認をしていた騎士団長が戻った所で、戦力の展開や、避難民の防衛を勤めてくれる兵士の割り振り、それと仮に籠城するとして何日持ち堪えることが出来るのか？などの話し合いを始めるのだった……

マリア姫の捕獲に出ていたジャンヌダルクが帰還してから様子がおかしい、今まではゴーレムやガーゴイルや兵士とは戦っていたが……民間人と戦った時に異常が見られた。更に言えばワイバーンもその統率を失い、人間を襲う所か逃亡を始めた。これは良くない、せっかく戦力としてガープ様に授かったというのに、これではとんだ役立たずだ。無抵抗の人間と戦う事が出来ない、それでは戦力としても、畏怖を集める対象としても今のままでは役に立たない

「どうですか？落ち着き……うつぐうつぐ!？」

「私に……話……掛けるなあー!」

顔を歪めながら、その目に激しい怒りの色を浮かべ、私の首を絞め左手で吊り上げるジャンヌダルク。その圧倒的な膂力に息が詰まる

「「ヌル様ー!」」

「消えろー!」

私の危機に連れてきた兵隊がジャンヌダルクに襲い掛かるが、いつの間にか右手に現れた旗で薙ぎ払う

「お、落ち着いて……わ、私に当たった……所で……何も変わらないでしょう?」

舌打ちと共に私を解放したジャンヌダルクは頭を抑えてふらふら

と城の奥へと消えていく

「ヌル様！大丈夫ですか!?!」

ゲソバルスキーが駆け寄ってくるのを手で制す。人間の姿をしているだけで私は魔族、首を絞められた所で多少息苦しい程度で活動に支障はない

「あの女、私が制裁を」

「止めておきなさい、あれはガープ様から預かっている者ですよ」

私よりも遥かに天才のガープ様が英霊召喚を行い、属性を反転させた存在。悔しいが、私の最高傑作のゲソバルスキーでも勝つことは難しいだろう

「しかし」

「大丈夫ですよ。ゲソバルスキー、貴方は貴方の任を果たしてくださいれば良いのです。マリア姫達の搜索をね」

村を焼き、追い出したのだが、どうも他にも隠し砦を持っていたのだろう。森周辺に逃げたと思われる、村人とマリア姫の姿はない。ドクターカオスが増援を連れて戻り、規格外の破壊力を持つ一撃でゴーレムを粉碎した若い男の事も気になる

「畏まりました。必ずやマリア姫達を見つけて戻ります」

「頼みますよ。場所さえ見つけてくれれば、幻影を送り込めますので」  
直接向かうのは愚作。幻影を送り込み、相手側の陣営の戦力などを分析し、その上で制圧するしろ、交渉に持ち込むのが最善。特に最初にくつちの戦力を見せ、相手の心を折るのも重要だ

「くつく。私に負けはありませんから」

地獄炉が既に正常に稼働している。ゴーレムもガーゴイルもいくらでも製造できる、更に言えば、私の魔力は常に最大で維持され、傷も即座に回復する。ここまでの布陣を作る事が出来た上に、こちらにはこの城の領主さえも支配下に置いている。仮に本陣であるここに切り込まれたとしても人質も居る、優秀な防衛も出来ている。ここま

で出来ていれば敗北するとは思えない

「さてと、では私は作業に戻りますか」  
未来に存在するガープ様の写し身を作る。私の技術では良い所、5



## その3

レポート16 竜の魔女 その3

横島達が過去に消えてから1日経過した。これは前回とは違う差異だ、前回は昼前に消え、夕方には戻ってきていた。だが1日経過した……前回は確か2日滞在していたはずだ

(もつと時間が過ぎていくのか?)

流星の私でも予想と推測では話すかどうか判断に悩むのだが……

「……お前何か知っているのなら言え。と言うか何か知ってるだろ? 吐け」

「そうですね。ドクターカオス、貴方は全くの自然体。この現象について知っているのではないですか?」

「喋って、お願い、もう私じゃこの2人を説得できない」

目が完全に据わっているシズクと神宮寺。そして美神達が消えたと言う事で、慌てて尋ねて来てくれた琉璃……

「カオス、知ってるなら教えて。姉さんと横島達は無事?」

目を真っ赤に染めているテレサの涙交じりの声にこれ以上黙っている事は出来ない判断する。と言うか、命が惜しかった。良いんですか?と言う目で見つめてくるおキヌに大丈夫と頷き

「信じられないと思うんじやが、ワシが若い時。中世の時代にワシは横島達に会っているんじや」

何を馬鹿なと言う顔をした神宮寺だが、シズクと琉璃はその顔色を変えた

「……美神の母は時間移動能力者だった……答」

「美神さんも同じ能力を持っていてもおかしくない」

美神が最後まで隠していた能力の1つをこのタイミングで切ってしまった。だが切ってしまったのなら切ってしまった場合の対処法もある

「恐らく自分では制御出来ていないと見て間違いないじやろうな、それに……今消えている美神と、ワシが会った美神が同一時間軸とは限

らん」

もつと未来で能力を制御できている美神の可能性も言うると神宮寺は何かを考え込む素振りを見せながら

「もしかして歴史改変を行っているのですか？」

一足飛びに結論を出してきたことに笑みを零す。全て説明しなくていいと言うのは楽でいいな

「そうかもしれない。さつきから妙に記憶があやふやになっている部分がある」

これは嘘ではない、覚えていた記憶に少しずつだが差異が生まれてきている

「それ大丈夫なの？神魔とかに罪に問われるんじゃない？」

テレサが心配そうに尋ねてくるが、これも大丈夫じゃろう。今の神魔の上層部は逆行関係者、美神の能力は知っているのだから

「とりあえず、美神さん達は今過去に居る。それで良いのね？」

そう考えて間違いではないと返事を返し、家から研究資料を取ってくると言い、おキヌを連れ出す。テレサはついて来たそうにしていたが

「お前ならマリアの反応を感知できる。何か反応があればそれを探知して欲しい、神宮寺は過去からの干渉があれば魔力で道しるべになって欲しいんじゃない」

シズクの竜気も同様になど言い。他の面子が着いてくるのを妨げる、聞かれては不味い話だから、それらしい言い訳が出来て良かったと安堵する

「優太郎に伝えてくれ、神宮寺達が美神の時間移動を知ったと」

【判りました。後で家で合流します】

優太郎の家に向かっていく、おキヌの背中を見ながら。記憶が次々に変っていく不快感に顔を歪め

「ブラドローにも声を掛けるか」

使い魔を呼び出し、ブラドローに合流出来るなら、使い魔についてきてくれとメッセージを吹き込み、ワシは自宅へ向かって歩き出すのだった……

森の中に隠されているというこの砦に籠城して2日経った。危惧していたワイバーンの襲撃は無く、ゴーレムとガーゴイルが近くまで来ているが戦闘になることは無かった。それもこれもドクターカオスの仕掛けだと言うのだから驚きだ

「ゴーレムやガーゴイルの視界ではこの砦を発見することは出来ん。流石に竜の魔女と名乗る女とその女が直接使役する白いワイバーンまでは判らんが、雑兵ならば恐れる事は無い」

白いワイバーンと竜の魔女……か。今敵対している中でもっとも危険だと推測される組み合わせだ

「その組み合わせも危険ですが、ゲソバルスキーを名乗る騎士も中々の相手です、ただ……」

「ただ何ですか？騎士団長さん？」

ただと言葉に詰まった騎士団長に螢ちゃんが何ですか？と尋ねる。本名を尋ねても、私はマリア姫に仕える者ですので、と決して名前を語らないフルフェイスの鎧兜の男性、声からして40くらいだと思っただけ……顔も見せない、名前も名乗らないんじやあ。ちよつと怪しいところじゃないわよね。とは言え、マリア姫とドクターカオスが信頼している以上私達がどうこう言う事じゃないけど

「同じ陣営ではあるようですが、協力関係には無いと思います」

「その根拠は？」

根拠のある話なのよね？と問いかけると騎士団長は勿論ですと返事を返してから、その理由を説明してくれた。ゲソバルスキーの配下を薙ぎ払い襲い掛かってきた魔女とワイバーン。その後はゲソバルスキーにもワイバーンをけしかけていたと……

「その話を聞く限りでは、向こうの陣営も魔女を使いきれしていないという感じだな」

戦力としては単体も集団戦力も突出しているが、指揮系統の違うのか、それとも元々従うつもりが無いのか、ゲソバルスキー……もつと言うとヌルと言う錬金術師にも従っていないようだ

「でも戦力としてはこっちよりも上でしょう？」



「はい……まともなぶつかれば。間違いなく負けます」

膂力に機動力、更に旗と剣を縦横無尽に振り回し、炎まで扱う。その話を聞くだけで判る、今の私達の戦力では魔女を押さええる事は出来ない……

「2日で色々準備は出来たが、ここからは兵士の武装よりも、美神や蛍の戦力を上げる方向に切り替える方が良いかもしれない」

兵士では魔女とワイバーンには勝てないとそれは騎士団長も理解していたのか、異論はありませんと返事を返す。すると話を黙って聞いていたマリア姫がここで口を開く

「ではその方向で動く、騎士団長は周囲の警戒に戻ってくれ。ゴーレムやガーゴイルを発見した際は極力戦闘は回避してくれ、どうしても戦闘になる場合は戦闘後時間を置いてから、戻ってくれ、この砦の場所を知られるわけには行かない」

「すべてお任せください。では失礼いたします」

マリア姫の指示に頭を下げて、部屋を出て行く騎士団長の背中を見ながら

「マリア姫ってその通り姫って感じじゃないのね？」

「む？まあカオス様に色々教わっているし、戦術や兵法なども教わった」

なるほど。姫と言うよりは騎士って感じなのかもしれないわね。死なないように、怪我をしないように知恵を与えたと言う所ね。私と蛍ちゃんの視線に咳払いをしたドクターカオスは顔を逸らしながら

「では私は装備などの開発に戻りますので、マリア姫。申し訳ないですが退出を」

「判りました。カオス様、よろしくお願いします」

民を、部下を死なせたくないのですと言う、マリア姫に任せてくださいと微笑んだドクターカオスに背を向け、マリア姫と蛍ちゃんと共にドクターカオスの研究室を後にする

「美神、それに蛍。横島を貸してくれている事。真に感謝する」

砦の中を見て回っているとマリア姫が礼を言ってくる。その視線の先には、子供と遊んでいる横島君の姿がある。ゴーレムにガーゴイ

ル、それにワイバーンと言う存在に立て続けに襲われ、塞ぎこんでいた子供。その子供達を連れ出して笑顔を取り戻したのは横島君だ  
「ほっ、よっ、つとー!」

「「凄い凄い!!」」

木の皮を丸めたボールでリフティングをしている横島君。あれだけ不規則な回転をするボールを連続で蹴る事が出来る、その動体視力と反射神経、それに運動神経は正直驚かされる

「へい、マリアパス!」

「あ、はい!」

一緒に子供の面倒を見ているマリアにボールを蹴り渡すのだが、マリアは上手く蹴る事が出来ず。木のボールが転々と弾んで転がっていく、だがその先にはチビ達が居て

「ぶぎゆうツ!!」

うりぼーがボールを掬い上げるようにしてマリアに返すと、今度はマリアは上手くボールを受け止めて小さくりフティングをする

「横島さん、返しますよ?」

「OKOK!」

軽く蹴り上げられた事でふんわりと横島君の元に戻るボール。それを胸で受け止めて、落とした横島君は子供の視線に目を合わせて

「どうだ?お前達もやってみないか?」

「「やるー!!!」」

おっしや、じゃあ教えてやろうなーつと笑う横島君。そしてそんな横島君と子供達を見て笑っているその子供の両親……

(私達がなじめたのも横島君のおかげかもしれないわね)

見慣れない服装に霊力を使い、マリア姫と瓜二つの女性に、妖怪を連れている一団。それだけで警戒心は嫌でも高まり、私達は腫れ物扱いだったのだが、炊き出しや子供と触れ合う横島君のおかげで随分と馴染んで来たように思える

「横島君は子供に好かれやすいからね、それに塞ぎ込んでるより、子供はやっぱり笑ってるほうがいいわ」

あんまり子供は好きじゃないが、塞ぎこんでいる姿を見ると可哀想

だと思おうし、何とかしてやりたいとは思う。だけど私では上手く子守が出来ないから横島君がいてくれて良かった。私とマリア姫は砦の中の巡回と襲われた場合の避難路の相談。そして砦が発見された場合、どこで迎え撃つのか？などの戦略会議をしながら、その場を後にするのだった……

突然私を尋ねてきたガープの使い魔。指定された場所に来てくれないか？と言うメツセージカードを持った蝙蝠……畏か、それとも共闘か……おキヌさんからの話では、横島君達が中世に時間移動していると聞いた。それに関係しているのか？それとも私がスパイだと言うことにたどり着いたのか……様々な可能性が脳裏を過ぎる

「土偶羅魔具羅。緊急用の転移の術式が刻まれたブレスレットと、小型スピーカーを持ってきてくれ」

「畏まりました。アシユ様、お気をつけて」

丁寧に頭を下げて部屋を出て行く土偶羅魔具羅。その姿を見送っている蓮華が心配そうな顔をして

「大丈夫なの？」

「大丈夫じゃなからうが、今まで隠れていたガープからの接触だ。リスクは承知、だが情報を得れるこの機会を逃す馬鹿はいない。通信機の受信先を預ける、ブリュンヒルデと合流して、私の聞いた話を伝えてくれ」

神魔に情報を流すことが出来なければ、こんな危険すぎる橋を渡る意味は無い。だから蓮華にそう頼み、私は土偶羅魔具羅が運んできた魔具を手にガープに指定された場所に向かうのだった

「我が友よ。よく来てくれた、歓迎する」

「ガープ。元気そうだな」

人間の姿に化けて上機嫌に笑うガープ。エレシユキガルを召喚し、その不敬によって反撃された傷はもう回復しているようだな……しかしガープの後にいるローブの男は何者だ？

「ああ。こいつか、私が召喚した英霊だ。私に逆らったのでな、魔術で

戦闘技術と知識を持った方と人格を持ったほうを分裂させ、技術と知識のほうをこうして側に置いている。姿を見せないのは、まあ念の為と思ってくれ」

ローブの裾から見える口元には白色の形の良い髭が見えている。それに肌の色から見て老人に近い年齢の人物だろう、姿は隠しているが、その霊力から英霊であることは間違いないだろう

「人格のほうはどうしたんだ？」

英霊を側に置いている。簡単に言われたその言葉に目を見開く、最高指導者が召喚したフローレンスナイチンゲールが荒れ狂っているというのに、霊格を2つに分けてその片方を使役する……英霊に関する理解度は最高指導者よりもガープのほうが上なのかもしれない

「霊力も殆ど抜き取って捨てた。どこぞで消滅しているだろう、全く悪の権化といわれる存在が青臭い正義感を持つてるとは……予想外の上にくだらな話だ」

その言葉に内心落胆しながらも、悪の権化と言われる存在と言うのが気になった

「ゾロアスターのアンリマユか？」

「アンリマユか……ああ、出来る事ならば召喚したい所だが違う。人間の中では悪と言うだけさ、それも自らの手を汚さないタイプの天才とでも言うべきかな？」

ガープがそこまで賞賛する人間……？その英霊が何者か尋ねたい所だが、あまり根掘り葉掘り聞いて私に不信感を抱かれても困るか……

「素晴らしいなガープ。まさか英霊召喚を成功させるとは」

「専門分野の違いさ、お前は機械工学。私は霊的分野に特化している、その差だ。お前だつて理解すれば英霊召喚できると思うぞ？」

何なら教えてやろうか？と言うガープ。だが私はその言葉に首を横に振った、これはガープの秘術だ。それを最高指導者にリークすれば、私がスパイだと言っているような物だ

「自分で辿りついてこそ意味のあるものだろう？」

「ふっ、そういうと思っていた」

「科学者、研究者同士だけが持つシンパシー。相手の研究成果だけを貰うような真似はしない、自分でその領域までたどり着くという事が大事なのだ」

「それで私を呼んだ理由は何だ？英霊を見せるためだけではないだろう」

「それだけで私を呼んだとは思えない、何かほかの理由があるはず。その理由は何だ？と尋ねるとガープはくっくつと喉を鳴らしながら」

「中世にプロフェッサーヌルと言う良い科学者がいたのを知っているか？」

「……ああ。知っているな、確かガーゴイルとゴーレムの権威だったか？」

「知ってるも何も無い、前の世界で私がスポンサーとなり研究させていた。今回は手を引いているが、まさか私の変わりにガープがスポンサーになったのか……これも歴史の修正力と言う奴か、ある程度は前回の歴史に沿って動くと言うことか」

「私の作った地獄炉とヌルの作った地獄炉を共鳴させ、精神のみの時間転移を行う。お前もどうだ？横島が真の特異点ならば、面白い物が見れるぞ？」

「真の特異点……ガープが横島君に注目している理由。特異点と言うキーワードが関係しているとはわかってはいるが、特異点が何かは判らない。ガープは私の反応に渋っていると判断したのか、更なる札を切ってきた」

「可能ならば、ヌルを現代に連れてくるつもりだが、流石に私1人では手が余る。可能ならば力を貸して欲しい」

「ゴーレムとガーゴイルを中世で実用段階にしたヌル。その技術と知識は恐るべき物があるだろう、だが……ヌルがガープ陣営に合流するのは避けなければならぬ事態だ。それに横島君達を護ろうにも、中世と言う時代では、妨害を打てば私の仕業だとばれてしまう。自分でも冷静でいられないと判っていたから私はガープのその要請に首を振った」

「すまない、今開発段階のものが仕上げの段階なんだ。ついて行きた

いのは山々だが……今は動けない」

「そうか……いや、急に訪ねた私が悪いな、無理を言った」

申し訳無さそうなガープに罪悪感が生まれる。同じソロモンの魔神、仲間意識は当然ある。現にもし逆行の記憶が無ければガープに協力していたという確信が私にはある

「その代わり、ここで聞いたことは誰にも話さないし、今度私の研究が形になればそれをお前に披露しよう」

英霊を見せてくれた礼だと言うとガープは嬉しそうに笑いながら、帽子を頭に被る

「楽しみにしているよ、アシユタロス。ではな、また会おう、教授。行くぞ」

「……」

ガープがそういうと2人の姿が闇に包まれて消えていく。残された私も転移でアジトに戻りながら

(中世でガープが動くか……なんとかして伝えたいが……)

中世にいる横島君達にガープの事を伝える手段は無い。特異点が何かは判らないが、ガープがそこまで注目する何かがある……

「ままならないな……」

前からずつと感じていたことだが、神魔であれ出来ないことはある。それを突きつけられ、私は思わずそう呟くのだった……

砦に籠城して、3日目。恐れていたことがついに形になった……

「姫様、ワイバーンが一齐にこちらに向かってきます！」

監視をしていた兵士が顔色を変えて飛び込んでくる。ワイバーンに対する武器は正直完成とは程遠いのか、ドクターカオスの顔色はいい物ではない

「ゴーレムとガーゴイルを優先したのが裏目に出たか……」

舌打ちをする気持ちはよく判る。ワイバーンとガーゴイル、ゴーレムでは戦力はワイバーンのほうが上だ。そんな相手をホイホイ戦場に送り込むとは想定していない。ゴーレム、ガーゴイルで索敵し、私

達を発見してからワイバーンを送り込む物だと思いついていたのだ。幸いにも魔女を名乗る相手がいなかったのが不幸中の幸いだが、ワイバーンだけでも十分な脅威だ

「弓兵部隊を後方に配置します。貴女方には前衛に出てもらわなければならないが……大丈夫ですか？」

心配そうに尋ねてくる騎士団長。だけど一般兵士では死人が出る結果になる、弓兵で後方支援をして貰った方が戦術としては正しい。「ワイバーンの弱点は翼だ。翼を破れば、ワイバーンは飛行能力を失う。更には言えば、ワイバーンの脚は着地には適しているが、地面を歩くのには適していない。狙うなら翼だ、そこを忘れるな」

ドクターカオスから差し出されたのは薄い緑色の刃をした槍が2つと剣が1つ

「剣は横島の背丈に合わせてある。栄光の手と組み合わせれば、リーチは解決できるはずだ」

「ありがと、カオスのじーさん」

横島も戦闘に出す。これは不安が残るのだが、今は少しでも戦力が欲しいと言うのと、砦に隠れているマリア姫と避難してきた村人達を守るにはマリアとドクターカオスを外す事が出来ない。マリア姫を浚われた段階でこっちは詰みになってしまっているから

「横島君。無理は絶対にしなさい、最悪の場合うりぼーでワイバーンを砦から引き離す。それが私達の仕事って事を忘れないで」

「はいー大丈夫です」

まだ砦を発見されていない。だからこちらから打って出る。そして魔女とワイバーンの注意を引き付け、離脱する。森の中と言う立地だからこそワイバーンは自由に動けない、そこを利用した戦略だ

「美神。この地図に印が打ってある場所が、罫を仕掛けてある所だ。上手く利用してくれ……それと無事に戻ってきてくれ」

マリア姫から差し出された地図を受け取り、行くわよと言う美神さんに頷き、私達は砦を後にする

「グゴガアアアアアア!!!」

砦を出て数分でワイバーンが群れを成して襲ってくる。その圧力

と迫力は思わず身震いするほどだ

「打ち合わせ通りよ。破魔札と精霊石は温存、使うなら霊体ボウガンにして」

「はい！」

横島と声を合わせて返事を返す。ワイバーンは霊力と魔力に対して強い抵抗力を持つ、効果の薄い霊具を使うのを避けるのは当然。更に言えば、今後のことを考え温存するのが道理

「横島君はいつでもうりぼーを出せるように準備して、走って逃げるなんて無理だからね」

搾り出すようにはいつと返事を返す横島。悪霊や魔獣は今までも戦ってきた、だからこそわかる。目の前に対峙しているワイバーンの強さが……

「横島君と蛍ちゃん是我的のフォロー！離脱する隙を常に窺いなさい！」

美神さんの怒声にも似た指示に返事を返すのではなく、行動で返事を返す。ワイバーンが咆哮と共に吐き出した炎、それが私達とワイバーンの戦いの合図となった……

森の中で何度も上がる炎と倒れる樹木、それを見て私は思わず笑みを浮かべた

「へえ……あそこにいるんだ」

ワイバーンが何体か倒されたのは知覚していた、30体のうち、3体は死んだ。あそこには少なくともワイバーンを3体は倒せる存在がいる。間違いなくただの人間ではないだろう、この胸を埋め尽くす虚無感を消してくれるかもしれない、そう思うと口角が上に上がるのを自覚した

「お戻りください、ヌル様とゲソバルスキー……うるさい」

私に城へ戻れと指図をしたゴーレムの頭を握りつぶす、あんなところにいたらいつまでも頭が痛む。その証拠に外に出たらあの激しい頭痛は完全に消え去ったのだから……

「ふうふう、はは……あはははははははッ!!!」





## その4

レポート16 竜の魔女 その4

全身に走る凄まじい激痛。不発弾か何か爆発したような……と  
にかく凄まじい衝撃を感じたのは覚えている

「はははは!! 貴女達なら、私を楽しませてくれるでしょう? ねえ?」  
私達を嘲笑うかのような女の笑い声。その声に顔を上げ、私の視線  
の先にいたのは禍々しい鎧に身を包んだ女の姿だった。鋭利な漆黒  
の鎧に、蟬人形のような生気の抜け落ちた白い肌。そして狂気の光を  
宿した金色の瞳……

(人間……違う。あれが……竜の魔女!)

マリア姫が言っていた竜の魔女の外見特徴に完全に一致している。  
竜の紋章が刻まれた旗と腰に刺した剣……そしてその圧倒的な存在  
感。小竜姫様と同格かそれ以上……牛若丸やノツブとも、ましてや義  
経とも違う。私達に向けて恐ろしいほどの殺気を叩きつけてくる

(これが……英霊!)

今まで遭遇した英霊が操られていたり、抑止力と言う存在だった。  
初めて完全に敵として遭遇した英霊に思わず身震いする、人間では太  
刀打ち出来ない存在。竜の魔女は私達を値踏みするようにその金色  
の瞳で見つめ

「まずはお前からだツ!!」

旗をどこかへと消し去り、腰の剣を抜き放ち横島君へと駆け出す

「横島君ツ!」

「横島ツ!!」

私と蛍ちゃんがそう叫んだが遅い、竜の魔女は殆ど一瞬で横島君の  
前に移動し、剣を振りおろした……

ぼんやりとする視界の中、何か突進してくるのが見えた。黒い影  
……その手に鈍く光る何か握られているのを見て、俺は殆ど反射的  
に、右手を振り上げた

「へえ？やるじゃない、人間にしては」

「ギツ!？」

振り上げた右腕には栄光の手が発動していた。それでも全身に走る激痛に苦悶の声を上げる、だが右腕を犠牲にしなければ俺は両断されて死んでいた。あの一撃に対応できた理由、それは牛若丸や沖田ちゃんのおかげだろう。だが反応出来ただけで、俺はここから動くことが出来ない

(い、いてえ……)

右腕を犠牲にして受け止めた。だがそこから走った衝撃で足が痙攣して動くことが出来ない

「でも、最初の一発で終わり見たいね!!」

再び振り上げられた剣が迫ってくるのが見える。避ける、避ける、と心眼の叫び声が聞こえる。俺も動かなければ死ぬと判っているのに動けない、最初の一撃を防いだ代償。それがあまりに大きすぎた……

「こつのおツ!!」

頭に振り下ろされる瞬間。美神さんと蛍の声が聞こえ、激しい金属音が森の中に響く

「す、すいません！た、助かりました！」

ありがとうございますと礼を言うが、美神さんにお礼は後と怒られてしまった。まだ俺達の命を刈り取れる魔女は目の前にいる、まだ助かってなどはいないのだ

「ふーん……弱いから群れて、みつともないわね」

俺達を見て嘲笑うかのように言う魔女。その目には俺達を馬鹿にするような光が宿っていた

「でもまあ……人間が何時まで耐えられるかしらツ!？」

再び空気が爆発したような音が聞こえ、魔女の姿が掻き消える。

「背中合わせ！お互いに死角をフォローして！」

美神さんの指示に反射的に動き、背中を合わせて3方向を警戒する。3人で警戒すれば、その姿を確認することが出来る……そう思っていたのだが……姿は愚か、その影すら見る事が出来ない。その余り

の速さに目を見開く

【速い……私でも追いきれん！】

心眼は辛うじてその姿を確認する事が出来ているようだが、完全に捕捉することは出来ないのか、指示を出せないでいる。木が砕け、地面が陥没し、石が恐ろしいスピードであらぬ方向に飛んでいく……八兵衛や小竜姫様の超加速とは違う、姿が見えないのは同じだが、破壊される物があるだけ、その脅威が何時自分に迫ってくるのかと言う恐怖が募る

（横島君。反応を見せないで、私の話だけを聞きなさい。陰陽術の用意、話は覚えてるわね？）

小声で話しかけてくる美神さん。話は覚えてるわね？と陰陽術のキーワードに美神さんが何を警戒しているのかは理解出来た、それは炎だ。マリア姫が隠れていた村を焼いた炎……相殺出来るか自信は無いがやるしかない

（散って逃げるのはなし、各個撃破されて終わりだからね、突撃してきたら精霊石、炎なら陰陽術。その後は……臨機応変に考えましょう）  
（作戦は何も無いってことですね）

蛍の言葉に美神さんが小さく苦笑する。だがそれは仕方ない事だ、相手が相手。情報も何も無い突発的な遭遇戦、今回は元々ワイバーンを撃退し、時間をかけて砦に戻るという囮作戦だったのだ。魔女と遭遇することも考えていたが、まさかあそこまでの存在とは想定などしているわけも無い。今俺達がやるべき事は魔女を撃退する事ではない、無事に砦に帰還する事。それを最優先課題とするべきだ、最悪の場合川に飛び込むとか、崖から飛び降りるとかする必要もあるかもしれないなど考えていると、心眼の鋭い声が脳裏に響く

【横島！上だ！！】

「消し炭になれッ！！」

反射的に指を噛み切り、陰陽札に文字を刻む。上から俺達を飲み込まんと迫る黒い炎に震えながら陰陽札を握り締め、剣指を切りながら詠唱を叫ぶ

「急急如律令ッ！！炎の力を散らしめよ！！！！」

俺達を包み込むように霊力の膜が発生し、炎を受け止めるが……  
「あちちちちッ!!!!だ、駄目だあ！」

手の中で札が異様に発熱している。直撃は避けたが、長時間受け止めるのは不可能だと悟る、そもそも炎に強い俺が熱いと感ずる段階で相当危険だ。これ以上持たない、そう思った瞬間。炎は弾ける様に霧散した……

「ふー……ふーっ……」

真っ赤になっっている手に息を吹きかけて冷ます。手の中は札は完全に燃え尽きていて、後もう少し炎の持続時間があれば全員が丸こげになっていたと容易に想像できる

「……へえ。お前面白い術を使うわね」

金色の瞳が俺を捉える。その絶対零度の視線に思わず身体が震えた……今まで感じてきた殺気や殺意とは全く異なる気配。虫や何かを見つめるようなその視線に心の底から恐怖した

「みむうっ!!」

「きやつ!」

Gジャンのポケットから顔を出したチビが電気を放つ。パチンっと言う音と共に周囲が一瞬昼間のように明るくなる、そして次の瞬間。身体が何かに持ち上げられた

「ぶぎゅうううう!!」

俺達を背中に乗せて走り出すうりぼー。自分達で考えて行動に移したと言うのか……

「逃げられる……とは言えないわね」

美神さんが背後を見てそう呟く、森の中に響く魔女の怒声。うりぼーのスピードは決して遅い物ではないが、逃げ切れとは思えない「どうしますか？美神さん。正直今の装備で勝てると思えないんですけど」

「それは私も感じてるわ、攻撃力がとんでもない。精霊石でも防げるかどうか……」

竜の魔女の力は恐ろしい物だった。その力も脅威なのに、そこに超火力の炎まで加わるとなるとどう考えても勝てるイメージに繋がら

ない

「とりあえず森を出るべきだ。森に放火されては逃げ道もなくなる」  
ワイバーンに囲まれる危険性を考慮して森の中で戦う事を選んだ。  
それなのに森を出るのか？と呟くと美神さんはいいいアイデアかもしれないと呟いた

「あの女。見かけどおりかなり短気よ」

……美神さんも人のことは言えないと思うんだけど、いやいや、それを口にしたら殺されるなどその言葉を飲み込む

「虚仮にされたと思つて私達を追いかけてくるでしょうね。直接私達を殺そうとするはず、ワイバーンで逃げられないようにはすると思うけど……3対1に持ち込めるかも……」

「美神さん。3対1でも勝てるなんて思えないんですけど」

蛍の言葉に頷く、あの怪力と炎。正直、数の有利なんて何の役にも立たないと思う

「狭い森なら旗や剣の動きを束縛できると思つたが、効果は無い。それなら開き直つて広い場所に出たほうが勝率が上がるかもしれない、それにマリア姫が言つていただろう？情緒不安定だと……もしかするとまたそれが起きるかも知れない、もつと言えば、私達の支援をしてくれていた弓兵部隊が支援に来てくれる可能性もあるだろう」

弓兵部隊と分断されたが、向こうを追いかけている気配は無い、だから無事に砦に戻り、応援を連れて戻ってきてくれるかもしれないと言う拙い可能性と、それと同じくらい信用出来ないマリア姫が殺され掛けた時に情緒不安定になり、逃走したと聞く。だが……とてもではないが、それで大丈夫と思う事など出来る訳も無かつた

「心眼。それはあまりに楽観的過ぎないか？」

俺でも思う。希望的観測に楽観的観測、正直に心眼らしくないというと心眼は苦笑するような素振りをしなから

「私でも突発的遭遇であそこまでの化け物と戦う羽目になれば、混乱もする。それともこのままうりぼーに乗って逃げるという手もあるぞ？」

うりぼーに乗って逃走。それは確かに1つの手段だと思つたが、周囲

から聞こえてくるワイバーンの鳴き声に逃げきるのは無理だと言うのも判っている。俺達の援護をしてくれていた弓兵部隊が砦に戻り、カオスのじーさんとマリアを連れて戻ってくるまで耐える……これも実用的ではないだろう。だが他に手段も無いのも事実だ

「それで行きましょう。広い場所の方が森の中からの不意打ちとか、森を燃やされて逃げれないって事にもなり難いし……」

条件は不利すぎるけど、逃げるのも無理なら迎え撃つしかない。と固い口調で言う美神さん……魔女がまた情緒不安定になるのを祈るしかないという最悪すぎる条件だが、それしかない。草原に出るとワイバーンが逃走経路を塞ぐように滞空しているのを見てうりぼーが立ち止まる。うりぼーの上から降りて、武器を構えているとゆったりとした歩みで竜の魔女が森から姿を見せる。

「さて、追いかけてここまでは……我が憎しみ、我が恨み。思い知ってもらいましょうか」

俺達を見て獰猛な笑みを浮かべる竜の魔女と、その声に呼応すかのように吼えるワイバーン。死ぬかもしれない恐怖を感じながらも、気持ちだけでは負けないと俺は震えながらも竜の魔女を睨みつけるのだった……

「少しは反撃したらどうです？どうせ死ぬのですから、勇敢に戦った方が死に際も輝くと言う物でしょう？」

まあ次の瞬間に殺されますがとエガオで言う竜の魔女。笑ったり、怒ったり、無表情になったり、情緒不安定と言うレベルではない。まるで、1つの肉体に複数の精神……多重人格のような印象を受けた「っははははははははッ!!!」

そして再び急に笑い出したと思った瞬間。矢のように駆け出してくる、反射的に横に飛んでその突進を交わす。地面をえぐりながら止り、振り返ると同時に旗を槍のように振るってくる。その攻撃の先は美神さんだ

「ちっ!!くっうううっ!!このおッ!!」

ドクターカオスから貰った槍で旗を受け止めるが、当然受け止めきれず美神さんの身体が大きく弾け飛ぶ

「蛍！美神さんを頼む!!」

「判った！」

地面に叩きつけられ転がっていく美神さんに駆け寄る。こんな時シズクがいてくれれば、治療して貰えるのにと思いながら肩を掴んで抱き起こす

「大丈夫ですか!？」

「な、なんとかか……直撃したら流石にやばかったわ」

荒い呼吸で返事を返す美神さん。私も含めだが、その顔には濃い疲労の色が浮かんでいる。直撃すれば間違いなくその瞬間に柘榴になる、掠っただけでも致命傷になりかねない相手との近接戦闘は精神の疲労が凄まじい

「ひっ！ひいいいっ！死ぬ！これは死ぬ!!」

「死ぬ死ぬ言うならさっさと死になさいよッ!!」

栄光の手とドクターカオスから貰った剣で旗を必死に受け止め、いなし、防いでいる横島を見て驚いた

「対応してる……」

私と美神さんは風を切る音や、訓練や除霊の経験で何とかあの嵐のような攻撃に対応出来ていた。だが私や美神さんよりも戦闘経験が劣る横島が対応出来ている、その事に驚かずに入れられなかった。

【右の薙ぎ払い！振り下ろし！そのまま後退ッ!!】

心眼のサポートがあつたとしても、私や美神さんではああは行かないだろう。どうしても声を聞いてから反応するというタイムラグがある、それに心眼のサポートは複数の攻撃のうち数回を当てているに過ぎない。それ以外の攻撃を回避しているのは、横島の純然たる実力が大きい。

「みむうっ！」

「ぴぎーッ!!」

「くっ！ええいっ!!鬱陶しい!!」

Gジャンのポケットから顔を出した、チビとうりぼりの電気ショツ



クとビームに竜の魔女が舌打ちしながら後ずさる。横島も荒い呼吸を整えながら後退してくる。幾ら反応出来るとは言え、攻撃が当たればその瞬間に死ぬ。その極限状態での戦闘は横島の手をかなり削っているだろう……

「横島君！」

「……うつつすッ!!」

美神さんの言葉に力強く返事を返した横島は額の汗を拭い、再び竜の魔女の方に向かって走り出す。恥ずかしい話だが、私と美神さんではあの近距離で戦うことは出来ない。元々が中距離の戦闘を得意としているから、あそこまでの近距離は対応できない

「タマモ。幻術仕掛けてくれる？ここら辺全域に」

「コンー！」

竜の魔女から撤退することは考えられない。ならばここら辺一体に幻術を仕掛け、ワイバーンの視界を誤認させ、一瞬の隙を突いて逃げる。その一か八かに賭けるしかないのだろう

「蛍ちゃんは私と一緒に横島君の援護をするわよ」

一箇所に留まらず常に移動しながら、状況に応じて必要なサポートを行う。それは口にするよりも遥かに難しいだろうが、横島にかかっている負担を考えれば、無理。なんて言える訳が無い、私は背中に槍を背負い、霊体ボウガンに矢を装填しながら、判りましたと返事を返すのだった……

状況は最悪だ、竜の魔女と名乗る英霊と思われる女。その強さは神魔に匹敵していた、今の装備も不足している。仲間もいない、この状況ではどう足掻いても勝てるイメージが湧かない。

「は……はっ……はっ……」

横島君の体力と集中力の限界も近い……今のうちに何とかして打開策を考えないと

「本当よく粘るわね!!」

大振りの旗の一撃を叩き込もうとしたその瞬間。手にしていた霊

体ボウガンの引き金を引く

「ちっ！」

「くっ！」

魔女の舌打ちと横島君の舌打ちが同時に響く、私と蛍ちゃんの放ったボウガンを弾くのに左手で剣を抜き切り払う。その一瞬だけ、旗の速度が緩まった、横島君はその隙に頭を抱えて、旗の下を潜り抜けることで命中するはずだったその一撃を避けたのだ

「あ、ありがとうございます……ごいますっ!!」

ふらつきながら立ち上がる横島君。剣はとつくに砕け、今は両手に栄光の手を作り出して対応しているが、その腕が震えているのには気付いていた……極度の筋肉疲労に、栄光の手が明暗を繰り返している。もう横島君に栄光の手を維持するだけの霊力が無いのは目に見える

「よく頑張ってるわね。でも、何時まで耐えられるかしら?」

右手に旗、左手に剣を握った竜の魔女の嵐のような攻撃が始まる。横島君を鬱陶しいと判断しているのか、旗と剣の攻撃は横島君一人に集中している。その隙に背後から攻撃しようにも……目の前に黒い火花が散るのを見て、慌てて飛びのく。その一瞬で先ほどまで私がいた場所が巨大な黒い炎の火柱に飲み込まれる

(攻守共に、隙がまるで無い)

防御力はさほどではないのだろう。だから霊体ボウガンと破魔札を避ける素振りを見せている、だがその圧倒的な攻撃力。それが強固な守りとなっている……

「蛍ちゃん！これッ！」

私の持っていた霊体ボウガンの矢を蛍ちゃんに投げ渡す。横島君ももう限界が近い、私には横島君ほどの動体視力も反射神経も無いが、むざむざ弟子が殺されるのを見ているわけには行かない。

「ぎっ……く、くそ……」

風船がはじけるような音と共に横島君の両手の栄光の手が消える。栄光の手を維持する霊力が尽きたのだ

「よく頑張ったわね、さあ、首を切りましょう。おさらばよ」

左手の剣が横島君の首に向かって振るわれるその瞬間。首から下げた精霊石のペンダントを引きちぎる

「精霊石よッ!!」

「ちっ……まだ抵抗しますか、鬱陶しい」

今手持ちで最大の純度を誇る精霊石の結界はその一撃を防いで見せた。だがその一撃を防ぐだけで精霊石の結界は完全に砕け散った……その桁違いの攻撃力に化け物めと心の中で叫ぶ

「す、す、すみません……ま、まだ……」

「もういい！それ以上は命に関わるわッ!!」

まだやれまると言おうとしていた横島君の言葉を遮って叫ぶ。横島君はとつくに限界を超えている、これ以上は命に関わる

「はいはい、お涙頂戴って訳ね？ま、どうでもいいけど？」

私と横島君のやり取りを見てくだらないと断言し、邪悪な笑みを浮かべた竜の魔女

「全員殺してしまえば、それで済む事ですから」

そう笑った竜の魔女の身体から凄まじい霊力が放たれる……これは、宝具!?逃げようにもうりぼーは力尽きており、巨大化することは出来ない。

「美神さん！私の分の精霊石を！」

蛍ちゃんが精霊石のペンダントを投げ渡しながら、駆け寄ってくる。私の2個と蛍ちゃんの1個……純度はさっきのものよりも劣るが、それでも普通の除霊ならば十分すぎるが……

（これでも耐えられるかどうか……）

ただの攻撃でさえ耐え切れなかった。とても宝具を耐え切れるとは思えないが……やるしかない!

「心眼！結界の構築を手伝って！」

【判ってる！】

私1人ではあの攻撃を防ぐ結界を精霊石を使ったとしても、作り上げることが出来ない。心眼のフォローを頼むが……遅かった

「これは我が……「コーンッ!!」」

宝具が発動しようとした瞬間。タマモが炎を放ったのだ、集中が削

ができれば、宝具の発動を妨害できる。だが妨害するにしても、その炎はあまりに弱々しかった……

「こんな……こんな……炎……？」

嘲笑う表情が一瞬無表情になった次の瞬間。私は思わず耳を塞いだ

「つぎやあああああ!!頭……頭が痛いッ!!つあああああああああ  
あー……あー……あー……!!」

頭を両手で抱え、草原をのた打ち回る魔女。そのあまりに豹変に私だけじゃない、蛍ちゃんや横島君も困惑の表情浮かべた

「痛い、いたいいたい……ああああ!!痛い、痛いいいッ!!熱い!苦し  
いッ!!……神よ、何故……何故私を……見捨てたのですか……私、私  
私私私……フランス……フランス……あああああー……ッ  
!!!」

そう叫んだ竜の魔女は糸が切れた人形のように崩れ落ちた。ここから見ても気絶しているように見える……だが竜の魔女は聞き捨てならない台詞をいくつも叫んだ、熱い、苦しい、神、フランス……

「まさか!？」

その叫んだキーワードと少女。その2つからあの英霊の正体が判った、だがそれはどうしてと言う困惑を私に与えた。だってありえない、聖人と言われる英霊が何故と、一瞬硬直した。だが後で私は後悔した、困惑している時間があるのなら、精霊石の結界で拘束するなり、武器を取り上げてしまえば良かったと……

「ニギガアアアアアアア!!!」

「しまっ!？」

自らの失態を理解した時。全てが遅かった、上空から降下してきた銀色のワイバーンが気絶していた竜の魔女を連れて、空へと飛び上がる、人一人抱えているからスピードも高度も低い。今なら打ち落とせる、そう思ったのだがそうはさせないと私達を取り囲んでいたワイバーンがいつせいに動き出す

「不味いッ!」

疲弊した今これだけのワイバーンの群れと戦うことは不可能。こ

こまでかと思つたその時

「総員構え、撃てええええええ!!!」

「「オオオオオオツ!!!」」

騎士団長の勇ましい叫び声と逃走した弓兵部隊の怒声が響き、森の中から大量の弓が放たれる

「援軍……来てくれたのね?」

正直私達はお外様だ、応援に来てくれるという保証は無かった。だがこうして助けに来てくれたのを見ると私達の事を仲間だと思つていてくれたことが判り、助かつたと言う安堵の気持ちに胸に広がるが、心眼の鋭い声に状況はまだ悪いままだと悟つた

【横島の意識が無い、休ませなければ大変なことになる】

ガープとの戦いの直ぐ後に、この戦いだ。横島君の疲労は私や蛍ちゃんよりも遥かに蓄積していた事を失念していた。本人が元気そうにしているから、大丈夫なのだと思つてしまった

「タマモ！幻術を！蛍ちゃん！横島君をお願いツ！」

「ガアアアアアア!!」

雄叫びと共に突っ込んできたワイバーンの口に破魔札を叩き込んで起爆させる。口の中で破魔札が爆発した事でもんどりうって倒れる。それでもまだ大量のワイバーンが降下してくるのだが

「コーンツ!!!」

タマモの鳴き声が響くと、ワイバーンがふらふらと前後感覚を失つたのか、動きに精細が無くなる。幻術に囚われたであろう今がチャンスだ

「うりぼー！大変だと思うけど、横島を運んでツ！」

「ぶ、びゅぎゅう……」

蛍ちゃんの声で横島君が限界で意識を失っているのだと判つた。うりぼーが苦しそうに大きくなり、横島君をその背中に乗せて走り出す。蛍ちゃんは反転して、ボウガンを放つ、狙つたのか、運が良かったのか。それはワイバーンの目を貫き、激痛に暴れるワイバーンが仲間を巻き込み、巻き込まれたワイバーンも同じように暴れ仲間割れが始まつた。そしてそこに弓兵部隊の弓矢の雨が降り注ぎ、ワイバーン

の翼の皮膜を射抜く

「蛍ちゃん！私達も撤退するわよ！」

何時までも仲間割れも、弓兵部隊の矢も続かない。今この好機を逃す訳には行かない、蛍ちゃんに逃げるわよと叫び、先行し走っていたうりぼーの後を追って森へと走る

「はいっ！」

弓兵の弾幕によってワイバーンを退けているが、それも何時までも続かない、弾幕をすり抜けてワイバーンがその牙をむいて襲ってくる「くっ！鬱陶しい！」

「シッ！」

もとよりワイバーンは強敵だ。それを体力も装備も消耗しきった今の状態で戦える訳が無い、マリアが合流し、弓兵部隊が再度弾雨を降らしてくれる事を期待するしかなかった……だが徐々に、徐々にワイバーンが迫ってくるのを見て、逃げ切るのは無理だと判断した

「うりぼー！先へ行つて！こっちがある程度は食い止める！」

これ以上は逃げる事が出来ない、一番重症の横島君だけでも先に避難させようと思い、立ち止まって必死に応戦したのだが……マリアは間に合わなかった

「こ、コーンッ!!!」

「ぶ、ぶぎゅー！ーッ!!!」

タマモとうりぼーの悲壮な鳴き声に振り返った時。私と蛍ちゃんの視界に飛び込んできたのは、月を背中に降下してきたワイバーンの1頭が意識を失っている横島君をその脚で掴み上げ、空へと飛び去る姿だった……

リポート16 竜の魔女 その5へ続く

## その5

レポート16 竜の魔女 その5

眼魂の使用に加え、勝利すべき拳の全力使用。更に竜の魔女との極限状態での近接戦闘、その3つの要素が加わり、横島は意識を失っていた。そして目を覚ましたとき。見覚えの無い古びた城の一室にいた、広いその部屋を見て数回目を擦った俺は思わず

「え、(なん)どこ?」

俺今どこにいるの?と言うか、美神さんと蛍は!?負けた?負けて捕虜として回収された?とか色んなことを考えていると

「みむう?」

Gジャンのポケットの中にいたチビが顔を出す。チビがいたことにほっとしながら、額に手を伸ばす。バンダナはしっかりと巻かれているし、眼魂もウイスプとブラドール伯爵の2個ちゃんと残っていることに安堵する

(監視状態にある。声に出して喋るな、私が心の中で状況を教える。いいな、声に出すな)

心眼の緊張しきった声に相当危険な状態だと判断し、震えながら頷く

(まず、私達はワイバーンに拉致された。竜の魔女の拠点へと回収されている)

いきなりの言葉に噴出しそうになったのを必死に堪える、どう考えても行き成り詰んでいるようにしか思えなかった。どうせならもう少し気絶していたかったとも思った

(そしてここはワイバーンの寝床だ)

(死ぬじゃねか!それ!!!)

どう考えても肉食だろ!?俺くわれて死ぬぞ?!心眼の言葉に叫ばず、心の中で叫んだ俺を褒めてやりたい

(いや、それに関しては……)

心眼が何かを言おうとした時。開いていた窓から大量のワイバー

ンが部屋の中に飛び込んできて、その真紅の瞳が俺を捉えたその瞬間。地響きを上げながら迫ってくるワイバーンに俺は恐怖を堪える事が出来ず悲鳴をあげるのだった……

横島君を浚った後ワイバーンはあれほど私達を執拗に追い掛けていたのを嘘のように止め、空へと飛び立っていった。直ぐにでも横島君を追いかけたい所だったんだけど、装備も無い、疲労も濃いとマリアに説得され、私達は皆へと帰還していた

「ぴぎゅう……ぴぎゅう……」

「コン……」

ぼろぼろと涙を流すうりぼーと、そんなうりぼーを慰めているタマモ。そして蛍ちゃんは茫然自失と言う表情で目に光が無い、ワイバーンに浚われて横島君が無事とは思えないと思うのは当然だが

「蛍ちゃん。横島君はきつと無事よ」

「……何か、根拠があるんですか？」

重い口調で尋ねてくる蛍ちゃん。そりゃワイバーンはどこからどう見ても肉食だし、浚われて横島君が無事とは思えないから落ち込むのは判るけど……私には無事と言う確信があった

「横島君を浚った後一斉に撤退した。それは回収しろって命令があったからだと思うわ。ドクターカオスは？どう思う」

「同意する、もしもヌルとやらがガープの一件を知っていれば、その価値を知り浚うことも考えられるし、人質としてこっちへ何かを要求することも考えられる」

最後の可能性を口にしなかった事に私は感謝した。態々人間を浚うメリット、そして魔族ならばと考えなくてはならない事……それは

（横島君を洗脳して、こっちへの敵をする事）

横島君には心眼がいるし、シズクの加護や清姫の竜気がある。そういう耐性は私達よりも遥かに上だ

「私は……その、ありえないと思うのですが」



「マリアが口をもごもごさせながら、やっぱり気のせいだと思いますと呟く」

「何？何か思いついたら教えてくれる？」

「私がそうたずねても言いにくそうにしているマリアにドクターカオスが、お前の考えを教えてくださいと促すとマリアは観念したように「その、ワイバーンが横島さんを気に入って巢に連れて帰ったと言うのはどうでしょうか？」

「……何を馬鹿など一瞬思ったが、チビ、うりぼー、モグラちゃん、タモモの事を考えてから」

「「ありえるかもしれない」」

「私と蛍ちゃんの呟きが重なった。いやむしろそっちが正解のような気がしてきた……マリア姫様もそう言えばと呟き」

「ワイバーンは家や森は焼きましたが、人間は殺してはいなかったよ  
うな……」

「そう言われるとそうかもしれない、私と蛍ちゃんを襲っては来ていたが、確かに攻めては少し精彩を掛けていたような気がしなくも無い  
「前者なら人質の交渉、後者なら横島はワイバーンに護られて安全と  
言う所か」

「あのカオス様？横島はそこまでに人外に好かれるのですか？」

「信じられないという顔のマリア姫様、まあ普通はそう思うのが当然  
よね。でも横島君は人外に好かれやすい体質だ、もしかしたらという  
可能性はゼロではない」

「そういう人間と言うのは稀に存在するのですよ、人間でありながら  
魔の領域に近い存在。神話でもあるでしょう？竜を手懐かせたや、獣  
に助けられた英雄は数多く存在します。横島はもしかするとその類  
かもしれませんよ」

「そう笑ったドクターカオスはでも楽観視も出来ないのです、探索用の  
使い魔を飛ばしましょうと笑い。使い魔を3匹飛ばしてくれた、拠点  
としている場所はマリア姫様もドクターカオスも知っている場所だ  
から、こっそりと偵察するくらいは分けないだろう」

「所で美神、君は竜の魔女の正体に予想がついたと聞くが、何者なのだ

？」

マリア姫様に内密な話があると言つて、部屋を出てもらつた後にドクターカオスがそう訪ねて来た

「確証はないんだけどね。多分はつくわよ？」

炎を恐れ、神に裏切られたと叫び、フランスと言う言葉を呟いた。それからその正体を絞り込むのは簡単な話だった

「もう少し先の未来にあわられる聖人「ジャンヌ・ダルク」だと私は思つてる」

イングランド王国との戦争「100年戦争」後期に現れた少女。フランスを取り返し、シャルルを皇帝にした、救国の聖女とまで呼ばれた人物だが、その最後は悲惨としか言いようが無い、貴族達の裏切りに会い、魔女とされ火炙りの刑にされた。それがジャンヌダルクと言う英雄だ

「ふむ、未来の人物か……となると私は推測が出来んが……そのジャンヌダルクは竜を操つたのかね？」

「ううん、そんな逸話は一切無し。争いを拒んだ人物ね」

確か旗持ちで味方の士気を上げたりしていた人物のはず。その伝承の中に当然、竜を操つたと言う物はない

「正義であるはずの英霊が竜の魔女を名乗り、破壊を尽くす……か、本来聖女であるからこそその拒絶反応かもしれない」

本来は善の存在であり、破壊とは程遠い人物。それが何らかの方法で悪になり、破壊を繰り返す。その事に対する拒絶反応が、情緒不安定と言う症状を引き起こしている可能性は十分にある

「でもそれってヌルが英霊を召喚できるってことですか？」

横島君が無事かもしれない、その可能性が出てきて少し元気を取り戻した蛭ちゃんがそう呟く、確かに英霊が存在するのだからそれを召喚した存在はいるだろうが……

「うーん、それだと違和感があるわよね」

「うむ、英霊を召喚できるのなら、ガーゴイルなどを戦力にする価値は無い」

英霊を複数召喚すればそれで済む話だ、製造に時間のかかるゴーレ

ムなどを戦力にする意味は無い

「じゃあジャンヌダルクはどこから?」

竜の魔女の正体は判ったが、新しい謎が生まれた。属性の反転した英霊「ジャンヌ・ダルク」はどこから現れたのかだ……謎が1つ解決すればまた新しい謎が生まれる。本当嫌になるわ

「とりあえず当面の目的は横島の救出になるはず、美神、それに蛍。お前達は休め、私は装備の見直しを行う」

ゴーレムなどよりもワイバーンに対する備えをしつかりしていれば、こんなことにはならなかった。だから今度はワイバーンに備えると言うドクターカオスの言葉にお願いねと呟き、蛍ちゃんとタマモ達を連れて部屋を出る

「美神さん、誰がジャンヌダルクを召喚したんでしょう……まさかガープ」

ありえない可能性ではないが、あれだけの手傷を負って直ぐに活動するとは思えない、考えられるのは

「ノア領主を洗脳したときから、ヌルと関係があつたくらいだと思うけど……情報があまりに無いわ」

情報が無いのに、あれやこれやと考えていても意味が無い。下手に考え込んで、こうだと思ひ込んでしまうことが恐ろしい

「少しでも早く横島君を助ける作戦を実行できるように、今は休みましょう」

「……はい、判ってます」

今私達に出来るのは、少しでも早く横島君を助ける作戦を立案すること。そしてその作戦を実行するための体力と霊力を回復させることなのだから……

(横島君、どうか無事でいて)

無事でいてくれる事を祈るしかない、嫌と言うほど思い知らされた無力感が肩に重く押し掛かってくるのを感じながら、部屋へと足を向けるのだった……



「あんた自分の立場わかってる?」

他人の心配をするよりも自分の心配をするべきだとは思わないの  
だろうか? 私が殺す気ならば、もう死んでいる。それが判らないほど  
に能天気なのだろうか?

「判つてるとは思います、ワイバーンにしろ、貴方にしろ、俺を簡単に  
殺せるのは判ってます」

「そう、じゃあなんで、そこで私を心配できるのかしら? 馬鹿にしてる  
の?」

こつちがいつでも殺せると判っているのに何で私を心配するの?  
と尋ねる、すると男はうーんつと唸りながら

「いや、自分でもよく判らないんですけどね。さつき凄く苦しそうに  
してた……からかな?」

自分が殺されるかもしれないと判っているのに、他人の心配をす  
る。こんな馬鹿な男を私は知らない

「死ぬのが怖くないの?」

「むつちや怖いです。死にたくないから必死に抵抗します、無駄だと  
思っただけでも、最後の瞬間まで絶対に諦めない」

死にたいわけでもない、それなのに自分を殺せる相手に平然と大丈  
夫ですか? と問いかける

「はあ。あんた、名前は?」

完全に毒気を抜かれた。このままここにおいても私の望む光景は見  
ることは出来ないだろうが、部屋に戻ってあのハゲやゲソなんちゃら  
に文句を言われるのもごめんだ。鬱陶しい上にめんどくさい、だから  
瓦礫の上に腰かける

「あんた名前は?」

呆然としている男にもう一度名前を尋ねる

「え? あ、横島」

「邪?」

ふーん。面白い名前ね、少なくとも長い上にめんどくさい、ハゲと  
かゲソなんちゃらよりはかは数倍良い

「死にたくないなら、なんか面白い話をしなさい。気に入ればあんた

を殺さないであげる」

頭の痛みが少し引いてきたし、何よりもこんな馬鹿見たこと無い。ハゲとハゲの仲間とゴーレムとガーゴイルしかいないこの城は退屈な上に窮屈だ、なんか面白い話をしなさいと言うと邪は困ったような表情をしながらも、こんな話はどうですか？と訪ねて来た

「え。えあ、えつとじゃあ……増えるうりぼーの話を」

増えるうり坊？くだらないようなら殺そうと思ったけど、まあまあ面白そうじゃない。私は柱の残骸に腰かけながら、邪の話に耳を傾けるのだった……

横島をワイバーン達が回収してきた翌日の夜。ガープ様への定期報告のとき、私は懸念していた事が現実になったことを伝えた。今まで以上の拒否反応の事だ

『拒否反応は出て当然。元々出ることは想定内です、むしろ出ないほうがおかしい』

元々は完全な善の存在、悪の側面を持たないジャンヌダルクの属性を反転させ、憎悪と殺意を植えつけた、拒否反応が出て当然だと笑うガープ様

「しかし、いい所で意識を失われては」

『そう焦ることも無いヌル、私の写し身が出来。私はその時代に移動してから精神操作をすれば十分に間に合う。それよりも美神令子は補足出来たのか？』

「は、はい！マリア姫とともに籠城していると思われまます。それにつきましては人質を確保したので、自ら乗り込んでくる事が予測されます」

それは素晴らしいとガープ様からお褒めの言葉を頂いた。美神令子、未来では有数の霊能者にして、時間移動能力を所有している可能性が極めて高いとされている

『それで人質と言うのは？確実におびき出せるだけの存在か？』

「そ、それは少しばかり自信がありません」

私も調べたが霊能が高いわけでもない、どこまで言っても普通の凡

人と言う様子の人間だった。人間は仲間意識が強いので、取り返しに来ると言う予想をしたただけだ

「赤い額当てをした、平凡な男です。役に立たないのなら『ヌル！よくやった、その男が最優先ターゲットだ』へっ？」

あんな凡人がガープ様の最優先ターゲット？それほどまでに重要な人物だったのかと思わず混乱した

『横島忠夫を確保しておけば、美神令子は間違いなく現れる。最高の人質だ、私も出来る限り早く其方に合流したい、写し身の準備を急げ』  
「畏まりました」

お前には期待している。その言葉を最後に、ガープ様との通信は途切れた、それを確認してから大きく深呼吸をする。ガープ様と話をする、その緊張感は凄まじい物がある

「ヌル様」

「どうしました？ゲソバルスキー？」

報告に私の部屋に入ってきたゲソバルスキーは竜の魔女が横島と接触したと報告してきた。その報告に眉を顰め、モニターを操作して横島を閉じ込めているワイバーンの巣を確認する

「へー？そんなことがあるのね、お前普通じゃないわ」

「え？そうですか？」

「そうよ、お前絶対変」

モニター越したが、竜の魔女が穏やかに話をしているのを見て、正直驚いた。竜の魔女の精神は安定せず、常に暴走していたのに……もしかするとこれが横島とやらをガープ様が最優先ターゲットにした理由かもしれない

「暫くの間様子見をします、もし部屋の中が騒々しくなれば突入。横島を救出してください、あの男はガープ様への捧げ物ですので」

「了解しました」

敬礼して部屋を出て行くゲソバルスキーから視線をそらし、培養液の中のガープ様の写し身を見上げる。私の持ちうる技術全てをつぎ込んだ、それでもきつとガープ様の力を見るに堪えないほどに低下するだろう……だがこれが今の私の限界だ。ガープ様の配下になり、更

なる技術をなんとしても手に入れてみせる。私はそう意気込み、窓の外に視線を向けた。写し身が来るのは早くて2日後の夜、昨日の今日で横島の奪還作戦を考えるととは思えないが、少しでも長く調整する時間が欲しい。ならば……

「ここは1つブラフを打っておくのでしょうか」

出来るのならば直接ドクターカオスと交渉したい所だが、それも叶わない。一方的な宣言をすることで向こうが慎重になるか、それとも強襲に出るか？それを1度確かめておくべきだと思い、砦があるであろう森の周辺に使い魔を飛ばすのだった……

リポート16 竜の魔女 その6へ続く



## その6

レポート16 竜の魔女 その6

横島がワイバーンに浚われ2日経った時。マリア姫達が籠城している森に向かって一方的な映像通信が行われた

『マリア姫、そしてドクターカオス。私達の人質となった、横島忠夫……だったか？それを無事に帰して欲しければ、マリア姫との交換だ。無論姫とただの一般人価値が違うというのは重々承知している、恐らくこの人質交換は成立しないだろう』

この領地の姫であるマリア姫と、一般人の横島の価値。それは比べるまでも無く異なっていた。高貴な血を持つマリア姫と普通の人間ではその価値は根底から異なっていた、それが判っているからこそヌルはにやりと笑みを浮かべながら

『しかし、人類全体で見ればこの男の価値は計り知れぬだろうなあ？地方の1領主の娘と神魔から必要とされる男。そう考えれば、横島のほうが遥かに価値がある、私としてはこの人質交換を蹴ってもらった方が都合が良い、今より4日後。我が偉大なる神が降臨なされる、そのお方も横島を望んでおられる。ああ、だからこの交渉は蹴ってくれた方が実に都合が良い』

なんせ好きに実験出来るからなと告げたヌルは人間の姿から蛸のような魔族の姿になり

『そうそう竜の魔女とワイバーンが大変横島を気に行っているね、生きていたろうが、さして5体満足だろうか？』

笑いながらそう告げたヌルの姿は溶ける様に消えて行き、再び静寂が周囲を支配するのだった……

砦からもヌルの挑発にも似た宣言は見えていた。横島が5体満足かわからないと聞いて、美神さんに早く救出作戦をと叫んだのだが「落ち着きなさい！相手の一方的な話を信じるんじゃないッ！」

美神さんのその一喝に完全に気圧された。美神さんは私の頭を撫でながら

「横島君が心配なのは判るけど、ここで準備も無しに突入して、全員囚われたら意味が無いわ。まずは落ち着きなさい、良いわね？」

「……っ、はい」

さつきと打って変わって優しい慈愛に満ちた表情で言われ、私は判りましたと返事を返すのがやっとだった……

「さてドクターカオス、タマモ。今の宣言をどう受け取る？」

タマモは九尾の狐。その英知は凄まじい物がある、作戦立案の為にもう手持ちが少なく、稀少な精霊石のペンダントを貸し与えて作戦会議に参加してもらおう事にした

「本当に人質交渉をするつもりなら一方的に要求を伝えるなんて真似はしないでしょう？こつちを焦られて突入させるって目的じゃないかって思うわ」

椅子に深く腰掛け。貧乏揺すりをしながら告げるタマモ。かなり動揺しているのが判るが、それでも冷静であろうとしているその姿を見て、深く深呼吸して気持ちを落ち着ける

「私も同意する。一方的な宣言と挑発、それは私達に準備を整わせたくないと言うのが丸わかりだ、それに横島もまず無事と見て間違いない」

つまり今回のあの宣言は完全なブラフだとドクターカオスは断言した。美神さんも同じ考えなのか、殆ど私と同じ考えねと呟いてから「竜の魔女……面倒だからジャンヌって呼称するわね」

可能性は高いけど、違うと信じたいけどねと言ってから、美神さんは自分の考えを話し始めた

「ジャンヌは向こうの陣営だけど、明らかにガーゴイルとかを指揮しているあのヌルとか言う、魔族とは協力体制に無いわ」

ワイバーンはゴーレムの助けをしないし、ゴーレムもワイバーンの助けはしない。陣営こそ同じだが、対立関係に近いと考えていいと思う

「つまり横島さんはジャンヌとワイバーンに護られていると言うこと

ですか？」

「敵に護られているって言うのはおかしい話だけどね」

敵であることは間違いない。だから安全と確信する訳には行かないが……ジャンヌとワイバーンが飽きるまでは横島の安全は確保されていると見て良いかも知れない

「それに横島の姿を見せなかった。それも意味があると思うわよ？姿を見せると元気なのがバレちゃうから姿を見せなかったって可能性はどう？」

タマモの言う通りかもしれない。疲弊している様子も無く、負傷もしておらず、ぴんぴんしていれば横島が安全な場所にいると証明するような物だ。だからこそその一方的な宣告と、横島の姿を見せなかったのだろう。落ち着いてくると横島がまだ無事なのだと判り、焦っていた気持ちが悪く落ちてきたのが判る

「3日後に神が現れると言っていたが、それもブラフかもしれない。とは言え、今これから救出作戦と言うのまた無理な話だ」

ゴーレムとガーゴイル、更にワイバーンが大量に巢食っている城に突入するのは今の装備では無理がある

「幸い城の見取り図は獲得している、使い魔が消滅したこの区画。これが恐らく、ワイバーンの住処で、横島もここにいる」

城の見取り図に×を打つドクターカオス。その場所は城の2階の大広間、かなりの部屋の面積を持つ場所で、大きな窓もある。確かにワイバーンの住処としてはここが最も最適だろう

「ただその場合、領主もまた人質になっている、救出作戦に出るのなら横島と領主の同時救出は必要不可欠だが……領主の居場所がわからないこと、それと見覚えの無い地下通路が作られているのが問題だな」

装備の問題に、人質の居場所がわからない。戦力さえも足りない……この中で救出作戦はかなりの難易度を誇るだろう。もう少し霊力の扱える人員が要れば話は変わるが、この時代でそれを期待するのは酷と言う物だ

「ふんぎゅう!!」

うりぼーが自分も協力するよ！と気合満々の表情で鳴いている。うりぼーの突進力と巨大化した体当たりはかなりの威力を誇るが、それは城の内部では使えないという欠点もある、更に言えばうりぼーの破壊力を生かすなら、十分な加速を生かす必要がある。そうなると相手にバレてしまい、強襲所ではない

「やる気があるのはいいいけど、あんたの出番はもつと後。判るわね？」  
「……ぶぎ」

「よしよし、大丈夫よ。横島は無事だからね」

「ぶぎゆう……」

タマモがうりぼーを抱き抱えて、大丈夫大丈夫と笑う。しかし安全と思い込み、時間を掛ける訳にもいかない

「出来るだけ早く突入したいと思ってるわ。4日後つてのが真実は思えないし、もしかすると明日かもしれないし、明後日かもしれない。向こうの話を馬鹿正直に信じるわけには行かないでしょ？」

「それは判ってる。明日、明日1日。私にくれ、その間に作りかけの武器を仕上げる、そしてもう1つの準備を行う。マリア、お前には大変な役割を押し付ける事になるが、大丈夫か？」

マリアさんに？私と美神さんの視線が集まり、マリアさん自身も困惑した表情を浮かべる中。ドクターカオスは自信満々に笑いながら

「我に秘策アリつと言った所だ。詳しくは明日武器を仕上げてから説明する、今は少しでも体を休めてくれ、突入作戦は時間との勝負でもあるが、奇襲も必要になる、体力と靈力を万全にしておいてくれ」

強い口調で言われ、私も美神さんも反論出来る訳もなく、私達自身も身体を休める必要があると判っていたので、作戦会議である程度の方角性が決まってから、私も美神さんも身体を休める為に部屋を後にするのだった……

「待ちなさい、ヌル」

ワイバーンの巣に向かう途中。ハゲを見つけたので呼び止める。

私に呼び止められ、困惑した表情をしているヌル

「私の名前って何？」

「はい？もう1度言ってくれますか？」

意味が判らないと言う表情をしているヌルを睨みつけながら

「私の名前は何って聞いているのよ」

邪と何度か話をしているのだが、竜の魔女って名前なんですか？つと言われ、そう言えば竜の魔女と言う名前はおかしいと疑問を抱いたのだ

「何故名前に興味を？」

「何？名前に興味を持ったなら悪いって言うの？」

不機嫌そうなハゲを睨みつけるのではなく、その首に手を伸ばさそうとすると、ハゲは慌てて後ずさり

「判りました。判りましたよ、教ればいいのでしょうか。貴女の名前はジャンヌ、ジャンヌですよ」

ハゲから教えられた名前がストーンと胸のどこかに嵌った気がした。ジャンヌ、ジャンヌ……そう、そうだ。何で忘れていたんだ、私の名前はジャンヌだ……

「ジャンヌ、ジャンヌ……ふふふ、そう、そうよ。私の名前はジャンヌよ。ふふ、ヌル。たまには役立つじゃない、ありがと」

もうヌルには何の用もない、自分の名前を思い出した。それだけでヌルの役割はもう終わりだ、私はヌルに背を向けて、2階へ続く階段へと足を向けた……

「安定してきたと喜ぶ訳にはいきませぬね」

残されたヌルはジャンヌの凄まじい殺気を込められた視線を思い出し震えながら呟いた。頭が痛いと思えることが無くなり、精神的に安定してきた。それ自体は喜ぶべきなのだが、人質の横島はジャンヌとワイバーンに護られ、手を出すことが出来ない。可能ならば何か仕掛けを施したいと思っていたヌルは思い通りに行かない事に眉を歪めながらも。大丈夫でしようと呟いた

「仮に横島に気を許したとしても、私達に反逆するまではいかないでしょう」

あの本質は悪である。ゆえに横島に気を許しているのは、何かの気まぐれ。だから不安に思うことは無い、そう判断し、ヌルは自らの研

究室に向かつて歩き出した。だがこのときヌルは気付くべきだったのだ、先日まで光のない眼をしていたジャンヌにすっかりとした意思の光が宿り始めていることに……

「うーし、良い子だ。よしよし」

「グルルル……」

ワイバーンの住処に向かうと、邪は能天気にながらワイバーンの頭を撫でていた。最初は何をしてるとワイバーンに怒りを抱いた物だが、あの能天気な男を見ると、毒気も怒気も完全に抜かれてしまうのだ。私でもそうなのだから、ワイバーンだって同じだろう

「ギルルル」

「え？卵？俺にくれるのか？」

「ギュー」

1頭のワイバーンから卵を貰って困惑しながらもありがとうと受け取った邪はそれを大事そうに抱き抱える

「人間の体温で孵化できると思えますか？」

「あ、あははは……いやあ、どうでしょう？」

私を見て乾いた笑い声を上げる邪の隣に腰掛ける。ワイバーン達が木や草を集めてきた寝床に卵を置いて、こっちに向き直る邪

「ジャンヌ」

「はい？」

「だからジャンヌ!!それが私の名前!!あんたが聞いたんでしよう！」

昨日話をしている時に自分が聞いたんでしよう!と怒鳴ると邪はハッとした表情になり

「ジャンヌさんですか、竜の魔女って呼びにくかったんですよ」

「ふんっ、気安く呼ぶんじゃないわよ」

邪を睨みつけるとすいませんと謝る。その姿に溜飲が下がり、まあ良いわと呟く。自室にいたら、ゴーレムが五月蠅いし、うろちよろしてもハゲとゲソバルもうるさい。そうなると必然的に邪の所に暇つぶしに来ることになるのだ

「だからハゲとゲソバルが鬱陶しいわけよ。判る？」

「ジャンヌさんも大変ですね、でもなんでそんなに嫌いなら指示に

従っているんですか？」

邪が普通に訪ねて来た事。それは考えても見なかったことだった、なんで私はこんなにもむかつくと思っっているのに、反抗しようと思わなかったのだろうか？

「そうね、あんまり鬱陶しいなら……」

ハゲとゲソバルと一緒にいてもつまらない。それに対して邪は面白い、面白い話をしてくれるし、私を気遣ってくれる。命令口調のハゲやゲソバルと一緒にいるよりもずっと楽しいだろう。それに邪と話すようになってから、あの頭がおかしくなりそうな頭痛の頻度も減った。今ではハゲやゲソバルに何かやられていたのではないか？と思うようになってきていた

「あんたを逃がしてもいいかも知れないわね」

人間は憎いと言う気持ちはある。だがなんで憎いのかそれが判らないのだ、怒る理由も無いのに、憎む理由も無いのに人間が憎い、殺したいと思う。だが邪は不思議と殺そうと思えない。なんと言うか、憎めない奴つて感じなのだ。ワイバーンも懐いているし、邪と話すようになってから頭痛も無い。そう思えば、邪を殺せば、またあの頭痛が襲ってくるのでは？と言う恐怖もあり、邪を殺すのも、殺されるのも駄目だと思うようになってきた

「え!?逃がしてくれるんですか!?!」

逃がしてあげても良いと言う私の言葉に顔を上げる邪に、バーカ、冗談よと言うと邪は頭を抱えて

「本当に逃がしてくれると思っただじゃないですか、こんなの詐欺だあ」  
「ごろごろと転げ回るその姿に私はこの城に居る様になってから、初めて心の底から笑ったような気がするのだった……」

夜だからと言ってワイバーンの住処を出て行ったジャンヌさんを見送り、俺は深く溜息を吐いた

「グルウ？」

「ああ、心配してくれるのか、ありがとう」

「みむうー」

僕も心配してるよ！と言わんばかりに顔を出すチビの頭を撫でる、ワイバーンに囲まれているのもなれたな。大人しいし、怖くないというのも大きいが、案外人懐っこい。尻尾をぶんぶん振る姿は犬を連想させる

【横島。いい調子だ、良いか？あのジャンヌは精神が不安定だ、疑問を抱かせろ。ヌルやゲソバルとやらに対する違和感を抱かせろ、そうすればジャンヌは敵対者とはなりえない】

ストックホルム症候群と言うんだ、と教えてくれた心眼の言葉にそうなってくれると良いなと呟く、俺がジャンヌさんに抱いたのはなんてアンバランスな人なんだという感想だった。俺よりも少し年上そうなのだが、その精神が幼いと言っても言うのか、俺に清姫ちゃんやアリスちゃんを連想させた。最初は恐怖ばかりを感じていたのだが、今は違う。彼女と話をすればするほど、その幼さを強く感じさせたのだ  
「美神さんや蛭に連絡する手段があればいいんだけどな」

チビやトビデンワを使うと言う選択もあるが、ワイバーンは何故か俺は襲わないが、チビには反応を示す、だから無事だという事を伝えることも出来ない。ただ美神さんや蛭が俺の救出に動き出す前に、出来れば脱出もしくは、ジャンヌさんを仲間にしたかと思っっている。最初は俺の話を聞くだけだったのだが、今はヌルと言う人物とゲソバルスキーとか言う奴に対する不満や、自分の名前に対する疑問と言うの抱き始めてくれた……俺がここに来て、2回目の夜、2日。その殆どを話す時間に当てた。2日で信頼関係が作れるとは思っていないのだが……生気の無い人形のような目をしていたジャンヌさんの目が生気が宿るのを見て、良かったと思うのは嘘ではない。更に言えば、ジャンヌさんにあんな仕打ちをしたヌルと言う奴も許せないという気持ちもある

「心眼。ジャンヌさんって何なんだろうな」

【恐らく、記憶を奪われ、思考能力を失っていたんだろうな】

人間が憎いという理由はあるのか？と尋ねたら、何で？私は憎いと思っっているのか？と言う返答があり、それに絶句し。次に竜の魔女っ



て他にも名前はあるんですか？と尋ねたら、名前？私の……名前？……え、私は……誰？と心底混乱した表情をした。そして何よりも俺は驚かせたのが、その頭痛だ。炎を撒き散らし、剣と旗を振り回し、痛い、痛いと言き叫び、暴れまわるその姿に俺は殺されるかもしれないという恐怖よりも、可哀想だと思ったのだ。そして怖いながらに對話を繰り返す、落ち着いて来てくれて本当に良かったときえ思っている。だが俺が今怖いと思っっているのは、ジャンヌさんの記憶を奪い、思考能力を奪った相手の事だ。心眼が言うにはジャンヌさんも英霊ではある、だが本来の属性から反転し、半場暴走状態にあるという。英霊をここまでおかしく出来る相手、そう考えるとガープの仲間がこの城の内部に居るのでは？と思ってしまう

「なんとか、美神さん達が来る前に説得出来れば良いな」

【出来るさ、お前ならな】

ジャンヌさんはそんなに悪い人じゃない、きっと分かり合うことが出来る。美神さんや虫には楽観的と怒られるかもしれないが、俺はそう信じたかった。俺達を殺そうとした竜の魔女じゃない、ジャンヌさんは良い人だ、多少口は悪いかもしれないけれど……悪い人じゃない。俺はそう信じてる、神宮寺さんみたいに本当はきつと優しい人だ  
と思う

「みむう？」

「チビもジャンヌさんは悪くないと思うよな？」

「みむう！」

前足をピコピコ振るチビにそうだよなーと笑いかけながら、ワイバーンが用意してくれた寝床に寝転がって、何故か貰ったワイバーンの卵を抱き抱え目を閉じるのだった……

そしてヌルの脅迫から、1日過ぎた昼。この時代での最大の戦いの幕が開けられる事になるのだった……

## その7

レポート16 竜の魔女 その7

「ふむ、そうか……愚かだなヌル。やはりお前は研究者だ」

ヌルからの定期報告を聞いて、少しばかり落胆しながらヌルの評価を改める。優秀だが、人間を少し甘く見ていると

『わ、私は何か間違えたのでしょうか!?!』

横島を傷つけるような発言と一方的な宣告、そして私の写し身が完成するまで2日掛かることを考え、4日と言う猶予を与えた

「間違えたとは言わない、人間と言うのを計算していないと言っているんだ」

ゴーレムやガーゴイルで護りを固めてあるヌルの拠点。その防衛能力は中世の時代を考えれば最高レベルだ、更にワイバーンまでいるので、大群で動けば察知でき防衛を固める事が出来る。相手を慎重に動かす為の4日という嘘の情報を流す、人間を見下している魔族にしては良く考えているといえるが、それでもまだ足りない。美神令子という存在と横島忠夫の価値をあまりに甘く見ている

(さてどうするか……)

若き日のドクターカオスが居るとなれば、向こうの技術力はヌルよりも上。そして人質交換を匂わせている所から……恐らく人質としてヌルが要求したと言うマリア姫とやらの偽者を用意して、そこから切り崩しに来るだろう

(偽者のマリア姫を連れ、城へ突入。陽動を兼ねての行動で、城の中で騒動を起こし、更に外から別働隊……つと言った所か)

美神令子は電撃戦を得意としている。更には直感にも長けている……恐らく想像にもしない、作戦で仕掛けてくるだろう。とは言え、考えられる向こうの戦術をヌルに伝えては意味が無い、ヌルの対応力を見るためにも、ここはあえて何も言うまい。ヌルの対応力を確かめる試験にはなるだろう

「まあ良い、人間に対する対処は任せる。私の意識が写し身に宿る前

に破壊されるようなくだらない結末にはしてくれないよ?」

『はは!! 万全の状態でお迎え致します! まずは竜の魔女の精神操作を行い、再び記憶と意思の剥奪を行い、人形に戻します』

記憶と意思の剥奪……横島と共に居る時間が多いと報告にあったが、私の精神操作を外から解除するか……

(やはり面白い男だ)

義経の事もある、やはり横島忠夫は要警戒だな。その能力にはまだ未知数なところがある、私直々に霊基を操作し、属性を反転させ、記憶と意思を剥奪してから、ヌルの場所に送り込んだが拒絶反応ではなく、記憶と意思を取り戻すとは……これは予想外だが、横島の能力の未知数さを私に教えてくれていた

『それではガープ様。朗報を座してお待ちください』

深く頭を下げたヌルの姿を最後に通信は途絶えた。私は椅子に深く背中を預けながら

「万全か……ふふふ。恐らくありえまい……」

恐らくヌルは窮地に追い込まれる。そしてその時に私を頼り自分で何もしないのか、それとも自分の手持ちの兵力で撃退して見せるのか……それを持ってヌルを本当に配下として迎え入れるか。それを見極めてみるとするか……正直私の興味は既にヌルよりも美神達がどのような戦術を持ってヌルに戦いに挑むのか、そして横島の能力の未知数さ。その2つに向けられているのだった……

その日は朝から妙な緊張感を感じていた、ピリピリと肌に刺激が来る。殺気とかそういうのじゃない、何か起こるのではないかと本能的に感じる何か……を感じていた。そしてその予感朝と夜の2回だけ、与えられる食事の後。確信へと変わった

「えつとどうかしましたか?」

普段は昼前から夜まで話をしているジャンヌさんが、朝食の後直ぐに現れたのだ。しかもめっちゃくちや不機嫌そうな表情で……しかも何かを喋るわけじゃない。ずっと俺の隣に座り、不機嫌そうに眉を顰

めるだけ……このあまりにピリピリした空気に耐え切れず、どうかしましたか?と尋ねる。するとジャンヌさんはやつと口を開いた

「自分が馬鹿みたいって思ったのよ」

何が憎いのかも判らないのに誰かを憎んで、復讐する相手も知らないのに復讐って口にした自分が馬鹿みたいと乾いた笑い声を上げる  
「どうしたんですか?」

この様子は尋常ではない。なにかあったのでは?と思い尋ねる

「どうしたも何も無いのよ!!私は!!ヌルと名前も知らないくそつたれの魔族に記憶も!感情も奪われて!!人形に戻すつてさ!!」

「ぐっ……うぐっ……」

激情に囚われたのか、ジャンヌさんが俺の首を片手で掴み締め上げながら持ち上げる。その圧倒的な腕力と憎悪に満ちた瞳に全身に震えが走る

「どうせあんたも私を裏切るんでしよう!見捨てるんでしよう!!私に味方なんかいないのよツ!!!」

「お……俺は……裏切……らな……い」

ここで彼女を見捨ててしまえば、彼女は本当に魔女になってしまおう。ジャンヌから真の竜の魔女になってしまう……

(横島!私が!)

心眼が攻撃すると叫ぶが、それを心の中で駄目だと叫ぶ。殺そうと思えば、首をへし折り、もう俺を殺せている。彼女自身だってまだ揺らいでいるんだ……ここで攻撃してしまえば、2度と俺の言葉は届かない

「口ではなんとも言えるわよ。こうして殺されかけて、死にたくないから口からでまかせを言っているんでしよう?」

「ち……がうつ!!!」

口からでまかせなんかじゃないっ!息が出来ないなか、出せるだけの大声でそう叫ぶ

「うつーげほっ!!ごほ!!!」

首から手を放され、尻もちをつく、4つ這いになって咳き込みながら、必死に息を吸う

「絶対私を裏切らないって言えるの？ま、まあ私は1人だろうが、寂しくなんかありませんけどね！」

目がむっっちゃ泳いでるな。変なところで意地っ張りなんだな……そう思うと、なんだか微笑ましく思えた

「俺は……裏切らない、何があつてもジャンヌさんの味方だ」

「……そう、じゃあ裏切ったら、私の憎悪の炎で2人で死にましよう。道ずれよ、それでも私の手を取れると？味方だと言えますか？」

死にたくはないし、蛍や、美神さんの事もある。それでも、俺は目の前で悲しんでいる人を、それもこんなとびつきり美女を見捨てたくは無い

「みむう？」

Gジャンのポケットから顔を出したチビに大丈夫と笑いながら、ジャンヌさんの手を掴んで

「俺はジャンヌさんの手を掴める。俺は……何があつても、貴方の味方だ。俺は裏切らない」

そもそも俺に裏切るって言う選択肢が無いんだ。短い間だったけど、過ごしてジャンヌさんが優しい人だって判ったから、この人はきつと、あれだ。神宮寺さんと同じだ、とても優しい人なんだけど、その言動で勘違いされるんだと思った

「私はこれからヌルをぶっ飛ばしに行くわよ？それでも着いて来てくれる？」

「丁度いいな、人を人形とか言う奴は俺も大嫌いだ。ぶん殴りてえ」

泣いて笑って、生きている人を人形なんていう資格は誰にも無い。そういう奴は大嫌いだ、仮に相手が魔族だったとしてもそれは変ら無い

「じゃあ行きましようか。もう1回言うけど、裏切ったら許さない」

「大丈夫、俺は裏切らない」

ジャンヌさんが突き出した拳に右拳を合わせ、栄光の手を両手に作り出す

「さあ！ワイバーン達よ!!!暴れなさい!!敵はゴーレム、ガーゴイル!そしてくそ鬱陶しいゲソバルスキー達!!これから反逆の始まりよッ

「!!!!」  
「!!!!」  
「!!!!」  
「!!!!」

ジャンヌさんの振り上げた旗に呼応するように雄叫びを上げ、飛び立つワイバーン達。その先陣を切るのは俺に卵を差し出した銀色のワイバーンだ

「宣戦布告ーどでかいの行くわよ!!!」「これは憎悪によつて磨かれた我が魂の咆哮……いっ！吼え立てよ、我が憤怒ッ（ラ・グロンドメント・デュ・ヘイン）ッ!!!」

「ちよつと待ってええええええ!!!」

剣を大広間の床に付き立てた瞬間。凄まじい黒炎が大広間の床を焼き尽くす、それから少し遅れて感じた浮遊感に絶叫しながら、俺は1階へと落ちていくのだった……

遠くにマリア姫様の居城が見えた、私は溜息を吐きながら振り返り「やっぱり引き返してはくれませんか?」

マリアにマリア姫様の格好をしてもらい、突入する。それが当初の計画だったのだが、父を助け出すのは私の役目だと言ってマリア姫様も私達に同行している。無理と言うのは判っているが、今からでも引き返してくれないだろうか

「すまない、マリア姫は言い出したら聞かないんだ」

申し訳無さそうなドクターカオス。でもここまで来たら仕方ない、前に進むしかないのだから。マリアが自分のモチーフになった人物を見て複雑そうな顔をしながら

「蛍さんとマリア姫、そしてドクターカオスが光学迷彩のマントで姿を隠し、城内へ突入。領主の搜索および、ゴーレム、ガーゴイルプラントの破壊で良いですね?」

突入前の打ち合わせとして尋ねてくるマリアに頷く、私が元の時代に戻る為にマリア姫様を手土産にヌルと謁見する。だがマリア姫様ではなく、マリアなので光学マントで隠している装備で開幕ブツパシ、ゴーレムとガーゴイルを操作している機械をぶつ壊す。そして

ゴーレムとガーゴイルが混乱している間に横島君を救出する。それと同時に作業でマリア姫様、蛍ちゃん、ドクターカオスの3人のペアで製造プラントと破壊と領主の救出からの速やかな脱出。正直どれだけ装備を整えても最上級神魔相手に勝てるわけなど無いので、ドクターカオスが準備してくれたのは徹底的に生存率を高める防御の霊具の数々だ。この時代は神魔が幅を利かせているので、ガープクラスが暴れていたら神魔も動き出す。ノア領主の時はブラドローの存在があるので神魔は動かなかつたが、今回はそうではないので恐らく、神魔の援軍が来る可能性に賭けている

「私とうりぼーは城の外でゴーレムやガーゴイルと戦う。合図があればうりぼーを巨大化させて、城へ突撃でいいのね?」

これはマリア姫様は難色を示したが、ゴーレムやガーゴイルの製造プラントになっていた事を考えると、あの周辺は既に魔力で汚染されている。そのまま運用するには、厳しい立地になるだろう

「やはり城は破壊するのか?」

「そうなりますね。ですが、ご安心ください!あの城よりも防衛に長けた城を作り上げましょう」

ドクターカオスの言葉によるしくお願いします。と返事を返すマリア姫様、それじゃあ作戦開始……

ドガアアアアンンンツ!!!

「!!何事?!」

「城があツ!」

作戦実行される前に吹き飛んだ城の一部に私達の驚愕の声が重なり、城の壁が吹き飛んだのを見て絶叫するマリア姫様……

「み、美神さん。ワイバーンがゴーレムとガーゴイルを襲ってます」

信じられないという様子で呟く蛍ちゃん。可能性としては考えていた、だけどありえないと思っていたんだけど

「あいつ、やったのね!」

ワイバーンに浚われたはずの横島君。それがワイバーンを味方に……いや、違う。ジャンヌを味方につけて、城の内部から破壊しているのだ

「作戦変更!!タマモ、うりぼーに分裂するように頼んで!」

向こうでも暴れているのなら、態々ヌルの所に直接向かってから考える必要は無い。この騒動を生かして、一気に制圧まで持ち込んだ方が良い

「うりぼー、増えて大きく。良い?6体よ」

「「「「ぶぎゆうううう」」」」

タマモの指示を聞いて、気合の籠もった声で巨大化するうりぼー。うりぼーの突進力で一気に横島君と合流する、これだけパニックになつていれば人質として領主を連れ出す余裕も無いだろう。人間にいいようにやられている、それが魔族のプライドを損ねる。まず鎮圧する方向に動くはず、私はそう判断し、巨大化したうりぼーは私達をその背中に乗せると、信じられない加速で城の方へ走り出すのだつた……

横島がジャンヌかワイバーンを味方にして暴れている。それによつて本来の計画は大幅に狂つたのだが……

「「「ギガアアアアアッ!!!」」」

「?!?!」

城の外でも見たが、城の中でもワイバーンはガーゴイルとゴーレムに襲い掛かり、その鋭い爪と牙でゴーレムとガーゴイルを粉砕している

「横島の特異性は聞いていたが、まさかここまでとは……恐ろしい才能だな」

「横島さんはとても凄い方です。人外にとっても好かれる人ですよ」

驚いているドクターカオスにマリアさんがそう補足する。実際横島は凄いと思うのだが、私は妙に不安だった。ワイバーンはジャンヌ・ダルクの反転存在にしたがつているわけで……

(いやいや、無い、無いよね……?)

うん、無い無い、幾ら横島でもそこまでは……無いよね?と言うか、そうならないうでくださいと心から祈つた



「ぶぎゆうー！」

「うりぼーが横島の匂い見つけたって！」

赤いバンダナを首に巻いたリーダーのうりぼーが力強く鳴く。領主と横島、その2人を見つける必要がある、先に横島と合流して、そこから横島のダウジングで見つけて貰ったほうが良い、だけど一応美神さんに指示を仰ぐ

「どうしますか？先に横島と合流しますか」

城の中はとんでもない騒ぎになっている。時間をかければかけるほど合流するのは難しくなる、今は大丈夫だが、そのうち炎が上がりれば合流する難易度は跳ね上がる。自分で身を護れる横島に対して、洗脳されている領主の方が優先度は高い。

「……マリア姫様。悪いですけど、先に横島君と合流します」

「……ちなみに理由はあるのですか？」

自分の父を見捨てるに近い選択をした美神さんにマリア姫様が納得していない、と言う表情で尋ねる

「横島君は探知に特化しています。先に合流すれば領主様を発見出来る率が上がります」

この広い城の中でどこにいるのか判らない相手を探すのは骨が折れる。今は城の中で混乱が起きているから、行動が楽になっている。だがこの騒動が落ち着けば、移動は愚か搜索も難しくなる

「マリア姫。領主を生かしておかなければヌルは領主を殺した犯人となります。身の安全は確保出来ていると思います」

「……カオス様……わかりました。では先に横島と合流しましょう」

ドクターカオスの進言でようやく納得してくれたのか、マリア姫様が頷く

「タマモ、横島君の所に案内して」

「OK。うりぼー、横島の所に案内して」

びぐうつと鳴いて、城の通路を走るうりぼー。今までよりもかなり早い

「て、敵!?!」びぐうつ！

中身がない鎧に何度も遭遇するが、うりぼーが体当たりやビームで

吹き飛ばし。どんどん加速していく

「私は今猪突猛進の意味を知った気がします」

「……私も」

目的地に向かって脇目も振らず猛突進。これぞ、正に猪突猛進。そんなくでもない事を考える余裕がある事に気付き、これも横島の陽動のおかげかと思っっているとうりぼーが扉に体当たりして、ある部屋に突撃していく

「ちよっ!? うりぼー!?」

背中の上のタマモが慌てて、人間の姿から子狐へと変り。粉碎した扉の破片を潜り抜ける。少し遅れて部屋の中に入った私が見たのは「ったく、邪。こいつ眼逝っちゃってるわよ、魔族に洗脳されてるんじゃないの?」

「違っって!? ジャンヌさんがビンタするから!!」「ぴぐうー!」ふぐおうっ!?

意識のない壮年の男性の服を掴んで持ち上げているジャンヌの姿と、うりぼーの突撃でくの字に吹き飛ぶ横島の姿だった……

「お父様? お父様?」

「あー……あー?」

マリア姫様が領主に話しかけているのを見ながら、腰を抑えてうごごおつと呻いている横島に近寄ろうとするのだが

「……」

腕を組んだジャンヌが不機嫌そうに私と横島の間割り込む

「……」

お互いの顔を睨みつける。なんであれだけ殺す、殺す言ってた相手と仲良くなってるのよ……

「邪。あんたの味方たわよ?」

「うおおおっ……ちよっ、ちよつと待って……こ、腰があ……」

うりぼーの突進が効いているのか呻いている横島にタマモが擦り寄り、腰の辺りを舐める。暫くすると横島は身体を起こし

「美神さん、蛭。カオスのじーさん、マリア。無事だったんだな」

「「それはこっちの台詞」」」

私達が無事だったと喜ぶ横島にこっちの台詞だと私達の台詞が重なる。危険度で言えば横島の方が上だったんだ、こっちこそ無事で良かった

「それで、横島君。竜の魔女は……」その名前は嫌い、私はジャンヌよ」美神さんの言葉を遮り、竜の魔女はジャンヌと名乗り、横島のほうを向いて

「邪。あんたの仲間が来たけど、約束は破らないでしょうね？」

「破るわけ無いだろ、俺はジャンヌさんの味方だ。絶対裏切らん」

横島の言葉を聞いて、にやあつと笑ったジャンヌは横島の隣に座る。そ、そこはあ……私の場所……と言うか。なんでそんな約束をしてるの!?

「とりあえず、横島君。どういうことか説明して頂戴」

美神さんが疲れたように溜息を吐きながら。何があつたのか？説明してくれと言うと横島は、時間も無いと言う事で簡潔に説明してくれた。ヌルとヌルに指示を出している魔族によって記憶を意思を剥奪され、憎悪と殺意だけを植えつけられ、人形だからと言われたジャンヌに味方をする約束したと、そのおかげで閉じ込められた場所から脱出できたし、領主も確保できた……

(私と似てる……)

正確には私ではない、ルシオラだが、ジャンヌとルシオラの存在は良く似ていた。そう思うと邪険にもしくい

「OK。じゃあ貴女は味方って考えて良いのね？」

「べつつに？私は貴女達がどうなるうが知ったこっちゃんないですけどね。まあ、邪は私の味方だから助けますけど？」

挑発するような口調にイラつとする。深呼吸をして、落ち着け、落ち着けと心の中で繰り返し呟く。今この状況で強い味方が出来た事を喜ぶべきなんだ。揉めている場合じゃない

「敵の敵は味方って思う事にするわ、ドクターカオス。領主の方は？」  
「駄目だな。深いレベルで精神操作を受けている、1度この場所を出るべきだ」

戦闘力の無いマリア姫様と領主を連れてヌルと戦う事はできない。

美神さんも私と同じ決断をしたのか

「タマモ、それとマリア。2人でマリア姫様と領主様を城から脱出させて、城内って事を考えると大人数は範囲攻撃を誘発させるから」

範囲攻撃をされては護るのに霊力を消耗してしまい、ヌルを倒しきれない。だからここはマリア姫様と領主様を生かす為に分かれて行動するわと告げる

「それは……いえ、その通りですね」

マリアの装備はドクターカオスが調整してくれたが、それでも生身に近い有機ボディに対応する装備は用意出来なかった。現代の戦闘力と比べれば半分程度しかないのだ。ここはマリア姫様と領主様の護衛に回って貰った方が良い

「私は幻術で相手の視界を奪うって事ね。魔族には幻術が効かないから、ゴーレムとかガーゴイルの」

「そういうこと、お願い出来る?」

お願い出来るも何も、それしか無いじゃないとタマモは小さく笑う。尻尾が完全に戻ったタマモなら、魔族でも幻術を仕掛ける事が出来るが、今のタマモでは魔族の抵抗力を貫く事が出来ない。ヌル相手では完全に力不足になるのだ、タマモもそれが判っているから納得し、うりぼーの分身体と共にマリア姫様と領主様を連れて部屋を出て行く。この時代の人間が死ねば、歴史が変る危険性が高い。だからこの選択は間違いではない

「ドクターカオスは人造魔族の製造プラントの破壊出来るわよね?」

「出来るも何も、やるしかあるまい」

製造プラントを破壊しなければ、無限にゴーレムとガーゴイルは襲ってくる。だからそれを破壊する事は最優先課題

「私は先に行く、大暴れして陽動を頼むぞ」

カオスがマントを翻し、暗い通路を駆けていく。その姿はハッキリと見えていたのにいつの間にか見えなくなる、迷彩装備をしていたようだ

「ジャンヌさん、また一発ドカンとやってくれるか?」

「むかついてるからやりたい所だけど……ちよつと時間を掛けすぎた

みたいね」

ジャンヌの言葉を尋ね返すよりも早く。危険を感じ、大きく飛びのく、その瞬間天井が吹き飛び

「よくも好き勝手やってくれましたね……ッ!!」

額に青筋を浮かべたヌルが眼を血走らせ、私達の前に現れたのだつた……

失態だ、失態だ、失態だ!!! ガープ様を迎える準備をしている時に、突如城の中から爆発が起こり、人間達の強襲が行われた。人間が襲撃してくる事は計算していた。だが

「なるほど、なるほど、人形が持ち主に逆らうと……?」

竜の魔女が裏切り、横島に組するとは思っても見なかった。竜の魔女の安定度が上がると思っていたのに、それがこつちを裏切る切っ掛けになるとは思っても見なかった

「人形? はっ! 私は生きてるのよ! 自分の記憶も意思も剥奪されるって言われて、誰がはいそうですかかって言うもんですか!」

ちっ……横島が不安定な霊基を安定させる効果を持っていると思っていたが、まさか自我を芽生えさせるとは……人間を甘く見るなと言われてましたが……こんなのを予想出来る訳が無い

「そうですか、そうですか……良いでしょう。貴女は人形ではなく人間、認めましょう。では叩きのめし、再び精神を操作して差し上げますよ。勿論、美神令子、横島忠夫。貴方達もね!!!」

雑兵では勝てない。そもそも破壊に特化しているジャンヌが向こうについた段階で、ゲソバルスキーもゴーレムもガーゴイルも役に立たない

「貴女達に教えてあげますよ、魔族の魔法使いの実力と言う奴をねえッ!!!」

ここまで万全に計画を進めてきたというのに、それをこんな、こんなくならない事で妨害されるなんて……ッ!! これ以上の失態は許されない! 私は魔杖を取り出すと同時に、魔法を詠唱するための時間稼ぎに雑魚ソルジャーを召喚し、裏切った竜の魔女。そして美神令子た

ちを睨みつけるのだった……  
リポート16 竜の魔女 その8へ続く

## その8

レポート16 竜の魔女 その8

額に青筋を浮かべたヌル。その表情は憤怒に染まっているのだが、それなのにヌルの戦術は冷静でそして対処を間違えば一瞬で全滅に追い込まれるほどに緻密に組み立てられた物だった……

(学者か研究者って風貌だけど……強いッ！)

隊列を組んで襲ってくるがらんだの鎧の剣を神通棍で受け止め、鎧に蹴りを入れて距離を取る

「風よー炎よッ!!」

ヌルが杖を大きく掲げると城の床を炎が走り、胸の周辺を狙い風の刃が飛び出す。その殺意に満ちた攻撃に舌打ちする

「精霊石よッ!!!」

残り少ない精霊石で風の刃を無効化する、地面を走っていた炎はジャンヌが剣を地面に付き立てることで相殺して見せた

「これで4つ。さて、あといくつ精霊石を持っていますかな？」

にやにやと笑うヌルに思わず舌打ちする。殺意に満ちた攻撃の組み合わせであり、厄介な波状攻撃だ。だがそれは殺す為の攻撃ではない、私達の防御を削る為の攻撃だ

(残り……3個)

思った以上に速いペースで精霊石を消耗させられている、狭い城の通路に何度も現れるがらんだの鎧……それは蛍ちゃん達の合流の妨げと戦術の制限。そしてヌルの呪文詠唱の時間稼ぎの3つの役割を果たしている

(人間だって侮ってくればいいのにッ！)

人間なんて神魔と比べれば弱い存在だ。それこそ、ゴーレムやガーゴイルよりも弱い……だから弱い存在だと侮ってくればいい。そうすれば付け込む隙もあるのに、ヌルにはそれが無い

「まあ答えてくれるとは思っていませんよ。精霊石がなくなるまで削

れば良いだけなのですから」

再びヌルの影から中身の無い鎧がぞろぞろと姿を見せる。このままだと本当に全滅する……なにか、この状況を変える一手が無ければ押し込まれ続け、まともな反撃も出来ずヌルの魔法の直撃を食らう……

「美神さん！大丈夫ですか!？」

「私の心配より自分の心配をしなさいッ!!」

鎧の合間から私の心配をする蛍ちゃんに私より自分の心配をしなさいと叫ぶ。不幸中の幸いにも横島君と蛍ちゃんが2人で分断されたのは幸いだと思っている。横島君が眼魂を使うのを阻止してくれるし、何よりも意外な事に直情派の横島君を押さええてくれるからだ

(問題はまず私なのよ)

ヌルは徹底して私を狙っている。蛍ちゃんや横島君への攻撃はさほど激しくは無い……それは私を先に潰す事で2人に動揺を与えると言う目的なのだろう。その証拠に2人に向けられる攻撃は当たれば致命傷だが、速度の遅い氷や岩の魔法だ。避けても足場を封じ、防御すれば防御ごと押しつぶす。厄介ではあるが、神通棍や栄光の手で十分に対処出来る攻撃だ

「稲妻よ！炎よ！氷塊よッ!!」

桁違いの魔法の弾幕に使いたくないと思いつつも、再び精霊石を切らされる。残り、2個……もう精神的な余裕は無い。早くこの状況を何とかしないと焦りばかりが募っていく……

(カオスはまだなの!?)

あのヌルの力は地獄炉が大きく作用しているはず。先行し、地獄炉を破壊しに行ったドクターカオスはまだなのか？と心の中で叫ぶ。ヌルを倒すには地獄炉を破壊するしかない、だが専門知識が無ければ壊せる訳も無い。難しいのは判っているが、早く何とかしてくれないと本当に全滅する

「ああああッ!!鬱陶しいッ!!」

全滅するという考えが脳裏を過ぎった時。ジャンヌが鎧を物凄い勢いで破壊する音と怒声が通路に響く……



(待てよ……?)

襲ってきた鎧を神通棍で殴りつけ、札を叩きつけて吹き飛ばしながらふと疑問が頭を過ぎった。ここは城の通路だ、この時代の事を考えれば通路は決して広い物ではない。そう……これだけ鎧が密集出来るはずも、これだけの距離を取れる筈も無いのだ。

「横島君！床をぶち抜いてッ!!!」

「え……あ、っ！はい!!!おおおおおおッ!!!」

横島君の突き出した右手に霊力が集まり、肘までの栄光の手が肩までの勝利すべき拳へと変化する

「そうはさせませんッ!!!……このハゲ頭あッ!!!」げつぶああっ!？」

ヌルが横島君に杖を向けた。やはり私の考えは当たっていたのだ、鎧が動く前にジャンヌが自分がぶち砕いた鎧の兜をヌルの顔面に投げつける。生々しい音を立てて、ヌルの首が大きく振れる。人間だったら死んでるわね……あれ……

「業炎のおおおおおッ!!!ファーストブリッドオオオオオオッ!!!」

何かの砕け散る音と視界を埋め尽くす真紅の炎……っ!!!

「誰もそこまでしろって言っていないわよ!？」

「すんません!!でも電気と氷がどうしても付与されちゃうんで!!!」

電気と氷ならコレが一番被害は少ないわね……横島君の霊能力って本当未知数すぎるわ。床が砕けた事で視界が大きく揺らぐ

「これって!?!どう言う事!？」

「嘘だろ!?!どこどこなんだよ!？」

蛍ちやんと横島君の動揺した声が高い天井に向かって響く、城の通路にいたはずの私達は気がつけば、ライン作業でゴーレムやガーゴイルが作られ。動物の身体に機械を埋め込んでいるプラントの中이었다……

「高位の転移と幻術よ！しかも対象に気づかれないレベルの！」

【馬鹿な!?!私が気付かなかっただど!?!】

心眼が気付かなかった。それはそれだけ高位の術だったという証明だ、心眼は確かに優秀だがこうして欺かれる事もある。それだけ神魔の力がこちらよりも高いと言う証明……だが幻術が解除され、正し

い距離感と場所を認識した今が大きなチャンス。私は向かってきた鎧を薙ぎ払い、その隙に私を取り囲んでいた鎧の包囲網を駆け抜け、蛍ちゃんも横島君と合流すべく走り出すのだった……

私の幻術が破られた……竜の魔女の投げつけてきた鎧で大きく振れた首を元の位置に戻す。その間に美神達が何かを話し合っていたようですが、その程度脅威足りえる物ではないと判断する

(相手戦力の情報の修正が必要ですね)

マリア姫の奪取の邪魔をした人間。ゴーレムを一撃で粉碎したのは判っていたが、想定よりも攻撃力が高い。恐らく攻撃力だけではない突破力も相当な物だろう

(魔女と組まれると厄介ですね)

破壊に特化した魔女と突破力に長ける人間。この組み合わせはもつとも避けなければいけないのだが

「へー？邪。あんたずいぶんと面白い能力を持つてるじゃない」

竜の魔女と横島の相性はいい。突撃思考の魔女に対して同じ攻撃力を持ちながら、柔軟性に富んだ横島。この2人は組ましてはいけない、組めば最後。そこからこちらの戦略を大きく崩される事になる

「私の幻術を解除したことはまず褒めましょう。賞賛に値しますよ」

私の幻術は魔族の中でも相当な物だと自負している。それを力任せに解除されるとは……少々腹立ちを覚えずにはいられない

「ふー……認めましょう。ええ、裏腹ですが認めざるをえない」

人間が弱いという考えは改めましょう。ほんの僅かなヒントで私の幻術を破って見せたり、人形であるジャンヌダルクに自我を取り戻させた。それは恐らく神魔でも出来ぬだろう。可能性に満ちた人間だから出来る事……

「ですが、それでも人間は神魔には勝てぬ！英霊であろうと！それは変わらない!!!」

人間の姿から私本来の姿である蝮の姿へと戻る。本来なら魔族は

人間界での活動に制限が掛かる、それを攻略する手段として私は地獄焔に目をつけたのだ。そしてこの場所は地獄焔の直ぐ側……私の力を最大限に発揮できるフィールド

「はっ！そっちのほうが人間の時よりまともだわッ!!」

魔女が駆け出してきたてきて剣を突き出してくる。私はそれを避ける事も防御する事も無く身体で受け止める

「お褒めに預かり光栄だ」

「ッ効いてない!?!」

効いていない訳ではない。ただダメージよりも私が地獄焔から供給されるエネルギーの総量の方が上なのだ

「お返しですよ」

「っうあああああああ!?!」

4本の足から放った火炎が魔女を包み込み、その華奢な身体を大きく弾き飛ばす。炎に対して強いトラウマを持つ彼女にとって炎が最も有効打撃となる。炎に包まれ、地面を転がりまわる姿にこれで魔女が行動不能になったと確信した。私の炎はそう簡単には消えない、そして英霊であれ人間の姿をしている以上

「さあ！お前は蛙になれ!!」

横島忠夫。こいつを自由にさしてはいけない、こいつが動き回れば一気に戦局を変えられかねない。杖を振りかざし蛙に変化させる呪いを放つ

「え？今なんかした?」

「……弾いただと?」

呪が直撃したのに横島は平然としている。完全に無効化しただと……やはりこいつ只者ではない!

(危険だ、こいつは危険すぎる)

何をしてくるか、何が出来るか?こいつは私の頭脳をしても読みきれない。雑魚ソルジャーを呼び出すと同時に杖を構える、

「呪は効きませんか、ならば力で押しつぶすまで！稲妻よ!」

「チビ！電気ショックッ!!」

「みぎやあああああッ!!」

横島のポケットから飛び出したグレムリンが信じられない事に私の電撃を相殺する

「馬鹿な!？」

地獄炉で強化されている私の電撃を何故グレムリンなどと言う下等な悪魔が相殺出来る

「ぐっ! ああああああああ!？」

動揺した一瞬に美神達の放ったボウガンの矢が目を打ち抜く。ダメージ自体は大きい物ではない、だが眼を潰された痛みはある

「貴様らあああああ!!！」

冷静であれ、冷静であらなければならない。そう判っているのに、目の前が怒りで赤く染まる

「はっ! ほんと外見相応ね!？」

「な、何故動ける!？」

横手から旗で殴り飛ばされ、城の壁に叩きつけられる。私の炎でのた打ち回っていたはずなのに! 何故! 何故動ける!!

「はあ? のた打ち回る? なんの話ですか?」

魔女の手には焼け焦げた黒い札……札? なんだ、あれは……破魔札ではないはず。見たことも無い、それに困惑するがあれが身代わりになっっているという事は一目で理解した

「今度こそ燃えるがいい!!！」

杖と足の両方から炎が魔女へと走る。いかに美神達が精霊石を持っていても、この距離では間に合わない

「急急如律令ツ!! 炎の力を散らしめよツ!!！」

「な、なっなにいいいいいいいい!？」

横島の放った札が私の炎を完全に掻き消す。なんだ!? なんだあの術は!? なぜあんな事が出来る!? 理解出来ない現象に一瞬完全に思考が停止した。それはこの乱戦で許される物ではなく……

「精霊石よ! 悪魔を退けたまえツ!!！」

「がっ、がっはあああああ!？」

美神達の投げつけてきた精霊石が炸裂する。これは駄目だ、地獄炉よりも回復量よりも大きなダメージを叩きつけられた。なによりも

精神的な混乱が大きい

(いかん！いちど立て直さなくては！)

混乱した精神状態ではまともな魔法の行使は出来ない。雑魚ソルジャーを呼び出し、距離を取ると同時に乱戦に持ち込めば数で勝るこちらが上だ

「数で勝ればこちらが上などと下らぬ事を考えてはいないだろうな？」

「ぬっぐううう!!」

背後から打ち抜かれると同時に恐ろしい脱力感が襲ってくる。まさか、そんな……ありえない!!

「中々に難問だったが、この私の頭脳を持ってすれば地獄炉の停止など容易い。良くぞ耐えた」

「ドクターカオスウウウウウツ!!」

私に匹敵する頭脳だと思っていた、だがこれだけの短時間で停止させれるなんて思っていなかった。ガープ様の降臨の邪魔をされた、私の完璧な計画を妨害された。それを妨害したドクターカオスへと突進する……怒りで我を見失い、完全に状況を一瞬忘れた

「これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮……！吼え立てよ、我が憤怒ッ (ラ・グロンドメント・デュ・ヘイン) ツ!!!」

「が、つつつうがあああああああああああッ!!!」

魂が軋む、全身が燃える。信じられない激痛に魔族としての姿を維持できず、人間の姿に戻り地面をのた打ち回る

「あはははははは!!無様ね！人を人形だなんだって言っておきながら、あははははは!!その人形に痛めつけられるなんて無様なんですか!」

その嘲笑に心が抉られる。無様……なんと言う無様さだ!!!ガープ様の降臨も妨げられ、完璧に進めていた計画は横島ただ一人のせいで魔女の離反から始まり完全に破綻した

「おのれおのれおのれおのれツ!!!この屈辱！怒り!!ただでは済まさんぞッ!!!」

屈辱と憤怒に顔を歪めながら立ち上がろうとするが、それよりも早

く魔女の一撃が胴を穿つ

「げほっ!!ぐっぐううう!!おのれえええええ……」

人形に！存在を歪められ、本来のあり方さえも見失った無様な英霊に……この私が！天才学者であるこのヌルが追い詰められるなんて……屈辱だ、失態だ、ここまでのミスを取り返す術を私は持たない「恥じるか、だがそれも良かろう。その屈辱が、その怒りがお前を成長させるのだ」

この声は!?!聞こえる筈の無い声に顔を上げると、そこには私の作り上げた複製体で降臨なされたガーブ様の姿があるのだった……

馬鹿な……どうしてここに……俺は突然現れたガーブに完全に混乱していた。ガーブはモノクルに黒いスーツ姿、そして杖を突きながら優雅に歩いてくる。その瞳が俺を見据えた瞬間、恐ろしい寒気を感じた

「これはこれは横島忠夫、美神令子、それに芦菫。こんな時代で合間見えるとは思ってもみなかったよ……時空移動能力。これはレアな能力だな……」

その言葉には余裕さえも感じられた。ブラドール伯爵の時の荒っぽい雰囲気が無いのだ

「……お前……私達の時代のガーブね?」

「ご明察。中々の頭の切れだ、褒めてやろう」

俺達の時代の!?!じゃあこのガーブはGS試験のときに現れたガーブなのか!?!

「その所を詳しく説明するほど暇ではないし、敵に説明するほど愚かな事もあるまい。ただ神魔よりも私が優れている……それだけで言葉は十分だろう」

自信過剰とは言い切れない。それだけの凄みがガーブには合った

「英霊召喚はやはり未知数だ、まさか自我を取り戻し離反するとは……まあそれも良かろう。貴重なデータだ、次に行かせばいい」

「お前が！お前がアアッ!!」

ジャンヌさんが怒りに満ちた表情でガープへと駆け出し、剣を振るうが

「ふう、聞き分けの無いお嬢さんだ。いや、人形か……くだらない」「っ……あっ……」

ジャンヌさんの小さな声がやけにハッキリと聞こえた。すれ違うその一瞬でジャンヌさんの首は宙に舞い、その姿は金色の粒子となり消え去ったのだ

「ガープウウウウウツ!!」

「横島ッ!」

蛍の一喝とビンタで怒りに染まっていた思考が一瞬冷える。蛍に張られた左頬を押さえた

「落ち着きなさい、ガープがいつもやることでしょ?こっちの精神を逆なでするのは」

動揺するよりも、怒りに飲まれるよりも先に冷静になりなさいと美神さんにも怒られる

「ふむ、多少は成長したか、ならこれはどうだ?」

ガープの目の前に魔法陣が展開される、そこから溢れ出る冷気に猛烈に嫌な予感がした。避ける事は出来ない、ガープが避ける事が出来る様な容易な攻撃をしてくるとは思わない。美神さんも同じだったのか、最後の精霊石を手を取った

「精霊石よ!我らを護りたまえ!」

「試作機だが、霊波遮断装置起動!!」

精霊石のバリアとカオスのジーさんの機械が作動した同時に、魔法陣から巨大な氷柱の雨が放たれた。

「なんてパワー!?!この時代のガープよりも強い!」

「駄目だ、機械がオーバーヒートする!」

美神さんとカオスのジーさんの悲鳴にも似た絶叫が結界の中に響く。まるでガラスが割れるような音を立てて氷柱が迫ってくる……それがやけにスローモーションに見えた

【横島! 呆然とするな! 動け!】

「横島あ!」

心眼と蛍の声。そして蛍に突き飛ばされた……尻餅をついた数秒で氷柱は止つたのだが……

「あいたた……蛍。あり……蛍……？」

力なくもたれかかつて来る蛍に血の気が引いた。蛍の背中には3本の氷柱が突き刺さつていて……それは完全に身体を貫通していた

「蛍……ちゃん？」

美神さんの呆然とした声が聞こえる。嘘だ、嘘だ……こんな嘘だ。カオスのじーさんに視線を向けるが、カオスのじーさんは力なく目を伏せるだけ……両手を見つめる。そこにはべつたりと蛍の血がついていて、蛍が死んだと言う事を俺に教えていた

「ははははッ!!どうだね?横島忠夫。これでもまだ冷静でいられるか?お前を護つて、お前が好いた女は死んだぞ!!」

【横島!駄目だ!冷静になれ!!!】

心眼の叫びが聞こえたが、蛍を殺されて冷静になどなれる訳が無い、俺が、俺が悪いんだ。俺が精霊石なら、カオスのじーさんの道具なら大丈夫と一瞬でも思つてしまったから……

「あ、ああ……あああああ……ッ!!!」

吼えながらウィスプ眼魂を握り締める。その鮮やかな黄色が漆黑に染まった気がしたが、そんなのはどうでもいい

「殺してやる!!!」

「やってみろ。お前に出来る物ならな」

挑発するようなガープの言葉に、心眼の声も美神さんの制止の声も何も聞こえなかった。蛍を殺したあいつを殺してやる、それだけが俺の考えれる全てだった

【ア……ッ……ユガンデミナー!トザシテミナー!】

漆黒のパーカーが俺の周りを踊るがそれすらもどうでもいいと思つた。あいつを殺す、それしか考えることが出来なかった

「……変身」

【止めろ!横島!!!】

最後まで脳裏に響いていた心眼の制止の声を無視し、俺はベルトのレバーを引いた。その瞬間、ガープが何かを投げてきてベルトの中に



吸い込まれるようにして消えていった。それが俺が覚えている最後の光景だった

【ギガン、シエイド！OK！レッツゴー！イ・ツ・ワ・リツ！ゴースト！】

美神は全てを見ていた。黄色のパーカーゴーストが漆黒に染まり、ベルトにガープの投げた狂神石が吸い込まれていくのを……そして狂神石を取り込み、禍々しい姿へと変貌したウイスプを目の当たりにしたのだ……獣の爪を思わせる鋭い突起物が生えた両腕、漆黒のパーカーには血の様な赤いライン、マスクに浮かんだ顔は真紅に染まり、目も口も悪魔のように大きく吊りあがっていた。激しい憎悪と殺意、そして狂神石によって心を閉ざし、歪めた横島。その名は仮面ライダーシエイド シエイド魂

【■■■■……………ツ!!!】

「横島君！止りなさい!!」

大きく吼えたその叫びは、既に人の言葉ではなく、獣の咆哮だった。突起物の生えた右腕を地面に突き刺したシエイドは腕を地面から引き抜くと闇が形になったような三日月状の剣が握られていた。美神の叫びも届かない、獣のように吼えたシエイドはガープへと走る

「ははははは!!!これで横島忠夫は我らの手に落ちた。くっく!!ははははは!!!」

【■■■■……………ツ!!!】

狂ったように笑うガープに駆け出していく漆黒に染まったシエイド。

「横島君！駄目よ！止りなさいツ!!!」

だが美神は届かない。今の横島に声が届くのは死んだ蛍しかいないだろう、そして蛍が死んだ今。誰の声も横島へは届かない

「もはや神魔ですら私達を止めるのは不可能。歴史を改変する、横島忠夫を手にした私達を止める術はない」

【■■■■……………ツ!!!】

怒りの咆哮を上げガープに斬りかかるシエイド、そして城を白く染め上げる稲光。それがこの時間の美神令子が見た最後の光景だった

……

次回仮面ライダーウィスプは！

ガープの攻撃によって巻き戻された時間。美神はやり直す機会を得たが、状況は絶望的。仲間はいない、道具は無い……

「横島君。これ……持つておきなさい」

「良いんですか？」

僅かな希望を持って差し出したのはノーフェイスから生み出された漆黒の眼魂だった

定められた運命をなぞるかのように繰り返される悲劇

変わったのは1つだけ、横島が漆黒の眼魂を手に行っているかどうか……それだけだった

運命は変わるのか？次回仮面ライダーウィスプ

「偉大な眼魂」

カイガン！グレイト！！ゴ・ゴ・ゴ・ゴーストツ！！

「命！燃やすぜツ！！」

リポート16 竜の魔女 その9へ続く

## その9

レポート16 竜の魔女 その9

眩い光の中に自分の意識が溶けて行く……幾つ物景色が浮かんで消えて行き、また浮かんでは消えていく……そして目の前に浮かんで来たある光景。横島君と蛍ちゃんが揃っている……その光景が目の前に浮かんだ瞬間。私は反射的に両腕を2人に向かって伸ばした。私が護らなければいけなかったのだ、その光景を、それなのに私は護る事が出来なかった。目の前でむざむざと破壊されてしまった……そうはさせない、私が護るのだ。自分が溶けて行く中、それでもそれだけは私の脳裏に焼きついて離れなかった。横島君を護り死んだ蛍ちゃん、狂神石で歪んだ姿になった横島君……それはすべて私の責任なのだから……

「美神さん?どうしました?」

「大丈夫ですか?」

「よ、横島君?蛍ちゃん?」

居る。2人が目の前に居る……その事に一瞬呆け。そして振り返る、そこには兜が命中し引っくり返っているヌルの姿がある

「あいつがああの程度で死ぬとは思えませんが、何か策はあるのですか?」

小馬鹿にした態度はそのままだが、ジャンヌも居る。何が起こっているのか判らず混乱する。夢や気のせいとは思えない、2人が目の前から消えた。その狂おしい喪失感私の中に残っている

(戻って来たんだ)

ママも時間移動能力者だった。霊能力は遺伝する……私にも時間移動能力があったんだ。ガープの稲妻の恐ろしいほどの電圧……その破壊力が私の中に眠る時間移動能力を呼び起こしたのだ。だがこれは偶然だ、2度同じ事があるとは思えない、ガープが来る。蛍ちゃんを殺し、横島君を奪いに来る……

「横島君。これを持ってなさい」

「これ……良いんですか？」

はつと息を呑む蛍ちゃん。それはノーフェイスを倒した黄金のライダーが投げ渡した黒い眼魂だ

「最悪の場合使う事を許可するわ」

「……うつつ。理由は聞きませんが、靈感が囁いているんですよね？」

今まで使用禁止所か取り上げている眼魂を渡された。その理由を靈感と尋ねてくる横島君、だけどそれは違う。私は見たからこれを渡したのだ。ガープに対応出来る可能性を持つ武器はこれしかない

「それとジャンヌ。ヌルをぶつ飛ばしたら1度下がって欲しいのよ」

「下がる？そこに何の「お願い」……はいはい、判りました、下がれば良いのでしよう」

強い口調で下がって欲しいとジャンヌにお願いする。氷の散弾、あれは今の私達では防げない。炎を扱えるジャンヌが頼みの綱だ、もしモグラちゃんが居れば違うが、タマモはマリア姫の護衛で送り出した。炎の使い手が居ないのだ

「それと心眼。物凄く嫌な予感がするから、周囲の警戒をして欲しいわ。何か探知すれば直ぐに教えて」

ガープの事は複製と言っていたが、あの圧力は本物だ。例え本体ではないとしても、私達では勝てない相手に間違いは無いのだ

「全員攻撃よりも防御に重点を置いて頂戴。アタッカーはジャンヌに任せるわ」

「私をこき使うつもりですか？「あのハゲむかつくでしょ？私達もぼこぼこにして良いの？」……ふふふ……ええ、そうですね。むかつきますね」

なんとなくジャンヌの操縦方法が判って来た気がする。プライドが高く、そして好戦的。うん、くえすにそっくりだ。だから横島君が仲間を引き込む事が出来たのかもしれない

「私の幻術を解除したことはまず褒めましょう。賞賛に値しますよ」

起き上がったヌルが先ほどと同じ言葉を口にする。ここからだ、ここからが勝負なのだ。あんな結末にはさせない、私は強い決意を胸にヌルを睨みつけるのだ……

薄れていた意識が急速に浮上してくる。バラバラになっていた私  
と言う個が再構築され、再び私になる

【培養液を排出します】

機械音声で繰り返すその言葉が発せられ、液体が排出されていく。  
ゆっくりとポッドの中から外に出る

「……ふむ、こんな物ですか」

作り物の体に意識だけをダウンロードする。手足の感覚には若干  
のズレがあるが、自分自身を使った実験とすればこれは十分な成果だ  
ろう。今後自分達の複製体を使って多面的に同時襲撃と言うことも  
可能になる、弱体化しているが戦闘技能や経験は紛れも無く自分自身  
「これは面白いかもしれないですね」

魔力で服を作りそれを身に纏いながら、今後の作戦として面白いと  
笑みを浮かべる。本体の能力からすれば、そのスペックは約半分以  
下。それでも複数体同時に襲撃させれば相手は混乱するだろうし、何  
よりもその中に本体が紛れると言うことで相手の出足を崩せる

(問題は私以外は無理と言うことか)

アスモデウスやアスラの脳まで筋肉では、本体と分身の両方で自分  
を確立する事が出来ないだろう。それを解決できるか、そこが問題に  
なるか……まあ時間をかければ十分に解決できる問題だな

「さてと……久しぶりに合見えるとするかな」

GS試験から大分時間が経った。横島忠夫が何処まで使える存在  
になったか、見ておくとするか……私はそう笑いその場を後にした  
「げほっ!!ぐっぐううう!!おのれえええええ……」

悔るなど言っていたのにヌルは悔った。その結果がこれだ

「恥じるか、だがそれも良からう。その屈辱が、その怒りがお前を成長  
させるのだ」

だがそれで良い。この結果は判っていた、だからこそ良いのだ。人  
間の脅威を学んだ、これでヌルはより成長する

「これはこれは横島忠夫、美神令子。こんな時代で合間見るとはね……時空移動能力。これはレアな能力だな……」

驚愕に顔を歪める横島達。ただ美神令子だけは恐ろしいほどに殺気を放ち、私を睨みつけてくる

「……お前……私達の時代のガーブね?」

鋭い目線を向けたまま私の正体に気付く美神令子

「ご明察。中々の頭の切れだ、褒めてやろう」

この時代の私と遭遇しているのにそれに気付くとは……中々頭が切れるじゃないかと笑う

「その所を詳しく説明するほど暇ではないし、敵に説明するほど愚かな事もあるまい。ただ神魔よりも私が優れている……それだけで言葉は十分だろう」

他の神魔では辿り付く事の出来ない領域に私は辿り着いた。それが事実、それ以上の言葉は必要ない。

「英霊召喚はやはり未知数だ、まさか自我を取り戻し離反するとは……まあそれも良からう。貴重なデータだ、次に生かせばいい」

横島達の側にいるジャンヌを見てそう笑う。まさか自我を完全に崩壊させ、憎悪と復讐心だけを与えたと言うのに……まさか自我を再構築し離反するなんて想像もしていなかった

「お前!お前がツ!!」

激昂し私に駆け出そうとしたジャンヌの腕を美神が掴んで止める

「挑発よ。乗るんじゃないわ」

「ぐっ……ぐ!!」

ジャンヌを止めた。そして私の挑発と言うことも読みきった……それには少しばかり驚かされたが、正直問題のあるレベルではない。ジャンヌの攻撃力は確かに神魔に匹敵する物に強化しているが、それでも脅威か?と言われるとそうでは無いからだ。力があっても技術が無い、それが所詮農村の生まれ神託を聞けるだけの小娘をベースに持つ竜の魔女の限界だ。当たらない攻撃など脅威とは程遠い

「ここからはヌルに代わり私が相手をしてやろう。ここで私を倒せば、未来が変わるぞ?この首欲しくは無いか?」

まあ絶対に不可能だがなと笑い、私はステッキを剣に見立て構えるのだった……

「お前達が欲して止まないアスモデウスの参謀の首だぞ？死ぬ気で取りに来なくていいのか？」

ガープが笑いながら挑発を重ねる。それは自分が負けられないと言う傲慢とも取れる自信から来ている

「これだから神魔なんて冗談じゃないわ！破魔札も何も通用しないんだから！」

美神が激昂して叫ぶ。こちらの攻撃はほぼ無効、それに対して向こうの攻撃は掠りでもすればそれだけで致命傷。アンフェアにも程がある

(強い……)

ノア領主の城で戦ったガープよりも数段上だ。直接的な戦闘力に変わりは無いとしても、時間が過ぎる事で研磨された実力は横島が退けたガープよりも上だ……しかも精神面が大きく成長している。あの城で対峙した時のような荒っぽさが無く洗練された精神力にはとても付け入る隙など見当たらない……単純に言おう。勝てるイメージが湧かない、どう足掻いても死ぬ映像しか見えない

「横島忠夫。お前には顔を殴られた、その借りをきっちりこの場で返しておこう。なに顔を殴り等しないさ、その首を貰おう」

地面を蹴り恐ろしい勢いで疾走して来るガープ。無駄だと判つていても精霊石の銃弾を放つ霊波銃の引き金を引く

「無駄だ」

銃弾をステッキで両断したガープの足が一瞬止まった。瞬きほどの一瞬だが、ガープの足が止つたのだ。だが次の瞬間には走り出し横島の前に移動していた……だが精霊石の銃弾で止つた一瞬。その一瞬は非常に大きい物だった

「「「っのおー！」」」

横島に向かって振り下ろされたステッキをジャンヌ、螢、美神の3

人がかりで受け止め弾き飛ばす。その威力に3人が後に押し込まれるが、それでも致命傷は避け防いで見せた。ガープは舌打ちし、地面を蹴り大きく距離を取り詠唱に入る

(なんだ、なんだあの違和感は……)

その光景を見て私は妙な違和感を感じていた。仮にも最上位に位置する神魔が精霊石で動きを阻害されるとは思えない、そもそもソロモンが悪魔は元々天使である。天使であり、悪魔。光と闇を内包する上位種族だ。神魔の中でもその強さは紛れも無くトップクラス……それが精霊石如きで動きを止めるか？

「氷の散弾！」

展開された魔法陣から恐ろしく巨大な氷の氷柱がマシンガンのように放たれる

「ジャンヌ！炎！！横島君はフォローして！」

「言われなくても!!!」

ジャンヌが旗を突き立てると、それを起点にして炎の壁が現れる。それを更に横島が陰陽術で強化する、圧倒的とまで言える火力は氷の氷柱を溶かしていく。だが完全には溶かしきれていないが

「これなら弾けるッ！」

炎の壁を突きぬけ、勢いも大きさも半分以下になっただけで氷柱を弾く事は容易だった。美神と蛭が氷柱を迎撃しているのを横目に私はガープに対して感じた違和感を考えていた。この違和感の正体を知ることが、ガープの攻略のヒントになるのではないか？

地獄炉停止による魔力の枯渇 否 ヌルとは元より別格の神魔。地獄炉の影響など微々たる物

こちらを警戒している 否 横島忠夫に強い興味を持っているよ  
うだが、それ以外に対した反応は無い そもそも人間を神魔が恐れる必要は無い

精霊石に弱い 否 元は天使が精霊石に弱い訳が無い。多少の不快感はあるだろうが、そんな物は微々たる物であろう

「カオス!?なに考え込んでるのよ！そんな暇があったらこつちを手伝ってよ！」



「黙ってる！今何か閃きそうなんだ!!」

美神の怒声に負けない怒声で怒鳴り返した時、漠然としていた違和感が形になり始めた

(何故追撃しない?)

氷の氷柱が通用しないのは判っている筈。それなのに氷柱は今までに発射されている。ガープほどの魔力の持ち主が魔法を1つしか使わない、これもおかしい。同時に2〜3種類の魔法を展開出来てもおかしくは無い……それに魔神形態ではなく、人間の姿を取っている。何故弱体化する人間の姿で戦う?ノア領主の城で戦った時は恐らく人間界で活動する限界で人間だっただろう。だが英霊召喚まで辿りついた未来のガープが自分の時間制限を解除する方法に辿り着かない訳が無い。そして何よりもこうして私が考え込んでいる時間がある。それがおかしい、あれほどの神魔が相手だ、本来ならこうして考えている時間などある訳がない

「そうか!判ったぞ!!」

精霊石で立ち止まった理由も、魔法が単発的なのも、その理由が判った。私は精霊石の銃をガープに向けながら

「その自信満々な態度に騙されたよ。お前人形だな?」

その余裕タップリな話し方と圧倒的な戦闘力に完全に騙された。恐らくあのガープは本体ではない、意識は本体ではあるが身体は偽者だ。ジャンヌを人形と挑発したのは、その火力により人形を破壊される事を恐れたから奇襲で仕留めようとしたのだ

「カオスのじーさん!?人形ってどういう事だ」

「は!人の事を人形って言うっておきながら自分も人形なんて笑わせてくれますね」

「簡単だ、魔力を注ぎ込み作り上げる複製。ホムンクルスの技術の応用、ゴーレムやガーゴイルを作るんだ。ホムンクルスの技術も確立させているだろう」

要人に化けさせたホムンクルスで、人間社会を混乱させる。そんな一手も打てるはず、恐らくマリア姫の父王を監禁していたのはそのデータを得るためだろう

「待つて、もし本体だったらどうするんですか」

「無いな」

蛍の慌てた声に無いと即答する。もし本体ならば人間にここまで馬鹿にされて黙っているわけが無い、そしてもう一つ

「ガープが降臨していれば、この城が消し飛んでるわ」

未来から本体が直接降臨していれば、その魔力の余波でこの城は消し飛んでいる。それが判っているからこそその言葉だ

「ふっふふふ！ははははッ!!!いやいや素晴らしい、素晴らしい頭脳だよ」

ガープが上機嫌に笑いながら拍手を始める。だがその眼は全く笑っておらず、私を睨みつけている

「優秀な人材と言うのは神魔であれ、人間であれ素晴らしい。人材とは宝、無能な味方は敵にも劣る。あのベルゼバブのような屑はその筆頭だ、物は相談なんだがね？君達をこちらに迎え入れる事が出来ると言えば……うんつと言ってくれるかね？」

これはただのリップサービスだ。ガープの眼には殺意が込められている、味方に迎え入れるつもりなど微塵も無いのが手に取るように判る

「俺はお前が嫌いだ！」

「残念交渉不成立だ。ならば……お前達を死体にして連れて帰ろうか」

ガープの身体が膨大な魔力が放出し、その姿を作り変えていく……だが、それは醜悪な姿をしていたくすんだ銀色の身体に、崩壊しつつある翼……伝承のガープの姿とは程遠いのだが

「……何故……ですか」

「お前を連れて帰るより、あの人間の方が有益だからだ」

ヌルの身体にガープの尾が突き刺さり、その身体を分解し吸収する。そこまで評価されたのはありがたいが、正直冗談ではない。僅か、身体の2割ほどだが、金色になった部分がある。それはガープ本来の神性を手にしたという事だ

「ずいぶんと良い男になったみたいね」

美神の皮肉にガープは楽しそうに笑う。だがその威圧感先ほどよりもはるかに高い

「どなしよ、俺のせいかな？」

「違うわよ、アレはガープの挑発。断つても、受け入れても結果は同じよ」

【悪辣な男だ、アイツの言葉は気にするな】

横島が動揺しているのを見て蛍と心眼がフォローする。良いチームだ、横島は確かに基点となる。若く、暴走する事もあるが柔軟性にも知識にも長けている。これからの成長が楽しみだ、微笑ましい物を見た気がして一瞬気が緩んだ……

「ぐっふう」

「カオスのじーさん!？」

ガープの手が光ったと思った瞬間。何かに吹き飛ばされる、何がと手を胸に当てて、その手が鮮血に染まっているのを見て

(不覚)

私はやはりどこまで言っても科学者なのだ、そんな男が良くここまですべて戦況をかき乱し、そして状況を変えた。だがそれが限界だった……気を緩めてはいけない所で緩めてしまうとは……不死ではあるから死にはしないが駄目だ。意識を保つ事が出来ない……私の意識は闇の中に沈んでいくのだった……

ガープの放った霊波弾でカオスのじーさんが吹き飛んだ。胸に風穴が開き、口から血を吐き出している姿を見て死ん……

「横島。大丈夫、ドクターカオスは不死よ。回復するまで動けないだけよ」

だから今は集中してと言う蛍の言葉に振り返るのを堪え、ガープを睨みつける

「やれやれ、お前は良い味方に恵まれているよ。私の仲間は脳味噌まで筋肉の連中で困る」

気は良い奴らなんだがなと肩を竦めるガープ。人間のような仕草

だが、油断など出来る訳が無い……俺は懐の黒い眼魂に手を伸ばす  
(まだ早いわ！向こうは複製の身体で魔神形態になってるから時間を  
稼げば自滅するのよ！)

だから無理をする必要は無いと蛍は言う。だが俺はそうは思わな  
かった、何か、何か嫌な予感がするのだ。胸を締め付ける狂おしいま  
での焦りが俺に言うのだ……戦えと……

【落ち着け横島。冷静になるんだ】

心は熱くても、頭は冷ややかにそれが戦いの鉄則だと心眼にも注意  
される。

「この姿になった以上この複製体は数分も持たぬ。だから全力で遊ば  
せて貰うぞ、抗ってみろ」

ガープの姿が掻き消えた。一瞬超加速と思っただが、違う。

「横島君！後！」

美神さんの声に反射的に横っ飛びする、すると銀色の光が俺の居た  
場所に突き刺さっている。それはガープの拳、反撃を繰り出そうと  
思った瞬間には既にガープの姿は掻き消えている

「集まったら駄目！相手は魔法使いよ！纏まれば一網打尽にされる  
！」

蛍と美神さんの元へ走ろうとした瞬間。美神さんの怒声に止めら  
れた

「ちいっ！鬱陶しい！」

ジャンヌさんのイライラした声が耳に届く、致命傷には程遠いが一  
撃一撃を的確に叩き込まれ。その顔には激しい苛立ちの色が浮かん  
でいる

「蛍！後！」

銀の閃光が蛍の背後に走る、それを見た瞬間。蛍の名前を叫んでそ  
の華奢な身体を突き飛ばす。2人でごろごろと石の床を転がる

「ご、ごめん！横島！」

「怪我が無いなら良い！」

速い、あの速度の攻撃を喰らえば致命傷だ。しかも魔法使い……魔  
法……使い？待て、何で魔法使いが拳で戦う？おかしい、おかしい

じゃないか。修行の時の神宮寺さんの言葉を唐突に思い出した

『魔法使いが詠唱するつて言うのは偏見ですわ。確かに詠唱は行いませんが、魔法陣で発動させる事も出来るのです。魔法で地面に魔法陣を刻み、そしてそこから魔法を放つ。そういう戦術も魔法使いの戦略なのですよ』

だから魔法使いと戦う時は本人だけじゃなく、その周辺も見るとす。その言葉が脳裏を過ぎった

「美神さん！足元の破壊跡を壊してください！」

間違いない。拳で戦うのは地面に魔法陣を刻んでいるのだ、速度と攻撃力で脅威と思わせる。そして地面から注意を逸らし、大きな魔法を使う。これだ

「……ッ！魔法陣！」

美神の判断が遅れた事を責めるのは酷と言う物だった。現在で魔法使いの数は少なく、更にそれを実践レベルで使用出来るのはくえすを含め、5人にも満たない。魔法使いと戦う経験などある訳が無い、そしてガープが真っ先にカオスを潰した理由。それは錬金術師であり、魔法使いのカオスが真っ先に気付く、そう判断しカオスを真っ先に潰したのだ

「惜しいな。気付くのが少しばかり遅かった」

ガープが指を鳴らすと魔法陣が光り輝き、そこから血の槍が無数に現れ全方位から横島達に殺到する

「防げるか？ははは、防いで見せろ。さもなければ死ぬだけだ」

高笑いするガープに憎まれ口を叩く余裕も無い、両手に栄光の手を作り自分に向かつてくる物を必死に撃退する

「邪魔よ！」

ジャンヌさんは右手に旗、左手に剣で恐ろしい数の槍を打ち落としているが、それでも打ち落とす以上の槍が魔法陣から現れ、ジャンヌさんを完全に足止めする

「横島君！蛍ちゃん！自分を護る事だけに集中して！」

美神さんの怒声に蛍と声を揃えて判りましたと返事を返す。だが槍の勢いが凄まじい、そう指示を出されなくても自分の事で手一杯

だった……

【斜め後ろと前からだ！霊力を放出しろッ！】

自分の判断と心眼の指示。自分で考えつつ、心眼の指示にも従う。極限の集中状態の中俺は見た……美神さんと蛍が打ち落としした槍が再び浮き上がるのを、声を出す。間に合わない、陰陽術それも間に合わない……2人が背後から貫かれる。その未来が脳裏を過ぎった瞬間

「届けえええッ!!!」

左手で自身に向かってくる槍を弾き飛ばしながら、右手を伸ばす。手のままでは駄目だ、届かない。切れ、切り捨てろ。伸びていた栄光の手が変化し、剣の形となる。鋭い音を立て槍が両断され落ちる、呆然としている美神さんと蛍。2人が無事だった、それに安堵した瞬間「お前は自分よりも他人を優先する。そうすれば隙を見せると判っていた」

背後からガープの声が聞こえた。どうして!?目の前に……上空のガープの姿が幻のように消える。

【げ、幻術だど?!……避ける！横島！】

「さよならだ。お前は私が有効に使ってやろう」

ガープの振り下ろした杖がスローモーションに見える。だが俺の体は動かない……避けられないスピードではないのに……横島は知る由も無い。高位の神魔はその言葉ですら強い力を持つ、声を掛けられた。それだけで横島の霊体は麻痺し、その自由を奪っていたのだ

「横島！」

「じゃ、ジャンヌさん?」

殺される。そう思った瞬間、ジャンヌさんが槍に突き刺されながら俺の方に走ってきて俺を突き飛ばす。そしてガープの振り下ろした杖に切り裂かれながら、その両肩を掴み

「燃えろおッ!!!」

「ぬ、ぬおおおおおおお!?!」

全身から炎を吹き出し、ガープの身体を燃やす。ここで戦い始めて初めてガープが出した苦悶の声、だがそれはほんの一瞬だった……

ジャンヌさんの身体を吹き飛ばし上空に逃れるガープ……俺は弾き飛ばされたジャンヌさんを抱きとめ

「な、なんで!？」

「……私の味方って言ったじゃない……先に死ぬなんて……馬鹿じゃないの。味方が先に死んで……どうすんのよ」

馬鹿じゃないのと言いなながらも、穏やかな顔で笑ったジャンヌさんの手が力無く地面に落ちる。

「ガープ!!!」

Gジャンの中から黒い眼魂を取り出す。時間で自滅するといっても、その時間まで耐えることなど出来ない。倒すしかない

「心眼。これしかない」

「……」

心眼は俺の言葉に返事を返さず、無言でベルトを召喚する。心眼もこれしかないと判っているのだ、俺にどれだけ負担が掛かろうとも、眼魂を使わなければガープを退ける事が出来ないとわかっているのだ

(チビ、美神さん達を頼む)

ポケットから飛び出し美神さんと蛍の元へ飛ぶチビ。チビの電撃なら、あの槍を迎撃出来る筈だ。心配そうに1度振り返り、美神さんの元へ飛ぶチビを背後に隠し、ガープを睨みつける

「見せてみる。お前の力を、私はその力が見たい!神魔をも超える力を!人間など恐れるに値しない!だが貴様は別だ!横島忠夫!貴様は人間達のジョーカーとなりえる!その力の底を私に見せろ!!」

「後悔しやがれ、この野郎」

【アーイ!ガッチリミナー!ガッチリミナーツ!】

ベルトに眼魂を押し込む。すると黒を基調にしつつ、金色の兜を被ったようなパーカーが俺の周りを踊る

「横島君!」

「横島!」

蛍と美神さんがこっちに走ってこようとするのが見えるが、ガープが指を鳴らすと氷の壁が現れ2人を遠ざける

「邪魔者は不要。私はお前の力が見たいんだ、見せてみる！神魔を超える力を!!」

「変身!」

レバーを力強く引くと、ベルトから15の光球が飛び出し、黒いパーカーがその光が作り出した輪を潜りながら向かってくる

【カイガン!グレイト!15の英雄!結集!ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!!】  
黒いパーカーを装着すると同時に15の光が胸に吸い込まれて消える。ウイСПや韋駄天の比ではない力が全身に漲る

「命!燃やすぜツ!!」

俺は力強く叫ぶと、ベルトから飛び出した2振りのガンガンブレードを手にガープへと駆け出すのだった……

次回仮面ライダーウイСПは!?

横島が手にした新しい眼魂。その脅威の能力を持ったとしても、ガープには届かない。確かにその力は複製のガープを遥かに超えていた……

「くっ、くそおっ!」

「どうした?もう終わりか?」

グレイトは横島には強すぎた力だった。その力を制御しきれず空回りを続ける横島……

「足りないな。お前の力の底を見せろと言ったんだ」

これは私の見たいものではない、そう呟いたガープが美神と蛭を傷つける

「ガープウウウウウ!!」

「そうだ!怒れ!もつと憎め!」

怒りにより力を強引にコントロールする横島。だがそれはガープの計算通りの結果だった……憎悪と怒りに飲まれ再び闇に染まろうとするウイСП……彼を呼び戻す者は!?

「……ったく……おちおち……寝て……も……いられ……ない……じゃない……」

次回「竜の魔女」



「振るえよ反旗！竜の魔女!!!」

リポート16 竜の魔女 その10へ続く

## その10

レポート16 竜の魔女 その10

全身から靈力を放つ横島君の新しい姿。金の装飾が施された肩当てや、籠手を装着しているその姿は力強さに加え、一種の美しさを持っていた……

「美神さん……今の横島の靈力は……あのガープに匹敵していますね」

「ええ。間違いないわ」

複製とは言え最上級神魔に匹敵する靈力を放っている。それに横島君の身体に吸い込まれた15の光も気になる……眼魂と言うのはどこまで私達の常識を超えていくのだろうか……そう思うのと同時にまた見ていることしか出来ない事に苛立ちを感じる。師匠なのに何も出来ない、それは自分の不甲斐なさを突きつけられている様で情けなく、そして惨めな気持ちになる

「命！燃やすぜツ!!!」

「来い！お前の力を見せてみろツ！特異点！横島忠夫ツ!!!」

私達には見ていることしか出来ない、神魔の戦いが目の前で始まりを告げるのだった……

私の命を刈り取りに来る刃……それを紙一重で交わす。その鋭い剣筋と殺意に満ちた一撃は十分な脅威だった……

(本体でも危ないかもしれないな)

今の横島の力は複製の私と互角。そして更に気合が乗っている……それは十分に脅威と思える勢いを持っていた。だが魔法使いに近接を挑む、それは魔法潰しの基礎戦術……それが通用するのは低位の魔法使いまでの話だ

「つまらんで、横島忠夫」

指を鳴らす。それだけで魔力弾が複数形成され横島に殺到する、慌

てて横島が迎撃に入る。だが勢いに任せ間合いを詰めていたその足が止ると言う事は……私の魔法の詠唱を防ぐ事が出来ないと言う事だ

「そら防いで見せろ」

「！」

氷の散弾を再び発動させる。ジャンヌが居たから防げた攻撃……その姿が無い今。防げるはずが無い、そう思っていた……

(なんだ!?)

だが横島の突き出した右手に霊力が集まるのを見て、嫌な予感がした。計算が狂う……そんな嫌な予感は的中した。霊力が球体に形成される……それは緑色の眼魂だった。横島はそれを即座にベルトに押し込みレバーを引く

「変身！」

【カイガンー！ロビンフッド！ハローー！アローー！森で会おうツ!!】

散弾が形成されるまでの僅かな隙。本体ならタイムラグ無しだが、分身体ゆえのタイムラグ……それは横島にとって十分な隙だった……手にした剣も霊力で変化した弓矢へと変貌を遂げていた……

【ダイカイガンー！ロビンフッド！オメガドライブ！オメガストライクツ!!】

「はあああああアツ!!」

横島の姿が弓を引きながらぶれる。その姿は7体……散弾が放たれると同時に分身した横島の手から霊力の矢が放たれる、凄まじい衝撃音と共に氷の散弾と霊力の矢がぶつかりお互いに消滅していく

(しまった……)

こんな能力は想定外だった。砕け散った氷と砕けた霊力の矢で視界が奪われる

「変身ツ！」

【カイガンー！武蔵！決闘！ズバツと！超剣豪ツ!!】

霊力と氷の霧を突っ切って横島が飛び出してくる。だがその姿はまた変わっており、着物を纏った武者と言う姿をしていた

「おおおおおおツ!!」

(速い！)

勢いに任せた先ほどの一撃とは違う。計算され、回避する事も、防ぐ事も難しい嵐のような連続攻撃が放たれる……袈裟、逆袈裟、薙ぎ払い、突き……どれが一撃でも受ければそこから一気に押しつぶされる圧力を持った一撃……

(だが甘い)

その一撃は鋭く、そして早い。だが神魔決戦、魔界統一を前線で戦いきった私にとっては十分に対応可能な攻撃だった……両手に魔力を集め、それを駆使し攻撃を弾く

「くっ!!」

(ちっ……この程度か……)

苦しそうに振るわれる刃を迎撃し、内心舌打ちする。最初は驚かさされたが、足りない。殺意が、憎悪が足りない。これならばマタドールと戦った姿の方が圧倒的に上だろう、スペックは上昇していても横島自身の殺意が足りない上に……

(やはりか)

振るわれる刃を白羽取りの要領で受け止め、がら空きの腹に蹴りを叩き込む。鋭く、重い攻撃だが……それは横島の意味ではない。眼魂の意思だ、脅威である私に自動的に反応しているだけの攻撃……そこに横島の意思は無い。あのグレイトと言う黒い眼魂の出力に振り回されているだけである……これでは横島の力を推し量ると言う私の目的を達成する事は出来ない

(ならばやるだけだ)

横島の観察をして私が得た結論は横島は自分の痛みよりも他人の痛みにも過剰に反応する。それが大事な存在であればあるほどだ

「おおおおおッ!!」

振り下ろされた2刀を片手の魔力の剣で受け止め、鏢迫り合いの体勢になる。だがこれは私がそうしているだけだ、その気になればこんな振り回されているだけの剣など弾き飛ばすのは容易い

「私が崩壊するまで時間を稼げば良いなんて甘い考えをしているんじゃないだろうな」

複製体で魔神体になれば複製体は私の魂の出力に耐え切れず崩壊する。いまだ研究段階であるから仕方ない事だが、崩壊による決着など私からしても願い下げだ。ここまで時間と労力を掛けた作戦がそんなくならない事で終わるなど認めれる訳が無い……だが私に残された時間が僅かなのも事実……だからこそその短時間で出来る事は全て行う

「だからこそこんなのはどうだ？」

横島の目の前で拳を握り締める。私が地面に刻んだ魔法陣に再び光が灯り……

「つきやああああッ!!!」

その範囲の中にいた美神達の悲鳴が響き渡る。殺すつもりは無い、殺して連れ帰ると口にしたが殺してしまえばその霊力は消える。生かしたまま連れ帰るのが最大の目的だ。だから殺さない程度に調整した電撃で美神と蛭が悲鳴を上げて崩れ落ちる

「ガープウウウウウッ!!!」

「そうだ！怒れ！もつと憎めッ!!!」

私の名前を叫んだ横島の気配が変わった。顔に浮かんでいる瞳が黄色から真紅に染まり、今まで闇雲に振るわれていた攻撃が鋭く、そして容赦の無い物に変わっていく……そうだ、これだ。これが見たかったのだ

(これが横島忠夫の本質だ)

横島自身は優しく、そして本来なら敵対する種族同士の橋渡しとなりえる素質を持っている。だがその本質は違う、橋渡しになるのは孤独を恐れる心の現われ、そして横島は自分の痛みには耐えられるが、他人の痛みには耐えられない。それは自分が心を許した相手が消えてしまうことに対する恐怖心……つまり横島忠夫の本質。それは狂おしいまでの他人からの承認願望と、孤独を恐れる心だ

(良いぞ、良いぞ……)

私を生かしては自分の仲間が死ぬ。その恐怖を認識した横島の魂の出力が恐ろしいほどに上昇していく……しかも私が望んだとおり闇に向かつての上昇だ……

(そうだ！堕ちて来い！横島忠夫ツ!!)

横島の魂は人間にしては稀有な無色な魂。それは容易く黒にも、白にも染まる……殺意と憎悪は毒のように……水にたらしめた墨液の様に……横島の心を蝕む……横島を止める者はいない。このまま堕ちきつてしまえ……

「……つたく……おちおち……寝て……も……いられ……ない……じゃない……」

ガープも横島も気付かない所で、血反吐を吐きながら立ち上がる何者かの姿があるのだった……

【止める横島!!止れ!止るんだ!!!】

脳裏に心眼の制止の音が響くが、それを無視する。ガープ、こいつは駄目だ。生かしてはいけない、ここで殺さないと……消し去つてしまわないと……皆が傷つく、いや死んでしまうかもしれない。だからこいつはここで殺すんだ!!!

「アアアアアアアアツ!!!」

この時横島の頭の中から目の前のガープが複製である事実や、美神や蛍が意識を取り戻しかけているその光景すら視界に入らなかつた……ガープがいたら自分の世界が壊れてしまう。その事に囚われ思考が完全に停止してしまっていた、怒りと恐怖に身を任せガープに向かってガンガンブレードを振り下ろそうとした瞬間……

「これ……は憎悪によつて……磨かれた……我が……魂の……咆哮……! 吼え泣……てよ……我が憤怒ツ (ラ・グロンドメント・デュ・ヘイン) ツ!!!」

ガープと横島を分断する巨大な炎の壁が現れガープと横島を強引に引き離す……

「……これは……」

「……何やってんのよ……この……馬鹿ツ!!!」

突然現れた炎の壁に足が止った直後。横殴りの拳が顔面に叩き込まれる、だがそれは弱い力で殴った本人がよろめいていた……そして

俺を殴りつけた人物を見て俺は思わず叫んだ

「ジャンヌさん！う、動いたら「黙れッ!!」ッ!!」

血の気の失せた青白い顔。石床に血の跡があり体を引き摺ってここまで来たのが判る……目の下に隈があつて、口からは吐き出した血の跡……触れただけでも倒れそう……満身創痍なんて言葉なんて生温い……何時死んでもおかしくないそんな状態のジャンヌさんに俺は完全に気圧された……

「……あんたがッ……こつちに来てッ……どうするのよッ!!あんたは……こつちに来たらいけないッ!!」

パーカーの襟を掴んで文字通り血を吐くようにして叫ぶジャンヌさん

「あんたが……優しい……馬鹿だからッ……っうっ!!げほっ!げほっ!!」

咳き込んだジャンヌさんの口から赤黒い血液の塊が吐き出される。咳き込みながら倒れるジャンヌさんの身体に手を伸ばすが……それはジャンヌさん自身に振り払われた

「わ、私は……自分を……取り戻したッ!!……そんな!お前がッ!!こつちに来てどうするッ!!」

肩で息をしながら俺を見つめるジャンヌさんの瞳は激しい怒りの色が浮かんでいた……

「お前は……こつちに来るなッ!!……あんたは……あんたに……復讐者は……似合わないッ!!」

震える手でパーカーの襟を掴んだジャンヌさんが俺を自分の方に引き寄せる……その身体の何処にそんな力があつたのかと思うほどに強い力だった……

「あんたの敵はッ!!……私が……倒して……あげるから……ッ!!……お前はッ!!優しい……馬鹿で……いなさいよ……ッ!!」

「言いたい事はそれだけか?人形?」

見たことの無い優しい表情で笑うジャンヌさんの胸にガープの放った矢が突き刺さる。その光景を目の前で見て、再び目の前が真紅に染まり掛けるが……優しい馬鹿でいろと言うジャンヌさんの言葉

が脳裏に響く、殺せと駄目だと言う声が何度も何度も脳裏に響く……  
【落ち着け！横島！自分を保て!!】

心眼の声が響くが、殺せという声も駄目だと言う声もその両方が正しいように思えて……頭が変になりそうだった

「そら、どうした。憎いだろ？私を殺したいだろう……来い。それともお前は……自分を救ってくれた相手の仇を取りたいとも思えない薄情者なのか？」

ガープの挑発の声……それが挑発だと判っている。なのに沸きあがる怒りを抑えきれない……ツ拳を握り締めて立ち上がろうとした時……

『だから……駄目だって言ってるでしょうが……』

ジャンヌさんの声と共にその身体が弾け、目の前に純白の眼魂が現れた……

「はは。所詮は人形……その魂さえも紛い物か」

純白の眼魂は確かにジャンヌさんのイメージではない、けどどこれは間違いなくジャンヌさんの眼魂だ……それを両手で握り締める  
(ありがとうございます……ごさいます)

彼女がいたら俺は冷静になれた。そうで無ければガープの思い通りに良い様に操られていただろう……

「力を……貸してください」

【アーイツ！ガツチリミナー！ガツチリミナー！】

ベルトに純白の眼魂を押し込む、現れたパーカーゴーストはやはり白銀に輝くパーカーだった。それを見てガープが嘲笑う

「お前の知るジャンヌ・ダルクなど存在しない。あれは紛い物、存在などしないのだ!!」

違う、例えそうだとしても……俺にとつてのジャンヌ・ダルクは彼女しかない。俺は絶対に彼女を忘れない！

「変身ッ！」

【カイガン！ジャンヌ！駆けるは戦場！救国聖女ツ!!】

白いパーカーが装着されたその瞬間。ベルトから黒い炎の壁が飛び出しゆつくりと迫ってくる……不思議と恐怖は無かった。大丈夫



だという確信があった

【テンガン・ジャンヌ！振るえよ反旗ツ！竜の魔女ツ!!】

純白のパーカーが一瞬で闇のような黒いパーカーへと変化する。そしてガンガンブレードとトカゲデンワが合体し、霊力で出来た竜の紋章が刻まれた旗が目の前に現れる。それを片手で掴み俺を囲んでいる炎を弾き飛ばす

「行くぜガープツ!!!」

怒りの炎は確かにまだ俺の胸の中に燻っている。だが今までのような気が狂いそうになる激情ではない……もう怒りに身を任せ、暴れたりしない。ジャンヌさんが望んでくれたように……俺は優しい馬鹿でいよう。怒りに身を委ねたりしない、俺はジャンヌさんにそう誓うのだった……

魔法陣から放たれた電撃で意識は残っていたが、身体が痺れ、動く事も声を発する事も出来なかった。ガープが横島を挑発しているのも、ジャンヌが横島を正気に戻したのもただ見ている事しか出来なかった……

「は……ははははっ!!!偶像を現世に呼び戻したのか!!!はははははははッ!!!お前はどれだけ規格外の化け物だ!このガープが認めてやろう!!お前は真正銘の化け物だ!人間でありながら神の境界まで足を踏み入れてきたとッ!!!」

横島の力を見て狂ったように笑うガープ。横島が何をしたのか、見ていただけの私と美神さんには理解出来なかった……ただ白いパーカーが漆黒へと変化した……その瞬間を目の当たりにしただけだ。まだ痺れている身体を歯を食いしばり必死に起こす

「おおおおおッ!!」

炎を纏った霊力の旗……武器とは言いがたいそれが恐ろしい速度で縦横無尽に振るわれる。黒い線がガープに襲い掛かっているようにしか見えない

「はははッ!!良いぞ!良いぞ!!!もつとだ!もつと見せろ!お前の力の

底をツ!!」

追い詰められていると言うのにガープは楽しそうに笑い続ける。身体も崩壊し始めているというのにそんな事はどうでもいいと言わんばかりの態度だ

「……………つくう……………」

美神さんが苦悶の声を出しながらやつと身体を起こす。上半身を起こす事ができたが、まだ足は痺れていて動ける段階ではない……………ダメージを与えつつ、動きを奪う。それも私と美神さんが感電死しないように威力を調整した魔法……………その魔法の効果を見るだけでガープの脅威がどれほどの物なのかと思いき知らされる

「喰らえツ!!」

ガープが両腕を振り上げると燃えるXの文字が横島へと高速で迫る。

「効くかあツ!!」

ベルトにマウントしていた剣でその文字を切り裂き、恐ろしい勢いで間合いをつめ飛び膝蹴りをガープに叩き込む

「ぐっ……………だが調子に乗りすぎたな!」

ガープの腕が横島の肩を掴み、ガープの身体から恐ろしい電気が溢れ出す

「うーうわあああああ!!」

悲鳴と共に横島の身体が大きく弾き飛ばされる。壁に叩きつけられ、ゆっくりと崩れ落ちる

「……………その姿は……………攻撃力と瞬発力に特化する反面……………恐ろしいほどに脆いな」

「うっせえ……………」

ガープの言葉にうるさいと横島が叫び、ゆっくりと立ち上がるがその足元はおぼつかず。今にも倒れそうな位ふらふらしていた……………たった一撃のダメージとは思えない程に横島はダメージを受けていた。それはガープの言葉が真実と言う証だった……………

(防御を捨てた攻撃性能……………)

防御に使われるリソースを全て攻撃と移動速度に回したんだ……………

だからこそそのあの攻撃スピードと破壊力。反撃される前に倒す、圧倒的な破壊力で相手を押しつぶす。それがジャンヌ眼魂の能力なんだ……その事に気付いた時冷や汗が流れるのを感じた。ガープの攻撃力は並じやない、それを防御が低下している今横島が受けて無事でいられる姿が想像出来なかった……

「……チ……ジカン……ガ……」

饒舌に喋っていたガープの身体が急激に崩れ、その言葉も途切れ途切れの片言になる。複製体がついにガープの力に耐え切れなくなつたのだ

「……コレデ……オワランゾ……オマエのチカラノ……ソコヲ……マダ……ミテ……ナイ!!」

右腕が崩壊し、左腕も崩壊していると言うのにガープは左腕から魔力の刃を伸ばし。溶けている翼を大きく広げる……最後の一撃に出ようとしているのは明らかだった

「俺もこのままお前を逃がすつもりは無い!」

【ダイカイガン!ジャンヌ!オメガドライブ!】

横島の手に行っている剣から漆黒の炎が溢れ出す……お互いに最後の一撃を繰り出そうとしているが判り、両手を組み祈る。横島が無事に帰ってくるようにと……それしか出来ない自分が情けなくて、みつともなくて……でもそれしか出来ないから……

「これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮!」

「ガッ!!!」

飛び立とうとしていたガープよりも先に横島の技が発動した。地面を走る漆黒の炎にガープが包まれ、そして地面から突き出した槍がガープの身体を完全に拘束する

「吼え立てよ我が憤怒ッ (ラ・グロンドメント・デュ・ヘイン) ツ!!!」

飛び上がった横島の身体が漆黒の炎に包まれ、流星のような一撃が崩壊しつつあるガープの上半身を跡形も無く消し飛ばすのだった……

城の床を砕きながら着地する。地面を滑った部分が煤け、先ほどの蹴りの火力の凄まじさを物語っている

「くつくくく……見たぞ……貴様の力……ははは!!ははははつはははっ!!!」

複製だから倒してもガープは消えない、狂ったような笑い声が響き……その笑い声が徐々に遠くなっていく。完全にその声が聞こえなくなった時……ベルトからオヤスマミーと言う声が響く

「うっ……」

急に身体から力が抜けた。膝を着いて荒い呼吸を必死に整える……心臓が恐ろしいほどに脈打つのが判る

【霊力の相性が悪かったんだ】

「はは……そうだとしても……俺は構わない」

俺はあの人に救われたから、例えジャンヌさんの霊力が俺との相性が悪いとしても……俺は使うだろう。俺は……味方だって約束したから……絶対にジャンヌさんを裏切らないって約束したから……震える足に活を入れて立ち上がる

「横島。大丈夫!意識はハッキリしてる!?!気分は大丈夫!?!」

蛍と美神さんがガープの電撃の痺れから回復したのか、駆け寄ってくるのが見える。2人が無事なのに安堵していると、手にしたジャンヌ眼魂から光が溢れる……

「ジャンヌさん……」

半透明のジャンヌさんの姿が目の前にあった。ジャンヌさんは俺と美神さん達を見て小さく笑い

『ありがとう横島。お前の話は楽しかったわ』

作られた、歪められた存在で……偽物だったけど……私は少しでも自分の意思で生きたわと笑う

「違う!ジャンヌさんは……偽者なんかじゃない!」

手を伸ばすが触れることが出来ない、幽霊なのに何で……ジャンヌさんは仕方ないと笑い

『だって私は作られた幽霊よ。普通じゃないの……このまま天国にも地獄にも行けずに消えるでしょう』

「そんなッ！」

ジャンヌさんが居てくれたからガープを退ける事ができた。それなのに、どうして……振り返り美神さんを見るが、美神さんは悲痛そうに首を横に振り

「上位の神魔は魂を操り存在を歪める。そうならば私達に出来る事はないわ……ただ見送るだけよ」

助けて貰ったのに何も出来ない……それが悲しくて空しくて……言葉に出来ない感情が胸の中を埋め尽くす

『良いの、楽しい夢を見たんだから……夢はいつか終わる物。それが今』

余りに時間が短かったけどねと笑うジャンヌさんの笑顔は柔らかく、そして優しい笑顔で

『でも夢は何時か続きが見れるかもしれないでしょう？だから……まだどこかで会いましょう』

さよならではなく、またねと笑うジャンヌさんに俺はいつの間にか流れていた涙をGジャンの袖で拭い

「また……どこかで」

『ええ。またね、あんたの事……そんなに嫌いじゃなかったわよ』

最後にもう1度笑ったジャンヌさんの身体は光の粒子となり、弾けて消えた……音を立てて落ちた旗と白い眼魂……それだけがジャンヌさんが俺達の目の前に居たと証だった……

「横島。ごめんね、何も出来なくて」

「良い、良いんだ。またって約束したから……」

蛍や美神さんは悪くない、俺達よりも遥かに強いガープ相手では何も出来なくて当然……眼魂がなければ俺だって何も出来ないのだから……

「ただ……俺は……ジャンヌさんに……色々見せたかった……」

俺の話を聞いて、興味深そうに顔を変える姿は歳相応の少女にしか見えなくて……怖い人って言うよりも、俺は可愛い人って思っ……「優しい人だったんだ……悪い人なんか……じゃ……無かったんだ……」

「うん……うん……」

黙って話を聞いてくれる蛍。もう頭の中がぐちゃぐちゃで何も判らない……悲しい、それしか頭に浮かばない……

「なんで……どうして……こんな事になるんだろう……」

もしももしもガーブが居なければ……難しいかもしれないけど、ジャンヌさんも俺達の時代に連れて帰ることが出来たかもしれない。彼女の知らない物を色々と見せれるかもしれない……そんな幻想を胸に抱いた。だけど……それはもう叶わない夢で……

「ああ……っ！うああああ……ッ!!!」

地面に落ちた旗を見て、もう耐える事が出来なかった……俺は涙を流しながらその場に蹲る。蛍が何も言わずに頭を抱いてくれたけど……それでも悲しくて、辛くて……蛍の華奢な身体を抱きしめて涙を流し続けるのだった……

レポート16 竜の魔女 その1-1へ続く

## その11

レポート16 竜の魔女 その11

戦闘の疲れとジャンヌの消滅と言う衝撃的な光景に横島君は泣き疲れたのか、気絶するように深い眠りに落ちてしまった

「とりあえず、城から出ましょう。あれだけの戦闘ですもの……いつ倒壊してもおかしくないわ」

「……そうですね」

複雑な表情で立ち上がる蛍ちゃん。横島君があそこまで泣き崩れた、それが敵であったはずのジャンヌだったからのこの複雑な表情だろう

「色々思うことはあると思うが早く出よう。何が起きるか判らない、調査に戻るにしろ1度準備を整える時間が必要だ」

意識を取り戻したドクターカオスが気絶している横島君を背負い、早く出ようと声を掛けてくる

「判ってるわ。蛍ちゃん、行きましょう」

「……っはい」

何か考え込んでいるような素振りを見せる蛍ちゃんの背中を押して、ロボロボのガーゴイル製造工場から出ようとした時

(あれは……)

ジャンヌが消えてしまったのに唯一残っていた黒い旗。今にも崩れ落ちそうな床の上に落ちているのを見て、私は慌てて駆け寄りその旗を手に城を後にするのだった……

城を脱出した所で隠れていたマリア姫達。それがとてもありがたかった特にうりぼーの存在が大きかった。私達の疲労具合を見ると即座に分裂し、巨大化。そして私達を乗せて森の中の砦まで引き返してくれたのだ……

「城を取り返し、そして父を助けくれた事。深く感謝する、ありがとう」

一晩明けたが、まだ靈力の消耗でフラフラしていたがマリア姫の感謝の言葉になんと返事をしたら良いのか？私も美神さんも悩んでしまった。全力は尽くした、だが今回もガープを退けたのは横島であり。私達は目立った活躍をしていない、それが胸に引っ掛かりどうしても砂に返事をする事が出来なかったのだ

「美神も蛸もまだ考えている事がある。感謝の言葉を口にするのは少し早いですよ、マリア姫」

「そ、そうか……そうだな……元の時代に戻るといふ事もあつたか……」

返事に困っている私達を見てドクターカオスが助け舟を出してくれた。確かにもとの時代に戻る手掛かりを見つける必要がある……マリア姫もそれもそうだなと頷いてくれた

「私達は城の調査を始めます。早くマリア姫が城に戻れるように尽力しますが、最悪の場合も考えてください」

最悪の場合……それは城の放棄だろう。マリア姫は明らかに気落ちした様子だが、判っていると返事を返し

「まだまだ苦勞をかけますが、どうかよろしくお願いします」

私達に向かって深く頭を下げるのだった……意識をまだ取り戻さない父親の事もあるのに、そんな弱さを見せないマリア姫に私はこの人はなんと強い女性なのだろうと思うのだった……

「ぴぎいーぷぎー♪」

「あ、美神さん、蛸。おかえりなさい」

大事を取って部屋で休んでいるようにと美神さんに言われていた横島だが、うりぼーの前足を持つてうりぼーを二足歩行させていた……うりぼーがめちやくちや楽しそうだけど……あれ大丈夫なのかしら？

「今から城の調査に向かうわ。マリア、横島君の調子は？」

「全く問題ありません。恐らく、美神さんや蛸さんよりも絶好調だと思われれます」

変身していたの？と言う疑問は残るが、マリアの診察結果なら嘘は無いだろう。それにジツとさせているとジャンヌのことばかりを



考えて悪循環になるかもしれない

「じゃあ横島君も同行してくれる？無理そうなら無理って正直に言うてくれたら良いわ」

美神さんの問いかけに行きますと即答する横島、その姿は妙に切羽詰っているように思えた……そんなことを考えながら準備を整えている横島の背中を見つめていると、ふと脳裏にジャンヌの姿が浮かんだ

(私に似てたな……)

姿の事ではない、その在り方が、その死が……その存在が実に私に似ていたと思う。消えてしまわなければ案外気があつたんじやないか？と思うほどにだ……

「横島君。ジャンヌの旗だけど……マリア様様が恩人の旗ってことで大事に保管してくれるって」

「……そうですね……良かった。流石に俺の家には飾れないですからね」

確かに竜の魔女としては引き受ける事は出来ないが、恩人のジャンヌとしてならばその遺品。我が名に置いて預かろうと約束してくれたマ

リア様。最悪の場合持ち帰るつもりだったけど、ドクターカオスもいるしきつと現代まで無事に保管されると思う

「あの旗さえ残っていれば、また会えるかもしれないわ」

英霊召喚の触媒として、本人の遺品ほど確かな物はない。それに眼魂もきつと強力な触媒になると思うわと励ますように言う美神さん「そうですね。また会おうって約束しましたから……また会えるって言う希望になりますよね」

寂しそうに笑う横島の姿に短い間だが、ジャンヌの存在が横島にとつととても大きな存在だったのだと判り。胸が痛んだ……そんな事を思

ってはいけなないと判っているのに私とどっちが大事つと聞いてしまいたいと思う自分が居て

「じゃあ行きましよう。早く現代に戻る術が見つかるといいわね」

このまま黙っているのが辛く、横島と美神さんに声を掛け、城に向かって出発するのだった……

(なんとも複雑な……こんなものばかりね)

どうして横島君の周りの恋愛沙汰ってこんなに重いものばかりなのかしら？横島と蛍の様子を見ていた美神は疲れたように深く溜息を吐くのだった……

マリア姫様の城に戻って来た俺がどうしても気になっていたのは、銀のワイバーンがくれた卵の事だった。2階の大広間に置いてあるその卵を何とかして回収したいと思ったのだ

「ふむ、悪魔などの気配はなしか……となれば、私と美神と蛍でゴーレム製造プラントの搜索。マリアとタママ達と横島で1階、2階の搜索とするほうがいいか」

カオスのじーさんが何かの機械を操作しながらチーム分けの提案をする

「戦力をそんなに片方に集めるの？」

「1階や2階は大して拠点として改造されているわけじゃない。改造されているのは玉座の間周辺だけだ。横島、玉座の間には足を踏み入れるなよ？搜索は1階と2階だけだ」

カオスのじーさんの言葉に判ったと返事を返す。2階の大広間に行きたかったので、地下の搜索に割り振られなくて良かったと安堵する

「製造プラントの搜索が終わったら、2階の大広間に向かう。そこで合流して玉座の搜索を行おう、美神も蛍も異論は無いな？」

美神さんも蛍も危険な地下より安全な上の階層の方が良いと判断したのか、それで大丈夫と返事を返す。そして俺とマリアとタママ達は1階、2階の部屋の搜索、美神さんと蛍とカオスのじーさんは地下へと判れ、マリア姫様の城の搜索を始めるのだった……

「横島さん。こちらは大丈夫です、どうぞ」

「ありがとう、マリア」

銃を手に通路などを警戒しているマリアが大丈夫ですと声を掛けてから、通路を進む。うりぼーはやや大きくなって匂いを嗅ぎながら歩いている。敵の匂いを探しているのだろう

「……まあ製造プラントが潰れてるから悪魔やゴーレムの追加は無いと思うけど……警戒に警戒をすることに越した事はないわよ」

俺の隣にぴったりついてるタマモ。別にそこまでしてくれなくても大丈夫だと思うのだが……

【いや、安心するには早い。後遺症がないのが心配なんだ】

「……ま、まあ今までのことを考えればそうかなあ

変身すれば今まで何らかの後遺症が出ていた。それが無いから心配なんだという心眼そこまで言われると俺も強く出ることが出来ず、2人に護られながら城の搜索を続けるのだった……

「心眼。ワイバーンの姿が無いのは何でだ？」

ゴーレムやガーゴイルの残骸はあるのにワイバーンの姿はない。なんでだろうと思ひ尋ねる

【恐らくジャンヌが召喚した存在だからだろう、召喚主が消えれば召喚獣は消える】

消える……その言葉に俺が貰った卵も消えてしまったんじゃないか？と言う不安が募る。

「1階は何も無さそうだから2階へ行こう」

卵が心配で2階へ行こうとタマモとマリアに提案する。2人とも今まで調べて何も無かったから、俺の意見を聞いてくれ3人と2匹で2階へ続く階段へ足を向けた

「ここが横島が閉じ込められていた大広間か……思ったより広いわね」

「ですね。敵の気配もないですし、散会して調べましょう」

ワイバーンの住処となっていたので荒れ果てている大広間を見て、タマモとマリアが散会して調べようと言った。これはチャンスだと思ひ

「じゃあ俺はあっちを調べる。うりぼー、チビ、行こう」

「みむうー！」

「ぴぎゅー」

元氣良く返事を返すチビとうりぼーと共に大穴が開いている場所へと走るのだった……

「良いんですか？タマモさん」

「良いんじゃない？横島が何か気にしてるみたいだし、あんまりそわそわされると心配でしようがないわ」

大広間になにかあり、それを横島が回収しようとしている。それが何か判らないが、横島のことを尊重したいタマモとマリアは横島を止める事無く横島を送り出していったのだった……

「あつた……よかつたあ……」

ジャンヌさんもワイバーン達も消えてしまった。だけどあの卵は俺がいた場所に確かに存在していた……卵に駆け寄り抱き抱える。触れる事が出来る……俺はその場に座り込んで卵を胸の中にしっかりと抱え込み

「ちちゃんと孵化させてやるからな……」

美神さんや蛍が怒るかもしれないが、それでも俺はこの卵を……ドラゴンの卵を孵化させると強く決意した。このドラゴンの卵が孵化すればジャンヌさんにまた会えるかもしれないという希望になるから……

「何も言わないのか？」

【言えんよ。私もジャンヌとあのドラゴンは嫌いじゃなかった。お前を護ろうとしてくれたからな】

心眼の言葉にありがとうと呟き、あらかじめタオルや古い布などを詰め込んだリュックの中に卵を丁寧に入れるのだった……

「横島君。何かあつた？」

美神さんの俺の名前を呼ぶ声にびくつとし、振り返るとカオスのじーさんと美神さんと蛍の姿があり

「いえ、特に何も無かつたですよ？」

自分でも声が震えてないことに安堵しつつ返事をする、3人の視線が一瞬鋭くなるが……

「ま、それなら良いわ。これから玉座の間の搜索を始めるから移動す

るわよ」

「地下は特に何も無かったし、何かあるとすれば王座の間だと思っわ」  
美神さんと蛍の言葉に判りましたと返事を返し、俺はリュックを丁寧に背負いなおし、美神さん達の後を追って歩き出すのだった……  
(またなんか拾ってる)

なお美神と蛍は横島が何かを隠しているのに気付いていたが、出発前の切羽詰った雰囲気が無くなっていたので、仕方ないと黙認し、横島が自分から言い出すのを待つ事にするのだった……

先ほどから感じていた頭痛が強まって来た……それに伴い記憶が書き換えられていく不快感が強くなる

「それで？過去で横島達に会っているとはどういう事ですか？」

「そのまんまじゃよ。横島達はワシが若い時代にタイムスリップして来ていたと言うことじゃよ」

目の前で殺気むき出しの神宮寺に苦笑する。この少女の横島に対する執着心は凄まじい物がある、これは最早執念などに近いかもしれない

「……それで横島達は戻ってくるのか？」

「戻ってくるとも、ワシはちゃんと送り返した」

横島達とマリア姫様の城の点検を行い、問題が無い事が判ってから美神達をちゃんと現代へ送り返した。確か、横島と美神から受け取った

ブラドール伯爵への手紙を持って1度あいつの所にも戻ったらしい……記憶の書き換えなので確信はないが  
(後でまたすり合わせに行くかの)

生き証人はワシとブラドールだけ、また記憶のすり合わせに行かないと行かんなど思いながら、案ずる事はないと言う

「もう直ぐ帰って来るじゃろ？」

おキヌが用意してくれたお茶を啜っていると、黒いワームホールが現れる。とつさに身構える神宮寺達だが

「うりぼー！がんばれー！あと少しだ！」

「ぴ、ぴぎゅううッ!!」

ワームホールの奥から聞こえてきた横島とうりぼーの鳴き声に警戒を緩める。しかし何が起きているんじゃないかと見つめていると

「ぶっぎいいいいッ!!」

うりぼーが何かを啜えてそれを引っ張っていたのだと判った。うりぼーとうりぼーが引っ張っていた台車の上の横島達が姿を見せるとワームホールが跡形もなく消え去った……

「うりぼー！お疲れ様！良く頑張ったなあ！」

「ぴぎー……」

台車から飛び降りて、うりぼーの顔辺りにしやがみ込み、頑張った頑張ったと頭を撫でる姿は余りに自然体で、一瞬硬直した神宮寺達が再起動するのに十分な姿だった

「横島、良かった。無事だったのですね」

「……横島。良かった……お帰り」

【横島さーん！おかえりなさいいいいい!!】

「わわわ！ちよつと待って！ちよつと待って！リュック！リュックを下ろさせてー！」

横島の姿を見るなり駆け寄る神宮寺とシズク、そしておキヌの姿。そしてリュックを下ろさせてくれと叫ぶ横島に苦笑しながら、台車から立ち上がるうとしない美神と蛍に足を向ける

「大丈夫じゃったか？」

「酷い目にあつたわよ……」

台車の上で疲れた様子の美神達。その後には大量の霊具が詰め込まれている、それは現代では作る事が出来ない稀少な霊具の数々……過去の自分がこれからの美神達の戦いの事を考えて持たせたのだろう。その配慮に感謝しているとマリアが台車から降りてきて

「ドクターカオス。これを……」

「これ……は」

マリアが差し出したのはマリア姫様が死ぬ前に返した、彼女の騎士であるという証明の指輪とそれと対になるマリア姫の指輪だった

……

「マリア姫様から伝言です。例え貴方がどこにいようと私の心は貴方と共に、そして貴方はどこにいても私の騎士様です……っ」と

マリアから差し出された指輪を両手で握り締める。それは過去ではマリア姫の葬儀と共に消滅した物……ワシはもう会う事は出来ないから……ワシがそこにいたという証明としてマリア姫様の葬儀と共に埋葬して欲しいと彼女の子孫に渡した物……

「ありがとう、マリア」

歴史改変の不快感はこの指輪で消えてしまった。その指輪を大事に胸ポケットにしまう……まさかこんなサプライズがあるなんて思っても居なかった……大事に、大事に持っていよう。彼女の存在を忘れないために

「姉さん……良かった……無事で」

「大丈夫ですよ、テレサ。心配してくれてありがとう」

マリアに抱きつくテレサの背中を撫でるマリア。色々と記憶と異なる事は起きていたが、無事に全員戻って来て良かったと安堵する

「ん？んん？……」

横島達が消える前に拾ってきた老紳士の幽霊がゆくりと身体を起こす。その深い青色の瞳に思わず寒気を感じた……危険な存在だとワシの本能が目の中の幽霊の危険性を感じ取っていた

【はて？美しいお嬢様たちがこんな……ここは天国なのカナ？】

やや訛りのあるのある日本語を口にした幽霊は軟派な事を口にした後に

【所で誰か私の名前を知ってる人はいないカナ？私は……私の名前……いや、そもそも私が誰か知らないカナ？】

胡散臭い笑顔を浮かべ、私の名前を知らないか？と尋ねてくる幽霊

……いや英霊

「どうもまた面倒ごとが始まりそうじゃな？」

「……過去から戻ってきたばかりなのに……」

がつくりと肩を落とす美神にどんまいと声を掛け、ロマンスグレーの幽霊に警戒の視線を向けるが……

「爺さん、名前判らないのか？大変だな」

「みむーみみーむ？」

「びぎー！」

【そうなのだよ、ボーイ】

警戒心ゼロで、うりぼーとチビ、そして眠っているタマモを抱き抱えながら話しかける横島に事務所の中に居る全員が深く溜息を吐くのだった……



## 別件リポート

別件リポート 変わる現代

横島達が無事に現代に帰ってきた翌日。ワシはいつの間にか郵便受けに入れられていた美しい装飾が施されていた封筒を手に、唐巢の教会を訪れていた

「ドクターカオス。いらっしやい、どうかしましたか？」

「ブラドローは居るかの？ 話に来たんじゃが？」

ワシを出迎えてくれた唐巢にブラドローはいるか？と尋ねると人のいい笑みで笑い

「居ますよ、今から私はピート君とシルフィー君を連れて除霊に出ますのでゆっくりして行つて下さい」

「うむ、おぬし達も気をつけてな」

最近何があるか判らんからなと唐巢達に声を掛け、ブラドローの部屋へ向かう

「カオスか……横島達はやったのだな」

その一言で理解した。ブラドローもまた記憶の書き換えが行われたのだと……

「どうじゃった？ お前の変えて欲しいと願った過去は変わったか？」

ブラドローと向かい合うように椅子に腰掛ける。ブラドローは少し目を伏せてから

「変わった。ソフィアとノアの墓がブラドロー島に作られた……美しい花々に囲まれた……それはそれは……素晴らしい物だった」

我が望んで止まなかった物が……手に入ったよと搾り出すようにブラドローは言った

「ワシもじゃなあ……横島には返しきれん恩が出来てしまった」

今指に嵌めているマリア姫の指輪。そして届けられた封筒には「マリア7世」の文字……内容はマリア1世の命日に行われる鎮魂祭にワシも参加して欲しいと言う旨の手紙だった

「ワシの記憶ではマリア姫は独身で死んだんじゃがな……」

マリア姫である血統は途絶えた。だが今もなおその血脈が続いている事に……そしてワシを恩人として迎え入れてくれる。ワシに帰るべき場所が出来たと言うことだった……

「シルフェニアが横島を想う理由も判った。帰るまでの間横島は2人の面倒を見てくれていたようだしな」

「ああ。直ぐに帰る準備が出来ないとかで1度お前の所に戻ったの……」

儀式を行う必要がある、その準備と材料を集める為にブラドールの所に戻ったのだ

「死んだ初恋の人に似てると言っていたが、まさかの本人だぞ?」  
「まさか時間移動しているなんて思うまい」

血を吸って吸血鬼にして永遠に一緒にいたいと思うシルフェニアの気持ちも判らないわけではないが、そうなる也确实に殺し合いが発生しかねないのでブラドールに注意をしておく

「牙を封印して置けよ?あの子は活動力がありすぎる」

「判ってる。シルフェニアはソフィアにそっくりだからな、性格なんて特に似ている」

……あの上品なソフィア姫とあの暴走特急が?ワシが首を傾げると、ブラドールは懐かしいと言うように窓の外に視線を向け

「我はいきなり頭を殴られて連れ去られたのだ」

「あのお姫様はなにをやったんだ?」

あのお虫も殺せないですよ?と言う人畜無害そうな顔で何をしました?あのお姫様は

「目覚めて直ぐ、一目惚れでしたと言われ困惑した物だ」

「誰だって困惑するぞ」

殴られて、拉致されて、一目ぼれと言われて困惑しない人間など存在しないと思う

「だが我もときめいたのも事実だった」

「何故そこでときめいた!?!」

普通は警戒するだろ!?!と言うとブラドールは笑いながら

「我を昏倒させる人間がいるのだと思うとな……人間も悪くないと

思った」

……星の抑止力であるはずの始祖の吸血鬼が何を言っていると思っただが、その結果子供を授かっているのだから、相性自体は悪くなかったのだろうか……ただシルフェニア以上の暴走特急だったのは予想外だったか……

「横島が記憶を失っている英霊を連れて帰ってきた。お前も今度見にきてくれないか？」

「英霊か……真名が判らぬと敵か味方も判断が付かないな。判った、我也見に行こう」

あの英霊はワシの本能的に危険だと感じていた。気のせいかもしれないが、どこかで会った気がしなくもないのだ……

「ブラドール島から戻ったら一度横島の家に寄ろう」

「戻るのか？」

このタイミングで？と尋ねるとブラドールはすまないと頭を下げ

「記憶だけではない、目で見たいのだ。ノアとソフィアの墓を……我侂だとは判っている。だが許してはくれないか？」

「許すも何もないだろう、行って来い」

そう言われ止める権利を持つ人間など存在しない。失った筈の物が手元に帰ってきた……物言わぬ骸だが会いたいと思うのは当然の事だろう

「出来るだけ早く戻る。ピエトロとシルフェニアは残して行く」

「連れて帰っても良いんだぞ？」

戦力は減るが、それでも家族で墓参りの方がいいんじゃないのか？と尋ねるとブラドールは小さく笑い

「命日なら連れて帰るが、今回は私の確認だ。連れて行くわけにも行くまい」

2人が妙な違和感を感じるだろうか？と笑ったブラドールは立ち上がり

「これを持って帰るといい、最近シルフェニアがもってきた物だが……お前なら顔が広いから確認が取れるだろう」

折られたまれたチラシをワシに押し付け、考えたい事があると言っ

て部屋を追い出すブラドー。それは自分の弱い所見せたくないという行動に思えたので、ワシは何も言わず唐巢の教会を後にし、ブラドーに渡されたチラシを開いた

「……………これは」

そこにはまだ大分先の話になるが、古代ヨーロッパ展としてマリア7世から借り受けた品として、竜の紋章が刻まれた旗が日本に来日にする。そしてその旗は国宝級の品であり、閲覧者に制限が掛かると記されていた

「横島を応募しておくかの」

抽選だから選ばれる確率はそう高くないが、横島の幸運ならばその僅かな可能性を引き寄せるかもしれない。ワシはそんなことを考えながら、自宅へと足を向けるのだった……………なんせあの謎の英霊の正体の特定もしなければならぬし、過去のワシが現代に送ってきた霊具のメンテナンスもある……………やる事は恐ろしいほどに多いのだから時間を無駄にしている場合ではないのだから

「これは暫く忙しくなりそうじゃわい」

過去では最適だったかもしれない霊具だが、この時代では使えないと言うものもある。だがこの時代では手に入らない、貴重な材料を使っているものもある。

「ガープに対する切り札になれば良いが……………」

せめてあやつが常に展開している障壁。それを突破出来るだけの武器になってくれれば良いが……………ワシはそんなことを考えながら、美神達から預かった霊具の改造案を考えながらその場を後にするのだった……………

ヴァンパイヤミストから生身の体に戻り、花を踏まないように気を付け着地する

「あれか……………」

遠くに見える2つの墓標……………私の記憶では何もない海に面した花畑だったんだがな……………まさか横島の特異点としての能力は物体にま

で干渉するのかと驚きながら墓標へ足を向ける。咲き乱れる色取り取りの花の香り、風に乗って空を舞う花びら……それは月の光に照らされているのもあり、幻想的な美しさを持っていた

「ノア……それにソフィア……」

白く美しい石に刻まれたノアとソフィアの名前。その墓標には汚れ一つなく、ここに来る前に城に寄ったのだが、執事の事が嘘ではなかったという証拠だった……偉大なる君主ノア様と慈愛の姫ソフィア様の墓標は常に汚れ一つない状態にしてあるという言葉は……

「これも全て横島のおかげなのだ。あのどこまでも馬鹿なお人よしのな」

2人の墓標の前に座り込み、城から持ち出したワイン……我とソフィアが結婚した年に作られたワインの栓を開ける

「我は横島に底知れぬ借りが出来てしまった」

過去でソフィアの命を救ってくれた。そしてそのおかげで我には数多の思い出が生まれた……それは遠い昔の記憶なのに、決して色褪せない美しい思い出となった。本来は罪人として追われ、決別することも出来ず。何故ノアがそんな暴挙に出たのかと思ひ悩み続けた1世紀……死別と言うのは代わらないが、それでも我はノアと和解する事が出来。その影に居た存在の事も知った

「我はあいつらを、ノア……お前を歪めたガープ達を許しはしない」

我は錆付いている。それは自覚しているのだ、本来の役割を放棄し、ソフィアと共にあることを望み。そして子を為した……それは本来の調停者たる私の務めではない

「我は弱くなった。弱くなってしまったのだ……」

本当はソフィア、お前が背後によってくるのを感じていた。お前の一撃など避ける事など容易かった……だがその深い蒼い瞳に我は魅入られてしまったのだ

「ノア。お前に与えられた知恵もそうだ……本当なら我には必要ないものだ」

貴族としての知恵など、高貴なる者の矜持など我には関係のない物だった。だがそれでも熱心に教えてくれるお前に恩を感じた、永遠の

孤独を生きるはずの我が得た一時の安らぎ……我はそれを心地よい  
と思つてしまつたのだ

「だが我はあの時よりも弱くなつたが、それゆえに今の我はあの時よ  
りも強い」

使命だけに生きていた我は強かつただろう。だがそれはガープ達  
と同じ強さだ、全ての者を見下し自分だけが絶対的な強者とした張り  
ぼての強さだ

「我には大事な物が出来た」

本来は得ることが出来なかつたソフィアとの楽しい思い出、愛しい  
息子と娘……シルフェニアのほうは少し暴走しがちで困るが大切な  
娘である事は間違いない

「勝つ強さではない、護るための強さを我は手にしたよ」

破壊し殺戮するだけの力ではない。護り慈しむ力を我は手にした  
……それは壊す為だけの力よりも遥かに強い力だ。栓を開けたワイ  
ンを煽り、残りをノアとソフィアの墓標に掛ける

「我は勝つ、お前達を侮辱したガープ達を何をしても倒す。無論我も  
死ぬつもりなどない」

必ず生きて勝ち、再びお前達の前に来る。それを心に誓う

「いや、その前にピエトロとシルフェニアと墓参りに来るか」

思いつきで行動してしまつたなと苦笑する。だがそれすらもきつ  
と我らしいとソフィアとノアなら笑ってくれるだろう、どうしても我  
は2人の前では孤独に生きていた時の自分が表に出てしまうから  
……

「ではな、ソフィア、ノア。今度はピエトロとシルフェニアと共に来る  
よ」

マントを翻し、我はその場を後にしようとした時……

『気をつけて』

『負けるなよ』

背後から聞こえてきた声に咄嗟に振り返る。だがそこに霊の姿は  
勿論ない……だが確かに我はソフィアとノアの声を聞いた

「ありがとう」

その言葉があれば、我は進んでいける。どれほどの茨の道であったとしても……我は進み続ける事が出来る。胸の前で拳を握り締め、ヴァンパイヤミストとなりその場から消えて行くのだった……

別件リポート 明けの明星へ続く

## 別件リポート

別件リポート 明けの明星

目の前に倒れ伏す何十人と言う神族と魔族。横島が魔人の末席に座る可能性があると言う事と歴史改変を為したと言う事で、横島を危険視し排除しようとした愚か者達だ

「ベルゼブル。何故竜神王とオーディンはまともに部下の手綱も取れないのだろうか」

しっかりと部下の手綱を握れといったのにこの有様だ。私の背後に控えているベルゼブルにそう問いかける

「反デタントの反乱分子ではないでしょうか？もしくはアスモデウス一派の持つ狂神石とやらでは？」

反デタントにしろ、狂神石にしろ……面倒な事だよ。私は背伸びをしながら

「1度アスモデウスの所に行ってもいいけどね。お茶でもしにいこうかな」

「ご冗談でもおやめください」

本気なんだけどね。世界さえ滅びないのならば、正直神魔混成軍も、アスモデウス達も私にとつては暇つぶしに等しい。

「ベルゼブル、そののを竜神王達に預けて来てくれ」

「……またどこかに消えるとかしないくれますか？」

ベルゼブルの問いかけにさあ？と返事を返す。じゃあ行きませんかと言うベルゼブルに傘を閉じて、それをバットののように振り回しながら

「気絶させられて半裸で横島の元に転移させられるか、それとも届けるかどっちが良い？」

届けてきます！と叫んで姿を消すベルゼブル。その姿にベルゼブルはやはりそこそこ横島を気に入っていると確信する、人間に半裸を見られた所でなんとも思はずも無いベルゼブルが赤面して逃げたという事が面白くて仕方ない



「もう少し横島に接触するように命じるかなあ」

今みたいに距離を取って監視ではやはりいざと言う時に遅れるだろう。現にそれでだいそうじよう相手に横島を死なせると言う失態をベルゼブルは起こしているのだから……なお慌ててオーディンの所に向かっているベルゼブルはと言うと……

「冗談じゃない！なんで私が半裸であいつの所に転送させられないといけないんだ!!」

そこそこ会う顔見知りと言う立ち居地になりつつある今、そんな事になったら話をするのは愚か顔を見合わせるのも気まずい！ルイ様の悪ふざけで私が積み上げてきた物が全部無くなる！と言う恋愛問題などではなく、至極当然な理由だったりする……

「さてと、アスモデウス。態々出張ってきて私に何か話かな？」

砕いた岩の上に腰掛け、振り返る事無く背後に立つアスモデウスの名を呼ぶ

「気付いていたのか」

「当たり前だろう？君達のアジトの場所だって私は全部把握しているよ」

まあそれをリークしても面白みが無いから何も言わないけどねと付け加える

「相変わらず周りを振り回して面白いか？」

「面白いね。特にベルゼブルとルキフグスを泣かせるのは面白い」

直属の部下だからなんでも出来る。そもそもあの2人に私に歯向かう勇氣は無い、ベルゼブルだけじゃなくてルキフグスも横島の所に送り込んで面白いかもしれない。ルキフグスの人間の姿は長身の美人だしな

「何故我の息の掛かった者を全て潰した？」

「横島を害そうとしたから」

ただそれだけ、アスモデウス一派とかは正直どうでもいい。ただ横島はこれからもっと面白い事になる。それなのに、こんな早々に死なれては面白くないのだ。横島は生きていてだけで人間も魔族と魔族も全てを引き込み大騒動を起こす。こんなタイピングで死なれて

は困る

「これからあいつは面白くなるんだよ。私が怖くて、分身で来る臆病者は消え失せろ！」

私の一喝で掻き消えるアスモデウスの身体。意識だけの分身で来るほどに私を恐れている、そんな臆病者とは話す価値もない。態々出てきたのだから何か用件があつただらうが……

「まあ別にいいだろう」

今の最高指導者はサタンとキリスト。私が口を挟む問題じゃない、もう私は隠居した身だ。面白おかしく天界も魔界も引つ掻き回すくらいで丁度いい

「ルイ様、戻りました」

「おや、早かったね。半裸で横島の所に転移するのは無しにしてあげよう。後3分遅かったらやっていたかもしれないが」

引き攣った顔をしているベルゼブルに笑いながら石から立ち上がり、再び傘を開き私はベルゼブルを伴って、魔界をその場を後にするのだった……

ルイ様と2人であちこちを流離う、それ自体はそう悪い事ではないだろう。私自身ルイ様は尊敬しているし、仕えがいのある上司と言うのも嘘ではない……ないのだが

「前に人間界でブリュンヒルデに会ってね。横島を大層気に掛けているのでシヨタコンつと言って苛めたら泣き出してしまったよ」

……この苛めっ子気質と悪戯気質だけは正直何とかして欲しい。と言うか、ブリュンヒルデが何かぶつぶつ言っていたのはそれが原因か……

「神魔からすれば人間は皆子供でしょう？」

「うんうん。だから小竜姫とかも皆シヨタコンの変態だね」

……弾ける笑顔で何を仰っているんだろうか？私は少しルイ様の考えが判らなくなった……

「君の場合は外見が年下だから、どうなるのか非常に興味がある。だから命令するよ、もう少し横島と接触するように」

「……っはい……」

拒否権など私には存在しない、ルイ様の命令が嫌だと思ってもはい  
と言うしかないのだ

「横島は嫌いかな？」

「……良く判りません」

ルイ様の突然の問いかけに私は少し考えてから、よく判らないと返  
事を返した。元々余り人間は好きではない、だから横島の護衛をしろ  
と言われた時は冗談じゃないと思ったんだが……

「なんと言うのか判りませんが、横島は人間とは思えないのです」

「ほう？死者の魂に関係するお前が人間ではないと判断したのか？」

口調がさっきのふざけた物から鋭い物に変わる。私はその声と目  
に恐怖を感じながら、自分が感じた横島の魂についての考察を口にし  
た

「横島の魂はとても人間の魂の容量とは思えないのです、もっと深く、  
広く、そして大きい、だけど浅く、狭く、そして小さいのです」

自分でも矛盾した事を口にしてしまうと自覚はある。だがそう  
としか言いようが無いのだ、普段の横島の魂と戦闘時の横島の魂はま  
るで別人と言うほどに違う物に感じるのだ

「ふむ、面白いね。それならなおの事近くで観察してくれ」

藪蛇だったあ!!!だがルイ様の命令に逆らう勇氣は私には無いし、そ  
れに良く判らないと言った物の……

(そう嫌いではないんだよな)

あの能天気と言うか、人を疑うと言う事を知らない横島は見ていて  
心配になってくる。するりと人の心に入ってくる……そして気が付  
けば絆されている……人たらしと言うか、抜群に自分の味方を作るの  
が上手いのだと思う

「さてと、ベルゼブル。あれをどう見る？」

そんな事を考えているとルイ様にそう問いかけられ顔を上げる。  
そこは美神の事務所が見える場所で、ルイ様が指差す窓に視線を向け  
る。そこには老紳士と言う表現が相応しい英霊の姿があった……

「反英霊だと見ますが、どうでしょうか？」

「うん、私も同じ見解だよ」

英霊には正義と悪の役割を担う存在が居る。それは奇しくも神族と魔族の關係に等しい、そして今美神の事務所にいる英霊は後者、悪を為す英霊「反英霊」に属する英霊だと思ふのだが……

「少し反応が弱いような気がしますね」

英霊なのは間違いないのだが、どうも存在感が薄い。いやこれはむしろ……

「弱体化している?」

「それに近いだろうね。霊基の一部が欠損していると私は見る、恐らくガープの実験で呼び出されたか……それとも何かのカウンターか……なんにせよ、ガープが動くときは再び英霊が出るだろう。だからベルゼブル、今度はだいそうじょうのような失態をしないでくれよ? 私は君を気に入っているが、2度もミスを犯す者を部下にしておくつもりは無いからね?」

笑顔で告げているが、次は無いと言う宣告。次ミスをすれば私の命は無い、その笑顔の陰に隠された言葉

「命に代えましても、必ずや」

「期待してるよ。じゃあ、後は任せるよ。横島の家に移り込むなり、美神の事務所に入り込むなり、GS協会上手く使うなり、自分で考えて最善の手段を取ってくれ」

なんだったらアイツに協力を頼んでもいいよ?と笑ったルイ様は傘を開くと同時に姿を消した。1人残された私はルイ様が言った5つの手段について考えていた。どれでも良いと言ったが、それ以外を行って良いとは言っていない、ルイ様が出した5つの条件からルイ様の求める条件を満たせという事……

「まずはアシュタロスの所に行くか」

横島の所に転がり込むは出来ればやりたくない手段なので、まずは私にとって最もダメージの少ない選択と言う事で、アシュタロスのアジトへと足を向けるのだった……

ベルゼブルの言葉を聞いて、私はうすうす感じていたことが間違っているという確信を得ていた。ベルゼブルが魂の総量を見極める事ができないと言うのは明らかに異質。それが人間ならばまず間違いないとありえない

「横島には複数の魂があるのかもしれないね」

仮に、そう仮にだが、別の世界の自分自身の魂と記憶と無意識に繋がっていると言うのはどうだろうか？自分で足りない物を、別の世界の自分から引っ張り寄せる。だから一時的に魂の容量が増えていると言うのはありえない話ではない……だから戦闘時のみ魂の出力が上がっているというのもあるがち的外れではないだろう

「ふむ……だがそうなる……世界の修正力が表に出てくるか」

世界は矛盾を嫌う。同一人物とは言え別の世界の人間の意志が、記憶が、魂が干渉することを世界が認めるだろうか？その可能性は極めて低いだろう。現に複数の世界を見ることが出来る私でも、世界に干渉するのはリスクが高い。神に等しい能力を持って生まれた私でさえも、自分の消滅を秤にかけてやつと出来る事だ

「でもまあ……やるけどね」

やつと横島の不可思議な能力を解明できるかもしれない糸口をつかめたんだ。それをむぎむぎ手放すような真似はしない

「ふっふーん♪横島は見ていて面白いからね」

退屈で神魔を引っ掻き回して、その退屈を紛らわせていたが、その退屈全てを紛らわせてくれる相手がいるなんて思っても見なかった。これからも見ていたい、どんな物を見せてくれるのかそれが見たい。だから……

「この時だけは、君に味方してあげよう」

このルイ・サイファーが……いやルシファーが君の行く末を見守ろう。どうか私を最後まで飽きさせないでくれよ？私は心の中でそう呟き、この世界から別の世界へと足を向けるのだった……横島の正体を、宇宙卵を用いた逆行なんて言う平坦な理由ではない、この世界がここまで狂ってしまったその理由を知るために……

リポート17 嵐を呼ぶ男 その1へ続く

リポート17 嵐を呼ぶ男  
その1

リポート17 嵐を呼ぶ男 その1

「じゃあ、アーチャーさん。この部屋を使ってください」

「おお！ボーイ！君は優しいな！幽霊に部屋を与えてくれるのかネ！！」

上機嫌に笑う老人の幽霊。溢れる胡散臭さがあるのだが、拾ってきたのは俺なので責任と言えば俺にあるんだろうな……

(と言うか、なんで弓兵?)

自分でそう名乗っていたが、なんで弓兵なんだろうか？弓兵と言うか老紳士って感じなんだけどなど思いながら、俺はアーチャーさんを俺の家に引き取る事になるまでを思い返していた

「うーむむ……私は誰なんだ、そしてここは何処なんだネ？え？日本？どこそこ？」

ソファアに腰掛け、紅茶を口にしながら自分の事を思い出そうとしている老紳士、飲食出来るから多分ノツブちゃんの仲間なのだろう

「飲食出来るって事はやっぱり英霊よね、横島君どこで見つけたのよ？」

「川を流されてました」

「川!?なんで私は川を流れてたんだネ!？」

いや、知らんし……むしろ俺が聞きたんだけど……

「どうすればいいんですかね？」

「そりや英霊だからねえ」

「英霊？何かね？ソレ？」

あ、美神さんの額に青筋が浮かんだ……小声で呆け老人って呟いているし、これは不味いかもしれない

「神宮寺さん。このおじいちゃんって何の英霊だと思いますか？」

「服装からしてヨーロッパ関連だと思いますわ」

ヨーロッパ……？ヨーロッパで英霊……？んなもん知らん。日本の英霊だとしてもうろ覚えだというのに

「蜚、カオスのじーさん。思い当たるのある？」

俺は当然知る由もないので、俺よりも知識のある2人を頼るのだが……

「いや、情報少なすぎるから……」

「無理じゃな」

情報がないと無理なのか……老紳士におじいちゃんじゃ呼びにくいので何とか名前とかを思い出して欲しいんだけどな……

【あ、アーチャー】

「アーチャー？」

【そう、アーチャーだ。うん、アーチャー。そう呼んでくれたまえ】

アーチャーって弓兵って事だよな？前に確かノツブちゃんが英霊の格としてはアーチャーと言っていたが、ノツブちゃんの仲間？

【いや、ワシは英霊だけど、他の英霊なんて知らんぞ？】

戦国時代ならまだ知り合いかどうかは判るが、異国の英霊など知らんと断言する。でもまあ、アーチャーっていう呼び名が判っただけ良しと思うべきだな

「……それでこの呆け爺どうする？」

【酷くないかネ!?!】

とは言え自分の名前も録に思い出せないんじや、呆け老人のほかには言いようが無い……同じ爺さんでもカオスのじーさんはしっかりしてるのに……

「とりあえず横島君。悪いけど、こつちでアーチャーだっけ？その老人の事を調べるから、ちよつと預かって」

まあ俺が拾ってきたのでそうなるのは当然か。俺は美神さんの言葉に判りましたと返事を返し

「じゃあー1回帰ります。また何かあったら連絡しますね、おいで、うりぼー」

「びびるん」

今まで頑張ってくれたうりぼーを呼んで抱き抱え、タマモはいつも



とおり頭の上、チビを肩の上に乗せ。シズクとノツブちゃんと一緒に美神さんの事務所を出る

「……ボーイ。君はずいぶん変わった人間だね？」

「そうっすか？」

俺は普通だと思えますけどねーとアーチャーさんと話をしながら、俺はシズクとノツブちゃんと一緒に自宅へと足を向けるのだった……

なお家に帰った俺は、押入れを開けて古いタオルや上着を丸めて巣をつくり、その中央にワイバーンの卵を置いた

「温めたりしなくて大丈夫かな？」

「大丈夫だ。竜の卵と言うのは、周囲の霊力などを吸収して成長する。下手に触らない方が良い」

心眼の助言にそれならいいけどと呟き、上からタオルを被せて

「早く孵化して来いよー」

何時孵化するかも判らないワイバーンの卵を撫でながら、俺はそう声を掛けるのだった……

横島達が過去から帰った頃。GS協会では……琉璃とスーツ姿で長髪の男性が向き合って話し合いをしていた

「では僕はこの土地をお借りしたいと思えます」

「……正気ですか？」

私自身が調べ、霊脈などの条件もよく霊能関係の事務所にするのは相応しい立地として、紹介したが目の前の男性。ICPO超常犯罪科……通称オカルトGメン日本支部の所長として来日した「西条輝彦」は勿論ですよと笑う

「美神さんのことは有名だと思っていたんですが、もしかしてご存じないですか？」

「いえ？よく存じていますよ」

美神さんは凄腕のGSとしても有名で、金にがめついなども悪い噂として広がっているが、その中に1つ。自分のテリトリーの中に事務

所を構える霊能者を嫌うと言うのがある。それを知っていてそれでもなお、美神さんの事務所の真向かいを選んだ？

「もしかしてお知り合いとか？」

「ええ。美智恵さんは僕の師匠でしたし、子供の時の令子ちゃん……失礼。令子さんとは親交も深かったですよ」

知り合いだから大丈夫って判断した……いや、それだけじゃないわね。この感じ……見た目は爽やかな好青年だが、魔窟と言えるオカルトGメンの中で生きている日本人。その強かさは尋常ではないはず。「一応言っておきますが、美神さんの後には六道がついていきますよ。」「それも承知していますよ。そして神代家と六道が必死に隠そうとしている秘蔵っ子の事もね……ああ、これはオカルトGメンは知りませんのでご安心ください」

狸め、と心の中で西条氏を罵る。確かに前はこの人に助けられたが、それでも信用出来る相手ではない。お互いにお互いを利用することで監視しあう、そんな嫌な関係になりそうだ

「美神さん達をオカルトGメンにスカウトするつもりですか？」

回りくどい真似をしてはぐらされる、あえて単刀直入に切り込む。これが冥華さんなら笑いながら、相手の痛い所について自分を有利に持っていくんだけど、生憎まだ私にはそこまでの経験は無い。だから愚直に切り込むしかないのだ

「それも一応考えてはいますよ。でもまずはそうですね……古い知り合いと新進気鋭の若いGSに会いたいと言う所ですね」

「引拔をするならこっちも考えがありますよ？」

オカルトGメンとGS協会は基本的に相容れない組織だ。そして日本GS協会の切り札に等しい人を引き抜こうとするのは流石に許容出来ない

「決めるのは本人ですよ。GS協会に所属しているけど、オカルトGメンの隊員だっているでしょう？では僕はこれで」

そう笑って出て行く西条氏を見送り、私は直ぐに電話に手を伸ばす。かける相手は言うまでもない冥華さんだ

『琉璃ちゃん？どうしたの？』

「オカルトGメンが美神さんと横島君達にちよつかいをかけようとしてるんです。西条輝彦って言ってます」

『西条君かあくあの子はくちよつと厄介ねえ』

冥華さんが厄介って言うほどの相手なの!? こういうときに政治的駆け引きの経験が足りなさを嫌がおうにも思い知らされる

『んくちよつとく面白い事を思いついちゃった』

「お願いしますから騒動は止めてください」

『いやよ〜?』

……なんでこんなに私は心労を貯めないといけないのだろうか? もう少して舞ちゃんか帰ってしまうと言うのに……問題ごとばかり、いやオカルトGメンに舞ちゃんとナナシが目をつけられる前に予定を早めて、氷室家に帰した方が良いかも知れない……私は深く深く溜息を吐きながら

「お手柔らかにお願いします」

オカルトGメンに関しての問題を全て冥華さんに任せる決断をするのだった……

『大丈夫よくオカルトGメンに令子ちゃん達を引き抜かせたりしないから』

楽しそうに笑う冥華さんに本当に大丈夫かしら? と不安を抱かずにはいられないのだった……

「ふむ、これは確か別の店で安く仕入れることが出来たな、こっちは適正価格より安い、今後もここで取引をすると良いだろう」

横島がアーチャーを連れて事務所に来た。最初は何で記憶喪失を? と思っただけで、椅子に座るなり凄いスピードで除霊具などの取引先の値段やそれが適正価格なのかを調べ始めた

「横島君。記憶戻ってるの?」

「いえ、全然だそうですけど、高校の数学と英語やってたら教えてくれて。なんかこういうの得意な気がするって言ってたから」

記憶は無くても、覚えているって事かしら……ヨーロッパ系で、数

学に強い……学者系？でも学者で弓兵なんていたかしら？色々思い返してみるが、該当する伝承や、伝説、有名人に思い当たる人間はいない。ますますあの英霊の正体が判らなくなった

「まあただ飯食いはしないヨ！他に計算する物はあるかね？」

なんでも任せてくれたまえと笑うアーチャー、美神さんはアーチャーが出した書類に目を通し

「あー破魔札はこっちの方が質がいいのね、神通棍は定価よりも安い……なるほどね」

道具使いである美神さんにとって質が良くて安い武器は必須だ。かなり真剣な表情で書類に目を通して、これは邪魔をしたらいけないかと思いつァァーに座りうりぼーとチビの毛並みを整えている横島の隣に腰掛ける

「昨日一晩で何か判ったことあった？」

「果てしなく胡散臭い」

酷いネ！ボーイ!!と叫ぶアーチャーだが、確かに胡散臭い。本当に記憶が無いのか？と言う疑いも当然湧いてくる……もつと記憶喪失の人間と言うのは不安そうで、あんなに朗らかに笑えない筈だからだ……胡散臭いと言う横島の評価も判る気がする

「あの一美神さん？冥華さんが後で訪ねるって伝えてくれたって」

買い物に行っていたおキヌさんが言いにくそうに口にした言葉に私達の顔が引きつった。色々助けてくれているし、頼れる人なのは間違いないけど……あの人関連と言うだけでまた面倒事かと言う不安がどうしても付き纏うのだ。胡散臭い幽霊に加えて、冥華さん……どうしようもない嫌な予感を私と美神さんが感じたのは言うまでもない……

「こんにちわ〜元気にしてた〜はい〜これ〜お土産ね〜」

にこにここと笑いながらお菓子の包みを横島に手渡す冥華さん。横島はご丁寧にもと頭を下げながら受け取っている

「それで冥華おば様。今度はどうしたんですか？」

「あれ〜知らないの〜令子ちゃんの事務所の近くにく〜オカルトGメンが来たのよ〜？」

冥華さんの笑いながらの言葉に美神さんの顔色が変わる。横島は「ん？つと腕を組んで首を傾げながら」

「それって確かピートが高校卒業して就職したいって言ってた奴か？」

「そうよ、GSのお役所版みたいな感じね」

今までは関係ないと詳しく説明してなかったたので、この機会に説明しておこう。民間GSはあくまで自分達も生活が懸かっているのでもうしても依頼料などが発生する。その為に霊症などを相談出来ないと言う民間人は決して少なくはない。そう言った人達の為に国からの支援を受けてGSとして活動するのがオカルトGメンだと説明する

「それなら美神さんと全然違うから大丈夫なんじゃないですか？」

「それがそうも行かないのよ横島君。私が高い除霊料を取るのには霊具などを揃える必要があるからなんだけど、オカルトGメンは世界規模の組織だからね……安く大量にいい道具を仕入れるのよ。そうなる……とこつちも経営が苦しくなるわけ」

美神さんからの追加の説明になるほどと頷く横島。うろ覚えだけど、確かオカルトGメンの日本支部は西条輝彦さん。美神さんとも親交があり、尚且つ美智恵おばちゃんの弟子……人の良い顔をしているが、計算高くそして策略家でもある……敵に回すには正直鬱陶しい部類の人間だ

「そういう訳で、琉璃ちゃんに頼まれて、乗り込みに行くんだけど、一緒に行きましよう？」

「……判りました。行きますよ、どつちみち会いに行かないといけないんですから」

にこにここと笑う冥華さんに疲れたように頷いた美神さんは、私と横島を見て

「悪いけど2人は待機。私と冥華さんで行くわ」

その言葉に少し驚いたが、私と横島をオカルトGメンの人間に接触させたくないと言う意図があるのだと判り判りましたと返事を返した時。

「オーナー、オカルトGメンの日本支部の方がご挨拶にと訪ねて来ています」

「いっちゃんの言葉に苦虫を噛み潰したような表情をした美神さん。少し考える素振りを見せてから、事務所に入れてと口にするのだった」「失礼します。僕はオカルトGメン日本支部の西条輝彦と言います」

「お、お兄ちゃん!？」

そして事務所の中に入ってきた西条輝彦さんを見て、美神さんが驚いた様にその顔色を変えるのだった……

美神さんを訪ねて来たオカルトGメンの人間を見て、俺は思わず首を傾げた。イケメンであんまり面白くないのは事実なのだが……

(はて?どこかで会ったような?)

初対面のはずなのだが、どこかで会った様な気がしなくも無い……  
と言うか

「美神さん。お兄さんいたんですか?」

美神さんの家族の事はあんまり知らない。お兄ちゃんと呼んでいたのお兄さん居たんですか?と尋ねる

「あ。ああ、ううん。違うのよ、ママの弟子で小さい時に面倒見て貰ってたのよ」

「そういう訳だよ。君は見た所……妖使いのようだけど?」

西条がそう尋ねてくるのでまあ一応と返事を返してから

「横島忠夫です。どうも」

「横島君か、確かGS試験で面白い霊能力を使ったと聞いているよ。僕こそよろしく」

手を差し伸べてくるが、どうしても握手をする気にはならず……でも向こうが手を差し伸べてるから、どうしようと思んでいると

「ふむ。基本は判っているようだね、霊能者同士。初見の人間同士でいきなり握手をするなんて事はほとんど無いんだよ」

令子ちゃんの教え方が良いって事だねと笑った西条は事務所の中を見て

「……令子ちゃんの事務所はずいぶんと個性的だね……幽霊の巫女さんに、幽霊の老紳士……それにグレムリンの赤ちゃんに妖狐に妖怪猪……」

西条の観察するような視線にアーチャーとおキヌちゃんはむっと顔をゆがめて、溶ける様に消えてしまった。明らかに気分を害したのだと判る

「で、弟子の個性を伸ばす為だから」

美神さんが慌ててそう言う。まあ確かに俺のせいだけだなあ……でもうりぼーとか可愛いから和むよな。なんか美神さんと西条の話に割り込める雰囲気じゃないし、話が終わるのを黙って待とう

「ぴぎゅー」

「はいはい」

撫でて撫でてと言わんばかりに背中を動かすうりぼーの背中を撫でる。と気持ち良さそうに目を細めるうりぼー

「芦菫さんだったね。今年のGS試験をかなり優秀な成績で合格したと聞いているよ」

「どうも」

蛍もぶすつとした感じで挨拶もそこそこに俺の隣に腰掛ける。西条は困ったように肩を竦めてから

「お久しぶりです、冥華さん。お元気そうで何よりです」

「ええー私は元気よく西条君もく元気そうねー」

冥華さんと挨拶を交わす西条。2人とも表面上は穏やかなのだが、なんかこう目に見えない圧力を感じる

(なんかピリピリしてる気がするんだけど?)

(まあ当然よ。オカルトGメンとGS協会はあんまり仲良くないしね)

そうなのか……冥華さんは当然GS協会側の人間なので、西条が面白くないのかもしれない。俺には理解出来ない、政治的な駆け引きと  
言う物なのかもしれない

「それで……西条さん。今日はどうしたんですか？挨拶だけじゃないですよね?」

美神さんが珍しく敬語を使っている。それだけ凄い霊能者なのだろうか……

「オカルトGメンは発足したばかりだから、人員が殆ど居なくてね。もし、令子ちゃんや横島君達が良いのなら、Gメンでの業務を手伝って貰おうと思ったんだけど……」

「横島君とく螢ちゃんはく仮免だからく国家組織のオカルトGメンには出向出来ないわよ」

冥華さんの言葉に西条はわかってますよと肩を竦める

「助っ人料は弾むから、少しの間で良いんだ。僕の仕事を手伝ってくれないか？」

「え、えっと……わ、私は構わないけど……その間事務所が休業になっちゃうわ、仕事の予定は結構埋まつてるから……それが終わってからなら……」

美神さんがしどろもどろになっていると珍しい光景だが、美神さんが居ないと俺達だけじゃ除霊が出来ないし……そうになると美神さんの信用問題になるんじゃない？

「うんくそれなら令子ちゃんく私が出向している間の責任はく見てあげるく横島君達も除霊出来るだろうしくこれも令子ちゃんと横島君達にとって良い勉強になると思うわ」

にこにここと笑う冥華さんに対して美神さんの顔は引き攣っているが、俺達と西条を交互に見て美神さんは、俺達に小さく頭を下げて「どうしても不味いことになったら連絡してくればいいから、冥華さん。少しの間よろしくお願いします、それと西条さん正式な依頼って事で別室で書類を作るけど良い？」

「勿論構わないよ。ありがとう、令子ちゃん。助かるよ」

西条の依頼を受けて、オカルトGメンの人員が揃うまでGメンの出向することを選び、俺と螢は少なからずショックを受ける事になるのだった……

まあ順当かもねえ。私は正直令子ちゃんが出向を断れば、出向する



ように説得するつもりだったから、自分から出向を引き受けてくれて良かったと思つた。

「さてとくじやあ打ち合わせをしましょうか横島君と蛭ちゃんだけじゃ、除霊は少し心配だと思つうからくそうねく白竜寺の子や、ピート君にシルフィーさんとかにも声を掛けてもいいわく正し、自分達で協力を頼んでねく？」

私はもし除霊に失敗した時のく賠償金や責任のほうは引き受けてあげるけどくそれ以外は自分達で何とかしてく

「で、でも俺と蛭だけじゃ」

「自分で事務所を構えた時のく予行練習だと思えばいいわく失敗しても責任はないからく気楽にやってみなさいくじやあねく」

横島君と蛭ちゃんに手を振り、令子ちゃんの事務所を後にする。

「ふふふく楽しみだわく」

不安そうな顔をしていたが、2人とも令子ちゃんを慕っているの令子ちゃんの信用を失わないように全力で頑張るだろう。

「横島君が楽しみだねく♪」

紅百合子の息子。あの会社に入るだけでその会社の株価を上げる、それほどまでに規格外の母を持つ横島君だ。きつと今回のピンチでその経営手腕を見せ付けてくれるかもしれない、私はもつと見たいのだ。横島君の中に隠れている才能を

「ふふふく本当に子供だけでもく六道にくれたらいいのにねえく」

結婚しろとまでは言わないが、その遺伝子だけでも六道に残してくればいいのに。あ、それだと冥子が不貞腐れるかなくあの子は横島君をずいぶんと気にしているようだし……

「面白くなりそうよねく」

令子ちゃんの庇護下から出た2人がどんな活躍をしてくれるのか？それが楽しみで仕方ない私は笑いながら、その場を後にするのだつた……

ボーイの師匠が別の会社に出向してしまつたと、そして明日1日で

助っ人を集め、除霊と経営を行う……そのための話し合いで1度虫と  
言うお嬢さんと分かれ、家で落ち合う手筈になったのだが……まだ年  
若い2人にはかなり難しい事を抱えてしまったように思えるね

【大丈夫なのかネ?】

「大丈夫じゃなくてもやるしかないから」

不安そうにしている。確かにまだボーイは若い、師匠の助力を受け  
ることが出来ないのは大きな不安となるだろう

「ぴぐうー!」

「コン」

「みーむッ!」

【確かに不安はあるだろう、だがこれも勉強と思えば良い】

ボーイが抱き抱えている動物達とバンダナから浮かんだ目がボー  
イを励ますように声を掛ける。うんうん、彼はとても良い仲間に囲ま  
れているようだね、私も及ばずながら力になろうじゃないか

【不安ならば力を借りれば良い、大丈夫さ。私は記憶はないが協力す  
るヨ】

「……すっげえ不安だけど、ありがとう」

記憶がないので頼もしい事は言えないが、それでも記憶は無くても  
私には知識がある。その知識で力になるよと言った次の瞬間

「おツ兄ツちゃーんっ!!あっそびに来たよーッ♪」

「んごふっ?!!」

【ボーイッ!!!】

私の横を駆け抜けた青い光にボーイの身体が大きく弾き飛び、思わ  
ず絶叫してしまうのだった……

リポート17 嵐を呼ぶ男 その2へ続く

## その2

リポート17 嵐を呼ぶ男 その2

1 度家に帰って、私と横島で何とか美神さんの事務所を切り盛りする方法を見つける。と言う無理難題の助言をお父さんに聞いてから、横島の家に来ただけど……そこには予想外の人物が2人いた

「あはははー貴方うりぼーって言うのね♪」

「ぴぐー♪」

大きくなっただうりぼーをランプポリンの様にして遊んでいるアリスちゃんと

「本当横島のおかげで安定した仕事に就けて感謝してるよ」

「元氣そうで何よりです、顔色も良くなってますね。良かったです」

ハーピーと握手している横島の姿があつて……なんで居るの？と思わず呟いてしまうのだつた……

「ぴぎゅ♪」

「うりぼー可愛い♪」

夕食の後うりぼーを抱き抱えて笑っているアリスちゃん達を見ながら、改めてハーピーさんに問いかける

「何で居るんですか？」

「アリスちゃんが横島に会いたって泣くから、保護者が折れた」

……あの親馬鹿魔神コンビ……今の人間界の情勢を判ってるのかしら？

「アリスちゃんの護衛とお世話係で同行を命じられたから来たんだ。ブリュンヒルデの所でお世話に……」やだー！私お兄ちゃんの所に泊まるー!!」……横島。アリスちゃんを泊めてくれる？」

「前も泊まつてるから大丈夫だ。引き受けるよ」

迷惑を掛けてすいませんと頭を下げるハーピーさん。出来ればもう少し安全な時に尋ねて来てくれれば良かったのに……

【まああのアリスと言う少女の事も気になるが、まずは自分達の事だろう？】

「……美神の事は気になるが、多分あの六道の大狸はオカルトGメンを利用している」

え?と驚く横島だが、それは私もお父さんから聞いていた事だ

「……あの狸は美神も随分と気に掛けている。それを目の前で引き抜こうとしているのを止めなかつたのは、戻ってくるかと確信しているからだ」

あの狸は人のいい顔の下で真っ黒い事を考えているぞとシズクが言うと、アーチャーさんも

「ああ、あれは人の良い顔で誤魔化すが、その中は真っ黒だネ!人を動かす側の人間だ。恐らく……ボーイ&ガール。君達で何か試そうとしているのサ!」

胡散臭い笑顔だが、妙にその言葉には説得力があった。私と横島で何か……そんなの言うまでもないだろう。百合子さんの天才的な経営手腕それがあるのか試そうと言う所だろう

「私は横島が所長代行をやってくれば良いと思ってるわ」

「ええ!?俺!?無理無理!!」

無理無理と横島が手を振るが、私はもつと無理だ。多分考えすぎて、碌な成果を上げることが出来ないだろう

「私も手伝うし、シズクとか、おキヌさん、それにノツブも手伝ってくれるから大丈夫よ。まずはやってみましょう?それに所長代行だから責任を全部押し付ける気はないし」

あくまで一時的な呼び名としての役職だからと説得すると、横島は不安そうだが判つたと返事を返してくれる

「じゃあ、明日の依頼は延期にしてもらうって連絡は依頼者に通してるから、助っ人を誰に頼むか?って言うのを決めましょう」

美神さんから貰った除霊のスケジュールを基にしつつ、更に新しい顧客を増やすための手段などを私達は夜遅くまで話し合うのだった

……

「じゃあ蛸ー、俺三蔵ちゃん所に助っ人お願いしてくるなー」

「頑張ってお願いしてくるねー♪」

そして次の日。横島はアリスちゃんを連れて白竜寺へ向かい……

残された私達は昨日の話し合いと言うか……横島の提案を実行して  
いたんだけど……

「横島の発想ってめちゃくちゃ規格外だと思うんだけど、そこどう思  
う？」

「……普通じゃないな」

【ボーイは怖いネ！その独創的な発想には驚かされるよ】

【本当ですよね】

「えーつとどうやっていれるの？」

美神さんの事務所をPRする第一弾の手段として、横島が提案した  
ポケットティッシュに美神さんの横顔と事務所の名前と電話番号を  
記載した紙を入れる作業を始めるのだった

【ノツブどうぞー！】

【おう!!】

横島家の英霊コンビは今朝からプリント屋に頼んだ、美神さんの横  
顔と電話番号入りの写真をノツブが投げ、牛若丸が小太刀に切りどん  
どん小さく切り分け

【のぶのぶー♪】

そしてそれをチビノブが回収して、こちらに運んでくる。その抜群  
の連係プレーに苦笑し、背後に積み上げられているダンボール箱の山  
に深く溜息を吐くのだった……

白竜寺に続く長い石段を登り、門を潜った俺とアリスちゃんが真っ  
先に見たのは

「折れるうう……ぎゃあーあああああッ!!ぎぶうう!ぎぶうううう  
うッ!!」

「喚いている暇があったら外してみせなさい」

陰念を背中合わせに背負い、その両腕を捻り上げている黒髪で小柄  
な少女と言う異様な光景だった……なお横島は知る由もないが、ゴ  
リーエスペシャルと言う名の関節技だったりする……

「ゆ、雪之丞ーッ!?!」

そしてその少女の近くに白目を剥いて倒れている雪之丞の姿を見  
つけ、俺は思わず絶叫してしまふのだった……

「あら、横島君じゃない。久しぶりね」

白目を剥いた陰念を投げ捨て久しぶりねと笑いかけてくるが、見覚  
えの無い少女なので首を傾げるしかない

「お兄ちゃん。お友達？」

「いや、違うと思うんだけどなあ……」

記憶力はそう悪い訳ではないが、知り合いではない筈……俺が首を  
傾げているとその少女はくすくすと笑いながら

「勘九郎よ、覚えてるでしょ？」

勘九郎？それって蛍と戦った……ってええ!?

「え、え!?!嘘!?!」

「本当よ。あの身体だと死んじゃうから、女の身体に魂を移して貰っ  
たのよ。今はクシナよ」

穏やかに笑いながら嘘おつと俺は心の中で呟くのだった……

「横島。お前何しに来たんだ？俺と組み手か？」

「違うわボケ」

俺はお前みたいなの戦闘狂じゃないし、何よりもアリスちゃんが居る  
のにそんな事をするわけが無い

「ぶぎゅ」

「あら、こんにちわ」

「ぴぎーン」

「ふふ、可愛いわね」

人懐っこいうりぼーがクシナさんに挨拶に向かう。頭を撫でられ、  
尻尾を振るうりぼー

「みーむう?」

【人も変われば変わる物だなあ】

肩の上で首を傾げているチビと心眼が感慨深そうにそう呟くが、普  
通の人間はあんなに変わったりしない。性別だってそんなに簡単に  
変わりません

「三歳ちゃん居ます?お願いがあつて来たんですけど」

白竜寺の責任者は三蔵ちゃんなので、居ますか？と尋ねる。クシナさんの足元で白目を剥いて泡を吹いている陰念は無視してだ

「居るけど……何の用事？その幽霊の子の話かしら？」

「いえ、違います。この子は俺が預かってるだけで、アリスちゃんって言います」

「こんにちわー♪アリスだよ？」

「あらちゃんとご挨拶出来るのね？偉い偉い」

元が男とは思えない穏やかな表情で笑うクシナさんは、雪之丞の方を見て

「陰念をたたき起こして、ストレッチとマラソンをしてなさい」

アリスちゃんや俺に話しかけると声とは違う、低く怖い声で告げるクシナさん。雪之丞が震えてる!？」

「横島君とアリスちゃんはこつちよ。おいで」

「はい！」

この人に逆らってはいけない。俺は本能的にそれを悟るのだった……やばいわ。この人怖すぎる……俺はそんな事を考えながら、アリスちゃんの手を引いて、白竜寺に足を踏み入れるのだった……

「うんうん、美神が居ないから助っ人して欲しいって事なのね」

「無理ですか？」

三蔵ちゃんに美神さんが居なくて、俺が所長代理になったんだけど、仕事も多いし、何よりも経験が足りないので助っ人をして欲しいんですと正直言ったのだ。アリスちゃんは難しい話判らないと、うりぼーとチビを抱き抱えて静かにしている

「んー私は実践稽古って良いと思うけどね。クシナは？」

「私も良いと思います。雪之丞、陰念、私でどうでしょうか？」

え？クシナさんも来るの？と思っているとクシナさんは俺にウィンクしながら

「私もリハビリ中でね、そろそろ実践で戦闘勘を戻しておきたいのよ」  
いざって時手伝いできるでしょ？と笑うクシナさん。でも確かに最近は大きなトラブルも多い

「三蔵ちゃん、雪之丞、陰念、クシナさんを助っ人で貸して貰えるで

「しよつか？」

「全然オツケー♪その代わりあれね、修行になるような除霊とかに参加させてね」

余りに軽い返事だったが、雪之丞達が助っ人してくれるなら非常に心強い。俺はありがとうございませと深く頭を下げ、白竜寺を後にするのだった……

【んーお団子、おいしー♪あ、横島君♪】

あのあと唐巢神父の教会、カオスのじーさんの家、エミさんの所にもより、手が空いている時なら良いと言うことで、ピート、シルフィーちゃん、タイガー、それにマリアとテレサの助っ人の約束も取り付け、休みだけと学校にもより愛子にも助っ人を頼み、美神さんの事務所に戻る途中、公園のベンチでお団子を食べていた沖田ちゃんが俺に気付いて、手を振って駆け寄ってくる。

「助っ人は終わったの？」

沖田ちゃんが助っ人であちこちのGS事務所を渡り歩いているのを知っている。ここに居ると言うことは、助っ人終わったの？と尋ねる

【はい！……この所の予定も終わりました。だから少しゆっくりしようかなって思っているんですよ】

にこにここと笑う沖田ちゃんは俺と手を繋いでいるアリスちゃんを見て

【誰ですか？……この子？……兄妹じゃないですよね？】

純日本人の俺と明らかに外国人のアリスちゃんはどう見ても兄妹には見えないよなと苦笑する

【アリスだよ！……幽霊のお姉ちゃん】

【アリスちゃんですか、こんにちわ。お散歩ですか？】

【散歩と言うか、助っ人のお願いをして回ってたんだよ】

助っ人のお願い？と不思議そうに首を傾げる沖田ちゃんに事情を説明すると

【水臭いですね！……私が手伝ってあげ……かふっ!?】

【沖田ちゃん!?】



「幽霊のお姉ちゃん!？」

自分の胸を叩いて吐血する沖田ちゃんに俺とアリスちゃんの悲鳴が重なる

【けふ……お手伝いしますよ。横島君】

血を拭い、吐血した事を無かったことにして手伝いますよと笑う沖田ちゃん。凄く不安だが、手伝ってくれると知っているのです、その言葉に甘えようと思った

「お願いしても良い？」

勿論ですと笑う沖田ちゃんにありがとうと笑い、俺はアリスちゃんと沖田ちゃんと一緒に事務所に足を向けたのだった

「あ、沖田ちゃん。歩くの大変だったらうりぼーの上に乗る？」

「ぴぐー♪」

【お、大きくなる猪なんですね……相変わらず凄いです】

「アリス乗るー♪」

アリスちゃんが乗ると笑うのでうりぼーの上に乗せてやり、じゃあ私もとうりぼーの上に跨る沖田ちゃん。その日猪の上に乗る幼女と美少女と普通っぽい男と言うシチュールかつとても目立つ組み合わせがあちこちで目撃されるのだった……

横島さんに助っ人として協力して欲しいと頼まれ、先生の了承も取れたので翌日から助っ人として美神さんの事務所に来たのだが……

(これはまた凄い面子ですね)

伊達と陰念、それに見覚えの無い女性が1人。それにマリアさんとテレサさん、助っ人として有名な沖田さん。それとアリスちゃんとその後ろに控えている魔族の女性……それにヨーロッパ系だと思われるロマンスグレーの紳士……少し見ない間にまた横島さんの周りが凄い事になっていると思わず苦笑しながら、横島さんに見るように言われたTVの録画に視線を向ける

『オカルトGメン日本支部の開設により、今までは高額な民間GSに助けを求めるしかありませんでした、今回のオカルトGメン日本支部の開設は霊症で悩む人の助けとなることでしょう』

ニユースキヤスターが現場で黙々と原稿を読み上げ、次にオカルトGメンの日本支部の支部長と言う西条さんのコメントが発表された『この程度の除霊は仕事の範囲内です。霊症に悩む方々の助けになれるようにこれからも社会に貢献していきたいと思っております』

そこで横島さんはTVの電源を切り、僕達の方に向き直る

「美神さんの知り合いらしくて、向こうの助っ人の行っちゃったから今回は助けて欲しくて皆に声を掛けたんだ。今週から2週間みっちり依頼が詰まって、確実に俺と蛍だけじゃ捌ききれないと思っとな」

美神さんは売れっ子GSだ。そのネームバリューも大きい、除霊の日程が詰まっているのは判る

「オカルトGメンが幅を利かせるようになると民間GSは厳しくなるわ。ここは民間GSで一番有名な美神さんの名前と顔、それと評判を良くしようって事になったの」

蛍さんが横島さんの言葉を引き継いで、今回の助っ人を頼んだ理由を説明してくれる

「全員で除霊に向かうって言うのは愚策だと思っから、マリアとテレサ、それとシルフィーちゃんとハーピーさんにはこれを配ってもらおうと思っます」

横島さんが僕達に差し出したのは「美神令子除霊事務所」の電話番号と住所と地図、それと美神さんの横顔がプリントされた紙が入られたポケットティッシュだった

「えつと……これで何とかなるの？」

テレサさんが大丈夫？と言う顔をする。勿論僕達も正気とは思っえず、横島さんを見る。だが横島さんは自信満々の表情で笑っ

「これは駄目二元で考えてるけど、効果だっっちゃんとあるって思ってるよ。目に止りやすい赤とか黄色を使っっているし、美神さん美人だから目も止るだろ」

確かにそうかもしれないですが、少し不安の残る作戦だと思っ

「んで雪之丞や陰念、それにピートや沖田ちゃんには除霊の方を担当して貰おうと思ってる。ギャラは皆で分けるからよろしく頼む」

じゃあ、早速で悪いけどと横島さんが僕達に除霊の内容が書かれた書類を差し出してくる。

「無理なお願いなのは判ってるけど、よろしく頼む」

深く頭を下げる横島さんに任せてくださいと返事を返し、僕と伊達達は事務所を後にした

「ピート。お前は何処を見に行くんだ？」

「えーっと呪の絵画らしいですね」

深夜に絵画に描かれた女性が飛び出し襲ってくるという内容だ。絵画に血が使われており、それが原因だと推測されると言うメモも書かれており、非常に判りやすい

「そういう伊達は？」

「俺達は3人で山の中の怪異の搜索……だよな？」

クシナさんと名乗った女性だが、実は彼女は初対面ではなく、GS試験でガープ相手に勇敢に立ち向かった勘九朗さんが女性の身体で蘇った人らしい。伊達はクシナさんに怯えながら尋ねる

「ええ、山の遊歩道の近くに賭けを挑んでくる鬼がいるらしいからね」

鬼!?!僕と全然違う相手じゃないですか!?!一流所が何人もチームを組んで戦う相手に3人で大丈夫なんですかと尋ねる

「被害者ゼロ、賭けを挑んでくるが、弱すぎるらしい。そして負けると山の奥へ逃げていくと……人的被害ゼロだ」

陰念から伝えられた情報になんと言えば良いのか困惑する。

「とりあえず鬼を見つけてからどうするか決めるわ。お互いに頑張りますよ」

にこやかに笑うクシナさんに手を振り返し、僕は横島さんから渡された地図と除霊資料と、保険として渡された精霊石を手に除霊現場へと足を向けるのだった……

ピート達が除霊に出た頃。事務所では

「ハロー、マイフレンド」

『何で英語やねん』

「はっははは！別に良いやろ！銀ちゃん！ちつと頼みがあるんだよ。そっちの芸能事務所のシャッチョーさんと話できねえ？」

『アイドルデビューか?』

「ちやうわ!美神さんのさ、事務所の所長代理やっているんだ。CMとか出来ないかなって思ってるんだよ」

『うーん、まあ聞いてみたるわ』

「頼むぜー!銀ちゃん!!」

横島が美神の事務所を更に有名にする為の一手を打っており。デスクワークや電話の助っ人として呼ばれたタイガーと愛子はと言うと……

「タイガー、ミス愛子。電話に出て、話を聞く、メモを忘れてはいけないヨー!」

「は、はあ、判ったんじゃあ」

【アルバイトも青春よね】

自称記憶喪失のダンディ幽霊。アーチャーに電話の対応などの指導を受け、メモ帳に指導の内容をメモし、忙しくなる前にと慌しくレクチャーを受けていた

「お兄ちゃん!アリスもお手伝いするー♪」

「そっかー。じゃあ、またティツシユの準備を手伝って貰おうかな」

「はーい!アリス頑張る」

「のぶのぶー♪」

「ぴっぎゅー♪」

「みむーむー」

「あ、タマモ。アリスちゃん面倒見てあげてな?」

「……はいはい、判ってるわよ」

マスコット軍団+アリスにもお手伝いをさせながら、書類の山に目を通し

「蛭。ここお願いするわ、シズクはこっち!沖田ちゃんとノツブちゃんは2人でこっち!おキヌちゃん次の書類頂戴!」

【はーい!今準備しますー!!】

横島所長代行の経営戦略が少しずつ動き出そうとしていた……

リポート17 嵐を呼ぶ男 その3へ続く

### その3

リポート17 嵐を呼ぶ男 その3

横島さんが提案した美神さんの顔写真入りのポケットティッシュの配布。これは思ったよりも効果が出ていると思います、霊症に悩んでいる人達が相談だけでも電話してくる事が多かったから、ただ駅前なので配布するのでナンパに遭遇すると言うデメリットがやはり大きいですね

「おねーさん。俺とお茶しない?」

そんなことを考えていると、早速テレサがナンパされているのを見て、いけないと思い、慌てて駆け寄るがテレサは目が全く笑っていない笑顔で

「あたしは仕事してるの、お茶とかしたくもないから」

ちやら男という感じをしつしと追い払う。その反応に少し驚いているとテレサはにこにここと笑いながら

「今日事務所に帰ったら横島と散歩に行くから、そっちの方が楽しんで〜」

……どうしましょう、テレサが横島さんを好きになってくれたのは非常に嬉しいのですが、そのベクトルがアリスちゃんと同じ方向だった

(そうじゃない、そうじゃないんですよ。テレサ)

今のテレサの横島さんへの好きが近所のお兄さんとかに向ける好きと一緒で、私はなんだかとても悲しい気持ちになるのだった

「美神除霊事務所をよろしくお願いしまーす。初回電話相談、無料にお聞きしまーす」

シルフィーさんが張り切ってポケットティッシュを配っているが、その理由は歩合で全部配りきれば、その日に現金を支給すると横島さんと約束しているからで、物欲に溢れている姿に思わず溜息を吐く

「1ついただけるかしら？」

「は、はい……どう……ミス・神宮寺……何をしていますのですか？」

ポケットティッシュを差し出そうとしたら、不機嫌そうなミス・神宮寺が目の前について、思わずそう尋ねる

「横島の助っ人は私は禁止されてしまっただけです何か？」

基本的にどの事務所の助っ人もOKされているが、事務所のオーナーは禁止されていると言うのをミス・神宮寺に今聞かされた

「オーナーとして聞ける相談もあると思っただんですのに」

確かにミス・神宮寺の言う事は判らないでも無いですが、今回は横島さんの経営能力や、適切な人員の割り振りが出来るかの試験でもあるので、流石にOKが出なかったのだろう

「……まあ良いですわ。個人的に横島の所に行くのは問題ないでしょうから」

御機嫌ようと手を上げてふらふらと歩いていく姿を見ていると

「くひひーくえすは横島が大好きだからねえ♪こんな良い機会に動けなくてやきもきしてるのさ」

「ひ、柩さん!？」

背後から笑いながら声を掛けられ、思わず後ずさる。柩さんはそんな私を見て、くひひつと笑いながら

「ちなみにボクも禁止されちゃってねー、このチャーカーのお札に手伝おうとしたのに残念極まりないよ」

不気味に笑う柩さんは私を見て、ニタアつと笑いながら

「まあ横島によろしく言っておいておくれよ。ボクもくえすも君の味方だつてねえ」

くひひつと笑いながら去って行く柩さんの小柄な背中を見つめながら

(横島さん、皆さんに優しいのは良いことだと思いますが、もう少し気をつけたほうが良いと思いますよ)

明らかに気色が違うと言うか、ちよつと危険な方向に振り切っている2人と出会った事で私はそう思うのだった

「柩ちゃんも神宮寺さんも困ったら助けてくれるって? 本当2人とも

優しいなあ」

テレサとの散歩に私も付き合うことにして、周りに人の居ない時に伝言を伝えると横島さんは信用しきった表情で嬉しそうに笑っていて、私の心配は横島さんにとっては考えて見た事もないことなのだとか判り。私の心配する内容は横島さんにとっては心配する事でも無い事の様で……

(豪胆なのか、それとも……ド天然なのでしょうか)

「テレサー、お兄ちゃん！いっくよー♪」

「おー！」

「よっしやこーい！」

アリスちゃんと一緒に遊んでいるテレサの隣で両手を上げる横島さん、勿論その周りでは

「みむー♪」

「びぐうー！」

「ノッブー！」

チビ達も楽しそうに鳴いていて、物凄く平和な感じなのですが

「てーい！」

可愛い声から超がつく剛速球を遠慮なしに投げ込むアリスちゃん。少しでも受け止めるのをミスれば吹っ飛ぶという殺伐とした遊びをしているのにも拘らず楽しそうで……

「何も考えていないのでしょうか」

横島さんは実は何も考えていないのでは無いかと思わざるを得ないのだった

「買った買った♪」

「その日のうちに支払ってくれて本当に助かりますね」

そしてピートとシルフィーはその日の内に払ってくれたギャラで電車で3駅先の安いスーパーでの買出しを終え、ご満悦と言う様子で教会へと帰っていたりするのだった……

美神さんがオカルトGメンに出向し、横島君が所長代行を勤めて3

日目……笑いながら訪ねて来た冥華さんに私は溜息を吐きながら

「横島君つてめっちゃめっちゃ優秀ですね」

「私も結構驚いてるわ」

エミさんの所のタイガー君、唐巢神父の所のピート君とシルフィーちゃん。そして白竜寺の伊達君、陰念君、そしてクシナさん。更にマリアさんとテレサさんを助っ人に引き込んだだけではなく

『霊症にお困りの方は是非1度美神令子除霊事務所まで、初回相談料無料にてお話を聞きします』

東京のアイドル事務所にいる幼馴染の伝手を利用して、TVCM。そしてその事務所に紹介した精霊「セイレーン」までも借り出し、特製のCMソングまで……

「発想が凄いなと思うんですよ。彼」

「ちよつと普通じゃないわよね」

マリアさんとテレサさんにハーピーに、駅前などで広告入りのポケットティッシュの配布など。普通のGSが使わない手をどんどん使っているが、それが意外な事に嵌りに嵌り、依頼が殺到している

「もし令子ちゃんがオカルトGメンに転職しても横島君がいればGS業界は安定ね」

ま、令子ちゃんがオカルトGメンに行くとは思えないけどね〜とこころと笑う冥華さん。正直私は冥華さんが何を考えているのかまるで判らないので口を挟まないが、本当に美神さんがGS協会に戻ってきてくれるのか？と言う不安はどうしても感じる

「大丈夫よく彼女はね〜お役所仕事とか向かない性格なのよ」

まあ暫くしたらお役所仕事に疲れ果てて、GSに戻るって始まるわよ〜つと冥華さんは笑い

「じゃあ〜またお茶にしに来るわ〜頑張つてね」

にこにここと笑い会長室を出て行く冥華さん。今回は横島君が凄いつて言いに来たのか、それとも美神さんは大丈夫と言いに来たのか？それともその両方か……何をしに訪ねて来たのか、単純にお茶ではないと思うんだけど……他にも何か意図があるように思わなくも無い



「冥華さんも相当狸なのよねえ……」

20歳程度の私じゃ、冥華さんの考えている事なんて全然判らないし、それに何よりも下手に怒らせて援助を打ち切られても困る。

とりあえず冥華さんの言う事を信じて、美神さんが戻ってきてくれるのを待つのが一番ベストなのかもしれない

「それに白竜寺の件もあるしね」

最近鬼が出ると有名な山で伊達君達が見つけた鬼……正しくは仙人であるという女性「綱手」確か歌舞伎の演目の児雷也豪傑譚で出てくる人物なのだが、まさか実在する人物とは思っても見なかった。しかもなんか陰念君を気に入り、白竜寺で世話になると言って空き部屋に陣取ったらしい

「女傑って感じだったわね」

1度会いに来てくれたが、女性にしては長身で快活な人物だった……まあ男所帯の白竜寺だけど、自衛は普通にするだろうし、何よりも自分で言い出したことを曲げるタイプには見えないので。好きにしてくださいと陰念君達に押し付けることにした……凄く死んだ目をしていた陰念君の顔が凄かったなあっと思り返す

「1回、横島君の所見に行こうかな」

今のところ目立った失敗もないが、やはりそこは仮免許のGSだ。1度GS協会長として様子を見に行くべきだろう

「それにしてもくえすにも困るわね」

くえすも柩も横島君の所に助っ人に行くとは騒いでいて、それを宥めるのに本当に苦労した。横島君は気のいい子だけど、もうちよつと普通の女の子に好かれるようになってくれると私としても本当に安心なんだけどねえ。ちよつと横島君の周りの子は皆癖が強すぎるから「はーどうしよっかなあ」

この調子で横島君が利益を上げ続けるのなら、GS業界で色々問題が起きそうだし、冥華さんが責任を全部取ると言ってくれたけど……「色々考えるわよねえ」

横島君の才能はもう少し隠しておくべきだったんじゃないかなあと思いつながら、執務室の机の写真立てに視線を向ける。帰る前に2人

で撮った舞ちゃんとの写真に笑みを浮かべる

(舞ちゃんも帰したしねえ……)

オカルトGメンが発足して、舞ちゃんがスカウトされないようにと早めに氷室家へと帰した。正式な書類を作り、六道の庇護下に置く準備が整ったらまた呼び戻すつもりだけど……なんか家に帰っても静かで寂しいのよね……私は思わず溜息を吐きながら会長室を後にするのだった……

美神さんの代わりに事務所の経営、蛍や皆が手伝ってくれているから何とか形になっているけど……俺一人ではとてもではないが、まともな経営なんて無理だっただろう。改めて美神さんの凄さを尊敬するのと同時に、家に帰っているのに頭の中を数字が踊り続けている

【横島。家に戻った時は数字を考えるのは止めろ、ストレスになるぞ】  
心眼の言葉にうん。と返事はした物のどうしても明日の除霊はどうしようとか、依頼料の話はどうしようとかそんな考えばかりが頭を過ぎったその時

「お兄ちゃんドライヤーしてー♪」

「んぐふっ!?!」

アリスちゃんの真横からの体当たりに変な声が出る。アリスちゃんは見た目よりも遥かに力が強いので身構えて無いと致命傷に成り兼ねないのだが、それに加えてアリスちゃんとお風呂に入っていたチビ達も加わる

「ふぎゅー!」

「みみーむー!!」

「ノッヴアー!!」

自分達もドライヤーをしろーっと言わんばかりに突進してくるチビ達の勢いには耐えられず、そのままカーペットの上に寝転がる

「早く♪早く♪」

兎の着ぐるみパジャマを着ていて、早くドライヤーしてと言うアリスちゃんに判っていると返事をして、体を起こすと机の上の資料が無い

「ボーイ、これは私がやっておいてあげるヨ。なーに、幽霊だから疲れることなんて無いからネ。生身の人間はゆつくり休みたまえヨ」

アーチャーさんが俺が見ていた資料を手にして、消えて行ってしま  
う

【ほい、横島】

「っと」

ノツブちゃんがほいっと投げ渡してきたドライヤーを受け取ると、おキヌちゃんと蛭、そしてシズクがキッチンから顔を出して

「……十分頑張ってる。休む時は休んでいろ」

「そう言う事、交渉とか全部引き受けてくれてるでしょ？家に戻ったらゆつくりしてて良いんだから」

「チビちゃんやアリスちゃん達と遊んでいてあげてください、それが一番落ち着くでしょ？」

まーTVを見るとかよりもチビとかアリスちゃんと遊んでいる方が落ち着くかな。なんかこう、上手く言えないんだけど、チビ達の元気とかを分けて貰ってるようで、凄く元気が出る

「じゃあアリスちゃんからな」

「うん♪」

胡坐をかいた俺の膝の上に座るアリスちゃんの長い金髪にドライヤーを当てながら、櫛で丁寧に梳く

「♪♪♪」

鼻歌を歌っているアリスちゃん、なんか最近髪を梳くのが上手くなってる気がする

「はい、おしまい」

「ありがとー」

にぱっと笑ったアリスちゃんは俺の後ろに回って、背中に抱きついてくる。力が強いのですこしウっとなったが、それは気合で我慢する

「おいで、チビ」

「みむう」

机の上で丸くなるチビの毛にドライヤー当ててチビ達用のブラシで毛並みを整える。モフツとした毛玉になるのだが、その姿は愛嬌

たっぷりで思わず笑ってしまう

「みむ?」

「プギユ?」

何笑ってるの?と言う感じのチビ達を見て、更に笑っているとアリスちゃんもパジャマからトランプを取り出して

「ご飯までトランプしてあそぼー」

普通に待ってるのは嫌と言うアリスちゃんに判ったと返事を返す。

「あ。それなら私も混ぜる」

【では私も】

【暇じゃからワシも】

トランプで遊ぶと言うと、牛若丸や、ノツブちゃん、タマモも加わる。俺はトランプをシャッフルしながら

「何して遊ぶ?」

「んーババ抜き」

ババ抜きね、この人数ならすぐ決着が付きそうだなあと思いながら、俺はシャッフルしたトランプを配り始めるのだった……

「横島の父性がカンストしそう」

【もうカンストしてると思えますよ?】

「……カンストの意味は判らないが、まあ横島は父親がなんか板についてるな」

キッチンで料理をしていた蛭達は、ほのぼのとしている横島達を見て、同じく微笑ましそうに笑いながらそんな話をしているのだった……

【ほほう?もう成果が……いやいやボーイの才能は怖いねえ】

横島が経営に手を出してから僅か3日。その3日の間に利益が上がり始めている事に気付いたアーチャーは笑みを深める

「良いねえ、私が生きてる時にボーイがいてくれたら……んん?いま、なにーか、思い出しそうだったようなー?」

一瞬物凄くあくだい顔をしたアーチャーだったが、結局何を思い出しかけたのかを思い出せず、この3日の横島の指揮の元で使われた必要経費、得た収益などの計算を再開するのだった……

除霊から戻り、西条さんに提出する書類整理を始める。民間GSでは使えないような高級な装備をふんだんに使えるので除霊自体は楽なのだが……横島君や蛍ちゃんと組んで仕事する時よりも疲労感を感じて仕方ない

(やっぱり私にはお役所仕事って言うのは合わないのかも……)

お兄ちゃんに助けて欲しいとお願いされたからオカルトGメンに出向したが、やはり私は民間GSの方が性に合っているのかも知れない

「どうしたんだい？ずいぶんと疲れた様子だけど……今回の悪霊は少し強かったかな？」

「え？あ、ううん。そう言うのじゃないわ、西条さん」

お兄ちゃんでも構わないよとくすくすと笑う西条さんは、窓から見える私の事務所を見て

「横島君と蛍君。2人ともずいぶんと頑張っているようだね、きつと令子ちゃんの教え方が良かったんだよ」

そう笑う西条さんだが、私は経営手腕なんて教えてない。横島君と蛍ちゃんが手探りで頑張ってくれているんだろう

「お昼からの除霊は僕と一緒にだけ大丈夫かい？無理そうなら休んでいてくれてもいいんだよ？」

「ううん！大丈夫！手伝うわ」

自分で手伝うと言って2週間の出向で契約した。プロとして気分が乗らないとかそんな理由で除霊を断るわけには行かない、心配そうな西条さんに大丈夫と声を掛けてオカルトGメンの事務所を出ると丁度出勤する所だったのか、横島君とあった。普段のGジャン、Gパンではなくスーツ姿で、心眼も額に巻いてない。オールバックにしているだけでグツと大人っぽい雰囲気になっている

「美神さん、それに西条さん。どうも」

「やあ、横島君。ずいぶんと頑張ってるみたいだね、CM見たよ」

西条さんと休憩中に見た私の事務所のCM。横島君の幼馴染の近畿剛一が所属する事務所に協力を頼んだか、かなり派手なCMが流されていた

「美神さんの事務所ですから、俺と蛭が所長代行をしている時に、売り上げを落とす訳にはいかないですから頑張ってますよ」

私の事務所の評判を上げる為に頑張ってくれている横島君。少し疲れが溜まっているのか、目の下に薄い隈が見える

「大丈夫？疲れてない？」

「大丈夫ですって！心配しないでくださいよ」

美神さんの顔に泥を塗るような真似はしませんよと笑った横島君は腕時計を見て

「とっ！すいません、昨日の依頼者との料金の話し合いがあるんでこれ！じゃあ」

そう笑ってタクシーを呼び止め、乗り込んだ横島君を見送る。依頼者との料金の話し合い、それは精神的にかなり来る場合もある。その精神的な疲労での隈だったのかもしれない……

「さ、僕達も急ぐ。悪霊の大量発生……下手をすれば霊団になりかねない」

「判ってるわ、行きましよう」

横島君があれだけ頑張っているのに私がこんな有様が余りにみつともない。気合を入れるために頬を叩き、西条さんの運転する車に乗り込むのだった……

横島の考えた経営プラン。それは全てが殆ど当りか大当たりにならなかった……CMやティッシュの広告で電話したんだけどと言う相談者が多かった。しかも横島の提案した初回相談料無料と言うのも大きく、除霊のほかに面談による相談を聞くのも多くなっていた

「祖父が急死してから、廊下や壁に刀傷が出るようになって……」

「なるほど……ちなみにおじい様はどのような方だったんですか？」

「もう引退したと言っていました、昔は退魔師だったとか……GSみ

「たいな職業ですよね？」

相談者の質問にそうですよと返事を返ししながら、相談を受けた霊症の内容から考えられる内容を告げる

「急死したおじい様。それすらも悪霊の仕業と言う可能性がありますね、1度霊視などを行わせていただいても宜しいでしょうか？そのまま除霊出来るのなら除霊、無理ならば準備を整えて再度除霊をさせて頂きます。どうでしょうか？」

「お願いします、怖くて怖くて」

震えている女性の依頼者に窺う日時の打ち合わせを済ませ、今日の面談は終わりとなった。

【お疲れ様です。蛍ちゃん】

「うーありがとー」

おキヌさんが差し出してくれたチョコレートを口にする、苦味のあの甘さがほっと一息つかせてくれる

「……面談出来るのが蛍か横島だけだからな、負担は流石に大きいか……私が大人になって面談を手伝うか？」

「ううん。大丈夫よ、横島の方がずっと大変なのに甘えた事言えないわ」

正直私よりも横島の方がずっと大変だ。依頼者との料金の打ち合わせに、クシナさん達の霊能力のスキルを的確に判断し、派遣する場所を決める。心労も精神的な疲労も私とは比べ物にならないだろう

「はい、美神令子除霊事務所です！依頼ですね、はい、はい……悪霊の数は1。先日購入した仏像が原因かもと……」

タイガーさんの大きな声による応対。それは私達に大体の除霊の内容を伝える為であり、アーチャーさんの提案だ

「ポルターガイストと体調不良ですね」

タイガーさんがこつちを向く、直ぐに派遣するべき案件かもしれないと判断したのだろう

「ピートさん、行けますか？」

今戻ってきたばかりのピートさんに心苦しいがお願いできますか？と尋ねる

「……大丈夫です。行けますよ」

栄養ドリンクを口にして行けますと返事を返してくれるピートさん。伊達や、陰念では屋敷での除霊には向かない、マリアさんやテレサさんは銃器などを使うので、やはり家での除霊には不向きだ。そうなるの家などでの除霊は私か横島、それかクシナさんかピートさんが候補に出る。私は面談、横島は依頼料の交渉、クシナさんはさつき出発したとなると消去法でピートさんしか残っていないのだ。指でOKサインを出す

「判りました、直ぐに派遣させていただきます。場所は東京都××○  
○丁、□―△の1ですね」

タイガーさんが住所を読み上げると、窓を開けてピートさんがヴァンパイヤミストで出撃する。繁盛しているのはいいけど、ちよつと苦しくなってきたるかもしれないわね

「はい、美神令子除霊事務所です。はい、はい……賽銭箱を荒らしたら、夢で刀の化け物が出てきて、罪人は首を切ると言う……夢だと思ったら、箆笥や扉が刃物になっていた……」

どうします？と愛子さんが振り返る。只の自業自得なのだが……私は溜息を吐きながら

「お仕事ですよ、伊達。ついでに説教もお願いできますか？」

さん付けは気持ち悪いというので呼び捨てにしているが、基本的にさん付けで呼んでいるので少し違和感がある。

「おうよ。任せてくれ」

ソファで寝ていた伊達が跳ね起きて、帽子とジャケットに袖を通す

「やばそうだったら援軍連絡入れてね」

「OK。深追いと無理はしねえ。まずはその神社とやらをしてみるぜ」

そう笑って事務所を出て行く伊達を見送る。美神さんが居る時以上に疲れるわね

「大丈夫かネ？疲れたのなら1度休むべきだよ。私なら面談を引き受けられる、少し休み給えヨ」



アーチャーさんが心配そうに言うが、正直横島が休んでいないから私も休む気になれないのよねと苦笑しているといつちゃんが

【横島さんと何故か琉璃さんと一緒に戻って来ましたよ】

琉璃さんと？なんで一緒に戻ってきたんだろう？と首を傾げながら、ソファアーから立ち上がり。横島と琉璃さんと一緒に飲むお茶の準備の為にキッチンへ向かうのだった……

依頼人との料金交渉を終え、事務所に帰ろうとしている途中。悪霊に追われている女の子を見つけ

「運転手さん！止めてー！」

「え、あーはいッ!!!」

タクシーの運転手さんに車を停める様に叫び、扉を蹴り開けるようにして車外に飛び出し

「伸びろーッ!!!」

三つ編みにした女の子の肩に手を伸ばそうとしていた悪霊目掛け、栄光の手を突き出す

【ギガあ!?!】

「え?」

悪霊の苦悶の声と女の子の驚く声が同時に響く、栄光の手で悪霊を捕まえ、そのまま伸ばした栄光の手を掴み一気に引き寄せ。

「オラアッ!!!」

左手にも栄光の手を作り出し、霊波刀で悪霊を頭から両断する。消滅していく悪霊を確認し、ガードレールを飛び越え追われていた女の子に駆け寄る

「大丈夫?」

「え、あ……はい。大丈夫です。助けてくれたんですね、ありがとうございます  
ございます」

赤みを帯びた長い髪を三つ編みにした少女がペこりと頭を下げる

【ん?あ、あああーッ!お前横島か!!】

その少女が肩から下げていた鞆から顔を出した小さな男。小槌を

背負った金ぴかの幽霊が俺の名前を叫んだ

「誰？つうかお前は何？」

幽霊って感じじゃないし、かと言ってチビ達と同じにも見えない

「ワイは福の神や、神様同士のつながりでお前さんの事は聞いてたで」  
「福の神？へー初めて見る」

美神さんに聞いた神界ではなく、人間界に出現する神の一種として  
福の神がいると聞いていたが、初めて見た

「私は花戸小鳩って言います。お名前は？」

「え？あ、俺は横島。横島忠夫って言うんだ、よろしく」

お互いに自己紹介を済ませていると、GS協会のエンブレムをつけた車が近くに停まり

「あれ？横島君、それに……小鳩さん？どうしたの？」

琉璃さんが後部座席の窓を開けて顔を出す。琉璃さんの知り合い  
ですか？と尋ねる

「知り合いつて言うか……六道に編入する子なのよ。迎え来なかった  
？小鳩さん」

「それがそのー待ち合わせの場所の近くで幽霊に追いかけて……  
横島さんに助けてもらったんです」

運が良かったわねと笑った琉璃さんは運転手に何か声を掛けてから、車を降りてくる

「この車で六道女学院まで行くと良いわ。私はこっちのタクシーで美  
神さんの事務所に行くから、さ、早く行きなさい」

「は、はい！その本当ありがとうございます」

【おおきになー】

福の神と一緒に車に乗り込む小鳩ちゃんを見送り、美神さんの事務所  
所に用事だったと言う琉璃さんに美神さん居ませんか？と言うと

「どっちかと言うと、横島君と螢ちゃんに用事なのよ。あのタクシー  
横島君が呼んでるんでしょ？一緒に乗っけてくれる？」

目的地が一緒だから大丈夫ですよと返事を返し

「運転手さんごめんな、また美神令子除霊事務所までお願い出来る？」  
「大丈夫ですよ、乗ってください」

嫌な顔をせず乗ってくださいと笑う運転手さんにありがとうございますと頭を下げ、俺は琉璃さんと一緒に事務所へと向かった

・  
・  
・

「という訳だったんだ」

何で琉璃さんと一緒なの？と言う蛍の問いかけに一緒に来た経緯などを説明する

「横島さんって本当トラブルに巻き込まれますノー」

昼14時。1度電話が落ち着いたのでタイガーが昼飯を食いながら苦笑する。自分でも確かにそう思うから複雑だ。なんか蛍とおキ又ちゃんが小声で何かひそひそと話をしているけど、どうしたんだろうか？

(小鳩さんってあれよね？凄い計算高い)

(はい、横島さんと1度結婚してました、演技ですけど)

蛍とおキ又は言うまでも無く、小鳩と言う危険度Aクラスの人物が近くにいると言う事を知り、警戒度を上げる話し合いをしていたりする……

「それで何の用事だったんですか？琉璃さん」

俺と蛍に用事って聞いてたけど、なんだったんですか？と尋ねる。すると琉璃さんは

「横島君と蛍ちゃんだけで美神さんの事務所を経営してるって聞いたから、心配になって見に来たのよ」

でもいらないお世話だったみたいねと琉璃さんは舌を出して笑う。確かに俺と蛍だけではとてもじゃないが、美神さんの事務所を経営する事は出来なかった。でも

「皆手伝ってくれましたから」

雪之丞達にピートにノツブちゃんに沖田ちゃん。皆が手伝ってくれてるから大丈夫ですよと笑う、俺1人では出来ない事だらけだが、

皆が協力してくれれば、1人では出来ない事も出来るようになる

「そう見たいね。そうやって人の協力を受けられるのも横島君だからね、もし何か困った事があつたら電話してきてね。協力できる範囲で手伝ってあげるから」

柔らかなく微笑む琉璃さんにありがとうございますと頭を下げる。自分でも思うが、俺は回りの人間に本当に恵まれていると思う……

【ただいまー！いやー疲れた疲れた。途中で沖田の奴が血を吐きおつてな】

【こふっ……ちよつと疲れただけですよ……】

「ふう、今戻りました。少し疲れましたね」

「おーい！横島！なんか神社に祭られてた刀みたいのぶち折ったからよ。謝罪頼むわ」

どたどたと帰ってきたノツブちゃんは沖田ちゃん、それにピートと問題発言をしている雪之丞……電話が鳴り止み、少し落ち着いた雰囲気になっていた事務所が一気に騒がしくなるが、この感じは嫌いじゃない。集金してきたアタツシケースを机の上に置き

「皆お帰り、そしてお疲れ様！昨日と一昨日の依頼料の集金も終わつたし！営業終了の17時になったらばあーつと!!皆で飯食いに行こうぜーツ!!あ、琉璃さんも来ます？カオスのじーさんと唐巢神父にエミさんとかにも声を掛けるんですけど良かったらどうですか？」

俺1人では絶対に無理だった。だからエミさん達にも声を掛けるつもりだ、だから琉璃さんもどうですか？と尋ねる

「折角誘ってもらつたし、私も参加させて貰おうかしら」

琉璃さんも来てくれると笑う、やっぱり食事は大勢でわいわいと食べるほうが楽しいし、美味しい

「じゃあ、お昼からも皆宜しくな！」

元気よく返事を返してくるピートや雪之丞の姿にやっぱり俺は回りの人間に恵まれてると改めて実感し

「沖田ちゃん、無理しないでちよつと休んでくれればいいから、ほら。こつちこつち」

【うっ、こほ、けほ……はい、すいません。横島君】

明らかに顔色の悪い沖田ちゃんを休ませる為、深夜からの除霊を行う際の俺が使っている仮眠室に案内するのだった……

リポート17 嵐を呼ぶ男 その4へ続く

## その4

リポート17 嵐を呼ぶ男 その4

除霊の依頼料で皆で豪勢な夕食を食べ、これからよろしくお願いしますと再びお願いしたのが2日前。そこからは怒涛の勢いで除霊の依頼が立て込み美神の事務所は毎日慌しい雰囲気になっていた……

「ぴーぎぴぎぴぎーぷぎぎー♪」

「みーむみーむみみーみむー♪」

ボーイの所で世話になりながら、私が感じたのはボーイには引力があると言ったことだった。人も、獣も、霊も何もかもを引き寄せる引力……それがボーイにはある。

「のーぶーのぶぶーのーぶー♪」

「なんか皆ごく機嫌だなあ」

自分の周りを歩きながら、楽しそうに歌う動物達を見てボーイは嬉しそうに笑う。年相応とは言いがたい、純心な子供のような笑顔だ。記憶の無い私でも判る。ボーイ……横島の心はまるで水晶のように透き通っているのだと

「お兄ちゃん。お仕事無いの?」

「うーん。ごめん、ちょっと休憩中。またお仕事あるんだよ」

えーつままないーつと頬を膨らませるアリスの頭を撫でるその姿には、父性のような物を感じる。精神性の物なのかは判らないが、ボーイには人を包み込む度量がある

(しかし面白いね)

ボーイの周辺を見ていれば判る。ボーイに想いを寄せるガールは多い……それなのにボーイはそれに気付かない、いや気付かないと言っうよりも……

(吊り合わないでも思っているのかな?)

ボーイは非常に優秀な頭脳と独創的な発想を持ち合わせている。それなのにどうも自分の評価が低すぎるのだ……だからこそ自分が好かれる筈が無いでも思っている節があるように見える

(天才と言える部類の人間なだけどネ)

常人では理解出来ないし、思いもつかない独創的な発想……そして人を扱う才能も恐ろしいほどに高いし、これで自己評価が高ければ、優秀な指導者とだって成り得ただろう。

(この複雑な人間関係は見ていて面白いんだがネ)

人に好かれる才能を持つボーイの周囲はとても複雑だ。人間に、幽霊に、人なざる者。その全てに想いを寄せるガール達がお互いに牽制したり、喧嘩したり、協力したり。見ていて本当に飽きないのだが、動きが無さ過ぎて面白みに欠けるのだ。だから私はほんの少し、ほんの少しだけ……火種を投げ込んでみようと思ったのだ

【ボーイの好きな女性のタイプはどんな感じなのかネ?】

「うえっ!？」

素っ頓狂なボーイの声から少し遅れて、事務所の温度が下がった気がした。そしてガール達の目が言っているのだ……全てを聞き出せと……どうも私が軽い気持ちで投げ入れたのは火種などではなく、導火線に火がついたダイナマイトだと悟るまでそう時間は掛からなかった……

自称記憶喪失の老紳士「アーチャー」さんの放った一言で事務所の空気が一段冷えた気がした。と言うか実際に冷えてると思う、蛍ちゃんとか、おキヌちゃんとか、ノツブさんとかの目がキラキラと光っているように見える……と言うか私も興味があるし……だって今の横島君の好みとか全然判らないし……

(でも今の横島君の方が……素敵)

私の知っている横島君はスケベで馬鹿で、それでも優しく、気がついたら側にいてくれるそんな人だった。今の横島君はチビちゃん達と暮らしているのが大きいのか、スケベと言う感じじゃなくて、優しくって思いやりに溢れていて……今と未来の横島君を比べたら悪いと思うけど、正直今の横島君の方が私は好きだ。感じとしては結婚して、子供が出来た後の横島君がこんな感じだった

「好きな女性……いや、ここで言う事じゃ【いやいや！ただのレクリエーションだヨ！深く考える事は無いんだ】」

横島君から見えない角度で破魔札で脅されているアーチャーさんが慌てて駆け寄り、説得を試みている、横島君は私や蛍ちゃんを見てうーんつと唸っている

「みむ？」

「ぶぎゅ？」

「のぶ？」

「どしたのー？」

この事務所の雰囲気気付いていないマスケット軍団とアリスちゃんが不思議そうに横島君に尋ねている。子供ってこういう時怖いと思う

【さあ！ちよーつとした息抜きじゃないか！14時からまた交渉だろう？15分ほどのお遊びじゃないか！】

まあそれくらいならつと横島君は呟き、うーんつと唸りながら

「やつぱり優しい人かな？」

……横島君の周りの女性は皆横島君に優しいと思うのだけど、あえてそれを言うのねと小さく呟く

【ほほう、優しいと来たかネ？ではボーイにとって優しいとは何かね？】

「え？うーん……俺が馬鹿した時に怒っても、解決策とかを一緒に考えてくれる人ですかね？」

今蛍ちゃんと沖田さんとシズクちゃんが小さく握り拳を作り、書類整理をしていたタマモちゃんが親指を噛み、おキヌちゃんのポルターガイストで植木鉢が浮いた……

「あいだ!?愛子さん、痛いんですジャー」

「あ、あらっ……ごめんなさい」

私の意思に反して机が動いて、足に当たったタイガー君が悲しそうに言うのでごめんなさいと謝る。マリアさんが今度ドクターカオスと一緒に尋ねてくれると言っていたが、最近バタバタしているのか訪ねてくる気配も無い



(それは別にいいんだけどね)

前は机から離れる事が出来なかった。だから時間がかかっても、机からはなれる事が出来るならと思いい我慢できる

「なるほどなるほど。では君は年上か包容力のある人が好きと言う事かネ？」

私がそんな事を考えていると、アーチャーさんが横島君に向けての質問を続けているのを思い出し、書類整理をしている振りをして、その会話に耳を傾ける。横島君の好みを知るのは私にとつてもとても大事な事だからだ

「いや別に年上が好きってことじゃないと思うんだけど……」

「母性の象徴のあるなし」「セクハラ禁止!」「んぐふっ!? ガール、良い左だ。世界を狙えるネ!」

母性の象徴といった瞬間。蛍ちゃんが手にしたファイルを左手で投げつけた、ボクシングの選手のジャブを喰らったみたいに世界を狙えると笑うアーチャーさん。悪い人じゃないんだけど、いまいちこの人の考えている事が判らない

【横島さんは年下とか同年代は嫌いなんですか?】

【そこじゃよね! ワシ、幽霊だけど、年齢凄い事になってるよ! シズクと同じロリ婆……: ……誰がロリ婆か】 ノツブウウウウウウ!!?!?!

ファイルで悶えているアーチャーさんの横を通り、おキヌちゃんとノツブちゃんが詰め寄り、シズクちゃんの怒りを買ってノツブちゃんが窓の外に弾き飛ばされた

「いやどうなんだろう? 小さい子とかは助けてあげないと思っけど」

「んー♪」

アリスちゃんの頭を撫でながら横島君がそう呟く。基本的に横島君は善人なので、困ってる人を見捨てるとかは出来ない人種だと思う「確かに横島さんは年下の人に優しいですね」

「そりゃ自分よりも年下の子が困っていたら助けてあげないと思わないか?」

思います。でもワツシは女子は怖いですけど笑うタイガー君。

横島君はでも大分慣れて来てるんじゃないか？と言う、確かに今の事務所は女性の比率が多い、前までのタイガー君なら逃げていたと思う【ふむ……自分よりも幼い者を護らないとつと君はそう思うのかな？】

アーチャーさんが眼鏡をかけ直しながらそう尋ねる。なんか一々そういう素振りが様になってるように見えるから不思議だ

「そりゃ自分よりも年下とかは助けてあげないといけないうって思う物じゃないんですか？」

横島君の問いかけにアーチャーさんはその通りだヨと笑いながら、ふむふむと頷いている

「あ、アーチャーさん。その動きとか教授って感じですね」

【教授？なんだろう？その響き嫌いじゃないヨ】

アーチャーよりよっぽど私らしいねと笑う。じゃあ今度から教授って呼びましようか？と横島君がのほほんと笑うと、アーチャーさんもそつちがいいねつと楽しそうに笑う。確かにアーチャーさんは学校の先生とかに雰囲気似てるから、教授って言うのも何か納得できさる

【それよりもですよ！横島君は年上は嫌いではないんですよね！】

「いや、そういうのは考えたこと無いし……」

【年上はアウト・オブ・眼中とかな……かふっ!!】

エキサイトした沖田さんが吐血して倒れた。ええつと……今まであんまり話したこと無いけど、この人も横島君の事が好きなのかな？幽霊なんだけど……あ、でもそれを言うとは私は九十九神なんだよねと心の中で呟く

「興奮したら駄目だって、うりぼー、枕」

「ふぎゅ」

横島君の指示でうりぼーが枕をずりずり引き摺りながら運んでくる。横島君は枕を沖田さんの頭の下にねじ込む

【ううう……横島君から圧倒的な父性を感じます】

「年下に父性感じてどうするんだよ」

沖田さんの言葉に横島君が苦笑しながら告げる。確かに年下に父

性を感じるとか駄目人間一步手前のように思える

【ふむではボーイは年下、年上関係なく、優しい人が好みと言う事かな？】

アーチャーさんの言葉に横島君が首を傾げると、アーチャーさんは宜しいと笑い

【ではいくつか質問をしようかな】

まあまだ時間があるから良いですけどと言って横島君は了承したのだが、そこからのアーチャーさんの質問は好みのタイプを聞いていると言うよりも、横島君の人格を調べようとしている。私はそう感じるのだった……

アーチャーさんと言うか、教授と呼んで欲しいと言ったアーチャーさんの目を見てみると、なんか急に眠くなってきた……ふわふわと気持ち良いなんかそんな感じ……

【ボーイ。君は誰が好きとか判らないと言ったね？】

その言葉に頷く、でも俺的には皆好きなのだ。みんなでわいわい楽しく過ごすのが好きで……誰が一番好きとか、そう言うのは本当に良く判らない

【君はきつと判らないんじゃない、判りたくないんだ】

そうなのかな？……首を傾げると教授の目が更に深い光を放つ、俺の心の奥底まで覗き込んでいるような……そんな感じがする

【君はきつと孤独を恐れているし、誰かから認められたいと思っっている。そうであるはずだ、ご両親は君に優しくなかったかな？】

「ううん、怖かった」

子供の時のことを思い出せば、怒られた記憶、叱られた記憶ばかりを最初に思い出す。その記憶を思い出し終わった後にやっと楽しかった思い出を思い出す事が出来る

【君は認められたいという気持ちが強いのだよ。承認願望とも言えるかな？】

「承認……願望？」

深い水の中にいるようなそんな感覚の中。教授の言葉だけがやけにクリアに聞こえる……

【そう承認願望だ。認められ、頑張っていると欲している。だから君は自分よりも年上に惹かれる、だが母を見ているわけじゃない。自分よりも優れている人間に認めて欲しいと言う気持ちがあるからだ】  
そう言われるとそうなのかな？つと思う。頑張つて、頑張つて、よくやった。頑張つたわねって言われたらいいと思う……

【だがそれであると同時に、君は自分よりも弱いもの、弱い物を助けたいと思う優しい心がある。それは自分が辛い思いをしたからだろう……だから君は誰にも優しいのだよ】

それが悪い事とは言わないよ？優しい事は十分素晴らしい事だと教授の声が聞こえたと思つたら、パチンつと言う音に一気に意識が覚醒した

【ボーイ。そろそろ行かないと、待ち合わせに遅れるよ？】

「え？あ！？嘘ツ！！俺寝てた！！」

時間は13時35分。急いで向かわないと間に合わない、慌ててネクタイを締めなおし俺は鞆を手に事務所を飛び出すのだった……

ばたばたと出て行った横島。その後の事務所では

【ボーイに想いを寄せるガールは大変だ。彼はそうそう自分の気持ちを自覚しないだろうね】

アーチャー改め教授と名乗るようになった老紳士は、慣れた手つきでコーヒーをカップに注ぐ

「……お前、横島に催眠術をかけたな？」

【ただのメンタルケアだよ。自分でも出来るなんて思わなかったけどネー！】

昔こんな事をしたような気もするヨ！と教授は笑い。うりぼーにもたれるように眠っているアリスへと視線を向け、机の上にコーヒーのカップを置いて、アリスに自分が着ていたジャケットを着せる

【彼はねえ。今のこの心地よい場所を壊す気がないのさ、だから好きとかが判らないんだよ】

正しくは判りたくないだろうねと教授は笑い、コーヒーに口をつ

ける。だが穏やかに笑っているのだが、その目の力は蛍やシズク、そしてノツブ達を圧倒するほどに凄まじい意志を持つ瞳だった……

【まあ頑張りたまえよ。彼は間違いない、最優良物件だと思うヨ？

……ぶべらっ!?】

だがニコリと笑った瞬間。その正体不明の圧力は消え、教授の顔もこの状況が面白くて仕方ないという様子で、コーヒーを手にしている教授に蛍達が投げつけた辞書や本が命中したのは言うまでも無いだろう……

部下から提出された横島君達の除霊の結果の資料に目を通す。令子ちゃんがいなければ、録に除霊も出来ないと僕は考えていた。冥華さんが一枚も二枚も噛んでやっとな除霊などが出来ると考えていた……

(甘かったか)

予想を遥かに超える優秀な成績を横島君は叩き出して見せた。自分では力が足りないからと都内の有数なGSに力を借り、友人のアイドルの事務所の力を借り、素晴らしい成績を上げ続けている。本人は交渉などを行っているのだが、あの歳では舐められまともに交渉できないのが普通なのに、彼は依頼主との交渉も素晴らしいらしい。現に部下に依頼を出して、横島君との交渉をさせてみたのだが

『とても17歳とは思えませんでしたよ。アフタケアや持続的な除霊になる場合の料金プランとかも丁寧に説明してくれました』

彼が事務所を経営すると思うと、オカルトGメンも危ないかもしれないですねと言う感想だ。それは横島君の人徳の高さを示しているだろう。しかし1週間と言う短期間で利益を1.4倍にしたその手腕は正直驚くべき物がある

(こちらに引き込もうと思っていたのだが……難しそうだな)

横島君の経験では事務所の経験は無理だと思い、冥華さんの提案に乗ったのが失敗だったかもしれない……何か失敗をし、フォロワーする形で横島君に僕は敵ではないと思ってもらうつもりだったのだが完

全に後手に回ってしまった

「少しばかり、手荒な事になるかもしれないが……別のアプローチと  
言うのもありかもしれないな」

神代琉璃と六道冥華が横島君の存在を隠すのに努力していたが、今  
回の事でそれは全て無駄になった。そう、横島君は優秀すぎたのだ。  
令子ちゃんがいなくても、恐ろしい成果を上げすぎていた……

「たとえオカルトGメンに来てくれなくても、彼は護らないと」

出来ればオカルトGメンに来て欲しい。そうすれば僕の下で令子  
ちゃんと共に守る事が出来るから、でもそれでも来てくれないなら来  
てくれないで、護る方法はいくらでもある

「彼も、令子ちゃんももつと強くならないと」

力だけではこの業界を生き残ることは出来ない、むしろ、横島君の  
有能さが出てしまった、ここから勝負なのだ。移籍希望や、助っ人  
の依頼、それにヘッドハンティング。これから横島君には老獪な相手  
との駆け引きが要求される、力ではない、頭脳を使った騙し合いだ。  
これは純粹に経験が物を言う

「憎まれ役も買うしかないか」

もつと危機感を持つて貰う為には憎まれ役を買うことも覚悟しな  
いといけないな

「西条さん。書類整理終わったわよ」

「お疲れ様、令子ちゃん」

書類を持つてきた令子ちゃんに笑いかけながら、心の中では横島君  
を追い詰める一手を考えている。僕もずいぶんと狸になったものだ  
と心の中で呟くのだ……

腕時計を見て、腰掛けていたベンチから立ち上がりゆつくりと歩き  
出す。そして3分ほど歩いた所で前から歩いてきた人物が私に気付  
く

「あれ？神宮寺さんじゃないですか？依頼帰りですか？」

「御機嫌よう。横島」

横島の散歩のコースは把握している。この時間にこの周辺にいれば横島と鉢合わせになる事は判りきつていた

「こんにちわー♪」

横島と手を繋いでた幼女が手をぶんぶんと振りながら挨拶をしてくる。見た目は少女だが……

(ゾンビ……いえ、これはゾンビと言えるのですか?)

呼吸をして、感情表現が出来る。確かに生きてはいないのでゾンビにカテゴライズされるだろうが……生きているゾンビ。言うならばゾンビの上位種。なんで横島がそんな存在と一緒にいるのだろうかと思いつつも、ここで揉め事を起こしては待つていた意味が無くなる

「こんにちわ」

出来るだけ平然を装い、少女に挨拶を返すにはあつと嬉しそうに笑う

「このお姉ちゃん。黒おじさんと赤おじさんに似てる!」

「え? そうなの?」

黒おじさんと赤おじさん……何もかは判らないが、恐らくは最上級神魔なのだろう。少し話を聞いて見たいが、恐らく魔界にいてもこの少女を見ているだろうから、好奇心を満たすのは止めておいたほうが得策だろう

「ぷぎ」

「みむう!」

チビが止めに入るが、それを無視してととと近づいて来たうりぼーの頭を撫でる。ぷぎーっと言う嬉しそうな声がする

「ちよつと色々考える事があつて散歩と言う所ですわ。横島はずいぶんと疲れていそうですね?」

「ははは……ちよつとやつれましたかね?」

乾いた声で笑う横島だが、その顔にはかなり濃い疲労の色が見える。作っておいて正解だった

「これをあげましょう」

「これは?」

青い霊薬をいれた瓶を手渡すと横島は首を傾げる。美神と蛭は横島に霊薬の説明すらちゃんとして無いのでしょうかね？

「体力と霊力を回復させる霊薬ですわ。疲れているようなのでどうぞ」

横島の霊体は何回か調べているし、横島の性格や霊力のバランスも当然知っているのです、これは完全に横島のみ調整した物だ。

(……横島以外じゃこれ飲めないんですね)

普通の人間には効力が強すぎる。私と美神はギリギリOKだと思うが、普通の相手では飲めない物だ

「ありがとうございます！本当神宮寺さんは優しいですね」

「ありがとーお姉ちゃん」

何の疑いも、不安も感じていない。純粹な信頼、それを横島から感じる。それは私が知りえないものであり、もつとも私から縁の遠いものでもある

「事務所の経営と言うのは難しいですが、これも勉強。失敗しても責任は貴方にはありませんわ、もつと気楽にやるべきですわよ」

ドクターカオスなり、あの弓兵を名乗る胡散臭い爺なりを矢面に立たせれば良いのだと遠まわしに言う。すると横島は頬を掻きながら笑い

「心配してくれているんですね。ありがとうございます！俺は全然駄目って判ってますけど、自分で出来るなりに頑張ってますよ！」

……そうじゃない、横島。お前は全然駄目等では無い、頑張り過ぎていると言う事を言いたかったのだ……

(上手く言葉に出来ないって言うのは何てもどかしいのでしょうか)

私の世界と言うのは私のみで完結していた。そこに突如入り込んできた横島、それは私にとって初めての経験であり、どうすれば良いのか判らないと言うのが本当だ。私の場合、横島の気持ちなどを考えずに一方的に、それも押し付ける形にしかなりえない。他人とどう接すれば良いのか判らないからだ。何か言いたいのだが、言葉になら無い。嫌な沈黙が広がりかけたそのとき

「みみー」



「ぴぐうー」

「あ、すいません。チビ達が散歩を再開したいみたいなので、俺はこれで」

「じゃねーお姉ちゃん」

うりぼーに引かれて歩いていく横島。その背中に手を伸ばしかけて、手を閉じて

「何か困った事があれば連絡を、すぐに助けに行きますわ」

私の言葉に横島は振り返り、嬉しそうに笑いながら

「はい！ありがとうございますー！」

そう言っとうりぼー達と共に公園へと足を向ける。散々待っていて、色気も何も無い会話で終る

「へたれー」

「!？」

突如聞こえてきた声に振り返ると柩はくひひっと笑っていた。見られていた、今のを……

「よし、殺しましょう」

「なんでさ」

あれは私の恥となる。ならばそれを見ていた柩を抹殺しようと思ったのだが、柩は私の手をかわしてリズムカルにスキップしながら「これでまた横島のくえすへの信頼度は鰻上り、なかなかあざといねえ?」

「え?」

「ん?」

柩の言葉に驚きの声を上げると、柩も同じような声をしたと思うとくすくす笑い出し

「近くにいる人間よりも少し離れた人間の言葉が強く響くこともあるって事だよ」

あーあー……ボクはどうやって横島の信頼度を上げようかなあつと言いながら、人ごみの中に消えていく柩。もしかなくても、私が横島を待っていたように柩も横島を待っていたのだろうか?そして私が声を掛けてしまったので、声を掛けるのを諦めた?元々横島へは

好意的で、個人的にプレゼントを貰うような間柄のようですし

「警戒するべきかも知れ無いですわね」

予知能力をフルに生かして横島と接触しようとするであろう柩を警戒することと、もう少しフレンドリーな会話をするにはどうすれば良いだろうか?と思いつながら、私はその場を後にするのだった……

「なんか神宮寺さんが霊薬くれたんだー。あの人本当に良い人だよなあ」

「「せやな」」

「なんで大阪弁?」

事務所でくえすから貰った霊薬を嬉しそうに見せる横島に、螢達が何とも言えない表情をしていたのは言うまでも無い……

埃だらけの座敷を音を立てながら進む男の姿があった。埃や蜘蛛の巣が張っている屋敷に眉を吊り上げながら、一番奥の部屋の扉を乱暴に蹴り開ける

「鷲羽! 貴様何故電話に出ない!!!」

その部屋の真ん中で埃だらけの部品に埋もれながら、眠っている無精髭を伸ばした痩せ型の男に怒鳴る

「おんやまあ、ボースー久しぶりですなえ」

その怒声で目を覚ましたのか、欠伸をしながら男が身体を起こす。だらしなく着崩した着物が更に訪ねて来た男の怒りに火を注ぐ

「昨日から電話したのに何故電話に出ない!」

「ああ? あーすんませんねえ。色々と立て込んでいたんですよ、んでボス? 何の用事ですかね?」

ふわあつと欠伸した男に更に眉を吊り上げるが、ボスと呼ばれた男はまだ胡坐をかいて欠伸をしている鷲羽を見下しながら

「横島忠夫の身辺調査及び、戦闘能力の測定。人形使い鷲羽道真(わしゅう・みちぎね) これをお前に命じる」

「あれ? そいつは神代の巫女さんと六道の大狸の秘蔵っ子でしょうに、争うつもりですかい? 陰陽寮の当主様?」

鷲羽の前にいる人物こそ、24歳と言う若さで現陰陽寮の当主と

なつた天才「躑躅院」の人間だった

「GS協会のあの女と大狸と真つ向から事を構えるほど馬鹿ではない、だが今警護が薄い、今のうちに調査しておいて欲しいんだ」

「まあ良いですけどねえ？」

鷺羽は気だるそうに立ち上がり、自身を怒鳴っている男に向けて、親指と人差し指で輪を作りながら

「それでお代はいかほどいたただけるんで？」

とにこやかに告げたのだが、その目は獣のように爛々と光り輝いているのだった……

リポート17 嵐を呼ぶ男 その5へ続く

## その5

リポート17 嵐を呼ぶ男 その5

美神がオカルトGメンに出向し、横島が所長代理をしている。私も  
柩も最初は助っ人を考えていたが、琉璃にストップを掛けられてし  
まった。フォローの出来る人材が少ないので何かミスをしないかと  
心配に思い、暫く情報収集をしていたのだが、入ってくる情報は良い  
情報ばかりだった。昨日の疲れた表情から、何か失敗でもしているの  
かと思いい、心配になって調べたがどれも成功していて。純粋な疲労で  
横島はやつれていたようだ

「しかし本当に規格外の男ですこと」

六道の大狸がバックについているから失敗したとしても、六道が  
バックアップするだろう。まあその代わりに美神は莫大な貸を六道  
に作る事になるが、それでも横島と蛭の経歴には傷がつかない。六道  
も失敗する事を前提に考えていたでしょう、私も何かミスをするので  
は？と心配していたのだが、横島は優秀だった。知り合いに声を掛  
け、助っ人を頼み。そしてその助っ人の能力を生かせる場所に配置  
し、自身は依頼人との交渉を務める。口で言うのは簡単だが、それは  
事務所を経営している人間ならその苦労を知る事が出来るだろう

「横島の母親の血ですかね」

横島の母親、旧姓紅百合子。なんでもスーパーOLとして、恐ろし  
いほどの経営手腕や、業務のプランニング能力を持っていたという。  
その血を引いているのですかね？と呟きながら、私は取り寄せた資料  
に目を向けた

「さて、あの胡散臭い英霊の正体の特定くらいはしておかないと」

横島の家に入り込んだあの記憶喪失だという英霊。自身を弓兵  
と名乗ったと言うことは弓や銃に関係する英霊と言う可能性もある  
が、正直それはそこまで信用しているわけではない。こうして取り寄  
せた資料もどこまで頼りになるかなんて判らない

「ですがそれもフェイクと言う可能性もある」

そもそも記憶喪失なのだ。そんな男の言っていることを鵜呑みにする馬鹿はいない

「ヨーロッパ系で晩年に死んだ男……」

あの外見年齢から考えて、50代だろう……となると学者と言う線が最有力だろう。趣味や何かで銃を嗜んでいてアーチャーを名乗っている……しかしヨーロッパ系の学者となると恐ろしい数の人物が候補に挙がるだろう。しかし私の感覚ではあの老人は正道の英霊ではない、恐らく反英霊に属する俗に言う悪党と呼ばれるタイプのような気がする……そう感じているのは美神も同じだろう。信長や牛若丸とは、根本的に存在が違うと感じるからだ……それが反英霊とは言い切れないが、その可能性は高い

「ドクターカオスが手掛かりですかね」

私で調べるよりもヨーロッパの魔王の異名を持つドクターカオスならば、もしかしたら知り合いで心当たりがあるかもしれない。そんなことを考えていると、電話が鳴る

「もしもし？神宮寺除霊事務所ですが」

『神宮寺！横島が!!横島がいなくなった!!シズクとか、タマモも場所を特定出来ないって！力を貸して!!』

受話器越しの大声に眉を顰めながらも魂が繋がっている、シズクやタマモが発見出来ないと言うのは相当な異常事態だ

「事務所の結界を解除しておきなさい！転移で飛びますわ」

蛍の判ったと言う返事を聞くのと同時に私は転移で美神の事務所へと飛ぶのだった……

横島は昼過ぎに依頼主からの電話があつて、打ち合わせ場所が変わったと言って出かけて行った。打ち合わせ場所が変わるといふ事は珍しい話ではないので、気をつけてと行って見送ったのだが、それから2時間後依頼主の方が尋ねて来て

「すみません、お約束の時間をずらしていただきありがとうございます」

した」

「え？」

その言葉に思わずそんな声が出た。依頼主の初老の男性は首を傾げながら

「そちらの従業員だと言う、痩せてる無精髭の方にそうお伝えしたのですか？」

その言葉に異常事態だと言うことに初めて気付いた。横島の所に来た電話と、依頼主の所にやって来たという男……

(やられた！)

横島をどこか別の場所に連れて行かれた。その事に気付きながらも依頼主との依頼料の話し合いをしないわけにはいかず、シズクとタマモに目配せをしてから応接間で依頼主との話し合いを済ませ、事務所の外まで見送って応接間に戻る

「……くそッ!!どこのどいつだ!!横島の場所を特定出来ない!」

「魂で繋がってるのに、何で判らないのよ!」

シズクとタマモが顔を歪めながら叫ぶ。私はシズクとタマモがいれば横島のいる場所を簡単に見つける事が出来ると思っていた

「判らない!?それどういう事!」

どうしてタマモとシズクで場所が特定できないのか?まさかガープに浚われたのかと言う考えが脳裏を過ぎる

【ボーイは東京内にいる事は判っている。だが場所の特定が出来ないそうだ……まるで強力な結界に阻まれているようにと……】

教授が沈鬱そうな表情で呟く。神族のシズクの探知と最上級の妖怪であるタマモの探知を拒む結界……それがどれほど規格外かその一言で察する事が出来た

「ピートさん!唐巢神父に連絡してください!タイガーさんはエミさんに!おキヌさんは美神さんと呼んで!マリアさんとテレサさんはドクターカオスを!私は琉璃さん達に電話するわ」

早く横島を見つけないと大変な事になる。事務所の中にいる面子にそれぞれの師匠を呼んでくれと頼み、受話器を手にするのだった  
……

「横島君が何者かに襲撃を受けているのは間違いないわね」

それから15分ほどで美神さん達は事務所に来てくれた。琉璃さんだけは来る事が出来ないけど、協会の職員を捜索に回し、自身も探しに出てくれると折り返し電話を掛けて来てくれた

「東京にいるのは間違いないが、場所を特定出来ない……結界と言うのは直ぐに思い浮かぶが……」

「……私とタマモの探知をすり抜ける結界など信じられない」

唐巢神父の言葉にシズクがぶすつとした表情で告げる。シズクとタマモは横島への加護がある、それを妨害する結界なんてそう易々と準備出来るとは思えない

「神魔でしょうか？」

「それは無いワケ。神魔ならもう横島は連れ去られてるワケ」

私の呟きにエミさんがそれは絶対に無いと断言し、その言葉の後にドクターカオスが口を開く

「シズクとタマモはそれぞれ有名すぎる。それだけに特化すれば、人間でも2人の感覚を欺く事は出来る筈じゃ」

「水神と九尾ですものね、確かに特化すれば私でもその感覚は妨害出来ませわ」

現に1度やって見せたでしょう？と神宮寺が涼やかな表情で告げるが、足を小刻みに動かしている所から、かなり焦っているのが判る

「……駄目だ、横島の魂に移動出来ない」

「となると相当厳しいの……」

「もう手当たり次第探すほうが早いんじゃないですか!？」

【落ち着け馬鹿、お前直ぐ吐血してダウンするんじゃないから】

【じゃあ私が!】

【お前も霊力尽きたら消えるじゃろうが!!動くな馬鹿者!】

一縷の望みを託し心眼に横島の所に移動出来ないか試して貰ったが、それも駄目だった。ノツブが心眼の言葉に頭を抱えながら呟き、慌てて駆け出そうとする沖田さんの服を掴んで止め、牛若丸を止める。なんと言うかとてもぐだぐだだった……

「だーっ!!ここでぐだぐだ話し合っても埒があかねえ!!探しに「黙っ

てなさい」へぐろっ!？」

このままここにいっても埒が明かないと言う伊達の顔面にクシナさんが裏拳を叩き込み黙らせる、陰念は顔が物凄い引き攣っている

「メドーサ様は居なかったから神魔の協力は得れない。となれば人海戦術しかないと思うけど……どうかしら?」

クシナさんがそう告げるが、人海戦術で全然違う場所を探しているは意味が無い

「横島さんはそんなに遠くに移動になってないっていましたじゃー」

【近くまでタクシーで行って、あとは歩くつもりって言ったわ】

タイガーと愛子さんが追加で情報をくれるが、それもあやふやな物だ。依頼主事務所の周辺か、それとも除霊現場の周辺かが判らないからだ

「今現在都内で霊力の反応は感知できません。戦闘にはなっていないと思いますが……」

「でもなんかざわざわした気配を感じるよ……何これ……」

レーダーで都内を調べていたマリアさんとテレサさんが顔を歪めながら呟く、霊力を察知して横島を見つけてくれようと思っていたと思うのだけど、結界でその痕跡さえも隠されていると可能性が高い。時間が経てば経つほど横島が危ない。それが判っているから焦りばかりが募ってくる

「ある程度場所を絞り込んで動くか、琉璃君からの情報を待つて動くか……」

「唐巢先生、それでは手遅れになる可能性があります」

場所を絞り込んだほうがいいと唐巢神父が言いかけるが、美神さんがその言葉を遮る。確かにここまで念入りにして横島を隔離したのだ、手を拱いていては手遅れになる可能性が高い

「依頼主の家、除霊した現場周辺をしらみつぶしに潰すしかないね。僕の車は生憎2人乗りだ、先に行くよ!」

西条さんがそう言って事務所を飛び出し、美神さんもバンのキーを握り締め

「雪之丞、陰念、蛍ちゃん!タマモ!行くわよ!時間が無いから!」



「私はバイクで行くわ、雪之丞、陰念。美神さんに迷惑を掛けるんじゃないわよ」

クシナさんの言葉にうつすと返事を返す2人を見てみると、チビとうりぼーを抱き抱えたタマモが脇を駆け抜けていく、私は机の上の心眼を首に巻き

「横島の気配を感じたら教えて！」

【言われるまでも無い。急ぐぞ!!】

ヴァンパイヤミストで唐巢神父と共に窓から飛び出したピートさん。タイガーを連れて、事務所を出て行くエミさん。幽霊のノツブと沖田さん、教授にシズクは既にその姿を消し、神宮寺なんて真っ先にその姿を消している。私も階段を駆け下りていく、美神さんの後を追って走り出すのだった……

ボロボロの廃倉庫の中のドラム缶の影に隠れ、必死に息を整える。闇の中から聞こえてくるカチャカチャと言う音が不気味さと恐怖を煽る……

(くっそお……なんだよ、あれは!!)

依頼主の使いと言う男からの電話で、料金の受け取り場所が変わったと聞き。指定された場所に来た……来た当時は綺麗な物流倉庫に見えていたのだが、中に入ると同時に一瞬でボロボロの廃倉庫へと変わった。そしてそれから俺はある化け物に追い回されていた

『キチキチキチ』

小刻みに響く時計の様な音……近くにしていると悟り息を殺し、身を潜める。ドラム缶の影から通路の様子を窺っていると、俺の目の前を何かが通過していく……それは漆黒の体と8本の足を持つ蜘蛛のような異形の姿。だが生き物と言う感じはしない……生きているという感じがしないのだ

(なんだあれ……)

こうして近くで見れば見るほど訳が判らなくなる。見た目は生き物なのに、生命の気配を感じない……悪魔なのか、それともガーゴイ

ルなのか……俺にはそのどちらなのか特定が出来ない。だがその化け物を観察していた時、首筋に静電気が走ったような感覚がした

『キューー!』

「くそっ! 新手かよッ!!!」

闇の中から飛び出てきた青い鳥。回転する嘴を俺に向けて降下してくるのを見て、頭を抱えてドラム缶の影から飛び出す。鳥は回転する嘴でドラム缶をまるで紙のように簡単に引き裂く……そしてその音で蜘蛛の化け物が音を立て俺の方へ突進してくる

「くそッ!!!」

栄光の手で手摺を掴み飛び降りる。栄光の手が伸びて1階のドラム缶の上に足が乗ったのを確認すると同時に、栄光の手を解除して走り出す。蜘蛛の移動は基本遅く、俺を見つければ猛烈な勢いで突進してくる。口からは霊力の網を吐き出す、これは蜘蛛の糸同様身体につくとそう簡単に外す事が出来ない

(でもそう思い込むのは危険か)

蜘蛛の糸は透明な物だ。あの様にあからさまに光るのは明らかに罠と思える

(心眼がいてくれれば)

俺も霊視は出来るが、心眼ほどの精度は無い。それに心眼がいなければベルトも出す事が出来ない……

(シズクも来ないしな)

廃倉庫の中には雨水が溜まっている部分もあり、シズクが見つめてくれるのでは?と言う淡い期待を抱きながら声を掛けたが反応は無かった。出口にも向かったが、何かに弾かれ外に出ることは出来なかった……つまり俺はこの廃倉庫の中に閉じ込められ、そしてシズク達も俺を見つけれないと言う絶望的な状況である事が判った。外に出るにはあの蜘蛛か、鳥かそのどちらかか、もしくは両方を撃破しなければならぬだろう

(栄光の手、勝利すべき拳、陰陽札に霊波刀……やれるか?)

心眼のフォローも虫も、美神さんもシズクもいない。完全な俺1人で、俺よりも強い相手2体との戦い……心臓がばくばくと脈打つのが

判るが……やるしかない、俺は覚悟を決めネクタイとジャケットを脱ぎ。近くに落ちていた棒や本を使い、後ろを向いて座っているように見せかけ逆方向へと走り出すのだった……

姿隠しの札で姿を隠しながら、横島忠夫の戦力分析をしていた。恨みは無いが、これも仕事。強いては金の為だからと割り切る

(まあ殺しはしないから、安心しな、ボーヤ)

今回は戦力分析、殺せや浚えという命令ではない。だから殺しはしない、操っている人形も適当に組み上げた蜘蛛と分析及び、録画をしている鳥だけだ。

(眼がいいねえ……)

蜘蛛の吐き出す霊糸は絡めとれば、人間は愚か、魔獣や妖獣さえも簡単に動きを封じる事が出来る。適当に組み上げた中でもこのからくりだけは本気で作ったのだが、見えない糸、見える糸を組み合わせているのに、それをことごとく交す

(攻撃力だけじゃ無しと……)

GS試験での圧倒的な攻撃力こそ聞いていたが、どうも横島の場合直接的な戦闘力よりもその眼と瞬発力。そしてそのスタミナを警戒するべきに思えてくる。かなり多角的に追い回しているのだが、それでも疲れた素振りを見せない。これには正直おどろか……つちい!! 左手の霊糸と繋がっている手袋を振り上げ、蜘蛛の関節を一時的に解除する。これで立体的な姿を維持できず、蜘蛛が床に倒れ付し、その上を火球が通り過ぎていく

(ふーやっべえ……油断したぜ……それにしても陰陽術か)

陰陽寮の血統だけで威張り腐っている馬鹿共よりも精度も術を組み上げるまでも圧倒的に早かった。再び指を動かして、関節を入れなおすが、今のはやばかったな……

「五行陰陽道……ったく、ボスと同じかよ。ちくしょうめ」

陰陽術には様々なバリエーションがあるがその中でも平安時代の天才術師「高島忠助」のみが使いこなし、婚姻を結ぶという話が出た

「躑躅院」に伝えた五行陰陽術。陰陽術は全ては陰陽五行思想によって構築されているが、高島の術はその中でも特異な形態だったと聞く「こりゃ相当な相手か？」

霊力の籠手、奇妙な球体という話は噂で聞いていたが、陰陽術までとは知らなかった。六道と神代が隠していたのは明らかだし、何よりも……ボスよりも出力が強い。しかも術式も違う

「ボスも熱を上げそうだよ、全く」

今は碌な陰陽師が陰陽寮にいない。大体がボスが作った札を使い、除霊する連中ばかりだ。だからこそ若いボスに対する反抗心なども無い……だがそれは全てボスの負担へと直結している。それなのに若いボスを蔑ろにする連中には正直むかつ腹も立つと言う物……

「つとこと……やばいやばい」

両手の手袋に意識を集中させ、指一本一本を丁寧に動かし蜘蛛を操作する。壁越しに横島が叫んでいるのが聞こえるし、鳥の見える光景があっしの目には映っている

（霊波刀に伸び縮みする霊力の籠手……なるほどねえ）

横島の戦闘スタイルは大分読めてきた。伸縮自在の霊力の籠手と霊波刀を組み合わせ、近く中距離に特化した戦闘スタイル。そこに陰陽術による全体支援……

「急急如律令ッ！風精招来！我に宿れッ!!」

無地の札に親指を噛み切りだした血で素早く文字を刻み、詠唱を唱える横島。その呪文を聞いて、あっしは思わず叫びだしそうになった（おいおいおい!!マジかッ?!?!?)

陰陽五行は木、火、土、金、水からなる思想であり、陰陽術の術の基本だ。その中で風は木に属するが、気難しい精霊でありボスはもっぱら木による治癒などを扱う。風精を呼び出し、憑依させ加速力を上げる……これはボスでも無理な術だ。六道の大狸が隠し通そうとした理由も判る。六道も高島に縁のある家系……あっし達よりも先に横島が高島の転生者と言う考えに辿り着いていたのだろうか

（やつべえ……これはマジでやばいぞッ!!）

必死に糸を繰るが、元々適当に組み上げた人形だ。あっしの操りの

術についていけない、鳥の支援も合わせて何とか捌いているが、徐々に差し込まれているのが判る。適当なところで引き上げる事を考え始めた時

「横島君大丈夫か!？」

「西条……さん!?!どうしてここが!？」

横島の問いに直感だ!と叫ぶ長髪の男。オカルトGメンの西条輝彦の到着にあっしは心の底から溜息を吐いた。蜘蛛がぶっ壊されるのは確実……もつと手を抜いたからくりになれば良かったと後悔したのだが、時既に遅しだと言うことに気付いてしまったから……

「しゃーねえ」

鳥だけでも回収しようと思ひ。鳥を回収するために右手の手袋を大きく動かすのだった……

靈感が囁くという感覚をずっと感じていた。それに突き動かされるように僕は車を市街地の中の廃倉庫へと向けた……数ヶ月前に除霊を済ませ、売却地になつていふ場所。既に霊などは存在しない完全に浄化されたその場所に結界が張られているのを見て、霊剣ジャステイスを突き立て抉じ開けると中から激しい霊力の流れが噴出してきた

(これで令子ちゃん達もこの場所を見つけたはずだ)

これだけの霊力の噴出。令子ちゃん達なら確実に見つけてくれるはず、ジャステイスを結界から抜いて、中に入ろうとしたが

「これは!？」

ジャステイスを引き抜こうとすると結界が閉じてしまう。だが手を拱いていては……少し悩んだが、僕は懐の精霊石の弾頭を持つニューナンブを手に、結界の中に飛び込んだ

「くっ!このッ!!」

『キチキチキチッ!!』

横島君の怒声と耳障りな歯車の回る音。それを頼りに暗い廃倉庫の中を駆け抜ける、倒壊した機械の向こう側に横島君と蜘蛛のからく

りを見つける。

(からくり人形……だと)

昔の道具使いが使っていた人形。特殊な加工を施し、悪霊等とも戦える人形。だがそれを繰る術は難しく、今では使う人間が居ない特別な除霊具……それと横島君が戦っている事に驚きながらも、何とかあの場所へ行く方法を考える。倒れた機械や、瓦礫で最短ルートは無理、かと言って遠回りしている時間は無い。その時天上からぶら下がっているクレーンを見つけ

「あれしかない」

階段を駆け上りニューナンブを懐に戻す。相当な高さだが、ここから飛んでクレーンの先にぶら下がり、機械の上に着地する。それしかない、後で思うがもつと他にいい方法が会ったのでは？と思ったが、この時は本当にこれしか思いつかなかった

「うおおおッ!!」

手摺を踏み台にして思いっきり飛ぶ。両手を必死に伸ばし、クレーンを掴むとがくんと身体が大きく揺れる

「くっ!!」

それでも必死にクレーンの先にぶら下がり倒壊している機械を乗り越えると同時に手を放す

「はぁ……はぁ……」

さ、流石に今のは危なかったと呟くと同時に機械の上から飛び降り、倉庫内に反響する音を頼りに走り出す

「横島君！無事か!?!」

「西条……さん!?!どうしてここが!?!」

蜘蛛と霊波刀で鏢迫り合いをしている横島君を見ると同時に、蜘蛛の頭部目掛け、迷う事無くニューナンブの引き金を引く

『キリキリ!?!』

頭部が大きく弾かれ、バランスを崩す蜘蛛を横島君が蹴りつけると音を立てて蜘蛛が倒れる

「こつちだ！早く！」

「っはいい!!」

蜘蛛が倒れていたのはほんの数秒。直ぐに立ち上がり、横島君を追いかけて来る蜘蛛目掛け続けてニューナンプの引き金を引くが……  
(やっぱりか！)

人形は悪霊や実体を持つ妖怪と戦う人形だ。霊波には恐ろしいほどに強いのは言うまでも無いが、物理防御も凄まじい。精霊石の銃弾を簡単に弾き飛ばす姿に焦りが湧く

「西条さんーこれ!!」

横島君が倒れかけの機械に体当たりをしているのを見て、それで通路を塞ごうとしていると理解し、僕もその機械に体当たりをする。2人の体当たりで機械は倒れ、通路を塞いだが正直時間稼ぎにしかならないだろう

「た、助かりました……はあ……はあ」

座り込み荒い呼吸を整えている横島君の額には大粒の汗が浮かんでいる

「大丈夫かい？」

「な、なんとか……こっちの攻撃全然利かないしあれ何なんですか？  
化け物？妖怪？」

横島君の問いかけに操り人形のことを説明すると、そんなものもあるんですねと驚いた様子で呟いた後

「それで倒す方法とかってあります？」

「武器が無い」

ジャステイスでも力不足だ、もっと重量のあるハンマーみたいな武器じゃないと言うと横島君は最後の札ですけどと呟き、指を噛み切って文字を刻み

「急急如律令ッ！土精招来！我が矛となれ！」

土……いや、石か!?石が盛り上がり幅広のバスターソードのような形になる

「これでどうですかね？」

「っ少し重いが……行けそうだ」

バスターソードを握り締め持ち上げる。かなりの重量があるが、これだけの重量があれば……

「しかし陰陽術をここまで使うとは、恐れ入るよ」

「ぶつつけ本番ですよ」

上手く行く自信も無かったですと言うが、それでもこの技量には正直感心する

「ではぶつつけ本番ついでだ。これを使ってみてくれ」

「け、拳銃!」

「そうだ。僕がこの剣であるの人形を破壊する、君には支援を頼みたい。出来るか?」

使い方は教えるという横島君は少し考え込む素振りを見せた後、やりますと呟く

「では簡単に使い方を教える。それと君が囮になることも自覚してくれ」

横島君を狙っているのは明らか、横島君を囮にし、一撃で決める打ち合わせをする。横島君は不安そうだが、その目は強い光を放っている……これなら大丈夫という確信があった

「くっ!このおっ!!」

ガン!ガンッ!!と銃声の響く音が倉庫内に響く、それを僕は機械の上で見ていた。剣の重さはかなりの物で腕力で振り回すのは無理だ、落下による重力を利用しないととても振り下ろす事が出来ない

(いい眼をしている)

簡単にレクチャーしただけなのに、横島君の射撃は的を得ていた。これは鍛えれば射撃も十全に使いこなせそうだ

(今だ!)

銃弾を弾き飛ばし、横島君へと近づいた蜘蛛が前足を振り上げたのと同時に、機械から飛び降り

「でやあああああ!!」

斬ると言うよりかは押しつぶす、重力と剣の重さを利用した一撃を蜘蛛の胴体に叩き込む。めきめきと言う音を立てて、剣が胴体にめり込んでいく歯車やバネが剣のめり込んだ場所から飛び出し、蜘蛛は大きく1度痙攣するとその動きを止めた

「お疲れ様。とりあえずこの倉庫を『キリキリッ!!』なっ!」



頭部だけが胴体から分離し、その牙を僕に向けてくる。終わったと思っていたから、反応が遅れたその瞬間

「急急如律令ッ！炎よ！我が敵を喰らえッ!!」

横島君の手から炎が打ち出され、頭部を燃やす。もう札はないって言っていたのに

「あはは……空中に血文字書いたら出来ました……俺ってもしかして天才？」

媒介をなしに陰陽術を使った。その事と背後から迫る敵に僕が気付かなかった……その2つを見た瞬間、一瞬意識が飛んだ

「ああ、お前は何時だって天才だよ。高島」

「はい？」

横島君の呆然とした声にふつと意識が戻り。僕は頭を振りながら「とりあえず外で令子ちゃん達を待とう。頭痛とかは無いかい？」

大丈夫ですと返事を返す横島君を見ながら、今僕はなんと言ったのだろうか？無意識に口にした言葉なのでなんと口にしたのは覚えていない……だけど妙に懐かしいような……そんな風を感じながらふらついている横島君に肩を貸して、僕はその場を後にするのだった……

横島の戦闘力分析に来たが、あつしの評価は規格外としか言いようがない

「化けもんだなあ……こりやボスも本気で動くなあ……つと」

「貴方……何者？」

この場を後にしようと思ったその時。背中に刃物を突きつけられ、ぱつと両手を挙げる。窓ガラスに反射した背後の人物を見て溜息を吐く

「こりや神代の巫女姫さんじゃないですかい？」

横島と西条の2人に意識を向きすぎて、背後に立つ人間に気付かないなんて、あつしも錆付いたもんですねえ……

「……お前。どこの手の者だ」

たたきつけられる圧力と殺気……ボスよりも若いくせにGS協会

会長なんて役職についているのも納得だ。雰囲気とかうちのボスによく似てやがる

「あつしは只のどこにでもいるぷーたろーでさあ?」

ボロボロのジーンズと色褪せたシャツと、くたびれたジャケットを見せながら言うが、巫女姫の視線は服装ではなく、あつしの両手に向けられていた

「嘘言うな。その手袋……人形使いね」

その言葉に内心舌打ちする。この手袋を知っている人間は少ない、既に人形使いは殆どいないからだ

「まあぱつとしないあつしですが、1つ誇りがあるんですわ」

「GS協会で聞いてあげるわよ」

「あつしは仕事をミスした事が無いんですわ、それがあつしの誇りでねえ!!」

「しまっ!?!」

奥歯に仕込んでいた閃光弾を舌で起動させ吐き出す。周囲が真っ白に染まるなか、札を取り出し、地面に叩きつける。巨大な鳥のからくりが姿を見せると同時に手袋から霊糸を出しからくりと繋ぐ

「じゃーなー巫女姫さんよお!またどつかで会いましょうや!!」

からくりが空に舞い上がり、その勢いで地面から足が離れるのを感じながら、ボスにどうやって言い訳しようか必死に頭を巡らせるのだった……

「やられた……どこの組織よ」

人形使いはいまや殆どいない、それを実践級で操る男。これは生半可な相手ではない、横島君の情報がGS協会以外に流れた事を知り、どうしようかと琉璃は小さく呟くのだった……その視線の先には鳥のからくりで空高くへ逃げ去った男が逃げる方向へと向けられていた……

リポート17 嵐を呼ぶ男 その6へ続く

## その6

リポート17 嵐を呼ぶ男 その6

突然廃倉庫の方角から膨大な霊力の流れを感じて、バンを其方の方  
向へ走らせる。エミや唐巢先生も感じ取ったようで、私が到着した時  
にはエミと唐巢先生の姿と、ぐったりしている横島君を抱えている西  
条さんと琉璃の姿があつた

「横島！」

バンの扉を開けるなり、蛍ちゃんとタマモが飛び出していく。私も  
サイドブレーキを引いて、蛍ちゃんの後を追いかけるように横島君の  
所に向かった

「あー蛍、美神さん……お疲れ様です」

地面に座り込んで疲れた様子の横島君。その様子を見れば只事で  
はないと言うのは一目で判った

「いや、実は……」

何があつたのかと言おうとした横島君だが、それをシズクが手で制  
し、私達の方を向いて

「……まずは治療だ。何があつたかはその後でもいいだろう」

「そうですね。治療薬も持ってきているから、これを飲むと良いで  
すわ」

確かに事情を聞くのは、治療が終わってからでも十分だ。私はシズ  
クの言葉に頷き、神宮寺とシズクの2人に治療を施されている横島君  
を見ながら

「蛍ちゃん。唐巢先生とか、西条さんに事情を聞いてくるから、側に  
てあげて」

「判りました」

不安そうな表情をしている蛍ちゃんに横島君についている様に声  
を掛け、1度横島君から離れる

「琉璃、西条さん。何があつたの？」

2人が多分横島君を助けてくれたのだと思い、事情を知っているは

ずだと思つて問いかける。2人の顔は深刻その物でやはり只事ではないと悟つた

「実戦級の人形使いに横島君が襲われていたんだ。危ないところだった、良く1人で応戦したよ」

西条さんの言葉に思わず嘘でしょ?と言う言葉が口から出た。人形使いは昔はいたが、今は殆ど居ない。横島君の陰陽術や妖使いほど稀少ではないが、それでもかなりレアなスキルだ。しかもそれを実戦級にまで練り上げているなんて、到底信じられない

【西条。お前の言うとおりに焼く焦げた人形を見つけたぞ】

【おっきい蜘蛛の姿をしていますけど、もうボロボロでとても運べそうに無いですよ】

倉庫の中を見ていたのだろう、ノツブと沖田ちゃんが深刻そうな表情で告げる。それに続くように琉璃が

「私の目の前で鳥の人形で空へ逃げていきましたよ。多分どつかの組織……関西系だと私は思います」

関西系の組織と聞いて真つ先に思い浮かぶのは陰陽寮。琉璃と冥華おば様が必死になつて横島君を隠そうとしていた組織に知られてしまった……

「かなり不味いワケ。絶対スカウトに動くわよ?」

「でしようね……今の陰陽寮を考えれば……」

陰陽寮は既に陰陽師の組織としては破綻している。実戦レベルの陰陽師が居ないからだ、だが平安時代の陰陽術を使える横島君の存在がバレてしまった。これは明らかに良くない

「おキヌちゃん、ノツブ。雪之丞達に横島君を見つけたから、1度私の事務所に戻るように伝えて来て」

【判りました。出来るだけ早く戻りますね】

空を飛んで雪之丞達を探しに行つたおキヌちゃんを見送り

「西条さんもそれでいいですよね?」

「勿論だ。他に陰陽寮の人間が近くにいても不味い、今はこの場所を離れよう」

私の考えに西条さんと琉璃が頷き、エミと唐巢先生は倉庫に視線を

向けて

「私と小笠原君で倉庫の周辺を調べる。どうして横島君を見つける事が出来なかったのか……その理由がこの周辺にあるかもしれない」

「令子、おたくは自分の所の弟子を守る事を考えるワケ。タイガー！ピート！こつちを手伝うワケ！」

横島君を心配してくれている2人にありがとうと礼を口にし、私はまだふらついた様子の横島君に肩を貸して、その場を後にするのだった……

美神さんと私で横島に肩を貸しながら、事務所へと戻って来たのだが……横島の表情はかなり暗く、相当消耗しているのが一目で判った。眼魂も使っていないのに、どうしてここまで消耗しているのか？それに美神さん達が言っていた人形使いと言うのも私は知らない。その人形に何か秘密があるのだろうか？

「つとと……」

「……無理をするな。大分霊力を消耗している」

足元がおぼつかない様子の横島にシズクがソファアに座るように言うというか、強引に横島を座らせるが、横島はそのまま眠ってしまった。チビ達はそんな横島が心配なのか、側に寄り寄っているのが見える

「気分が悪いとか、どこか身体に違和感とかありますか？」

神宮寺が横島にそう尋ねる。返事を返す気力も無いのか、首を左右に振る横島に神宮寺は特に身体に何か仕掛けられたという訳では無さそうですわねと呟く

「横島はどうしたんだ？ずいぶん調子が悪そうだが……？」

「人形使いと戦ったからよ、悪霊と妖怪と戦うように調整された人形は、相手の霊力のバランスを崩すの、それで横島君の霊力のバランスが崩れてる。そうよね？心眼」

そんな事が出来る霊能者がいるなんて……全然知らなかった。いや、もしかすると逆行した事で生まれた差異なのか、それとも逆行前

も存在していたが、表に出なかったのか？そのどちらだろうか

「ああ、だがこの程度なら問題ない一晩あれば私が整える事が出来るレベルだ」

だから横島は眠らせたと言う心眼。顔を近づけると規則正しい寝息が聞こえてくる

「良いの？眠らせて話に参加させても良かったんじゃない？」

「だが今の消耗している状態で話を聞かせても理解出来ないだろう。明日落ち着いた状況でもう1度聞かせれば良い」

それに横島が寝ているからこそ、話せる話もあるだろう？と心眼は言う。確かにその通りかもしれない、横島が今狙われている。そんな話をすれば横島がどんな行動に出るか……

「とりあえず今優先するべき事は、令子ちゃん。君はもう自分の事務所に戻るべきだという事だよ」

西条さんが真剣な表情で告げる。出向期間はまだ4日残っているけど、正直こんな事態になってしまったから出来れば美神さんには戻ってきて欲しい

「良いの？」

「良いに決まってる。元々僕が無理に頼んだことだからね、弟子を持つ身としては弟子を優先するのが師匠としての心得と言う物だよ」

無理に引き離れた僕が言うことじゃないけどねと西条さんは苦笑し、美神さんありがとうございますと頭を下げる。美神さんがいないから横島が先頭指揮を取った、将来の事を考えればそれは間違ったことではない。ただ私達の見積もりが余りに甘かったのが原因だ

「ああ、それなら西条君。私は幽霊だが、手伝いをしてもいいヨ。なに、頭の良い君なら判るだろ？私が何をしようとしているのか」

「あくどいな、貴方は……お願い出来ますか？」

「勿論だとも。大丈夫、ちゃんと仕事はするよ。ちゃんとね」

西条さんは肩を竦めながらも、教授の言葉に頷き、教授はニヤリと底意地の悪い顔を浮かべる。幽霊だから姿を隠そうと思えば、姿を隠せる。そしてオカルトGメンのネットワークを通じて情報を集める。そして西条さんにそれを黙認しろと遠まわしに言っているのは明らか

かで、それを受け入れた西条さんに少し驚いた

「良いんですの？天下のオカルトGメンがそんなことをしても」

「構わないよ。どっちにせよ、無理やりこの地位を手にして日本に来たんだ。Gメンの中で元々僕は良い立場じゃない、今更気にする事でもない」

そう笑う西条さん。その表情を見れば生半可な覚悟で日本の支部長になったのでは無いと言うのが良く判った

「何時までもオカルトGメンの支部を空にする訳には行かない。そろそろ戻るよ、何か判ったら連絡する。教授さんだったね？早速だけ来てくれるかい？」

【構わないサー！後でボーイには部屋を出ると伝えればいいからね】

にこやかに笑う教授に西条さんは苦笑しながら、僕の事務所にも幽霊が住着きそうだと笑う。教授と共に事務所を後にするのだった……

「横島に眼魂を常に携帯するようにするべきでしょう。牛若丸か、信長。いざとなれば、眼魂から出て戦える英霊と共に居る方がいいでしょう」

【私も！大……カフツ！】

最後まで言い切れず吐血する沖田さんは論外。護衛として不安すぎる……戦闘力の高さは判っているが、不安要素が余りに強すぎる

【ワシはそこまで近接に優れているわけじゃないからの、牛若丸の方が適任じゃろ？】

【お任せください、今度から主殿の危機となれば直ぐに戦いましょう】  
ちよつと性格面に不安が残るが、近接に優れ加速力などにも優れている牛若丸眼魂の携帯をこれから横島に義務化させよう

「えつと横島君って今危ないってことなんですか？」

事務所から出る事が出来なかった愛子さんがそう尋ねてくる。今回は直接的な被害が出ているけど……

「実際どうなんですか？」

「正直に言うと、判断に悩むって所ね」

あれだけの人形を扱える相手。そうなれば横島を殺そうと思えば

殺せるほどの力量差があった、それをしないのは横島君を生かしておくことに意味がある。そして更に言えば

「未知数の戦闘力を持つ横島を調べようとしたつとと言うのが妥当な線。次に仕掛けてくる時は……横島のスカウトもしくは浚う事を目的にしていると見ればいいでしょう」

平和的か暴力的かと言うのは異なるが、横島を奪おうとしている相手がいる。しかもそれは……

「……私と横島の繋がりを絶つ事が出来る相手」

「正直あれは驚いたわね……」

魂で繋がっているシズクとタマモの感覚すらも阻害できる相手……その厄介さと危険度の高さは容易に想像できる。神魔やアスモデウスの事で手一杯なのは判っているが、今回の事もお父さんに相談しておこう。

「また厄介な問題が増えましたね……」

「そうね。でも横島君が悪いわけじゃないから」

神魔に魔人に、ガープ達。そしてそれらの中心にいる横島……穏やかに眠っている姿を見ながら、また大きなトラブルが近くに近寄ってきているような気がした……なおこれから15分後、事務所に戻ってきてくれたクシナさん達にも同じ話をし、三蔵さんに話を通しておいでくれるというクシナさんに私と美神さんは揃って頭を下げるのだった……

俺が変な蜘蛛の人形に襲われた次の日。美神さんは事務所に復帰してくれた、昨日の内の話し合いで出向期間は残っているが、戻ってくれても構わないと西条さんが言ってくれたらしい。だから俺は心配そうなアリスちゃんに見送られ、病院の後事務所に来た時には雪之丞達は既に帰った後だと聞いた……勿論ちゃんと助っ人料も割り増しで払ってくれたと言うので一安心だ

「美神さん。結局昨日の人形はなんだったんですか？」

家を出る前にシズクにこれからずつと持っておくと、押し付けられ



た牛若丸眼魂を無意識に握り締めながらそう尋ねる。正直昨日のは死んだと思つた……眼魂も無い、心眼も無い。完全な1人……西条さんが来てくれなかったらと思うと正直ぞつとする……そして西条さんと言えば、教授が短い間だけとお世話になったねと笑い、明日からオカルトGメンの所で暮らすよと昨日家を出て行った事を思い出す。優秀な人だから大丈夫だとは思うけど、お爺さんだから大丈夫かな？と言う不安が僅かにあるが余計なお世話だろうか……？

「あれはね。人形使いの人形よ」

そんなことを考えていると、美神さんが人形について教えてくれた。しかし聞いた事も無い人形使いの言葉に首を傾げる、色んな霊能者の事は聞いたが人形使いなんて者は聞いた事が無いからだ

「昔にもういなくなつたつて言う凄惨な退治屋らしいわ、私も美神さんに聞くまで全然知らなかつたわ」

蛍も知らないほどに珍しい相手に襲われる……俺何かしただろうか……

「くえすや、唐巢先生、それに西条さんに冥華おば様とも話し合つたけど……多分横島君を調べに来たつて私達は考えてるわ」

「……俺そんなに調べる所なんて無いと思ひますけど？」

そもそも知識も無い、実績も無い、心眼や眼魂の補助が無ければ碌な戦闘も出来ない。そんな俺を調べる価値なんて無いと思うんだけど……

「……お前は色んな陣営から注目を受けている。今回美神が離れて、お前が前に出ていたから、他の組織が動いたんだ」

「他の組織つて……え？本当？」

そんな馬鹿など言おうとしたのだが、美神さんや蛍が深刻な表情をしているのを見て、シズクの言葉が真実なのだと判つた

「スカウトつて言う形で来るか、誘拐しに来るかわからないから心眼と牛若丸眼魂は常に持つてなさい」

美神さんの強い口調に判りましたと返事を返す事しか出来なかつた。それだけ心配されていると言うことでもあり、昨日のは相当危険な状態だったのだと改めて思い知らされた……

「直ぐ仕掛けてくることは無いと思うし、私も事務所に戻ったから大丈夫だと思うけど。一応暫くは知らない人とかに気をつけて、琉璃が一応人形使いを見たらしいから……これ、似顔絵」

美神さんが差し出した紙を見る。そこには痩せ型と言うか、痩せ過ぎとも言える細身の男の絵が書かれていた。無精髭を生やし、あんまりやる気のある表情に見えないのだが、目だけがやけに凄い眼力を放っているように見える

「これが人形使いらしいわ、変装とかしてる可能性があるけど……かなり痩せ過ぎなのは間違いないから」

「なんでそんな事を言えるんですか？」

「んー人形の事は流石に私も管轄外なんだけど……冥華おば様が言うには……」

人形を動かすには本人の霊力が必要不可欠で、しかも空を飛ぶとなると体重なども相当絞り込まないといけないらしい……痩せ気味の男には気をつけろと言う事で覚えておこう

「それで本当なら、暫く横島君は家で待機つて行きたいんだけど……冥華おば様にまた貸を作っちゃったのよ」

物凄く言いづらそうな美神さん。でも俺も馬鹿じゃないから、ここまで言われれば大体理解してしまう

「……六道ですか？冥子ちゃんの所ですか？」

六道と美神さんが呟き、深く、物凄く深い溜息を吐きながら、俺と蛭にある紙を差し出す、その紙には大きく体験入学の文字

「横島君と蛭ちゃん、悪いけど1週間六道女学院に体験入学してきて」「はい？」

俺と蛭の間抜けな声で返事を返してしまった。美神さんは頭を抱えながら

「うん、言いたい事は分かるのよ？でもね、ほら。あの人に貸しを作ったままって物凄く怖いよ。色々いいたいことはあるけど我慢して、1週間お願い」

シズクとか、タマモにアリスちゃんも連れて行って良いから。ちよつとした気分転換のつもりでよろしくと言う美神さんに俺と蛭

は、引き攣った顔で頷き、美神さんの事務所を後にするのだった……

書類をまとめていると襖が開き鷺羽が疲れた様子で姿を見せる。私の執務室に入ってきた事に睨みつけると鷺羽は手を上げて

「回りには気付かれてませんよ、ボス。そこん所はちゃんと弁えてますって」

「どうだか。それより早く閉めろ」

とつとと部屋の中に入って扉を閉めろと命じると、普段の遅い動きからは想像出来ない手際で扉を閉め鍵をかける

「どうだった？」

「いやあ、手抜きしたとは言え、人形を1体お釈迦にされましたわ」

その言葉に吊りあがっていた眉が更に吊り上がる

「それとすんません、神代の姫巫女に見つかっちゃいました」

「お前は何をしている!!!」

隠密行動に特化しているお前が何故見つかったと怒鳴ると鷺羽は頭を掻きながら

「いんやあ。横島つつうのが規格外すぎて、驚いている間に背後を取られて……一応速攻で逃げたから大丈夫だと思いますが……探りは入れてくるかもしれないです」

「ちっ、ならお前はまた屋敷に戻れ、それで何に驚いたんだお前は」

元よりそのつもりでさあどと鷺羽は笑う。鷺羽は私の直属でもそも陰陽寮所属ですらない、そして誰も鷺羽の存在を知らない。だから使い勝手のいい部下だと言うのに……姿を見られては私の手持ちの札としての効力は半分ほどになってしまっている

「ボスと同じ陰陽五行術。しかもボスよりバリエーションも威力も上回ってましたよっ」

「何？それは本当か」

私よりも歳若いと言うのにな？鷺羽の報告が信じられない。私が血反吐を吐きながら修練した陰陽術よりも、強力と言われ。はいそうですかと納得できるわけが無い。だが元より何度か私と一緒に仕事を

している、私の能力は知っているはずだが……それでも言い切れるのか？と尋ねる

「間違いないっすね。しかもアイツ、札も媒介もなしに、空中に血文字を書いて陰陽術を使いましたよ。ボスは出来ますか？」

「……無理だな」

札が無ければ陰陽術は使えない。それを血文字でしかも空中に文字を刻み発動させる、それは私でも不可能だ

「後霊力の籠手。あれ完全に物質化してましたわ、あつしの人形の装甲をぼこぼこにしてくれた相手なんて本当久しぶりですよ」

霊力の完全物質化……しかもそれで物質にも霊力にも強い鷺羽の装甲をへこませる……それだけでどれだけ規格外かと察するのは十分だろう

「六道の大狸が動くと思いますが、そこはすんません」

「いや、私を知っていればこそその動揺だ。そこは責める事は出来ない」  
最初こそ激昂したが、話を聞けば鷺羽に落ち度は無い。想定外過ぎた横島が原因だろう……それに私を知っていたからこそその鷺羽のミスだ。そこを責めるほど私は器量の狭いつもりは無い

「すんませんね、ボス。これ一応、人形に記録させてるんで、後で確認してやってください」

んじゃあ失礼しますと言って気配を殺して部屋を出て行く鷺羽。私は其方には視線を向けず、鷺羽の人形が記録していたという横島の戦闘データに視線を向ける。それは鷺羽の報告通り規格外であり、並みの霊能者では真似が出来ない戦闘スタイル。更に言えば、今の横島は荒削りの原石。これを磨き上げればどうなるのか？と思わずにはいられない

「ふふふ……ああ、楽しみだ。楽しみだよ、横島忠夫」

今はまだ会うことは出来ないが、出会った時が楽しみだ。私の言葉にどんな反応をするだろうか？そしてもし横島が私の手を取った時、六道の大狸がどんな顔をするのか……それを想像すると自然と笑みが零れてしまうのだった

別件リポート 白竜寺3人組みの戦い

## 別件リポート

別件リポート 白竜寺3人組みの戦い

横島からの頼みで鬼が出るといふ山へ向かう電車の中で事前調査リポートを読んでいるクシナに尋ねる

「本当に鬼がいると思うか？」

「そうね、可能性は五分五分つて所ね……とくに鬼に関する逸話も無い山だし」

鬼と勘違いされる土着の精霊や妖怪つていう可能性と、本当に鬼がいるのどっちかねとクシナは笑う。1日で見つければいいが、発見出来ない事を考慮し、泊りがけの準備もして来た

「陰念。お前はどっちだと思う？」

「……どっちでも良い。外での除霊もしくは調査の感覚を掴めればな」

腕を組んで目を閉じていた陰念が少しだけ目を開きそう呟くと、また目を閉じる。よく見るとうつすらと霊力を身体に纏っているの、霊力を練り上げる訓練をしているのだと悟った。

「そうね、話し合いで済む可能性もあるし、戦闘前提じゃなく、まずは対話から考えましょう」

クシナの言葉に判ったと返事を返し、目的地の山に到着するまでの1時間。クシナに叱られながら、事前調査のリポートに目を通すのだった……

「本当。横島君って有能ね」

「……だな」

クシナの言葉に若干気落ちしながら同意する。俺はてつきりテントなどでキャンプする前提だと思っていたので、荷物にテントを持ってきていたのだが、横島が東京で俺達が搜索する山の近くの温泉宿に俺と陰念、そしてクシナの部屋の2つの予約を取ってくれていた。しかもオンボロ宿ではなく、ちゃんと旅行MAPなどにも乗っている立派な宿だった

「あいつは自分で前線に出るより、こういう風に仕事させたら優秀かもな」

「頭はかなり良いみたいだしね」

横島と言えば俺の中ではGS試験のタイマンの印象が強かったが、実際は横島がかなり頭が良いと言う事を知り、少しだけブルーな気分になりながら、鬼の目撃情報が多いという山に足を向けるのだった……

鬼が出るという山の調査を横島君に頼まれて、件の山に来ただけど……そこには予想外の光景が広がっていた

「これは予想外だわ」

鬼が出ると言う事で観光客などは少ないと思っていたんだけど、実際は逆で観光客だらけだ……しかも鬼が出る山と言う事でTVまで来ている始末だ

(クシナ、これは良いのか？観光名所みたいになってるぞ?)

これで仮に鬼と戦うことになったら恨まれるんじゃないか？と陰念が訪ねてくる。だけど今回の依頼は県からの依頼なのだ

(大丈夫だと思うわよ。とりあえずまずは調査しましょう)

賭けを挑んでくるが、弱すぎるらしい。そして負けると山の奥へ逃げていくのだが、その鬼が持っているのが宝石の原石や、金や銀の希少金属などが多く、それを求めて暴力団関係者などがこの周辺に来て治安が悪いという事情もある。

(とりあえず今は登山客と言う感じで山へ行きましょう)

宿の周辺でも感じた事だが、GS関係者を暴力団が監視している。そんな感じだった……県の依頼がGS協会にあり、GS協会からの依頼と横島君は言っていたが、その情報は既に暴力団に流れているようだ

「じゃあ。トレーニングを始めましょう、雪之丞、陰念。手足にリストバンドを付けなさい」

「うつつ!!」

胴着に着替えている2人にリストバンドを渡す。その姿を見て、この山にトレーニングに来たと偽装する計画だ。そもそも到着した段階で15時を過ぎている、今日はまともな調査は難しいと既に理解しているから、まずはトレーニングをしつつ、可能な限りの情報収集。これが今日出来る中で最善だろう。手足にリストバンドを付けて走り出す2人を宿で借りた自転車で追いかけるのだった……

「さて、事前調査の通りね」

登山の入門として勧められている山だけあって、子供でも登れる様な山だ。車やバイクでも通れるように道も整備されている

「鬼が出るって言うのは？どっちのほうだ？」

「中級者用ね」

ここまでは整備された初心者用の山を登って来たが、ここから先は整備されていない山を登った先に茶屋があり、その先で鬼が出ると言う広場があるらしい

（どうする？このまま行くか？）

雪之丞がストレッチをする振りをしながら小声で訪ねてくる。先ほどから私達を追いかけて来ている何者かの気配は感じている……妖怪などではなく、人間の気配なので恐らく暴力団関係者……

「今日はこのまま初心者用の山を登って、頂上を目指しましょうか」

業と追いかけて来ている連中にも聞こえるように大きな声で言つて、陰念と雪之丞を促し初心者用の整備された山道を登る

（良いのか？）

（構わないわ。今日は調査だもの）

それにここに到着した段階で既に夕方の少し前。今から調査を始めるのは元々難しいというのは判っていたし、それに鬱陶しい連中に付き纏われては調査所ではない。とりあえず今日はトレーニングに来ている集団と言う事にしておこうと思い、初心者用の山を登る事にする。暫く登ったところでお爺さんが蹲っているのを見つけ、陰念に目配せすると陰念はお爺さんの方に駆け寄る

「爺さん。大丈夫か？」

「あ、いやあ……ちよつと腰を痛めてねえ」



「麓まで運んでやろうか？」

陰念は口は悪いが、基本的に善人だし、年功序列を重んじる性格もあり。老人、子供などには非常に優しい

「いや、麓じゃなくて頂上に用があるんじや。山頂の休憩所の管理人をやつとるからそつちに行きたいんじや」

元々頂上に用があるということもある。陰念は構わないぜと笑い、お爺さんの前にしやがみ込む

「すまないねえ」

「気にするな、しつかり掴まっててくれよ。爺さん」

お爺さんを背負い山を歩き出す陰念。私と雪之丞はお爺さんの荷物を持って、2人を後を追って頂上に向かって歩き出すのだった……

山を登っている最中に腰を痛めたという爺さんの案内で俺達は山の頂上付近の爺さんの家に到着した

「お爺さん。1人でこんな所に住んでるの？」

「いやあ、この時期だけじゃよ？息子も毎日様子を見に来てくれてるし、今日はただ運が悪かったんだ」

息子が生活必需品を届けてくれた後、買い忘れをしていることを思い出しタクシーを呼び、俺達が見つけた少し前で降ろして貰い上り始めた所で腰を痛めたらしいのだ

「いやあ、ワシも歳と言う事じゃなあ」

はっははつと笑い、あいたたたつと腰に手を当てる爺さん

「おいおい、無理しないほうがいいんじゃないのか？今からでも遅くねえ、山を降りたらどうだ？」

流石に心配になり、山を降りて病院に行ったほうが良いんじゃないか？と言うと爺さんは大丈夫だとにこやかに笑う

「大丈夫じゃよ。この山には天女様が居られるからな」

天女？鬼じゃなくて？俺達が首を傾げていると爺さんは知らんのか？と言ってその天女様の事について話し始めた。昔とある仙人に選ばれ、不老不死になった女性の話。美しく、気高く、そして強く。か

なり昔、この周辺が酷い日照りに襲われた時。空を舞い、雨を呼び起こしたと言う天女の話

「あのお方はなあ、ちよーつと俗世に触れてそれが楽しくて仕方ないと言っておられたよ。勝っても負けても面白い、賭けつて言うのは堪らないとな」

「……お爺さんの口ぶりだとその天女様と知り合いみたいだけど？」

「おお。知り合いも知り合いじゃ、3日に1度はこの家に来て飯を食って行かれるよ。その後は花札とかで遊んでるわい」

昨日来たばかりじゃから暫くは来ないじやろうかと爺さんは笑う。なんてこった……こんな所でこんなにも凄い有力情報を得られるなんて……情けは人の為ならずと言うが、正にこのことなんじやないだろうか？

「爺さん。俺達はGS協会から鬼が出るって聞いてきたんだが……鬼について知らないか？」

「鬼？……ああ、天女様が雨乞いをする前は鬼と呼ばれていたの……美しい、金の髪に紅い瞳と日本人とは思えない姿じやから」

昔の雨乞いの石碑にちゃんと天女様の容姿が記されているから、麓に下りたら調べると良いと爺さんは笑う

「鬼って言われているのは天女様は知ってるのかしら？」

「知つとるよ。まあ天女様は気にしないと快活に笑っておられたがな……じゃが、最近はこちらの悪い連中が天女様の財宝を狙ってくる。ワシはそれが嫌じやなあ」

……その言葉に鬼と天女様が同一人物だと悟り、俺達が顔を見合わせるとう爺さんは椅子を揺らしながら

「天女様は何かを待っていると言っておられたよ。それがもしかするとお前さん達かもしれないな」

天女というだけあり、何か特別な力を持っているのかもしれない……しかしそれで俺達を待っていたと言うのなら、一体俺達に何をさせたいのだろうか

「天女様は気まぐれじやからなあ、お前さん達がいる間に天女様に会えると良いの」

また何時でもおいでと言う爺さんに見送られ、その山小屋を後にする

「クシナ、どうする?」

「とりあえず明日朝早くから中腹に向かいましょう」

何かを待っていると言う天女様と言う女性。その女性を早朝から探そうと言う話になり、暗くなる前に山を下りるのだった……

早朝、クシナと雪之丞と共にまだ朝靄の掛かる山道を登る。そして中級者用の方へと足を向けたとき

「あたしと勝負しないかい?」

突如背後からそう声を掛けられ、警戒しながら振り返る。そこには紅い布が引かれ、その上に座っている金髪紅目と言う日本人離れた容姿に着物を着込んだ女性の姿があった……今通り過ぎたばかりなのに、全然気が付かなかった……天女の術なのか、仙術なのか……それはわからないが、気配の気の字も無かった女性の存在に否が応でも警戒度は跳ね上がる

「ママに似ている……」

馬鹿がぼーぜんとした表情で告げる。いい加減にしろよ……このマザコン野郎と心の中で罵る

「勝負って何の勝負ですか?」

クシナが警戒しながら問いかけると、天女様は両手を広げ楽しそうに笑いながら

「サイコロでも、花札でも何でも良い。1勝負しようじゃないか、ソロモンの魔神に運命を乱された子よ」

その言葉に俺達の眉が釣りあがる、何で知っている。いや、よく見ると雰囲気やさつきと変わっている……お師匠様や、メドーサ様に似た……人間よりも遥か上位存在だけが持つ圧倒的な存在感。自分がとても小さい存在に思えてくる……

「それとも……お前さん達はこっちの方が良いかいツ!!」

座っていた天女様が急に立ち上がり、顔目掛けて拳を繰り出してく

る。凄まじい音を立てて迫ってくる拳をとつさに後に飛びのいてかわすが、その強襲に俺達3人も拳を握った……握ってしまった

「拳を握ったね?じゃあ、勝負の形式は喧嘩だよ」

いつの間にか手に握っていた羽織を羽織ながら拳を鳴らす天女様。妙齢の女性に見えるのだが、その圧力と存在感に額から汗が流れ落ちる

「天女様は賭けが好きと聞いていましたが?」

「それも好きだよ。でもあたしは喧嘩も好きなんだよ」

にっと笑うが、その笑みには押さえられない戦いを好む戦闘狂の色が浮かんでいた

「それとあたしは天女様なんかじゃない。あたしは仙人綱手。楽しい喧嘩をやろうじゃないか」

天女様……いや、綱手はそう笑うと、その細い腕を振り上げ、地面に叩きつける

「嘘だろ!?!」

「驚いている暇があつたら飛びなさい!」

クシナの怒声に反射的に地面を蹴り跳ぶ。綱手の拳が命中した場所が陥没し、それによって山の中に埋まっていた石が槍のように飛び出してくる……なんつー馬鹿力だ。その恐ろしい怪力に額から冷たい汗が流れ落ちるのだった……

別件リポート 白竜寺3人組みの戦い その2へ続く

## 別件リポート

別件リポート 白竜寺3人組みの戦い その2

仙人綱手は楽しい喧嘩と私達に告げたが、私達はとても喧嘩なんて思うことは出来なかった。あの細腕は軽く当たっただけで、木々を薙ぎ倒し、地面を蜘蛛の巣状に粉碎する。そしてその攻撃は恐ろしいほどに早く、拳を握っているのを見るだけで恐ろしいプレッシャーを感じる

「どうしたんだい？反撃すらまともに出来ないのかい？」

これじゃあ詰まらないよと鼻を鳴らす綱手。女性の細腕とは思えない、その怪力と恐ろしいほどのプレッシャーに足が竦む

「おおおおおーッ!!!」

雪之丞が雄叫びを上げて魔装術を展開し、綱手に向かって駆け出す。それを見て小さく舌打ちする、大分体の動きは戻ってきたが、靈力の制御は私も陰念もまだまだだ。陰念はまず魔装術を使えないが、私は魔装術を鎧の形状に固定出来なかった。溢れ出す靈力を身体に纏うのが限界であり、陰念は横島君が使う眼魂と同じ物を所持しているが、その副作用は深刻でおいそれと使う事は出来ない

「魔装術か、若い割にはまずまずだね」

「おらあッ!!」

駆け出した勢いで拳を繰り出した雪之丞だが、綱手はそれを片手で受け止めて

「脇が開いてる、足を開きすぎてる。そんな拳じゃあ届かないよッ!!!」

風を巻き込んだ。私は少なくともそう感じた、腰の動きと足の移動だけで凄まじい風を起こしながら繰り出された拳が雪之丞の顔面にめり込み

「ぐおっ!?が……ッ!うおおおッ!?!?」

「雪之丞!!」

木を薙ぎ払いながら吹き飛ばされ、雪之丞の絶叫が恐ろしい勢いで遠のいて行く……

「陰念！雪之丞の方に！」

私の言葉に領き山の斜面を駆け下りていく陰念。その方向に行かせないように綱手の前に立つと綱手は頭の後に手を回し、頭を搔きながら

「殺しはしないよ。言っただろ？喧嘩だって」

喧嘩だと軽い口調で言うが、あの豪腕で殴り飛ばされたら魔装術があつたって確実に死ぬ

「最初にサイコロとかを出したのは何だったんですか？」

「いやあ、負け続けでね。むしゃくしゃしてたから八つ当たりで来そうな奴が来たらそりや喧嘩しようってならないかい？」

この人八つ当たりって言い切った!!仙人なのに!!!私の中で仙人と言う幻想が砕け散った瞬間だった

「大丈夫だよ。私は医療とか治療の術は大得意さ、だから死に掛けても死にはしないよ」

骨とか折れてもちゃんと言われながら何年もこの山で過ごしてきた。た掛かっただけだと判った……仙人と言う事を知らなければ気の良いお姉さんに見えるのだが……私は溜息を吐きながら拳を握る

「よしよし、おいでおいで、ちよつと遊ぼうじゃないか」

まるで子供と遊ぼうとしている姉のように優しい顔で、恐ろしい圧力を放ちながら手招きする綱手に恐怖を感じながら、私は綱手のほうに駆け出すのだった……

鬼とか、天女様とか言われながら何年もこの山で過ごしてきた。たまーに人間と賭けをして遊ぶ程度だったのだが、最近はあたしを鴨にしている連中が多くてむしゃくしゃしていた

(人間もこうなるか)

昔酷い日照りでこちら辺が全滅しかけた時に雨乞いをしてやって、こちら辺一帯を救って神様、天女様と言われ、自分で救った場所が滅ぶのとも思ひこの山で過ごしてきたが、今の人間にはそんな事は関係

ないらしい。山の頂上付近に住んでいる爺さんは天女様と呼び、あたしに食事や酒を出してくれるが、最近であった人間はあたしの金や銀を巻き上げてやろうと言う欲望むき出しの連中で本当にむしゃくしゃしていた

(まああたしも悪いんだけどね)

ほんの息抜き程度にやる賭け事は面白かったし、勝つても負けても、昔はそのまま宴会や食事となつて楽しかったが……今は本当に単純に金を巻き上げるか、あたしの身体を見て欲情する連中ばかり、イライラしていたから霊能者と思わしき3人に喧嘩を吹っかけた……これは正直仙人らしくないと思った……だが

「お前は中々筋がいいな」

顔を目掛けて蹴りを入れてきた少女の足を掴みながら言う。最初に魔装術を使つて突っ込んできた少年は思わず全力で殴り飛ばしてしまつた、だけど魔装術を展開していることを考えれば致命傷ではないただろう。そしてあの3人の中でリーダー格と思われる少女は霊力は標準以上なのに、それを上手く使えないと言う変わった相手だったが、体術のキレとあたしを思うように戦わせまいとする、戦闘状況のコントロールは抜群に良く、思わずそう呟く

「それはどうも!」

足を掴まれているのを無視して、飛び上がりもう片方の足で蹴りを入れてくる。それを首を傾げる事かわし、掴んでいた足を離し拳を繰り出す

「い、今殺す気でしたよね!?!」

「いやいや、避けるって判つてたよ!」

なんで疑問系なんですか!と叫ぶ少女に思わず苦笑する。今まで溜まっていたストレスが一気に消えていくのを感じる、楽しいと単純にそう思う

「どれ少し本気を出してみるかな?」

霊力があるのにそれを使わない、その理由が知りたくて指で印を結ぶ。身体の中がカツと熱くなり、その熱が徐々に口まで込み上げてくる

「火遁の術ッ!!!」

息を吐き出すように、体の中で生まれた熱を口から吐き出す。それはあたしの目の前で弾けて広がる

「ッ!!!」

少女の顔が歪み、炎の中に吞まれる。そこまで力を練り上げたわけじゃない、目晦ましに近いそれだ。だけど突如目の前に炎が広がれば、身体を守ろうとするだろう……その反応を見ようと思ったのだ

「つつつう……」

「っ！すまない!!」

霊力を放出してあたしの炎を防いで見せたが、その額からは大粒の汗を流し、身体が小刻みに痙攣している。それに加え、霊体の様子がおかしい……慌てて駆け寄り治療を施して理解した

「お前の身体、人間じゃないね?」

「……ええ、ソロモンのせいと身体を失いました」

見かけも中身も人間だが、その所要所に精霊石などの高純度の霊石などの霊石の存在が感じられる。霊力があるのに使えない理由、それは魂と肉体の拒否反応!慌てて治療を施したが、少女は目の前で倒れる……無理に霊力を使ったから、意識を保っていられなかったのだらう……

「てめえ……やりやがったな」

最初に殴り飛ばした小僧と助けに行った2人が山の斜面を駆け上り戻ってきたが、周囲の焼け焦げた跡と倒れている少女を見て、その目に怒りの色を宿す

「おい、雪之丞。お師匠様とクシナ説得するのあとで手伝え」

「……ちっ、しゃーねえな」

魔装術を展開した小僧の後でもう1人が球体を取り出す。それを見て無性に胸騒ぎがした……あれを使わせてはいけない。直感でそう感じたのだが……もう遅かった

「アーイー・オソレテミーヤーオソレテミーヤー!」

球体を握り締めている小僧の回りを青い禍々しい気配を持つ服が踊りだす。その服が持つ気配は既に瘴気、人間が触れてはいけない力



だ

「変身」

「カイガンホロウ！心中！ゲツチユーツ！ガクガクゴーストツ！！」

その服は紐のような腕で小僧の首に手を伸ばすが、小僧はその腕を振り払う。その瞬間その身体はノツペラボウの姿へと変わり、その服を纏うと、錠前と鎖でその手足を封印する

(なんだあれは……)

ソロモンの魔神の出現はあたしも感じていた。そしてそれによって運命を狂わされた人間の事も予知した……だがこの力は想定外であり、予想外だった

「雪之丞！行くぞッ！」

「ああッ！最初から全開だッ！！」

同時に駆け出してくる2人にこれはとんでもない物呼び出してしまったかもしれないと後悔したが、時既に遅し、もう賽は振られている。あたしは小さく溜息を吐きながら拳を握り締め、凄まじい勢いで突進してくる2人に対峙するのだった……

ホロウとなると魂の奥がざわめく、自分が自分じゃなくなるような……魂を削られているかのような不快な感覚

「おおおおおッ！！」

判っていた事だ、ホロウの中に眠る悪魔はまだ俺の身体を諦めていない、隙あれば俺の身体を奪おうとしている。時間をかけるわけには行かない、必然的に速攻しかない。雄叫びを上げながら拳を繰り出す「ちっ！」

綱手が舌打ちしながら後方に飛びのく、それを見て雪之丞が追撃にと駆け出す。だが俺の目は捉えていた……綱手の指が何かの印を結ぶのを

「馬鹿！畏だッ！！」

「風遁！暴風激の術ッ！！」

鋭い呼吸音と同時にその息が暴風の名の通り、砂煙を上げ、石を砕

き俺と雪之丞に迫る。とつさに両腕をクロスして顔を守るが……

「ぐううっ!!」

巻き上げられた木や石、そして風の塊が叩きつけられる衝撃で思わず苦悶の聲が零れる。それは数秒の攻撃だったが、その数秒俺と雪之丞はその暴風に耐える為に完全に足止めされた。風が止んだその瞬間

「ぐっふっ!!」

腹にめり込んだ綱手の拳。だが俺はそれを拳と最初認識できなかった……拳大の鉄の塊のように思えたのだ

「その力は嫌な予感がする、悪いけどさっさと意識を刈り取らせてもらうよ」

「陰念ー」

綱手の心配そうな声と雪之丞の俺を呼ぶ声が聞こえたと思った瞬間。凄まじい衝撃が連続で2回叩きつけられた……俺の身体はまるでボールのように弾け飛び木々を薙ぎ倒しながら山の奥へと弾き飛ばされた

(ぐ、ぐうう……)

立ち上がるとうとするのだが身体に力が入らない。衝撃としか理解出来なかったが、恐らく綱手の拳は俺の顎を打ち抜いていたのだ、三半規管が揺らされバランス感覚が狂わされているのだ……だがそれよりも俺は不味いと直感していた

(だ、駄目だ……)

その凄まじいダメージに意識が薄れていく……だがそれと同時に俺の中で何かが暴れ始める。眼魂の中に封じられた悪魔が俺の意識が薄れた事で活性化していた。必死に意識を保とうするが……あまりに大きいそのダメージ、意識を失うなど何度も何度も自分に言い聞かせたが、綱手の言っていた意識を刈り取る。その言葉に嘘は無く、俺の抵抗は無意味であり俺の意識は苦痛と共に闇の中に沈んで行った……意識が途切れるほんの少し前

【ホロウ、フオロー、嘆きのソウルッ!!】

鎖の弾け飛ぶ音と獣じみた唸り声を聞いた気がした……

また、クシナとママお師匠様に叱られるのは覚悟して眼魂を使った陰念。横島と同じ力だが、横島のと違い暴走する危険性はあるということは知っていた、だがクシナが倒れているのを見て頭が血が上っていたことは認める。本来俺が止めるべきだったのだが……俺もGOサインを出してしまった……その結果がこれだ

【ウオオオオオオオツ!!!】

山全体を震わせるような咆哮と共に陰念が木をなぎ払いながら姿を見せた。だがその姿は先ほどとはまるで異なる姿をしていた……青いパーカーはまるで闇その物のような漆黒に染まり、胸の中心にあった錠前は存在せず両肩のプロテクターは3つ爪の鉤爪になり両腕に装着されていた。そして猫背で獣じみた唸り声を上げるその姿を見て

「陰念?」

思わずその名を呼んだ。その瞬間陰念の顔がこつちに向けられた。その瞬間身体が金縛りにあったかのように動かなくなった……叩きつけられた殺気に完全に威圧された

【オオオオオオオオオツ!!!】

地面を蹴りこつちに飛び掛ってくる陰念の姿が見える。この瞬間俺は理解した、逃げてても、防いでも、反撃してもだめだと……森の中で出あった肉食獣のように逃げる事も、防ぐ事も出来るだろう。だが結果は変わらない、殺されるという結果は……変わらない。呆然と動く事が出来ずにいると綱手が俺の前に回りこみ、飛び掛ってきた陰念の頭部に回し蹴りを叩き込み蹴り飛ばす

「おい! あれはなんだ! 何でもいい、知ってる事を言え!」

そう怒鳴る綱手。俺はママお師匠様から聞いた限りの事を話した

・ ガープによって憑依させられた悪魔を封印している球体

・ あれがないと陰念は霊力を使えない

・ 陰念の意識があれば表に出てくることは無いが、気絶すると表に出てくる可能性がある

・悪魔の力を引き出して霊力を使っている、錠前があれば大丈夫  
途切れ途切れにしか思い出せないが、確かそんな話だったと告げると綱手はそうかと呟き、親指を噛み切る

「オオオオオオッ!!!」

「悪いね、陰念。あたしのせいだ……憂さ晴らしに喧嘩なんて売ったあたしのせいだよ」

飛び掛ってきた陰念に対して申し訳無きそうに口にした綱手で、血で空中に文字を描いた

「あんたが狂わないように重ね合わせて封印してやるッ!!四神結界ッ!!!」

力強く叫びながら印を結ぶとドズンッ!!と言う重い音を立てて、陰念の身体が地面に縫い付けられる。よく見るとその手足には巨大な4つの鉄の杭みたいなのが突き刺さっているのが見える

「だ、大丈夫なのか!？」

「大丈夫だよ。動きを封じているだけだからね」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!」

鼓膜が破れるんじゃないかという咆哮が森の中に響き渡る。思わず耳を塞ぎたくなるが話を聞かなければならないのでそれを我慢する。綱手は耳を塞ぎながら、凄まじい音を立てて暴れる陰念を見つめて

「とは言っても凄い力だ。あたしの結界を力づくで破ろうとする相手なんか初めてだ」

そう呟いた綱手はゆっくりと陰念に近づき

「ふんッ!!!」

拳を硬く握り締め、陰念の頭部に振り下ろした。陰念の身体が更に地面にめり込み

「オヤスマミー」

機械的な声でそんな声が響くと、陰念の姿が元に戻る。綱手はそんな陰念を背負いながら

「あんまり時間が無い、あんた達が泊まっている旅館に案内してくれ、そこでできつちり封印を施すから」

案内してくれと言う綱手に頷き、俺は陰念と同じように意識を失っているクシナを背中背負って、綱手と共に山を駆け下りるのだった……その後は旅館の俺達の泊まっている部屋で綱手が何か幻想的な術を行っているのを呆然と見つめ

「いつつつつ……雪之丞?ここは……陰念!?何!?何があつたの!」

目を覚ましたクシナに事情を説明したら、全力で拳骨を落とされ「どうして止めなかったの!この馬鹿ツ!綱手さん、陰念は大丈夫ですか!」

「何とかね。でも定期的に封印を掛け直さないと不味いかも……あんな達どこで暮らしてる?あたしも近くに移住するよ」

拳骨を落とされた頭を抑えながら、俺達の横島の事務所での最初の依頼はこうして幕を閉じ、横島に負担を掛けないようにこの事は決して話はいけないとママお師匠様とクシナ、それにクシナに呼ばれたメドーサと綱手の4人に陰念共々こっぴどく叱られる事になるのだった……

後、白竜寺に住むことになった綱手がどうなったが……

「よし、良い霊力の練り込み。ただ荒いね、もう少し丁寧に練りこむことを覚えな。そうすれば魔装術の安定度も増すよ」

「うつつ!!」

「陰念はもつときつちり基礎トレーニングね。少ない霊力を使うんじゃないなくて、外の霊力を使うことも覚えるのよ」

「はい、お師匠様ツ!!」

ママお師匠様と共に俺達の新しい師匠として恐ろしいほど早く、白竜寺に馴染み

「三蔵、もうちよい感覚じゃなくて丁寧に教えてやれないのかい?」

「あはは……そういうのはちよつと苦手かなあ?」

「つたく、しょうがないね。ほら、霊力の扱いの苦手な子はおいでコツを教えてあげるからね」

ちよつといい加減な所のあるママお師匠様とちよつと口は悪いが、優しい綱手師匠。2人の美人なお師匠様として白竜寺へ受け入れられるのだった……

リポート18 福の神 頑張る その1へ続く

リポート18 福の神 頑張る  
その1

リポート18 福の神 頑張る その1

「福ちゃん。凄いな、六道女学院の女子寮って」

【おう。そやなあ】

広い女子寮の部屋を小さく、小さく使っている小鳩に苦笑しながら返事を返す。突如感じた浮遊感と、身体が分かれる感覚。気がついたらワイは過去に居た。しかし只の過去ではないというのは直ぐに理解した、何故なら最初からワイは福の神やったし、それに小さく、狭い家ながら、人並みの生活を小鳩とその母親は過ごしていた。

(横島はどこや)

昔は小鳩と横島は隣り合わせで暮らしていて、小鳩は横島に恋をしていた。だが普通の一軒家で、横島の姿は無い。その光景に流石のワイもめちやくちや混乱した物や……そんな毎日を過ごしていると六道女学院の理事長を名乗る女性が尋ねて来て

『小鳩ちゃんは、優秀な霊能者になれるかも、特待生で迎えてあげるから、おいで』

と言ったのだ、その視線は小鳩もそうだが、ワイに向けられていた。福の神と共にいる少女、それだけで小鳩は弱いが神通力の欠片と霊力を有している。それに目をつけたのだろう、小鳩は余り乗り気ではなかったのだが、母親が言ったのだ

『強い力には責任が伴います、それを制御する術を学ぶ事も大事だと思いますよ』

最初は誰やこいつと思った。小鳩が貰ってきた食材を奪って食べていた母親とは思えない、いや、もしかするとこっちが素なのかもしれない

「でも横島さんって格好良かったねえ」

ぼーっとした表情で告げる小鳩に思考の海から引き上げられる。六道の迎えが来る前に悪霊に襲われ、小鳩を助けた横島。だがワイの知っている横島よりも大分落ち着いていて……その感じは結婚した後の横島に良く似ていた

【良い霊能者見たいやしな。六道に居ればまた会えるかも知れへんな】

あの後霊能関係の雑誌を買った小鳩だが、横島は特集記事が組まれるほどに有名だった。しかしワイはそれには驚かなかった、元々色欲は相当強かったが、頭の回転は悪く無く、独創的な発想に霊力の物質化に文珠使い。その稀有な才覚はワイも重々承知していた、しかしその隣の少女には流石に驚いた

(ルシオラ? いや、ちよつと違う?)

横島が恋し、失った魔族と瓜二つの少女の姿があった。彼女の存在が横島を精神的に成長させているのだろうか? という疑問はある

「へへ、そうだと良いなあ」

窓の外を見て微笑む小鳩。妄想癖は未来も今も大して変わってない……なんか幸せそうなので触れる事は無いけどな

(さーて情報収集出来れば良いけどな)

未来と過去の差異を調べて、あと横島の周辺を知りたいと思う。だから出来れば六道に来てくれないかなと思う

【ほら、明日から六道での授業やる? そろそろ寝なかんぞ?】

「はーん」

ワイの言葉に返事を返し、寝室に足を向ける小鳩を見送り。ワイはキセルを口に咥えて、福の神として今度こそ小鳩を幸せにしてみせると決意するのだが、横島の周辺を見て心が折れかける事を今のワイは知る由も無いのだった……

美神さんから六道女学院に体験入学して欲しいという話が合ったんだと言うと、アリスちゃんが目に見えて頬を膨らませる。折角遊び



に来たのに俺は仕事で家にいなかったので明らかに怒っている

「アリスちゃんも一緒に来て良いって」

「本当!？」

「ばあつと華の咲くような笑みを浮かべるアリスちゃんに本当つと言つて頭を撫でると、アリスも行くーつと笑う」

「ハーピーさん。まだ泊まっけていても大丈夫ですか？」

「大丈夫。まだ連絡も無いから」

黒助さん達からの連絡が無いから泊まっけていても大丈夫というハーピーさん。楽しそうに笑っているアリスちゃんを見て

「じゃあ明日一緒に行こうな？」

「うん♪楽しみだねー、うりぼー、チビ」

うりぼーを抱き抱え、頭の上にチビを乗せて楽しそうに笑う姿を見ていると、ズボンがくいくいつと引かれる

【のつぶうー!】

「……チビノブもくるの?」

のぶのぶと頷くチビノブ、これはおいて行くといじけそうだ……そしてここまで大所帯になるともう、良いよな?と思う

「シズクもノツブちゃんも来る?」

心配だからと言うシズクと面白そうだから来ると言うノツブちゃん。俺は心眼に1つ尋ねた

「怒られるかな?」

「……良いんじゃないか?お前を呼んだ時点でこうなるって判つてたはずだ」

それなら大丈夫かと、夕食の準備を全員で始めるのだった……

「なんで皆で来たの?」

六道女学院の前で蛭が信じられないと言う様子で尋ねてくる。俺は頬を掻きながら

「皆来たいって言うから……」

はあつと蛭が溜息を吐く、その姿を見ると罪悪感を少し感じるが

「楽しみだね、お兄ちゃん」

嬉しそうなアリスちゃんを見ると、やっぱり仕方ないんだと思う。

寂しい思いをさせたから遊んであげようと思うのは決して間違いではないだろう

「……凄い集団で来たわね」

「マルタの姉御。すいません、迷惑でしたか？」

姉御言わないと苦笑するマルタ姉さんはノツブちゃん達を見て

「理事長の言う通りになったわね。特別に教室を1つ用意するから、今案内するわ」

着いて来てと言うマルタ姉さんの後を付いて、六道女学院の敷地の中に入るのだが……

「俺まで見られてる気がする」

「実際見られてるわよ、ほら、使い魔学科の子」

蜜の指差したほうを見ると確かに使い魔学科の子と、その使い魔が見える。ちらほら来てるから顔とか覚えてるなあっと思う

【横島は人気者じゃないや、うりぼーとかか？】

「そうかも？チビとか可愛いし」

俺よりもその周りじゃないか？とノツブちゃんと話しながら、俺は六道女学院の校舎の中に入るのだった……

横島と学校に通う。これはある意味楽しいイベントだと思っただけけど、マルタさんに案内された教室の中では

【のーぶのぶー♪】

「ぶぎゅー！ぴぐうー♪」

「みーむ！みみー!!」

「あははは！待て待て〜♪」

アリスちゃんとチビノブ達が追いかけてっこをして遊び、シズクはマルタさんから渡された教本に目を通して、ノツブはメロンパンをむしゃむしゃしてる……なんと自由すぎる

「蜜。最初何処見に行くの？」

タマモを膝の上に乗せて、その艶やかな金色の毛を整えている横島がそう尋ねてくる。私は六道女学院の各学科棟と、その棟が専門とし

ている科目を見て、一番最初に向かうべき場所を提案した

「そうね……やっぱり基本の霊能科はどうかしら？」

マルタさんは私と横島で話し合っただけ好きな科目で好きな場所に行っただけ良いと行ってた。体験入学と言う形こそとっているが、恐らく冥華さんの考えは私や横島と言う仮GS免許とGS免許を持つている私と生徒と話をさせる事にあると考えている。それで無ければ、自由に好きな場所に行っただけいいなんて言わないだろうし、ノツブ達を連れてきても良いなんて許可も出さないだろう

「……霊能科か、悪くないと思うぞ？特に横島。お前は基礎が今一だからな」

シズクに基礎が今一と言われ、私を見る横島に頷く。横島の霊能力は言うならば基礎を覚えて、何十年もしたGSが技術を発展させて覚えるような物が多い。栄光の手とか、サイキックソーサーとか正にその典型だ。私と美神さんで基礎は教えているが、1度専門の教師の話を聞くと言うのも悪くないだろう

「じゃあ霊能科の授業を受けよう」

「ええ、それが良いわね」

アリスちゃんと手を繋ぎ、チビ達を抱き抱える横島と一緒に霊能科の教室に向かう。廊下から教室の中を覗き込むとどの教室も5個ずつ机と椅子が用意されていた。アリスちゃんが横島の右隣に座り、私が左隣、そしてアリスちゃんの隣にノツブ、私の隣にシズクで椅子に座る

「霊力の循環による身体能力の強化は、霊能者の基本的な技術になります」

教師が一瞬私達を見て、少し驚いた表情をしたが直ぐに平常心を取り戻し、授業を再開する。生徒達はちらちらと私達を見ている、その顔は不思議そうで、どうして仮GS免許を持っている私達がここにいらんだらう？と言った所だろうか

「ふんぷん♪」

アリスちゃんは教師の言葉に興味なし、鼻歌を歌いながら横島が買ってきたノートに落書きを書いて楽しそうだ。チビノブ達は横島の

後ろでちよこちよここと遊んでいる。それを見て私は心の中で生徒に謝った、こんな状況だったら授業に集中出来ないわよねっと……

「1人前のGSでも基礎は大切です。そして仮GS免許の資格者ならば、早く本免許になる為に基礎を学び直します。仮免許はゴールではなく、スタートライン。基礎を怠れば命を落とす事となります、慢心せず基礎を学ぶ事、そして復習する事を忘れないでください」

そう言っただけで私と横島に頭を下げる教師。それはだしにしてすみせんねと言いたげな表情だった

「では今日は霊力による身体能力の強化についてです。これは基礎的な技能ですが、基礎であるが故に奥が深い技術になります。自分の経絡が耐えられないほどの霊力で手足を強化すれば、筋を痛めたり、骨折したりします。しかし弱すぎれば、強化する意味が無い。何度も繰り返し身体能力を繰り返し、自分の身体に合った強化量を感じる事。それが大事です」

うん。それは結構的を射ていると思う。私や美神さんは既に自分の身体に適した霊力の強化量を把握している、横島は理解して使っているのではなく感覚だが、それでも適正な強化と言えるだろう

「そして強化ですが、常に全身を強化すると言うのは膨大な霊力を持つているGS。唐巢神父や小笠原GS、それに美神GSと言ったAクラス以上のGSが出来る術であり。普通は要所要所で使うと言うのが一般的です、除霊中に霊力が尽きると言うのは死に直結するので自らの霊力の総量、霊力の均等なバランス配分を覚える事を大事にしてください」

適切な授業の進め方だ。やっぱり専門的な知識を持つてる人は違うわ……冥華さんが集めた教師だから知識も技術も並みの霊能科の教師よりも頭1個も2個も上だ。ノートを取っている横島を見ながら、やっぱり基礎は大事よねと私もここは大事だと思う所をノートに書き写していく。

「では1限目の授業を終わります」

教本を閉じた教師は私と横島を見て、ああ、そうでしたそうでしたと呟き

「2限目は各クラス合同のマルタ先生の実技指導になりますので、もしご参加されるのならば体育館へ」

「ありがとうございます」

丁寧に教えてくれた教師に横島と揃って礼を言い、生徒達が着替えの準備を始めるので私達も教室を後にした

「芦GS、横島GS。霊能科に来てくださりありがとうございます」

私達に与えられた教室に向かおうとしていると霊能科の教師がそう笑いかけてくる。壮年の男性教諭で、人の良い笑みを浮かべているがその立ち方などでやはり並の人物ではないと言うのが良く判った

「いえ、こつちも勉強になりました」

「はは、そう言って貰えると幸いですよ」

そう笑った教諭は宜しければと前置きしてから、体育館の方を見て「もし良かったら実技の方にも参加していただけると嬉しいですが」

横島とその言葉に顔を見合わせる。元々マルタさんの指導を受けたいと思っていたので実技と書いている2限目は私も横島も元々参加するつもりだった。だがそれを改めて言われるとどうしたんだろうか?と思うのは当然だ

「何か理由があるんですか?」

横島がそう尋ねると男性教諭は溜息を吐きながら、その理由を伝えてくれた。名家という血筋が多く、しかも独自の霊能技術を持っている生徒が多く、やはり基礎を疎かにしている傾向があると

「私はもう引退したGSですので、流石に派手な動きは出来ません。芦GSと横島GSなら現役ですし、その動きを見せて貰えば少しは考えを改めると思います。勝手な頼みですが、どうかよろしくお願いします」

そう頭を下げて職員室に下がっていく教諭を見送る。シズクやノツブはその話を聞いて顔を顰めている

「……昔ほど悪霊が多くないからな、慢心もするのかもしれない……それは良くないな」

「だよー、一族秘伝の術だとしても、磨かないと実戦じゃあ使いきれんしの……」

元々六道女学院の卒業生でGSとして大成した人は少ない。それは実戦経験の乏しさや、ノツブの指摘の通り一族の術とかに慢心したまま卒業し、最初の除霊やゾンビなどの除霊で心が折れて、事務系のGSへと転身する生徒が多いからだ

「実技に参加で良いわよね？」

「元々参加するつもりやし、それで良いんじゃないか？」

今まで何度か六道で模擬戦をやっているが、眼魂だったり、使い魔だったりと言うならば普通じゃない戦い方だった

「主殿には少し不利ですかね？正統派の戦闘は主殿の戦術ではないですから」

「そうだとしても時に正統派の戦闘も大事じゃよ」

横島の場合正統派って言う言葉から最も程遠い場所にいるのよね……

「まあやるだけやってみるよ」

「お兄ちゃんがんばれー♪」

横島の回りで跳ねているアリスちゃん達に苦笑しながら、私達は体育館に足向けの向けるのだった……

運動着に着替えながら、今朝の朝礼のことを思い出す。今日から一週間、芦蛭GSと横島GSが六道女学院に体験入学すると理事長から通達があった

(芦GSならまだしも、横島GSなんて……)

仮免許でもGSはGS。GSをつけるのは最低限の礼儀だが、私は横島GSが決して好きではなかった。使い魔と共にある妖怪使いに、謎の球体を用いての謎の戦闘スタイル。そして本人も認めているが最低限の霊能の知識しか持ち合わせていないのに、美神お姉様の事務所の手……

「弓。顔険しいわよ？」

「え、あ……そうでしたか？」

クラスメイトに顔が険しいと言われ、小さく頭を振って笑みを浮か

べる。

「でもねえ、この1週間楽しみだね。芦GSもそうだけど、横島GSも一緒だしね」

仲の良い友人からの横島GSも一緒に楽しみと言う言葉に思わず眉を顰める

「横島GSはさほど評判の良い方ではないようですが？」

これは事実だ。美神お姉様と芦GSの補助的な役回りをし、稀有な霊能を持っているから美神お姉様の助手と言う立ち位置と言うのを雑誌で見た。正直助手として相応しくないと言う意見も良く聞く

「私見たことあるもん。美神お姉様とかの除霊、横島GS凄かったよ？何も言わないでも美神お姉様や芦GSの必要としている道具を素早く渡してバックアップしてたし、陰陽術とかで支援とかもやってた」

雑誌で評判良くないの見たけどさ、あれって確か前に美神お姉様のことを悪く言っていた記者の記事だったし……評判落とそうとしているようにしか見えないよ

「それに毎朝私の家の前を走ってるの見るけど、必死にトレーニングしてたよ。自分が足手纏いなのが判ってるから、少しでも追いつこうとしているの良く判るし……って弓？弓ー？どうしたの」

私を呼ぶ声を見無視して教室を後にする。あんな何も考えていない様子の横島GSが凄いだなんて私は思わない。マルタお姉様の実技指導は厳しいから、そこでボロが出るはず……

「皆さん。横島GSの実技をやってもらうと言うのはどうでしょうか？」

既に体育館に居たクラスメイトの前でそう提案する。あちこちから良いね、見て見たいとか言う声上がる中。これで横島GSが美神お姉様の助手に相応しくないと、それを皆理解してくれるはず。だが私が見たのは予想だにもしない光景だった……

## その2

レポート18 福の神 頑張る その2

教師の皆さんが用意してくれたパイプ椅子に座りながら、横島とマルタさんの組み手を提案した生徒に視線を向ける……

(弓かおりだったわね)

確か雪之丞とデートしている時に、ベスパ達と一緒に襲撃した覚えがある……その表情は信じられないと言いたげに歪んでいた。勿論その顔の理由も判っている

(横島の評価って低いのよね)

GS試験に来ていた評論家やGSには緘口令が敷かれたので、横島のGS試験での評価は稀有な技能を持つと言う程度が表側の評価そしてそれ以降は除霊現場に命がけで進入してくる馬鹿とかが横島を見て、適当に記事を書いている。恐らくその評価を鵜呑みにしていたのだろう

「……見ているとスカつとする光景だな」

横島にとことん甘いシズクがにやりと笑う。横島の能力はGS基準から考えても高すぎる、感覚で使い。それを研ぎ澄ます才覚に長けている。ただ教科書通りではないので、そこが少し霊能を齧った程度の人間には理解できないのだ。霊能に深い知識のある人間だけが判るのだ横島の桁外れの才能に……

【お、あれお前が教えた動きじゃな?】

【はい。しかし、主殿に教えたのは主よりも大きな相手との戦闘術ですから】

マルタの方が背が低いもんなあとノツブが呟く。横島は自分よりも大きな相手との戦いには慣れていますが、自分よりも身長の高い相手は苦手になっている。更に言うところフェミニストな面があるので、女性に拳を振るうと言うのが基本的に苦手だ

「お兄ちゃん、がんばれー♪」

「みむうー」



「ぶぎゅっ!!」

「はいはい、大人しくしてる」

横島にがんばれーと声援を送っているアリスちゃんとチビ達の面倒を見てくれているタマモを見てみると、組み手を見学している生徒の中で1人、やけに横島を熱心に見つめている生徒を見つけた

(ん?知ってる?あの人……見たことある)

どっかで見たことある。ルシオラの時か、横島蛍の時なのか覚えてないけど……あの人が知ってる。誰だったかな?と見つめていると、その生徒の肩の上を見て思い出した

(花戸小鳩!)

そうだ、そうだッ!!おキヌさんよりも遥かに危険度の高い女性だ。良く家に訪ねて来ていたが、1度結婚してくれたのに……とか、福の神が憑いている私の方が……とか……お母さんも苦手って言ってた超真っ黒い人だ!今はまだ黒くなくて白いけど……いつかあの黒さになるんじゃないか?と私は思わず背中に冷たい汗が流れるのを感じるのだった……

私と横島の組み手を提案した弓。六道の生徒の中でとりわけ選良思想の強い少女だ……それは霊能者である事に対する自負と、強者に対する憧れと言うことは分かっていたが、私は実技指導の教師と言う事で、話をする権限は無い。だから危ない子と思って見ていたが、横島との組み手はそんな弓の凝り固まった思考を解くのに相応しいと思っただけ

「ハレルヤッ!!」

拳を軽く握り、かなり本気でジャブを放つ。私の拳は決して遅くは無い、むしろかなり本気なのでその速度は音を置き去りにする。だが横島はそれを見てから反応する。どんな反射神経と目をしているのよと言いたい

「つつーッ!!」

「へえ。やるじゃない」

避けられないと判断して、私の拳を側面から叩いて軌道を逸らす。だが完全に勢いを殺しきれず、手が痛いと手を振っている

(姉さん。あんまり熱を入れすぎないでください)

肩の上で小さく言うタラスクに判ってるわよと呟く。組み手と言う形を取っているが、これは組み手ではない。1週間横島が六道に滞在する上で横島が馬鹿にされないようにする為の儀式に近い

「せいっ!」

「遅いッ!」

横島の打撃に合わせて、カウンターに左拳を繰り出し……小さくした打ちした。拳を繰り出すと同時に横島は頭を低くして、私の拳をかわずと腕を掴み私の懐の中で回転する

(折られる!)

横島の回転に逆らわず好きにさせる。投げられると同時に手を突いて体勢を立て直す……肘を少し痛めたか、でも抵抗していれば折られていた。そう考えれば痛めた程度何の問題も無い

「シッ!!」

「どわっ!」

大きく踏み込んで右フック。当然これは大振りなので横島はしゃがみ込んでかわす、かわした先に右膝を振り上げると両手で受け止めるが、私の力を耐え切れず横島の身体が宙に浮く

「ハレルヤッ!!」

ここだ!と判断して1・2のコンビネーションを繰り出すが、横島は信じられない事に空中で身を捻って、私の腕に一瞬手をおいてそれを軸にして大きく後に後退する。地面に着地し、とんとんとリズムを取って構えなおす横島に見学していた六女の生徒は言葉も無い。相手の腕を軸にして飛ぶとか常識的に考えてありえない、ひそひそ声で肉体強化してるんだよとか言う声が聞こえてきたので、それは違うと私は口にした

「良い反射神経してるわね?身体強化してないでしょ?それ」

横島の眼の良さは知っている、だがそれだけでは説明出来ない。こうして何とか拳を交して感じたことを口にする。身体から靈力を感

じない、つまり横島は自前の身体能力で全て反応して見せたのだ。だけど霊力は僅かに感じるので、どこかをピンポイントで強化しているか、それともお互いが交差する瞬間だけ強化してるはずと思いなから言うと、横島はとんでもない事を言い出した

「あ、やっぱり判ります？マルタ姉さんの攻撃半端無いから」

手をぐっば、ぐっばしながら、右足でリズムを取る横島。やはり身体に霊力の気配を感じないから、身体強化はしてない。横島はにっこりと嬉しそうに笑いながら自身の目を指差して

「目を強化してみました。よーつく視えます」

さらりととんでもない事言いやがった。この規格外男……思わず頭痛を感じて、頭に手をおく

「私の聞き違いじゃないわよね？何を強化してるって？」

「目と伝達神経？」

なんで私の問いかけに疑問系で返してくるのよ……と言うか身体強化ならわかるのに、目の強化って何よ……

(本当感覚でとんでもないことをするわ)

霊能の知識が無いから、思いつきでこうしたら良いんじゃないか？とか、こうしたらどうなるのか？とかを色々試す横島。それでいてスポンジみたいに教えた事を吸収して、それを発展させてみってくれるから面白い

「じゃあもう1つギアを上げて行こうかしら？」

ぎゃーっ 藪蛇っ と叫ぶ横島に笑いながら私は再び拳を握った。なんと言うか横島は弟に似ていると思う、明るくて、騒がしくて……でも優しい子で……

(横島というと素が出ちやうのよね)

聖女マルタじゃなくて、村娘のマルタの顔が出ちやうのよね……でもそれは決して嫌な感じではなく、自然と笑みを浮かべてしまう。横島はやっぱり不思議な子と思うのだった……

私は目の前の光景を見て言葉も無かった。マルタ先生は決して弱

くない、むしろ現役のGSと比べたって強いと言える人だろう。稀有な才能を持っているだけの横島GSでは簡単に殴り飛ばされて終わり……そう思っていたのに

「せいッ！やっ!!」

「ひっ！くっ!!」

普段の授業の時よりも数段早い。打ち終わりしか見えない拳を横島は手で、足で、肘で、全身を使って受け止めて防いでいる

「少し熱が入りすぎですよ!」

合同授業なので他の教諭がマルタ先生に熱を入れすぎです!と注意をするが、マルタ先生も横島GSも極限の集中状態なのか、その声も聞こえていない様子だ

「やれやれ随分と熱が入っている様子だ」

「仕方ないだろう?理事長の秘蔵っ子だ。才覚があるだけじゃない、努力もしている」

「ああ、見た見た。靈力を循環させながらランニングしていたり、体術の稽古も一生懸命だよな」

教師から横島の話が出てきて、近くにいた教師に声を掛けた。美神お姉様を尊敬している若い女性の教師の篠原先生だ

「横島GSは美神お姉様の足手纏いなんじゃ?」

私がそう尋ねると篠原は一瞬驚いた顔をしてから、怖い顔をして

「弓さん、それ聞かれたら、GS協会にも、六道の会社にも勤める事が出来なくなるわよ?」

その言葉に絶句していると篠原先生は眼鏡を上げながら、雑誌を見たのねと呟く

「横島GSの評判は雑誌とは全然違うわ。確かに稀有な才能を持っているのも事実、そうね。私からしても羨ましいわ」

一流のGSが何年もかけて身に付ける技能をあの歳で身に付けている。それはとても凄い事だし、羨ましいわと篠原先生は言う。才能だけで雇われていると言われている筈だから、それは誰だって羨ましいと思うだろう。実力も知識も無いのに、才能だけで色んな人にちやほやされて、才能に胡坐を掻いて努力をしない男と書かれていたのだ

から

「でも彼は決してそれに胡坐をかいたりしてない。努力して、色々試して、それを自分の物にしようとな努力を続けているわ。それに美神GSも神代会長も、そして理事長にも目をかけられているけど、それを自慢なんかしないで地道に、一步一步努力して前に進んでる」

あれが自分の才能にあぐらをかいて努力していない人間に見える？と言われ、私は言葉も無かった。仮にも私も「弓式除霊術」を受け継ぐ鬨龍寺の跡取りとして、修行に明け暮れてきた。だから相手の動きを見れば、どれだけ努力して来たかはわかる

「シッ！シッ！！」

確実に疲労はたまっていくだろうに、しっかりと体重移動と共に繰り出される拳は何日も走りこんだ足腰があるから出来る事だ。努力に努力を重ね、積み重ねた土俵があるから出来る動き……

「そんなんじゃないわよー！」

横島GSのジャブをマルタ先生は弾き、懐に入り込んで拳を繰り出す。横島GSの身体がくの字に折れて殴り飛ばされる

「ちよつとーマルタさん！やりすぎですよ！！」

「……お前もう少し手加減をだな」

芦GS達のやりすぎだと言う声にマルタ先生は返事を返さず、油断無く拳を構えている。それはまだ終わっていないと言っているようにしか見えなかった

「そっつ！！」

「げっ！！」

突如振り返り拳を繰り出したマルタ先生。そしてその方向から横島GSが姿を見せる、え、え!?今殴り飛ばされたのは……そっちに視線を向けると殴り飛ばされた横島GSの姿は消えていた

「感覚阻害、分身、それとも幻術？何したの？」

「いや、適当に……霊力をぐつととしてがーッ！とやって、ばーつと……」

適当!?適当でなんであんな高等技術が出来るのか。私を含め周囲の生徒の顔が驚愕に歪む、どういう頭の作りをしているのかと思った

「適当に変な術を編み出すなッ！」

「っひいっ!!」

マルタ先生が怒声共に蹴りを繰り出し、横島GSはそれを頭を抱えてしゃがむ事でかわし、反撃にと軸足に足払いを仕掛ける

「つとー！」

初めてマルタ先生の体勢が崩れた。横島GSはそれを見ると、マルタ先生のジャージを掴んで

「せいっ!!」

「きやつ!？」

マルタ先生の身体が宙に舞った。何をしたのか判らなかつたが、恐らく合気道系の投げ技。それでマルタ先生を投げ飛ばしたのだろう

「甘いってのッ！」

だがマルタ先生もマルタ先生だ。着地と同時に、地面を蹴って横島GSに飛び蹴りを放つ

「あわわわ!!」

慌てて両手をクロスして、その蹴りを受け止める横島GS。だがマルタ先生はそれで終わらず、一步バックステップを取って振りかぶった右拳を……

「マルタさん、少しやりすぎかと」

「……喧嘩を売ってるなら買ってやるぞ」

その最後の一撃を繰り出そうとした瞬間芦GS達が割り込みマルタ先生は申し訳無さそうに、頭をかいて

「横島が随分と強くなってるから熱が入っちゃったわ……大丈夫？」

「大丈夫ッす。良い勉強になりました。蛍達も大袈裟だよ、俺は全然大丈夫」

そこまで心配しなくても良いと横島GSが笑い、臨戦態勢だった芦GS達も手を下げる。組み手が終わったと思った時、並んでいた生徒の列から拍手をする音が聞こえ、それが徐々に広がっていく……私も気がついたら拍手していた。そしてそれと同時に後悔していた、雑誌の情報を鵜呑みにしていた自分が恥ずかしく思うのと同時に、美神お姉様の事務所の助手として相応しい人物だったと目の前の組み手を

見て、理解するのだった……

マルタ姉さんとかの組み手とか、他の授業の見学とか、使い魔学科に顔を出したりしていたら1日はあつと言うまだった。途中でキアラさんのカウンセリング室も見ただけど、予約で一杯だった。それだけでキアラさんのカウンセラーとしての実力は凄いなあつと思つた。ちなみに昼休憩の時間にはおはぎを持って尋ねて来てくれて

「宜しければ一緒にお茶をしませんか？」

と穏やかな声で言うので、皆でキアラさんの手製のおはぎに舌鼓を打ち、世間話などを交えた。本当に穏やかな人で、やっぱり今出会ったときも、小竜姫様とかに似てるなあと思つたのだ。

「結構早く終わったな」

「まあ他の子はこれから部活だったり、寮に戻ったりするみたいだしね。ここら辺まででしょ」

他の生徒は部活があるので、俺達は16時のバスで帰ろうと思ひ、バスの迎えが来るまでバス停のベンチで待つ事にした

「お家に帰ったら散歩行こう♪」

「みむーみみーむ♪」

「ぴぎゅー♪」

散歩散歩と言うアリスちゃんとチビとうりぼーに判つてると返事を返すと、やたーつと喜ぶアリスちゃん達を眺めながら、膝の上のタマモを撫でる。1日アリスちゃん達の面倒を見てくれていて疲れたのか、先ほど俺にペンダントを返し、子狐の姿になって今は眠っている

「……あの狸の学校だから少し不安だったが、あの様子なら大丈夫そうだろう」

【思つたよりも暇だったしの】

心配だからついてきたシズクと面白そうだからと言っていたノツブちゃんは退屈そう。でも学校だから、そんなに面白いイベントなんてある訳も無い。アリスちゃんはずっと俺の隣にいて、話をしたり

絵をかいたり、チビと遊んでいたから明日も来る！と言ってるけどな……

【しかし、良く反応出来たな。横島、訓練の成果が出ているぞ】

「そうね、ちよつとずつ結果が出てきたんじゃない？」

蛍と心眼のお褒めの言葉に思わず頬が緩みそうになるが、いかんいかんと首を振る。マルタ姉さんは終始手加減してくれていたと思う、だからその手加減してくれた状態で粘る事が出来てもまだまだだ思うのは当然だ

「でも驚いたよなあ。あんなに変わるもんなんだな」

1 限目が終わるまでは珍獣を見るみたいな目だったのに、マルタ姉さんとの組み手を終わったら生徒の皆の俺を見る目が変わっていたのは正直驚いた。

「そりゃGS免許を持つてるし、目の前で実力を見れば納得するって物よ」

「俺は言うほど実力なんて無いと思うけどなあ」

マルタ姉さんとの組み手は終始逃げと防御。他の生徒はもつと良い勝負をしていたかもしれない

「栄光の手とか無しだから、それで考えれば横島が上よ」

【そうですよ主殿。己の得意な戦術を使わないで、格上と戦う。それはとても難しい事ですよ】

栄光の手や、サイキックソーサーは霊能としてはセオリーをとことん外れていると説明され、出来れば使わないで欲しいと言うことで栄光の手とかは使わなかった。そうなる俺の場合とことん攻め手に欠けてしまう

「神通棍とか使うほうが良いのかな？どう思う？」

「うーん、横島には合わないと思うわよ？もし合うならとつくの昔に、美神さんが勧めているだろうし」

霊能者としての基本的な装備とかと横島って相性悪すぎなのよね？と蛍に言われて少し落ち込むが、自分でもそうかもしれないと思う。もし俺が神通棍とか使えるなら蛍と一緒にこれを使ってみてとか言われるはずだし……そんなことを考えていると



「くひ、やあやあ！」

「どわあっ!？」

突如目の前に現れた柘ちゃんに驚き大きく仰け反る。シズクや蛍がどうしたの!?!と振り返り、俺の目の前にいる柘ちゃんを見て何で?と言う顔をしている

「アリスだよ?誰?」

「夜光院柘、柘で良いよ」

よろしくねーつと笑っているアリスちゃんとその隣でくひくひ言っている柘ちゃん。なんか正直凄い光景だと思う

「何やってるの柘?」

「何って通学だよ、通学。冥華の命令で飛び級で1年に配属されてるんだよ、ひひひつ……横島のくれたチョーカーのおかげで普通に通えるし」

まあボクは気紛れだから、気が向いた時しか来ないんだけどね!と上機嫌に笑う柘ちゃん。

「未来視は大丈夫?」

「大丈夫だよ、薬も30から10個くらいに減ったから良い調子だよ」

10個でもかなり多いと思うんだけどなあ……でも未来視が暴走してないと聞いて良かったと安堵しているとGS協会のロゴの付いた車が門の前に停まる

「くひひ、会長殿に呼ばれてるからね。くひ♪じゃあ、また明日」

くひひつと笑って車に乗り込む柘ちゃんを蛍と見送り。俺は走り去っていくGS協会の車を見つめながら

「相変わらず柘ちゃんって変わってるよな」

「そうね……夜道とかに会うと叫んじゃうかも……」

悪い子じゃないんだけど、やっぱりちょっと変わってるよなと蛍と話しながら、バスが来るのをのんびりと待つのが……

「所でさ、なんかめっちゃ分厚い入学手続きって本貰ったんだけど、どうすればいいと思う?」

何これ辞典?と思いたくなる入学手続きを笑顔で冥華さんに渡さ

れたんだけど、どうすればいいと思う?と蛭に相談する

「……美神さんに相談しましょう。捨てる怖いわ」

だよな。あの笑顔の影で何考えているか判らないし、とりあえず1度持ち帰り美神さんに相談する事に決めるのだった……

「会長殿、横島と蛭が体験入学してるなんて聞いてない」

「私も聞いてないわよ」

一方GS協会に来ていた柩は横島と蛭が体験入学しているなんて、聞いてないと琉璃に文句を良い

「……ああああ……あの机妖怪の毒電波を思い出す……ボクのトラウマなんだよあれはあ……」

(机妖怪の愛子さんの毒電波?え?何か彼女特殊能力とかあったのかしら……?)

柩の言う毒電波。机の中に飲み込んだ相手をスイーツ脳に洗脳する電波であり、それを知らない琉璃は愛子に何か特殊能力があるのだろうか?と真剣な顔で考えていたりするのだった……

寮に戻ってくるなり、ぽーっとした表情で窓を見つめる小鳩。カレンダーに×印をつけて、後4日とか小さく書いている

(ワイ福の神なのに……)

小鳩が寮の手続きをしている間に横島が使い魔学科に居たそうやけど、小鳩が来る少し前に戻ったらしい。その話を聞いた小鳩は明らかに落胆していた

(うーむむ……なんでや)

もう福の神としての実力は高い物や、小槌を振るえば万札位ぽんつと出せる(小鳩や母親の意向で出来れば出さないと欲しいと言うので滅多に使わないが……)福の神としての能力は申し分ない。福の神は憑いている人間に幸運を齎す、それは金運を初めにして恋愛運だってそうだ……ワイの神通力が通じないとか……ちよっと信じられない

【まあ明日も使い魔学科に来るから、そのときにお礼を言えば良いやろ?】

「うん……でも、横島さんの回り可愛い子ばかりだったよね……」  
はーっと深い溜息を吐く小鳩。いかん、小鳩はネガティブだから考  
え始めるとド壺に嵌るんや……

【大丈夫やで、小鳩だって可愛いで】

「うん、ありがと福ちゃん……私お風呂入ってくるね」

ふらふらと部屋を出て行く小鳩を見送り、ワイは深い溜息を吐きな  
がら

【水神様に妨害されとるんかなあ】

横島の側にいた小柄な少女。曲がりなりに神の一端のワイは  
判る、あの少女は水神様や、しかも相当な神格の持ち主……なんでそ  
んな相手が横島の側にいるのか？と言う疑問を抱きながらも

【ええい！ワイは負けへん！負けへんでーッ!!】

夜の帳の中空を駆ける流れ星を見てワイはそう叫んだ。今度こそ  
小鳩を幸せにするんやーっと……だがそれが前回よりも遥かに厳し  
く過酷な戦いであると言う事を、ワイは翌日思い知らされるのだった  
……

リポート18 福の神 頑張る その3へ続く

### その3

レポート18 福の神 頑張る その3

横島さんと蛍ちゃんの六道女学院の体験入学の2日目。私は美神さんの指示で2人に同行していた

【美神さんが言うには、横島さんを六道に入れる為だけに共学にするとか考えていると思うから、教師を信用しないようにと……】

私の言葉に横島さんと蛍ちゃんが心底嫌そうな顔をする。昨日はシズクちゃん達が同行していたらしいが、今日は2人の姿は無く。横島さんと手を繋いでいるアリスちゃんとチビちゃんとうりぼーちゃんとタマモちゃんといういつもの面子だ

「結構助けてもらっているし、悪い人じゃないと思うんだけど……」  
「でも善人とも言えないわよ、計算高いし……ちよつと素直に信用するには怖いかも」

バスを待っている間。昨日よりもちよつと警戒して過ごしましよ  
うと言う蛍ちゃんと横島さんを見ながら

(一文字さんとか弓さんはどうなんだろう……)

私が生き返るのはもう少し先……だと思う。生き返った後は友人関係だったけど、今幽霊の姿で会っても大丈夫かな？と言う不安を抱きながら、バスに乗り込んだ2人の後を追って、私もバスの中に移動するのだった……

【1つの教室全部使っているんですね】

霊能科の棟の空き教室が横島さん達の待機所になっているらしい。  
1つの教室を丸々使わせて貰っているなんて思っても無かった

「お兄ちゃん、えーい」

「つとと」

アリスちゃんは自分が背負っていた鞆からボールを横島さんに投げ渡す。横島さんはそれを受け取り、アリスちゃんに投げ返す

「へへーん」

横島さんに遊んで貰っているのが嬉しいのか、幸せそうに笑ってい

るアリスちゃんに横島さんは近寄って、うりぼーちゃんとチビちゃんと一緒に遊び始める

【良いんですか?】

「いいのよ、本当体験入学って形だけみたいで、好きに授業に出て、好きに見学して、好きにうろついて良いって」

それ体験入学って呼んで良いんですかね?と首を傾げる。とても体験入学には思えないんですけど……

「それよりも小鳩さんが入学してる」

【本当ですか!?!】

蛍ちゃんの言葉に思わず本当ですかと叫んでしまい。アリスちゃんと遊んでいた横島さんが振り返り

「どうかした?」

何かあった?と尋ねてくる横島さんに慌ててなんでも無いですよ!と返事を返し、蛍ちゃんに頭を寄せる

【本当に?】

「うん、しかも福の神と一緒に。私を見て驚いた様子だったから、記憶があるかも知れない」

小鳩ちゃんは強かで、横島さんを計算高く狙っていた……そんな相手がいるなんて思っても無かったので、正直かなり驚いた

【小鳩ちゃん自身は?】

「記憶は無さそう。でも横島に熱っぽい視線だったわね」

……前のアパートじゃないのに、なんで横島さんと小鳩ちゃんが出会ってしまったんだろう?思わず溜息が出てしまう

「私はあんまり小鳩さんに詳しくないから、おキヌさん。どんな様子か見てくれる?」

【はい、大丈夫ですよ】

あの人は笑ったまま嘘をつける人だ。そしてそれを隠し通す術にも長けている……私も完全に見破れるか自信は無いけど、1度会ってみよう。そう思ったとき教室の扉が開き

「教師からの命令で1週間ボクも君達と一緒に教室らしい、くひひひ♪よろしく」

……柩ちゃんがくひひつと笑いながら入ってきて、蛍ちゃんを見ると疲れたように溜息を吐く……体験入学って聞いて平和に過ごせると思っていたのに……やっぱりまた何かありそうな予感がして、私も深く溜息を吐いてしまうのだった……

横島がくれたチョーカーのおかげで、未来視の暴走は収まった。そして薬の量も減った……それは良い事なんだけど

(行動を読まれるようになったちゃったんだよね)

未来視に制限が掛かったので、自分の生死(横島もついでに)に関わる未来のみに限定し、未来視をしていた。だけどそのせいで今度は会長殿達の行動を読めなくなった。そのおかげで気がつけば六道に編入され、そして今は横島と同じ教室だ

「うりぼー、ほーれ」

「ぴぎゃーん」

「うりぼー上手だね♪」

横島の投げたボールをジャンプして、鼻で投げ返すうりぼー。モグラが居ない変わりにうり坊がいる……一体どういう経緯でと疑問を感じずにはいられない

「柩。最近見なかったのってもしかして編入手続きとか?」

仲が良いと言う訳ではないが、それでも蛍とも美神とも世間話はする。ましてや後4日間はクラスメイトのような物なのだから、つつけんどんにする必要は無いので普通に話をすることにした

「……くひつーそんな所だね」

チョーカーを外せば未来視の制限が外れるが、文字通り折角人並みの寿命になるかもしれないと思えばチョーカーを外す気にはならない

「1ヶ月に2回、2回だけ全力の未来視をしてるんだけどね……先のことばかり見ている、近々起きる事が読めないんだよ」

チョーカーを外して全力の未来視をする時間は30分ほど、しかもその内容もガープとかの襲撃などを重点的にし、暴走する前に再び

チョーカーを装着しているのです、自分の未来まで見ている余裕は無い  
【ちなみに何か見えたんですか？】

「くひひ、ゼーんぜん。あ、でも蛭と横島が過去に行ったのは知ってるよ」

未来視で見たからね、でも何時行くかとかは判らないから何も言わなかったし、美神の超レア技能を公にするつもりもなく、ボクの胸の中に留めておいたよと笑うと、蛭はそれなら良いけどと呟き

「1ヶ月に2回って言ってたけど、次は何時？」

「明後日かな。新月か満月の時が良いんだよ」

月の満ち欠けの時に未来視すると短時間で必要な情報を手にしやすいので、その時が都合が良いのだ

「それよりも1限目の授業には出ないのかい？」

「普通の教科じゃね……それなら図書館とかで本を見たりしたほうが良いと思わない？」

なるほど、だから横島は遊んでいるのか……ん？横島の方に視線を向けるとうり坊が6匹に増えて、なんかアリスの指揮でびぐびぐ鳴いている……

「あれも妖怪かな？」

「……乙事主かも知れない」

……いや、それ日本で最大級ともいえる知名度の神獣じゃないか……と言うかなんで、そこまで考えた所で大分前に会長殿に伝えた山のことを思い出した。でもその時は山を破壊され、怒り狂った乙事主が周辺を更地にすると言う未来だったと思うんだけど……

「……もしかして神の山関係かな？」

こくりと頷く蛭。また未来を変えた……その事に本気で驚くし、凄くと思うのだが……

「」「ふぎゅー」「」

「くすぐったいーやめ、こらこらー止めろー」

「あはは、くすぐったいよー」

ちよっと大きくなったうり坊とアリスに囲まれて、楽しそうに笑う姿に自分がどんな存在と一緒にいるのか？それを確実に理解してい

ないだろう。と言うか、横島に教えてない可能性が高いかな

「くひひ、君達も大変だね。所であれいいのかな？」

ボクは多分初めて心の底から、他人に同情した。少し離れた所で見ている分には面白いが、側にいる人間は大変なんだろうな……更に巨大化し増えたうり坊に飲み込まれるようにして消えていく横島とアリスを見て、蛭とおキヌが慌てて救出に向かう姿を見て、ボクはくひひっと笑うのだった……やっぱり見ている分には面白いから……

福ちゃんは正確には使い魔じゃなくて、神様なんだけど、私は使い魔学科に配属される事になった。神憑きだから憑依や、神託という学科も合ったらしいが専門的な知識が多すぎて、理解出来ないだろうという判断らしい。

「小嶋さん、多分今日も横島さんが来ると思うよ」

「え。そ、そうなの？」

カソと言う火鼠を使い魔にしている藤村さんが、カソの顎の下を撫でながら教えてくれる

「横島さんは使い魔学科に良く来てくれるしね」

「……ちよつとずれてるけどね」

使い魔学科の生徒はそんなに多くないから皆の名前を覚えてたけど、ちよつと怖いと思っていた葉月さんや、篠村さん、それに火野さんも横島さんには割りと友好的だった

「横島さんってそんなに結構来てくれるんですか？」

結構と言うか……六女に来た時は大体顔を出してくれるわよ？と全員が答えた

「私達よりも凄い妖使いだしね？」

「それに使い魔も皆良く懐いているし……薫のキョンシーと違って」  
そう苦笑する火野さんの視線の先を見ると篠村さんが2人のキョンシーに悪戦苦闘していた

「ごめんって！ほらプリン！プリン上げるから」

【キシヤーツ!!】



「きゃあー！髪！髪止めてええ!!」

……キョンシーに髪を引っ張られて泣いているのを見て、大丈夫なんですか？と尋ねる

「大丈夫じゃないけど、信頼関係ゼロだから仕方ないわね」

天城さんはそう言いながら、自信の足元に伏せていた炎を纏う犬……狼かな？の頭を撫でる

「そもそもキョンシーなんて言う使い魔を選んだ段階で扱いにくいでしょうに」

「たーすーけーてーツ!!」

【「シヤアアアアツ!!」】

キョンシーに追い掛け回されている篠村さんを助けようか悩んでいると、教室の扉が開き

「見学に……【「ニヤー♪」】うおう!?!」

横島さんが入ってくるなり、篠村さんを追い掛け回していたキョンシーが猫みたいに鳴いて横島さんに突撃する。

「大丈夫かしら?」

「……ぐすつ……どうして言う事を聞いてくれないの……」

へたり込んで泣いている篠村さんを励ましている短い黒い髪の女性。芦GS……近くで見て思うけど、綺麗な人だ。それに優しそう

「ゾンビだ！こんにちわ！アリスだよ?」

【「シヤー♪」】

青いエプロンドレスの少女が自己紹介すると、キョンシーは横島さんからアリスちゃんの方に移動し擦り寄っている

「ぴぐ」

「みーむう」

「ココーン」

【お邪魔します】

尻尾を振りながら小さな猪と、ふわふわと空を飛ぶハムスターらしいの生き物と、鮮やかな金色の毛をした狐。そして最後に巫女の幽霊さんが入ってきて、扉を閉める。私は思わず隣に居た藤村さんに「これって普通なんですか?」

違うに決まってるでしょ？と笑う藤村さんに横島さんの周りが特別なんだと、私が理解するのにその時間は掛からなかった……

「よし、うりぼー。これだ、見たな？」

「ぶぎゆう♪」

「よし、取ってこーいッー！」

横島さんがfrisbeeを投げて、それをうりぼーが凄まじい勢いで追いかけて行き

「ぴっぐうー！」

「「「おー」」」

ジャンプして空中でfrisbeeを受け止める。うりぼーに私を含めて皆の拍手が出る

「よーしよしー！偉いぞー！」

「ぴぐう」

frisbeeを咥えて戻って来たうりぼーの前に座って、偉い偉いと撫で回す横島さん。その姿は犬を飼っている人みたいに見えるんだけど……撫でているのは猪である

「よし、今度はチビだ。これな」

「みむ」

「よし、とってこーい！」

「みむー♪」

空を飛んでハムスター（グレムリンと言うらしい）がボールを追いかけていく、その姿は愛らしいし、とても見えていて平和な気分になるんだけど……これ授業なのかな？と福ちゃんと一緒に首を傾げる

【なあなあ、これ何の授業なんや？】

「使い魔と仲良くなる時間よ、信頼関係が無いと、篠村見たいになるからね」

キョンシーに噛まれたり、追いかけられたりしているのを見るとちよつと怖い。福ちゃんはそんな私を見て

【大丈夫。ワイはそんなことしないで】

「うん、ありがとう」

小さい時から一緒にいるから、信頼関係は大丈夫だと私も思ってい

るから、こうして面と向かって言われると凄く安心する

「じゃあ皆も使い魔とスキンシップをしてください」

担当の先生の声を聞いて、自身の使い魔と思いきいの時間を過ごす  
クラスメイトの皆……

「お姉ちゃん。この子達アリスに頂戴♪」

「え、いや、駄目……私の使い魔居なくなっちゃう」

「懐いてないから良いでしょ？アリスに頂戴」

「駄目。お願いだから……帰ってきて」

篠村さんの使い魔のキョンシーがアリスちゃんに懐いてしまい。  
頂戴、駄目と言う押し問答を繰り返している……私はどうしようか悩  
みただけで、芦GSと一緒にうりぼー達と遊んでいる横島さんの方に足  
を向けた。折り机と椅子を用意して、何か話しているの、邪魔かな  
とは思ったのだが、やっぱりもう1度ちゃんとお礼を言っておこうと  
思ったのだ

「あの、あの時はありがとうございます」

悪霊に追われてる時に助けてくれてありがとうございますとも  
う1度お礼を言う

「そんなに気にしなくて良いのに、それより小鳩ちゃんは福の神だっ  
たっけ？」

横島さんが私の顔の横を浮いている福ちゃんを見てそう尋ねてく  
る

【ども、福の神やってますねん、よろしゅう】

にこにここと笑いながら福ちゃんが頭を下げる。そんな福ちゃんを  
怪訝そうに見つめる芦GSとおキヌさん

「えつと芦GSに、おキヌさんでしたよね？福ちゃんがどうかしまし  
たか？」

私がそう尋ねると、2人は小さく笑みを浮かべ

「ううん、なんでもないの、福の神なんて初めて見たから珍しくてね。  
あ、それと芦GSじゃなくて蛭で構わないわよ？」

芦GS……ううん、蛭さんは私が思っていたより優しい人だったみ  
たいで、小さく笑みを浮かべながらそう言う

「じゃあ花戸小鳩です。よろしくお願いします」

改めて自己紹介をし、他の生徒と違って福ちゃんは明確なコミュニケーションを取れるので、私は勧められるまま、横島さん達が腰掛けしているパイプ椅子を自分の分も組み立て、福ちゃんの話をしながらか横島さんと蛍さんと話をするのだった……ただ最後のほうで

「あの白い私ってなんですか?」

私のことを白いと言った2人の小声が気になり、どういう意味か問いかける

「【気にしないで、こっちの事だから】」

声を揃えて言う蛍さんとおキヌさんに私と横島さんは揃って首を傾げ、福ちゃんが何故か滝のような汗を流しているのが妙に気になったのだが

「お兄ちゃん! あそぼー♪」

アリスちゃんが大声で横島さんを呼び、横島さんもそれに答えて席を立った事でその奇妙な雰囲気は一瞬で霧散してしまうのだった……

六女の体験入学をしている横島GSと芦GS。本来の課題とは異なり2人が滞在している1週間は六女の生徒は特別な課題を出されてきた。それは2人の動きを見て何を思ったのか、何を感じたのかをレポートとして纏めると言う物だった。1日ごとに提出されるリポートの山を見て私は笑みを隠す事が出来なかった

「やっぱり横島君は最高だわ」

横島君の世間一般の評価は才能に物を言わせ、琉璃ちゃんや令子ちゃん、私に気に入られていると言うのがGSの間での一般的な評価だ。なんせ通学しているのは普通の高校で霊能科も無い、霊能の勉強をし始めたのは中学と余りに遅い。才能に甘えていると言われても仕方ないが、実際はそんなのは能力のないGS崩れの癖みに過ぎない「うんうん、本当に良かったわ」

六女は女子高なので男の子の横島君を体験入学させるのは、中々骨

だったけど、無理にでも体験入学させて正解だった

横島GSについて感じた事として多いのは

「その独創的な思考と臨機応変に対応出来る応用力は尊敬します」

「組み手をしたときに感じたのですが、雲か何かを相手にしているみたいで掴み所がなくて、気がついたら倒れてました」

「正攻法じゃないから真似しない方がいいといわれましたけど、正攻法で通る事が少ないから色々覚えたのだと思いました」

「使い魔との距離感、接し方がいかに大事か、そして信頼関係を築く大切さを感じました」

「……横島GSはロリコンなのでしょうか？なんで外人の女の子にお兄ちゃんと言われているのか気になりました」

「なんか一番最後は余りにあれなので、気にしない方向で行きましよう。たった2日で横島君の評価は大きく変わり始めていた

「蛍ちゃんもいい感じ〜♪」

「芦GSについて感じたことについては

「どの霊能もバランスよく鍛えられていて、攻撃だけではなく感知や調査も大事と言う事を改めて思いました」

「親切にアドバイスをしてくれて、実際の除霊現場で起きうる自体と言う事も教えてくれてとても勉強になりました」

「横島GSのような奇天烈な行動はしませんが、理詰めで詰め将棋やチェスのように追い詰められる感じがしました」

「などと正道な戦術に秀でていて、蛍ちゃんと邪道な戦術に秀でている横島君との合同授業と言うのは、六女にとってとても良い刺激になっている」

「除霊は教科書通りじゃないからね〜」

「除霊は1分、それこそ1秒で状況が良くも悪くも劇的に変わる、確かにある程度は決められたパターンという物がある。だけどそれはあくまで1つのパターンと言う物だ。そうなると思えば、六女の生徒の悪い所で、六女の生徒で優秀なGSがいらないと言われる理由だったが、今回の事でちよつと良い教訓になりそうだ

「もうちよつと刺激が欲しいかな〜」

横島君はどうも守りに徹しているようだけど、それでは横島君のためにもならないし……

「うん、明日は横島君にも攻撃するようにお願いしてみましょ」

横島君本来の奇抜な動きを見て、皆がどう思うのか？そしてそれはそのまま除霊現場にも通用する経験になるはず、私はそう確信し明日は横島君にそうお願いしようとして心に決め

「冥子く明日。横島君が組み手をするから見に来なさいね」

「え、あ、はい判ったわ」

六女の生徒も大事だけど、冥子にももう少し頑張ろうという意志を芽生えさせる為には横島君が一番の刺激になる

「もうちょつと積極的になってくるといいんだけどね」

横島君に頼って欲しい、頼れる人になりたいとおもっている冥子。それが好意によるものと言うのは明らかなのに、余りに奥手すぎる。わが娘ながら情けないわくと私は深く溜息を吐くのだった……

「私が後20年若ければね」

横島君の血を六道に入れるために何でもしたんだけどと思わずに入られなかった

「ひっ！」

「ん？横島どうかした？」

「……い、いや、今何かとんでもない寒気がしたんだけど……」

「うりぼーちゃんにもたれて寝てましたけど、床で身体が冷えたんじゃないですか？」

「そうかもしれないかな。明日はうりぼーの上で昼寝しよつか？」

「うん！そうするー♪」

横島はその類稀なる危機察知能力で自身に迫る危機を感じ取っていたが、それを床の上で昼寝していたからだ勘違いしていたりするのだった……

キーボードを叩き、表示された数値を見て舌打ちし、今入力した数値を全て消去する

「教授。理論値は？」

「……+45、-7」

教授の言葉に眉を顰め、再び計算しなおす。今まで私が英霊召喚をしたのは3回。まず冥界の女主人「エレシユキガル」だが彼女は私の制御を離れ逃走した。ホムンクルスの身体に顕現したからか本来の権限には程遠いが、私達よりも強力だった。そして2回目は教授、人間の英霊だから制御できると考えたが、やはり離反。しかしその知性を失うのは痛く、その精神を2つに分けることで従順になったが、命令しないと活動しないのでは役に立たない。そして3回目は「ジャンヌダルク」離反すると計算し、狂神石と精神操作で属性を反転させたが、横島の行動によって自我を取り戻した……

「まだ計算しているのか？」

「アスモデウスか、当たり前だ」

私の研究室に入ってきたアスモデウスに当たり前だと返事を返す。雑兵は多くても、突破力に長けた味方は少ない。大将であるアスモデウスが先陣を切るのは士気をあげるだけではない、純粹に人員不足なのだ

「ジャンヌダルクやエレシユキガルのように、逆らう手駒を使うのは危険すぎる」

「ああ。だから今度は観点を変えてみようと思う」

英霊を支配下に置き、ホムンクルスの肉体で操る。それは最終的な目的だ……理想とすれば、超人ヘラクレス、英雄王ギルガメッシュ、施しの英雄カルナなどの超級の英霊を支配下におきたいとは思っている。その為の触媒も確保している……だが

「私はこう考える、急ぎすぎているのではないかと」

理論を試したい、実験データが欲しいと焦りすぎていた。英霊と言う星の抑止力を使役する、戦力を確保する。それだけに固執していたのではないかと私は大いに反省している。召喚したはいいが、横島の陣営に行かれては眼も当てられない。それはジャンヌダルクで嫌と言うほどに理解した

「それで？では何をするつもりなんだ？」

「最近合流した人狼に非常に面白い話を聞いた」

元々は日本の生まれの狼男だが、何年か前に海外へ逃げ出し、そしてそこでアメリカの人狼と婚姻したという経歴を持つ珍しい人狼の子孫から聞いたのだが

「日本に魔狼フェンリルを封印している剣があるそうなのだ」

「それはありえないだろう」

もし封印されているなら北欧だ。日本なんて島国に封印されている訳が無いとアスモデウスは即答する

「私もありえないと思っているがまずは情報収集だ。そしてもし偽者だとしても、フェンリルと勘違いされるだけの霊核があればいい」

魔人と同じく制御するのではなく、魔界に放してやればいい、そうすれば勝手に大打撃を与えてくれる

「そして英霊とは程遠い存在を呼び起こせばいい。まあこれは話すつもりは無いがな」

また秘密主義かと肩を竦めるアスモデウス。本当は説明したいのだが、まだ情報が足りないのだ

「待っていてくれ、今度こそ上手くやって見せるよ」

「期待してる」

そう笑って研究室を出て行くアスモデウス。私は既に3度失敗している、今度こそ、今度こそは成功してみせる。その為には入念な趣味レポートだ

「む、また駄目か。次だ、教授」

「……了解」

85回目の計算の失敗、だがこの段階の失敗など何度してもいい、実行するまでに成功に近いデータを取ることが出来ればいいのだから……私と教授は86回目のシュミレートに向けて、また計算を始めるのだった……魔狼の雄叫びが上がる日は近い……



## その4

リポート18 福の神 頑張る その4

お母様から言われて横島君と蛍ちゃんの組み手の稽古の見学に来たんだけど正直横島君と蛍ちゃんが負ける姿なんか想像できなくて、やっぱりそしてその結果も私の予想通りだった

「思い切りはいいけど、それだけじゃ駄目ね」  
「あいた」

頭の上の風船を割られると負けと言うルールで蛍ちゃんと横島君1人ずつに対して、六女の生徒は10人1組。普通に考えれば数の多い六女の生徒の勝ちなんだけどそれはあくまで普通の人間が相手の場合だ。除霊をしていけば、相手の方が数が多いと言うのはザラだ、令子ちゃんの所で助手をしている2人なら乱戦は嫌ってほど経験してる

「隙を狙って言うのは良いけど、霊体ボウガンは生身相手じゃあ、そんなに効果ないわよ」

神通棍でボウガンを叩き落とし、そのまま頭を叩いて紙風船を割る蛍ちゃん。令子ちゃんと同じで正攻法な戦闘スタイルなので六女の生徒には凄く勉強になると思うわく問題は

「ていていてい!!」

「あいた!」

「空中走って!?!あたら!」

「腕が伸びてー!?!」

横島君の方ねく彼は本当に自由にさせるととんでもない戦法を思いつくのよねく

「冥子も見学に来たんだ?」

「うんくお母様がねえく見に来なさいって言うからく」

マルタに見学に来たのよくと言うとマルタは苦笑しながら

「それ騙されてるわよ?見学に来たら横島と組み手させなさいって聞

「いってるわよ?」

「えええ〜」

横島君と蛍ちゃんが頑張っているとところを見に来たのに、横島君が栄光の手やサイキックソーサーを自由に使いこなし、上下左右縦横無尽に攻撃を繰り返す。その自由さと予想外の方向から繰り返される攻撃は除霊での悪霊の攻撃の模範と言えれば判りやすい。真正面から攻撃してくる悪霊なんていないから、横島君の奇抜と言うか、定石とは程遠い動きに何処まで対応出来るかね〜六女の理詰めの考えとは真つ向から異なる横島君の動きにどこまで喰らいついていけるかね〜と思っていると私にも紙風船が渡される

「やらないと駄目〜?」

「頑張れば横島が凄いつて言ってくれると思うけど?」

横島君に凄いつて尊敬してもらえる……私は少し考えてから、持ってきていた重箱をベンチの上に置いて

「頑張るわ〜」

丁度決着がついた所なので私は横島君に声を掛ける

「次はね〜私よ〜」

「え?冥子ちゃんど?」

困惑してる横島君。私も困惑してるので〜それはお互い様よね〜

「えーつとなんで冥子さんと勝負を?」

「お母様が〜」

蛍ちゃんの質問にお母様の命令なの〜と言うとあーつとやって納得してくれたようだ

「じゃあルールは一緒、紙風船を割られたら負け。紙風船以外を攻撃しても良いけど、常識の範囲内で」

マルタの説明に頷きながらも、心の中で横島君と私の相性のことを考えていた。

(なんで勝負しろなんていうの〜)

横島君は動物に好かれるのでショウトラちゃんとか凄く嫌そうにするのよね〜お母様も判らないわけじゃないのに〜でも横島君に良い所を見せたいから〜頑張りますよ〜

「アンチラちゃん〜アジラちゃん〜」

直接攻撃に長けているアンチラちゃんと間接攻撃に秀でているアジラちゃんを召喚する。サンチラちゃんとビカラちゃんではやりすぎてしまうかもしれないので、一番コントロールしやすい二匹を向かわせる

【キューー！】

「つとー！」

アンチラちゃんの耳の攻撃を栄光の手で受け止めて、反撃でデコピンをする

【きゅ!?】

みゅーつと鳴きながら私を見るアンチラちゃん。うんうん、判るわ〜横島君に攻撃されてショックなのよね〜

「うっ、罪悪感が凄い」

横島君も胸を押さえているので、やっぱり今回は早く終らせるべきだと確信した

「アジラちゃん〜お願い〜」

【ウー!!】

アジラちゃんが口を開いて炎を吐き出す、横島君が炎を見てサイキックソーサーを出した瞬間に追加で2体の12神将を召喚する

「あんまり熱くない? 【!】 え!? 俺!?!」

炎の中から横島君に変身したマコラちゃんを見て横島君が停止した瞬間に

「えいー！」

メキラちゃんの瞬間移動で後ろに回りこんで、横島君の頭の上の紙風船を両手で割るのだった……皆がびっくりしてる中、私はピースサインをして

「私の勝ち〜♪」

と笑い、変身を解除したマコラちゃんの頭を撫でてあげるのだった……

シズクがお弁当を用意してくれていたのです。それを机の上に広げ、皆でお昼にしながら冥子ちゃんとの試合を思い出す

「いや、あれ凄い驚きました」

「ふふ〜自分と同じ顔が出てきたらびっくりするでしょ〜？」

うふふと冥子ちゃんが笑う。自分と同じ顔が出てきたらそりや誰だってびっくりすると思う、卵焼きを頬張りながら蛍に視線を向ける「悪霊向けの戦術じゃないですね、対人ですか？」

「うん〜お母様が覚えておけっ〜あ、この卵焼き甘いのね〜」

「あ、俺が好きなんですよ」

甘い卵焼きは俺が好きなのでシズクが良く焼いてくれる。甘いのは好きじゃないですか？とと言うと冥子ちゃんはううんっつと首を振り

「甘い卵焼きは〜私も好きよ〜あ！横島君と蛍ちゃんがいるっつて聞いたから〜お弁当を作ってきたのよ〜2人も食べて食べて〜」

シヨウトラの背中の上の重箱を机の上に広げる冥子ちゃん

「きや〜おいなりさんじゃない！あんた気が効いてるわ！」

タマモがすぐに狐モードから人間モードになって、お稲荷さんを美味しそうに頬張る

「ん〜この甘しよっぱい感じがいいわ。横島、これめちやくちや美味しいわよ」

お稲荷さんが好きなタマモが言うのなら美味しいのは間違いないだろうけど

「ちよつと待って、はいあーん」

「みーむう」

「ぴぐうー」

あーんっつと口をあけるチビとうりぼーの口に林檎を入れてやると嬉しそうに鳴く。その姿を見ていると

「あーん」

……アリスちゃんも口を開けていたので卵焼きを入れてあげると嬉しそうに笑う

「美味しい！私はパンとかの方が好きだけど、これも美味しいよ！」

そりやアリスちゃんはどこからどう見ても外人さんだから、洋食の

方が口に合うよなと思いつながらタマモが絶賛してるお稲荷さんを手  
に取る

「あ、本当だ。美味しい」

「本当？嬉しいわ〜」

にここにご冥子ちゃんが笑う。寿司飯はやや酸味が強く、甘く煮ら  
れているお稲荷さんと一緒だと実に美味しい

「美味しいですね、冥子さんは料理お上手ですね」

蛍の言葉に冥子ちゃんはうんつと嬉しそうに笑う

「お花とか〜琴とか〜裁縫とか〜お掃除なら私は誰にも負けないと思  
うわ〜」

……多分冥子ちゃんにGSと言う職業はあんまり向いてないのか  
もしれないなあと思いつながら、唐揚げを食べる。やや塩味の効いてい  
るこれは

「これおキヌちゃんだ」

「わ！判ったんですか!?!」

「うん、判る判る、この煮つ転がしは蛍だろ」

「う、うん、そうだけど、本当に判るの?」

信じられないと言う感じの2人だけど、シズクもおキヌちゃんも、  
蛍も味付けの癖とかあるから判るんだよな

「……あ、これはアリスちゃんだな」

「わー！お兄ちゃん凄いい！それアリスが作ったんだよ！」

……1個だけめっちゃでかいおにぎりだから、これアリスちゃんつ  
てすぐ判った。頑張つて作つてくれたと思うのでそれを齧りながら、  
唐揚げを頬張りながら、話を元に戻す

「やっぱ対人型の技術は覚えなないといけないんですか?」

「うん〜そうらしいわ〜私はそうでも無いけど〜霊能科には稀有な固  
有技術を継いでる子もいるから〜悪霊よりも人間に気をつけないと  
いけないのよね〜」

「結構聞く話ですよ。霊能って遺伝しやすいらしいですから」

「横島さんも気をつけるほうがいいですよ?」

「はは、俺男だぜ?なんで気をつけるんだ?」

女の子が気をつけるのは判るけど、男の俺が何を気をつけるんだ？  
と言うと、黙り込んでいた心眼が

【横島の血を入れようと、薬を盛ったりする相手がいるかもって事だ】  
はははは、何を馬鹿なと思ったのが、深刻な顔をしてる蛍達を見て  
「えっ？マジっ？」

「「大マジ」」

嘘ーと言いたくなるが、その真剣な顔を見ればそれが本当の話だと  
判り、六女が全寮制なのってそういうのから守る為だったりするんだ  
と理解し、霊能者って悪霊とかを倒すだけじゃなくて、もつと大変な  
こともあるのだとしみじみ思うのだった……

体験入学と言うか、今後GS業界を引つ張るかもしれない若手GS  
が見学に来ている。と思えば良い、聞きたい事があれば何でも聞きに  
行って良いと言う担任の言葉が合ってから横島と芦の周りは話を  
聞きたい生徒で埋め尽くされた。あたしはそんな2人を見ながら  
(横島は変わってるな)

幽霊の巫女さんが背中に憑いているし、グレムリンとか猪とか狐を  
抱き抱えているし、明らかに外人さんの少女にお兄ちゃんって言われ  
てるし。しかも今日は

【のつぶのぶー♪】

なんかノブノブないてる変な生物も一緒だし。あたしが横島を見  
ていて思ったのは変わった人だった……芦は弓とか似ている真面目  
な人って感じなんだが、横島は何を考えているのか今一良く判らない  
「チビ、うりぼー」

ねこじやらしをグレムリンと猪に向かって振る辺り、本当に変わっ  
ていると思うのだが、それはあたしも似たような者だ。悪霊に襲われ  
ている時にあたしは必死で応戦したのだが、どうやらその時の経験で  
霊力に覚醒したらしく、後日六道の教員にスカウトされ六女に転入し  
たのだが……ぶつちやけ馴染めない。完全なお嬢様学校に、不良の生  
徒のあたし……正直馴染める訳も無い。

「あのさ、横島GSちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

だから横島GSに話を聞こうと思ったのだ。話を聞けば彼は普通の中学を卒業し、更に言えば今も普通の高校に通いながらGSとして活動していると聞いた。芦GSに話を聞くよりも、よっぽど参考になると思ったのだ

「俺に？別に良いけど……俺馬鹿だぜ？」

「お兄ちゃんは馬鹿じゃないよ？」

隣に座っている少女。アリスちゃんと横島GS達は呼んでいた、青いエプロンドレス姿に青い目金髪と明らかに日本人ではない。一体どういう関係なのだろうか

「いや？俺結構馬鹿だぞ？赤点ギリギリだし」

【でもそれは除霊を手伝ってるからじゃないですか？えーつと一文字さんでしたよね？どうぞ、座ってください】

巫女の幽霊さんにあたしの名前を呼ばれたことにも驚いたが、座ってくださいと言われたので空いていた椅子に腰掛ける

「みむ」

「ぶぎゅー」

【のーぶー】

変な生物が猫じやらしを振って、それを追いかけているグレムリンと猪。めっちゃ楽しそうだ……なんと言うか横島の周りだけ、雰囲気が違うように見える

「……」

(怖ッ!?メツチャ見てる!?)

横島の膝の上で丸くなっていた狐がめっちゃあたしを見ている。牙むき出したからめっちゃ怖い

「んー？タマモー、牙出してどうしたー？」

「グルルル」

なんかご機嫌斜めだな？どした？と能天気には笑う横島。だがタマモと呼ばれた狐はまだあたしを凄いい目で見ている……本当怖い

「GSの事を聞きたいなら虫だけど……俺に何か答えられるのがあると良いんだけど……」

「あたしはさ、一般の学校から転入したから、GSの事ってあんまりよく判らないんだよ」

そう切り出すと横島はそれは俺じゃない駄目だなと笑う。同じような経験をしている人じゃないと判らない話と言うのはある、多分弓とか芦は話があうと思うけど、経験も知識も足りないあたしにはその話を理解出来ない。実際授業にもついていけない部分もある

「どうやって霊能力があるって判ったの?」

「俺?俺は蛭にスカウトされたかな」

「スカウトって言うか、横島がナンパして私が受け入れたって感じよ」  
そんな感じ、いや……そんな感じって言われても判らんし……と言うかナンパかよ。周りの女子生徒がじゃあ付き合ってるんですかと盛り上がりながら尋ねる

「いや、俺が全然駄目すぎてなあ……」

……あ、これ横島の方が尻込みしてるやつだ。芦が凄く深い溜息を吐いているから良く判る……とは言え、あたしは恋話とかをしたいわけではないので強引に話を元に戻す

「普通の学校に通ってて、GSやって……大変とは思わない……んですか?」

弓の眼力が凄いので途中で敬語にすると、横島は喋りやすいほうで良いよと笑いながら

「俺は大変とか思わないかな。毎日楽しくないか?」

楽しくないか?と逆に問いかけられ、困惑していると横島はグレムリンを抱っこしてそう尋ねてくる。意味が判らず、首を傾げると横島はグレムリンの顎の下を撫でながら

「判らない事が判るようになる、知らないことを知れる。それって面白いことだと思うけどな」

「みむう♪」

横島はグレムリンを撫でながらのほほんと笑う。横島の言葉は考えても無かったことだから、正直困惑した

「転入とか、入学した人ってさ、自分だけ違うとか、周りの人は凄いかと思うんだよな。俺も同じだし、と言うか美神さんと蛭が凄す



ぎるし……」

その言葉にハツとした。横島はあたしよりも遥かに凄い人間を見ていて、そしてそれでもここまでやってきたんだと

「俺は馬鹿だけど、馬鹿だから色々覚えると思うんだよな。おキヌちゃんはどう思う?。」

「わ、私ですか?そ、そうですね……私は幽霊だから、今見る物、あるものは皆新鮮で面白いですよ。だって私幽霊して300年ですし」

300年前の幽霊!?!そのとんでもない言葉に思わず絶句するが、確かに300年前の幽霊ならば今あるものはどれもきつと新鮮だろうし、見たこと無いものばかりで面白いと思うだろう

「勉強して良い成績をとるのはまあ、それも1つの楽しみ方だと思う。でもそれだけだと疲れるだろうし、面白くないだろ?もつと肩の力を抜いてき、判らない事は判らない、だから知ってる人に助けて貰うとかして、一步踏み出してみればいいんだよ」

俺なんてなんも判らんから蛍とか、霊能に詳しい人に頼りっぱなしだぜ?と横島は笑う

「前に踏み出してみれば……うん。きつと楽しい事も、面白いこともあると思うぜ?。」

辛い事もあると思うけど、うん、きつとそれよりももつと楽しい事、嬉しい事、面白い事が沢山あると思う。そう言った時の横島の顔は私と同じ歳なのに、やけに大人びて見えた。1年生や中等部の子がお兄ちゃんっぽいって言っていた理由がこれかもと思った

「後はあれだな。迷った時は自分の心に従えって事だな、最後に大事なのは自分が何をしたいか?だと思っぜ」

そう締めくくった横島。経験談も混じったその言葉は進路相談や担任に言われるよりも、心に響いた。あたしは横島に相談して良かったと心の底からそう思うのだった……後日カウンセラーの殺生院先生のその話をしたら

「横島さんのほほんとしていますが、かなり辛い事も大変な事も経験してますからね。ああいう人がカウンセラーとかに向いているんですよ」

と穏やかに笑い、あたしにおはぎと緑茶を差し出しながら

「そして私も出来る限りお力になりますわ。一文字さん、貴女はまず誰かに頼る事、そして助け合う事を覚えると良いですよ」

自分が劣っているなどと思わないでね？と笑いかけられ、あたしは素直にはいつと返事を返すのだった……

横島さんと蛍さんが高等部にいるのは知っていたが、人だかりがあつて中々話を聞けなかった。今日も諦めて引き返そうかと思つたとき

「ぶぎゅ」

「みむう」

「あ、うりぼーにチビ。私の事覚えてる？」

前に一緒に川原でご飯食べたよね？と問いかけると、うりぼーは尻尾を振りながらぴぎーつと鳴き、背中の上のチビもみーむーつと鳴く、どうやら私の事は覚えていてくれたようだ

「横島さんと蛍さんに会いたいんだけど、一緒に行つてくれる？」

ぶぎーつと鳴いたうりぼーはそのまま少しだけ大きくなり、人だかりを突っ切つて移動する。私はその後を早足で歩いてうりぼーの後を追いかけるのだった

「あ、アンちゃん。久しぶりね」

「ど、どうも」

私に気付いた蛍さんが小さく手を振ってくれるので私も振り返す、横島さんはうりぼーの前に座り込んで、犬を撫でるみたいになしやわしやと撫で回していた

「どうしたの？」

「はい。実は、前に見せた除霊銃の試作品が出来たので見てもらおうと思つて」

前にピートお兄様と訓練した時はヘルシング家の試作型だった。

これは私が日本で更に改良した物だ

「へー。思つたより軽くて良いじゃない、素材は、んー見た所、聖句を

刻んだ強化プラスチックとか?」

「はい!それと樹齢300年とかの神社の御神木の枝を頼んでわけてもらって使ってます」

霊力の伝達が良い素材などを選んで、加工して組み立てたんですと笑う。オートマチックにしてあるのでスライドさせながら

「弾は?」

「マルタ先生と唐巢神父に聖句でエンチャントして貰いました。あ、でもそのままでも使えます」

私の話と蛍さんが理解出来ないのか、首を傾げている生徒を尻目に蛍さんはスライドを戻し

「霊波弾の感覚?」

「それで大丈夫です」

片手で銃を持ち、照準を合わせる蛍さん。引き金を引くと鋭い音と共に霊力が銃弾となって飛び出す、それは開いていた窓から飛び去ったが、中々の速度だった

「反動もまずまずだけど、これ普通の人じゃ使えないんじゃない?」

さすがと言うべきなのだろう、たった1回の試射でこの銃の欠点に気付いた、聖句で強化した外枠、中に組み込んである御神木の枝。それらは霊力を爆発的に増大させるが、その反面使用するのに相当な霊力が必要とする

「うっ。実はそうなんです……ちなみに私じゃ無理です」

最低でもBランク相当のGSじゃないと使用できないのだ、駄目じゃないと蛍さんが笑う。試作だからこれから機能などを厳選していく予定だが、使ったデータが無いと改良品の製作は難しいだろう。だから私はここにきたのだ

「あのーもし良かったら蛍さんか横島さん使いませんか?私じゃ使えないんで、使った感想とか聞かせてくれれば良いので」

実際に悪霊に使った場合などのデータが欲しいんですよと言うと、蛍さんは良いわよ?と返事を返した後

「はい、横島」

「なんで俺!?!」

それを横島さんに差し出した。横島さんが動揺してなんで俺!?!と言った時額のバンダナから眼が浮かぶ。

【良いではないか、モデルガンを買うよりもよっぽど信用出来る。それにお前は遠距離が弱いから渡りに船じゃないか】

「心眼よ、でもよお?。」

【でもではない、有効な武器を貰えた事を喜ぶべきだ。アン・ヘルシング、感謝する】

バンダナからの感謝の言葉に、あ、はいと思わず間抜けな返事をしました。でもとりあえず、実戦データを取ってくれるなら、蛍さんでも横島さんでも良いかと呟く

「えっとじゃあ、これ聖句弾です。2カートリッジ分あるんで、無くなったら唐巢神父の教会に来てください。ピートお兄様に預けておくので」

「う、うん……ありがとう」

複雑そうな顔をして受け取る横島さん。用件が終わったから帰ろうと思っただけ……

「アンちゃん、神通棍の改造に興味とかない?。」

「ありますー!どうするんですか!?!」

蛍さんからの余りに魅力的な言葉に振り返り、どう改造するのか?と言う話し合いを始めた。勿論その日のうちに私と蛍さんにマッドサイエンティストと言うありがたいたくない渾名が付いたのは言うまでも無いだろう……

横島GSとマルタ先生の組み手と今朝の一文字さんに対する真摯な言葉で私の中で横島GSの評価は大きく変わった。GSとして尊敬し、そして教えを請うのに相応しい人物……だと思おうのですが

「やっ」

「ぬおっ!?!」

ははは、驚いたねと笑う少女。高等部に飛び級で編入された「夜光院枢」GSに驚かされ、アリスちゃんと言う少女にお兄ちゃんお兄

ちやんと慕われ（中等部などの生徒にもお兄ちゃん系）と言われ、巫女の幽霊であるおキヌさんに、芦GS。それに初日にいた小学生くらいの少女と中学生くらいの少女の事もあり、容易に信用して良いのか？と言う考えがどうしても頭を過ぎる……のだが

「よーしよし、うりぼー、伏せ」

お互いに信頼関係を築く為のレクリエーションの時間。うりぼーやチビ、あと不思議な生物（チビノブ）を含め、戯れているのだが……ちよつとそこに混じるのは恥ずかしいと思い、離れてみているのだが……

「びぎー」

「ジャンプ！」

「びぎぎー!!」

「くるんくるん」

「びぎぎぎー♪」

その姿を見ていると邪気とか邪な気持ちを抱いているとか、そういう印象はまるで受けない。子供じみたと言うか……なんと言うか……どう言えば良いのか判らないが、身の危険を感じるとかそういうのが一切無いのだ

「横島の事がよく判らない？弓さん」

背後から芦GSに声を掛けられ、驚きながら振り返る。すると芦さんは困ったような感じで腕を組んで笑っていた

「はい、私には横島GSが良く判りません。悪い人ではないと思うんですが」

使い魔学科だけではない、霊能科や、霊具科などにも熱心に顔を出し、勉強している。最初は男なんてって言ってた生徒も普通に受け入れている

「横島って悪い事をするのに向いてないのよ。基本的に」

後女好きだけど、いざってなるとヘタレちやうのよねと深く深く溜息を吐く芦GS。その姿を見れば、横島GSに思いを寄せているのが良く判るし、横島GSも芦GSに思いを寄せているのが判るのだが、どうしてこれで付き合っていないのか？それが不思議で仕方ない

「ぎゅー♪おんぶしてー♪」

「はいはい」

アリスちゃんをおんぶしてあげると、アリスちゃんがききやきやっと楽しそうに笑う。見ているととても穏やかな気分になる光景だが、芦GSが隣にいるのを見るとなんと複雑な気分になる

【横島さんはロリコンじゃないから大丈夫だと思っただけですけれどね】

「お、おキヌさん!？」

突然私の隣の壁から姿を見せたおキヌさんに驚いて身じろぐ。横島GS達といて幽霊でも良い人が居るとこのことを知ったが、それでもかなりビツクリした

【横島はぼいんぼいんのねーちゃんが好きやと思っただけだよ】

「ふ、福の神!？」

今度は小鳩さんの使い魔の福の神が窓から姿を見せて、とんでもない事を口にする

「また出たわね、そんなに小鳩さんと横島をくっつけたいの?」

【はははは、当たり前やろ? 憑いてる家を幸福にするのがワイや、小鳩が横島を好きならそれが幸福になるってことやろ?】

【喧嘩売っているんですね? 良いですよ、言い値で買ってあげますよ】私を中心にして火花を散らす3人に私は心の中で誰か助けてと叫びたかった。と言うか、横島GSが気付いていないだけで、横島GS

の周りの人間関係めっちゃドロドロしてるじゃない!

(も、もしかして三角関係どころじゃない?)

私が知らないだけでもっと大勢の人が横島GSを好きで、それでお互いにお互いを牽制しあっている? 私はこの短いやり取りでその可能性を嫌ってほど理解し、そして少し興奮した。漫画や雑誌で見る関係がこんな近くにあるなんて……だけど出来れば私を巻き込まないで欲しかったと思う

【弓さんはどうですか? 私と横島さんは釣り合っていると思いますか?】

止めて! 私を巻き込まないで、こんな事なら、恥ずかしいとか思わないで私もあつちに混ざれば良いと思った

「私と横島はどう見える?」

(お願いします、誰か助けてツ!!!)

どう答えたって軋轢が生まれるような回答はしたくない、誰か助けてと心の中で叫んだ時。ボールが転がってくる

「おーい、弓ー、ボールとってくれー」

一文字さんが手を振っているのを見て、これ幸いと私はボールを拾って、重苦しい空気の3人の間から逃げ出した

「大丈夫だったか?なんか凄い雰囲気だったからボールを転がしたけど……」

「一文字さん……ありがとうございます。とても助かりました……」

良いってと笑う一文字さん。だけど本当に助かった……これがきつと助け合うという事……私は助け合うということの大切さを今、身を持って知るのだった……

「聞こうと思ってたけど、貴方は記憶があるのね?」

「そやでー、横島蛍。いい加減、親離れしたらどうや?」

「その言葉、宣戦布告と見るわよ」

【そーっ……】

【逃がすかッ!】

弓がいなくなった事で逆行記憶持ちの3人の激しい口論が行われる中。横島とマスコット軍団は……

「よーしチビノブ、行くぞー」

【のっぶー】

ペットボトルをバット変わりにし、野球の様な遊びをしていたので、そのダークマターも真っ青な暗黒空間に気付くことは無いのだが……

(…なんで気付かないだろう?)

周りの生徒は皆気付いているのに、なんで横島はあの暗黒空間に気付かないのだろう?と首を傾げる六女の生徒達の姿があるのだが

【のーぶーー】

【ぴぎゅー】

「チビノブ上手ー」

「タマモ、取れー!!!」

野球っばい遊びに興じる横島とアリスがその視線に気付く事は無いのだった……

リポート18 福の神 頑張る その5へ続く



## その5

レポート18 福の神 頑張る その5

横島君と蛭ちゃんとの体験入学をしている1週間。私は除霊の依頼を受けるのを止め、代わりに今まで除霊した現場の再除霊や、地鎮祭に参加することを主な仕事にしていた。その理由は助手がいらないからという理由ではない、横島君を襲撃した人形使いの情報を集めるためだった

「判らないことが、判ったって何の冗談？」

私の言葉に西条さんは深い溜息をはきながら

「すまないね。僕も教授もネットワークをフルに使って情報を集めたんだけど、何も判らなかつたんだ」

「いやいや、警察のネットワークまで侵入してみたけど、あははは！神代君が見たという男の痕跡は何処にも無かつたよ」

琉璃が見たと言う長身で痩せぎす、無精髭姿の猫背の男。似顔絵も作り、表と裏両方から調べたのに痕跡なし

「人形も指紋から全部調べてみたんだけど、指紋すらない」

「手袋とかそういう次元じゃないね。多分人形使いとやらは指紋も全部削ってる」

指紋すらも削り、存在しないことになっている男。恐らく戸籍すら持ち合わせていない、真正正銘存在しない男。それが人形使いの男

「陰陽寮じゃないかもしれない？」

陰陽寮と私は思っていたけど、もしかしたら違うのかもしれない。勿論陰陽寮が白ってわけでは無いが、限りなく黒に近いグレーだろう

「特定の相手の仕事だけを請ける裏の人間かもしれない」

「そういう相手だと、六道や警察、公安、オカルトGメンの情報にもないのも納得だ」

特定の顧客の仕事しか請けないタイプの霊能者と言うのは少なからずいる。暗殺や呪いというタイプの霊能者がそれだ、そうなることや  
はり情報を集めるのはかなり難しいかもしれない

「態々すいませんでした、西条さん。教授」

「いや、気にする事は無いよ。僕も気になつていたからね」

正直求めていた人形使いの情報は無かったが、それ以外の私が離れていた間に動いた組織、組合員などが事細かく調べられていた

「まあ私からすれば、自分で動くは愚作だヨ。蜘蛛の様に巣を……ん？んん……今何か思い出しそうだったような……」

記憶喪失だと言う教授。だがその知性と頭の回転は恐ろしいほどに早い……だが決して信用してはいけない、それは私も西条さんも感じていた。彼は決して正義側の英霊ではない、反英霊。悪に属する英霊のはず

「失礼する」

突如聞こえてきた第三者の声に振り返ると、そこにはブラドール伯爵が佇んでいた

「ブラドール伯爵。どうしたの？」

「いや、少し気になる事があってな。彼か？記憶喪失の英霊とは？」

ブラドールは私の問いかけに答えず、教授を見つめる。その目は鋭く、剣呑な光を放っていた

「な、何かナ？私と君は初見だと思うが？」

その視線に怯えながらも笑みを絶やさないう教授にブラドール伯爵は

「鹿撃ち帽は好きか？」

その表情からは信じられないほど普通の事を尋ねた。私も西条さんもそして教授自身も不思議そうにしている

「そうか、では滝はどうだ？落ちたら戻って来れないほどの滝だ」

「いや、そんなのは好きじゃないが……一体何なのかな？」

教授の言う事は最もだ。ブラドール伯爵が何を尋ねたいのか、理解出来ない。ブラドール伯爵は判らないなら良いとぶつきらぼうに言い放ち

「邪魔したな」

現れた時と同じように突然と消えた。一体何がしたかったのだらうか

「ん、ん。それよりも時間が無いから簡潔に言う。現在陰陽寮につい

ての調査は無理だ、あそこは一応まだ国家のお膝元だからね」

既に術師がいなくても今までの経歴がある。だから陰陽寮は日本直属、いかにオカルトGメンやGS協会、そし冥華おば様ならと思うが……それでも核心に踏み込む事は出来ないだろう

「現在当主は躑躅院の人間になっている」

「……ごめん、聞いたこと無いわ」

陰陽寮と言えば土門などが有名だけど……躑躅院なんて聞いた事が無いと言うと西条さんは当然だねと笑い

「今まで隠し通してきた平安時代の陰陽術を持ち出し、数ヶ月前にクーデター同然で当主の地位に着いたらしい。と言う事で詳しい情報は一切不明、こっちはやつとトップの頭が変わっているのを知った段階だよ。実力も何もかも判らない」

正体不明の敵って事……それはかなり厳しいかもしれない。

「もう少し詳しい情報を調べたら、また伝えにくるけど……人形使い側については不明。それ以外で動いた組織としたら、GS協会を辞職した中堅を再度雇いなおした、GS崩れが多い。後そのタイミングで国外から何人か入国して来てるみたいだ。判っているのはオカルトGメンとは関係ないって事だけ」

慌てて調べたからこれ以上は少し難しい。もう少し腰を据えて調べた結果を伝えるに来るけど、暫くは警戒を強めた方が良くと言う西条さんのアドバイスに判ったと返事を返すと西条さんと教授を見送り、2人が調べてくれた資料に目を通すのだが、ブラドール伯爵の言葉が気になってしょうがない。あの人はそんな無駄な事を言いに来る人ではない、何か教授の正体のヒントを出してくれたのではなからうか？

「鹿撃ち帽……滝……か」

それが教授の正体を掴むヒントなのだろうか。生憎私は海外の英雄にはそう詳しいわけではない、私はこの情報をくえすに伝える為に受話器を手にするのだった……

突然訪ねて来た冥華さん。話の内容は大体判っているつもりだ

……横島君と螢さんの体験入学。それ自体にたいした意味は無い、大事なのは六道の元に居ると言う事実と、六道の傘下にいる裏切り者の炙りだし……私は色々考えてその結論を出した

「私はあの2人が六道の下に居ると言う事を証明する為に、体験入学させたと読んでいますが……どうでしょうか？」

私の問いかけに冥華さんは30点くと笑いながら返事を返した

「まだまだ甘いわよそんなのは誰でも判る事よ？」

30点では落第点も良い所だ……だが他に何があるのだろうか

「まずわね横島君を保護する為に六道を共学にするつてのがあるわ普通的高校じゃ、進入し放題でしょ？それにピート君とかもいるし……どうせ護るなら一箇所に纏まってくれたほうがおばさんとしては凄く楽なのよね」

平然と言うが、それは今までの六女の歴史を大きく変える内容だろう。横島君を護るためだけに、そこまでするか？と思った

「後は六女には色んな派閥の次の当主とかも多くいるから、横島君と仲良くなつてもらおうと思つてくほら、彼人たらしだから」

それは同意する。横島君はあつという間に仲良くなつてしまう。だから次の名家と呼ばれる人と仲良くなつてくれれば、横島君の身を護ることに繋がるだろう

「後はハーレムで喜ぶかなあつて」

「はーん」

若い男の子だからハーレムつて喜ぶかなあつて思つただけであんまり効果なかつたわねくと笑う。こ、この人……自分の学園の生徒全員を使つてハーニートラップを……

「琉璃ちゃんはどうか？横島君つて可愛いでしょう？」

「……ノーコメントで」

嫌いではないし、嫌いか好きか？つて言われれば好きと言えるけど、そういうのは考えてない。ただ可愛いか、可愛くないかと言われると……彼を知れば知るほど、可愛いと思うことはあるかもしれないけど

「まあ共学は無理だったけど」

無理だったんだ……物凄く残念そうな冥華さんには悪いけど、失敗してくれて良かったと思う

「でも今回ののは今回ので成功よく陰陽寮の息の掛かっている生徒を炙りだせたし」

「……ちなみに何人くらいですか？」

5人くらいねくと冥華さんは笑う。陰陽寮、日本国内の霊的組織だが、完全に対立関係にあり。お互いに干渉すること無い組織同士だ  
「その子達は？」

「んー実は全然話を聞いて無いみたいなのよねー横島君をどう思うか？って言うのを教えてくれってそれだけ」

それだけ？これだけ大規模な事をしておいて、それだけとは正直信じられない

「だから多分人間を囿にして人形で情報収集してるんじゃないかしら？」

「そうだったら厄介ですね」

戦闘タイプの人形のリーチは短い、諜報タイプの人形はとにかく射程が長いと聞く。文献などが頼りだからどこまで信憑性があるかわからないが、梅さんに聞いた所かなりの射程と、隠密動作が出来るらしいので警戒するに越したことは無いだろう。囿と組み合わせ使われると情報はどこでも抜き出し放題だ

「もし可能なら私が面会を頼んでみるわ」

敵なのか、味方なのか？それを知りたいからと笑った冥華さんは、どっこいしょつと言いながら立ち上がり

「とりあえず今回ののは良く判らないって結果ねーまたなにか判つたらしく伝えにくるわ」

そう笑って会長室を出て行く冥華さんだが、立ち上がる瞬間。ソファアの間何かを入れていた……多分今回訪ねて来たのも、六女の話も全てブラフ。本命はソファアに挟んだ何かを私に渡す事だろう  
……

(こつちも監視されている?)

態々尋ねて来て、世間話をして、そして手渡ししないで隠すように

席を立った。それは直接渡すのが危険と言う事ではないだろうか？だから私はそれに気付かない振りをしてソファから立ち上がり、執務席へ戻るとエントランスから電話があり

「もしもし？どうしたの？」

『言峰綺礼氏が尋ねてきています』

……言峰神父が？正直あんまり話したい人物ではないけど、通してくれる？と返事を返す。それから3分ほどで言峰神父は訪ねて来た

「突然申し訳ない。神代会長」

「いえ、大丈夫ですよ。それでどうしたんですか？」

言峰神父は基本的に海外で活動している。そんな人物が訪ねて来たと言うことは何かトラブルか？と思って当然だろう

「ふむ。実は昨日、神のお告げがあった」

「はい？」

予想外の言葉に思わず変な返事を返してしまった……え？神のお告げ？

「私は破門されていたと思ったのだが、いや、主の懐はよほど広いらしい」

逆光で顔を見ることは出来なかったが、間違いなく神だったと確信したと言峰神父は笑いだ

「日本へ向かえと、私はそれに従ってここに来たのだ。暫くの間日本に滞在したいのだが、構わないか？」

駄目って言っても居るだろうし、神のお告げと言うのも気になる。もしかすると本当に何かあるのかもしれない

「判りました。GS協会の寮が空いているので、好きな所をどうぞ」  
ありがとうと笑った。言峰神父は執務室をそのまま出ようとして、

思い出したように

「英霊ナイチンゲールも共に入国している」

クリミアの天使！きつと優しい人物……と思ったのだが、言峰神父の次の言葉に絶句した

「殺してでも治療すると言って人の話を聞かない人物だ。気を付けたほうが良い、かなりの危険人物だ」

危険人物に危険人物と言われる英霊……私は出来れば会いたくないと思いつながら、忠告ありがとうございますと頭を下げるのがやつとだった……

お昼からは座学なので私も横島も普通の授業を受けるつもりは無いので休憩していた時。キアラさんが入ってきた

「まあ、横島さんはお昼寝中ですか？」

「ええ。どうもアリスちゃんを寝かしつけている間に自分も寝ちゃったみたいで」

うりぼーにもたれかかり、アリスちゃんと並んでいる横島を見て苦笑する。寝かしつけていて自分も昼寝をしてしまう姿に可愛いと思ってしまう

「そうですか、案外疲れておられるのかもしれないですね」

そう笑い机の上に重箱を置くキアラさんはにこにこ笑いながら

「おはぎなどを作ってまいりましたのでおやつにどうぞ」

ご丁寧にもうもと頭を下げる。六女にいる間キアラさんは良くおはぎを持ってきてくれた、カウンセラーの技術として甘いものを提供し、心を穏やかにさせるといふものらしい

「キアラさんはなんでカウンセラーになろうと思ったんですか？」

私や横島の話聞いてくれるが、キアラさんは全然話をしてくれないので、どうしてですか？と問いかける。するとキアラさんは驚いた顔をする。何をそんなに驚くかな？

「くひひ、こういうタイプは自分が質問されるなんて考えた事がないんだよ」

「……昼寝してたんじゃないの？」

横島の近くで寝転んでいた筈の柩が笑いながら言うので、寝てたんじゃないの？と尋ねると柩はくひひと笑いながら

「アリスに捕まっただけだよ。どうもあの子は同年代に対して押しが強い」

困った物だと笑うけど、アリスちゃんのことを考えると無理も無いのかもしれない。ネビロスさんとベリアルさんとハーピーさんの

3人暮らし、必然的に大人と暮らすことになるので同年代の友達が欲しいのかもしれない

「ふふふ。なんだかんだいっても面倒見が良いのですね？」

「……ボクも似てると言えば似てるしね」

恥ずかしいのかくひびと笑いながら顔を逸らす。その姿を見てキアラさんは笑いながら

「カウンセラーを目指した理由ですけども、こうして話す事で誰かを助ける事が出来る」と

言う事を知ったからですわ」

にこにこ笑いながらキアラさんはさらりととんでもない事を口にした

「私の実家は真言立川詠天流の寺でして」

……その言葉に私も柩も目を見開く、霊能に関わる人間ならばその流派が何を意味するのか知っている。

「とは言え私が物心つく頃には廃れ、性交を用いた儀式も本尊もない、ただのそうあるだけの組織でした。変な規律を作り病気の私を自然の中に入れて治るとか訳の判らない事を言っておりましたね」

ふふと笑うキアラさんに思わず私は尋ねてしまった

「そんなに重い病気だったんですか？」

「まさか！点滴をして栄養を取れば治るほどの簡単な病でしたわ」

「……なるほど、変な戒律で病気が悪化したのか」

柩の言葉にキアラさんはその通りですと笑い

「このまま死ぬのかと思いはじめたとき、信者の1人が私を連れ出して病院に連れて行ってくれたのです。そして私の病気は治りました」

その後私の実家はオカルトGメン、陰陽寮、GS協会によって滅ぼされ、私は自由になりましたと言った

「確か何年か前にあった、山の中の違法GS組織の一斉検挙ってまさか!？」

犬猿の仲である組織が3つ協力したと言う事件だったので覚えていた。まさかそれが立川流の寺なんて夢にも思わなかった

「私はその人に助けられ、六道の保護下に入る事が出来ました。そし



てその人は言いました、人は獣と違い、言葉を話すことが出来る。言葉があれば分かり合える事があると、言葉を交わすことが出来るのが人間だと」

話し、言葉を交わすことの大切さを知り。そして私は言葉で人を癒す事の出来るカウンセラーを志したのです

「結構ハードな人生歩んでますね？」

「うふふ、私もそう思いますけど、今は楽しく生きてますわ」

柔らかく何もかも包み込むような雰囲気があるけど、それは自身の苦しい体験から齎された優しさなのだと言った

「ですから話し合いますししょう？言葉は相手を傷つける剣にもなりますが、相手を癒す薬にもなるのですから」

キアラさんって凄いなあつと私は思う。

「じゃああれだ。ロリコンじゃないって言う2歳年上をどうすればいいかな？」

「ちよつとおお!？」

「ふふふ、これでは女子会という奴になってしまいますね」

横島とアリスちゃん起きるまでの間。私が柩とキアラさんに振り回されたの言うまでも無いだろう

「なんか疲れてない？」

「……気のせいよ」

あの2人思った以上に相性が良くて厄介だった。横島との関係とかを根掘り葉掘り聞かれ、精神的に疲れて果ててしまいながら、私は横島にそう返事を返すのだった……

1週間あれば横島さんとお話できると思っていたのに、私が思う以上に横島さんには人氣が合った。私があつた時はスーツ姿で真面目と言う感じだったんだけど、Gジャン、Gパン姿の今の横島さんは気さくで優しい人物だった。使い魔学科の生徒にも、私と同じ1学年の生徒にも凄い人氣だった……だけどそれはアイドルとか、そういう人に対する人氣に近かったというのもいやと言うほど思い知らされた

(蛍さんとか凄く綺麗)

ずっと横島さんと一緒にいた蛍さん。まだお付き合いしていないという噂を聞いたが、それでもその中睦まじさを見ると彼氏、彼女になるのは時間の問題に見えた

「大丈夫やー、頑張れ！小鳩」

福ちゃんがそうやって励ましてくれるけど、それでもやっぱり自分が劣っているような気がしてしょうがない

(横島さん素敵な人だもんね)

少し話す事が出来たが、気さくで優しくて、思いやりのある人だった。それに横島さんの側にいるチビちゃんやうりぼーちゃんもとても幸せそうで……タマモちゃんは私に対して凄く唸ってて怖かったけど……これだけ動物に好かれる人が悪い人とは思えなかった

「お兄ちゃん、帰ったら散歩に行こうね」

「じゃあ今日はちよつと遠くの公園に行こうか？」

アリスちゃんと言う少女と優しく話している姿を見ると、きっと子供が出来ても優しい父親でいるだろうと言うのも良く判った……使い魔学科なら結構会えるよ？と皆が言うけど、きっとそれは外から来てくれた講師と生徒という関係が近いだろう……

(はぁ……)

もつと踏み込めばよかった。もつと近づいて話をすれば良かったと後悔ばかりが募っていく

「どうかした？」

「ふえっ!」

近くで横島さんの声がして顔を上げると、心配そうにこつちを覗き込んでいる横島さんが居て変な声が出てしまった

「え、えつと？」

「いや、福の神が元気ないからつて言うから……」

にっこ笑った福ちゃんが溶ける様に消えていく。折角連れて来てくれたけど、アリスちゃんやおキヌさんが居るから告白なんて出来るわけも無いし、そもそもそんな風に仲良くなっているわけではないので、なんと話をすればいいのか判らない

「あ、あの！横島さん」

自分で思っていたよりも大きな声で呼んでしまい。顔がカツと熱くなるのが判る、だけど横島さんは嫌そうな顔をせずはどうしたの？と尋ねてくる。なんと言えば良いか、ぐるぐると頭の中が空回りするのを感じながら

「ま、また色々教えてください。私霊能とか全然判らないから」

結局無難に霊能について教えてくださいますと言うのがやっとだった。横島さんは俺に出来る範囲で良ければと笑う、その後でおキヌさんが面白く無さそうに私を睨んでいる。その視線に背筋に冷たい汗が流れる

「横島ー。そろそろバス来るわよー？」

「判ったー、今行く。小鳩ちゃん、またな」

そう笑ってアリスちゃんと手を繋いで門へ向かっていく横島さん。その背中を見つめていると心臓が大きく脈打つのが判った……ああ、やっぱり私はあの人が好きなんだなと思い、横島さんの姿が見えなくなるまで、私はその背中を見つめるのだった……

花戸小鳩 4・4倍と言う名前がこのとき、トトカルチョに刻まれるのだった……

お兄ちゃんと手を繋ぎながらのんびりと散歩する。これがここ最近の私の楽しみだった、最初はお兄ちゃんもお仕事で忙しくて遊んでくれなかったけど、今は沢山遊んでくれるのでとても楽しい

「ぶぎゅー♪びゅー♪」

短い尻尾をぴこぴこ振りながらお兄ちゃんの前を歩くうりぼーにその上をふわふわと浮かんでいるチビ。お兄ちゃんの回りには可愛い動物が沢山いて、お兄ちゃんと一緒に遊ぶのも、チビ達と遊ぶのも本当に楽しい

「あのさー？牛若丸。そんなに警戒しなくても大丈夫だと思っただけど？」

「いえ、用心する事に越したことはありません」

お兄ちゃんの肩の上でちかちかと光る球体。玩具みたいだけど、玩

具じゃない。お兄ちゃんを護ってくれてるらしいけど、あんな姿でどうやって護るんだろうか？私はずっとそれが不思議だった

「それなら牛若丸も人間モードになったら？」

【隠れて行動する事に意味があるのです】

人間モード……お兄ちゃんのその言葉にほかの姿があるんだと納得していると、前のほうから歩いてくる金髪の女の子の姿を見て

「あ、ベルゼ「よーし、アリスは良い子だなー!!」ふがふが」

確かベルゼブルお姉ちゃんだったと思ひ。名前を呼ぼうとすると、一瞬で口を塞がれた

「えーっと高城さん？どうしたの？」

「少しアリスを借りていく！知り合いだから心配するな」

お兄ちゃんの返事を待たずに私を抱えて裏路地に移動するベルゼブルお姉ちゃん

「アリス。久しぶりだな」

「うん。黒おじさんと赤おじさんのパーティーの時だよね」

本当に大分前だけど、そこで赤おじさんに紹介されたので覚えていた

「アリス、私はベルゼブルと言う事を隠している。高城と呼んでくれないか？」

お仕事の都合って言うのは分かるけど、そんな名前呼びにくいし……うーん、あつー！そうだ！良い事思いついた

「お姉ちゃんも一緒にお兄ちゃんと散歩してくれるなら良いよ？」

「むぐつ……それ以外じゃ駄目か？」

駄目つと言うとベルゼブルお姉ちゃんはどうぐつと暫く唸ってから、判ったと呟く

「じゃあ高城お姉ちゃんも一緒ね」

もうどうにでもなるがいきと疲れた様子で呟く高城お姉ちゃんの手を握り、心配そうにこつちを見ているお兄ちゃんの方に向かって歩き出す。お兄ちゃんの側にいると毎日が楽しい、いつお迎えが来るか判らないけど……お迎えが来るまでは毎日楽しく過ごせると良いなと思うのだった……

「高城さん、アリスちゃん。鯛焼き食べる？」

「食べるー♪」

「鯛焼き？」

散歩の途中でお兄ちゃんが鯛焼きを買ってくれたんだけど、どこから食べれば良いのか。不思議そうに鯛焼きを見つめている高城お姉ちゃんが可愛いと思った。普段怖い鎧を着てるから怖い人だと思っただけど、本当は違うんだなあっと思うと、何か楽しくなってくるのだった……

両手足を拘束された人狼を前にして、小さく深呼吸をする。私に日本にフェンリルが封印されていると言う事を教えてくれたあの人狼だ。私は彼にもう1度問いかけた

「これを行えば、君の自我は滅び、君と言う存在は消える。それでも良いかね？」

「覚悟している。俺は神が嫌いだ、人間が嫌いだ。ならば、それを滅ぼす尖兵になることに何の後悔がある。なんの恐怖がある、ガープ様。俺を兵器にしてくれ」

その強い覚悟を秘めた言葉に私はそれ以上問いかけるのは、この誇り高き人狼の覚悟を無にする事と悟った

「最後に名前を」

「名は捨てた。これより兵器となる物に名は必要ない」

最後に名前と言う私の言葉もバツサリと切って捨てた。その覚悟、その誇り高き魂を私は忘れることは無いだろう

「そうか。ならば私達の為に死んでくれ」

「応ッ!!」

力強く吼える人狼の胸を麻醉なしで切り開く、目をカツと見開くが、叫び声1つ上げない。恐ろしいまでの精神力と覚悟だ、切り開いた胸の中に狂神石を液体のまま注ぎ込む、血液と反応し、狂神石が体内で結晶化し、人狼の身体を内側から貫く

「■■■■……■■■■」

言葉にならない古の呪文を口にする。それは人狼の中の狂神石、そして人狼と言う存在と共鳴する。英霊を呼び寄せるのには触媒だけでは足りない、制御することを考えれば意思の無いホムンクルスではなく、適正のある生贄を使えばいい。それが私の導き出した英霊を制御する1つの答えだった。詠唱が進むに連れ自ら実験体になる事に志願した人狼の姿が変わっていく……内側から膨らむようにその身体が巨大化していく、その姿は既にもう元の姿の3倍近い巨体へと変貌していた。そして黒い毛皮は蒼く輝く体毛へと生え変わる……詠唱が終わる頃。私の目の前には既に人狼の姿はなく、3m近い巨体の狼が姿を見せていた……ゆっくりと目を開いた狼は激しい憎悪と殺意をその目に宿し、そして再び生まれた事を喜ぶように激しい遠吠えを上げるのだった……

別件リポート 高城の日記へ続く

## 別件リポート

別件リポート 高城の日記

魔界の最深部に有るルイの宮殿……しかしルキフグスと、ベルゼブルの両名と宮殿の主であるルイを除き誰も其処を見たことは無い。結界に始まり、認識阻害、空間の歪みにルイの言うことしか聞かぬ魔界の中でも取り分け凶暴な獣の群れ。ルイの宮殿を探す。自殺行為に等しい、むしろ招かれていないのに尋ねていけばルイの怒りを買うのは明らか。故に誰も尋ねて来ない、そんな宮殿の主。ルイ・サイファーはと言うと机の上に置かれた日記を見て楽しそうに笑っていた。

(さて、さて、どんな報告書かな?)

ベルゼブルに横島の観察結果を日記形式で提出するように命じたが、どんな風に記されているのか?それが楽しみで仕方ない。

「平行世界へ渡り何か面白い物を見つけたのですか?」

そう尋ねてくるメイド服姿の女性。女性にしては長身で、すこしサイズの小さいメイド服の胸元の自己主張が凄まじいそのメイドは、人化したルキフグスだ。彼女はティーポットとカップを机の上に置きながらそう尋ねて来る

「ん?ああ、あれね。あれはあれで面白かったよ。自分が消滅するかどうかの瀬戸際での旅はね」

平行世界へ渡り、色々調べてみたが本当に自分の消滅を対価にしただけの成果は得れたと思う。面白い人物にも会えたしね、絶句しているルキフグスに机の上の日記を見せながら

「これはベルゼブルの横島の観察結果と近況報告を、日記にして提出させた物なんだよ。ベルゼブルは頭がカチカチだから、書類とかも枚数が多くて面白みが足りない。だから日記形式にさせてみたんだ」

もつと客観的に、そしてベルゼブルがどう思ったのか知るには日記形式が良いと思ったのだ、少しばかり無理難題が過ぎた気がしなくも無いが、あの堅物には遊び心が足りないので、これくらいで丁度いい

かもしれない

「そうそうルキフグス。君も横島の所に行つて見るかい？」

今の人化しているルキフグスを見た横島の反応とかを見て見たい。とても面白そうだからね

「いえ、遠慮しておきます」

「そう？君みたいなタイプを横島に近づけるとどんな反応をするのか見てみたかったんだけどな、嫌がるなら止めておこう」

何か失態をすれば、それを理由に人間界に送り出す事も出来るけど……ルキフグスは目立ったミスもして無いし、私が面白いと思つて人間の姿で固定しただけで今は満足するとしよう

「じゃあルキフグス。また何かあったら呼ぶから退室するように」

これからベルゼブルの報告書を楽しむのでルキフグスに退出するように促す。判りましたと頭を下げ、部屋を出て行くルキフグスを見送り、ベルゼブルの日記と言う形式の報告書を見る

○月△日

グレムリンと猪と狐の散歩をしている横島を発見、気配を殺して追跡。能天気には猪と狐と触れ合う、妖怪などに対しての警戒心0

何故あそこまで無警戒でいれるのが不思議で仕方ない、一応最上級に近い妖怪二種類なのだが、何故動物と同じ扱いで怒らないのか……

そこが不思議である。

○月■日

前から感じていた疑問が解決した。横島が馬鹿もしくは何も考えていない、それが恐らく正解だと思われる。向こうが攻撃する素振りや警戒する素振りを見せないの、自分も警戒も何もしない。見た目通りの小さい動物として触れ合っている。ある意味豪胆と言えると思うのだが、今日馬鹿でかい犬の式神に体当たりされ、吹き飛んでゐるのにけろつとしている。その人外の回復力と体力には驚かされた



「うーん……ちよつと想像と違うと言うか……」

日記形式なのは間違いないんだけど、文が硬い、そして隠れて見ているからか面白みも何も足りない。少しページを飛ばしてみるか……

△月○日

不覚を取った。横島の周辺にいる猪、グレムリン、あとイヒヒと鳴く謎の妖怪に発見された。連鎖的に横島にも発見され、気がつけば横島と並んで鯛焼きを食べていた、なにがどうしてこうなったのか……理解出来ない。

△月□日

翌日も発見された、あの猪。うりぼーが私の匂いを覚えたらしく、私の匂いを発見すると突進してくる。そして必然的に横島も一緒に来るので、なし崩し的に一緒に散歩する事になる。何故私かと思うのだが、警戒すると言う事を知らない横島を見ていると不安になってくるので一緒に散歩をする。本当に何故こうなったのか理解出来ない……だが、鯛焼きは美味しいので、そこまで怒る事は無いのかもしれない。

△月△日

今日は珍しく横島と出会わなかった……何かあったのだろうか？

△月●日

今日も横島に会わなかった。毎日この時間はここら辺を通るのに……

△月■日

こうも姿を見ないと心配になり、横島の家を見に行くとアシユタロスの娘に教わりながら、必死に勉強をしていた。そこで初めて横島が学生だったと言う事を思い出した。散歩に来ないのはこれが理由

だったのか。

△月▲日

今日も横島が来ないので、私から尋ねてみて見ることにした。散歩の途中で買う鯛焼きも持参してだ……買う前ではいいアイデアだと思ったのだが、手にしてみると。何故？と言う疑問が脳裏を過ぎったのだが、チャイムを鳴らし姿を見せた横島の驚いた表情と差し出した鯛焼きに嬉しそうに笑う姿にまあ良いかと思う事にした。

「絆されてる、絆されてるよ。ベルゼブル」

文の中に刺々しさはあるのだが、明らかに嫌っているわけではない。これはとても面白いことになったと思う。数ページ先に今までと比に成らない程に文章が増えていくページを見つけて、そのページまで日記のページを飛ばしてみる。

○月○日

アリスにまで発見された。と言うかベリアルとネビロスの奴は何故人間の所に自分の娘を預けているのか？アリスもアリスで横島に懐きすぎるだろう？と言うか、お兄ちゃんお兄ちゃんとおべったりである、こんな姿ベリアルが見たら確実に血涙するだろうな……ネビロスは良い傾向だと笑うと思うが……そして何故か私も一緒に散歩が当たり前になっていく。私はルイ様の命令で横島の護衛であり決して友達ではないのだが……警戒心ゼロでのほんとしていく横島の分まで私がアリスと横島を護るのか？いや、それは可能なのだが……果たしてそれでいいのだろうか？と言うか、何故私は一緒に散歩すると言う事を受け入れている？いやいや違うだろうか？護衛と友達は違う……うん、あ、待て待て……そうか、友達。護衛と思わずに友達として触れ合う。うん、これは成功と言えるのではないだろうか？あの無警戒で人を疑うと言う事を知らない横島の側にいる。友達だから、2日に1回とか、1週間に4回とか散歩で会っていても普通だし……人間相手に友達と言うのもおかしな話だが……

そこまで読んだ所で日記を閉じて、声を出さずに笑う。語るに落ち

たと言うことは正にこのこと、人間だと軽視していたのに、今では友達と認めてしまった

「ああ、横島。君は本当に面白いな」

あの超堅物をここまで変えた。そしてこれからも変えて行くだろう、面白味の無かった部下が面白くなる。それは何よりも面白く、そして愉快的事だ。私は紅茶のカップに手を伸ばし、程よく冷めたそれを飲み干す。

「やっぱりルキフグスも横島の所に送りたいな」

ベルゼブルほどではないが、堅物で仕事仕事のルキフグスがどんな風になるのか？それを見て見たい。

「何か失態してくれないかな」

そうすれば、それを理由にルキフグスを横島の所に送れるのに……私はルキフグスが大きなミスをしてくれないかな？と思わずにはいられないのだった……

「寒気が！尋常じゃない寒気がッ!？」

そしてルキフグスはルイのそんな悪巧みを敏感に感じ取り、自分の身体を抱きしめるようにして震えているのだった……

リポート19 魔狼の咆哮 その1へ続く

リポート19 魔狼の咆哮 その1  
その1

リポート19 魔狼の咆哮 その1

それは突然の出来事だった。山の中に結界を張り暮らしていた人狼族、だが昨晚突然結界が破られ蔵が荒らされた。そして人狼族の至宝である1振りの剣が奪われた……

「長老。では八房の剣の奪還には動かないと仰るのだな？」

日本家屋の中で向かい合う老人と2人の男。犬塚クロ、犬飼ポチの両名の顔は険しく、人狼族の長老は仕方ないと諦めの表情だった

「そうじゃ、クロ、ポチ。八房の剣に封じられた狼王「フェンリル」は既に我らに災いしか齎さぬ、人間は森を減らす。その裁きを受けてもらう、良いか。決して「断るッ！」な!?クロ!ポチ!何を言っているのか分かっていいのか!？」

長老の言葉を遮り断ると叫んだクロとポチは立ち上がり

「人間全てが悪ではない、拙者は人間に助けられ、娘も救われた。八房の剣は靈力を求める、横島殿達に危害が及ぶのは間違いない。拙者は受けた恩を仇で返すような真似は死んでも出来ん」

「我等が奪われたのだ、奪還に向かうのは当然だ。裁きだなんなの言って守勢に回る長老に従う義理も道理も無い、友の友もまた友。道理を通さぬ、長老の言葉など聞けん。我等は行く、追放したければするが良いッ!!」

長老の家を飛び出すクロとポチ長老は待てと考え直せと叫ぶが、その声はシロとポチには届かない

「父上、ポチ殿。出発の準備は出来ているでござるよ」

クロとポチが家に戻ると、シロが既に旅支度を済ませていた

「シロ、お前は「拙者もいくでござるよ父上。横島先生には返しきれぬ恩があるゆえ」

シロもついていくという言葉にクロが顔を歪めるが、ポチは諦めろ

と言ってクロの肩を叩く

「お前の妻と同じだ。言い出したら聞かん、それに追っ手が掛かる前  
に出なければいかん。ここで押し問答をしている時間は無い」

村の中から響く雄叫びに包囲網は既に作られかけているとポチが  
言う。村で最強の剣士2人を失うわけには行かないと長老が動いて  
いるのは明白だった

「判った。行くぞ、シロ」

「はいッ！」

狼の姿に化けたクロの上に跨るシロと、荷物を身体に括り付けてか  
ら狼へと変化するポチ。2匹の黒い狼は自分達を包囲しようとして  
いた若い人狼達を蹴散らし、森の中へと消えていくのだった……

緊急集合と言う美神さんからの電話で事務所に行くところにはエ  
ミさん、冥子ちゃん、それにピートとタイガー、カオスのジーさんに  
マリアとテレサの2人。唐巢神父に西条さん……そして言峰神父に  
クシナさんの姿があり、俺もそれを見て只事ではないと一瞬で悟つ  
た。ピリピリとした緊張感を感じ、足元にいたうりぼーとチビを抱き  
抱え、邪魔にならないように少し離れた所に腰掛ける

「すいません、少し遅れました」

蛍が頭を下げながら事務所に入って来て、事務所に揃っている面子  
を見て緊張感に満ちた表情になる

「さてと、今回集まって貰ったのは僕が頼んだんだ」

西条さんがそう言って話を切り出す。その顔は真剣そのもので、懐  
から写真の束を取り出す

「緘口令が敷かれているから、知らないと思うが最近都内で辻斬りが  
出ている。その被害者は既に20人を越えている……非常に言い  
にくい、被害者は既に全員死亡している」

その余りの被害の大きさに顔が歪むのが判る、もしかして手にして  
いる写真の束は……

「被害者の写真だ。言っておくが、横島君達に見せるつもりは無い。

僕はこういうのに慣れてはいるが、それでも吐きそうになるほどに凄惨な遺体だ。高校生の君達は見ない方が良い」

そう言つて美神さん達に写真を手渡す西条さん。美神さん達もその写真を見て眉を歪め、確かに酷いわねと呟いた。

「これ……霊刀の傷ね？」

「ああ、衣類は傷つけられず、人体は恐ろしいほどの切れ味で両断されている」

両断……その言葉を聞いて、思わず想像してしまつて吐きそうになり口を押さえる。カオスのジーさんは西条さんの言葉を聞いて不味いなと呟く

「霊刀は魂を喰らえば喰らうほどに切れ味を増す。20人も切つているとなると……神魔でさえも恐らく切れるな？」

「はい、そして高純度の霊体を求めるようになる。横島君やピート君達が狙われる可能性が高い、暫くの間出歩くのを控えて欲しい」

「で、でもそれだと襲われた時に逃げたり、助けを求めるのに遅れが出ませんか？」

おキヌちゃんがそう言うのと西条さんはそれも考えていると呟き

「ピート君には父親のブラドー伯爵が付いているから問題ない。タイガー君には言峰神父が付いてくれる。横島君はシズクさんや牛若丸に信長、沖田総司などが付いている。これは最初の方の処置だけだ、相手の正体を掴み。対策を練り次第また集合を掛ける。今はターゲットが一箇所に集まる方が危険なんだ」

霊力が集まり、そこに襲撃を仕掛けてくる可能性があるからと西条さんが言う。確かに一箇所に集まつて襲撃を受けるリスクを考えればバラバラの方が良いだろう

「オカルトGメンから精霊石を支給する。襲われた場合、これを使って逃走してくれ」

俺達に2個ずつ精霊石を渡してくれた西条さんは時計を見て「明るい内に家に戻って欲しい、夜は敵の時間だ」

どうも緊急招集は危険と言う事を伝え、精霊石を渡してくれる為だったらしい。ピートとタイガー、それに蛍と共に美神さんの事務所

を出る

「おつかいない事件だな……もしかしてまたガープか？」

「魔人って線もあるわよ、横島」

「こういう事件が起きると真つ先にガープを疑うが、蛍の言うとおりの魔人と言う可能性もある

「その通りだ。横島忠夫、思い込みほど危険な物は無い。十分に警戒し、襲撃に備えるのだ」

「あ、ありがとうございます」

「固い口調の言峰神父に顔が引き攣るのが判る。悪い人じゃないと思うんだけど、ちよつと苦手だ

「とりあえず西条さんに言われたとおり、明るい内に戻りましょう。僕はヴァンパイヤミストで逃げれますが、タイガーさんと横島さんは……」  
「……いざとなれば飲み込む」……そうですね、その手段がありましたね」

「……ミズチタクシーは本当に勘弁して欲しいのだが、緊急事態ならあれほど安全な逃走手段もないだろうから文句を言う訳には行かない

「蛍も気をつけて、ピートもタイガーもな」

「うん、横島もね」

「ありがとうございます、横島さん。皆も気をつけてください」

「何かあったら直ぐ電話しますけん」

お互いにお互いの名前を呼び、気をつけてと言って俺達は分かれ、早足で自分達の家へと足を向けるのだった……分かれた蛍は早足から走りへと変わったその理由は言うまでも無い、歴史が変わっている……おキヌから聞いていた人狼事件よりも被害者が多く、流れが違う。その事に言いようの無い不安を感じたのだ……そしてその不安は的中する事になる

東京の中に妙な気配を持つ奴が現れたのを私は感じ取っていた。人間でもない、獣でもない、だが魔族でもなければ、神族でもない

(なんだこいつは……)

魂を感じ取る能力を持つ私が、その全容を掴めない。こんなのは初めて……いや、横島と言う前例がいたな。だがあいつと奴は根本的に違う、奴を形作っているのは憎悪と殺意。どこまでも純粹で、どこまでも歪んだ感情だけだった。それ以外の魂を持たぬ、継ぎ接ぎだらけの魂……吐き気さえも覚える程に醜悪な魂だった

「さてと、どうするか……」

あの魂の持ち主がガープの手によるものならば、横島の身が危険だ。だが私は魔族と言う事を隠している、と言うことは全力は出せない。魔力を使うことは出来るが……次の失態は許されないので慎重に動かなければならない。奴の動きが活発になるのは日が落ちてから、まだ少し時間が有るのでブリュンヒルデの様子を見に行ってみるか……そう思いブリュンヒルデに会いにいったのだが

「わ、私はシヨタコン……変態……ぶつぶつぶつ……」

(ま、まだ引き摺ってるツ!!!)

ルイ様の苛めのダメージが尾を引いているのか、どんよりとしたオーラを纏いながら何かぶつぶつ言ってる！慌てて駆け寄り肩を掴んで体を揺する

「おい！ブリュンヒルデ！お前何してる！」

「え、あ……閣下」

ほんの少し理性の光が戻る。真面目なブリュンヒルデの事だ、考えすぎてド壺に嵌ってしまったんだろう

「ルイ様が私を年下好きの変態だと……」

「ルイ様のジョークだ、真に受けるな」

と言うか、今の姿の方がよほどドン引きすると思いつつながら大丈夫だと声を掛ける

「わ、私は大丈夫でしょうか。立てる……うん、立てる。あ……やつぱり駄目かもしれないです」

重症だな、これは……ジョークとして聞き流す事のできなかったのはやはり生真面目な性格による物だろう

「今東京に変な魂を持つものがある、横島に危害を加える可能性があるあ



る」

私の言葉にブリュンヒルデの瞳に力が戻る。生真面目な性格だからこそ、任務を思い出せば再起動してくれると思ったのだ

「私も合流するつもりだが、力を見せる予定は無い。言っている意味が判るな?」

「……はい、大丈夫です」

話をする知人程度の私はまだ自分の力を見せている訳ではない、だから私は横島を護りはしない。有事の際に備え、側にいるが最悪の状況になるまでは動かない

「時間が無い、日が落ちればそれは既に奴の時間だ。急ぐぞ」

「はい、大丈夫です」

さっきのような沈鬱な気配は無い、この様子なら大丈夫だろう。私はブリュンヒルデと共に横島の家へと足を向けた、ゆっくりと沈んでいく太陽とそれに反比例すかのように強くなっていく奴の気配

(一体何がいるんだ)

正体を掴むことが出来ない不気味な存在。その存在を感じ取りながら、私はもう1度急ぐぞとブリュンヒルデに声を掛けた。夜は既にもう直ぐそこまで迫っていた……

それは唐突に現れた……黒い何かが目の前で集まったと思った瞬間、目の前に何かが現れていた。私も西条さんも勿論。ドクターカオスも唐巢先生も、警戒の為に冥子が召喚していた12神将も全く気付かなかった。唐突に私達の目の前に現れたそれはまるでゴミでも捨てるかのように、その手にしていた人間の上半身をこっちに投げつけて来た。血を撒き散らし、向かってくる肉片に誰しも動きが止まった。思考が再び動き出したのは、マリアとテレサが私達の前に立ったその瞬間だった

「マリアー・テレサー!」

ドクターカオスの悲痛な叫びが聞こえる。2人はたった一太刀……その一太刀で片腕を細切れにされ、コンクリートブロックに頭か

ら突っ込み動かなくなつた。悲鳴も何も聞こえなかつた、本当に一瞬の出来事だつた……

「??？」

不思議そうに自身が手にする刀を見つめる人影。目の前にいるのに正体が判らない、まるで黒い何かが目前にいる。靈視をしてもその全容を掴むことが出来ない

「喰らえッ!!」

西条さんが私達を庇うように前に出て、銃を構えた瞬間。その黒い人影の頭が動いたように見えた、そして白銀の閃光が闇夜を駆ける

「うぐッ!」

「西条さん!」

閃光が走つたその瞬間、西条さんの身体が大きく弾き飛ばされる。その太刀筋も振り上げた刀も私の目には映らなかつた

(こいつ……何者!?)

その動きを見せず、マリアとテレサを戦闘不能に追い込み、今こうして西条さんも一撃で倒した。正体がまるで読めない相手の強襲に完全にパニックに陥ってしまった

「皆くやつつけてーッ!」

「冥子待って!」

止めようとしたがもう遅かつた。冥子の影から飛び出した式神が黒い影に向かつた瞬間

【【ぎゃんッ!?】】

360度から襲い掛かつたにもかかわらず、式神は一太刀……ううん、一太刀に見えただけで実際はもつと多かつたかもしれない。その一撃で両断され、冥子の影の中に消えていく

「え」

目の前の光景が信じられず、呆然とする冥子に西条さんを引き裂いた閃光が走る

「冥子ー!」

近くにいたし、しめ鯖丸の一撃を防いだ鎧を着ている事もあり、その閃光の前に立つた瞬間。鎧が碎ける音と、頭が一気に軽くなる……

(これ不味い！)

髪を切られたただけならまだいい、だがそこから霊力をごっさり持つて行かれた

「エミー！」

「判ってるワケ！」

これ以上戦っても各個撃破されるだけだ。エミの名を叫ぶと精霊石のペンダントを引きちぎり、霊力を込める。その炸裂する一瞬、倒れていたマリアとテレサが立ち上がり、駆け出してくる。マリアはその背中にドクターカオスを背負い、無事なほうの左腕で私と冥子を掴み、テレサは気絶している西条さんを背負った唐巢先生を右手で掴み「背中に乗って！早く！」

「判ってる！」

エミを背中に背負い地面を蹴る。空高く跳び上がったマリアとテレサによってその場を逃れるが、月の光の中私は見た。姿形は人間に近いが、その影が巨大な狼の姿になっていた事を……そして現れた時と同じく弾ける様にその姿を消したその姿に恐怖と共に寒気を覚えたのだった……人智を超えたその存在を、黄金に輝くその瞳を目にしたその瞬間に……自分が巨大な何かに食い殺される姿を見た。エミやドクターカオスも同じだったのかもしれない、その顔からは完全に血の気が失せていたから……

暗い闇の中に紛れるように佇む、モノクルを身に付けた男性……ガープの姿がそこにあった。だがその声は女性の……もつと言えば美神の声だった

「ええ。そうよ、情報が集まったから事務所に来て頂戴。ええ、出来るだけ急いでね」

『はい、判りました。美神さん』

闇の中から聞こえてくる横島の声。その声には一切の不信感や警戒の色は無かった、ガープは手を振り、魔法陣を消すと振り返り

「私の言葉が判るか？」

「……」

黒い影は返事を返さない。ある存在の依り代となる事を選んだこの人狼に既に言葉を理解しても返事を返すと言う知性は持ち合わせていなかった。既に概念と成果でている人狼に感情などは無いからだ

「すまないな、質問が悪かった。この地で霊力が異常な流れをしている場所は把握しているか？」

2回目の問いかけに黒い影は頷く、ガープはそれならばいいと返事を返し、アスモデウスに向けるような親愛に満ちた表情で口を開く

「ならばそこに行くがいい、そこに極上の餌が待っている」  
「……」

その問いかけに頷いた黒い影は弾ける様に姿を消す。だが道路にはその姿が刻まれていた、闇の中を駆ける巨大な狼の姿を

「私が手助けするのはここまでだ」

己を捨てる覚悟をし、感情も、記憶も、名すらも捨てた人狼。だが表たつて協力する事は出来なかった、何故ならあの人狼に宿った存在は神魔すらも憎んでいるから、まだ力が足りず宿った存在が目覚める前だからこそこうして話をする事が出来たが、恐らく次は無い。ガープ自身すらも餌と見なし、牙を剥く可能性が高い

「願わくば、お前の願いが叶うことを祈っているよ」

狼とは大神。神に準ずる聖なる獣、自然を壊す人間に対する憎悪と殺意は本物であり、そして己を救わなかった神魔を憎んでいる。だからガープが手を貸すのはこれで最初で最後。後は己をどこまで取り戻すか、そしてガープの研究成果がどこまで効力を発揮するかに掛かっている

「……惜しいな」

うつすらと見える月。それが満月ならば良かったのだがなと呟き、ガープは杖を付きながら、影の中に溶ける様に消えていくのだった  
……

リポート19 魔狼の咆哮 その2へ続く

## その2

レポート19 魔狼の咆哮 その2

謎の黒い人影に襲われた私達はそのまま霊能に関する病院を訪れていた。私は強化セラミックスの鎧のおかげで比較的軽症だったが、霊力を溜め込んでいる髪を切られた事で少し霊力のバランスがおかしい

「ドクターカオス、マリアとテレサは？」

普通に回復するよりも時間が短くて済む。そんな淡い期待を抱きながらマリアとテレサの様子を尋ねる、だがドクターカオスの返事は私の求めていた物ではなかった……

「……マリアは回復まで48時間、テレサは82時間と言う所だ。有機ボディの分回復までの時間は短縮されているが、失った霊力の回復に時間が掛かる」

ドクターカオスの言葉に眉を顰める。冥子と西条さんは戦闘不能、エミは相手が近接の達人なので役に立たない、唐巢先生は近接の達人だけど、刀を手に行っている相手に挑ませるのは無理だし……ブラドール伯爵に助力を頼むのもありだけど……

(あの黒い影の特性を掴まない)

人型の黒い影。霊力を吸収して自分を強化する正体不明の敵……攻撃が一切通らなかった。あの無敵性を何とかしない事には、どうしようもない

「大丈夫かね？唐巢、それに美神令子」

病院の廊下に響く重い声。その声に顔を上げると漆黒のカソツクが視界に飛び込んでくる

「言峰綺礼……」

どうして日本に……と思うが、それと同時にあの正体不明の敵と戦うにはこれくらい人間を辞めている相手が必要なかもしれない

「……ですね、急患は」

言峰の後から誰かが姿を見せる。それは女性だった、赤い服に身を

包み、肩から鞆を下げた女性……見た目は普通なのだが、人魂が近くに浮いているのを見る限り人間じゃない

【では私は治療に入ります】

言うが早く、病室に入つていく女性の後姿を見てると言峰がその人物について教えてくれた

「英霊ナイチンゲールだ。治療の腕は確かだ」

ナイチンゲール！その名前に医療のスペシャリストと喜んだのだが……

【腕の腱が傷ついていますね、感染症の危険性を考慮して切除しましょう】

「待て待て！大丈夫！ちゃんとくつつくから」

【大丈夫です、私は助けたいのです。貴方を殺してでも】

「だ、誰かアアアアアアッ!!!」

病室から聞こえてきた悲鳴に全員が沈黙する中、言峰はにこりと笑いながら

「あの英霊は人の話を聞かない。命を助けるためなら何でもする」

「二なんて英霊を連れて来たの!?!」

私とエミと唐巢先生の声が重なるが、言峰は肩を竦め、勝手について来たのだよ？と言う。怪しいと思うが、証拠もないのでこれ以上追求するわけには行かないわよね。とりあえず私も巻き込まれたくないので、西条さんが自分で何とかしてくれる事を祈るだけだ

「綺礼来てくれて助かる。正体不明の黒い人型に襲われたんだが、霊力も効かない、聖句も効かない。対処法がわからないんだ、何か心当たりは無いか？」

「ふむ……色々海外で見てきたが、流石に情報が足りないな。他に何か感じたことは無いか？」

感じたこと……そう言われ、真つ先に思い浮かんだのはあの圧倒的な憎悪を宿した瞳……そしてあの異様な影だろう

「影が何かの獣だったわ」

「獣か……となるとその人型は何かの化身と言う可能性が浮かぶな、神か悪魔かそこまでは判らないがね」

何かの化身……正体の特定をしたいのに、それだけじゃ特定の使用が無い

「あの霊刀……私の髪を切った時。ごっそり霊力を持って行ったわ」

「ふむ。そうになると、相手の目的は霊力を持つ相手を襲う事だろう」

辻斬りをしていたのは霊力を集める為か。となると横島君達が心配になってくるわね

「1度横島君達を集めよう。ブラドール伯爵の所に集まって貰えば良いだろう」

バラバラにしたが、相手の能力を考えると一箇所に集まっていたほうが安全かもしれない。1度横島君達を集めようという流れになったとき

「あ、あれ？なんで美神が……さつき事務所に来るように電話してきたのに……？」

ハーピーがやって来て、何か訳の判らない事を言う

「事務所に来るように？私が電話をした？」

「うん。横島が電話に出てて、みんなで事務所に向かったんだけど……途中でGS協会の人にあつて、病院に唐巢神父とかいるって聞いて、あたしが話を聞いてくるように言われてきたんだけど……」

ハーピーの話最後まで聞かず、廊下のソファアの上に置かれてたエミの鞆を引ったくり走り出す

「エミッ!!バイク借りるわ!」

背後から聞こえてくる後で合流すると言うエミ達の声を聞きながら、階段を駆け下りる。やられた!横島君達が誘い出された!私達が思うよりも、遥かに相手は厄介な絡め手を持っている。だが気付いたのが遅すぎた

「皆無事でいてよ……」

エミのバイクで事務所に向かいながら、私は横島君達の無事を祈り、事務所へと走る。幸いエミのバイクはGSナンバー、スピード違反をしても警察に止められる事は無い。事務所に向かう途中漆黒のバイクが車線に割り込んでくる、一瞬カッとなったが、そのバイクもGSナンバーそして漆黒の車体……まさかと思い加速すると、そのバ

イクを駆っていたのはやはりくえすだった。ヘルメット越しに一瞬私を見たくえすはそのままエンジンを吹かし、更に加速していく、赤信号も当然無視だ。私は一瞬あっけに取られたが、琉璃に全部丸投げすれば良いと思い。私も赤信号を無視して、前を走るくえすのバイクを追いかけるのだった……なお途中で私とくえすを走って追い抜いて行つた言峰に私もくえすもドン引きしたのは言うまでも無い……

美神さんの電話で俺達は事務所に呼び出された。だが、事務所に美神さんの気配は無かった。いや、そもそも美神さんは昨日帰ってきてないといっちゃんか告げた

「蛭。これってまさか……」

「嵌められたわね」

蛭も俺と同じ考えなのか、沈鬱そうな表情で告げる。嵌められた……その言葉に事務所の中に嫌な沈黙が満ちる

「大丈夫です。私がいれば、最悪の結果は防げると思いますよ」

「聖奈さん……」

事務所に来る途中に合流した聖奈さんが大丈夫ですと笑う。確かに魔族の聖奈さんがいれば最悪の事態は防げるだろうし、籠城だって可能だろう

「お兄ちゃん、アリス。暇ー」

「いい子だからちよつと待っててね？」

アリスちゃんを家に置いておくわけには行かないので、一緒に連れて来たが、暇と詰まらなさそうに言う。足元をちよこちよこ歩いていたらうりぼーを抱き抱え、アリスちゃんに渡すとうりぼーを抱き抱えて嬉しそうに笑う。これで暫くは大丈夫そうだろう、タマモは嫌がるので、駄目ならチビにもアリスちゃんを宥めるのを手伝って貰う事しよう

「横島さん。1度美神さん達に電話するほうが良いと思うんですけど」  
「ジャー」

「うーん、でも病院って言われても場所まで聞いてないし」

来る途中にあったGS協会の人が唐巢神父達が入院していると聞



いて、ハーピーさんに様子を見に行つて欲しいとお願いしたが、その時にどこの病院かもちゃんと聞いておくべきだったな……

「しかしゆっくりしている時間は無いぞ？ここに誘いだしたと言う事は、ここに集まった段階で敵は動いている」

ソファアーに座つて足を組んでいる高城さんが険しい顔で告げる。見た目とその仕草は違和感しかないはずなのに、妙にしっくり来るのが不思議だ

【事務所では戦闘は厳しい、罠と判つた以上直ぐに移動するべきだが……】

「……集団で移動すると言うのもネックだな」

本当は移動した方が良いんだろうが、この大人数で移動するのは少々厳しい。ミズチタクシーと言う手もあるが、あれはリスクが高すぎる……

【私が美神さん達を呼んできましようか？】

「止めておいたほうが良いと思います。下手に移動すれば、おキヌさんが襲われますよ」

美神さん達を呼んできましようか？とおキヌちゃんが言うが、それは聖奈さんによつて却下された。移動するのも駄目、助けを呼ぶのも無理……いや、待てよ？

「ピートだったら安全に行けるんじゃないのか？」

「まあ。ヴァンパイヤミストと言う手段もありますが、僕の力量では1人が限界です」

そつか……霧で皆まとめて脱出出来ればと思つただけど……やっぱり早々上手くは行かないか

「聖奈さん。一回横島の家を設置した転移陣は？」

「すいません、もう撤去してます」

聖奈さんのルーンによる転移でも駄目か……東京なんていう都会なのに、まるで無人島にいるみたいだなと心の中で呟いた時。凄まじい破壊音が響き渡る

「いっちゃん！今のは!？」

【入り口が破壊されました！敵が侵入してきますツ!!】

いつちゃんの悲鳴にも似た声……事務所に来て僅か10分……俺達をここに誘い出した相手の動きは恐ろしいほどに早かった

「いつちゃん、敵の数は？」

【敵の数は1。姿は黒い人影です、手には霊刀と思わしき刀を所持しています】

その言葉に俺達全員の顔が引き攣る。それは西条さんに聞いた辻斬りを連想させたからだ……と言うか、確実に辻斬りを行っている相手だろう

「横島さん、蛍さん、この事務所に何か武器は？」

聖奈さんがその手に槍を作り出しながら尋ねてくる。俺が口を開くよりも早く蛍が

「銀の弾丸を撃つ拳銃とか、破魔札なら近くにありません」

「……ではそれを持ってきて下さい。相手の気配がおかしい……これはヘタな魔族よりも危険かもしれません。シズクさん、助力をお願いします」

聖奈さんが険しい顔でシズクに助太刀を頼む。ノツブちゃんや牛若丸は俺達の護衛に残しておいてくださいと言われ、それだけやばい相手と言うことに気付き、俺は背中に冷たい汗が流れるのを感じ。俺達の話聞いて、うりぼーを抱き抱え不安そうにこつちを見ているアリスちゃんに俺は大丈夫と言いながら頭を撫でるのがやつとなのだった……

閣下から話には聞いていた正体不明の敵……そこまで警戒していなかったのだが、こうして目の前にした時、その敵は酷く不気味で、そして歪に見えた

(なんでですか……あれは)

目も鼻も無いシルエットこそは人間だが、それは人間とは程遠い姿をしていた……そして何よりもだが、その魂が酷く歪だったのだ。人間でも、悪魔でも神族でも無い……その姿から種族を特定できない。

「……酷い匂いだ。死臭がこびりついているな」

シズクさんが顔を歪めながら氷の刃を手にする。私とシズクさんなら足止め出来るとは思うのだが、私達2人を前にして何の反応も見せない……先手を取るべきなのか、それとも相手の動きを見た方が良いのか……そもそも相手がどこを見ているのか？その全てが判らない

(これは早いうちに撤退したほうがいいかもしれないですね)

準備も何もしていないうえに、護るべき相手がいる。そして狭い事務所内に加え、敵の正体が判らない。すべてにおいて不利、この場所で決着をつけようとするほど愚かな事は無いだろう

「……ッ！」

(初動が無いッ!?)

ゆらりと動いたと思った瞬間恐ろしいスピードで踏み込んでくる黒い影。反射的に槍を構えたが、振り下ろされた剣は1回、しかし槍を通じて感じた衝撃は複数回……一振りで複数回の斬撃を繰り出し、当たれば霊力を根こそぎ吸収する

(厄介な獲物ですね)

死臭を感じたのはなにもあの黒い影だけではない、あの剣自体も濃密な死臭を放っている。一体何人切り殺してきたのか……

「……行けッ!!」

シズクさんがペットボトルを投げると同時にそれを起爆させる。水の雫が全て氷の刃に変化し、黒い影に殺到するが……

「……」

「リアクションは無しですか」

神通力の宿った刃だ。神魔族でもダメージは薄くても何らかの反応をするはずだが、それすらもない……ますます、あの黒い影の正体が判らない、まずは情報を得る。それを考えルーン魔術を放った瞬間

「……ッ!!」

黒い影がリアクションを起こした、ルーンに対して左手を突き出し、攻撃を受け止めた……いや私の炎を吸収した

「!?!」

その予想外の現象に私とシズクさんが一瞬硬直した。数秒にも満

たない、コンマ何秒の硬直その一瞬……その一瞬で黒い影は消え去った。逃げたのではないのと言うまでも無い

「……ブリュンヒルデッ！」

「っはい！」

弾かれたように事務所の奥に向かつて走り出す。私とシズクさんを倒すよりも、横島さん達を狙った方が良い。そう判断したに違いない、向こうは横島さん達が事務所にいるのを知っているのだから……私とシズクさんが黒い影に追いついた時。やはり黒い影は横島さん達の前にいた……ただ予想外だったのは

「ギギイイツー！」

黒い影が傷を押さえて後ずさる光景と、霊波刀を展開し、振り切った体勢で困惑している横島さんの姿がそこにあっただけ……

それは何かを考えた攻撃と言う訳ではなかった。蛍と協力して美神さんの武器庫からいくつか武器を動かし終わり、結界札などの準備をしている時。俺達の影が濃くなったような気がしたのだ……そしてその影が盛り上がった瞬間。俺は殆ど反射的に霊波刀を作り出し、袈裟切りに振り下ろしていた。ゴムか何かを叩いたような嫌な感触とのた打ち回る黒い影

「ノツブちゃんッ！」

【おうよッ！】

ノツブちゃんの名前を叫ぶと同時に駆け出していたノツブちゃんが刀を振るうが、その刀は黒い影を素通りする

【効いてない！っうか、霊力持ってかれたッ!?!】

顔を歪め後退するノツブちゃんと変わって、恐怖を感じながらも前に出て霊波刀を黒い影に向ける

【蛍！ピート！下手に動くな、こいつ……存在自体が霊力を吸収する！私の予想だが、霊刀か、霊波刀しか有効打撃は望めないかもしれない】  
【い】

心眼の重い言葉に蛍達の顔が曇る、これだけ面子が揃っていても霊

刀を使える者はおらず、霊波刀を使えるのは

「俺だけ……か」

使えると言っても俺の技術はそう高い物ではないし、長時間維持出来る物ではない……状況は積みに近い。この黒い影が居ると言うことはシズクと聖奈さんも倒されたと見て……

「……横島ッ！」

「横島さんッ！」

シズクと聖奈さんが扉を蹴り空けて姿を見せる。怪我などをしてないのが判り良かったと思うのだが……とても安心など出来なかった。黒い影は傷を押さえながら立ち上がっているが、その姿にダメージを受けている様子は見えず。更に言えば目も、口も何も無いのでどこを見ているのか判らない。それに気配もそうだ、とても不気味で、こうして見つめているだけでも吐き気を覚える。身体も大きいのか、小さいのか判らない……数の上では圧倒的に優位なのに、全然安心出来ない。普段ならシズクや聖奈さんがいればそれだけで安心できるのに……

「シッ!!」

逃げるのか、それとも戦うのか、悩んでいたその時。黒い人影がシズクと聖奈さんの横を通り抜けて、鋭い踏み込み音と共に拳を繰り出す

「「言峰神父ッ!」」

「無事か。良かった……」

硬い表情のまま、少し嬉しそうな声を出すという器用な事をする言峰神父。そしてそれから遅れて、バイクのエンジン音が2つ響く

「間に合った!」

「ギリギリですわね」

赤と黒のバイクが事務所の中に飛び込んでくるなり、黒い影に破魔札を投げつける

「美神さん！それにくえす!」

蛍が2人の名前を叫ぶが、美神さんはそれに返事を返さず

「ピート！タイガーと一緒に病院に！ブリュンヒルデはアリスちゃん

と高城を！蛍ちゃん早く後に乗って！」

皆に素早く指示を出す美神さん。俺はと思っていると神宮寺さんに腕を捕まれ

「早く後に、この場所ではどうしようもなりませんわ」

「は、はいッー！」

少し気恥ずかしい物を感じながらも早く！と言われれば、照れている時間は無い。俺は言われたように神宮寺さんのバイクのタンDEMシートに座ると2人はエンジンを吹かし、事務所の窓を突き破って外に飛び出す。着地の凄まじい衝撃に思わず神宮寺さんの細い腰に両腕を回して、しがみつくようにして衝撃に耐える。これからどうするんですかと尋ねる間もなくバイクを走らせる神宮寺さんに今は話をしている場合じゃないという事だと理解し、神宮寺さんの腰にしがみつきながら、背後を振り返る。すると丁度聖奈さんがアリスちゃんを高城さんを抱え事務所から出てくる姿が見えるのだった……

蛍ちゃんをタンDEMシートに乗せバイクを走らせる。姿は見えないが、あの黒い影の気配はピッタリと着いて来ている

(予想外の面子が多すぎる)

アリスちゃんに高城のことは考えても無かった。だから聖奈に抱えて貰っているが、もし聖奈がいなければ事務所から逃げる事は出来なかつただろう

「美神さん、駄目です。全然振り切れません」

蛍ちゃんも追いかけてくる気配を感じているのか、顔を歪めながら呟く。言峰が足止めをしてくれると思っていたが、もう追いかけて来ている事を考えると足止めが出来なかつたのだろうか

「……いや、違う。あいつは影の中を移動出来るみたいだ」

氷の上を滑って着いてきたシズクの言葉に顔を歪める。今は夜だが、月と街灯であちこち明るい。だから気配が離れる事もなく、ずっとピッタリ着いて来ているのだろう……夜が明けるまではまだ6時間はある。何とか対処法を見出さない事にはここで全滅するのは必

須だ

【美神駄目だ！止れッ!!回り込まれている！】

心眼の怒声に慌ててブレーキを掛け、スリップしないようにハンド  
ルを切る。アスファルトにタイヤのスリップ跡をつけながら、私とく  
えすのバイクが止る。進行方向には街灯もなく、月の光だけが道路を  
照らしている。バイクから降りて神通棍を構えながら

「横島君、アリスちゃんを聖奈から受け取って、それとノツブちゃんと  
牛若丸を」

この面子では間違いなく聖奈が最強だ。だからアリスちゃんを受  
け取り、ノツブ達をとお願ひするが

「駄目です。ノツブちゃんとの攻撃はあの影に通じないみたいです」

アリスちゃんを抱き抱えながら駄目ですと言って理由も教えてく  
れた横島君に舌打ちする。英霊が戦力にならない、言ったら悪いがそ  
んな事態を想定などしているわけが無い……本当にあの黒い影の正  
体が何者なのか、ますます判らなくなつた

「グルルルッ！」

「ウーッ!!!」

「チビ、それにタマモもうりぼーもどうした？」

チビ達が凄まじい唸り声を上げる、今まで無いことに横島君も困惑  
しているのが良く判る。動物の本能で何かを感じ取つたのだろうか  
……

「美神、蛭、横島。何か来ますわ」

「……でかい、なんだ。これは……」

道路の奥からドシャ、ドシャつという重い音を立てて、何か近づ  
いてくる。アリスちゃんが怖いと言つて横島君に抱きつき、高城がや  
れやれと肩を竦め、折りたたみ式の霊刀を構える

「戦えるの？」

戦つてくれるの？と言ふ願ひを込めて高城に尋ねる。真の蠅の王  
……そんな彼女が助太刀してくれるなら、これ以上に頼れる相手はい  
ないのだが

(私はルイ様に横島を護れといわれたただけだ、お前達を助ける理由は

無い)

だが高城の言葉は冷たい物だった。それでも横島君を護ってくれ  
る……それだけで安堵したのも確かだ。横島君が眼魂などを使わな  
いでくれるなら、それに越した事は無い

【ウオオオオオオンッ!!!】

地響きを立てて私達の前に現れた何かを見て絶句した。それは3  
m近い巨体の狼だった……その背中に私達を追い掛け回していた黒  
い影を乗せ、口に黒い影が手にしていた刀を啞えたその狼は、凄まじ  
い殺意を宿した金色の瞳で私達を睨んでいる。

「美神！来ます！」

それは一瞬のことだった。距離はかなり離れていたし、その巨体  
だ。見逃す事は無い、そう思っていたのに、狼は一瞬で私と螢ちゃん  
の前に移動していて、口に啞えていた刀を振るってきた。その余りに  
一瞬の事に完全に虚を突かれ動くことが出来なかった……避けられ  
ないと判った時つい目を閉じてしまった、横島君の私を呼ぶ声がやけ  
に遠くに聞こえた……

「え？」

だが私の耳に飛び込んできたのは甲高い金属音。目を開くと、そこ  
には着物姿の男性が2人。その2人が手にした刀で振るわれた刀を  
防いでいた

「でやあああああッ!!」

裂帛の気合を持って振るわれた刀はその狼の巨体を弾き飛ばす。  
突然の事に混乱していると今度は後から横島君の混乱した声が響く  
「せんせーッ！だいじょうぶでござるか!？」

「シロ!?え、じゃあクロさん!？」

シロにクロさん!?顔を正面に向けると犬の耳と尻尾が2人の男性  
から生えているのが見えた

「犬塚クロッ!」

「犬飼ポチッ!」

「義によって助太刀致すッ!!!」

声を揃えて叫ぶクロさんとポチの声に、黒い影が初めて揺らいだ。



巨大な狼に跨っていたのは着物に似た何かを来た首の無い幽霊の姿  
だった……その姿を認識した時、巨大狼の周囲に響き渡る凄まじい雄  
叫びが放たれた……

リポート19 魔狼の咆哮 その3

### その3

リポート19 魔狼の咆哮 その3

闇の中から姿を現したのは、軽自動車よりも遥かに巨大な狼だった。その背中に俺達を追いかけていた黒い影を乗せ、自身も口に刀を咥えた余りに巨大な化け物……金色の瞳が俺達を射抜き、その視線に足が竦む……アリスちゃんが怖いと言って震えるが、俺も恐ろしくて仕方無かった

「あれは……まさか。いえ……でも……似ている」

「……ああ。似てるな、フェンリルに……気配だけだが」

聖奈さんと高城さんが険しい顔で何か話をしている。そう思った瞬間、空気が爆発した音と共に狼が美神さんと蛍の前に狼が一瞬で移動する。危ないと咄嗟に飛び出しかけたとき、誰かに腰を掴まれ完全に動きが止った。狼が刀を振るった瞬間、思わず目を閉じたが周囲に響いたのは甲高い金属音だった……

「せんせーっ！だいたいじょうぶでござるか!？」

背後から聞こえてきた声に振り返ると、赤いメツシユの入った白髪の少女が視界に飛び込んでくる

「シロ!?え、じゃあクロさん!？」

砂煙の向こうにはクロさんともう1人男性の姿があった。2人は刀をXの字にして狼の刃を止め、力強く踏み込みながら狼の巨体を弾き飛ばす

「犬塚クロッ!」

「犬飼ポチッ!」

「義によつて助太刀致すツ!!」

その力強い咆哮で、初めて狼の反応が変わった。失望したような、落胆したようなそんな気配の後。狼は大きく息を吸い込み、周囲を振るわせる凄まじい雄叫びを上げた……その凄まじい音に、足から力が抜けてへたり込む。立ち上がるうにも足が震えて力が入らない……

美神さんや蛭、神宮寺さんも同様だった……何が起きたのか唯一動く目で周囲を確認する事しか出来ない

「魔力を雄叫びに乗せて叩き付けたんだ。それで体の感覚が麻痺している、無理に動くな」

高城さんが俺の肩に手を当てて、動くなど強い口調で口にする。

「……やばすぎじゃろ……霊力吸収に……魔力の……波動とか……バグか!？」

「うう……上手く……具現化……出来ないです」

おキヌちゃんとノツブちゃんの姿が明暗を繰り返し、今にも消えそうになっている。雄叫びに攻撃が付与されていたのは明白であった

「……みむ」

「ぴぎ……」

「チビ!?うりぼー!？」

小さく鳴くと目を回してぼてっと落ちてくるチビとうりぼー。動く事が出来ないが、運よく倒れこんだ俺の腹の上に落ちてきた事に安堵する

「グルウ……」

タマモは何とか踏み止まっているが、それでも今にも倒れそうだ……

「シズクさん、横島さん達をお願いします。動けないようですから」

「……判った。倒せとは言わないが、退けるくらいはやってくれ。私は治療をする」

聖奈さんが槍だけを持った姿ではなく、鎧姿になり狼と応戦しているクロさん達に合流する姿を見ながら、怖いと震えるアリスちゃんに大丈夫だよと俺は声を掛けることしか出来ないのだった……

影を使いながら高速で駆け回る狼……その速度は完全に拙者を超えていた、幸いなのは拙者とポチだけを狙って来る事だが

「ぬっぐうっ!この馬鹿力がツ!!」

ポチが悪態をつきながら噛み付いてきた狼の横つ面を殴りつける。

先ほどまで啞えていた刀……妖刀「八房」は狼の背に乗っている黒い影が手にしているが、その影は人狼族の着物を着ていた……何者だと言う疑惑が湧くが、今はそんな場合ではない。地面を蹴り、目を狙って突きを繰り出した瞬間。影が盛り上がり刃となる

(止れん……このまま行くしかッ!?)

既に最高加速に入っている。ポチの拙者を呼ぶ声がするが……そのまま踏み込むしかない。そう思った瞬間

「エイワズッ!」

凜とした声が響き、拙者の前に奇妙な文字が浮かぶ。それは伸びてきた影の刃を弾き飛ばす、何の憂いもなくなった拙者は全力で刀を突き出す。だが周囲に響いたのは甲高い音

(目を狙ったと言うのに!)

急所なのは間違いない。だが何かに弾かれてしまった、大きく後に飛びのき刀を構える。すると信じられない事に切っ先が存在していなかった……まるで切り落とされたかのように……見えなかったが狼か、影か何かが拙者の刀を切り裂いたのだ

「大丈夫ですか?」

「……助太刀感謝します」

薄い紫の鎧と大きな槍を手にした女性が声を掛けてくる。その声から、拙者をさっきの一撃から護ってくれた文字の使い手だと判断する

「犬塚クロと申します」

「ご丁寧にも、私はオーデインの娘。ブリュンヒルデと申します」

挨拶を程ほどにかわし、巨大な狼に視線を向けると、弾丸のような勢いでポチが吹っ飛んでくる

「ちいっ! 固いッ!!」

地面を削りながら止ったポチが大きく舌打ちする。刀を見ると、やはり拙者と同じく刃毀れしている……

「しくじったな、もっと良い刀を盗んで来れば良かった」

「全くだ」

拙者とポチの刀は人狼の刀鍛冶が打った刀だが、長老の家に侵入し

て八房に並ぶ刀を盗んで来れば良かったと後悔しながらも、獲物を失ったくらいで戦えぬほど人狼は弱くは無い

「はっ!!」

拙者とポチの気合の入った声が重なり、折れた部分から霊力の刃が姿を見せる。霊刀と霊波刀は人狼のお家芸だ、刀を失った程度で戦えなくなる訳が無い

「あの狼は影を基点に転移しております、私の術で転移は封じ切れないので……テイワズ・エイワズ!」

奇妙な文字が拙者とポチの前に展開され、それが身体に吸い込まれるようにして消えていく

「むっ、これは……力が満ちてくる」

「ルーン魔術です。私の槍では有効打になりませんので、支援をさせていただきます」

そう笑うブリュンヒルデ殿に小さく笑い返す。あの狼が拙者たちを狙う理由。それは霊刀の有無だろう……雄叫びで動けなくした横島殿達には目もくれない、それは拙者達を脅威、もしくは厄介と判断しているのだろう

「ポチどうだ?」

「問題ない、爪と牙の1本でも折ってくれる」

気合に満ちているポチ。疲労はあるが、気力は充実している。この様子ならば問題ないだろう……俺達を睨み周囲を移動していた狼が牙を大きくむき出しにて、飛びかかってきた瞬間

「ふっ!!」

黒い影が飛び出してきて、狼の横っ面に拳を叩き込む。信じられない事に狼の巨体が吹き飛んだ

「ふむ。固い……だが殴れない訳ではないようだ」

黒い奇妙な服を着た男が拙者達の戦いに加わったのだが……その指が折れているのは見えていた

「大丈夫なのか?人間。指が「指がどうした?私は私の信仰を貫く、助けを求める者を救うのだよ」

指が折れた事など全く意に介した素振りを見せない男に、それ以上

に尋ねるのは非礼になると判断した。既に体勢を立て直し、こつちを睨みつけている狼を睨み返し、拙者とポチは霊波刀を振りかざし、狼へと駆け出していくのだった……

シズクの治療の甲斐があつてか少し身体感覚が戻ってきたが、それでもやはりまだ手足が動かないし、立ち上がる事も出来ない。言峰神父がどうやって追いついてきたのかは判らないが、合流してくれた事に心から安堵の溜息を吐く

「この私までも……あの犬……」

くえすが唇を噛み締めて凄いで目で狼を睨みつけている、魔女である自身に強い誇りを持っているくえすだ。彼女にとって魔力を伴った攻撃で動けない自分に激しい憤りを覚えるのは判る。だが相手は私達の常識を超えていた

「ウオオオオオッ!!!」

雄叫びを上げながら縦横無尽に駆け回るその巨体。軽く掠つただけでも人間ならば一瞬で挽肉になるであろうその身体……そして影から影へと移動すると言う異常な動き、攻撃手段はその背中に背負った黒い影の刃とその巨体を生かした体当たり、そして影を刃に変えるの3種類だが、悔しい事にそれら全てが抜群にかみ合い、攻守共に隙が無い

「……大丈夫か？横島。気持ち悪いとか、そういうのは無いか？」

「うん、大丈夫だよ」

アリスちゃんとシロの側にいる横島君が平気そうな表情で返事を返す。魔人絡みかと思つたけど、あの様子なら違いそうだ。マタドールの時も、だいそうじょうの時も、今思えば横島君の様子はどこかおかしかった。心眼の声が聞こえないのは、きつと横島君の魂の調整をしているのだろう。おキヌちゃんとノツブが姿を消しているのだ、私達も魂にダメージを受けている可能性は高い

「ちっ……決め切れない。なんだあいつは……」

戦況を見つめていた高城が大きくした打ちする。人外の範疇にい

る言峰綺礼にブリュンヒルデ、それにクロさんにもう1人の人狼と言う布陣なのに追いきれず、有効打は丸で無い……あの異常な攻撃力に堅牢過ぎる守備。弱点がまるで見当たらない

「状況はかなり不味いですね。美神さん」

「うん……こうやって見てる場合じゃないのは判っているんだけどね」

動けるなら合流するべきなんだろうけど、意識こそハッキリしているがまだ手足は麻痺して、思うように動くことが出来ない。この状況で戦いに出るということは完全に足手纏いになると言うことだ。邪魔にならないように精霊石の結界を作り身を守ることが今の私達に出来る最善である。しかし不思議なのは、どうしてあからさまに足手纏いの私達を狙わないのか、何故執拗にクロさん達を狙うのか？

(そこに何か手掛かりがある?)

さつきまでは私達を執拗に追いまわしていたが、クロさんの姿を見てからはクロさんだけを狙っている。そこにあの狼の弱点を知ることがあるのだろうか？

「お兄ちゃん。あの狼……生き物じゃないよ?」

「え?」

アリスちゃんが横島君にしがみつきながら、震える声でそう告げる。横島君がどういふことか尋ねると、アリスちゃんは月を指差して「月と同じ気配がするの……」

影を渡る能力とアリスちゃんの言葉であやふやだった何かか形になろうとしている。だがアリスちゃんの言葉は私達だけではない、あの狼にも、そしてブリュンヒルデ達にも届いていた

【ガアアアアアアッ!!!】

怒りの咆哮が初めて私達に向けられ、影が高速でアリスちゃんと横島君達に迫る。それはこれ以上自分の正体を知られるわけに行かないと言わんばかりの攻撃だった。反射的に蛍ちゃんと一緒に持っていた精霊石で結界を作るが……伸びた影はまるで氷を貫くように一瞬で精霊石の結界を突き抜ける。その信じられない光景に一瞬完全に思考が停止した

「……やらせるかッ！」

シズクが氷の壁を作り出す、それはなんと氷の前で弾ける様にして分かれ、横島君達目掛けて伸びていく……

「コーンッ！」

タマモが身体を揺らしながら炎を放つが、影の刃はまるで意思を持ったようにその炎をかわし、横島君達へと伸びていく……私達は危ないと判つていても、身体が動かないので横島君の名前を呼ぶことしか出来ない

「危ないッ！くっッ!？」

私達が動けないのに、横島君は弾かれるように立ち上がり、サイキックソーサーを展開するが、影の刃はそれを簡単に貫き横島君の肩を抉る

「せんせっ！っぐうっ！」

「お兄ちゃん！シロッ!？」

シロが横島君の名前を呼び、短い霊波刀で刃を切り払おうとするが、シロも黒い刃に切り裂かれる。だが2人が立ち塞がった事で、アリスちゃんは守られた。だがアリスちゃんの悲痛な悲鳴が周囲に響く……こんな状況でも動けない。一体あの咆哮にどれだけの魔力が込められていたのか……動かない身体に歯噛みするが、横島君とシロの作り出したその短い時間は高城が横島君達に駆け寄る時間を与えていた

「シッー！」

鋭い声と共に繰り出された霊刀が、影の刃を両断し消滅させる。その圧倒的な技量に驚愕し、ただ切り裂いただけじゃない、一瞬放たれた魔力で何かを切り裂いた所までは判断がついたからだ

「っぐうっ!!このおッ!!伸びろーッ!!」

肩を抉られた事で、その顔を苦痛に歪めながら横島君が突き出した手から霊波刀が伸びる。それは信じられない速度で狼へと伸び

【グッルウウウッ!？」

狼の右足に突き刺さった。初めて苦悶の声を上げた狼は大きく後ずさり、横島君を暫くにらめ付けるとアスファルトを砕きながら跳躍



し、山の中へと消えて行った……

「……横島ッ！」

一瞬の攻防のあと、弾かれたようにシズクが横島君の元へ走り。ブリュンヒルデ達も駆け寄る中、横島君は肩からの出血で顔を青白くしながら懐から札を取り出し、それに文字を刻むとシロに貼り付けてその場に倒れこんだ

「お兄ちゃん!？」

「おい！横島ッ!？」

アリスちゃんと高城の悲鳴を聞きながら、この状況でも身体が麻痺して動けない自分に、腹が立って、腹が立って気が狂いそうになりながら、今自分出来る最善をする

「この近くにGS協会が所持している別荘があるわ！そこなら薬とかもあるかもしれない！」

もとよりその場所に逃げ込むつもりだった。ここまで来ればそう遠くは無い

「判りました。横島とシロが危険なので私が美神と横島とシロを連れて先行し、到着後にルーンで皆さんを直接呼び寄せる。それで良いですわね?。」

良いも何もまともに動ける面子が少ない今。私達は反対出来る立場に無い

「クロ、お前は残れ、拙者がシロに付き添う」

「し、しかし」

「娘の事になるとお前は冷静になれん。少し頭を冷やしておけ」

ポチという人狼はそう言うと、狼に変化しシロをその背中に乗せる。私と横島君はブリュンヒルデに抱き抱えられ、月が照らす夜空を飛び立つのだった……

ブリュンヒルデ殿の術で一瞬で屋敷の前に移動した拙者達は一晩寝ずの番を行い、日が昇ると同時に屋敷の中に足を踏み入れた。大きな屋敷の一室で横になっている横島殿とシロ。だがシロは横島殿が倒れる前に施してくれた術のおかげか出血も少なく、今は穏やかな寝

息を立てている。横島殿は汗が酷いが呼吸は整っていて、命に別状は無いだろう。そんな横島殿に寄り添うように眠る幼女と小さな猪と子悪魔、その姿を見れば横島殿の人となりはある程度ポチにも理解出来ただろう。そして拙者はまた横島殿に借りが出来てしまった、拙者の命と娘の命……横島殿にはただただ感謝しかない

「それでクロさん、ポチさん、あの狼何か心当たりがあるの？」

美神殿がそう問いかけてくる。あの狼に関しては正直拙者もポチも知っている事など殆ど無いのだが……持ち出された刀については知っている

「あれは八房。人狼族最高の刀鍛冶が我らの祖先、フェンリル狼の牙を用いて作った妖刀と聞いている。まあ、そのフェンリル狼とやらがなんなのかは知らないのだが……それが昨日何者かに奪取され、拙者はクロと共に奪還に来たのだ」

ポチが頬をかきながら八房と拙者達がどうしてこの場所に居るのかという理由を話す。だが美神殿達はフェンリル狼の名を聞いて顔を引き攣らせる

「私のお父様の命を1度奪った魔狼ですわね……」

「神と精霊が満ちていた時代の狼ね……世界を滅ぼすほどの力を秘めているわ」

長老から偉大な狼の神と聞いていたが、まさかそこまでの存在とは知らなかった……世界を滅ぼす力を秘めた強大な神と聞いていたが、正直話半分で聞いていたので、まさかそんな相手だったとは夢にも思わなかった

「フェンリル狼となると、今の神魔では勝てぬ相手だな。ブリュンヒルデ様、グレイプニルを借り受けることは可能ですかな？」

あの狼と殴り合いをしていた男。言峰という男がブリュンヒルデ殿に問いかけるが、ブリュンヒルデ殿は顔を歪め

「それが天界とも魔界とも連絡がつかないのです。恐らく妨害電波が発生していると思われます」

「となると、あの狼はガープの手の者という訳か」

小柄な少女だが、威厳と威圧に満ちた少女がそう告げる。拙者の尻

尾が逆立ったままなので、見掛けと違うと言うのは嫌って言うほど理解していた

「聖奈さん、それは天界や、魔界からの支援は絶望的と言う事ですか？」

横島殿の額に濡れたタオルを置いていた蛍殿が振り返りながら尋ねる

「……申し訳ないですがそうなります。元々電撃戦を得意とするガープ達です、情報の分断は彼らの得意技です」

天界や魔界と言う場所から応援が望めないとすれば、応援を頼む事ができる場所からになるだろう

「クロさん。人狼の里からって応援は頼めるかしら」

「……難しいでござるな」

元々長老は完全に傍観するつもりだったと告げると美神達の顔が険しくなる。元々人狼は人間が好きではない……協力を得るのはかなり難しい

「最悪武器をかつぱらって来るぞ。里には銀の槍や弓が有る、あれがもし八房を持ち出された時に使えと言われている武器だ」

応援が絶望的ならば武器を奪うしかない。ポチの意見には拙者も全面的に賛成だ

「……だが、あれはフェンリルとは言いがたくないか？魔力も神通力も足りていない」

水神様がそう告げる。あれでも十分すぎるほどの脅威だったのに？あれよりもまだ強くなるのかと戦慄する

「月の魔力で偶像を形にしていたと私は考えます。フェンリル狼はもつと巨大ですから、恐らく横島さんに傷を付けられた事で警戒心が生まれたのでしよう」

あの高密度に圧縮された霊波刀か……あれは確かに拙者も驚いた。まさか人間であそこまで強力な霊波刀を使うとはと驚愕した物だ。だがそれは、相手が凶暴なだけではなく、少しでも不利な条件があれば撤退するほどの知性を持っているという証拠で、状況の悪さを如実に示していた

「凶暴性だけではなく、冷静さも持ち合わせているか……厄介な相手だな」

「そうね、とりあえず。琉璃に連絡を取って見るわ、満月まで10日あるし……くえすも何か調べているみたいだしね」

今朝から姿を見せない、黒い魔女殿。あの触れば切られるような気配を持った少女の姿が見えない理由に納得した。こうして話し合うよりも、まずは敵の情報収集を選んだのは決して間違いないからだ

「とりあえず皆さんも食事にして、少し休んだ方が良いでしょう？」

幽霊のおキヌ殿が食事の準備も出来ましたと笑う。昨日からろくに休んでいないので、身体を休めることも大事だ。向こうも怪我を負っているのでいきなり襲撃を仕掛けてくることは無いだろう

「私は朝の祈りを捧げていないので、それをしてから頂こう」

言峰殿はそう告げると部屋を出て行く。固い気配を伴った巖のよくな男……その力強さを見れば、どれだけの修練を積んできたのかが判る。味方になってくれるという事はこれほど頼もしい事は無いだろう

「う、うーん……あいてて……あれ？ここ何処？」

横島殿がゆっくりと身体を起こし、周囲をきよときよと見回している

「横島！良かった。大丈夫？気分が悪いとかは無い？」

蛭殿が嬉しそうに笑い、気分はどうだと尋ね、水神様が水を手渡している姿を見て小さく苦笑していると、シロが何事か呟く、慌てて駆け寄ったその時。シロの姿が光り、光が収まった時そこには幼女から少女と言える年齢に成長した姿があった

「……成長期か？シロ？」

「判らないでござるよ、せんせー」

なんか間の抜けた会話をしている2人に緊張感に満ちていた部屋の中に笑い声が零れる

「超回復だわ。そうね、そうよね。これだけ魔力とか、神通力に満ちているんだもん。吸収して身体を回復するのは判ってた事だわ」

美神殿がうんうんと頷きながら、この現象を説明してくれる。娘が急成長したのは驚いたが……元気になってくれたなら良かったと思った瞬間。ぐーっと言う音が重なり

「腹減った……」

横島殿とシロの声が重なり、先ほどまで部屋の中に満ちていた重苦しい沈黙は何時の間にか何処かへと消え去っていたのだった……

リポート19 魔狼の咆哮 その4へ続く

## その4

レポート19 魔狼の咆哮 その4

ピート君達から黒い影に襲われ、美神さん達がバイクで逃走していると聞きGS協会とエミさん達は臨戦態勢に入った。正体不明の敵に狙われている美神さん達の安否が心配でならない。そんな時電話がなったので反射的に電話を取る

「もしもし」

『琉璃。私よ、美神』

受話器から聞こえてきた声に思わず安堵の溜息を吐くが、安心出来る状況ではないので意識を引き締める

「今何処に？」

『GS協会のセーフハウスの……67。山の中の奴』

地図を広げセーフハウスの場所を確認する。東京から長野の中間辺りのセーフハウスだ

「大分逃げましたね」

『うん。影を軸に転移してくる狼……あの影が手にしていた刀「八房」って言うらしいんだけど……あれフェンリル狼の牙で作った刀らしいわ』

美神さんの言葉に思わず嘘でしょ？と尋ねるが、美神さんは暗い声で本当と呟く

『あの刀を封印していた人狼族が教えてくれたわ。まだ完全に復活して無いらしいけど、それでも軽自動車よりも遥かに大きい狼に襲われて大変だったわ。写し身だと思うけど、フェンリル狼の権限を持っているのは間違いないらしいわ』

咆哮に魔力を乗せてこっちの身体の自由を奪うとか、影を操るとか、本当に規格外の化け物だったと呟く美神さん

「神魔の方に連絡は？マルタさんに向かってもらいませうか」

天界から降臨している聖女マルタさんを応援に送りませうか？  
と言うが美神さんは止めた方が良いわと断言した

『無理、ブリュンヒルデと合流してるけど、天界・魔界との連絡は妨害されてるみたい。ガープの手の者って予想してる。こつちからカズマに連絡できるから、彼に合流して貰うつもり。良い？東京を手薄にしたら駄目よ』

状況は最悪だ。こちらから応援を出せば東京が手薄になり、その間にガープが出てくるという可能性も浮上してくる。となればマルタさんと三蔵法師様は動かせず、カズマさん……つまりはビュレトさんが頼みの綱となる

『とりあえず、これから人狼族の里に私とクロさんの2人で行って見る。また何かあればこつちから連絡するから、多分支援物資とかを次の満月までに頼む事になるから、その時はよろしく』

美神さんはそう言うと言った。心配しているエミさんや唐巢神父に伝える事も考えたが、今は私達から出来る事は無い。とりあえず今出来る準備として、精霊石や、破魔札の準備をするくらいだろう。

「それにしても本当にフェンリル狼が相手となると……これじゃあ駄目ね」

神代の中でも最強に属するフェンリル狼に今の時代の精霊石や破魔札がどれだけ効果を出すか？となるとやはり不安が生まれる

「神卸しが必要かもね」

あまり私が協力できることは無かったけれど、今回こそは私が最も協力出来る状況かもしれない。私は精霊石などの手配をするのと同じに、神卸しで使う魔法陣を描く為の特殊な墨と筆の発注もすることにするのだった……

琉璃との電話を終えてバルコニーに出るとシロと横島君が凄まじい勢いで肉を食べていた。失った血を補充するために肉を食べるよいうに言ったが、本当に凄い食べっぷりだ

「……そんなに慌てて食べるな。材料はある」

「んぐんぐ、いやあ、腹へって、腹へって仕方ないんだよ。食べても食

べても足りない感じ」

「ぐくんっ！拙者もどぎざる」

そう言って再び肉に手を伸ばす横島君とシロ。多分霊力を奪うという特性は狼の攻撃にも適応されていたのだろう、血だけではなく、霊力も回復させるための異常な食欲と言う所だと思う

(しかしまあ、いきなりずいぶんと成長したわね)

前に見た時は5歳位だと思っただけど、今は背も伸びて、少し胸も膨らんで来ている。外見的な年齢で考えると小学校高学年くらいに見えるから10歳前後と思うけど……ここまで急激に成長すると本人の感覚とかが少し心配になってくるわね

「美神。琉璃とは連絡が付きましたの？」

セーフハウスの一室に閉じこもっていたくえすは、ワインを手にしながら首尾を訪ねてくる

「とりあえず連絡はついたわ。精霊石とかの準備はお願いしたわよ」

私達が狙われているのは明白で、動き回るのは危険だからそういう道具を集めるのは琉璃に頼んだ

「クロさん。今夜中に出発したいけど大丈夫？」

「拙者は大丈夫でござるが、協力を得れるかは判らないでござるよ？」

判っていると返事を返す、協力が得れない場合は本当に武器を奪つてでもあの狼への対策をするつもりだ

「長老に言っつてやれ、シロが傷つけられたと。それでもお前は見て見ぬ振りをするのかとな」

酒を呷っているポチがふんつと鼻を鳴らす。少々ぶつきらぼうな所は有るが、悪い人狼では無いようだ

【はぐはぐっ！ったく！あの犬っころめ……とんでもないことをしてくれたものじゃ】

霊力を消耗したとががつと肉を食うノツブ。幽霊だから控えろという訳にも行かないし、何よりも次の満月までに横島君とシロの霊波刀をより強くする必要がある。そのための訓練相手として霊力を蓄えてもらうのは急務だ

「ノツブ、横島とシロの事も考えて食べてよ？」



「わかつとる！正直今回ワシはあんまり役に立たないからの！2人の訓練相手が出るくらいの霊力を蓄えるだけじゃ」

蛍ちゃんの言葉にノツブは真剣な表情で返事を返す。馬鹿っぽい所はあるが、そこは歴史に名を残す戦国大名だ。戦略眼などは私よりも遙かに上だ

「ビュレト様には使い魔で連絡が付きました。明日には来てくれると思います」

「ビュレトのおじさんも来るの？わーい！楽しみだなー♪」

聖奈の言葉に楽しみだなあつと笑うアリスちゃん。見ていて微笑ましいが、状況は悪く。そして決して気を抜ける状態ではない。

「ビュレトは強いが、それでも相手が相手だ、安心しきるなよ？」

ワインを手に肉を少しずつ頬張る高城。もう普通に会話する程度には親しくなっていると思っただけど……

「高城さん、カズマさん知ってるの？」

「……まあ私も聖奈と似たような存在だからな」

あ、そうなんだーと笑う横島君。確実に横島君のマイペースとか、何も考えていない素振りに気が緩んでいると思う、ちよつときよどきよどしているのがそれをよく現していた

(横島君って人の素を引き出すわよね)

例えるなら猫だ。気がついたら懐の中にいる感じ、触ろうとすると逃げるのだが、それでも近くから見ているって感じなのよね

「横島も飲みますか？」

「いや、神宮寺さん。俺未成年ですよ？」

堅苦しいですわねとくえすは言うが、あれはどう見ても自分も構えと言っているようにしか見えない

「ちよつとくえす、未成年に酒を勧めないですよ」

「一口くらい問題ないですよ」

横島君と一緒に飲みたいくえすとそれを阻止する蛍ちゃん。魔女って言うのを地で行ってるわね……横島君はオロオロしてるだけだし……言峰神父は神父で

「うむううう……」

赤黒いマーボーを喰りながら食べている。何を考えているか判らないと言え、横島君と良い勝負かもしれないわね。そんなことを考えていると目が合ってしまった

「食うか？」

「食うかッ!!」

誰が好き好んで匂いと湯気だけで目と鼻が痛くなる物を口に運ぶ物か！クロさんとポチなんて露骨に言峰神父から離れてるし！私と言峰神父のやり取りを見て、横島君達が楽しそうに笑う。わいわいと楽しそうに食事をする面子を見ながら、これからの事を考えると如何しても気持ちが悪くなるのを感じたのだった……

「くえす、聖奈、それにシズク。私がない間よろしくね」

正直この面子なら何が起きても大丈夫だろう、私は横島君達の事を聖奈達に任せ、ここから更に先にあると言う人狼の里にクロさんと一緒に向かうのだった……

あの狼には霊波刀が効くと言うことで横島さんとシロさんの霊波刀を鍛えるというのが当面の方向性になり、アリスちゃん達は精霊石で人化したタマモとチビとうりぼー、そして閣下が調べ物ついでに屋敷に残ってくれるという事になり、私達は近くの川原で横島さん達の修行となりました。満月まで10日ほど……本音を言えば付け焼刃と思っていたのですが……

「俺ってあれだ。思い込みだ、絶対切れる、大丈夫って思いこんでたらこうなった」

「なるほどー・信じてるって事でござるなー！」

思考回路が近いのか、知性レベルが近いのか、横島さんのざっくりとした説明をシロさんは理解し、そしてシロさんに説明する事で横島さんも自分の霊波刀への理解を深め

「出来たでござるよー！前よりもずっと強い！」

「やったなー！」

半日ほどで霊波刀の強化を成し遂げてしまった……これには正直私も神宮寺さんも驚いた

「相変わらず化け物ですこと」

「ですね……才能の塊です」

前から思っていたことだが、横島さんは英雄としての素質がこれでもかと詰まっている。思わず私でさえも惹かれてしまうほどに……

(うつ……でも)

ルイ様にシヨタコンシヨタコンと弄られた事を思い出すと、どうしても横島さんとの距離感が難しい

「聖奈さん、神宮寺さん、蛍ー♪出来ました！出来ましたよー♪」

子供みみたいな無邪気な顔で出来た出来たと笑う横島さん。愛嬌のある顔をしているので愛らしさをどうしても感じてしまう。弟のジークは私に対しておびえを見せるのだが、横島さんにはそれが無いから余計にそう思うのかもしれない

「そうね、良かったわね。でもまだこれからよ」

私と神宮寺さんが停止している隣で蛍さんが笑いながら、まだこれからよと声を掛けると横島さんは判っていると返事を返す。確かに今は使えていても実戦で使えなければ意味が無い

【よっし、そろそろワシの出番じゃな】

【私もお手伝いしますよ】

ノツブと牛若丸が立ち上がり組稽古をやろうという流れになったその時

「おい、横島。お前ナイフ持ってるだろ？それを媒介にしろ」

じっと見つめていたポチが横島さんに近づきながらそうアドバイスをする。横島さんはGジャンのポケットに手を入れて、金色のナイフを取り出す

「これですか？」

「そうだ。手から集束した霊波刀を出すのも良いが、刀とかの刃物を使え。そうすればより強固な剣になる。シロ、お前にはこれを貸してやる」

ポチはそう言うと言った腰帯に挿した脇差をシロさんに投げ渡し、やってみると言う。霊波刀は人狼の得意技なのでどうなるのか見ていると

「のわったたたーッ?!?!」

「あわわわあああ!？」

2人とも馬鹿でかい霊波刀を作り出し右往左往している、ポチはふんつと鼻を鳴らすと、腰に挿した刀を抜刀し2人の手からナイフと脇差を弾き飛ばし

「手からやるのは簡単だ。刀や媒介を使って作れて1人前、まだまだ甘い。組稽古など早すぎるわ」

ポチも刀を構え、霊波刀で刀を覆うがそれでも刀より大きくなって  
いる

「媒介が有るからでかくなる、それを刀のサイズに圧縮するんだ。その歳でそれだけ出来るって言うのは才覚はある、それは認めてやるからそれに喜ばず、鍛え上げるんだな」

刀を鞘に収め、森の中へ向かうポチ。その後姿が妙に気になり、蛭さんと神宮寺さんに2人の様子を見ていてくださいと頼み。ポチの後を追いかける

「何だ？拙者に文句でもあるのか？」

「いえ、そういう訳ではないのですが……何故あのような嫌われるような事を？」

もつと他に言い方があったはず、そう思い、私がそう尋ねるとポチはふんつと鼻を鳴らし

「修行中の相手を甘やかしてどうする。厳しく、突き放すくらいで丁度良いんだ。褒めたりするのは論外だ」

子供だから調子に乗ると言ったポチは刀を地面の上に置いて、座禅を組みながら

「拙者も修行中の身だ。邪魔しないで貰おうか」

そう言う目目を閉じて霊力のコントロールをするポチ。自分にも他人にも厳しい性格のようですね、私は失礼しましたと呟き、横島さん達が修行している川原に戻ると

「む、むむうううー」

「く、ぐぬううー」

刀とは思えない大きさに肥大している霊波刀を必死にコントロールし、圧縮しようとしている。だが上手く行かず暴走しかけては

「ふんっ!!」

言峰の拳で手から脇差とナイフを弾き飛ばされている。正直私達は霊波刀など使えないので見ているしか出来ない、だがポチの言葉は2人に強く響いたらしく

「うーん、やっぱりただ霊力を込めるだけじゃ駄目っぽくない?」

「そうでござるな」

時折座り込んであーでもない、こーでもないと話し合い。蛍さんや神宮寺さん、そして言峰神父に霊力のまとめ方ってどうすれば良いのか?と助言を聞いて、また繰り返し霊波刀のコントロールの修行に戻る。失敗しても前向きに頑張る姿にこちらも頑張れと応援したくなる気持ちになる。私も2人に何か助言が出来るのでは?と思い2人の元へ足を向けるのだった……

なお横島達が修行している間。屋敷で留守番をしているアリスはと言うと……

「うーりぼー、うーりぼー、うーりうーり、うりぼー♪」

「「ぶぎ、ぶーぎぎー♪」」

「みーむーみーむむー♪」

アリスの謎の歌にあわせて増えるうりぼーとその回りで踊るチビ

「うりぼー、うりぼー、うーりうーり、うりぼー♪」

「「「ぶぎ、ぶーぎぎー♪」」」

2匹が4匹、4匹が8匹と倍々に増えていくうりぼーは部屋を徐々に埋め尽くして行き……

「うりぼーって言葉がゲシュタルト崩壊しそうだな」

自分の頭の上や膝の上でびぐびぐ鳴いているうりぼーに高城が深い、深いいため息を吐き

「大事な事は何が起きてても受け入れる事だわ」

横島という限り、訳の判らない事はおきるんだからと頭の上に3匹のうりぼー。膝の上に2匹、そして背後で丸くなっているうりぼー3匹に囲まれているタマモの言葉に、高城は更に深い溜息を吐くのだった……

「うりぼー、うりぼー、うーりうーり、うりぼー♪」

「「「「「ぶぎ、ぶーぎぎー♪」」」」」」

そしてそんな2人に気づかないアリスとうりぼーはノリノリで歌を歌い続け、うりぼーは増え続けているのだった……

横島達がセーフハウスの近くで修行している頃。美神とクロは人狼の里に辿り着いていた

「結界で里全体を隠すって凄いいアイデアね」

霊視ゴーグルがなければ発見出来ないほどの高密度の結界。それを維持している人狼に感心するのと同時に驚愕する

「ずっと前の祖先が用意してくれた物を維持しているだけでござるよ。それに八房を奪った相手には何の効果も発揮してくれなかった」

八房を盗んだ相手と言うのは恐らくガープ。あれほどの上位魔族ならば結界を破壊するのはわけないだろう……疑問は1つ残るが、それでも納得出来ない訳ではない。疑問は何故西洋の悪魔であるガープが人狼の里の場所を特定出来たかだ

「恐らく警邏の若い衆が襲ってくると思われるので、どうか拙者の後ろに」

クロさんの言葉に頷き、彼の背後をついて歩く。一応籠絡に使用えそうな者は用意しているが、襲われた時に対する備えは必要だ。洞窟を抜けると、遠くに藁葺き屋根の家が見える

「あれが人狼の里ね」

前のクロさんに尋ねた瞬間。木々の間から完全武装した若い人狼が飛び降りてくる

「クロ殿、何故人間を案内したのですか!」

「必要な事だ。拙者を救ってくれた恩人が八房を持つ相手に狙われている。それを見捨てる事など出来ん」

そこを通せとクロさんが威厳を伴った声で言うと、2人は茂みの中に消えて行く。私はその姿を見ながら

「クロさんって里では上役だったりするの?」

「一応村一番の剣士と言われております。ポチは2番目です」

人狼の里の有力者が姿を消せば、それは厳戒態勢にもなるわね。私は先ほどの完全武装も納得だと思った、八房を奪った相手の再襲撃に備えていたのだろうか

「それで長老って言うのの話は通じるの?」

「頭が固すぎるが、シロが救われた話をすれば十分に交渉に持ち込める。最悪の場合、武器を奪えばいい」

どうせ里の中で拙者やポチより腕の立つ者はいない、武器だけあればいいと言うクロさんにそうねと返事を返す。やる気のない味方がいても足手纏いになるだけだ。それなら最初からいない方がいい

「クロ。何をしに戻った」

案内された長老の家には10人ほどの若い人狼と、立派な髭を生やした老人が1人。その老人は鋭い視線でクロさんと私を睨みながら、話す事は無いと言わんばかりにそう口を開いた

「武器を借りに来ただけだ。拙者は長老、貴方の下した決断を愚かだと思っっている、八房を盗んだ相手は人狼を狙っている。完全に復活すれば、我らとて危険なのだ」

「仮にそうだとしても、お前は掟を3度も破った。里一番の剣士としてもそれは到底許せる事ではないぞ」

ギスギスとした重い空気が満ちてくる。これでは話し合い所ではないと判断し、私は背負っていた鞆からここに来るまでに1軒だけ合ったスーパードで買ってきたある缶詰を取り出した

「まあいきなり話を聞いてと言うのもなんだから、手土産を持ってきたわ。話し合いはその後でも良いでしょう?」

「そ、それは……?」

長老の目が私の差し出した缶詰に向けられる。そうこれはトップブリーダーが推薦する、NO.1ドッグフード「ワンちゃん大満足!」シリーズの最新商品8種のビタミンと牛肉入りだ

「日も落ちたし、こうして睨みあってるよりまず食事にしたほうが有益だと思わない?ほら、長老さん」

缶きりで蓋を開けて長老に差し出す。べ、別に信用したわけではと

か言いつつ、ドッグフードを受け取る長老さん。私は他の人狼にもドッグフードを差し出しながら、クロさんにも食べる？と尋ねると「かたじけない」

頭を下げながら受け取るクロさん。人狼が全員美味しい美味しいと食べている事で雰囲気が変わったのを感じ、私は自分用に買っていたおにぎりの包みを空けながら、とりあえず交渉には入れそうねと安堵の溜息を吐くのだった……

リポート19 魔狼の咆哮 その5へ続く



## その5

レポート19 魔狼の咆哮 その5

「なるほど……事情は判りました」

ドッグフードを勢いよく食べていた長老が湯呑みを手にして、一息つきながら口を開く

「しかし相手が相手ですので、我らは……」そんなにフェンリル狼が怖い？」

私の言葉に長老がクロさんを見つめるが、私は違うわよと即答する。確かにクロさんの話で確信を持ったのは事実だが、あの姿、あの威圧感を感じればフェンリル狼の事は容易に想像がつく

「北欧神話によるとかつてこの世は精霊と神々の物だった」

別に北欧神話は専攻していたわけじゃない。それでもGSなんていう家業についていけば、自然とそういう伝説や神話には詳しくなっていく物だ

「悪神ロキの息子でその口は世界を飲み込むほどに大きく、戦いの神テュールの腕を食いちぎり、神々の全面戦争の折には主神オーディンを食い殺した。そして神々は滅び、人の時代になった」

「良くご存知ですな」

長老が小さく笑みを浮かべ、家の中の人狼達を見渡し、そこまでご存知ならばと呟く

「我らは皆フェンリル狼の魔力を引き継いだ者達ですじゃ。そして八房はフェンリル狼の牙で作った刀……あれにはまだフェンリル狼の意志が宿っているとされております」

嫌な情報が出てきたわね……あの黒い影と狼。あれがもしガープが呼び出した何かと仮定すると……

「長老。拙者達が戦った狼は古い人狼族の着物を着ていたように見え  
た」

「……昔里を出て、海を渡った者達がいたな。いや、誤魔化しはやめよう。フェンリル狼の意志に飲まれた者達をワシは里から追い出した

……数の少ない人狼を減らす訳にはいかなかったから」

人狼を狙うのは、自分達を迫害した者への復讐って訳か。通りで私達よりもクロさん、ポチを狙ったわけだわ……

「ちなみに復活したときの対処法とかは伝わってないの？」

まだ完全に復活する前ならば対処法もあるかもしれない。何か無いのか？と尋ねると長老は顎鬚を摩りながら

「里に伝わっている銀の弓矢などが武器としてはありますが……クロ。どう見る？」

「足りん。全く持つて足りん、相手の力の底が見えんからな」

影を操る能力と卓越した剣術を持つ黒い影。それだけでも脅威なのに、巨大な狼としての姿もある……銀の弓矢だけではとてもじゃないが勝機なんて見いだせない

「……人狼族の守護女神の力を借りれば、勝てるやも知れませぬ」  
「守護女神？そんなの聞いた事が無いでござるが？」

あちこちからそんな話は聞いた事が無いと言う声上がる。深く溜息を吐く姿からその情報を意図的に隠していたのが一目瞭然だった。ゆつくりと立ち上がり、掛け軸の手を伸ばす長老

「我らの守護女神……それは」

掛け軸を勢いよく引くとその後ろに隠された物があらわになる。それは複雑に入り組んだ魔法陣……

「我ら人狼族の守護女神……アルテミス様を召喚する為の魔法陣それを貴女に託しましょう」

差し出された掛け軸をしっかりと受け取る。フェンリル狼に対する切り札は確かに人狼族の里にあったのだ……だが問題は  
(なんていう複雑な魔法陣)

しかも複雑なだけではない、面積もとんでもないものだ。私はその掛け軸を手に立ち上がり

「クロさん、先に戻るわ。あとで武器を持つて戻ってきて」

「それは構わないでござるが……それで何とかなるのではないか？」

「この魔法陣を用意しようと思うと準備が物凄く大変なのよ、今からやっても満月に間に合うかギリギリなの。だから早く戻って準備を

してくるわ」

くえすにブリュンヒルデ……それと東京からエミを呼んでもギリギリだろう。私は急いで来た道を引き返し、山の麓に停めているバイクの元へ走るのだった……

ブリュンヒルデと蛭から連絡を受けて横島達を合流した。フェンリルの牙を使った刀を持つ相手との戦いに備えて特訓しているとの事だが、横島の訓練を見ていて問題は直ぐに判った

「横島。お前は止めておけ、ポチに師事してもお前は強くなれない」  
ポチという人狼の腕は確かだった。攻撃のタイミング、防御勘、間合いの取り方など一流だ。正に正統派の剣士と言えるだろう。だが横島の師匠としては全く持って向いていないのが数分見ただけで判った

「ビュレト様もそう思いますか？」

「ああ。横島とポチじゃ駄目だな」

俺が感じたんだ。恐らくブリュンヒルデも同じ感想を抱いたはず。蛭やくえすに判らないだろう、これが判るのは俺やブリュンヒルデと言う武器を使う者だけだろう

「どういうことですか？横島はずいぶん頑張っていると思いますけど……」

「霊波刀の圧縮もかなり上手くなっていますわ。ビュレト様」

蛭とくえすがそう言う、俺は頭をかきながら違うそうじゃないと言つて、横島に近づいて

「お前には正道の剣術は合わない。お前だつて判っているんじゃないのか？」

「……なんとなくは……牛若丸とかノツブちゃんによく言われますから」

本人が反抗しなかったのは自分でもうすうす感じていたからだ。ポチの剣と自分の剣は致命的に違うのだと

「どういうことか？」

「それは俺も感じていた、名も知らぬ神よ。横島には教えられる事は何

も無い」

訳が判らないという人狼の少女……シロと言うらしい、彼女は首を傾げどういうことか？とつぶやき、その隣でやはりかと呟くポチ。見ている分には良い感じに見えたが、やはり本人同士が一番それを感じていたのだろう

「横島の剣は邪道だ。構えも、剣の振り方も正道とは程遠い」

シロとポチが正眼に構えるのに対して、横島の構えは足を肩幅に開き、身体は斜に構えている。それが癖になっているのに、それを正眼に構えるのに矯正すれば横島のよさは簡単に消えてしまうだろう

「言峰。お前とブリュンヒルデと組み手をするのが一番横島にとって良いと思うが、どうだ？」

正直俺も魔術や体術を組み合わせるが基本的には正道に近い、ここまで邪道剣を使う横島を師事するのは申し訳ないが無理だ。牛若丸とノツブがどんな苦勞をして横島に剣の構えなどを教えたかが、容易に想像できる

「私は構わないが、私は手加減などと言う器用な真似は出来ない」

そこは横島自身の陰陽術とブリュンヒルデのルーン魔術で対応してもらえば問題ないだろう。

「横島は実戦稽古の方が向いてるだろう。言峰とブリュンヒルデに見て貰え」

判りましたと返事を返す、横島達を見ながら再び丸太の上に腰掛ける

「……ビュレト、魔界と天界の方は正直どうなんだ？」

「酷い騒ぎだ、シズク」

蛍やくえすも横島の訓練を見ているので、離れた所で今現在の天界と魔界の話をするが、正直酷い有様だ

「アスモデウス達が天界と魔界に同時に侵攻している。そっちの対応で天界と魔界は動けない」

「……フェンリルの復活が近づいていてもか」

シズクの言葉に小さく頷く、ブリュンヒルデでは魔界と連絡が取れないが、俺の権限を使えば連絡はつく。フェンリル狼と聞いて、正規

軍に安置されているスレイプニルをジークやワルキューレに届けて貰おうと思っただが、まさかの同時テロ。しかも魔装術と狂神石で凶暴化した連中を大量にぶつけて来た、流石にそうになると天界と魔界は動けない。これは恐らくフェンリル狼の復活を邪魔させないための進軍だ。

「……小竜姫とあの猿は？」

「お前知ってたのか」

妙神山にハヌマンがいるのを知っていたのかと問いかけると、知っていたが黙っていたと返事を返す。揉め事はお断りだからなと言うシズク

(横島本位か)

横島の為になるかどうかで考えて、今はまだ早いと判断したと言うところだな。時期が来ればこつちが言わなくても言いそうだが

「妙神山も襲われている。そもそも人間界に近い、神魔の駐屯所だ。真っ先に狙われている」

だからメドーサもそつちに合流しているのだ、だがそれでも小竜姫とハヌマンも動けないと言うとシズクはそうかと呟き、横島の方に足を向ける。話が終わればいなくなるか、どこまでも横島本位だなと苦笑するが、状況はかなり悪い。本当にフェンリル狼が蘇るとなると魔人もアスモデウス達よりも脅威となる。それなのに天界と魔界の正規軍は動けないように足止めを受けている

(最悪あいつも引つ張り出すか)

最悪の場合アシタロスも引つ張り出さないと手が足りない。だがそれは本当に本当の最終手段だ、それは絶対に切つてはいけない鬼札だ。まずは俺が全力を出せる場を整えるか、俺は丸太から立ち上がり、この周辺に俺が全力で戦っても大丈夫のように強力な結界を作るためにその場を後にするのだ……

横島の訓練を命じられ、実戦形式で手合わせをしているが、私は直ぐに横島の評価を改める事になった

(反射神経、運動神経、それに目……あと思いきりもいい)

臆病な性格と私の攻撃に過剰に反応しているが、完全に避ける事が出来ている。ブリュンヒルデの魔術は防御力の強化だけなので、横島の自前の運動能力で私の攻撃に反応しているとなると流星に驚きを感じずにはいられない

「ふっ!!」

流星に本気で八極の業を使うと横島を壊しかねないので、震脚を使わずに筋力だけが外門頂肘を繰り出す

「とつとおっ!?!」

大袈裟に仰け反るが、横島は目で見て反応をしていた。そこから更に踏み込み肘を水平にして裡門頂肘に繋ぐがそれは霊波刀で受け止められた。

「ふっ!」

だが受け止められるのは計算のうち、そこから身体を回転させ背中による打撃技「鉄山靠」と繋ぎ、横島を大きく弾き飛ばすが

(手応えが薄い)

自分で飛んだか、体勢を素早く立て直し横島を正面に捉えようとするが……居ない。いやそれ所か気配も無い、訓練を見ている蛍や神宮寺の驚愕の声が聞こえるから回り込んでいるなどではなく、本当に完全に消えているのだろう。それならと懐から黒剣を取り出して360度全てに投げる

「どわーっ!?!」

「そこか!」

「そこかちやうわーっ!!」

岩の上にインクが滲む様に横島が姿を見せる。その手には穴の空いた札……恐らく陰陽術で姿を隠していたと言うことか。それにしても反応を見せずに発動させるとは……だが姿さえ確認出来ればとその方向に走り出した瞬間。横島が先ほどの情けない泣き顔ではなく、にやりと笑い

「掛かったな!」

横島は親指を噛み切るが、だが札を手にしていないもう陰陽術を使

えないと思っただが、横島は空中に血文字を描き印を結んだ  
「むっ!？」

地面が消えた、身体が突如現れた穴の中に吸い込まれる。その穴の深さは私の身長長の2倍近い

「どうだー!？」

「やれやれ」

俺の勝ちだと笑う横島に肩を竦め、膝を曲げておもっいきりジャンプすることで穴から飛び出す

「へ?へもっ!？」

横島の頭に全力で拳骨を落とし、横島が奇声を上げて倒れこむ。私はカソツクについた砂を払いながら

(実戦形式と言っただのは失敗だったな)

霊波刀の訓練のはずが、本当に何でもありの実戦になってしまった。次の組み手は霊波刀に絞ったほうが良さそうだ

「……やれやれ、ちゃんと霊波刀を使わないからだ」

シズク様が文句を言いながら、横島の治療をしているのを見ながらまだ、先ほどの光景を見て絶句している蛍に尋ねてみた

「陰陽術は札がなくても使えるのかね?」

私はカトリック系なので日本由来の陰陽術など知らない。横島の事を知っているであろう蛍にそう問いかける

「い、いえ、無理ですよ。札っていう媒介があつてこそですし」

「理論としては空中を札として認識したでしょうけど……それもありませんね」

話を聞く限り、どうも普通は出来ない事を平然とやってのけたらしい。牛若丸と信長はうーっと唸って頭を摩っている横島を見ながら

「また面白いことを身に付けたようじゃな」

「ですね。あれを組み合わせたら、また主殿の戦術が広がりますね」  
平安時代の天才武将と戦国大名という組み合わせ、さらにそこにシズク様が加わった文字通りの英才教育……

(バチカンに知られると問題になりそうだな)

日本以外の組織に知られるとそれだけで横島の危険性が上がる。

私は今見たことを誰にも話すまいと心に決め、再び拳を握る

「では横島。今度はお前の栄光の手と霊波刀だけで、組み手だ。それ以外は禁止とする、良いな」

「うーす……痛いのは嫌だけど頑張りますよ」

よつと跳ね起き、両手に霊力を集め籠手にする横島。簡単そうにしているがそれだけでも普通の霊能者には出来ない芸当だ……才能の塊、いやびつくり箱かと苦笑し、カソツクの両袖を振るい、そこから棒を取り出し連結させて構える

「なんやそれは!？」

「八極拳は体術のみにあらず、槍術も一流なのだよ。とは言え私のは未熟だが……4連激までくらいなら出来る」

8つの斬激を飛ばす八房には程遠いが、ある程度は感覚を掴めるだろう

「ただし手加減は出来ない、私も修めている途中だからな。骨の1本や2本貫う事になるかもしれないが……どうする?」

私の問いかけに横島の顔が引き締まる。護るための力、それが横島の本質なのだろう

「シズク、聖奈さん。怪我したら治療お願いします」

シズク様に頭を下げてそう頼み、左手の籠手を霊波刀に変形させこちらを見据え

「お願いします。言峰神父」

「良い覚悟だ、行くぞッ!」

手加減無しで全力で横島に向かって槍を突き出す、必死に反応する横島だが4つのうち2つが直撃し、身体が大きく吹き飛ぶ。蛍の悲鳴が聞こえるが横島は立ち上がる

「全然大丈夫だから、心配しなくて良い」

真剣な表情で今度こそ全部避けると意気込んでいる横島。手加減無しで打ち込んだので、確実に骨が折れたか、輝が入っているだろうにその痛みを少しも見せない

「よかろう。お前が動けなくなるまで何度でも付き合おう」

槍を振るい再び穂先を下に向けて構え、横島を睨みつける。怯えは



あるが、引くものかという強い決意を見せる横島に向かって、私は再び槍を走らせるのだった……

『どう？琉璃出来る？』

2回目の美神さんからの連絡に私はむうっと言う返事を返すことしか出来なかった。フェンリルに対抗して守護女神のアルテミスを呼び出すというのは判る……判るけど

「すっごくギリギリになりますよ？」

神を呼び出すサイズとなるとめちやくちや大きくなるし、ミスも許されない。幸い魔法陣に精通しているくえすが一緒でもかなり厳しいだろう

『エミを応援につて無理？』

「エミさんは呪い専門じゃないですか」

黒魔術には詳しいが、魔法陣までを使うのは少し不安が残るだろう。私は少し考えてから

「判りました。私が行きます」

『……良いの？』

良いも悪いも、今GS協会や、六道の中で一番召喚に詳しいのは私だろう。

「明日の夜までには合流します。美神さんも無理せずに戻ってください」

人狼の里からセーフハウスに戻る途中のガソリンスタンドで電話を借りていると言っていたので、美神さんも無理をしないでくださいと言うと、受話器から美神さんの苦笑が聞こえてくる

『無理しないといけない段階だからね。でもありがと、気をつけるわ。じゃあ待つてるから』

電話が切れツイッターと言う音が響く、私は溜息を吐きながら受話器を元に戻し

「柩の言う通りになったわ」

「くひひ、少し遅れたみたいで悪いね」

能力を制限するチョーカーで前よりは僅かに未来予知の精度が落ちてきているが、それでもこうして情報を事前に持ってきてくれたのはありがたい。話を聞いた段階である程度私も覚悟をしていたから

「私がない間、未来予知の情報を唐巢神父とかに流してくれる？」  
「良いよーその代わり、依頼料は貰うよ？」

こつちも生活が掛かってるからねと笑う柩に判ってるわよと返事を返し、小切手に手早く数字を書き込んで柩に渡す

「……何回予知すれば良いのかな？これ？」

「多めにお願ひ、何時戻れるか判らないから」

フェンリルの復活はなんとしても防がないといけないが、その間に私の失脚とかを狙っている相手にGS協会会長の地位を奪われては目も当てられない

「くひ、確かにそうだね、引き受けたよ。でも無事に終わったら特別手当を要求するよ」

めちやくちや予知必要そうだからねと言う柩に無事に帰れたらねと約束し、準備を整えGS協会を後にする。エミさんに唐巢神父、それに冥華さんに回る所はいくつもあるし、準備も必要だ。だが何よりも今必要なのは……と病院に足を向ける

「これは神代会長こんばんわ」

「こ、こんばんわ」

鬼の表情をしているナイチンゲールさんがめちやくちや怖い。彼女は私を見つめると鞆から何かを取り出す

【疲労などに効く薬です、無理をしないでくださいね】

「あ、ありがとうございます」

殺してでも治療すると言われるかと思っただが、そうじゃなかったことに安堵し西条さん達が入院している階に足を向ける

「琉璃？どうしたワケ？」

「エミさん。実は美神さんから連絡が合って暫く東京を離れます」

私の言葉にエミさんと唐巢神父の顔が険しい物になる

「私や小笠原君では駄目なのかな？」

「はい、私じゃないと駄目なんです。神卸の必要がありますので」

これは私以外の誰にも出来ない事ですのうと、唐巢神父もエミさんも納得したように頷く

「判った。暫くオタクの代わりに動けば良いってことね？」

「私も全力を勤めさせてもらおうよ」

唐巢神父とエミさんによりしくお願いしますと頭を下げる。本当は西条さんにも頼みたいんだけど

【あー彼は駄目だよ？無理をしていたから、あの凶暴な看護婦さんにKOされてるよ。ナイチンゲール48の医療術。フローレンスバスターとかで泡吹いてたよ】

いつの間にか現れた教授が禁煙パイプを吹かしながら笑う。フローレンスバスターって何？もしかして

「あのさっきの蜘蛛の巣状の破壊のあとって？」

【彼女が着地したあとだね！良く西条は生きてたよ！】

あっはははつと笑う教授だが、正直笑う所じゃないと思うんだけど、それ……

【でも私が一応オカルトGメンの仮所長になってるよ、人員いないんだけどね！】

むちやくちや上機嫌で笑うわね……果てしなく胡散臭い人物だ。だがその知性はとても役に立つ

「オカルトGメンの装備の貸し出しお願いできる？」

【勿論だよ？西条も頼んでいたよ。泡を吹いて気絶する前にね】

人員はこつちが確保して、道具はオカルトGメンが用意する。他の国とかとは違い、友好的な関係をこれからも築いて行きたいわね

「じゃあ、あとはお願ひします」

時間が無いので挨拶もそこそこに病院を後にし、今度は病室を回り手を握り病人を励ましているナイチンゲールの背後を駆け抜け、待っていて貰ったタクシーに乗り込み

「六道の屋敷までお願いします」

今度は冥華さんに私が居ない時の頼みをする為に六道の屋敷へと向かうのだった……

「教授、理論値は？」

「……オールクリア」

教授からの返答に笑みを零す。やっとだ、やっと理論が完成した……本当ならば完全な形で英霊を制御したいが、英霊にも性格と言う物がある。それを考えれば如何しても御すことが出来ない相手と言うのは少なからず存在する、例えばかの英雄王ギルガメッシュなどはどう考えても制御できる相手ではないが、戦力として考えればあれ以上優秀な英霊は存在しないのもまた事実。ではどうするか？となれば簡単だ、狂わせればいい、しかしジャンヌダルクのようでは駄目だ、しかしかといって教授のようになられてもまた意味が無い。そう考えた時、私が目をつけたのは牛若丸と義経だ。1人の人物を子供の時代と大人の時代に分ける、そしてその上で精神制御を施す。そうなることで欠けた魂を求めるが故に私の術に自ら掛かりに来る。

「お前も足りない半身が欲しいよな？」

「……」

ちつ詰まらん奴め、指示に従うが感情が無い、意志が無い、これでは人形と代わらない。感情のある英霊だからこそ手駒として役立つと言うのに、もう言い下がれと命じると頭を下げて教授は部屋を出て行く。私はその背中を見つめながら、深く溜息を吐く、策略は上手く行っているというのに思ったよりも成果が出ない。それは宇宙意志の妨害とでも言うのだろうか？本当ならばもう少し大きな戦果が出ていてもおかしくないだけに、これだけ知略を振るっているのに成果が出ないことに僅かばかりの苛立ちを覚える

「だがそれももう終わる」

魔人、そして今回のフェンリルは私の動きを感知させないために動かしたに過ぎない、フェンリルに関しては個人的には成功して欲しいと願っているのだが、それもどうなるか判らない。だがアスモデウスの同時テロにフェンリル、魔人と無視できない脅威が重なった事で警備が緩んだ場所がある。そして私はその場所に昨日やっともぐりこむことに成功し……手にしたのだ

「ふふふ。もうすぐ……もう直ぐだ」

私の視線の先には赤黒い1つの球体が転がっていた。それは眼魂であり、そしてある神をその中に封じ込めた極めて強力な眼魂……そしてそれを使う存在ももう直ぐ『出来る』そこから私が長い時間を使ったた計画が動き出す時だ。私は笑みを押さえる事が出来ないのだった……

レポート19 魔狼の咆哮 その6へ続く

## その6

リポート19 魔狼の咆哮 その6

私がセーフハウスに戻った日の翌朝。琉璃がセーフハウスに合流してくれた、まさかこれほど早く合流してくれるとは思って無かったので、これには些か驚かされた

「神代家で使う神卸しの道具一式をとりあえず持つてきましたよ」

除霊に関しては専門家であると言う自負はある。だけど交霊術に關しては正直そこまで詳しいわけではないので、琉璃がきてくれたのは正直ありがたい。それで人狼族の至宝の魔法陣は？と尋ねてくる琉璃に鞆から長老から預かった掛け軸を取り出す

「これなんだけど、どうかしら」

「……うわ」

琉璃の返事は心底嫌そうな声。もしかして満月に間に合わない？と尋ねると琉璃はギリギリです、しかもめちやくちやギリギリと返事を返す

「カズマさんやクロさんに時間稼ぎを頼む事になると思います」

言わなくても分かっていると思いますが、横島君は出さないほうが良いと思いますよと琉璃は言う。勿論それは判っている、相手がガープの手の物と判っている段階で横島君は今回は前衛に出すつもりはない

「ブリュンヒルデにビュレト、それにクロさんとポチに言峰神父。戦力的には十分だから横島君にも魔法陣を書くのを手伝って貰おうと思ってる。蛍ちゃんやくえすに協力を頼んでもやっぱりギリギリ？」  
「誰に手伝ってもらってもギリギリですよ。召喚陣が召喚陣ですからね、早速始めたいんですけど、良いですか？」

「私は良いけど、琉璃は？」

東京から来て直ぐだ。琉璃こそ大丈夫なの？と尋ねるとそんなことを言ってる場合じゃないですからと琉璃は笑う。フェンリルの復

活はなんとしても防がないといけない、もしガープ陣営に加わったら、北欧関連の神の力は借りれなくなる。難しい事は百も承知だが、ここで何とか食い止めなければ

「美神殿、人狼の里からありったけの武器を持って来たでござる！」

「ワシも老体なれど協力しましょうぞ」

クロさんと長老が助っ人に来た。これで武器や戦術を整えるという面での準備は出来た。後は……アルテミスを降臨させる為の魔法陣が間に合うかどうかの勝負になるだろう

「横島君達を呼んでくるわ」

「じゃあ私はテニスコートで準備をしています」

フエンリルの前でも正攻法では勝てない相手。ビュレトや、言峰神父の力を借りて何とか出来るだろうか？如何しても勝機の見えない戦いの前に気持ちが悪くなるのを感じながら、私は横島君達を呼ぶ為に川原へと足を向けるのだった……

そして満月の夜、危惧していた通り黒い影は私達を襲うために現れるのだった……

クロとポチと言う人狼と言峰。そして俺の4人で黒い影を足止めすることになった、ブリュンヒルデとベルゼブルに話は聞いていたが、こうして目の前にしてみると判る。これはもう生きてはいない、幽霊と生者の中間つと言った所か……

「前も言ったが正攻法では勝てないぞ」

俺とブリュンヒルデで周囲に結界を張っているが、それすらもどこまで効果を発揮するか判らない。満月のせいだ影があちこちに出てくるので、相手の能力を制限するのは無理。アルテミスを降臨させる魔法陣を起動させるまでの時間稼ぎだが、それも満足にこなせるか判らない

「判っているでいざやる」

「無理はしないさ、無理はな」

クロとよく判っていない様子のポチ。そしてその後ろに控えてい

る言峰は何も言わず一步下がる、幽霊と生物の中間と言う事は言峰の洗礼詠唱が切り札になる可能性もある。だから前衛を張られては困る訳だ

「……」

言葉を発せず、刀を構える黒い影。足の動きや手の動きから来ている服装は着物に近いのだと予測がつく、俺自身も愛用の剣を構え黒い影と対峙する、話によれば一太刀で8度の攻撃を繰り出す刀とか、俺が4つ、クロとポチで2つずつで4つ弾いてくれば耐える事が出来る計算だが、影の攻撃。これを目にしていけないから、それについての対策が今一判らない。とにかく相手の一挙手一投足を見逃さないようにする事だ

「……」

黒い影は俺や言峰に視線を向けず、クロとポチに視線を向けている。人狼の里から追放された一族と言う話だったが、どうもそれも信憑性を帯びてきたか……しかしそれにしてもまるで気配が無い。そう思った瞬間黒い影が掻き消える。反射的に剣を振り上げる

「つぐうつー！」

「……」

何時の間に上空に移動したのかわからないが、全体重をかけた一撃に顔が歪む。足が地面にめり込むのが判る、どうも俺とブリュンヒルデの影同士の転移はある程度は封じているが、完全に封じることが出来ていないようだ

(馬鹿力が！)

一太刀で8度の刃が飛ぶと聞いていたが、これは純粹な力だけでも十分な脅威になる。剣を振るい影を弾き飛ばそうとするが

「っー！」

影の重さが一瞬で消え、力を込めていた分大きくバランスを崩す、慌てて体勢を立てなおそうとするが、今度は地面から槍の形状をした刃がいくつも飛び出す

「ちっー！」

舌打ちしながら地面を蹴った瞬間。背後で激しい金属音が響く、俺



は飛行をキャンセルし、地面に着地する

「不用意に飛ばないほうが良さそうだな」

音を立てて地面に落ちたのは言峰が手にしているやけに柄が短い剣。そしてその刀身はドリルか何かで抉られたように、穴が空いている

「木の葉の影からも刃を出せるようだ。気をつけたほうがいい」

「そのようでごさるなッ！」

言峰の警告とクロの声に振り返ると、クロと影が切り結んでいて俺とポチが動こうとすると再びその姿を消す

「ええいつ！鬱陶しい！」

「……」

今度はポチの背後に現れ刀を振るう。切っ先から飛び出した8つの刃を迎撃していると、背後から切りつけられる

「ちいっ！」

俺は鎧に加えて全身を魔力で防御しているので、魔力を吸収されるという事は無かったが思った以上に厄介な相手だ。反撃にと剣を振るうが命中する寸前にその姿が再び霧散する

「ジリ貧になる！クロとポチはお互いの背後をカバーしろッ！」

バラバラになっていたら各個撃破される。俺は大丈夫だが、クロ達是不味い。3人が集まったのを確認すると同時に剣を満月に向かって掲げ、魔力を暴発させる。一瞬周囲が昼間の様に明るくなり、影の姿がはつきりと浮かび上がる。

「二でやあッ!!」

「!!」

その隙を見逃すクロ達ではなく、一瞬で間合いを詰めて刀を振るうが、影も影で並大抵の技量ではない。刀の柄でポチの刀を受け止め、刀身でクロの刃を受け流す。命中したのは言峰の投げた剣だけで、しかも浅く切りつけただけでダメージはさほど通ったように思えない（これだけ苦勞してやっと一打ちか）

しかも録にダメージが通っているように見えない。ガープの事だ、俺が出て来ることは計算して俺の攻撃に対する防御は万全にしてい

るのだろう。俺は溜息を吐きながら剣を構えなおし、揺らめいていた身体が元に戻り刀を構えなおす影を睨みつけながら早く、魔法陣を完成させると心の中で呟くのだった……

遠くから何かの炸裂する音が響き、顔を上げるとセーフハウスのある方角から光の柱が上がっているのが見えた

「来たみたいですね。美神さん」

「……もう少し時間的な猶予が欲しかったわ」

額にタオルを巻いて長い髪が目には掛からないようにしている美神さんが顔を歪めながら呟く、聖奈さんや、琉璃さん、それにくえすも似た様な姿をしている。これだけの面子で魔法陣を連日書いていたが、やはり神を呼び出す魔法陣。満月の日には間に合わなかった……あの影の相手は影から転移してくる。聖奈さんとカズマさん、そしてくえすにシズクの4人の結界で封鎖されているので、影で転移してくることは無いと思うが、フェンリルが復活すればこの結界も役に立たないだろう。フェンリルが復活する前に、なんとしても魔法陣を仕上げなければ……下手をすればカズマさん達は無駄死になってしまう

「後1時間……ううん、30分もあれば仕上がるんだけど」

「やっぱり途中で魔法陣を変えたのが響いていますわね」

長い間保管されていた魔法陣は所々欠損している部分もあり、これでは完全な形で召喚出来ないと琉璃さんが神代家の知識を使って魔法陣を改良してくれたのだが、そのせいで時間ギリギリで間に合う計算が少しずれてしまった

「無いものねだりをしてもし方あるまい。今出来る事を全力でやるべきだ、そうだろう？」

ぶつぶつ文句こそ言っているが高城さんの手の動きは早い。聖奈さんよりも琉璃さんよりも遥かに早い、彼女一人で魔法陣の4分の1を仕上っているとさえいえばその速さがどれだけ異常か判るだろう

「閣……んん！高城さん、最悪の場合、私も出ます。その間に何とかありませんか？」

最悪自分も時間稼ぎになるので何とかありませんか？と聖奈さんが高城さんに尋ねる

「無理だな。焦って仕上げれば荒が出る。ここは時間稼ぎ組の奮闘に頼るべきだろうよ」

「確かにそれしかないわよね……それに聖奈、貴女だと正直フェンリルとなると聖奈だと相性が致命的に悪いでしょ？」

話をしながらも魔法陣を描く手は一瞬たりとも休むことは無い。勿論私もだ

「アリスちゃんは俺と一緒にこの中を塗りつぶそうな」

「はい♪」

横島とアリスちゃんにも魔法陣の写しを渡し、色を塗りつぶす所を担当してもらっている。その理由はアリスちゃんを安全に護れる場所が何処にも存在し無いからだ。ネビロスさんとベリアルさんが怒り狂うような展開は避けなくてはならない

「そうなればワシが出ます、今回の件はワシの責任ですから」

人狼族の長老が沈鬱そうな表情で言う。かつて先祖返りをした一族を殺す事で里を守ろうとした、その責任が回り回って戻って来た。人狼を憎む最悪の存在としてだ、言ったら悪いがその事に関して私達は何も言う事が出来ないし言うつもりも無い。それだけの覚悟があるのなら時間稼ぎに向かってくれても良い、長老は私達が何も言わないのを了承を受け取ったのか、狼男の姿になり森の中に消えていく

「長老……美神殿、まだござるか!？」

魔法陣の中心にいるシロがまだでござるか!と叫ぶと全員に大人数く黙って座つてろ!と怒鳴り返され、尻尾と耳を垂れさせて座り込む。焦っているのは皆同じなのだ、そこに怒らせるようなことを言わないで欲しい、シロに憑依されるのではなく雌の人狼であるシロと人狼族の秘法の魔法陣を組み合わせる事で他の神ではなく、アルテミスだけに絞込み神霊召喚を行う。シロのコンデイションも大きく作用しているので、動かずに意識を集中してなさいという怒鳴り声があちこちから響く

「……ノツブ、牛若丸。ペンキが足りないぞ」

私の反対側で魔法陣を書いていたシズクがペンキが足りないとか、小さな声なのにそれがやけに響く。それだけ皆集中していて、周囲が静まり返っているという証拠だ

「今もって行くわい！色は！」

「……黒の42」

「他に足りない人はいませんか！」

「青の53番ってどこですかー!？」

影と戦えない幽霊トリオはペンキ運びに悪戦苦闘している。おキヌさんはともかく、ノツブと牛若丸が絶望的に戦力にならない。そしてチビ達は言うまでも無く戦力外なので、若干つまらなそうに魔法陣の外で大人しく座っている

「げーよ、横島！はみ出しちゃった！」

手伝っていたタマモが泣きそうな顔でそう叫ぶ、横島はその声に立ち上がりながら

「大丈夫大丈夫！直ぐ行くから！アリスちゃんちよつと待っててな」

「はーい」

横島はアリスちゃんの面倒を見るだけでなく、はみ出したや、間違えたという魔法陣の修正作業をしてきている。小さなペンキ缶を手にし、小さい筆ではみ出した部分を手早く修正してくれている「横島君、悪いけどそれが終わったらこつちもお願い！修正じゃなくて、魔法陣を少し切れてる部分なの！」

「それが終わったらこつちですわー！」

琉璃さんとくえすの横島を呼ぶ声が重なる。魔法陣を書いて、文字を書いて、そして色を塗る。やることは恐ろしく地味でそして時間の掛かる事だ。しかも文字を刻むのは古代文字なので琉璃さんか聖奈さんの2人に限られるが、魔法陣も書きあがっていない。私とシズクと美神さんとくえすの4人で全力で書いてはいるがとにかく大きい、しかもコンマのズレも許されないといい極限の縛りまでついている。色を塗っているタマモとアリスちゃんはアリスちゃんではみ出す事が許されないし、色むらも勿論駄目と言う恐ろしい難易度が付け加えられている

「神宮寺さん終わりました！次は!？」

「こつち！急いで！」

横島があちこち走り回って、必死に魔法陣を修正している。私も手元の魔法陣の全体図と睨めっこをしながら、魔法陣を書き上げること  
に全神経を向けるのだった……

琉璃さんが合流してから2日。全員が殆ど不眠不休でアルテミス  
と言う神様を呼び出す魔法陣を描く事に尽力していた……あの影が  
フェンリルと言う魔獣の影であり、それに対抗できる神様を呼び出す  
ためにだ

(カズマさんやクロさん達は大丈夫だろうか)

時間稼ぎをすると言ってセーフハウスの近くに待機してくれたカ  
ズマさん達、その強さは知っているつもりだが、相手は攻め手が一切  
判らない正体不明の敵。影を媒介に転移する問い能力を持っている  
化け物だ。少しでも早く魔法陣が完成して欲しい、俺はそればかりを  
考えていた

「出来たツ!!」

美神さん達の出来たという声が重なり、琉璃さんが掛け軸を広げ  
る。俺は何かあったら危ないと思いきやアリスちゃんの元へ向かう

「お兄ちゃん、どんな神様が出てくるか楽しみだね」

そうだねとは返事を返せなかった。俺はアルテミスと言う神様を  
知らない、楽しみというよりも怖いという気持ちの方が強かった

「遙か星霜に去りし古き神よッ！今一度姿を形を成さんことをッ！」

魔法陣全体が光り輝き、天を突くような光の柱が魔法陣から噴出  
す、その光の柱が消えた時、魔法陣の中心に浮かぶように一人の女性  
の姿があった、短すぎる赤いスカートに、肩や首がむき出しで、胸を  
僅かに覆っているだけと言う赤いドレス姿の女性。物凄い美女で思  
わず視線が胸に向けられるが、蛍に尻を抓られ、視線を逸らす。女性  
はんーっと大きく背伸びをしながら俺達を見つめ

「神霊アルテミスです！よろしくね！」

「ペットとかぬいぐるみとかのオリベえです。よろろーしーくー」

そしてその女性が抱き抱えている熊のような、訳の判らない生き物が喋りだす。俺はゆっくりと美神さん達の方を見た、美神さん達もあんぐりを口をあけている。これは完全に予想外だったのかも……

「それでー私を呼んでどうしたのー？せつかくダーリンと楽しく過ごしてたのに」

「ぶぎゆる!?!縮まつてる!首決まつてるからあ!」

熊のような生き物を抱えながら女性が魔法陣の上に降りてくる。なんと言うか、軽い。俺の想像していた神様とは違いすぎる

「女神様!拙者達に力を貸して欲しいでござる!フェンリル狼が復活をしようとしていて、拙者達ではどうしようもないのでござる」

シロがアルテミス様に必死に頼み込むが、アルテミス様はうーんつと腕を組んで反応が芳しくない

「私はもう世界を去った神だからねー、そりや私を信仰してくれるのは判るけど……ちよつとそれはお門違いじゃないかなー?そういうのはこの世界にいる神様に頼んでよ」

自分達で何とかしてという言葉に思わず絶句する。用が無いならもう帰るわよ?と軽い感じで言うが、いなくなられては困る

「な、なんとかなりませんか!アルテミス様」

聖奈さんがアルテミス様に駆け寄るが、アルテミス様はもう興味は無いと言う感じで一瞥し

「だって私もそうだけど、世界を去った神は残ってる神に全部役目を引き継いだでしょ?私じゃなくて、今世界にいる神に頼むべきだと思うのよ?ねえ、その金髪の子もそう思うでしょ?」

「……さあな」

冗談ではなく本心からそう思っているのが良く判る。しかし何でこのタイミングで高城さんだけに声を掛けたのだろうか?実は高城さんも神魔とか……そんな感じなのだろうか?と言う疑問が一瞬頭を過ぎるが、今はそれ所ではない。美神さんや琉璃さんも声を掛けようにも、その冷酷な気配に何も言葉を発する事が出来ないでいる

「いやいや、そういうなよ。アルテミス、お嬢さん達。俺がアルテミスを説得してやるから、その素晴らしい胸を少し「ダーリンツ!なん

で浮気するの！」ふぐいっ！出る！中身！でる！内蔵とか！そんなのが全部口から出るう!!!」

聖奈さんをナンパしようとした熊の生き物がじたばたと暴れる。アルテミス様はそんな熊を冷めた目で見つめながら

「神ってなんも無しに助けるわけじゃないのよ？助けたとして何をくれるの？捧げ物も無いじゃない、久しぶりに呼ばれたから来てみたけどー……ふざけてるの？」

その瞬間凄まじい圧力が放たれ、立っていられずにその場に膝を着く。小竜姫様達とは根底から違う、ふるふる震えているアリスちゃんの手を握り大丈夫だよという声を掛けることすら出来ない、ポケットの中で震えているチビとうりぼーもアルテミス様に対する恐怖を全身で表していた

【なんかワシが想像していた神と違うんじやが】

【そうですね……信じる者は救われるのでは】

「……お前ら黙ってる、神は簡単にへそを曲げるんだから」

ひそひそ話しているノツブちゃんと牛若丸に一瞬視線を向けるアルテミス様、シズクやノツブちゃん達を見て、不機嫌そうな顔を更に不機嫌そうに歪め、どこかから取り出した変な形状の弓を俺達に向けてる。矢は無いのに、殺される光景を想像して足が竦む

「本当なら神罰を下すんだけど、それをしないでだけでも良いとして欲しいわねくそれか今からでも捧げ物を用意してくれる？それなら考えても良いけど」

今から捧げ物なんて準備している時間なんて当然無い

「さ、捧げ物以外では駄目でしょうか！用意できるものなら何でも用意します」

「宝石とか、金とか、そういうので良ければいくらでも用意するわ」

琉璃さんと美神さんがそう言うがアルテミス様の反応はやはり良いものではない

「そういうのは全然興味ないのよねー……捧げ物がないなら生贄かなーその男の子とか、良い魂してるよね」

アルテミス様の視線と弓が俺に向けられ、ぎよっとして思わず後ず

さる。美神さん達が険しい顔をして、アルテミス様を睨みつける

「あはは！冗談、冗談。私処女神だし、ダーリンいるし、男の生贄はいらないかなー。でも……んー対価をくれないとねー。神って無条件で力を貸すわけじゃないんだから」

貴金属も駄目、捧げ物を用意している時間は無い。じゃあどうすればいいんだ……俺達が頭を抱えているとアルテミス様はそうだと行って、弓矢を一度虚空に消し去り、良い事思いついたと言わんばかりに笑い

「私恋話とか聞かせて欲しいなー?」

はい?まさかの言葉に俺達全員目が点になる。アルテミス様は熊を抱き抱えながら

「恋は良いわー♪私も恋をしたから変わったもの♪浮気癖が少し酷いけど、優しいダーリンがいるし」

熊のぬいぐるみを胸元に抱き抱え、さっきの気配と幸せと言うオーラを撒き散らすアルテミス様。胸元の熊の足がびくびくと痙攣しているのは指摘したほうが良いのだろうか、さっきの重々しい空気がなくなっただけで怖いと言っているアリスちゃんにやっとな大丈夫と声を掛ける事が出来る中。俺は熊の心配を少しだけしていた

「燃えるような純愛も良いし、甘酸っぱい青春の恋も大好き♪そういうのがあるー?私そういう話聞くのすツごい大好きなの!恋話たくさん

聞きたいなー聞かせてくれるんなら考えてもいいんだけどなー?」

蛍や神宮寺さん達をチラチラつと見つめる、見つめられた蛍と神宮寺さんは一瞬呆けた顔をしたが

「し、します!そのしますから!力を貸してくれませんか!」

「わ、私もいたしますから」

「ゆ、幽霊でも良いですか!?!それならし、します!」

顔を赤くして恋話をすると言うとアルテミス様はにまあーつと物凄く嬉しそうな顔をして

「それなら手伝っちゃう!それに最近人間界面白そうって思ってたらダーリンとハネムーンしちゃおう♪」



「いや、待て待て！俺お前と結婚とか、「ダーリンうるさい」ぴぎゃあ！！」

胸元にぎゅっと詰め込まれ痙攣する熊。なんと言うか扱いが酷すぎる気がしなくも無い

「じゃー行きましようか？あ、もし嘘だったら殺すからね？恋話楽しみだなー♪」

最後にもう1度全員を威圧するかのようになり、おそろしい気配を放ち。あつちのほうねと笑って飛んでいくアルテミス様。俺達はその姿を見つめ暫く呆けていたが、アルテミス様の後を追ってセーフハウスの方角へと走り出すのだった……ちなみに走る能力に不安のあるシズクとアリスちゃんは巨大化したうりぼーの背中に乗っていた事を追記するのと、なんかやけに蛭と神宮寺さんが俺を見るのに、どうしたんだろう？と俺は首を傾げるのだった……

セーフハウスの近くの森は既に破壊されつくし、クロとポチの体力は限界が見え始めていた。それは弱いとかではない、相手の狙いがクロとポチだからだ。俺や言峰よりもダメージが大きい

「おい、生きてるか」

周囲を鮮血に染めているクロ達に生きてるか？と声を掛けながら、2人を庇う様に前が出る

「……まだまだ平気でござるよ」

「ふん、誇り高き狼がそうそう弱音を言うものか」

かなり消耗しているが膝を着かないクロとポチに正直感心する。ダメージも通らない、こっちは良いように捌られるだけと言う絶望的な状況に良くここまで耐えていると

「この御老体は限界だな」

「ま、まだまだあ……」

言峰の洗礼詠唱の効果が薄いので回復に回って貰っていた、言峰が素早く人狼の老人の首に腕を回し絞め落とす。その闘志は買うが、既に瀕死の一步手前長老と言う立場なのだから、自分の身を護ることも考えるべきだ

「シッ！」

「!!」

だんだん馴れてきて、影からの突進と自在に作り出す刃を受け止める事は出来るようになってきたが、それだけだ。反撃は当たらず、当たったとしてもダメージは殆ど入らない。完全なジリ貧だ、しかもやはり俺の魔法に対する防御は完璧で魔法の効果も殆ど無い、あいつら完全に俺が無力になるようにしてやがる……

(まだか)

有効打がまるで入らない、8連の刃も徐々にその範囲と威力を肥大させ、これ以上耐えるのが難しい所まで来ている。ブリュンヒルデ達はまだかと内心焦り始めた頃

「照準よーしー! やったれーッ！」

「はーいっ♪」

この場に似つかわしくない女の声が響いた時。恐ろしい速度で光が駆け抜け、影が手にしていた刀を中ほどから叩き折る

「ビュレト様! 大丈夫ですか!」

「良かった! ギリギリ間に合ったみたいね!」

「父上大丈夫でござるか!」

くえすを筆頭に駆けつけてくる美神達。上空に佇む女神を見て間に合ったのかと安堵の溜息を吐く、影は失った獲物を手に呆然としている。その隙に横島達がクロ達に駆け寄り手を貸して、後ろへと下がっていく

「クロさん、ポチさん、大丈夫ですか!」

「ギリギリでござるよ」

「遅い! もう少し早く出来なかったのか?」

獲物を失った影に視線を向けるアルテミス、影もアルテミスを見つめたその瞬間。耳障りな声を出した

『遅い……やっと現れたか神よ』

ガラスが擦り合わされるかのような不愉快な音、だがその声は動揺しているわけでも、怯えているわけでもない。現れるのが遅いと言わんばかりに不機嫌そうな物だった

『神を喰らい、我は完全となる……貴様が来るのを待っていた……』  
待っていただど!? 影の言葉に警戒心が跳ね上がる。ブリュンヒル  
デに目配せをすると素早くルーン文字を空中に刻み、俺達にルーンで  
出来た守りを掛ける

『偉大なる狼王は既に目覚めた! 神! 貴様が最初の供物だ!!』

凄まじい咆哮と共に影が弾け、見る見る間に巨大化していく、4つ  
の瞳と世界を飲み込むと言われた恐るべき魔狼が自らの復活を喜ぶ  
かのように、凄まじい咆哮を上げるのだった……

リポート19 魔狼の咆哮 その8へ続く

## その7

リポート19 魔狼の咆哮 その7

亜空間を進んでいるとどこまで響いてくる強烈な神通力の波動に足を止める。魔狼が目覚めたか……

「争乱の狼煙となる」

今の世界から消え去った古き獣が目覚めた。魔力と神通力を併せ持った桁違いの咆哮は神魔は勿論、様子見に徹している魔人達にも大きな影響を与えるだろう

「時代が動くぞ、偽りのデタラントの崩壊だ」

あの人狼は良くやってくれた。神魔などに倒されることもなくその本懐を遂げられるように祈りながら私は亜空間を進む、いかに私の技術があるといえど、亜空間での長時間の活動は文字通り命を削る……私は翼を翻し、私自身の目的を達成する為に亜空間の奥へ、奥へと向かうのだった……

影が爆発したと思った瞬間。俺達の目の前には小山ほどの大きさの狼が現れていて、俺達を睨みつけていた。その圧倒的な巨体と身が竦む様な殺気に足が震える

「んーこれならギリギリかなー？まだ相手の力。万全じゃないみたいだし」

アルテミス様の言葉にこれで!?と思わず叫んでしまった。マタドールやガーブクローンとまでは言わないけど、凄まじい力を放つてるのにな!?

「霊力の吸収を徹底して阻害していたからだ。本来のエネルギー量がらすれば半分にも満たない!」

ビュレトさんの言葉にそれなら勝てるかもしれないと言う考えが脳裏に浮かぶ。美神さんや琉璃さんも同じだったのか

「じゃあ霊力が枯渇してるいまなら勝てる?」

その言葉にシロとシズクに手当てを受けていたクロさんが血相を

変えて叫ぶ

「飢えた狼は危険だ！手当たり次第に喰らいに来るぞ！」

『腹が減った……』

クロさんの言葉と狼が腹が減ったと叫ぶタイミングが殆ど一緒に、俺は殆ど反射的にアリスちゃんとタマモの腕を掴んでを横つ飛びする。頭の上とかのチビやうりぼーの驚いた声がするが、それには我慢して貰うしかない。その直後に地震のような音が響く

「シロや横島殿やアリス殿、それに魔女殿は格好の餌じゃ！その霊力を完全に狙われておるぞ！」

言峰神父に介抱されている長老に叫び声に俺はアリスちゃんを背中に背負い、タマモの手を放す

「アリスちゃん、しっかりと捕まってる」

「う、うん」

アリスちゃんの腕が首に回される。恐怖で震えているのか、その手は小刻みに震えている。誰だってあんな化け物相手だ、震えて恐怖を感じて当たり前だ

「タマモは悪いけど、走ってくれよ」

「判ってる、アリスに走らせるのは酷だわ」

アリスちゃんは確かに靈力とかは多いかもしれない。だけど精神が幼いと言うのは判っていた、別の言い方をすると俺以上に力のコントロールを知らないのだ。だからこんな状況で走らせるというのは幾らなんでも酷過ぎる

「琉璃！高城！横島君達を避難させてッ！」

「判ってます！シズクさん！負傷者の運搬をお願いします！」

「……判ってる。横島、シロ！先に行け。この3人を治療したら、直ぐにお前達も水の中に取り込む」

琉璃さんと美神さんの怒声に返事を返す間もなく走り出す。地面を喰らっていた狼がのそりと身体を起こし

『逃がすと思ってるのか？』

その言葉に背筋に冷たいものが流れるのを感じた直後。心眼の音が脳裏に響く

【止れ！先に魔力塊がある！】

俺の勘が当たっていた事に良かったと思いつつながら、前を走っていたシロとタマモの服を掴む

「わぷっ!？」

「わわ!？」

シロとタマモの驚いた声が聞こえるが、体重的には俺の方が上だ。2人が仰け反って止った直後、2人の目の前を黒い刃が通過する。影のときも使っていた能力だ

『狼の狩は始まったばかり、逃がしなどはしないぞ』

4つの瞳が俺達を睨みつける。その目を見て、俺は逃げる事が出来ないと思ふのだった……シズクの舌打ちが嫌な沈黙に見たこの場に響き渡る。それだけで水を媒介にした転移も出来ないと言う証拠で逃亡できないというのが如実に判ってしまった

「横島君。周囲の警戒、下手に動かないで」

「嫌な流れだ。あちこちから殺気が漏れている」

琉璃さんと高城さんが俺達の側に来てくれたが、それで状況が何か変わるわけではない。周囲から感じる恐ろしい気配はますます強くなっていて……足手纏いにならないようにこの場を離れる事も出来ない。咄嗟に懐の眼魂に手を伸ばしたが、それはいつの間にか隣に来ていた牛若丸とノツブちゃんに制された

【主殿、変身すれば主の身体は私達と同じになります】

【霊体の攻撃はアイツには通らん。無駄死にするだけだ】

いままで起死回生の一手になっていた眼魂が使えない……それは俺がこの戦いでは何の役にも立たないと言う事で、俺は悔しさから拳をきつく握り締めるのだった……

フエンリルの復活。それは霊力が満ちてなければ為さないと私は考えていた……アルテミス様になんとか協力を取り付け、影の段階ならば数の有利をとれば封殺できると考えていた……だが向こうは降臨しようとしているアルテミス様を吸収しようと考え、わざと影の

ままだったと言った。その段階で全員でこの場に來た事が完全に裏目に出てしまった

『ガアアアアッ!!』

咆哮を上げ、巨大な牙を剥き出しにして飛び掛ってくるフェンリル。復活したばかりで頭の回りは良くないのか、攻撃自体には反応出来るから避ける事も出来るし、防ぐことも出来る。だがこちらの攻撃が全く通らない

「ちいつ！攻撃が通らんッ！」

「私の魔法も効果が殆ど見えませんわ!？」

ビュレト様の舌打ちと神宮寺の動揺した声が響く、フェンリルにこちらの攻撃が通らないのだ。攻撃力だけで考えれば神魔の中でも上位に入るビュレト様と、人間の中では最高位と言える魔法使いの攻撃を無効にする。その理由は判っている、フェンリルは古き神。今の神魔とは力の概念が違う！その概念が攻撃を阻んでいる

「アンサズー！」

それならと空中にルーン文字を刻み、炎を放つがフェンリルはそれを受けても何のリアクションも見せない

『ああ……腹が減ったッ!!』

腹が減ったと叫び、前足を振り、尻尾を振り回す。時折影が刃になるのも厄介な上に、フェンリルはその巨体もあり、掠っただけでも致命傷になりかねない攻撃を多用する。私やビュレト様なら問題ないが、美神には反応出来ない判断しルーン魔術を施しておいて正解だった

「あーん！ダーリン！全然効果ないよー!？」

「だーってろー！今考えてるッ!!」

アルテミス様も弓矢を放つが、効果が薄く。そしてアルテミス様を喰らおうとするフェンリルにアルテミス様の声にも泣きが混じってくる、復活したばかりと言えばアルテミス様も条件は同じ。だが月を司る神と言う事で、フェンリルに大しては有利に立てるはずなのに……

「フェンリルって言うのはこんなに規格外なの!？ブリュンヒルデ！」

突進攻撃を転がって回避した美神が悲鳴にも似た声で叫ぶ

「いえー！流石にここまで無敵性は無かったはずなんです！」

お父様を食い殺した時よりも体のサイズは一回りほど小さいんですと叫び返す

「こ、これですか!?!」

霊力の大きい順にターゲットと見ているフェンリル。この中でも霊力が大きいのはアルテミス様でその次にビュレト様と私に閣下、そして美神、神宮寺、蛭、横島、アリスちゃんと続いていく……そのおかげか横島達にあまりフェンリルの攻撃が向く事はない……いや、実際は何度もその牙がそちらに引き掛けるのだが

「おいー！犬っコローよそ見してるんじゃないやねえッ！」

「はっ!!」

ビュレト様の挑発と共に放たれた炎と私の刺突が首を捉え、私とビュレト様にフェンリルの視線が向けられる。私は美神達に目配せする、正攻法では勝てない。この不死身性を見破る事が最善だ、人間ではいつまでも精神力も集中力も続かない。私とビュレト様が戦っている間に、何か攻略のヒントを掴んで欲しいと思ったのだ

「……行けッ！」

シズクさんの氷の矢や槍が虚空から現れ、前足から放たれた魔力刃を弾き、そして進行方向や足の下にそれらを発動させる事でフェンリルの動きを大きく阻害してくれてる

「えーいつ!!」

『くはははは!!効かんぞッ!』

よろめいた先にアルテミス様の8連射が叩き込まれるが、命中する寸前に何かに弾かれるように霧散し、周囲に神通力の幕を作り出す

「ええいーあれでもダメージが通らないのか!?!」

ビュレト様が苛立った声で叫ぶ、私もその光景が信じられなかった。古き神の力の高さは私達よりも遥かに多い、ガープに何かさかれていたとしてもあの防御力は異常すぎる

「ではこれならどうだ」

神通力の幕を目晦ましに使い、言峰が飛び蹴りをフェンリルの頭に



叩き込んだ。凄まじい重音を響かせフェンリルの頭が大きくねじれる、信じたくは無いが、言峰の純粋な肉弾戦での攻撃力は私を上回っているかもしれない……あの蹴りの威力を見て私はそう感じた

『人間如きが！』

「人間だが、私とて人間兵器とまで言われた男だ。そうそうに倒れはしないッ！」

私とビュレト様と言峰、そしてアルテミス様とシズクさんの5人でフェンリルへと立ち向かうのだった……

横島のほうに走っていると、横島達も横島達で相当苦戦していたのが近くによって直ぐ判った

「大丈夫ですか？」

「あはっ……流石におねーさん、錆付いてるわ……」

霊刀を手にしている琉璃さんは膝を着いて荒い呼吸を必死に整えていて、横島は両手に栄光の手を作って周囲を油断なく警戒している。だがフェンリルはビュレトさん達が相手をしているのに何と戦って……私がそう思った瞬間。

「蛍！頭下げろッ！」

「えっ!？」

横島の怒声に反射的に頭を下げると、私の頭上を栄光の手が通過し重い金属質な音が響き渡る

「影の刃があちこちから飛んでくるのよー早くこっちに来なさいッ！」

タマモの声に私達は走り出し、横島達がいる場所に近づくと巨大な狐火に照らされた一角に横島達の姿があった。早く早くと手を振る横島を見ながら狐火の下に飛び込む

「な、何が起きてるの？」

「影から剣とか槍、それに斧なんか飛び出てきて！てえいっ！いるでござるッ！」

話をしている間にも槍が飛んできて、それをシロが霊波刀で打ち落とす

「い、いやあ……物理刀じゃ駄目です。簡単に曲げられて……多分神通棍も殆ど効果ないですよ」

刀とは思えないほどに曲がっているそれを見せながらへたり込む琉璃さん。會長つて言う立場もあり実戦から遠退いていたのがかなり響いているのが良く判る

「ふぎゆうー」

「みむー」

チビとうりぼーもビームと電気ショックで影の武器を迎撃していて、アリスちゃんは増えたうりぼーの中に埋もれるようにして隠されていた。クロさんとポチさん、それと長老はシズクの氷の結界の中にいるが倒れていて意識があるようには見えない

「横島。おキヌや信長はどうしたのですか？それに高城は？」

姿の見えない幽霊トリオのことを尋ねるくえすに横島はそろそろ来ますと言つて、次の瞬間魂を揺さぶるような衝撃を受けた

「うつくう……な、なにこれ……」

【フェンリルが空気を吸い込むたびに周囲の霊力を奪っているんだ。ビュレトとブリュンヒルデの結界が生きているから、フェンリルに霊力は流れていないが、持久戦になればなるほど不利になる】

私の問いかけに心眼が答えてくれたが冗談じゃない。ただでさえ強い相手がこんな絡め手まで使ってくるなんて……

「ノツブとかがないのは、霊体だからね？」

「うっす、俺よりもダメージが大きくて。眼魂の中にいます、おキヌちゃんは……【横島さんに憑依させて貰つて耐えています】」

横島の背中に重なるようにおキヌさんが姿を見せる。だがその顔色は悪く、霊力吸収攻撃の脅威を物語っている

「ちなみに私とシロ、それとチビとうりぼーは平気。種族的にはフェンリルの遠縁とも言えなくも無いし、人間だけがターゲットみたい」  
「だけどあの影の刃は厄介でござる」

私よりも小さいチビとうりぼーが平気な理由を教えてくださいけど、それは何の救いにもならない。ただ一つ気になるのは、フェンリルと戦っていた時は感じなかったのに、どうして横島達の側に来たらそれ

を感じたかが頭のどこかにひっかかった……本当ならお父さんの助言を受けた所だけど、今朝は大丈夫だったのにいまは連絡がつかない。フェンリルの復活の影響だろうか……

「私は……だ」

そして高城はアリスに抱きつかれ、うりぼーの群れの中から顔を出した。酷く疲れた顔をしているのがやけに印象的だった

「とりあえず、こっちの状況は判りました。それよりの今の問題はフェンリルをどうするかですわ」

攻撃が効かない無敵の狼、それをどうやって倒すかだ。いつまでも攻め手が見つからなければビュレトさん達が消耗する一方……みんなの限界が来る前になんとかする方法を見つけ出す必要がある

「心眼。何か感じたことは無い!?!」

アリスちゃんを安心させる為にアリスちゃんに心眼のバンダナを渡していた横島。私達はアリスちゃんに頼んで心眼を借りて、何か判ったことは無い?と尋ねるが心眼はすまないと前置きしてから

【馬鹿でかい霊力の塊があるから、普段通りの探知能力は期待してないでくれ】

つぐう……：心眼の探知能力を頼りにしていたのに!普段通りではないとしても、私達よりかは上だと思おうしかない。私達が頭を抱えている

間も背後からは重い金属音が響き

「シロ……そっち鎌行ったぞッ!」

「っはい!せんせー!」

シロと横島、それとタマモが必死に影から伸びて来る刃を迎撃している。私も美神さんもくえすも霊波刀は使えない、横島達が必死に耐えている間に何か良策を見つけ出さないと……

「別の空間に存在しているというの?」

【いや、空間の歪みは探知していない】

「そうですか、位相をずらして空間自体を防御手段にしていると思っただけですが……」

魔法は無効、物理は仰け反らせる程度の事は出来るが効果ゼロ……

あの無敵性には何か理由があるはずなのに……

「精霊石も神通力も効果が無いのよ。それで考えられるのは？」

【難しい所だな、考えられるのは自身に命中した力と同じ力を外に向かつて放出しているという可能性はあるが……】

それはかなりタイミング的に難しいと心眼が言う。あれだけ同時に攻撃を受けて、それら全ての威力を目視で判断して相殺する。それがどれだけ難易度が高いかなんて言うまでも無いだろう

「いやー！私の弓が全然効かないよー!!」

「だーっ！落ち着け！パニックになるな！」

アルテミス様のパニックになった声とそれを落ち着かせようとするオリオンの声。それに続いて

「合わせろーブリュンヒルデ！」

「はいっ！」

ブリュンヒルデさんとビュレトさんの左右からの同時攻撃が叩き込まれるが、2人の身体が斜め上に弾き飛ばされ

「……流石に辛くなってきたな。おい、そっちは大丈夫か？」

「右手の指は全部死んだが。左が残っている、何も問題は無い」

水切れを起こしかけているシズクと肉体的なダメージで限界が近い言峰神父に焦りばかりが募る

【横島さん、後ろから来ます！】

「だーっ！そろそろやばいぞッ!!!」

「横島切れるんじゃないわよ！」

私達への攻撃を防いでくれている横島とシロ、それにタマモにも疲労の色が濃い

「みむうー！」

「び、ぴぎーッ！」

電気ショックを繰り返しているチビはまだ元気そうだが、うりぼーは少し声に元気が無い。それでも私達に向かってくる刃を迎撃してくれている……だが誰もが理解していた。限界が近いと……このままではジリ貧であり、何も対抗手段が無いと……

『そろそろ限界だろう、1人ずつ食い殺してくれる』

フェンリルの挑発するような声に焦りばかりが募っていく。なにか、何か無いの……あの無敵性と貫く方法は無いのかと必死に頭を働かせるが何も思いつかない……焦りばかりが胸を埋め尽くしていく……

「え？アリスちゃん!?今なんて言ったの?」

琉璃さんの驚いた声に振り返ると、アリスちゃんが影を指差して何かを呟いていた。アリスちゃんの指の先を見て、アリスちゃんが何を言っているか理解した……フェンリルに影が無いのだ。山の中で雲もなく満月のおかげで街灯がなくても足元が見える、だからフェンリルの影が無いのはおかしい……フェンリルの無敵性それは本体ではないから、魔力と神通力で出来た分身だから攻撃が通らなかった

「アルテミス様!上に飛んで下さい!その狼は違うツ!」

美神さんの叫び声を聞いたアルテミス様が上空へと凄まじい勢いで飛び上がっていく

『させるかあッ!』

4つの目と口から靈波砲を放ち、アルテミス様を打ち落とそうとするが、オリオンが指示を出して、アルテミス様はそれを減速せず回避し、更に更に上空へと昇っていく、天空まで上っていく……

「さあダーリン、愛を放つわよ!『月女神の愛矢恋矢ツ!!(トライスター・アモーレ・ミオ)』」

「冷静に考えろ、お前どこ出身!?!」

どこか真剣になれ切れないやり取りが上空から聞こえ、ピンク色の光を伴った巨大な神通力が流星のように地面に向かってくる。

『くそ!ふざけるな!我は、我は今度こそ世界を変えるんだツ!!』

自身に向かってくる神通力を迎撃しようと必死に靈波砲を放つが、密度が違いすぎる。フェンリルの攻撃は全て弾かれる

「終わりですわ。あの密度の神通力を弾き飛ばすのは不可能ですわ、それよりも美神精霊石の準備を!あれだけの神通力が炸裂すれば全員只ではすみませんわよ!」

「そ、そうね!精霊石よ!」

くえすの魔法によるバリアと精霊石の護り、そしてアルテミス様が

上昇するのと同時に、こつちに向かっていたビュレトさん、ブリュンヒルデさん、シズクの3人の結界が構築され、私達全員を包み込んだ直後。神通力の矢が地面に突き刺さる

『ゴーゴー・ゴええええええええッ!!ウ、ウオオオオオオオオオンンンンッ!!』

地面を震わせる凄まじい狼の断末魔の叫び、そして視界を埋め尽くすピンク色の光に私達は完全に視界を失い、その直後に結界を揺さぶる凄まじい衝撃に思わず悲鳴を上げてしまう

「ちいーふざけた言動でも古き神か！おい！くえす！魔力を回せ！結界が碎けるぞ！」

「は、はい！しかし、古き神の力がここまでなんて思っても見ませんでしたわ!?」

「ソーンッ！」

「ちっ、あの馬鹿女神め、もう少し手加減って物を考えろ。アリスはうりぼーの中に隠れる」

「う、うん……」

結界が音を立てて碎け、ビュレトさんとブリュンヒルデさんの魔術で結界を内から強化する。高城もこっそりと魔術で結界を強化してくれてた。アリスちゃんはまだ増えたままでぴぐぴぐ鳴いているうりぼーの群れの中に潜り姿を隠し、チビは本体のうりぼーを抱えて、横島の頭の上に避難する

「ややや、やばくないかあ!？」

【落ち着け！これだけの神性の結界だ！そう簡単に破れることは無い！】

チビとうりぼーを頭の上から、Gジャンのポケットに入れた横島が動揺して叫び、心眼が大丈夫だと言うが結界越しても地面を揺らしていて、大変な事になってるのが判る。現に限界を超えていた言峰神父は着弾時の神通力の衝撃で気絶してしまっている、良く私達や横島が意識を保っていると正直感心してしまった

「蛍ちゃん！横島君の方に行きなさい！琉璃は琉璃でしつかりしなさい」

「だ、駄目です……久しぶりの規格外の神通力で腰抜けました……」  
なにやってるのよ!?と叫び琉璃さんと庇う美神さんを見て、揺れる地面に足を取られながらも横島の方に向かうが……

「ちよつとー横島！抱っこしてよね!」

「あーずるいでござる!」

「……私も霊力が限界だぞ、横島」

精霊石を外して子狐モードになったタマモを抱き抱える横島とそれを見てずるいというシロは、シズクと共に横島の腰元に抱きついてる。それ見て私も正直膨れ面になりかけたが、それよりも早く

「蛍もー!」

「え?」

膨れるよりも早く横島に抱き寄せられる。怖くて震えているのに、それでも私を庇おうとしてくれた横島にときめいた。そして永遠とも思える数秒が過ぎ去り、光の柱が消えた時にはアルテミス様が私達の目の前にいて

「ワァー！ やったあ！ ダーリン大好き!」

周囲の被害なんて完全に無視で、勝ったーと嬉しそうに笑うアルテミス様とその肩の上で周囲の被害を見たオリオンが溜息を吐きながら

「はい、はいはい、お疲れさん……ほんと悪いね。こいつこういう奴だからさ、周りの被害とか全然考慮しないから」

酷い戦いだっただのに、最後までどこか締まりきれない。脱力するのを感じながらも全員無事だった……地面は岩盤が捲れ上がり、クレターが出来て、周囲の木が根こそぎ倒れているけど、それでも私達は全員無傷だ。私は思わずその場にへたり込みながら、良かったと呟くのだった……

「……この被害の補填を考えるだけで私吐きそうです」

「……今はそんなことを考えるのは止めましょう?」

悲哀に満ちた琉璃さんとそんな琉璃さんを慰めている美神さんの声は、聞こえたけど聞こえなかった振りをし、同じように地面に座り込んだ横島の肩に頭を預け、目を閉じるのだった……もう疲れて、疲

れて……意識を保ってられないから……

亜空間にも響いてきた凄まじい魔力の波動に眉を顰める

「そうか……死んだか」

あの人狼が本懐を遂げることを祈っていた。だが死んでしまったか……そう思うと残念でならない。フェンリルの特性がなければ私も協力したが、神魔を憎む心が消えることは無い。そのせいで恐らく人間を軽視したのだろうな……負けた理由を推測し、残念だったと呟く。だがそれを悔やんでいる時間も無い……

「やっと思つた」

亜空間の奥のそのまた奥。神々の墓場とでも言うべきその場所にやっと思つた……この世界から上位の世界に行くこともなく、だがかといつてこの世界に君臨することもしなかつた神々が眠る場所。神魔同士の争いでその肉体を失い魂だけになった神がいる場所。その場所に足を踏み入れた瞬間、魂を驚つかみにされたような圧迫感を感じ、身体が動かなくなる

『へえ？見てよ。何千年ぶりに肉体を持ったのが来たよ』

『ああ、そのようだな。だが小僧、貴様何をしにきた』

姿を確認できないが、私よりも遥かに霊格のある2柱の声に押しつぶされそうになりながら、懐に手を伸ばす。話をするつもりも、ここで死ぬつもりも無い

『私に従ってもらうぞ、古き神よっ!!』

懐から取り出した球体のボタンを押し込み投げつける。小賢しいという笑い声と共に球体に手が伸ばされるが

『あ、あれ？す、吸い込まれる』

『ぬう……貴様ッ！』

怒りに満ちた怒声が響くが、それよりも先に球体に2柱の神が吸い込まれるのが先立った。目の前に落ちた赤黒い球体と翡翠色の球体……

「はは！ははははッ！成功だ！成功したぞ！私は眼魂を作り上げたッ!!」



その2つの眼魂を持って来ていたアタツシユケースにしまい、更に  
空白の眼魂を手に亜空間を進む、この場に眠る神全てを眼魂へ封じる  
ために……

リポート19 魔狼の咆哮 その8へ続く

## その8

レポート19 魔狼の咆哮 その8

フェンリルとの戦いの後。私達はセーフハウスで傷の手当などを  
する事となった、正直直ぐにでも東京に戻って、唐巢先生などにも事  
件の顛末を話したいという気持ちもあつたし、それに神魔との連絡を  
取りたいという気持ちもあつたが……

「態々戻る事も無い。俺とブリュンヒルデがいれば魔界軍から誰か来  
るさ」

「こちらからも連絡をしてみるの、まずは身体を休めるべきかと」

と聖奈とカズマに言われ、自分の状態も鑑みれば今は動ける段階で  
はないと判断し、魔界軍から連絡役が来るのを待ちながら傷の手当を  
する事にしたのだが……

「うりぼーちゃん、こっちもお願いしますね」

「ぴーぐっ！」

おキヌちゃんの側に救急セットを背負ったうりぼーが近づき、おキ  
ヌちゃんはそこから絆創膏を取り出して、シロとタマモの頬に消毒液  
を塗ってから絆創膏を張る

【この深さなら跡は残りそうに無いですよ。良かったですね】

「本当よ、頬に切り傷とかありえないわ」

「そうでござるか？拙者はあんまり気にしないでござるが……」

女の子だから顔に傷が残らなくて良かったですねとおキヌちゃんが  
が笑い、タマモも良かったというのだが、良く判っていない様子のシ  
ロ。こういう所でシロとタマモの性格の違いと言うか、自分が女と言  
う認識の差が出ているようだ

(ふう……気を抜くと気絶しそう)

全員思ったよりもダメージと疲労が大きく、座り込むと動く事が出  
来ず。おキヌちゃんとノツブ、それに牛若丸とアリスちゃんと高城と  
言う異質すぎる組み合わせ……と言うか、少し大丈夫か？と思う組み  
合わせで私達は手当を受けていた。

「あいたたた……し、染みるわよッ!」

【あーすまん。適量って適当な量ってことじゃろ?】

……蛍ちゃんの傷に思いつきり消毒液を掛けているノツブ。涙目で呻いている蛍ちゃんを見て、どうか私にノツブが来ませんようにと心から祈った、そのおかげか私の方に来てくれたのはおキヌちゃんです。本当に良かったと心の中で呟く

【あ、あの、本当にこれで?】

「……ああ、大丈夫だ。水が足りないからな……がぼがぼがぼおお……」

牛若丸が不安そうにしながらシズクの顔を桶に溜めた水の中に沈め、蛇口を開く。ざばざばと水が出る音と、がぼがぼおつと言うシズクの声。正直言つて治療には見えないわね……

「はい。お兄ちゃん、絆創膏張つたよ」

「もう少し分相応つと言う物を考えて無理をしないことだな」

「おお、アリスちゃん上手だなあ。高城さんもありがとうございます」  
横島君はアリスちゃんと高城さんに治療されている。もし出来るなら蛍ちゃんが付きつ切りだっただろうけど、自分も満足に動けないので若干悔しそうに2人を見ている

「……」

くえすはくえすで肉体的な疲労とダメージはかなり少ないが、それでも魔力の消耗が激しいのかソファアに座って眠っている。

(それよりもクロクさん達ね)

横島君と一緒にだったシロやタマモは疲労こそ濃いけど、怪我自体はそうひどい物ではない。だが足止めに奮闘していたクロクさん、ポチ、長老そして言峰神父は相当な重症だ。ブリュンヒルデの用意してくれた治療を促進させる結界の中で眠っているが、動く気配が微塵もない所を見ると完全に体力と気が回復するまで目を覚ますことはなさそうだ

「琉璃、ヘリコプターとかチャーターできない?」

「出来ることは出来ますよ?でももしガープに撃墜されたらって考えるとリスクが大きすぎます」

琉璃の言葉にむうつと唸る。フェンリルを呼び出していたのが、ガープだとすれば、今回の結果も当然見ているはず。もしこの付近に罫などを設置されていたらと考えると容易に車などで移動するわけには行かないだろう。しかし本当に良くフェンリルなんて化け物に勝てたと思うわね……それもこれもアルテミス様の力が大きいんだけど

「あーん、これおいしー♪今の下界って凄いい物が多いわね」

「がももががもー」

ケーキを食べてご満悦なのだが、小さい熊の姿をしているオリオンの口にケーキを詰め込んでいる姿を見ると、少し……いやかなりやばい人にしか思えない、そんなことを考えていると部屋の真ん中に魔法陣が2つ浮かび上がり、一瞬身構えたが

「大丈夫です。私の妹と弟ですよ」

穏やかに笑う聖奈……と言うか、ブリュンヒルデの弟と妹？と首を傾げていると魔法陣から人影が姿を見せた。褐色の肌に金髪、そして鋭く尖った耳をしている少年とその隣で険しい顔をしている翼を持つ女性

「第二魔界特殊部隊分隊長ワルキューレ少佐参上しました」

「第四魔界情報部ジークフリード中尉参上しました」

ピツと敬礼する2人に聖奈はにこりと微笑み、次の瞬間ごつんつと言う音が2回響き、ワルキューレとジークフリードが頭を抑えて蹲る。その目は涙目で、いつの間にか槍を手にしていた聖奈を恨めしそうに見つめている

「敬礼と足の動きにバラつきがあります、それと声の張りが全く足りていませんよ」

「二つは、はいっ!!も、申し訳ありません」

穏やかかと思っていた聖奈だが、姉妹にはかなり厳しい性格なのか、やりなおし、やりなおしと何度も何度も口にし、その度にたんこぶを量産させていくワルキューレとジークフリードを私は呆然と見つめるのだった……

い、痛い……頭が割れそうだ。大姉上に呼ばれて姉上と一緒に人間界に来たけど、にこやかに笑いながら敬礼が遅いと怒り、何度も何度も僕と姉上の頭を叩く大姉上。身体と魂に刻まれたトラウマから文句を言う事も出来ない

「ジーク、余計な事を考えているから行動が遅れるのです」

「っは、はいっ！」

一際強く頭を叩かれ、目の前が涙で歪むのを感じながらもはつきりと返事を返す。他人にはとても優しい大姉上だけど、自分にも家族にも厳しい性格だから敬礼や挨拶が遅れると信じられないくらい怒る……今回は何回で終わるだろうか？1000回未満で終われば良いけど……僕がそんなことを考えていると横島君が動いた

「えーっと、あの聖奈さん」

「はい？なんですか？横島さん」

僕達に向けていた笑顔とは違う笑顔で対応する大姉上、その顔を見れば横島君への評価の高さが判る……と言うか事実高いだろう。僕の知っている横島君とは別人か？と思うくらい性格が落ち着いている、それに修行にも前向きで、手加減していたとは言え大姉上に一撃をいれた（僕も姉上もまだ有効打が入った事は一度も無い）僕や姉上の話を聞く気は無さそうだが、横島君の話は聞いてくれそうだ

「えーっとそのですね。あんまりごつごつ頭を殴るのはかわいそうだと思いますし、美神さんや神宮寺さんも神様の動きを知りたいと思うんですよ。先にそつちの話をして貰った方が俺達もうれしいかなーって……みんな凄く疲れていますし……駄目ですか？」

大姉上の顔色を窺いつつも最後まで自分の意見を口にした。姉上が小声でソルジャーではなくヒーローかと呟いた、それは確かに僕もそうだと思う

「そうだぞ、ブリュンヒルデ。ワルキューレとジークフリードを鍛えるのも良いが、まずは先に話すべき物があると言うものだろう」

「絞るなら後で絞ってやれば良いさ、特にジークフリードはな」

ビュレト様とベルゼブル様が助け舟……ビュレト様は明確な助け

舟だったけど、ベルゼブル様は明らかに自分のストレスでの八つ当たりを僕に向けているのが判る

「あれ？高城さんって実は魔界の偉い人なんですか？」

「……さあ？自分で考えろ」

……横島君に自分の正体話してないんだ……のほほんとした表情で尋ねられて、目に見えてうろたえているベルゼブル様案外うっか……

「おっと手が滑った「ぴぎゅいー!?」うごはあっ!？」

茶色い何かがすごい勢いで顔面に命中し変な声が出る。横島君のうりぼーって声と弱々しい泣き声で離れていく茶色い何か。だが目に当たった固い突起物で目の前が歪んでよく見えない

「高城さんーうりぼーを投げないでくださいよ！」

「つす、すまない、手が滑ったんだ……業とじゃないんだ。本当だ」

ベルゼブル様が動揺してる声が聞こえる。横島君が何かを抱えて怒っているのがぼんやりと見える……一体僕は何を投げられたんだ？……それが判らないからますます混乱する

「はあ……判りました。ワルキューレとジークへの教導は持ち越す事にしましょう。報告をお願いします」

横島君とベルゼブル様のやり取りで氣勢を削がれたのか、疲れた様子で話すをするように言う大姉上。痛い目にあったが、結果的には大姉上からの教導から逃れる事が出来たので僕は心の中でベルゼブル様に感謝を告げるのだった……

ワルキューレさんとジークさんの報告を聞きながら、何度も何度も意識が飛びかける。シロとタマモ、それとチビは丸くなり、うりぼー巨大化してカーペットのの上に伏せて眠っているし。おキヌさん達も流石に靈力の限界なのか、空中で腕を枕にして眠ってるし、アリスちゃんは横島の膝を枕にして寝息を立て、横島は何度も舟を漕ぎながらも何とか目を開けて話を聞いているという状態だ。普通だったら何この状況？って言うくらいごちゃごちゃしているが、そんな突っ込みも出ないと言うか出す余裕も無いくらい皆ギリギリだ

(やっぱりプロだわ)

美神さんと仮眠から目を覚ましたくえす、それと琉璃さんの3人は眠い素振りなど一切見せず。2人の報告に耳を傾け、気になっている部分に質問している。プロのGSとしての意識の差を思い知った気がする

「じゃあ、ガープは今回は動いていないってことで良いのかしら？」

「はい、魔界の基地などに一切の被害も無く、また天界も同様です。恐らくフェンリル狼の復活を隠れ蓑にし、何かの道具の調達をしていると魔界正規軍は考えています」

「フェンリル狼の復活で必然的に警戒度の低い拠点から、重要度の高い拠点に人員の再配置が行われましたから」

ジークさんの返答を手帳にメモしている美神さん達。私もメモしようと思うのだが、眠くて眠くてまともな字にならない

「……………ここから東京への転移は可能なのか？」

「それについては問題ない、既に私達が来るのに転移を利用している。フェンリル狼とその素体になった人狼が結界の基点となっていたのだろう」

フェンリル狼が倒れたから、転移を阻害する結界が消滅したと説明してくれるワルキューレさん。だが、出来ることならばミズチタクシーは避けなければならない。今の疲労している段階では戻す可能性が余りに高すぎる

「とりあえず、今日一晩泊まって明朝東京に戻ることにしましょう。琉璃、東京の方で救急車とかの手配をお願いね」

「判つてます。明日戻る時間が決まればその時間に来てくれるように手筈を整えます」

クロさん達の傷は思ったよりも深く、本人達は嫌がるだろうが東京の霊能病院に強制入院となりそうだ

「なあ。お前」

「え？何!?なんの話ッ!？」

「お前女神は止めとけ、女神は駄目だ。お前星座にされるぞ？」

「ねえ本当何の話!?!何の話なのか教えてくれッ!？」

「俺の直感。お前すっげえ女難……「ダーリン♪そろそろ寝ましようね」ぴぎゆるッ！」

横島に何かをアドバイスしていたが、アルテミス様に胸に抱き抱えられ、強制的に沈黙させられるオリオン。しかし星座になるとか……それってオリオンの最後であり、横島も星座になるとか聞いて、大丈夫かな？って思ったのは言うまでも無いが……しかし星座になるとか、横島はどうなってしまうのか本当に心配になる

「アルテミスはどうするつもりなのですか？」

「……放置になります。古の神なので私達ではちよつと手が出る相手ではないですし、下手に怒らせると自然災害とか連続で起こしかねない相手なので……」

くえすの質問に聖奈さんが非常に暗い顔で告げる。終わったら帰るのかな？と思っていたのだが、居座る気満々と言う様子。聖奈さんは飽きるまで待つしかないですねと言う

「はい、聖奈さん。質問です」

「なんですか？横島さん」

横島が小さく拳手をして質問と言う。横島は首をかしげながら

「今の神様と古い神様って何が違うんですか？」

横島に質問は少し私も気になっていた。同じ神族なのにと私も思っていた

「それはあれだ。前の神魔大戦の後。何人かの神魔は今のくだらない神魔の情勢に飽き飽きして別の次元に隠遁することを決めた、それが古き神々だ。俺の知ってるあたりだと、イシユタル、エレシユキガル、ティアマトーなどのメソポタミア神話系の神がそうだな。今の世界にいる神々とは権限から魔力量まで違う、イシユタルで言うと、木星までワープできたりするし、ティアマトーだと魔獣を子供として生むな」

カズマさんの解説に横島の顔が大きく引き攣る。今の神様でも強いのに、古い神様はもっと強いのかと驚いているのだろう。アルテミス様の力も凄まじかったし……ギリシヤ系の神様もやはり桁違いの力を持っていると見て間違い無いかも……



「私やワルキューレ達北欧神話系も体系的には、古き神々となりますが、能力に制限を掛けて今の世界に留まっています。お父様も本来の能力で言うとは半分ほどに弱体化しておりますが、それでも神魔の中では最上級に位置しております」

聖奈さんとカズマさんの説明にへーつと返事を返す横島。んつと  
呟き

「でもさ。カズマさんって本当はビュレトって言うソロモンの魔神なんですよね？ソロモンの魔神は古い神ってやつじゃないんですか？」  
「俺らは元々は天使種だ。それが変化して魔族になっっている、正確には俺らは神じゃない。その違いだな、それと古い神って言うのは強い力を持つゆえに、今のデタントのしがらみとか、人間の信仰で世界を失った奴が多くてな。基本的にはもう自分達にやることは無いってことで隠居している……アルテミスは、オリオンを気に入って、オリオンを逃げられない上位世界に連れ去ったんだがな……基本的に自分本位で人の話を聞かない女神でもある」

……やばい人もあって思っていたけど、本当にやばい人だった。部屋の中に嫌な沈黙が満ちる……

「ちなみにシズクはどっちなの？」

「……本来の姿なら古い神だな。だが今は能力を制限しているから、今の神魔で言えば、上級つと言うところだ」

水神で竜神って言う2重神性。確かにシズクは桁違いの能力を  
持っている神様と言えるだろう

「お父様からは、暫くの間人間界に駐在せよとの事です。フェンリル狼の復活で土着の神などの様子がおかしくなるかもしれないので、私は調査を命じられています」

「僕は大姉上の助手で横島さんの護衛の手伝いをするようにと、あとアリスちゃんの保護者が近い内に迎えに来るのでそれまでの護衛も命じられています」

やっぱりフェンリル狼の復活は神魔の間でも大きな出来事だったみたいね。聖奈さん、カズマさんに続き、更に人員を送り込んでくる辺り、そこが良く判る。しかしアリスちゃんを迎えにベリアルさんと

ネビロスさんなんてビッグネームが同時に動いても良いのだろうか  
「つたく、過保護すぎるんだよ。あの馬鹿は」

高城さんが小さく過保護すぎる馬鹿がと呟く、ハーピーさんやワルキューレさんがいるので態々迎えに来なくても良いのにねと小さく苦笑していると、2人はとりあえず報告できるのはこれで全部ですと敬礼する

「ご苦労様でした。とりあえず、今日のところはワルキューレとジークが寝ずの番をしてくれるので」

「え!？」

「なんですか?」

聖奈さんの言葉に聞いてないと言わんばかりにえつと言うが、聖奈さんに睨まれなんでもないですと言う。姉と妹弟の力関係が一瞬で理解出来た

「まあ見張りをしてくれるならありがたいわ。休ませて貰うわね、螢ちゃんと横島君も休むと良いわ」

聖奈さんの決定に口を挟むと飛び火しそうなので、逃げに回る美神さんにそうですねと返事を返し、巨大化しているうりぼーに背中ヲ預けて目を閉じるシズクとその近くでうりぼーの巨体に顔を埋めて動かなくなつた横島に大丈夫かな?と言う不安を抱きながら、その場を後にするのだった……そして翌日私達はワルキューレさん達の護衛の元東京に戻つたのだが……

【のぶう】

「ごめん、ごめんよ!チビノブ!」

マリアさんとテレサさんに連れられ、帰って来たチビノブに必死に謝る横島と、ぷくうつと頬を膨らませて怒っているチビノブと

「良かったああ……お帰りいいいい!」

「ハーピーお姉ちゃん。ただいま」

帰ってくるまで平常心では居れなかったであろうハーピーさんがアリスちゃんに抱きつき号泣するとか帰って来たら、帰ってきたでとんでもない騒動が待ち構えているのだった……

フエンリル狼の復活……ワルクユーレとジークを送り出したが、正直先ほどから嫌な胸騒ぎが消えない

「ムニン、フギン。頼むぞ」

私の使い魔であり、幻想種では最上級に位置する2羽を解き放つ。今までは封印してきたが、どうもそれ所ではない。フエンリル……我の神としての身体を食った魔狼。魔族へと転身し、存在を保ったがフエンリルの存在は我の中では思い出したくも無い相手だ。だがガープが態々フエンリルを呼び戻そうとした、それに違和感を如何しても感じるのだ。確かにフエンリルは強大な魔獣だが

(態々呼び出すに値するか?)

フエンリルは知性はそう悪くは無いが、それはあくまで獣としてのレベルの話だ。そんな相手を態々ガープが労力を使い呼び出すことに意味があるのか?と思うのだ。

「フエンリルを囚にしたとも考えられる」

フエンリルを人間界で復活させる事で、天界と魔界の護りを固めさせる。そしてその間に自分の本命を成し遂げるのではないか?フエンリルという北欧神話最強の獣を復活させる事で、探知能力を誤認させ、スルトやロキを目覚めさせようとしたのではないか?その考えに迫り着いたのだ。世界を焼き尽くす存在であるスルトと善でもあり、悪でもある北欧最強の悪神ロキ。その両名、もしくは片方でもガープ陣営に入ったとなると情勢は一気に変わる。今まで電撃戦を仕掛けてきたアスモデウス達が制圧をするための戦術に切り替えてくるだろう……

「オーデイン様」

「……なんだ」

考え事をしていて部下が部屋に入ってきている事に気付かなかつた。顔を上げて驚いた

「アマイモン?」

「ああ、そうだ。勝手に入ってきて悪かったな」

おどおどしている部下の背後にいるアマイモンがやりと笑いながら無事な左腕を上げる

「何故？」

「何故？フェンリルなんて化け物が目覚めて、いつまでも引き籠もつてられるわけが無いだろう」

戦力としては役に立たないが、それでも役に立てることは有るだろう？とアマイモンは笑う

「すまない、助かる、これからガープ達の動きが激しくなりそうなんだ」

このタイミングでアマイモンが復帰してくれたのは正直ありがたい。我は早速最高指導者へとアマイモンの軍部への復帰について連絡を入れるのだった……そんな我を見つめているアマイモンの視線に気付かずに……

別件リポート 白竜組 修行中

## プチトトカルチヨ

プチトトカルチヨ 開幕 その3

「ダンタリアン。前回はちつとないんちやうか？」

「私はテーマを提供しただけだ。文句は受け入れん」

前回のトトカルチヨではマスコット軍団の勝利で勝利者0という結果になった。だがそれは私の責任ではないし、何よりも

「自分たちの設定付けが甘かったと後悔するのだな」

詳細な賭けの内容はキリストとサタンが決めている。だからそれは私の責任ではないといいつつ、干乾びたミイラみたいになっているキリストを見て鼻で笑う。博打にのめり込むリスクくらいもう少し考えろと言いたいものだ

「キリスト、何か食べるか？」

声を出す元気も無いのか、顔を上げて熱心に私を見つめるキリストに食べるといふ返事だと判断し、使用人に食事を用意させるのだった

……

「ふーっ 馳走様でした」

上品な素振りで口を拭うキリストだが、食べてる間は獣同然だったな。これで天界の最高指導者だと言うのだから失笑を浮かべたくなる物だ

「それでダンタリアン。次の賭けのテーマだけど面白そうなのはあるか？」

1ヶ月分の鉱山の収益は失ったが、たった1カ月分。直ぐに賭けの失敗は取り返すことに成功している、これが資金の備蓄のあるなしの大きな差となるだろう

「ふむ、そうだな。お前達は最も大事な事を忘れてる事に気付いてるか？」

不思議そうに首を傾げるサタンとキリストに溜息を吐きながら

「結婚での最大の障害は親である場合もあるだろう？」

「あ」

キリストとサタンの今気付きましたという声が重なる。以下に本人が好きあつていたとしても、親御の反対と言う可能性があるだろうに

「だから横島の両親と言うか……母親だな」

あの親父は駄目親父だから、母親の方がいいだろう。母親の現段階での参加者の好感度を賭けの対象にしたらどうだ？

「確かにあの母親に好かれるのはやはり大事ですよね」

「めっちゃ強いもんな、あの人」

うんうん、いい感じいい感じと笑い、ありがとうと叫んで出て行くキリストとサタンを見送り、読んでいた本にしおりを挟んで

「それで？お前の相談の内容は？」

キリストとサタンが尋ねて来たから隠れたゴモリーにそう問いかける。普段のドレスではないが、それでも美は全く隠す事が出来ない。よく自分の城から私の所まで来れたと正直感心するレベルだ

「枢ちゃんに会いたいのよお……手伝って、ダンタリアン」

枢……確か、こいつが暫く面倒を見ていた人間だったか、予知能力持ちの

「貴方も予知能力者でしょ？枢ちゃんを助けるっと思って」

「あー判った。判った、まわりつくな、鬱陶しい」

どうもゴモリーだけは苦手だ、泣いていると助けてやりたいと思っ  
てしまうから……

「じゃあいくか？」

「良いの!？」

良いのって言うっておきながら、私がいくって言うまで付き纏うんだろ？と尋ねると言葉に詰まる。ゴモリーに苦笑しながら構わないと返事を返すのだった……ゴモリーとダンタリアンがこっそりと人間界に行く打ち合わせを始めたのと同じタイミングでキリストとサタンからトトカルチョ参加者にプチトトカルチョの案内が配られるのだった……

『横島の母親に気に入られてるのは誰だ!？』

人間でありながらとんでもない能力を持っている横島の母親の百合子氏に今もつとも気に入られているのは誰か？その好感度ランキングを当ててバッチリ儲けましょう。人の心理や心を見る事が出来る神魔に協力して貰うので、今回もかなり精度の高い結果が出ると思われます。本トトカルチョの参考にどうぞ！

今回の参加者は

「芦菫」 1・2倍

大本命でありながら、いつも良い所でチャンスを逃す。だが今回は母親の好感度なので、今回こそは本命のままゴール出来るか!?

「神宮寺くえす」 3・2倍

横島の師匠として1度挨拶を交わしている。かなり友好的な出会いをしているので、勝利者となる可能性は極めて高い

「シズク」 4・8倍

息子の家で息子の面倒を見てくれている神様と言う認識だが、横島が居ない時に世間話をしていたり、それなりに信頼関係を築けている可能性が高いぞ

「おキヌ」 5・2倍

幽霊だが、礼儀正しく、友好的な出会いと付き合いをする事が出来る。幽霊なので花嫁として考えている可能性は勿論ゼロだが、礼儀正しい子として気に入られている可能性は高い

「タマモ」 6・2倍

最近の帰国で人間に化ける事が出来ると百合子さんも知った。やや気は強めだが、百合子さんと横島に対しては礼儀正しく、家族として受け入れられている。狐時代が長かったのが不安要素だが、家族として受け入れられているので好感度は高いと思われる

「マリア&テレサ」 7・5倍

前回の帰国時にドクターカオスから話を聞き、そして横島からの手

紙で百合子さんが知った姉妹。横島に明確な好意を寄せているマリアと、よく判らないけど横島といると楽しいテレサと言う凸凹姉妹。写真と手紙で知っただけだが、人を見る目が凄まじい百合子さんから見えてどう見えるのか？好感度ランキングゆえに今回のダークホースとなる可能性は十分だ

なお今回は前回の全員はずれの影響もあり、百合子さんの好感度ランキング1〜6位を予想し、そのうち2つの順位が当たっていたら当選となります。やや低めの払い戻しとなりますが、皆様奮ってご参加ください

一方その頃ナルニアでは神魔が自分の息子を賭けにしているとは知らない百合子はレアメタル発掘のスケジュールを組みながら

「忠夫どうしてるかなあ」

周りの人間に恵まれ、色々の良い方向に成長している忠夫の事を最近考えてしまう。今思えば叩いて伸ばす自分達の教育計画は忠夫にはあつていなかったのだろう……だから忠夫は歪んだ方向に成長してしまった。それを正してくれた蛍ちゃん達には正直感謝の言葉しかない。偶に送られてくる忠夫の手紙を見ると充実した毎日を送っているようにも思える

「でもこの子は本当に何やってるんだろうね」

先日送られて来た手紙に同封されていた写真には黒髪のまた幽霊の女の子と並び、猪を抱き抱えている写真が送られて来た。2枚目の写真にはカオスさんとその娘さんだろうか？2人の姉妹と蛍ちゃん達と一緒に撮った写真も同封されていた

「この子達がマリアさんとテレサさんね」

カオスさんが自慢の娘と言っていたけど、確かに写真で見ても器量良しの子に見えるわね……でもこうして見ると、忠夫の回りって女の子ばかりに見える……

「忠夫って結局誰と付き合う気なんだろう……大丈夫だとは思うけど



ちよつと心配になるわね」

うちの馬鹿亭主みたいに手当たり次第と言うことは無いだろう。あの馬鹿が凄まじいレベルで反面教師になってくれたので、そこは大丈夫だろう

「結構押し強そうだな子もいたし……神宮寺さんとか」

忠夫がずいぶん信頼している様子の神宮寺さんとかは、物凄い押し強そうだな子だ……それに対して蛍ちゃんは少し気が弱そうに見えるし……

「既成事実とか笑えない結果にならないければいいけど……」

……自分で言うっておいて少し心配になってきた。発掘スケジュールを組み上げるのを1度中断し、変わりにノートと便箋を取り出して「1回忠夫の周りであった人のことを考え直して見ましよう」

余計なお世話かもしれないが、それでも忠夫は大事な息子だ。だからこそ、1度私が出会った忠夫の周りの女の子の事を思い返してみようと思うのだった……

なお急に百合子がそんな事を考え出したのは、神魔の手によるものであり、新しいトトカルチヨの案内を神魔が見ている隙にゴモリーとダンタリアンは魔界を後にするのだった……

参加方法は前回同様活動報告にて誰に賭けるかエントリーしてください、詳しくは活動報告に記載しておくので、今回もどうかよろしくお願いします

## 別件リポート

別件リポート 白竜組 修行中

横島が所長代行の時に除霊の手伝いをしていたが、鬼のいる山の調査と言う一件から白竜寺の住み着いた自称仙人（お師匠様が仙人と断言したのでガチの仙人様だった）「綱手」は少々気性が荒く、いい加減な所もあつたりする非常に人間味溢れた仙人だったのだが……

「あー酒が美味しいねえ」

「朝から酒飲むなッ！」

真面目な時は凄く良い師匠と言うのは認めるのだが、ちよつと本当に仙人か？と思うところが多い、酒は好きで、肉も魚も好む（霞だけでも平気らしいが、どうせなら良い物を食べたいらしい）後出会ったときもそうだったが、賭け事が好きでお師匠様とは別のベクトルで大丈夫か？と不安に思ってしまう人物だった……

「はー、やれやれ、陰念に酒を取り上げられちゃったからねえ……今日は少し修行に参加しようかねえ」

「取り上げられるのが嫌なら人の部屋で飲むな」

固い事言うんじゃないよと笑う綱手、赤い染め抜きのある着物を肩から羽織ったいつもの着物姿だ  
「どうも」

「おう、雪之丞。顔が固いぞー」

先に訓練していた雪之丞だが、綱手を見て顔が固くなる。どうも雪之丞の感性的には苦手なタイプに分類されるようだ。ちなみに、俺も苦手だ

「綱手さん、今日は訓練を見てくれるんですか？」

「ああ、でも東條。お前はまだ無理だな、基礎が出来てない。しっかり走り込みと体力トレーニングをしっかりと積みな、ちゃんと基礎が出来たら稽古を見てやるから」

綱手の言葉にはいっと元気良く返事を返した東條は走り込みにいきますと言って、走っていくその背中を見ていると綱手は他人よりも

自分の心配をしなと俺に言う

「お前の今の状態は三蔵に聞いてるよ。まああれだ、良く生きてるよ。お前」

普通は戻ってこれないんだぞ?と笑った綱手だが、次の瞬間には拳を握り

「だけど、何時自分を飲み込むか判らない力をそのままにしているのは宜しくないね」

綱手が何を言っているのか、俺も雪之丞も理解し、そしてその上で雪之丞が口を開いた

「綱手さん「さんづけはいらない、むず痒い」綱手。横島も同じ力を持つているが、それでも乱用していい力じゃないんだぜ?」

「そうかい、で?その横島はお前と同じ過程でその力を手にしたのか?」

同じ力、似たような力でも俺と横島では手に入れるまでの過程が違う。それを言われると俺も雪之丞も口を閉じるしかない

「暴走するのは見てたから知ってるよ。でもね、それをあたしが封じてやる。何度も何度も叩きのめして、制御する感覚って奴を体で覚えな。それとも本当に心中するかい?」

眼魂の中にいる悪魔と心中するつもりなんかない、俺は胴着の中から眼魂を取り出す

「お前いいのか?」

「良いも何も俺自信このままじゃ駄目だと思ってるからな」

眼魂があれば霊能者として復帰できる。お師匠様の言葉に嘘は無かったが、自分の力としてなければ何時牙を向くか判らない力をそのままにしておくつもりは無い。これ以上皆に迷惑を掛けるつもりは無いのだから、もし制御できるようなると言うのなら願ったり叶ったりだ

「無理すんなよ」

心配そうにしていた雪之丞の巻き込まれると危ないから離れるように言うと、無理するなよと言って離れて行く。俺は雪之丞の姿が見えなくなつたのを確認してから眼魂のボタンを押し込んだ

「アーイー・オソレテミーヤー、オソレテミーヤー」

恐れてみるとは本当にいい性格をしている。現れたパーカーが俺を馬鹿にするように目の前を飛ぶのを睨みつける

「変身ッ！」

「カイガン！・ホロウ！・心中！・ゲツチュー！・ガクガクゴーストッ！」

目の前に錠前が現れ、そこから伸びた鎖が手足を縛りつけ、胸に埋め込まれる。視界が大きく広がり、全身の力が満ちるが、それと同時に身体を蝕む悪意のような物を感じる

「さてと、あたしとの組み手だが、戦うのはあたしじゃない。判ってるね？」

綱手が拳を握り、羽織っていた着物を投げ捨てながら問いかけてくる。それは俺も判っている、敵は俺と俺の中にいる悪魔自身だと

「まあ暴走したら暴走したとき。死ぬほどぶん殴って正気に戻してやるから覚悟しな」

目が完全に据わっている。俺は小さく深呼吸してから拳を握る、力を使えば使うほどに胸のざわめきが強くなる。だが相手が止めてくれると言っているなら、それを信じよう。俺はそう思い、相手が格上と言うのも分かっているので先手必勝と地面を蹴り、跳躍した勢いで拳を繰り出すが、俺の拳に攻撃の当たった手応えはなく、変わりに腹部に重い衝撃が叩き込まれた

「ぐっっ！」

「相手が格上だから突っ込むって言う考えは嫌いじゃないけど、もう少し状況を見な」

綱手は俺の突進に合わせてかがみ込み、起き上がる勢いで足を振り上げたのか

「ぐっ……」

「そら、歯を食いしばりな」

顔面に拳大の岩がめり込んだかと思った。凄まじい衝撃と共に弾かれたように殴り飛ばされる……吹っ飛ばされながら体勢を立て直し、地面に手を叩きつけ勢いを殺し、綱手を見るが

(い、いない!?)

目の前にいるはずの綱手の姿は無く、背後から凄まじい衝撃を感じ  
上空に蹴り飛ばされる

「仙人が仙術だけと思うんじゃないよ、体術だって極めてるんだから  
ね」

上空にいた綱手の説教めいた声と共に繰り出された回し蹴りが腹  
に叩き込まれ、地面に叩きつけられる。全身に走る凄まじい激痛に意  
識が薄れ、胸の中で大きく何か脈打つ感覚したと思った瞬間。俺の  
意識は闇の中へと飲み込まれていくのだった……

【ホロウ！ フォロー！ 嘆きのソウルツ!!】

「ウオオオオオオオオツ!!!」

パーカーが1度離れ、再び装着され、肩当が手甲となり靈力で出来  
た鋭い爪があたしに向けられる。その目はどう見ても正気ではなく、  
唸り声同様獣同然と言うのが良く判る

「さてと、ここからが本番だね」

誰に聞かせるでもなく、自分に言うように小さく呟き、拳を握り締  
める。あたしの目的は陰念よりもこの悪魔だった……雪之丞にも悪  
魔が憑いているのは知っている。だがそれは観察しているようで、敵  
意は少ない。だが陰念の悪魔は違う、肉体を欲し隙あれば陰念の肉体  
を奪おうとしている。ならば1度叩きのめし、表に出れば制圧される  
と言う事をこれでもかかと教えてやろうと思ったのだ

「ウオオオオオオンツ！」

唸り声を上げて飛び掛ってくる悪魔にあたしは拳を硬く握り締め、  
地面を思いつき踏み込み拳を繰り出す

(!? 硬い)

鈍い音と共に手に跳ね返ってきたのは恐ろしいほどに硬い感触。  
殴ったこつちの手が痺れている、舌打ちしながら蹴りを繰り出し距離  
を取ろうとするが、片足、片足で地面を蹴ったそれだけで弾丸のよう  
な勢いでこつちに突っ込んでくる

「土遁の術ッ！」

やばいと直感的に判断し、指を噛み切り印を結ぶ。地面から硬質な

岩の壁が姿を現し、それが悪魔の突進を防ぐが、それがたいした時間稼ぎにならないことは判っていた。印を再び結び、大きく息を吸い込む

【「ウオオオオオオッ!!!」】

陰念と悪魔の声が重なりながら、岩の壁を砕いた瞬間。練り上げた霊力を一気に開放する

「火遁の術ッ！」

視界を埋め尽くす紅蓮の壁。それに頭から突っ込んだ悪魔は炎に飲み込まれ、両手を振り回し、頭を抱え地面を転がりまわって炎を消そうとするが、そんじよそこらの炎じゃない。霊力に仙術、つまり自然の力も練り込まれた私の術は神魔でさえも致命傷となりえる

「おい、質問に答えろ。そしたら炎を消してやる」

演技は止めろと遠まわしに投げかける。獣同然と言うが、そうではないとあたしは感じていた

「獣の振りをして、お前自身がこの世に留まる要となっている相手の身体を奪い何をするつもりだ」

【黙れ、女】

炎の中に揺らめく悪魔の姿が映し出される、暗褐色の鎧に、4本の腕、そのうち2本には巨大な戦斧が握られている

「あたしはこいつの師匠でね、どうしても口を出さずにはいられないんだよ」

まだ認めてもらっては無いけどねと心の中で呟く、まあ白竜寺の面子は皆良い連中なので、こいつらが寿命で死ぬまでは見て見たいと思っている

【憎い、恨めしい、俺を利用したあいつらが憎いッ!!】

【「オオオオオオオッ!!」】

悪魔の声と陰念と悪魔の声が重なった怒号が周囲に響き渡る

「ちよっと!?!なにやってるの!」

「少し黙ってな、良い所だよ」

只事ではないと判断したのか、駆け寄ってきた三蔵に黙ってなど言う。この悪魔の正体を突き止めること、それが陰念が己を制御する第

一歩になるだろう

【恨む、恨むぞ33……俺を、俺を！利用した貴様を！許さぬ、許さぬぞッ!!誇り高き大公爵である】

【オヤスミー】

錠前が再び陰念の手足を縛つたと同時に陰念が元の姿に戻る。慌てて火遁を解除し、深く溜息を吐く

「良い所だったんだけどねえ、ねえ三蔵。大公爵って知ってる?」「知らないっていうか！あたしの弟子に何してるのよ!」

倒れてる陰念を大事そうに抱える三蔵に悪かったよを謝る。あの悪魔の正体を知りたくて無理やり引きずり出しては見たものの、結局は判らないと言う事が判つただけだ。仙人ではあるが、あたしは東洋には詳しいが西洋の悪魔なんて知るわけも無いんだから

「あんまり無茶な事をしないでよ。大事な弟子なんだから」「悪かった、悪かったってば。もうしないよ」

陰念に過負荷を掛けるつもりは無かったし、悪魔を叩きのめすことで屈服させ、陰念が制御しやすいようにするって言うのも嘘じゃない。予想外だったのは、悪魔の矛先が陰念ではなく、自分を操った相手……ガープに利用された怒りに燃えていたって事か……

「陰念?大丈夫?意識ある?」

「……う、うん……お師匠様?」

良かったあつと笑っている三蔵に背中を向けて、その場を後にしながら考える。もしも陰念が眼魂とやらに宿る悪魔を制御出来る時が来るとすれば……それは多分1回限りのチャンスだろう

(ガープに向ける憎悪が重なった時しかないだろうね)

なにせよ。あたしと三蔵でもどうしようもならない因縁が陰念と悪魔にあると言う事がわかつただけだった……

綱手さんと組み手をし、意識を失つたと聞いて東條と一緒に陰念の部屋に向かう。勿論夕食のおかゆと薬を携えてだ

「陰念先輩も無茶をしますよね。クシナさん」

「そうね。陰念はあれはあれで責任感も仲間意識も強いしね」

水などを運ぶのを手伝ってくれている東條が小さく呟く。東條は陰念に面倒を見てもらっていたので、年下の中では一番陰念に懐いている。

「口は悪いけど、結構良い所あるのよね」

雪之丞は仲間意識がかなり強く、年下にはやや甘い所がある。だが陰念は違う、確かに仲間意識は強いが、それと同時に1人1人が独り立ち出来るようにと考えているので厳しい所があるのだ

「そんなに早く霊能者として復帰したいんですかね？」

「まあ自分のせいであって思ってる所が無いとは言いい切れないわね」

神魔から無罪放免という通達があり、雪之丞は仮免を手にしたが陰念はそれを断った。自分で制御できるまではと断ったのだ

「あんまり無理をしないで欲しいんですけどね」

「それは無理って物よ。東條」

自分で決めた道を違える事が出来ない。そういう不器用で堅物な所があるのが陰念だ、もうこうなれば口で止る事はありえないだろう

「陰念、雪之丞。入るわよ？」

そう声を掛けてから2人の部屋に入ると、陰念が滝のような汗を流しながら巨大な物体を動かしていた。それは陰念の霊力の操作の修行的な物で、倒れたばかりで何をしているのつと怒鳴り込もうとした瞬間

「揃ったッ！っうおっ!!」

陰念が出来たと嬉しそうに叫び、その瞬間眩い光が放たれる。正直、良く手にしていたお盆を落とさなかったと自分を褒めたいくらの閃光だった

「目があ!!」

近距離で見えていた雪之丞が目を押さえて悶絶する中。多分私だけは見えていた、閃光の中に立つ何ものかの姿を……赤と青の鎧……横島君のウィスプや陰念のホロウよりも鮮やかで機械的な印象を受ける姿、その姿がブレ、赤と青の2人の姿になり。その姿が弾ける様に消えると、陰念の手の中に赤と青の二色で構成された眼魂が落ちてくる



(あのライダーが眼魂になった?)

三蔵さんが眼魂をいくつか持っているのは知っていたが、陰念が制御出来ないことを考えて渡さずに保管していた。私は勿論眼魂が何かなんて知らないので憶測だが、多分あの光の中で見たライダーがあの眼魂に宿っていると考えると良いのかもしれない。でも今は眼魂所ではない、机の上におぼんを置き

「東條。水を置いて部屋に帰りなさい」

「っは、はいいいいいいっ!!」

水のピッチャーとコップを置いて走り去る。ようやく私に気付き、顔を青くする陰念と雪之丞にニツコリとワライながら

「正座」

「っはい」

食事をさせる前に説教する事になるなんてねと小さく溜息を吐きながら、まずはと2人の頭に拳骨を落とし

「今日大人しくしてろって言ったわよね?なんでこんなのやってるの?雪之丞もなんで止めないのよ?」

「ごめんなさい」

振るえながら頭を下げる2人に駄目よときっぱりと口にし、それから1時間みっちり2人に説教をし、最後に全力で2人の頭にもう1度拳骨を落とした

「じゃあおかゆ温めなおしてくるから。今日はもう大人しくしてなさいよ」

折角作ったのに冷めてしまったおかゆを手に、頭を抑えてごろごろ転げ回っている2人を尻目に私は2人の部屋を後にするのだった

……

リポート20 狼の居る日常 その1へ続く

## リポート20 狼の居る日常 その1

リポート20 狼の居る日常 その1

「よーこーしーまー。いい加減に起きなさいよー」

むにむにとほっぺを引っ張られる感触がして、うつすらと目を開く、フエンリルの一件で疲れが溜まっているので朝のランニングは休むって言ってた筈だけど……ぼんやりとした思考と歪む視界で頬を引っ張ってる誰か……多分蛍に視線を向ける。ぼんやりとした視界でも判る蛍のシルエットじゃない、ボリユームのあるふさふさとした鮮やかな金髪……ん、んんー

「たまもー、かってにせいれいいしもちだすと、しずくにおこられるぞお……」

眠すぎるので舌足らずな感じになってしまったが、シズクに怒られるぞと言うとタマモがくすくす笑う気配がする

「もう精霊石はいらないのよ、9本目の尻尾が戻ってきたから。と言うか本当に起きなさいよ」

「ふえ？」

ぐいつとタマモに腕を引っ張られベッドから身体を起こす。大きく欠伸をしながらベッドに腰掛けているタマモに視線を向ける、確かに首に精霊石のペンダントは無いし、精霊石のペンダントで人化した時よりも少し成長しているように見える

「えっ…マジっ？」

「うん、マジ。あ、でもやっぱり時間制限はあるのよね」

完全に人化しているタマモに意識が覚醒し、マジ？と尋ねるとマジなのよと笑うが、でも時間制限はあるのよねと笑うタマモ

「まー戻ったばかりだし、狐の方が楽と言えば楽なのよ。ほら、もう昼近いから起きなさいよ」

ベッドから立ち上がるとぽんつと言う音を立てて狐の姿になり、部

屋を出て行くタマモを見送り頭に心眼を巻く

【漸く起きたか、調子はどうか?】

「ちよつとダルいかな?寝すぎだろうか」

身体が少し重いというと心眼は当然だと笑った。高密度すぎる靈力の渦にいたから身体感覚がおかしいのだと説明してくれた

「でもそれだと直ぐに出るんじゃないのか?」

もう2日くらい経ってるけど?と訪ねながら部屋の中を見る。チビとうりぼーの寢床にチビとうりぼーの姿はなく、部屋の隅にチビノブの布団(シズクが捨てるタオルとかで作ったセット)が丁寧に畳まれている。寝てたのは俺だけかと思わず苦笑する

【靈力のバランスが崩れてるからな、ある程度感覚が戻った後に出て来るんだ】

靈力のバランス調整の上手い美神達は昨日の内に出てるだろうなと心眼が付け加える。靈力のコントロールが未熟だから出るのが遅れたって思えば良いかと思いいりビングに向かう

「あ、お兄ちゃんおはよー♪」

「おはよう良く眠れた?」

アリスちゃんとハーピーさんに手を振られ、ちよつと寝すぎたかも?と返事を返す

「みーむー♪」

「ぶぎゅー♪」

俺が部屋に入ってきたのに気付いたチビとうりぼーが近寄ってきて、撫でて撫でてと言わんばかりに尻尾を振るので、2匹の頭を撫でる

「……起きたか、もう時間も時間だ。朝食と昼食を一緒にしても良いか?」

そう言われて時計を見ると11時を過ぎているので、昼食と一緒に良いと言ってシズクが用意してくれた水を飲んでから、顔を洗いに行く。冷たい水で目が覚めた状態でりビングに向かって気付いた

「ノツブちゃんとシロは?」

シロも俺の家に泊まっていたはず、それにノツブちゃんは?と尋ね

るとシズクは木の桶に炊きたてのご飯を移しながら

「……ノツブはメロンパンを買いに行った、シロは散歩と言って朝から戻ってない。海辺に向かうって行ってたから市場で魚を買って来てくれとは頼んだが」

何処まで散歩に行ってるんだろうな？と尋ねられるが今起きたばかりの俺が知るわけも無い

【のぶのぶ】

足をよじよじと昇ってきているチビノブを抱っこしてソファアーに腰掛ける。家に置いていったのを怒り、戻ってきてからは甘えん坊モード全開だ。抱っこしていてもよじよじと動き回り、背中に移動したと思ったら頭の上に寝そべるようにして抱きつく。

【お目覚めになられましたか、気分はどうですか？】

庭で素振りをしていたのか、木刀を手に部屋に入ってくる牛若丸。最近の靈力切れも起こさず人化している時間も多し

「修行してたの？」

【ああ、いえ、ちよつと遊んでいただけです】

そう笑ってボールを見せてくる牛若丸。ボールと木刀で何をしていたのだろうか？と言う疑問はあるが

【のつぶーノブ】

頭の上にしがみついているチビノブが気になって話に集中できないから、また今度聞くよと口にする

【ええ、今度にしましょう。きつと主殿には役立つ遊びになると思いますよ】

あれ？牛若丸にとっての遊びって＝修行なのかな？と思いつつ、また今度と言う約束をする

「コン」

チビノブが落ちないように気をつけながら、机の上の靈能新聞（蛭と美神さんの勧めで契約することにした）を手に取り、広げていると俺よりも先に部屋を出た筈のタマモが遅れてリビングに入ってきて、俺の膝の上によじ登り丸くなる。人化してても狐モードが楽って言っていたので好きにさせる

「お兄ちゃん。お昼ごはん食べたら散歩行こうね」

「そうだなー、朝散歩しなかったしな。チビとうりぼーはどうする？」  
勿論行くというのは判っているが一応尋ねてみると当然鳴きまくり、行くと行っているのが判る。頭の上のチビノブも手をピコピコさせているので行くと言う解釈でいいだろう

（後で美神さんの所に電話しよう）

暫くは勝手に出歩かないようにと注意されていたし、ジークって言う聖奈さんの弟さんが護衛を勤めてくれると言っていた

「じゃあジークに電話して迎えに来てくれたら行こうな」

はーいって返事を返すアリスちゃんを見ていると玄関の開いた音がして

「シズクー！シズクーツ！！魚とか一杯買って来たでござるよー！昼は海鮮丼でござるなあ！」

発泡スチロールの箱を4箱も担いで帰ってきたシロはソファアに座る俺を見て

「せんせーおはようでござるー！」

若干磯臭さを残す物の非常に元気そうでそして楽しそうだ

「おう、おはよう」

「犬のお姉ちゃんおはよー」

元気良く返事を返すシロにアリスちゃんと一緒におはようと返事を返し、手にしていた新聞を机の上に戻してシロがどんな物を買ってきたのか見に行くことにするのだった……発砲の中には鮪のブロックや鯛、それに鮑やホタテがぎっしりで

「お前これどうした!?これは明らかに無理だろ!？」

シズクの顔が引き攣っているので完全に予算オーバーだろうって思っただけの海鮮を手にしたのか教えてくれた

「市場で水揚げとか、荷物運びを手伝ったら安くしてくれたでござる!」

いい人がたくさんいたでござるよと弾ける笑顔のシロ。予想よりも遥か上のレベルでシロの交渉スキルが高い事に驚愕すると同時

に、美神さんの所に電話する時に蛍と一緒に夕食に来てくださいと誘おうと思った。だって流石に1日で消費しきれない量じゃないって思ったしな。昼食の前に美神さんに電話して、ジークに来てくれるように頼み。海鮮が一杯有るので是非来てくださいと夕食に誘い、蛍にも同じ電話を掛けるのだった……

お昼少し過ぎに電話が鳴った。電話を掛けてきたのは横島君で、アリスちゃん達が散歩したいと言っているのでジークを呼んで欲しいと言う事とシロが大量に海鮮を持ってきたので、是非夜に食べに来て欲しいと言う旨の電話だった。蛍ちゃんにも電話すると言っていたので、今こっちの事務所にいるから伝えておくわと伝えて受話器を戻す

「じゃあ悪いけど横島君の所にお願いでできるかしら？」

「全然大丈夫です。それが僕の任務ですから」

そう笑って事務所を出て行くジーク。魔族の時は褐色の肌だったけど、人化したら白い肌の優しい顔つきの少年の姿になっていた。ジーク曰く、自分は先祖返りなので性質は神族よりとの事だった

「シロが海鮮を沢山持ってきたから夕食食べに来て欲しいってさ」

勿論蛍ちゃんは行きますと返事を返してくれたのだが……その後が余りに暗すぎる。と言うか事務所全体から負の気配が発せられている

「……」

「……」

「いや、もうその葬式みたいな雰囲気やめてくれない？ 蛍ちゃんもくえすも」

何で私の事務所にくえすと蛍ちゃんが居るかと言うと、あれである。アルテミスに協力を得るために勢いで言ったというか、言ってしまった恋話云々のくだりの件についてだ

「あと、用が無いなら帰ってくれない？ 柩」

「ぶふー！ や、やばい！ あはははは！ 笑い死ぬ、くひひひっ!!!」

予知でこの光景を見ていたのか、笑いに来たと行ってずっと爆笑し

ている柩に帰るように言うが笑い転げていて話にならない

「おキヌちゃん、お茶頂戴。お茶」

「はい、今用意しますねー」

どの道今日は依頼を受けるつもりなんて無いので、のんびりするつもりだったのでキツチンで昼食を用意してくれていたおキヌちゃんに悪いと思ったのだが、お茶を頼む

「所で、落ち込んでいる所悪いけどさ、くえすって鹿撃ち帽と滝つてキーワードで英国の英霊って思い切りあるの居る？」

私も調べているがそんなピンポイントの記述はそう簡単に見つかる事が出来ない。海外に詳しいくえすにそう尋ねてみるが

「あのさ……恋話ってどんな話をすればいいの？」

「私を知ってると思います？」

思わない、でしょう？と言うなんと言うか力の抜けるというか、お互いに横島君想ってる相手同士で顔を見合わせて、なんとと言う話をしているのだろうか？これじゃあ真剣な話は出来ないわねと小さく溜息を吐く、いまだに爆笑している柩に本当に何しに来たのよ？と言うと、涙を流しながら立ち上がり

「影が近づいてる、気をつけたほうが……だ、駄目！真面目な話なんてでき。くひひひっ!!」

話を最後まで言い切る事無く、また爆笑し始める柩。影？また何かトラブルが起きる可能性を予知能力持ちの柩に告げられたが、フェンリル事件の整理すら出来てない今、そんな話は聞きたくなかったし、そして対策も練ることも出来ない

(とりあえず聖奈に伝えておきましょう)

ジークも戻ってくるだろうし、私の事務所を拠点にして日本の調査をしているワルキューレも戻ってくる。その時に話せばいいと思い、西条さんが入院している病院に入院しているであろう、クロさん、ポチさん、そして言峰神父が何かトラブルを起こしてないか、いや、もつと言えばナイチンゲールが何かトラブルを起こしていないだろうか？と心配していると、腰をガツシとつかまれる

「もうこうなったら美神さんも道ずれにするしか」

「私と蛭だけに恥をかかせるなんてフェアじゃないと思いませんか？」  
「ちよ!?なんで私を巻き込もうとしているのよ!大体私には「西条さん」  
「西条がいるでしょう」はなせーッ!」

アルテミスとの話し合いに私を巻きこもうとして結託した蛭ちゃんとかえす。普段仲悪いくせになんでこういう時は無駄にコンビネーションが良いのよ。と言うか私と西条さんには何にも無い!た、確かに子供の時は憧れていたって言うのが無いわけじゃないけれど!

「横島君が同席しないからいいでしょ!と言うか、私を巻き込まないでよ」

横島君同席しないからそこまで気にする事無いでしょ!と言うか私を巻き込まないでよと言うが

「無理、無理なんですう!もうなんか爆発する。色々と大事な物が!」  
何が爆発するって言うのよ!なんか訳の判らない事を言い出す蛭ちゃんに

「冷静に考えれば考えるほど、自分が認識してなかったことを認識するんです。自分が自分じゃなくなるような気がして嫌なんですわ」

「気のせいよ!」

それは恋話をするのと約束した自分を客観的に見たからでしょ!と言うが、離す気はまるで無い。と言うか目が見た事も無いくらいマジだ

「うんと言うまでか、私の気持ちの整理がつくまでは」

「人造貧乏神って言うのがあるのですか、どうでしょうか?私の魔法の実験台になってみませんか」

泣き落としと脅しに来るくえすと私達を見て爆笑している柩に本気で殺意を覚えながら、この状況をどうやって切り抜けるかと必死に考えを巡らせるのだが、もう遅かった

「はーい♪恋話聞きに来ましたー♪」

「……(死ーん)」

胸元にオリオンを突っ込んだアルテミスが窓から突撃してきて、私達の目が死んだ色になるのだ、おキヌちゃんがお茶とご飯は用意しま



したから！と言って逃亡していくのは殆ど同時の出来事だった……

横島君の散歩に同席したのだが、僕は数分でそれを後悔していた  
「ぴぎゅ」

「ふぐうつー」

横島君のペットの突進でこれで3回ほど吹き飛ばされ、地面を転がっていた。ダメージはそれほどでもないのだが、追突された衝撃はかなり凄まじい

「悪い！ジーク大丈夫か!?おかしいな、普段うりぼーはこんなことしないのに」

「い、いや……良い。り、理由は判ってるつもりだ」

閣下にシユートトされ、僕と激突した事を根に持っているのだろう。ふんすつと鼻息が荒い所を見ると間違いない

「とりあえずリード持つか?それなら突進されなと思うから」

突進はされなと思うが引きずり回されそうなので良いと返事を返す。何よりうりぼーが頭を振って超嫌そうにしているし、何をされるかわからないし

「うりぼー、あんまり意地悪しちゃ駄目だよ?」

「ぴぎゅー」

アリスちゃんがうりぼーに注意しているが、それでも不満たつぷりと言う様子だ

「みむみむ」

【のぶのー】

グレムリンと小人が何か言っているが、僕に動物会話のスキルは無いので何を言っているか分からない、だが雰囲気でうりぼーが納得していないのは良く判る

「まあもう少ししたらうりぼーも気持ちの整理がつくでしょう。我慢しなさい」

「……そうですね」

明らかに僕を知っていると云う様子のタマモさん。誰が逆行の記憶持ちは知らないが、彼女は間違いないようだ

「せんせー！早く先にいくでござるよー」

「ぷーぎー」

「はいはい、今行くから」

シロさんとうりぼーに先に行こう行こうと言われ歩き出す横島さん。かなり人目につく集団となつている横島さんから少し距離を取つて、周囲を警戒しながら散歩に付き添う

「お兄ちゃん、今日帰りに鯛焼き買う？」

「今日は止めとこうか？シロが一杯美味しい物を買つて来てくれたから」

「拙者頑張つたでござる！」

この集団の中で人間は横島君1人だけだが、横島君が中心になって集団になつている。前もそうだったが、横島君は抜群に人と仲良くなるのが上手いと思う

【ノブー】

「だーめ、今日は買い食いしない、でも帰りにジュース位は買つてやるからな」

パン屋のショーウィンドウに張り付いて、何かのパンを指差しているチビノブと言う小人を抱き上げる横島君、この時分の横島君よりも精神的にかなり落ち着いていて、そしてあんまり女、女言わなくなつている。そして優しさもあるが、駄目な事は駄目ときつちり言える。まるで子持ちの男性のような印象を受けた

【大変だな、横島】

「そうでもないけどな。わいわいして楽しいじゃないか」

皆思い思いに動き回っているのにそれを楽しんでいる。それは僕の知っている横島君だと、本当に成長した40代位の時の精神性に近いと思つた

（後は直接的な戦闘能力かな）

僕は魔族ではあるが、実際それほど闘争本能がある訳ではない。どっちかと言うと大姉上に近い精神性だと思つている、それに対して姉上は強さを至上としている部分があるので、もし機会があれば今の横島君の実力を見て欲しいと言われていた

(どうやって言えば良いんだろうか?)

戦いを嫌う性質の横島君に組み手を頼んだとしても確実に嫌がるだろうし、どうすればいいんだろうかと思っっていると

「あ、そうだ。ジークも飯食ってくか?」

「え?」

シロさんが沢山持ってきた海鮮があるから飯を食っていけよという横島君。ありがとうと返事を返したのだが、本当に僕の知っている横島君と違うなと思った。多分小さい生き物と一緒に暮らしていて、何か思うところがあつたからだと思うが、良い所が目につくようになったからだと思う。横島君と一緒に横島君の家に帰る途中で

「大当たりー♪焼肉セット7人前だよ」

「やりにい!」

みんなで夕食と言う事でジューズを散歩の帰りに買うと言う横島君と一緒にジューズをケースで購入したのだが、クジ引き券で見事焼肉セットを横島君が引き当てた

「でもせんせー、これでは足りないでござる」

「だよなあ。良し!家に帰ったらシズクに諭吉さんを貰って買出しに行こう」

「海鮮に焼肉ねえ……まあ美味しいから良いわよね」

海鮮でだけじゃなくて、焼肉も追加しようという話になる

「チビとうりぼーには果物買うからな」

「みむー♪」

「ぴぎー♪」

横島君の言葉に嬉しそうに跳ね回るチビとうりぼー。何だろう? 保父さんって言うキーワードが脳裏に浮かんできたんだけど……

「横島、私にはなんか無いのー?」

「せんせー、拙者はー?」

「アリスにはー?」

「ノブノブー?」

自分達には無いのか?と言われ、横島君はうーんつと唸り、ぽんつと手を叩き

「諭吉さんを2人貰える様に交渉してみよう」

どうも横島家の財政は全てシズクさんが仕切っているようだ。暗くなる前に帰って、シズクに交渉しようと言う横島君を先頭に、僕達は横島君の家へと戻るのだった

「ジーク、これ庭に出して」

「判った」

シズクさんとの交渉は成功し、再び買出しに出た後。バーベキューセットを出してくれと言う横島君の手伝いをしながら、美神さん達が来るのを待ちながら、キャンプシートや飲み物の準備をする

【シズクちゃん、このホタテネギ味噌で良いんですか?】

「……ああ。ネギ味噌焼きにしよう」

「じゃあ私は醤油と味噌とにんにくで焼肉のタレを作るよ」

戻ってきたら居たおキヌさんとシズクさんにハーピーが横島さんの家で料理を作り、リビングでは邪魔しないようにアリスちゃん達が遊んでいた

「みーむー♪」

「チビはボール遊び上手だね、うりぼー、行くよー?」

「ぷぎゅー」

リビングで楽しそうに遊ぶアリスちゃん達と縁側に座り

【焼きメロンパンとか斬新とか思わない?ちよつとずつ粉砂糖を振りながら、こんがり焼くとか最高じゃね?】

【焦げ焦げにならないといいですね】

野菜の下拵えをしている英霊2人を見て、もう横島君の家って周りの人に化け物屋敷とか思われてるんじゃないかな?とふと思った。だって人魂とか結構浮いてるし、普通に浮いて家に入っていく人とかいるし、そんなことを考えながら準備を手伝っていると、ふと背筋に冷たい気配を感じた。これは!?

「横島さん、ご招待ありがとうございます」

「大姉上!お疲れ様でしたツ!!」

大姉上が笑顔で入ってくるのを見て、僕が即座に頭を下げたのは言うまでも無い

「美神さん、蛭。それに神宮寺さんもいらつしやい……あれ？美神さん達、なんか疲れてませんか？」

「……気のせいよ」

「気にしなくていいですわ」

「大丈夫だから」

そうですか？と不思議そうに呟く横島君はまあ良いかと笑う。いや、全然良くないと思うんだけど

「じゃあ夕ご飯にしましょう」

ここにこと楽しそうに笑う横島君を見ると、大姉上に財布を渡され

「白ワインと赤ワインを3本ずつ。15分以内に」

「はいっ!!!行ってきます！」

ここから商店街に行くまでに8分掛かるとか、そう言うのは全く関係ない、指定された時間内で買って戻らなければ叱られる。僕はそれだけを考えて、大姉上の財布を持って横島君の家を飛び出すのだった……なお、15分12秒とかで拳骨を落とされたのは言うまでも無い……

【ワシのメロンパンがああッ!?!】

【大炎上ですね】

【なんでバーベキューのでメロンパンを焼けると思ったんですか?】

激痛に悶える僕の前で横島家の何時も通りの日常が繰り広げられていた

「はーい、チビノブとアリスちゃんの分焼けたよー」

「はーい!お兄ちゃんありがとー♪」

【ノッブ!ノブノブー】

バーベキューと言う事で横島君が料理の手伝いをしているのだが、バーベキューグリルの上に似つかわしくない物が2つ

「あちちち、おー出来た出来た、タマモーチビとうりぼーに焼き林檎食べさせてやってくれ」

「はいはい、ほら。チビ、うりぼーおいで」

「みつむう♪」

「ぶぎゅ」

「せんせー、せんせー、拙者も肉ー」

「……お前は少し魚も食え」

「もがつもがもが……旨い！」

「はーい、野菜とお肉持って来たよー。ジュースに入れる氷も用意で  
きたよー」

ハーピーやシロさんタマモさん含め、横島さん達がわいわいがやが  
やと楽しそうなか。妙に美神さん達が静まり返っている

「どうかしたのですか？」

大姉上も気になったのかそう尋ねるけど、なんでもないと声を揃え  
る3人。あれは絶対何かあったと思う

「はい、美神さんと蛭と神宮寺さんもどうぞ」

「あ、あああ、ありがとう」

「あ、ありがとうございますわ」

不思議そうに首を傾げる横島君。だが僕はあのやり取りで理解し  
た、横島君関連で何かあったのだと、でも何かあったと思っても黙っ  
ておく事が美徳と言う事もあるので、僕は無言でホタテのネギ味噌焼  
きにフォークを伸ばすのだった……

リポート20 狼の居る日常 その2へ続く

## その2

レポート20 狼の居る日常 その2

今日は昼から六道女学院に行く和美神さんに聞いていたので、美神さんと蛸が迎えに来てくれるまで、チビ達と遊びながら家で待ってることにしたんだけど……

「フブ！フブフブ！のーブーツ!!」

チビノブがなんか怒ってる。家に置いていったのは謝ったので許してくれたと思ったんだけど……まだ何か怒ってることがあるっぽい

「シロかタママ、何て言ってるか判る？」

煎餅を齧りながら何か話をしていたシロとタママに声を掛ける。チビとうりぼーが何て言ってるか判る2人ならと思ったのだが……

「申し訳ないでござるせんせー、拙者にはなんて言ってるか判らないでござる」

「チビとかうりぼーなら判るんだけどね」

駄目か。エキサイトしているチビノブが何で怒ってるのか知りたいただけど……じゃないとどう謝れば良いのかも判らないし、どうした物か……

「シロ、あんたの服ボロボロすぎ。こう言うのを手伝いして買いなさい」

「えー拙者着物欲しいでござるよ」

何か見ていると思ったから服のカタログを見ていたのか、あんまり高いのじゃないなら買ってやれるけど、うちの財政は基本ロリオカンだからなあ……欲しい服が有るならロリオカンに交渉して貰わないと

「フツブウ！ノーブブー！」

「ちよつと待って、待ってー！」

怒って足をぽかぽか叩いてくるチビノブ。痛くは無いけど、ここまですぐ何かを訴えようとしているのだ。それを何とか理解してやりたい

んだけど……シズクが居ればシズクがチビノブの言葉が判るのだが、残念な事に買い物に出掛けてしまっているし……本当にどうすれば良いんだと困り果てていると救いの手は意外な所から伸ばされた

「アリス判るよー?」

「え?アリスちゃん判るの?」

判るよーつと言つてにぱつと笑うアリスちゃん。今まで机の上で何かポーズ、可愛いというか、勇ましいというか、判断に悩むポーズをしているチビとうりぼーを見てどっちの勝ちーつて言っていたが、どうも話はちゃんと聞いていてくれた様だ

【別にそこまで気にしなくていいじゃろ?置いて行つた事を怒ってるだけじゃろ?】

「いえ、そう決め付けるのは良くないでしょう。チビノブはノブノブしか言いませんが賢いですから、何か主殿に言いたい事があるのでしよう」

メロンパンを食べ終え、林檎ジュースの缶を握り潰しながら言うノツブちゃんと、そんなノツブちゃんを窘めている牛若丸。こんなことを言ったら悪いけど、ノツブちゃんのこういう所がチビノブがノツブちゃんを嫌っている理由なんじゃ?とか思っていると、チビノブの話聞いていたアリスちゃんが判つたよと笑う

「あのね。お兄ちゃん、今度からチビノブも除霊について行くつて」

「え!?大丈夫なのか!」

除霊について行くつて言つても怪我とかしたらと思うと心配で心配で仕方ない。チビノブはふんすつと鼻息荒く窓を開ける

【のーのーのーぶーぶー】

なんか大きく息を吸い込み始めた。何だ?何なんだ?何をするつもりなんだ?俺達の視線がチビノブに集まった瞬間

【ノツバアアツ!!!】

「ビームでた!」

【霊波砲だな、出力も凄いで】

心眼がビームではなく霊波砲と訂正する。開いた窓から外に向かって放たれたチビノブビームは雲を薙ぎ払い、青空へと消えてい



く。チビノブはそれを見て自慢げに振り返る、口から少し煙が出ている以外はいつもと同じ顔なのだがどこかドヤつとしているように見える

「いや、なんで口から霊波砲出るのよ、普通手の平でしようよ」

「え？拙者頑張れば、口から出るでござる」

「……あんだ。もう少し女としての自覚無いわけ？」

シロとタマモのなんか脱力する話を聞いていると、チビノブが自分の影に手を突っ込んで、何かごそごそと探し始める。何してるんだろ？と全員でチビノブを見つめっていると玄関からシズクとハーピーさんのただいまーと言う声が響く

「……今家から凄いい霊波砲が出て行ったけど誰のだ？危ないから家の中で霊波砲とかを使うな」

「あーごめん。なんかチビノブが今度から除霊に来るって言うから、そのデモンストレーションだったみたい」

チビノブの攻撃と聞いてシズクもハーピーさんも一瞬驚いた顔をしたが

「まあ横島の家で暮らしてればなんか進化するよね」

「……まあ殆ど異界に近いしな」

「待って、俺の家どうなってるの」

気にしない方が良い、気にしなくても良いと言うシズクとハーピーさん、こうして面を向かって言われると、怖いと思う気持ちが無いわけでもないので少し怖くなる

「ノツブー！」

気合満点の声と共にチビノブが取り出したのは、平べったくて、なんか金属質の光沢を持つ何かだった。

「お、平蜘蛛じゃな。あれは良いものなんじゃよなー、しかしレプリカかの？」

どうもノツブちゃんが知っているアイテムのようだが、一体なんに使うものなのだろうか？

「ノツブー」

チビノブはそれをノツブちゃんに投げつける。投げつけるといっ

てもふわりとした感じで投げつけたのでノツブちゃんは楽に受け取る

【んーこの重さ、この色合い、マジで平蜘蛛そっくりじゃな】

投げつけられたそれを観察しているノツブちゃん。攻撃目的じゃなくて、仲直りの証として投げたのかな？と思ってみているとアリスちゃんが俺のズボンを引っ張る

「どうかした？」

「離れた方が良いかも、チビノブすっごい悪い顔をしてる」

そう言われてチビノブを見ると確かにすっごい悪い顔をしている。俺は机の上のチビというりぼーを抱き抱え、アリスちゃんと共にノツブちゃんから離れる。

「タマモ、聞こえてるでござるか？」

「当たり前でしょ」

俺には聞こえないが、シロとタマモには何か聞こえているようだ。本とジューズを抱えて逃げてきた

【あのさー、横島】

金属の何かを観察していたノツブちゃんが凄く真剣な顔で俺の名前を呼ぶ、こんなに真剣な顔を見たのは初めてかもしれない

【なんか、これカチカチ言ってるんじゃないけど……しかも、なんか紐が出てきて、手を縛られて手放せないんじゃないけど】

【霊力が物凄い勢いで集束しているな、このままだと……】

カチカチ言ってる、手放せない……そして心眼がいやなタイミングで黙り込んだ、心眼が言いかけた言葉を想像し、全員重い沈黙が広がる。全員が物凄い引き攣った顔をしてノツブちゃんから距離を取る

【牛若丸！助けて！友達じゃろ！】

近くに居た牛若丸に助けを求めるノツブちゃんだったが、それに大して牛若丸の言葉は……

【勘違いしないでください、主殿を護る同僚とは思っていますが、私は貴女の事を友と思ったことはありません】

めちやくちやドライかつ冷たい言葉と絶対零度の視線でした。そのまま牛若丸は窓を全開にする

【シズク、どうぞ】

「……お前のその冷静さ、私は買うぞ」

シズクがノツブちゃんの後ろに回りこみ、その背中に手を当てる。「危ないからね。あたいの側に来てね？」

「はい♪」

ハーピーさんがアリスちゃんを抱き抱えるようにして護る中、シズクが何をしようかと悟ったノツブちゃんが引き攣った顔で振り返る【待つて！そんなことをするなら助けッ！横島あッ！助けてえッ!!!】

俺としても助けてやりたいけど、俺生身だし、爆弾解体なんか出来ないのだからそつと目を逸らす事しか出来なかった

「……横島とお前を秤にかければ、お前を見捨てるに決まってるだろ？ どうせ英霊だ。死なない、夕食は豪勢にしてやるから逝って来い」シズクはそう言うと言った大量の水でノツブちゃんを窓の外に押し出した。字が違いう!!つと言うノツブちゃんの声がドツプラー効果で響き渡り、数秒後にドカンつと言う音が周囲に響き渡った……俺の気のせいではなければ、青空にノツブちゃんの横顔が見える気がする

【ノツブー!】

そして竹光を振り回し、勝ちーつと喜んでいるチビノブを見て、おいて行くと家が爆破されるかもしれないと思った俺は、今度の除霊にチビノブを連れて行く事を決めた

「ノツブちゃん大丈夫かな？」

「大丈夫だと思うよ、服はボロボロになってるかもしれないけど、もう死んでるから死ぬことは無いよ」

弾ける笑顔でとんでもないことを言うアリスちゃんにう、うんと返事を返しながら、ノツブちゃん大丈夫かなあつと開いている窓の外を見つめていると美神さんのバンがやってくるのが見え

「なんか凄い霊力がこつちから来てたけど、なんかあったの？」

美神さんの言葉に俺達が言葉に詰まったのは言うまでも無いだろう……

六女に向かう中。先ほどの霊力の正体を横島君が教えてくれた

「チビノブの攻撃ねえ……」

チビノブビームとチビノブボンバーと横島君は言っていたが、靈波砲と爆発する靈力の塊を作るとか危険すぎるだろう、しかも除霊について行くと騒いでいるので今度から連れて行きますと言っていたが……もう少しだけで良いので妖怪っぽいのを連れて歩くことの危険性を考えて欲しい

「ノブー」

「よーしよし、良い子だから大人しくしてような」

車でのお出かけが初めてだから興奮してるんですと横島君がチビノブをフォローするように言うが、微妙にフォローになってない。

「所で横島。シロとタマモ、それにアリスちゃんは？」

付いてくると思っていたシロ達が居ない事を蛍ちゃんが尋ねる。横島君は膝の上に座っているチビノブの頭を撫でながら理由を口にした

「タマモがなんか買い物に行くって言うから、ハーピーさんが付き添って買い物に行ってる。なんか服とか買うんだって、尻尾が9本全部揃ったから精霊石なくても人化出来るから服がいるって」

「え？」

私と蛍ちゃんの困惑した声が重なった。8本目まで揃って最後の一尾が全然戻らなかったのに……いや戻ったことが悪いって言うつもりは無いんだけど……

「ちなみにもう子狐には戻らないって？」

「いえ。狐モードも楽は楽だからって言っていましたよ。尻尾は完全復活した幻術で隠すから問題ないって」

問題は無いかもしれないけど、その全力モードの幻術とかの能力がどれくらいな物なのか実が気になる。仮にも九尾の狐、神魔に最も近い妖怪と言われた実力は健在だろうし

「尻尾がモフモフしてて可愛いんだよ」

「……そう」

蛍ちゃんが遠い目をして横島君に返事を返す。何処の世界に九尾の狐の尻尾がモフモフしてて可愛いという感想を抱くGSがいるだ

ろう？多分世界中を探しても、横島君くらいの物だろう

【所で美神さん、今日六道女学院に行く理由ってなんなんですか？】

おキヌちゃんが横島君の頭の近くで浮きながら六道に行く理由を尋ねてくる。蛭ちゃんとおキヌちゃんの顔が嫌そうに歪んでいる、六道に関わると嫌な事になると言うのが良く判っているからの反応だろう

「ちなみに今回は冥華おば様の話じゃないの、なんか面白い物が出来たからそれを見に来て欲しいって」

面白いものがあると電話で聞いて見に行く事にしたのよと言うと横島君達が不思議そうな顔をする。私も見に行くか本当に悩んだんだけど、霊能関係で新しい発明になるとか、特許になるとか聞いたら興味が出てきたのだ

「まあもうすぐ着くから見て見ましようよ」

態々電話してきたくらいなんだから相当珍しい物なんだろう。六道には霊具開発をしている学科もあるし、そういうのを専門を研究していた教師を講師として呼んでいた。だからそういう教師や生徒が何か開発したのかもしれない、そんなことを考えている内にバンは六道女学院の駐車場に着いた。

「じゃあ行きましようか。新しい神通棍か、それとも霊体ボウガンか……もしかすると精霊石銃とかもありえるわね」

新しい特許が取れるような物と聞いていたので、どんな物が来るのか楽しみで楽しみで仕方ないわね。横島君と蛭ちゃんにそう声を掛けてバンを出て入校許可証を貰う為に職員室に足を向ける

「あー来てくれたのね、助かるわ」

「本当ですね」

「マルタにキアラ？どうしたのよ」

明らかに私達を待っていたって言う様子の2人にどうかしたの？と尋ねる。正直マルタならよっぽどの事が無ければ十分対応出来るだろう、キアラの能力は正直未知数だが、カウンセラーとしての能力だけではなく、それなりに戦闘能力を持ってなければ六道女学院の教員になれない筈。カウンセラーとして迎えられるくらいだから回復

系の能力を持っていると思うんだけど

「ちよつと正直どうしたものかって思う事が起きてるのよ」

「ええ、花戸小鳩さんはご存知ですよ？横島さん、蛍さん」

「私じゃなくて横島君達に声を掛けるキアラ。2人の方を見ると横島君達は不思議そうに首を傾げながら」

「小鳩ちゃんって、福の神と一緒にの子ですよ」

「なんかありました？小鳩さんってそんなに問題児って人じゃないって思うんですけど……」

福の神を連れてくる生徒……横島君と蛍ちゃんが知ってる理由はそれで判った。使い魔学科の生徒だろう……

「えつとね……とりあえず付いて来て。話すよりも見た方が早いと思うから」

口では説明しにくいと言うマルタに頷き、2人が持っていた入校許可証を受け取り保健室に足を向ける

「お元気そうですね。どうですか？霊能の修行は進んでいますか？」

「私はまずまずですかね、横島の方も良い感じよ」

「蛍にそう言って貰えると嬉しいけど、実際どうなのかな？」

「私も大分横島さんは強くなっていると思いますよ？」

「みむーみみー♪」

「ぴぎゆう？」

【ノブウ】

【お前達は横島の家に着たばかりだからな、そのうち判ると思うぞ】

横島君は自信無さそうにしているけど、ここ最近の横島君の実力は相当伸びていると思う。眼魂だけの話じゃない、陰陽術の伸びも良いし、一緒に居るチビ達の能力も非常に高い。正直眼魂を使わなくても十分戦えるだけの能力を持っていると思う。心眼とおキヌちゃんに言われても、うーんつと唸る横島君。自分では実感がもてないのよね、霊能力の強さって

「ふふ、成長する時期が来ているのかもしれないですね。もし悩み事とかがありましたら、尋ねてきてくださいね。カウンセラーとしてご相談に乗りますよ」

にここにこと笑うキアラ。冥華おば様が態々呼び寄せたカウンセラーなのだから、きつとカウンセラーとしての腕は本物だろう

「相談に乗って貰うと良いと思うわよ、やっぱり伸び悩む時期つてもあるし、正直私に相談しにくいこともあるだろうし」

現に私が唐巢先生に相談できなくて、冥華おば様に相談した事がある。近い人に相談するよりも、ある程度距離を取ってる人に相談した方が良い時もあるし、キアラのカウンセリングを受けても良いんじゃない？と言う話をしていると保健室はもう目の前だった

「ここよ。とりあえず見てみて」

マルタに言われて扉を開けるとそこでは……

「ふ、福ちゃん。何て物を作ったの」

赤みが掛かった髪をお下げにした少し気弱そうな少女とその隣にいるフアラオみみたいな服装の小人……多分福の神が困ったような顔をして

【い、いやあ、ワイは福の神として利益になるものを……】

利益になるもの？福の神の視線の先にはダンボールに入った何かがあった

「あ、ハンバーガーじゃん。一個もーらい」

「ま、待って！横島さん駄目！」

少女が止めに入るが遅く、横島君はハンバーガーを齧る

「んごっ！」

「横島君!?!」

「横島！」

【あ、あー！思い出すのが遅れ……】

口からぶばあつと口にしたものを吐き出し倒れた横島君に、私と螢ちゃんの悲鳴が重なり、おキヌちゃんが何か言っていたがその声は良く聞こえなかった

「あちゃー……食べちゃったのね。まあ見た方が早いかな」

マルタが溜息を吐いていると横島君の背中から霊体の横島君が姿を見せ

【んじやこりやあああああ!?!】

「すみませんすみませんすみません、福ちゃんが本当すみませんすみません」

可哀想になるくらい頭を下げる少女とふわふわと浮かんでいる横島君。私は深く溜息を吐きながら、詳しく事情を説明してとマルタにお願いするのだった……

保健室の中をふよふよ浮かんでいる横島と、白目をむいたまま立ち上がる横島の身体。GSって言う職業じゃなかったら絶叫していた……そんな嫌な確信が私にあり、フラフラと動く横島の肉体から目を背けながら

「心眼、怖いからやめてよ」

今横島の魂が肉体に無いので、恐らく身体を動かしているのが心眼だと思い。やめてと言うと、バンダナに目が浮かび上がる

【だが床で放置する訳にも行くまい。ソファーまでだ】

ぎくしゃくとまるでマリオネットに動く横島の身体を見て、これ心に動かせるんじゃないやなくて私が抱き抱えた方が良かったんじゃない、そう思ったのは言うまでも無いだろう……

【すげー箒で飛ぶのとまた違う感覚だな、はっ！あのバーガーを食べたらチビと空中散歩できる!?!】

「止めなさい」

相変わらず発想が常人の斜め上を駆け抜けている横島に私と美神さんの静止の声が重なる。

【よし、横島はソファーに横にした】

「それでなんでこんな食べ物を作ったの?」

「あ、あのそれ作ったの私じゃなくて、福ちゃんが」

前の世界の記憶を持つ福の神の仕業と聞いて、私とおキヌさんの視線が福の神に向かう

【ありや食いもんじゃないで、食べたら幽体離脱するもんや】

福の神は食べ物として作ってないんやと言って、自分が作った物の効果を説明してくれた。確か私の記憶だと、未来だと食べ物で幽体離脱するのが普通で、しめ鯖バーガーがその始まりだったとか聞いたよ



うな……福の神が作った奴だったんだ、初めて知った事実にも正直少し驚いた

「……あーそれは確かに特許取れるわ」

福の神の言葉に美神さんが判るわと呆れた様子で返事を返す。確かこの時の幽体離脱って金属バットで殴るだったから、確かに食べる事で幽体離脱するなら痛みは無い分売れる可能性は極めて高い

【ノーブート】

【おおー幽霊でも触れるーあ、チビノブだから触れるのか？】

横島は横島で自由にチビノブを抱き抱えて空中でぐるぐる回転している。魂の緒が繋がっているから大丈夫だけど、魂が肉体から出ていて案外危険な状態って判って欲しいんだけどなあ……今度はどうりぼーを抱えてくるくる回ってるし……

【幽霊って結構色々な事ができるでしょ？横島さん】

【本当だなー、もっと不自由な物だと思ってた】

おキヌさんが幽霊の利点を横島に説明している。後横島、色々出来るのは横島自身の霊力が高いから干渉出来るだけであって、幽霊全てが物質に干渉出来る訳じゃない

「それで美神どうなの？幽体離脱バーガーって売れるの？」

「売れるとは思わよ。六道にスポンサーになってもらって……レシピを公開すれば十分売り物になるし、特許も取れば完璧に小嶋さんの利益になるし、金属バットで殴られるのは誰だって嫌だと思っし」  
除霊の都合上幽体離脱しないといけない場合はあるけど、金属バットで殴打なんて誰だって嫌だし、肉体に戻った時に頭めちやくちや痛いし

【あーチビを見つけた時に戻った時めちやくちや頭痛かったな】

【みむう？】

そのとき赤ちゃんだったチビはその事を覚えてないのか、自分なの？と言いたげに何度も何度も首を傾げていた。横島はそんなチビが可愛いのか頭を撫でていた。と言うか何時まで幽体離脱しているつもりなのだろうか

【いやー俺はてつきり小嶋ちゃんが超料理下手なのかと思ったぜ】

「あ、いいえ！私結構料理得意なんですよ!？」

横島が小鳩さんに料理が下手だと思ったと言ったら、小鳩さんが慌てて立ち上がり、料理得意なんですよと叫び、私達の視線に気付き、小さくなりながらすみませんと謝る

「横島さん、それは失礼ですわよ？小鳩さんは家庭科の成績はトップクラスで、料理の成績は特に優秀ですよ」

「あ、すみません。ちょっと軽い気持ちで」

キアラさんにたしなめられ謝る横島。ここで終わればよかったんだけど

「じゃあ今度使い魔学科に来てくれる時に簡単に食べれる何かを用意しておきますね」

「え？良いの？ありがとなー」

自分のアピールポイントを知っていて、それをぐいぐい前に出してくる。横島はのほほんと楽しみにしていると笑っているが、私とおキヌさんはそれ所ではなかった

(やつぱり敵だ！しかも超強かつ！)

やはりこの人は危険だ。一見大和撫子だが、自分の目的を最優先にする強かさがある！私とおキヌさんが驚愕していると、眼魂が光り牛若丸が姿を見せる。

【主殿、幽霊となり空を飛べるのが嬉しいのは判りますが肉体に戻れなくなる前にお戻りください】

【そうだぞ横島。魂の緒が切れれば元に戻れないぞ】

【え!?そ、それはあかん、どうすればいいんや!?】

肉体に重なるように倒れ込めばいいと心眼に言われ、倒れ込むように肉体に戻る横島。意識が戻るまでは数分あるので、さっさと話を纏めて横島を連れて帰ろう

「じゃ、これ一応琉璃に話を通し通しておいて上げるわね。多分後日GS協会から人が来ると思うから、ちゃんと話を聞いて……そうね。霊具学科の教師に同席を頼むと良いわ。じゃ、私達は仕事があるから」

そう笑って帰るわよと言う美神さんに判りましたと返事を返し、ま

だ意識が戻らない横島を巨大化したうりぼーの背中に乗せて、私達は保健室を後にした。後日TVCMで

【花戸印の霊体離脱バーガー！好評発売中！】

そのCMを見て、私達が微妙な表情をしたのは言うまでも無いだろう……

「なーノツブちゃん、ごめんってー」

部屋の隅で体育すわりをしているノツブちゃんにごめんって謝るが、こつちすら見てくれない

「んー拙者こういうのはあんまり好きでないでござるよ」

「良いからちゃんと服を着るの！あんまりボロを着てると横島が変な顔で見られるんだからね」

えっ!?!それは不味いでござる！と言って買って来たであろう服の袋をござそと漁っているシロとタマモの話を聞きながら、言葉だけでは駄目だと判断して六道の帰りにメロンパンを色々買ってきた。もう物で釣るしかない

「チビ、うりぼー、見てみて！ボール買って来たのー♪あそぼー♪」

「みつむう♪」

「ぶぎゅー♪」

アリスちゃんがボールでうりぼー達と遊んでいる声を聞きながら、ノツブちゃんの周りにメロンパンをおいて行く

「シズクー、今日は野菜中心で行こうと思うんだけどどうかなー」

「……焼肉とかだったしな、今日はサッパリ系で行くか」

キツチンで仲良く話をしながら料理をしているハーピーさんとシズク。ハーピーさんは口調はラフなところはあるが、生活能力は非常に高いのか、シズクと同レベルの料理の技能を持っていて、本当に色々作ってくれる。アリスちゃん好みの洋食が多いんだが、実に美味しかったなあっと思いつながら袋からメロンパンの包みを取り出す

「まずはオーソドックスなメロンパン、さつくり生地メロンパン、チョコメロンパン、チョコチップメロンパン」

「……ワシはそんなに安い女じゃないんじや」

やはりメロンパンの効果は絶大だ、今までマントで身体を隠し、体  
育座りをしていたノツブちゃんが顔を出してくれた

「夕張メロンの果肉入り、メロンクリーム入りメロンパンもあるよ」

【そ、それはあ……隣街の……高級メロンパン】

美神さんに無理を言つて、あの後隣町のパン屋に寄つて貰つて買つてきたのだ

「本当ごめん、今度からチビノブにあんなことをさせないから許してくれないかな」

俺もまさかチビノブがあんなことをするなんて思つて無かつたのだ。だけど今度はそんなことをさせないと約束する

【……縁側】

「え？」

ぼそりと言つたノツブちゃんに何？と尋ね返す

【縁側で一緒に食べるなら……まあ今回は許す】

夕食前だから4個入りのメロンパンの包みを手にして言うノツブちゃんに判つたと返事を返し、縁側に2人で並んでメロンパンを齧りながら、ゆつくりと登つて来た月を見つめた

【全くワシがお前のために頑張つたこともあると言うのに、何故見捨てるんじや】

「いや、俺爆弾なんて解体出来ないし」

【やってみれば案外出来るんじやないのか？お前なら】

そうかなあ……手先は案外器用だと思ふんだけど、正直そこまで出来る自信なんて微塵も無いんだけど……

【貸しじやからな、今度はワシのためになんかするんじやぞ、約束じや】

小指を差し出してくるノツブちゃんに判つたと返事を返し、指きりげんまんをする

【よし、なら今回は許す。じゃけど次は無いからの！】

長い黒髪を翻し家の中に戻っていくノツブちゃん、俺は完全に昇つた満月を見つめながら

「今すつごい平和で幸せだなあつて思うよ。心眼」

【そうだな、平和と言うのは掛け替えの無いものだ】

今これだけわいわいしていて、騒がしくも楽しい生活。俺はそれが幸せで嬉しくて、これがずっと続けば良いのになあと思って、縁側から部屋の中に向かって寝転がる

「せんせー、着替えたでござるー」

俺の顔を覗き込むようにして着替えたと笑うシロ、ちよつと身体を起こしてシロの服装に視線を向ける

「ん？おー、似合うじゃん」

見て欲しいと飛びついてきたシロ。Gパンにシャツとジャケットと何処となく、俺に似た感じの服装だ

「あんまり女の子っぽい嫌でござるーって騒ぐから恥ずかしいから無かったわ」

シロに反して、ワンピース姿のタマモがやれやれと言う感じで首を振りながら言う。

「拙者そんなことを言っていないでござるー！」

言ってたー、言っていないでござるという口論をするシロとタマモに苦笑しながら立ち上がる。

「あんまり騒いでいるとシズクに怒られるぞー」

シズクが怒ると大概物理なので痛いぞと言うと、口論していたシロとタマモは急に静かになる。それだけでどれだけシズクを恐れているのが良く判る

「お兄ちゃんもあそぼー♪」

ぽーんっ投げられたボールを受け取り、尻尾を振っているうりぼーの方に転がしながら、やっぱり大勢でいるのは楽しいと俺は笑みを浮かべるのだった……

リポート20 狼の居る日常 その3へ続く

## トトカルチヨ結果発表

### トトカルチヨ結果発表

ナルニアという異国の地では近くで忠夫の周りに居た少女を見定めると言うことは出来ない。と言うか、今まで放任主義と言うか、親らしい事をしていないのに、そんな事を言い出しても迷惑と言うことは分かっているが……子供の時に悲しい思いと辛い思いばかりさせたので、もしも誰かお付き合いするとか、結婚するとか言うならやっぱり幸せになってほしいと思うのが親心と言う物だろう……

「これでも人を見る目はあるからね」

話した時間、一緒にいた時間は短いが……人を見る目は確かだと思っている。無論誰とお付き合いする、結婚するというのは決めるのは忠夫だけ……

「やっぱり少しは……ね」

まだ結婚とかそう言うのは無いと思うけど……それでも1度忠夫の周りの女の子の事を整理しておこうと思ったのだ

「おキヌちゃん……か、あの子も結構良い子だと思うんだけどね」

忠夫の家に出入りしている幽霊の女の子。物腰も丁寧で料理も上手だった……もしも彼女が生きた女の子なら良いお嫁さんになったかもしれない……けど……

「でもノツブちゃんとかとどう違うのかしら」

凄く幽霊らしいノツブちゃんとおキヌちゃん。実際のところどう違うのだろうか？物を食べれる、食べれないの違いらしいけど……いや、そもそもGSになりたいのになんで幽霊と一緒に暮らしているのだろうか？……今思い返すと疑問ばかり浮かんでくる

「ちよつと残念よね」

蛍ちゃんと同じくらい良い子だけど……幽霊だから駄目よねとおキヌちゃんの名前の所に文字を書き加える。もしも生き返れたりするなら……彼女も忠夫のお嫁さんに良いかもねと小さく呟く。ノツ

ブちゃんも勿論幽霊なのでNGだけど、本当になんで家の忠夫は幽霊と同棲しているんだろうか、チビちゃんとかモグラちゃんなら判るんだけど……息子なのにいまいち考えている事が判らない

「次は……やっぱりシズクちゃんかな」

ノツブちゃんと同じように忠夫と同棲している少女を思い出す。見た目こそ少女だが、その実水神で竜神であり忠夫の守り神みたいな事をしてくれていると聞けば、親としては安心出来る。神様が忠夫を守ってくれているのだ、GSなんていう職業を調べれば、嫌でも怪我をする、死ぬかもしれないという話は嫌と言うほど聞く……だから神様が忠夫と一緒に暮らして護ってくれていると言うのは嬉しい

「そう言えば、タマモちゃんも忠夫を護ってくれてるって聞いたわね」前に日本に行った時に人間の姿になっていたタマモちゃんにあった。子狐の姿も勿論可愛いが、人間の姿をしている時もとても愛らしかった。それこそ養子縁組をしても良いかなっと思うほどにだ

(忠夫もずいぶんと可愛がってたしね)

妹のようにタマモちゃんを可愛がっていた。タマモちゃんはそこに少し不満そうだったけど……タマモちゃんも忠夫の事が好きなのかしら？でもそうだとっても忠夫はタマモちゃんを妹みたいに扱っているから、かなり厳しいかとも思い小さく笑い。タマモちゃんの名前の後に小さく家族(?)と書き込む

「でも神様がお嫁さんってどうなんだろう?」

神話とか昔話では神様と結婚したって言う話は結構聞く……シズクちゃんは少し口は悪いけど、忠夫の事を大事に思ってくれているのはよく判るし、家に居てくれるから忠夫の為に掃除とか洗濯、それに食事の準備もしてくれている。ここまでやってくれているのを見ると忠夫に好意を持ってくれているように思える。でなければ、あそこまで献身的に忠夫に尽くしてくれるとは思えない

「……どうなんだろう」

護り神様ってそういうこともしてくれる物なのだろうか?それとも忠夫が特別なのか……あの子めちゃくちや無表情だから顔で感情を読み取るのが難しいのよね……

「ただ1つ言えるのはあの姿だと犯罪って事よね」

神様で実際は忠夫よりも、私よりも遥かに年上なのは判るけど……見た目小学校の高学年くらい……流石に犯罪臭が凄まじい

「もし大人になれたりするなら変わるかもね」

そう苦笑しながら神様だから判らないと書き込み写真に写っているマリアさんとテレサさんの姉妹を見つめる

「本当仲の良い姉妹って感じね」

揃いの服を着ているからではない、写真から見ても仲の良い姉妹と  
いうのは良く判る。カオスさんが自慢の娘と言うのも良く判る

「あれって結局冗談だったのかしら……」

忠夫の嫁にどうかの？とにこやかに笑っていたが……あれは本気  
だったのだろうか……

「……少なくともマリアさんのほうは……本気っぽい」

写真で正面を向いているように見えるが、目が忠夫をロックオンしている。テレサさんの方は忠夫が抱き抱えている猪に興味津々と言う感じだが……

「……忠夫って凄くモテる？」

正直蛍ちゃん位しか忠夫を好きになる子はいないと思っていた。  
年がら年中ナンパ、そして頭の回転はいいのに、それを使う方向を致命的に間違えていたし……ただ私達がナルニアに出発した後。蛍ちゃんが色々面倒を見てくれたのは知っているし、それに美神さんの所でGSの修行を頑張っていて……それが性格矯正になったのかもしれない

「と、とりあえず、もし今度帰国したらマリアさんとテレサさんとも話をして見ましょう」

写真と忠夫の手紙とカオスさんの言葉では正直掴みきれ居ない所も多い。1度会って話をして見ようと思った……忠夫がこのまま  
どンドン同居人や妖怪などを拾うならあの家では少々狭いだろう。  
GSなのに妖怪を拾って育てている、突っ込み所は多いが、それも忠夫の個性なんだろうと苦笑する

「神宮寺さんは……見た目と違って結構優しそうな子よね」



個人的に興味があり神宮寺さんの事は調べている。判ったのは彼女がかなり名家の生まれだが、両親は既に亡くしている事。そして後ろめたい経歴があるという事も知った……そして忠夫を自分の事務所に研修に来させるために公安とも手を切り、GS協会に所属することを選んだ。確かに殺人や呪いと言うのは決していい物ではないだろう……だが世の中には必要悪と言う物もある。神宮寺さんはそういう道を選び、そして裏の世界で積み上げた経歴や、自分の価値を全て捨ててまで忠夫を選んだ……

「口は悪いし、冷たいって印象を受けるけど……実際はちよつと違うのよね」

そうせざる得ない事情があったと思えば彼女には同情の余地がある。忠夫に惹かれているのも、もしかすると闇の中で見た光が忠夫だったのかもしれない……そう思えば嫌える訳も無いし。私自身も助けてあげたいと思う

「もし蛍ちゃんよりも先に会っていたら……」

忠夫は間違いなく蛍ちゃんが好きだろう。そして蛍ちゃんも忠夫が好きだろう、だがお互いに奥手というのもあるし、霊能者と言う道に忠夫を引き込んだ責任と言うのを感じて忠夫を1人前の霊能者にと頑張ってくれているのは分かる。だけどその責任感のせいで、どうも忠夫と蛍ちゃんの関係が進展していないように思える。妙な所で2人ともまじめだから、そこが原因だというのは分かっている。しかしこれが神宮寺さんならば……弟子と師匠と言う関係よりも、恋人と言う関係になっていたんじゃないかなっと思ってしまう

「また彼女とも話してみたいわね」

あの時はバタバタしていて、話をする余裕なんか無かった。今度帰国する時は純粹に話をする時間が取れたらなっと思う……

「でもやっぱり蛍ちゃんよね」

忠夫の回りに女の子や幽霊に、妖怪の赤ちゃんとか色々集まっている。それはきつと蛍ちゃんと出会ってからだだろう、忠夫が変わったのはやっぱり蛍ちゃん存在が大きいと思う

「本当なんであんなに奥手なのかな」

お互いに好きあっているのは良く判る。だから帰国した時にはも  
しかしたらお付き合っているかも？と期待していたのだが、実際は  
進展なし……これは少しばかりがっかりだった。蛍ちゃんも忠夫も  
もう少し押しが強ければと……こう中学生の甘酸っぱい恋愛と言う  
感じはひしひしと感じた……

「別にそれが悪いって訳じゃないんだけど……」

むしろ若いからこう勢いがついてしまっただけって言う事になっ  
て安心していえると言え、安心していい。だけど忠夫の回りを考  
え

、蛍ちゃんがこのままだと出遅れていくような気がしてならない。  
私的にはやっぱり忠夫と蛍ちゃんが付き合ってくれてくれるって言うのが  
やっぱりベストなシナリオなだけで……初恋は実らないという言  
葉もあるし……周りの子も蛍ちゃんと同じくらい良い子って言うの  
も分かっている……

「本当忠夫の回りこれからどうなるんだろ？」

まだまだ1波乱も2波乱もありそうな忠夫の回り……親としては  
幸せに生きてくれればいいんだけど……

「あー早く1度仕事を片付けて日本に帰りたいな……」

今になって忠夫が心配で心配で仕方ない。私はリクライニング  
チェアに背中を預け、大きく背伸びをしながらそう呟くのだった……

神魔による百合子さんの現在の好感度一覧

- 1位 蛍
- 2位 神宮寺くえす
- 3位 タマモ
- 4位 シズク
- 5位 マリア&テレサ
- 6位 おキヌ

今回は白竜王様・アークス様・応龍様・自堕落キツネ様・無銘様の  
5名の予想的中となりました。

今回も参加していただき、どうもありがとうございますございました

## その3

レポート20 狼の居る日常 その3

我が家には沢山の動物が暮らしている。それはにぎやかで楽しいのだが……1つだけどうしても避けては通れない物がある

【散歩って言って連れ出すしかないだろうな】

「うん、それしかないんだよなあ……でもその後なんだよ、大変なのは」

散歩って言って連れて行くとすっごい楽しそうなんだけど、途中であれ？なんか違うぞ？って気付くんだよと呟く、動物なので危機察知能力が凄いなだよ。散歩って思わせる為にアリスちゃんにも手伝ってもらおうと思うけど、それでどこまで誤魔化せるかな

【シズクに手伝って貰うしかあるまい、あとノツブも良いな。普段怠惰で過ごしてるんだ、1年に1回くらい手伝わせるべきだと思うよ】

まあ私は初めてだからお前から聞いたただけが大変なのは良く判るよと笑う心眼。本当に大変なんだよ、1年に1回だけなだけだよ……

「牛若丸にも手伝って貰おう」

今回は只でさえ人数が増えている。これは確実に俺だけでは無理なので、2人にも手伝って貰おう。俺は溜息を吐きながら立ち上がり、机の上の1枚の紙を手にした。その文字を見て更に深く溜息を吐く、その紙にはでかでかと大きな文字で

【使い魔の予防接種のお知らせ】

と書かれているのだった。1年に1回のチビ達の恐怖のイベント、妖怪特有の変な病気になるための予防接種のシーズンが訪れているのだった……

「うおうっ!?!」

リビングに入るなり、部屋の奥から凄い勢いで飛んできた何かを反射的に受け止める。何だ？何が飛んできたんだ。若干混乱しながら

受け止めたそれを見る。もふもふとした茶色い身体の……って

「うりぼー!?!」

【なんで飛んできたんだ、うりぼーは】

俺と心眼は俺の手の中で目を回しているうりぼーを見て、リビングで何が起きていたのかと見ると

「みむう」

部屋の隅に置かれているハムスター用の台車（ドクターカオス製）が凄まじい回転音を上げ。その隣でチビが頭を抱えて小さくなっている

「うりぼーが楽しすぎて回転させすぎて、飛んで行ったんだよお兄ちゃん」

アリスちゃんがはしやぎ過ぎたんだね!つと笑う。どれだけ回転させたら、あんな弾丸みたいな勢いで飛んで来るんだろうな

「ぷぎゅっ・ぴぎゅー♪」

目を覚ましたうりぼーは俺の手の上から飛び降りて、再び台車の方に走っていく。よつぽど気に入ったみたいだ、部屋の隅から台車を回す音を聞きながらキッチンに居るシズクの方に向かう

「……どうした?何か用事か?」

食器を拭いているシズクに手にしている予防接種の受付の紙を見せる。シズクはそれを見てその時期かと呟く

「……牛若丸かノツブを連れて行くべきだな」

「やっぱり?」

いつもはチビとモグラちゃんの2匹だが、今回はチビ、うりぼー、シロ、タマモ、チビノツブと5匹だ。特にシロとタマモは人化して逃亡する可能性が非常に高いので、それを捕まえられる人員は必須だ

「散歩って言って連れ出すつもりなんだけど、どうかな?」

「……それなら散歩の帰り道に商店街に寄ろう」

丁度その通りに病院があるから、そこで予防接種をすればいいというシズク。道中で買い物を買えば警戒心も薄れるだろう、これはシズクの良いアイデアだな

「じゃあ、ノツブちゃんと牛若丸に頼んで早速」

「待て横島、勝手に出歩いてはいけないと言われてるだろう？まず美神に連絡を取り、ジークかブリュンヒルデを派遣して貰ってからだ」

早速出かけようと言う俺に待ったをかける心眼。勝手に出歩いて怒られるのも嫌なので、美神さんの事務所に電話を掛けるのだった……

「いや、なんかすいません」

シズク、ノツブちゃん、牛若丸、シロ、タマモ、アリスちゃん、俺と言う大所帯で予防接種の前に公園に向った。楽しそうに遊んでいるアリスちゃん達を見ながらベンチに腰掛け頭を下げる

「何気にするな、これも私の仕事だ」

ジークかブリュンヒルデさんが来ると思っていたんだが、我が家に訪ねて来たのはワルキューレさんだった。ジークの姉で、ブリュンヒルデさんの妹と聞いているが、2人とは大分雰囲気が違う

「いっくよー♪」

「ぴぐー♪」

「みみーむ♪」

【のぶぶー♪】

ボールを投げるアリスちゃんとそのボールを追いかけて行くチビとうりぼー。非常に楽しそうだが、その後の予防接種でどんな反応をするのかが心配でしようがない。なおボール遊びを提案したのはアリスちゃん、遊び疲れさせて暴れないようにしたら良いよとの事。魔界にも予防接種が有るそうで、逃げ回るぐーちゃん対策らしい

「……大体店の位置は覚えたな？今度からお使いを頼む時があるから真面目に覚えろよ」

「判ったでござる！頑張って覚えるでござるよ」

「めんどくさいわねー」

シロとタマモは人化出来ると言う事なので、これからお使いを頼むこともあると言ううちよつと強引な理由かもしれないが、それで連れ出してきた。口ではめんどくさいわねーと言いながらもちゃんと手帳にメモをしているタマモに思わず苦笑をする。なんで私がか言う

事もあるのだが、ちゃんと基本的にお手伝いをしてきているので、やる前に何か言いたいという感じなのだろう

【んーこうして太陽の下を歩き回るのは良い物ですなー】

【そうだなー、縁側で日向ぼっこするのも良いけどなー】

肉体を構築する霊力が回復した牛若丸がぐーつと背伸びをしながら嬉しそうに笑う。散歩とか出来るのも楽しいが、やっぱり大勢で食事が出来ると言うのが俺としては一番嬉しいかもしれない。美神さんもちゃんと食費に関しては何れで支給してくれるし

【メロンパンを忘れるなよ】

【判ってるって】

恐らく予防接種で大変なことになると判っているので、ノツブちゃんも連れて来たのだ。報酬を忘れるなんて事はしない、俺とノツブちゃんがそんな話をしているとワルキューレさんがくすくすと笑い出す。2人で振り返るとワルキューレさんはすまないと言いながらも、それでも口元に笑みを浮かべ

「余りに楽しそうだな、つい笑ってしまった。平和つと言う感じではないじゃないかとな」

ガープの事で神魔は常に殺伐としているから余計にそう思ってしまったよと笑い

「リラックス出来ると言う事は良い事だ。ずっと気が張っているより良い」

【うむ、その通りだな。ずっと張り詰めていると、簡単に緊張の糸は切れてしまうからな】

心眼がワルキューレさんの言葉に付け加える。適度に気を緩める事が大事なのだろうか？と思っているとボールが足元に転がってくる

【お兄ちゃんもあそぼー♪】

【みむー♪】

【ぶぎゅー♪】

【のっぶー♪】

あそぼーと言うアリスちゃんに判つたと返事を返し、ベンチに座つ

ているノツブちゃんとワルキューレさんに頭を下げて、アリスちゃん達の元へ向かう

【私の必殺シュートですー!】

「ボールが分裂した!？」

牛若丸も遊びに参加したのだが、牛若丸と遊ぶ時はきっちり身構えていないと怪我をする。最初のボール投げが4つに分裂したのを見て、俺はそれを確信するのだった……

「じゃ、私（拙者）は急用を思い出したから!」

【ディーフェンス!ディーフェンス!!】

公園で遊びつかれた頃合で予防接種をやってくれる動物病院に直行。シロとタマモが気付き逃亡を図るが、ノツブちゃんにガードされ「……」ここで逃げたら水で締め上げるぞ」

シズクの絶対零度の声と視線にしゅんつと大人しくなった。シズクが怒るとメツチャ怖いからな

「みむーみむうむみういいいい!!」

「はい、暴れない」

俺の手の中で暴れているチビ。普段は捕まえるのに苦労するが、遊びつかれて体力が減っているので捕獲しているのは案外楽だった

「ぶぎゅ?」

【ノブ?】

予防接種初体験のうりぼーとチビノブが大人しくしているが、病院の中に入ったらどうなるかな

「予防接種なんで逃げようとしたら捕まえてくれますか?」

「良いだろう。私も手伝おう」

ワルキューレさんにも逃げようとしたら捕まえるのを手伝ってくださいとお願いしてから、俺達は病院の中に足を踏み入れた

「ぶぎゅ!ぶぎゅうう!」

病院の中に満ちる動物の鳴き声にうりぼーがここは怖い所なんだと理解したが、もう遅い

「すぐ済むからおとなしくな?これは大事なことから」

「ぴ、びぎゅ……」



そわそわしているが、それでも一応は伏せてくれる。シロとタマモはシズクに睨まれ、人化を解除して子狐モードと子犬モードでシズクとノツブちゃんに確保されている

「ノブ？」

自分も予防接種されると思っていないチビノブを見ながら順番待ちをしていると、割とすぐ俺の名前が呼ばれる

「みむ、みむむうう」

ぺちぺちと俺の手を叩いているチビにすぐ済むからと声を掛けて、病室に足を踏み入れる

「よろしくお願ひします」

「はーい、すぐ済みますからねー」

チビをしつかりと捕まえて、逃げられないようにし、お医者さんの方を向ける。チビはそれでも最後まで抵抗していたが

ブスリ

「みっぎやあああああ!!」

暴れると判っていたので手早く注射を刺されて絶叫するチビ。その後は絆創膏を張られて待合室に戻る

「ぶぎゅーぶぎゅううううう!」

「落ち着いて、すぐ終わるから。ね!」

【主殿と暮らすのに大事な事ですからね!】

チビの悲鳴にうりぼーが暴れているが、アリスちゃんと牛若丸に確保されている。俺は涙目で丸くなっているチビをアリスちゃんに預け、うりぼーのリードを手にして病室に戻る

ブスリ

「ぶっぎやあああああッ!!」

注射を刺されて絶叫するうりぼー、後シロとタマモとチビノブか……先は長いな。その後は勿論なのだが、最後まで逃げようともがいていたシロとタマモだが

「では神魔合同で横島の護衛を勤めている立場から言うが、病気になるかもしれないお前達は排除対象になるがいいかな?」

ワルキューレさんの言葉に暴れるのをやめた2人を抱き抱えて病

室に入り、数秒後……

「きやいーんんツ!!!」

悲壮すぎる鳴き声が2回続いた後、チビノブも自分も!? って言うりあくションで初めて逃亡に出たが抱き抱えて病室に入るが、頭を抱えて体操座りで丸くなり完全防衛体勢だ。

「帰りにメロンパン買ってやるからな」

【ノツ！ノバアアアアアアツ!!!】

メロンパン!? と顔を上げた瞬間にブスリとやられたチビノブの絶叫が病院に響き渡るのだった……

「ほらー、チビの好きなメロンだぞー、うりぼーは安納芋、シロはビーフジャーキー、タマモは揚げもあるぞー、チビノブはメロンパンあるよー」

帰宅後リビングの隅に固まり恨めしそうにしているチビ達に声を掛ける。1年に1回の予防接種、この時だけは本当に大変だ。ワルキューレさんに迷惑を掛けたので夕食を一緒にどうですか? と誘ったのだが

【私も仕事があるのでな、またな。暫くの間早朝の散歩の頃にはまた来よう。間違っても勝手に出歩くんじゃないぞー】

そう笑って帰って行ったのだが、本当に出来る人って人で格好良いよなあつと思わず思ってしまった

【ノーブ♪】

チビノブはメロンパンと聞いてダツシユで駆け寄ってきた。ちよつと心配になるが、寄って来てくれたので膝の上に乗せて、メロンパンを小さく千切る

「はい、あーん」

【ノツ♪】

予防接種を我慢してくれたので思いっきり甘やかしていると、今度はうりぼーが寄って来た。安納芋を半分に割って

「ほら、おいで」

「ぶぎゅー」

お尻の絆創膏がやけに目立つが駆け寄ってきたうりぼーの口元に

芋を向ける。嬉しそうに鳴きながら芋を貪るうりぼー、そしてチビノブにメロンパンを与えていると我慢出来なくなつて来たのか、チビも寄つて来る

「元気で過ごすためだからな、意地悪してるわけじゃないからな？」

「……みむ」

メロンを小さく切つてフォークにさしてチビに向ける。あむつと頬張りにぱつと笑うチビ、本当に何時も予防接種の後は大変だ、モグラちゃんとかは全然抵抗しなかったし、刺されても鳴かなかつた分。余計に大変に思う

「シロとタママはー？」

「……貰うけど、揚げじゃなくてご飯の時」

「拙者もそつちが良いでござるなー」

予防接種に騙して連れて行つたのは俺なので判つた判つたと返事を返すと、今食べるおやつとして貰うと言うのでジャーキーの袋と揚げの袋を渡す

「全く、なんで予防接種なんてあるのよ」

「そうでござるなー、痛いだけでござるよ」

深く溜息を吐き、ぐちぐちと文句を言っているシロとタママ。一応念の為と言われているからそれを言われると俺としても辛いんだよなあ……チビ達にメロンを与え終わると今度はアリスちゃんが俺の膝の上に座り

「はいっ」

プリンを差し出してくるアリスちゃん。それを受け取るとあーんと口を開く、どうも今日はこうしてやることになりそうだと苦笑するのだった……

「48の医療技の1つ、フローレンスバスターツ!!!」

「ごばああああ!!」

翌日クロクさん達のお見舞いに病院に行つたのだが、軍服を着た女性がプロレス技見たいのをポチさんに仕掛けて目の前に落下してきた……その余りの光景に美神さん達も絶句し、付き添いのジークがありえないくらい震えだした

【予防接種が嫌で逃げるなんて情けない！早く来なさい】

泡を吹いているポチさんを引き摺っていく女性と目が合った。そしてその視線はチビ達に向けられ

【予防接種は済んでいますか？】

「はい！大丈夫です！」

俺が即座にそう返事を返すとそれなら良いのですと微笑み、泡を吹いているポチさんを引き摺って病院に戻っていく女性

「昨日予防接種行っておいて良かったと思う人手あげて」

チビ達が前足や尻尾を上げる。昨日予防接種行つてなかったらどうなっていたんだろう？俺は昨日の内に行つた自分を褒めてやりたと思うのだった……

人の話を聞かない狂戦士なナイチンゲール。これはフェンリル事件の時に知っていたつもりだけど、こうして目の前で見るととてもないと思う

「ジーク。大丈夫か？めつちや震えてるけどどうした？」

「大丈夫だよ。横島君、ただ基地で追い回されて最終的に脱落とされたことを思い出しただけさ、全然大丈夫、僕は全然大丈夫さ」

大丈夫じゃないだろ!?と叫ぶ横島君。どう見ても完全にトラウマになっているのは一目瞭然だ

「父上が心配になってきたでござる」

「まあ、あれを見れば心配になるわよね。早くお見舞いに行きましようよ」

地面に出来ている蜘蛛の巣状を見れば心配になるのは当然。それに私達もクロさん達が今後どうするのか？と言うのを聞こうと思っていたので、受付に声を掛けてからクロさん、ポチさん、そして長老の3人が入院している病室に向かった。なおチビ達は病院内と言う事もあり

「その使い魔はこちらのケージに入れてくださいね」

「はい、ちよつと狭いけど大人しくしててな」

病院の中なのでうちよろしくないように、病院側から貸し出された

ケージの中に入れられた。のだが……横島君がゴムボールを入れてやるとケージの中でそれで遊び始める。賢いだけあって、騒いではいけない場所とは理解してるみたいね。エレベーターで教えられた階まで移動して、3人の病室に足を踏み入れると私達を出迎えたのは苦悶の呻き声だった

「うぐぐ……ぐぐおとおお……」

「暴れるから酷い目にあうのだぞ、ポチ」

「全くじゃな、婦長殿は大人しくしておれば酷いことは……いや、するな。あのお方には話が通じぬ」

クロさんと長老はベッドに腰掛けて、腰を押さえて呻いているポチさんを見て、呆れた様子で溜息を吐いていた。ナイチンゲールの姿はないから、多分別の病室に入院している西条さんと言峰神父の所に居るのだろう。出来れば悲鳴とかが聞こえてこないと良いんだけど心の中で祈る。ジークは護衛だからと言って病室の外で待機しているが、ちよつとこう軍人だからか、固すぎるって気がするわね

「父上ー元気そうでござるな」

「シロ、お前も元気そうで良かった。所でその召し物はどうしたのか？」

せんせーに買って貰ったでござると弾ける笑顔でシロが言う。横島君は小声で蛸ちゃんに

(俺金出してやってってシズクに頼んだだけなんだけど)

(シロにすれば横島に買って貰ったって事なのよ。多分)

自分の頭の中で都合よく解釈してるみたいね。まあ、子供特有の考え方よね

「それは横島殿、申し訳ないことを」

クロさんに頭を下げられおどおどしている横島君。こういうのに慣れてないからどうという反応をすればいいのか判らないのね

「美神殿、本当は元気になってから頼みに向かおうと思っていたのですが、相談事があるのです」

クロさんがベッドに正座して、私と横島君を真剣な眼差しで見つめる

「ポチさん。大丈夫か？」

「うごごおおお……あの暴力女、手加減って言葉を知らないのか」

……多分と言うか確実に横島君にも関係のある話なんだから、もう少しこつちの話に集中して欲しいんだけど……蛍ちゃんに腕を引つ張られ、私の後ろに横島君が来た所でクロさんは口を開いた

「横島殿、シロを預かって貰えぬでござるか？これは長老も了承してくれたのだ」

「うむ。シロには里は狭すぎる、いや、もつと言えば人狼全体がもつと広い視野で見る時代が来たと思うのだ」

やっぱりね、シロは横島君を慕っているから横島君の所に預けようと言う相談だった

「俺は別に構わないですけど……シロは良いのかな？」

……横島君。お願いだから良いって返事をする前に少しは相談って物をして欲しいんだけど、とは言え、人狼族との橋渡しはこれから必要かもしれないから、OKは出すつもりだったから良いんだけど……もう少し、報告・連絡・相談ってことを覚えて欲しい

「拙者はお願いしたいでござるよ！良いんでござるか！父上、長老！」

「うむ。色々と考えたのじゃが、今は日本全体もおかしくなっている。結果も簡単に破られた、いつまでも里を隠しておけるとは思えんの

じゃ、美神殿。シロを横島殿に預けると同時に、人狼の一部をじーえす？じやったか？それにすることは可能かの？」

長老の言葉にすぐは返事は出来ないわと返事を返す。今は人間のGSが減っているので、確かにGSとするのは可能かもしれない。靈力や剣術の技量も高い、だけどそれは私が決めれる事ではない。琉璃に相談はしてみるわと返事を返す

「うむ、急には里の者も動揺するだろうから、ワシが里に帰るまでにある程度話しが固まってくれば幸いじゃ」

全治1ヶ月で入院期間は後3週間の予定だ。それくらい時間があれば話も固まるだろう、後は琉璃の判断次第と言うところね

「では横島殿。シロをよろしく頼み申す」

「は、はい、お預かりします」

「せんせー！よろしくござるー！」

……とりあえずあんまり良くない方向だけど、話が固まったって事でいいわね。面会時間もあるし、そろそろお暇しようかなと考えていると

【まだ帰らないでください。全員1度検診しますので】

居なかったナイチンゲールが病室に入ってきて、帰ってはいけな  
いと言われ、もう少し早く帰るべきだったと私は心底後悔するのだ  
った  
……

フローレンス・ナイチンゲール。クリミアの天使と呼ばれる偉人、  
その名前から慈悲深く優しい人物と言う先入観があった……のだが、  
実際は話を聞かない狂戦士みたいな側面があると聞き、怖いと思っ  
ていたんだけど

【はい。終わりです、蛍さんでしたね。先祖がえりとの事ですが、偶  
には魔力を放出するように、余り過度に封印すると後に身体機能に障  
害  
が  
出  
ま  
す  
よ  
】

……大人しくしていれば凄く優しい女医さんでした。ブラウスの  
ボタンを閉めながら障害ってどんな物が考えられますか？と尋ねる

【そうですね。まずは魔力が体に溜まりすぎての魔力中毒。これが一  
番可能性が大きいです、手足の感覚の麻痺などが主な症例ですね。次  
は女性としての機能に障害が出る可能性があります、今はそういう前  
兆は無いですが可能性があるとしつかり覚えておいてください】

「……はいっ！」

予想を遥かに超える障害が出ると聞き、近い内に先祖返りをしてい  
るGSとして再登録される事が決まっているので、あんまり能力を隠  
さないで使う事にしよう。横島と結婚した時に子供が出来ないなん  
て冗談じゃない

【後は筋力トレーニングは控えめにしてください。筋肉を付けすぎる  
のも余りよくありませんからね】

後で処方箋を出しておきますと言われ、検診室を後にする。美神さ

んは自分の検診表を見て

「私アルコール少し控えろってさ」

「ご愁傷様です」

美神さんのアルコール摂取量は常人よりも遥かに多いので、身体を大事にすると言う意味でもやはり酒を控えるべきなんだろう

「蛍ちゃんは？」

「……偶に魔力を開放しなさいって怒られました。その……今はいいけど、女の子としての機能に障害が出るって」

私の言葉に美神さんは顔色を変える。今は良くても、引退してからの方が時間が長い。美神さんは少しだけ怒った表情をして

「先祖がえりって隠すのはよく無いって事よ。最初から私に相談してなさい」

「……はい」

先祖がえりと言うのはどうしてもGSと言う家業に障害が出る。だから隠していたが、やっぱり隠すべきではなかったと後悔した。本当に障害が出る前で良かったと思う

「それにしても横島君はずいぶんと長いわね」

「そうですね……」

シロとタマモはクロさん達の病室に検診が終わるまで預けても良いと言う話だったので、置いてきたが、私が終わってから1時間経っても終わらないので少し心配になってきた。

「すいません。ずいぶんと遅くなりました」

横島がやっと検診室から出て来て、私達に頭を下げる

「特に異常とかは無かったの？」

「異常すぎるほど頑丈だからって色々調べられました」

「私も聞いたが、今のところ横島の霊体にも肉体にも障害は無いそう  
だ」

心眼の言葉にほっと安堵の溜息を吐いたのだが、次の横島の言葉で私も美神さんも思わず凄く微妙な顔をした

「なんか俺ならナインチンゲール、48の医療技と52の診察技を覚えれる筈ですって言われましたけど、どうしたら良いと思います？」



「それは人間で使えるのかしら？」

「さあ？と横島が首を傾げる。そもそもなんで診察している相手に自分の技を覚えさせようとするのか？やっぱり普通の人の考え方じゃない」

「横島さーん、お薬取りに来てください」

「はい、今行きます」

「どうも検診が長引いている間に薬も出来てた見たいね。すぐに呼ばれ薬を取りに行く横島の背中を見ながら、美神さんに尋ねる」

「除霊最近入れてないですけど、どうしたんですか？」

「ちよつと身体を休める時期だと思ってるね。近隣の簡単そうな除霊は入れるけど、遠出の除霊はやらないから」

「フエンリルとの戦いの疲れを取りたいけど、温泉とか言ってる余裕は無いからと笑う美神さん。多分近隣の除霊も入れたくないんだろうけど、どうしても依頼を受けないといけないから受けたって感じだ。」

「判りました。でも美神さんもあんまり無理しないでくださいよ？」

「判ってるわ。西条さんが復帰してくれば、後は大分楽になると思うのよ」

「だからそれまでの辛抱よと美神さんが言うと、薬を貰った横島が戻ってくる」

「予定じゃなかったけど、検診で遅くなったし、このまま晩御飯食べてく？」

「あーじゃあ一回シズクに連絡していいですか？なにか準備してたら悪いし」

「一応病院で遅くなるかもしれないって言ってありますけどと言う横島。こうしてみるとなんか横島の家がシズクが居るのが当たり前で感じて胸がもよよとする。横島が公衆電話で電話しているのを見ていると美神さんが笑いながら」

「あんまり出遅れてると皆に出し抜かれるわよ？横島君、結構人気有るみたいだし」

「う、わ、判ってはいるんですけどね」

電話でOKが出たのか、指でOKサインを出してくる横島に手を振り返す、すると横島も手を振り返してくれる。

「じゃあちよつと良い焼肉屋でも行く？多分タマモとかいるから、魚って空気じゃないと思うし」

「そうですね、そうしましょうか」

焼肉屋ではあんまりいいムードとは言えないが、皆で食事するのは楽しい。それにシロの歓迎会を兼ねていると言えば、丁度いいだろう。

病室のタマモ達を迎えに行つて、そのまま焼肉屋に足を向けたんだけど

「せんせー、せんせー、まだでござるかー？」

「もういいんじゃない？」

「駄目！生焼けだとお腹壊す！」

横島がなんかお父さんとか保護者とが板についてきてる。私はそんなことを考えながら横島の分の焼肉を皿に入れてあげると

「ありがとな、蛭。つて馬鹿か!?生で食おうとするな！」

「拙者その程度じゃお腹壊さないでござる！」

駄目だつて言う横島と、生肉を食べようとするシロ。そのやり取りが面白くて、噴出してしまふ。本当に横島の側にいると面白いわねと私は心の底から思うのだった

「ご馳走になるのは悪いので経費で出しますね」

「良いの？じゃあ黒毛和牛の上コース8人前と上カルビ8人前追加でお願いします」

「あ、じゃあ俺メロンとかもお願いします。チビ達のごはんに」

「OKー♪すいませーん、メロンも3人前お願いしますーす」

経費で落とすとジークが言った瞬間。高い肉をどかどか頼む美神さんとそれに便乗してメロンをお願いしますと言う横島、優しくなつたと思つたけど、やっぱり美神さんは美神さんなんだなあつと思うのだった……

## その4

レポート20 狼の居る日常 その4

横島とおキヌ、それと蛍とグレムリン、猪、タマモ、シロという面子でまだ朝早い道を一緒に走る。早朝の散歩の護衛は私が引き受けるとジークと大姉上に言っつて、これで2日目。私が感じたのは前の世界よりも横島が勤勉と言う事だ

「そう、その調子。霊力の循環だけじゃなくて、周囲の霊力を効率的に取り込むことを意識して」

【横島さん、頑張ってくださいね】

蛍とおキヌの言葉におうつと返事を返す横島。はっはっはつと小刻みに呼吸を繰り返し、全身に霊力を張り巡らす。だが自前の霊力だけではそれは自分に掛かる負荷が非常に大きくなる、それを周辺の霊力を取り入れることで自身の霊力のキャパを増やすだけではなく、高利率的に自身も強化する。神魔では基本的な動作だが、人間ではかなりの難易度であるその技術を横島は体得しようとしていた

【だが、自分の存在をしつかりと認識しろ。取り込んだものを異物として認識しろ……そうだな身体に鎧を纏うイメージだ】

心眼と言うバンダナは今横島は身に付けていない。蛍の首にスカーフのように巻かれてる、恐らく昔話にあった横島の霊力を補助する精霊。本当はGS試験で消滅したはずだが、どうやらまだ生きているようだ。自分に頼らず霊力をコントロールする一環と言う所だろう

「ふー……やっぱり心眼が居ないとしんどいな」

【何時までも私に頼るな。私は手伝いはする、だがそれに頼っつていては何時までも1人前には程遠いぞ】

【もう少し休んでいる時まで小言は良いと思いますよ？あ、横島さん。動かないでくださいね】

ゴールである川原に寝転がる横島の額には大粒の汗が浮かんでいて、それをおキヌがタオルで拭っている。万全のバックアップのある

修行、そして指導者も居る。確かに横島の能力が私の知る横島よりも伸びているのは納得だ

「みむー♪」

「ぶぎゅっー」

一緒に走ってきたグレムリンと猪は川原を駆け回っている。しかし横島のグレムリンは凄いな……魔界正規軍で飼育されている魔獣よりも強いんじゃないか？と思う時がある。幼年期は弱いはずなのに……一体どうやってあそこまで力を手に入れたのだろうか

「コンッ！」

「ワンッ！」

監視役のシロとタマモに吼えられて川の上から戻ってくるグレムリン。しかし何故人化出来るのに動物の姿で着いて来たのが気になるな

「じゃ、横島練習始めましょうか？」

「えーっ、俺それ苦手なだけど」

私が見ている限り貪欲に修行を積んでいた横島が嫌そうな声を出す。一体何の訓練なんだ？と振り返り蛭が手にしている物を見て納得した

「待て。それだったら私が教えてやろう」

蛭が手にしている拳銃、横島には普通の射撃と言うのは恐らく合わないだろう。私はそう判断して、蛭と横島にそう声を掛けたのだった

……

ワルキューレさんが私が教えてやろうと言って近づいてくる

【ワシが教えるんじゃない！】

「安心しろ、お前の指導を奪うつもりは無い。こういうやり方もあると教えるだけだ」

ワルキューレさんが蛭に近づいてきて、手を差し出す

「壊さないでくださいね？」

「判っているよ、心配するな」

蛭からアンちゃんを作った霊波銃を受け取り観察するワルキュー

レさん。

「ふむ、洗礼弾を装填出来つつ、霊波を打ち出せるタイプか。人間が作った割には良い出来だ」

両手で構え照準を合わせたりしながら銃の評価をしたワルキューレさんは俺に視線を向けて

「拳銃と言うのは射撃武器としてはそう優秀な部類ではない。強いて言えば護身用だ、射撃武器としてはマシンガンと比べれば制圧力も火力も乏しく、ライフルと比べれば言うまでも無く射撃距離や威力も低い。このタイプなら有効射程は約50m、敵を狙うなら20m強、撃つだけなら射程はもう少し延びるが、そうなると命中率は期待出来ないし、威力も下がる。威力・命中共に期待出来るのは約7mほどがこのタイプの銃の特徴になる」

さすが本職流れるように銃の解説をしてくれた。ただ構えて撃つって代物じゃないのか

「しかしだ。蛍のようなタイプなら足を止めての射撃が向いているが、横島。お前には無理だ、何故ならお前のようなオールラウンダーを射撃要因として一箇所に留めるのは馬鹿のする事だ」

「じゃあ蛍に向いているって事ですか？」

そう言う訳じゃないと笑ったワルキューレさんは牛若丸を出してくれと言う。眼魂を取り出して、牛若丸に出てきてくれるように頼む

【私に何か？】

「軽く稽古に付き合ってくれ、横島に指導したいんだ」

少し不機嫌そうだったが、俺の指導と聞いて牛若丸は表情を変えて刀を構える

【言っておきますが、私は手を抜くと言う事は出来ませんよ】

「それで構わない。私も英霊の強さと言うのを見て見たいと思っただ」

ワルキューレさんは俺が貰っていた銃を逆手に構え、自身が持っている拳銃を正眼に構える。だがその構えは銃を撃つように適しているように見えなかった

【そのような構えで私をどうにかできると？】

「御託は良い。来い」

挑発するような言葉に牛若丸は体勢を低くして、獣のような勢いでワルキューレさんに飛び掛る

「ふっ」

「!」

逆手で構えた銃の銃身で牛若丸の刀を絡め取るようにして受け流し、正眼に構えた銃を牛若丸の顔面に向けて放つ

「くっ!」

牛若丸は顔を逸らして霊波を回避するが、その隙に懐に回りこんだワルキューレさんが腕を掴んで投げ飛ばす。その腕の極め方は俺も教わった相手が抵抗すればそのまま腕をへし折る極め方に酷似していた。牛若丸はそれを承知しているので自ら飛んで交わすが着地するまでの間にワルキューレさんが両手に構えた銃から霊波が連続で放たれ、牛若丸の体を大きく吹き飛ばす

「銃だから遠距離攻撃と言うのは先入観だ。銃を使いながらも近距離戦闘を好む者は多い、何故なら近づけば近づくほど、命中率は増すからだ。だが無闇に近づけば良いと言うものではない、相手が後衛タイプなら防衛手段にも当然特化している」

「何故!?!」

「驚く事は無い。私は銃の使い手として知られている分、近づけば有利と思っっている相手はこれでもかと相手にってきている」

俺と蛭に話しかけながらも背後から襲ってきた牛若丸の攻撃を見もせず、銃身で受け止め反対の手に持った銃を牛若丸に押し付け引き金を引く

「ぐうっ!」

「牛若丸!?!」

苦悶の声を上げながら吹き飛んでいく牛若丸。その姿を見て思わず名前を呼んだが

【心配無用ですー!こんなに楽しい遊びは久しぶりですッ!】

「……戦闘狂め」

弾ける笑顔の牛若丸にワルキューレさんは仕方ないという様子で

笑いながら

「ほら、もつと遊んでやろう。来い」

【言われなくても！】

地面を蹴った牛若丸の姿が掻き消える。地面を蹴る音は聞こえるので、高速で走り回っているのが良く判る

「心眼、見えてる？」

【ギリギリな。だが本当に早いぞ、小柄な分捉えるのは難しいはずなのに、良くあそこまで対応できる物だ】

心眼の感心した声が響く、ワルキューレさんは縦横無尽に襲ってくる牛若丸の刃を受け止め、受け流し、叩き落とし対応している

「打撃と防御に使うことにより、相手のペースを崩す。ただしそのまま防御はするな、霊力で銃身を強化して耐久を上げろ。いざ撃つ段階で壊れていては話にならない。また、銃口から霊波刀を展開してやるのも有効だッ！」

【ギッ！】

銃口から伸びた霊波刀を牛若丸は歯で受け止め、噛み砕く、なにそれ!? そんなの出来るの! というか大丈夫なのか!

「だが打撃と防御、そして射撃では決めきるのは難しい。また相手の攻撃力が自分よりも上回っていけば、持久戦に持ち込むのは自身が不利。つまり銃で近接を行う場合、銃の役割とは……」

【足が!?!】

「本命の攻撃を通す目晦まし、牽制、及び相手の機動力を奪う為に使うのだ。チェックメイト」

牛若丸の動きが急に止り、ワルキューレさんが牛若丸の額に銃を突きつける

【参りました】

牛若丸が剣を捨てて、両手を挙げる。ワルキューレさんはそれを見て銃を戻す

「今のは射撃の中にルーン魔術と、銃痕で魔法陣を刻み、それで相手を捕縛することを考えていた。牛若丸の足元を見てみる」

そう言われて足元を見ると淡く光る文字が見えた

「私は大姉上ほど、ルーン魔術に精通しているわけでは無いが、捕縛と身体強化は使い慣れている。近接と銃による中間射撃で相手に脅威だと思わせ、銃を避けさせる事で罠の所に追い込み、後は仕留める。横島にはこういう風があっているだろう、反射神経と動体視力がずば抜けているからな」

だがその為にはもう一丁これが必要になるがなとワルキューレさんは笑い。俺と蛍を見て何か質問は？と問いかけてくる

「銃で打撃戦をするとか結構やる人いるの？」

「居るな、ナイフの延長みたいな感じで使う物は案外いる、私も現に最初はナイフだったが、その内に銃での打撃戦を覚えた。そっちの方が良い場合もあるんだ。武器を持ち替えずに、戦闘レンジを変えられるのは実に便利だな」

相手の目論見を崩す事も出来るんだとワルキューレさんは笑い

「近接戦闘の訓練をする時に時間を見て試して見ると良い、その場合は木か何かを銃の形にして、イメージを掴むと良いな」

にこりと微笑んだワルキューレさんにありがとうございますと頭を下げ、朝の訓練は終わりになり、家までゆつくりと散歩しながら戻っていくのだった

「じゃ、横島。お昼から霊具の呪いを解除するらしいから14時30までには事務所に来てねって」

【時間の前に迎えに来ますからねー】

朝御飯の後に蛍から今日のスケジュールを聞いて、迎えに来てくれると言うおキヌちゃんに判ったと返事を返し、リビングに戻る

【負けた……あれは相手の出方が判らなくて……不覚です】

【銃で殴りかかるとかめっちゃ面白いな！ワシもやってみるかなあ！】

ワルキューレさんに負けた牛若丸が落ち込んでいて、ノツブちゃんはワシもやってみるかなあっと笑っているのを見ながらソファアームに座る

「ワン♪」

「コン」



「あーそれで動物モードな訳ね。判った」

どうして動物モードなんだろうか?と思っていたのだが、ブラシを啞えてシロが来たのを見て何をして欲しいのか理解し、シロから膝の上に乗せてブラシをかけてやる

「クウ……」

気持ち良さそうに目を細めているシロのブラッシングを終えて、リボン結び、そして今度はタマモもブラッシングをして

「はい、アリスちゃんもおいで」

「うん」

ぱあつと華の咲くような顔で笑ったアリスちゃんの長い金髪に丁寧にブラシを通しながら

「黒おじさん達から連絡合った?」

「まだ無いから遊んでいいと思う♪」

そっかあ、魔界の仕事で忙しいって言ってたけど、あの2人何してるんだろうねえと呟くと、アリスちゃんはアリス知らないと笑う

「はい、リボンも結べたよ」

「ありがとー♪」

嬉しそうに笑ったアリスちゃんがチビ達と遊ぶのを見ていると、今度はチビノブがやって来て

【のぶ】

「はいはい、もうみんな髪梳いてやろうな。おいで」

【ノツブウト】

もうこのまま全員髪梳いてやれば良いんだろうと思い、普通に並んでいるノツブちゃんとその後のシズク。何でシズクまで並んでいるんだろと思いつながら、膝の間に座ったチビノブの髪をゆっくりと梳き始めるのだった……

美神さんと蛍ちゃんに横島さんと呼んで来てと頼まれて13時15分に呼びに行ったんですけど……うりぼーちゃんにもたれて、アリスちゃんやシズクちゃん達と気持ち良さそうに昼寝をしていて、起こ

すのが可哀想に思ってしまったのと、無防備に昼寝をしている姿が可愛くて暫くその寝顔を見ていた

【横島さん、そろそろ起きましようよー?】

ふと時計を見て13時50分、そろそろ起こさないと14時30分までに事務所にいけないのでほっぺたを突いて起こす

「んああ?あれ、寝ちゃったかあ」

【おはようございます、もうそろそろ14時になっちゃうんで早く行かないと間に合いませんよ?】

私の言葉に不味いと言って飛び起きた横島さんはアリスちゃん達に毛布を掛けて

「行こう!遅れたら怒られる」

【あんまり遅れそうだったら、私が先に行きますよ】

頼むと言う横島さんと一緒に美神さんの事務所に慌てて向かい。

到着したのは14時45分

「怒ってるかなあ」

【アリスちゃん達を寝かしつけてたつて言えば大丈夫じゃないですかね?】

今回は道具の除霊なのでチビちゃん達は駄目って話だったので、ぐずるので寝かしつけてきたつて言えば許してくれますよと言いながら事務所の中に入る

「すいません!遅れ……ました?あれ?美神さん?蛍?」

居るはずの2人の姿が無く、そして変わりに置いてあったのはクレインゲーム……それを見て、呪われたクレインゲームの事を思い出した

「クレインゲーム?何でこんな所に」

横島さんがクレインゲームに近づいて、その中を覗き込むとギギつて言う効果音が聞こえそうな感じで振り返り

「物凄く見覚えのある人形がたくさん入ってるんだけど……」

横島さんに言われてクレインゲームの中を覗き込む

【……私もすつごく見覚えがあります】

美神さんに蛍ちゃんは勿論、唐巢神父にエミさんにピートさんに夕

イガーさん

【……この黒いドレスと半笑いの人形って】

「神宮寺さんと枢ちゃんかな？……心眼これってどう？」

【呪われてるな。ゲームに負けて取り込まれたのだろう】

……事務所の中に物凄くいやな沈黙が満ちる。横島さんは冷や汗を流しながら財布を取り出して

「……1プレイ100円と6プレイ500円。どっちが良いと思う？」

【500円にしましょう】

【そうだな。500円だ】

私と心眼さんの言葉を聞いて、横島さんがコイン投入口に500円を投入する

「……エミさんか、神宮寺さんが取れそうだな」

正面からと側面から人形を覗き込んでボタンを押す……んですけど

「ああつ！落ちたあ」

エミさんの人形を持ち上げたアームだが、人形の数が多く、人形同士が引つ掛かりアームから落ちる。

「……500円でよかった……」

横島さんは服の袖で汗を拭い、今度は神宮寺さんの人形に狙いを定めたみたいですよ

【エミさんは？】

「人形が落ちて場所が変わったから直ぐは無理。人形が動いて、神宮寺さんの人形の位置が変わったから確実に取れる。よし……行けッ！」

横島さんの操作でクレーンゲームのアームが動き、神宮寺さんの人形の上に移動し、その胴体にしつかりとアームを食い込ませる。2人でクレーンのアームを真剣に見つめ、商品取り出し口に神宮寺さんの人形が落ちる

「やったー！」

【やりましたね！】

神宮寺さんの人形が落ちた瞬間。強い霊力がクレーンゲームから  
発せられ

「助かりましたわ。横島」

「神宮寺さんー！じゃあ、やっぱりこれって……」

人形から人間に戻った神宮寺さんは不覚を取りましたと言っ  
てから、このクレーンゲームの事を教えてくれました

「数年前に倒産したゲームセンターに設置されていた機械です。その  
店の店主は倒産のショックで自殺し、この機械に取り憑いているん  
です。私と柩は面倒だから壊そうとして、ルール違反と言う事で取り込  
まれてしまったんです」

……面倒だから壊そうとする。それはそれで問題があると思うん  
ですけど、呪われた機械のルールに正直に付き合う必要は無いと考  
えているのならそれは当然の行動だろう

「へいへい！おいらはクレーンゲームさ。人質を助けたかったらちや  
んとクレーンゲームにコインを入れて、正々堂々取り返しなよ！言っ  
とくけど、今度壊そうとしたら中の人間の魂がどうなっても知らない  
ぜ！」

クレーンゲームの上のほうの人の顔が馬鹿にするように笑う、神宮  
寺さんは大きく舌打ちして横島さんの方を向いて

「横島。クレーンゲームは得意ですか？」

「……そ、そこそこです！」

「よし、なら人質を全部取り返してやりましょう。正し、このクレーン  
の中のは全部本物ですわ」

本物？横島さんと一緒にクレーンゲームの中を覗き込む、その中に  
は妖怪や悪魔の人形も入っている

「……出したら暴れますよね？多分」

「それ以外を取れば良いんだろう？」

心眼さんの言葉に横島さんはそうじゃないんだと言って、クレーン  
ゲームの側面に回りこんで中の人形の位置などの観察を始める

「人形同士が重なり合ってるし、紐が引っ掛かっている部分もある。神  
宮寺さん、人質だけ取るのは無理です……その」

言いにくそうにしている横島さんの言葉を遮り、神宮寺さんが強い口調で告げる

「問題ありませんわ。妖怪とかを倒すのは私がやります、さっさと次の人形を取りなさい」

不覚を取ったと言う事で不機嫌そうな神宮寺さんに怯えながら、横島さんはクレーンゲームの正面に立つ

「あの取りやすそうな位置にあるピエトロか、枢は取れませんの?」

「無理っす。あの怪物のぬいぐるみが引っ掛かってるんで……失敗するかもしれないですけど、この位置だと取れるのは唐巢神父になりますね」

「唐巢ですか……ちなみに横島、硬貨は後何枚ありますか?」

神宮寺さんの問いかけに横島さんは財布を取り出して

「100円玉が2枚と500円が1枚です、換金してきましょうか?」

「いえ、このクレーンゲームは勝手に動きますわ。離ればどこに行くのか判りません」

現に日本のゲームセンターのあちこちに現れて、人を飲み込んで消えていくつので危険妖怪として登録されていますわと教えてくれた

【神宮寺さんは硬貨は?】

「カードとお札しかありませんわ、硬貨なんて持ち歩きませんもの」

さっすきの沈黙とは違う沈黙が広がる。私はクレーンゲームの中を覗き込んで

【西条さんとか持ってそうじゃないですか?】

「最悪換金にも行つて貰えるしな、よし、神宮寺さん、妖怪2個取ります」

横島さんの言葉に神宮寺さんが頷いた所で、横島さんがクレーンゲームの操作を始める

【ギシャ……「死ね」】

鳴き声を最後まで上げる事無く消滅した妖怪。その絶対零度の声も合わさり、その怒り具合が判り。私も横島さんも若干震えながら「お、おキヌちゃん。俺が妖怪とか引き抜いたら横の人形とかがどう

動くか見ててくれる？」

【は、はい！判りました！】

少しでも多くの味方を増やしたいと思い。私と横島さんは必死で呪われたクレインゲームと対峙するのだった……

〜6時間後〜

「ひい……ひい……し、しんどい！」

6時間横島さんが頑張ってくれたおかげで、人質はほぼ全員解放され、残るは美神さんと蛍ちゃんの2人になったんですが

「ひひひ、肩でも揉んであげようか？ボクは何にも出来ないからね」

「い、いや、良いよ……」

戦闘に向いていないという理由で枢ちゃんとは私達と一緒にクレインゲームの攻略に回っているんですが、余りにくっついていて少しムカッとします

「すまないね横島君。退院して直ぐで遅れを取るなんて」

「いや、大丈夫つすよ、と言うか西条さんはあんまり無理しない方が良いんじゃないですかね？」

神宮寺さん、ピートさん、唐巢神父にエミさん、タイガーさん、そして西条さん。戦力も整ってきているが全員疲労の色が濃い

「A級までいるなんて……どんなにこの世を怨んでいるんだい」

「ほ、ほんとなわけ……これだけ面子が揃ってなかったら全滅してるワケ」

クレインゲームの中の妖怪は後半になればなるほど強くなり、全員疲労の色が濃い

「それで横島、美神と蛍の人形は取れそうですの？」

「……どっちもアームの死角なんですよ」

「……ええええー!!!」

横島さんが青い顔で振り返り事情を説明してくれた、クレインゲームには死角がありどうしても取れない位置があると

「じゃ、じゃあ！ワッシが持ち上げて人形を動かせば！」

「いや、駄目だ！隅に引っ掛かっているから絶対動かない」

どうする、どうすると横島さんが繰り返し呟いていると、枢ちゃん

が立ち上がり

「いひひ、あれ、見てっらん」

「え？あー」

柩ちゃんに言われて中を覗き込むと、美神さんの人形の頭の紐が動いている。それにそれだけではなく、蛍ちゃんの人形の紐も動いて、美神さんの人形の足に巻きついていて

「靈力を振り絞っているんだ、これを逃せばチャンスは無い！横島君、急ぐんだ！」

「は、はい！」

唐巢神父と西条さんの言葉に頷き、クレインゲームを操作し、アームが美神さんの人形の紐に通る。そして美神さんと蛍ちゃんの人形が浮き上がる

「落ちるな、落ちるな……」

横島さんの祈りの声と共に人形がゆっくりと動いていき、商品取り出し口の中に2つとも落ちる。その瞬間全員の歓声が爆発し、2人の人形が光り元の姿へ戻っていく

「馬鹿！なにやってるの！クレインゲーム本体を取り逃がしてどうするの！」

！  
元に戻った美神さんの怒声に振り返ると、クレインゲーム機が無い

(しまった)

前は人形が引っ掛かって取り出して貰ったから、2個とも落ちた事に喜んでしまった

「あーそれ大丈夫だよ。くひひ、ポチツとな」

外に出ようとしたりするとき柩ちゃんが何かを取り出し、ボタンを押す。その瞬間爆発音が響いてくる

【柩。お前何をした？】

心眼さんが引き攣った声で尋ねると柩ちゃんはいひひいつもの不気味な笑い声

「爆弾をちよろつとね？逃げるの知ってたから、くひひひっ♪」

怖ッ！やっぱりの子は敵に回すといけないタイプだと今確信し

た

「……そう、それなら良いわ、皆今日は本当お疲れ様、特に横島君がいてくれて良かったわ」

「い、いやあ……そんな事は無いですよ？」

横島さんが気恥ずかしそうに笑うが、ここにいた全員が知っている。横島さんがいなければ全員あのクレーンゲームに囚われたままだと

「時間も時間だし、もうこのまま夕食にいきませんか？全員むしろくしゃしてますし」

神宮寺さんの提案に西条さんがそれは良いと笑い

「じゃあオカルトGメンの経費でだそう、正直今回はもう駄目かと僕も思ったしね」

西条さんの言葉に美神さんが頷き、皆で夕食に行くことになったのですが、私が考えているのは別の事だった。このクレーンゲームの事件の近くで死津喪比女が蘇る。そしてそれは私にとっての試練の時間が近づいて来ていると言う証だった……

一方その頃、横島が通う高校では……ドクターカオスとマリアが愛子に会いに来ていた

「えつとその、ドクターカオス。私はその……」

「学校から出れるか……じゃろ？うーむ。直ぐには無理じゃな」

ドクターカオスの言葉に明らかに気落ちする様子の愛子

「依代が必要なんじゃ、しかも出来るだけ成長した大木、それがあればお前を縛っている机から脱する事が出来る。そしてその時期はそう遠くは無い」

「え？」

ドクターカオスの言葉に顔を上げた愛子。そしてマリアは愛子を見て笑いながら

「大きな地震を覚えていますか？東京が壊滅寸前になったあの事件を」

「あ……はい！覚えています」



「あんまり良いことでは無いが、ワシも対策をしている。その地霊を倒し、神木の枝を入手すれば全ては丸く収まる」

これは逆行した記憶を持つ3人だから話せる話題。おキヌにとって試練の時が近づく時、それは愛子にとって新生の時が近づいていると言う事を示していた……

リポート20 狼の居る日常 その5へ続く

## その5

レポート20 狼の居る日常 その5

美神さんからの申請書類、それに了承の判子を押ししてから数日後

……

「はい、はい。お手数かけました」

『いえいえ、構いませんよ。神代会長の勇猛さは私共の所まで来ておりますから』

「まだまだ小娘ですよ」

『六道婦人が選んだお方です。きっとこれから伸びるでしょう、これからも良いお付き合いを期待しています。ではマーロウをよろしく願いますね』

その言葉を最後に電話が切られる。今の世界で最高と言われるGS犬「マーロウ」既にかかなりの老犬だが。その能力は若いGS犬を遥かにしのぐ。若い時も優秀だったらしいが、老いてなおその能力はまだ進化しているとなればどれだけ規格外か良く判る

「シロちゃんとタマモちゃんをどうするつもりかしらねえ」

横島君の所に転がり込むことになった人狼のシロちゃんに、既に人化を完全に会得し、更に9本全ての尻尾を回復させたタマモちゃん。その2人を戦力として鍛える為にマーロウの派遣を私に頼んできたのは判る。今の所仕事も無いからとすぐマーロウが派遣されたのは嬉しいけど、マーロウを見て2人がどんな反応をするかが少し心配よね

「でもまあ、そればかりじゃないし」

今入院している人狼の長からの頼み。人狼族の里を開放するので、その代わりに若い優秀な人狼にGS免許を配布してほしいという物。人狼の能力は確かに高く、その感覚も優秀だ

「だけどなあ。表立って受け入れるとなると」

大分馬鹿な連中は切り捨ててきたが、そう簡単に受け入れるとなるとまたこれは別問題になる。人狼は海外ではワーウルフ、つまり吸血

鬼のシモベという立ち位置だ。そうなるとバチカンが騒ぎ出す可能性もあるし、トチ狂った自称正義の吸血鬼ハンターが日本に来日する建前になってしまおう、戦力としては欲しいが、まだ揉め事になるのは避けたい

「やっぱ冥華さんに相談しよう」

どう考えてもこの件は私だけでは決めれない、冥華さんをお願いして協力してくれる人を集めて相談するべきだろう、まだ入院していると聞いているので、その間に話がある程度固まれば良いんだけど……そんなことを考えながら、先ほど部下が持ってきた手紙の確認をしていると、1つだけやけに雰囲気が違う封筒が出て来た。紫色の刻印が刻まれた物々しい雰囲気郵便箋

「つとついにあつちも動いたわね」

横島君を襲撃した謎の人形使い。それが所属しているかもしれない陰陽寮……ううん、もつと言えば躑躅院からの会談の了承の手紙だった

「こつちを優先しないといけないわね」

関東のGS協会と関西の陰陽寮。その関係は決して良いものではない、だからこそ名目は会談としたが、これはお互いの腹の探りあいであり、そして高度な政治的やり取りでもある

「あー胃が痛くなってきた……」

うら若い乙女だと言うのに、どうして胃薬が手放せないのかしら……私は深く溜息を吐きながら、冥華さんに連絡を取るため受話器に手を伸ばすのだった……

人狼の長老さんとクロさんにシロを預かって欲しいと言われ、教授が使っていた部屋をシロとタマモの部屋へと改装することになった、まあ男が俺1人なので正直肩身が狭いなあと思わない事も無いが、毎日がにぎやかで楽しいでこれはこれで良いかと思う事にした。今もそうだ

「散歩ー♪散歩ー♪散歩でござるー♪」

「みっみーむ♪」

「ぶぎゅびつぐつ♪」

「お散歩ー♪」

早朝の散歩と夕方の散歩にシロが混ざり、そして念の為の護衛として付き添ってくれているワルキューレさん。何時も以上ににぎやかで楽しい散歩となっている

「せんせー！拙者と競走するでござる！拙者が勝ったら、商店街の揚げたてコロツケを買って欲しいでござるー！」

「競走は良いけど、買い食いするとシズクに怒られるぞ？」

俺の言葉にシロがびくつと肩を竦める。我が家の食事情と財布を管理しているシズクを怒らせるのは生活する上で死活問題になってくる。現にタマモと喧嘩しすぎて2人とも髪を蛇にしたシズクに超怒られていた。それを思い出したのか、シロの顔は青白い

「むつむー、怒ると思うでござるか？」

「めっちゃ怒ると思うけど？今日はトンカツにするって言ってたし」

肉……肉食べたいでござると腕を組んで唸っているシロはむむうつと唸った後

「では競走だけでも」

「公園に着いたらな」

歩道で競争していたら行人に迷惑になるから公園についてからと言うと、ワルキューレさんが小さく吹き出した

「どうしました？」

「いや、なんと言うか、おまえが保護者に見えて仕方なくてな。いや、歳を取って見えるという訳じゃないぞ？雰囲気かな」

チビとかと暮らしてるから面倒見が良くなったのかな？それに毎日が明るいいし、幽霊とは言え女の子も家にいるのでエロイ本とかも見なくなっただし……何より自分でも思うくらい落ち着いてきた様な気がしなくも無い。思わず考え込んでいると

「せんせー！早く競走するでござるよー！」

「びぐー♪」

「みみーむ♪」

「早くー♪」

シロ達に呼ばれ顔を上げるとシロ達はもうずいぶん先を歩いていて、公園のすぐ近くまで行っていた。

「はいはい、今行くよ」

競争と言っているので軽くウォーミングアップと言うことで少し駆け足で、シロ達の所まで走るのだった……なお結果は

「ぴっぐー♪」

「ま、負けたでござる……」

少し巨大化して物凄い勢いで走り出したうりぼーの圧勝だった。さすが猪、1度勢いが付けば加速力は流石に凄まじい

「負けちゃった」

「アリスちゃんドレスだしな、走りにくくない？」

ちよっぴりと言って舌を出して笑うアリスちゃん。シロはともかく、俺達は遊びのつもりだったので良い運動になったと言う事で良いだろう。そんなことを考えているとポケットから軽快なメロディが響く

「ん？電話だ」

ポケットに手を入れる前に、ポケットから変形したトカゲデンワが飛び出してくる

『もしもし横島君？悪いんだけど、シロとタマモを連れて事務所に来てくれる？ちよっつと急な除霊の話があつて手伝って欲しいのよ』

「それは良いんですけど、こら！チビ！止めろ！すいません、ちよっつと待ってください」

「みむ、みむむむ」

【キューー！キューー?!?】

チビがトカゲデンワに手を伸ばし、トカゲデンワが逃げ回る。生きて動く機械に興味津々なのは良いが、下手をすれば解体してしまうのでチビを捕まえて

「アリスちゃん。ちよっつと捕まえてて」

「はーい♪」

「みむう……」

アリスちゃんに捕まってもまだ視線でトカゲデンワを追いかけて

いるチビ。トカゲデンワが隠れて姿を見せないのがチビが怖いと言  
うのが本当の所だと思う

「えーっと何時までに行けば良いですか？」

時計を確認すると時刻は16時15分。家から美神さんの事務所  
までは約50分ほどなので集合時間を確認する

『18時までにお願ひ。一応シズクにはもう連絡してあるから、丁度  
カツを揚げる所だからカツサンドにするって伝えてくれって言われ  
てるわ』

カツを食べると意気込んでいたシロの尻尾が垂れていたが、美神さ  
んのその言葉でまたパタパタと振られ始める

『それとシロとタマモの2人にも関係あるから2人を絶対連れて来て  
ね。じゃ、待ってるから』

シロとタマモを？なんでだろとは思ったが判りましたと返事を返  
す。トカゲデンワは通話が終わるとまたポケットに入って動かなく  
なる、どれだけチビを怖がっているのだろうか……

「ワルキューレさん、すいません、急いで戻る必要が」

「話は聞いていたから大丈夫だ。急いで戻ろうか」

本当はもう少し遊ぶ予定だったが、仕方ない。アリスちゃん達を連  
れて俺は1度自宅に戻り、タマモとシズクを迎えに行く事にするの  
だった……

横島のバイクの最終調整をしていると美神さんから呼び出しが  
あった。後はフレームを組み付けて、塗装するだけなんだけど

「ごめんお父さん、最後の仕上げお願いするわ」

「判ったよ。気をつけて行っておいで」

同じくツナギ姿のお父さんにそう声を掛け、油やオイルで汚れてい  
る身体をシャワーで綺麗にしてから美神さんの事務所へと向かった  
……なお残されたアシユタロスはと言うと

「……もう少し馬力を上げてつと、うーん。蓮華、やっぱり蛍がオ  
ミットした機能を付けたいと思うんだけどどう思う？」

「あんまり改造しすぎて姉さんに怒られないようにしてよ？」

判ってる判ってる楽しげに返事を返し、蓮華に呆れられていた。

そして蛍がオミットしようとしていた機能とは

「やっぱり眼魂でパワーアップする機能は欲しいよな」

ゴーストドライバーの機能を限定的に再現する機能だった……鼻歌交じりで1度組み上げられたマシンを解体する姿を見た蓮華は額に大きな汗を流し

(私、しーらないっつと)

これは絶対姉さん怒ると確信し、逃げるように地下の整備室を後にし

「あげはー、散歩行くかい？」

「いくでちゅー♪」

あげはを連れて散歩と言う名の逃走を図るのだった……

「うわ、めっちゃくちや良い肉でござるなあ。美神殿の夜食でござるか？」

「ああ、これは違うんですよ。お客さんにです」

「お客って普通はお菓子とかじゃないの？相手が犬じゃあるまいし」

「いえ、お客様って犬なんですよ」

「……はい？」

階段の上から横島達の声が聞こえる。もう先に到着していたのかと思えば階段を登ると、横島とシロとタマモ、それにシズクにそしてノツブにチビ達といういつもの面子なのだが、今日は横島がチビノブを肩車していた

「あ、蛍。珍しいな、俺より遅いなんて」

「ちよつとね、家の用事。それでどうしたの？」

階段の下で話はある程度聞いていたけど、どうしたの？と尋ねると、応接間の扉が開いて

「こつちまで聞こえてるわよ。そんなところで話をするより何かに来なさい」

美神さんが苦笑しながら応接間に来なさいと言うので、判りましたと全員で返事を返し、応接間に入る。そこには、明らかに老犬と思え

る一匹の犬の姿があった

「おキヌちゃん。そのステーキはマーロウに、態々飛行機で来てくれたからね。まずは食事にしてあげて」

「は、はい。判りました、マーロウさん？どうぞー」

おキヌさんがステーキを置くのと伏せていたマーロウはのそりと起き上がり、とても老犬とは思えない勢いでステーキに齧りつく

「えーっと美神さん。犬がお客様ってどう言う事なんですか？」

「マーロウって言うのよ、横島君。今世界で一番優秀って言われてるGS犬よ」

GS犬？と言う横島達の困惑した声が口から出る。私も正直困惑した声をしていたと思う

「別に驚くことは無いわ。動物は元々人間よりも霊能力が高いし、犬は特に訓練すれば人間とも協力出来る、理想的な動物なのよ」

美神さんの言葉に横島がへーっと感心したように呟き、うりぼーの頭を撫でながら

「じゃあうりぼーもGS猪になれますか？」

「……それはちよっと判らないわね」

弾ける笑顔の横島に目に見えて美神さんの顔が曇る。相変わらず発想が斜め上を突き抜けている……GS猪ってなんなのよ……

「それで、私とシロもって聞いてたけど、何？私達をGS犬にでもするつもり？」

普段は大人しく、そして横島の家の手伝いもしているが、基本的にプライドが高いタマモがめちやくちや不機嫌そうに口を開く、それに対してシロは

「拙者シロでござる。よろしくでござるよ、マーロウ殿」

「……わふ」

友好的でマーロウに挨拶をしていた。その姿を見て、ふと思いだしたのだがシロじゃなくて、シロさんの時。つまり未来な訳だが、シロさんのGS犬としての師匠はマーロウで色々な事を教わったと言っていた気がする



「シロは性格的に向いてると思うけど、タマモは無理でしょ？ならマールロウの動きを見て、その所作とか盗むでしょ。あんたなら」

遠まわしに横島の利益になると判断すれば、言わなくても覚えるでしょ？と言われタマモが顔を逸らす。シズクにしてもそうだけど、タマモも基本的に横島本位すぎるのよね

「……それで夜の除霊にしても早い、しかし昼の除霊にしては遅い。こんな時間に呼んだ理由は何だ？」

お弁当であろうバスケットを手にしているシズクが美神さんにそう問いかける。18時なんて言う中途半端な時間、そんな時間に除霊って今まで無かったわね

「今説明するわ。今都内で騒ぎになってるんだけど、レストランとか食堂が荒らされるって聞いたこと無いかしら？」

あーなんかニュースとかTVで見たような……

「建前は連続食い逃げってなってるけど、人の口に戸は建てられないとはよく言ったものよ。噂が出来てしまったの、幽霊がレストランを襲うってね。これは正直良くない傾向なの」

「噂でしょ？それがなんで良くないんですか？」

横島が不思議そうな顔をするが、私は美神さんの言わんとしている事が判った

「妖怪や鬼って言うのは人間の畏れを糧にしているのよ、そしてたいした噂ではないとしてもそれだけ人に知られれば、レストランの経営者が自分の店が襲われて、客足が遠のくと恐れれば、それはもう畏怖となるの。そうなれば、この事件を起こしている相手は強い力を得ていくわ、それこそ自分の霊格を上げるほどにね。だからその前に成仏させるのよ」

都市伝説や古い逸話のある妖怪と言うのはそれだけ危険と言う事よと言った美神さんは真剣な表情で

「多分今回の敵は死霊使い（ネクロマンサー）よ、動物霊を駆使して、祓っても祓っても別の幽霊がレストランを襲うのよ」

「……あれ？それならアリスちゃんも連れてきたら良いんじゃないですか？強い死霊使いなら、弱い死霊使いの僕を奪えるんだよって物凄

「い俺に自慢してくれましたよ?」

……横島の能天気な言葉に事務所の中は静まり返り、少しの静寂の後

「……アリスちゃんって助っ人として呼んで大丈夫かしら?」

「ど、どうでしょう? ワルキューレさんとか、ジークさんに話を聞いた方が良いかも」

1度専門家の話を聞きたいと言う事になり、横島の家でアリスちゃんの護衛をしているワルキューレさんに電話をする事になるのだ……

アリスちゃんが死霊使いと言う事を私は完全に忘れていた。と言うか、それ所か彼女がゾンビと言う事も実際忘れかけていたと思う。横島君をお兄ちゃんと慕い、天真爛漫な少女と死霊使いとゾンビと言う事とはとてもではないが繋がらないからだ

「どう? アリスちゃん。何か感じる?」

「ん、んー……もうちよい先かな?」

横島君と手を繋いで何かを探している様子のアリスちゃん。私は足元にいるマーロウに

「態々来てもらったのに役割を取ったみたいでごめんね?」

「……ワン」

少し間があったがマーロウは返事をしてくれた。だがそれは怒っているわけでもなく、かといって呆れているわけでもない……今の感じは

「気を緩めるな、だそうでござるよ」

「翻訳ありがと」

シロがマーロウの言葉を翻訳してくれた。やっぱり警告の声だったみたいね

【美神さん、来ます!】

「来るよ!」

上空で警戒してくれていたおキヌちゃんとアリスちゃんの警告の音が重なった瞬間。下水道の蓋が弾け飛んで大量の動物霊が飛び出

していく、だがその数が問題だった、1体や2体では無い、それ所か両手の指でも足りない程の圧倒的な数

「……ちっ、大分力を付けてるぞ」

シズクが舌打ちをし、忌々しそうに告げる。これだけの数を使役する、今飛んで行った数を見ればその力にはおおよその予想がつく

「美神さん。これは大分不味いかもしれないですね」

「そうね、とりあえず追いかけるわよッ！」

バンに乗つてと声を掛け、全員が乗り込んだのを確認してからバンを走らせる

「ちよっと！そっちじゃないわよ！左！」

「ワンワンッ!!」

霊体の群れを追って直進しようとしたが、タマモとマーロウの怒声が重なった。思わずブレーキを踏む

「あれはフェイクよ、良く見て」

タマモに言われて動物霊の動きを見ると、不規則に飛んでいる物と、ある程度規則に沿って動いている2種類が見える

「ワン」

「どーも、褒めてもらえて嬉しいわ」

どうもマーロウもタマモにやるじゃないかと言ったようで、褒めてくれてありがとうとあんまり嬉しくは無さそうだが、一応礼を口にしてている。私はマーロウとタマモの言った左の方へハンドルを切る。暫く走っていると2人の言っている意味が良く判った

「これ、あちこちから……」

「すげえ数だ」

「みむう……」

「ぶぎゅ」

「ノーブー」

【いや、これちよっと洒落にならんぞ】

蛍ちゃんと横島君の驚いている声とチビ達の不安そうな鳴き声が聞こえる。正直私も驚いている、どこからこれだけの数かと思うレベルで動物霊が集まって来ている

「……嫌な流れだな。これは……」

「最後まで付き合ってくれるかしら？ワルキューレ」

用が済んだらアリスちゃんを送って帰ると言っていたワルキューレにそう問いかける

「乗りかかった舟だ、最後まで付き合うさ。だがこれは並大抵の事じゃないぞ」

「うん、それは私も感じてる」

最初は動物霊ばかりだったのだが、途中から軍服を着た人間霊も混じって来ている。東京にはかつて多くの日本軍基地があった、戦争中

で死んだ兵士もいれば、戦後に戦犯として処刑された者もいただろう。それらも使役しているとすると只の死霊使いでは無いだろう（でもこれで謎が解けたわね）

どうして食料品ばかりを奪うのか、その理由も判ってきた。だがそれはかなり不味いことになっていると言う証でもあり、思わず顔を歪める。そして動物霊達はマンホールの中へと飛び込んで消えて行った……

「最悪、最悪すぎるわよ」

「……ですよね。私もそう思います」

とは言え、今更助つ人を頼んでも間に合わないだろうし、これ以上力を付けさせるのは危険だ。バンを停めて後部座席へと振り返る

「横島君、予定変更だわ。アリスちゃんと一緒についてきて」

「え、でもアリスちゃんは車に残すんじゃない……」

確かに最初はそのつもりだった。だけどそうは言ってられなくなった

「……霊力の吹き溜まりになっている、ここに残す方が危険だ」

「そうでござるなあ、拙者も感じるでござるよ」

まさかこれほどの霊力の吹き溜まりが都内にあるなんて思っても見なかったが、戦力的には十分に整っている。不意打ち、奇襲に備えれば十分対応出来るだろう。但し、まだ相手の正体も判っていないのでそうと決め付けるわけには行かないけど……

「とりあえず、降りて調査するわよ。最悪の場合一時撤退することも考慮するから」

判りましたと返事を返す横島君と蛭ちゃん。私もバンの運転席から降りて、後ろに積んでいた霊具などの確認をしながら、もう1度周囲の霊視を行う。周囲の建物全体が放つ霊気とマンホール周辺の霊気が全く異なるのを感じて、これはもしかするとかな厄介な案件かもしれないと改めて感じた

(まさか都内でこんな事件に当たるなんてね)

しばらく遠出の依頼を受けないで、都内の簡単な地鎮祭や、除霊を行おうと思っていたのに……どうも私達、ううん、神魔が思っている以上に今の世界はどこかおかしくなってきたているのかもしれない……私はそんなことを考えながら、蛭ちゃんと横島君に手渡す精霊石のペンダントと指輪の確認をするのだった……

リポート20 狼の居る日常 その6へ続く

## その6

レポート20 狼の居る日常 その6

令子嬢ちゃんに何年かぶりに助っ人に呼ばれたが、こりや今回の山はそう簡単なものじゃないみたいだな。狼と狐のお嬢さんに指導をしてくれと言われていたが、そんな余裕は無さそうだぜ……

【横島さん。アリスちゃんをお願いしますね】

「アリスちゃん、おいで」

「はーいっー」

幽霊の巫女さんが青いドレスのお嬢さんがバンダナの小僧に渡す。これで全員降りて来たわけだが……正直全員で降りてきたのは失敗だったかもしれないな

「食い散らかされた食べ物とか一杯落ちてますね

「……勿体無いことを、罰が当たるぞ」

【食べ物を粗末にするなんて許せませんね】

周囲の捜査をするのは基本だが、もう少し気を張り詰めてやるべきだ。特にあのバンダナの小僧、潜在能力は桁違いそうだが、それを扱いきれてないのが良く判る

「蛍ちゃんは見鬼君を、横島君は結界札を持って待機。シズクとノツブちゃんは悪いけど先行「グルルルッ！」マールウどうしたの？」

令子嬢ちゃんの指示は的確だが、今回は愚策、先行させる予定だった2人を動かしてはいけないと、唸り声で警告する

「何これ!? めちゃくちゃな反応が!」

ちいつー! 遅かったか!!! 周囲の気温が下がったように感じるほどに爆発的に霊が集まってくる気配がする

【来るぞ! 上だ!】

バンダナの小僧の額当てから目が浮かび上がり、警告を発すると同時に恐ろしい数の動物霊が上下左右から湧き出るように姿を見せる

「この数は異常だぞ!」

【マジかよ?! ちょっとこれ洒落にならないっつて!】

その圧倒的な数に一気に騒がしくなる。周囲の霊気の匂いを辿るが、ここまで雑霊が多いとすぐに発見出来ない

「だーっ！なんだよ！この量は！」

バンダナの小僧は霊波刀で動物霊を切り裂きながら、青いドレスの少女を必死に守っている。その反射神経と霊力の集束技術は確かに人間と思えば異常と言える。令子嬢ちゃんが弟子として連れてくる理由も判った

「シロ！あんたは突出しない！横島の後！分断されるわよ！固まりなさい！」

「ッ！判ったでござる！」

狐のお嬢さんは気の強い外見に反して非常に冷静だ。この乱戦になり、好戦的な性格なのであろう狼のお嬢さんが前に出かけるのを一喝して止める

「……行け」

「シッ！」

水神と神魔と思われる女は氷と銃で動物霊を祓っているが、倒した倍以上の悪霊が姿を見せる。やっぱり普通の除霊では無理だ、霊気を辿り、この霊を操っている何かの気配を探す

「オオンッ！」

そしてその気配を見つけ、雄叫びを上げながら前足を繰り出す。だが操っている何かは攻撃を簡単にかわし、令子嬢ちゃん達の前に姿を現した

「キギイツ！」

「「ね、ネズミ!?!」」

それはバンダナの小僧が連れてくるグレムリンよりも更に小さい、だがその目に狂気の光を宿す姿はその身体の大きさよりも、遥かに大きく威圧感に満ちているのだった……

私達の前に現れたネズミ。その後の攻撃は恐ろしいほどに素早かった、だが相手が悪かった

「シューッ！」

両手を突き出し、凄まじい靈氣を放つネズミだったが、それよりも早くワルキューレさんと、シズクの2人の防壁がその靈氣を弾き飛ばす

「チュウ……ッ！」

忌まわしげに鳴いて、動物靈を爆発させその靈氣に紛れて姿を消すネズミ。この暗い下水道であんな小さい相手を見逃すのは、次見つける事がどれだけ困難かと言う事を示していた。現に横島君と蛭ちゃんの後を追おうとしていたが、それを慌てて止める

「全員動かないで、固まって！」

このまま追いかけて行くにはリスクがありすぎる。1度状況を整理するべきだと判断して、全員に動くなど指示を出す

「気分が悪いとかは無いですか？あれだけの靈氣を受けると人間でも操られる可能性があるわ、どこがおかしいとおもうところは無い？」

横島君と蛭ちゃんに気分は大丈夫か？と問いかける。2人は1度頷いてから

「俺は全然大丈夫です」

「横島にきた靈波は私も防いだ、問題は無い」

心眼が憑いている横島君の靈的防御力は間違いなく最強クラスだ。そこにシズクとタマモの加護が加わっているから、呪いや靈波攻撃に關しては横島君は無敵に近い。だが蛭ちゃんの表情は芳しくなく

「精靈石が一発で砕けました」

「私も、1回は耐えたけど、多分次は無理」

「拙者もでござるよお……」

シロとタマモに念の為に預けていた精靈石のペンダントが軒並み砕け散っている。シロはそれとは別に純度の高い精靈石のペンダントをしているから人化を維持しているが、やはり状況は決して良くないだろう

「……あれは普通じゃないぞ。怨念や恨みが物凄い」

「ですね、私もゾクつとしましたよ」

「ワシもじゃなあ、ありや、体こそネズミじゃが、中身は別物じゃ」



私でも感じていたが、やっぱりシズクと元が霊体のおキヌちゃんとノツブちゃんはあのネズミの中にいる何かを感じ取ってるようだ

「グルルル、バウ!!」

「マーロウ殿が1度撤退も考慮しろって言ってるでござる」

……やっぱりか。マーロウは私にとっては世界最高のGS犬ではなく、まだ霊能者としてどんな道を進めば良いのか悩んでいた私に道を示してくれた相手でもある、その意見は聞きたい所だ。事実1度撤退と言おうとしたのだが、アリスちゃんとワルキューレの言葉でその言葉を飲み込んだ

「ここいっぱい人が死んでる……」

「……魔界正規軍が討伐した死霊使いと同じ霊波パターンが検知された。あのネズミに憑依しているぞ」

……人がいっぱい死んでいる……それと魔界で死んだ死霊使い。ここで撤退して、あのネズミが更に力を付ける可能性を考慮すると、撤退して装備を整えたとしても討伐しきれない可能性がある

「シズク、この下水道の中どうなってるかとかかって判ったりする？」

「……少し待て、今確認する」

シズクが目を閉じて、意識を集中する仕草を見せる、数分後目を開き

「……大分先で入り組んでいるが、コンクリートの壁の向こうに木で出来た通路がある」

「決まりね、最悪だわ」

第二次世界大戦の時に破棄され、忘れられた基地。どうもそれとこの下水道が繋がっていると見て間違いないだろう、となればネズミに憑依しているのは死んだ死霊使いに加え、戦死した軍人の魂と言った所だろう。横島君と蛭ちゃんが私を見る、ここで決断するべきなのだろう

「進むわ。マーロウ、それとシズク、お願い出来る？」

私達では感知できない、ならばマーロウとシズクに頼るしかない。それにこれ以上力を付けられるのも怖いが、ここが日本軍基地の跡地と繋がっていると考えると何かの武器を持ち出す可能性も高い。そ

の前に、ここで叩いておく必要がある

「ワン」

私が決めたなら逆らわないと言う感じのマーロウと仕方ないなど言う素振りのシズク

「横島君、蛍ちゃん。周囲を警戒して進むわよ。最悪でも日本軍基地の入り口だけでも見つけないと、撤退しても何の意味も無いからね」  
最低限そこまでやれば撤退も出来る。方位磁石は持っているし、このマンホールから入ったのも覚えている。後は基地の場所を特定して、古い時代の地図を見て基地の出入り口を知れば、こんな相手のホームを通る必要も無くなる。戦うことになる可能性も高いけど、このまま撤退して被害が大きくなる可能性を考えれば進むしかない。この暗く、隠れる所が多い場所でネズミなんていう小さい敵を相手にすると言うのは相手にとって有利すぎる

「タマモ、狐火で明るく出来る?」

「出来るけど、全員をフォローするとなるとそれを維持するので手一杯よ。動いたりなんてとてもじゃないけど出来ないわ、横島」

「あ、じゃあ、俺がおんぶしてタマモを運ぶからそれならどう?」

その横島君の提案が通り、タマモを横島君がおんぶし、タマモの狐火が私達の周辺を明るく照らす

「……ギリツ」

蛍ちゃんが音がするくらい歯を噛み締めてるけど、横島君にとってはタマモが人化していても、可愛い子狐という印象が抜けないのだから。だからタマモには極めて甘い

「はいはい!拙者もおんぶを!」

「シロ、炎出せる?」

「……無理でござる」

じゃあ今は駄目だと横島君に断言され、しよんぼりするシロ。横島君は空いている左手でアリスちゃんと手をつなぎ、右手でタマモを支える。

「とりあえず横島君は戦闘に参加出来そうに無いわね。ノツブちゃんとワルキューレ、よろしく」

移動とお守を担当する横島君は戦闘には参加できないので、ノツブちゃんとワルキューレに横島君の援護を頼み、シズク、マールウ、シロ、ワルキューレ、私、蛍ちゃん、横島君（タマモ、アリスちゃん&マスコット軍団）おキヌちゃん、ノツブちゃんと言う陣形で周囲を警戒しながら、ゆっくりと下水道の中を歩き出すのだった……

なお歩き始めて数分後

「あれ？うりぼーの上にタマモが乗れば、あいだだだだ!!」

「なんか言ったかしらー？」

「ひゃひゅもおおー」

横島君が余計な事を言ってタマモに頬を抓り上げられるという一幕があり、私と蛍ちゃんの集中しなさいと言う一喝が下水道に響いたのは言うまでも無い……

マールウ殿とシズクと一緒に前衛で周囲の警戒をしながら前に進む。

『なんだお前さん、案外やるじゃないか』

『どうもでござるーっとー』

マールウ殿のお褒めに言葉に返事を返し、振り返り様に霊波刀で下水から飛び出てきた下級霊を切り捨てる。

『お前さんらにGS犬としての指導をしてやれって言われてきたが、こりゃ出る幕が無いな』

歳を取ったかあと笑うマールウ殿だが、拙者にとってはマールウ殿からは何度も何度も指導を受けている。だから大事な事は全部覚えているのだ

「まだまだ小娘でござるよ、悪いところがあつたら教えて欲しいでござるなあ」

『じゃあまずーっ、周囲を警戒するときにはぺらぺら喋るんじゃねえ』

マールウ殿が飛び出し、コンクリートの隙間から顔を出した下級霊を噛み砕く

『軽いお世辞に大袈裟に喜んでるようじゃあ、まだまだだぜ』

その言葉にその通りでござるなあと呟く、少し褒めてまだまだと言うのはマールロウ殿の指導の時に何度も体験していた。それなのに喜んでしまうとは、まだまだだ

「みむうー」

「ぶぎーッー」

【のーぶッ!!】

せんせーの大事にしているチビ達。だが彼らも恐ろしいほどに強い、チビは電気ショック、うりぼーは牙の間からビーム、そしてチビノブは竹光で雑霊をずばずば切り裂いている

「あんまり前に入るなよー？危ないからなー」

せんせーの言葉に元気良く返事を返す、どうもせんせーに良い所を見せようと思つて頑張つているようだ、その姿に思わず微笑ましいと思いつながら鼻に意識を集中させる

(ん、んー……ちよつと違うでござる)

匂いは感じる、感じるのだが何かおかしい。拙者が感じると言う事はマールロウ殿も同じで1度立ち止まる

「どうした。何か問題か？」

手にしていた銃のカートリッジを交換しているワルキューレ殿がそう尋ねてくる。マールロウ殿は小さく唸り、拙者に喋るように促す

「気配が幾つも別れたでござる」

「二気配が別れた？」

ここまで追いかけてきたネズミの気配と霊気が一瞬にして4つに増えて、バラバラの方向に向かったのだと告げる

「マールロウが見失うわけ無いし……本当に分裂、いえ、そんな事はないし……もしかして追いかけた霊気が最初から違つたって可能性は無い？」

美神殿にそう言われると拙者はあんまり自信が無い。前よりも霊気が強すぎて、何度か方角を間違えかけたから

【話すのは良いが、出来るだけ早く方向性を決めてくれんかのー！】

「……数が多いからな」

こうして話をしている間もシズク達が無尽蔵に湧いて来る動物霊

と雑霊の対応をしてくれる

「ちつ、雑魚は雑魚だが、これだけ出てくると鬱陶しいな」

ワルキューレ殿が顔を歪め、向かってくる雑霊を打ち落としているが、その表情を見ればいらついているのは明らかで早く解決策を見つけないと大変な事になりそうな気がする。

「俺のダウジングでどうですか？」

「何を元にダウジングするの？そもそも動き回っている相手のダウジング出来るの？」

「うっ……それはちよつと、じゃあ心眼！」

【すまないが、近くにいるのならまだしも、これだけ霊気に満ちた所では私の霊視はそれほど遠くまでは見えないぞ】

自身の提案も駄目、頼みの綱の心眼も駄目

「……美神さん、これはもう限界だと思っんですけど」

「そうね、私も無理だと思っつわよ」

色々と話し合ったが、どうすれば良いのか皆目検討が付かず、やっぱり1度引き返すと言う流れになり掛けたとき

「お兄ちゃん。これはあれかもしれない……あんまり自信が無いんだけど、黒おじさんの得意な奴」

美神殿達が話し合っているとアリスちゃんがあんまり自信が無いと前置きしてから口を開いた。それは一定の間隔で死霊を召喚する術式と言うのがあると、自分はまだ使えないけど、黒おじさんと言う人物が得意としていると……

「うーん、ある程度の距離に近づけば雑霊を召喚するように調整して、それを別のネズミとかにくつつければ気配が分裂したように感じるわね」

「でもそうなると追いかけて行くのは難しいですよ。別れて調べるなんて論外ですし」

そんなことをしたら個々に撃破されるわよと美神さんが即答する。ここでまた先に進むか、戻るかと言う選択肢が拙者達に突きつけられたが、解決の糸口と言って良いのか、悩むがこの状況を打破するヒントはタマモが持っていた

「一々めんどくさいわね、こういうのはね……」

タマモがせんせーの背中の上から降りて、両手を広げる。その動作を見て、拙者を含め全員が強烈に嫌な予感を感じた

「ちよつとタマモ。あんた何をするつもり」

引き攣った顔で美神殿が止めに入ろうとしたが、それよりも早く雑霊にイライラしていた他の面子も動き出してしまった……

【おおーそうじゃな！ぐだぐだ考えても何も変わらんわー！】

「……そうだな。めんどくさいし、臭いし、気持ち悪いし、さつさと片付けるか」

「……ああ、その意見には私も同意しようか」

「みむー！みむううー!!!」

「ぴぐうー！ぴぐぐー!!!」

【のーぶうー！ののーぶ!!!】

タマモの反応を見て、せんせーが大事に育てている動物達が騒ぎ出し、少しでも先行し偵察していたおキヌ殿が戻ってきて

【なんか奥から大きいのが……つて何をするつもりですかあ!?】

「おキヌちゃん！こつち！こつち!!頭抱えて伏せろ！」

「最悪すぎるわね！本当！なんでもっと冷静な面子がないのよ!!」

「精霊石だけじゃ足りないですよね!?結界札、結界札は何処!?」

「みみーむううー!!!」

「ぷぎやあああ!!!」

【ノブノブウウ!!!】

美神殿達が慌てて自分達の身を守る算段を付ける中。拙者はマローウ殿を抱え、せんせーの元に走り、おキヌ殿がせんせーの近くに来たのとほぼ同じタイミングで

「狐火ツ!!」

【ぶち抜けえッ!!!】

「……消えろ」

「吹き飛ば」

タマモの狐火、ノツブ殿の霊波砲、シズクの強力な水鉄砲、ワルキューレ殿の手榴弾が同時に暗闇に向かって放たれた……

「耳塞いで！頭を下に！」

美神殿の怒声の次の瞬間、凄まじい振動が下水中に響き渡り、凄まじいほどの靈波の奔流が下水道中を駆け巡った

「あ、あんたらねえ！何してくれてるの!?!もし天井壊したらどうするつもりなの!?!」

美神殿が怒り心頭と言う感じで怒鳴るが、今の惨劇を起こした全員はシレっとした顔をして

「良いじゃない、おかげで待ち伏せしてるの動いたみたいよ」

「……結果がよければ良い、それに天井が落ちても護れるしな」

【そう言う事じゃな】

全然反省して無いタマモ達に美神殿がまた怒鳴ろうとしたが、それはアリスちゃんの言葉で遮られた

「何、奥からなんか凄い幽霊の塊が……来てるよ?しかも凄い勢い」

アリスちゃんの言葉に頭に血が上っていた様子の美神殿も落ち着いたのか、アリスちゃんが指差した先を見て顔色を変える

「逃げるわよ！なんかやばいのが来る！」

通り過ぎた広い場所に戻るわよと言う言葉に頷き、足の遅いアリスちゃんをせんせーが抱き抱え走り、全員で狭い通路から広場へと走るのだが

【なんじゃ！物凄い重い音が響いてくるんじゃけど!?!】

「……でかいぞ、これは……」

ノツブ殿とシズクの言葉を聞かなくてもそれはわかる。下水が大きく波打ち、何かが近づいて来ているのが良く判ったから

「おキヌちゃん、奥で何を見たんだ!?!」

【おっきい金属の何かですう!】

「それってまさか日本軍の兵器とかじゃないわよね!?!」

全員で慌てて狭い通路を駆け抜け、広い場所に出てここで迎え撃つわよと美神さんが口にした次の瞬間

【ギーサーまーらー……!?!?!】

「……はあああああアツ!?!?!」

現れたのは鍔付いた金属の体を持ち、ドラム缶のような形状をした

両腕と、肩と背中、そして胴体に機銃らしき物があり、それを操作する役割があるのだろうか、軍服姿の幽霊が機械の歪な巨人に乗り込んでいた。怒鳴り声を上げたのもその軍人の幽霊だった

【お前らのせいで下半身が吹き飛んだではないか！だが上半身が残っていたら十分！貴様らを血祭りに上げてくれるわああ!!】

ネズミが饒舌な言葉を喋り、怒りの声を上げる。最終的には結果オーライだったが、半分吹き飛んでいるとは言え、機械の巨人相手なんて冗談じゃない

「ワルキューレ！あんた後で絶対ブリュンヒルデに言つてやるからねっ!!」

「それだけは止めてくれえッ!!」

【死ねええッ!!】

美神殿の怒声とワルキューレ殿の悲鳴、そして幽霊の怒声と訳の判らない中、歪な機械巨人との戦いが幕を開けるのだった……

【はーははははっ！俺は最強だアアア!!この力があれば、日本の勝利間違い無しだアア!!】

狂ったように笑う軍服の幽霊に舌打ちする。既にまともな思考を持ち合わせていない、恐らくまずネズミに死霊使いの魔族が取り憑いて、そしてその上で軍服の幽霊を使役しようとして逆に支配権を乗っ取られたと見て間違いないな

「……こんな汚い水……最悪だ」

シズクが下水で氷の壁を作り出し、放たれた機銃を防ぐ。状況は最悪と言える、相手の武器は実弾で、鉄の装甲……私が今手にしている銃を駄目元で撃つてみるがやはり装甲に阻まれる

「みーむーッ!!」

【効かんわあッ!!】

チビが高出力の電撃を打ち出す。今度は装甲ではなく雑霊を盾にして防ぐか

「これ不味いわね。逃げようにも追いかけてくるだろうし、外に出た



らもつと大変なことになるわ」

「あの馬鹿でかい砲塔が自由になりますもんね」

美神と螢が巨人の姿を見ながら、冷静に状況を分析する。下水道だからか、あちこちの壁に引つ掛かり、思うように動けない。それが今の所の幸いと言える点なのだが、問題は敵の防御をこちらが貫けないと言う所だ

「アオオオオオーンッ!!!」

タマモ、シロ、マールウの三重の雄叫びが一瞬、巨人の回りの雑霊を浄化するがすぐに雑霊が集まってくる

「ぜーぜー！駄目でござる！祓っても祓っても、すぐ集まるでござるよ!」

「ぎ、先にこっちの喉が潰れるわ……」

「グルウ」

狼の声は魔を払う効果があるが、それでも祓いきれないほどにこの下水道には雑霊が満ちている。それは倒しても倒しても切が無く、そしてこちらが徐々に疲弊していく最悪の流れとなっていた

「装甲の中にいる、幽霊を除霊すれば倒せるんだけど……」

「装甲の中に隠れるからボウガンとかは届かないし、精霊石も無理……なんとか打開策を考えないと」

人間世界の弱い霊とは言い切れない、相手は鉄としての特徴をフルに使い、攻防共に高い次元で成立させている。なんとかしてあの戦車の部分だけでも破壊しないと全滅は必須だ。最悪美神達だけでも撤退させて、力を解放して周囲に被害が出る可能性があるが、圧倒的な魔力で押し潰すか？今自分に出来る対処法を考えていると

「よし、ノツブちゃん頼む」

「よ、横島さん、本気ですか？」

「お、おう。でも大丈夫かの？」

横島が何かしようとしている声が聞こえて、全員で振り返ると、ノツブがその手にうりぼーを乗せていた

「ぴっぐうー!」

「うりぼーはやる気だ。だから俺はうりぼーを信じる」

【言っても無駄だ、やるだけやらせてみよう……】

「うりぼー！がんばれー！」

「ぴぎいっ!!!」

【ノーブ！ノーブブブー!!!】

横島達とチビノブ達がうりぼーを激励する。待て、あいつらは何をするつもりだ……強烈に嫌な予感がするのだが……

【もうワシどうなっても知らんからのツ!?!】

ノツブが大きく足を振り上げ、大きく踏み込みながらうりぼーを投げる。英霊の力で投擲されたので、そのスピードは凄まじい……

【「なんでうりぼーを投げたの!?!」】

何をどう考えたらうりぼーを投げると言う考えに到達するのか理解出来なかったが、投げられて数秒後

「ぶっぎいいいいいいッ!!!」

うりぼーは高速で回転しながら巨大化していく、その短い牙から霊力で出来た牙が伸び、その勢いはドリルと言っても十分通用するレベルだった

【な。なにいいいっ!?!】

「ぶぎやあああああッ!!!」

激突音ではなく、何かを抉る金属音が響き、鉄の巨人の胴体には大きな風穴が開いていて、うりぼーは着地する同時に振り返る。チビとチビノブもその動きに何をしたのか気付き、素早く飛び上がりうりぼーの上に移動しチビノブは竹光を構え、うりぼーの横に立つ

「ぴっぎゅうううッ!!!」

「みっぎやあああああ!!!」

【ノーブブブブーッ!!!】

【ば、馬鹿なああああああああ!?!】

牙の間から打ち出された極太の霊波砲と下水道を照らす凄まじい電撃、そして竹光から飛び出した霊波刃が胴体に飛び込み、その中にいる幽霊を纏めて消し飛ばした……爆風で煽られながら、あの小動物達の攻撃力の高さは何だと思わず思考を放棄したくなった……

「うりぼーすげえ！俺の家族は最強だあ!!」

「やったあ！うりぼー凄い！チビもすごい!!」

アリスと喜んでいる横島を見ながら、私は美神のほうに視線を向け「お前、自分の弟子に何を教えてるんだ？」

「あんなことを教えてるわけが無いでしょうがッ!」

「私、横島が何を考えてるのか判りません……」

「……心配するな、横島の考えている事を理解しようとするのがまず無理なんだよ」

横島に戦士としての素質があると思っていたが、どうもそれとはまた違うようだ。だがなににせよ、打開策が無い状況で打開策を見出した、その発想は賞賛に値するだろう。そのときふと足元まで吹き飛んできた鉄板が目についた

(日本陸軍霊能特殊装備開発室 局長……蘆屋)

製作者と作られた場所が書かれている鉄板を拾い上げる。これはもしかすると調べておく必要があるかもしれない、と私は直感でそう感じたのだ。

「とりあえず、下水道から出よう、ここは臭い」

流石にもう耐えれないので下水道から出ようと促し、私達は下水道を後にするのだった……だがこの時、気付くべきだったのだと思う、鉄くずの近くにしゃがみ込み、何かごそごそしている横島とアリスの姿に……気付いていれば、あんなことにはならないのだったが、気付いた時にはもう何もかも手遅れになった後なのだった……

リポート20 狼の居る日常 その7へ続く

## その7

レポート20 狼の居る日常 その7

今回の件でだけ改めて今の日本がどこかおかしくなっているのと感じた。撤退する前にワルキューレが調べてくれた結果だけでなく……東京の下水道と魔界が繋がっていたらしい……と言っても、本当に針の穴ほどの隙間らしいが、どうもそれを通って魔界で討伐された死霊使いの魂が日本に来ていたらしい

「本当に微々たる隙間で良かった。下手をすれば魔界の凶暴な魔獣が日本で大暴れしていたかも知れん」

「洒落にならないわよ、それ」

今はGSの数が減っている上に、高位のGSは依頼を複数掛け持ちし、全員が疲労している。そんな状況で魔界と繋がるなんて事にならなくて本当に良かった。それこそガープ達が攻め込んでくる可能性もあれば、ガープ達が来なくても全滅しかねない事態になっていたかもしれないのだから

「それで、美神、この蘆屋と言うのはどう思う」

「昔の陰陽師にそんなのがいたくらいしか知らないわね」

あの霊的兵器の作成者の蘆屋と言う人間、これも私の直感だが調べしておく必要があるかもしれない。安倍清明の伝説に出てくる陰陽師と同じ名前、横島君にもなにか関係してそうな気がするので、人間界と魔界の両方で調べる手筈を整えていると螢ちゃんが事務所に入ってくる

「美神さん。少し遅れましたか?」

「ううん、全然気にしないで良いわよ」

下水道なんていう不潔極まりない場所での除霊だったので、1度家に帰って風呂に入ってくるように伝えてあった。現に私もめっちゃくちゃ念入りに身体とか髪を洗ったし、集合時間に遅れても良いって伝えておいたので時間的には何の問題も無い

「しかし今回のような事件が多発すると不味いな」

「ワルキューレから見ても？」

私の問いかけに当たり前だと即答したワルキューレは腕組をしたまま

「周りの雑霊を縦横無尽に取り込んで霊力を維持し、兵器の残骸を武器とする。言ったら悪いが、厄介なんて物じゃない」

普通の除霊の準備をしていたらあんな相手どう考えても勝てる相手じゃない。それが判っているからこそワルキューレにそう問いかけたのだ

「まだ増えると思う？」

自然発生する霊力を伴う機械兵器。もしあんなのがこれからも生まれるとしたら、それはどう考えても対処出来なくなる。だってそうだろう？ 霊を除霊すれば倒せるが、その肝心の霊は機械の骨格の中。霊力が通らず、そして神通棍などの一般的な除霊具の攻撃力では鎧を砕けない。あれはGSの天敵とも言える

「……判らない。今回はあの魔族にとって都合の良い条件が揃っていたからな」

依り代になる霊力を持ったネズミと武器になる兵器の残骸。確かに相手にとって都合のいい条件がこれでもかと揃っていた、とりあえず霊力の吹き溜りになるような場所に旧日本軍の基地とかが無いことを祈るしかない

「でもうりぼー凄かったですね」

ノツブちゃんが投げて、高速で回転しながら巨大化し、霊力の牙で突撃。アレは正直横から見ても思ってたとんでもない破壊力だと思っただけ。そしてあれが無ければ正直全滅していた可能性もある。横島君の思い切りとうりぼーの意思に助けられたかもしれない

「横島の育てている使い魔はなんと言うか、普通じゃないな」

「ワン」

ワルキューレの言葉に伏せていたマール口も同意する。そして私も同意する、チビやうりぼーは強いなんてレベルじゃないのでマール口の呆れたような鳴き声にも納得だ。暫くチビやうりぼーについて話をしていると応接間の扉が開き

「遅れましたー」

「遅れましたー」

横島君の真似をしてアリスちゃんが入ってきたんだけど、その頭の上には赤いリボンをつけた

「チュウ♪」

下水道で魔族に憑依されていたネズミの姿があった

「なんで拾ったの?」

「アリスちゃんが拾ってたみたいで、大人しくなってますから大丈夫ですよ」

横島君の能天気な言葉に激しい頭痛を覚えたが、アリスちゃんの肩の上で鳴いている姿に邪気はなく、そしてハツカネズミなので白い体色と真紅の瞳と可愛いと見えなくも無い、とりあえず私の管轄内ではないので

「ワルキューレ。後はよろしく」

「……ああ」

今回はわたしの管轄では無いので、アリスちゃんの事を任されているワルキューレ、しいてはブリュンヒルデ達に丸投げすることにした

「チュウー!」

「みみーむ!」

「ぶぎゅー!」

【ノープー!】

なんか小動物同士で意思疎通しているのは無視して、横島君に視線を向けるとシズク達の姿が無い

「あ、シズク達はおキヌちゃんとハーピーさんと買い物です。明後日には迎えに来るらしいんで、お別れパーティーの準備を……えつとそれに付きましてですね」

「はいはい。特別手当出してあげるわよ」

あざーっす!と頭を下げる横島君とその隣で遊園地!遊園地とはしゃいでいるアリスちゃん。アリスちゃんの保護者2人と事を構えたくは無いので友好的に接しておくべきだろう。それに遊園地に行く代金なんてそう高い物じゃないので気にするまでも無い。むしろ

私が気にしているのはマーロウの方だ

「どう？今回マーロウの動きを見て、何か参考になったかしら？」

タマモとシロに勉強させるためにマーロウを呼んだのだ。2人にそう尋ねると

「私は犬じゃないから、私は私なりのやり方で横島の助けをするから」  
「拙者はマーロウ殿に色々教えて貰ったでござるよ！」

弾ける笑顔のシロと嫌そうな顔をしているタマモ。でもマーロウの話聞いて動いていたのは2人とも同じだ、今回の事はどうもシロにもタマモにも、そして私達にも大きな転機になったみたいだ

「じゃあ、横島君。今回の事1度リポートに見なさい。資料はあげるし、アリスちゃんが帰ってから1週間あげるわ。自分1人で仕上げてみなさい」

うえっ!?!と叫ぶ横島君に事務所の中に笑い声が満ちる。自信無さそうにしてるけど、私の代わりに所長をやっていた時は自分でやっていたのだ。甘くする時期はそろそろ終わりで良いだろう

「蛭ちゃんに聞くくらいは許してあげるから頑張ってみなさい。じゃ、今から琉璃の所に行くわよ」

今回の事はGS協会で対策を練って貰う必要がある。今日は午後からフリーと言っていたので、報告に行くわよと2人に声を掛け私達は事務所を後にするのだった……

アリスちゃんに迎えが来るまでは後1日ある。昨日沢山食材を買い込んできたシズク達はキッチンで料理の本を見ながら

「ぎゃー! スポンジ潰れたあ！」

「……むう、またか……」

【思ったよりも難しいですね】

アリスちゃんの雰囲気にも合う、洋食とデザート作りの試作品の作成を頑張っている。

「どんなの作ってくれるのか楽しみ♪」

【のっぶうー!】

膝の上にチビノブを乗せて、ねーっとチビノブと笑っているアリス

ちゃん。ノツブちゃんは普段通りメロンパンを買いに外出しており、牛若丸とシロは庭で竹刀を振っている

「むう、やはりこうも少し筋力をつけるべきでござろうか？」

「私は筋力よりもスピードを鍛える方が重要だと思いますよ？私もシロも決して一撃で相手を打倒するタイプではありませんし」

同じ剣士と言う事で色々話し合いながら訓練を頑張っている。ちなみに俺が混じるとシロが俺の真似をして邪道を覚えてしまうらしいのと、アリスちゃんとどこに行くかと言うのを決めると言う事もあり、部屋から竹刀を振っている2人が性格が似ているからかなんか姉妹に見えたことに苦笑しながらタマモが広げている雑誌に視線を戻す

「やつぱり、ここが良いんじゃない？デジャブーランド」

1日平均2万人は訪れる超有名な遊園地だっけ、東京の近くに色々ある遊園地の中でもかなり有名な場所だ

「でもなあ、チケット取れるかなあ」

「そこが問題よね」

確かにアリスちゃんと遊びに行くには良い思い出になるかもしれないけど、招待チケットがあれば別だけど、飛び込みで行けばそれこそアトラクションで遊べるかどうか……

「とりあえず今日の散歩の時に見に行ってみるわ」

「うん、駄目だった時の為にほかの遊園地とかも調べとくわね」

タマモにありがとなど礼を言い、散歩の時間までチビやうりぼーと遊びながら時間を潰すことにするのだった……

(こりや駄目だな)

チケット販売所の近くまで見に来たがチケット売り場大混雑。とてもではないがチケットを買えるとは思えない状況だった、遊園地のチケットを買いに行くと言って散歩に来なくてよかったと心底安堵した

「今日はちょっと遠くの公園に行こうか？」

「うん！行くー♪」

普段出かける公園よりも少し遠くに行こうかと言って、チケット売



り場から離れてちよつと遠くのチビ達が大好きな木のアスレチックの公園に行こうかと歩き出そうとした時

「あれ？横島さんとアリスちゃん？」

「ん？おー奇遇やなあ！なにしてるんやー？」

小鳩ちゃんと福の神に背後から声を掛けられ、人も通る所なので1度近くの広場へ移動しようとして提案し、小鳩ちゃん達と一緒に商店街から離れる事にした

「お姉ちゃん元気？アリスは元気だよー！」

「こんにちわ。私も元気だよ」

にぱーつと笑うアリスちゃんに小さく手を振り返す小鳩ちゃん。チビ達はベンチに腰掛けている俺の膝の上で早く散歩と言いたげに鳴いている。

「いつもの散歩のコースじゃないですよね？私良くここに買い物来ますけど、横島さんを見たのが今日が初めてです」

「アリスちゃんがもう少しで帰るからどこか遊びにいこうかなーって言う下見をしてたんだよ」

俺の言葉に小鳩ちゃんは何かを察した様子だった。そりやこころ辺で見れば、俺がアリスちゃんと何処に連れて行こうとしていたなんて直ぐ判るだろうしな

「それでしたら、横島さん、アリスちゃん。これをどうぞ」

小鳩ちゃんが俺に差し出してくれたのは、特賞と書かれた小さな封筒。中を見るとデジャブーランドのペア招待券

「いやいや！こんなの貰えないから！」

「良いんです。アリスちゃんは横島さんと遊園地行きたいよねー？」

小鳩ちゃんの問いかけにアリスちゃんは行きたいーと直ぐ返事を返し、良く判って無い様子のチビ達も楽しそうに鳴き声を上げる

「どうせ私は誘う人もいませんし、横島さんに譲りますよ」

【ちよ！小鳩それは「福ちゃんは静かにしててね？」むぐう！】

福の神の口を慌てて塞ぐ小鳩ちゃんに本当は誘う人が居たんだと思ひ、やっぱり受け取れないと言って封筒を返そうとするが

「だから良いんですよ。どうせ私そのチケットの有効期限の明日六道

で補習ですし、どつちにしろ行けないので」

だから気にしないでくださいと笑う小鳩ちゃん。ここまで言ってくれていると付き返すのは逆に悪い気がしてきた

「今度、ちゃんとお返しするから、本当ありがとう」

「お姉ちゃん、ありがとう！」

アリスちゃんと一緒にお礼を言うと小鳩ちゃんは柔らかく微笑みながら

「良いんですよ、アリスちゃん、横島さんと楽しんで来てね」

福の神の口を最後まで塞いで歩き去っていく小鳩ちゃんにアリスちゃんとありがとうと声を掛け、俺達は散歩を再開するのだった

「なー。いいんか？横島を誘うんじゃないか？」

「そのつもりだったけど、別に良いかなって、ほら。今回の事で横島さんが埋め合わせしてくれるって言ってたし、私の印象が強く横島さんに残るかなって」

やや黒い笑みを浮かべて言う小鳩に福の神は冷や汗を流しながら、なんで、なんで小鳩が黒くなってるまうんや、そうならんように頑張ってたのにと何度も繰り返し呟いているのだった……

横島がアリスちゃんと出かけることになり、遊園地と言う事でワルキューレさんとジークさんの直接護衛が出来ないので、苦渋の決断としブリュンヒルデさんがルーン魔術で遠隔護衛がすると言う事が決まり、私は美神さんと共に仕事に出かけた。現場は東京デジャブーランドで最近霊現象が起きていると言う事で、オカルトGメン……つまり西条さん達との共同の仕事だ

「デジャブーランドで霊現象って何か理由があると思います？」

「うーん。やっぱ楽しいとか、面白いとかの陽の気が集まっているからそれに惹かれてって可能性があるわね」

それほど強力な妖怪とかは出ないと思うけどと美神さんは言うが、前の下水道の事もあるし、また予想外の何かが出てくる可能性もある「シズクもノツブも手伝ってくれないですもんね」

「仕方ないわ。基本的に横島君が気に入ってるから手伝ってくれてる

ただだし」

【私はちゃんとお手伝いしますよ?】

おキヌさんがそう笑うが、最後まで渋っていた。私と美神さんの視線が向けられると口笛を吹いて視線を逸らす、良いも悪いも美神さんの事務所は横島の調子によって大きく左右されると思う。勿論私も込みでだけど、シズクはアリスちゃんが帰る前に好きな料理を作ってやるって言う事で来てくれてないし、ノツブはノツブで今日はパスと言って断られ、タマモはシロに東京を案内すると言う事でパス、牛若丸は一応横島の護衛と言う事で眼魂で横島のポケットの中だ

「とりあえず西条さんもいるし、まずは話を聞いてそこから考えるわ」「あれ?今回は話も聞いてないんですか?」

美神さんにしては珍しいと思いきや尋ねる。美神さんは小さく溜息を吐きながら

「夢を売る企業だから表立って私を雇えないって話なのよ。西条さんに話を通して、そこから私って流れなのよ」

「なんともめんどくさい話ですね」

【夢って一種の売り物なんですかねえ?】

霊的な問題で何か起きればもつと大変なことになるだろうに……私はそんなことを考えながら、従業員用の入り口からデジャブーランドの中に足を踏み入れるのだった……

「あ、そう言えば横島君に作るって言ってたバイクどうなったの?」

「もう少しですよ?あと最後に胴体に装甲をくっつけて塗装すれば仕上がりですよ……お父さんが何故かバイクにゴーストドライバーを組み込んでくれましたけど」

「それ大丈夫なの?」

美神さんの言葉に判りませんと返事を返すのがやっとだった。能力は限定的にしたと聞いているが、それでもどうしても不安要素は消えない

「遅かったね。令子ちゃん、蛍ちゃん」

西条さんが私達に気付いて手を振ってくる。長い階段を下りた先は広い空間が広がっていた。あちこちにPCが見え、クレーン車など

の大型特殊車両が見える。まずは依頼者に紹介するよと言って歩き出す西条さんの後を付いて歩き、メインコントロールと書かれた一際大きな部屋の中にはいる

「ふむふむ。このプログラムはこうしてだね、そしてこっちは駄目だ、電気効率が悪すぎるヨ」

「な、なるほど」

教授がこちらの技術スタッフに何かアドバイスをしていた。西条さんを見ると西条さんは肩を竦めて

「PCを与えるとあつと言う間に全部覚えてね。彼本当に記憶喪失なのかい？」

自己申告だから結構怪しいですよと美神さんと一緒に言っ、ふとPCに視線を向け

「げっ」

「何て声を……げっ」

私に注意をしていた美神さんがモニターを見て、同じように呻いていた。そこには運が良いのか悪いのか、横島とアリスちゃんの姿あった。正し大型犬サイズに巨大化しているうりぼーやその頭の上にはちよこんと座るチビ、そして猫の耳のヘッドバンド装備のチビノブ、それにウイスプにアリスちゃんの拾ったネズミ。もうとんでもない集団になっている

「横島君らしいというか、なんと言うか……やっぱり彼は個性的だね」  
「今度注意しておきますから」

西条さんは好意的に言ってくれたが、これは正直かなり不味いので今度美神さんと一緒に注意しておきますと呟く

「では今回の依頼内容なのですが、これを見てくださいか？」

スーツ姿の老人がPCを操作して写真を映し出す、そこにはチビサイズのややいかつい顔に小さな石斧を持った妖怪の姿

「性悪な妖精【ボガート】ね」

「かなり珍しいですね」

元々は海外の妖怪だ。日本の土地に馴染んでいるとは思えない、現に少し項垂れて、肩を落として消耗しているように見える

「オカルトGメンの方にも相談しましたが。閉鎖せずに、あの妖精を退治して欲しいのです」

依頼主の言葉に西条さんを見ると、肩を竦めて

「こういう無茶な依頼だから手伝って欲しいってお願いしたんだよ」

疲れた様子を見れば相当苦労した後なのだろう。普通は遊園地などに妖怪が現れば、閉鎖して退治する。営業中にしかも客に見つからず退治する、それはかなりの難易度だ。考え直せと言いたかったのだが

「私共の仕事はお客様に完璧な夢を提供することなのです！妖怪が出たから閉鎖などと言う事をして、その輝きに曇りを与えてはいけないのです！」

【良いね！そういう信念は大事だね！】

賛同しているあの馬鹿幽霊を本当に何とかして欲しいんだけど、やっぱりあの人は胡散臭い上にとても信用出来ない

「なんとしても極秘裏に処理してください！その為には金に糸目はつきません！」

「警視総監から僕も圧力をかけられていてね。本当大変だと思うけど協力して欲しいんだ」

「裏で色々思惑があるってことね……はあ。とりあえず、蛍ちゃん。見鬼君の準備して」

美神さんの言葉に判りましたと返事を返し、バッグから見鬼君を探す。横島がいればたぶん簡単に見つけ……見つけ？見鬼君を見つければ、机の上のモニターに視線を向ける

『あれ！あれが良い！』

『ジェットコースターかあ、結構怖いと思うけど、大丈夫？』

『大丈夫ー♪』

ジェットコースターに行きたいと言うアリスちゃんに大丈夫？と声を掛け、大丈夫と返事を返したので、うりぼー達を引き連れてジェットコースターの方に歩き出す横島達。その姿自体は問題は無い、問題なのは横島の性質だ

「美神さん。私物凄く嫌な予感がします」

「そうね。私もするわ」

【実は私もです】

「うん？何か問題でもあるのかな？」

【おお、ボーイがいるじゃないか、後で少し顔を出しておくかな？】

横島の性質を良く判つてない西条さんと教授の言葉を無視し

「横島君が先にボガートを見つけてるんじゃないかなって」

「ははは、この広い遊園地でそうそう遭遇する物じゃないさ」

その反応で判った。やっぱり西条さんは横島の性質をまるで理解していないと

「おキヌちゃん。悪いんだけど、横島君の方に合流してくれる？」

【判りました。ちよつと行って来ますねー】

壁抜けして飛んでいくおキヌさんを見送り、大袈裟だなど苦笑している西条さん。たぶんこれが普通の反応で、私達の反応がどこかおかしいと言う事を理解すると、なんだかとても悲しい気持ちになった……

そして案の定と言うか、なんとと言うか横島とアリスはと言うと

「うっ？」

「みむー！」

「ぶぎゅー！」

【ノツブウー！】

「ん？なんだー？なんかいるのかー？おお!?!なんかいかついのが居る!?!」

「なんだろー？初めて見る」

【ボガートだ。悪戯妖精と言われる妖精の一種だよ】

早速ボガートとエンカウントしたりしているのだった……横島の人外ホイホイは遊園地でも十全に発揮していた……

レポート20 狼の居る日常 その8へ続く

## その8

リポート20 狼の居る日常 その8

小鳩ちゃんに譲り受けたデジャブーランドのチケット。それでアリスちゃんとチビ達と遊びにきたのだが、まあ凄い事凄い事。ジェットコースターや観覧車、コーヒーカップなどの定番は勿論。ウォータークルーズと言う奴に、プールに飛び込むような形のジェットコースターに触れあい動物広場、それに玉当てや射撃で景品が貰えるスポーツコーナーにゲームセンター。とにかくアトラクションの数が凄

「お兄ちゃん、あの作りかけのお化け屋敷の所に幽霊が見える」

【ああ。私も見えるな、着物の姿の女のお化けだ】

「帰ったら美神さんに相談しようか」

お化け屋敷に本物の幽霊が出そうなんですけどと相談してみよう、除霊するのは美神さんの指示を仰ぐべきだ

「さてと、じゃあアリスちゃん。最初はどこに行こうか？」

「んーつとねーメリーゴーランドー♪」

やつぱり女の子だなと思ひ、メリーゴーランドに行く事にし、大型犬サイズに巨大化したうりぼーのリードを引っ張りながら、メリーゴーランドへと向かうのだった

「やつぱりちよつと従業員さんも困惑してたな」

【普通は猪を連れてこないからな】

ドッグランとか言う犬を走らせるコースもあるので、ペット同伴もOKだったが

「い、猪ですか？えつと……それと妖怪？それにその小さいのは子供ですか？」

「いえ、精霊と猪と小悪魔です」

「あとハムちゃんー♪」

【ノツブウー！】

「ぶぎゅ」

「みむう！」

「チューー！」

受付の所で精霊と猪と小悪魔ってOKなんですか!? って半分涙目になっていた若いにーちゃんには正直少し悪い事をしたかもしれない。まあ最終的には入場出来たので問題は無いが

「早くー♪」

「チューー♪」

早く早くーと俺を呼ぶアリスちゃんに判ったよーと返事を返し、俺はメリーゴーランドの方に足を向けたのだった

「えーっ、お兄ちゃん乗らないの……っ？」

「むっっちゃ浮くからな」

居るのは10歳くらいの女の子ばかり、流石にそこに俺は混ざれない。だからリュックからカメラを取り出して

「黒介さん達に見せる写真を撮ってあげるよ」

俺がそう言うのとアリスちゃんは判ったーと笑うが、今度のコーヒークップは一緒だよと言って、従業員に案内されアトラクションの中に入っていく。

「お兄ちゃん♪」

馬の上で楽しそうに手を振るアリスちゃんに手を振り、その満面の笑顔をカメラに収める。そこでふと思った

「アリスちゃん、今日帰るけど、魔界ってカメラ現像してくれるところあるのかな？」

「……どうだろうな？」

デジャブーランドから帰ったら、ハーピーさんかブリュンヒルデさんに聞いてみようと思いつきながら、楽しそうに手を振るアリスちゃんの姿をカメラに収めるのだった。なおメリーゴーランドから降りたアリスちゃんの第一声は

「今度ぐーちゃんも連れて来てもいい？」

「うーん、ちよつとそれは難しいかも」

俺の家に置くにはぐーちゃんはちよつと大きすぎるかなあつと俺



は直ぐに許可を出さないよと言った。ついでに言う

「まずシズクがOKしてくれないと」

「……そっか」

家主と言うことで俺を立ててくれているが、駄目な事は駄目と言つてシズクは決して妥協はしない。馬はシズクの感性的にセーフかアウトなのか？そこが何より重要だと思う

「じゃあ今度はコーヒーカップだな。行こうか」

「うん♪」

アリスちゃんと手を繋いでコーヒーカップに向かう。あんまり人気の無いアトラクションなのか並ばずに乗り込む事は出来ただけ

【ノブノブー♪】

「やめえ！チビノブ！やめい！」

「あははーっ！もっともっともっ！ーっ！」

チビノブがコーヒーカップの回転を早めるレバーの上に立って走り回り。俺とアリスちゃんの乗っているコーヒーカップだけ異次元レベルの高速回転をする羽目になった

「このー！悪戯しすぎだー！」

【ノブキヤアア!?!】

コーヒーカップから降りたところで目が回りすぎて、1度広場で休憩することにした。勿論その理由となったチビノブはくすぐりの刑だ、ジタバタと悶えて逃げようとするチビノブを捕らえくすぐり続ける

【のーのーブウ】

チビノブがぐったりした所で1度くすぐりの刑を終え

「じゃあ今度はどこに行こうか？」

「あれー！」

喜色満面と言う感じでアリスちゃんが指差したのは……日本一と銘打たれたジェットコースター。思わず背中に冷たい汗が流れる

「あれ！あれが良い！」

俺の顔色の悪さに気付かず、あれがよいと跳ね回るアリスちゃん

「ジェットコースターかあ、結構怖いと思うけど、大丈夫？」

考え直して欲しいと思いきや尋ねるがアリスちゃんは心底楽しんでいる顔をして

「大丈夫ー♪」

ああ、これは考え直させるのは無理だなと判断し、俺はアリスちゃんと共にジェットコースターへ向かうのだった

「のわあああああ?!?!」

「あっはははははー!おもしろーい!」

絶叫している俺の隣で面白い面白いとはしゃぐアリスちゃんに俺は心の中で早く終わってくれと思わずにいられなかった……

「お兄ちゃん、あれやって!あれやって!」

「ちよつと待って……お願い、ちよつと待って」

玉当てで景品を取ってくれというアリスちゃん。俺としてもつてやりたいがジェットコースターの高速回転で吐きそうだと

「みむ?」

「ぶぎゅ?」

【ノブウ?】

リユックの中でジェットコースターを満喫していたチビ達がどうしたの?と言う顔をする。何で平気なんだよ?と思う

【ここで少し休憩するのはどうだろうか?少し休んだ方が横島も確実に景品を取ってくれると思うぞ?】

「じゃあジュース!ジュース!」

それならジュースを飲むと言うアリスちゃん。本当に元気に満ち溢れているなと思いきや、自動販売機でジュースを飲んで少し休憩してから運動コーナーに足を向けた

「はい、では12球で9つの的を落としてくださいねー」

ラインの上に立って振りかぶりボールを投げる。自分でもオツと思うほどの結構なスピードで的を射抜く。あれ?俺以外と野球できるんじゃない?と思いきや、俺は2個目のボールを取り、最後に残しておく面倒そうな9つの的の隅を目掛けてボールを投げるのだった

「お、お客様。それくらいで勘弁してくれませんか？」

あの後も射的とかで景品を取りまくり、従業員の方が引き攣った顔で言うので止める事にした。取り捲った人形とかは預かってくれるとか、何とも気の効いたサービスだ。出口で交換してくれると言う番号札を鞆の中に大事にしまい、時計を見ると12時を刺している。

「じゃあそろそろお昼ごはんにしようか？」

「うん！」

シズクがお弁当を用意してくれていたので憩いの広場でお昼にしようと思い、移動している時

「う？」

「みむー！」

「ぶぎゅー！」

【ノツブウ！】

「ん？なんだー？なんかいるのかー？おお!?なんかいかついのが居る!?」

チビ達が何か騒ぎだったので振り返ると、曲がり角の所にチビ達と同じサイズのやけにいかつい顔をした何かがいた

「なんだろー？初めて見る」

【ボガートだ。悪戯妖精と言われる妖精の一種だよ】

妖精かあ、俺の知ってる妖精って全然可愛くないよな。ナナシもなんと言うかめちやくちや強いし

「みむーみみー」

「ぶぎゅーぴーぎー」

「うー！うっうー♪」

なんかチビ達と意思疎通してチビ・うりぼー・チビノブ・ハムちやんという隊列の一番後ろに加わったボガート。別に目くじらを立てることも無いかと思いい、ボガートも引きつれ憩いの広場でお昼ごはんにすることにするのだった……

ジェットコースターを降りた後の横島さん達が見つけれなくて、うろろうろしている間に12時になってしまった。憩いの広場でピク

ニツクをしているかとも思い憩いの広場に向かうと

「うーうー♪」

「あーお前お腹空いてたのか、卵焼きも食べるか？」

「うーうーうーうー♪」

私達の予想通り横島さんはぼつちりボガートと遭遇していて、そして何故か普通に弁当を広げて一緒に食事をしていた

「みむう♪」

「ぶぎゅー！」

小さくかつとされた林檎を食べて嬉しそうなチビちゃんとうりぼーちゃん、そしてその隣では

「あむっーんー美味しいねー」

「ノツブー！」

アリスちゃんとチビノツブがサンドイッチを食べてぼやつとした顔をしていた。私は溜息を吐いた、やっぱり横島さんがボガートと遭遇していたからだ。でも何かする前に捕まえていてくれたので良かったとも思った

「あれ？おキヌちゃん？どうかした？」

横島さんが私に気付いてどうかした？と尋ねてくる。私は横島さんの隣に座りおにぎりを抱き抱えるようにして食べているボガートを指差して

【美神さんと蛍ちゃんの今回の除霊のターゲットなんです】

横島さんはボガートを見て、それから私を見て

「いや、めっちゃ大人しいぞ？」

「うっ。」

おにぎりを食べ終え、今度はタコさんウィンナーを食べているボガート。顔はいかついけど、確かに危険そうには見えない

【と、とりあえず美神さんと蛍ちゃんと1度合流してくれませんか？】

私凄く損な役回りと思いつながら横島さんをお願いすると、お弁当食べ終わってからならという返事が返ってきたので、横島さん達の近くで横島さん達がお弁当を食べ終わるのを待って、皆で1度地下のメイコンントロールルームに向かおうとしたその時

『ニャアアアアア!!』

猫の奇声が響き渡る。だけどそれは普通の声ではなくて、靈波を伴った叫びだった

「待ち……待ってマツキーキャット!」

「別に苛めようってことじゃないんだワン!」

「まつ! きやう!」

憩いの広場の前を駆け抜けていく猫とそれを追いかけて行く、着ぐるみが3体。そのうちの一体がこけてしまったんですけど、その着ぐるみの中の声はとても聞き覚えのあるもので

「もしかして蛍?」

「……ううう……横島あ……」

横島さんがこけた着ぐるみに声を掛けると、半泣きの蛍ちゃんの声が聞こえてきた。横島さんはその着ぐるみに手を貸して、立ち上がり

「おキヌちゃん、悪いけどアリスちゃん見てて、うりぼー」

「ぴっぐう!」

横島さんの意図を汲んで、巨大化したうりぼーに横島さんが跨る。

美神さん達が困っている様子なので手伝う事にしたようです

「みむ」

「うー」

チビちゃんに抱えられてボガートがうりぼーの頭の上に座る

「じゃあマツキーキャットの手伝いに行こうか?」

「ありがとー」

着ぐるみ口調で蛍ちゃんが返事を返し、うりぼーに跨り、横島さんの腰に手を回す

「お兄ちゃん頑張ってねー」

「直ぐ戻ってくるから、待っててな」

アリスちゃんに手を振り返し、うりぼーに跨って走っていく横島さん。憩いの広場に残された私とアリスちゃんとチビノツブ、正直どうすれば良いのか判らなくて、えーつとえーつとと呟きながら、看板に書かれているデジャブーランドの地図を見て

「えーっと、憩いの広場の中の動物広場で行きますか？」

「うん！行くー！チビノブも行くよねー？」

「ノッブー！」

ただ待たせているのも可哀想だと思い、憩いの広場に併設している動物広場にアリスちゃんと一緒に向かったんですけど

「はい、1ー2のー3♪」

「ワンワン！」

「ニャーニャー♪」

「ヒヒーン♪」

「チュー！チュー！チュー♪」

「フー！フー！フー！ノッブー♪」

「「わあああああ!!」」

動物と会話できるアリスちゃんが触れあい動物広場の動物を集めて、鳴き声で歌を歌わせて凄い騒ぎになってしまって、どうしようと思わずにはいられないのだった……

逃げ回るボガートの捕獲は完了した。実際は結構色々あったんだけど、一言で言うとならぬとチビが何とかした

「う、ううー」

「みむーみむー!!みみーむう!!」

「ううー……」

追いかけてデジャブーランドの開発地区。新しいアトラクションを作っている立ち入り禁止ゾーンに追い込んだんだけど、資材とかを使つて暴れるは暴れる

「これは洒落にならないわよ!？」

「一端引くべきかもしれないね」

着ぐるみ姿では運動能力が極端に制限される。見失うかもしれないが、ここは1度このエリアを出て着ぐるみだけでも脱ぐべきだ。ここまで追い込んだのだからもう人はいないから姿を見られる心配も無い、1度撤退しようとした時。鉄材が私と西条さんに向かって射出された。咄嗟に避けようとしたが、着ぐるみに足を取られバランスを

大きく崩してしまった

「令子ちゃん！」

西条さんが私を突き飛ばして守ってくれようとしたその時

「ミツギヤアアアアツ!!!」

空を裂く凄まじい電撃と物凄く聞き覚えのある鳴き声。まさかと思ひ振り返ると

「よっしやー！超セーフッ！チビ、帰ったらメロンだ!!」

「みつむー♪」

「美神さん大丈夫ですか!?!」

巨大化したうりぼーに跨った横島君と着ぐるみの頭だけ脱いでいる蛍ちゃん、そして

「うー！うっうー!!!」

「うー！うっうー！うるー!!」

もう一匹のボガートだった。横島君の側にいるボガートは首を振って、駄目だよと言っているように見え、マツキーキャットの上のボガートは怒っているような鳴き声を上げ、再び鉄骨などを射出してくる

「うりぼー！ビーム！」

「ぶぎゅー！」

牙の間から放たれた霊波砲。それを維持したまま首を振るうりぼー、霊波砲は勿論その首の動きに沿って動き、鉄骨を薙ぎ払っていく

「……令子ちゃん。横島君の使い魔は一体何なのかな？」

「やっとなんて判ってくれた？横島君の使い魔は色んな意味で規格外なのよ」

横島君自身もかなりの規格外だが、横島君の使い魔もその周りも規格外なのだ、類は友を呼ぶを地で行っている

「美神さん、これ流石に近づけないと思うんですけど」

「本当ね。どうしようかしら」

うりぼーが頑張ってくれているので話す余裕は出来ているが、鉄骨の雨は今もまだ続いている。ボガートを何とかしなければならぬ

が、近づけないのでどうしようもない

「うっ！ううー!!」

「う!!ううー!!」

横島君が連れているボガートが一生懸命声を掛けているが、それでもマツキーキャットを操っているボガートは声を荒げる。どう見ても説得が上手く行っているようには見えない

「横島君が何とかしてくれている間に着ぐるみだけでも脱ごう。これ以上は無理だ」

西条さんの言うとおりで、霊体ボウガンなどを持ってきてボガートだけを打ち抜くしかない。そう思ったとき

「みみー!」

「う!!」

チビが鉄骨を潜り抜けてマツキーキャットの頭の上のボガートの前に立つ

「みむー!みみー!」

「う!!うー!!」

チビが説得を試みているようだが、駄目でボガートが手にしていた斧を振りかぶった瞬間

「みむ!!」

「う!?!」

チビの短い手がボガートの頭を打ち抜いた。ボガートがよろめき斧を振りかぶるが

「みむう!!」

「う……」

「みみー!!」

「う……」

見た感じペチと言う感じの打撃なのだが明らかにボガートはふらついていて、ついに倒れたボガートの上にチビが馬乗りになってペチペチ叩き続ける

「チビー！待てー！やりすぎー！やりすぎだから!!」

横島君が止めに入ったとき、ボガートは号泣していて、もう一匹の



ボガートに手を引かれながら、機能停止したマツキーキャットの上から降りてきた

「えーつととりあえず、アリスちゃんに翻訳してもらって、話を聞きたいんですけど良いですか？」

「……ええ、とりあえずね」

ここまで泣いているといるとそのまま除霊するのが可哀想に思えてきて、私は横島君の提案を受け入れたのだった

「えつとね、海外の資材でこっちにきて、親とはぐれて、寒いし、お腹すいたし、どうすれば良いのか判らなかつたって」

「美神さん、西条さん、除霊はちよつと止めてあげてくれませんか？」

アリスちゃんの翻訳を聞いて、ここで除霊してしまえば私達が完全に悪役だ。しかもボガート2匹はチョコレートを食べるようにして食べており、悪意など微塵も感じられない

【えつとじゃあ、なんでロボットを？】

「待ってね、聞いてみる。どうしてロボットを操ったの？」

私達全員が疑問に思っていたことをおキヌちゃんがアリスちゃんに尋ねる

「ふんふん、怖いし、寒いから護ってくれるのが欲しかった、今はいけないことをしたと思ってる」

……ボガートつて言う先入観が怯えているボガートの妖精を誤解させてしまったようだ

「どうでしょう？非常に大人しいみたいですし、今回は除霊はしない……オーナー？」

西条さんが話を纏めようとしたが、オーナーはボガートに近寄り

「私達には君達が手伝いをしてくれるのならば、温かい寝床と食事を提供する事が出来る。どうだろうか？デジャブーランドのマスコツトになつて見ないかね？」

「「オーナー!?!」」

まさか過ぎる言葉に私と西条さんと蛍ちゃんの絶叫が重なる。

「アリスちゃん、今の翻訳してくれる？」

「判ったよー」

「「待てー！」」

即座に翻訳をお願いする横島君と翻訳するアリスちゃん、止めに入るが遅かった

「うっうー♪」

「お手伝いするって」

即決で決まってしまった。私は激しい頭痛を感じながら西条さんに

「すみません、契約書の作成手伝ってくださいますか？」

「あ、ああ。良いとも、まさかこんな結末になるなんてね」

引き攣った顔をする西条さん。除霊に来て、まさかこんなことになるなんて誰も想像するわけがない

「良かったな、横島。お前の夢がまた一步近づいたな」

「ほんとだよなー。やっぱり妖怪Ⅱ悪いって物じゃないんだ」

弾ける笑顔の横島君を見て頬を赤くしている蛍ちゃんとおキヌちゃん、そして良かったねーと笑いながらチビノブを抱えているアリスちゃん達

(連れてこなくても結局とんでもないことになるのね)

横島君の周りとか、横島君に人外が関係しないようにするにはどうすれば良いのだろうか？私は最近本気で悩んでいる横島君と人外の出会いをどうすれば良いのか本気で西条さんに相談しようと思った  
「美神さん、その除霊終わったので横島と一緒にデジャブーランドで遊んでも良いですか？」

【で、出来れば私も、その】

除霊自体は終わってるし、ここからはオーナーさんとボガートの契約に西条さんと2人だけで大丈夫なので、良いわよと返事を返し、全員で地下のメインコントロールルームを出て行く横島君達を見送るのだった……

蛍やおキヌちゃんも加わりデジャブーランドで遊んだ。チビやアリスちゃん達は勿論蛍達も大満足で小鳩ちゃんには本当に感謝した。今度できる限りのことでお返しをしようと決めたのは言うまでも無

い

「んー♪美味しい！アリス、こんなに美味しいケーキ初めて」

シズクやハーピーさんの作ってくれたケーキや鶏の太股のローストに舌鼓を打ち、夜遅くまでアリスちゃんは眠らず終始はしやぎばなしだった

「のーぶのぶのぶのぶー」

【ノブノー♪】

特にチビノブと仲良くなり、一緒に歌を歌い。寝る布団まで一緒に本当に仲良くなつたのが良く判つた

「お兄ちゃん。お土産ありがとう♪」

「本当ありがとうね」

黒介さん達に持って行くお土産もデジャブーランドで取つたぬいぐるみも鞆に入れ、そして

【ノーブ】

【ノブウー】

ノツブちゃんからチビノブが生まれたのと同じ術で分身したチビノブとハムちゃんも一緒に帰る準備は万全だ。ちなみに昨日アリスちゃんが帰ると聞いてチビノブが分身と言うか増えて、アリスちゃんがハムちゃんと一緒に連れて帰ることにしたのだ

「……お前どういう生き物なんだ？」

【いや、ワシも知りたいし】

基本的にノツブちゃんと同じ事を出来るのは知っていたが、まさか、影分身まで出来るとは……しかも影分身ではなく、生きた分身だというから驚きだ

「今度は犬のお姉ちゃんもタマモも一緒に遊ぼうね♪」

「約束でござるよ」

「待ちなさい、なんでシロはお姉ちゃんなのよ」

シロがお姉ちゃん呼びで自分は呼び捨てに頬を膨らませるタマモをまあまあと宥める。たぶん狐の姿の時の印象が強いのが原因だろう、お姉ちゃん呼びになると良いなと思うが、結構難しい様な気がしなくも無い。そしてアリスちゃんの迎えだが黒スーツの紳士、黒助さ

んだった

「黒おじさーん♪」

「ああ、アリス、随分と横島に良くしてもらったようだね？」

すっごく楽しかったーと笑うアリスちゃんに黒助さんは良かった良かったと笑い

【ノブウ】

「チュー」

「お友達のチビノブとハムちゃんだよ」

アリスちゃんがチビノブ【分身】とハムちゃんを黒助さんに紹介し、黒助さんは少し考えた素振りを見せてから

「この生物は？」

「えつとすいません、良く判りません。精霊らしいですけど……」

俺も、そして召喚したノツブちゃん自身も良く判っていない。チビノブの生態って実は俺達も知りたい

「ふむ、とりあえずハーピー。あの精霊の世話も暫く頼むよ」

「は、はい！判りました」

黒助さんにぺこぺこ頭を下げるハーピーさん。これは雇い主だからとかじゃなくて、純粹に怖がっているように見えなくも無い

「すまないね、私と赤介の都合で迷惑を掛けたね」

そんなことを考えていると黒助さんが俺のほうを見て頭を下げる

「いえ、アリスちゃんは良い子でしたから大丈夫です」

それにアリスちゃんがいたから毎日楽しかったし、困らせた事なんて何も無い。しかし黒田黒助と赤山赤助って本当どう考えても偽名だよな。一体本当の名前は何なのだろうか？

「それでも本当にありがとう。今度は私達の屋敷に遊びに来てくれたまえ、私が迎えに来るからね」

「皆で待ってるねー♪」

そう言って消えていく黒助さんとアリスちゃんを見送り、俺は一緒に手を振っていたシズク達に

「魔界って人間が行っても大丈夫なの？」

「「さあ？」」

声を揃えて首を傾げるシズク達に、黒助さんが迎えに来てくれる前にブリュンヒルデさんか神宮寺さんに相談しようと思心に強く誓うのだった……

別件リポート 月の女神との恋愛談義

## 別件リポート

別件リポート 月の女神との恋愛談義

窓から突入してきたアルテミスに私、蛍ちゃん、くえすの思考が完全に停止した。準備を整えるから待っていて欲しいと言っていたのに何故と

「いやーすみませんねー、こいつ暇だ、暇だって動き回るモンで」

「ブーダーリン、それじゃあ私が子供みたいじゃない」

似た様なもんだと言う熊のぬいぐるみとアルテミス。蛍ちゃんとくえすの動きが止った隙に私の腰をガツチリ掴んでいた蛍ちゃん達の手を振り払い

「じゃ、私は琉璃と打ち合わせがあるから」

前のフェンリル狼の事とか、入院しているけど入院費を払えないであろろう長老達の件とか、色々あるから！と言って2人が呆然としている隙に事務所から逃げ出すのだった……

「ずいぶん早くないですか?」

「ちよつとね、色々あったのよ」

打ち合わせの予定時間よりも早く来た私に怪訝そうな顔をする琉璃に、GS協会に着くまでに買って来たシュークリームを差し入れし、予定よりも30分ほど早い話が、話し合いを始める事にするのだった

「あ、予定が変わった分書類整理手伝ってくださいね?」

「……うん。良いわよ?」

書類整理、恋話を秤にかければ書類整理の方が良いに決まっている。私は琉璃の頼みを即座に引き受けることにするにした

さて目の前で鼻歌交じりのアルテミス様を見て、私とくえすの視線が何度も交差する。どっちが先に逝くのかと言う事である

「あーお嬢さん方。話すなら早い方が良いぞ?こいつはのんびりふわふわとした外見の割りに気が短い、神罰とか言い出すぞ」

神罰とか洒落にならないんだけど……と言うか今の神魔よりも強いアルテミス様が暴れるとか洒落にならないと思う。だがいざ話すとなると無理である、とんだ罰ゲームだ。本当に横島がいなくて良かったと心の底から思うレベルだ。協力を得るためとは言え、別の手段があったのでは無いか?と思う

「まずなのですが、私と蛍が想いを寄せているのは同じ人物です」  
「くえすう!?!」

まさかの発現に上擦った声が出る。アルテミス様は目を細めて  
「浮気性なの?」

「いえ。そんな男ではありませんわね、一言で言う……馬鹿です」  
「馬鹿じゃないわよ!?!横島は……横島は……」

「訂正できますの?」

無理でした。横島と言えば私の記憶だと煩惱だが、煩惱が子煩惱に変化しつつある今の横島はちよつと……いや、かなり考えが読めない。煩惱少年からド天然少年に進化してしまった、助平じゃなくてぽわぽわしている今の横島も可愛くていいと思ってしまう……  
「おめー、あれだ。横島ってあれだよ、お前が呼ばれた時にいた額当ての」

「ああ!あの子ね、確かにあの子はちよつと変わってるわよね」

……女神が変わっているって言われる横島って人間から見るとかなり変わってるって事よね。なんか少し悲しくなったが

「あの子相手なら、うん。色んな人に好かれるだろうから納得ね」

なんか勝手に納得してくれたから良かった。だけどまさかくえすから話を切り出すとは思ってなかったの、私はくえすが語る横島を好きな理由に耳を傾ける。他人から見た横島がどう見えるのか、そしてくえすがどれだけ横島を理解してくれているのか?後で私も話す必要があるが、1回くえすの考えを聞いてみたいと思ったから

「横島と会ったのはクリスマスでしたわ、除霊帰りに商店街を通っていたら泣いてる様に見えたってハンカチを無理矢理手渡してきて。何だこの馬鹿はと思いましたわ」

……うん。それは確実に思うわね、そして更に警戒もするだろう。

しかし何故その低すぎるスタートから今の高すぎる好感度に辿り着いたのか謎でしかない

「次にあったのは吸血鬼ブラドールの除霊の時でした。アルテミス様ならば判ると思いますが、私は普通ではありません」

「ああ、それは判るわよ？ ソロモンの魔神の力がこれでもかつて根付いてる」

「その通りです、神宮寺家はビュレト様の魔力を代々受け継いできた家系、短命であつたり、発狂したりとまあ没落した惨めな家系ですわ私もその人には言えない事を繰り返し忌み子や魔女と蔑まれて生きてきました、しかし横島はあの馬鹿は……ふふふ」

くえすはそういうと、何かを思い出したように楽しそうに笑う

「この私を良い人なんていう奴は馬鹿で十分ですわ」

あーそう言えば何故か横島はくえすを物凄く信頼してるわよね。今は大分自分の悪評も悪い噂も行動で全て帳消しにしてるっけ

「それに危険な時に助けられたら、自分を理解しようと思ってくれていたら、どうして嫌いになれますか？」

「それすごい素敵よねー、私もダーリンにそれくらい思つて貰えたら幸せ〜」

「ぶぎゅうううう!?!」

そのダーリンと言うか、熊なんですけど、胸に抱きしめられてぐつたりしてるんですけど、それは良いんでしょうか

「私は横島の信頼を裏切りたくない、そして横島に信頼され続けたいと思つています。その為なら自分に似合わないと思つていることもやるでしょう……ただーっただけ……っただけ悔いている事があるとすれば……」

くえすはそう言うとき普段の自信満々な表情から一転、寂しそうな、それこそ泣いてしまいそうな顔で

「何故私は蛍よりも先に横島に出会えなかったのか、もしも出会う順番が逆だったのならば私と蛍の立ち位置は逆だったのでは無いかと思わずにはいられませんね」

くえすの言葉を聞いていたアルテミス様はんーっと首を傾げなが



ら

「ちよつと私の期待してた話とは違うけど、とつても素敵だったわ。横島が振り向いてくれると良いわね〜」

それはちよつと私が困るんだけど……私の感じでは私とくえすの横島の好感度つて殆ど同じくらいだと思ってる。今一番警戒するべき恋敵のくえすの横島への想いを聞いて、お父さんと蓮華に言われているとおり私には危機感が足りないと言う事を実感するのだった……

話さなければならぬ、そう思えば羞恥心とかはあんまり無かった。私が横島を想う気持ちは恥じる物では無いし、誇るべき物だとも思っている。それと蛭に圧力を掛けるためにも先に話す事こそが最善だと判断した

「横島は私を知らないと思うんですけど、私は横島をずっと前から知ってて、ずっと好きだったんです。何よりも大事な存在と言えるわ」

ずっと？横島の話では、横島と蛭が出会ったのは横島が中学3年の時のはず。だが、蛭の話し方ではそれよりもずっと前に出会っている

言っている様に聞こえる

「子供の時の知り合いつて事かしら？」

「……それよりもずっと前ですかね」

子供の時よりも前？その言葉に私が首を傾げた時。瀕死だったオリオンが顔を上げ

「前世の記憶か、それとも未来か、相当強い縁があるみたいだな」

「……多分そうじゃないですかね？」

前世？未来？そんな言葉で横島に思いを寄せている。それは正直腹ただしいと思つた、それでは横島を見ていないではないか。あの清姫とか言う竜族と同じだ

「私は、横島が横島だから好きなんですよ。馬鹿でちよつと助平で、で

も誰かの為に頑張れて、自分が怪我をしても手を伸ばそうとする。そんな優しい横島だから好きなんです。前世とか、未来とか、そういうのじゃなくて……切っ掛けはそうだったかももしれないですけど、そうじゃないんです」

上手くは言えないんですけど、何よりも大事なんですと蛍が言う「うぬぼれじゃないですけど、多分横島も私を好いてくれてるって思うんです」

うぬぼれとかじゃなくて、事実横島は蛍に思いを寄せているだろう。今はまだ自分が弱すぎるからと思ってるからか告白はしていないだろうが、それでもどちらかが告白すればそれだけで付き合いそうな雰囲気だ

(まあそれはまだ先の話だと思いますが)

横島が一步引いていけば、蛍は1歩所か、4歩は離れている。だからそこに入り込める隙があると私は思っている、つまり蛍がヘタレと言う事だ。全てはその一言に尽きる

「でもそれだと駄目になっちゃおうと思うか……なんて言うか、横島の成長を邪魔しちゃう様な気がして」

「んー駄目になるって、あれ私とダーリンみたいなの？」

遠からず近からずという感じですと蛍が返事を返す。横島の成長の邪魔……仮に恋人同士になったからって別にそんな風になるとは思えませんがね

「おー良く考えてるなあ。俺みたいなタイプと違って、あの横島って言うのはあれだ。1人に決めると、それ以外に目向きもなくなるタイプだ。そうなるの色々変わってくると思うぞ……あの？アルテミスさん？その手にしているのは」

「浮気は駄目よ」

弓矢の鏃をオリオンの頭に突き刺すアルテミス。どうしてこう過激なのだろうか？と思っただが、オリオンは

「手がー手がとどかねえー」

頭に刺さった矢を必死に抜こうとしてジタバタして、机の上から落ちた。ほんの少しだけ大丈夫かと心配になった

「あーなるほど、横島は一途なのね。きつとメディア？んーキルケーと似たタイプね」

「それは違うと思います」

思わず蛍と同じ事を言ってしまった。ギリシヤ神話でも飛び切り問題のある魔女2人と横島が似ているとか洒落にならないと思う

「んーでもパツと見たただけだけど、横島は相当色んな人と縁があるみたいだし」

「ん？お前が霊視したのか？珍しいな、そんなに興味が沸いたか？」

机から落ちたことで矢が抜けたオリオンが机の上に戻ってきたが、オリオンの言葉に私はダーリンだけよと言いながら頭を殴る。応接間の机にめり込んだオリオン、アレは死んだんじゃないだろうか？それとも分身みたいなものだから死にはしないのだろうか？なんにせよ扱いが酷すぎると思う

「彼はねえ、きつとこれからもいろんなことに巻き込まれるし、色んな出会いをするわ。その中にはうん、多分私見たいな女神もいれば、

貴女達みたいな女の子もいると思うわ。判るもん、顔は似てないけど兄さんとかに気配が似てるわ」

横島はアポロンに似ている!?予想だにしなかった情報がアルテミスから齎された

「あと凄くね、女難の気がする。英雄でそんなのいた気がするわ！」

……ギリシヤの女神から見ても女難の相があるとか、本当にやめて欲しいんですけど

「それよりももっとこう、どきどきするような話は無いの？」

キラキラした笑顔をしているアルテミス。思い出として人に言いたくない物もある、私と蛍は目配せをする。お互いに考えている事は恐らく1つ

「凄く良い所があるので案内します」

興味津々と言う感じのアルテミスを横島の学校まで案内し

「じゃ、後はよろしく」

「任せましたわ」

「待って!?急に何!?女神様って何!?もつと説明して!？」

「ねーねー? どうやったら恋愛空間つてのに入れるの?」  
「放せー!!!」

後から助けてと叫ぶ愛子という机妖怪。机の中に取り込めば、少女マンガに出てくるような甘い世界を体験できるとかなんとか。柩が横島と一緒に取り込まれて、正気を失いそうだったとか言っていた  
「これで大丈夫ですわよね?」

「多分。暫く出てこないんじゃないかな?」

神だから空腹で出てくることは無いだろう。愛子とやらに負担が掛かるだろうが、私達に影響が無いのなら何の問題も無い

「なんか疲れちゃったから、ケーキでも食べに行こうと思うんだけど、一緒に来る?」

「……そうですわね。付き合いますよ」

肉体的疲労は無いが、精神的疲労がすごい。ここは蛍の誘いを断る理由も無いので近くの喫茶店に2人で足を向ける

「でもハッキリ言わせて貰いますが、前世とか未来とか言うの正直どうかと思いますわよ?」

「そつちもじゃない。横島の為だけに普通のGSやるとか普通じゃないわ」

ふふふ、あははははと互いに笑いながらも、目が全く笑っていない。ほんの少しだけ共感出来る部分もあったが、やっぱりと言うか確実に私と蛍が相容れることは無い、それを確信した1日だった

「んー素敵、ねえ! 愛子ちゃん、私の巫女にならない?」

「……えつとお?」

なおアルテミスは愛子の恋愛空間(元青春空間)を非常に気に入り、愛子を自分の巫女にしようとするほどに気にいる事になるのだが……それは少しだけ先の話である

「もう勘弁してくれえ!」

オリオンのメンタルに致命的なダメージを与えるスイーツ空間は、アルテミスには非常に居心地の良い世界だったようだ……

## 別件リポート

別件リポート 白竜寺の日々

白竜寺と言うのは異能を持って生まれ、家に行き場の無い孤児や、施設に預けられた子供が霊能を鍛える為の養護施設と言うのも兼ねている。つまり何が必要になるかと言うと大量の食材や日用品を搬入する必要がある。だが白竜山は悪霊が発生しやすい立地で一般の業者が食材を搬入する事は出来ない。つまり何が言いたいかと言うと

「クシナー！車の免許やっつと「やかましい」んごぶっ!？」

車の免許を取れる年齢の弟子は可能な限り早く車の免許を取ることが望まれるのだ。そして4回目をやっつと免許を取ったと喜ぶ雪之丞に年少の子供を昼寝させてきたばかりのクシナーの怒りのラリアットが炸裂するのだった……

「何騒いで……ああ、やっつと免許取れたのか」

「そうなのよ、それで嬉しくて騒いでいたからちよつとね」

仕草と喋り方は可愛いかもしれないが、喉を押さえ喋る事も出来ず悶えている雪之丞を見るとちよつと所のダメージには思えない

「それで陰念。バイクの免許の方は？」

「あ、ああ。大丈夫だ。次で実地試験だが、多分通る。だが本当に良かったのか？」

俺も雪之丞と共に車の免許を取るつもりだったのだが、クシナーにバイクの免許にしろと命じられたのだ

「うん、だって白竜山の下の駐車場、車2台までだし別の駐車場借りるのもなんだしね」

なんとも世知辛い話だが、クシナーの言う事には納得できた。クシナーの車が停まっているのは俺も知っていたし

「うーごほ、げほ、いきなりラリアットは酷くないか？」

「小さい子が寝てるんだから静かにするのが普通よ。免許を取れて嬉しいのはわかるけどね」

いや、こいつの場合無免許で運転しすぎた時の癖が邪魔をして、上手く行かなかったんだよな。まあクシナのスパルタで矯正されたのなら良いが

「陰念は今日は身体を休める日でしょ、バイクの免許お疲れ様。じゃあ雪之丞、早速買い物に行くわよ」

「え？車は？」

「3回目の時に琉璃会長に頼んで古いバンを譲ってもらっておいたの、まさか落ちるなんて思ってたけどね」

ジト目のクシナに口笛を吹いて誤魔化す雪之丞。クシナはそれを見て苦笑する

「下についたら荷物を運ぶのを手伝いに来るように、じゃ行くわよ」

「うーっす」

ふらふらと歩いて行く雪之丞としつかり歩きなさいと怒るクシナを見送り、俺は自分の部屋に向かったのだが

「うぶ、お前何時から飲んでた!？」

「あー？仙人様をお前呼びなんてするんじゃないよ。もつと敬いな」

「敬って欲しかったら敬われる行動をしろ！」

俺の部屋には酒瓶が散乱し、むせ返るようなアルコールの匂いに吐き気がした。しかも今は酒樽を開けて、それに榊を突っ込んでがぶ飲みしている。見た目は誰がどう見ても美女なのに、そういう行動から残念美人と言う言葉が脳裏を過ぎる

「これくらいで気持ち悪くなるなんてねえ、酒を飲まないからだよ。ほら、飲め！」

「未成年に酒を勧めるな！この駄目仙人!!」

スイッチが入っている時は師匠と同じくらい尊敬できるのに、スイッチがOFFになればこれだ。俺は足元に転がっている酒瓶を拾い

「ちよつと待て、これどこから持ってきた!？」

白竜寺は文字通り寺だ。酒などは殆ど置いていない、これをどこから持って来た。いや、それ以前に買う金があったのか！と気付き怒鳴るが、ツナデはジャーキーを齧りながら

「ああ？あー琉璃とか言う奴の手伝いをしてね。そのお礼の金で買ってきたよ」

白竜寺の生活費に手を出して無くて安心したが、何故それで俺の部屋で酒を飲む！雪之丞は今ここにいないが、良く飲めと言われて困ってるし

「陰念修行の話だけど……あら？」

「お？ずいぶん豪快に飲むなあ」

「おおおお、お師匠さまあああああ!？」

お師匠様が落ちていた酒瓶に足を取られ、駄目仙人が枡酒で樽から飲んでる酒に頭から突っ込んだ。慌てて樽から引っ張り出すが

「ひっく！陰念、せいぎー！」

「酔ってやがる！」

「あははっ！面白くなってきたね！酌だ、酌しろ！陰念！」

酔っ払いが増えた事に激しい頭痛を覚えながら、俺はどうやれば無事にこの絶望的な酒宴から逃れることが出来るのか、それを必死に考え始めたのだが

「陰念、飲みなさい」

「いやいや、お師匠様。俺は未成年です」

「お師匠様のお酒がー飲めないって言うのー！」

絡んでくるお師匠様に心の底から助けてくれと叫ぶのだった……

雪之丞が車の免許を取ったので、普段なら2回買い物に行かないといけない所が1回で済んだ。外で見ていた東條達が外で見ていたのか、長い階段を駆け下りてくる

「陰念はどうしたの？」

普段先頭で降りてくる陰念の姿が無い。荷台を開けながらどうしたの？と尋ねると東條は遠い目をして

「酔っ払ったツナデ様とお師匠様に……」

「そう……じゃあ仕方ないわね」

陰念は多分駄目ね。間違いなく絡み酒とパニくっている姿を見て楽しんでるツナデ様の玩具になっているだろう

「雪之丞。暫く弟弟子の部屋にいと良いわよ?」

「そうさせてもらう、さつさと運び込もうぜ」

荷物を全員で3往復くらいで運び終わったところで

「助けてえええ!!」

陰念が自分の部屋から何とか出てこようとするが

「お師匠様のお酒があ!ひつく!のーめなーってー!」

「あはははは!飲め飲め!!」

酔っ払い2匹に足と腰をつかまれ、必死に逃げようとしている陰念と目が合うが私含め、全員がさつと目を逸らす。ピシャンつと陰念の部屋の襖が閉まり

「いや、だから俺は未成年……無理無理!んぐうう?!?!」

「あははははははッ!!」

ああ、陰念は無理矢理酒瓶を口に突っ込まれたのね。私達は陰念の部屋に通じる廊下の所に、関係者以外立ち入り禁止の柵を配置し、汗も流れていないのに、汗を拭う素振りをして

「さあ、皆。プリンを作つてあるから食べましょう、陰念の分は残しておいてあげましょうね」

「はーい」

とりあえずここから先は弟弟子たちを行かせはいけない、私はそう判断し荷物を運ぶのを手伝つてくれた皆を引き連れて、その場を後にしたのだった……

なお陰念は夕方三蔵様とツナデ様に引き摺られて、夕食の時間に顔を出したが、予想通り青白い顔をしていたので

「おかげ作つてあるけど食べれそう?」

「……食べる」

ちよつと羽目を外しすぎたかもと笑う2人。ツナデ様はともかく、三蔵様にお酒を飲ませないように気をつけようと心に誓うのだった……

なお陰念は酒を口に含むと直ぐ気絶するらしく、殆ど飲まされてなかったとして安心した

「クシナー?今度私に付き合つてくれよー。1人で飲んでもつまらな



「いんだよ」

「もーあたしお酒なんて飲まないから、と言うかあたし飲みたくて飲んだわけじゃないのよ?」

言い訳するような口調だが、常に質素と節制している三蔵様だ。自分から進んで酒を飲むとは思えない、多分足を滑らせて、酒樽に頭から突っ込んだと言う所だろう

「判りました。では後日、あと三蔵様は判っているので大丈夫ですよ?」

「く、クシナー! ねえ! やっぱあたしの弟子にならない!」

「いえ、私には既にお師匠様がいるので」

がっかりしたように肩を落とす三蔵様。悪い人じゃないんだけど、ちよつと師匠として慕うには不安があるのよね

「結構飲める口なのかい?」

「それなりにですよ。嗜む程度です」

メドーサ様も良く付き合えと言っていたので私はそこそこ酒は飲める。メドーサ様に来れるか判らないけど、一応声を掛けてみようと思ひ、連絡用の使い魔を鳥籠から出すのだった。

「いやあー! 良い飲みっぷりだね! このワインってのも美味しい!」

「日本酒ってのもいいねえ。小竜姫がチビチビ飲んでるのは知ってたけど、これは良い味だよ」

ツナデ様とメドーサ様が意気投合し、私はちよこちよこ摘まみを作りながら、2人に酌をする事に徹底するのだった……

道場で座禅を組んで霊力のコントロールに意識を向ける。暫くそうしているとうとう頭を叩かれた

「乱れてるわよ。そんなのでやっても意味無いわよ?」

「勘……クシナ」

思わず勘九郎と呼びかけ、凄い目で睨まれたのでクシナと呼び直す。クシナは俺の前に座り

「どうしたのよ? 雪之丞が座禅なんて珍しくない?」

「ちよつとな」

横島がゴーストドライバーを持ち、陰念もそれを手にした。それでやや焦っていると言う実感はある、自分が置いていかれるような、そんな気がしてならないのだ

「まずはもつと気持ちを静めることね、負け続けは悔しい?」

クシナの言葉に言葉に詰まる。俺は少し間を置いてから

「悔しい」

俺は強くなりたいたい、それなのに負けてばかりだし、役に立たないことも多い。それが悔しくて惨めな気持ちになる

「いて」

デコを指で弾かれ顔を上げる。クシナはくすくす笑いながら

「雪之丞は真面目すぎるのよ、もつと楽に考えて見なさい」

「俺が真面目?」

自分ではとても真面目とは思いたいと思うのだが……クシナは真面目よと笑い

「生真面目で自分の行動に責任が伴う事も判ってる。だから余計に悩むのよ」

そこで言葉を切ったクシナは少しだけ真剣な顔をして

「自分に宿った力を嫌っても意味は無いのよ?」

「……!?!」

凶星だった。ガープに与えられた魔装術……GS試験で悪魔に乗っ取られ、暴走した俺を横島が正気に戻した。そこから俺は自分に宿る異能に気がついた

「メドーサ様が言ってたけど、雪之丞。貴方に憑依していた悪魔って仲間思いで仲間を庇って死んだ悪魔らしいわよ」

「え? 待てー! どういう事だ!?!」

俺の問いかけにクシナは返事を返さず、良く考えて見なさいと言って道場を後にする

「悪魔でも仲間思いか……」

自分に宿る悪魔の力を毛嫌いしていたが、気持ち的にはそう悪いやつでは無いのか? と言う考えが脳裏を過ぎる。俺は座禅を組んで霊

力を再び高める。だが今度は靈力を闇雲に高めるのではなく、自分の内側に向けて潜って行く様な感覚で靈力を高めていく  
(都合の良い事を考えているのは判る。だけど俺は仲間を護る事が出来る力が欲しい)

深く、深く自分の中に潜って行く、俺の中に残っているかもしれない悪魔の残滓を探して、深く、深く、深い瞑想状態へと落ちていく。意識が完全に途絶える前、静かな男の声を聞いた様な気がした……

「クシナ、道場のほうやけに寒くないか？」

「なにか切っ掛けを掴んだかもしれないわね。陰念、ちよつと着いてきて」

夕食の時間になっても雪之丞が姿を見せず、そして道場から冷気が流れてくると言う陰念。先に食べてと弟子達に声を掛け、道場の扉を開く

「なんだこれは……!?っおい!雪之丞!大丈夫か!」

「ちよつとこれは想像以上ね」

雪之丞は道場の中にいた。だが雪之丞の姿は氷の中にあり、陰念が慌てて駆け寄り、氷を叩くと簡単に砕ける

「さ、ささささ……寒い!なんじゃあこりゃあ!」

道場の中がまるで雪山のようになっていてのを見て絶叫している雪之丞にクシナは

「お風呂で暖まってきたさい、陰念。多分足が思うように動かないから連れてってあげて」

「判った。つたく、お前何やってるんだ？」

「いや。座禅組んでいただけ……くっしゅ!寒い!」

人に向かつてくしゃみをするんじゃないやねえと怒鳴る陰念とすまんと謝る雪之丞の2人が道場から消え、変わりにツナデ様と三蔵様が姿を見せる

「こりゃ、あいつも普通じゃないみたいだねえ」

「そうね。何時指導するか悩んでいたけど、どうも雪之丞も次のレベルに行く必要があるかもね」

一面銀世界に染まっている道場を見て、頭を抱える2人。陰念に続

いて雪之丞も、自身に宿る異能を受け入れようとしていた……それが  
どんな結果を齎すかは今はまだ判らない

レポート21 死線(デッドライン)のヘルズエンジェル その1  
へ続く

リポート21 死線（デッドライン）のヘルズエン  
ジェル

その1

リポート21 死線（デッドライン）のヘルズエンジェル その1  
「ハッハー!!遅い遅い遅い遅い!!!てめーらの遅さには欠伸が出る  
ぜッ!!!」

炎の車輪を持つバイクに跨ったライダーズーツを纏った骸骨が遙  
か後方から向かってくる2つの光に向かって叫ぶ

「ガツカリだー!ガツカリだぜッ!!!天界で最速コンビって聞いてたが遅  
すぎて話にならねえッ!!!」

バイクの激しいエクゾースト音が骸骨……魔人ヘルズエンジェル  
の怒りを、落胆をこれでもかと示していた

「遅い野郎に用はねえッ!あばよッ!!!」

バイクの前輪を跳ね上げ、炎を地面に残しながら走り去っていくへ  
ルズエンジェル。それから数分後ヘルズエンジェルがいた場所に辿  
り着き膝を着く2つの影……額に大粒の汗を浮かべ、苦しそうに呼吸  
を整えていたのは八兵衛と九兵衛の姿だった

「くっ、くそ!俺が……俺達が遅いだとッ!!!」

「くっ!九兵衛!!悔やむのは後だ!あいつが向かったのは人間界だ。  
追うぞッ!!」

「ああ、判ってる!」

そして八兵衛と九兵衛もまたヘルズエンジェルを追って、人間界へ  
と向かうのだった……

一方横島の家では……

「ふああああ……良く寝たでござる」

布団から這い出て大きくぐぐーっと背伸びをする。せんせーが拙  
者とタマモに二段ベットを購入してくれたがベットはあんまり落ち  
着かず、結局2段の上は拙者とタマモの荷物置き場となり、拙者は慣

れ親しんだ布団で眠っている。タマモはまだ眠っているので、起こさないようにして部屋を出て、顔を洗うために洗面台に向かう

「ん？おはよーシロ」

「おはようでござるー！せんせー！」

朝から大きい声を出すなどせんせーには怒られてしまったが、次の言葉で笑みを浮かべた

「チビとうりぼーの散歩に行くけど、一緒に来るか？」

その問いかけに勿論でござると返事を返したのは言うまでも無い

「はいはい！シロはもつと靈力を意識して、横島は良い感じだからそれを維持して」

蛭もやはり同行していて、自転車で後から追いかけてくる。

（うー判ってはいるんでござるが）

靈力のコントロールはわかっている。だがいざそれをやるとなるとどうしても上手く行かない、知識としては知っている。だが身体がそれについて行かない感じなのだ

「はっはっはッ！」

短く息を吸って吐いて走っているせんせー。最初は小さい差だったが、徐々に、徐々に拙者とせんせーとの距離が開いてくる

「みむー♪」

「ぶぎゆぎゆー♪」

【イヒヒー♪】

せんせーの側を楽しそうに飛び、走るチビやうりぼー、それに見知らぬかぼちゃ頭。狼の姿となれば追いつけるのは判っている

（修行が足りんでござるなあ）

それでは駄目だ。狼としての身体能力に物を言わせたものだ。人化し、人狼としての力を使っても「今」のせんせーに追いつけない。それはせんせーの努力が、修行の成果が形となり、人狼である拙者よりも高い身体能力を発揮できるほどに、靈力を使いこなしていると言う証拠だった……

ランニングのゴールの公園に着くと、横島が大の字になって寝転がり、あーつと呻いている。最近では心眼の補助なしで自分で霊力のコントロールを頑張っているが、私から見てもその精度は非常に高いと言える。元々本能に近い形で栄光の手などを使っている横島だ、霊力のコントロールにおいては私や美神さんを遥かに上回る才能を持っているのだから、後は慣れるだけと言う段階に入ってきている。

「みむむー♪」

「ぶぎゅー！」

公園に着いたので好き勝手に走り回るチビとうりぼーを見ながら、自転車の籠に入れていたタオルを手に取る

「はい、横島。汗を拭かないと風邪を引くわよ？」

「んーありがと」

ふいーつと言いながら座りタオルで汗を拭く横島。その隣のシロにもタオルを渡す

「ありがとうでござる」

女の子らしからぬ力任せの髪の毛の拭き方に少し言いたくなかったが、それは止めた。余計なことは言う物じゃない

「今日はどうする？座禅？それとも組み手でもする？」

「組み手ならせんせー、拙者とー！」

シロの言葉に横島が嫌そうな顔をする。別に組み手が嫌と言う訳では無い、基本的にフェミニストの横島は女性に手を上げるのが嫌なのだ

「あれあったつけ？霊波銃？」

「持って来てるけど、そっちにするの？」

木刀と霊波銃は持って来ているが、今日はノツブが同行してないので指導してくれる人いないわよ？と言う

【主殿、私もいますよ】

「うーん……そだなー、じゃあ今日は木刀にするかなあ」

シロと牛若丸もいるしと言って横島が立ち上がるうとした時

「はいゴール。でもタイムが良くないわね」

「ぜーっぜーっ！ふー鬼！」

「余裕そうね？もう一周……あら？横島君と蛍ちゃんじゃない。おはよう」

クシナさんが私と同じく自転車で雪之丞の後を追いかけて走ってきていた。文字通り追いかけてだ、後からついてくるのではなく、追いかけて無理やり走らせていた

「おー疲れてるなあ。雪之丞」

「横島か、勝負だあ！」「止めなさい馬鹿」ふぐう!？」

勝負だ！と立ち上がった雪之丞の頭にクシナさんの拳骨が落ちる。

白竜寺の力関係は非常に判りやすいわねと苦笑する

「ごめんなさいね、横島君、蛍ちゃん。家の馬鹿弟子が迷惑を掛けるわ」

元が男とは思えないおしとやかさよね。多分生まれてきた性別を間違えたって言うのが一番相応しいかもしれない

「もし横島君さえ良ければ組み手をしてくれるかしら？普段は陰念か私だし、違う相手と組み手をしたって言うのも判らないわけじゃないし」

どうかしら？と丁寧に言われれば、横島も断れない。はあーつと深い溜息を吐きながら

「何時も同じルール。霊力なし、制限時間3分、有効打撃1で終わりですなら良いけど、どうするよ？」

「OK！それで頼むぜ！」

ガバツと雪之丞が立ち上がりフィンガーグローブを装備する。横島も苦笑しながらフィンガーグローブを装備する

「用意は良いわね？じゃあ、試合開始！」

腕時計のタイマーを3分にセットして、2人に声を掛ける。するとやはり何時も通り雪之丞が先手必勝と言わんばかりに拳を繰り出し、寄横島がそれを防ぎ、リズムを取ってある程度の距離を保つ。本当に何時も通りの立ち上がりだ

「あら？貴方初めて見るわね、名前は？」

「犬塚シロでござる！せんせーのところでお世話になっている人狼でござるよー」



よろしくね?と言う穏やかな口調でシロと話をしていたクシナさんが私の隣に座る

「ルールがあるって事は結構組み手してるのかしら?」

「ランニングの時間が重なると殆どしてますね」

私も美神さんも横島の近接能力を高めることに繋がるので、そういう悪い事とは思っていない、横島の調子が悪い時はちゃんと止めている

「みーむー!」

「ぶぎー!」

「ヒヒー」

【主殿!相手の方が攻撃力が高いですから、自分から攻め込まないように!】

チビ達や牛若丸のセコンドめいたアドバイスを聞いて、冷静に距離を取って終始カウンターに徹底する

「うーん。直接戦闘だと、どうも雪之丞が不利っぽいわね。戦績は?」

「雪之丞の0勝利、7引き分け、10敗ですね」

時間切れの引き分けが最近延びているが、基本的には雪之丞が負け越している

「霊能は?」

「とりあえず無しでやってますよ。だって2人の能力を考えてみてくださいよ」

魔装術に Gürp さえも殴り飛ばす右拳。熱が入って、それを使い出されたらどれだけの被害が出るか

「でいやっ!」

「がふっ!」

雪之丞の拳を弾いて、懐に飛び込んだ横島の裏拳が雪之丞の顔面を捉える

「はい!そこまで!」

雪之丞の熱が入る前に割り込み、無理矢理勝負を止める。雪之丞がかなり悔しそうにしているが、今回は勝負に焦れた雪之丞が前に出たからの敗北だ。基本的には接戦だったから、もう少し雪之丞が冷静

だったら危なかったかもね

「じゃ、学校に遅れるから」

横島がそう笑ってきた道を引き返して行くのを自転車で一緒に走りながら

「結構焦ったでしょ？今日」

「うん、正直なー。雪之丞の方が格闘技術上だし」

ちゃんと横島自体は判ってるみたいね。横島が勝ち越しているが、基本的に横島の方が不利な勝負なのだ。だから1発入れれば終わりにしているし、時間制限も設けている。持久戦となるとやはり横島の荒さが目立ってくる

(なんかクシナさん考えていたしなあ)

帰るときに何かを考え込むような素振りを見せていたクシナさんが如何しても気になる。何か新しいルールを考えてきそうだ

「せんせー、明日は拙者と修行するでござるよー」

【主殿、新しい遊びを考えたので是非】

「はいはい、晴れてたらな。今日は学校もあつて、バイクの免許もあるから忙しいんだよ」

「あ、実地試験の日程今日だった？」

うんつと横島が返事を返す。バイクは完成してるから、後は横島の免許だけなのよね

「じゃあ試験頑張つてね。勿論学校も」

私の言葉に判ってるよと若干不貞腐れた様子で返事を返す横島が可愛いと思うのだった……

こちらでお待ちくださいと言う陰陽寮の職員の姿が消えた所でやっとふうつと小さく溜息を吐く、ジークとワルキューレは暫く横島君の護衛を勤めてくれていたけど、やはり魔界正規軍の正式な辞令には逆らえない。昨日の深夜に魔界へと戻ってしまった

「うーん、まあこれは仕方ないわよね」

むしろこれは私の監督不行届と言わざるを得ない。本当ならばG

S協会から頼れる人員を護衛に出すくらいはやらないといけな  
に、それが出来ていないからだ。

「でもく琉璃ちゃんは頑張ってるわよ？」

「でもやっぱり私がもつとしっかりしないとダメですよ」

今回の事も当然私の責任だと思つていますと続ける。陰陽寮の躑  
躑院との会談、どうも冥華さんも自分のルートで交渉していたよう  
で、GS協会と冥華さんの申請だから仕方なく引き受けたという態度  
が目に見えている。陰陽寮の現支部ではなく、旧支部に通された段階  
で私も冥華さんもそれを感じているだろう

「待たせてしまつて申し訳ない。私もそれなりに忙しい物でね」

「いえいえ、こうして会談を開いてくれただけでも十分ですよ」

そう言つて貰えるありがたいと笑う躑躑院だが、その目は全く  
笑つていない。陰陽師の服を改造したと思われる、ふわりとした服。  
髪は短く切り揃えられているが、男とも、女とも取れる髪型だ

(これじゃあ性別わからないわね)

躑躑院は名を明かすことで、呪力の力を受けるといふ名目で本名を  
明かすことは無い、容姿を見ても、服装を見ても中性的で性別が判ら  
ない

「さてとまずですが、この支部に招き入れたのは決して貴女方を下に  
見ているという訳ではありません」

一瞬どの口が言うかと思つたが、その表情から本当の事と言うのが  
良く判つた

「私だけが平安時代の陰陽術を使えると言う事で、当主になつてい  
るのですがね。身内の恥を言うようで恥ずかしいのですが、私の言う事  
を聞かない者が多く困つている所なのですよ」

まあ神代会長と似た様な物ですよと言われるとそうかもしれな  
いと思う。年齢的には私とそう変わらないし

「それで陰陽寮には人形使いはいないのかしら？」

「ええ、陰陽寮には人形使いはいません。それは間違いありません、そ  
もそも今の陰陽寮で人形使いがいればどうなるか判るでしょう？」

G S協会とオカルトGメンで陰陽寮は必要ないのでは？と言う意見も出ている。その中で稀少な人形使いがいるとなれば、ここぞとばかりに大々的に発表するだろう

「古代の技術を持つと言って大々的にアピールするでしょう？まあ、資料は無いわけでは無いので、技術としては何とか現代に復活させようとは思っておりますが、夢のまた夢ですね」

写しでよければ資料をお譲りしますよ？と笑う。その言葉と笑みに思わず混乱する、悪意を感じないのだ

「私としてもこのまま陰陽寮が潰れて消えてしまうのは少しばかり寂しいと思う所ですが、それもまた時代の流れでしょう。古い考えに囚われ、今もなお陰陽寮こそが日本の守護者と言っているような堅物ばかりで正直妄想はいい加減にしろと言いたい所ですよ。六道を筆頭に既に日本有数の霊能者全員が陰陽寮を抜けた所で陰陽寮は衰退する事は決まっておりますしね」

ふふふつと笑った躑躅院。友好的、友好的に思えるが、それすらも罨と思えなくも無い

「陰陽寮が潰れても良いの〜？」

「大して興味はありませんね。躑躅院を更に発展させるとするのは割りりと本気ですが、正直私を頂点に置くのを嫌っている組織に何故私が身を粉にしなければならぬのかと常に思っていますよ」

血だけに拘る古い遺産など滅びればいい、そこまで言い切った躑躅院に驚く、自分の組織だというのに……話からは陰陽寮をとことん嫌っているようにしか思えない、それがミスリードなのか、それとも本当にそう思っているのかわからない

「失礼」

携帯電話の着信音が響き、失礼を声を掛けて鞆から携帯を取り出す「どうかした……なあ!? 魔人嘘でしょ!」

バイクに騎乗した魔人の襲来が告げられ、次の言葉に気絶しそうになった

『バイクの实地試験に参加していた横島忠夫G Sと陰念G Sが追走。陰念G Sは深追いは止めろと言ったようですが、横島G Sは追走。現

段階で消息不明と』

なんでそこで追いかけて行っちゃうのよ！横島君もつと冷静になつて動いてよ……とは言え、横島君の行動は決して間違いでは無いと言いつれないのが辛い。魔人の脅威を知っているから、少しでも情報を集めようと思つて後を追いかけたのは、決して間違いではないと思う。だけど横島君自身も自分の価値と言うのもつと考えて欲しい

「判つたわ、直ぐに戻るから」

もうこうなつたら会談所では無い、もつと色々聞きたい事はあつたがそれ所では無い。早くGS協会に戻つて陣頭指揮を取る必要がある、勿論美神さん達に合流する必要もある、可能なら神族にも連絡を取りたい

「ごめんなさい、会談は次の機会に」

こちらから会談を申しこんでこんなことになるなんて思つても無かつた。正直もう少し話をして、本当の事を言っているのか見極めたり、難しいとは思つたが、GS協会とオカルトGメンと陰陽寮とも提携を組めたらなんて思つていただけに、この魔人の襲来は最悪の展開と言わざるを得ない

「ええ、判つていますよ。どうかお氣をつけて、そして助力が出来ない。私をお許しください」

今はまだ陰陽寮は国家に属す組織となっている。つまり政府の申請が無ければ表立つて除霊出来ない立ち位置にある。私と冥華さんは別れもそこそこに、陰陽寮を後にするのだった

「急いで東京に、早く状況を把握しないと」

「そうねえ、横島君が心配だわ」

なんで横島君がバイクの実地試験の時に魔人が出たのか、そして何故ジークとワルキューレが魔界に戻つた……

(待つて。これつてもしかして貰!?)

魔界で業と発見され、正規軍の2人が呼び戻され、そのタイミングで魔人が出て来た……いや、もしかして2人が戻つた理由がガープ一派が動いた事で2人が戻らされた可能性もある。私は横島君の無事

を車中の中で祈らずにいられなかった……

「さて、道真」

「あいよおくちゃんと状況偵察してくるよ」

まあ姿を見つかるわけには行かないから、人形に行かせるけどねえと笑う。躑躅院は嘘は言っていない。人形使いは陰陽寮には所属していない、躑躅院の専任だからだ。だから陰陽寮には所属してはいないとこの言葉に嘘は無い

「陰陽寮が潰れても良いんですかい？」

「興味ないからな、一応当主と言う事だ。別に陰陽寮が潰れようが、潰れまいが興味は無い。大事なのは躑躅院の家の事だけだ」

さきほどまでの柔らかい表情と違い、冷酷とも言える表情を浮かべた躑躅院はにやりと笑う。自分にとって都合の良い流れになっている、そう言わんばかりの笑みを浮かべた。魔人の出現は確かに日本全体にとっての脅威である、だが躑躅院にとってはそれが好機だった

「まあ今度は前みたいな失態はしないんで安心して待っていてくれよお」

ひらひらと手を振り部屋を出て行く道真を見送り、躑躅院は笑う。それは冷酷で残忍な笑みだった……

レポート21 死線（デッドライン）のヘルズエンジェル その2  
へ続く

## その2

レポート21 死線(デッドライン)のヘルズエンジェル その2  
授業を終え、放課後に予定通りバイクの実技試験に向かっているの  
だが、妙な耳鳴りを感じる

(うーん。なんだろうか……?)

調子が悪い訳では無いがこの耳鳴りが妙に気になる。今日はバイ  
クの試験を止めた方が良さだろうかと思っていると

「うん?」

さつきまでの耳鳴りが嘘のように消える。気のせいだったのかな  
?それとも試験で緊張していただけかな?と思い。俺は教習所に足  
を向けた……のだが

「……」

なんか明らかに外人さんと言う感じの少女が鯛焼き屋をジッと見  
つめている。もう凝視しているといつても良いレベルだと思う

「えっとうかした?迷子?それとも誰か待ってるの?」

ネロちゃんの仕事もあるし、観光客で迷子かな?と思つて声を掛けた  
「……何故あんなに人がいるのか考えていたのです。迷子でも、誰か  
を待っているわけでもありません」

まああそこの鯛焼き屋は美味しいし、人が並んでいるのは結構当然  
なんだよな。実技試験の前に何か甘いものでも食べて、気分を落ち着  
けるといいって蛸にアドバイスされていたし、まだ試験の時間まであ  
るので列に並んで2個鯛焼きを買う

「1個食べる?」

「……食べる?」

いや、なんで疑問系で返して来るんだ?紙袋から鯛焼きを出して齧  
ると、真似をして少女も鯛焼きを齧る

「……美味しい」

「だよなあ、ここの鯛焼き尻尾の先まで餡子でぎっしりだしなあ」

その焼き立てともなれば、人気で人が並ぶのも納得だ。

「じゃあなー」

「……ありがとう」

もそもそとまるでハムスターのように鯛焼きを頬張っている少女に手を振り、その場を後にしたのだが。もしかして迷子と思っただけで実は迷子なんじゃと慌てて振り返り

「あ、あれ？いない……」

目を離れたのはほんの数秒なのに、少女の姿は無い。もしかしてノツブちゃんみたいに凄い幽霊だったのかな？と思い。俺は鯛焼きを齧りながら教習所に足を向けるのだった……

「あのさー？勝手にうろろしないでくれる？と言うか何持ってるのさ？」

「……美味しい」

「あーはいはい、美味しいの。良かったね、でも勝手に動き回らないでくれるかな？怒られるの僕だからさ」

横島に鯛焼きを渡された少女は、金髪の少年に叱られながらも、鯛焼きを食べる手は一切止める事は無いのだった……

「なんか緊張してきたなあ」

講習とかは何度も受けるのに来てるけど、いざ試験の時に来ると全然違う建物に思えるな。2、3回深呼吸して入った教習所には余り人数が居なかった……と言うか、俺しか居なかった

「えーっと俺だけなんですか？」

「いえ、今日は横島さんともう1人だけです。GS免許による特別試験になりますので一般免許とは違うんですよ」

あーそう言えば、美神さんと蛍が言ってたな。GS免許があると、バイクや車などの免許の取得がやりやすくなると聞いていた。試験の前に何度も実技講習も受けているので、基本的なことさえ忘れてなければ落ちる事はまず無い……らしい

「あれ？陰念だ」

「む、横島か」

遅れて入ってきたのは陰念だった。俺を見てやや不機嫌そうな顔だ



「では試験の準備をするので、最後にもう1度確認をしてください」

試験官が退室し、俺と陰念だけが部屋に残される。何とも言えない沈黙が待機室に満ちる、何を言えば良いのか、話題が何も無い

「……あの時は助かった。礼を言う」

「え、えーつと？」

GS試験の時だと仏頂面で陰念が言う。そんな前の事を言われても……つと言うか

「陰念も持ってるのか？」

眼魂を取り出して見せると陰念はポケットから赤と青の2色の眼魂を取り出し

「俺は霊能者としてはこれが無いと活動できないんでな。持ち歩いてる」

「いや、俺が聞きたいのはそうじゃなくて」

なんでベルトを持っているのか？つて聞くと陰念は首をかしげながら

「俺はお師匠様から貰っただけだ。何処から持って来たのかとかは知らない」

三蔵ちゃんが……うーん、どこからベルトを持って来たのだろうか？

(もしかして優太郎さんかな?)

元々は俺のベルトも優太郎さんが作ったと聞いているし、もしかして研究して優太郎さんが作ったのだろうか？

「それよりもだ。話をしていて、良いのか？試験に落ちるぞ？」

「う。それもそうだな……」

とりやすいように援助があると聞いているが、それで落ちてしまつたら余りに情けない。

「横島さん、準備が出来ましたのでどうぞー」

本を開こうとしたら、名前を呼ばれ泣きそうな気分になりながら、俺は待機室を後にするのだった……

待機所を出て行った横島。まさかこんな所で出会うなんて思っていなかったので、何を話せば良いのか全く判らなかつた

(GS免許による中型二輪の免許取得制度か)

GSと言う職業につけば足は必要になる。電車やタクシーでは現場に行くのに時間が掛かる、だからバイクや車の免許を取るのには程度援助が入る制度だ。除霊中とすればある程度の信号無視などは許されるが、それにかこつけてめちやくちやすれば、勿論GS免許も中型二輪の免許も両方とも停止になる事もザラだ。

(まあある程度は大丈夫だろう)

試験を済ませ、実技の講習も何度も受けている。よほど無茶をしなければまず間違いない合格だろう、そもそも霊能関係で身体を鍛えているのでバイクを起こすなども何の問題も無く出来る。1時間ほどで横島は待機所に戻って来て、直ぐに俺も呼ばれ、横島と入れ違いで俺も実技試験を受けるのだった

「免許の取得って結構時間が掛かるのかな？」

「その日のうちに取れる」

合格発表を待つまでの間に横島がそう話しかけて来る。何か話題を見つけようと必死の様子だな、とは言え、俺も何を話せば良いのか判らないのでどうしても黙り込んでしまう。そんな感じで10分ほど過ごしていると、俺の思った通り俺も横島も中型二輪の免許を取得出来た

「合格となっておりますが、普通の運転とGSの方が必要とされる運転技術は異なるので、こちらの特殊運転技術講習施設の教習をお勧めします」

差し出されたパンフレットを受け取り、目を通そうとした時。教習所から凄まじい爆発音が上がる

「ハッハーツ!!!」

高笑いしながら炎を撒き散らすバイクに跨った男。どう見ても普通じゃない、かなり距離が離れているのに、その男は俺と横島を真っ直ぐに見つめ、挑発するように手招きし、ウィリーをして走り去っていく

「すいません！バイクとヘルメット借ります！」

「ちいつ！いきなりなんだよ！」

どう見ても普通じゃない、倒すとまでは言わないがある程度の情報は必要だ。俺達は教習所のバイクを借りると叫び階段を駆け下りる「すいません！美神さんの事務所かGS協会に連絡お願いします！」  
「は、はい！無理をしないでください！」

判つてますと返事を返す横島よりも先にヘルメットを着け、俺は炎を撒き散らすバイクを追いかけてバイクを走らせるのだった

(ちいつ！速い！)

教習を終えたばかりだから、俺も横島もバイクの運転技術はかなり荒い、減速と加速を繰り返して挑発するような動きをするライダーに苛立ちを覚える

「ハッハー！おいおい！俺を追いかけてきたんだろう！もつと飛ばして来いよ！そんなんじゃ俺には追いつけねえぜツ！」

挑発するように叫ぶ男。もつと飛ばして来いと言うが俺も横島もバイクの速度は70を越えている、それなのに距離は全く縮まらない「ちつ！横島！これ以上は無理だ！引くぞツ！」

どう見てもこれは罠だ。その気になれば、俺も横島も完全に引き離す事が出来るのに一定の距離を保っている。それはどう考えても罠だ、今もこうして追いかける事が出来ているのは炎がアスファルトに残っているからだ

「もう少しだけ追いかけてみる！」

「おい！馬鹿！状況を冷静に考えろ！ここは引くんだツ！」

どう考えても罠。それなのに何の対策も無く突っ込んでいく馬鹿がどこにいる！そう叫ぶが横島は更にバイクを加速させていく

「アーイツ！シツカリミナー！シツカリミナー！！」

「待て！本当に止めろ！！」

横島の隣を追走するように飛ぶパーカーを見て本当に止めろと叫ぶ。あの馬鹿変身してもつと加速して追いかけて行くつもりだ！

「変身ツ！」

「カイガンウisp！アーユーレディ？」

「イヒ？」

少し困惑した笑い声が響き、横島がバイクに乗ったままパーカーに向かつて行く

「Ok！レッツゴーッ！イ・タ・ズ・ラ！ゴ・ゴ・ゴーストツ!!!」

変身したことで筋力が増し、加速で暴れていたハンドルを無理矢理捻じ伏せ加速していく。もう風切り音で引き返すぞという俺の声も届かない。いや意図的に無視している可能性もあるが

(ちいつ！駄目か)

教習所のバイクを借りてきたが、あくまで実技試験用の物だ。ガソリンは満タンじゃない、もう俺には追いかけて行くだけの足が無い  
「くそがッ！雪之丞と同じ性質か！」

もう少し冷静な奴だと思っていたが、そうではなかったようだ。どうも頭に血が上るとそれ以外を考えられないタイプと見て間違いない

(こっからだど……小笠原ゴーストスイーパーオフィスか)

とにかく給油するにも金が無い、誰でも良いから横島の後を追いかける事が出来る人物に声を掛けるしかない、俺はそう判断し、バイクを反転させ小笠原ゴーストスイーパーオフィスへと向かうのだった

……  
別方向へ走っていく陰念のバイクを見つめる視線。暫くその方角を見つめていた何者かは、横島達が走っていった方角に視線を向け、建物の上から上へと飛び移り横島の後を追いかけて行くのだった

……  
あの炎を撒き散らすバイク。それを見てから頭痛と耳鳴りが収まらない。それに上手く説明出来ないのだが、霊力が上がっている様な気がする。変身したことで空気抵抗が気にならず、更にバイクを加速させることでやっとその姿を視界に収める事が出来た

「ハッハー！良いぜ良いぜ！もつと来い!!!」

逆立った金髪にライダースーツの男。吊り目でかなりいかついが、年齢は20代後半くらい

(これはどっちだ？幽霊か？それとも呪われた何かとかか？)

戦うつもりでは無いが、生身では到底追いつけないと思い変身した。だから観察する余裕が生まれたが、乗っている男が幽霊なのか、それともバイクかライダースーツが呪われていて……

「くっ!?」

男が片手をこっちに翳した瞬間。そこから火の玉が飛び出してくる、加速がついているのに急にハンドルを切ったのでバイクが右へ左に揺れるが、それを何とか制し、アクセル開けて、エンジンの回転数が上がってきたら加速する。

(ここはどこら辺だ)

闇雲に追いかけてきたが、周りに人の姿は無い。俺が今どこら辺を走っているのかも判らない

「ハハハーツ!!考え事をしている場合じゃねえぜ!ええ!同胞よツ!!」

いつの間にか減速してきた男が高笑いしながら同胞と呼んだ

「お前は魔人か!?!」

俺を同胞と呼んだのは、マタドール、そしてだいそうじょうの魔人だけだ。だからお前は魔人なのかと叫ぶと男は逆に不思議そうな顔をして

「あん?気付いて追いかけてきたんじゃねえのか?あの頭のかてえ騎士さん達の命令じゃねえのか?」

その男から告げられた言葉が理解出来なかった。少なくとも、魔人には騎士と呼ばれる連中がいると判っただけだ。俺の横を追走していた男は変身している俺をマジマジと観察し、何かを理解したように笑い出す

「ははあ。まだ完全には目覚めてねえ口か、感応が起きるから完全に覚醒したと思っただぜ」

男はそう笑うと炎を纏いながら加速していく、バイクの車輪が炎に染まり、男の顔が骸骨へと変わる

「なら改めて名乗ってやるぜ!俺はヘルズエンジェル!死線(デッドライン)のヘルズエンジェルだ!覚えておきな!」

炎を撒き散らしながら姿を変えた男……いや、ヘルズエンジェル。その凄まじい熱量に変身してなければ近くにいるだけでも大やけどだったと悟った

「そらそらー…どうしたどうしたあ!!」

「くっ!」

俺の前を蛇行するようにして進路を徹底的に妨害してくる。このまま振り切ろうとすれば振り切れるのにそれをしないのは、何かヘルズエンジェルの考えがあるのだろうか、俺には返事を返す気力も無い。この加速、そして熱さに体力と集中力が同時に削られていくからだ……

「そらよっ!」

「うわっ!?!」

急に反転したと思ったたら前輪を跳ね上げて体当たりを仕掛けてくる。反射的にブレーキを掛けたが、この加速ではブレーキなんてろくに利くわけも無い、車体が左右に振られ、思わずバイクから投げ出されそうになるが、それを腰を浮かせて下半身と上半身の力で何とか耐える

「オラオラー!そんなんじゃあ俺について来れねえぞッ!」

「ぐっ!この野郎ッ!!」

後輪で車体を横から殴られ、大きくバランスを崩すが意地で何とか踏み止まり、ヘルズエンジェルの真似をして前輪を跳ね上げて体当たりを仕掛ける

「はっ!そんな弱いバイクで俺に勝てると思ってるのかよッ!!」

後輪を跳ね上げた一撃で簡単に弾き飛ばされ、クラッシュしかけるのを堪えたが今の一撃で車体が溶け始めている事に気付いた。鉄が溶ける異常な温度……生身では到底耐えられる温度では無い

(ぐっ!もう駄目か!?)

エンジンにも不具合が出ているのかスピードが上がらない、アクセルを開いてもうんともすんとも言わない。それ所かハンドルもブレーキも元にも動いてはくれない

「ま、顔合わせだ。こんなもんだらうよ、今度はもつとましなマシンで

追いかけて来な!!ヘルエキゾーストツ!!」

ヘルズエンジェルがバイクを大きく反転させながら停車したその瞬間。空気が爆発しながら迫ってくる、避けなければ!そう思ったのだが、この加速の中で、しかももうまともに動かないバイクでそんな運転なんか出来るわけが無い

「う、うわあああッ?!?!」

爆発する風の中に真正面に突っ込み、バイクの爆発と、ヘルズエンジェルが放ったであろう技の爆発に大きく弾き飛ばされる。

「ぐはっ?!」

【オヤスミー】

背中から何かにぶつかった衝撃で意識が遠のいて行く、走り去るバイクのエンジン音とヘルズエンジェルの笑い声。それだけが薄れていく意識の中、やけに耳に残るのだった……

除霊の出発する寸前に琉璃とエミからの連絡で横島君が魔人らしき物に遭遇。その後追いかけて行って行方不明と聞かされ、依頼の日程をずらしてもらい

「それで横島君は何処まで確認出来るの!?!」

『海辺に向かっていたって一緒にいた陰念が教えてくれたワケ!今アスファルトの破損の後を追って横島を追いかけてる』

何でバイクの免許の実技試験に行つて魔人に遭遇するのよ!と心から叫びたかった

『とりあえずなんか判つたら連絡する!オタクは大人しくしてるワケ!』

横島君の事は心配だが、今ここで私と蛍ちゃんが動いて連絡がつかないと不味いと言う事だろう。携帯の番号だけを伝えられ、それをメモするとエミからの通話は切れた

「……横島は?」

「今エミとGS協会で痕跡を頼りに探してるみたい。私達は動かないでつて」

蛍ちゃんがぐつと唇を噛み締める。私だつて今直ぐにでも追いか

けて行きたいが、エミも琉璃も馬鹿じゃない、海の方とだけと言って詳しい場所を教えてくれなかった。これではとてもではないが、探しようが無い。シズクとタマモに伝えなかったのは、間違いない。また崇り神のようになられては困ると思う事だろう。でも海の近くなら、シズクの方が探すのに適していると思うんだけど

「海の水を吸収して大蛇になったらって事じゃないですかね？」

「日本終わるわね」

横島君の生死が日本の今後に直結する。何を馬鹿など言い切れない所が辛い、早く琉璃やエミが横島君を見つけてくれないかと焦りばかりが募っていく中

「み、みみ！美神さん！あ、あの！よ、横島さんが！見たこと無い人に背負われて」

おキヌちゃんがパニックになりながら、私と蛍ちゃんに叫ぶ。それを最後まで聞かないで応接間を飛び出して事務所の出入り口に向かう

「美神令子除霊事務所と言うのはここで良いのか？この男のGS免許に書いてあったから連れて来たが」

ぐったりとした横島君を背中に背負っている。紫色の髪と赤い何処かの民族衣装だろうか？それを着た男性と思ったのだが

(違う、女だわ)

美青年に見えなくも無いが、身体つきが丸い。胸は何かで潰しているのかもしれないが、男性ではなく女性だと判った。だが男装をしている女性が何者かと思うよりも先に、その女性の背中に背負われている横島君の寝顔を見て安堵してしまった

「よ、よかったあ……横島が無事だった……」

「良かったです。本当に良かったです」

見た感じ大した怪我をしている訳でも無い。意識を失っているだけのその姿に心底安堵し、蛍ちゃんと揃ってへたり込んでしまうのだった

「それで何時まで私はこうしていれば良いのかな？」

柔らかい笑みを浮かべながらそう尋ねてくる女性の言葉に我に返



り、すみませんと謝ってから立ち上がる

「ありがとうございます、どうぞこちらへ」

エミと琉璃が探しに出る前に、近くで倒れている横島君を見つけて連れて来てくれたのだろうか？とりあえずエミと琉璃に連絡するのも大事だが、まずは横島君を横にして、ここまで連れて来てくれた女性に礼を言わなければならぬ。それにどういふ状況で横島君を見つけたのか、それも聞かせてもらふ必要があると思ふ。私はその女性を事務所の中に招き入れることにした

「ああ、そうさせてもらふよ。幾らなんでもずっと背負っていると私とて辛い」

170cmほどで女性としては高身長だが、意識を失っている横島君をずっと背負わせている訳には行かない。横島君を連れて来てくれた女性に丁寧な礼を言いながら、私と螢ちゃんは事務所の中にその女性を招き入れるのだった……だがこの時私も螢ちゃん、そしておキヌちゃんもも気付かなかった、いや、行方不明という横島君が見つかったという安堵で警戒心が緩んでしまっていたのだ……事務所に入った時その女性の口元が弧を描いた事に最後まで気付く事が出来なかった……

リポート21 死線(デッドライン)のヘルズエンジェル その3  
へ続く

### その3

リポート21 死線(デッドライン)のヘルズエンジェル その3  
事務所の横島の仮眠用のベッドに横島を寝かせ、横島を連れて来てくれた女性に美神さんと共に視線を向ける。赤を貴重にした民族衣装のような服装に短く切り揃えられた紫の髪。パツと見男性に見えるが、良く見ると喉仏が無く、そして身体つきも丸い……最初は横島を助けてくれたからと思っただが、今こうしてみるとおかしところしかない

「あ、あのー紅茶です」

「ああ。ありがとう、私は紅茶が好きでね」

おキヌちゃんが私達に紅茶を差し出してくれる。目の前の女性はそうあることが当然ともいう態度で紅茶を口に含む。私達も紅茶を口にする

(救急車とか他にもやる事はあつたはず)

普通なら救急車か、GS協会に連絡を取るはずだ。それなのにタクシーで横島を背負ってきた、そこに違和感を如何しても感じる

「あ、美神さん。連絡はつきましたか？」

「ええ。とりあえず周辺の捜査が戻ってくるらしいわ」

目的は横島を見つucker事だったから、横島がここにいる事は伝えなければならぬ。美神さんは私の隣に座って、紅茶を口にしているが、その目は真剣と言うか非常に鋭い。多分私の考えている事は全部美神さんだっと思いついているだろう

「まずは助手を助けてくれてありがとうございました」

「いや、偶然通りがかっただけだよ」

倒れている相手を無下には出来ないだろう？と笑う女性に美神さんは小さく深呼吸してから

「横島君を見つけたのは何処ですか？」

「海辺の工事現場の近くだったかな？急に爆発音がしてどうしたかな？っと思っただけ外に出たら黄色い何か飛んでいくのを見たんだ」

黄色い何か……つまり横島は変身することを選んだと言う事だろう。とりあえず嘘は言っているようには思えないが……本当の事を言っているようにも思えない。それに視線に私と美神さんを観察するような色が浮かんでいるのも気になる

「では……」

美神さんが更に何かを尋ねようとした時、仮眠室の扉が勢い良く開く

「横島君!?!落ち着きなさい!?!どうしたの!?!」

「横島!?!もう大丈夫だから!?!」

【横島さん!?!落ち着いてください!?!ここは事務所ですよ!?!】

腰にベルトを巻いて、眼魂を握り締めて現れた横島。慌ててソファから立ち上がろうとしたが、横島の次の言葉に完全に停止した「あんたが何でここにいる!?!マタドールツ!!!」

マタドール?その言葉に絶句し、反対側のソファに座っている女性に視線を向ける。女性はカップを机の上に置き、長い足を組みながら、信じられない威圧感を放ち始める

「流石だ、ニーニョ。良く私だと判ったな、それとも感応能力かな?」

「良いから答えろ!?!マタドールツ!!!なんでここにいるツ!!!」

ニーニョ、そしてその口ぶりと威圧感は香港で戦ったマタドールの物で、背筋に冷たい汗が流れる

「そう怒鳴るなよ。助けてやったじゃないか、あのまま気絶していたら、爆発するバイクに巻き込まれていたぞ?」

激昂している横島に対して、そんなに怒るなよと肩を竦め紅茶を口にするマタドール。横島はその言葉に苦虫を噛み潰したような顔をする

「ぐっ……」

横島自身が気絶していたことを把握していたのか、軽い口調のマタドールに言葉に詰まる

「座りたまえよ、私が殺す気ならもう死んでいるだろう?私は話に来たんだ。ま、軽い暇つぶし程度だがね」

それに良い茶葉を楽しもうと思っっているのに、何故殺し合いを望む

のか判らんよと言われ、私達は引き攣った顔のまま腰を下ろす

「そう、それで良い。後もう少しだ、あと少し待ちたまえよ」

マタドールがそう笑って数分後。応接間の扉が開き

「大丈夫ですか!？」

「やあ、戦乙女ブリュンヒルデ。数百年ぶりだ」

ブリュンヒルデさんが完全武装で飛び込んできたのだった……完全に警戒態勢のブリュンヒルデさんに対し、友人に声を掛けるかのように気軽な素振りのマタドール……状況は最悪だ。マタドールにとって私達は人質で、ブリュンヒルデさんはそれを助けに来たと言う状況なのだから……

鮮血のマタドールとは以前対峙した事があった。だから私は気付いてしまったのだ、美神さんの事務所にマタドールがいる事に

「そんなに怖い顔をするなよ、私は戦いは好きだが……気分じゃない時も稀に、うん、ごく稀にある」

マタドールはカップに紅茶を注ぎ、私に差し出してくる。私は鎧を解除して、ソファアに座りながらカップを手にする。だが私とマタドールの魔力で応接間の磁場が乱れて、おキヌさんの姿が消えてしまった

「そうそれで良い。判らないわけじゃないだろう?」

ここで戦いになれば、瞬きする時間も与えられず美神達は殺される。今この場の支配者はマタドールだ

「さてなんの……ああ、そうだったな。ニーニョ、私がマタドールだと感じたな? 目で見るのではなく、霊力で感じるのでもなく、私だと理解したな?」

マタドールの視線が横島さんに向けられる。横島さんが顔を歪めるを見て、マタドールは楽しそうに笑う

「力が増して来ているのだよ。魔人は魔人が判る、くつくつく……お前は私達に少し近づいているのさ」

横島さんが未熟な同胞と呼ばれ魔人に近い存在になりかけているのは判っている。だがこうして面と向かって言われると嘘だと言い

たくなる

「感知されたくなければ、己を自覚しろ。人間である己をイメージしろ」

「……なんでお前の言う事を」

「別に聞かなくても良いさ、だがその場合、四騎士がお前の所に来るぞ？」

四騎士……その言葉を聞いて、私は横島さんのほうに視線を向けて「今は言うとおりにしてください、お願いします」

「聖奈さん……はい」

横島さんが私の言葉に領き目を閉じる。意識を集中させているのだろう

「聖奈、もしかして四騎士って」

「はい、ヨハネ黙示録の四騎士です。あれらを相手にするのは私一人では不可能です」

1対1ならまだしも、4対1となれば勝機があるとは思えない。それぞれが最上級に匹敵する力を持ち合わせているのだから

「あれ？」

「そう、それだ。魔人は自らの生前を思い出す事で魔人の力を抑える。無意識に垂れ流しては魔人を呼び寄せることになるぞ」

応接間に満ちていた威圧感が少し和らいだ。マタドールだけではなく、横島さんも無意識に魔人としての力を発していた

「横島君は魔人になるのかしら？」

「さあ？今の段階では判らんよ。ただ同胞となるべく素質は秘めているとだけ言っておくかな」

横島さん〓魔人では無いことに安心したが、今はまだ判らないという言葉に全員の表情が曇る

「それでマタドール。何故横島さんを助けたのですか？」

「何スピード馬鹿が暴れているのを感じただけだ。横島が追いかけているのを見て、どれほど力を付けたか見てみるのも面白いと思ったからだな」

だがまだまだだったかと笑ったマタドール。その姿に殺意や敵意

などではなく、今なら話を聞けると思ったのだが、マタドールは指を出して

「質問は1人1回だ。今は気分が良いから答えてやろう。良く考えて口を開くのだな」

上機嫌で紅茶を口にするマタドール。魔人を相手に友好的にお茶会なんて冗談では無いが、話を聞けるこの機会を手放すのは余りに惜しい

「魔人姫は今日本に居るのですか？」

居ないで欲しい、そう願って尋ねたがマタドールの返答は私の願いとは異なっていた

「居るな、今はふらふらしているようだが、あの我侷姫だ。何時暴れだすか判らんぞ？」

くつくつくつと喉を鳴らすマタドール。魔人姫が日本に居る……出来ればいないで欲しかった

「魔人姫の容姿は？」

「流石にそこまで言うものか、自分達で探せ」

まあ人間態の姿でフラフラしているから案外どこかで会っているかも知れないぞ？と言われ、美神と螢さんの視線が横島さんに向く。人外との遭遇率を考えるとありえなくもないが……藪を突いてなんとやらとも言おう。下手に触れるべき話題では無いだろう

「マタドール。貴女は魔人一派として活動しているのかしら？」

「いや？私は離反した。今よりももっと強くなるであろう横島を見ている方が面白いからな」

マタドールは今魔人一派に属していない。そうだとしてもマタドールは香港で封印を解除された時よりも遥かに強いだろうからあ、それは何の救いにもならないが……集団で動いて居ないと言うだけでもありがたいと思うべきだろう

「追っ手とかはいるのかしら？」

「まず無いな。魔人姫は我侷で面白ければ良いと言う性格だ。態々追っ手を出すほど無いと考えているだろうさ」

そもそも神魔と戦った時だって暇つぶしで、封印されたのだから飽

きたという理由だ。軽い感じで告げられた言葉に殺意を覚えた、魔人との戦いで何人の神魔が死んだか、どれだけの被害が出たと言うのか、それを暇つぶし、飽きたなんて理由で終わったとすれば殺意を覚えずには居られない

「ヘルズエンジェルは何が目的なんだ？」

「速い奴を襲うよ、あいつは速さを極めることしか興味が無いからな。魔人姫も御すことが出来ない相手だ」

速さ……つまり民間人の被害を抑えたければ、車やバイクなどのスピード制限を徹底する事か、囷となる物を用意することが対策になるだろう

「さてと、ご馳走様。良い茶葉だったよ、ではまたいずれ、素晴らしい闘争の場で会おう」

窓を空け、軽い感じで飛び出したマタドールの姿が無く、大きく深呼吸をした。それは美神さんや蛍さんも同じで、この場で戦いにならなくて良かったという安堵からの物だった……

マタドールとお茶会と言う恐ろしい緊張感の中での30分は途方も無く長い時間を感じられた

「はーやっと姿を現せました」

磁場が歪んでいて姿を現すことの出来なかったおキヌちゃんの疲れたような言葉に、やっとこの場の緊張感が緩んだ

「蛍ちゃん、タクシーを下に呼んだから横島君を家に連れて行ってくれる？その後出来たら横島君の様子を見ていてくれるかしら？」

蛍ちゃんに横島君を連れて帰ってくれるように頼む。マタドールが居ると言う事で何とか意識を保っていたようだが、マタドールの姿が消えると、意識が朦朧としているのが判る

「待って……ヘルズ……エンジェルの回り……」

何かを伝えようとしてくれているのは判る。多分追いかけて横島君が入手した情報だろうけど、今は自分の身体を休めることを考えて欲しい

「今は動かないからまず休みなさい。マタドールの話もあるし」

速さに拘る魔人らしいから特殊警戒態勢を取ってくれるように琉璃やオカルトGメンに話す必要がある。私だけでは信用されない可能性もあるので聖奈には付き添ってもらおう必要がある

「ほら、横島行くわよ」

「う、うん……」

【私も付き添いますね】

完全に意識を失っている人間を運ぶのは凄まじい重労働だが、なまじ意識を保っている人間を運ぶのはなお大変だ。おキヌちゃんにも付き添うように頼み、私は聖奈と共に事務所を後にした。対策本部としてGS協会が設定されたと聞いたので、コブラで急いでGS協会へ向かう

「美神さん、横島君の様子は？」

対策室と銘打たれた会議室には、琉璃、冥華さん、エミ、ブラドール伯爵、ドクターカオス、西条さん、そして教授の姿があった

「マタドールが横島君を助けたみたい。傷は大したこと無いわ」

マタドールの言葉に会議室にざわめきが広がる、魔人が2柱同時に動いていると思ったようだ

「そうじゃなくて、なんか同類が居るのを感じて見に行ったら、横島君が倒れてたから連れて来たって、紅茶飲んで消えたわ」

「美神さん達が人質に近い状況でしたので、見ていることしか出来ませんでした」

ここに来るまでに話したが、横島君が魔人に近づいている事は口になかった。これは私達の中で黙っておこうと思ったのだ

「唐巢先生とくえすは？」

ここに居てもおかしくないのと思いどうしたの？と尋ねると琉璃が教えてくれた

「唐巢神父は除霊に出っていたので変わりの助っ人としてブラドール伯爵に来て貰いました。くえすは……横島君が見つかったって聞いたなら出て行きました」

ああ、絶対家で鉢合わせしてるわね。喧嘩とかになって無いと良い



けど、そう思いながら私と聖奈も会議場の椅子に腰を下ろすのだった。「周辺の搜索をした結果だけど、周囲の温度が異常に上昇していた。もしこれが魔人が疾走した後の被害だとすれば、街中で走られたらそれだけで重軽傷の人間が多発する事になる」

「アスファルトも溶けていたし、横島君が乗っていたバイクも溶解していた点から、まず人間が耐えられる温度じゃないだろうねえ」

西条さんの説明を教授が補足する。それだけの熱量を出して走り回る魔人……ああ、これは伝えておかないと

「暴れている魔人はヘルズエンジェル。速さを追求する魔人らしくて、もし出来るならスピード制限とかを徹底できないかしら？」

「……一応公安に話を通しておくけど、難しいと思う」

そりや難しいのは判るけど、スピードを出していたら魔人に教わるリスクを上げることには直結する。多少難しくてもやらないといけないだろう

「オカルトGメンとGS協会が叩かれる原因になりますね」

「厄介な相手ね〜」

ヘルズエンジェルを何とかしないとイケないのだが、対策が出来る前に被害者が増えると言うのは何ともしても避けなければならぬ

「うーむ。スピードを出せば良いなら、デコイで何か作ってみるかの？」

「我の魔術も合わせれば車やバイクなど比にならぬ速度の物が作れるだろう」

とりあえずはドクターカオスとブラドー伯爵の発明で何とか凌ぐしか無いだろう。西条さんは携帯を持って会議室を出る、恐らく警察に話を付けに言ったのだろう

「それとエミ、助かったわ。1番最初に横島君を追いかけてくれたのよね」

「陰念が駆け込んできたからね。除霊に出る前で良かったわ」

結果的にマタドールに助けられたが、その前にエミが追いかけたことには感謝しかない。

「それと本当に嫌な情報だけど、マタドールが教えてくれたわ、魔人

姫って言う魔人のリーダーが日本に居るって」

マタドールからの情報だけど、あの顔は本当の事を言っていると思った。だからそのまま伝えた

「最悪すぎますね、魔人全体が日本に集まってるってことですよね？」  
最上級神魔に匹敵する存在が日本に居る。何時爆発するか判らない爆弾を抱えているようなものだ

「ブラドール伯爵、もしかして魔人姫の特長とか知りませんか？」

「……いや流石の我も知らぬ。そもそも我は魔界や天界とはあまり繋がりが無い」

古代の地球の情勢などは知るが、さすがに天界や魔界となると判らないとブラドール伯爵は言う

「じゃあ美しい戦乙女殿。何か知っているのでは無いかな？」

「わ、私も詳しい事は、最上級極秘機密になっているとしか……お父様なら何か知っているかもしれません」

魔人の存在自体が神魔にとっては忌むべき存在。だから情報は殆ど無いってのが現状みたいね

「目撃者によると、バイクに騎乗した存在らしいですが熱量自体を武器としていると見て間違いないですね」

「ちよつとく戦うには厳しい相手ねえ」

まず魔人の速度についていけなくては話しにならないが、その熱量がまず課題として立ち上がり、次にスピードが課題になる

「ドクターカオス。仮にだけど、熱量対策とスピードを両立出来る物を用意出来たとして準備はどれくらい必要なワケ？」

「……そうじゃなあ、最短で1ヶ月かの」

1ヶ月も魔人を野放しにすることは出来ないし、何よりもその間にガーブ達が現れる可能性を考慮するととてもでないが私達にそんな時間は無い。琉璃や冥華さんの視線が私に集まる

「横島君と陰念しかないってことね……？」

バイクが破壊されてしまったが、ある程度追いかける事ができていた横島君と陰念。その2人の共通点は1つ、ゴーストドライバーと眼魂だ

「そうなりますね。また横島君に負担を掛ける事になりますね……」  
「じゃがバイクを改造するだけならば、それほど時間も掛からないが……」

確かにそれが一番最善の一手となるだろう、だが琉璃もドクターカオスもエミもブラドール伯爵も致命的なことを一つ忘れている

「横島君と陰念は今日バイクの免許を取ったばかりなのよ？走らせるのでやっただわ」

バイクで格闘戦をこなすヘルズエンジェルを相手に素人がどこまで喰らい突けると思う？と問いかける。多分今回追いかけたのだからやっとの事だったはず。それだけ騎乗の腕に差があると言うことを理解している？と問いかけると琉璃達が黙り込んだ。そこまで考えていなかったというのが見え見えだ

「……少なくとも私は無理だと思います。魔界で有名な騎乗兵と競り勝っていた相手ですし」

「その道のプロに素人が挑むのは無謀を通り越してるねえ、しかも相手が相手だ。ろくに抵抗できない可能性が高いよ」

横島君と陰念に負担を掛けるのは嫌だとしても、対策としてはありえる。だが問題はそこでは無い、2人のバイクの騎乗技術。それがヘルズエンジェルを相手にするには致命的に欠陥しているのだ

「私は直ぐに横島君と陰念を戦わせるのは反対だわ」

下手をすれば2人が再起不能になりかねない。だってそうだろう？神魔でも名のある騎乗兵を何人も打ち倒し、さらにはアスファルトを溶解させるような熱量を放ちながら走る相手を追いかける。まず追いかけるだけでも信じられない程疲労するだろう、それに加えて支援も無く2人で対処しなければならぬ。仮に勝算があっても賛同したくないのに、勝算が無い今ならば尚の事賛同出来る訳が無い

「ビュレト様が非常に優れた騎乗の腕を持っているので、指導して貰うのはありだと思いますが」

「付け焼刃でどこまで対応出来るかよね」

「いやそれ以前にまずバイクの強化も必要じゃ。相手に追いつくだけの加速力と相手の熱でバイクが破損しないようにするのも必須じゃ」

「……なんにせよ。今は何も出来ないってワケね」

今回の会議で判ったのは今の段階では何も対処する術が無いと言  
う事だけで

「とりあえず高速道路だけは閉鎖と、車の速度制限は話を付けれた  
……なにかあったのかな？」

西条さんがなんとか掛け合って、高速道路の閉鎖と速度制限をさせ  
ることに成功した。それだけが今の所の目に見える成果だった……

リポート21 死線（デッドライン）のヘルズエンジェル その4  
へ続く

## その4

リポート21 死線(デッドライン)のヘルズエンジェル その4  
美神さんの用意してくれたタクシーで横島の家に戻ったんだけど、  
丁度と言うか、多分確実に周囲で待ち伏せしていたくえすに遭遇した  
「また魔人に出会ったと聞きましたが、大丈夫でしたか?」

多分大丈夫と返事を返す横島の頭を叩く、ベルトと眼魂を使ったの  
に平気な訳が無いと怒鳴る

「ええ、それならば蛍のいうとおりでしょうね。後で話を聞かせてく  
れますか?」

あー多分あれね。横島が見つかって会議を飛び出してきたのね  
……私もあんまり詳しく把握しているわけじゃないけど、ある程度は  
把握しているのでわかる範囲でと言って家に入ろうとすると扉が開  
き

「シズクー!センサー!センサーが帰って来たでござるよ!」

「……本当か!」

横島を探す為に出発しようとしていたのか、完全武装に近い姿を見  
て良いタイミングで戻って来れたと安堵した

「……途中で横島の気配を探せなくなって、探しに行こうとしていた」  
「最初はバイクの試験だと思ってたんだけど、なんかどんどん遠くに  
行くし」

横島と魂で繋がっているシズクとタマモは徒中までバイクの試験  
だと思っていたらしい、所が途中で横島の気配が感じられなくなって  
焦っていたと

「拙者とうりぼーの嗅覚で探そうとしていたでござる」

「ふぎゆうー!」

……横島の警備体制が凄い事になっていると思う。と言うか、皆め  
ちやくちや過保護だと思っ

「ふーむ、今回は眼魂を使ったようだが、どうも中途半端な形だったよ  
うだ」

今回はバイクの試験と言う事で心眼を置いて行ったわけだ。心眼の目がバンドナに浮かび上がり、やや疑問系の声で告げる

「「え？」」

横島の状態を見ていた心眼の言葉に思わず間抜けな声が出てしまった。

【私を置いて行ったから、上手くドライバーを召喚出来なかったという事だと思う。だから横島への負荷も少ない】

【えーっとそれってつまり心眼さんがベルトを出さなければ、横島さんへの負担が少ないってことですか？】

それは良く判らないが、少なくとも普段よりも反動は少ないと思うぞと心眼が呟く

「んー確かに普段よりあんまり身体痛くないかな？」

【ノーブー】

チビノブが差し出した湯飲みを受け取り、ズズーっと啜る横島。確かに普段と比べて平気そうだ

【いや、それ逆に横島の霊体が強くなってるだけじゃね？】

【確かに私もそう思います】

中途半端な変身だったという心眼と、横島の霊体が強くなっているのでは無いか？と言うノツブと牛若丸。どっちも正論っぽいので

「とりあえず、横島は横になりましょうか？」

「……チビノブ、布団」

【ノツブー♪】

とりあえず話には参加させるけど、横島は横にしようと言う事が決まった。なお、この布団はリビングに横島用に配置された新しい物だったらしい……

「ヘルズエンジェルの得意技みたいの見ただけど、爆発する暴風だった。こう爆発が迫ってくる感じ」

ヘルズエンジェルと対峙した横島がこういう攻撃をしてくると説明してくれるんだけど

「なんか判りにくいですね？」

「うーすみません。すっげー説明しにくいんですよ」

空気が爆発するって言うのは何とも判りにくい例えだ。しかも得意技となると対策は必須だろう

「……私がやった粉塵爆発みたいな奴か？」

「んーそれもなんか違うんだよな。突風と炎が同時に来るみたいな？んーいや、それも違うな」

布団に横になりながら手をワキワキと動かして必死に伝えようとしているんだけど、全然判らない

「あーこんな感じ？」

タマモが指をパチンと鳴らすと炎の壁が机の端から端へ移動し、移動しきると爆発する

「んー近いかも？」

【難しいですねえ、もっと何かこう覚えていることは無いんですか？】

横島はうーんっと眉をしかめて必死に唸る。暫く唸っていると横島はそうだつと手を叩き

「ヘル・エクゾーストとか言ってたっけ、後なんかこうめちやくちや固い壁に正面から衝突したみたいな衝撃だった」

風自体を打ち出し、その打ち出した壁に炎を纏わせる……？でもそれも何か違うような気がする。マタドールにしろ、だいそうじょうにしる魔人の能力は人知を超えている、その能力を予測することすら難しい

「後はバイクで曲芸みたいな感じで襲ってきたのと、ヘルズエンジエルの回りはむちやくちや熱かったってことかなあ」

バイク自身も武器にして、速度と質量。それと自身の能力であろう炎による攻撃……

「ノツブ、シズク、今の話を聞いてどう戦う？」

戦略家のノツブと戦闘力は群を抜いているシズクにどう戦う？と尋ねる

【そうじゃなあ。待ち伏せして集中砲火で相手のスピードを削ぐか、バイクとやらを走らせるのに適していない場所に追い込んでからかなのう？】

「……熱量が問題だな。近づくにしろ、その熱が攻撃と防御を兼ねて

いる。真正面から戦うのは無理だと思う」

「やっぱりか……速度と熱量。それは単純だが、単純ゆえに非常に強力な攻撃だ」

「スピードで追いつけたとしても、普通の物では熱であつと言う間に動けなくなるかと」

「仮に元々熱に強い私だとしても、逆に言えば攻撃手段が無い」

「熱に強いタママだが、攻撃手段は炎だ。炎を使いこなすヘルズエンジェルに攻撃が通用するとは思えない……」

「変身して戦うにしても、スピードで追いつけないと話にならないし、バイクも熱で壊れてちゃうし……」

「なにせよ、今の段階では対抗策が無いと言う事だけが判った。くえすは話を聞いていて」

「では横島から聞いた話を伝えてきますわ」

ドレスの裾を翻し立ち上がった所で、思い出したようにポシエツトから何かを取り出して机の上に置く

「眼魂!?出来たの!?!」

「一応霊力と魔力を込めて見ましたわ。まあ、眼魂としての機能があるかは不明ですが、横島に預けます。では御機嫌よう」

手を振り去っていくくえす。私達は机の上のシルバーの眼魂を見て

「人間でも眼魂になるのかしら?」

「いや、判らんし、ノツブちゃんとかは眼魂を家にしてるけどさ」

初めてかもしれない生きた人間の眼魂だ。とりあえず、横島が保管する事になったが、眼魂としての効果は勿論不明で

「それなんでござるか?」

眼魂を使う戦いを見た事が無いシロが不思議そうに首を傾げていて、どうやって説明すれば良いんだろう?と私達は頭を抱えるのだった……なおチビとうりぼーは

「みむーみむー」

「ぴぎゅー」

横島の布団の隅に寝転がって気持ち良さそうに寝息を立てている



のだった……

ドクターカオスにつけている使い魔から聞いた情報だが、今度の魔人はヘルズエンジェル。バイクに騎乗した魔人らしい

「ビュレト知ってるか？」

「ああ。何回かやり合った事がある。厄介な魔人だ」

バイクを手足のように使いこなし、格闘戦を仕掛けてくる。本人は風と炎の使い手らしく、常に異常な熱量を身に纏いそれを攻撃と防御に転用する……話を聞くだけでも判る、相当な難敵だ

「ビュレトで何とか対処できるか？」

私の問いかけにビュレトは少し考える素振りを見せてから首を横に振った

「五分五分だな。バイコーンは元々魔界の獣だ。人間界の空気は合わない」

ある程度の速度は出せると思うが、スタミナ切れが早く、そしてバイコーン自身も弱体化してしまうらしい

「……付け焼刃になると思うけど、横島君と陰念君に騎乗技術を教えるのは？」

「それくらいなら問題ないが、あいつはトップクラスの騎乗兵（ライダー）だ。横島と陰念の運転技術が気になる」

ちなみに昨日免許を取ったばかりだと言うとビュレトは頭を抱えて

「自殺行為だぞ？アイツは俺と同格か、それ以上だ」

魔界でも有数の騎乗兵である。ビュレトがそこまで言うか……人間界ではフルパワーを発揮出来ないバイコーンでは、恐らく足の差が勝敗を分けるだろう

「……とりあえず駄目元で構わない、横島君と陰念君に指導をしてくれるか？」

ビュレトを含め3人で当たれば機動力を削ぐ事が出来るかもしれない。短い時間のトップスピードを出すまでは横島君と陰念君が何

とか喰らい付き、隙を見てビュレトが突貫すると言う事も可能だ

「判った。一応様子は見てみる、それよりも韋駄天に連絡しておけ」

「あーなんかあの2人。ヘルズエンジェルに遭遇して、追いかけて行って消息不明らしい」

真つ先に連絡したんだけどいらないって言われたと言うと、ビュレトは頭を抱えて、深く深く溜息を吐き

「何とか策を考えておけ、あいつは空中も走る」

「最悪な情報どうもありがとう」

私の部屋を出て行ったビュレト。地上と空中を走り回る、規格外の騎乗兵。しかも炎と風の使い手……魔人相手と言うのは……そこまです考えた所で背筋に異様な寒気を感じて振り返る

「や。アシユタロス」

「……これはルイさん。お久しぶりですね」

さも当然と言う感じで椅子に座り、茶を飲んでいるルイ様とその後ろに控える長髪の女性……ルキフグスの人間態か

「いやいや、あのヘルズエンジェルとビュレト、それと横島がレースをするんだって？面白そうだから見に来たよ」

「……いえ、そういう訳ではないんですが」

出来れば魔人相手だ。横島君と陰念君を出さずにビュレトだけで対処出来るのが好ましい

「まあ暫くは横島の側を見ておくけどね。ああ、あとこれ」

軽い感じで投げられた皮袋。咄嗟に両手で受け止めるが、肩が抜け落ちるかと思うほどの重量だ

「ベルゼブルに全賭け」

「ははは。何をあの石頭が……増えてる!？」

嘘だろ!?!なんでベルゼブルの名前が追加されてるの!?!と言うかあいつなにやってるの!?!仮にも最高レベルの魔神だろ?なんで横島君に絆されてるんだよ!?!なに!?!横島君は神キラー(意味深)か!?!

「あいつ、チョロイン」

聞きたくないよ、そんな事実。でも倍率は10.75と非常に高いが、トトカルチョに追加されてる

「ああ。後、ゴモリーとダンタリアンが今人間界にいるよ」

「判らない！私にはあの2人が何を考えているのか判らないッ！」

なんでそんなに嬉しく無い情報ばかりが増えていくんだ！ルイ様が楽しそうに笑い、ルキフグスは私の肩を叩いて

「この世の全てはルイ様の玩具です」

顔を上げるとルキフグスの目に光は無く、諦観にも似た色が浮かんでいて、その一言でルキフグスが日頃どんな苦勞をしているのかよく判った

「ああ！なんかすごい納得したよ!!ちくしょうめ!!」

「ははっ！面白いね」

ルイ様の楽しそうな笑い声に半分絶望しながらも、トトカルチョの元締めとして、一応その掛金を預かるのだった

「ああ、あとこれ。横島君にプレゼント」

「……ちなみになにかお聞きしても良いですかね？」

ドンつと机の上に置かれたもの……見る角度によつて輝きを変える金属を見て痛烈に嫌な予感を感じながら尋ねるが

「なんだったかな？どつかの天使？いや悪魔だったかな？ポーカーで巻き上げたなんかなのは覚えてるけど」

なんか破壊神だったような気もするけど、まあ良いよねと言われるがどうでも良くなんか無い。これオリハルコンとか、ヒビイロカネとか言わないだろうな

「とりあえず霊力とか、魔力とか、神通力を通しやすい素材だから、横島君に上げてよ。じゃーねー」

「では失礼します」

引つ掻き回すだけ引つ掻き回して去っていった。私は机の上に鎮座している摩訶不思議な金属を見つめた

「お父さん。あのさー、横島のバイクだけど……なにそれ？」

「明けの明星が持って来た摩訶不思議な物質。横島君へのプレゼントトつて言ってたから……」

そこで言葉を切った私を蛍が不思議そうに見つめながら

「から？なに？」

物凄い引き攣った顔をしている蛍、うん、気持ちには判る。私も本当なら見なかった事、聞かなかったことにして、この金属をどこかの地下倉庫にしまつて、2度と日の本に晒したくないと思つていゝから、でもそれが出来ないと思つていゝから絶望してゐるのだ

「多分横島君のバイクに組み込まないと怒り狂う」

私と蛍の間に嫌な沈黙が満ちたのは言うまでも無く、蛍は顔を引き攣らせながら

「エンジン周りとか、フレームとか少し改造しないといけないと思うの」

「そつか。じゃあ、この金属使つてみようか？何か判らないけど、どつかの破壊神か、天使か、悪魔から強奪してきたらしいから、霊力とか、神通力とか、魔力の伝達率が凄く良いんだつて」

そつかーと空虚な顔で笑う蛍。私も多分同じくらい死んだ顔をしながら、その金属を抱えて地下の整備室に足を向けるのだった

「蓮華ちゃん、蛍ちゃんとおとーさんが死んだ顔をしてたでちゅね？」  
「うん、多分。自分達ではどうしようもない現実を見ちやつたんだね」  
現実つて怖いでちゅねーと良く判らない返答をするあげはと手をつなぎ、蓮華はおやつでも食べようかと言つてあげはを連れて、その場を後にするのだった……

俺は横島の事を小笠原GSに伝えた後。給油をして、バイクを教習所に返しに行つた。その後白竜寺に戻るとクシナとお師匠様が渋い顔をしてゐた、十中八九横島の事だと判つた

「横島がどうかしましたか？」

「陰念、お帰り。横島君だけどヘルズエンジェルつて言う魔人と戦つたらしいわ」

俺が追いかけてゐた時は人間の姿だったが、やはり魔人だったのか……俺は無理だと判断して後退したが、横島の事は心配してゐた

「横島の方は？」

「とりあえず保護されて、もう家に戻つてゐるらしいわ。でもヘルズ

エンジェルに対抗する為に呼び出される可能性が高いって」

お師匠様の言葉を聞いて、お師匠様がGS協会からなんと言われているのか理解出来た

「俺にも声が掛かっているってことですね？」

俺も横島もバイクの免許を取ったばかりだ。2人とも運転技術には不安が残る、それを1人で追いかけさせるような真似はしたくないと言う事だろう

「うん……でも横島君と陰念だけじゃ多分追いきれないって事で、ビュレトを中心にして、2人がサポートするって形にはなるらしいわ。明日からGS協会のほうでバイクの訓練をして貰うって」

……正直付け焼刃の運転技術でどうこう出来る相手では無いと思うが……横島だけに負担を掛けるのも嫌なので、判りましたと返事を返す

「それとマタドールって言う魔人も東京にいるらしいから、雪之丞にもGS協会に詰めて欲しいって伝えてくれる？私とクシナは今からGS協会で打ち合わせをしてくるから」

「雪之丞が勝手に出かけて行かないように目をかけておいてね」

お師匠様とクシナの言葉に判ったと返事を返し、俺と雪之丞の部屋に戻る

「なんかあったか？」

「また魔人だそうだ」

魔人の言葉に雪之丞が顔色を変える。俺は荷物を机の上に置きながら

「だが相手がバイクに乗っているから普通では戦えない」

「車じゃ無理か？」

「アスファルトを溶かすような熱を放っているから、爆発するぞ」

バイクでも危険だが、それは熱対策をすることで何とかするらしい。車全体を加工するよりかは、コストも低くいし、改造も楽という事だ

「だーっ！また俺は留守番か」

「いやそうでも無いらしいぞ、マタドールが東京にいるらしい」

マタドールの名前に雪之丞がその顔つきを変える。俺は詳しくは知らないが、香港で対峙した魔人らしいな

「それで何だって?」

「念の為にGS協会に明日から詰めて欲しいらしい。俺は横島と一緒にバイクの特訓だ」

せめてアクセルを切り替える時の迷いの時間を抑えるくらいはやらなければ……それくらいは出来なければ、俺も横島も何の役にも立たないだろう

「おい、勝手に出歩くな」

「……型を復習して来るだけだ。勝手に出るような真似はしない」

振り返らずに言っただけで部屋を出て行く雪之丞。後を追いかける音が、直ぐに響いてきた地面を踏みしめる音と、鋭い風切音に本当に型をやるのだと判り、俺は追いかけるのを止めた。

「もしかしたら、これが助けになるかもな……」

前の赤と青の2色の眼魂が出てきた、巨大なルービックキューブのような眼魂。その中にあるバイクの絵柄……これを揃えて新しい眼魂になるのなら俺は必死に霊力を練り上げながら、ルービックキューブに挑むのだった。そのバイクの絵柄がもしかしたら助けになるかもしれないと思って……

その頃。東京でも有数のホテルのスイートルームに訪れている1人の影があつた。フード付きの赤いローブを身に纏った少女は、そのフードを取り払う、その下から現れたのは黄金のような金髪、エレシユキガルだ……

「こんな所で過ごしてらんだ?」

「ふっふっふ、良い部屋らしいぞ?豪華な装飾にルームサービス。ま、余にとってはとても贅を極めているとは言えんがな」

ワインでもどうだ?と進めてくる女帝に結構と返事を返す、私はずもそも余り酒を好まない

「それで?四騎士を私に差し向けて何のつもり?不戦じゃなかったの

かしら?」

私をここまで連れて来て、部屋の外で待機している四騎士の事を言う  
と女帝は楽しそうに笑いながら

「勿論不戦さ、戦うつもりは無い。余は契約を違えぬよ……今はな?」  
今を強調するような女帝に眉を吊り上げる。最上級の神魔同士は  
口約束でも互いを縛る、それが神としてのあり方だ

「何そう怖い顔をするなよ、ただの冗談じゃないか?」

「冗談には思えないわよね」

無理矢理ここに連れてこられたのだ。正直機嫌が良いとは言いい  
れない

「ふっふっ、何ちよつとした誘いさ、余の配下……とは言いい切れんな。  
あの馬鹿は余の言う事を聞いた試しが無い……か?」

「貴女大丈夫?」

自分の言う事を聞かない部下とか、ちよつと人徳が無いんじゃない  
の?つと心配になる

「泣いてない!泣いて無いからな!ちゃんと他の部下は言う事を……  
聞くと思う」

「不安になってるじゃない」

強い力を持つている女帝だが、どうも部下とかには恵まれていない  
ようだ……

「まあそれはどうでもいい、問題児が横島にちよつかいをかけるよう  
でな。暇つぶしだ、見て行け。それにあつちをふらふらこつちをフラ  
フラしているなら、少しの間滞在するが良い、ここなら食事も風呂も  
あるぞ?」

横島……か、確かにアイツは面白いし、こうして誘われたならみて  
みるのも面白いかもね……

「良いわ、どうせやる事も無いし、付き合うわ」

「そう来なくては、折角誘った意味が無い」

今の情勢は大体理解したし、やることも無い。それならば少しの間  
女帝に付き合うのも悪くないかもしれないわね  
(それに横島を見極めるのも出来そうだし)

横島がどんな人格なのか、それは戦いと言う極限状態の中でこそ見れるかもしれない。そう思い、私は女帝に付き合うことにした

「で。ワインは飲まぬか？」

「葡萄ジュースを一つ」

……若干呆れた顔をしている女帝だけど、良いじゃない！あんまりお酒とかこの身体だと美味しく感じないんだからッ！まあ結局女帝はルームサービスとやらで葡萄ジュースを頼んでくれたので、私としては別にどうでも良いんだけど、あの生暖かい視線には少しだけイヤとするのだった……

リポート21 死線(デッドライン)のヘルズエンジェル その5  
へ続く



## その5

レポート21 死線(デッドライン)のヘルズエンジェル その5  
魔人対策本部に私、西条さん、教授、美神さんの4人が常に詰め、雪之丞君やピート君は唐巢神父と言峰神父(バーサーカー婦長から逃走中)の2人に徹底的に絞られ、横島君と陰念君はビュレトさん、そしてバイクの免許持ちの蛍ちゃんとかえすの3人に色々と指導を受けている

『こちらエミ、ヘルズエンジェルの痕跡を発見したけど……崖に凄まじい焼け跡が出来てるワケ』

横島君の持っている「トカゲデンワ」による、映像通信が会議室に広がる。それを見て思わず絶句する

「これはただ走っただけの物と思うべきなのか、それとも攻撃どつちかな?」

【現実逃避は止めたまえよ、所長。何度も見ているだろう?これはただ疾走しただけの跡だ】

現実逃避をした西条さんに教授のツツコミが入る。ヘルズエンジェルは異常な熱量を持っていたと聞いているが、岩が完全に融解するほどの熱量は正直嘘でしょと言いたくなるレベルだ

「とりあえずエミさん、無理しない範囲での追跡をお願いします」  
『了解、悪いけど命懸けだから報酬の方は割り高よ』

ヘルズエンジェルの追走をしてきているエミさんの言葉に判っていますと返事を返すと、映像通信は途絶える。それにしてもただ走っているだけでこの火力。攻撃と防御を両立しているのが厄介すぎる

「ドクターカオスとブラード伯爵の改造で何とかなるの?」

「バイク自体はどうかなるそうです……ただ……その運転者は無理かと」

だから変身出来る横島君と陰念君なのだ。運転者も対応するなら元々技術のあるくえすや蛍ちゃんに名指しが入るから……

「横島君と陰念君に負担を掛けるのは、非常に心苦しいが、仕方ない。」

しかし、しかしだ。相手は空中も走る、どうやって追い込む?」

なんとかしてヘルズエンジェルを追い込むと言う事は考えているが、飛行能力を持つ事を考えると岩場などに追い込むと言うのも難しいだろう

「やはりだね、配置型の罠に誘い込むのが妥当だよ。ここから、この区域を封鎖してだね。シズクとノツブに弾幕攻撃と言うのはどうだね?」

出来ればやりたくない一手だ。確かに効果はあるだろうし、英霊と水神の二段攻撃だ。いかに魔人と言えど脅威になるだろうし、バイクも破壊して機動力を削ぐことも出来るだろう。だがその対価としてその周辺に多大な被害を齎すことになるだろう

「それは最終手段にして、結界とかの調整で最初は何とかしてみましよう」

「んー戦力を小出しにするよりも、最初に先制したほうが良いと思うんだけどねえ」

被害を最小にするには教授の言っている事がもつとも正しいと言うのは皆分かっている。判ってはいるんだけど……

「こういうとき警察とかがうるさいのが辛いわよね」

「まあね。オカルトGメンが全面に出れば良いんだけど、今回はあくまでGS協会にオカルトGメンが協力するって体勢だからね」

戦力などに乏しいオカルトGメンを矢面に出す事は出来ず。かと言ってGS協会が出れば、横暴だのなんだのと騒ぐ政治家や警察もいる……ここにいる全員はそれを知っているので深く、深く溜息を吐きながら

「琉璃、天界の韋駄天に支援って頼めないの?」

「ヘルズエンジェルに喧嘩を売られて、追走して行方不明だそうです」

今一番役に立つであろう神魔もいないと言う事に、また全員で深く溜息を吐くのだった……

バイクの特訓を始めて4日。横島も陰念も物覚えは良い方で割り

と直ぐに加速と減速、そしてコーナリングは会得した。

「……」

今は蛍とくえすを交え、2人がブロッキングするのを追い抜く訓練をしている。バイクでの騎乗戦で相手よりも前に入る事は戦闘に置いて有利に立つことを意味する。スリップストリームで追いつかれる可能性があるが、それは逆を言えば相手を自分の後に固定することが出来ると言う事にも繋がる。追い抜こうと前に入るが、高速の世界の空気抵抗は恐ろしい障害となる。引き離されず、相手の後を付いて行くなればスリップストリームを利用するしかない。相手がヘルズエンジンルと言う規格外の騎乗兵相手ならばなおの事だ

(しかし……までか……)

スリップストリームを掴むと言うのは思ったよりも難しい技術だ。相手にピツタリと付く必要がある、ヘルズエンジルのバイクよりも遥かに出力の劣る蛍とくえすのバイクにも追いつけないのでは横島と陰念にスリップストリームを利用するのは不可能に近い。2人は初心者と言う事もあり事故を恐れているのは確実。そしてそこに2人の性格が加わってくると、横島に関しては出来るかもしれないが……やはりぶつつけ本番になるだろう

(横島は臆病なくせに思い切りがある。今は……怪我をさせるのを怖がっているつと言う感じか)

蛍とくえす。順番にやらせているが、近づきすぎて接触して転倒するのを恐れているのか一定の距離以上近づこうとしない。これがヘルズエンジンル相手なら無理にでも突っ込んでいきそうだが、今は無理だろう。それに対して陰念は論外だ

(慎重すぎるな)

粗暴な外見と言動に対して陰念は極めて常識人だ。そしてその性格も、決して騎乗兵として適した物ではない

「……までー」

とりあえずこれ以上やっても、横島も陰念もスキルアップすることは無い。そう判断して、止るように叫ぶのだった

「ぶっはあ……疲れるわあ」

「ふー……モータースポーツとも言うしね」

ヘルメットを外した横島達の額には滝のような汗が浮かんでいるので、タオルとスポーツドリンクを投げ渡す

「どうでしたか？ビュレト様」

「……妥協点と言う所だ」

4日という短い訓練時間で良くここまでとは思うが、これ以上はやはり才能の問題になってくる、とりあえず走らせる事は問題無いというレベルになってくれただけでも御の字だ

「なんとかなると思いますか？」

「……五分五分だ」

正直それ以外言いようが無い。美神達の何回にも及ぶ話し合いの結果、信長とシズクを海岸沿いに配置し、そこにヘルズエンジェルを追い込むと言う事で作戦は決まった。

「本当に誘い出せるんですか？」

「それに関しては何の問題も無い」

あいつは速い物に強い興味を抱く。今岩場や海岸にいるのは憂さ晴らしに近いだろうから、高速道路でも走っていれば簡単に食いついて来るだろう

「マタドールが東京にいるというのもあるしな、横槍が入る可能性も考慮しなければならぬ」

マタドールは戦闘狂だ。むしろヘルズエンジェルと戦っている間に乱入してこないかの方が心配だ

「そう……ですか、すいません。私はちよつと用事があるので」

蛍がそう笑ってレース場を後にする。用事の内容は判っている、横島用に調整しているバイクの仕上げだろう。ルイ様に何かを組み込むように命じられていると聞いているからな

「でも横島は実際良いセンスをしていますわよ？」

「そうですかね？」

くえすの言葉には同意だ。運動神経も反射神経も、動体視力も極めて高い。横島は訓練すれば良い騎乗兵になるだろう、問題は……

「お前だ。お前はもう少し思い切りを良くしろ」

「判つてはいるんですけどね……」

言いにくそうに敬語で返事を返す陰念。運動神経と反射神経は横島と良い勝負だ、だがその性格上思い切りが無さ過ぎる

「このままだと、雪之丞だったか？それに完全に置いていかれるぞ」

唐巢と言峰に白兵戦の訓練をしてもらっている。雪之丞とピートの成長速度は凄まじいと聞いている、休憩と食事を挟んでひたすら白兵戦の訓練だ。元々考えるよりも身体を動かす方が好きらしい雪之丞にはその戦闘漬けがとことんあっているようだ

「……」

無言で黙り込む陰念。こいつは知性で野生を押しさえ込もうとしているタイプだと見た。少し煽って見る程度では駄目か

「おおーい！横島ー！出来たぞー」

レース場にトラックが止り、ドクターカオスが助手席から顔を出し、何かを操作するとトラックの荷台が開き、バイクが姿を見せる

「……でかくないか？」

「中型のサイズじゃないな」

トラックに近づいた横島と陰念がぼそりと呟く、フレームもタイヤもワンサイズ大きいように見える

「違法ギリギリの改造じゃ。一応許可は得てるから、法律的にはセーフじゃし、今回は問題ない」

ただこれが終わったら大型の免許を取ってくれろと嬉しいと笑うドクターカオス。違法ギリギリじゃなくて、大型に改造しやがったなこいつ

「横島さん。とりあえず乗ってみてください、最終調整をするので」

「陰念はこっちなー」

ドクターカオスの娘2人に呼ばれて、横島と陰念がバイクに跨った瞬間。周囲の魔力の流れが変わった……

「ちっ！誘い出すつもりが、誘い出されたのはこっちなー！」

俺の舌打ちと同時に雷が目の前に落ちる、

「ハッハー！ちゃんとしたマシンを手に入れたみたいだな！折角待っててやったんだ！思いつきり楽しもうぜッ!!!」

ヘルズエンジェルが炎を撒き散らし叫び声を上げる。横島がちやんとしたバイクを手にするのを待っていた

「おい、どれくらいで調整は済む？」

「……30分じゃ」

思ったよりも長いな、だがそれで良いかもしれない。俺はバイクンが変化しているバイクに乗り、ヘルメットを被る。くえすに目配せするのは作戦開始を伝えるという意味だったが、頷きすぐに走っている姿を見て俺の意図は伝わったようだ

「俺が相手をしてやるよ、ヘルズエンジェル」

「ん？おぉ！お前か！ビュレト!!良いぜ良いぜ良いぜ!!お前が相手なら不足はねえ!!」

前輪を跳ね上げ走り出すヘルズエンジェルの後を追って、俺も走り出すのだった

(ちっ、相変わらず規格外の野郎だ)

前の大戦の時に何回かやりあったが、そのバイクの技術は前よりも上がっている。まだ人間の姿なので、あいつとしては遊んでいるような物だが、それでもその規格外の腕前は嫌でも思い知らされる高速道路を降り、海へと続く山道を走りぬける

「はっ！良いぜ良いぜ!!やっぱりお前は最高だ！」

コーナリングの度に抜きつ、抜かれつ。距離を一定に保って走り続ける。今は互角だが、どうしても焦りは生まれる。バイクオンに人間の界の空気は合わない。今は着いて行けているがそれもどこまで持つか……

(ちっ。最後まで持たないか)

計画にある海岸までは持たないか、と思った時。横島と陰念が遅れて追いついてくる。まだ距離は大分あるが、それでもあの加速では時期に追いつく。そうなれば計画通り3人で追い込めば良い、そう思った瞬間

「なごいっ!」

前輪に何か突き刺さる。それは白く輝く弓矢……ダメージで変化を維持できず、バイクオンの姿に戻った愛馬が大きく仰け反り、投

げ出される中。俺は見た、空中に滞空する白い怪馬に跨った魔人……ホワイトライダーの姿を……叩き込まれた神通力のダメージが大きく、俺とバイコーンはガードレールを超えて、遙か下へと転がり落ちていくのだった……

追い付いた。そう思った時にカズマさんのバイクに光の矢が突き刺さり、ガードレールの下に転がり落ちて行った……その姿を見て絶句し、バイクを止めようとしたがそれは陰念に制された

「止めろ！相手は魔神だ。この程度でどうこうなるわけ無いだろう！」

人間の姿をしているがカズマさんもまたソロモンの魔神。だから大丈夫だと叫ぶ陰念

「冷静になれ、感情的に動くな。絶対途中で追いついてくる」

だから今はそれを信じてヘルズエンジェルを見失うなどしつこいように口にする。相手が人間の姿でこつちを侮っている間に、海岸まで追い込むんだと言う陰念。それが正解と言うのは嫌でも判る。返事を返す事よりも加速することを返事とする。エンジンが唸りを上げ、加速していく

「ちっ、横槍を入れやがって、折角楽しんでいたのによ」

ヘルズエンジェルは人間の姿のまま忌々しそうにそう呟く声が聞こえた。だが後を追いかけている俺と陰念を見て

「まあ良い。俺の本命はお前だ、少しは腕を上げたか見てやるぜッ!!」前方を走っていたヘルズエンジェルが急に反転し、ウイリー走行で向かってくる。それを左右に分かれることで回避するが、即座に前輪を下ろして、後輪で殴りかかってくる。それは加速することで交わす「へえ。大分上手くなつたみたいだな、だけどまだまだだぜッ!!」

背後からヘルズエンジェルのバイクが唸り声を上げて、追いかけてくる。それは背後から獣が追いかけてくるような異様なプレッシャーを伴っていて、振り返らずにひたすら加速する。追いかけているのと、追いかけているのではまるで掛かってくるプレッシャー

が違う

(落ち着け、そのままで大丈夫だ)

心眼の声が頭に響き、冷静になるが、冷静になった分だけ怖いという気持ちが強くなる。計画では追いかけて、追い込むことになっていたが、逆に追いかけていて大丈夫なのだろうかという不安が頭を過ぎる

(まだ待ち伏せの場所は先だ。ここら辺ではまだ駄目だ)

大分車の通りは多い、時々すれ違う車が暴走族かという顔で俺を見ている。確かに通行人がいるのでは、とてもではないがノツブちゃん  
の三千世界も、シズクの氷柱のマシンガンも使えない。

(追われていると言うのは計画間違いだが、場所に誘導しているという面では何の問題も無い)

だから落ち着いて走り続けろと言う心眼の言葉に小さく頷く、俺は心眼がいるから冷静さを保っていられるが、良く陰念は1人でこのプレッシャーに耐えられると思う。目的地としている海岸はまだ遠い、それもそのはずだろう。元々は高速道路からスタートするはずが、俺達が練習していたレース場に直接現れたのだ、想定していた距離よりも大分走る距離が増えている

「そらそらー！どうした？そんな物か？」

後から追いかけて来ていたヘルズエンジェルが完全に追い付いた。カズマさんに散々利用しろと言われたスリップストリーム。多分それでピツタリ着いて来ているのだろう。その圧倒的な威圧感とプレッシャーに手の平に汗が浮かぶのが判る

「紅い騎士殿に聞いたが、お前は追い込むと力を見せるらしいな、見せてみるよ！」

「うわ!？」

背後からの衝撃に上擦った悲鳴が出る。ヘルズエンジェルが加速してきてバイクで後から俺を突き上げる

「くっー！」

「おっとー！甘い甘い！」

陰念が体当たりして防ごうとしてくれたが、ヘルズエンジェルはそ



れを簡単に避け、今までぴったり着いていたのを止め、大外から俺の前に割り込んで来て

「そらよっ!!」

炎を壁のようにして俺と陰念の前に作り上げる。炎が突然現れれば、ブレーキを握ってしまおう

「馬鹿!大丈夫って聞いてただろうが!」

陰念は減速ではなく、加速して炎の壁を突き抜けたが、俺は減速してしまった。そしてそれはヘルズエンジェルにとっては狙い通りだったのだろう

「また追いかけて来いよッ!!」

火球が減速していた俺の目の前で炸裂し、アスファルトに大きな穴が空く

「う、うわ!?!」

【ちいっ!横島ハンドルを手放せ!】

バイクの車輪が穴に取られ、後輪が跳ね上がる。心眼の手を放せという叫びに俺は慌ててハンドルから手を放したが、跳ね上げられた衝撃で道路の上に投げ出され、頭を抱えて道路の上を転がり

「バ、バイクは!?!」

慌てて立ち上がりバイクに視線を向けるが、時既に遅しバイクは炎の壁の中に倒れて突っ込み爆発、四散してしまった

「韋駄天で走っていけば追いつけるかな」

【いや、その必要は無いな】

韋駄天魂に変身しようとした時、必要ないと言う心眼の言葉にどういう意味だと尋ねた瞬間。背後からバイクのエンジン音が響くのだった……

背後から聞こえてくる爆発音。確実に横島のバイクは今爆発した……つまりビュレトが回復するまで俺1人での追走になる

(……行けるか)

昨日何とか絵柄を揃えて入手した。黄色い眼魂……ホロウを使うよりかはきつと安全だろう、いや、安全かどうかは俺の願いつて事に

なるか

「ええい！出たとこ勝負だ」

眼魂のボタンを押し、ベルトに押し込む。するとベルトからパーカーが飛び出し、まるで回し蹴りをするようなモーションをとって、空中で半回転して降りてくる

【アーイー！オソレテミーヤー！オソレテミーヤー！】

バイクに追走するように飛ぶ黄色いパーカー。ぶっつけ本番でやるしかない、レバーを掴んで引つ張る

【カイガン！レースッ！風斬る速度！振り斬る速度！】

パーカーが背後から被さる様に装着され、前からは黄色い壁が迫ってくる。だが減速するわけには行かず、更にアクセルを開いて加速する

「これは……」

視界に広がってきたのは鎧武者の籠手のような両腕、多分全身もこの鎧武者のような装甲に覆われているのだろう

(これは……)

だが俺が驚いたのはそこでは無い、「判る」のだ。バイクの走らせ方、加速の仕方……何もかもが手に取るように判る。これなら行けるッ！俺はクラッチレバーを握り、スロットルを戻す。それと同時に左足でシフトアップ、クラッチレバーは離すがスロットルは開いたままにしゆっくりとスロットルを開いていく。この動作が自分でも驚くほどにスムーズに出来、スピードが上がっていく。これならば1人でも何とかなるかもしれない

「ハハハ！お前も面白そうだな！全力で行くぜ！」

ヘルズエンジェルが炎を纏いその姿を変えていく、勝負は今始まりを告げるのだった……

レポート21 死線(デッドライン)のヘルズエンジェル その6

## その6

リポート21 死線(デッドライン)のヘルズエンジェル その6

バイクが爆発してしまい、変身して追いかけてしようとしたその時。背後から聞こえてきた激しいエンジン音。明らかに市販の物では無い、改造されたバイクが俺の前に止る寸前に乗っていた人物が俺の名を叫んだ

「横島ッ！」

「蛍!？」

まさか蛍が来た事に驚きながら、手にしていた眼魂をズボンの中に戻し、蛍に駆け寄る

「はあ……はあ、こ、これ……わ、私とお父さんで作ってた……よ、横島用のバイク。やっと完成したから届けに来た」

「俺に?」

蛍はうんと返事を返し、バイクから降りてへたり込む

「横島用に調整してるから、私には足も足りないし、握力とかも足りないから……本当大変だったわよ。で、でもこれなら追いつけるわよ」  
大粒の汗を流しながら言う蛍。申し訳ない気持ちと蛍が作ってくれたというのが嬉しい。そんな複雑な気持ちで胸が一杯になる……だが今は時間が無い、蛍もそれが判っているのかタオルで汗を拭いながら

「頑張って」

「ありがとう！」

ヘルメットを被りなおし、キーをバイクに刺す。跨ってみると驚く……乗り心地が良いとかそうじゃなくて、まるで自分の体と一体になったような不思議な一体感がある。俺がクラッシュして10分ほど……追いつけるかは五分五分だったが、このバイクならッ！走り出しまでも驚くほどにスムーズで、加速も信じられないほど手に馴染む、遠くに火柱が上がるのを見て

「心眼！」

【判ってる！】

俺の言葉に直ぐ心眼が返事を返し、腰にベルトが現れた瞬間。空間が歪み現れた穴から白銀の眼魂がベルトに飛び込む

「な、なんだ!? なんの眼魂だ!?!」

【ア—イ! シツカリミナー! シツカリミナー!】

とは言え止っている時間もウイispに交換している時間も無い。なるようになれとベルトのレバーを掴んで引っ張る

【カイガン! マツハツ! 変わるシグナル! フルスロットルツ!!!】

マツハ!? あ—つと確か! 別の世界の俺との訓練の時に、良く頑張ったって海東さんに貰ったけど、ずっとうんともすんとも言わなかった眼魂だ。殆ど三蔵ちゃんに持ってかれたから忘れてた!?

「追跡! 撲滅! いずれもマツハ—ツ!」

【言ってる場合か!?!】

知るか! 変身したら勝手に口が動いたんだから俺のせいじゃない! と心眼に叫ぶ。

「あれ?」

【どうした?】

マツハ魂になってからさつきよりもバイクが一体化したように思える。クラッチもアクセルも…: 手に取るように判る。アクセルを開けて加速するのだが、エンジンがまるで獣の唸り声のような音を立てて爆発的に加速する。暴れかけるハンドルも変身しているから握力で簡単に制することが出来る。そして加速した瞬間空中から黄色と青の光が俺の隣に着地する、まさか他の魔人かと思ったその時

「横島君!」

「横島!」

「うお!? 八兵衛!? 九兵衛!」

それは韋駄天の2人だった。俺の隣を全力で走りながら

「すまん! ヘルズエンジェルを見失ってるうちにとんだ迷惑を掛けたようだ」

「失態は行動で取り返す!」

眼魂を！と叫ぶが、多分マツハ魂の効果で運転技術が上がってるので無理だ！と叫ぶ。だが眼魂は勝手に浮かび上がり、その中に八兵衛と九兵衛が飛び込み、ベルトに入ろうとしたその時

「む？」

「え？」

エンジンメーターの部分が開き、そこに韋駄天眼魂がセットされる  
【アーイー！シツカリミナー！シツカリミナー！】

そして何故かバイクからリズムミカルな音楽が響き始める。レバーは無く、良く見ると眼魂がセットされた部分が上にスライドしそうだ。ハンドルから手を放して眼魂が入った部分をハンドルの間に移動させる

【カイガン！韋駄天！神界！最速！天の飛脚ツ！】

「バイクが……変形した!？」

丸みを帯びていた風除けが鋭利な形状に変化し、ボディも純白、そしてなんか後にブースター見たいのが装着された

「なんか知らんが！行くぞおツ！」

【待て！いきなりアクセルを！】

心眼の静止は遅かった。背後のブースターが火を吹いたと思った瞬間。恐ろしい加速が掛かり、まるでロケットのようにバイクは道路を滑り出すのだった……

一定の距離まで近づくと、ヘルズエンジェルは火柱を放ってくる。セツトした眼魂の効果か、運転技術が向上しているので回避は出来る。回避は出来るが……

(このままじゃ駄目だ)

信長達が待ち伏せしている場所にヘルズエンジェルを追い込めない、そう思った瞬間

「ノオオオオオオツ?!?!？」

「はっ！」

俺の横を横島が絶叫しながら通過していく。なんかやけに禍々し

いバイクだったが……なんだあれは、一瞬疑問が脳裏を埋め尽くしたが、今はそれ所では無い。なんとしてもヘルズエンジェルを予定した場所に追い込まなければ……だがこのままでは追いつけない、そう思ったとき。俺の身体を覆っていた鎧武者のような装甲がはじき飛び、バイクと合体する

「これは……はっ！考えるのは後だなッ!!」

アクセルを吹かすと今までとは比べられない加速が俺を襲う。だがこのスピードならば追いつける

「くっ！」

凄まじい加速のGに耐えながら前方を走っている、横島とヘルズエンジェルに向かって走り出す

「ハッハー！最高だ！このスピード！このスリル！たまらねえ!!」

少しでも運転をミスすればクラッシュする、異常なスピードの中だと言うのにヘルズエンジェルは狂ったように笑う

「！」

「!!」

この加速の中では喋っている余裕も無い。横島にハンドサインを送ると横島もハンドサインを送り返してくる

「っ！はは！俺相手に寄せてくるか！良いぜ！ハッハー！最高だ!!」

横島がヘルズエンジェルの横に寄せ、信長達が待ち伏せしている方にヘルズエンジェルのハンドルを切らせ、俺が背後からぴったりと寄せ、スリップストリームを利用して離されずの距離をひたすらに保つ「オラオラ！俺はバイクだけじゃねえんだぜ!!!」

ヘルズエンジェルが巻き起こす炎と風は変身と強化されたバイクの装甲に任せ、歯を食いしばり必死に耐える。だが後何分、後何秒耐えればいいと言う考えが脳裏を埋め尽くす。幾ら変身していてもヘルズエンジェルの火炎は凄まじい物がある、何時までも耐える事など出来るわけが無い。徐々に焦りが過ぎってくる

「!!」

崖の方から巫女の幽霊……おキヌが姿を見せた瞬間。揃ってブレーキを掛ける

【三千世界に屍を晒すがよい。……天魔轟臨ッ!!】

「……!」

信長の背後に凄まじい数の火縄銃、シズクの背後に凄まじい数の氷柱が浮かび上がる

「ちいっ!!!」

ヘルズエンジェルが舌打ちをする。だがその間に俺と横島は既に射撃軸から逃れている

【これが魔王の三千世界（さんだんうち）じゃあっ!!!】

「……これで消えろ!」

凄まじい弾幕と氷柱がヘルズエンジェルにへと向かう。これで決まったと俺は思った……だが、俺は魔人と言う存在をまだ見誤って居ただのだ

「舐めるなあッ!!」

バイクを跳ね上げ、壁のような弾幕を潜り抜け始める。炎と風で直撃を逸らし、致命傷を避け、バイクにいくら被弾しても、ヘルズエンジェルは完全に決まったと思ったその一撃を避けて見せたのだ

「ヘルエキゾーストッ!!!」

「ノツブちゃん!シズク!!」

裂帛の気合と共に放たれた一撃が信長とシズクを大きく弾き飛ばし、横島の悲鳴が上がる

「助けに行くのはアイツをやってからだ」

恐ろしいスピードを保っていたバイクは黒煙を吐き、ヘルズエンジェルも疲弊している。2人を助けに行くとしても、今ヘルズエンジェルに背中を向けるのは自殺行為だ。バイクを降りると、バイクに装着されていた鎧が全て解除され、再び俺に装着される。

（バイクはお釈迦か）

装甲が解除された瞬間スクラップになるバイクに申し訳ないことをしたと思いなながら、ヘルズエンジェルに視線を向ける

「ちっ…スピードが!」

バイクのエンジンは唸り声のようにエクゾースト音を上げているが、スピードが上がらないのか、舌打ちをしながらも鋭い視線をこっ

ちに向けている。バイクのスピードは落ちているが、それだけで勝てる相手とは思えない。あの脅威的な熱量と風は以前脅威のままなのだから……

遠く離れている場所で戦っている横島ともう1人……だいそうじようと戦った人間か。ホワイトライダーが見ている光景が余と女神の前に映し出されている

「……横島の方がもう1人よりも戦いなれてるって感じね」  
「そのようだな」

マタドールと戦ったと言う事も知っていたが、どうも横島の方があの奇妙な鎧の姿になれている様な気がする

『これだ！』

【カクサーンツ！】

横島の箆手に丸い何かが装填され、打ち出された散弾がヘルズの突っ込みの勢いを削ぎ、もう1人が攻撃する隙を作り出している。どうも横島は直接戦うよりもフォローに回った方が強いのかも知れない

『はっ！』

黄色い鎧姿の男が両手に持った鎌のような武器で切りかかる。直線的なスピードはまずまずだが、本来のヘルズなら簡単に回避できる一撃だろう

『ちいっ！』

だが横島と仲間の策略によって追い込まれ、集中砲火を受けてバイクが損傷しているヘルズには回避しきれない一撃だ。前輪で受け止め弾き返すが、そうなれば横島に無防備な姿を見せることになる

『行け！』

箆手から飛び出した射撃をまともに喰らい、大きく態勢を崩す

「横島の方が上手いわね」

「うむ、どうやらそのようだ」

速さのみを追求し、周りの確認を怠った。それがヘルズがここまで



追い込まれた原因だが……

「だがそれもここまでよ」

ヘルズも流石に集中砲火を受けて、いつまでも良いようにされるほど愚かでは無い。徐々にその雰囲気が変わってきている、スピードのみを追求する姿から、戦闘者へと……

『おつらあーヘルエキゾーストツ!!』

前輪を大きく跳ね上げ、爆風と火炎を同時に放ち横島達を纏めて攻撃する。だがあれは攻撃のためでは無い

『ち、違うー!』

『くそ! 嵌められた!』

あれは技名を叫んだだけで、攻撃した訳では無い。フェイントだ、その隙にヘルズはバイクを大きく噴かせる

『ヘルスロットルツ!!』

ヘルズの姿がオーラに包まれ、バイクも真紅のオーラを燃やす。

「へえ、何したのかわ?」

「加速だ。しかしただの加速では無い」

行動スピード、反射神経などの動きに関するありとあらゆるものを加速させる。それがヘルズの得意技だ、しかし本人は戦闘に対して興味が無いので使うことすら稀だが……

「ここから面白くなるぞ」

映像の先で前輪を跳ね上げ、横島達へ突進し、2人が横っ飛びで回避すると焰をばら撒く。それはヘルズが本気になったサインであり、ここからヘルズの本領発揮だと笑みを浮かべるのだった

「ヘルズって実際どうなのかわ? 神魔を何人倒したとかは?」

……女神の問いかけに余は返事を返す事が出来なかった。戦闘力は高いが、スピードのみを求めるヘルズは実は神魔との大戦の中でも神魔を1人も殺したことの無い魔人だったから……

最初は俺と陰念が優勢だった。だがヘルスロットルと叫んだ後、ヘルズエンジルの動きが格段に良くなった

「そろそろ! お前達が望んだ土俵に上がってやったんだ! 少しは抵抗

して見せな！」

バイクによる打撃と焰と風、手数と攻撃力が爆発的に上昇して対応しきれない

「おらよッー！」

「ぐふっ!?!」

「陰念ー！」

バイクの跳ね上げ攻撃で陰念の体が浮き上がり、炎の追撃でこっちへ吹き飛んでくる。それを慌てて受け止めるが黄色い装甲のあちこちは煤けて凹んでいる

「くそースピードが上がるが防御力がガタ落ちだ」

眼魂には色んな特色があるが、どうも今陰念が変身している眼魂はスピードが上がる反面、防御力が極端に低下するみたいだ

「ヘルエキゾーストー！」

俺と陰念が留まっているのでヘルズエンジェルが炎と風を伴った爆風を叩きつけてくる。俺は反射的に別の眼魂、標識の止れのマークが浮かんでいる眼魂をナイトランターンにセットして、引き金を引く

【トマーレー！】

巨大な標識が現れ、爆風を受け止める。どうもこのマツハ魂と言うのは、射撃能力を秘めた眼魂をセットすることで特殊な効果を発揮するようだ

「ぐっぎいいいいー！む、むうりいいいいいー！」

直撃は何とか防いだが、踏ん張っても踏ん張りきれない。ヘルエキゾーストの威力はトマーレのバリアでは防ぎきれないほどに強力だった

「おいこらー！もう少し耐えろ!?!」

陰念の言葉に無理ーつと叫んだ瞬間。標識が碎かれ、爆風に2人も大きく弾き飛ばされる

「ぐっ……やべえ……おい、陰念ー！他の眼魂は無いのか!?!」

マツハ魂の防御・拡散攻撃・偏向射撃はヘルズエンジェルに有効打となっている。だがその性質上ナイトランターンが必須で、俺はゴーストチェンジできない

「なんでこうもぶつつけなんだ！こういうのは俺の性じゃないって言うのによー！」

陰念はそう叫ぶと左右の色が違う眼魂をベルトに押し込む

【アーイー・オソレテミーヤー！オソレテミーヤー！】

なんだあのパーカーゴースト……色が青と赤交互に変わってる

……

「変身！」

【カイガン！パラドクス！LVファイフティー！！体を熱く、ヒートアツプ！】

赤いパーカーが装着された後。拳を構えているボクサーが描かれたプレートが陰念の体を覆い。プレートが消えると拳に赤い籠手が装着され、ヘッドギアに似た装備が頭に装着されていた

「俺の心を滾らせるなツ！」

拳を打ち付けた陰念がそう叫んでヘルズエンジェルに向かって駆け出す。思わずおいつと叫んだが

「ふんっ！」

「はっ！良いぜ良いぜ！どんどん打って来い！」

ヘルズエンジェルの前輪の跳ね上げ攻撃を紙一重で回避し、燃える拳を容赦なくヘルズエンジェルに叩きつけている。俺も援護にと射撃を放とうとするが、陰念がヘルズエンジェルに近すぎて攻撃が出来ない。場所を変えようにも、2人の位置が目まぐるしく変わるので位置取りが難しい

「おっらあッ!!」

「ぐっ！はははははは!!良いぞ良いぞ！戦いだ!!ああ！楽しいぜえッ!!」

だがその攻撃はヘルズエンジェルの戦闘意欲を跳ね上げる。このままだと不味いかもしれない

「シツシツ!!」

「ヘルスピナー！」

陰念の攻撃に合わせてヘルズエンジェルがバイクごと大きく回転する、風を纏う強烈な一撃だ。だが陰念は両手をクロスさせ、その一

撃に耐えると腰のベルトのレバーを大きく引く

「テンガン！パラドクス！LVファイフティー！心を冷ませ、クールダウン！」

「さあ！運命のパズルだ！」

姿が変わった!?赤い籠手が分離し、青く変化し肩に装着される。ヘッドギアに似た装備もヘルメットののような姿に変化している

「まずはこれだ！」

陰念が片手を挙げるとパズルのピースのような形状をしたエネルギー弾がヘルズエンジェルに殺到する。それに合わせてナイトラントーンに拡散をセットしてトリガーを引く

「カクサーン！」

打ち出した巨大な霊波弾が分裂し、ヘルズエンジェルに襲い掛かる  
「ヘルバーナー！」

全身から炎を放ち、俺と陰念の攻撃を纏めて弾き飛ばし、俺と陰念に向かつてこようとしたが

「そうはさせない」

陰念が両手を上げて指先を動かすと、周囲の岩が勝手に動き出し、ヘルズエンジェルのバイクの前輪と後輪にまわり着く

「なんだこれはあ!?!」

それは俺も同意だ。なんで岩があんなスライムみたいに变化して前輪と後輪にまわりついたのか、その光景を見ていただけに不思議で仕方ない

「こいつでピョッてな！」

本見たいな何かを取り出し、そこからメダルを取り出してヘルズエンジェルに投げつける陰念。するとゲームで見るとような、雛が頭の上に戻るエフエクトがヘルズエンジェルの頭上をくるくると回りだす

「おっ!?おっ、あんだあ。こりゃあ」

ヘルズエンジェルが舌足らずの声を出し、混乱しているような声を上げる。何がなんだか判らないが、今がチャンスと言うのは分かった。ナイトラントーンに神宮寺さんの眼魂をセットし、ゴーストドライバーに翳す

【ガンガンミナー！ガンガンミナー！】

「うっしやあ！行くぜ！」

右足にエネルギーがたまっていくのを感じながら、腰を深く落とす  
「こいつで決めてやる」

陰念は両手にメダルを乗せ、それを弾くと再びベルトのレバーを引く、青いパーカーが再び赤く染まり、肩の装甲が両手に装着される

【ダイカイガン！パラドクス！オメガインパクト！】

『巨大化！』

『マッスル化！』

弾いたメダルが陰念の体に触れると、信じられないことに陰念の右腕が異常な大きさに巨大化する。なんとというかすごい能力の眼魂だ

【オメガブレイク！】

「はっ！」

地面を蹴り飛び上がると空中に赤い魔法陣が展開され、空中で回転しながら魔法陣に飛び込むと炎が右足に集まる

「おっらあああッ！」

「ぐっはああああ!？」

力強く踏み込んだ陰念の右拳がヘルズエンジェルを吹き飛ばし、その吹き飛んだ先目掛け魔法陣を伴った全力の飛び蹴りの追撃を叩き込む

魔法陣が炸裂し、ヘルズエンジェルが爆発の中に消えていく姿を見ながら、地面に着地しサムズアップすると、陰念は背中を向けて手を振る。なんか、陰念とは仲良くなれそうな気がするのだった……

遠く離れた所で見ていたマタドールは手を叩きながらその笑みを深くする

「ふふふ、ニーニョ。素晴らしい成長速度だ」

楽しくて仕方ないという様子で手を叩いていたマタドールだが、次の瞬間舌打ちをする

「……みつけたぞ……マタドール」

雲の間から白い馬に跨ったホワイトライダーがマタドールの前に

立ち塞がった

「これはこれは白騎士殿、この私に何か様かな？」

一食触発と言う空気を纏うマタドールだが、ホワイトライダーは小さく口元を歪め

「最弱の魔人は……最強へと至る……お前もまたその道標となるだろう」

そう告げたホワイトライダーは溶けるように姿を消し、残されたマタドールは更に口元を歪め

「どうもニーニョ。君が望まぬとも私と君の道は重なるようだ」

人間の姿のまま深い笑みを浮かべたマタドール。その笑みは親愛の表情とも取れる柔らかい笑みを浮かべているのだった……たとえ横島が望もうが、望まかろうが……横島と魔人の道はもはや完全に交わろうとしているのだった……

リポート21 死線(デッドライン)のヘルズエンジェル その7  
へ続く

## その7

リポート21 死線(デッドライン)のヘルズエンジェル その7  
【えーっと、横島さん達が戻ってきたんですけど……そのお】

連絡役に出ていたおキヌちゃんが顔を出す。先に戻ってきた。その言葉に対策本部に安堵の溜息が広がる

「皆は無事なの？」

【は、はい！横島さんと陰念さんは軽症、ビュレトさんはその魔人の攻撃で右腕の負傷、ノツブちゃんとシズクちゃんは炎でダメージは大きいようですが、水さえ補給すれば回復出来るそうです】

きいそうですが、水さえ補給すれば回復出来るそうです】

横島君と陰念がシズクとノツブちゃんを連れて、対策本部帰って来た。戻ってくるまで心配で心配で仕方なかった、途中で螢ちゃんが完成したバイクを届けに行くと言って飛び出して行ってしまったので余計に心配になっていたし、相手が相手なので全員無事で帰ってきてくれただけで良かった

「結局俺達には出番は無かったな」

「無い方が良いんです」

「……拙者もついて行きたかったござるよ」

「馬鹿ね、動物の姿なら追いつけるけど、その代わり防御がた落ちよ？横島に負担を掛けるだけだわ」

東京にマタドールがいる。だから唐巢先生と雪之丞達を念の為に残していたが、マタドールが姿を見せる事は無かった。よしと安堵するが、それとも何か企んでいると怪しむべきか……判断に悩む所だ  
「それでキヌ、ずいぶんいいにくそうにしましたが、他に何か問題はあったのですか？」

【えーっと問題と言えばすごい問題だと思っんですよ。なんて言えば良いのかなあ】

おキヌちゃんの言葉に首を傾げていると、対策室の扉が開き、その

理由が判った

「ハイ！マイフレンド！行こうぜ！スピードの向こう側に！」

「音速を超えるか……胸が熱くなるな」

「世界の壁は越えたことが無いぜ」

八兵衛と九兵衛がヘルズエンジェルと肩を組んで入ってきた。その後からは

「頭痛が……」

「大丈夫ですか？」

「……俺も頭が痛い」

「え？陰念も!?大丈夫なのか？」

「……いや、あの光景を見たら誰だって頭痛を覚えるわ」

横島君と蛭ちゃん、そして頭を押さえたビュレトと陰念。蛭も頭痛なのか!?と言うなんか良く判って無い様子の横島君に私も激しい頭痛を覚えながら、横島君にどうしてこうなったのか説明してとお願いするのだった……

俺と陰念の渾身の一撃を受けたヘルズエンジェルは岩場に大の字で寝転がりながら

「あーくそ、俺の負けだ。ちくしょうめっ！」

胴体に風穴が開いているがぜんぜん平気そうだった……会心の手応えだったって言うのに、魔人との地力の差を思い知らされた気分だ  
【オヤスマミー】

ベルトが消え変身が解除されるが、俺も陰念も驚くほど反動が少なかった

【眼魂によって負担が変わるのかもしれないな。とりあえず今は、ヘルズエンジェルを拘束しろ】

心眼の言葉に判ったと返事を返し、持って来ていた精霊石で結界を張ってヘルズエンジェルを拘束する

「負けたんだから暴れたりしないぜ？」

よっと言って結界の中で胡坐をかいて座るヘルズエンジェル。なんと言うかマタドールとかと違って交渉の余地があるように見える。



それと口調と態度から案外気前の良い兄ちゃんのようにも見える。骸骨だけど……

「陰念。悪いんだけど、ヘルズエンジェル見ていてくれるか？」

「……構わないがどうした？」

「いや、シズクとノツブちゃんが心配だから」

ヘルズエンジェルの直撃を喰らい吹き飛んだ2人が心配だと言うと、陰念はわかったと返事を返してくれた

「ああ、それなら行って来い。ここは心配ない、俺1人じゃ無いしな」  
バイクから八兵衛と九兵衛が姿を現し、結界の近くに座り込んでヘルズエンジェルと話をしている。俺はそれを見て、バイクに近づいてハンドル部分にセットされていた韋駄天眼魂を取り出して

「もし暴れたらこれを使ってくれ、八兵衛と九兵衛の力を借りれるから大分楽だと思う」

「……判った。感謝する」

韋駄天眼魂を陰念に投げ渡し、俺はノツブちゃん達を探す為にその場を後にした

「心眼。気配は？」

【そのまま進め、もう少ししたら見えてくるはずだ】

坂道を登り、ノツブちゃんとシズクが立っていた付近で心眼に尋ねると、もう少し進めと言われる。言われた通りに進もうとして、忘れてはいけない事を思い出した

「あ、そうだ。おキヌちゃん、俺が来た方に虫がいるんだ。もしかするとビュレトさんも回復してるかもしれないから、様子を見てきてくれるかな？」

俺が行けたら良いんだけど、ヘルズエンジェルをどうにかしないと動けないので、おキヌちゃんに見てきてくれるように頼む

【良いですよー、横島さんも無理をしないでくださいね】

手を振り、飛んでいくおキヌちゃんを見送り、心眼の誘導で、ガードレールの隙間から山の中に降りて、暫く進んでいると木の枝に引っ掛かっているノツブちゃんとシズクの姿があった

【メツチャ熱かったじゃけど!?!】

「……予想よりもヘルズエンジェルの熱が上だっただけだ。私は悪く無い」

口論している様子だが、元気そうだ。大怪我とかをしてなくて良かったと心底安堵する

「シズクー、ノツブちゃん！」

俺が呼びかけると2人がこつちを向く

【横島ー、何とかなかったのかー?】

「おおー! 2人のおかげで何とかなかったよー。所で大丈夫かー! 降りれるー?」

降りれると尋ねると無理ーと言う返答が帰ってくるので、近くに見えた岩の上に乗って

「シズクから行くからなー」

栄光の手をシズクの方に伸ばし、シズクが握り返すのを確認してから栄光の手でシズクを引き寄せる

「よつと、大丈夫?」

栄光の手が戻ってくる勢いで飛んできたシズクを抱き止めて、大丈夫?と尋ねる。何時も顔色が悪いから、顔色じゃあ判断がつかんから「……ちよつと今回は相手が厄介だったな。疲れた」

疲れた様子で座り込む、シズクに眼魂を差し出すとシズクの姿が眼魂の中に吸い込まれる。これで時間が経てば回復してくれるだろう

【横島ー! ワシも早くー!】

ノツブちゃんの言葉に判ったーと返事を返し、シズクと同じように栄光の手を伸ばし、ノツブちゃんも回収し陰念達が待っている場所に戻る。ビュレトさんと蛍の姿が会った

「横島、大丈夫だった?」

「俺は大丈夫だよ。蛍こそ大丈夫だったか?」

俺がそう尋ねると蛍はビュレトさんに途中で回収して貰って、迎えに来てくれていたおキヌちゃんに案内して貰ってここまで来たと教えてくれた。

「ありがとうございます、ビュレトさん」

「礼は良い。また俺は役に立たなかつたしな」

そうは言うが、ビュレトさんが有名だったから狙われたのではないか？と俺は思うんだけど……

「所で何で頭を押さえていたんですか？」

俺がそう尋ねるとビュレトさんはヘルズエンジェルの方を指差す。そつちに視線を向けると

「マツハー」

「フォーミュラー」

「おおおお……マイフレンドツ！」

ヘルズエンジェルが八兵衛と九兵衛と握手していた

「なあ。陰念、あれなんだ？」

「スピード狂の共感らしい」

……良いのかなあ……いやでも、なんかすつごい仲良さそうだし……余計なことは言わない方が良かった

「とりあえず帰りましょうか？」

美神さん達も心配しているだろうから帰りましょうと提案し、俺が蛭を後ろに乗せ、陰念はビュレトさんの後に乗る

「競争だ！ヘルズ！」

「ハツハー！バイクがなくても、俺は足は速いんだぜ！」

「負けないぜ」

3人で仲良く走っていく八兵衛と九兵衛、そしてヘルズエンジェルに、あれで良いのかなあと思いつながら、俺達も東京に向けて走り出すのだった……

横島君の話聞いて、対策本部にいた全員が頭を抱えていた。なんで魔人と仲良くなるのかなあ……韋駄天

「これを着てくれ」

「クールジャパンって奴だな！」

八と九の染め抜きがされている半被を着て喜んでいるヘルズエンジェルに激しい頭痛を覚える

「ヘルズエンジェル。どうして貴方は韋駄天を友達と呼んでいるので

すか？」

「ははっ！速い事とは強いことでありすばらしい事だだがそれを理解するものは少なく真の強さと美しさというの速さの中にのみ存在するそして仲間とは速さの強さと素晴らしさを共感することが出来る者の事をいうつまり魔人たちには速さが足りないッ!!」

なんかとんでもない早口で訳の判らない理論を口にするヘルズエンジェルだが、敵対する意思はなさそうだ

「というかそもそも俺は速さ比べをしたかっただけで別に戦いに来たわけじゃねえし戦いも面白いがなによりもレース！これが最高の闘争の形だ」

思わずビュレトさんとブリュンヒルデさんを見る。2人は溜息を吐きながら

「結構襲ってきていたが、あれはなんだ？」

「そりやおめえ、レースの誘いだ。でも攻撃してくるから反撃しただけだぜ？」

「そう言えば、ヘルズエンジェルが殺した神魔はゼロでしたね。周囲の被害は凄まじいですけど」

……なに？この魔人って傍迷惑なだけな存在って事？

「はははー！それは悪いな！気合が入ると炎をコントロール出来ないんだぜ！」

訂正めちやくちや傍迷惑な存在でした。でも魔人なので何か有益な情報を聞き出せるかもしれない

「ヘルズエンジェル。魔人の仲間と言うのはどれくらいいるんだね？」

「あゝ？四騎士だろ？マタドールだろ？クソ爺だろ？後は……笛吹きとお姫さんだな」

少ない……8人。魔人一派はたった8人の集団だというの？

「笛吹きはずいぶん前にいなくなっただけで聞いたような？ハハ！俺も殆ど合流したことねえからしらねえや」

どうしよう、こいつ、物凄く殴りたい。ヘルズエンジェルが知らないだけでもっと他の魔人がいるかもしれないと言う事なのだから

「と、とりあえず。私とビュレト様でヘルズエンジェルを1度連行します」

「知ってる事はかなり少なそうだがな……」

スピード狂いで仲間意識薄め……初めて撃破した魔人が何とも言えない存在だが、仲間の特徴などを教えてくれれば幸いなだろう。ビュレトさんとブリュンヒルデさんに連行され、それに付き添う韋駄天2人を見送る

「横島君、陰念君。どこか体調が悪いとかは無いかな？」

「あー大丈夫です。ちよつとしんどいだけです」

「……俺は喉が渴いた」

今回の功労者の2人が特に怪我をしていなくて良かったと思った。何故ならば……

【急患は何処ですか!?!】

ナイチンゲールさんが病院から姿を消したと先ほど、病院から連絡が合ったからだ

「むう!?!」

【言峰! やつと見つけましたよ! 病院から逃げ出して! 大人しくしなさい!】

言峰神父が逃げようとしたが、ナイチンゲールさんの方が一手も二手も上で……

「うっ!」

【逃がしません】

逃げようと目晦ましを投げた言峰神父の腕を弾き、そのまま背後に回りこんで絞め落とす。

【横島さん、陰念さん、それにシズクさんとノツブさん。1度病院に来てくださいいね?】

につこりと笑うナイチンゲールさんに横島君達は壊れたように何度も何度も頷くのだった……

【それと琉璃さん。状況確認をしたいのは判りますが、皆さん疲れている様子。今日の所は1度解散にしましょうね?】

あ、これは断れば全員強制的に入院させられる流れだ。色々確認

したい事はあったが、ナイチンゲールさんのバーサーカー具合は全員が知っているので、全員冷や汗を流しながら対策室を後にするのだった……勿論明日早朝から再び集まってくれようように頼んでから

「うーむ。ヘルズは敗れたか、まあ良いだろう。あいつは馬鹿だから」  
元々大して仲間意識も無い男だ。むしろ横島と陰念とか言う男の力を余に見せてくれただけでもよしとしよう

「女神……なんだ、もういないのか。詰まらん奴め」

女神に声を掛けようにももうその姿は無い。まあ無理矢理連れて来たから、用が済んだら消えるのは当然か

「どうしますか？ヘルズは？」

「ほっておけ、排除する理由も無い」

ヘルズから引き出せる情報など大したことは無い。それよりも……だ

「どうも今東京に余を勝手に見つめていた男の仲間がいるようだ」

眠っていたが覚えている。あの下賤な瞳、余は完璧な美を持っているので目が惹かれるのは仕方ない。だがあの下賤な瞳、思い出しただけでも忌々しい！

「探せ、そしてその男達の拠点を炙りだせ」

頭を下げた出て行くレッドライダー達を見送り、机の上に茶器を並べる

「明けの明星まで尋ねてくるとは、人気者も辛いな」

いつの間にか現れていた明星に紅茶のカップを差し出す

「ははは、そうだね。大淫婦、君が蘇ってから会いに来ようとは思っていませんよ」

「横島を見ているついでだったくせに」

それは痛いところを突かれたねえと笑う明星はカップの中身を口にして、満面の笑みを浮かべる

「少しの間、私に協力してくれないかな？」

「いきなりなんだ？それは余にとってメリットはあるのか？」

いきなり協力しろと言ってきた明星。付き合いが短い訳では無いが、余りに突然の事でどうしても警戒心が先行する

「何、横島達が東京を少し離れるみたいだからね。その間、私と一緒にガーブ達が動こうとするのを防ぐというのはどうかな？」

「ほほう、それはまた面白そうだな」

余を下賤な目で見ていた者の拠点を知っているような口ぶり。それに横島達がいらない間に、事が進むのも面白くない。だから余は

「良いだろう。協力しようじゃないか」

「そう言ってくれると思っていたよ。じゃあ、明日にでも出掛けようか？」

「何処にだ？」

余がそう尋ねると、明星は邪気の無い顔で笑いながら横島の所と言うので、余もにこやかに笑い返しながら

「それは良い、全然会って無いからな」

余が一方的に横島を知っていると言うのも面白く無い。だから明星と共に横島の元に出掛けることに了承したのだった……

『明星と横島の所に遊びに行つて来る ネロ』

その書置きを見て、四騎士達が絶叫したのは言うまでも無い……ルイ・サイファアと魔人姫の共通点。それは部下をこれでもかと振り回す点だった……そしてそれは互いの部下をかわいそうなまでに振り回すことであり

「暫くの間女帝の世話も頼むよ」

「よろしく頼むぞ」

「……はい」

ルキフグスも同時刻。完全に血の気の引いた顔でルイとネロの世話を始めているのだった……

## 別件リポート

別件リポート アリスちゃんのお家

横島の所で世話になっていたアリス。横島からのお土産として貰った？ついて来た精霊(?)は私達の屋敷をトコトコと歩き回っていた

【のっぶー♪】

「あ、ああ……ありがとう」

畳であるタオルを手渡され感謝の言葉を口にする。すると精霊……チビノブにはぱつと笑い部屋を出て行く、扉の外から

「チビノブもお手伝い？」

【ノブノーブ♪】

「アリスもお手伝いするー、ハーピーお姉ちゃんの所に行こッ！」

【のっばー】

きやつきやつと楽しそうな声がするのを見て、私は小さく深呼吸をして

「ちよつと横島を殺してくる」

「ちよつとそこまでタバコを買ってくるみたいなノリで物騒な事を言うなたわけ」

ゴスツと私の頭にネビロスが読んでいた本の角が文字通り突き刺さるのだった……

「横島がいるからアリスが明るいのには何故横島を害そうとする」

「……横島横島言うアリスを見てるととても悲しくなってくる」

お兄ちゃんお兄ちゃんとお兄ちゃんとお兄ちゃんが慕っている横島が羨ましく思えてくるのだ……

「アリスの人格面の成長に横島は大きく関係しているぞ？」

「……判ってる。判ってはいるんだ……」

頭では理解しているのだが、どうしても感情で理解出来ない。



「アリスが横島に嫁いでしまうのでは無いかと……」

「気が早すぎた馬鹿者」

アリスは私とネビロスの英知を生かした少女だ。ゾンビでありながら成長する彼女を見てみると私よりも横島を選んでしまいそうなのが怖いのだ

「アリスも成長する。幼い子供では無いのだよ」

ネビロスの言葉に判っている、判ってはいるのだと返事を返す。私もネビロスもアリスに惜しみない愛情を注いで来たつもりだが、アリスを成長させているのは一緒にいる私達ではなく、横島であると言う事がどうしても引つ掛かるのだと私はネビロスに言うのだった

お兄ちゃんがくれたチビノブとハムちゃんと一緒にぐーちゃんの小屋に向かう

「ぐっぐー♪」

「あはは、ぐーちゃん、くすぐったいよー♪」

擦り寄ってくるぐーちゃんの頭を撫でながら、足元に居たチビノブを抱っこする

「チビノブだよ。アリスの新しいお友達」

「ノブー」

ふんふんと匂いを嗅いだぐーちゃん。最近は口に入る物を何でも食べようとしないので大丈夫だと思う

「そしてこの子がハムちゃん」

「ちゅー！」

「ブルルル」

頭の上のハムちゃんが鳴き声で返事をするぐーちゃんも同じく鳴き声で返事を返す。

「よーし、じゃあぐーちゃん！ブラシしてあげるからねー」

「ノブーー！」

ぐーちゃんよ様のブラシを手にとってチビノブと一緒にブラシを通す。気持ち良さそうな声で鳴く、草と水を餌うけに入れて馬小屋を後にする

「やあ、アリス」

「黒おじさん！どうしたの？」

黒おじさんに抱きついてどうしたの？と笑うと黒おじさんはチビノブやハムちゃんを見て。嬉しそうに笑いながら

「実はね、アリスにお願いがあるんだ」

「アリスに？」

黒おじさんからお願いがあるなんて初めてだ、お手伝いかな？お使いかな？とワクワクしていると黒おじさんはにっこりと笑いながらアリスに耳打ちする

「お願い出来るかな？」

「うん！判ったー♪ハーピーお姉ちゃんに相談してくるー」

【のぶー】

黒おじさんからのお願いを引き受けた私は厨房にいるであろう。ハーピーお姉ちゃんの所に走った

「ハーピーお姉ちゃんー！」

「え？あ、アリス？どうしたの？」

お皿を拭いていたハーピーお姉ちゃんに駆け寄り、私はハーピーお姉ちゃんの顔を下から見上げながら

「赤おじさんにパンケーキを作るの！だから教えて！」

にっこりと笑みを浮かべながらハーピーお姉ちゃんにそうお願いするのだった。黒おじさんが教えてくれたんだけど、赤おじさんが元気が無いらしいので、赤おじさんの好きなパンケーキを作ってあげて欲しいと言われたのだ

「パンケーキ？んー判った。ちよつと待ってね、材料用意するから」  
「じゃ、アリスエプロン取ってくるー♪」

黒おじさんが編んでくれたエプロンが部屋に置いているので、私はハーピーお姉ちゃんが準備している間に、自分の部屋へと走るのだった……

ベリアルに視線を向ける。ベリアルは机に突っ伏して溜息を吐いている、あのドラゴンとも言える姿でそんな姿をしていると哀れを通

り越して滑稽に見えてくる

「ベリアルよ、横島を嫌うとアリスに嫌われるぞ？」

アリスは横島好きなので、横島に意地悪とすると間違いなく嫌われるぞ？とと言うとベリアルはうむむううつと唸る

「お前は横島を毛嫌いしすぎだよ。彼は中々好青年だよ？」

どこかずれてるけどな、斜め上を全力で駆け抜けていくその独特な思考回路は私も疑問に思うがそう悪い人間では無い

「……接点が無いからな」

「接点を作ろうとしないのはお前だ」

横島自身はアリスの保護者と言う事で私もベリアルも立ててくれている。それにアリスが帰る時は必ずお土産まで持たせてくれる

「お前が横島を嫌い理由を教えてやろうか？トトカルチョだ」

うぐつとベリアルが呻く、元々ベリアルは移り気な相手と言うのは好きでは無い。だから神魔の中でトトカルチョになるほどに女性に好かれている横島に嫌悪感があるのだろう

「女にやたらめつたら手を出す奴は好かん」

「逆に考えろ、横島が手を出されているんだ」

横島自身は草食系とも思える。肉食獣に囲まれている草食獣……  
そこまで連想した所で思わず笑ってしまう

(あれはあれで一途だろうに)

嫌な話だが、あれだけ美女に囲まれていればより取り見取りなのに、横島自身は全く手を出そうとせず、回りをやきもきさせながら小動物の世話をしている。あんな男もまた珍しいだろう

「赤おじきーん♪」

勢い良く扉が開き、アリスが満面の笑みを浮かべ部屋に入ってくる。その顔には白い粉がついていたり、エプロンには染みが出来ていたりと酷い有様だ

「アリス。その格好はどうしたんだ？」

ベリアルが驚きながら尋ねるとアリスは胸を張りながら

「赤おじさんと黒おじさんにおやつを作ったのー！ねー？」

「ノブノブ!!」

チビノブがカートを押して来てアリスと一緒に嬉しそうに笑う。ベリアルに料理を作ってくれと言ったが、まさか私の分まであるとは思わなかった

「むふー！頑張った」

赤おじさん、黒おじさん大好き！と書かれているホットケーキに思わず、目頭が熱くなった。あんなに無感情だったアリスがこんなにも成長してくれた。その成長を齎してくれた横島に心の底からお礼を言いたい

「それでねー、赤おじさん、アリスお願いがあるの」

「……な、なんだ？何でも聞こう」

ベリアルがハンカチで涙を拭いながら、アリスに笑みを向けるが、それは次のアリスの言葉で凍りついた

「アリス、赤おじさんにもお兄ちゃんと仲良くして欲しいの……駄目？」

アリスに取ってはベリアルも横島も大好きなので、喧嘩してほしいし、仲良くして欲しいのだろう。ベリアルはホットケーキとアリスノ顔を交互に見て、既にナイフとフォークを手にしホットケーキを口に行っている私を恨めしそうに見つめながら

「……わ、判った……今度時間を見て、横島が屋敷に来れるように準備しよう」

「本当ーありがとう！赤おじさん！アリス一生懸命作ったから食べてね！」

はしやぎながら部屋を出て行くアリス。ベリアルはナイフとフォークを握り締め

「ああ。見定めてやるぞ……お前がアリスに相応しいかなあ……横島忠夫オオ!!」

「やりすぎて嫌われるなよ」

目が炎になり、髪も燃え盛っているベリアルに私はそう声を掛け

「所で、人間が私達の屋敷に耐えられるかな？」

「……私は知らんぞ、そこはお前に任せるからな」

ここは魔界でも深部だから人間が耐えられるか判らん。横島を呼ぶ前に1度屋敷の点検をブリュンヒルデに頼んだ方が良さかもしれない

「生クリームとチョコソース……素晴らしい味だ」

今まで怒っていたのに、アリスが作ったホットケーキに表情を和らげられるベリアルに単純な奴めと思いつながら、私もホットケーキを口に運ぶのだった……幼いアリスが料理まで出来るようになった。その事は私とベリアルにとって何よりも嬉しい出来事なのだった……

一方その頃アリスはと言うと

「じゃーん、チビノブちゃんのベッドー！」

「フツブー♪」

ベリアルとネビロスがそんなことを考えているとは欠片も思わず、自分の部屋にチビノブ用のベッドを配置し

「こっちはハムちゃんね」

「ちゅー♪」

拾ってきたネクロマンサーのネズミのケージの準備をしたりと、今まで以上に充実した日々を過ごしているのだった……

リポート22 いざ、妙神山へ その1

## リポート22 いぎ、妙神山へ その1

リポート22 いぎ、妙神山へ その1

ヘルズエンジェルの戦いの後。俺はナイチンゲールさんがいる霊能科の病院を訪れていた……のだが

「えーつと何をしてるんですか？」

【大人しくしていなさい】

強い口調で大人しくしていなさいと言われ、はいつと返事を返し枕に顔を埋める。寝転んだ状態で手足をずっと触られている、これは一体何の検診なのだろうか？さっきはレントゲンみたいなのを取っていたけど……

【はい、もう座って良いですよ】

座って良いと言う許可が出たのでベッドの縁に足を投げ出して座る。ナイチンゲールさんは手にしているカルテに熱心に何かを書き込んでいる。これは邪魔しない方が良いなと思い静かにする

(美神さん達はどうかかなー)

琉璃さんの所に行った美神さんと螢は大丈夫かなあとと思うのと、先に検診を終えたシズクとノツブちゃん和付き添いで来てくれてるタマモもずいぶん待たせているけど、怒ってないかな……

【どうも横島さんはかなり特異な体質のようですね】

「はい？」

ちよつと言われている事が理解出来ず、間抜けな返事を返してしまふ。ナイチンゲールさんは言い方が悪かったですねと言って、詳しく説明してくれた

【経絡と言うのは普通酷く損傷すると回復が極めて難しくなります。横島さんの場合、何度も霊力が完全に枯渇していますね？それは経絡にも酷い負担を掛けるのですが、それは知っていますね？】

「は、はあ。それは何度か……」

普通の霊能者なら再起不能になってもおかしく無いって言うのは何回か聞いたことがある。

【普通ならとつくに霊能者としては再起不能になってもおかしくないのですが、横島さんの場合。経絡が損傷しても、それを上回る速度で経絡が回復しているのです】

……損傷しても上回る速度で回復？ちよつと言われている意味が判らない

「えーつと普通は霊力を適度に消耗して、経絡を強くするとか聞いていたんですけど」

【ええ。普通はそうです、ですが霊力を枯渇させて、回復させると言うのは無理なんです】

そもそも霊力は魂の力、つまり生命力と直結しています。それを完全に枯渇させるというのは死に直結しますし、霊能者としては普通は再起不能になるんですと優しく言われ、美神さんと蛍が何度も何度も俺の事を心配している理由が判った

【筋肉痛はわかりますよね？】

「え、あ。はい」

ランニングとか筋トレをしているので筋肉痛は判るけど、なんで急に筋肉痛？俺が首を傾げるとナイチンゲールさんは更に詳しく説明してくれました

【損傷した筋が回復する事で筋肉痛となりますが、普通経絡は損傷したら終わりです。ですが、貴方の場合筋肉痛のように損傷したらより強く、強靱に回復しているのです】

とは言え、普通は回復しないので、どうしても思うのですが、とナイチンゲールさんは首を傾げていた

【とりあえず薬を処方しておくので、暫くは食事の後に服用するように。ではお大事に】

ありがとうございますと言ったと言ってナイチンゲールさんの検診室を後にする。残されたナイチンゲールはカルテとレントゲンを見て

【異常なほどに発達している……これはどう見ても、人間の経絡では……それこそ神魔レベルの……これはどういう……】

その手に残されたレントゲンの写真に写っている横島の経絡。それは人間とは思えないほどに発達した経絡が全身に張り巡らされている姿があった……

「これはおいおいするとして、言峰綺礼。貴方にはもう言葉が無駄だと良く理解しました」

着ていた白衣を脱ぎ、眼鏡を外し、首を鳴らし、拳を鳴らすナイチンゲールの向かう先には、以前逃亡を試みている言峰の姿があった  
「私には使命があるのだ」

「ええ、私にもありますよ？患者を救うと言う使命がね」

互いに平行線のまま、第14回ナイチンゲールVS言峰綺礼。無制限1本勝負の幕が開くのだった

「む、長老。また言峰殿が脱走を試みているでござる」

「あの御仁も懲りんのう……」

「拙者はまだ諦めてない！」

「諦めろ馬鹿」

脱走を試みて、その度に重症を負っているポチに、長老とクロの無慈悲なツツコミが突き刺さるのだった……

横島君、シズク、ノツブちゃんの3人が病院に行っている間に私と蛸ちゃんはGS協会を訪れていた。対策室の看板から、復旧対策になっている

「やっぱりあれですかね？ヘルズエンジェルが走り回った道路の復旧って大変みたいですね」

アスファルトを溶かし、岩石さえも溶解させる。ただ走っていただけと言っているが、あれほど傍迷惑な存在もそうそういないと思う。復旧対策とかかかっている会議室の前を通り、琉璃の部屋に向かう

「あー美神さん、お疲れ様です……」

書類の山に囲まれてぐったりしている琉璃にそっちこそ大丈夫？と声を掛ける

「違いますよ、疲れてぐったりしてるんじゃないくて」



「今病院から来た横島君の検査結果を見て、僕も神代会長も心配になつてしまつたんだよ」

2人のあまりに深刻な表情を見て、これは只事では無いと判断した「横島が実は重症とかとかですか？」

「うん、正直言うと、私としてはソツチの方が嬉しかったわよ。これはちよつと……墓場まで持つていく覚悟が必要かなつて」

「うん、僕もそう思う。オカルトGメンのデータには絶対に残せないよ」

とりあえず座つてと言われ、激しく嫌な予感を感じながら椅子に腰掛けると、琉璃がFAXのコピーを差し出してきた。私は差し出されたFAXと見て絶句した

「美神さん、一体な……に……」

同じくFAXを覗き込んだ蛍ちゃんの目が、FAXの文字を追つて動き、そして私と同じように絶句した。そこにはレントゲンらしい物のコピーも添付されていたのだが、それを見れば異常さが判る。横島君の経絡が異常に肥大している、そして専門家のナイチンゲールからの一言。人間ではなく、神魔クラスの経絡の太さになりつつあると……

「マタドールやヘルズエンジェルが言つてましたよね、同胞つて。私としては言いたく無いんですけど、横島君は本当に魔人に近づいていくのかもしれないです」

原因は判らないですけど琉璃は前置きする。横島君の場合、これが原因なんじゃと思うことが多すぎる。くえすの魔力の譲渡に始まり、韋駄天の憑依と眼魂の入手。そして牛若丸、ノツブ、シズクと規格外の存在との同居に、憑依、そして恐らく極めつけは香港での小竜姫様とメドーサの二人の眼魂を使った暴走形態。それらの要因が組み合わさつて、横島君を人外の領域に押し上げているのかもしれない「僕としては横島君の事を口外するつもりは無いし、記録にするつもりも無い」

「私も原本は破棄するようにナイチンゲールさんに言いましたし、ナイチンゲールさんも今回のカルテとレントゲンは誰にも見せてない

と喋って来ています」

「……つまり、横島君の事を知るのは、横島君本人とナイチンゲール。そして私達4人と冥華おば様って事ね？」

私の問いかけに琉璃は小さく頷く、あの病院だって六道の手が入っている。間違いなく冥華おば様の下に横島君の事は伝わっているだろう

「そこで、西条さんとも話し合っていたんですけど……妙神山に修行に行きたいって言ってましたよね？」

「……1度隠れろって事ね？」

西条さんが関わっている段階でまず普通じゃない、GS協会とオカルトGメンは犬猿の仲とも言える。西条さん自身はGS協会に思うことが無いとしても、今度配属されてくる部下が同じとは限らない「ちよつとね、流石にヘルズエンジェルの件は内密に処理出来る物じゃないからね」

「国際GS連盟も動きますし、その間……2週間ほどは妙神山に隠れて欲しいんですよ」

だいそうじょうの件はなんとか内密に処理したらしいが、流石に今回のヘルズエンジェルは無理だったらしい、あれだけ派手に市街地とかを走り回れたらそれは当然だろう

「で、でも2週間で本当に大丈夫なんですか？」

「まあ何人かは残るだろうね、でもね、オカルトGメンにしても、国際GS連盟に関しても日本はさほど旨味のある土地じゃないんだよ」

西条さんは正直に言い切った、左遷と言っても良いレベルなんだよ。本当はねと……

「じゃあなんで日本に来る事を選んだんですか？」

琉璃の言葉に西条さんは苦虫を噛み潰したような顔をしてから教えてくれた

「僕に関しては本当はヨーロッパ支部の予定だったんだけど、本当に強引に日本に来たんだ。本当はここに来る奴が余りにひどいんでね」顔を歪めた西条さんは本当は日本に来る予定のオカルトGメンのことを教えてくれた。書類上は汚職の摘発となっているが、実際は性

格、言動が日本に相応しくないと言う事と、冤罪で3人の人間を死刑に追い込んだと言う事を指摘して、強引に割り込んだらしい

「名はイクサと名乗っているが、これは間違いなく偽名だ。容姿は金髪碧眼で人当たりが良さそうな男だが……強引な逮捕、証拠の捏造と自白の強要に、温厚な精霊や妖怪も殺す人類至上主義者だ。元妖怪専門のバウンティ・ハンターだ」

ついでに言うと言捕を狩といい精神的にも肉体的に徹底的に追い詰め壊す。殺した妖怪とかは剥製とかにして飾ることを趣味にしている

「なんでそんなのがオカルトGメンにいるのよ!？」

普通に犯罪者だ。なんでそんな相手がオカルトGメンにいるのかと思わず叫んでしまった

「……頭が良いんだよ物凄くね。自分が摘発されないように根回しをするし、検事としての資格も、医者としても資格もある。それに何よりも今のオカルトGメンの総監の娘と結婚しているから、今回の件でも退職には追い込めず、別の支部に派遣されることになっている。野獣の様な本性を知性で隠しているそんな男だ……確か言峰神父を国際指名手配犯にしたのもあいつだ。インドの方で精霊に育てられた子供を穢れ人として殺そうとした時に言峰神父に邪魔をされたと言う事に腹を立ててね」

まあ元々余り言峰神父は良い顔をされていなかったが、その件に関しては100%イクサが悪いと西条さんは断言した

「日本を希望したのも、オカルトGメンの支部が新しく出来るのと、国際GS連盟からの監視が弱いと踏んでの事だと思っている」

自分の悪事がばれない場所として日本を選んだと思われるイクサ。だがそのときと今は余りに情勢が違う、魔人が多く潜み、ガーブ達の侵攻場所となっている日本。つまり自分の出世には大きく影響を齎すが、常に命の危険に晒されるかもしれない場所。そんな所に好き好んでくる人間はいないと西条さんも琉璃も断言した

「とりあえず、イクサの事はいい。日本に来る事は無いだろうからね、今大事なのは横島君も蛭君も令子ちゃんも1度妙神山に行く事だ。

修行と言う名目でなんともなる。それに今回は魔人の被害の確認になる筈だから、調書を出すことでこれも何とかなる」

「今まで駄目だ、駄目だと言っておきながら、急に行けと言っておきながら、調査団が来る1週間後までに妙神山に出発してください」

私達の事を心配してくれている西条さんと琉璃。多少予定は狂ったが、妙神山に行くことに変わりはない……けど

「琉璃と西条さんは大丈夫なの？」

意図的に当事者を隠すようなことをして大丈夫なの？と尋ねると2人は困ったように笑いながら

「今回の話は冥華さんのルートで入ってきた話ですから、突然尋ねてくるつもりですけどね。向こうは」

「ああ。でも突然尋ねて来て、当事者がいないのは向こうが悪い。そう思わないか？」

ああ……どうもまた私は冥華おば様に借りが出来てしまったが、今回はそうも言ってもらえないわね。2人にありがとうと頭を下げ、私と蛭ちゃんはGS協会を後にした。

「蛭ちゃんは準備を始めておいて、私は依頼の先延ばしの話をするから」

横島君も昨日の今日で出発する準備を整えるのは大変だ。私も入っていた依頼の件もある

「4日後に出発よ。シロとタマモも勿論連れて行かせるわ」

「そうするしかないですね」

人狼と九尾の狐。その2人も当然見られるわけには行かないし、英霊であるノツブと牛若丸に沖田ちゃん、それにシズクも駄目だ。国際GS連盟とオカルトGメンに正式に報告されているマルタ、三蔵は大丈夫だとしても他の面子は見られるわけには行かない

「大所帯ですけど、小竜姫様怒りませんかね？」

「……大丈夫じゃない？多分」

先の判らないことを不安に思うよりも、とりあえずなるようになれと思ったほうが気が楽だ。それが横島君と付き合う上で一番大事な

ことだと悟ったのだから……

一方その頃横島は言う……家でチビとウリぼーと遊んでいたりする

「みむー！みむーうー！」

「ほれほれ、捕まえてみる」

チビの目の前で指を振っていた。チビは短い手を一生懸命動かして、捕まえようとしているが上手くいかない。だがそれが面白いのか、尻尾も羽根も凄いい勢いで振るわれている

「みつむー！」

指に前足と後ろ足でしがみ付くような形で抱きつき。捕まえたと言わんばかりに満足げに鳴くチビ

「シズク達もいないしなー」

診察の結果異常なしかった2人は、いつものようにメロンパンを買いに行き、シズクは牛若丸を連れて夕食の買い物だ

「ぶぎゆうー！」

「俺も暇だから買い物きたかったなー。ウリぼーもそうだよなあ」

寄ってきたウリぼーを抱き上げる。買い物に行つてチビとウリぼーの果物を買おうと思つていたのに……買つて来てくれるとは言つていたが、少し悪いという気持ちになる

「お前が平気だと思つても、私とシズクから見ると療養するべき状態なんだ」

怒るような心眼の口調に謝っているとシロとタマモがリビングに顔を出す

「じゃ、横島。ちよつと出掛けて来るから」

「夜までにはかえるでござるよー」

出かけてくるという2人に気をつけてなーと言つた物の、今日は家でゆっくりしてると言つてなかつたかなあ？と首を傾げる

「ぶーぎゅー！」

「おおバク宙！すごいなー！」

うりぼーがいつの間にか覚えていたバク宙に凄いと行って手を叩いていると、ピンポンとチャイムの音が響く

「ノブノブ？」

「あー良いよ。俺が出る」

タオルとかを運んでいたチビノブが帰って来て、出ようか？と言わんばかりにこつちを見るが、チビノブはノブノブとかしか言えないので、知り合いじゃないと困るからなと言って、玄関に向かう

「はーい……あれ？」

玄関を開けるとそこにはちよつと意外な組み合わせな人物の姿が会った。ふわりとした青いワンピース姿のルイさんと、赤いワンピース姿のネロちゃんに思わず首を傾げる

「ちよつと暇だからお茶をしに来たよ」

「うむ、暇だからな！」

暇だからお茶をしに来たと言う2人。別に俺の家じゃなくても良いのになあと思いつつも、折角尋ねて来てくれたのに追い返すのも悪いなと思いつ、俺はどうぞ上がってくださいと声を掛けるのだった……

横島は知る由も無いが、ネロとルイの2人によって、家の中に自分1人になった事、そしてもう一つ

「……胃、胃が痛い……」

「大丈夫ですか？胃薬いりますか？」

周囲を神魔に覗かれない様に結界を張っている、ベルゼブルとルキフグスの姿が自分の家の屋根の上にいる事を……そして心労で本格的に胃を壊し始め、ぐったりしているベルゼブルと、そんなベルゼブルの背中を摩るルキフグスの姿があることを、横島は知る由も無いのだった……

リポート22 いぎ、妙神山へ その2へ続く

## その2

リポート22 いぎ、妙神山へ その2

カチャカチャとキッチンから横島が何かをしている音が響く中。手を持ち上げ、少し眉を顰める

「この場所は些か辛いかな？」

「…………いや、それでもない」

にやにやしている明星に弱みを見せる訳には行かないが、リラック  
スできる環境かと言われると正直そうとは言えない

(神域…………いや、これは違うか)

意識して魔力から神通力に切り替えると、肌にぴりぴりとしていた  
感覚がなくなる

「なんだ。もう適応したのか、詰まらない」

本当に性格の悪い奴だと思いつつも、横島の家の中を観察する。  
と言つても家具等を観察しているのでは無い、横島の家の中に漂う力  
に視線を向ける

「この家はおかしいな、普通じゃない」

「ああ、横島の家は普通じゃないのさ」

神通力に靈力に竜気に魔力…………それらが異常に交じり合つて、普通  
ではありえない空間を作り出している。それは異界と言つても十分  
に通用するレベルだ

「あんまりお茶を入れるの得意じゃないんで、少し渋いかもしれない  
ですけど…………」

「フブフブ」

横島とお菓子の入ったお盆を手にして歩いてくる小人…………妖精？  
いや、妖精にしては存在感があるな、なんだこの奇妙な生物は…………

「うむ。ありがとう」

「すまないね」

机の上に置かれたのは見慣れない緑色の茶。そして楕円形のおか  
しが4つ

「緑茶とドラ焼きなんですけど、ネロちゃんは和菓子とかは初めて？」  
「ちゃん付けか……いやまあ。確かに余は横島よりも大分背が低いし……訂正するべきか否か……おいこら、明星！口に手を当てて笑いを堪えているんじゃない!!」

（とは言え、この呼び方は新鮮だな）

「姫様とかばかりだったのだから、ちゃんづけは非常に新鮮だ。それに横島の余を氣遣っているような視線もそう悪くは無い……ので」

「うむー初めてではあるが、これも旅行の醍醐味！ありがたく頂戴するぞ」

訂正せずに年下と言う感じに振舞うことを決めるのだった……ただ

「ルイさんは大丈夫ですか？」

「ああ。平気だよ。和菓子は好きだからね」

「何故明星だけさんづけかつ敬語なのか……やはり身長の問題なのだろうか？いや、しかしこればかりはどうしようもないし、なんかむしゃくしゃしたのでドラ焼きとか言う菓子を頬張る」

「おお……これは美味しい」

ホテルではケーキなどを良く口にするが和菓子は食べた事が無かったと思う。ふわりとした生地と中の滑らかな甘さ控えめの黒い奴、これが美味しい。緑色の茶も美味しい、かなり苦いと思うのだが、その苦味がこの和菓子と言うやつを良くしてくれていると思う

「はい、チビノブの分な」

【フツブー♪】

横島の横に座り半分に割って貰ったドラ焼きを美味しそうに頬張る小人。恐らく手製であろう、小人サイズの湯呑み

「ほい、チビとうりぼーは林檎」

「ぷぎー♪」

「みみーむ」

「グレムリンとうりぼーサイズの林檎なのに、皮が兎の耳のようになっている。これは並大抵の器用さでは無いな」

「横島は手先が器用なのか？」



「手先？結構器用だと思うよ？良く魔法使いの人にシルバーアクセサリーを作れって言われて作る時あつて、なんか面白くなつて色々作ってる」

魔法使いと言うと神宮寺か、人間にしたら優れた魔法使いと言えるだろう。しかしアクセサリーか

「面白そうじゃないか、私にも見せてくれよ」

「ええ……ルイさん、お嬢様じゃないですか……そんな相手に見せるものじゃないつすよ？」

「良いじゃないか、余にも見せてくれ。面白そうだ」

余と明星の2人に言われ、本当に大したこと無いですからね？と言つて席を立った横島とその後を付いていく、グレムリンと猪そして小人を見ていると明星が告げた

「横島。ずいぶんと魔人化が進んでいるようだね」

「その様だな」

余を横島は抵抗なく迎え入れているし、友好的だ。その理由は一つ魔人化が進み、無意識のうちに余を味方だと思ひこんでいると言う事だろう……

「だがそれは余のせいでは無い、それは全て横島の素質だ」

魔人と言うのはその数が極めて少ない。その理由は魔人になる条件の1つ、後天的に神通力と魔力を得ること事態がまずありえないことだから、次に仮に魔力を得たとしても魔人として覚醒するかは素質が大きく作用する。

「生きたまま魔人へと近づくと男など初めて見た」

「だろうねえ」

そして最後の前提条件。魔人とは死して初めて覚醒する。生きたまま魔人へと至ろうとしている横島がどれだけ異質なのかと言うのは余も良く判っている。だからこそその行く末を見たいと思うのだ。「どうなるのか見て見たいのだよ」

「ああ。それは私も同意だ」

今のままではどうなるかも判らない横島。それがどんな風に成長していくのか、そしてどんな結末を迎えるのか。それが見たくてしよ

うがないと余もそして明星も思っているのだった……

横島が持つて来た小箱の中をネロと共に覗き込む。手作りで素人と言っていたが……

「凄いいじゃないか、これなんかは売り物になると思うよ」

薔薇のブローチ。これなんかはとても素人とは作れる物では無いだろうと思っていると、ネロにブローチをひったくられた

「横島！これを余にくれ！余は薔薇が大好きなのだ」

「別に良いけど、大した物じゃないぞ？お嬢様って雰囲気の内口ちゃんに似合うかどうか……」

ああ、手作りの物だからお嬢様と言う雰囲気の内口に似合うのか心配しているのか……変な所を気にするなと苦笑しながら、私は目に付いた指輪を2つ持ち上げる

「じゃあ私はこれを貰おう」

「いやいや！本当大した物じゃないですからね!？」

大した物じゃないと謙遜するが、短い幅に文字のような模様が刻まれ、そして何よりもこの異界とも言える横島の家で作られている（素晴らしい、これほどの物はそうそうお目にかかれない）

技術は荒く、成型も未熟。だが無意識に、横島はこの家に満ちている神通力、魔力、竜気をこれに練りこんでいる。少し加工すれば、それだけで魔法などの触媒となるだろう、しかもこれは……『無色』だ。本当にまつさらな透明な力……どんな色にも変えられる。素晴らしい品だ

「私はこちらが気に入ったんだよ。だから欲しいと言っているんだ」

駄目かい？と尋ねると横島は困ったように笑う

「素人の作った奴なので、あんまり見せびらかさないでくださいよっ……」  
「ふふ、それはどうだろうね」

判る者はこの指輪の価値が判る。私がどうしようかなと言いなながら笑うと、横島は本当に止めてくださいよと言う。自分の作り出した物に価値があるとは信じていない、その反応に笑ってしまう。これほ

どまでに多才なのに、どうしてこうも自信が無いのとも思う

「これは良い出来だ。横島、また薔薇でアクセサリーを作ってくれ、今度はペンダントが良い」

「ああ、それは良いね。じゃあ私はブレスレットでも頼もうか」

「いやいや、本当無理ですからと言う横島にネロと共に笑う。ああ、実に愉快だ。面白い人間だよ、本当にな……」

「そう言えば、ネロちゃんとルイさんって友達なんですか？」

暫く世間話をしていると横島がそう尋ねてくる、これはなんとも反応に困る。があえて言うなら

「友達だな（殺しあう）」

「うむ、友達だな（殺しあう）」

私の道もネロの道も決して重ならぬ物だ。故に今は仲良くしていても、いずれは殺しあうことが決まっている。それが私とネロの関係と言えるだろう。横島は私達の言葉の影に隠れている物を感じ取ったのだろ

「でもまあ美少女同士は仲良くしているほうが良いと思いますけどね。なー?」

「みむ?」

「ぶぎゅ?」

自分のそばにいるグレムリン達に声を掛けている横島。その姿を見て、確かに私達だけでは決して道が交わることは無いだろうが……もし横島がいれば、その道は重なるかもしれないなとふと思うのだった

「大してお構いも出来なくてすいません」

「いや、構わぬ!急に訪ねて来たのは余達だからな」

正直急に訪ねてきたのに、嫌な顔をせずに対応してくれ、更に欲しいと言って殆ど奪う形になったアクセサリーもくれた横島はやはり基本的に善人過ぎるのだろうか

「あ、これ電話番号なんで、もし今度来る時は事前に電話をしてくれると嬉しいです」

気をつけてくださいいねーと笑い私とネロを見送る横島。屋根の上

で待機していたルキフグスとベルゼブルを連れ、その場を後にする

「中々有意義な時間であった。横島とは面白い男よ」

「そうだね、彼は一言で言えば……ジョーカーだろう」

どの陣営にとつても切り札足りえる存在だ。だからこそ人間側ですら横島を手にしようとしている集団がいる

「目障りだ」

落ちていた石を蹴り上げる。上空で何か砕ける音がして落ちてくる

「なんだこれは？カラクリか？」

「そうだろうね。前に横島を襲った組織が使っていた様な気がする、ベルゼブル。これについて調べておいてくれ、何処の組織の物で、バックに何がいるのかもね。出来る限り詳細に頼むよ」

私の言葉にベルゼブルは頷き、ガラクタとなったカラクリを拾い上げる。霊糸の痕跡は残っているので、これである程度は調べる事が出来るだろう。ベルゼブルもそれが判っている、私がやらなくてもベルゼブルが叩き落そうとしていたのは明らかで、パチパチと放電している左手を見て、少し悪い事をしたかな？と思う。正直目障りだったから仕方ない、姿を隠してちらちら飛び回っているのは大変不快だ

「ついでに他に飛び回っているものも破壊しておきます」

「ああ、よろしく頼むよ」  
手にしていた日傘を開き、空を見上げる。美しい太陽が目に入るが、そんなものは仮初の平和の証とも言えるだんだん天界も魔界も、そして人間界も騒がしくなってきた

「ではネロ、暫くの間。約束通り協力してもらおうか」  
「勿論だ、それに横島からもブローチを貰ったので、余はとても気分がいい」

鼻歌交じりのネロ。気分屋だから約束を反故されることを考えていたが、この様子なら問題ないだろう。私はベルゼブルをこの場に残り、日傘で魔界の門を開く

「これはこれはずいぶんと大所帯だ」

転移した先はアスモデウスの軍が侵攻している真つ只中。進路か

ら見て、狙いは第4部隊の宿所と言うところか  
「そうだろうか?とても目障りとは思わないか?」

思うなあとネロの口元が三日月のように吊りあがる。私と匹敵する膨大な魔力を全て開放する

「では諸君。目障りだ、消えてくれたまえ」

「お前達は運が良い、今余はとても良い気分だ、故に……苦しまずに滅してやろう」

そしてその日。第4部隊の宿舎がある、渓谷はその形状を大幅に変え、更地寸前になっていた。その光景を見た2人はふむと呟き

「ふむ。少しやりすぎたかな?」

「良いのでは無いか?こういう時は思い切りが大事だ」

能天気には笑う2人に付き人のルキフグスが関係者にどう謝ろうかと頭を悩ませていたのは言うまでも無い……

ネロちゃんとルイさんが帰った後。コップなどの片づけをしていると、黙り込んでいた心眼が口を開く

【横島。お前は判っていて、迎え入れたのか?】

その言葉に俺は手にしていたコップを逆さにしながら

「2人がとんでもない神魔ってことを?」

俺の言葉に判っていたのかと心眼が呟く。最初はただの人と思っていたけど、今日会って確信した2人は神魔の関係者だと

「上手く言えないんだけど、胸の方がざわめくというか……魂が震えるだけでも言うべきか」

【良く感じたな、あの2人の隠蔽術はとんでもないレベルだ。私も気配を探るのに全精力を向けて、やっつと言うレベルだ】

そんなレベルなのかと驚いていると、シロとタマモがしきりに首を傾げながら帰ってきた

「おかえり、どうかしたのか?」

「いや、なんで私出掛けたのかな?」って

「家でのんびりしているつもりだったのでござるが」

なんでだろう？と言いながら手を洗う2人。もしかしてルイさんとネロちゃんが何かしたのだろうか？とも思ったが、それは口に乗せず、俺の胸の中に留めておく

「……ただいま」

【今戻りましたー】

シズクと牛若丸の声があるので玄関に迎えに行ったのだが……普段よりも荷物の数が大分少ない

「あれ？荷物少くない？」

【ノブノブ】

荷物を一緒に取りに来たチビノブも首をしきりに傾げている

「……ああ、暫くしたら妙神山に2週間。泊り込みで修行をするから伝えておいてくれとおキヌに言われてな」

【だから買出しの量を少なくしたのです】

妙神山と言えばモグラちゃんが居る。元気にしているか心配だったので妙神山に行くこと自信には何の文句も無いけど

「暫く東京で言ってたのに、どうしたんだろうな？」

【きつと前から修行に行きたいと言っていたからな、やっとスケジュールが整ったのだろう】

美神さんが何度もそう言ってたつけと心眼の言葉で思い出し、荷物の袋を両手に持つとシズクが俺を呼び止めた

「……エプロンをして何をしていたんだ？」

「あ。うん、さっきまでお客さんが来てたんだよ。高城さんの友達のリイさんって人」

高城さんの名前を出すとシズクが眉を顰めた。なんだろう？高城さんの友達だと何か不味いのだろうか？

（あれ？ルイさんの友達って事は高城さんも神魔なのかな？）

ルイさんの友達だから高城さんも神魔なのかな？そう言えば、アリスちゃんも知ってたみたいだし

「なあ？心眼、高城さんも神魔なのかな？」

【当たり前だろう？気付いてなかったのか？】

全然気付いてなかったわ……これ美神さんに聞かれると怒られそ

うだから、黙っておこうと心に決めた

「……横島。一応出発の準備はしておけよ？2週間分だからな？」

シズクの言葉に了解と返事を返し、冷蔵庫の近くに荷物を置いてリビングでボール遊びをしているチビとうりぼーに

「ちよっと忙しいからリビングで遊んでてな？」

「みむうー！」

「ぶぎゅー！」

着替えを出す邪魔とかをされたら困るので、そう声を掛けて自分の部屋に向かおうとすると、リビングからシロとタマモも出てきた

「なんか私達も一緒だったさ」

「牛若丸とノツブとシズクも一緒にそうでござる」

全員で行くの？これは相当本格的な修行をするのかな？

「私さあ、修行とか嫌いなんだけど」

「我慢するでござるよー、それにあんまりジツとしていると、太るでござるよ？」

タマモは無言で下腹に手を当てて、やや鬼気迫る表情で部屋に向かって小走りになった

「タマモ太ったの？」

「せんせー？それは乙女に言っではいけないこととござる」

凄い眼力のシロにこれはやすやすと言っではいけないことだったと理解し、俺は小さい声ではいっと返事を返して。自分の荷物を纏める為に自分の部屋へと向かうのだった……

「なあ、心眼。卵大丈夫かな？」

ワイバーンの卵はまだ孵化する気配が無いけど、置いておいて大丈夫かな？と尋ねる

「大丈夫だ。お前の部屋も相当な霊力に満ちている。それに孵化までは大分時間が掛かるから心配ないよ」

心眼の言葉に一安心し、俺は押入れからスポーツバッグを2つ引っぱり出すのだった

なおその日の夜。チビとうりぼー、そしてチビノブは夜中に押入れを開けて

「みむみむみむ」

「ぶぎゅぶぎゅぶぎゅ」

「ノブノブノブノブ……」

マスコットパワーを卵に与えていたりする……実は横島が寝てからチビ達が行っていることで、ワイバーンの卵はマスコットパワーで変質し始めていたりする

公園の中にある電話ボックスの中にいる長身の男……道真は顔を真っ青にし、大粒の汗を額から流しながら受話器を手にして、ある場所の電話番号をコールする

（ああ、くそ！殺されるかと思った）

カラクリ越しに横島の家を見ていたが、横島の家から出てきた2人。見た目は飛び切りの美少女2人、だが目があったのだ、カラクリ越しに、そして口元が余計なことをすれば殺すと動いたのも

『もしもし?』

「ああ。すみませんね、ボス。悪いっすけど、撤収させてくださいや」

『どうした?何があった?』

「桁違いの神魔がどうも横島の家に入り浸ってるみたいで、こりゃあ下手をすれば殺されちまいますわ」

仕事をしくじったことは無いが、今回の件は駄目だ。人間相手ならまだしも、神魔相手では殺されてしまう

「その代わり魔人と横島の戦闘データは取ってますんで、それでご勘弁を」

『仕方あるまい、撤収して来い』

すみませんねえと謝り電話ボックスを出て、駅に足を向けようとして舌打ちした

「どうした?そんなに焦って逃げる事もなかりうに」

「……」

あつしは口をパクパクとさせることしか出来なかった。見た目は10歳ほどの外人の少女、だがその圧力は今まで相手にした誰よりも



強い

(くそーこいつも神魔か！)

少し横島の事を監視するだけのつもりだったのに！どれだけ横島って奴は規格外なんだ！

「あの馬鹿はどうも人を疑うと言う事を知らないから、私がこうしてあいつを守れと言われてる訳だが、貴様のような男は好かん。笑いながら人を殺すような輩は非常に不快である」

「いやあ。そいつあ、勘違いしてもんじゃないですかねえ？」

じりじりと後ずさりする。こりやあトンでもねえバケモンだ、いくらなんでも直接出向くのは失敗だったかも知れん

「それでも人は見る目があってな。どうもお前は好かん。だからここで殺しておくでしょう」

殺される！咄嗟にそう判断して逃げようとするが気付いてしまった。昼間の公園なのに誰もいない、さっきまで大勢人がいたのに……目の前の光景を見て結界の中に閉じ込められたと理解した

「理解したようだな。ではし……つちー！」

観念するしかない、そう思った瞬間。目の前の少女が舌打ちし、振り返る。何か別槍か!?だがなんにせよ、これが逃げる最初で最後のチャンス

「ええいつ！とっておきだ！こんちくしょうめ！」

なけなしの転移札、ボスの開発中の転移札を地面に叩きつける。目の前の光景が歪み、自分と言う存在が薄れていく中。あっしは確かに見た。横島ともう一人が変身していた奇妙な姿と良く似た何者かが、あの少女へと殴りかかっていく姿を……

「ちっ、逃がしたか。お前何者だ」

「……？」

道真の逃亡を手伝ったウィスプに酷似した者は首を傾げると、溶けるように消えた。一瞬の強襲だったが、その力は凄まじかった「どうも本格的にきな臭くなってきたな」

あと少しまで追い詰めたというのに……余計な邪魔が入った。高城は舌打ちをしながら、手にした槍を消してその場を後にした

(あの姿……横島にそっくりだったな)

横島と陰念が変身する仮面ライダーと言う姿に酷似した何者かの強襲を受けたとルイへと伝えるために……

レポート22 いざ、妙神山へ その3へ続く

### その3

リポート22 いぎ、妙神山へ その3

妙神山に2週間の泊まり込みの修行。しかもシロやタマモ、そしてノツブちゃんに牛若丸も参加と言う大所帯。その問題は少し考えれば直ぐに思いつくことだった

「鞆が足りないは流石に考えて無かったわね」

「だよなー」

蛍も準備があると言うので一緒にデパートに来ていて、苦笑する。2週間分の着替えや荷物を運ぶ鞆が無いと言う致命的な問題だった「拙者風呂敷しかないでござる」

「私も鞆なんてないし」

2人の言い分は最もで田舎から出てきたシロとつい最近まで狐フォームだったタマモも鞆なんて持っていないわけが無い。勿論必要な物以外は持つていないシズクも無いと言う事で蛍と待ち合わせて買い物に出掛ける事になったのだ

「あ、そう言えば俺のバイクってどうなったの？」

メンテナンスをするつて言われて預けたけど、どうなったのか？と尋ねると蛍は頬をかきながら

「ごめん。完全にオーバーヒートで壊れちゃった」

「……やっぱり？」

韋駄天魂をセットして変形したモードの加速力は凄まじい物があった。もしかしたら壊れてるんじゃないかなーと不安に思ってたんだけど、まさかその通りだったとは

「あ、でも大丈夫よ！今回のでどれくらい負荷が掛かるか判ったから次はバッチリ！絶対壊れないから安心してね！」

もしかして俺がヘルズエンジェルを追いかけている時に壊れてる可能性があったのかもしれないと思うと、少しだけ薄ら寒い気持ちになりはしたが、今度は絶対大丈夫と笑う蛍を信じたくて、その事を言うのは止める事にした

「あら、横島君に蛭ちゃんじゃない。お買い物？」

背後から聞こえてきた声に振り返るとクシナさんが元気？と笑いながら近寄ってくる。その後をのろのろとしたペースで歩いてくる2人

「……………うごごおおお」

腕も足もプルプルするくらい荷物を背負っている雪之丞と陰念だ。思わず絶句して2人を見てみるとクシナさんは笑いながら

「白竜寺の年少組みの子が遠足で荷物の準備で大変なのよ」

なるほど。白竜寺は施設も兼ねているって美神さんに聞いていたけど、結構大変なんだな

「あらーシズクちゃんじゃない、そうそう！前の豆腐を混ぜて作る肉団子の作り方があるとうね。もう大人気だったわ」

「……………あの卵焼きの餡かけレシピ、あれも良かった。ありがとう」

…………シズクとクシナさんの話がおもいつきり主婦だ。見た目小学生と美少女なのに、何か残念だ

「大丈夫か？雪之丞、陰念」

「は、話しかけるなあ…………死ぬから」

どうも相当一杯一杯らしい、話しかけて悪かったと謝る

「それで2人…………じゃなくて、皆でお買い物？」

俺達が来てない事に気付いて、シロとタマモが戻って来るのを見てクシナさんが苦笑しながら呟く

「妙神山で2週間修行なんですよ。それでリュックとかスポーツバッグを買いに来たんです」

「まあ、それは大変ね。でも妙神山での修行ならきつとスキルアップするわ。頑張ってるね」

雪之丞と陰念を連れて、エレベーターではなく。エスカレーターに足を向けるクシナさん、2人の無理！と言う声とやるのよというドスの利いたクシナさんの声に、俺と蛭は思わず南無と呟き手を合わせていた

「せんせー。今の御仁は誰でござるか？」

「クシナさん、雪之丞と陰念の姉弟子の人かな。結構優しい人だよ」

「元男だけどね」

タマモの言葉にシロが元男!?!と叫ぶ。うん、元男なんだよな。見た目完璧な美少女だけど、それを知っているからか美少女と言うよりも、友人の兄貴と言う感じがするんだよなあ

「どういう経歴の……」

「まあ細かい事は良いだろう、買い物先にしようぜ」

こうしてあったのも偶然だし、とりあえず自分達の買い物済ませうぜと声を掛け、エレベーターに足を向けた

「おお、これなんて拙者良いと思うでござるな」

と言う訳で旅行バッグを見に来たのだが、シロはとにかく速い。黒くて、大きいだけの鞆を手に取り、これで良いと笑う

「んーこつちの方が綺麗だけど、ちよつと小さいわね。こつちは丁度いいけど……可愛くない」

タマモは色々鞆を見てうーんつと唸っている。なんと言うかシロとタマモの反応があんまりに違っていて、なんか面白いとまで思ってしまう

「……面倒だからこれでいいか」

「それで良いの?」

シズクが手にしているのは小学生の子供が背負うような、ピンク色のファンシーな鞆。外見的に違和感はないけど、それで良いの?と尋ねる

「……入らない分はチビとうりぼーの荷物用の鞆に入れるから問題ない」

「さいですか……」

まあチビ達の荷物用の鞆を買いに来たので、かなり大きい物を買う予定だったので、大した問題じゃないか

「私もこれで良しと」

蛍もシロと同じタイプで、色が赤く機能性重視の物を選び。タマモは最後までうんうん唸っていたが、最終的に機能性を考慮したようだ  
「チビとうりぼーはどれがいい?」

「みむー!」

「ぶぎゅー」

ちなみにチビとうりぼーは、ペットショップで自分達用のケージを選んでいた。チビはハムスター用、うりぼーは犬用のリュック型のキャリーを選んでいた事をここに追記する

「2週間修行って聞いたけど、実際なにをやるのかな？」

フードコートで昼食をしながら首を傾げる。妙神山は霊能者の修行場と聞いているが、正直基礎がまるで出来てない俺が付いて行く理由が判らない

「はい、あーん」

「みーむう♪」

あーんつと口を開いたチビの口の中に、苺を入れてやると口をもごもごとさせながら尻尾をぶんぶん振り回す。美味しかったようだ  
「1度私達の霊力の測定をして、合った戦闘スタイルを見つけて、それを極めるって感じらしいわね。ちなみにノツブ達は霊力の上昇らしいわ」

自分にあつた戦闘スタイルね……うりぼーの口に苺を入れてやりながら、蛍達に視線を向ける

蛍 美神さんと同じで道具使い。後幻術などが使える

タマモ 幻術と火炎系が使える

シロ 剣術のみ

俺 陰陽術（齧った程度） 霊力の形態変化（栄光の手・勝利すべき拳） 眼魂 齧った程度の剣術 ノツブちゃんと牛若丸仕込みの体術……良く考えた結果

「2週間やるのもしかして俺のせい？」

色々覚えすぎていると言うか、広く浅いというか……うん。ぶっちゃけよう、俺が余りに出来なすぎないのが原因だと推理した

【馬鹿か、お前は。お前が出来ないんじゃないやなくて、お前が出来る過ぎるのが問題だ】

フードコートと言う場所なので黙り込んでいた心眼がバンドナに浮かぶ。近くを歩いていた男の子がお化けーと泣いて走って行ってしまったのが実に申し訳ない

「いやいや、無いだろう？なあ蛍」

俺が出来すぎるとか悪い冗談にしか思えないので、蛍に同意を求めたが

「まあ心眼の言うとおりのね。私とか美神さんって固定の戦闘スタイルだけど、横島って状況に応じて色々出来るし」

「……んぐつ！せんせーみたいの色々出来る方が格好良いでござるよ！」

「汎用性の塊よね」

「……原石だな」

全員に褒められ、なんとも気恥ずかしい物を感じながら、俺は自分の頼んだカレーライスを口にするのだった

「え？俺が言うの？」

「うん、お願い」

沖田ちゃんも一緒に連れて行くらしいのだが、それを俺に伝えてくれと言う蛍

「えーつとちなみに何処にいるかとかは？」

「知らないわ。見つけられれば良いの、私達も探すし、じゃ明後日の朝5時の美神さんの事務所だね」

出発の日時を手帳にメモして、蛍と分かれる。沖田ちゃんは除霊の助っ人としてあちこちの事務所を渡り歩いている。東京にいないことも多い。出発前に見つけられたらいいけどなあ……

「シズクかタマモ、最近沖田ちゃん見た？」

一応尋ねてみるが見てないと言う。だよなあ……いたら結構な頻度で俺の家を訪ねてくるし……今どこにいるんだろうなあ

「……とりあえず、荷物を詰めてそこから考えれば良い」

まあ先に自分達の準備が先か。そんなに時間も無いしと思い、家に帰ると

【あ、横島君。お邪魔してまーす】

【ついさつき尋ねて来てなー、これ温泉街の土産の饅頭じゃってー】

縁側に座り、ノツブちゃんとお饅頭を食べていて思わず脱力してしまうのだった……

姉さんが今日横島と買い物と聞いていたんだけど、昼少し過ぎに帰って来て、更にツナギに着替えるのを見て、おやつと思った

「姉さん？」

「蓮華？どうかした？」

「どうかした？はこっちの台詞なんだけどなあ……」

「横島と買い物じゃなかったの？」

「買い物だったわよ？シロとか、タマモとか、シズクも一緒だったけど」

「……ああ、あたしが悪いのかな？横島と買い物と聞いて、2人だけと思っていたあたしが悪いのかな？」

「それで何を買ったの？服とか？」

「ううん？明後日からの妙神山の修行に持っていく鞆……ふぎや！な、なななな！何するのよ！」

思わず姉さんの頭に空手チョップを入れた私は絶対悪くない。むしろ悪いと言われたら間違いなく切れる自信があった

「なんではこっちの台詞！なんで鞆を買っただけでそんなに嬉しそうなの!？」

「横島と一緒にだったら何でも楽しいけど？」

駄目だこの姉さん。遅れすぎている……頭を思わず抑えると頭痛いの？と尋ねてくるので

「ああ！頭が痛いよ！横島と買い物と聞いてあたしはてつきりデートかと思ってたから！」

「そんなこと言っただけ？」

「言ってるだけ！言ってるだけ！デートって思うじゃん普通！」

「全然進展とかして無きそうな姉に絶望した！」

「絶望って酷くない!？」

姉さんと横島の恋路を応援したいと思っているのに、これじゃあ応援のしようが無いじゃないか……

「じゃあ何か進展あったの？」



「ううん？何も無いけど？」

なんで何も無いのにこんなに平気そうに出来るのかあたしには理解出来ない！普通はもつと焦るはずなのに

「このままじゃ横島取られちゃうとか思わないの？」

「……」

下手糞な口笛を吹く姉さん。なんで不安に思っているのに行動に移せないのか……自分の姉が恋愛雑魚過ぎて困る

「で、でも！妙神山だからくえすは来ないわ！」

たしかに神宮寺くえすはいないだろう。あのぐいぐい行く性格で、そして恋に積極的なくえすがないだろう……だけど！

「小竜姫がいるんじゃないの？」

横島も信頼していて、そして未来でも横島は姉弟子と慕っていた。そして小竜姫は横島を好いていたが、結婚したので身を引いた。けど

今は違う、積極的に行くんじゃないの？と言うと、姉さんがダラダラと冷や汗を流す

「……」

「うん。忘れてたんだね、その反応を見ればわかるよ」

くえすがいないと思っただけで安心しきっていた。それが間違いなく姉さんの敗因だろう

「……ちよつと気持ちを静めるのに機械弄りしてくるわ」

「それはおかしい！」

回れ右をした姉さんのツナギの襟を掴む。どうして機械弄りで気持ちを静めようとするのか、もつと他にあるだろう！

「あ、でも、そう言えば、小竜姫様は未来の記憶は無いわ！だから大丈夫」

「……父さんが言っただけで、未来の自分に憑依されてるみたいなんだけど？」

え。なにそれ聞いてないと目を大きく見開く姉さん。なんで姉さんと父さんで最後の方で凡ミスするんだろう？うっかりってレベルじゃないと思うんだけど……いや、それか目に見えての脅威じゃない

からと後回しにしていたのかもしれない。主に姉さんが

「緊急家族会議の必要性があると思うんだけどどう？」

コクコクと頷く姉さんに激しい頭痛を覚えながら、私は姉さんと一緒に父さんの部屋に向かったのだが

「ほう。お前の娘か、初めまして。ダンタリアンだ」

……え？なんでソロモンの魔神がいるの？父さんは父さんで頭を抱えながら

「なんかダンタリアンの予知で小竜姫がなんか凄い事になるかもつて」

「竜神の愛は暴走しやすい。些細な切っ掛けで弾けるぞ、まあ別に私には大して関係も無いがな」

ものすつごいタイムリーな話題にあたしも姉さんも思わず無口になった

「そうそうゴモリーも来ている」

更にもう一柱ソロモンの魔神がいると聞いて、しかも恋愛に関する魔神だった

「そうそう柩と言う人間を溺愛していてな。横島を見に行くとか何とかと」

終わった……あたしと姉さんと父さんが同時に蹲るのだった。なんで横島の周りには神魔とか普通じゃない人間ばかり集まるのか、自分と姉さんも含めてだけど、本当にどうしてと思わずにはいられないのだった

「似合うでちゆか？」

「ええ、とても良く似合っていますよ」

「えへへー♪」

そして蓮華と蛭が絶望に打ちひしがれている頃。あげはは横島がプレゼントと言つて蛭に預けていたリボンを結んで、可愛らしく微笑んでいたりするのだった……姉妹の温度差が如実に現れた瞬間だった……

兵庫の方での助っ人を終え、帰りに温泉饅頭をお土産で買って横島君の家に来たのですが、残念ながら横島君は不在だったので

【じゃあ、横島君が帰るまで待ちます。あ、これお土産です】

【おおー饅頭か、じゃあ茶でも入れるかのー】

ノツブと一緒に饅頭とお茶を飲みながら横島君を待つことにしたのですが、今思えば帰らなくて正解だったと思う

【ほほう、天界の修行場での修行に私も付き添っても良いとは、嬉しいですね】

まさか私も誘って貰えるとは思ってなかった。助っ人の依頼も暫くは入って無いし、横島君と共に修行に出ても良い頃だと思う

【と言うか、ワシもなあ。もう少し力を出せるようになりたいしなあ】  
【そうですよねえ。どうも本調子とは程遠くて】

【あ、私もなんですよ、それ】

途中までは順調に力を付けてきたと思っていたんですが、途中で急に霊力が回復しなくなった。自分の感覚では、もう少し上があると判っているのに、その遥か下までしか身体がついてこない感じ

【おお、そうそう、それじゃ、ワシも同じ感じ】

【私もです。妙神山とやらで何とかなると良いのですが……】

幽霊だから身体を鍛えるのは無理だし、霊力を高めるしか方法が無い。まあ物を触れるし、食べれるしで普通の幽霊よりも凄いです、意識と身体感覚に差があるのはいただけない

【せんせー。このピンク色の着物の侍は誰でござるか?】

【おや、横島君。弟子を取ったのですか?】

横島君の家に暫く来てなかったが、新しい住人が増えている。しかもせんせーと呼ぶと言う事は内弟子ですか?と尋ねる

「犬塚シロって言うんだ、この子のお父さんと天狗が勝負してたんだが、薬を天狗が渡さないから蹴りを入れてな。そしたら親父さんを助けてくれた御礼をしたって言うし、お父さんも面倒を見てくれて言うから預かってるんだ」

なるほど、状況は大体理解しました。父上を助けてくれた横島君の所にお礼奉公に来たと言う事ですね

【天狗に蹴りを入れたんですか？主殿】

「あと説教もしたかなあ、大体さ、子供が病気つて時に冷静に戦えると思う？」

そんなもん圧倒的に天狗が有利じゃないかと横島君は怒るが、良く天狗に蹴りを入れて、その上で説教が出来たと思う。変な所で横島君のメンタルは凄まじいと思う

【天狗ですかあ、昔が懐かしいですね。野山を遊び回ったものです、もしやこれから行く妙神山と言う場所には天狗が？】

「あー前はいたけどどうだろう？」

天狗に会えるかも知れないとはしゃいでいる牛若丸と、その隣で首を傾げている横島君。とても穏やかな雰囲気があつて、まるで自分の家のように気分が落ち着く

「拙者、犬塚シロでござる」

【ご丁寧にも、沖田総司です】

改めてシロちゃんと自己紹介をかわした所で、シロちゃんの尻尾がぶんぶん揺れている

「この馬鹿、ちよつと手合わせして欲しいってさ」

タマモちゃんの言葉に苦笑し、首を横に振る

「ええ！駄目なのでござるか？」

【どうせやるならもつと広い所でやりましょう】

明後日には妙神山と言う場所で修行するのだからそこでやりましょう。ああ、そうだ

【横島君もこの際、もう少し剣術を覚えてみてはどうです？】

【おお！人斬り！良い事を言うな！主殿、剣術を覚えてみましょう！きつと主殿なら基本を覚えれば、いろいろと出来る事が増えると思いますよ】

私に賛同する牛若丸。横島君は苦笑しながら、饅頭を齧り

「そうだなあ、2週間あるから色々やってみても面白いかもなあ」

そののんびりとした言葉に、タマモちゃんとシズクちゃんも反応した

「じゃあ、あれじゃない？仙術とかも挑戦してみたいんじゃない？」

「……お前使えるのか？」

使えないけど、知ってることは知ってるわよ？と返事を返すタマモちゃんは、そのままシズクちゃんに

「じゃあそっちは何を教える気なのよ？」

「……普通に水と氷系の陰陽術を、妙神山なら修行に適しているから」  
なんか異様に盛り上がっている面子を見て、横島君が湯呑みをズズウッと啜ってから

「藪蛇だった？」

「そうだな。藪蛇だったな？」

「じゃが良いんじゃないかの？良い環境では徹底的に修行、しかも優秀な講師揃い。大変じゃと思うが、頑張れ」

「みむー！みみーむう！」

「ぶぎゅーぴぎー!!」

「ノブノブー！」

今まで静かにしていたマスコット軍団も騒ぎ始めた。なんとやっているのだろうか？と首を傾げているとタマモちゃんが翻訳してくれた

「修行先でも、遊んでねって言うてるけど？」

しかもマスコット軍団にも遊んでくれと言われ、横島君は困ったように笑いながら

「俺、なんか大忙しだなあ」

俺なんか間違えたかなあと頭を抱える横島君に思わず噴出してしまふ。ああ、やっぱり横島君の側は楽しいですね

「んごふっ！」

「わわわ！チビノブ！布団！」

「き、急に血を吐いてどうしたでぶぎるかあ!？」

急に胸に込み上げた血を吐き出し、横島君が慌てて枕とかを取りに行くのをみながら、私はゆっくりと縁側から、横島君の家に向かって倒れるのだった……薄れ行く意識の中、穏やかな空気を壊してしまつて申し訳ないと思うのと同じに、大丈夫？と優しく声を掛けてくれる横島君に心から感謝するのだった……恐らく、修行の2週間は何より

も楽しい日々になると私は用意された布団に横になりながら、思うの  
だった……

レポート22 いざ、妙神山へ その4へ続く

## その4

リポート22 いぎ、妙神山へ その4

カーテンの隙間から入ってくる日差しにむうーと唸りながら身体を起こす少女。美少女と言えるほどに整った容姿をしているのだが、色素の薄い髪と焦点の合っていない瞳が美しさよりも不気味さを実際立たせている。少女の名は「夜光院枢」神魔から見ても規格外の「未来予知」「空間把握」などのレアな稀少技能をこれでもかと持つ天才少女だった。

「ふわ……あー眠いねえ」

頭痛がしてくる前に横島から貰ったチョーカーを身に付ける。それと同時に背後まで見えていた視界が正面だけに限定され、脳に直接やすりをかけられるような痛みを一気に軽くなる。

「……本当横島には感謝しかないねえ」

自分への褒美で望んでくれたボクのを抑制してくれるチョーカー。この首輪型のアクセサリーが愛おしくて堪らない。

(……まさか自分の性癖がねえ)

まさか自分に束縛願望があるなんて思ってたよ。まあそれも個性かな？そんなことを考えながら洗面台に向かうと、そこには何故人影があった。

「あ、枢ちゃん。おはよー」

「……おは……よう？」

朝は元気良くと笑う女性が一瞬理解出来なかった。そこにいてだけで空間を侵食するような圧倒的な美の象徴。少し紫が掛かった髪と、穏やかな光を宿す黒目……そして鍋から漂ってくる甘い香りと、何かを焼く香ばしい香り。朝はパンだろうか？……いや、現実逃避は止めよう……受け入れるべきなんだ。

「なんでここにいて!?ゴモリー!?!」

ソロモン72柱ゴモリーが何故、ボクの家で、しかも普通に料理をしているのか、叫ばずに入られなかったのだ。

「ダンタリアンと一緒に魔界から出て来たのよ。ちよつと騒ぎがあつて、魔界正規軍がバタバタしているうちに」

コーンスープとベーコンエッグトーストを食べながら、ゴモリーがのほほんと告げる。

「それはそれは、残された部下が可哀想だね」

「良いの良いの♪」

きつと魔界では大騒ぎになっているだろう。魔界の重鎮が勝手に魔界を抜け出したのだから、きつと大変な騒ぎになっているはずだ。

「枢ちゃんに会いたかつたつてのもあるんだけど、ちよつとね。気になる事があるのよね」

「気になる事？」

くそ、このコーンスープ美味しいじゃないか……なんでソロモンの魔神がこんなに料理が上手なんだと思いつながら、尋ね返す。

「うん。魔界でも有名だから横島君を見てみようと思つて」

「よし、帰れ！」

そんな動物でも見るような感覚でほいほい動き回られたら困るし、何よりも横島達は修行で出発前なのだ。ゴモリーの遊び半分で横島を尋ねさせるわけには行かない。

「横島達は明日には修行に出るから暫く東京にはいないよ」

「え？ そうなの？ うーん、今から会いに行くのは迷惑よね？」

当たり前！ と怒鳴る。ゴモリーが頭の上を手を当てて、蹲る仕草をする。全然怖いなんて思つて無いくせに……そう思うと思わず溜息が出た。

「じゃあ枢ちゃんと遊ぶわ」

どうしよう、普段学校に行きたいなんて欠片も思わないのに、今は学校に行きたくして仕方ない

「あれ？ そのチョーカー……ヒヤクメ族の」

ゴモリーの視線がボクの首に向けられて、思わず手で隠す。だがゴモリーはその仕草で気付いたらしく、その目に剣呑な光が宿る。

「そつかー、横島君つて子に貰つたのね？」

「い、いや違うから！」



違うと言いつつも声が裏返ってしまい。ゴモリーはニコニコ笑いながら判つてる判つてると笑い。

「チョーカーかあ……へえ。女の子にねえ」

あ、これはやばい。横島の命が危ない、窓ガラスに輝が入るくらい、ゴモリーが怒っている

「これはボクが欲しいって横島にお願いしたんだよ。そのヒヤクメ族に知り合いがいるなんて思ってなかったけど、これがあるから能力が暴走しないから寿命が延びそうなんだから」

寿命が延びると聞いてゴモリーから怒気が静まる。危ない、本当に危ない所だった。横島が殺される所だったよ。

「でもチョーカーを欲しいがるなんて、柎ちゃんって苛めて欲しい子なのかしら?……はうっ!」

ゴモリーの言葉に、ボクは飲み終わったマグカップを全力で投げつける。

「あ、でも私泊まる所とか無いから、暫くお世話になるわね?」

マグカップの直撃を受けた所に絆創膏を張りながら、魔法で自分の荷物を取り出すゴモリーを見て、ボクは受話器を手にしていた。

「あ、もしもし?ボクなんだけど、会長殿。ちよつと相談に乗ってくれないかな」

この自由さ、横島と似すぎている。ゴモリーに迷惑を掛けられているはずなのに仕方ないと思うのは絶対にそれが理由だと思い、会長殿に相談することを決めるのだった……

柎から相談に乗ってくれない?と言う電話があった。急にやってきて、くひくひ笑う柎が事前に言うって事は相当な事情だと判断して良いわよと返事を返すと、お昼前には来ると言うのでそれくらいなら私の方の用事も大丈夫と言って電話を切る。

「お疲れ様でした。大丈夫でしたか?」

「いや、私は平気だよ。大体連絡付かない場所だからね」

向かい側のソファアに座っているメドーサさんに頭を下げる。2

週間の間横島君達を妙神山に隠してくださいと言うのをお願いするのに、妙神山に連絡が付かないと言う事でメドーサさんをお願いしたのだ。

「それでその妙神山の方は？」

「全然OKだつてさ、小竜姫も相当乗り気だし、何よりも……」

そこで言葉を切ったメドーサさんに少しかだけ嫌な予感がした。今白竜寺に駐在している三蔵様、でも妙神山には彼女のお弟子さんであり、闘神の孫悟空が居るはずなんだけど、嫌な予感が拭えない。

「ハヌマンの爺がめっちゃ乗り気。横島を最強にするとか何とか」

「……それは大丈夫ですか？」

孫悟空と言えば知らない人が居ないとまで言える非常に有名な神様だ。確かに修行を見てくれるというのなら、これ以上に無い誉だと思ふけど……人間で大丈夫なんですか？と尋ねる。と言うか、なんで横島君の事を知っているんだろうか。

「多分三途の川をメドレーすると思う」

「駄目じゃないですか!？」

殺してどうするんですか!？と思わず叫ぶ。メドーサさんも顔を歪めて、深く溜息を吐きながら今回人間界にいる理由を説明してくれた。

「だから三蔵に無理しないようにって手紙を書いて貰おうと思つて」

「是非お願いします」

修行に行つて再起不能では洒落にならないので、本当にお問い合わせしますよ?と頼み。窓から出て行くメドーサさんを見送る。

「はい、もしもし?」

『ああ、神代会長。申し訳ないね』

メドーサさんが出て行つてすぐ鳴った電話を取ると西条さんから電話だった。やや電波が悪いから、恐らく携帯で電話をしてきているのだと判断して手帳を開く。

「何か問題でもありましたか？」

『ああ、問題とかじゃなくてだね。令子ちゃん達が居ない間の打ち合わせをしようと思つてね』

今オカルトGメンは西条さんが日本に居た時の知り合いで構成されているので、打ち合わせの必要はあんまり無い。それなのに打ち合わせをするって事は……間違い無いわね。

「配属される予定なのは日本人では無いってことですか？」

『いや、日本人は日本人だけど、向こうに移住した日本人とかが中心になる見たいでね。少々厄介な事になりそうだ』

国際GS連盟の事もあるし、オカルトGメンも問題ばかりだわ……思わず深く溜息を吐いてしまう。

『まあエリート風を吹かしている馬鹿な連中だから、現実を知れば大人しくなるよ』

こんな事を行ってはいけませんが、ガープとかの襲撃があつて、1度心を折ってくれば良いのと思わず思ってしまった。

『あ、そうそう。君に頼まれていた事だけど、接触出来たよ』  
「本当ですか？どうでしたか？」

舞ちゃんに聞いていた氷室神社の近くに住むと言う神様。それと接触を取ってくれるように頼んでいたのだ。

『かなり力のある地霊のようだけど、真名は不明だ。記憶がないそうでね、それと神魔の方にもあったんだが……神と言うよりかは非常に

高位の精霊という事だ。ガープに利用されないように注意を払ってくれるそうだよ』

詳しくは東京に帰ってからと言う西条さんに判りましたと返事を返し、電話を切る。

「高位の精霊かあ……」

もしもガープに利用されたりすると非常に厄介ね。しかも地霊となると大地に関係する権限も持っている可能性が高い、最悪の可能性を考慮しておく必要もありそうだ。

「もしもし？一応災害救助用の避難キットとかを、東京の避難所とかに配置しておいて、それと水とか灯油もお願いね」

出来ればそんな事にはなつて欲しく無いと思つていますが警戒をしておいて無駄と言う事は無い。あちこちの避難所を管理している職員に電話をして、非常用具の充実を頼んでいると扉がノックされる。

「いやー会長殿。悪いね」

いつも飄々としている柩の顔色が悪い。珍しいこともあるわねと思いつながら、尋ねてきた理由を尋ねる。

「それで相談したいことって何か……」

しら？と最後まで言い切ることが私には出来なかった。何故ならば……柩の後から姿を見せた人物。見た目は普通の人間だが、その威圧感。そして存在感が桁違いだった。

「初めまして、ソロモン72柱のゴモリーよ。よろしくね」

ふわりとしたワンピース姿の紫色の髪の日を見張るような美人。だけどその名前が非常に問題だった。嘘って言いたかったけど、真実って事が判ってしまったから

「なんかソロモンの魔神がボクの家で居候したいって言ってるんだけど、ボクとしては帰って欲しいんだよ」

酷い！と叫んでいるが、柩の意見には全体的に同意出来る。だから私は再び電話を手にする。

「あ、もしもし？ブリュンヒルデさんですか？すみません、超緊急事態なので、すぐGS協会に来てくれませんか？」

『はあ？構いませんが。どうしたのですか？アルテミス様の件でしょうか？』

「あ、それは大丈夫です。解決しました」

解決と言うか、押し付けたというか、愛子ちゃんの恋愛空間を気に入ったらしいので、愛子ちゃんに押し付けました。めちやくちや号泣してたけど、あの人を自由にさせるほうが怖いので我慢して貰おう。

「ゴモリー様がそのーですね？」

『あ、はい。察しました、すぐお伺いします』

その電話の後、すぐブリュンヒルデさんは来てくれたんだけど、ゴモリー様は物凄く渋った。それこそ神の威厳なんてない、駄々っ子その物だった。

「じ、じゃあ！柩ちゃんの所に居てもいいなら、宮殿の宝を提供するわ！ガープ対策で必要でしょう！」

「い、いえですね。そういう問題では無いと思うのですが」

ブリュンヒルデさんはそうは言うが、その言葉に私は物凄く悩み（1分ほど）え、嘘だよね？と言う顔をしている柩の肩に手をおいて「ちよつとらしいからよろしく」

柩を生贄に捧げることを決めた。それに本気で嫌がつているわけじゃ無さそうだし、接し方に困ってるって感じだから仲良くしてみれば良いと思う。フレンドリーな性格みたいだから、柩の個人主義改善になるかもしれない。

「じゃあ、すぐに連絡して運び込ませるからねー♪柩ちゃんはもつとお洒落しましよーねー」

「会長の馬鹿ああ!!」

柩から聞いた事の無い悲鳴を聞きながら、柩を抱き抱え鼻歌交じりで帰っていくゴモリー様を見送り。ブリュンヒルデさんに向き直り「すいません。ちよつと少しの間柩をよろしくお願いします」

「……ま、まああのお方も人の話を聞く人じゃないので、丸く収まったと思うことにしますね」

あの女の子が可哀想ですけどと言うブリュンヒルデさんも応接間を出て行く

「そのうち自分に跳ね返ってきそうで怖いわ」

でもこれしか対処法が無いから仕方ないわよねと小さく呟き、私は机の上の書類の山に手を伸ばすのだった……

なお、その頃。妙神山では

「よいしょ、よいしょと!!忙しくなりますね」

2週間と言う長期修行。しかも知り合いが来ると言う事で小竜姫は何時も以上に張り切つて掃除をし、布団を干して迎え入れる準備をし

「やはり横島と出会わせなければ、変動せんと見たー!」

いつまでも倍率が変動中の自分の弟子の名前を見て、横島の強さを見せなければ、変化しないと行って、妙に修行にやる気になり

「お前の大好きな、横島殿が修行に来るそうじゃ」

「うつきゅー!きゅきゅー♪♪」

モグラちゃんは横島が修行に来ると聞いておおはしゃぎ、そして口

ンはそんな孫を見て微笑ましそうに笑いながら

「生きてるかの？」

「…………ぎ、ギリギリ…………」

モグラちゃんのサンドバック状態の鬼門達にそう声を掛けているのだった。妙神山は間違いなく修行場だった、だがその出迎える雰囲気は友人を迎え入れる田舎の家という状態だった。

「ふふふふ、これは良い事を聞きましたわ！」

そしてどこから聞きつけたのか、清姫もにたあつと笑っていたりするのだった……

私の報告を聞いたルイ様の眉が小さく上がる。これはお怒りかもしれないと思い、姿勢を正し

「申し訳ありません。全て私のミスです」

横島を監視していた男を見つけたと言うのに、乱入者によって取り逃がした。これは紛れもなく私のミス、しかも許されないレベルのミスだ

「いや、ベルゼブル。君は良くやってくれたよ、短時間で見つけ、そして危険と判断し排除しようとした。それだけの脅威を感じたと言う事だろう」

神魔相手では、あの男は脅威と足り得ない。だが人間相手とすれば、あの男は危険だ。肩を組み、笑いながら人を殺せるような男だ。だから排除しようとした

「君の邪魔をした者って言うのが気になってね。本当に横島に似ていたのかい？」

「はい、私もそれ故に困惑し、一手行動が遅れました」

横島が変身する奇妙な姿。それに非常に良く似ていた、だから私は一瞬硬直し、一手行動が遅れた。ただの襲撃者ならば困惑こそすれど、行動する事が出来た。だが横島と似ていたから硬直してしまったのだ

「どつちに似ていたかな？」

ルイ様が差し出した写真。それは横島の変身した姿が記録されていた、ヒヤクメの仕事か？と思いいながらその写真を見つめる。そして私は10枚の写真から1枚を抜き出した

「これに良く似ておりました」

籠手と黒いコートのようなパーカーを身に付けた姿。違う点とすればそれは色だな

「この姿は黒を基調にしましたが、襲撃者は鮮やかな緑色のラインが入っていましたし、色は濃い青とシルバーのワンポイントがありました」

こうしてみると全く違うのだが、あの時は奇襲だったから困惑してしまった

「ふむ。となると横島でもなく、陰念でもない。ベルゼブル、君はどう見る？」

にやにや笑う顔を見れば判っている。ルイ様はこれがどの陣営の物が理解している、そしてその上で私に問いかけている

「アスモデウス陣営と断言します」

「だろうね、あの研究馬鹿が何時までも自分が遅れをとった物を再現しようとしないうえに、むしろ横島の物よりも強くなっているだろうね」

あれは間違いなく、ガープ作だと言える。どこか機械的な印象を受けたのでそれは間違いはない、ただ1つ気がかりなのが

「この相手からは神通力と魔力を感じました」

「……ふむ。それは少し嫌な感じだな」

神通力と魔力。それは相反する力であり、それを持つ者は極めて少ない。ルイ様もその数少ない1人だ

「暫くの間横島達は妙神山に居るそうだ。その間に東京を調べてみてくれ」

「はい。判りました」

妙神山ならば東京に居るよりも遥かに安全だ。横島が東京にいないうちにあの謎の襲撃者の手掛かりを少しでも掴みたい、私はルイ様への報告を終えて東京に戻ったのだが、東京から感じる魔力が増えて

いる。しかも桁違いに……その魔力が知り合いの物で更に泣きたくなかった

「何をしてるんだ、ゴモリー、ダンタリアン」

何故東京に来る。もつと他の場所があっただろうに……私はもう手放せなくなっている胃薬を口に含み、ペットボトルの水で流し込んで、あの謎の襲撃者の手掛かりを求めて行動を始めるのだった……

「どうだった？。レブナントの初戦闘は？」

セーレに面倒を見させていたレブナントの初戦闘の結果を尋ねる  
ガープ

「初戦闘って言うか、奇襲で終わったんだけどね」

「ふむ。戦闘には発展しなかったのか？」

「いや、なんか首を傾げて、居なくなった。追いかけるのが大変だったよ」

セーレの話聞いて、調整不足かと呟くガープ。その視線の先には培養液の中に浮かぶ人影があった

「後なんか、鯛焼きとか言うのを食ってたけどさ、僕の話聞かないんだよあいつ」

「まだ調整段階だからな。致し方あるまい、やはり人格に問題ありか、すぐに実戦投入とは行かないな」

「ごぼんと泡立つ培養液を見つめ、ガープは小さく笑い。セーレの方を向き

「暫く私は動くつもりが無い。アスモデウスにも少し進軍を控えろ伝えておいてくれ」

控えろも何も、ルシファアの攻撃で軍隊が壊滅してるよと唇を尖らせたセーレはそのままガープの研究室を後にした。残されたガープは同じく培養液に沈んでいる幾つ物眼魂を見つめてにやりと笑う

「いつまで逆らえるか実に見物だ」

真紅の培養液。それは固形化される前の狂神石。神魔を狂わせるその液体の中で眼魂は淡い光を放っていたが、1つ、また1つと光を失い、狂神石の中へと沈んでいくのだった……



リポート23 妙神山 その1へ続く

## リポート23 妙神山

### その1

リポート23 妙神山 その1

〜美神視点〜

ガタンゴトンと電車の揺れる音が響く、あんまり馴染みの無い音のはずなのにやけに気分が落ち着くのは何故だろうか？本能的に好きなのだろうかと思う。

「俺むっちゃ浮いてると思うんですけど、そこはどう思います？」

「気のせいよ」

横島君の問いかけを一言でバツサリと切り捨てる。私、螢ちゃん、シロ、タマモ、沖田ちゃん、ノツブ、シズク、牛若丸、おキヌちゃんにそして横島君。女性9に対して、男性1、これは目立っても仕方ないし、愛嬌のある顔という感じの横島君が浮くのは仕方ないのだ。

「ノブウー」

「え、ああ。みかん？今剥いてやろうな」

横島君の膝の上でノブノブ鳴いているチビノブも目立っている理由だと理解してくれば、もう少しおどおどしているのが治ると思うんだけど、多分横島君が気付くことは無いと思う。

「しかし、GS免許って便利ですね」

「まあね。持っている結構便利よ？」

でもその便利さを利用して、偽造して、GSだって言われて霊能も無いのに、除霊に挑戦して死亡するという事件が1時期多発したので、今は顔写真入りになって、身分証明書も兼ねるようになったけど、昔は本当に悪用された時期もあった。

「俺、正直チビ達は鞄じゃないと駄目だと思ってました」

膝の上のチビノブとチビにみかんを与えている横島君。確かに電車なので普通は動物を乗せる事は出来ない、けれども

「横島君の場合。妖使いとして登録されてるから、動物じゃなくて除霊道具扱いに出来るのよね」

G S免許にはそれぞれ専門としている除霊の種類が記録されている。私の場合は「道具使い」であり、くえすだと「魔法使い」、唐巢先生だと「体術(特)」と言う感じにある程度の分類分けがされている。ブラドール島に行った時はG S免許が無かったので、貨物室となったが。G S免許を取った今は霊具扱いで持ち込めるのだと説明すると横島君と螢ちゃんは自分の財布からG S免許を取り出す

「あ、本当だ。私も道具使いになってる」

「……俺、妖使い、特殊霊術、符術とかなんか物凄い事になっている」「あ。本当だ」

【横島さんは色々出来ますからねー】

横島君つて多才すぎるから、琉璃も頭を悩ませていたのよね。まあ、G S免許のそんな細かいところを見る人はいないのでそこまで気にする事は無いけど

(やっぱり人來ないわね)

現代風の服に身を包んでいるノツブや、牛若丸に沖田ちゃんだけど、ぼつちり人魂が近くに浮いているし、何よりもふわふわ浮いているおキヌちゃんを見れば、誰もこっちの車両に來ないのは当然だ

「……しかし電車で移動するのは長いな」

シズクがやや不機嫌そうに言うが、そればかりは我慢して貰わなければならぬ。神魔の協力で移動したとなるといらぬ疑いがかけるし、今回の修行の件だって、叩かれれば西条さんにも琉璃にも迷惑を掛けかねない。集団で行動して目立つくらいならまだいい、だがそれ以外で目立つのは非常によろしく無い案件なのだ

【あ、駅弁くれー】

【私もお願いします】

そう、普通に行動してくれることが何よりも良いのだ。幽霊が駅弁を食べるなんて誰も想像がつかないだろうから

「種類はいいから、駅弁を9個頂戴」

妙神山につくまでは遠足気分でも良いだろう。妙神山では修行漬の2週間になるのだろうか

「……ていつ」

【ああ、横島さん。ありがとうございます】

横島君が駅弁の蓋を開けて、箸を刺して手を合わせる。おキヌちゃんへのお供え物で、こうすると味が判ると言っていたけど、目の前で見ると結構引くわね

「……鮭弁か。悪くない」

「私は焼肉ね」

種類に拘らず頼んだので、何が出るのか判らないが、それはそれで面白いわねと思いつつながら、私達は少し遅めの朝食とした。始発で出発したからおにぎりで済ませたから、お腹が空いたのよね。これから登山する前にしっかりと食べておこうと思った

「あ、すいません。バナナ5つください」

「はいよー。お兄さん、バナナ好きなのかい?」

妙神山に向かう前の最後に買い足す物を買って足していると、横島君が実費でバナナを大量に買い込んでいた

「……ちなみになんでバナナ?」

「いや、チビもうりぼーも果物好きだし、モグラちゃんもバナナ好きですし、それに登山するじゃないですか、甘い物はあつたほうがいいかなって」

横島君の言葉にそれもそうねと思い、私は更にチョコレート注文する事にするのだった……

↳横島視点↳

前も登った妙神山。以前と違う事があるとすれば、俺がGS免許を取り、そしてやってきた面子が倍近く多くなっていると言う事だろう  
「ぶぎゆう♪」

山を見てうりぼーが尻尾を振りまくる。絆鞠さん達がいた山を離れて久しい大自然に興奮している様子だ

【これは良い。なんと良い山なのでしょうか、胸が躍りますね】

何故か牛若丸も興奮しているが、あんまり気にしないようにする

「それで前と同じでキャンプするんですか?」

前は途中でキャンプしましたが、今回はどういふスケジュールで

行くんですか？と尋ねる。背負いきれない荷物などは分身して増えた

うりぼーに括り付けてある。結構な重量のはずだが、尻尾を振りながらついてくるので案外平気そうだ

「ある程度進んだらうりぼーに乗って行くわ。2週間の修行スケジュールも向こうも組んでくれるだろうから」

美神さんは腕時計を見る、暫く考え込む素振りを見せてから

「今9時30分だから、15時過ぎくらいに到着するスケジュールで行きましょう」

1時間は普通に登山をして、その後はうりぼーで一気に登ると美神さんが言うと、シロが手を上げて

「はい！はい！狼になって走るのはありでござるか!？」

「……そこはシロとかタマモの好きにしてくれたらいいわ」

なんで私まで走る前提なのよと文句を言うタマモ。運動は嫌いじゃないらしいけど、シロと同じ扱いは不満らしい

【私最後まで登れますかね？】

【コフるなよ？】

持病を抱えている沖田ちゃんがやや不安だが、最悪うりぼーに乗って貰えばいいだろうと思ひ、俺達は妙神山を登り始めるのだった

【ああ、なんと楽しいのでしょうか！】

【本場でござるなあ！】

山に入った瞬間、猿のように木の枝にしがみ付き、その上をぴよんぴよん跳ねながら、高速で移動するシロと牛若丸

「……野人め」

「いや、そんなことを言ったら可哀想だと思っけど」

元々山暮ららしいし、山の中でテンションが上がっているだけだと思う。暫くすれば落ち着くだろう

【やっぱり妙神山の近くですから、空気が綺麗ですね】

おキヌちゃんも鼻歌交じりでご機嫌と言う感じで俺達の頭上を飛んでいるし、うりぼーとチビもめちやくちや元氣だ

「ふぎゅふぎゅ!!」

「みむー♪」

余り遠くまでは行かないが、それでも楽しそうに山の中を走っている

「はぁー子供は元気ねえ」

なんかタマモが年寄り臭い事を言うが、基本的に街の方が好きというタマモは2週間の妙神山暮らしに少し不満を持っているようだ  
「もう少ししたら、うりぼーに乗って移動するからね」

美神さんの言葉に判りましたーと返事を返し、汗を流しながら山道を登る。シズクは足を動かさず、水を使ってスーッと登って行き、ノツブちゃんは普通に登山を楽しみ、先ほど1度吐血した沖田ちゃんは杖を突いて、もう少し登ると頑張っている

【のーぶのぶー♪】

「チビノブも元気だなあ」

俺の横から離れず、木の枝をぶんぶん振り回しているチビノブ。楽しそうだなによりだ、表情の良く判らない顔も楽しそうに見えるから不思議だ

「美神さん、蛍大丈夫？」

ちよつとペースの遅れてきた2人に大丈夫？と尋ねる。前は俺が着いて行くのがやつとだったのに、今は俺の方が先行している

「大分横島君が鍛えられてるって事よ。なんだかんだ言っても女だからね、私も」

「ふう……基本的な筋力とか脚力には差が出てきても当然よ」

毎日健康的な食事をして、運動しているから、ゆつくりだけど差が出てきてるといわれて、そんな馬鹿なと思ったのだが

【普通の人間は人狼のダツシユには追いつけないからな？】

【競争して勝てるだけ、横島さんが凄いですよ？】

心眼とおキヌちゃんに言われたが、俺は違うと思うんだけどなあと思いつつ、山道を登るのだった

【あ、横島！鹿！鹿見つけたぞ！撃つか！】

「止めとこう？神様の山だから勝手に殺したりするのは不味いと思う」

もし何かを捕まえたり、採ったりするなら1度小竜姫様に聞いてからにしようと言うと、ノツブちゃん火縄銃を降ろして

【良く肥えて旨そうじゃったんだがなあ】

戦国時代の武将との認識の違いかなと思った。俺には肥えて旨そうと言うよりも、円らかな瞳が可愛いと思ったんだけどなあ

【んごふっーぜー……ぜー!も、もう無理です!】

登山を始めて1時間と20分。良く頑張っていた沖田ちゃんのギブアップの叫び声に、美神さんはタオルで額の汗を拭い

「ここまでくれば見られても心配ないわね。横島君。お願いしてくれるかしら?」

「判りました。うりぼー!」

俺が呼ぶとダツシユで駆け寄ってくるうりぼーの頭を撫でながら「人数分に分身してくれる?その後皆を乗せて、山を登って欲しいんだけど大丈夫か?」

俺の問いかけにうりぼーは元気良く返事を返し、そのまま分身し大きくなって地面に伏せる。ただバンダナ付きの本体は俺から離れなかったが……木の枝を利用して高速で移動しているシロと牛若丸を除いた全員はうりぼーに乗り、妙神山を登り始めたのだが

「「ぶぎぎー」」

縦横無尽に跳ねて、飛んで、曲がって、加速するうりぼーは下手なジェットコースターよりも激しくて、1度休憩に立ち止まった時。俺、蛭、美神さんが手足を付いて蹲り

「は、吐く……やばい。これは駄目」

「で、ですねえ……ちよつと……うっ……」

「俺もやばい……」

「ノブ?」

駅弁をリバーシしかけたのは言うまでも無く、俺の背中を撫でてくれているチブノブに小さくありがとうと呟いた……なおノツブちゃんとシズクは平気そうで

「……」

たださえ青白い顔を更に白くさせて、瀕死状態になっている沖田

ちやんとの温度差が凄まじかった……

（蛍視点）

うりぼーに揺られながら山を登ること1時間。やっと遠目に妙神山を確認出来た。ここまで来れば歩いて行っても大丈夫だと判断して、うりぼーから降りる

【馬みたいで楽しかったです】

「……もう少し仲良くならないと、乗りこなすのは難しそうです」

木が見えなくなってきたら、牛若丸とシロもうりぼーの分身に乗って移動してきたけど、やっぱり昔の人からすると、うりぼーも馬って言う認識なのかもしれない

「ふふ、私はうりぼーとも仲良しだもんね」

「ぶぎゅー♪」

どうもタママはうりぼーと仲良しらしいので、安全運転だったらしい。その話を聞いていた横島はうりぼーの顔の前にしゃがみ

「めちやくちや凄まじい走りだったけど、もしかして俺の事嫌い？」

「ぶぎゅーぶぎゅー」

首をぶんぶんと左右に振るうるぼー。そのしぐさを見ていて判った

「大好きだから、一緒に走るのが楽しかったんじゃない？」

【あ。そうかもしれないですね】

ぶぎゅーつと大きな声で鳴くうりぼー。どうも、横島を背中に乗せて走るのが楽しくてしかた無かったらしい

「ふう、とりあえずまずは妙神山に行つて。小竜姫様に挨拶するわよ」  
行きましたよと言つて先を歩く美神さんの後を歩く。妙神山での2度目の修行、それでどこまで自分の力が伸びるのか、横島にだけ負担を掛けなくてすまないようになれば良いんだけど

【所で横島君。妙神山ってどんなところなんです？】

【修行場とは聞いておるけどな】

妙神山が初めての沖田さんとノツブが横島に問いかける。横島は



いつの間にか狐に変化していたタマモを胸元に抱き抱え

「小竜姫様って言う竜の神様が居る場所で、霊能者のスキルUPをする所かな？」

ふわりとした説明だけど、言いたい事はそう間違っていないと思う  
【幽霊にも効果があるのででしょうか？】

「あるんじゃないかな？多分」

牛若丸達がパワーアップするかは良く判らないが、霊力とは魂の力なので多分パワーアップはすると思う

【むう？なんだろうな、妙な気配がする】

妙な気配と聞いて思わず身構え、次のシズクの言葉で全力で身構えた

「……妙な気配じゃない、これはあのストーカーの気配だ」

……え？居るの清姫？思わず横島とおキヌさんと一緒に周囲を見るが、それらしい姿は無い

「清姫？誰でござるか？」

清姫の事を知らないシロが羨ましい、あのインパクトのある竜族は間違いなく、一度見れば忘れることなど出来ないだろうから

【横島さんのストーカーをしている竜族のお姫様です】

「それはお姫様として良いんでござるか？」

お姫様としては駄目だと思ふなあとおく横島。どこかの影から清姫が出てくるかもしれないのでやや警戒しながら、妙神山の門まで向かう

「うっきゅー♪」

「モグラちゃんー！」

後もう少しと言う所で勢い良く扉が開き、弾丸のような勢いで横島に突っ込んでいくモグラちゃん。横島もモグラちゃんを抱きしめてくるくる回り始める

「モグラちゃん。元氣？」

「うっきゅーうっきゅー♪」

横島に頭を摺り寄せているモグラちゃんを見ると、門から小竜姫様も姿を見せる

「お久しぶりです。今回はよろしくお願いします」

「ちよつと迷惑を掛けるかもしれないけど、よろしくね」

ノツブ達も居るので、間違いなく騒がしくなり、迷惑を掛ける事になるかもしれないので先に謝る美神さん。それに対して小竜姫様は柔らかく微笑み

「お待ちしておりました。美神さん、蛍さん、今回は私の師匠も修行に協力してくれるそうですよ」

小竜姫様のお師匠様って確か……物凄く嫌な予感がした。だって小竜姫様のお師匠様ってハヌマンだから、しかも間違いなく逆行の記憶があるに違いない人物だからだ

「……久しぶりと言うべきなんだろうな」

「ええ。どうもお久しぶりです、シズクさん。もうあちこちの竜を襲ったりしてないですよね？」

小竜姫様の言葉に、横島に迷惑を掛けるからとシズクは言うが、横島に迷惑を掛けなければ襲っているのかな？と少しだけ考えてしまった

【私は修行は出来ないので、お料理とかお掃除のお手伝いをしますね】  
「ありがとうございます。おキヌさん、人数が多くなるので少し不安だったんです。手伝って貰えるならとても助かります」

おキヌさんは修行じゃなくて付き添いだしね。適材適所という奴だと思う

「うきゆう？」

「新しいファミリーのうりぼー、そしてチビノブだ」

「ぷぎー」

【ノブー！】

「うきゆうきゆう」

「みみーむ」

横島はうりぼーとチビノブをモグラちゃんに紹介するのを見ながら、私達も新しい面子の紹介をする

「この子が織田信長、こっちが牛若丸、それでこの子が沖田総司」

【よろしくなのじゃー】

「よろしくお願いします」

「よ、よろし……こふっ」

なんで自己紹介の間に吐血するかな？小竜姫様は苦笑いを浮かべながら

「はい、初めまして小竜姫と言います。英霊の皆さんもここで修行すれば、より強くなれると思いますよ」

「拙者、犬塚シロでござるー！」

「はい、シロちゃんですね。よろしくお願いしますね」

全員の自己紹介を終えた頃合でモグラちゃん達と一緒に私達の方に来る

「小竜姫様。今回はよろしくお願いします」

「ぶぎゅー♪」

「みみーむ♪」

「ノツブー♪」

横島と横島の周りのマスコット軍団に圧倒される小竜姫様だったが、穏やかに笑い

「はい、今回は横島さんも修行を頑張りましょうね」

「うっすー！」

小竜姫様の言葉に気合の入った声で横島が返事を返したその時

「気合が入っていいの、今回の修行希望者は」

「前も来ていたぞ？お前が遊んでいるうちに」

ロンさんとその隣の服を着た猿……間違いないハヌマンだ。私が思わず身構え、そして美神さんがその笑い顔を引き攣らせる中。横島は肩に下げていた鞆から何かを取り出す

「よろしくお願いします。あの、これ宜しかったらどうぞ」

頭を下げながらバナナ1房をハヌマンに差し出した。一瞬私も美神さんも、そして小竜姫様も顔が引き攣ったのだが

「ほほう。これは良さそうバナナじゃ」

「ほっほ、横島殿お土産感謝するよ」

皮を剥いていきなりバナナを頬張るハヌマンとロンさんに、私達の目から光が消えたの言うまでも無い……

リポ<sup>°</sup>ート23

妙神山

その2へ続く

## その2

リポート23 妙神山 その2

〜老師視点〜

横島から差し出されたバナナ。受け取ってしまったので、皮を剥いて頬張る。良く熟していて、実に美味しい……っじゃなくて！

(なんでバナナを持って来たんじや?)

どうして横島がバナナを持ってきているのか?それが不思議で仕方なかった。ワシの事を知っていたのか?と言う疑惑が頭を過ぎる。

「横島さん?あの私のお師匠様がバナナ好きって知っていたんですか?」

小竜姫が呆然とした表情で尋ねる。すると横島はワシを見て

「お師匠様なんですか?」

だがその顔を見て、判った。横島は何も知らないと、横島は性格的に腹芸などが出来るタイプじゃない、つまりこのバナナは別の目的で持ち込まれたものだ。

「うむ。ああ、バナナありがとう、美味かった」

「久しぶりの果物と言うのも、上手かったよ。横島殿」

ああ、いえいえと言って横島が頭を下げ、別のバナナの皮を剥き始める。

「はい。モグラちゃん、こっちはチビとうりぼー、チビノブは?」

【ノツブ♪】

食べるんだなーと笑い、皮を剥く横島を見て理解した。ワシへのお土産とかじゃなくて、自分の周りに居る小動物への餌だったのだと……

(……ワシの知ってる横島と全然違うんじやが)

煩惱とかまるで無い、バナナを食べて嬉しそうに鳴いているグレムリンとかの頭を撫でて美味しい?と笑っている。なんと言うか子煩悩へと煩惱がシフトしてしまったように思える。それに何よりも無邪気な子供と言う印象を感じた。

「すいません、家の弟子が失礼しました」

「いやいや、美味かったよ」

良く熟しているいいバナナだった。妙神山に居るとバナナは滅多に食べれないので、非常に嬉しかった。

「美神令子と言います。こっちは芦螢ちゃん、そしてあの子が横島忠夫君」

全員名前は知っておるんじやが、ウムと頷きながら返事を返しキセルを啜える。

「妙神山特別修行コースの師範。斉天大聖孫悟空じや、今回はワシも修行を見る。まあよろしく頼む」

ぷかーつとキセルの煙を吹かしていると横島は顔を輝かせて立ち上がった。

「三蔵ちゃんに聞いてました。物凄く強いって、今回はよろしくお願いします」

物凄く修行に前向きな横島の反応に思わず苦笑する。ワシの知っている横島は修行とか大嫌いじゃったが、この横島は違うようだ。しかし三蔵ちゃん……お師匠様、もう少し自分の呼び名とかを考えてくれないだろうか？そろそろ良い歳なのだから……内心溜息を吐きながら、横島を見つめる。

（身体も良く鍛えられておる）

生まれ持った素質だけに甘えていたワシの知る横島ではなく、目的を持って鍛えられた肉体だ。それに霊力の密度もまずまず、螢が横島が死なないように鍛えていたのが良く判る。

「うむ、よろしく。小竜姫、まずは全員を部屋に案内してから、全員の霊力の測定から始めておいてくれ」

スペシャル修行コースではなく、徹底的な鍛えなおしと普段と違う修行コース。その理由は横島と横島の周りに居る英霊の存在を厄介な存在から隠す為。神魔もその事を承諾し、妙神山を隠れ場所として提供する事を決めた、勿論横島から離れる前にバナナを2房貰うのも忘れずにだ。ゲームをやる時にちよこちよこ食べようと思う。

（さてさて、どうなることやら）

ここで靈力を完全に引き出して文珠に覚醒させると言うのも1つの手段じやが、今の横島が耐えられるという保障も無い、それ以前に今の横島は面白い様な能力を持っている。

(それらを発展させるのも面白いかもなあ)

伸び代だらけの横島をどう育てるか、2週間と言う妙神山ではありえない長期の修行。英霊も3人も居るし、美神も蛍も伸び代は十分残っている、どういう風に育てるかを考えながらワシは自分の部屋へ足を向けるのだった。勿論

(横島がいる間に小竜姫の認識を変えるのは急務じやな)

ワシの手持ちの金を全部賭けている小竜姫が今のままでは駄目すぎる。この2週間の間に横島を意識するくらいに横島を成長させてみることを企むのは当然の事だと思いがな……。

〜美神視点〜

ハヌマンに出会い頭にバナナを渡すという横島君の突拍子の無い行動には叫びそうになったが、ハヌマンは上機嫌で2房持って奥の部屋に向かった。

「では横島殿。孫をよろしくお願いします」

「あ、はい！暫く預かりますね」

モグラちゃんは横島君にしがみ付いてはなれないので、横島君が面倒を見る事になり、私達は小竜姫様に案内され泊まり込みで修行をする人達専用と言う離れに案内された。

「美神さんと蛍さんがこの部屋、シロさんとタマモさんはこっち、信長さんと牛若丸さんと沖田さんとおキヌさんはこちらの部屋に、シズクさんは「……私は横島と一緒に構わない」……判りました。では横島さんとシズクさん、それとチビ達もこの部屋をどうぞ、それと荷物を置きましたら置いてある服に着替えて、また正門の前へ集まってください」

シズクって基本的に横島君と同じなのよね。めちやくちや過保護

で横島君を心配している、蛍ちゃんがムツとした表情をしていたけど、流石に部屋割りで我侷をいう訳には行かないので、小竜姫様の指定した部屋割りで部屋の中に入り、用意されていた服に手を伸ばすとピリつとした感覚が肌に走る。

(なるほど……ね)

魂に直接負荷をかけて霊力の向上を図るって事か、これを毎日着て修行していれば魂に掛かる負荷は相当な物になるだろう。

「今回は前回と違いますね」

「そうね」

前の時も着た服とデザインこそ同じだが、恐らく使っている材料が全然違うのだろう。修行と言う名目で妙神山に2週間山籠りするのだ、横島君や蛍ちゃんだけではなく、私もしっかりと成果を得たいと思っていたので、これなら私もなにか切っ掛けが掴めそうね。私はそんな事を考えながら部屋に用意された修行着に袖を通すのだった……。

「ぶぎゅー！」

「うーきゅーうー！」

私達が正門の前に行くと、既に横島君は門の前に来ていた。そこではうりぼーとモグラちゃんが身体を相手より大きくしていた。

「横島君。何してるのかしら？」

「いやあ？なんかここに来たら急にこんな事を始めて、俺も何がしたいんだが……」

不思議そうに首を傾げる横島君のそばではチビとチビノブが手を振って、うりぼーとモグラちゃんを応援している。

「びぎゅー！」

「うっきゅーー！」

ズモモという感じで大きくなる2匹だったが、ついにうりぼーが大きくなる限界を向かえたのか、震えはするが大きくなれず、モグラちゃんは更に大きくなりうっきゅーと鳴く。それが勝ち名乗りだったらしく、うりぼーもモグラちゃんもしゆるしゆると小さくなる。

「何をしてやったんじゃ？なんか部屋から大きくなってる姿が見えた



んじゃが?」

【子供同士の背比べみたいなものじゃないですか?】

【背比べの割にはとんでもない事になってましたけどね】

ノツブちゃん達も同じ服に着替えて、こつちにやってくる。やっぱり魂に負荷をかける物だから、幽霊でも着れるのね。

「ところで横島。シズクは?」

「自分は修行しないからって料理でもするってキッチン」

……まあシズクは修行のしようが無いからね。それも当然かな?

料理などの用意をしてくれているなら何の文句も無いけれど。

「タマモも修行するでござーるーう!」

「いーやーよー!!」

こつちに引き摺ろうとしているシロと嫌だと抵抗しているタマモ。修行はまだ始まって無いんだけど、これ大丈夫かなと思わず不安に思ってしまうのだった。

「うきゅー」

「よしよし、モグラちゃんもうりぼーと仲良くしてやってな?」

しゃがみ込んで鳴き声を上げるチビ達の頭を撫でている横島君に思わず脱力して、溜息を吐いてしまうのだった……。

く小竜姫視点く

初日の修行は霊力の測定と、身体能力の確認と言う軽い内容で終わりとなった。2週間と言う長期の訓練は今までの妙神山ではありえない事であり、私も老師も修行の予定を組み上げることに相当頭を悩ませる結果となったからだ。

(横島さんの体捌きが尋常では無いレベルでしたね)

前に妙神山に訪れた時は素人と言うレベルだった。でも今日の横島さんは体裁きから霊力のコントロールまで1段も2段も上のレベルになっていた。GS試験、マタドールの戦いの時よりも更に成長しているのが一目で判る。身体能力と霊力は今、横島さんが成長期に

入っていると考え、更に横島さん自身に努力しようと言う意志があるのが非常に良かった。それが横島さん自身の能力を伸ばすのに良い傾向となっている。

「ん、んー」

夕食を終え、日誌を書き終えた所でぐっぐーっと大きく背伸びをする。普段は静寂に満ちている妙神山。それが一気に騒がしくなったのだが、それは決して不快ではなく、むしろ喜ばしい物のように思えた。

「皆さんやる気に満ちていますしね」

タマモさんは元々家に居ると危険と言う理由で着いて来ているので修行に関しては、強制は出来ないが自分が覚えている事を横島さんに教えようとしているので、それも1つの修行の形として認めるべきだろうと思う。

「横島さんの修行の方針に悩みますね」

G S 試験の時のあの戦いは今もすっかり覚えているし、マタドールを退けた時のボロボロになりながらも、戦い続けたその背中を私は覚えてる。横島さんは護る事に特化していると思ったのですが、そうとも言い切れない。自分を完全に度外視にするそのあり方は……余りに歪だった。

(でもそれは危険でもありませんね)

自分の身を度外視に私たちを助けようとした。それは横島さん自身の命を縮める行為に他ならない。それにあの時よりも戦術も幅が広がり、何をしてくるか判らないという面もある。だけどそれも素直に喜び切れない所もある。横島さんは元々自分を軽視する傾向があるが、それに徐々に魔人に近づいている疑惑があると美神さん達に聞かされたからだ。

「1度ヒヤクメに様子を見てもらって……それから」

ヒヤクメに横島さんの状態を見て貰って、修行の予定はそこから組み替えて……。

「ふふ」

思わず自分が笑っている事に今気付いた。才能に溢れ、修行にも前

向きな横島さんが非常に好ましく思えたのだ。

「剣術なんて物も面白いかもしれないですね」

今日到着したばかりだから修行の予定をつける為に、霊力の測定などをしたのですが、明日は軽く組み稽古などを見てみるでもいいかもしれない。あまり霊力を使わせないで、体術を重点的に見てみれば、横島さんにさほど負担を掛ける事も無いでしょうし。

「老師に相談ですね」

今回の修行は老師が主に予定を組んで、私とその補佐となっている。老師に1度お前ならどういいう風に訓練の計画を立てる？と言われて、それを考えてみると言われていたので、私が考えた修行の予定を手にして自室を後にするのだった。

（あ。でも清姫様と天竜姫様はどうしよう）

一応ここは天界の駐在所となっているので、ちゃんと護衛が居ればお2人が来る事の出来る場所でもある。

「ヒヤクメに伝えると、そのまま知られそうですね」

でもヒヤクメに来てもらう事は必要だし……でも横島さん達が居るとすれば絶対こつちに来ると言うであろう2人の姫の事を考える。

「どうしましょう……」

今の所妙神山は安全な拠点と言えますが、例え伝えなくてもこちらにやって来そうな清姫様は特に不安要素だ……部屋はまだあるけど、竜神王様がどんな反応をするだろうか。

「やっぱりこれも老師に相談しましょう」

今回の件の責任者は全て老師だ。だから老師にこれも相談する事にし、早足で老師の部屋へと向かうのだった。

【ふふふふ、やっつと、やーつとです♪】

小竜姫の認識出来ない所でもう1つの小竜姫の声が響く、長い間横島との接点が無い事で魂の奥深くで眠っていた、狂竜がその牙を剥こうとしていた……。

一方その頃、自分が危機に陥っているなどと微塵も考えていない横島はと言うと……そんな事は知るよしもなく、寝る準備を始めた。

「ほらモグラちゃん、モグラのベッドも持って来てるんだぞ」

「うきゆうー♪」

スポーツバッグからモグラちゃんのベッドの籠を取り出して、モグラちゃんを抱き上げて籠の中に寝かせる。

「うりぼーもおいでー」

「ぷぎー♪」

ダンボールで作ったうりぼーハウスにうりぼーの前に置くと、うりぼーは尻尾を振りながらダンボールハウスの中に潜り込む。

「チビはこれな」

「みむ♪」

チビの愛用のややボロボロになりつつある籠を自身の枕元に置き、最後にチビノブの布団を取り出して、布団の横に広げる。

【のーぶー♪】

「はいはい、遊ぶのは明日、今日はもう寝ようなー」

あそぼーといわんばかりに飛びついてきたチビノブを抱き抱え、今用意した布団に横にする横島の姿は悲しい事に、どこからどう見ても父親のそれだったりする。

「……お前も早く寝ろよ？2週間の修行がどういうスケジュールなのか予想もつかないんだからな」

「判ってるよ、ありがとシズク」

シズクの言葉に明かりを消して布団に潜り込む横島とそんな横島を見つめるシズクの優しい視線。横島家の平和な日常は妙神山でも変わらずに広げられているのだった……。

なお他の部屋では

「動物フォームなら、横島の部屋に潜り込めるわ。人型になるとシズクに頭を刺されるけど」

「いやいや、タマモ、それは無謀と」

「私は良い物、横島の部屋で何度寝てると思ってるのよ、じゃ、おやすみ」

「させんでいびるううー」

「邪魔しないでくれる!？」

子狐フォームの時のベッドである籠を手にして、部屋を抜け出そうとしているタマモとそれを防ごうとしているシロの攻防戦が繰り広げられていたし……。

【第1回枕投げ大会！イエーツ！】

【もが!?やりましたね……覚悟は出来ているんですよね!?!】

【すいません、沖田さんはもうゆっくり寝たいんですけどお!?!】

【直接戦闘以外なんでもありません、私が最強です!】

ポルターガイストで布団と枕を操るおキヌとノツブ達の直接攻撃以外なんでもありと言うカオス過ぎる枕投げと言う名の戦闘が広げられ

「明日はどういう訓練になると思いますか？」

「そうね。やっぱり基本的な体術とかの見直しとかじゃないかしら？」

2週間って言う長期だから、多分戦闘技術の見直しを1からやると思うわよ」

美神と蛍の部屋は他の部屋と異なり、物静かな雰囲気ですぐに落ちていくのだった……。

妙神山滞在 1日目 終了

リポート23 妙神山 その3へ続く

## その3

リポート23 妙神山 その3

く小竜姫視点く

朝靄が掛かる中、ややぼんやりとした思考のまま廊下を歩いていると、庭の方から横島さんの声が聞こえてきた。思わず欠伸ばしかけたのを噛み殺し、下駄を履いて庭に出る。

「うきゅーうきゅきゅー♪」

「よしよし、上手上手」

横島さんが庭に片膝を着いて擦り寄っているモグラちゃんの頭を撫でている姿が見える。

「よし、今度はうりぼーだ。とってこーい」

「ぶぎゅーッ！」

円盤を優しく投げると、うり坊がそれを追いかけてダツシユする。見た目はとても可愛いのですが、その身に秘めている神通力は凄まじい。まだ覚醒こそしていないようですが、もし目覚めればそれこそ神獣クラスに間違いない、一体何処で拾って来たのでしょうか。

(横島さんらしいと言うところですかね?)

動物に好かれ、動物を大事にする。ちよつと大事にしている動物が普通じゃないですが、こうしてみている分には微笑ましい。

「あら？」

こつんと足に何か当たる感触がする。少し考え事をしていて、飛んで来た円盤に気がつかなかった

【ノブー】

ちよこちよこと言う感じで駆け寄ってくる小人。英霊織田信長の分身の術で生まれたらしい、それはとてと寄ってきて、私が手にしている円盤を見つめる。

「あ、はい。どうぞ」

【ノブー♪】

「んーあったか？あ……小竜姫様。おはようございます」

円盤あつたー？と言いなながらこつちに歩いてきた横島さんが私に気付いてぺこりと頭を下げてくる。

「おはようございます。随分と早いんですね？」

「いや、あはは。モグラちゃんが遊ぼう、遊ぼうって騒ぐから、シズクにうるさい！って部屋を叩き出されちゃって、シズクが朝弱いって始めて知りましたよ」

モグラちゃんを抱き抱えて笑う横島さん。シズクさんは竜神ですが、元は蛇の大蛇。寒さには強いですが、朝は低血圧は上手く動けないようです。ただでさえ、山の上で気温が低いので余計にそうだろう。

「横島さんは大丈夫ですか？修行をするのにこんなに朝早くから起きて。結構ハードですよ？」

1から徹底的に叩きなおすので辛いですよ？と言うと横島さんは抱えていたモグラちゃんを地面の上に降ろして、遊ぼうと言わんばかりに自分の側に集まってくる小動物達の頭を撫でながら、本当に楽しそうに笑う。

「修行始まると遊んであげれないですからね。だから少しくらい早起きしても全然平気ですから」

「みむうー」

グレムリンがボールを抱えて浮かび上がるのを見て、じゃあ次はボールだなと笑う。

「じゃあ小竜姫様。失礼します」

ぺこりと頭を下げ、再び広い所に移動してボールを投げる横島さんを見て、思わず笑ってしまった。無邪気な少年と言う感じがして、なんと言うか可愛いと思ってしまった。

「ふふ……なんと言えば良いんでしょうね」

楽しそうに鳴くモグラちゃんやうりぼー達と白い息を吐きながら遊ぶ横島さんの姿を見て、なんとと言えば判らないが、とても微笑ましい気持ちになりながら、朝食の準備をする為にキッチンに足を向けるのだった。朝食の準備を始めてから30分ほどでダダダッ!!と廊

下を走る音がして、キッチンの扉が勢い良く開きシズクさんが姿を見せる。

「……コンロは空いているか!？」

「え、ええ。大丈夫ですけど?」

味噌汁の準備は終わり、今漬物を切っている所なのでと言うと、シズクさんは味噌汁に蓋をすると、鍋敷きの上に移動させ。片手鍋を手にして、冷蔵庫から牛乳を取り出す。

「何をするんですか?」

「……こんなに寒い所では身体が冷える。温かいココアを作って横島に持っていくんだ」

ココアの粉と砂糖を靴から取り出してマグカップに入れている姿は、とても八岐大蛇の系譜の最上級の蛇神には見えず。なんと言うか世話焼きの妹みたいな感じで思わず笑ってしまった。

「……何か言いたいことがあるのか?」

「い、いえ!あ、横島さんは卵焼きは甘いのですか?」

物凄い目で睨まれなんでもないと行って、慌てて話題を変える  
とシズクさんは甘い方と呟きくと、ココアを手にしてキッチンを出て行った。

「下手な事は考えない方がいいかもしれないですね」

少なくとも2週間は滞在するのだ。関係がギクシヤクするのは良くない、それに何よりも、今のあの目。温かみなど一切無いその瞳、丸くなつたと思いましたが、そんな事は無いのだと一目で悟った。

「さてと後はご飯が炊き上がれば朝食の準備は終わりですね」

健全な精神と魂は健全な肉体から、修行の前にはしっかり朝食を取つてからだ。今日は美神さん達の基礎身体能力の確認とする為に軽く模擬戦の予定だ。ヒヤクメは少し忙しいので、夜にしか来れないという話なので、待っていて1日ロスするのは余りに惜しいので、ヒヤクメの診察を後回しにして、先に美神さん達がどれだけ成長しているのか、それを確認する事にしたのだ。

「ぐっ、惜しい……あれだけ無防備で、しかも笑顔を浮かべる私だったならば……」



そして小竜姫の魂の中の未来の小竜姫は先ほどの無防備な横島を見て、とんでもない好機だったのにと、唇を噛み締めるのだった……。

〈美神視点〉

朝起きて顔を洗いに行く途中で縁側に腰掛け、ココアを啜っている横島君と、その脇に置かれているボールとfrisbeeと、頭を抱え小さくなっているチビ達の姿。

「……朝から遊んでみたいですね」

「そうね。ちよつと注意しておきましょうか」

普段の修行とは違うのだから、しつかり休むように注意しようと思つて足を其方に向ける。するとシズクの声が聞こえてきた。

「……遊んでやりたいのはわかるが、修行の事も考えろ。お前心眼に怒られると思つて、心眼を置いて行つただろ？」

「……はい」

一言言つてやろうと思つたんだけど、既にシズクに叱られているようなので何も言わずに、昨日案内された洗面台に足を向けるのだつた。

「では今日は軽く模擬戦などをしてほしいと思います」

朝食の後の小竜姫様の笑顔の言葉に、いきなり死ぬんじゃないかしら？と思つた。神族で武神で竜神と組み手どう足掻いても勝てないんだけど……厳しい訓練にしても厳しすぎる。

「あ、でも安心してください。体術や武器の扱いを見るだけなので、そこまでやる気は無いですし、まずは英霊の皆さんからです」

【【えっ？】】

なんかボロボロの状態の3人が引き攣った声で返事をする。小竜姫様はにこにここと笑いながらも、額には青筋が浮かんでいた。

「昨日ずいぶんと暴れてくれたみたいで、元気が有り余っているようですから」

ああ、昨日の騒ぎつてノツブ達だったんだ。いつまでもバタバタしていると思つた。

「うー眠いー」

「ほら、タマモ。しゃきつとして、ちゃんと朝ご飯食べないと」

机の上に突っ伏して欠伸をしているタマモにご飯を食べるように言う横島君に、私は食後のお茶を啜る。

「それ、横島君もよ」

「うん。早く食べないと身体動かないわよ?」

私と蛭ちゃんの注意に、横島君はうっと呻く。今までチビ達の世話をして、今度はタマモ。全然食事が進んでいないので横島君も早くと注意する

「せんせー、まずは食べて軽くストレッチをして、身体を解すでござる」

【周りを気にするのはいいが、自分の事も優先しろ】

「……はい」

皆に注意され、しょんぼりしながら自分の分の朝食にやっと箸を伸ばす横島君。

【あ、お味噌汁温めてきますね?】

「うん、ごめん。お願いするわ」

既に冷めている味噌汁をおキヌちゃんに渡し、温めなおして貰う間、卵焼きと漬物で白米を食べる横島君。温かい内に食べないからと思う。

(まずはノツブ達の動きで小竜姫様のパターンを見ましようか)  
(そうね)

先にノツブ達が戦うのは、何も昨日暴れたからだけでは無いだろう。まずは肉体的疲労が無い英霊から戦い、自分のパターンを私達に見せて、その上で体力なり、神通力が消耗した段階で私達と戦うと言う小竜姫様の考えだろう。

「……ほら、食え」

「ぶぶーちよっと！無理矢理詰め込まないでくれる!？」

私達が真剣に考えているとなりでタマモがシズクに無理矢理食事を詰め込まれ、呻いているのを見てどうも締まらないなあと思うのだった……

GS試験でも用いられた互いの靈力にダメージを与える結界の中での模擬戦になったんだけど、周りに被害が出ない。そして全力で攻撃しても大丈夫と言う環境で初めて牛若丸やノツブの全力を見た。

【シッ！】

「そうそう簡単に貫きませんよー！」

光のようにしかも見えない牛若丸の刺突を小竜姫様は剣の腹で受け止め、受け流しと同時に横薙ぎの一撃を繰り出す。

【こちらにも簡単には直撃は貫きません】

身を振りながら跳躍し、結界の上を蹴って小竜姫様から距離を取り、刀を構える牛若丸。片足で軽くリズムを取って、距離を一定に保つ。

「ノツブちゃんから見ても、優勢なのは？」

既に模擬戦を終えたノツブに横島君に尋ねる。ノツブは胡坐をかいて、顎を手の平に乗せ、牛若丸と小竜姫様の戦いを見つめる。

【小竜姫じゃなあ、ワシも牛若丸も自分の意識の感覚と、身体の動きに差がある】

感覚と身体の動きの差異。それを治したいと言っていたけど、そんなに大きな差異なのだろうか。

「そんなに酷いのかしら？」

蛍ちゃんがノツブにそう尋ねる。何度か除霊を一緒にしているが、そういう素振りは無かったと思うけど……本当にそんなに問題が出るレベルなのだろうか？と思うのは当然だ。

【んー普通に弱い相手と戦うなら全然平気じゃ。ただ相手が格上もしくはは同格となると、身体と感覚の差が出てくる。ほれ見てみい】

ノツブに言われて小竜姫様と牛若丸の対決に視線を向ける。

【くっ！】

「間合いと呼吸が乱れましたねッ！」

今まで完全に間合いを保ち、剣の打ち合いをしていた牛若丸と小竜姫様。その間合いと打ち合いのリズムが大きく乱れ、小竜姫様の切り上げで牛若丸の手から刀が弾き飛ばされる。

【参りました】

「いえ、いい勝負でした」

牛若丸が両手を上げ、降参の意を示す。だがその目は全く負けたと思っているようには見えない、それは自分の思うように動かない身体に対する苛立ちが目に見えていた。

「灵力のバランスが整いましたら、また1勝負しましょう」

「……ええ、次はこうは行きませんので」

眼光鋭く結界から出た牛若丸はそのまま、横島君の所にダツシユして来て、深く頭を下げる。

「うううー！す、すみません！負けましたあ!!」

「うんうん、大丈夫俺は牛若丸が強いつてよーつく知ってるから、次があるよ、次が」

良し良しと言いながら牛若丸の頭を撫でる横島君。なんかこう、溢れる包容力が見え隠れしてる。

「ノブー」

「みむみー」

「ぶぎゅー♪」

「うう、ありがとう。次は！次はこんな無様な姿は見せません！」

チビ達が持つて来たタオルとジュースを飲んで、握り拳を作る牛若丸。その気合に満ちた表情を見れば判る、妙神山にいる時間全てを使つて小竜姫様にリベンジをしようとしているのがよく判る。

「では次は私ですね。では横島君、行って来ます」

「頑張つてなー、あ、でもあんまり無理をしないように」

「コフるなよ、へっぽこ人斬り」

横島君の言葉には嬉しそうに笑い、ノツブの言葉にうるさいですと怒鳴り結界の中に入る沖田ちゃん。

（相手は幽霊だからね？）

（判ってます。判ってますよ）

蛍ちゃんがぶすつとしていているけど、相手は幽霊だから、絶対に横島君を結ばれることは無いんだからね？と声を掛ける。

「せんせー。沖田殿と小竜姫様。どっちが勝つと思うでござるか？」

「気持ち的には沖田ちゃんだけだなあ、多分小竜姫様じゃないかな」

膝の上で丸くなっている子狐モードのタマモの背中を撫でながら、横島君が言う。

【それは感情的に言っているのか？】

「いんやあ、違うぜ？沖田ちゃんとかノツブちゃんとか牛若丸とか、良く組み手とか、戦い方を教えてくれたから思うんだけど」

そこからの横島君の言葉は私も蛍ちゃんも驚いた

ノツブちゃんは剣も銃も使えるけど、どっちかと言うと銃の方が得意だから、間合いを詰められると弱いし

牛若丸は機動力が命なのに、結界の中じゃあ思うように動けないし、何より刀だから下手に小竜姫様の剣を受けると刀が折れる

沖田ちゃんも機動力が武器で、刀は切るんじゃないやなくて突くように使うから、死角を取ればチャンスはあるかも

と告げた。それは的確で正確な状況判断能力で、その話を聞いていたノツブが満足そうに笑う。それは自分の弟子の成長が嬉しくて仕方ないと言わんばかりの物だった。

(これはちよつと気合を入れていかないと不味いかもね)

横島君がどんな英才教育を受けているのか？それを改めて知った。師匠としてあんまり情け無い姿を見せるわけには行かないと私も気合を入れ、次の小竜姫様との組み手の事を考える。

「だ、大丈夫ですか？」

【ケフ……む、無念】

そして小竜姫様と沖田ちゃんの勝負は予想通りと言うか、なんと言うか、沖田ちゃんが吐血し、顔面から倒れこんでの敗北となった……。

「……お昼は天ぷらでもするか」

【あ、それなら天つゆ作りますね】

そして修行をしないシズクとおキヌはのんびりと昼食の準備を始めているのだった……。

く小竜姫視点く

美神さんと蛍さんとの組み手も終わり、最後の横島さんとの組み手の前に正座をし、一時気を静める。脳裏に過ぎるのは先ほどの蛍さん

と美神さんとの組み手だ。

(同じ道具使いですが、2人ともまるで戦術が違いましたね)

英霊の3人と比べれば(1人だけは映霊でしたが)人間の2人は魂の出力や身体能力で劣る。だから霊具ありで、装備も万全での戦いとなったのですが、蛍さんは終始待ちの戦闘スタイルで、破魔札を敢えて私に切り裂かせる事で、切り裂かれた破魔札の中の力と霊力を共鳴させての大火力による一発逆転を狙いながらも、霊体ボウガンと自身の得意技能である幻術を組み合わせ、ほんの少し、ほんの少しずつ私の間合いを崩すと言う2段階構えの耐久戦を仕掛けてきた。

「うーやっぱ相手の踏み込みが厳しかったわ」

「大丈夫か？」

横島さんが霊力の消耗でダウンしている蛍さんをタオルで仰ぎながら、水を差し出す姿を見て小さく笑う。蛍さんの戦術は素晴らしい物で、確かに近接を得意にする相手にとっては厄介な戦い方だった。ただ蛍さんの言うとおり、私の踏み込みそれと幻術による、間合いの攪乱。それがどうしても蛍さんの計算を上回っていた為、幻術による攪乱が中途半端だったのが敗因だ。結界で私にはある程度の能力の制限がかかっていたからこそ、私にも効果が出ていた。これが普通の人間や妖怪相手なら十分有効な戦術だっただろう、神魔には効果が薄いでしょうが、人間や弱い幽霊相手には実に効果的だと思う。

(美神さんは彼女らしいと言いますか)

美神さんが取った戦術はシンプルなものだった。神通棍で殴りかかると思わせて、精霊石の粉末による目晦ましを至近距離で使い。私の視界と霊力を感知する能力を麻痺させ、自身は防御札を全身に貼り付け、1発2発貰ったとしても、私の感覚が麻痺している間に少しでも痛打を与え、あわよくば結界で制限されている私の霊力を削りきると言う事を考えた突撃。普通に戦っても、持久戦に持ち込んでも勝てないのならば、短期決戦で少しでもダメージを与えようという戦法を取った。それが思いの外苦しい戦いになった。

(これは私も気をつけないといけないですね)

絡め手や間接攻撃はさほど得意では無いからこそ、完全に美神さん

の策に嵌ってしまった。勝てないと覚悟して、少しでも痛打をと、全力で打ち込んできたと思い。その一撃をあえて受けて、返しの一撃で思っただけ身構えた瞬間の零距离での精霊石の爆発。竜族や神族だったとしても感覚が麻痺する痛烈な閃光だった。視界は見えない、霊力は感知できないでそれは終始苦しい展開となってしまった。

「ぐ、あいたたた……あの剣で居合いとか予想外すぎるわよ」

見えないのなら見なければいい。自分の間合いに入った瞬間の一太刀。それで美神さんを行動不能にした、少々力が入りすぎてしまったが、それだけ私を追い込んでいたと思っただけ貫えたと幸いですね。

「よし」

やっと視界と霊力を感知する感覚が戻ってきた。ゆっくりと立ち上がり、横島さんの名前を呼んだ。

「横島さん。お待ちせしました」

「あ。うっすー！シロ、悪いけど、シズクを呼んで来てくれるか？蛍と美神さんの様子を見て欲しいって」

「判ったでござる！すぐ戻ってくるでござるよー！」

シロさんにシズクさんと呼んでくるように頼み、立ち上がった横島さんの手には木刀が握られている。横島さんが武器を持つ所はあまり見た事が無いですが、彼の事だからきつと面白いものを見せてくれると思いい。結界の中に入ってきた横島さんと対峙する。

「よろしくお願いします」

「はい、よろしくお願いします」

横島さんがそう頭を下げ、木刀は左手で片手で持ち、右手は霊力で出来た籠手。右手を突き出し、左手の木刀は切っ先を下に向け、斜め下に、そして横島さん自身が斜に構えているので右手がやけに大きく見える。今まで相手した中でこんな構えの相手と戦った事が無い、何をしてくるか判らないので今までと異なり自分から攻め込む事が出来ない。

「！」

突然右手が巨大化した。巨大化したように見えたとか、攻撃で霊力の籠手が伸びたとかでは無い。文字通り、霊力の籠手が横島さんが開

いた手の形で巨大化し、私に迫ってきたのだ。

(軽い!?)

神剣で迎撃しようとして横薙ぎに振るったのだが、それは驚くほど軽く。簡単に弾き飛ぶ、だがそれと同時に困惑した。

(どっへ!?)

横島さんの姿を一瞬見失った。だが背後から気配を感じ、腰に挿した2本目の神剣を後手で抜き振るう。

「とっ!とと……やっぱ駄目か」

「いや、今のは結構良い線行っていましたよ」

霊力の籠手を伸ばすと同時に切り離し、自身はその籠手を影にして移動。相手が籠手を切り裂いた瞬間に霊力が霧散し、視界を奪った間に背後に回る。いきなり手が巨大化すれば、相手は困惑する。それを利用した中々面白い攻撃でしたが……。

「でも面白いだけではッ!」

反転し、横島さんを正眼に構えようとした瞬間。その姿が消える……いえ、違う!これは!即座に顔を上げると横島さんの姿は私の頭上にあつた。

「よつと!」

籠手を結界の上に伸ばし。それを縮めることで一瞬で上空へ退避した!?!結界の上を蹴って離れた所に着地する

(読めない)

横島さんの行動がまるで読めない……流石に眼魂を使うとは思えないですが、それでも横島さんの動きが読めない。自由にさせてはいけないと思ひ、前に足を踏み出した瞬間。ガクンつと態勢を崩す。

「これは!?!」

何が起っているのか判らなかつたが、横島さんが何かをしたのは判る。態勢を崩している私に指を噛み切つた横島さんが空中で文字を描いた。

「急急如律令ッ!氷精招来!」

空中に刻まれた文字から冷たい靄が溢れ出し、私の手元を包み込む。



「っ、冷たい……」

ダメージは殆ど無い。だが手がかじかんで力が入らない。

「行きますー!」

木刀を両手で構え振り下ろしてくるのを、後ろに飛んでかわす。馬鹿正直に声を……。

「伸びろーッ!」

「しまっ!」

霊力の籠手が伸びて私の足を掴む、ぐんつと引つ張られる感覚と共に横島さんの方に引き寄せられる。完全に引つ張られる前に、短い方の神剣で霊力の籠手を切り払い、地面に手を付いて大きく距離を取る。

「うーん、今のも駄目か」

横島さんは不満げだが、正直少し焦った。奇策、徹底的に奇策なのだが、柔軟すぎる発想が怖い。

「ちよ!?横島君!?今札無しで陰陽術使わなかった!」

「え。あ、はい!前に人形使いに襲われた時に使えるようになりまして!すっごい疲れるんであんまりやりたくないですけど」

陰陽術は札を必要とするのが前提なのに、それを覆した。才能と言うのか、それとも型にはまらないとでも言うのか、どっちにせよ恐ろしい能力だ。だが次の横島さんの行動は完全に驚かさされた。

「俺が思いついたのは駄目だったので、今度は……これで挑戦します」

霊力の籠手を解除し、木刀を両手で構え正眼でこっちを見つめる。

それは鏡合わせのように私と同じ構えだったのだ……。

↳蛍視点↳

结界の中で木刀と神剣がぶつかる音が何度も響く。私はその光景を見て心底驚いた、こうして打ち合う前の横島の戦術も驚かさされたが、今日の前の光景はその驚きを越えていた。

「シッ!」

同じタイミング、同じ呼吸、同じ腕の振り全て同じで振るわれた木

刀と神剣がぶつかり、ガツンという重い音が響き、弾かれたように横島と小竜姫様が間合いを取る。だがその姿は完全に同じで、頭が混乱してくる。

【別に驚くことでもなからうに。横島は自分の経験では届かないと判断した、じゃあ届かせるにはどうすればいいか？簡単じゃ、相手の真似をすればいい。一挙手一投足その全てを真似している】

【主殿はそれを平然とやりますしね】

ノツブと牛若丸の声が聞こえるが、私の頭の中はありえないの言葉で埋め尽くされていた。何処の世界に相手の動きを見て、真似して神族と打ち合える人間がいると言うのか。

「……お前と美神がいるから、追いつこうと頑張つて、頑張つて、それでも届かないから届く為に横島がたどり着いたのが真似をすることだった」

「見取り稽古という奴でござるな……でもそうだとでもせんせーは凄いでござる」

小竜姫様は手加減してくれている。それでも人間には反応するのがやつとの境地だろう、私では1回か2回打ち合うのが限界だ。

「本当に全て真似をするのですね？」

「……」

小竜姫様の問いかけに横島は返事を返さず、小竜姫様が放った突きからの薙ぎ払いを完全に真似し、再びガツンという重い音が響く。

「ふふっ、修行中と言う事を忘れそうなくらい楽しいですよ」

小竜姫様の酷く上機嫌な声が聞こえる。袈裟、逆袈裟、薙ぎ払いに突き、そして足裁き。その全てを真似してみろと言わんばかりに横島に向かって繰り返し出し、横島もそれに必死に喰らい付いて行く。

(これが横島の才能なの?)

天性の才能に胡坐をかく事無く、研磨し、磨かれ続けた横島の才能。人界の鬼札とまで言われたその実力が開花された……。

「そろそろ限界ね。シズクお願い出来る？」

「……言われなくても」

美神さんとシズクが何か意味深な話をしてどう言う事か尋ねよう

とした時。それは起きた……お互いに木刀を振り上げ、振り下ろそうとしたその瞬間。

「へもお……」

「つきや!? え、え!?!」

【「ちよつとー!?!」】

急に横島が訳の判らない奇声を上げて倒れこみ、そのままの勢いで小竜姫様を押し倒すのを見て、私と沖田さんの声が重なった。やっばりこいつは敵か!?!今認識した。タマモが狐の姿で吼えていたのは無視する。

「ちよつ!?!ど、どうしたんですか!?!」

「う、うぎい……腕も足も……全身がいたい……ううう」

ぴくりとも動かず呻き声をあげて言う横島の下から、小竜姫様が這い出てくる。

「小竜姫様みたいにならずと剣術を鍛えている相手の真似をしたら、鍛え方が足りない横島君じゃあどつかおかしくなるもの当然よ」

美神さんがぴくりとも動かない、横島の前に立ち無理しすぎと怒る。

「うー……そうなんですかあ?」

【鍛え方がまだ足りなかったか】

呻いている横島と、心眼の残念そうな声を聞き。沖田さんとにらみ合いをしながら、私は横島の元へと駆け寄る。

「大丈夫?」

「……いひゃい。動けにゃい」

……舌が回ってない横島の声に思わずときめていると、うりぼーが駆け寄ってきて、横島のお腹の辺りに頭を突っ込み、お尻を振って横島の下にもぐりこみ、巨大化する。

「うきゅー!」

「みみう」

モグラちゃんが運びたかったと抗議するが、うりぼーの方が早かったとチビに窘められる。

【まあ、良くやったほうじゃな】

【そうですね。でもやっぱり剣の修行をして無い分が響きましたね】  
観戦をしていたノツブと牛若丸が立ち上がり、吐血している沖田さんの足を掴んで引き摺って行く。

「よ、よ(じまぐーんん)」

うつ伏せになっっているので物凄いだみ声で横島を呼ぶ。横島に父性を感じるとか言っていたけど、本格的にやばい人だったようだ。

「拙者、せんせーが心配なので組み手はまた後にして欲しいでござるよ」

「……え、え。あ！そうですね！横島さんの治療を優先してあげてください。結構無理をしていますから」

顔と耳が真っ赤の小竜姫様にまさか？と思いつつも、横島の方が心配なのでうりぼーに乗せた横島を建物の中へと運ぶのだった。

「……筋を痛めてるか、湧き水が良い所で良かったな。心眼、もう少し横島の突撃癖を何とかしろ」

【やりたいと言う事は挑戦させる方がいいだろう？】

部屋での治療の一幕が、過保護な母親と放任主義の父親みたいな感じで、思わず笑ってしまった。安静の為に部屋から出た所で、美神さんが声を掛けてきた。

「横島君の成長速度は凄まじいわね」

「そうですね」

美神さんは既に成長しきっていると本人も自覚している。私はまだ霊力とかは伸びるが、技術的には既に成長しきっている。横島は知識も技術も足りないからこそ、その成長幅と速度が私達よりも遥かに大きい。

「ちよつと本格的に小竜姫様に相談しよう」

「ですね」

慕ってくれていて、そして私達を立てようとしてくれているのに、そんな私達が横島よりも弱いのでは話にならない。自分の限界を感じているが、それが限界なのか、それともその先があるのか小竜姫様に相談することを決めるのだった……。

リポート23 妙神山 その4へ続く

## その4

レポート23 妙神山 その4

〜小竜姫視点〜

無理をした横島さんをシズクさん達が治療と言って部屋に運ぶのを私は呆然として見つめていた。さっきの横島さんは凄かった……私の動きを完全に真似していた。力や圧は異なるが、自分がもう1人いるとさえ思った。

(今であれば……)

横島さんが今後どうなるのか私には見当もつかなかった。長いこと妙神山にいるが、大体見ればどれくらい強くなるかと言うのは見極める事が出来る。蛍さんはまだ霊力も伸びるし、技術も磨くことが出来る。後は切っ掛け次第で、美神さんは霊力、技術共に成長しきっているが、もう一皮剥けると思う。だけど、横島さんは底が全く見えな  
いのだ。

「今であれば……私を……」

超えるかもしれない。その言葉は口には出来なかった、そこまで呟いた所で頬が熱いのに気付いてしまった。

(いえいえ！わ、私は何を今考えた!?)

一瞬思ってしまった、彼ならばと私を倒して婚姻をと一瞬思ってしまったのだ。私が妙神山にいるのは修行のためと言うのもあるが、もう

1つ理由がある、それは婚姻をとるさい他の竜族と距離を取るためでもある。自分よりも強い相手としか婚姻しないと書いたのは何時のことだったか……思い出せないほど前の話だったのは判っている。結局私が妙神山に来る前に私に勝てた相手は誰一人存在せず、何時までも意地を張らずに婚姻、婚姻とうるさい私に負けた若い竜族の男達の相手をするのも疲れ果て、良縁があるのにとうるさい若い竜族の娘にも疲れ果てた時に竜神王様が私を妙神山の管理人としたのだ。

『何時の日か、お前が求める伴侶が出来るの良いな』

と笑い、私をこの地の管理人として、妙神山に括られた神としたのだ。ここならば修行で力を求める相手には事欠かない、いずれは私に勝てる相手もと思い、それも忘れかけていた時に熱を与えられたのだ。横島さんが限界を向かえて倒れ、押し倒された時に不思議と嫌な気持ちは感じなかった。

「いやいや！彼は人間で！」

違う違う、否定する言葉を呟いて、今のが自分の気の迷いと思いたいのに……どうしてもそれを否定しきれない。

「彼は人間で私は竜族で」

だから彼の方が先に死んでしまう、私はそれを看取る事になるのが嫌なんだ。

「で、でも……」

もしももしも横島さんが神魔族に認められるような大きな活躍をすれば、今の時代ではありえないが、人間から神になる事だって……不可能じゃ……。

「だから違くて!!」

そこまで考えた所で違う違うと思わず叫んだ、私が言いたいのはそのんなことじゃなくて……それは人の理に反する事で、横島さんを想っている蛍さんに悪くて……。

『でも人間だから早く死ぬでしよう？そしたらどうなるのかしら？』

「だ、誰?!」

今誰かの声が耳元で聞こえた気がした。思わず振り返り、辺りを見回すが誰の姿も無い。でも今の声はやけにはつきりと聞こえた、耳に触れる吐息の温度まで感じたほどだった。

「違う違う……」

確かに横島さんは好感の持てる人物だ。誠実で真面目で人を思いやれる優しい人で……。

「!」

ボツと顔が熱くなるのが判った。考えれば、考えるほどに横島さんに惹かれ始めている自分を自覚してしまった。

「違う、違います。私はそんなことを考えてない」

気を静めるために神剣を振るう。何百年も繰り返したこの動き、だが普段の動きと比べて精細がまるで無いのが判る。それは自分が迷っている。悩んでいるというのが明らかだった。

「彼は人間で、私は神族」

自分に言い聞かせるように呟きながら剣を振るう。人と神が結ばれることは許されない、寿命も価値観も違う、お互いに悲しい想いをするだけ。だから結ばれてはならないのだ。

「これは違います」

愛情なんかじゃない。これは、今私の胸を埋め尽くしているのは弟子が大きく成長しようとしていることを喜んでいただけだ。

「弟子の成長は師の喜びだから……」

自分を超えて大きく成長しようとしている。その片鱗を見せている横島さんが誇らしいだけで、愛情なんかじゃない。もし愛だとしてもそれは友愛で、決して恋愛感情のものなんかじゃない。

『それで自分の気持ちに蓋をするの?』

「!?」

また耳元に聞こえた声に振り返る。だが先ほどと同じく、やはり声の主の姿は見えない。

(幻聴?)

私の気の迷いが今の声の正体? 誰もいないのに、なんであんなにもあの声が聞こえるのか判らない。最初はもしかして清姫様かと思っただが声が違う……今の……今の声は……。

「わ、私の声……や、やっぱり幻聴ですよね」

今のは間違いなく私の声だった。声のトーンは少し違うが、発音などは間違いなく自分の声だった……だから幻聴だと思った。声として聞こえたのではなく、私がそう思っているのかもしれないと思ってしまった。

「違います、私はそんな事は考えていない」

横島さんと蛍さんが一緒にいるのを見て、微笑ましいと思ったのだ。それがねたましいなんて思った事は無いし、蛍さんの場所に自分が入りたいと思った事も無い……そう自分に言い聞かせるように剣



を振るうが、振る度に剣の動きは鈍く、精彩を欠いて行つた。

「……はあ……はあ……」

違うと言ひ聞かせる度に迷いが生まれるのが判る。これは禅を組んで気を静めるべきだと思ひ、私は剣を戻し修行場に足を向けるのだった。

【もうちよつと、堕ちてしまえばもつと楽になるのに】

勿論言うまでもなく、小竜姫を惑わしているのは未来の自分自身であり、己の心に蓋をした結果を知る自分の言葉だからこそ、それは深く小竜姫を悩ませる結果となつた……そしてそれは老師を喜ばせる結果にもなつた。

「来た来た来た！ 変われ変われ変われ!! はが!？」

「弟子を遊びの対象にするな!」

小竜姫の倍率が変わ動中から計算中に変つた事に興奮している老師の頭に、ロンの溜息と共に繰り出されたチョップが食い込むのはほぼ同時だった……。

く美神視点く

横島君の治療が終わると、シズクとおキヌちゃんによる昼食の準備が終わつたのはほぼ同時で、そのまま昼食なつた。そしてお昼からの修行は座禅だった。シロは座禅と聞いて露骨に嫌そうな顔をしたので、我関せずという顔をしていたタマモを見て、小竜姫様はにっこりと笑つた。

「じゃあ、シロさんは、タマモさんと組み手でもいいですよ?」

「え?」

嬉しそうなシロと嫌そうなタマモの声が対照的だった。でも小竜姫様は笑みを浮かべたまま、話を続ける。

「霊力をまともにコントロールできないとどうなるのか教えてあげてください」

「あーはいはい、判つたわよ」

不思議そうな顔をしているシロと、判つたと言う顔をするタマモ。

小竜姫様の言いたい事は霊力を駆使して、シロを翻弄し、霊力を感知する事の大事さを認識させろと言う事だろう。私達が言うよりも年齢が近く、そして同じ狼に属するタマモだから、その差をモ口に教えれると小竜姫様は考えたのだろう。

「あそここの道場を使ってくれて構いません。では美神さん達はこちらへ」

奥に見える道場を指差す小竜姫様に頷き、そっちに駆け出すシロとその後を面倒そうに付いていくタマモを見送り、私達も案内された道場に向かった。

「もつとこうえつと」

こじんまりとした道場で座禅を組むと聞いて、横島君がきよろきよろと周囲を見ながら、言つて良いのかな？と言う顔をし、小竜姫様は笑いながら、横島君が尋ねようとした事を当てて見せた。

「派手な修行を想像していましたか？でも違います。基本的に忠実な修行をするので、こういう地味な修行です」

横島君の問いかけに小竜姫様は笑いながら言う。基礎を決定的に鍛えて欲しいと言う頼みをしたが、まさか座禅を組まされるとは思つてなかった。

「ワシも？」

「ええ、貴女もですよ。ここは竜脈の中心、つまり霊力が満ちている場所になります。だからここで禅を組む事で霊力はより高いレベルで身体に吸収されます」

だから霊力の底上げになりますよと小竜姫は笑つて口にする、ノツブ達も座禅を組む。私も大きく深呼吸して、禅を組んだがすぐに顔が歪んだ。

(くっ、これは思っていたよりも……辛いわね)

意識を集中すれば判る。地面から噴出してくる圧倒的な霊力の波に意識が飲み込まれそうになる。牛若丸やノツブ達も苦しそうにしているし、蛭ちゃんも同様だ。

「……無理」

【心を静めて、霊力を受け入れろ】

「いや、無理。パン！ってパンツ！って破裂しそう」

横島君の無理って言う声と心眼の助言の声が響くが、横島君はやっぱ無理と呻いている。

(もしかして横島君。こういうの苦手?)

今まで表に出なかったが、横島君は身体を動かさない修行が苦手なのかもしれない。だが霊能者にとって霊力を感じ、それを受け入れる事は基礎中の基礎だ。

(今まで気付かなかった)

横島君は危機的な状況に入る度に新しい力や、新しい才能を開花させてきた。その輝かしい物の後で横島君の弱点は隠されていたのかもしれない……この2週間の間にそれを改善出来れば良いけど……私はそんなことを考えながら、吹き出てくる霊力を受け入れ、それを放出すると言う事を繰り返し、魂へと強い負荷を繰り返し掛けるのだった……。

「はい、今日はこれくらいにしましょうか」

30分ほどの座禅だったが、身体と魂に掛かった負荷は半端では無かった……小竜姫様の終わりの言葉が響いた時にそのまま崩れ落ちる。

【よこしまあ、眼魂……疲れたあ】

【わ、私もお願いしますう】

【……】

倒れて呻いているノツブ達の声と声も無く這って来る沖田ちゃんを見て、眼魂を取り出す横島君。その中に入っていく英霊組が少しずると思う、霊力の回復に適した場所とか、横島君に負担を掛けるけど武器にもなるとか、インチキも良い所だと思う。

「では後は身体を休めてくださいね。明日はもう少し時間を延ばしていきますから」

その言葉が私には死刑宣告のように聞こえたけど、わかりましたと返事を返す

「とりあえず、ここから出ましようか」

「はい」

「……うす」

この場所には何時までも霊力に当てられていて、調子を崩してしまう。だから出ましようと思いを掛け、ぐったりしている横島君と蛍ちゃんと共に瞑想場を後にする。小竜姫様はまだ禅を組むと言っていたが、やはり神族と言う事かと思った。

【はい、お水ですよー】

縁側で座っているとおキヌちゃんが水を運んできてくれたので、それを口にする。良く冷えた井戸水だからか、身体の火照りが一気に冷えていくのが判った。

「どうだった？横島君、蛍ちゃん」

座禅の感想を聞いてみる。私でも辛いと思った修行をどう感じたのか尋ねてみたかった。

「なんか、外から身体を開かれてるみたいなの、そんな感覚で気持ち悪かったです」

「俺はあれだな。風船みたいに外から空気を入れられて破裂するかもって思った」

2人の言っている事はあながち間違いでないか、霊力を意識し、それを外から取り入れる。それは自然に行っていることだが、ここまです力の密度と濃度が濃いと、身体に違和感を覚えるのも当然だ。そしてあそこで座禅を組む理由も判った。

（魂に強烈な過負荷を掛けて、霊力の保有量の向上ね）

霊力と言うのは基本的に持って生まれたものだ。だから横島君や冥子見たいに生まれつき霊力の多い人は優秀とされる、その点で言うと、実は私は差ほどでもない。確かに霊力は多いが潜在霊力として魂に眠っている物はそう多くなく、霊能者と活動する頃には既に自分の霊力を100%扱えていたからだ。だから潜在霊力の多いGSは伸び代が多いと注目される、無論その霊力が目覚めないのもそう珍しい事では無いが、目覚めれば爆発的に成長するというタイプだ。

（私は魂に負荷を掛けて、霊力のキャパを増やす。2人は外の霊力に触れさせて、それに感応させて眠っている霊力の開放ね）

外の圧倒的な霊力に触れさせて、魂の中に眠る力を引き出すための

瞑想だと判断する。

「うきゆうー！」

庭の方からモグラちゃんの気合に満ちた声が聞こえてくる。確かモグラちゃんもロンさんの元で竜気をコントロールしている修行をするって言ってたわね……竜の修行がどんなのか気になるので休憩がてら見てみようと思った。

「ちよつと見に行ってみましょうか」

「そうですね」

どんな修行をしているのか気になるし、シズクが面倒を見てくれるチビ達の様子を見に行こうと思う、奥の道場からは騒がしい声が響いてくる。

「なんで当たらないでござるか!?!」

「それは自分で考えてみたら? はい、はい」と

シロの困惑した声とタマモの気の抜けた声が聞こえてくる。どうもまだ組み手は続いているようなので、終わるまで余計な事を言わないように仕様と思った。シロには言葉で言うよりも、自分で体感したほうが良いと思ったからだ。

「どんな修行をしているのかな?」

「うーん、想像もつかないわね」

竜族の修行。どんな事をしているのかな? と話しながら庭へと向かう、しかしそこで待っていたのは私の想像を超える物だった……。

〈蛭視点〉

靈力に満ちた部屋での座禅を終えてモグラちゃんの修行を見に行っただけけど……そこで待ち構えていたのは想像もしてない光景だった。

「うきゆう……」

「なーんで角が伸びるかのう?」

「……不思議だな」

角が伸びてしよんぼりしているモグラちゃんと不思議そうに首を傾げる、シズクとロンさん。一体どうしてああ言う事になっているの

かと思わず首をかしげた。

「みむ♪」

「ぷぎゅー！」

横島が来たとき気付いてうりぼーとチビが横島にダツシユして甘えに入る。それを見て、モグラちゃんの角がしゆるしゆると短くなり、横島の元に走ろうとしたが、それはロンさんが尻尾を掴んだ事で止められた。

「今は修行の時間じゃ。横島殿も応援してくれるぞ」

「うきゅう……」

めちやくちや不満そうだ。特にチビとうりぼーが甘えているのを見て、不公平だと思っっているのは明らかだった。

「モグラちゃん。頑張れ！ここで見てるからな」

横島が縁側に座り、応援してくれるのを見ると、尻尾をピンと立ててうきゅうっと元気一杯という様子で鳴き声を上げる。その姿を見て、美神さんと苦笑しながら縁側に座る。おキヌさんは横島の頭の上に浮いてモグラちゃんを見つめている。

「ではもう1度じゃ、竜気を徐々に高めていくのじゃぞ？」

「……焦るなよ」

ロンさんとシズクの助言に頷き、モグラちゃんが身体を震わせる。徐々に竜気が高まっているのか、その毛が逆立ち、周囲の小石が浮かび上がる。

「な、なんか想像していたのと違うんですけど」

「俺もびっくりしてる」

モグラちゃんの毛が逆立ち、スパークしている。変身？変身するの!?と思わず思ってしまう。

「うきゅううううー！」

気合に満ちたモグラちゃんの声。それに合わせる様に竜気が光り輝き……。

「うきゅうー……」

光が晴れた時そこには角がみよーんっと伸びたモグラちゃんの姿があった……。

「鹿みたいで可愛いよ」

横島のフォローなのかよく判らない声が響く、モグラちゃんの角はしゅるしゅると短くなつて元のサイズに戻る。

「途中までは上手く行っているんじゃないかな」

「……なんで角に竜気が集束するんだろうな？」

どうも2人にも事情が良く判っていないようだが、角に竜気が行つては不味いと言う事は判った。

「みむうー！みみーむー！」

「ぶぎゅー！」

「うきゅ……」

落ち込んでいるモグラちゃんを励ましているチビとうりぼー。いつの間にか、うりぼーとも仲良くなつたようだ。

「修業上手く行つて無いんですか？」

「いや、順調すぎるほど順調じゃよ？ただ人化となるとこの有様じゃ」「うきゅ」

人化……そつか、モグラちゃんの修行つて人化の術だったんだ……それを今初めて知った。想像もしてなかった修行には少し驚いた、でも竜は人に化けれるし……良く考えれば当然の修行なのかもしれない。

「強さ的にはもう竜族から見ても最強クラスじゃよ」

……え？サラリととんでもないことを告げられた気がする。そして強さを見せてやろうというロンさん、あれよあれよと言う内に鬼門が連れて来られたんだけど……鬼門の顔が死んでいたのがやけに気になった。

「では鬼門対孫の戦いを始める。よいか？何時も通りじゃぞ？」

「うきゅうー！」

「……」

気合満点のモグラちゃんと遠い目をしている鬼門（右）。横島は大丈夫かなつと心配そうにし、チビ達は応援していると言う、なんかとんでもないことになっていた

「うーきゅーー！」

先手はモグラちゃん。気合満点の声と共に巨大化し、ぺちつと虫を潰すような気軽さで前足を振り下ろした。

「がつー！」

鬼門はそれを腕をクロスして受け止めるが、即座に後足の蹴りが命中し、鬼門の身体が宙に浮く……。なんか前に見た時よりも格段に攻撃力が上がっているんだけど……。

「うきゆきゆきゆきゆきゆッ！うつきゅー！！！」

「がぼおおおおおお!？」

残像が見えるような連続パンチが浮かび上がった鬼門に叩き込まれ、最後の大きな鳴き声と共に繰り出された右ストレートが鬼門を妙神山の外まで弾き飛ばした。

「……………」

私と横島と美神さんの沈黙が重なった。強いとかそういう次元じゃないと思うんだけど……鬼門、なんも出来て無かったんですけど……殆どサンドバックになっていたんだけど……。

「うむ、良いパンチじゃった」

「……竜としても素晴らしい成長具合だ」

うんうんと感心しているシズクとロンさん。いや、あれ強すぎると思うんだけど……竜に変化しなくてもあんなに強いとか本当にとんでもないと思う。

「では次じゃ」

「……はい」

震えながらやってきた鬼門を見て、物凄く怯えているのが良く判った。

「うーきゅー」

「いやああ！嫌だあ！もう実験台は嫌だああ！」

モグラちゃんが空気を吸って大きく膨らんだと所で鬼門が錯乱して叫びだす。一体何が起きるといふの？

【なにが起きるんでしょうか?】

「モグラちゃんビームかな?ほら、チビとうりぼーと一緒に」

横島がのほほんと言うが、ハムスターサイズのビームって考えたら



規格外の攻撃力ってことを良く考えて欲しい。

「……」

シズクが険しい顔つきで指を鳴らした瞬間。私達の周りに水の壁が現れた。

「え!?何!?シズク、無言でバリアとか怖いんだけど!？」

「大丈夫!?大丈夫なの!せめて説明して」

「美神さんも蛸も怖がり過ぎだって、シズクがやってくれるなら心配ないって」

突然の事に動揺する私と美神さんに対して、シズクだから大丈夫と言う全幅の信頼で笑みを浮かべる横島。私たちとの温度差が凄まじいと思った次の瞬間……大きく膨らんだモグラちゃんが口を開いた。

「うきゆうううう!!!」

「ぎゃーっ!!!」

モグラちゃんが凄まじい火炎を吐き出し、鬼門の絶叫が周囲に響き渡る。

「あちあちあちいいいい!!!」

火達磨になつて転げまわる鬼門を遠い目で見ながら、モグラちゃんは身体を震わせながら巨大化し、次の攻撃を繰り出した。

「うきゆうー!」

「……」

凄まじい冷気を伴った息を吐き出し、鬼門を氷像へと変えた……ドラゴンの攻撃と言えばブレスだけど、それをモグラの姿のまま放つたと言う事に一瞬思考が停止した。

「「え?」」

火炎からの氷結と言う恐ろしいコンボが炸裂し、氷像にモグラちゃんが爪を向けた。

「うきゆう」

ツンつと突くと氷像にひびが入り、顔を残して鬼門（左）は粉々に砕け散る。いや、これ強いとか言うレベルじゃないと思うんだけど……。

「と、こんな感じじゃな」



「だから嫌でもちゃんと修行しないからだぞ、明日からはちゃんと座禅もするんだぞ?。」

するでござるーと横島さんに抱きついて泣いている人狼シロ、横島さんはそんなシロを励ましながらも注意している。

【おおーやつと来たか!ワシの霊力の今の測定をしてくれ】

【よろしくお願いします!】

【霊力が戻れば、もっと強くなれますよね!?!】

英霊3人組に詰め寄られ、奥の部屋から料理を運んでくるシズクさんと小竜姫とおキヌさん……なんかちよつと見ない間にずいぶんと騒がしくなったのねと思ひ、思わず立ちすくんでしまった。

「あ、ヒヤクメ。来たんですね?とりあえず霊力の測定の前に、夕食にしましょう?。」

「あ、そうなのねー?ありがとー」

とりあえず普通に食事に招いてもらった事に感謝し、開いている場所に腰を卸すのだった(横島さんから1番遠い場所)

「はー疲れた、シロが何度も突っ込んでくるから疲れたわ」

「お疲れ」

夕食を終え、疲れた疲れたといっているタマモさんと、そんなタマモさんを睨んでうーつと唸っている。何があつたのか気になりはしたが、泥沼になりそうだし、それにまだ仕事も全部終わっている訳では無いので、横島さんと色々話をしたいが、そんな時間も無い。

(でも2日後にはおやすみなね〜)

2週間滞在するらしいので2日後にゆっくり遊びに来れば良いと思ひ、夕食を終えた後。本来の目的である、霊力の測定を始める。

「はーい、じゃあ〜英霊さんからこっちに来るのね〜♪」

愛用の鞆型のコンピュータから出した簡易の靈魂のレントゲン装置や、霊力測定器などを取り出して英霊組みから診察を済ませ、シロさん、タマモさん、螢さん、美神さんと検査し、最後に横島さんの額に測定器を付けて、横島さんの今の霊体の状態を記録する。

「はい、ちよつと失礼するのね〜♪」

横島さんのデータをコンピュータへと取り込むために、キーボー

ドを操作する。この場で確認も出来るけど、私は如何しても顔に出てしまうので、この場で検査せずにデータを取り込んで鞆を閉じる。

「ちよつと検査するのに時間が掛かるから2日後にまた来るね」  
気をつけてと手を振る横島さんに手を振り返し、私は名残惜しいものを感じながら、妙神山を後にして、そしてその場で検査しなかったことに戻ってから心底安堵した。

「え、え、う、嘘!?ど、どう言う事なのね!？」

横島さんの検査結果を出していて、私はパニックに陥った。私のコンピュータの出した結論を認める事が出来ず、また認めたくなくて……慌てて診察結果を手に部屋を飛び出した。

「りゅ、竜神王様!!」

私では対処しきれないし、胸の中に留めておくことも出来ない。私はプリントアウトされたカルテを取り、コンピュータの電源を切って竜神王様の元へと走った。

「こ、これ〜見て欲しいのね〜!」

「どうした、ヒヤクメ。そんなに慌てて」

警護の神族に緊急事態と叫んで、慌てて竜神王様に横島さんのカルテの結果を差し出す。

「これは……真か?」

「は、はいなのね」

口にははいけない、何処に耳があるのか判らないので、具体的な事は何も口にしない。私の意図を正確に汲み取ってくれた竜神王様は小さく頷いた。

「早急な話になる、お前の休暇を早めて、明日からとする。それと妙神山に赴く際に老師が破壊した宝物についての言及に私も向かおう」

「ありがとうございますのねー」

老師の暴れっぷりは皆知っているの、妙神山で何かを壊したと事に対する言及と言う事にして、竜神王様が妙神山に同行してくれる事に同意してくれた事に私は心の底から安堵した。カルテに出された横島さんの検査結果……それは人間の魂から変質し始めている予兆が出ていると言う事だったから……受け入れたくない現実が重く、私

の肩へと押し掛かっていた。

リポート23 妙神山 その5へ続く

## その5

レポート23 妙神山 その5

〜横島視点〜

「んあーあふう」

妙に暖かいなあと思いつつ、大きく欠伸をして、今何時かなと思いつつ、身体を動かそうと思つたと動けない。一瞬金縛りと思つたのだが、すぐに違うと判つた。

「すぷー……」

「ぴぎゅ……」

モグラちゃんとうりぼーが少し大きくなって、俺の布団の両脇にいたのが原因だった。ぴったりと俺の側に寄り添っているものだから、2匹の体の間で俺はどうやら寝返りがうてなかったようだ。日はうつすらと差し込んで、うっすらと少しで修行の間だと思つた。皆起きる時間までもう少し布団に入つていようと思つた。と言うか、出たく無いと思つた。山の中なのでやや寒いので、モグラちゃんとうりぼーの体温で寒くない。

（まあ良いか暖かいし）

昨日もちゃんとお風呂に一緒に入ったので、もふもふで柔らかくて、獣臭さも無い、ただ腕だけは引き抜きたいなと、頑張つて腕を動かして、右手、左手と引き抜き、モグラちゃんを抱き枕みたいにしてもう少し布団に籠もつていようと思つたのだが……。

（あれえ？）

なんか見つめられている気がする。シズクかな？と思つて、欠伸で歪んでいる視界を腕で拭き視界のほうに向ける。

「おはようございませす」

「ほわあ!？」

俺の視界に飛び込んできたのは白い着物と青い髪の少女……だが角があるので人間では無いのが判る。と言うか、清姫ちゃんだった。

「ぴっぴい」

「ふぎゅ」

俺の声に驚いたのか、うりぼーとモグラちゃんの奇妙な声を上げる。起こしかけたと思いビックリしながら、声を小さくして返事を返す。

「お、おはよう」

「はい、おはようございます」

満面の笑みを浮かべる清姫ちゃんだが、俺は多分引き攣った声で返事を返してしまったと思う。

「妙神山に遊びに来たら、横島様の気配を感じたので、そーつと」

「そ、そうなんだ」

シズクが清姫ちゃんの気配がするとか言ってたから、いると思ってたけど……朝起きて目の前にいるとビックリする。

「こちらに新しいお召し物をご用意しております」

「あ、ありがとうございます」

俺の鞆から出したと思われるシャツと靴下を見て、お礼を言うと、清姫ちゃんの視線が俺の顔よりも下を見ているのが判った。

「ずいぶんと雄雄しいようで」

頬を赤く染め、気恥ずかしそうに言う。その言葉を聞いて、清姫ちゃんの視線の先を見ると、そりやまああれだ、朝の生理現象って奴で……清姫ちゃんのやや熱っぽい視線に気付いた俺はもう殆ど反射的に布団を体に巻きつけて、身体を隠す。

「つきやーッ!!!」

自分でもこんな声が出たんだと思う声で思わず叫んでしまうのだった……。

く 沖田視点く

腹部に痛みを感じて、ゆっくりと目を開く、近くからんがーつと言う大きな鼾……私は溜息を吐きながら、上半身を起こした。予想通り、そこには布団を蹴飛ばしたノツブの姿があった。腹部に感じた痛みは寝返りを打ったノツブの足が勢い良く振り下ろされたのだと

判った。

【全く、寝相が悪いんですから!】

まだ全然眠れているはずの時間なのに!とは言えもう目は覚めてしまったので、布団から這い出す。

【すーすー】

【どうやったら空中で寝れるんですかね?】

おキヌさんは空中で自分の腕を枕にしている寝ていた。私、ノツブ、牛若丸さんは普通に食事が出来て、着替えも出来る。だけどおキヌさんみたいに空中に浮かんだりする事は出来ないし、ポルターガイストと言う事も出来ない。私達とおキヌさんの違いはなんだろう?と思いつながら寝巻きから、着物に着替える。正直2人が起きてくる前に起きたのは幸いだったかもしれない。前2人が起きてくる時に、胸にさらしを巻いていたら、嫌味ですか?と牛若丸に言われ、惱殺ボデイで横島を魅了でもする気か?と言われ、もうとんでもない喧嘩になったので、2人が起きる前にサツサとさらしを巻いてしまうことにした。

(しかし横島君は凄いですね)

前から才能はあると思っていた。教えた事を即座に理解し、そしてそれを発展させる。彼は紛れも無く天才と呼ばれる部類だと思っていた、だが昨日の小竜姫さんとの模擬戦で、その動きを完全に真似しているのを見て私は胸が躍った。

(才能を見るとこうなるんですかね)

自分よりも才能があると思った、そして彼がどんな成長し、どんな道を選ぶのか見て見たいと思った。映画の設定が魂を持ち、映霊となった私。英霊の2人よりも遥かに劣る霊格、そして映画の監督に与えられた呪いとも言える設定。私は自分が本物の「沖田総司」では無いことを知っている、だがこうして意志を持ち、自分の考えで動く事が出来る。確かに生身の幽霊では無いが、私は私だと言える。ちよつと最近横島君の溢れる父性にちよつと惹かれて、甘えたくなるのは判るが、仕方がない。

(年下だから、純粹に慕ってくれて、尊敬してくれて、それなのに包容



力もあるとか反則過ぎる)

年下属性でありながら、年上属性もあるとか、1人2役と言うか、もうとにかく美味しい。なお沖田の名誉の為に付け加えるが、この年下好きは沖田役の女優の性癖であり、沖田の生粋の物では無い。

【修行と言うので色気は無いですけど、一緒だから楽しいですよね】  
修行なので色気などまるで無いが、全体的にアットホームな雰囲気なので、修行もやりやすく、そして理想的な師がいるので私的に満足だ。

【これを機に横島君も剣を選んでもくれると良いんですけどねー♪】

横島君の才能は多才なのを知っているが、こちら辺で剣一本に決めてくれれば良いのに、小竜姫さんが剣の使い手で、慕っているのを知っているのだからこれを機に横島君が剣を選んでもくれると良いなーと思いつきやーッ!!】

【横島君!?!】

横島君の女の子みたいなきな悲鳴が聞こえ、何かあったのではと思いき横島君の部屋へと駆け込む。

「いえいえ、恥じることも無いですし、隠すことなんて無いのですよ? 雄雄しいのは良い事です」

「いやーっ! 布団を剥ぎ取ろうとしないでえ!」

何が起きているのか判らなかつた。横島君が白い着物の少女に襲われている(性的に)様にしか見えなかつた。横島君の大事にしている動物が布団を奪われないように奮闘しているが、少女の細腕とは信じられない力で引つ張られている。

「大丈夫ですよ、何もしいんですから、またその雄雄しい物を拝見出来るだけで」

「助けてえー!」

はあはあしている少女が危険人物なのは判った、目が血走ってるし、吐息が荒いし……恐怖しか感じない。

【今助けますからね!】

「その声は沖田ちゃん!?!」

あの悲鳴で絶対誰かが来ると思い、白い少女の背後に回り引つ張るのがだが……。

(いや、尋常じゃないんですけど!?)

まるで岩を持ち上げようとしているかのような重さが私の腕に来る。何この子!?横島君の知り合いなの!?いや、それにしても危険すぎるんだけど!?!もう少し交友関係は考えたほうが良いと思う。

「横島様あ♪」

(駄目だ、この子は危険だ)

声が完全に発情している。もう完全に横島君の雄雄しいもの(かもしれない)しか見えていない。何とか引き離そうとしていると、この騒ぎに気付いたのか、一気に寺が騒がしくなる。

「……清姫え!!」

「はっ!シズク!」

【今あ……あっ!?!】

廊下から聞こえてきたシズクさんの声に目の前の少女の力が緩んだので、腰を落としてその少女を持ち上げ用とした時に足を滑らせて、後に引つくり返る。

「うおう!?!」

「ぶぎゆう!?!」

「うきゆう!?!」

ちよつと気合が入りすぎて、自分ごと後に倒れてしまった。だけど横島君から少女を引き離すという目的自体は成功した。

【あいたた、大丈夫……】

でしたか?と続けようとして、私は思わず黙り込んでしまった。私が投げた少女が雄雄しい物と言っていた物が見えていた。パジャマの寝巻きからでも自己主張しているモノ……それに目が奪われた。

【お、大太刀……】

いやもう、ご立派とかそういうモノじゃない、見てしまったら羞恥心とかあるが、目が惹かれてしまう。

「何があったの……沖田ちゃん!?!」

「沖田さんが横島を襲った!?!」

【違います！違いますからね！？犯人はこの子で！】

目を回していた白い着物の少女を抱え上げるが、その前の私の行動を目撃されてしまっていた。

【いや、めっちゃガン見してたじゃろ】

【……変態か？】

布団に隠れて亀状態になっている横島君。確かに確かに思わず見つめてしまったのは認めるけども、そこまでガン見なんてしてない。

【違いますからね！？沖田さんは助け……コフツ！？】

最悪の場面でコフツてしまい。吐血で誤魔化そうとしているという空気になってしまい。一番最後に現れたシズクさんが漆黒の笑みを浮かべて、これは駄目だと悟った。

【……疑わしきは……罰する！】

【だから違うんですよー！！】

私の無実の叫びが早朝の妙神山に響き渡るのだった……。

く信長視点く

氷で出来た板の上に正座し、膝の上に重りを乗せられ首からは看板を下げた白い着物の少女。横島の話では清姫と言う竜族の姫らしいが……とんでもない問題児だったようじゃな。

『私は横島様を視姦しました』

と言う看板を下げ、冷たい重いと苦しんでいる姿を見るととてもお姫様には見えない。

【お前もああなるところだったんじゃな】

【私は無実です！】

沖田の奴も刑を執行されるところじゃったが着替えを終えた横島の証言により、罪は回避された。からかう様に言う顔と顔を赤くして怒る。

(ちなみにどんなモノじゃったんかの?)

姫と沖田が硬直するモノ。どれだけのモノじゃったと尋ねた瞬間

……頭に衝撃が走った。

【いてえ！】

「雑念は駄目ですよ？」

小竜姫に頭をバシンつと竹刀で叩かれた。むぐう……堅物め。とは言え修行は修行なので、今はそつちに集中する事にする。

「脇、足の動きが甘い。相手の動きを良く見るんじや」

「は、はい！」

服を着た猿。ワシでも知っている孫悟空と美神が組み手をしてい  
るんじやが、ありや完全に遊ばれてるの……。

(完全に見切ってる)

足の動き、手の動き、その全てを技が繰り出される前に見切つてい  
る。

「ほいっと」

「きやつ!？」

孫悟空が腕を掴んで、ほいっと言うのと美神の身体が面白いように宙  
に舞い。増えていたうりぼーの上に落ちる、投げ飛ばされるのでうり  
ぼーがクッションになっっているっていう光景は中々凄まじいもの  
じやな。

「お主も虫も筋は良し、じやが道具に頼りすぎじやな」

武器を失つても戦えるように、ある程度は鍛えておくべきじやなと  
2人に笑いかける。孫悟空は振り返り、横島に視線を向けた。

「横島。おぬしはどうじや？」

「あの、これ修行ですか？」

「うきゆう♪」

モグラちゃんが腕を振り下ろし、それを横島が受け止め受け流すと  
言う事を繰り返している。モグラちゃんは尻尾を振って大喜びじや  
から遊びにも思える。

(いや、良く受け止めれるの)

だが実際はモグラちゃん巨大化しているので、その質量もあるが、  
その身体から溢れている膨大な竜気。それは普通では受け止めきれ  
ない。

【そのの所どう思う?】

【ノーコメントです】

モグラちゃんの振り下ろしの直撃を受けて、ダウンした牛若丸は顔をぷいっと逸らす。初見であり、警戒していたモグラちゃんの会心の一撃だったと思う。

「だーかーらー! 回りの霊力を感じれば判るわよ!」

「だーかーらー! それはどうすればいいでござるか!」

タマモとシロは朝からあんな感じである。シロは剣術は有能じゃったが、それ以外はさっぱりでむしろ馬鹿だった。

「もう私じゃ面倒見切れないわよ! 馬鹿すぎる!」

タマモがうりぼーの上から下りた美神に駆け寄る。その顔は疲労で……。

【あいだあー!】

【ひぎい!】

「今は自分の事に集中しましょうね?」

バシイバシイツ! と2発の音が響く、ワシはともかく、沖田まで。薄目で沖田を見ると頬が桜色で絶対朝のモノを思い出していると確信した。後で絶対に問い詰めようと思う。

「うきゆきゆ!」

「よっ、ほっ!」

横島とモグラちゃんは前足と両腕と言う違いはあるが、リズムミカルにお互いの手を弾き続けている。

「霊力循環の修行じゃ。お前は霊力は感覚で使っておるからの、相手の力に合わせて自分の力を調整すれば弾ける。失敗すれば押し潰される、お主は口で説明するよりも身体を動かした方が判りやすからう」

孫悟空の説明になるほどなーと感心する。横島は考えるより、行動なので口で教えるよりもよっぼど判りやすいんじゃないやろうな。

「では美神殿と蛭殿にはワシが指導するかの」

がりがりと棒で何かの紋章を地面に描くロン。何をするんじゃないやろうな?と思わず視線がそつちに向いたのだが……。

「もう1発欲しいですか？」

【いません】

竹刀を手に当ててニコニコ笑う小竜姫。そう何度もバシバシ叩かれる趣味は無いので、浮かしかけた腰を戻す。

【……ふー】

生真面目な牛若丸はめちやくちや集中してるし、色事にも興味が無さそうじゃしなあ……とりあえず瞑想に集中するか。

「ワシがこの結界の中に竜気を満たすので、それと自分の霊力を混ぜ合わせ取り込むのじゃ。横島殿は瞑想とかは無理そうじゃから、正しこれは1人ずつじゃから、瞑想しない方はシロの面倒を見てやってくれるかの？」

「うきゅー！」

「どっ……いしよお」

ロンの説明と、モグラちゃんや横島の声を聞きながら、ワシと沖田と牛若丸は瞑想を続けるのじゃった……。

「横島様に見られてる……はあはあ……何か、新しい何かを……」

清姫が何か開いてはいけない扉を開きかけているのを誰も口にしえず、孫悟空が無言で衝立で清姫の姿を隠した。

【ノブノブー♪】

【皆さんご飯ですよー】

シズクの手伝いをしているチビノブとおキヌの呼びかけで午前中の修行は終わり、昼食の後は足捌きや攻撃の間合いの詰め方などの基本的な修行を繰り返しやるのだった……。

【それで実際の所、横島の戦闘力の程は？】

【……こ、これくらい……】

【なん……じゃと!?】

修行の疲れを取るための入浴の時間。沖田が指で示した横島の戦闘力を聞いて、驚愕するのだった……。

〈老師視点〉

モグラの膨大な竜気にも完全に対応し、霊力組み手を完全に成し遂げた横島に正直ワシは驚いた。お師匠様から、やり過ぎないようにと言われていたが、あの手紙を見ていて本当に良かったと思う。

(熱が入りすぎる所じゃな)

横島の才能が余りにもまぶしい、この才能をもっと引き伸ばしたいと思ってしまった。

「はい、良い感じですよ。大きく、踏み込むのではなくすり足を心掛けてください」

「は、はいッー！」

小竜姫が直々に横島に剣術を教えているのだが、小竜姫の顔はこれ以上に無いほどに輝いている。まあそれに対して、螢が面白くなさそうにしているので、今日はこれくらいにしておくべきじゃな。

「よし、小竜姫。今日はこれまで」

「はい、老師」

余り一気に詰め込んでも、横島が理解出来ないと言う理由で小竜姫と横島の訓練を終わらせる。

「さて、次の訓練じゃが……一度陰陽術を見せてもらおうかの」

空中に文字を刻んで使う陰陽術……正直前例がないことだ。今の横島の陰陽術の適正を見てみようと思いい、無地の札を渡して精霊を呼んでみるようにと促す。

「火精・水精・雷精・土精……風精はちよつと苦手です」

苦手と言いつつ、文字も刻まずに札を光らせ、浮かばせている。陰陽術の五行その全てに高い適正を持っているのは明らかだ……それなのに風が苦手と言う理由も判る。

「風が苦手と言うわけじゃないの、普通に使えればそれで御の字。お前が苦手と感じるのはそれに対応した、使い魔がおらんからじゃな」

火はタマモ

水はシズク

金はチビ

土はモグラとうりぼー

が対応しているから、強い力を発揮できる。だが、風……正しくは

「木」の属性がおらん事が扱いにくいと感じる理由と告げる。

「老師質問です！木ってどんな動物がいるんですか？」

「横島君ッ！」

「……すいません、やっぱり今のなしで……」

こいつ絶対妖怪を捕まえようとしていたな……そういえば、横島が来てから麓の妖怪が活性化していると聞かし……横島に拾ってもらおうと思って集まってきたのかも知れんな。

「普通の人間と考えれば素晴らしいレベルじゃから、そう気にすることもあるまい。さて、ではそろそろ本題に入るかの」

今日の午後の修行は霊力の循環とそれに伴う身体能力の強化の話だ。

「火・水・木・金・土の五行属性は陰陽術の基本属性じゃが、これも陰陽術に限った話ではない。その者に応じて得意な属性と言う物がある」

霊力は基本的には無色だが、その人物の性格や人生経験によっては別の性質に変化する事もある。

「今日はそれぞれに適している霊力の属性を診断するでしょう」

横島に渡したのと同じ無地の札を渡して霊力を込めるように促す、これによって美神達の霊力の性質を見極め、より実りのある霊力の性質変化を学ばせようと思ったのだ。

(さてさて、なにがでるかの)

キセルを吹かし、札を握り締めて唸っている美神達を見つめる。そう簡単に霊力の本質は表に出てこない、夕暮れまでに発現すれば上出来じゃなと思ひ、次の修行の内容を考えるのだった。

### く美神視点く

お風呂で汗を流し、縁側に座り涼を取る。少し田舎の宿と言う気がするが、ここはちゃんとした修行場だから、そこまで気を緩める事も



出来ない。現に、今日の修行の最後にやった霊力の性質も結果が出なかったので、余計にそう思う。

「どう蛭ちゃん。何か掴めそう?」

「うーん。何とも言えないですね」

修行と言うことで酒を断っている美神さんが井戸水の入ったコップを私に差し出してくれながら尋ねてくる。竜気と言うのは扱いが難しいが霊力を活性化させる事が出来るとの事。ロンさんの竜気で霊力が活性化している所まで判るんですけどねと呟いた。

「私もそれくらいね、横島君は竜気に慣れてるからかなり早く進んでいるみたいだけど」

竜神とすれば規格外のシズクと同居している横島は元より竜気には慣れている。その面では私達よりも先の段階に言っていると見える。

「でもまあそれ以外は駄目らしいけどね」

竜気に慣れていても、それは触れる、身体に取り入れるという段階でそれを使いこなす事が出来ない。ロンさんが何でここまで出来ているのに?と不思議そうにしていたのを思い出して、思わず笑ってしまう。

「ふーさっぱりしたでござるー」

「あれ?横島は?」

尻尾と耳がある分入浴時間の長いシロとタマモが首からタオルを提げて、広間にやってくる。

「まだお風呂じゃない?チビ達もお風呂に入れてるし」

横島はチビ達をお風呂で洗うので案外長風呂だからと言うが、妙に嫌な予感を感じていた……。

「なー?牛若丸見て無いか?」

【おかしいですね、浴衣も無いですし】

……ノツブと沖田さんの言葉に物凄く嫌な予感がした、いや、予感じゃなくて確信に近かった……そしてそれは的中した。

「横島さんですか?ちよつと散歩に行くと言うので、私が山菜を取りに行く清められている所をお教えしましたか?」

「最悪だ！」

山の中とかで横島を自由にさせてはいけない。それが私達の共通の認識だったのに！油断していた。

「大丈夫ですよ。私が世話をしているので、妖怪とか近づけませんから」

小竜姫様の言葉に少しだけ安堵するが、妖怪とかは近づけないんであって、妖怪以外ならどうなのだろう？と言う不安が脳裏を過ぎる。

「ちよつとモグラちゃんとうりぼーと散歩するだけって言っていましたから大丈夫ですよ。それに牛若丸さんも着いてますから」

それなら大丈夫かな？と思ったのも束の間

「それよりもちよつと手伝って欲しいんですよ。シズクさんと清姫様が厨房で喧嘩をしまして、仲裁を是非手伝ってくれませんか？」

……なんか凄い面倒ごとに巻き込まれそうな気がする、横島が散歩に出たのは危機回避だったかもしれない。

「……洋食」

「和食ですう！」

【喧嘩するの止めましょうよお】

厨房では炎と氷柱が飛び交い、火柱や氷柱があちこちに出ていて、キツチンの面影が何処にも無い。

「【ごめん。無理】」

あれを仲裁に入るのは自殺行為だと思い。回れ右をして小竜姫様に背を向けて、広間へと全力ダッシュをするのだった……。

一方その頃。横島はと言うと……

「クーン……クーン……」

「なんだろ？あれ？木登りして下りれなくなったのかな？」

割と高い木の枝にしがみ付いて弱々しく泣いている茶色いもこもこの生き物を発見していた……。

## その6

リポート23 妙神山 その6

〜横島視点〜

小竜姫様が山菜を取りに行くと言っていたので、モグラちゃんとチビとうりぼーが散歩したがっていると言う事もあるので、俺が行きますと云って、牛若丸を護衛にして、チビノブも交えて俺達は寝泊りしている修行場の裏手から山の中に入った。

「みっみーむう♪」

「うつきゅつきゅー♪」

「ぴっぐぴぎー♪」

【ノブノブ♪】

散歩が大好きなチビ達の楽しそうな鳴き声を聞きながら、出発前に小竜姫様から渡された紙を覗き込む。

「ここに書いてある野草を探して欲しいって」

【お任せください！山菜取りも茸取りも昔、沢山やりましたので！】

弾ける笑顔の山育ちの牛若丸。ズボンとシャツ、それとジャケツト姿で男装に近いが、あんまり女の子って感じのは嫌がつての選択だが、モデル体形なので、勇ましいと言うよりかは綺麗と言う印象が強い。

「よーし！散歩しながら一杯野草を見つけろぞー」

俺の声に元気良く返事を返すチビ達。楽しいなあと思いつながら俺は山の中を歩き始める、手にした紙と野草を見比べる。

「駄目だ。判らん」

【落ち着いて、良く見ろ。お前なら判る筈だ】

心眼にこれも修行だと言われ、うーんつと唸りながら野草と睨めっこする。

【それぞれそれ！】

ぼいぼいぼいっと籠の中に野草をシユートしていく牛若丸。これが経験の差かあとと思いつながらジーっと見つめる。

「これか？」

【ヨモギだ。それで合っている】

心眼の言葉にホツとし、自分の籠に入れる前に一度チビ達に見せる事にした。

「これ、これを見つげるんだ。判った？」

「みつみ」

「ぴぎゆうー！」

「うつきゆうー！」

【ノブノブ!!】

ヨモギを見せると、手にとって見たり、匂いを嗅いだりして、各々の方法でヨモギを認識したのか、勇ましく鳴いて散っていく。

「見つけれぬのかな？」

【動物の勘は凄いぞ？】

チビ達が見つけれぬかなと不安に思っていたが、心眼の言葉にそれなら大丈夫かと眩き、俺は牛若丸と一緒に野草を探し始める。

【主殿。茸を見つげましたよ！】

見た感じ禍々しい茸を笑顔で掲げる牛若丸にそれ大丈夫？と尋ねる。

【はい！見た目はあれですが美味しい茸です！】

昔も食べましたと言うので大丈夫かと思ひ、それを籠に入れる。

「みみーむー！」

「うつきゆうー！」

【ノブー♪】

チビ達もヨモギを見つけ、どんどん拾ってくる。しかしあんまり同じ種類でも困るので、本来の目的の散歩を再開する事にする。

「じゃあ、そろそろ散歩を続けようか」

散歩がメインなので、うりぼーを見つけたら散歩に戻ろうかと声を掛ける。

「うりぼー、うりぼー？おーい？どこだー？」

一匹だけ中々戻ってこないうりぼーの名を呼びながら山道を歩いていると、ぶぎゆうー！と言う呼び声がしたのでそっちの方に向かうと

うりぼーが木の下に頭を突っ込んで、お尻を振っていた。

「みむう？」

「うきゅ？」

「ノブウ？」

何してるの？と言う感じでチビ達がうりぼーに駆け寄る。俺も何をしているのかな？と思い近寄ると、うりぼーが一生懸命地面を掘り返す。

「ぶっぎゅー！」

えっへんと言う感じで俺の方を見る。そこにはやや太めの茸が顔を出していた。

「なにそれ？」

【横島、それは松茸だ】

呆れたような心眼の言葉にマジ!?と返事を返す。松茸なんて初めて見たぜ……。

【そんな茸が嬉しいのですか？主殿。それならこの牛若丸も見つかりますよ！】

「ぶぎゅー!!」

自分の方が見つけれとうりぼーが大きく鳴く。俺は籠を背負いなおす。

「楽しく散歩をしてるんだから、見つけれたらで良いよ、な？」

散歩に来たのであって、喧嘩しに来たんじゃ無いんだからと言うと牛若丸はしよぼんつと頭を下げた。

【私はただ褒めて欲しくて】

「ぴーぎゅー」

褒めて欲しかっただけという牛若丸と、それに同意するように鳴くうりぼー。俺は牛若丸の頭を撫でてから、うりぼーの頭を撫でる。

「皆凄いつて、俺なんか全然見つけて無いんだから」

籠に一杯の野草と茸は牛若丸達が頑張ってくれたんだからと言って笑い、喧嘩なんかしないでのんびり散歩しようと言ってやっと散歩が再開されたのだった……。

「ぶぎゅー」

「みみーむうー♪」

「うきゅーん♪」

【のーぶー♪】

【イヒツヒー】

開けた場所があつたので、そこで荷物を降ろして、ボールで遊ぶ。人気の無い静かな森の中にチビ達の楽しそうな声が響き渡る。

「うきゅー♪」

「よしよし、偉い偉い」

ボールを啜えて戻ってきたモグラちゃんの頭を撫でて、ボールを受け取った時。

「ん？なあ、牛若丸。何か聞こえないか？」

【……はい、聞こえます】

とても弱々しい泣き声が聞こえた、牛若丸も聞こえますと言うので、ボールをポケットの中にしまい。俺達はその声の主を探し始めた。

「あーあれかあ」

声の主は案外すぐ見つかった。やや大きめの樹の枝にしがみ付く様にして鳴いている茶色いもこもこ……猿じゃないな

「心眼。あれは何かな？」

【良く判らないな。普通の動物では無いと思うが】

普通の動物じゃないって事はチビ達の仲間か……どっちにせよ。あんな上で鳴いているのを見て、ほっておくわけにも行かない。

【主殿。私が行きましようか？】

「ありがと、でも大丈夫。うりぼー、ちよつと増えて大きくなってくれる？」

俺の言葉に頷きうりぼーが増えたことを確認してから、籠を下ろすと牛若丸が心配そうに言う。

【私が行きますよ？主殿は下で待っていてくれても大丈夫です】

「だから良いって、折角買ったばかりなんだから、大事にした方が良いって」

妙神山に来るのに動きやすい服と言って買ったんだからと言って、

木の枝に手を掛けて上へと登る。

「く、くー……」

「よーし、おいでおいで」

木の枝にしがみ付いていた茶色いもこもこは額に宝石みたいなのがある小熊だった。ぷるぷる震えながら寄つてきた熊を脇に抱えると、みかけよりも大分軽い。それこそ、チビとか、うりぼーくらいに軽さだ。これなら落ちることは無いなと思い、ゆっくりと樹から下りて、小熊を地面に降ろす。

「くーん！くーん♪」

地面の上に足が着くと嬉しそうに鳴きながら擦り寄ってくる。額と胸に宝石みたいな輝きがあるのが良く判る。

「みむうー！」

「くー！」

「うきゅー！」

「くっくーん！！」

「ぶぎー」

「く、くう？」

「ノブー？」

「……？」

チビ達ときやつきやとはしゃいでいる姿を見ると、牛若丸が小声でどうします？と尋ねてくるので、チビ達と遊んでいる熊に視線を向ける。

「くう？」

俺の視線に気付いたのか、きよんとした表情でこつちを見る小熊。人懐っこいし、胸の宝石見たいのは装飾品っぽく見えるから、もしかすると誰かのペットかもしれないという考えが頭を過ぎる。

「もしかしたら小竜姫様のペットかも知れないから連れて帰ろうと思うんだけどどう？」

【ま、まあその可能性はあるな】

人を怖がらないし、人懐っこいし、それにここは小竜姫様が山菜を取りに来る場所と聞いていたので、もしかしたら小竜姫様のペットか

もしれないと思ひ。俺はその小熊を抱き抱え、来た道を引き返す事にした。

「小竜姫様のペットだと思つて連れて来たんですけど」

「その大変愛らしいですけども、私のペットでは無いのですが」

小熊を見て、即答で違いますと言われ、俺は胸に抱えた小熊を庭に放す。

「くー!」

「みむうー!」

「うきゆきゆー♪」

「ぴぎゆう!」

「ノーブー」

きやつきやつと庭ではしやぎまわるチビ達を見て、俺はにっこりと笑いながら美神さん達に助けを求めぬ。

「どうすれば良いですか?」

「だから拾つてくるなつていつも言つてるでしょうが!!」

蛍と美神さんの怒声に俺はすみませーんつと慌てて頭を下げるのだった。

【松茸を取つてきたんですよ】

【マジで!?今日の晩飯はご馳走じゃな!】

【ほんとですねー、あ、早く厨房に持つて行きましょう!】

謝つてゐる俺をガン無視して、厨房に野草とかを運んでいくノツブちゃん達。

「せんせー、拙者も散歩行きかけたでござるよー」

「なんで誘わないわけ?」

風呂に入つていたので誘わなかつたシロとタマモの責める様な視線といじけた声に俺は更にごめんと深く頭を下げるのだった……。

夕食の前に順番で風呂に入る事になり、横島がモグラちゃん達とお風呂に入つてゐる頃、意を決した表情で部屋を抜け出る人影があつた。

横島の横島のサイズを聞いた、ノツブが実際どんなものかと見に行こう抜き足で歩き出した時。



【やはり覗きですか、私も同行しましょう】

【沖田院。やっぱりムツツリか】

【べ、別に良いじゃないですか、それはそれ、これはこれです】

頬を赤らめ、風呂場に向かおうとした2人だが、その足はほんの数歩で止まった。

「何をするおつもりでしたか？」

【「逃げるんだよおおおおツツ!!」】

【「逃がしませんツ!!」】

鬼の表情をしている小竜姫に追い回され、神剣で2人が峰打ちを喰らった時。

「今何か変な声しなかったかな？」

「みむう？」

チビ達と温泉に入っていた横島は、競い合うように泳いでいるモグラちゃんとうりぼーを見つめながら、ペット用シャンプーでチビを洗っているのだった……。

く美神視点く

横島君を自由にさせた結果。また訳の判らないのを捕まえて来た。本人が言うには小竜姫様のペットと思っただけらしい、私も縁側に腰掛けて様子を見てみると、向こうから擦り寄ってきた。

「くー?」

足元によって来て甘えるように鳴く。確かにこれだけ人懐っこい姿を見ると誰かのペットかもしれないと思う。

「この額と胸のも理由ですかね」

「多分ね」

額には翡翠色の宝石、胸にも同じく翡翠色の宝石。しかも金の縁取り見たいのがあるので、確かに見ようによっては装飾品を見に付けているようにも見える。

【美神さーん、蛍ちゃん。横島さんが一杯松茸を拾って来たので、今日は松茸ご飯と土瓶蒸しとかにしますねー】

壁からひよこつと顔を出したおキヌちゃんが笑いながら言う。精進料理中心なので、松茸とかが食べられるのはまあ良いかと思う。

「とりあえず松茸で今回ののは許すとしましようか」

別に名前をつけている訳でもない、小竜姫様のペットと思って拾って来たらしいので、そのまま野生に返しても大丈夫だろう。

「美神さん、蛍さん。今のうちに1つ伝えておきたいことがあるのですが……」

小竜姫様が真剣な顔をして、私達の側に座る。その表情を見て、ただ事では無いと思ひ私も蛍ちゃんも姿勢を正す。

「今日の夜ヒヤクメと竜神王様が妙神山に参られます」

竜神王……確か天竜姫の父親で竜族の長だったわね。そんな神族が妙神山に……考えられるのは1つしかない。

「横島に何か？」

ヒヤクメがしてくれたと言う私達の検査結果。それに何か問題があったのだろうか。

「私もそこまでは流石に判りませんが、老師を交えて、美神さんも話し合いの場に参加して貰うこととなります」

思い当たる節がある事と言えば、1つしか無い。マタドールが言っていた横島君が魔人に近づいていると言う言葉……それが確定になったと言う事なのだろう。

「私は聞かない方が良いと言うことですか？」

「……一応と言う事ですよ。それに美神さんと蛍さんがいなければ流石に横島さんも不信に思う筈なので、後で美神さんに聞いてください。話すかどうかは美神さんにお任せしますので」

お出迎えの準備があるのでと言って席を立った小竜姫様を見送り、庭を駆け回っている小熊を見る。

「最近ちよつと色々ありすぎてゐるわね」

「……本当ですね」

色々な出来事が起きているが、そのどれもが横島君を中心にしている。横島君には平安時代の陰陽師の転生者と言う可能性があるが……。

(それ以外に何かあるのかしら)

私達が知らない何かがあるのかしら、そして今夜の小竜姫様と孫悟空老師、そして竜神王との話し合い……蛍ちゃんに話しても問題の無い話だと良いんだけどと思っていると、横島君がお風呂から出て来た。

「はい、順番なー。チビからおいでー」

「みむう♪」

ドライヤーとブラシを手にチビから順番にドライヤーを掛けて、ブラシをする横島君。その姿は余りにも何時も通りで、おかしいところなんて微塵も無くて、魔人になりかけているなんて嘘としか思えなかった。

「せんせー、拙者もお願いするでござるよ」

「じゃ、私も」

【主殿。申し訳ないですが、私もよろしくお願いします】

……姿が見えないなあと思っていたら、またお風呂に入ってたタマモとシロもチビ達の列に並び、それから数分後。

「どうも貴女達には説教だけでは足りないようですね!!」

【ちよつとした出来心で……】

頭にたんこぶをつけたノツブと沖田ちゃんが小竜姫様に引きずられて見ているのを見て、私と蛍ちゃんは揃って深く溜息を吐き。

「じゃーん♪ツインテール!」

「おおー!せんせーありがとうでござるー♪」

手先の器用さを存分に発揮し、シロの髪型をツインテールにし、今度はタマモの髪にクシを通しながらどんな感じに整えるかを尋ねる。

「どんな感じにする?」

「何時も通りでいいわよ」

了解と笑い、鼻歌交じりでタマモの髪を整えている横島君の姿になんか保護者と言う立場が板についてきたように思う。

(毎回思うんですけど横島の天職って保父さんとか、ブリーダーかもしれないですよ)

蛍ちゃんが小声でそう呟く、GSなんていうあこぎな職業でなけれ

ば、横島君の天職は確かにそっちの方だと思う。

「あ、清姫ちゃん。悪いんだけど、チビ達に水を出してくれるかな？お風呂に入ってたから」

「はい、判りました。すぐにご用意しますね」

うん、ありがとーと笑い。タマモの髪を何時ものナインテールに整えていく。その手並みは何時も通りというタマモの言うとおりに言うのが良く判るなあと思ひ。

「はい、どうぞ。お待たせしました

「みむー」

「びぐ」

「うきゅーん」

【ノツブウー♪】

ドライヤーと櫛で毛玉みたいになっているチビ達が美味しそうに水を飲む中。

「失礼するのね〜」

「夕食時にすまん。失礼する」

「よこしまー久しぶりです」

予定よりも早く来てしまいましたと言って、小竜姫様が青い顔で走ってくる。恐らく、横島君のお風呂を覗こうとしていた、馬鹿英霊2匹の制裁をしていたのだろうけど、なんとも間の悪いタイミグで竜神王とヒヤクメに加え、天竜姫までもが妙神山を訪れた。横島君はタマモの髪を丁度梳き終えた所で、一瞬驚いた顔をした後。

「初めまして、横島です」

状況を理解していない表情のまま、竜神王にぺこりと頭を下げ、私達もそれに続くように頭を下げ、自己紹介をするのだった……。

〜龍神王視点〜

くつくつくつくと小気味良い音を立てて、小さな鍋が煮られる。中は厚くスライスされた松茸と山菜だ、他には山菜の天ぷらや、妙神山にしては珍しい魚などの姿もある。

「横島様あ！この土瓶蒸しは私が作ったのですよ」

「へーそうなんだ、清姫ちゃんは料理が上手なんだなあ」

横島の言葉に嬉しそうに身を振る清姫。仮にも先代様の孫娘と言  
う立ち位置にありながらと思うと、頭痛をどうしても覚えずにはいら  
れない

「心を御すなど事は出来んよ。まあ、飲め」

老師がそう笑い、徳利を差し出してくるので猪口を差し出す。横島  
の事について話し合う予定が、天竜も来ると言うので、夕方に到着し、  
そのまま夕食にご相伴となった。

「そろそろ食べれるかな？」

「……待て、もう少しだ」

松茸の傘は汁が溜まってそれが美味いんだと言って、横島の側で小  
さな七輪を覗き込んでいるシズク。

（いや、直に見ると驚くな）

シズクも清姫も横島に想いを寄せているとは聞いていた。正直話  
半分だったが、こうしてみると本当のことなんだなと思う。

「もう少し時間が掛かるのか、じゃあチビー、おいでー」

「みむう♪」

膝の上に乗ったグレムリンに林檎を与える横島。グレムリンは口  
を押さえて、尻尾と羽根を動かして非常に嬉しそうだ。

（あれは本当にグレムリンか？）

感じる力の波動がとてグレムリンとは思えない。それにロン老  
師の孫も横島の膝の上に登り始める。

「うきゅー」

「はいはい、はいあーん」

「うきゅーん♪」

横島に甘えまくりだ。しかもそれだけではなく、莫大な神通力を宿  
している猪に、小さな人型の精霊も横島の側に集まっていく。人外に  
好かれる性質と聞いていたが、予想よりも凄まじい力だ。

「小竜姫が松茸を用意するなんて驚きなのね〜」

「私が用意したんじゃないですよ？横島さんが採って来てくれたので

す」

私に来るから用意したと思っていたのだが、まさか横島が探つて来たとは……滅多に見ない、非常に大振りな松茸だからずいぶんと奮発したと思っていたのだが……そして横島は横島で自分に視線が向けられている事に気付いたのか、首を左右に振った。

「俺じゃないですよ？うりぼーと牛若丸が見つ付けてくれたんだよ」

「ぶぎゆう♪」

【頑張りました】

……仮にも英霊と神獣が何をしているんだと頭痛を覚えたが、まあそれはいいだろう。本人達が納得しているのなら、私から言う事は何も無い。

【あー松茸ご飯うめーツ！これなら明日も採りに行こうと思うんじやが】

【ですねー、松茸入りの茶碗蒸しなんて贅沢の極みですよね】

【私も美味しいですよ〜】

英霊も普通にパクパク食べてるし……いや、それが悪いという訳では無い。英霊は食べた物を霊力に変換出来る、霊力などを回復させる術としては決して間違いでは無いのだが……後、約1名。松茸ご飯に箸を指してお供え物として味を実感している幽霊が普通なのだが、この状況では浮いて見えるから不思議だ。

「美味しいんだけどねえ、肉食べたいわ」

「拙者もでござるよお……」

あれは九尾と人狼……か？なんでこんなにも人外で溢れているのだろうか。

「お肉ですか、一応ここは修行場なので肉は少し難しいですねえ」

「いやいや、待て。小竜姫、自給自足なら良からう。1週間に1度、2度くらい肉も食べたからう。自分で捕りに行くのなら構わぬのではないか？これも修行だ」

ロン老師の言葉に九尾と人狼の目に怪しい光が灯る。それを見て慌てて小竜姫が口を開いた。

「無闇な殺生は駄目ですからね！1人1匹ずつ！それ以上は駄目で

す」

九尾と人狼は狩りに特化した一族だからな。2人で1匹ずつ、これが妥協点だろうなと思いなながら土瓶蒸しに箸を伸ばす。良い味だな……

「ずいぶん無口だけど、蛸も美神さんもどうかした？もしかしてまだ小熊を拾ってきたの怒ってる？」

横島が不安そうに2人に問いかける。と言うか庭にいたあの精霊……横島が拾って来たのか……なんでこんな所にと思っていた。

「え、ううん。美味しいわよ！これだけ松茸尽くして言うのは贅沢だなあってね」

「東京じゃあこんなの食べれないからね、味わってただけよ」

2人の言葉に横島はそうですか？と首を傾げながら頷く、その仕草から納得していないのは明らかで、2人が食事に集中できていない理由も判っている。恐らく、あの2人は聞いているのだろう。私が妙神山に訪れた理由が横島にあると言うことを……。

(最高指導者、そしてルイ様が目を掛ける理由もこうして直接見に来て判ったしな……)

なんとも不思議な人間だ。人当たりがよく、そして明るい。ムードメーカーと言う奴だな。

「よこしま、あの小熊はよこしまのですか？」

「小竜姫様のペットかなって拾ってきたんだけど、違うみたいで、どうしようかなって考え中」

夕食後。天竜が横島にそう尋ねる、何か嫌な予感がした。

(この感じ、イームとヤームの時に似ている)

駄目だと言っても意見を曲げず、最終的に私が折れたあの時と同じだ。

「天竜「あの小熊、私が飼います」え？そう？じゃあ、小熊が着いていくって言ったら連れて行って良いよ？」

私が止めに入る間もなく、横島と天竜姫の間で話が決まり。天竜は草鞋をはいて庭に出ると

「私の所に着ませんか？小熊さん？」

「く？」

ふんふんつと天竜の匂いを嗅いでいた小熊は納得したのかくうつと元氣良く返事を返す。天竜は小熊を抱きしめた。

「父上。お屋敷に帰ったらクマゴローの小屋を作って欲しいのです」

……天竜は非常に優秀だが、その何とも言えない微妙なネーミングセンスはイームとヤームと名付けられた2人の竜族でよく判つて……。

「あ、俺もクマゴローが良いと思つてた」

嘘だらろ!? つて視線が横島に向けられる。だが横島はそれに気付かずにごやかに笑い、九尾は汗も出てないのに汗を拭うそぶりをする。

「私自分で名乗つてて良かったって今心底思うわ」

「そうでござるな」

もしかしたら自分も変な名前になつていたかも知れない。その現実を知ったタマモが暗い顔で呟き、シロという人狼に慰められていた。

「そうですよね! 可愛いですよ。クマゴロー」

うん可愛い可愛いと笑う横島と味方を得たといわんばかりに笑う天竜。まさか天竜と似たネーミングセンスを持つ者がいるとは……想像もしなかった……。

「くうっ！」

「みむう！」

「うきゅーん♪」

「ぶぐー！」

【ノブノブ！】

小動物軍団に加わりくーくー鳴いている小熊。それはどう見ても自分の名前はクマゴローと自己紹介しているようにしか見えぬ。

「……そうか。大切に世話をするのだぞ？」

はいつと弾ける笑顔の天竜に私は深く深く溜息を吐いた。そしてその時美神と目が合った、そしてそれと同時に理解した。

(ああ、同類だ)

言う事を聞かない娘と、部下と言う差こそあるが、天竜と横島の



やっている事は殆ど同じで私は美神に強烈なシンパシーを抱くのだった……だがシンパシーを得たからと言って、それで終わりにすることは出来ない。今日やってきた事、夕食の後の話し合いが本番なのだから……。

一方その頃。東京では……

「それでダンタリアン、ずいぶんとだんまりだがゴモリーについてきただけじゃないだろう?」

ダンタリアンは私の拠点の地下の図書館に籠もりきりだ。私と同じ過去・現在・未来に関係する権限を持つ魔神として、それなりに仲良くして来たつもりだ。ただその差異は本による物と、能力と言う差はあるが、基本的には同じ能力と言っても良い。

「まあ私がゴモリーには甘い」

「それはよーつく知ってるよ」

老若問わず女性の愛を得る方法を知ると言うゴモリーは、その知識からか、どんな相手にも好かれる方法を知っている。同じソロモンはそれを知っているからゴモリーのあの我侷な性格から距離を取っていたのに、ダンタリアンだけはゴモリーと共にいた。

「だから枢と言う人間に会いたいと言うので共に人間界に来た」

「表向きはだろ?」

私の問いかけにダンタリアンはやっと読んでいた本を閉じ、ワイングラスを机の上に置いた。

「ビュレトを連れて来い、話はそこからだ」

ビュレトも同じビルにいたので念話で着てくれと言うとビュレトは不機嫌そうに、地下の図書館に現れた。

「相変わらず不愉快な面だ」

「そうかい、私もお前が嫌いだよ。感情をあらわにするなど、愚の骨頂。感情とは理性で制される物だ」

「ストップ!ストップ!ここで喧嘩してくれないでくれるか!」

ビュレトとダンタリアンの相性はゴモリーとは間逆で最悪だ。ビュレトはダンタリアンを嫌い、そしてダンタリアンもビュレトを嫌

う

「まあ良からう、ビュレト、アシユタロス。私が人間界に来た理由……それは1つだ、私の現在と未来を見る能力でも先が見えない。だからそれを見届けに来た」

ダンタリアンから告げられた言葉。それは余りに不吉で、そして最悪の結果を予想させる言葉だった。

「東京で何か起きるのか？」

私は能力に制限が掛かっているので、予知は出来ない。だからダンタリアンにもつと詳しくと尋ねるが、首を左右に振り、何時も彼が小脇に抱えている本が開かれた。

「それは……」

「見ての通りだ。私の予知は今使えない」

ダンタリアンの差し出した本は虫食いに加え、闇色に染まり何かなんだか判らない状態だった。

「ビュレトは自由に魔界を行き来できる。だから後はどうするかは前とアシユタロスに任せる」

そう言うのと本を開き、まただんまりとなる。こうなるとダンタリアンは何をしても口を開かない。

「俺はオーデインの所に行く」

「……気をつけてな」

ガープの事だ。人間界から魔界に行く通路は全て監視しているだろう、教われる可能性を考慮してくれと言って、ビュレトを送り出し。私も自分で出来る限りの最善の一手を打つ為に、動き出すのだった……ダンタリアンでさえも見通すことが出来ない未来。ガープがどんな一手を打って来ても対応出来るように準備を万全とするために……。

## その7

レポート23 妙神山 その7

〜美神視点〜

夕食の後、小竜姫様、竜神王、そして老師の3人と私で横島君についての話し合いを始めた。ヒヤクメもいると思っていたんだけど……その姿が無い事に、少し違和感を覚えた。

「ヒヤクメは本当なら休暇ですから、でも詳しい話は聞いているので大丈夫ですよ」

私の怪訝そうな顔を見たからか、小竜姫様がそう付け加える。休暇……か、嘘だと思つてたけど、本当に休暇だったみたいね。

「それじゃあ、今回はよろしくお願いします」

神族……しかも竜族のトップが直々に動いてくれているのだ。これはただ事では無いと思ひ、姿勢を正し頭を下げる

「そう緊張しなくてもいい、神魔が思うように動けず、人間達に迷惑を掛けている事は私達の不甲斐なさだ。神魔大戦の折りの敗戦者と侮っていた神魔全体の落ち度でもある」

敗戦者……か。確かに1度負けて敗走した相手がこれほどまでの力を付けて戻ってくるなんて普通は思わないわよね。

「それもあるが、神魔同士の利権の争いなどが邪魔をして、思うように動けぬと言うのもあるからの」

「……厄介な連中ですからね。反デタント派は……」

神魔だからそんな事は無いと思つていたけど、どうも神魔のほうも人間みたいな政治的なやりとりがあるのね……話には聞いていたけど、ここまで酷いとは思つてなかった。

「それよりもだ。大事なのは横島の状態だ」

ヒヤクメから預かっていると竜神王が言いながら、鞆から何かの書類を取り出して、私達に手渡ししてくる。まさか、竜神王から手渡しされるなんて思つてなかったの、内心驚きながらそれを受け取る。

「見終れば廃棄する。内容は出来る限り各自で覚えてくれ」

その言葉に頷き渡された書類を捲る……一番最初のページはカルテだった。

(こっちは方は大丈夫みたいね)

マタドールとの戦いでのレストランドラゴン。その後遺症で横島君が味覚や痛覚などを失ったが、それに対する副作用などは無いようだ。それを見て小さく安堵したのだが、次の書類を見て、その安堵は一瞬で消し飛んだ。

(……え？な、なにこれ……!?)

それは前にヒヤクメが来てくれた時の私達の検査結果。私や蛍ちゃん、それにノツブ達は大した変化も無い、強いていけば筋力が上がっているとか、霊力が上昇しているとか、そんな感じだ。と言っても私の場合は誤差の範囲と言えらるだろう、蛍ちゃんは成長期なので良く能力が伸びている。これは納得なのだが、横島君の場合。身体能力も霊力も恐ろしいほどに成長している……いや、これは成長なんて言葉で片付けてはいけない……これではまるで進化だ。

「……横島の能力の伸びが恐ろしいの、これは真か？」

「はい。ヒヤクメが何度も検査した結果なので事実とのことです。そしてその上で、ヒヤクメと私なりの推測をして見ました」

別人というほどに変化している横島君。その理由を推測したと言う竜神王。そしてその理由は私からすれば如何しても納得できないものでもあった。

「横島は英霊や神霊と融合し、そしてその度に魂に強い負荷をかけてきた。常人ならば、神魔の魂に自分の魂が蝕まれ、自我を失っているとおかしくは無い」

それはヒヤクメにも聞いていた。横島君が人外になるかもしれないという危険性として……だから私も蛍ちゃんも気をつけていたつもりだ。ただ横島君の突撃癖には悩んでいたし、それに最近後遺症も弱くなっていると言う事で、複数の眼魂を使わなければ大丈夫なのでは？と思っていたのだが……。

「普通なら取り込まれるはずの人間の魂が逆に神魔の魂を取り込んで強化しているのではないかと考えている。人間の魂のまま駄目な

らば耐えられるように変化すればいいとなったのかも知れない、横島の魂は人間のまま、人間の殻を破ろうとしている。人間のチャクラが中立として、神族の魂が陽、魔族の魂が陰、それらが交じり合うことでどうなるのか、老師ならば判るでしょう」

「ちよつ、ちよつとまつて！人間のまま人間の殻を破ろうとしていてるってどういう意味よ!?もつと判りやすく説明してくれない!」

意味が判らない、私にとって大事なのは横島君がどうなるのかだ。そんな専門的な事を言われても理解出来ない。

「簡単に言うんじゃな、横島は……ワシ等に近い存在になる。尸解仙……肉体ではなく、魂こそが存在の証となる……簡単に言えば仙人とも言える」

「ま、待つてください。横島さんが仙人なんてそれは飛躍しすぎではありませんか!」

黙って話を聞いていた小竜姫様がそこで声を荒げたが、それは竜神王の落ち着けと言う言葉で黙らされた。

「魔人ヘルズエンジェル……速さこそ命と言うあやつは韋駄天の友ならばと、身体と霊使構造を調べることを了承してくれた。その結果でもある、魔人は……邪仙と呼ばれる存在とほぼ同じ存在であると言う事が判った」

「仙人と邪仙って何か違うの?」

同じ仙人だと思うのだけどと言うと老師がキセルを吹かしながら、より詳しく説明してくれた。

「基本的には同じじやが、邪法と呼ばれる物に精通していたり、己の欲望に忠実であったり、仙人らしからぬ仙人とも言えるかの」

本当はもつと細かい分け方があるが、そこまで説明する必要もあるまいと老師は笑うが、私からすれば笑い話では無い。

「横島君が魔人に近づいているというのと何か関係があるの?」

「それは判らない、ヘルズエンジェル曰く、魔人は死んで蘇ると言う事から仙人の生まれに近いとは思うが、確信は持てぬ。かと言って確信を得るために横島を殺すわけにもいかん」

「当たり前です!!」

私と小竜姫様の怒声が重なる。竜神王は勿論そんなことをするつもりは無いというが、その顔は険しい。

「魔人Ⅱ仙人と考えるのはまだ危険ではあると思う。なんせ魔人自体が良く判っていないからな。ただ横島が変質しかけているというのもまた事実」

横島君の変化。それは確かに深刻な物だ、今直ぐどうにかなるという訳では無いが、それでも十分に警戒する必要がある。

「老師。修行をみている時に横島の状態はどうですか？」

「可でもなく、不可でもなく……普通にしている状態では、特に何も感じないが……戦闘による極度な興奮状態が関係しているのかもな……なんにせよ、様子見が必要じゃな」

横島君が変化していることは判ったが、前例の無い事なので様子見が必要と言うのが今回の話し合いで出た結果だった。

「今は何も出来ないが、どんな事でも私達は協力する。不安にさせることしか言えず申し訳ないが、そこは許して欲しい」

許して欲しいと深く頭を下げられ、駄目だ等と言える訳が無い。しかし私も何を言えればいいのか分からないのも事実……まさかこんな事になるなんて夢にも思っていないのだから……、もう大丈夫と言う安心が欲しかったのにより悩む結果になるなんて考えているわけが無い。

(どうしてこんな事に)

横島君は最初こそスケベな面があったが、今では落ち着き。本来の性質であろう穏やかな面が強くなってきた、何度も思う、横島君の天職はきつと保父のような仕事だろう。最も戦いから縁の無い性格のはずなのに、戦いの中心になってしまう横島君……それが運命だというのならば、なんと過酷な運命なのだろうか……。

(蛍ちゃんと出会ったのが間違いなのか、それとも私の事務所に来たのが間違いだったのか……)

どうして横島君が霊能なんて物に携わってしまったのか？もしも霊能に関係なく、生きていたのならと思わずには居られなかった。

「なんにせよ、横島はこれからも戦いの中心になるじやろう、あれはそ

ういう運命の元にいる。ワシも何度も見てきた」

戦いなんて縁の無い性格をしているのに戦いの中心になってしまおう。乱世の時代ではよくあったことだと老師は言う、思わず声を荒げてしまいそうになったが、深い悲しみを湛えたその瞳に何も言えなくなってしまうた。

「じゃが横島は1人ではない、それこそが横島の救いとなるじやろうな」

勿論ワシ達も協力するがと老師は言う。横島君を1人にしないこと、そして横島君1人に負担を掛けないこと……それが私達が妙神山に來た理由なのだ。

「明日より、本格的な修行に入るがよろしいな？」

「よろしくお願いします」

師匠として、何時までも横島君にだけ負担を掛けたくない。それが今回の妙神山での修行の目的だ、今よりも厳しくなると聞いたが、私は迷う事無くお願いしますと頭を下げるのだった……。

「美神さん、横島の様子は？」

「とりあえず今は大丈夫みたいだけど、魂が変化しかけてるのは確からしいわ。ただそれが良いか悪いかはまだ判らないらしいけど」

深夜まで話し合っていたのに、起きていた蛍ちゃんに横島君の今の状態を伝えると、その表情が明らかに曇るが、正直神魔でさえも判らないという結果では不安にしか思わないのも当然だ。

「でも横島君を1人にしてしまえば、魔人みたいになるかもしれないけど、そうじゃないでしょ？」

横島君の周りには色んな人がいる。だから横島君を1人にしないこと、そして怖いと思わないことが大事で、支えてあげることが大事なのよと言うと蛍ちゃんは小さく頷き、布団を被る。多分色々考えたことがあったのねと思いつながら私も明かりを消して布団を被る。前々から思っていたけど、蛍ちゃんと横島君には何か特別な縁があるのでは？と思った。人間じゃなくなるかもしれないという言葉に、信じられないほどに表情をゆがめた蛍ちゃんに私はそう思わずにはいられないのだった……。

く横島視点く

時間は少し遡り、美神達がそんな話をしているなんて夢にも思っていない横島の部屋では……とてもほのぼのとした時間が過ぎていた。

「ぶぎゅう♪」

「可愛いです」

人懐っこい性格のうりぼーとそんなうりぼーの顔の近くにしゃがみ込み、頭を撫でる天竜姫や、シロやタマモ、それに清姫、シズクの姿もあり、しんみりとしている美神達の部屋とは異なり、明るい空気に満ちていた。

「ふっふーせんせー、今度は拙者がせんせーに美味しいお肉を食べさせてあげるでござるよ」

「結構動物も見るとね、やっぱり鹿ね。赤身が多くて美味しいわ」

明日は自分が美味しい肉をとってくるとやる気に満ちているタマモとシロ。俺は膝の上のモグラちゃんの毛並みを整えながら、注意事項を口にした。

「うり坊と猪は絶対駄目だからなッ！」

「ぶぎゅ？」

呼んだ？とこっちを見るうりぼーに違うというと、また畳みの上に頭を伏せる。仮に違うと判ついても、猪とかは食べれそうに無いので駄目と手で×しるしを作る。

「判つてるでござるよー、拙者の狙いは熊でござるー！」

「くうっ？」

「熊も駄目」

クマゴローがいるので熊も駄目と言うとシロはううーむと唸り始める。もしかしたら明日の狩猟には着いて行った方が良くも知れないと思わずには居られない。

「つとどうした？」

「うきゅ」

膝の上で大人しくしていたモグラちゃんが急に動き出し、膝の上から下りてどこかに歩いていく……。



「……喉でも渴いたんじゃないか？」

「そうかな？」

シズクが水分補給だと言って差し出してくれた湯呑みを受け取る。

「おお、心眼。見てくれ、茶柱だ」

【本当だな、何か嬉しい気持ちになるな】

茶柱が浮かんでいるのを見て、思わず笑いながら緑茶をズズうつと啜る。コーヒーとか、紅茶を飲むけどやっぱり一番落ち着くのは緑茶だなと思う。

【ノブノブ】

「……何？お前も欲しいのか？」

【ノブウ】

なんとチビノブまで緑茶が欲しいと言うので、シズクが湯呑みに入れてやると両手で湯呑みを持って俺の隣にちよこんと座る。

【ノーブー】

ほっとした表情で溜息を吐く、チビノブは色々食べるけど、緑茶の味まで判るとか凄いなと思わず感心する。

「みみーむー！」

「うきゅー！」

チャキーンつと言う感じでチビとモグラちゃんがポーズを取っている。みむうーとうきゅーつと唸りながらポーズを変えているのを見て、可愛いと思うのと同時に何をやっているのだろうと言う疑問が過ぎると、見ていただだけのクマゴローもその中に加わった。

「くーうーんー！」

チャキーンつとクマゴローもそのポーズに参加する。

「ぶぎゅうつー！」

うりぼーまでも参戦した。なんだろう、全員が可愛いと勇ましいの中間のようなポーズをしているけど、マスコット同士の力争いかなかなのだろうか……。

「……あらぶるマスコットポーズだ」

「強さと可愛さの両立らしいわね」

翻訳を頼んだ結果、タマモとシズクから告げられた言葉に俺はそっ

かと呟くのだった。

(荒ぶるマスコットのポーズとかなんだろう?)

【あれじゃないか?何か勇ましい】

チビが小さい翼を目一杯広げ、両手を伸ばす。モグラちゃんは前足を突き出すようにして背伸びをして、うりぼーはくるくる回って悩むような素振りを見せた後、何故か丸くなった。クマゴローはちよこんと座り牙を剥き出しにした、可愛いというポーズとうーん?と唸るのが混じっているが……確かに可愛いと言えれば可愛いと思う。

「可愛い♪」

天竜姫ちゃんがそんなチビ達を見て嬉しそうに笑っているの良いかと思ひ、湯呑みを机の上に置いた。

「横島様。修行の方はどうでしょう?」

「んーどうだろう?」

朝の暴走具合の影は微塵も無い清姫ちゃんにそう尋ねられる。朝の肉食獣の気配は恐ろしかったが、普通にしていれば本当に美少女なんだよなと思ひながら、皆に聞いてみる事にした。

「実際俺ってどうなの?」

自分では判らないのでシズクにそう尋ねる。シズクは持ち込んだ煎餅の大袋を開けながら、うーむと唸った。

「……まずまず基礎的な体作りは確認が終わっているだろうから、明日からさらに発展した修行になると思う」

「あ、それなら私の術とかも教えてあげよっか?」

「それでしたら私の薙刀もお教えしますよ?」

……皆色々教えてくれるって言うてるけど、そこまで覚えきれんだろうか?と言うか……俺に言うべき事ではないと思う。

「小竜姫様とか老師に相談してくれるといいんじゃないかな?」

俺は修行させてもらう側なので、教えてくれるなら何でも覚えようと思っているが小竜姫様達が良いよと言ってくれたら覚えるよと思う。

「それなら聞いてみようかなー、横島って多分炎系って相性良い様に思うんだけどなー」

「……それを言うなら、氷だつてそうだと思うけどな」

「薙刀は良いと思いますよ」

なんか盛り上がつてしまったなあ、修行期間が短いのであんまり詰め込みだと何処まで覚えきれるかなあと不安に思つているとおキヌちゃんが、洗濯物を手に部屋の中に入ってくる。

【はい、洗濯物乾いてましたよ】

「ありがとう」

修行出来ないおキヌちゃんは小竜姫様のお手伝いをしてくれている。洗濯物もその一環だ、おキヌちゃんが畳んでくれた洗濯物を受け取り、鞆の側に置いた。

「あ、そう言えばノツブちゃんとかは？」

姿の见えないノツブちゃんの事を尋ねると、おキヌちゃんは深く溜息を吐いて、肩を竦めた。

【今は道場で足に重りを乗せられて、反省中です。ヒヤクメさんが子供の時のトラウマとかを永遠呟いていますよ】

何でも俺の風呂を覗こうとしていたとか……普通逆だろと思いながらも、そつかと呟き……あんまり気にしないことにした。

「ほら、暖かいぞー」

「みむっ♪」

「うきゆう♪」

チビ達の寢床のタオルを干されたばかりの暖かいタオルに交換してやるのだった……なお寝る前にしれつと気配を消し、部屋に隠れようとした清姫ちゃんだったが……シズクセコムには勝てなかった。

「……ふんっー！」

「げふっ……」

シズクの氷のハンマーで頭を殴られ、悶絶している間に足を引きずられて強制退去となり、シズクはそのままシロとタマモを凄まじい目で睨みつける。

「……お前達も早く部屋に帰れ」

「はいー！」

シロとタマモを見て、告げられたドスの聞いた声に2人敬礼して、

回れ右をして俺の部屋から出て行いった。

「おやすみなさい、おいでクマゴロー」

「くうーん！」

「うん、おやすみ」

おいでクマゴローと言って、クマゴローと共に部屋を出て行く天竜姫ちゃんを見送り、布団に入って眠りに落ちるのだった……。

「裸で敦盛」

【あれは酒のノリでえ……】

「年下に父性を感じてるのね〜?」

【あうあうあう……】

動けない相手なのでヒヤクメが嬉々とした表情で、ノツブと沖田の恥ずかしい過去を語り続け、何か新しい性癖に目覚めかけていた……微々たる物であろう……。

〜老師視点〜

竜神王とそしてヒヤクメもいる中、美神達の修行は次の段階に入っていた。妙神山に満ちている竜気にもなれ、それを自身の靈力に混ぜる事が出来るようになった。普通はこれだけでも相当な時間を有するのだが、3日で成し遂げるとは思っても見なかった。

(本来は加速空間でやるんじゃないか)

加速空間で魂に過度の負荷を与え、新しい靈能に覚醒させる。それが妙神山での最高峰の修行だ、無論生きるか、死ぬかの二択となるが、それは与えられた竜気に魂が耐え切れず、魂が自壊してしまうことにある。加速空間での修行には劣るが、日常的に竜気に触れる事で美神達の靈力も変わって来ている。

「ゆっくりです、ゆっくりでいいので私の真似をしてください」

身体をゆっくりと動かし、一步の踏み込み、拳を握り、突きを繰り出す動作、呼吸と共に靈力を循環させる事。基本的な型の見本を小竜姫が見せ、それを横島達が見て真似をしているのだが、その額には大粒の汗が浮かび今にも倒れそうになっている。

「無理そうなら倒れるがよい、無理をすれば心身ともに傷めるだけじゃぞ」

ワシの言葉にまず蛭が膝をつき、次に美神、その次に信長、牛若丸、沖田と倒れ、最後まで型に着いて行ったのは横島だけだった。

「ゆつくりと踏み込んで、霊波を手から放つ」

「……………つくつ……………ふー」

小竜姫を真似を最後までして、横島が霊波を手から放ち、その場に尻餅をつくように倒れこんだ。

「疲れたあ……………」

「ふふ、お疲れ様です」

横島に柔らかく微笑む小竜姫を見ながら、キセルを縁側に置いて立ち上がる。

「霊波を取り込みにくい状況での霊力の運用はどうだったかの？」

今までは霊力を過度に与えて、霊力の覚醒を促す。そして次の段階では霊力を極端に削る、周囲の霊力を取り込むと言うのは霊能者ならば誰でもやっていることだ。だがそれを制限される事で何が判るかと言うと潜在霊力のキャパが判るのだ。

「元々横島さんの潜在霊力はくかなり多いのねく蓄えている量が多いから今回は最後まで出来ただけなのねく」

ヒヤクメが縁側に座りのほほんと笑いながら告げる。

「まあそういうわけじゃな、横島が優れているという訳では無いので安心するが良い」

元から蓄えている量が美神や蛭の倍近いのだ、今回は出来て当然じゃな。とは言え、それをコントロール出来ていないので、宝の持ち腐れに近いのが残念だが、この修行で少しでも己の力を使いこなすと言う事を覚えてくれれば幸いだ。

「さてと休息は終わり、次の修行じゃ」

今回からは蓄えている霊力を完全に使い切ってもらおうと告げると、英霊組の顔色が変わった。

【霊力全部使い切ったらワシら消えるじゃん!?!】

【さ、流石にそれは私達も嫌なのですが】

「……コフ！」

1人吐血しているのは無視して、ワシは心配ないと笑う

「消滅しかけたら霊力を直接叩き込んでやるから心配ないわ！横島達もじゃ、じゃから安心して……三途の川をメドレーリレーしようか？」

笑いながら言ったワシの言葉に美神達の顔が面白いように引き攣る。それを見てカッカッカと笑っていると小竜姫が苦笑する。

「1度身体に残っている古い霊力を全部使い切り、新しい霊力に入れ替えるんです。だから擬似的な霊力の枯渇なので心配は無いですよ……まあ本当に枯渇しかける時もありますけど……」

光の消えた目で意地悪をあんまりしないでください老師と言われ、ワシはなおの事カッカつと笑う、擬似的な臨死体験ほど魂に過負荷を掛ける物は無い、これこそが最も効果的な修行なのだ。

「死ぬほど辛いが死にはせん、霊力が枯渇したら外から与えてやるから心配も無い、だから安心して……擬似的な死を体験してもらうの」

手にしていたリストバンドを横島達に渡し、身に付けるように言うと、のろのろとした素振り以身につける。

「『うぐっ！』」

「カッカッカ！重かろう？それがお前達の霊力の約半分の重さじゃ」

全員が腰を曲げ、冷や汗を流している。横島だけは両手が地面すれすれじゃな、元より霊力量が多いので異常な重量となっているのだから。

「老師……竜神の装飾具を何て使い方をしているのですか？」

「カッカ、文句を言うな。これも使い方の1つじゃぞ」

ワシの修行の見学をしていた竜神王が眉を顰める。あのリストバンドは本来は咎を犯した竜族を処罰する為の物だが、霊力を限界まで消費させるという目的では十分に使える。

「ヒヤクメ、休暇中悪いのじゃが霊力が限界まで減ったら外すように指示してやってくれるかの？小竜姫は美神達を連れてランニングじゃ」

高地トレーニングに靈力に制限が掛かるので、体力的にはすぐ底をつく筈じゃが、心と身体を同時に鍛えるならこれが一番じゃな。

「判りました。では行きましようか、こっちはです」

「行ってくるのね」

返事もなく歩くような速さで小竜姫の後を追って走り出す美神達を見送り、縁側に腰掛けキセルを啜える。

「かなりのスパルタで行くようすな」

「まあ、こころでもせんと間に合わん」

ガープの侵攻は日に日に激しくなり、英霊も戦力としている。どう足掻いても標的にされるのならば、自分達である程度は迎え撃てるように鍛えるのが師の心と言う物じゃからな、後は次にやってきた時に加速空間での修行で靈能を開眼し易い下地を作ると言う目的もある。

「ロン殿は？」

「孫と一緒にシロとタマモを見ておるよ」

スパルタの美神達のコースでは一緒には出来んからなと笑い。キセルを吹かす、身体に蓄積されている澱んだ靈力を全て排出し、新しい靈力に入れ替えさせる。その後からはより本格的な修行に入っていく予定だ。

(横島が問題じゃなあ)

靈力の回復量も蓄積量も多い横島の靈力が尽きるまでどれだけ時間が掛かるかの、2週間の間にある程度形になれば良いがとワシは深く紫煙を吐き出すのだった……。

「ふーふーやっぱりご飯は竈です、おキヌさん、お味噌汁はどうですか？」

「バッチリです、山菜たっぷりのが出来そうですよ」

「フツブフツブ」

そして清姫達は修行に参加しない分、昼食などの準備を進めていた。

「あら、上手ですね」

「フブー！」

漬物を切り分けているチビノブの頭を撫で、今度はお茶を沸かす清

姫におキヌは味噌汁の味を調えながら、首を傾げた。

「かなり濃いですが大丈夫ですか？」

「ええ、濃い方が良いでしょう。老師の修行はかなり厳しいですからね、塩分は大目にしておきましょう、シズク、おにぎりの中身はどうするのです？」

「……横島が好きな鮭と梅干にする。後は卵焼き」

「では鮭を焼きますね」

仲は悪いのだが、同じ作業をすると息が合う清姫とシズクにおキヌは小さく笑った。

「じゃあ私は皆さんが戻ってきたときのタオルとかの準備をしてきますねー」

と言つて厨房を出て行った。万全な状態での修行をするためのバックアップ体制は恐ろしいほどに整っていたのだ……。

くくえす視点く

一方その頃東京では……

「私の屋敷に何をしにきたのですか？」

「……つかれたの、少し休ませて」

書齋で魔道書を見ていると急に訪ねて来た琉璃に思わず眉が上がる。私は基本的に騒がしいのが嫌いなので、急に訪ねて来られてもてなすつもりなんて微塵も無い。

「……横島君がいないから不機嫌」

「殺しますわよ」

睨みつけると琉璃はひらひらと手を振りながら、怖く無いわよと笑う。この猫みたいな性格はどうも好かない……。

「ダンタリアンとゴモリーが今東京にいるわ。何か大きい事件が起きそう」

その言葉に読んでいた魔道書を閉じて手を叩く、すると妖精メイドがティーポットを手に現れる。長い話になりそうなので、もてなすつもりは無いがそれなりの物は準備した方が話もしやすい。

「詳しく聞かせて貰いましょうか」



疲れて逃げてきたと言うのは嘘で、私に情報を流しに来たのだらう。

「とーぜん、勿論そのつもり。ビュレトさん繋がり、だから結構正確な話よ。何が起きるかまでは判らないけどね」

後横島君達が戻ってくるかも判らないし、何時事件が起きるかも判らないと付け加えられる。

「柩には？」

「この後予知を頼みに行く予定」

柩の予知でどこまで情報入手できるか、そこも重要なポイントになるでしょうね。問題は柩の存在をガープに捕捉されるかもしれないという危険性ですわね。

「査察の連中は？」

「教えてない、もう1回ガープの襲撃を受ければいいのよ」

ガープの侵攻など嘘と言っている連中だったので、1度ガープの襲撃に巻き込まれれば、ぐうの音も出ないだろう。

「これお願い出来る？」

「貸ですわよ？」

判つてると言う琉璃から紙を受け取る、内容は準備して欲しいもの、橋渡しをして欲しい相手の事が事細かく記されていた。唐巢神父や、小笠原エミなどの有名所に琉璃が行き来していたら何かあるかもと疑われる結果になる、だから元々素行が良くないと言う事で国際G S協会にもオカルトGメンにも良く思われていない私に白羽の矢が立ったのだろう。

「やれやれ、忙しくなりそうですこと」

「ごめんね？」

別に琉璃に文句を言っているわけでは無いですわと返事を返し紅茶を口にする。

「とりあえず横島君を護るためってことで納得してくれた？」

「……それで弄るのはやめてもらいましょうか」

睨みつけると琉璃はくすくす笑いながら、クツキーに手を伸ばす。妙神山には私はいけないので、横島がどれだけ成長して帰ってくるの

を楽しみにしているのは事実だが……それでからかわれるのは好きではない。

「横島君の事大好きなくせに」

「うるさいですわよ」

あはは照れてると笑う琉璃に軽い殺意を覚えながらも、こんな話をするほど他人を懐に入れていいる事に気付き、これも横島の効果ですかね？と心の中で呟き、今横島は何をしているのか？そんなことをぼんやりと考える。

「それで視察団は？」

「あー全然視察とかして無いし、三蔵さんの所もけんもほろろに追い返されたらしいわね」

三蔵をどうせ自分達の国にとか、そんなことを考えていたのでしょうね。そっけなく対応され、肩を落としている姿が容易に想像出来る。

「ちなみに今回は何処までの脅威と考えてますか？」

「……最悪の場合東京の民間人の一斉避難まで」

なるほど、最悪東京が壊滅することまで視野に入れている。もしくは視野に入れる必要があると告げられていると……。

「あれ、貴方の妹がいる氷室神社の方、あっちも注意した方が良いでしょうよ」

「とりあえず伊勢神宮とか、太宰府天満宮も注意してるけど、そっちも？」

「私の勘ですけどね」

今までのパターンで言うと、確実にそれだけでは終わらない。更に複数の手が用意されていると見て動くべきだ、むしろ有名所よりも、マイナーな方が危ないと思う。

「アドバイスありがとう、そっちも気にして見るわ」

「あんまり戦力を分散するのも嫌ですけどね」

ガープの厄介な所はその戦術と戦略の広さにある。東京で動きながら、他の場所で何をしてくるのかそこまで考えないといけないのが厄介さを段違いに跳ね上げている……。

(これだったのかもしれないですわね)

霊感が囁く……霊能者特有の感覚。ここ最近の胸騒ぎがガープの動きを感じ取っていたのか……なんにせよ。またとんでもない事が起きようとしているのは確実だろう。そして邪魔をされるかもしれないので水面下でしか動けないのが厄介だ。

「権力問題と言うのは何処も厄介ですな」

「……本当にね。白髪生えそう……」

乙女なのにと嘆く琉璃にご愁傷様と笑い、私は紅茶を口にする。霊能関連の事件が起きていないこと、それが嵐の前の静けさであると言う事は明らかなのだった……人間で足を引っ張り合っている場合では無いというのに……本当に人間とは業が深い、私は溜息を吐かずにはいられないのだった……。

リポート23 妙神山 その8へ続く

## その8

リポート23 妙神山 その8

〜横島視点〜

老師との新しい修行でグロッキーになった物の、狩りを見に行くと約束していたので止めといたら？と蛭と美神さんが言う中、俺はシロとタマモの狩りの見学に来ていた。

「ふぎゆう？」

「うきゆう？」

勿論チビ達も同行しているが、俺のほう見て大丈夫？と尋ねてくるうりぼーとモグラちゃんの視線に笑う。言葉は喋れないけど、本当に表情豊かだ。

「うん、大丈夫。でもゆっくりな？」

ぴぎつと元気良く返事をするうりぼーの背中に揺られながら森の中を進む。

【調子が悪くなったら無理をしないで言ってくださいね】

「判ってるよ。おキヌちゃん」

俺が調子が悪くなったら、シズクや美神さんに連絡に行くために付き添っているおキヌちゃんに判ってるよと返事を返す。

【ノブノブ！】

「判ってるよ、シズクにも怒られるし」

チブノブに背中をペチペチと叩かれ判っていると返事をするよと今度は心眼が俺に注意の言葉を口にする。

【判っていたら約束だとしても大人しくしているだろう】

その余りに正論に返す言葉ありませんと言って、暫く進む。チビ達は散歩気分で楽しそうなので、筋肉痛みたいな感じで痛いと思っても、思わず笑ってしまう。

【肉！狩らずにはいられない！】

【余りはしゃぎ過ぎないように、1人1匹ですよ】

そして肉を食べたいと言い出したノツブちゃんと、そんなノツブ

ちゃんをたしなめる牛若丸も同行してくれている。沖田ちゃんは付いて来る事を希望していたが、吐血したのでお留守番となった。

「では捕まえてくるでござるー！」

暫く進むと、切り株のある開けた場所に出たので、ここで待っているように言われる。シロは軽く準備運動をしてから期待しているでござるよおおーっ！と言いう叫び声を残して山の中に消えていくシロ、止める間も注意する間もなかった。

【肉！焼肉じゃああー！】

同じような叫び声を上げて山の中に消えていくノツブちゃん。牛若丸に視線を向けると小さく頷いてくれた。

【しっかりと見張りますので！主殿は動かないように！】

そう言つて木の枝に飛び乗り、枝から枝にジャンプして移動していく牛若丸を見送る事にした。

「じゃ私も何か捕まえて来るかな。まあどうせすぐは食べれないだろうし」

「え？・そうなの？」

すぐに食べれないと言うタマモにそうなの？と尋ねるとタマモは髪を整え、腕まくりをしながらどうしてか説明してくれた。

「私とかシロは全然平気だと思うけど、硬かったり、獣臭かったりするし、シズクとかなら美味く料理してくれると思うけど、2〜3日は寝かした方が人間の舌には馴染むと思うわよ？」

寝かした方が人間の舌には馴染むと思うわよ？」

じゃ、行つて来るからと言つて森の中に入っていくタマモを見送り、うりぼーに括りつけてきた鞆からキャンプシートを取り出して引いてその上に寝転ぶ。

「ふう、やっぱり寝転ぶ方が楽だなあ」

身体のあちこちが痛い、この感じは最初に変身した時に似ているなと思いつながらキャンプシートの上に寝転がると、モグラちゃんがおなかの上に登ってくるので少しだけ身体を起こす。

「どうしたー？」

前足の横に手を入れて持ち上げるとうきゆうつと楽しそうに鳴く、

どうやら構って欲しい様だ。俺はゆっくりと身体を起こし、シロ達が戻ってくるまでの間、ここでチビ達と遊んでやる事にした。

「そーれ」

「うきゆうー♪」

ボール遊びがうりぼーもモグラちゃんもお気に入りなので、ゴムボールを投げてやるとぽんぽんと軽やかに跳ねていくボールを楽しむように追いかけるモグラちゃんとうりぼーは見ているととても和む。

「ノブノー」

俺の隣にちよこんつと座り背負っていた鞆をござござし始めたチビノブ。

「みむ?」

「何探してるんだ?」

チビと一緒に何をしてるんだ?とチビノブの手持ちを覗き込んでみると、チビノブは鞆からじゃーんつと言わんばかりに煎餅を取り出した。

「ノブウー」

どうぞと言わんばかりに差し出してくるので、それを受け取り半分に割って、半分をチビノブに差出し齧る。木の枝に風が当たり、さわさわと音を立てる音と、ボールを前にうきゆうっ!ぷぎゆうっ!と争奪戦をしているモグラちゃんとうりぼー、そして膝の上からしようがないと言わんばかりに飛び立つチビと俺の隣でもきゅもきゅと煎餅を齧るチビノブ。

「凄い平和だなー」

【あのとでも平和とは思えないのですが?】

おキヌちゃんが引き攣った顔で言うが、俺の家の日常的な平和なので、誰がなんと言おうが平和なのである。その時背後からガサガサと音がして振り返る、シロ達でも戻って来たかな?と思っただが、そこにいたのは中学生くらいの身長で、艶やかな黒髪をツインテールにした赤眼の少女がいた、誰?と言うか、森の中に似つかわしくないブレザー姿に首を傾げていると、その少女は地面を踏みしめながら、俺に近寄って来た。

「また会いに来るって言って全然来ないし！この嘘つきッ！」

といきなり物凄い声量で怒鳴り込んできた。その怒声に思わず眉を顰め、嘘つきってえーっと思ったのだが、あっと思い出した。

「もしかしてイタチちゃん？」

「みむうー！」

チビと一緒に言うと、黒髪の少女は目を吊り上げながらぶすつとした表情でそうよと返事を返す。

「えっと横島さん？知り合いですか？」

「知り合いつて言うか、あれだ。イタチちゃんだよ、ほら前に妙神山に来た時に俺とチビがはぐれた時に会ったんだ。でも凄いなー、妖怪だったんだ」

「……妖怪になったのよ。カマイタチに」

動物から妖怪に……モグラちゃんと一緒かと思うよりも先に、俺は頭を下げた。

「ごめん！また来るって言ったのに、全然来なかった俺が悪い！」

「みむう……」

チビも申し訳ないと思っているのか頭を下げる。2人で頭を下げるのとイタチちゃんは手を振りながら、慌てた様子を見せる。

「あ、あたしが勝手に待ってただけだし！で、でも会いに来るって言ったら来るのが普通じゃないの!?!」

良いって言ったり怒ったりするイタチちゃんに俺とチビはどうすれば良いか判らない。

「ノブノブ？」

「えーっとイタチさんは横島さんに何をして欲しいんですか？」

チビノブとおキヌちゃんの言葉にイタチちゃんは、そわそわしながら、俺を何度もチラチラと見つめてくる。

「えっと、ほらあの時はあたし普通の動物だったし、今は……カマイタチになったからさ」

指を動かすと風がくるくると動き回る、その動きを見て思わず拍手が出てしまう。

「だからその、今度はあたしも……」

何かを言いかけた時、ガサつと音を立てて鹿を担いでいるシロ達が戻ってきて、イタチちゃんは顔を青くさせた。

「た、たべられるううううう！」

ぴゅーつと走り去ってしまった。シロとタマモは鹿を俺達の前に下ろしながら、イタチちゃんの走り去った方向を見つめる。

「知り合いでござるか？」

「……妖怪っぽいけど？」

【凄くいい所に帰ってきてくれました】

グツとサムズアップするおキヌちゃんと困惑しているシロとタマモを見ながら、時間を見てイタチちゃんを探さないといけないなと思った。何か言いかけていたからきつと大事な用があるはずだ。

「それで知り合いでござるか？」

「クロさんと天狗の勝負の時に案内してくれたイタチちゃんなんだ」

なんと！それでは父上の命の恩人でござる！と叫んだシロは担いでいた巨大な鹿を俺の目の前にドスンと下ろした。

「探してくるでござる！」

イタチちゃんが飛び込んだ藪の中に行ってしまった。がさがさと凄い音を立てて、イタチ殿ーつと叫ぶ声が聞こえる。

「で？なんだって？」

「妖怪になったからって今度はとか言っていたけど、なんだろう？」

最後まで聞けなかったからと言うとタマモは何かを察したような表情をする。

「まあ、逃げたんだから大事な用じゃないと思うわよ」

【そうですよ、大したこと無いことですよ】

タマモとおキヌちゃんに口を揃えて言われると、それもそうかなあって気もする。

「みむ？」

「だーめ、迷子になるから」

追いかけようか？と言う感じで俺を見るチビ達に駄目と言って、再びボールを転がすと、今度はチビとチビノブも混じり楽しそうにボールを追いかける。その姿をのんびりと見ていると心眼が疲れた



ように小声で何かを呟いた。

【人外吸着体質か】

「なんか言った？」

あんまり良く聞こえなかったので、何か言った？と尋ねるとなんでもないと言われる。俺はそれならそれで良いけどと呟いて立ち上がり、チビ達と遊んでやる事にした。

「よーし、ボール遊びするぞー」

きやつと楽しそうに足元にじゃれ付くチビ達を見て、俺は手にしているゴムボールを軽く投げるのだった。どうも俺が座っているので、近くでチヨコチヨコしていたが、遊び足りないようなので、少し身体は痛いけど、俺も混じって遊んでやることにするのだった……。「押しかけ使い魔か。横島の事を甘く見てたわね」

【本当ですね。まさか動物から妖怪に進化するまで執着するなんて】

きやつきやつと楽しそうに遊ぶ横島達を見ているタマモとおキヌの視線は茂みの中に向けられ、また何処から出てくるかもしれないイタチちゃんを常に警戒しているのだった……。

【横島ー！捕ってきたぞー！今夜は焼肉じゃあー！】

【何匹も捕まえようとするのでとめるのが大変でした】

「おーおかえりー、じゃあシロを見つけたら帰ろうか……牛若丸悪いんだけど、シロ探してきてくれない？」

【了解です！すぐに探してきますね！】

茂みを掻き分け山の中に消えていく牛若丸を横島達が見送り、シロと牛若丸が戻ってきたのは1時間後の事であった……なおシロ達が捕まえてきた鹿肉は当面の間。良質な筋肉を作ると言う目的の元、様々な調理を施され、夕食の机の上に並ぶのだった……。

く美神視点く

霊力を1度空にして新しい霊力に入れ替えると言う私が教わってきた霊能とは真逆の教え。霊力の枯渇は生死に関わると言うのは知っていたのだが、信じられないほどに身体の調子が良い。

「人間界での霊力の質が悪く、密度も薄い場所では霊力を循環する、しない以前の問題じゃ。毒素に満ちた霊力が空になった霊体に入って調子を崩したり、寿命を縮めるのは当然。妙神山の清らかな霊力と入れ替えれば、調子が良くなるのは当然の事じゃよ」

老師の説明を聞いて、なるほどと納得すると同時に、これで下界に戻ったとすると弱体化するんじゃないかという不安が過ぎる。

「いらぬ心配じゃよ。霊体を鍛えている段階じゃ、今度妙神山に来る時は命を賭けた修行をすれば霊能者として確実にランクアップする」  
命を賭ける修行か……確実にランクアップすると聞いても流石にそう踏ん切りはつかない。

「まあ今直ぐの話では無い、良く考えて決断するが良い、ではそろそろ今日の修行を始める。まずは霊力を循環させる型から入る、今日は全員倒れてくれるなよ」

老師の監視の下、ここ数日何度も繰り返し型を始める。ゆっくり息を吸って、力強く踏み込みながら霊力を放出する。普段ならなんてことのない動作なのだが、霊力の密度が下がっているからか、本当に軽い動作なのにすぐ額に汗が浮かんでくる。

【くっ……ぬぬう……】  
【うっ……くう】

ノツブや牛若丸の苦悶の声が聞こえてくる。霊体であるノツブ達の方が負担は遥かに大きいのだろう……かと言う私も相当しんどい。「こりゃー人の事を考えてる暇があるのかー！」

老師の怒りに怒声に自分の事だけに集中する。私も今は虫ちゃん達の師匠と言う立場ではなく、等しく修行をさせて貰っている身だ。自分の修行に集中する。ゆっくりと地面を踏みしめ、腕を突き出し、拳を握る。やっている事は穏やかだが、その疲労具合は桁違いだ、手が震えてくる……10通りほどの動作を30分ほど、それだけで汗が滴り落ち、肩で大きく深呼吸をする有様だ。横島君も疲れている様子だが、まだけろりとしている姿に基本的な霊力の差かと改めて思い知らされる。

「よし、ではそのまま組み手じゃ、相手を打倒するのでは無いぞ？」

型が終わってすぐ、組み手という指示が出る。正しこれはただの組み手ではなく、打撃と共にお互いの霊力を交換し、相手との霊力を循環させる物だ。相手の霊力と自分の霊力を合わせれば痛みは出ないが、少しでも感覚が狂うととんでもない激痛となる。自身の経絡に自分と違う霊力が通るのだ、魂の拒絶反応が出て当然だ。

「蛭は牛若丸と、ノツブは沖田と、美神は小竜姫とじゃ、横島はモグラとじゃな」

シロとタマモは今回の修行に参加できるレベルじゃないので、別口だ。私と蛭ちゃんが組み手することはなく、ノツブや沖田ちゃんと順番で組み手となっている。

「お手柔らかに」

「はい、大丈夫ですよ。ちゃんと手加減しますから」

につこりと笑う小竜姫様に背筋に冷たい汗が流れる、小竜姫様は勿論竜族でしかも神族。一瞬でも調整を間違うと、その瞬間にダウンする……あの激痛は言葉で表現するのは難しいが、肋骨が折れてうっとなった時に、蝶野にフルスイングのビンタを喰らって、倒れた瞬間に小錦が落ちてくるような、そんな痛みだ。

「これくらいはどうですか?」

「もう少し上では無理ですか?」

「ワシがメインでやる」

「ええーやですよ、ノツブ霊力の調整とか下手糞じゃないですか」

組み手をする前に霊力をあわせる必要があるので念入りに準備するのが普通なのだが、横島君はそんなものを一切せずにモグラちゃんの前に立った。

「うつきゅーうつきゅーうつきゅー」

「ていていてい」

打ち合わせもなしにぺちぺちと組み手を始める横島君。横島君の場合、元から竜気に相性が良いのと、モグラちゃんと仲良しなので打ち合わせも無しで可能なのだ、なおノツブ達がやったときは初激すら受け止めきれず、地面に沈んだ。勿論私や蛭ちゃんでも結果は同じだろう。

「ではそろそろ始めましょうか？」

「……はい」

小竜姫様の言葉に恐怖を感じながら頷き、自然体で構える。小竜姫様が避けてくださいといわんばかりのスピードで拳を繰り出してくるので、それを横から絡め取るようにして腕を動かすが、私と小竜姫様の腕が触れた瞬間。形容しがたい不快感が駆け巡る、それは私のチャクラに小竜姫様の竜気と神通力が駆け巡る感覚だ。

「あいただああ!?!ちよつとお!?!」

【む? 間違えましたかね?】

すぐに響く、蛍ちゃんの悲鳴に私も集中力が途切れ、激しい痛みが全身を駆け巡る。

「あいたたたたああ!?!無理無理無理!!」

「はあ、では少し休んでまたやりますよ?」

鬼めと心の中で呟くが、これは霊的な攻撃に対する防御と、霊視の強化を兼ねている。霊力での攻撃が主な神魔と戦う上での必須技能なので、息を整えて立ち上がると私の目の前には衝撃的な光景が繰り広げられていた。

「うきゆきゆきゆきゆきゅー!」

「ていていていていていい!!!」

横島君とモグラちゃんが凄く突きの速さ比べをしているのを見て、私は思わず小竜姫様を見る。

「あそこまで出来ないよ駄目?」

「い、いえ、流石にあれば私でも無理かと……」

相性が良すぎるとあんなふうになるのね……相性がいいのは沖田ちゃんとノツブも同じだ。

【ぐぎいいいいいい! 叫んだらどうですかあ!?!】

【につひひいいいい! 叫ぶのはそつちじゃああ!?!】

相手より強い霊力を送り込み、我慢比べをしていたんじゃ意味も無いと思うんだけどね。私は深呼吸をして、調子を整えてから立ち上がった。

「じゃあ、もう一回お願いします」

「はい。今度はちゃんと集中してくださいね」

小竜姫様の言葉にわかつてると返事を返し、私は再び組み手の集中し始める。相手の動き……ではなく霊力と竜気の動きに意識を傾け、同じ量に調整した霊力を纏わした拳を突き出す。

「そう、いい具合ですよ」

同じ霊力同士だと磁石のように反発し、腕が跳ね返される。今度は私が踏み込み、拳を突き出すと、軽い感じで出された拳が私の拳とぶつかり乾いた音を立ててお互いの腕が弾かれる。

「……」

蛍ちゃんと牛若丸も勢いが出てきたのか、軽やかな音を立てて、拳を繰り出しあう光景が横目に写るが、真正面の小竜姫様だけに意識を向ける。霊力の量を増やしてきたので、私も霊力の量を増やして対応する、だが今度は霊力を極端に減らしてきたので、私も霊力を限界まで落として、その手刀を払う。

「いい感じですよ。良く観察してください」

霊力の細かい操作、普段やるよりも遥かに高レベルなそれに大粒の汗を流しながら、量を自在にコントロールする小竜姫様にあわせ、私も何度も何度も霊力を調整しながら何度も何度も拳と脚を交差させるのだった。

「今日の修行はここまでじゃ、午後からは霊力と魂を休ませるように」キセルを吹かしながら、今日の修行は終わりじゃと言って奥の部屋に向かう老師を見送り、私達は尻餅をつくように倒れこんだ。霊力の細かいコントロールに霊視、精神的にも肉体的にもめっちゃや疲弊した。

「ご飯の準備を手伝ってきますね。美神さん達は身体を休めていてください」

軽やかに歩いていく小竜姫様。判っていたけど、やっぱり私達とは体力とかが桁違いなのね。

「っ、疲れました……」

「そ、そうね」

大分慣れてきたけど、霊力の密度が極限まで下がっているので、霊

力を回復させるのも難しく美味しいご飯を食べてさっさと休みたいと思う。

【横島くーん、眼魂……】

【ワシもお……】

眼魂をと言つて横島君に這い寄るが、横島君は渋い顔をして手で×マークを作った。

「駄目って言われてるから駄目、小竜姫様と老師に怒られるから」

そんなあーつと呻く馬鹿英霊2人を尻目に横島君は縁側にチョコンと座つて待つていたチビ達に駆け寄り、鞆からボールを取り出す。

「よーし、じゃあボール遊びするぞー」

「みつむうー!」

「ぴぎゆう!」

【ノブノーブー!】

「うつきゆうー!」

【あ、主殿ー、私も行きますー】

マスコット軍団を引き連れて、庭に出て行く横島君。私と螢ちゃんはその後姿を見て、凄いなあとと思った。

「横島君のスタミナとか打たれ強さつて絶対私達の倍以上よね」  
「……ですね」

動く気力も無い私と螢ちゃんに対して、庭でボールを追いかけて遊ぶ横島君達の姿。山の中だから良く声が聞こえるのだが、物凄くはしゃいでいる声が聞こえてきて、男だからとか言う理由じゃなくて、根本的に私達よりも霊力が多いと言う事を確信し、ゆつくりと胡坐に座りなおしながら横島君を見つめる。

「もうちょい頑張らないと駄目みたいね」

「そうですね」

私達も成長していると思つていたけど、横島君の成長率の凄まじさは私達を遥かに超えている。それを改めて実感してしまい、私と螢ちゃんは成長しているのに素直に喜べないのを感じていた……。

〈螢視点〉

妙神山での修行は恐ろしくハードだが、その厳しさゆえに自分がスキルアップしているのが良く判る。霊視も霊力の操作も前よりも確実にスキルアップしていると確信出来る……のだが、横島は私や美神さんよりも遥かにスキルアップしている。元々横島は才能の塊であり、軽い指導でも成果を上げてきた。そんな横島が朝から晩まで修行漬け、しかも理想的な師に指導を受けていればどうなるかなんて火を見るよりも明らかだ。昨日の修行で見せられたあれは凄まじかった。「横島よ。そこにある人形にはワシの仙術で霊力を通してある。良く観察し、ここだと思う所に霊力を込めた打撃を試してみるが良い」

「は、はい」

成人男性と同じくらいの大きさの人形の前に立った横島は肩幅に脚を開いて立ち。ふーつと言う短い呼吸と共に力強く踏み込み、心臓よりも少し下、わき腹の辺りに拳を軽く打ちつける。

「どわあ!？」

バンっと言う炸裂音と共に人形の頭と手足が吹き飛ぶ。とてもそんな威力のある打撃には思えなかったのに……一体何が起きたのだろうか？

「カカカカ！正解じゃ、今のが相手の霊力に自身の霊力をぶつける技じゃ、相手の霊力の流れ、薄い所を見極める霊視なくては出来ぬ技じゃ」

「いやいや、相手死にますよ!？」

上機嫌に笑う老師に横島がそう叫ぶと老師はますます笑いながら、さっきの技の説明をしてくれた。

「判りやすくしただけじゃ。人を殺すほどの威力は無いよ、まあ精々気絶させたり、身体を麻痺させるくらいの効果じゃが勿論殺す気で打ち込めば、体内からボンなのは確実じゃけど」

その説明に横島が青い顔をする。人が内側から爆発する技なんて横島の性格的には使えない技だろう。

「さて次は蛭と美神じゃ。やってみろ」

印を結ぶと現れた人形を目を凝らして見つめるが、とても霊力の溜

まっている場所なんて判らない。

「まあこれは感性の問題もあるからの、居る間にコツを掴めばよい」  
何度も挑戦したが結局私も美神さんも成功せず、横島も次のステップに進んでそこからは一回も成功する事は無かった。

「気を落とすことは無いですよ？私もずっと修練していますけど、成功した方が少ないですから」

どうも小竜姫様でもめったに成功しない秘術らしい、相手のチャクラに同調させ、魂を麻痺させる。そんな技をそう簡単に習得出来るはずが無い、横島が成功したのも初心者用人形だったという理由が大きい。

「心眼を使ってみますか？」

コツを掴むためにと心眼をスカーフのように巻いてやって、私も美神さんも最初の人形はクリアできたが、これは心眼のアドバイスが大きい上にかかなりの精神集中が必要だったので、とても実戦で使える技では無いだろう。

「老師は自分の感覚で技を教える癖を何とかしてください」

「カカカカ！今は無理でももつと歳を重ねれば使えるとワシは確信しておるよ」

今は使えないけど将来的に使える技とか教えられても困るんだけどなあと思いつつながら、その日の修行は終わりとなったのだが今日はさほど疲労感も無いので、そのまま横島と美神さんと一緒に自主練習をする事にしたんだけど……やっぱりよく判らない。

「見える？」

「いえ、全然」

美神さんと向かい合い、相手の霊力の流れを確認しようとするが、全然判らない。組み手の時の身体の外に流れている霊力ならまだしも、相手の体内の霊力の流れを察知するとか、難しいとか言うレベルではなく、異次元のレベルの技術だ。

「せんせー！せんせーも修行終わりでござるかー？」

「はー横島聞いてよ。この馬鹿、物覚え悪すぎ」

馬鹿じゃないでござるーと叫ぶシロと疲れた様子のタマモ。良



く喧嘩するけど、2人の相性の良さは良く判る。

【おおう……しむうう】

【ちよつと冗談じゃないんですけど】

【コフツ……】

道場から這い出てきたノツブ達は疲労困憊と言う様子だ。3人がやっているのは霊気の向上、なんでも今の3人は英霊のランクとしては下から数えた方が早い段階らしい、英霊の格は3人とも高いのだが……それとは別に霊力を改善しないと本来の強さには程遠いらしい。

「お主らが霊力の容量を上げたいというから付き合っただけだぞ？」

「父上、お疲れ様でした」

水を持って天竜姫がととととと竜神王様に駆け寄る、その後からはクマゴローはてちてちと言う音を立てて歩いてる姿が見える。

「うむ、ありがとう」

縁側に座り水を口にする竜神王様。その後からヒヤクメさんが出てきたのだが、英霊組みは瀕死寸前でその場に倒れこんだ。

「頑張ってるからそろそろだと思っのね？」

【「その前に死んでしまう」】

もう死んでるから大丈夫なのねーとにこやかに笑うヒヤクメさん。彼女も彼女でほんわかしてるけど、毒舌な部分があるのよね。

「よこしまーチビ達と遊んでも良いですか？」

「まだ修行でやりたいことがあるから、面倒見ってくれるならお願いしますよかな？」

「はい！クマゴロー行くよ」

「くうー！」

クマゴローと共に庭に出てチビ達と遊び始める天竜姫を見送り、教わったことを話し合う。

「拙者はあれでござる、霊力を刃にして飛ばす術を教わったでござるよー！」

弾ける笑顔でとんでもない事を言うシロに横島は良かったなあつと笑うが、とても笑いながら話す事では無いと思う。

「シロとタマモが教わったのは、靈力を放出するってことかしら？」  
「そうなるわね。でも今まで使ってたのよりも遥かにいい感じよ」

本能的に使う靈波砲を更に洗練させたと言う事だろう。タマモがそういうのなら、間違いなく段違いに良い技術なのだろう。

「まあ良く理解して無いから、上手く説明出来ないけど、そのうち教えてくれると思うわよ」

私達とシロとタマモの修行が違うのは、シロとタマモが付いていけないというのもあるがもう一つ、2人の身体は人間よりも遥かに靈力を扱うことに適している。人間と同じ修行をする事は2人にとつてあんまり旨味は無いのだ、その後は風呂が沸くまでの時間あーしたら良い、こーしたら良いと話し合いながら、教えてもらった技術を自分のものにする為の話をするのだった。

「あんまり成果が出てるように思えないのよね」  
「そうなんですよね」

お風呂が沸きましたよと言うおキヌさんの言葉に1度話し合いと練習を止めて立ち上がる、頑張っているのだが、あんまり実感が無いなあ……。

【だが私から見ても妙神山に来る前よりも遥かにレベルアップしているぞ】

心眼のお褒めに言葉にありがとと返事は返す物の、果たしてこれで神魔相手に戦えるのかと言う不安は如何しても付き纏う。嫌でも、ガープを相手にすることを考えなければならぬのだから……。

【相手は神、神殺しなんて本当なら冗談や御伽話の世界なのにな】  
【本当にね】

神殺しなんてそれこそ神話や御伽話の中での話だ。それなのに私達には嫌でも神魔と戦う可能性があるなんて本当に冗談じゃない。

「ちよつとうりぼー達と散歩に行こうかな」  
「駄目！」

散歩に行くと言う横島を2人で止める。タマモに聞いたのだが、この近くに横島の所に押しかけようとしているカマイタチ【人化習得済み】がいるらしいので、出歩かせると確実に遭遇するので駄目だと言

う。

「えーでも、拙者もせんせーと散歩したい……「黙れ、馬鹿犬」ふぐう!？」

タマモの流れるようなボディブローがシロに叩き込まれ、シロが蹲り癡癡する。その姿を見て横島が引き攣った顔をしているのを見ながら、散歩が駄目な理由を考える。

「今は霊力の入れ替えをしているから普段よりも霊力の防御力が落ちてるから、大人しく庭で遊んだ方が良いわ」

「あ。そっか……普段と同じ感じでした」

美神さんの適切すぎる説明に心の中でガッツポーズをとる。横島の所に行く為だけに妖怪に進化したカマイタチなんて冗談じゃない、確実にタマモの同類じゃない、これ以上は流石に小動物が増えるのも美神さんにも負担になるから出来るだけ避ける方向で行きたいし、この説明に納得してくれたようで横島は散歩は辞めにしようと言ってくれたのが本当に良かった。

「じゃあゴムボールで遊ぼう、今取って来るな」

そう笑って自分の部屋に向かっていく横島を見送る私達、横島がいなくなったのでタマモにカマイタチについて尋ねてみる。

「で、実際そのカマイタチってどうなのよ？」

「見た感じ横島にべた惚れよね、妙神山を出てもしつこいかも」

タマモの観察眼は間違いないので、性格も確実に当たっているだろう。なんで横島を自由にするとんでもない物を拾ってくるのだらう？個性と言う言葉で片付けられないレベルになってきていると私も美神さんも思うのだった。

「ペットボトルをバットにして遊ぶか!」

「フブー」

「私も良いですか?」

OKOKと笑い、ペットボトルをバット代わりにして、ゴムボールで野球みたいにして遊び始める横島達。横島の周りはチビ達にクマゴローに天竜姫にシロとタマモに復活してきたノツブ達……明らかに人間が少ない光景に、私も美神さんも溜息を吐かずにはいられない

のだった……。

一方その頃妙神山近くの大木の枝の上では艶やかな黒髪をツインテールにしたブレザー姿の少女がその真紅の瞳に怒りの色を浮かべ叫んでいた……。

「あーっもう！なんで人狼に妖狐がいるのよ！おっかないっいたらありやしない！」

横島の所に押しかけて来ていたカマイタチが枝の上に座り、遠くに見える道場を忌々しそうに見つめていた

「理想的な主人を見つけたのに！凄いい事に成ってるし！会いに来るっ言っても来ないし！来たと思ったら人狼と妖狐までいるし！なんか色々増えてるしッ！なんなのよ！もーっ!!!」

枝の上でうがーっとな怒鳴り続けていた少女はふーふーっとな荒い呼吸を肩で整える。怒ってはいるが、彼女にとって横島は理想的な主人であり、人狼と妖狐が居たとしても横島を主人とする事は既に決定事項であり、それを覆す予定など無い。

「何のために姉と妹と分かれたのか、わかりやしない！」

カマイタチとは3人で1体の妖怪であり、長女は転ばせ、次女の彼女は風を操り人を切り裂き、妹は傷を癒すと言う三位一体の妖怪ではあるが、今はGSも多く、妖怪界全体もバタバタしているので妖怪として活動して無いこともあり、単独で行動しているので、むぎむぎ帰る事等出来ないと言って枝から飛び降りた少女は風を操り軽やかに着地すると、再び妙神山へと視線を向ける。

「ぜっつたいぜっつたいぜーっつたいに！主人にしてやるんだからあ!!!」

力強くそう叫ぶと風を纏い、凄まじい速度で山の奥へと消えて行くのだった……。

## その9

レポート23 妙神山 その9

〜シズク視点〜

妙神山での修行も10日目、予定では後4日で東京に戻る予定だ。やはり理想的な師という存在は大きいのだろう、東京にいる時よりも横島の霊力が格段に強くなっている。

【のぶー】

「……うん、上手に出来たな」

全員分の洗濯物を一緒に畳んでいたチビノブがにぱーっと笑う。妙神山には洗濯機はないが、そこは私の水神としての力を使えば、水を回転させて洗濯機のような効果を発揮させるのは簡単なことだ。洗濯さえ済めば、日差しと風で簡単に洗濯物は乾く。

「……横島の分は持っていくか」

【ノブウ♪】

広間に置いておけば全員勝手に持っていく、風呂場にはタオルくらいは置いておくかと洗濯物を手にして広間を出る。

「愛！して！まーす!!!」

清姫がなんか雑刀を振るって叫んでいる。一緒に居る美神達が遠い目で見ているのにもかかわらず清姫はにっこり笑うが、その掛け声は突っ込み所しかない。

「気合の入る掛け声が良いんですよ」

「……そうなんだ」

襲われかけた横島がめちやくちやドン引きしているが、清姫はニコニコである。10日で霊力の循環と霊力操作が一定の技量を超えたので、残り4日だが戦闘技術の向上の訓練に切り替わり、それならと意気込んで修行に参加しているが、完全には回っている。

【ノブウ……】

「……あいつはちよっと残念なんだ。ほっておけ」

我が道を行く性格であり、そして尚且つ思い込んだら一直線で周り

のことを気にしない性格だ。空回っていいようが、横島を鍛えようとしているのなら別に邪険にすることも無い。

(流石に無理だったしな)

最初は妙神山の霊気と竜気に満ちた土地で私の術なども教えるつもりだったが、基礎的な霊力と身体能力の向上で終わった。だが、これに必要な身体能力や霊気は獲得出来たと見て間違いない。後はまた時間を見て指導していけばいいだろう、なんせ私は横島と同居しているので時間はたっぷりあるのだから。

「ノブウ？」

「……ああ。すまない、少し考え事だ」

立ち止まっている私を見上げるチビノブにすまないなどと謝り、私はチビノブと共に横島と私の部屋に向かい、丁寧に畳んだ洗濯物を置いて、そのまま厨房に足を向けた。竈や囲炉裏とどっちかと言うと、見慣れて、使い慣れた設備なので料理もしやすい。ただ電子レンジ等が無いのは些か不便ではあるが、それは高望みと言う物だろう。それにそういう設備だから出来る料理と言うのも少なからずある。

「……今日は鹿肉でハンバーグでも作るか」

温度を調整して熟成させているので、もう問題なく食べることが出来る。今日は挽肉にしてハンバーグでも作るかと言うと、チビノブは肩を落として小さく鳴いた。

「……メロンパンは無いからな。戻るまで待て」

【のぶうー】

お手伝いのスタンプカードは既に5枚溜まっている。だがここは妙神山でメロンパンを買える環境では無い、私なら転移で東京に行けなくも無いが、それをするとノツブもうるさくなるだろうから、ここは我慢させる。

「……戻れば横島が買物について行ってくれるさ。ちよつと高級なものも買ってくれるかもな」

私の言葉にぱあっと笑うチビノブ。普段は1個100円の安いものだが、横島もチビノブが頑張って手伝いをしているのを知っているので、もしかしたら中にメロンクリームとメロンの果肉入りの1個5

00円のメロンパンを買ってくれるかもしれないぞと言うと、嬉しそうに笑う。その姿を見ながら厨房に足を向けようとすると、道場から竜神王が出てきた。

「シズクか」

「……お前もずいぶん暇そうだな。若造」

私の言葉に竜神王がふつと笑う。天界にいれば相手の立場を考えてもう少し謙虚な対応をするが、ここは妙神山で中立の土地だ。竜神王相手だったとしても下に出る必要は無い。竜としての格を言えば、私の方が遥かに上なのだから。

「ミズチの連中は良いのか？」

「……興味ないな」

今の私の興味は横島にしかない、そもそも元々私は群れることも、ミズチを統率することもなく自由気ままにやっていた。今更ミズチを統率する事に興味は無い。

「……前に竜族とミズチが横島を殺しに来たぞ、次そんなことをさせてみる。どうなるか判ってるだろうな？」

態々天界に行くのが面倒だったから私の中で留めておいたが、こうして顔を見合わせたのだ、文句くらい言わせてもらう。

「……オロチと先代竜神王の孫娘、それが怒りのままに暴れたらどうなるだろうな？」

「肝に銘じておく」

引き攣った顔をする竜神王にお前は甘いと言言する、角が立たないように、そして丸く丸めようとしているがそれが駄目だ。

「……竜もまた実力こそ全て、時に非情な決断をすること勧める」

先代と比べれば丸すぎる。あの男は既に死んでいるが、罰則や規律を何よりも徹底させた。代替わりして変革をと謡うのも判るが、それでは軟弱者と思われるだけだぞと助言し、私は竜神王から背を向けて厨房に足を向ける。

「あ、シズクちゃん。今日はお昼何にしますか？」

「……鹿肉のハンバーグにする、おキヌは芋餅を作ってくれ。作り方知ってるか？」

多分大丈夫ですと返事をするおキヌによろしく頼むと言って、手を洗っていると厨房の扉が開いた。

「シズク様、私もお手伝いします」

「くうー！」

天竜姫とクマゴローが厨房に来る。私は苦笑しながら、クマゴローを指差す。

「……クマゴローは駄目だ。手伝えること無いからな、チビノブ。クマゴローと遊んでやれ」

【のぶー♪】

今日はチビノブの代わりに天竜姫に手伝わせる事を告げると、チビノブはクマゴローの背中に乗りとてとてと厨房を後にした。

「何を作るんですか？」

「……ハンバーグ」

ハンバーグ？と不思議そうにしている天竜姫に説明しながら、私は調理を始めるのだった。なおその姿を見ていたおキヌは後で横島に姉妹みたいだったと言っていたりする……。

くタマモ視点く

縁側に座り、剣を振る横島とシロ、そして神通棍を手にする美神と蛭を見ながら大きく欠伸をする。

「タマモちゃんはく修行しないのね？」

「いやよ、めんどくさい」

ヒヤクメの言葉にそう即答する。ロンから効率的な霊力の使い方は教わったが、それ止りだ。と言うよりも別の問題があるのだ。

「私がどうやって修行するって言うのよ」

九尾の狐。それは妖獣では最上級の存在であり、神と魔の力を扱っている。その力は神魔にさえ匹敵するという飛び切りの存在だ、私が頑張らなくても、この身体は魂は、効率的な力の使い方を知っている。私に出来る事と言えば、それは一つしか存在しない。



「知識をつけることじゃないの」

知識をつけ、応用力を高めること。身体を動かす修行ではなく頭を鍛える修行、それが私に必要な物なのだ。

「本を探してくるようにならなければならないのね」

「それ間に合わないじゃないの」

後4日で妙神山を去るが、4日間はヒヤクメは休暇なので、絶対に本が手元に来る事は無い。

「東京に行く口実が出来るのね」

こいつ案外強かよね……私はさつき自分で淹れて来たお茶を飲みながら、訓練をしている横島達に視線を向ける。

「さき！横島様！剣などは置きになられて、槍を扱ってみてはどうですか？」

「き、清姫様？今は私が稽古を見る時間でして」

「小竜姫？何か言いましたか？」

い、いえつと小竜姫が引き攣った顔で返事をするけど、明らかに納得はしていない。横島は横島でおろおろしてるし、本当に何をやってるんだが……。

(へタレ)

私の知っている横島と今の横島は全然違う。まずは女に飛び掛らないし、思い切りがいいし、頭の回転もいい。正直逆行する前でも気に入っていたんだけど、今の横島は九尾の本能から見ても好意的に見える。

(そもそもなのよねえ)

私はそもそも護ってくれる相手を求めるといふ本能がある。理想を言えば金も権力もある相手が理想だが、横島は金も権力も無いが、陽だまりの中に居るような心地よさがある。だから離れたとは思えない、1度近づいたら離れる事が出来な引力を横島を持っていると思う。

「じゃ、じゃあ後で教わるから。今は小竜姫様の訓練を先にさせて欲しい」

「むう……そう言われるのなら」

横島の言葉にぶすつとした表情で離れる清姫、あいつお姫様なのに  
行け行けすぎるわよね。

「うむ良い感じじゃ、神通棍を伸ばすだけではなく、それを軸に形状変  
化させるのだ」

「はい」

美神と蛸は霊力の形状変化の仕方を老師に教わっている。形状変  
化と言えば横島の十八番だが、普通は修行を積んだ霊能者がやっとな  
出る術であり、いきなり使える霊能ではない。まあ私はそういうのは  
出来るけど、めんどくさいからやらない。狐火とか使ってるほうが楽  
だしね。

「踏み込みをしつかりと意識して、自分の間合いと相手の間合いを把  
握してください。特に横島さん、貴方は感覚に頼りすぎです」

「うっ、はい」

横島は色々出来るからどれも中途半端なのよね。でもどれかに絞  
ると、横島の強みがなくなるから指導するの難しいらしいのよねと思  
いながら真面目に修行している横島達を見ていると道場の扉が爆発  
する。

「何事?!」

突然の爆発に全員の視線が道場に向けられ、煙の中から沖田達が姿  
を見せるんだけど……その姿は大きく変わっていた。

「自分だけ姿変わらないからって霊力を暴発させるのは駄目だと思っ  
たんですよ!沖田さんは!!」

沖田は桜色の着物から、ミニスカートのような丈とノースリーブの  
着物姿になっていて、続いて出てきた牛若丸もその姿が変化してい  
る。

「全く酷い目に合いました」

牛若丸は上半身裸同然の服装はそのままに右腕と右足に甲冑を装  
備していた。

「なんでじゃあ!なんでワシだけそのままなんじゃあ!」

最後に出てきた信長は煙を放つ、茶器を頭上に掲げていて、それは  
チビノブの茶器爆弾と同じ物と言うのが良く判ったのだが……それ

は完全に悪手だと思う。

「貴女は何をしてくれてるんですかあ!!!」

【ぎゃー!不慮の事故なんじゃあ!!!】

小竜姫が怒りの形相で駆け寄ると、茶器を抱えて逃げ出し。数分後、道場の外れから天誅と言う叫び声が聞えた。

【のつぶああー!?!】

茶器が爆発し、上空に吹き飛び絶叫する姿が縁側からでも見えた。あいつ……本当に何しているのよ。

【主殿!霊力が向上しました!】

「お父さん!そんな格好許さないって言っただろ!?!早く着替えなさい!」

横島に霊力が向上しましたと喜んできた牛若丸は横島にそう怒られてしゅーんっとなっていて、気のせいではなければ垂れた尻尾と耳が見えた。

「服着替えたのかしら?」

「いえ、霊力が増えたと思ったら服が変わってました。前よりも身体が軽いですし、今ならもつと活躍……コフツ!」

沖田は何時も通り突然吐血し、牛若丸はしぶしぶと言う感じで着替えるために居住エリアに足を向ける。

「今日という今日は許しませんからね!」

【……ノブウー】

黒焦げのノツブを小竜姫が引き摺ってくるのを見ながら、煎餅を齧り、お茶をすすって一言呟く。

「平和ね」

「絶対違うと思うのねー?」

うるさいわね、横島と一緒に居るとこんなものしょっちゅうあるから全然動揺しないのよ。

「美神さん、これだけ騒ぎになると修行所じゃないですね」

「そうね」

「仕方あるまい、少し早いが午前の修行は終わりにするかの」

小竜姫が激怒しているし、庭でチョコチョコ遊んでいたチビ達も横

島を心配してこつちに来てるから修行所じゃないしね。私は縁側に持って来ていた水の入ったペットボトルと紙コップを手に立ち上がった。

「訓練終わったなら一息つくの良いわよ。はい、お水」

「お、ありがとなータママ」

1番最初に横島に手渡し、美神、蛍と順番に水を手渡し、シロにはペットボトルを押し付ける。

「酷いでござるよ」

「あんたじゃ紙コップじゃ足りないでしょうよ」

蓋を開けて、口をつけて飲み始めるシロ。紙コップで足りないからそのまま渡したのよと思い、心配そうに寄って来たチビ達に声を掛ける。

「横島は大丈夫だから心配ないわ」

私の言葉に嬉しそうに鳴いて横島に駆け寄るチビ達を見ながら、私は皆が飲み終えた紙コップを回収するのだった……。

くノツブ視点く

皆が食時の時、ワシだけ正座だった。道場を破壊したのは悪いが、ワシの目の前で光って姿が変わった2人に対して、ワシだけなんも無いとか理不尽じゃね!?

【ぶふーん】

【笑うなあー！一応ワシの分身じゃろ!?!】

【ノツ！】

鼻で笑われた。ワシの分身の癖に生意気な奴じゃ！いや、そもそもワシの言う事なんて数えるくらいしか聞いたこと無いけど！

「それでノツブちゃんは変化して無いの?」

【……霊力は上がっておるよ?でもなんでワシだけ変身無いの!?!】

横島にも怒鳴るが、これは横島のせいでは無い。しかし何故ワシだけ……姿が変わらないのかが判らない。

「まあいいじゃない、パワーアップしたんだから」

「そうだと思おうわよ?」

美神も蛸もパワーアップしたからいいじゃないかと言うが、2人が変身してるのにワシだけそのままというのがどうにも納得行かないのだった……昼食の鹿のハンバーグと芋餅とサラダを終え、ワシ達も修行と思いきや、ヒヤクメがワシ達を呼び止めた。

「はい、霊体の検査をするのね」

ヒヤクメによって霊体の検査をする事になり、修行に参加することは出来なかった。

【横島君動きがずいぶん良くなってますね】

【本当ですね】

検査と言っても病院とかでは無いので、普通の部屋で検査待ちするだけ。庭で修行している横島の姿も見える。

「つとと!ひい!」

「そんなにおびえるな、恐怖は身体を硬くするぞ?」

猿と組み手をしている横島が、避ける度に悲鳴を上げる。だがそれもあの豪腕なら当然の事だろう、だが当たる気配も無いのだからそこまで怯える事はないと思う。

【主殿は才能の塊ですからね】

【全くじゃ】

本人の気質から、役に立っていないが横島は戦闘に関しても恐ろしい才能を秘めている。それが開花するのは何時になるかのう……何か切っ掛けがあればいいんじゃないかな。

【それにしても遅いですね?】

【じゃな?】

少し検査の準備をするからって言って、かれこれ1時間。昼寝してるんじゃないかと思ひ、襖を開けると其処には信じられない光景があった。

「ちらつと見える感じがいいのね」

ヒヤクメがでっかいカメラを構えて横島を盗撮してました……ワシが何を言っているか理解できないと思うが、ワシも理解出来ない。しかし今やるべき事は1つしかない。

【「みーちやった♪みーちやった♪よーっこしまに言っつてやるー」  
!?!?」

しまったという顔をしているヒヤクメ。散々好き勝手言っつてくれたのだ、やり返される覚悟は出来ているんじゃないやろうな!

「いやいやーちよつと魔が差しただけなのね!?!?」

違うからと言うヒヤクメ。じゃがその言葉を信じる馬鹿は居ない、何故ならば証拠が山のようにある。

【「その山積みの写真はなんですか?」

オワタと言う顔をしているヒヤクメ。どうも霊力を用いての横島の盗撮の常習犯の疑いがあるな。

【「どれどれ」

「あ、あ!・だめなのね!?!?」

その写真の山に手を伸ばそうとすると、ヒヤクメが止めに入る。

【「神でありながらなんと言う事をしているのですか!?!?」

生真面目な牛若丸が妨害に入り、ヒヤクメの手がワシと沖田に伸びることはなく、裏返しにされている写真を引っくり返してみる。

【「はわわわ!?!?」

【「ほほう……」

そこにはズボンこそ穿いているが、上半身は裸で首からタオルを下げている横島の写真（腹筋がいい感じに割れている）。

チビやモグラと一緒に昼寝している写真に、抱き抱えてころころしている写真。

【「これを公表したらどうなるか」

【「……は!・そ、そうですね!」

……沖田。今のお前はとんでもなく酷い顔をしているのに気付いておるかの? 指摘するか悩むが、その写真の束を取り上げようとする。

「待って! 待って! 出来心! 出来心なのね!?!?」

【「【出来心でこの量はおかしい】」

ワシと沖田と牛若丸の声が重なった。どう見ても1000枚近くある、きわどい物も多い、これは変態の所業であると言わざるを得な

い。

「欲しいのを上げるから黙っていて欲しいのね」

【……おい、馬鹿やめろ】

沖田が写真を着物に突っ込もうとするのを止める。だが沖田の目はぐるぐるして正気じゃない……こいつも良い感じにやばい奴だ。

【だってこんなに可愛い】

【ああ。それはワシもたまに思う】

昼寝している写真とか、モグラとかの毛並みを整えている姿とか確かに愛らしいと思う……あ、待てよ。

【ワシもちよつと貰っておくかの】

【じゃあ言わないでくれるのね!?!】

盗撮犯を突き出せないのは残念じゃが、この写真には使い道がある。牛若丸が汚物を見るような目でワシを見るが、個人的に使うのではなく、これは防衛策として使えるはずだ。

【いや、シズクとか、くえすとか怖いじゃろ?これで何とかなら無いかなど】

【あ。そうですね。じゃあ私も貰っておきましょう】

横島命のシズクとくえすは怒ると死に直結する。あの2人なら死んでいても殺すとか普通にやりかねないので、これはワシの命綱になりそうじゃ、写真を選んでみると綺麗に梱包されているのを見て、それに手を伸ばそうとしたんじゃが……。

「あ、それは駄目なのね。それは頼まれてるのなのね」

誰に?とワシ達が首をかしげた瞬間。襖が開き小竜姫が姿を見せた……まさかの人物に一瞬思考が停止した。

「ヒヤクメ頼んで……」

【(……)】

ワシ達と小竜姫の目が合い、言葉に詰まる小竜姫とワシ達の嫌な沈黙が広がり、小竜姫は回り右をした。

「じゃあそう言う事で」

【待て待て、何事も無いように帰ろうとしてるんじゃ?座れ、な?】

これはまたとないチャンスであり、ここで小竜姫の弱みを握ってしまおうとワシが思うのは当然の事であり、逃げようとした小竜姫の肩をワシは即座に掴むのだった……。

「すみませんでした。出来心で、横島さんには内密に……」

小竜姫が横島に恋慕していると言う事を知った瞬間でもあった。

【全く写真で見るくらいなら、近くで見たほうがいいのに】

そして明後日の発言をする牛若丸に診察部屋が一時騒然となったりと、とてもぐだぐだじゃったが、診察自体は済み、靈力の向上と身体能力と魂の感覚へのラグが減った事がヒヤクメによつて告げられるのだった……診察のはずが、犯罪者と遭遇するということんでもない一幕が広げられている頃横島はと言うと……。

「ふっふーん♪」

「ぶぎゅー♪」

モグラちゃんやうりぼーの毛にブラシを通していた。

「ずいぶんと楽しそうね？」

「だって、櫛を通すともふもふになって可愛いじゃないですか」

美神の言葉に櫛を通し終え、ピカピカになったうりぼーを掲げてみせる。

【まあいいじゃないか、馬鹿な事をするよりよっほど良い】

「そうなんだけどね、あんまり増えすぎるとね」

「でも横島が悪いわけじゃないですし」

横島に向こうが懐いてしまい、付いて来るのであって、横島が悪いわけじゃないからとフォローする蛍の前で、横島は膝の上に乗ってきたタマモの9本の尾に丁寧に櫛を通しながら、リボンの束に手を伸ばす。

「リボンを赤いから白いのに変えようか？」

「コンー！」

首元に結んでいるリボンを交換しようかとてもほのぼのした表情でタマモに告げているのだった……。

「よこしまー・クマゴローもブラシしたい！」

「くうー！」



お風呂から出てきたクマゴローと天竜姫に横島は苦笑し、鞆からブラシを取り出して天竜姫の方に視線を向ける。

「おいで、やりかたを教えてあげるから」

「判った」

天竜姫にブラシを渡し、毛の方向に逆らわないようにと注意しながらクマゴローのブラシの仕方を教えていた。

「……なんか見えていてホツとしますね」

「そうね」

【本当ですね〜】

「……日常って感じだな」

修行場である妙神山ではあるが、穏やかなその雰囲気にも美神達もホツと溜息を吐いていた。修行、訓練続きではあるが、こうして気を緩める事もまた修行では大切な事なのであった……。

〜老師視点〜

お気に入りのゲームをやるでもなく、自室でキセルを吹かしている  
と襖が開いた。

「失礼します」

「おうなんじゃあ?」

竜神王が失礼しますと言って部屋に入ってくる。姿勢を正している  
竜神王に生真面目な奴めと心の中で呟く、まあこの真面目さが無ければ  
竜神王なんて立場にはおれんな。

「横島達のほうはどうでしょう?」

「いい具合じゃな」

妙神山の本来の修行形式では無いが、14日。つまり2週間の修行  
で考えれば後4日残して、十分に鍛える事が出来たと思う。

「本当ならもう一歩踏み込みたい所じゃがな」

加速空間で魂に負荷をかける所まで行きたいが、今回はそこまでは  
無理そうじゃな。次の機会に楽しみに取っておく事にしよう。

「それで何のようじゃ?」

竜神王と言う役職はそれほど暇な役職では無い。それなのに妙神

山に滞在する、なにか特別な理由があると言うのは即座に理解できる。こうしてワシが1人である時に訪ねて来たと言う事はその理由を伝えるに来たと見て間違いないだろう。

「……魔界正規軍より、ダンタリアンの予知が使えなくなったと……恐らくガープの侵攻が起きるか」と

「厄介じゃな」

キセルを鉢の上に置く、ガープの侵攻とダンタリアンの予知が使えないと言うのは相当不味い状況だ。元々ダンタリアンの予知能力に頼ったことは無いが、ダンタリアンの持つ書物には全てが記録されている。それが使えないと言う事は定められていた何かが既に砕け、未来が不安定になっていると言う事でもある。

「お前が妙神山に滞在しているのは横島達を逃がすためか」

「……建前は老師が妙神山を破壊したと言う事にしてますけどね」

建前でもなんて理由にしてくれたんじゃないかと頭を抱えるが、妙神山は間違いなく侵攻の中心になるだろうし、神魔が多く襲ってくるのは確実だ。

「東京とどっちがましかの？」

思わずそう呟いた。ガープの侵攻は恐らく人間界、魔界、天界の3つの世界で同時に行われるだろう。妙神山に横島達を匿うのが正解か、それとも東京に戻すのが正解か、難しい所じゃな。

「もしもの時はお願いします」

「うむ、心得た」

妙神山は特殊な立地でもあるし、天界側の霊界チャンネルを持つ拠点でもある。妙神山が落とされる事は何があっても避けなければならぬ、最悪の場合はワシ自ら妙神山の防衛に出る事になるだろう。(出来れば何事も無いといいんじゃないかな)

妙神山と天界と魔界に侵攻があり、東京……もつと言えば、人間界に態々ガープ達が出てこなければ良いと願うワシだったが、その願いは叶わず、新たな戦いの幕開けはもうすぐ側に迫っているのだった……。

リポ  
ー  
ト  
2  
3

妙  
神  
山

そ  
の  
1  
0

## その10

レポート23 妙神山 その10

〜小竜姫視点〜

修行が終わるまで後3日。私も老師と共に横島さん達の修行を見ていましたが、やはり横島さんの成長速度が著しい、美神さんや蛍さんも成長しているが、横島さんのはまさしく進化と言うべきだろう。「足に竜気をガツとして、ギュツとして、ドーンするんです」

天竜姫様が私も何か教えると仰られる。流石にそれを駄目とは言えないので、お好きなようにと言うと、擬音で横島さん達に何かを説明している。

「……判るか？」

「いえ、判りません」

シズクさんの言葉に判りませんと即答する。天竜姫様は天才と言うべきお方なのですが、その分。他の人に何かを説明したりするのは苦手を通り越して、異次元の世界になってしまう。美神さんと蛍さんも明らかに困惑しているし、横島さんは頑張って理解しようとして行動に移っていた。

「えーっとガツとして、ギュツととして、ドーン……ふぐおおおおおおうううう!？」

足元で霊気が爆発して、高速回転しながら地面を滑って……一瞬思考が停止したがその信じれない光景に思わず叫んだ。

「横島くーん!？」

「横島あ!？」

「横島さーん!？」

頭を下にして滑って行くと言う驚愕の光景に私達の悲鳴が重なる。横島さんはバツタリと倒れていたのだが、身体を急に起こした。

「イケル」

ぐつとサムズアップした瞬間。鼻血と額から大量の血が噴出し、シズクさんが慌てて横島さんにと駆け寄って行くので、私は天竜姫様に

何をしようとしていたのか尋ねた。

「天竜姫様。何をお教えしようとしたのですか？」

「……ちよ、超加速を……」

……神族と竜族の最終奥義をそう簡単に伝授しようとしなくてください。と言うか、説明が余りにあれすぎるのでは……。

「……大丈夫か？」

「うん、全然平気。ちよつと着地の時足が滑っただけ。次は出来そう」

「駄目！絶対!!」

次は出来そうと言う横島さんに美神さんと蛍さんの駄目と言う怒声が響き、横島さんがビクリと肩を竦めるが、当然だ。超加速にしろ、神族や竜族の技と言うのは根本的に神や竜の強靱な身体が前提の技術だ。人間が扱うには無理がありすぎるので、真似をするのは良くないと釘を刺しておこう。

「それでしたら天竜姫様。モグラちゃんに竜気のコントロールを教えてください。あげるのはどうでしょうか？」

反対側でチビやうりぼー、そしてロンさんに見守られながら頑張っているが、相変わらず伸びるのは角と言う謎の現象に悩まされているモグラちゃんだ。

「判った、クマゴローおいで」

「くうー！」

クマゴローとモグラちゃんの方に走る天竜姫様を見送り、シズクさんの治療で傷が治っている横島さん達のほうに近づいた。

「では今日の稽古を再開しましょうか」

今日は老師は竜神王様と話をしているので、今日は私だけだ。私の専門と言えば武器の扱いがどうしても前に出てくる。

「では私の出番ですね」

「……お前は少し大人しくしていたらどうだ？」

清姫様が立ち上がるが、シズクさんに氷で拘束される。横島さんに良い所を見せたいのは判りますが、こうも邪魔されては困るのも事実だ。

「形態変化ですが、美神さんと蛍さんは何か良いイメージが出来まし

たか？」

霊力の形態変化。それはイメージが何よりも重要になる。横島さんは籠手、槍、剣に盾と自在に変化させているが、本来の観点で見ればそれはありえない現象の1つと言える。横島さんが出来るのは偏に一時的に師事したと言う神宮寺さんの言葉が非常に大きいだろう。(出来ると思いきむことですか)

知識が足りない横島さんに助言した言葉。出来ると思いきめ、これが一種の自己暗示に近い形となり自分の霊力なのだから操作できて当然と言う真理に導いている。だから横島さんは自身の霊力をどんな形にも変化させれる。しかし、知識があり、磨いてきた技術がある美神さん達にはそれが出来ないのだ。

「私はやっぱり鞭かなって思うのよね」

神通棍が伸び、そしてその先から放出される霊力が集束できる量を超えて鞭のようになる。

「良い感じじゃないですか」

ここまで出来ていれば殆ど完璧と言えると思うのですが、美神さんの表情は芳しくない。

「威力はあるんだけどね。どうも維持するのが難しいのよ」

「あれですね、鞭の動きを理解していませんね」

鞭のような形状だが、鞭の動きを美神さんが理解していないこともあり、必要以上に霊力を消耗し霧散してしまうパターンだろう。

「でもそれで良いと思いますよ」

「なんで？」

「だって霊能で作った鞭ですし、鞭って言う先入観が無いほうが自在に動かせるんじゃないですか？」

霊能と言う事は形状自身は鞭だが、美神さんの体の一部と言える。鞭のように振るったり、伸ばして槍にも出来るでしょう？と助言する。

「そっか、それもあるね。どうも駄目ね」

知識がある分どうしても先入観が生まれる。ここら辺が横島さんとの違いだろう、知識や技術が足りない分を思い込みや発想で補う。

天賦の際を十分に生かしているといえる。

「蛍さんはどうですか？」

「私はこうなりました」

神通棍の先から刃渡り40Cmほどの三日月状の刃……なるほど珍しい武器を選びましたね。

「鎌と言う事ですね？」

「間合いを詰められると弱いんですけどね」

美神さんは間合いを掴ませない事で相手を中間距離に留めることにし、蛍さんは鎌に変化させることで相手を遠距離で足止めすると言う形に辿り着いたらしい。

「幻術と組み合わせるんですね」

「はい。一応そのつもりですけど、前提としては……横島とコンビかなと……」

ああ……横島さんに前衛を頼み、中距離支援と言う事ですか……それは案外理に叶っていると思いつながら、頑張ってくださいと声を掛ける。

「では横島さん、よろしく願います」

「はい！よろしく願います」

木刀を正眼に構えて、横島さんと向かい合う。横島さんは相変わらぬ変則的な構えだ。右手に木刀、左手は下げて、右足でリズムを取るように足踏みをしている。

(でもこっちの方が横島さんらしいですね)

その天性の運動神経と反射神経、それを生かすには型にはまった構えと言うのはよろしくない。自由にやらせたほうが横島さんの良さが光ると言うのは2週間の間でよく判った。

「シッ……」

「うん、今のはいい感じでしたよ」

短い息の吐き出しと共に間合いを詰めた一閃、今のはかなりいい感じだった。そのまま1回、2回と剣を打ち合う、初日は受けとけた所から横島さんを押しつぶしたが、今の横島さんは受け止めると同時に重心を逸らし、受け流す。そして左手を突き出そうとして、引っ込め

る。

「いや、小竜姫様。なんで二刀流なんですか」

「大分スキルアップしたからですよ♪」

短い小太刀の木刀を左手に構え、右手には木刀。本気での戦い方だが、横島さんの反射神経と運動神経相手では片手ではいつかは追い込まれる。だから今回は最初から二刀流だ。

「では行きますよ」

「出来れば来ないで欲しいなあって！」

それは駄目ですね！と言つて横島さんに斬りかかる。弾き、防ぎ、受け流す。

「っー！」

「出し惜しみはしなくても大丈夫ですよ？」

防げないと判断したのか、上着から銃を取り出し、それで小太刀を受け止め、間合いを取る横島さん。

「もらい物ですし、使いこなす自信が無くて」

「使わなければ自信なんて付きませんよ。大丈夫です、当たりませんから」

霊波を打ち出す銃だ。仮に当たったとしても、ダメージは通らないので心配なさらずと言うと横島さんは困った顔をしながらも引き金を引いてくる。

(動きに躍動感が出てきましたね)

武器が増えただけで格段に動きがよくなり、戦術も変わった。短い時間で組み上げた戦術だが、それは非常に効果的であった。

(本当に横島さんは凄いですね)

少しの指導、稽古で段飛ばしで成果を見せてくれる横島さん。この2週間で私の横島さんに対する気持ちは大きく変わっているのだ。た。

【なんでそっちの方向に……】

異性に対する愛情に向けたかった未来の小竜姫だったが、現在の小竜姫は弟子に対する親愛へと傾いた。

「……あんまり変化しなかったの」



「生真面目ですからねえ」

竜神王と将棋を打っていた老師の手元には、小竜姫4・1↓3・2倍と望んでいたよりも変化していない、トトカルチョの倍率表があるのだった……

「王手」

「ぬお！卑怯じゃろ!？」

そしてその隙に王手を取られ、竜神王に卑怯と叫ぶ老師の悲しそうな姿があるのだった……

↳西条視点↳

「はい、はい、お疲れ様。神代会長」

『いえいえ、そちらも大丈夫ですか?』

電話から聞こえてくる神代会長の問いかけに大丈夫ですよと返事を返しながら書類に判を押す。その大半は教授の下で働くのが嫌だと言う、新米の配置移動希望の書類だが、それら全てに却下の判を押す。

「ごっちはプライドが高い連中ばかりで困りますよ」

一応国連のエリート組織だが、それが現場でなんの役に立つ? 訓練もせず、東京周辺の霊能の事も調べず、自分達はエリートだからと言う。これでは横島君達の方がよっぽど優秀だ。

『私の方の監査員はGS試験と台湾の件を私達の虚言として処理することを決めているそうです』

「ああ。それは僕のほうも一緒だね」

僕と神代会長が結託し、発言力を高めるための狂言として処理することを決めていると言うのは既に把握している。霊体化した教授が全部僕に報告してくれているからね。

「後2週間も滞在してくれるんです。存分に楽しんでもらえばいいでしょう」

『……ほんの少しだけ良心が痛みますけどね』

神代会長の言葉に少し眉を顰める。彼女は人の上に立つには十分な素質を秘めているが、まだ歳若い分甘いな……。

「こちらは善意で情報を渡した。しかしそれを処分したのは彼らだ。馬鹿は死んでも治らないですよ」

機密として神魔から齎された情報は提供した。だがそれらを見た形跡は無い。

『書類は閲覧後に発火し、消滅するようになってるんですよ？』

「ええ。リストにある27名、誰の名前も消えていない」

オカルトGメン、GS協会の監査と新規配属の人数分の書類を配り、リストで確認しているが名前が消えない。それは誰も見ていないと言う事だ。ならば僕達が良心を痛める必要は無いのだ。

「それよりも準備のほうは？」

『大丈夫です。シエルターなどの準備も出来ています』

東京が戦場になる可能性が高い、民間人を保護できる場所の確保は最重要だ。それはGS協会で用意してくれる、ならばこっちは武器だ。

「破魔マシンガンなどの準備は出来ています」

『助かります。後は美神さん達ですね』

妙神山に隠れて貰っている令子ちゃん達。予定では既に帰国しているはずだが、神代会長によって役職から外された連中と面会しているらしい、確実に賄賂の話だろうな……。

「こんな事を言っただけですが、襲撃が起きてから戻って来てくれるのがベストですね」

『……私もそう思います』

何も無いときに戻ってくると、今度は嬉々として令子ちゃんや横島君の監査だ、査問だと始まるだろう。だからガーブ達の襲撃があつてからの方が都合がいいのには思わずには居られない。

「では神代会長。事が起きればよろしくお願いしますね」

『ええ。判っています』

近く東京でなにかが起きるのは判っている。それならばなにか起きてから戻ってきてくれれば良い、権力争いの醜い姿はまだ学生の横

島君には余り見せたくは無いらな。

「さてと……」

電話を切ってから調べていた資料に再び目を通す。僕が調べていたのは西条家の記録だ、西条家は平安時代までは「西郷」だったらしく、宮仕えの陰陽師でもあった。昭和初期に西条へと名を改めたらしいが、その理由は判っていない。

「躑躅院……躑躅院……」

記録も殆ど残されていないが、躑躅院の名前は学生時代に見た覚えがあった……確か……西郷の時代だったと思う。

「あった、これだ。藤原の姫に手を出したと言う事で処刑された「高島忠助」後に冤罪及び鬼道家の狂言であることが判明した」

自分のルーツを知りたいと思ったときに調べた記憶があったので目的の資料はすぐに見つける事が出来た。

「当時の陰陽寮当主「躑躅院」……名は無しか」

思わず舌打ちが出る、躑躅院は独自の技術の継承として名前を明かさな。性である躑躅院しかやはり記録されてなかった……それでも躑躅院の過去が僅かに判った。

「六道家、藤原、輝夜の3者による証言もあり、高島を良く思わない一派による陰謀であった……か。うーん」

躑躅院は高島忠助との婚姻の話もあったと聞く、それは庶民の生まれである高島についての当時の権力の問題もあったそうだが……。

「……これ以上は無いか」

高島の処刑で暴れ狂った清姫の一件で資料は穴抜けになっている。処刑の前後の資料が無い。

「ここで躑躅院が動いた理由があるはずだ」

明確な証拠は無い。だが僕も、冥華さんも確信している。横島君を襲った人形使いは間違いなく躑躅院の人間であると、あの手のタイプは組織に属さないアウトローを手勢にしている筈だ。

「何か繋がりがあるのか……」

「高島」と「躑躅院」と「横島君」そこに何か、あの躑躅院が問題になると判っていても動く理由があったのか？名前は似ているが、それ以

外の何かが横島君にはあるのだろうか？思い当たるのは陰陽術だが……使いこなせているとは言いがたい。

「判らん！」

六道家にも当時の資料は無い。何があったのか、それが判れば現当主の躑躅院の動きもわかると思うんだが……考え込んでいるとノックの音がするのでどうぞと言うと教授が姿を見せるが、その顔は明らかに曇っている。

「やー西条。駄目だねえ、彼らは私の話を聞いてくれない上に君に直に話をするとは騒いでいるんだ、もう来ると思うんだが、大丈夫力ネ？」  
大丈夫では無いが対応するしかあるまい。僕は深く溜息を吐いた後、集めた資料を教授に手渡す。

「ああ、教授すまないが、この資料を見て、何か思ったことがあれば教えて欲しい」

「……ふむう、判った引き受けよう。どうせ邪魔者扱いだしね！」

はつはと笑い僕の渡した資料を手が消えていく教授、それと同時に扉をノックし、入ってくる馬鹿共、上司の部屋に返事も無いのに入ってくるとは社会人としての心構えが足りない。そう思いながら僕は駆け込んできた8人を睨んだ。

「返事も無いのに入ってくるとは相当急用なのだろうね」

僕の言葉にハツとした表情になるがもう遅いんだよ、僕は机を叩きながら立ち上がった。

「それでなんの用件かな？また教授に関する文句なら、聞かないよ。彼は君らよりも優秀だ」

「ですがあいつは幽霊です！」

「オカルトGメンに幽霊の社員がいるなんておかしいでしょう！」

「そうかいそうかい、じゃあ教授がやってくれている仕事を全部変わりにやってくれればいい。そうだな、彼は何時も5時間で終わらせてくれるが……仕事の処理もわからないだろう、17時まで待とう」

後8時間もあるから楽勝だろう？しかも8人も居るんだからと言って、もう1度睨みつける。

「次こんな事をすれば始末書だからな。社会の一般常識を守りたま

え」

僕の言葉に失礼しましたと言って出て行く一団を見送り、深く溜息を吐いた。

「無能な味方は敵にも劣るか……」

なんでこんなに精神的に疲れないといけないんだ。僕は背もたれに深く背中を預け、事務所の天井を思わず見上げるのだった……なお8人は17時までには終わらせる事が出来ず、8人がかりで終わったのは21時を過ぎた頃だった事をここに追記する……。

く横島視点く

修行漬けの2週間もあと2日で終わりとなると少し寂しいという気持ちがあるな。

「うきゅー……」

「俺は連れて行ってあげたいけど駄目って言われてるだろ？」

まだ竜気の修行が完全では無いので可哀想だが、東京には連れて行けない。モグラちゃんが寂しそうに鳴いていると、こつちも寂しくなってしまう。

「これこれ、無理を言っではいかんよ」

「きゅーん……」

ロンさんの言葉にますます落ち込むモグラちゃんに天竜姫ちゃんが励ましの言葉を掛ける。

「でも竜気大分コントロールできてるからもう少しだと思っ」

「むきゅー」

天竜姫ちゃんの励ましの言葉に少しだけ元気になったモグラちゃんを抱き抱えて、背中を撫でてやると顔に擦り寄ってくる。

「待ってるからな、修行頑張っ」

「うきゅー……」

それしか言えないが、流石に俺の独断で連れて帰る事は出来ない。保護者であるロンさんの意見が何よりも大事だ、それにやっぱりモグラちゃん自身を守ることにも繋がると思うから。

「私もう帰らないといけないですが、横島様、これをどうぞ」

脱走、逃亡、ストーリーカーの常習犯の清姫ちゃんは屋敷が大騒動なので、今日戻ることになった。別れ際に差し出してきたのは青い眼魂……出来たのかと驚いてしまった。

「やつと作れたのです、どうぞ私だと思ってお持ちください」

「……アリガトウ」

思わず引き攣った声で返事を返してしまっただが、清姫ちゃんは嬉しそうに笑い。迎えであろう、竜に引かれる牛車見たいので空へと飛んでいった。

【なあ、横島それ大丈夫か？】

「私は使わないほうが良いと思うけど」

「私も」

大丈夫かと言われると不安しかないのだが、折角くれたものなので、大事に持って帰ろうと思う。

「せんせー、置いて行ったほうが」

「馬鹿ね、あれはね、斜め上を全力で駆け抜けるのよ？置いていったら、横島が危ないわ」

「え？俺危ないの？」

さつと目を逸らされた。ちよつと危険と思っていたが、どうもかなり危険の間違いだったようだ、これは手放さないようにしよう。

「みむう？」

「ぶぎゅ？」

大丈夫？と心配そうに俺を見るチビとうりぼー、チビ達にも脅威と思われているのか……まあ、実際清姫ちゃんは危険人物だけだな。

【気配は覚えた。次からは問題ない】

奇襲は避けれるぞと自信満々に言う心眼の言葉を信じてみたいと思う。悪い子では無いと思うんだけど、ちよつと怖いんだよな。清姫ちゃん……たまに光の無い目で俺を見ている事があるし……。

【大丈夫です！私が守りますから】

「……気配を消して、後からブスリとかやるぞ」

……シズクの言葉に広間に嫌な沈黙が満ちた。とりあえず、下手に

刺激しないほうがいいのかもしれない……牛若丸も顔が引き攣っている。

【彼女は暗殺になれてそうですしね】

【あー判る判る】

沖田ちゃんとノツブちゃんの話では暗殺が得意そうらしいので、本当に気をつけるべきだと思った。

「後2日で修行は終わりじゃが、何か手応えはつかめたかの？」

老師の言葉にはいっと返事を返す、靈力の操作の感じは大分つかめたと思うし、覚え切れなかつたけど色々技術を教えて貰えた。手応えは間違いなく掴んでいると思う。

「後2日は軽い修行で疲労抜きをメインでやります」

疲労抜き？その言葉に思わず首を傾げると小竜姫様はくすりと笑った。

「霊体や身体に負担ばかり掛けてきましたからね、霊体と身体に良く利く温泉で身体を休めれば2日で万全になりますよ」

そつかあ、修行つて疲れを抜くところまでやるのか……俺はモグラちゃんの頭を撫でながら、ふと気になった事を思い出した。

【とりあえず今日は美味しい物でも食べて、ゆっくり身体を休めましょう。さつき竜族の人が牛肉を持ってきてくれたので、今日の夕飯はすき焼きにしましょう】

すき焼きか、良いなあ。俺すき焼き好きなんだよなあ……やっぱりご馳走つてイメージがある。

【鹿もドゥンドゥン入れよう】

【そうですね、美味しいですよ】

どうしようすき焼きに鹿肉が……ああ。でも美味しかったから大丈夫なのかな？とりあえず作ってくれるシズクとおキヌちゃんに任せよう

「2日のんびりするなら、山の中の散歩とかもいいかもしれないわね」  
「そうですね」

残り2日はのんびりして東京に帰る計画のついて美神さんや蛍と話す。

「あ、そうそう、なんか川があるから、魚釣りも面白いかもしれないですよ」

「魚釣りかー、やったことないのよね」

「私も」

「拙者釣りより、爪でドーンの方が楽でござるー！」

「あんたバカあ？そんなことしたら全滅させるでしょうが」

それなら俺が教えるよと話し、後2日のんびりとする計画を話していたのが、まさか翌日の正午東京でとんでもない事が起きるなんて、妙神山にいた俺達は夢にも思わないのだった。

↳ガープ視点く

時代が移り変わり、人が繁栄し、明かりの消えない街となった。人間と言う物の進化は凄まじいと呆れながらも感心する……。

「だがそれも終わりを告げる、漸く始まるのだ」

長い時を待った。敗北の苦渋もこれでもかと味わった。だがそれも終わりを告げる……。

「教授後は任せる。レイを効率的に使え、私にはやるべき事がある」  
「……は」

武装を装備した教授が深く頭を下げ、その隣でややぼんやりした様子で少女が頭を下げる。自我を失わせているから、これくらいだろう。教授とレイに背を向け、地面を蹴り飛翔する。

「遅いぞ、ガープ」

空中で待っていたアスモデウスとセーレが私に怪訝そうな顔を向け、少し不満げに言う。

「すまんな」

アスモデウスの叱責の言葉。どうしても何かを始める時は考え、悩み、そしてその場所を見たくなる。私達の行動で破壊された場所を見たい、だから壊される前の風景をその目に焼き付けるのだ。

「今回の事が失敗したらどうするのさー？」

ペガサスに跨ったセーレの言葉に頭を振りながら苦笑する、確かに失敗する可能性はあるだろう。横島忠夫、あの男に今までの計画は全



て邪魔されているしな。無論失敗する可能性も十分に考えている。

「さてね、また何時も通りになるかもしれないぞ」

敗北、失敗、そのいずれかでもまた何時も通りだ、だとしても今回の事には意味がある、

「小競り合い程度だったからな、神魔も私達を侮っている。それは些か面白くない」

いままでは正規軍などを奇襲する程度だったが、それももう終わりだ。本格的な侵攻に切り替える時期が来たのだ……何時までも小さなテロを続けてきたのは、侮らせるためだが……何時までもそれに甘んじているつもりは無い。

「当然だ。敗北した身ではあるが、誇りまで捨てたつもりは無い」

アスモデウスの言葉にセーレも頷く。敗残者と向こうは甘く見ている、だからここそこまで念入りに準備が出来た。

「だからここら辺で私達の本気を見てもらおうじゃないか」

「魔界と天界は？」

セーレの言葉にそつちも同時に行うと笑う、天界・魔界・人間界……

その全てを対象に私達は攻勢に出る時が来たのだ。

リポート24 反逆者達の進軍 その1へ続く

## リポート24 反逆者達の進軍 その1

### リポート24 反逆者達の進軍 その1

それはまさしく一瞬の出来事だった。天界、魔界、人間界の3界に同時に侵攻したアスモデウス一派、その動きはいままでの戦力を削ぐ小競り合いなどではなく、相手を叩き潰す事を目的にした電光石火の強襲であり、予想外の進軍であった。それも当然、集団ではなくアスラ、アスモデウス、ガープ、そして暗躍するセーレの4人のみ、本来なら強襲とすらも言えぬ自殺となるはずだが、力を蓄え続けた4人には部下の存在すらも邪魔であったのだ。

「どうしたどうした！天界正規軍！敗残者である我を打ち倒すことから出来んのか!!!」

悪神アスラは天界正規軍をその巨軀と拳を持って文字通り叩き潰した。

「今この時より我らの反逆は始まる。敗残者と、逃亡者と侮った貴様ら自身を悔いろ」

アスモデウスはその憤怒の炎を持って、しかし冷静に激情に駆られる事なく魔界軍へと宣戦布告を上げる、

「……パチン」

東京では突如異形の塔が現れ、その頂上にはローブ姿の人影と、黄金の様に輝く髪と真紅の瞳を持つ少女の姿があった。

「やれやれ、どうして東京で宣戦布告しないの?」

「はっ！横島忠夫も、美神令子もない時に宣戦布告などして何の意味がある。弱者に興味など無い」

だがその中でガープ、そしてセーレは東京にはいなかった。アスラは天界にいるシヴァ、ヴィシユヌの2柱に対する宣戦布告、アスモデウスはオーデイン、アマイモンの2柱に向けての宣戦布告。ガープの

興味の対象がない以上、態々表舞台に立つ気はガープには無かった。根本的にガープの気質として暗躍している方が性にあつていると言えるからだ。

「で、大丈夫なの？東京は」

「ホムンクルスや魔獣に、悪魔とゾンビまで預けてある、教授がいれば問題は無い」

ガープの言葉にセーレは肩を竦め違うと言つて、モニターを指差した。

「僕が言ってるのはお人形の方」

「ああ。問題なからう、あれはあれでいい」

人形であることに意味があると笑うガープはセーレと共に人里離れた山中へ向かった。

「東京は陽動、本命はこつちだ」

「はいはい、どうせどっちが成功してもいいって事でしょ？」

セーレの言葉に判ってるじゃないかと笑い、ガープとセーレは山中へと消える。アスモデウス一派の宣戦布告、そしてアスモデウス達が敗残者と言う認識はこの日を持って覆ることになるのだ……

### く 琉璃視点く

地響きと共に東京に現れた異形の塔。東京タワーよりも大きいその塔からはゾンビや顔の無い人型、そして凶暴な魔獣が多数出現した。

何かあると思つていたが、まさかこれほどの大規模な襲撃とは予想だにもしていなかった。あちこちに散らばつていた神代家の霊能者から多数寄せられる報告の数々、だがシエルターも救助物資も、そして何よりも唐巢神父もブラドー伯爵も、エミさんもそして白竜寺にも、マルタさんにも、そして三蔵法師様にも連絡はついている。

「東京タワー周辺の民間人の救助を最優先！唐巢神父とブラドー伯爵、それにくえすの3人を塔周辺に向かうように伝えて！塔から出てくる悪魔とかの進軍を防ぐのを優先！次に結界で可能ならば周辺の

封鎖！私もすぐ現場に出る！」

スーツから巫女装束に着替え、霊刀を2振り腰に挿し会長室を出ようとする。と査問委員達が血相を変えて飛び込んできた。

「あ、悪魔に幽霊それにゾンビの強襲が！早く避難場所を教えてください！」

「し、死にたくないのよ!!」

耳障りな怒声を上げる馬鹿達に1度だけ大きく溜息を吐いた。

「残念ですけど、GS協会の役員が入る避難場所なんて最初から用意してません。GS協会日本支部の職員全員は既に遺書も遺言書も用意して職務に当たっています」

私自身も勿論遺書も、遺言書も用意している。ガープが横島君達に目をつけている以上戦場になる事は必須、何時死んでも良い様に全員が既に覚悟を決めてこの業務についている。

「私は前もって神魔から齎された情報として、東京が襲撃させる可能性があると云う機密書類を渡したはずですが、見て無いのですか？」  
私の言葉に顔を歪める海外の査問委員達。私は最悪の状況に備えて準備しろと伝えてあった、それをしなかったのは自分達だ。

「ガープの襲撃を嘘だ、虚言だと言っていたようですが、これが事実。日本は今、世界中のどこよりも危険な場所ですね」

窓の外を飛び交う悪魔達を見て、私は会長室の電話を手に取り、館内放送の番号を入力する。

「GS協会日本支部を最悪放棄します！今支部に残っている職員全員は緊急マニュアルAを実行するように！」

館内放送を流し、会長室を出ようとする。と査問委員のユースウェルに肩を掴まれる。

「緊急マニュアルとは？」

「全員武器を持って民間人の救助を最優先にしろって言う指示ですよ、貴方達もGS協会の人間だ。戦えるでしょう？武器庫に案内しましょうか？」

私の言葉にしどろもどろになる査問委員達に私は頭に血が上った、偉そうにしている癖に自分では何も行動しようとしな。GS協会

の査問委員会の者だと言っておきながら、いざ悪魔が出てくれば戦う気概も無い。

「偉そうなことを言っていざ危機になれば保身に走る愚か者共！死にたくなければ自分で考えて行動しろ！言っておくけど、日本支部に避難用のシエルターなんて無いからね!!」

G S 試験、魔人復活の件で日本は戦場になると実感していた、だからこそ私は退職を勧めたがそれでも残ってくれた面子だけが今のG S協会の職員だ。

「会長！車の準備が出来ました！」  
「なら行くわよ！あの塔に!!」

あの塔が原因で何かが起きている。神魔とも連絡が取れず、そして他の県にも連絡がつかない。恐らくあの塔を基点に結界が作られ、東京は封鎖されているのだろう。

「ま、待ってくれ！わ、私達はどうすれば?!」

「自分で考えろって言いましたよね！お偉い役員さん達なら最善が判るでしょう?」

散々いい加減に狂言はやめろとか言いまくってくれたんだ。私も西条さんも良く我慢してきたと思うが、こうしてガープ達の進軍があれば助けてくれ、どうすれば良いのか教えてくれ、護ってくれなんて都合が良過ぎる。私はへたり込んでいる10数人の査問委員達の首元を指差す、これ見ようがしに付けている精霊石のペンダント。その使い方くらい知っている筈だ。

「精霊石をそれだけ持っているんだから、全員で結界でも何でも張りながら逃げればいいでしょう?」

それだけ身に付けている精霊石を使って逃げればいいと言って、私は車の用意が出来たと呼びに来てくれた職員と共に駐車場へ走る。

「いい気味でしたね会長！私胸がスーツとしましたよ！」

「私も言いたい事は全部言ってやったわ」

女だからと私のことをずいぶんと舐めてくれていたから、あの絶望したって顔を見ると本当に胸がスカツとした。

「でもそんなことを言ってる場合じゃないのよね」

「はい！私の車で行きましよう、オープンカーなんで運転しながらじゃかじやか撃てますよ!!」

……鏡原さんだっけ、この人って確かスピード狂……いやいや、死ぬ覚悟をして自分についてきてくれた職員だ、偏見とかは良くない。「後、不動さんと須田さんも待つてます」

確か元オカルトGメン職員だったが、過激な言動と武器の乱射で解雇された人を冥華さんがスカウトして連れきたのが不動さんで、もう1人の須田は元はモグリのGSだが、精霊石の加工技術に長けたちよつとマツド系の男だ、なんでも1度六道家を単独で失脚させようとしていたテロリストでもあるが、それが面白いと冥華さんが気に入ったんだっけ？なんとも癖の強い面子だがこの場ではこの上なく頼もしい。

「会長急げ！悪魔がよつて来てるぞ！おい！須田まだか!!」  
「やかましい、黙ってろ竜也。すぐに済む」

細身だが、筋肉質で空手と重火器の扱いに長けている戦闘班のメンバーの不動竜也が、腰に鎖を巻いて、両拳にはバンテージ、背中には鎖で斧を2つ縛り付けているし、精霊石マシンガンに、換えのカートリッジに手榴弾とありったけの重火器と精霊石バズーカを両肩に担いでいる。そしてその隣で怪しい何かを作っている須田隼……集まっている面子にいろいろと言いたい事はあった。だけど、今はそれを問い詰めている場合ではない。

「行きましようー！」

今のこの状況では頼もしすぎる味方だ。鏡原さんの車に飛び乗り、私達4人はGS協会を飛び出した。

「世界を救うときがきたあ!!」

「この腐れ悪魔共が！くたばりやがれッ!!オラオラオラオラア!!おい須田あ！爆弾よこしな！ぶっ飛ばしてやるッ!!」

「おう使え!!竜也!!」

冥華さんの紹介で職員として迎え入れたが、人選を間違えたかもしれない、私が心からそう後悔するまで時間はそう掛からないのだった……。

く美神視点く

明後日には東京に帰る予定で、今日は1日温泉などでのんびりとする予定だったのに、私達は起きたと同時に嫌な予感を感じていた。首筋にちりちりと来る嫌な感じだ。

「髪の毛が戻らない……なにこれ」

「うー拙者もでござる」

シロとタマモも髪が逆立ち、異様な気配を感じていた。シズクも目付きが鋭く、何かに警戒している様子だ。

(これは予定を切り上げて東京に戻るべきかもしれない)

疲労抜き2日の予定だったが、そんな時間は無いかもしれない……そう思っていた直後

「竜神王様！天界、魔界、人間界でアスモデウス一派の一斉決起が！天界はアスラで壊滅的な打撃、魔界はアスモデウスの襲撃で正規軍が大打撃、人間界では東京が封鎖されました！ご指示を！」

若い竜神の悲鳴にも似た叫びで私達は今何が起きているのかを理解した、ガープ達の侵攻が始まったのだと……

「小竜姫様！私達は東京に戻るわ！」

ガープ達の襲撃が起きているのに、妙神山に籠もっていること等出来る訳が無い、ここはもう決して安全な拠点とは言えないのだから、これは横島君も蛭ちゃんも同じ意見だろう。

「駄目です！許可出来ません！危険な場所に自ら向かうなど！」

しかし小竜姫様は駄目だと言って、門を封鎖してしまう。これでは妙神山から出ることが出来ない、それを見て横島君が小竜姫様に詰め寄る。

「何ですか!?神宮寺さんとか、琉璃さんとか危ないのに！俺達だけ隠れていることなんて出来る訳が無いでしょう!?!」

「それは判ります！ですが、みすみす命を落とす可能性がある場所に送り出すことが師匠としてどうして出来るんですか!?!」

横島君の怒声に負けない声で小竜姫様が怒鳴り声を上げるが、それを諫める竜神王様の静かな声が周囲に響き渡った。

「小竜姫、お前の気持ちは判るが止めるのは無理だ」

「竜神王様!」

私達を止める事が出来ないと判断したのは竜神王様だった。

「送る事は出来る。だが戻ることは出来んぞ?それでも良いか?」

確認と云う感じで尋ねてくるが、私達の答えは決まっている。行く以外私達の返事はいえぬ、仲間が戦っているのに安全な場所でのうのうとしていられるわけが無いのだ。

「な、なんで!なんでですか!」

「小竜姫、冷静になれ、ここは天界と魔界の中間点、つまり両方から攻められる可能性がある。この場所にいる事の方が危険じゃ」

老師の言葉にハツとなる小竜姫様。確かにその危険性は極めて高い、仮に安全だとしても妙神山にとどまるという選択肢は私達には無いけどね。

「小竜姫、同行しろ。悪いが、私達も時間が無い、今直ぐに出立して貰う。目的地はGS協会か、白竜寺どちらにする」

シズクがいてくれて正解だったわね。荷物は全部シズクが水の中に入れて運んでくれる、それならば何も心配することは無い。

「美神さん、目的地は?」

「GS協会よ」

琉璃達と合流するのが最優先。白竜寺は安全だろうが、その分山の頂上と言う立地が行動する上での邪魔となる可能性が高い、それならばGS協会に向かうのが一番効率がいい。

「老師後はお願ひします」

「うむ、任せられた」

まさか修行中にこんな事になるとは思っていなかった、寝巻きから着替え、精霊石、破魔札などの装備を整える。

「よこしま、気をつけて」

「うん。ありがとう、天竜姫ちゃん、モグラちゃんも修行頑張つてな」  
「うきゅ」

横島君が天竜姫様とモグラちゃんと別れを告げ庭に出てくる。

「陣で跳ぶ、小竜姫はそのまま美神達と行動を共にせよ。連絡係だ」



「はい、判りました」

小竜姫様が同行してくれるなら心強い、そう思いながら私達は竜神王様の作り出した陣で東京へと跳んだのだが……。

「「あいだあ!」」

強烈な衝撃と共に地面に叩きつけられる。幽霊組みのダメージは殆ど無いが、私達のダメージが深刻だ。

「う、うおおおお……」

「やばい……これやばい……」

横島君が4つ這いで、うおおおと呻き、蛍ちゃんが自分で自分の身体を抱きしめて痙攣してる、私は全身を強かに打ちつけたショックで声も出ない。

「死ぬ……これは……死ぬ……」

「足……これ骨逝ってる気がするでござるう……」

タマモとシロも重症で痙攣している。平気そうなのは本当に沖田ちゃん、牛若丸、ノツブ、おキヌちゃん、そしてシズクの5人だけだ。

「みむ?」

「ぶぎー」

「ノブー?」

あ、後ついでにチビとうりぼーにチビノブも無事なようだ……動く事が出来ない私達にシズクが水のペットボトルを無言で開けて私達の傷を治療してくれる。

「あいたた、なんで……何が起きたんだ」

「判らない、判らないけど、竜神王様と小竜姫様がいなのと関係してるかも」

ゆつくりと立ち上がり、叩きつけられた理由を考えるが、恐らくこの場にはいない竜神王様と小竜姫様の事が大きく関係してる筈だ。

「恐らく転移で分断されたな。何か条件があるのかもしれない」

小竜姫様達と分断された……恐らくだけど、2人は東京にすら入れなかったと見て間違いないだろう。

「ノオ、あれ何に見えるかの?」

「ずいぶん悪趣味ですね」

「しかし、あれはどう見ても前から東京にあったものではないですよね」

【東京タワーはあっちですしね】

ノツブ達の話し声に振り返ると、そこには不気味に脈動する異形の塔の姿と、そこから飛び立つ悪魔の姿が遠目に見えた。状況はかなり悪いと見て間違いない、そう思った直後塔の方から火柱が上がる。あれは……くえすの炎だ。

「神宮寺さんだ！」

横島君が立ち上がり駆け出す、私達はまだ立ち上がるほど回復していない。

「横島君！勝手に行動しない！」

「駄目！戻って！」

私と螢ちゃんの声に横島君は少し減速したが、振り返り私達に向かって叫んだ。

「先にどうなってるか見てきます！ノツブちゃん！沖田ちゃん！美神さんと螢を頼む！シズクは勿論皆の怪我を治してやってくれ!!」

【主殿！私も行きます！】

そう言って再び駆け出す横島君の後を追って、牛若丸が走り出す。

「おキヌちゃんも行って！横島君がくえすと合流してたら撤退するように伝えて！私達もすぐに行くから」

【は、はい!!】

牛若丸も突撃癖がある、止めることが出来る人員が必要だ。だからおキヌちゃんに横島君を追いかけるように頼む。

「あーっもう！なんであんなに独断専行するのよ!!」

どうすれば横島君の突撃癖を無くす事が出来るのか、それを知りたいが、今はそれ所では無い、まだ痺れている身体に鞭を打って立ち上がり

「シロとタマモは無理そうなら獣になって！急いで横島君を追いかけるわよ！」

このまま更に分断なんて冗談じゃない、可能ならばくえすと合流してその場を離脱。それが最も理想的だ、何故ならば塔周辺には異様な

瘴気に満ちている、今の私達では装備が足りない。そのうち瘴気に蝕まれ、動けなくなる前に横島君と合流しなければならぬ。

「……動くな、すぐに済ませる」

2本目のペットボトルを使い治療を施され、やっとともに立ち上がる事が出来た。だが戦闘には到底耐えられそうに無い、相手を妨害してその場から逃げるしか無いだろう。

【前衛はワシと沖田でやる！シズクは美神と蛭を頼む！】

【行きますよー！】

まだ身体が思うように動かない私達はノツブと沖田ちゃんを先頭に、横島君の後を追って悲鳴と炎に満ちている東京の街を走り出すのだった……。

くくえす視点く

塔から湧き出る悪魔とゾンビ達の撃退に借り出されているが、状況は芳しくない。

「神宮寺君！そっちに行つたぞ！」

「言われなくても！」

唐巢の言葉に即座に魔本を開き、魔力を増幅させて炎を放つ。黒炎の火柱が悪魔とゾンビを纏めて薙ぎ払うが……倒した以上の敵が姿を見せる。

「……はっ……はっ」

流星にこれだけの長時間魔法を使い続ければ、体力も、魔力も限界が近い。

「ちっ！こちらの戦力は有限だというのに!!」

ブラドール伯爵がマントを翻し、稲妻を放つ。その圧倒的な破壊力は再び悪魔達を薙ぎ払うが、倒した数の倍以上が再び姿を見せる。

「シッ！フッ！」

唐巢が拳で悪魔を打ち砕くが、明らかに精彩に欠いている……。

(撤退しなければやられる)

状況は明らかに不利、更に魔の眷属である私とブラドール伯爵さえも蝕む瘴気。

「はっ……はっ……まだまだ!!」

ブラドール伯爵が腰に挿した剣を抜き放ち、悪魔とゾンビを薙ぎ払っていく。私ももうこれ以上は魔法を使えない、撤退時に発動させる転移の魔力を残しておかなければならない。聖句で清められた弾丸が装填されているベレッツタを両手に持ち応戦するが、やはり3人に対して敵が多すぎる。

「神宮寺さん！唐巢神父！ブラドール伯爵!!」

背後から聞こえてきたのはこの場にはありえない声。思わず振り返ると横島がこつちに駆けて来る姿が見える。待ちに待った応援だが、横島では駄目だ、今この場に1番来てはいけない人物が応援に来てしまった。

「横島！来るな!!」

「横島君！来ちゃ駄目だ!」

「横島！来るな！戻れ!」

私だけでは無い、唐巢もブラドールも叫ぶ。ガープ達の最優先ターゲットの横島ではそれこそ飛んで火にいる夏の虫だ。その後から牛若丸とおキヌの姿も見えるが、美神達では無いことに思わず舌打ちする。私達の叫びも横島には届かず、Gジャンから眼魂を取り出した横島がボタンを押し込み、ベルトにセットする姿が見える。

「アーイー！ガッチリミナー！ガッチリミナーツ!」

漆黒のパーカーと15の光が横島と共に追走する。横島は走りながらレバーを掴み、それを力強く引いた。

「変身!!」

「カイガン！グレイト！15の英雄！結集！ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!!」

漆黒のパーカーが装着され、15の光が胸に吸い込まれて消えていく、肩や腕部に金のワンポイントを持つ、みた事も無い姿に変身した横島が私の横を駆け抜けていった。

「フツ!」

横殴りの一撃で悪魔を殴り飛ばし、背後から飛びかかってきた悪魔は後蹴りで胸から上を蹴り砕く、圧倒的な攻撃力と防御力の高さに驚かされる。

「ガアアアアア！」

「せやっ!!!」

悪魔の巨大な腕を片手で受け止め、がら空きの胴体に拳を叩き込み悪魔を一撃で絶命させる。その動きの早さと攻撃力は今まで見たどの姿よりも強烈だった。悪魔が横島を脅威と判断し、横島へと向かっていく、横島はそのまま私達から距離を取り叫んだ。

「神宮寺さん！唐巢神父！ブラドール伯爵！俺が引き受けます！早く撤退準備を！」

腰にベルトに両手を翳すと、そこから2振りのガンガンブレードが飛び出し、横島は両手にガンガンブレードを持ち、悪魔を両断し、ゾンビを薙ぎ払う、その姿はまるで嵐、悪魔もゾンビもお構いなしに引き寄せ両断し、消滅させていく、正直私達の苦労がなんだったんだと思うレベルだ。

【早く！いつまでも残られていては主殿も撤退できませんぬ！】

【すぐに美神さん達が来ますから】

牛若丸とおキヌの言葉、確かにこの場面なら横島に任せて撤退するのが間違いなく正解だ。

「ぶぎゆうー！」

「みむう！」

分裂したうりぼーが背中に乗れと身を低くし、チビも早く乗れと促す。この場はうりぼーのダッシュ力で逃げるのが得策と言うのは誰もが理解していた。

（駄目、今この場を引いてはいけない）

だが私の直感は今この場から逃げてはいけないと告げていた。今この場を引き、横島だけを残せば取り返しのつかない事になることを感じていた。

「神宮寺君！早く！横島君が足止めしてくれている間に！」

「屈辱だが、この場は引くぞー！」

唐巢とブラドール伯爵が逃げると言う、だがそれでも私はその場に立ち竦んだままだった。横島から目を離してはいけない、魂の奥底からそう叫ぶ声が聞こえていたから……。

「変身！」

【決闘！ズバツと！超剣豪！】

黒い姿のまま、横島のパーカーが真紅のパーカーに変わりに、動きが格段によくなる。その姿を見れば、体力も魔力も精神力も集中力もつきかけている私が邪魔になると言う事は判る。だがそれでも今逃げてはいけないと直感が叫んでいた……そしてその時はすぐに訪れた。

「……こんにちわ」

周囲の悪魔が消え、ゆつくりと開いた塔から姿を見せたのは悪魔でもゾンビでもなく、ふわりとした白いローブ姿の黄金のような金髪と血のような真紅の瞳を持つ少女の姿。だがその姿を見た瞬間、全身の産毛が逆立ち、尋常では無い恐怖を感じた。

「……君はあの時の」

「はい、あの時の鯛焼き、とても美味しかったです」

横島とその少女は知り合いだったのか、困惑した声で返事を返す。少女は私や唐菓には視線を向ける事無く、光の無い真紅の瞳を横島だけに向けている。その異様な気配に嫌な予感がますます強くなる。

「本当ならこんなことはしたくないのですが……」

少女はそういうとローブを脱ぎ捨てる。ローブの下には脱ぎ捨てられたローブと同じ白のシャツとスカート姿……だが私の目はその少女の服装よりもその腕に向けられていた。機械的だが、どこことなくナイトランターンに酷似した少女の細腕に似合わないガントレットに……。

「ですが貴方を捕らえろと言うガープ様の命令です。出来るだけ痛くしないので、抵抗しないでくださいね。殺すなどというご命令ですが……あんまり抵抗されると殺してしまうかもしれませんから」

少女がスカートから灰色の眼魂を取り出すのを見て、嫌な予感はず信へと変わった。

「横島！止めなさい！あれは！あの女は！お前と同類ですわ！」

「え、え！っ！」

横島は困惑しているようだが、私の言葉と眼魂を見て駆け出すが、

それは余りにも遅かった……少女は腕のガントレットに灰色の眼魂をセツトしてしまったのだから……。

【レブナント】

「……できるだけ優しくしますね？」

【セツト、レブナント！レディ？】

「……変身」

【ヒガン！ヒガン！！ファントムコール！】

凄まじい暴風に視界が塞がれ、横島もその突進を止められてしまった。そして暴風が収まったとき、そこには横島と酷似したボディアーマーに身を包み、シルバーのワンポイントの入った濃い青のパーカーを纏った仮面ライダーの姿があった……。

次回の仮面ライダーウィスプは!?

「あんまり抵抗されると、手加減を間違えるかもしれないので大人しくしててください」

「うぐっ……」

横島達の前に現れたガープ達によって作られた仮面ライダーレブナント。その戦闘力はグレイト魂を使用した横島よりも上だった

「抵抗は無意味と何故判りませんか？」

グレイトの攻撃力を持ってしてもレブナントの防御力を貫く事が出来ず、反撃に繰り出される拳で横島はダメージが積み重なっていく

「……これならどうだ!？」

【カイガン！ゴエモン！ 歌舞伎ウキウキ！乱れ咲き！】

「そうですか、まだ抵抗しますか、では仕方ありませんね」

【セツト！ロキ！レディ？】

「……変身」

【プレイヤー・イン・ラグナロク！ファントムコール！】

横島がゴーストチェンジすると同じく、レブナントもまたその姿を変える

「ロキ!?北欧の悪神!？」

「……こうなると手加減は非常に難しいのです。なのでどうか死なないでください、まあ死んでも魂さえあれば問題ないのかもしれないですけど……痛いのは嫌でしょう？大人しくしていてくれれば、こっちもそれなりの対応が出来ると思うんですけど……」

敵意も悪意も無い、そう命じられたからと言わんばかりの態度で横島に襲い掛かるレブナント。圧倒的な力の前に敗れ去る横島

次回「敗北」へ続く

リポート24 反逆者達の進軍 その2へ続く



## その2

レポート24 反逆者達の進軍 その2

〜横島視点〜

前に鯛焼き屋の前であった少女が目の前で変身した、そのことに驚いたのは勿論だが、何よりもその姿はどことなくランタン魂に似ていた。

「……参ります」

目の前のライダーが姿勢を低くした。そう思った瞬間、俺の身体はくこの字に折れていた。

「が……ぐっ……」

その余りの激痛に呻く事しか出来ない、俺を殴ったライダーは手を閉じたり開いたりして不思議そうに首を傾げる。

「殴るといっなのは何か奇妙な感じですよ」

等と呟きながら距離を取り、今度は回し蹴りを頭に叩き込んできた。サッカーボールのように蹴り飛ばされ、ビルに背中から叩きつけられる。

「げほっ」

叩きつけられたダメージが大きい、目の前がチカチカと光る、グレイトの防御力は高いはずなのに、それを貫通する痛みに吐きそうになる。

【横島！意識を失うな！】

心眼の言葉に無茶言うなと思いつつも、歯を食いしばり意識を保った。

「貴方に用は無いですけど……」

【お前になくてもこちらにはある!!】

牛若丸がその手にした刀で切りかかるが、周囲に響いたのは妙に甲高い金属音。そして信じられないと言う、牛若丸の呟きだった。

【ば、馬鹿な】

牛若丸が手にした刀はライダーの肩に当たった。だがそれだけ

だった、中ほどから折れた刀が宙に舞う。その信じられない光景に思わず絶句した……。

「ちよっぴり痛かったです。ではこれはお返しです」

ゆっくりとした動作で振りかぶった拳が牛若丸の顔面を殴り飛ばす。凄まじい衝撃音を放ちながら吹き飛んだ牛若丸は俺と同じようにビルに叩きつけられ、意識を失ったのかずるずると崩れ落ちる。

「神宮寺さん！唐巢神父！ブロードー伯爵！早く撤退してください！」

この短いやり取りで俺は完全に理解した。勝てない、この相手には勝つ事が出来ない。今出来る最善は逃げの一手しかないのだと、それを悟ってしまった。

「……そこまで必死にならなくても、私の目的は貴方だけです。仕掛けてこなければ何もませんか？」

小首を傾げ、何故そんなに必死なのですか？と尋ねてくる。その姿には悪意や敵意などがまるで感じられない、だがそれが逆に不気味さを煽っていた。とりあえず神宮寺さん達が逃げる時間だけでも稼がなければ……武蔵魂からグレイトに戻ってしまったが、まだ14個の眼魂は使える。なんとかそれで対応するしかない、俺は全身が痛む中立ち上がり、拳を握り締める。

「……大人しくしていれば良いのに」

まただ、瞬間移動したかと思うほどの一瞬で俺の目の前に現れる。反射的に腕をクロスさせて放たれた拳を受け止める。

「ぐっ!？」

体格は俺よりも頭一個は低い。それなのに俺はまともに耐える事が出来ず、大きく弾き飛ばされる。地面に跡を残しながら何とか踏み止まり、前を見るが相手の姿は既に無い、そのスピードに驚愕していると心眼の声が脳裏に響いた。

【横島後だ！】

心眼の言葉に頭を下げると、凄まじい音を立てて蹴りが頭の上を通り過ぎていく。その凄まじい音に直撃していたら意識を失っていたかもしれないと思い、冷たい汗が背筋を流れる。

「……今、変な気配がしましたね？」

攻撃を避けた俺をその空虚な瞳で見つめてくるライダー。その圧倒的な威圧感に思わず後ずさりしかけるが、それを何とか踏み止まる。

(駄目だ。下がれない)

後にはもう戦えるとは思えない状態の神宮寺さん達がいる。ここを下がることは出来ない、歯を食いしばってその場で踏みとどまるしかないのだ。

【横島……今は隙を窺うことを優先しろ。万全とは程遠いのだからな】

心眼の言葉に小さく頷く、修行の疲労も抜けていない上に霊力も万全とは言えない。悪魔やゾンビ相手だから大丈夫と思っていたが、ここまで規格外のライダーが控えているなんて夢にも思っていなかった。

「……」

俺をジツと観察している、威圧感も圧迫感も感じているのにどこか敵意を感じない。ただ命じられたから俺と戦う、俺を捕らえようとする。

(本当に人間なのか?)

こんなことを考えてはいけないと判っているのだが、相手が人間とは思えない——まるでロボットか何かと戦っているような不気味さがある。

「……来ないのならこちらから」

滑るように向かってきたライダーに拳を繰り出すが届かない……当たる前に何かに弾かれているような、そんな不思議な感じだ。

「……えい」

「ぐっ!?!」

膝蹴りで身体を起こされ、肘打ちで地面に叩き落される。それほど力が入っているようには思えない打撃、それなのに俺の目の前はチカチカを明暗を繰り返していた。

(このままじゃやられる)

美神さん達が合流してくれるまで耐える。それすらも不可能に近

い、たった数回のやり取りで俺はそれを思い知った。

(横島。訂正する……前に出ろ)

(だよな)

護りに入ったら押し潰される。それならば前に出て少しでも相手の情報を掴むしかない、俺は玉砕覚悟で拳を握り、相手に向かって駆け出すのだった……。

くくえす視点く

妙神山にいるはずの横島が応援に来た。助けに来てくれた、それ自体は嬉しい。だが状況は良くなる所か、悪化の一途を辿っていた。

「せやッ!!」

「効きません」

大きく振りかぶった横島の拳が当たるが金属質の打撃音が響き、その拳は防御らしい防御もしていない相手に簡単に弾かれる。

「えい」

「ぐっ?!」

それほど力が入って無いように思える敵の攻撃は横島にダメージを積み重ねていく。横島は撤退しろと言っているが、ここで横島を残して撤退など出来る訳が無い。だが魔力も霊力も尽き掛けている今まともな攻撃を仕掛ける事はまず不可能だと言うことは明らか。

「……ブラドー伯爵、私の血で魔力は回復出来ますか?」

「……すまないが、お前の血は我には毒だ」

となれば血液で回復できるブラドー伯爵が頼みの綱だったが、私の血液は受け付けないと言われてしまった。

「で、では……私の血はどうですか!」

唐巢が1番ダメージが大きい、近接でひたすら悪魔を屠って来たのだ。霊力と魔力が尽き掛けている私よりも状況は悪い、下手をすればそのまま死んでしまうかもしれない唐巢の血を貰うわけには行かないとブラドー伯爵は首を左右に振る。

「カイガン! リョウマ! 目覚めよ日本! 夜明けぜよ!」

「変身ッ!」

横島が再び姿を変える。それは前に別世界の横島が訪れた時に使っていた、15の英雄眼魂の力。確かにその力は凄まじい物があるだろうが、横島の動きは明らかに精彩を欠いている。ここに来るまでのダメージかそれとも強い力をコントロール出来ていないのか、それともその両方か。判っているのは状況が最悪という事だ。

「ブラドール伯爵、神宮寺君。判っていると思うが、下手に攻撃をしては駄目だ」

唐巢が顔を歪めながら言う、本当ならこうして観察している余裕があるなら横島を助けたい。だが下手に攻撃をして、その注意がこつちに向けば、より横島に負担を掛けることになる。

「戦況を見極めるぞ、相手のあの異常な防御力、それを破る切っ掛けを探す」

「……判っていますわ」

助けたいののに、助ける事が出来ない。その悔しさに歯を噛み締め、なんとか横島の力になる方法をと必死に横島とあの謎のライダーの戦いに視線を向ける。

「ふっ！」

「ですから無駄です」

横島の攻撃は相変わらず相手には通らない、防御力が横島の攻撃力を完全に超えているのだ。どう足掻いても横島の攻撃が有効打になる事が無い。

「唐巢。お前の血は吸えない、下手をすれば死ぬぞ」

私の分析と同じく、ブラドール伯爵は駄目だと言った。弱りきっている今の唐巢は吸血に耐える事が出来ない、そして今使用できる魔法では相手の防御を突破できない。かと言って横島を見捨てて逃げる事も出来ない……八方塞がりの状況だ。

「みむううううッ!!」

「ぶぎゅうう!!」

チビとうりぼーの最大攻撃であろう雷と霊波砲が背後から命中する。

「……」

煙が僅かに出ているだけで、ダメージが通っているようには見えず。横島を殴り飛ばし、振り返りその無機質な視線をこちらに向けてくる。

「みむう!」

「ぶぎゅ!」

自分達の攻撃が効いていない事に驚く2匹だが、その攻撃によりあいつの意識がこつちに向いた。

【ガンガンハンド】

籠手から飛び出した長大な銃を手に取り、その銃口をこつちに向ける。

「……死になさい」

その指が引き金に掛かろうとした瞬間。凄まじい水流がライダーを飲み込み、壁に叩きつける。

「……遅いですわよ」

「……うるさい、こつちだつて必死だ」

シズクと共に沖田、信長、美神、蛍が必死の様子で駆けてくる。その姿を見て、横島の精彩が欠けていたのはダメージを受けていたからだと判った。

「くえす、何なのあいつ!? 仮面ライダー!」

「こつちが聞きたいですわよ。判ってるのは、ガープの配下と言う事だけですわ」

痛む身体に鞭を打って上半身を起こす。横島と共にいるタマモとシロが人ではなく、獣の姿をしているのは周囲を警戒しての事だろう、ここは敵の拠点のど真ん中。どこから奇襲が来るかわからない、だが奇襲の必要は無いのかもしれない相手が強すぎるから――。

「……敵は排除……」

【このおツ!!】

沖田が凄まじいスピードで踏み込み刀を振るうが、それは相手の指先で受け止められる。

「言いましたよね? 敵は排除します」

【んごふっ!】

【沖田あ!!】

踏み込んで放たれた蹴りが沖田の胴を蹴りぬく、吐血し吹き飛ぶ沖田に信長の悲鳴が響く、だがライダーはそんな信長を嘲笑うかのよう既に彼女の目の前にいた。

「人の心配をしている場合ではないです」

【なっ!?!うぐっ!?!】

次の瞬間信長も殴り飛ばされ、背中からビルに叩きつけられ瓦礫の中に消える。

「敵は排除するのみです、私が捕獲せよと命じられているのは横島忠夫、美神令子の2名。それ以外は抹殺対象となります」

冷酷にそして機械的に私達に視線を向けるライダー……その無機質な雰囲気恐怖を感じたのか、獣の姿のタマモとシロが狐火と霊波砲を打ち出す。

「……言ったでしょう? 抵抗は無意味だと」

炎と霊波は命中する前にバリアの様な物に弾かれ霧散する。地面を踏みしめこつちに近づいてくるのを見てシズクが思わず動き出そうとする。

「……!」

だがこの場面で回復能力持ちが死ねば、それだけで全滅する事を避けることは出来ない。

【こつちに出来ないでください!】

おキヌが瓦礫をポルターガイストで飛ばして、動きを止めようとするが、それは妨害にもならない。

「美神、破魔札は!」

「ここに来るまでに使い切ってる! あんなのがいるなんて予想外だったんだから!」

恐らく私達を回収して撤退するつもりだったのだろう。元々妙神山で修行に向かっているのだから、道具の手持ちはさほど無いはず。

(不味い不味い不味い)

このままでは何も出来ず全滅する。何か、何か無いかと必死に考えを巡らせていると横島が背後から走ってくる。

「させるか!!」

横島が背後から飛びつき、その動きを封じようとする。それは通常なら有効な手段だろう、相手の方が背が低い。後から拘束すれば通常なら相手の動きを束縛することは十分に可能だ。

「無駄です」

「ぐっくう……!」

肘打ちで横島の拘束を振り払い、頭を掴んで無造作に横島を投げ飛ばしてくる。

「横島!」

「横島君!」

【横島さん!】

蛍と美神が投げ飛ばされた横島を受け止めようとするが、当然その勢いを止められるわけもなく、3人ともごろごろと転がりやつと動きが止る。

「くつく……やべえ。強い、美神さん、蛍。難しいと思うんですけど……何とか撤退してください」

横島がふらつきながら立ち上がる。私達の中で1番攻撃力がある横島がダメージを与えないとなると、誰もダメージを与えることは出来ない、それに加えて横島の動きが精彩欠いているのはダメージも関係している。

「……これならどうだ?!」

美神達が止めに入る前に、横島が駆け出し、眼魂をベルトにセットしてレバーを引いた。

【カイガン!ゴエモン! 歌舞伎ウキウキ!乱れ咲き!】

走りながら両手のガンガンブレードでライダーに向かっていく。だが相手の対応は聞き分けの無い子供を相手にするような、そんな反応だった。

「シズク、水で飲み込んで撤退は出来ないのか!」

「……出来るならとつくにやってる!」

ブラドローの言葉にシズクが怒鳴り返す。何らかの術で私達が弱体化している、もしくは相手が強化されている。そして転移なども出来



ない

……状況はただでさえ絶望的だったと言うのに、状況は更に悪化する。

「そうですか、まだ抵抗しますか、では仕方ありませんね」

敵のライダーはパーカーから何かを取り出す、それは瓶に入った赤い液体——それに私を含め、全員の驚愕の音が響いた。

「狂神石!?!」

神魔を狂わせ、英霊を歪める恐るべき結晶。そのライダーは狂神石の瓶を2つ無造作に取り出し籠手のスロットを開けて、その中にセツトする。

「……様子見と手加減はここまでにさせて頂きます」

ガシャンという異様な音と共に、空になった瓶が排出される。すると今まででも恐ろしい圧力を放っていたと言うのに、その圧力が段違いに強くなる。

(そんな……まさか)

眼魂と狂神石の相乗効果による圧倒的な攻撃力と防御力、それがあいつの異常な強さの理由だと言うのか? もしそうなら、今の私達のあれに対抗するだけの戦力は無い。

「……これで終わりです」

狂神石の禍々しい紅いオーラと纏った相手は別の眼魂を取り出し、腕の籠手に装着する。まさか他の眼魂まで所持していると言うのか?! あの規格外の強さから更に強くなる。その姿が容易に想像でき、最悪の結果が脳裏を過ぎる。

【セツト! ロキ! レディ?!】

「……変身」

【プレイヤー・イン・ラグナロク! フアントムコール!】

紅と金を基調にした派手なパーカーを身に纏い、自身の身長と同じくらいの剣を手にするライダー。だが眼魂のコールは聞き捨てならない物だった。

「ロキ!?! 北欧の悪神!?!」

「最上級の神魔の眼魂ですって!?!」

北欧神話のラグナロクを引き起こした最悪の存在。その悪神の眼魂を使用した……しかも狂神石で能力にブーストを掛けた状態だ。それはただでさえ悪い状況が更に悪くなったと言う事だ

「……こうなると手加減は非常に難しいのです。なのでどうか死なないでください、まあ死んでも魂さえあれば問題ないのかもしれないですけど……痛いのは嫌でしょう？大人しくしていてくれれば、こっちもそれなりの対応が出来ると思うんですけど……」

横島の攻撃を受け止め、その剣と杖が一体化したような武器を振るう。

「ぐつくつくつ……」

両手に手にした剣をクロスさせて受け止める横島だったが、横島が使えば甚大な負担を与える神霊眼魂、そしてロキと言う最上級の神魔眼魂。その出力の差は明白だった、拮抗は一瞬にも満たず、剣を弾かれ杖の部分の殴打が横島を襲う。

「ぐつーまだまだあ!!」

一瞬ふらつく横島だったが、すぐに態勢を直し剣を振るおうとする、だが横島の決死の行動も……その全てが無力だった。

「何度でも言いましょう、抵抗は無意味です」

「うつぐあああああああ!」

指を鳴らされると同時に展開された魔法陣から炎の柱が上がり、横島の姿が火柱の中に消える。その光景に周りにいた全員が悲鳴を上げる。

「ぐつくつ……」

【ダイカイガン!グレイト!!オメガドライブ!】

ふらつきながら立ち続けていた横島は震える手で腰のレバーを掴み引き、全身に霊力の光を纏う。

「どうして諦めてくれないのですか?」

【シンピガン!ロキ!フアントムバーストツ!!!】

横島とライダーが飛び上がるのはほぼ同時で、光を纏った飛び蹴りが交差すると思った瞬間。

「おらああああ!くたばりやがれええええ!!」

「!?」

背後から飛んで来た精霊石ロケットが相手に命中し、バランスを崩した。横島と交差する瞬間の事だったので直撃するはずだった、それは僅かにずれる。

「くっぐぐううううう!!」

「ここまでです」

だがお互いの蹴りが交差すると言う結果は変わらず、そして無慈悲にも横島に相手の蹴りが命中し、横島は爆発しながら吹き飛んだ。

「がつ!!」

【オヤスミー】

身体に刻まれた魔法陣が最大の光を発すると同時に横島は爆発の中に消え、爆炎の中からオヤスミーと言う声が響く。ミサイルが飛んで来たほうを見るとオープンカーに乗っている琉璃と運転席に座っている女、そして2人の男。そのうちの片方が煙を放つロケットランチャーを担いでいるので今ぶっ放したのがあの男だと判る。

「美神さん!これはどういう、と言うかなんでロケットランチャー撃ったんですか!?!」

「生きてるならぶっ殺す、死んでるならぶっ飛ばす。それが一番早い」  
「なんですあの男は……言ってることとやってる事は無茶苦茶だが、そのロケットランチャーのおかげで横島に直撃しなかった。その事に関しては感謝しなければならぬ、そうでなければ横島は確実に死んでいた。」

「……!」

シズクが即座に行動に出た、気絶した横島の近くに幸いにも消火栓があり、破壊された消火栓から水が噴出し続けており、そこに転移し、横島を捕らえようとしていた相手よりも早く横島を回収する。

「……横島を渡しなさい、そうすれば貴女達に危害は加えないと約束……「隙を見せたな、化け物め」

影から飛び出した金色の影がライダーの胸に蹴りを叩き込み蹴り飛ばす。あれはベルゼブル!?!どうして此処に……。

「ブリュンヒルデー!撤退だ!全員を跳ばせ!」

「……くっ！は、はい!!」

ルーン文字が私達の前に現れ、私達はその場から姿を消し、何処かのビルの中にいた。

「蛍！横島君！大丈夫か!？」

「お父さん!？」

蛍の言葉からここが蛍の父親のビルだと判り、限界を超えていた私は安全な拠点と判った瞬間に意識を失い、その場に倒れるのだった……。

「逃がしましたか……」

【リターンオブコール!】

残されたライダーは姿を見失ったことに対して興味も抱いていないように、腕の籠手を操作して変身を解除する。

「……良いのか？追わなくても」

塔の影から姿を見せたローブ姿の男に変身を解除した少女は振り返った。

「待つていればあちらから来ます。こちらから仕掛けるまでも無いでしょう」

「……まあどの道チェックメイトまではそう時間は掛からないか。では再び待つとしようか、レイ。それともレブナントが良いかね？」

「……どちらでもお好きなように」

レイ、それが少女の名前であり、レブナント。それが彼女の変身するライダーの名前であった……。

く 琉璃視点

私が塔の前に来た時。くえす達はボロボロ、沖田さん達も瓦礫の中で倒れ全員が致命傷かそれに近い負傷を負っていた。特に横島君が重症だ。今は優太郎さんのビルの地下で治療されているが、何時目を覚ますかも判らない。

「大丈夫かい?」

「……大丈夫に見えるなら、お前は目玉をくり貫いて交換して来い」

「……申し訳ないですが……限界が近いかと……」

ブリュンヒルデさん、そしてベルゼブルさんの両名は息も絶え絶えと言う様子だった。だけど私と美神さんは問いたたださなくてはならない。

「優太郎さん。貴方は……神魔ね？」

美神さんがそう切り出した。今この場にいるのは、私と美神さん、そしてブリュンヒルデさんと高城と名乗っているベルゼブルさんの4人だけだ。蛍ちゃん達は横島君が重症なので病室にいるし、唐巢神父、ブラドール伯爵にくえすも限界ギリギリだ。不動さん達も平気そうにしていたが、疲労困憊で今は休んでいる。今だからこそ尋ねられる事を探ねる、どんな答えでも自分達の胸の中にしまっておくつもりだ。

「……そうだね。私は神魔であることは認めよう、そしてその性質がブリュンヒルデとは異なり、ベルゼブルに近いことも認めよう」

優太郎さんは少し悩む素振りを見せてから神魔であることを認めた。そしてベルゼブルさんに近いと言う事は、その性質は「魔」しかも最上級の魔族であると言う事を遠まわしに認めたのだ。

「蛍ちゃんは先祖返りじゃないの？」

美神さんがそう尋ねる。蛍ちゃん、蓮華ちゃん、あげはちゃんの3人は優太郎さんの娘となっている。だが優太郎さんが魔族となると、血縁関係があるとは思えない。美神さんの問いかけに優太郎さんは首を横に振り、先祖かえりと言う事を認めた。

「いや、蛍は紛れもなく先祖がえりだ。私は何百年か前に人間界で活動していたこともある、私の力を分け与えた者もいた。その子孫が蛍や、あげは、蓮華だ。孤児の彼女達に私は父親として接してきたつもりだよ」

蛍ちゃんはそれを知っているの？の言葉は私も美神さんも飲み込んだ。多分蛍ちゃんはそれを知った上で、優太郎さんを父と呼んでいる。それだけの信頼関係があるのは判っていたから、そして蛍ちゃんも父親が魔族であることを黙っていた、それはきつと今の情勢を考えたので、そこを責める事は出来ない。

「真名は教えてはもらえないかしらっ？」

「……すまないが、それは出来ない。ただ……そうだね。1つだけ、これだけは言おう」

優太郎さんはそこで言葉を切り、真剣な顔で私と美神さんを見つめて、衝撃的な言葉を告げた。

「私は……ソロモン72柱である。それもビュレト、ベリアルと友人関係であるほどの地位を持つと」

「!？」

それは予想を遥かに超える返答だった。ソロモンの魔神……神魔であることは判っているが、まさかそんな存在とは思わなかった。

「ただ今は神性を放棄しているから、人間と変わらないけどね。それよりもだ、今話すべき事は私の正体を探ることじゃない筈だ」

まだ隠している事は多いだろう。それでも味方をしてくれてる、そんな人を疑うより、今は現在の東京の状態を知るべきだ。

「……判ったわ。色々聞きたい事はあるけど、今は我慢するわ」

「すまないね。私も話せるなら全てを打ち明けてしまいたいが、それも出来ない事情があるんだ」

本当に申し訳ないと頭を下げた優太郎さん。その真摯な対応を見ればこれ以上問いただすことは出来ない。

「話は済んだか、私もブリュンヒルデも休みたいんだ。私達が命を賭けて見てきた事を話しても良いか？」

「……色々と思うことはあると思いますが……今は私達の話聞いてください」

余裕そうに見えるが辛そうな顔をしているベルゼブルさん、そして青白い顔をしているブリュンヒルデさん、最上級の存在である彼女達がここまで消耗している理由。そして今東京で何が起きているのか……それを知らなければ、何も打つ手は無い。

「今、この地は丸ごと異界となっている。外から来る事も不可能であり、そしてまた外に出ることも不可能。今東京は陸の孤島と化している。更にあの塔にむかって星が落ちて……私達に残された猶予は96時間……4日であの塔を破壊しなければ……日本は滅ぶ」

それが私とブリュンヒルデの調査で得た答えだと告げられ、私も美

神さんも頭の中が真っ白になるのだった。

リポート24 反逆者達の進軍 その3へ続く

## その3

### レポート24 反逆者達の進軍 その3

時間は少し遡り、美神達が地面に落下したのと同時刻、結界の外で小竜姫、竜神王の2人もまた同じように地面に叩きつけられていた。いや、美神達よりも2人の状態は深刻な物だった。結界に弾かれると同時に、悪魔達の強襲……ダメージを回復する暇も無い戦いに2人は疲弊しきっていた。

「はあ……はあ……うつ……」

「ぐっ……畏に飛び込んだか……不覚……」

津波のように押し寄せる悪魔達を殲滅した頃には小竜姫も竜神王もダメージによって立ち上がることも出来ず、その場に膝を付いた。「……ぐっ……りゅ、竜神王様……なんとかして……私だけでも中に入れてませんか……」

右腕から血を流し、その着物を真紅に染めている小竜姫が剣を杖代わりにして立ち上がり、竜神王にそう懇願する。

「そんな有様で無茶を言うな……それに……今は東京には……入れん」

一緒にいた美神達は恐らく結界の主。つまりガープに招待されていたので入る事が出来たが、招かざる客は東京に足を踏み入れることすら叶わぬと竜神王は忌々しそうに結界を睨みながら告げた。

「……撤退だ。このままでは、私もお前も危ない」

「で、ですが……くっ」

竜神王に詰め寄ろうとした小竜姫だが、それも叶わず膝を着く。いまの自分では助けになる所か足手纏いと悟った小竜姫は悔しそうに、顔を歪め足を引き摺りながら竜神王の側に向かう事しか出来なかった。

「対策を整えて、あの結界を突き破る必要がある……やつらめ、とんで



もない事をしてくれる」

「……そんな?」

竜神王の視線の先を見て、小竜姫は悲鳴を上げる。2人の視線の先には徐々に近づいてくる巨大な星の姿があったのだ……

く美神視点く

優太郎さんのビルの応接間、そこで高城に告げられた言葉に頭の中が真っ白になった。

「ごめんなさい、もう1回言ってくれませんか?」

どうか私の勘違いであって欲しいと思い、もう1度言ってくれと頼む。高城は溜息を吐きながら、受け入れ難い事実だろうかと前置きして、詳しく説明してくれた。

「東京の中心に現れたあの塔にむかって星が落ちている……私達に残された猶予は96時間……4日である塔を破壊しなければ……日本は滅ぶ」

聞き違いじゃなかった。96時間でもう1度あの塔へ向かい、なおかつ強くなっている筈の沖田ちゃん達を一撃でKOし、変身している横島君を常時圧倒していたあのライダーを倒して、あの塔を破壊する。どう見積もってもそれは不可能としか思えなかった。

「更に言うと、結界内の神魔は著しく弱体化するし、外から援軍を呼ぶことも不可能だ」

追加で齎された情報に思わず琉璃がヒステリックに叫んだ。

「そんなのどうやって不可能じゃないですか!」

「そうだな、私もそう思うよ。だがやらなければ日本に住む全員が死ぬ、何もせずに諦めるのか?」

挑発するような高城の言葉。普通ならこんな話を聞けば、ヒステリックに叫ぶか、諦めるかの2択だろう。だけど、私には何か手があるのが判っていた。

「貴女のボスが横島君を死なすのをみすみす見逃すとは思えないわね。業と挑発するようなことを言ってるけど……手が無い訳じゃないんでしょう?」

私の言葉に高城はふんつと鼻を鳴らしてから、ソファアにどつかと腰掛ける。香港であった明けの明星、どうも横島君を気に入ってる様子だから、むぎむぎ死なせるわけがないと信じたい。最悪でも横島君や蛭ちゃんと言った次代のGSだけでも日本から避難させて欲しいと思うのは当然の事だ。

「手は無いわけじゃない、だが100回やって1回成功すれば良い程度の勝率だ。正直に言おう、こんなものは作戦とも言えん、命を賭けた大博打だ」

100回やって1回成功するかどうか、大博打も良い所だが、それしか手が無いならそれに賭けるしかないだろう。

「詳しく聞かせて、時間は有限なんだから」

96時間……4日しかないのだ、時間は1秒だって無駄には出来ない。

「今の段階で判明しているのは、あの塔は魔族の扱う結界術をベースにしていると言う事だ」

「土角結界とか、火角結界ですね」

高城の言葉に琉璃が即座に結界の種類を言う、火角結界はGS試験でも見たのでとても印象深い結界だ。そして魔族の結界術の中でも極めてポピュラーな物でもある。

「ああ、だがベースにしているというだけで、その結界に当て嵌まるわけではない。基本的なシステムが同じという事だ、つまり、中心を

破壊すれば結界は機能を停止する。そしてあんな塔を作り上げたんだ、結界のコアは紛れもなく登頂部にあるだろう」

ここまで聞けば作戦と言うのは大体理解した。と言うか理解してしまった……作戦なんて言えない、限りなく特攻に近い物だ。

「塔に突入して、登頂部のコアを破壊する事が作戦？」

「そうだ、結界を破壊し、隕石の誘導を停止させる。そうすれば後は力を取り戻した、私達も協力出来る」

殆ど特攻に近いそれが私達に残された、生き残るための道。しかも神魔の力を借りれないとなると、負傷している横島君も当然借り出されるし、エミヤ、冥子に、ピート達も総動員されての作戦になるだろ

う。

「予定としては2日。2日を使い、塔の内部の情報を可能な限り集める、そして装備を整える。突入が無理な場合は」

優太郎さんはそこで言葉を切り、窓の外を見つめる。そこには既にゆっくりと降下している隕石の姿があった……。

「隕石を破壊するという方向でドクターカオスに連絡を通して」

突入し登頂部を目指すか、隕石を破壊し、96時間と言うタイムリミットを無くすかの2つ。明確な目的が出来たのは良いが、その前には横島君を完膚なきまでに叩きのめしたライダーの撃破という大きな壁が立ち塞がる。

「これ、横島君を徹底的に叩き潰したライダーの戦闘記録。これの対策が絶対必要だわ」

私の手から飛び立ったトカゲデンワが壁に映像を映し出す、映像記録としては5分ほど、だがその記録映像で相手の脅威は十分に伝わるはず、私はそんなことを考えながらノイズ混じりながら横島君が必死に記録した、相手の姿に視線を向けるのだった……。

くカオス視点く

今東京に向かって落ちてきている星の情報を可能な限り集めているのだが、集めれば集めるほどに状況が絶望的なのだと思います。知らされる。

「ええい！また駄目じゃ！マリア、テレサ！パターンDの解析記録を回してくれ!!」

隕石を破壊するには霊力では駄目だ、純粋な攻撃力と火力が必要なのだが、神魔は弱体化し、そして他の支部や政府とも連絡が取れない。恐らく既に対策に動いているじやろうが、連絡が取れないのでは連携の取り様も無い。

「ドクターカオス、どうぞ」

「これ！」

マリアとテレサがくれた資料に必死に目を通し、どこかに突破口を

探す、考えても考えてもあの隕石を破壊する手段など思いつかない。

(ミサイルを強化するか?)

自衛隊基地の戦闘機用のミサイルを改造するにしても時間がない、しかもあの面積だ。ミサイルで何とかできるとも思えない……。

「……はいーもしもし!!」

電話が鳴りいらだちながら受話器を手に取る。

『もしもし、ドクターカオスか!? 僕だ。西条だ!』

西条からの電話と言うことでほんの少しだけ冷静さを取り戻す、今は仲間内で仲間割れしている場合では無いからだ。

『時間がないので要点だけ言う、自衛隊の武器は既に悪魔によって破壊されていて使い物にならない! 戦闘機や戦車も同様だ』

その報告に舌打ちする、戦闘機を無人に改造して隕石にぶつけると言う作戦は実行する前に潰れた。

『芦優太郎と言う人物のビルに令子ちゃんや神代会長がいるんだが、横島君が重症だ!』

「なんじゃとー横島が重症じゃと!」

ワシの言葉にマリアとテレサが椅子から立ち上がる、妙神山にいるはずなのに何故横島が東京にいて、重症なのかそれは知りたかったが、そんなことを悠長に話し合っている時間は無い。

『良いかい、今から白竜寺の雪之丞君、クシナ君、陰念君。そして三蔵さんと綱手さんの5人が貴方の家に向かう! その5人と合流し、優太郎さんのビルに向かってくれ!』

それはこのまま個別に対策をしていても、何にもならないと言う事であり、そして横島の治療の人手が必要だというのが判った。

「判った準備を整えて、出発の準備をする!」

『そうしてくれ! 僕はこのまま、六道の屋敷へ向かう!』

西条はその言葉を最後に電話を切った。兎にも角にも生き残り全員を優太郎の元へ集め、残された96時間で隕石と塔を何とかする。その方法を考えないといけない。

「マリア! テレサ! 霊薬の材料を全てバッグに詰めろ! ワシは開発中

の霊具を運ぶ！時間がない！急げ！！」

「は、はいっ！！」

ワシの珍しい怒声にびくんと身を竦め、行動に出るマリアとテレサ。2人を見ながら地下の研究室へ走る、試作段階の霊具が培養液の中に浮かんでいるので、それを急いで排出する。

「ええい、まだ実戦段階では無いというのに！！」

未来でのアシユタロス戦役の時に見た、竜の牙やニーベルングの指輪による、美神の強化。流石に神具による強化は負担が大きいので、擬似神具……聖句や聖水で清められた素材と擬似精霊石で作り上げた神具を研究していたのに……試験の前に実戦投入しなければならぬことに舌打ちする。

「結局ぶっつけか！いつもこんなじゃ！！」

調整している時間はあると思うが、それでも安定起動するか不安が残る試作品を鞆の中に突っ込みマリアとテレサと共に家を出る。ガーゴイルをふっ飛ばしながらドリフトを決めて停まる車に絶句する、だがそうしなければ振り切れないと言う事なのだろう。

「早く乗れ爺さん！」

「誰が爺さんじゃ！」

ワシの事を爺さんと呼んだ陰念に文句を言いながら車に乗り込む、運転席でハンドルを手にしていたのは予想外にもクシナで、助手席には着物姿の女性があった。

「喋ってる時間は無いですから口を閉じて、なんでも良いから掴まっ  
て下さい！綱手さん！」

「判ってる」

指で印を結ぶと同時に車が霊力……いや、これは神通力か、それに包まれ急降下してきた悪魔を弾き飛ばす。

「よっし！クシナ行っちゃえ！！車なら後で買いなおすわ！！」

「はい！全力で行きますよ！！」

ゾンビや悪魔をぶっ飛ばしながら走り出すバン。その凄まじい加速に思わず座席に抱きつくようにして耐える、その時に雪之丞と陰念と目が合う、諦めきったその目を見て、ここに来るまでの惨劇が容易

に想像できる。

【行け行けー!!!】

「人間の反応は無いからぶっ飛ばしなッ!!!」

「はいっ!!!」

アクセルを容赦なく踏み込むクシナ。ブレーキ役がない所か凶悪な焚きつけ役が2人もいる、2人がとんでもなく遠い目をしている理由が判った頃にはもう遅い、ジェットコースターのように上下左右に振られることに歯を食いしばって耐える事しか出来ないのだった。

「はわわあああああ!?!無理無理無理いい!目が回る!?!気持ち悪い!!!」

「あわわあああああ!?!無理無理無理ですう!!横島さーん!!!」

気持ち悪いと叫ぶテレサと横島に助けを求めるマリア。もうなると言うかバンの中はほんの数分で地獄絵図と化しているのだった……。

〈蛍視点〉

お父さんのビルの地下の結界で護られた1番奥の部屋で横島は眠っていた。シズクが作った水の布団に包まれ、ほんの少しだけ身体が浮いている。

「くえすも聞いたでしょ、96時間であの塔を攻略できると思う?」

「正確にはもう90時間切ってるでしょうね」

私の言葉にくえすが即座にそう訂正する。その言葉に、もう6時間経ってるのかとぼんやりと思った、ドクターカオスや、マリアさんとテレサさん、それに白竜寺の面子と言う全員が集まったのがもうずいぶんと遠くのように思える。ドクターカオスとシズクと綱手さんの治療で横島の顔色はずいぶんと良くなったが、それでもその顔色は悪い。皆追い詰められているのに、ベッドの側に腰掛け横島の側から離れる事が私も、くえすも出来なかった。美神さんや琉璃さんは私達の事を考えてくれたのか、何かあったら呼んでといって私達をこの場に残してくれたが、皆が動いているのと言う罪悪感がどうしてものし掛かってくる。くえすも私も黙り込んで沈黙していると、部屋の中から叫び声が響いた。

「あいだだだだあああああ!!!痛い!身体がバラバラになりそうなくらい痛iiiiiiii!!!」

横島が目を覚まし、痛いと呼び始める。その声に椅子から跳ね起きて扉を開ける。

「シズク!シズク!!!横島!横島が起きたわー!早く!早く!!!」

ブラドール伯爵や唐巢神父の治療をしていて、別の部屋にいたので早く来てくれと叫んだ。

「横島!暴れては駄目です!」

その後ではくえすが横島に暴れてはいけなと声を掛けて、身体を押さえている。1人では抑え切れないと思ひ私も手伝うと、横島は暴れるのを止めたが、その代わりに大粒の汗を流し呻き始める。

「がつぐうう……あぐう……」

今負傷者の中で一番重症なのは間違いなく横島だ。早くシズクに来てほしいと思っていると扉を蹴り開ける勢いでシズクが飛び込んでくる。

「……横島、動くな。大丈夫だ、すぐに痛みは無くなる」

シズクがペットボトルの蓋を開けて、中身を横島に振り掛ける。それは横島の体に触れるとゼリーのようになり硬化し、横島の身体を包み込んでいく。最初は私もくえすも驚いたが、飲ませるのも今の横島では危険だし、傷だらけの身体に直接振りかけるのも無理と言う事で、こうしてスライム状にして、横島の身体を包み込むようにするのがもっとも回復が早いとシズクは言っていた。

「……お前の靈力に調整してある。下手に動かなければ大丈夫だ、後1〜2時間で身体の痛みは引くはずだ」

シズクが横島にそう声を掛けると、治療の効果が出ているのか、徐々に横島は穏やかな表情になり。額に大粒の汗こそ浮かんでいて、それでもさつきのような死人のような顔ではなく大分落ち着いていた様子で、私もくえすもやっと一息つく事が出来た。

「ありがとう」

シズクに礼を言った横島は自分がどこにいるのかと思ったのか、頭と視線を動かし始める。そして私を見つけると、顔だけをこちらに向

ける。

「蚩……あの後どうなったんだ？」

あの後……横島が光の柱に飲み込まれた後の事を聞いているのか、それともここに来るまでのことを尋ねているのか……恐らく両方だと判断する。

「あの後聖奈さんと高城が助けに来てくれて、奇襲で相手を蹴り飛ばして、ルーンでお父さんのビルまで逃げてきたわ」

2人とも弱体化していたらしく、確実に助けられるタイミングを計っていて、結局全員ボロボロになるまで割り込めなかったと2人に謝られた。けどどうして全員無事とは言いがたいけど、逃げ切れたのは彼女たちのおかげなので文句を言うつもりは無かった。横島が口を開こうとした時、くえすが指でその口を塞いだ。

「今は自分の身体を回復させることに専念することですわ」

だから眠りなさいとくえすが言うが、横島は無理にも身体を起こそうとするので私もくえすも咄嗟に手が出してしまった。

(全然身体に力が入ってない)

力なんか全然入れてないのに、横島の動きを簡単に止める事が出来た。それだけ横島が重症なのだと判った、本当に死ぬ一歩手前だったと判ると額に冷たい汗が流れるのが判った。

「私達の怪我なんて軽い物なのよ、横島。今横島が1番重症なの、シズクの言うとおり治るまでは大人しくしていて」

「その通りですわ。状況は後で説明します、今は身体を休めてください」

2人で大人しくしている、休んでいろうと言うと横島の顔から表情が消えた。その顔に思わず息を飲んだ、横島のそんな顔は見た事が無かったから……。

「誰か死んだとかは無い……よな？」

不安そうに言う横島。自分が気絶している間に誰か死んだんじゃないのか？と不安でしょうがないのだろうと判った。

「大丈夫、怪我をしている人はいるけど、死んでる人はいないわ。本当に横島が1番重症だから、今は無理をしないで」



「嘘じゃないよな？俺を安心させようとしてるとかじゃないよな？」  
動かない身体を無理に動かして、私の腕を掴む横島。その手は小刻みに震えていて、目には涙さえ浮かんでいる。

「大丈夫ですわ。全員無事ですから、私と蛍が嘘をつくと思いますか？」

「そうよ、大丈夫だから今は眠ってて横島」

横島の頭を撫でながら言うと、横島は不満そうにしていたが、その内目を閉じて穏やかな寝息を立て始める。

「……外も中もボロボロだ。８８時間と言うタイムリミットがあるが、横島自身は１０時間で完全回復する目安だが……私は横島を戦わせるのは反対だ」

シズクに言われなくても全員が反対するのは判っている。でも全員が反対したとしても、横島は戦うことを選ぶだろう。

「ジャンヌ・ダルクの事があるわ」

私も美神さんも意図して黙っていた。すぐに美神さんの事務所の事もあり、説明する時間が無かった。だけど横島の今の反応を見て、やはりジャンヌの事は横島にとって根深いトラウマになっていると確信した。

「ジャンヌ・ダルク？英霊が何か関係しているのですか？」

「……中世でガープが呼び出して、属性を反転されたジャンヌに横島は助けられたのよ。でも、ジャンヌは横島の目の前で消滅させられて眼魂になっても横島を助けた」

正直発狂し、魔に堕ち掛けていた横島を引き戻したのはジャンヌがいたからだ。もしそうでなければ、横島は完全にガープの手に落ちていたと思う。

「……チツ、トラウマか……」

「……そうなるか」

目の前で知人がいなくなる事、それが横島にとって根深いトラウマとなっている。仮に、横島を縛り付けて、私達だけで塔に向かったとしても横島は何をしても合流しようとするだろう。それだけ根深いトラウマとなっている……今のあの必死の表情を見て私はそれを確

信してしまった。

「デリケートな部分過ぎて踏み込めないですわ」

「……だから黙ってたのよ」

心の中でもデリケートすぎる部分だ。そう簡単に触れてはいけない部分なので敢えて黙っていたが、東京に着てすぐくえすの元に駆け出したのも、トラウマの事だと思う。

【あのー、蛍ちゃん、神宮寺さん。美神さん達が呼んでいるので、そろそろ会議室をお願いします。私とシズクちゃんで見ているので】

壁から顔を出したおキヌさん、横島をおいて行くのは不安だったけど、今のやり取りも美神さん達に伝えないわけに行かないので、おキヌさんとシズクに任せて部屋を出る。

「はあ……」

「溜息も出ますわね」

近くにいる筈の私達よりも、もう会えないジャンヌの方が横島の心に近い。それを知ってしまい、おもわずくえすと共に深い溜息を吐くのだった……。

悪魔やゾンビが闊歩する街。その場所には似つかわしくない2人の美少女が鼻歌交じりで闊歩する。

「全く、ずいぶん面白いことになってるではないか」

「そうだね」

自身に向かってくるゾンビや悪魔を日傘で容赦なく殴り、突き刺し、切り裂き、そんなものは障害にもならないと言わんばかりに世間話続ける少女達。青のエプロンドレスと真紅のドレス姿とこの場には相応しくない、服装でありながらも、そうあるのが当然と言うべき雰囲気満ちていた。

「しかしだな。明星よ、こうなる前にあやつらを潰すという選択肢もあつたのでは無いか？」

「そうだね。でもね、あんまり甘やかしても成長は見られないじゃないかな  
いか、女帝」

言わずもがな、その少女達は史上最強の墮天使ルシファー事ルイ・サイファールと666の女帝ネロの両名だった。今までアスモデウス陣営の出鼻を挫き、面白おかしく戦況を引つ掻き回していた2人がこうして東京に戻ったのはつい2時間ほど前の話だ。正直この2人がいなければ天界も魔界も人間界もとつくにアスモデウス達に掌握されていてもおかしくなかった。だが2人の妨害が合ったからこそ、宣戦布告に留まっていたのだ。

「窮地に追い込み、横島がどんな力を発揮するか見たくないか？」

「うむ、それは……面白そうだ」

「だろう？」と笑いあうルイとネロ、だがその顔は邪悪とも言える色に満ちていた。

「仲間を失い、復讐心に芽生えるか」

「それとも仲間を生かし、自ら死地に歩むか」

そこで言葉を切った2人は楽しくて仕方ないと言う様子で笑いながら

「どちらにせよ、横島には素晴らしい試練となる」

より強靱に、より強く、その魂を磨き上げるためには劇的な試練が必要だ。だからこそ、ネロもルイもこの地に滅びの塔が建つのを敢えて見逃した。

「まあ死ぬようならば、そこまでの人材と見るさ」

「だな、だが余の勘では横島は成し遂げるぞ。あの塔の破壊を」

そんなのは私も同じだよと笑いながら、ルイとネロは歩む、今から始まるであろう人間達の戦いを最も楽しめる場所へと……

隕石落下まで後……88時間

リポート24 反逆者達の進軍 その4へ続く

## その4

レポート24 反逆者達の進軍 その4

〜美神視点〜

西条さん、三蔵ちゃん、綱手という仙人にドクターカオスにエミ、冥子に冥華おば様と言うあの塔で何が起きていたか？それを知らない面子が見ている中。トカゲデンワが戦闘記録を映し終え、変形し私の手の中に納まる、

「……すまないが、僕にはあれに勝てるビジョンが全く浮かばない」

嫌な沈黙が満ちる中。西条さんが苦しそうにそう呟いた。その意見は先に見ていたカズマや高城も同意見だった、魔力の度数を計測しても計測器が振り切れるレベル。つまり、あの塔の中は魔界と言ってもいい状況の筈だ。

(少しでも情報収集してくれるけど)

同じ話を聞いても時間の無駄と言って、カズマ、高城、ブリュンヒルデの3人は少しでも、情報を集めるために外に出ているため今はない。今回の話し合いは状況の整理と言うのが大きい。

「よく生きて戻ってこれたワケ」

エミがそう呟く、私もそれはそう思う。相手の方が圧倒的に強く、成す術もなく叩きのめされる横島君の映像を何度も見るのは辛い、それでも見なければ突破口なんて見いだせない。

「後88時間後にあの塔に隕石が落ちてくる、それは間違いないことじゃ、戦闘機やミサイルを使って破壊も考えたが……既に破壊されるおる。正直残り80時間で、あれを破壊できるほどの物を用意する自信は無い」

私達の活路があたの塔に突入するだけに今この瞬間に決まってしまう。

【ざっと高さを見て350mほどと推測するヨ？普通に登ると考えて、そうだね……全力で駆け上る40分としよう。そうなれば時間的余裕は75時間となるだろう、しかし、しかしだヨ？悪魔やゾンビな

どの群れ、そしてボーイを叩きのめしたライダーの存在を加味し、準備や突入までに体力を回復させる時間を考えると……」

教授はそう言うのと、掛けていた眼鏡を外し、ハンカチで拭いながら冷静に分析した結果を告げた、

「突入までに使える時間は60時間以内、1日の猶予を持って塔に向かうべきだね」

負傷している面子が回復するまでの時間、準備や偵察をする事を考えると2日と半日。それが私達が自由に使える時間となる……それは余りにも短い時間だった。

「でも間違いなく、相手は妨害を打って来る。あのバカみたいに強い奴を突破したとしても、その先にまだ何かあると見て間違いないよ」  
「あたしもそう思う」

350mの塔を防衛することを考えれば要所要所、もしくは各階層ごとにバカみたいに強い門番がいると考えて良いだろう。

「冥華おば様、冥子、あいつの無敵性って映像からわかる？」

今この中にいる面子の中で分析に特化してる2人にそう尋ねる

「えつとねえ、多分だけど、狂神石のエネルギー全部を、障壁とかに回してると思うから、それを突破出来るだけの攻撃力が、いると思うわ」

「私は冥子とは逆の意見よく狂神石のリソースを攻撃に回して、神霊クラスの、神通力で防御してると思うわ」

2人の意見は残念な事に揃わなかったが、何らかの方法で防御しているという考えは一致していた。

「悪いんだけど私。狂神石って知らないんだけど、どんな物なんだい？見たところ液体のように見えるけど……」

「僕もだね。狂神石と言う名前からして、禍々しいけど、なんなんだい？」

綱手と西条さんの質問に琉璃を見る。琉璃は小さく舌を出す、一応狂神石はSSSランクの機密になるから当事者以外は緘口令が敷かれている。

「ガープが使ってる紅い石で霊力や魔力を強化するんだけど、狂神石

の名前の通り、精神を狂わせて凶暴化させる。今までの事例だと、神魔も操られて、英霊も操られてる。規格外の魔力物質って所だと思わ

「魔も操られて、英霊も操られてる。規格外の魔力物質って所だと思わうわ」

固体にも液体にもなるのが厄介な所なのよねと付け加える。これ水とかに混ざられたら、それだけで人間全員が操られる結果になると思う。

「危険な物質って事ね。それを身体に吸収して、能力を強化する……これ勝てる？」

「……難しいね、私もこんなナリでも仙人だから、肉体じゃなくて魂の存在だからね。近づいて我を失うって可能性もゼロじゃない」

英霊組みの攻撃が一切通らないと言うのも謎だ。少なくとも妙神山でパワーアップしているのは間違いないのに、攻撃が通らないのが不思議で仕方ない。

「正直今の段階で有効打撃を与える方法は不明、なんとかしてやり過ぎす事が出来れば良いんだけど……」

「それは不可能に近いワケ」

あれだけの強さを持つ相手だ。間違いなく番人として立ち塞がるだろう、どうすれば倒す事が出来るのかと頭を悩ませているとパンパンと手を叩く音が響いた。

「くひひひ、今解決策が出ないことを考えても一緒だろう？今は破壊されること前提で塔の内部の情報を集めることじゃないのかな？」

それは柩の声だった。予知能力で何か判らないだろうか？と期待を込めて全員が振り返り停止した。ふわりとした紫色のドレスの妙齢の女性の胸の中に柩はしっかりと抱きしめられていたからだ。

「どうもーこんにちわ。ソロモン72柱ゴモリーよ、戦うことは出来ないけど、知恵を貸しに着たわ」

嘘でしょ？と言う考えが全員の頭の中を過ぎるが、慌てて部屋の中に飛び込んできた優太郎さんが制止に入る。

「勝手にうろろろしないでくれるか?!ゴモリー!」

「ええー私ってあんまりジツとしてるの好きじゃないのよ」

この自由さ、そしてこの威圧感。紛れも無く神魔で非常に軽いノリだけど、ゴモリーであると言う事は嫌でも判った。

「今来ました……えつと……なんですか？この雰囲気？」

「……」

蛍ちゃんとかえすが来て、会議室の雰囲気を見て不思議そうにする。この反応は判らないわけでもない、私だったとしても同じ反応をしていたらうから……。

「とりあえず蛍ちゃんとかえすも会議に参加「その前に如何しても話しておかないといけない事があります」

蛍ちゃんはそう言うのと酷く悲しみに満ちた表情で、くえすも唇を噛み締めて酷く辛そうな表情で横島君の状態を教えてくれた。

「横島がさつき目を覚ましたんですけど、震えて、涙を浮かべて誰も死んでないよなって、横島は……酷い精神状態です」

「仮にこの場に残したとしても、眠らせたとしても、何をしてでも出てくるでしょう。今の横島の精神状態は余りに……危うい」

それこそ、自分がどうなつても構わないと言う覚悟で出てくると言う2人の言葉に、また新しい問題が浮き彫りになった。

「美神さんは判ると思いますけど、ジャンヌの事が酷いトラウマになつてるようで。目の前で死んでしまったから……」

ジャンヌが居たから横島君はグループへの憎悪に飲まれなかった。その後も平気そうにしていたから、私は意図的に記憶を封じている。そう考えていたけど、どうも違つたようだ。

「……ああ、そうなんだ……だからボクは見たんだね、崩れた塔と横島が1人で死ぬ姿を……」

柩の言葉。それが何を意味しているのか、全員が理解した。横島君が1人であるの塔へ挑み、そして命を燃やし尽くす未来。可能性の未来としてそれが生まれてしまつていふと言う事を……。

「そんな事はさせない！させないわ!!お願い、皆力を貸して、何とかする方法を、皆で考えて！」

1人では駄目だ、だけどこれだけ頭の良いメンバーが揃っているの

だ。何か、何か手があるはずだ。

「判つてるわく私が何とかまず、あの塔の中を調べてみるわく」

「僕はオカルトGメンの武器庫から武器運び出す事を考える！」

「ワシは武器と防具を用意する、横島を1人にさせるものか」

……その言葉を横島君に聞かせてあげたかった。横島君は1人じゃない、これだけ皆に慕われて、協力してくれる人が居る。自分1人で何もかも背負う必要がないと言う事を……。

くビュレト視点く

遠くに見える塔を見て舌打ちする。高さは350m前後……神魔ならば問題なく上空からの進入と言うのが候補になる。

「普段ならなんでもないんだがな」

「弱体化してるこの身が忌々しい」

俺の言葉にベルゼブルが舌打ちする。人間界では弱体化するが、それに加えて更に結界で弱体化している。今の俺達は人間と同等位の能力しか発揮出来ない、それに加えて結界の中では体力も魔力も減っていくと言う中ではどう足掻いても塔の中に突入するというのは不可能だ。

「……やっぱり駄目ですね。連絡は出来ません」

「そうか、もしかしたらと思っただがな」

結界の反応が薄い部分を探し、連絡が取れないかと考えたが、どうも結界の薄い場所でも連絡は出来ないようだ。

「通信障害はあいつらの得意分野だからな、抜かりは無いか」

元々あいつらは電撃戦を得意としている。僅かな希望に賭けたが、それも徒労に終わったか……。ベルの縁に腰掛ける。

「おい、ベルゼブル。あいつら、本当に隕石を東京に落とすつもりだと思うか」

美神達も居ないので、本音を聞かせるとベルゼブルに尋ねる。幼い少女の風貌だが、魔界の重鎮であるベルゼブルの英知は凄まじい物がある。

「……6・4でハツタリと考えている。特異点の横島を日本事潰すと



は思えないが……それだと前提条件がある」

ベルゼブルが何を言おうとしているかは分かる。それは横島があの塔に向かわないことだが……

「横島さんは絶対向かう事になると思います」

横島の性格を考えれば、間違いなく塔へと向かう——そうすればガーブ達は塔に来れば横島を嬉々として捕らえるだろう、

「解決するべき問題は山ほど残ってるしな」

何とかあの塔の内部の情報を集める事、武器と防具を準備する事、だがそんな事は些細な問題だ。

「あの仮面ライダーをどうするかだ」

狂神石で能力を強化している恐らくガーブが調整した仮面ライダー。その解決法を考えないといけない、そうでなければ突入しても全員全滅するだけだ。

「……とりあえず今は周辺の偵察をメインにするしかあるまい」

時間的な余裕は無いが、今直ぐに塔の中に乗り込める状況ではない、腕時計を見る残り時間は79時間……時間的な余裕は2日。それは決して長い時間では……塔の周辺を監視していると、ローブ姿の男の姿を見た。

「ん？」

思わずもう1度視線を向けた時。その男の姿は幻のように消えていた。

「どうかしたか？」

「いや、今あそこに男がいなかったか？」

塔の方を指差してベルゼブルとブリュンヒルデに尋ねる。

「いえ、見ていませんが」

「そもそも私達の探知をすり抜ける相手が早々いるとは思えないし、人間が出歩いているとは思えないが？」

俺の気のせいか……？確かに俺の気にしすぎかと呟き、本来の目的である周辺の搜索と、もう1つこの周辺に居るであろうゾンビとガーゴイルなどの情報を集める為に移動を始める。

【ごめん、協力したいけど、私は無理】

六道の学校に居るマルタは、避難してきている人間を護るために動く事が出来ない。勿論、それは判りきつてることなので連れ出しにきたわけでは無い。

「この周辺に悪魔は出たか？」

【結構な頻度で出てくるから、私足止めされてるのよ】

東京の中心に現れた塔。その内周部には弱い敵、外に行けば行くほど敵は強くなる……か、セオリーとは真逆だな。

「ありがとうございます、それを聞きたかったのです」

ブリュンヒルデのルーンで六道の学校周辺の結界を強化して、その場を後にする。塔から離れれば離れるほど敵が強くなる。それで考えられるのは攻め込める事だ。ベルゼブルも同じ結論に至ったのだろう。

「横島達を攻め込ませるのが目的か？」

隕石と言う東京所か、日本を滅ぼす手を打ってきているが、戦力は到底本気とは思えない。

「あの仮面ライダーで事足りると思っっているのでは無いでしょうか？」

確かにあれは強い、あの攻撃力と防御力は脅威ではあるが……1人で出来ることなど高が知れている。

「まだ何かある様な気がするな」

「ああ、あいつらがこんな簡単な手で終わるはずがない」

まだなにか、悪辣な何かが隠されているはず。天界とも魔界とも連絡がつかず、そして天界と魔界も攻め込まれているが、何故関係のない日本だけが滅びるような一手を打ってきたのか？ガープの性格を考えれば、もしこれと同じことをするのなら、間違いなく天界か魔界でやるはずなのに、それを日本でやった。それが気がかりだ……何故態々日本でこれだけ大規模な事をしたのか。何か理由があるように思えてならない。

『ビュレトか？横島君が目を覚ました。悪いが偵察を1度切り上げて戻って来てほしい』

「判った。すぐに戻る」

横島が目を覚ました。それだけで戻れというのはおかしな話だ、何か、他にも話したい事があるのだろうか。

「1度戻ろう、そろそろ限界だ」

「……ですね」

「本当に忌々しいな」

体力と魔力が減り続けるこの状況。元々人間を助けるなんて柄では無い俺達だが、人間に頼らざるを得ない状況に追い込まれている事に舌打ちし、俺達は1度アシユタロスのビルへと引き返すのだった……。

### 〜横島視点

どれくらい寝ていたのかは判らないが、目を覚ました所でシズクとおキヌちゃんに連れられて、俺はベッドが置かれていた部屋から外に出た。

「大分調子は良いはずだが、どうだ？」

心眼の言葉が通路に響く、眠る前は妙に焦っていたと思うのだが、その感覚は今が無い。

「大分楽かな？身体も全然痛くないし」

今なら走ったりすることも全然余裕だと思う。俺の言葉を聞いて、シズクとおキヌちゃんが安堵の溜息を吐く姿が見える。そんなに重症だったのかな？と改めて思った。

（上手く行ってるみたいですね）

（……そのようだ）

横島の精神状態が宜しくないとシズクも心眼も気付き、眠っている間に少しばかり暗示を掛けていたのがどうやら功を奏したようだ。

「……おキヌ、先に美神達に報告してきてくれ」

【はいー】

シズクの言葉におキヌちゃんが壁の中に消えていく。俺はその姿を見送り、ベッドサイドのシズクに声を掛ける。

「シズク、正直状況はどうなんだ？」

「……悪いが、私も知らない。だから今からそれを聞きに行くんだ」

あの女の子が変身したライダーは強かった。多分今手持ちで1番強いはずのグレイト眼魂でさえもまともに戦う事が出来なかった。もしかするとガープ達よりも強いのでは?と言う考えが脳裏を過ぎる。

「……とりあえず今は美神達の話を聞くのが先だ」

シズクに1人で考えても良い答えは出ないと言われ、俺はそれもそうだなと返事を返し、シズクと共に美神さん達が待つ部屋に向かった。

「遅れました」

扉を開けて中に入り遅れましたと頭を下げるん……だけど皆が驚いた顔をしていることに驚いてしまった。

「えつと……そんなに遅れました?」

会議室の中にいた全員が俺の顔を見つめるので、そんなに遅れました?と尋ねる。美神さん、琉璃さん、西条さん、唐巢神父にブラドール伯爵、エミさんに冥子ちゃんに冥華さん、それに三蔵ちゃんと……見たことない半被姿の女性に、カズマさんに聖奈さんに、高城さんに蛍と神宮寺さん……会議室にいる面々を確認していると、俺が入ってきた扉が吹き飛んだ。

「みむー!みみむうううう!!」

「ぴぎゅうううう!!」

「こんこん!」

「わおーん!」

【のぶーのーぶうう!!】

「へぐうっ!」

背後から凄まじい衝撃を受けて、思わずたたらを踏んで、その場に座り込む。あいたたたと言いなながら振り返るとチビ達が居て、へたり込んでいる俺の腕の中に飛び込んでくるチビ達、その俺を心配するよくな視線を見て、俺が寝てる間ずっと心配してたんだと思い。チビ達を抱きしめて立ち上がる。

「本当遅れたみたいですね」

あんまりジツと見つめられるのもう1度謝る。雪之丞達もいる

けど、ノツブちゃん達の姿がないのが気になる。

「別に遅れてるとかじゃないから気にしないで、空いてる席に座ってちょうだい」

空いてる席と言うと、蛍と神宮寺さんの間しかないんだけど……まあ空いてる席がないからそこに座り、チビ達を膝の上に乗せると、チビは頭の上に登ってきて、タマモは首に巻きつくようになる。シロとうりぼーは膝の上で丸くなって、チビノブは座る所が無いので机の上に乗せてやる。

【ノブ】

机の上にちょこんと座り、足をぱたぱたさせてる。机の上とかに資料がないから別に良いんだけどさ、なんかファンシーすぎて会議室の雰囲気が変わったように思える。

「じゃあ改めて説明します。教授お願いします」

【任せたまえよ】

琉璃さんの言葉で教授がコンピュータを操作すると、中央のスクリーンに映像が映し出される禍々しい塔の姿だ。

「この塔の高さは外見から予測して350mほどですが、恐らく内部は異界化しており、外見よりも高い可能性があります。そして更に後77時間であの塔目掛けて隕石が落ちてくる計算となっております」

【速度にもよるが直径約100kmほど、勿論衝突すれば未曾有の危機となるだろうネ】

……なんかとんでもない話になってるんだけど……え？地球の危機なの今？一瞬何を言われてるか理解出来なかったが、神妙な顔をしている美神さん達を見れば本当の事と言うのは嫌でも判った

「いまドクターカオスや優太郎さんが武器とかの準備を急ピッチでしてくれてる。隕石の誘導は塔の頂上にあるであろう、コアを破壊すれば止まる計算らしいわ」

つまり後77時間で装備を整えて、そして尚且つあの塔の頂上を目指す……それが俺達の作戦であり、生き残る道と言う事だ。

「で、でもあいつは」

完膚なきまでに叩きのめされたあのライダーのことを思い出す。

どう考えてもあいつは、要所の前に立ちそれ以上進めないようにしてくるはずだ。

「それに関しては僕から説明する。今の装備、人員であいつに勝つ事は申し訳ないが不可能だ。ならば、戦わなければいい、精霊石、ルーン魔術、法術、仙術、魔法。それら全てを使つて結界術を作る。それであいつを拘束し、護っている階層を突破。その後、扉の再封印をして追つて来れないようにする」

勝てないのなら戦わない、それは間違いなく1つの方法だろう。

「判つてる、判つてるよ。横島君、それは余りに樂觀的な考えだつて」唐巢神父がそう言う、相手も馬鹿じゃない。そんな方法で出し抜けるとは思えない、何かもつと悪辣な何かか隠されているに違いない。「だから俺と聖奈が同行する。短時間しか戦えんが、足止めくらいなら問題ない。お前達が上の階に向かい、結界の中心さえ破壊してくればなんとでもなる」

「つまり今回はスピード勝負になるわ、時間を掛ければ掛けるほど不利になるわ」

「ただでさえ時間制限がありますからね」

時間制限つきで、強い相手に特攻を仕掛けないといけないとか、本当に無理としか思えない。

「とりあえず今は情報収集してるわ、それまでは周辺に出現してる悪魔とかの特徴と対策を覚えてちょうだい」

スクリーンの画像が切り替わり、悪魔の特徴と弱点が映し出されるんだけど、数が余りにも多い。

「……数がとんでもないんだが？」

「覚えなさい、雪之丞」

その悪魔の数がとんでもない、10や20では効かない数だ、思わず左右の蛍と神宮寺さんを見るが2人は俺にもモニターを見るように促した。

「見てしっかり覚えなさい」

「覚えやすいところから教えてあげますから」

……どうも出発までの時間は勉強漬けになると悟り、俺は小さく溜

息を吐くのだった……

「まあまずはそのれよりもだ。ここで嫌な情報を言うのはボクも本意ではないんだけど、あの塔にはまだ何かいるよ。巨大な銃を装備した英霊が1人ね」

枢ちゃんから告げられたのは、あの規格外のライダーに加えて、もう1体。英霊が待ち構えているという情報だった。

「英霊……か。厄介な相手だな」

「ですね。態々ガープが召喚しているとなると、間違いなく指揮官タイプ」

「……銃を装備しているというのもブラフかもしれないな」

枢ちゃんから告げられた情報で1度悪魔の映像は消され、英霊に対する予想が組み立てられるが、その正体には誰も辿り着けない。

「巨大な銃って何か思いつく？」

「いいえ、狙撃銃とかならシモヘイへではと言えますが」

「自分のシンボルをそう簡単に見せるほど馬鹿じゃないだろう？」

英霊は自分のシンボルがある、例えば、沖田ちゃんなら「菊一文字」や新撰組の羽織り、伝承や伝説に名を持つ英霊だからこそ、それから正体が突き止められる。

「ガープがそんな愚かな事をするとは思えないぞ？本来の正体を隠すカモフラージュと見るべきだ」

「そうですね、智将と言われるガープがそんな簡単な手を打ってくるとは思えません」

ガープの頭脳を知っているからこそそのカズマさんと聖奈さんの言葉、時間は残されていないのに、考えるべき事は山ほどある。人類が今窮地に追い込まれていると言う事を俺はいやっと言うほど実感するのだった……。

く 神魔サイドく

一方その頃、魔界と天界ではとんでもない大騒ぎになっていた。それぞれのアスラ、アスモデウスから与えられた被害、負傷した神魔の輸送などで大騒ぎとなっていた。そこに負傷した竜神王と小竜姫が

来れば、更に大騒ぎとなるのは当然だ。

「竜神王。何があつた」

「東京が結界で封鎖されてる、そして結界内に星落としだ。あいつらとんでもないことをしてくれー!」

竜神王の言葉を聞いたオーデインは即座に落下してくる隕石についての情報収集を始める、なんとか外部から破壊出来ないかという考えも出るが、それらが可能な武器はアスラとアスモデウスの両名によって既に破壊されている。

「ちいっ!まさかいきなりこんな強攻策に出てくるとは」

今までの侵攻とは比べ物にならない大型で多面的な攻撃。本来ならば人間を護るべき神魔が大打撃を受けているのでは話にならない。

「転移での東京への増援はどうだ」

「駄目だ。私と小竜姫は結界に弾かれて、この有様だぞ」

小竜姫は天界の医療班によって既に緊急治療室にいる、竜神王も同じレベルの負傷だが、まずは情報の共有と行うことで途切れかける意識を必死で繋ぎとめていた。

「なにか打てる手はありませんか!？」

「なんて間の悪い!」

呼び戻されたワルキューレと、調査報告に戻っていたメドーサが表情を歪める。少しでも戦力が欲しいタイミングで人間界を後にしていたメドーサは特に激しい苛立ちを隠せずにした。

「少なくとも東京には、ビュレト、ブリュンヒルデ、ベルゼブル、ダンタリアン、ゴモリーの5柱の魔族がいる、それが不幸中の幸いだか……恐らく結界内で弱体はさせられているからどこまで頼れるか」

自分達の陣営も立て直さないといけないのに、さらには人間界は滅亡の危機となれば、自分達の陣営を後回しにしても、人間界の滅亡を回避する術を考えるのは当然だ。

「それならばだ、オーデイン、竜神王。人員を送るのは無理、更に隕石を破壊するのも無理となれば……」

特別戦術顧問に就任しているアマイモンは反対が出るだろうかと前置きしてから、今出来る最善の手段を告げた。



「無事な天界と魔界の武器庫にある物を、転送してみるのはどうだ？  
ブリュンヒルデの拠点に魔界との直通の魔法陣がある。連絡はつか  
なくてもその反応で理解するはずだ」

だが失敗する可能性も考慮して、まずは壊れても大丈夫なものから  
の輸送を提案するとアマイモンは告げ。今出来る支援はそれしかな  
いと決断した神魔達はそのための準備を急ピッチで始めるのだった  
……。

隕石落下まで後74時間……

レポート24 反逆者達の進軍 その5へ続く

## その5

レポート24 反逆者達の進軍 その5

くアシユタロス視点く

薄暗い部屋に私とドクターカオスのキーボードを叩く音だけが響く、残り時間52時間……作業を始めて20時間と少し、作業は当初難航すると思っていたのだが、思ったよりもスムーズに作業を進める事が出来ていた。

「……やはりここは精霊石を結界形式で配置して、防御力に回すべきだと思うんじやが」  
「そうすると攻撃に回す分が足りなくなりますから……」

攻撃力と防御力を両立させなくてはならない、ドクターカオスの考え方は徹底して防御に傾倒している。その理由は少しでも生存率をと考えているのは判る。

「私はプロテクターに精霊石を使わず、貴方の擬似精霊石の粉末と私の魔術を併用するべきだと思います」

神代君がGS協会か持ち出してきた精霊石と、小笠原君、六道君、冥華さんが持ち出してきた精霊石は4人で20近く、普通の除霊で使うには過剰すぎるほどの量が集まっているが、あの塔の中身がどうなっているのか判ら無いが、100%断言できる。悪辣な罠と無数のゾンビや悪魔で埋め尽くされていると、防御を固めるのは確かに生存率を高める上で非常に重要なファクターになると思う。

「囲まれたりする場合を考えれば、やはり状況を打破出来る広域に広がる武器が必要だ」

「……むう、それもそうか」

生存できたとしても囲まれて突破出来ないのでは、闇雲に消耗し、そして時間だけを浪費する事になる。

「武器を作る方向でいいですね?」

「うむ、そうじやな」

1人では話し合いなどは出来ない、かと言って2人だと意見がぶつかることもある。だが、こうして意見を交えることが何よりも大事なのだ

「分析などはいらないかね？ 私にはそれくらいしか手伝いが出来ないのだけれド」

教授が地下の開発室にやってきて手伝えることは無いかね？と尋ねてくる。2人で開発して、強化して計算するでは明らかに時間が足りなくなる。

「すまないが、これの計算式を出して欲しい」

【任されたヨー！】

擬似精霊石と言うのは擬似と名の付くとおり、ほかの物質で精霊石と同じ効果を持つように生成された物質だ。つまり通常なら精霊石と相性の良い素材との組み合わせなどでは逆に効果を発揮できない可能性がある。そうになると折角作った道具が無駄になると言う事になる、道具を作る予定だったが、素材の組み合わせで不安になる物は後回しにして、今の段階で堅実に効果のある物を優先してきた。

(それにも限界はある)

堅実と言うのは安定して使えるとも言えるが、突出した物がないと言う事は秀でた物が無いと言う事になる。普段なら計算しつつ作業すると言う事も可能だが、制限時間が限られている今。計算している時間が無い、だから教授に計算を頼むことで、私もドクターカオスに作業に取り組むことが出来るが、私には1つの懸念があった。

(教授……か)

ガープの方にいた『教授』そして私達の方にいる『教授』。ガープは正義を語る不完全な部分を切り捨て捨てたと言った、そして横島君は流れてくる教授を保護した……もしも、もしも今私達の方にいる教授が、ガープが切り捨てた善の部分だというのなら……教授が鬼札になるかもしれない。

(力を取り戻せば……あるいは……)

この状況を引っくり返す鬼札になるか、それとも凶悪な敵になるか……。

(あーくそ、真名を聞いておけば良かった)

真名が判れば何らかのアプローチも取れるのにと思っていると、地下の研究室の扉が開いた。

「ドクターカオス、ブリュンヒルデさんの拠点の魔法陣に反応があったそうです。支援物資か、援軍かはわかりませんがどうするべきか、意見を聞かせて欲しいとのことですよ」

このタイミングでの魔法陣に反応。援軍だとすれば結界の弱体に引つ掛かり動けなくなるだろう、それが判らないほどオーデインは馬鹿じゃない、確実に結界の影響を受けない物資に間違いない。

「恐らく支援物資じゃ、回収できるのなら向かうべきだと思うがどうじゃ？」

「私も同意です」

まず間違いなく支援物資だ、残り時間が少ない中。1から作り上げるよりも、元からある物を改修したほうが時間を短縮できる。私とドクターカオスは支援物資の可能性を考え、意見を聞きに来たマリアに回収に向かうべきだと告げるのだった……。

く琉璃視点く

手にしたトランシーバーから聞こえてくる声に安堵する。緊急マニユアルA……GS協会職員がチームで避難所に向かい民間人の保護を行う。6チーム全員が避難所に無事に到達したとの報告に心底安堵する。

『避難所に備蓄してある結界札などで籠城は可能そうです』

籠城……普通ならそれでいいんだけど、50時間で隕石が落ちるなんてとてもじゃないが言えなくて、そのまま待機としか言えなかった。

(やっぱり無理なものは無理だしね)

言峰神父とクロさん、ポチさんの3人も何とか引つ張り出せないか？と考えたのだが、そこはバーサーカー「ナイチンゲール」が立ち塞がった。

【負傷者を戦わせる訳には行きません。即刻お引取りを】

と言って戦うに出るぞと騒いでいたクロさんとポチさんを締め落とし意識を刈り取った。

「私には子羊を救う使命がある」

【そうですか、私にも怪我人を救うと言う使命があるのですよ】

言峰と取っ組み合いをしているナイチンゲールと言峰神父を見て、増援は無理だと諦めたのは記憶に新しい。思わず深く溜息を吐く、少しでも戦力が欲しいがナイチンゲールの言っていることも最だった。

「お疲れ様、神代会長」

私がまさか病院での惨劇を見て疲れているとは思っていない西条さんが差し出してくれたインスタントコーヒーを飲みながら、気になっっていた事を尋ねてみる。

「……オカルトGメンの新入りは？」

あれだけエリート風を吹かせていたのだ。多少なりとも戦力になるだろうと思い、今まで1度も話題に出なかったことを尋ねてみる。

「……全員職場放棄して避難所に行ったよ。まあこれで僕に従わないって事で、日本支部から追い出せると思う事にするよ」

軽く言うが、西条さんが動き出すまでに相当時間があつた。恐らく時間ギリギリまで説得を試みたのだろう、結果は恐らく我先にシエルタワーに隠れて終わりだったのだろう。

「ドクターカオスと昔さんは回収に向かうべきだと」

地下から戻って来たマリアさんの言葉に私も西条さんも顔色を変え、頭脳班の2人の意見を聞いた上で作戦を執行するか考えていたのだ、2人のGOが出れば可能な限り短時間で道具の回収をした  
い。

「マリアさん、そのまま悪いんですが、不動さん、須田さん、エミさん、冥子さん、タイガーさん、シルフィーさん、ピートさんを選んでください」

突入班になるであろう美神さん達は動かさせない。冥子さん、エミさん、シルフィーさん、ピートさんは卒なくこなせるが、逆にそれが今回は足を引っ張ることになる。一点特化の突破力、それが今回の作戦で要求される大きな要素になる。塔に突入できないメンバーは突入

班のサポートに回るべきだ。

「判りました。ついでにトラックの準備もします」

マリアさんにお願ひしますと言って、私は振り返る。

「という訳で、西条さん。どっちが現場指揮をとりますか？」

私か西条さん。どちらかが道具回収に出て、どちらかがこの場に残る。流石に2人とも出るわけには行かないと思ひながら言うと、西条さんが僕が行こうと手を上げた。

「いや、神代会長。君には君でやるべき事がありそうだよ」

西条さんが視線を上げる。その視線に吊られて顔を上げる、そこには外を写しているモニターがあるのだが、そこに写されている人物の姿が問題だった。

「躑躅院!?なんでここに」

陰陽寮のトップと言うべき躑躅院がこの場にいる。その事に私は困惑し、それと同時に不味いことになっていると悟った。横島君の能力をい見せるつもりがないのに、この場に居ると言うことは嫌でもその姿を見せる事になるからだ。

「……視察団が何かを仕掛けていたという可能性もあると思うがどう見る?」

「むしろそれしかないですよね」

私と西条さんを失脚させたいと思っていた連中だ。内密に躑躅院と連絡を取っていた可能性はゼロでは無い、だがどうしてこの場所を……いや、普通に考えて神魔がこれだけ集まっている拠点だ。神通力を頼りにこの場に來たと考えるべきよね。

「私が応対するので、西条さん。現場指揮お願ひします」

西条さんは初見だし、ここは私が対応するしかない。私は西条さんに現場指揮を頼んで、ビルの出入り口へと走った。

「……神代琉璃?そうか、神通力を頼りに來たが、ここが拠点か」

「拠点として間借りしてるだけよ、GS協会とオカルトGメンの支部は一時的に放棄してるから」

悪魔とゾンビが集中していることを考え、放棄すると言ってから私は躑躅院を観察する。着ているスーツはボロボロで上着は既に脱ぎ

捨てられている。中性的な容姿なのでやはり男か女かは特定できない……もしくは何かの術で性別に関する認識を捻じ曲げている可能性もある。

「なんで東京にいるの？」

「ああ、GS協会の視察団とかいう連中から呼ばれていて昨日東京入りした所だ」

これがその手紙と言って差し出されたものを見ると、確かにGS協会の判が押されている。勿論私が押した覚えは無い、恐らく査問会が勝手に動いた結果だろう。

「状況が悪いのは判っている。私も何か手伝えらと思うのだが」

善意なのか、それとも悪意なのか……だがこうしてGS協会の視察団が勝手に動いていたと言う証拠を手土産に来たと言う事で否が応でも警戒心は生まれる。

「それは助かるわく是非手伝ってもらいましょう」

「め、冥華さん!？」

突然割り込んできた冥華さんに驚き、思わずその名を呼ぶが、私はそれ以上言葉を発する事が出来なかった。笑っている、笑っているのだが、その気配は微笑みから程遠い覇気に満ちていた。

「今は貴方の言い分を全部信じてあげるわく♪今はね」

今はを強調する冥華さんは目が全く笑ってない笑みを浮かべ、ゆっくりと振り返った。

「令子ちゃんやく横島君に紹介しましょうか〜一時的な協力者として。それでいいでしょう〜？」

「ええ、構いません。陰陽寮はオカルトGメン、GS協会とは協力するつもりはありませんからね。生き残るために力を貸す、それで良いでしょう？」

とんとんで話が進んでいるが、私に割り込む余地は無い。完全に主導権は冥華さんに移っていたから、私は口を挟む事が出来ない。

「じゃあ行きましょうか〜あ、そうそう」

冥華さんが私と躑躅院を先導して歩き出そうとして立ち止まり、ここにこと笑いなながら躑躅院に釘を刺した。

「高島忠助の陰陽術を唯一現在に受け継ぐ、躑躅院は、素人の陰陽術に目くじらを立てたりしないわよね〜?」

え? 私はその言葉に躑躅院を見てしまった。その顔は今までの飄々としたものと異なり、唇を噛み締めその目に強い怒りを宿していた。

「ええ、私は何もしませんよ?」

「そう良かったわ〜」

その反応で理解した。迎え入れはするが、余計な事をするなど言う事をいつているのだと。陰陽寮は基本的に登録されていないモグリの陰陽術師を厳しく罰する傾向にある。生き残るために力を貸すという言葉を引き出し、そしてその上で釘を刺した。生き残れるんなら、それ以外は目を瞑るでしよう?と言う事だ。

(やっぱり私はまだまだだわ)

相手の動きを封じる言葉を相手自ら引き出す、こういう駆け引きは私にはまだまだだと思ふのだった……。

〜西条視点〜

戦えるほどの霊力が回復していないブリュンヒルデさんを車の助手席に乗せ、彼女の拠点近くまで来たが……そこにはやっぱりと言う光景が広がっていた。

「へっ、予想通り過ぎて笑っちゃまうぜ」

魔法陣の反応に惹かれたのか悪魔とゾンビで大通りは溢れかえっていた。

「全くだな。竜也」

元テロリストと元オカルトGメン職員。本来なら相反する組み合わせなのだが、何故かこの2人は相性がいいらしい。

「おい、西条さんよ。俺と須田に任せときな、全員消耗する必要はねえぜ」

サブマシンガンにマガジンをセットして獰猛な笑みを浮かべる不動。そしてその隣では須田が何かの準備をしていたのだが……その光景が少し、いやかなりやばい。



「ヒヒヒ……ようやくこいつを試せるぜ」

なんか手袋型の霊具をつけて怪しい笑みを浮かべている須田。僕は少し考えてから、後部座席の2人に視線を向けた。

「あのマンシヨンまで小笠原君と寅吉君の護衛を頼む、残りの面子はこのトラックを防衛しよう」

思いつき引き攣った顔をしている小笠原君、別に君に全てを押し付けるつもりは無い。

「冥子さん、僕も出るので、ピート君とシルフェニア君と一緒にトラックの護衛をお願いします」

12神将は暴走さえしなければ、火力は高い。だからトラックの護衛と言う名目で暴走する危険性がある冥子さんをこの場に残す。

「う、うーん、頑張るわあく横島君に励ましてもらったしくうん、大丈夫、大丈夫、私は出来る」

……大丈夫だろうかという不安は残るが、正直いつ爆発するかわからない人物と一緒にいるのは避けたいのでヴァンピールの2人に任せよう。

「鏡原君。もし最悪の場合は場所を移動しても構わないけど。その場合は式神札を飛ばしてくれ」

「は、はい！判りました。お気をつけて」

「申し訳ありません。私がこんなありさまで」

助手席で申し訳ありませんというブリュンヒルデさんに大丈夫ですよと声を掛け、僕達はトラックから降りた。

「おらおらおらおらあああ!!」

「ヒヤハハハハアツ！」

……もうお前等だけでいいだろ?と思ったのは言うまでもない。適性がないからという理由で首にされた不動竜也だが、適性がないのではなく、上司が扱いきれなかったただけだろう。あの男はブレーキのない車と同じだからだ、戦力としては申し分ないが、あれを扱うとなると上司は始末書との戦いになるだろう。

「くたばりやがれえええええ!!」

トラックから降りると同時にサブマシンガンを両手に持って突撃

していく馬鹿を僕は見た事がない。反動が凄まじいサブマシンガン  
を両手で扱うとか尋常じゃない。

「ハハハアアア！目だ！鼻だあ！耳だああ！！」

霊波の爪で悪魔をつぶし、鼻を抉り、耳を切断するあいつは多分キ  
チガイだ。あれがキチガイじゃなきゃ、誰がキチガイだと言わざるを  
得ない。

「はーやっぱり俺はこれは性にあわねえなあ！！」

サブマシンガンが弾切れしたら、それで直接ゾンビをぶん殴り、倒  
れた踵で頭蓋骨を踏み砕いた。おかしいな、霊能者の筈なのに空手家  
か何かのようにしか見えない。

「……あれ、元オカルトGメンって聞いてたけど？」

「ええ。僕も名前だけは」

誰がどう見てもオカルトGメンではなく、テロリストのそれであ  
る。だが一応は国家試験に通っているだけの頭脳はあるはずなのだ  
が……何故あかも獰猛な笑みが似合うのだろうか謎だ。

「戦闘狂ですかノー？」

寅吉君の言うとおりの不動は戦闘狂と言っても問題ないだろう。い  
まなんて、斧を両手に持ってゾンビを頭から勝ち割ってる。

「おい！俺と準が止めておいてやる！さっさと行きやがれ!!!おい！手  
榴弾寄越せ！」

「そらー！」

「てめえー！ピン抜いて投げるんじゃ……ねえっ!!!」

ピンを抜かれ投げられた手榴弾を蹴り飛ばし、悪魔の軍勢の中央で  
炸裂させる。

「頭下げろおー！」

須田の影から飛び出した悪魔に手にした斧を投げつける不動。

「お前だつて危ないだろうが」

「はっ！お互い様だ」

あの危険児2人としては僕達の方に被害が出る。幸いにも手榴弾  
とサブマシンガンの掃射で大分数が減っている今がチャンスだ、僕達  
はブリュンヒルデさんに聞いていた彼女の部屋に飛び込んだ。

「はは……これは紛れも無く切り札だな」

そこにあつたのは精霊石で構築された籠手や剣の数々と人間界ではありえないほどの大きさの精霊石などの数々だった……これを運び出せば勝機はある、僕も、小笠原君も間違いないと思うただろう……。

残り時間49時間……

なおトラックに残った面子はマンシヨンのほうから聞こえてくる爆音と高笑いに顔を引き攣らせながら。

「残れて良かった」

囲まれる可能性はある物の、危険人物と一緒にじゃなくて良かったと心から安堵しているのだった……。

〜美神視点〜

私とくえすは会議室に冥華おば様達の後仏頂面で入ってきた若い人物に眉を顰めた。男か、女か判らない独特の雰囲気を持つその人物は私達を見て、頭を下げた。

「陰陽寮当主躑躅院と言う。名は掟で隠す物としてるので躑躅院と呼んでくれればいい」

陰陽寮当主。その言葉に嫌でも警戒心と何で連れて来たと言う気持ちりが沸く、冥華さんも陰陽寮の危険性は知っている筈なのに、何故当主を連れて来たのか理解出来なかった。

「躑躅院は〜どうもね〜GS協会の視察団に呼ばれてきたんだけどこの状況でしょ？生き残りたいから〜協力するって〜陰陽寮とか関係無しで〜ただのこの事態に巻き込まれた霊能者として〜協力してくれるそうよ〜」

ニコニコと笑う冥華おば様の隣で苦虫を噛み潰したような顔をすする躑躅院。冥華おば様に丸め込まれて、言質を取られたって所ね。

「それなら助かるわ。『陰陽寮』の躑躅院じゃなくて、ただの霊能者の躑躅院として協力してくれるなら本当に助かるわ」

私の言葉にギツと睨んでくるが、正直怖いとも思えない。自分の思い通りに成らなくて八つ当たりしてる相手なんて怖くもなんともない……ただその後が不安要素として生まれてしまった。

(後が問題かな)

陰陽寮は陰陽術や札に関してはめっちゃやうるさい。今回の事は不問だが、横島君が陰陽術とかを使ってる所を見られると今後不味いかもねと思いながらも、横島君は霊波刀や栄光の手の操作を格段に上げた。表立って使わせないようにすればいい、そうでなければ後で横島君を突くことは出来なくなるからだ。

「とりあえずだけど、これ今の段階で判ってることだから」

武器の回収に行く前に冥子が写真として置いて行ってくれた塔内部の写真を回す。

「……これがあの塔の内部か?」

「そうよ、どう見る?」

私とくえすと琉璃は既に見ている。だから躑躅院の意見を求める、躑躅院は写真をジツと見つめる。

「これは罨ではないのか?」

私達と同じ結論を出した。塔内部が異界になっていることを私達は警戒していたが、異界になっておらず。普通の塔となっていた、塔の中身は1階から頂上まで全て一貫されており、通路、階段、広場と次の階層に続く階段と言う作りが頂上まで延々と続いていた。

「私達はこの塔が破壊されることをガーブ達が想定していると思ってる」

塔に向かって隕石が落ちてくる。日本を滅ぼす事が目的だと思っていたが、実際は違うかもしれない。ガーブにとっては潰されても構わないと捨て鉢としての作戦とも思えるのだ。

「私達は嫌でもあの塔に向かわなければならぬ。それは嫌でもあの塔に私達の注目が向くと言う事ですわ、塔を隠れ蓑にし、何かをしていると言う可能性が浮上しましたから」

塔を破壊されても構わない、むしろ破壊してくればその間自分達への注目を逸らす事が出来る。高城とカズマの意見はあの塔は神魔

の注目を集めるデコイであり、そして私達を誘い込む罠でもあり、そして私達や神魔が動かなければ日本を滅ぼすと言う3重の手であると言う意見を出した。

「今考えている作戦だと一点突破力のある美神さん達を主軸に、塔の頂上を目指すことしかないのよね」

だから今は装備や、霊力を回復させることに努めてると言うど躑躅院は資料をじっと見つめて黙りこむ。協力してくれると言質を取られているのでいやでも協力するしかないが、既に作戦は決まり、後は準備を整える段階なのだ。

「躑躅院には陰陽札とかを可能な限り準備して欲しいの、突入するメンバーと階層の特徴は教えるからこっちに来てね」

冥華おば様が躑躅院を連れて行く、恐らく別室で札などを作らせる計画なのだろう。私達は嘘は言っていない、作戦も決まっているし、そして突入するメンバーももう既に決まっている。

「それで美神、これはどうするつもりですか？」

「……それを今から考えるのよ」  
横島君を一方的に叩きのめした少女。あの少女がああ塔の責任者だと私達は思っていた、だけど冥子の透視で写された最後の写真には、黒いローブを身に纏った何者かの存在が写されていた。

「明らかに気配が違いますよね」  
「うん、多分こっちがああ塔を支配してるガープの部下だと思うのよね」

最上階には何かの機械が置かれており、あれが間違いなく結界の基点と塔に隕石を誘導させている物だろうけど……そんな場所に護衛を置いていない訳が無い。

「結界で閉じ込めやはり強行突破しかありませんわよね」  
「それしかないでしょ」

何度考えても、何度シミュレートしても、今の戦力であの少女が変身したライダーを突破する事は出来ない。結界を破壊して本来の力を取り戻した聖奈達が出てやっとならう。

「……すまん、見つからなかった」

「ごめんねー、大分頑張ったんだけどねー」

カズマとゴモリーが会議室に入ってくる。東京にいる筈のアルテミスを探してもらっていたんだけど、どうも見つける事が出来なかったようだ。

「動くのが辛いのに探しに行ってくれてありがとうございますごさいます」

少しでも戦力をと思ったけど、やっぱり無理そうだったみたいね。フエンリルの時に判っていたけど、自分本位の神様だから見つけたとしても助力を得るのは難しかったかもしれない。

「んーどうしても力が足りないなら、私と契約する?」

「……それは本当に本当の最終手段にしたいと思うんだけど」

魔装術の契約をする?と尋ねてくるゴモリー。最上級神魔と契約すれば、それは間違いなく戦力になるだろう。だがその後には後遺症などで悩むことを考えれば避けたいと思うのは当然の事だ。

「それよりも美神さんもくえすももう少ししたら休んでくださいね。当事者なしで話し合うのは嫌ですけど、道具の確認とかは私たちでやりますし、霊力と体力が足りないなんて冗談じゃないですよ?」

琉璃の言葉に判ったわよと返事を返し、くえすと共に会議室を出る。

「実際くえすはどう思う?今回の作戦」

「作戦?特攻の間違いでしょう?」

嫌味っぽく言うくえすだが、その通りだ。今回は特攻としか言いようがない、罨と知りながら突っ込むしかない。それが皆判っている、最悪でも横島君達だけでも転移させれないかと言う願いは不可能と言われてしまったから……どうせ道が残されていないのなら、少しでも勝ちの目のある方に全賭けするしかない。

「流れ星なら願いが叶うって言うけど」

「私達に迫ってるのは終末の星とでも言いますかね」

窓から見ても星は間違いなく近づいて来ている。天井が迫ってくるように思える、もうお前達には道など残されていないといわれているようなきもしてくるが、まず気持ちで負けないこと。それが何よりも大事だろう、気持ちで負けては勝てる勝負も勝てなくなってしまう。

「行きましょう。少しでも身体を休めましょう」

残り時間47時間。恐らくあと8時間寝て、装備などの最終調整を済ませる事を考えるとやはりこれも10時間近く掛かるだろう、その後最後の眠りを取り7時間として残り時間は22時間。予定よりも多くの時間を残せた事に感謝しながら、私とくえすは睡眠を取る為に仮眠室へと足を向けるのだった……。

く雪之丞視点く

「ん、んん……」

突入班に選ばれた俺は寝て休めと言うママお師匠様や綱手の言葉で、レジャーマットと毛布で眠っていたのだが、ふと目が開いた。突入班に選ばれたのは横島、蛭、美神、シズク、沖田、信長、牛若丸、神宮寺、陰念、ブラドール伯爵、ママお師匠様、綱手、シロ、タマモ。装備を整えばクシナやマリア、テレサも参加すると聞いている。

(ン?)

皆寝て少しでも霊力と体力を回復させようとしているので、俺ももう一眠りしようと思ったのだが陰念の姿が無いので、身体を起こすと。毛布の上に据わっている横島に近づいているのが見え、なにやってるんだ?と思いつつ俺も立ち上がり横島の方へと向かうのだった。

「雪之丞と陰念かどうかしたか?」

横島が俺達に気付いてそう声を掛けてくる。座っている横島の近くには、うりぼーを筆頭に蛭や沖田達の姿がある。

「お前こそ何をしてる。早く寝るべきだろうが」

陰念の言葉に横島は苦笑しながら立ち上がり、顔の前で手を合わせながら俺達に頭を下げる。

「起きてるなら悪いんだけど、ちよつと俺に付き合ってくれねえ?皆寝てる今の内しか多分話してる時間がないんだよ」

なにか覚悟を決めた表情をしている横島の言葉に、俺も陰念も言葉を挟む余地など無かった。横島に連れられ、仮眠室を出た。そしてそこで告げられた言葉に俺も陰念も勿論反対した。だが横島は自分の

意見を曲げなかった。

「こんなこと頼めるの雪之丞と陰念くらいしかいないだよ。多分皆止めるから、それに最悪の結果を考えての事だから。そうならなければそれでいい」

実行するとは言い切れないと言う横島の言葉に、俺も陰念も止めなければと判っていたのに、その覚悟を決めた瞳に判ったと返事を返してしまった。

「もし怒られたら俺の責任にしてくれていいから、無事にやり遂げようぜ」

そう笑って部屋に戻っていく横島を俺と陰念は黙って見送ることしか出来ず、翌日を迎えてしまった。

(あの後寝れたか?)

陰念の小声の問いかけに眠れなかったと返事を返した。どうしても横島の頼みの内容が頭を過ぎって眠る事が出来なかったのだ。

「何かあった?」

クシナが俺と陰念に何かあった?と尋ねてくる。見るだけで判るほどに疲弊しているのかと思いつつも何とか誤魔化す言葉を考える。

「これをやり遂げないと、死ぬと思うとな。流石に怖いと思ってな」

陰念がぱつと口にしたので俺もそれに合わせることにした。

「ああ、こんなに早く死んだんじゃ、ママに合わせる顔がないから、絶対やり遂げるって思ったら眠れなくてな」

俺と陰念の言葉にクシナはふうんと返事を返しながらも、疑いの眼差しを向けてきた。

「ま、いいけど、無茶なことをするなら止めときなさいよ?」

そう忠告して去って行くクシナに内心冷や汗を流しながら、霊具の調整をするために地下に向かう。

「横島君はこれとこれ、蛍ちゃんはこっち」

「はい、えーっとこれなんなんですか?」

「霊波障壁を発生させるやつ、そのまま殴ったり出来るらしいわ」

「へーすごいっすね!」



地下で開発されたという霊具の調整をしている間も、食事をして  
いる間も昨日の話のほんの一握りさえ、横島は告げる事はなく平然とし  
ていた。俺も陰念も話さなければと判っていた。横島の昨日の頼み  
の内容をママお師匠様でも、美神にでも話さなければいけないと判っ  
ていたのに、昨日の覚悟を決めた横島の目を思い出すと如何しても口  
にする事は出来ず。時間はあつと言う間に過ぎ……塔へと突入する  
時間が来てしまうのだった……。

隕石落下まで残り……22時間……

リポート24 反逆者達の進軍 その6へ続く

## その6

レポート24 反逆者達の進軍 その6

くガープ視点く

塔の中に横島達が潜入したと言う報告を聞いて、笑みを浮かべる。このままにしていれば、日本が滅ぶとなれば嫌でも突入しなければならぬだろう、ここまでは私の計算通りだ。

「でもさー、それ下手したら横島死ぬでしょ？どうするのさ？」

ソファアーに寝転がりどういうつもり？と尋ねてくるセーレに私は手にしていたワイングラスを机の上に置いた。

「あの塔に入った地点で問題は無い。あれは特殊結界で構築されていて、あの中に入っている限りは隕石の追突の衝撃は来ないんだ」

あれは確かに日本に隕石を誘導するための装置でもあるが、それであると同時に横島達の保護具としての機能もあるのだ。

「本当にどつちでもいいと思ってるんだ」

「勿論だ。まあ正直に言わせて貰うと」

モニターを見ながらチーズを齧る、その濃厚な旨味を楽しみながらワインを口にする。計画通りに進んでいて、気分もいいから酒も美味しい。

「直接私が手を下すつもりだ。だからこの程度切り抜けてもらわなければ詰まらないと言うものだ」

アスラは恨みがあるシヴァとヴィシユヌと戦い、2柱と行動不能にしてきた。あの2神を行動不能にさせたのは、非常に大きい戦果だ。

アスモデウスは魔界正規軍の武器庫を潰した

「私の顔を2度に殴ってくれたんだ。この程度でしなれては私の見込み違いと言うことになるさ」

私は正直今回の件は横島達は切り抜けると踏んでいる。犠牲者が出る可能性もあるし、手足の欠損と言うのも考えているが、それでも切り抜けるだろう。そして横島が私への憎悪を向ければ良い、私の計画通りの展開だ。

「教授は捨てるのか？」

「戻ったのか、アスモデウス。しかし捨てると言うのは酷い言い様だ。もう必要ないという事だ」

いや、それは捨てるってことでしょ？と言うセーレにうるさいと怒鳴る。教授の独特な計算式の算出方、そして眼魂に神魔の魂を封じるのも既に実用段階に来た。

「これ以上は教授から得るものは無いと言う事だ」

自我も無い人形にしては良く頑張ってくれた。擬似人格を与えたが、どうしても人形のような気配が消える事はなく、命令しなければ行動できない部下など必要ない。

「更なる上の段階を目指す時に、足を引っ張る部下は必要ない」

机の上に緑色の眼魂を取り出す、刻まれた刻印は「K」それを見て、アスモデウス達が驚いた表情をする。

「む？あの小娘に渡さなかったのか？」

「渡さなかったじゃない、渡せなかったんだ。これは起動しないんだよ」

本来はこれも渡すつもりだったのだが、何度やっても起動せず。教授にも計算させたが、改善案は出ず。教授自身が意識を失う有様だ、だから私は教授を用済みと判断したのだ。

「まだ私にも理解出来ないものがあると言うことだ。初期の実験段階だった、眼魂も再び研究しながら対策を考えるさ」

眼魂と言うのはまだ未知の部分がある。それを知れただけでも御の字、ここから更に研究を進めれば良い。今は手探りの段階なのだから、結果を慌てて求める必要も無い。

「それよりもアスモデウスもどうだ？」

「貰おう。丁度いい見世物もあるようだ」

モニターが正面に来る位置に座ったアスモデウスにワイングラスを差し出す。そこには通路に背中を預けてへたり込むビュレトの姿がある

「良いの？仲間だったんじゃないの？」

ビュレトが私達の仲間であったこれはセーレも知っている。私達

はワインを飲みながら、モニターに視線を向ける。

「だからこそだ。仲間だったからこそ、苦しまずに死んでくれと願うのだ」

「かつて同じ世界を夢見たからこそな」

どうしようもないほどに違えてしまった道。悲しくはあるが、それもまた私達の運命だったのだ。だが親友であったのも事実、だからこそ、私やアスモデウスの手で殺したくないという気持ちがあるのだ……。

〈蛍視点〉

塔の内部は突入前の予想と比べて思ったよりも罫は多くなかった。私、美神さん、横島、くえす、シズク、クシナさん、信長、牛若丸、陰念、雪之丞、ブラドール伯爵、三蔵さん、綱手さん、シロ、タマモにカズマさん、マリアさんと聖奈さんの両名も塔に突入してくれた。長い時間は戦えないからとカズマさん、聖奈さんが先陣を切り続けてくれたけど、階段を7つ登った所で限界が来てしまったようだ。

「偉そうなことを言っておいて悪いが、俺とブリュンヒルデはここま  
でだ」

「……外よりも結界の密度が高くて、流石にこれ以上は……」

結界のせいで力が出ないと言っていたが、ここまで私達を一切疲弊させずに連れて来てくれた。

「マリアとシロとタマモはここに残ってくれる？」

ここに来るまではゾンビしか出なかったが動けない2人を残していくには不安がある。だから美神さんが残ってくれるという面子に声を掛ける。

「私は反対する理由はありません、ちょうど広間もありますし、私には適した条件です」

銃器を使うマリアさんが残る事で階段からの敵の進撃を抑えることが出来る。

「うー拙者はセンサーの側にいたいのでござるが」

「……まあいい事はあると思うけど、我慢した方がいいわよ。シ

口、多分元々美神はそのつもりだから」

えっと驚くシロと横島。シロはともかく横島は理解してくれてるって思ってたから、思わず肩を落とす。

「結界さえ破壊出来ればブリュンヒルデもビュレト様も本来の力を発揮出来ます。理想を言えばもう少し上まで行きたい所でしたけどね」  
体力と魔力に余裕があっても、結界が強くなり身体が動かなくなっ  
てしまった。

「まだ上はあるけど、私や英霊達でお前達の疲弊を少なくして、上層を目指す。でも力尽きた面子を置いて行くわけには行かないから護衛を残すという事だよ」

綱手さんの説明に横島は納得したのか、シズク達に心配そうな視線を向ける。

「気をつけてな。怪我とかしないように」

「敵のど真ん中にいるのに何を言ってるのよ、でも大丈夫だからゾンビ相手なんて怖くも何ともないし」

「拙者も大丈夫でござるよー」

横島がシロとタマモに激励し立ち上がる。時間は1日と言う猶予はあるが、ライダーの存在もある。時間をかけている余裕は無いので、横島に声をかけて階段を駆け上がる。

「敵が全然いないが、これはやっぱり罠なのか？」

階段を駆け上がりながら雪之丞がそう呟く、敵の数は少なく結界さえなければカズマさんと聖奈さんで最後まで登れると言う所だろう。

「さつきも思っただけけど、あの広間。意図的に安全にされている様な気がするわ」

「確かにね、結界の密度も薄かった」

意図的にセーフスポットが用意されている長い塔……階段を駆け上っている私達の脳裏に最悪の予想が浮かび上がった。そしてそれは間違いなく的中しているだろう。

「これ全体が罠と見るのが正しいじゃろうなあ」

「ですね。これを破壊しなければ星が落ちてくる、だから嫌でも突入しなければならぬ、ですが向こうとしては死んでは困る相手もい

る」

牛若丸が横島を一瞬見て小声で呟く、ガープ陣営で死んでもらうては困るターゲットとなると美神さんと横島の2人は間違いない、つまりこの塔は隕石の誘導装置であると同時に、私達を捕らえる虫籠でもあったのだ。

「私達を誘き寄せるための罠であると同時に守る結界でもあるって事ね」

「……あいつらの思惑通りに動いているのは腹が立つな」

つまりガープ達にとっては私達がこの塔に侵入するのは計算のうちで、しかも私達を護る為の物でもある。

「日本より価値があるって言われても全然嬉しくないけどね」

日本よりも実験動物としての価値があると言われてる様でむかつくわと美神さんが言う

「話はここまでだよ、次の扉が見えてきた」

綱手さんの言葉に意識を引き締める。7階までのパターンならまたゾンビか悪魔が待ち構えていて戦いながら、上の階層を目指すことになるだろう。

「横島君と陰念は極力戦ったら駄目よ」

私が注意しようとしていた事を、クシナさんが注意する。こんな風には言いたくないが、ライダーに対抗出来るのはライダーの力。つまり横島と陰念だけがあのライダーに対抗出来る私達の切り札になる、勿論まだ不安要素はある、お父さんが言っていた教授……ガープ側にいると言う英霊の存在だ。一応カズマさんが他に強敵がいる可能性があるあるとは言ってくれたけど、不安要素として重く押し掛かる。「じゃあ、今度は私が先陣切るから。私は霊具使い切ったら終わりだしね」

【では私も時間をかけている場合ではありませんからね】

クシナさんと牛若丸が先陣を切ってゾンビを蹴散らしながら走っていく後を追いかける。残り時間は19時間と45分……

く 琉璃視点

美神さん達が突入して3時間。残り時間は18時間弱……残っている面子は美神さん達が塔を破壊してくれることを考え、シエルターなどの見回りに向かってきている。テレサさんとドクターカオスは戦える人員では無いが、怪我をしている避難してきている人達を見るために、不動さんと須田さんの護衛であちこちを回っている。

「みむうー」

「ぴぎゅうー」

【大丈夫ですよ。横島さん達はちゃんと戻ってきますから】

窓枠に座り、塔を見つめているチビとうりぼー。あの塔の中が高密度の魔力で満ちているのは火を見るよりか明らかなので、お留守番となっているのだが。窓枠に座りぴくりとも動かない。

【私も一緒に行けたらよかったですけどね】

「沖田さんは無理しない方がいいですから」

結核と病弱と言う映画の設定に縛られている沖田さんは戦闘力は高いが、スピードが命の今回の作戦で身体に爆弾を抱えている沖田さんを起用するわけには行かなかったのだ。

「神代君、コーヒーでも飲むかね？」

「貰います」

優太郎さんが差し出してくれたコーヒーを一口啜る。こんな事をしていてる場合では無いのは判っているが、もうここまで来たら美神さん達が無事に塔を破壊してくれるのを祈るしかない。

「運命は今だ見えぬ、どうなることやら」

「不吉なことを言うな、ダンタリアン」

……今思うとソロモンの魔神が3人もいる部屋でコーヒーを飲んでる私って何なのかしらね？

「これねー、魔界で今流行ってる服なのよー♪きつと枢ちゃんに似合うわー」

「……」

死んだ目でこっちを見ている枢は意図的に無視する、何時も人を引っ掻き回しているのだからたまには苦勞すればいい。

「所で優太郎さん。教授と高城の姿が見えませんがどうかしたんです

か？」

「……私も探しているんだが、姿は無いんだ。多分高城は上司に呼ばれてそっちに合流していると思うんだけど、教授はわからない」

……幽霊だから消えているという可能性もある。だがここで急に消えた教授に思わず眉を顰める。

【探しに行きましようか？】

「ううん、良いわ。今は下手に分散すると危ないから」

おキヌちゃんが探しに行ってくれろと言っけけれど、動き回ることに對してのリスクが高すぎる。教授の事は心配だけど、大丈夫だと無事を祈るしかない。

「悪い知らせだ。美神達は上層にいるが、既に脱落者がかなり出ている」

「うん、やっぱり上に行けば行くほど結界が強くなってるみたいなのよ」

躑躅院と冥子さんが顔を歪めながら今の状況を報告してくれた。陰陽術で作った護りを塔に突入した班に持たせているので、それが誰がどこにいるのかと言うのは分かるようになってるんだけど、状況は余りよく無いだろう。

「予想よりも厳しいね」

「ですわ」

中層に入る手前の広間の辺りにカズマさん、聖奈さん、マリアさん、シロちゃん、タマモちゃんの4人

中層に2箇所ある広間の1箇所目でクシナさんと牛若丸。2個目の所で綱手さん

上層の広間に全員の反応があつたけど、そこでは三蔵様と信長の2人の反応が残った

「これで残りは9人ですか」

最悪でも美神さん、蛍ちゃん、くえす、シズク、横島君、陰念君の6人は残す予定だったけど、残りがブラドール伯爵と雪之丞ではやや厳しいかもしれない。

「私が気になってるのはそこじゃないの」



冥子さんは塔の外観図を指差し、下の階層に向けて手を広げる。流石に敵の反応までは判らないけれど、戦闘となれば動いたりするので戦ったしているのが判る。私達は外観図を見て、冥子さんが何を言いたいのか理解した。

「下の階層で何も動きが無い？」

下の階層で残っているカズマさん達が戦闘している形跡が無いのだ。広間と言う場所で残ってるから、敵が押しかけてもおかしくないの？

「……広間はもしかすると安全な場所としてガーブが配置したお遊びかもしれないね」

「可能性はあるな。隕石で日本を滅ぼすとしても、ガーブにとって有能な駒もいる。全部消し飛ばすとは思えない」

その言葉で優太郎さんとダンタリアンが何を言いたいのか全員が理解した。

「あの塔に突入させること自体が罠だった……？」

広間と言う安全なセーフポイントを作り、隕石が落ちても生存出来る。隕石を止めるには塔に突入する必要があるが、だがそれ自体が罠であると言う事が今更になって判った瞬間だった……。

「……………ここに何かある」

琉璃達がガーブの策略に気付いたその頃。優太郎のビルを抜け出した教授は塔の前に立っていた。

「何かが、何かが私を呼んでいる……」

激しい焦燥感に駆られ、ここまでやってきた教授は険しい顔つきのまま悪魔達が蔓延る塔の中へと足を踏み入れていくのだった……。

くくえす視点く

突入前に聞いていた一番魔力反応が強い階層へ向かう前の広間でブラドール伯爵が力尽きた。それも当然だ、三蔵と信長が脱落し、そこから私達を疲弊させないために1人で戦い続けたのだ、始祖の吸血鬼だったとしても無茶が過ぎた。

「私の心配はいらぬ。先へ行け、裏腹だが、この広間は安全だ。体力が

回復すれば合流する」

ここに来るまでの三蔵たちと同じ言葉を口にし、広間の壁に背中を預け崩れ落ちるブラド―伯爵に背を向けて、階段を走る。残っている面子はこれで8人……正直何の疲労も無くここまで来れたのは奇跡に近いと思う、出来すぎなくらい順調に進めたが、それも此処までだ。「……とまれ」

シズクの静かな声に全員が足を止める。何故止められたのか、それは全員が理解した。

「静か過ぎる」

「本当だ」

今まではゾンビのうめき声や、悪魔の羽ばたきの音が聞こえていたが、この階層ではそれがない。

「横島。心眼に【既に索敵は済ませた。この階層に敵の気配は無い】

ここに来て、敵の気配がない階層が現れた、それは誰がどう見ても罠であり、そして危険であると判るあからさま過ぎる罠……。

「このまま突っ切ったら……」

「間違いなく待ち構えているだろうな」

横島を徹底的に叩きのめしたライダーが待ち構えているのは間違いない。

「ここまで来たら後は広間が3つ」

最上部まで来ている事は判っている、つまりこれが最後の打ち合わせとなるだろう。

「突入前の通り、ライダーは結界で封じて突破するわ。真っ向から戦うには危険すぎるから」

狂神石で能力を強化している相手と真っ向から戦うなんて無謀を通り越して、自殺行為に等しい。だから結界で封じ込めている間に強行突破。出入り口はシズクの氷と精霊石で更に封じて、後は無謀だろうが無策だろうが残り2つの階層を4人ずつで突破し、最上部の結界の制御装置を破壊する。そうすれば後は力を取り戻したビュレト様達の力を借りてどうにでもなる。

「じゃあ行くわよ」

最後の打ち合わせを済ませ薄暗い通路を進む。そして広間の扉を開いた時、拍手の音が響いた。

【やあ、良く来てくれたね。待っていたよ】

拍手をしながら立ち上がった人物は私達も良く知る教授の姿だった。だがその目は赤く輝き、邪悪な気配を纏っているから私達の知る教授とは別人と言うのは明らかだった。

【私の半身がお世話になったようで感謝するよ、では改めて名乗ろう、私はモリアーティ、ジェームズ・モリアーティだ。お美しいお嬢様方】  
ジェームズ・モリアーティ!? 犯罪界のナポレオンとまで呼ばれた悪党中の悪党だ。

「教授。あまり挑発しない、私達の仕事はここで全員を捕らえること」  
【判っているともさ、レイ。だがここまで来たと言う事自体は賞賛に値する。そうは思わないかね?】

教授が笑みを浮かべながらレイと呼んだ少女は判りませんねと言って、一歩前に出る。その手にはすでに眼魂が握られている。

「……横島忠夫。どうか今回は抵抗なきように私は決して好んで攻撃しているのではないと言う事を理解してください」

「抵抗するなって言われてもそれは難しい話だよな」

普通に会話をしているが、その中でも緊張感嫌でも高まっていく、お互いに攻撃を仕掛ける隙を狙っているのは明らかだ。

【ここまで来た事は賞賛しよう。だけど、それもここまでゲームオーバー、いや、チェックメイトだね】

モリアーティは何処から取り出した銃剣を手に取り、レイが眼魂のボタンを押し込もうとその時。それこそが私達の待っていた瞬間だった。

「おつらああああ!!」

今まで黙り込んでいた雪之丞が手にしていた精霊石のフラッシュバンを投げつける。それが炸裂したことで、レイとモリアーティの動きが一瞬止る。

「蛍ちゃん、横島君!」

「はい!!」

美神達の声を聞きながら、私とシズクと雪之丞、陰念は次の階層へ続く扉へと走る。そして美神、蛭、横島が分割して持っていた結界札が発動し、2人を閉じ込める。美神達も駆け出してきて、計画通りこの階層を突破できると思ったその時、モリアーティの邪悪さを秘めた声が響き渡った。

【残念だが、これは余りに計算通りだよ】

モリアーティの声が響き、ピシっと言う輝の入る音が響く、思わず振り返ると、結界に細かい傷が入り始めていた。

「そんなり!? どうして!？」

【簡単な話だよ。君達の方にビュレト、ブリュンヒルデの両名がいるのはこちらも把握している。対策さえ取れば】

モリアーティは手にしていた杖で結界を叩く、その瞬間にガラスの砕けるような音と共に結界は砕け散った。

【この通り、結界などガラスにも劣る。ではレイ君、後は頼めるかな?】

「ええ、こちらの計画通りですね」

【スカサハ!】

レイが手にした眼魂を押し、ガントレットに嵌める姿が見える。次の階層に続く階段への扉はまだ先だ、ここで戦闘になる事を想定していたのか、他の広間と比べて距離がある……変身する前に扉から外に出るのは不可能だ。それでも走る足は止めない、ここで止れば全滅するのが判っているから……。

【セット!スカサハ!レディ?】

「……変身」

【ダンス・オブ・マカブル!ファントムコール!!】

レイと呼ばれた少女が変わった。紫と赤を貴重にしたパーカーに身を包み、顔には槍の穂先を思わせるマスク。

「……苦しまぬように、一撃で終わらせてあげます」

レイが手を掲げると魔法陣から血のように紅い槍が姿を現す。それを見れば判る、あれはゲイボルグ。スカサハはケルト神話に出てくる魔女にして影の国の女王。英雄クーフーリンの師にしてルーン魔

術の使い手だ、英雄であり、神。極めて厄介で、そして強大な存在だった。

(だからですか!)

ブリュンヒルデのルーン魔術は間違いなく、神代のレベル。だがスカサハはその更に上に行く、だからルーン魔術の結界は効果を発揮しなかった。

【シンピガン！スカサハ！ファントムバースト！】

召喚された魔槍が唸りを上げ、恐ろしい魔力を放ち始める。逃げ切れない、そう思った瞬間横島が踏み止まり、白銀の眼魂のボタンを押し込む。

【アーイー！シツカリミナー！シツカリミナー！】

純白のパーカーが横島の周りを踊るのを見て思わず足を止めかけるが、1人だけ足を止めた横島の声が響いた。

「早くー！1回しか防げない！俺もすぐに行きますから早く!!」

それを見た横島の怒声で止りかけた足を再び前へと走らせる。

「横島……くっ！判ったわ！すぐに来るのよ！」

「横島……」

当初の計画と違うが、塔の最上部に行けば横島を助けることが出来る。足を止めるのではなく、前へ進むこと。それが横島を助けることに繋がるかと広間を走る。

「変身！」

【カイガン！ジャンヌ！駆けるは戦場！救国聖女ツ!!!】

純白のパーカーに身を包み、ガンガンブレードとトカゲデンワが合体した旗を手にする横島。

「影の国へ連れて行きましょう」

魔力を放つ槍を放し、爪先に乗せたレイがゲイボルグを上空へと蹴り上げ、その後を追って跳躍した音が聞こえた。

「防いでみせるッ！」

【ダイカイガン！ジャンヌツ!!!】

横島の身体が黄金の靈力に包まれ、旗が光り輝き、背後から凄まじい光が私達を照らす。

「主の御業をここに 我が旗よ、我が同胞を守りたまえ！」

その時発せられた声は横島の物ではなく、女性の声だった

「蹴り穿つ死翔の槍【ゲイ・ボルク・オルタナティブ】ッ!!」

「我が神はここにありて【リユミノジテ・エテルネツル】ッ!!」

無数に分裂した槍が掲げられた旗から放たれた光が受け止める。

永遠とも思える数秒……勝ったのは横島だった。

「……驚きました。今のを防ぎますか」

「いやー素晴らしい、まさか呪いの槍を全て防ぐとは、君の事は上方修正しておこう」

レイとモリアーティが横島を賞賛する。まだ光の壁は消えていない、扉の前で立ち止まり横島の方に視線を向ける。

「横島君！早く！」

「横島！今のうちに！」

私達が早く来るように横島を呼ぶが、横島は旗を手にしたまま、ぴくりとも動かない。もう1度早く来るように叫んだ時、横島の小さな声が響いた。

「すみません、1個嘘付きました」

横島はその態勢のまま私達に向かって声を掛ける。

「これ使うと、俺は動けません。効果が切れるまで俺はこのままです」  
その言葉に目を見開く、だが横島は前を向いたまま私達に声を掛けてくる。

「出来る限りここで時間を稼ぎます。美神さん、神宮寺さん、蛍、シズク、陰念、雪之丞。出来るだけ早く、戻ってきて下さいね」

横島の声は笑っている、ブリキが切れたような緩慢な動きで横島はゆっくりと立ち上がり、扉の前に立つ。その姿を見ればこれ以上何を言っても無粋と言うのは分かった。

「すぐに戻るから！」

「横島！無理しないでね！本当にすぐ戻るから！」

美神と蛍が声をかけ、階段を駆け上っていく。無理をするな、無茶をするなんて安い言葉だ。英霊1体とライダー1人、横島が決死の覚悟でここを死守しようとしている、心配するのは当然。だがその心意

気を無駄には出来ない、少しでも早く結界の基点を壊すことが邪を助けることに繋がる。

「……横島……死ぬなよ」

「すぐに戻りますわ」

シズクと共に階段を駆け上る。残っている階層は2つ、だがそれを安全を期して攻略している時間は無い。同時攻略、それが私達が横島を救えるただ1つの手段だ。

「雪之丞！陰念！急ぎなさい！」

時間がない、とにかく急いで階層を進む……焦りと心配で胸が埋め尽くされる中。自分達が横島を救える手段は前に進むしかないのだから……。

「横島あ!!俺は約束は守る!てめえも約束を破るんじゃないぞ!!!」

「……任せろ」

2人の声が階段の中にまで響く、それに対して横島の声は静かだったが、ここまで響いてきた。

「ああ。頼んだぜ、ここは俺に任せろ」

横島の小さな声が不思議と階段の中に響いた、私達はその声に後ろ髪を引かれる思いで階段を駆け上るのだった。

「待っててくれたのか」

光の壁が消えるまでの10分、レイとモリアーティは横島に対して何もしなかった。効果が切れて、自由が戻って来た横島が立ち上がりながら2人に問いかける。

「待つも何も貴方が最優先ターゲットですので、この場に残るのなら追う必要はありません」

【と、いう訳だよ、ボーイ。君を捕らえれば、私達の勝利条件は達成。後は君を連れて塔を出て、後で塔の中に残っているあとの面子を回収すれば完全勝利と言う事だよ】

物分りの悪い子供に説明するような口調の2人に横島はなるほどと頷き、旗を回転させて槍のように構える。

【抵抗する気かね?君は1人。私達は2人、どっちが有利かなんて簡単に判るだろう?】

「大人しくしてくれれば痛くしませんよ？」

負けると判っているのだから大人しく負けを認めろという2人に対して横島は首を左右に振った。

「そうだな、多分負けるだろうけど、俺は美神さん達が結界の基点を壊してくれるまで耐えればいい」

【ははは、ボーイ、それは確かにその通りだが、基点に誰もいないとも思っているのかね？】

「逆に言うぜ。お前達は美神さん達がどれだけ強いのか判ってない」

横島の声に不安や恐怖は無い。自分が力尽きる前に美神達が戻ってきてくれると心から信じているからだ。

【仮に先に行ったお嬢様方が強いとして、君はレイ……いや、レブナントと私に勝てるだけでも】

槍の切っ先と銃の銃口を向けられた横島は小さく苦笑する。

「勝てないのは判ってるけど……こっちだってそう簡単に負けてやらない！」

気迫に満ちた声にモリアーティはくつくつくと喉を鳴らし、楽しくてしようがないと言わんばかりの笑みを浮かべる。

【ではやって見せてもらおうか。では行こうかレブナント】

「……はい。覚悟を決める時間はもうあげましたしね」

美神達が走り抜けた広間で戦いの火蓋が切って落とされるのだった……。

くベルゼブル視点く

「おおーやつと始まったか、待ちわびたぞ」

何時までも横島が戦わないので暇を持て余している様子のルイ様と女帝だが、横島が戦い始めればがばつと跳ね起き、その戦いに視線を向ける。

「ふむ、今回は防御して耐えるつもりか、2対1だからあながち間違いでは無いね」

「つまらぬなあ、戦いならば前に出るものだ」

ルイ様と女帝の言葉を聞きながら、思わず足踏みする。何故横島を



一人で残したのか、せめてシズクかくえすがいればイーブンな戦いが出来たはずなのに。

「そんなに心配かい？ベルゼブル？」

からかうようなルイ様の言葉に内心しまったと思いつながら

「はい、横島は稀少な存在ですので、ここで失うには余りに痛いかと」  
特異点の可能性を秘め、恐ろしい才覚に溢れている横島をこのままガープ達に渡してしまつて良いのかと言うと、ルイ様と女帝はきよんとした顔をした後、声を上げて笑い出した。

「お前はまだ横島を理解していないな」

「全くだ」

はははつと笑い続ける2人を見つめていると、2人は笑つたまま自信に満ちた表情で告げた。

「横島は勝つよ、己がない相手と植え付けられた自己を持つ相手などに負けるものか」

「うむ、まあ護る者が近くにいないだけ、力を発揮しきれぬと思うが、それでも負けるとは思えんよ」

2人はそう笑うと今正に落下してきている隕石を見つめ、楽しくて仕方ないという表情で笑いあう。

「のう、明星よ。横島が面白いものを見せてくれれば、あれをどっかに跳ばしてしまおうか」

「いいね、つまり日本の命運は横島に掛かつてるつて訳だ」

楽しそうに笑いあう2人、神魔よりも遙か高みにいる2人の考えは私には理解出来ない。だが少なくとも完全に見捨てると言う訳では無いと言う事に安堵し、空中に映し出されている横島と英霊ともう1人のライダーの戦いに私も視線を向けるのだった……。

リポート24 反逆者達の進軍 その7へ続く

## その7

レポート24 反逆者達の進軍 その7

〜東京サイド〜

ドクターカオスとテレサは塔の近くの一番被害者の多いシエルトーで治療活動を行っていたのだが、そこには運悪くオカルトGメンの新入りたちがいて、早く治療しろとかすり傷程度なのに騒いでいた。

「悪いが、お前さんらより重傷者は何人もいる。その程度の傷、睡でもつけとりやなおる」

「「なんだとくそ爺!!」」

骨折をしているわけでもない、ゾンビに噛まれているわけでもない。それなのに早く治療しろとうるさい連中にドクターカオスが眉を吊り上げ、医療道具を運び込んでいたテレサが不機嫌そうに眉を顰めたその時小柄な影が空を舞った。

【のーぶーッ!!】

妙に間延びした声が響き、バシッ!と言う鋭い打撃音が響き、騒いでいた3人が泡を吹いて昏倒する。

「お前ついてきておったのか?」

【のっぶー】

チビノブがぶんぶんと手を振り、その姿にドクターカオスは溜息を吐いた。

「まあお主のおかげで少し手間が省けたの」

「私がやっても良かったのに」

テレサの手にも棒が握られており、それで3人を攻撃しようとしていたのは明白だった。恐らく3人はチビノブに昏倒させられたほうがまじだっただろう。

「手加減とか判らないから、これで覚えようと思ったのに」

残像を残しながら素振りをするテレサ。間違はなくテレサに攻撃されていたら骨が砕けていたの言うまでもないだろう。

「無事に切り抜ける事が出来たら、何か作ってやろうか？」

ドクターカオスの言葉にコクコクと何度も頷くチビノブにドクターカオスとテレサは苦笑し

「ではまずは、暫くは手伝いをしてくれるかの？」

「ノブウ！」

くだらないことで時間を取られたと呟き、ドクターカオスとテレサはチビノブも交え、避難している怪我人の治療を始めた。

「おいおい、黙って聞いてりやなんだなんだ！お前達は何様だ!!」

「そうよ、貴方達が何をしてくれたのよ！逃げてきて、偉そうに命令して何様よ!!」

「み、皆さん……」

ピートが向かったシエルターにはセイレーンがいて、2人でゾンビや悪魔を退けていたのだが、ゾンビが少なくなったら避難してきていた視察団がピートとセイレーンを罵倒し始め、それを聞いていた2人に助けられていた避難してきた人が視察団に怒鳴り始める。

「くっ！お前達こそ理解しているのか！吸血鬼のハーフと妖精。そんな相手がいてはゆっくり休むことも出来ないだろう！」

「人間じゃないんだから人間の避難所にいるのはおかしいのよ！」

視察団の男女の言葉にピートとセイレーンは悲しそうに顔を歪め、それを見て避難し、2人に護られていた民間人が激怒するのは当然の事だった。

「そうかい！でもな！俺達はあるちゃんと言った姉ちゃんに助けられたんだ！お前達じゃねえ！」

「人間じゃないだつて!?よく言えたもんだよ！大体あんた達にそんなことを言う資格があるのかい！」

味方がいないことに焦り、2人は自分達がGS協会の視察団の人間だと名乗った。いや、名乗ってしまった。

「じゃああんた達も霊能者じゃないか！隠れて、怯えて、ゾンビがいなくなりや霊能者だつてよ！お偉いさんだから自分達の言う事を聞けつてさ！」

男の言葉に避難してきていた民間人の批難の視線が視察団の2人

に向けられる。

「霊能者なら、少しでもゾンビと悪魔と戦いなよ！ここにいるGS協会の人は頑張ってくれたよ！」

「そうだ、そうだ！怪我しても逃げてくださって最後まで俺達を庇ってくれたぞ！」

徐々に自分達に向けられる批難の声に男女は徐々に耐え切れなくなり、ついには黙り込んだまま、避難所の事務室に閉じ籠った。

「あんちゃん達、悪いな、気を悪くしただろ？」

「ほら、水と携帯食料持って来たよ。少しでも良いからくいな」

「い、いえ！僕は食べたりしなくても平気ですから」

「あたしもだよ」

良いから良いからと言って水と非常食を抱え込まされたピートとセイレーン。確かに2人は人間では無い、この状況では恐れられても無理は無かった。だけど誠実に助けようとしていたから2人を庇ってくれる沢山の味方がいた、横島だけではない、人間じゃなくても受け入れてくれると言うのが2人には何よりも勝る報酬であり、そして味方であった。

「夏子、大丈夫か？」

「うん。私は大丈夫やけど、なんか大変なことになってるな」

そして銀一が避難して来ている避難所には横島と銀一の幼馴染である夏子の姿もあった。

「あーあー、長期休暇やから観光に来たのに、なんでこないなことになるんやろうなー」

「でも運よく俺に会えたやろ？」

「まー知り合いがおるのは心強い……銀ちゃん！ちよつと私外出るわ！」

「おー気を……つて!?アホか！なんで外にでるんや!？」

夏子から告げられたまさかの言葉に銀一は思わず素の大阪弁が出てしまったが、夏子は止らず避難所の出口に走っている。

「外で子供が倒れてるんや！黙ってみてられるかいな！」

「ちよつ！あーつ！クソ！俺も行く！」

夏子が走って行くのを見て銀一も黙ってみていられる訳がなく「ちよ!? オタクなにしてるワケ!? つて! あーもう!! なんて横島の知り合いは考える前に行動するワケ!？」

この避難所を担当していたエミは悲鳴を上げながら、2人の後を追って避難所を飛び出していた。

「おう、これで最後だぜ」

「きやくなんでこんなにするの〜」

「は! 俺はオカルトGメンだ、視察団だつてやかましい方が悪い」

冥子の前に投げ捨てられた、男達は全員生きてるか? と心配になるほどにたこ殴りにされていた。

「後で責任追及されたら〜どうするつもりなのよ〜」

「ははっ!! そんなこたあ氣にしてねえよ! おーい、もし俺が訴えられるつうたら証言してくれるか?」

「おう! 良いぜ兄ちゃん! 偉そうなことばかり言つて何の役にもたたねえやつより、兄ちゃんの方が俺達を助けてくれたしな」

「食べる物も水も独占しようとして、子供のことを考えて欲しかったからね。お兄さんが悪くないって証言してあげるわよ」

その言葉に不動はにやつと笑い、首を鳴らしながら椅子に腰掛けた。

「つうわけだ、心配ねえ」

不動がボコボコにした連中はオカルトGメンだ、視察団だ。俺達に従えといつて民間人に命令ばかりしていた集団で、命知らずにも不動にも命令し、叩きのめされた連中だった。

「は〜私は別にいいけどね〜シヨウトラちゃん。お願いね〜?」

【わふー!】

とは言え、これで邪魔者はいないと治療を始める冥子を見つめている不動は、窓の外を見てもう目視出来るまでに近づいて来ている隕石に舌打ちをしながら、カーテンを勢い良く閉めるのだった……タイムリミットはもうすぐそこまで迫っていた……。

〜美神視点〜

広間を震わせる獣の咆哮に思わず冷や汗を流し、身体を小さくさせる。視線の先の扉は既に開いていて、陰念と雪之丞の2人が最上階を目指しているはずだ。

(ここからは本気って事ね)

今までの広間と異なり、やけに広く。そして結界などで構成されていて、私と蛍ちゃん、シズクとくえすの2人ずつで分断されるのと同じ時に壁がせりあがり迷路のように変化した。思わず舌打ちしたが、その変わりに2人は無傷で上の階層に行く事が出来た。正直2人で何が出来ると思わずにはいられないが、塔の上部のコアさえ破壊してくれば、後は神魔の援護を得る事も出来る。1人でも最上階に辿り着くことが全員が助かる条件の1つだ

「かなり厳しいですね。どうしますか?」

「……そうね」

私達を分断した上で結界の中に放たれたのは異形の魔獣だった。見た感じは合成魔獣のキメラ、だがその圧力は獣ではあるが神魔に迫っていた。

「横島君がいる階層までは手抜き、それから上は本気で妨害にくるみたいね」

ここまで温存する事が出来ていた。まだ正式名称もない霊具を起動させる、機械の様な駆動音と共に右手首に装着していたブレスレットから高密度の霊力の盾、左腕には籠手と一体化した剣が展開される。

「私は弓みたいですね」

「いいんじゃない?向いてると思うわ」

蛍ちゃんは盾と一体化したボウガンのような形状だ。霊体ボウガンの発展型と聞いていたが、攻撃力には期待が持てそうだ。

(重さは殆ど感じないわね)

これだけの重装備だから重さも相当と思っただけに、重さを感じないと言うのはありがたい。ここまで使う機会が無かったので出発前に蓄えてきた霊力の備蓄も万全だ。問題は使った事が無いだが、そこはぶつつけ本番でやるしかない。

「くえすとシズクは大丈夫でしようか？」

あの2人には霊具ではなく、霊力を蓄える腕輪が2つずつ支給されている。2人とも霊力を攻撃に転換するタイプなので霊力が尽きる方がよっぽど危険だ。動きを阻害する防具よりも、そちらを選ぶのは当然の事だと思う。

「……蛍ちゃん。話はここまでよ」

「……っはい」

通路の先から聞こえてきた獣の吐息、生臭い匂いが近寄ってくるのが判る。

【グルウ】

話し声……ううん、違うわね。恐らく霊具が起動した時の霊力に反応してこっちに近づいて来ているのだろう

「多分だけど、この通路の壁は私達の行動を阻害するための物で、相手はあの巨体でもこの通路を十全に活用出来る」

壁がそり上がる前に見たのはライオンを2回りほど巨大化させた獣。見えたのは一瞬だが、前足には岩のような肌があった。

「あの巨体でこの狭い通路……普通は無理だと思うんですけどね」

常識的に獣を戦わせるなら、広い場所。それなのに狭くするその理由が判らないが、足音を立てて近づいてくるのだから先制攻撃を全力で叩き込ませてもらおう。蛍ちゃんとハンドサインを交換し、通路を背中にして相手が近づいてくるのを待つ、壁越しにでかいのを一発叩き込んでやると左拳を握りこむ。重々しい足音が近づいてくる、私の前に来た瞬間に壁に左拳を叩き込む。壁が砕け、霊力の刃に現れる。舞い違いなく捉えたタイミングだと確信していたのだが……その姿は何処にもなかった。

「い、いない!?!」

間違いなく相手の気配は近づいてきていた、だが蓋を開けると相手はいない。その事に一瞬混乱した、気配も足跡も近づいていたのに何故!?

「美神さん!上!!」

蛍ちゃんが霊力の矢を放ちながら叫ぶ、顔を上げるよりも先に頭を

庇ってその場を飛びのく、重々しい音と共にコンクリートの砕ける音。そして何かが羽ばたく音。

「……そういう訳」

体勢を立て直した私が見たのは背中に生えた漆黒の翼で、壁の上を滞空し、蠍の尾に似た漆黒の鎧に包まれた尾をこちらへ向けるキマイラ

……いや違う、更に上位の個体だ。

「マンティコア……ね。泣きたくなつて来るわ」

S級の魔物であるマンティコア相手に、しかも移動範囲に制限を掛けられた上で戦う。余りに相手が有利すぎる条件に思わずそう呟いてしまう。だが条件で言えば横島君の方がはるかに不利な条件で戦っている、師匠である私が少しくらい不利だからって諦めるわけにはいかない。

「蛍ちゃんはフォローして！出来れば翼狙いでお願いよ」

伸ばされた蠍の尾を霊力の盾で受け止めながら、私は蛍ちゃんに向かってそう叫ぶのだった……。

くくえす視点く

次の広間に入るなり、シズクと共に結界の中に閉じ込められた。美神達も同じですが、陰念と雪之丞が先に行つたので、コアさえ破壊してくれば後はどうにでもなる。まずはそれが最優先だ、横島を助けるためにもそれが何よりも大事だ。

「それでシズク、相手の気配は判りますか？」

「……判らない。こんな相手は初めてだ」

シズクが忌々しそうに舌打ちする。結界の中に閉じ込められ、そのまま放置されている。正直ガープがただの足止めなんてしてくる訳がない。この結界の中には何かがある、だが気配が判らない。索敵能力を持つシズクに期待したが、どうもシズクも分からないとなると相応な隠密能力持ちだろう。時間がない時に、めんどくさい相手を配置してくれたものだ。

「……時間がない、広範囲に攻撃するが良いか？」



「どうぞ、私もそうするつもりでした」

相手の時間稼ぎに付き合うつもりなんてない。向こうが出てこないのなら炙りだしてやるつもりだ、シズクが両手を広げ、そこから水が滴り落ちる。

「……お前の遊びに付き合うつもりはない。消えろ」

シズクが氷の嵐を放った瞬間——私達は結界に背中から叩きつけられていた。

「けほっ……今何が起きたの？」

「……判らない、しかも私が水でダメージを受けた」

ギリつとシズクが歯を噛み締める。水神が水でダメージを受けた、それは間違いなくシズクにとっては最大の屈辱だろう。しかし攻撃を放つと同時に叩きつけられていた、それらしい姿も見えず。

(なるほど、魔法使いの天敵ですか)

火力と範囲攻撃に特化した魔法使い、そしてシズクのような神魔に対するカウンター能力を持ち合わせた隠密能力持ちだ。

「さて、どうしますか？シズク」

私は魔力が尽きた時の補助武装として拳銃を所持している。聖句や、魔力をエンチャントされているカートリッジを外して、通常のカートリッジに交換しながらどうしますか？と尋ねる。

「……余ってるか？」

「ええ。ありますわよ」

2丁所持しているので1つ手渡し、予備のカートリッジを2つ手渡す。余りシズクは好きでは無いが、今はそんなことを言ってる場合は無い。

「……神宮寺、跳べ」

シズクの言葉を聞いて反射的に跳躍すると、地面に4つの傷跡がつく。この感じは爪と言う事ですかね、何にせよ獣と言うことに変わりはなさそうだ。

「助かりましたわ。では助かるついでに、攻撃の瞬間のことを教えてください」

「……言われなくても」

私には感知できない、極微弱の殺気。シズクはそれを察知したらしい、相手の姿が判らず、そして魔法も使えない。時間がない今、私とシズクに出来る事が姿の見えない敵の全容を知り、そして何故魔法を反射出来るのか、それを知る事が出来なければ死ぬ。

「イライラしますわねえ……時間が無いと言うのに」

「……全くだ」

横島が危険だと言うのにこんなまどろっこしい事をしなければならぬ事に苛立ち、姿を隠している何かに激しい憎悪を抱く。こういううちまちましたのが一番嫌いなので余計に苛立った。

「……下から何か来る、薙ぎ払いだ」

シズクが氷で何かを防ぐ、遠心力、薙ぎ払い……氷が砕けた位置。それから姿の見せない襲撃者の位置を予測して引き金を引いた。

「そこですわ!」

「ギツ!」

何かの呻き声と床に落ちる紫色の血液、これで普通の生き物では無いというのが判った。

「……何発当たった?」

「掠っただけですわね。大分速いですわ」

傷をつければ血液でどこにいるのか判ると言う淡い期待もあったが、敵の姿は見えない。恐らくある程度の自己再生能力は有しているのだろう。それに長い尻尾と来ればある程度の正体の予想もついた。

「どうもお仲間のようで」

「……みたいだな」

恐らくリザードマンのような姿をしていると言う予想がつく。恐らくだが、元々魔界に生息していた生き物をガーブが改造して、魔法反射の能力を与えたか、それともその逆に姿を消す能力を与えたか、もしくは寿命などを取り払い、元々持っていた能力を改造されて防衛に配置されたと見るべきだろう。

「……時間は無いが、やるしかない」

シズクの言葉に判ってますわと返事を返し、表面上は冷静でも早くと急ぐ心を抑えるのに私は必死だった。

「……心は熱く、頭は冷ややかに戦いの鉄則だぞ」

額に青筋を浮かべているシズクに言われ、お前が言うか？と思つたが、自分よりも動揺している相手を見ると逆に落ち着くのか私は小さく深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

「言われなくても分かってますわ」

ここで私とシズクが切れて力任せに暴れたとしても、それが横島を助ける事には繋がらない。どれだけ怒りを抱えていても心は冷やかに……それが魔法使いの鉄則なのだから。

〈陰念視点〉

俺と雪之丞の2人で塔の最上階を目指して走っていた、コアを破壊すれば神魔の弱体化をさせている結界を解除出来る。そうすればお師匠様も全力を出せる、2人居ればどちらかが護っている敵を相手にしている間に破壊できると思っていた。

「……横島の言うとおりになっちまったな」

「ああ」

最悪の場合。横島がなんとか道を作るから後を頼むと俺と雪之丞は言われていた。馬鹿な事を言うなと2人で言ったが横島は既に覚悟を決めていたのだろう。

『なんか嫌な予感がするんだよ、だから念の為に頼んでおくだけだ』

念の為と言っておきながら、こういう展開になる事を横島は予測していたのかもしれない。霊能者と言うのは勘が鋭いから、何かを感じ取っていたのかもしれない。

「少しでも早くコアを破壊するぞ」

「判ってるー！」

とにかく俺達には時間がない。腕を振り、息が切れようが階段を登り続ける。そして最上階に着いた俺達を待ち構えていたのは2人の人影だった。

(人間……か?)

姿形は人間だが、生きてるように見えない。その異質な雰囲気も嫌でも俺と雪之丞に警戒心を与え、2人が眼魂を取り出した瞬間にそ

れは確信に変わった。

【セツト、ハルピユイア！レディ？】

【セツト、サイクロプス！レディ？】

間に合わない！くそがッ！俺もホロウ眼魂を取り出しボタンを押した。

「おおおおおー！ー！ー！ッ！！させるかよっ！！」

雪之丞が雄叫びを上げながら魔装を発動させ、駆け出していく。止める間もない事に舌打ちするが、少しでも止めれる可能性があるならそれに賭ける気持ちも判る。

【アーイ！オソレテミーヤー！オソレテミーヤー】

（なんだ？この違和感は）

すぐに俺を襲ってくるパーカーが今日は何故か俺の周りを浮遊する事に留めている。何故と思いつつも襲ってこないなら、それはそれでいいと思いつつレバーを握り締める。

【「変身！」】

【「心中！ゲッチュー！ガクガク！ゴースト！】

【「ソニックソルジャー！ファントムコールツ！】

【「ガイアソルジャー！ファントムコールツ！】

同時に変身と叫び、俺と2つの人影の姿が変わる。だが2人が変身した姿は機械的でロボットののような印象を受けた。

「邪魔！敵は排除する」

邪魔だと雪之丞が叫び、拳を繰り出そうとした瞬間。水色のパーカーのライダーは無造作に雪之丞の顔面を掴み、信じられない事に雪之丞の身体を持ち上げたのだ。

「がっ！ぐっ！？」

相手の方が小柄なのに相手は片手で雪之丞を持ち上げ、壁に向かって走り出す。

「雪之丞！！「排除する」ぐっぐう！！」

その姿を見て思わず雪之丞の名を叫んだが、次の瞬間。俺は横殴りの衝撃を受け、上空に向かって弾き飛ばされていた。

「うっぐっ」

俺の首を掴んでいるライダーの背中には翡翠色の霊力の翼が生えていて、低空飛行からの体当たりで弾き飛ばされたというのが判った。首に伸ばされている手を必死に振りほどこうとするが、信じられない力で全く振りほどく事が出来ない。

「……繰り返す。敵は排除する、横島忠夫、美神令子以外は抹殺せよ、それが私に与えられた命令。よって抹殺する!!」

機械的な声が同時に発せられ、俺は上空からの急降下で広間の床に叩きつけられ大きく弾んだ。

「げほっ…げほっ…」

凄まじい衝撃に息が出来ない。思わず蹲り咳き込む、反対側でも凄まじい炸裂音がして、雪之丞も同じように壁か地面に叩きつけられたのがわかる。

「排除する」

「ぐっ…調子に乗るんじゃない…」

脇腹を蹴ってきたのでそれを受け止め、足を払い倒れた所に拳を振り下ろす……

「な!?!」

だが俺の拳が捉えたのは広間の床で、今日の前にいたライダーの姿は無い。混乱した次の瞬間、背後から蹴りを叩き込まれる。

「ぐっ……何が起ってる!」

広間の床を抉りながら何とか衝撃を殺して立ち上がり、俺を蹴り飛ばした相手の方を向くが敵の姿は無い。

「どこだ!?!」「どこだ!?!」

俺の懐に一瞬に現れていて思わず腕を振るうが、何も手応えがない。

「私は量産型レブナントタイプH。貴方のスピードは遅すぎる」

「がっ!ぐっ!?!」

一撃の威力は大してない。だが、連続して繰り返される攻撃は全て急所を正確に射抜いていて、ダメージよりも急所を攻撃されたことで動きが鈍ってくるのが判る。

「くっ…ん、この…オラァ!」

「無駄です、私は量産型レブナントタイプS。貴方の攻撃は私には届かない」

無機質な言葉が雪之丞に投げかけられる。雪之丞の拳も霊波砲も完全に無効化されていて、重い反撃を受けたたらを踏んでいる。

「余所見をしている暇があるのですか？」

「くっ！舐めんなあ!!」

大振りではなく、鋭く小さい打撃で少しでも相手の動きを阻害しようとするが、クリーンヒットは愚か、かすりもしない。

「無駄です。私とタイプSは、対神魔用にロールアウトされています。人間では決して勝てません、なので抵抗せず死を受け入れることを提案します」

無機質に告げられる言葉にふざけるなど拳を握りしめる。勝てないから諦めるなんて情けない真似が出来るか、俺なんかよりも遥かに横島が苦しい戦いをしているのに諦めろって言われて諦めるはずが無い。

「情けねえ真似が出来るかあッ!!」

俺と雪之丞の叫びが重なり、繰り出した拳がライダーの顔面を捉え、数メートル吹っ飛ぶ。俺は殴られすぎてぼんやりする頭を数回振って、拳を握り締める。

「人間を舐めたらどうなるか、教えてやるぜ」

神魔が人間より優れている、そんなのは当たり前だ。だけど人間だって神魔を打倒出来る、傷を付けることが出来る。俺も雪之丞も絶望的な状況でも諦めず立ち上がってきた奴を知っている……だからッ!!この程度で諦めてたまるかッ!!

「俺はお前をぶちのめして、この塔を破壊してやる」

何度倒れようが、何度血反吐を吐こうが、俺は止らない。横島に頼まれたんだ、男が1度任せろと言っておいて、やっぱ無理でしたなんて情けない真似なんて出来ないから、俺は拳を握り締めそう叫んだ。「そうですか、では排除します」

「お好きなように抵抗してください、私は貴方を抹殺します」

無機質にロボットのよう排除します、抹殺しますと言う2体に向

かつて俺と雪之丞は同じことを叫んでいた。

「やってみろ、この人形野郎。人間を舐めるのも大概にしやがれ」

↳横島視点↳

背後から来た衝撃にたたらを踏んだ瞬間、胴に槍の一撃が叩き込まれ塔の壁に背中から叩きつけられる。

「ぐっふ」

その凄まじい衝撃に一瞬息が詰まる。そのまま広間の床に倒れかけるのを足を地面に叩きつけるようにして耐える。

【大丈夫か横島！】

心眼の言葉に大丈夫じゃないと心の中で呟く、ジャンヌ眼魂。ジャンヌさんの眼魂と異なり、白の姿……多分ジャンヌダルクと言う本来の存在で考えれば、この白い姿が本来のジャンヌ・ダルクなのだろう。その能力は堅牢な防御力……正直この防御力に助けられ、俺はなんとか生きていくというレベルだった……1度神宮寺さんの眼魂を使おうとしたが使えなかった。神宮寺さんの多彩な魔法を使えるなら2対1でも何とかなるかもしれないと思つての事だったが使えなかったので、今もこうしてジャンヌ眼魂の高い防御力を頼りにして戦っている。

【ふむ硬いね。今のは完全に意識を刈り取つたと思つたのだがネ】

モリアーティが観察するような視線を向けてくる。姿も顔も同じなのにその悪意に満ちた表情には嫌悪感しか感じない。

「……上の階層にはガープ様が改造した魔獣がいますし、私の量産型もいます。貴方のお仲間は目的を果たせずに死んでいると思いますよ?」

だから抵抗は止めたらどうですか?と近づいてきて警告する少女に手にしていた旗を振るう。火花を散らす旗と槍、だがよろめいたのは俺だけだった。

「美神さん達を……甘く見るなよ……絶対にやってくれる」

俺がここで足止めをしていれば、美神さん達は最上階の結界のコア

を破壊してくれるだろう、だから俺はそれを信じて待つだけだ。

「……別に私はそれに関して思うことは無いんですけど」

振るわれる拳を頭を下げてかわし、地面を蹴って間合いを放す。槍はリーチをつめれば有利と思っていたのだが、間合いを詰めても強い。それなら距離を取ったほうがまだ対応しやすいと判断した。

「くっっ！」

無言で振るわれた槍に肩を挟まれ、火花が散る。だが胸を狙われていたのを肩にそらせる事が出来たのなら十分御の字だ。

「無理に攻めようとするな。距離を取りつつ、モリアーティは私が見る」

無茶を言うといいたくなるが、それが出来なければ俺が死ぬ……地力も戦闘技術もあちらが上。無理だと判っているがやるしかない、それでも心眼がモリアーティを見てくれているのでギリギリ対処出来ている。

「……えいー」

可愛い掛け声から振るわれる可愛くない薙ぎ払いを旗で受け止める。力はそれほどでもないのだが、ここにモリアーティが加わるとその威力が何倍にも跳ね上がる。

「それ！」

「ぐっ!!!」

その槍にモリアーティの銃弾が当たり圧力が増し、そのまま押し切られてしまう。正確無比な射撃、これが攻撃にも防御にも加わるので厄介だ。

「はっ!!!」

踏み込みと同時に繰り出される刺突。狙いが肩であるのが判ったので致命傷では無いと判断し、歯を食いしばり耐え。上段から旗を振り下ろすがモリアーティがそれを許すわけも無い。

「んー狙いは良いがまだまだ」

4つの衝撃を受けたと思った瞬間旗が弾かれ、後退させられる。そして俺の動きが止ったその瞬間に4つの閃光が走り、俺は再び弾き飛ばされていた。



「ぐふっ!!」

壁に叩きつけられ何度も咳き込む。幾らジャンヌ魂の防御力が高くても、流石に限界が見えてくる。

「……そろそろ降参してはどうですか？ 貴方は稀少らしいのでそう酷い目には合わないと思いますよ？」

「……やなことだ」

咳き込みながら立ち上がり、旗を構える。切っ先が振るえ、目の前が歪むがそれでも不屈を訴える。

「信じるねエ、実にくだららない、どれだけ頑張ろうがどうしようもない現実と言う物は存在する。君は私達に回収され、他の人間もサンプルとして実験台になる。それは覆しのない確定した未来なのだよ」

俺を見て愚かなと言うモリアーティにうるさいと叫んで、旗を振るい少女を弾き飛ばそうとするが、それよりも先に目の前に文字が浮かんだ。

【避けるー！】

心眼の言葉を聞くよりも早く横に飛ぶ。文字が光り輝き放たれた炎に肝を冷やす。

【ほら、私から注意が逸れた】

「がっはっ!!!」

心臓を的確に貫く弾丸に上半身だけが大きく弾かれる。変身しているから身体を貫通することは無いが、その凄まじい衝撃に意識が跳びかける。

【気絶するな！踏み止まれ!!】

心眼の言葉に歯を噛み締めて薄れ掛けた意識を繋ぎ止める。正確無比な射撃が俺の攻撃を、そして移動を阻害する。防御を繰り返し、最後まで持つのか？と言う考えが脳裏を過ぎる。ジャンヌ魂は防御力こそ高いが、攻撃力は低い。それは最初の数回の打ち合いで理解していた、心眼の補助もあり、先手先手を取っているのに防がれる。モリアーティに妨害されているのもあるが、妨害されるのも攻撃力の低さが大きく影響しているだろう。

【前に出ると言う方法もあるが、それだとモリアーティが問題だ】

心眼と頭の中で相談しながら、横薙ぎに叩き込まれた槍を旗の柄で受け止め、横へ受け流し拳を繰り出す。

「……当たりません」

だがそれは首を傾げるだけで交わされ、それならばと膝蹴りを放とうとしたが……やはりこれも届かない。

【良く頑張るねえ。もうそろそろ諦めたらどうかな？】

長い銃身から放たれた銃弾が膝に命中し、苦悶の声を上げた瞬間に少女の拳が顔面にめり込み大きく弾き飛ばされる。

「……ぐっ、まだまだあ」

身体は痛い、もう無理だと心が叫んでいる。でもそれでも、それでも俺はまだここで倒れるわけには行かないのだ。歯を食いしばり、視界がぼんやりと滲む中。それでも俺は膝を折らない、意地でも倒れるつもりなんか無い。

【レブナント、どうも彼の闘志は折れないらしいね。意識がある限り、彼は立ち上がるよ】

「……判りました。では意識を完全に奪いましょう」

少女は無感情にガントレットを操作すると全身に凄まじい魔力を纏った。

【シンピガン！スカサハ！フアントムバーストツ!!】

「影の国へと連れて行きましょう」

手にしていた槍を落とし、それを爪先に乗せながら少女が坦々とした声で告げる。咄嗟にベルトのレバーに手を伸ばしたが……俺の手はレバーを掴むことは無かった。

「うっ……」

積み重なったダメージに足がもつれ、一瞬意識が遠のいた。その時間は数秒にも満たない、本当に一瞬の事。だがこの状況でそれは致命的だった……。

「蹴り穿つ死翔の槍【ゲイ・ボルク・オルタナティブ】ツ!!」

上空に飛翔していた少女がオーバーヘッドの要領で槍を蹴ってくる。それは空中で分裂し、雨のように迫ってくる。もうジャンヌ眼魂で防ぐことは出来ない、韋駄天でもかわす事が出来ない。

「ゲームオーバー！チェックメイトだよ。ボーイ」

嘲笑うかのようなモリアーティの言葉がやけにはつきり聞こえる。

（死ぬ……ここまで……）

眼前に迫る死を運ぶ紅い雨。もう今からここまで、諦めるしかないのか……。

（違う、まだだ）

まだ俺は全てを出し切っていない。まだ、腕も動く、足も動く、霊力も使える。それなのに諦めるのか？足元に転がっている清姫ちゃん  
の眼魂を握り締めナイトランターンにセットする。

「ダイカイガン！ジャンヌ、清姫ツ！ガンガンミナー！ガンガンミナーツ！！」

「諸天は主の栄光に、大空は御手の業に。昼は言葉を伝え、夜は知識を告げる。我が心は我が内側で熱し、思い続ける程に燃ゆる」

ガンガンブレードから溢れ出た霊力の余波が上空から降り注ぐ、死の雨の第一陣を防いだ。ガンガンブレードの刃を握り、頭の中に浮かんだ言葉をただひたすらに口にする。

「我が終わりは此処に、我が命数を此処に、我が命の儂さを此処に。残された唯一の物を以（もつ）て、彼の歩みを守らせ給え」

ガンガンブレードから溢れ出た霊力が紅く染まり、それと同時に白銀のパーカーも燃えるような赤に染まる……いや、これはきつと燃えているのだろう、この詠唱の通り命の炎を燃やしているのだ。

「横島！止める！今の状態でこれ以上の魂への過負荷は死ぬぞツ！！」

心眼の静止の音が聞こえるが、俺はもう止まらない。いや、止まったら動けなくなるのが判っている。だから動き続ける、立ち止まらないで、諦めないで、心を折らないで俺は前に進み続ける。仮に倒れたとしても——後ろ向きには絶対倒れてなんかやらない、道は前にしかない、そしてどこまでも続いているのだから。

「主よ！この身を委（ゆだ）ねます！！ 紅蓮の聖女【ラピユセル】ツ！」  
ガンガンブレードだけではない、全身が燃える炎を纏ったまま前に出る。不思議な事に、痛みは無い、苦しみも無い。降り注ぐ死の雨を弾く、ガンガンブレードを、拳を振るいひたすらに弾き続ける。

「……これはちよつと予想外ですね」

【私もだよ、まだこれだけの力があつたとは驚きだね】

レブナントとモリアーティの信じられないと言う声がやけにはつきりと聞こえる

弾く

弾く

弾く

弾く弾く弾くツ！

ただひたすらに全身を包んでいる炎に突き動かされたただひたすらに槍を弾き続ける。だが半分も弾いていない所で、異変が俺を襲った。身体が力に入らない、ガンガンブレードが重くて仕方ない、気を抜いたらそのまま倒れこんでしまいそうになる。

「お……おお……おおおお……オオオオオオオオツ!!!」

叫ばないと何かしていないと駄目だ、このままでは消えてしまう。俺は動けなくなってしまう、そんな確信めいた予感に突き動かされガンガンブレードをがむしゃらに振るつた——そして……俺の手から乾いた音を立ててガンガンブレードが弾けとんだ。それだけじゃない、ジャンヌ魂も解除されてウィスプ魂に戻っていた事に……この時初めて気付いた。

【良く頑張つたよ、だけど、ここまでだ】

モリアーティが手を叩きながら、諦めろという言葉を投稿かけてくる。だが諦めると言う言葉は俺の中で一番縁の無い言葉だ、まだ動ける。動けるならば、俺が諦める訳が無いのだ。

「まだ……まだ諦めて堪るかツ!!!心眼!手伝ってくれ」

【判っている……ここで死ぬ訳にはいかないからなツ!!】

靈力で盾を作る、極限まで圧縮して全てを防ぐなんて贅沢は言わない。手でも、足でもくくれてやる、だけど頭は守る。頭だけが無事なら、俺はまだ戦える。足を失おうが、腕を失おうが死ななければ俺の勝ちだ。

「俺はツ……」

耐えてみせる。自分で大丈夫だ、耐えて見せるから先に行ってくれ

と言ったのに、その俺がここで倒れるわけには行かない。

「俺は……諦めないッ!!」

サイキックソーサーを全力で展開する。だが俺の霊力を振り絞ったサイキックソーサーは無数に降り注ぐ槍には何の意味も持たない、紙のように碎け、死の雨が降り注いだ。

「ぐっ。ぐぎっ!!」

音を立てて槍が身体を抉っていく、それでも霊力の集束は緩めない。今で駄目ならもつと圧縮する、もつと、もつと!! 霊力を搾り出せ「あ、あああああああーっ!!」

目の前で高密度に圧縮された霊力が渦を巻く、徐々に貫通していた槍が少なくなる。でも駄目だ、まだ足りない、もつと、もつと霊力がある。そうでなければあの雨を防ぐ事が出来ない、そうでなければ死んでしまう。

「これ以上は命に関わるぞ!」

霊力をこれ以上使えば命に関わると心眼が言う、だが耐える事が出来なければ、俺はどの道死ぬ。でも俺は死ぬつもりなんてない! 耐えてみせる。これで耐えれないならもつと、もつと圧縮して、ほんの少しでもいい致命傷を防ぐ事が出来ればそれでいい。約束を護れないで死ぬつもりなんてない、俺は約束を「護」るんだ! ここで耐えて、皆が戻ってくるのを待つんだ。

「う、うおおおおおおおッ!!」

その時澄んだ音色が聞こえた気がした。目の前で渦を巻いていた霊力が集束して、俺の前に集まってくるのがやけにはつきり見えた、そしてそれはそうあるのが当然とでも言うかの用に俺の目の前で結晶化していく、それはグレイト魂の時に眼魂を作る時と同じのように思えた。

「そんな、まさか?! 早すぎる?!」

心眼が何かうろたえている中、眩い霊力の輝きの中。俺は見間違いかもしれないが、ある物を見た。それは翡翠色に輝くビー玉のような何か……その中に刻まれた「護」と言う文字。それが一際輝いた次の瞬間、俺は後方に向かって弾き飛ばされていた……。

「ぐっ……ぐっ……」

【オヤスミー】

壁に背中を預けて崩れ落ちる。何とか生きてはいるが……変身が解除され、立ち上がることもすら出来ない。蜘蛛の巣状に割れている壁がどれだけの勢いで俺が叩きつけられたのかを如実に現していた。

(あ、あれは……)

俺の目の前で「護」と刻まれた球体が霊力へとなって消えていく……なんだったんだろうか、今は……握りこんでいた手を開くと同じようなビー玉が零れ落ちるが、身体の痛みと霊力の消耗で意識が途絶えかけていてそれ所では無い。

「これでもう終わりです。大人しくしててください」

【甘いねえ、手足を全て折ってしまえばいいんだよ、生きていればいいんだ。丁寧に扱うこともないさ】

ゆっくりと近づいてくる影に、もう駄目かと思ったその時。

【ボーイツ!!】

勢い良く扉が開く音と俺を心配する声。その声の聞こえたほうに視線を向けるよりも先に、俺は誰かに抱き抱えられていた。

「なん……で?」

【ボーイ! 大丈夫か!? 生きているのか!? 私が判るかネ!】

涙を浮かべ俺に駆け寄ってくる教授の顔が俺の目の前にあるのだった……。

リポート24 反逆者達の進軍 その8へ続く

## その8

リポート24 反逆者達の進軍 その8

〜綱手視点〜

塔の壁に背中を預けたまま呼吸を整えている着物姿の女性……中層に残った綱手だ。彼女は拳を閉じたり開いたりしていたのだが突如目を閉じて大きく溜息を吐いた。

「駄目だ。全然回復しない」

元々仙人である綱手には霊力の枯渇と言う事はありえない。常に大自然から力を供給されているので、霊力切れ、体力切れなんて事はまずありえない。だが現に体力切れを起こしているのには理由があった。

「どうもこの塔の作りみたいだね」

動けないのなら今時分に出来る最善をする。綱手は壁に手を当てて、立ち上がり広間の中をゆつくりと歩き出す。

「魔力と神通力、それに陰と陽……西洋と東洋の技術のミックスか」

ありとあらゆる力の概念を用いて作られている結界の分析をする。今回の事もそうだが、今後これと同じような結界がいくつも作られるという可能性を考え、分析をするつもりだった綱手だが、結果論は判らないという結果だった。ガープの渾身の結界はそう易々と分析出来る物ではなかったのだ……綱手がどうしたもんかねと溜息を吐いた瞬間。背後から大きな音が響いた。

「はあ……はあ！おお！綱手！ここは何処だね?!ボーイはまだ先か！」

「あんた何しに来たんだい」

教授が扉を蹴り開けて広間に入って来たことで綱手の考え事は中断させられた。膝が笑い、額に大粒の汗を浮かべている教授は首を振り、歩み続ける。

「私がどうこうなんてどうでもいい！ボーイはまだ先か?!」

「あ、ああ。まだ大分上だ」

綱手の返答に教授は服で汗を拭い、次の階層へ続く階段へと歩き出す。その姿を見た綱手は着物の中から札を取り出して。

「少しだけ力を分けてやるよ。どうせ私は結界が解除されるまで動けない」

戦闘に耐えるだけの力がない、上の階層に行けば行くほど上位の存在は動きを束縛される。それならば英霊である教授の方がまだ戦えると判断し、綱手は霊力と仙力を教授に譲渡する。

【ありがとう、私は行かないといけない。ボーイの力になる為に】

ふらふらの状態で階段を駆け上がったっていく教授を見つめていた綱手は疲れたように溜息を吐く、残っていた力を全て譲渡したので立っているのも辛く、その場に尻餅をつくように倒れこみ、階段を駆け上がったっていく教授を見送るのだった……。

〜三蔵視点〜

壁に背中を預けて休みながら、目の前で倒れている信長に座らないの？と尋ねる。

【嫌じゃ、寝転んでる方が楽】

どーせ誰に見られても気にするもじやないと信長は笑う。あたしと2人で上層部まで来たが、これ以上は結界が強くてあたし達は前に進めなかった。

【雪之丞と陰念は正直どうじゃ？横島の足は引つ張らないか？】

そのあんまりな言い方に少しイラっとしたが、それも仕方ないかと心の中で呟く。横島君が判断基準になっている以上、陰念と雪之丞はやや見劣ると思われるのは仕方ない事だ。

【足手纏いになると思うなら連れて来てないわ】

今回の件で2人が自身の殻をやぶってくれと信じていたからこうして連れて来たのだ少なくとも、途中で力尽きてしまったあたしよりも役に立つのは間違いない。

【少し不安要素はあるけどね】

【このタイミングで不安要素とか止めて欲しいんじゃない？】

陰念は霊力を使えば暴走する危険性があるし、雪之丞も霊力を冷氣



に変換出来るようになったが、それは自身に宿る悪魔に近づいている証拠でもある。

【大丈夫。あたしの弟子だから！】

【お前の弟子じゃから不安なんじゃ】

物凄く失礼な事を言う信長の頭を軽く蹴り、天井を見つめる。霊力の流れも何も感じられない、この塔の中はかなり複雑に結界が組み込まれていて、霊力の流れを掴みきれない。

【よっ……と】

【もう行くの？】

歩けるだけの霊力が回復したからこれでいいと言って信長は階段に足を向ける。あたしよりも年下が頑張っているのを見て、疲れたなんて言ってる場合じゃないわね。

【あたしも……行くわよ？】

【カカカ、そうかそうか、なら気合で進むかの】

陰念達が結界を壊してくれる、そうならば少しでも早く助けに入れるようにあたしと信長はふらふらと歩き出し、手摺にしがみ付くようにして上を目指して歩き出すのだった……あたし達だけじゃない、下の階層で力尽きたクシナ達も回復すれば上を目指すとそう信じていたから……。

く蜚視点く

上空から振り下ろされる爪と伸縮自在の毒針つきの尾。ただでさえ手ごわい相手なのに、壁で束縛され自由に動けないという条件でのマンティコアとの戦いは最初から劣勢に追い込まれていた。

「グルルル」

ドクターカオスが作成してくれた霊具のおかげで何とか不利にはならず、対応出来てはいる。腕についている霊具のゲージを見て舌打ちする。

(もう半分を切ってる)

戦っている時間はそれほど長くないのに、防御を使いすぎて。思うように動けないこと、横島が危険なので早くこの場を切り抜きたい

と言う焦りが私と美神さんから精彩さを奪っていた。

「くっ！この鬱陶しい！」

今まで尾で攻撃してきていたのだが、それから一転し上空からの噛み砕きと爪攻撃に切り替えてきた。獣の本能化は判らないが、私と美神さんが弱ってきていると言う事を的確に見抜き勝負を決めにきていた。

「美神さんー！」

美神さんが盾で噛みつきを防いでいる隙に矢を放つ。だがそれは硬すぎる毛皮に弾かれ、有効打にならない。だが攻撃を受けたと言う事で再びマンティコアを飛翔させる事は出来た。

「大丈夫ですか!？」

マンティコアを警戒しながら美神さんに駆け寄る。美神さんの額は汗でびっしょりで呼吸も荒くなっていた。

「大丈夫って言いたいけど、結構きついわね。これ」

美神さんは声こそ余裕を持っているが、その姿を見れば余裕なんてないのは明らかだ。私は弓と言う事もあり、距離を取っているが猛毒の尾と爪、そして人間の体なんて骨後と噛み砕く事の出来る顎。そんな相手と白兵戦をしていけば、消耗するのは当たり前だ。弓ではなく、神通棍で美神さんとポジションを交代しようかと考えていると美神さんは額の汗を拭いながら、作戦を伝えてくる。

「でも今までのやり取りで大分相手の出方が判って来たわ。ポジションの位置取りはこのまま行くわ」

「……大丈夫ですか？」

霊力には心配がないが、体力は大丈夫ですか？と問いかけると美神さんは私の額にデコピンをして来た。

「まだまだ弟子に心配されるほどやわじゃないわよ。それよりも神通棍私に貸して」

自分ののもう折れちゃったからと言う美神さんに伸縮した状態の神通棍を渡すと、ポケットの中に押し込む。

「グルウ」

風を裂いて迫ってくる尾を私の盾で弾く、直撃では無いのに身体の

芯にまで響いてくる衝撃。それだけでマンティコアがどれだけの脅威なのか良く判る。

「いい、私が合図をしたらフルパワーで矢を打ち込んで、それで極めるわ」

「……判りました」

相手の早さは毛皮の堅牢さ。本当に攻撃が当たるのかという不安はあった、だけど美神さんの自信満々な顔を見れば何か勝機があるように見えて、私は判りましたと返事を返すことしか出来ないのだった……。

〈陰念視点〉

壁に背中から叩きつけられ、大きく咳き込む。真っ向からでは相手を突破できないと判断して、先にコアを破壊しようとしたのだがそれすらも叶わなかった。

「私達に与えられた命令はコアの防衛と横島忠夫、美神令子の捕獲。命令はかならず遂行します」

翡翠色のパーカーに身を包んだライダーがゆっくりと迫ってくる。その気になれば一瞬で間合いを詰める事が出来るのに、業とゆっくり迫ってくる姿は俺に恐怖を与えようとしているのが良く判る。咳き込み、口元を本能的に拭いながら立ち上がる。

(……攻撃力はそれほどでも無いんだ)

もう数え切れないほど殴られ、蹴られているが意識はハッキリしている。高速移動からの体当たりだけは致命傷になりえる威力を秘めているが、拳と蹴り自体は雪之丞の方が強いと思うほどに威力が無かった。

「でやあッー」

「無駄です」

俺の拳を右腕で受け止め、鋭い蹴りが脇腹に食い込む。カウンターで貰ってしまったので、思わずたたたらを踏んで後ずさる。

「シッ！シッ!!」

「ぐっー」

俺が拳を1つ繰り出す間に相手は2発、3発と拳をほりこんでくる。それは機械のように正確でそして鋭い、だがそれだけだ。

(歯を食いしばれッ！意識を失うな！)

自分にそう良い聞かせる、相手の攻撃が機械のように正確でこちらの意識を一撃で刈り取るものでは無いのなら歯を食いしばり耐えれば良い。胸に衝撃が走ったと瞬間に拳を突き出した。

「！」

やっと手に衝撃が跳ね返ってくる。翡翠色のライダーは胸を押さえて後退する、それほど力を込めて無いのだが、ダメージはかなり深刻の様子だ。

(防御力はそれほどでもないのか……)

攻撃力と防御力を犠牲にして機動力に特化したようだ。追いかけても追いつく事が出来ない、こうしてダメージを与える瞬間を目の前で見た。それによりやっと覚悟を決める事が出来た、自分の命を大事にしているは相手に勝てないと言う事が良く判った。

「……油断しましたが、もう油断はしません」

声のトーンこそは変わらないが、その無感情さが怒りを感じているように思える。

「おつらああああ!!」

反対側で戦っていた雪之丞の叫びが響き、凄まじい追突音にする

「……ごはっ……へ、へへ……やっっつとてめえの護りをぶち抜いてやったぞ」

「……捨て身で来るとは計算外でした」

雪之丞が口元の血を拭うのが見える。あいつ、相手の攻撃に自分から突っ込んだのか……相手の防御を貫く事が出来ないのなら、カウンターで相手の力を利用して相手の防御を貫く事にしたのか……。

(無茶をしやがる)

俺の相手のように攻撃力が無い相手なら判らない訳では無いが、相手の攻撃力は凄まじい。そんな相手に相打ち覚悟で突っ込むなんて普通は考えないぞと思いつつも、それがもつとも確実に堅実と雪之丞は考えたようだ。

「シッ!!」

翡翠の翼を羽ばたかせ突進してくる、その攻撃はもう翡翠色の線にしか見えない。

「くそッ!」

速さを生かした攻撃に拳だけで対応するには無理がある。相手が地面にいるのならカウンター戦術も狙えるが相手が空にいると攻撃のしようがない、パラドクス眼魂を取り出し眼魂を回転させる。

「アーイー・オソレテミーヤー! オソレテミーヤー!」

青いパーカーが俺の周囲を飛び交う、ベルトのレバーを掴み思いつきり引いた・

「変身!」

「カイガンパラドクス! LVファイフティー! 心を冷ませ、クールダウン!」

「さあ! 運命のパズルだ!」

直接攻撃が届かないのなら苦手だとしても遠距離攻撃をするしかない。

「ふっ!」

手を掲げると青い霊波弾が空を舞うライダーに殺到していく……だがライダーは空を舞い、俺の弾幕を回避していく。

(追いきれない!)

相手の方が速すぎる、射撃の弾速よりも相手の方が早く追い切れない、その事に歯を噛み締める。

「射撃なら追い詰めれると思いましたが?」

「がっ!」

背後から蹴りを叩き込まれ、頭から広間に突っ込む。即座に反転して相手の姿を探すが、その姿は翡翠色の光にしか見えないのだ。

「私達は命令を遂行するように設定されています」

斜め下から蹴りを叩き込まれ、振り返った瞬間には拳を顔面に叩き込まれる

「相手の能力もしくは戦闘能力によりリミッターが解除されるように

設定されています」

淡々と機械のように言うライダーは空中で滞空しながら、その手をこちらに向けてくる

「な!?ぐおっ!!!」

急に風が吹いたと思った瞬間。広間の壁に背中から叩きつけられた

「相手よりも強くなるように私達は設定されています。ですから貴方のお仲間も」

ゆつくりと崩れ落ち、咳き込みながら立ち上がり雪之丞の方に視線を向けると雪之丞は顔を驚掴みにされ、吊り上げられていた。

「よく善戦したと言えますが、魔装術では私達には勝てない」

「ぐっ……ぐっ……!?!」

魔装術が解除された雪之丞が自身を吊り上げている腕を必死で叩いているのが見えるが、効果が出ているようには見えない……このままでは雪之丞も頭を砕かれて死んでしまうだろう。

「うぐっ!!」

俺も上空から放たれる風の弾丸を必死で避けていたが、足を狙い打たれ仰け反った所に、集中砲火が背中に叩き込まれる。

「ぐ……ぐ……ぐ……がっ」

「ここまではです。15分、よく頑張ったと褒めてあげましょう」

立ち上がるうとするが、頭を踏みつけられ地面に叩きつけられる。それでも立ち上がるうすると頭を踏みにじられる。

「警戒せよとプログラミングされているのは横島忠夫のみ、故に私達は貴方達を脅威とは認識しない」

排除すると言う言葉を繰り返して口にしていたが、それは敵とすらも認識せず、邪魔者として認識されていたと言う事を今知った。その事に屈辱と怒りを感じ、身体を起こそうとするがそれよりも強い力で床に叩きつけられる。

「貴方達は約束も果たせず、ここで果てる。それが運命」

俺と雪之丞に同時に告げられた言葉。ふざけるなど雪之丞の叫びが響く、俺も同じ気持ちだ。横島がどんな気持ちで俺と雪之丞に願

を託したのか、俺と雪之丞ならやってくれろと信じてくれたんだ。

「……けるな」

拳を握り締める。俺を踏みつけているライダーが首を傾げているのが判る、歯を噛み締める。

「ふぎ……ける……な！」

俺と雪之丞はまだ生きている、まだ動く事が出来る。ここで何も出来ずに死ぬなんて誰が認める物か、拳を開き渾身の力で立ち上がろうとする。

「……無意味です」

俺の力よりも強い力で俺をその場に留めようとするが、そんな物で俺は止らない。

「ダチが頼むって、俺に任せるって言ったんだ!!」

「力が上がって……想定を超え！ぐっ!!」

雪之丞が叫びながら自身を拘束している腕を掴み、全力で握り締めるのが見えた。何かが弾ける音と共に雪之丞は拘束から脱出し、頭から血を流しながらも立ち上がり拳を握る。

「男が任せろって言っただけ出来ませんでしたじゃねえ!!男が1度口にした事を覆せるかあッ!!!」

そうだ、その通りだ。俺と雪之丞は任せろと言った、だから横島は頼んだと言ったんだ。俺の頭を踏みつけている足を掴んで、その足を砕いてやると言わんばかりに握り締める。

「……うちの人間も想定を超える！」

咄嗟に飛びのいたその隙に立ち上がり、硬く握り締めた左拳を相手の顔面に向かって突き出す。肩まで突き抜ける衝撃に初めてクリーンヒットしたのだとわかった。

(あいつは馬鹿だから、俺の事も友達とか思っているんだろうな)

あのお人よしの大馬鹿だからきつと俺の事も友達だと思っただろう。その余りに人を疑う事を知らない馬鹿に思わず苦笑してしまう、あんな馬鹿は知らないが、あんな馬鹿に恩を感じている俺も相当な馬鹿かと苦笑する。雪之丞の様にダチと叫ぶ事は出来ないが、友情を感じていないわけでは無い。

「ツとー！」

突如何かが顔面に向かって飛んでくる。それを咄嗟に掴むと手の中にはシルバーの縁取りがされた、紫色の眼魂が収まっていた。ボタンを押してベルトの中に入れる、するとベルトから白銀の装甲に紫のワンポイントが入ったパーカーゴーストが飛び出した。

【アーイー！オソレテミーヤー！オソレテミーヤー！】

腰のベルトのレバーを握り締める。雪之丞は再び魔装術を展開しようとしていたのだが、霊力が集束し、雪之丞の姿が氷の中に消える。

「変身！」

【カイガン！チェイサー！知られぬ幻影！数奇な運命ツ!!】

パーカーが覆いかぶさる様に装着され、ベルトから飛び出した斧を手にする。

「……仮面ライダーチェイサー」

「ウオオオオオオオオオーツ!!」

雄叫びと共に氷が砕け、そこから雪之丞が姿を見せる。両手足は水晶のような装甲に変化し、肘には透き通る氷の刃が新しく生えていた。

「俺はてめえをぶちのめして、約束を護るっ!!」

バイザーとフェイスガードが装着され、雪之丞の顔を隠すと凄まじい吹雪が放たれる。俺はその姿を見ながら、手に握っている斧を振る。見掛けよりも重くないな、使いやすそうな重さだ、それに手に馴染む。まるで自分の身体の一部とも思うようにだ。

「行くぜ、俺達を甘く見たのを後悔させてやる!!」

「行くぜ行くぜ行くぜ！行くぜーツ!!!」

くシズク視点く

鋭い風切りと共に放たれる見えない尾の一撃を頭を下げた回避する。大分相手の出方が見えてきたが、予想よりも遥かに姿が見えず、感知できないのは予想よりも遥かに苦しい。

「……大体の大きさは予想がついてきたな」



「本当ですわね」

神宮寺に声を掛ける。長い間防衛に徹し、そしてダメージにもならない攻撃を繰り返しやっと敵の全容が大まかだが判ってきた所だ。時間がないと言うのにここまで時間をかけさせてくれたトカゲもどきに心底怒りを覚える。

(……大きさは訳2m弱)

銃弾を2人である程度の予想を立てて打ち込み、さきほど神宮寺と同じ射撃軸で打ち込んだが、私の銃弾外れた。神宮寺の銃弾が命中した場所から逆算すると恐らくそれくらいと言う予想だ。そしてその前の攻撃で相手の身体の幅も判っている。

「……斜め上から来るぞ」

その場でバク宙して、私は振り下ろされた攻撃を回避し、神宮寺はサイドステップでそれを回避する。広間の床に3本の爪痕が出来ると同時に拳銃の照準を合わせ同時に引き金を引く、狙う位置は今までの攻撃で位置を予想した頭があるであろう場所だ。

「ギッ！」

聞くに堪えない悲鳴と紫色の鮮血が舞う。姿は相変わらず見えな  
いが、それでもある程度の予想はついてきたな……

「……さて、神宮寺。どうする？」

「どうもくそもないですわ。さつさとあの蜥蜴を潰して、先に進む。  
それしかありませんわ」

それは私も同意だが、姿が見えない。私と神宮寺の主な攻撃が使えないのでは火力が余りに足りない、まあ、それはそれでもう対策は考  
えているが……

「……私の考えに乗るか？」

カートリッジを交換して、再び銃撃出来るようにしながら神宮寺に  
問いかける。

「こっちの考えもありますか？」

相手の気配は近くには無い、ここまでやりとりしていれば私も神宮  
寺も相手の気配と攻撃の瞬間に感じる殺気も全て覚えている。どう  
も頭を狙われた事で危機感を覚える程度の脳味噌はあったようだな

……

「……結界のほうはどうだ？」

「こっちはOKですわ」

流石は神魔レベルの魔女か、性格や言動的にそりは合わないがそれでも優秀なのは認めてやれる。二言三言打ち合わせを済ませ、同時に逆方向に走り出す。神宮寺と私のプランその両方を同時に開始し、今分かれたことでどっちに反応するのか見定め。そしてその上で行動を開始する。

(敵が1体とは限らないからな)

今までは敵の間合いと気配を覚える為に同時に行動していた。だから2人で対処していたが、敵が1体とは限らない。敵の回復力が凄まじいのか、複数の固体がいるのか、それも知らない事には作戦の決行には踏み切れない。神宮寺が走った方向から銃声が聞こえるのと同様に同時に私のほうにも尻尾の薙ぎ払いが来た。

(やっぱり複数体か……これで第一条件はクリア)

後は敵が何体いるのか、そしてもう1つ。私のプランで行くのか、それとも神宮寺のプランで行くのか……そこだな。私は全然違う所に銃弾を2発打ち込み、再び走り出す……もうかなりの時間をかけてしまっている。これ以上時間をかけるわけには行かない。

(横島……)

この中では横島の安否が判らない。2体を相手に時間稼ぎのために残っている横島が無事なのか、それだけを考え私は結界の中を走り回るのだった……

↳横島視点↳

倒れかけた俺を抱き止めたのはモリアーティと同じ顔をしている教授だった。その優しい瞳に危機的な状況と判っているのに何故か笑ってしまった。

【ボーイ！大丈夫か!?生きているのか!?私が判るかネ！】

俺を抱き止めて大丈夫か、生きているかと泣きそうな声で言う教

授。

【ははは、これはこれは、我が半身ではないかね。出来損ないで、正義などと言うくだらない事を言う半端者が良くここまで来れたね】

少女を制して嘲笑うモリアーティに教授は俺を抱き抱えたままで、モリアーティに怒声を飛ばす。

【お前などは私の半身では無い！】

【そうともさ、私もお前を嫌悪する。お前も私を嫌悪する、つまりは互いに邪魔者という事だヨ】

拳銃の銃口が向けられる、教授は見た所手ぶらでとても戦えるようには見えなかった。

【ボーイ、私は思い出したんだ。私もまたジェームズ・モリアーティ……君達とはきつと相容れない存在だった】

俺をゆつくりと広間の床に寝かせて、少女とモリアーティの間に立ち塞がる教授。

「……戦える力はモリアーティにあるのに何故邪魔をするのですか？」

【そうだね、戦えないから戦わない。負けると判っているから逃げる、それはきつと間違いでは無いヨ】

飄々とした声で言う教授だが、武器も何も無いスーツ姿ではとても戦えるとは思えない。

「……駄目だ」

教授の手を掴む、英霊でも死んでしまふんじゃないかと思いきその手を掴んだ。

【大丈夫、私は幽霊だからネ！気持ち折れなければ、負けない。心配しなくてもいいんだヨ】

俺を安心させるためにか大丈夫と笑う教授にモリアーティは手を叩いて笑い出す。

【確かに英霊はそう簡単には消えない、だけど私がいる。同じ存在が居れば強い存在に飲み込まれて消えるだろう】

消える……そう聞いてなおの事駄目だと思いき、両手で教授の手を握る。

「ボーイ、私は悪党さ。君のそばにいる、他の英霊とは違う。悪しかなすことの出来ない存在だ、けれども君が回復するまでの時間は稼げるヨ」

教授が消えることを覚悟している。その姿に目の前で消えてしまったタママモキヤツトのこと、ジャンヌさんの思い出してしまう。

「……嫌だ」

もう俺の目の前で誰が死んでしまうのも、消えてしまうのもみたくない。

「お涙ちようだいはうんざりだよ。レブナント、ここは私がやっても良いかね？」

「……変身が解除されているのなら、私が出るまでも無いでしょう。お任せしますよ」

少女が槍を虚空へと消し去り、モリアーティから背を向けるとモリアーティはにっこりと笑う。その銃を俺と教授に向ける、お互いがお互いを庇おうと動いた。

「そんなに互いを護りたいなら、2人同時に攻撃してあげようじゃないか」

俺と教授の間に銃弾が打ち込まれ、それが炸裂したと思った瞬間。広間の床が爆発し、俺も教授も大きく弾き飛ばされる。

「ぐーボーイ！何をしてるんだ！私は悪党だから壁になると言っているだろう!!」

俺に教授が怒鳴るが、俺はそんなことを望んでいない。

「教授は悪党なんかじゃないだろ!？」

「違う！私はジェームズ・モリアーティだ、悪のカリスマ、犯罪界のナポレオンと呼ばれる大悪党だ！正義と最も程遠い存在なのだヨ！存在してはいけない存在なのだよ」

悪党だとか、犯罪界のナポレオンだとか、そんなのは俺には関係が無い。俺にとって教授はちよつと胡散臭いけど、優しく困っている時に手助けしてくれる。そんな人だ、だから悪党だから、自分にはいい事なんて出来ないとかそんな事は俺にとっては何の意味も無い言葉に過ぎない。

「なんで悪党が正義の味方の助けをしたらいけないって決め付けるんだよ!」

俺は正義の味方なんて思ったことは無いけれど、教授が正義だ、悪だと言うならそういうしかない。

「……ボーイ」

「悪党だったとしても良い事をしてもいいだろ!?なんで悪党だから存在したらいけないって事になるんだ!」

「はははは、これは面白い事を言うね。少年、ならばその半端者に変わって「黙ってるクソ爺!!」」

モリアーティにそう怒鳴りつける。顔と声が同じでもモリアーティと教授は全然違う、あのクソ爺の言葉なんて聞くつもりは無い! 「悪党でも正義の味方をするとかめちやくちや格好良いじゃないか」

悪だとしても正義をなすとかめちやくちや格好良いじゃないか、それに何よりも正義だ、悪だと考えているからごちゃごちゃして来るんだ

「教授は正義の味方は出来ないんだろ?じゃあ俺の味方になってくれよ」

まだ何も入っていないブランクの眼魂を取り出し、クソ爺と言われ目を見開いていたモリアーティを睨みつける。

「クソ爺……ははは。そうかそうか、そんなに死にたいのだね?」

紅く輝く瞳が俺に向けられる、それを見て俺は確信した。教授は悪党なんかじゃないと……

「ああいうのが悪党って言うんだと思うよ。教授」

穏やかで理知的な光に満ちた目とは違う、ギラギラとしていて悪意と殺意に満ちているあの瞳こそが悪党の目だと思う。

「は……はははは……そうか。そうだね……私は正義の味方にはなれないけれど……うん、ボーイの味方にはなれるヨ。なにをそんなに……私は難しく考えていたんだろうネ……話はもつと簡単だったはずなのに……」

そう笑う教授の顔は本当に楽しそうで、変な話だけど子供のような笑顔を浮かべていた。頭が良い人だから、自分の事とか色々考えてそ

れで思いつめてしまったのだと思う。ここまで助けに来てくれたんだ、英霊でこの塔の中では動くのも大変だと言うのに……それは何よりも頼もしい姿に思えた。

「俺に取っっちゃあ、教授は最高に格好良い味方だよ」

ちよつとと胡散臭いけどなどと言うと教授はますます楽しそうに笑い出す。俺と教授の意見が纏まりかけた時、俺と教授の間に魔力弾が打ち込まれる。

「せい!!」

「うわつとと!!」

飛んできた魔力弾を栄光の手で打ち落とす、教授は武器がないので慌てて飛びのいて交わす。攻撃してきたモリアーティはその真紅の瞳に怒りの色を浮かべ、手にしている銃身の長い銃を変形させ俺と教授に照準を合わせる。

【遺言はそれで終りかね?それならば消えたまえ】

今まで使っていた細身のライフルが変化して、バズーカーのように変化した銃の巨大な銃口の先に魔法陣が展開され、魔力を集束させるモリアーティ。あれを喰らえば死ぬと判っていたのに、何故か俺も教授も笑いが収まらなかった。

【笑いあうのはいいが、このままでは死ぬぞ】

心眼の言葉に判つてると返事を返し、ブランク眼魂を教授に向けると教授がその中に吸い込まれ、純白の眼魂から茶色と青の2色にカラーリングされた眼魂に変化する。

【アーイー・シツカリミナー!シツカリミナー!】

魔力を集束している間にベルトに教授の眼魂をセットする。ベルトから飛び出した茶色と青のパーカーが俺を護るように踊るのを見て、大きく深呼吸をしてベルトのレバーを握る、それと同時にモリアーティの銃から凄まじい魔力波が放たれる。だけど不思議に恐怖は感じなかった……

「変身!」

【カイガン!プロフェッサー!孤高の天才、完全犯罪!】

爆炎の中からまるでコートのようなパーカーを羽織り飛び出す。

サイキックソーサーを2重にした事で思ったよりもダメージはこちらには来なかった。それになによりも教授が庇ってくれたのでダメージなんてある訳もなかった。

「そちらも準備が出来たと言う事が、まあそれでも取るに足りない存在だがね」

再び取り回しが良くなった銃を剣のように構えるモリアーティ、俺がベルトに手を翳すとガンガンブレードが飛び出しライフルモードに変化したそれを手に取る。

「さあ！行こうぜ、教授！」

【ああ、勿論だよ！ボーイ！】

消える覚悟をしてまで俺を助けに来てくれた。それは何よりも心強い味方だと思う。あんな嫌味っぽくて醜悪なモリアーティに負けるなんてこれっぽっちも思えなかった。

【半端者が人間と融合してなおの事醜くなった物だよ】

ふんつと鼻を鳴らすモリアーティにガンガンブレードが変化した銃を突きつける。誰にも人を半端者や醜いと言う資格は無い、それにその言葉は何よりもモリアーティにこそ言うべき言葉だと思う。

「そうか、じゃあこの半端者がお前よりも強いつて事を見せてやるよ」

【は！そんなのありえないね、レブナント。手出し無用だぞ】

「……そうですか、ではそうさせてもらいましょう」

【リターン・オブ・コール！】

あの少女が変身を解除して座り込む、これで乱入はありえない。モリアーティと俺と教授との勝負だ、お互いに位置を変えながら駆け出すタイミングを計り、天井の一部が落ちてきたのを合図にして俺とモリアーティは同時に銃の引き金を引きながら駆け出すのだった……

くアスモデウス視点く

モニターで横島とレブナント、そして教授の戦闘を見ていたのだが、レブナントが教授に言われたと言うのもあるが戦闘を放棄してしまった。

「だからさー、僕言ったじゃん。あいつは戦力として不安が残るって

さ」

レブナントの監視役をしていたセーレがそう言ったじゃないかと我に言う。確かに戦闘を放棄してしまうようでは意味が無いな、とは言え神霊眼魂に適合したのは複合神性型ホムンクルスの0000だけと聞く、それ以降の量産型NOは神霊眼魂に適応しなかったと言うのだから少々の不安を感じながらも実戦投入したが、セーレの言うとおり実戦に配備するには余りに早すぎたと思う。

(精神が幼すぎるからな)

我達の思想の思惑も理解しない、命令された以上はある程度は行動する。だが気分が乗らない、降伏を進めるなどやはり兵器としては不安が……

「どうした?」

突然ガープが椅子を倒しながら立ち上がったので、考えを中断し、ガープにどうかしたか?と尋ねる。するとガープは異様に興奮した素振りを見せる。

「どうしただ?!アスモデウス!セーレ!お前は何も理解していない!レブナントの運用は成功したのだ!!」

成功した?あれで?我とセーレが首を傾げる中、ガープは高笑いを続ける。

「横島が戦闘中に魂の力を急激に高める事は判っていた。だから私は横島に過負荷を与えるためにライダーシステムを模範した。そしてその結果横島め!恐ろしい能力を発現したではないか!!」

成功だと高笑いをするガープはマイクを手に取りレブナントに通信を入れる。

「その蜘蛛の巣状の割れ目に落ちているビー玉を回収し、帰還の準備をしろ。今回の作戦は十分に成果を上げた」

『了解しました。すぐに帰還準備をします』

「ちよつと!あれだけ労力掛けてそれで良いの!」

セーレがそう怒鳴る。それに関しては我も同意だ。神魔をあれだけ欺き、態々宇宙にまで行ったのにそれも止めるとか正気じゃない。

「隕石を落として横島ごと回収してしまえばいいだろう?」



「それも考えていたが、量産型も劣勢に追い込まれている。ここで回収してしまっても良いが、横島に更に過負荷を与える為にも今回はここまでにしようと思う」

……ガープがそう言うのなら我として言う事は無い。そもそも今回の日本に隕石を落とすという作戦の影でセーレと共に動いて、次の作戦の種は撒いてある。今回の件を切り上げてもより確実な手があるとと言うのなら、無理に最後まで遂行しろと強制する事も無い……  
「今回の事で下界で動きにくくなるぞ、そのデメリットを上回るメリットがあるんだろうな？」

隕石落しまで遂行したのだ、それが失敗した以上同じ作戦を2度打つ事は出来ない。今回レブナントに戦えではなく、帰還せよと命令した。その理由を納得できるように説明しろと言うとガープは判らないのも無理は無いと笑った。

「私は潜んでいる間にありとあらゆる文献を調べた。そしてその中で非常に興味深い物を見つけな」

くつくつくと喉を鳴らすガープの視線の先には、ビー玉のような結晶を回収しているレブナントの姿がある。

「奇跡の結晶「文珠」キーワードを凍結させ、それを自由に使いこなす万能の力。その能力はありとあらゆる物理法則を超え、使い方次第では死者蘇生、時間跳躍などのありえないとされる奇跡を成し遂げる。それは条件さえ揃えば最上級神魔ですら滅する事が出来る、伝説級の代物だ」

ガープの言葉を聞けば、それがどれだけ稀少な物かは判る。だがそれがどうしたと言うのだ。

「それは小さな球状をしていて、中に文字が刻まれているそうだ」

その言葉に先ほどの光景を思い出す。完全に横島の命を奪ったと確信した攻撃を防いだ光の壁。そしてその中心にあった「護」と言う文字が刻まれた球体があった事を思い出した。

「その瞬間を記録しているが、横島は「文珠」を作った。つまり横島は有史の中で数人しか存在しない文珠使いである可能性が高い。戦いの中で目覚め、誰かを護るために力を使う横島だ、ここで回収してし

まうよりも完全に使いこなせるようになるまで待つて回収した方が遥かにメリツトになる」

その説明は確かになるほどと思うだけの内容ではあるが、根本的な問題があるだろう。

「それってさ、横島しか使えないんでしょ？ そんなにありがたがる能力？」

セーレの言うとおりのだ。キーワードで指向性を持たせ、霊力を開放することでその能力を発揮する。確かにレアな能力ではあると思うが……

「まあ話は最後まで聞け、文珠の最も秀でている点はな……誰でも使えるんだよ。回復にも、攻撃にも、防御にも、妨害にも使える。1度精製されてしまえば誰だつてその力を使うことが出来るんだよ」

「何そのありえない能力、横島つて本当は神魔とかじゃないの？」

人間が持つには過ぎた能力だ。だが今回の件でガープが手を引くと決断したのも、戦いの中でより安定したレベルで文珠を精製できるのか、それを見極めるためと思えば納得出来る。

「3つほど回収できた。こちらの研究材料として使うのは十分、後は横島を今まで以上に観察すればいい」

洗脳して自我を失えばその能力が発現しない可能性があると言われれば、今回手を引く理由も十分に納得出来た。唯一納得できない点があるとするれば……

「何故横島ばかりがこれほどの力を持つのかだな」

人間が持つには過ぎた能力だ。それを複数持ち合わせる横島、人間全体が強いのならまだ判らないわけでは無い。だが横島だけがこれほどの力を持ち合わせている事には流石に違和感を感じずにはいられない。

「ああ、それに関しては私にある程度の予想を試してみたのだが……」

ガープから告げられた言葉に我もセーレも馬鹿など思いはしたのだが、どこかで納得してしまう内容だった……。

「判った、じゃあもう少し様子を見ようか」

「そうだな、そうしよう」

「納得してくれて何よりだ」

ガープがにやりと笑う、そんな話を聞けば嫌でも納得せざるを得ないだろうと思ひ。モリアーティと横島の戦いに視線を向けるのだった……。

レポート24 反逆者達の進軍 その9へ続く

## その9

レポート24 反逆者達の進軍 その9

↳雪之丞視点↳

俺の首を掴んで吊り上げているライダー。何処となく横島に似ているのに感じるのには嫌悪感だけだった。その無感情で機械的な様子が、感情的な横島との違いのように感じて、それが嫌悪感と不信感につながっているのかもしれないと思った

(……まだ……動く)

魔装術は砕けて、何度も殴られて額が割れて視界が真紅に染まっているが、手も足もまだ動く。血が流れた事で頭に上っていた血も抜けたのだろうか……思考が妙にクリアになっている

(……だからまだ……俺は戦える)

俺の首を掴んでいる相手の手首を震える右手で掴む。すると相手は大きく溜息を吐きながら俺に言葉を投げかけてきた

「まだ抵抗するのですか？戦力差はこんなにも明らかだというのに？」

相手の攻撃は魔装術を簡単に砕き、俺の拳も霊波砲も防御姿勢すら取らない自然体で防がれる。捨て身で相手の攻撃に自ら飛び込み、相手の勢いを利用しての同時打ちで、額が割れ相手の防御力の高さに左手の指は殆どがあらぬ方向を向いている

「つたり前だ……男が約束を破れるわけが……無いだろう……が」

この程度で痛いだ、無理だの言える訳が無い。それに何よりも、俺は横島に任せると言ったんだ。横島が時間稼ぎをすると行って俺なんかよりも苦しい戦いに挑んだ。その姿を見ておいて指が折れた程度で立ち止まれるわけが無い

「人間と言うのは理解できないですね。何故合理的に「うっせえ!!」……なるほど、まだ抵抗するのですね？」

「ごはっ!!」

首を掴まれたまま広間の床に叩きつけられる。何かが砕ける音が

聞こえたが、それは言うまでもなく俺の骨が砕けた音だろう。間違はなく重症だろう。叩きつけと共に俺の首を手放し、息が出来ず悶えている俺を爪先で蹴り上げるライダー。全身が痛い。特に胸が痛い……

(肋骨が……逝ったか)

呼吸をするたびに胸が痛む、間違いなく今砕けたのは肋骨だろう。だがその痛みのおかげか意識がよりハッキリしてきた

「貴方達は約束も果たせず、ここで果てる。それが運命」

機械的に無理だと告げる。約束を果たせず、俺がここで死ぬ。それが俺の運命だと人形がほざきやがる

「……けるな」

身体が痛むが、その痛みよりも怒りが上回っていた。約束を守れず死ぬ、それは俺と陰念ならと信じてくれた横島の気持ちを何よりも裏切る事だ……約束を破る事が俺には死ぬよりも辛いことだ。息苦しい中歯を食いしばり、袖で額から溢れる血を拭いながら立ち上がる

「ふぎ……ける……なッー」

拳を無理矢理握りこむ、折れている指を無理矢理握りこんだので尋常じゃない痛みが走る。だがこんな痛みがなんだ、男の約束を守れないことの方がよっぽど辛い……

「貴方の言っている事は理解不能です」

「……ぐっ!!」

頭を鷲掴みされ吊り上げられる。頭蓋骨がメキメキと悲鳴を上げているがそれがなんだ。折れている左手で相手の手首を掴む

「ダチが頼むって、俺に任せるって言ったんだ!!」

この程度の痛みがなんだ、俺はこの程度で止まらない、止ってなんかやらない!!! 全力で手を握ると何かが破裂したような音が響いて拘束から逃れる事が出来た。相手は手首を押さええてありえないとか繰り返して咳いている姿が見える。その姿があまりに滑稽で再び左手を強く全力で握り締める

「男が任せろって言って出来ませんでしたじゃねえ!! 男が1度口にした事を覆せるかあッ!!!」

思いっきり左拳を振りかぶり、地面を力強く踏みしめながら左拳を突き出す。まるで交通事故のような音が響き、相手の首が大きく捻れてよろめく

「力が上がって……想定を超えて!?ありえない、ただの人間がこんな……ありえるわけがない」

パニックになっていいる姿に馬鹿かと呟き、誰に聞かせる……いや、俺の中にいるであろう悪魔に叫ぶ

（おい！いつまで眠ってやがる！てめえだつてダチの為に命を賭けたんだろう!?!）

仲間のために命を賭けたという悪魔、それなら俺と同じだ。なら俺の気持ちが変わる筈だ、約束も守れず、ダチの信頼を裏切る事がどれだけ辛いかを判っているはずだ

（あつかましいとは判ってる！だけど力を貸してくれよ！なあ！）

俺の今の力じゃアイツには勝てない。仮に勝てたとしてもそれは相打ちで俺も死ぬという結果だろう、それでは横島との約束を守れたとは到底言えない。弱い俺が敵に勝てないのは判る、だがそれで横島が心に傷を負うなど認められる訳がない

（……ギャンギャンやかましい、だがまあ……お前の気持ちも判らんでもないか）

飲み込まれても知らんぞと言うぶつきらぼうな男の声。そして次の瞬間、俺は氷の中にいた。死ぬほど冷たいのに、熱い、熱くて、熱くて、身体が燃え上がりそうに熱い……この熱さを押さえる事など出来そうに無かった

「ウオオオオオオオオオーッ!!」

力が溢れて来る。雄叫びを上げながら氷を砕くと砕けた氷はそのまま全て霊力へと変換され、今までの俺の魔装術とは比べられないレベルで霊力が圧縮され正しく鎧と呼ぶに相応しい姿へと変化を遂げる

「俺はてめえをぶちのめして、約束を護るっ!!!」

その叫びと共にバイザーとフェイスガードが現れる。不思議な事に息苦しさも前が見にくいつても無い、身体はボロボロで、霊力

も枯渴しかけていたのに内から力がどんどん湧いて来る

「行くぜ行くぜ行くぜ！行くぜーッ!!!」

ジツとしていることなんて出来ない。拳を握り締め、地面を蹴る。気が付いたら俺は一瞬で5m近い間合いを詰めていた。

「!?!」

俺も相手も完全に困惑し、一瞬動きが止ったが、自ら仕掛けたこともあり俺の方が先に我に返り。拳を相手の顔面に叩きつける。今までは命中しても弾かれていた攻撃が完全に相手を捉え大きく吹き飛ば

「……ずいぶんいい男になってるな」

「うっせえ、茶化すな」

陰念の方も見た事のない姿に変化し、斧を手にしている。どうも陰念のほうも相手を殴り飛ばして、追いかけて来たって所か

「邪魔すんなよ」

「それはこっちの台詞だ」

俺の敵は青い方、陰念の敵は緑色。互いに邪魔するなよと言葉を交わし、自らが敵と決めた方に向かって駆け出すのだった……

〜横島視点〜

鋭い風切音が耳元を通っていき、思わず肝を冷やす。俺と教授、そしてモリアーティの戦いは今まで俺が行ってきた近距離の白兵戦などではなく、お互いに目まぐるしく足場を変え、飛び上がり、姿勢を低くする。1分所か1秒ごとに戦況が変わり続ける高速戦闘だった

【落ち着くんだボーイ、君はあの銃弾を眼で見えて避けている。落ち着いて、動揺せずに冷静に対処するのだ。射撃は私がサポートしてあげるからね】

大丈夫。俺なら出来ると励ましてくれる教授。モリアーティと教授の声は同じなのに何故こんなにも違うのだろうか、やはりその人のあり方とでもいうのだろうか

【ジャック・スペード！】

銃弾同士が空中でぶつかり、軌道を複雑に変える。それが何度も交

錯し、軌道がまるで読めない

【右斜め後、左側面、後方からの強襲だ。無理に避けるよりもサイキックソーサーで防げ】

【その後はお返しに霊波弾を撃って上げればいい、動揺することも怯える事も無い。照準を合わせて引き金を引く、簡単な話だヨ】

心眼と教授の言葉に心の中で返事を返し、跳弾を繰り返して死角から迫ってきた弾丸をサイキックソーサーで防ぐ……実際は大分勢いは殺したが、貫通してパーカーを抉っていったので防げてないのだが……

「行け！」

ガンガンブレードを銃に変形させ、霊波弾を打ち出す。だがモリアーティは地面に手をつくとき、そこを基点に魔力の壁を作り出し、それで直撃を防ぎ

【中々やるじゃないか】

即座に横つ飛びをしながら掃射を打ち込んでくる。それに肝を冷やししながら、サイキックソーサーを一瞬だけ持つ壁にして後方に飛ぶ。再び中間距離へと俺とモリアーティの距離が離れる。今なら距離を詰めればそのまま押し切れるんじゃないかと言う考えが頭を過ぎる

【相手が射撃タイプだから近づくとセオリーと思うが、それは罠だ。誘い込み大きな一撃で刈り取る、行けると思っても前に行っては駄目だヨ】

教授の言葉に踏み込みかけた足を止め、再びガンガンブレードを構える。モリアーティはそんな俺を見て小さく溜息を吐く

【なるほど、似たような思考を持つ相手と言うのはこうも厄介か】

【あつははは、だとしても私と君ではまるで異なるとも。私には味方が2人もいるからネ！】

俺と心眼の事だろうな。教授が上機嫌で返事を返す、それに対してモリアーティは足踏みをして、額に手を当てて

【横島忠夫と言う存在は脅威であると把握していたが、それは思っていただけと言う事のようにだ。思い切りの良さ、眼の良さ、そして自分



の勘を信じて迷う事無く動ける勝負度胸……横島忠夫の評価に関しては改めなければならぬようだ」

真紅の瞳の不気味さと温度を持たない坦々とした言葉。だがその言葉に込められている殺意と怒気に思わず息が詰まる

「レブナントは参戦しなくて良いと言った以上……再びレブナントの協力を得るのは難しい」

ちらりとモリアーティが視線を逸らすので、そつちを見るとレブナントと言うライダーに変身していた少女は瓦礫の上に座り、足をパタパタさせながら鯛焼きを頬張っていた。俺の視線に気付くと抱えている袋と俺を交互に見ているので、首を左右に振ると安堵した様子でまた鯛焼きを齧りだす……なんなんだ。あの子は……さつきと全然違う、まるで子供じやないか……

「ああ。レブナントは複合神性型ホムンクルス「アルターエゴプロジェクト」の試作だ。精神は極めて不安定かつ幼い、命令及び戦闘にでも入らなければその精神年齢は8歳程度の幼い物だ。善悪の区別すらあやふやさ」

聞いても居ない事をぺらぺらと喋るモリアーティ。しかし複合神性型ホムンクルス……アルターエゴプロジェクト……名前だけでも判る。これは相当危険な計画なのだと思う。これをなんとしても聖奈さん達に伝えなければならぬだろう

「さて何故私がこんなことを言うかと言うと。簡単な話だ、遊びは終わりにしようと思ってるね」

教授が地面に手をつくると魔法陣が展開される。それを見て慌てて引き金を引くが、魔法陣から放たれている魔力で全てが明後日の方向に弾き飛ばされる

「無駄だ。私は既にガープ様には見限られている。自我は口惜しい事にお前と共にいる教授に持っていかれた、私には演算能力しかガープ様に差し出させる物がなかった。それも命じられて行動することしか出来ない哀れな人形だったさ、だからこうして失敗しようが成功しようがかまわない計画に擬似人格をインストールされ送り出された」  
その言葉は平坦だったが、深い悲しみの色が見て取れた。俺が思わ

ず口を開こうとすると

【おつと慰めは無用。仲間になれという言葉も無用、私は最後まで私を現世に呼び戻したガープ様への忠義を貫くまで】

魔法陣から姿を現したのは巨大な白い棺……だがそれは機械的に見た目と下りただの棺と言う訳では無いだろう

【超過剰武装多目的棺桶ライヘンバツハ……これがお前達の墓標となる!!】

棺から打ち出されたミサイルの雨に絶句する。だが絶句してる場合では無い

「ええい！くそ!!」

弧を描いて落ちてくるミサイルをガンガンブレードで迎撃していると、今度は地面を抉りながらマシンガンの銃弾が迫ってくる

「化け物か!?!」

サイキックソーサーで防いだのだが、簡単にソーサーを貫いてくる姿に絶叫する

【言っただろう?これがお前達の墓標となると!!この程度がライヘンバツハの力と思わないことだ!】

棺桶の下部が開いて砲門が姿を見せる。それを見た瞬間尋常じゃない寒気が俺を襲い、思わず足を止めてしまった

【ガープの技術力で作られた武器だ!並大抵物じゃないぞ!見てる暇があれば避ける!】

【やばいよーあれ!絶対やばい奴!!】

心眼と教授の声に我に返った後にはもう遅かった

【喰らいたまえ!】

【ビームウウウ!!】

ごんぶとのビームが広間の床を削りながら迫ってくる姿に絶叫してしまつた俺は多分悪くない。うりぼーとかチビのビームを見た相手もこんな気分だったのかと言う的外れな事を考えながら俺はサイキックソーサーを2重に展開し防ぎに入った……のだが予想を遥かに超える威力にサイキックソーサーは簡単に砕け、俺は巨大な靈波の光の中へと飲み込まれるのだった……

〈陰念視点〉

新しい眼魂……チェイサーと言う眼魂は素早さが低下する変わりに、凄まじい攻撃力と防御力を有していた。超高速のヒット&アウエイを繰り返し、上下左右縦横無尽に切り込んでくる相手の攻撃をほぼ無効にするその防御力は確かに頼もしい

(だが、このままでは千日手か)

この防御力に攻撃力も比例しているのならば、一撃でも直撃すればその一発で流れを変える事も出来るだろう。だが俺の攻撃は当たらず、向こうの攻撃は俺には通らない。完全な千日手だ

「オラオラオラッ!!」

「こ、こんな……あり、ありありあり!?!」

……雪之丞のやつ絶好調じゃねえか。互いの拳がぶつかりあり、弾け飛ぶのだが雪之丞の方が圧倒的に立て直しが早い。相手が1発繰り出す前に2発、3発と叩き込んで相手の勢いを削いでいる。相手が殴られすぎてなんか壊れているラジカセみたいになってきたが、キヤパオーバーで思考停止に近いか。上空から降下してきた翡翠の閃光を斧で受け止め弾き飛ばす

「……防御力は脅威ですが、攻撃が当たらなければどうと言う事は無いですね、このまま耐えていれば私の勝となる」

その言葉に舌打ちする。塔に入ってから時間の感覚は曖昧だが、もう時間はさほど残されていないだろう。仮に装置を破壊しても、隕石が地表を通過する時のダメージで地上は壊滅的な打撃を受ける

(装置は……あそこか)

塔の中心にある機械。あれが隕石の誘導装置であり、そして神魔の力を削ぐための装置なのだろう。だが高密度の結界に護られていて仮にこいつを無視して装置の破壊に向かったとしても恐らく攻撃力が足りない……それが判っているから俺は千日手と思ったのだ

(なんか無いのか)

今までの眼魂には何らかの特殊能力があった、こいつにもこの状態を解決出来る特殊能力が無いのかと思わずには居られない。ライ

ダーがなんらかしらの特殊な能力を持つ筈……いやそうとも限らないのか？特殊な能力を持たぬ代わりに高い身体能力を持つ場合もあるのか……？俺も横島も眼魂の事は殆ど知らない、そう思い込むのは間違いなのか……？

「おい！雪之丞！さっさと装置を壊せ!!」

相手が早すぎるので俺では出し抜いて装置に近づく事が出来ない  
ので、雪之丞にそう叫ぶが即座に怒声が返ってきた

「わーってる!!だけどな！直撃食らったらこっちもやべえんだよ!!!」

雪之丞の方が優勢なのはその手数と圧倒的な攻撃力で押しているからだ。そして相手が雪之丞の攻撃力の上昇に動揺しているからだろう、ここで攻撃を緩め装置に向かえば冷静になって流れが相手に戻るかもしれない。それを本能的に悟っているからこそ、装置を破壊する事が出来ないのだろう

「シッ!!」

「ちいっ!」

考え事をしている間も上空から降り注ぐ閃光と翡翠の光となった体当たりを防ぎ、いなし、反撃のチャンスを待つが相手の動きが早すぎて対応出来ない。どうせなら斧ではなく、もっと速度の高い射撃武器が欲しかった。相手に速度に対応出来ない巨大な武器では何の意味も無い……

「ぐっ!!」

上空からの急降下キックを咄嗟に斧で防ぐが、かなりの勢いがついていたので防ぐ事が出来ず、吹き飛ばされる

「ええい！鬱陶しい……ん?」

ダメージは差ほどではないのだが、この調子でヒット&アウェイにして、耐久に持ち込まれたとしても霊力が底を尽きて変身が解除されるか、暴走するかの二択しかない焦りながら体勢を立て直し斧を構えようとした時に気付いた。斧の刃の近くに妙な出っ張りがあることに、それを掴んでスライドさせると眼魂をセットするであろう窪みが姿を現したのだ。

(これか?)

ベルトのバックルを開き、そこに入っているチエイサー眼鏡をセツトし、窪みを元に戻すと斧が発光しながら声を発し始める。

【ヨクミローヨ、マッテローヨ！】

「はあ!?待ってろってなんだ!?!」

これで何とかできるか?と淡い期待を抱いていたのに、斧から発せられる声は良く見ろと待ってろの音声に思わずいらだって叫んでしまう。時間がないって言うのに待っているとと言う言葉には煽られている様にしか思えない

「どうも逆転の武器ではなかったようですね」

馬鹿にするように急降下と共に繰り出される蹴りを受け止める。そのまま足首を掴もうとするが、俺の手が伸びるよりも早く俺の腕を蹴り、反転しながら上空へと逃げる。その舞うような動きに沿うように動く翡翠の尾は流星のように見えた、だが美しいなどと感じるわけも無く、馬鹿にされているように感じて苛立ちが強くなるのだが「うっらああああ!!」

「あの馬鹿!俺まで巻き込むつもりか!?!」

雪之丞の雄叫びと地面を殴りつける音、その瞬間周囲の温度が下がり氷柱や氷柱が姿を見せる。それは俺を巻き込みかけていたが、それと同じに俺にとっては最大の好機を齎した

「!?!」

突如目の前に現れた氷柱に正面衝突し、落下してきたライダー目掛け駆け出し

「ぶっ飛ベツ!!」

ダッシュの勢いと全力で振りかぶった斧の一撃がライダーの胴を捉える

「いぼっ!?!」

苦悶の声を上げて、身体がくの字に折れて相手がボールのように吹っ飛んだ瞬間。斧の発している声が変わった

【マエミローヨ、イツテローヨ！】

「な……な……なにい?」

吹っ飛んでいるはずの相手が急激にスローになる。まさか、これが

この眼魂の能力？

(相手のスピードを遅くする?……いや、考えてる時間はねえ!!)

相手がスローになっっている時間がどれほどかはわからないが、さほど時間的な猶予は無いはず、地面を蹴りスローで吹っ飛んでいる相手の懐に飛び込み拳を繰り出す

「?!?!」

火花を散らし吹っ飛ぶが、やはりスローなので少し吹き飛んだだけで終る。相手の動きが鈍いうちに拳と蹴りを連続で叩き込む。その度に相手の姿勢が変な形で空中に留まり、混乱しきっている今が好機だと思い、身体のパネを生かした回し蹴りを叩き込む

「がっ!?!」

スローモーションで吹き飛び、結界のコアの直線状に止つたのを見て腰のレバーに手を伸ばす

「男の拳はてめえと、てめえの大事な物を護る為の物なんだとよ、だから俺は！この手に！横島との約束を握り締めるツ!!!」

雪之丞が右拳を大きく掲げ、姿勢を低くする。それを見て相手は籠手のボタンを押し込む

【シンピガン！サイクロプス！ファントムバーストツ!!】

「お前を潰す！お前の存在は危険だ!!」

先に駆け出したのは敵の方だったが、俺には何の心配も無かった。

雪之丞が負ける訳が無いと判っているから

【ダイカイガン！チェイサー！オメガトライブ！】

「はあああ……ッ！」

腰を深く落とし右足に霊力が集束するのと同じに跳躍し、空中で反転し飛び蹴りを放つ

「これが俺の！誓いを護る拳だああああッ!!!」

「ば、馬鹿な!?!あ、ありえない、こんな、こんな!?!こんなありえないいいいいいい!!!」

青いライダーの拳を左手で弾き、右拳を相手の胸に突き立て駆けて来る。それを見れば雪之丞が何をしようとしているのか明らかで、俺も雪之丞の計画に合わせる事にした

「おおおおおおおおおッ!!!」  
「?!?!」

最後まで自分の時間が戻らず困惑している相手の胸に蹴りを叩き込み、そのまま結界のコアに突き進む。普通では粉碎できないのなら、挟撃そして、大質量をぶつけて粉碎するしか破壊する手段が思い浮かなかった、雪之丞の場合は考えたのではなく、勢いだろが、野生的な勘と言うのは恐ろしい物だな……

「ぶっ潰れるオオオオオオ!!!」

「おーりやあああああッ!!!」

敵を直接コアに叩き込み、制御装置は2人を巻き込んで爆発した。殺した……いやホムンクルスだから、そうは言っても気分は良くないか……

【オヤスマシー】

ベルトが消え、変身が解除される。その瞬間ドツと身体が重くなるが気絶するほどではなかった。だが雪之丞は魔装術が砕けると、その場に座り込む。その姿は明らかに疲労困憊と言う様子だった……

「……疲れたな」

「ああ。だけど……俺達はやったぞ」

装置に亀裂が走り爆発していく、俺達に任された仕事はやりきった。これでお師匠様や綱手が何とかして

「(づ)は(づ)」

「雪之丞ー！?」

爆発した装置から弾丸のように何かが吹き飛んできて、それが雪之丞の顔にめり込むのを見て思わず叫ぶ、なんだよ、命懸けでやりきったのになんでこんなに締まらないんだと思いつつながら、俺は倒れている雪之丞の顔にめり込んだ物に手を伸ばした

「……………これは……………あいつらの」

雪之丞の顔にめり込んでいたもの……それは量産型レブナントと名乗っていた2人組みが変身するのに使っていた、籠手型の変身ツール……その罅割れた残骸なのだった……

く横島視点く

俺は霊波の中に飲み込まれて死んだ。そう思っていたのだが、突然身体が軽くなったような。そんな感覚がした

【これは……戻ったぞー！】

【ああ！間違いない!!】

心眼と教授の嬉しそうな声が脳裏に響き、俺の意思ではなく右腕が動き、そこから放たれた光が霊波を防ぐバリアとなった

(……あれ……は)

視線の先にはレブナントの攻撃を防いだのと同じ翡翠色の珠から放たれている壁の姿があった。どれくらいの時間放射されていたかは不明だが、珠が罫割れ砕けると同時にビームの放射は止った

【なるほど、量産型レブナントは破れたか……】

教授が聞き捨てなら無い事を呟く、量産型!?!量産型なんて者までいるのか

【そうになると神魔が増援に来るのも時間の問題……レブナント、君は撤退したまえ】

「元からそう命令されている、じゃあね、教授」

少女は瓦礫から飛び降りると黒い渦に飲み込まれるようにして消えた。これで割り込んでくる事が無いけど……彼女に関してはいろいろと謎が残る結果となった

【さて、では続きをしようじゃないか。横島忠夫、そして我が半身よ】  
棺桶を構えるモリアーティだが、その規格外の大きさの射撃兵装によろめいているのが判る

【降参したらどうだい?そう酷い扱いはしないと約束するヨ】

【ふふふふ、私らしかぬ甘さだ。横島忠夫に影響されているようだな】  
教授の言葉にモリアーティは小さく笑い、腕が震える中棺桶を俺に向ける

【言っただろう?私は最後までガープ様への忠義を貫く!】

放たれるミサイルとマシンガン。霊力では無い、物理的な攻撃は言うまでもなく脅威だ。これならば霊力の方がよっぽど対処しやすいと思いながら、その場から駆け出し、マシンガンはサイキックソー



サーで防ぎ、弧を描いて降下して来るミサイルは靈波弾で打ち落とす  
【ボーイ、彼はもう意地になつている。終わらせてあげるのが情けと  
言うものだヨ】

説得は無理なのだろう、あそこまでポロポロでも戦うと言う意志を  
覆さない事。そこまでガープに心酔しているのか、洗脳されているの  
かは判らないが、ここまで戦わせると言う事がガープの恐ろしい能力  
のように思えた

【言葉を交わすのこれで最後だ。ぐだぐだと長話をするのは性じゃな  
い】

棺桶に靈力と魔力が集まっていくのが判る。俺も腰のレバーに手  
を伸ばす

【ダイカイガン！ プロフェツサー！ オメガシユーテイング!!】

ガンガンブレードの銃形態の先端に靈力で出来た銃身が追加で現  
れる。それは上下で分かれていて、鰐の口のように思えた

【これが終局の風景だ!!世界崩壊をその目に見るが良いツ!!】

棺桶から放たれる弾幕のようなミサイルとマシンガンの嵐に思わ  
ず足が止りかけるが、即座に心眼と教授の声が脳裏に響く

【止るな！切り札はある、お前は進め！】

【その通り、活路は前にしかないヨ】

あの弾幕に突っ込めつてか?!いや、でも心眼と教授の言葉だ。それ  
に俺自身もそれしかないと思っていた、逃げれば射程の広い銃弾に撃  
たれてそのまま畳み込まれると思ったから、そしてもう一つは……

(あの時ほど怖くねえ！)

マタドールと戦った時も、ガープの複製と戦った時よりも恐ろしい  
とは思えなかった。だから俺の硬直は殆ど一瞬で自ら弾幕の中に飛  
び込んだ。視界を塞ぐ銃弾とミサイルの嵐に怖くないと思つたが  
やっぱり怖い。心眼の切り札はまだかと思わずにはいられない

【斜め前！0.4秒後に反転！そのまま0.7秒前進！】

教授のコンマ何秒の回避の指示に従いながら少しずつ、少しずつだ  
が前に進む。手にしているガンガンブレードの銃身には既に凄まじ  
い靈力が集束されている

【良いか、チャンスは一瞬だ！動揺するなよ！】

心眼の怒声が脳裏に響いた瞬間、俺の目の前に存在していた銃弾の壁は存在せずモリアーティの背中が目の前に広がっていた

【消え……後!?】

モリアーティが振り返る前にガンガンブレードの照準を合わせる。だがこれは俺の意志ではなく、教授が俺の身体を動かした結果だった【さよならだ。同じ私である、君に私はこうして別れを告げよう。疑似宝具展開……別れの時間だとネ！】

銃身がさらに展開して複雑な魔法陣が描かれる。モリアーティはふっと笑い

【そのようだ。横島、そして異なる私よ、ライヘンバツハは君達に譲ろう。私から、君達への餞別だ。好きに使いたまえ】

今までの憎悪に満ちた表情ではなく、柔らかい表情を浮かべたモリアーティは手にしていたライヘンバツハと言う名の棺桶を投げ捨て、両手を広げる

【これより先の戦いはより苛烈に、そして激しく、死と破壊を齎すであろう！抗え！立ち止まるな！そして……躊躇うな！】

それは俺に対しての助言のように思えた。モリアーティが最後にニツと笑う。それは教授の笑みと同じ物だった

【ボーイに対する助言に感謝するヨ。また会おう】

【ああ、また会おう】

俺の意志ではなく引き絞られた引き金、そしてガンガンブレードから放たれた凄まじい霊波砲がモリアーティの姿を跡形も無く消し飛ばす

【オヤスミー】

変身が解除され、よろめくと教授に抱きとめられ、そのまま広間の床に寝かされる

【休みたまえ、疲れただろう?】

確かに疲れている、疲れているけど……っただけ聞きたかった

「なあ、モリアーティはあれで良かったのかな?」

もつと他の道があつたんじゃないか?と教授に尋ねると教授は俺

の前髪を撫でて

【君の優しさは美德ではあるが、優しさでは救えぬ物もある。モリーアーティは君にそれを教えてくれたのさ】

そうなのかな。教授の目を見てみると眠くなり、俺はそのまま目を閉じて眠りにへと落ちていくのだった……

【教授。1つ頼みがある】

【なんだね?】

【美神達が来る前にあの瓦礫の周りに落ちているビー玉の様な物を回収して欲しい】

【それは構わないが、なんの意味があるのかネ?玩具に見えるが?】

【あれが最後の回りこんだ奴の種でな。人に見られると不味いんだよ】

【……なるほどネ、判った。回収してくるよ】

【ああ、頼む。美神達が来る前にな】

く????  
視点く

横島と陰念、雪之丞の戦いが終わった頃。塔をゆっくりと登る少年の姿があった。いや少年と言うのは正しくない、姿こそ少年だが。その正体はソロモンの魔神、セーレであった

「全くガープも回りくどい事が好きすぎる。有能ならばさっさと回収してしまえば良いんだよ」

レブナントと一緒にささつぶつぶつ言いながら横島がいる階層の下の大広間に足を踏み入れたセーレだったが、即座に飛び退く。その瞬間セーレがいた場所が何者かに射撃される

「素晴らしい、良い反応と褒めてあげようじゃないか、少年」

手を叩きながら姿を見せたのは真紅の銃を手にし、ローブを目深に被った黒い仮面ライダーの姿だった

「……お前……何者だ!?なんで気配も何もない!」

セーレはこの階層に生命反応が無いと知っていたので何も持たず、現れていた。だが結果は異なり、襲撃者がいた事に動揺した

「何者か……か。よろしい、では名乗るとしよう。まあ、どうせ忘れるだろうがね。」

ライダーはそう笑うと手にしていた銃をローブの中に戻し、大袈裟な身振りで自己紹介を始めた

「我は未来より来たりて、過去へと進む者。我が名はフォーテイス、仮面ライダーフォーテイス。真なる歴史の篡奪者である、以後お見知りおきを」

「歴史の篡奪者だって？ ずいぶんと大きく出たね」

セーレはその名乗りに深いそうに眉を顰め。虚空からレイピアを取り出す

「大きく出たわけでもなんでもない、純然たる事実であるのだが……まあ良からう……君の存在は今ここでは邪魔でしかない。よって、排除させてもらうとしよう。」

真紅の銃の銃身をスライドさせ、現れたスリットにカードを装填し、銃口を上に向け引き金を引く

【KAMENRIDE ビルド】

【KAMENRIDE クローズ】

「存分に楽しんでくれたまえ」

【鋼のムーンサルト！ラビットタンク!!】

【Wake up burning! Get CROSS—Z RAGON!】

打ち出された光から青と赤の仮面ライダーが召喚される

「な、何なんだ!?!何なんだよ!?!お前は!?!」

「言っただろう? 真なる歴史の篡奪者である、と。さあ、少し遊んであげたまえ」

フォーテイスの言葉でクローズ、ビルドがセーレへと駆け出す  
「つとーなんだなんだよ!?!どうなってるんだよーうぐう!?!」

手にしたレイピアでドリルクラッシュヤーを防ぎ、クローズの蹴りを飛んでかわすが、そこに真紅の銃から放たれた銃弾が叩き込まれ、セーレは呻きながら地面を転がっていく

「このままだと面白くないことになるのでね、この歴史を奪わせても

らうよ」

【フィニッシュタイムツ！】

ローブの下のベルトに装填された何かのボタンを押し込み、ベルトのバックルを回転させる。するとビルドとクローズはエネルギーへと変換され、セーレの身体を拘束し、広間の中をまるで柱時計のような重厚な音が鳴り響く

「なんだよーふざけるなよ！お前は何者なんだよ!?なんでこんな能力がある!?お前は何者なんだ！」

「くだいな、何度も言っているだろう？真なる歴史の篡奪者であると、ではさよならだ。再び会う時までね」

【パラドクスタイムブ레이크ツ!!!】

跳躍したフォーティイスの蹴りがエネルギーとなったビルドとクローズごとセーレに叩き込まれる

「う、うわああああ!!」

爆発と共に炎の中に消えるセーレだが、フォーティイスが指を鳴らすと炎が消えセーレの姿が元に戻る。だがその目に生氣はなく、そして動く気配が無い

「さてと……君はこのままレブナントを連れて、拠点へと戻る。フォーティイスと名乗るライダーとは遭遇せず、横島忠夫を回収しようともしていない……こんなところか。」

セーレの頭に手を当てて、球体となった光を取り出すとそれを握り潰すフォーティイス。そしてセーレは目の前にいるフォーティイスの顔を素通りしていく……

「なんで僕がこんな使いつぱしりをしなくちゃいけないんだ、全くガープも人使いが荒いんだから」

ぶつぶつと呟き、自身をじつと見つめているフォーティイスに目もくれず、自身が今登ってきた階段を下りていく

「さて今はこんなものかな」

フォーティイスはローブの中に銃を戻し、代わりに本を取り出すと同時に楽しそうに階段をゆっくりと登っていく、だがその姿は明暗を繰

り返し、横島達のいる階層を抜けて上の階層へ辿り着くと鮮やかなにその姿を映し出した。その時にはフォーティスの姿はローブを纏った青年の姿へと変わっていた。

「今の段階における横島忠夫がガーブ陣営に回収される事態は回避された。今の段階では……ね。横島忠夫……君が」 『であるか、それとも』 『であるか……観察させてもらうとするよ……』

ふふふつと小さく笑ったフォーティスは本を開き、その中に吸い込まれるようにして消えていくのだった……そしてそれから数分後、美神達が扉を開け、下の階層にいる横島の元へと走っていくのだった……

リポート24 反逆者達の進軍 その10へ続く

## その10

レポート24 反逆者達の進軍 その10

くタイガー視点く

塔の周りをワツシは須田と言う男と一緒に回っていた。ワツシの霊能は戦闘向きでは無いと言う事で、見回りや横島さん達が塔を破壊してからの行動の為に動いていた

「よし、次のポイントに行くぞ」

瓦礫の上から駆け下りて来る須田。細身で長身、そしてその両手には精霊石で出来た爪型のグローブが装着されている

「いい加減何をしてるか説明して欲しいんですジャー？」

持ち運んでいる機械はかなりの重要なので、何に使うのか説明して欲しいと言うと、須田さんは地図を広げながら

「会長は横島達が確実に塔を破壊してくれていると考えている。あれは隕石のビーコンでもあるが、それと同時に結界の中の悪魔が出現するための制御装置でもあると思われる」

悪魔が存在するための制御装置？ワツシが首を傾げていると須田さんは舌打ちして

「魔界の悪魔が人間界でそうそう活動出来る物か、あれは魔界と同じ空気を作る、もしくは悪魔に直接魔力を供給するための装置だ。塔が破壊されれば、悪魔は魂食いで魔力を補給しようとする。だから精霊石の結界で悪魔を纏めて消滅させるんだ。来る前に説明しただろう？」

「アルファなんちゃらとか、ガンマソーだとか言われても理解出来ないですジャー……」

確かに出発前に色々資料とかグラフとか見せて貰ったんじやが、余りに専門知識過ぎて理解出来なかった。

「ちっ……これだから脳筋は嫌いなんだ」

……酷い言われようである。しかし霊能工学の専門用語なんて一介の学生が理解出来る訳がない……

(ああ、どうせならエミさんと一緒に良かったんですじゃー)

何時も組んでるチームで動きたかった……そこまで考えた所で急にふつと身体が軽くなる

「……は、はははーやりやがった。本当にやりあがったな！おい！寅吉とつととずらかるぞ！装置は捨てる！」

須田さんが急に踵を返して走り出すのを見て、呆然としていると

「馬鹿やろうー！急激に悪魔の行動範囲が縮まるんだぞ！こんな所にてみる！俺達は悪魔に喰われるぞ！」

そう言われて担いでいた装置を投げ捨て、慌てて須田さんの後を追いかけて走り出す

「何処に逃げるんですじゃ!?」

「まずは走れ！とにかく距離を取ってから考える!!ちっ！俺の計算よりも1時間も早い！早いのは良いが周りの段取りも考えろ！」

ぶつくさ良いながら走る須田さんの後ろを走りながら、ちらりと塔を見る。横島さん達は絶望的な戦いに挑みそれに勝利にした……自分との差があまりに出来てしまった様に思えて、思わず胸が苦しくなる。置いていかないと欲しいと思う

(いや違うんですじゃー)

自分が足踏みしているから、横島さん達との距離が出来てしまったのだ……首から下げた虎の牙のペンダントをワシは知らずに強く握り締めているのだった……

く美神視点く

それは突然の事だった。急に身体が軽くなったのだ、そしてそれが何を意味するかは私も蛍ちゃんもすぐに判った。先に行った雪之丞と陰念がコアを破壊したのだ

「キツシヤアアアアア!!」

「くっ……、このおとおおおッ!!」

私が足を止めた一瞬にマンティコアが牙をむき出しにして襲い掛かってくるが、それを盾で防いで、そのまま地面を強く蹴り通路にマンティコアを叩きつける



「ギギッ!？」

今まで自分が優勢だったのに、急に私の力が上がった事に困惑しているマンティコア。全然気付いてなかったが、どうも私達もあの結界の中にいたことで霊能に制限がかかっていたようだ

(これで何とかなる)

横島君が2対1で戦っているが、それも恐らく既に結界の束縛から開放された聖奈達が向かっているはず

「今までずいぶんと調子に乗って……くれたわねッ!!」

籠手と一体化した刃を踏み込んで振るう。今までの踏み込みと違うことに一瞬反応が遅れたマンティコアの尻尾を切り裂く、青色の血を流し怒りの視線を私に向けるマンティコア

(……違うわね)

マンティコアと思っていたが、少し弱いように感じる。よく考えればガープ達とはいえ、マンティコアを飼いならず、もしくは使い捨てるの兵力として使うには戸惑いがあったのだろう。それを結界で私達の能力に制限を掛け、向こうの能力を強化することでオリジナルのマンティコアと誤認させていたのだろう

(恐ろしいのはそこじゃないけれどね)

尻尾を失い、怒りに身を任せ飛び掛ってくるマンティコアの爪と牙を盾で防ぎ、隙を見て盾自身で殴りつける。今回の事で恐ろしいと感じたのは相手の緻密な戦略だけじゃない、効果が消えるまで自分達も対象に入っている事すら気付かなかった結界だ。これがどれほどの準備で展開出来るかは判らないが、これは明らかに人間用の結界だった

(つまり、それだけ本気って事ね)

盾の側面でマンティコアの体当たりを受け流し、がら空きの胴に蹴りを叩き込む。体重さがあるのでダメージはさほどでは無さそうだが、それがマンティコアの怒りを買うには十分の攻撃だった

「グルルルルウウツ!!」

「何?プライドでも傷ついたかしら?」

あのタイミングで私が剣を突き出していたら、それだけでマンティ

コアは死んでいた。それが判っているからこそ、マンティコアの目には激しい怒りの色が見える。自分を馬鹿にしていると判っているだろうから

(……別に舐めているわけじゃないんだけどね)

余裕そうな態度こそ保っているが、盾も剣も既に靈力が底を尽き掛けている。だからこそこの挑発なのである、それは私の予想よりも効果を発揮してくれた。蛍ちゃんには目もくれず、尻尾を切り落とし、自身を挑発している私の姿しか見えていない。私は盾を剣で叩く、澄んだ音が響き渡る。チャンスは一度、そしてその機会を失うつもりは無い、この1回で確実に極める

「ほらほらどうしたの？怖いの？」

盾を捨て身軽になる。もう靈力も残っていないので、盾としての機能は期待できない。それなら投げ捨てて身軽になった方が良い

「ゴアアアアア!!」

私が挑発していると判ったのか、マンティコアが怒りの方向を上げる。私は盾を捨て開いた手で、太もものバンドに止めてある神通棍を手にする

(……本当、横島君といえるからイチバチ所か、イチジユウでも挑戦しちゃうのよね)

相手は獣、人間よりも俊敏で、人間よりもはるかに凶暴。そんな相手なら確実性を取るのが一番だ、でも自分よりも圧倒的に強い相手に挑み続けてきた横島君を見ていたからか、武が悪い賭けにも挑んでみようと思ってしまう。ゆっくりと間合いを詰めてくるマンティコアを見据え、最後の餌をまく

「え、あ……!?!」

靈力とはつくに切れていたが、それを自前の靈力で維持していたのを消してみせる。そして武器が消えたことであらうたえる姿を演出した瞬間

「ぐアアアアアア!!」

雄叫びを上げて飛び掛ってくるマンティコアに笑みを浮かべる。私は自分の命をベットした、そして私はその賭けに勝った

「こっのおおおお!!」

大口を開けて飛び掛ってきたマンティコアの口の中に手を突っ込み、神通棍を伸ばす  
「つつうー」

鋭い牙で腕が少し切れたが、これで最大の急所が露になった。マンティコアから飛びのきながら蛍ちゃんの名を叫ぶ

「いっけえええ!!」

「?!?」

最大までチャージし、精霊石で増加された矢がマンティコアの口中で炸裂する。マンティコアの身体が体内に飛び込んだ精霊石で焼かれ爆発する

「ぺっぺ!!さ、流石に近かったわね」

「……ほんとですね」

2人ともマンティコアの血で全身びしょ濡れだが、マンティコアは倒した。私達を閉じ込めていた結界が砕け散る

「……流石に疲れたわ」

「……ですね」

すぐにでも横島君の元に駆けつきたいのに、立っていられず私と蛍ちゃんはそのまま尻餅をつくようにその場に倒れこむのだった……

くビュレト視点く

階段を踏み砕く勢いで駆け上がっていく、結界を破壊した事で体の感覚が戻って来た瞬間、俺は跳ね起きて階段に向かって走り出した……

(どこまで俺は無様だ!)

人間の助けをするはずなのに、俺は何時も後手に回る。こんな有様でガープ達を止めるなんて良く言ったものだ

「落ち着いてください」

「やかましいー無理してついてこなくて良い!!」

落ち着けと叫ぶブリュンヒルデに無理してついてくるなど叫ぶ、俺達を見てくれていたシロとタマモを置いて、俺は上の階層に文字通り

階段を踏み砕きながら上の階層へと走る。嫌予感がするのだ、何か俺達は見落としている、そんな気がしてならない……上の階層に感じる魔力が消えた

「ちいっ!!!」

扉を蹴り開けるが、ここにいたはずの何ものかの姿は無い。僅かに残る魔力の残滓がここに神魔がいたという証だった

(この感じ……同類か)

間違いない、ガープとアスモデウスのほかにもあいつらの陣営には、ソロモンがいる。他の魔族には判らなくても俺には判る、ここには同胞がいたと……

「ブリュンヒルデー……ここを出たら諜報部に連絡を取っておけ!今活動しているソロモンの確認をしろ!」

「え、あ……ビュレト様!」

話は後だと叫び、扉を蹴り開けるようにして上の階層へと走る。

(綱手はどこだ!)

横島の気配が弱い、負傷しているのは确实だ。上の階層にいる回復能力を持つ奴と合流して、上の階層に向かわなければ……

「!?」

「おや、運が良いと言うのか、それとも悪いのか……御機嫌よう。ソロモンの魔神のビュレト殿」

広間に出たとき、俺の目の前には黒いローブを目深に被った男がいた

「……お前、あの時の」

「おや、私を見つけておりましたか?ははは、些か油断しましたかね」  
こいつ何者だ?人間……じゃないな?だが神魔でも妖怪とも言いがたい。俺がこの塔を調べた時に姿を消した男……最初は見間違っていたのだが、俺達に紛れて塔の中に浸入していたようだ。腰の剣を抜き放つ

「何者だ、答えろ」

「怖い怖い。か弱い人間には恐ろしくて堪りませんね」

肩を竦める男は口元に余裕の笑みを浮かべ、そして俺を見つめてに

やりと笑う

「魔神ビュレト、かつてアスモデウス、ガープ、ベリアルと共に魔界統一に出たサタンの軍と対決。何時までも終わりのない戦いに空しさを感じ「黙れ！」おつと怖い怖い」

俺の剣を身体を仰け反らせ交わした男はローブの中から瓶を投げつけてくる

「……エリクサーだと」

「ふふふ、必要でしょう？それを差し上げますから、今回は見逃してもらえませんか？」

投げ渡されたのはエリクサーで思わず困惑する。不老不死にさえいたるといふ霊薬だが、これを希釈して薄めれば人間の傷などは立ちどころに治る。だがこれを作れる存在は今はいないはずだ……こいつは本当に何者だ

「では失礼を、私はまだ見つかるわけには行きませんのでね」

待てと叫ぼうとした俺の声は発せられず、一瞬呆然としていたが

「そうだ、エリクサーを届けるんだった」

なんで俺はこんな所で立ち止まっているんだ？俺は頭を振りながら階段を走り出すのだった……

「私も運が悪い」

男は柱の影から姿を見せ苦笑する。最初に来た人間にエリクサーを渡し、記憶を奪う予定だったのに、まさかソロモンに会うとは肩を竦める男の腰にはセーレを下したフォルテイスが腰に巻いていたベルトの姿があった。この男がフォルテイスの変身者だったのだ

「やれやれ、さっさと撤退しましょうかね」

階段の下から近づいてくる気配に男は肩を竦め、閉じていた本を開き。その姿を今度こそ塔の中から消すのだった……

くくえす視点く

それは唐突なことだった。シズクと協力し、この中に何体のリザードマンがいるのか、それを調べている時。8体まで数えた所で、身体がふつと軽くなった。それはまるで水の中から出た時のような、全身

に掛かっていた重さが無くなる

(なるほど……ね)

解除されるまで実感できない人間までも範囲内に入れた結果……それはガープが人間を侮っていない証拠であり、そしてその結果をこのタイミングで切つて来たと言う事はより本格的な活動を人間界で行うための物であろう

「シャアアー」

「……失せろ、下等な蜥蜴が」

シズクが拳を握り締めると、その目の前で青紫の血の華が咲く。その光景に周囲にいたりザードマンの困惑した気配が伝わってくる

「よく今まで好き勝手してくれましたわね」

これはお礼ですわと呟き、指を鳴らす。炎の柱がリザードマンを包み込み、黒焦げになった死体が音を立てて崩れ、私の炎で出来たマグマの中に下半身が飲み込まれ、徐々にその中に引きずり込まれていく姿を見て小さく笑う。今まで好き勝手してくれた奴が骨さえも残さず消え去るのは見えていて気分が良いですわ

(……弱体化に気付かせず、そして敵対者には対応する装備をですか) 黒焦げになったリザードマンの死体には、焦げ1つ無い鏡の様な盾が身に付けられていた。あれでこちらの攻撃を跳ね返していたのだろう。全身がマグマに飲み込まれる前に死体の腕に蹴りを入れ、弾け飛んだ盾だけを回収する

「シズク。さっさと片付けますわよ」

「……言われるまでも無い」

私が結界の中で放った炎は広間の床をドロドロに融解させマグマにより、その温度を急激に上昇させている。私は懐に忍ばせておいた精霊石のナイフに魔力を通して振るう。バターのように結界が切り裂かれる

「先に出てますわよ」

「……ああ、そうしろ」

結界を破壊出来なかったのは、私自身が弱体していたからだ。本調子に戻れば破壊とまでは行かないが、切り裂いて外に出ることなど容

易い、私が外に出て数秒でシズクも出てきて、指を鳴らす。結界の中から急激に冷やされたマグマの音が響き渡り、結界を揺らすすさまじい爆発が発生する。結界にこびり付いている青紫の血を見て

「薄汚い花火ですこと」

「……まったくだな」

意図的に発生された水蒸気爆発は結界の中のリザードマンを纏めて吹き飛ばしていた。当初の計画ではシズクの氷の中で自分達だけを護るつもりでしたが、そんな必要はありませんでしたわね

「では行きましょうか?」

「……だな」

横島が心配で仕方ないので余裕を持った喋り方をしている私とシズクだったが、競い合うようにして階段を駆け下りていく……美神達が残ったフロアには内側から爆発したマンティコアの死体が転がっていたが、美神達の姿は無かった

「……一応無事だったみたいだな」

「そのようですわね」

激闘の後はあちこちに転がっている。美神と蛭は1体のマンティコアを相手にしていたようですが、砕けている壁などを見ると恐らく狭い通路に閉じ込められての戦いはさぞ厳しい物だったでしょうね……少しだけ広間に視線を走らせ、下の階層に向かう。

「あれは!?」

「……」

捲れ上がった広間の床や、壁に付いている鋭い攻撃の跡……そして瓦礫の上に突き立っている白い機械的な棺桶……それらを見るだけで横島の戦いがどれほど厳しい物だったのが一目で判る。横島はと視線を走らせると横島の側にモリアーティが居るのを見て思わず身構えるが

【STOP! 私! 私だツ!! 教授だ! お願いだからもう止めてくれないかね!? ボーイが寝てるから、誰も止めてくれなくて今まで殴られていたんだから! 君達にまで襲われたら私座に帰ってしまうヨ!!!】

よく見るとモリアーティとは全く雰囲気が違う。それ所かたんこ

ぶだらけで泣いている姿を見て、発動しかけた魔法を解除し横島に近づく

「シズク、良かった……横島を見てくれる？動かすのは不味いから」

横島の様子は酷い有様だった。全身きり傷だらけで、顔には痣まで出来ている。それも当然だろう横島は2人で英霊とライダーを相手にしていたのだから

「……大丈夫だ。すぐに治療に入る」

シズクが横島の近くに座り込む。私は離れた所で広間を観察している美神に近づくと

「ああ、くえすね。どう見る？」

「どう見るも何も、今回は失敗してもどうでもいい作戦だったのではないですか？」

私達を誘い込み、神魔の注目を集めその陰で暗躍していたのだろう。本気ならば、塔の中に本物のガープが居てもおかしくなかったのだから

「となると、ガープの本当の目的は何処にあるのかなって思ってたね」

「……うんざりしてきますわね」

これだけの激闘の後にまた戦いなんて冗談じゃないが、その可能性が極めて高く思わず溜息を吐きたくなる

「あいたたっ！お!?蛍!?シズク!?そっちは大丈夫だったのか!？」

横島が意識を取り戻し、蛍達を心配するような事を言うが、それよりも先に横島の方がよっぽど心配だったという怒声が響く

「先に横島への説教ですか？」

「……悩む所ね」

そう苦笑する美神と共に横島の元へ向かう。横島は至近距離で怒鳴られた事に耳を塞ぎ

「いや、でもあの場合にはあするしかなかったし」

「そうだとしても格上相手に1人で挑むとかありえないでしょう!?もっと自分の事を大事にしてよ!」

蛍の涙目の怒声に横島は謝る事しか出来ず、おろおろしながら視線で私と美神に助けを求めている



「蛩。気持ち判りますが、私達よりも重症な横島に怒鳴るのはどうかと思いますわよ?」

「どうせ説教するなら治ってからの方が良いわ」

私の助け舟と美神の助け舟だか良く判らない言葉に、渋い顔をする横島。勿論私だっと思ふ事はあるのだから

「怪我が治ってからですわよ?」

「……はい、すみませんでした……」

しょんぼりしている横島を見てみるとシズクは横島の頭の上に水を振りかけながら

「……霊体はそれほどでもないが、身体はずいぶんとボロボロだな。大丈夫か?」

「え? そう? あんまり痛くないけど」

……痛みを感じないほどボロボロと言う事を自覚して欲しい物ですわね。私達が全員溜息を吐いているのを見て首を傾げている姿を見て、きよとんとしている横島に心からそう思う

【あのー私も身体ボロボロだから少し休ませて貰うヨ】

教授はそう言うのと横島の側に転がっていた眼魂の中に消えていく……教授の眼魂で勝った? いや相手と同じ能力を持つ眼魂だったとしても、それでモリアーティとはイーブン、もう1人のライダーの対策とはなりえない

「何があったの?」

「いや、俺もよく理解して無いんですけど……心眼がなんとかしてくれたのかな?」

心眼が? 横島のバンダナに視線が向くが心眼は何の反応も見せない、ここでだんまりとか止めて欲しいんですけどね……そんなことを考えていると上の階層へ続く扉が開き陰念と雪之丞が互いに肩を貸しながら姿を見せる

「ちよっとすいません」

横島はそう謝ると、顔を顰めながら立ち上がり2人に近づき。手を上げる、2人はそれを見て苦笑しながらふらふらながら横島に近づき、勢い良くハイタッチする

「ああいうの、私には理解出来ないわね」

「……男同士のあれだろ、女には理解出来ないさ」

苦笑するシズク……まあ確かにあれは私達には理解できないですわね。へたり込んで痛みで顔を歪めながら笑っている馬鹿達の考えなんて理解出来る訳が無い。下から駆け上がってくる気配と足音……私も美神達もその場に座り込む。意地で立っていたけど、限界なんて勿論とつくの昔に超えていた……助けが来たなら無理をして立っている意味は無い。大人しく救助されよう……次の戦いはすぐそこに迫っているだろうが……今はこの戦いを終らせる事が出来た。それで良しとしましよかね……勢い良く開いた扉の音と駆け込んでくる足音を聞きながら私の意識は闇の中に沈んでいくのだった……

↳唐巢視点↳

ふーっと大きく息を吐き、握っていた拳を開き、眼前に倒れている男達を睨みつける。彼らは今の今まで避難所に隠れていたのだが、安全と判った瞬間に出て来て、自分達が主導で今回の事件は解決したとする為に車で避難所を回っていた琉璃君を害そうとしたのだ

「なにをしたか判っているのか？唐巢神父……私達が主導になれば、君の破門だって取り消せる」

「悪いが今の自由な立場も気に入っててね。それに何で私が君達の下に付く理由がある？」

私も見てきたが、避難所で自分は偉いだのなんだの言っていた視察団への評価も、オカルトGメンの職員も気に食わない。自分の危険を理解して、それでも動いていた琉璃君を裏切り理由にはならない

「お前！なんでそっちについている！躑躅院！お前を呼んだのは私だろう！」

「呼んだ？は！なぜ私がお前のような格下に従うと思ったんだ？私はお前達が企んでいるクーデターを公表する為に東京に来ただけだ」

躑躅院の冷酷な色が宿った瞳に黙り込むオカルトGメン。中性的な容姿と名を明かさないので男か、女か判らないが彼が身に纏う空気

は間違いなく支配者のそれだ。同じ風格を持つ琉璃君や冥華さんとは別方向の圧倒的なカリスマの持ち主だ

「それくらいで良いんじゃないかな？」

「唐巢神父か、ふむ。私がどうこうしたわけでは無いがね？」

まあ叩き伏せたのは私とあそこで腕を回している大男……不動君の2人だけだけどね。

「あー良い喧嘩だった。最高だな」

不動君がもつぱらだ。話を聞くまでも無く殴る蹴る、投げ飛ばす。男も女もお構いなしの彼には正直苦笑するしかないな……そんなことを考えているとオカルトGメンのマークの付いた車が止り西条君が姿を見せ

「霊能法違反で全員検挙する！」

逮捕状か……この状況でよく裁判所が発行してくれたなと思いなから躑躅院に近づく

「今回は協力してくれて助かったよ」

「日本の危機だ。協力するのは当然だろう？」

……嘘だな。耳触りの良い事は言っているが、彼は本当の事を言っていない。私の視線に躑躅院はふっと小さく笑い

「ほら、英雄の帰還だ。労わなくて良いのかな？」

塔から出てくる美神君達の姿が遠くに見える。彼の事は気になるが、戻って来た美神君達を労わない訳には行かない

「……ずいぶんと厄介な相手だね」

「はい、彼はちよつと底が見えないです」

今回はこうして協力する事が出来た。だが彼がいつまでも味方ではないとは思えない

「彼の扱いは細心の注意を払った方が良い」

「……判っているんですけどね。今回の件にはずいぶんと協力してくれたし、無碍にも出来ないんですよ」

厄介な相手だね。年若いがこの根回しの良さ。相手が断れない状況を作り出す手腕は魔窟とも言える陰陽寮で鍛えられた物だろう。今の琉璃君では対処出来ないほどに老獪な相手だ

「後はあの隕石を……」

神魔の力が戻った。後はあの隕石を破壊して貰えばと言いかけた時、東京タワーの方角から金色の閃光が走り、隕石を砕いた

「……ビュレトさんでも、ブリュンヒルデさんでも無いね」

「魔人姫……どこかにいるって言ってたけど、日本に居たのかもしれないですね」

魔人の長。魔人姫、それが東京にいる可能性が今の一撃で浮上した……私達は揃って溜息を吐きながらも、絶望的な戦いに挑み、そして無事に戻って来てくれた美神君達を笑顔で出迎えるのだった……

くベルゼブル視点く

横島達が無事に結界を破壊した事で身体に掛かっていた負担は消えた。これで降下して来ている隕石を破壊が可能になった、横島が頑張ったのだから、あれくらいは私の方で処理をしようと思いい立ち上がろうとするルイ様に肩を掴まれた

「ルイ様？」

「彼女がやる気みたいだからね、邪魔をしない方が良い」

魔人姫に視線を向けると奴は楽しそうに笑いながら立ち上がり

「ああ、良い物を見た。横島……やはりお前は我らの末席に座るに相応しい」

「何を勝手なことを言っているんだい？彼は私の玩具だよ」

……魔人姫もルイ様も言っている事は同じレベルだと思っただが、2人の怒気と魔力がぶつかり合い空間を歪めるのは止めて欲しい

「まあ良い、それを決めるのは横島だからな」

立ち上がった魔人姫の姿が一瞬で変わる。赤いワンピースが赤黒いドレス姿へと変わり、背後には金色の鎧が浮遊している……

(これが……魔人の頂点)

ルイ様で慣れているから倒れる事は無いが、その圧倒的な魔力と神通力。そしてその存在感はルイ様に匹敵すると思われる

「ネロ、パンツ見えてるけど？」

「ははは、見せて恥ずかしがるものではないわ」

一部が透けているスカートからは、下着が見えているし、背中丸出しで、僅かな布が見えるが尻まで見えている

(痴女か……酷い服装だ)

同じ女としてあれは正直どうかと思う。だが魔人姫からすればそれは自分の美を最大限に引き出す服装と言う事なのかもしれない

「饞別だ。見るが良い、余の一撃をツ!!」

魔人姫が虚空に手を翳すと炎が溢れ出し、炎その物が剣となったような歪な大剣がその手に握られていた

「本当なら余の劇場を出す所だが……そこまでする必要もあるまいて……星馳せる終幕の薔薇【ファクス・カエレスティスツ!!】」

力任せの技では無い、軽やかなステップから放たれた剣の一撃は金色の閃光となり隕石を貫く。その圧倒的な破壊力に思わず息を呑む……

「おっと、このまま地球に落としては被害が出るな」

魔人姫が拳を握り、それを開くと降下して来た隕石の破片は跡形も無く消失していた

「うむ。これで良い」

ドレス姿から再びワンピース姿になり、座り込む魔人姫。見た目は子供だが……この力。間違いなく、ルイ様に匹敵している……そうで無ければ、ルイ様とタメ口で喋る事など不可能だろう

「所で、ネロ。もう少し付き合わないか？」

「ん？まだ催し物があるのか？」

「横島の所に遊びに行こうと思うんだ」

「その話乗った！して何をして遊ぶのだ？」

物凄く嫌な予感がする……この邪悪とも取れる笑みは何度も何度も見てきた。そしてそれは高位の神魔にとってはトラウマとも言える笑み……

「ポーカード。賭け事は面白いじゃないか」

「ほほう。それは面白そうだな」

数多の神魔を泣かして来たルイ様のギャンブル好き。それが横島へと向けられようとしていて、それを止める事が出来ない事に私は心

の中で横島への謝罪を口にするのだった……

レポート24 反逆者達の進軍 その11へ続く

## その11

レポート24 反逆者達の進軍 その11

〈オーデイン視点〉

東京に迫っていた隕石が粉碎され、結界も破壊された。だがそれを喜ぶ者はこの部屋の中には居なかった……何故ならば、全員が全員あれを知っているから、地上から放たれた黄金の閃光は今この部屋にいる上層部の全員に深い傷を与えていたからだ

「……魔人姫マザーハーロットか」

アマイモンが小さく呟いたが、その声は会議室に驚くほど響き渡る。魔人姫マザーハーロット……最上級の神魔しか知らぬ魔人達の頭領の名……ルイ様に匹敵する。すなわち最高指導者と同格の力を持ち合わせる魔人達の長。それがマザーハーロット……聖書にも名を刻まれた別名バビロンの大淫婦とも呼ばれる存在だ

「復活しているのは知っていたが、まさか東京に陣取っているとはな」  
即座に兵士を送りましょうと言う部下達を一喝する。静まり返る会議室に我は咳払いしてから

「魔人姫には四騎士が付き従っている。人間界を滅ぼすつもりか？」

我の言葉に黙り込む部下達、今事を構えればそれこそ四騎士達はその権限を使い人間を殺すだろう。人間に対する絶対的な上位存在が四騎士だ。しかし神魔にとってもその力は脅威である……

「……今は何もしない、これしか道は無い」

魔人と戦った時は神魔の両方が協力し、やっと戦う事が出来た。ガープ達と戦っている中で魔人とも戦いになればそれは互いを滅ぼし合う物にかなりえない

「オーデイン様。余りにそれは消極的過ぎるのでは？やはりここは攻めるべきだと」

「愚か者が、ただでさえガープに不覚を取っていると云うのに、ここで魔人とも会戦になってみる。それこそ挟撃に、相手が協力し合うこと

もある。敵を増やして全滅するつもりか？」

「アマイモンの正論に言葉に詰まる部下。人間などどうなるうが構わないと思っている一団だからこそ、攻め込めと言う部下を睨む

「とりあえずだ、今魔人は神魔には攻撃を仕掛けてきていない。人間には悪いが、積極的に対処に出る事は出来ない」

「魔人姫は気紛れだ。今は人間を相手に遊んでいるようだから良いが、ここで神魔が大軍で来て再び戦争へと舵きりさせる訳にはいかない  
い

「その代わり神魔からは人間達に手厚い援助を行う。まずは東京の復興、それと医療班をすぐに派遣しろ」

東京に現れたグループの塔と隕石。そしてそれと同時に各陣営に攻め込んできたアスモデウス達、今までの小競り合いではなく、本格的な戦争が始まろうとしているのかもしれない。私の言葉に返事を返し、会議室を出て行く神魔を見送りながら我を見つめているアマイモンに視線を向ける

「……消極的と思うか？」

「いや、今はこれでいいと思う。あまり戦局を広げてはそれこそ対処が間に合わなくなるからな」

少数精鋭の魔人一派と電撃戦と絡め手を得意とするアスモデウス一派。そのどちらも難敵であり、その両方を相手取るわけにはいれないから我は人間達の世界は人間達にかささせる手を打つしか出来なかつた……

（竜神王が回復するまでは我だけか）

負傷し治療室にいる竜神王。あやつが回復するまでは我一人で神魔混成軍を指揮する事になる……こうしてアスモデウス達が動き出す前にアマイモンが合流してくれて良かったと安堵していると、扉が開きインドの方から出向してる文官がガタガタ震えながら

「も、申し訳ありません！シヴァ様がルイ様と共に下界へ……と、止められず申し訳ありませんでしたあ!!」

「……申し訳ありません、我が主が、本当にご迷惑をおかけします。すみません、本当すみません」



魔法陣から現れたメイド服姿のルキフグスが何度も何度もインドの文官と頭を下げる姿を見て、我はアマイモンに嘘偽りの無い本心を告げた。

「吐きそうだ」

「……仕方あるまい、我も胃が痛くなってきたぞ」

なんでこのタイミングでとんでもない行動に出てくれるのか？我とアマイモンはルイ様の突拍子の無い行動に溜息を吐く事しか出来ず

「すまないが、ルキフグス。ルイ様を連れ戻しに行ってくれるか？」

「……はい、判つてます。ええ、判つてますとも」

連れ戻すのは不可能であり、関係各所に謝罪行脚になる事を悟ったルキフグスは、ハイライトの無い目で再び魔法陣の中に姿を消した

「お前は、今のうちにパールヴァアテイの所にも行け」

「は、はい！判りましたあ!!」

そして文官にはシヴァの嫁を呼んで来いとアマイモンが頼む姿を見ながら、我は背凭れに深く身体を預けた。気のせいでも、勘違いでもなく、胃が痛み始め我は医療室にいる部下に胃薬を持ってきてくれと頼むのだった……

く琉璃視点く

ガーブの作り上げた塔の機能を止めた美神さん達の帰還は言うまでも無く凄惨な騒ぎになった。正しだ、報道各社とか、そういうのはなく

【流石あたしの弟子ー!!やったわー!!】

陰念と雪之丞が三蔵法師の胸に抱きこまれ、羞恥心と呼吸が出来ずに気絶……これだけで済めばまだ救いもあったんだろうけど……当然それで済むはずもなく

【消毒ー滅菌!!】

デストロイヤー婦長による、治療と言う名の襲撃で本当に地獄絵図と化した。抵抗する間もなく全員が全員病院送り、抵抗すれば容赦な

く絞め落とされると言う医療と言う名を借りた人間狩と思った物だ。長期入院になると思ったのだが、ビュレトさんが持っていたエリクサーとシズクの治療で早い段階で検査入院だけで済んだらしいが、デストロイヤー婦長とビュレトさんの争いが合った事は忘れてはいけない

【薬による無理矢理の治療が良いと思っっているのですか!?!】

「お前の暴力的な医療行為の方が問題があるに決まっているだろう!」

殆ど線にしか見えない攻防の結果。まだやらなければならぬ事があると言う事でエリクサーの使用が許可されたが、使用許可が出るまでは凄まじい攻防が繰り広げられていたと言わざるを得ない

(と言うか、あの人躊躇い無く腕とか折に行くのよね)

命を救うためなら何でもすると公言するフローレンス・ナイチンゲール。それは比喻でもなんでもなく、本当に何でもするのである。医療と言う名の物理攻撃は勿論、絞め落としや、関節技まで本当に何でもありなのだ。1度拘束してしまえば、後は基本的に治療行為をしてくれるだけのだが、そこに向かうまでの過程が危険すぎる……私は溜息を吐きながら、もう1つの頭痛の元に視線を向けた

「不動さん、やりすぎとか考えませんでした?」

「やりすぎ?..なんだそれは?..美味しいのか?」

ニツと乱暴な笑みで笑う不動さん。避難所で横暴な行為をしていた視察団やオカルトGメンの職員を病院送りにした……正直それに関して私は思うことは無い、やり方こそ乱暴だが不動さんは正しい事をしたと思っっている。

「もう少し手加減してくれてればお小言言わないで済むんですけどねえ?」

「はッ!手加減なんぞ出来てたら俺はオカルトGメンを首になってねえよ」

ごもつとも、乱暴で言動も荒いが、仮にも彼は国家公務員だった経歴もある。ただ筋を通ってない事を許せないと言う真つ直ぐすぎる正義感と、相手を殴る事に躊躇いが無いのが彼の欠点か……ちなみに

首になった正式な理由は実は実働部隊隊長と言う権力で好き勝手していた禿デブを殴り飛ばした事が理由らしいけど……ロケットランチャーやマシンガンを両手に持って走っている姿を見た限りでは、それ以外の問題もありそうだな

「証人も多いですし、とりあえず始末書だけお願いしますよ?」

「おう!判ったぜ」

手を振り部屋を出て行く不動さんを見送る。今回の件ではかなり助けられたし、それにGS協会ですぐに出動させれる戦闘班のリーダーだ。謹慎させるわけにも行かないのでかなり甘い対応になってしまったが、それ以上に視察団とオカルトGメンの一部の職員の態度が悪かったのでそれでトントンと思うべきだろう

「まだやること沢山あるのよねえ……」

あの塔はまだ東京の真ん中にあるし、家を失った人の仮設住宅の建設、それに今は休んでいる美神さん達からあの塔で何があったのかと言うのも聞かなければならない……とりあえず今は出来る所から処理していくしかない。私は意を決して電話を手取る

「忙しいところすまないな、神代会長」

「ちょうど一区切りついたしね」

躑躅院との話を先に済ませることにした。彼……いや、彼女?かもしれないけど、かなり危うい人物なのは判っている。だから何を要求するのかと言うのを考えていたのだが、躑躅院の要求は私が危惧していた金や、神代家の技術などではなく

「横島忠夫と話したい」

その1つだけだった、拍子抜けとは言わないが、思わず眉を吊り上げる。そんな私の反応を見て躑躅院は笑いながら

「判っている、判っているさ。六道と神代の秘蔵っ子だ、別の組織の人間に触れさせたくないのは判る。だがそこまで隠されると気になると言うものだろう」

「……悪いけど、1対1での会話は認められないわよ?」

もし躑躅院の能力が洗脳とかそういう系列だとしたら、横島君と2人きりになんて出来るわけが無い

「ああ、それで構わない。なんなら、報告を聞くときに一言二言話せるだけで構わないよ」

かなりの譲歩した条件を出してくる躑躅院に違和感を覚えながらも、それでも私達が近くにいる場所ならと思いつながら私はその躑躅院の申し出を受け入れるのだった……

くビュレト視点く

俺とブリュンヒルデ、そしておまけでダンタリアンは妙神山に居た。その理由は神魔からの支援物資を受け取るというものがあるが、もう一つ。どうしても明らかにしなければならぬ事があったからだ

「……一応確認しましたけど、妙神山、神界正規軍から持ち出された記録は無いですよ？」

包帯と湿布が痛々しい小竜姫が手に書類を持ちながら呟く、その言葉にブリュンヒルデも俺もさすがに表情が曇る

「そう……か」

俺の手の中にあるエリクサーが4分の1ほど残った瓶。エリクサーは今神魔の中でも極めて稀少な薬品だ、勿論アシタロスも所持してないし、ダンタリアンとゴモリーも所持してない、俺は勿論こんなものは所有していない。そして魔界正規軍にもブリュンヒルデに確認を取らせたが、全て保管されているとの事

「これはどこから来たんだ？」

俺がいつの間にか持っていたエリクサー。それを横島達に使ったが、後で我に返ればなんで俺がこれを持っていたという問題があったのだ

「両方の正規軍に保管されている物は全部ありましたしね」

「そうですね……どこから持ち出したんですか？」

「判らん、それが判らないからこうして妙神山に来たんだ」

もしかしたら天界正規軍かと思っただが……思わず溜息を吐くと

「だから私の話を聞けと言っているだろう？」

「黙れ、俺はお前が嫌いなんだよ」

ダンタリアンを睨むとダンタリアンは私もお前が嫌いだよと笑う、俺とダンタリアンの相性は絶望的に悪い。小竜姫とブリュンヒルデが青い顔で止めに入るが

「判ってる、こんな所で争うものか」

「それが懸命だ。バタバタしてる中で中立地帯で暴れればどうなるか、猿でも判る。これでも判らなければ、お前は猿以下だ」

額に青筋が浮かぶが、それを拳を握り締めて耐えているとメドーサが姿を見せる

「小竜姫、とりあえず魔界からの……何事だい？これは？」

「ああ、メドーサ。すぐ私も行きますから」

メドーサと共に逃げるように部屋を出て行く小竜姫。ブリュンヒルデが若干羨ましそうにしているのは無視する

「お前がエリクサーを持っていた理由だがね、私の本にも記録が無い」  
「駄目じゃねえか」

偉そうな事を言って何を言っているとダンタリアンはまあ待てと笑い

「未来予知が回復し、過去と未来も見通す私の権限が戻っているのに拘らず、それを認識出来ない。それがどれだけ異常か判るだろう？」

「……ダンタリアン様よりも神格が上が関わっていると言うことですか？」

ブリュンヒルデの言いたい事は判るが、そうではない。ソロモンの魔神はその何れもが上級、最上級に属するが、それらが持つ権限は仮に最高指導者であれおいそれと手を出す事が出来ない領域だ

「歴史に干渉する能力を持つ何者かが、暗躍しているという事だよ。そうで無ければ説明がつかない」

ガーブやアスモデウスでもない、かと言って魔人達でもない、第3者の介入の可能性が浮上した。

「第4の陣営と言う事か？」

「さあ？それはどうだろうね？陣営かそれとも個人か……なににせ

よ、まだまだ事件は収拾などついていないと言う事だよ」

……歴史改変そんな能力を持つ相手がいるとは信じられないが、ダンタリアンの性格は最悪、最低だが……嘘は言っていないだろう

「オーデインにそれと無く伝えておいてくれるか？」

「は、はい。流星に信じきれないですが伝えておきます」

ダンタリアンの勘違いとかで済めば良いんだが、もしくは、ダンタリアンの本がまだ正常に戻ってないとかなら救いもあるんだがな……

(俺が思い出せないのが悪いか)

恐らく俺はその何者かに接触しているのだ。だからこうしてエリクサーを持っていた、俺が思い出せばそれで解決するんだがな……「ビュレト、ブリュンヒルデ。天界と魔界からの救援物資の準備は出来ました、出発しましょう」

俺達が妙神山に来ていたのは、天界と魔界からの救援物資を受け取るためだ。有事には中継基地としての役割を持つ妙神山、ここが一番大規模な天界と魔界へのゲートを持つ、エリクサーについても調べるつもりだったが判らない以上早く東京に戻るべきだ。なんせまだ悪魔やゾンビの討伐は終わっていないのだから

「お前も東京に戻れば少しは手伝えよ？」

「……考えておこう。そもそも私は前線には向かない」

これ以上人間にだけに負担を掛けるわけには行かない、東京に戻り次第。俺もブリュンヒルデも悪魔の討伐を始める予定だ

「私も同行します」

「大丈夫か？」

負傷している小竜姫は大丈夫ですときっぱりとした口調で言うので、これ以上尋ねるのは野暮だと思い。俺とブリュンヒルデ、そしてダンタリアンと小竜姫の4人で支援物資を手を東京へと引き返していくのだった……だがそこには予想もしない光景が待ち構えているのだった……

〈横島視点〉

俺がどうやってモリアーティとレブナントと言うライダーを倒したのか？と言う話をする為に俺はGS協会を訪れていた。ノツブちゃん達は霊力が回復していないのに無理をしたので、眼魂で療養中だし、難しい話をするのでチビとうりぼーはお留守番で、私達じゃ何も出来ないからとタマモとシロがチビとうりぼーの面倒を見るのに残ってくれた。だから俺はシズクと共に会議室に来たのだが……

「君が横島忠夫か、よろしく。私は躑躅院だ」

男か女か判らない中性的服装をした赤紫色の髪をした人物に手を差し出され、困惑しながらも手を握り返しながら、横島忠夫ですと返事を返す。確か、塔に突入する前に見た気がするけど……どんな人なのだろうか？ここに居ると言うことは霊能者だとは思うけれど……

「ああ、失礼したね。私は陰陽寮の当主になる」

陰陽寮!?!もしかして俺が勝手に札とか作ったのがバレた？と冷や汗を流していると先に来ていた美神さんと蛭に名前を呼ばれ、これ幸いと2人の後ろに逃げる。躑躅院はそんな俺を見て薄く笑っているのが、なんか余計に怖いと思った

「……お前は」

「〽機嫌麗しゅう。シズク様」

俺の後に部屋に入ってきたシズクに深く頭を下げる躑躅院さん。シズクは少し困惑した表情を見せた後に俺の隣に腰掛ける、知り合いなのか？と尋ねようかと思っただが、腕を組み目を閉じてしまったので話しかける雰囲気じゃないので家に帰ってから訪ねて見ようと思っ

た  
【横島さんは大丈夫ですか？】

「なんとか……かな？」

身体はやっぱ痛いし、何より慣れ親しんだとも言える霊体痛がじんわりと俺を襲っている。心配そうに尋ねてくるおキヌちゃんに苦笑いをしながら返事を返すと、西条さんが会議室に入ってきて中にいる全員に目を通す。

「じゃあ、全員揃ったから今回の件についての報告を聞こうかな」

西条さんがそう仕切り始めるが、雪之丞と綱手さんにクシナさん、

それとカオスのジーさんとマリアとテレサの姿が無いし、良く見るとタイガーやピート、それにブラドール伯爵の姿も無い、エミさんや冥子ちゃん達の姿も無い。その代わりに小竜姫様の姿があるけれど……」

「ブラドール伯爵達も大分無理をしたので動けないらしいんです。後雪之丞君は動ける状態じゃないのでクシナさんと綱手さんが看病してるんですよ？それと」

ブラドール伯爵も相当無理をしたって言うのは俺も知っている。神魔の能力を制限する結界の中で俺達を消耗させないために終始先陣を切っていたのだ、その消耗具合は十分に察することが出来る

「ええ。かなり無茶をしたみたいだから、エリクサーで霊力と体力は回復したけど、暫く安静よ」

三蔵ちゃんが険しい口調で告げる。雪之丞大丈夫かな？この話し合いが終わったらお見舞いにも行くべきかな？と思っただが……

「横島も安静にしてないと駄目だからね？」

「……はい」

蛍に釘を刺されたので、電話にする事にした。かなり無茶な約束をして、それを果たしてくれた雪之丞にはやっぱり感謝してるし、陰念は腕組んでむすつとしてるけど、会議が終わったら話を聞いてみようと思う

「エミさんと冥子さんは人数も人数なので後日リポートで確認するかから良いそうです。あ、あとエミさんから、近畿 剛一が駄目だと言うのに避難所から出たそうなのでこちらからも注意しましたが、横島君からも連絡をしておいてください」

銀ちゃん……なにやってるんだよ。危険なときは大人しく避難してくれよと思いつつ、琉璃さんのきつめの言葉に判りましたと返事を返し、西条さんの仕切りで再び報告会が始まるのだった……

「今回では神魔が無力となり、応援にこれず申し訳ありません」

小竜姫様がそう謝罪するが、服の下からも包帯が見えているのを見れば、何もしてなかったわけでは無いと言うのが良く判る。だから誰もそれを責める人間はいない



「天界はアスラがシヴァ様、ヴィシュヌ様の2柱に戦いを挑み、魔界ではアスモデウスの強襲。今回の事件は3界同時テロと言えるべきものでした。」

シヴァ？ヴィシュヌ？俺の知らない神様の名前だ。ただ美神さん達の顔が引き攣ったので、凄まじい神様と言うのは良く判る

「インドの最上級の神だね。それでアスラはどうなったんだい？」

「……信じられないですが、シヴァ様、ヴィシュヌ様のお2人を相手に終始優勢に戦いを進め、そのまま姿を消したそうです。恐らく、狂

神石によるブーストもあると思いますが……今後天界、魔界は厳戒態勢に入ると思います」

人間界だけじゃなくて、天界と魔界も大変な事になっているようだ。それだけグループが本気になったと言う事なのだろうか？

「神魔からは支援助物資と東京に残っている悪魔の討伐隊が派遣される事になっていきますし、先立ってビュレトとブリュンヒルデの両名が悪魔退治を始めてくれているので、美神さん達はゆっくりと身体を休めてください」

小竜姫様の言葉に判りましたと返事を返すと、心眼が頭の中で声を掛けてくる

(横島来る前に書いておけと言った手紙を回せ)

手紙？ああ、会議の後に少し時間をくださいって奴だな、ポケットから手紙を出して蛍の前に置く、資料を見ていた蛍が横目で俺を見るので

(心眼から、話の内容は俺も判らない)

心眼からの話と言うと蛍は頷き、目を通すと美神さんに回す。躑躅院は机に腰掛けず、ソファアで話を聞いているのである人までは手紙が回らないので大丈夫だろうと判断する

「じゃあ次は私ね。あの塔の中にはマンティコアの劣化クローンみたいなのが配置されていたわ、戦う場所は狭くてかなり苦戦したわね」

「私とシズクの方は放射系の攻撃を反射するリザードマンが10体ほどですわね。一応その反射する盾みたいのは回収しましたわ」

鏡と言うか、銀みたいな光沢な盾を神宮寺さんが机の上に置く。そ

れを見ていた小竜姫様は少し考える素振りを見せてから

「神魔の方で回収しても良いですか？」

「ええ、お願いします。ドクターカオスが治療で忙しいので、分析出来る人がいませんから」

琉璃さんの了承を得てから、その盾を回収する。しかし放射系を反射するとか、神宮寺さんとかとは致命的に相性が悪かっただろうに……それを相手に勝てた神宮寺さんとシズクが凄いと改めて思う

「えつと俺の方なんですけど、レブナント……名前はレイっていうらしいんですけど、彼女は途中で戦闘を放棄して鯛焼きを食べ始めました」

俺の報告には？と言う視線が向けられるが本当の事だから、そうとしか言い様が無い

「戦闘を放棄？横島君がダメージを与えたのかい？」

「いや、ずーっとボコボコにされてました」

モリアーティとレブナントの2人のコンビの連携は完成していて、正直ずつとあのままでは俺は死んでいたと思う。ジャンヌ眼魂の防御力に命を救われた形になっている

「途中で教授が助けに来てくれたんですけど、その時にモリアーティが引けと指示したら、反論もせずに変身を解除したんです」

教授も来る時に声は掛けたんだけど、霊力が回復してないからという理由でノツブちゃん達と同じく留守番である

「そう言えば、教授もモリアーティらしいけど、それは大丈夫なのかい？」

西条さんが心配そうに尋ねてくるけどそれは問題ないと思う

「胡散臭くはあると思いますが、自分はガープにあれこれされるまえに脱出した正義の方らしいので大丈夫だと思えますよ？」

俺の言葉に美神さん達は渋い顔をする。胡散臭いつてというのが嘘をついていると思われる理由なのだろうか

「とりあえず後日面談をさせてもらおう。その後どうするか決めるからね」

「……教授は味方だと思いますけど……」

でもやっぱりモリアーティを見ているから、無条件で信じる事が出来ないって事か

「まあ横島を助けてくれたのは良く判ってるから、本当に念の為よ？  
ね？美神さん」

「ええ、ただ、やっぱり報告書としてレポートが残るから余計なやつかみが入らないようにする措置と思ってくれれば良いわ」

「神魔としても話を聞いて消滅させると言う事も無いので心配しなくても大丈夫ですよ？」

蛍と美神さん、そして小竜姫様が大丈夫と言うので、俺は再び塔の中の話をし始めた。あのレイと言う少女については絶対に情報を共有しておく必要があると思っただから

「モリアーティが消滅する前に教えてくれたんですけど、彼女はガーブが主体にしているえーっとなんだっけ？」

【複合神性内蔵型ホムンクルス。アルターエゴプロジェクトの試作0号らしく、精神が不安定で非常に幼い人格らしい】

心眼が話を覚えていてくれて良かった。そうそう、アルターエゴだ。しかし複合神性っていうのが理解できないけれど

「複合神性……それってもしかして神の権限を擬似的に複数組み合わせるって事かしら？」

「ありえない話じゃないと思います。ガーブは魔工学や、魔術に精通してますが、ホムンクルスなどの製造にも特化していたらしいです」

「そうなる、今後アルターエゴと言うホムンクルスが増えると厄介だね」

美神さんや神宮寺さんが話を広げていると陰念が手を上げて

「俺と雪之丞は量産型と名乗るホムンクルスと戦った。既に量産態勢は出来ていると思う、俺が戦ったのがタイプH、スピード特化で単体飛行が可能だった。雪之丞が戦ったのがタイプS、異常な攻撃力と防御力の白兵戦特化だった」

「琉璃さん、すいませんが少し席を外します」

小竜姫様が険しい表情で会議室を出て行く。多分神魔の上層部に

今の話を伝えに行つたのだろう、レブナントでも恐ろしいほどに強かつたのにそれが量産されているとか冗談じゃないと思う

「量産型ですか……ガープの陣営の戦力はどうもそのホムンクルスと、変身ツールによる集団戦と言う事でしようね」

「量産の準備が出来たから、これだけ大きく動いたという訳ね」

今まで散発的だったり、英霊を使っていたのはそのホムンクルスを作るための時間稼ぎだったと言う事か……

「あ、でも精神が不安定らしくて善悪の区別がつかないらしいです。レイつて子だけだと思いますけど」

強大な力を持つのに善と悪が判らないと言うのは恐ろしい事だと思うが、逆にそこが彼女の強さであり、弱さだと思う

「……お前は仲間に引き込めると思っているのか？」

【まあ、善悪が判らないと言うのなら、それを教える事で味方に出来る可能性もあると思うけど……】

シズクと三蔵ちゃんが俺が言おうとした事を引き継いでくれるが、美神さん達の顔色は険しい

「やっぱり難しいですかね？」

「難しいというか無謀ね。下手をすればスパイを抱え込むことになるだろうし」

「そうだね、そもそも横島君。その情報は何処からだい？」

モリアーティですと言うとますます美神さん達の顔が険しくなる。

俺も考えたけどやっぱり嘘の情報と言う線もある。だけど俺の直感では本当の事だと思っっている

「取り合えず今は情報を集める事を最優先にしよう」

唐巢神父の言葉で1度レイに関する話は終わりとなり、その後は俺では理解出来ない難しい話と専門用語のオンパレードとなった為、黙って話を聞く事しか出来ないのだった……

く美神視点Ⅱ

シロとタマモにチビとうりぼーを横島君が連れて来てないことに安堵した。躑躅院に見せるには危険すぎる面子だからだ、特にタマモ

を見せることにならなくて良かったと思う

「すいません。今戻りました、あの陰念さん、横島さん。後日神魔から派遣されて来る兵士がいるので、貴方達が見たレイと量産型と言うホムンクルスについて教えてください」

小竜姫様の言葉に横島君達が頷く。今まで危機を切り抜けるのに使ってきた力が敵に回る、それは恐ろしい事だ。しかもそれが何十人で攻めて来るなんて想像するだけでも恐ろしい

「とりあえず今の段階で判る事は全部ですね。皆さん、疲れているのに集まってくださってありがとうございました」

琉璃が頭を下げると、それに変わるように躑躅院がソファから立ち上がり

「今まで陰陽寮は閉鎖的であったが、今回の件で守秘義務が如何に愚かしいか判ったよ。陰陽寮を近い内に公開する、その時は是非見学に来て欲しいよ、横島君」

「うん？」

自分が名指しされると思ってたのか素っ頓狂な返事を返す横島君に躑躅院はふふつと笑い

「では神代会長。横島君と話をしたいと思っていたが、今回は止めておこう。今自分がやるべき事が判ったので、失礼するよ」

躑躅院はそういうと背を向けて会議室を出て行く、私達の視線が自分に集まっている事に気付いた琉璃が溜息を吐きながら

「視察団の事でちよつとありまして」

唐巢先生にも聞いていたけど、かなり酷かったみたいね。西条さんも額に手を当てて

「一応全員逮捕して留置所に入れてるよ。あまりに酷すぎる」

オカルトGメンの新米まで酷いとか、琉璃とか西条さんが不憫すぎるわね

「それで横島？態々残って欲しいって何の話ですか？」

くえすが横島君にそう切り出すと、横島君ではなく、心眼が浮かび上がり

「横島の命を救い、そして2対1と言う絶望的な状況を切り抜けた方

法を説明しようと思つてな」

横島君はレブナント、レイと言う少女については話してくれたが、どうやってあの状況を切り抜けたのかは教えてくれなかった。それは心眼が隠すべきと判断したって事だったと……

「その前にシズク、1つ聞きたいんだけど、躑躅院つて知り合いなの？」

蛍ちゃんのその問いかけにシズクは閉じていた目を開き、溜息交じりで告げた

「……高島に嫁がせるという話で高島の陰陽術を教えられたのが躑躅院だ。平安時代でもそれなりの地位にある陰陽師の一族で高島と仲が良かった」

……横島君の前世の可能性である高島、そしてその高島の妻になる筈だった躑躅院……か。もしかして横島君に声を掛けたのつて平安時代の婚姻とか言わないわよね。蛍ちゃんが物凄い顔をしてるし、くえすも凄い顔をしているので違つて欲しいと心から思う中、横島君が間延びした声で琉璃に質問する

「あ、それで1つ。あの躑躅院さんつて男なんですか？それとも女？」

横島君の問いかけには誰も答えられなかった。何故なら誰も知らないからだ、中性的な容姿で、男か、女かも判らないのだ

【横島、それは後にしておけ。今このタイミングで口の堅いメンバーが揃っているこの時しかチャンスは無い】

心眼が固い口調で横島君を叱る。しかしそれを見て、嫌がおうにも緊張感が高まつた、今まで心眼がこんなことを言う事は無かつたからだ

【心眼さん、一体なんなんですか？】

【見れば判る。横島】

おキヌちゃんの心配の言葉も無視し、心眼が横島君にそう促す。まさか魔人化したとかそんなじゃないわよね？と思つた私達の前に横島君が差し出したのは翡翠色のビー玉のような物が5つ

「ビー玉？お前ふざけてるのか？」

「いや、ふざけてないと……思うんだけど……」

良く判ってない様子の横島君と陰念だけど、私達は理解した。理解してしまった……

「琉璃！カーテン！」

「判ってます!!」

慌てて会議室のカーテンを閉め、出入り口に鍵を閉める。私達の反応に驚く横島君だが、これでもまだ全然足りなくらいだ

「……美神さん、これってもしかして……」

「……信じられないけど、多分そうよ」

「私も始めて目にしたよ。でも確かにこれならば横島君が生き残った理由も納得だ」

私達の反応を見て首を傾げている横島君。これが何か理解していないのだろう、だが説明するよりも先に聞かないといけない事がある  
「横島。これは敵が所持していた物ですわね？」

くえすがそうであって欲しいと思っっているのは明らかだった。勿論私だっそうだし、小竜姫様もそうだろう。だけど横島君の返答は「いや、多分……俺が作ったと思うんですけど……これ何なんですかね？」「護」って文字に助けられたんですけど？」

その言葉に私達の願いは裏切られた、そしてそれと同時に今後横島君が神魔だけではなく、人間にも狙われると言う可能性が生まれてしまった。躑躅院や視察団の人間がいなくて良かったと心の底から思った……

「良い？横島君。良く聞いて欲しいの、そのビー玉……ううん、霊具はね、「文珠」って言うのよ。伝説の中で語られる最上級の霊具よ」

琉璃が険しい表情で告げる。目を大きく見開き、嘘でしょ？と言う横島君の手の上にある物、それは奇跡の体現、伝説の中にのみ語られる「文珠」の姿だったのだから……

リポート25 横島家の非日常 その1  
その1

リポート25 横島家の非日常 その1  
〈蛍視点〉

横島が2対1と言う絶望的な状況を乗り切ったのは、また眼魂の2個使いだと私は思っていた。多分美神さんとくえすも同様だろう、だから厄珍とか、自分が持っている伝手を頼って薬品を用意していた。だが横島はそれとは全く異なる方法で危機を乗り越えていたのだ（早すぎる……いや、でも早くない……ああ、わかんない!!）

私は横島が何時文珠に覚醒したのか知らないのだ。だからこれが早いのか、遅いのか判断がつかないのだ

「伝説？これが？いやあ？冗談……じゃないみたいですな」

冗談と笑おうとした横島だが、美神さん達の真剣な顔を見て、顔を引き攣らせる

「いや、待つんだ。これが本当に文珠なのか確認する必要がある、横島君。1つだけ手の中に握ってくれるか？」

西条さんが美神さん達を制して横島に声を掛ける。横島は4個を机の上に置き、1つだけを握り締める

「よし、そうだな……怪我が治るとかそういうのをイメージできるかい？」

「怪我が治る？ですか？……多分、大丈夫ですけど……それが何か？」  
「出来るだけ正確に、思い浮かぶ感じで良い怪我が治るイメージを持つんだ」

西条……さん？姿は西条さんだ。だが口調が少し違うような……皆が怪訝そうに西条さんと横島を見つめる中、横島の右手が光る「わつとと……」

驚いた横島が手を開くとその中の文珠が飛び出す。それは偶然か、それとも必然か私の足元に転がってくる

「……【治】って刻まれています」



その文珠には間違いなく、治るの文字が刻まれている。これで決まりだ、これは紛れも無く文珠

「……令子ちゃん。これを使っても構わないか？」

「え、ええ……大丈夫」

会議室が異様な緊張感に満ちる中。西条さんが私から文珠を受け取り、それを小竜姫様に渡す

「!?」

光が溢れ、小竜姫様を包み込む。そして光が晴れたと同時に小竜姫様は自身の腕に巻かれている包帯を解く、次に着物の胸元を開き中を確認し

「治ってます。身体の何処に痛みも無い」

「……決まりですね。横島君の霊能は圧縮じやなかった、横島君の霊能は全て文珠から零れ落ちた欠片だったのですね」

琉璃さんの静かな呟きが会議室に満ちる。異様な緊迫感の中……横島は

「零れ落ちた欠片ってどういう意味ですか？」

何を言われているのか理解出来ない横島。心眼もだんまりと言う事は、心眼にとってもこのタイミングでの覚醒は不味いって事がよく判る

「うん、横島君。あたしから1つお願いがあるんだけど良いかしら？」

三蔵さんが横島に微笑みかける。横島が困惑しながら頷くと三蔵さんはにこにここと笑いながら

「文珠を作ってみてくれるかしら？」

「……いや、俺作り方なんて判らないんですけど？無我夢中で何がなんだか……」

命の危機に追い込まれ、そしてその中で文珠を作り上げた？いや、今までの横島のパターンではありえない事では無いと思うけど

「……横島。球体をイメージして、霊力を圧縮していけ。無理だと思ったら霊力を霧散させろ」

シズクが口を開いたと思ったら文珠の作り方を教える。皆が見つめる中シズクは深い溜息を吐いて

「……高島も文珠使いで陰陽師だった。アイツは公表する事無く隠し通していたけどな、切り札として持っていた」

シズクから告げられた言葉。それは横島が高島の転生者であると言う可能性を著しく高め

「で、出来た……のかな？」

握りこんだ拳を開いた横島の手の中の文珠……それが覆しようの無い証拠となりえたのだが

「「あ」」

私達の見ている中で4つの文珠のうち3つが音も無く消滅している、そしてそれを見ていた三蔵さんとシズクは頷きあい

「まだ完全に使いこなせているようじゃないみたいね。これなら霊能として押し通すのは難しいし、隠しておけるんじゃない？」

「……そうだな。今の時代に文珠の事を知られるのは不味いな」

不安定な霊能となれば、それは固有霊能としても弱い。それに何もなくても消滅するなら文珠ではなく、新しい何かの霊能として

「……誤魔化せますか？」

「ちよつと苦しいけど、不安定なら何とか見なかったことにも出来る……かも」

「いや、それを隠し通すよりも先に横島君は六道にも席を置く必要が出てくるかもしれない」

「確かに、流石にこのレベルになると私だけじゃあ厳しいわね、正式に後継人になつてもらふ必要があるかも」

「あ。それなら私も立候補しますよ、六道と神代が後継人なら並大抵の相手はちよつかい掛けれないですし、神魔の方はどうですか？」

「妙神山に戻り次第、すぐに手筈を整えたいと思います」

美神さんだけで横島を護れないレベルにまで事は進んでしまっているのだ……そして私も家に帰つたらすぐにお父さんに相談することを決めた。そんな中西条さんが手を叩き

「とりあえずだ。皆落ち着いて席に座って欲しい、横島君がまず文珠について理解していないこともある。それらの説明が先だ」

勿論横島君を護ることも大事だがと付け加えた西条さんに頷き。

私達は椅子に腰を下ろすのだった……

（美神視点）

横島君を一人で残した結果が文珠だったのか、しかし琉璃の言うとおり横島君から零れ落ちた霊能として栄光の手や陰陽術が発現していたというのなら、それは遅いか、早いかの違いになるだろう。

「それで、零れ落ちた霊能って言うのはどういう意味なんですかね？」  
意味が判らないで混乱している様子の横島君に説明してあげる必要があるわね、とは言え具体的な説明をしないと横島君も理解出来ないでしょうし、机の上に4個置かれている文珠を1つ取り

「くえすと唐巢先生と琉璃も1つずつ取ってくれる？」

私の言いたいことを理解してくれたのか、唐巢先生と琉璃も文珠を手にし、文珠に霊力を込めるがやはり何の反応も無い

「はい、横島君。これ持って火をイメージしてくれる？」

「え、は、はい」

困惑している横島君が文珠を手にし、霊力を込めると文珠には火の文字が浮かんでいる

「えっと……これはどういう？」

「それも横島君から零れ落ちた霊能って話に繋がるのよ、良い。文珠って言うのは高密度に圧縮された霊力なのよ、それに文字を与えることで指向性を与えるの」

ちんぷんかんぷんと言う様子の横島君。なんて説明すれば良いのかしら

「横島が陰陽術を使うときに文字を刻むでしょう？陰陽札自身は無色の霊力なので、刻まれた文字で効果を発揮するのです」

「あーなんとなく判るような。判らないような……」

横島君みたいに感覚で使う人には理論的な説明って全然理解出来ないのよね

「つまりあれか？文字を刻むのは横島しか出来ないって事で良いのか？だがさつきは横島じゃなくても力を使えてたが？」

陰念は粗暴な外見の割には結構頭良いみたいね。

「そう、そこが文珠の凄い所になります。文字を刻むことが出来るのは作り出した人だけですが、使用するのは誰でも出来るのです。でもそれは1文字のみ、横島さんはきつと複数の文字を刻んだ文珠を使えるでしょう」

「複数の文字？それは1つの文字と何か違うんですか？」

小竜姫様の説明に横島君が質問を出すので、琉璃に目配せをすると琉璃は会議室のホワイトボードに文字を書く

「治すと言うのと、治癒って言うの。硬いつて言うのと強固。意味は同じだけど、横島君はどう思う？」

「それはやっぱり2文字の方が凄いつていうイメージですよね？」

「……その通りだ。より強い効果を発揮できるという事だ、ただ高島は色々実験していたが、やはり複数文字は高島しか使えなかった」

シズクがそう補足する。それにしても今回の事で横島君が高島の転生者って可能性が一気に強まってしまったわね

「あたしが隠して使うから、1個だけ治を作ってくれるかしら？」

「あ、すいません。私も1つお願いします、老師の怪我が酷いので」

三蔵の言葉に横島君が私を見る。私が頷くと横島君は文珠を握り締め文字を刻み三蔵に手渡す

「ありがとう、ごめんね」

「すいません、ありがとうございます」

手を合わせて謝る三蔵と小竜姫様を見ながら心眼に視線を向けるが、心眼はまだだんまりである。どうしてここまで頑なに言葉にしないのか……心眼には何か思う事があるのだろうか

「とりあえず横島君。人の目があるところでは絶対に文珠を使つてはいけない、更に言えば作ることも禁止する。良いね？」

「文珠はかなりの靈力を消費するからね、命に関わる可能性も考えて欲しい」

西条さんと唐巢先生がそう言うが、横島君を除く全員が理解しているだろう。それは横島君に文珠を作らせない口実だと、今の情勢で文珠を作れるという情報が流れれば、横島君の人権は無視され、そこそ機械かなにかに組み込むことを考える輩もいるだろう。横島君が

文珠を作れるという情報は何よりも隠し通さなければならぬ話だ  
「とりあえず今はそんな所ですね。美神さん、GS協会の方で車を出  
しますのぞ」

琉璃の言葉にありがとうと返事を返し、私達はGS協会の職員が運  
転する車でGS協会を後にした。事務所に帰った私はすぐに受話器  
を手に取り

「もしもし、令子です」

『思ったより早かったのね、琉璃ちゃんから話は聞いてるわ』

「……お願い出来ますか？」

『ええ。大丈夫よく令子ちゃんの仕事所を正式に六道系列に迎えるわ  
くまあ、名前だけね』

今まではフリーでやってきたが、もう私個人の方では駄目だ。六道  
と神代の力を借りなければ弟子を護ることすら出来ない、その事に唇  
を噛み締める

【美神さんの決断は間違っていないと思いますよ？】

【私もです、オーナー】

おキヌちゃんといっちゃんの方の言葉にありがとうと返事を返し、背凭  
れに背中を預け、ビールをちようだいとおキヌちゃんに頼むのだった  
……

くくえす視点

屋敷に戻った私を待ち構えていたのは本を片手にした青年の姿。  
その名前を私は知っている、いや、私の魂が知っている

「ダンタリアン……なんのようですか？」

私の問いかけにダンタリアンは小さく笑う。なんでもない仕草な  
のに妙に苛立つ

「何少し君と話をしたかと思っただけだ。不快かね？」

不快かと言われれば不快だが、それは私の中にあるビュレト様の魔  
力がダンタリアンを嫌っているからだろう。だがそれでもこうして  
訪ねて来たその事に何か意味があるはず

「お茶を入れましょう。どうぞ中へ」

私はそう声を掛け、ダンタリアンを屋敷の中へと招き入れるのだ  
た

「ふむ、良い茶葉だ。実に美味しい」

「お褒めに預かり光栄ですわ」

そんなに嫌味っぽくなくても良いじゃないかと肩を竦めるダン  
タリアン。

「これは性分ですので」

「……横島忠夫には甘いのに?」

その言葉に眉を吊り上げるとくつくつと喉を鳴らすダンタリアン。  
ビュレト様とダンタリアンの相性が悪い理由が判った様な気がする、  
ビュレト様はどちらかと言うと直情型だ。ダンタリアンのような人  
の真剣を逆なでするタイプと相性が良い訳が無い  
「して私のような人間になんの御用でしょうか?」

強引に話を変えるとダンタリアンはそれすらも楽しいと言う表情  
になる

「君はビュレトの力を持つが、その性質はビュレトとは程遠いね。君  
の本質は……そうだね、グループに近い」

目的のためならばどんな非道も犠牲も払う、そういうタイプだと面  
と向かって言われる。だがそれは私自身も自覚していることなので  
それに対して思う事は無い

「いやね。ゴモリーが柩をやたら気に入っていて、友人関係とか根掘  
り葉掘り聞く中で横島の次に君の名前が多かった」

……あいつ、私を売りましたわね!? あんまりべたべたされるのが嫌  
いな柩だ。自由になる為にゴモリーとダンタリアンが興味を持ちそ  
うな私の名前を出したわねと心の中で罵る

「まあ私が尋ねてきた理由だが、君にだけは教えておこう。神魔、人  
間、魔人、アスモデウス、だが争乱の種はこの4つにあらず、後2つ  
の争乱の種が人間界へと蒔かれるだろう」

「なんですって?」

ダンタリアンが告げた言葉は到底聞き流せるものではない。私が  
睨みながら尋ね返す、だが人間の殺気などダンタリアンにはたいした

事が無いのか涼しい顔だ。

「言葉の通りだ。争乱の種はあと2つ。これは神魔にも伝えていない、教えるのは君だけだ。そして君はこれを他人に話す事が出来ない」

「……なるほど、縛りましたわね？」

正解だとダンタリアンは笑う。神魔の言葉は呪術となる、私はダンタリアンから告げられたこの事を誰に伝えることも出来なくされてしまった

「不安定な未来だ。選択によって変わることもあるだろう、だから足掻いて見せて欲しい。君が苦しみぬいて出す決断を私に見せて欲しい」

「判りましたわ。くたばれ、このくそ野郎」

楽しそうに笑いながら消えていくダンタリアンを最後まで睨みつける。その姿が消えてから怒りに任せて机を蹴り上げようとした瞬間に気付く

「……これは」

ダンタリアンが座っていた椅子の上に置かれていた物。それは魔法陣……しかも召喚術の陣

「……なるほど、それが貴方の見たいものと言うことですか」

ダンタリアンが見たい物、それはソロモンとの2重契約、もしくは私が苦しみぬいてダンタリアンを召喚することのいずれか

「本当、良い趣味してますわね」

魔神らしい感性と言えば感性なのだが、それは人間をなんとも思っていない冷酷な神としての側面を目の当たりにした

「良いでしょう。抗って差し上げますわ」

だがそのおかげで決意した。ダンタリアンが喜ぶような結末などぶち壊してやると心に決める。だからまず私がやるべき事は1つ

「今のままでは駄目と言う事ですね」

人間の魔法使いとしては高位だとしてもまだ足りない、もっと力がある。だから私は受話器を手にする

『あら。とても珍しいお方からの電話ですね』

「ええ、そうですね。魔鈴めぐみ」

魔鈴めぐみ……私と同じく魔女、魔法使いとしてGSの中でも屈指の知名度を持つ相手。ただし黒魔術が専門の私と異なり、白魔術をメインにした魔法使いだが

「いくつか魔法書を融通して欲しいのですが」

『……何をしておつもりですか？』

海外、イギリスなどを拠点にしているめぐみは今の日本の情勢を知らないのだろう。そうで無ければこんな言葉は返ってこない

「少し日本の情勢を調べて見なさいな」

『……いやあー実はここ数ヶ月遺跡に迷い込んでて……あははは……しかも狙いの魔法書でも無かったですし……はあ……』

乾いた笑い声を上げるめぐみ。魔法書探しをしていれば私も数ヶ月は遺跡暮らしをするのはザラなので笑えはしないけど

「……ソロモン72柱のアスモデウスとガープが魔界、天界、人間界を相手に戦争を始めましたわ」

『本当ですか!?日本は大丈夫なんですか!?』

「なんとかと言う所ですわね。隕石落として正直危ないところでしたが……」

受話器越しに絶句するめぐみだが、次は申し訳無きような声で

『あの私は……その』

「判ってますわ。イギリスを出れないのでしよう」

めぐみは私と違い非常に温和で優しい、日本人なのにイギリスを拠点にしているのもそれが大きい。それにイギリス政府は魔女・魔法使いの復活に並々ならぬ意欲を燃やしておりそういう面でもめぐみはそう簡単にイギリスを出る事が出来ない

『はい、その通りです。オカルトGメンか、GS協会が動いてくれれば動けるとは思うんですけど、それでも大分時間が掛かると思えます』  
「それは承知しています、私の頼みは魔法書です。貴女に日本に来てくれとは言っていません、それもタダとは言いませんわ。私が所蔵している白魔術の本……それと交換して欲しいのです」

『判りました。大丈夫ですよ、魔法陣同士で交換で良いですか?』



とんたん拍子で話が進む。本来は私とめぐみの相性は決して良いものではないが、善人であるめぐみからすればソロモンの魔神相手に戦うための力が欲しいとなれば断る理由がない。魔法陣の上に乗せた白魔術の本が消え、変わりに古めかしい魔道書が姿を見せるのだが……

「めぐみ、これはなんですか?」

本の上に乗せられていた腕輪が2つ。これはなんだ?と尋ねるとめぐみは苦笑しながら

『この封印を解くのに数ヶ月掛かったんです。ただ効能とか判らないので分析ついでに差し上げます』

「実験の間違いでしょうか?」

私の言葉に苦笑しながら、失礼しますと電話を切るめぐみ。善人と言われているけど、腹の中真つ黒ですわね。まあなんにせよ目的の魔道書は手に出来た。私は椅子に腰掛け魔道書を開く、その中から落ちてきたのは古びた地図のコピー

「……訂正しましょう。貴女は善人ですわ」

イギリス政府の判が押されている紙も一緒に出てきた、政府から預かっている物を複製して送ってきたと言う事は自分の立ち位置を危うくするが、それでも送ってきたと言う事はこれが私の力になると言う事だろう。ならば先にこれを調べようと思い、私は読みかけていた魔道書を閉じて、地図を手にして書斎を後にするのだった……

〜老師視点〜

包帯塗れの己の体を見て苦笑する。大袈裟など、確かに怪我こそしたがここまでする必要は無かった。だがロン曰く、お前が弱っていると見れば攻め込んでいる馬鹿がいるだろうから、お前自身が囷になれば良い。と言う事でこの有様である。まあそれも戦法としては受け入れることが出来るので問題は無いが

「老師、少し宜しいでしょうか?」

「うむ。入れ」

小竜姫の声に部屋の中に入ることを了承したが、入ってきた小竜姫

を見て苦笑した。その気配は未来の小竜姫だったからだ

「おぬしが出てきたと言う事はなんじゃ？横島に何かあったか？」

「……横島さんが文珠に覚醒しました」

その言葉に思わず顔が引き攣る。早すぎる、横島が文珠に目覚める事は判っていたが早すぎる……

「これを竜神王様へ」

差し出されたのは治の文字が刻まれた文珠。横島が文珠に覚醒したことは隠す必要のあることだが、情報はいずればれる。それを防ぐ為にも竜神王の回復は急を要する

「え、老師？あ、あれ？」

急に現代の小竜姫に切り替わったことに驚きながら、ワシはキセルを吹かし

「報告は確かに受けたし、文珠も預かった。小竜姫も疲労が堪っていないのじゃろう。少し休め、ワシは竜神王の元へ向かう」

「え、あ、は、はい！」

困惑している様子の小竜姫に疑問を挟ませないように畳み込むように言葉を投げかけ、部屋を後にする。残された小竜姫が混乱しているのがわかるが、時間を掛けている場合では無いのでそれは無視する

「大丈夫かの？」

「……身体が思うように動きませんでしたよ」

そう苦笑する竜神王。ワシが治療を施すと言う事で無理にここまでするまで入って来れたが、やはり天界の重鎮なので警護が凄

「すまぬが、今から行うのは仙術の秘術ゆえに全員退出願いたい」

無論そんな言葉が普通なら通る訳が無いが、ベッドから身体を起こした竜神王がその通りにしろと口添えをしたので、ワシと竜神王だけになる

「竜神王。これが判るな？」

手の平の中に隠した文珠を竜神王に見せる。それを見て驚く竜神王の胸に手を当てると文珠がその効力を発揮する

「……横島ですか？」

小声で尋ねてくる竜神王に頷くと竜神王は沈鬱そうな顔をする。

文珠の希少性、そしてその効果を考えれば当然のこと。そしてそれが人間が持つ能力となればそれは大変な騒動になるだろう

「何とか出来るかの？」

横島の護衛を今まで以上に増やす必要がある。それも頼れる神魔だけでだ……竜神王は少し考える素振りを見せてから頷く、神界、魔界も同時にガープの行動範囲になっているが、それ以上に人間界を制圧されると不味い。人間界は戦場と考えると劣悪だが、拠点として考えればこれ以上に無い拠点となる。それは魔族だからできる手段……魂喰いによる魔力の回復。それをされれば神としては非常に苦しい戦いに追い込まれる

「小竜姫を人間界に配置します」

「それがよかろうて」

小竜姫、メドーサの辺りが最も配置する人員で適している。それに魔界正規軍もブリュンヒルデを置いている以上、こちらも一定以上の人材を配置する必要がある

「老師、これからどうなると思いますか？」

「それが判れば苦労せんわい」

ガープもアスモデウスも戦上手だ。一人でも厄介なのに、それが2人。神魔も一枚岩とは言えぬ以上苦しい戦いになるのは必須

「どこまで巻き返せるかじゃな」

向こうの牙はこちらの喉元に突きつけられていると言うのに、こちららは向こうの拠点すらわからぬ始末。今までは散発的なテロに留まっていた事が神魔に油断と慢心を与えた。どうせ敗北者大きな手は打てぬと高を括っていた者が多すぎたのだ……それが向こうの策略とも知らずに……

(苦しい戦いになるの……)

神魔側が圧倒的な不利な状況で始まったアスモデウス、ガープとの戦い。既に追い込まれている状況からどうやって戦況を引っくり返す事が出来るか？ワシの脳裏に浮かんだのが横島の姿で……ワシは深く溜息を吐きながら脳裏に浮かんだ横島の姿を消し

「オーデインと合流しようかの」

「そうですね」

今は魔界の方が情報を多く掴んでいる。ここに留まっても変わらないと判断し、ワシは竜神王と共に天界を後にするのだった……

くアシユタロス視点く

蛭から聞いた横島君が文珠に覚醒したと言う言葉に一瞬頭の中が白くなる。確かに横島君の最終的な霊能ではあるが、余りに早い

「美神さん達の対応は？」

「とりあえず文珠を作らせない事と六道と神代の傘下に美神さんが入る事を決めた」

霊能で強い発言力を持つ六道と神代だ。その傘下に入れば当面の安全は確保出来たと見て間違いない、ただ問題はそこでは無い

「もう逆行の記憶は何の意味も持たないよ」

「……判ってる」

今回の隕石落としに神魔の能力を封じる結界。そのいずれも本来無かった事件だ。私も協力したいところだったが、そうなると思われ派の情報を得れなくなる。だから動けなかったことに歯がゆさを感じる

「すまないが蛭。私は少ししたら人間界を去る事にしよう」

「え？」

このタイミングでの私が人間界を後にすると言う言葉に蛭が目を見開く

「ど、どうして？」

「どの道人間界にいても私は大きく動けない」

ガープにスパイと思われると思うように動けない。そうなれば結局どこにいても意味は無い、それでは味方としては言いがたいだろう

「危険だが、ガープの陣営に直接乗り込む」

「そんなの危険だわ！」

危険だとしてもこのまま人間界にいても思うように動けないのなら、リスクは承知で動くしかない

「今直ぐと言う話じゃない、もう少し状況を見てからだ」

「……本当？」

姿が見えないうちに勝手に魔界に行かないかと心配そうにしている蛍に大丈夫だよと笑いかける

「ある程度の備えをしてから魔界へ行くよ。多分向こうからアプローチがあるだろうからね」

ここまでガープ達にとつての良い流れが出来たとすると、ここで合流を拒否すれば不信がられる。つまりここがガープの陣営に潜り込み情報を得るチャンスなのだ

「無茶しないでね？」

判ってるよと笑い返す。時間がどれくらいあるかは判らないが、人間界に入れる間に出来る間の供えをしておかなければならない。

(私もまた覚悟を決める時が来たようだ)

ここまで大規模作戦となると、間違いなく続けて動き、神魔にダメージを与えるために大規模な作戦を打つだろう。そして受けた被害を神魔が修復している間に、また大規模な作戦を計画する。つまり次にガープが動いた時、それを出鼻で挫く必要があるだろう。神魔にとつても人間にとつても正念場が近づいているのだった……

リポート25 横島家の非日常 その2へ続く

## その2

リポート25 横島家の非日常 その2

〜横島視点〜

布団の中で昨日の話をぼんやりと思い返す。伝説の霊具とか歴史上最もレアな能力とか言われてもピンと来ないし、霊力を圧縮させて栄光の手や勝利すべき拳や、空中に文字を刻んで使う陰陽術が劣化した文珠と言われても全然理解出来ない

(もう少し寝よ)

朝のランニングも禁止されているので、二度寝しようと思いを打った瞬間だった

【ノッ・ブー♪】

「んごふっ!？」

筆筒の上からダイブしてきたチビノブボンバーに強制的に覚醒させられるのだった……

『合体だあ!』

【ノブノブ、ノブノブー♪】

TVの前でご機嫌で踊っているチビノブ。今放送されているのは子供向けの合体ロボアニメ、それを見て今日が日曜日だったのかと思うレベルだ

「……はい。お茶」

「ん、ありがとう」

シズクがお茶を淹れてくれたのでそれを啜っていると、チビノブがTVの画面をペシペシ叩く。視線を向けるとそのアニメのロボットの玩具のCM

「それが欲しいのか?」

【ノブノブ】

コクコクと頷くので、今度買い物に行った時に買ってやるかなあと思いながら、膝の上に登ってきたうりぼーの背中を撫でる

「みむ♪」

なおチビは机の上にチョココンと座り、ペットボトルのキャップで水を飲んでいたりする

【やあ、ボーイ。おはよう】

【あ、おはよう教授】

完全にダウンしていたので眼魂の中で持ち帰った教授だが妙に生き生きしている。なんと言うか目がキラキラしてる

【昨日寝ながら考えたのだがネ！働いた分の給料を所長に貰おうと思ってるネ！】

幽霊でもお金大事！と叫んで家を出ていく教授を見送っているとリビングの扉が開き

「うー朝からうるさいわねえ。あのじいさん」

「あの大声は頭に響くでござるよ……………」

タマモとシロが頭を抑えながら部屋の中に入ってくる。リビングで俺がお茶を啜っているのを見るとシロが顔を輝かせ

「せんせー！散歩に行く……………「はいはい、馬鹿犬。大人しくしてなさい」ふぎい！」

駆け出そうとした瞬間タマモに襟をつかまれ女の子が出して良いと思えない声で呻く

「げほっ！げほっ!?!な、なにをすることでござるかあ!?!」

「あのね。この時間帯に横島がのんびりしてるって事は散歩禁止って事でしょうが」

おお。流石タマモ、大正解だ。昨日の今日だから美神さん達に散歩禁止って怒られてるんだよな

【その通りだ。横島は今日は外を出歩くのは禁止されてる】

【あ、心眼。やっどだんまり止めてくれたのか?】

昨日からずっと黙り込んでいたわけじゃないぞ?…と言って  
に好きで黙りこんでいたわけじゃないぞ?…と言って

【霊力のバランスがおかしいからな、その調整をしていた。魂はデリケートなんだ】

まあ心眼が俺の事を心配してくれているのは判るので、黙っていた理由も納得した所でしょんぼりしているシロに

「という訳で、俺は外に出れない。美神さん達に怒られるし」

散歩大好きなシロがうーつと唸る。唸っても駄目な物は駄目

「チビとうりぼーも駄々捏ねてないのに、あんたが駄々捏ねてどうするのよ」

チビとうりぼー以下と言われシロが唸るのを止めると、首に下げているペンダントを外し、子犬フォームになる

「わんー!」

「はいはい」

ブラシを手に取り毛並みを整えて上げる。タマモは真向かいに座り、急須を傾けて緑茶を湯飲みに注いでTVに視線を向ける

「まあ家でのんびりするのも良いんじゃない?」

そう笑うタマモ。同年代に見えるけど、圧倒的に精神年齢はタマモの方が上だよな

「みむ♪」

チビがボールを抱えて机の上に着地する。散歩の代わりにボールで遊んで欲しいという事だと判断し、ブラシを机の上に置いて

「シロも遊ぶか?」

「わんー!」

その返事を了承と受け取り、俺は朝食までの間ゴムボールでチビ達と遊んでやることにするのだった

くタマモ視点く

チビとうりぼーとチビノブに混じってボール遊びをしているシロに内心溜息を吐く、私と違ってシロは元々精神が幼いので、余計に肉体に引っ張られている

(文珠は相当不味いのよね)

昨日シズクに聞いたが、横島が文珠に目覚めかけているとの事。人間、神魔が欲してやまない奇跡の具現……横島がどれだけ危険な立場に置かれているのか、多分横島自身も全然理解していないでしょうね(と言うか、もう私の知ってる横島の面影ないし)

スケベじゃない、女を見てもナンパしないし、精神的に落ち着いて



いて、小動物に懐かれている。まあ今の横島の方が好きと言えば好きだけどき、正直妹扱いは好きじゃないのよね

【おはようございまーす】

「横島、おはよー」

「あ、おキヌちゃん、蛭おはよー」

おキヌがいつものように壁から姿を見せ、合鍵で蛭が入ってくる。圧倒的なまでに女子率が高いわよね、まあこれは言わないけどき。蛭とシズクとおキヌが朝食の準備をしている頃にノツブと牛若丸が起きてくる

【うー、眠い】

【です、ね、しんどいです】

霊力を消費しすぎる⇨消滅と言う2人はあの塔で相当霊力を消費しているので声にも元気が無い

「外に出れないと暇よね。なんでゲームとか買っておかなかつたの？」

「そうだよなあ。なんかゲーム機でも買っておけばよかつたよなあ」

横島は外に出れないので必然的に暇を持て余すことになるのよねえ。チビ達は横島が家にいるのでそれが楽しくて仕方ないみたいだから

【ノープ♪】

チビノブがじゃーんと言う感じで何かを掲げる、それはトランプだったけど、そうになるとチビ達が遊べないのよね

「んーちよつと物置見てくるわ。なんかあつた気がする」

「いつてらー」

ひらひらと手を振り、トランプ駄目なの？と言う顔をしているチビノブの頭を撫でながら

「うりぼーとチビが数字判らないからね」

頭は良いけど流石に数字までは理解出来ない。そうになるとチビ達が今度は不貞腐れると言うとチビノブはトランプを1枚持ち上げる、それはスピードの4で

「みむーみむ、みむ、みむー！」

「ぷぎん、ぷぎん、ぷぎん、ぷぎんー！」

4回勇ましく鳴く。え？もしかして判るの？今度は私が絵札を掲げる

「みみみみみみみみみみむー！」

「ぷぎんぷぎんぷぎんぷぎんぷぎんぷぎんぷぎんー！」

……やばいわ。この2匹数字理解してるわ……チビとうりぼーの賢さに私はかなり驚かされた

「ご飯の準備……あれ？タマモ、ノツブ。横島は？」

漬物とかを運んで来た蛸が姿の見えない横島のことを尋ねてくる

「なんか物置で暇つぶし出来るの探しに行くってさ」

【じゃってー】

蛸は判ったと返事を返し、リビングの扉を開けて

「横島ー、もうすぐご飯よー？」

「おー、すぐ行くわー」

物置から聞こえてくる横島の声。私は机の上の精霊石のペンダントを取りシロの首に掛ける

「ほら、あんたも朝ごはんの手伝いをする」

「りよーかいでござるよー」

横島に蛸にシズク、それに私にシロ、そして牛若丸にノツブにチビとうりぼーとチビノブと大人数の食事になるんだから、ちゃんと準備を手伝うとシロを叱り、私は机の上の急須と煎餅の皿を片付けるのだった……

〈蛸視点〉

味噌汁と卵焼きと味の塩焼きに漬物と言う典型的日本の朝ご飯と言う食卓。それ自体はまさしく日常と言う感じなのだが

【あ、横島。次醤油くれ】

「あいよー、あ、牛若丸。次岩海苔ちようだい」

【判りましたー！暫しお待ちください！】

人魂が飛び交い、チビ達が横島の近くに座り小さくかつとされた林檎を食べて、チビノブが先割れスプーンをぶんぶんと振り回す

(……日常って何だっけ?)

私の中での日常が最近判らなくなってきた気がする

「シズク、せっしや肉食べたいでござる」

「……朝から肉など出すか馬鹿」

「朝は魚よ。我佯言わないでござ飯食べなさいよ」

とりあえず平和って事で良いのよね。大根の漬物を咀嚼しながら

「あ、この漬物美味しい。これ何で漬けてるの?」

「……後で教えてやるよ」

横島の家で過ごす時に大事なものは何があっても動じないこと。そして突拍子も無い行動に出る横島に驚かないことである

【のぶーん】

「美味しいのかー、良かったなー」

そして煩惱塗れから子煩惱に溢れるようになった横島がチビノブの頭を撫でるのを見て、いい変化なのか、悪い変化なのか少し悩む所までが多分ワンセットなのだと思うのだった

【はーい、お茶は入りましたよー】

食後におキヌさんが運んできてくれた生温いお茶を飲みながら横島に提案する

「暇ならゲームでも買ってきましようか?」

横島の家にはゲームとかがないから、暇ならゲーム買って来ようか?と横島に言う

「ああ、それはまた今度で良いよ。俺も見に行くし、暇つぶしなら面白いものを見つけたからそれで良いと思う」

「ござ飯の前に物置で何かござござやってたけど、何を見つけたのだからうか

「あ、シズク。悪いんだけどバケツとちよつと丈夫な布……あとタコ糸を用意してくれるか?」

横島の言葉に何をするのか良く判ってない様子だが、頷くシズク。横島はありがとうと口にするのと物置でふたたびなにかござござし始める

「タマモ、物置に何かあったの?」

「知らないわよ。そういう所なんか見に行かないし」

「グローブとかボールでござるかな!」

……外で遊べないって言ってるのにシロは何を言ってるのかしら。少し頭痛がしてきたわ……そんな感じで暫く待っていると横島は煎餅の箱を両脇に抱えて部屋の中に入ってくる

「……横島。こんなので良いか?」

「おおー! バッチリバッチリ」

シズクが用意したバケツと布を見てニコニコと笑う横島はその場に座り込んで、バケツの口に布を被せてタコ糸でしっかりと回りを縛る

「みむう?」

「ぶぎゅ?」

何してるの何してるの? とチビ達が横島の回りとうろろする。確かに私も興味がある、横島がこんな事をしてるところは見た事がないから

「よっし、出来た。俺が子供の時に遊んでたんだけどさ、ベーゴマとメンコを見つけたんだよ。これで今日は遊ぼうかなって思ってたさ」

ベーゴマとメンコ……話には聞くけど、こうしてみるのは初めてね

「ほー、いっぱいあるのー」

「ベーゴマもメンコも勝てば相手のを全部貰えるからな、大阪ではベーゴマタダちゃんと言われたもんだよ」

にっししと笑う横島はタコ糸を結んで煎餅の箱の中からベーゴマを一つ取り出すと、私達に糸の巻き方を教えてくれる

「大阪だとござの上でやるんだけど、そんなのないし関東式って感じかな。よっ!」

横島が勢い良く糸を引くとベーゴマが布を上を軽やかな音を立てて回転する。思わずおおーっと言う歓声上がる

「へー、面白そうじゃない」

「本当でござるな」

確かに私の知っている駒とは全然違い、こういうのも面白いかもと思う。何よりも横島が昔遊んでいた遊びと言うのが良い

【主殿、ベーゴマと言うのは色々形があるようですが?】

「ああ。ベーゴマつての言うのはさ、背の高いベーゴマより背の低いベーゴマのほうが強かったり、小さいベーゴマより、大きいベーゴマのほうが強いとか色々特性があるんだ」

でも小さいと回しにくかったり色々あるんだよなあとしみじみ言う横島。煎餅の箱の中からベーゴマをいくつか取り出して

「これが初心者でも使いやすくて良い感じなんだ、じゃあ1人ずつ教えるな」

そうして私達は横島にベーゴマの糸の巻き方と投げるコツを教わるのだった

【ノツバーツ!!】

【ノブツ!?やべえ、こいつマジツエーツ!!】

そして意外な才能を開花させたのはチビノブだった。指も無いのに、実に器用に糸を巻き、力強くシュートする。ノツブの投げたベーゴマを簡単に弾き飛ばし、むふーっと自慢げな顔をしている

「……それ」

「後から投げるのずるくない!」

金属がぶつかる乾いた音を立てて、タマモのベーゴマが宙を舞う。シズクは涼しい顔で

「……同時に投げたいちやもんは止めてもらおうか」

「むきー!!次は私が勝つんだから!」

大人びてるくせに妙に子供っぽいところがあるタマモがムキになっっているが、どうもタマモはかなり糸を巻くのが下手なようだ。だから回転力が弱くて簡単に弾かれてしまう

【あはは♪私も出来るからこれ面白いですね】

【ぬつく……上手く回せません】

ポルターガイストを駆使してベーゴマをシュートするおキヌさんは満面の笑みで、牛若丸はそもそもベーゴマを回せない

「よいしょっとー」

何回目かでやっとベーゴマをまともに回転させられるようになったが、やはり回転が弱くやっと回転していると言うレベルだ

「おお。虫も上手になったなあ」

横島が嬉しそうに笑う姿を見ると悪い気はしない。だけど……これじゃあとてもじゃないけど、勝負に参加出来るレベルではない

「横島には全然勝てないじゃない」

「あはははー！そう簡単には俺は負けないのだ」

やっぱり横島が抜群に強い。小さい駒は回しにくいと言っているのに横島は一番小さくて、平べったいベーゴマを実に上手に回転させている

「みつむうー！」

「あおーん!?ち、チビにも負けたでござる……」

うりぼーとチビは2人タッグでベーゴマを回している。チビがベーゴマを固定して、うりぼーが回転することでシュートしてるんだけど、凄まじいとしか言い様が無いわね

「ははは、シロはベーゴマが苦手みたいだな。じゃあ、メンコでもやるか」

「うーそうするでござるよ」

「あ、それなら私も教えて貰おうかな」

外に出かける事は出来ないけど、これはこれで面白い遊びだわと思う。まあ私からすれば横島と一緒にいればそれだけで面白いんだけどねと思いつながら、今度はメンコの遊び方を横島から教わり始めたのだが、ここでもやはり相性と言うのが出てくる

「てーいっー！」

「嘘!?!強すぎない!?!」

「へっへーんでござるー♪」

そしてベーゴマは苦手だが、シロがメンコに抜群に強いと言う事が判明し

「みーむうー！」

そしてやっぱりここでも、チビとうりぼーのペアが抜群のコンビネーションを發揮し、私はまたも負け続けとなるのだった……

くブリュンヒルデ視点く

「はい、はい。判りました、それでは失礼します」

神魔合同軍からの連絡をメモして魔法陣を消し去る。どうも私が魔界に戻るのには難しいとの事、その理由はやはり文珠に覚醒した横島さんの護衛として私を外せないとの事。更に応援として小竜姫が私のセーフハウスに同居するとの事、それに関しては文句は無いのですが

「……この部屋を見られるのですか」

殺風景で必要なものしかない部屋。自分で言うのもなんですが、私は仕事人間なので趣味の物とか無いんですよ……まあ一時的な拠点と説明すれば殺風景でも何の問題も無いでしょう

「閣下はどこへ行かれたのでしょうか」

ベルゼブル閣下の姿が見えない。塔の攻略の際にはいなかったが、恐らくルイ様に連れて行かれたのは判るのですが、何時まで戻ってこないのでしょうか?と黙っていると思っていると扉が開く

「失礼します。ブリュンヒルデさんの住居はこちらで宜しいでしょうか?」

「……ルキフグス宰相?どうなさったのですか?その御姿は……」

長身の女性の姿をしたルキフグス宰相……紫色の髪と瞳、あと少しサイズが小さいのか胸を強調するメイド服姿を見て思わずそう問いかける

「ルイ様に」

「ああ。すいません、心中察します」

ルイ様が面白おかしくするためにルキフグス宰相の姿を女性に固定したのだと理解する

「いえ、それは良いんですよ。ええ、どうせ私もベルもルイ様の玩具ですしね」

そのやさぐれている声になんと返答すれば良いのか判らない。私とルキフグス宰相の間に嫌な沈黙が満ちる

「まあ私の事は置いておいて」

ええ!置いておいて良いんですか……その姿とかもう少し話すべきだと思っただけです

「美神令子を紹介して欲しいのです」

「それは構わないのですが……何の御用でしょうか？」

別に美神さんを紹介することには何の問題も無いですが、面識も無いのに何故？と思いきや尋ねる

「……ルイ様がご友人とシヴァを連れて横島忠夫でしたっけ？それとギャンブルをするから、上司を連れて来いと……ああ、もう関係各所への謝罪行脚は済んでますよ？」

なんとと言う面子……と言うかルイ様のギャンブル好きは魔界でも有名だ。勿論問答無用で宝などを巻き上げる悪魔として……

「すぐに向かいますよ！大変なことになる前に!!」

「はい、本当そうして貰えると嬉しいのです」

巻き上げる物が無いとなると、それこそルイ様が何を仕出かすかわからない。生贄と言うわけじゃないですけど、資産家でもある美神さんをつれて横島さんの家に向かわなければ!!

「その諦めきった目の色はこれだったんですね？」

「……はい。私には止める事が出来ませんから」

神魔のトラウマ。ルイ様とのゲーム、横島さん……いえ、人間界の経済の危機と私とルキフグス宰相と共に美神さんの事務所へと向かうのだった。そして丁度その頃、横島家では……

「はい、えーつとルイさんとネロちゃんと……どちら様ですか？」

「志波総一郎と言う、2人の友人になる。面白い奴がいると聞いて、今回は同行させて貰った」

「と言うわけだよ。横島君、遊びに来たのだがいれてくれるかな？」

「ちゃんと土産でケーキとかも買ってきたぞ！」

「今別のお客さん来てますけど、どうぞ。狭い家ですけど……」

ルイ、ネロ、そして志波総一郎と言う偽名を名乗るシヴァ神が訪れているのだった……



### その3

レポート25 横島家の非日常 その3

〜横島視点〜

外出禁止なので家でランプやベーゴマをして時間を潰していた。昨日は蛭が家にいたが美神さんと一緒に琉璃さんと話があるそうで、今日は俺達だけだ

「はい、あーがりつと」

【マジで!?横島がずっと一番なんじゃけど!?】

【凄いですね。主殿】

「……これで2週間ゴミ捨て免除だな」

俺とシズクとノツブちゃんと牛若丸の4人でババ抜きをして時間つぶしをしていた。途中でノツブちゃんがドベは買出しとかで固定じゃーと叫んでいたのだが

「言いだしつぺの法則ね、馬鹿みたい」

「でござるなー」

観戦に回っているタマモとシロがノツブちゃんを指差して、けらけら笑っている。俺が5戦ともずっと1位で、シズクが2位、牛若丸とノツブちゃんが一進一退と言う状況だ

【ワシのドロー!!ぬああ!?!】

【では私です。はい、あがりです】

なああああつと嘆いているノツブちゃんを見て全員で笑っていると玄関のチャイムが鳴る

「あ、俺が出てくるよ」

シズクが立とうとしたので、それを制して玄関に向かう  
「はーい、どちらさまですか」

玄関を開けてそこに居たのは予想外の組み合わせだった

「よう、横島」

【ごめんねー、横島君】

「綱手さんと三蔵ちゃん?どうかしました?」

白竜寺の三蔵ちゃんと綱手さんにどうかしました？と訪ねる。綱手さんは着物の上に半被を羽織り、三蔵ちゃんは法服じゃなくて普通のワンピース姿だった。正直あの法衣って本当に仏門？と思う時があったので普通の格好をしていることに安堵する

【何ってあれよ。横島君の家の結界のバージョンUPに来たのよ？】  
「私はあれだ。こいつが時々とんでもないポカをするからそれを監視に来た」

酷いという三蔵ちゃん。結界を強化してくれるのは嬉しいけど、チビ達が大丈夫か不安になる

【横島の家にはグレムリンとかがいるんだぞ？】

俺の不安を心眼が告げると三蔵ちゃんは大丈夫大丈夫と笑う

【ちゃんと聞いているから大丈夫！あたしに任せて！】

自信満々と言う感じなので任せても大丈夫かなと思ひ。俺は三蔵ちゃんと綱手さんを家の中に招き入れる

「……なんとも凄い面子だな？どうした？」

「なんか家の結界のパワーアップだつて」

【そう言う事！あ、横島君。ちよつと家の中を見てくるからねー】

霊力の流れとか溜まり場を見るからと言つてリビングを出て行く三蔵ちゃんを見送っていると、綱手さんが机の上のトランプを見て

「お、絵札遊びか、良いね良いね！私もいれてくれよ」

「あ、でしたら俺の変わりにどうぞ」

毎回俺が上がってしまうので面白味がないかもしれないし、何よりチビとうりぼーが遊んで欲しそうなので俺の座つてた場所に綱手さんに座ってもらい、俺はソファーに腰掛けて

「チビ、うりぼー、チビノブおいでー」

「みむう♪」

「ぶぎゅー！」

【ノーブー♪】

ソファーの上に登ってきたチビとうりぼーを膝の上に乗せて遊んでやりながら綱手さん、牛若丸、ノツブちゃん、シズクのババ抜きを観戦に回る

「みむ」

「ねこじやらしが良いのか？」

「みむみむ♪」

猫じやらしを啜えているチビから猫じやらしを受けとり、それを揺らす。チビとうりぼーが嬉しそうにそれを追いかけて、チビノブは膝の上にちよこんと座り、ボールをぺしぺし叩いている

「少ししたらボールで遊ぼうな」

【ノブウ♪】

チビもうりぼーもボール遊びは好きなので順番で遊ぼうなと声を掛ける

「せんせー、拙者散歩いきたいでござる」

「だからそれは駄目だって言われてるでしょうが」

散歩かあ、良い天気だから散歩行きたいけどなああとソファアから窓の外を見つめる。美神さん達の許可が下りないと駄目だなあと苦笑する

「じゃあ、今度皆で海か山に行くでござる」

「だからそれも美神達の許可が出ないと駄目でしょうが」

シロはよっぽど外に行きたいんだなと苦笑していると机の方から

【やったあー！やっとなワシの勝ちじゃあ!!】

「むむう、もう一回だ！」

ノブちゃん勝利の雄叫びを聞きながら、俺は猫じやらしを振り

「それで心眼せんせー、俺の体調って正直どう？」

【私を外せば、どんな状況か一瞬でわかるぞ？私は責任を持たないが】  
その心眼の言葉にまだ不味い状況なんだなと思ひ、俺はバンダナに伸ばしかけた左手を引っ込め、膝の上のチビノブの頭の上に乗せて撫でる事にした

〜20分後〜

「むぐぐぐ……」

【え、お前弱すぎじゃろ】

【そうですね。これは勘が弱いとかではなく】

【……純粹に幸運が低すぎる】

綱手さんがフルボッコである。ソファアに座りボールを投げてやりながら見ていたんだけど、とにかく連敗である

【ノブ】

「はいはい」

チビノブがボールを拾ってきたので、それを受け取りチビノブの頭を撫でるとノブと嬉しそうにチビノブが鳴く

「むぐぐう……もう1回ー!」

綱手さんが肩を震わせて、もう1回と叫んだタイミングで玄関のチャイムが鳴る

「くう?」

「わん?」

飽きてきたのか小動物フォームでソファアの上に寝転がっていたシロとタマモの頭を撫でて、俺は誰が尋ねてきたのか確かめるべく玄関へと向かうのだった……

↳シズク視点く

綱手の引き運が弱いというか、幸運その物から見放されているような貧弱すぎる引きに笑っていると横島が尋ねてきた人達を連れて、リビングに入ってくる。そして入ってきた面子を見て、思わず眉を吊り上げる

「ネロちゃんと、ルイさんとえーつと志波さんで良いですかね?」

明らかに人間では無い3人組。そのうち2人の気配には覚えがあった。私達がいけない時にお客さんが来ていたと言っていた時に家に残っていた魔力と同じ気配だ

「ああ、それで良いがさんはいらぬ。志波と呼んでくれれば良い」

そうですか?と横島が能天気には笑いながら、お土産でケーキとジュースを持ってきてくれたと言って

「じゃあ、お皿とかコップとか用意してくるな」

鼻歌交じりで横島がキッチンの中に消える。さも当然のように座る3人組……志波と言う男を見つめて

「……お前偽名乗る気あるのか?シヴァ」

インドの破壊神シヴァ……天界にいた時なんか話をした事がある

「無理矢理連れて来られたのだ、即興ではこんな物だ。後私は今は志波だ、シヴァと言うな？良いな」

その言葉に込められた神託が信長達を縛る。私はギリギリセーフだが、争乱になるような真似はしたくないので黙ることにする

「それで志波さんは何のよう人間に？」

「ああ。それは私立案だよ。横島とゲームをしようと思っただけ」

「殺人ゲームとかじゃないよね？」

ノツブの言葉にそんなわけある訳ないじゃないかと笑うルイ。だがそのにこやかな笑みには闇があり、とても嫌な予感がする

「……それでお前は誰だ？」

神魔かどうかもあやふやだが、この2人と共に居ると言うことは間違いなく神魔のはず

「余か？余は可愛くて美人のネロ様だ！」

……なるほどまともな会話が出来ないタイプか、ならば無視しよう。それが一番だ

「はい、ケーキ持ってきましたよー、ネロちゃんとルイさんが持ってきてくれたから2人から選んでください」

にこにここの状況を理解していない横島に思わず溜息を吐くが、横島は顔に出してしまうのでこれが一番良いのかもと思うことにした

【横島君。 結界……】

しかしそこですまないのが横島家だ。三蔵が現れ志波を見て絶句する

「回れ右、お前はここで何も見なかった」

【はい！失礼します！】

敬礼して回れ右してリビングを出て行く三蔵。そのやり取りを見ていた横島は何かいいようにしていたのだが、この圧倒的な魔力にチビ達が怯えて擦り寄ってきたので、チビ達を膝の上に乗せて口に仕掛けた言葉を飲み込んでくれた

「これはね、良いケーキなんだよ。ああ、全員分あるからその人狼と

妖狐も人化するといい」

そう笑いながら告げるルイ。横島の家だが、今この場を支配しているのはルイなのだった

「あ、美味しいですね。これどこのケーキなですか？」

「んー。これは日本のケーキじゃないんだよ。そんなに気に入ったのならまた今度持ってきてあげよう」

本当ですか！嬉しいですよと笑う横島だけが、リビングに満ちるこの異様な空気に気付いていないのだった……

「トランプで遊んでいるみたいだし、私の好きなゲームをしないかい？」

その言葉にシヴァの顔が引き攣る。なんだ？ルイは何をしようとしているんだ？

「ポーカーをやろうじゃないか、何シンプルな賭け事だよ」

賭け事と聞いて綱手が目を輝かせる。こいつ引き運とかめちやくちや悪いくせに賭け事好きだよな

「この人数で出来るの？」

「出来るとも、そうだね。でもあんまり人数が多いと面白味も無い、ドベから抜けて行って、最終的には1対1で勝負になるようにやっつけていこうか」

ルイがトランプをシャッフルし、私達の前に2枚ずつおいて行く

「ルールはテキサスホールデム。4回のラウンド勝負だ、1回目は手持ちの2枚、2回目は場に3枚のカード、3回目は更に1枚、4回目も更に1枚カードが追加される、場のカードと手札の2枚で役を揃えるというゲームだ」

絵合わせと言う事か、ルイは鞆から役の組み合わせの一覧を取り出す

「これが役か、ほほー色々あるなあ。はい、横島」

「ありがとう、うわあ。覚えるの大変だ」

順番で回されてくる役の組み合わせを見て横島が覚えるのが大変そうと言うのも納得だった。

「本当は賭けだからお金か物品を手持ちにするが、人数が減るまでは

賭け無しでやろう」

ルールを詳しく知っているのは私だから、最初は私がディーラーとゲーム進行をやらせてもらうよとルイが笑い。ポーカーが幕を開けるのだった……だが私達は確信していた。一番最初に脱落するのは綱手だと……

（ネロ視点）

机の上に置かれている5枚のカード　スペードの9・クローバーの5・クローバーのJ・ハートのA・スペードの3……

（うむむ……）

前に置かれているカードが2枚ダブっていれば4カード、3カードが狙えるが、余の手持はクローバーの4とハートの3……

（やはりこの人数ではなあ）

余と横島とシヴァとシズク、綱手、信長、牛若丸、シロ、タマモの9人……最初の数回は豚が何人か出るだろう

「では全員の手札をオープンしてくれ」

余が　クローバーとハートの3を出す　1ペア

シロとタマモはそれぞれハートとスペードの5で1ペア

信長がハートとクローバーの9で3カード

シヴァがダイヤとスペードの9で信長と同じく3カード

牛若丸と綱手がハートの2とハートのK、スペードの2とクローバーのKで豚

そして横島はと言うと……驚きだが、余達の中では最も強い組み合わせだった

「クローバーの2とハートの4だから、場のA・スペードの3、クローバーの5と合わせてストレートですよね？」

「ああ、そうだよ、横島。このラウンドでは横島がトップだね。今回の脱落者は牛若丸と綱手だね」

【うーむ、正直全然判りませんでした】

「花札とかならわかるんだけどねえ」

元々トランプにはあんまり強くないらしく、牛若丸という英霊と綱

手と言う仙人が抜ける。これで場のカードが少しは良くなるかと思  
い、手持ちのカードをルイに返す。ルイはそれを受け取るとそれを良  
くシャツフルする

「ルイさんは良いんですか？」

「ああ、もう少し人数が減ったら参加するよ」

にこにここと笑うルイだが、これは間違いない。自分が勝負するのに  
値する順番を待っているのだと……ならば余が勝ってテーブルにル  
イを引きずり出してやるといき込む

「チビ、うりぼー、チビノブー♪俺勝ったよー」

「みみーむー」

「ぴぎー」

【ノブブー♪】

横島が楽しそうに自分の周りの小動物と戯れているのを見ている  
と、再びランプが配られる。今度は6人なので少しカードが良い筈  
と思いい札を見る

(ダイヤの10とスペードの7か……)

これもまた微妙な手札だなど思っているとルイが机の上に5枚の  
カードを並べる。スペードのJ・クローバーの10と4、それとダイ  
ヤのKとスペードの4

(……1ペアかあ……)

カードをドローするポーカーなら馴染み深いですが、こういうスタイル  
は初めてなのでこれが良い引きなのか悪い引きなのかが今一判断が  
出来ない

「では勝負だ、全員カードをオープンしてくれ」

余がダイヤの10とスペードの7で場のカードと合わせて1ペア

「……今回はあんまり良い引きじゃなかった」

シズクはハートの4とクローバーの10で1ペア

「……揃ってないでござるよお……」

シロはハートの8と6でブタ

「やり、今度は私は良い札よ」

タマモが笑いながらカードを出す、ハート、クローバーのKで3



カード。確かに余達の中ではいいカードだ

「私も3カードだ」

シヴァが出したのはクローバーの4とスペードのA。4が3枚でスリーカード

「えーつと俺はハートのAとQです。場のカードが10とJとKだからフラッシュユって奴ですよー！」

にこやかに出された2枚の絵札に全員が凍りつき、ルイが嬉しそうに笑い出す。これは自分の敵を見つけたと言わんばかりの笑みで、シロの変わりにルイがテーブルに着いたのだが

「あ、また似てる組み合わせだ」

場のカードがハートのJ、Q、10でスペードの3、Qで横島がハートの9と7を出した時。全員が硬直した……回が進む事に恐ろしい引き運を発揮する横島にタマモとシズクが抜け、4人での勝負になった時。これは勝てないかもしれないと思うのだった……

〜美神視点〜

ブリュンヒルデと見たことの無いメイド……魔界の宰相。ルキフグスと言う組み合わせが血相を変えて私の事務所に来て、ルイ・サイファーがポーカーをすると言って横島君の家に行つたと聞いた。最初はなんでもないじゃないと思つただけど

「ルイ様は取れるものを何でも持っていきます。横島さんでしたっけ？彼を連れて帰る可能性も十分にあります」

「美神さん！すぐ行きましよう！除霊は中止です！」

横島君が拉致されるかもしれないと聞いて、今日予定してた除霊現場の下見は中止にした

【私、先に見てきます！】

おキヌちゃんが飛んで行き、私と螢ちゃんも慌てて横島君の家に向かい。そこで私達が見た者は

「わーはははは!!良いぞー!良いぞー!横島!その調子だ!その調子で私の槍を取り返してくれ!」

「ぐぐぐうう!!せ、折角巻き上げたのに……ええい!次だ!私はこの

志波から取り上げた三又の槍を賭ける！さあ！横島君。君は何を賭ける！」

何か異様に白熱したポーカーが繰り広げられていた。と言うか志波と三又の槍って……思わず冷や汗が流れる。横島君の家の結界を強化すると言っていた三蔵を見つけ、志波と言う男を指差すと、壊れた人形のように何度も頷く

(シヴァ神なの!?)

インドの神シヴァ神が何でと思うのだが、上機嫌で横島君の肩を叩いているので最悪の結果にはならないだろうと安堵しながら、小声で(聖奈、マジ?)

(はい、大マジです。神魔混成軍がお妃であるパールヴァティ様を呼びに動いています)

……やめてよね。隕石落としからたった2日なのでなんで横島君の所にこんなに神魔が集まるのよ……

「よーし！行けー！横島！あのルイの余裕綽々の顔を崩してやれ！横島の掛金は余が出そう！この黄金の杯だ！」

「良し！なら今度こそ私の勝ちだ、巻き上げさせてもらうぞ！その杯を!!」

あの金髪の子誰かしら？初めて見るんだけど……タマモとシロ、それにシズク達も観戦していて盛り上がっているので何があったのか尋ねてみる

「あ、危ないところでござった……せ、拙者霊刀を取り上げられるところでござった」

「……私尻尾の毛2束切られる所だったわ」

どうやらルイに負けて色々巻き上げられる所で横島君が連勝してるって言う所らしい

「……蛍。お前はいなくて良かった、さつきまでは凄い地獄絵図だった」

「ワシ、あいつと2度とポーカーなんてやらん」

【主殿がないと大変なことになってましたね】

……一体何があったのかしら？物凄いことになっているって言う

のは分かるんだけど

「綱手何があったの？」

酒を片手に馬鹿笑いしている綱手に声を掛ける。私達は何があったのか判らないからまず状況を把握したかった

「いやあねえ、私達から色々巻き上げようとしていたルイを逆に返り討ちにしてるんだよ」

いやあ、横島の幸運は凄まじいねえと爆笑している。そう言えば横島君って何気にめちやくちや運良いのよね……

「フルハウス！これでどうだい！」

「えつと4カードです」

また横島君の勝ちのようで、ルイが唸りながら金色の槍を志波に返す。それを見て横島君の隣の少女が横島君に抱きつき

「よーし良し！横島！凄いぞー！偉い偉い！」

「い、いや、あのネロちゃん。止めて欲しいんだけど」

「照れてるのか！愛い奴め!!」

横島君が照れて顔を真っ赤にしているのを見て、蛍ちゃんが不機嫌そうに割り込み、ネロと言う少女を引き離す

「ルイ様。そろそろおやめになりませんか？相手が悪いのです」

ルキフグスがルイを止めに入るが、ルイはその制止を振り切りにつきりと笑いながら、横島君に顔を近づける

「……良いだろう、横島君。君は強い、それは認める。だけど私も負けたままじやあ帰れないんだよ」

「あのルイさん、俺が今回は運が良かったって事で終わりにしません？」

横島君が引き攣った顔で提案するがルイは当然それを受け入れることは無く

「最後の勝負だ。これで負けたら私は大人しく帰る」

「わ、判りました。じゃあこれが最後ですよ？」

横島君がトランプをまとめて、机の側に待機しているシズクに手渡し、シズクがそれをシャッフルしてルイと横島君の間に置く

「よーし！やれ！横島！」

「こういう性悪は徹底的に叩くのです」

牛若丸とノツブの野次にビクビクする。普通のポーカールなら良いのに、相手は魔界の重鎮しかもルシファー相手とか冗談じゃない。私なら勝負になる前に逃げる。知らないって幸福なことなんだと心から思った

「む？なんだ。余が横島を愛でるのを邪魔するな」

「……そっちこそ横島に近づきすぎよ」

ネロと蛍ちゃんに挟まれておろおろしてる横島君。ここだけなか修羅場になってる

「私が勝ったら、横島。君の持っている眼魂と言う不可思議な物を貰おう。君が勝ったら」

ルイはそこで言葉を切り、聖母のような清らかな笑みを浮かべ

「私のメイド。ルキを暫く君に預けよう、彼女はスーパーメイドだから生活が楽になるよ」

「ルイ様あ!？」

まさかのルキフグスを賭けに上乗せ、ルキフグスが絶叫する中。トランプは配られ

「ふふふ、横島。また来るよ、今度はルーレットで勝負だ」

ネロと志波2人と、メイド服姿のルキフグス事ルキを残してルイは帰って行ったのだが、帰り際に念話で余計なことを喋るなど言っていたので、私達はルイの正体を横島君に伝える事が出来なかった

「えっと、その……暫くの間お世話になります」

死んだ目で頭を下げるルキの姿とどうすれば良いですか？と困惑した様子で尋ねてくる横島君に私も蛍ちゃんも何も言う事が出来ないのだった……

↳ネロ視点

横島に抱きつき頭を撫でていると不機嫌そうに割り込んできた黒髪の女。中々に整った容姿ではあるが、天上の美たる余と比べると劣るな

「なんだ？余が横島に褒めることに何か問題でもあるのか？」

「横島が困っているわ」

困っているねえ……まあ確かに赤面しておろおろしているが、決して困っているようには見えぬな

「横島は嫌か？」

「え、えつとお……」

横島の腕を胸の間に挟むと目に見えてきよどきよどし始める。その反応が又愛いのだが、蛍は不機嫌そうに顔を歪める

「横島の友達なのは判るけどさ、あんまりべたべたしすぎじゃない」

「……揉め事は困るんだがな」

【横島さんも横島さんだと思いますよ】

タマモとシズク、そしておキヌの反応を見て横島の回りの人間関係が大まかに把握した

(面白いなあ)

これだけ好かれていけると言うのに、これほど愛い反応。誰にも手を出していないと判る、だからこの反応だろう。横島の性格はすでに把握しているが、誰か一人と定めればその相手だけに愛を注ぐだろう。これはそういう男だ

「ふむ、横島は誰かと付き合っているのか？」

違うと判っているがあえてそう尋ねる。余の言葉に動揺する蛍達の反応が見ているがまた面白い、しどろもどろになる姿を見て心の中で嘲笑う。恋や恋愛と言うのは戦争なのだ、それなのに動き出せないのならば別の相手に搔っ攫われても仕方ないという物だ

「い、いや、そういうのは無いけど……」

唇を噛み締める蛍達の反応が面白い。これほど愉快なのは早々無い

「では余はどうだ？これでも余は尽くすタイプだぞ？」

「え、えああ!？」

奇声を発するのは横島だけではない、蛍達もだ。その反応を見て余は笑いながら立ち上がり

「まあ今直ぐ答えはいらんよ。考えておいてくれればな。余は結構お前の事好きだぞ？」

横島に投げキッスをしてその場を後にする。横島の家を出ると爆弾が爆発するかのような大騒ぎが聞こえてきて、それがますます余の笑みを深くさせる

「なんとも楽しい時間であった」

ルイのあの鉄面皮を崩し、恋愛で動かない横島達に爆弾を投げ込んできた。これほど楽しい事は早々ない

(まああながち嘘でもないのだが……)

横島の側にいるのは面白いし、暖かい。だから余が横島が好きと言うのはあながち嘘でも無いし、冗談でもない

(ああ。早く堕ちて来てくれないか)

横島の魔人としての力は強まっている。だから横島は余に嫌悪感を抱かない、普通自分の家をあれだけ騒がしたのにまた来て下さいなんて言える訳が無い、人間と言うのは自分のテリトリーを壊されるのを嫌がる物だからだ

「しかし、それだけでも言い切れないか」

横島が余に嫌悪感を抱かないのは魔人になっているとの関係しているが、余が横島を好ましくはまた別の問題である。魔人の姫たる余が魔人に想いを寄せることなどはありえない、だが実際問題余は横島を好ましく思っている

「ふふふ、ああ……楽しいなあ」

これほど楽しいと思ったのは今までただの一度も無かった。1人の行動に一喜一憂し、そして横島の言葉に喜ぶ、こんな事は今までならありえない。だが今の余の心の動きはまるでただの少女のようで、その自分では今まででありえないその心の動きが何よりも余の楽しみとなっていた

「横島よ、もつともつと余を楽しませてくれ」

この退屈しかない世界で心から楽しいと思える者を見つけた。だからもつと余を楽しませてくれ、横島ならば余の空虚な心に確かな熱を与えてくれると思ったから……もつともつと余を楽しませて欲しいと心から願うのだった……

〈蛍視点〉

ルイさんが帰り、横島を誘惑していたネロが帰る。勿論家の空気は何とも言えない空気に満ちている

「じゃあ、私は十分楽しんだから帰るかね、じゃあな」

【結界の強化は済んだから、じゃあね。横島君、今度は白竜寺に遊びに来てくれると嬉しいわ】

そしてその嫌な雰囲気を感じ取った三蔵さんと綱手さんはそさくさと逃げて行き

「私も仕事がありますので、そろそろ失礼致します」

聖奈さんも逃げて行つた。志波と言う神魔は上機嫌に笑い

「横島。お前は面白い、気に入った。今度何か困った事があれば声を掛けるが良い、助けてやろう」

私がルイに奪われた物を取り返してくれたからなと上機嫌に笑う志波さんだったが、窓ガラスが叩かれた音に振り返ると、げえっと叫びた。誰かいるのだろうか？と思ひ振り返ると、そこにはピンク色の着物に似た服を着て、ふわりとカールした紫色の髪をした上品そうな女性の姿があつた

【はいはい、何か御用ですか？】

牛若丸が窓を開けてそう尋ねる。女性はにこやかに笑いながら

「貴方。仕事を抜け出して何をやっているのですか？部下の皆様が困っていますよ。早く帰りましょう？」

「う、うむ。態々苦勞をかけて済まない、ただな、横島がルイから奪われた物を取り返してくれたのでな」

志波さん結婚してみたみたいね。この感じを見る限りでは奥さんに頭が上がらない駄目亭主のパターンそうだけど

(奥さんかあ)

やっぱり私の夢からすれば可愛いお嫁さんになりたいわよね。そうなるように動いていたつもりだけど、思ったよりもイレギュラーが多いけど……

「まあそれはそれはありますがとうございます。何か困った事がありましたら、教えてください。必ずお力になりますので」

志波さんの奥さんはニコニコと笑い、志波さんの耳を引っ張り頭を下げて出て行く

「……さてと、横島の家で手伝いをしてくれるなら、掃除道具とかの場所を教えておこう」

「はい、よろしくお願いします」

重婚に全く違和感のないシズクはルキフグスさんを連れてリビングを出て行き、怖い相手がいなくなったと言う事で籠から出てきたチビ達が遊ぼうと横島にじゃれ付くのを見ながら

「ねえ、横島」

「は、はいー!」

私は普通に声を掛けているのに怯えている。横島に変なのと思いつつながら

「ルイさんとネロさんって結構尋ねてくるのかしら?」

私達が知らないところで横島と接触しているのなら危ないと思いつつ尋ねる。横島は膝の上のチビノブの頭を撫でながら

「そんなに毎日来るわけじゃないけど、結構尋ねてくるかな? 紅茶とかお土産で持ってきてくれるし」

今日もケーキを持ってきてくれたと能天気な顔で笑う横島に頭痛を覚える。間違いなく、横島の好感度を上げる為の差し入れだ。どうも私の知らない所で横島を狙っている相手が増えているようだ。特にあのネロって言う少女は危険だ、私よりも年下そうだけど、黄金比の身体。何故こんなにも容姿が不公平なのか、神様に問い詰めた気分だ

「美神殿ー、拙者暇でござる。外に行っても良いでござるか?」

「それなら除霊についてきても良いわよ? 来る?」

美神さんの問いかけに行く! と返事を返すシロ。まあ人数が多い方が楽なのは事実だし、横島は動かせないし

【あ、手伝えばお給金は出ますか?】

【メロンパンじゃー!メロンパンを買ってくださいー!】

牛若丸とノツブも手伝うと言ってくれているので、下見じゃなくてそのまま除霊に進めそうだ



「タマモはっ。」

「いやよ、めんどくさい、と言うかこれだけいれば十分でしょ」

TVのスイッチを入れて、煎餅を齧るタマモ。らしいと言えらしいわね

「おキヌちゃんは来なくても良いわ。これだけ人数が揃えば除霊も余裕だしね」

【判りました。頑張ってきてくださいね】

おキヌさんは居残りど、肉食系だから横島が心配だけど、シズクがいるから大丈夫よね。

「じゃあ横島、行ってくるわね」

笑顔で見送ってくれる横島に手を振り返し、横島の家の前に停めてあつたバンへと乗り込む

「蛍ちゃん、もうちよつと頑張らないと横島君取られるわよ？」

「……はい」

私の評価が高いのは知っていたが、このままでは駄目だと改めて思った。

「ちなみ横島と一緒に出かけるとか大丈夫ですかね？」

「うーん、暫くは無理ね」

デートとかは駄目みたい。横島の家遊びに行く回数を増やそうかな、このままだと本当に横島と彼氏彼女の関係になれないと思いき焦りを覚えるのだった……

## その4

リポート25 横島家の非日常 その4

〜横島視点〜

ルイさんとのポーカー対決の翌日の昼間。俺はソファアークに腰掛けてそろそろ外に行きたいなあと思いつつながら、テープとはさみ、それとダンボールとビー玉で工作をする。流石にチビとうりぼーにも出来る暇つぶしがそろそろ必要だと思ったので、こうして工作中である

【のーぶう♪】

前TVで見た合体ロボットの玩具を嬉しそうに頭の上に乗せて踊っているチビノブの歌と踊りに思わず笑みを浮かべてしまう

「悪かったなあ、タマモ」

買いに行ってくれたタマモにお礼を言うと、タマモはファッション雑誌を捲りながら

「うるさいシロと牛若丸を捨てて来たついでよ」

遊びに行きたい行きたいと騒ぐシロは確かに騒がしかったけど……思わずジト目になると

「ああ、嘘嘘。バツテングセンターでホームラン打つと商品貰えるでしょ？なんかそれに燃えたみたいで、ホームランを打って来るって2人であっちこっち行ってるみたい」

何やってるんだらうか？いや、まあシロと牛若丸の身体能力なら楽勝だと思うけどさ……出禁にならないと良いなと苦笑する

「よーし、出来た」

机の上に完成した丸いダンボールを置く。チビとうりぼーが興味津々と言う感じで近づいてくるので

「それ」

指で弾くとビー玉が回転してホッケーのパックのようにするすると動く、チビ達はそれが自分達の方に近づいてくるのを見て、目を輝かせる

「落ちたら負けだからな？」

「みむうー！」

「ぶぎゅー！」

2匹が体当たりしてかなりのスピードで迫ってくるパツクを受け止めてまた指で弾く

「ただいまー、お？なんか面白そうなのやってるの？なんじゃなんじゃ？」

「……寄り道の前に肉と魚をキッチンに運べ」

判ってるつと怒鳴るノツブちゃんに一瞬くすりとした瞬間。チビとうりぼーはそれを見逃さなかった

「みーむー！」

「びーぐっ！」

「つとーとと?！」

机の上を凄い勢いで滑ってきたパツクに反応できず。反射的に伸ばした右手をすり抜けて、パツクは机の下へと落ちるのだった

「みみー♪」

「ぴーぎゅ♪」

勝った勝ったーと喜んでいるチビとうりぼーを見て作って良かったと思つて見つめていると、チビノブが箱を頭の上に乗せたままりビングを出て行く

「遊ばないの?」

【のーぶ、のーぶのぶーノツブ！】

なるほど……判らん！でも遊びに行くと言うのは何となく気配でわかった

「夕ご飯までには帰って来るんだぞー」

メロンパンとおにぎりを肩から提げている鞆に入れていたので、夜まで帰ってこないと判断してそう声を掛ける

【ノツ！】

箱を頭の上に乗せて出かけていくチビノブを見て笑っていると心が呆れた様子で

【何を言ってるのか判るのか?】

「いや。全然、でも目を見れば何となく判らない?」

判るか馬鹿と言う心眼の呆れたような声にそうかなあと思っていると、電話が鳴る。立ち上がろうとするとファッシュン雑誌を見ていたタマモが立ち上がり

「良いわ、私が出る。横島は遊んでてあげなさいよ」

タマモがそう言うのでパックを机の上に乗せて再びチビとうりぼーに向かつて弾く

「みむー」

「ぶぎゅー」

なんとチビが弾いたパックがうりぼーの身体に当たって跳ね返り、予想していたのと違う軌道で跳ね返ってくるパックに反応しきれず、つ再びパックがフローリングの上に落ちる。連敗は流石に悔しいので、今度は真面目にやろうと気合を入れたのだが

「横島ー電話ー、銀一だつてー」

銀ちゃんから？ああ、きつと美神さんとか琉璃さんに叱られたんだなど予想をつける

【横島ー♪それ面白そうじゃからワシに変わってくれ】

「OKー、チビ、うりぼー。電話してくるからノツブちゃんと遊んでてな」

元気良く返事を返すチビとうりぼーの声を聞きながら、電話台の前にいたタマモから受話器を受け取る

「もしもしお電話変わりましたー」

『おお、横っちかあ。悪いなあ、自宅休養中なのに』

まあ正直暇していたので電話を掛けてきてくれたのは嬉しいしな  
「いやあ、別に構わないぜ。で、聞いたけど、避難所から勝手に飛び出したんだつて？何やってるんだよ」

長話になりそうなので椅子に座りながら何て無茶をしてるんだ？と尋ねる

『止めてくれ、その話は思い出したくない。死ぬほどこわかったんや』  
「だからなんで死ぬほど怖いと思ってるのに飛び出したんだよ？」

銀ちゃんは俺と違って冷静に物を考えられるはずだ。それだけに信じられないと思う

『いや、ちゃうんや。美神さんと神代さん……メツチャ怖い』

「あーうん。それは判る」

俺なんかしょっちゅう怒られてるしな、無茶してるから……暫く互いに無言になった後

「それでなんで飛び出したんや？なんか理由あるんか？」

『……夏子がな、子供が倒れてるって飛び出したんや』

その言葉に思わず椅子から立ち上がった。え？え？夏子東京にいるの？

「夏子、東京におるんか？」

『おう。長期休みって事でなあ、横つちと俺に会いに来たみたいや』

そっかあ……良く考えると小学以来だよなあ、なんか懐かしいなあ

「で？その夏子は？」

『入院してる』

はは、そうか入院かあ……入院!？」

「どう言う事や!？」

『なんか魔力だか、霊力だかよー判らんけど、強い霊力に当てられて酔ってるみたいらしいわ。んで霊能の病院に入院しとるで横つちも元

気になったらお見舞い行ってやってくれるか？』

銀ちゃんに夏子が入院してる病院の名前と住所を聞いて、外出許可が出たらお見舞いに行くわと約束して、受話器を元に戻す

「夏子が入院かあ、何をお見舞いに持って行けばいいんやろうなあ」

「ねえ。横島、夏子さんって誰？」

後から聞こえてきた声に振り返ると、そこには目が全く笑っていない笑顔の蛍がいました。その圧倒的な威圧感に怯えながら蛍の質問に答える

「小学校の同級生です」

「ふーん、入院してるんだ。お見舞いの時私も一緒に行くね？」

有無を言わさないその口調に俺はハイっと何度も頷きながら言う事しか出来ないのだった……

〈枢視点〉

人間界での隕石落としか言う割りに洒落にならない危機を乗り越えたボク達だけど、ボクはボクで新しい危機に瀕していた。味方もいない、孤立無援での絶望的な戦いに挑む事になっていた

「へー、ゴモリーって言うのねー、よろしくー♪私ね、アルテミスー」  
「よろしくねえ♪」

ゴモリーに無理矢理買物に連れ出され、着せ替え人形にされていて、やっと休憩で立ち寄ったカフェではボクのトラウマである机妖怪とドレス姿の女性がいて、机妖怪が死んだ目をしていて、彼女もボクと同じ目に合っていると本能的に悟った

「あー枢ちゃんだっけ？パフェ食べる？」

「ストロベリーサンデー」

一番高いのを頼む、どうせお金はゴモリー持ちだしね。ゴモリーと意気投合している女性も紛れも無く神魔だろう、小声で誰？と尋ねる（月の女神のアルテミス様だって）

止めてくれよお……ソロモン72柱と古き神とか冗談じゃないんだけど……なんで横島と知り合いになったら、それと比例するように神魔の知り合いが増えるのが謎でしようがない

「私の巫女候補の愛子ちゃん。机の中で恋愛の世界を作ってくれるのよ」

「恋愛の世界！良いわねえ、私も愛とかの権限を持つてるからそういうのだーいい好き♪」

でしよーつとテンション爆上がりである、もうお願いだからボクを自由にして欲しい

「私の義娘の枢ちゃん」

「ちよつと待てえー！誰が何時！お前の義娘になった！」

擬音が出そうな勢いで指を向けるが、ゴモリーが心底不思議そうな顔をしているのがむかつく

「あー判る、素直になってくれないのね？」

「そうなのよ。私はこんなに可愛がっているのに……」

よよよつと良いながら泣き崩れる振りをするゴモリーに頭が痛く

なってきた。予知能力を封印してるから何も判らないけど、これは酷いと言わざるを得ない

「その恋愛空間って言う奴私も見たいな」

「良いわよ。ね、愛子ちゃん」

おおーっと目から光が消えて、愛子が頭を抱え込んでいる。しかしあの机の中の恋愛世界と言うのは余りにひどい、スイーツと言わざるを得ない

「最近ね私の意見を組み込んでくれて、すーっごく素敵な空間になったのよ」

馬鹿な!?あれが更にバージョンUPしているのか!?愛子を見ると耳まで真っ赤になっている。これは逃げるべきなのか?巻き込まれる前に逃走するべきなのだろうか。だがボクの運動能力では簡単に捕縛されるだろう

(どうしてボクは頷いてしまったんだ)

連れ出させる前に逃げるべきだったのか、それとも泣き落としをするゴモリーを無視すればよかったのか……盛り上がってるうちに逃げるべきなのだろうか……

(あの世界はごめんだ)

横島の事を完全に兄だと思っていた。いや、確かに横島の包容力とかは兄とかそういうのを連想させるけどさ……血縁も無い相手を兄呼びって相当痛い奴だと思っただよね。

「枢ちゃん。横島君を紹介するか、アルテミスさんと愛子ちゃんと一緒に買い物を見て回るのどっちがいい?」

……その脅しにも似た言葉にボクは降参するしかなかった。ゴモリーが横島を知っているのは知っているが、ボクと一緒に確実に暴走する。それを回避する必要があると思っ、アルテミスと愛子と同行する事をボクは了承したのだが……次の満月の未来予知でボクと横島が机の中に引っ張り込まれる未来を確認し、ボクはどうやってその結末を回避するのかを必死に考え

「……よし、くえすを巻き込もう」

クールな振りして恋愛脳のくえすも巻き込めば、少しでも自分に掛

かる負担を分散させる事が出来ると思ひ、くえすを巻き込んでやる  
心に決めるのだった……

〈蛍視点〉

横島の口から出た夏子と言う女性の名前。親しみさえあるその言  
葉に誰と尋ねると小学生の時の同級生で、しかも入院していると言う  
「銀一さんと一緒に仲良しだったんだ」

「おう、3人でよく遊んでてなあ、銀ちゃんから俺が東京にいるって聞  
いて、こつちに出てきたらしい」

小学生の同級生に態々会いに大阪に出てくる……これはちよつと  
警戒するべきかもしれない、幼馴染と言う属性は危険ってお父さんも  
蓮華も言つてたわ

「ふーん、で。その同級生って言うのが横島の初恋だったりするの？」  
タマモが煎餅を齧りながらどうでも良いと言う感じで横島に尋ね  
る。だがその目はみた事の無い真剣な光に満ちている

「みーむーっ！」

「「ぶぎぎッ!!」」

【増殖は卑怯じゃね!?!】

……なんか机の上にダンボールで作ったであろうエアホッケーの  
パックを打ち合っているノツブとチビとうりぼーの組み合わせは、あ  
んまり気にしない方向で行こう。と言うか増えて凄まじい軌道で変  
化するパックって絶対反応できないと思う

「はは、いや、俺振られてるし、夏子は銀ちゃんが好きなんだよ」

懐かしい思い出を語るような様子の横島……振られてるって告白  
してるんだと言うのが割りとショックだった。と言うか、夏子さんっ  
て前の世界では名の字も無かったわけでどんな人物か想像もつかな  
い

「お見舞いに蛍がついてきてくれるなら俺も安心だし、よろしくな」

「……ええ。大丈夫よ」

無理矢理でもついていくつもりだったが、横島には怪我をしている  
幼馴染をお見舞いするって言う気持ちしか無さそうなので、心配する



必要は無いだろう。仮に夏子さんがまだ横島を好きだったとしても、私が付き添えば諦めてくれると思う

「ふーん、まあ私は良いわ。留守番してるし」

タマモは興味が無くなったとらしく、フアツション雑誌に視線を向けている。私はどうしようかなと思いきキッチンにシズクに

「何か手伝う？」

昼食の準備をしているシズクに手伝おうか？と尋ねるとシズクはキッチンからリビングを見つめ

「……いや、良い。新しい鍋を買って来たから、それを試したいから」となると手伝いが邪魔になるかもしれないわね。それなら横島と話でもしてましようか

「なー蚩。まだ外出駄目なのか？」

「んー私も言われても、外出禁止を出してるのはGS協会とオカルトGメンだし」

美神さんじゃなかったの？と驚いている横島。実際問題外出禁止を出しているのは横島のダメージと、そしてまだ東京に隠れているかも知れない悪魔を危惧している西条さんと琉璃さんの指示だ

【まあ身体の調子も良くない、もう少しのんびりしておけ】

身体のダメージと霊体のダメージは深刻だ、横島はかなり無茶をするので休む時は長く休ませないとダメージの積み重ねになるから

「もう少ししたらOKでるんじゃない？その前にナイチンゲールさんの診察があると思うけど？」

「げえ。俺あの人苦手なんだよなあ」

悪い人では無いんだけど、あの殺してでも治療するという強引な姿勢は確かに怖い。でも医療に携わる人としては優秀なのよね

「まあ私も美神さんも一緒になるから大丈夫だと思うわよ、所で、ルキさんは？」

ルイさんが預けていったメイドさんの姿が無いので、どこにいるの？と尋ねると横島はあつと頷きながら、自身の近くに置いてあった急須にお茶を入れながら

「なんか知り合いがいるからって挨拶してくると、近くにマンショ

ンを借りるって言って朝早くから出て行ったよ」

のほほんと笑いながら湯飲みを差し出してくる横島。知り合い……聖奈さんか、それとも高城さんか……どっちにせよ神魔に会いに行ったと見て間違いのないわね

「今帰ったでござるー」

【主殿大漁ですよー♪】

シロと牛若丸が騒がしく帰ってくる。どたどたとリビングの扉を開く、そして2人が持つてるものを見て絶句した。ダンボールに紙袋の山、まるでバーゲン帰りのおばさんと言う感じだ

「ホームランを打ちまくって、色々貰って来たでござるー！」

【ただ2度と来るなと怒られましたわー！】

……なにしているのよと呆れはしたが、ジュースの缶やカップヌードルの箱。それにホットプレートとかもある、しかも全部バラバラの店の

シールが張ってある。目玉商品を軒並み搔つ攫われた店は泣いてるわね、絶対

「おー頑張って来たなあ。とりあえず押し入れに片付けといて、後で見えるから」

了解ですと返事を返し、荷物を運び出す2人を見送った横島はゆっくり振り返り

「なあ、蛍。あの2人をボーリングとかに連れていくの絶対駄目だと思っただ」

「そうね、止めておきましょう」

あの2人は余りにクラッシュヤー過ぎる。心から楽しんでるのは判るが、ある程度は自分の力をセーブすることを覚えて欲しい。多分ルールとか知らなくてもその身体能力でどうにでもなってしまうパターンだ

「それより蛍、俺の外出禁止が解除されたらどこか遊びに行こうぜ、バイクの免許も取ったし、ツーリングする約束だったし」

「うんーそうね、どこに行くかは考えておくわー♪」

私から横島を誘おうと思っていたのに、横島から誘われた事に私は

満面の笑みを浮かべながらそう返事を返す

(とりあえず急ぎましょう)

横島とツーリングする為に破損している横島のバイクを修理して、色を塗りなおしたりしないといけないわね。それに初心者横島でも安全に運転できるツーリングコースを考えないと

「あ、そうそう。これカオスのジーさんに預けておいて欲しいんだけどいい?」

「くえすの眼魂じゃない。どうしたの?」

「んー使えないって言うか、起動しないって言うか、良く判らないから分析して欲しいなって思っ」

「判ったわ。預かっておくわね」

横島が差し出した銀色の眼魂を受け取ったのだが、後にこれが私に激しい後悔をもたらす事になるのだった……

くカオス視点く

薄暗い研究室の中をモニターの明かりだけが照らし出す。モニターの前に座る長身の老人……ドクターカオスは顎を摩りながら

「恐ろしい技術力じゃな」

横島が回収してきたガープ陣営のモリアーティ教授が使っていたという武器……超過剰武装多目的棺桶ライヘンバツハ。これだけ内部に武器を仕込んでいて、尚且つこのサイズに纏め上げるとは……

「……ワシが作ったとしても、後一回りはサイズが大きくなるな」

重機関銃にロケットランチャー、霊力砲といった多様な小型兵器を内蔵しており、中に組み込まれている武装の重量やサイズを加味しても、ワシの技術ではとても作れる物では無い

「恐ろしいのはガープの技術力か」

霊能学や魔界工学だけではない。武器などの作成技術に、霊能学と魔界工学の技術まで組み合わせられて作られている。策謀だけではなく、こういう技術力の高さにも脅かされる

「……それに関してはこれもじゃが」

雪之丞と陰念が回収して来たと言う量産型レブナントの変身ツ

ル。残念なことに眼魂をセットするスロットと、中に装填されていた眼魂が砕け散ってる為使用する事は出来ないが、それでもこれにも十分な使い道があるだろう

(修理……出来るかのう?)

修理できれば戦力として使えるが、ワシの技術と優太郎の知識を合わせても、完全な形での修理が出来るかどうか……とりあえず今は保管しておくでしょう。いつかは使い道が出来るかもしれない

「さてと、問題はライヘンバツハか」

射撃武器とすれば規格外の攻撃力を持つが、やはりその巨大さと重量が運用する上での課題として立ち塞がる。マリアとテレサに試し撃ちをさせたが、その反動ゆえに使いこなす事が出来ないでいる。だが、これをそのまま破棄するのは余りにももったいない

「おう、アシユタロス。ちよつと良いか?」

魔法陣による通信でアシユタロスを呼ぶ

『ドクターカオス?どうしました?』

「おう、モリアーティが横島に託したって言う武器。あれはそのまま使うには余りに厳しくて、中身は分析したからいくつか機能をオミットしてマリアとかの武器にする予定じゃが、オリジナルの使い道が無い」

盗聴器や魔法的な仕掛けが無いのは確認している。だがこのままでは無用の長物になる、だから

「これを横島のバイクに組み込まないか?」

『詳しく聞きましょう』

これだから学者や研究者と言うのは話がしやすい。このライヘンバツハは魔界でも稀少な貴金属で形成されている、横島のバイクの免許は中型二輪だが、GS免許の特例措置である程度の改造は許されている

「変身した時に武器として使用できるバイクにしてしまえばいいと考えておるんじゃないか」

『……変形機能を加えて、姿勢サポートとかにするってことですね?』  
「その通りじゃ」

人間で使用出来ないのなら使えるように改造してしまえば良い、どうせ横島のバイクが故障しているのならなお好都合。この棺桶の形状を削り、フレームにしてしまえばいい

『後日取りに行きます。設計図を引いて、蛍に話を通しておきます』  
「うむ。頼んだ」

横島の変身した姿は強いが、些か射撃能力に劣る。バイクを武器と兼用に改造してしまうのは我ながら良いアイデアだと思う

「カオスー、チビノブが尋ねて来てるぞー？」

「うん？通してくれて良いぞ」

そう言えばチビノブに何か作ってやると約束しておったな。テレサに通して良いぞと声を掛けると研究室の扉が開きチビノブが入ってくる

【のー！】

手を上げるのでそれが挨拶だと判断して、手を上げ返す。するとチビノブは満足げに笑いながら近寄ってくる

【ノノー♪のーぶー！】

「うん？これか？」

頭の上に乗せている箱を手渡してくる。それはTVなどで放映されている安い特撮ヒーロー物の玩具……

【ノーブー！ノーブー！】

箱を指差して、自分を指差す。箱の側面を見ると3つのロボと主役のフュギアが合体し、バラバラの形態に変化し、最終的には3対のユニットと合体して超巨大ロボになると言う感じの説明が書かれていた

「これを作って欲しいのか？」

【フツ♪】

なんとまあ……いや、まあ不可能ではない。人間サイズなら難しいが、30cmほどの小人用ならそう難しくも無い

「良かろう。これを作ろう」

ノブー♪と嬉しそうに踊るチビノブ。ワシの予想ではそろそろシズモ姫の事件が起きる筈。あの植物に対応し、除草に特化したロボを

作ってしまったえば良いだろう。嬉しそうに踊るチビノブをみながら、箱の蓋を開けてどんな物か把握する事にするのだった……

↳西条視点↳

僕は額によった皺を揉み解しながら、もう1度頼むと口にした。

【給金だ！私に給金をくれ！マイボーイに服を買うんだヨツ！】

聞き違いじゃなかったんだ……マイボーイ。横島君の事かな？と遠い目で思いながらも、教授は良く頑張ってくれているので給料を払うのは吝かでは無い。財布を取り出して

「すまないが、君が給料を要求するとは思ってなかった。計算をするので、とりあえずこれで我慢してくれ」

15万でとりあえず今は勘弁して欲しいと言って手渡す、3ヶ月。殆ど休み無しで働いてくれているので、そこから計算するからまずはこれでと

【ありがとう！マイボーイの服のセンスが駄目すぎるからネ！楽しくなるヨ！おじいちゃんは今行くぞお!!】

お爺ちゃん……まあ本人が楽しいのなら良いかと思って見送る

「ごめんね、何か騒がしくて」

「ううん、別に良いけど……ずいぶんと横島君を気に入ってるみたいで」

令子ちゃんが苦笑する。マイボーイと呼んで、横島君の為に給料を求める。普通に見て驚くな

「西条さん。横島君の事ですけれど、オカルトGメンは……どうするつもりですか？」

「……そうだね、規則通りなら稀少な霊能の持ち主として国際オカルトGメン本部に報告するって言うのが制度だけ……」

稀少な霊能の持ち主は財産と言う事で国際オカルトGメンとしては保護と言う名の軟禁を強いる事がある。これは上層部のクズさが原因だが……

「僕個人として報告するつもりは無い、そんなことよりもまずやるべき事があるからね」

オカルトGメンの新入りと、GS協会の視察団が起こした犯罪に關しての起訴があるから……

「黙っていてくれるわけ？」

「黙る？ いやいや違うよ。忙し過ぎて資料がどこに行つたか判らなくなつてしまふのさ」

アタツシケースに横島君の資料を入れて鍵をかける。そして鍵をポケットに入れる

「無能が多いからね、どこにしまったか、これから判らなくなつてしまふのさ」

僕が肩を竦めると令子ちゃんはくすくすと笑う。判つていても表に出さない、出させない、それが僕の出来る横島君の守り方だ

「それとあんまり隠していると余計に怪しまれる。神代会長と話し合つて横島君を外に出した方が良いよ」

「うん、それは冥華おば様にも言われてるわ、ごめんね。西条さん、何回も何回も手間を取らせちゃつて」

そう笑つて出て行く令子ちゃんを見送る。手間……か、僕はそうは思つてないんだけどね

「……なににせよ、これからが正念場だ」

結界の中に満ちていた悪魔やゾンビ。それはブリュンヒルデ、ビュレトの兩名の活躍でその大半が駆逐された。だがそれではすまない、これだけ大規模な計画を推し進めておいて、あの塔の中にガープ達の幹部クラスの姿が無い。しかも途中で撤退したと言うライダー……今回の件は成功しても、失敗してもどうでも良い計画だったのでらう。だからこんなにもあつさりと手を引いた、まだ悪辣な一手が仕込まれている。そう見て間違いないだろう……まだ気を緩めることは出来ない。むしろこれからが大変だ、恐らくガープ達は文珠に覚醒した横島君を見ているだろうし、横島君がこれまで以上に狙われる事は必須だろう

「人間問題は六道と神代で大丈夫だ」

今までフリーの令子ちゃんが六道と神代の下に入ることを決断したのだ。それは名家2つを後盾にして、オカルトGメンや国際GS連

盟からのちよつかいを防ぐためだ。日本にいる以上、六道と神代の名は大きい。おいそれと手を出せる相手では無い、何時までも防げるとは思えないがこちらの準備が整うまでは間違いないく時間を稼ぐことが出来る。となると当面の問題は神魔の方になるだろう……

「大丈夫だ。護り切ってみせる」

そのために僕は権力を手にしたんだ。令子ちゃんも横島君も護り切ってみせる、僕が日本の支部を求めたのはそれが理由なのだから……もう2度と失わないと僕は僕自身に誓ったのだから……何を犠牲にしても護り切ってみせる。僕はそう心に強く誓い、オカルトGメンを後にする。ここからは国際GS連盟とオカルトGメンを相手にした政治戦だ

「西条君く遅かったわね」

「すいません。色々と立て込んでいたので」

「うんく別に良いけどねくそれじゃあ早速行きましょうか」

例え相容れない相手だったとしても手を組もう。それが令子ちゃんと横島君を護る事に繋がるのなら悪魔とだって手を組む。それが僕の覚悟であり決意なのだから……

リポート25 横島家の非日常 その5へ続く



## その5

リポート25 横島家の非日常 その5

くナイチンゲール視点く

午前中に診察に来た横島達のカルテを書き込む、ナイチンゲールの手が急に止る。それは横島の診察結果に入ったからだ

【美神、虫は健康体であり、霊体にも何の問題もありませんでしたが……】

横島の診察結果は霊能、そして医学の観点から見ても異常すぎた。常人ならば死んでいてもおかしくない霊力の消耗をしているのに、回復する術並外れた回復力。そして診察する度に別人と思うレベルで強くなっている筋肉……鍛えていると言うレベルでは片付けられない現象が横島に立て続けに起きていた

【……彼にはどんな秘密が隠されているのでしょうか】

横島のカルテは極秘にするようにと神魔から強く要請されている。人間相手には異常な措置とも言えるが、それが必要とされるほど横島には何か秘密が隠されているのかもしれない

【……】

医者としては心配で仕方ない、何時横島の身体に限界が訪れるかわからないからだ。今日は大丈夫でも明日は？明日は大丈夫でも1週間後は？と言う不安がどうしても離れない。しかし今は異常がないのでそれを伝えることも出来ない……そのもどかしさを感じながらカルテを書き終え、特殊な魔法陣が描かれた封筒に入れる。その一瞬で私の手の中にあつたカルテは消える、極秘なので最高指導者の元に届くように特別な便箋を何通も預かっている。最初は驚いたが、封筒が消えるそれにすらも慣れた物だ

「フローレンス婦長。特殊病棟の彼？いえ、彼女ですが病院を移動させたいのですが宜しいでしょうか？」

私の許可を取りに来た院長の言葉に少し考え込む。夏子と言う少女が命懸けで連れて来た子供は、脱がすことの出来ない奇妙な服に身

を包み、エメラルドのような緑の髪を足元まで伸ばした中性的な子供だった、色々と挑戦したが、服を脱がすことは叶わず。触診と点滴を与え特殊病棟に隔離していた彼を移動させると言う言葉に眉を吊り上げる

【実験台にでもするおつもりですか？】

「い、いえ！違います。彼を助けた少女も入院しているので、もし目を覚ました時に合わせた方が良いのではと思ったのです」

確かあの子と話をしたのは夏子と言う少女だけでしたね。今は魔力中毒で専門な病院に入院してるはず

【確かに精神上そちらの方が良いかもしれないですね。判りました、移動を許可します】

私の言葉に返事を返し出て行く院長を見送り、回診に向かおうとした時。扉が慌てて開かれ

「フローレンスさん、また言峰さんとポチさんが脱走をッ！」

【全く懲りない人たちですね。判りました、直ぐに向かいます】

着ていた白衣を脱ぎ、手袋を嵌めて診察室を飛び出す

「むう。早い、お前が遅いからだ」

「俺のせいにするな！お前がマーボーと言うのを食うまで待てと言うからだろう！」

仲間割れしている馬鹿2人へと駆け出す。即座にポチを蹴り飛ばす言峰、私は自身に向かって来たポチの首に腕を回す

「うっ……」

【処理は適切かつ素早く】

脳に障害を出さずにチョークスリーパーで意識を刈り取り、その場に横にさせ4階の窓を開けて外に飛び出そうとする言峰目掛け、懐から出した拳銃の引き金を引く

【殺菌！】

「殺菌ではなく死んでしまうぞ」

【ご心配なく、麻酔銃です】

この男の身体能力は異常だが、入院しているのに逃走しようとするのは認められない

「私には救いを待つ者がいるのだ」

【そうですか、私も患者を治すと言う使命があるのですよ】

互いの意見は平行線、これももう何度も繰り返している。言峰が拳を握り構えを取る

【安心してください。私は殺してでも貴方を治療します】

そして言峰VSナイチンゲールの99回目の戦闘が幕を開けたのだった……

「長老よ。何故ポチは学習せぬのか」

「仕方あるまい、この消毒薬の匂いはきつすぎる。王手」

「ぬお……」

同じ病院に入院している長老とクロはポチも学習せぬなあと苦笑しながら、将棋を指しているのだった……なお言峰は52の診察技の1つフロレンスドライバーによって、アスファルトに叩きつけられ再び入院期間が延びることになるのだった……

〜横島視点〜

リビングから聞こえてくる手拍子に俺は溜息を吐きながら、どうしてこうなったんだろう？と思わずにはいられなかった。多分全ては教授が原因だと思う……

【ボーイッ！ たっだいまーッ!!】

めっちゃハイテンションで教授が両腕に紙袋を3つずつもち、首からも袋を下げていると言う異様な姿で帰って来たのだ。俺達も丁度ナイチンゲールさんの診察を終えて帰ってきた所だったのでタイミングが良かったと言えば良かったのだが、そのハイテンションには正直少し疲れた

「……なんだ、お前給金貰うって消えて今まで何してた？」

【それは勿論面白い物だヨ！大量サ】

服の紙袋が見えているので教授はお洒落なんだなあと思いながら、久しぶりの散歩でご満悦と言う感じのチビとうりぼーの足を拭う

「みむ♪」

「んぎゃ」

「判つてる判つてる。夕方も散歩に行こうな」

「やったーと言う感じではしゃぐチビとうりぼーに暴れるなど笑いながら濡れた布巾で足を拭う」

「あ。それでしたら夕方まで沖田さんも一緒に良いですか？」

「何かあつたらいけないのっていると便利だと思えますよ？」

「病院の帰りにバツタリ会い、そのまま着いて来た沖田ちゃんが散歩に同行しても良いですか？」と尋ねてきて、牛若丸が一緒だといざと言うとき安全ですよと言う

「俺は駄目って言わないよ。沖田ちゃんの好きにすれば良いと思うよ」

「じゃあ着いて行きますよ」

嬉しそうに笑う沖田ちゃんを見ながら、足を拭き終えたチビを部屋の中に放す。ちよこちよここと歩き回り、ボールを転がし始める姿を見て笑いながら今度はうりぼーの蹄を拭く

「夕方からも散歩でござるか！拙者もいくでござるよー、タマモも来るでござるか？」

「嫌よ、めんどくさい。それにシズクに家事を手伝えって怒られるからパス」

タマモは最近あんまり自堕落が過ぎるとシズクに昨日少しは家の事を手伝えって怒られてたっけと苦笑する

「教授。買い物するなどは言いませんけど、自分の服を買って来て横島の家置くのはどうかと思うんですけど」

蛭が全員の麦茶を入れてリビングに入ってくるなり教授をそう窘める。確かにそうだよなあ、教授の部屋は今シロとタマモの部屋になつてるし、教授の荷物置くところ無いよなあと思っていると、紙袋の中をあけていたノツブちゃんが

「いや、これ明らかにお前が着るには派手すぎるじやろ？」

その手に持っているのは赤系統の服で確かに教授みたいな、アラファイフが着るのは少し無理があるかなと言う服だった。

「そりゃそうさ、私が着る為買った服じゃないからネ」

自分で着ない服を何で買ってきたの？と言わんばかりの視線が教

授に向けられる中。教授はふふつと笑いながら

「これは私の味方をしてくれると言ったボーイへのプレゼントさ！受け取ってくれ」

「俺え!？」

まさかの俺へのプレゼントと言う言葉に絶叫する。そんなの考えでも見なかったし、俺は服なんてどうでも良いと思ってるのに……断ろうと思ったのだが、俺へのプレゼントと聞いて興味無さそうにしていたタマモがソファアールから跳ね起き

「へえ、良いセンスしてるわね。これとこれとこれ、横島着て見なさいよ」

「つきやー！着物！着物ですよ♪横島君、これを着て沖田さんと一緒に写真を取りましょう」

「……それならカメラが居るな、確か牛若丸とシロが貰って来た景品の中に使い捨てのカメラがあったはず」

「教授、いいセンスしてると思うけど、横島に金は似合わないわ」

興味無いと言う感じだった蛍達が紙袋を開けて、服の組み合わせを試す。これは逃げるべきなのか？どうするべきなのか？と俺は悩んだ

「ノブウー」

「あ、開けれないのか、今あけてやるな」

メロンパンの包みが開けれないらしく、メロンパンを差し出してくるチビノブからそれを受け取り封を開けてチビノブに返し、改めて逃げようとした時

【残念だがタイムアップのようだ】

心眼の残念そうな言葉が脳裏に響き、振り返ると満面の笑みを浮かべている蛍達の姿

「これとこれ着てみてくれる？きつと横島に似合うわ」

「えーセンス悪い。こっちの方が良いわ、こっち着てみなさいよ」

蛍とタマモが服を差し出してきて、ノツブちゃんはソファアールに腰掛けにまにま笑ってる。あ、もう逃げれないと悟り、俺はタマモと蛍が差し出してくる服を受け取るのだった……

（蛍視点）

服を買いに行くと言うと嫌がる横島。服装とかには興味が無いらしく、GジャンとGパン、それに羽織るジャケットが数着と自分の服には本当に興味の無い横島。顔立ちは悪くないのに、服が野暮っただい。買い物とかの時に色々と服を見せてみたが反応はよろしく無かったが、こうして教授が大量の服を買い込んだのは正直にGJと言わざるを得なかった

「んー良いわよ♪横島はやっぱりそういうのが似合うわ、あ、そうそう髪の毛も上げましょう」

「うええ……良いよ」

黒のジーンズに白のボーダー、そしてその上に黒のジャケットを着せ、首からペンダントを下げさせたタマモがワックスで髪の毛を上げようと言うが、横島は当然それを拒否する

（うーん。悪くないわね）

タマモの趣味がむき出しになっているが、案外横島にはワイルド系のファッションが似合うのかもしれない

「ふふふ、どうよー私のファッションセンスの方が横島に似合うわ」

挑発するタマモの言葉にむっとして紙袋の中の服を引っ張り出して、横島に似合う組み合わせを考える。確かに横島にはワイルド系の服装が似合うかもしれないが、それではタマモと被ってしまう

【ボーイ、これなんかどうかな？着て見ると良い】

「あの、まだ俺着替えるの？」

疲れた様子の横島に当たり前！と返事を返すと横島は教授に渡された服を受け取り廊下に出る

「……横島は服に余りに興味が無いからな、色々考えてやると良いかもしれない」

シズクは服の中にしゃがみ込みシャツとズボンを手にして、これは違うと呟いている

「服なんて着れば良いと思うと思うんでござるが」

【私もですね。主殿が嫌がるので服を着てますが、やはり軽量な方が

良い」

「『野生児コンビは黙っててっ!!』」

私達の叫びにビクリとする牛若丸とシロ。服に興味が無いので着替えている横島を見ているだけの2人には静かにしていると怒鳴る

「いや、案外横島は見目が良いから、見ていて面白いの」

【沖田さんは横島君には着物が似合うと思うんですけどねー】

横島を見て楽しんでる英霊2人を横目に横島の服を選んでいると、リビングの扉が開く

「きゃーっ！良いじゃない！横島格好良いわよっ！」

「本当ね。教授、あんたもいいセンスしてるわ」

その姿を見て思わず私は叫んでしまい、タマモは感心したように呟く

「ええーいやあ、こんなの俺全然にあわないって」

横島は恥ずかしそうにしているが、そんな事は全然ない。強いて言えば心眼が若干浮いているが、バンダナは横島のチャームポイントなのでそれがない横島は想像できない

【似合うだろう？少しばかりボーイには渋みが足りないが、十分に似合うはずだ。本当はネクタイが必要なんだがネ】

黒のスラックスとグレーのYシャツに黒のジャケットには金の刺繍で蝶のマークが入っており、渋い服装なのだがそれが逆に横島にあっている。ギャップ萌えでも言うのだろうか、胸をくすぐる初々しさがあってそれが良い

「みみー！」

「ぷぎゅうー！」

「ほら、チビもうりぼーも不満そうにしてるし、これは駄目」

腕でバツテンを作る横島。たぶんと言うか、確実にチビとうりぼーが不満なのは、胸ポケットが無いのでそこに入れれないと言う事を不満にしていると思う

「でもよくにあってると思うけどね」

【服に着られてるって感じが初々しくて良いんじゃないかの】

【私も可愛くて良いと思います】

可愛い、初々しいの言葉に横島の顔が真っ赤に染まり、ぷるぷると震え始める。どうも言い過ぎたみたいだ

「もう終わりー！これはもう着ない！」

恥ずかしいのか逃げる横島だが、その前にシズクがカメラのシャッターを押す

「シズク。それ現像したら頂戴」

「……構わない」

うん、あれは良い物だった。もう少し洗みが出てくればもっと似合うと思う、もしくは若いバーテンダー見習いとか言う設定でも似合いそうだ

「蛭が選んできたこういうのが、俺としては楽で良いけどなあ」

私が選んだのはグレーのワイドパンツと、白のインナー。そして薄青色のカーデイガンでお洒落と身軽さが両立する服装だ、そしてカーデイガンには胸ポケットもあるのでチビとりぼーも満足そうにしている

「ええー。もっとピツとしたのが良いわよ」

「やだよ、肩が凝って疲れるし」

どうもタマモの好みはぴっちりした服装のようだ。確かに格好良いが本人が嫌ってる服装を着せるのは可哀想だ

【横島君。そろそろ着物を着てくれませんか】

「え、あーうん。判った」

沖田さんのリクエストで着物を手にリビングを出て行く、着慣れない服なのでかなり苦戦したようだが着物を着込んで横島がリビングに入ってくる

【んー良く似合うじゃないですか！あ、シズクさん！写真、写真お願いしますー！】

沖田さんが横島の隣に立ってピースサインをする。その姿を見て、その発想は無かったと驚かされる。そうよ、横島の写真だけ撮るんじゃないくて、一緒に撮れば良い。普段お洒落をしない横島にどうやら舞い上がっていたようだ

【あ、シズクさん。現像したらくださいね】



「……ああ。構わない」

2 ショット写真なんてレアな物を手にする機会を逃すわけにはいかない。私は直ぐに立ち上がり、踵を返し逃げようとしていた横島の肩を掴んで止める

「横島。また着替えてくれる？一緒に写真を撮りましょう」

「記念にね」

「……拒否権は……」「あると思う？」「」ですよね……」

るるーつと悲しそうにしている横島だけど、私は見逃さなかつた。横島の顔が僅かに緩んでいることを、着替えるのはめんどくさいけど一緒に写真を撮れるのは嬉しいと顔が物語っていて、この日1日は着替えたり写真を撮ったりとわいわいと楽しい時間を過ごすのだった……なおくえすが色んな服装をした横島と蛍達の写真を見て、大量の服を買い込んで横島の家を襲撃すると言うハプニングが後日起きるわけなのだが……それはそれで平和な横島家の非日常なのであった……

リポート25 横島家の非日常 その6へ続く

## その6

リポート25 横島家の非日常 その6

くシロ視点く

せんせーが学校に行っている間は拙者達は暇を持て余すことになるでござる。せんせーがいれば何をしても面白いが、せんせーがいないと一気に退屈になっちゃってしまうからだ

「みーむ♪」

「ぴぎんー……」

せんせーが作った玩具で遊んでいるチビとうりぼーは机の上をうろうろと歩き回り、タマモは煎餅を齧りながら雑誌を見る。シズクは部屋の掃除と皆が思い思いに過ごしている

【じゃあ、ワシはメロンパンを買ってくるからのー。おい、シズク何かついでに買ってくるものはあるか?】

「……燃えるゴミの袋とお茶請けの煎餅」あ、それならこのサラダ味つて言うのお願い」じゃあサラダ味の煎餅を2袋、それとチビ達の林檎を買って来てくれ」

シズクががま口から出した2枚の千円を持って出て行くノツブ。

拙者も少し出かけるでござるか

「シズク、父上と長老のお見舞いに行ってくるでござる」

チビノブは朝から出かけているし、牛若丸は座禅を組んで瞑想している。拙者はTVとか雑誌を見るのは余り好きでは無いので、入院している父上のお見舞いに行くことにする

「……そうか、それなら持っていけ」

差し出された見舞いの品を買うお金を受け取り、拙者は病院へと走るのだった

「父上、長老ーポチ、お見舞いに来たでござるよー」

来る途中で買ったドッグフードの缶詰と花を抱えて3人の病室に入るなり、拙者は絶句した

「……死ーん」

「父上、何があったでござるか?」

ベッドに括り付けられ、口から魂が出ているポチの姿を見てそう尋ねる

「また脱走しようとしてな」

「納得でござる」

どうしてどう足掻いても勝てないと判っている相手に向かっているのか、そこが拙者には判らないでござるな。それに無理に監禁しているのは脱走しようとしているからでそうしなければ婦長殿は少し怖いだけで乱暴な方では無いのに

「おお、シロか。よく来たな」

長老がベッドから顔を出して笑う。かなり長期間入院しているが元氣そうで何よりでござる

「お見舞いでドッグフードを買って来たでござるよ」

買ってきたドッグフードを見せると父上も長老も嬉しそうに笑う。

ベッドの側の戸棚に袋ごと入れ椅子に腰掛ける

「シロ。横島殿に迷惑を掛けていないか？」

「そんなことしないでござるよ」

「いや、お前の事だ。散歩散歩と騒いでいる気がする」

……流石父上でござる。拙者の事をよく判っている、思わず黙り込むと父上は笑いながら

「良いか、横島殿の好意に甘えさせて貰っている以上迷惑を掛けるでないぞ」

「……はいでござる」

正直せんせーと一緒にいるのが楽しくて、はしやぎ過ぎていたと思うときもある。父上に諭されなければ気付かなかったと思う

「これからは気をつけるでござるよ」

「うむ、横島殿に迷惑を掛けぬように、そして修行に励むのだぞ」

父上と話をしていると長老が腰を摩りながらベッドから身体を起こし

「良いか？ 霊波刀を強化するには己だけではないぞ、回りの力をよく観察することじゃ」

回りの力を観察する？ 長老からの初めての助言……しかしその意

味が判らず、尋ね返そうとした時

【長老さん。リハビリの時間ですよ】

「む、これはかたじけない。婦長殿、良いか？霊波刀とは己のみの力で無いぞ」

婦長殿に連れられて行く長老の姿を見送り、ベッドに腰掛けている父上に尋ねてみる

「己のみの力にあらずつてどういう意味でござろう？」

「判らぬ、だが長老は若い時は卓越した霊波刀の使い手だったと聞く、何かの秘術のヒントなのかも知れん」

元気ならば私もと言う父上に無理をしないで欲しいとお願ひし、また尋ねてくると約束して病院を後にする

「回りの力を観察して、己だけでは無い……でござるか？」

正直長老の言葉の意味は理解出来ないが、何かのヒントなのだと思う。でもそれが何のヒントか判らず唸りながら帰る

「長老からそう助言されたでござるが、どう思うでござるか？」

昼飯の炒飯を食べながらシズクとノツブと牛若丸に意見を求める

「……人狼は自然と共にある一族だからな。何か独自の霊力への観点があるのかもしれないな」

【あれじゃないか？外の霊力を取り込むとか？】

【しかしですね。霊波刀に集束するとなると肥大してしまうのでは？】

うーむ。やっぱり理解出来ない話でござるか……もしかしたらと思ったでござるが

「……真面目に修行しろってことだろう」

【そうでしょうね。また私と一緒に遊びましょう】

【そうでござるな、よろしくするでござるよ】

牛若丸と修行をしていると面白いほどに自分が上達しているのが判る。だから遊んでいる間に何かヒントを掴めればと思う

「ただいまー。シロも散歩行くかー？」

「いくでござるよおーッ!!」

夕方にせんせーが帰宅し、相談しようと思ったのだが散歩に行くの

言葉に相談するべき内容を忘れたのだが、この時の長老の言葉が後に拙者とせんせーの危機を救うことになるとは夢にも思わないのだ……

〈蛍視点〉

お父さんとドクターカオスの3人と一緒に横島がモリアーティに託されたと言うライヘンバツハを観察する

「これをバイクの車体にするの？」

正直無謀と言うか正気？と言いたくなるアイデアだったが、お父さんもドクターカオスの満面の笑みを浮かべている

「調べてみたが魔界でも稀少なレアメタルだ。これを使えば耐久度は間違いなく最高の物になる」

「それにこれは魔力や霊力で形状変化する性質もある鉱物じゃ、今はこの姿に固定されているが、調整すれば変身した後の武器にもなる」

……凶面も引いてあると言われれば嫌だと突っぱねる事も出来ない。それに普通のバイクでは壊れる可能性が高ければそれを踏まえて改造する必要がある

「判ったわ。これも横島に必要ななら」

どうせフレームから見直す必要があるから、それならばもう改造に踏み切ってしまったおう。何よりも思い切りが大事だ

「武器とかはそのまま大丈夫なの？」

「それはやや難しいが、何とかする」

搭載されているミサイルの数や、霊波砲の数を調整してバイクに適応させるらしい。もう思いっきり武器だけど、GSナンバーなので違法ギリギリの改造でもOKだ

「私としては変形機能を持たせてフロートの機能も与えたいな」

「フロートかあ、案外便利かもしれないわね」

神魔を相手にするならば空中戦になる可能性が極めて高い。そうになると足場になると言うのはいいアイデアかもしれない

「耐久力は結界石を組み合わせて、バリア機能を与えてみるかの？」

「それいいかもしれないですね」

もうバイクと言うか完全に兵器になりつつあるが、まあ大丈夫でしょう。ヘルズエンジェルの件も考えると機動力と攻撃力、それと防御力の3つの要素を備える必要があるしね

「じゃあとりあえず車体に合わせてエンジン周りも強化して……後は横島君の身長に合わせて作っていく方向で」

お父さんがそうは言うが車体の方は図面を機械にセットすれば後は自動的に加工されるのを待つだけだし、やるとすれば普通の車体だから制限していたエンジンのリミッターを解除して、調整するくらいなんだけど

「さて、ここにこんなものがあるんじゃないか」

ドクターカオスがにやにやしながら出したのは何かの機械の図面が4つ。ちらりと流し見したのだが、直ぐに画面に顔を向ける

「4つの補助ユニットとそれ単体を武器として装備する……ほう、ほう……」

「面白いアイデアですね。チブノブ前提なのが気になりますけど」

図面を見るとチブノブと合体した姿があるのでチビノブ前提の補助ユニットと言うのが判る

「いやな、隕石落としのときにチビノブが手伝ってくれたから何か作ってやろうか？」と冗談で尋ねてみたんじゃないが、こういう風に作ってくれと持ってきた物でな」

ああ、それはドクターカオスが悪いわね。チビノブはノブノブしか言わないけどめっちゃくちや賢いから

「でも面白そうじゃないですか、バイクの車体が完成するまでこっちの作業をしましょう」

「そうね」

でもとても面白そうと思ったのは嘘ではない。しかもチビノブの頼みと言う事は私達の暴走と言うわけでは無いので、実戦級の装備にしてあげて見せよう

「あ、そう言えば、携帯の量産は？」

横島の持つてるトカゲデンワ。あれの変形とAIをオミットして量産するって話を思い出し、どうするの？と一応尋ねる

「『そんな物は後回しだ!』」

「だよ、私もそう思った!」

と言う訳で私達はチビノブ用の補助ユニットの開発に取り掛かるのだった……

「……横島。何してるのよ」

夕方に横島の家に向かい、リビングで信じられない物を見て思わず額を押さえながら尋ねる。横島はやっべつと言う顔をしているが、うりぼーは非常に楽しそうに『空中』を横島を乗せて浮遊している、足をまるで犬かきのように小刻みに動かして

「いえですね。陰陽術で風精霊を呼んで、その札をうりぼーに貼れば飛べるかなと……」

「ぶーぎゆう♪」

「みみーむ♪」

空を飛ぶ友達が増えて嬉しいのか楽しそうなチビにも軽い頭痛を覚える。スケベでなくなったら天然を獲得するとか想像しようも無いんだけど……

「思いつきでとんでもないことをするの止めてくれるかしら?」

どう考えたらその答えを導き出すのか、と言うかなんでシズクも心眼も止めてくれないのよ

「……横島の自主性は尊重するべきだと思う」

【被害も出そうに無いしな】

ストッパーがその役割を果たしていない事に溜息を吐く。だがこれも新しい陰陽術の使い方と考えればそう悪い物ではないかもしれない、

一時的な浮遊って言うのは上手く使えば移動にも防御にも併用出来るし

「とりあえず、今後は思いつきでやる前に1回相談してね」

「はい、よーし、うりぼー。着陸だ」

「ぴーぎー」

足と尻尾をぱたぱた動かして降下してくるうりぼー。その仕草は可愛らしいけど、巨大化して、ビーム撃って、増えるうりぼーが空ま

で飛ぶってどんな恐怖よと思いつながら、買ってきた夕食の材料を持ってキッチンに向かうのだった……

くベルゼブル視点く

ルキフグスマでもが東京に派遣された。しかも横島の世話役としてなのだが、当たり前と言えば当たり前だが横島の家は狭いので私の人間界の拠点に転がり込む事になるのは必然だ

「どうしてももう少し片付けられないのですか？」

「私は自分でどこに何があるか把握してる」

几帳面なルキフグスと私のやや大雑把な性格が衝突するのは必然だった。同僚ではあり、ルイ様の無茶振りに振り回される者同士はあるが、私生活にまでとやかく言われるのは面白くない

「横島の家の子供をやるんだらう、そっちに行つたらどうだ？」

「……シズクさんに来る時間を指定されているんですよ」

あのロリ蛇め……意外とアイツ細かいところを気にするんだよな。私は溜息を吐きながら立ち上がりながらジャケットを羽織る

「何処へ？」

「ブリュンヒルデの所だ。報告書を出してくる」

ジト目のルキフグスに書類を入れた封筒を見せて家を出る。それにルキフグスは散らかっているとは言いが、それはルイ様の件でこちらに送られてくる数多の文句の書類と言う事を思い知るがいいさ

「……こ、これは……これも、あれも……ああああ……すいませんでした、ベル」

そしてベルゼブルが部屋を後にし、部屋の掃除をしていたルキフグスがその書類を見てベルゼブルに謝罪する姿があった

「はい、閣下。お疲れ様でした」

「いや、良いさ。ブリュンヒルデもお疲れ様」

書類を手渡してお互いの労を労う。今回の隕石落としは神魔の体たらくと言われても仕方ない、だがまさかガープがあんな強攻撃にでると思っても見なかった

「魔界の方はどうなってる？」



「ガープ達を敗残者と侮っていた上層部が顔色を変えましたよ」

だが今思うと敢えて嫌がらせのようなごまごまとした戦法でこっちの油断を誘っていたとも言える。魔界有数の頭脳の持ち主だ、1を100にも1000にも見せることも出来れば、1000を10に見せ掛ける事も出来る。私達はそれに完全に騙されたと言う事だな……

(今この状況こそがガープが作ろうとしていたものか)

戦場、戦況、情勢を全て自分の思い通りにコントロールしたガープ。ここから打って来る手がガープの本命と言うことになるだろう

「アスモデウスよりもガープの動きに気をつけろ、特にビフロンスにな」

ガープに心酔しているビフロンスは単独で動くことはまず無い。仮に動いているとしたらそれはガープの戦略や作戦の下見に来ているか、死んだ神魔の遺体を回収してネクロマンシーする事にあると思う

「判りました。そちらも伝えておきます」

「また何かあれば来る。ではな」

お気をつけてと言うブリュンヒルデに手を振り街へ出る。気分転換に何かそう甘い物……

(鯛焼きでも買って行くか)

横島の顔を見に行くのもいいかもしれない。自宅療養中と聞いているし、ルキフグスは横島の家の手伝いを仕事と思っているので、聞いても教えてくれないしな

「美味しいのかわ」

「おー気に入ってくれたみたいで何よりです。リンさん」

聞こえてきた声に慌てて振り返ると、横島と見慣れない女……いや、違う神魔……古き神か！なんでそんな女と横島が一緒にいるのか一瞬理解出来なかった。

「おい、横島」

「あ。高城さん、どうも」

にへらと笑う横島。相変わらず何故こうも警戒心が無い、もう少し

疑うって事を覚えても良いんじゃないのか

「……こんにちわ」

「ああ。こんにちわ」

どうしたのかしら？と笑っていた女の目が鋭い物に変わる。見た目は笑っているが、目は全く笑っていない

「みむむ？」

「ぴぎゅっ」

「どうかしました？」

野性をどこかに置いてきた小動物2匹。多分それも全部横島のせいだろう

「高城雅と言う、よろしく」

「リンって呼んでくれればいいわ。よろしく」

お互いに差し出された手を握り潰さんと言わんばかりに力を込める。横島は不思議そうに首をかしげ、回りからは修羅場、修羅場というひそひそ声が聞こえてくるのが実に腹正しい。これは痴情の纏れなどでは無いのだから余計にそう思う

「とりあえず目立ってるから場所移動しない？」

この能天気馬鹿を殴りたい。私はお前を心配していると言うのに……だがこのまま目立つのも困るので横島の提案を受け入れることにし、鯛焼き屋を後にする

「で？どこで知り合ったんだ？」

「え？普通に？」

普通にやらない奴の普通なんて信用できるわけが無い。特に古き神々なんてどこかおかしいのが当たり前だから余計にそうだ。そもそも古き神と普通に出会うとか余計にありえない

「留学に来て場所を探してる時にあつたのよ」

それらしい理由だ、外見年齢も横島に近いしな……どうも私達が知らない間に横島は変な知り合いを増やしていそうだ。あの666の女帝のこともあるしな

「高城さんには海外旅行の時にあつたんだ」

【旅行じゃなくて海外の除霊だがな】

だんまりをしているからいらないと思っただが心眼もいるのか、心眼が古き神と気付いていないわけが無い……

(横島に利益があると言うことか)

過保護気味な連中が多いのだ。そんな相手が何も言わないと言う事は横島に利益があると言うこと……ならばここは様子見に徹するべきか

「見慣れない相手で些か警戒していたようだ。すまないな、こいつが余りに危機感が無いからな」

「それは判るのだわ」

えっ俺？って顔をしている馬鹿。心の中でお前だよと呟く、警戒心とかそういうのを何処に置いてきたと2時間くらい説教したい気分だよ

「ふふふ、本当に横島は面白いわね。でも邪魔みたいだし、またね」

楽しそうに笑い歩き去って行く古き神。またねと言う事は何度も出会っているという事だ、これは警戒するべき事案なのかもしれないな

「あ、高城さんも鯛焼き食べる？買ってあるけど」

「……貰おう」

がさごそと音を立てて紙袋を探る横島、差し出された鯛焼きを並んでベンチに座って齧る。横島への怒りもあるが、何とも心が和む瞬間だと思う

「あ、高城さん。お見舞いとか行く時ってどんなのが喜ばれるかな？」

「……急に聞くな。まあ相談くらいには乗ってやるが」

個人的な相談に乗ってほしいといわれるくらいには信用されていると言う事が、妙に嬉しく思い。私は横島の相談を聞く事にするのだった

……なお、そんなベルゼブルを魔界で見ているルイはにまにまど笑いながら

「もう一押しかな。ベルゼブルは面倒みがいいからなあ」

早くベルゼブルが自分の気持ちに気付かないかなあと邪悪な笑みを浮かべ、横島とベルゼブルを楽しそうに観察していたりする……

く美神視点く

一通り出現した悪魔やゾンビの処理は終わった所だけど、召喚された悪魔やゾンビは案外知性が高く行動力がある。特に仲間が消滅しているのを見てどこかに隠れている可能性はやはり捨てきれない

「美神さん。唐巢神父や三蔵様にも頼んでいるんですけど、1度全方位に散って東京中に再搜索をしたいんです」

私達のリハビリを兼ねた依頼と言うのは良く判る。特に1週間近く療養していたのだし、それに高密度の魔力の中に居たことで感覚が狂っている場合もある

「パトロールと悪魔とかを見つけたら除霊って事ね？」

依頼の確認のために瑠璃に尋ねるとその通りですと瑠璃は笑う。だけどその目の下には深い隈がありちゃんと眠っているのが心配になってくる

「私の方は大丈夫ですから、それに美神さん達には早く実戦の勘を取り戻して欲しいんです」

「まだ何かあるのね？」

その危機感のある顔を見れば何かあったのだと判る。うぬぼれる訳じゃないけれど、今東京で一番力のあるGS事務所と言えば私の事務所だと思う。白竜寺の面子も強いけれど、あくまで仮免集団なので引率するGSがいなければ除霊を引き受ける事が出来ない。唐巢先生は立場上自由には動けない、ブラドール伯爵やピート達の事があるから私達は彼らが何かを企んでいるとは思わないけれど、偏見持ちの間がそれだけ多いと言う事だ。くえすは単独での戦力は凄まじいけど、その性格上協調性は皆無。ただ横島君がいれば簡単に力を貸してくれる……エミと冥子の所は戦力的に追加がある訳でも無いが、その応用力を考えると東京に置いておきたい人員だ

「舞ちゃんを覚えていきますか？」

瑠璃の実妹で、遠縁の氷室神社に預けられているって言う話は勿論覚えてる。だから覚えてるわよ？と返事を返す

「……その近くでモノクルを嵌めた貴族風の男を見たって言う目撃情

報があるんです」

「ガープの人間の姿の可能性が高い、だけど日本で態々活動する意味があるのだろうか」

「舞ちゃんの話では神霊がいるそうなんです。その神霊にナナシを貰ったと……何回か捜索隊を出しているんですが、発見出来なかった……いえ、もうガープに捕らえられているのかもしれない、こうなったら直接見に行くしかないですから」

氷室神社の場所が今一判らないけど、どこかの山奥とは聞いています。琉璃は私達とくえすを連れてその周辺を調べてみたいと言う事だろう

「よろしくお願いしますね」

「了解、じゃあとりあえず今晚から横島君と蛍ちゃんを連れて行動するわ」

ブリュンヒルデとビュレトの両名が見てくれたとは言え、悪魔は狡猾でそして狡賢い。どこかに隠れていてもおかしくは無い、東京が出る前に万全を期しておきたいと言うのも判る。隕石落としの時期に動いていたと言う事はガープにとってあの計画は単なる隠れ蓑だったと言う事で

「まだまだ大きな臭いわね」

「本当ですよ……」

1つ終ったら、また次の事件が待ち構えている……気を休める事も出来ない

「いつまでこんな事が続くんですかね」

「……そうね」

いつまでも終わりの無い戦い……更にガープの悪辣な罠と策略。それは確実に私達を消耗させているのだった……

別件リポート てんりゅー日記

## 別件リポート

別件リポート てんりゅー日記

俺とイームの朝は早い、起床と同時に屋敷の掃除と木々の水やり。それが済めば今度は朝食の準備の手伝いや買い出しと日々を忙しく過ごしている。辛くはある、だがそれ以上の充実感を感じ日々を過ごしている。だが平穩無事に過ごせたのは1週間前までの話だ

「くうッ！」

「ぎいーやあああッ!!!」

「イームウウッ!!!」

白いもこもこに腕を噛まれたイームの絶叫。天竜姫様が横島から貰ったという小熊(?)は天竜姫様といると大人しいが、とても凶暴だった。しかも俺とイームの掃除担当の庭に小屋が設置されたのだが、またこの熊の縄張り意識が凄い、掃除をしているだけでも襲ってくるレベルだ

「くうッ！」

「あ、兄貴、兄貴……て、手痛いんだなあ……」

噛まれた右手を押さえて泣いているイーム。大丈夫だお前の仇はこの俺が取って……

「くうッ! (ガブッ!!!)」

「ぐうあああああああッ!!!」

「あ、兄貴いいいいいいッ!!!」

容赦の無い頭への噛みつき。その凄まじい激痛と頭から吹き出る血……痛いと言うか、寒さを感じながら俺はその場に倒れ込むのだっ  
た

「あ、クマゴロー。イームとヤームに遊んでもらっていたの?」

「くーん♪」

天竜姫様に駆け寄り喉を鳴らすアホ熊。あの悪魔めと噛まれ、引きずりまわされ。ズタボロにされた状態で庭に突っ伏しながらも、輝く笑顔の天竜姫様に勿論ですと返事を返すことしか出来ないのだった

……

「イーム……明日からはちよつと……防護服にしよう」

「……わ、判ったんだなあ……」

普通の服では殺されてしまう。天竜姫様のペットなので俺とイームは反撃出来ない、反撃ではなく身を守るための装備を整える事を決めたのだった……

急によこしま達が帰ってしまい寂しそうにしていると小竜姫から聞いて、お母様が許可をくれたので私とクマゴローはお昼からの2時間妙神山で過ごしていた

「うーきゅー」

「くー」

妙神山の庭で楽しそうにはしゃいでいるクマゴローとモグラと一緒に庭を駆け回る。こうやって身体を動かしているのが凄く楽しい  
「うーきゅー」

「何?何をくれるの?」

妙神山で遊び始めて3日位でモグラが私に何かをくれるというので、一緒に修行場の近くの岩場に向かう

「くーくー」

クマゴローが岩を転がして楽しそうにしているのを見ると、モグラが小さな岩を私の前に転がしてくる

「うきゅー」

「岩をくれるの?」

岩を見て楽しそうに鳴くので岩をくれるの?と尋ねるとモグラは首を左右に振り、少し岩から離れて岩に爪を向ける

「うーきゅーきゅきゅー!!うーッ!!」

鋭い音を立てて爪が何度も何度も振るわれる。爪が振るわれる度に岩が豆腐のように削られていく

「うーきゅーうきゅきゅー」

楽しそうに尻尾を振り、爪が何度も何度も振るわれる。見ていると

それが何かの形になっていくのが判る

「くぐ。」

クマゴローもモグラがやっている事に興味津々で、岩を転がすのを止めてモグラのやっていることの観察を始める

「うーきゅー！」

最後にモグラがつんつと岩を突くと、岩に亀裂が走り細かく崩れ落ちていく。そして岩から削りだされたのは……

「よこしまー！」

「うきゅー！」

見事としか言いようの無いよこしまの岩の像だ。ふんすつとモグラが胸をそらすのも納得の仕上がりだと思う、頭で私の方に押し出してくるモグラにありがとうつと笑って持ち上げる

「うきゅー！」

「うん、これをくれたから竜氣のコントロールを教えてあげるね」

楽しそうに鳴いて跳ねるモグラに竜氣のコントロールを教えてあげる。竜氣の質と量的には既に人化を使えてもおかしくない、でも人化を使えないのは単純にモグラが竜氣のコントロールが苦手と言う事だ。私も人にあんまり物を教えるのは得意じゃないけど、プレゼントを貰ったので頑張つて教えてあげる事にする

「天竜姫様、お迎えが着てますよ」

「む、モグラ。続きはまた明日」

「うきゅー」

小竜姫が呼びに来たので、モグラにまた明日と声を掛けて、クマゴローによこしまの像を持たせて道場に足を向ける

「あの、天竜姫様。その石像は？」

「モグラが作ってくれた」

ちらちらと石像をみる小竜姫にモグラが作ってくれたと伝え、私は迎えに来た竜神族と共に妙神山を後にするのだった

「あ、あのーモグラちゃん。私にも横島さんの石像を是非ーっ」

「うきゅー」

「え。疲れるから嫌だ？そこを何とかお願いできないですか？」



なお天竜姫が帰ってから小竜姫がモグラに自分にもと頼み込んでいる姿があるのだが……モグラちゃんが小竜姫に横島の石像を作ったかは定かでは無いが……上機嫌な姿が目撃されたので、作ってもらえたのかもしれない

「そうそう、上手。もうちよつと」

「うーうー」

「くーんくーうー♪」

そして天竜姫に竜気のコントロールを教えて貰っているモグラちゃんが人化を習得する日も近い……？

リポート26 妖怪病院 その1へ続く

## リポート26 妖怪病院 その1

リポート26 妖怪病院 その1

〈銀一視点〉

魔力や霊力中毒専門の病院……「緋立(ひりゆう)」に入院している少女の部屋に訪れる青年の姿があった。扉をノックして、部屋に入るが寝ているはずの幼馴染の姿が無く、深く溜息を吐きながらお見舞いの品を置いて部屋を出る。どこにいるのかは判っているので、中庭へと足を向ける。この病院の入院患者は部屋から出ることが無いのに、何故自分の幼馴染はこんなに元気なのだど苦笑し、中庭のベンチに腰掛けている少女の頭を叩く

「こらあ！何で部屋におらんのだや！」

「いったあ！乙女の頭を叩くかふっ！ツ！」

そう唇を尖らせる幼馴染……夏子に苦笑しながら銀一はベンチの隣に腰掛ける

「忙しいスケジュールを見てお見舞いに来たんだぞ？部屋で待っててくれないと困る」

「んー、なんか胡散臭いわ。大阪弁で喋りよ」

ずけずけと言う夏子に銀一は嬉しそうに笑う。顔が良いからと言う事でアイドルになった、だがそれで同級生は急にきやーきやー言い出したので、近畿剛一ではなく、銀一と見てくれる夏子の存在は銀一にとつてとてもありがたかった

「へいへい、ほんで、なんで部屋におらんかったんや？」

見てる相手もいないと言う事で大阪弁で問う掛ける銀一に夏子は抱えていた雑誌を膝の上に広げる。それは霊能の特集雑誌だった

「いやあ、横っち随分と活躍してるみたいでなあ」

悲しいのか、嬉しいのか、複雑な感情が無い混ぜになっている夏子に銀一はあえて笑いながら話を続ける

「そりや、東京でも1、2を争うGSの弟子やからなあ、それに才能もあつたらしいし」

「……昔から横つちはちよつと不思議なところあつたしなあ」

懐かしむような言葉に銀一の脳裏にも昔の横島の姿が過ぎる。自分と一緒にスカート捲りなどをしていたが、突然変なところを見つめる時が合ったり、自分達には見えない何かを見ていると思つたこともある。それが今思えば、横島が幽霊とか精霊を見ていたのかと変な風に納得してしまつた

「おーそうそう、横つちに連絡はしておいたから、今度お見舞いに来てくれるかもな」

「マジで!? わー何年ぶりやろうねえ。と言うかなんで銀ちゃん横つちの電話番号知ってるん?」

やや鋭い視線で責める様な夏子に銀一は肩を竦めて苦笑する

「映画の撮影の時にちよちよいつとなあ」

「あー踊るGSって奴?」

そうそうと夏子と会話をする銀一の顔は楽しそうで、演じる必要が無く素でいられる時間を楽しんでいる様子だったが……

「なんかさ、これとか見ると、横つちモテモテやん?」

その言葉に銀一はこの雑誌を作つた編集部に殺意を覚えたのは言うまでも無い。その雑誌にはおキヌや、蛭と言う横島の周辺の美少女(幽霊もいるが)との写真とうりぼーを抱き抱えている横島の姿が写されていたから

「……昔からやけど、横つちはモテるなあ」

「そやな。でもそれは横つちの人柄やて」

そんなん判つてるよおと笑つた夏子は足をふつてベンチから立ち上がる

「どいいくん?」

「んー昨日さ、隣の病室に私と銀ちゃんが助けた子が入院してきてなあ。ちよつと部屋を覗いて見いへん?」

自分が怒られる原因となつた子供ではあるが、確かにどうなつてい

たか気になっていた銀一は夏子の誘いに頷き病院の中へと戻る

「こんにちわー」

「……おや、こんにちわ」

そして銀一と夏子を待っていたのは、透き通るような緑の髪を持った中性的な子供の姿だった。だが2人が驚いたのは、その子供が発した言葉だった

「……所で僕は誰で、ここはどこなのかな？何も思い出せないんだけど……君達は僕を知っているのかな？」

さらりと告げられた言葉は自分が記憶喪失だと告げる言葉で夏子と銀一は慌てて、医者を呼ぶ為に病室を飛び出すのだった……

↳横島視点↳

夏子と銀一が医者を呼びに走っている頃。横島はと言うと……川原での自主訓練を行っていた。

「ぶぎッー」

「ぐうっ!!」

雪之丞がうりぼーを持ち上げようとするが、持ち上げる事が出来ず。するりと脱出され、後ろ足で砂を掛けられて呻いていた

「はい、雪之丞の負けー」

今まで持ち上げようと奮闘していた雪之丞が力尽きたのを見て、俺は笑いながら雪之丞の負けを告げる。これでピート、雪之丞、陰念の3人がうりぼーに負けたことになる

「みーむ♪」

「ぶぎッー♪」

頑張ったとハイタッチを交しているチビとうりぼー。うりぼーとの勝負はシンプル、うりぼーを持ち上げてゴールまで運べるか？ただそれだけである。だが抱き抱えれば暴れるし、攻撃禁止なので俺達にとって不利なルールだ

「はあ……はあ……これ本当に出来るんですか？」

ピートが息を切らしながらそう尋ねてくるので、今度は俺がうりぼーとの勝負に挑むことになった。虫がそんな俺を見て苦笑してい

る

「しゃあ、行くぜー！」

「ぶぎーッ!!」

ダツシユで俺の足元を駆け抜けていこうとするうりぼーの胴体にしがみ付くが、うりぼーは俺を引き摺りながら疾走する

「ぬっぬうううー!!」

何とかそのダツシユをとめて持ち上げようとする。うりぼーが痛がるのでルール上は足は掴んでは駄目なので、掴む所は胴体だけだ。霊力をコントロールして、うりぼーの力に耐えながら何とかして持ち上げようとするが

「ぶーぎゅー」

「あ……ぶぎやあー！」

俺の腕から飛び出したうりぼーがそのままの勢いで俺の上に落ちてきて、俺はうりぼーに押し潰されてそのまま目を回してしまうのだった……

「お前も出来ねえじゃねえか」

「はは、何を言ってるんだ？俺は出来るなんて言っていないぜ？」

うりぼーの方が俺よりも力が強いわけだ。だから俺もトレーニン  
グなんだぞ？と言うと雪之丞と陰念が溜息を吐く

「私も結構止めてるんだけどねえ」

【トレーニングと言うか、遊んで貰ってると思ってるからな】

心眼の言うとおりである。俺はトレーニング、うりぼーは遊んで貰っていると思い大はしゃぎ、実に無駄の無い修行だと思っ

「それともチビの電気ショックでも避けるか？」

「「死ぬわッ!!」」

雪之丞達に怒鳴られるが、チビは素早くて色んな角度から攻撃してくるので攻撃を避けると言う修行には最適である

「おい、横島の頭の螺子吹っ飛んでるぞ？」

「何を言ってるのかしら？横島と一緒にいる上で一番大事なのは動揺しないこととろたえない事よ」

「……物凄く説得力がありますね」

まるで俺がどこかおかしいみたいなの口ぶりだな、俺は芝生の上に座り込みうりぼーをわしやわしやを撫でながら

「俺は普通だよ?」

雪之丞達の普通じゃないと言う突っ込みにうむうつと俺は唸る事しか出来ないのだった……

「それで横島さんは何時学校に復帰する予定なんですか?」

ピートが傷絆創膏を張りながら尋ねてくる。俺としてはもう復帰しても良いと思っっているんだけど

「美神さんと一緒に除霊の予定が入ってるからそれが一区切りついてからかなあ?なんか問題でもあった?」

テストとかそういうの?とピートに尋ねる。するとピートは遠い目をして

「最近僕達のクラスにアルテミス様がよく出沒しまして」

蛍の目から光が消える。アルテミスさんかあ……あの人もいろいろとぶっ飛んでるからなあ

「シルフィーと意気投合してるんです」

「判った。死んでも行かない」

シルフィーちゃんとアルテミスさんの組み合わせなんて最悪すぎるので、暫く学校に行かないと返事を返す。ピートが悲しそうな顔をしている、多分常識人だから苦しんでいるのだろうが、そのうち吹っ切れるようになるだろう

「じゃあ学校行かないなら白竜寺に顔を出せよ、修行に混ぜられるようにママお師匠様に頼んでおくぜ」

「……色々振り回されると思うがな」

「んー美神さんと蛍に相談してから返事するわ」

白竜寺に修行と言うのもありかもしれないが、俺の師匠は美神さんなので美神さんに許可を取ってからなと返事を返し、俺は蛍と一緒にランニングしながら家へと向かう

「ぶーぎー」

「みむうー」

チビとうりぼーも楽しそうに走り回っている。しかしあの小さい

身体でよくあんなスピードが出るなど感心する

「そうそう、今日も夜から除霊だからね？準備とか忘れないように」  
ガープの隕石落としによって出現した大量の悪魔とゾンビ。それらの討伐がまだ終ってないんだから、遊び半分の気持ちじゃ駄目よと言っただけに分かつてるよと返事を返す。

「じゃあまずは家に帰って休憩して、それから今日の除霊現場の打ち合わせよ。しっかり覚えてね？」

「…………ふあい…………」

ただ、除霊だけなら良いんだけど、建物での除霊なども多くて立地や部屋の数などを覚えなさいといけないのが辛い。でもこれも1人前のGSになるための修行だから頑張ろうと思う、美神さんや蛍の足を引っ張らないようにもつともつと強くなるうと思うのだった……

く美神視点く

私達の除霊の感覚を取り戻すという目的で1週間除霊漬けを行う予定だったが、3日目にして私は違和感を覚えて、くえすを助っ人に呼ぶことにした

「これが昨日と一昨日の除霊のパターンよ。悪いけど目を通してくれる？」

横島君がいないから不満そうなくえす。だがプロなので私情は殺してくれていると言うか、状況を掴んでないと横島君に適切なアドバイスを出さないわよ？と告げてやっと昨日と一昨日のパターンに目を通してくれた。本当に横島君の事を好きすぎるでしょう……

「…………感知されている霊力の割には悪霊の数も少ないですし、悪魔もいませんわね」

「うん。事前調査ではBくAマイナスくらいの結果が出てるんだけど、実際乗り込んでみるとCクラスなのよね」

最初は冥子も間違える事があるかと思ったが、それが2回も続けばありえないと思う。冥子の霊視はかなり正確だ、A判定を出しておいてCランクと言うのはありえない

「とりあえず今日も様子見をして見るけど、その結果次第では…………」

「調査範囲の拡大ですわね？」

私の言いたい事を先に言うくえすにその通りを返事を返す。今日も続けて除霊を行うが、やはり事前の情報ではA判定だ。これでまたC〜D級ならば、これは完全に異常事態だ。1度ならず2度、更に3回も冥子がミスをするとは思えない

「私の予想だと転移してるって考えているんだけどどう？」

中位の悪魔で転移能力持ちが補足される前に逃げている。私はそう考えている、恐らく空気が浄化され体力を回復させるつもりで霊脈で回復をしている。だから霊脈を伝わって近づいてくる私達の気配を感じ取って逃げているのではと考えている

「普通に考えればそうですが、それは相手が中位クラスだと言う前提でしょう？ 上位だと仮定すれば、異空間に逃げていると言う線もありますわ」

「最悪の予想過ぎないかしら？」

聖奈とカズマが1度悪魔を一掃してくれているから、そこまで上位の存在はいないと思いたいんだけど……

「結界作成能力に特化している悪魔の線も捨て切れないですから、今日の除霊の最中のデータ収集と、夜の間に関何か事件が起きていないか……そうですね。病院周辺を探ってみませんか？」

「火葬場とか墓地じゃなくて？」

死体の魂や自縛霊を取り込む方が効率が良い筈だ、それなのに病院周辺を上げるくえすにそう尋ね返す

「殺すよりも生かさず殺さずで霊力を吸収した方が悪魔にとっては良い魂ですわ」

「……OK、じゃあそっちの方向で行きましょうか」

生かさず殺さず、舐めるように魂を喰らう。そうなると大きな被害は出ないだろうけど、広く浅く被害が頻発している可能性がある

「確か、魔力中毒で入院してる人が多かったわね」

悪魔やゾンビに襲われた人達はナイチンゲールがいる病院にいるけど、魔力中毒では霊力に触れると回復が遅くなるので霊力とかとは隔絶された病院に入院しているはず



「とりあえず今日の除霊の結果次第って事でよろしく」

黒魔術の専門家で悪魔にも詳しいくえすに助っ人をよろしくと言うと、くえすは良いですわよと笑った後手帳を取り出して

「ではいくつか聞きたいんですけど、横島が好むお菓子と食事、後好きな本とかを教えてくださいます?」

……ごめんなさい横島君。貴方の情報でくえすの力を借りれるから、貴方の情報を伝えるわねと心の中で謝罪し、くえすが尋ねてくる内容を私の知る限り伝えるのだった……なおそれは夕方18時に事務所に来るまでずっと続いた

(おキヌちゃん居なくて良かったわね)

くえすが来るまでに横島君と蛭ちゃんに今日の予定を伝えて来たと頼んで、送り出して正解だった。ここまで横島君の事を根掘り葉掘り聞いている姿を見られてたら大変なことになっていたと思うから

「なんか美神さん疲れてますね?大丈夫ですか?」

「ちよつと調べ物があつてね。大変だったのよ」

蛭と横島君に心配されるほどに私はやつれていた様で、乾いた声で返事を返すのがやつとだ

「神宮寺さんも手伝ってくれるんですね。今日はよろしくお願いします」

横島君が丁寧挨拶するとくえすはそれを見てにいつと笑う、邪悪と言う感じの笑みなのにどうして笑顔で話を出来るのが割りと不思議だ

「美神殿、今日は拙者も頑張りますゆえ、よろしくお願いするでござる」

丁寧頭を下げるシロによろしくと返事を返す。初日にノツブとシズクとシロとタマモとフルメンバーだったが、突入すれば敵が少ないので、今日はシロだけが横島君について来ている

【お夜食と飲み物の準備も出来ました】

「OK、じゃあそろそろ出発しましょうか」

恐らく早朝までかかる仕事だ。除霊だけではなく、周囲の調査までする必要があるし

(夜食を用意して、くえすまで呼んでるって事は何か厄介なことってことですね?)

小声で尋ねてくる蛍ちゃんに頷く。今は確信が無いから話せないけど、今回も飛び切り厄介な山になりそうだ……横島君にちよつかいを掛けていくくえすを見て、面白く無さそうにしている蛍ちゃんを見て、除霊以外にもハードな時間になりそうと私は覚悟を決めるのだった……

だが美神達は知らない、美神達が調査に乗り出した頃。魔力中毒で入院している病院のありとあらゆる部屋から魔される声が響いていた事を……そして看病する立場である看護婦達も机に突っ伏し、青い顔で魘されていることを……

〔ケタケタケタケタケタツ!!!〕

そして嚴重にその姿を隠しながら、闇夜を舞う悪魔の姿がある事を美神達は知らないのだった……

リポート26 妖怪病院 その2へ続く

## その2

レポート26 妖怪病院 その2

〜夏子視点〜

暗い、どこまでも暗い道を私は歩いていった。一切の光が無い底なしの闇……私はその中を足を引き摺りながら歩んでいた

(臭い、気持ち悪い……ここは何処なの)

その通路は不快な匂いに満たされていて、足元はまるで泥の中に居るかのよう足に纏わりつき、足を下ろす度に足の裏に感じる何かを踏み潰すような感触も気持ち悪くてたまらない。それでも歩くことはやめない、じつとしていてはここから出る事なんて出来ないのだから

【出られない、出られない、ここからは出られない〜♪】

突如闇の中に響いた調子はずれな歌声。その気味の悪い声が闇の中にこだまし、不快感だけが広がっていく

「誰?どこにいるのッ!」

だが私は恐怖した。闇の中で突如聞こえてきた声が自分の耳元で聞こえたから、恐怖に顔を引き攣らせながら、手を振り回す。だけど、手には何も当たらない

【オイラはいるよ?近くにいるよ?】

「ひっ!」

ペロリと頬を舐められる感触がして、全身に鳥肌が立つ気味が悪いと思いつつも暗い通路を全力で駆け出す。走る事で生暖かい液体が跳ね、自分を汚して行くのが判る。それでも止れない、止る事が出来ない

【駄目だって、駄目だよ?そっちに行ったら死んじゃうよ?】

君の悪い声がかざつと耳の側を離れない。気持ち悪くて、恐ろしくて、前へ進む足を止める事が出来ない。そして走り続けて、やっと耳元から気持ち悪い声が遠ざかる……ほっとした瞬間。足元が消え、凄まじい浮遊感が襲ってくる。そして足元からあの不気味な声が再び

聞こえた

【いただきまーすッ！】

「つきやあああああッ!!」

聞こえた声に反射的に視線を下に向けると、巨大な歯と舌……私を飲み込もうとしている口が見えて、私はそう叫び声を上げるのだった……

「大丈夫？大丈夫かい？」

「え。あ……」

誰かの心配するような声と揺さぶられる感触に私は目を覚ました、ぼんやりとした頭で私を揺さぶっている誰かに視線を向けると、そこには隣の病室の記憶が無いと言う子供の姿

「どうして？」

「魔されてる声が聞こえたからかな？大丈夫？」

私の声が隣まで聞こえていたのかと思い、恥ずかしい気持ちになりながら身体を起こす

「ありがとう、起こしてくれて」

「別に良いよ。それに君が僕を助けてくれたって聞いてるしね」

にここにこと笑う少年？それとも少女？にありがとうと頭を下げる。

「私夏子って言うの、君は？」

「んー思い出せないんだよね……うーん……」

腕を組んで真剣な声で唸る。その仕草は中性的な容姿の事もあり、可愛らしいと思える物だけど、名前が無いって言うのは不便だと思いい。私も腕を組んで一緒に唸る

(あ……)

朝の日差しが髪に当たってその髪がエメラルドのように光る。

「エルってどう？」

「エル？……うん、それで良いかな。エルで行こう」

自分の名前を思い出すまでの仮の名前と言う事だから、ニツクネームみたいな感じで良いと思う。私はベッドから身体を起こして

「それじゃあエルちゃん。ご飯食べに行こうか？」

「うん、行こう」

身体自体は健康なので、出歩くことを許可されている。私がそのようなのだからきつとエルちゃんも同じだ、手を繋いで病室を出て思わず呻いた。何故か夢で見た闇の世界を思い出してしまったから  
「どうかした?」

「う、ううん、なんでもない。行こう」

私はエルちゃんの手を引いて食堂に向かったが、昨日までは感じなかったどこから見つめてくるような視線があるような気がしてしうがないのだった……

く琉璃視点く

美神さんとかえすが朝一番で尋ねてきた。今回の除霊の仕事も無事に完結したと聞いているけど、どうしてそんなに怖い顔をしているのか理解出来なかった。

「どうかしました?」

除霊の勘を取り戻すために連続除霊は頼んでいるけど、レポートは何か異常があれば提出で良いって言っている……昨日は特に強い霊力や魔力の反応も無いはず。色々考えてみたけど、どうしても美神さんとかえすが2人で尋ねてくる理由が判らなかった

「冥子の事前調査が3回連続で外れたわ」

「……マジですか?」

冥子さんの補助除霊による、調査的中率はほぼ100%だ。1回はずれたとしてもそれは差異のレベルであるはず、それが3回となると流石に異常だ。

「冥子さんには?」

「ここに来る前に伝えてきましたわ。冥子も信じられないと言ってましたけど、事実です」

そうよね。冥子さんは除霊は苦手な分、補助除霊による調査に力を入れていた。それが外れていると聞いて信じられないと思うのは当然の事だと思う。

「事前除霊の結果はどうだったんですか?」

「BくAくクラスって言う判定だったんだけど、除霊に踏み込んだら

C―Dランクって所ね」

美神さんが差し出してきたリポートに流しだが目を通す。写真に収められている悪霊のランクは確かにそう高くない、美神さんはC―と言ったけど、正直D＋判定でもおかしくない

「A判定となるとレギオンとか、ポルターガイストでも上位のレベルですよね」

「ええ、だから初日はシズクとかを連れて行っただけだね……余りに程度が低いってもう着いて来てくれないのよ」

それは仕方ないだろう、シズクの力を考えればそれこそ、A＋A A Aクラスまでの除霊までは楽勝だ。D判定の除霊に連れて行かなくては溜まった物じゃないだろう

「霊脈とかの調査はした？」

「しましたわ。でも霊脈らしいものは愚か、霊道すらありません」

うーん、それは正直かなり異常ね。確かに除霊に向かって存在する悪霊のレベルが低いって言うのはありえない話では無い、逆に悪霊などのレベルが高い場合も勿論ある訳だけど……それでもそれらの場合は霊道や霊脈を通じて移動しているって言うのが一般的だ。それも無いのに、冥子さんの調査が外れると言うのはありえない話だと思う。

「都内に何か強力な反応とか無かった？」

「いえ、それらしいものは無かったですけど……」

隕石落としての件で今も尚GS協会は警戒態勢をとっている。何か反応があれば、私の方から美神さんやくえすに連絡を取っている

「うーん、琉璃。西条さんと教授は？」

「あー今日本に居ませんよ？」

犯罪行為に走ったオカルトGメンと視察団の件で日本に居ない。設備に関しては使用許可を得てるけど、レーダーやセンサーの類は殆ど同レベルだし……

「よっぽど隠密能力の高い悪魔でしょうか？」

それだと悪霊の反応が弱くなっているのは、魂食いによるその悪魔の強化だと思うけど、都内でそんなことをすれば必ず痕跡が残る

「何かそれらしい報告って上がってない？病院とか」

「病院ですか？ちよつと待つてくださいね」

上げられている報告書などに目を通すが病院周辺でのそれらしい報告例は上がっていない。

「私の予想では病院関連だと思っっているんです。それでもないですか？」

くえすが自分の予想が外れているって事が信じられないのか、良く確認してくださいと言うけど、本当にそれらしい報告も反応も無いのよね。病院以外となると霊園とか墓地とか、火葬場とかそこらへんになるかしら？

「お邪魔するわねー♪」

「……やあ」

……なんか凄いの来たわ。一瞬思考が停止したのが良く判る、柩がゴモリーさんに抱き抱えられてやってきた。もうなんと言うか見た目のインパクトが凄い、それに柩の頭の上にゴモリー様の胸が乗っていて、柩が物凄く嫌そうにしている。

「凄い事になってますわね」

「黙れ言うな、凄い事になってるのは自分が良く判ってる」

そんな口調は駄目よーとゴモリーさんに頭をなでまわされ、柩の目付きが凄い事になってるわね。何時も死んだ目をしてるけど、今日のはまた凄い

「……病院。病院に気をつけるんだ、下手をすると大量に死者が出るよ」

「んー予言は終わったわねー、じゃあ面白い物に行きましょうねー♪」  
「待って！病院！病院で間違いじゃないツ!？」

ゴモリーさんに抱き抱えられたまま出て行こうとする柩にそう叫ぶ、柩は胸の中に抱き抱えられたまま予知の続きを口にする。

「深夜だ、夜の時間に気をつけるんだ！」

「ふっふーん♪可愛い服を着ましようねー」

「お前は少しは状況考えろーツ!!!」

楽しそうなゴモリーさんに対して、怒鳴りまくる柩。だけど貴重な

情報を柩はもたらしてくれた

「深夜帯の防犯カメラとかの映像とか、宿直の人の話を聞いて見ますね」

問題ないって報告を受けているけど、その報告自体が既に悪魔によつて歪められている可能性があるのだから

「そうね。柩が態々言いに来たって事は間違いないわ」

「となると入院患者が多いところから回って行きましょうか」

柩の未来予知の結果だ。それは間違いなく的中している、病院側も中々OKを出さないと思うけど、それでも調べる必要がある。

「美神さんとかえすだけじゃ厳しいですからね」

私の言葉に苦笑する2人。確かに2人のGSとしての腕は極めて高い、だけど良くない噂も多いので病院としても、書面を見て対応してくれるとは思えないしね。私の言葉に肩を竦める美神さんとかえすと共に調査の為にGS協会を後にする事にするのだった……

〈横島視点〉

銀ちゃんに教えてもらった夏子が入院している病院は「緋立病院」と言うギリギリ東京都内と言う感じの場所にある病院のようだ。虫に尋ねてみたが、どうも虫も知っているくらい有名な場所らしい。「霊力中毒とかの専門病棟ね。そこに入院してるって事は結構酷い状態なのかもしれないわね」

俺を不安に思わせたい訳じゃないけどと笑う。勿論そんな事は判りきっているんでそれを責めるような事はしない

「あんまり悪霊とか幽霊のみない場所ですよ。私も散歩の時に通りますけど」

「そうなの？あーじゃあもしかすると俺のランニングコースの近くだったりする？」

おキヌちゃんの散歩のコースとなるとおれのコースとダブっている場所が多い。住所だけだからあんまりわからないけど、もしかして俺の知ってる場所？と尋ねる



【結構近いと思いますよ？横島さんが土日に行く散歩コースの方です】

「そうそう、途中で川があつてそっちの方に行くでしょ？その逆方向に行くのよ」

蛍の補足もあつて場所が判つたけど、結構遠くに入院してるんだなと思つた。出来るだけ早くお見舞いに行こうと思つていたけど、ちよつと近い内にお見舞いに行くのは難しそうだ。昨日の除霊の事もあるが、3日連続冥子ちゃんが事前調査を外した。これはおかしいと美神さんも言つていて、今日も朝からちよつと調査に出るつて言つていたのもある。俺と蛍はシズクやノツブちゃんに意見を求めて見ることになっていた

「んー霊脈とか、それっぽいのないし……なんで悪霊とかのランクが下がるかなあ」

【共食いしたならレギオンとかいいますしね……何か変なにおいはありませんでした？】

「……それっぽい匂いも無いでござるしなあ」

昨日付き添つてくれたシロに牛若丸がそう尋ねるけど、シロは何も感じなかったと告げる。もちろん俺や蛍も調査してそれらしいものは無かつたんだよな……

「……おかしな話だな。12神将を用いているなら外れるとは思えんし」

【そうじゃよなあ……うーん】

シズクもノツブちゃんも思い当たる節は無いつて言つてるし……

霊脈、霊道がなければ、瞬間移動的なものは出来ないつて話だ。

「心眼も特に何も感じ無かつたよな？」

【ああ、何か感じたら私が言わない訳が無いだろう？】

だよな……心眼の索敵能力で感じ取れないとなると本当に原因は何なのだろうか？俺も蛍も冥子ちゃんの所で実習したから判るけど、冥子ちゃんが外すとは思えないし……本当に何なのだろうか？

「みむーん」

【「みむーん」】

【のーッ!のぶぶーッ!!】

チビとうりぼーをチビノブが追いかけている。チビは純粹にすばしっこくて捕まえる事が出来ず、うりぼーは分身と混じっているから対処できないようだ。それでも喧嘩せず遊んでいるので良かったと思う

「ぶぎゅ」

【ノーブウ!?】

捕まえたと思ったのに分身で手の中から消えるうりぼーに驚いている姿に思わず笑いかけて……あれ? って思った

「あのさ、凄い馬鹿みたいなんだけど1個気になった事聞いて良い?」  
そう言えば前から気になっていたと言えば気になっていたのだ、ただ何時間聞けば良いのかなと思うのと、可愛いから良いやと思っていたんだけどさ

「うりぼーって分身するじゃん?元に戻るとき、どうなるの?」

「……いや分身には意識は無いからね?」

「あれで?」

分身同士が鳴いて、跳ねてる姿を指差して尋ねる、どう見ても意識が無いようには見えない。それを見て螢はうーんっと唸り始め、シズクに助けを求める

「……分身にもよるが、高度な分身だと本体の見たものがフィードバックすることはある。私もそういう分身は使えない事は無い」

「じゃあさ、分身が悪霊を食べて、美神さん達が来る前に消えてるとかない?」

分身が食べて、んで本体に逃げ帰るとか無い? って尋ねると、螢達が目を見開く

「盲点過ぎたわね」

「と言うかあれよね。霊脈とかそういうアプローチするし」

【経験不足が役立つ事があるな】

【横島のひらめきって物凄いなッ!よしよし、ワシが褒めてやろう】  
褒められているのか貶されているのか今一判らないけど、俺の眩きかもしれないと今回の事件の突破口になるかもしれない事で

「よーし、うりぼー。おいでー」  
「ぶぎゅう♪」

俺にその閃きを与えてくれたうりぼーを抱き抱えて頭をなでまわす。俺には判らない難しい話を始めた蛭やシズク

「……分身と仮定して、となると反応は短時間で広範囲って可能性があるな」

「となると、どこを基点にしているかよね」

「霊脈の近くがやっぱり関係していると思うんだけど……」

「ここはどうですか？霊脈が近いですよ」

【馬鹿じゃなあ、霊脈は近いが、神社や教会が多い場所に拠点を構えると思うか？】

「よっほど馬鹿じゃないと、そんなところには構えないわよね」

「……ここはどうだ？霊脈はさほど近い訳じゃないが、周囲にはGS関係の施設は無いぞ？」

「割りと狙い目と言えば狙い目よね。病院って言う所が嫌らしいと思うわ」

「じゃあ、これで1度美神さんに報告するとして、仮にだけどどんな悪魔とかが居ると思う？」

凄いや専門的過ぎてさっぱり判らん、シロが逃げてきたので俺はうりぼーを1度フローリングの上に降ろして

「ドラ焼き食べる？」

お茶請けで買って来ているおやつを食べるか？とシロに訪ねる。

シロは座布団の上に寝転がりながら俺の方を見て

「貰うでぶぎゅうよー」

【あ、じゃあ私お茶入れますね♪】

「あ、それならチビとうりぼーに林檎もお願いして良い？」

とりあえず進展があったのだから、難しい事は蛭達に任せ俺達は少しだけ早いがる時のおやつにする事にするのだった……

く悪魔視点

ほんの僅かだが、今回の事件の手掛かりを掴み始めた横島達……し

かし横島達は知る由も無かったのだ、こうして手掛かりを集め、そしてどんな敵が今回の事件に潜んでいるのか？それをおぼろげながらに掴み始めた。だがそれは余りにも遅すぎたのだ

「う、ううー……」

「うわあ、う……ううう……」

病院の中に魘される声が響く、だがそれは入院患者だけの声だけでは無い。ナースステーション、宿直の医師、GS……この病院の中に居る全ての人間が魘され、その顔に大粒の汗を浮かべ、届かない助けを求める。苦悶の叫びが響く中を鼻歌を歌いながら歩む影

【おやおや、おやおやおやあー！】

「……うっ、ううう……」

魘されながらも病室から這い出て来た女性を見つめる。黒い影、助けを求めるように伸ばされる手を踏みつけ、指を鳴らす

「……ひっー」

魘され続けていた女性が目を覚まし、踏みつけられた腕の痛み顔に顔を歪めながら、自身の腕を踏みつけている主を見て恐怖に顔を歪める【イヒヒヒ……いただきまーすうううッ!!!!】

影の口は一瞬で女性の魂だけを飲み込み、抜け殻となった肉体だけが病院の通路へと残された。だが決して死んでいるわけではない、死んでいるとも、生きていとも言えない完全な植物で女性の身体はその場に放置された

【楽しいねえ〜楽しいねえ〜イヒヒ、ヒヒヒ〜】

一瞬だけ放たれた魔力の反応はGS協会、オカルトGメンのセンサーに感知されることは無かった。それこそがこの悪魔の最も賢い点だった、隕石落としの際に神魔の妨害を防ぐ為に用意された結果、そしてその中に召喚された悪魔はその大半がビュレトとブリュンヒルデが討伐された。だがこの悪魔は狡猾でそして自らの力と言う事を理解していた

【くっくっふひはははあッ!!】

まともに戦えば自分は死ぬ。それが判っていたから悪魔は暴れるのではなく、人間に憑依し避難する人間として病院の中へと逃げ込ん

だ。そしてその場所で殺さないように細心の注意を払い行動し、そして今は自らの技能を用いて狩りの瞬間だけ魔力を放出すると言う方法で魂喰いを繰り返し返していた。そして見つかることを考え、本体ではなく分身で動く事もまたこの悪魔の賢い所だった

【次はどこに行こうかなあ、ヒツヒツヒツ】

そして異形の悪魔は調子外れの歌を歌いながら、影の中へと消えていく。自らの弱さを知るからこそ、派手に立ち回らず、そして今まで生き延びてきた悪魔だが、この1回の魂喰いで我慢してきた欲求を抑える事が出来なかったのだ。悪魔は口から涎を垂らしながら影の中へと消えて行くのだった……

そして翌日10人近い植物状態が発見される事となり、自体は一気に動き出す。だがそれは悪魔を追い詰める事となり、更なる被害拡大を齎すのだった……

リポート26 妖怪病院 その3へ続く

## その3

レポート26 妖怪病院 その3

くくえす視点く

横島の思いつきと言う事で違いかもしれないという前置きはあったが、横島の話は決して間違いではないかもしれないと思った。

弱い分身をいくつも用意して、魂を吸収したら分身ごと回収……ですか」

「やっぱり違いかもしませんか？」

横島は不安そうですが、あながち間違いではない。霊力センサーなどに触れない程度の本当に弱い弱い分身をいくつも作る、そして殺さない程度に人間から魂を奪い力を蓄える……

(問題は何を媒介にしているかですね)

吸血ならば痕跡が残る、それが無いということは夢を媒介にした魂喰いの線が濃い……夢を媒介にした魂喰いとなると……

「ナイトメアでしょうか？」

「……それが一番可能性が濃いわね」

悪夢を見せて対象の魂を食らう悪魔。それがナイトメアですが……

「でもナイトメア対策ってどこもやっていますよね？」

蛍がそう呟く、そう。その通りなのだ、ナイトメアは有名な悪魔で対処法が確立している。今ではどこの病院もナイトメア避けの札や魔法陣を用意している

「ナイトメアの亜種って言う可能性もあるわね」

「あれだけの事件の後ですしね」

ガープの事件の後で東京だけではなく、日本中の霊力や神通力のバランスが崩れている。それに伴って、何かの変異が出た可能性は十分にありますわね……

「……一応調べてみたが、お前達の道具には感知できないレベルの極微量の魔力の残滓があった」

「私とシロの鼻でギリギリね」

シズクとタマモの言葉に横島の予想が限りなく正解に近いと言う事が判った。ただし問題は賢いナイトメアなのか、変異したナイトメアなのか……それともまったく異なる悪魔なのか……敵が絞り込めないって言うのが問題といえれば問題ですわね。ですが、弱い分身をいくつも呼び出して、霊力を感知したら本体の元へ逃げる。それによって自分を特定させないという方法を取っている……その可能性が浮かんだのは横島の柔軟な発想のおかげと言えるだろう。美神もそう思ったのか、横島を褒める言葉を口にする。

「よく思いついたわね、横島君」

正直私達ではこの発想には辿り着けなかっただろう。生き残りの魔族であると言う事を前提で考えていたから、センサーの類は強力な物を使っていた。それに枢の予知の事もあり、調べる方向を変える事を決めた。だがそれはより強力な魔力に反応する見鬼を使うつもりだったので、弱すぎる魔力はやはり感知出来なかっただろう

「美神、とりあえずもう一度搜索のやり直しですわね」

「そうね……今回は分かれて再調査をしましょうか」

病院の周りを調べ、シロやタマモの嗅覚を生かして……相手の行動パターンを探りだすしかないですわね。

「じゃあ……あ、ちよつと待って電話だわ」

出発の打ち合わせをしようとした所で電話が入る。もしかすると琉璃が何かを見つけたのかもしれないですわね

「それにしても、よく思いつきましたわね?」

「いやあ、うりぼーが増えて歩き回ってるのを見て思いついたんですよ」

うりぼー……ああ、あれは確かに増えて歩き回っているいろいろやりますわね。

「でも私もそんなの気にしたこと無かったしね」

「まあ私もですわね」

そう言う物と思い込んでいた訳だ。霊力があれば、それを元に分身だって出来る。霊能の知識があるから、深く考えることは無かったと

思う

「問題は十分靈力を蓄えているって所よね」

「……そうなるな、元々が対したことは無くてもどれだけ魂を蓄えているか判らない」

タマモとシズクの言う通りではある。今回は私達は完全に後手に回っている……下手に個別行動を取ればそれこそ、返り討ちにあう可能性もゼロではない

「分かれて調査はリスクがあるかもしれませんがね」

「そうよね……時間は掛かると思うけど、集団行動の方が良いかも知れないわね」

相手がかなりの量の靈力を蓄えていたら、それこそ下手に見つかればそのまま負けてしまう可能性もある。

「所でノツブや牛若丸はどうしたのですか？ついでにおキヌも」

いつも大体一緒にいる幽霊3人組はどうしたのですか？と尋ねる。

シロやチビ、うりぼーも一緒だ。だが……

「んにゆう……」

「みー」

「ぶぎゆるう……」

難しいことは判らないと言う事で集まって丸くなって眠っている。別にとんちんかんな事を言い出さないのなら、寝ていても構わないと思うが、子供組みと違って幽霊組みは除霊の前なら一緒にいてもおかしくないんですけど……

「ノツブちゃん達は周りを調べてくるって言っていましたよ。俺のダウジングに使えるような物があるかもしれないって」

横島のダウンジングですか……確かにそれも上手く行けば相手の居場所を特定出来るかもしれないですわね。

「でも正直期待は薄めなのよね」

「まあそうですわね」

横島が悪いわけではない。ただ、ここまで自分の痕跡を隠すことに特化した悪魔を見つける事が出来るか？という不安はある。それに



想定よりも悪魔が強い場合もあるので、最悪の場合ビュレト様に助けを求める事も必要かもしれない。そんなことを考えていると美神が通話を終えて、こちらを見る。その険しい顔を見て、胸騒ぎがした。「あちこちの病院で魂が食われてる人が見つかったわ」

それは私達、そしてGS協会の初動捜査が遅れた事によって被害者が出たという言葉なのだった……

く美神視点く

東京都内の病院の内、7箇所を失った事による植物状態の人間が発見された。琉璃の報告を聞いて現場検証に向かったのだが、そこには唐巢先生とピート、シルフィーちゃんの姿とエミとタイガーの姿があつた。

「美神君か、私達も話を聞いて飛んで来たんだが……少しばかり……いや、かなり厄介な事になっているみたいだ」

唐巢先生が渋い顔をしている。それだけ厄介な事になっていると言う事ね……

「蛍ちゃんとかえすは現場の調査を、シロとタマモは何か痕跡が無いか探ってみてくれる？横島君はシズク達と一緒に何でも良いから気になる点が無いか調べてみて」

病院内に悪魔がいるとは思っていない。仮にいたとしても、これだけのGSが集まっていれば既に撤退している物と考えてバラバラに調査を始める。蛍ちゃんとかえすは霊能の知識から、シロとタマモは人狼と妖狐の嗅覚、横島君の直感とシズクと心眼のフォローがあれば、私達では見つけられない何かを見つけられる可能性は十分にある。

「それなら、タイガー。オタクもついて行くわけ」

「了解ですジャー。横島さん、よろしくお願いするんじや」

話を聞いていたエミがタイガーに横島君に同行するように指示を出す。タイガーは精神感應能力持ちだから襲われた人の思念を探すって所ね……

「では先生、僕とシルフィーは病院内のナイトメア避けが機能してくるか調べてきます」

「すぐ戻りますね」

時間をかけている場合ではないので、分散して一気に情報収集を始める。少なくとも後4箇所は回らないといけないのだ、1箇所で時間を掛けることは出来ない

「私は詳しい話を聞いてないんだけど、唐巢先生とエミは何か聞いている？」

私よりも先に来ていたので、何か聞いてないか尋ねる。すると唐巢先生は手帳を出す、それだけでほかの病院も回っていると言うのが判った

「……まず魂喰いをされた被害者だけど、魂の尾が残ってるから犯人さえ倒せば助ける事が出来るかもしれない」

「だけどそれは時間の勝負なワケ」

魂が完全に消化されるまでが救出までのリミットって事ね。私の方も調べていた情報を出す

「横島君の質問で気付いたんだけど、どうも今回の悪魔は弱い分身を幾つも作って、人間とか悪霊を喰らって力を蓄えてるみたいなのよ」  
「なるほど、道理で痕跡が見つからないわけだ」

私だけではなく、唐巢先生達も琉璃から依頼を受けていたのだろう、かち合うことは無かったけど、同じ案件で調査を行っていたみたいだ

「なるほどね……つととなると痕跡発見の難易度は高いと……令子オタク、これからどこを見て回る予定なワケ？」

「とりあえず、ここと、こつち、ノツブちゃん達が先行してるから、そつちと合流したいし」

「判った、じゃあ私達はこつちと海のほうに向かう。小笠原君はどうする？」

「もつかい、霊視して回ってる冥子と合流してみるワケ」

とりあえずこの病院のあとに回る所の打ち合わせを済ませる。同じ所に行っても、時間の無駄になるだけだしね

「所で、ナイチンゲールのいる病院って被害者出てる？」

一応確認と言う事で尋ねてた。すると2人は苦笑しながら逆に尋

ねてきた、被害者が出ていると思う?と

「……思わないわね」

あのデストロイヤー婦長が気付かない訳が無いわね。判りきった質問をしてしまったと苦笑していると、蛭ちゃん達が戻ってきたので声を掛けて次の病院へと足を向けるのだった……

↳夏子視点↳

病院での味気ない夕食を終えて消灯時間となった。昨日の夢のこともあり、眠るのが怖いと思っても睡魔には勝てず。私は自分でも驚くほど早く眠りに落ちた……これで朝まで起きる事は無い。私はそう思っていたのだが、ふと目が覚めた

「あ……あれ?」

私の眠りはかなり深いほうだ。それも1度寝たら途中で起きる事がないほどに深い眠り……それなのに目が覚めた。トイレに起きた訳でもない、寝苦しかったわけでもないし、喉が渴いているわけでもない。それでも私は目が覚めたのだ……

「時間は……つと」

朝方かな?と思いついに視線を向ける、だけど時計の針は丁度頂点を指している……つまり深夜0時と言う事だ

「こんな時間に起きたの初めてだよ」

やっぱり眠る時に怖いと思っていたのが悪かったのかな……でも昨日の夢は夢なのにしっかりと覚えていて、無意識に眠るのを拒否したのかなと思えばベッドから身体を起こす……

「こういう時、個室って便利よね」

銀ちゃんがお見舞いで持って来てくれた横つちのGSとしての活動が書かれている週刊誌をベッドの脇の棚から取り出して、備え付けのライトの紐に手を伸ばす

「あれ?」

何度か引つ張るが電気がつかない。電球が切れたのかな?あ、でも私が入院してすぐ取り替えてくれた、まさか数日で電球が切れるなんておかしいよね……

「うーん……」

流石にここまで暗いと雑誌を見る所ではない。仕方ないけど、水でも飲んでベッドに横になろうと思えばベッドから立ち上がる

「……しかし、横つちがGSかあ……」

最年少記録は更新していないが、それでも通常の高校に通いながらと言うのでは初のGS免許持ちとなった幼馴染。アイドルになっていた銀ちゃんにも驚いたが、横つちはそれ以上だ。そんな事を考えながら、蛇口を捻りコップに水を注ぐ

「きやああツ!？」

コップに入ったのは、透明な水ではなく。まるで血のように赤い液体……いや、この血生臭さは間違いない血だ。手にしていたコップを投げ捨て、悲鳴を上げて後ずさる

「ま、まさか……これも夢?……いてツ……ゆ、夢じゃない……」

まさか昨日の夢の続き?と思ひ頬を抓る。だけど鈍い痛みが頬に広がり夢じゃないことを確信する……だがそれと同時に凄まじい絶望感が襲ってくる。夢ではない、だが夢で見た恐怖が襲ってくるのだ、霊能者でもなんでもない。ただの高校生である私に

「……ヒツ!？」

な、ナースコールと思ひ震える足に鞭を打って立ち上がり。再び尻餅をついた……何故ならば、そこには歪んだ笑みを浮かべた自分自身がこつちを見つめていたから、しかも少しずつこつちに近づいているのが判る

「あ、あかん! これはあかんわツ!!」

腰が抜けて立てない、正直漏らしていない自分を褒めてあげたいくらいだ。4つ這いで病室から出て、更に息を呑んだ

「え……え?……ここ何処や!？」

私がいいたのは最新施設の病院のはずだ。だが扉の外に出ると、そこは板張りの通路と木で出来た壁……どう見ても私がいいた病院ではない。

「ど、どうなってるんや……」

病室に引き返す……いや、鏡から私の偽者が出てきている。もし

戻って捕まったらどうなるのか判らない、だから病室に戻ることは出来ない

「なんで起きてもうたんや……」

これはもしかしたら起きてしまったから、訳の判らない世界に引きずり込まれたのだと思ひ、どうして夜中に起きてしまったのかと心底後悔する。

「はッ！ え、エルちゃん！」

隣の病室に入院しているエルちゃんの事を思い出し、殆ど這うようにして隣の病室の扉を掴んで開ける

「あれ？夏子どうかしたのかい？」

不思議そうに私を見つめているエルちゃん。無事で良かったと安堵し、このまま朝までエルちゃんの病室でエルちゃんと籠城しよう。そう思っていたんだけど、一瞬で綺麗な病室は板張りの廃墟のような病室へと変化した……それはここも安全な場所ではないという証だった

「これは……どうも大変なことになってるみたいだね」

「うん……」

一瞬だけ顔色を変えたが、それでもまたいつものような柔らかい笑みを浮かべるエルちゃん。その精神力というか、動じない心は正直すごいと思う

「ほら、夏子」

「あ、うん。ありがとう」

手を貸してくれたエルちゃんにありがとうと言ってやつと立ち上がる。1人ではないと言うのが気持ち的にも私に余裕をくれた

「と、とりあえず。他にこの病院にいる人を探そうか」

「……そうだね。ここにいても良い事が無さそうだ」

もしかしたら私はエルちゃんのように行き成りこの廃病院に移動した人がいるかもしれない。それに物凄く嫌な予感がするから、早くこの病院から脱出した方が良くと思う。それか病院にいるGSの人を見つけよう……

「怖いかもしれんけど、一緒にがんばろ」

「うん、頑張ろう」

私とエルちゃんは互いを励ましあい、ボロボロの病室を後にするのだった……

↳銀一視点↳

夏子とエルが廃病院と化した緋立病院を脱出するために動き出した頃。暗い山道を走る青年の姿があった……

「くそッ！どうなってんねんッ!!!化け物の仕業か！あーくそッ！GSはなにやつてるんやアッ!!!」

銀一は息を切らしながら悪態を付く。夕方に夏子の見舞いを終えてタクシーで帰っている途中に意識が途絶え、気が付いたら深夜。タクシーの運転手はいくら揺すつても目を覚まさない……そしてタクシーを出れば病院は赤いオーラに包まれている。とつさに俺は来た道を全力で引き返していた

「あ、あつたあッ!!」

山の中の公衆電話。そこに駆け込み、テレフォンカードを入れる。「出してくれ、出してくれ!」

俺はGS事務所なんて知らないの、横つちの自宅に電話を入れる。

『はい、横島ですけど?』

「横つちか!俺や!銀一やッ!」

「お?銀ちゃん?どうかした?夕方くらいに電話してくるなんて珍しくないか?」

夕方?腕時計を見ると時間は深夜0時を回っている、どう考えても夕方なんて言葉は出てこない時間だ

「横つち、俺はなんか今深夜の時間帯に閉じ込められてる見たいなんや」

『はっ。』

「悪い!上手く説明できんけど、病院が赤い光に包まれてて、俺は森の中に閉じ込められてるんやッ!」

受話器越しにばたばたと横つちが動き回る音がする

『具体的に教えてくれッ!』

「夏子の見舞いに来てたんや!それで帰ってる途中に意識が途絶えて、山の中にいたんだッ!」

俺だけではない、夏子も危ないと思うと自然と声が荒くなる。横つちは落ち着けと繰り返し言う、場所さえ判ればすぐに行けるからと叫ぶ

『緋立病院だったよな!』

「あ、ああ!そうや!なんかあれはやばいッ!」

俺には霊能なんて無い、だけどあそこが危険と言うのは判っている。夏子が危ない、そのことを横つちに訴えていたのだが、突如電話の音声が乱れ始める

『……銀……ない……』

「もしもし!もしもしッ!!何言うてるかわからへんでッ!」

突然横つちの声にノイズが走り、何を言っているのか判らなくなる。新品のテレフォンカードなので通話が出来ないなんて事はありえないのに……

『……だ……く……ろ……』

「何言うてるんや!?くそッ!切れてもうた……ッ!?なんやねんこれは!」

横つちとの通話が切れ、再び番号をプッシュしようとする、公衆電話は消え去り。俺は木の枝を握り締めていた……そのありえない現象に俺は混乱する。だがそれと同時にこれでこの辺りがとんでもないことになっていることを確信した

「今行くからなッ!!」

俺で何が出来るかなんて判らない、だけど夏子が危ないと知っていて止まっていることなど出来なくて……俺は山道を緋立病院に向かつて走り出すのだった……。

だが美神も横島達も想像だにしない事が「緋立病院」では起きていた。

【ひ、ひいい……来るな、来るなあ】

【おやおやおやあ？たかが人間から無様に逃げ回るのですかあ？】

ナイトメアの身体はボロボロで、そんなボロボロのナイトメアを追い回しているのは着物姿の貼り付けたような笑みを浮かべた若い男だった。

【人間は弱い、餌になれと言ったのはお前だ。だから拙僧が今度はお前に言いますよ、強い私の実験台になりなさい】

【ひ、ひいいい……ッーや、やだああッ!!げぼれおっああーっ!!】

暗闇から伸びた昆虫のようであり、しかし肉食動物のように引き締められた異形の前足が窓から外に逃げようとしていたナイトメアを胴体から貫いた。

【くく……くふふふう……ふうははははははあッ!!良いぞ、やっと理想的な素材を手に入れた、クフフ……ああ、楽しい、楽しいなあ……】

【あ、がぎ……い、いぎやあ……】

着物姿の狂ったように笑いながら血反吐を吐くナイトメアの頭を掴み、暗がりの中に中へと消えていくのだった……。

ナイトメアは呼び覚ましてはいけない者を引きずり出してしまった、元軍病院跡地である緋立病院を餌場に決めたとき、ナイトメアは逃れられない死の運命に囚われてしまっていたのだ。

だがそれに気付いた時はもう遅い、この病院に潜む悪意は目を覚まし、既に動き出していたのだから……。

リポート26 妖怪病院 その4へ続く



## その4

リポート26 妖怪病院 その4

↳夏子視点↳

エルちゃんと手を繋いで病院の通路を歩く。昨日までは明るい電灯だったのに、今は裸電球が何メートルか置きにぶら下がっているだけで常に薄暗く歩いただけで軋む板張りの廊下にも心臓が暴れだすのが判る。

「どこかで懐中電灯とかが見つかるかええな」

「……そうだね、暗いってだけで怖いからね」

正直に言うところエルちゃんと早い段階で合流出来てよかったと私は思った。もし1人だったら、パニックになって動く所じゃなかったと思うから……ただ自分よりも遥かに年下の……年下の……少年？……少女？

「エルちゃんって男の子？女の子？どっち？」

中性的過ぎて性別が判らないので、どっち？と問いかけるとエルちゃんは小さく笑い。

「男とか、女とかどうでも良いと思わないか？僕は僕、それで良い」

「……うん、そだねー」

なんか変な風にはぐらされた。でもこれは触れてはいけない話題のような気がする、にこやかな笑みを浮かべているのに、目が全く笑っていないので余計にそう思う。

「とりあえずエレベーターか階段をめざそっか？」

確か私とエルちゃんが入院していたのは病院の6階。外に出るにはまず階段かエレベーターを見つける必要がある、記憶の中の病院の通りは全く当てにならない、さつき通過した部屋は本来ならナースステーションのはずだったのだが、立てかけられた看板は「処置室」……凄まじく嫌な予感がして、中に入ることは無かったけど……

「そうだね、階段とかを探しながら懐中電灯とかが見つかるか良いね」

「うん、本当だね」

最悪蠟燭でもいいんだけどなあ……とりあえず自分で持ち歩ける光源が欲しいなと思いつながら通路を歩いていると、エルちゃんに手を強く引かれ、通路の影に身を潜める事になった。

「ちよつ、急にどしたん？」

「しっ！静かに」

エルちゃんが怖い顔をしている。何か大変な事なのかもしれないと思い、静かにしていると私達が進んでいた通路から重い足音を立てて、誰かが通過していく。人がいる？と思いつ顔を上げて、咄嗟に両手で口を塞いだ。そうでなければ叫んでしまいそうだったから……

『兵士の不死身化実験はどうだ？』

『良い調子らしいよお？』

けらけらと調子外れの笑い声が通路に響く、私達の前を通過して行ったのは軍服を纏った男性が2人……だが1人は右肩がちぎれ、左足がひざから下が存在していない。そしてもう1人は頭が半分吹き飛んでいる……どう見ても死んでいる。だから目の前で歩いている……その異常な光景。本当に叫ばなかった自分を褒めてあげたい……頭を抱え込んで暫くジツとしていると完全に人の気配は無くなった。

「危なかったね。見つかったらどうなっていたんだらうね」

「そ、そうだね……」

本当にその通りだ。見つかったらどうなっていたら、私とエルちゃんがどうなっていたか……想像するだけでも恐ろしい。

「あのさ、エルちゃん。もしかして記憶戻ってる？」

記憶喪失のはずなのに、妙にこの状況に慣れているような気がする。もしかして記憶が戻った？と尋ねてみる、だけどエルちゃんは首を左右に振って違うと口にした。

「全然思い出せてないよ……だけど、こんな状況には慣れてる気がするよ」

もしかするとエルちゃんはGSだったのかもしれない、倒れていたのもゾンビとかと戦って怪我をしたのかな？……でも見た所8歳くらいだし……ちよつとエルちゃんの経歴がわからないけど、今は頼も

しい味方だ。2人で協力してこの病院から脱出しよう、それか安全に籠城できる場所を見つけて朝までそこに隠れていようと思う。

「……あ。エルちゃん、ちよつと見てな」

通路の影から顔を出して、幽霊が居ないのを確認していると、先の通路が板張りの通路と見慣れた病院の姿を明暗を繰り返している。

「備蓄室って書いてあるね」

「何かあるかもしれない、行って見よう」

幸いにも板張りの通路と見慣れた病院の通路の姿が変わる感覚は長い、もし可能なら、このまま病院の中にいたいけど……もしかするとエルちゃんの部屋と同じように一瞬で廃病院に連れ込まれるかもしれない。だから廃病院に引きずり込まれる前提で、この病院から脱出する為の道具を手にすることだけが出来ればと思う。廃病院から、病院の通路に変わった瞬間に私はエルちゃんと共に備蓄室に飛び込んだ。

「……そうそう上手くは行かないね」

「うん、でも判ってた事と言えば、判ってた事やね」

やっと逃げ込めた備蓄室だけど、やっぱり外の通路と同じで病院と廃病院の姿が何度も何度もその姿を変えている。しかも見ている間にも病院と廃病院の姿が変わる間隔が短くなっているので、慌てて目的の品である。懐中電灯を探し始める。備蓄室だから緊急時に持ち出す道具がきつとあるに違いない。

「あ、これ最高やんツ!!」

何個目かのロッカーを開けた時に、思わずテンションがあがって叫んでしまった。オレンジ色の鞆に赤十字のついた重い鞆をロッカーから引きずり出す。

「それはそんなにいい物なのかい？」

不思議そうにしているエルちゃんに勿論と返事を返し、ロッカーの中に入っていた災害避難用キットの鞆を取り出す。机の上において中身を確認するとやはり捜し求めていた、懐中電灯を始め、軍手や長期保存水や乾パンと言った様々な道具が収められていて、思わず満面の笑みを浮かべる。今の訳の判らない状況に追い込まれている状況

で、しつかりとした救助の道具を手に来たと言うのは何よりも嬉しいし、少しだけ安心感が生まれる。

「少し休んでから移動して……」

そこまで言った所で、備蓄室が廃病院の姿へと変わった。板張りの壁と床、そしてどす黒い何かに染め上げられたベッド……思わず目を逸らしたのはしようがないことだと思う。

「休んで行く?」

「嫌やな、エルちゃんは?」

僕も嫌だよと笑うエルちゃん、誰が好き好んで明らかに血が染込んでいるベッドで休もうという物か、たださっきのソファーには座りたかったなあと心の中で呟く。

「じゃあ、また階段とかを探して行こうか?」

「いや、ちよつと待って、これはなんだろうか?」

エルちゃんが私に少し待ってくれと言って机に近づいた。何かを探しているそぶりを見せているので、バックから懐中電灯を2つ取り出す。本当は水が飲みたかったけど……500mlのペットボトルが2本しかない。補充出来る機会もないかも知れないので、これは大事に使用おうと思えばツグの中に戻す事にした。

「ほら、夏子。これを見てよ」

「何?地図でもあったんか?」

エルちゃんが何かを手を嬉しそうに笑うので、何があった?と尋ねながらその手の中の物を覗き込む。そこには機密と書かれていた書類の束があった、受け取って中身を確認すると穴抜けになっているが、いくつか情報を読み解く事が出来た。

「うげえ……ここ日本軍の基地の上に来てるんか」

正確には基地の跡地だが、やはり良い気分はしない。と言うか、普通に心霊スポットやないかいッ!私にこの病院を薦めたGS協会の人間をぶん殴りたくなるわ。しかもさっきの幽霊も言っていた不死身の兵士計画見たいな事も書いてあったけど……穴だらけで読むことが出来ない……と言うか正直読みたくないの、読めなくて良かったと思える。

「あ……地図があるね」

この階と次の階まで、その先は穴あきになっているけど、少なくともこの階を抜け出ることは出来そうだ。

「よし、じゃあ怖いけど……頑張つて行こか？」

「そうだね、2人ならきつと何とかなるよ」

私はエルちゃんと励まし合いながら、廃墟となった元備蓄室を後にして階段を探して歩き出すのだった……

↳横島視点↳

銀ちゃんからの電話で夏子が危ないと言うのと、緋立病院と言うことは判った。一応美神さん達に連絡を取ろうとしたが、今丁度捜査から帰って来た所だから電話も通じない。

(どうする……どうする)

銀ちゃんの事だ。夏子が危ないと知れば、自分が霊能者じゃないとしても夏子の元へ走るだろう。と言うか、俺が霊能者じゃないとしても、俺だつて夏子の所に走つただろう。

「せんせー、どうしたでござるか？」

「なんかあったの？」

シロとタママが心配そうに尋ねてくる。シズクやノツブちゃんも居るので事情を話したら……いや、でもそうなると危ないから美神さん達と連絡がつくまで動いたらいけないと言いつつも出さずかもしれない……だけど話さない訳にも行かないよな。

【相談だけはしておけ】

心眼が言葉短く俺に注意する。それでも駄目だと言わないことには感謝した。

「シズク達にも話してからにする」

俺の様子を見てただ事ではないと思つたのか、シロとタママもそれ以上話を聞こうとすることはなく、素直に俺と一緒にリビングに来る。

「ん？どうしたー？」

【何かありましたか？】

朝から頑張っていたノツブちゃんと牛若丸はソファアに寝転んでくつろぎモードだ。正直俺も電話がなければ、風呂に入って寝ようと思っていたので、本当に良いタイミングで銀ちゃんが電話を掛けてきてくれたと思う。

「シズク、緋立病院って所で何か起きてるらしい」

「……あそこか、奇妙な感じなのは覚えてる」

シズク達も妙な気配を感じると言っていた病院だ。病院が建つ前に何があったとかは判らないと美神さん達も言っていて、明日調べようという話だったのに、その前に銀ちゃんから大変なことになると連絡があった。せめてもう少し早ければと思う、これが昼間とかなら装備を整えて突入する事も出来たけど……それはもしもの話で、今正に危険な目にあっている旧友の為に俺は病院に行くことを決めた。

「銀ちゃんと夏子が危ないから、俺は行きたい」

美神さんと連絡がつくまで待つてられないとシズクに告げる。シズクは目を鋭くさせて睨むような表情になる……と思いきや、深く深くため息を吐いた。それは諦めの色が混じっているのは明らかだ、怒られると思ったが、シズクはそのまま牛若丸達に視線を向けた。

「……ノツブ、牛若丸。眼魂について行ってやれ、私はシロとタマモを連れて美神と合流してから向かう」

「良いのか?」

シズクのまさかの了承の言葉に驚きながら尋ねる。シズクはもう1度ため息を吐き

「……止めた所で無理にでも飛び出していくのなら、許可を出したほうが精神的にも少しはましだ」

「オツケー、横島。終わったらメロンパンじゃよ?」

「ご安心ください。私がお守りしますから」

眼魂の中に入った2人に領きGジャンの中に入れる。後精霊石や破魔札をリュックに入れて、チビもその中に入れる。

「みむう?」

何?と不思議そうにしているが、おとなしく鞆の中に納まるチビ。

足元によってきたうりぼーも抱きかかえる

「大変だと思うけどよろしくな?」

「ぶぎゅー」

緋立病院まではうりぼーに運んで貰うつもりだ。本当ならバイクを使えば安全だったんだけど、足が無いからうりぼーに頼むしかない。

「せんせー、拙者もいくでござるよ」

「私かシロがいたほうがいいんじゃない?」

ついていくというシロとタマモに困っていると、シズクがストップを掛けた。

「……異界になっていた時、においや結界を破れるお前達がいないと、私達が横島と合流できない。だから駄目だ」

シズクの説明に不満そうながらも頷くシロとタマモに見送られながら玄関を出ようとする、背中に軽い衝撃を感じた。

「ノーブウツ!!」

洗濯物を配り終えたチビノブが背中に抱きついてくる。降ろそうかと思ったが、シズクが連れて行けと言うので前のほうに抱きかかえる。

「ノーブツ!」

コアラのように抱きついたチビノブに苦笑し、うりぼーを道路の上に降ろして大きくなるように頼む

「ぶーぎゅー!」

俺が跨つても全然余裕な大きさになったうりぼーの上に跨り、俺達は緋立病院へと向かうのだった……

↳夏子視点↳

最初の備蓄室で見つけた地図に従い私とエルちゃんは下の階に続く階段を見つけた。見つけたのはいいんだけど……

「これ降りていったら地獄とかいわへん?」

「……どうだろうね……」

空中に浮かぶ骨で出来た階段……地獄への直通便と言われても驚

かない自信が私にはある。そんな自信があっても何にもならないけど……

「どうする？…引き返す？」

「いや、進もつか」

一応調べはしたけど、エレベーターもないし、非常階段も無い。怖いけど、この階段しかないなら、こっちに進むしかない。覚悟を決めて、階段を一步下りる。

「ふえッ!？」

「いやいや……とんでもないね」

階段を下りたはずなのに、気が付いたら上の階よりも酷い有様の廃墟の中に居た。自分の常識は通用しないと言うのは判っていたけど、異常すぎる現象に思わず間抜けな声が出る。エルちゃんも口調こそ冷静だけど、目が大きく開かれているし……

『今声がしたぞ?』

廊下の奥からくぐもった男の音がする。やばッ!行き成り上の階にいた軍人の幽霊に発見されてしまったようだ。

「と、とりあえず隠れようッ!」

エルちゃんの手を引いてどこかに隠れる所は無いかと探す。私の前の通路は大きな穴が空いていて、通れそうにないし、近くの扉は大きな木材で塞がれている。穴だらけでいかにもって感じの扉しかないが、そこに飛び込むと廃墟に相応しくないロツカーが並んだ部屋だった。

「と、とりあえずこの中に隠れよ」

ゴツゴツと重い足音が近づいているので、早く隠れないといけな。一番近いロツカーを開けてエルちゃんと一緒にその中に隠れる、運が良かったのか、中身が全然入ってなかった。

『居ないな』

『確かに声がしたんだけどな』

上にいた幽霊と同じで頭が無かったり、腕が無かったりする軍人が4人入ってきて、辺りをきよろきよろと見回す。暫くそうしていたと思うと構えていた銃やナイフを下ろした。



『侵入者か?』

『腐れアメ公かもしれんぞ』

『俺達の不死身の兵士計画がばれたのか?』

ひそひそと話す3人。あの人達はもう死んでいるのに、いつまでも自分達が死んだ事に気付かず、世界大戦の時間に囚われていると思うと少しだけ可哀想に思えた。

『侵入者が居るなら防衛装置を起動すればいい、総員時計の仕掛けを作動させろ』

『『了解ッ!!』』

腕章って言うのかな? それをつけた上官らしい幽霊の命令で軍人達が部屋の中の何かを取り出しを飛び出していく、足音が遠くなり気配を完全に感じなくなつたのでロッカーから出る。

『防衛装置って言ってたね』

エルちゃんが呟く、確かにそう言っていた。エルちゃんが見つけた機密文書の中身を確認するとよく判らない凶形がいくつも記録されていた。ただし、いくつかは穴抜けになつているようだけど……

『仕掛けを解かないと先に進めない……か』

5階には時計らしき絵柄が書かれている。その時計の針を動かしながら、前に進まないといけないとか本当に止めて欲しい。と言うかよく世界大戦の時期にそんな仕掛けを出来たなど正直感心する

『何かいじつてたよね』

もしかしたらこの部屋に最初の仕掛けがあるのかもしれない……そう思つて私達が隠れて部屋を調べると、金属製の小箱があつた。中身を確認すると、5つの溝があり、その中に1つだけ鍵らしき物が残されていた。

『これなんだろう? 果物?』

『僕にもそう見えるね? なんだろうか?』

その鍵には果物らしき絵が書かれていた。これが何かの仕掛けを解く鍵なのだろうか? でも少なくとも、私達が持っている機密と書かれた物には、それらしい絵は無い。多分虫食いになつている部分の仕掛けに使う鍵なのだろう。

「……とりあえず進も」

「うん、そうするしかないみたいだね」

最初は朝が来れば誰か助けに来てくれると思っていたけど、時間は全く動いていない。つまりこの廃墟の中では私達の時は止まったままなのだ。このまま隠れていても誰かが助けに来てくれるわけは無い、そしてジツとしていればあの兵隊の幽霊に見つかって殺される。それなら動くしかないだ。

「この近くの仕掛けの所に行つて見よう。そこで何か判るかも知れない」

エルちゃんの提案に頷き、部屋を出ようとしてちよつと待つてと呟く、どうしたんだい？と尋ねてくるエルちゃん。

「すぐく役立つ物を見つけたかもしれない」

椅子を動かして、その上に立つ。そして戸棚の上に置かれている「G」と掛かれた箱を抱えて降ろす。

「何それ？」

「わかんないけど、前に見たことがあつて」

確かどこの施設にも配置されている物、この悪霊などが闊歩する時代に最も必要な物……それがもしかしたらあるかもしれない。そう思つて箱の蓋を開ける……そこには異様な形の拳銃が1つ。それとカートリッジが二つ、ただし銃弾ではなく、特殊な加工が施された破魔札のカートリッジだ。

「除霊銃……これで何とかなるといいな」

民間人が悪霊等に襲われた時に使えるように簡略化された除霊銃……それが私とエルちゃんの生命線になる。私はガンベルトをパジャマの腰元に巻き、除霊銃をその中に収めた。正直使えるかどうかとか、狙っている所に撃てるかも心配だけど……幽霊と戦うにはこれしかない。少なくともナイフとかを使うよりかは効果があると思う。

「夏子、それは使えるの？」

「使えるけど、当たるかはわからへん」

「……そっか、でも武器があるのは嬉しいよね」

何とも言えない表情をするエルちゃんにその通りやと返事を返し、

懐中電灯を手に私達は廃墟の搜索を始めるのだった……

リポート26 妖怪病院 その5へ続く

## その5

リポート26 妖怪病院 その5

↳夏子視点↳

「走れえッ!!」

「わかってるよおおッ!!!」

廃病院の中に少女と子供の悲鳴にも似た怒声が重なる。2人の背後からは大量の兵隊の幽霊が追いかけて来てる

「もう嫌やあ!こんなん!!」

「夏子おツ!駄目だつて!走ってッ!!」

一般人である夏子と記憶喪失のエル、2人は互いに互いを励まし合っていたが……それも限界

「……よっしやあッ! 引けえッ!!」

「それえッ!!!」

【(一)ウボアアアアアアッ!!】(二)】

のように見えたが、どうもそれは演技だったらしく、紐を引かれて逆さになったバケツから精霊石の粉末が溶け込んだ水が亡霊兵士を直撃し、強制的に昇天させる。

「よし、作戦成功や」

「相手が馬鹿で良かったね」

ハイタツチをしながら笑いあう、正直ここまで上手くいくとは思ってなかった。向こうが私とエルちゃんを見つけると追いかけてくるのを利用したが、やっぱり頭とか、目が無いから生きてる私とかの気配で追いかけて来ていたのだろう。態と見つかって、ここまで誘導する作戦が成功して本当に良かった。

「でも、精霊石の粉末が無くなっちゃったね」

「しゃーないわ、2袋しかなかったし」

正直バケツ3つに粉末2つって大丈夫かな?と言う不安があったレベルだ。こうして一掃出来ただけでも2袋使った価値は十分にあると思う。廃病院の床の上に落ちている日本軍の制服が7つ……結

構引き付けてきたつもりだけど、7体除霊出来たのは素人ならば十分すぎるのではないだろうか？むしろこんな状況でここまで行動出来る私って実は凄くない？と自画自賛したくなるレベルだ。

「よっしゃ、じゃあこの兵隊さんが何か持ってなかったか探してみよか」

私とエルちゃんがこんな作戦に出る必要があったのは、この階は真ん中のホールを中心に大の字の様な通路になっているのだが、私とエルちゃんが階段から降りていた通路とホールの真ん中までは鍵が無かったのだが、後の4つの通路は全て鍵が掛かっていた。それらしい物を探してみたが、最初の部屋で見つけた果物の鍵しか見つからなかった。つまりあの部屋から出た幽霊が鍵を持っていると考え、こんな感じの作戦になってしまったのだ。血が滲んでる軍服に嫌だなあと思いつつながら、何かないかと想い丁寧に調べる。

「あ、あったよ」

「ホンマ？」

エルちゃんの見つけたつて言う声に振り返ると、私達が持っている果物の鍵と同じLの鍵がエルちゃんの手の中にあった。懐中電灯で照らすと波？それとも風かな？3本線が手元に刻まれているのが判る

「……なんでこんなわかりにくいんや」

「仕方ないんじゃないかな？とりあえず、これでどこかの扉を開けることを期待して、移動しよう？」

ここで留まっても先には進めない、まずは行動してみるしかないか……私はエルちゃん言葉に頷き、ゆっくりと移動を再開する。幽霊の話によれば、時計の仕掛けがあるらしい。まずはその仕掛けを見つけること、そしてこの階を自由に移動出来るようにする事が最優先だ。

「……これは違うみたいだね」

「そやな……刻まれてるマークは石かな？」

丸っこいマークが刻まれているのを確認して、穴だらけの地図に緊急キツトの中に入っていたボールペンでメモ書きをする

「隠れなかな」

エルちゃんを抱きかかえるようにして通路においてあるロッカーの中に隠れる。鉄の錆びた匂いがするが、こんな袋小路で幽霊と戦うなんてごめんなので、息を殺して幽霊が通過する事を祈る。

「この通路は大丈夫なようだな」

ガチャガチャと何かを動かす音がして、扉の開閉音が響く、そして再び扉が閉まり鍵がしめられる。ロッカーの隙間から確認すると、青い腕章をつけている幽霊の姿が見える。

「次は太陽の通路の確認だな、さてと海の鍵を持つてる奴はどこだったか」

ぶつぶつと呟きながら去っていく幽霊、しばらく息を殺して完全に気配が遠ざかったのを確認してからエルちゃんと一緒にロッカーを出る。

「どうもこれは波の鍵みたいだね」

「そうやね、太陽のマークは……左下の方の通路やったね」

風か波か悩んだが、これは波の鍵で良い様だ。しかも、太陽のマークの扉を開けるとまで教えてくれた。まだどうすればこの病院から脱出出来るかは判っていないが、とりあえず手持ちの鍵で開けられる鍵の場所も判った。少しでも早く脱出するために、私とエルちゃんは虫食いの地図に刻まれている太陽のマークがある扉目指して歩き出した。

「これほんまにどうなってるんかな？」

「僕に言われてもねえ……」

苦笑いしているエルちゃん、でも目の前の光景を見れば苦笑いもしたくなると思う。何故ならば、廃墟と言っても良い通路を進んで扉を開けたら、目の前に広がるのは最新の病院とほ言いがたいが、それでも板張りの綺麗な通路だったからだ。もうこの通路が普通じゃないって言うのは判っていたけど、もうありえないってレベルじゃないよね。これ……

「声？侵入者か？」

通路の奥からノイズ交じりの男の人の声が聞こえてくる。咄嗟に

通路の影に身を隠して、鞆の中から除霊銃を取り出す。

「エルちゃん、懐中電灯お願い」

エルちゃんにそう頼んで、銃と一緒に入っていた説明書を確認する。通常の銃とは異なり、反動は少なめらしいけどしっかりと命中しないと除霊の効果は期待出来ないそうだ。安全レバーをはずして、銃の上半分をスライドさせると銃弾が装填される

「……落ち着いていこう」

「うん。判ってるよ」

今までは隠れてたり、精霊石の粉末を使って来たけどそろそろこれを使ってみるしかない。これが一番除霊キットに数多く入っていたのだ、これを使いこなす事が私とエルちゃんの生存率に直結すると思う、心臓がバクバクと脈打つのが判る。こんなの普通に生活していたら絶対に使わない道具だ、しかも外せば死んでしまうかもしれない……とんでもない緊張感の中。私は刀を振り上げ、走ってくる軍人に向けて引き金を引いた

【ああああ……】

あつけない、こんな風に思っではいけないが私はそう思った。私の撃った除霊銃の銃弾は軍人の額を打ち抜き、一発で除霊した

「やるね、夏子」

「いやあ……まぐれやで?」

もう一回やれって言われても絶対出来ないという確信があったが、それでも今回はこれで切り抜ける事が出来た。私とエルちゃんは通路の上に落ちた軍人の服……ではなく、何故か落ちていた日誌と地図を拾い上げる。

「これ……日付が全然違うね」

「そうだね、どうなってるんやろ?」

私達の持っていた地図とは材質も、それに書かれている日付も私達の持っている地図よりも数ヶ月は先の日付になっている。もしかするとこの病院から脱出するヒントなのかもしれない

「とりあえず隠れよか」

「異議なし」

今の銃声であちこちから足音と怒声が響いてくる、流石に集団で襲い掛かれると勝てると思えない。私とエルちゃんは近くに見えた部屋の中に慌てて駆け込むのだった……

く美神視点く

シズク、タマモ、シロ、おキヌちゃんの4人が事務所に駆け込んできた。それに強烈な嫌な予感を感じた、それは毎度の事ながらも言えるが……

「……横島が緋立病院に向かった。横島の幼馴染が囚われているそうだが、止めはしたが……無理そうだから、ノツブと牛若丸とチビ達をつけて送り出した。早く、私達も合流を急いだ方が良い」

お願いだから止めてよ……いや、でも無理に止めて1人で横島君を向かわせてしまうリスクを考えればシズクは最善の手を打つたと言える。

「よ、よりによって……大当たりを何で引くかなあツ!」

「そうですねッ!!横島は何か呪われているんじゃないやありませんツ!」

今日の昼間の調査の結果を事務所で蛍ちゃんとかえすと一緒に調べ、一番怪しいと結論付けたのは緋立病院だ。しかもよりによって、そこをピンポイントで引き当てるとか、くえすの言葉じゃないけど、横島君が呪われているんじゃないかと思わずにはいられない

「おキヌちゃん!霊具を纏めてる部屋から1く3番を全部車に積み込んでッ!」

「は、はい!判りました!直ぐ持って来ますツ!」

対自縛霊除霊特化の霊具を用意してある霊具を持って来てくれと頼む、私達の慌しい雰囲気を見て、シロとタマモも顔色を変える

「何!?!そんなのその病院やばいの!?!」

「先生が危ないでござるか!?!」

説明してくれと言う2人に説明は後と怒鳴り、部屋の中に用意してある神通棍を投げつけ、上着を羽織る

【み、美神さん!準備できましたあッ!】

おキヌちゃんの言葉に返事を返すのではなく、階段を駆け下り駐車



場へと向かう。慌てて付いて来たシロとタマモ、それとシズクが乗り込んでからアクセルを思いっきり踏み込んで走り出す。後部座席から聞こえてくる悲鳴は半分無視する、今は時間がない。一刻も早く緋立病院に向かわなければ……

「時間から逆算すれば、もう横島は緋立病院に到着している頃ですね」

うりぼーに乗って行ったとなれば、もう横島君は間違いなく緋立病院に到着している頃だろう。時間的には40分ほどの遅れ、それを取り戻すのは一苦労だ。

「それで緋立病院になにがあるの!？」

「それだけ慌てる理由があるんでござるかッ!？」

シロとタマモの言葉に私もくえすも答えている余裕は無い、くえすは携帯電話で琉璃に電話しているのでバックミラー越しに蛍ちゃんを見つめる。私の意図を読み取って蛍ちゃんが緋立病院について説明を始めてくれた

「シロも覚えていると思うけど、最初に地下水路で除霊したでしょ？あの年代の日本の軍事基地は東京都内のあちこちにあったの」

東京は戦争時代はかなりの霊的力場に満ちた土地であり、その霊的力場を利用して霊力の様々な軍事転用が行われていたらしい。その1つが私達が見たあの霊的戦車だった、だが当時の軍上層部はそれだけでは納得しなかったのだ。

「霊力を無限に取り込むことで、不死身の人間を作る。それが当時の軍上層部の最終目的でその実験に使われていた軍病院の跡地が……」

「『緋立病院』」

蛍ちゃんの言葉を遮るようにシロ達が呟く、軍事基地は既に完全に潰され、それらしい痕跡は何一つ残っていない。だが、かつてそこに存在していた……それだけで全ては成立してしまうのだ。

「周囲の病院から精気を抜きとっていた悪魔は恐らく既に消滅しているか、病院と言う概念と一体化しているでしょうね」

アリスちゃんが連れ帰ったあのネズミのネクロマンサーと同じだ。周囲の軍事施設に残っていた怨念に利用され、そして用済みとして怨

念に取り込まれたか、一体化した。そして病院自体を異界にしている  
「とにかく急ぐわよッ!! 琉璃も応援を寄越してくれるはずだからッ  
!」

まず私達のやるべき事は横島君の回収もしくは合流。可能ならば  
異界を閉じる、無理ならば応援が来るまで耐える。とにかくまずは、  
横島君との合流を最優先、私はハンドルを握り締め、アクセルを強く  
踏み込む。

「美神ッ! す、少しやりすぎではあ!」

「酔うッ! これ酔うう……ッ!」

【ゆ、幽霊なのに気持ち悪いですう】

「あああああーッ!」

「死ぬうッ! これ死ぬでござるう!」

横滑りに信号無視、後部座席と助手席から聞こえてくる悲鳴は完全  
に無視し、私はひたすら車を走らせるのだった……

〜エル視点〜

夏子と共に駆け込んだ部屋の中で見つけた地図のすり合わせをす  
る。最初に持っていた地図と虫食いの地図、それらをすり合わせると  
果物のマークがある時計は運がいいのか、夏子と共にいる部屋の中  
にあった。

「えーっと、えーっと……、お、これやない?」

「それっぽいね、どれ僕が取ろうか」

夏子では背が高いし、身体が大きいので取れないと思い机の下に潜  
り込んで半透明の床の中に隠されている時計を引きずり出す

「大丈夫?」

心配そうな夏子に大丈夫と返事を返し、時計を机の上に置く。

「これで何か変わるといいんだけどなあ」

「そうだね」

最初から持っていた果物の鍵を時計に差し回す。抜こうとした  
んだけど、鍵は途中で折れてしまい抜けなくなっている。これでまた  
使うとか言い出したら僕は切れる自信がある

「お？」

僕と夏子の声が重なった。時計板が開き、そこから新しい鍵が出てきた。今度は……太陽の鍵のようだ

「……凄いいんどくさい仕掛けやね」

「そうだね」

鍵が欲しいだけなのに、なんでこんなに遠回りしないといけないんだろうね……2人で深く溜め息を吐きながら地図を開く。太陽の鍵……太陽の鍵……懐中電灯で隅々まで照らして、そして確認したけども……

「ないな」

「うん、ないね」

虫食いの部分も無いのに太陽の鍵のマークは無い、つまり今度の鍵は太陽ではないと言う事なのだろうか……2人でうーんと唸りながら地図を見る。残っているのは、「海」「島」「森」「車輪」みたいなマークだけど、どう考えても太陽とは繋がりがなさそうだし……

「よっしゃ、行こう」

「え？」

大丈夫？と尋ねると夏子はふふんと胸を張る。やや大きめの胸が目の前で揺れたが、特に何も感じない。

「太陽言うたら海やろツ!!」

物凄く自信満々で言うけど……僕は地図を指差して

「めちやくちや遠いよ？」

僕達のいるフロアから中央フロアに進んでそこから、更に森の鍵の先に海のマークがある。この距離で考えれば、間違いなく、辿り着く前に敵に遭遇すると思うんだけど……

「んでも行くしかないやろ？出来れば……幽霊には会いたくないけどなあ」

うん、誰も好き好んで幽霊に会いたいとは思わないと思う。思うんだけど……

【出て来い！貴様がここにいるのはわかっているんだぞ！】

【売国奴めツ！殺してくれる!!】

扉が物凄く叩かれている、幽霊なのに壁を通過してくるとか不思議な事はしてこないんだね。これで移動していて、後ろの壁から襲われるって事が無くなったって事で安堵したよ。

「エルちゃん、こっちゃん早くッー!」

机を動かして、通風孔によじ登っている夏子。実に行動的だね、机の上に乗ってジャンプして夏子の手を掴むと、夏子に通風孔の上に引き上げられる。埃まみれで、蜘蛛の巣だらけだけど、敵から逃げられたと思えば十分だ。

「それで夏子はこういうのになれてるのかい?」

「いや、昔こういうのが好きな友達がおつてな、一緒に遊んでる内に私も覚えたというか……覚えてしまったと言うか……まあそんな感じ!」

困ったように笑う夏子、その笑顔を見ると、一瞬脳裏に誰かの顔が過ぎったような気がする……

「どうかした?」

「ううん、なんでもない、急ごう!」

今は僕の記憶なんてどうでもいい、まずはこの病院から脱出すること、僕の事はその後でいい。全部終わって、安全になってから考えよう、僕が何者なのかと……おぼろげに見える悲しそうな真紅の瞳の持ち主が誰なのかって事はね……

く銀一視点く

乾いた音を立てて放たれた除霊銃の弾丸が幽霊の頭を打ち抜いて、成仏させる。俺は額から零れた汗を拭いて、大きく溜め息を吐く

「映画とは全然違うな!」

GSの映画で使ったこともある除霊銃だが、弾は入っておらず銃弾は合成で付け加えたから、本物を撃つたのはこれが初めてだ。

「エレベーターは使えない、病院に勤務してるGSもいない!」

必死に走って到着した緋立病院は静まり返っていた、1回の受付には斃されているナースと、泡を吹いて倒れているGSが3人。一応病室は覗いたが、入院患者も全員似たような物だ。

「……横っちはまだ到着しそうにないな!」

電話をして、ここまで来るのに30分。緋立病院は車で1時間くらいだ、美神さん達と合流してここに来るとしても、まだ30分近い時間が掛かるだろう

「……泣けるなあ」

除霊銃の使い方、簡易破魔札の使い方、それに精霊石の粉末の使い方とも知っている。ただ一番欲しかった結界札が無かったのが辛い「すみません、少し借ります」

倒れているGSが持っていた除霊銃のマガジンを3つ拝借して、ベルトの間にねじ込む。俺には霊力がないので、神通棍などは使えない……これが使えたら接近戦も出来るんだけど

「じゃあない、ない物ねだりをしては仕方ない」

どうせ使えないんだから無理して持っていていっても意味が無い、懐中電灯と除霊で使う装備一式が手に入っただけでも御の字だ。

「……いないな」

1階にも幽霊はいるが、それはぼんやりとした影のような幽霊だ。浮遊霊とかそんな感じの弱い霊だ、そんな相手に貴重な除霊銃の弾丸を使うわけには行かない。隠れながら階段を目指して進んでいく

(夏子の病室は5階やったな)

まずはなんとしても5階の夏子の部屋に行く、扉を開けて階段を登ろうとして絶句した。

「階段が無いッ!」

非常階段があるはずの場所にはコンクリートのような石壁。なんで階段がないのかと思うが、大声を出してしまった事で何かが近づいてくる気配がするので明かりを消して近くの部屋に隠れる。

(ここは更衣室か)

あちこちに白衣が吊るされているので、恐らく医者更衣室なのだろうと考える。もしかすると、絆創膏とかの簡単医療キットがあるかもしれない。搜索を開始する前に少しこの部屋を調べておいたほうがいいかもしれないな、そんな事を考えながら扉を少しだけ開けて通路を確認する

【異常はありませんでした!軍曹!】

「それならばいい、行くぞ」

そこに居たのは軍服を着た幽霊が2人、しかし腕が無かったり、首が無かったりとこうしてみるとかなりグロテスクな光景だ。

(……………あれは……………)

2人を観察していると、レントゲン室の扉が一瞬ぶれて、木の扉に変化した。そして幽霊はその木の扉の中に消えて行った……………

「異界だったっけ？」

強い幽霊か、悪魔がいると起きる現象。普通の建物なのに、奥行きがおかしかったり、へんな部屋が増えていたりするっていうあれだ。つまりこのままでは横つちは確実に俺達とは合流出来ない

「頼むぞ、横つち。気付いてくれよ」

病院の入り口にメモを貼り付けて、念のために受付ロビーにも同じメモを貼り付けてレントゲン室の扉を開く

「……………くそ、こええ……………」

目の前に広がったのはレントゲン室ではなく、薄暗い木で出来た通路。その恐ろしい光景に息を呑むが、それは夏子も同じだろう。ここでビビッて足踏みしてるんじやあまりに情けない

「じゃあ、行くぞおッ!!」

自分を鼓舞する為にそう叫び、俺は廃墟の通路を懐中電灯で照らし、ゆっくりと歩みだすのだった……………

なお銀一の希望である横島はと言うと

「はい、止まりなさい。なんで君は猪に乗って、道路を走っていたのかな？」

「えっと、えっとですね!あのこれ!俺GSです!仮免許ですけど!」  
「美神所霊事務所……………ちよつと待ちなさい、今GS協会と照会を取るから」

「あああー、急いでくださいッ!俺師匠に呼ばれてるんですからあッ!!!」

猪に乗って道路を疾走していたと言う事で、警察に捕まり足止めされていたりするのだった……………

リポート26 妖怪病院 その6へ続く

## その6

レポート26 妖怪病院 その6

〜夏子視点〜

海のマークがある扉の場所は非常に遠く、更に幽霊の数も桁違いに増えていた……当然ながら、出会う度に除霊しては、弾切れを起こすのは明白だったので、必然的に隠れながら先に進むことになる。安全を考慮して隠れながら進む事を選択したのだが、それが緋立病院の謎を解き明かすことになるんなんて夢にも思わなかった……ただし、それは絶対に知りたくない事実でもあったのだが……

【手足は繋いだ、これで動く、動くはずなんだ……何故動かぬ】

ぶつぶつと呟きながら、手を動かし続けるボロボロの白衣の医者。その手元には何も無いが、その呟いている言葉で何をしようとしているのかは判る

「……うつぶ……想像するだけで吐きそう」

「そうだね……でももうちょっと我慢しよう」

この部屋の外では兵士の幽霊がうろうろしている。だから後もう少しはこの部屋にいないといけなわけ……懐の除霊銃を手に取り、忍び足で医者のお霊の後ろに立って目を逸らしながら引き金を引く

【うがああああ……】

断末魔の悲鳴を上げて成仏する幽霊……その場にはこの廃病院には似つかわしくない金の懐中時計が落ちていた。

「結果オーライ？」

「まあそうなるんじゃないかな？」

隠れてるのに不気味だから除霊しただけだけど……これは明らかに何かのキーアイテムだろう。それを拾い上げて開こうとするけど、全く開く気配が無い

「なんやこれ？」

「ちよっと貸して」



エルちゃんも懐中時計を手に取り引つ張ったり、回したりするが開く気配は微塵も無い。机の上において2人でうーんと唸る

「これもしかして時計じゃないんやないか？」

今まで進んできて判った事だが、どうにもこの軍病院を建設した人物はよほど時計に拘っていたと思う。だからこれも時計をモチーフにした何かであって、実際には時計ではない物かもしれない。そう判断して、時計を開ける事を諦めて鞆の中に戻しておく

「時間……かあ、もう大分この中にいるよね」

「そやね」

少なくとも3時間は経過していると思う。だけど、まだ日は昇らない。信じたくないけど、この中では時間は流れていないのだと思う、ずっと静止した時の中に私もエルちゃんも居るのだろう

「とりあえず、何とかして脱出するか、外と連絡をとろ」

「……そうだね、行こうか」

この場所に留まっても、何も変わらない。と言うか……この場所ので死体同士をつなげて、蘇生実験をしていたとすればこんな場所には居たくなく、私もエルちゃんも外に亡霊が居ない事を確認してからゆっくりと扉を開いて外に出る。かび臭い空気と湿度が高いのにひんやりしている、そんな奇妙な通路の中を周囲を警戒しながら進む

「……森の扉だね」

「そうだけど……これ通れないやん」

鍵はないけど、駄目元でノブを回してみたらあっさり扉が開いた。だが開いた先の通路は穴が空いており、とても通る事が出来ない。どう考えてもジャンプしたり、橋を使って通れる幅ではない……

「あの時みたいのが必要なかもしれないね」

「あーあれか」

果物の鍵を使って見つけた時計、あれを回したとき廃墟の中身が変わった。つまりまた似たような仕掛けが施されていると見て間違いないだろう

「……気が重いけど進もうか」

「そうだね、行こうか」

元々の目的は太陽の鍵が使えるかもしれない海の扉だ。とりあえずこの先に何かあると判っただけでも御の字と思うしかない、ここま  
で来れば海の扉は近い。この扉のことは少し後回しにして、今は先に  
進む事を考えよう

「よいしょっと」

エルちゃんに懐中電灯で照らして貰い、開いてくれと思いつながら太  
陽の鍵を海の扉に突き刺す。ガチャリと何かが嵌る音がして、ゆっく  
りと鍵を捻る。果物の鍵と同様に回しきると鍵が折れてしまったが  
扉が開く

【○月○日 死体同士の結合実験の開始】

【△日△日 霊力の過剰投与により、一時的な蘇生を確認。ただし発  
狂した事により、頭部破壊処理実行。被検体14号の破棄を決定】

【□日□日 軍病院の霊的防衛施設化の了承を得た。これで私の邪魔  
をするものはいない】

【●日△日 僅かに生きている人間に死体の手足の移植実験の開始。  
拒否反応は少なく、これで戦闘不能の兵士の戦線復帰の可能性が出て  
きた】

【▲日□日 生き返った人間だが、戦闘中に発狂し、敵味方を関係なし  
に虐殺後。泡を吹いて死亡、被検体124号の破棄が決定された】

【■日●日 私の実験を危険とし、軍人が押しかけてきたが、霊力を持  
たない人間など恐れるに足らず。この蘆屋道貞を止める事などは出  
来ぬと知るが良い】

【■日21日 悪魔が私の空間に迷い込んできた。今までは私が殺し  
た兵士で実験をしていたが、生きの良い個体を手に出来たのは幸運で  
ある。我が因果をより強い物にしてやろうではないか】

開けた扉から次々に聞こえてくる声。しかし最後の声に私の顔は  
引き攣った……21日。それは昨日の日付……

「……………このさきにいるんか」

不死の兵士計画を実行した狂った霊能者の幽霊が居るかもしれない  
と思うと、どうしても足が止まる……だけど、ここまで調べてきて、  
先に続く物は無かった。

「行こう……見つからなければ何とかなると思うよ」

「そやな……そう思うしかないよな」

この先に進まなければ、私もエルちゃんもこの廃墟にいつまでも囚われたままだ。だから前に進むしかない……だけど

「手つなぐか?」

「……うん」

1人では恐ろしくて前になんか進めない、私とエルちゃんはしっかりと手を繋ぎ。今もなお不気味な眩きが続く廃墟の中を歩き出すのだった……

↳銀一視点↳

通路の陰に隠れながら、必死に前に進む。幽霊兵士がこれでもかと歩き回り、その白濁した目が向けられる

(あーくそ、怖えッ!!)

大体俺はアイドルでこういうのは俺のキャラじゃないのに……心の中でそう眩きながらも、前へ進む足は意地でも止めない。夏子も俺と同じ目に会っていると知っているのに、足を止めれる訳が無い

【ギャッ!】

亡霊兵士が俺の横を通り過ぎると同時に、頭に銃口を突きつけて引き金を引く。発射された破魔札が幽霊を一撃で成仏させる、一瞬警備網が乱れた隙に扉の中に駆け込み、大きく息を吐く

「時計は……止まってるか」

入るまでは動いていた時計も今は止まっている。俺の感覚では大分歩いている感じがするが、それは幽霊が近くに居るといふ恐怖からそう感じているだけで、実際はさほど時間は過ぎてないのかもしれない。

「……弾は……まだ余裕はあるか」

もう1カートリッジは使ったが、後2本残っている。銃弾の数は多分……後30くらいだと思う。問題は、上の階層に続く階段が見つからない事と、亡霊兵士の姿が余りに多い事だろう

「な、何だ!?!」

突然柱時計の音色が廃墟の中に響き渡る。その余りに音にびつくりして、大声を出してしまい。慌てて口を塞ぐ……暫くそのままできると、廃墟だったはずの部屋の中がビデオの逆再生のように真新しい木の部屋に変わる

【蘆屋。お前は優秀な霊能者だが、やりすぎたな】

【おやおやおやおやあ？そんな物を向けて……ヒヒヒ、どうするおつもりですか？】

部屋の中に突然現れた2人に思わず身構えるが、2人は俺の存在には気付かない様子で話を続ける。腕章をつけた軍人と向かい合うのは着物を着た不気味な青年だ

【決まっている、貴様を処分する。このイカれた大量殺人者がッ！】

【ふふふふ……はははははッ！これはおかしな事をお言いにならない。戦争なんてやっているんですよ？どちらも殺人者ではないですか？】

【黙れ！何が霊力で不死の兵士だ！貴様が！貴様がやっているのはッ！！】

【殺人でしょうか？死体と死体を繋ぎ合わせて、霊力で現世に魂を呼び戻し、命令を遂行すればまた死体にもどる。命令にも忠実で、死さない。貴方の注文どおりでしょう？】

【ふぎけるなあッ！誰が死体を増やせといったッ！私は傷を癒せと言ったのだ！その間に不死に出来ると言うから、お前の話を聞いた。それなのに死体にするとは本末転倒だッ！！】

「……話を聞いているだけで胸糞悪いな」

話を聞いているだけで判る。この着物の青年は死体を繋ぎ合わせ、霊力で魂を呼び戻し兵士として使っていた……この軍人さんが怒るのも納得だ。

【それにお前が主導になって開発している、霊的防衛兵器！起動するのに20人の生贄が必要だと！何を考えている！】

【死なない、傷つかない、そして大量殺戮が出来る。戦争にこれ以上無い武器でしよう？……酷いですね】

【な、何故!?何故死さないッ!!】

青年の言葉を遮り、銃の引き金を引いた軍人。その銃弾は青年の頭を捕らえ、その半分を吹き飛ばす……だが青年はゆつくりと立ち上がると、ぽんと言う音を共に姿を消す。空中をひらひらと舞うのは人型だ

【なっ!?】

【さようなら、貴方も私の人形になりなさいな】

青年の腕が軍人の胸に突き刺さる。きよとんとした顔をした軍人だが、その痛み到我に帰ったのか血涙を流しなら叫び声を上げる

【ぎ、ギアアアアアアアッ!】

【ああ、良い。人間の悲鳴とは何故こうも心地よいのですか】

血にぬれる腕を見て恍惚とした表情を浮かべる青年……いや人の姿をした化け物を思わず睨みつける。だがこれは過去の記憶だ……俺と青年の目が合うことは無い

【さてさて、これで生贄も十分に確保できますね。くふふふ……時縛りの法を使えば、私の願いは成就するツ!!!】

青年が両手を大きく伸ばすと同時のその姿は掻き消え、青年と虚ろな目をした軍人の変わりに部屋の真ん中に魔法陣が浮かび上がる

【……これしかないのか】

この階層に階段やなどは無かった。これに入らなければ前に進むことは出来ないという悟り、俺は覚悟を決めて魔法陣の中に足を踏み入れる。

【……もうなんでもこいや】

一瞬で別の部屋の風景が変わった。ほんまもんの魔法陣かと思うと完全に開き直ることも出来る。ただ、さっきの会話が気になる

【うがああああ……】

【ああああ……】

【ほんま、冗談きついわ】

あちこちから聞こえてくる呻き声……ただの亡霊ならいいのに、今一瞬見えた人影は明らかに両腕が人間の物ではなかった。きつと、あれが、蘆屋と言うキチガイが作った死体の兵士……それがまだこの廃墟の中に居る。そう思うと戸惑っている時間は無い、早く夏子を合流

しなければと言う気持ちが強くなる。もう見つかつて追い回されて無ければ良いのにと心配し、俺は手にしている除霊銃のカートリッジを交換し、部屋の外に出る

【ああああ……】

【ぼおおお……】

「くそッ！怖くなんてないからなッ!!掛かって来いやあッ!!」

両腕が獣のような腕になっている兵士、両腕が無く、顔にレザーマスクをし、背中から蠟螂の刃が生えている死体兵士になきそうになりながら、まずは先制攻撃と思ひ、精霊石の粉末を投げ付け、手にしている除霊銃の引き金をがむしゃらに引くのだった……

くエル視点く

「おやおやおや、ここまで迷い込むとは、いやいや、運が悪いですねえ」僕を追いかけるように聞こえてくるねちっこい男の声に舌打ちする。割れた鏡で背後を確認すると軍服を着た生きているとは思えない白い肌をした男が手足や頭部が人間ではない幽霊を引き連れて追いかけてくる

(夏子がいなくて良かったよ、本当に)

心の中でそう呟き、椅子の上に飛び乗ると同時に椅子を蹴って跳躍し、壁の装飾品にぶら下がってそのままガラスの無い天窗を通過して反対側の通路に飛び込む

「おおー実に素晴らしい、貴方ならば良い兵士になりますよー」

嬉しそうな男の声を聞きながら暗い通路を走り出す。背後の壁からは殴りつける音が響いてくるので、少しでも距離を取っておきたい。そんな事を考えながら走り続け、どうしてこんなことになったのかを思い出していた……

「行き止まりやね」

夏子が残念そうに呟く、あの海の扉の先は一直線の通路で脇道などは何も無い。本当に一本道の通路だった……2人できよろきよろを通路を見回していると、ある一箇所が目が止まった

「夏子、道はあるかも知れないよ。僕しか通れないと思うけど……」

壁の上のほうに天窓があり、そこが開いている。夏子を踏み台にすれば僕なら反対側にいけると思うと提案する

「いやいや！駄目やろ！行けても戻ってこれへんやんツ!」

「でもこの先に行かないと、多分僕達は出れないよ」

多分さつき見つけた金の懐中時計を使うのはこの先にあると思う。僕がそう言うと、夏子は駄目だという理由を考えようとするのが判るが、それでも僕を止める理由が見つからないのか困ったような表情を浮かべる。

「何もいきなり行くとは言わないさ、1回開いてる部屋からシーツを持ち出して、それを繋ごう」

それが命綱になると思う、そのシーツの先を持って反対側の通路に向かい。向こうで金の懐中時計を使ったら戻って来て、シーツを掴んで戻ってくる提案する

「……判った。じゃあエルちゃんがぶら下がっても大丈夫なくらい、丈夫なシーツをさがそ」

あちこちの病室を見て、比較的綺麗で傷の無いシーツを何枚も繋いで、心配そうに僕を見つめる夏子に大丈夫と声を掛けて、僕は天窓から反対側の通路に向かった

「……夏子が来なくて正解だよ」

着地して直ぐ、僕の目の前に広がったのは血で汚れた通路だった。

「エルちゃん大丈夫そうか?」

「うん、大丈夫だよ、でも進む前にシーツを試しても良いかい?」

夏子の返事を聞いてからシーツにぶら下がる、反対側の通路の柱に結んであるからかなり丈夫だ。後は壁を蹴りながら登れば、元の通路には戻れそうだ

「大丈夫そうだね。じゃあ、行ってくるよ」

「気をつけてな」

壁を挟んでいるので大声で返事を返し、僕は懐中電灯で通路を照らしながらゆっくと歩き出す。通路は鮮血だけではなく、奇妙な文字で埋め尽くされている

「……なんだろうね、この感じ」

夏子と出会うまでは自分と言う存在があやふやで、夏子と会ってから自分がすっかりしてきたと思う。そして今はこの血塗れの通路を見ても動じない、良くは判らないが何処かでこんな光景を見たような気がしなくも無い。

「とにかく急ぐ」

早くこの通路の仕掛けを解いて、夏子と合流しよう。やっぱり1人だと不安になるし、夏子の事も心配になるからね。気配を殺しながら通路を早足で進んでいく

「……趣味が悪いね、本当に」

部屋の中を覗き込んでみるんじやなかったと後悔する。この通路は壁の先と同じく一本道だが、左右に扉がある。何があるのか？と思いい部屋の中を見て、見るんじやなかったと後悔した。そこに培養液に浸された四肢の一部が獣に取り替えられた人間が何体も収容されていた……今まででキチガイと判っていたつもりだが、まだ全然足りなかったようだ

「ほほう。なるほどなるほど、悪魔とはこうなっているのですか、いやいや、実に興味深い」

【ギ、ギイイイイツ!!】

薄暗い通路の先から男の声と暴れ回る何かの音と苦悶の悲鳴が聞こえてくる……この先にこの惨劇を作り出した本人がいる。小さく深呼吸して扉を開けて別の通路に出る、扉の先は病院と同じ作りでありここに部屋と机や椅子が置かれている。だけど、あちこちに壁やバリケードがあつて、最短ルートで進むことは難しそうだが。それがかえって隠れ場所や相手を巻く事が出来ると判断し、僕はゆつくりと歩き出す。

(……)が……か、覚えておこう)

目的地は奥の部屋だが、恐らく金の時計を使えば何らかのリアクションがあると思うので迂回次いでに逃走経路を確認する事を忘れない

「ほーほう。なるほど、霊体を肉体に押し込めればダメージを受ける。いやあ、面白いですねえ」



【ギ、ギグアアア】

悪魔の苦悶の声と暴れることでぶつかり合う鎖の音。それを聞きながら部屋の中を覗き込む、軍服の男が馬の悪魔の前で何かをしている……いや、何かなんて言えないね。悪魔を生きたまま解体してる……

(……あれか)

壁で仕切られ、男が悪魔を解体している部屋の前に銀の壁掛け時計が見える。ゆっくりと扉を開き、部屋の中に忍び込む

(うわあ……)

部屋の壁に等間隔で並んでいる異形の兵士……しかも幽霊ではなく、生身の肉体なので何らかの術でこの状態で保存されているのが判る。

なににせよ、部屋に入る前に逃走経路の確認をしておいてよかったということだね。僕は壁に掛けられた銀の時計の文字盤の中心に金の懐中時計を嵌めた

「おやあ？まさかここまで潜り込んだ人がいるとは、いやいや、驚きですぬ」

音や動きと言う反応はなかったが、キチガイは何かを感じ取ったように、首だけを動かし僕を見つめる。即座に踵を返し、背後から聞こえてくる男の声と不気味な呻き声を聞きながら来た道を全力で引き返すのだった……

「いやいや、よく逃げましたね。素晴らしい運動神経ですよ……ええ、全く素晴らしい、貴方ならば良い素体になりますよ」

「そりやどーも……」

追い詰められたわけではない……あともう少しで夏子が待っている通路だけど、この男と一緒に戻るわけには行かない。だからあえて立ち止まったけど……こうしてみると本当に異様な男だ。軍服の上に着物、死人のように白い肌と、へんな化粧……服装も変だが、身に纏う気配はもつと異常だ……だけでもつと異常だと思えるのが、自身自身だ。これだけ不気味で異常な雰囲気な男と顔を見合わせているのに、恐れるわけでもない、動揺する訳でもない。自分の中で何か

研ぎ澄まされているような……そんな気がするのだ。

「人間を素体にする上で1番の課題は、霊力の有無。しかし優秀な霊能者を捕らえるのも難しい、となるとある程度の妥協と言うものは必要になるわけです、しかししかし、貴方は素晴らしい。実に良い逸材だ、どうですか？人間を超える力に興味はありませんか？」

聞いてもないのに喋り続ける男をじっと見つめていると、男はぼんつと手を叩く。

「おや、ああ、なるほどなるほど、お前達下がりなさい」

男が手を上げると周りにいた異形の兵士達は男から離れていく、なんか勝手に納得して、勝手に行動したけど……僕が無口なのは化け物が恐ろしいからと解釈してくれたようだ。

「さて、これで話しやすいでしょう？今ならばまだ麻酔を打ってから処置してあげますよ」

満面の笑みで告げる。だがそれは逃げれば麻酔なしで生きたまま解剖すると言う事だろう

「お断りだッ!!」

ここまで来る間に見つけた精霊石の粉末を男の顔に投げ付ける。着物は着物の袖で粉末を受け止める、その隙にと横を駆け抜ける

「手癖が悪いですねえ、まあ、この程度で何とかかなると思うとは……いやいや、子供は愛らしいことです」

男は全く怯む事無く、僕の肩を掴んだ。その事に驚いていると男はニヤニヤと笑いながら

「なにもおかしいことではありませんまい？私は人間、人間に精霊石の粉末が効くとお思いですか？」

「……がつー」

首を掴まれ吊り上げられる。片手で人を吊り上げておいて人間等とよく言えたものだ……だが、こうして捕えられてはどうしようもない

「追いかけてっことは楽しかったですが、それもここまで、さあ。行きましょうか？男か女なのか、それも調べてあげましょうね」

下卑た笑みを浮かべる男に、自分の中で何かが嵌ったような音がし

た

「……僕に……汚らわしい手で触るなッ!!」

金色の粒子が舞ったと思った瞬間。男の首が宙を舞い、僕は薄汚れた通路に尻餅を突いていた。何が起こったのは判らなかつたが、僕は直ぐに立ち上がり夏子が待つ通路へと戻る。すると夏子の隣には除霊銃と鉄パイプを背負った青年の姿があつた……夏子と一緒に僕のお見舞いに来てくれた青年だつたから、その姿は僕も覚えていた。

「エルちゃん！良かった無事やつたんやな」

「夏子がまつとつたのは君か」

僕を見て安心した様子の夏子とその隣の青年の手を引く、詳しく説明している時間がない……今は早く、この場所を離れないと……

「急いで！化け物が追いかけて来てる」

僕の声に続くように化け物の雄叫びが響き、壁に重い何かを叩きつける音が響く

「逃げるでッー」

「判つとるわッ!!」

あの化け物相手では、この壁なんてどれだけ持つか判らない。僕達は脱出経路を知っていると言う青年に先導され、その場を後にするのだった……

「いやいや、油断しましたねえ」

頭と胴体が離れ、完全に死体になつた筈の男。だがその頭は胴体から離れているのに喋り続けていた……

「くふふふ、英霊でしたか。いやいや、これはとんだ掘り出し物……逃がすわけには行きませんねえ」

ゆっくりと立ち上がった胴体は地面に落ちている頭を拾い上げ、切断面に頭を乗せる。数秒で傷はふさがり、男は首を鳴らして、口についた血を拭う。

「ふふふ、ははははははッ!!ああ、楽しくなってきましたねえッ!!」

白目と黒目が反転し、男の身体から瘴気とも取れるどす黒い魔力が吹き上がるのだった……

一方その頃横島達も病院の近くに訪れていた。うりぼーに跨り、病

院の方に視線を向ける横島

「あのさ、心眼。あれやばくない」

【……横島、私は引き返す事を勧める。これはお前1人では無理だ】  
【そうじゃな、この距離でも判る】

視界でも確認出来るほどの高密度の魔力溜りとなつている緋立病院。心眼とノツブの言う通り、引き返すのが正解なのだろう……

「駄目だ。夏子と銀ちゃんがいるから、ここまで来て引き返せない」

心眼達の忠告を聞いてもなお、横島は緋立病院に向かう事を決める。それを聞いて横島の隣に牛若丸が姿を見せる

【判りました。では私が先行して、先に様子を見てきます。可能ならば主のご友人も保護します】

「うん、頼むよ。牛若丸」

横島の言葉に牛若丸はお任せくださいと満面の笑みを浮かべ、木の枝の上に飛び乗り恐ろしいスピードで緋立病院へと向かう

「みむう？」

【ノツブー】

「うん、行こう。美神さん達も追いついてきてくれると思うし」

自分達が先行をしているのはシロ達が伝えてくれている筈、だから横島は前へ進む事を決断しうりぼーに跨ったまま緋立病院に向かうのだった……

「いやいや、今回も面白そうだねえ」

緋立病院に向かう横島を見つめる2人の人影……ルイ・サイファーとルキフグスだ。緋立病院を覆っている凄まじい濃度の魔力を見て、楽しそうに笑っていたが、ふと思いついたようにルキフグスに問いかける。

「さてと、で、ルキフグス。横島の家でメイドとして活動して何か判ったかい？」

ポーカーで負けた事で、横島の家に残った自身の部下にそう尋ねる。するとルキフグスは目を逸らして

「いえ、挨拶回りが済んでなくてですね。それに横島にもまずこの街になれてからで良いと言われて……まだメイドらしいことは何一つ

……」

「……それじゃあ駄目じゃないか、私が面白くない事が嫌いだと判っているだろう？」

睨まれ申し訳ありませんと頭を下げるルキフグス。その姿を見てルイはにやりと笑い

「今回は許すけど、もっと横島に接触して、私を楽しませてくれよ」  
「……はい」

ルイの言葉に震えた声で返事を返すルキフグス、ルイはそんなルキフグスを見て心底楽しいという笑みを浮かべ、緋立病院に向かう横島に視線を向ける。こうして表に立って見に来ているのはルイだけが、様々な場所……天界、魔界と言う場所から横島を見つめている視線を感じ、ルイは更に楽しそうな笑みを浮かべる。人間も、神魔もその全てが理解しているわけではない、だが横島が望む、望まないは別にして、横島は全ての出来事を中心へととなっているのだから……

リポート26 妖怪病院 その7へ続く

## その7

リポート26 妖怪病院 その7

〜夏子視点〜

銀ちゃんを先頭にして私とエルちゃんが駆け込んだのは黒い穴が道を塞いでいた森の通路。逃げるのに必死だったけど、このままでは袋小路に逃げる事になると思い慌てて叫ぶ

「銀ちゃん、そこ通れないやで!」

「は?俺はここから登って来たんやで?」

不思議そうにしている銀ちゃん。もしかしてと思い振り返るとエルちゃんは膝の上に手を当てて、荒い呼吸を必死で整えながら

「……ちや、ちゃんと仕掛けは動かして来たよ」

「仕掛けってなんかあったんか?」

詳しく銀ちゃんに説明したい所やけど、背後から凄まじい音が聞えてくるので先へ行こうと促す。銀ちゃんも危ないのは判っているからか、問いただすことはせずに私達が持っていたのと同じ、除霊銃を手に先頭を走り出す。もう少しで通路を渡り終るという所でエルちゃんが足を止める、慌てて振り返るとエルちゃんは来た通路に両手を向けて目を閉じていた。

「エルちゃん、どうしたんや!」

「僕は大丈夫だから先に行つて!追っ手が追いついてくるまで少しでも時間を稼いだほうが良い」

言っていることは判る。でもそれがエルちゃんがこの場に残ると言う事ならば、認める事が出来ないと言おうとした瞬間。エルちゃんが突き出した両手から金色の光が放たれ、通路を完全に崩壊させる。これなら追つて来れないと思うけど、目の前で起きた信じられない光景に銀ちゃんと揃って絶句する

「は、は……は……う……」

だがそれも死人のような顔色をしたエルちゃんの姿を見て消える。倒れてたエルちゃんを銀ちゃんが背負う

「とりあえず、話は後や！今のうちに距離をとるで」

「う、うん」

銀ちゃんに背負われているエルちゃんの血の気のない顔に、かなり無茶をしたんじゃないかと心配になりながら通路の先にあった階段を駆け下りた所で息を呑む、そこには立ち上がることこそ出来ないが、手足が人間の物じゃない軍服姿の化け物が2体転がっていた

「……もしかして銀ちゃんがやったん？」

「必要に迫られてな……暫くは悪夢を見そうや」

確かにと同意しつつ、唸り声を上げている化け物の横を通り、迷う事無く走っていく銀ちゃんの後を追って走る。全然躊躇わず走って行くけど、ちゃんと出口に向かっているのか不安になった

「銀ちゃん、今階段とかあったけど!？」

「俺が来た道の方が早いッ!!」

ちゃんと出口に通じてる！と叫ぶので、銀ちゃんの言葉を信じて銀ちゃんが飛び込んだ部屋に入ると魔法陣？って奴がぼんやりと光っていた……

「なあ、あれ大丈夫？」

「……俺はあれでこの階に来たから多分大丈夫」

多分がつくのが凄く不安だけど、化け物が増えたので、搜索してる時間はないので銀ちゃんの言葉を信じるしかない。

「魔法陣で移動する前に少し休憩するか、この部屋の中には入ってこないみたいだし」

扉の前を通る気配がするけど、入ってくる気配は無いので少なくともここは安全と判断して埃まみれの椅子に腰掛ける。

「ありがと、私とエルちゃんだけじゃどうしようもなかったわ」

「運が良かったな、夏子。病院から帰る前に急にタクシーの運転手が気絶してただ事や無いと思って、慌てて戻ってきたんやで」

時間ギリギリまで病院で私と話をしていた銀ちゃんの結果オーライだろう。緊急バッグから蓋を開けていないペットボトルを銀ちゃんに投げ渡す

「お、サンキュー」

蓋を開けて一気に水を飲んでやつと落ち着いたのか、銀ちゃんは手にしていた除霊銃のマガジンを交換しながら、ソファアで横になるエルちゃんに視線を向ける。

「記憶喪失らしいけど、もしかすると霊能力者だったかもしれないな」  
「あの騒動で怪我したんかな?」

隕石が落ちてくると言う映画も真つ青の霊事件の時に怪我をした可能性はあるのかもしれない、むしろあれだけゾンビや悪魔が徘徊していれば怪我は愚か死んでいてもおかしくないのだ

「とりあえず、ここから出たら横つちに相談してみよ。横つちもこつちに来てくれるやろうし」

「ちゃんと横つちに連絡したん?」

「おうよ、知り合いに霊能者がいるんや。危ないときに連絡しないんか馬鹿のする事やろ」

そっか、横つちも合流してくれるなら少しは……そこまで考えた所で思わず尋ねる。

「横つちって大丈夫なん?」

私の知ってる横つちは言ったら悪いが、助兵衛で、霊能者と言われても少し不安が残るんやけど……

「大丈夫や、横つちはかなり変わった……物凄い意味で」

「……どんな感じに?」

「……ちっさい悪魔とか、でっかくなって炎を吐くモグラとか、竜神様とかと一緒に助兵衛って言うか……うん、ド天然になってた」

「それ大丈夫か?」

助兵衛なものもどうかと思うけど、ド天然って横つちに何が起きたんやろう……なんか会うのが怖いような、楽しみのような複雑な気持ちだ

「う……うん」

「エルちゃん!大丈夫か!」

ソファアから身体を起こしたエルちゃんに駆け寄る。エルちゃんの顔色はさつきよりマシだけど、かなり悪い様子だ。だけどエルちゃんは大丈夫と笑い、ソファアから体を起こして立ち上がる



「進もう、嫌な予感がする」

「もう少し休んでいても大丈夫だぞ？」

銀ちゃんが休んだ方がいいと言うがエルちゃんは険しい表情で天井を見上げる。

「いや、急いだ方がいい。早く移動しよう」

その強い口調に私も銀ちゃんも何も言えず、エルちゃんの言う通りにし、魔法陣の中に足を踏み入れる。一気に変わる景色に驚くのも束の間

【さてさて随分と逃げたようですねあ……では始めましょうか、命を賭けた鬼事を……はは……はははッ!!ひゃーっはははははははッ!!!】

病院を揺さぶるような凄まじい狂笑に私達は全身を走る寒気を抑える事が出来ないのだった……

く銀一視点く

除霊銃を連射しながら通路をひたすら走る。魔法陣で移動すれば少佐と呼ばれた男の部屋に着くと思っていたのだが、移動した先はどこまでも続く一本道

「銀ちゃん、こんな所……違う見たいやね」

「ああ。違う、あの声の主の仕業だと思う」

移動して直ぐに聞えてきた狂った男の声。確実にあの男が俺達を来た場所と違う場所に移動させたのは確実だ……正直に言えば、移動して直ぐ走れば外に出れると思っていたのだが、自分の考えが余りに甘かった事を思い知らされた気分だ

「……あの声、部屋の奥で悪魔を解体していた男と同じだ」

「……もしかして、軍服の上に着物を着てる変な男？」

違っていて欲しいと思いいエルに尋ねた。だけど、エルの返答はどうして知っているのか？で絶望感が重く肩に押し掛かってくる。何度も見た化け物兵士を作った男がまだ生きているなんて信じたくないが、どうもそれが事実のようだ

【さてさて、その通路を走り続けければゴールですよ。ヒヒヒッ!!ささ、頑張つて逃げてくださいな】

嘲笑うかのような男の声が響くと同時に、壁から浮き出るように亡霊が現れ始め、それから俺達はずっと走り続けている

【あああ……】

【げばあ……】

【ギイイイツ……】

現れる幽霊はさほど強いわけではない、こうして走りながら連射している除霊銃で行動不能に出来る程度の弱い幽霊だ。だがそれでも終わりの無い一本道を走りながら戦っていると、まだ続くのか、いつになったら終わるのか？と言う絶望感が重く押し掛かってくる

「……僕が何とかしようか？」

「いや、それは本当に最後の最終手段にしたい」

エルの金色の光は凄まじい攻撃力を持っているが、その反面消耗が激しいので、どうしても連打する事が出来ない。除霊銃でなんとか対処できる相手に使って消耗されるのは避けたい

「くそ、これ絶対追い込まれてる」

思わずそう舌打ちする。これは確実に追い込まれている、追い込まれた先に居るであろう男に使って欲しいのである金色の光は使わないうで欲しいと頼む。

【さあさあ！頑張ってください、もう少しですよお】

もう体力も除霊銃のマガジンも後が無いというところで男の甚振る様な声が響き、いらつきを覚えた瞬間目の前が一気に明るくなる。だが俺達の顔に笑みは当然無い……何故ならば、俺達の目の前にはにやにやと笑う男……過去の記録で見た蘆屋と言うキチガイが俺達の前にはいたからだ

「さあさ、ここがゴールですよ。あの世……と言う名の絶望のゴールですよ」

蘆屋の周りには俺達を追いかけていた化け物よりも遥かに強力そうな化け物が何体もいる。後ろに逃げようにも化け物の息遣いと足音が聞え、前はどう見てもこんなちやちな武器で突破できるような相手ではない

「……行けッ!!」

先制攻撃と言わんばかりにエルの両手から金色の光が飛び出す、それは蘆屋の前で霧散する。信じられないという顔をしているエルに対して、蘆屋は陰湿そうな笑みを浮かべ、指を左右に振る。

「1度喰らえば対処法なんていくらでも思いつきますよ。そんな物を切り札にする方がどうかしてると言うべきですね」

そう言うのと蘆屋は喉を鳴らし、白目と黒目の反転した目で俺達を見つめて笑う。

「霊力も無しに良くここまで逃げたと褒めてあげましょう、貴方達ならば優秀な私の駒になつてくれる……そう信じていますよ」

そんな信頼いるかと叫びたいが、周りの化け物からの放たれている威圧感が増し、立っていられずに思わずその場に尻餅をつく。

「さ。丁寧に運んでください、決して傷つけないように」

化け物がにじり寄ってくる姿を見てもう駄目だと思ったその瞬間。風を切る音が響き、肉を裂く音と蘆屋の苦悶の声が響いた。

「がっ!?!」

【間に合いましたね！ 貴方達が主殿のご友人で宜しいかッ!!】

「前！ そいつは死なないッ!」

カジュアルな服装に身を包んだ小柄な少女が蘆屋の首を刎ねた。だが即座に回復しているのを見て危ないと叫ぶと、その少女はバク宙で蘆屋の放った札を回避した。

【面妖な……】

「ふふふ、英霊が2人。これはいいですねえ、大収穫ですよ」

助けに来てくれたのはありがたいが、相手が倒せないのではどうにもならない。だが少女はにやりと笑った。

【私はあくまでも主殿のご友人を発見するのが仕事。この2人を見つけた段階で私の仕事は完了しております】

「では大人しく捕まってくれませんか?」

【まさか、私は主が死ぬまでお仕えする所存。あれほど仕えがいのある御仁は兄上のほかにはおるまい】

微妙にかみ合わない会話を聞いていると突如ガラスが割れるような音が響き、何かが通路の飛び込んでくる。

「よつしやああーッ！俺の勘すごくね!?銀ちゃんいたじゃん！」

【そうだな。12分の1を良く当てたよ】

「みみーむー♪」

【のっのー♪】

「ぶぎゆるう」

茶色い何かに跨った横つちが壁を突き破り、俺達と蘆屋の前に着地する。俺はその姿を見て思わず目元に浮かんだ涙を拭った。

「何が凄いやー！遅すぎやッ!!」

「それは正直すまん！悪霊まみれでここまで来るのも大変だったんだぜ。でも間に合っただろ？」

「間に合ったとは何を差して「うりぼー！ビームッ!!」

「ぶぎやああーッ!!」

「あーッ!!」

蘆屋が何かを言おうとしたが、それを遮って放たれたごん太のビームが蘆屋とその周りにいた化け物を吹き飛ばす。

「しやあー！何勝ち誇っているんです？私はまだ健在ですよー」……くそつたれめ」

だが蘆屋が目の前に現れにやにや笑う姿を見て、横つちは跨っていた猪から降りて俺達の前に立つ。その後姿は自分の知ってる横つちとは違うと思ひ知らされ、思わず息を呑むのだった……

↳横島視点

軍服の上に着物を着た奇妙な男。その姿を見て、直感でやばいと悟り先制攻撃でうりぼーにビームを使わせた。だがノーダメージだった……

(心眼、どう思う?)

(情報が足りない、もう少し様子見だな)

直感でやばいと感じ取ったのは心眼も同じだったが、あの高出力のビームを受けてもダメージが無いと言うのは納得出来ない。

「ノツブちゃん頼んだ」

懐に忍ばせた眼鏡に触れるとノツブちゃんが姿を見せる。

【気色悪いのー】

背後から姿を見せている化け物に刀を抜いて駆け出していくノツブちゃん。相手の力量が判らないので挟み撃ちなんてごめんこうむる、だけど牛若丸が動かないのを見て何かあると俺でも悟った

「あの男は？」

【首を跳ねましたが、すぐ復活しました。なにかからくりがあるかと】  
首を跳ねても死なないと聞いて舌打ちする。うりぼービームが効かなかったが、バリアや何かと思ったんだがどうもそれとは違うカラクリがあるようだ。

「ほほう！英霊ですか、なるほどなるほど……貴方横島忠夫ですね？」  
俺の名前を知っている……その妙な雰囲気とあわせて、俺の中で奇妙な男に対する警戒心が跳ね上がる。俺の眉がつりあがったのを見て、男は失礼でしたねと笑う

「元日本軍霊能特殊装備開発室 局長蘆屋道貞と申します。ふふふ、これから何度も顔を見合わせることもあるかも知れないのでお見知りおきを」

にやにやと笑うその姿。見た目は病弱そうな痩せ型の男……だけど、何ともいえない不気味な雰囲気がある

「急急如律令ッ!!火精招来ッ！我が敵を喰らえッ!!」

ノーモーションで放たれた陰陽術に俺の指は咄嗟に動いていた。横島の動きは殆ど条件反射に近い、今までの戦いの経験がそれを可能にしていた。宙に刻まれた文字が淡く輝き、横島達を包み込む。

「急急如律令ッ!!霊符の力を散らしめよッ!!」

剣指で素早く描かれた文字に霊力が宿り、蘆屋の陰陽術をキャンセルする。

「ほう……触媒なしとは驚き、しかしまだまだ陰陽師としての力量は未熟な模様ですね」

両手の指の間全てに挟まれている札を見て、顔から血の気が引く。それを見て蘆屋は笑い声を上げる

「青褪めましたね？つまり貴方にはこれを……【ノツバアアッ！】……は？茶釜？」

チビノブが影から茶釜を取り出して蘆屋に投げ付けるそれを見て、俺は慌てて銀ちゃんも夏子に耳を塞ぐように叫ぶ。そして次の瞬間爆発した茶釜が蘆屋を吹き飛ばす……一瞬上半身が消し飛んでる姿が見えて吐きそうになるが、ビデオの逆戻しのように蘆屋の姿は一瞬で元に戻る。

(今の見たか?)

(ああ。見た……手品の種は判らんが、牛若丸の話通り相手の能力はダメージを受けないことにあると見た)

今のは完全に直撃だった、現に相手の身体も一度は吹き飛んでいく。だがそれでも次の瞬間には回復している、回復とか、残像とか、防御したとか、そんなちやちな手段じゃない。心眼でも見切れない何か、あの男を護っている。

「チビ、チビノブ、うりぼー。銀ちゃんと夏子を頼んだぜツ！」

栄光の手を両手に作り出し、狭い通路を蹴って蘆屋に接近する。距離を取ったままでは相手の行動に一步遅れる、無詠唱とまでは行かないが、相手の陰陽術の発動までの時間はかなり短い、相手に詠唱をする隙を与えてはいけない。俺と心眼はそう判断した

「せいッ!!」

「とつと……なかなかやり……おつと」

正拳は交わされたので、それと同時に姿勢を低くして足払いを仕掛ける。蘆屋の足を掬い、身体が揺らめいたところで前に踏み込もうとする

【待て横島！毘だツ！】

心眼の言葉に踏みとどまり、右の栄光の手を霊波刀に変え、反射的に横薙ぎの一撃を叩き込む。それは蘆屋には届かず、その影から現れた片腕が獣、もう片方の腕が刀の異形を切り裂き消滅させる

「ふむふむ、攻撃力に目を奪われがちですが、その反射神経は脅威ですね」

冷静に観察されている事に気付き舌打ちを打つ、ガープやマタドールとまでは言わないが、この男も底が見えない。特に今のタイムラグなしの召喚術……こうなると接近で相手の詠唱を潰すという俺のプ

ランは通らなくなる

(ええい、こうなりや出たとこ勝負だ)

Gジャンの内ポケットから銀の銃身を持つ銃を取り出す、アンちゃんがついて、ワルキューレさんに使い方を指導された霊波銃。それを左手に持ち、右手は霊波刀を維持する

「む、そう来ましたか……いやいや、中々多彩な戦術ツ！」伸びろーツ!!」持っているように

霊波刀を伸ばすと同時に、霊波銃の引き金を引く伸びる刃と圧縮された霊波の2段攻撃。だがそれも、蘆屋には届かない、いや当たっているのだが、ダメージにはならない

(どうもこの状況で相手の秘密を解き明かすのは無理そうだな)

脳裏に響く心眼の声に小さく頷く、夏子と銀ちゃん、それと10歳くらいの子供と俺にとっては守りたい者が多すぎる。しかも相手の方が有利な条件となると、相手の無敵の秘密を探っている余裕なんてあるわけも無い

「そら、行きますよ」

俺と同じ……いや、俺よりも洗練された無詠唱の陰陽術が同時に放たれる。そのうちの1枚は霊波銃で撃ち落す、もう1枚は夏子と銀ちゃんを護ってくれているチビの電気ショックで迎撃される。蘆屋が目を見開いているうちにと前に出ようとするが、俺の影から伸びる腐敗した手が俺の足首を掴むので、舌打ちをして霊波刀を下に向かって突き刺す。

「ふふふ、いやいや、中々面白い勝負ですねえ」

相手の方が余裕があるのは当然だ、だが、俺も切り札は切つてない。いや、正確には切り札を切れない、この距離では銀ちゃん達を巻き込む可能性があまりに高すぎる。ここは何とか時間を引き延ばして……

「我が祖たる蘆屋道満直伝の陰陽術と五行陰陽術は随分と相性が悪い様子」

「……道満？」

告げられた名前が妙に頭に残った。これを忘れてはいけない……

俺はそれを直感で感じた。

【横島！いいぞッ！】

【準備完了です！】

ノツブちゃんと牛若丸の声を聞いて、銃を懐に戻し拳を握る。周囲の霊力を収束し、肘までだった栄光の手が肩までを包み込む

「……行くぜえッ!!」

手の甲から3つの光が溢れ、背中の霊力の翼が砕け散る。夏子と銀ちゃんはノツブちゃん達によって、この空間から脱出している。だからこそ、俺はこの一撃を繰り出すことが出来る

「滅殺の……ファイナルブリットオオオオッ!!」

通路を削りながら蘆屋へと突き進む、そして蘆屋の胴に拳を突き立て霊力を解放する

「ははっ、私の攻撃は効かないのに随分と無駄な事をなさる」

「いや、無駄じゃねえ」

凄まじい霊力の光の中、首を傾げる蘆屋。攻撃が効かないのは俺だって十分承知している、だから俺のこの攻撃は蘆屋に向かって繰り出した物ではない

「お前に効かなくても、この空間はどうだろうな？」

「……それが狙いかッ!?!」

澱みきつた魔界とも言える異空間……それは存在するだけでも、周りに影響を与える。それを破壊するのは正直、勝利すべき拳でも僅かに足りない。俺は右拳に握りこんだ文珠が光り輝き、蘆屋ではなく、その周りを包む何かを破壊する手応えを感じながら右拳を振りぬくのだった……

↳ 蘆屋視点↳

私が長い時間を掛けて、作り上げた空間が破壊された。それに対して激しい怒りを抱く物の、それを成し遂げた横島にも強い興味を抱く「イヒヒヒ……良くもやってくれましたね」

あの霊力の拳だけではない、あの出力は確かに凄まじい物だったが、私の世界を壊すには足りない。何か奥の手がある……それを引き



ずり出してやると元の世界に戻り、横島と向かい合いながら告げる。異界を砕かれ、殴られた衝撃で外に飛び出ているが、ダメージはあるわけも無い。着物からどす黒い球体を取り出し翳す、私の影から現われた異形の兵士が私を包み込み、私の身体を強化していく

【ヒヒヒヒ……こうなればお前に勝ち目はありませんよ】

「それはどうか」

横島の腰にベルトが巻かれていることに気づいた。横島は手にしていた黄色の球体の側面を押しベルトに押し込む

【アーイツ！ シツカリミナー！シツカリミナーツ!!】

「ほ？」

ベルトから飛び出した黄色い服が横島の回りを踊るのを見て、思わず間抜けな声が出る。流星に私の知性を持ってしても、理解できない光景に驚くのは当然だ

【イツヒヒー♪】

「行くぜ、ウイスプ」

何かしてくる。それを直感的に悟りそうはさせないと攻撃を繰り返すが、それは横島の前を踊るパーカーに打ち落とされる

「変身ッ！」

【開眼ウイスプ！アーユーレディ？】

ベルトのレバーを力強く引くと、黄色の服は空中でUターンし横島へと急降下する。それに合わせて横島が右手を高く掲げるとそれと同時にウイスプが左手を突き出して降下してくる。

【イツヒヒー!!!】

空中でハイタッチを交わすと横島の身体が鎧に包まれ、その上半身を覆うように黄色の服を着込む

【OKッ!!レッツゴー！イ・タ・ズ・ラーゴ・ゴ・ゴーストツ!!!】

横島の姿が一瞬で変わったことに驚いたが、それ以上に面白い事になると確信し、周囲に人魂を作り出し、骨で4つの腕を作り出す。あの姿になった横島から感じる威圧感の中々の物……ただ身体が大きいだけでは、的になると判断した。

「ではでは、始めましょうか。貴方の力を見極めさせてもらいますよ」

「やってみなあッ!!」

地面を蹴りまるで飛ぶように向かってくる横島に巨大な外骨格の  
中でほくそ笑み、私はあの御方から名前を聞いていた横島の力を見極  
める為の戦いを挑むのだった……

リポート26 妖怪病院 その8へ続く

## その8

リポート26 妖怪病院 その8

〈横島視点〉

風を切り、俺を押しつぶさんと迫る掌を飛び退いて交す。でかい割りに結構早い……しかも腕が4本もあるので上下左右と縦横無尽かつ同時に攻撃を仕掛けてくるので正直避けるので手一杯だ。

「中々良い反応ですねぇ。ですが、これはどうですか？」

押し潰しからの横薙ぎ、それを跳躍してかわし巨大な腕の上に飛び乗り、そのまま相手の顔目掛けて走る。

「せいっ!!」

「無駄無駄」

踏み込んで拳を繰り出す。だが無駄と言う蘆屋の言葉の通り、ダメージが通っているようには思えない

【跳べ横島ッ！】

脳裏に響いた心眼の声に従い、腕を蹴って跳躍すると蘆屋の身体が紫のオーラに包まれ、凄まじい霊力が放電のような現象を引き起こす。

「ふむ、ふむ、助言の言葉に従い即座に行動できるのは素晴らしいですね」

褒める言葉だが、そのねちっこい絡みつくような声に眉を顰める。しかし、相手は幽霊に変化していると思っただが、変身してもダメージが通らないのは不思議だな。眼魂を交換するかと考えていると、再び心眼の声が脳裏に響く。

「……もう少し様子見をしろ」

心眼がそう言うのならそうするべきだろう。眼魂を交換するのは身体に掛かる負担も大きい、連続で交換するよりも有効な攻撃が分かってからでも十分と言うことだろう。そう判断し、ベルトに手を翳す。飛び出てきたガンガンブレードの柄を手にし振り上げ、肩に担ぐ。刀とかなら使いやすいんだけど、ガンガンブレードはどっちかと

言うの大剣なのでこうして担いだ方が振りやすいし使いやすい。

「ふっふっふっ……一人で私に勝てると思うとは、くっくっく。余りに早計」

殆ど反射的に横っ飛びする。理由も根拠も無いが、このままここに居てはいけない。そう思ったのだ……そして俺の目の前に広がる紫の炎を見て俺の直感が正しかったと思った。

「あれはやばいな」

上手く説明出来ないが、ガープやマタドールと戦った時の炎に良く似ている。身体へのダメージは勿論、魂へのダメージも凄まじい事になりそうだ。

【……恨みの炎だな】

俺がいた場所には髑髏が浮かび上がる巨大な火柱が浮かんでいた。あれは直撃していたら大変なことになっていたかもしれない

「そら、続けて行きますよ」

連続で浮かんでは消える火柱を見て、慌てて回避に入る。次の炎が上がるまで少しのインターバルはあるが、これは不味い。余りに攻撃の間隔が早すぎる

【気をつける、調子に乗って動きすぎるなッ！】

心眼の忠告に心の中で判ってる！と叫び返す、火柱の周りは陽炎のように揺らめいており、その火力の凄まじさを如実に物語っている。だが俺が危ないと思ったのはそれだけではない。

【清姫だ、清姫眼魂を使え！】

心眼のアドバイスに従い、青い眼魂を取り出しベルトにセットする。それと同時に白い着物を連想させるパーカーがベルトから飛び出すのだが……

「いや近い」

【♪♪】

べったりとくっついてくる清姫パーカーの頭をぐいっと押し、ベルトのレバーを掴んだ。

「変身ッ！」

「アーイツ！開眼、清姫。熾烈に苛烈、華麗に加熱ッ！」

パーカーを着込むと同時に現れた扇子を手にし、それを振ると火球が扇子から飛び出す。

「つとこれはこれは、中々面白いですねえ」

弾けるように飛び散った火球は巨大な亡霊の姿の蘆屋の身体を貫いたが、それも即座に回復されてしまう。

「それ」

「効くかッ！」

恨みの炎ではない、普通の炎ならば恐れる必要はない、腕をクロスして火に自ら突っ込む。

「効いていない……なるほどなるほど、その竜気ですか」

シズク魂同様、普通の火には強いのが清姫眼魂の特徴のようだ。普通の炎は自ら突っ込む事で防ぎ、扇子を振るい火球による連弾を叩き込む。だが、火の玉から飛び出したクナイの雨に慌てて身を振り、扇子を左手に持ち、右手にガンガンブレードを持ちそれを必死に振るう「くっ！厄介すぎるだろ！」

ガンガンブレードを振るう事でクナイを弾き、炎を掻き消すのだが、その数が余りにも多い。相手の攻撃を避ける為に動き回っていた足をつい止めてしまった。

「足を止めていていいのですかな？」

そしてその熱さに足を止めれば、蘆屋が狙い済ましたように再び火柱を放ってくる。咄嗟に飛び退いてかわすが、火柱はそのままその場所に残り続けている……一度は陰陽術で散らそうと思ったのだが、巨大化した事で火力が上がっているのか、それとも変身していることで俺の霊力のバランスが変わったのか……理由は判らないがとにかく無効化出来ないって言うのが変わりようの無い事実だ。炎があちこちに上がっていて逃げる場所が無いと言う事に焦りが胸に募る、一回ウイスプにチェンジすることも考えた。だが中距離の差し合いに特化しているウイスプでは相手の火力には対応しきれない、攻撃を回避しながらも必死に頭を働かせる……だがそれも火柱の方向に追詰められ、考えがどうしても纏まらない

(これが厄介なんだ……対処しきれんツ！)

心眼のフォローがあつたとしても、俺の動きではそのうち追詰められてしまう。俺の周囲を覆うように現れた火柱を見て思わず舌打ちした。病院で対峙した時の無敵性は確実にこの巨大な亡霊の姿になつても残っているだろう。それはさっきの渾身の一撃でもダメージが通らなかつた事を見れば明らかだ。

(美神さん達が来る前に弱点の1つでも見つけないと駄目だ)

……突破口を見出すためにも、このままでは駄目だと判断する。美神さん達が合流してくれても、相手の攻撃が通らないのでは的が増えるだけであり、俺達の状況がますます悪くなる結果になるだろう。

(牛若丸眼魂しかない)

相手の無敵の秘密を探りながら、相手の攻撃を回避する。清姫眼魂の火炎防御は優秀だが、運動力はさほど高くない。この場合は機動力があり、自分よりも巨大な相手と戦い慣れている牛若丸魂にチェンジするしかないと俺は判断した。

【横島、牛若丸だツ！】

「判つてる！」

心眼に言われるよりも先に牛若丸の眼魂を手に取り、ボタンを押してベルトに押し込む、ベルトから飛び出した牛若丸パーカーゴーストが盾になり、直撃しかけた炎を弾き飛ばしてくる。その間にガンガンブレードを地面に突き立て、レバーを握り締め、力強く引きながら叫ぶ

「変身ツ！」

【カイガンツ！牛若丸！シユバツと八艘！壇ノ浦ツ!!】

【頑張りましょう！主殿ツ！】

パーカーが装着され、身体が一気に軽くなる。そしてそれと同時に牛若丸の声も響く

(うえ!?牛若丸!?牛若丸ナンデ!?銀ちゃん達は!?)

2人を守ってくれていると思っていた牛若丸の声がしたので、思わずそう叫ぶ。頭は混乱していても、身体は動き連続で浮かび上がる火柱と左右から伸びる腕を回避し続ける

(ノブとチビ達に任せてきました！それに1人でどうにかなるとお考えですか？)

牛若丸の言葉に無理と返事を返す、心眼のサポートがあったとしてもあいつの攻撃には対処しきれない。地面に突き立ったガンガンブレードを踏み台にして飛び上がり、振るわれた真空の刃を回避して着地する

「手伝ってくれるか？」

【勿論ですとも！】

元氣よく返事を返す牛若丸。俺は地面に突き立ったガンガンブレードを引き抜き、それを2つに分離させ、4つの腕と髑髏の胴体、そして2つの頭を持つ異形へと変化した蘆屋を睨みつけるのだった

……

〜夏子視点〜

廃墟から元の緋立病院に戻って安堵したのも束の間。病棟の窓の外の光景は私の理解を超えていた……いやな感じの男が巨大な亡霊になり、横つちは特撮番組に出てくるような姿になっている。一般人である私の理解を完全に超えていたのは間違いない

「はははは、軽業師ですか、いやいや実に愉快！」

「くたばれ！この外道ツ！！」

久しぶりに再会した幼馴染が猪に乗っていたのも驚いたし、なんか綺麗な女の子も一緒だし、可愛い生き物と一緒に、でもあれはいくらなんでもないと思う。何アレ、なんか特撮番組に出てきそうな姿になっているんだけどと言いたいんだけど言葉にならず、指を窓の外に向ける。銀ちゃんは腕を組んで、うんうんと頷き

「気持ちは判る。俺も最初見たとき同じ気持ちやった」

だよね、あんなの見れば動揺して声も出ないよね!?

「みみむー！」

「ぶぎゅーぴっぐー♪」

【ノブ!!ノブ!!】

小動物軍団が横つちを応援している。その姿は愛らしい、愛らしい

んだけど……目を何度か擦る、それでも目の前の光景は変わっていなかった。

「ぶぎゅー」

「増えてるツ!？」

エルちゃんを背中に乗せている猪、そして私の目の前にも猪がいて、思わず増えてる!と叫ぶ。なんでやねん!大きくなるだけでも相当なのに、それなのに増えるってどういう事!?!猪を飼ってるだけでも相当なのに、もしかしてこの猪妖怪なの!と叫びそうになる

「いやあこいつらは増えるし、でかくなるし、ビームも出さずぞ?そういう猪じゃ」

「どういう猪!？」

普通猪は増えないし、大きくならないし、ビームも出ない。愛想は良いし、可愛らしいけど、なんかやばい気がする。

(と言うか、この子もなんだけど)

血の様な真紅の瞳、そして絹のような黒髪は同性からしてもうらやましい。小柄ではあるが、小柄だからこそ彼女の美しさが際立っているような……気がする。しかし、最大の問題は彼女の顔の周りを浮遊している赤い火の玉だ……もしかして、いやもしかしなくてもこの子も幽霊なの?尋ねたいけど、尋ねられず、その顔を見つめているとノツブと呼ばれた少女は悪戯っぽく笑う。

「ん?ワシが気になるか?ははははツ!!ワシも幽霊じゃよ♪」

「横つちが何を考えているのか判らないツ!!」

GSを目指しているはずなのに、なんで幽霊とか、精霊とか、悪魔とかと一緒になのかわからず思わず叫ぶ。すると、ノツブと呼ばれていた少女が背負っていた火縄銃が私の顔に向けられる

「ちよっ!なにをする」

「だーってる小僧。下手に騒ぐな馬鹿者。ワシが何で横島の手伝いもせずにここに居ると思ってるんじゃ」

そう言うと、火縄銃の銃口は私の顔から逸らされた。だがあの一瞬、私は死ぬと思った。それだけの怒気が放たれたのが判る……いや怒気じゃなくて、もしかすると今のが殺気って奴なのかもしれない。



そう思っている私に銃を向けていた少女は気をつけろと短い、鋭い声で告げる。

【横島の幼馴染の割には異常に耐性が無いの、まあ良い。普通はそうじゃろうからな、だがここはまだあの蘆屋とか言う化け物の支配に置かれてる、もつとよく考えて行動するんじゃない】

火縄銃の引き金が引かれ、暗がりから姿を見せた腕が蠅螂の兵士の頭が吹っ飛んだ。それは紛れも無く、私の大声で呼び寄せてしまった敵の姿だった……

「……すいませんでした」

「ごめんなさい」

銀ちゃんと揃って謝罪を口にする。私達の謝罪を聞いたノツブは鋭い視線を窓の外に向ける、これ以上話す事は無いとその態度で物語っている……それはそれだけ私達が彼女を怒らせてしまったと言う証拠だった。

(……横っち)

窓の外に視線を向ける。巨大な幽霊と戦う特撮番組のHEROのような姿をした横っち……その姿に驚かされるのと同時に、横っちが酷く遠くにいるように思えた。再会したらアイドルになっていた銀ちゃんにも驚かされたが、それとは別のベクトルで横っちが酷く遠くにいるように思えたのだ……

↳横島視点

「無駄無駄無駄!!そんな攻撃など効きませんよツ!!」

「ちっ!!」

振るわれた腕を踏み台にして大きく後方へ跳ぶ、余りに跳びすぎると蘆屋が展開している炎の壁に飲み込まれるので、その前に手を地面に叩きつけ地面を削り炎まで後数歩と言う所でやっと動きが止まった

(どう見る。心眼)

【異常だな……何かカラクリがあると見た】

逃げていてもキリが無いと思い、牛若丸の力も借りて切り込んでみ

たがやはりダメージは与えられない。

(手応えすらないとなると、あれはこの場所に存在していない可能性もあります)

牛若丸も自分の考えを告げる。思いつきり加速してからの突撃もダメージが無いとなると、牛若丸の話も真実味を帯びてくる。

(眼魂を交換した方がいいか?)

マツハ魂や、シズク魂、それにジャンヌ魂など、他の眼魂だって所有している。ゴーストチェンジをするべきかと問いかける、それに大して2人の返答はNOだった。

【今は止めておけ、牛若丸の身軽さがあるから回避出来ているが、眼魂を変えては捕まる可能性がある】

【それに、有効打を与えられず霊力だけを消耗しては変身も解除されてしまいますよ】

他の眼魂は多彩な能力を持つがその反面、俺に掛かる負担も大きい。力尽きるリスクを考えるとやはりもう少し様子見をして、相手の弱点、もしくはダメージを与える方法を見極める必要があるということか……

【それ行きますよ】

4本の腕と言うことは20本の指があると言うことだ。そしてそれらがバラバラに迫ってくる光景は圧巻である、だがそれは俺の命を奪いに来ている一撃と言うことには変わりはない

「ぐっぐうう……ッー」

ガンガンブレードで受け止め、いなすが自由自在に動き回る指は予想以上に厄介だった。牛若丸眼魂でなければ、2〜3回受け止めただけで押し潰されていたと思う

【左に飛べー！そこから転がって敵の攻撃範囲から逃れろ！】

心眼の言葉に疑問も不安も抱かず、何も考えず言う通りに動く。1発だけ肩を掠ったが20本の指によって作られた鳥籠から逃げる為の犠牲と考えれば、それは安すぎるだろう。

「おおー！これでも駄目ですか！いやいや、愉快愉快、今の時代には中々面白い男がいるのですねえ」

巨大な化け物の姿なのに、その声は飄々とした男の声。その外見と声の質の違いに僅かに混乱するが、それでもガンガンブレードを両手に構え続ける。

「それで大丈夫です、この手の輩は正攻法で来ることはありません。絡め手、絡め手で仕掛けてきます」

牛若丸の言葉が脳裏に響く、確かに少し顔を見ただけだが嫌みっぽそうな顔をしていた。それに身に纏っている空気が陰湿で顔を合わせているだけで気分が悪くなった……姿は人間だが、俺にはどうしても人間には思えなかった。

「随分とこっけいな動きで逃げ回りますねえ。それでは私を倒すことなんて出来ないですよ？」

地面から吹き上がる紫の炎を必死に回避し続ける、次の火柱が出るまでに大分時間差がある。だが、その炎が暫くその場に残り続けるのが実に厭らしい、あの蘆屋っていう男の性格を如実に現していると思う。しかも回避に専念していると挑発の声を投げかけてくる……だがそれが挑発と判っているので足を止めるなんてことはありえない……

「魔人を退け、御方を殴ったと聞いていたわりにはあまりにも弱い」  
「な……!?!」

蘆屋から告げられた言葉に思わず足を止めた……いや、止めさせられてしまった。それだけ蘆屋が口にした言葉は俺にとって衝撃的だったからだ、魔人を俺が退けたという話は神魔の中で隠されている話だと聞いているし、蘆屋の口ぶりだと蘆屋とガープが繋がっているようなイントネーションだった事もある。この状況で足を止める、蘆屋の攻撃が決定打にならなかったのは、牛若丸眼魂の機動力による回避能力があったからだ。それなのに足を止めてしまった……足を止めた俺を見て蘆屋が邪悪な笑みを浮かべたのが判った。

「愚かなり……さあ、死になさい」

「しまっ!?!」

目の前に広がる光の本流。咄嗟に両腕をクロスして防御姿勢に入るが、当然そんな物で防げるなんて思っていない。だが身体を守らな

ければと言う当たり前の防衛本能による防御態勢だった……

【ちいっ!!】

飲み込まれる！そう思った瞬間俺の脳裏に響いたのは心眼の舌打ち、そして凄まじい紫の光に飲まれたと思った瞬間に俺の視界に広がったのは俺を包み込む、青白い霊力の光なのだった……

くルイ視点く

巨大な悪霊となった何者かと戦う横島を見つめる。誰の邪魔も入らない、超高高度……少しだけ見にくいだが、それでも神魔の余計な邪魔が入らないのだから、これはこれで良いだろう。

「ルイ様。こちらをどうぞ」

「ああ、ありがとうルキフグス。良いタイミングだよ」

ルキフグスが空中にテーブルと椅子を呼び出す、机の上には摘みとワインのボトルまで準備されている。流石ルキフグス、完璧なメイドと言えるだろう。引かれた椅子に腰掛けるとゆっくりと押され机が近くに来る、グラスを手に取り白ワインを口に含む。

「ふふふ、ああ。楽しいね」

横島が死んでしまえば私の楽しみはその大半が消えるだろう、それでも私は助けに出ないし、ルキフグスも応援には行かせない。それについてだけど、ビュレトやブリュンヒルデもこの場には来させない。横島の真価は生命の危機に追い詰められれば、追詰められるほどの真価を発揮する。そう簡単に助けなどに入られて盛り下がるような真似はして欲しくない。

「よろしいのですか？このままでは横島は……「死なないよ。大丈夫、問題ないさ」

ルキフグスの言葉を遮って告げる、確かにあの凄まじい霊力の光に横島が飲まれかけた時は思わず腰を上げかけた。だがそれは寸前の所で止まった

(いやいや、よくやるねえ)

心眼と言う横島に与えられている使い魔……私が横島の家を訪ねるとずっと私を警戒しつつも、決して姿を見せないその使い魔が気配

をあらわにした。それだけでも面白いのだが、今回はそれだけではなかった。横島が光の本流に飲まれたと思った瞬間、小さな球体がベルトから吐き出された。それは私で無ければ見逃してしまうほどの一瞬だけ具現化していた……本来ならそれにそこまで気に掛ける必要は無い、だがそれが伝説とも言える霊具なら話は別だ。しかもそれを相手の攻撃にあわせて、確認させないように使うという心眼の涙ぐましい努力も無駄になったと思うと更に楽しいと思えてくる。

(文珠……か)

文珠……私でも数回しか見たことが無い伝説の具現。それが使われた……それは私が新しい玩具を見つけた瞬間でもあった

(横島の能力か……いやいや、本当に面白い)

横島の能力はどれも面白いと思っていたが、まさか文珠までも獲得するとは……横島の才能か、それとも魂の問題か……どっちにしろ面白い

(しかしこうなると少し不味いか)

このまま戦いが続けば横島が死ぬ可能性は高い……だが横島は既に魔人へと到る準備が出来ている。つまり死ねば魔人として転生する可能性が高いのだ、人間としては死を迎えていても横島と言う存在は死にはしない。横島の本質が変わってしまうのは面白くないかもしれないが、人間の寿命としての枷から逃れるのならそれも一興……私はそう思っていたのだが、このまま死んでしまうとネロの物になってしまいかもしれない……それは私としては面白いものではない。しかし、私が表立って動くわけにも行かない

「ルイ様、ベルゼブルが近づいています」

「ああ。それはいい、ルキフグス。呼んで来てくれ」

私は表立って動けないが、私でなければ何の問題も無い。それにベルゼブルは随分と横島に執着しているのでギリギリまで私の手元においておいて、本当に危ない時に助けに行かせる。いつ私の許しが出るかそわそわするベルゼブルを見るのも面白いかもしれない、私は手元のグラスを見つめながら横島を見ていると飽きる事は無いなど小さく呟くのだった……

〈蘆屋視点〉

今の攻撃は直撃した。私にはその確信があった、横島の心を揺さぶり足を止め大きな一撃を叩き込む。それは戦いの中の定石とも言える戦法だ……あれだけ収束した霊波砲ならば完全に横島の意識を刈り取ったはずだ。

(大きな土産が出来ましたねえ)

そろそろ人間界で出来る事も無くなるので撤退しようと思っていた矢先のナイトメアの襲来、そしてそれを喰らう事による私の霊力の上昇……あの馬鹿な馬面が現れた事で計画が1つも2つも前倒しになったことは素晴らしい。そして更に御方が望んでいる横島忠夫の身柄の確保……ここまでの手土産があれば私が人間であっても舐められることは無いでしょう。いや、それ所か並みの神魔よりもいい立場で迎えられるかもしれない

(……そう私は特別なのだからッ！)

私はかつて日本軍で霊力の軍事利用をし、世界大戦を制する為の発明を繰り返していた。我が偉大なる祖先「蘆屋道満」が扱ったという陰陽術も学び、そして今の霊能とは異なる平安時代の技術も学んだ。それによって作れたのが、あの人間の身体をベースにした不死の兵士であり、そして手足を動物や動物の物に置き換えた異形の兵士達……そして最後に手がけた戦車をベースに人間の魂を吹き込んだ軌道要塞……

(全く、愚か過ぎて話にならない)

私が作った兵器を使えば、日本は世界大戦の勝者になれたと言うのに……人道的ではない、それは人間がやる行いではない等と言って私を殺そうとした。それで私は人間に見切りを付けた……私の素晴らしい研究を無駄にする国にこれ以上貢献するつもりは無かった。道満が考案し、使う事の出来なかった邪法を使い人間を捨てた時にあの御方に出会ったのだ。自分を認めてくれる場所、自分がいるべき場所を！今まで生きてきたのはこの御方に出会う為だけだったのだと！そう思うほどに私は強く、あの御方に心酔した。だが今はまだ早い、

もつと力をつけろと言われて、その場は別れたが今ならばあの御方の元で力を振るうことが出来るのだ

(さてと、後はあの英霊を回収して離脱することにしませうか)

この姿は非常に強力だが、その分燃費が悪い……下手にこの場に留まって神魔や、GSと戦うことになるかと面倒だ。横島忠夫とあの英霊を回収して離脱するべき動き出した時。私の放った霊波波を突き破りピンクのパーカーが現れる……

【アーンッ！シツカリミナー！シツカリミナーッ!!】

それに続くように聞えてきた歌に驚きながらも微笑んだ。さつきは霊波砲は殺さない程度には全力だった、あの奇妙な鎧で護られていたとしても意識を刈り取るだけの攻撃力はあつたはずなのだ

(ああ、これはまだまだ面白くなりそうだ)

早く離脱しなければならぬと判っている。だがあの御方が警戒し、気をつけろと言う横島忠夫の力。それを体感してみるのもいいかもしれない、横島にも言ったがこれから何度も顔を見合わせるようになるかもしれないのだ。相手の力を知っておくことは決して無駄ではない……だが、さつきも言った通り、この姿は燃費が悪い。ここは取り込んでいる兵士を戦力にして戦うことにしましょう

「変身！」

【カイガン！卑弥呼！未来を予告！邪馬台国！】

霊波砲を吹き飛ばし姿を見せた横島、やや毒々しいピンク色に少し眉を顰める……いえ、これは色で眉を顰めたのではないですね。何かは判らないが、あの姿になった瞬間。周囲の空気が変わった……私に有利だった空気が消えてしまったのが判る。

「んっふふふ。いやいや、それはまた奇怪な姿ですなあ」

「おめえに言われたくねえッ！」

ははは、確かに……いや、いや、全くその通りで思わず笑ってしまう。その齒に衣を着せぬ言い方は嫌いではない

「どうです？私と共に御方に仕えるつもりはありませんか？」

連れ去るよりも仲間として連れて行ったほうが楽だ。だからそう言葉を投げかけたが、横島の返答は霊波刃を飛ばすという物だった。

「残念交渉決裂ですね、では命のやり取りを始めましょうか」

兵士を影から呼び出し、2本の腕には霊力を纏わせ、残りの2本で印を結ぶ、横島は刀を逆手に構え腰を深く落とす。

(これはこれで愉快なり)

自ら戦場に出るとするのは初めてだが、これはこれで面白いと微笑み。弾丸のような勢いで駆け出してくる横島に向かって、異形の兵士を差し向けるのだった……

リポート26 妖怪病院 その9へ続く



## その9

レポート26 妖怪病院 その9

緋立病院に向かっていている美神達は緋立病院の方から天に向かって登る霊力の柱を見て、自分達の危惧している展開になっていると確信した

「不味いわねッ！ ちょっと飛ばしていくわよッ!!」

もう十分飛ばしている。だがこれだけ離れていても響いてくる霊力の波動に美神達は激しい焦燥感を感じた、何故ならばチビ達が居るとはいえ、横島1人。それに霊力を持たない民間人が2人……それだけのハンデを背負って戦えるだけの経験が横島には無いからだ

「あの感じ……真つ当な霊力ではないですね」

「濁り切ってて気持ち悪くなるわね」

くえすとタママモが顔を顰めながら告げる。それは勿論美神も感じていた、神族の神通力、魔族の魔力とは違う。完全な人間の霊力なのだが、それが濁りきっている……人間でありながら魔族に近い魔力を発しているのだ。それはつまり姿は人間だが、もうその魂は人間ではないという証拠だった。

「聖奈さんとかの助っ人を受けるべきでしたか」

「……それは考えたけど無理」

余りに派手に聖奈達が動き回ると、人間界の霊力のバランスを崩すことになる。それにもしこの霊力の反応がガープとかならば、それも叶うが、人間界レベルの悪霊や魔族の出現に上級神魔である聖奈に助っ人を頼むことは難しい。

「シズク！ 先行出来ないッ!?!」

「……出来るならしてる」

シズクの苛立った声に美神は舌打ちする。水を媒介にした転移で一気に横島と合流して貰おうと思っていたのだが、それも叶わない。「おキヌちゃん！ 先行して！ 精霊石と粉末！ それと聖水を持っていて！」

【は、はい！判りましたあッ!!】

おキヌが美神の指示で精霊石などをまとめてある袋を抱えて、バンの天井から飛び出していく

「美神殿！おキヌ殿だけで大丈夫でござるか!?拙者も！」

「あんたはおとなしくしてなさいッ！」

自分もとと飛び出していこうとするシロを美神は一喝して止める。くえすも車から出ないのは、この周辺の空気が既に瘴気と呼ぶに相応しいレベルにまで歪んでいるからだ。おキヌを先行させたのは、精霊石を所持している上に空を飛ぶ事が出来るので一直線に向かうことが出来るから選んだのだ。だが走って行くシロでは、辿り着く前に瘴気に倒れる可能性もあり美神はシロを止めたのだ。

(無事でいてよ、横島君ッ！)

前々から感じていたが、全ての事件は横島を中心にしておきている。ありえないと一蹴したわけだが、今回の事で、本当にその通りなのかもしれない……思い当たる節はあまりにも多すぎる。美神は激しい胸騒ぎを感じながら強くアクセルを踏み込み、緋立病院へ向かう山道に向かってハンドルを切るのだった……

～横島視点～

蘆屋の放った特大の霊波砲……俺は勿論、牛若丸も反応出来なかった。つまりあの攻撃を防いだのは心眼と言うことになる。

【すまん、文珠を使った】

脳裏に響く心眼の謝罪。文珠は極力使うなど言われていた、それだけ稀少な霊具であるのと同時に俺が作れると判ると俺の身が危ないと言う美神さん達の助言だった。正直な話それだけ貴重な道具と言われても正直ピンと来ないし、なによりも使わなければ防げなかったとなれば心眼に感謝こそすれど、責める訳も無い。まあ神魔にばれたとしても、正直なるようになれとしか言えないし、使えば生き残れると判っているのならばそれを使うのを躊躇う馬鹿はいない。

(それよりも今はあいつを何とかしようぜ)

蘆屋は今も健在だ。ダメージが通らないのだから、それも当然だが……いつまでも相手に攻撃を仕掛けられないのではジリ貧だ。なんとしても突破口を見出す必要がある。

【主殿、どうしますか？】

俺は正直に言うと、今使えて神魔眼魂を除けばもつとも能力の高いグレイト魂にチェンジするつもりだった。だがグレイト魂はヒミコ魂に変化していた。それはグレイト魂がヒミコ魂が有効だと判断してくれたと思いたい、正直このド派手なピンクはどうかと思うが、まずはなによりも命は大事にだ

「まずは様子見、突破口を見つけたら一気に其処から突き崩す」

【心得ました。では私が先陣を切るとしましょうか】

私服の上に鎧甲冑……痴女使用はそれはそれで駄目だけど……これはこれで似合わない

(だよなあ)

カジュアルな服の上に鎧……上手く言えないけど、これじゃない感じが凄いが……本人が大して気にしてない様子なのでそれを指摘するのは正直どうかと言うものだろう

【あああー】

【ぼうらあーッ!!】

【ぎっぎっぐやあーあーッ!!】

奇声を発して近づいてくる手足が人間ではない兵士達。その哀れな姿を見ると蘆屋に対する激しい怒りがふつふつと湧き上がってくる

「おやおや、そんなにもその兵士達が哀れですか？ ですが、彼らは力を求めた。その結果がその姿、何も嘆くことも怒ることもありませんよ」

仮に力を求めたとしても、まさか自分がこんな姿になるなんて思っても見なかっただろう。蘆屋によって改造され、人間としての姿も尊厳も失い、ただ蘆屋に使役されるだけの哀れな兵士……俺には恐ろしいと思うよりも先に、可哀想と言う気持ちと彼らをこんな姿にした蘆屋に対する激しい怒りがふつふつと沸いて来る。

「てめえはもう黙れ、ぶっ潰してやる」

「良いですねえ、その純粹な激しい怒り、私には理解出来ない物ですが……くふふふ、そういう正義感に溢れている人間を叩き潰すのが私の趣味なのですよ」

……ほんとはいい性格をしてやがる。今すぐにでもあいつを叩き潰したいが、まずは今俺達に近づいて来ている亡霊兵士を突破し、蘆屋の懐にまで飛び込む必要がある。

【怒りは判るが、我を見失うなよ】

心眼の助言に判つてると返事を返す、相手の性格が最低最悪で、しかも俺と同じ陰陽師。下手に近づけば、そのまま罠に囚われて捕まるかもしれない。相手にどれだけかかっているとしても冷静に相手の策略に引つかからずに冷静に対応する

「行くぜ、牛若丸」

【はい、参りましょう】

俺と牛若丸に近づいてくる異形の兵士を見つめ、俺と牛若丸は同時に地面を蹴って走り出すのだった……

く牛若丸視点く

人の身体に獣の手足……人間の知性を持った獣と考えればそれは優秀なのかもしれない。だが肝心の人間の面が既に死んでいれば、それは唯の歪な異形に過ぎない

【シッ!!】

擦れ違い様に一閃し、そのまま半回転して振り下ろされた巨大な螳螂の鎌を受け止める。確かに昆虫の力を人間の大ききで振るうと考えれば、それは凄まじい脅威だ。だが狙いは甘い、そして唯の力任せの攻撃ともなれば囲まれる事さえ避ければ脅威とは足りえない。

【うあああ……】

【ギグギ】

【グルアアアアッー】

「ふふふ、兵士はまだまだいますよ」

蘆屋の影から次々と出てくる兵士達。そのどれもが既に死んでい

るのを無理やり使役されていると思うと哀れにも思うが、今は敵同士。自分達が生き残ることだけを最優先で考える

「せいッ!!」

【ギンチャア!?!】

主殿の動きはやはりぎこちなさが残っている。だが、私や信長との修練のおかげか、刀を持つ握り、足捌きはやはり格段に良くなっている

「このっ!!」

敵の攻撃を刀の腹で受け止め、そのまま半回転し薙ぎ払う、そしてそのままの勢いで刀を振り上げ敵の一撃を防ぎ、蹴りを叩き込んで相手を吹き飛ばす。

(これだけの動きが出来るのに何故、こんなにも自己評価が低いのか……私には理解できません)

左右から迫ってくる異形の拳を地面を蹴って回避し、私に向かって伸ばされている手の上に着地し、主殿の方に向かって走る

「はっ!!」

互いの影から姿を見せた異形を同時に切り裂き、互いに背中に会わせで合流する。

【流石心眼殿ですね】

【ふん、私が言う前に横島が気付いていた】

心眼殿の言葉にそれは失礼と返事を返しながら、周囲をうかがう。姿は見えないが、肌突き刺さる殺気は時間が経てば経つほどにその数を増している。

(なあ、牛若丸。おかしいとは思わないか)

主殿の問いかけに私もそう思いますと返事を返す。先ほどまでの恐ろしいまでの波状攻撃が姿を消し、今は異形の兵士とメインとした包囲網を作る戦闘スタイル、私の力を主が使っていた時の炎で私達を追いまわす攻撃は兵士を召喚しだしてから使っていない

「それ、参りますぞ」

「炎と雷だッ!」

4本の腕に持っている巨大な札による、広範囲に広がる陰陽術を

使ってくる。だがそれは細かい制御が出来ておらず、私や主殿は勿論。兵士さえも巻き込む広範囲攻撃にこそなっているが、狙いは甘く私の機動力を持ってすれば避けることは容易く、さらにそこに主殿の予知能力が加われば対処すること事態は容易い。

(どう見る?)

(おおよその推測になりますか……あの力を長時間は維持出来ないのではないのでしょうか?)

巨大化することによる範囲攻撃、周囲の兵士を取り込むことで増大した霊力による強力な攻撃。それらはどれも強力な攻撃だが、それに伴う霊力の消耗とて激しいはずだ。

(賭けだけど突っ込むのはどうだろう?心眼は慎重になれっっていつてるけど)

慎重になるのも必要な事だと思えますが、敵の戦力が未知数で戦えるのが私と主殿と数が限られている事を考えれば私の判断は1つ

【前に出ましよう】

戦力差は明らか、このままでは私も主殿は勿論。チビ達や主殿の旧友の命も危なくなる、それならばまだ動ける内に、まだ私も主殿も体力にも霊力にも余裕があるうちに前に出るべきだ。

「……仕方ない、霊力の流れは私が読む。危険だと思えば止めるぞ」

心眼殿の呆れた様な言葉を聞きながら、私と主殿は地面を蹴って蘆屋の元へ向かって走り出すのだった……

〜ベルゼブル視点〜

異常な霊力の付近に横島の霊力を感じて様子を見に来た(断固助けに来たわけではない)のだが、そこにルイ様とルキフグスがいて、私は近くに行く事を禁じられてしまった。

「そんなに慌てなくても大丈夫だよ。ベルゼブル」

「……慌ててなどいらないのですが……」

「ベルゼブル、物凄い足踏みしてますが?」

ルキフグスに言われて気付いた、確かに右足が小刻みに動いて貧乏ゆすりをしている。そしてそんな私を見て、ルイ様がとても微笑まし

い物を見るような顔をしている

「……死にたい」

「死んでもいいけど、また復活するだけだよ？」

……物凄く真面目に返答されて、さらに悲しくなった。どうして横島が関わると私はここまで平常心を失うようになったのか……自分の事ながら理解出来ない。

「さてと、ベルゼブル。この状況をどう見る？」

「……正直に言いますと、応援は必要ないかと」

私の言葉にルイ様はその通りだねと笑う。確かにここにきた時は焦っていた、だがこうしてルイ様に玩具にされ、ルキフグスの慰めるような視線に晒されていると嫌でも精神が落ち着いてくる

「でやああああッ!!!」

愚直に、ただただ愚直に進むだけ、一杯一杯になっているのは判る。だがそれを補って、導く心眼がいる。だからこそ横島は本能とすべき荒々しい動きで前に進んでいるのだが、その中にも日々の修行で身に付けた技が出ている

「横島は面白いね」

「そうですね……とても面白いです」

才能の塊の癖に、自分に自信が無くても自分だけではない、他人のためにも全力で頑張れる。本当に面白いというか、見ていて飽きない奴だと思う。

「おーりゃああーッ!!!」

走りながら胴を切り払い、逆袈裟で相手の腕を切り裂いて、拳を相手の顔面に叩き込む。型なんて無い、でたらめな動きに見える。だがその実、どの動きにも決められた動きや足捌きが見え隠れしている。(静と動を意識せずに組み合わせるか……)

普通はどちらか1つだが、横島には経験も知識も無い。例えるのなら無地の紙か澄んだ水だ、どんな色に形にもなるし、どんな色にも染まる。横島と一緒に巨大な亡霊へと駆けている英霊の動きも真似し、1秒前の横島よりも、今の横島の方が強い。自分に必要な物、自分の戦い方に合致すると思えばどんな動きでも学習し、自分の物とす

る。

「横島は天性の持ち主ですね」

「そうだね、知識が無いって言うのがこうもプラスに働く男と言うのは見たことがないよ」

知識があつて応用がある、それが普通だ。だが横島の場合、応用から覚えてそこから普通を覚えていく、何もかも本当にちぐはぐな男だ。

(む、あれは……)

フェンリルもどきと戦つた時に見せた、攻防一体の構え。敵の攻撃を受け止めると同時に重心を変え、敵の動きを利用して受け流し、背後に回りこむ。鎧を展開していれば、そんな小細工は必要ない。だが生身の時に戦う時に覚えた私独自の剣術……それすらも組み込んでいるか……なんとも強欲な男だ

「ベルゼブル。凄く嬉しそうだね」

「どうぞ」

すつと差し出された鏡に映る私の顔は嬉しそうと言うよりも、だらしなく緩んでいるとも言える顔で……

「だから！なんで！横島と関わると私は変になるツ!!」

「いやいや、面白くていいよ。ベルゼブル、もつと私に愉快的物を見せてくれ」

「お褒めに預かり光栄ですツ!!」

半分切れながらルイ様に返事を返す。ルイ様に喜んで貰えるのは何よりも喜ぶべきことだ、だがそれが自分でも制御出来ない感情となると話は別だ。上手く説明出来ないが、恥ずかしさだけが胸を満たしていく

「つまり横島というところなる、そう、恋愛雑魚だ」

「……あの正直それはどうかと思うんですけど」

頭を抱えて呻いているベルゼブルを見て、これほど楽しい物は無いと笑うルイと、同僚が上手く説明出来ないが大変なことになっていると理解したルキフグス

「なに、心配することはない。横島と関われば、直ぐにお前もこうな



る」

「……あの帰ったら駄目でしようか？」

「駄目に決まってるだろう？それだと私が楽しくないじゃないか」

ルイの言葉にルキフグスは死んだ目でそうですねと小さく呟く、でも自分は大丈夫かもしれないと思っていたルキフグス。だが彼女もまた、ルイをこれ以上無いほどに楽しませる事となるのだった……

↳横島視点↳

蘆屋に改造された兵士の勢いは留まることは無く、むしろ近づけば近づくほどにその勢いを増していた。だがそれに反比例するように、蘆屋からの妨害は減り、ついにはその姿も巨大な亡霊から元の人型に戻り、俺達の動きを拘束するような陰陽術に切り替えてきた。それは蘆屋の霊力が尽きかけているという証拠に思えた。だが、牛若丸も霊力も消耗がかなり激しいのか、その姿が壊れかけのTVのように明暗を繰り返している

【すみません！私はここまで……】

6つ腕の異形の兵士の頭を斬り飛ばしたと同時に眼魂に戻った牛若丸。眼魂が地面に落ちる前に駆け出し、眼魂を拾い上げる。

(お疲れ様)

俺の消耗を少しでも少なくしようとして、限界を超えて頑張ってくれた牛若丸に労いの言葉を呟く、もし牛若丸がいなければ、俺も多くの昔に限界を超えていたかもしれない。それだけ、蘆屋の召喚する敵の数には限りが無かった

「本当に素晴らしい力ですよ。よく2人でここまで戦ったと褒めて上げたい位です」

口調こそ穏やかだが、その目は赤く光っており蘆屋が激しい怒りを覚えているのが良く判る。それとも霊力の消耗が限界なのか……どっちにせよ、向こうもそろそろ限界が近いと見て間違いないだろう。

「へえ、褒めてくれるって言うなら、何かくれるのか？」

何百体切り倒したかは判らないが、俺の手も振るえガンガンブレー

ドを握る手も、俺自身の汗なのか、それとも敵の血なのか、ぬるぬると滑っている。下手をするとすっぽ抜けそうなのが怖いところだ。「そうですねえ、貴方を思いつきり改造するのも楽しそうだと思いますか？」

むき出しの悪意って言うのはこんなにも恐ろしい物なんだな……姿は人間なのに、その考え方も行動も人間とは程遠い。怪人とも言うべき存在を目の当たりにし、靈力に飲み込まれると大変なことになるという言葉の意味を……俺は知ることになったのかもしれない。靈力を扱う者ならば、そのすべてが警戒しなければならぬ靈力に飲み込まれた者の末路とでも言うべき姿は俺もなりえるかもしれない可能性なのだと思うべきなのだと思います。

「ですが、それもまた難しいでしょうなあ……」

にやにやといやらしく笑う蘆屋の影から、再び改造された兵士が姿を見せる。だが今までと違うのは、蘆屋の背後に黒い穴が開いている事だ。

「大変楽しい時を過ごす事が出来ましたが、それもここまで、ではまた何れ、名も無き大地の精霊が眠る場所にてお会いしましょう」

「ま、待てー！逃げるなッ!!」

蘆屋は危険だ、ここで逃がすわけには行かない。ガンガンブレードを変形させて、靈波砲での狙撃を狙う

「くふふふ、無駄ですよ」

「【(アアアアーツ!!)】」

「クソッ!!」

亡霊兵士が蘆屋を庇うように立ち塞がり、靈波砲は蘆屋にまで届かない。そうしている間にも蘆屋の身体は既に腰まで消えている……

「くそッ！間に合えッ!!」

ゴーストドライバーのレバーを掴んで引こうとするが、それよりも早く蘆屋の身体は消えてしまっただった

「ふふふふ、もう間に合いませんよ【てええーいいッ!!】ギツ!？」

空中から聞えてきたおキヌちゃんの声、そして投げ付けられた精霊石の光が蘆屋を包み込んだ。

「今だッ!!」

【ダイカイガン! ヒミコ! オメガドライブッ!!】

普通に攻撃したら蘆屋にまでは届かない、腰を深く落とすと同時に地面を蹴り回転しながら飛び上がる。俺の動きにそって霊力の竜巻が発生し、俺を囲んでいた亡霊兵士を巻き上げ浄化していく……

(そうか、これがヒミコ魂の能力か)

蘆屋の無敵能力も消し去っていたし、何よりも何の苦しみも無い表情で消えていく亡霊兵士を見て、ヒミコ魂の能力は悪霊を浄化する能力。それに特化しているのだと確信した、最大まで上昇すると同時に半回転し、空中に作り出したサイキックソーサーの上に着地すると同時に爆発させる。

「いつけえええええッ!!」

眩いまでに輝くピンクの光に包まれながら、俺は全力で蘆屋のから空きの胴体に蹴りを叩き込んだ……のだが、蘆屋の身体は煙と共に消え去り、ゆつくりと俺の手の中に何かが落ちてきた

「これは……」

それは焼け焦げた紙で出来た人型だった。その焼け焦げた場所は俺の蹴りが命中した場所と全く同じ場所だった

【変わり身だ。いつからすり替わっていたんだ……】

なんとしてもここで倒すと決めていたのに……結局は逃げられてしまった訳……か。

【横島さん、大丈夫ですか?】

「あーごめん、無理。後よろしく」

おキヌちゃんの返事を聞くよりも先に、変身が解除され、俺はそのまま背中から倒れこみながら意識を失った。体力の消耗も霊力も消費も限界を超えていたし、何よりもしとめ損ねたと言うのが大分堪えた……紛れも無く、俺は蘆屋を追詰めていたはずなのに、自分でも気付かないうちにすり替わっていた。それは俺と蘆屋の間にとつもない力の差があるように思えた……

(蘆屋……道貞……か)

その名は決して忘れてはいけない、ゆつくりと消えていく意識の中

……俺の心に蘆屋の名前と容姿は深く刻まれた。上手く説明出来ないのだが……俺は蘆屋を知っている……そんな気がしてならないのだった……

リポート26 妖怪病院 その10へ続く

## その10

リポート26 妖怪病院 その10

くくえす視点く

緋立病院の近くまで来た私達は予想にもしない相手によって足止めされていた。

「ふふふ、御機嫌よう。良い月夜だとは思わないかね？」

モノクルをつけた紳士のような姿の優男……その姿を私達が忘れるまでも無い……

「……随分と人間界を満喫しているようね、ガープ」

車に乗っていて一掃される訳にはいかないので、車から出たが正直神魔の助けも無くて、ガープと戦うなんていう真似は避けたいところですね

「まあ、魔界の濁った空よりかは人間界の方が気分転換にはいいかもしれないな」

喉を鳴らすガープの背後からは、三葉虫のような気味の悪い昆虫が群れを成して姿を現す。ギチギチという耳障りな鳴き声で、眉を顰めなくなる不快な臭いに顔を顰める。

「最近は面白いものを見つけたのだよ。名も無い神霊なのだがね、その力は素晴らしい。日本を海に沈める事だつて容易いほどの力を秘めた神霊だ」

名も無い神霊……琉璃の妹の舞の舞の住む神社の近くに居ると聞いていた神霊、神魔が保護に動いたとは聞いていましたが……それすらも出し抜いてガープが接触したと言う事ですか……

(しかしこれはあまりにも不味い……)

日本を沈める事も出来るほどの力を秘めた神霊……最低でも上位神魔、下手をすれば最上級神魔に匹敵するかもしれない

「私は魔界にて、お前達が日本沈没を防げるのかを楽しんで見させて貰うよ。逃れられぬ絶望にどう立ち向かうのかをね……」

私達では絶対に止める事が出来ないと考えている。その挑発的な

笑みを見ればガープが何を言いたいのかなんて容易に想像できる……しかも場所も判っていて、そしてあえて姿を見せたとすることは私達が焦り、そして足掻く姿を娯楽として見ようとしているのは明らかだ

「ではまた会おう、ああ、またがあれば良いな」

その言葉を最後にガープの背後に控えていた気色悪い昆虫は一斉に襲い掛かってくる。逃げるガープを追う事も出来ず、凄まじい勢いで襲い掛かってくる昆虫との戦いを始める事になった。

「来るわよッ！タマモ！くえす！よろしくッ!!」

神通棍を構える美神と蛭、そして両手に水の刃を作り出すシズクと、霊波刀を構えるシロ。昆虫であることから私とタマモの炎が効果的なのは明らかだ

「私に合わせなさいな」

「冗談、そっちが私に合わせなさいよ」

反りが合わないが、今この場面だけでは私もタマモも協力出来る。私達はこんな所で足止めをされている時間なんて無いのだ

「くっ！脆いけど……直接攻撃するとあつという間にお釈迦だわ！」

「酸性の体液って事ですね、美神さん！破魔札です！」

「ありがとッ!!」

美神と蛭が素早く神通棍から破魔札に持ち替える姿を見ながら、無詠唱の炎をでたらめに打ち込む

（耐久は低いですね）

大きさは小型く中型犬程度、鋭い牙を持つ三葉虫という感じだ。神通棍で簡単に撃退出来るが、潰した所から神通棍が腐敗している所を見る限りでは、その体液は酸性もしくは強い腐食性を持っており、人間の身体に掛ければそれだけで危険という代物だ。

「シロ！あんたは下がちなさい、死ぬわよ！」

「うー拙者また役立たずでござるうッ!!」

シロが泣きそうな声でそう叫ぶが、完全近接戦闘型のシロでは倒すだけでも危険な相手と戦うことは出来ない。シズクも今は氷の氷柱を射出するスタイルに切り替えている、戦闘力はさほどではないが

次々と襲ってくるのは正直鬱陶しい

(完全に私達を足止めする為だけの敵)

ガープが現れたのは私達を挑発するためだけではないだろう、確実に先行しているであろう横島の捕獲が目的なのは明らかだ。それが判っているからこそ、焦りが募っていく。もし、姿を消したガープが横島の元に現れていたらと言う不安が胸を重く押し掛かる

「ああっもううざったいのよッ!!美神! 蛭! 巻き込まれたくなければ飛びなさい!!」

「そういうことですわッ!!」

美神と蛭の返事も待たずに、私とタマモの最大火力が蟲達の群れに容赦なく炸裂する。ほんの僅かに蛭や美神に掠りましたが、まあ、あれくらいなら許容範囲でしょう

「こ、殺す気ッ!?!」

「当たらなかつたから問題ありませんわ、それに横島の方も問題ですわ」

緋立病院の方から凄まじい霊力の嵐が発生している。横島の方も相当危険なはずだ

「くえすとタマモを怒るのは後にして、今は横島と合流しましょう」

「そういう事ですわ」

物凄い顔で私とタマモを睨んでいるが、美神達なら避けれると言うという確信があったからの攻撃だ。それに攻撃に出るまで少し余裕もあったので、美神達の運動神経なら確実に避けれると確信していた「まあ悪いとは思ってるけど、横島も心配だし、そこは許して」

「それだけせんせーが心配だったと言う事で、許してやって欲しいでございぬ」

「……まあ、私もやる所だったしな。鬱陶しい雑魚はまとめて薙ぎ払うのに限る」

深く溜め息を吐く美神と蛭。だが自分達よりも横島が危ないと言うことは美神達も判っているのか、今はこれ以上追求せず車に乗り込めと言う。私とタマモは形だけとは言え、謝罪してから車に乗り込み緋立病院へと向かう。緋立病院の中庭の近くで大の字で倒れている

横島と一生懸命応急処置をしているおキヌを見て、私達は慌てて車から飛び出していくのだった……

「はぁー本当にもう……」

横島に駆け寄り見る蛍達を見て美神は溜め息を吐きながら車を停める。横島が攫われていない事には安心した……だが再びガープの策略が動き出しており、すぐに動き出したいが出発準備や対策を練る時間も余りに短い。それにわざわざガープが目の前に現れた事も気になる。日本に神魔の注目を集め、本命は魔界や天界と言う可能性も高くなる。

「なんにせよ、今回の事件が正念場になりそうね」

日本を沈める程の力を秘めた神霊が、ガープに操られているとなるとカズマやブリュンヒルデ達の力を借りる必要も出てくる。しかしそうなると魔界や天界側の守りが薄くなる可能性も高い……ガープの話を何処まで信用するかという問題もあるが、次に起きるであろう事件が3界の命運を分ける大きな事件となることは疑いようの無い事実なのであった……

く 琉璃視点く

横島君の報告と、その幼馴染2人の話の通り緋立病院を調べたら、緋立病院には空間が歪められている痕跡があった。ただし、既に崩壊しており、それ以上調べる事は出来なかった。だが、横島君が倒した異形の兵士の亡骸はそのまま残されていたのは不幸中の幸いだった。(でも、ガープの話は不味いかもしれないわね)

舞ちゃんの友達だと言う名も無い神霊……つまり白骨温泉の近くの氷室神社の周辺が危ない。だが、神代家の人間も居て、神魔も警護していると言うのにガープが何かをしたと言うのは正直信じられない。

(判断に困る子も居るしなあ)

中性的な容姿の子供が保護されていたが、緋立病院で何かの能力に目覚めたらしいが、それが霊能なのか、それとも特異技術なのか、それとも記憶を失った英霊なのか……私とすれば霊能なのが一番だが、



これが後者2つだと目も当てられないわねと思わず溜め息を吐く  
「琉璃さん、大丈夫ですか？」

「え、あーうん、大丈夫。それより話を続けてくれる？」

心配そうな横島君に大丈夫よと返事を返し、話を続けるように促す。先にガープの話聞き、今は横島君の話だ。ガープの話も正直やばいと思っっているのだが、横島君の話も相当に危険だ

「蘆屋道貞って言う陰陽師は緋立病院の異変の犯人だったと思います。陰陽師としての実力は正直よく判らないですけど、俺よりも確実に上だと思えます」

蘆屋の名前は前の東京地下の旧日本軍が開発したであろう、霊的兵器。その製作者の名前と同じだ。横島君の幼馴染である、近畿剛一君と日田夏子さんが回収してきた緋立病院の中にあつたと言う戦時中の資料には、霊的兵器の製作者であり、人体改造をしていた医者でもある。それが蘆屋道貞……

「他に覚えてることは無い？横島」

「何でも良いですから思い出してみてください」

この話し合いに参加していた蛍ちゃんとかえすが横島君にそう問いかける。本当はビュレトさんやブリュンヒルデさんも同行して欲しかったのだが、異界搜索や、ガープの言っていた名もなき神霊の件もあり今はそちらの方の裏付けに動いてくれている

「見た感じは20代後半って感じの優男って感じだけど、顔を見ているだけで嫌悪感が凄かったです。後へんな化粧みたいなのをしてました」

【霊視が出来る人間なら判ると思うが、既に人間ではない。良くは判らないが、巨大な亡霊になる能力と、こちらからの攻撃を無効化する能力を所有していると思われる。後は、陰陽術を使えるようだが、それ以外に召喚術や、ネクロマンシーにも精通しているような素振りを見せている】

横島君が教えてくれたのは蘆屋という人物の外見的特徴、心眼が教えてくれたのは蘆屋の霊的能力の2つ。後で似顔絵師を呼んでいるので、それでモニタージュも用意して貰うつもりだ。

(でも、それをばら撒くかどうかは正直悩むわね)

霊的能力があれば、相手が危険という事はわかる。だが、一般人になるとその限りではないし、何よりも相手の能力があまりにも反則くさい。危険人物なのは間違いないが、一般的な指名手配犯として公表するのは危険すぎる。似顔絵を作ったら、小竜姫様や、ブリュンヒルデさんに仲介して貰って神魔にだけ情報を流して貰おう

「それで誰かに仕えているみたいな事を言っていたんですけど……多分というか、確実にガープだと思うんです」

それは間違いないだろう、緋立病院の近くにもいたし、何よりも横島君と美神さん達がスカウトされたと言う話もある。優秀だからか、人間とは余りに程遠い感性をガープに目をつけられ、戦時中にガープの配下になつていたと考えるのが普通だろう。

「疲れているのにありがとうございしました。暫くはゆっくりしていただきます」

美神さん達にお疲れ様でしたと頭を下げ、GS協会からの金一封を手渡しゆつくり休んでくださいと言つて、執務室を出て貰う。

「蘆屋……か」

蘆屋と聞いて脳裏に浮かぶのはやはり陰陽師の蘆屋道満だろう。あの有名な安倍晴明のライバルとして有名な陰陽師だ……無論道満に子孫がいるという話は聞かない。蘆屋という苗字を名乗っている可能性もあるし、本当に子孫でありひっそりと血を受け継いでいた可能性もあるだろう。

「……1回冥華さんに相談しよう」

陰陽師の事ならば陰陽寮に話を聞くのが一番早いですが、躑躅院は余りにも裏が見えない。信用するのは危険だ、まずは平安時代から続いている名家である「六道」を頼るのが1番の正解だろう、次に冥華さんの所で保護されている鬼道の話聞く。陰陽寮と躑躅院を頼るのは一番最後にしよう

「つと、その前につと」

舞ちゃんから何かあったと言う話も聞かないし、部下からも異変があったとは聞いていない。だがガープの話を信じるのならば、次の事

件は間違いなく氷室神社を中心に発生すると私は考えている。念の為に氷室神社に駐在している部下へ電話する為、受話器に手を伸ばすのだった……

↳ガープ視点↳

横島と戦った蘆屋を部下として魔界のアジトへと連れ帰ったのだが、人間であり、その性格もあり魔界のアジトでも大きな問題を起こした

「どうだ？中級魔族と言うのは？」

「いやいや、ガープ様。この程度の実力で貴方様の部下となれるのなら、もっと早く私を迎えに来て欲しかった物です」

蘆屋によつて殺され、転がっている中級魔族の頭を踏み潰す。力があるのならば人間だつて迎え入れる、それは私達の中での絶対のルールだ。蘆屋と私が出会った時既に蘆屋は人間を半分ほど辞めていたが、それから30年ほどか？それでここまで力を高めているとは……正直予想外だが、これは私にとつて良い予想外だ

「止めなかつたのか？セーレ」

「だつてー止めるだけ無駄じゃん？それなら蘆屋の力を見せた方が無駄が無いでしょ？」

まあその通りではある、その通りではあるが、私達のアジトを肉片や脳漿で穢されるのは正直面白くはないな

「おい、お前。ここを片付けておけ、良いな？」

「は、はい！判っておりますッ!!」

蘆屋の部下として使い捨て程度の魔族を当てたが、蘆屋はそれを全て殺し尽くして見せた。中には、上級神魔も居たが、それすらも倒して見せるとは正直これは予想をはるかに超える逸材だ

「蘆屋。私の研究を手伝え」

「おお！お任せください！必ずやお役に立ちますとも」

人間と言う事で蔑んだ目で見られていた蘆屋だが、その力を見せれば蘆屋にちよつかいを掛ける馬鹿もいない。教授の代わりに蘆屋の頭脳を使つてみるのも面白いだろう

「会議があるんだから、早く戻ってきなよー?」

セーレの言葉に判っていると返事を返し、蘆屋を研究室へと案内する。蘆屋を連れてくる際に、美神達の前に現れたのも意味がある。そのことについての話をする必要もある、セーレに注意されるまでも無く、それは私が一番判っている。

「おおー!これはこれは!横島が使っている物ですね」

「ああ。そうだ、私もそれを研究している」

横島と戦った事で蘆屋も眼魂を知っている。机の上に置かれている眼魂を見て、嬉々とした表情で眼魂を掴み上げる。

「これは中身は入っているのですかな?」

「ああ、だがそれは使えない」

使えない?と不思議そうな顔をしている蘆屋。中に魂が宿っており、それは眼魂として成立している。だが使う事が出来ないのだ

「それには極めて神格の高い神魔の魂が宿っている。そうだな、私達よりも上だ」

「最上級よりも上の神魔……最高指導者と呼ばれる存在ですか?」

本当の神と呼ばれる存在なのかと問いかけて来る蘆屋。私はトランクケースを開けて実験用の眼魂を蘆屋に差し出す。

「そうだな、初代の神の指導者に近い。実際はなることはなかったがな」

真つ向から戦えば私達全員でも勝てないほどの力を秘めている神族が封印されていると言うと、蘆屋はますます目を輝かせる

(まあ、らしいと言えばらしいか)

人間の脆弱な身体を憎み、道徳や正義を笑い、己の知識を満たすことだけを考える。だが、その強さは紛れも無く本物だ。いや、強さゆえに狂っているともいえるべきかも知れないな

「お前にはこの眼魂を使えるようにしてもらう。私の調べた分析結果はこれだ、それを踏まえ私では思いつかない方法で眼魂を制御して見せてくれ」

「判りましたとも!必ずやご期待に答えて見せます」

私と教授では起動する事が出来なかった。正直、蘆屋でも無理と

思っているが何かの突破口を見出せるかもしれない、そんな期待を抱き私はアスモデウス達が待つ会議室へ足を向ける

「さて、随分と待たせたようですまないな」

「いや、気にする事はない」

「そろそろ我も下界で暴れる事が出来るのか？」

アスモデウスが気にする事は無いと告げ、アスラは下界で戦えるのか？と言うが、アスラを動かすとすればもう少し戦況が整ってからだなど頭の中で策略を考える

「まずは全員思っていると思うが、私が昨晚何故美神達の前に姿を見せたかだが、それもあの名も無き神霊も全て私の計画の上と言う事を理解して欲しい」

「あれだけ神魔から隠れて動いていたのを台無しにするだけの価値があるの？」

「勿論だ」

私の要求を聞いて、一番苦労していたセーレがジト目で見つめてくるので、即座に勿論だと返事を返す。あれだけの神魔の防衛を抜いて、神霊に接触出来たのはセーレの能力が大きい、それを無碍にされれば責めたくなるのも当然だ。だが、セーレの隠密も交え、そして今回私が姿を見せたのも含めて1つの作戦なので、そこを十分に理解して欲しい物だ

「隕石を落とすのは失敗したが、それも横島の霊能を目覚めさせると言う目的を十分に成し遂げたと言えるだろう」

あの奇跡の体現である「文珠」を実験で1つ潰してしまっただが、それでもまだ2個は手元に残っている。横島は危機に追い込めば追い込むほどに新しい力を開眼する、そしてそれと同時に人間から離れていく

「横島が魔人に近くなっているのは明らかだが、魔人だけではなく神魔にも同時に近づいている。それを利用しない手は無い」

「……横島を神魔にでもするつもりか？」

私の言葉を聞いてアスモデウスが怪訝そうな顔で尋ねてくる。人間でありながら神魔に近い、ならば神魔にすればそれは人間よりもは

るかに強い力を発揮するだろう……だがそうではない

「横島は魔人にも、神魔にもしない、横島を人魔にする」

「……それって言葉遊び?」

「同じ意味にしか聞えんが?」

馬鹿2人はほっておいて、魔人と神魔と人魔は全てが違う、神魔は文字通り神や悪魔だ、そして魔人は人でありながら魔へと堕ちた者、蘆屋もこれに含まれる。人魔は私が考えた言葉だが、神魔とも魔人もまるで違う存在だ

「横島には人のまま、魔になつてもらおう」

訳がわからないと首を傾げるアスモデウス達、だが私もあくまで考えたばかりなのでこれ以上詳しく説明することは出来ない。もう少し、様子見が必要だが、名も無き神霊との戦いでそれを見極める事も出来るだろう。

「まあ見ていてくれ、私の思惑通りになれば面白い物が見れるぞ」

不信に思われているのは判っている。だが、私として上手く説明出来る物ではない。今までの横島の戦闘パターンなどを見て、推測した物がその通りなのか?それを知る為に神霊を使うのだからな

「じゃあすぐに動くのかい?」

「いや、暫くは魔界と天界で行動する、邪魔が入っては困るからな」

これだけ大掛かりな準備をして、神魔の妨害を受けて失敗したでは笑い話にもならないからな。だから、邪魔が入らないように人間界に向かう、正規部隊の3〜7番隊を潰すと告げると判りやすく笑みを浮かべるアスモデウス達。私はそんなアスモデウス達を見つめながら、具体的な作戦、そして動かす部隊の話が始めるのだった……

リポート27 同窓会 その1へ続く

## リポート27 同窓会

### その1

リポート27 同窓会 その1

〈横島視点〉

緋立病院での異界事件から2日経ったが、俺はシズクによって外出禁止になっていた。変身の反動や、蘆屋の陰陽術に異界の歪みきつた空気など、どれも健康に害があるので外出禁止と登校禁止。それがシズクと美神さんによって出されてしまった……下手をすればバーサーク婦長さんである、ナイチンゲールさんの所に入院になっていたかもしれないと思うと、登校禁止と外出禁止で良かったと思うべきだろう。

「っと」

背中に圧力を感じて振り返るとうりぼーが鼻で俺の背中をぐいぐい押している。これは攻撃とか、そういうのじゃなくて猪の習性らしい。振り返ってうりぼーを抱っこして膝の上に乗せる

「どうした？遊んで欲しいのか？」

「ぶぎゅー」

遊んで欲しいのかな？と思いきや、膝の上に乗せると、今度は嫌々して膝の上から降りてまた背中をぐいぐいしてくる。一体うりぼーは何をしたいのだろうかと思っていると、脇の間に頭を突っ込んだと思うと、頭を振って潜り込んで来て膝の上に落ちると非常に満足そうな表情をして鳴き声を上げる。俺が乗せたのと、自分で潜り込んだ違いなのだろうか……そんな事を考えていると電話が鳴る。膝の上のうりぼーを見ると、くりりとした真ん丸の目が俺を見つめる。なるほど、俺の膝の上から降りる気はなさそうだ

「みむっ？」

「いや、チビは無理だろ？」

チビが受話器の方を向くがサイズの明らかに無理。どうするか

なあつと頭を傾げているとリビングの扉が開いて、散歩に行っていたシロがそのまま受話器を取る。

「もしもし、横島でござるよー」

シロに頭を下げると、OKサインをするシロ。二言三言会話すると、子機を手にして俺の方に歩いてくる。

「せんせーのお友達でござるよ」

「ありがとな、はい。もしもし、お電話変わりました」

『よー、横っち』

「なんだ、銀ちゃんかどうした？」

銀ちゃんからの電話は結構珍しいよなと思いつながらどうした？と尋ねる。

『夏子と一緒に遊びに行く予定やったんやけど、ちよつと用事が入ったんで、夏子だけで行かせたわ』

東京に土地勘が無い夏子がとても俺の家に辿り着けるとは思えない、遊びに来てても良いとは思ったが、銀ちゃんも来た事無いのに、とんでもない無茶をすと思う。

『もしかして迎えとかに行けへん？』

ちらりとキッチンを見ると、シズクが包丁を研いでいる。俺は少し考えてから

「無理、ロリおかに殺される」

『……なんか、横っちの家に行くの怖くなったわ』

失礼だな、俺の家は十分普通だ。ただ幽霊の女の子が2人居候していて、狐少女のタマモと人狼のシロと、チビとうりぼーとチビノツブがいる、普通の和やかで楽しい家だというのに

「とりあえず、俺は無理だ。外出は出来ない」

俺の命に関わるので外出は無理だと告げ、待つてるから銀ちゃんと一緒に来ればいいじゃないかと言うと銀ちゃんは溜め息を吐いて

『夏子がジツとしていると思うか？』

「ないな」

子供の時は俺と銀ちゃんを振り回していた夏子だ。道がわからないうからと言ってジツとしているとは思えない



「……とりあえずシズクとかには頼んでみるわ」

『悪い、迷惑をかける』

幼馴染なんだから気にするなよと返事をし、近くで待っていたシロに子機を返す。

「なーシズク。ちよつと良いか?」

「……外出はダメだぞ」

コンマのレベルの高速返答。シズクが心配してくれているのは判るけど、少し度が過ぎてるかもしれないよなあと苦笑する。

「違う違う、銀ちゃんと夏子が遊びに来るんだけどさ、お菓子とかあつたっけ?」

「……無いな。夕方に買出しに行く予定だった」

シズクは手にしていた包丁を片付ける。俺の家に来るんだから、商店街の近くを通るはず。今から買い物に行つてくれれば、高確率で夏子に遭遇する筈……俺はそう思っていたのだが……

【のーブー!!】

「……お前が行くのか?」

【ノブノブ!!】

チビノブがお使いに行くと言う、しかし、あそこまで張り切っている姿を見ると駄目とは言えず。買い物袋を持って、うりぼーに跨つて出て行くチビノブを俺とシズクは見送る。

「大丈夫かな?」

「……メモ入れているから大丈夫だと思う」

突然始まった初めてのお使い、大丈夫かなあと思いつながらも、緋立病院で会っているし、それに探しても伝えてあるので大丈夫だろうと思うことにする。

「所で、シロ。タマモは?」

「あーなんか嫌なにおいがするからとか言つて、どこかに行つたでござる」

嫌な匂いつてなんだろうか?また何かトラブルでも起きるのだろうか?念の為に美神さんに伝えるべきだろうかと悩む。シロはそんな俺を見ながら木刀を手にして庭に素振りが出るし……どうしよう

か、タマモが野生の勘で危ないと感じていることを伝えるべきなのか悩んでいるとシズクが笑う

「……何かあるのなら心眼も何か言うさ、それも無いなら問題無いってことだ」

「そういう事だ。だからあんまり心配をせずにチビと遊んでやれ」

俺の魂の調子を整えていて黙りこんでいた心眼だが、シズクと一緒に問題ないと言われればそうかとしか言えず、俺はチビと遊んでやれと言われたこともあり、机の上においてあった猫じゃらしを手に取りチビに向かって振る

「みむー」

にぱっと笑い猫じゃらしを追い回すチビ。その微笑ましい姿を見つめチビノブ達が帰ってくるのを待つのだった……

〜夏子視点〜

緋立病院での蘆屋と言う異常な霊能者との遭遇、幽霊や化け物が闊歩する廃病院を駆け回ると言う一生忘れられない経験をした私は、今回の件を公にしない事を条件に安いホテルから、都内の高級ホテルへと移り宿泊することになった。GS協会の神代さんは決して事件を隠蔽したいのではなく、蘆屋と言う異常者が悪魔の中でも非常に危険な相手と繋がりがあがる可能性が高く、その件の調査が済むまでは公にしたくないと言う事だった。

(よく生きてたな……私)

東京に隕石を落とそうとした悪魔と関係があると知れば、私も口を紡ぐしかない。もう少し情報が整理され、緋立病院に異界が完全に消滅しているかの確認が済むまではと言う条件だが、それは至極当然だと思った。もしあの事件を公表して子供が夜中に忍び込む危険性を考えれば黙ることは当然だと思う、それに2〜3日の間中には結果が出るなら暫くの間黙っている事は何の問題も無い。それよりも現在進行形で問題があるとすれば……

(どいっやねん……)

商店街の近くらしいけど、まずその商店街が見当たらない。朝出発

する前に銀ちやんからの電話で簡単な地図を作ったけれど、話だけなのでこれもあっているかどうか自信が無い。少しばかり恥ずかしいけど、誰かに聞いてみようかと思った時、風に乗って楽しそうな声が聞えてくる。

「ノツブーノブノブー♪」

「ぶぎぎっぎー♪」

物凄く陽気な鳴き声に振り返ると大型犬くらいの猪の上に跨った小人が棒をぶんぶん振りながら進んでいた。

（あれは……間違いない）

横つちの家で飼われてるペットと何かだ、横つちが病院に飛び込んできた時に見たので間違いない。もしかしたら頼んだら、連れて行ってくれるかもしれない。そう思い、私は来た道を引き返す、その姿を見れず見失ったと思いきや、脇道のほうから風に乗って声が聞えてくる

「ノーノツブー！ノーブウー！」

「あーはいはい、これね。お使いえらいね、チビノブちゃん」

「ノツブー♪」

……なんでノブノブしか言ってないのに意思疎通できるんだろうか？声を掛けようと思ったんだけど、和菓子屋の店主と会話してる姿を見て、思わず足が止まる

「ノーブウー！」

「はい、1500円丁度ね。また来てねー」

「ぶぎー」

「ノツブー！」

ノブーとぶぎーと鳴きながら和菓子屋から背を向けて歩いてく1匹と1人？を追いかけようとして……立ち止まる。私は知ってるけど、名前も知らないし、そもそも意思疎通が出来ないので私の伝えたことが伝えられるのか？と言う不安。でも横つちの家に行く最後の希望なわけで……ここは話しかけるしかない。そう決意したとき

「ぶぎゅー」

「ノツー！」

猪と小人が既に私の目の前にいた。少し驚きながらも、この反応を見れば友好的に思える。もしかすると、横つちが迎えに出してくれたかもしれないという淡い期待もある

「あの、横つちの家に行きたいんだけど……」

「フッノー！」

元気よく返事を返して、歩き出す猪。えつとお？これはついて来いって事なのかな？暫く後姿を観察していると振り返る

「フ？」

鳴き声なので言葉の意味は判らないけど、その反応を見ればついてこないの？と尋ねているような気がして、私は慌てて猪の後を追いかけて歩き出すのだった……

「なんでおるねん」

「い、いやあ、終わってすぐタクシーを呼んで」

私が散々迷って、猪と小人ちゃんに会わなければ辿り着けなかったというのに、なんで家の前で銀ちゃんにあうんや。汗をだらだらと流している銀ちゃんのわき腹にグーパーパンチを叩き込む

「レバー……レバーはあかん」

「しらへんわ。案内してくれておおきにな」

脂汗を流して呻いている銀ちゃんを無視して、私をここまで案内してくれた小人ちゃんにお礼を言うと、嬉しそうに手をぶんぶんと振る小人ちゃん、意思疎通は難しいけど案外可愛い子なのかもしれない。私はそんな事を考えながら呼び鈴を押そうとしたんだけど

「せんせーのお友達でござるなー、せんせーは調子があんまり良くないでござるから、そのまま入るといいでござるよー」

庭の方で赤いメッシュが入った白髪の幼女が木刀を振りながら、その声を掛けてきて

「あ、いらっしやい。横島さんに聞いてますよ、ゆっくりして行って下さいねー」

巫女装束の幽霊の美少女が窓から飛んでいく姿を見て、随分見ない間に横つちってかなり変わったんじゃ？そんな不安を抱きながら、小人ちゃんと猪が家の中に入っていく後を追って、横つちの家の中に足

を踏み入れるのだった……

くカオス視点く

ガープと遭遇したという美神達。その話の中で名も無き神霊と、日本を沈めることが出来る可能性を秘めた存在と聞いて、ワシは即座に死津喪比女の事を思い出していた。だが状況は確実に前回より悪いだろう……

(ガープが既に関わっていると……やはり厳しい……か)

前回は植物が枯れる特性の呪術を組み込んだライフル弾を使用した。だがガープが手を加えているとなると、それも有効打になるとは思えない……

「手を借りるとなると……難しいがアシユは必要じゃろうな」

美神達が対峙した三葉虫のような怪物。これに腐食性の体液を持っていたという報告を受けているが、当然前回ではそんな能力は無かった……一応準備していた霊具は全てが無駄とは言わないが、一部は更に改造する必要性が出てきた。

「ドクターカオス、銃弾の方はどうしましょうか？」

「マリア、すまないの。一時保留じゃ」

回収された遺骸を調べて、相手に有効な調合した方が良さそう。耐久力はさほど高くないので、簡単に倒すことが出来ると聞いている。だが神通棍に始まる霊具を使い捨てにする訳には行かない。ガープの事だ、白骨温泉の付近だけは考えにくい、天界か魔界、そして東京などのどこかで動いてくる可能性も十分に……

「マリア、すまないがテレサと一緒にブラドローのところに行ってくれんか？」

「それは構いませんが、どうしたのでしょうか？」

白骨温泉周辺と考えているが、それすらも間違いの可能性がある。名も無き神霊が白骨温泉の周辺にいたりという情報は掴んでいる、だがあくまでそれは名も無い神霊の1体に過ぎない。他の場所にも存在している可能性もある、なんせ日本には八百万の神がいると言う。どこかにまだ祭られていない神も存在する可能性も十分にある

「ブラドールならば微弱な神通力も感知できるじゃろう。それを調べて欲しいと伝えて、マリアとテレサもそれを手伝って欲しい」

少し怪訝そうな顔をしたマリアだが、わかりましたと領き地下研究室を出て行くマリアを見送る

「失敗したのー」

チビノブに頼まれて作った霊具は興が乗りすぎてなんかとんでもない物になっておるし……白骨温泉周辺と思い込んでいたのが間違いないなく失敗だと思ふ。

(いや、失敗と思ふもそれではそれで間違いか)

白骨温泉周辺ではないかもしれないと言うのは、ワシの逆行の記憶から推測された自体だ。勿論それはガープ達の知らない情報だ……

「上手く行けば……封じ込めれるかもしれん」

前回と異なり神魔は東京に多くいる。それを利用する事で東京で起きる大地震を封じすることも可能かもしれん、それに津喪比女の本体の復活を防げる可能性も……そこまで考えて、前提条件が間違っていることに気付いた。

「いや、それも違うか」

津喪比女は穏やかな神霊として、神代琉璃の妹で氷室神社に預けられている「氷室舞」と親交が深いと聞く、本体を封じるのではなく。こちらで利用も可能かもしれない……

「これは少々リスキーじゃがワシも動くか」

どうせこの出来た霊具を横島の家に預けてくる予定なんじゃ、そのままブリュンヒルデの所に足を向けても良いじゃろう……いや、アシユのところの向かうのが先かも知れんな……

「む、誰じゃ、この忙しい時に」

チャイムが鳴るが、マリアとテレサは先ほど出て行ってしまったし……ワシが出るしかないの……地下研究室を出て玄関に向かう。控えめだが何分かの間隔でチャイムが押される、控えめなのかそれともしつこいのかと首を傾げながら玄関を開く。

「はいはい、どちら……何をしておるんじゃ？」

新聞か、それとも新入りの押し入りか、厄珍のつながりで霊具を

作って欲しいと言うGSが押しかけてきたかとか色々考えていたんじゃないが、扉を開け目の前にいる人物を見て思わず呆れる。動きやすそうなジーパンと赤いシャツ、そしてその上にGジャンと明らかに小僧を意識した衣装に身を包んだ小竜姫様がいれば誰だって驚く、そもそも妙神山にいる筈の神族が何故と言う言葉が脳裏を過ぎる。

「えつとですね、天界と人間界を自由に行き来出来るゲートを作ったので神族として派遣されて来たんです。それで……その横島さんの家は何処でしょうか？」

ブリュンヒルデに貰った地図は落としてしまいましたし、正直街にも慣れてないので戻れるかも不安で、美神の事務所も判らないと言う小竜姫様。ワシは思わず深くため息を吐く。だが個人的に動き、ガープ陣営に捕まるリスクを考えれば、小竜姫様と一緒に行動出来れば安全は確保できる。ワシはそう思うことにした……と言うか、そうでも思わないとやってられないと思ったと言うのもある。

「小僧の家に行くから案内はしてやるわい」

「本当ですか！ありがとうございます」

華の咲くような笑みを浮かべる小竜姫様。また小僧の周りが大騒動になりそうじやなと苦笑し、小僧の家に運ぶ霊具を持つてくるから待っていて欲しいと頼み、地下研究室に置いてあるチビノブの装備を取りに行く為に地下研究室に引き返す。まあ考えようによつては直接神族に話を通す事も出来るし、少しばかり面倒だがそう目くじらを立てることもない。自分にそう言い聞かせながら、机の上に置かれている新しい霊具の設計図や、津喪比女の使い魔の昆虫の分析サンプルなどを金庫の中に戻し、代わりにチビノブの装備を担ぎ上げその場を後にするのだった……

くタマモ視点く

一方嫌な予感がすると言ってシロと別れたタマモはと言うと……白竜寺のある山の中を駆け回っていた

「こらー！待ってって言うてるでしようがあッ!!」

「いやーッ!!あたしはまだ死にたくなーいッ!!」

二房の黒髪を翻し、少し変わった学生服と言う感じの服に身を包んだ少女をタマモは犬歯を？き出しにして追い回していた。

「何日も何日も横島を見てたのはあんたねッ!!」

緋立病院に向かう前から、ちよくちよく感じていた視線。その主をこの少女だと決めつけ、正直に白状しなさいと叫ぶ

「ち、違うしー！そ、そんなに何日も見てないわよー！」

「見てたのは認めたわねッ!!」

横島のストーカーを見つけたと、鬼気迫る表情で追いかけるタマモと、殺されるーつと叫んで風をまどつて逃げ回るカマイタチの少女。「大体あんたの住処は妙神山でしょうが！なんで東京にいるのよ！はっ！横島を追いかけてきたわねッ!」

「べ、別にそれを責められる理由は無いでしょ!?!いいご主人を見つけて追いかけてきて何が悪いのよ!?!」

横島を主人にすると決めたカマイタチは長い時間を掛けて、東京に辿り着き。横島に接触するまえに、タマモに発見されて追い回されたのだ

「だ、大体！あたしみたいな弱い妖怪見逃しても良いじゃない！弱いものをいじめるのかっこ悪いわよッ!」

妖兽としては最上位のタマモ、それに対してカマイタチは下位も下位、3人揃って1人前なのに、1人ではその能力も満足に使えない。弱い物いじめと叫ぶのも判らないでもない

「これ以上、私と属性が被るのはいらぬのよ!!」

「何それ!?!酷くない!?!」

うるさいと怒鳴り、カマイタチを追い回すタマモ。そしてそんなタマモから半泣きで逃げ回るカマイタチ……止めに入る者も助けにくれる者もない

「そもそもなんであたしが怒られないといけぬのよ！そもそもそっちこそ横島の何よー!」

「……家族」

「今の間はなによ！そっちだって押しかけてるんじゃない!?責められる理由も責めていい理由も無いでしょう!横島の彼女とかじゃないん



だからッ！どうせ妹扱いなんでしょ!？」

東京に着てすぐ追い回されたこともあり、タマモの弱点見たりと畳み掛けるように言うカマイタチだが、それは完全に悪手だった。

「言ったわね……私の気にしてることを言ったわねえッ!!」

タマモの周りに狐火が飛び交い、それが容赦なく顔の近くに叩き込まれ、カマイタチは半泣きから号泣に変わった

「なんであたしがこんな目に会うのよー！ただ優しそうな主人を見つけたっただけのにいッ！」

「待てコリアアッ!!」

カマイタチの殺されるーっと言う悲壮感に満ちた叫びと、タマモの怒気が満ちた怒鳴り声は白竜寺にまで響いていた

「なーなんか凄いだ騒ぎ聞こえね？」

「俺は何も聞えない、片方は聞き覚えのある声だが、俺は知らないし、何も聞えない」

陰念は無言で立ち上がり、窓を閉める。それは下手に関われば大変なことになると知っているからこそその陰念の自分の身を護るため防衛術なのであった……

「今なら9割殺しで許してあげるわよッ!!」

「それ死んでる！死んでるからあッ!？」

なお、その日の日暮れまでタマモの怒声とカマイタチの泣き声が止む事は無いのだった……

リポート27 同窓会 その2へ続く

## その2

リポート27 同窓会 その2

↳ 銀一視点

猪と小人が楽しそうに鳴き、その後ろを夏子が苦笑しながらついて行き横つちの家に入って行く、俺もわき腹を抑えながら横つちの家の中に足を踏み入れる。見た感じは普通の一軒家、だけど、入る前から出て行った巫女の幽霊のおキヌさんに、庭で木刀を振るう犬耳少女……

(なんか凄いことになってる)

電話では横つちの家が凄いことになっていると言っていたけど、半分くらい冗談だと思っていたが、紛れも無い真実だったようだ

【ノー♪】

「ぶぎゆうー♪」

「おー、お帰りちゃんとお使い出来たのか？ 偉い偉い」

買い物袋を受け取り偉い偉いと頭を撫でる横つち。おかしいな、同じ歳の筈なのに、この溢れる父性は何なのだろうか？

「銀ちゃんも夏子もいらっしやい、ゆっくりして行ってくれよな」

「みつむー♪」

【イヒヒ】

ハムスターサイズの何かがリビングを飛び回り、その近くをかぼちや頭がふらふら飛んでいる。これでGSを目指しているとか本当なのだろうか

「久しぶりやなあ横つち……元気そうで何よりや」

「俺はいつでも元気だぞ？ あ、でも今は外出禁止なんだけだな」

膝の上にうりぼーを乗せて頭を撫でながら言う横つち。外出禁止……っていまさら子供じゃあるまいしと思っただけだ

「変身するとなあ、肋骨が折れてうって呻いたら、両手足が折れて、その上から曙が降ってくるくらい痛いんや」

「大丈夫なの？」

全然平気と笑うけど、横つちは本当に大丈夫なのかと心配になってくる

「……横島の幼馴染なら言ってくれ、もう少し自分の身体を心配しろとな」

「いや、マジで大丈夫」「……だ・ま・れ」……はい……」

10歳くらいの少女が御盆の上に湯呑みを持ってくるなり、ジト目で横つちを注意し、そして横つちは黙れと言われ、身体を小さくしていた。なんと言うか、物凄く力関係が判る一幕だ

「えっと、横つちの親戚の子？」

「うんや、水神で竜神様のシズク。我が家の守り神兼ロリオカン」

……いや、横つち相手神様ならもう少し敬うとか、そういう事をした方が良くと思うんやけど……

「……紹介はアレだったが、シズクで良い。神とかそういうのは正直どうでもいいから普通にシズクで良い」

「あの神様なのにそれでいいんですか？」

夏子が引き攣った顔で尋ねる。シズクさんは横島の隣に座り、ドラ焼きの封を開けながら

「……ロリオカン呼ばわりと比べれば全然気にしない」

それって横つちのせいやないかい!!もう少し神様に対する敬う気持ちとかを持つべきなのではないのだろうか？

「でも、洗濯とか料理とか、裁縫とか掃除とか、もう俺の家ってシズクが居ないと回らないと思うんだけど……」

あ、これ違う、シズクさんが横つちを甘やかした弊害だ……そんな事を考えているとリビングの窓がガラッと開き

「喉渴いたでござるー♪牛乳牛乳」

「……おい、駄犬。足くらいちやんと拭いてから家の中に入れ」

「はひいつーごめんなさいでござるうーツ!!」

シズクさんに睨まれて縁側に戻る赤いメッシュの入った少女。勿論どう見ても横つちと血縁関係があるようには思えない

「……あのさ、横つち。あの子は？」

「ん？シロか？クロさんって言う人狼って人の娘で俺の家で居候して

る」

……どないしよう、横つちがとんでもなく遠くに行ってる気がする……と言うか、横つちの家って化け物屋敷？

「フーブ」

「あーはいはい」

小人が横つちにメロンパンの袋を渡して、横つちが封を開けてやると横つちの隣に座って美味そうにメロンパンを齧り始める小人

「よーこーしーまーああああーワシにもメロンパンン!!」

「ぎゃああああアツ?!?!」

机の上の丸い球体から手が出てきて、そこから長い髪を翻した幽霊が出てきて、思わず夏子と一緒に悲鳴をあげる

「ノツブちゃん、お客さん来てるからもう少し普通に出てこれない？」

【酒飲み過ぎてあたまがいたいんじやああ……】

そう言っ出てきたのは病院でも見た少女の幽霊だった。出てくる感じが違うだけで、ああもおどろおどろしい感じになるのか……背中に冷たい汗が流れたぞ……

「はい、メロンパン」

【うまうま】

そして横つちは普通にノツブさんにメロンパンを与えて、机の上の櫛を手に取り髪を整えている。しかもその手並みが明らかに慣れている、幽霊にまでモテるとか横つちどうなってるんや……

「みむう!!」

「ぷぎゅぷぎゅー!!」

自分も自分も言っ横つちの周りを跳ね回るうりぼーとチビ。これ横つちがへんな風になったんじゃなくて、横つちの周りが凄いいことになっていて、横つちがその環境に順応してしまったんじゃなからうか

「シズクさん、今日はどうすればいいですか？」

「……とりあえずキッチン周りの掃除でもするか」

……あれえ、なんで一般家庭にメイドさんがいるんやろうか？しか

も長身切れ長の目でぼんきゅっぼんの信じられないほどの美女なんやけど……夏子が自分の身体を見て、死んだ目をしながら横つちの方向に油の切れたロボットのような動きで

「アノサ、アノメイドサン……ナニ？」

しゃべり方までもが!?横つちの家に来て僅か30分。それで夏子の精神は崩壊一歩手前まで追い込まれていた

「ルイさんって言う女社長さんのメイドさんのルキさんって言うんだけど、ポーカーで色々巻き上げられていた人の変わりにポーカーで勝負したら俺が馬鹿勝ちして、暫く預けるって言って置いて行かれちゃったから俺の家のお手伝いさんをして貰ってる」

……頭が凄く痛い、どういう流になったらメイドさんが置いていかれるなんて言う結果になるのだろうか?しかもそんな事を考えているとチャイムの音が鳴る

「あれ、お客さんだ。シズクー、お願いしていいー?」

「……良いぞ。ルキ、少し待っていてくれ」

「はい、判っています」

シズクさんが玄関に向かい、すぐにリビングに戻ってくる。物凄く長身な黒尽くめの老人と、その後ろに横つちが良く着ているGジャンとGパンに良く似た服に身を包んだ赤い髪信じられない美女が一緒に入ってきた

「カオスのジーさんに、小竜姫様。どうしたんですか?」

「おう、チビノブに頼まれていた霊具が出来たから届けるついでに、暫く人間界に駐在すると言うことで案内してきたんじや」

「どうも、横島さん。また無茶をしたようですね、あんまり無茶をしてはいけませんよ」

……あ、駄目だ。なんか溢れるお姉さんオーラみたいなのが出た……なんか初めて男性の知り合い来たけど、女性も増える。横つちつて東京になってからモテモテになったのかな?

(あ。違うわ、大阪からモテたわ)

外見じゃなくて、中身を重視する人にはモテモテだったわ……東京には外見よりも中身を重視する人間が多いのかな……遠い目をしな

がら俺はそう思い、机の上に置かれている茶菓子のドラ焼きに手を伸ばす。有名な店のドラ焼きだけあり、生地もしつとりしていて餡子も甘すぎず実に上品な味だと思う。

「あ、小竜姫様も座ってください。疲れたでしょう」

「それではお言葉に甘えさせて貰いますね」

なんか、この調子で女性の知り合いがどんどん尋ねてくるように思えるのは俺の気のせいかなあ……いや、これ絶対気のせいじゃないなあ……俺はそんな事を考えながら、湯呑みを手に取る。茶柱が浮かんでいるけど、全然嬉しいって思えないのはなんでやろうなあ……

〈夏子視点〉

ま、またとんでもない美人が尋ねてきた。横つちが……物凄くモテてる!?別にそのこと自体は大して驚きでもないが、回りにいる人の女の人のレベルが高すぎる

「これがバイク型で、これがUFO型で、これが……なんじやろ?飛行機?」

「いや、カオスのじーさんもわからんのかい」

横つちは横つちで長身の老人と話をしているのだが、なんと言うか、孫と祖父と言う感じがするんだけど

【ノブ♪】

チビノブはカオスさんが持ってきたアタツシユケースから出したバイクに跨り、楽しそうにリビングを走っている。

「……カーペットに傷がつくから、庭で遊んで来い」

【ノブッ!】

シズクさんの言葉に頷き、庭をバイクで駆け回っている。ノブしか言わないけど、実は物凄く頭がいいのかもしれない。

「それでカオスのじーさん。あれ大丈夫?」

「全然平気じゃよ、元はアニメの玩具を見てワシが作った物じゃから霊具としての効果も抜群じゃ。ま、普段は玩具くらいで使わせて大丈夫じゃよ」

カオスさんはそう笑って、用事があるからと言って帰っていく。あ

れを届けにきてくれるだけで尋ねてきてくれるとか、相当仲がいいように見える。

「横っち、今の人誰?」

「カオスのじーさん、ヨーロッパの魔王って言われてる凄い錬金術師らしい。気も良いし、優しい爺さんだ。後1000歳越えてる」

肩書きから言って物凄く不安になるんだけど、横っちの顔を見る限りかなり信頼しているようなので、余計な事は言わない方がいいだろう。と言うか、1000歳を越えているってそんな普通の感じで付け加えないで欲しいんだけど……

「あ、美味しいドラ焼きですね。結構長旅で疲れていたんで、凄く美味しいです」

「それは良かったです。それで小竜姫様は東京で暫く活動するんですか? 妙神山は大丈夫なんですか?」

「はい、それは大丈夫ですよ。魔法陣で直通になってますから、すぐ妙神山に帰れますし、ガープも人間界で派手に動きそうなのでしばらくはこっちにいます」

湯呑みを置いて穏やかに笑う小竜姫さん? いや、会話から聞いている限りだと……もしかして小竜姫様も神様なのだろうか

「あの、小竜姫さんって神様なんですか?」

銀ちゃんが引き攣った顔で尋ねると、小竜姫様はくすりと笑いながら髪を少しだけ持ち上げる。そこには短いけど、ちゃんと角があった「竜族の小竜姫と申します。どうかよろしくお願いしますね」

……どうしよう、横っちって人間の知り合いつて全然ないんじゃないかな……なんか心配になる

【横島くーん!お土産を買って……げぶうーツ!】

「沖田ちゃんツ!」

凄い勢いで壁から出てきたピンク色の着物姿のお姉さんが突然吐血して、リビングを滑っていく。

「うりぼー、レスキューー!」

「ぶぎっ!」

横っちの指示でうりぼーがその小さな身体を着物のお姉さんの下

に潜り込ませる。

「え？」

ずももつという感じで可愛い猪が大きくなって、背中にお姉さんを乗せて横つちの方に運んでくる。

「ダイナミック入室からの吐血は流石に困るなあ」

「……後で綺麗に掃除しろ」

【うう……判ってますよお……】

横つちが座布団を半分にしたんで、枕にしたからか初めてお姉さんの顔がしっかり見えた。

「え？女優の……」

【あ。違いますよ？沖田さんは顔だけそっくりさんの幽霊です】

「映画から出てきた幽霊さんだから顔が似てるんだ」

……映画から出てきた幽霊とか、完全に私の理解を超えているんだけど……しかし、横つちがタオルで汗を拭いたり、ストローを差したコップを口に近づけている姿を見るとなんか、もやっとする

「……やっぱり、横島君は私のお父さんになってくれる少年だったのですね」

「いや、俺のほうが年下だし、お父さんとかおかしいだろ」

私には判る、横つちは冗談だと思っているが、沖田さんの方はガチだ。その目が物語っている

(なあ、銀ちゃん。横つちの周りがこんなのって知ってた？)

正直10年ぶりの幼馴染との再会だ。ちよっぴり期待していたんだけど、横つちの周りが凄すぎる。強いて言えば、肉食獣に囲まれている草食動物だ

「横島さんも体調が優れないんですからね。あんまり無理をさせないでください」

【げふうっ】

小童姫様の拳骨が落ちる。その反応と目を見れば、これは確実に横つちに想いを寄せているっぽい。これは女の直感で間違いないと確信出来る

「ねー、横島。ちよっと相談があるんだけどさー」



「お帰り、タマモ。昼前には帰ってきてくれて良かったよ」

「ナインテール？上手く説明出来ないけど、ナインテールとしか説明しようが無い独特な髪型をした少女がリビングに入ってくる。それに続いて、変わった学生服を来た黒髪のツインテールの少女も入ってきた」

「あれ、イタチちゃんだ。いらっしやい」

「う、うん」

「……なんか横つちの知り合いつて女の子ばかりじゃない？東京で何をしていたんだろうか？緋立病院に助けに来てくれた人達も全員女の人ばかりだったし」

「お昼ご飯一緒に食べさせたいんだけど良い？」

「全然良いぞ。小竜姫様とか、夏子も銀ちゃんも居るし、イタチちゃんも全然OK」

「お昼前に帰ろうと思っていただけ、断るのも悪いし、このまま一緒にお昼を食べさせてもらおう。」

「私は余り和食は得意ではないので、洋食ですがお口に合えば幸いです」

「ルキさんが用意してくれた昼食はレストランで無ければ口に出れないような綺麗なフレンチだった」

「すげ、フレンチって奴だ」

「みむー！」

「ぶぎゅー！」

「横つちの周りの小動物軍団も、綺麗にカットされた果物に嬉しそうだ。」

「……こういうのはテーブルマナーとかあるのか？」

「え？嘘じゃろ？ワシ、そんなの知らんよ？」

「美味しく食べれば無問題ですよ」

「え？マナー？なにそれ、美味しいんでしょうか？」

「ただ全員テーブルマナーのテの字も知らないのです、思い思いの形で昼食を食べる事にする」

「おおー美味しい、ルキさんは料理上手なんですな」

「メイドですから」

「ここにこと笑うルキさん、確かにこの味は一般家庭の味とは言えない。本当にレストランで食べるような食事だ」

「これはマジで美味しいな、芸能界のパーティーでも食べたこと無いわ」  
1人だけテーブルマナーを知っているのか、丁寧に見える銀ちゃんが信じられないと言う様子で呟く、でもそれは本当のことだと思ふ。普通の家でこんなの出てきたら、普通はびっくりすると思ふし、味も良く判らないと思ふ

「森の中で食べる鹿とかとは全然違うわね、ちよつと食べにくいけど」「そうでござるな、美味しいけど、食べにくいでござる」

野生児っぽい2人はこの昼食に苦戦している。美味しいけど、絶対どんな味が説明できない昼食を食べ終え、その後は思ひ出話や、お互いの近況の話をし、私も銀ちゃんも用事があるので17時ごろに横つちの家を後にする事にした。なんかずっと驚きっぱなしの1日だったと思ふ

「えつと、あたしはまだ弱いカマイタチだけど、もつと強くなるから」

「うん？俺も全然弱いからお互い頑張らないとな」

「う、うん。だからもつと強くなったらまた来るね！」

「強くならなくても全然遊びに来てくれて良いんだけどなあ、あ、夏子も銀ちゃんも全然遊びに来てくれて良いから」

……なんだろう、あの少女が凄く哀れに思えてきた。でも少女はまたいつでも遊びに来て良いからの言葉に顔を輝かせ、短いスカートとツインテールを翻し去っていく

「じゃな、横つち。今度はもつと元気なときに遊びに来るわ」

「じゃあね、横つち。また遊びに来るから」

いつでも来てくれよーと手を振る横つちに手を振り返し、私と銀ちゃんは横つちの家を後にするのだった……

〈横島視点〉

のんびりと歩いていく夏子と銀ちゃんの姿を見送り、俺も家の中に戻る。正直平気と言っていたが、身体は痛いし、重い、それにしんど

すぎて瞼も今にも落ちそうだ。

「……無茶をするからだ。馬鹿」

「いやあ、意地はりたくなるじゃん？」

あきれたと言わんばかりに俺を見て溜め息を吐くシズク。折角尋ねて来てくれたのに、寝ているなんて失礼だと思ったし

【横島はこういう奴だ】

銀ちゃんと夏子がいる間は黙り込んでいた心眼が溜め息と共に言う、そこまで言うか？といおうとしたんだが

「あいたた」

我慢してた分余計に身体が痛くて呻く、その声を聞いて沖田ちゃんや小竜姫様が出てきて、心配そうな顔をする。

「やっぱり無茶をしましたね。駄目ですよ、本当に」

【いっつも迷惑を掛ける分、助けてあげますね！】

しょうがないと言う感じの小竜姫様と俺がダウンしていると聞いて嬉々とした表情を浮かべる沖田ちゃん。小竜姫様はともかく、沖田ちゃんは怖いなあと思いつつながら、2人に肩を借りてリビングに戻る

【ノツブー！】

「みー」

「ぴぎん」

リビングに戻ると、チビノブ達が布団を引いていてくれたので、痛み身体に顔を歪めながら布団に潜り込む。すると子狐になったタマモが俺の腹の上で寝転がる、すると身体がすつと楽になった

「ありがとな」

「コンー」

タマモが霊力を調整してくれているから身体が楽なのだろう、俺はタマモに礼を言つて布団を被る

「すいません、小竜姫様。折角尋ねて来てくれたのに」

「いえ、大丈夫ですよ。尋ねて来たのは薬を渡すというのもありますし」

机の上に置かれる虹色の液体の入った小瓶、シロやシズク、それにノツブちゃんと牛若丸も顔が引き攣った

【それ大丈夫かの?】

【どう見ても毒なんですが】

「……味と見た目は最悪なんです、効果は良いですから」

いや、効果が良いとしてもその見た目からとても口に含む勇気が無いんだが……でも折角、小竜姫様が持つて来てくれたので、ありがたく受け取ることにする。

「色々話すことがあったんですが、今の体調では無理そうなのでゆっくり休んでください」

優しく笑う小竜姫様にすいませんと頭を下げると、俺の意識はすぐに闇の中へと沈んでいくのだった……

「……で、本当の所はどうなんだ?」

「はい、シズクさんには申し訳ないですが少し手伝って欲しいです、土着の竜族を纏め上げます。人間で言う同窓会ですな」

「……私は会いたくないんだがな、まあ、ルキがいるから大丈夫か。悪いが、暫く横島を頼む」

「判りました、ルイ様に命じられていますし、私にお任せください」

横島が眠りに落ちてから、小竜姫はシズクを伴って横島の家を出る。小竜姫の受けた命令は3つ、1つは横島の護衛、もう1つはガープに対する警戒、そして最後の1つは天界と袂を分かった竜族の所在の確認の3つである。ガープからすれば天界からも、魔界からも恩恵を受けていない人間界の竜族は実験の素材としても、そして仲間に取り入れるとしても使えるだろう。特に狂神石で洗脳してしまえば良いのだ。そして龍の血や鱗を素材に、魔術道具を作られれば、下級神魔でも脅威となりえるのでその対策も必要だ

「人間界では水龍が主流なので、やはりシズクさんがいると頼もしいんですよね」

「……言っておくが私は纏め上げたりしないぞ?」

「分かってます。有事の際にガープに協力されたりするのを防ぐのと、日本を護るためですな」

「……やれやれ、面倒なことだ」

そうは言いつつも、横島を守ることに繋がるのならばと文句を言わ

ず、小竜姫と並んで空を飛ぶシズクの視線の先にはメドーサが腕を組んで待っていた

「本当に連れてきたよ。信じられないねえ」

「……メドーサか、まあ妥当な所だな」

天界で有名な小竜姫と魔界で有名なメドーサ、そしてその両方に属する事無く、それでも竜族として善と悪の両方に一目置かれているシズク。この3人ならば人間界の竜族を説得するのも不可能ではないだろう、メドーサと合流した小竜姫とシズクはメドーサの先導で、出雲へと向かうのだった……

リポート27 同窓会 その3へ続く

## その3

レポート27 同窓会 その3

〜冥華視点〜

性別、経歴などが一切不明の躑躅院。中世的で美しいが、それと同時に冷酷な光を宿す彼(彼女?)については六道の家の力を使っても、その経歴を完全に調べることは出来なかった

『冥華さん。悪いが、私の方も駄目だなあ』

「そう〜ごめんねえ〜一条さん。今度、何かお返しするわ〜」

六道を初めとしたかつて陰陽寮に所属していた六家。一条・二条・九条・土御門・近衛・六道の六家、血が薄まり、既に霊能者としては滅んでいる家系は決して少なくは無い。命がけの除霊、そして日本政府からも信頼が厚いと言えれば聞こえは良いが、その反面殉職率は高い。六道家も高島が残した式だがその中にはかつて、躑躅院と親交のあった家もあるかもしれないと電話をして回っているのだが、一番最有力の一条は駄目だったか……

『その代わり蘆屋は見つけたぞ、世界大戦の始まる前……えっとお……昭和13年に一条家に一時駐在しておった』

その年代と言うと一条家が廃れ始める前……いや、正しくは霊能を捨てる前だったと記憶している

「もしかして奪われたの?」

『だはは……面目ない』

私の本来の口調に一条家の前の当主は取り繕ったように笑い謝罪した。

『じゃがな、あの当時の一条家で最強と言われた隠を抵抗すらもさせずに殺害し、逃亡されてはなあ……』

「隠蔽したわけね、貴方のお父様が」

『そうなるな。それにあの自分はワシは父上の命令で山奥に疎開しておったしな』

霊能を捨てたのではなく、捨てざるを得なかったと言う事なのね。

それだけ蘆屋と言う男の霊能はずば抜けていたと見て間違いないだろう

「ありがとね〜また何か判つたら〜教えて〜」

『おうともさ、じゃが最近きな臭い。そちらも気をつけるんじやよ』  
心配してくれてありがとね〜と返事を返し、受話器を置く。一条家の霊能は確か、使役した動物の召喚……横島君達のような妖使いではなく、意思を完全に剥奪して使役する。

「……なるほどね、大体カラクリが見えてきたわ」

一条から使役術を奪い

二条から霊力のコントロールの術を学び

九条からは結界術を奪い

土御門と近衛はまだ判っていないが、確実にその家の霊能を奪っているのは間違いないだろう。

「……土御門からは陰陽術で、近衛からは治癒術と言うところかしらねえ」

まだ連絡がついていないが、その家の霊能に関しては十分に理解しているつもりだ。六道に来なかつたのは12神将は六道の血にしか、基本的に従わない。奪つても使役できないのでは意味がないと考えたのだろう

「出来れば躑躅院の事も知りたいんだけどねえ」

蘆屋は当然陰陽師としては危険すぎる、それに日本陸軍に所属していたと言う事までは判明しているが、それ以外の経歴は一切不明だ。それに加えて躑躅院も判つてることの方が少なすぎる

(……六道と敵対関係って言うのも不安なのよね)

高島と婚姻関係にあった躑躅院、だが肝心の高島はまだ妻となる少女が幼いと言う事で正式に婚姻を結ばず、自身の陰陽術を伝えた。そして藤原の姫や、輝夜と交友を深め、そして六道の家には12神将を残した。それがどれだけ躑躅院のプライドを傷つけただろうか……そうなればその子孫の躑躅院も六道に深い恨みを抱いている可能性は高い。そんな事を考えていると電話が鳴る

「はい〜もしもし〜」

『どうも、六道冥華。私です、躑躅院です』

アポイントメントを取っていた土御門か、近衛と思っていたのに電話を掛けてきたのは躑躅院だった。予想外の相手からの電話に受話器を握り締める手に自然に力が籠もった

「どうしたのかしら？」

『いえ、日本政府から日本で大きな災害が起こるかもしれないと聞きまして』

……あの糞狸共。一番流してはいけない情報を躑躅院に流しやがったわね……

『何かお力になれることもあるかも知れないので、私も東京に向かうと思うのです』

「ありがとね〜じゃあ来てくれるのを待ってるわあ〜」

思う事はある、互いに互いに互いの腹の探りあいと言うことも判っている。だが、ここで臆しては躑躅院の情報を手に入れることは出来ない。罠だと判っていても、それに乗る必要がある

『ただし、向かうのは私だけになりますかね』

それも予想通りの返答だ、躑躅院の力は未知数だ。それを知る機会を逃す手は無い

「来るのを待ってるわ〜」

どこまで信用できるかは判らない、だが日本が消滅しては元も子も無い。この機会が躑躅院の力を見る最初で最後のチャンスだと思い、私は躑躅院を招き入れる事を決めるのだった……

「ボスよお、あんまり単独行動をするのはあつしとしてはどうかと思いますぞえ？」

「ふふ、必要なことだよ。道真、向こうが苦しいからこそ、私の手を取るしかないのだから」

随分と性悪なこつてと道真は肩を竦める。自分のボスの悪辣さは知っていたが、こういう時は本当に生き生きするんだからと苦笑する「それよりもだ。少し休む、後は任せるぞ」

「へーへー。判りやしたよって言う傍からかい」

躑躅院の頭がガクンと落ち、道真は慌ててそれを支える。そして暫



くすると顔をゆつくりと上げる、だがその目に先ほどまでの冷酷とも取れる意思の光は消えていた

「さ、行きましようね。いまはゆつくり休んでくださいな」

ぼんやりしている躑躅院の手を引いて、道真は部屋を出る。手で目を擦りながら躑躅院は大きく欠伸をする

「眠いんですかい？」

「どうだろ……良く判んないや、そうだ、それより横島！横島に何時会える？」

「きつと近いうちに会えますよ、さ、今は寝ましようね」

華のように笑う躑躅院を寝室に案内し、その部屋の前にどっかりと座り込んだ道真は舌打ちする

「ちつ、胸糞わりい、何が躑躅院の最高傑作だよ。くそが、これから狂人と関わるのはごめんなんだ」

躑躅院の本当の姿を知るただ1人。鷲羽は腕を組んで目を閉じる、己を縛る契約。それとは別に力になりたいと思っっている自分を嘲笑すると同時に、そんな自分も決して嫌いではないのだから……

くくえす視点く

イギリスの魔鈴めぐみから受け取った魔道書に挟まれていた機密文書の解読……それは思った以上に難航していた。

「これが……いえ、違いますわね。ではこれ……文脈がおかしいですわね」

判っていることはこのイギリス政府が隠していた魔道書が何か、そうとてつもなく強力な魔道書の1ページと言うことだ。しかし、その文は古代文字で書かれており、しかも中世の時代の魔法を前提にして書かれていることが、解読の難易度を恐ろしいまでに上げていた

「……くえす様。お客様です」

「今忙しいから追いつ返しなさい」

妖精メイドに追いつ返しなさいと即座に返す、これが横島なら考えるが、客と言う段階で横島ではない。ならばわざわざ会う必要は……

「いえ、待ちなさい。尋ねて来たのは誰ですか？」

「ドクターカオスです」

……ヨーロッパの魔王の異名を持つドクターカオスなら解読のヒントになるかもしれない、そう思いメイドにやっぱり招き入れるようにと声を掛ける

「ぬお、随分と酷い有様じゃのう」

「うるさいですわ、それで何の用ですの？」

解読する為に山積みになっている魔道書を見て、叫ぶカオスを睨むとカオスは肩を竦める。

「悪いんじゃないが、これに魔法を込めてくれるかの？」

「……自分でおやりになればいいでしょう？」

私の言葉にカオスは苦笑し、机の上に銃弾を置く。白銀の弾丸が5つだ、随分と珍しい物を持って来てますわね。

「黒魔術も白魔術も両方扱えるが、やはり専門とは言いがたいしの」

「はいはい、判りましたわよ。きっちり対価は貰いますからね」

判っておると返事を返すカオスに頷き、読んでいた魔道書を閉じて注文された魔法を銃弾に込めていく

「毒に、成長障害に壊死……一体何に使うつもりですかの？」

「詳しくは説明できませんが、必ず役に立つとだけ言っておくかの」

考えられるのは緋立病院で私達を襲った昆虫の群れ、それに対する対抗策と言う所ですかね。あの時は私とタマモの最大火力で薙ぎ払いましたが、それもそう連発出来る物ではない。別の方法で相手を楽に殲滅できるのならばそれに越したことは無い

「それで対価は何を支払えばいい？」

「これを」

私が解読している魔道書のページを見せる。するとカオスは深く深く溜め息を吐く

「馬鹿なイギリスじゃな、これはの、卓越した黒魔術師と白魔術師で無ければ解読できん」

「え？」

「つまり1人じゃ解読出来んのじゃ、悪いがワシはもう歳じゃからお主の魔力量に合わせることは出来ん。知人に白魔術に優れている人

間がいるなら呼び寄せることじゃな」

今までの私の苦勞が全て無駄……そう聞いて激しい怒りを覚えたが、これ以上時間の浪費をしなくて済んだと考えればそれは決して無駄ではないと思う

「ではカオス、悪いですがイギリス政府に圧力を掛けてくださいますか？魔鈴めぐみが日本に来れる様に」

「……仕方ないのう……家に帰ったらすぐにやるわい」

めぐみは押しに弱いので、政府に駄目と言われたらそれで引き下がってしまう。ここはカオスに頑張ってもらおうとしましょう

「もしもし、めぐみですか？」

『くえすですかあ……？解読出来ました？』

私と同じで行き詰っているであろうめぐみにすぐ連絡を取る。時間の無駄は少しでも早く終わらせるべきだ

「なんでもそれは白魔術師と黒魔術師が協力しないと解読出来ないそうですわ」

『ええ!?な、なんですかそれは!!何処情報です?』

「ドクターカオスですわ」

ドクターカオスの名前に真実なんですわと疲れた様子で呟くめぐみ。小声で数ヶ月無駄になりましたと呟いているので、そこは哀れに思う

「カオスがめぐみが日本に来れるように圧力をかけるそうですから、解読は暫く諦めることですわね」

『ほんとですか。もう私イギリス政府の無茶振りに疲れましたから、早く呼んで下さいね』

凄く嬉しそうにしているので、下手をすれば日本が沈むかもしれないというのを伝えるのは止める事にし、他に出来る魔道書の分析を勧めて電話を切る。

「さてと、私も気合を入れて行きますか」

切り札になるかと思っていたのが、切り札所か完全にゴミ札だった。だが早い段階で判明してくれて良かった、今ならばまだ準備は間に合う、美神達が準備を整え再び東京を発つ前に私も準備を進める事にす

るのだった……

くルイ視点く

暇つぶしでオーデインの所に顔を出すと珍しい顔があった。片腕を失ったアマイモンだ、まさか魔界正規軍でこいつの姿を見るとは正直よそ以外だね

「へえ、アマイモンじゃないか。なにをしてるんだい？」

自分の部下であるはずのアスモデウス達が大騒動を起こしているのに、どうしてここにいるんだい？と言う意味を込めて、アマイモンにそう尋ねる。

「……これは閣下。随分とお久しぶりですね」

うんうん、この隠そうとしても見え隠れている不快そうな気配、これだからアマイモンは面白い。

「そんなに私が嫌いかな？」

「……」戯れを

あの言葉の間とその反抗的な目……殆どの神魔が私と事を構えるのを恐れる中、それでもこれだけはつきりと意思表示をするアマイモンは本当に面白い

(腹に一物抱えているけど、それもまた是としようじゃないか)

かつて、まだアマイモンが神だった頃。私とどちらが最高指導者になるかで揉め、僅差で私に破れ、その後魔族に堕ちた。アマイモンも中々に複雑な経歴をしていると苦笑する。

「いい加減にかつての部下の後始末はつけられそうかい？」

「……この身体ですので、知恵を貸すだけでお許し願いたいです」

「おかしなことを言うな、そんな事をかけらも思っていないのにね」

ギリツとアマイモンが歯を噛み締める音が響く、私との一食触発の空気に魔界軍の第一司令部に緊張感が走る。

「この道楽者が」

「ふふふ、良いね良いね、やっと素が出たじゃないか」

この荒れ狂う炎のような気質。これこそがアマイモンだ、あの燻っている様な気配では全く持って面白くない

「随分な口を利くじやあないか、魂を砕かれる覚悟は出来ているのかい？」

「先に喧嘩を売ったのは貴様だ、ルシファー」

1 神魔であるアマイモンが私を呼び捨てでできるのは理由がある。かつて太陽神と同一視されたアマイモンは私に匹敵すると言ってもいい

「そうだねえ、じゃあ私の責任で殺し合いでもするかい？部下の後始末を自分でつける、なんて良い上司なんだ。出来るだけ惨たらしく殺してあげようか？」

「……ちっ」

私の言葉に露骨に舌打ちするアマイモン、彼だつて判っている。これが私の挑発であると言う事を……だからこそ小さく溜め息を吐いて怒りを飲み込む素振りを見せるアマイモンが面白くて仕方ない。

「ご無礼を心より謝罪します」

「ふふふ、良いよ別にね。気にして無いさ」

それに良い気分だから戦う気はなくなつたのも事実。もしもアマイモンが下らないことを言うのなら、まだしも、矛を引いた。それならばまた私も矛を引くのが道理と言うもの、これで怒っていたら私の方が子供と認めているようなものだしね。

「ルイ様！どうか、どうか穏便に！」

「ああ、いいよ。気が変わったから今日は帰るよ、引きこもってるソロモンとポーカーでもして帰るさ」

どうせ付き人もいないから、面倒ごとを起こすと自分で後始末をしないといけないのでめんどくさいし……それに見るべき物を見た

（ああ、こちらもこちらで面白くなりそうだ）

アマイモンなんていう劇物を抱え込んだオーディン、それが牙を剥いた時。あいつがどんな反応をするかが楽しみだ

（運命を決めるのは神じゃない。人間だからね……）

結局神魔が自由に出来ることなんてそれほどない、運命を決めるのは人間。それを見定めるのが私の楽しみであり、最高の娯楽だ。知らずの内に魔人姫や私と仲良くなっている横島が今は最高に面白い。

だからこそ、私は口を紡ぐ。そう強いて言うのならば……

「今はまだ語るべきではないって所かな」

アマイモンが内に秘める獣を見た。それだけで今回は十分、だから「横島に巻き上げられた分はどこのソロモンから奪い取ってやろうかなあ」

折角シヴァから取り上げた槍も返す羽目になってしまったし、それに変わりお宝を誰から奪い取ってやろうか……私はそんな事を考え、鼻歌を歌いながら魔界を歩き出すのだった……

くメドーサ視点く

出雲の土着の竜神と言えば、シズクのホームと言っても良い。だからシズクがいれば、交渉にしろ、説得にしろ楽に済むと考えていた。小竜姫だけでは話が拗れただろう、なんせ小竜姫は天界のエリート中のエリートだ。そんな相手が来れば土着の竜族はへそを曲げるだろう。

シズクだけでは話が纏まらなかつただろう、シズクは地上の竜のトップと言っても過言ではない。そんな相手が来れば形だけは平伏するが、反逆を考えるだろう。

私では考えてもいないのに反逆を考えているだろうと話になってしまっただろう。

つまり私達3人で来る事で対等な話し合いになるだろうと私は考えていた。

「これは滾る」

「やべえ、流石ヒヤクメ。これは萌える……」

「ああ、どうやったら横島にあえるのかなあ……」

……なんで土着の竜族全員が横島を知ってるんだ？しかも、ヒヤクメが小遣い稼ぎで売ってるブロマイドとか、ちよつとしたビデオ見たいのを売ってるんだが、なんでそれを持っているんだ？

「横島の石像だってよ！ 凄くないか！」

「ほほう……これは良いな」

「いやいや、この映像はどうだ。可愛い」

「横島は可愛い」

うりぼーに埋もれて昼寝をしている横島を見て可愛い、可愛いと言ってる土着の竜族に頭痛がしてきた。

「……なあ、メドーサ。あいつら殺してもいいか？」

「止めろ。気持ちは判るが止めてくれ」

あんな奴らでもこれから起きるかもしれない未曾有の大災害の備えにはなるんだ。だから殺さないでくれと言うとシズクは溜め息を吐いて、指を鳴らした。

「ああああーッ!!?これはあー!」

「いやあああッ!シズクさままだアア!」

「嘘でしょ!?!まだ来る時間じゃ……あああーッ!」

あちこちから聞こえてくる断末魔の叫びに溜め息を吐きながらも、余りに土着の連中が酷すぎたので、これで自分達に有利な状況で交渉できると思う事にするのだった……。

「はいはい、地震が起きるかもしれないからそれを止めるのを手伝えと」

「……そうだ。断れば判るな？」

「はい、大丈夫ですよ?大丈夫ですから降ろしてくれませんか？」

「……それは駄目だ」

水で吊るされている土着の竜神が泣いているが、待ったくこれっぽっちも同情出来ないから不思議だ。

「……おい、待て小竜姫」

「……ナンデスカ？」

「……氷土下座するか？」

「……すみませんでした」

……土着の竜族から取り上げたものを回収しようとする小竜姫にも頭痛を覚えた。どうしてこんな事になっているのか、不思議でしよ  
うがない。

「もし災害を最小に抑えたら横島に会えますか？」

「あんな可愛い人間見たこと無い」

「YESシヨタ、ノータツチを誓う」

どうするって顔でこつちを見てくるシズク。いや、私を見るなよ……頼むからさ……。

(横島の人外ホイホイのレベルが上がってる)

私の知る横島よりも今の横島の人外に好かれるレベルが桁違いに上がってる。なんせ会ったことも無いはずの土着の竜族さえもこれだ。

「とりあえず仕事次第じゃないか？良ければ竜神王様が許可してくれるかもしれないぞ?」

「「じゃあッ!!」」

吊るされたまま、体育会系の返事をする竜族に頭痛を覚えながら、シズクに視線を向ける。

「横島連れてきたら一瞬だったんじゃないか?」

「……例えそうだとしても絶対に連れてこない」

だろうね……この反応を見る限りでは飢えた獣の中に横島をほっぽり出す事になる。説得や交渉が楽になると思うけど、それだけは絶対にはいけない事だと思った。

「これ、レアの……こつちと変えませんか?」

「む……良いだろう交換成立だ」

「……あの馬鹿殴って良いか?」

「良いよ」

ブロマイドを交換している馬鹿を殴りに行くシズクを見ながら、とんだ貧乏くじを引いたと私は深く後悔するのだった……。

氷室神社の近くの森の中……そこには導師の幽霊とシズ、そしてナシの3人の姿があった

【流石にこれ以上は無理そうだな】

「うむ、流石にこれ以上はどうしようもないな」

【まさかこのようになるとは……】



3人の力で結界を構築していたが、それすらも限界が近い。結界の中にはおぞましい蟲の群れが封じられている

【まさかお前の権能を奪い取られるとは……】

【最上級神魔には私にも勝てない】

今ここにいるシズはグループに権能を完全に奪われる前に、切り離れたシズの自意識だけの集合体だ。だがその反面力の7割を失い、シズにもう神霊としての力は無い

「2人を呼び戻すか？」

【いや、ナナシ殿、いまさら呼び戻して間にあわんでしよう】

自分1人ではなく、ナナシと同じく舞の護衛の妖精を呼び戻すかと呟くが、今からでは間に合わないと導師は判断した

【じゃが、私はおキヌを今回の事に巻き込むのは避けたい】

【……いえ、申し訳ない。もうおキヌを霊的兵器にする装置は壊れており、使用出来ません。もとより使うつもりは無いですが……この地の霊脈はおキヌの霊力と混じっておりますから】

【兵器として使わずともおキヌをこの場に呼び寄せる必要があるのか。なんと忌々しいッ！】

そう舌打ちするシズ、出来ればおキヌには白骨温泉での事件に巻き込まず。自分達の力で解決したかったが、それも不可能であると言うことはシズ達が一番理解していた

【ええい！仕方あるまい！今使えるだけ霊脈から霊力を引き出してこの場を封印する！】

【単なる時間稼ぎにしかありませんが、それしかありませんな】

昆虫達が融合し、巨大な異形の姿へと変化したのを見て、導師達は今引き出せるだけの霊力を霊脈から引き出し、強力な結界を張り、その場から逃走する。日本の次なる危機はもうすぐ傍に迫っているのだった……

## その4

リポート27 同窓会 その4

〜横島視点〜

シズクが小竜姫様とどこかに行ってしまった。本来ならば、俺の家の食卓は質素になるか、それとも蛍やおキヌちゃんが来てくれて用意されるはずだった。だが、今はルイさんから俺の家のお手伝いのルキさんが居てくれた。ルイさんのメイドさんだけあって家事も料理も何でもござれだったのは非常にありがたかった。それにあんまり馴染みが無い洋食が続くと言うのも中々面白いと思う

「こんなパンとか正直初めてね」

「そうでござるが、美味いでござるよ」

「おかわりー！めっちゃうめえツ!!」

「パンはあんまり好きではないんですが、これは美味しいですね」

「ノブー!!」

パンを卵と牛乳のソースに浸して焼いた……えーつとフレンチトースト?とか言う見慣れないパンとコーンスープとベーコンエッグとサラダ、シズクの作る和食とは勿論全然違うのだが、これがまた美味しい。それに俺達があんまり洋食に慣れてないのも判っているのか、ナポリタンやシチューなどの普通の高校生にもなじみのある料理を出してくれているのが本当にありがたい。

「この乳液って何かコツがありますか?」

「たっぷりの卵と砂糖、それと無調整の牛乳です。味の濃い牛乳ではなく、無調整の牛乳がポイントですね」

蛍はなんかルキさんに話を色々聞いてメモしてる、やつぱり本職のメイドさんだ。簡単そうに見える、料理にも本職の凄い技術とかが使われているのかもしれない。

(いや、ホント美味しいな)

半熟卵にカリカリのベーコン、味付けはシンプルに塩だけなのに本当に美味しい。香港の高級ホテルで食べた朝食と比べても遜色ない

かもしれない、俺はそんな事を考えながらフレンチトーストに齧り付くのだった……

「と言うわけでレイさんのメイドさんは物凄いなと思う」

もう少し休みが長期になりそうなので、高校に手続きに来た時にピート達にあつた。まだ復学の目処は立ってないので、休憩時間の時に少し話をしていたのだが、それがいつの間にか盛り上がっていた。

「父の城のメイド長も凄かったですしね」

「何時休んでるのかって思うくらいだったよね、お兄ちゃん」

「ワツシは一般庶民だから、メイドさんの凄さって言うのは判らんですジャ―」

日本では貧乏暮らしだが、ブラド―島では貴族の2人もメイドさんの凄さを知っており、タイガーだけはピンと来ないのか、首を傾げていた。

「所でさ、横島君ってメイドさんが好きなの?」

「どういう意味か良く判らないんだけど愛子」

メイドさんが好きとか正直ちよつと意味がわからないんだけど……愛子にどういう意味なのか?と尋ねると愛子は手をぶんぶん振りながら

「な、ななな、なんでもない!ちよ、ちよつと気になっただけ」

いや、その反応はどう見ても大丈夫には見えない反応なんだけど……その時俺の脳裏に電撃が走った。愛子が何に慌てているのか判ったのだ

「ん?愛子!」

「な、なに!?!別にメイド服着てみようとか考えてないわよ!?!」

違う、そうじゃない、俺が言いたいことはそんなことじゃなくて……俺は愛子の後ろ、つまり愛子の本体を指差して

「机が大変なことになってる!?!」

「「え!?!そこッ!?!」」

ピート達が驚いているが、俺にとってこれ以上驚くことはないと思う

「助けてくれー!!もうやだあああーっ!!」

「ダーリン逃げちゃ駄目ーッ!!」

愛子の机から逃げようとする熊……多分オリオンとそのオリオンを捕まえている腕、腕しか見えないけど確実にアルテミス様だろう

「もうやだああ!!頭が変になる!!」

「なんで!?!こんなに楽しい空間なのに!!」

逃げたいオリオンと逃がしたくないアルテミス様。俺は顎の下に手を当てて愛子の方に視線を向けた。

「愛子の机の中って凄かったよな、もしかして何か悩んでる?それなら相談に乗るけど」

枢ちゃんが俺のことお兄ちゃんとか、タマモがなんか訳の判らないことになっていた。もしかしてそれが愛子のストレスが原因なら友人として相談にくらい乗ってあげたいと思うんだけど……

「いえ、愛子さんの悩みは横島……」ちよつと黙ってくれるッ!」げふうっ!」

「ピートッ!」

愛子の唸る左ストレートがピートを殴り飛ばす。その凄まじい腰のキレに思わず驚愕する

「横島君は気にしなくていいわ、ね?」

「あ、はい」

これは駄目だ、容易に触れてはいけない話題だと判断し、何度も何度も頷いていると愛子がよろしいと笑う。なんかその隣でシルフィーちゃんが溜め息を吐いているけど、多分そのことも指摘しないほうが俺の身の安全に繋がると思う

「横島さん、あれいいんですかのー?」

「どうだろうなあ」

熊の姿でなければ底なし沼とか、妖怪に捕まってる人って感じだよな。心情的には助けるべきだと思うんだけど、相手は神様だし、下手に怒らせるといけないって美神さん達にも言われているから、どうするべきか本当に悩む

「あ、横島!助けて!助けてくれええええ!」

名指しで助けてくれとわめいているオリオン……名指しされたか

ら何とかしてやりたいと思うんだけど……

(心眼、どうしよう?)

(悩む所だ)

オリオンを助けて得れるメリットとデメリット、アルテミス様の邪魔をして、得れるメリットとデメリット……そのどちらも非常に大きいぞと言う心眼。

「もう空想とか、そういうのは嫌なんだよ!」

「いいじゃない!遊び放題じゃない、日暮れの学校に遊園地にプールに海、それにキャンプに星空の下!どれも凄く楽しいし、ロマンチックじゃない、ダーリン!」

話を聞いている限りだと外に出たいオリオンと、色んなシユチエーションで楽しめるということとで外にでたくないアルテミス様。正直どっちもどっちだと思うんだけど、顔だけではなく耳まで真っ赤な愛子が可哀想なので止めに入ることにする

「あのーアルテミス様」

「あれ?横島ー!元気?」

机の隙間からハイライトの消えた目が俺のほうを見ている正直メツチャ怖い。それとオリオン、助かったって言う顔をしないでくれ、多分俺がやるのは別方向であんたにとってとは地獄だ

「あ、はい、元気です。東京で有名な遊園地のフリーパスがあるんですけど、オリオンと行きませんか?」

「行くー!なにそれ!凄く素敵!」

「裏切ったな!俺をぶぎゆるっ!」

抱きしめられて白目を剥くオリオンに心の中で南無と呟く。いい人……かは判らないけど、冥福くらいは祈ろうと思う

「俺の家にあるんで、取りに来てくれますか?」

「勿論!やったー遊園地だー!!」

バインバインと跳ねまくる胸に一瞬目が奪われそうになり、俺は首を左右に振ってアルテミス様と白目を剥いて泡を吹いているオリオンを自宅へと案内することにした

「あ、随分早かったですね。どうでしたか?」

ルキさんがさつと和食のレシピ本を隠すのをみて、この人も何か悩みがありそうだなと思った。

(やっぱり思うところがあるんだらうな)

ルイさんのメイドなのに、俺の家にいる。やっぱりその事には思うところがあるんだらうな……ちよつと話を聞いたほうがいいかもしれない……だけどまずはアルテミス様にデジャブーランドのフリーパスを渡すことにするのだった……

↳ブラドー視点↳

ブラドーの部屋にカツンカツンと言う小気味良い音が響く、ブラドーとカオスが向かい合いチェスを指しているのだが、2人の視線は盤上に一切向けられていない、それなのに駒が動き回り、盤上から駒が取り除かれていく。

「今、日本の神魔に特に異常は感じられない」

「そう……か。ワシの考えすぎだったかの？」

ナイトが大きく動き、僅かにブラドーの眉が動くがすぐにクイーンが動きナイトが盤上から取り除かれる

「アシユタロスにも話を聞いたのだろうか？どうだった」

「お主と大体同じじやな。ただ、やはり白骨温泉の近くの霊力の流れがおかしいそうじや」

怪しい場所は判っている、だが相手もそれは100も承知。そこに飛び込むには其れ相応の準備が必要だ

「武器の方はどうだ？」

「むっ……昆虫であり、植物、殺虫剤と枯葉剤を併用してみたわい」

どうもカオスが押されているのか眉が大きく動く、それでもブラドーは大きく駒を動かす事無く丁寧に駒を動かす

「誘いには乗ってこんか」

「安い誘いだ、我を釣りたければもつと大きな餌を用意することだ」

カツンつと大きな音を立ててビショップがキングの前に動き、カオスのキングはチェックメイトを逃れる為にキャスリングでキングを大きく逃がす

「餌と言えば、ワシは日本での騒動を餌にするつもりではないかと思っている」

「ありえなくはないな」

神魔からすれば日本はさほど重要度の高い場所ではない、だがそれは一部の神魔にとつての話だ。特定の神魔にとつては、日本は何よりも死守すべき土地となる

「小竜姫達が土着の竜族の助けを求めている」

「8ー2だな」

「ちなみにどっちじゃ」

「判っているだろう、協力するのが2割だ」

「だろうなあ……」

理想はもつと多くの竜族を仲間にするのだが、土着の竜族はどちらかと言うと、天界を憎んでいるとも言える。すべてはメドーサとシズクの頑張り次第ではある、小竜姫がやや弱い所があるが、竜族の中ではカリスマと言えるシズクとメドーサの存在が説得、もしくは交渉のキーポイントになるのは明らかだ

「チェック」

「む、良い手を打ってきたな」

話をしながらもカオスとブラドローのチェスは進み、追い込まれていたカオスのクイーンがブラドローのキングを射程範囲に収める。

「お主は今回は表に出るのか?」

「いや、止めておこうか」

確かにブラドローは強力な吸血鬼ではある、だが操られないと言う保証もないので東京に残る事を選択した。

「東京と言えば躑躅院が来るらしいな」

「あいつか、あいつは中に獣を飼っているぞ。チェック」

「むっ……」

お返しと言わんばかりにチェックをされ、カオスの顔色が変わる。そしてそれを見てブラドローは楽しそうに喉を鳴らす

「マリア姫の子孫が日本に来るそうだな」

「む、ああ、横島が預けたジャンヌダルクの旗を届けに来てくれるそう

じゃ」

「嘘を言え、お前を迎えに来るんだろう」

「ワシはいかんよ、日本でやることが……ちつ、参った」

これ以上打つ手がないと判断したカオスが降参し、ブラドローは笑いながら駒を片付ける。

「その白骨温泉とやらに向かうメンバーは？」

「美神、横島ファミリー、蜚、琉璃、くえすらしいな」

「会長が動いていいのか？」

「自分の妹がいれば黙ってはおられんじやろうよ、ワシ達は東京の防衛じゃ」

「未来の記憶は使わないのか？」

「もう大して役に立たん、あの時代では過去じゃが、今では未来じゃ。未来は簡単に形を変えるからな」

未来は簡単に形を変える。カオスの言葉にブラドローは獰猛な笑みを浮かべ

「では手始めにガープの思い描いている未来を変えてやるとするか」

「その意気じゃ、何もかもあいつらの思いとおриにはならないと言うことを教えてやろうじゃないか」

そう笑いあうカオスとブラドローの目には凄まじい決意の光が宿っているのだった……

〜ルキフグス視点〜

ルイ様のご命令で横島の家メイドして預けられることになった。そのことに關しては特に文句はない、それがルイ様の御意思であるのならば、私はそれに従うまでだ……だがそれでも引つかかる部分が無い訳ではない

「どうぞ」

「すみません」

横島が用意してくれた緑茶を啜る。仮初とは言え、家の主人にこんな事をさせてしまうとは……やはり自分はメイド失格なのではと言う考えが脳裏を過ぎる



「ルキさんがいてくれて本当に助かってますよ、今だって俺達の事を考えてくれていたんですよ」

「え、まあ、洋食よりも言うのを考えなかったわけではないです」

ルイ様は洋食を好まれるので、私も洋食を得意としている。だけど今私がいるのは横島の家なので、横島達日本人の舌に合わせた料理を覚える必要もあると思ったのだ

「俺達は本当に感謝してますけど、どうしてそんなに不安そうな顔をしているんですか？」

「不安そうに……見えますか？」

これでもポーカーフェイスには自信があつたのですが、それすらも人間相手に見破られるとは……こんな無様な有様だからルイ様に横島の所に預けられたのかもしれない

「そんなに不安に思うことはないと思いますよ。多分、ルイさんはルキさんを心配してくれてると思うんですよ」

「ルイ様がですか？」

ルイ様が私を心配……そんなことはありえないと思いますよと言うと、横島はそんなことはないですよと自信に満ちた顔で笑う。

「ルイさんは優しい人ですから、きっとルキさんの事を心配してくれると思いますよ」

「私が駄目なメイドだから、ルイ様は私を見限つたのでしょうか」

横島はルイ様の事を何一つ理解していない、だからそんな甘い事が言える。あの人は冷酷で、役に立たないと思えば部下だって簡単に切り捨てる。それこそが、その力強い背中に私もベルゼブルも惹かれ、共に来たのだ。だから私も役に立たないと思われれば簡単に捨てられる

「そんなことないですよ、疲れてるから、そんな風に考えちゃうんですよ」

何故私は頭を撫でられているのだろうか……しかも何故それを振り払おうと思わないのか……上手く言葉に出来ないのだが、奇妙な安心感がある。

「俺の家にいる間は本当にゆっくりしてくれて良いですからね、ルイ

さんが迎えに着てくれたらそれからまた頑張れば良いんです」

「……そう……ですかね？」

そうですねと笑う横島、そして私は気が付いたら正座している横島の膝の上に置かれた座布団に頭を預けていた。完全に立ち位置が逆だが、私は膝枕をされていた。非常にリズムカルに頭を撫でられ

「あ、嫌でした？」

「いえ、嫌といえますか……こんな初めてと言いますか」

なんででしょう、こんな無条件に甘やかされるといいうのは初めてで……何とも言えない感情が胸を埋め尽くす

「仕事で疲れた沖田ちゃんとかにやると喜んでくれるんですけどね」

【それはあの馬鹿だけだろう】

沖田……あのすぐ血を吐く英霊ですね。いつも馬鹿な事を言っていますけど……確かにそう嫌な感覚ではない

「すみません、少しの間このままで」

「はいはい、ゆっくり休んでくださいね」

【ここにも駄目な奴がいたか……】

心眼の言葉は余りに辛辣ですが、なんと言うか妙にフィットする。私に足りない何か埋められているような……そんな気がする

「……ただいま……横島、お前何してるんだ？」

「ルキさんに休んで貰ってる」

それでなんでお前が膝枕するんだ？と呆れた表情をしているシズク。普通なら飛び起きる所ですが、そんな気にもならず私はそのまま目を閉じるのだった……そして、この時の報告書には一言こう綴られていた

【神魔を駄目にする人間、横島】

「……ルキフグス……君に一体何が……」

愉悦を求めてルキフグスを横島に預けたルイだが、自分の部下なら絶対発しないであろうその言葉に困惑し、そして次はどうするかを考えていた。

「もう少ししたら迎えに行こう」

迎えに行つた時のルキフグスがどんな反応をするのか、それを楽し

む為にルキフグスを迎えに行く事を決めたのだが……まずは

「今回がどうなるかだね」

ガープ達が日本でまた騒動を起こそうとしている。ルキフグスを迎えに行くよりも先に、まずそれを見届ける事を決めるのだった……

雲一つ無い夜。月の光を浴びながらおキヌは横島の家が見えるビルの縁に腰掛けていた

【……私はどうしたいのかなあ】

生き返りたい……前は私は生き返れた。だから今回も私は生き返れる……私はそう思っているけど、前とは余りに違う世界、そして違う状況。

【……でも生き返った後……私はどうなるのかな】

前は生き返って、そして記憶を失ったけど私は横島さんや美神さんの事を思い出せた。だけど、もし今回生き返って、美神さん達の事を思い出せなかったらどうしよう……そんな不安を私はずっと感じていた

【今が凄く楽しい……楽しいけど……】

今のままでは嫌だと思う自分、そして今のままでも良いんじゃないかと思う自分……自分でも上手く説明できない複雑な感情。それを誰にも相談出来ず、ずっと胸に抱え込んでいた

【……私どうしたいんだろう……】

白骨温泉の近くの氷室神社……そこに向かうことが決まったと美神さんが言っていた。そこが私の死んだ場所であり、そして前の時間では私がもう一度生きて、楽しい時を過ごす切っ掛けとなった場所……

【でも……私は……怖い】

怖い、そうだ。私は怖いんだ、生き返れないかもしれないってことが怖くて、横島さんの事を忘れたまま過ごすんじゃないか？そう思うと怖くて怖くて仕方ない。でも時間はもう待ってはくれない、死津喪比女が起こす天変地異ではない。ガープが引き起こす、本当に日本全

体の危機……それは紛れも無く、前回よりも大きな事件であり、そして大きな被害を起こすかもしれない自体だ

「くっくー」

「くるっくー」

私の動きのせいなのか、眠っていた鳩が起きて鳴き出す。その姿に可哀想になり私は殆ど無意識に歌を口ずさんでいた

【この子の可愛さかぎりない。山では木の数、萱の数……星の数より、まだ可愛い……ねんねやねんねや、おねんねや……】

そして子守唄を歌いきった時、私は思い出した。前も同じことがあった……そして流れ星が……2つ!?前は1つだったのに……今は2つ、それが私に向かってまっすぐに向かってくる

【おキヌ、すまないが、お前の力を貸して欲しい】

現れた導師様の幽霊に、思わず身体が硬直する。だが少し間を置いて、落ちてきた流星の光が消え、そこから聞えてきた女の声に私の身体に広がっていた恐怖と、束縛感は完全に消えていた

【案ずることはない、お前を犠牲にすることは無いと誓う。だから私と導師についてきて欲しい】

そこにいたのは死津喪比女……によく似た巫女服の女性の幽霊。前はいなかった存在、そして無理やりに私を連れて行こうとした導師様が私の返答を待っている……

(やっぱり……そうなんだよね)

前とは違う状況、今までも何回もあった。それは私の時も同じなんだと思うと不思議と恐怖はなかった……今までだつて最悪と言われる状況だつて、皆と協力して何度も切り抜けてきた……その時に未来の記憶なんて何の役にも立たなくて、自分達の力で道を切り開いてきたと言う事を私は思い出した。怖がっていても、何も変わらない。自分の未来は自分で切り開く物なんだ

【判りました。私も一緒に行きます】

だから私は前へ進もう、怖くても、恐ろしくても前に進もう。その先にきつと素敵な未来がある、その未来を切り開く為に、隠れるんじゃないくて、恐れるでもなくて前へ進もう。私はそう心に決めて、導

師様の手を取るのだった……

レポート28 切り開け、己の未来 その1へ続く

# リポート28 切り開け、己の未来 その1

リポート28 切り開け、己の未来 その1

〜横島視点〜

おキヌが東京から消えて数時間後、凄まじい地震が東京を襲った。だがその地震の大半は物理的エネルギーではなく、霊的なエネルギーを伴った攻撃で東京中に雑霊や浮遊霊、そして地蔵などの霊的防衛装置に容赦なくその牙を剥いた

「な、ななな!?なんだこれえ!」

【動くな横島ツ!!】

その凄まじい揺れに飛び起きた俺に心眼の動くなと言う怒声が響き、慌ててベッドの上に留まる。

「こういう時こそ落ち着いて行動しろ、寝起きで動けば必要の無い怪我をする。まず落ち着いて深呼吸をしろ」

心眼の言葉に領き、1〜2度深呼吸を繰り返す。すると寝起きでぼんやりしていた頭がすっかりしてくる、寝ていたから大きな地震に感じたがその震度は3か4程度、確かに揺れているがパニックになるようなレベルではない

【落ち着いたな、周りを良く見ろ】

俺以上にパニックになっているチビ達。小さい動物だから、弱い地震でも恐ろしく感じるのかもしれない

「おいで」

「み、みむう!」

「ぴ、ぴぎゆうー!」

【ノブノブー!】

地震に驚いて飛び起きたチビ達がベッドの上に飛び乗ってくる、チビ達を宥めながら地震が終わるを待つが、5分経っても……10分経っても止まる気配が一向に無い。

「心眼……これもしかして」

【ああ、間違いないな】

ガープの言っていた日本の危機……それがこの大地震なのだ。緋立病院の事件から2週間……ガープがついに動き出したのだ

「……大丈夫か」

「あ、シズク……。シズクが何かかしてくれたのか？」

シズクが俺の部屋に入ってくると同時に地震が止まり、シズクが何とかしてくれたのか？と尋ねる。

「……神通力に反応しての攻撃だ、神通力を解除して、竜気に切り替えただけだ。心眼、お前も気をつけろ」

【助言感謝する】

神通力を竜気に切り替えたとか、良く判らないが、これがガープの攻撃であるのは明らかだった

「移動した方が良いか？」

「……ああ、準備を急げ。着替えは多めにな、シズクタクシーで一気に向かう」

シズクタクシーは死ぬほど恐ろしいが、多分今は最も安全に移動できる手段だろう

「判った。シロとタマモに声を掛けてから移動しよう」

「……準備が出来たらリビングに來い、シロとタマモには声を掛けておく」

シズクの言葉に判ったと返事を返し、札を作る為の筆や墨に紙、それに眼鏡や、トカゲデンワを鞆の中に詰めてビニール袋で包み込む

「せんせー、どうやって移動するでござるか？」

「これ絶対慣れないわよ。シロ、息止めてなさいよ？」

「え？どういふことでござるか？」

シズクタクシー初体験のシロに心の中で南無と呟き、シズクの周りに立つ。すると空中なのに水が発生し、俺達を包み込んでいく

「せんせー!?!これはなんでござるかあ!?!」

「とりあえず我慢した方が良い、終わってから説明する」

パニックになっているシロにそう声を掛け、俺達はシズクの作り出

した水のドームの中に飲み込まれた

「「げほがほっ!!」」

「……到着」

本拠地になっているだろうと予測したGS協会に一瞬で移動したのは良いが、全員びしょぬれで4つ這いで蹲る姿に丁度GS協会に訪れたであろう美神さん達の悲鳴が上がるのだった……やっぱりこれ駄目だ。本当に死に掛ける、ジェットコースターよりも凄まじい衝撃に気絶しそうだ

「横島、大丈夫?」

「……ごめん、無理……」

心配そうに俺の目の前にしゃがみこむ螢に無理と言って、俺の意識は闇の中へと沈んでいくのだった……

〜西条視点〜

水に包まれてダイナミックに登場した横島君達、着替えこそしているが完全にグロッキーで背凭れに背中を預けていた

「大丈夫?」

「……大丈夫じゃない……吐く」

「うえ……気持ち悪いでござるよお……」

「耳の中に水が入って抜けないんだけど」

三者三様に弱りきっている、その姿に可哀想だとは思いつつも、今は情報整理が必要だ。琉璃君に令子ちゃん、唐巢神父等の今東京にいるGSが全員揃い、小竜姫様やブリュンヒルデさんをオプザーバーとして招いている。ガープが攻撃を予告していたが、それがこれなのかどうかを特定する必要もある

「まずは集まっていたいただきありがとうございます。早速本題に入りますが、本日未明に起きた震度3の地震。軽震にも関わらず余震が続き、不可解な被害が続出しています」

GS協会とオカルトGメンの力を使い、手に入れた日本各所の被害状況を纏めた資料を全員に配る

「嘘、この弱い地震で神社仏閣が崩壊って」



「ありえないわね」

「明らかに意図的と見るべきだね。私の教会も震度5か6くらいは振動だった、ブラドール伯爵が何とかしてくれたが、そうでなければ私の教会も倒壊していただろう」

「……ちなみに横島の家も凄い地震だったぞ」

神社仏閣、それに唐巢神父の教会も、横島君の家が地震の範囲に入ったのは少し気がかりだが、恐らくこれは神通力を目安にした広範囲攻撃だと思っている。

「小竜姫様。何かご意見はありますか？」

「まずこれですが、自然発生の地震ではなく、霊脈を利用した攻撃であることは間違いありません」

やはりか、小竜姫様の同意を得れたことで自分の考えが当たっていたという事を確信した。

「私とメドーサ、そしてシズクさんの3人で日本の土着の竜族の力を借りているので、この程度の被害ですが……時間を掛ければ」

「より強い地震が日本を襲うことでしょう」

今の地震でも凄い被害が出ている、だがそれで神魔の力を借りて軽減されているとなると状況は悪化の一途を辿ることになるだろうな

「西条、震源地の特定はもう出来ているんでしょうね？」

「ああ、それは地震があつてすぐに特定している。オロチ岳の地下数百メートルが震源となっている」

「……氷室神社の近くですね」

今まで黙り込んでいた琉璃君が疲れた様子で呟く、震源を素早く特定出来たのもガープから与えられていた情報、そして氷室神社からの報告でもある。

「今回の地震は間違いなく霊障なワケ」

「うん、あのガープが言つてたつて奴よねえ」

ガープ陣営に囚われているであろう名も無き神霊、その神霊の力を使った大規模攻撃と見て間違いない。

「日本が沈没しているとかはまだ出てないわよね？」

「教授に分析を頼んでいるが、今の段階では問題ない。だが時間を掛

ければどうなるか……」

海に浮かんだ島国……それが日本だ。名も無い神霊の力が未知数だが、大地に関係する神霊ならば、日本を沈めることなど容易いだろう。いや、まず間違いなく、ガープの目的は日本を沈める事にあるだろう

「それについてなんだけど、おキヌちゃんが姿を消したわ」

「おキヌちゃんが？どこか別にいるとかじゃなくてですか？」

令子ちゃんという言葉に横島君がそう尋ねるが、令子ちゃんの顔は険しいままだ。

（おキヌ君……か）

おキヌ君はオロチ岳の周辺の山を鎮める為の生贄として死んだと聞いている。つまり、今回の事件に関係している可能性は極めて高い「琉璃、氷室神社の文献になりかありませんでしたの？」

「氷室神社は殆ど廃れてるから、霊能に関しての情報はずっと……ただ何かを祭っているってくらいね」

廃れた神社だからこそ、琉璃君が自分の妹を隠す場所として選んだのだが、今回はそれが足を引っ張る。氷室神社が、霊能を伝えて入れば何か有力な情報を得る事が出来ただろうからね

「令子ちゃん、当初の予定通りに動いてくれるかい？」

「会議が終わったらすぐ出発できる準備は整えてるわ」

危険だと判っている場所に令子ちゃんや横島君を送り込まないといけない、その事に心を痛める。だがおキヌ君と最も縁が深いのは令子ちゃん達だ、彼女達以上の適役はこの場には存在しない

「すまないがすぐに氷室神社に向かって欲しい、小竜姫様。お願い出来ますか？」

「はい、判っています」

令子ちゃん達だけで送り出すのは危険だ。小竜姫様に付き添いを頼み、GS協会を出て行く令子ちゃん達を見送る

（相変わらず悪辣な手だ）

戦力を分散したくないのに、戦力を分散せざるを得ない状況を作り出す。神社仏閣が潰れた事で溢れ出す悪霊や怨霊、それは既に白竜寺

の面子が調伏に向かっているが、地震が続けば新しい結界も意味を成さないだろう。

「では僕達がやることだが、日本を沈める事が出来る可能性を秘めた神霊は明らかに少ない、その神霊が暴れた過去の記録が無いか、それらを調べ令子ちゃん達に伝える。次に可能な限り被害を最小を抑える方法を全員で考えよう」

日本にいる以上、危険なのはどこにいても変わらない。全員が自分出来る最善を行い、被害を最小に抑えようと告げ、東京を出た令子ちゃん達に続いて、僕達も行動に出るのだった……

◇蜚視点◇

美神さん、私、横島、シロ、タマモ、くえす、琉璃さん、小竜姫様にシズク、そしてノツブと牛若丸と言う11人で私達は白骨温泉の近くに来ていた。その理由は山神への生贄になったおキヌさんを祭っている祠か神社を見つける為だ。

「あのー氷室神社に向かわなくて良いんですか？」

「それは後でいいわ、まずは調べることがあるの」

氷室神社に行かなくて良いんですか？と尋ねる横島に美神さんが後で良いと言って山中に視線を向ける

「あつちが氷室神社でいいのよね？琉璃」

「ええ、あそこに見える山道が氷室神社の方角ですね」

木々が生い茂っているので、ここからは確認出来ないが望遠鏡で確認すると確かに整備された道が見える。あの先が氷室神社と言うのはあっているだろう

「横島君、牛若丸と信長に出て来てもらって」

横島が眼魂を取り出すと牛若丸とノツブが姿を見せる。

「悪いけど、2人で情報収集して来てくれる？今この森の中で何が起きていのかを重点的にお願い」

「了解です、山は私の庭みたいな物ですからー！」

【横島ーメロンパンを頼んだぞー！】

やる気満々の牛若丸とメロンパンを頼んで、森の中に消えていく2

人を見送り、持ってきていた地図を確認する

「琉璃は先に氷室神社に行ってもいいわよ？」

「いえ、私も先に調べるのに参加しますから」

GS協会の会長なのに、自分が一番危険な場所に出てきて大丈夫なのだろうか？それとも自分の妹が関係しているから、黙って待つてられなかったのか……多分その両方だと思うけど、琉璃さんが大怪我しないように気をつけないといけないわね。

「それで美神さん、どうするんですか？牛若丸とノツブちゃんが戻ってくるまで待機ですか？」

「ううん、私達は私達で捜索を続けるわよ。眼魂があれば、それが目印で戻ってくるだろうしね」

ちよつと酷い気もするが、仮にも英霊だ。私達よりも強さは上、どうなっているかわからない森の中を調べるのにこれ以上の適役はいないだろう

「……近いな、ここらへんに太い霊脈が通っているぞ」

「強い神通力を感じます。恐らくこの近くに祠があると思います」

シズクと小竜姫様の感覚を頼りにおキヌさんが祭られているであろう祠を探す。

「えつとつまり、山の神を鎮める生贄になったおキヌちゃんは祭られてるって事で良いんですか？」

「そうなりますわ、山の神と一体化することでおキヌもまた神の眷属として祭る事で祟りなどを押さえているのです」

どうしておキヌさんの祠があるのか理解していない横島に私とくえすで説明する

「若くして死んだからね。穢れ無き巫女の身体はいけにえとしても、人身御供としても優秀なのよ」

「……凄いやましい話なんだなあ……」

確かにその通りだけど、当時の霊能ではそれが限界だったし、今よりも神や魔物の定義があやふやだったのだ。生贄で神の怒りを鎮めようとした村人や、雨乞いをした者は多いだろう。おキヌさんもその当時では珍しくない、生贄に選ばれた1人と言うことだ

「駄目だぞ、うりぼー危ないからな」

「ぶぎゅ」

「みぎゅー」

こつんこつんとケージを叩いて外に出してとやっていたチビとうりぼーに駄目だぞと声を掛け、背中にケージを背負いなおす横島。本当ならうりぼーやチビの靈的感覺も何かの頼りになりそうなんだけど、もう少し状況を調べないと外に出せないのが現状なのよね。

「それって重くないんですの？」

「え？全然重くないですけど？」

今まで誰も触れてなかったことにくえすが触れる。それは私も気になっていたし、絶対美神さんや、小竜姫様も気にしていたと思う

【の？】

「チビノブは全然軽いから大丈夫だ」

【の〜♪】

頭に両手足でしがみついているチビノブ、顔も横島の頭の上に乗せていて結構重そうなんだけど……妖精だから重さとかはあんまり感じないのだろうか？

「あのさ、話しているところ悪いんだけど、誰か近づいて来てるわよ？」

誰かが近づいて来ている……その言葉に思わず身構えてしまうが、タマモが全然警戒していない素振りを見せていると言う事は敵ではないのだろうか

「普通の人間でござるよ、くんくん、ほんの少しだけ靈力を感じるでござるが……」

補足するように言うシロの言葉……他のGSがこっちに来ている。いや、そんな話は聞いてないし、可能性があるとするれば

「氷室神社の人間でしょうか？」

「その可能性はありますね。ちよつと場所を変わってください」

靈能が廃れていると言っても、古文書の類は残っているのかもしれない。それを元に誰かが来たのかもしれない、氷室神社の人間と顔見知りの琉璃さんに交渉を頼んで、私達は1度下がることにした

「あれま、琉璃さんじゃねえか！地震があつたばかりになしてこんな所に？」

草木を掻き分けて姿を見せたのはショートカット姿のおキヌさんと少女の姿で思わず、横島がおキヌさんの名前を呟いた

「早苗ちゃん、貴女こそ危ないわよ。今何が起きてるのか聞いてないの？」

「父っちゃんに言われて様子を見に来ただ、この近くには氷室神社が祭っている神様の祠があるらしくてなあ」

祠……間違いない、私達が探しているおキヌさんの祠に違いない

「悪いんだけど、その祠の近くまで案内してくれるかしら？」

「琉璃さん。この人達は？」

「いま日本を襲ってる地震について調べに来たGSよ、勿論私もその1人。悪いんだけど、案内してくれるかしら？」

怪訝そうにしていた早苗さんだが琉璃さんにも言われて、納得したのか私達の案内を始めてくれた

「結構きついけど、気をつけてな」

田舎育ちと言う感じだとすると山を登っていく早苗さん。正直荷物を持ったままでついていくのはきついわね……

「シロとタマモは悪いけど、ここで荷物を見てて、すぐ見て戻ってくるから」

「了解、でも念の為に結界くらいは用意して行ってよね」

「せんせー、気をつけていくでござるよー」

シロとタマモを荷物番に残して、私と美神さん、くえすとシズク、そして小竜姫様と横島と琉璃さんの7人でおキヌさんの祠を目指して、山登りを始めるのだった……

蝙蝠の使い魔からの映像を見つめながら、川に足を入れている神秘的な容姿の少女……レイは手にしていた鯛焼きを齧りながら山を登る横島達を見つめていた

「……まだ何も言われて無いし、鯛焼きも残ってるから勿体無い」

無表情のまま鯛焼きを齧り続けるレイ。だが良く見ると、その白い

肌には包帯がいくつも巻かれていた

「まず横島よりも先に、あの妖精を何とかする。あれは……危険」

鯛焼きを食べたいから動かないのではない、受けているダメージが大きすぎて思うように動けないレイは鯛焼きを齧りながら、複数の使い魔が映し出す映像に視線を向ける。自分にダメージを与えたあの規格外の妖精達、横島達と戦うよりも先にあの妖精を何とかするべきだとレイは判断していた。

「氷室舞の捕獲は難しすぎる」

人間を一人攫うくらい簡単だろうとガープ様は言っていた。確かに氷室舞自身はただの人間で捕獲は容易だろう、だが、氷室舞を守っている妖精が強すぎる

「……これも単独じゃ使えない、役に立たないにもほどがある」

ぽいつと草むらに向かつて投げ捨てられる眼魂、禍々しい赤と金の眼魂にはEのナンバリングと口を空けた蛇のような模様が刻まれていた

「もぐ……もう少し休憩して、それから考えよう」

1人でやれと命じられていたからこそ、レイは今回の事をガープに報告することは無かった。ガープもまた氷室舞の捕獲完了の報告を受けてから、新しい命令を出すつもりだった。それは氷室舞の捕獲が容易であると思いついていたガープのミスであり、レイ自身はガープの命令に従っているだけであり、横島達が現れたことを報告しないのも氷室舞を捕獲するまで連絡するなど命じられたことにしたがっているだけある

「美味しい」

善悪の区別がつかず、命じられた事を実行するだけのレイ。もしガープが横島達が現れたら連絡しろと命じていれば、何か変わったかもしれない、しかしこのオロチ岳で横島達と出会う事がレイに大きな影響を与えることになる事を、ガープは勿論、レイも知る由も無いのだった……

リポート28 切り開け、己の未来 その2へ続く



## その2

レポート28 切り開け、己の未来 その2

〈蛍視点〉

氷室神社の関係者であり、琉璃さんとも知人と言う氷室早苗と言う人物と早く合流することが出来。入り組んだ山道を神通力や、霊脈を辿っておキヌさんの祠を探すと言う無茶をしなくて済んだのは非常にありがたい話だった。だが1つだけ面白くないことがある

「へー横島さんは舞ちゃんと同じ霊能者さんなのだべか」

「いやあ、俺なんか見習いだしなあ」

「あつははは！そんなんわたすだった同じだべ、父つちやに怒られながら霊能の勉強してるだ。舞ちゃんの方が覚えがはやくてなあ」

「あー判る判る、自分が駄目駄目って思う時あるよな」

「んだんだ」

……なあにこれえ？おかしいわね、横島はコミュ力高い割に初見の人は結構警戒するのに、なんでこんなにも意気投合するまでの時間が短いのだろうか

「しかし、舞ちゃんの妖精とは違うんだなあ」

【の？】

「んーチビノブって妖精なのかな？」

横島が目を向けてくるけど、チビノブは妖精と言うか……うーん精霊？美神さんに視線を向けると美神さんもお手上げのポーズ。結論、チビノブって訳の判らない生物なのよね。横島はめちやくちや可愛がってるけど……それよりもいま気になるのはなんで早苗さんと仲良くなるが早いからだ。恋愛感情とかは見えないけど……そうね。ノブとか牛若丸に似た仲の良さを感じる

「……」

くえすもそこが気になるのか、じつと早苗さんを観察してる。

「なんか寒いだ」

「巫女装束だからじゃない？」

かなあ？そうだと思うというなんか気の抜ける会話をしている横島と早苗さん。性格が似てる……って訳じゃないし、昔の知り合いって感じでもないのよね

「……不思議だな」

「そうですよね、横島さんにしては珍しいというか……」

「まあ実際珍しいわよね」

シズクと美神さん、それに小竜姫様も珍しいと呟く。やっぱり付き合いが長いから判るんだけど、初対面の人とこんなに仲が良いとか本当に珍しい事だと思う。

「早苗ちゃんって凄いいコミュ力あるのよ」

突然琉璃さんが訳の判らない事を言い出した。全員が首を傾げて琉璃さんを見るなか琉璃さんは横島と早苗さんを見ながら

「舞ちゃんって超ド級の人見知りなのよ。親戚でも完全にアウトなレベルで」

「……それって正直どうなんですか？」

それは人見知りじゃなくて対人恐怖症とかのレベルだと思う。と言うか、親戚でも駄目とか人見知りとかで片付けて良いレベルではないと思う

「そんな舞ちゃんと時間を掛けてでも、お姉ちゃんって呼ばれるようになってる早苗ちゃんってそれはとんでもないコミュ力だと思うのよ

……横島君と早苗ちゃんが仲良くなるのが早いのってお互いにコミュ力お化けだからじゃない？」

何を馬鹿な……と思いはしたが、なんか琉璃さんの予測には何か、納得出来る不思議な説得力があった

「ぶぎゅ」

「おーうり坊だべ、随分とめんこいな」

「うりぼーって言うんだ、可愛いだろう」

「ぶーぎゅーん」

……元々人懐っこいうりぼーだけど、鞆から顔を出してぴぐぴぐ鳴いている。チビもじーつと観察してるのを見て妙に納得してしまった

「『その通りかもしれない』『』  
「でしよ？」

横島レベルのコミュ力お化けと言うか、人たらしにあったのは初めてかもしれない。恋愛関係は無いかもしれないけど、あつと言う間に友達レベルになっっている早苗さんの凄まじさに私達は言葉を失うのだった……

↳ 琉璃視点↳

早苗ちゃんに案内され、山道を登る事1時間。崖の中腹に注連縄の巻かれた鳥居と洞窟が見える、距離はまだ大分離れているけど、肌を突き刺すような神通力を感じる

「ここがわたすの家の御神体を祭ってる祠だ」

氷室神社の御神体……か、氷室神社も遠くに見える。場所的には霊脈のほぼど真ん中、オロチ岳・祠・氷室神社の3つが繋がった場所にある。

「くえす、早苗ちゃんここに残つてくれるかしら？」

「はいはい、言われなくても残りますわよ」

え？つと驚いている早苗ちゃん。あそこまで高密度に圧縮された神通力となるとくえすとの相性は悪いを通り越して最低だろう、下手をすれば魔法を使うのに致命的なダメージを与えそうなので、くえすをここに残すことにする

「あの一琉璃さん、一体何が起こってるんですか？御神体様の様子見とかじゃ？」

「早苗ちゃん、気になるのは判るけど、詳しく聞こうと思わない方がいいわ。下手に聞くと早苗ちゃんの身が危ないからね」

琉璃の険しい顔と突き放すような言葉に驚いた様子だが、早苗ちゃんは近くの岩に腰掛けて

「判りましただ、ならわたすはなんも聞きません。でも父っちゃんだけは説明して欲しいだ」

田舎言葉だけど決して頭が悪いわけじゃないのね、むしろ頭の回転は早い方と見た。琉璃は後で氷室神社に寄るから、そのときに説明す

るわと返事を返し、祠に続く縄梯子に手を掛けようとして

「横島君、悪いけど先に行ってくれるかしら？上で引き上げて貰えらると皆助かるから」

確かにそれは必要かもしれないわね、縄梯子は幸い新しいみたいだけど、縄梯子を上るのはコツがいるし。上で引き上げてもらえるとなるとやっぱり安心感も違う

「了解です。じゃ、チビノブはお留守番な。うりぼーとチビもよろしく」

【のぶ、】

横島君に対して敬礼して、横島君が背負っていたリュック型のキャリーを受け取るチビノブ。本当にノブノブしか言わないけど、かなり賢いのよね……チビノブ

「よっ、ほっ、とっ」と

縄梯子をするする上がって行く横島君を見ながら、木の間から緋立病院で現れた昆虫のような、植物のような異形が現れないかを警戒する。縄梯子の真ん中で襲われたらどうしようもないからだ、だが警戒していたが化け物の出現は無く横島君は祠の前まで登ってOKサインを出す。縄の劣化や敵の気配は無い見たいね

「私が最後に登ります、シズクさんは……もう行ってますね」

いつのまにか横島君の隣にいたシズクに苦笑する小竜姫様につられて私も苦笑する。だが緊張感を保つよりは、こういう風にすこし笑ったり出来る方が精神的にも余裕になると思う。小竜姫様とシズクが上と下から見ってくれるなら何の心配も無い、縄梯子に手を掛けて登っていく。固定された梯子ではないので少し揺れるが大木に囲まれているのでさほど風が来ないのも助かる

「美神さん、手を」

「ありがと」

横島君に手を掴んで貰い洞窟の前に立つ。その瞬間髪がざわめいた、下から見ても圧倒的な神通力だった。だけど、こうして目の前に立つとそれよりも遥かに強力だ

「シズク、正直どう？」

「……調べ終わったから早く撤退した方がいいな、密度が高すぎる」

シズクでさえも密度が高いと言うのなら、人間には更に危険だろう。出来れば時間を掛けて調べたいが、手分けをして一気に調べた方がいいだろう

「よいっしょつと」

「大丈夫か？」

蛍ちゃんと琉璃も登って来て、小竜姫様が最後に洞窟の前に立つ。険しい顔で洞穴を覗き込み

「かなり高密度の結界で覆われてますね。外からの進入は恐らくないと思いますが、隠れ場所にするにも些か危険です。早く調べて氷室神社に向かいましょう」

こんな山の中に神域があるなんて想像もしないわよね。悪霊などの気配もないと言うので武器も手にせず洞窟の中に足を踏み入れる  
「……がけ崩れって感じじゃないな」

「そうね。なんと言うか意図的に崩されたって感じよね」

洞穴の中の祠はあちこち岩が崩れている。だけど、これだけ岩が崩れていてもこの祠が崩れる気配が無いのは、何らかの手段でこの場所が守られていると見て間違いないだろう。そんな事を考えていると大きなくしゃみが響く

「うー、すんません。なんかここ寒くないですか？」

横島君が鼻を擦りながら頭を下げる。確かに山の中と言っても、この中には結構寒いわね……

【神通力だけでなく、地下の水脈に繋がっているな】

「うーん、そう聞くと意図的にこの洞窟は作られているようですね」

心眼の霊視を聞いて小竜姫様がそう補足する。自然でも霊脈と水脈がつながる事は十分にあるが、この頑丈な洞窟を見る限りでは意図的に作られている。この先に何が待っているのか……進んでみるしかないわね。薄暗い洞窟を進むと、途中で祠が崩れ、更に奥が見える。やっぱりこの洞窟は作られた感じね……この奥にこの洞窟を作った何者かは何かを隠している……鬼が出るか、蛇が出るか警戒しながら奥に進んだ私達が目の当たりにしたのは、想像にもしない物だった

「お……キヌ……ちゃん？え？え？なんで、なんで……なんでこんな所におキヌちゃんの死体があるんだ!？」

巨大な氷の結晶の中で眠ったように死んでいる巫女服のおキヌちゃんの姿に動揺した横島君の声が、洞窟の中に響き渡った……

く小竜姫視点く

横島さんが半分パニックになっているので、蛍さんとシズクさんに様子を見てあげてくださいと言って、私が氷の中で眠るおキヌさんの遺体を調べることにした

(……肉体の欠損は無し……、それに状態も非常に良い)

とても300年前の遺体とは思えない、雪山の低い気温に加え、霊脈に繋がっているとは言えこれだけの状態の良さは自然な状況ではありえない

「……判りました。おキヌさんは死んでなかったんですね」

おキヌさんは幽霊にしては温厚で、そして悪霊にも、地縛霊にもなる気配が無い理由もこれを見て納得した

「死んでないって、小竜姫様。おキヌちゃんは確かに幽霊で」

横島さんは理解していない様子ですが、美神さん達は私が言おうとしていた事を理解したようだ

「仮死状態……つまり生霊って事ね？」

「ええ。しかも澄んだ水脈と霊脈を繋げることで、おキヌさんの邪気を常に祓い続けているようです」

おキヌさんの霊力に邪気が混じれば、それはこの澄んだ水脈が浄化し、そして霊脈の霊力を供給する。

「……つまりこの洞窟を作ったのはただの霊能者ではないと言うことか」

「これだけ計算してるんだもんね。並みの霊能者じゃないわね」

東京から姿を消したおキヌさんと、山の中に保存されているおキヌさんの遺体……そしてこの大地震。その全ては間違いなく繋がっている

「えっと、待ってください。俺馬鹿だから理解できないんですけど

「……おキヌちゃんはどうなっているんですか？」

馬鹿だから判らないと横島さんは言いますが、これは余りに専門的過ぎる。それに、憶測も混じってくるので理解出来ないのは仕方ない「つまり簡単に言うと、300年前に何かがあって、おキヌちゃんを生贄にしたんじゃないやなくて、おキヌちゃんって言う巫女さんを霊力のコントロールに使って、霊脈の霊力を使って何かをしたのよ」

その何かは判りませんが、恐らく霊脈を使って何かを封じたと考えるのが妥当ですね。そして……恐らくは生き返れるようにしているはず……ただ確信も無いので、その事は口にしない

「……とりあえず、1度氷室神社に向かいましょう。全ては其処にあるはず」

「ですね。氷室神社は元々氷の霊能に特化した家系ですから、詳しく聞いて見ましょう」

名は体を表すと言うことですね。本当はもう少し調べておきたいところですが、これだけ緻密な計算をされた結界の中を下手に触るのは危険だ。それこそ、おキヌさんの保存されている遺体にも悪影響を与えかねない。美神さん達を促して結界の外へ足を向ける

「琉璃さんとシズクさんでお願いします」

「はい、大丈夫です」

「……任せておけ」

この場所に誰も侵入できないように神代家の結界と、シズクさんの氷でこの場所を封鎖する。それが終わり次第、すぐに氷室神社に向かうことにしましょう

「おキヌちゃんが死んでないってもしかして、しめ鯖バーガーみたいな感じなんですか？」

しめ鯖バーガー!?触れてはいけない話題だとは思いますが、何を考えたらしめ鯖をパンに挟もうとしたのか……製作者さんが何を考えていたのか聞きたい所ですが……恐らくは仮死状態にして幽体離脱するって言う料理なのだと思う

「判らないけど、そこらへんも氷室神社で調べてみないと判らないわね」

「でも死んでないなら生き返れるんじゃない？」

横島さんは生き返れると言う言葉を聞きたいと言うのは判っている。だけど、確証も無いのに横島さんに期待を抱かせる訳にも行かず、かと言って答えないわけにも行かず、どうすればいいのか悩んだ瞬間

「受けよ！我が乾坤一擲の一撃をオオオオツ!!!」

「みぎやあー！ー！ー！ー！」

やけに渋い男の声とチビの怒りに満ちた鳴き声が聞え、ただ事ではないと思いい祠の外に走った私達が見たのは想像だにしない光景だった

「ぬおおおおおー！ー！ー！ー！」

「みううううー！ー！ー！ー！」

ハムスターサイズの全身鎧を纏い、そのサイズからは信じられない両刃剣を手にした妖精剣士と木の枝に電気を走らせたチビが鏑迫り合いをしている光景で、木々がなぎ倒され、風が嵐の様に荒れ狂っている。巻き上げられた木の葉が顔に当たり正気に戻ったが、それでも目の前の光景は理解を超えていた。

「二二大変なことになってる!?」

一体何があったのか、くえすさんとかが何故この争いを止めていないのか、そんな疑問が脳裏に浮かんでは消えるを繰り返して、止めに入らないと思った時には第三者の乱入が起きていた。

「やめんかあー！このばかもんがあー！ー！ー！ー！」

木の枝から飛び降りてきた新しい妖精が鎧の妖精の背後から飛び蹴りを叩き込み、この戦いは終わった。祠の奥に結界を張り直して良かったと思いつつながら私達は慌てて縄梯子を降りるのだった……

〜横島視点〜

洞穴の奥におキヌちゃんの水漬けの遺体を見て、混乱していた俺だが……正直更なる混乱でおキヌちゃんには悪いが、一瞬おキヌちゃんのことを忘れていた

「む？おお、横島ではないか。チビがいるからどうしたものかと思っ



だが、お主もいたか」

ナナシが鎧の妖精の頭をぶん殴りながら声を掛けてくる。そのフレンドリーな感じに驚きながらも、舞ちゃんの妖精だから氷室神社の近くにいるのは当たり前かと納得する

「あいたた、酷い目に合いましたわ」

「ユミルうー、行き成り暴れるのは止めて欲しいだ」

どうもユミルと呼ばれた鎧の妖精の不意打ちで神宮寺さんと早苗ちゃんが吹き飛ばされてしまったようだ。慌てて茂みから顔を出した2人に手を貸す

「ユミル、この戯けが！」

「む、魔力を感じたので危険と判断しただけだ。決して俺は間抜けではない！」

ナナシとユミルと言う妖精の喧嘩を聞きながら、神宮寺さんが不意打ちとは言え吹き飛ばされたことに内心驚いていた

「油断してたの？」

「いえ、十分警戒してましたわ。でもあのユミルと言う妖精……軽く見積もってもA級。チビと同じく、規格外の妖精ですわね」

チビと同じくらいと言われても俺にはあんまりピンと来ないんだよなあ、俺からするとどこまで言っても可愛いとしか思えないし

「みむう♪」

「ぶぎゅー」

「フーブノブ」

いまま折れた木の枝を手にしてふんすつと胸を張ってる姿は勇ましいというよりも可愛いとしか思えないし

「ナナシ、そのユミルって言うのは舞ちゃんの新しい妖精なのかしら？」

「うむ、つい先日舞の護衛となったユミルだ。不意打ちしたのは申し訳ないが、こちらにも都合がある。許してくれ」

都合……か、やっぱり緋立病院で現れたと言う昆虫のような異形が原因だろうか？思い当たる節は俺にはそれしかない

「……あの化け物昆虫か？」

「まあ、サイズのには十分警戒するわよね。気配を感じ取って攻撃したんじゃない？」

「……私の気配はそんなに攻撃的ではありませんわよ？」

仕方ないと言う感じに持って行こうとする美神さんに神宮寺さんが眉を顰めて反論する。少し不機嫌そうだけど、やっぱり妖精に遅れを取ったって言うのは魔法使いとしてのプライドが許さないのかな？

「はい、横島」

「ありがとう、蛍」

うりぼーのリュック型のケージを受け取り、うりぼー達をその中にいれようとした時。ナナシの口から信じられない言葉が飛び出した。「レブナントを名乗る仮面の女がこの周辺に出没していてな。氷室神社は結界で護られているからいいが、それに任せきりも不安だ。こうしてワシとユミルでパトロールをしていたのだ」

レブナントって事はレイがこの森の中にいる。一気に俺達の中の警戒度が跳ね上がった、こうなるとノツブちゃんと牛若丸を偵察に出したのが失敗に思えてくる、早く呼び戻す必要がある。そう思い眼魂を取り出そうとすると美神さんが険しい顔で俺を見る

「横島君！2人を呼び戻して！」

「判つてます」

Gジャンの内ポケットから眼魂を取り出して、握り締めて霊力を込める。これで俺が呼んでいると2人にも判るはず

「色々話を聞きたいけど、まず氷室神社に行きたいんだけど良いかしら？」

「うむ、そのほうが良かろう。舞も神社にいる、この場所で話をするよりもその方が安全だ」

異形の昆虫だけが敵だと思っていたのだが、まさかのレブナントもこの場所にいる。いままでは普通の森に見えていたのに、一気にこの場所が不吉な場所に思えてくる

「私が前衛、シズクさんを後衛にして、タマモさん達と合流、その後すぐに氷室神社でいいですね？」

視界が悪い森の中で圧倒的なまでの強さを持つレブナントと戦うのは余りに危険すぎる。それは全員がわかっているから、小竜姫様の指示に誰も反論せず、全員で周囲を警戒しながら来た道を引き返していく

「えーっと、そのれぶなんとなつていうのはそんなにあぶないだか？」  
「うむ、ワシとユミルで不意打ちで撤退させることが出来たが、真つ向から戦うには戦力が足りぬ。急いで戻ろう、この道は結界で守られているが、それでも不安だ」

ナナシは喋りながらも周囲を警戒しながら前に進み、ユミルは油断無く巨大な大剣を構えている。早苗ちゃん顔が青ざめるが、本当にいまこの森の中は危険なのだ。うりぼーとチビをキャリーの中に入れ、背中に背負いなおす。チビノブはキャリーの上に座らせ、頭の上にしがみつかせる。全員で周囲を警戒するが、少しでも目は多い方がいい。チビノブにも上空をしつかり監視してもらおう

「心眼、周囲の警戒よろしくな」

【判っている。だが急げ、妙な感じだ】

その妙な感じが何かと心眼は告げなかったが、多分俺を含めて全員がそれが何かを理解している。どこから俺達を見つめている視線、まるで底なし沼に足を踏み入れたかのような重圧……レブナント、いや、レイはもうこの近くにいますのだと……

レポート28 切り開け、己の未来 その3へ続く

## その3

レポート28 切り開け、己の未来 その3

〜美神視点〜

氷室神社までの道はナナシとユミルの2人の妖精が先頭を進んで引き受けてくれた。レブナントと交戦し、それを退けたと言う妖精は正直認めたくは無いが、私よりも強いかもしれない

【横島、何かあったのかの?】

【問題ですか?】

木の枝の上から飛び降りてきた牛若丸と茂みを掻き分けて出てきたノツブ。レブナントと遭遇して無くて本当に良かったと思う

「物凄いトラブル。レブナントがいるらしい」

横島君の言葉に2人の眉が吊上がる、東京での戦いで役に立たず殆ど一撃で倒された事を思い出したのだろう

【……こりや少しばかりマジで行くかの】

【次は負けません】

2人の雰囲気は鋭く、そして重い物に変わる。こういう姿を見ると本当に英霊だと実感する

「うりぼーが迎えに着たけど、どうかしたの?」

「つとと、もう少しゆっくりで良いでござる」

「「ぶぎゆう?」」

増えて大きくなつたうりぼーにタマモとシロを迎えに行つて貰つたのだが、正直2人もレブナントに遭遇していなくて良かったと心から思う

「話した後、氷室神社についてから説明するわ」

私の険しい顔にただ事ではないと判断したのか、それ以上話を聞かずうりぼーの上から降りるシロとタマモ。うりぼーに乗って移動は考えたんだけど、この人数では流石にうりぼーにかかる負担が大きすぎる

「……この道を覆つてる神通力が弱くなって来ている」

「山全体に薄く広く延ばし始めているようですね。急ぎましょう」

シズクと小竜姫様の言葉に頷き、早足で山道を進む。不幸中の幸いは山道ではあるが、それでも御神体へ向かう道と言う事である程度整備されていることであろう

「神宮寺さん、どうかしましたか？どこか痛めているとか？」

「え、ああ、いえ、違いますわ。ただ気になることがあったんですわ」

少し遅れているくえすに気付いた横島君がくえすに尋ねるとくえすは気になることがあると言って、周囲を見回す

「どうかしたの？」

「……魔力の流れが妙なんですわ」

魔力の流れ？でもそういう流れがおかしいなら心眼が何かを言ってもおかしくないはず

「くえすの気のせいじゃない？」

「気のせいなら気のせいで良いんですわ、でも何か引つかかるんですわ」

蛍ちゃんの言葉に険しい顔のまま返事を返すくえす。心眼でも感じ取れないような極微弱な……

「もしかしてガープとかの魔力もあるとか？」

「……その可能性も十分ありますわね」

ビュレトの魔力をその身に宿すくえすは人間ではあるが、その存在のありようは魔族に近い。眷属同士の力の共鳴でその何かを感じ取っているのかもしれない

【調査が必要ならばワシとくえすが残るが？】

ノツブの言葉に少し考えているとくえすがその必要はありませんと口にする。

「留まるリスクの方が高いですわ、氷室神社から式神と使い魔を飛ばしましょう。横島と琉璃も手伝ってくればすぐに済みますわ」

妙な流れがあるとだけ覚えておけば良いと言うくえすに頷き、氷室神社への道を進んでいるとこんな山の中には不釣り合いな屋敷が姿を見せる

「随分と大きい屋敷ね、早苗ちゃん。ここらへんの地主も兼ねている

のかしら?」

「いやあ、わたしはあんまり詳しくねえんだが、なんでも300年前にあの祠と社を子々孫々で護ると言う条件でこの土地を与えられたんだ」

また300年前と言うキーワードが出てきたわね。この神社もおキヌちゃんと間違いなく関係があるはず……あの祠に御神体が祭つてあると聞けばそれはまず間違いないだろう。

「早苗…その方……いえ、神代さんまで……とりあえず、お上がりください」

社の掃除をしていた男性が驚いた様子で一瞬私達を見たが、私達の中に琉璃の姿を見つけるとその顔色を変えてどうぞと笑う。どうもある程度は日本に今何が起きているのかある程度は理解しているみたいね

「あれ? 蛍、美神さん。神社がここだけ無事ですよ?」

「ほんとね……よっぽど氷室神社の御神体は強力なのかもしれないわね」

まずは氷室神社にある昔の事件の記録、それを調べることが優先しましょうか……おキヌちゃんの事や、昔に何があったのか、それを知らないことには何も始まらないしね

く横島視点く

氷室神社は広いが、それでも全員が入ることが出来ず。知識的に一番劣る俺と興味があんまり無いと言うシロとタマモと一緒に俺は庭で待つことにした

「あ、舞ちゃん。元気?」

「うん、元気。横島君も元気そうだね」

縁側にちよこんと座っていた舞ちゃんを見つけ、手を振りながら縁側に向かう。ナナシとユミルも舞ちゃんの近くに座り、饅頭を抱え込むにして齧っている

「出てきていいぞー」

チビやうりぼー達をリュックやケージから出してやると庭の上で

遊び始める。背中に背負っていたチビノブも降ろしてやるとチビ達と一緒にはしやぎ始める

「……こんにちわ」

「こんにちわ」

「こんにちわでござるよー」

人見知りの激しい舞ちゃんはすすすすと離れながらシロとタマモに挨拶を返す。

「みみーむ?」

「む?それか?もてるなら持つてもいいぞ?」

縁側に立てかけてあったユミルの剣をチビが手に持ち、ぶんぶんと振り回す。かなり大きいのに見た目と反して随分と軽いようだ

「なあ、ユミルだっけ?あの剣の材料って何?」

チビに剣を作つてやる約束をしていたが、丁度良い材料がないのでチビを待たせていた。けどあの剣の材料を使えばいいチビの剣が出来そうだ

「あ、あれはシズがくれた奴だから、シズに聞いて見るよ」

ユミルではなく、舞ちゃんが返事を返す。シズ……ナナシとユミルをくれた神様だっけ……でももしかしてその神様ってガープに利用されて暴走しているんじゃないか……

【舞、呼んだかえ?】

「ぬおっ!」

突然聞えてきた声に振り返ると10歳くらいの少女が俺の隣にいて、思わず後ずさる。

「……あんななに?」

「人間ではないでござるな」

【うむ。その通りだ、ワシはシズ。名も無い神霊じゃ】

いや、いるじゃん……名も無い神霊がガープに操られているかもしれないって聞いていたけど、ここにいるし……もしかして別の神様が操られているのだろうか……

【神にしては力がないな、精神だけを切り離したのか?】

心眼がちよつと俺には理解出来ない難しい話をする。精神だけと

か俺には全然理解出来ない

「うむ、ガープとか言う金色のやからに力の大半を奪われてしもうた」  
「それ駄目な奴ツ!!」

やっぱりこの人が力を奪われた神様だった。思わず叫んでしまった俺はたふんと言うか絶対悪くない

「なに、そう気にするまでも無い。シズの力を奪って作られた怪物を倒して奪い返せばいい」

「簡単な話だ。ただ重機とか言うでかい車よりも2倍くらいでかいが」

「二それ全然簡単じゃないツ!!」

俺とタマモ達の悲鳴が重なった。気にするまでも無いとか、簡単な話とか言っているけど正直そんなレベルではない。本当に大変な事になってるっていうレベルだと思う

「じゃから、おキヌを呼び戻したのじゃ、彼女がおればこの地の霊脈を使う事が出来るからな」

さざりと告げられた言葉に一瞬何を言われたのか理解できなかった。舞ちゃんに大丈夫?と言われて我に帰る

「お、おキヌちゃんはここに居るのか!?どこに!近くに居るのか!」  
【落ち着け小僧】

ビシつとでこぴんされて思わず額を押さええて蹲る。姿は幼女だけど凄まじい力だった……

「元よりおキヌはこの地の神になるはずだったんじゃ、霊脈の力を引き出すにはこの地と一体化する必要があるが、そのまま消えることも無い。自然と出てくるのを待つんじやな」

「はい、シズ。お茶」

舞ちゃんがマイペースにお茶を差し出し、それを受け取り縁側に腰掛けるシズ。とりあえず、おキヌちゃんが無事でよかったと思うべきなのだろう

「横島君がユミルに上げた剣と同じ材料が欲しいって」

「む? そうなのか? うーむ……力を取り戻したら譲り渡そう。だから手伝ってくれるの?」



元よりそのつもりなので、それに関しては何の問題も無いけど……  
無いけど

「重機よりデカイってどんな化け物よ」

「ちなみに下半身はさそりで馬鹿でかい上半身がついてるな、霊力弾を撒き散らしてくる」

「後は腕を切り落としたが、殆ど一瞬で修復された。恐ろしいほどの再生能力持ちだ」

「死ぬでござるよ」

全くその通りである、どう考えても勝てる気がしない。氷室神社の方からも

「二「勝てるかあッ!!!」」

美神さん達の怒声が聞えてくるので同じ話を多分聞いているのだろう。このままでは日本が沈むが、それにしても敵が強大すぎるだろう。

「勝算が無い訳ではない、全てはおキヌ次第。今は座してその時が待つのを良からう」

「シズもナナシもユミルも考えてくれるから大丈夫だと思おう」

それに美神さん達も何かを考えてくれるだろうし……ここは待つしかないんだろうな、あんまり時間がないのは承知しているけど……俺は縁側に再び腰掛け庭を駆け回っているチビ達を見つめて精神の安定を図るのだった……

〈蛍視点〉

氷室神社の中にいた導服の幽霊……300年前に知性を無くして暴れていた中国から流れ着いた神霊をおキヌさんを使って封じたと言う幽霊に私を含め、全員の批難の視線が向けられる

「待て待て、落ち着いてくれ。私は確かにキヌを人身御供にした。それは認める、だが、反魂の法で蘇れる様に手筈は整えてある。祠を見ただろう?」

あの氷の中に眠るおキヌさんの遺体……確かに状態は良く、条件さえ揃えば反魂の法は不可能ではないでしょう

「ですが、神魔に処罰の対象となる可能性は考慮しているのですか？」  
【む、それはその……申し訳ないとしたか】

死者蘇生は神魔でも重罪になる、勘九郎さんの件は本当に本当の特例処置だ。仮に生き返ったとしても、おキヌさんのその後の人生の事を考えていない導服の幽霊。術者としては優秀でも完全に詰めが甘いですね

「小竜姫様。処罰の対象とかになるの？」

「……良いですよ。私の胸の内に留めておきます、横島さんに恨まれたくないですし」

神魔としては報告するべきだろうけど、小竜姫個人としては見逃します。多分百目を通じて監視している上層部もそれくらいの慈悲は持っていると思いますから

「……とりあえず。お前の話を聞く気は無い、私達に話を聞いて欲しかったらキヌを連れて来い。それからだ」

【……判りました。すまないが、後は頼む】

神主に頼んで姿を消す導師、言ったら悪いですが私達の中で導師の評価は地に落ちている。ここにいたら話がこじれるだけなので、今はいない方が良いと思う

【あんな良い娘を生贄にするとか正気じゃないの】

【全くですね。ああいう知識だけのが鬱陶しいんですよ】

【……頭でっかちの無能だな】

ボロボロに言われているが、正直その通りだと思う。神霊が暴れていると言うが実際は其処まで大きな被害ではなく、間伐や軽度の地震と噴火に留まっていた。しかもその地震と噴火でこの周辺の土地が整地されたとなるとそこまで悪い影響は出ていない、本当に日本に大きな被害が出ているとすれば間違いなく神魔が動いていた。つまり人間側の暴走に近い形になってしまったのだと私は考えている

「では改めまして、氷室神社の神主の氷室総一郎です」

正座したまま頭を下げる総一郎氏。霊力は……平均ほどですが、良く身体が鍛えられているのが良く判る。

「日本全体に地震が起きているのは判っていますよね」

「はい。その件に関しても導師様とナナシ、ユミルと、そして力を奪われてしまった神霊シズ様が動いています」

調査結果を送ろうとしたのですがと言う総一郎氏。だが地震の影響で東京までは情報が送る事が出来なかったのだろうか

「シズと言う神霊が暴走しているんじゃないですか？」

「シズ様は完全に己が暴走する前に精神と知識だけを切り離して、完全に神通力を失う前にガープに操られた肉体を封印しました。ですが……結界も破壊される寸前で、その影響で地震が日本全土に発生していると思われませう」

精神と知識だけを切り離す……神魔としても本当に最後の最後の手段だ。だが、それには莫大なリスクが伴う。この場にいる全員がそのリスクを一瞬で理解した。

「精神を切り離すとはまた厄介な事をしてくれましたね」

「……それしか手段が無かったのだろうか」

ガープの精神操作か、肉体操作、どちらにせよ、完全に操られる前にと行動したのだろう。ただ精神がないのでは、残された器は完全に暴走する。

「捌め手は使ってこないけど純粋な力の暴力で押し潰してくるわけね」

「結構厳しい戦いですね」

神通力やその神特有の特殊能力を失ってはいる物の知性を無くし暴れるというのは余りにも厄介な相手である。

「これは遠目ですが、暴走した肉体が戦闘特化で作り上げた肉体になります」

差し出された写真を見て、思わず気が遠くなった。人間よりも遙かに巨大な肉体、下半身は8本足の蜘蛛の様な姿だが、その前には巨大なハサミのような器官が見て取れる、上半身は鎧のような物で覆われているが筋骨隆々なのがぶれていても判る

「大きさ予想はどれくらいですか？」

「5〜8m級だと思います、この写真を収めた時はもつと小さかったようですが、今はもつと巨大化している可能性もあります」

巨人と戦う事になるわけですか……しかも地霊となると搦め手は無くても、霊脈から霊力を取り込んで回復する可能性は十分にありま  
すね

(応援要請が必要かもしれないですね)

ただ天界と魔界でも同時にアスモデウス陣営が行動を始めているので、応援を呼ぶのは難しいかもしれませんが……それでも駄目元で応援要請は出しておくべきだと思います

「応戦したナナシとユミルに寄れば、霊力弾を撒き散らすや、霊波砲を吐き出すなど知性はやはり低いようですが、ダメージを与えても即座に回復する能力と、異形の使い魔を召喚する能力を持つようです」

「……勝てるかあッ!!!」

思わずそう叫ぶ美神さん達。回復能力があつて、手下を作り上げる能力まで持つとなると少々……いや、些か厳しい相手だ。

「いえ、実は勝算が無いわけでは……」

勝算が無い訳ではない、そういうかけた瞬間。神社の中に警報が鳴り響いた

「馬鹿な！結界が崩されただど!?!」

その言葉を聞いて私達は弾かれたように部屋を飛び出す。恐れていた事になつてなければ良い……そう祈っていたのですが

「こんにちわ、横島忠夫。お元気そうですね」

「……レイちゃんか、それなりに元気だよ」

鯛焼きを片手に横島さんに声を掛けるレブナントの姿に私達の嫌な予感的中していた事を悟るのだった

～レイ視点～

氷室舞の誘拐、それを成し遂げる為に私は氷室神社に来た。だけど、横島達の姿もあり一瞬どうすればいいのか悩み、悩んだ結果

「……連れて来て」

自分で手を下す事をやめ、手に握っていたレブナント眼魂を懐に戻しながらそう指示を出す事にする。

「!!!」

連れて来た昆虫や、奇妙な人型を横島達に差し向けることにして、私は近くの石の上に腰掛け鯛焼きを齧る

「食べますか?」

美神達が戦いを始める中、私を警戒し目の前に来ていた横島に鯛焼きを差し出しながら食べますか?と尋ねる。

「い、いや、いらぬ。そ、それより何をしに来たんだ!」

横島が警戒しているが私は今戦う気も無い、ガープ様に出された命令をどれから果たせばいいのか判らない、だから私は何もしない。命令違反とかで文句を言われても困るから

「氷室舞をつれて来いって言われたけど、横島達と戦えって命令されてないから私は何もしないだけ」

命令違反は駄目だからと言うと横島はきよんとした顔になり、その身に纏っていた闘志は完全に霧散する。

「え?本当に戦わないの?」

「私は戦わない、でもあいつらは知らない」

結界は壊した。だけどそれだけ、氷室舞を連れ出そうにも氷室舞の前には横島がいる。そうなると横島と戦う事になる、それは命じられていないので戦う訳には行かない

「……それなりに強いけど頑張つて」

「……えつと、ありがとう?」

「どういたしました?」

互いに首を傾げながら会話を交わす、確かに戦闘は始まっているがそれでもこんな話をするくらい余裕はある。つまり、この段階で氷室舞を連れ出すという作戦は失敗していると同義なのだ

(でも観察はしておこう、今後の為に)

多分今回の氷室舞を連れ出すのは失敗すると思う、そんなに沢山手駒をつれて来たわけじゃないし……まさか横島達がいるなんて思っても見なかった。だからレブナント眼魂は持つてるけど、今私に戦うつもりは微塵もない。眼魂や籠手がだけどそれは問題じゃない、氷室舞を攫え、それだけしか命令されていない。戦えとも殺せとも、横島

を連れて来いとも言われていない。だから私は戦わない……だけど……私と戦うというのならば……

「！」

「下がれ、横島！」

私の殺気に気付いた横島の顔が青くなり、この場にいない誰かの声が響く。多分あのバンダナに浮かんだ眼の声なんだろうなあとぼんやりと思いつながら紙袋の中から新しい鯛焼きを取り出す……前に自分は戦えると言う事を証明する為に眼魂を取り出す

「戦うって言うなら……死ぬ覚悟をしてもらわないと私も困る」

レブナントだけではない、渡された複数の神霊眼魂を取り出し告げる。私は何をしたいのか、何をすればいいのかなんて判らない。でも排除されるのも、廃棄されるのも嫌だ

(……私は存在したい)

命令には答える、やるべきことがそれだから

命令しないことには何もしない、それはやらなくてもいいことだから

廃棄されたくない、それは私が消えてしまうから

それは駄目だ、それだけは何があっても嫌だ

廃棄するというのはなら私は抗う

だって私は消えたくないから……

「私は廃棄されない、他の私がいなくても、レイと言う私は私だけ。だから私を脅かすなら……死んで」

これは私が私に出した命令、これだけは何があっても護りぬく、抑揚の無い平坦な声のレイの声だが、その声には確かに強い感情が込められており、感情や自我のない筈のレイの眼に確かに宿る強い意志の光の現れであり、そしてレイが確かに生きていると言う証なのだった

……

リポート28 切り開け、己の未来 その4へ続く

## その4

レポート28 切り開け、己の未来 その4

〈小竜姫視点〉

レブナントに変身していると言うレイ……あれを間近で見た瞬間私ははつきりと理解した。アレは神魔の中でも最上位と言える存在が憑依しているとも言える……

(アルターエゴプロジェクト……)

複合神性持ちのホムンクルスを作ると言うガーブ達のプロジェクト……その完成形を目の前にしたことと背中冷たい汗が流れるのを感じた。あのクラスの力を持ったホムンクルスを量産出来ると言うのならば、それは人間界だけではない、天界や魔界でもそれは恐ろしいほどの脅威となるだろう。ただその言動を聞く限りでは、純粋な悪とは言い切れない。複数の神の神性を与えられた事で非常に不安定な性格をしていると思われる

「シッ!!」

飛び掛ってきた昆虫の胴を薙ぎ払い、返す刀で頭を叩き割る。強さは差ほどではないようですが……数が厄介ですね

(さて、どうしましょうか)

植物や昆虫が変態した魔物と言うのは総じて火に弱い。本来ならば、火を使えば一掃出来る。だが、炎を使えば森の中の神社である氷室神社に被害を与える可能性も高い、そのような状況で炎を使う事は出来ないのです、神刀の柄を強く握り締める

「シャアッ!!」

「ふっ!!」

力任せに振るわれた棍棒のような武器を後ろに飛んで躲すと同時に前に踏み込み、胴体から両断する。巨大化した団子虫のような昆虫、空を飛ぶ植物の葉の羽を持つトンボのような異形、そして今倒した人型だが、木と蔓で構成された1つ目の異形……一番数が多いのは

団子虫、次にトンボで一番数が少ないのは人型だ。だけど知性があるようには見えず、そして指揮官と言う様子でもない

(……数は3種類……と決めるのは危険ですね)

この場に来ていないだけで、上位種がいる可能性は極めて高い。それに動き出していない本体の事も気になる、まだ結界の中に封じられているのか、それとも威力偵察なのか

(いえ、そうではないですね)

氷室舞……琉璃さんの妹を攫いに来たと言っていた。つまりその命令をレイに出した時ガープはまだここに私達が居ると言うことは予想していなかったのではなからうか？もしくは私達が居る事を想定し、レイがどんな反応を示すのかそれを見定めようとしているのかもしれない

「鬱陶しいですねー」

足に絡みついてきた団子虫を蹴り飛ばし、腰に挿している2本目の神刀を抜き放つ。普段私が使う神刀では大きすぎ、そして取り回しが悪い。昆虫として考えれば十分に巨大だが、人や魔物として考えると小さい相手と戦うには大きな刃よりもこういう小回りの利く刃の方が使い勝手が良い

「……どうも、妙な流ですね」

指揮官はこの場にはいない、もしくはレイに指揮官としての権限が無いと私は予想していた。だけど、今は明らかに昆虫の動きが私を足止めするものになって来ている

(……判らない、それらしい反応はないのに)

魔力や神通力と言った力の流れも感じられない、しかし相手に知性があるようには到底見えない。本能的に私を狙って襲って来ているとしても、それでも説明がつかない

「「ギチギチギチ」」

牙と爪を鳴らす虫に小さく溜め息を吐く、確かに女としての生き方は半分捨てているような生活をしています。それは私だって自覚しています……虫に対する不快感はあるのだ。蹴り飛ばしても、切り裂いても飛び散る体液にも汚らわしいという嫌悪感さえある……だ



けどそれを表に見せることは決してない、それくらいの精神修養は積んでいる。冷静に戦況を見て、1つ気がかりな点があった

(……横島さんに反応を見せない)

最も横島さんが危ないと思っていたのに、横島さんへの反応が余りにも少ない。だがそれもブラフの可能性がある、この大規模攻撃の影でガープの手の者が奇襲の機会を狙っている可能性はゼロではない。シズクさんに目配せすると頷く、この中で一番手札が多いのはシズクさんだ。特に防御能力は秀でていると言えるだろう……これで横島さんへの護りは完璧とは言えないが、それでも十分と言える。罅割れた地面から這い出るようにして出てくる昆虫の群れを睨みつけながら、私は神刀の柄を強く握り締める

(氷室舞さん……もですか)

何故ガープが氷室舞さんを名指して攫えと命令したのか、それが気がかりだ。この場で一番危険とも言える、横島さんと舞さんからゆっくりだが着実に引き離されるのを感じながら、私を引き離そうとする異形との戦いに意識を向ける。向こうが私を引き離そうというのなら、それに乗ってやろう、だが相手の誘いに乗った上で私は相手の作戦を破ってみせる。そう心に決め、津波のように襲ってくる昆虫をにらみつけるのだった……

くタマモ視点く

金属質な音が響き、シロがバックステップで後ろに下がってくる。手にしている霊刀を見て溜め息を吐く

「やっぱり人間の作る刀は脆いでござるよ」

シロが人狼の里から持ってきた霊刀は強すぎると言う事で、GS協会が紹介した鍛冶師が作った霊刀を装備していたのだが、団子虫の甲殻に当たり砕けたのを見てシロが使えないといって刃に膝蹴りを叩き込みへし折る

「大丈夫なの？」

「鈍らなど必要ないでござるよ」

柄の先から霊波刀が飛び出し、再び飛び掛ってきた団子虫を頭から

両断する。霊波刀は人狼の十八番だが、消費する霊力は決して少なく無い訳ではない

(……このままじゃ駄目ね)

狐火を使えば楽だけど、森の中で神社も近いということでも狐火を使う事は出来ず、指鉄砲の形を作り空を飛び交うトンボを下から打ち抜く、敵はさほど強いわけではない。だけど数が多すぎる

「シロ、横島と合流するわよ」

「……了解でござる」

シロはやや不服そうだけど、ここは仕方ないと思ってもらおうしかない。氷室神社は安全地帯だが、逆を言えば敵に囲まれている状況だ。しかも昆虫の癖に頭が良い、完全に私達を分断するように立ち回っている

(どこかに指揮官がいる……って訳じゃなさそうね)

最初は勢いに任せて攻撃してきたただだが、途中から確実に動きが良くなっている。学習しているのか、それともどこかで隠れて指揮を取っている上位種がいるのかは判らないが状況は少しずつ少しずつだが確実に悪い物となっている。

(美神と蛭、それとくえすと琉璃は結界の外に近いわね)

派手に立ち回り、自分達に注意を寄せようとしている。言うまでも無く、自分達が作り出した隙を利用して横島と合流しろと言っているのは明らか……だけど問題は私とシロでは突破力が足りないと言う事だ。狐火が使えれば、良いのだが植物が混じっているので下手に炎で攻撃して炎がその場に残ることは避けたい……シズクは横島についているし、ノツブは屋根の上に陣取って火縄銃でトンボを撃ち落してくれている

「……食べる?」

「いや、いらないけど、どうしてこんな事をするの?」

「命令されたから?」

横島はレイと名乗った女の説得?いや、レイと言う女が何を考えているのか。それを聞き出そうとしている、敵に何をしているんだと怒鳴りたくなるが、レイは横島には好意的だ。また魅了したとか、そう

いうものじゃなくて……そうただ単に横島との相性がいいのだろう  
(何か情報を引き出してくれるといいけどッ！)

人型の異形に霊波弾を撃ち込むが効果が薄い、霊波刀で無ければ有効打撃が入らないのだろう。

(不味いわね……)

「くっ!!ぬぬうっ!!」

「!!」

シロは私よりも幼い姿だ、10歳前後のまだ幼い自分の姿だ。筋力や敏速力、それに霊力のキャパが圧倒的に少ない。それに自分の感覚よりも小さい身体に思うように動いていないのは明らかだ……このままではシロが危ないと判断して本来は使うべきではないと判っているが狐火を使う事を決意した

「狐火ッ!!」

威力を絞り込んで、相手の顔面に炸裂するように放つ。敵を倒すほどの火力も無く、しかし相手を怯ませるには十分すぎる狐火に相手が動揺している隙にシロが相手の胴体を蹴りつけて距離を取る

「タマモ、余計にピンチになったでござる」

「うるさいわね、あのまま押し潰されたかったの!」

あの異形の人型からは離れることは出来たが、その代わりに団子虫に囲まれて完全に孤立してしまった。この状況をどうするか、必死に考えていると、私達の目の前に人影が舞い降りる

【せいっ!!】

神社の屋根から飛び降りてきた牛若丸が着地と同時に、刀を振り回し団子虫を巻き込んで纏めて吹き飛ばす

「助けに来てくれたでござるか!」

【はい、主殿の命令です】

横島の指示で助けに来たと言う牛若丸の言葉に安堵する。正直、あのままでは囲まれたままになっていただろうから……でも

「また囲まれてるじゃないどうするの?」

【強行突破】

「強行突破でござるな」

大体判つてた脳味噌が2人になった段階で嫌な予感はあるが、その通りになったと溜め息を吐く。ただ不幸中の幸いは氷室神社の敷地が広い事にあるだろう、ま、大暴れをしても神社が壊れない事だけは感謝して欲しいと思いつつ倒した傍から湧き出てくる昆虫の群れに向かって走り出す牛若丸とシロの後を追って走り出すのだった……

く 琉璃視点く

くえすから借りている洗礼弾を放つエアガンを2つ構えながら、状況を分析する。敵の数はさほど多いわけではないのだが、一定以下になると倒した数がびったり補充される。こちらの体力を削り取る目的か……それともこの場に足止めすることが目的なのか……

「ぬうんツ!!」

「斬艦刀!一刀両断ツ!!」

舞ちゃんを守ってくれているのは本当にありがたい。だけど、ユミルってあれは正直どうかと思うハムスターサイズで4m近い刀を振り回すとかどんな怪力をしているのかと言いたくなる

「でやあツ!!」

「?!?!」

ナナシの飛び蹴りで人型が4体ほど纏めて胴体を貫かれて消滅する。ナナシの強さは知っていたからいいけど……いや、良くないけどナナシとユミルは妖精にカテゴライズするには些か問題があるような気がしてならない

「くえす、もう少し纏めて何とかならない?」

「出来るならしてますわよ、鬱陶しい」

あ、これ目がマジだから本当に切れる一歩手前だ。ただ、切れてないのはこの状況でプツンして周りへの被害を与えないように我慢しているだけだ。

「ちっ、あのユミルの不意打ちさえなければ」

違った、ユミルの不意打ちで負傷していて思えないように動けないからやや大人しいだけのようだ。それが無ければとつくの昔に炎を

持ち出して暴れていたかもしれない、そう思うとユミルが不意打ちでくえすを弱体化させたのは決して間違いではないように思えてきた

「……凍れ」

シズクが地面に手を当てると氷柱が走り、昆虫を貫きそのまま氷の中に閉じ込める。倒すまでには至っていないようだが、強靱な生命力を持つなら無理に倒すのではなく、行動不能に追い込む事が正解のように入る

「くえすも出来るでしょ、あれやってよ」

「シズクの真似と言うのが不快ですわ」

やめてくれないかな本当に、なんでこんな状況なのにプライドを優先するのか……正直横島君がレイと対峙してなければ絶対横島君とくえすを組ませるべきだったと思っっている。横島君に良い所を見せたいから、冷静に行動してくれるんだけど……基本的にくえすって好戦的だから今みたいにイライラしていると何をしでかすのか判らなくて正直怖い

「ですから、私はこうします」

「!?!」

くえすが指を鳴らすと岩が盛り上がり、昆虫を挟んで押し潰す。体液とかめつちやくちや飛び散っているけど、動きを封じるのではなく一撃で倒せるのならばそれに関しては文句は無い

「このまま美神さん達と合流しましょうか」

「……あまり乗り気ではないですけどね」

横島君を見ていて、そつちに行きたいのは重々承知だけど、今はそれを認める訳にはいかない。レイが座っている場所を基点にして境界が開き、そこから昆虫軍団が雪崩れ込んで来ている。あれを止めないと、もつと上位種が侵入してくる可能性がある。それだけはなんとしても防がなければならぬ

「これって狙うのコツがある?」

「空を飛んでる相手に正確に下から当てれるなんて思わないことですわ」

空中から急降下して奇襲してくるトンボを何とかして、迎撃したい

と思ったんだけど命中しなくてくえすに当てるコツがある？と尋ねると無理して当てれる相手ではないと言う返事が返って来る

(ちよつと不味いわね)

私の基本的な武器は霊刀と符術になるが、殆ど奇襲に近かったので装備が足りない。それは美神さんも同じだが、太腿のバンドに神通棍を携帯していたらしく、それで応戦している。これに関しては私の注意力不足と言える、現場を離れすぎていて武器を装備する事を忘れていた。

「もう少し錆び落としをしておく事を薦めますわ」

「……返す言葉も無いわ」

元々戦闘が得意な訳ではない、あくまで私は神降ろしを行う巫女であり直接的な戦闘が得意ではないのは当然だ。だがそれを言い訳にして、足手纏いになって皆に迷惑を掛けるのは本位ではない。私も時間が許すのならば、訓練や特訓をして本格的に錆び落としをしておく必要がある

「だーっ！倒しても倒しても数が減らないとか止めて欲しいんじやけど！」

神社の上で狙撃してくれていたノツブが怒鳴る声が聞える。かなりの数が撃破……撃破？おかしいわね。倒した瞬間は敵の死体は残っているけど……今はそれらしい姿は氷室神社の中のどこにも確認できない

「くえす、トンボの死体ってどうなってるの？」

「……なるほど、相手が賢くなってる理由が判りましたわ」

今日の前で倒した相手が地面に溶ける様に消えていった、恐らく地面の中で霊力を吸収して体を再構築して復活している。だからこれだけの数を倒しているのに足場が埋め尽くされることが無く、そして敵の数にも変化が無い。これだけ倒しているのにそれはありえない話だ……だが敵が地面の中に取り込まれ、再び身体を再構築して出現していると考えれば足場が埋め尽くされない理由も敵の数が張らない理由もある程度は説明がつく

「くえす、悪いけど倒すんじやなくて封印する方向でお願い」

私の言葉に判ってますわと返事を返すくえす……突発戦闘で相手の事を理解していなかっただけど、これは予想以上に厄介な相手かもしれない……再び地面の中に消えていく虫の残骸を見て私は自分達が劣勢に追い込まれている事を理解するのだった……

く美神視点く

地面から浮き出るように現れる昆虫を見て舌打ちしながら、結界札を投げ付け昆虫を結界の中に閉じ込める。倒しても倒しても敵の数が減らない、一番前線に出ていた私はその理由を敵が無限に出現していると最初は考えていた。だけど地面から湧き出るように姿を見せた事と敵の死体がいつのまにか消えている点から倒しても地面を基点にして回収され、何らかの方法で回復し再び出現しているのではと予測した

「美神さん、まだ結界札残ってますか？」

蛍ちゃんが結界札が残っているのかと尋ねてくるので、最後の1セットを蛍ちゃんに投げ渡す。私と蛍ちゃんの手持ちは20枚……20体は動きを封じれる経験になるが、正直そんなの焼け石に水に過ぎない

「使うのは人型に絞り込んで、昆虫はしようがないわ。倒していきましよう」

団子虫とトンボは正直其処まで脅威ではない、確かに組み付かれれば危険度は跳ね上がる。だけど、その甲殻もさほど硬いわけではなく、霊力を通して殴れば十分にダメージは通る。だけど人型は駄目だ……最初は棍棒を所持していたが、今は剣や槍を持っている個体までいる

「こっちの攻撃パターンを学習しているんでしょうか？」

「その可能性は高いわね」

最初は棍棒、次は槍、そしてその次は剣……明らかに神通棍に適応した装備を持ち始めている。敵の強さは正直Bクラス程度の弱い魔物と同格か、それよりも少し強い程度だ。だけど、装備も体力も万全ではない今決して強くない相手だとしても、決して油断できる相手で

はなくなっている

「……私は私、誰でもない私なの」

「君は君じゃないのか？」

「私じゃない私もいる、私は沢山いる。だけど、私は私一人だけいれば良い」

風に乗って横島君とレイの話が聞えてくる。何を言っているのか理解出来ないが、横島君が前に来た複合神性内蔵型ホムンクルス……「アルターエゴ」ガープ達の主戦力となるであろうホムンクルス部隊。それが大きく関係していると言う予想はつく、自分と同じ顔を持つほかの個体を見て、自分と言う存在に強く執着をし始めたのかもしれない

【不味い、霊力の流れが変わってきたぞ！】

少女……いや、違うわね。弱いが神通力を持っている……ガープに力を奪われた神霊、それが彼女なのかもしれない

「ちよっ!?じよ、冗談きついわよ!？」

大きな地響きが響き、山の奥から何かの唸り声が響いてくる

「美神さん!下がって!下がってください!」

「やばいのがこっちに向かってきてますわ!」

琉璃とくえすの声を聞いて、慌てて氷室神社に引き返す。森を抜け、氷室神社に続く石段に辿り着いた時。私達もそれを見た

「……嘘でしょ」

「これは少し不味い所じゃないわね」

5 m近い巨体の異形が遠くから地響きを立てて、真っ直ぐに氷室神社に向かってきている。赤い単眼と鋭い牙を剥き出しにしている口元からは涎が流れ続け、紫色の舌が宙を漂っているのが見える……その巨体さ、そしてその身体から放たれている圧倒的なまでの神通力と負の霊力……あれがああ少女が奪われた神性の結晶であり、そしてその肉体と神通力を持って作られた戦闘用の肉体なのだろう

「!!ギギイッ!!」

「!!シャーシャーッ!!」

「!!ッ!!」

!!



そしてあの異形が姿を見せてから明らかに敵の動きが活性化して来ている、氷室神社の結界の所まで戻るのも難しいかもしれない

「シズクさん、消火をお願いします!」

「後で私のせいとか言わないでよッ!」

「早く、早くはなれるでござるーッ!危ないでござるよーッ!」

シロの声がして、殆ど反射的に石段から茂みの中に飛び込む。その直後に炎が神社から放たれ、私達を追いかけていた昆虫を纏めて焼き払い、その直後に冷たい雨が降る。正直なんて事と思うが、そうでもしなければあの追撃を振り切ることは出来なかったと思うと、小竜姫様達のとった行動は決して間違いではないと思う……間違いではないと思うんだけど……

「殺す気かッ!!」

直撃していたら私達も火達磨になっていたので、4人で声を揃えて殺す気かと叫べ。せめてもう少し安全を確認してから攻撃してくれても良かったと思う

「早く!時間がないんです!」

「怒鳴ってる暇があったら後ろ見なさい!」

後ろ?今炎が通過して……振り返った瞬間。私達は文句も言わず、石段を全力で登り始めた。何故ならば炎を突っ切って人型が物凄い勢いで登ってくる。下半身が燃え様が、腕が無かろうがそんなの構いなしで登ってくるその姿には恐ろしさもなく、必死で階段を登っていると階段に黒い影が落ちる、一瞬雨かと思ったがそうではなかった

「みむう!」

「ぶぎぎぎーッ!!」

「ッバアアッ!!」

「うりぼーが飛んでるッ!?」

横島君が大事に大事に育てているうりぼーが分身し、チビをその背中に乗せて飛んでいる。しかもチビノブまでもUFOみたいな上に乗って爆発する茶釜を投げ続けている。何がどうしてこうなったのかは判らないが、今が氷室神社に撤退するチャンスだと思い。死に物

狂いで石段を駆け上るのだった……

く横島視点く

美神さん達が危ないと言うことは俺も理解していた、だけど俺はジツと俺を見つめるレイから目を逸らすことが出来なかった。紅くきれいな目である筈なのに、何の感情も感じ取れないその目を見て俺はレイから背を向けるのは良くないと思ったのだ

「私は私、だけど私じゃない私もいる、ねえ、私は本当に私だと思おう?」  
「……俺は君しか知らないから、君がレイなんだろ?」

俺の返事にレイはそういう解釈もあるんだと呟いて、鯛焼きの入っていた紙袋を丸めて握り締める。するとその紙袋は一瞬で燃え尽き、風に乗って消えていく

「横島は横島でしょう?別の横島はいるの?」

「い、いや、俺は俺1人だけど」

「人間は1人なの?」

「普通は1人だと思う」

話しているうちにどんどん饒舌になり、何かを考え込む素振りまで見せるレイ。その姿は外見とは異なり、本当に幼い少女にしか見えなかった。

「私が私になるにはどうすればいいと思う?」

問いかけられた言葉に俺が返事を返すことが出来ないでいると、レイは小さく、本当に小さく溜め息を吐いて

「難しい事なんだね」

「ああ、それは凄く難しいことだと思う」

敵同士と言うには何とも言えない微妙な距離感。手を伸ばせば届きそうだけど、手を伸ばしたらレイが居なくなってしまう様な気がする

「……たぶん今度は戦う事になると思うけど、横島にはあんまり痛くないから」

「他の皆は?」

俺にはあんまり痛くないと言って笑うレイに他の皆は?と尋ね

る。レイは首を傾げて

「横島と氷室舞は殺すなって言われてるから、殺さないだけだよ？だから他のは殺すか、壊す」

今までの幼い風貌と変わり、急に冷酷な殺人者のような気配を纏うレイ。その凄まじいまでの気配の変化に思わず息を呑んだ

「じゃあね、また会いに来るよ」

そう笑って影の中に溶ける様に消えていくレイ。その姿が完全に見えなくなると同時に、俺は蹲り必死に荒い呼吸を整える

【大丈夫か？意識ははつきりしているか？】

「……だ、大丈夫だと思う」

今まで俺に何の声も掛けなかった心眼。だけどそれには理由がある、レイの言葉には言霊が宿っており、下手をすれば俺が操られかねないと言う事で心眼が俺の精神を護っていてくれたのだ、レイが消えた事で声を掛けてきてくれた。それでやっと終わったと一息付く事が出来た

「……無理はするな、1度神社に戻れ」

そうすることが正解と言うことは俺だつて判っている。ただ話をしていただけなのに、凄まじい疲労感。目を閉じてしまえばそのまま寝入ってしまったいようなほどに疲れ果てている……シズクの言う通りにするべきかと悩んでいると凄まじい雄叫びと地響きが響き始める

「……シズク、俺は大丈夫だから美神さん達のほうに回ってくれ」

あの巨体を相手にするには美神さん達だけは無理だ。だがかと言つて俺も戦えない、それならばシズクが美神さん達のフォローにはいるのが一番正しい選択の筈だ

「……だがお前をこの場に残すことの方が心配だ」

先ほどよりは敵の勢いは弱くなっている、だがそれでもまだ俺の近くにも、舞ちゃんの近くにも昆虫とトンボの姿はある

「ナナシ、横島君を連れてきて！」

「い、いや！それは無理じゃ」

「任せておけいッ!!」

出来るの!?!と言う早苗ちゃんの突込みが遠くに聞える。俺も正直

ナナシで大丈夫と言う不安はある、だけど今は俺よりも美神さん達の方が危ない

「みむう！」

「ぷーぎゆうー！」

「ノブノブー！」

チビ達がやけに気合満点と言う感じで鳴く、チビはうりぼーの上に跨り。うりぼーは俺の鞆から陰陽札を取り出して引きずってくる

「ノーツ!!」

そしてチビノブが腕を掲げると、空中に「N」の文字が浮かび、其処から丸っこいUFO見たいのが降りてきた

「……………」

「のーツ!!」

勇ましく叫んでUFOに飛び移るチビノブ、茶釜を取り出して団子虫に投げ付ける。茶釜が爆発し、あちこちで火柱が上がっている。

「ちよつと消火してきてくれるかな？」

「……………そうだな。その方が良いな」

このままだと山火事になるのでシズクに消火作業を頼み、俺は陰陽札に文字を刻みうりぼーに貼り付ける

「風精招来」

うりぼーの周りに風が逆巻き、チビの号令で勇ましく鳴いて走り出すうりぼーの姿がぶれ増える……………のだが、増えたうりぼーまでもが風を纏って空を飛ぶ姿には思わず絶句した。

「動くなよ、落とすからな」

「……………よろしくお願ひします」

【ナナシ、お前本当に妖精か?】

俺を頭の上で持ち上げて、軽々と俺を運ぶナナシにも絶句したが、今はそれ所ではない。地響きを立てて近づいてくる巨人に思わず視線を向けると、いつの間にか俺の隣にいたシズが心配ないと呟いた

【おキヌが来た。これでとりあえずは何とかなる】

シズの視線の先をつられてみると、いつもの紅白の巫女装束ではない。どこか神々しさを感ずる装束を身に纏ったおキヌちゃんの姿に

思わず視線を奪われる

【去りなさいッ！ここは貴方の来る所じゃありませんッ!!】

山全体に響くようなおキヌちゃんの一喝、思わず耳を塞いでしまうような凄まじい一喝だった。

「嘘だろ」

【嘘ではない、当然だ。おキヌはこの山自身とも言える、仮初の山の主ではおキヌに勝つ事などできぬ】

シズの言っている事も、目の前で起きたことも正直信じられない、だがおキヌちゃんのその一喝で信じられない事に巨人の姿は土くれとなり、消え去った

「倒した？」

【いや、違う。神通力と霊脈の流れを断ち切っただけだ、まだあいつは生きておる。あやつを倒すには……】

一時的に相手を無力化しただけであり、倒すにはどうすればいいのか？と話をしてくれるシズには悪いと思ったのだが、俺は霊力の粒子を撒き散らしながら降りてくるおキヌちゃんの神々しい姿に完全に見惚れていて……シズが話している内容は何1つ俺の頭の中には入ってこないのだった……

リポート28 切り開け、己の未来 その5へ続く

## その5

レポート28 切り開け、己の未来 その5

〜美神視点〜

レイと昆虫軍団の強襲を切り抜けた後、私達は氷室神社の大広間を借りて今回襲撃してきた敵の分析、そして300年前の事件の事をシズとおキヌちゃんの2人から聞くことにしていた。氷室神社の神主と早苗ちゃんには悪いけれど、2人の先祖だという導師に対する印象は決して良いものではない。明らかに後手に回っている対応、それに300年前とはいえ人身御供と言う選択を取った人間はどうしても信用しきれないのだ。そしてそれは間違いではないと言うことがシズの言葉によつて証明されていた

「ワシは300年ほど前に大陸から日本に来た地霊じゃが、あの当時は大飢饉などが酷くてな。人の恨み辛みを吸収してしまい、少しばかり暴走状態になっていた。確かにまあ、災害を起こしたことは認めよう。だが日本の霊脈の清らか力を吸収すれば、元の神霊に戻る筈じゃった」

「……それはつまり、人間側の早合点と言う事か？」

「まあ、そうなるかの。地震を起こし、地割れなどを起こしたが……人間に被害を与えぬように細心の注意は払っていた」

数回霊力を抑えきれずに起こしてしまった地震とそれによる旱魃、人間に被害を出さぬように注意はしたそうだけど、大きな地震になつてしまったらしく、それによつて討伐対象になつてしまったらしい

「あの当時のずさんとも言える霊能事情では致し方ないとは言え」

「些か、短絡的な行動でしたね」

あの当時で考えれば、本当に日本が壊滅するほどの危機となれば神霊が動いていた。300年前と言えば、まだ日本にも多くの神が駐在していたのだ。勿論小竜姫様だつて妙神山に居たし、何よりも

「琉璃の〴〵先祖様が居たんじゃないの？」

「居たはずですよ。日本お抱えの霊能者として、多分……こんな事を

言うのはなんです、自分に箔をつける為の暴走をってしまったんでしょね」

あの当時で考えれば神代家、六道家を初めとした日本有数の霊能者が鎬を削っていた時代……その他の霊能者の評価が悪く、成り上がるうとしている霊能者も多い時代だった筈だ。

「つまり、あの導師が生前に暴走して、喧嘩を売ってはいけない相手に喧嘩を売った挙句、自分では対処しきれず人身御供を使ったと」

「身も蓋も無いが、まあそんな所じゃな。ここら辺を治めていた殿に、若く美しい女を人身御供とするとして集めさせておったし」

本当に最初はこの話し合いに同席すると言っていた神主さんと早苗ちゃんがいなくて良かったとおもう、自分達の先祖がそんな非人道的な事をしたと言う事は最後まで知らない方が良いと言う物だ。私達もこの話は絶対に氷室神社の人間に話すべきではないと心に決めた。

「それで私も選ばれたんですよ。女華姫も命に身分も上下も関係ないと言って生贄を決めるくじ引きに混ぜてくれましたね」

お姫様自らも生贄に選ばれる事を覚悟して、くじ引きに参加するのは……言ったら悪いけれど、導師と殿様よりもよっぽど人間味溢れていて、そして人の上に立つのに相応しい人間ね

「女華姫か……あの山のような巨体の大女……ワシは最初男と思ったわ」

「ふふ、確かにその見た目は完全に男の方ですけど、凄く心優しい人だったんですよ」

「あのさ、おキヌちゃん。昔の事忘れたんじゃ？」

私達が尋ねる前に横島君がおキヌちゃんにそう尋ねた。おキヌちゃんは昔の事を忘れてはるはずなのに、シズと話す口調は完全に昔の事を覚えているようにしか思えない

「それはワシが説明しよう。単純に言うとおキヌが人身御供になった際にワシとおキヌの魂は一時的に完全に同化した。おキヌの記憶と

清廉な魂はワシに移り、ワシの邪気と神通力がおキヌに移り、再び

2つに分かれたんじゃ」

「つまりおキヌさんは神の力をその魂に宿していた？つ事ですか」

【そうなるな、だからこそ300年もの間。悪霊にもならず幽霊として存在することができたのじゃ】

なにかとんでもない話になってきた気がする、人身御供になり魂となった事で神と一時的に融合して、元の人格を保ったまま分裂する。ちらりと琉璃を見ると首を振る

(つまりおキヌちゃんはただの村娘じゃなかったと言うことね)

琉璃……正しくは神代家と同じく神降ろしに耐えうる肉体だった。だからこそシズと一時的に融合しても元の人間の魂に分離する事が出来たのだろう

【あの、おキヌ殿に邪気が移ったと言いましたが】

【もしかしてあれかの、偶にくすくす笑って邪悪な気配になるのは】  
【ワシの邪気じゃな】

……おキヌちゃんのダークモードってめっちゃくちや怖いって思ったけど、神霊の邪気を纏っていたとなれば納得だ。と言うか、その邪気は……

「ねえ、なんで皆で俺を見るの？」

「『別に……』」

横島君に近寄る女の子への嫉妬心とかで発揮されていたわよね。下手をすれば、周囲一面が呪われていたかもしれないと思うと嫉妬くらいで済んで良かったと思う

【じゃが心配ない、おキヌの生き返る準備は出来ておる。生き返らせる時はおキヌの中の邪気はしっかりと回収する、これで元の穏やかな心優しい村娘に戻るじゃろう】

「え？おキヌちゃんは元々優しい穏やかな子だよ？ちよつと怖い時あるけど」

【も、もう！横島さんったら】

頬を赤らめ、両手で頬を押さえていやんいやんと身を攀じるおキヌちゃん。なんか物凄く感情を表に出すようになったわねえ……蛍ちゃん



とくえすがむつとしてるけど、其処には触れない方向で行きましよう。藪を突いてなんとやらだ

「それでシズ、どうやってあの化け物を退ける事が出来たのか、それについて説明してもらっても良いかしら？」

「うむ、おキヌとワシの関係性はこれくらいにしておくかの。あの導師が作った最終兵器は使いたくないしの」

【私も嫌ですよ、あんなの】

導師が何か準備していたって聞くだけで凄い嫌な予感がするわね。

「……ちなみにその最終兵器って何だ？」

【人間の魂を余す事無くエネルギーにして射出する砲台だ】

「な!?そんな事をすれば2度と輪廻の輪に戻る事は出来なくなりますよッ!!」

小竜姫様の怒声に驚きながらも、2度と転生出来ぬほどに魂を磨耗させる兵器を作り出した導師への評価はますます低い物となる

【そもそも、導師が本気でおキヌを生き返らせるつもりがあつたかどうか、あのような兵器を作る男じゃからの】

【でも、あれですよ。その功績で、女華姫と結婚してこの土地を貰ってましたよね?】

【うむ、正直ワシもそれはどうかと思うがの……】

とりあえず、私達の中で共通した導師の評価は人間とも思わない、最低最悪の下種な霊能者であると言うことだ。氷室家が導師の子孫だとして、導師が使っていたという霊的兵器が現代に伝わっておらず、結界術や封印術に秀でた霊能者へと変化した事に私達は安堵するのだった……

【そ、そこまで言わなくても良いのに……】

なお導師はシズとおキヌの自分のネガティブな話ばかりをされ、氷室神社地下の自分が作り出した霊的兵器の上で体育すわりをして、涙を流しているのだった……

〈琉璃視点〉

氷室家の開祖がとんでもない事をしていたと言う事をシズとおキ

又さんに聞いた後。最後に現れた巨人をどうやって退けたのかという話に移っていた

【あれはワシの本来の肉体と神通力の結晶だ。この土地の霊脈の力をおキヌが引き出し、ワシが居ることで存在を維持できず崩壊した】  
「崩壊したって事はもう出てこない?」

横島君が安堵した様子で尋ねるが、物事はそんなに簡単な話ではない

【いや、今回退ける事が出来たのはあやつと霊脈の繋がりが弱かったからじゃ、再び現れる時は今回のようには行かぬ】

【そうですね、今こうしている間も私が使える霊脈がどんどん少なくなっているのが判ります】

霊脈の支配権をおキヌさんから取り返す為に、一時的に姿を消していると言うことね

「……そうなるにあいつの使い魔は暫くは出てこないな」

【普通ならそうですね。使い魔を作り出すのに力を使っているのは消耗する一方ですし】

つまり今度現れる時はおキヌさんが居たとしても、あの巨人を退けることは出来ないと言うことね

「……厄介だな、霊脈と直結されているとなると」

「そうですね。私とシズクさんのフルパワーでも対処できるかどうか……」

竜神としては最高レベルの強さを持つシズクさんと小竜姫様でも霊脈から無尽蔵に霊力を引きだせる相手では幾らなんでも勝ち目は無い

「それで勝てないという事を言いたいのでしょうか?」

【いや、勝率があると言う話だ】

シズは広間から地図を持ってきて、地図に×印を付ける

【ここが、氷室神社。それでここが、ワシの祠になるんじゃないが、ここに御神体が残っている】

御神体と聞いてシズが何を言おうとしているのか私達は一瞬で理解した。多分理解出来ないのは、横島君くらいだろう

「あの、シズさん。舞さんと良く会っていたと言っていましたけど、彼女はここまで来ていたんですか？」

「いや、ここら辺に中間の社を作ってここら辺で会っていた」

新しい×印が地図に打たれる。氷室神社と社の丁度中間みたいね、ここら辺なら運動音痴の舞ちゃんでも来れるかも

「ここまで行くとなると結構厳しいですね」

「……谷の下に川があるが、ここまで霊力が乱れているとな」

「あのすいません、何の話か理解できないんですけど」

横島君が拳手をして訳が判らないと言う、専門的過ぎる知識なので理解できないのは当然だ。いくら美神さんでもここまで教えるには時間が足りていない

「神には御神体と言う本体がある、それが力の源であり。そしてこの世に具現化する鍵となる」

「ふんふん、あれ？でもそれだとシズクと小竜姫様も？」

横島君がそう尋ねると、小竜姫様は首から下げているペンダントを、シズクさんは扇子を取り出す

「私はこれになります。一番最初に生えてきた角ですね」

「……私はこれだ。高島が私の鱗で作った扇子」

御神体は安置するか、自分で所持するのが一番安全で確実な方法だ。シズは結界の中に安置すると言う方法を取ったのだろう、それは本来なら正しい保存方法の1つだと思うけど

「問題は相手もそれを知らないわけが無いって事ですわね」

「間違いないわね、レイが回収に向かっているかもしれない」

今はまだここにあるとシズが告げているけど、それもどこまで信用出来るか判らない

「ワシと牛若丸で見えてくるか？」

【主殿達はここに居てくれても大丈夫ですよ？】

ノツブ達がそう告げる、確かに英霊の方がと一瞬思った。だがそれは横島君からSTOPが掛かった

「レイも変身が出来る。もしノツブちゃん達がレイの眼魂に封じられる危険性もあると思う」

そうになると牛若丸とノツブの2人が敵に回ると言うことだ。確かにそうならたらどうしようもない

「危険は承知で私達で直接行くしかないって事か」

御神体を手に入れなければあの巨人を倒す事は出来ない。危険を承知で私達は明日早朝から、シズの御神体が眠ると言うやシロを目指して出発する事を決めるのだった……

「お話は終わりました？ご夕食とお風呂の準備が出来ましたので、どうぞ身体を休めてくださいな」

突然これだけの大人数で押しかけたのに、笑顔で迎え入れてくれる。氷室凜華さんには感謝しかない

「すみません、本当に」

「いいいえ、気にしないでください。庭に温泉もありますからゆつくりと身体を休めてくださいね」

女性としては大柄だけど、もしかするとそれが女華姫の血を引いている証なのかもしれない

「まだ山の中は雪が残っている場所もありますから、アイゼン等を用意しておきますね」

「あ、それなら友達に声を掛けてダウンジャケットを持ってきてもらうだ！」

山に向かう私達の為に積極的に動いてくれる氷室家の皆さんに感謝し、もしガープの計画が完全に実行されたら一番最初に大きな被害を受けるであろう氷室神社を、舞ちゃんを受け入れてくれた優しいこの人達を、そして日本を守る為にも何としても御神体を手に入れて見せると決意を新たにするのだった。なお、夕食の後横島君がお風呂に入っている頃

【ちよつとした出来心じゃろツ!!】

「それでなんで男の人のお風呂を覗くんですかツ！待ちなさいツ！その煩惱断ち切つてあげますツ!!」

【煩惱所か首と胴体がオサラバするわあツ!!】

ノツブと小竜姫様の追いかっこが始まり、それから暫くして横島君が若干気落ちした様子で広間に来て

「……場を和ませようと思ったんですかね？ バッチリ目があったんですけど、もしかして俺セクハラされてます？」

なんかとんでもなく悩んでいる様子の横島君に私達は何も言う事が出来ないのだった……

く美神視点く

氷室神社の電話を借りて東京へと電話する。通話が繋がるまで大広間を覗いているが……先ほどまでの緊迫とした空気が霧散しているのが実に良く判る

「よし、よし、良い子だ」

「ぶぎゅー」

ドライヤーとブラシでうりぼーの毛並みを整えている横島君だ。

「もう、横島は本当にうりぼーとかが大切なのね」

「そりやもう可愛いからなあ」

「ぶぎゅー」

うりぼーを抱っこして笑う横島君は、見かけよりも随分と幼く見えて可愛いという印象が強い

「……ったく、しょうがない奴だ」

「あら、でも、気をずっと張っているよりかはずっと良いと思うわ」

琉璃の言う通りだ、横島君の纏う空気で先ほどまでの張り詰めた空気が霧散している。横島君は本当にムードメイカーよね

【もうすぐご飯が出来ますよー】

「山菜の天ぷらとかだべー」

おキヌちゃん達も表情が柔らかくなっている。確かに気を緩めすぎるのはよくない、だけでも、ずっと張り詰めていると簡単に切れてしまう。適度なリラック스가このような状況では大事なのだ

「よし、今度はチビだ。おいで」

「みむうー♪」

今度はチビを膝の上に乗せてブラシで毛並みを整えている横島君、その表情は凄く生き生きしているのが良く判る。

「やれやれ、まあ、これも横島の良さか」

「……面白い人間だな」

「ナナシとユミルももうすぐご飯にするねー」

舞ちゃんもパタパタと楽しそうに歩き回って夕食の手伝いをしている。さつきまでは沈鬱そうな顔をしていたのに、横島君を見ているうちに自然に笑顔が増えてきたと私は思っている

【蓑虫の刑とか酷くねっ!?!】

「少し反省していなさい、全く……横島さん、不埒者は成敗しておきましたからね」

小竜姫様の言葉に複雑そうな表情をしながらもありがとうございまずと頭を下げる横島君、そういう姿を見ているとやっぱり横島君にはGSと言う職業は向いていない様に思える

(でもそうは言ってられないのよね)

レアな霊能を多数持ち合わせ、伝説にある文珠使い。それらの才能が横島君をどうしても非日常に導いてしまう、もし横島君が霊能者でなければもしかすると保育士だけじゃなくて、ペットシヨップとかも案外天職なのかもしれないと思うようになってきた。

「くう」

「わんわんー!」

「はいはい、判ってるよ。シロとタマモちちゃんとブラシをしてやるからな」

ご飯の前にブラシをしろと言わんばかりに鳴いているシロとタマモを見て、苦笑しながら膝の上を叩く横島君を見ていると受話器のコール音が変化した

『もしもし?』

「あ、西条さん? 私、私」

『令子ちゃんか、氷室神社の方はどうだい?』

状況はあんまり良くないということ伝える。知性と精神を失った暴走している神の肉体と、レイとの遭遇。霊脈の支配権についてもそこまで残された時間はないということ伝える

『増援は必要かい?』

「ううん、今の所は大丈夫。それよりも東京はどう?」

『こつちも状況は芳しくないね。特に神社仏閣を失った事で悪霊の大量発生が続いている、能力的にはそこまで脅威じゃないけど……徐々に出現する悪霊のランクが上がっているね』

悪霊の強さのランクアップ……具体的な事を言わない西条さんだけど、多分エミや唐巢先生が出張るレベルの強敵なのは間違いない  
「神社の復旧とかはどう？」

『そつちもやってるけど、中々難しいね。悪霊も馬鹿じゃないからね、それよりもだ。僕達よりも君達の方が心配だよ』

レイや知性の無い神との戦いと聞いている西条さんの声色が引き締まる

『最悪の場合、遠慮せずに増援要請を出して欲しい。ビュレトやブリュンヒルデ、それに優太郎さんもいる』

「うん、判ってる。最悪の場合は連絡するわ」

当面は相手も御神体を狙って動くだろう。御神体さえ手に入ればしまえば相手方の切り札だと思われるシズの肉体は使えない、まずは何としてもレイよりも先に御神体を手に入れる事が最優先だ

「こつちのほうだと団子虫、トンボ、それと植物で出来た人型が軍隊みたいになってるわ。今はこつちら辺だけだけど、その内そつちにも出てくるかもしれないから、本当に気をつけて、倒すよりも結界で封印しないと何度でも復活するから」

『それは厄介だね、情報ありがとう。それじゃあ、僕もまた現場に出るから、ここで失礼するよ。令子ちゃんだけじゃない、横島君達にも気をつけるように伝えて欲しい』

それじゃと言って電話を切る西条さん。向こうの状況はかなりぼやかされたけど、やっぱりこちらと同じ状況と見て間違いないわね

「東京はどうでした？」

「悪霊の群れだって、下手をするとレギオンが出てくるかもしれないわね」

通路に背中を預け、腕を組んでいるくえすに東京の状況を伝えると  
「そうですかと言葉短く頷き」

「御神体の所に横島を連れて行くのは反対ですわ」

「駄目よ、横島君は連れて行く」

「……リスクを判っているんですの」

「判ってるわよ」

視線だけでも人を殺せるなら、今のくえすの目が正にそれだ。私だって、氷室神社が完全に安全と言えるのなら横島君を氷室神社に残す。だけど、幽霊としてこの場に留まっている導師の事、そしてレイの存在もある。

「レイが本気だったらここは吹き飛んでるわ」

「……それは判っていますが…」

神霊眼魂を駆使し、自身も神通力を持つレイは正直言って、小竜姫様やシズクでも勝てるかどうかと言う相手だ。そんな相手が襲ってくるかもしれない、場所に横島君を一人で残す方が危険性が高い（……それに、中世の時もある）

蛍ちゃんが殺された時に暴走した姿。あの時は、狂神石によって横島君が魔族に落ちたことで姿が変わった。今魔人に近づいている横島君だと、正気を失うだけであの時の姿になりかねない……近くに置いておく方が安心できると私は思う

「横島君を一人にしたらどうなるかなんて言うまでもないでしょう」

「それは……そうですが」

横島君は案外無茶をする、しかも自分の身を省みない所もある。そこが横島君の危うさだ、自分よりも他人を優先する。それは決して良い傾向ではない

「不安はあるけど、横島君を信用してあげなさい。それが何よりも横島君にとって嬉しい事のはずよ」

「……それで横島が無茶をするとなると、私は如何しても許容出来ませんわ」

くえすらしからぬ、不安そうな声。それだけくえすが横島君を心配していると言う証であり、そして想いを寄せていると言う証でもあると思う。

「もうちよっと信頼してあげても良いと思うわ」

「……アレですか？」



「あー、待て待て、判った判ってるから！」

「みむみむー」

「ぷぎー」

【ノッノー♪】

「ご飯ご飯ーと言わんばかりに口を開けて、横島君の周りに集まっているチビ達。果物やメロンパンを慌しく準備をしている横島君を見て、私は少し考えてから

「……余り信用しすぎない方がいいかも」

「でしようね、見ていると微笑ましいというのは認めますけれど」

いい感じで話を締めようと思っていたのにそうならなかった事に苦笑しながら、私達も食事をする為に大広間に足を向けるのだった……全ては明日。時間との勝負だ、今日一日くらいはゆっくりしていても良い筈なのだから……

くガープ視点く

レイからの報告を聞いて、私は少しばかり眉を顰めた。氷室舞の捕獲を命じていたが、そこに横島達が混じってくると言うのは想定していたよりも些か早い、場所は伝えておいたが思っていたよりも辿り着くのが早かった

（命令の簡略化が失敗だったか）

今のレイには複雑な命令を理解するだけの知恵が無い。だからこそ、氷室舞の捕獲のみを命じたが少しは臨機応変に行動してくれる事を期待したのは失敗だったかもしれない

「それと蘆屋が作った眼魂は単独では使用出来ませんでした」

蘆屋が作ったと言うとコブラ眼魂か、動物系の眼魂を使うと言う実験は失敗したと言うことか

「単独と言うことは、複数使用は出来たのか？」

「はい、コブラの毒を使うという方法での使用は出来ました」

変身するには霊力が足りないのか……それとも動物だから霊格が足りないのか

（なんにせよ、これは今後の研究課題だな）

眼魂と言うのは未知に満ちている。仮に生成できたとしても実用段階には遠い可能性だつてある……これは蘆屋のミスではなく、実用段階にない可能性を考慮せず。レイに渡したミスになるだろう

「判った、だがコブラは使用するな。殺すにはまだ早い」

「……はい、判りました」

コブラの霊圧だけを抽出した眼魂の能力を付与すれば、意図しなくても殺してしまう危険性がある。最終的に殺すとしても今はまだ早すぎる

「それと巨人ですが、巫女の幽霊の一喝で消滅しました」

それは興味深いな、精神と知識だけを持って逃亡したのは把握していたが……地霊だけではなく、巫女の幽霊……恐らく横島達と共にいるあの巫女の幽霊だと思うが……あの巫女がこの土地と何らかの関係がある可能性があるな

「判った、座標を送る。その場所にある、御神体を回収し、巨人に与えておけ。そうする事で不安定な、霊核も安定するだろう」

知識と精神がないので、本能で動くでかぶつだ。だがその身に宿る神性は本物……御神体を与える事で擬似人格を獲得する可能性もある。ゆっくりと擬似人格を植え付ける事を考えていたが、そこまでゆっくりしている時間はなさそうだ

「氷室舞の捕獲、御神体の回収、優先するべきはどちらですか？」

逐一命令しないといけないか……だがこの程度の事でイラついていては天界と魔界を同時に相手取って戦う事など出来ない。それにレイは文字通りプロトタイプ、自我も応用力も希薄だ。そんな相手にイラついていては自分も同じ程度の知識しかないと認めているような物だ

「氷室舞の捕獲は一時中断、御神体の確保及び、横島の戦闘データ、もしくは拉致が可能ならばそれを最優先だ」

「……横島の周りは」

「好きにしろ。殺すも、痛めつけるのも、見逃すもお前に一任する。良く考えて行動しろ」

了解しましたと告げるレイを一瞥し、通信を切る。正直日本で騒動

を起こすのはそちらに注意を向ける事と、もう一つ横島の魂へ過負荷を掛けてその魂を変質させることにある。もつと、もつと強くなるが良い、そして我らに対する憎悪を燃やせ

「ふふふふ、全ては私の計算通りだ」

レイに渡すことの無かった4つの眼魂、そして盾のようなガントレット……準備は出来ているが、まだ横島が完成していない。横島が今よりも、もつと魔人に近づいた時、そして今よりもなお激しい憎悪を私達に抱いた時。その時こそが私達の本懐が成し遂げられる時なのだから

「だからもう少しだけ待っている」

私の机の上で魔力を放出し、震える3つの眼魂「A」「G」「S」とナンバリングが施された、血の様な真紅に輝き、炎を纏う眼魂。黄色の輝きを放ち、見る者を狂わせる光を放つ眼魂、そして緑に輝き、消えては現れるを繰り返す眼魂を見て私は笑みを零す。全ては大義の為……天上の輝きを再び世界を照らさせる為。世界を再び一つに纏める為なのだ

「全ては些事……大義の為の犠牲となれ」

天界も、魔界も、人間界も全てを犠牲にしても成し遂げるのだ。それこそが私達が存在している理由なのだから……

「ぶえつくす!!」

氷室神社の一室で眠る横島は突如凄まじい寒気を感じて、大きくくしゃみをして目を覚ました

「……………ぶぎゅう?」

「うー冷えてるのかなあ、おいで」

「ぶーぎゅ」

山の中で冷えたのかなと呟き、布団をめぐってうりぼーを抱き枕にして再び眠りに落ちる横島。それは決して寒気などではなく、本能的に己の身の危機を感じ取ったのだが……横島がそれに気付くことはないのだった。だが仮に気付いたとしても、横島に出来る事など何もない……全ては運命の中の出来事であり、それを覆す事など誰にも出来ないのだから……

リポート28 切り開け、己の未来 その6へ続く

## その6

レポート28 切り開け、己の未来 その6

〈蛍視点〉

東京から持ってきた霊具や装備を身につけ、シズの本体である御神体の搜索の準備を進める。正直レブナントがいることは想定していなかったのでレブナントに対応する装備はないが、それでもそれ以外の相手には何の問題も無く対応できると思う

「結界札と防御札は少し多めに持っていくわよ」

「はい、ありがとうございます」

美神さんが用意していた結界札と防御札を自分用の霊札ホルダーにセットしておく、あの昆虫軍団や、木が変化した人型だけでも十分に厄介だ。装備はいくら準備していても足りないだろう

「じゃあ、そろそろ行きましようか」

「はいっ！」

美神さんの言葉に気合を入れて返事を返す。危険であることは想定していたが、私達を待ち構えるのは想定したよりも遥かに危険な状況……一瞬も気を緩めることは出来ないわねと気合を入れて氷室神社の庭に出る

【ノブノブー♪】

「おーウイリーだ。凄いなチビノブ」

【ノツブー♪】

チビノブサイズのバイクを乗り回しているチビノブを見て、今まで全身に満ちていた気合が一気に抜け落ちた気がした。琉璃さん達も凄く複雑そうな表情をしている

「ふぎゅーぴぐぐー」

「みむー」

うりぼーが短い足をぴこぴこ動かして空を飛んでる……そう言えば、前も飛んでたけどうりぼーの新しい能力なのだろうか、そんな事を考えているとうりぼーの高度が徐々に下がり、横島がそれを抱き止

める

「急急如意令、風精招来」

「ぷぎゅー♪」

横島が陰陽札を貼り付けると、再びうりぼーが空へと舞い上がり、バイクではなくUFOの上に座ったチビノブも混ざって空の上で遊び始める

「美神さん、頭痛がします」

「奇遇ね、私もよ」

横島のフリーダムさをまだ私達は甘く見ていた、煩惱がなくなつたのを喜ぶべきか、悲しむべきかは微妙なんだけど、この天然さは間違いないと嘆くべきだと思う

「啻ー美神さん、おはようございまーす」

弾ける笑顔の横島に私も美神さんも疲れたように手を振り返すことしか出来ず、同じ様な表情で縁側に座っていた琉璃さん達は

「なんか、良い感じに気が抜けたって感じなんですよね」

「横島が楽しそうですから、別に良いんですけどね」

「……最近ますます馬鹿になつてる気がする」

シズクの評価が辛辣すぎる。だけど、その顔は笑っているので本当に馬鹿とは思ってないのが良く判る。むしろ微笑ましい物を見つめていると言う感じに見えなくも無い

「ま、気負いすぎても良い結果は出んぞ、これくらい脱力してる方が丁度良い」

【焦りは失敗の元です。敵地に向かうのですから、ある程度の緊張は必要ですが、やはりある程度の脱力も必要ですよ】

ノツブと牛若丸の横島へのフォロー。確かに気負いすぎは良くないだろう、横島がそこまで考えているつもりはないと思うけど……いい感じにリラックス出来たと思えば横島の行動は決して間違いではないだろう

「せんせー、拙者も頑張るでござるー!」

「ま、ほどほどに頑張らなさいよ。ほどほどにね」

シロとタマモのコンビが横島にじゃれ付いている姿を見ると、

微笑ましい物か、それとも嫉妬するべきなのか正直少し悩む。くえすも複雑そうな表情をしているので、判断に悩むところなのだろう

「よしよし、頑張ってくれるのは良いけど怪我はしないで、全員無事でまた戻って来ような」

引率の先生って感じね、でも一番無茶をする横島が言っているの  
で、残念ながら説得力は全くの皆無だけど……

「そろそろ出発しましょうか、山の陰気が薄まって来ましたから」

山の力のバランスを確認していた小竜姫様の言葉に頷く、本当なら朝早く出発して早い段階で戻りたい所だ。だけどここまで山奥だと、陰気が満ちていて、悪霊や妖怪の出現確率が増す。それならばリスクを少しでも減らす為に日が十分に昇ってから出発すると言うのは決して間違いではない筈だ

「じゃあ出発前に、今回の作戦を説明するけど、全員驚かないで頂戴ね」

「私と美神さん、それと小竜姫様で考えたんだけど、多分これが最善の方法だと思うの」

そう前置きされた作戦は驚き、異論を口にしたくなる内容だった。正直、リスクとリターンの吊りあいが取れてないと思ったが、説明を聞いて、それしか方法が無いと言うのは嫌でも思い知らされた

「仕方ないですね、それで行きましようか」

「……だな」

この作戦の要となるくえすとシズクが美神さん達の計画を受け入れた。2人の説得が一番面倒だと思ったが、恐ろしいほどに素直に認めてくれたので安堵する。

【途中までの案内は私が入ります。では出発しましょう】

出発して、帰ってくる場所が滅ぼされていると言う自体は避けなければならぬ。シズとナナシとユミルの3人を氷室神社に残し、私達は御神体を目指して山の中へと足を踏み入れるのだった……

く美神視点

御呂地岳は初心者にも登りやすい山だ。正しそれは通常の登山

ルートに限る、御神体が眠るのは氷室神社の人間だけが知っている山道の奥の奥……通常の道では辿り着けない場所にある

「ふう、結構厳しいわね。皆大丈夫？」

氷室神社を出発してから1時間険しい山道を登り、開けた場所に出たので休憩する事にする。正直何時敵が襲ってくるか判らず、そして装備も万全なので体力の消耗は激しい

「まだ大丈夫ですわ。ただ、敵が出てくるとなると何とも言えないですわね」

「ここまでは敵も出てないですしね」

くえすと琉璃が額の汗を拭いながら返事を返してくる。確かにその通りだ、敵も御神体を奪われる訳には行かないと言うことは理解しているはず、それなのに敵が出てこないのには違和感を覚える。行きは良いが帰りは地獄……罠に誘い込まれている気がしてならない

「シズク、心眼、今のところ何か気配はある？」

索敵能力に秀でた2人に尋ねてみても何の気配も無いと言う返事が返ってくる。これはおかしいわね

「小竜姫様、どう見ますか？」

「……十中八九罠でしょうね。ですが、私達には前に進むという選択肢しかありません」

あの巨人が御神体を手にしてしまえば、それこそ無尽蔵の神通力を得てしまう。そうなれば私達に勝ち目は無い、なんとしてもレイよりも先に御神体を手しなければならぬ……とは、思っている。けど最悪の場合も想定しなければならぬ、敵の奇襲、そして自分達の計画が失敗しているかもしれないという不安を抱いて行動しているので、肉体的な疲労よりも精神的な疲労が大きくなってくる

「ぶぎゆう」

「うりぼーも大丈夫そうだな。大変だけど頑張ってくれな」

荷物を運搬してくれているうりぼーの頭を撫でる横島君。うりぼーがいてくれるから、大荷物を運ぶ必要は無いので、これには本当に感謝するしかないわね

「……」



「……感じるでござるか?」

「遠いけどね」

シロとタマモが山頂を見つめてその顔を陰しくさせている。動物的な勘で何かを感じ取っているのかもしれないわね

「シロ、タマモ何か嫌な感じがするの?」

「……変な感じって感じかしらね、どこかから纏わりついてくる……蛇みたいな気配がするのよ」

「気持ち悪いでござるかよ、しかもどんどん気配が強くなってきているでござるか」

蛇みたいな気配……か。敵はレイとあの巨人の眷属だけじゃない、もしかするとガープが召喚した魔界の獣と言う線も捨て切れない

【進むなら今と言う所じゃな、長期戦になる可能性もある。もう少し霊脈が太い所を見つけておいた方がよい】

【結界を作るなら、そっちの方が好都合ですよ】

どの道前に進むしかないのだ、ノツブと牛若丸の言う通り、スピードが大事なことは十分判っているけど、最悪の場合に備えて霊脈が十分な場所を見つけておくの必要なことかも知れないわね

「じゃあそろそろ出発しましょうか、周囲への警戒を怠らないでね」

その声を掛け、登山道から獣道へと足を踏み入れる恐らくここからが、本番になる筈……それが全員判っているので、凄まじい緊迫感を維持したまま周囲を警戒しながら、山の奥へと足を踏み入れていくのだった……

く 琉璃視点

御神体に近づくに連れて氷室神社を出発してから感じていた嫌な予感はどうぞんぞん増していた。敵が現れない事、それすらも不安を煽る

「琉璃さーん、大丈夫ですか?」

「だ、だだー大丈夫ー!!!」

切れかけの縄の橋を渡るとか冗談じゃないけど、この先に行かないといけないのだから高所恐怖症だって意地でも我慢してみせる

「……腰。抜けるかもしれない」

「我慢してよねッ!」

蛍ちゃんが真顔で腰が抜けるかもしれないと言うけど、山の間だから凄まじい強風が吹いているし、縄を切れそうだし、板も切れそうで本当に踏んだり蹴ったりである

「琉璃さん……私泳げないんです……落ちたら死ぬ……」

「そんなカミングアウトいらないわ!と言うか不吉な事ばかり言わないで頂戴!」

一緒に橋を渡っているわけではない、蛍ちゃんが一番最後なのだけど不安に駆られすぎてさつきかたネガティブな事しか言っていない。本当なら小竜姫様や、うりぼーに乗せて貰うと言う形で渓谷を渡る所なのだが、身動きの取れない空中で襲われる可能性を考慮すると橋を渡り、回りの皆に守って貰うのが一番安全な形なのだ。だから我慢するしかない、我慢するしかないんだけど……本当怖すぎる。お願いだから、橋を渡っている間に敵に出てこないで欲しいと祈る事しか出来ない

「は、はあ……はあ……わ、渡り切ったわよ……」

橋を渡りきり、地面に足がついた時その場に思わず蹲ってしまった  
「大丈夫ですか?水飲みますか?」

「……う、うん。ありがとう」

横島君から水を受け取り、口に含む。冷たい水が喉を滑り落ちていく感じが実に心地良い、今までの緊張感が一気に緩んだ気がする……  
「蛍ちゃん!後は貴女だけよ、頑張って!」

「蛍—頑張れ—ッ!」

【み、見た目はボロボロですけど、橋は結構丈夫ですから—】  
【私も分析している、大丈夫だ。落ちることは無い】

顔面蒼白の蛍ちゃんに声を掛けていている横島君達を見ながら立ち上がり、乱れきった呼吸を整える

「琉璃、来ますわよ」

何が来るなんて言うまでも無いだろう、蛍ちゃんに横島君達が声を掛けていているのは橋を渡った瞬間。この周辺の空気が変わったからだ……暗く澱んだ闇の気配とも言える。蛍ちゃんが橋を恐れているの

は判っているけど、一刻も早く体勢を立て直す必要がある

「……駄目だ、時間切れのようだな」

「そうみたいですわね！」

茂みが大きく動き、待ち構えていたと言わんばかりに樹木で出来た狼が飛び掛ってくる。

「拙者の前で出来損ないの狼を見せるとは……挑発でござるか？」

【！】

擦れ違い様の一閃で樹木で出来た狼の首は乾いた音を立てて、地面に落ち溶ける様に消えていく

「来た！蛍ちゃん！急ぎなさいッ！」

「急げ、蛍ッ！心眼ッ！」

【判っている】

蛍ちゃんの背後からも樹木で来た異形が地面から生える様に現れ、逃げ腰で橋を渡っている蛍ちゃんに迫る

「うう……ううううッ!!！」

目を閉じて橋の上を走り始める蛍ちゃん。橋が激しく揺れているが、ゆっくり渡っている時間は無い。横島君が両手に栄光の手を作り出して、タイミングを計っているのが見える。恐らく射程範囲に捉えたら、手を伸ばして蛍ちゃんを引き寄せるつもりなのだろう。それならば……

「シズク、うりぼー達に攻撃の指示をお願いします、タマモちゃんは炎を！小竜姫様とくえすは敵の迎撃を！シロちゃんとノツブと牛若丸は背後からの襲撃に対応してください」

矢継ぎ早に指示を飛ばしながら、私は荷物から精霊石の粉末と結界札を取り出す。敵の数に限りは無い、山の中に居る以上どこにいても、敵は再生し現れる。まずは安全な拠点を作り、そこで休みながら戦わなければ間違いなく数の暴力で敗北する。私達は敵のホームグラウンドに足を踏み入れてしまったのだから……

(明らかに強くなっている)

団子虫とトンボの姿は消え、代わりに樹木で出来た狼と鳥が新しく出現している。それは団子虫とトンボでは対処できないと判断した

からだだろう、シズは知性は無いと言っていた。だけどあの巨人には明白な意思があるという証拠だ

「うっしー! 蛍、少し目を閉じてろよッ!!」

「え、きやつ!?」

蛍ちゃんの短い悲鳴と美神さんのでかしたと言う声が聞えてくるので、栄光の手による蛍ちゃんの回収に成功したのだろう

「……狙え、撃てー!」

「二二ぴぐぐーッ!!!」

整列したうりぼーがシズクの指示で霊波砲を放ち、空中から襲撃しようとしていた鳥を次々撃ち落していく……谷川の近くで少し間違えば谷底にまつさか様に落ちることになる、だがここで相手の攻撃を食い止めるしか私達には手段はない、例えこれが敵の罠でレブナントが現れる時間稼ぎだとしても……戦わないという道は私達の中には存在しないのだった、何故ならばこの事態は私達にとって、想定外ではなく……想定内に過ぎなかったのだから……

〈横島視点〉

ボロボロの橋を渡り終わると同時に、先ほどまでの敵の気配が無い状態は一転し、雪崩のように敵が襲ってくる。出発前に美神さんたちが話していた最悪の展開になっていると俺は確信した

『出発前に話しておくけど、もう敵が御神体を確保している場合があるわ。その場合はくえすの魔法で氷室神社まで撤退する事になるわ』  
『こちらが先に回収できれば御の字だけど……敵も御神体が必要な事は判ってる筈。出発する前に、氣勢を削ぐような事を言うけど、多分713で敵が既に御神体を回収していると思ってる』

美神さんも琉璃さんもこの事態を想定していたのだ、そしてその上で今回の作戦を考えていた。それは樹木の敵の細胞を手に入れること……生物と樹木の中間の姿をしていたとしても、生物ではなく植物だ。そしてその植物はおキヌちゃんの一喝で砕け散った巨人の体細胞と同じ物であるというはず

『……それが判っているなら、全員で出ることは無いんじゃないのか

？』

『敵も馬鹿ではないですからね、こちらが少数人数で出れば最初からレブナントをぶつけてくる可能性があります』

レイが変身するレブナントは正直俺よりも遥かに強い、東京では見逃された形になるが戦いになれば俺に勝てる要素は何処にも無い。罾だと判っていて無策で突入する馬鹿は居ない、最悪の場合……つまり御神体を相手側に確保されていた場合。樹木の兵士の体細胞を回収し、神宮寺さんの魔法で離脱する。それが美神さん達の立てていた計画だった

【ノーブーツ!!】

機械音を立てて、UFOが変形した戦車と合体するチビノブは流石に想定外だけど……多分それ以外は美神さん達にとっては想定内だろう

【ちいっ！思ったよりも厄介じゃぞ！】

【そうですねッ!!】

問題は敵の身体の一部を回収したいのに、倒した傍から消滅してしまふことだろう

【……なるほど、中々賢いようすわね】

【……共食いか】

神宮寺さんとかえすがそれぞれ、氷と土で相手を拘束するが、拘束された傍から樹木が集まり拘束されている物を貪り食う。

【不味いな、知恵を確実につけている】

心眼が舌打ちしながら告げる。敵は知性が無いはず、だからこそ、相手を回収する計画を立てていた。だけど相手はそれを完全に越えてきた……本能的か、それともグループに入れ知恵されたかは判らない。だけど、俺達に樹木を回収させる木は一切無いのが良く判る

【そっ！】

【せいッ！】

タマモの狐火とシロの霊波刀の一閃が樹木の化け物を貫く、だが先ほどまでは一撃で倒せていた化け物はいまだ活動を続けている

「くっ、硬くなってるッ！」

「蛭！頭を下げろッ！」

神通棍で殴りつけても、止まる事無く歩き続ける樹木の化け物を見て蛭に頭を下げるように叫び、栄光の手で殴りつける。先ほどまではこの一撃で、相手を倒すことが出来ていた。だが俺の手に跳ね返ってくる衝撃はまるで鋼鉄を殴りつけたような重い手応えだ

【主殿ッ!!】

【!?】

牛若丸が木を蹴りつけてその勢いを利用して、敵を胴体から両断する。これは敵の細胞を回収できるかもしれないという期待を抱いたが、地面に落ちる前に敵の身体は霊力に変換され霧散していく（蛭ちゃん、横島君。どうも今回の作戦は最低限の目的を達成するのも難しいかもしれないわ）

美神さんが深刻な表情で告げる、敵はこちらの想定よりも強く、そして回収する筈の敵の身体も回収する前に消えてしまう。御神体の社に辿り着くにも、この場に足止めされていては御神体所ではない「……………こんにちわ」

「ああ、こんにちわ」

そして更にレイまで現れた。状況は悪化の一途を辿っている……………しかもレイが出てきてしまったては、俺が出ない訳には行かない

「今回は貴方を捕獲するように言われていますので、大人しくてくださいね」

【セツトツ！ レブナントレディ？！】

レイが身につけている籠手から濃いブルーのパーカーが飛び出し、レイの後ろに滞空する

「貴方達を探している物はもう私が回収しました」

銅鏡を取り出し、俺達に見せ付けるレイ。それを見ておキヌちゃんが御神体と叫ぶ、シズから聞いていた御神体の特徴を全て満たしている……………敵が強くなったのはレイが御神体を手にしたのが理由のようだ

「お前から奪い返すって言うのもありだと思わないか？」

「出来るのならば、どうぞ？でも私も手加減はしませんけどね」

俺とレイの視線が交差する。昨日の穏やかな視線ではなく、絶対零度の視線をぶつけられ背筋に冷たい汗が流れる。だけど、ここで引くわけには行かない、懐から取り出したウイСП眼魂のボタンを押し込む

「行くぜ、心眼」

【やるしかあるまい】

【アーイツ！シツカリミナー！シツカリミナーツ！！】

ウイСПパーカーがレイへと飛び掛り、レイの背後のパーカーとぶつかり、何度も何度も交錯を繰り返す。その間に俺とレイの姿はトライジェントにへと変化している

「変身ツ！」

【ヒガンヒガン！フロントムコールツ！！】

【開眼ウイСП！アーユーレディ？OK！イ・タ・ズ・ラー！ゴ・ゴ・ゴーストツ！】

同時に変身して駆け出す、レイが出てきてしまった以上。もはやこの作戦は失敗だ、奪い返すとは言ったが、正直レイから御神体を奪い返す自信は無い。神宮寺さんとシズクの撤退の準備が整うまでの時間は稼いでみせる。俺はそれだけを考え、拳を強く握り締めるのだった……

くくえす視点く

敵が既に御神体を手に行っている可能性は美神達に説明を受ける前から考えていた。ガープはそこまで馬鹿じゃない、あの巨人を維持するのに御神体が必要となれば即座に回収に動くとは思っていた。そうなると氷室舞を攫う事を命じた理由が不明瞭になるが、恐らく氷室舞の神楽舞を必要としていたのでは推測することは出来る

「がつー！」

「前も言った筈です、抵抗は無意味だと」

横島とレイの拳が交差するが、吹き飛ばされるのは横島だけだ。体格では完全に横島が上回っている……だが狂神石でサポートを受けているレイの方が膂力も反射神経も横島を完全に上回っている

「ちいっ！鬱陶しいですわねッ！」

こうなれば一刻でも早く氷室神社に戻る必要があるのだが、そうではなければ横島だけが消耗し、一番奪われてはいけない横島がガープに奪われる事になってしまう。だが転移魔法を発動しようにも敵の攻撃が余りにも激しい

「ふっ!!」

「……邪魔をするなッ！」

今もなお敵を一撃で倒すことが出来ているのは小竜姫とシズクの2人。私達はチームを組んで漸く戦えるレベルだ、御呂地岳は霊山と言うことは把握していたが、その山の中に隠されている霊脈の数も質も並みの霊地を遥かに越えている

「ぬっくっ！ ええい、邪魔邪魔じゃッ!!」

【そこを通せッ!!】

ノツブと牛若丸が敵陣の強行突破を図るが、そうはさせないと樹木の化け物が私達を分断する。高火力の炎で薙ぎ払う事が私には出来る、だがそうなると転移魔法へ向ける意識が弱まり、転移までの時間が長引く結果になりかねない

「美神さん、蛍ちゃん。くえすのフォローに、タマモちゃん！全力でお願いッ！」

自身も霊刀を振るい敵の攻撃を防ぎながら琉璃が矢継ぎ早に指示を飛ばす、こうなってしまうえば御神体がどうか言っている余裕はない。少しでも早く、この場所から離脱する必要がある

【ノブノブノブノブーツ!!】

UFOと合体して、戦車の下半身と、両腕にガトリングガン。背中にキャノン砲を背負ったチビノブが射撃で敵の勢いを削いでいるが、倒しきるには攻撃力が足りない

「みーむううッ！」

稲光が走り雷が落ちるが、樹木の敵には当然効果が薄い……だが動きが鈍った事は私達にとって紛れもなく幸運だ

「せいっ!!」

「狐火ッ！」



動きが鈍った僅かな隙にシロとタマモが相手の首を切り落とし、あるいは火炎を叩き込み確実に敵を倒す

「くえす！まだなの！」

「早くしろって言うなら、私に詠唱に集中させなさいッ！」

敵への攻撃をしながら、自分への攻撃を防ぎ、そして転移魔法の完成を急ぐ。そんな魔法の天才を自負している私でも不可能だ、私が何よりも早く魔法を完成させようとしているのに、急げなんて言われると怒りがこみ上げてくる

「このっ！ぐっふっ!？」

「遅いですよ、止まって見えます」

横島の拳を回避し、その両腕を横島の首に回したレブナントはがら空きの胴体に何度も膝蹴りを叩き込み、横島を地面へと叩きつける。呻き声を上げる横島を見て、思わず駆け出しそうになるが、それを唇を噛み締め耐えこの場から離脱する為の魔法を完成させることに意識を向ける。

【当たってくださいッ！】

「横島立ち上がらないでよッ!!」

「……凍ってるッ！」

「プギイイイイッ!!」

トドメを刺そうと拳を振り上げたレブナントにおキヌのポルターガイスト、蛍の霊体ボウガン、シズクの氷の光線、そしてうりぼーの牙の間から打ち出された極太の霊波砲が命中する。並みの神魔ならば、一撃で行動不能になってもおかしくない攻撃だった。だが、レブナントにダメージが通っている様子は無い、僅かにパーカーから煙が上がっているだけだ

「シッ！」

「……竜神族、小竜姫。要注意神魔」

攻撃は通らなかった、だけど僅かにレブナントの意識が逸れた。その瞬間に小竜姫が超加速でレブナントに切りかかる

「ふっ！せいッ！はっ!!」

「鬱陶しいですね。貴女に用は無いんです」



……レイって何……」

横島の一言でレブナントは急に不安定になった……いや、違う？あれはパーカーに入っていた狂神石の赤いラインが消えている。もしや狂神石はレブナントの力の源だけではなく、レイの精神を安定、いえ、あの様子では余計な事を考えない様に精神誘導していた可能性がある

「横島！早く！逃げますわよッ！」

だがこの隙は逃げるのに役立つ、転移魔法が完成させる事が出来た。横島を呼び寄せ、転移魔法の発動の最終段階に入る。横島が転移魔法の範囲に入ろうとした瞬間

「違う違うッ！私はレイ！0番じゃないッ！」

「カイギガンツ！！カザシテミナー、カザシテミナーッ！！」

籠手に真紅に輝く眼魂をセットし、レバーを引くレブナント。籠手の先の銃口から漆黒の球体が発生する、それは自身の近くにいた樹木を削り、周囲の小石を吸い込み消し去っていく

(まさかブラックホールッ!?)

なんの魂が宿っているのかは判らないが、重力制御……もしくはブラックホールを作り出す能力だと判断する。

「横島！急ぎなさいッ！！」

あんな物がこんな至近距離で炸裂したらどうなるかなんて考えるまでも無い、こちら辺一体が消し飛んでもおかしくないのだ。私だけではなく、美神たちも叫ぶが、既に発動している重力に引き寄せられているのか変身しているのに全く距離が縮まらない。そしてその時は訪れた……

「コブラッ！オメガストライクッ！」

「う、うっうわあああああー……ッ！！！！」

錯乱したレブナントが放った漆黒の球体、放たれた重力波で足元が崩れ去る中、転移魔法が発動し、氷室神社へと引き戻されていく中。私は見た、1人だけ、重力に引き寄せられ、転移魔法の範囲から外れた琉璃が漆黒の闇の中に吸い寄せられていく姿を……そして転移魔法の中から飛び出した横島の背中を……もう魔法をキャンセルする

ことは出来ない、私は山奥から氷室神社へと瞬間移動する中。琉璃の手を掴んで自分の胸の中に抱き寄せた横島がそのまま崖の下へと転落していく姿から視線を逸らすことが出来ず、茶化すように聞えてきたチャオの言葉が耳から離れることは無いのだった……

『はっはー、随分と面白いことになったなあ』

重力で抉り取られた谷川を見て、レブナント……いや、赤いオーラを纏うレブナントではない何かがワラウ。真紅に輝く鋭い目を急流に向けて、そこには琉璃を背負い、急流を流されていく横島の姿が見えている。だが変身が解除され、今にも沈みそう……それこそ殆ど溺れているような姿だが、それでも琉璃を背負い続ける姿にナニカは深い笑みを浮かべる

『良いねえ、ああ言う愚かな奴は大好きだッ！やっぱ人間っていうのはこうじゃないとなあッ！』

ナニカは上機嫌で笑いながら崖の上から飛び降りる

『少しでもサービスだ、助けてやるよ』

空中で静止したナニカは横島と琉璃に手を翳す。すると沈み掛けている横島の周りに光が集まり、その姿を僅かに浮かせる

『さてと、じゃ、お前も一緒だ、今のままじゃ詰まんからな。それに……俺も時間切れだね。上に戻るのは無理だ、ま、運が良ければくたばることはないだろうよ……チャオく♪』

籠手からレブナント眼魂を引き抜いたナニカ、一瞬で赤いオーラに包まれたレブナントの姿はレイの姿に戻り。意識を失っているレイは横島達と同じ様に急流に飲み込まれ、あつという間にその姿を消すのだった……

リポート28 切り開け、己の未来 その7へ続く

## その7

レポート28 切り開け、己の未来 その7

〜美神視点〜

氷室神社に戻ってきた私達は立っていられず、その場にへたり込んだ。全員が見てしまったのだ、横島君と琉璃が急流に飲まれる姿を思い出し、血の気が引くのが判る。だが何時までもへたり込んでいるわけには行かず、横島君と琉璃の救出について考え始める。

「シズク、シズクッ！横島は!?横島は無事なのよねッ!？」

そう言つて欲しいと言わんばかりに蛍ちゃんやんがシズクの両肩を掴む、相当乱暴な掴み方だったのかシズクは顔を歪める。いえ、違うわね……あの感じは、悔いているように私には見えた。

「……横島の気配は感じ取れない」

「え？」

「……横島の気配は感じ取れないと言ったんだッ!!」

シズクラしからぬ怒声に全員が驚き、そして蛍ちゃんやんは力が完全抜けてしまったのかへたり込んで、嘘と繰り返し呟いている。

「小竜姫様、横島君の気配が感じ取れないと言うのは本当ですか」

「……はい、ただ横島さんが死んでいるから気配を感じ取れないのか、それとも急流に流されて神通力の溜り場まで行ってしまい。私達の間で感覚では感じ取れないだけかもしれないかもしれません」

淡々と告げる小竜姫様だが、その手は硬く握り締められ、血が滴り落ちている。その姿を見れば、小竜姫様が自分を責めているのは明らかだ、それに責められるべきは私だ。くえすの転移あり気で敵の中に飛び込むことを決めたのは私だ。

「信長ッ！こっち来て」

「な、なんじや急に」

「思いつきりビシタして、早くッ!!」

「え？何を？」

「早くッ!!」

私の怒号に信長はどうなっても知らんぞと言ってから、振りかぶったビンタを私の頬に叩きこむ。景色が飛んで、蛍ちゃんやくえすの私の名前を呼ぶ声がやけに遠くに聞えた。

「……あー痛い、とんでもなく痛いわね」

これ絶対後で腫上がるわね、でもこの痛みで混乱していた考えが纏まってくる。

「シロ！タマモ！それと牛若丸！悪いけど、チビ達を連れてすぐにまた山へ向かって貰うわよ、小竜姫様もお願いします！地図で当たりをつけるから、その周辺を重点的に！くえすと蛍ちゃんは東京に連絡！もうなりふり構ってられないわ、カズマも聖奈も呼び寄せるわよ！」

横島君が死んでいるわけが無い、絶対に生きているはず。ガープやレイも間違いなく、横島君の回収に走る。相手よりも早く、横島君と琉璃を発見しなければならぬ。

「シズクは川から横島君達の霊力を探して、近づけば判るわよね？」

「……ああ。見つけてみせる」

返事を返すと同時に地面の中に溶ける様に消えていくシズク。最悪の場合だけど、水の中に沈んで浮かんで来れない場合横島君達を見つけれのはシズクしかない、そんな最悪の結果になってほしくない  
と祈るしかないが

「チビ、うりぼー、横島を探すわよ。匂いは覚えてるわね？」

「みむうー！」

「ぶぎゆうー！」

「……絶対、せんせーを見つけてごさる」

山岳図を取り出して、自分達が最後にいた場所。そして川の位置から横島君と琉璃が流れ着いているであろう、場所に丸をつける。もし違えば、後はシロ達の鼻が頼りだ。

【び、美神さん！私は?!】

「おキヌちゃんは霊脈のコントロールを奪われないようにしてなさい  
！良い！間違っても神社の外にでようなんて思わないことッ！」

おキヌちゃんが霊脈のコントロールを奪われてしまえばそれこそ

全滅を避ける事は出来ない。大変だと思っけど、意地でも霊脈を確保しておいて貰いたい。

「美神さんはどうするんですか」

「別アプローチでノツブと一緒に横島君を探すわ、山に登る間に作った休憩所、そこに横島君の切り札で戻って来てる可能性があるから！」

山に作った休憩所は全部で4箇所、横島君が意識を失っていても明珠を心眼が使っていてくれる可能性もある。可能性は限りなく低いけど……私はその可能性を信じたい、狼と狐の姿になって茂みの中に消えるシロとタマモ、うりぼーとチビとチビノブもそれを追いかけるようにして茂みの中に消える。

「難しいと思いますけど、よろしくお願いします」

「大丈夫です、横島君を見つけたら必ず連れて来ます」

小竜姫様にシロ達に同行を頼んだのは、超加速で戻って来れるからだ。

「美神さん、私も」

「私も行きますわよ」

自分達も行くと言う蛍とくえす、その意志は買いたいけど……今は駄目だ。2人の能力の高さは十分に把握している、だが、本当ならついてくるように言いたい。だけど……それが不可能なのは2人の状態を見れば一瞬で判った。

「そんな震えた手足で何をするって言うの?」

2人とも手足が震えてまともに立ってられる状態ではない、横島君への依存は警戒していたけど、今回は最悪の形で蛍ちゃんの弱点が露呈してしまった、くえすは正直予想外だったけど……それだけ横島君に想いを寄せていると言うことだろう。自分達の今の状態を見て、ついでいいていくな言えなくなつた2人を残して私達は氷室神社を出る。夜は冷えるし、何よりも雪山だ。時間を掛けている時間は無い、時間が経てば経つほど、横島君と琉璃の生存率は低い物となるのだから、疲れているとか、霊力が無いとか言う泣き言を言える場合ではない。「良い、私の頼んだことをしておいて、ちゃんと横島君は連れて帰るわ。行きましょう」

【おうー！】

ノツブと共に再び山の中に足を踏み入れる。師匠より先に弟子が死ぬなんて許さない、絶対に、絶対に見つけてみせる。私はノツブに頬を張られ、熱を持ち始めた痛みを堪え、横島君の姿を探して山の中を歩き始めるのだった。

く横島視点く

俺が覚えていたのは、コンクリートの壁に叩きつけられたと思うほどの衝撃と、変身が解除された事で発生する全身の痛みだ。しかも状況を把握する前に急流に飲み込まれ、泳いでいるのか、それともただ流されているのか、それすらも判らない。

【横島！意識を保て！良いか！絶対に意識を失うな！】

心眼の叫び声が脳裏に響く、その声すらも強烈な痛みとなり、意識を失うなと言う心眼の言葉でも意識を失いそうになる……だがそれでも俺は途切れかけの意識を必死で繋ぎとめていた。

(な、なんとしても、上陸する)

背中に背負っている琉璃さんがいるからだ。何度水を飲んだか判らない、息苦しくて死ぬかもしれないと思った。だけど急流は俺と琉璃さんを安全に下流に運んでくれた

「ぜ……ぜ……うっ……ぐうう」

殆ど這うようにして川から上がる。琉璃さんは完全に意識を失っていて、目を覚ます気配が無い。もしかして水を飲みすぎているとか、最悪の予想が脳裏を過ぎり、心眼に大丈夫かと尋ねる。

「し、心眼……る、琉璃さんは？」

【大丈夫だ、お前が水を飲まないように必死に泳いでいたから琉璃は頭を打った衝撃で意識を失っているだけだ】

琉璃さんが無事と言う事だけで身体から力が抜けた、でもこんな所で休んでは敵に襲われるかもしれない。全身が痛むが歯を食いしばり立ち上がろうとして、その場に崩れ落ちた。



「うぎいつ!？」

【どうした!?! だい……ぐつ、すまない。気付かなかった、私のミスだ】  
「い、いやあ。心眼は悪くねえよ……」

冷たい谷川に長時間流されていたことで気付かなかったが、足に太い木の枝が刺さっていた。貫通こそしていないが、かなり奥深くまで刺さっているのが判る。

「……心眼、こういう時ってどうすればいい?」

【口にハンカチを詰め込め、それから引きぬけ。後は文珠で回復させる】

心眼の助言に従い、タオルを加えて両手で枝を握り締めて、思いつき引き抜く。

「?!?!?!」

声にならない痛みと吹き出る鮮血に目の前が暗くなるが、それでも意識を保つ。

【……私では応急処置程度の力しかない。すまない】

「いや、ありがとう。大分楽になった」

心眼では文珠の力を引き出すことが出来なかったようで謝罪してくるが、立ち上がる事は出来ないがそれでも痛みが無くなっただけでもありがたい。

「心眼、ここどこくらいだろう」

【かなり下流だと思う】

流も随分と弱まっているが、それだけで麓に近いとは思えない。木々も高いし、なによりも森の気配がおかしいというか……人の気配が微塵も無いことから、山奥だろう。

【立てるか?】

「ごめん、無理。でも移動するしかないんだろ、悪いけど、俺の代わりに前を見て欲しい」

意識の無い琉璃さんを背負ったまま、匍匐前進の要領で前へ進む。文珠はまだあるが、十分な効果も無いのに使うわけには行かない。

【琉璃が目覚めるのは待つわけには行かないな】

「ああ、シズクが来てくれないのはおかしいしな」

川の近くならシズクが来てくれる、そう思っていた。だけど、これだけ時間が経っても現れないと言うことは、俺達の場所が判らない。またはシズク達も負傷していて動けないと考えるべきだ。つまり何が言いたいかと言うと、自力でどこか隠れる場所を見つければ必要があると言うことだ。

【霊視で隠れれそうな場所を探す、私が休めと言ったら休め。良いな？】

心眼の優しくも厳しい言葉に判っていると返事を返し、動かない足に苛立ちを覚えながら必死に手を伸ばし、身体を引きずるようにして森の中を進む。これだけドロだらけにすると、シズクに怒られるかな？それとも、また勝手な事をしたと美神さんに怒られるかな？そんな事を考えていると身体の痛みも気になくなって来る。

【身体の痛みを感じられないのは、完全に霊体が麻痺しているからだ】  
「……それは判ってる」

栄光の手も作れない、陰陽札も使えない。俺の霊力は間違いなく枯渇している、それはいくら馬鹿な俺でも理解している。

「早く休める場所を見つけないとな」

【そうだな、このままでは日が暮れる】

木々の間から零れる太陽の光が、オレンジ色に染まって来ている……それは夕暮れが近いことを示していた。

「もしかして意識を失っていたのかもしれないな」

【……私もな】

激流から陸地に打ち揚げられた時に意識を失っていたのかもしれない、夕焼けの光を見て俺はそう呟いた。それとも、レイとの戦いの段階で、既に昼近かったのか……どっちだろう。そんな答えの出ないことを考え、意識のない琉璃さんを背中に乗せて必死で這い蹲って森を進む。

「俺さ、今まで真剣……に……修行してたのかな」

【急にどうした？】

知識が足りないから基礎を教わり、足りない知識を覚えてきた。だけど、俺は真剣に修行してたのかなと思ってしまう。

「だって……よ、蛍も美神さんもヒーリング出来るだろ？でも俺は出来ねえ」

【……横島、人には相性がある】

「そうだとしてもさ、それに甘えてたんじゃないか？」

額から汗が零れ落ちて、それが目に入る。その痛みに顔を顰めながら、必死に前に進む。背中に琉璃さんの感触を感じるが、それが性につながる事は無い、今の俺に考えられるのは修行不足の言葉だけだ。

【お前は足りない知識を身につけている段階だ、2〜3年の修行で、10年近く修行してる人間に追いつけると思うか？もし追いつけると思うのならば、それは慢心だ】

お前に才能はある、だかそれは時間を掛けて伸ばす物だと心眼に叱られる。

「そういう……もんかなあ」

【当たり前だ、むしろ数年で並みの霊能者を越えているお前の方がよほど規格外だ】

知識が足りないと言う言葉を言い訳にして、俺は本気で修行していなかったのではと思う。これは何を言われても、多分消えることは無い。

【横島！洞窟だ！】

「……やっとかよ」

切り立った崖の中にある洞窟を見つけた心眼に心の底から感謝して、そちらに手を進める。2人分の体重が手にかかり、皮がずる剥け鮮血が滴っているが……あれくらいなら根性で進んでやる。

【……大丈夫だ、中に生物の気配は無い】

心眼に霊視で中を確認して貰ってから、洞窟の中に這って入る。岩に背中を預け、漸く一息つけた。だけど、まだ駄目だ、このままでは2人とも凍死する。指を噛み切らなくても、血が滴り落ちているから楽で良いなと笑い、空中に文字を刻む。

【横島！馬鹿、今霊力を使うなッ！】

「い、今……使わないで……何時使うんだよ、心眼」

俺だって、これ以上霊力を使うのは危険だって判ってるさ。だけ

ど、だけどさ……このままじゃ、死んじやうんだよ……琉璃さんが。

「人が死ぬのは……見たくねえよなあ」

【馬鹿者ツ！お前が死ぬぞツ!?止めるー!】

心眼の制止の音がうるさくて、バンダナを引きちぎるようにして外す。その瞬間心眼の音が聞えなくなる、心の中で心眼への謝罪を告げる。でも止められても、俺は止まれないんだ。

「急急如意令……火精……招来」

空中に刻まれた血文字が地面に落ちて、温かい霊力の火が灯る。時間は掛かるけど、これで凍死の心配は無いはずだ……一安心すると同時に俺の意識は深い闇の中へと沈んでいくのだった。

く 琉璃視点

目を覚ました時、私の目の前に広がったのは岩の壁とその岩の壁を明るく照らす炎の明かりだった。何で自分がここにいるのかと言うことが判らず頭がぼんやりとしていたが、徐々に暗がり目目が慣れてくる。

「横島君ッ!?!」

私と向かい合うように岩壁にぐったりとした横島君を見て、慌てて立ち上がり横島君に手を伸ばす。その身体は冷え切っていて、顔色も青く死人と見間違うような顔色だ。

「冷たい……横島君！横島君ッ!?!」

声を掛けるが横島君は身じろぎ一つしない、慌てて口元に手を当てる。

「……い、息はしてる。で、でもこのままじゃ」

手に僅かに息が当たるけど、その呼吸は余りにも弱々しい。このままでは数刻も持たずに横島君は死ぬ……温めないといけないと思ひ、炎に手を翳して気が付いた。これは普通の炎じゃない、今こうしている間も横島君の霊力と体力を消耗させている。

「どうして気付かなかったのッ!?!」

普通なら気付いていた、だが私も山の冷たい水で身体のコまで冷え切り、弱り切っていた為が弱り切っていてそこまで気が回らなかった

た。横島君は自分の霊力と体力を削りながら、「私」にだけ炎の熱を向けていたのだ。私の服だけが乾いていて、横島君が今もびしょ濡れなのと心眼を巻いていない理由が判った。

「心眼！心眼起きてッ！」

【琉璃か！助かったぞ！】

横島君の手が握り締められるようにしてたたまれていた心眼を無理やり引き抜いて広げる。すると、すぐに心眼が浮かび上がり、思わず安堵の溜め息を吐いた。

【まだ間に合う！ぎりぎりだが、霊力は残ってる！】

心眼がそう叫ぶと洞窟を明るく照らしていた炎の感覚が変わる。本当なら炎を消すべきなんだろうけど、外はもう日が落ちている。獣除けにもなるから炎を完全に消す訳には行かないと判断したのだろう。

【私の神通力と竜気で炎を維持する。これで横島の霊力と体力はこれ以上減ることはない……減ることはないが】

「判ってる、横島君の体温が下がりすぎてるのよね」

濡れた服を着たまま何時まで気絶していたのか判らないが、死ぬ一歩手前まで身体が冷え切っているのは間違いない。ちよつと目を逸らしながら、濡れている横島君の服を脱がしていく、シャツにGジャンとGパンといつもの姿だから何とか脱がせる事が出来た。霊力の炎だから燃えることは無いので脱がした横島君の服を火の傍に置いて乾かす。

【……琉璃、こんな事を頼むはどうかと判っているが……】

「判ってる、判ってるから、最後まで言わなくて良いわよ」

洞窟の中だから火の温度で温まって来ている、だけど横島君にはまだ体温が足りない。私がこうして普通に動けるのは横島君のおかげだし、谷から落ちる時に横島君が護ってくれたから私は身体の何処も怪我をしていない……だけど、横島君は酷い有様だ。足には深い刺し傷があり、両腕も手の皮がずる剥けて血が今も滴り落ちている。

「……………」

自分よりも年下がここまでやってきているのに、恥ずかしいとか

思うほど私は人でなしではないつもりだ。躊躇っている時間も恥ずかしがっている時間も無いので手早く巫女服を脱いで下着姿になり、横になっている横島君を正面から抱き合うように抱きしめる。彼の肌と触れた私の肌に濡れた感触と共に冷え切った体温が伝わってくる。

(弱い……心音が弱すぎる)

背中から抱きしめるかと少し悩んだ。だが余りにも横島君の心音が弱すぎた上にすっかり冷えてしまっていた、それに霊力があり得ない程弱くなりすぎている……これでは体温が回復する前に横島君が死んでしまう。

「駄目よ、逝ったら駄目……そっちに逝ったら駄目よ」

逝くな、逝くなと繰り返し返し声を掛け続ける。声だけではなく、私の霊力と体温を横島君に譲渡する為により一掃密着すると彼の胸へと押し当てて張り付いていた私の胸が形を変えて水音を立てる。横島君が魔人に近くなっているのならば……本来ならば喜ぶべき事ではないが、緊急事態である今はその事が今はその事が正に不幸中の幸いだった。彼の身体……その身体の質は神魔に近いはず、それならば神代の技で霊力を譲渡する事だって決して不可能ではない。

【琉璃、気をつける。横島の霊力は無尽蔵だ】

「……それは、もう少し早く言って欲しかったわね」

霊力が横島君に触れている場所から凄まじい勢いで吸い込まれていく……しかもそれだけではない、横島君と私の魂の波長が合っているのが判る。

「これは……きついわね」

【自我を保て、危険だと思うなら、私を手首に巻け】

心眼の申し出をありがたく受け取り、心眼のバンダナを手首にきつく結ぶ。それのおかげか、横島君に吸い込まれていく私の霊力の勢いが少し弱まって行った

「……心眼、ごめん。多分……寝ちやう」

【結界は私が維持する、すまないな巫女にこのような真似をさせて】

「……気にしないで……良いわよ」

巫女ではある、だが巫女であると同時に私は人間だ。助けてくれた人を見捨てるような真似は出来ないのだ……これは心眼に言ってもいいかな。

「……私、横島君って結構好きなのよね」

その言葉を最後に私は霊力を横島君に譲渡した事への反動で眠りに落ちた、でも横島君を逝かせない為に、その背中に回した手の力を緩めることは無かった。

「あ、あああ……あの、る、るる……琉璃さん」

「ん……んん？」

どもっている横島君の声が聞えて、意識がゆっくりと覚醒してくる。

「おはよう」

「おお……おお……はよう……ごございます、あ、あああ……あの、こ、これは……」

その慌て含めく姿にくすりと笑ってしまう、横島君の周りにはあれだけ女の子がいるのに下着姿の私を見るだけでこれだけうるたえていと可愛いと思えるから不思議だ。

「とりあえず……服を着ましようか？」

両腕で胸を隠し、微笑みかけると横島君はその顔を真っ赤にして、まるでブリキ人形のように何度も何度も頷く。

「は、ははは……はひッ！」

互いに背を向けて乾いている服に着替える、昨日服を脱ぐ前に感じていた気恥ずかしさとかは不思議と無かった。

「横島君」

「は、はい、そ、そのなんで……抱き合って……」

顔色が目まぐるしく変わる横島君。赤くなったり、青くなったり、私を気恥ずかしそうに見つめて来たり、その反応を見て愛おしく見えてしまうのは何でだろう。

「おねーさんの裸は安くないんだからね？」

「え!?!えうえう……」

目を白黒させる横島君に向かって私はウィンクする。蛍ちゃんや

くえすには悪いけど、命を助けられたこともある。それに元々横島君のことは好意的に感じていた、だから本気になってしまうのは仕方ない事だ。

（琉璃……か、蛭とくえすととはまた違うが……悪くはないか）

横島と琉璃に声を掛ける事はないが、心眼は横島の魂の中で琉璃も横島の伴侶に相応しいかと呟くのだった。

くガープ視点く

「レイの反応が途絶えた最後の記録はどうなっている？」

「……は、はい。コブラ眼魂の反応を最後にき、記録しています」

私の問いかけに蘆屋が小刻みに震えながら、レイとの反応が途絶えるまでの最後の記録の報告をする。コブラ眼魂を作り上げたのは、蘆屋だ。その責任を追及される事を恐れるのは当然の事、だが私は怒り等は抱いていなかった。

「単独起動は不可能ではなかったと言うことか……聞いておくが、眼魂に魂は宿っていたのか？」

「い、いえ。コブラの性質のみを組み込んだ眼魂です」

魂が宿っていないはずの眼魂……その段階で眼魂として破綻している。だが蘆屋の作成した眼魂は動物の性質のみを組み込んだ弊害であるが、それであるがゆえに量産の利く眼魂であった。

（面白い、これだから未知と言うのは面白くて仕方ない）

他の眼魂、ハルピユアやサイクロプス、ゴレムではない反応だ。罰せられる事を恐れている蘆屋だが、新しい発見をした有能な部下を罰するつもりはなかった。

「使い魔を飛ばしておけ、レイを発見次第。液状化した狂神石を投与するように、また横島を見つけたら回収しておけ」

「は、はい……判りました」

罰せられないことに拍子抜けした表情の蘆屋が深く一礼して、私の研究室を出て行く。研究とは失敗と成功の繰り返しだ、レイの反応が途絶えたのは正直不味い展開だが、コブラ……すなわち蛇の眼魂に蛇



に関する神性が宿ったかもしれないと考えればこれは紛れもなく幸運だ。

「問題はリミットに間に合うかどうかだな、やはり調整不足か」

複合神性アルターエゴプロジェクトの試作の0番であるレイには複数の神性が組み込まれている、量産型は1柱だけとする事で安定度を増している。

「やはり最初の1体だからと、気合を入れすぎたか」

出力や性能は紛れもなく上級……いや、最上級に匹敵する。だがその反面、極めて不安定であり狂神石を定期的に摂取させ魂に負荷をかけなければ自我に目覚めてしまうかもしれない……戦略兵器としては失敗作も良い所だ。

「……反応が途絶えて4時間か」

摂取させるリミットは当に過ぎている、後は体内に残っている狂神石とファントムコールドーの中に内蔵されている狂神石の貯蔵が何処まで持つかだが……と、ここまで考えた所で私は自分が笑みを浮かべていることに気付いたのだ。

「そうか、これは私に取っては望むべきことか」

自らが創造した者が刃向かう、味方として運用するよりも敵に回った方がデータを取るのは相応しい。自分が作り出したモノが自分に逆らうかもしれない……それを楽しいと思うとは……。

「私はどこまで行っても科学者と言うことか」

自分の想定を超えることが楽しくて仕方ない、自分の想像を創造物が超える事が楽しくて仕方ない。これは科学者としての悪癖と言っても良いだろう、ただ1つ言えるのは……私に取ってはどちらでも良いと言う事だけだ。

「どうなるか見届けるくらいはしてやるさ」

私の創造物だ、それくらいの慈悲はある。それにあの神霊から奪い取った神性のおかげで、日本に神魔の注目が集まっている。今の内に種を撒こう、まだまだ私達がやるべきことはあるのだから……。

「い、痛い……頭……が……痛い」

レイもまた横島と琉璃同様川から這い出て、森の中を彷徨ってい

た。激しい頭痛と全身を襲う疲労感……どうすればいいのか、何をしたらいいのかそれすらも判らないままレイは森の中をさまよい歩く、歩みを止めたいと思っても頭の中に響く声がそれをさせない。

『立ち止まるな、進め。止まれば死ぬぞ』

『大丈夫、この道であつてるわ』

『苦しいけど、頑張つて立ち止まらないで』

頭痛の中でも聞える声に導かれながら身体の痛みと疲労感を感じながらもその歩みを止めることは無いのだった、レイは気付かないがガープから渡された神霊眼魂……赤黒い光の中から僅かに零れる鮮やかな光、狂神石によつても完全に狂わなかった眼魂に宿る神霊が残された僅かな力を振り絞りレイを救おうとしていたのだ、神霊達に導かれ進むレイの進む先には横島達が身を休めている洞窟があるのだった……。

リポート28 切り開け、己の未来 その8へ続く

## その8

リポート28 切り開け、己の未来 その8

〜横島視点〜

ぼんやりとした意識の中ずっと聞えていたのは、「逝くな」と言う声だった。どこに逝くなと言われてるのは判らなかつたが、とにかく今自分が進もうとしている方向に逝つてはいけないのだということに判つた。後……

「よ、良かったのだわ。あ、危ない所だつた」

どこかで聞いたような心底安堵した様子の少女の声が聞えた事も覚えていて。上下左右、前後の感覚も判らないが逝くなと言う声と俺の手を引いた誰かの存在……それがあつたから俺は多分死なないで目を覚ますことが出来たのだと思う。

「……んあ」

寝ぼけた声と共に目を覚ました俺が感じたのは、包み込むような暖かさだつた。だけど、身体が冷えすぎていたのと、血を流しすぎていたのが原因だと思うのだが、頭がまともに回らず。気絶している間に救助されたのだと思い、暖を取ろうと思ひ殆ど本能的にその暖かい物を抱き寄せた。

「んんうん……」

だがその時に聞えてきた艶やかな声に一気に意識が覚醒し、そして俺は混乱した。俺はトランクスこそ穿いていたが全裸に近く、暖かい……俺が最初にうりぼーだと思つていたのが下着姿の琉璃さんで、俺の胸板で琉璃さんの胸が潰れているのが見えたのだが、下着の姿は見え、雪のように白い肌が目の前一杯に広がっていた。

「?!?!」

心臓が止まってしまうかと思つた、目覚めてすぐ目の前には殆ど全裸の琉璃さんで、しかも俺も殆ど裸で抱き合つていて、俺の両腕はラベンダー色のショーツに包まれた琉璃さんのお尻を驚つかみにしていて……柔らかいじゃなくてツ!!。

「あ、あああ……あの、る、るるる……琉璃さん」

腕の中の琉璃さんに声を掛ける、この体勢は不味い。本当に不味い、必死に他の事を考えていないと下腹部が起きだしてしまいそうだった。

「ん……んん？」

俺が声を掛けると琉璃さんの真紅の瞳がゆっくりと開かれる、その美しい赤に俺は魂まで奪われてしまうのではないかと本気で思った。

「おはよう」

「おお……おお……はよう……ございませす、あ、あああ……あの、こ、これは……」

極自然に挨拶をしてくる琉璃さんに対して、俺は噛みまくりで目を逸らして、琉璃さんの身体を見ないようにするのに必死だった。

「とりあえず……服を着ましようか？」

そしてそんな俺を見て、くすりと笑った琉璃さんは両腕で胸を隠し、服を着ましようとして声を掛けてくる。

「は、ははは……はひッー」

俺は逃げるように琉璃さんに背を向けて、Gパンを穿いてTシャツを着る。男の着替えなんて一瞬だが、巫女服の琉璃さんは時間が掛かる。洞窟の壁を見つめて、背後を見ないようにするのだが……。

(うつ……これは)

狭い洞窟なので琉璃さんの甘い香りが充満している上に、衣擦れの音が聞えてきて心臓が爆発しそうなくらい高まるのが判る。

「横島君」

「は、はい、そ、そのなんで……抱き合って……」

俺の考えを見抜いたかもしれない、俺は顔を青くさせ、先ほど見た琉璃さんの身体を思い出して頭に血が上ったりして、多分100面相みたいになつていたと思う。

「おねーさんの裸は安くないんだからね？」

「えっ!えうえう……」

琉璃さんの言葉に俺が何かしてしまったのではないかと、俺は頭に乗っていた血が一気に下がったように感じた。

「私が目を覚ましたら、横島君が低体温症になりかけてたから人肌で温めることにしたのよ」

2人とも着替え終えると琉璃さんがどうして殆ど裸で抱き合っていたのか、その理由を教えてくれた。

「ご迷惑を掛けてしまったようではないですか」

「迷惑なんてとんでもないわよ、私は助けられた側だしね。助けられて、そのままって言うのは私の性じゃないの」

ウインクしながら言う琉璃さん、でもある意味良かったと思う。もしこれで一線とかを越えてしまっていたら、俺はそれこそ命を懸けて償わないといけない筈だ。男の裸なんてたいした事はないが、女性の裸は違うのだから。

「一晩経ったが、シズクが現れないのはおかしい」

「そうね、多分こちら辺が結界で覆われているか、それとも霊力が濃くて思うように探せないか……それとも両方かね」

「うむ、結界に覆われているなら私が見つける、霊力の濃度が濃いならば」

「私が何とかするわ。これでも神卸しの巫女だからね、膨大な霊力の扱いには慣れてるわ」

心眼と琉璃さんがどうやって美神さんと合流するのかと言う話をしているのを聞きながら、震える足に活を入れて立ち上がる。

「横島君、大人しくしてなさい。血を失いすぎてるのよ」

【無理をするな、大人しくしているろ】

文珠は作らないように言われているので、心眼が俺に使った物しかない。霊力も余り使えないが、それでも栄光の手は使える。

「食料を取ってくる、川で魚くらい取ってくるよ」

自分出来る事をしたい、俺だけが足手纏いになるのは嫌だと思いうと、琉璃さんに手を引かれた。

「つつと、わぷっ!」

殆ど力が入ってないのに、俺はバランスを崩し、再び琉璃さんに抱きしめられる形になってしまった。

「焦らなくて良いの、3人寄れば文殊の知恵って言うでしょ?」

大丈夫よと言って頭を撫でられると、なんと言うか気持ちが悪く落ちてくる。だが、それと同時に恥づかしさもだが……何故か、その恥づかしさが心地よいと思えるから不思議だった。

「私は知ってるからね、横島君が頑張ってるの。だから無理をしないで、おねーさんの約束。良いわね？」

「……はい。すいません」

「よろしい、じゃあ、2人で川に向かって、そこで川魚を取れるか考えて見ましよう。心眼もそれで良いわよね？」

琉璃さんはそう笑うと、俺の背中に回していた手を退けて、穏やかに笑う。その笑顔を見て……多分、俺はこの人には一生頭が上がらないと思った、美神さんとはまた違う親しみを感じていた。

「そういえば、さつき心底安堵したって顔をしてたけど、私が嘘を付いてたらどうする？」

「うえ？」

「ふふふ、もし一線越えてたら……責任取ってくれる？」

「取ります、何をしても」

男としての責任を取らなければならぬ状況になっていたら、俺はその責任を果たす必要があると思う。

「ふふ、冗談よ。でも……横島君なら良かったかもね」

普段冗談をよく言う琉璃さんだけど、その時だけは本当の事を言っている……俺はそう感じるのだった。

〈蛍視点〉

横島と琉璃さんは行方不明になって、1晩経った。夜中の捜索は危険と言う事で全員引き帰してきたが、有力の手がかりは無かった。

「水で匂いが途絶えてるのよ……途中まで、ここら辺までは匂いを追えたわ」

「滝になってる辺りって事ね。つまり2人は滝を落ちて、そこからさらに先……ここら辺に流されてるって事ね。もしくは支流に入って、ここら辺か……」

タマモの報告を聞いて、美神さんが地図に丸を付ける。それは何の因果か、御神体が安置されているはずの峠の近くだった。

「シズクさん、転移で移動出来ますか？」

「……駄目だな、高密度の神通力が集まっている。恐らく、いや、確実に神域だ」

神通力と霊力が密集して作られた神域。そこにいるから、転移は出来ない。シズクが断言した。だがそれは決して不幸な知らせではなかった……。

「少なくともセンサーは無事と言う事でござるな」

「川から上がっていればって条件はつきませんが……恐らくは大丈夫でしょう」

シズクが転移出来ないほどの高密度の神域となれば、ガーブ達もおいそれとは動けない筈……となれば問題は2つだけあるだけだ。

「私は同行できないって事ですわね」

「私もですわね」

先祖がえりとビュレトさんの魔力を持つくえすはその神域に入る事が出来ない、昨日に引き続き氷室神社で留守番となる事が決定した瞬間だった。

「ここで待ってるしかないって嫌ね」

「そうですわね」

必ず横島と琉璃さんを連れて戻ってくるといって出発した美神さん達を見送った後、私とくえすは縁側に並んで座って待つ事しか出来なかった。無事な可能性があるのは嬉しいけど、よりによって高密度の神域とか無いわ。

「あのうりぼーを見つけた山では平気だったんですの？」

「痩せ我慢だったけど？」

定期的に魔力を開放する事で身体の作りが変わってきている。あの時は、ちよつと身体が重いなー程度に感じていたけど、多分今では絶対に無理だと断言できる。

「ブリュンヒルデさん達は？」

「もう少しで合流してくれる筈ですわよ」

そっか、そうですわつと言う会話で私達の会話は途絶える、元々友人と言う関係でもない。どっちかと言うと横島を奪い合う敵同士に近いし……。

「横島無事かなあ」

「……川に流された以上、服はびしょ濡れ、しかも雪山で濡れた服……琉璃に食われてなければいいですが」

何を馬鹿な事と言う事は出来なかった。横島は変身していたので確実に霊力と体力を失っている、そうなれば陰陽術なんて使えないわけで……そうになると暖を取れる方法は1つ、人肌だけになつてしま

う。

「琉璃さんって横島さんの事好きでしたっけ？」

話を聞いていたおキヌさんが縁側の上に浮かびながら尋ねてくる……正直判らないけど、琉璃さんは横島に何回も助けられているわけ……。

「琉璃って結構横島の事が好きないように思えますわね」

「……私も」

横島の好みの年上でナイスバディの美女だ、しかもそんな相手と雪山で1晩……死んだとか以上に最悪の予想が脳裏を過ぎる。

「考えをへんな方に誘導しようとしてるでしょ？」

「悪い方向に考えるよりかはマシですわ」

「いや、十分悪い方向ですけど!？」

横島や琉璃さんが生きていてくれるのは嬉しいけど、戻ってきたら失恋しているとか本当お願いだから止めて欲しいんだけど……。

「まあ妾とかありますわよね」

「なんでそれを容認出来るの!？」

「私は横島が自分の物になるのが一番ですけど、無理なら自分が横島の物になるのもありだと思えますわ」

そしてくえすと自分の余りにかけ離れた恋愛感覚に蛍とおキヌは絶句するしかないのだった……。

「蛍さん達、落ち込んだり、叫んだりどうしたのかな？」

「なに色恋は複雑と言うことじゃな、所で舞は横島がお前の兄なつた



らどう思う?。」

「え? 嬉しいけど?。」

【そっか、それならばワシが言うことはないの】

「え? 横島さんは琉璃さんとお付き合いしてるだけか?。」

【ワシの見立てでは奪い合いになってるって所かの】

「そっかー、横島さんは良い人だべ、仕方ないだな」

「優しい人だしね、でも私は横島さんがお兄ちゃんならそれはそれで良いと思う」

恋愛を知らない舞と、横島の人柄からモテるのは仕方ないと笑いあう早苗を見ながら、シズは顔を上げる。

「シズ、神魔が近づいておるぞ」

「男と女、男のほうは馬、女は空を飛んでいる」

周辺を警戒していたナナシとユミルの報告を聞いて、その方角に視線を向けるシズ。膨大な神通力と魔力が近づいてくるのを感じながら、シズは笑みを浮かべる。ゆっくりとだが、反撃の準備は整い始めているのだった。

く琉璃視点く

「横島君がいてくれて本当に良かったわ」

「そうです……かね?。」

栄光の手で川魚を捕まえてくれたから、今こうして焼き魚を口にすることが出来ている。雪解け水が流れ込む溪流は水が冷たく、とても水の中に入れるレベルではなかった、そんな中横島君は栄光の手を網状にして一網打尽にしてくれたのは本当にありがたい。

【これだけ川の側にいても、シズクは現れない……か】

「やっぱり神域か結界ね」

川の側で食事をしていても、横島君には恐ろしいほどに過保護なシズクが現れない。洞窟で話していた、結界か神域かと言うのが真実味を帯びてきた訳だ。

「とりあえず敵が出ないだけでもありがたいって思うべきね」

「そうですね、俺も反動出てますし」

足に太い木の枝が刺さっていたと言う横島君は足に傷を負っているし、私を背負って匍匐前進で進み続けたからその手の平と腕も酷い有様だ。そしてそこに変身のリバウンドが重なれば、横島君は戦闘が出来る状態ではない。

「ごめんね、あんまり効果が出なくて」

「い、いやあ、大分楽ですよ。本当ですよ?」

ヒーリングを施したのだが、傷は殆ど回復しなかった。変身のリバウンドが原因か、魔人に近づいているのが原因かは定かではないが、横島君には普通のヒーリングの効果は薄いようだ。

「洞窟の場所は覚えていて、とりあえず神域の切れ目、もしくは結界の基点を探そう」

美神さん達と合流する為にも行動するしかない、魚の骨を地面に埋めて私と横島君は森の中を歩き始める。

「大丈夫?」

「っ平気です」

足を踏ん張れない横島君は明らかに歩みが遅い、大丈夫か?と尋ねると大丈夫と返事を返してくれるが、その額には脂汗が浮かんでいる。

(最悪の場合を考えたほうが良いかも知れないわね)

タマモちゃんとしろちゃん、それにうりぼーとチビ、ノツブと牛若丸に美神さんと小竜姫様にシズク。くえすと蛭ちゃんは先祖返りなので高密度の神域には侵入しにくい。となると私達を探しているのは9人、一晩経っている事からある程度は私と横島君が流れ着いた場所を逆算して捜索してくれている可能性は高い。

「もう少し調べたら、洞窟に戻りましょう。少し熱が出て来てるみたいだし」

「……すみません」

ハンカチで汗を拭ってあげて額に手を当てると尋常じゃなく熱い、昨日の怪我の影響で身体が熱を持ち始めているのだろう。そんな相手を森の中を連れ回すわけには行かない

「……文珠は最後の1個があるぞ」

「それは最終手段にとっておきたいから」

万能の霊具「文珠」確かにその能力は凄まじいの一言に尽きるところ。だけど、横島君への負担が大きくて碌に研究していない霊具にそこまで頼る事は出来ない。レイも周辺に居ることを考えれば、それはレイからの逃亡用に残しておくべきだろう。

「ここに札だけ配置して戻りましょう」

除霊の最中に逸れた時用の救難信号を出す札を木の幹に貼り付けて、引き返す事を決める。やはり今の状況の横島君を連れ回す事はリスクが大きすぎる、かと言って1人で残すのも危険だ。あの洞窟で救助を待つか、時間を掛けてヒーリングで足の傷だけでも癒すまで洞窟に隠れておくべきだと思う。本来川に向かったのは食糧確保と、シズクが見つ付けてくれないかって言う期待を込めた物だけど……シズクが現れないのならば、地力で美神さん達と合流するのは難しいと思う。

「俺なら大丈夫ですよ」

「大丈夫とか、大丈夫じゃないって問題じゃないのよ。聞こえる?」

熱でぼーっとしている横島君は不思議そうにしている、やっぱり注意力も散漫になってるわね。横島君が大丈夫って言っているだけでも洞窟に引き返すべきだと判断する。

「滝よ、滝が近くにある。私達が滝壺に落ちたのかは判らないけど、何の装備もなしで崖は登れないわ」

「ここが一番私達が川に落ちた所に近いが、滝は登れない。それにここまで相当消耗しているだろう、引き返すぞ」

滝を登れるような装備は当然無いし、栄光の手が伸縮自在と言っても、今の酷いコンデイションの横島君に無理をさせるわけには行かない。つまり、私達に出来ることは、自分達がこの近くにいると言う痕跡を残し、美神さん達が見つ付けてくれるのを待つしかないのだ。心眼も強い口調で引き返すぞと横島君に告げる。

「と言うわけで引き返しましょう。肩、貸してあげるわ」

私も感じていたが、足取りは怪しく、木にもたれかかるようにして

呼吸を整えていた。変身の反動と怪我でまともに動ける訳が無いのだ、これ以上は無理だと私も心眼も判断し、洞窟に戻るから肩を貸してあげると言う。

「だい……………」

大丈夫と言おうとしてよろめいた横島君を抱き止める。霊力の枯渇から回復したとは言え、十分な医療環境が整っていた訳ではない。横島君の体調は最悪に近い、弱い、連続する呼吸を見てもそれは間違いない。

「戻りましょう、今は無理だわ」

「……………はい」

自分の体調は自分が一番判っているのだろう、悔しそうに唇を噛み締める横島君の頭を撫でる。ここで無理をしても、何も変わらない。やっぱりリスクはあるけど、洞窟で身体を休めてヒーリングを使って体力が完全に回復するまで歩き回るのは避けたほうがいいわね。そう判断した、脱力する寸前の横島君に肩を貸して洞窟へ引き返そうとした時、心眼の叫びが周囲に響いた。

【待て！誰か来る！凄い神通力だ】

心眼の言葉に私と横島君の顔に緊張が走り、茂みが大きく揺れるのと同時に誰かが倒れこんでくる。

「……………琉璃さん……………彼女は……………」

「レイ……………ね」

法衣のような服と黄金のような金髪……………その白く透き通る肌は無数の切り傷を負ったレイが私と横島君の目の前に倒れていた。

『いい所に居てくれた、彼女を助けてくれ』

『正直私達もそろそろ限界でしたから』

レイの身体から溢れ出した神通力……………陽炎のように揺らめく神通力が揺らめく人影となり、私と横島君に声を掛けてくるだった。

〈???視点〉

レイをここまで導いて来た、レイの体力が限界を向かえる前に2人

の人間に出会えたのは紛れも無い幸運だった。

「どういうことか説明してくれますか？」

ぐったりと倒れているレイを警戒する2人の人間……横島と琉璃の2人はレイを怪訝そうに見つめている。

『詳しく説明するのは難しいのじゃが……ワシもこやつもレイを形作る神性の1つと違ってくれれば良い』

『すつげえ、イケ魂、こんなの見たことねえッ！』

『おい、馬鹿者。真面目にやれ真面目に』

決して馬鹿じゃないと判っているが、真面目な話をしている時にふざけるのは止めて欲しい。

「形作る神性と言うことは、貴方達はもう神としての姿は……」

『いや、気にする事は無い。我等は古き神、もはや人間にも神魔にも関わらぬと隠遁した身だ。その段階で死んでいると思ってくれて構わない』

レイを形作るのは世界から隠遁した古き神々。この世界から去った段階で、既に死した身に等しい……まあワシは不死なのだが、眼魂とやりに封じられて、劣化した神性として自分の人格が再生されているに過ぎないと告げる。

「……すいません、えつとどういふことなんですか？」

『簡単に言うとうとすね、オリジナルから引き離された性格のコピーと思ってくだされれば大丈夫です、オリジナルと似た性格と記憶を持ちますけど、オリジナルでは無いと言うことです』

説明されても今一理解していない様子だが、ワシ達にも時間が無い。

『フロントムコールドーを外しておけば、レイが好戦的になることは無い。あれは変身だけではなく、レイの制御装置でもある』

『今は狂神石がないから私達も自我を保てますが、それも時間の問題』  
試作型として作成されたレイは他の量産型と違い、善性の神の神核をこれでもかと組み込まれたレイは、この時代に生まれた全く新しい神と言える

『レイの自我を芽生えさせろ、レイには善悪が無い、己が何をすればい

いのか理解していない。だから命じられた事を行動するしか出来ない』

『でも決してレイは悪ではありませんわ、狂神石から遠ざければ自我は芽生えます。与えられた仮初の人格と自我ではなく、彼女自身の本来の自我が芽生えることでしょう』

狂神石によってワシ達も何時まで自我を保てるか判らない……だがこれだけは伝えておかなければならない、狂神石が枯渇し、そしてあの忌々しい蛇がレイに干渉した今が最大の好機だ。

「自我が芽生えれば、味方になつてくれると言う事でしょうか？」

『そこはレイ次第じゃが、完全に狂神石に吞まれれば、恐ろしい脅威となる。それを避ける方法と思つて欲しい』

レイの力は凄まじい、あのガープでさえもリミッターをつけることを選択するほどに……だが狂神石に完全に吞まれ、リミッターと制御が必要なくなった時、レイは人間にとつても神魔にとつても最狂最悪の存在になる事は間違いない。

『ガープ達が接触する前に、疑問を抱かせる、自分のあり方に困惑させろ』

『そうすれば、レイは考えるでしょう。1度芽生えた心を消す事は出来ません』

本当はもつと伝えたいことがある、だけどそれを全て伝える時間はもう無い様だ。

『ワシ達は神であるがゆえに、狂神石には勝てない』

『もうすぐ完全に塗りつぶされるでしょう』

ワシ達全員で干渉して、自分が自分であると言う事を意識させることは出来た、だがそこまでだ。そこから先は人とのふれあいではか芽生えることが無い、人間に頼むしかないのだ。

『目覚めればレイ本来の性格と人格となるだろう、その時に色々と声を掛けてやって欲しい』

これだけ声を掛ける事が出来れば、少なくとも敵として行き成り殺されると言うことは無いだろう。その言葉を最後にして、ワシ達は再び眼魂へと封じ込められて行く、その間にレイのぼんやりとした声が

響く、何も判らないレイが森の中に放置される事がないことに安堵し、レイを託した2人がレイをガープの呪縛から解き放ってくれる事をワシは心から祈るのだった。

くレイ視点く

私を見上げる2人の人、私はその2人を見つめて、見つめて……そしてお互いにどれくらいそうしていたか判らないが、私はゆつくりと口を開いた。

「誰？」

誰か判らない、どこかで見たような気がしないわけではないんだけど……相手が誰か判らない。

「……これって」

「多分子供と同じ状態、これが本当のレイって事ね」

ぶつぶつ何か呟いているけど、それも何か判らない。腕を見つめる……何かがここにあったような気がするんだけど……あると凄く嫌な気持ちになったのを覚えている、だから無くなっていて良かったと思う。

「名前はわかる？」

「……レイ、私は……レイ」

名前は覚えている私はレイ、そう、レイだ。これだけは忘れてはいけない、大事な事。

「俺は横島、よろしく」

「……横島。ん、覚えた」

赤い布を巻いた青年の名前、その名前も顔もどこかで見たような気がするんだけど、やっぱり判らない。

「私は琉璃、よろしくね。レイ」

「……ん、琉璃。よろしく」

空みみたいな髪をした赤い目の女性……彼女も見たことが在るような……無い様な……そんな事を考えていると、懐に何か入ってるのに気付いた。

「何これ？」

鏡みたいな何か、なんでこんなものを持っているのか判らなかつただけど、横島と琉璃がそれをジツと見つめている。

「欲しいの？」

「え？く、くれるの？」

「欲しいならあげる」

横島が欲しいと言うならあげると言つて、琉璃に鏡を押し付け、横島の腕を掴む。

「ぽかぽか……」

「……さいですか」

暖かそうと思つていたけど、実際にくつついても本当に暖かい。この暖かきがあるなら、あんな重いだけの鏡なんて要らない。

「はふうー」

何か眠くなつてきたので、横島の腕をしっかりと抱えたまま目を閉じる。今まで冷たい、寒いと言うことしか覚えてなかつたけど……この暖かいは覚えておきたい……私はそう思うのだった。

「あの琉璃さん、これつて完全に子供じゃ？」

「そうみたいね。このファントムコールドを外したのが良かったみたいね、それよりも、御神体も入手出来たのは大きいわね」

「でもレイはどうすれば？」

「とりあえず、横島君に任せるわ」

眠つてしまったレイは横島の手を放すことはなく、外見は横島と同年代の少女なのに精神年齢は5歳ほどの幼児と大差が無かつた。

「ファントムコールドと、狂神石……か、このまま小竜姫様に会えたらレイを預けても良いかもしれないわね」

「そう……ですね。前も会いましたけど、この子つて戦うこととかに向いてないように思えますしね」

穏やかなに寝息を立てるレイ、そんなレイを見つめる横島と琉璃。レブナントとして出会つたのは2回だが、こうしてみるレイにレブナントとしての敵意も脅威も無く、先ほど消えてしまった2柱の神が言つていたことが真実だと信じざるを得ず。横島と琉璃はレイを戦



いから遠ざけるべきだと考えていた。だが洞窟の天井に張り付いている金色の蝙蝠が、一瞬の内に洞窟から飛び立っていったのに最後まで横島と琉璃の2人は気付く事は出来ず、悪意はゆっくりと横島達へと迫っているのだった。

横島と琉璃がレイを見つめている頃、美神達は2人が拠点としている洞窟の近くまで訪れていた。

「ぶぎ、ぶぎゆうー！！」

「ココーンツ!!」

「ワンワンワンツ!!」

匂いを見つけたのか興奮した様子うりぼー達。だが、肝心な道がない……やはり、横島と琉璃は滝の下に落ちていたのだ

「シズク……は、もう先行してるみたいね。ザイルで降りましょうか？」

「いえ、危険ですので私が抱えて滝を降ります。ノツブと牛若丸は先に先行して、下りる場所の確保をしてください」

【了解じゃ、行くぞ。牛若丸】

【はい！これでやっと主を助ける事が出来ます】

英霊である2人にとってこれくらいの高さはどうと言うことは無く、小竜姫に言われると同時に滝の上から飛び降りていく。

「小竜姫様、気付いてる?」

「ええ、嫌な流です。急ぎませうか」

小さくなっただうりぼーを抱えて、滝を降りていくチビと、UFOの上でシロとタマモを乗せて降下していくチビノブを見つめながら、2人は顔を上げる。今まで快晴だったのが、急に曇ってきた。山の天気は変わりやすいと言うが、ここまでの変化はおかしいと感じていた。

「急ぎませう、横島さんも心配ですし」

「ええ、敵が出て来ても困るしね」

横島は変身でダメージを受けている、そんな相手を庇いながら戦うのは以下に美神達にとっても厳しい。敵が現れる前に、横島と琉璃を救出して氷室神社へと戻ろうと考えていた、だがそんな考えを嘲笑う

かのように悪意は美神達に向かって、その牙を向けようとしているの  
だった。

リポート28 切り開け、己の未来 その9へ続く

## その9

レポート28 切り開け、己の未来 その9

〔美神視点〕

小竜姫様に抱えられて滝壺の近くに着地し辺りを見回す、滝の上面よりも霊力が密集しているのが肌で判った。

「古い神域ですね、もう神はいないですけど……神通力の名残がこの周辺を護っています」

古い神域……か、シズの祠だと思っていたけど、シズよりも前。おキヌちゃんの村に祭られていたと言う守り神の神通力かと思つていると、水が盛り上がりシズクも姿を現した。

「どう、横島君の気配はある？」

横島君と魂で繋がっているから、近くにいれば横島君の居場所が判るかも知れないと思ひ尋ねる……だがシズクは首を左右に振った。

「……いや、今はまだ感じない、それよりもタマモ達は？」

私よりも先に下りていたので周辺の搜索をしているのかもしれないと返事を返し、滝壺から離れて森の中に足を踏み入れる。すると、そこではタマモとシロが人の姿になっていたのだが……その回りではチビやうりぼーが唸り声を上げているのを見てただ事ではないと言うのが一目で判った。

【美神、小竜姫も気を引き締める。タマモ達が言うには、レイの匂いがするらしい】

【妙な気配はしてますから、間違いではないと思いますよ】

ノツブと牛若丸の言葉を聞いて、私は直ぐに折れたたんでいた神通棍を手にする。

「みぎいいッ！」

「うううーッ!!」

【ノブウーッ!!】

敵意と警戒心剥き出しのチビ達、動物だけあって私よりもレイの危

険性を如実に感じ取っているのだろう。

「それで横島君の匂いは残ってるの？」

「うん、それはバツチリ。琉璃の匂いも残っているんだけど……」

そこで言葉を切ったタマモ、いつもはつきりしているタマモが口ごもるなんて珍しいと私は感じた。そしてタマモの言葉を引き継いだシロに私達は判断を悩まされる事となった。

「せんせーと琉璃の匂いにレイが混じったでござるよ」

2人の匂いにレイの物が混じった、考えられるのは2つ。1つは横島君と琉璃がレイに連れ去られた、もう1つは横島君と琉璃がレイを回収しただ。

「……何か妙ですね、警戒していきましよう」

「そうするしかないみたいね」

レイに連れ去られたのか、それともレイを回収したのか……どちらにせよ、前に進まなければどうすれば良いかなんて判らない。

「タマモ達は悪いけど先導してくれる？」

「判ってるわよ、ほら、行くわよ。うりぼー」

「ぶぎゆうツッ！」

毛を逆立ったままにして歩き出すうりぼーと、その頭の上で放電しているチビ。その後ろについて歩く、タマモとシロの後について4人で森の中を進む。

「ノツブはどう思う？」

「うむ、レイも巻き込まれて打ち上げられたというのはどうじゃ？」

挟り取られた谷を見てきたが、確かにあの規模の破壊の後を見る限りではレイが巻き込まれたと言うのもあながちありえない話ではないだろう。

「制御出来ているようには思えなかったですしね」

あの時のレイは完全に錯乱していた、まるで誰かに背後から声を掛けられているように、自分に言い聞かせるように繰り返し違うと、私は私だと叫んでいた。

「とりあえずはまず主殿と合流しましょう、ここであれこれ考えていても変わりません」

私達の話を中断し、茂みを掻き分けて行く牛若丸。その後姿には強い焦りの色が浮かんでいる、勿論私達も焦っていない訳ではない。

「……姿が子供だから精神も幼いのだろう。横島の姿を見るまでは安心出来ないのさ」

「そうかもしれないの、とりあえず少しでも早く横島達を見つけよう」

最悪の場合の事は全員の脳裏に過ぎっている、だがそれを口にする事は無く固い表情で私達は森の中を進む、だがそれもほんの数分で止められた。

「おやおやおやおやあ？まさかこのような所でお会いするとは、クフフフ……いやいや、拙僧も運が悪い」

どす黒い瘴気を纏った痩せぎすの男と開けた場所で鉢合わせた。その顔を見て、私は顔を歪めた。

「蘆屋……ッ!？」

「ほほう、横島から聞いておりましたか？ンフフ、そうですよ？拙僧蘆屋道貞と申します。どうぞ、お見知りおきを」

慇懃無礼と言う感じの蘆屋は私達を観察するように見つめ手を上げる。

「拙僧はレイを探しているだけ、そして貴方達は横島を探している。どうです？互いに見なかったことにすると言うのは？」

蘆屋の問いかけに一瞬何を言われたか理解出来なかった。

「何を企んでいるんですの？」

「企むなんてとんでもない。それでどうです？「貴様の様な外道の提案を受ける理由は無い！」……ンフフ。交渉決裂と言う事ですね、それならば仕方ありません」

牛若丸が擦れ違い様に一閃する。それで蘆屋の首は落ちたのだが、蘆屋は自身の首を抱えて笑い出した。

「ここで貴女方も捕らえましょう、優秀な女の霊能者。ンフフ……交配実験がはかどると言うもの」

蘆屋の影から手足が動物や昆虫の物に置き換わった、無数の人間が姿を見せる。

「外道め。その命を持って償え」

「ははははッ！私の罪など無い！私を裁く事など誰にも出来ぬ!!」

白目と黒目を反転させ高笑いしながら蘆屋は地面を蹴り浮かび上がる。

「どうぞお楽しみくださいいな。ンフフ……慰み者になっても拙僧は楽しめますからなあ」

下卑た視線で私達を舐め回すように見つめる蘆屋に全員が嫌悪感をあらわにした。

「『死ね!』」

ここにいる女全員を敵に回した蘆屋だが、楽しくて仕方ないと言う様子で笑う。

「その威勢も何処まで続くか、ンフフ……楽しみに見させてもらいますよ」

蘆屋はそのまま空中に姿を消し、それと同時に現れた無数の異形の人間が雄叫びを上げて襲い掛かってくる。

「牛若丸、ノツブ小竜姫様、お願いします!」

「判つてます!皆さんは無理をしないでください!」

「呪われた命を終わらせて上げましょう」

「やれやれ、あの外道にはもう会いたくなかったんじゃがなあ」

小竜姫様とノツブと牛若丸をセンターにして私と螢ちゃん、そしてシロがバツクアップ、シズク、くえす、タマモの遠距離攻撃と言う陣営で私達は異形の人型との戦いを始めるのだった……。

「さて……と、どうしますかな」

森の中で異形の人型と戦う美神達を見下ろす人影、目深に被ったフードと手にしていた金属片で装飾された本を弄ぶ様にして何者かは笑う。楽しくて仕方ないと、そして自らが動くべき時が来たのかと笑うのだ。

「接触するか、せざるべきか……これで決めるとしますかね」

男の手から乾いた音を立ててコインが放たれる、男の視線の先にはまだ遠いが木々をなぎ倒しながら、こちらに突き進む異形の姿があった。

「裏……ですか、ではまだ私は表舞台に立つべきではないと言うこと

ですね。ですが……手助けくらいはしてやりますかな」

手にした本を開き、そこから何かを取り出す男。男の手の中には仮面ライダーの顔が描かれた3枚のカードが握られているのだった……。

↳横島視点↳

先ほどまでぼわぼわとしていた雰囲気のレイだったが、今は視線も定まり、身に纏う気配も鋭くなっていた。

「……横島に、琉璃……私は……そうですか、回収されたのですね」

人格と精神面が不安定とは聞いていた。だけど、ここまで変わる物かと俺は正直驚いていた

「こんにちわ、さつきまでの貴女はもう少し可愛げがあったけど……今の貴女の方が話は聞けそうね。それとも……私達と会話をする気は無いかしら？」

「……いえ、助けられた以上。ある程度の情報は提供するべきだと思います……ファントムコールドは返せとは言いませんよ」

結界の中に封印されているファントムコールドを一瞥するだけで、レイは俺と琉璃さんに視線を向けた。この反応は正直予想外だったので驚いた、ファントムコールドを返せと暴れるくらいは考えていたからだ。

「私達を殺す気は？」

「素手ですか？無理に決まってるでしょう？」

レイはそう言うのと着ていた法衣を捲りあげる、俺は反射的に目を逸らす。

「……なるほど、ガープにはそこまで信用されているわけではないと【酷いことをする】

見てはいないが、琉璃さんと心眼の言葉からレイには生身では霊力や神通力を使えないように封印が施されている様子だった。

「納得していただけたようで何よりです、それで大人しくしていれば私の身の安全は保証されるのですか？」

「そうね……貴女が大人しく、私達に従って「琉璃さん」……何？」  
鋭い光をその目に宿す琉璃さんは少し怖いと思ったが、それでもこれだけは言わないといけないと思った。

「レイに命令に従えとか言うのは止めて欲しいんです」

「……横島君、それが無理だと判って言うてるのかしら？」

それは勿論俺だつて判っている。だけど、氷室神社での会話、そして崖の上での取り乱しように思い出したらそう言わずにはいられなかったのだ。

「彼女は自分自身を捜していると思うんです、だからその……強制するのは止めて欲しいんです」

思いつき溜め息を吐かれる、敵の陣営の中枢にいる人物に何を甘い事を言っているんだと思われているのは間違いない、だけど……レイは話せば判ると俺はそう信じたかった。

「……自分は自分になりたいって言ってたよな」

「そうですね、私は私です。誰でもない私なんです」

無感情、無表情のレイが鬼気迫る表情になった……それだけ自分のあり方を、レイと言う個人なのだと訴えているのだ。

「それだったら、命令に従うだけじゃ俺は駄目だと思う」

「……ではどうすればいいのですか？どうすれば私は私になれますか？」

光の無い紅い目に射抜かれる、何の明るさもないその空虚な瞳に恐怖を感じながらも俺は言葉を続ける。

「そんなのは誰だつて判らない、でも大事なことは何なのか俺は知ってる」

「……なんですか？その大事な事とは？」

姿は俺と同じ年くらいだ、だけど、今のレイは俺よりも遥かに幼い少女のように思えた。

「大事な事は自分の心で決めるんだ、誰に命令されるんじゃない……自分で、自分の心で決めるんだ」

ネロちゃんからの受け売りだが、俺は本当にその通りだと思う。俺の言葉を聞いたレイは、一瞬目を見開き、繰り返し自分の心で決める



と呟いていた。

「結構良い事言うのね、ま、自発的に協力してくれるならそれに越したことはないのは確かだし」

「いやあ、受け売りです。俺にそう言ってくれた人がいて、俺もその通りだと思っただけですよ」

琉璃さんとそんな話をしていると、洞窟の中にまで響く大きな振動が突如俺達を襲った。

「きゃっ!?!」

「だつと!?だ、大丈夫です……?!?!?!」

突然の衝撃に倒れてきた琉璃さんを咄嗟に両手で受け止めようとするが、俺も本調子ではないからか支えきれず。琉璃さんに押しつぶされるようにして、洞窟の中に倒れこんだ。その時顔に押し付けられた琉璃さんの胸の感触に俺は完全にパニックになってしまった。

「し、心眼どうなってるの!?!」

「言わなくても判ってるだろう……敵だ。しかも近い」

心眼と話をする琉璃さんだけど、琉璃さんが動く度に胸が押し付けられる。その柔らかい感触と甘い香りは紛れもなく、極楽と言えたんだけど……余りに強く押し付けられ、俺は息が出来ず目の前が暗くなるのを感じた。

「琉璃すまないが、体を上げてくれ。横島が、お前の胸で窒息する」

「え?あ!きゃあ!ご、ごめんね!?!だ、大丈夫?」

自分の態勢に気づいた琉璃さんが慌てて立ち上がった、ほんの少し、ほんの少しだけ惜しかったと思いつつ立ち上がる。

「やべえ……あんなの相手に戦えないぞ」

「そうなるわね、レイもお構いなしで潰しに来た見たいね」

地響きを立てて近づいてくる巨人とその周りを飛び交う、昆虫や翼を持つ木の兵士。その姿に俺と琉璃さんが絶望感で一杯になる、俺は負傷しているし、琉璃さんは巫女で戦闘者ではない……ここで死ぬのかと俺が思ったその時。

「大丈夫だ、救援が来たぞ」

心眼の声に顔を上げると、うりぼーを先頭にして走ってくるタマモとシロ、そしてその後ろにいる美神さん達を見て助かるかもしれないと言う希望が胸の中に広がる。

「レイ、一緒に来てくれるよな?」

「……はい、私は死にたくありませんから」

手を伸ばすと俺の手を握り返したレイを立ち上がらせる、琉璃さんは結界で封印したままのフアントムコールドーを脇に抱える。

「美神さん達と合流して、シズクの転移で逃げましょう」

戦うことは不可能、それならばシズクの転移でこの場から逃げる。俺と琉璃さんはそれだけを考え、レイと共に洞窟を飛び出すのだった……。

く小竜姫視点く

何とか蘆屋が召喚した異形の兵士を倒した直後に地響きと共に現れた土くれの巨人、それは氷室神社に現れた時よりも小柄だった。だが戦うと考えれば、その脅威度は依然として高いままだ。

(横島さんと琉璃さんの回収後、即時離脱しかありませんね)

巨人だけならば私だけでもギリギリ対応出来るかもしれない。だが、土で出来ていると言う性質上倒しても復活する可能性が高い……昆虫や木の兵士も翼を持ち恐ろしい数が進んできている事と疲弊具合を考えれば、ここで戦うのは得策ではない。横島さん達を回収したら、即時撤退するしかないだろう。

「美神さん！小竜姫様ツ!!」

地響きに気付いて隠れていた横島さんと琉璃さんが姿を現した、無事でいてくれたことは喜ばしい事だ。だけど、何故か2人の側にはレイの姿もあつた。

「横島なんで、その女も一緒な訳?」

「いや、色々あって……な。とりあえずフアントムコールドーは取り上げてから変身は出来ない」

状況を簡単に説明してくれた横島さんですが、その顔色は決して良

くは無い。土気色の一歩手前と言う様子だ。

「シズク、横島君をお願い。死ぬ一歩手前まで衰弱してたから」

死ぬ一歩手前と聞いて、タマモさん達の顔が険しい物になる。勿論私もだ、変身の反動だけではない……なにか別の要素があったのは明らかだが、死ぬ一歩手前まで衰弱していたと聞いてやはり戦闘は無理だと判断する。

「ぶぎいッー」

「……悪い、うりぼー」

巨大化したうりぼーの跨る横島さん、その姿を見れば張り詰めていた緊張の糸が切れたと察するのは簡単な事だった。琉璃さんは決して戦闘が得意な訳ではない、最悪の場合を想定して気を張り続けているのだらう。

【美神、それに小竜姫。このまま戦うには明らかに不利じゃな……どうする？ワシが戦闘不能になるがデカイのぶちかますか？】

宝具を使うか？と信長が尋ねてくる。無論倒すためではない、撤退する隙を作り出す為の物ではあると言う事は判っている。ちらりとシズクさんを見ると、首を小さく振る。

「すいませんが、それはもう少し後でお願いします」

【心得た】

宝具であるの巨人と昆虫を吹き飛ばしたとしても、撤退するする術が無い。超加速では運べて1人、シズクさんの転移が頼りでしたが……それが出来ないとなると下手な大技で消耗するわけには行かない。

(ビュレトさんとブリュンヒルデさん)

東京にはまだ神魔がいるが、自由に動ける戦力はあの2人だけだ。私達が無事にこの場所から離脱する方法は1つ。ブリュンヒルデさんのルーン魔術でビュレトさんか、くえすさんの魔力をブーストして転移で逃げる……これしかない。

「来るわよッー」

「チッー横島君とうりぼー、それと琉璃を中心にして卍ッ！シズクと牛若丸はレイの監視をッー」

動く事の出来ない横島さんを中心にして、前後左右に配置する。

……今私達が出来る陣形ではこれが一番優れているだろう。

「私が先陣を切ります、援護をよろしくお願いします」

美神さんに声を掛け、空中から急降下してきた昆虫を切り捨て、返す刀で地面から生えるように現れた木人を胴体から両断する。

「ちえいッ!!」

「ノーブーツ!!」

銃声が2発響く、信長とチビノブの射撃が的確に相手の頭部を打ち抜き、その勢いを弱らせる。

「てかげんなしで行くからねッ!狐火ッ!!」

そこをタマモさんの炎が放たれ木人と昆虫を纏めて焼き払う。木人と昆虫相手では私達も引けを取らない、だがそれはあの巨人が動いていないからこそその有利性だ。

(早く気付いてください)

ビュレトさん達もこっちに向かっていているのならあの巨人を見れば、私達がここに居る事は判るはず……早く気付いて合流してくれるかどうか私達の命運を左右する。

「チッ!数が多いわねッ!」

「みぎーッ!!」

美神さんの神通棍が振るわれ、木人を吹き飛ばす。それは敵を倒すには火力が足りないが、即座に放たれたチビの雷で炭化し木人が森の中に倒れる。

「せいッ!!美神殿!このままでは不味いでござるよッ!」

【完全な消耗戦ですからねッ!】

シロさんと牛若丸が横島さんを護りながら刀を振るう、しかしその通りだ。完全な消耗戦であり、撤退はビュレトさん達が合流してくれる事を祈るしかない……木人と切り結びながら必死にこの場を切り抜ける方法を考える……だがそれは、悪手だった事に気付いたのは全てが手遅れになった時だった。

『キキィッ!!』

突如空中から襲ってきた機械で出来た蝙蝠、その蝙蝠の口から吐き出された衝撃波が結界を砕く。

「しまッ!!」

「……どうも、これは返して貰います」

結界の中に封じられていた籠手を蝙蝠の足が掴むと同時に、レイも地面を蹴って牛若丸とシズクさんの警戒をすり抜けて一気に離脱する。

「フロントムコールドーは返して貰いました。ここで貴方達を倒して、横島を連れ帰るというのも吝かではないのですが……」

籠手を再び身につけたレイは左手に眼魂を握りながら、私達を一瞥し……眼魂を懐に戻し、背を向けた。

「大事な事は心で決めろと横島が言いました、そして借りは返す物と言うのも私は知っています。なので助けられた借りはここで見逃すという事で手を打って貰いましょう……ではまた何れ、ここで死なないでくださいね」

だがレイは戦う事をしなかった、背を向けて歩き去る事を選んだのだ。その信じられない光景に、思わず一瞬動きが止まった。ガープの手下なのに、戦う事を自らの意思で拒絶したのだ。

「!!!」

風を裂く音、そして地響きのような音を立てて巨人の腕が振り上げられる。

「シズクさん!」

「……やるだけやってみるッ!」

この中での巨人の攻撃を防げる可能性があるのはシズクさんの氷の壁以外ありえない。だが質量の差がありすぎる。

「ノツブ! 宝具をお願いしますッ!!」

【判ってるわッ!!】

少しでも攻撃を加えて相手の質量を削ぐしかない、そう判断して私が腰を深く落とした時……それは現れた。

クラックアップフィニッシュッ!!

「?!?!」

巨人の腕を食い千切るばかりの勢いで紫の流星が巨人へと食らいついた、そしてそのまま身体を回転させ巨人の腕を肩から捻り切る。

セルバーストツ!

「ッ!!!」

巨人の声にならない叫びが山の中に響き渡り、紅い閃光が空を貫いた。胸にキャノン砲を持った、シルバーの人型が胸から放った一撃が巨人の上半身と下半身を分断し、山のような巨人の胴体が私達目掛けて落ちてくる……だがそれすらも私達には届かなかった。

メロンスカツシユツ!!

「……シツ!!」

戦国武者の鎧兜に似たアーマーを身に纏ったライダーが手にしている剣を振るい、その切っ先から飛び出した刃が巨人を両断する……

「仮面……ライダー」

突如この戦いに乱入したのは紫、灰色、そして白の仮面ライダーの姿だった。砕かれた巨人の残骸が土となって降り注ぐ中、3人は縦横無尽に戦場を駆ける。

「「……」」

3人はこちらに視線を向ける事無く走り出し、木人や昆虫をその拳で、手と一体化しているドリルで、手に握った盾と剣で倒していく……その姿を見ていると、目の前が急にゆがみ私達は氷室神社の庭に立っていた。

「小竜姫！良かった、間に合いましたねツ！」

「ぎ、ギリギリでしたわね……」

くえすさんとブリュンヒルデさんの声……転移によって助けられたと言う事に気づき、私達はその場に尻餅を突いた。助かった事は間違いない……だがそれ以上の謎が生まれた。私達を助けた3人の謎のライダーの存在だ……だがそれを追及するよりも先にやるべき事がある。

「ブリュンヒルデさん！横島さんが重症なんです！早く治療をツ！」

さつきまでは意識を保っていたが、今は完全に意識を失い脱力している横島さんの治療……それを何よりも優先するべきだと思い、私は声を張り上げるのだった。

〈西条視点〉

薄暗い部屋にキーボードを叩く音だけが響き続ける……美神達が氷室神社で襲撃されているのと同様、東京もまた断続的に昆虫、木人による襲撃を受けていたのだ。

「ビュレトとブリュンヒルデが抜け……神魔は、メドーサとダンタリアン、ゴモリーの3人か」

メドーサは積極的に協力してくれてるが、ダンタリアンは現在消息不明、ゴモリーは柩を護ると言う目的があるため、柩が前線に出れば協力してくれる。

「アルテミス之力を借りれば、もう少し負担を減らす事も出来るのだが……」

横島君が通っている学校の机妖怪の愛子君、彼女と共にいるアルテミスはあくまで自衛の為にしか戦ってくれない。

「ナイチンゲール婦長、三蔵法師様……それに沖田君への負担が余りにも大きい」

白竜寺の雪之丞、陰念、クシナの3人も奮闘してくれているが、余りにも敵の襲撃の範囲の幅が広すぎる。しかも1度出現すると、断続的に出現し続けるので、その間は戦いっぱなしになる。

「もしも？ ああ、了解。彼らには余り無理をしないように伝えて欲しい、それと冥子さんにも同じ様に伝えて欲しい」

今部下の報告で僕は決断せざるを得なかった、雪之丞君と陰念君が霊力枯渇でダウンした。最も激しい前線で戦っていたからそれは無理もないが、魔装術、そして横島君と同じ眼魂を使う事でこの事は想定出来ていた。

「やはり僕は指揮官の器じゃないな」

戦力図や人員配置ではない、仮に指揮官としても前線で自らも戦いながら指揮を出す方が性に合っている。今こうしていても、前線に出たいと思っているのだから……。

「すまないが、唐巢神父、冥華さん、それとドクターカオスとブラドー

伯爵に連絡を取ってくれ」

僕の決断は決まっている、だが、僕と同じく東京を死守する為に戦っている皆にも事後通達ではなく、事前通達にしたいと思っただから部下にそう頼む。机の上の1枚の書類……陰陽寮からの協力要請だ。正直、陰陽寮に貸しを作るのは怖い、だが今東京にいる戦力は相当消耗しているし、疲労も蓄積している。オカルトGメンもGS協会もロボロで、六道女学院の講師や、事務職に就職した卒業生まで借り出している。これ以上負傷者を出すわけには行かない……神代会長の変わりに東京を預かっている者として、大局を見なければならぬ。

「……反対されるか否か、いや……状況は皆判っている筈」

全員が理解しているはずだ、このままではそう遠くない内に東京は陥落する。戦える霊能者に対して、敵の数と質が違いすぎるのだ。それは特化戦力として令子ちゃんや、横島君の能力ばかりが伸びていた事が大きく関係している。

「100の訓練よりも1の実戦……思い知らされたな」

僕もその言葉の意味は十分に理解していたつもりだが、まさしく理解していたつもりだったのだ。横島君は基本的な霊能の知識が余りにも足りていないが、それを補って余りある戦闘センスを持っている。雪之丞君やピート君が悪いというつもりは無い、だが知識がある分。どうしても攻めてに欠いているのだ……それは本来ならば、堅実で生存率を重視していると褒めるべき点だ。だが、それは多少無理をすれば届くという場面で踏みとどまるという事に繋がっている。

「いやあく随分と大きい手を打つねえ」

私驚いたよと笑いながら教授が部屋の中に入ってくる。温和な笑みを浮かべているが、その目は僕を品定めするような目を向けている。

「僕は貴方の御眼鏡に叶ったかな？」

「ん〜悪辣さがまだ足りないねえ、人の上に立つならば……己が動く事などあってはならないよ」

犯罪界のナポレオンと呼ばれた男の冷徹な視線が僕を射抜いた、いつもふらふらとしている好々爺としての雰囲気は何処にも無い。



【まあその甘さは嫌いじゃないけど……ね、オカルトGメンが使えないなら、使える所から引つ張ってくるしかない】

「……公務員だから、安定していると思っただけで入社する人間が多すぎるんですよ」

GS免許の国家資格と公務員だから給料が安定している……そんな安易な考えで入ってくる人間が多すぎる。僕がオカルトGメンに入った時はもつと試験も厳しかったのに、今は随分と簡単になったと思う。

【まあ良いさ、陰陽寮を連れて来る事を選択した事は間違いないと思うよ】

「いえ、陰陽寮は呼んでいません」

ほう？つと眩き、教授の目の色が変わった。正直、今の陰陽寮とオカルトGメンの質は正直同じレベルだ。いや、むしろ平安時代の陰陽術を失伝している分陰陽寮の方が酷いと言える。

「僕が助けを求めたのは躑躅院本人です」

【なる、金ではなく、彼……いや彼女かな？個人的に求める物を対価にするわけだ】

「……恨まれるの覚悟の上ですけどね」

躑躅院が求めるのは横島君との話し合いだろう……稀有な陰陽術の使い手だ、横島君の術を知りたいと思うのは当然の事。

【殴り倒されない事を祈るよ】

「はは……本当ですね」

軽く笑う教授だが、その目は真面目だ。そしてその真面目な顔のまま……。

【いや、マジで気をつけなよ？くえすは呪うよ？容赦なく呪うよ？】

……うん、それは判ってる。判ってるから、そんなにマジな顔をして欲しくないなあ。令子ちゃんとかが帰って来てから、説得する事を考えるだけで胃痛がするんだから……今からそんな不安になる事を言わないで欲しい。

「西条さん、皆さんが到着されました」

「そうか、ありがとう」

考え事をしている時間は終わりだ、ここからは自分の考えを僕よりも遙かに経験のあるGSを相手に認めさせなければならぬ。コーヒーを口に含み、大きく深呼吸をして僕は唐巢神父達が部屋に入ってくるのを待つのだった……。

【死刑宣告を待つ気分かね？】

「……ちよつと黙つててくれますか？」

ニヤニヤ笑う教授を睨みつけ、僕は説得する内容を考えるのに頭を悩ませるのだった……。

レポート28 切り開け、己の未来 その10へ続く

## その10

レポート28 切り開け、己の未来 その10

〈美神視点〉

ブリュンヒルデのルーン魔術によって強化された、くえすの魔法で私達は無事に氷室神社に戻ってくる事が出来た……。だが、その代わりに大きな謎を山奥に残す結果となってしまったが……。

(あの仮面ライダー……見た事無かったわね)

別の世界の横島君に出会った時に見たどのライダーにも該当しなかった、1人似ていると言えば……。白い鎧武者、確か……。鎧武だっけ……。?そのベルトに良く似た物を装備していたと思う。

「とりあえず、西条さんに連絡しておきますか」

横島君が行方不明になっている事は伝えていないが、敵の攻撃が本格的になってきているので、東京の方が心配になりGS協会に電話する。

『令子ちゃんか、そっちはどうだい?』

「……ぼちぼちって言うところね、ブリュンヒルデとビュレトが合流してくれたから、攻勢に出たい所だけ……」

レイから、横島君は御神体を預かったと言っていた。助けられたお礼として……。信じられない事に残してくれたらしい。正直これを手にした事で、攻勢に出る事は出来るようになったと思うけど……。本当に攻勢に出るかどうかは、今日のシズ達との話によるけどね。

『こっちは状況があんまり芳しく無くてね……。躑躅院に救難要請を出す事になってしまった』

一瞬何を言われているか判らなかつたが……。主力が抜けている事を考えれば、西条さんの決断が苦渋の決断だったのはわかる。

「……向こうの要求は?」

『陰陽寮に見学に来て欲しいそうだが、冥華さんがいたから横島君1人ではないけど……』

横島君1人で陰陽寮に行く事になれば、全力で反対する。だけど、付き添いがいても大丈夫ならこちらももある程度は妥協しなければならぬだろう。

「判ったわ、でもこの事は私の胸の中にとどめておくわね」

『……蛍君達には僕から言うよ』

これは西条さんの決定なので、私から言う訳には行かないのでこの話は聞かなかった事にしようと思う。

「それでもし攻勢に出るのならまた連絡するわ、もしかするとエミに協力を頼む必要があるかもしれないし……」

相手は神だが、御神体を失い、シズとおキヌちゃんが居れば霊脈の力もこちらにもっと引きこめるのだろう……。そうなれば、ただの獣か悪霊になる、そこをエミとくえすの呪いでさらに弱体化させるって言うのが妥当な所だと思う。

『判った、もし必要な物資があればまた連絡をしてくれ、冥子君に届けさせる』

「うん、よろしく。じゃあ、また後で」

普通に届けるのでは間に合わない、インダラかシンダラで高速で配達して貰うのが一番確実だし、敵に襲われても逃げ切れるわよね。私はまだ一度西条さんに感謝の言葉を告げて、受話器を戻す。

「はあ……」

広間に戻る前に溜め息を思わず吐いた……。疲れているとか、心労とかそういうのじゃなくて……。今私を悩ませている物……。それは。

「「……バチイッ!!」」

視線が火花を散らしている蛍ちゃんとかくえすと琉璃……。そしてそれに気付かないというか、気付きたくないのか一生懸命チビの世話をしている横島君。そしてそんな横島君を怪訝そうに見つめているタマモとシロ……。そして。

【これは面白い事になってきたのう……】

【まあ、そうですね。見ている分には面白いですよね】

そんな横島君達を見ている英霊2人……。山の中の一晩を過ごした訳だけど、琉璃が横島君にアプローチを掛け始めていて……。一

体山の中で何があったのか問い質しくなる。

「美神さん、東京はどうでしたか？」

「……私達が出る前はまだ防衛網を維持出来ていましたけど……」

私が戻るなりそう尋ねてくる小竜姫様とブリュンヒルデ、正直恋愛でギスギスしているあつちに合流するより、小竜姫様たちと話をしている方が精神衛生上良いと思い、私は横島君の助けを求める視線を無視して小竜姫様達のほうに足を向けるのだった……。

〈蛍視点〉

横島が無事に帰ってきてくれたのは何よりも嬉しいし、怪我こそしているけど命に別状が無いのも良かったと思う……良かったと思うんだけど……。

「あ……」

朝食の席で横島が醤油挿しに手を伸ばし、琉璃さんも同じタイミングで手を伸ばした。指先が触れた時お互いの声が重なる、赤面する横島と余裕の表情の琉璃さん……その温度差はある。だけど、その反応を見れば山の中で何かあったのは明らかだ。

(……何が……何があったの……)

横島が動揺していて、琉璃さんは慈愛に満ちた表情……その表情と反応を見る限りでは私にとって最悪の状況に近いかもしれない。

「みみーむうー♪」

「ぶっぎいーん♪」

「ご飯ご飯と言いたげに鳴いて横島に擦り寄るチビとうりぼー、それを見て助かったという反応をしている横島。完全に逃げに回っているけど……気付いていない訳が無い。」

「……」

「……」

くえすとおキヌさんの2人は全身から黒いオーラを溢れ出せながら、貫かんばかりのジトつとした視線を向け……それに対して必死に目を背けているが、何時までも逃げられると訳が無いと言う事は理解して欲しいわね。予想に反してタマモは横島と琉璃さんを観察するよ

うな感じで、シロは何も判ってないという感じである。

「そんなに怖がらせなくても良いと思うんだけど？」

先に話を切り出してきたのは、やはり琉璃さんだった。朝食が片付けられ始めている机の上で、私はゴングの音が鳴ったように感じた。

「みーみー!!」

「ぶぐー、ぴぎー」

「フーフーブー」

遊ぼう、遊ぼうと横島の回りにチビ達が集まっている。だけど、逃がしはしない。私達の無言の圧力で横島はその場に座ったまま、机の上にチビ達を乗せて、指を振ってチビ達と遊び始める。

「別に苛めている訳ではないですわ、ただ……何があったのか知りた  
い、ただそれだけですわ」

そう、そこである。元々琉璃さんは横島を気にかけていたのは知  
てるけど……戻って来てからはもつと横島に甘くなったと言うか  
……好意的になってきている気がする。

「何があったか……ね」

「……」

琉璃さんが横島に視線を向けると横島は首を振るう、懇願している  
ように見えなくもないリアクションだ。

(絶対なんかあった……ッ！)

その反応を見れば、山の中で何かあったのだと判る……と言うか、  
その反応を見て、何も無いと言う話を信じるというのが無理と言う感  
じだ。

「……別に横島をそこまでつるし上げる必要もないだろうに」

「人生は色々経験が必要じゃしなあ……特に女を知る事は大事じゃろ  
うなあ」

あのニマニマしている信長を殴りたい……いや、多分眼魂に逃げる  
と思うんだけど……一線を越えているとか本当無いわよね？私が  
色々考えている間に決着とか本当に止めて欲しいんだけど……。不  
安と嫉妬と横島を信じたい気持ちがない交ぜになる……と言うか、横  
島が本当に何も言わないので不安になる。

「……一線は越えてないわよ。ただ……横島君が低体温症で本当に死  
んじやいそうだったから、私も恥ずかしかったけど人肌で暖めただ  
け。やましい事は何も無いわよ」

人肌で暖めただけとあっけからんと言う琉璃さんに少し驚いた、横  
島が気恥ずかしそうにしている理由も判った。

「……えうえう……」

横島が口を開きかけて、閉じて顔を真っ赤にしているのを見るとそ  
の光景を思い出しているのが良く判る。横島は案外純情だから、そう  
いうのを多分まだ処理出来てなかっただけだと思う。

【暖を取る術がなく、横島も怪我で血を流しすぎていた。あの場合は  
あれが最善だったと思う】

心眼のフォローも聞いて、確かにその通りだと思った。横島の両手  
の皮は殆ど剥けていたし、足にも貫通寸前の刺し傷もあった。今は、  
その両方ともシズクに治療して貰って傷は無いけど、確かに状況はか  
なり不味かったと思う。

【とりあえず、横島さんが意識してるだけって事で良いんですね？】  
おキヌさんがそう言っただけかと思ってるのか、琉璃さんにそう  
問いかけた。だが琉璃さんは猫のような、笑みを浮かべた。

「あら。私はそんなにガードの緩い女じゃないわよ？横島君が好きだ  
からしたのよ？」

「「えっ？」」

私とくえすと横島の驚いた声が重なり、琉璃さんはにこにここと笑い  
ながら、横島にウインクをした。

「横島君の事、私は好きよ？」

「え……えっ？」

「琉璃……ッ」

「ふふん」

状況を飲み込めない私と怒りを露にしているくえす、そして横島に  
微笑みかける琉璃さん。

「え、えーつとお？」言っておくけど冗談とかじゃないからね？私は本  
気だから」

琉璃さんの同性でも見惚れる様な笑みに本気だと判り、私もくえすも殆ど同時に声を荒げるのだった……。そして横島は、その怒声にびくりと背筋を正したと思うと、チビ達を抱えて逃げていった。とりあえず、横島は置いて置いて置いといてよし、問題は琉璃さんだ。

「あんまり嫉妬深いと私駄目だと思ふなあ」

「……余計なお世話です」

「そもそも蛭は横島の彼女でもないんですからね」

「……琉璃さんですか……はい、なんとなくそんな気がしてしましたよ」

とりあえず、今この場にいる3人は敵……しかも私に持つてないものを持つている強敵……私はそれを改めて自覚するのだった……。

くタマモ視点く

チビ達を抱えて逃げて行つた横島、こういう動きは本当に私の記憶の中の横島にそっくりだと思ふ。

「タマモ、なんで喧嘩するでござるっ」

「とりあえず、そういうことがあるつて覚えておきなさい」

人狼は一夫多妻はそう珍しい事ではない、むしろシロの父親のクロの考え方が余りにも人間に近い。そして、未来の記憶と現在の記憶の融合がしっかりしていないのか、シロの人格は微妙に現在よりだ。だから、自分が失恋したという経験に結びつける事が出来ないのだと思ふ。

「いやあーッ！良いな！面白くなって来たぞー」

【主殿は良い主君ですからね、私も鼻が高いです】

「……くだらない話だ。別に妻が1人と言うわけでも無いだろうに……」

……とりあえず、英霊2人と妻が複数いてもおかしくないと考えているシズクは無視して、横島を追いかけて見ようと思ふ。

(……まあ、大体どこにいるか判るし)

蛭達の争いに巻き込まれても面白くないし、美神達の話に混ざるの



はもつと面白くない。とりあえず、横島が何で逃げたのか……女子ばかりの環境から逃げて何をしようとしているのか、それを見てみれば横島が何を考えているのか判るだろう。

「別に横島は誰のものでも無いじゃない、だって今ですら彼女居ないのだし」

「……後から来たクセに」

「後も先も関係ないでしょう?」

「まあまあ、ね、落ち着いて」

「別に落ち着いていますよ? それより貴方もはつきりと言ったら?」

「じゃあ、言いますけれど今が大変な時に——」

その場のピリピリとした空気は知らない人が見ても重さで思わず吐きそうになるほどだった……。あの鈍感なシロでさえもこれはやべえって顔をしてるけど、爆心地が近いから逃げるに逃げれないで私を見て裏切り者って顔をしている。

(まあ気付くのが遅れたのが悪いのよね)

最初は互いに嫉妬、それが徐々に焦りと殺気に変わって行って、殺気に気づいた時にはもう逃げられない状況になっている。

(こんなの別に慣れたくもないんだけどねえ……)

九尾の狐、そして姐己としての記憶はあんまり無いけど、それでも人の感情……とりわけ情念に関しては私は相当強いので、嫉妬を感じた時に逃げに回って大正解だ。

【あつはははッ! 良いぞ! 面白くなってきたのーッ!!】

【主殿のような人にはやはり豪胆な妻が必要だと思っんですよね】

【……なんで私の味方をしてくれないんですかあッ!】

……もう駄目ね、やっぱり早く席を立って正解だった。背後でどんどん大きくなる、瘴気めいた殺気を背に私は庭に足を向けるのだった……。

「ぶっぎっ!ーぴぐー」

「1・2、1・2」

(……なにやってるの?)

庭でうりぼーの前足を持って、声を掛けながらうりぼーを歩かしている。これはちよつと……いや、こんなの想像できる訳が無い。思わず何をしてるのよと叫びたくなつたが、それをギリギリで堪えた私を褒めて欲しい物だ。

「横島よ、お前の事で争っているのに逃げるのは、些か男児らしくないぞ」

「……ナナシ、めっちゃ怖い。俺、ああいう空気駄目なんだ」

「ナナシ、お前に聞いていた横島と余りに違うんだが」

……なんで妖精の群れの中に混ざっているのに違和感が無いのかしらね。本当不思議なんだけど……まあ不思議と言えば、ナナシとユミルも本当にいい勝負だと思う。

（あれ、どうやってるのかしら？）

靈力を具現化させて鎧にしているユミルとナナシ、決戦が近いからトレーニングをしていると思うんだけど、なんだろう。あのメカメカしい鎧は……どう考えても妖精が装備して良い鎧には思えない。

「では横島はあの3人が嫌いなのか？」

「ううん、嫌いじゃない。凄く好き」

……ナナシがカウンセリングを始めたわね。でも、これは好都合かもしれない。私が姿を見せるよりも男同士の方が……。

（あれ、ナナシって男？）

妖精って性別あやふやだけど、口調で多分男だと判断する。

「それは妻にしたいという好きか？」

「……わかんない」

判らないとしょんぼりとした様子で横島は返事を返しながら、チビとうりぼーを膝の上に乗せる。

「判らない……そうか、判らないか」

「うん」

「仕方あるまいって、男は女よりも精神年齢が幼い物だ。好きと言っても、好ましいと思うのか、愛しているのか判らないって事だな？」

ナナシの言葉にこくりと頷く横島、それを見てナナシは大口を開けて笑い出す。

「笑うようなことか？ ナナシ……俺は、人の想いには誠実であるべきだと思う」

……あんな玩具みたいな顔をしているのに言ってる事は凄くまともね。

「俺は不誠実なのか？」

「いや、そう決断するには早い。お前はまだ、まだ今の関係性を壊したくないだけなのだよ」

これは結構的を得ているわね、仮にだけど横島が誰かと付き合えば、皆の関係性は大きく変わる。それを横島は恐れていると……、それは判らない話ではないと思う。

「俺はどうしたらいいんだろうか？」

「せいぜい悩め、悩んで悩んで、お前を好いてくれる者にどんな返事を返すか、それを精々考えるが良い」

ナナシは上機嫌に笑う、その姿はハムスターサイズとは思えないほどに好々爺と言う感じだった。

「そのうちお前が生涯添い遂げたいと思う相手も出来るだろうよ、行くぞ」

「……承知」

ナナシが私を見てにやりと笑い、ユミルと共に歩き去っていく……絶対、あれ私に気付いてたわね。好々爺と言うのは止めて、腹黒い爺さんだわ……。

「チビー、うりぼー、誰かを好きになるって難しいなー」

「みむう？」

「ぶぎゅ？」

……止めなさいよ、チビ達に話しかけてる姿ってどこからどう見ても、末期の一手手前だから……いや、むしろそれだけ追詰められていると言うことなのかも知れない。

「横島」

私が声を掛けると一瞬肩を大きく竦める横島……その姿に怯えすぎとは言えなかった。多分今でも広間は魔窟状態だ、怯えるのは無理もないと思う。

「タマモか。どうかしたのか？」

「どうかしたってあんたが逃げたから心配して見に来たのよ」

心配して見に来たと言うと横島は悪いと頭を下げた。

「まあ、横島が悪いわけじゃないし、少し寝なさいよ。酷い隈よ？」

「うむ、もつと言つてやってくれ、私が言つても聞かないのだ」

多分山の中の事を横島自身も上手くまだ処理できてないのだろう、大分性格が落ち着いたとは言え、元々横島は女好き。琉璃と抱き合っていた事を思い出せば、性欲をもてあますのは無理も無い話だ。

「ほら、すこし寝なさいよ」

「……あのタマモ？」

「なによ、美少女に膝枕して貰ってるんだから喜びなさい」

縁側に座り、横島の頭を半分抱え込むようにして膝の上に横にする。横島は何か言いたそうにしていたが、口を閉じて心眼をずらしてアイマスクの変わりにする。

「……少し寝るわ」

「うん、そうしなさい。まだ全部終わったわけじゃないんだからね」

横島は多分次の戦いには参加できない、身体は大丈夫でも霊体はロボロだ。とても戦いに参加できる状態ではない、私の膝の上でもう寝息を立て始めた横島の頭を撫でる。

「出し抜いたという所か？」

「そういう言い方は好きじゃないわね」

横島の事は好きだ、だけどこの好きは未来の私の好きで、今の私の好きはきつと家族としての好きだ。その2つが混じっていて、自分でもこの好きが異性として好きなのか、それとも家族として好きなのか判らなくなる時がある。多分、子狐の時から一緒にいたからそうなってしまったと思うんだけど……これが嫌だと思わないから不思議なのよね。

「……ふあ、私も寝よう」

陽射しが暖かいし、正直私も横島が戻ってくるまで心配であんまり寝てなかったし……私も寝ようと思う。チビ達ももう、横島の側で丸くなってるから、このまま皆で寝てしまうのも気持ち良いだろうと思

い、私も目を閉じるのだった……。

〈優太郎視点〉

ビュレトとメドーサが氷室神社に向かった事で、東京の戦力は間違いなく落ちている。だがそれに対応するように、敵の攻撃も緩くなってきた……。――

「ガープめ、何を考えている」

ガープは研究者だが、それと同じくらい軍師としての能力も高い。普通ならば、ビュレトとメドーサが抜けた事で戦力が落ちた東京を攻めに行くはず……。だがそれをしないと云う事が気がかりだ。

「何か、また手を用意しているのか？」

まだ東京にはゴモリーとダンタリアンの2人と三蔵法師、そしてアルテミスとオリオンが駐在している。正直ダンタリアンと、アルテミスは戦力として未知数だ。それゆえに攻め手に欠ける……。

「いや、無いな」

自分で考えておいてこれは無いと断言できる、アスモデウスが共にいる以上その多少の不利なら強引に押し通すだけの突破力がある。アスモデウスには正直それだけの戦闘力があるのだ……。そこにアスラが加われば、直接戦闘に秀でていないメンバーが多いので強引に制圧する事は可能はず……。

「駄目だな……。判らない」

複雑な戦術なのか、それとももつとシンプルな戦術なのか……。ガープの打ってくる手はとても複雑でどうしても相手の考えを読む事が出来ない。

「……氷室神社が目的とも考えにくい」

名も無き神霊がいると聞いているが、正直それがどうしたと言うレベルだ。横島君を確保するとしても、本気を出していれば疾うの昔に確保出来ている筈。

「泳がす事に意味があるのか……？」

横島君は戦闘の中でその才能を開花させてきた……文珠に開眼しているが、ガープはそれよりも上を求めているのか……？

「太極印型文珠……か？」

前の世界でルシオラの霊基を取り込んだことで横島君が開眼した、文珠の進化形態……あれは私にはかすり傷程度の傷だったが、人間で考えれば最強の霊具と言える。

「いや、待てよ……」

ガープは太極印型文珠の事を知らない、そして今の横島君には魔力だけではない、神通力、竜気、妖力が加わっている。

「……更に上を作り上げるだけのポテンシャルを持たせようとしているのか」

ガープの事だ、文珠については研究し尽くしているだろう。そして文珠は横島君の霊力から作られている、そうならば横島君の魂の状態をダイレクトに受ける。

「……五極文珠……か？」

魔力と霊力で太極印型文珠が生まれた、もしも、もしも横島君が今回の世界でも太極印型文珠に辿り着く事があれば、それは魔力・霊力・竜気・神通力・妖力が練りこまれた5種類の力を持つ、前よりも強力な文珠……名付けるのならば5極文珠とも呼ぶべき物にに進化する——ガープはそれを考えているのか？

「いや、違う」

そこまで考えた所で違うと気付いた、そもそも太極印型文珠を知らないのだ。ありもしない力を求めるような真似をガープはしない。だが……横島君が持ち合わせている5種類の力。これが横島君をガープが攫おうとしない理由の様な気がしている……。

「……とりあえず試してみるか」

キーボードを入力して、魔力・霊力・竜気・神通力・妖力を設定して、それを観測装置で逐一データ取りをして見る。

「これで何か判るかもしれないな」

ガープの目的を知るためにも、思いついた事を試してみる事は決して悪くないはずだ。それに、これで文珠が生まれる事も無いだろう

し、それに何か起きたとしても、危険な事など起きるわけも無いだろうしね。

「もしもし?」

観測装置の設定を終えると電話が鳴る、この電話と言う事はGS協会か、それとも令子君か……それともドクターカオスかな?と考えるがら受話器を手にする。

『ああ、すまんの優太郎。少しばかり協力して欲しいんじや、GS協会に来て欲しい』

「判りました、直ぐに伺います」

私は魔神と言う事を明かしているが、立場的には一般人と言う事になっている。こうして、呼び出されたという事は魔神としての私の知識を求めているのか、それとも霊具を販売している芦コーポレーションの社長としての私を必要としているのか……GS協会に行ってみる事にしよう。蚤から話は聞いているが、それでも手に入らない情報も多い。サポートするにも、正確な情報は必要だ。

「父さん、どこか行くのかい?」

「ああ。少し出かけてくるよ、それと悪いんだが蓮華。私の研究室の机の上においてある、観測装置。あれの分析を頼むよ」

特に危険な事も無いだろうし、蓮華に経過観察を頼んで私はビルを後にするのだった……。

「……23時45分、特に変化はなし」と

優太郎に記録を取る様に言われていた蓮華は真面目に記録を取っていたが、反発しあう5種類の力は統合されるわけも、大きな変化もある訳はなく、先ほどの電話で記録を取るのを止めて良いと言われていた事もあり、その記録を最後にして地下の研究室を後にした……。「……1つ目の鍵は手にした」

蓮華が消えた地下研究室に突如現れるフード姿の男の姿。その視線の先には、反発しあう霊力があつた。だが、男はそれを見て笑みを浮かべると、服の内側から取り出した罅割れた眼魂をその中心において。すると、魔力・霊力・竜気・神通力・妖力は全て、罅割れた眼魂に吸収されていき、罅割れた眼魂は僅かに虹色の輝きを放った。

「……まだ足りないが、1つ目の鍵は手にした、2つ目もそう遠くない内に手に入るだろう」

先ほどの輝きはないが、それでも男は満足そうに頷くと再び機械を操作して5つの力を発生させ、現れた時と同じ様に闇の中に溶ける様に消えていくのだった……。

優太郎はカオスに呼ばれてGS協会に向かったのだが、そこで思わず気を失うほどの衝撃を受ける事になった。

「……」

3人の土着の竜族が魔法陣の中心に座っているのはまだ判る。東京の地震の被害を抑える為と言うのは判る。

疲労で息が荒いのも判る。

「……」  
「ただ魔法陣の周りに並べられた横島君の写真とかポスターとかは一体……。」

「なんか……横島のファンらしくてな」

「東洋の龍は俗物なんだな」

迎えに来てくれたカオスとブラドール伯爵が何とも言えない表情をするが、優太郎も同じ様な表情をしていた。ついに直接会わなくても人外を魅了するようになったのかと絶望半分の表情を浮かべる。

「終わったら褒めて貰える」

「凄いつて言つて貰える」

「頭を撫でて貰う」

地震を最小の被害を抑えて褒めてもらおうとぶつぶつ呟いている竜族はなんか凄く怖かった。

「あれ、横島君に会わせたら駄目だと思う」

「ワシもじゃ」

「ジャパニーズ変態だな」

辛辣すぎるが、それに関しては優太郎は何も言えなかった。

「滾ってきた!!」

「ふうふううーっ!」

「やべ、涎出てきた」



駄目だ。手遅れ過ぎる……完全な変態トリオに横島を会わせることは出来ない。優太郎達は心の中で決意するのだった……。

レポート28 切り開け、己の未来 その11へ続く

## その11

リポート28 切り開け、己の未来 その11  
くブラドール視点く

東京防衛線の最前線基地であるGS協会。昨日聞いた、陰陽寮当主躑躅院の力を借りると決断しましたと我達に告げた西条。彼は反対される事を懸念していたようだが、我達の中で反対する者はいなかった。理由は単純だ、このままだと東京は攻め落とされる。それが判っているからこそ、反対意見など出る訳が無かった。

「思ったより早く早かったのねく躑躅院く？」

「日本の危機ですからね。救援要請を受けて直ぐ京都を出発しましたよ」

穏やかに笑う中性的な容姿の躑躅院。こうして顔を見合わせるのは初めてだが、こうして向かうあうと奇妙な違和感を感じる。

(……2人……いや、3人……か?)

魔に属する者だから判る、「躑躅院」の中には複数の人格が存在している。この会議に参加しているゴモリーも目を細めている事から、あやつも感じ取っているだろう。

(意図的に作られた多重人格者……か?)

多重人格と言うのは見た事があるが、それらは元の人格が剥離し生まれた人格だ。だが躑躅院には魂が剥離した痕跡がない、これは意図的に必要とされる人格を植え付けられている可能性があるな。

「ブラドール伯爵、私に何か？」

「いや、こうして協力し合える事が幸運だと思っているだけだ」

気配を殺していたが、私の視線に気付いた……か、どうもきな臭いな。良い噂が少ない陰陽寮だ、少しばかり調べておいた方が良いかも知れん。

「では時間がないので早速本題に入ります。今日本全土を襲っている地震ですが、中国から渡ってきた神霊の身体が奪われ、ガープに利用

されている事が原因だと判明しています」

横島達か、相当緻密な偵察を繰り返したのだろうな……敵の性質が細やかに記録されている。我達の方で記録した戦闘データと大差はないが、戦っている回数が段違いなのだろう。我達の方で把握出来ない敵の能力も記録されていた。

「東京に出現するものはまだ弱いようですね」

【そうみたいね……数が多いのは再生が間に合わないって事ね】

山の中での戦闘では倒しても、即座に回復し学習しなおして出現するらしい。東京に出る個体はそんな能力は確認されていないが、山中か否かというのが敵の再生能力に直結しているのだろう。

「神霊とも合流済みで、本体を捨てても良いと本人も認めているので核を破壊する方法で考えたいと思います」

「植物系と言う事はやはり細菌系が早いと思うワケ」

時間が無いと言うことが判っているので、エミが拳手して植物を枯れさせる方法で行こうと提案する。

「それは良いアイデアだと思うんだがね、回りの被害を考えるべきだ」「うむ、植物を枯れさせるだけならば楽だが……地面に打ち込めば、周りを汚染するぞ」

優太郎とカオスがエミの提案に反対意見を出す。だが、敵も馬鹿ではないので、直接本体で出てくることは無い。

「……精霊石などで霊力を遮断出来れば楽なだけ……」

「相手が神様じゃねえ……まあ私達にも効果は殆どないんだけど」

ゴモリーの言う通り、元々天使のソロモンには精霊石は殆ど効果が無い。そして神霊の操られている肉体とやらも、知識がないとしても神の端くれ精霊石の効果は余り望めない。

「ふむ、それでしたら……地表に呪いを刻んでしまうのはどうでしょうか？」

「話を聞いていたかな？」

呪いを打ち込むと提案した躑躅院に西条が嫌味を言うが、躑躅院はにこやかに笑う。

「ここには幸いサンプルが大量にあります。本格的に大地を汚染する

呪いは必要ない、敵の嫌がる呪いを作るのです」

ほう……中々頭が回る、それとも陰陽師と言う人を呪う術者の知識からかと正直感心した。

「なるほど、敵が隠れていたかなくなるような空気を作る訳か」

「はい、敵を炙り出して、そこを狙い打つと言うのはどうですか？」

地中に隠れて、まともに動いてこない相手を探り出すにはその方法が一番確実かもしれない、問題は……。

「どれくらいで準備できそう？」

「ん～細菌をベースにして、私の方は半日もあれば何とかなるワケ」

「私の方は1から分析なのでなんとも、ブラドール伯爵とドクターカオスが協力してくれれば、目処も立つかもしれません……」

ガープに操られている神霊の肉体が本格的に動き出す前に、我達の準備が出来るのかどうかという問題が大きく立ち塞がるのだった……。

くガープ視点く

机に指を何度も打ち付ける。計算外の事が起きている……しかも修正不可能なレベルでだ。

「お前は何者だ、マントの男」

横島達の場所を確認し、送り出した神霊。それが倒されたのは計算の内だ……あれはあくまで作られた複製であり、御神体が無ければ身体統合を十分に維持出来ない。寧ろ破壊される前提の人形と言っても良いだろう、だから破壊される事は想定内だ。

「御神体の事は仕方あるまい」

レイ自身も川に落ちて疲弊している間に横島達に捕虜にされていたと報告を受けている。狂神石のストックも使い切っていたようだし、そうなればレイは普通の少女と大差ない。2対1で取り押さえられ、御神体を取り上げられたとしても不思議は無い。

「随分と苛立っているようだな、侵攻に不満か？」

「……侵攻事態に不満は無い。だが、私の計算通りじゃないという事が腹立たしい」

天界と魔界の侵攻は想定よりも進んでいるし、量産型レイも十分に成果を挙げてくれている。人間界の侵攻はさほど重要視していないが、日本が滅ぶかもしれないという事で仏教系の神魔の動きを束縛する事を考えれば、こちらも十分な成果を挙げている。

「何が不満だ？ 我の戦略か？ それとも暴走したアスラか？」

アスラは別に構わない、元々神魔の強い恨みを持つ。戦いになれば命令に従う等と思っていないのだから……私は指を動かして空中にモニターを投影する。

「これを見てくれ」

私を不快にさせている現況をアスモデウスにも見せる事にする、アスモデウスの意見も聞きたいと思っていたからな。

「……これは……横島と同じ……か？」

「ああ、恐らく似て非なる者……ノーフェイスを運用した時に現れた別の時空の横島忠夫と同じだと私は推測している」

紫、白、灰色の仮面ライダー……仮面ライダーと言う括りではあるが、その性質は全く異なっている。

「問題はその後だ」

ライダー達が人形達を殲滅した後に現れたフード付きのコート？ いや、ローブか？ 全身を覆い隠す服に身を包んだ男が手を翳すと3人はカードになり、男の手の中に戻っていく。

『いずれお前達に会いに行くぞ、ガープ』

そしてこの男は私の使い魔に堂々とそう告げ、空気の中に溶ける様に消えて行ったのだ。

「……何者だ、この男は」

「判らない、少なくとも使い魔で見ている時には私はこの男を認識していない」

「どういうことだ？」

「見ていた筈なのに、私はこの男を認識出来なかった。映像記録を見返して、やっと気付いたんだ」

私の認識すら完全に欺いた男がこうして映像記録に己の姿を残した……私はこれを挑発と受け取った。

「厄介な相手そうだな」

「ああ、相手の出方が……何事だ!？」

突如アジトに鳴り響いた警報。馬鹿な、この場所を神魔に特定されたのか!？慌てて外部モニターに接続する。

「……あいつは!？」

魔界の大地に立つフード姿の男……それは紛れも無く私を挑発していた男の姿だった。

(馬鹿な……量産型レブナントが全滅!?)

主戦力として生産しているはずの量産型レブナントが全て全滅している、警報が鳴り響いて殆ど一瞬でだ。……この男……何者だ。

「態々お越し頂けるとは光栄だ。それでお前は何者だ?」

映像で声を掛けると男はふっと小さく笑った。その姿にますます苛立ちが募る、だが男はそんな私達を見てなお嘲笑うように言葉を続ける意。

『魔神が壊すというのなら、それを守る。神が守るといふのなら、それを壊す。それでこそ、中立にして公平というものでしょう? だから……私はお前達を壊しに来た』

「ほう、私達を壊すか……大きく出たな、人間如きが」

『そうやって驕るのがお前達の悪いところだ。だからこそ、お前達は弱い人間に足元を掬われる。覚悟するがいい、我が刃はお前達に届くぞ』

男が手にしている銃がモニターを破壊する。なるほど、宣戦布告に訪れたという事か……。

「潰すぞ、アスモデウス」

「ああ、ここまで虚仮にされて黙ってはいられんよなあ」

まだ男が外にいる、そう思い全軍出撃したのだが……そこには本を開いている男の姿があった。

「ほう、ソロモンが2人も相手をしてくれるとはな」

「人間如きが私達を挑発した事を悔いるがいい」

「悪いが、私は純然たる事実を告げただけだ。さて……と今お前達に好きに動かれると、私の計画が狂うんでな。ここで足止めをさせて貰う」

男は読んでいた本を閉じ、コートの内側から何かを取り出す。なんだ……眼魂と……何かの機械が男の手に握られていた事に気づき、魔法を放つがそれは余りにも遅かった。

【ヴィートウスッ!!】

男の腰に巻かれていたベルトに眼魂を嵌めこまれた機械が装着される……この男も仮面ライダーかつ?!

「変身」

【逆行!・パラドクスタイム!・スゴイ・ネガイ・オモイ 仮面ライダーフォーティス、フォーティス、フォーティスッ!!】

柱時計が現れ、それが時間を刻みながら男の姿を覆い隠していく……そして柱時計が消えた時。ローブを身に纏った仮面ライダーが私とアスモデウスの前に立ち塞がっていた。

「貴様……何者だ」

アスモデウスの問いかけに謎の男が変身したライダーはマントを翻し、道化のような大袈裟な身振りを取る。

「数多の世界を巡り、過去と未来を記録する。我は遠い過去と遠い未来より来たりし者にして、未来から過去へと到りし存在(もの)。我が名は仮面ライダーヴィートウス。真なる歴史の篡奪者であるッ!」

慇懃無礼と言う様子で名乗りを上げるヴィートウス。だがその姿を見た時、私の怒りは霧散していた。この男は……普通じゃない、アスモデウスもそれを感じ取っていたからか、人間形態から燃え盛る炎を纏った紅い悪魔の姿へと変貌を遂げる。

「そこまでの大口を叩いた事を後悔するぞ!人間ッ!」

この男を自由にさせてはいけない、私は本能的にそれを感じ取りアスモデウスと同じく魔神形態となり、ヴィートウスへと向かって行くのだった……。

く美神視点く

蛍ちゃんとかえすと琉璃とおキヌちゃんの見ているだけでも正気を失いそうな暗黒空間は今そんな事をしている場合ではない、と言うシズの冷静な突っ込みの前に霧散した。だがこれは後日また騒動になりそうな問題だったが……とりあえず、今は何も言わなかった。「そう、判ったわ」

『すまないね、東京の方の人員には全員了承を得ているが……必要な事だった』

躑躅院に協力要請、前回の隕石落としの時もそうだったが……例えば危険だと判っていても今は手を借りなければならぬ状況だ。

「向こうの要求は？」

『前回と大差ないよ。横島君とゆっくり話をする時間と、陰陽寮への見学を希望している』

「よっぽど引き抜きたいのね」

横島君は現在の陰陽師の中ではもっとも優れた能力を持っている。陰陽師の技術が廃れかけている陰陽寮には、喉から手が出るほどに欲しい人材だろう。まあ、私も琉璃も横島君を陰陽寮に渡すつもりはないし、横島君自身も陰陽寮に行く事を選択することは無いと思う。

『こちら側の作戦としては、東京に出現している土人形や昆虫を分析して相手を炙り出す準備と、エミ君の黒魔術で相手を弱体化させるつもりで動いている』

「判ったわ、こつちの方の報告だけど……本体は龍になるかもしれないって」

受話器越しで西条さんが息のを呑んだのが判る。元々シズは球根のような、植物状の神だった、だが、日本と言う土地に適合する為に身体を再構築し、極上の霊脈を利用しての身体を作り上げているそうだ。最初の目撃された蠍のような下半身を持つ巨人から更に変化する可能性があるかも知れないらしい。

『小竜姫様達が関係しているのか？』

「……その可能性はゼロじゃないって」



竜神を見た事により、より強い存在を知ってしまった。だから更に身体を作り変える可能性があると言っているとシズは言っていた……正直巨人と言うだけでも厄介なのに、それが更にパワーアップするとか本当に冗談じゃない。

「あくまで可能性の段階だけど、こっちは龍と戦う事も想定して準備してる、姿形は龍でも、性質的に変わりはないらしいし」

あくまで土着の神であり、大地から切り離す事が出来ないというのが攻略のヒントになるだろう。くえすの呪いにエミの黒魔術が加われば、相当弱体化させられるという希望はある。

『……どこまで弱体化させられるかが肝だな』

「そうね、小竜姫様達も動いてくれてるけど……多分どれだけ頑張っても下位クラスの神魔と同等らしいわ」

私は今西条さんと連絡を取る為に会議を抜け出しているけど、大広間ではまだ対策会議が行われているだろう。

『もう少し増員を送ろうか？』

「ううん、これ以上は良いわ。と言うよりも、もう無理でしょ？」

私の言葉に西条さんが苦笑するのが判る、私達が氷室神社に来てからそろそろ10日。私達のほうも苦しい戦いをしているが、東京で主戦力となっていたビュレトとブリュンヒルデが抜けてしまったのだ。間違いなく、戦力的に言えば東京の方が苦しい状況になっているだろう。

『……出来るだけ早く、こちららも準備を終えてシンダラに道具を送らせる』

「うん、ありがとう。こっちももう少し偵察と準備を整えるからあんまり焦らなくても良いわよ」

ここで御神体を取り戻したのが大きなアドバンテージになっていると思う、霊脈の支配権はおキヌちゃんとシズがいるので元々こちら側にあった。それでもあの巨体を操る事が出来ていたが、支配権の差でおキヌちゃん達の前ではまともに活動できず御神体を求めてた。だけど、それも手にした事で流れは確実にこちらに傾いてきていると思う。

「おかえりなさい、美神さん」

古い和綴じの本を大量に抱えている横島君が私に気付いておかえりなさいと声を掛けてくる。今私達は相手の偵察と平行してもう1つの作業を行っている……それはおキヌちゃんがかつて暮らしていた集落で祭られていた神についての調査だ。

「どう？何か手掛かりはあった？」

「んーすみません、俺こういうの読めないんでなんとも……ただもう少し古い年代をって言われたので、色々探してますけど……」

古い文字を読むには横島君では知識が足りないから、こうして運搬係を務めているって訳ね。

(それにしても、凄いバランスね)

横島君の頭にしがみついているうりぼー、蹄で身体を全然固定出来ないはずなのに横島君の頭の上から落ちる気配がない。

「みむう？みみー？」

「ぶぎやうツ!!」

「みーむう……」

チビが多分降りるようになっているんだけど……うりぼーは唸り声で返事を返す。横島君がいなくて、随分とうろろしていたけど……横島君から離れると居なくなってしまうとも思っているような素振りだ。

【ノツノー！】

「よし、これで頼まれた本は揃ったな。また運びに行くか」

チビノブも頭の上に本を載せて歩いてきて、2人で歩いていこうとするので、逃げられる前に注意をしておくことにする。

「今は仕方ないけど、そのうち横島君も読めるようになりなさいよ？」

「……頑張ります」

GSとして独立するならこういう古文書を読める知識も必要になるんだからねと声を掛け、山積みの本の周りに足を向ける。

【これは当時の食糧事情じゃ、えーっとこれは日照りの記録】

【こっちはあれですね、昔の伝染病とかので……んーっと】

「……これは近いな、小竜姫。この種類の本を探してくれ」

「判りました、すいませーん、横島さん、今度はこっちにお願ひします」  
ノツブと牛若丸、そして小竜姫様とシズクが本を凄まじい勢いで捲り、違う違うと投げ捨てている。氷室神社に保管されている文献だから、もう少し大事にして欲しいんだけどと思いつながら本を片付けている蛍ちゃんと琉璃にどういふことか尋ねる。

「私が読める範囲じゃ、手掛かりが無くて3人に頼んでます」

蛍ちゃんと琉璃が読めないとなると江戸時代とかじゃないわね、もう少し昔の記録にまで手を伸ばしているのかもしれない。

「琉璃も無理なの？」

「読めない事はないんですけどね……流石に平安時代初期とかの文献は少し……」

平安時代後期なら私でも読めるんだけど……、流石にその年代ともなると読むのは些か厳しいわね。

「……む」

「これは些か不味いですかね」

【やべえってもんじゃねえだろ】

【……知らない方が幸せな事ってあるんですね】

……急に凄い不吉な話を始めた小竜姫様達。おキヌちゃんの集落が何を祭っていたのか？それを尋ねると小竜姫様は引き攣った顔で口を開いた。

「だいだらぼっちです」

「「え？」」

私と蛍ちゃんと琉璃の驚愕の声が重なった。そして小竜姫様はそんな私達を見て、小さく溜め息を吐いた後。

「もう一度言います。だいだらぼっちです。本体ではなく、分霊ですけど……間違いないと思います」

国作りをしたと言う巨人、神や鬼とも称される巨人……日本のあちこちに伝承のある有名すぎる妖怪であり、神。それがかつてこの山で信奉され、暴走したシズの肉体に食われたもう1柱と判明し、私達は心の底から深く溜め息を吐いたのだった。

(これ、くえすとエミの呪いで何とかなるかしら……)

分霊とは言え、だいだらぼっち。その知名度と強力は折り紙つきだ……しかも龍の性質まで持ち始めるかもしれないとなると、西条さんには焦らなくて良いと言ったが、時間的な余裕はそれほど無いのかもしれない。

「文献探しが終わったのなら、横島を借りてもいいですか？」

「え、あーうん。良いわよ」

くえすが横島君を助手にくれと言うので、良いわよと茫然自失と言う感じで私は返事を返すのだった……。

くレイ視点く

横島達が撤退したあと、私は金色の蝙蝠に先導され山の奥に案内された。そこには派手な色彩の着物を纏った優男……確か、蘆屋の姿があつた。

「今回は私の手違いでとんでもない事をしてしまい、申し訳ありませんでした」

「手違い？」

何を持って手違いをしているのか判らない、私自身も川に落ちる前があやふやで良く覚えていない。

「コブラの眼魂をお返し願いたい」

「……これ？」

血の様に真紅に輝く眼魂を懐から取り出す、これは単独では使えないと聞いているけど……もしかするとこれが私が意識を飛ばした理由なのかもしれない。

「調整を行いたいで」

「……やだ」

「はい？」

「やだ」

返すのが正しいと思ったのだが、これを返したくないと思懐に再

び隠す。蘆屋が目を丸くしているのが判る、頭を押さえ再び蘆屋が返してくださいますと云う。

「……嫌だ」

「何ゆえですか？それは単独では使えませぬよ？」

「……それでもやだ」

何故かこれを手放してはいけない気がする、だから嫌だと拒絶する。

「判りました、ならば無理に返せとは言いませんが決して使いにならぬように」

「……判ってる」

私が余りにも拒絶するので、蘆屋も諦めてコブラを返せということは無くなった。変わりに、狂神石の瓶を手渡してくるのだが……。

「……少ない」

「ええ、少々こちら側に問題がありました」

問題？と私を首を傾げると蘆屋は何とも言えない表情をする。その表情にただ事ではないと私も悟った……馬鹿にするわけでもない、考察を口にする訳でもない、本当に見たことのない表情を蘆屋は浮かべたのだ。

「ガープ様とアスモデウス様が重症、基地から手を引き撤退しております」

「……何があったの？」

「それが……判りませぬ」

「……どういう事？」

「判らないのです、私もその戦いを見ていた筈なのに……思い出せないのです。恐らくそういう能力者に襲撃を受けたとは思いますが……」

ガープ様達も同じだと冷や汗を流す蘆屋。それは少なくともガープ様達を戦闘不能にするだけではなく、記憶も奪う相手。

「……魔界正規軍ではないのですね」

「ええ、魔界正規軍なら全員取り押さえられているでしょうからね」  
少なくとも戦闘不能にして、その場に放置するような真似はしない

でしよう。と蘆屋は顔を歪めながら口にした。

「そういう事情で狂神石はこれ以上は提供出来ませぬ」

「……でもこれじゃあ、戦えない」

フアントムコールドーを起動するだけの狂神石も無い。これでは、私は戦えないという。と蘆屋は札を数枚手渡ししてくる。

「ガープ様もレイに戦えとは言っておりませぬ。どうせ、横島も戦闘できる状況ではありません。ゆえに、横島の変身無しの戦闘データの記録をお願いします」

渡された札の説明を軽く受けると蘆屋は印を結んで闇の中へと消えていった。戦わなくてもいい、戦闘記録だけを取れという命令に少しだけ安堵している自分に違和感を感じながら、私はその日は眠る事にした……少しでも霊力や神通力を回復させる為だ。

「……どうなるのかな」

地響きを立てて進む神霊。前は下半身が蠍みただったが、今はそれに加えて両肩からドラゴンの顔が姿を見せている。御神体は失ったが、より強力に進化していると言うことだろう……。

(あれ?)

でも見ているとその身体の一部が少しずつ剥がれているように見える。その剥がれた部分は即座に再生しているけど……ちよつと調子が悪そうにも見える。

「……予定より早い?」

夕方から夜くらいに予想だったが、殆ど朝と言っても良い時間だ。予定よりも早く完全体になった訳でもなさそうだし……。

「……何か攻撃を受けたのかもしれない」

ビュレトやブリュンヒルデが合流した事も確認している。御神体が無いので、完全体になる前で出撃しない筈だったが……もしかすると私が気付かなかっただけで、先に何らかの攻撃を受けた可能性もある。

「……でもその程度は大きな差にはならない」

何かの攻撃を受けていたとしても、あの巨体だ。それに、殆ど無限再生の手下も多数いる……多少の妨害など何の障害にもならないだ

ろう。

「……安心してください、死にそうになったら回収してあげますから」  
氷室神社から出てきた横島達を見て、誰に聞かせるでもなく私はそ  
う呟き、蘆屋から預かっていた札の1枚を引き裂くのだった……

リポート28 切り開け、己の未来 その12へ続く

## その12

リポート28 切り開け、己の未来 その12

〈横島視点〉

美神さん達の懸念は的中する結果となってしまったようだ。地響きを立てて進んでくる巨人の本体は写真で見た蠍に似た下半身に加え、両肩から触手が伸び、その先は牙を剥き出しになっている龍の顔が生えている。写真で見たものよりも小さくなっているが、それでも10mはある巨体だ。

「横島、判っていると思いますが決して戦場に出ようなんて思わないことですわ」

「……神宮寺さん、はい。判ってます」

正直俺は今回は戦力外となっている、その理由は2つ。1つは変身の反動、もう1つは琉璃さんが影響している。俺は正直良く判っていなかったのだが……俺の霊力の質は「魔」に近いらしい、それに対して琉璃さんの霊力は完全に善？んー神？良く判らないけど、小竜姫様に近い性質らしい、つまりマタドールとの戦いで使ったマスタードラゴン。それと似た現象が今の俺に起きている訳だ、身体の痛みなどはないが霊力の細かいコントロールが出来ない。陰陽札などは問題なく使用出来るが、栄光の手や勝利すべき拳などの細かい霊力制御を要求する技が一切使えないのだ。

「貴方が今すべき事は私の魔力の強化、それと相手にこちらを認識させない事の2つですわ」

「了解です、上手く出来るか判りませんが……頑張ります」  
東京からシンダラによって運ばれてきた特別な陰陽札と、エミさんが作ったと言う細菌弾が3発……それが俺達の切り札となる。

「あれは確かに本体だが、本体と直結している肉体なだけだ。あの規模だから破壊できれば相当な影響を与えられるが……無理に破壊する必要はない」

「そういう訳だ。あの導師が作った兵器は破壊したのだからな」



導師の幽霊は昨晚強制的に成仏させた。その理由は美神さん達の警戒していた通り、あの導師は既に6割方怨霊になっていたのだ。それが琉璃さん……つまり神代家の人間が来た事で一気に怨霊化が進み。おキヌちゃんだけではなく、あろうことか俺達さえも生贄にして霊力兵器を使おうとしていたのだ。これは俺達が寝ている間に小竜姫様、ビュレトさん、ブリュンヒルデさんの3人が対処してくれたらしいが……人間の姿ではなかったとだけ聞かされ、導師がこの世に残る触媒としていた霊的兵器も破壊する事になったのだ。

【一応最終兵器で残しておきたかったんですけどね……】

「おキヌちゃん、それやったら2度と口を利かないからな？」

じよ、冗談ですとおキヌちゃんは言うが、俺としては誰かを犠牲にして勝つということはしたくない。折角生き返れるかもしれないのに、そんなおキヌちゃんが再び死ぬなんて認める事は出来ないのだ。……まあ、あのレベルになるとお前の魂だけじゃ足りないからな、そもそもあんな外道な物は存在しない方が良い」

俺たちの護衛として一緒に行動しているシズクが目を細めながら呟く。本来ならば、シズクもあの巨人の攻略に参加するはずだったが……シズクはミズチつまりは「水」だ。地面や木の属性のシズクは相性が悪いから氷室神社と俺の守りに参加している

「……術式の第一段階完了、横島ツ！」

「は、はいッ！ かの者の力を増幅させよ！ 急急如意令ツ!!」

精霊を呼び寄せるのではない、神宮寺さんの魔力に干渉してその魔力を増大させる。

「……後3割。ゆつくりと増大させてください」

「は、はい」

ぼんやりと感じる神宮寺さんの魔力に干渉して霊力を注ぎ込む。さつきも言った通り、今の俺に細かい霊力調整は出来ない。

【すこしばかり霊力が多いな、こちらでコントロールするぞ】

「心眼、頼んだ」

心眼に俺の霊力の細かいコントロールをして貰い、陰陽札を媒介にして神宮寺さんに俺の霊力が譲渡されていくのだが……。

「ん……ッ」

(気まずい)

神宮寺さんの声に艶が混じるので、霊力の操作を間違えそうになるし、おキヌちゃんの目も怖い。唯一普通に接してくれているのはシズとシズクの2人だけと言うこの状況……本当なら前線に出てる方がよほど気が楽だと思う。

【それくらいに留めておけ、暫くはその魔力量を維持するべきだ】

「で、ですわね……くっ……結構きついですわね」

普段の余裕に満ちた表情から一転、冷や汗を流している神宮寺さん。厳密に言えば神ではないのだが、肉体だけでも神と言う事で呪いを掛ける事に対する難易度が恐ろしいほどに上昇しているのだろう。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫に決まっているでしょう？本免許持ちのGSを舐めてはいけませんわ」

そう笑う神宮寺さんだが、その笑顔が無理をしているようにしか思えなくて……

(無理なの……かな)

自分でもコントロール出来ないほどに霊力が増加している今ならば、不安定になってしまう文珠の作成。これだけ霊力が増えているのならば……文珠を生成して美神さん達の手助けが出来ないかと考えてしまう。

「……間違っても文珠を単独で作ろうとするな、今のお前の霊力では暴発するかもしれないからな」

「シズク……うん、判ってる」

自分でも制御できない霊力。どれだけ力があっても、これでは何の意味もない。強い霊力が欲しい訳ではない、自分で使いこなせる自分の技量と比例した霊力だけあればいいのにと思わずにはいられない。

【なにそこまで心配することはない、ナナシとユミルは強いよ】

「本当に？」

【勿論だ、あの2人なら神魔にも匹敵する。戦場の心配をするよりも、今自分の出来る事をするがいい】

チビ達と共に美神さん達の戦いに参加しているナナシとユミル、正直ハムスターサイズなので心配ではある。だけど、六道での試合もあるからきつと大丈夫なのだろう……と言うかそうでも考えてないと美神さん達が心配で、駄目だと言われているのに戦いに合流しそうになつてしまう。

(今自分にできる最善……か)

今は戦えないと言う事が判っているの、裏方に回るしかない。その事が悔しくて、俺は拳を握り締め遠くに見える巨人に視線を向けるのだった……。

〈蛍視点〉

東京からシンダラによって運ばれてきた支援物資、そして呪いの効果だけを強化した陰陽札。それによつて神の肉体が出てきたのは間違いない。こちらにとつては計算通り、今も確実に敵の弱体化は行われている……等。

「ちつ、再生能力が高いな」

「地面から完全に切り離さない事には再生能力を無効化することは出来ないでしょう」

腐つても地霊、地面に接している限り相手の能力全てを抑制する事は出来ない。だがあの巨体では、地面から切り離すと言うのも難しい

【ちえいッ!!】

「はッ!!」

現れた時は10m近かった巨体は今5m近いサイズまでに小さくなつている。だが、それでも巨体は健在だ。ビルを簡単に両断するであろう蠍の鋏を牛若丸と小竜姫様が弾き続け、ブリュンヒルデさんとビュレトさんが大技を叩き込む。それによつて相手の動きの大半を抑え込んでいるが、地面から生えてくるように現れる昆虫や木人の頻度も少なくはなつている……。

「ノーブ！ノーブ！！」

チビノブが手を掲げると空中に「N」の文字が浮かび、そこから車のような機械が現れる。

「美神さん、あれどうなってるんでしょうか？」

「知らないわ、ドクターカオス脅威の科学力とでも思ってたなさいッ!!」  
木人の一撃を受け流しながらの私の疑問に美神さんが怒鳴ってくる。でも転移してきてるわよね……同じ科学者としてその技術には強い興味がある。

「ノーブ!! ノーブーローブッ!!」

勢い良く飛び上がったチビノブと、Nの文字から出現した車が真ん中から左右に分かれてチビノブの両腕に装着され、ヘルメットがチビノブの顔を覆う

「ノーブーローブーローブッ!!」

肥大化した両腕を下にして急降下してくる姿に強烈な嫌な予感がし、慌ててチビノブから距離を取る。そしてその直後地面に腕を叩きつけるチビノブ、叩きつけられた両拳を基点に凄まじい振動が周囲を襲う。

「な、なんてパワーよッ!」

「も、もしかしてさっきの私達のほう見て鳴いていたの警告だったんじゃないですかねッ!」

立っていられず、思わず膝をついたが今こっちを見て鳴いていたのは、もしかしたら危ないと言う警告だったのかもしれない

「ぶぎぎッ!!」

空中から空を飛ぶうりぼー達が編隊を組んで急降下してくると同時に牙の間から霊波砲を連続で打ち込んでくる。

「チャンスー今の内に体勢を立て直すわよッ!」

「はいッ!」

横島の方にはシズとくえす、それとおキヌさんの3人が付いているのでマスコット組みも全員こっちに参加している。近くで守るよりも、敵を倒した方が横島が安全と判断しているのか、非常に攻撃的だ。

「みーむ!」

「ぴぐうッ！」

チビの合図で旋回し、今度は回転しながらの牙アタックで木人を吹き飛ばす。正直、囲まれ始めていたのでチビ達の攻撃で1度陣形を立て直す事が出来た。

【余り前に突っ込むなよ】

「地面から出てきて囲まれたのよ、私達のせいじゃないわ」

背後に召喚した火縄銃で支援をしていたノツブ。でも私達も別に孤立したかった訳ではない、地面全てが敵が出現する領域と言うのを少々甘く見ていたのだ。

「それよりも琉璃の方は大丈夫なの？」

【問題ないわい、ただここまで静かだと些か心配じゃがな】

琉璃は今結界の中で祈りを捧げている。神代に伝わる神卸の技術の応用……人間界に一時的に神魔でも行動しやすい空間を作り上げる。それには極度の集中と膨大な霊力が必要になる、精霊石と結界札にルーン魔術で作られた強固な結界の中にいる琉璃。

(保険のまま済めば良いけど)

前に分析用にと回収した文珠が2つ。回復の復の文字が刻まれた2つの文珠、これで琉璃の霊力を復活させて結界の維持を願っている。

「美神殿ー！こっちの手伝いを頼むでござるよおッ！」

「そっちが分断されてこっちが大変なんだからねえッ！」

タマモとシロの助けを求める声を聞いて琉璃はノツブに任せて2人の方に駆け出すのだが……

「ふっははははっー！弱すぎるわあッ!!超級妖精幻影弾ッ!!」

「我はユミルッ!氷室舞の剣なりッ!!チェストオオオオッ!!」

霊力を纏ったまま体当たりをするナナシと、凄まじい長さの大剣を振るうユミルの姿に私も美神さんも絶句する。もう、あれ絶対妖精じゃない、それが私と美神さんの間違いな共通の認識だと思っただった……。

くくえす視点く

横島からの霊力の譲渡には1つ問題があった。琉璃の霊力が今横島に混じっている事……などではない。魔と聖が混じると強烈な反発作用を引き起こす、だが横島は信じられない事に聖と魔の両方に強い適正がある。神にも魔族にもなれる体質と言っても良いでしょう、そんな横島の体内で交じり合った霊力は既に聖でも、魔でもない、純粹な力の塊だ。魔その物の私の霊力にも問題なく融合してくれる……問題は霊力などでの問題ではなく、純粹に私の羞恥心の問題だった。

「ん……」

身体をまさぐられるような感覚……これが問題だった。ビュレト様の魔力に引かれて人間らしい感性が殆ど死んでいるし、訓練で色事にも強い筈なのに、この感覚だけは慣れない……いや、慣れる事が出来ないのだろう。

(……でも当然ですわね)

思いを寄せている男とそうではない男、身体や心の反応が異なるのは当然だ。何よりもこの感覚は、私が確かに人間であると言う証明のようにも思える。もう少し、もう少しだけこの感覚に浸っていたいと思うが……そろそろ限界だ。

「力の増幅を止めてください……これ以上は無理ですわ」

「りよ、了解ですッ！」

私の力のキャパの意味でも、声を押し殺すにも、平気そうな表情をするのも限界なので霊力の譲渡を止めさせる。

【……】

おキヌがジト目でみているがそれは完全に無視する。シズクとシズは大して興味も無さそうと言うか事実無いのでしょうね、霊力の譲渡は房中術に近い側面がある。平安時代の竜神と、それよりも古い時代の神では大して目くじらを立てる事でもないと言う事でしょう。

「……呪いの効果は十分に出てますが、ここまで効果が出てくるとそろそろ危ないですわね」

最初に出現した状態から考えれば既に半分以下にまでサイズダウ



ばれる存在に墮ちる事を意味しますが、既に神でもない肉体だけでは足りない力を補う為に人間を喰らおうとするのは当然の事ですわ」

魂食い、これが足りない力を補うのに一番手っ取り早い。霊脈から断たれ、今もビュレト様達の攻撃を受けて小さくなっている事を考えればたった2割だけ確保出来ている霊脈では足りないかと判断したの  
だろう。

「じゃ、じゃあ早苗さん達も危ないんじゃない?」

「……それは心配ない、霊能者としての格が低いからな」

既に霊能の半分ほどが廃れているので、霊能者としての格はさほど高くないという言葉に偽りは無いだろう。それに私や横島、それに美神や蛭と言った強い霊力を持つ餌が近くに居るのに、食べた所で大して腹の足しにならない人間を襲う事は無いだろう。

「シズク、少しの間お願いしますわね?」

「……お前はいつでもいいが、横島を護るついでは護ってやろう」

それで十分、シズクはどこまで行っても横島の守護者。そのついでで私は十分だ、そもそも死ににくい体でもあるのですから、多少の怪我など何の問題でもない。

「組み立てますわよ。このライフルを」

ドクターカオスと芦優太郎の作り上げたこの特殊ライフルならば、地面も貫通してシズの本体を貫けるだろう。

「は、はいー」

おっかなびっくりと言う様子だが、手先が器用な横島を残したのはこのスナイパーライフルを組み上げる為ともう1つ。

「私ではこれを撃てませんからね、貴方が撃つのですよ」

「せ、責任重大ですね……」

引き攣った顔をしているが、事実だ。いかに魔力などで身体能力などを強化していても、私は所詮女なのだ。これだけ長大のスナイパーライフルを撃つには骨の強度が足りない。それならば、横島を強化して撃たせた方がまだ命中する可能性が高い。

【地面が揺れ始めてきましたね……】

「まあ、当然ですわね」



巨体を操っている本体は地中だ、本来なら人形で私達を喰らうつもりがそれすらも失敗すれば慌てて地上に出てくることは計算の内だ。

「……だが気を緩めるな、あくまで私は植物だ」

「判ってますわ」

植物、つまり株分けなので分身が作られる可能性もある。現に木人と言うのはシズの肉体の分身である事までは判明しているのだから……。

「今の所は分裂した気配は無い、狙うなら今だ」

索敵能力に特化している心眼がそう言うのならば間違いないだろう、恐らく分裂してターゲットを逸らすという知恵も無いほどに劣化しているのでしょう。

「では行きますわよ」

私が良く使う浮遊術ではない、それではスナイパーライフルの反動には耐えられないだろうし、不安定だから横島も射撃に集中できない。魔力の消費が多くなるが、シズクの氷を土台にして空中へと浮かび上がる。

「ちよつと冷たいですね」

「……我慢しろ」

地面は全てあいつの肉体になると言っても良い、地面を持ち上げてそれと同時に包み込まれたのでは抵抗など出来ない。ならば、多少の冷たさは我慢して氷を浮かび上がらせる方が得策だ。

「……もう少し上。そして左だ……そこから斜め下……よし、そこだ」  
シズが自分の核の場所を特定し、横島がそこに照準を合わせる。姿は横島の陰陽術とルーン魔術で隠しているので見つかる事は無いだろう……無論警戒を緩めるつもりはないが……。

「すーはーすーはー……ふー」

深呼吸を繰り返し、集中状態になった横島が氷の上に寝転び、スナイパーライフルの引き金を引いた。凄まじい轟音を伴ってエミの作った植物を死滅させる呪いの込められた銃弾が地面に突き刺さる。

「——ッ!!!」

声にならない獣の断末魔が響き渡る、心眼の言う通り核を分裂させ



「フーブウ」

「ぴぎゆう……」

ご主人が居なくなるのは初めての事だった。チビやタマモは経験しているかもしれないけど、チビノブも自分も初めての事だった。撫でてくれない、抱っこしてくれない事が寂しくて……それ以上に怖いと思ったのだ。

（人は弱い）

どれだけ優しく、暖かくても人は弱い。その事を初めて知った、今回は無事に帰ってきてくれた。それでも次は？その次は？いつか大きな怪我をして居なくなってしまうのではと思うと怖かった。だからご主人を奪わせないように戦う事を選んだのに……それなのにご主人が奪われようとしている。

「——ッ!!」

切り落とされた龍の首がご主人を飲み込もうとしているのを見た、その瞬間弾かれたように走り出した。まだ間に合うかもしれない、まだ届くかもしれない

（……遅い）

ご主人は可愛いといってくれるけど、この小さい身体が憎い。

（ああ……嫌だ嫌だ……）

誰よりも早く走り出した筈なのに、距離は縮まらない。この小さい身体では……見えていても届かない。

（掴めない……）

この手では仮に間に合ったとしても、その手を掴む事が出来ない。ご主人の仲間も走り出しているが、距離があり過ぎる。届かない……届かない……居なくなってしまう、あの化け物に喰われてしまう。

（嫌だッ!!）

今欲しいのはあの化け物を倒す力。

今必要なのはあの距離を縮める事の出来る足ッ!!!

今必要なのはご主人の腕を掴める腕ッ!!

（色んな物を貰った）

何も知らない自分に暖かさをくれた。

安らぎをくれた……。

幸せとは何かを教えてくれた……。

(無くさない、奪わせないッ!!)

何よりも大事な者なのだ……。

自分にとつて■■■にとつてご主人は必要な存在なのだ。

(届け届け届け届けッ!!)

地面を蹴る短い足が憎い……。

何も掴む事が出来ないこの爪が憎い……。

(欲しい……)

今まで気付かなかった、欲しい物は1つだった……。

愛された分、ご主人を助ける力、護れる力が欲しい……。

今なら判る、時折頭の中に響く声は……。

自分を呼ぶ声は……。

寝ている時に見る、何処かの光景は……。

きつと己だったのだ、今の自分になる前の自分の記憶……。

力を取り戻せと言われていたのに、自分は可愛いうりぼーで居たかった。

ああ、なんて愚か……。

力を取り戻しても己は己だ、可愛いうりぼーで居れたかもしれないのに……それを拒絶したのだ。

だが今は力が欲しい、自分がどうなっても良いから力が欲しい……。

(ああ……欲しい、力が欲しい……)

どうなつてもいい……嫌だけどうりぼーじゃなくなつてもいい、その代わりに……。

(ご主人を助ける事が出来る力をッ!!)

突然視界が高くなつた気がした……。

地面を蹴っていた足が力強く大地を踏みしめる足に変わった……。

雪のように白い手を目の前で握り締め顔を上げる。そこには龍に飲み込まれそうになっているご主人の姿が見える

【返せッ!!!!】



## その13

リポート28 切り開け、己の未来 その13

くナナシ視点く

ふむ、あの猪……ついに本来の姿を現したか……、それほどまでに横島を失うのは恐怖であったか……。

「■■■■ー……ッ!!!」

言葉を発する事は出来ないのではない、恐らくだが古い言語なので言葉として感じられぬのだろうか……いや、凄まじい力だ。

(山その物……まさしく神であるな)

山の中に居る限りうりぼーは無敵であろう。あれはそういう神だ……山の中にいる限りは決して力が尽きる事は無いだろう……問題はその圧倒的な力に飲まれ、自我を完全に失わないかと言う所だろうな。

「フーヴァアアアアアアッ!!!」

……あれは何か判らないな。妖精のような、精霊のような……なんとも言えない生物が雄叫びを上げ、茶釜を地面に叩きつけその上に飛び乗る。

「ユミルよ、横島のつれてくる者はまっこと不思議よのう」

「全くだ、だがそれは俺達にも言える」

茶釜が高速回転し、龍の首を弾き飛ばすと同時に霊力の壁を作り出し、そしてその中にバイク、UFO、車、そして飛行機のような何か飛び込んでいった。

高速回転する茶釜の上で腕組し、仁王立ちするチビノブの回りにバイク、飛行機、UFO、車が旋回しながら近づいた。

「ノブウー」

茶釜が光り輝き、鎧へと変化する茶釜。するとUFOが中心で2分割され変形しながらチビノブの足元へ近づく。

シヤッ!!

具足から伸びたコードがチビノブの鎧と合体し、コードが具足の中

へと撒き戻り、チビノブの足をジャツキなどで固定していく。

車がスライドし、チビノブの胴体を挟み込み鎧の上半身へと変化し、分割されたバイクがチビノブの両肩に装着される。

そして背部に飛行機が装着され、エンジンをチビノブの手に装着され回転しながらその中から握り拳を出現させる。

最後に飛行機の後部から出現した兜がチビノブの頭部に装着され、巨大化した火縄銃が飛行機の全面に装備される。

今この時大英霊「織田信長」の分身としてではない。

チビノブ自身が戦うと決め、横島を脅かす敵と戦う為の鎧。

ファイティングマスケット……。

その名も精霊王グレートチビノブッ！

【ノブウツ!!】

……霊力の壁が弾き飛ぶと、先ほど中に飛び込んだ4つの機械と合体したのか勇ましい姿へと変貌した小人が雄叫びを上げる。その姿を見ていると笑いがこみ上げて来る、その姿を笑った訳ではない。

「まこと、面白い男よ」

種族が違うのに、ここまで慕い、そして傷つけられたことに怒るか……それだけ、横島が愛を持って接し、そしてその愛情に応えようとしている……。

【シャアアッ!!】

【ノブウツ!!】

突き出した左腕から放たれた光の壁が龍の口から放たれた種子を全て弾き落とし、掲げられた右腕が高速回転し、小人が突き出すと凄まじい勢いで射出された右腕が龍の首を跡形も無く消し飛ばす。

【ノブウツ!!】

そして追撃に繰り出された霊波砲が龍の胴体を貫くが、それはあつという間に回復し、それを見て更に横島の傍の小動物達の怒りの気配が強くなる。その姿を見て、ワシは眉を顰めた。

(だがそれは危うい力だ)

怒りは限界以上の力を引き出す、だが怒りゆえにその視野は狭くなりその足を掬われる事になるだろう。

「みつぎやああああッ!!」

チビの怒りの咆哮と天空から降り注ぐ雷、そして赤黒い雷を纏い宙に浮かぶチビの姿を見てそれを確信する。

「ユミル、この場は任せても良いか?」

木人や昆虫が押し寄せて来ているこの状況でユミルを残す事は心苦しい、だがチビ達のフォローに入らなければその怒りの炎はチビ達自身を燃やし尽くすだろう。年上としてそれを諫める必要がある、例え敵を屠る事が出来たとして、自分達が傷つけば横島が悲しむ……そんな事すら判らぬほどに怒りに飲み込まれている。このままでは、そう遠くない内に自滅するのは目に見えていた。

「行け、ナナシ。この場は任された」

「すまぬの」

「ふん、構わん。どうせ俺は誰かと共に戦うと言う事が出来ぬ1人の方が戦いやすい」

ワシと同じサイズの癖に巨大な大剣を振るうユミル、あの男もまたワシと同じ……戦いに敗れ、そして気が付けばあの姿でこの世界に現れていたと言う。

「むんッ!!」

振り下ろされた剣……いや、ユミルが言うには「斬艦刀」の柄から霊力の渦が現れ、ユミルの身体を白と赤を基調にした鎧が包み込み。光が消えた時には西洋の鎧に身を包んだ鎧武者がその場に佇んでいた。

「眼前に立ち塞がる敵は全て破壊するッ!!」

背後の赤いドリルを回転させ、木人達の群れに突っ込んでいくユミル。あの暴れようでは、下手に近づけばワシも巻き込まれかねんな……。

「ではワシも行くか、マスタークロスッ!」

拳から黒い霊力に包まれ、ワシの姿も変わっていく……生身では流石にあの中に飛び込むのは余りに危険、だがこのまま見捨てる訳にも行かぬ。地面を蹴り、背中の翼から霊力を噴出してチビ達の元へと飛びながら思う。



(まっこと、面白い)

死んで目覚めれば異なる世界、そしてそこには追い求めた美しい自然があった……人の営みがあった……。

(ならば、それを護る事こそがワシの使命よッ！)

一度は全てを壊そうとした、だが妖精と言う第二の生を受けた今。ワシがすべきことは壊す事ではなく、護る事。なればこそ、ワシは■■■■ではなく、名も無き妖精「ナナシ」であれば良い、鍛え上げた武術はまだワシの手の中にある……壊す事しか出来ぬこの拳で護る事が出来るのだから……。

くブリュンヒルデ視点く

圧倒的な神通力の奔流、それは魔に属する私とビュレト様には致命的なまでに相性が悪かった。

「ちっ、判ってたはずなんだがな……」

「わかっていたつもり……だったのでしょうね」

神殺し、英雄殺しの2つ名を持つ神魔嫌いの山神「乙事主」……横島が連れているうりぼーが乙事主の可能性は考慮していた。

「動けますか？」

「今はまだ何とかなる……が、時間が経てばどうなるか判らん」

存在するだけで私達の動きを制限する事が可能とは想像もしていなかった。小竜姫は神に属する者だから、まだ負担は軽微だ。だが乙事主の力が高まれば、そう遠からず動けなくなるだろう。

【むぎいッ!!】

【へぶろッ!】

重圧に耐えかねて牛若丸と信長が地面に倒れ……いや、めり込んだ。中級、最上級の神魔ですらこの有様なのだ。英霊では既に活動するのにも限界と言うレベルなのだろう……。

【!!】

言葉も発する余裕も無いのか目配せをしてくるので頷くと、2人の姿はその場から掻き消える。霊体化をすることを選択したのは明白、

そしてその選択も正解だと私は思った。

「■■■■ーーーッ!!!」  
「ギャオオオオオッ?!?!」

手にした無骨な剣で巨人を切り裂き、両肩から伸びている4本の首を切り落とす乙事主。時間が経てば経つほどに、周囲に満ちる力は重くなつていく。

「フーブウウウッ!!!」

ゴレムの中から響くチビノブの怒声、サイズは人間の子供と同じ位なのだが信じられないパワーを発揮している。ドクターカオスの作品と言うのは判りますが、もう少し何とかして欲しいと思つてしまった。

「みぎいいいいーッ!!!」

赤黒い電気を纏うチビも普段の愛くるしさは何処にも無く、完全に怒りに飲まれているのが明らかだった。

「小竜姫、私とビュレト様は大丈夫ですので、あちらをお願いできますか?」

「……はい、判りました。どうか、無理をしないでください」

まだ動けるうちに小竜姫に美神達の元へ向かうように促す、私達はもう空を飛ぶことすら難しいが……それでもまだ戦える。

「この戦いが終わったら、1度妙神山に顔を出すか」

「そうです……ね。そうしましょうか」

今回の事でも実感したが、このままでは私達すらも足手纏いになる可能性が出てきた。もう、神である、英雄であると言う事は戦闘において何の優位性も無い、むしろデメリットにすらなりかねない……。

「この体たらく、竜神王やオーデインに文句すら言えん」

「あら、お父様に文句など言つてらしたのですか?」

言葉のあやだといいながら剣を構えるビュレト様、私も重くて、手から零れ落ちそうな槍を握り締めて眼前を睨みつける。

「「ギギイ……ッ!!!」」

私達同様乙事主の出現で動きが鈍くなつてきているが、それでも歩みを止めない木人と昆虫の群れ。神魔として、あんな存在に敗れるわ

けにはいかない。

(それに……)

横島が小竜姫を慕っている姿を見た、師として尊敬されそして頼るべき人として扱われている姿を見て羨ましいと思ってしまうのだ。

「余計な事を考えてるなよ?」

「失礼な、やる気を上げているんですよ」

恐らく今回もこんなありさまではとても尊敬されるなんて事は無理だろう……それにこんな打算をしているなんて知られば、それこそ失望されかねないと苦笑する。だけど、そのおかげで身体に入っていた力が抜けたのを感じた……。自然体……敵の眼前であったとしてもリラックスが出来る事……そして目指すべき場所、目的が判った。危機的な状況なのに、笑みを隠す事が出来ない事に氣いた。だが、その笑みが危機的状況なのにリラックス出来ていると言う証であり、先ほどまで感じていた緊張感とプレッシャーは綺麗さっぱり消え去っているのだった……。

く美神視点く

今回の作戦立案は私ではなく、くえすとブリュンヒルデだった。平常時ならば横島君の桁違いの霊力を隠す事は難しいが、今の琉璃の霊力が混じった事で、霊力のバランスが崩れている横島君を発見するのは難しいと判断し、くえす、シズク、シズ、そしておキヌちゃんの4人と共にスナイパーライフルでの狙撃役を務めさせた。

(途中まで完全に計算通りだったのにッ!)

横島君は戦えないから姿を隠し、狙撃役を勤めさせるのは正解だった筈だ。それに、小竜姫様やビュレト、それに私達が巨人と率先して戦う事で横島君への注意を逸らし、そしてくえすの呪いとエミの黒魔術と躑躅院の陰陽術、そしてルーン魔術の4種類の呪いは間違いなく巨人の力を削ぎ、そして本体を引きずり出すという私達の作戦は間違いなかった筈だ。

「うっ……」

背後から聞えてきた琉璃の声、その声は疲弊しきっていて限界が近いのが明らかだった。私は悩みながらも、今のこの状況での最善の一手を考えた。

「蛍ちゃん！先に行つてちょうだいッ！シロとタマモも2人についていつてッ！」

茂みから顔を出したばかりの2人にそう叫ぶ、私達が撤退を選択したのと同様で、シロとタマモも撤退を選択したのだ。その理由は間違はなく、氷の土台から落ちた横島君を見たのが理由だろう。

「人使いが荒いわねッ！ま、いいけどッ！」

「せんせーのところに戻るんでござるよなッ!？」

やっぱりシロ達も横島君が落ちる光景を見て、引き返していた様だ。蛍ちゃん1人を先行させるのは不安だったけど、シロとタマモも一緒なら大丈夫だろう。

「美神さん……はいッ！」

私に背を向けて走り出す蛍ちゃんを見送り、足がもつれた琉璃に肩を貸す。

「大丈夫？」

「……ギリギリです、本当に……」

小竜姫様達が全力を出せるように结界を作り上げていた琉璃の消耗は凄まじい筈だ。

「……うりぼーが乙事主に變化したから、無理やり结界を上書きさせましたんです」

結界の上書き……神殺しであり、英雄殺しの乙事主。その範囲は間違いなく神魔と英雄に特化しているのだろう……さつきまで空を飛んでいたビュレトやブリュンヒルデが地面に立っているのは力を制限されて浮かんでいる事が出来なくなっていると言う事ね……。

(本当に乙事主だったなんて)

もしかしたらその眷属程度に考えていたけど……まさかの乙事主本人とは思っても見なかった。しかし、その力を解放したのは横島君がシズの肉体に喰われかけたからだ。

(それだけ横島君を想っていたと言うことかしらね)

勿論私も蛍ちゃんも龍の首が横島君を喰らおうとした時に走り出した、だがそれよりもうりぼーが早かったのだ。

「横島君、大丈夫?」

「う……美神さん、は、はい……何とか」

シズクに背後から抱きかかえられるようにして横島君が返事を返す。その顔は青く、呼吸も速い。傷口が開いたのか、それともうりぼーの結界の効果を受けているのかは判らないが、状況は良くないのは明白だった。

「シズクが言うには状態はあんまり良くないようです」

蛍ちゃんが脈拍を測りながら私に報告をしてくれるけど、それは聞かなくても判っていた。蛍ちゃんと共に先行したシロとタマモが狼と狐の姿で横島君の膝の上にいる、それは自分の霊力を譲渡しているのだろう。つまり、横島君の状態は最悪を通り越して、最低の可能性もある。

「……いいいや、俺は大丈夫」

「横島、ぶん殴りますわよ?」

くえすの言葉に横島君が引き攣った顔をする。どうもくえすやシズクの制止を振り切って動こうとしていたのだろう……。

「小竜姫様、状況はどうなんですか? 実際私達に今の所勝ち目はあるんですか?」

準備していた結界は無力化され、そして小竜姫様達は戦えるが凄まじいまでのハンデを背負ってしまっている。この状況で勝ち目があるのかと尋ねる。

「……勝ち目はありますが、問題は乙事主様と相手の核を見つけ出せるかです」

龍の首から新しい肉体が現れた、そしてその前の肉体は砂のように崩壊した。間違いなく、前の肉体には呪いの弾丸は命中していたのだ。

【弾丸が命中した瞬間に気配が変わった】

【間違いなく本体だったんです】

シズとおキヌちゃんが本体だったと必死の形相で告げる、だがそん

な顔をしなくても2人の話が真実なのは明らかだ。長い間共同体だったのだからおキヌちゃんがその感覚を見逃すわけが無い、それにシズだって自分の肉体だ。これも間違えるわけが無い……それから導き出される答えは1つ。

「この森の中に居る全てが新しい肉体たりえるってことね？」

「……そうなると思われます」

数は減っているが、昆虫と木人、そして巨人から切り落とした肉片すらも新しい肉体となって再生を促す可能性があるのだ。

「ええい!!良い加減にせんかあッ!!この馬鹿者共があっ!!!」

ナナシの一喝に思わず耳を塞いだ、ハムスターサイズなのに森を全て揺らすような声量って本当にとんでもないわね。

「だから止まれといっておるだろうがあッ!!石破天驚拳ッ!!」

それでも動きを止めなかったチビ達にナナシの手から打ち出されたエネルギー弾が命中する。

「みぎいッ!」

「のばあッ!」

「チビがあッ!」

チビ達の絶叫と横島君の悲鳴が響く、だが今の一撃で頭に血が上っていたチビとチビノブも少し落ち着いたように見える。

「くえす、シズク、横島君をお願い。蛍ちゃん、心配だと思うけど今は動くわよ」

琉璃はここにくると意識を失い、死んだように眠ってしまった。やはり、安全な所まで来るまでは気を張っていたけど……やはり、琉璃はとつくの昔に限界を超えていたのだろう……。シズクの側が今一番安全なので、横島君と一緒にこの場に残す事にする。

「……はいッ!」

昆虫と木人を倒す事で、核が転移で逃げる場所を潰す。そうしなければ、いつまでもこの戦いに終わりは来ない。シズク達に横島君を任せ、私達は再び森の中に足を踏み入れるのだった……。

「……ちよ、ちよっと様子を来たただけなのに、なんなのだわッ!?この空間はッ!!」

美神達が山の中に足を踏み入れた時、横島が死に掛けているのを感じたエレシユキガルも乙事主の結界に囚われ、転移は出来ない。隠していた神格も表に出てしまっていることに右往左往していたのだが……ひとしきりパニックになれば落ち着いてきたのか何度も深呼吸を繰り返した後は虚空に手を翳し、両刃の巨大な槍を召喚していた。「ここまで来たのだから、乗りかかった船。少し手伝いをするのだから、別に横島が心配とかそういうのじゃないしッ！う、うん！大丈夫大丈夫ッ!!」女神、お前何言っておるのだ?」ほ、ほわあああああッ!?な、なんでここにいるのだわッ!」

「いや、横島の生命力が随分と弱まったようだから、余も様子を見に来たのだ」

冥界の女主人と女帝が美神達の知らない所で、戦いを始めていたりするのだが……幸か不幸か、それに気付く者は誰も居ないのだった……。

「あ、これが終わったらまた横島のところに行かんか?」

「え、あー行くのだわッ!」

そして再び、冥界の女主人と女帝が横島の家を強襲する事が決まっていたりする……。

くおキヌ視点く

導師様と神代家に因縁があった……そのおかげか、私の魂を弾丸にして放つ装置は壊された。これで私が魂を限界まで磨耗する事はなくなつた……だけど、その代りに相手にトドメを刺すことが出来ないという状況に陥ってしまった。

(どうすれば良い、どうすればいいの……)

このままでは全員全滅する……敵は弱体化しているので簡単にその腕は足を切り落す事は出来る。だが、切り落とした部分に倒した相手の核が移動して再び復活してしまう。

「みむつううーッ!」

「うむ、それでよい!怒りで吹き飛ばすのではない、確実に仕留めよ!」

ナナシとチビちゃんが昆虫や木人を適格に破壊していく、相手の手下が減ればそれだけ相手の核が移動する先が無くなる。

「アンサズッ！」

「ちっ、まともに戦えんのは面倒だッ!!」

ブリュンヒルデさんとビュレトさんも乙事主様へと変化したうりぼーの結界の効果で武器を使うのも難しくなったのか、魔法と魔術を使い始めた。

【■■■■ーーーッ!!】

獣の咆哮が響くと空気がまた一段と重くなった、乙事主様は山の化身ではあるがそれと同時に荒神である。その力は人間にも、神魔にも等しく有毒である。

「ちっ、シズク。横島は任せます、私は少しでも敵の数を減らしてきますわ」

「……判った、気をつけろ」

美神さんや蛍ちゃんも動きが鈍くなっているのを見てくえすさんが戦闘に出る事を決めた。数は減っているし、増える事はないが森を埋め尽くすばかりに現れていた木人や昆虫もその勢いを減らしている……だけど完全にその姿を消したわけではない。

「……焦るな、気を静めろ」

【シズ？】

シズが私を見つめて真剣な表情でそう告げる、今まで黙り込んでいたのに突然何をと困惑しているとシズは再び目を閉じた。

【私を感じ取れるように、お前だって、悪意を感じ取れるはずだ】

【悪意……ですか？】

【そうだ、相手は自分を特定されないために転移を繰り返している筈だ。お前も感じ取れるはずだ】

シズの言葉に促されるように目を閉じて、意識を集中させると確かに感じる……この森の中を動き回る数多の気配を……。

【で、でもこんなに気配に多かったら何を探せば良いのか】

【落ち着けと言っているのだ。確かに敵の気配は多い、だがその中でも気配の強弱があるはずだ】



気配の強弱……今まで考えても無かった事。そして私が戦場に立つと言うことは余りにも少なかった……シズに言われている事も正直半分も理解出来ないと思う……それでも、泣き言を言ってる余裕なんて無い。

(出来ると思いい込む事ですよね、横島さん)

出来ると思いい込め、そうすれば多分。うん、きっと出来る。それが横島さんがよく言ってる事だった、疑うな、迷うな、揺らぐなど自分には出来ると思いい込むと横島さんは言っていた。

「……シズク、怒ると思うけど……両腕だけでいい、後1発……ライフを支える腕と引き金を引く手があればいいんだ」

「……横島……ちっ、これが終わったら説教だ。この大馬鹿者が」

【狙いは私が定めてやる、お前は私が撃てと言ったら引き金を引けばいい】

「それはありがたいな、心眼、シズク……頼むぜ」

横島さんも重症なのに、まだ戦おうとしている。そして美神さん達を助けようとしている……出来ないとやる前から嘆くのではない、自分なら出来る。やってみせると、ボロボロの身体を引きずって立ち上がろうとしているのだ。

【ノーノー……ノーブウウウツ!!】

「斬艦刀ツ!!疾風怒濤ツ!!」

ロボットになっっているチビノブちゃんの背中から巨大な砲門が展開され、森を薙ぎ払うかのように霊波砲が放たれ、ユミルの振るった巨大な刀が木々の間から現れた木人を薙ぎ払っていく、だが2人の攻撃はまだ終わらない。

「チビー・使えッ!!」

「みむうッ!!」

ユミルの投げた刀を空中で受け止めたチビちゃん、その刀を振り上げると短くなっていた刀がユミルが振るっていた時と同じように巨大な刃となり、放電しているのか眩い光を放ち始めた。

「みつぎやあああああッ!!!」

空中で回転したチビちゃんが手にしていた刀を投げ、それが地面に

突き立つと地面に電撃が走った。

「敵味方識別……ッ!? 美神さん、チビがッ!?」

「一々細かい事気にするんじゃないわッ! 横島君に似てきたと思いなさいッ!」

……美神さん、それはそれでどうかと思うんですけど……でもこれは間違いなくチャンスだった。

「……見つけたッ!」

「私もですッ!」

敵の数が極端に減ったのでやつと一際強い悪意を明確に確認出来た……残っている悪意の反応は数個……あれ?

(消えた?)

他に残っていた悪意の反応が突然消えたことに疑問を覚えたが……再び敵が出現する前に狙い打つこのチャンスを逃す訳には行かないと思った。

「あの一本松! その上のトンボが本体ですッ!」

巨人や木人ではなく、弱い昆虫に本体を移していた。だがそれは正しいように思えた、空を飛ぶトンボならば敵の脅威に気付き、逃げる事も出来る。戦況を見極め、木人や昆虫を召喚する事も出来る。巨人を目晦ましにし、そちらに注目を集める。

「■■■■ー……ッ?!?!」

鋭い銃声の音から遅れ、声にならない獣の悲鳴が響き渡り、地面から現れていた木人や昆虫、そして竜の首を持つ巨人も溶けるように姿を消した……思わず安堵の溜め息を吐いたが、それは直ぐに消えた。

「……」

白銀の髪を風になびかせ、猪の被り物をした乙事主様が何の感情も見せない無機質な瞳で私を……いえ、横島さんを見つめている。確かにガープに操られていたシズの肉体を破壊することは出来ましたが……まだ1騒動おきそうな事は何も変わっていないのだった……。

リポート28 切り開け、己の未来 その14へ続く

## その14

レポート28 切り開け、己の未来 その14

く小竜姫視点く

戦いが終わった……いや、戦いが終わったとはまだ言えない。横島さんを見つめる色の無い瞳……乙事主様だ、神ではあるが神を嫌い、人を嫌い、英雄を嫌う。

(戦う事になるのかもしれない)

ここには神も英霊もそして人間もいる……乙事主様の嫌う物全てが揃っている。下手をすれば……いや、下手をしなくても戦う事になるかもしれない……そう思うと額から冷や汗が流れた。

【お前は面白い人間だな、横島忠夫】

静かな声だが、森全体に響き渡る声……これは神託ツ! 誰一人言葉を話す事は許されない。それが許されているのは横島さん1人だけだ……。

「面白い……ですか？俺が？」

口を開こうとしても誰も口を開く事が許されない中。横島さんが能天気な声で乙事主様に返事を返す、ここにいる全員が必死に目配せをしても横島さんがそれに気付く事はない。

【さよう、お前ほど面白い存在は見つかりが無い。お前は、自分がどれほどの偉業を成したか理解しておらんだろうがな】

口元を押さえ楽しそうに笑う乙事主様は手にしていた剣を神通力へと分解する。

【我は山だ、山そのものだ。人を裁き、神を裁き、そして災厄を持って人を、神を間引く者。それが我だ、言葉を持たぬ地球の代弁者。それが乙事主、怒りの化身である我だ】

ころころと楽しそうに笑う乙事主様。その姿に私は初めて違和感を覚えた、怒りの化身、地球の代弁者。その通りだ、本来怒りの感情しか持たないはずの乙事主様が笑っている事の異常さに今気付いたのだ。

【生まれ変わった我にお前は優しさを与えた、愛を与えた、日常の素晴

らしさを教えた。それは我ににきみたまとさきみたまを与えた、我が化身は我になることはあらず、既に別の神性を手にしたのだ」

「……すいません、どういうことか判りません」

横島さんの頭の上に？マークが大量に浮かんでいるのがわかる。だが、私達は何を言っているのか理解した、理解してしまった。

(横島さんは新しい神を生み出したんだ)

荒神としての側面しか持たない乙事主様の神性から穏やかで幸せを与える神性を作り出したのだ、それがうりぼー……神の少ない現在に生まれた新しい神の姿。

【判らぬならば、判らぬままで良い。己のあり方を見失うな、お前が己を見失えば我が化身もまた我になるだろう。それと……我が化身をこれからも頼むぞ】

何かの弾ける音と共に乙事主様の姿は消え、小さな何かが上空から落ちてくる。横島さんは弾かれたように立ち上がり、両手を伸ばしながら前に飛び込み、落ちてきた小さな何かを抱き止める。

「うりぼー、良かった。」

「ぷー……ぷぎい？ぷぎーツ!!ぴぎーツ!!」

落ちてきたのはうりぼーだったらしく、横島さんが抱きとめると閉じていた目をゆつくりと開き、横島さんを見て感極まったように鳴きだし、その頭を何度も何度も擦り付ける。

「ありがとな、うりぼーのお陰だ」

「ぴぐう？」

何のことか判らない様子のうりぼー、恐らく乙事主様のときの姿の記憶は無いのでしょうか……。結界が消えた事で私達もゆつくりと立ち上がる。

「どうするんですか？小竜姫様？」

「どうも何も、何もしませんよ。ガープに操られていた神は倒されて、めでたしめでたしです」

乙事主様の写し身が人間界に居る……この情報は隠さなければならぬ。特に過激派の神魔には絶対に知られてはいけない、ガープが見ている可能性がありますが……ガープを持ってしても御せないこ

とは明らか、そんな相手にガープが進んで手を出してくるとは思えないですし……後私達がやるべき事は1つ……これから行われる反魂の儀を見て見ぬ振りをするだけだ。

く舞視点く

氷室神社に何度も響いていた地響きが消え、遠くの方からお姉ちゃん達が戻ってくる姿を見て私は思わずへたり込んで、涙を流し続けた。神社からも見えていた巨人と、空を飛び交う昆虫の群れにお姉ちゃん達が戻ってこないのではと不安に思ってしまったからだ。無事に帰ってきた姿を見て泣き崩れてしまったのは恥ずかしいけれど、それだけ本当に不安だったのだ。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「うん、ちょっと疲れただけだから」

戻って来たお姉ちゃん達だったが、疲労困憊で神社に入ってくるなり倒れこんでしまい、その日1日目を覚ます事は無かった。そして翌日平気そうにしているお姉ちゃん達だったが、その顔は険しくて何かまだ問題があるのだと判った。

「反魂については俺とブリュンヒルデも目を瞑るが……リスクは承知しているのか？」

「はい、それに関してはちゃんとおキヌちゃんには説明してあります」

反魂……氷室神社が御神体を祭っていた洞窟の中の洞穴、その奥におキヌさんの氷漬けの遺体があつて、状態が良いから蘇れるという話だったけど、やっぱり問題があるらしい。

【何とかワシの方で尽力するが……記憶が残るのは五分五分じゃな】

幽霊として300年生きたおキヌさん、幽霊と言うのは存在自体が薄い、仮に蘇れたとしてもその記憶が消えてしまうかもしれないという事だった。

「小竜姫様、何とかありませんか？」

「横島さん。私としても何とかしてあげたいのですが……武神なので、術的なのはあんまりお力にはなれないんです」

神様にも得て不得手がある、それは当たり前前の事だが神様の奇跡に頼りたい時にそれは余りにも残酷な事実だ。

「……私も何とかしてみよう、あれだけ清らかな霊脈だ。それに水も近い、私も力になれるだろう」

ミズチで竜神様のシズク様が協力してくれると言っても、やはり100%ではないのだろう。

「もう少しだけ、様子を見てみる？」

「いや、それは止めておいたほうがいい。あの馬鹿が無理やり霊脈の力を引き出そうとした弊害が何時出てくるかも判らん」

あの馬鹿……多分私達を生贄にしようとした導師の怨念だろう、正直あんな怨念と10年近く居たとか恐怖しかない。

「……あの私、生き返れるなら生き返りたいです。私、忘れません。絶対に忘れませんからッ!!」

記憶を失うかもしれないと言う事を誰よりも恐れている筈のおキ又さんの叫び……涙を浮かべながら叫ぶ姿に誰も何も言えなくなつたのか、正午からおキ又さんの復活が行われる事になった。

「お姉ちゃんは行かないの？」

「そうね、言っても良いんだけど……多分居ない方がいいのよ、きつと……」

祠に向かったのは、美神さんの事務所のメンバーだけだった。神卸しが使えるお姉ちゃんが居た方が成功率が上がると思ったんだけど……お姉ちゃんは黙って美神さん達を見送ったのだ。

「ただ力だけがあれば良いと言うことではないのですよ、霊力とは想いの力。ずっと一緒に居たと言う方が強い力になるんですわよ」

「くえすがそんな事を言うなんて珍しいわね、どういう気持ちの変化？」

「別にですわ、ただ……そうですわね。そういう気分だったとでも言っておきましょう」

お姉ちゃんとかくえすさんは仲がいいのか悪いのか、良く判らない。だけど、多分……仲は良いんだと思う。喧嘩友達と言うか、じゃれあうというか……多分そんな感じなのだと思う。

「では近いうちにこの土地の霊力と近い神を派遣する事になりますので」

「はい、よろしくお願いいたします」

お養父さんが小竜姫様に頭を下げている、おキヌさんが生き返れば祭神が居なくなり、この土地の霊脈が廃れるかもしれない。それを防ぐ為に穏健派の神様が新しくこの土地に祭られるらしい。

「とつちやも大変だべ」

「そうだね。早苗お姉ちゃん」

霊能者としての格は落ちていて、そして早苗お姉ちゃんの霊力も僅かに残るだけ……恐らく次代の神主か、その次を最後に氷室の霊能者は消えてなくなるだろう。

「最後に聞きますが、未練は無いのですね？」

「ありません、先祖様の悪行、そしてあの恨みで変化した禍々しい姿を見て確信しました、やはり氷室は霊能を捨てるべきだと」

お養父さんは霊能を捨てる事を決断した、完全に捨てる事は難しいけど、そういうことが可能になる神様もいると言うことだ。そして新しく祭られる神様はそれを可能にする神様らしい。

「判りました、後の事は私に任せてください」

「はい、よろしくお願い致します」

深く深く頭を下げるお養父さん、自分は既に霊能が途絶えているが早苗お姉ちゃんが霊能を使えることを喜んでいた。だが霊能が齎す恐ろしさを知り、霊能を捨てる決断をしたのだろう。それは決して間違ではないと思う、異能は異能を呼ぶ……それを知った今、霊能を捨てる決断をするのは当然の事だった。

「その代り、私の方のお願いも守ってくださいね？」

「はい、おキヌが蘇りましたら体が回復するまでは氷室神社で養生させます、もし記憶が無ければ養女として迎え入れます」

勿論お養父さんも守らなければいけない事はあるが、それでも霊能を捨てるという条件と比べれば地主としての立場もあるお養父さんの方が楽な条件だ。それをあえて提示したのは、きつと横島君の事を考えての事なんだろう。

「そろそろな、舞も祈ってやるといい」

「うん、判ってるよ。ナナン」

おキヌさんが蘇れるように、無事にまた横島君達に出会えるように……私は氷室神社から反魂の術が成功する事を心から祈るのだった……。

〈蛍視点〉

肌寒い洞穴の奥……氷漬けのおキヌさんの遺体、横島や美神さんは反魂が成功するかはらはらしていると思うけど、私は多分成功すると思っていた。

(これは歴史で必要な事)

どんなに世界が変わっても、どれほど出来事は増えても、どうしても避けられない事はある。多分、おキヌさんが生き返るのはこの世界では約束された1つの事なのだろう。

【お前の霊波刀が必要だ。霊波刀を刺してあの氷の呪術を解除する、そしてその直後に反魂を行う。これでおキヌは蘇る】

「せ、責任重大ですね。で、でも頑張ります」

横島が右手首を掴んで霊力を集中させている。いつでも霊波刀を作り上げる事は可能だろう、その姿を見て若干複雑な気持ちになる。

(やっぱり私性格ブスだなあ……)

生き返ってくれることを喜ぶべきなのに、それを素直に喜べない自分に複雑な気持ちになる。

【蛍ちゃん、生き返ったら今度はちゃんとお友達になりましょうね】

「おキヌさん……うん、そうね。ちゃんと今度は友達になりましょう」

そんな私の気持ちに気付いたのか、おキヌさんが私の両手を握って笑ったと思うと、私の背中に腕を回して抱きついてくる。

(蛍ちゃんの気持ちは醜くなんかありませんからね、きつと皆そう思っています)

自分が好きな人に自分だけを見て欲しいと思うのは当然の事ですから私の耳元で告げたおキヌさん。それはきつと嘘偽りの無い、お



キヌさんの本心で……多分、ううん……仮に自分が同じ立場だとしてもきつと同じ事を口にしていたと思う。

「おキヌちゃんの言う通りね、記憶が失われると決まった訳じゃない、それに仮に記憶がなくなっても……また友達になりましたよ」

「……お前が横島の事を忘れるとは思えないしな、少しの別れとでも思っておくさ」

美神さんとシズクがおキヌさんを励まし、泣きそうな顔で笑う。

「……おキヌ殿、また会うでござるよ。拙者待ってるでござる」

「その言い方だと、忘れる前提じゃない。私を忘れたらひどいんだからね」

次々におキヌさんに皆が声を掛けて行く、おキヌさんも不安に思っているし、仲間が減るかも知れないという恐怖は全員が感じていた。それでも泣き出す者も不安を口にするものも居なかった。

「みみーむ」

「ぷーぎゅー!」

「ノツブブー!」

チビも珍しくおキヌさんに擦り寄り励ますように頬を舐める。その姿におキヌさんは驚いたように笑い、チビの頭を撫でる。

「生き返ったら、友達になってくれますか?」

「みむう」

それは嫌と言う感じで首を振るチビに暗い雰囲気が一掃され、薄暗い洞窟の中に少しの間笑い声が広がる。

【幽霊同盟も一時解散じゃな、いや、生き返るから完全解散かの?ま、生き返って楽しく過ごすがいいさ。姿を消して横島の部屋に侵入できなくなるのを名残惜しいと思ってるじゃろうしな】

【ちよつとノブちゃんツ!ち、違いますからね!?私そんな事してませんからね?】

【いえ、けっこうしてますよね?丑三つ時とか】

【止めてーツ!!】

……おキヌさん何をしてるのよ……だけどノツブと牛若丸の暴露で暗い雰囲気は完全に消えて、いつも雰囲気が戻って来ていた。

「おキヌちゃん」

「あ、いえ!? 違いますから! 別に寝てる間に侵入とかしてませんからねツ!」

横島に声を掛けられうろたえるおキヌさんの手に、横島が何かを握らせる。

「なんて込めればいいのか判らなかつたけど……」「繫」がるって込めた、俺達の絆がまた繋がるって信じて」

【横島さん……】

横島が渡したのは文珠だろう……全員がそれを気付いていたが、それを指摘する事は無い。

【そろそろだ】

【霊力も最大まで高まった、後は霊力が低下していくだけ。今が最初で最後のチャンスだ】

心眼とシズの言葉に横島は無言で霊波刀を作り出して、私達から背を向ける。

「おキヌちゃん、さよならは言わないから、だから……またなツ!!」

【はいッ! 私、忘れませんからッ! 絶対、絶対!! 皆の事を忘れませんかッ!!】

氷の結界に霊波刀が突き刺さり、氷の結界が中から碎け散る。そして横島に向かって倒れ掛かってきたおキヌさんを横島が抱き止める……

「……生きてる、呼吸をしてる」

横島がおキヌさんの口元に手を翳し、生きてると安堵した表情で呟いた。

「……私……忘れません……忘れませんから……美神さん……蛍ちゃん……横島……さん」

寝言のように呟かれるおキヌさんの言葉、それは私達の事を忘れていたら決して口にされる言葉ではなく、おキヌさんが私達の記憶を持ったまま生き返ることが出来たという希望となった。

「今はおキヌちゃんを入院させるわよ、起きるまでは私達も待つてられないからね」

直ぐに東京に戻らないといけないので、おキヌさんを神代家の人間が医者をしている病院に預け、私達は東京に戻った……東京での壊滅的な被害、今回の事件の報告……おキヌさんが目覚めるまで待ちたいと思っても待てない理由が私達にはあったのだ。それでも2日はおキヌちゃんが起きるを待つていたけど、流石にこれ以上は無理と言う琉璃さんと西条さんの言葉に私達は後ろ髪を引かれる思いで私達は氷室神社を後にして、東京へと戻っていくのだった……。

『もしもし、私です。おキヌです！ちゃんと、私……私覚えてましたッ！今はまだ入院しないとイケないけど……2月までには東京に戻ります！絶対戻りますからッ！待つていてくださいね！』

除霊から帰った私達におキヌさんからの涙交じりの留守電が出迎えてくれて、私達は思わずその場に泣き崩れてしまうのだった……。

～レイ視点～

シズと言う神霊の肉体は破れた、横島が食われ掛けた時は流石に驚いたが……神が降臨した事で横島が助けられたのは正直安心した。

『レイ、そろそろ戻れ、今回の作戦は失敗だ』

「了解です」

戻れという通信に返事を返し、座っていた巨岩から腰を上げて気付いた。私を見つめているフード姿の男の姿に……。

「貴方は誰？」

「私ですか？名乗るほどの者ではないですよ。ただの通りすがりです」

通りすがり……だが私が気付く事が出来なかった事で警戒心は嫌でも生まれる。そもそもこんな山の中を何の目的も無く通るなんてことはありえない。

「そんなに警戒しなくてもいいですよ、私はただ貴女に贈り物を持ってきただけですから」

「贈り物？」

もしかして、私が知らないだけでガープ様の手下なのかもしれないという考えが脳裏に浮かんだ。

「これをどうぞ、いつか貴女の助けとなるでしょう」

「眼魂？これは何の……いない？」

眼魂を受け取ったが、それを投げた男の姿は既がない。投げ渡されたのは無機質な白い眼魂、ナンバリングも文字も刻まれていない眼魂……こんなのはじめて見た。

「……なんの眼魂だろう」

でもこうして渡されたという事は何か意味があるはず、私はそう考え、眼魂を服の中に入れてその場を後にするのだった……。

「因果は少しずつ埋められていく、されどまだ足りぬ」

歩き去っていくレイを見つめるフードの男、レイの目の前にいるのにレイはその男を認識出来なかった。認識させない事……それがこの男の能力の1つだからだ。男が認識させないと決めた瞬間に男は「世界」から認識されなくなる、それがこの男……仮面ライダーフォーテイスの能力の1つだった。

「次の舞台は過去の世界、されど醜悪に切り貼りされたおぞましきかぐや姫の歴史……されど、これは私が奪うべき歴史にあらず。運命の必然、なればこそ、それを見届けるのも一興。次はお前も舞台に立つて貰うぞ、アシユタロス」

読んでいた本を閉じ、軽やかに男は歩き出す……フードから僅かに見える口元は楽しくて仕方無いと言わんばかりに微笑んでいるのだった……。

別件リポート 魔界での激戦へ続く

## 別件リポート 魔界での激戦

別件リポート 魔界での激戦

アスモデウスとガープのコンビ、ソロモンの中でも最上級と言われる神魔2人とたった1人で戦う。それはどんな神魔が相手だったとしても恐怖し、絶望する。事実アスモデウスとガープのコンビはサタンによる魔界統一戦でも彼らに膝をつけたのはサタンただ1人だった。

「今ならばお前の持つガジェットを渡せば許してやらんことはないぞ？」

アスモデウスが斧の切っ先を向けながらマントに見えるコートを翻しているフォーティスに声を掛ける。普通ならばアスモデウスとガープに見逃してやるから持っているものを置いていけと言われれば生き残る為に装備を捨てる事は決して間違いではない。だがフォーティスにとってガープとアスモデウスは決して勝てない相手ではないのかその言葉にやれやれと言う素振りでは肩を竦める。

「何故私が許されないとはいけない？私は事実を告げているのだよ、敗北者達よ」

状況は圧倒的に不利、それなのにフォーティスは挑発を止めない。その言動にアスモデウスの額に青筋が浮かぶ、だがそんな相棒にガープは落ち着けと声を掛ける。自分達の力量を見極める事が出来ないほど目の前の男は弱い相手ではない、ガープは冷静に単独で魔界まで乗り込んできた上に自分達に戦いを挑んできた謎のライダーを十分に警戒していた。

「ならばその敗北者の力……試してみるか？人間」

「ほほう。その力の一端を見せてくれるというのなら見せていただく、敗北者とは言え最上級神魔。その力と技術には何らかの発見があるかもしれないからね」

魔界のどこかで、最上級の2体の魔神と謎の男の戦いの幕が切つて落とされたのだった。

くアスモデウス視点く

「ふんッ!!」

「おっと、いやいや、中々の力のようだ。当たれば、私と言えど危ないかもしれないですね。当たれば……の話ですがね」

振り下ろした戦斧は変身する前も着ていたフード付きのマントに防がれる。防がれる事自体は何の問題も無い、我が気になったのは数多の神魔を屠り、その防具を切り裂いてきた戦斧……それが全く切り裂けていない

(物理的防御ではないな、何だ?)

物理的な防御ではない、かと言って靈力や神通力の防御でもない。我でも理解出来ない、不可思議な力で防がれたと言う所か。

「この距離で考えている場合ですか?」

「ふっ、この距離だからこそだッ!」

マントの下から伸びた手に握られている銃、そこから放たれるエネルギー弾を盾で受け止め、そのままの勢いで強引に押し込む。

「いやいや、素晴らしい力ですね。賞賛に値しますよ」

(手応えが無い?)

確実に命中した、それは間違いない。だがなんの反動も返って来ていない……吹き飛んだ先で軽やかに着地したフォーティスを見て首を傾げる。

「どうしたアスモデウス」

「あの男……外見以上に変だ。まるで手応えが無い、目の前にいるが本当はいないのではとさえ思う」

我の言葉にガープはふむと顎の下に手をおいて何かを考え込む素振りを見せる。

「いつも通りだ、行けるな?」

「心得た」

あの基地は既に廃棄することを決めた、襲撃を察知できず。量産型のレブナントを10体以上失ったのだ、あの男が神魔の手先と言う線も捨て切れない以上、敵に発見された基地は捨てるしかない。

「ただの人間相手に作戦会議までしますかね?」

挑発的な口調だが、それを意図的に無視する。ガープに言ったら怒り狂うが、この男とガープは良く似ている。人の神経を逆撫でする言動と口調、この手の相手とはまともに会話をしないことだ。そしてもう一つは……

「おつとッー」

「ぬんッ!!」

「ぎ、急に……あ、荒々しくなりましたね？」

相手のペースに乗らない事、終始自分のペースで攻撃を繰り返す事だ。この手のタイプは自由にさせると、罠を配置する。そしてその罠に相手を誘い込み刈るというタイプだ、相手の動きを観察し、自分の攻撃の流れに引きこむ。

(硬い……なんだ、これは?)

まるで空気と戦っているような……いや、空気と言うのは些か語弊があるな。これは精霊……か?己の身体を持たぬ上級精霊と戦った時の感覚に似ている。

「取ったぞッ!!」

戦斧では取り回しが悪過ぎる、相手の動きをまだ見切れない以上使い慣れた武器を捨てる事には抵抗があったが、斧を振るうと同時に魔力を通し剣へと組み替える。

「ッ!!」

斧が剣になった事に僅かに動揺したフォーティスの胸を捉えるが、やはり手応えがおかしい。完全にクリーンヒットの手応えだったのに、切り裂いた手応えが全く無い。

「逃がさんッ!!」

剣からハルバートに組み替え、その鎌の部分でフォーティスを捕まえ自身へと引き寄せる。

「くっ!!」

「ぬっ……我を止めるには力が足りんなッ!!」

エネルギー弾を乱射してくる。だが、私の身体を貫くには攻撃力が足りていない。目の前に引き寄せたフォーティスの顔面に拳を叩きつけ、ハルバートを振るい上空へと投げ飛ばす。

「果てろッ!!」

ハルバートを弓に組み替え超高熱の弓矢を上空のフォーティスへと打ち込む。その姿が火球の中へと消える……普通ならこれで勝つたと確信できる最高のタイミングの連続攻撃だった。

「貴様何をした？」

「いや、実に見事な連続攻撃でした。賞賛に値しますよ」

我とガープの前に立って手を叩くフォーティス。完全にどの攻撃も命中した手応えだった、なのにフォーティスには傷1つ無い。

(ガープ、何か判ったか?)

(いや、何もわからない。私が何も判らないと言うことが腹ただしい) ガープが下がっていたのは相手の能力を判断する為だが……どんな状況でも的確に相手の能力を見極めてきたガープが判らないと言うのは不気味を通り越して異常だな。

「さてと、いつまでもガープが戦いに出ないのは面白くありませんからね。私も頼りになる味方を呼ぶとしましょう」

手にしていた赤い銃の前半分をスライドさせ、そこに何かのカードをセットする。

「悪党に悪党をぶつける、それが戦いのセオリーと言う物でしょう?」

【KAMENRIDE マッドローグ】

【KAMENRIDE エボル】

「さあ、互いに様子見はここまで、戦いを始めよう」

【コウモリ! 発動機! エボルマッチ! バットエンジン!】

【コブラ! ライダーシステム! エボリューション! コブラ! コブラ! エボルコブラ!】

銃口から発せられたカードから2つの人影が姿を見せる。1人は白と紫の身体を持つ機械的なシルエットの仮面ライダー、そしてもう1体は赤と金を主体とした悪趣味な色をした仮面ライダーだ。

「なるほど、お前の能力は召喚術か」

「当たらずも遠からず、まあ安心するといい。これは中身の無い空っぽの人形だ、だけど人形には人形の使い方がある」



自らが召喚した赤と金のライダーの背中に手を突き入れたフォーティスは赤いライダーの体内から何かを取り出した、それが核だったのか召喚されたライダーは溶ける様に虚空の中へと消えて行った。

「時計？」

それはストップウォッチに見える奇妙な丸い道具だった。眼魂よりももつと機械的な、それを見て一瞬足が止まった。

【エボル】

ボタンを押し込むとその時計から凄まじい魔力が放出される、本能的に止めなければと思い駆け出すが、それはもう1体の召喚されたライダーによって阻まれる。この時完全に我は出方を間違えた、相手の出したものが武器である事を考えて、足を止めたがリスクを承知で前に出るべきだったのだ。

【ハハハハハハハッ!!】

「ちっ、耳障りな声だッ!!」

エネルギー弾を撒き散らし、逆手に構えたダガーを高速で振るってくる。力はさほどではないのに、恐ろしいまでの圧力を感じた。

「変身」

【アーマータイム・エボリューションッ!!エボルッッ!!】

ベルトから奇妙な音声が流れたと思うとフォーティスの纏っていたローブが弾け飛び、マントのようになり露となったその身体には先ほどあの紅いライダーと同じく悪趣味な赤と金の鎧を装着されていた。姿が変わっただけ……そう笑う事は出来なかった、最上級とまではいわないが上級レベルの魔力を放つフォーティスの姿にたった1人でここまで乗り込んできたのも、そして我とガープが外に出るまでに10体の量産型レブナントを倒したのも純然たる実力だったと悟ってしまったから……だがそれでも我もガープも引くつもりは無い。ここでフォーティスを倒し、そのベルトと力を奪いとる。恐らくガープも同じ考えだと思い、駆け出そうとするとそれはガープによって制された。

「今度は私が相手をしよう、フォーティス」

「ほほう、それは楽しみだ。アスモデウス陣営の頭脳……いや、お前達

の本当の頭目から軍師を任されているガープが相手をしてくれるとは恐悦至極」

やはりこの男を生かして帰す訳にはいかない、我達が何の為に動いているのかそれを知っている。何故、この男が知っているとどう疑問はある……しかし、そんな事は些細な事だ。ここで殺す……その事に何の違いも無いのだから……

くガープ視点く

アスモデウスと召喚されたライダーが戦っているのを横目にしながら、金と赤の鎧を装着したフォーティスとの戦いに意識を集中させる。

(早い、それに重い……)

手数はさほど多いわけではない、だが防御や攻撃に移るまでの始動が恐ろしいまでに早い……。

「爆ぜろッ!!」

「おっと、危ない危ない」

フォーティスの軽い口調に舌打ちする、爆ぜると眩き目の前に爆発を起こすと同時にフォーティスの背後に魔力刃を作成した。だが、そのどちらも装甲に阻まれた。物理防御力が高いのはアスモデウスとの戦いで把握していたが魔力等の攻撃に対しても非常に強固な防御力を持つようだ。

「右斜めに飛び、デコイを作り出して反転、転移術で私の背後を取る」

「……ッ!」

ささやくように告げられた言葉に私は思わず足を止めた。フォーティスが言い当てたのは今正に私が取ろうとしていた行動だったからだ……私の同様を感じ取ったのかフォーティスは手を叩きながら笑う。

「この姿は特別でね、どうすれば勝利できるのか、どうすれば相手を無力化できるのか、そして相手が何をしようとしているのか手に取るように判るのだよ」

予知……いや、違うな……手品の種は恐らく召喚され、即座に消滅させられたライダーにある。似たようなベルトをしていたあの紫と白の

ライダーも何か特別な能力を持っている可能性があるだろう。

(ちっ、安い挑発に乗るんじゃないかな)

単独で乗り込んできた地点でリスクを避けて逃げるべきだった。今ならば、そう判断出来るが虎の子の量産型レブナントをアレだけ破壊されては早々逃がすわけにも行かないと思うのは当然だ。

「シッ!!」

「ふっ、甘いですよ」

踏み込んだ剣による一閃も簡単に受け止められる、初動も無い一撃だったのだが……これがあの姿の能力と言うわけか……。

「考えた所で攻略法などは存在しない」

「そうだろうなッ!」

膝蹴りは簡単に受け止められ、反撃に繰り出された肘うちが胸を穿つ。人間の姿でなくて正解だな……魔神形態で無ければ今の一撃で胸郭が完全に破壊されていただろう。

「無差別にばら撒きか。やれやれ魔神としての矜持はないのか?」

「貴様も言っていたがな、私達は敗北者だ。そんな物はとうに捨てた」  
私達にとつて負ける事とは死ぬ事だ、生きていれば次がある。逃げても次に繋がるのなら、それは逃げであつても負けではない。

(アスモデウス、離脱するぞ)

(それしかあるまい)

可能ならば、フォーティスのベルトとガジェットを奪うつもりだったが……敵が強いというよりも相手の能力を見極める事が出来ない。仮に追詰めてもそれよりも強い力を発揮され私とアスモデウスが撃破、もしくは私とガープのいずれかの撃破と言う状況になつては目も当てられない。

「後ほんの少し付き合ってもらうぞ、フォーティス」

試作品の狂神石の液体を一気に飲み干す、身体の中で太陽が生まれたかのような熱が全身を満たしていく……だがそれと同時に胸が張

り裂けそうに痛む。

(まだ試作品だからな、この程度は想定内)

使用実験も無しに使えば、体に深刻なダメージが来るのも計算の内。倒しきるとは言わないが、ここである程度はフォーティスの手札を調べておく、姿勢を低くすると同時に地面を蹴る。

「み……ぐっ!？」

「お前が私の動きを全て知るといふのなら、それを超えればいい。実に簡単な理屈だ」

好きなだけ私の動きを先読みするが良い、私はその動きを悉く越えてやろう。手足が千切れそうな痛みも問題は無い、私達を追って来れないだけのダメージを与えれば即座に撤退する。これ以上フォーティスと交戦するつもりは無い、アスラ達も既に撤退完了しているだろうから時間稼ぎは十分に済んだ。

「?!?!」

「ぬおおおおー!ーッ!!」

アスモデウスも狂神石のアンブルを飲み干し、白と紫のライダーを圧倒する。戦闘技術だけの人形だからこそ駆け引きも無く押し潰す、その後はアスモデウスと2人でフォーティスにある程度のダメージを与えれば良い。

「ふむ、なるほどなるほど、そちらもまだ上があると……ならば、私もギアを1つ上げるとしましょうか」

【ブラックホールッ!】

黒と白の禍々しい装飾の施された時計のボタンを押し込むフォーティス、それを見て殆ど魔力を圧縮して放つのだが……。

「弾いただと!？」

「いえいえ、そうではありませんよ。これは運命に刻まれた必然、貴方達に抗う事などは出来ない。そう!何故ならば……」

【ブラックホール、ブラックホールッ!ブラックホールッ!!】

フォーティスの姿が白と黒を貴重とした姿に新たに变化したフォーティスはベルトを掴んで回転させる。

【フィニッシュタイムッ!!】

「貴様は何を知っている！お前はまさかッ!!」

この時私の脳裏を過ぎつたのは世界意志の使者、動く事も喋る事も出来ない星の代弁者であるという可能性だった。だが私の問いかけにフォーテイスは答える事無く、全身の禍々しいエネルギーを纏った。

「アスモデウスッ！」

「判っているッ!!」

紫と白のライダーを倒したアスモデウスが疾走してくる、あの一撃を喰らってはいけない。逃げなければと思い、アスモデウスと共に転移しようとしたが、私が発動した転移の魔術は一切の効力を発揮しない。

【エボルテックパラドクスブレイクッ!!】

「運命に刻まれたそうあれと記された敗北、つまりお前達に私に抗う術はないのだから、何故ならばこれは「世界」の定めた敗北である」意識を失う寸前私とアスモデウスが見たのは魔界に浮かぶ漆黒の太陽……そして、私達から「何か」を奪い取る、名も知らぬ男の姿なのだった……。

くフォーテイス視点く

「さてとこんな物か」

アスモデウスとガープの記憶を一部操作してから立ち上がる、このまま自由にしておけば運命の子が目覚める前に世界は結末を決めてしまう。

「世界に定められた命運、それもまた良からう。だが運命に抗うもまた運命である」

世界はそうあれと決めた流れで世界を動かす、だがそれにそって動くだけの物語の何と詰まらない事か運命とは、今を生きる者が抗い、そして嘆き作り上げていくものだ。世界の修正力なんて詰まらない物でどうこうしていい物ではない。

「やあ、またあったね」

「これはこれは、ルイ・サイファー殿、このような場所で会うとは奇遇

ですね」

にこにこと笑うルイ・サイファアの姿に内心顔を歪める、世界の修正力の影響を受けない存在。この時間軸で唯一私の能力を受けない存在が目の前にいる……足元で倒れているガープやアスモデウスに視線を向けないのは私が目的だからだろう。

「そうだね、前に会った時は世界の狭間だったからね」

「ええ、まさかあのような場所でお会いするとは想像もしませんでしたよ」

誰も存在する事が許されない場所であ会った超越者、この存在もまた……私と同じ「傍観者」だ。

「ガープとアスモデウスと随分と遊んだようだね？」

「ええ、少しばかり自由にさせる訳には行かなかったのでね」

「……まあ良いだろう。こいつらに今死なれると面白くない、だからこいつらは生かしておこうかな」

これだ、傍観者でありながら、それでいて世界に混乱を齎す者。やはり私とルイ・サイファアは似ている……だからこそ、互いに干渉であるべきだ。

「次は面白いかい？」

「ええ、貴女が退屈しない事を約束しますよ」

「ふふふ、それは楽しみだ。だけど、退屈したらお前を殺すよ。」

笑っているが、その目は冷たい。私の言葉が偽りと判れば殺しに来るだろう。どこにいても、どんな世界にいても逃げられない。

「では一つとっておきの情報を、冥界の女主人と女帝が揃って出かけますよ、人間の家へ」

「それはいい、私も混ぜて貰うでしょう」

そう笑い背を向けたルイ・サイファアに安堵し、私も背中を向けて歩き出そうとした時、私の背中にルイ・サイファアの言葉が投げかけられた……その言葉に私は思わず足を止めて振り返ってしまった。そこには人間界に続く門とその近くで控えるルキフグスとベルゼブルの姿……ルイ・サイファアは日傘を開きながら本当に楽しそうに笑っていた。

「お前は何度世界を壊すんだろうね。お前の友はなんて言うだろうね  
……」

その言葉を最後にルイ・サイファアの姿は消えた……もう聞くはずの無い名前を聞いて、私は思わず小さく笑った。ルイ・サイファアが何故そんな事を口にしたかは判らないが、そんな事で私は立ち止まる事はない。

「そんな事を止めろと言うだろう、ルイ・サイファア。だが私は止まらない、もう止まれないのだよ……私の行いに迷い無し、全てが正義なのだから……」

コートの中から出した本を開いて私は歩き出す、もう私は止まらない。止まる事などできないのだから……

## リポート29 新しい生活 その1

リポート29 新しい生活 その1

〜横島視点〜

おキヌちゃんを氷の結界から救出して麓の病院に運んでから2日。おキヌちゃんの意識が戻る事は無く、そして俺達が氷室神社に滞在できるのも今日が限界だと琉璃さんと美神さんが俺達に告げた。

「心情的にはおキヌちゃんが起きるまで氷室神社にいたいんだけど……東京の後処理の事もあるし、それに報告の事もあるから今日の夕方には東京に戻るわ」

「ごめんなさいね。私も何時までも西条さんにGS協会の事を押し付けるわけにも行かないの」

美神さんと琉璃さんの言う事はもつともだ、むしろ直ぐにでも東京に戻らないといけないはずなのにそれでも2日の待つてくれた事に感謝しかない。何よりも苦渋に歪められた顔を見れば、美神さん達にとつても苦渋の決断と言うのは明らかで俺達はその決定に文句を言う事は無かった。

「お姉ちゃん、横島君。おキヌさんが起きたらすぐ連絡するから」

「舞ちゃん、ありがとう。よろしく頼むな」

おキヌちゃんが記憶を残しているかと言う不安はある、それに無事に目を覚ますかと言う保障も無い。それでも起きたら直ぐ連絡してくれると言ってくれた舞ちゃんには感謝しかない。

「とりあえず今日一日休んだら東京に戻るわ、休みと言っても外出は禁止だからね。特に横島君」

「うっす」

俺を名指しする美神さんに反論など出来るわけもなく、俺は氷室神社の縁側で日向ぼっこをすることになった。

「ぶぎゅーぶぎゅうう……」

日当たりがいいので俺の膝の上で丸くなって眠っているうりぼー



の背中を撫で、庭で駆け回っているチビノブとチビを見つめる。

「息はしてるし、心音も安定しているからそんなに心配しなくても直ぐに目を覚ますわよ」

「そうでござるよッ！おキヌ殿なら元気に戻ってくるでござるー！」

俺を励ましてくれていているシロとタマモ、自分では普通のつもりだけど……やっぱりシロ達には判るんだな。

【なに、心配する事はないさ。おキヌには死の気配がない。むしろ強い生の気配がする】

【あの手の者は殺しても死にませんよ、主殿ッ！弁慶と同じ気配がしますから！】

武蔵坊弁慶と同じ扱いをされているおキヌちゃんはきつと複雑な気分だろうなあと思ひ、思わず笑ってしまうとシロ達は俺を見て満足そうにしている。

【お前は笑ってる方が良い、そのほうがお前らしいよ】

心眼の俺らしいという言葉が妙に頭に残った……その言葉が何か大事な言葉のように思えたのだ。

「どうしたの？」

「せんせー？もしかして眠いでござるか？」

シロとタマモが俺の顔を覗き込んでいることに気付いて違う違うと手を振る。

「いや、誰かに……ううん。ずっと前に……そんな事を言われたような気がするんだ。俺は俺らしくって言葉を……さ」

上手く説明出来ないし、勿論そんな言葉を言われた事も無い。だけど……「俺らしく」って言葉は何か、とても心地良い言葉のように思えた。

【それは前世の記憶かも知れんな】

俺達の話に急に割り込んできたシズが俺を見ながら楽しそうにそう呟いた。

「前世？」

【お前のように莫大な潜在霊力があるものは稀にあるのだよ。つまりお前の前世にお前らしくという言葉を使ったものがお前のだよ】

前世かあ……俺の前世って平安時代の陰陽師高島かもしれないとか聞いているけど、証拠も無い。だけど、神霊のシズが言うのなら本当の事なのかなと思っているとシズが地面に手を当てた。

「何してるのよ？」

「急に神通力を高めて何をするつもりでござるか？」

「何、チビがユミルの剣を欲しがっていると聞いたのでな、それにお前にも頼まれていただろう？」

シズが手を当てていると地面から急激に芽が出て、枝となり、そして樹木になった。

「ワシからの今回の件の報酬じゃ、是非持って行ってくれ。神通力を込めているから色々な物の触媒になるだろう」

見上げるような樹木、シズの神通力が込められたそれは間違いなく最上級の素材だろう……持ち帰る事が出来ればの話だが。

「これどうやって持って帰ろう？」

「ぬ……すまぬ、そこまで考えていなかった。斧があるから、それを持って来よう」

そして俺達は想定もしないところで、樵の真似をすることになった。

「ふんぬうッ！」

【せいッ!!】

気合満天の声でノツブちゃんと牛若丸が斧を振るうが、その体表に弾かれる。

「でや……あだだだ……」

「て、手がしびれるでござるよお……」

俺とシロも斧を振るうが弾かれ、手がしびれてその場に蹲る事になったし、タマモの狐火も弾かれた。

「シズ、あんたちよつと気合入れすぎじゃない？」

「……奪われた神通力が戻ったのが原因かも知れんな……しかし、参った。ユミルもナナシもおらんしな」

舞ちゃんも普通に学校だ。そしてユミルとナナシはその護衛だから今氷室神社にいない、俺はもう1度その巨大な樹木を見上げてどう

しようかと頭を抱える事になるのだった。

く琉璃視点く

東京に戻るまでに2日の猶予を取ったのはおキヌさんが心配なのも理由だったが、もう1つ。この場で何となしななければならない問題があったのだ。

「横島君の件ですが……小竜姫様、ビュレト様、ブリュンヒルデ様。何か妙案はありますか？」

私の問いかけに3柱の神は口を開かない、いや、開く事が出来ないのだった。本来荒神の側面しかない乙事主様から温厚な御霊を召喚し、それを新たな神とした。横島君が行ったのは新たな神の誕生の手助けと人間……いや、神でも不可能な偉業を成し遂げたのだ。

「正直、横島の能力がここまでとは想定していなかった」

「そうですよね、英雄としての側面は確かに認めていました……」

「現代に新しい神を誕生させるなんて事をやってのけるなんて想像も出来ないですよ」

神魔としてもありえないという奇跡を横島君はやってのけた。やってしまったのだ……文珠、霊力の物質化、英霊との合体……数え切れないほどの異能が横島君には集まっている。だが今回の件は危険だ……危険すぎる。

「もし横島がガープに捕らえられたら全く新しい神が大量に生み出される事になることになるでしょうね」

「……そうなるのよね、やっぱり」

うりぼーが乙事主様の別の側面の神であると言うのは乙事主様本人が認めた。次世代の新しい神がうりぼーと言うことだろう、横島君は今までの通りペットみたいな感じで可愛がっているけど……。

「まず、その前提がおかしいんじゃない？確かに横島君は神を生み出した、だけど、チビ達は神になっていない。何か特別な条件があるんじゃないの？」

「む、その可能性はあるか……」

簡単に神を生み出せるならばチビやチビノブもまた神になっているだろう……本人の素質なども関係してくる可能性は十分にあるか。「判りました、今回の件はヒヤクメに分析を頼み、竜神王様にもみ報告させて頂きます」

「では私もお父様だけに」

神魔の軍部の指導者、それだけにうりぼーが乙事主様に変化した事を伝えるという事で話は纏まった。横島君の異能は余りに異質すぎる、今回の事は要観察と言う事になるのだろうか……しかし、今回開眼した横島君の能力はなになるのだろうか。

「うりぼーが乙事主様の転生だから、神になれたって事ですかね？」

「考えられるのは其処ですね。しかし、そうなると……ちよつとまた厄介な事が生まれますけど」

小竜姫様が引き攣った顔でそう告げる、厄介な事……正直今まで以上に厄介な事なんてそうないと思うんだけど……。

「日本の古い神は殆ど自身の由縁のある動物に転生している」

「……それ最悪なんじゃ？」

私と美神さんにくえすと蛍ちゃんの声が重なった。横島君の特性と言えば人外ホイホイとも言える人外との遭遇率だ、しかも、転生して小動物になっている神様とエンカウトする可能性は極めて高い……。

「美神さん、今ふと思ったんですけど」

「お願い言わないで、私に物凄く思い当たる事があるの」

「……やっぱりですよ、私も実は思い当たる節があります」

あるのッ!?横島君一体貴方は何をしているのか……悪い子じゃないんだけど、ちよつと横島君が苦手になりそうだ。

「……クマゴローって神様の転生態なんじゃ？」

「何だそのクマゴローって？」

「妙神山で横島さんが見つつけてきた、神獣の赤ちゃんです。今は、天竜姫様が面倒を見ますが……元々は横島さんが発見して来ました」  
ネーミングセンスが独特すぎるけど、問題は神獣の赤ちゃんと言う

事と横島君が見つけてきたという所だ。

「熊の神様って何がいたつて？」

「私も専門ではないですが、アイヌ民族と北欧関連に多くいたと思いますわ」

……大変な事になっていくかもしれない。その神獣の赤ちゃん……クマゴローも乙事主様と同じ神に進化する可能性があるとかちよつと冗談じゃない。

「小竜姫、ヒヤクメに一応見てもらっておけ」

「そうしますね」

小熊まで神になるとか怖すぎるので、ちゃんと1度見て貰っておこう……そんな事を考えているときふと顔を上げるとブリュンヒルデ様の顔色が悪い。

「どうかしましたか？」

「……あのですね、アリスちゃんが魔界に横島さんを今度招待したいと言つて、ベリアル様とネビロス様が動いているんです」

……魔界の危険な動物の赤ちゃんが横島君に懐きまくつて、横島君が連れて帰ってくる未来が全員の頭を過ぎったと思う。

「それは……「ズズン……」何事だッ!？」

ビュレト様が止めに入ろうとしたが、庭の方から凄まじい地響きが響き私達が慌てて外に出ると太陽を覆い隠すような巨大な樹木が庭に生えていた。

「あ、美神さん。シズが今回の報酬って事で神木をくれたんですけど、これ全然切れないんです」

【折れたあッ!!】

【こうなれば、私の刀でッ!!】

「止めるでござるッ！刀はそんな事には使えないでござるよッ！」

「ちよつとシズク、これどうにかならない？」

「……水の刃も効かないのにどうしろと言うんだ」

横島君達がシズが用意してくれた神木を伐採しようと奮闘している姿を見て、私達は一気に脱力してしまった。だが、神霊が用意した神木となれば、間違いなく最上級の霊具の素材となるだろう。

「ビュレト試してくれる?」

「……嫌な予感はあるがやってみよう」

「私もやってみましょうか」

ビュレト様と小竜姫様の一撃にほんの僅かな切れ込みがやっと入った神木……これどうやって伐採すればいいんだろう? 私達が揃って樹木を見上げたのは言うまでも無い……。

↳ドクターカオス視点↳

横島達が氷室神社から持ち帰ってきた神木の分析を進めていたが、結論は1つ。これは今人間界で手に入る最も優れた霊具を作る素材であると言うことだ、そして問題はこれをどうやって加工するかだった。

「マリア、テレサ。レーザーエッジで何とかなるかの?」

「めちやくちや硬いけど、なんとかなるかなあ……」

「霊力を消費すれば切る速度も上がりますね」

加工が極めて難しいが、この最高の素材を何とか生かしてやりたい。当初の計画では、撃破した神霊の残骸を回収するつもりだったが、だが実際はガープの手によって肉体と精神に分かれ、生き残った精神が上質なご神木を生成してくれたのはありがたいが余りにも加工難易度が高すぎるな。

「ねー、カオス。これどうするの?」

「そうじゃなー、霊具の芯などに使えばいいかもしれんなあ」

素材としては間違いなく最高の品だ。問題は加工出来るかどうかじゃが……とりあえず、当面やるべき事は決まった。

「悪いんじゃが、マリアとテレサで正方形に切り出してくれるかの?」

「ミス愛子ですね?」

「そうじゃ、約束はまず果たさねばならないからの」

愛子との約束だから、まず机から離れるように別の寄り代を作る。これだけ神通力の籠もっている神木なら、寄り代としての能力に不安は無い。本当ならワシが加工出来ればいいんじゃが、切り出す所

は流石に無理なのでマリアとテレサに頼んで椅子に腰掛ける。

「……マジなんじゃなあ」

チビノブに頼まれて作った霊具が使われたらしいが、その戦闘記録は凄まじい。サイズ的には小学校低学年ほどの大きさだが、その火力は間違いなく並のGSよりも遥かに高い。

「なんと説明するかの……」

琉璃からどうしてあんな物を作ったのかと言う説明を求める電話があった。製作者として説明する義務はある……だが特撮番組の玩具を真似して作ったと説明して納得してくれるだろうか……。

「いや、しないな」

逆の立場でもお前は何を言っている？と言う感じになるだろう。神通棍や霊体ボウガンの素材は使ったが、正直玩具程度の性能しかないはずなのだ。少なくとも、森を焼き払うほどの攻撃力は無い。

「そもそもそんなのを作ったら小僧の家が消滅するしなあ」

あくまで玩具、子供の玩具程度の気持ちで作った事に間違いはない。問題はチビノブのほうだろう、あんな子供の落書きのような姿でも大英霊といっても過言ではない「織田信長」の分身だ。そのスペックは間違いなくA級下手をしたらS急に匹敵するだろう。

「とりあえず、チビノブが原因と言う事にしておくかの」

もう少し詳しい分析をしないと断言は出来ないが、作った玩具の力タログスペックだけを持参してGS協会に向かう事を決めた。

「さてと、大分良い感じに修復出来たの」

隕石落とし事件の時に現れたと言う量産型レブナントが使っていた変身ツールの籠手。不幸な事に、眼魂をセットするスロットが崩壊しているので変身ツールとしては使用出来ない。だが、霊力を拳に収束するや、霊波刃の展開能力は健在だったので修理を続けていたがやっと修理が終わった。

「うむ、悪くない」

眼魂をセットする部分には変わりに擬似精霊石を搭載した。これで僅かな霊力でも増幅して攻撃力を上げる事が出来る……筈。後は格闘戦メインのGS……唐巢神父や、雪之丞に渡せばデータ取りも出

来るだろう。

「量産の目処が立てばなお良いんじゃないかな」

相手の戦力はやはり人間側よりも遥かに高い、だがそれでも負けるわけには行かないのならはこちらの戦力も底上げするしかない。修理する過程でこの武器の構造は大体理解したと言える、後はGS協会とオカルトGメンの許可がでたら量産型の試作を作成してもいいかもしれない。

「ん？」

そんな事を考えながらチラシを見ているとその中にエアメールが入っているのに気付いた。普段はマリアが識別してくれるのだが、木人や昆虫の襲撃でそれ所ではなかったのだろうと思いチラシの中からエアメールを取り出して中身を確認する。

「……そうか、もう直ぐ日本に来るのか」

其処にはマリア7世からの手紙、竜の魔女の旗を持って日本に来日する日程が記されていた。

「小僧はどうなったかな？」

なんせ国宝になっている旗だ。そう簡単に見れるものではない、小僧の幸運なら当たるかもしれないと思ったが……もし外れていたらワシが頼み込んで見せてやるかなと思いつながら、便箋に封入されていたワシとマリア達の分のチケットを机の引き出しに入れるのだった。

「あれ？なんだろ、このド派手な封筒？」

「……日本のじゃないな。美神に聞いてみる、あいつが何か用意してくれていたのかもしれない」

カオスと同様に家を離れている間に届いていた郵便物の山から、赤と青の派手な封筒を横島達も見つけているのだった。

〈西条視点〉

東京に起こっていた木人と昆虫の襲撃は令子ちゃん達が神霊を倒した事で収まったが、その被害はやはり甚大だった。何よりも東京を



守るように配置していた神社の御神体などの消失が余りにも痛かった。

「申し訳ないですがよろしく頼みます」

「ああ、気にしなくてもいいさ。これからもよき隣人であろうじやないか」

躑躅院にまた借りを作ることになってしまった。この男……いや、女か？ 隙あらば僕達に恩を売りつけてくる。

（厄介な相手だ）

だが良く考えれば陰陽寮と言う魔窟の当主をやっているのだ、それこそ冥華さん達クラスの狸とやりあっている。年若いが、人生経験は僕よりも遥かに上だろう。

「よき隣人か、それならばオカルトGメン、いや、GS協会もそうだが互いに交流会なんて物はどうか？」

「ふむ、横島君を陰陽寮の見学に来てもらうというのは決めていたが、確かにそういう話の方が良いだろう。では横島君の所属している事務所……美神令子除霊事務所の面子を陰陽寮へと招待しよう」

その言葉に僕は内心安堵の溜め息を吐いた。横島君1人では不安だったが、令子ちゃん達がいればまたその対応は大きく変わってくる。

「僕は表立って提携と言う事は動けない」

「そうだろうね、国際機関だからね」

オカルトGメンは国際組織だ。その都合国に認められている組織以外との連携をとるのは非常に難しいという性質がある、特に陰陽寮は振るいだけの組織でますます表立って提携と言う形をとるのは難しい。無論事件が発生したので民間人の協力を得たという形で処理をすることになるだろうが……本当にこんな厄介なルールは消えてしまえと心の底から思っている。

「神代会長も見学に参加して貰うというのはどうかな？ GS協会の会長と言う立場ではなく、神代家当主と言う形で」

「ふむ、私に異論は無いよ」

琉璃君の了承は得ていないが、今ここで琉璃君も参加する事を認め

させておかないと難しいだろう。

「では、東京の後処理が終わったらと言う事で良いかな？」

「それはそちらの予定にあわせるよ。では私もそろそろ京都に戻ろう、被害は小さいとは言え少なくない影響がでているからね。当主とし

て、周りの被害の確認は必要だ」

どの口がそれをいうと思ったが、それを口にするには無かった。陰陽寮の当主と言う立場にあるが、躑躅院に陰陽寮自体には何の感傷も感じられない。むしろ自分の枷でも思っているような素振りだ……それなのに陰陽寮に招待する。これは何かあると疑うべきだな……

「はい、もしもし？」

『ああ、西条君か？私だ、ピエールだ』

「これはピエール参謀。何の御用でしょうか？」

ヨーロッパ方面のオカルトGメンの統括をしているピエール参謀。先生と関係のあるGSで僕のオカルトGメンでの後継人と言っても良いだろう、そんな人物からの電話に思わず背筋を伸ばした。

『そんなに緊張しなくても良い、視察団の後ろの政治家連中を一掃出来た』

「それは何よりです」

電話口越しでガツハハと豪胆に笑うピエール参謀、その大声に眉を顰めるがこれが彼の良さでもある。

『魔鈴君を日本に送る面倒を見てやってくれ』

「……何かありましたか？」

魔鈴めぐみ、僕がイギリスの大学にいたときの後輩で、今はヨーロッパやイギリスを舞台にして古い魔法の再現をしているはずの彼女に日本に来て欲しいと申請は出したが、余りにも早い。向こうでも何かあったのかと勘ぐってしまった。

『魔界の悪魔の出現頻度が上がっている、それを魔鈴君が行っていると言うデマが広がっていてね。念の為だ』

「……イクサですか？」

『……うむ、あの男はやはり危険だ。だが局長も聞いてくれんからな』  
やはりイクサか、あの強烈な選民思想の持ち主だ。魔女である魔鈴君の立場は決していいものではないだろう……しかしオカルトGメンではなくフリーランスの筈だが……何か事件があつてピエール参謀が一時的に自分の配下に置いたと見て間違いないだろう。

『丁度マリア7世が日本に来日する。その時にあわせて護衛として参加させる』

「かなりの力技ですね」

『なに、魔鈴君がマリア7世と交流があるから出来る事だ。私はこれからイクサのやつてる事の裏付けを取ろうと思う』

「……危険ですよ？」

『危険は承知の上だ。それよりも頼んだぞ』

イクサと言う男は悪魔のような本性を知性で隠しているような男だ。弁護士資格や、医師免許なども持ち合わせているが、それは確実に自分を守る為の表向きの地位だ。そうでなければ、人外専門のバウンティハンターなんて道は選ばないだろう。

「すいません、西条さん。遅れました」

「いや、気にしなくてもいいよ。神代会長、それじゃあ今回の事件の事と、マリア7世の来日についての話し合いをしましょうか」

イクサの事、ピエール参謀の事は気になる。だがそれでも僕達にはまだやるべき事がある、特にマリア7世の件は絶対に問題を起こしてはならない。

「オカルトGメンの上層部が乗り込んでくるっていう事態は避けたいですしね」

「ああ。あの権力欲に塗れた連中が乗り込んでくることは避けたい」

自分達の子飼いの視察団を潰された事で間違はなく僕達を逆恨みしている。だがあの視察団の不運は政治家の孫娘などがいた事で、しかもその孫娘や妻に乱暴を振るおうとした所を不動に発見され叩きのめされたのだ。僕達が何かをしたわけではない、完全な自業自得はあるが、それで納得する訳が無いのだ。

「とりあえず、美神さん達にお願いして、東京にいる高ランクのGSに

は全員動いてもらおうと思います」

「そうだね、後はSP達だが……西条家と神代家で用意しよう」  
「それが無難ですね」

大きな組織と言うのはどうしても腐敗する。オカルトGメンと言う国際組織でもそれは変わらない、だからこそ僕達は頑張らなければならぬ、相手に付け入る隙を見せない為に、何通りもシミュレーションを繰り返し、最も堅実なルートと護衛策を作り上げる。

「これからハードなスケジュールですね」

「仕方ない、長と言うのは他の人間よりも疲れるものだよ」

上の人間は下の人間よりも厳しい仕事をするものだ、だからこそ「長」と言う言葉がつくのだろうと僕は考えている。これから毎日話し合いが続くだろう……だがそれも仕方ないと割り切れる。だが、唯一願うのは……。

「ガープがまた動かないといいですね」  
「全くだ」

普通の悪霊なら問題もないが、ガープ達が動けば国全体で動かなければならない。出来ればマリア7世の来日はもう少し遅れさせて欲しかったが……そうも言ってもらえない。願わくば、マリア7世の来日時にガープが再び動き出さない事を心から祈るのだった。

レポート29 新しい生活 その2へ続く

## その2

リポート29 新しい生活 その2

↳横島視点↳

氷室神社から戻って来て2日。俺は毎朝の日課である散歩とランニングをサボってリビングで仰向けに寝転がっていた。

「なーチビー、いつの間にか俺がメイド好きでコスプレさせてるってさー、やばくね?」

「みむう?」

そうだよな、チビに言っても判らないと思うんだけどさ……昨日チビノブとノツブちゃんのメロンパンを買いに行った時俺の家にメイドさんが出入りしているらしいけどどうしたんだい?とパン屋のおじさんに言われた。

「?」

庭の掃除をしてくれていたルキさんと目が合って、手を振ってくるので振り返す。俺は良く判らないけど、オールドスタイル?とか言う古いメイド服で、コスプレとも程遠いのが良かった。もしそうでなければ、歳近い少女にメイド服を着せて働かせているとかとんでもない奴になっていたと思う。

(まあその誤解は直ぐに解けたんだけど……やっぱりなんかやるせない)

これが中学の時みたいになんなんにナンパを繰り返していた俺ならそういう悪い噂も広がったかもしれない、だけど自分で言うのもなんだけどかなり落ち着いたから親父とお袋が俺を心配して海外から頼んだハウスキーパーと言う話になっていた。シズク?シズクは従兄妹だろうという噂だ、シズクもそれを知っているが修正するのめんどくさいと言う事でそのままにしている。でもその内、シロとタマモの話も出てきそうで、その時はどうするかなあと思っているとふとあることが脳裏を過ぎった。

「あのさ、シズク。やっぱりルキさんも神魔?」

「……当たり前だろ?」

ですよねールイさんのメイドさんだから間違いないく神魔だ。外見は歳近くても実際は俺よりも遥かに大人……窓の外からメキリと言う音がして、視線を向けるとルキさんが信じられないほど優しい顔で箒をへし折っていた。俺は慌てて何度も頭を下げた、するとルキさんは笑ってくれたが、目は全く笑っていなかった。

(……殺されると思った)

やはり女性に年齢の話題はタブーだ。頭の中で考えるだけでも駄目だと悟り、俺は2度と女性の年齢を詮索するのをやめた。

「みーむーうー」

「ぷぎ」

散歩ー散歩ーと言わんばかりに鳴くチビ達、普段より少し遅い時間だけど……どうせ学校に行くことは禁止されている。

「シズク、ちよつと散歩に行つてくるわ」

「……余り遠くまで行くなよ」

心配そうなシズクに判つてると返事を返し、ジャージに着替えているとリビングの扉が勢いよく開いた。

「散歩なら拙者も行くでござるツ!!」

「はいはい、じゃあシロも準備しろよー?」

まだ寝巻き姿なので着替えて来いよと言って、チビの首輪にリードを繋ぐ。そして続けてうりぼーには首輪ではなく胴体に付けるハーネスを付ける。

「チビノブはー……聞くまでも無いな」

「ノツブウー」

準備完了とピースサインをするチビノブも散歩に参加つと、ランタンは弱っているようなので机の上に置いて置く事にする。そのかわりにまだ寝ているようだが、牛若丸眼魂をGジャンの胸ポケットの中に入れて持つていくことにする。

「みー♪」

「ぷつぎーツッ!」

「ノーブーツッ!」

河原まで軽いランニングをして、リードを外すと楽しそうに追いか

けっこを始めるとチビ達。悩みとかそういうのも一切なさそうに楽しんで、見ているだけで楽しくなってくる。

「せんせー、もう少し遠くで良いと思うでござるよー」

「俺病み上がり」

俺の言葉にあつと言うシロ、木の枝が太腿を貫通していたのだから一応重症人だ。今日も昼間からナイチンゲールさんのいる病院に行く予定なのだ。

「……せんせー、拙者。あの先生苦手でござる」

「言うな、俺も苦手だ」

殺してでも治療するって目的と手段が逆転していると思う。でも親身になって相談に乗ってくれるし、薬も出してくれるし言動は過激だけどそう悪い人じゃないと思う。

【文句を言うな、あれほど腕のいい医者はそのはいないぞ？】

「でもさ、怖いんだよ」

心眼も認めるほどに良いお医者さんと言うのは判るんだけど、腕を折るとか、足を折るとか普通に言うから怖い。

【英霊だからな、戦争当時の記憶が強いんだろう。治療しているのに、戦場に戻ろうとする軍人を止めるには足を折るしかなかったんだ】

「俺はそこまでやらないけどなあ」

「ポチが逃げようとするのが原因ではないでござろうか？」

病院に行く度に逃げようとしているポチさんか……確かにその姿と記憶の中の兵士が合致して強攻策に出ているのかもしれない。

【とりあえず、病院に行ったら大人しくしている事だ】

それは言われるまでも無い、ナイチンゲールさんがいる時に無茶をすれば物理的に曲げられかねない。あ、でも一つ気になる事があった。

「ナイチンゲール式医療術を教えてくださいって言ってたけどどう思う？」

【それは少し考えさせてくれ】

「拙者はプロレス技を使うせんせーはちよつと嫌でござる」

確かになあ、でもプロレス技に似ていても人型には有効かもしれない

いなら、覚えておいて損は無いのかなと思っていると背後から声を掛けられた。

「おや、横島君。おはよう」

「あ、唐巢神父。おはようございます」

首にタオルを巻いてランニングをしていた唐巢神父に声を掛けられ、頭を下げる。唐巢神父はタオルで汗を拭い、後ろを振り返る。

「ピート君！ペースが遅れているぞッ！30キロ程度で息が上がってどうするッ！」

「す、すみませんッ！」

その怒号にピートの謝罪の声が聞え、少し遅れてピートが公園に入ってきた。

「はあ……はあ……お、遅れました」

「霊力と魔力に頼りすぎだよ、身体強化を使う事を当たり前と思っははいけない」

「確かにそのとおりだな、元々膨大な霊力と魔力を持つピートだ。基礎がおろそかになっていないとは言えないな」

唐巢神父と心眼の厳しい言葉にすみませんと謝罪するピートはその場にへたり込んでタオルで汗を拭っている。

「随分絞られてるみたいだな」

「あ。横島さん……ええ、東京にも木人と昆虫が出たんですけど……身体強化を阻害されました」

阻害？俺達はそういうのは無かったけどと首を傾げていると唐巢神父が教えてくれた。

「妙神山で鍛え上げたからね。美神君達レベルの身体強化を崩す事は相手にも出来なかったのさ、だけどピート君や雪之丞君達は駄目だったよ。今頃三蔵法師様に鍛えなおされているだろうね」

そっか、俺達の方も大変だったんだけど……ピート達も大変だったんだなとしみじみ思った。

「横島さんは今日は学校は？」

「ナイチンゲールさんの所に診察の予約が入ってる」

俺の言葉に沈鬱そうな顔をする2人にやっぱナイチンゲールさ



んは危険人物って言う認識なんだと改めて理解した。

「まあ余り無理をせず、今は身体を休める事だよ。さ、行くぞ。ピート君、後10キロだ」

「は、はい！横島さん体調が回復したら、学校に1度顔を見せてくださいね。愛子さんが心配してましたから」

ピートの言葉に判ったと返事を返し、軽くストレッチをしながら立ち上がる。

「シロ、霊力組み手やろうか？」

「拙者は良いでござるが……心眼殿はどうでござるか？」

「……余りやらせたくはないが、霊力の循環と言う意味ではいいか。正し2分だけだぞ」

心眼の許可を得てから、俺とシロは朝の澄んだ空気の中、妙神山で学んだ霊力組み手を始めるのだった……。

～愛子視点～

ピート君がボロボロの有様でHRギリギリの時間に倒れこむように教室に入ってくる。

「おはよう、また朝からトレーニング？」

「愛子さん、ええ……正直今回の事でも、前の事でも僕は……」おはよう………ごいいます………じゃー……」ふっぐうう………ツ!!」

ピート君が最後まで言う前にタイガー君が教室に入ってきたが、そのまま倒れこんでピート君が苦悶の声を上げる。

「はい、男子救出！急いで急いで」

手を叩きながら言うのと運動部の男子が立ち上がり、タイガー君を起こして、その下からピート君を引きずり出す。

「学校の時はもう少しセーブした方が良いと思うわよ？」

「……ははは、そんな事を言ってる時間がないですから」

「また役立たずでしたけん」

東京を何度も襲っていた地震と木で出来た人と巨大な昆虫による襲撃事件。それに2人も参加していたのだが、役に立たなかったというよりも見習いのGSでは出来る事が無かったのだ。

「お父様の言う事も聞かないから駄目だよ、自分で納得するまでほっておいてあげて」

シルフィーちゃんの言葉に私はこれ以上何もいえなくて、判ったと返事を返すのがやっとだった。

「あ、そうそう。朝横島さんに会いましたよ」

お昼休みの時に屋上でお弁当を食べているとピート君が思い出したように呟いた。

「え！本当？横島君東京に戻ってるんだあ……そうかあ」

目を輝かせるシルフィーちゃんに顔を顰めるピート君。前みたい横島君の血を吸おうとすることはなくなっただけ……色んな意味でやばい方向に進化してしまった気がする。

「学校にこないって事は療養中ですじゃー？」

「……ナイチンゲール先生の所だって」

その言葉にタイガー君が顔を引き攣らせた、ナイチンゲール先生……クリミアの天使と呼ばれたフローレンス・ナイチンゲールさんが英霊となつて東京にいるけど、話を聞くだけでも相当な人らしいので心の中で南無と呟いた。

「横島さんはやっぱり怪我を？」

「元氣そうだったけど、足を引きずっていたから多分足を怪我したんだと思う」

ピート君から横島君の状況を聞いて、凄く心配になったけど私は学校から出れないし……机を背負って会いに行くのも迷惑だろう。

(まだかな)

こんな事を言つてはいけないが、大地震。これを私は待つていた、私が変われるかもしれない大きなチャンス。これを私は待つていたのだが、周りの被害が余りにも大きくてそれを楽しみにしていた私は正直そんな考えを抱いた自分を恥じていた。

「元氣になったら学校に来るって言つてましたから、近いうちに学校に来てくれると思いますよ」

「そう……ね、でもあんまり無理はして欲しくないかな」

横島君に会いたいののに、会うのが怖い……なんでこんな気持ちにな

るのかなと思いつながら楽しそうに食事をするピート君達を見つめながらそう思うのだった。

「随分と待たせてしまったようじゃな」

そしてその日の放課後、ドクターカオスとマリアさんとテレサさんが尋ねてきた、その手には凄まじい神通力を放つ木片がある。

「……これで私は机から解放されるんですか？」

「それは少し違うかの、机とこの木片がお前さんの寄り代になる。どちらかが砕けてもどちらかが存在していればお前さんは死ぬ事は無い」

机から離れることが出来る、自由に歩ける時を待っていたと言うのにいざそうなる怖い。なんと自分の都合の良い話しか考えていなかったのだろうかと地震を待ち侘びていた自分が酷く醜く思える。それでも……それでも私は。

「よろしくお願いします」

怪我人が増えて欲しいと思ったわけじゃない、ピート君達が自分達の無力さを思い知って欲しいなんて思ってもいない、ただ私は……。

(横島君の隣を歩きたいだけ)

横島君を好きな人は沢山いる、その中に私が入れるなんて思っていないけれど……それでも普通に横島君の隣を歩きたいと思うのは人間じゃなくても許されることだと思う。

「判った。では始めるぞ、何心配する事はない。直ぐに済む処置じゃ」

机の上に置かれた木片から零れる光が机を通じて私に伝わってくる。ずっと感じていた重みが溶ける様に消えて、身体が浮き上がるような感覚を感じたそのとき。

「そおいッ!!」

「お前馬鹿！マジで止めるッ!」

この状況で一番聞きたくない、アルテミス様の声とオリオンの声が教室の中に響いた。そして……

「あ……」

「あつて何!?!何なんですか!?!」

「……ダイジョウブだよ?ツクエカラハハナレラレタヨ?」

「なんで片言ッ!?待って待って!パンツ!ってパンって破裂するッ!?!」

「霊力増大してます!」

「霊力安定開始ッ!!」

凄い力が私の中に雪崩れ込んできて、マリアさん達の慌てた声を聞きながら私の意識は光の中に消えていき、完全に意識が途絶えるその前にアルテミス様の声が聞えた。

「私の巫女ゲットー♪」

「いや、すまんね。とりあえず、あれだ。頑張れ」

楽しそうなアルテミス様の声と心底申し訳なさそうなオリオンの声を聞いて、私は自分が呪われているのかなと真剣に悩むのだった。

↳ 枢視点↳

閉じていた目をゆっくりと開く、予知に急に割り込んできた映像を見て僕はクッククツとこみ上げて来る笑いを抑えることが出来なかった。

「おめでどう、お前はもう逃げられない」

「急にどうしたんですの?」

くえすが不思議そうな顔で尋ねてくる、満月の予知の日。呼んでもないのにくえすは僕の家を訪ねてきた。まあ、その理由は判っているけど藪をつついてなんとやら僕は賢い女の子だから黙っておくさ。

「はい、どうぞー。コーヒーでいいわよね?」

「ありがとうございます。ゴモリー様」

「もー様付けなんて硬いなあ、ビュレトと関係者ならゴモリーちゃん  
で良いわよ」

「歳を考えろ馬鹿」

「ひっどーい!こんなにピチピチなのに」

ピチピチなんて言う死語を使う辺りに年齢が滲み出ていると思うが、外見年齢は20歳くらいだから本当に見ただけはいいんだよね。

「それで逃げられないって誰の事ですか？」

「机妖怪さ、アルテミスが割り込んでとんでもない事になってるみたいだよ」

でも人を洗脳するような机妖怪にはお似合いの結末だと思う。

「ああ。あのスイーツの」

「クヒヒ……君に人の事を言えるかな？」

「ああ？」

「おお、怖い怖い」

今完全に目が据わっていたくえすをからかうのは本当に命がけだね。まあ、楽しいから止めないんだけどさ。

「アルテミスは結構良い子だけどね」

「……あの机の中が気に入っただけじゃないの？」

「そうよ？甘しよっぱい恋愛って私大好きなの」

……神魔って皆暇人なんだな、まあ僕としては家の掃除とか、ご飯も用意してくれるから文句無いけどさ。

「それで今回の予知はどうでしたの？」

「クヒヒ、心配しなくても大丈夫さ。暫くは大きな事はないよ、暫くは」

首に巻いたチョーカーを触りながらそう呟く、満月で力が増幅している時に何も見えなかった。つまり、それは暫くは安全と言う事だ……もしくは逆の発想で僕の予知では感知出来ないほどの大きな事件と言う可能性もあるが……それなら僕は気絶しているから多分それもないはず。

「そうですか、ではその……あのですね」

「……横島と仲良くしたいなら、率先して動いた方がいいよ。会長殿も動いたんだろう？」

「知ってたんですの？」

「クヒヒッ！昨日夢で少しね」

洞窟で抱き合ってる姿は正直驚いて飛び起きるレベルだったが、流石にそれは口にしない。しかし会長殿までもが……まあ、それなりに好意を抱いていたのは知っていたし、好意を抱いて行為に走らなかつ

だから御の字と考えるべきだと思う。

「ふーん、横島君って結構モテる見たいね、何もなければ良い加減に紹介してよ」

「……まあ、いいけど暫く待ったほうがいいよ」

まだ待つのか？と駄々っ子みたいな口調のゴモリーに少し苛つとする。愛を得る方法を知る魔神だ、男に愛される好かれるという技術全て持っているゴモリーを横島に合わせるのは正直凄く不安ではある。文句は言わないけど、多分くえすも同じだろう。

「明けの明星が横島の家に行く光景が見えたけど……クヒビ。出会わせたいかい？」

予知なのに割り込んできて邪魔をしないでくれと言われたんだよと言うとくえすとゴモリーも納得したようにうなずいた。

「止めておきましょう、命は惜しいですからね」

「遊び道具にされる趣味は無いし、のんびり時間を見て会いに行きましようか」

誰も好き好んでルシファーに関わる者は……あ、いるわ。横島は多分凄い神魔くらいは気付いているけど、多分全然気にしていないと思う。

「ルイ様の遊び道具になってる人間って聞くだけで私は凄いと思うんだけど」

「クヒビ、ポーカーで勝ったらしいよ？」

「嘘本当ツ!? 私ペンダントとイヤリング取られてるから、横島君取り返してくれないかしら!？」

……神魔は本当に暇人なんだね。ゴモリーを横島に紹介すると、ルシファーに会う。邪魔するなど言われているから、会いたくは無いら。クヒビ、結構横島の家に入ったりしているみたいだから今度頼んでみたら？」

「そうね、そうしましょうか。また巻き上げられるのは嫌だし」

余裕綽々のゴモリーが顔を引き攣らせているのが面白いと思いがら、コーヒートを啜りながら考え事をしているくえすに声を掛ける。

「会長殿は肉食系だよ、蛭がへたれている間に動いた方がいいよ」

「ちつ、知ってますわよ。でもいざ誘うとなるとどうすればいいのかわからないんですわよ」

魔法の事しか考えてないから女子力皆無のくえすだもんねと思っただが、それを言えば殺し合いになりかねないので喉元まで来た言葉を飲み込む。

「デートに誘うのね、面白そう。相談に乗ってあげましょうか？」

「……柩は良いんですの？」

「だって柩ちゃん、拘束されるのが良い「黙れッ！」ちよつと特殊な性癖だから、私の助言意味無いし」

くえすがドン引きした目をしているけど、性癖は人それぞれ、口を挟まないで貰いたい物だ。

「1度横島君に会った後になるけど……ふふ、アドバイスしてあげようか？」

「……お願いしますわ」

とりあえずくえすがゴモリーの助言を聞いて、本気になりそうだから暫くそれを見て楽しむ事を僕は心に決めたのだった。

くアシユタロス視点く

琉璃が横島に好意を表明したから焦って行動に出たくえすだが、それに対して蛭はと言うと……

「ふう、お父さん。エンジンの方はどう？」

「大分安定しているね、良い感じだよ」

気を静める為に横島のバイクの改造を行っていた、こういう所が蛭のへたれたる由縁なのだが、私はそれを口にしない。何故ならば、それを言えばスパナの一撃が待っているからだ。

「しかし、琉璃君が横島君に好意を寄せるとはね」

「元々そんな素振りがあったけどね」

6. 2倍から2.5倍と相当倍率が下がっているのだからそれだけ本気って事と横島君が好意的に思っている事は言わない方が良さそうだ。

「それでデートのプランも考えないでバイクでいいのかな？」

「ふっふっふ、これが私のデートプランよ。横島とツーリングするの」  
一緒に遠出するの楽しみだなーと楽しそうな蛍だけど、くえす君もバイクを持つているから追いかけてくる可能性は考えていないんだろうなと思ったが、自分で気付くべきだと思つてそれも口にしない。  
「ふう、これで良しつと油を流してくるね、お昼から病院だし」

横島君達全員もナイチンゲールに診察してもらう予定になっている、時間が掛かるからお昼からの予定なのでこうしてバイクのメンテをしていたが、時間的にそろそろ出発の準備をしないと予約している時間に間に合いそうも無い。

「了解了解、ゆっくりお風呂に入つておいで」

ヘルズエンジェルとのレースで中破したバイクは今、人間界で手に入る素材ではなく全て魔界産である。そうでなければ、ルイ様から提供されたエンジンに耐えられないのだ、いくつか偽装を施すから大丈夫だと思つたが……それでも僅かに不安はある。

「ふう、やる事が多すぎる」

ドクターカオスと協力して、量産型レブナントが使つていたと言う籠手の複製に、単独では使えないと言うくえす君の眼魂の分析。それにガープ陣営にもぐりこんでスパイ活動に入るまでの人間達に必要なだと思われる準備。やる事は山ほどあるのに、どこまで備えればいいのか判らず、思わずぼやきたくもなつた。

「いや、そんなことを言っている場合ではないな」

幸い霊力・神通力・魔力・竜気を混ぜた実験は何も起こらなかつた。つまり今の段階では横島君には何の影響も無いということが判明したのだ、それだけでも私としては御の字だ。そんな事を考えていると電話がなる、少し嫌な予感を感じながら受話器を手にする。

『もしもし、優太郎さんですか？専門じゃないと思うんですけど、1つ頼みたい事があるんですよ』

電話の主は琉璃君だった。結構あの子も可愛い顔をしている割に面の顔が厚いな。普通は、1人の思い人を取り合っている相手の父親に電話しようとか思わないと思うんだけど……それとも会長と言う



責務とプライベートを完全に分けているって事かな。

『うりぼーが乙事主様になったので1度診てもらえますか?』

「了解、昼間に横島君が病院に行くと聞いているから私も其処に同行するよ」

『すいません、ご迷惑を掛けます』

蛍を病院に送っていくついでだ。それに診察には琉璃君も来るだろうし、その時に話を聞けば良いと思う。

『それでは失礼します、あ、それと……私は引きませんからあしからず』

その言葉を最後に電話は切れた、プライベートもガッツリ混ぜて来ているじゃないか……。これは恋愛雑魚の蛍には荷の重い相手かも知れないな……。まあ、それで蛍が諦めるとは思えないので大丈夫だとは思う。

「問題は横島君か」

横島君は押しに弱いからなあ……。琉璃君にぐいぐい押されるとうんっで行ってしまいそうで怖いな。

「さてと私もシャワーを浴びるかな」

病院に行くのに油塗れの格好で行く訳にも行かない、本当は蛍を送っていくだけのつもりだったが……。琉璃君に会うならちやんとスーツを着ていくかなと思ひ、スパナを工具箱に戻して私も地下研究室を後にした。

「……ピカア」

アシユタロス達がいなくなり、暗くなつた地下研究室でくえすが横島に渡した「ウィッチ眼鏡」の瞼が開き、その目から怪しい光を放つ。その光の先はまだ整備途中の横島のバイクへと向けられているのだった……。

## その3

リポート29 新しい生活 その3

く 美神視点く

氷室神社での戦いの後遺症は勿論、なんらかの呪いや病気の可能性があると言う事でナイチンゲールのいる病院に訪れていた。

(増えてる……)

私達を出迎えたのは増えている蜘蛛の巣状の亀裂、前までは1つだったのに……3つも4つも亀裂が増えている。

「……言峰神父ですかね?」

「ポチの可能性もあるでござるなー」

逃亡常習犯の2人だけど、そのまま死んでいるんじゃないかと本当に心配になった。

「結構懲りない人達ですよね、あの人達」

「あ、あの……近くないですか?」

「え? そんな事ないわよ?」

琉璃も勿論診察の為に訪れていたのだが……横島君と琉璃の距離が近い。蛍ちゃんとかえすが凄く顔をしている……にらみ合うとか互いに牽制と言う感じの蛍ちゃんとかえすだったが、琉璃はめっちゃ積極的だ。

「今度一緒にご飯を食べに行かない?」

「え、えーつとお?」

助けてという目をしている横島君に心の中で溜め息を吐きながら、琉璃の提案を聞きつつも横島君へ助け舟を出す。

「氷室神社に行った全員ででしょ?」

「そうですよ」

これで違うとか、くえすとか蛍ちゃんが動かなければ琉璃は横島君を1人だけ連れ出していたと思う。

(これ、本当に不味い気がするわね)

蛍ちゃんとかくえすがやりあっている間に琉璃が横島君を攫って行きそうなの……この積極性を見るとそれも私の思い過ごしではないよ

うに思えてくる。

「は〜い、令子ちゃん〜の診察の番ですよ〜」

「……冥子、あんたここで何してるの?」

ナース服の冥子に頭痛が強くなった気がした。冥子はにこにここと笑いながらくるりとターンする、その動きに沿ってスカートがふわりと動いた。

「シヨウトラちゃんのパワーアップで〜ナイチンゲールさんの所でお勉強してるの〜」

「わふんッ!」

シヨウトラも凄いでしょと言わんばかりに自慢げな鳴き声を出す。確かに冥子は除霊に向いてない、そういう面では医療系に進むのは間違いないと思う。

「横島君似合う〜?」

「凄く似合っつてて可愛いと思う、冥子ちゃんもシヨウトラも」

「本当?嬉しいわ〜」

「わふわふッ!」

ほんわかほのぼのしてる横島君と冥子の直ぐ側では蛍ちゃん達が睨みあっているし……私は思わずお腹に手を当てた。

(胃が痛くなつて来たわね)

動物フォームのタマモが横島君の膝の上に乗って唸っていて、シロも少し悩んで子犬フォームで横島君の膝の上に座る。ここは自分達の場所だと言いたいのか、それとも自分達の物と主張しているのか……。

「はあ……へたれてるから、こんな事になってしまったんだよ」

蛍ちゃんを病院まで連れてきた優太郎さんが疲れた様子で呟く、でも本当にそのとおりだ。もつと積極的になっていけば、望む関係になれていたのに、横島君の良さが判つてライバルが増えてきてから慌てるのでは余りにも遅すぎる。

(自業自得までは言わないけど……)

横島君はまあ顔は普通だし、決してモテるっていうタイプではない。だからこそ蛍ちゃんものんびり横島君を籠絡しようと思ったと

思うんだけど……

(人の中身を大事にするタイプにはモテるのよね)

外見ではなく中身を重視するタイプ……蛍ちゃん含め、くえすや琉璃。そして何故か人外には異様に好かれる……横島君に惹かれる相手が増えてから慌てても時既に遅しである。

(横島君、もう少し人の好意に敏感になってくれないかしら)

それか蛍ちゃんと相思相愛なんだから、さっさとどっちか告白して付き合うかなんとかしてくれないかしら。私はそんな事を考えながら診察室に入ったのだが……。

【身体に異常は見られませんが、ストレスを感じていませんか？ とりあえず、胃薬を処方するのでアルコールの摂取は控えてください】  
ストレス性の胃炎になりかけていると聞いて、本当にさっさとくつついてしまえ、もしくは誰かと付き合い合ってしまうと心の底から思うのだった……。

〈蛍視点〉

氷室神社の時も感じていたけど、横島と琉璃さんの距離感が近い。横島はおろおろしているけど、琉璃さんがぐいぐい押している感じだ。

(不思議だわ)

普通はこれだけぐいぐい行っていれば多少の嫌悪感や、男好きと言う感じを受けるはずだ。それなのに、琉璃さんにはそれが無い。こんな事を言ったら自分の負けを認めるような物だがなんと言うかそうあるのが当然と思えてくる。

(違う違う)

なんで私は勝負に入る前から負けを認めているのか、私の方がずっと前から横島を好きだったのだから引く訳が無い。

「あ、そうそう。美神さんにも話す予定なんだけど、陰陽寮への見学が決まりそうよ」

横島や私達をからかう様な猫のような雰囲気から、一気にGS協会会長と言う立場に切り替わった琉璃さんに一瞬面を食らった。

「……裏取引ですか？」

「まあそうなるみたいね。あの巨人を弱らせた呪い……躑躅院も一枚噛んでいたみたいだし、表向きはGS協会と陰陽寮の連携を取る為の視察って事になるわ」

「今まで何回も要請があつたのに、それを悉く断ってきた陰陽寮が良くそれを言い出しましたね」

GS協会、オカルトGメンが歩み寄ろうとしていたのに、それを断り続けたのは陰陽寮だ。それが突然手を取り合おうなんて、おかしいと思えない。

「俺さ、良く判ってないんだけど……陰陽寮ってのはGS協会とかとは仲が悪いのか？」

「ここら辺は政治的なやり取りになるので横島には説明してなかったけど、そろそろそういう話をしても良いと思える。」

「元々陰陽寮って言うのは日本に認められていた霊能組織なのよね、それが昭和末期から平成初期に掛けて日本の国防組織って言う立場から外されたのよ」

「外されたのではなく、正確には蹴落とされたですわ。あの時分には陰陽寮に正式な陰陽師は少なくなっていたのですわ」

琉璃さんの言葉にくえすが補足する、勿論正式な陰陽師の現象もあつたが、その頃には海外からGS協会やオカルトGメンが日本に入り始めていて、弱体化していた陰陽寮に拘る必要が無いと政府が判断したので。

「神宮寺さん、神宮寺くえすさん、診察室へどうぞ」

「私の番みたいですわね、ではお先に」

横島にだけ手を振り黒いドレスの裾を翻し歩き去るくえす、悔しいけど……女の色気って奴では完全に負けていると思う。

「いつも思うけど、神宮寺さんって格好良いよなー」

綺麗と続くと思ったのに格好良いって言葉に私も琉璃さんも驚いた。横島は私達の視線に気付いたのか、恥ずかしそうにする。

「自信に満ち溢れているからな、横島には自分に足りない物だから惹かれてしまうのだろう」

自信過剰ともいえるが、くえすは自分の立ち振舞いに一切の迷いも躊躇いも無い、その美貌とあわせ、その自信に満ち溢れた姿は確かに万人を虜とするだろう。

「俺がこの世で一番信頼出来ないのは自分自身だからなあ……自信に満ち溢れた神宮寺さんには憧れるよなあ」

それは横島の口癖とも言えた、何よりも自分が信用出来ない。だから横島には自信がない、そんな事は無いといつも言っているけど、横島にはその言葉は届かない。

「横島君は頑張っていると思うわよ。自信なんてそんなのは後から付いてくる物よ」

「そういうもの……なんですかね？」

「そうそう、そんな事を言えば私なんて自信なんて欠片もないわよ？」

「え？」

私と横島の困惑した声が重なった。琉璃さんはそんな私達を見てくすりと笑う、いつも自信に満ちているように見える琉璃さんが自信がないとか何の冗談かと思う。

「責務か……それは辛い生き方だね」

「神代家当主、GS協会会長。そんな立場は私は欲しくなかったんですけどね」

日本でも有数な霊能者の家系である「神代家」そして日本のGS協会の会長と言う立場……それが私達とそう歳の変わらない琉璃さんが大人にならなければならない理由だったのだろう。

「私も普通に人並みに学校に行って、遊んで、好きな人と過ごして、そんな青春欲しかったわね」

横島に流し目を向けるのは嫌だけど、それは琉璃さんの嘘偽りのない本心だろう。

「くえすの自信は自分を守る為の物、自分を卑下されない為に身につけた力だけど、くえすの心は狭い、自分の世界だけで完結している」そこに他人を入れる余裕はないはずなのに、くえすは横島を求めた。自分に足りない優しさを求めて、横島を欲している。

「うるさいですわね、貴方に評価される筋合いはありませんわよ」

心眼の己への評価にくえすが不機嫌そうに鼻を鳴らす、だが心眼はそんなくえすに目もくれず、今度は私に視線を向けた。

【優しく受け入れる。それは甘く、相手を包み込む。どんな時も側にいて、絶対的に肯定し、否定しない。それが蛍】

突然の心眼の言葉に私も琉璃さんも、勿論横島も言葉が出ない。

【他人に厳しく、己にも厳しいからこそ絶大なカリスマとなる。己を隠し、本性を見せない。それが琉璃】

「……他人から称されるのは何とも言えないわね」

【そう嫌うなよ、くえすも、蛍も、琉璃も、いや、それだけじゃない。横島の回りにいる者は横島にない物があって、横島にだけあるものを求めている】

俺にだけにしかないもの？と横島が呆然とした様子で呟く、自分にしかないものなんて思いつかないのだろう。だが、横島にだけあって、皆が欲しいと思っているのはその絶対的な優しさだろう。

【それが好きという感情なのか、愛なのか、それはきつと自分達には判るまい。まあ、それを探して悩むのが恋愛であろうよ。まあ、せいぜい悩め、ああ、横島はもう少し人の好意に気付くべきだな】

「うえ!?!」

突然の直撃に横島が困惑した声を上げる。心眼が突然語りだしたのは心眼から見た私達なのだろう……突然の愛なのかとか言われて、私も琉璃さんも顔が赤い。

「心眼は何をさせたいのかな？」

【横島が心身ともに大きく成長する事を望んでいるよ、私はお前達の誰かが横島をより成長させる……そう思っている伴侶としてな、誰かなるかは私の関する事ではないが……】

「横島さーん、診察室へどうぞー」

「えっと、じゃ、俺行きますからー!」

うりぼー達を抱えて診察室へ逃げ込む横島。残された私達は心眼に言われた言葉を噛み締め、小声での伴侶の言葉の意味を理解して耳まで真っ赤になってしまふのだった……。

くナイチンゲール視点く

全員の診察を終えて、特別な協力者として残った芦優太郎さんと一緒にカルテに目を通す。

「最悪の結果は避けられているようだね」

【そうですね】

木人と昆虫と言う事で体内へ花粉などでの感染症の可能性を恐れていましたが、それも無いようで一安心と言う所ですね。

【問題は横島さんですね】

「……ううむ、彼は本当に未知数だからな」

優太郎さんは神魔と言う事でGS協会やオカルトGメンに提出するカルテではない、本物のカルテを机の上に広げる。

「体組織の回復までも早まっているのか」

「人外化が爆発的に進んでいますね、ここまで来て人格を保っている横島さんには驚きです」

常人ならば、ここまで変質が進めば既に人格面にも影響が出ていてもおかしくは無い。それなのに、元の穏やかな人格のままと言うのは驚かされる。

【私としては魂に関係する霊視が出来る神に詳しく診察を求めます】

「そうだね……ヒヤクメに声を掛けておくよ」

私に診察できる範囲を既に超えている。肉体や霊体の治療は出来ませんが、魂の変質には私では治療は出来ない。

「これは私が責任を持って神魔に届けておくよ」

【よろしくお願ひします】

出来る範囲の事はしたが、私にも出来ない事はある。それでも医者としてのベストは尽くしたと思う、それに言峰やポチのように逃走しない善良な病人なので私も優しく接する事が出来る。

「身体能力的はどうかな？」

【そうですね、トップアスリートレベルと言う所ですね】

本来のその骨格ではありえない筋肉や瞬発力、霊力による強化か魂



の変質による変化なのかは判らないですが……横島の身体能力も人間から外れ始めている。

「……そうか、横島君の努力が実っていると言うのはないかな？」

「それもあると思いますが、そこは難しい所ですね」

横島のトレーニングは聞いていますが、そのトレーニングであそこまでの身体能力を得たというのは正直信じられないと言う部分もある。

「全て横島君の変質として片付けるつもりかな？」

【まさか】

それで片付けるのならば、優太郎さんを診察室に呼ぶ必要は無い。何もかも全て、横島さんの変質で片付けてしまえばいいのだから……。

【私には魂に関する知識が足りません、ですからそちらに対する知識の譲渡を望みます】

「判った。近いうちにまとめて持ってくるよ。かなり厚くなるが、大丈夫かな？」

【大丈夫です、私はこれでも英霊ですから】

英霊と呼ばれるほど偉業をなしたと言う実感は無い、ただ英霊と言う存在は私にとって大変都合が良かった。まず疲労で倒れる事も無い、病気で動けなくなる事も無い、人を救いたいと思う私にとってこれほど都合のいい身体は無い。

「うりぼーに関してだけど……あれはどうかかな？」

【大丈夫ですよ、可愛い動物のままです】

乙事主と言う神に進化したと言う話は聞きましたが、身体能力とかに変異は無い。それに優太郎さん自身も調べて異常が無いことは確認しているはずだ。

「私とは違う観点での話も聞きたかったんだよ」

【確かにそれは知りたかったですね】

自分でこうだと思った話でも、他人から話を聞くことでその内容は何倍も優れた物になる。意見の交換と技術の交換は何よりも必要だ  
「ナイチンゲール先生！また逃亡ですッ!!」

「全く、話を聞かない患者ですね。直ぐに行きます、優太郎さん。少しお待ちいただけますか？」

大丈夫だよと笑う優太郎さんに背を向けて、診察室を出る。

「ちいッ！もう見つかったかッ!!」

「急げポチッ!!」

「私もいい加減に堪忍袋の緒が切れました、骨の10本や20本覚悟してもらいますッ!!」

単位がおかしいと叫ぶ言峰とポチ、だがナイチンゲールは止まる事を知らず、もはやこの病院の名物となっている時間無制限の格闘戦が幕を開けるのだった。

「医療は筋肉だッ！新しい医療を確立させるんだ！」

「二はいッ!!」

そしてそんなナイチンゲールに感化され、霊能力とナイチンゲール式医療術の継承者がこの病院で次々と生まれている事を琉璃が知り、彼らにGS免許を交付するか真剣に頭を悩ませる事となるのだった……。

【ふんッ!!】

「があああああーッ！痛い！痛いいいい！」

「でたーッ！ロメロススペシャル！これは痛いぞーッ!!」

「先ほどフロレンススパークで地面に叩きつけられた言峰神父が担架で運ばれていきますねえ」

「ぎ、ギブ……アップ……ごぼっ」

「おっと！ポチ選手ギブアップッ!!20分15秒！ナイチンゲール婦長の勝利だあッ!!」

「今、小児科に入院中の少年達からベルトが授与されますッ!!感動的ですねえッ!!」

……病院ではなく、プロレス会場になっていると言うことに突っ込みを入れるものは誰もおらず、廊下に用意されていた机やパイプ椅子を慣れた素振りで行収を始める入院患者達なのだった……。

く ルイ・サイファアー視点く

東京の高級レストラン、そのVIPルームにルイ、ネロ、エレシユキガルの3人の姿はあった。

「人間界では極上と言える食材と最高と言われる料理人が作った料理の味はどうかかな?」

「普通」

ネロとエレシユキガルの言葉に笑みを浮かべる、全く持つてその通り。これはどこまで行っても普通なのだ。

「真なる美食と言う物を理解していないな」

「色々食べ歩いてみたけど、それと比べても美味しくないのだわ」

神魔の味覚と言うのはある程度は人間に似ているが、最終的に美味かどうかを決めるのはその料理に込められた人間の思いだ。

「最高の食材を使い、TVなどに出て慢心している。昔はもう少し美味かったんだけどね」

これならば高級ホテルにスカウトされる前の小さな街のレストランのシェフをやっている時の方が美味しかった。

「それで態々こんな普通の料理を食べさせて、何をするつもりなのか? 横島の所に行くのではなかったのか?」

「そうなのだよ、私を騙したの?」

ネロとエレシユキガルに落ち着けと言って、ナプキンで口を拭う。確かに私も横島の所に向かう予定だった……。

「今日は横島は病院だったのだよ」

ルキフグスに聞いたのだが、横島は昼から病院だったらしい、それでは会いに行っても意味がないだろう?と問いかける。

「病院って、横島は病気なのだよ!」

お見舞い、お見舞いは何が良いのだわつとおろおろしているエレシユキガル。冥界なんて場所にいたから、こういう不測の事態には滅法弱いんだよ。

「落ち着け女神よ、魔人化が進んだという事だろうか?」

「まあ人間からすれば大変な事だしね」

横島の人外化、それは人間側からすれば大変な問題だ。だが神魔か

らすれば、それは大した問題ではない。寿命から開放されるのだから、横島で遊ぶ時間が増えると思えばいい。

「命に別状はないの？」

「ないない、強いて言えば余達にまた一步近づいたと言う所だ」

私達の側に近づくのならそれはそれもまた喜ぶべき事、やはり伴侶とまでは言わないが肌を重ねる事があるならば人の身では絞りきって殺してしまうかもしれないからね。

「だから明日昼前に横島の所に行こうと思う」

「食事前は失礼だと思っただけど……？」

まあ確かに普通はそうだ、だけど今回私にはある考えがある。それを試すには昼前の必要性があるのだ、話を聞けば2人も納得すると思う。

「横島に料理を作らせて見ようと思うんだ」

私の言葉に2人も興味津々と言う顔をする、その一言で私が何を考えているかは如実に判るはずだ。

「正直人間の料理には飽きた」

「まあ珍しいって言うのは認めるんだけどね」

ネロも別のホテルに滞在しているが、その味には満足していないだろう。そしてエレシユキガルは普通の食事に感動していても、その味に満足しているかと言うときつとそうではないだろう。

「横島の料理と料理人の料理、そのどちらか神魔である私達の舌を満足させるのか、試してみようじゃないか」

2人の返答は聞かなくても判る、その眩いまでの光を宿した目を見れば私のアイデアに賛同している事は明らかなのだから……。

「ふっふーん♪良い出来じゃないか？」

「うん、良いと思うわよ、あー焼き上がりを楽しみだなー」

「せんせー！拙者のペンダントもー」

「判ってる判ってる、どうせ家で安静だからシロの分も作るよ、シズクも何が良い？」

「……何でも良い、横島が作ってくれるならそれで良い」

診察の結果1週間の自宅療養といわれたので、暇をもてあました横

島はシルバーアクセサリーを作って暇を潰していた。そんな平和な横島家に3柱の神魔が訪れようとしているとは、誰も想像にもしないのだった……

リポート29 新しい生活 その4へ続く

## その4

レポート29 新しい生活 その4

〜横島視点〜

家にいると言うのは案外退屈だ。昨日神宮寺さんに電話して、自宅療養なのでシルバーアクセサリーで何か作るのありますか？と尋ねると凶面を魔法で送ってくれたので、それを見ながらシルバークレイを整形する。

「心眼、これってさ。本当に魔具の媒介とかになるの？」

【なるぞ、普通はこういうのを作るのはそれ相応の準備が必要なんだが……お前の家は……】

「ああ。いや、大体察した」

心眼が口ごもったのでその理由を察した。俺の家が何か大変な事になっていと言う事は聞いているので、それ関係だろう。まああれだ、チビ達と暮らすのは楽しいのでそれを止める気は無いので本当に些細な問題だ。

「みむ」

「ぶっぎやーン」

【のーぶー!?!】

チビがうりぼーのほうの旗を掲げる。今うりぼーが鼻息で飛ばしたボールがチビノブの手をすり抜けて、壁に当たったのでゴールと言う事なのだろう。

「よし、出来たつと」

【いい仕上がりだな。私でも判る】

三日月型のペンダントトップが出来た。ただ三日月状にするだけではなく、角度とかそういうのも考えて立体的な仕上がりになっているのだが、思ったよりも上手に形を整える事が出来た事に笑みを零す。

「じゃあ、シロ達のも仕上げるか」

昨日形を整えて、乾かしておいたシロ達のシルバーアクセサリーも仕上げる事にする。シロは牙の形をしたペンダントトップ、タマモは

指輪（人差し指用）シズクは何でも良いと言っていたので、板状に伸ばしたシルバーアクセサリーに水の雫を連想させる彫りこみを入れてみた。鍵とかにつけるアクセサリーに丁度良いと思う大きさだし、多分これくらいなら邪魔にならないと思う。

【しかし、結構色々作っているな】

「練習でな、華とか綺麗にできてるだろ？」

ネロちゃんが花が好きだとか言っていたので、細かいものを作る練習で花も何回か作っている。色々作成して、神宮寺さんに持って行って、魔具にして貰う。それがどんな効果を持つのかは俺には判らないし、それは全部神宮寺さんの感性にある。

「横島ー、ちよつと出かけてくるからねー」

「美神殿に呼ばれてるでござるよー」

「……私は少し小竜姫に会って来る」

シズク達に了解ーつと返事を返す、シロとタマモの件は昨日美神さんに聞いている。人狼族にGS免許を交付する話が纏まりそうだから、シロ達に先にGS試験を受けてみないかって話があるのは知っていた。シズクは多分アレだ、今回の件で神様に進化してしまったうりぼーの件だと思う。

「……お昼は」

「あー、良いよ、良いよ。適当に作るから」

「……すまない」

「良いって、これでも簡単な料理は出来るから心配しなくていいよ」

最近シズクに色々用意して貰っているが、最初は1人暮らしの予定だった。それにお袋と親父も帰ってくるのが遅いから、基本的な料理は出来るから心配ないと言ってシズク達を見送る。

【……やれやれだ。人払いをここまで徹底するか】

「なんか言った？」

シルバーアクセサリーを焼いていると心眼が何か呟いたけど、良く聞き取れなかった。なんて言ったのか尋ねたけど、シルバーアクセサリーを焼成しているので焼成が終わり、焼きあがったシルバーアクセサリーを机の上に並べてから何て言ったのか？と尋ねる。

「いや、お客さんが来そうだなと言ったのさ」

お客さん？俺の家に？ピートが課題でも持ってきてくれるのかな？と思っていると本当にチャイムが鳴った。

「はーい」

郵便局か宅配便かと思いつながら玄関を開ける。そして尋ねてきた人物を見て、俺は正直驚いた。

「や、暇だから遊びに来たよ」

「横島、久しぶりだな。元気にしていたか？」

「お、お邪魔するのだわ」

ルイさん、ネロちゃん、そして凜さんの3人が尋ねて来た。3人も良い所のお嬢様……と言うか、神魔なのに何故俺の家に一瞬思った。だけど、神様としてじゃなくて友人として尋ねて来てくれたのだから、神様と判っていても、俺は普通の友人に接するようにする事にした。

「いらっしやい、特にお持て成しも出来ないけど歓迎するよ」

俺はそう笑い、3人分のスリッパを用意するのだった……。

くネロ視点く

余達が尋ねて来たとき、一瞬横島に迷いが生まれた。それは余達の正体にぼんやりながらも気付いたという証だろう……だが、次の瞬間には笑顔で招き入れてくれた。

(本当に面白いなあ)

人間ではないと判っていても笑顔で招き入れる、それがどれだけ勇気の居る事か判らないわけではないだろう。

「みーむー♪」

「あら、チビ。元気？」

「みむう」

なんと……余と明星には懐かないチビが女神に甘えている。頭を撫でられて、気持ち良さそうに目を細めている光景に驚いた。

「凜さんはチビと仲良しですねー」



「チビ達から擦り寄ってきてくれるのよ」

「ぷっぎ、ぴぐうー♪」

【ノブノブー】

横島の家不思議生物が女神に集まっている。おかしい、余の方が女神よりもずっと尋ねて来ているはずなのに何故余には懐かない。

「理不尽だ、何故余には懐かない!？」

「いやあ、うりぼーは人懐っこいけどチビは警戒心が凄いからじゃないかな?」

自分の知り合いにも全然懐かないと言うが、それでも納得出来ない程がある。

「ほら、チビおいで」

「み、みぎい……」

「ほら、私も仲良し」

「……あのチビがめちゃくちや怯えてるんで止めてあげてください」

明星に震えながら擦り寄るチビ、目力で脅しているのを見て、流星の横島も静止し、チビを抱き抱える。

「みむう……みむう」

怖かったと言わんばかりに甘えているチビに余と女神の責める視線が明星に向けられる。

「私はおいでと言っただけだよ。責められる理由は無いな」

……判っていた事だが、明星の面の皮の厚さは凄まじいな。普通は少しで悪びれた素振りを見せるはずなんだが、だが明星が弱っている姿を見せるのなんて想像も出来ない。つまり、明星はこれで良いと言うことなのだろう。

「横島、これは何かしら?」

「シルバーアクセサリーですよ。今外出禁止なので、暇潰しで作っているんですよ」

ほう……前のシルバーアクセサリーも中々良い出来だったので、今回横島が作ったと言うシルバーアクセサリーを覗き込む。

「おおッ!これは実に余の好みだッ!」

薔薇の装飾が施された指輪を見つけ、それを人差し指に嵌めてみ

る。本当は薬指のつもりだったのだが、流石に大きすぎた。

「ぴったりだ。横島貰っても良いか!？」

これほどの出来だと駄目と言われるかもしれないと思ったが、欲しいと思った以上駄目だと言われても持つて帰るつもりだった。けど……横島の返答は予想を超えていた。

「ああ、それネロちゃんが薔薇を好きだと言ってから作ったんだよ。不恰好だけど、気に入ってくれたなら良かった」

余の為に作ったと言う言葉に一瞬何を言われたのか理解できなかった、少し時間が経って言われた言葉を理解した時。

「余は嬉しいッ！お前は余を喜ばせる天才だッ!!」

「わぶっ!？」

横島の頭を抱え込んで抱き締める。横島が目を白黒させて暴れているのを見て、ますます楽しくなる。

「照れているのか、愛い奴めッ!」

胸の間に抱き抱えられ、慌てている横島の姿が可愛くて仕方ない。早く魔人となって余の側に来て欲しいとますます強く思ってしまう。

「そこらへんにしてあげなよ、横島だつて思春期だ」

「むう。抱き心地は案外良いのだがな」

明星に止めに入られ、渋々横島の頭を解放する。耳まで真っ赤の姿にますます愛いと笑う、この初心な反応が面白くて仕方ない。

「な、何をしてるのかわ!?は、破廉恥だわッ!？」

女神が目をグルグルさせて半分パニックになっている、本当に不測の事態に弱い奴よ。

「ネロにあると言うことは、私にも勿論あるんだろう?」

「え、あ、はい。ルイさんにはこれを……」

「ほう……どうしてこういう形にしたんだい?」

明星に差し出されたのは太陽と月が重なって見えるペンダントだった。横島は頬をかいて、咳払いを繰り返して気を静めてから説明してくれた。

「いや、ルイさんってこう……上手く言えないんですけど、太陽みたいに照らしてくれる時もあるし、月みたいに見つめている時もあるかな

あつて思つて」

「ほほう……」

横島の言葉に明星が楽しそうな笑みを浮かべる。神であり、魔族、善と悪。その両方の側面を持つ明星はまさしく太陽と月、それを感じ取つて作るとはやはり横島には常人には無い感性がある。

「ありがとう。気に入ったよ」

「お嬢様が身につけるにはあれだと思ふんですけどね」

宝石を使われているわけではない。だけど、その素朴さが返つて余達には掛け替えのない物に思えるのだ。

「よ、横島。わ、私も欲しい」

「凜さんですか？じゃあ、ここから選んでく」そ、そうじゃなくて私の為だけのが欲しい」……俺の作ったので良いのなら、どんなのが良いですか？」

横島にこんな感じが良いと話している女神の顔は酷く楽しそうで、それだけで横島に好意を抱いているのが判り余も明星も面白いからかいのネタを見つけたと笑みを浮かべるのだった……。

くエレシユキガル視点く

横島に行き成りアクセサリーを欲しいと言つてしまつたけど、迷惑ではなかつただろうか……笑顔で引き受けてくれたが、実は困っているんじゃないかと不安が胸を埋め尽くす。

「何そんなに気にする事はないさ、無理なら無理と横島は言うからね」  
「楽しみに待つていれば良いだろう」

明星と女帝に言われ、そうなら良いのだけど慌てていた気持ちが落ち着いてくる。キッチンから聞こえてくる何かを炒める音……今横島が料理を作っている。

「迷惑じゃなかつたかしら」

「お前はネガティブだなあ、横島が良いと言っているのだから大丈夫に決まっている」

面白そうと思つて明星と女帝の誘いに乗つたけど、もしかしたら迷

惑だったかもしれないという不安が強くなる。

「まずはネロちゃんから、でも言っておくけど、男料理だから味は保障しないから」

「いやいや、作って貰ったのに文句は言ったりせぬ、ありがとう。横島」

机の上に置かれたのはシンプルなおムライスだった、女帝は横島に感謝を告げてスプーンを手にする。

「いただきます、さてさてどんな味かな」

わくわくとした様子でおムライスを口に運んだ女帝。どんな反応をするのかと明星と見ていると女帝は目を丸くした、美味しいのか、不味いのか、その反応では全く判らない。

「あむ」

無言で黙々と食べる女帝に味の感想は？と言うが女帝は無言のまま。美味しいのか、まずいのか、本当にどっちなのだろう。

「はい、お待たせしました。今度はルイさんです」

「ああ、ありがとう」

今度は明星、最後は私なのだと思うのだけど……まあそれは仕方ない。多分外見的年齢で作っているのだと思うことにする

「いただきます」

明星もおムライスを口に運び、女帝と同じ顔をした。

「味はどうなのかわ？」

「……これは口で説明するのは難しい」

「うむ、実際に食べるしかない」

口で説明するのが難しいとか、意地悪にしか思えない。どんな味かするのか、それをそわそわしながら待つ。

「はい、お待たせしました」

「あ、ありがとうなのかわ！」

目の前に置かれたおムライスを見る、ケチャップライスには薄焼き卵からはみ出ているし、卵も半熟ではない。本当に普通のおムライスだった、それなのになんで女帝と明星が味の感想も出来ないのかと思いつつスプーンを手にする。

「いただきます」

「気に入ってくれると良いんですけどね」

横島も席についてオムライスを食べ始めるのを見ながら私もオムライスを口に運んだ。

(これは……確かに言葉に出来ないのだわ)

本当に普通のオムライス。特出すべき事なんて何も無い、本当に平々凡々な味だ。だけど私の胸を埋め尽くしたのは、そのオムライスの味ではない。

(暖かいのだわ……)

美味しいといってくれるかなあ

あちやあ。ちよつと失敗したなあ……ま、良いか。俺の分にすればいいんだし

お嬢様に出す料理何てなあ

失敗するかもしれない、美味しいって言ってくれるかなと言う不安も料理から伝わってくる。だけど一番は喜んでくれるかなと言った私達の事を思っている感情がひしひしと伝わってくる。

「これは確かに言葉には出来ないわ」

「ええ……もしかして不味かったですか?」

不味かったですか?と不安そうにする横島。味よりも私達が楽しんでいるのは、横島の気持ちだ。だからこれを味で表現するのは難しい……だからなんと言えば良いのか本当に難しい。だけど、一言で言うのならば……

「こんな味(思いやり)は初めてなのだわ」

それって不味いって事ですか?と言う横島に3人で違うと笑う、本当に神への供物として考えればこれ以上に無い美味だ。だけど、それは人間に説明するには余りにも複雑だ。だから、私達はそれぞれに笑みを浮かべる。

「とても優しい味だ」

「うむ、高級なレストランより良い」

「素直に言っただけの味よ?」

顔を赤くさせて、しどろもどろになる横島を可愛いと思いつつながら、

私は再びオムライスを口に運ぶ。お腹ではなく、心が満たされる優しい味。それは現代で食べたどんな味よりも美味なのだった……。

「じゃあ、アクセサリーが出来たらルキさんに伝えますね」

「ああ、そうしてくれ。今度遊びに来る時はルキに連絡しておくよ、ではね。また来るよ」

「楽しかったぞ、今度は遊園地でも行くか」

「遊園地……そうね、それも面白いかもしれないわね」

横島の所で昼食を終え、暫く世間話を続けて私達は横島の家を後にした。

「いや、本当に優しいものだった」

「そうだね。味ではなく、心が満たされたよ」

「そうね」

神魔の供物としては余りにも現代に近いが、それでもあれほど満たされる供物は今まで経験が無かったかもしれない。

「ルイ様、お楽しみいただけただけでしょうか？」

邪魔が入らないように結界を張っていた明星の2人の部下が現れ頭を下げる。

「ああ、楽しかったよ。これで暫くは退屈しなさそうだ」

「うむ、やはり楽しいという事は良いものだ」

ここにいる3人のいずれかでも本気を出せば、日本は滅ぶ。けど、その時が来るまでは横島の友人として、そして明星と女帝とも友人関係で良いと思う。

「ではな、明星、女神よ。今日は面白かったぞ」

手を振り、空気に溶ける様に消えていく女帝、そしてそれに続くようにもう1人の金髪の少女から差し出された日傘を受け取り、明星は軽やかにステップをふむ。

「本当に横島は面白い、もう少し現代を見ても良いと思えるから不思議だよ。さ、いこうか、ベルゼブル」

「はい」

魔法陣を展開し、その中に消えていった明星達を見送り、1人残ったメイドに視線を向ける。

「横島にありがとうと伝えてください、ではまた何れ」

「はい、お気をつけて」

部下ではないのに、丁寧に見送ってくれるメイドに手を振り、地面を蹴って空へと舞い上がる。

「綺麗なのだよ」

人の営みが作り出した人工の星空、それを見つめながら空を飛ぶ。アクセサリーのお札にまた、冥界の砂を渡しておいた。これで横島が死ぬ事は無いと安堵し、私は鼻歌を歌いながらその場を後にするのだった……。

くろい視点く

「いや、実に楽しかった。やはり横島のところに行くのは面白い」

「そうですか……良かったです」

良かったと言いながらも苦虫を噛み潰したような顔をするベルゼブル。それは私が横島に会いに行くのを面白くないと思っっているのは明らかだ。

(お前も私を楽しませているのだよ)

人間を軽視するベルゼブルが人間に想いを寄せている、それが面白くて仕方ない。そしてベルゼブルがそれを自覚していないのが、更に面白いのだ。

「横島の護衛を任せているんだから、もう少しちゃんとしっかり見えてやっておくれよ?」

「は、はい。判っています」

私の命令が無ければ人間なんてと言って、思うように近づけないのだ。だから命令と言う形でベルゼブルにもつと横島に関わるようにと命令する。

「私を宮殿まで見送ったら、すぐに東京に戻ってくれて構わない」

本当はその必要も無いのだけど、ベルゼブルを連れて来たのには理由がある。

「ありがとう、お疲れ様。ああ、そうそう、ゴモリーが横島に会いに行

くそうだ」

「は……は？」

目を面白いように丸くするベルゼブルに抑えていた笑みが零れる。ああ、その顔だ。その顔が見たかったんだ……

「愛の魔神だからねえ、横島にアプローチをするかもしれないねえ」  
「……すいません、東京に戻ります」

回れ右をして飛んでいくベルゼブルを見て私は声を上げて笑った。ああ、面白い。なんて面白い、自分でも横島の事を想っているのに気付いていないのに、あの顔は如実にベルゼブルの感情を表していた。

「お前は焦って、嫉妬した」

横島を奪われるかもしれない、横島の愛を受けるかもしれない。そんな未来を想像して、ベルゼブルの顔は焦りと嫉妬に歪んだ。その顔を思い出すだけで笑みが零れる。アレで、自分の感情に気付いていないのだから、本当に面白い。

「ああ、さっさと自覚してしまえばいいのに」

そうすればもつと面白くなる、無意識に横島を求めている。それが自分が横島を愛しているから、横島を欲している事に気付けば、もつと面白くなる。

「ゴモリーは会いに行くけど、その義娘の付き添いなんだけどね」

神魔の中でも稀有と言っても良いほどの予知能力者。その保護者をしている、ゴモリーはその娘と横島を結婚させようと色々と考えている。

「だけど……どうなるかなあ」

ゴモリーは男に全ての女性から愛を得る方法を教える権限を持つ、だけど、自分の権限が利かない相手を見たらどんな反応をするだろうか？

「ああ……なんて面白い」

退屈をもてあましていた私だが、横島と出会ってから本当に面白くなってきた。横島と言う存在が世界を面白くしているのだろう……そう思えば、簡単にガープの思い通りにさせてしまうのは面白くない、妨害を繰り返していた。



「さて、この感情がどうなるかは君次第だ」

今は面白い人間と言う感じで見ているが、横島がもつと面白い事を見せなければ、その気持ちは変わるだろう。男と女の友情、それも良からう。それも面白い事の1つだ、友情と愛情の境目で揺れるなんて本当に面白い事じゃないか。

「だけど、それが愛になったら……ふふふ、本当に面白いね」

人間に興味をここまで持ったのは本当に初めてだ、別の世界の私は本当の神と戦う為にある人間を魔人へと変えたようだけど……今の私はそうではない、もつと面白いものを見たいのに人間を殺すつもりも無い。

「世界が違えば、抱く思いも違う。姿も違えば、抱く感情も変わる」

神魔であつても心は御せないだからこそ、神魔は人の姿を取るのだ。自分達には無い物を人間に求めて、それは時に判断を鈍らせ、神魔を狂わせる。だけど、それが面白くて仕方ないのだ。

「もつと、もーつと私を楽しませておくれ。横島忠夫」

お前が生きている間は世界を滅ぼそうなんて思わなくなるように、私の退屈を全てかき消しておくれ、もつともつと私に面白い物を見せてくれ、お前が無様に血を吐きのた打ち回る姿を見せてくれ。

「ああ……なんて面白い」

世界はこんなにも喜劇と悲劇に満ちている、だからこそ面白い。そして今のこの世界のメインキャストは誰でもない、横島だ。お前が主演の劇を最後まで見届けよう、そして私がお前を本当に助けたいと思つたのならば……。

「ふふふ、少しくらいは手伝ってあげようかな」

今はまだ手助けするレベルではない、私が動いても良いと思えるほどに私を楽しませてくれと呟き、私は宮殿の中へと足を踏み入れるのだった……。

## その5

リポート29 新しい生活 その5

〈枢視点〉

横島の家に行くわーと鼻歌交じりで服を用意しているゴモリー、愛の女神だけあってそのセンスは間違いなく1級品だとは思う。

「あのさ、ボクこういうの嫌なんだけど」

「なんで？ 凄く似合うわよ？」

ふわふわとしたドレス……くえすがよく着ているドレスに似ているけど、それよりももう1段階ふわふわしている……世間一般的にゴシックロリータと呼ばれるそれはボクにはとてもじゃないけど似合わないと思う。

「こんな隈だらけでぼさぼさの頭で？」

「隈はお化粧で隠してあげるわ、髪の毛も私が綺麗に整えてあげるからね」

嫌だというボクの気持ちは完全に無視しているゴモリー、これはどうも足掻いても着替えさせられると理解してしまいボクは深く溜め息を吐くのがだった。

「……死にたい」

「あら、死にたいなんて言ったら駄目よ？ 枢ちゃん。美しいって言うのは周りの視線を奪うのよ」

普段と同じ道を歩いているのにあちこちから聞こえる声がうるさい、声を掛けるよとか言う声が聞こえてくる。だからこんな服を着るのは嫌だったんだ。

（横島君が可愛いって言ってくれるわよ？）

小声で言うゴモリーにうっと呻く、周りの人間がこれだけ反応するのならば確かに横島も可愛いと言ってくれるかもしれない。

（違う違う）

横島の事は確かに好いていると思うけど、彼氏とか、彼女とかそう言うのになりたいわけじゃなくて……。

「……何？」

「べっぴんー♪」

ニマニマと笑っているゴモリーと回りの声に苛々としながらボクは横島の家へ向かう足を早めるのだった……。

「横島に迷惑を掛けないと約束しろよ」

「だいじょーぶ、大丈夫」

1回横島とも会っている筈だけど、その時は隕石が迫っていて碌に話している時間が無かった。だからゆっくり話をしたいというのは判るけど、この頭の中がお花畑のゴモリーがなにをするつもりか心配ではない。

「はーい、あれ……柩ちゃん？今日は随分と可愛い格好してるな」

チャイムを押してすぐに姿を見せた横島がボクを見て可愛いと声を掛けてくる。その言葉を聞いて胸がバクバクして、顔が赤くなるのが判る。

「でしょー♪柩ちゃんは可愛いわよねー。貴方見所があるわ」

「……えっと、ゴモリーさんでしたっけ？」

「あら私の事もちゃんと覚えててくれたんだ。嬉しいわ、所で……家に入っても良いかしら？」

どうぞどうぞと家の中に招き入れてくれる横島。玄関に入るとうりぼーがこつちを見つめていた……いつもと同じ可愛い姿なんだけど、妙に威圧感があるように感じる。

「別に貴方のご主人様をどうこうしようなんて思っただけ無いわよ？」

「……ぴぐう」

短い尻尾を振りながら横島の後を追って跳ねるように歩いていくうりぼー。その姿が見えなくなってやっと一息つけた。

「ゴモリー、今のは一体……」

「どうも本当の意味で神獣になったみたいね、今はまだ不安定だけど……神殺しの猪って知ってる？」

「……乙事主」

「せいーい、賢い柩ちゃんは褒めてあげるわ」

偉い偉いと頭を撫でられる、少しだけ満更でもないと思っただけで勝手に自分に苛つとしながらその手を振り払う。

「前の予知じゃそんなことは無かった」

「判らないの？今のこの世界は不安定、未来なんて簡単に形を変えるわよ？」

うりぼーが乙事主の転生である事は判っていた。だけど、まさかあんな威圧感を持つているなんて思っても見なかった。

「まあ変な事をしなければ大丈夫よ、あれ半分寝てるみたいなものだし」

「一番変な事をしそうなゴモリーに言われたくない」

寿命を延ばす為のチョコーカーだけど、もしかしたらこれ外した方がボクの身を護ると言う意味では良いのかも知れないけど……。

（寿命が縮むのはなあ……）

どうせすぐ死ぬと諦めていたのが、寿命が延びると知ってそれをむざむざ自分で手放すのはと悩むのと、横島の贈り物だから付けていないのは横島にも悪いし……。

「やっぱり横島君に飼われたい？」

「……死ねッ！」

耳元でとんでもない事を言ってくれたゴモリーの尻に照れ隠しの蹴りを叩き込む。た、確かにそう言う気持ちが無いとは言いつれもないけどそれを他人に言われるのは耐え切れないのだった……。

くゴモリー視点く

柩ちゃんを少しからかい過ぎてお尻を蹴られてしまったけど、それが照れ隠しと言う事は判っている。

（やっぱりこの年頃の女の子は複雑怪奇だわあ）

柩ちゃんの根底には拘束願望があるだから首輪と言う物を欲しいと横島君に言ってしまったのだ。苛められる事を望む被虐体質……彼女にとってはそれが世界との接し方だったのだろう。神魔をも越える予知能力、そんな能力を持っていれば寿命は間違いなく削られる。常に世界を見ていて、そして世界に精神を削られる。それが彼女のこの歪んだ性癖と性格を作り出したのだろう。

（見極めないとね）

横島君がどんな人格で枢ちゃんをどう思っているのか、私はそれを知りたい。

「……神魔か、何をしに来た？」

「枢ちゃんの付き添いよ。別に何もする気は無いわ」

「……思ったよりも凄いわね、龍神の圧力が凄い……完全に私達を警戒している。龍神にここまで愛されるってどういう人間かと正直呆れてしまう。」

「シズク、お客さんだからクッキーとか出してー」

「……お前は……ああ、もう良い」

横島君は能天気って感じね、もつと私に色々言いたかったんだろうけど、何を言っても横島君が警戒心を抱かないと判断したのか呆れた様子でキッチンに入っていく龍神。

「えーつとじゃあ、改めて横島忠夫です」

「まあご丁寧にどうも、ゴモリーです」

礼儀正しくはある見たいね、それと胸元を開いているドレスを着ているけど、それに目を奪われかけている所から普通に女が好きそう  
だ。

「みむう?」

「ぷーぎゅー」

「フノーブ!」

「ああ、チビとうりぼーとチビノブです」

「やーつと短い手足を振る小動物軍団。見た目は可愛いけど、その力は凄まじい。種族的なものは完全に別物ね……」

「くひひ、今回も元気そうで何よりだよ」

「心配してきてくれたんだ、ありがとう。やっぱり枢ちゃんは優しいな」

「おーつと、無意識の先制ブローだ。人にお礼を言われる事が少ない枢ちゃんには効果は抜群のようだ、恥ずかしいのと嬉しいのと複雑な感情を持って余しているのが良く判るわ。」

「……お茶とクッキー」

「ありがとなシズク、つとどうした?」

「……別に？」

クツキーの皿を机の上に乗せ紅茶のポットを載せると横島の隣に座った龍神。その目は鋭く、明らかに私を監視している。

「……むう」

柩ちゃんが面白くなさそうにしているけど、そういう面では正常に嫉妬しているのよね。

「横島君、柩ちゃん可愛い格好してるでしょ？」

「はい、一瞬誰か判りませんでしたよ。余りに可愛くて」

「……」

おっと、龍神が今度は面白くなさそうな顔をしている。短いやり取りだけど、大体横島君の周りの関係がわかって来た。アシユタロスがトトカルチョなんてやるから女好きの助平かと思ったけどそうではないみたいだ。

「んふふ、貴方も可愛いから今度こういうドレス着て見る？」

「……良いのか？」

「いいわよく女の子は可愛い格好してないよね」

顔色は少し悪いけど、龍神も凄く可愛い顔をしているので色々服を着せてみる楽しみがある。

「くひひ、そういえば予知で見てしまったんだけど……半裸で会長殿と一緒に1晩過ごしたのに何も無かったんだね？」

柩ちゃんの言葉に横島が噴出して咽こんでいる、半裸で男女が1晩いたのに何も無い……横島君が誠実なのか、それとも……。

「もしかして年下にしか興奮しないとか？」

「ごぼあっ！げぼあぼらーたーああっ?!?!」

やだ、この子面白い(確信)。でも会長殿ってあの子でしょ？神代琉璃。あれだけの容姿の整った子はそうはいないと思うけど、そんな子と1晩半裸で過ごして何も無いとかあれ位の年齢の男の子じゃまずありえないと思うのよね。

【余りからかうのは止めてやって欲しい、横島は初心なんだ】

バンダナから浮かんだ瞳から声がある、初心なんだって言われると私としてはからかいたくなって仕方ない。

「あ、あのですね……そう言うのは、もつとこう……」

「ご」によごによく聞き取れない声で何か呟いている横島君。どうも、そう言う行為に関しては結構頭が固い見たいね。

「年下趣味なら、ボクはどうかな?」

「……アノオレデアソンデマス?」

横島君の目がめちやくちや泳いでいる柎ちゃんの流し目にうろたえているのを見る限りでは、年下趣味って言うのもあながち間違っとなさそうに思えるけど……ここは確かめておきたいわね。

「あんまりからかったら……あら?」

意図して無い不測の事故ですよーと言う感じでドレスの紐が解けて脱げてしまったという体を装う。女神の黄金比率の身体と私の色気だ、女に興味が無い男さえも魅了すると自負するこの身体を見て、横島君がどんな反応をするのかを見る。

(切れて襲ってくるかしら?)

襲い掛かってきても組み伏せる事が出来る、どんな反応をするのか楽しみに見ていると横島君は顔が真っ赤になったと思うと、次の瞬間鼻から凄まじい勢いで鼻血を噴出した。

「ぶぼあっ」

「ご、ゴモリー何をしてるんだ!?ま、まさかゴモリーまで横島が欲しいとか言わないよな!」

「……全く初心にも困った物だ」

下着が丸見えになり、横島君が鼻血を出して昏倒し、柎ちゃんが焦りまくり、龍神がしようがない奴だと言わんばかりに肩を疎める。

「うふふ、ごめんなきいね。ドレスの紐が少し緩んでいたみたい」

「いひゃいは、そひよ、ひゅいひやません」

鼻にティッシュを詰めている横島君がペこペこと頭を下げる。だけれどこれは私から仕掛けたものなので、その反応は正直驚きだ。

「横島の助平さには困ってしまうね。くひひ……」

困ってしまうと言いつつも気が気では無い表情をしている柎ちゃんが可愛い、けれど今の様子だと大人の女性にしか興味が無いように思える。

「ちよつとトイレを借りるね」

そう言つて柩ちゃんが立ち上がる、これはチャンスだと思ひそのスカートを掴んで思いつきり捲りあげる。ドレスと言う事でガーターベルトと少し大人っぽい下着姿。未成熟な柩ちゃんがこういう格好をしているからこそ、その破壊力は凄まじい筈だ。

「はっ」

「ぶふっ……うーん……」

「みみーむう!!」

「ぴぎゅう!!」

【ノブー!】

「……血を出しすぎたか」

捲り上げられたスカートに柩ちゃんが困惑した声をあげ、横島君がまた鼻血を出して引っくり返り、横島君の側の小動物が慌てふためく、そして龍神が仕方ないと言いなながら座布団を半分に折り曲げて横島君の頭の下に入れる。

「良かったわね、柩ちゃん。意識してくれてるみたいよ?」

「……こ、このお、馬鹿魔神ツ!!」

羞恥心と横島君が意識してくれた事が嬉しくて、凄く複雑な表情をしている柩ちゃんの回し蹴りを顔面に喰らい、後ろにひっくり返りながら

(今度は遊園地とか映画に行きましょう)

横島君も柩ちゃんも可愛くてとても気に入ったので、今度はもっと楽しい所に2人を連れて行こうと思うのだった……。

↳愛子視点↳

都内の一軒家の前に佇む長い黒髪を腰元まで伸ばした少女……「愛子」は手にしている地図と目の前の家を交互に見つめていた。

「き、来ちゃった」

机からやつと開放されたのはいいけど、アルテミス様の巫女とか訳



の判らない事になっているけど……歩けるようになって、学校から出れると聞いて私が一番最初にやって来たのは横島君の家だった。

(どうしよう……どうしよう)

訪ねてきたのは良いけど、横島君への課題を渡して帰るのが普通なのかしら、それとも少しだけ横島君の家に上がっても大丈夫なのかしら……。ポストに課題を入れて帰ろうか、チャイムを押すか葛藤していると背後から声を掛けられた。

「あれ？愛子だ、よー久しぶりだなあ」

「……お前、何になった？」

「うわ。頭砂糖菓子が居る」

……辛辣！ー人だけ辛辣だけど、私の机の中を見たタマモちゃんならばその反応は判らないでも無い。

「こんにちわでござるよー」

ぶんぶんと手を振るシロちゃんに苦笑し、深呼吸を繰り返して気分を落ち着けてから振り返る。

「横島君も元気そうで良かったわ。それでえーつと散歩？」

横島君の片手には買い物袋、そしてもう片方の手にはリードにつながれたうりぼーと散歩帰りって感じがする。

「そうそう、チビノブがメロンパンを欲しいって言うからさ」

【ノツブー♪】

両手をピコピコ振る妖精……かしら？チビ達は見たことあるけど、この子ははじめて見た。

「まあ、立ち話もなんだし家に上がってくれよ」

「え？良いの？」

自然な流れで家が上がってくれよと言われ、断るのもおかしな話だと思い。私は横島君のお言葉に甘えて、家の中に入ったのだった。

「俺チビの足とか拭いてから行くから、先に部屋の中行つてて、シズクー温かいタオル」

「……判ってる」

横島君が玄関に残り、私はシロちゃんとタマモちゃんと一緒にリビングに入ったんだけど……。

(空気が重い)

タマモちゃんの中で私は頭の中お花畑認定だから視線が鋭い。

「タマモー、頭の中砂糖菓子ってどう言う事でござるか?」

止めて下さいお願いしますなんでもしますから、シロちゃんの純粋な視線が痛い。

「恋愛空間なのよ、机の中って言うか……愛子の頭の中」

「お願いします。止めて下さい」

机の中に入れてしまうと強制的に恋愛シミュレーションスタートなのは私でも予想外だったんです。

「愛子殿、面白そうなので拙者も入れて欲しいでござる」

花より団子って感じのシロちゃんも恋愛に興味あるんだとどこか、ぼんやりとそう思った。だけど、スイーツ扱いは私が耐えられなかった。

「態々悪いなあ、本当ありがとう」

「え、あ、ううん。全然いいのよ」

横島君が来て私を吊るし上げる空気は無くなったけど、ジト目のタマモちゃんの視線がずっと背中に突き刺さっていたのは辛かった。

「学校何時くらいから復帰できそう?」

「早くて来週かなあ、ナイチンゲール先生次第だし」

ピート君から聞いてたけどやっぱり横島君の怪我はあんまり芳しくないようだ。

「無理しなくていいからね、皆待ってるから」

無理をして怪我が悪化したら元も子もないからねと横島君に笑いかける。

「ありがとう、それとカオスのじーさんが頑張ってくれたんだな」

「うん、これで普通に外を歩けるわ」

ちよつとハプニングもあつたけどと笑うと横島君は首を傾げて、何があつたのかと尋ねて来る。

「……アルテミス様がちよつと」

「あーなんか判る気がする」

「拙者も判つたような気がするでござる」

悪い人ではないんだけど、頭のねじが少し緩んでいるから……何を  
しでかすか判らない。タマモちゃんが小声であんた人の事言えるの  
？って言う声が痛い。

「あの人の巫女になって、なんかこう……神通力的何かが使えるとい  
うか……」

机妖怪から別の何かに進化してしまったというか、自分でも上手く  
説明出来ないけどそんな感じと言うと横島君は酷く複雑そうな顔を  
一瞬した物のはつとした表情で笑顔になった。

「でもそれで好きに歩けるんだろ？良かったじゃないか、これでまた  
遊びに行けるな」

「え？良いの？」

まさかの横島君からの誘いの言葉に笑顔が零れる、タマモちゃんは  
面白くなさそうにしているけど、この誘いは絶対に受けるべきだ。

「まだ暫くばたばたしているけど、それが終わって学校に行った時に  
でも話し合おうな」

「う、うん。楽しみにしてる！」

アルテミス様の巫女になってしまったのは計算外だったけど、横島  
君にデートに誘われたのでこれは間違いなく良かった。だけど……  
その後学校に戻った私にはとんでもない試練が待ち構えていた。

「なんで遊園地でライトアップされた観覧車の前でええッ!!」

「凄く素敵だと思うわよ？」

机の中でどんな感じになるかなとシユミレーションをしたんだけ  
ど、それが完全に私の願望剥き出しで絶望したし、アルテミス様は素  
敵と言ってくれるけど、そんな事は考えて無いの筈と何回シユミレ  
ーションしても大体同じ最後で自分の恋愛脳に絶望した。

「委員長気質は助平なんだよ、うん。間違いない」

助平心の塊みたいなオリオンに言われて、私は本当に悲しくなっ  
てしまうのだった……。

く美神視点く

陰陽寮の見学と言うのは仕方ない、今回の件で陰陽寮に向かう事は

決まっていたからだ。だけど私としては許容出来ない点が1つあった。

「かなり予定が早くない？」

『向こうにも向こうの都合があるそうだ。マリア7世の来日の件もある、僕も早いほうが良いと思っただ』

マリア7世の来日……恐らく横島君が預けたジャンヌの旗の件だろう。あれは確かに国宝ではあるが、所有権は横島君にある。勿論マリア7世達もそう思っている筈だ、それは横島君に招待状が来ていることでも明らかである。

「まだ完全に回復して無いのよ？」

『……それも判ってる。だが、後回しにすればするほど動きにくくなると思う』

躑躅院と言うのは狡猾な蛇みたいな人物だ。下手に弱みを握らると思うように動けなくなってしまう……早い段階で向こうの要求を呑んでしまったほうが良いと西条さんは判断したのだろう。

「樞に予知をして貰って、それからくえすも同行させるわよ」

『人員についてはある程度の融通は利く、難しいと思うけど遅くても来週の初め、早ければ今週末までには見学を頼んだよ。令子ちゃん』  
受話器を元に戻して深く溜め息を吐く、もう少し時間的な猶予があると思っていたんだけどなあ……。

「陰陽寮ですか？」

「うん、遅くても来週の初めにして欲しいって」

今日が火曜日だから時間的な猶予は3日ほどだ、私は溜め息を吐きながら立ち上がりコートに袖を通す。

「ツーリングコースの相談をする約束だったけどごめんね」

「ううん、大丈夫です。お留守番してますね」

本当なら今日は蛍ちゃんや横島君とツーリングをするので、そのコースの話し合いとかをする約束だった。だけどそんな話をしている余裕が無くなってしまったので、申し訳ないと思いつつ留守番を頼む。

「戻ってきたらまた相談に乗るから」

「大丈夫ですよ。気をつけて行ってきてください」

バイク初心者用のツーリングの雑誌を手に気をつけてくださいと見送ってくれる蛍ちゃんに背を向けて事務所を後にする。

（まずは柩の所に行つて……いや、その必要は無いかしら？）

柩の事だ、自分に関する予知の事と横島君の事に関する事は頼まなくても予知している可能性がある。となれば、まずは琉璃の所に行つて……。

「くえすのところにも連絡があつたんだ」

派手なエンジン音を立てて停車したくえすのバイクに苦笑する。バイクで来た事に苦笑したのではなく、あの一匹狼気質のくえすが私を呼びに来たつてことに驚いた。

「当たり前ですわ。それよりも陰陽寮の事で琉璃に会いに行くのでしよう？時間が勿体無いから早く行きますわよ」

判つてると返事を返しコブラに乗り込む、最近は大勢で移動することが多いからバンをよく運転してるけど……やっぱり私にはコブラの方が性に合つていると思う。

「柩は先にGS協会に居るそうですわ」

「予知を伝えるんじゃないかと、自分で来たんだ。珍しいわね」

柩もくえすと同じタイプで群れるタイプじゃないけど……横島君が関わると積極的に動いてくれる。それは好意によつての物だろう……人を惹きつける横島君が凄いのか、それとも影とか闇を抱えている異性にばかり好かれる横島君の女難が凄いのか……。

（心配になるわ）

そのうち、横島君が後ろから刺されないかなと心配になりながらコブラのエンジンを掛けるのだった……。

美神が横島の将来と言うか、横島が誰かと付き合つた時にどうなるかと心配している頃。横島の家では……

「あれ？小竜姫様とメドーサさん、どうかしましたか？」

「いえ、横島さんの様子を見に来たんですよ」

「あたしは横島の家の子の結界の様子見とうりぼーの観察、それとこれな」

「……魔界レース？」

メドーサが横島に差し出したのはレースのチケットと賭けの倍率表。それを見ている小竜姫は苦虫を噛み潰したような顔をしていた……明らかに何か言いたい事があるが、それを必死に我慢している様子だった。

「そ、ヘルズエンジェルがレースをさせろってうるさいからね、オーデイン様と竜神王様が開催する事を決めたのさ。詳しい日程はまだま

ま だけど、掛金でレースをするから見に来るといい、息抜きになるしアリスとかも見に来るってさ」

「そう言うことなら見に行くだけ見に行きますね。美神さんに相談してからになりますけど……」

「無理に見に来なくてもいいさ、こういう催物があるって知らせに來ただけだから」

「あ、折角来てくれたんですから少し休憩していつてくださいよ」

にここにこと笑いメドーサと小竜姫を家に誘う横島、今日も今日もで横島の家には人外が集まっているのだった……。

リポート29 新しい生活 その6へ続く

## その6

レポート29 新しい生活 その6

↳シズク視点↳

家の前に止まっている2台のバイク。1つは蛍の物で、もう1つはヘルズエンジェルの時に使った横島のバイクなんだが……。

(なんだ、これ)

バイクから感じる神通力と魔力、間違いなく全うな物ではないことに気づいて思わず溜め息が出る。一緒に乗ってきた優太郎はバイクのキーを渡すと、散歩して帰るとのんびりと帰って行ってしまった。せめて、このバイクがどういう風に出てくるか位は説明しろと心のそこから思ったが、もう歩いて行ってしまったので文句を言う事も出来ない。

「……お弁当と飲み物。暗くなる前に帰ってくるよ」

「うん、ありがとう。シズク」

横島は安静を申し付けられていたのだが、蛍がナイチンゲールから許可をもぎ取ってきたらしい、あのバーサーカーから譲渡を得るとか案外蛍もやる物だと感心する。

「せんせー、せんせー、拙者も行きたいでござるよー」

「動物モードなら大丈夫じゃない？」

シロとタマモが横島の周りをちよろちよろしながら、自分達も連れて行けと言っているが横島は手で×マークを作る。

「俺は初心者だから、あんまり荷物が多いと怖いから駄目。慣れたら、連れて行くから」

お前は気付いていないけど、蛍が超勝ち誇った顔をしてるからな？ それを見てシロとタマモが必死だって理解しろよ？と言いたくなかった。

「みむうー♪」

「ぶぎ♪」

「ノブノブー♪」

「よーしよし、大人しくしてるんだぞー？」

横島の言葉に楽しそうな鳴き声を上げるチビ達、サイズが小さい事もあり連れて行くらしい。あの3匹がいれば、大概の事は問題なく解決できるだろう。

「横島ー、そろそろ行くわよー」

「おう、じゃあ、行つてくるなー」

弾ける笑顔の横島と蛭を手を振って見送り、今にも追いかけていきそうな馬鹿2匹の襟首を掴んで家の中に戻る。

「……お前達にはやる事があるのが判つてるだろう」

「そりゃ判つてるけどさー」

「拙者も山の中で遊びたかったでござる」

横島と蛭の邪魔する気満々のタマモと子供みたいな事を言っているシロに溜め息を吐いた。

「……今の状況を判っているのか？」

少しだけ殺気を込めて睨むと2人とも肩を竦めて、申し訳なさそうにわかつてると返事を返す。

「……陰陽寮なんて所に横島を行かせるのは私は反対なんだ」

「それは私も同じよ」

私と同じで平安時代を知るタマモも私の意見に同意した。あの時代の陰陽寮でも酷い物だったのに、陰陽術の廃れた今の時代に横島をつれて行くことが心配でならない。

「罨の可能性もあるわよね」

「……横島を監禁する可能性もある」

横島は男だから女を宛がって、その血を残そうとする可能性も十分にある。美神も琉璃もそれを警戒しているのだ、陰陽寮は何でもやる。高島を冤罪で処刑したのだから、それは間違いない。

「……一度捨てた者をまた取り戻そう何てするなんて許さない」

「それね。もうあれじゃない？陰陽寮潰しても良くない？」

「……それは悪事の証拠を見つけてからだ。清姫も召喚してやる」

「それ良いわね、あいつ危険だけどこういう時は役立つわ」

シズクとタマモが真っ黒いオーラを出しているので、シロはソファアの後ろに避難する。そこには先にいた、牛若丸とノツブの姿も



あった。

「タマモとシズクがめっちゃ怖いでござる」

【龍は情が深いからなあ、いや、あいつは半分へ……ふぶあつ!】

振り向きもせず投げられた氷柱がノツブの額に突き刺さり、ノツブはその場に昏倒した。牛若丸とシロは触らぬ神に祟り無しと言う事を目の当たりにし、2人の悪巧みをソファアの後ろで隠れ、震えながら聞いていた。

「呪いって言ってるでござる」

【幻術とも言ってますね】

「更地!?これ美神殿に言った方が……」

【方法は過激でも、主殿を守るほうが……】

「……1000年呪う」

「馬鹿ね、不能でお家断絶」

「……ありだな」

【駄目だ、ストッパーがない(ござる)】

止めなければならぬ、そう判っているのに2人の暗黒の瘴気が恐ろしく、何もいえないシロと牛若丸なのであった……。

〜蛍視点〜

邪魔者無しで横島と2人きり……チビ達がいるから完全に2人きりとは言えないけど、邪魔者が入らないのは凄く良かった。

「蛍の方が運転上手だなあ」

「横島はまだ慣れてないからよ」

修理がやっと終わって横島の元に来たばかりなのだ。運転に慣れていないのは当然、それにツーリングのコースも初心者向けで非常になだらかなコースを選んだ。

「この先に自然公園があるのか?」

「そうそう、オープンしたばかりらしいわ」

日帰り温泉とお父さんと蓮華が提案してくれたけど、それは流石に早すぎる。夏場なら海とかプールとかも選択肢に入ったけど、冷えて

くる時期にプールとか温泉はありえない。少し寒いかもしれないけど、自然公園を目的地にしてツーリングをすることにした。

「みーむう♪」

「びっぐびぎゅー♪」

【フッノー♪】

初めてのバイクに興奮しているチビ達の頭を撫でている横島。その姿を見ているだけで私も楽しくなってくる、バイクはモーターズポーツと言うほどに体力を消費する。今は休憩しているけど、この調子ならお昼前には目的地の自然公園に着きそうだ。

「じゃあ、そろそろ行きましようか」

私の言葉に横島が笑顔で返事を返し、横島を先導して再び自然公園への道を走る。ライダーズーツにヘルメットと温かい服装をしているので、寒い時期なのにじつとりと汗が出て来るのが判る。

(バイクとなれば妨害できるのはくえすくらいだし)

空を飛んで追いかけてくれば偶然と言うのは明らかに無理な話だ。となれば、違和感が無いのは車かバイクになるが、オープンしたばかりの自然公園で徹底的に除霊されているので仕事で偶然と言うものありえない。つまり今日は邪魔されずに横島と過ごせるのだ。

「どう？結構良い所じゃない？」

「おー緑が綺麗だなあ」

自然が豊かな公園で、木で作ったアスレチックや、川に魚を放流しているのも釣りも楽しめる。それに、ハイキングコースなどもあり東京都内とは思えないほどに自然に溢れている。

「みむう♪」

「ぶぎゅー！」

自然に興奮しまくりのチビとうりぼーに素早くリードを付け、2匹が勝手にどこかに行かないようにする横島。その動きは実に手馴れていて、思わず苦笑してしまうレベルだ。

【ノー】

「チビノブも離れすぎたら駄目だぞ？」

【フッ！】

横島の言葉に敬礼で返事を返すチビノブは横島の隣にぴったり付いて短い足を一生懸命動かして歩いている。

「じゃあ、ハイキングコースに行つて、お昼にしましょうか」  
「おうー」

横島が楽しそうに返事を返すのを見て私も笑いながら2人でハイキングコースへ足を向ける。

「みみー♪」

「ぶつぎゅぎゅー♪」

リードがあるので遠くに行く事はないが、普段散歩の時は緩く弧を描いているリードが張っているのを見るとチビ達も楽しくて興奮しているのが良く判る。

「お、あれか、アスレチック」

「なんでも1000くらいの遊具があるらしいわ」

「100種類か、凄いな」

遠くに見える木で出来たスライダーやターザンロープを見て横島が感心したように呟いた。その姿を見てお昼から行つて見る？と尋ねてみると、横島は意外なことに首を左右に振った。

「チビ達が遊べないから止めておこうぜ、ボールとかフリスビーで遊ぼうと思う」

「判つたわ。今回はあんまり時間もなしね」

冬の日暮れは早い、シズクに日が暮れるまでに帰つてこいと言われているのもある。それに今日は横島がバイクに慣れるという目的が最優先だから、あんまり時間を掛けて遊ぶのは良くないわね。

「じゃあお昼を食べて休憩したら、そのままピクニックコースに行つて遊びましょうか？」

「みつむ♪」

「ぶぎゅー♪」

横島ではなくチビとうりぼーが返事を返す、今回の計画の2つ目の計画も順調に進んでいるみたいね。

(やっぱりチビとうりぼーと仲良くなるのは大事だわ)

横島と付き合う場合うりぼーとチビに敵対されていたのでは、良い

空気になっても壊されてしまう。横島を攻略するにはまず横島のマスケット軍団を攻略する方が大事だ。

【良い森だ、人の手が加わっているが自然の力に満ちている】

「心眼にも褒めて貰えるなら私の選択は間違っただけだ。みたね？」

【ああ、ここは良い。横島の霊力と合っている】

心眼のお褒めの言葉に思わず笑みが浮かぶ、色々考えて何処がいいかなどか頭を悩ませた甲斐があったというものだ。

「おおー、これは良いなあ」

「ふふ、気に入ってくれたみたいね」

ハイキングコースの中腹には広場があつて、ここからピクニックコースに行けるようになっていて。横島がそこから見える景色に楽しそうな声を上げる。

「すげえ綺麗！夕暮れまでいれるなら日暮れを見たいなあ」

「それはシズクに怒られるわよ？」

私が夕暮れを好きだから横島とよく見るけど、それで横島も夕暮れが好きになっている。確かにここから見ると夕暮れは綺麗だと思うけど、シズクにもナイチンゲールさんにも怒られるので、夕暮れ前には帰路に着かなければならないのが残念だ。

「そっか、それは仕方ないな」

「ゆっくり出来る時に来ればいいのよ。今日は横島のバイクの練習だしね」

曲がりや下りが多くバイクの運転の練習コースとしては最適だ。もつと横島が乗りこなせるようになれば、日帰り温泉とかも出来るので横島が早くバイクに慣れてくれることを願うばかりだ。

「じゃあお昼ごはんにしようかしら？」

「そうだなー、俺腹減ったよ」

にこにここと笑う横島達と一緒にハイキングコースからピクニックコースの広場に足を向けた時。横島の側の茂みが動いた、まさかこんなに人の気配が多いのに横島の所にマスケットがと戦々恐々していると茂みの中から声がする。

「ぺっぺっ、あーもうッ！草ばっかりで困るわね、あ！見つけたわよ。横島ッ！あんた怪我してるって言うから妹から薬を貰って来てあげたわよ」

茂みから現れたのは絹のような黒髪と真紅の吊り目、見た感じ中学生くらいで……あんまり凹凸のない身体つきだ。

「あ、イタチちゃん。髪に葉っぱ付いてるよ？」

「え!?嘘！ちよつと取ってよッ!!」

了解了解と笑って髪の毛っぱをとる横島、その手に気持ち良さそうに目を細めていたカマイタチと目が合った。

「初めまして、芦螢です」

「カマイタチの次女よ、よろしく」

普通なら邪魔者って思うんだけど……なんか良く判らないけど、この子には凄いシンパシーを感じた。多分カマイタチの方も同じで、手を差し出してくるので私はその手を握り返すのだった……

くカマイタチ視点く

横島が病院とか言う場所にいつているのは知っていた、よく判らないけど……怪我をしているのだと思い、1度妙神山の家に戻って妹から薬を貰って戻ってきたんだけど、横島の家には人狼と九尾の狐がいて怖くて、それとどうやって渡そうかと思いつくと横島の匂いが遠ざかって行ったので追いかけてきた事でやっと横島と接触する機会があった。

「はいどうぞ、まあ、私の作った奴じゃないけどね」

「ありがとう」

この黒髪の女……螢だっけ、この女にはなんとも言えない奇妙なシンパシーを感じた。横島に抱いた強烈な主にしたいつて言う願望じゃないけど、なんか仲良くなれそう……上手く説明出来ないけど、そんな気配を感じていた。

「はい、チビあーん」

「みむう♪」

チビが横島に林檎を食べさせてもらっている姿を見て、あたしもイタチの姿になればと一瞬思ったけど、人の姿で会っているのに動物になるのはなんか違うと思ひ、そのまま差し出されたおにぎりを両手で持って食べる。

「薬ありがとうな、心配してくれただよな？」

「べつに心配なんかしてないけどッ！でも人間は簡単に死んじやうんだからもう少し気をつけなさいよね！」

あああー！違う違う、そんな風に言いたいわけじゃなかったのに思わず攻撃的な感じで返事を返してしまったことに絶望する。

「あはは、気をつけるよ。でもありがとう、心配してくれてありがとう」

やだ、横島つて聖人か何かかしら？普通はこんな風に言ったら怒つて当たり前なのに、笑顔を浮かべるとか少し信じられない物を見た気分だ。

「ごめん、本当は心配してた。怪我とかしたら駄目だからね、はい、これカマイタチの秘薬。効果はすごくあると思うわ」

ひどいことを言つてごめんなさいと謝つてから横島に薬を渡す。

「みーむうー」

「びっぎー」

「ノツブー！」

「ああ。良いのよ、気にしないで」

チビ達がありがとーありがとーと鳴きながらりんごや果物を差し出してくる、ただ一匹いるこの奇妙な生物何かしら？妖精……かしら？本当に良く判らない奇妙な生物だ。

「横島に薬を持ってきてくれたのね、ありがとう」

「良いの良いの、人間は弱いから簡単に死んじやうんだから」

正直横島が怪我をしているかもしれないと思うと気が気じゃなかったけど、こうして元気な姿を見て本当に安堵した。

「貴女優しいのね」

「え、えーそうかな？」

優しいと言われた事がないので驚いたけど、そんなに悪い気分

じゃないわね。

「よっしゃー、遊ぶぞー」

「みむー♪」

「ぶーぎゅー!」

【ノブノブー♪】

ボールを片手に駆けて行く横島とチビ達、無邪気と言うか何と言うか見ていて飽きないわよね。

「カマイタチって使い魔になりに来たの?」

「え?そうだけど?」

まず使い魔を道具扱いしない、これは最低限あたしが求める条件だ。次は優しい事、次に思いやりがあること、最後に使い魔に好かれている事。その全てをクリアしている横島は理想的なご主人様と言えるだろう。恋慕は……どうだろう、そこはまだ判らないけど……理想的なご主人と言うことしか考えてなかったし……あたしがそう言う目に見えて安堵した様子の蛭に気付いた。

「蛭は横島と番になりたいの?」

「ぶふうっ!!げほっごほっ!!」

あたしの言葉に蛭が噴出して、物凄く咳き込む。その姿にあたしの言っている事が正しかったと確信した、蛭は顔まで真っ赤にして目を白黒させている。

「な、ななななあなななー!!」

「ごめん、普通に喋ってくれないとわからないわ」

まさかここまで動揺すると思っていなかったので、あたしも驚いているのだから、蛭は何度か深呼吸を繰り返し、額に手を当てた。

「初対面の人でも判ってくれるのに横島は判ってくれないの」

「それは悲惨ね」

ボールを投げてチビ達と遊んでいる横島は子供っていうか何も考えていないように見える。相当蛭は苦勞しているのだろうと一目で判った。

「あたしは何もいえないわね、頑張っつてとしか」

「……ありがとう」

蛍とそんな話をしているとボールが転がってきて、横島が手を振っている。あたしは足元のボールを見てイタチの姿に戻り、ボールを啣えて手を振る横島の元へ走るのだった……。

「今度は普通に遊びに来てくれていいからな」

「ありがと、でもタマモが怖いから」

「大丈夫大丈夫、タマモには薬を持ってきてくれたって事で苛めないように言うからさ」

めいっばい遊んだ後、あたしは横島の鞆の中にチビ達と一緒に入って東京に戻って来ていた。

「ま、そう言うことならたまには会いに来るわ。じゃね」

横島に手を振り、東京での住みかとしている白竜山とやらに戻る。人間が回りに沢山住んでいる割には、空気も澄んでいるし、霊脈も上質だから住みかとしては本当に最適の場所だ。

「今日は楽しかったなー、誘ってくれてありがとうな。蛍」

「いいのよ、また今度遊びに行きましょうね」

風に乗って聞こえてくる蛍と横島の声を聞いて、あたしは鼻歌を歌いながら楽しかった今日の事を思い出す。今日は横島に遊びに来てもいいって言う許可も貰えたし、友達も増えた。楽しくて良い1日だったなあと思いつつながら私は半分跳ねるように夕暮れの道を進んで行くのだった……。

なお蛍は今日の事をアシユタロスや蓮華に告げて、酷くがっかりされた表情をされて理解出来ないと言う表情をしていた。

「もう少しこう、なんかいいのかね?」

「駄目だよ、父さん。そういう展開にしたいなら横島とチビ達を引き離さないよ」

「いや、将を射んとする者はまず馬を射よって言うじゃない?」

「言うけど、違う」

横島という将軍を落とす為に、馬（マスコット）を狙ったという蛍に2人の違うと言う言葉が突き刺さったのだった……。



く躑躅院視点く

横島が蛍とツーリングをしている頃、京都の陰陽寮では中年の男の怒鳴り声が薄暗い通路の中に響いていた。

「わ、私を廃除して良いと思っっているのか！」

「良いと思っっているから貴様を首にするのだ、お前はもう必要ではない。退職金を持つてさっさと去ね」

私が切った小切手を見ると表情を一転させ、小切手を抱え込んで去っていった陰陽寮統括……いや、元統括に溜め息を吐いた。

「随分とばっさばっさ行きますねえ」

「道真か、GS協会とオカルトGメンが視察に来るんだ、それなりの準備は必要だろう？」

横島の話は陰陽寮でも噂になっている。人の口に戸を立てられぬのは当然だが、馬鹿が暴走して私の責任にされても困るので徹底的に排除する。

「で、あつしは馬鹿が馬鹿な事をする前に排除すればいいんですよ？」

「そう言うことだ。判っっていると思うが、証拠を残すなよ」

一度は神代琉璃に発見され、次は神魔に見つけられている。そんなへまをするなよと言うと道真は肩を竦め苦笑した。

「巫女姫様に関しては自分の失態を認めますがね、神魔については勘弁してくださいよ」

「判っっているさ、良く逃げてきたと褒めてやっただろう？」

「へーへー、ギャラをきっちり半分にされたのでいやでも覚えてますよーだ！」

べつと舌を出しお茶らけた雰囲気をしていた道真だが、目が急に鋭くなる。

「どーも、オカルトGメンとGS協会の半端もんと接触してる連中がいるみたいですね」

「丁度いい、泳がしておけ。西条と神代には恩を売っておいて損は無  
い」

向こうが私を疑ってくれるの大いに結構。私の目的は陰陽寮の復

興ではなく、躑躅院の家の再興である。その為に陰陽寮はただの踏み台に過ぎない。

「それは良いんですけどねー、ボスの仕込だと思われませんか？」

「もう除籍した連中だ、知らぬ存ぜずで押し通す」

除籍した地点でもう関係者ではない、私としては馬鹿をやって逮捕して与えた小切手が回収できればなおよし。霊能者としての道を諦め……いや、もう霊能を失っているのだから与えた金で余生を過ごせば良いのだ。分不相応の野望など抱かずにな……そうすれば少くらいは温情を与えることも出来る。

「では行け道真。情報を集めておけ、それと見学に来たら姿を隠しておけよ？」

判つてますよくと間の抜けた返事を返し執務室を出て行く道真を見送り、机の上の書類に視線を向ける。

「今の段階では、非の内所は無い」

横島は調査の結果は非常に誠実な人間だ、女や金で揺らぐ男ではない。ならば、私は横島の信頼を得る。神代琉璃や美神令子を横島が慕うのは、助けられた事や、自分の面倒を見てくれていたからだ。そう言う面ではあの2人は信頼を勝ち得ている、その信頼があるからこそ、横島は陰陽寮への移籍に頷くことは無いだろう。

「焦る事は無い」

何を考えていても、人の心は他人には読めぬ。神魔であつても変わらない、私は自分の心に蓋をする術をすでに習得している。蟲毒ともいえる、陰陽寮で生きて行くにはそれが必要だったからだ。

「楽しみだよ、横島」

私は歓迎しよう、陰陽寮も歓迎しよう。時間を掛けて、私はお前から信用を得よう。焦ることは無い、時間を掛ければ良い。妻を作るなら作れば良い、彼女を作るのもまた良いだろう、強い霊能者は妾でいてもそれは当然の事だ。そこに対して私に不信感はない、むしろそうあつて当然だと私は考えているからだ。

「最終的にお前の血が躑躅院に残れば良い、それだけだ」

類稀なる陰陽師の横島の血があれば、躑躅院は復興出来る。足りない

い五行陰陽術の情報を得ても、私の目的は達成される。私が望む結末に至る場合には複数のルートがある、だから焦る事は無い。時間を掛けて、足場を作れば良い。ただそれだけの話なのだ……時間は有限で、過ぎ去った時間を戻す事は出来ない。だが挽回する方法はいくらでもあるのだから……

「何、焦るなよ。時間はある、そうだろう？美弥」

「……判ってる。判ってるよお……でもね……私……私」

「大丈夫。心配するな、私がお前を傷つけたことは無いだろう？」

「うん、うん……判ってる。判ってるよ、依」

「良い子だ。もう少しで横島に会える、その時を待っている。大丈夫、ちゃんと私が横島に会わせてやる」

「うん……判ったよ。私待ってる、良い子で待ってるよ」

躑躅院の声が部屋の中に響く、それは独り言にしか思えなかったが……確かに誰かと会話をしているような声なのだった……。

## リポート30 陰陽寮

### その1

リポート30 陰陽寮 その1

〜横島視点〜

陰陽寮への見学の日程が決まり、俺は荷物を纏めていた。金・土・日の2泊3日の予定なので着替えも3日分用意する。

「みみーむ、みっみーむーみみみーむむー」

「ぷっぎぎーぷっぎぎゅーぴぎぎー」

【ノツブブーノノーノー】

荷造りしている俺の後ろでチビ達が歌っている声がする。多分、踊り付きでノリノリで歌っているんだろうなあと思うと穏やかな気持ちになる。

【TシャツやYシャツの中に札を隠しておけ、それとお前は苦手だと思うが、神通棍も忘れるな】

「やつぱりいるの?」

【当たり前だ。陰陽寮は基本的に他の霊能者を認めていない閉鎖的な組織だ。隠し武器を忘れるな】

招待されているはずなんだけどなあと思いつつも、心眼の助言に従い服の中やタオルの中に破魔札や、神通棍を仕込んでおく。

「みむぎゃっ!?!」

【ノバア!?!】

チビとチビノブの驚いた声だったので振り返るが、うりぼーがきよとんとした表情をしているだけだ。チビ達の悪戯かな?と思いつつ荷造りを再開する。

「神宮寺さんも来るから持って行くこうか?」

【シルバークアクセサリーか、そうだな。依頼されていた分もあるから持って行っても良いだろう。ただ、蛭達にも持って行け】

心眼の助言が間違った事は無いので、言われた通りペンダントトツプや指輪等も鞆の中に詰め込んでおいた。

「みみむう!？」

【ノーブウーツ!？」

「ん?さつきからどうした?」

チビ達の驚いた声に振り返ると何かが顔を目掛けて飛んできていた。

「は?わぷっ!」

顔にしがみついてくる何かに驚きながらそれを引き離して驚いた。くりくりとした真ん丸の目とすべすべとした白い肌、それとおキヌちゃんが着ていたような巫女服に猪の頭を模したであろう帽子を被った幼女が俺の目の前にいた。

「???」

「え、この子何処から来たの?」

チビノブよりも少し大きいくらいの女の子が不思議そうに俺を見つめている。何処から現れたんだろうと思ってそのまま抱きかかえているとぽふんっと言う音を立ててその姿が消えた。そして煙が消えた時に、俺の手の中にはうりぼーがいてぶぎーっつと鳴いている。

「どうしよう、うりぼーが変身覚えてる」

【今を見て第一声がそれで私はある意味安心したよ】

タマモもシロも変身?うん、多分変身するけどうりぼーまで変身を覚えてしまった。とりあえず床の上に降ろすと尻尾を振りながら歩いて、姿がぶれて女の子になって、またうりぼーに戻っている。

「もしかなくてもコントロールできてない?」

「ぶぎい?」

何?と不思議そうな顔をしているのはその顔をしたいたいの俺のほうだと思う。

【とりあえず美神に相談しておけ、あとうりぼーには気をつけろよ。突然変身するからな】

抱きかかえてる時とかに変身されると困るしなあ、心眼の言う通り少しだけ警戒しておく事にしよう。

「みみーむ、みっみーむ!みみみーむむー」

「ぶっぎぎーぶっぎぎゅーびぎぎー」

【ノツブブーノノーノー】

そしてまた歌って踊り始めたチビ達を見てやっぱりうちの子は可愛いと確信するのだった。

【京都か、あそこにはあんまり良い思い出が無いんじゃないかな】

【私も似たようなものですよ。それよりもいざって言う時止めるのを手伝ってくださいよ】

「……それ無理なような気がして来たでござるよ」

「横島様が陰陽寮に……ふふ、あはは……ふふふ……消し飛ばしてもいいんですよねえ!？」

「……向こうが何かしてきてからだ、そしたらああ、陰陽寮という存在を消し去ろう」

「ついでに呪いで一家断絶ね」

ダークネストリオを前に牛若丸、信長、シロは声には出さなかったが無理と言う事を悟ってしまったのだ。

「じゃあ、ルキさん。行って来ます」

「はい、お気をつけて行って来て下さいね」

ルイさんの命令で俺の家のお手伝いをしていているルキさんに2日の間はゆっくりしてくださいとお願いし、俺達は集合場所であるGS協会へと向かうのだった。

〜美神視点〜

陰陽寮への見学、それは今までのGSやオカルトGメンではありえない事だった。だからこそ念入りに準備をしたつもりだし、計画も練っていた。

「あ、美神さん、西条さん、琉璃さんおはようございます!あの朝起きたらうりぼーが変身してて、清姫ちゃんが居たんですけどどうすればいいですかね?」

「……なんで出発当日にとんでもないトラブルを持つてくるのよ……。蛭ちゃんやくえすも驚いているのが良く判る……いや、そうじゃない。うりぼーは乙事主の化身、つまり神の写し身だ。1度人型になったのだから変化を覚えるのは想定内だ」

「♪♪」

【ノーブ！ノーブ♪】

チビノブと手を繋いで楽しそうに歩いているのはまだ大丈夫、想定内だ。だが清姫は良くない、当時の都を焼き尽くした竜の姫。

「どうも今回は同行させてもらいますわ、横島様を守る為に」

「……私が助っ人として呼んだ」

止めてよね……いや本当にやめてよ。デストロイヤー2人とか絶対手に余るに決まっている、恐らくストッパーになると思っていた小竜姫様の顔が引き攣っている。

「また逃走成されたのですか？清姫様」

「ええ、陰陽寮なんて屑の集まりの所に横島様が向かうなんて私耐えられせんわ、やっぱりあの時に全部ゼーんぶ……壊しておけば良かった」

殺気に満ちた瞳孔の開いた瞳。私達が思う以上に陰陽寮をシズクも清姫も嫌っていたようだ……でもこれは考えようによっては最強の抑止力とも受け取れると思う。

「陰陽寮には見学ですが、向こうが何かをしてきたらお力をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「ええ、良いですよ。私は横島様を守りたいのです、奪われないうちに、2度と殺させぬように……だから殺さないといけないですよね？」

……駄目だ。やっぱり清姫を連れて行くのは危険すぎる、今も横島君に聞こえないと判っていてとんでもない事を言っている。京都が火の海、GS協会とオカルトGメンの関与が疑われる……そんなニュースが頭の中で聞こえた気がした。

「ぶぎゅう・ぶぎゅー？・ぴーぎー？」

「よいしょ、どうしたー？そんなに不思議そうな声して？」

横島君が猪にもどったうりぼーを抱きかかえる。だけど、うりぼーは不思議そうな鳴き声をあげ続けている。

「コントロール出来てない所か、自分が人間になってるのも判ってないのよ」

「今は何で急に視界が狭くなったのかーって混乱してるでござる」  
「シロとタマモで何とかならないの？」

私の言葉にシロとタマモは出来ない事はないけど、今は時間が無いと返事を返した。本当に今朝、出発前に判った事なので自分達も驚いていると言われてしまった。

「じゃあ時間のあるときでいいから面倒を見て頂戴」

人型になっているのは恐ろしくだが体に神通力が溜まりすぎて、それを発散する為に変化しているのだと思われる。霊力過多と言う症状があるのだから、神通力も過多になる可能性は十分にある。だから面倒を見てくれるように頼んでおく、言葉が判るし変化するんだからタマモ達以上の適役はいない筈だ。

「旅行みたいで楽しみだなあ」

「そうね。まあちよつとした観光つて言えなくも無いし」

「そ、そうですわね」

陰陽寮に行くのを旅行とと思っている横島君に蛍ちゃんもくえすも苦笑している、旅行所か敵地なのだから警戒して欲しい物だが……横島君にそれを言っても無駄だろう。

「そろそろバスが来るからそれに乗り込んでくれ、さー出発だ」

西条さんが明るく仕切るが、私と西条さんと琉璃の頭の中には一抹の不安があつた。それは柩の予知の内容だ、燃え盛る山と凍りついた街。竜の姫に気をつけてと言っていた、柩の予知の精度から考えればこれはほぼ間違いないと当たる。

(馬鹿な事をしないでよね)

横島君ではない、陰陽寮にいる躑躅院やそこに所属する陰陽師を思い、私は心からそう願った。決して陰陽寮の無事を祈ったわけではない、ただ今にも爆発寸前の爆弾が私達を巻き込んで爆発する可能性を考え、巻き込まれたくない。その一心でそう願わずにはいられないのだった……

〈蛍視点〉



多分今地球上で一番危険な場所に向かっている。私達全員はバスの座席でそう思っていた、1人だけ違うのは横島で膝の上にうりぼーを乗せて前足を持ってうりぼーを踊らせている。

「よいよこ」

「ぶぎーぴつぎーぐー」

マイペースと言うか、デストロイヤーの殺気が2つが自身に向かつていないので気付いていないのだろう。

「横島様、楽しみですね」

「そうだよなあ、旅行みたいで楽しみだよなあ」

陰陽寮が危険な場所とは説明しておいたけど、招待されているから大丈夫だろうと前向きに考えている横島。その前向きな考え自体は間違っていないと思う……間違っていないと思うんだけど……。

（くえす、あの楽しみのニユアンス絶対違うわよね？）

（そんなの当たり前じゃないですか）

これは違う、京都が楽しみ等ではない。絶対アレだ、高島つて言う陰陽寮を殺した陰陽寮の生き残りを燃やすのを楽しみにしているに違いない。

「清姫ちゃんも楽しみなら、一緒に少し観光してみようか」

「まあまあ♪嬉しいですわ」

「……なら私も付いて行くか」

「うんうん、皆で見て回るのも楽しいと思うよな。蚩、神宮寺さん」

はじける笑顔の横島にそうねと返事を返した物の、横島がストツパーとして清姫とシズクを見ていないと京都大炎上するので横島には是非清姫とシズクを見ていて欲しい、そして陰陽寮が馬鹿な事をしないことを切に願う。

「とりあえず今日の予定を行っておくわね、昼過ぎくらいに着くからお昼ご飯を食べて、旅館の受付を済ませます。その後に陰陽寮での話し合っただけど、何か質問はあるかしら？」

「はい！チビ達は大丈夫ですか！」

「ええ、大丈夫よ。GS関連の旅館だから使い魔で泊まれるわ」

琉璃さんは予想していた質問だったのか、迷う事無くそう返事を返した。横島はチビ達を見つめて良かったなあとほにやりと笑っている。

「それと陰陽寮の見学の日程については判らないけど、とりあえず躑躅院との話になると思う」

……性別不明で怪しき満点の躑躅院か、お父さんのネットワークでも、くえすや美神さん、それに冥華さんでも経歴がわからない。判っているのは西条さんが手に入れた平安時代の情報だけだ。

（躑躅院と高島の婚姻）

高島は優れた陰陽師ではあったが、その生まれは平民。類稀なる霊力で陰陽師になり、宮抱えになったがそれゆえに蔑まれていた。それを不憫に思った帝が、高島と躑躅院の婚姻を進めたと聞いている。これはシズクと清姫にも聞いているの事なので間違いない、躑躅院が横島を気に掛けるのは陰陽術だけではない、その婚姻の話が大きく関係していると思う。

「それと見学の時に言う話じゃないんだけど、神隠し事件が多発しているからその事件の共同捜査にもなる」

「神隠し……今もまだ行方不明なのですか？」

「いえ、神隠しになった人物は大体1日から2日後、元いた場所で発見されています。ただ、その時の記憶は曖昧でそこから探すのは難しいでしょう」

神隠し……か、普通の神隠しならば見つかる事は無いだろう。京都と言えば日本の中ではかなり稀有な霊地でもあるし、妖怪など多い。神隠しが起きる条件は揃っているが、すぐに戻ってくるというのが気がかりだ。

【天狗殿に聞いて見ますか？鞍馬山も近いですし】

牛若丸がそう提案してくる。京都と言えば牛若丸のホームグラウンドだ。情報を集めるのは適役だと思うんだけど……ちよつと気になった。

「牛若丸さん、京都の天狗と話を付けられるのですか？」

【私を覚えてくれていたら大丈夫だと思いますよ？】

牛若丸の言葉に小竜姫様は考え込む素振りを見せた。もしかして天狗つて神魔とは別勢力になつていいのかしら……。

「竜神王様に連絡を取つて文を用意してもらうのでそれを届けて貰つてもいいですか？」

【良いですとも、この牛若丸にお任せください】

やはりガープと言う脅威があつたとしても日本の神魔との連携は思うように言っていないのだろう……そこまで考えてふと思つた。昔の顔なじみや、知り合いと言う事で神魔や強力な妖怪と話を付けられる可能性があるのは何も牛若丸だけではない、多分私だけではなく、美神さんや琉璃さんもそう思つたのだろう……全員の視線が横島の近くに座つていたタマモへと向けられていた。

「いやあ、車と言うのは何時見ても面白いでござるなあ」

「はいはい、みつともないから椅子に座りなさい」

タマモは九尾の狐なのだから、日本3大妖怪なのだから、大嶽丸や酒吞童子とも交流があるのではと思つたのだが……タマモは冷めた視線で私達を見つめていた。

「人間が勝手に言い出したただだから、後の2人なんか知らないわよ」  
傷ついたと言わんばかりの態度に私達は選択を間違えてしまったという事に気づいた。基本的にタマモもシズクも横島がいるから協力してくれているだけで、別に人間側と言うわけではないのだ。  
「くうん」

「あれ、珍しいなタマモ。子狐で甘えてきて、どうしたんだ？」

あつという間に子狐の姿になり横島の膝の上で丸くなるタマモ。それは気分を害し、自分を絶対に否定せず、そして過去も詮索しない横島とお前達は違うといわんばかりの拒絶の態度だった。

(失敗したわね)

(ですな……すいません)

今の神魔の情勢もそうだが、日本の状況も決して良い訳ではない。難しいのは承知だが、日本3大妖怪である大嶽丸や酒吞童子、そして日本3大怨霊である道真公や将門公の力を借りればと全員が思つていたのは間違いない、だがその糸口は簡単に切れてしまった。

「よしよし、久しぶりに甘えてきて本当にどうしたんだ？」  
「コーン」

横島の優しげな声と甘え声のタマモの声。陰陽寮に向かう道中だが、幸先が不安な物になってしまい。全員が暗い表情でため息を吐くのだった……。

「ん？」

【どうかしたのか横島？】

「何かありましたか？」

「いや、今さ、誰かに見られてる気がしたんだけど……」

「……清姫ならずと見てるが？」

「24時間365日お慕いしております」

「いや、そう言う感じじゃなくて……うーん、気のせいかな？チビ達は  
どう思う？」

「みむっ」

「ぶぎっ」

【もぐもぐ】

索敵能力に長けている心眼やチビ達が気付いていない、もしくは何も感じていないという事は自分の気のせいかな？と横島は思うことにしたのだが……

「……」

影の中から横島を見つめる赤い瞳は横島に熱視線を向けていたが、  
気付かれる前にその場から影の中に溶ける様に消えていくのだった  
……。

く???視点く

無数の目が浮かぶ暗い世界——常人ならば発狂してもおかしくない世界にすすり泣く様な声が響き続ける。その声にこの世界の主である少女は悲しそうに、寂しそうな表情で、また駄目だったとその幼い容姿に相応しくない諦観めいた表情で声の元へと足を向ける。

「もうやだ、出して助けて」

「いやいやいや」

「暗いよお怖いよお」

何処からとも無く老若男女の恐怖に震える声が響く、その声を聞いていた何者かは悲しそうに、そして疲れたように溜め息を吐いて指を鳴らす、しばらくしてまた指を鳴らすと恐怖に震える声は愚か人の気配すら無くなる。

「寂しいな、悲しいなあ……誰か私と遊んでよ」

闇の中に幼い少女の声が響く、黄金色に輝く金髪を赤いリボンで束ね、白い独特な帽子を被った少女が身を翻すと、その動きにそって白いスカートが翻る。

「だーれも私と遊んでくれない、寂しいな、悲しいな」

白と紫の導師服……中国系の服装でありながら、ゴスロリドレスのような意匠もあるそんな複雑な構造の服を着た少女は薄暗い無数の血走った目が浮かぶ暗闇を日傘を差して歩いていく。

「……あ」

そんな中少女は外の光景を見て、驚いたように、そして期待するような声を上げた。そこには妖怪や竜に囲まれて笑っている青年の姿があった。

「凄い、楽しそう」

小さな妖怪や精霊が青年の周りで楽しそうに笑う、その光景を見て自分も仲間に入れてくれるかな、私も嫌がらないかな、怖がらないかなと不安と期待をこめた視線を青年に向け続ける。

「ん？」

「きゃっ！」

目を通して目があつたのを感じて慌てて目を閉じる、今絶対目が合っていた。そんな事は少女にとって初めての事だった……だからこそ少女は青年に強い興味を抱いた。

「早く来てくれないかなー」

こっちに近づいて来ている事は判っていた、だからその青年が来る事は判っていた。ここに来たら、この世界に招待しよう。怖がるかな、不気味がるかな、それとも優しく笑ってくれるかな？寂しさを誤

魔化す為に神隠しを繰り返していた少女は偶然目が合った青年、横島に興味を持ち、駄目元で続けていた神隠しを止めた。横島なら遊んでくれるかもしれない、受け入れてくれるかもしれない。今までのように怖がるだけじゃないかもしれない、そんな期待を抱き、横島が京都の街に足を踏み入れる事を楽しみに待ち続けるのだった……。

リポート30 陰陽寮 その2へ続く

## その2

レポート30 陰陽寮 その2

く琉璃視点く

ちよつぴりバスの中が微妙な空気になってしまった物の、私達は無事に京都に到着していた。陰陽寮からの招待という事で誰か向かえが来ると思っていたんだけど……出迎えは予想外の人物だった。

「ようこそ、京都へ。よく来てくれた」

躑躅院が迎えに来るとか想定外なんだけど……穏やかな笑みを浮かべているが、それが逆に何かを企んでいるように思えて来る。

「まさか君が迎えに来てくれるとは驚きだよ」

「ご用意した宿は通常では辿り着けない場所ですからね。私が案内するのは当然でしょう」

……霊能者専門の旅館くらいに思っていたけど、どうも躑躅院の管理する特別な場所と見て間違いない見たいね。

「シズク様だけではなく、清姫様もおいでくださったのですか、当代の躑躅院でございます」

「ええ、初めましてと言っておきまじょうか。無能の陰陽寮の当主様」  
行き成り口撃とか止めて欲しいんですけど……小竜姫様を見るが、首を左右に振る。お願いですから止めてくださいよと叫びたくなかった。

「無能の陰陽寮、まさしくその通り返す言葉もございません。所詮は古い連中の集まり、無能なのは当然ですね」

「……お前よく言うな」

「私は別に陰陽寮に拘りがあるわけではありませんから、日本政府の命令で就任しただけで別になんとも思っていないから」

これは本当ね、躑躅院は陰陽寮に対して何も感じていない、命じられたから陰陽寮の当主をしているだけで何の思い入れもある訳ではない。

「発言には気をつけたほうがいいのではないかな?」

「失言でも何でもありませんよ、嘘偽りの無い本心ですからね、一応陰

陽寮の改善は考えていますが……さてさて、それもどこまで出来るものやら」

躑躅院を当主に据えた政府関係者は無能だったみたいね、自分の手駒にするつもりが全く御さない相手だった訳だ。

「立ち話もなんですから、どうぞこちらへ」

穏やかに笑って歩き出す躑躅院に案内され旅館へと向かう、だがその道中でシズクと清姫の顔色が変わり始めた。

「2人ともどうかした？」

「……いや、ちよつとな……」

「そんなありえないですわ」

この道に2人は覚えがあるらしく、普段冷静……って訳じゃないけど、それでも冷静な判断が出来る2人が妙にそわそわして来た。

「正直に言うと言館と言言訳ではないのですが、恐らく京都で寝泊りするならここ以上に安全なのは躑躅院の家しかないですからね」

「……歓迎されてないって事ね？」

「私は少なくとも歓迎していますよ？オカルトGメン、GS協会に今の陰陽寮が抗う術はない。傘下に入るのもまた1つの選択肢」

閉鎖的な陰陽寮には家柄自慢だけが脳の無能しかいない、更に陰陽師の家系だったとしてもその力は弱く陰陽術が使えない者も多い。だから京都の霊能関係者の多くは六道女学院に入学させる。それで陰陽寮に戻ればまだ良いが、そのままGS協会、オカルトGメンに就職、霊能関係の大学に進学と陰陽寮に戻る若い人材は少なく、衰退していく一方である。

「国に認められた霊能の組織とは思えないわね」

「それは良くて明治まで、今の陰陽寮にまともな陰陽師も無い、霊能者もない。歴史だけの組織になっていきますからね」

よつぽど政治家との癒着が多いのだろう、冥華さんも女学院の卒業生を陰陽寮に紹介して欲しいって言われたらしいけど、それも真つ向から断ったと聞いている。そもそも生徒自身も大した旨みのない陰陽寮に戻りたいと希望する訳が無い。

「平安時代の家を改修して水回りはちゃんとリフォームしてあります



ので泊まる所としては申し分ないと思いますよ」

結界の中に隠されていた膨大な庭を持つ古い屋敷……それを見て清姫とシズクが驚きに目を見開いた。

「どうでしょう？ 清姫様、シズク様、喜んでいただけただけでしょうか？ 高島邸の管理、1000年前よりずっと続けてまいりました」

陰陽師高島の家、それを守り続けてきたと笑う躑躅院。清姫とシズクがどれだけ高島を想っているか知っているから打って来た非常にやらしい一手だ。

「……横島？ 横島ー？ 大丈夫？」

「横島？ どうかしましたか？」

蛍ちゃんとかえすの声に振り返ると横島君がぼーっとした表情で屋敷を見つめている。その目に映っている筈の蛍ちゃんとかえすの姿は横島君の目の中には無い。

「横島！ あんたちちゃんとしなさい」

「いつーえ、あ……あれ？ どうかした？」

タマモのビンタで正気に戻ったみたいだけど、今のは危なかった。確実に横島君に何らかの異変があったのは確実だ。

「大丈夫ですか？ 気分が悪いなら病院に案内しましょうか？」

「いえ、大丈夫よ。荷物を置かしてくれたら横島君を休ませるからとりあえず屋敷に入っても良いかしら？」

躑躅院が近づこうとしたのを美神さんがガードして屋敷に入って休ませると言うのと躑躅院は笑顔で屋敷へと案内してくれたけど、見学、神隠しの調査に加えて、横島君の様子に警戒する必要があるみたいだ……。

く美神視点く

忙しいのでと神隠しの資料を渡し、見学の時間に迎えを寄越すと去っていった躑躅院だが、その口元には抑え切れていない笑みがあった。横島君の異変は躑躅院の望んだ結果だったのだろう。

「それで正直な所、横島君の調子はどうなの？」

「……魂が揺らいだ、シズク、清姫、そしてこの屋敷と躑躅院が何かの鍵だったのかもしれない」

蛍ちゃんとタマモに様子を見るように頼んで心眼を借りてきて話を聞いているけど、やっぱり魂が関係しているようだ。

「……前世の記憶を無理やり引き出そうとしているのかもしれない」

「横島様は不完全な転生をしていますしね」

「下手をすると、横島さんの記憶の上書きなんて事もありえますね」

状況はあんまり良くは無いだろう、躑躅院がこの屋敷を宛がったのは間違いなく、横島君の前世の記憶を刺激するつもりだったからだ。

「西条さん、今からでも別のホテルとか取れるかしら？」

「……いや、電話で確認したが霊能者の枠は全部埋まっているらしい」

「かなりお金を使ってますね」

多分と言うか確実に部屋は空いている、だが躑躅院の圧力でホテルも旅館も借りれない状況だ。

「横島を見学に連れて行くのは危険ですが……連れて行く以外の選択肢はありませんわね」

「横島様を残しておく方が危険ですからね」

見学をさせたいって言うのは勿論本当だろう、陰陽の今の戦力で戦えと言われたら困るのでGS協会、オカルトGメンと協力したいのは本音だろう。ただそこに躑躅院個人の思惑が絡んできているのが問題だ。

「シズク、清姫。見学の時間は夕方からだから屋敷の中を見てくれな  
いかしら？」

「……言われるまでも無い」

「隠し部屋とかも知ってますしね」

高島の屋敷を知っている清姫とシズクに屋敷の見回りを頼んでおく、気付いてないだけで陰陽寮のスパイがいるとか避けたいしね。

「とりあえずやるべき事をしよう、躑躅院も馬鹿じゃないから陰陽寮で仕掛けてくることは……」

「あるかもしれないと思いましたね？私もです」

躑躅院は陰陽寮に何の執着も未練も無い、もしかすると私達の見学

を使って自分で陰陽寮を潰す口実すら作りかねない。あれは自分の目的の為なら手段を選ばない人種だ。

「横島君にはノツブの眼魂を所持してもらいましょう。それと心眼もあれば最悪の場合になっても大丈夫です」

「私も警戒させてもらいますので大丈夫です」

神魔が3人と眼魂と心眼、この万全の守りで横島君にちよつかいを掛けるのは難しいだろう。勿論それに甘えるつもりはないので、私達も警戒するつもりだ。

「シロは動物のまま私達についてくれるかしら?」

「了解でござる!」

タマモは横島君の様子がおかしくなった時に人の姿になってしまっているのですそのまま横島君を守って貰う。シロは万が一横島君が攫われた時に追跡できるように手元に残って貰おう。軽く打ち合わせをしているとあつと言う間に見学の時間が来てしまう。

「横島君、そろそろ見学の時間だけど大丈夫?」

「あ、はい!大丈夫です。ちよつと車酔いしたのかなあつて」

車酔いか、本当に車酔いなら良かったんだけどねと心の中で呟いた。実際はもつと深刻なんだけど、本人がそう思っているのならそう思わせておいたほうがいい。

「みーむー♪」

「ぷぎー」

横島君が肩にチビとうりぼーを乗せて立ち上がると、チビノブはその足元にびったりと寄り添う。視線を向けると敬礼されたので、チビノブなりに横島君を守ろうとしてくれているのが判った。

「ノツブは眼魂で横島君と一緒にね、それとこれ心眼帰すわ」

「どうも、やっぱりバンダナがないと落ち着かないんですよね」

慣れた手付きでバンダナを額に巻く横島君。その姿におかしな所は無い、蛭ちゃんとタマモに目配せすると小さく頷いた。おかしい所は何も無いか……この屋敷が関係しているのか、それとも躑躅院か……もう少し様子見しておく必要があるそうさだ。

「じゃあ、そろそろ出発しましょうか」

本当にはあんまり行きたくは無いんだけど……しょうがない。私は心の中で溜め息を吐きながら、迎えに来たと言う陰陽寮のバンに乗り込むのだった……。

〈横島視点〉

陰陽寮、昔からあるGS協会みたいなのと聞いていたので神秘的なものを想像していたんだけど、実際はそうではなかった。

「何かこう……工場みたいですね」

「工場か、はははッ!! ああ、正しくその通りだよ。横島君」

美神さん達が顔を顰めている。やっぱり言うのは不味かったかな？と思いはしたが、本当に工場にしか見えなかった。ラインでどんどん生産されている札の山を見て、俺は本当に工場にしか見えなかったのだ。

「陰陽寮も地に落ちたものですね」

「……何を言ってる、元々陰陽寮なんか大した価値も無い」

清姫ちゃんとシズクが物凄く毒を吐いていて、周りにいる職員が顔を歪めている。だが清姫ちゃん達が神族と判っているので、手出しは出来ないようだ。

「見た所かなり霊能者の数は少ないみたいだね」

「実動隊が約10人ほどでそれに対して裏方は300人近くいますからね。霊能があっても、実働は嫌だと言う者が多くて困ります」

それって実働部隊だと死んでしまうから隠れていたって事か、こんな感じで大丈夫なのかと不安に思った。

「京都は靈的被害はさほど多くないですからね、ですが、それでも厳しい数です」

「安倍とかね」

「ええ、平安時代の有名な陰陽師が残してくれた結果が生きているので今はまだいいですが、それもあと何年効果を持つことか」

昔の結界に頼りきって、今の霊能者が努力していない。こんなじゃ、自分の実家が陰陽寮に所属していても、GS協会に所属した

いって言う六道女学院の生徒が多いのも納得だ。

「今は破魔札の販売や陰陽札の販売で陰陽寮は活動しておりますので、基本的な除霊活動はしていないと思ってもいいかもしれません」  
「失礼ですが、東京の隕石落下の時や、地震の時はどうしていたのですか？」

小竜姫様の鋭い視線から放たれる言葉に躑躅院さんは肩を竦めて、悲しそうに目を伏せた。

「実働隊で意欲のある者は行動してくれましたが、殆どは隠れてしまいました。だからこそ私が動いたでしょう？」

部下が逃げてしまったので自らが面に出てくる。それは西条さんや琉璃さんと同じだと思った回りの職員も気まずそうに目を逸らすだけで、反論もしようとしないから間違いなくそれは事実なのだろう。

「見学させて頂いて判りましたが、この調子では神魔からしてもあなた達を頼る事はないと思います」

「当然ですね、ですがこれが今の陰陽寮の内情です。いつそ国防の地位から外れた方が良くと思いますよ、このままでは死人が増えるだけですからね」

「当主様!?!何を言っているのですか!?!神魔の協力を得ればまた復興だって」

「馬鹿者、今の言葉を聞いてなかったのか？神魔は私達に力を貸す理由が無いと言っているのだ」

沈むと判っている船に乗り込むものはいないと言われると躑躅院さんに詰め寄っていた中年の男性は呻く事しか出来ない。

「下がれ、目障りだ」

「……御意」

鋭い一瞥に中年の男性は領きはしたが、俺達を親の敵のように睨みながらその場を後にした。

「中々見苦しい物ね」

「私もそう思うよ、当主なんて地位は欲しくないのにね」

権力や自分達が楽に金を得たい、そんな態度がありありとしていて

俺は陰陽寮への嫌悪感を抱いた。

「お望みならば修練場なども見学しますか？ここ数年使われた痕跡はありませんが」

そう言う躑躅院さんに美神さん達が見学する価値も無いと言って、3時間予定されていた見学は1時間と30分ほどで切り上げられ、俺達は京都にいる間宿泊する屋敷の中にいた。

「さてと、目に見えて悪い所ばかり見せられたけど、横島君達はアレを本当だと思っちゃ駄目よ」

「え？」

「判ってます」

困惑する俺に対して、すぐに判ってますと返事を返した蛭に驚いた。俺はなにも判らなかつたけど……何かあつたのだろうか？

「……隠し通路や隠し部屋だらけだな」

「ええ、平安時代にもあつた仕掛けもそのままでしたわね」

ええ……マジで？判つてなかつたの俺だけ？

「え？隠し通路なんてあつたでござるか？そんな匂いはしなかつたでござる」

「馬鹿ね、私がいるって判つてるんだからそれ相応の準備をしてるに決まつてるでしょ」

どうも気付いていなかったのは俺とシロとチビ達だけ見たいのよ  
うだ。

【隠し通路は相当数あるな、多分躑躅院本人も把握していないと思われる、悪い場所だけを見せたのは確実に自分を裏切っている派閥があると言う事を言っているはずだ】

「はあー自分だけで組織を正常化出来ないから私達を利用したって事ね」

「そうなるだろうね、でも助けを求められたのだから手伝おうじやないか」

美神さん達は状況を理解しているみたいだけど、正直俺は良く判つていなかった。

「蛭、どういふ事？」

「つまり自分の部下って立場で好き勝手してる連中がいるからって事を伝えてたのよ、普通見学で悪い所を見せる？」

確かに他の人間が見に来るならば、良い所とか綺麗な所を見せるのは当然だよな。そう考えると躑躅院さんが案内してくれた場所には違和感しかない。

「人間同士で足の引っ張り合いをしている場合ではないですから、さっさと解決してしましましょう」

「そうですね。横島様に害を掛けられても困りますし」

「そもそも神隠しも反躑躅院が動いている可能性があるな」

「民間人の霊能者で何かを実験しているっていう線もありますね」

「……となると、霊脈が関係している場所を探すべきだな」

「じゃあ、私が探すわ。京都にいる2日の間にさっさと解決したいし、何時寝首をかかれるか判らないとかごめんだし」

とんとん拍子で話が進むのを見てみると、やっぱりどこかから視線を感じる。

「んー？」

「せんせーどうしたでござるっ？」

「いやさ、誰か見てる気がするんだよ」

【気にしすぎだろう。大体隠れている何者かがいるなら私が気付くし、何よりも清姫とシズクが気付かない訳がない】

京都に来てからやたら周囲を警戒しているシズク達。確かに心眼の言う通りで美神さん達がぴりぴりしているから俺も気が立っているのかな？

(うーん、でも誰かの視線を感じるんだけどなあ)

どこからずっと見つめられている、そんな感覚を感じながら美神さん達の話し合いに耳を傾けるのだった。

↳ 躑躅院視点

いくつか計算違いはあったが、それでも概ね私の計画通りに話は進んでいる。

「道真。状況は？」

「まずまずって言いたい所なんですがねえ。どーも、奴さん達厄介すぎる相手とつるんでるみたいで」

道真がこういう言い回しをするときは状況が極めて悪いと言う事で内心舌打ちする。当初の予定では見学に来る前にある程度決着をつける予定だったのだが、それも失敗してしまっている。

「魔族か」

「正解でさボス、鬼道の関係者ですねえ」

「ちつ、あの疫病神め」

既に捕えられて精神病棟に監禁されている鬼道の名前が出て来たことに心底腹が立つ。この見学を利用して馬鹿な連中を一掃してやろうと思っていたのに、それも上手く行かなくなってくると流石に苛立ちを覚える。

「南武グループと関係してるみたいで、その施設は破壊したんですけどねえ。人造妖怪プロジェクトをやってたみたいなんですよ」

「あいつらはアホか？」

「アホって言うか間抜けでしょうねえ、乗り込んだ時はもうパニック状態でしたよ」

自分達でも退治出来る様な弱い妖怪を大量に作り出し、それで金を巻き上げようとして失敗して殺されたか、重傷を負っていると言う所だろうな。

「証人として何人かは生かしておけ」

「あーすんません、どっちみちもう助からないレベルでしたし、もう死んでますよ全員。ほら南部グループって良い話を聞かないでしょう？」

「ああ、人造神魔とか人造妖怪とかの霊的兵器を作りたいとか言っただけで接触してきていたな」

勿論断ったが、人外を兵器にするリスクと全く持って理解していない。制御できる内は良いが、相手が自我を持って暴れだしたらどうするつもりかと言って追い返したが、馬鹿な連中と共謀した様だな。

「培養装置は壊しましたから増える事はないと思うんですが、明日一



応美神達も連れて行って下さい」

「ああ、判った」

霊法で人造的に妖怪を作るとは重犯罪だ。オカルトGメンの西条がいるならそれも十分に利用してやろうじゃないか。

「ただボスを排除しようとしていた連中の拇印付きの書類も山ほど出て来てるんで、陰陽寮は関係ないって方向でいけますよ」

「それはいいな、道真。余り深追いせずに戻れ、夜明けを待つんだ」

「あいあいさー。んじゃま、もう少し調べたら撤退しますわ」

道真からの報告を聞いて、苛立ちと同時に計算通りになっているかと微笑む。高島の屋敷に宿泊させる事で、横島に何かか起きているのは私の思惑通りだ。全てが全て自分の思い通りになるなんて都合の良い事は考えていなかったが、反私の間人と南部グループの件を除けば概ね計算通りだ。

「このまま陰陽寮を作り変える」

今の歳を取っただけの害悪がいる陰陽寮を変える、GS協会でもオカルトGメンの傘下にでも入ってしまえば良い。最早この組織に悪霊や妖怪と戦うだけの力は無いのだから、むしろ傘下に入る事で他の人間が責任者になってくれれば私は躑躅院を復興する事だけの尽力出来る。元々陰陽寮に何の未練も執着も無い、むしろ私の邪魔をするくらいにしか陰陽寮の事は思っていない。

「さて、次はどうするかな」

この強気の状態が自分を守る為の物と解釈してくれば、それはそれで都合だ。流れはそう悪くない、あの時私に噛み付いてきた馬鹿な男のそれを後押ししてくれるだろう、崩壊しかけの組織を押し付けられ、それを何と改善しようとしているが邪魔者扱い。

「悲劇のヒロインとでも思われればまた良し」

私が妖しいと思っただけでも目に見える悪意があれば人間の目はそちらに向かう、そうすれば私に向けられる警戒のまなざしも少しは緩いものとなるだろう。

「動き出した歯車は止まらない、陰陽寮消滅のシナリオはもう止まらない」

やはり陰陽寮は私にとって足枷でしかない、ここまで来たらもう壊してしまい、新しく作り直すしかないのだ。そうすれば私は自由になる、もう拘束されることは無い。私の真の目的の為だけに進んでいくのだから……。

リポート30 陰陽寮 その3

## その3

レポート30 陰陽寮 その3

〜美神視点〜

明朝躑躅院からの連絡で陰陽寮の一部が暴走して行っていたと言う霊犯罪の現場が見つかったと聞いて、私と琉璃と西条さん、そして小竜姫様と躑躅院の5人で現場に乗り込んだんだけど、想像以上の現場に私達は顔を歪めた。

「酷いわね、横島君達を連れてこなくて正解だわ」

「だね、これはトラウマになりかねない」

壁にめり込んだまま絶命している男に、床に散らばっている肉片に廊下を染め上げる鮮血の海。凄惨な殺害現場にこういう現場を除霊などの霊視で見たことがあるとは言え、私達は顔を歪めていた。

「私達の不手際で本当に申し訳ないです」

「躑躅院のせいとは言えないでしょう」

自分の責任でと躑躅院は言いをするが、今回の事は躑躅院の責任ではないだろう。山の中に隠蔽されていた研究施設、妖怪を培養するガラスのポッドが何個も並んでいたが、それは砕け散り気味の悪い色の培養液と殺されたであろう人間の血液で異臭が漂っている。

「妖怪の方はどうなったのかしら？」

「周囲を搜索し、半径1キロほどで死んでいるのを発見しました」

「半径1キロとなると市内も範囲になっていますね」

山の中ではあるが、それでも決して交通の便が悪いという訳ではない。半径1キロほどとなると京都市内にもぐりこんでいる可能性はゼロではない、むしろ京都市内で多発している神隠し事件それに関係している可能性も浮上してきた。

「神隠しの件も合わせて、ここはしっかりと調査した方が良いね」

「西条さん、お願い出来るかしら？」

「大丈夫だよ、ここは僕に任せておくれ。躑躅院君もそれで良いかな？」

「よろしくお願いします、一応躑躅院の人間を何人か派遣しますが

……信用出来る部下です。西条さんに従うように言っておきます」

死人が出ているのでGS免許だけでは調査が出来ない。ここはオカルトGメンの西条さんに任せて警察が間に入らないようにするべきだ。オカルトGメンの西条さんが間に入れば、警察から捜査権は西条さんに移る。そうなれば、施設の中で見つかった資料を私達も見ることが出来る。

「陰陽寮は良いのかしら？」

「馬鹿が自爆してくれましたからね。やはり1度陰陽寮は解体するべきだと改めて思いましたよ」

躑躅院が手にする紙には陰陽寮の役員名簿がある。この施設に携わっていた人間の名簿だろうが自分の部下に足を引っ張られるとは躑躅院、中々不憫に思えてくるわね。

(予想が違ったかな?)

躑躅院が何かを企んでいると考えていたんだけど……どうもこうも立て続けに事件が起きると私達が躑躅院を警戒しすぎているだけのような気がしてきた。

「厄介な病気の菌などがあると困りますので、1度施設を後にして準備を整えてからもう1度訪れると言う事でよろしいでしょうか？」

「そうだね、そうしようか。人造妖怪だと厄介なウイルスを仕込まれている可能性もある、詳しく調査する前に防護服などを準備した方がいいからね」

簡易の防護服は着ているけど、これ以上先に進むのに簡易装備では危険だと言う事で私達は1度施設を後にする事となった。

「琉璃、それに小竜姫様。私達は1度横島君達と合流しましょうか？」

横島君達には神隠しにあった人達に一度話を聞いて欲しいと言って調査を頼んである。子供と言う訳ではないが、大人が行くよりも年齢が近い、もしくは自分の子供の年代の横島君達が行く事で話を聞きやすいと思ったのだ。

「そうしましょうか、正直この施設は管轄外ですしね」

「横島さんの事だから何かヒントを見つけているかもしれないですし

ね」

妖怪だけなら私達も調査権があるが、人死が出て警察が動いている。西条さんに捜査権が移るまでは神隠しの事件の方を調査するべきだろう。

「躑躅院はどうする？1回街まで戻る？」

「いえ、私はここに残ります。部下が来たら車で戻りますので心配ないですよ」

施設に残ると言う躑躅院と西条さんを残し、私達は横島君達と合流するべく車に乗り込み街へ向かって走り出す。

「小竜姫様、今回の件。何処が絡んでいると思いますか？」

「……神魔ではないと断言出来ませぬ。神魔が絡んでいたらあんな中途半端な妖怪は生まれませぬ」

「となると人間側ですか……美神さん、なにか思い当たる節はありますか？」

「そうね……人造妖怪などを研究してるって有名なのは南部グループと難波だったと思うけど……違法って事で研究は中断させられてるはず」

GS試験のガープ強襲、次に隕石落として大きな事件が続いている。人造魔族や妖怪のプラントを奪われたら大変な事になると政府の方で研究の廃止が決定したはずだけど――

「研究者がそれで止まっているとは思えないですね」

「そうなのよね」

政府の決定だからとそれで止まるとは思えない、表向きは研究を中断していてもまた研究を再開している可能性もある。施設の調査でどこが陰陽寮の一部と手を組んでいたかが判れば良いんだけどね。

「それより小竜姫様、頼んでいた件は大丈夫そうですか？」

「はい、大丈夫です。私は横島さんの護衛だけじゃなくて、メンタルケアの件も任されていますから」

高島の屋敷を見て前後不左右に陥っていた横島君。一応心眼が見てくれているけど専門家のヒヤクメの診断を頼んだのだ、早くても陰陽寮の見学が終わってからになるけど、それでも専門家が見てくれる

というだけで安心感がある。

「でもこれ絶対予定してた日程で終わらないですよね？」

「……そうね。1回横島君の学校に電話しておかないとね」

2泊3日の予定だったが、神隠しの件に加えて人造妖怪と厄介な事件が舞い込んでしまった。これが終わるまで東京に帰るのは難しうね……横島君の学校に電話を入れて、ここまで来たら発想を変えてみるのもいいかもしれない。

「安倍清明神社とかも見に行ってみましょうか」

「そうですね、どうせ長くなるなら勉強旅行って感じにしましょうか」  
長くなるなら長くなるでそれなりの方法もある。本当はマリア7世が来日する前に戻りたかったけど、それも難しくなりそうだ。

「まあ何にせよいつも通りって事ね」

「大忙しって事です。判ります」

本当にばたばたしていて落ち着ける時間なんて無いわね、私はそう苦笑しながら琉璃に横島君達と連絡を取って欲しいと携帯を使うように頼んだんだけど、琉璃が電話をするよりも先に携帯が音を立てた。

「……美神さん、凄く嫌な予感がします」

「奇遇ね、私もよ。小竜姫様は？」

「……私もです。凄く嫌な予感がします」

3人が3人嫌な予感を感じながら、琉璃が代表して電話を取る。

「もしもし琉璃だけど、はあ!?横島君がいなくなった!?目の前で急に消えたって!?今何処!?すぐそっちに行くからッ!金閣寺の近くね!?シズクやタマモに横島君の気配を探して貰って!でもあんまり深追いはしないですよ!近くに横島君の気配があるかどうかだけ探してちょうだい!」

……まだ何も解決していないのに続けざまに起きる事件、しかも横島君が消えたと聞いて私達は蛍ちゃん達がいる金閣寺に向かって車を走らせるのだった……

くくえす視点く

神隠し事件の調査は予想通り難航していた。その理由は被害者が何も覚えていないというのもあったが、陰陽寮側がまともな捜査をしていないというのが大きかった。

「もう滅べば良いと思いますわね、陰陽寮」

「落ち着いてくださいよ、ね？神宮寺さん」

横島が落ち着いてくれと言わなければ私は勿論、シズクと清姫がぶちぎれていた可能性だって十分ある。

「なんでどこの陰陽寮の派出所も助兵衛爺しかいない訳？」

「……凍らせたが問題なからう」

「髪を燃やしてやりましたわ♪」

私は自分の美貌に絶対の自信がある、相手に劣情を向けられた事も1度や2度ではない、だがあそこまで堂々と人の身体を嘗め回すように見て下卑た笑みを浮かべる連中は始めて見た。あれで一応陰陽寮所属のれっきとした職員だというのだから驚きだ。

「あれで一応国から認められてる霊能組織なんだよな？」

「認めたくは無いけどね、と言うかここまで腐敗しきつてるとか思ってたなかったわ」

勿論それを私達が許す訳も無く、そう言う馬鹿を叩きのめして、調査報告を奪い取ってきた。道中で障害だ何だのと騒いでいたがシズクと清姫が名乗ったら血の気を引いた顔をして土下座を始めたのだ。

「あのさ、シズクと清姫ちゃん。平安時代で何をしたの？」

「……知らない方がいい」

「横島様を知るべき事ではないですわ♪」

デストロイヤーコンビの平安時代でのおお暴れっぷりは現在にも伝わっていて、竜気を開放し名前を名乗ればそれだけで陰陽寮の連中は顔を青褪めさせて自分がどんな事をしたのかを知り、呪わないでくださいと土下座を始める。平安時代で何をしたことやら、まあそのお陰で今回は無事に切り抜けることが出来たので何も言うつもりはな いですけどこの時代にもシズクと清姫と言う竜神に対する恐怖が伝わっているということはそれはそれは凄い暴れようだったのだと容易に想像できる。

「それでせんせー、どうするでござるか？」

「そうだな、木の枝を投げて傾いた方に向かうって言うのはどうだ？」

「あ。それなら拙者の刀を使うでござるよ」

「二「勝手に動き回るなッ!!」」

「はひいッ!!」

横島を自由にすると確実に問題が起きるので、勝手に動き回るなど怒鳴る。全くの偶然だが、私と蛭とタマモとシズクの声が重なったので怯えた表情をする横島とシロに内心溜め息を吐く、横島ならば神隠しの元を見つけそうだが、その前に横島が神隠しにあう様にしか思えないのでとにかく動き回らせる訳には行かない。

「と、とりあえず。この名前だけの調査報告でも使えないことはないと思うの」

「そうですね。直接尋ねて行くと言うのもありでしょう」

あの無能な陰陽寮の人間では面倒ごとになると判断して、まともに調書をとっていない可能性もある。陰陽寮の派出所から奪い取った被害者名簿を頼りに歩き回るのもありだとは思う。

「せんせー、牛若丸帰って来ないでござるな」

「天狗の所に行くとか行ってからな」

「古い友達に会って話が進んでいるんじゃないか？」  
……本当に横島達はのんびりとしていると言うか……力が抜けますわね。でも緊張している力が緩むので、そう悪い物ではないと思う。

「……今の所それらしい気配も無い」

「匂いもね。つまりこちら辺で神隠しは起きていないと思うわ」

一番最近の神隠しにあった被害者が見つかった十字路ではそれらしい気配は無しですか……京都市内で転々としているのでやはり妖怪か神が動き回っていると見て間違いないですわね。

「古い神の知り合いとかはいますか？」

「……いるにはいるが、私達がいれば挨拶に来ると思うぞ」

「ですね、なんで燃やされる訳には行かないですから命乞いに来るはずですわ」



……こいつら本当に平安時代になにをしたのだろうか？だが平安時代の暴れっぷりを知っていれば命乞いに来るというのも事実だろう。つまり、神隠しを起こしているのは少なくとも平安時代の妖怪や神ではないと言いう事になりますわね。

「しまった!? 囲まれたッ!? チビ達何をしたんだ!？」

「みむー……」

「ぴぎいー……」

【ノブウ】

【やべえっ！笑える、何これ!? 何処から来たんじゃ!】

「……まだ増えてるでござるよお」

地図と資料を見ていると横島達が騒いでいるのでそちらに視線を向けて絶句した。どこからやってきたのかと言うレベルで横島が鹿に囲まれていた、鹿公園も近くはないのに一体何処から……。

「……くえす、私の気のせいかしら？ 今空から鹿が降りてきたわ」

「気のせいではないですわね」

「……神鹿だな」

空を駆けてきた雪のように白い牡鹿と子鹿が鹿の群れを突っ切つて横島のほうへ向かう。

【キュウ♪】

「なにこれ、可愛い」

白い子鹿が横島に擦り寄り、横島はそんな子鹿の前にしゃがみこんで頭を撫で回している。見ていると穏やかになる光景だが、これは何としても防がなければならぬ事態だ。

【キューー! キュウキューー!】

子鹿を横島に押し付けようとしている牡鹿を見て、私と螢が同時にシズクと清姫に追い返すように頼んだのは言うまでも無い……。

「可愛かったのになー」

「せんせーは動物に好かれるでござるからな!」

【いや、アレは動物ではなく神魔なのだが……いや、まあ別に良いが】

普通に生きていたら神の赤子を預けられるとか絶対にありえない、だが横島だからそれはありえない話ではない。

「あれ、高島様が世話をしていた神鹿ですわね」

「……そうだな、まだ生きていたんだな」

「きつと自分が高島様に育ててもらったので自分の子供を横島様に預けに来たのですね」

「……育てる環境があれば良い使い魔になったんだが、勿体無い事をした」

「……横島の前世は一体どれだけの人外と繋がりがあったのか不思議で仕方ない。と言うか、育てる環境があれば引き取る気満々だったシズクに私は驚愕した。」

「……あんまり覚えてないけど、私も昔会ってた気がするのよね」

笑えない話だ、九尾の狐と縁があるだけでも驚きなのに前世だけではなく、今世までとかがありえない話だ。

「とりあえず金閣寺に向かってみましょうか、その近くの住職の目の前で人が消えたというので詳しい話を聞けると思いますわ」

「そうね、美神さん達が合流するまでにある程度の情報は集めておきたいしね。横島、移動するわよー」

蛍の呼びかけに返事を返す横島をみていると本当に思う、横島は人間ではあるがその本質は人間とは程遠い。妖怪や神魔と心を通わせるその才能、横島は人間と人外の架け橋とでもいうべき人間なのかもしれない。

(今の時代では必要ないものですけどね)

時代が時代ならば横島はもっと重要視されただろうと思いつつ、金閣寺への道をゆつくりと歩く。車を借りても良かったが、神隠しなどの情報を集める為にはやはり歩き回る事が大事だ。

「それにしても凄い物騒な話だったよな」

「山奥の研究施設ね、正直何をやってるのよって話よね」

「……馬鹿だから仕方ないんだよ、馬鹿だからな」

「馬鹿は死んでも治りませんもの、あ、もう死んでますわね。きつと死んでもなおらないのでしょうかね」

美神達は陰陽寮の馬鹿の暴走で虐殺が起きてその調査に行っている。美神達が合流する前にはある程度の情報を集めておきたいと

思いながら金閣寺が見えてきた時——唐突にそれは起きた。

「ふえッ!？」

横島の間抜けな声が聞こえ、それから遅れてすぐに横島を見ていてくれと頼んでいたシロと信長の悲鳴が周囲に響いた。

「せんせー!?!せんせーが消えたでござる!?!」

【嘘だろッ!?!目の前にいたんじゃよ!?!】

シロと信長の驚愕の声に振り返ると、2人の間にいた横島の姿は無く横島の手になっていた鹿せんべいだけが2人の間に残されていた。

「タマモ! 気配は無かったの!?!」

「何にもしなかったわよッ!どこから!?!いや、どうやって!?!」

「……私の結界もすり抜けただと……!?!」

「何の気配も匂いもしない……。横島様がいなくなった」

混乱するシズクや清姫の声、私達に囲まれている状況で横島は誰の目にも触れず、そして何の痕跡も残さずその姿を消したのだった……。

く 琉璃視点く

蛍ちゃんから連絡があつてすぐ金閣寺に向かった。そこでは蛍ちゃんやくえす達が捜査用の器具を使って必死に横島君の痕跡を探していた。

「遅れてごめん、何があつたか教えてくれる?」

まずは状況を把握するべきだと思い蛍ちゃん達にそう声を掛けた。連絡があつてから1時間ほど、つまり1時間は痕跡を探していた事になるが——その表情を見れば手がかりらしい物が無いのは判っている。

「琉璃さん……はい。金閣寺の近くの寺の住職が目の前で神隠しがあつたというので、そちらに向かっている道中に突然私達の真ん中で横島が姿を消したんです」

「……結界は張っていたが、それもすり抜けた」

シロとノツブがしっかりと護衛をしていたのに、その間をすり抜け

て横島君とチビ達だけが姿を消したと言う。残っていたのは横島君が持っていた鹿せんべいだけ……これは正直私達の目算が甘かったかもしれない。シロとノツブが護衛をして、シズクの結界があれば安全だと思っていた私達の失敗だ。

(だけど、残しておく訳にも行かなかった)

高島の屋敷に横島君を残せば何をきっかけにして前世の記憶に取り込まれるか判らなかつた。だから連れて歩くしかなかったのだが、まさかこれだけの霊能者、そして神魔の警護をすり抜けて横島君だけを攫う能力を持つなんて想像もしていなかつた。

【言っておくが油断はしていなかつた。目を光らせて、周囲の灵力の流れにも注意をしていた。それなのに一瞬の内に横島の姿は消えた】唇を噛み締めながらノツブが吐き捨てるように言った。それは近くにあったのに、みすみす横島君を神隠しに会わせてしまった事に対する怒りと自分への情けなさが表に出た言葉だろう。

「ワフウ……」

「クウ！コンッ！」

シロとタマモは動物の姿で横島君の匂いの痕跡を探しているが、シロが見つからないと言ったのをタマモが叱責している。2人の嗅覚が便りの綱である、横島君の灵力の匂いを見つけてくれれば横島君を見つけれられる可能性がでくるのだから

「清姫は？」

「横島を探しに行きました。どっちにせよ、あの人は私達の言う事は聞きませんし、無理に留めておく方が危険だと判断しました」

清姫の危険性は全員が把握している。正直自由にさせるのは不安だが、無理に留めておいて焼き払うという選択を取られては困る。そう考えれば、蛍ちゃんの判断は決して間違いではない。

「痕跡がまるでないですね、隠密に特化した妖怪か、それとも……」

「言いたい事は判るわ、小竜姫様」

口ごもった小竜姫様。可能性の段階だが、横島君を攫ったのは人造妖怪の可能性がある。半径1キロの範囲ではあるし、神隠しで死亡者がいないのは灵力を吸収して力を蓄え、人間を殺すことで自分の痕跡

を残さないようにしていると考えれば一応の辻褄は合う。

「何か知っているんですの？」

「犯人かもしれないってだけよ、とりあえず1度住職さんの所に行きましよう」

完全にくえすの目から光が消えている。あの暗く澱んだ目を見てよく返事を返せると美神さんには正直驚く、私も覚悟をしていれば平気だけど突発的に見ると悲鳴をあげてしまいそうになる。

「……ちっ、判りましたわ。このままここにいても何の手掛かりはありませんから」

「そう言うこと、1時間探しても無いってことは痕跡は残っていないわ。なら次は何処に現れるか、そこを突き止めるほうが有意義よ」

少なくとも神隠しに合った人間は2日の間に元いた場所から遠く離れた場所か、人通りの多い場所に衰弱しきった被害者が発見されるというのがいつものパターンだ。楽観視は出来ないが、横島君も見つかる可能性は十分にある。

「まずは目撃者に話を聞くのが一番よ、もしかするとそれを手掛かりに見つけられるかもしれないからね。蛍ちゃん！タマモ、シロ！行くわよ！」

美神さんが蛍ちゃん達に声を掛け、私達は金閣寺に向かって移動を始めた。だけど、その道中で聞きすてならない話を聞いてしまった。

「え？神鹿？」

「……京都の神の使いですね。私も知ってます」

「……その神の使いだけだな。高島が一時期面倒を見ていた、その神鹿が自分の子供を横島に預けに来た。一度は帰って貰ったが……あいつなら見つけられるかもしれない」

「それ苦渋の決断過ぎるんだけど」

「……流石に2匹目の神獣はそう簡単に使い魔として認めるのは……」

横島君を見つけれられる可能性はあるが、その為に乙事主に続いて2匹目の神獣を抱え込むのは少しと言うかなり問題がある。

「それに育てれる環境がないと思うんですよ」

「そこよね。だって鹿だし」

「鹿ですしね」

いくらなんでも東京で鹿の面倒を見るのは無理があり過ぎる、だけど横島君を発見出来るかもしれない方法の一つでもある。

「最終的にどうしようもなくなったら、シズク。頼むわ」

「……判った、面倒を見れる土地が用意出来るまでは待つように私が説得しよう」

出来れば頼みたくは無いけど、最終手段として神鹿に横島君を見つけてくれるように頼むと言う事を私達は決めるのだった……。

く???視点く

やってしまった。近くに怖い人が沢山いたけど、私の近くに来たのでお兄さんを隠してしまった。今は一緒にいた猪達ときよときよととあたりを見回している。

(遊んでくれるかな……怖がらないかな)

あれだけ沢山の妖怪と一緒にだから私も怖がらないでくれるかな？

そんな沢山の不安と期待を抱いてお兄さんの前に立った。

「こんにちわ」

「ん、ああ、こんにちわ」

そこで沈黙、普通の人だったら私が閉じ込めたのかとか、化け物と怒鳴るけどお兄さんは小さな生き物を撫でたりしてじっと私を見つめている。

「あのさ、君も神隠しにあったの？」

「え、えーつと違うかな？」

私がこの世界の主とは言わず、お兄さんに首を傾げると頭に巻いている布から目が浮かび上がった。

【横島、この少女が神隠しの犯人だぞ？】

「んーそれはなんとなく判るけどさ、見てみるよ。悪い事とかしそうに無いじゃないか。なら話し合えると俺は思う」

【……お前の考えが最近わからないよ、でもまあ敵意は無いな】

お兄さんが私が神隠しの犯人と判つていても、警戒する素振りも攻撃する素振りも見せなかった。だから私はこの人なら大丈夫と思つた。

「あのね、私寂しいの、だから遊んでくれる?」

「よし!遊ぼう!何して遊ぼう」

【お前な?少し考えろ】

即座に遊ぼうと言つてくれたお兄さんに一瞬困惑する。お兄さんは不思議そうに首を傾げて、遊ばないの?と尋ねて来る。

「う、うん!遊んでくれるの?」

「おう、だけど遊び終わったら外に出してくれる?」

「うん!約束する!遊ぼう」

「おう、遊ぼう!あ、俺は横島。んで、チビとうりぼーとチビノブ」

「みむー♪」

「ぷぎー♪」

【ノー♪】

お兄さんの回りで小さな動物達が楽しそうに鳴き声をあげる。お兄さんだけではなく、動物達も一緒に遊んでくれると言っているのが判る。

「私はね……えっと、その」

「名前が無いの?」

「うん、私はずっと1人でここにいたから」

だから私は自分の名前を知らない、それに自分が妖怪なのか、神魔なのか、それとも人間なのかも判らないのだ。でも特別な力があるから、人間ではないのかもしれないけど……。

「じゃあ綺麗な紫の服を着てるから紫ちゃん!」

「紫……うん、私は紫!」

【……だから簡単に名前を……いや、もう良い。好きにすればいいよ】

紫……私の名前、お兄さんがくれた私の名前。それが嬉しい、遊んでくれるだけじゃなくて名前までくれるなんてお兄さんは本当に優しい人だ。

「よっしやー!紫ちゃん遊ぶぞー!」

「うん！遊ぶー♪お兄さんと皆と一緒に遊ぶー♪」

初めて遊んでくれる人を見つけて、私は嬉しくて嬉しくてチビ達と一緒にお兄さんの周りを踊りながら、お兄さんがどんな風に遊んでくれるのかを楽しみにするのだった……。

「あ、でも遊び道具無いな……どうしようっ？」

「それならえい！」

お兄さんの前に小さな隙間を作って外を見えるようにする。

「これで要る道具を外から中に入れればいいよ」

「紫ちゃん凄いな！」

「えへへー♪私凄いな？」

「凄い凄い！よっし！これで遊び道具を探そうー」

「おーっ!!」

美神達が必死に自分を探しているかもと言う事は考えていた横島だが、紫に悪意が無く、純粹に寂しいと感じている事を横島は感じ取り、彼女を退治するよりも、言葉と行動で彼女の事を知ろうとした。横島もまた、自分に出来る戦いを始めているのだった……。

リポート30 陰陽寮 その4へ続く



## その4

レポート30 陰陽寮 その4

くくえす視点く

横島が姿を消した。それは私を含めて全員の焦燥感を煽っていたが、闇雲に探しても見つける事が出来ない。まずは情報収集をするべきだという美神の言葉に私達は金閣寺の近くの神社の住職の元を訪れていた。

「神隠しの事ですか。陰陽寮の方にはお話ししましたが、望まれるのならばまたお話ししましょう」

住職は人のいい笑みで笑い、神隠しの件についての話を始めてくれた。住職が目撃したのは1週間前の事で目が多数浮かぶ漆黒の穴に人が飲み込まれる姿を見たらしい、慌ててその穴に向かったがその穴はあつという間に消え、飲み込まれた参拝客は3日後に同じ場所に倒れていたらしい。

「霊力の方は感じましたか？」

「そうですね、私はさほど優れた霊能者ではないのですが……足が竦むほどの凄まじい霊力でした。それにその一上手く言えませんが、お祈りをしている間に感じる空気も感じましたね」

お祈り……つまり神通力を持つ相手であり、霊力と妖力も持ち合わせている。美神と琉璃に視線を向けると2人も小さく頷いた。確信はないが、可能性としてはやはり陰陽寮の一部が計画していた人造妖怪……いえ、神通力を持つているなら人造神魔とでも言うべき存在が神隠しの主犯なのだろう。これ以上被害がでる前に、何としても退治する必要がある。

「幼子の泣き声を聞きました。きつと寂しくて、悲しくて泣いているのでしょうか。どうか迷える魂をお救いください。私には、その力がありませんので」

住職の言葉に私達は返事を返す事が出来ず、話を聞かせてくれたことに感謝し寺を後にした。車に乗り込み、次の目的地を考えながら、住職から聞いた話を整理する。

「幼い子供の泣き声……もしかすると人型の妖怪なのかもしれないですね」

「となると、完全体って事になるんじゃないかしら？もしくは人の声を模範しているか……可能性としては8―2だと思うけど」

人造妖怪を作成していたアジトの周辺には異形の妖怪の姿があったと聞いた。そう考えれば人間の声を真似して油断を誘っていると言う可能性が強い、可能性は窮めて低い人型になり人間のような感情を持っていると言う可能性もあるが、それは限りなく低い可能性だろう。

「いや、私は人型の可能性が凄く濃いと思うけど？」

「拙者もでござるな」

【ワシも、と言うか断言できる。絶対子供じゃよ、しかも女の子】

「……私もそう思う。泣いていたって事は寂しいって事だろう？横島に構ってもらおうとしているに違いない」

私達はそう思っていたのだけど、タマモ達が確信めいた口調でそう告げた。

「何か理由は？」

蛍が引き攣った顔で理由はあるの？と尋ねる。それが一考する価値があれば、人型と言う事で考えてもいいかもしれないですわね。

「いや、アリスとか天竜姫の事を考えるとねえ？絶対子供よ」

「せんせーを攫う人外とか遊んで欲しいに決まってるでござる。そもそも拙者がせんせーに遊んで欲しいでござるからな」

【横島は人外ホイホイだからの】

「……横島は子供に好かれる、そして人外にも好かれる。これはもう2倍特攻っていう奴だろう？」

それは余りにも抽象的な言葉で何を馬鹿なと思ったのですが、私だけではなく全員が神妙な顔をしていた。ありえなくはないと思ってしまうから……。

「どうしよう、もう横島君を攫った相手がお子にしか思えなくなってます」

「私もよ、なんでかしらね……」

「理由は無いんですけど凄く説得力がありますよね」

「私もそう思うんですけど……不思議ですけど」

相手が子供でも動物の姿だったとしても横島を隠した相手は幼いという印象が脳裏に焼き付いてしまった。

「今戻りました。天狗殿達なのですが、大天狗殿の娘が行方不明らしく見つければどんな事でも協力してくれるそうです……所で主殿は何処ですか？」

「……ううう、横島様の気配が何処にもないんです……一瞬、本当に一瞬間で横島様の気配を感じたのに……」

戻って来た牛若丸が天狗からの協力を得れる条件を教えてくださいました。教えてくれましたけど……いつの間にか車の中にいて泣き崩れている清姫がかなり気になることを言っていますが、今はそれ所ではなかった。天狗と人造神魔と横島の事で頭の中が一杯だった。

「どうしましょう美神さん、もう天狗の娘と横島と一緒にいる姿しか想像できません」

「言わないで、私もそう思ってるから」

「……横島君と人外が存在ってやっぱり切っても切れないんですよ」

「本当ですよね。早く横島さんを見つければ良いんですけど……」

「……とりあえず、清姫。横島の気配があったっていう公園に案内してくれ」

「……判ってますわ。まずは手がかりですものね……」

とりあえず一番最初の手がかりは何とか入手出来たのですが、横島が何か別の問題を起こしているような気がして私達は頭を抱えざるを得ないのだった。

く横島視点く

美神達が横島の捜索を行っている頃。異界で紫と共にいる横島はと言うと……。

「それ！」

「ぶーぎゅー♪」

「おーッ♪」

紫と公園に落ちていたフリスビーやボールを回収し、それを使ってうりぼーと共に芸を行っていた。今も横島が投げたフリスビーを横島の背中を駆け上がったうりぼーがジャンプして空中で加えて着地した所だ。

「凄い凄い！ねね！凄いよね！」

「う、うん。凄い」

導師服に身を包んだ紫と並んで座るのは黒い翼を持つ幼い少女。公園で遊具を回収している時に見つけた天狗の女の子も一緒に連れてきて横島は2人と遊んでいたのだ。

「紫ちゃんと天ちゃんもやってみる？」

やるーつと両手を上げて立ち上がった2人に苦笑し、うりぼーが加えていたフリスビーを受け取る。

「うりぼーはキャッチが上手だから上手くしてくれるけど、力任せに投げたら駄目だからな？優しくうりぼーの事を考えて投げてやって欲しい」

「はーい♪」

元気良く返事を返す2人の頭を撫でてフリスビーを渡す。すると紫ちゃんの方が年上なのか、天ちゃんに譲っている姿がありそんな姿を見たからか、微笑ましい気持ちになる。

「優しくな。こうもって、手首の力で軽く投げる」

「は、はい、えつとこうかな？こうかな？」

2〜3度素振りをした天ちゃんがフリスビーを手に取り、うりぼーとその隣でぶんぶん手を振っているチビノブ目掛けてフリスビーを投げる。

「のーぶーッ!!」

うりぼーでは届かない高さだったのでチビノブがジャンプしてフリスビーを受け止める。

「あう、失敗です」

「大丈夫大丈夫、最初から上手くは出来ないよ」

フリスビーって投げるだけなら簡単なんだけど狙った所に投げるのは難しいんだよな。チビノブが俺目掛けて投げてきたフリスビーを受け取り、今度は紫ちゃんに手渡す。

「うりぼー行くよー！えいっ！」

気合満点だった紫ちゃんだが気合を入れすぎてから回ったのか、フリスビーは地面に叩きつけられ小さく跳ね、ころころと転がって行った。

「ぶぎ」

うりぼーがゆつくりとフリスビーの元へ歩き、加えて紫ちゃんのもとに戻って来た。んだけど、紫ちゃんは酷く複雑そうな表情をしながらそれを受け取るのだった。

「ボールにする？」

「もつかいやってみる！」

「私も！」

子供にはフリスビーは難しかったかなと思ひ、ボールにする？と尋ねるが2人の気持ちはまだ折れていないのか、フリスビーを投げると言うので2人の好きにさせる。

「ノーブ、ノーノーブーブウー！」

「うんうん、えつとこう？」

「ノブノブ、ノーノーブー」

「こう？」

「ノーツブ」

……あの2人もチビノブと話を出来るんだな。妖怪？それとも精霊かは判らないけど、チビノブと意思疎通が出来るのは凄いと素直にそう思う。

【横島。美神達が探しているのはわかっているな？】

「絶対探してくれていると思うよ」

この目玉だらけの漆黒の世界は不気味ではあるけど害は無い。紫ちゃんが満足するまで遊んであげて、その後以外に出してくれるか、それとも一緒に外に行かないかと交渉してみるつもりである。

「みーむ、みみーむう」

「チビもそっちの方が良いと思うよな？」

「みつむう♪」

話してみても、遊んでみて判った。やっぱり彼女は普通の子供なのだ、そりやまあ特別な力を持っているかもしれないけど普通の幼い女の子なのだ。話せば判るし、遊んであげれば喜ぶそんな普通の子だ。でもこんな所にいればそれこそ本当に妖怪や化け物になってしまいかもしれない、俺としてはそれを認めることは出来ない。

【小竜姫様がいてくれて良かったな、相談出来ると思うぞ】

「俺が引き取れば良いんだけどな」

【無茶を言うな、男子高校生が7歳くらいの女の子の面倒を見れると思うか？】

「やっぱり厳しいよなあ」

シロでも中学校くらいで自分の事は自分で出来るし、タマモも同じだ。だけど幼い紫ちゃんの面倒を見るのは俺の家では無理があると言うのは判りきっている。

【小竜姫様に相談して、力をコントロール出来るようにしてやれば何時でも遊びに来るさ】

「やっぱりそうなるよなあ」

紫ちゃんが妖怪なのか、精霊なのか、神魔なのかは判らない。けど力をコントロールする術を学ぶ必要は判っている、だって俺もそうだしな……力って言うのはあっても決して幸せとは限らないって言うのを身を持って知った気分だ。

「今度はボール！ボールで遊ぶー！」

「円盤は難しい」

フリスビーに悪戦苦闘していた紫ちゃん達だが、ついにギブアップしボールで遊ぶというので俺はゆっくりと立ち上がりボールを抱えあげる。

「よっし、じゃあボールで遊ぼうな」

俺の言葉にきゃっきゃっと楽しそうにはしゃぐ紫ちゃん達を見て改めて思う。確かに彼女たちは人間ではないかもしれない、けど決して敵ではない泣いて笑って、言葉を交わして人と変わらないのだ。

だからきつと分かり合える、仲良くなれる。だから俺の夢の人と人なざる者も手を取り合える未来はきつと訪れる——俺は心から思うのだった。

く躑躅院視点く

人造妖魔の拠点の捜査を西条と行っていると横島が神隠しにあったという報告が西条に入った。そうなればこの拠点の調査にばかり気をとられているわけには行かないと、私と西条は1度この拠点の捜索を部下達に任せ車に乗り込んだ。

「横島君はそんなにも人外に関係性が深いのかな？」

「横島君が歩けばまず人外に出会うと見て間違いないですよ。しかし、参ったな……京都で多発している神隠しならまだいいんだが」

京都で多発している神隠し、これも捜査こそされているが有力な手がかりは無い。ただ被害者はいても死傷者がいないから多めに見ていたが、それがあだになった形になってしまった。

「京都の結界が破壊された痕跡はないですよ？」

「相手は最上級神魔だよ？人間の常識は通用しない」

京都にグループ一派が侵入していると思いたくないが、全く持って西条の言う通りである。

「……天狗に頼んでみますか？」

「それも無理だ、なんでも天狗の長の娘が行方不明だそうだからね。牛若丸がもう頼みに行ったそうだよ、結果は娘を見つけてくれれば手伝ってくれるという話になっている」

京都近辺に陣取っている天狗の助力も得れないか、なんとも面倒な話になってきたものだ。

「人狼や妖狐は駄目だったんですか？」

「匂いが無いそうだからね、匂いさえ残っていればどうにでもなるのだけど……」

なんとも世知辛い、横島君の周りには横島君を守ってくれる存在が沢山いるが、その感知をすり抜けるとは素直に賞賛するべきだろう。

「それでどうするつもりなんですか？」

「とりあえず、清姫様が横島君の気配を感じたといっている公園に向かってみようと思うよ。それで躑躅院君はどうする？」

陰陽寮で降りるといふ選択肢も私にはある。だが折角馬鹿が暴走して私も被害者と言う流れになり、警戒心が緩まっているのだ。ここで一気に仲間内に入り込む方が得策だと思う。

「横島君を招待したのは私ですからね。見つけるまでお付き合いします」

「すまないね、よろしく頼むよ」

オカルトGメンの西条とGS協会の神代琉璃。陰陽寮を廃寮にするにしろ、正式にオカルトGメンかGS協会の傘下に入るにしろ2人への橋渡しは大事だし、何よりも印象を良くする為の行動はしておくべきだろうと判断し、横島君を見つけたらまで同行することにする。

「ここで横島様の気配を感じたのですわ」

「……確かに少しだけ気配が残っているな」

公園では清姫様とシズク様が搜索を行っていた。近くには美神達もいて、見鬼君等で痕跡を探している。

「ちよつと匂いがするでござるなあ」

「うりぼーとチビの匂いもするからこの近くだとは思うんだけど……」

見た所それらしい物はないが、横島君の気配がこの公園に残っているらしい。考えられるのは1つ、この公園のどこかに異界があり、その中に横島君がいると言ふ可能性だろう。

「令子ちゃん、何か見つかったかな？」

「西条さん、ううん。匂いと痕跡は僅かにあるらしいんだけど……目に見えるそれらしい物は無いのよね」

「霊視ゴーグルでも駄目ですね。うーん、本当に横島の気配があるのかしら」

霊視ゴーグルや見鬼君は悪霊や霊的存在の発見には適しているが、異界などを見つけたるには適していない。痕跡は見つけられても、横島君本人を見つけたるのには難しいだろう。



「躑躅院も着てくれたんだ」

「招待したのは私ですからね、搜索を手伝うのは当然ですよ」

琉璃の目にはまだ若干の警戒の色がある。だがそれで当然なのでそれに対して眉を顰める事はしない。

「部下に恵まれてないのね、私も人の事言えないけど」

「だから解体するんですよ、判るでしょう？」

正直な話GS協会の方が良い人材が揃っていると心から思う、なんせ寝首を掻こうとする相手がいないってだけで十分いい部下だと思う。

「異界だと思うのですがどうですか？」

「……空間を切り裂いて見ましようか？」

「すいません、ちよつとそう言うのは止めてくれないでしょうか？」

神魔の力を全力で振るえば空間くらい切り裂けると思うが、その後の事を考えて小竜姫様を止めに入る。だが、抜き放った神刀を鞘に納める気配が無い。

「横島さんを早く見つけるべきだと思うんです。京都には结界があるから大丈夫では？」

「あのそれとこれはとは話が別なのですが？」

空間を切り裂いてそこから悪霊とか妖怪が溢れ出たらどうするつもりですか？と逆に問いかけるが小竜姫様はそれでも剣を収める気配がない、その事に背中に冷や汗が流れた。

「では魔法でこじ開けましょう」

「お願いですから空間を破壊するっていう方向から離れてくれないですか？」

横島君に対する対応が余りにも過激すぎる。神魔であれ、女性なのだから恋をすることはあるだろう。だがその恋が空回りしているような気がしてならない。

（おかしいな。私はこういうキャラじゃないはずなんだが……）

なんか横島君達が来てから突込みとかストッパーばかりをやっている気がする、そんなの私のキャラじゃないのに……。

【むむむ、本当に主殿の気配があるんですか？】

「あるって言ってるじゃん？だから探し……ぐぶおうツ!?」「ノツプちゃん!?どうしよう、思いつきり踏んづけちゃった……」

信長の苦悶の声と動揺しきった青年の声、振り返ると紫の導師服の幼女と天狗の少女を背中に背負っている横島君が信長を踏んづけていた。横島君を呼ぶ声があちこちから聞こえる、予定通りではないが横島君が戻って来た。それだけで今はよしとしよう……。

（天狗の娘に神通力を持つ子供……か、私の手柄ではないが、まあ良いだろう）

京都を騒がしていた神隠し事件の主犯も見つかり万々歳、これが今回の横島君の神隠しの落とし所では妥当な所だと思う。

「美神さん、えっと天狗の天魔ちゃんと、良く判らない妖怪？神様の赤ちゃん？良く判らないですけど、紫ちゃんです」

「天魔です、よろしくですー」

「紫ですわ、よろしくお願いしますね」

のほほんと笑いながら2人を紹介する横島君。その姿に動揺や、恐れなどは無く、横島君が人外に好かれるのはその凶太い精神なのではないかと思いつながら、横島君のほうに足を向ける。今回の件はこれで解決、神隠しの件でたばたしているから滞在期間を延長させて……（まだまだやれる事はあるな）

京都に在る間に警戒するべき存在から、ある程度の信頼は勝ち取っておく必要がある。そうでなければ、態々横島君達を京都に招待した意味がない、紫と言う少女に険しい視線を向けている小竜姫様とそんな紫を庇う素振りを見せている横島君。

「小竜姫様、そのような視線を向ければ彼女が怖がってしまうでしょう？まずは話を聞くべきではないですか？」

「……そうですね、すいません。怖がらせてしまいましたね」

横島君の後ろに隠れて、その服を握っている紫からの視線と庇ってくれたという安堵の表情をしている横島君。今一番信用を勝ち取りたい相手からの安堵した表情に笑みを浮かべる。

「彼女は人を殺している訳でもない、何もそんなに警戒する必要はないでしょう？」

「躑躅院さん」

「大丈夫だよ、私は君の味方だよ」

私は君の味方だとも、私に君が必要な限り……はね。表面上は笑みを浮かべ、内心は冷酷なまでに横島を品定めする。君の価値は君が思っている以上に大きい、だからどうか私に君を見限らせないで欲しい。いつまでも私にとって利用出来る存在であって欲しい。

(美弥の為にもね……)

私に取って横島君の価値は陰陽術にしかない、だが美弥にとってはそうではないのだから、私にとって何よりも大事な美弥に相応しい相手であることを私は心から望むだけなのだから……。

く小竜姫視点く

横島さんが無事に見つかったのは本当に嬉しい事だ、怪我も無い、洗脳された痕跡も無い。それだけで本当に心から安堵したのですが……目の前の光景を見ると些か複雑な気分になるのは何故でしょうか？

「はい、メロンパン。美味しいよ？」

「ありがとー」

「すーすー」

メロンパンを食べている天狗の少女と横島さんの膝の上で寝ている紫と言う少女の神魔を見ていると何とも言えない気持ちになる。

「みむふうみむふう」

「ぷーぎりゆうるうりうー」

【のーのー】

チビ達も遊び疲れたのか横島さんの側で寝ているその姿はとても微笑ましいのに、寝ている少女を見るともやっとする。この気持ちは一体何なのだろうか？

「天魔様、お帰りは……」

「まだ帰りませぬ、父様にそうお伝えください。判りましたね？」

「は、はい、判りました」

天魔ちゃんはすぐに迎えが来たのですが、きっぱりとした口調でそう追い返し横島さんに甘えている。

「つまり紫ちゃんは寂しくて遊んでくれる相手を探していただけと？」

「そうみたいです、フリスビーとかボールで遊んであげて、外に出たって言ったら簡単に出してくれましたよ。まあ、紫ちゃんも着いて来ましたけど」

でも元から連れて来るつもりだったので問題ありませんとはじめて笑顔の横島さんに頭痛を覚える。

「と、とりあえず討伐事案にはなっていないから退治する必要はないですわね」

「それはそうだけど……どうするのよ？」

横島さんに懐いているのは良いとしても相手は力をコントロールできない神魔、横島さんがそれを望もうとも、紫ちゃんがそれを望んでも私達はそれを認めることが出来ない。

【小竜姫様、天竜姫様のお友達にどうでしょう？】

「俺からもその線をお願いしたいですけど……」

天竜姫様には友達がいらない、そう言う面ではきつと横島さんと心眼の頼みは決して間違いではない。間違いではないのですが……

「それは私の一存では決めれないので、後で連絡を取ってみます」

「すいません、よろしくお願いします」

力をコントロールできない神魔を野ざらしには出来ない、こうして見つけた以上は保護するのが一番妥当だ。

「大丈夫なのですか？」

「大丈夫ではありませんよ？見た所天竜姫様と年齢も近いですし、竜神王様次第ですが」

天竜姫様の友達にするかどうかは竜神王様の決定次第だが、天界で保護するのは間違いない。

【横島ーワシを踏みつけるとか酷くない？】

「ごめんごめん、本事故だったんだよ」

【言葉だけかの？】

「東京に帰る前に京都のメロンパンを沢山買って帰ろう」

【なら許す！】

気の抜ける会話をしている横島さんと信長はいつも通りと言うことにしておいても、私達は私達で解決するべく問題が残ってしまった。通常の神魔ではない、やはり危惧していた通り人造神魔と言うべき存在だ。まだ京都でそういう開発が続いている可能性はゼロではない

「やっぱりすぐに東京に戻らず、もう少し調査を続けようか？」

「そのほうがいいですよ、やっぱり」

今回は自爆と言う形で終わりましたが、人造神魔や人造妖魔が実戦段階になりそれが日本で暴れるかもしれないとなれば、この近辺でそういう研究所がないか念入りに調査する必要がある。

「人造神魔とかを開発できる組織となると限られてきますしね」

「でもそうなくても一筋縄じゃ行かない相手よ」

政治家との癒着や検察とのやり取りなど、陰陽寮のお膝元で人造神魔計画などを進めていることを考えればやはり陰陽寮は既に抑止力として機能していないのだろう。躑躅院さんが1人で努力しても、1人では出来る限界がある。正直あんまり信用出来ない相手ですが、京都にいる間は協力するのと同じに躑躅院さんを見極めようと思う。

(味方として信用していいのかどうかを……)

神魔だけではない、人間が人造神魔などを製造している。恐らくだが、その知識を与えたのはガープだろう、同じ人間同士でさえも信用出来ないそんな状況になりつつあるのが今の日本だ。

(これもきつと計画の内なのですね)

隕石落としと大地震と続けて作戦を行ったガープだが、今は不気味なほど沈黙している。その不気味な沈黙がまた大きな事件を起こそうとしている予兆に思えて仕方ないのだった……。

## その5

レポート30 陰陽寮 その5

く 琉璃視点く

横島君の神隠し事件の次の日の早朝。高島の屋敷の広間ではなんと微笑ましい光景が広がっていた。

「んーんー♪」

「むにゅー」

鼻歌交じりで紫ちゃんの長い金髪に櫛を通して横島君。そしてそんな横島君の膝の上で目を細めて気持ち良さそうにしている紫ちゃん。見ているだけで思わず微笑んでしまう、そんな微笑ましい光景だ。

「ふぎゅ」

「みー」

「順番、判ってる」

【ノブノブ♪】

更にうりぼーやチビもその近くで行儀良く座ってブラシをしてもらうのを待っているのを見ると、その微笑まじさが倍になるのが本当に不思議だ。とは言え、いつまでも微笑んでいる余裕は無いので横島君におはようと声を掛け美神さん達の元へ向かう。

「おはようございます。少し寝過ぎしてしまいましたね」

「ううん、私達も起きたばかりだから、蛍ちゃん」

蛍ちゃんが差し出してくれた湯のみを受け取り、机の上に広げられた資料が見やすい位置に腰を下ろす。

「今日は壊滅した製造場にあった地図や資料を元に調査を行うつもりなんだけど……」

ちらりと西条さんが横島君達に視線を向けた。それだけで何を言いたいかと言うのは私だけではない、全員が理解していた。

「横島さんは残すべきだと思います」

「あの紫ちゃんの事も考えるとね、横島君は屋敷に残すべきだ」

高島の屋敷で記憶の混濁が見られる。今は安定しているが、何かの

きっかけで再び記憶が表に出てくるかもしれない、可能性としては戦いの中で起きる可能性が高いと思う。高島は陰陽師だった、つまり戦いの中こそが彼の記憶をより刺激する事になるだろう。

「……もしも生き残りがいて、紫を操作されると困るといいうのもあるな？」

「はい、彼女は人造神魔ですから。詳しい所はヒヤクメに見てもらおう必要がありますが……リスクは避けるべきでしょう」

横島君のそばでにこにここと笑ってる紫ちゃんは幼女にしか見えな  
いが、空間に穴を開けて自由自在に移動する能力を持っている。恐らく調整してその能力を与えられたと思われるから、そんな紫ちゃんを敵の拠点かもしれない所に連れて行くのは余りにリスクが大きすぎる。

「誰が残りますか？」

「理想的なのはシズクか清姫のどちらかと、くえすか蛸ちゃんだけど、私としては2人には付いてきて欲しいわね」

黒魔術のエキスパートのくえすと幻術と幻術破りのエキスパートの蛸ちゃん。そのどちらも今回の調査では必要になる能力だ、横島君の護衛に残しておきたくはあるが、それと同じ位同行して貰いたい。

「僕は清姫とシズクの2人に残って貰うべきだと思いますよ」

「その理由は？」

「京都の霊能者にとって2人は悪夢のような存在だからね、その場においてくれるだけで威圧を与えてくれる筈だよ」

平安京を焼き尽くした清姫と大蛇のシズクは確かに東京よりも京都で有名な竜神だ。西条さんの言う事も最もだと思う、となると清姫とシズクの2人を屋敷に残して、信長と牛若丸もいるから横島君の守りは鉄壁と言えるだろう。過激派が来たとしても、英霊2人、竜神2人を前に横島君に害を与える事が出来るとは思えない。

「悪いけど、タマモとシロも同行してくれるかしら？」

「……ま、良いわよ。私もやりたいことがあるし」

「止めるでござる、タマモはせんせーに害を与える連中を不能にする呪いを掛けると」

……それはそれで危険だとは思うけど、横島君を守ろうとする意志は感じられる。

「その呪いは駄目だから、でも幻術は許可するわよ？」

「OK、生きてるのが嫌になるくらいの悪夢を見せてあげるわ」

「……頼んだぞ、タマモ」

「私達の変わりに横島様に害を与える存在を消し去ってくださいね？」

握り拳をぶつけ合う3人、その姿は誓いを新たにしているように見えた。だけど、それは横島君を傷付けるすべてを排除するという余りにも物騒な誓いだ。

（横島君の警備が凄い）

下手に手を出せば殺される。広間で紫ちゃんと天魔ちゃんの前で歌いながらお手玉をしている横島君を見て、後ほんの少しでも良い自分の身を守ろうとする意思があれば良いのにと思わざるを得ないのだった……。

く横島視点く

人造妖魔の研究が京都で行われているのでその調査に行くと言う美神さん達を見送り、俺は言いつけられたとおり屋敷で紫ちゃんと天魔ちゃんの面倒を見ていた。

（紫ちゃんが……か）

天魔ちゃんは今の天狗の長の娘で、凄い妖力を持っている。そして紫ちゃんも人造妖魔、いや、人造神魔とも言える存在で凄い力を持っているので連れ回すのは危険と言う美神さんの言葉を思い出す。だけど、俺から見るととてもそうとは見えなかった。

「えい、えい、みゅーっ！」

「今度は私、えーい「みぎやあツ!!」ああ!?チビごめんねツ!!大丈夫」

お手玉に失敗して口を×マークにしている幼い女の子と、気合を入れすぎてお手玉を高く投げてしまいチビを迎撃してしまい慌てている外見相応の少女にしか見えないのだ。



「チビ大丈夫か？」

「み、みむう……」

よほど当たり所が悪かったのか苦しそうなチビを頭の上に乗せる。

「ご、ごめんなさい」

「大丈夫だよ、チビも俺も怒ってないから」

ちよつと油断していただけたらう、普段のチビならば軽くかわしていただろうから。多分ここまで飛んでくる事は無いと思っていたのだと思う。

「そんなに力いっぱい投げなくて良いんだよ。軽く、これくらいの感じ」

紫ちゃんと天魔ちゃんの前に座って、軽い力でお手玉を投げて見せる。高く投げないと落ちてしまうと思うのが失敗の理由だ。

「はいはいはいはい」と

「おおーッ!!」

ぱちぱちと2人の拍手の音が響いて、なんだか気恥ずかしい気持ちになる。

「まあこんな感じで軽くやってもいいし、こうやって2人で並んでつと」

紫ちゃんに右手のお手玉を投げてもらい、俺は左手のお手玉を紫ちゃんに軽く投げ渡す。

「こうやって2人でやっても面白いだろう?」

「3人でも出来る?」

「出来るよ、順番を決めてやろうか」

3人で三角になるように座って順番にお手玉を投げ合う、時々落としてしまうけれど楽しそうに笑う姿を見ていると俺まで楽しい気持ちになる。

【主殿ー物置で鞠を見つけましたよ】

【蹴鞠やるぞーッ!!】

広間でお手玉で遊んでいると物置を捜索していたノツブちゃんと牛若丸が蹴鞠を頭の上に乗せて走ってくる。

【ノーブブウー】

そしてその後ろを籠を頭から被って走ってくるチビノブを見て、思わず噴出してしまった。

「じゃあ、今度は外で遊ぼうか？」

「遊ぶー♪」

「ぴぎいー♪」

家の中で遊ぶよりも外で遊ぶほうが好きなのか笑顔で返事をする2人。縁側においておいたスニーカーを履きながら何をして遊ぶか考える。

（籠があるから投げ入れて遊んでもいいかもしれないし、サッカーみたいにしても面白いかもな）

何はともあれ、2人が遊べる内容を考えないと思いつながら俺はうりぼーと紫ちやん達を連れて庭に出るのだった。

「……死ぬ、失せろ」

「ええ、本当に目障りです事」

そして楽しそうな庭での横島達と違い、玄関近くでは陰陽寮所属ではない陰陽師崩れの襲撃があったりしたのだが、清姫とシズクに追い返されていた。いや、半殺しにされていた。

「……愚か者は何時の時代も変わらないな」

「そうですね、全く私達がいるのに横島様に近づけさせる訳がないでしょうに」

穏やかな口調、そして普段の幼い少女の姿ではあるが完全に瞳孔が開き、竜気を全身に纏う2人にとって横島が逆鱗なのは明らかだ。それなのに僅かな希望を持って死地に飛び込んでくる愚か者に清姫とシズクは鼻を鳴らす。

【お手伝いしましょうか？】

「……牛若丸、横島は？」

「いえ、じゃんけんにかけてしまいました、人数的に混ざれないのでこちらのお手伝いをしようかと」

「それはいいですねえ、見せしめで首を刎ねましょうか！」

ひっと息を呑む襲撃者達。自分達はとんでもない所に来てしまったと悟ったようだが、それは余りにも遅かった。生きていたいのなら

ば、横島の陰陽術や妖使いの技術を奪おう何て分不相応な思いを抱かず、隠れていれば良かったのだ。

「……さて、知っているか？酷い凍傷になると……死ぬほど熱いんだぞ？」

「大丈夫ですよ、殺しはしません。殺しは……しませんよ……？」

目が全く笑っていない竜神2人と無言で抜刀する牛若丸。その殺意に満ちた顔に愚かにもこの屋敷を襲撃した者達は悲鳴を上げたのだった

「今変な声聞こえなかった？」

【気のせいじゃろ？と言うかうりぼーガードかてえッ!!】

「「ぶぎぶぎーん」」

「むむむ、えーいー!」

「てやーん」

【ノツバアッ!】

籠に蹴鞠を入れるという遊びをしていた横島達。横島は悲鳴が僅かに聞こえたようでノツブにそう尋ねていたがはぐらかされ、増えたうりぼー3匹とチビノブと言うディフェンス相手にどうやって蹴鞠を籠に投げ入れるのかと言う事に意識を向け始める。

(もうちよい結果を強くしておくかの)

そんな中ノツブは笑顔の中に鋭い獣のような光を宿し、横島に悟られないように结界札を使う。横島に人との戦いは早い、そう判断したノツブの優しさである同時に、狂笑とも取れる声を上げている清姫の声を横島に聞かせない為の配慮なのだった……。

く西条視点く

最初に壊滅していた人造妖魔プラント。それがどうも京都中に隠されているプラントの中で一番巨大だったらしく、他のはプラントとも呼べない小さな研究施設だった。

「己えー!躑躅院!貴様のせいであええッ!」

「これさえ成功すれば陰陽寮の発展は約束されたと言うのに!」

聞くに堪えない罵詈雑言を上げる研究者をどんどん拘束する。正直これは令子ちゃん達GSの仕事ではないが、相手が霊能者であると言うこと、そして横島君に害をなす可能性があると言う事で率先してくれている。

「躑躅院。もう判つていると思うが、陰陽寮の単独の霊能権は今回の事で完全に剥奪になる」

「しようがない事ですね、覚悟はしていました」

この研究施設で4件目、そのどれもが培養用の溶液と人間では用意出来ないであろう素材の山。これらは全て証拠として徴集するが、ここまで来てしまえば、国家反逆罪や霊能法違反を初めとした10以上の罪科が問われるだろう。

「一応貴方達には感謝していますよ」

「僕に出来るのはこれくらいだからね」

躑躅院をこの調査と強制執行に同行させる事で躑躅院を罪に問わせないと言うのが僕に出来るやつとだった。

「陰陽寮は解体後、GS協会、もしくは六道の傘下になることになるだろう」

「言われなくても大丈夫ですよ、ここまで腐りきっているなんて私も思ってもみませんでしたから」

人造妖魔だけでもアウトなのに、そこに更に人造神魔……陰陽寮を追放された面子が復讐を兼ねて計画していたようだが……これは明らかに人間だけの仕業ではないだろう。

「西条さん、狂神石を発見しました」

「……やっぱりか、僕も行こう」

奥の調査をしていた令子ちゃんからの連絡を聞いて、躑躅院と共に研究所の奥へと足を向ける。

「西条、来ましたか。道中はもう処理をしまいましたでしたが問題ないですね?」

「ああ、構わないよ。ありがとう」

砕け散ったカプセルと撒き散らされている培養液、どす黒い血液は恐らく中に入っていた妖魔を処理した痕跡だろう。人間の手が加え

られた妖魔が開放されればどんな二次災害が起きるか判らない、手早く処理してくれただけでもありがたい。

「証拠写真は収めておきましたんで、後で提出しますね」

「うん、助かるよ。所で令子ちゃん和小竜姫様は？」

姿の見えない2人の事を尋ねると薄暗い通路からシロが姿を見せた。

「西条殿、こつちでござるよ。この奥でござる」

シロに呼ばれて壁にしか見えない場所に一步足を踏み込む。すると広い通路が目の前に広がっていた、振り返ると金属で出来た通路が広がっている。

「これは……転移でしょうか？」

「そうだろうね、それらしい痕跡が見当たらないはずだよ」

転移の魔法陣でここは別の場所、もしくは隔離された異界と言うことだろう。

「確実にガープだろうな」

どう考えても人間の出来る事ではない、これは確実にガープの仕業だ。氷室神社よりも前の段階でここまで日本に根を張っているとは僕も想像していなかったが、自体は思っていたよりも深刻なようだ。

「西条さん、これ、見てくれる？」

「殆ど残っていないんですけど、これは間違いなく狂神石ですよ」

頑丈に作られていたポッドの中に僅かに残されている赤い液体。その禍々しい気配から狂神石であると言うことは明らかだ。

「小竜姫様、これを回収することは出来ますか？」

「すいません、出来ません。私は勿論、美神さん達が触れても正気を失うでしょう」

初めて狂神石のサンプルを入手出来るチャンス。だが触れてしまえば発狂してしまうとなればそうやすやすと触れることは出来ない。

「仕方ないですね、ではこの研究施設を封鎖。後日神魔にッ！」

神魔のこの現場を渡す事を考えていたが、突如背中に氷柱を突っ込まれたような悪寒が走る。

「ちよつとこれやばいわよ、魔力が渦巻いてる」

「防衛装置！やっぱり仕掛けていましたか！皆さんここは撤退です」  
もつと集めたい証拠はある、だがこの異様な霊力と魔力の流れ、このままこの場に残っているのは危険だと判断し来た道を走って引き返す。

「急ぎなさい！長くは持ちませんわよッ！」

「早く！飛んでください！」

やはり異次元だったのか、僕達を呼ぶ蛍君達の姿がとても遠くに見える。もといいた時空とこの時空を切り離す防衛装置。このままこの場所に残っているのは下手をすればガープの元へ移動させられてしまうかもしれない。

「令子ちゃん達から急いで！」

まだ距離がさほど遠くない内に令子ちゃん達に飛ぶように言う。徐々に距離が離れていつているが、この距離ならば問題ない。助走をつけて思いつきり地面を蹴って飛ぶ。

「西条さん！」

「すまない！ありがとう」

令子ちゃんに手を掴まれ引き上げられる。振り返ると遠くに見える通路は闇の中に飲み込まれ、後ろに通路があった痕跡は跡形も無く消し去られていた。

「あ、危ない所でしたね」

「本当だよ」

後一步遅ければ僕もあの消え去った通路に飲み込まれていたかもしれないと思うと額に冷たい汗が流れるのが判る。

「初めて直で見ましたが、狂神石の名に偽り無しですね」

神を狂わせる魔性の鉱石。さっきのは液体だったが、それでも危険性はひしひしと伝わってきた。

「令子ちゃん、何か証拠みたいなものは見つかったかな？」

「ごめんなさい、それらしい物はないわ。神魔が関わっていたって言う証拠は見つけたんだけどね」

令子ちゃんの言葉に僕は落胆を隠せなかった。少なくとも神魔……ガープがこの研究所に関わっていたのは確実だ。だがそれだけ

ではない、人間も間違いなくこの研究所に関わっていた。ある程度の絞込みは出来るが、それでも物的証拠と言うのは欲しかったと思う。「良いじゃない西条、何人か確保したんだからそいつらを尋問でもすれば判るんじゃない?」

「私の魔法で頭の中を覗いても良いですわよ?」

タマモ君と神宮寺君の言う事も最もだ。少なくとも生きている証人を10人近くは確保できた、それだけでも――

「美神殿――早く早くこっちに来て欲しいでござるよ!!急に泡を吹いて血反吐をツ!」

シロの声に慌てて通路を抜けて、確保した研究者達の元へと向かう。だが僕達が辿り着いた時にはもう手遅れだった。

「死んでる……」

「本当に用意周到ね、嫌になるわ」

蛍君と神代会長が頭を抑えている。予想になるが、あの研究施設の防衛装置……その起動を合図に研究者の体内に埋め込まれていた魔法か何かが発動したのだろう。

「小竜姫様、死人でも情報を取れるでしょうか?」

「……神族では難しいですね、1度ブリュンヒルデさんに連絡を取って見ます」

魔族のネクロマンシーや死霊魔術で死んだ研究者を操り情報を得る。それは決して人道的ではないが、今はそんな事を言っている場合ではない。僅かでも情報を得れる可能性に賭けたい。

「どうもまた大きな騒動が起きそうだね」

「本当、泣けるわよ」

人造妖魔、人造神魔の研究施設にガーブが関わっていた。それが判明した以上再び僕達は備えなくてはならない、ガーブによる侵攻に抗う為に……。

(状況は悪い、それでも諦めない。諦める物か)

英霊や神魔を操る技術に加え、仮面ライダーを有するガーブ陣営。その力は紛れも無く人間よりも遥かに上だ、だがそれでも僕達は劣勢に追い込まれながらも抗ってきた。どれだけ絶望的でも諦めない、僕

は心の中でそう決意を新たにする。

「とりあえず回収した証拠から何か判るかもしれない、手に入らなかった情報を嘆かずに行動しよう」

「そうですね、資料は沢山ありますし、何か判るかもしれないですよ  
ね」

後ろ向きになっても何も始まらない、5件の研究所から応酬した証拠の中にこの研究に関わっていた企業などの情報を得れるかもしれない。僕達はその可能性を信じ、1度高島の屋敷に戻る事にした。

「私はここでブリュンヒルデさんかメドーサを待ちます」

どうやら魔族の方とも連絡が付いたようで、遺体の引渡しをしようと  
言う小竜姫様を研究所の跡地に残し、屋敷に戻る事にした。

「……ああ、おかえり。悪いが静かにしてくれるか？」

「横島様が寝ているので」

【思う存分叩きのめしました、もう主殿に害をなす物は京都にはいない  
いでしよう！】

屋敷の外で山積みになつてる陰陽寮関係者に溜め息を吐き、京都の  
警察に逮捕するように連絡を取り屋敷の中に足を踏み入れる。

「ぶぎゆるうーぶぐりゆうー」

「みむうふーみふー」

【ノノブウ……】

【「すーすー」】

巨大化したうりぼーにもたれ掛かるようにして眠っている横島君  
とそんな横島君に抱きかかえられて眠っている紫ちゃんと天魔ちゃん  
の姿。今まで血塗られた場所にいたからこそ、その穏やかな日常を  
想起させる光景に僕を含めた全員が安堵の溜め息を吐くのだった  
……。

くガープ視点く

「ガープ様、京都の拠点が潰れたようですね」

「そのようだ、まあ良かろう。所詮は暇つぶしだ」



人造妖魔と人造神魔を作るといふ神をも恐れないその研究者達に興味を持ち、僅かな技術を分け与えた。成功するとは思っていなかった。失敗しても特に感じる事は何も無い。それに今はそれ所ではないのだから……。

（何者何だ、私は何と戦った）

何かと戦いアスモデウスと共にボロボロの状況で倒れていた時の事を思い出す。だが何と戦ったのか、何故トドメを刺されなかったのか、思い出そうとする度に頭にもやが掛かる。私とアスモデウスにこんな屈辱を与えた相手に対する復讐と報復を心に誓いながらも、その相手を思い出せない事に私もアスモデウスも込み上げる怒りの矛先を何処に向ければいいのか判らないでいた。

「まあ良い、南部のほうがよくほど成果を上げている」

「南部グループですね、確かに人造魔族の製造には成功していますし、制御も出来ていますね」

蘆屋の報告を聞いて笑みを浮かべる。同じ技術、同じ設備を与えた。だが成果を出したのは陰陽寮の脱落者よりも後に私の技術を知った南部グループだった。その時点で陰陽寮に興味は無く、南部グループがどこまで行くかに私の興味は移り変わっていた。

「ゴレムの安定製造、小型の自立の魔道兵器など南部の成果は著しいですよ。グループ様」

「なるほどなるほど、それならば褒章を与えなくてはならないな」

有能な人間ならば迎え入れる事が出来る。その点では南部グループは単独では決して優れた存在ではないが、集団となるとその能力は極めて優秀になる。だがそれは1人では迎え入れるほどの価値も無いと言うことも現している。

「蘆屋、南部グループにガルダの羽を届けてくれ、ガルダを生成出来れば末席に迎えようとも伝えてくれ」

「畏まりました」

神獣であり、魔獣でもあるガルダ。私でも生成は確実に成功するとはいえないが、もしもガルダを再生出来ればインド系の神話の相手には有利に出れる。ガルダの羽はまだ何枚も残っているので1

枚くらい戯れで人間に渡しても何の痛手でもない。

「さてと、私は私の作業を続けるか」

忌々しいが記憶改変を受けた事は変わらない事実だ。だがこれによつて面白い事を思いついたのもまた事実、それを試してみるのも良いだろう。

「お前は転んでもただでは起きないな、ガープ」

「アスモデウスか、当たり前だ。敗走は良いさ、だが負けて放置された屈辱をそう忘れる物か」

負けて殺されたのならはまだ判る。だが記憶を操作して放置されたと言うのは私達のプライドを痛く傷付けた。もし、今度遭遇したら必ず殺すと決めている。だがそれと同時に記憶改変で面白い事が出来ると思つているのもまた事実。

「試験的だが、やってみる価値はある。成功すれば、現代の有力なGSが殆ど消えることになる」

「それは面白いな、やってみる価値はある」  
「だろう？」

前に中世へとタイムスリップした経験を生かし、現代に残つたまま歴史改変を行つてみようと思う。正直実験程度なので成功する保証は無い、あくまで実験だ。仮にその作戦が成功しても現代に影響があるとも確証は無い。だが、だからこそやってみようと思うのだ。

「場所は？」

「日本だ。もつとも怪異に満ちた時代「平安京」あそこで実験をしてみようと思う」

「好きにすれば良い、我は止めぬ」

「ああ、吉報を待ってくれ」

忌々しい事に負傷はまだ完全に癒えてはいない、だがジツとしていくつものもない。この作戦が成功すれば、横島を護る者が少なくとも、攫う事が容易になるかもしれない。そんな可能性を戯れで試してみても良いとおもっていた。

「名づけるならば平安大魔京とでも言おうかな」

時間逆行、歴史改変の有効性を試す実験としては丁度良いと私は笑

い、魔術式の構築を始めるのだった。

『ガープ歴史改変を計画する、時代は平安時代』

と刻まれた文字が光り輝き、男の手に行っていた本のページから消えていく。その事にフォーティスは計画通りと微笑む、記憶改変を施した際にガープの脳裏に命令とも言える時間逆行計画を残していたのだ。

「これで歴史の大筋は守った。後はどうなるか、これからが私の物語の始まりだ。さてと、役者を集めなくてはな」

ガープだけではない、第3者であるフォーティスの思惑も交わり、現代よりも遠く離れた平安時代に悪意の種が撒かれようとしているのだった……。

リポート30 陰陽寮 その6へ続く

## その6

レポート30 陰陽寮 その6

〈小竜姫視点〉

美神さん達を見送り、暫く崩壊した研究所の跡地で待っているとメドーサとブリュンヒルデさんの2人が遠くから飛んで来るのが見えた。2人が思ったよりも早く来てくれたことに安堵した。清姫様とシズクさんが一緒だとしても、恐ろしい力を持つ人造神魔と天狗の長の娘……そして横島さんがいると言うのは魔族……もつと言えばガープにとっては貴重なサンプルを同時に得るチャンスである事は間違いない。早く合流しなければと思っていたので、30分ほどで2人が来てくれたのは本当にありがたい事だった。

「……おいおい、小竜姫。なんとか出来なかったのか？」

「無茶を言わないでください、私は術はあんまり得意じゃないんですよ」

ある程度は扱えるが、私の武器は剣術と体術だ。ガープの仕掛けた遠隔操作の魔術を解除する術は私にはない。

「メドーサ、あんまり無理な事は言わない方がいいですよ？」

「いや、あたしが言いたいのは頭が吹っ飛んでる事についてだよ。死んでるのはいいし、でも吹き飛ぶ前に切り落とすくらい出来なかったのかよってさ」

「それは確かに私のミスですが……異界が閉じようとしているので逃げるのに手一杯でしたから」

本当ならば首を切り落とせばより情報も入手できただろう。だが異界が閉じると同時に遠隔操作の術が起動してしまえば、流石にどうしようもないのだ。

「ネビロス様のネクロマンシーなどで操る事は可能でしょうか？」

「……正直頭を失っているので確実とは言えないですが……断片的にでも情報を得れる可能性はあります」

断片的……ですか、ガープの遠隔操作があるとしてもやはり1人くらいはまともな状態にしておきたかったという後悔が頭を過ぎる。

「まあ仕方ないさ、ガープの常套手段だと思えばな」

「簡単に切り捨てますからね、彼らはさほど重要ではなかったのでしょうか」

「……そう言つて貰えると助かります」

ガープ陣営にビフロンスが居る事は判つている。本当に有能ならば、死体にした後に回収して蘇生しているはずと言う言葉にほんの少しだけ、許された気持ちになった。

「私はメドーサと一緒に死体を運びます。また何か判れば連絡しますね」

「ヒヤクメはかなり忙しいみたいで今すぐに動けないらしいからな。横島に気をつけるんだよ」

ヒヤクメはすぐに動けないと聞いて内心溜め息を吐いた。横島さんの状態はあんまり良くないものではない、出来れば早く見てもらいたかったんですが……無理ならば横島さんの状態には細心の注意を払う事にしよう。

「それと人造神魔を1人保護しました。転移能力持ちで幼い少女です」

「……それってもしかしなくても横島か？」

「はい。横島さんですね」

横島さんだからこそ保護出来たといえるだろう。子供に好かれる気質だから、警戒心を緩めて保護する事が出来たのだと思う。

「力のほうはコントロールは？」

「正確に出来ている訳ではないですが、ある程度は大丈夫と言つた所です。外見は天竜姫様と同じ位で、精神年齢はとても幼いです」

「判りました。そちらも伝えておきます」

横島さんが保護し、そして神魔へと託したのならば横島さんは紫ちゃんの事を気に掛けるだろう。下手をすれば、神魔への不信感に繋がりがねない。

「竜神王様とお父様に伝えてみます」

「よろしくお願ひします」

人造神魔とは言え、生きているのだ。そして感情があるのだから難

しいと判っていても、優しい場所において欲しいと願う。研究者の死体を抱えて転移する2人を見送り屋敷へと戻るとそこには……

「この度は我が娘を見つけていただき感謝します」

「ああ、いえいえ、その偶然の事ですし」

「いやいや、気難しい我が娘が懐いている。よほど心細かったのでしょうか、これほど安堵した表情を見るのは父である私でも久しぶりの事です。我ら天狗——いつでも力を貸しましょうぞ」

「はあ、どうもありがとうございます？」

天狗の長が横島さんに頭を下げていて、横島さんが困惑した表情をしている。だけど、困惑したいのは私達の方であると言う事を理解してほしいのだった……。

く琉璃視点く

「あ、おかえりなさい。ふはあ……寝かしつけるだけのつもりが俺まで寝ちやいました」

皆忙しいのにすいませんと謝る横島君だけど、子供の体温は温かい寝かしつける間に眠ってしまったとしても、それは仕方のないことだ。

「おはよー」

「むにゅー」

まだぼんやりしている紫ちゃんやんと天魔ちゃんを立ち上がらせて、昼寝をした事で乱れている服を整えてあげていると、夕暮れの空から何かが羽ばたく音が聞こえてきた。

「あれって!?!天狗じゃないッ!?!」

【おお、長殿が参られたようですね】

4人の天狗が籠を担いでゆつくりと降下してきて、その中の1人が籠を開ける。

「天魔」

「父様!もう参られたのですか?」

「うむ。お前を見つけてくれた御仁に礼を言うのが最優先だと思って

な」

籠から姿を見せたのは若くも見えるが、それと同時に年寄りにも見える。そんな不思議な気配を身に纏った黒と白の翼を持つ立派な体格の天狗だった。

「横島殿でよろしいか？」

「あ、はい。横島です」

「この度は我が娘を見つけていただき感謝します」

おどおどしている横島君と天狗の長の会話を聞きながら、私はとりあえず庭先ではなく屋敷の中へと声を掛けるのがやっとなのだった。

「横島、天魔の父様です」

「天魔の父の幻魔と申します」

「ご丁寧にもありがとうございます」

横島君を尋ねて来たので、私達は何も言わないで横島君の後ろに控える。横島君が助けてという視線を向けてくるが、私達に出来る事はないので無視する。

【幻魔殿はもう少し天魔を見ているべきではないのですか？】

「耳が痛いな、牛若丸。だがな、天魔はいたずら好きで、目を離すとすぐになくなってしまふのだ。5人のお目付け役から逃げ出して、

山を出ているとは思っても見なかったのだ」

5人の天狗のお目付け役に見つからずに逃げるって……幼くてもやっぱり天狗。しかも天狗の姫と言うのは伊達ではないのだろうか？ど……お姫様としてそれはどうなのだろうか？

「監視から逃げるのは姫としての嗜みですわ」

「え？そうなの？」

「そうですわよ？外に出たくても監視が付いて回るのは面白くないですもの」

「そっか、お姫様には逃亡が基本技術なんだ……」

清姫様、お願いだから横島君に変な事を言わないでほしい、変な所で素直だから信じてしまうから……。

「天狗の隠れ蓑です。これがあれば見つからないのです！」

「おお、凄い。そんな霊具があるのか」

「天狗は皆持つてますよ?。」

天狗すげえつと横島君がキラキラと透き通った目で尊敬の視線を向ける。幻魔様もうむ、まあ、天狗は凄いやからなつと満更でもない様子だ。

(天狗つてもしかしてチヨロインですか?)

(まさか!横島さんだからですよ!)

(……傲慢と書いて天狗と読むくらいだぞ)

傲慢と書いて天狗と読むのなら、きつと純粹と書いて横島君と読むに違いない。純粹と傲慢が掛け合わされるとこんな化学反応が起きるのかと私達は半分諦めの境地で見ている。

「こほん、我が娘を見つけてくれた礼の品を持ってきた」

「いやあ、そんなの良いのに」

「礼の品と言っても、本来の所有者に返すだけだ。どうか受け取って欲しい」

付き人の天狗から受け取った木箱の蓋を開け、幻魔様が机の上に木箱を置いた。横島君はその中身に手を伸ばし、箱の中から持ち上げる。

「これは勾玉ですか?」

【凄まじい高密度の霊石で作られているな、こんな物を受け取ってもいいのですか?】

「かまわない、それは陰陽師高島から預かっていた品。あの男と似た気配を持つ横島が持つのに相応しい」

陰陽師高島の霊具……ッ!京都に来たのだからその可能性は十分に考えていたけど、まさかこのタイミングで渡されるとは思っても見なかった。

(美神さん)

(判つてるわ。蛍ちゃんとかえすも気をつけておいて)

高島の屋敷を訪れた時のように横島君の魂に刻まれた記憶が姿を見せるかもしれない、そう思って警戒していたのだけど、横島君に変調は見られず。勾玉を木箱に戻して自分の目の前に置いた。

「綺麗ですね。ありがとうございます。大事にしますね」



だが私達が危惧した横島君の魂に変調が起きる事はなかった。だけど、今は起きていないだけで、いずれ起きるかもしれないと思えば何か理由をつけてあの勾玉を一時的にでも取り上げるべきなのかもしれない。

「うむ、それとな。何か困った事があれば、いつでもこれを吹いてくれ。天狗の長の名において助太刀いたそう。さ、天魔。帰るぞ」

「え、あ……はい、判りました。紫、またね？」

「うん、またね……」

紫ちゃんと天魔ちゃんが寂しそうに別れをかわし、横島君もそれを悲しそうに見つめている。

【幻魔殿、1度主殿の家に案内するので主殿の家の場所を覚えておいていただけますか？】

付き人の天狗が何を言っているつと言う顔をしていたが、幻魔様は牛若丸が何を言っているのかを理解していた。

「うむ、それも良かろう。天魔はどう思う？」

「良いのですか？」

何時でも横島君に会いに行けると知って華の様な笑みを浮かべる天魔ちゃん。その姿を見て、本当に横島君が人外に好かれると言う事を改めて思い知った気分になった。

「では横島殿、また何れ、天魔と共に伺います。それまでご健在で」

「とても楽しかったです、また遊んでくださいね」

籠に乗り、山へと帰って行く幻魔様達を見送っている横島君を見つ

めながら、私は美神さんに声を掛けた。

「また人外との繋がりが出来ましたね」

「……そうね。もう、諦めるしかないのかしら」

「諦めるべきなんだろうね、これはもう横島君の個性だから」

日本でも取り分け強力な妖怪である天狗との繋がりが出来たのはありがたいことだが、それも素直に喜べない理由もある。

「私のことは気にしないでいいよ。どうせ、陰陽寮との繋がりは切れてる」

「まあ、そう言うなら良いけど、後で逆恨みとかしないですよ？」

「ははは、陰陽寮はGS協会の傘下になるんだ。自分の上司に唾を吐いたりしないよ、私はね」

天狗は陰陽寮と繋がりがあつたが、それもいつの間にか切れていたのだろう。その切れた縁が横島君でGS協会と繋がったのはありがたいけれど……正直に喜べないでいた。

(今回は大丈夫だったけど……次も大丈夫とは言えないわよね)

まだ高島の遺品を天狗が持つていて、それが横島君に渡されてなにか影響があるのではと心配してしまう。

「……横島。風呂に入つて来い」

「あいよー。チビ達もおいで」

「あ、紫もー」

チビ達と紫ちゃんを連れてお風呂に向かつていく横島君。その余りの自然体に私は溜め息を吐きながら、紫ちゃんの後をなんとも言えない目で見つめているくえすと蛍ちゃんを見て苦笑する。

「少なくとも、目に見える成果は1つは出来ましたね」

「そうね、そう思うことにしましょうか」

天狗との繋がりが出来た。京都での事件には巻き込まれたけど、これを1つの成果として私達は考える事にしたのだった。

↳ 蛍視点

横島の後ろの雛のようについて回る紫ちゃん。美神さんやくえすが言うには自分の能力で異界に閉じ籠っていたのを、横島が受け入れて甘やかしたのでそれが刷り込みのようになって紫ちゃんは横島に父性を感じているとの事だ。

(ありえない話ではないのよね)

横島の人外に好かれる特徴に子供の神魔となれば、横島に懐くといつても過言ではない。

「ぎゅーん」

「んー？紫ちゃんは甘えん坊だなあ」

にぱっと笑い横島に抱きついている姿は見ていて微笑ましい、微笑

ましいいんだけど……。

(なんだろう、凄くいやな感じ)

アリスちゃんや天竜姫様、そして天魔ちゃんとは違うような気がしてならない。

「……とりあえずだが、まだ東京には帰れないんだよね？」

「陰陽寮の事が解決するまでは帰りたくても帰れないのよ」

本当ならば今日東京に帰っている予定だったが、元陰陽寮の研究者達の暴走で人造妖魔、人造神魔の件が明らかになったので、それが解決するまでは東京には帰れないらしい。

「まあそれならそれで観光旅行でもすればいいのですわ」

「ですね。やっぱり息抜きは大事ですよ」

互いに賛同しているように見えるけど、その目は全く笑っておらず邪魔者と認識しあっている。それなのに、表面上は笑えるとか本当にすごいと思う。

「ぴぎん」

「みむー」

「よーし、取ってこーい」

「えーい」

そしてそんなくえすと清姫の空気にも気付かず、ボール遊びをしている横島も横島で本当に凄くと思う。

【横島は基本的に何も考えて無いからの】

【むしろ自分の知り合いが喧嘩するわけないと思っている節もありませんよ】

横島から煩惱が消えると恐ろしいレベルの天然になってしまった。そんな横島も可愛いんだけど、可愛いだけじゃ駄目なのよね。もう少し危機感とかを覚えて欲しいと思う。

「冥華さんには連絡したら、六道の調査班が来るまでは待機だね」

「となるとやっぱり息抜きで観光とかになるわよね」

「屋敷に留まっているのも不安ですしね」

横島の変異が屋敷に起こることで起きるかもしれないと思うと、冥華さんが来るまで屋敷にいる時間は極力少なくしたい。

「では鹿公園にいくでござるよ」

「止めなさい馬鹿、どんな悲劇を起こす気よ」

全く持ってタマモの言う通りである、横島と動物は決して近づけてはいけない。それは私達の中の絶対のルールだ。

「……」

（（（いるッ!!!）））

白い毛の子鹿が今チラッと空を飛んでいた。まだ横島の所に来る事を諦めていないのだ、そんな時に鹿公園に行けばまた天空から舞い降りてくる神々しい鹿になってしまうのでそれは避けなければならぬ。

「私の提案なのですが、北野天満宮か清明神社に行って見ませんか？」

小竜姫様の提案に全員の視線が小竜姫様に集まる。今の横島的に決して相性のいい場所ではない、だがそのどちらも横島に取っては縁が深い。

「横島さんが文珠に目覚めたのですから、道真公に会っておくべきではと思うのです。勿論、会ってくるとい保障はありませんが……」

文珠は文字通りの最後の切り札だ。人造妖魔、人造神魔が作られている事を考えれば、量産型レブナントを超える脅威になりかねない。そうなれば文珠が必要になる場面は多くなるかもしれない。

「ですが、それはリスクが余りにも大きすぎませんか？」

「はい、リスクは承知の上で提案しています。そしてその上で決めるのは美神さん達にお任せします」

神魔としては戦力向上で文珠は必要だが、小竜姫様個人としては文珠を横島に作らせるのは不安って事なのね。

「……私は北野天満宮か清明神社なら、清明神社を選ぶわ。西条さんと琉璃は？」

「僕も文珠は今はまだ触れるべきではないと思うよ」

「私もです、清明神社にしましょう」

この場の責任者の3人が北野天満宮に行く事を反対した。そのことに安堵の溜め息を吐いていると、いつの間にか横島達は庭に遊び場

所を移したのか、屋敷の中にその姿はなかった。

「もう、勝手に外に出ないって言ってるのに」

「……良い、私が呼んでくる」

シズクが外の警戒を兼ねて屋敷の外に出ようとすると、横島と紫ちゃんが誰かを連れて広間に入ってきた。その誰かを見て、私を含めた全員が躑躅院と呟いた。

「えっと、躑躅院美弥です。そのお兄様のご指示で京都の案内に参りました」

「躑躅院さんの妹さんだそうで、何か京都の観光のお金とかを預かってきてくれたって言っているんですけど……」

躑躅院よりも明るい紫色の髪、そして自信に満ちた躑躅院と異なり不安そうに辺りをきよときよとみている美弥さんと目があつた。

「そ、そのお……初めまして、よろしく願います」

おどおどと挨拶をしてくる美弥さんに挨拶を返す。躑躅院のお兄様と呼んだので、躑躅院の性別が男であると言うこと、そして美弥と言う妹がいると言う事は判った。だけど、その言動と容姿に私は違和感を覚えた。

(余りにも似すぎている)

男女の違いはあるにしても余りにも美弥さんは幼く見えた。それなのに躑躅院にも恐ろしいほどに似ていた……まるで同一人物のよう

に  
「それで躑躅院は何処に案内してくれるって？」

「は、はい、えつと清明神社の方へご案内するようにと申し付けられています。それと昼食のレストラン等もこちらで用意しております」

完全に陰陽寮……いや、躑躅院の思い通りになるような気がして、嫌な予感でした。だがこうして、美弥さんが送られてきた事もあり、断る事は出来ないだろう。それに私達の目的地も清明神社だったから美弥さん、そして躑躅院の申し出を受け入れる事にするのだった。

（???視点）

神社の中の鏡の前で禪を組んでいた若い青年が閉じていた目をゆっくりと開いた。

【ん？随分と懐かしい気が近づいているな】

宙に浮かぶように立ち上がった青年の周りには人魂が浮いており、その青年が生きた人間ではないと言う事を如実に示していた。

【……西郷さん、母様か……転生しておられるのか……】

青年は困ったように首を傾げる。青年の名は「安倍晴明」平安時代最強の陰陽師と言われているが、彼自身は決して己が最強の陰陽師とは思っていないかった。

【記憶は恐らく無いだろうし……それなのに会おうのはやはり不味いよなあ】

彼の陰陽術は彼の母親から教わった高島の陰陽術である。つまり、最強の陰陽術師は安倍晴明ではなく、彼の中では高島忠助ただ1人なのである。

【ん？これは……高島殿の気配？いや、あったことはないんだが……この感じは間違いない】

姿を現すべきか、現さざるべきかと悩んでいた安倍晴明はその気配で決断を下す事が出来た。

【すまないが、私はやはり今は会うべきではないと考える。すまないが、私の代わりに母様のお出迎えと御持て成しを頼む】

【（こくり）】

鬼の式神を2柱召喚し安倍晴明は姿を隠す事を選択した。これが西郷の転生者である西条と、母親の転生者である美神だけならば彼は2人の前に姿を見せる事を選択しただろう。だが、ここに高島の転生者である、横島が加われば彼の中に姿を見せるといふ選択肢は存在しなくなる。

【気まずいなんて物じゃないからなあ】

安倍晴明の功績と高島の功績が入り混じって陰陽師の神として伝わっている。

【もうちよつと加減してくれば良かったんだけどな】

清姫の大暴れによって平安京が燃やされた事により、高島の陰陽師としての証拠が消え去ってしまった。そこに、高島の陰陽術を知る西郷と葛の葉の指導によって才覚を表した安倍晴明に、高島の記録が無くなり、宙ぶらりんになっていた数多の怪異を調伏した高島の経歴が安倍晴明の経歴として謝って伝わってしまったのだ。

【人の功績を奪うとか、本当嫌なんだよ。私はそれなりの陰陽術師でいいのに……】

確かに安倍晴明は高島の死後の陰陽師では最強だった。だが、西郷と葛の葉から聞く高島の経歴とその優れた術に尊敬と敬意を払っていた。だがそこに高島の陰陽師としての功績と経歴までもが自分の物にされてしまうと話とは別になる。

【最強の陰陽師は高島殿だよ。私なんかよりもよっぽど優れてる】

その事を苦しく思っている安倍晴明は高島の転生者である横島にあう事を拒み、その場から逃げるように姿を消すのだった。

【……シヨウタイ、コツチ】

【アルジカラタノマレテル】

【……美神さん、お出迎えが凄いですけど】

【怖い……】

【……式神だな、しかも召喚されたばかりに見える】

【まあ、横島様のお出迎えをしないなんて失礼です事】

清明神社を訪れた横島達を出迎えた3mは超える巨軀の大鬼の式神に美神達は引き攣った顔で案内され、ヒートアップしそうな形相の清姫とシズクは横島によって宥められ、美神達は大鬼に案内されるまま清明神社の中の異界へと足を踏み入れるのだった……。

リポート30 陰陽寮 その7へ続く

## トトカルチョ 予告

大型トルカルチョ 開幕予告

ダンタリアンの予知でトトカルチョのテーマを決めてもらおうと思いい、私達がダンタリアンの屋敷を訪れた。

「やあ、待っていたよ」

……なんでルイ様がここにいるのかなあ？ニマニマと笑っているけど、寒気と恐怖しか感じないんやけど、とやうかなんでこんな所にルイ様が入るのか不思議でしようがない。

「逃げたら殺す」

「はい」

逃げたら駄目とか考える前に殺すと言われた。ルイ様なら最上級神魔でも殺せるから大人しく椅子に座ることにする。

「はい、これダンタリアンから」

ダンタリアンの手紙と言われてキーやんと中を見ると「ざまあww」つと絵文字付きで書かれていて、キーやんと共に無言で手紙をびりびりに引き裂いた。

「さてと、いつも横島君でトトカルチョと言うのをやっているそうじゃないか、でもね、あれでは足りない。全く持って足りないんだよ」全然面白くないと言うルイ様。楽しそうな顔の裏に隠れている狂気とも気配に心の中で横つちに謝罪の言葉を口にする。ワイ達じゃこの御方は止めることは出来ないのだ。

「これだけ面白い要素があるんだ。もっともつと面白くないといけないって何で判らないのかな？」

「返す言葉もございません」

下手に反論すると物理的に首が飛ぶので全てルイ様の言う通りですと頭を下げる。

「まずだね、横島君という哀れな草食動物がどれだけの肉食動物に囲まれているのか、そこを教えてあげるべきだと思うんだよ。そうすればもつと賭けに参加する人間が増える」

「本当ですか!？」



「間違いないとも、横島君は警戒心が薄いからね、周りにいる女性が全員が自分を食べようとしているなんて夢にも思っていないだろう」

そこよな、横つちと言えば肉食系だったんやけど、チビとか拾い始めて子煩悩で天然に進化したからなあ……神魔でもびつくりの進化の過程だと思う。なんで煩悩魔人があんな風に天然魔神になったのか謎で仕方ない……。

「とは言え、それを直接横島君に教えては意味がないからね。横島君の1日に参加者に見せて、興奮したらアウトと言う事にしてだね」「となるとおしおき部隊も必要ですね!」

「ハヌマンには声を掛けておいた」  
「待て、それはあかんって」

ハヌマンを召集するのは危険すぎるとストップを掛けたが、ルイ様とキーヤンは完全に乗り気で、もうワイの言葉なんて届いていなかった。

「ヒヤクメが横島君の日常を盗撮してるから、そこを編集して見せてあげようと思う」

「なるほど、ちよつとムフフってことですね。判ります」

「その通りだよ、普通は男なんて思うかもしれないけど、横島君だからね」

「横つちだから仕方ないですね」

人外キラーと言えば横つちやけど、まさか神魔の間で自分の日常生活を見て、誰が一番興奮したかなんて賭け事に使われているなんて思わないやろうなあ……。

(とりあえず、強く生きて欲しもんやな)

横つちもそうやけど、意中の男性の日常生活を見て、興奮するかどうかで賭けにされる虫達にも心底同情した。

「アダルテイな部分での興奮はお仕置きでハヌマンにしようと思う」

「つまり着替えと風呂ですね」

「そうそう、通常の部分は物凄く痛いけど、絶対後遺症が残らない竹刀を用意したい」

「ルイ様の脅威の技術力ですね、楽しみです。ではルイ様、1度神界へ来てくれますか?」

「良いとも、とても面白く有意義な時間にしよう」

楽しそうに笑うルイ様とキーやんを見送る。こうなると判つていて逃げていったダンタリアンに恨み言を言いながら、ワイも2人の後を追って歩き出すのだった……。

次回は大型トトカルチョで3回の小説形式のトトカルチョにした  
と思います。

絶対に興奮してはいけないヒロイン 横島家24時

と言う訳で年越しのあれのオマージュですね。今回はその予告編  
です、本編回はセカンド完結後に投げる予定ですので、それまでは予  
想を楽しんでいただけると嬉しいですね。

横島が過ごす24時間の中で、ヒロインの性癖と言うかどきりとす  
る瞬間が多数出てくる感じですよ。

それを見て、ヒロイン同士のコメントとかで有爆や裏切りなどを入  
れて面白いと言う感じでやっていこうと思います

初回は

横島寝起き(舌足らず)

ランニングから帰宅

朝食

マスコットと戯れる

の4つのシーンを見たヒロインが誰が一番おしおきを受ける事にな  
るかというのを予想してください。この4つのキーワードで話を  
展開していくので、小説としても、トトカルチョとしても楽しめるよ  
うに頑張るつもりです。

なお小説形式と言う事ですが、募集や参加者の意見を聞いても私の  
中で最初に決めたヒロインが一番おし置きされるという変更は無  
いのでご安心ください

それでは今回の参加者はこの6人で3回トトカルチョと言う形で横島家の「朝・昼・晩」の3つの場面となります。

蛍

くえす

琉璃

小竜姫

エレシユキガル

ネロ

で人間3神魔3で6人でお送りします。

この面子で誰が「朝」で一番お仕置きを受けるのか、予想していた  
だいていつも通り活動報告にてご参加と予想の受付をしております  
ので、活動報告を見ていただけると嬉しいですよ。

## その7

レポート30 陰陽寮 その7

〜美神視点〜

案内役として来た躑躅院美弥。彼女が言うには躑躅院の妹で、躑躅院の性別は男と言うことになる。それは正体不明ともいえる躑躅院を知る手掛かりでもあった。

「つとと」

「大丈夫？」

「あ、はい、大丈夫です。私は……少しドジなので」

何も無い所で躓く、道を間違えましたあと嘆く等。躑躅院の名を持つが躑躅院の持つ不気味な雰囲気とは程遠い。

（あれ、囧とかじゃないですかね？）

（私もそう思う）

信用出来る部下に躑躅院の名前を与えて、妹として振舞えと言われているだけののような気がする。……正直完全から回っているような気がするけど、自分の妹（偽）でも躑躅院を名乗らせたと言う事はそれ相応の能力は持っていると思う。

「むふー♪」

「紫ちゃん楽しそうだね」

「楽しいー♪」

横島君と手を繋いでご満悦と言う様子の紫ちゃんも非常に愛らしい。子供の紫ちゃんとおつちよこちよいの美弥は横島君が面倒を見てくれているので、その間に私達は美弥と言う少女を観察する。

（見た感じは……17〜8くらいね。それにしても……体格は小柄で自信無さげ……やっぱり偽者？）

躑躅院家の詳細はわからないが、躑躅院のあの油断も隙も無い振る舞いは幼い頃から、そう躡けられているのが理由だと思う。

（……兄だけ英才教育した可能性はある）

（もしくは政略結婚の駒ですかね）

シズクと清姫の言う事も判る。躑躅院と非常に似た顔立ちで双子

と言っていたから、霊力などは全部兄である躑躅院に行つて美弥には殆ど霊力が残っていないのかもしれない。だがその整つた容姿と庇護欲を掻き立てる様子は政略結婚の駒として育てられたと考えれば決して不思議ではない。

「ちよーつと離れましょうね」

「……あ。はい、ごめんなさい」

あんまり距離が近いと蛍ちゃんが横島君と美弥の間に割り込む、しかもそれだけではなくくえすまでも動き始めている。

「……琉璃は大人しくしててよ?」

「やだなあ、判つてますよ?」

絶対嘘だ。今凄いそわそわしてた、私が声を掛けなければ絶対あの中に割り込んでいたと思う。

「……引率の教師つてこんな感じなのかな? 西条さん」

「いや、引率の教師でもここまで大変ではないと思うよ」

西条さんと揃つたため息を吐いた。明々後日には冥華おば様の部下が来るので東京に帰れるが、ここまで疲れたのは久しぶりかもしれない。肉体的ではなく、精神的に疲れている。

「ぶぎい?」

「みむう」

「ん?それが食べたいのか? OK OK。すいませーん、このお饅頭……えつと食べる人?」

はいと手を上げる紫ちゃんとチビノブ。そしてそれに続くように蛍ちゃん達も手を上げる、横島君はそれを数えて店のおばちゃんに饅頭の数を注文している。なんか凄く横島君が生き生きしているように見えるわね……横島君の性質上、多分こういうのが本当に彼の天職なのだと思う。

「道真公ですが、会いに行かなくて正解だったかもしれません」

「どういうことですか? 小竜姫様」

「はい、道真公もまた文珠の使い手で神です。狂神石による洗脳を考え、神魔の嚴重警護の中にいるそうです」

「……確かに、操られる訳にはいかないからな」

学問の神ではあるが、それと同時に怨霊でもある道真公。雷神でもあることを考えれば、神魔としても護らなければならぬ人材だろう。

「晴明神社の方はどうなの？」

「式神が残っているそうなので、彼らに話を聞いてみれば良いと思います」

狂神石による洗脳を恐れるのは当然だ。だけど、本音を言えば人間界で警護するくらいなら天界でも、魔界でもいいからそちらに引っ込んで、警護に回す神魔をガープとの戦いに参加して欲しいと思うのはいけないことだろうか？

「美神さん達もどうぞ」

私達にも饅頭を持ってきてくれた横島君を見て思う、何故横島君ばかりが狙われるのか、そして何故横島君だけがあれほどの力を身につけるのか……それがガープ達に対抗する為だけの術となれば、それがどれだけ過酷な事なのか。霊能者なのだから運命と言うものは信じている、だけど何故横島君だけがこれほどまでの過酷な運命を背負わなければならないのかと思わずにはいられない。

「美神さん？」

「あ、うん。ありがとう、貰うわ」

「せんせー、拙者もー拙者も欲しいでござるー」

「ちよつと恥ずかしいから大声出さないでくれる？あ、横島私も欲しい」

シロとタマモに呼ばれて、今もつてくよーと返事を返して紫ちゃんとは歩いていく横島君を見て、自分出来る事は何かと考える。私の出来る事なんて高が知れている、それでも師匠として出来る限り彼を護りたい。私は心からそう思うのだった……。

く小竜姫視点く

普段決して人が多いとは言えないが、晴明神社には数人の人間が常に駐在している。だが今日に限って、誰もいない。その異様な光景に

美神さん達が息を飲んだ。

「朝早すぎたかな？まだ、入社してないのかな？」

横島さんだけが間の抜けたことを言っていて力が抜けてしまった。思わず美神さんと蛭さんを見たが、そつと目を逸らされた。

「……横島。 出社時間ではなく、人払いだ」

「横島様達だけを招待しているんですよ？」

「え？マジで？」

横島さんが本当ですか？と私達を見るので小さく頷くと、うわー恥ずかしいと言つて顔を押しさえている。

(どう見ても横島さんが可愛い)

戦闘中は凛々しいという感じなのに、今の横島さんが可愛く見えて仕方ないのは何故だろうか？

【ムカエ……キタ】

【ドウゾ……ヤシロへ】

地響きと共に現れた巨軀の大鬼。その額に張られている陰陽札から清明の式神なのだと判断して全員で社に足を進めるのだが……。

【……モウシワケナイ、ゴエンリヨネガイタイ】

「へ？」

横島さん、シズクさん、清姫様、そしてタママさんの4人だけが鬼の手で遮られた。

「……お前ら何を言っているか判っているのか？」

「式神の分際で」

シズクさんと清姫様とその表情に憤怒の形相を浮かべる中、赤い鬼が青い鬼に目配せする。

【『申し訳無いが、高島殿の転生者かもしれない人間に会うとか気不味いとかそんな話じゃない、あの人の陰陽師の経歴の半分くらいが私の功績に……すまぬ、嘘ついた。8割くらい私の功績にされてるのは辛い、もう死ぬほど辛い、もう死んでるけどさ……なんか生まれてきてごめんなさい。清姫様とシズク様もすいません、許してください。お願いだから社は壊さないでください、高島殿の書物は社に安置しているので、それでお許しください。本当すいません、許してください。』

生まれ来てごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい……』アルジカ  
ラノデンゴンデアル」

余りに卑屈すぎる晴明の言葉に私達は絶句した。だけど平安時代の天才陰陽師の高島の功績を自分の功績と誤解されれば、それはそれで辛い物があつたのだろう。

「えっと、じゃあ俺は残れば？」

【モウシワケナイ、アナタガタカシマニニテイルトオソレテアルジニ  
ゲタ】

【アルジメンタルトウフ、ユルシテ】

片言で謝る大鬼2人に横島さんは仕方ないと肩を竦めて、入ってはいけないと言われた清姫様達の手を引いて、神社のベンチに腰掛ける。

「ここでお留守番してますね。幸いチビ達の玩具を持ってきているので、これで遊んでますよ」

「……お前が良いなら良いが」

「まあ一緒に遊べるなんて嬉しいですわ♪」

「横島が良いって言うてるから私も待つわ」

チビちゃん達と一緒に残ると言う横島さん、結界も張ってあるので侵入される事はないと思います。入室を許された私達だけで社の中に足を踏み入れる。

「せんせー！拙者も残るでござる」

「私はお兄さんと遊ぶー♪」

【横島が残るならワシも残るかの】

【私達がいまので大丈夫ですよ】

「わ、私は案内役なのでここに残ります、それに、に、兄さんに霊能に  
関わるなど言われてますし」

躑躅院の妹が残る事は不安だったが、信長さん達が残ってくれると  
いうので横島さんが何かされることは無いと安心して社の中に足を  
踏み入れると、そこは私達が寝泊りしている高島の屋敷に似た空間  
だった。

「これは凄いな。今の僕達に必要な物ばかりだ」



「……とは言つて持ち出せないみたいですね」

「それなら可能な限りメモして、覚えていくしかないわね。くえす、頼んだわよ」

「なんで私に全部に押し付けるんですの？」

棚に収められていたのは失伝した陰陽術や、霊具の作成方法。そして古い霊脈やかつて信仰された神の居る場所などが事細かく記されていた。西条さんの言う通り、今の私達に必要な物ばかりだった。

「でもこれを全部見ていると相当時間が掛かりますよ？」

「それは大丈夫でしょう。ここは異界ですよ？」

確認の為に尋ねると鬼は小さく頷く、この霊力の流れから異界であることは確信していたから本当にただの確認だが、異界であったことに安堵した。

「この時間と外の時間は同じではないのです。この異界は外の時間よりもゆっくり時間が流れるつと言う事でよろしいですか？」

「ナカノイチジカン……ソトノイツプン」

「ユツクリシテホシイ」

つまりここで5時間調べても外の時間では5分と言うことだ。貴重な文献を調べる時間としては十分だ。それにまず間違ひなく2度目に尋ねてもこの場所は2度と入れてはくれないだろう。

「OK、そう言うことなら徹底的にメモさせてもらうわよ」

「こういうのは横島には向いてないですね」

「令子ちゃん、蛍君。ノートだよ、これにメモしておこう」

既に集中しているくえすさんに苦笑しながら私も棚に収められている本の形をした霊力の塊に手を伸ばす。形状自体は本だが、高密度の霊力の集まり、開いただけで膨大な情報が脳の中に流れ込んでくるのがわかる。

(これならメモの必要は無いかもしれないですね)

目で見ていいるのではない、魂に直接刻み込まれているのだ。これならばメモの必要はない、それが判ったからか片っ端から本を見ている美神さん達に苦笑し、神魔にとって一番必要な古い神の場所が記された書物に重点的に私は目を通すのだった……。

くシズク視点く

ボールを弾ませチビ達と紫と駆け回っている横島を見つめる。横島が楽しそうに幸福に満ちた光景、私が一番好きな光景だった。

「それ」

「えつとえつと、あいたー!」

「わたた、清姫ちゃん。大丈夫?」

「だ、大丈夫ですわ」

……凄まじく猫被りしている清姫に腹は立つが、それはそれ、これはこれと言う物だ。

「……楽しそうですねえ」

「……そうだな」

躑躅院の妹だという美弥。穏やかで何を考えているのか判らないぼやぼやとした視線。美神達は偽者を疑っているようだが、この娘は紛れも無く躑躅院の娘。その魂の気配と霊力の香りで間違いないと確信出来る。

(……だがこの娘には違和感がある)

何がと言われると説明しがたいのだが、この娘にはなんとも言えない邪な気配がある。

「えつと、なんででしょうか?」

「……いや、なんでもない」

確信はないから何も言わないが、この娘には気を許してはいけない。警戒していなければならぬと言う事を竜の直感で私は悟っていた。

「そーれつとー!」

「きやつ!ちよつと力加減を考えなさいよシロツ!」

「ぶぎー!びぎいッ!!」

思いつきりボールを蹴ったシロにタマモの怒鳴り声とうりぼりの抗議の音が響いた。

「むう、申し訳ないでござる」

【力加減は難しいです】

野生児コンビが唸るが、遊びなのだから何もそこまで全力でやる事はないのだ。

「それ。紫ちゃん行くよ?」

「よいしょ、えい」

横島が軽くボールを蹴り、紫がそれを受け止めて蹴り返す。するとチビがボールの上に乗ってボールを転がしていく、そしてその先ではチビノブが待ち構えていて……

【ノツバアアツ!!】

【へぶろおっ!またお前は!良い加減にワシも怒るぞ!!】

【ノブノブー♪】

【待てコラーツ!!】

全力でボールを蹴り込まれた信長がチビノブを追い掛け回しているが、あいつ気付いているのか?社の上で待機している無数のチビノブの姿に……

【(「ノブー♪」)】

【ぎゃあああああーっ……】

【「ノツブちゃん!」】

【「もきゅもきゅで楽しそう♪」】

悲痛そうな横島の叫び声に対してチビノブに埋もれているのを楽しそうと言う紫。やはり紫は只者ではないと確信し、チビノブの山の中から必死に信長を助け出そうとしている横島の手助けをする為にベンチから立ち上がる。

【くすくす】

【「……どうした?」】

「いえ、こんなに楽しそうなのは初めてで、ああ、私もお手伝いしますね。シズク様」

くすくすと笑っていた美弥も立ち上がり、チビノブの山に埋もれている信長の救出を手伝う為に立ち上がる。その顔に邪心などは見られず、ますます私はこの娘が何を考えているのか判らなくなった。

【死ぬかと思った】

「もう死んでるじゃない」

【そうだとしても痛い物は痛いんじゃない？！】

「チビノブ、ごめんなさいは？」

【ノーブウ】

【なんで御主がふてくされておるんじゃない？！】

【ノツ！】

お前なんか嫌いだと言わんばかりに砂をかけるチビノブに信長の額に井形が浮かぶ。

「本当にチビノブと信長は仲が悪いわねえ」

「でもせんせーが居ないと結構仲良しでござるよ？」

【主殿がいると思うことがあるんでしょう。チビノブも】

ノブとしかいえないがチビノブは信長の分身である。抱く感情も考えている物も同じだ、恐らくチビノブが抱いているのは嫉妬に似た感情であることは間違いがない。

「うふふ、貴女も横島様が大好きなのね」

【ノーブウ】

【みむー♪】

【ぴぎい♪】

清姫の言葉にチビノブだけではなく、うりぼー達も楽しそうに鳴く、横島の側に集まるのは横島が大好きだからだ。そうでなければ、幼生とはいえ子悪魔と神獣が人間の側に居る訳が無い。人外を引きつける魔性とも言える魅力……それが横島にはある。

「横島様の周りはとても楽しそうですね」

「美弥さん？様って？」

「あ、いえ、その横島様と言う感じがしませんか？」

着物で顔を隠しながらチラチラと横島を伺っている美弥。その目には邪心などは無いが、隠しきれて居ない横島への好意の色が浮かんでいた。

(……妄執か)

躑躅院は高島の家と婚姻する事で自分達の家には足りない陰陽師を招きいれようとした。そして高島には無い、貴族としての立場を与え

ると盟約を結んだ。それが成し遂げられることは無かったが、高島の転生者である横島に好意を抱く、それはきつと躑躅院が何代、何年掛かろうが、今度こそ高島の血を躑躅院の家に入れるという目的の為に子孫に呪いとして刻み付けた物だろう。

(これか、私の感じていた違和感は)

己の感情ではない、先祖から高島の転生者に出会ったら恋に落ちるように呪いを刻まれた哀れな娘。それが躑躅院美弥と言う娘だった。

「美弥ちゃんも遊ぶ？チビ達はちっちゃいからその所は力加減を考えて欲しいけど」

「は、はい！私も混ぜてください」

因果が導くように横島と美弥は出会ってしまった。それが幸か不幸かはシズクにも判らない、だけど……

「え、えい」

「プーギツ！」

「わわ、返してくれた」

「良かったな、うりぼーも遊んでくれて楽しそうだ」

「はい、良かったです！」

今楽しそうに笑う姿は決して1000年の妄執ではなく、今を生きる美弥と言う少女の嘘偽りの無い本心であると言うことは明らかだと思ふのだった。

〜冥華視点〜

東京に居る西条君や令子ちゃんからの報告書を見て私は眉を顰めた。人造妖魔、人造神魔の研究プラント、そして狂神石の存在。それらは今まで散りじりだった線を1つに繋げてくれていた。

「これでやっと〜鬼道の事がわかったわ〜」

何故あの気狂いが狂神石を持っていたのか？それは私にとっても謎だったが、鬼道は京都を拠点にしていた。つまりなんて事は無い、鬼道の事件が起きる前から京都で人造妖魔と人造神魔の研究は行われていて、そしてその研究者の1人か、ガープかは判らないが鬼道に

狂神石を与えた。入手経路は繋がった、但しその道は辿ったとしても首謀者に辿り着くことはないとしてもそれも1つの手がかりにはなっていた。

「悪いんだけど、京都に行く調査班の中にいた過去に南部グループと、東部グループの調査に赴いたのを全員外してくれるかしら？」  
自分の部下を疑っている訳ではない、だが人間の中で人造妖魔と人造神魔の研究をしていたので有名なのは南部と東部グループであり、互いに競い合っていた、まだ名前は出ていないが、確実に京都の人造妖魔の件には南部か東部が関係していると考えていた。

「これはくますます大変な事になるわねえ」

人造妖魔に人造神魔。人造妖魔は人間だけだが、確実に人造神魔はガープが絡んでいる。どれだけの個体数が在ったのか、どれだけの期間研究されていたのか？それらを突き止める術はない。だが判っていることは1つだけあった。

「人間同士の醜い足の引つ張り合いが起きるわ、それだけは避けないと」

東京の隕石落として既に判っていたが、視察団やオカルトGメンの若手の行動は酷い有様だった。だが今回は本来見方であるべき人間の中に日本を滅ぼす研究をしている者が居る。それは何としても避けなければならない。

「あ、もしもしく唐巢君？、悪いんだけど、少しの間東京を離れるからよろしくね」

えっ!? どういうことですか! と叫んでいる唐巢君を無視して受話器を戻して執務室から立ち上がる。目的地は首相官邸だ、陰陽寮の現当主の躑躅院が存続を諦め、GS協会の傘下に入る事を認めた。これで陰陽寮を支持している政治家連中の要らないやつかみを受けることは無くなる。

(本当に馬鹿しか居ないんだから)

既に崩壊している陰陽寮の顔を立てるとか、GS協会と六道は陰陽寮の傘下に入るべきだと言っていた馬鹿な連中の顔を思い出す。だが今回の陰陽寮の傘下の研究者が人造妖魔の研究をしていたと言う

ことが明るみになれば無理に陰陽寮の存続は出来ない。

(いえ、確実に繋がってるわねえ)

陰陽寮の支持をしていた政治家達は南部グループや東部グループのパーティーに出席していた。そう考えれば間違いなくクロダ。

「それで今回手伝ってくれるのかしら？」

「……ええ、その為に無理を言いましたから」

「全く、お前と一緒だと飽きないよ。美知恵」

死んだ筈の美神美知恵と魔族のワルキューレのコンビに私は笑みを深める。

「そろそろ邪魔者を排除したかったのよねえ」

「先生、良い御歳なのですからもう少し大人しく出来ませんか？」

「出来ると思う？」

「……はい、そうでしたね。すみません」

私に睨まれて肩を竦める美知恵ちゃんだけど、彼女が集めてきてくれた情報は本当にありがたい。死んだ事になっている事と魔族の協力があるから得れる資料が沢山ある。

「じゃあ行きましようか？令子ちゃん達が戻る前に決着をつけるわよ」

「本当、そうしてください。私はまだ令子に見つかる訳には行かないので」

美神達が京都に居る間、東京でも戦いの幕が上がろうとしていた、高度な政治戦。だがそれは決して甘い物ではなく、下手をすれば除霊よりも激しく、そして悪辣な人間同士の争いなのである。

リポート31 サイド東京 その1へ続く

リポート31 サイド東京  
その1

リポート31 サイド東京 その1  
〜三蔵視点〜

横島君達が京都に陰陽寮の見学に行くと言うのは正直反対だった。とは言え、最終的な決定権は本人にしかない訳だ。

(なんかあそこ好きじゃないのよね)

あたしに是非と言っていた連中が全員京都の人間だったけど、あの人を値踏みするような視線と下卑た視線は好きではない、霊能者ではあるが、完全に霊力が澱んでいて何年もまともに霊力を使っていないのが明らかだったし、正直あんなのが国守とか正気?と思っただレベルだ。何事も無く、無事に帰って来てくれれば良いんだけど思いながら雪之丞と陰念の組み手に視線を向ける。

「ちっ!」

「あめえッ!」

雪之丞の右拳に自身の右拳によるカウンターを仕掛ける陰念。雪之丞はそれを自身の肘を曲げる事で強引に軌道を逸らし、そのまま地面を蹴って距離を取る。

(いい具合に仕上がってきてるわね)

魔装術、そして眼魂と言う違いはあるけど、基本的に陰念も雪之丞も徒手空拳の戦いをメインにする。やはり体術の底上げは大事だと改めて確信する。

「あんたはなにかトラウマがある。だから、霊力が上手く使えないんだよ」

「そ、そうですかノー……」

エミさんに言われて預かっているタイガー君だけど、綱手もやつぱりあたしと同じ答えを出していた。彼の根底には何か辛い記憶があり、その辛い記憶が彼の霊能力の妨げになる。

【帰るの?】



「エミさんに相談しないといけないんじゃないやあ、お世話になったんですじゃあ……」

肩を落として道場を出て行くタイガー君。出来る事ならアドバイスをしてあげたい所だけど、身体能力や霊力ではなく、本人の精神的な問題となるとあたし達よりも師匠であるエミさんが解決すべき問題だ。もしくはタイガー君自身が乗り越えるべき問題。

「はい、そこまで、2人ともクールダウンを兼ねて走ってきなさい」「うつす」

ぱんぱんとクシナが手を叩きながら組み手の決着の合図を出す。決着と言っても終始互角で甲乙つけがたい組み手だったと思える。

【でもやっぱりって感じね】

【そうですね、特に雪之丞の方が問題ですね】

道場の壁を見てクシナと揃って溜め息を吐く、道場の壁は凍てついていて、雪之丞が踏み込んだ床も凍りついている。

「あの時からですね」

【そうですね、うーん、どうしよつかなあ】

東京への隕石落としての件で開眼した雪之丞の氷の異能。コントロールの修行を頑張っているみたいだけど、中々成果が出ない。

【やっぱりあたしじゃ無理かなあ】

「……メドーサ様に連絡しましょうか？」

クシナの言葉に少し考えてからお願いと返事を返す。これが普通の霊能ならばあたしでも指導できるけど、ソロモン由縁の霊能ではいくらあたしでもお手上げだ。メドーサを通じて魔族に連絡を取ってもらって、専門家の意見を聞きたい。

「とりあえず、応急処置だけしてくるよ」

【お願い出来る？】

「良いよ居候の見だし、あんたには言いたくないみたいだしね」

雪之丞は氷の異能のせい手足が相当冷えているのか、よく温かいお茶を飲むようになった。それに日用品の買出しでカイロも買い込んでいるのもクシナから聞いている。

【やっぱり焦りからかしら？】

「そう思います、横島君の事がありますし」

横島君の成長具合は凄まじい、会うたびに別人のようにパワーアップしているけど、それが雪之丞と陰念……それだけじゃない、タイガー君やピエトロ君の焦りをも煽っている。友人同士だからこそ、横島君だけが突出している今の状況が辛くて仕方ないのだろう。それは判るけど、無理をして身体を痛めていては意味がない。でもこればかりはあたし達が言ってもどうこうできる問題でもない。

【男の子って難しいわねえ】

「そうですね、やっぱりプライドとかもあるんでしょうけどね」

クシナと並んで男の子の指導の難しさを嘆いていたけど、クシナは元々男な訳で……あたしはクシナが入れてくれたお茶を啜りながらなんともいえない気持ちになるのだった……。

「大丈夫か？」

「……問題ねえ」

「あんまり無理すんなよ、酷かったらお師匠様から綱手様に相談しろよ？」

「……判ってる、だけどそんな事を言ったら追いつけねえだろ」

雪之丞の言う追いつけないが誰を指しているのが痛いほど判る陰念は何も言わず、雪之丞と並んで山道を走る。組み手の疲れは確かにあった、だけどそれでは止められないほどに雪之丞と陰念は焦りを胸の中に抱え込んでいた……。

くブラドー視点く

魔法陣の真ん中に座って滝のような汗を流しているピエトロ。その姿を横目に懐中時計の蓋を開く、後5分で1時間か……。

「ピエトロ、そろそろ出る」

「い、いえ、あと少し」

「聞こえなかったのか？我は出ろと言ったのだ」

もう少しと言うピエトロを睨みつけると四つ這いでピエトロが魔

法陣から出てくる。

「はあ……はあ……うつ」

「その有様で後もう少しなどと言えたな、己の限界と引き際を見誤るな」

「あの、お父様、もう少し」

「お前は黙っているシルフェニア」

指導をすると言う段階で親子と言う甘い感情は捨てている、むしろ息子が可愛いからこそ、我は冷酷な判断が出来る。

「見ろ、指先が炭化している。このままではどうなっていたか判らない訳ではあるまい？」

「……っはい」

「嫌だろうが、冷蔵庫に入っている輸血パックを飲んでおけ、後遺症が残る。シルフェニア、肩を貸してやれ」

「う、うん。お兄様、ごめんね」

肩を担ぎ部屋を出て行くシルフェニアとピエトロを見送り、部屋の中央で淡く輝く魔法陣を足で消す。

「やはりピエトロには才がない」

ヴァンピールではあるが絶望的なまでに才能がない。吸血鬼としてはシルフェニアの方が優れ、人間としても半端者。我が息子ながら、何故こうも過酷な運命を背負うのかと思わざるを得ない。

「ブラドール伯爵。お疲れ様です」

「唐巢か、疲れてなど居ない。疲れているのはむしろピエトロだろう」

我はあくまで魔法陣を維持してただけ、それだけで疲れるような柔な身体ではない。

「身体はそうでも、精神はそうは言わないでしょう？」

「……まあ……な」

理論上はピエトロは吸血鬼としての闇の力と人間としての光の力。その両方を扱える、だが不幸なことにピエトロには才能が余りにもない。

「……光と闇の融合は闇の眷属の中でも一部しか使えぬ超稀少技能だ」

「ブラドール伯爵は使えるのでしよう？」

「使えるというのと使いこなせるというのは別問題だ」

扱えるというだけで使いこなせているとは言いがたい、始祖の吸血鬼であつたとしても扱い切れないそんな力をピエトロは使おうとしている。

「横島は悪い男ではない、だがあの規格外の才を持つ男に追いつこうというのは余りにも酷な事だ」

「……ですね。ピート君だけではない、雪之丞君や陰念君、それにタイガー君も苦しんでいるようです」

横島と言う男は太陽と称してもいい、遠くから見ている分には良いが近づこうと思えばそれは近づいた者を焼き尽くす。これが異性ならば、それは恋慕になつてもおかしくはないが、同性だからこそ追いつきたいと願う。

「道を違えなければいいがな」

「ですね。それは私も危惧しています」

憧れは憎しみへと転化する。そしてそれはガープにとつて最も都合な展開だと言つても良いだろう。そうならぬようにメンタルケアを徹底しなければならぬ。

「唐巢、ピエトロに聖句を教えてやってくれ」

「それは構いませんが……急にどうしましたか？」

「本来ならば光の魔術と闇の魔術の合一がもっともリスクが少ない。だがピエトロには才がない」

黒魔術の才は必ずば抜けているといつても良いが、絶望的に光の魔術に対する適性がない。このまま魔法陣の中心で光の魔術と向かい合わせても、光の魔術には決して開眼しない。

「聖句と闇の魔術を混ぜるのは難しいが、ピエトロにはそれしかあるまい」

「判りました。確かに引き受けました」

「すまんな、冥華の件で疲れているのに」

「はは、貧乏くじは引きなれていますよ」

そう笑う唐巢に背を向けて部屋を出るとピエトロが廊下のベンチ

で輸血パックを啜っていた。

「お父様」

「ピエトロ、お前に光の魔術は扱えぬ。絶望的なまでにお前に才はない」

「うっ……そ、それでも「なればお前が新たな道を作れ、聖句を使いこなせるようになれ。お前にはそれしか道はない」……はいッ！」

聖句と闇の魔術の合一、それは今までどんな者でも挑戦したことのない新たな道。茨の道になるだろうが、ピエトロが横島に届こうとするのならば、それしか道はない。余りに過酷な道だが、我は確信していた。ピエトロならば、かならずその場所に辿り着けると……。

↳ゴモリー視点↳

「ねー、枢ちゃん。愛子ちゃんに会いに行きましようよっ」

「だ・れ・が・い・く・かッ!!」

一言ごとにも怒鳴るように言う枢ちゃんに肩を竦める。脳裏に過ぎるのは昨日の記憶。

「大丈夫、人それ……」「だ・ま・れッ!!」あふんっ!？」

行き成り頭に鈍、やだ。うちの娘がバイオレンス過ぎる件について、アシユタロスに相談したくなるわ。

「ちよつと上級者過ぎるだけで」

「もういいから黙ってくれないかなあ!？」

頭に突き刺さったまま枢ちゃんの説得を試みるが失敗だ。血が噴水のように噴出すけど、鈍は抜くべきだったかもしれない。

「愛子ちゃんもあれじゃない」

「あれとボクが同類とか断じて認めないッ!」

認めただほうが楽なのに……この高い自尊心と冷静な部分が相まって、今の枢ちゃんは混乱してるのね。

「本逆」

「~~~~ッ!!」

顔を真っ赤にして本を正しい位置に戻す枢ちゃん。うちの娘がバイオレンスではなく、うちの娘が可愛すぎるとも言うべきかも知れ

ない。

「アルテミスも結構いい女神様よ？」

「あんなスイーツが!？」

ちよつと電波入ってるけど、アルテミスはそんなに悪い女神じゃない。そしてその巫女の愛子ちゃんも結構可愛いよね。

「滅んだ世界で2人きりとか良いんじゃない？」

「異常だよツ!？」

愛子ちゃんの独占欲の凄さを感じた。愛子ちゃんも必死に否定していたけど、自分の心の奥底の願望だからそれは仕方ないと思う。

「飼われる事希望の「黙れえツ!!」あいだああツ!？」

今度はカッターを突き刺された。解せぬ……やっぱり家の娘はバイオレンス過ぎるかもしれない。バイオレンスかつ助兵衛なロリイとかレベル高いと……。

「いたいいいツ!？」

「今失礼な事考えただろツ!？」

頭に刺さったカッターをぐりつとされた。ちよつとソロモンの魔神でも物理的に痛すぎる。

「大丈夫、私は良いと思う。後は横島君次第」

「……ちよつと本気で1回死んでくれないかな？」

横島君の倫理観が問題になると思うけど、頑張れば柩ちゃんの拘束飼いは多分叶う夢だと思う。ちよつと余りにハイレベルなので、ちよつと引いてるけど、でも性別とか変えられる神魔からすれば多分うん、まだ正常。もう一線越えてしまうと流石の私でも手に余るけど、今ならまだ可愛いで頑張つて押し通せると思う。

「とりあえず、横島君が帰るまでにどこに誘おうとか考えた方が良くと思うの?？」

「……横島、良いって言うてくれるかな?？」

「勿論、だからその手に持っているナイフとか、包丁をこっちに渡してちょうだい」

ちなみに私が攻撃されてもじつと耐えて、説得を試みていたのは愛子ちゃんの机の中で柩ちゃんの願望。目隠し首輪が露見し、ドン引き

されたことで目がぐるぐるになってしまった柊ちゃんを落ち着かせるためだった。なんせ家中の刃物を確保して、近寄るなど威嚇する柊ちゃんの説得は本当に大変だった。

「……そうかな？」

「大丈夫よ。横島君は貴女の事を嫌ってないわ、だから刃物をこつちにちようだい？」

「……うん」

説得時間8時間と42分。やっと柊ちゃんの手元から刃物が離れた事に心底安堵する。

(まあ大丈夫、うん。きつと大丈夫)

ちよつと柊ちゃんの中で横島君が占める部分が大きくなりすぎちやつたのよね。でも大丈夫大丈夫と言いながら柊ちゃんを宥める。

「柊ちゃんは可愛いから大丈夫」

「……」

でもちよつとこの目から光が消えかけているのは危ないわね……予知の時に何か見たくないものを見てしまったのかしらと思いがら、私は柊ちゃんが眠りに落ちるまで頭を撫で続けてあげるのがた。

くアシユタロス視点く

私はこの時尋常じゃないほどに焦っていた、横島君のバイクのライヘンバッツハを組み込む事に成功したし、それにドクターカオスが修理している籠手型の変身ツールも比較的計画通りに進んでいる。それにガープに私の事がばれた訳でもない、それでも私の額には大粒の汗が浮かんでいた。

「やあやあ。初めまして、アシユタロス」

「……君は誰だい？」

ローブを目深に被り、片手にやけに古めかしい本を抱きかかえた青年が突如私の部屋に現れた。冷静に声を掛けたつもりだが、自分の物とは思えないほどに声が震えている。

「そう怯える事も恐怖することも無い、ただそうだね。お茶を飲みに来たとでも言えればいいかな?」

「……そうかい、それならば茶を入れよう」

さつき蓮華に運んできて貰ったばかりのティーポットから2つのカップに中身をを注いで、青年の真向かいに座る。

「どうぞ」

「いや、すまないね」

すまないと言っておきながら、全く謝罪の感情を感じられない声。その声を聞きながら、部屋の中を確認するが転移などの痕跡はない。どうやって私の部屋に入ってきたのかが判らず、正直かなり困惑した。

「良いお茶だ、ありがとう」

「いや、構わないよ。それで君は何をしに来たんだい?」

神魔に気付かせずに、部屋の中に現れた。ルイ様とよく似たその術、だがルイ様は程遠い気配にルイ様の変装ではないとわかっていても、警戒心を如何しても緩める事が出来ない。

「なに、ちよつとした警告だよ」

「警告? 私にかい?」

「そう、他でもない君にだよ。平安時代の事を覚えているかい?」

平安時代? 一瞬何を言われたか判らなかつたが、次の瞬間激しい頭痛が私を襲った。

「がっ!?!」

「ちゃんと預けた物を持っていておくれよ? 忘れていると思うからね。ま、私に出会ったことも忘れるんだがね。お茶ご馳走様、美味しかったよ」

「……そうだった、そうだった。これを忘れていた」

何で忘れていたのか、とても大事な物だったはずなのにと思い慌てて立ち上がり、引き出しの中からある物を取り出す。

「きつとこれが横島君に必要な筈だ」

ずっと前に見つけた物。恥ずかしいことに何時手に入れたか忘れてしまった。だけど、これが横島君の助けになることは判っている。



「……待てよ、なんで私はこれを持っているんだ？」

机の上に置かれた巨大な白い眼魂。それが大事な物であると言うこと、隠しておかなければならなかったの筈なのに、何故私は今これを躊躇い無く机の上に出したのか？その理由は幾ら考えても判らず、何故か机の上に2つ置かれている紅茶のカップにも訳がわからず私は首を傾げ続けるのだった……。

「運命の転機、その1「平安時代」ガープによって歪められた過去、それがこの世界の1つの転機となる」

アシュタロスのビルの上で楽しそうに本を捲り続ける男……フォーティス。何を見ているのか、そして何を考えているかも判らないフォーティスはゆっくりと立ち上がり、自身が開いていた本を閉じる。

「どうか、悔い無き選択をすることを祈るよ。ふふふふ」

強い一陣の風が吹いた時、フォーティスの姿は最初から存在しなかったように消え去っているのだった……

リポート31 サイド東京 その2へ続く

## その2

レポート31 サイド東京 その2

くキアラ視点く

六道女学院のカウンセリングの予約は以前から常に満杯になっていたが、隕石落とし、地震の件から更に増え。理事長の許可を得て、放課後だけではなく、精神状況が著しく悪い生徒は授業中もカウンセリングを受けれるようにしています。……それでも処理しきれないほどの生徒が私の部屋を訪れている。そして、その多くの生徒が抱えている悩みは同じ物でもあった。

『霊能者になるのが怖いんです』

『わ、私はあんなふうには戦えません』

『どうしてあの人はあんなにも自分の命を削るような戦いが出来るんですか……私には判りません』

そしてカウンセリングを受けに来た生徒の中には「横島忠夫」が怖いと言う生徒が余りにも多かった……よく笑い、そして人を思いやる心配りも出来る、そして自分よりも未熟な妖使いにも懇切丁寧に指導する。そう言う面では、横島さんを好く人物は多いだろう。だがそれと同じ位彼を嫌う人物も多いのが事実だ。

「……話だけで知った気になるからですね」

横島さんは一般的な霊能者とは余りに違いすぎる。蛍さんや美神さんが霊能者として非常に高水準で整った能力を持つからこそ、横島さんの異質さは目立ち、そして美神さんの霊能事務所に入れなかったルーキーの霊能者が横島さんの悪評を流し、それを週刊誌が嬉々として書き立てる。

(どうした物でしょうねえ)

横島さんの一部分だけが今が目立ちすぎている。何も横島さんは命を軽々しく捨てようとする人物ではない……だが彼は余りにも自分の命よりも自分にとって大事な人の命に重きを置きすぎている。それは、霊能の現場を知らない女生徒には自分の命を度外視する異常者にしか見えないのだろう。

「キアラさん、今時間いいかしら？」

「はいはい、冥子さん。どうぞ」

冥子さんが不安そうな顔で私の部屋に入ってくる。いつも連れてくる12神将も自身の影に引っ込めている所を見て、私は珍しいと思っただ。

「なんかねえ、最近、横島君が怖いって話を良く聞くのでも、横島君は優しく、とっても可愛い子なのになんでそんな話が出てるのかなあ、って思っただ」

その間延びした口調の中に横島さんを真摯に思う気持ちがあるのが、これでもかと伝わって来る。私は冥子さんに椅子に座るように促した。

「そうですね、やはり週刊誌が一番大きな部分を占めていると思いますが、教材としてある物も悪いといえは悪いかもしれませんが」

横島さんの戦闘のビデオは私も見ましたが、特にGS試験の時の血塗れで互いに笑みを浮かべながら殴り合ってる場所をピックアップしたのは明らかに間違いだと思っただ。

「お母様が選んだ奴？」

「ええ、確かに霊能者としては良い戦い方かもしれませんが、やはり実戦経験が余りに少ないですからね」

実戦経験の少なさ、それと立て続けに起きた霊能事件が恐怖心を煽っているのだと思っただ。

「でも、横島君の悪口とか言われてるのは嫌なのよ」

「判ります。私も良い気分はしませんからね、とは言え、今の段階では出来る事がそう多く無いのも事実なんです」

横島さんと交流が深いのは六道女学院では妖使いの学級の生徒と、留学生のアン・ヘルシングさんに弓さんと一文字さんを20人にも満たない。一応1度交流学級をしましたが、蛍さんがメインで横島さんはおまけと言う感じの扱いでしたしね。

「じゃあ、どうすればいいの？」

「……美神さんがOKしてくれるかと言う問題がありますが、策は無いです」

「本当〜♪」

「本当ですよ、ある程度話が語りましたら冥子さんにも説明しますね」  
「冥子はん、お仕事の時間でっせ？」

「あ〜マー君、今行くね〜」

私に一礼して冥子さんを連れて行く鬼道正樹さん。彼も暫くカウンセリングに通っていましたが、今では安定しているようでよかったですね。

「やはり横島さんと触れ合うことは大事なのですね、あとは除霊の実戦を知ることですが……」

横島さんの悪評を流させない為には日常的に横島さんと交流している人物が必要であり、さらには除霊現場の現実と言う物を教える必要がある。

「うーん、私の考えることではないんですけどね」

あくまで私はカウンセラーで教諭ではない、だがそれでも見過ごせない物はあるし、手助けしたいという気持ちが無い訳ではない。

「1度理事長によーつく話を聞いてもらおう事にしましょうか」

1度生まれてしまった不穏の種はそう簡単に消す事は出来ない、だがその不穏の種が花を開き、騒動を起こしてしまえばそれは看過して良い問題ではない。六女のカウンセラーとして、そして1人の大人として対処したいと思う。

「それにいくつか気になる事もありますし」

霊能者になるのが怖いというのはわかります、ですがそこから横島さんが怖いと言う話に飛ぶのは余りにもおかしい、10人に対して4人が横島さんが怖いと言っている。

「これも何かの変調の印なのかもしれませんね」

人の不安や恐怖を煽り、要らない対立を生み出されている。今はまだ私の予想の範囲ですが、これすらもガープ達の攻撃のような気がしてならない。

「こんな時こそ一丸にならなくてはいけないのに……」

GS協会、オカルトGメンの査察団問題に人造妖魔を開発していると言う黒い噂が耐えない霊能関係の会社の数々。ガープの襲撃が何

時おきるか判らないと言うのに、何故人間同士の争いが続くのかと言う事を考えていると扉をノックされる音が響く

「はい、どうぞぞ」

「失礼します」

不安な事はある、考えたいこともある。だが迷える者が尋ねて来た時はそれらを全て隠しましょう。それが私殺生院キアラの仕事なのですから……。

くドクターカオス視点く

先日から殆ど毎日掛けられてくる電話に辟易しながら、毎回繰り返している返事を返す。

「じゃからな、それはワシの管轄外じゃ」

『そこを何とかありませんか、今魔鈴めぐみに日本に行かれるととても困るのです』

「そんな事を言ってもな、彼女は日本国籍でそちらには善意で籍をおいているに過ぎないじゃろ？」

『そ、それはそうなのですが……』

「大体使えもしない白魔術を大々的にアピールするからそんなことになるんじゃ、それにめぐみも教導書を残すと言ってるではないか、真面目に習得の為の修行をせい」

「面目に習得の為の修行をせい」

オカルトGメンとGS協会からの徴集にめぐみは2つ返事で了承した。だけど最低限の引継ぎと言う事で1ヶ月徴集日をずらしてくれているのだから、ヨーロッパのGS協会は協会で自分達で対処するべきだ。

『そ、それではドクターカオス、貴方が帰国する事はどうでしょうか？』

「ごめんこうむる。日本でワシはやるべき事があるからの」

横島の為の霊具や、アシユタロスとの共同開発。それにマリアとテレサの恋路を見届けたいという気持ちもある、日本に骨を埋めるつも

りなので今更ヨーロッパに戻るつもりも無い。

『マリア7世の説得を――』

「諦めろ、マリア姫の血筋が人の話を聞くと思うな」

これ以上話をしていても泣き言か愚痴しか出てこないと判断して電話を切る。国際電話だから、電話代も馬鹿にならないのだ。これ以上馬鹿げた話を聞いているつもりは無い。

(……フーム)

籠手型の変身ツールの修理は8割ほど完了しているが、ワシとアシユタロスの出した結論は使用できないだった。呪われるとか、魂に過負荷を掛けるからではない。純粹にこれは使用できないのだ、起動するためのキーが足りないのか、それとも眼魂が必要なか……理由は判らないが使えないのだ。

(惜しいのう……)

そこまで量産する必要はないが、せめて美神達にもとおもったが使えないのでは意味が無い。優太郎の言う通り、武器としての分析は完了しているので量産型の武器としてくらは実戦配備できるかのう……。

「カオスー、なんか日本政府の人が会いに来てるよー?」

「あー、なるほど、判った。すぐに行こう」

マリア7世の来日と竜の魔女の旗。そのどちらも今の日本では手に余る代物と言っても良いだろう、めぐみの来日と予定をあわせてくれるそうじゃが、それでも問題は山積みだ。

「ドクターカオス、お忙しい中申し訳無いです」

「いや。構わぬよ、それで何の話じゃ?」

何の話と尋ねても、この外交官が何を言おうとしているかは話を切り出される前から判っている。

「……マリア7世と横島忠夫には何か関係があるのでしょうか?」

マリア7世の来日の理由は竜の魔女の旗、それを正当な所持者である横島に渡す為だ。これは7代に渡ったマリア姫の遺言であり、それと同時にワシが国に残してきた戦闘の記録から反対する者は居ないだろう。

「神魔によって中世に横島達が現れた事があったのじゃ、そしてあの旗は横島がマリア姫に預けた物であり、所有者は横島にあると言う事じゃな」

「……そこを何とか日本の国宝にすることは出来ないでしょうか？」  
「政治的だけではなく、ヨーロッパを敵に回す積りかの？」

確かにあの旗の価値は極めて高い、だからこそそう思うのは無理もない話だ。だがそれをすればヨーロッパ諸国を纏めて敵に回すことになるだろう。

「判つてます、私も判つていんです。でも、それでも納得しない馬鹿は多いんです。これ……言わないでくださいよ？」

「言う物か、お主も苦勞しているようじゃなあ」

この外交官には同情するが状況が悪い、まだ正式なGS免許すら持たぬ横島がヨーロッパ方面で国宝としてされているSSS級霊具である竜の魔女の旗を譲り渡されるという事態。マリア7世の来日は大きな騒動を巻き起こすことになる事を嫌がおうもなしに悟ることになるのだった……。

くベルゼブル視点く

横島達が京都……陰陽寮の見学に行つていると言うことは私としては承諾出来る内容ではなかった。横島を襲った人形使いは京都の手の者だろう、そんな相手がいる場所に横島を送り出す——リターンよりもリスクが高すぎる。私がある場に居たのならば声を高らかに反対しただろう。

「そんなに颯め面をしなくてもいいじゃないですか？」

「うるさい、何故横島達が出発してから伝えた」

「ルイ様のご命令ですから」

勿論出発してから伝えろというのもご命令ですよと笑うルキフグス。ルイ様の命令で横島のメイドをしているが、ルイ様は一体何をさせたいのかと本当に思う。

「多分右往左往する私達が見たいんでしょうね」

「……多分はいらないと思う」

ルイ様にとって世界含めてすべてが遊び道具だ。とりわけ、今は横島を気に入っているので私達を見て遊んでいると言うのは確かだろう。

「……なんか、横島に膝枕されて寝てたそうだな」

「そう言う貴女は1週間に4日。偶然と言って散歩しているそうですね」

嬉しそうにしているルイ様から聞いた互いの恥と言うべき部分の話だ。だがそれは横島が関係している訳で……

「横島って怖いなあ……」

私とルキフグスの声が重なった時、勢いよく横島の家が開いた。

【横島くーん！沖田さんが遊びに来ましたよー！】

英霊が嬉々として入って来たが、縁側で並んで座っている私達を見て首を傾げて、1度門の外に出て表札を確認して戻ってくる。

【横島君のお友達ですか？】

まあ初対面だからこの反応は当然か、神魔と名乗る必要もないのでルキフグスが淹れてくれたお茶を啜る。

「横島達なら出掛けていて、帰ってくるのは何時になるのか判らない」

【え……えーっとちなみに何の？除霊でしょうか？】

「霊能に関する意見交流ですね。終わるまでは戻って来ないかと」

がーんつと口で言っつて蹲る沖田は手に提げていた紙袋を差し出してくる。

【これ水羊羹なので、横島君に、それとこれはお饅頭です】

【ご丁寧にも、沖田さんもお茶どうですか？】

【いただきます】

横島がいないと聞いて曇り顔の沖田が座れるように縁側を詰めて座ると、再び門が開いた。だがそこから見えた顔は決して、人間の家を尋ねてきて良い人物ではなかった。

「横島？いるかしらー？」

「余が遊びに来たツ!!む？明星の付き人か……まあ良い、横島は？」



冥界の女主人と魔人姫に横島の不在を伝える。すると冥界の女主人は魔人姫に詰め寄る。

「だから最初に電話するべきだったのだから！」

「お前横島の電話番号知ってるのか？」

「……知らないのだから」

「じゃあ駄目ではないか」

……その気になれば日本を片手間で日本を滅ぼす事が出来る存在が人間の家に集まる。これはきつと異常な事態なのだと思うが、横島の家だと普通だと思えるのは何故だろうか？

（横島の家が異界になりかけているのは……神魔が集まるだけではないか）

確かにきつかけはそれだったはずだ。だが今は横島自身も異界化を進めている要因だろう。眼魂を何度も使い、魔人姫に魔人の末席に座る条件を満たしていると言われているということは神通力と魔力を既に横島は有している。

（お前は何処に向かうんだろうな）

少なくとも横島は何時までも人間としている事は出来ないだろう、横島は既に人なざる領域に足を踏み入れている。

「まあ、横島は居ないが、遊びに来たんだ。茶でも飲むか？」

「和菓子か？和菓子ならば貰おう」

「せ、折角だから頂くのだから」

「……横島君の周りって女の子ばかりですよ、私もですけど」

人外ばかりを集めるのは横島の人柄か、それとも人外になりかけていることで周りの人外を集めているのか……

（いや、無粋……か）

横島の朗らかな人柄が様々な物を引き寄せている。そう思う方が良いと思う、私もその一人になってしまっているのだから、そう思いたいと心から思うのだった……。

くフォーティス視点く

東京タワーの展望台の上に腰掛けるフード付きのローブを纏った

男「フォーティス」は強風の中にいるとは思えないほどの穏やかな顔で豪華な装飾の施された本を捲っていた。

「……さて、私にやれることはやった」

自身の能力とそしてこの本を使い、必要な物は全て用意した。だがその全てが十全に稼動するかとと言うと、流石の私も自信はなかった。「運命は簡単に形を変える。だがだからこそ、こうして介入できる」

ルイ・サイファーに言われたが、正にその通りだ。何度世界を壊した事か、何度慟哭の叫びを上げた事か……だがそれでも私は止まれな、立ち止まりたくは無いのだ。その為だけに、私はこうして再びこの世界に足を踏み入れたのだから……。

「……憎くもある、それでも私には必要な力……か」

読んでいた本のページを捲ると白紙だったページには6つの文章が増えていた。

「……道は増えた。だがそれを選ぶは私ではない」

真に定められた道は2つ、しかし今は6つの道が作られた。だがそれは決して、平坦な道ではない。決して幸福に溢れる道ではない、だが決して救われることの無い2つの道よりは可能性が増えた事は喜ぼう。決してそれが少なくない対価を持ったとしても、それでも選べる選択肢が増えたことは喜ばしいことなのだ。

「選択の時は近い、どうか悔いなき選択を」

指し示された道は6つの道。

- 1つは破壊者となり、己を失う道。
  - 1つは神の器となり、支配と言う名の救済を齎す道。
  - 1つは護りたい者を護る事も出来ず、共に死ぬ道。
  - 1つは命を削り、短い仮初の平和を愛する者と生きる道。
  - 1つは従属を誓い、支配の下で生き続ける道。
  - 1つは誰からも忘れ去られ、大切な者達に平和な世界を残す道。
- 誰も知らない所で運命の歯車は回り始めているのだった……。

外伝リポート 平安大魔境へ続く

## トトカルチヨ 絶対に興奮してはいけない横島家2 4時 朝編

トトカルチヨ 絶対に興奮してはいけない横島家2 4時 朝編  
〜蛍視点〜

普通に家にいたはずなのに、気が付いたら映画館みたいな場所にいた。何を言っているか判らないと思うが、私が一番混乱している。

「……………は？」

「あれ？なんで私こんな場所に？」

「……………なんでしょうね、物凄く寒気がするんですけど」

「zz…………zzzz…………」

「おーい、起きろー？駄女神ー？」誰が駄女神ツ！……………つてここ何処なのかわ？」

わいわいと一気に回りが騒がしくなって振り返ると、くえすと琉璃さん、それに小竜姫様とネロ、そしてリンと偽名を名乗ってるエレシユキガルの姿があった。統一性も関係性もない、強いて言えば人間でもない面子が6人集められていると言うことに困惑していると急に周りが明るくなり、思わず手で顔を隠した。

「やあ、よく来てくれたね。ま、私が召喚したんだけどねツ！はは」

……………物凄く聞きたくない声が聞こえた。手をずらして声の主を見て私達は絶句した。青い清楚ともとれるワンピースに、白い日傘をさしてニコニコと笑う絶世の美女……………だけど、その身に纏う覇気は神魔を完全に超えている。

「お？明星か？余と女神を呼んで何の用事だ？」

「ちよつと面白い事を思いついたのさ、まあ立ち話もなんだから座るといい」

心の底から座りたくない。だけど、座らないと何をされるかわからないのでびくびくしながら椅子に座る。

「いやね。私ほど長く生きていると退屈と言うのが嫌いでね。それで何か無いかなと思っていたら、面白いのがあるじゃないか。そう、横

島君だ」

……なんで横島はこういうやばい人にばかり目を付けられてしま  
うんだろう？ 私だけではなく、琉璃さんやくえすも遠い目をしてい  
た。

「最初は横島君の精力をちよいちよいとして、君達に逃げて貰おうか  
と思っただけけど……」

そのちよいちよいは確実に絶対に駄目な奴だと思う。捕まったら  
無理やりとかありそうなんだけど……。

「まあ君達を傷物にしたと知ったら横島君が自殺しそうなのでやめ  
た」

止めてくれてよかった。GOを出す前に1回考えてくれる人でよ  
かったと心の底から思う。

「でもそれだと私の退屈を紛らわせる事が出来ない。さてどうするか  
とおもって思いついたのがこれだ」

ルイさんが指を鳴らすとスクリーンが下りてきて、カウントダウン  
の後ルイ・サイファアプロジェクトと言う文字が大画面一杯に踊る。

(最上級神魔って皆こんな感じ?)

お父さんで知っているつもりだったけど、私は本当に知っているつ  
もりだったのかもしれない。この訳の判らない感じは私には理解出  
来ないと思う

「絶対に興奮してはいけない横島家24時と言う企画だ」

「」「」「どういう企画!」「」「」

何!?何をどう考えたらそんなアホみたいな企画名を思いつくのは  
教えて欲しい。

「ヒヤクメが良く横島君を盗撮しているの、彼女の身の安全を確保  
する約束で24時間横島君の周りを見て貰おうという企画だよ」

……普通なのかな? 24時間横島君を見ているだけって事なのかし  
ら? いや、それはそれで問題があると思うんだけど……。

「で、君達は横島君を見て、一定以上の心拍数を超えたら興奮している  
と言う事でおしおきだ。尻を神通棍で叩く」

「」「」「なんで!」「」「」

どういう理屈なのか判らない、なんで叩かれないといけないのか謎でしかない。

「そりゃあ勿論乙女としてどうかと言う反応をするであろうシーンを厳選して流すからね、言い換えれば誰が一番ムツツリかって話だよ」  
なんだろう、凄く失礼な事を言われているはずなのに何か納得している自分がいる。

「まあ平常心を保てば良いって事ですから」

「それに逃げれる訳無いですしね」

「面白そうではないか」

「……私、こういうの嫌なんだけど……」

まあ普通にしていればお尻を叩かれるなんてことは無い訳だし……いや待つて何で納得しかけてるのよ私。

「あの神通棍なんかでお尻を叩かれたら大変なことになると思うんですけど」

「大丈夫。物凄く痛いけど、後遺症も後も残らないさ。君達が淑女としての嗜みがあれば、可愛い横島君を見て終わり、そう言う企画だよ」

まあ私は殆ど毎日横島の家に通っている訳だし、泊まる事もある。だから多分叩かれる事は無いだろうし、ルイ様から逃げるのは不可能だと諦め、私も席に腰掛ける。

「納得してくれた様で何より、では最高画質、最高音質で楽しんで行くじゃないか」

でも私は無理だと判っていても逃げるべきだったのだ。あの愉悦魔人のルイ様が見たいのは横島ではなく、叩かれる私たちであると言うことに気付いた時にはもう何もかもが手遅れとなった後だったのだから……

く琉璃視点く

ルイさんに拉致された。神魔の中で一番やばい存在を聞いていたけど、まさか突然こんな事をするなんて思っても見なかった。

(なんて頭の悪いタイトル)

絶対に興奮してはいけないとか、神魔って実は暇なのかしらと思っ  
ているうちに大画面に映像が映し出された。

「……蛍ちゃん、横島君っていつもこんな風に寝てるの?」

「……殆どそうですよ?」

ベッドの周りに増えたうりぼーとチビノブが鼻ちようちんを作っ  
てる。ベッドサイドにはチビが寝ている籠が置かれていて、心眼がそ  
の隣に畳まれている。

「これで熟睡できるとか凄いですわね」

「……平常心の修行ですね」

「いや、それはないだろ」

ベッドの周りにもいるのに、ベッドにもぐりこんでいるうりぼーと  
チビノブ。なんでこの状況で寝れるのは不思議で……。

『エレシユキガルアウトー』

「え!?ま、まつ!?いったあツ!?め、めちやくちやいたいのだわツ!」

黒子が出てきて神通棍でエレシユキガル様のお尻を神通棍でフル  
スイングで叩いて行った。え、あんなにフルスイングなの……と言う  
か、エレシユキガル様は一体何に平常心を乱されたの?

「横島が可愛かったから……」

そう言われて画面を見ると幼い子供のように安心しきった顔で横  
島君は寝ていて……確かに可愛い。

『琉璃、くえす、アウトー』

「はあツ!?ちよつやめ、いったあツ!」

「ひうつ!」

黒子出現からフルスイングまでの時間差が余りにも早いツ!身構  
える隙も無く叩き込まれた。

「……いっつう……なんて痛みですの……」

「うう、悪意を感じるわね……」

横島君を可愛いと思ってしまった瞬間にフルスイング。信じられ  
ない痛みだ、こんなのが続くと思うとぞっとする。

『……横島、そろそろ起きろ』

『いやあ……もつとねうう……』

『全員アウトー』

私達6人の悲鳴が重なった。今のは駄目だ、強力すぎた。なにあの舌足らずな感じ……あんなの可愛いと思うに決まってるじゃない!? (逆切れ)

『……ランニングとチビ達の散歩があるだろ?』

『むみゆうー……』

『くえす、琉璃、小竜姫アウトー』

『いっつううッ!?』

『いったあッ!?これ本当に跡残らないのッ!?』

『きやうッ!』

ベッドでタレパンダみたいになっている横島君の奇妙な鳴き声に男の子なのに可愛いと思つた瞬間、私は再び神通棍でお尻を叩かれていた。始まって数分で3回も叩かれた。その痛みと予想以上にこちらの平常心を揺さぶってくる映像の横島君に私は恐怖で身を震わせるのだった……。

く小竜姫視点く

琉璃さんとくえすが凄いハイペースで叩かれていますね。でも確かに無理は無いのかも、元々横島さんは愛嬌のある顔をしています。寝起きでぼんやりとしている横島さんの姿は輪に掛けて可愛らしかった。これにはときめいてしまうのも無理は無い、と言うかヒヤクメを脅してそう言う場面ばかりを厳選したのが実に良く判る。今は横島さんが首からタオルを下げてランニングをしているので特に興奮する事も無く、横島さんが真面目に頑張っている所を微笑ましい気持ちで全員が見ていた。

「ヒヤクメが何をしているのか問い詰めたいですわね」

「普通に盗撮だからね」

「でもルイさんが保護してますからね」

滅多に横島さんに会えないヒヤクメはその能力で横島さんの盗撮を良く行っている。でもこうして映像で記録したのは初めての事だからきつと疲れているだろうなあと思っていると横島さんが帰宅す

る。

『ただいまー』

『お帰り、タオル用意してあるわよ』

『ありがとな、タマモ』

横島さんが玄関に腰掛けて、チビとうりぼーの足を拭いている。くすぐったそうに身を振っているが、逃げる事はせずに大人しく横島さんに足を拭かれたチビとうりぼーはてけてけーっとりビングへと駆けて行った。

「自由だなあ、まあ可愛いから良いが」

「ちなみにそれはどっち?」

「どっち? 勿論両方だッ!」

魔人姫と冥界の女主人までこの場に参加している事に内心ドキドキしながら、余り叩かれずに終わりたいなあと心から思う。興奮と言うと変態と受け取られてしまうが、平常心を乱してしまうという事がアウトかセーフの基準になる筈だ。

「横島君は可愛いからねえ、見ているだけでも面白い」

どうかお願いですからそのまま見ているだけにしてください、貴女が動くトンデモナイ事になるので本当に見ているだけにしたい。

『……お風呂入れてあるから、汗を流して来い』

風呂!? シズクさんの口から出たまさかの言葉に一瞬ドキリとし、その直後に全員アウトの音が響いた。

「いったあ!?!」

「つうっ!」

「ううっ……」

「ひっぎっ!?!」

「あたあッ!?!」

「っあっ!?!」

あれ絶対何かおかしい仕掛けがされてる。神魔でもこんなにいるとか本当にありえない。

「くすくす」



苦しむ私達を見て笑ってるルイ様にイラツとするがそれを必死に我慢している中。映像の横島さんは風呂場に向かつて行き、当然盗撮されているなんて思っていないわけで服を脱いだ

『エレシユキガルアウトロー』

「こ、こんなの無理なのだわッ!?!」

スパーンつと言う音とエレシユキガルの声が響く、上着を脱いだ横島さんの腹筋はそこそ割れていて、汗をかいていることもあり健康的な色気に満ちていた。

『全員アウトロー』

そして再びスパーンつと神通棍の振るわれる音が響く。い、痛すぎる……こんなのが後何十時間も続くとか地獄でしかない。そして横島さんの手がズボンに向けられた時。

『小竜姫 くえす、琉璃、蛍、ネロ 猿キツク』

「「「はい?」」」

一瞬何を宣告されたのか理解出来なかった。こうなったらせめてと思つて画面に目を向けるが見せられないよ?と言う看板を持っているルイ様のイラストが画面に展開されていて凄くイラつとした。そしてライトアップされて舞台袖から老師が姿を見せた。

「いやいや!?!老師ッ!?!」

「……暴れるな。余計痛くなるからな」

何で老師がこんな所に参加してるんですかあと叫ぶ、と言うか老師に蹴られたら死にますよッ!?!

「アダルトな要素で興奮したらお仕置きはハヌマンキツクになるんだ」

「「「先に言ええッ!!」」」

いや知つていてもあんな思わせぶりな所を見たら興奮するけれどッ!?!せめて身構える時間が欲しかった。

「はう……」

エレシユキガルはオーバーヒートして顔が真っ赤で気絶している。

「あれは!?!あれはセーフなんですよ!?!」

「気絶は判定の結果セーフ」

いやいや、あれ絶対興奮しすぎて脳がオーバーヒートしてるんですよ。絶対アウトですつとて叫ぶが黒子に拘束され、老師がタンタンと片足でリズムを測る。

「煩惱退散ッ！」

「~~~~ツ?!?!?」

ズドムと言う重い音を立てて、老師の回し蹴りが私のお尻を捉え、次々と声にならない悲鳴が重なりたた打ち回る音が重なっていくのだった……。

くくえす視点く

ハヌマンの蹴りで下半身が爆発するかと思いましたが……。痛いとの差恥心とこんな企画を考えたルイに怒りを覚える。

『はい、あーん』

『みーむう♪』

『びぐー!ぶぎぎーツ!!』

『はいはい、うりぼーもな』

ただまあ、普段見れない横島のぼんやりしている部分を見れるのはいいので、この怒りは飲み込もうと思えますけれど……。

「全然ご飯食べてないのかわ」

「横島の場合、自分のご飯よりまずチビ達ですからね、ちよつと冷めてからになるんですよ」

楽しそうに鳴いて横島の周りを跳ねているチビ達。横島から小さく切った果物を貰って本当に嬉しそうだ。

『エレシユキガルアウトー』

『いったあッ!?なんで私ばかり!?!』

興奮する要素はなかったと思うんですけどね……横島が可愛すぎたという所でしょうか?

『ご馳走様でしたー』

『……ん』

少し遅めの朝食を食べた横島はそのままうりぼーを抱きかかえて、その前足を抱え込む。

『うーりうりぼー、うーりうりーうりぼーだ』

『ピッグーピグー』

『ノブー♪』

『みっみっむー♪』

調子外れの歌に合わせて踊るチビ達。なんでしょうね……何か怪しい儀式の現場に見えなくも無いのですが……

『エレシユキガルアウトー』

「だわッ!？」

またバシーンと叩かれて、奇妙な悲鳴をあげるエレシユキガル。耐性の低い相手がいるから、自分に飛び火しない事に安心する。

『風精招来』

『ぴぎー♪』

「「「何してるの!?!」」」

『蛍、琉璃、くえす、小竜姫アウトー』

横島が陰陽札を貼り付けてうりぼーを飛ばすのを見て、思わず叫んでしまったのですが、そこで叩かれるとは解せませんわね。

「うつつつ……乙女をこれだけほんぽん叩くとは……」

「……しかもいたいのは一瞬だけって所を氣遣うくらいなら叩かないで欲しい」

尾を引かない痛みと言うのは良いですが、いえ、やっぱりこれだけお尻を叩かれる怒りを覚えますわね。

『おー♪』

『ぴぎー♪』

『全員アウトー』

「「「「こんなの無理ッ!?!」」」」

ふわふわと浮くうりぼーの上に跨って子供のように弾ける笑顔の横島を見たら、ときめくに決まっている。

『……あんまり飛ばすなよ?』

『せんせー、拙者も乗りたいでござるよー』

……横島の家が魔窟って言われているのは間違いないくうりぼーを飛ばしているからに違いない。何回目になるか忘れた臀部に走る激

痛に顔を歪めながら、いま自分がこんなに痛い思いをしているのも何もかも横島が可愛いのが悪い。

(……無防備で警戒心が無いのが悪い)

そもそもこんな悪い魔女を良い人と言って疑いもしない、それがどんな結果を齎すのか、それをいつか教えてもいいかもしれない。

『くえす、アウトー』

「つつうつつ！ これ絶対へんな魔法使ってますわよねツ!？」

再び走った激痛にそう怒鳴り声を上げる。まだ2時間も経っていないのに、とんでもない回数を叩かれている。これからもつと自分の平常心を揺さぶられる光景が続くかもしれない、椅子に座りなおしながら額に浮かんだ冷や汗を拭う。それは奇しくも、小竜姫や蛍も動揺なのだった。

「お昼からはもつと可愛くなるよ」

叩かれないのならばゆつくり見たいと思うのですが、罰ゲームと隣り合わせ、しかもハヌマンキックが控えていると言う地獄はまだまだ始まったばかりなのだった……。

と言う訳で今回は

蛍 5

くえす 8

琉璃 7

エレシユキガル 7 (疑惑の判定1)

小竜姫 6

ネロ 4

と言う結果になりました。疑惑の判定1なので「くえす」「エレシユキガル」と予想してくれた方が正解となります。ネロ様が圧倒的に少ないのは、バビロンの大淫婦ですから生半可なことでは動揺しないと言う事ですね。蛍は横島家に入りびたりなので同様少な目、もつとも耐性の低いエレちゃんや笑顔の裏で牙を剥き出しにしているくえすが一番回数が多かったと言うことになります。

今回の当選者は

エレシユキガルを予想した

「鳴神 ソラ」様

「自墮落狐」様

そしてくえすを予想した

「イメクト」様

「アークス」様

「アラッチ」様

の5人となります。この5名様には後日リクエストの件に関してこちらからメッセージを送らせていただきます。

そして続けてトトカルチヨ第二弾を開始します次回は

お昼寝横島君

お昼ごはん

来訪者ズ

の3つで、今回の結果に加えてこの3つでどれだけ虫達が平常心を保てるかどうかと言う事です。キャラ崩壊などがありますが、次回も続けてトトカルチヨになります。次回はもう少し小説形式でも話を長くしていこうと思いますので、次回の『トトカルチヨ 絶対に興奮してはいけない横島家24時 昼編』までの一週間の間に投票もよろしく願います。

## 第231話

トトカルチョ 絶対に興奮してはいけない横島家24時 昼編

くルイ視点く

自分で考えたけど、これは思った以上に面白い。こんなにも面白いと思っただのは数億年生きてきた中でも数えるほどしかない。

『ののーノブー』

『上手上手』

前回りしているチビノブの前で手を叩いている横島。その姿はどこからどう見ても父親か保父にしか見えない、しかしグレムリンや神獣をあそこまで羨んでいるのを見るとブリーダーも天職なのかもしれないね。

『エレシユキガル アウトー』

「んぐうっ！」

そして冥界の女主人の耐性が低い、確かにヒヤクメに盗撮させて、可愛いとかそう言うシーンを厳選したつもりだけど本当に脆いね。

『みみーむう、みみーむう』

『あいあいつと』

小指にじゃれ付いているチビと遊んでやっている横島。アウト判定を貰っているのはエレシユキガルだけだ、これはちよつとしたインターバルのつもりだったんだけど……予想以上に耐性が低い。

(じゃあ、そろそろまた動かして行こうかな)

蛍達は確かに横島の事を良く知っていると思う。だけど、横島が家にいる時にどんな風に過ごしているかまでは知るまい。私も驚いた横島の恐るべき人外キラの力を見て驚愕するがいい。

くネロ視点く

明星のせいで酷い目に合った。よりによって、余の尻を叩くとは……これは本来ならば許さない案件なのだが……。

『よしよし』

横島がとても可愛いので許そうと思う。これは確かに見ていて面白い光景だと思う。

【横島くーんッ！私が来ましたよー】

『沖田ちゃん、いらしゃい。今日の除霊は終わったの？』

【勿論です、ちゃんとお給金でお土産も買ってきました】

なんか知らない幽霊だな、しかも横島に随分と馴れ馴れしい気がする。

「あの幽霊、横島の家で随分と入り浸ってるみたいですよわね」

「気が付いたら居るのよね」

「除霊しましょうか」

「いや、止めてよね？彼女結構役に立ってるんだから」

蛍とくえすがあの女剣師の幽霊を除霊すると口にして、琉璃がそれを止める。そんな光景を横目にしながらスクリーンを見て

「ああ!?!」

『ネロ、小竜姫 アウトー』

「あいたあッ!」

「ひぎいっ!?!」

バシーンと言う音が響き、また余の尻が叩かれた。絶対怪我をしないと聞いていても、やはり面白い物ではないし、何よりも痛い。

【今日もねー、沖田さんは頑張ったんですよ?】

『うんうん、偉い偉い』

「……あの幽霊、やっぱり除霊しましょう」

「そうですね。あれは横島に害しかありませんわ」

「……止めて、ちょっと悩んでる自分が居るから止めて、お願いだからそう言う提案しないで」

横島が何故か女剣士に膝枕をして、慈愛に満ちた表情であの女幽霊を褒めている。正直、ちょっとあの膝枕が羨ましいと思ったのが叩かれた原因だと思う。

【やっぱり疲れたときは横島君ですね。絶対横島君は私を否定しませんから】

『否定されると悲しいからなあ、それとやっぱり褒められると嬉しくなるしな』

【褒めて肯定してくれる横島君マジお父さん】

『俺まだ未成年なんだけどなあ』

確かにその通りだろう、横島の方が年下の筈なのに、父性を感じている女幽霊……ちよつと、いやかなり性格に難があると思う。

「「末期だな」」

しかも変態のレベルがかなり末期だ、横島の身の安全の為にも除霊したほうがいいのかもしれない。

『ふぎいッー』

【ふぎやあッ!!】

しかし横島の優秀なセコム「うりぼー」がその頭に噛み付き、膝の上から引き摺り下ろして横島の膝の上に丸くなる。

『こら、そんなことしたら駄目だろ?』

『ぴーぎゆう』

横島に怒られているが不満そうなりぼー、あやつからすれば守ったつもりなので怒られるのは面白くないのは当然だな。

【あいたた、大丈夫ですよ、またお仕事ありますし、お土産を届けに来ただけですから。では！行ってきます】

『行ってらっしゃーい』

横島に手を振られ見送られた女幽霊は明らかに頬を上気させて、上機嫌で駆けて行く。横島は生きていても死んでいても、人を魅了するかなんとも罪深い男だ。

『ぴぐぴぐ』

『あれ?もういいの?』

女幽霊が見えなくなるとうりぼーは膝の上を降りて机の上で遊んでいるチビの元へ向かう。昼寝をしたかったわけではないので、女幽霊がいなくなれば横島の側を離れるのは当然か……。

「暫く東京に戻れないくらいの仕事はどうですかね?」

「あれ駄目ですよ、そのうち横島喰われます」

「……ちよつと考えて見ますね」



あの女幽霊の目には隠しきれない情欲の色が合ったな、今はまだ大丈夫そうだが……そのうち横島が危ないかもしれない。

『大丈夫ですよ、ルキさんは頑張ってますよ』

『でも私が無能だから』

『そんなこと無いですよ』

横島と誰かの会話の声が聞こえてきて余達が顔を上げると同時に全員アウトっと言う声が響いた。

「あれは駄目でしょうッ!? いだあッ!」

「セクハラ! 1000%セクハラアアッ!」

「あっち! アウトなのはあっちいいッ!」

「あれは許されないと思ううッ!」

「へ、変態なのだわあッ!」

「ふぎいっ!」

さっきの女幽霊は仰向けで横島の膝に寝転がっていた。だが新しい相手はうつ伏せで横島の尻に手を回すように寝転がっていたルキフグスは確実にアウトだと思う。

「……ちよつと自分の部下が初めて心配になったかもしれない……」

明星も神妙な顔をしているが、そんな顔をするなら最初から送り出すなど言いたい。

『私大丈夫ですかね』

『大丈夫ですよ、ルキさんは頑張ってますよ』

すーはーすーはーって音が聞こえる。やばいこれはかなり上級者の変態だ……あんなの見たことないと思わずドン引きする。

『俺は凄く助かってますよ?』

『横島さん……はい、頑張ります。これからも頑張れると思います』

言っている事は前向きなのに、まだ横島の膝にうつ伏せとかありえない。

「……もしかして弱気だと横島って全肯定して励ましてくれるんですかね」

「え? 絶対に否定しないで励ましてくれる横島君? 良いんじゃない?」

『琉璃アウト』

「あーっ！ツ!!」

「……なにやってるんですのよ……でも確かに励ましてくれる横島かも知れませんか」

「え？私もしかしたら励ましてくれたりするんですか？アレだけ優しい声と手付きでツ!？」

『小竜姫 アウトー』

「ちよつと考えただけなのにいつ!？」

なお後日、横島の家を訪れた小竜姫が少し弱気な態度を見せると、横島は全肯定して励ましていた。絶対に否定しない横島と言うのは本当の事だったようだ……。

くエレシユキガル視点く

横島の家を訪れている変態の存在が明らかになった後。私達は地獄に陥っていた……

『小竜姫 アウト』

「ひぎゆう!」

『蛭 アウト』

「無理いッ!!」

『くえす アウト』

「ふっぐう!？」

『ネロ アウトー』

「いやいや!? これは駄目えッ!!」

『エレシユキガル アウトー』

「ふっぎい……」

『琉璃 アウト』

「叩くなら叩けばいいでしょうッ!？」

ひっきりなしに叩かれている。その理由はあそこでニマニマしている明星が原因だ。明星の魔法が凶悪すぎたのが原因だ。

「いいだろ？チビ達と視界共有するの」

「」「良いけど、良くないッ!」「」

『全員アウトー』

「「「「あーっツ!!」」」」

痛い……痛すぎるのだわ……もうお尻の感覚が無くなってきているのだわ……。

『のー』

「はい、あーん」

『のーぶう♪』

スクリーンに映る映像ではない、横島の顔が目の前にあつて口にスプーンが向けられ、優しい笑みを向けられる。そしてちゃんと野菜を食べられると頭を撫でられる。幼子にする反応だが、それが妙にこう……ドキドキしてしまうのだ。

『小竜姫 アウトー』

「本当無理ですってえ!」

『蛭 アウトー』

「もういやあッ!」

本当に代わりばんこに叩かれている。なんなら同時にも叩かれているのだ。

『みーむうー』

『はい、あーん』

『蛭、琉璃、ネロ、アウトー』

「「「ひぎいッ!!」」」

自分に向けられたものではないと判っている。判っているのだが、余りにも横島の顔が近いのと食べ終わった後に頭を撫でられる感覚に興奮を隠し切れない。だけど、子供じゃないという自尊心がギリギリの所で私を踏み止まらせてくれていた。

『のー』

『いやいやじゃない、はい、あーん』

『ノブウ』

『あーん』

『のー……』

『偉い偉い、ちゃんと食べれたな』

『全員アウトー』

「「「叩くなら叩けえツ!!」」」

もう半分逆切れで私達はそう叫ぶのだった。なお食事が終わるまでの15分間で全員が少なくとも4回は叩かれたことをここに追記したいのだわ……。

く 琉璃視点く

悪辣な横島君の日常ばかりを見せられていた。正直言って、尻の感覚はもう無い。絶対これ後遺症があると確信しているのだが……

『全員アウト』

「「「ふぎゆう……」」」

もう殆ど奇声になってる。それくらい痛みが重なってきている……これは正直やばいのもかもしれないと自分でも思ってきた。

『ふぎゆうー……』

『よし、こんな感じだな』

巨大化したうりぼーに埋もれるようにして庭で昼寝している横島君。邪気とかそう言うのが一切無い、子供のような顔だ。

『小竜姫、琉璃 アウトー』

『いだあッ!』

『うぎゅ……』

上手く言葉に出来ない充実感と見ているだけで幸福な気持ちになる光景で尻を叩かれる。もう、悪夢じゃないかなと思いはじめた。「大丈夫だよ、昼寝をしている横島だけでこれは終わり、お昼休憩までもう少しだよ」

その間は叩かれないと聞いているけど、それでも蓄積した疲労と痛みは絶対に抜けないと思う。

『ノブ』

『おいでおいで』

そして横島君がチビノブを抱っこして昼寝をするんだけど、悪辣な

事にやっぱり抱きしめられた感覚とぬくもりを感じた。

『全員アウトー』

「……止めろおッ!」

どうしたらこんな悪辣なゲームを思いつけるのが謎でしかない。本当に心の底から早く終わって欲しいと思っている、もうこれ以上可愛い横島君は……見たく、見たく……やっぱり見たい。

『琉璃 アウトー』

「判ってましたよおッ!」

駄目だ、自分の欲望に勝てない。と言うか、私ここまで横島君を好きだったのかと自分で自分にドン引きするわ……。

『……寝たか』

横島君フアミリーが全員寝静まった頃にシズクさんが庭に出てきて、横島君が抱きかかえているチビノブをゆつくりと腕から引き離す。

『……よし』

『全員アウトー』

「……何が良しかアッ!」

チビノブを退けて、自分が横島君の腕の中。しかも抱き合う形で満ち足りてよしと言っているの、思わず怒りで叫んでしまったが、怒りで叫んでも興奮と認定されるとか納得できないにも程がある。

「え、シズクやばくない?」

「普通にやばいですわね」

「……横島君、神魔に魅入られすぎじゃない」

「……清姫様が居なくて良かった」

「子供と大人形態を使い分けるとかレベル高いなあ」

「……はわわわ……凄いことになっているのだわ」

シズクさんは横島君からの信頼も厚いけど、これは普通に肉食。これ横島君油断していると喰われるんじゃないかと心から心配になった。

「面白かったね、じゃあ私達も休憩だよ。お昼ごはんにしようか」

休憩だよとニコニコと笑うルイさん、でもこのゲームはまだまだ続く。しかも朝よりもひるのは過激になっていて、この調子で夜の横島

君の映像は大丈夫なのかと私は不安になりながら、短い休憩時間に入るのだった

と言う訳で今回は

蛍 9

くえず7

エレシユキガル 8

琉璃11

ネロ 9

小竜姫 11

と言う事で今回は琉璃さんと小竜姫様と言う事で

琉璃さんを予想した

応龍様

イメクト様

自堕落狐様

そして小竜姫様を予想した

博神和人様

の4名様のご当選となります！ 今回もご参加ありがとうございます！  
す！

次回は散歩・お風呂・就寝の3つでお送りしたいと思います

蛍達が平常心を保てるかどうかと言う事ですね。キャラ崩壊などがあります。次回も続けてトトカルチョになります。次回はもう少し小説形式でも話を長くしていこうと思いますので、次回の『トトカルチョ 絶対に興奮してはいけない横島家24時 夜編』までの一瞬の投票もよろしくお願ひします。

『トトカルチヨ 絶対に興奮してはいけない横島家2  
4時 夜編』

『トトカルチヨ 絶対に興奮してはいけない横島家2 4時 夜編』

（琉璃視点）

横島君が神魔や人外に好かれることは判っていた。いや、正しくは判っていたつもりなんだと改めて思い知らされた。

（好かれてるんじゃないなくて、愛されているんだわ）

人ならざる者に愛される性質……それがきつと横島君の特徴なのだと思う。

『……………』

（（（絶対マーキングとかされてる）））

シズクさんの怪しい笑顔を見て私は、ううん、きつと全員が確信した。夕暮れの少し前にシズクさんは横島君の腕から抜け出して、チビノブを再び抱きかかえさせて証拠を完全に消し去り、立ち上がると同時に邪悪さを隠しきれない笑みを浮かべたのだ。

「蛇だからね、執念深いよ」

笑えないんですけど……ルイさんは爆笑しているけど、私達からすれば全く持つて笑えない話だ。清姫様も相当やばいけど、シズクさんも相当やばいというのが良く判る。

「でも大丈夫さ、彼女の恋愛感は平安時代だからね」

「まあ妻が多いのは良い男である証拠だからな！」

……平成の人とは余りにも価値観が違いすぎる。昔はそれで成立したんだろうけど……私達からすれば複雑でしかない。

「……妾がいてもいいけど、自分が妾なのはちよつと」

「複雑なのだわ……自分が正妻が良いのだわ」

……なんで横島君に複数の妻って方向に進んでいるんだろ？やっぱり神魔って何を考えているのか判らないわ。

「……………」

「いや、なんでそこで悩んでるの？」

「……道が多いほうがいいじゃないですか？」

「あ、私は違います」

私と同じ考えを持っているのが蛍ちゃんしかいなくて、私は酷く複雑な気分になってしまふのだった……。

『……気をつけて』

『はーい、よっしゃあ、行くぞ』

『みむー♪』

『ぴっぎー♪』

『ノツブー♪』

『散歩でござるー♪』

『エレシユキガルアウトー』

「ひうつ!?!」

……流れで叩かれたわね……本当に横島君が可愛いってだけでエレシユキガル様の叩かれている回数が尋常じゃなく多い。

(でもなあ、可愛いよね)

子供のまま大きくなったような……純粹無垢とでも言うのだろうか?とにかく横島君は可愛いと思う。

『小竜姫、琉璃、アウトー』

「ですよねえッ!」

「いっつうッ!?!」

駄目だわ、私も小竜姫様も可愛い横島君に勝てないかもしれない。もう感覚の無くなってきた臀部に私はそれを受け入れてしまいそうになった。

「……」

「……」

(がッ!)

そして恐らく自分と同じ事を考えている小竜姫様とアイコンタクトをかわすだけで、お互いが何を考えているのかを理解し、その手を互いに強く握り締めるのだった。



（蛍視点）

琉璃さんと小竜姫様が何か悟ってしまったている。それに何か強烈に嫌な予感がしたが、私がそれを口にするには無かった。言うべき事ではないと思っただからだ。

『はいはい、ほいっと』

『わおーん♪』

『エレシユキガル アウトー』

『だわツ!』

相変わらずエレシユキガルさんの耐性は低いけど、シロはシロで何をしているのだろうか？

「横島もシロも何を考えているんですの？」

「多分何も考えてないと思うわ」

考えるよりも先に行動と言うのが横島とシロだ。遊んでいるうちにフリスビーを使った犬の芸に興味が移ってしまったのだと思う。

『そー……ふぐう』

『……ぴぎゆう?』

『だ、だいじょ……あ、ごめん。無理、中身出る、どいて……』

『「」……何やってるの?』

アウトには誰もならなかったが、うりぼーも横島の背中からジャンプしようとしたが、横島がその重量に耐え切れずに崩れ落ちた。

『よーしよーしよし、うりぼーが悪いんじゃないからな』

『ぷい』

『琉璃アウトー』

『……なんでここで』

うりぼーの顔を抱きかかえるようにして頭を撫でていた横島を見て琉璃さんが叩かれた。琉璃さんも困惑してるけど、私達も困惑している。

『小竜姫アウトー』

『……つつー!』

そして小竜姫様も叩かれた。どうしてそこに興奮する余地がと

思っただけけど、小竜姫様の言葉に全員アウトーの声が上がった。

「あれだけわしゃわしゃ撫でられるとかいいなーつと」

「……」

弾ける笑顔でうりぼーとチビノブを撫でまくっている横島。確かに滅多に見えないというか、殆ど見たことが無い。チビ達しか見ない笑顔だと思ふ、あんな顔を向けられると確かにきゅんとしてしまうかもしれない。

『全員アウトー』

「……ひぎいッ!?」

乙女らしかぬ悲鳴が口から飛び出す、でもそれだけ痛いのだろうかしょうがないと思つて欲しい。

『のーぶー』

『上手だぞー』

『ノッブ♪』

夕暮れの中公園で思ふ存分遊びまわる横島達。それを見て平常心、平常心と心の中で何度も呟いていたのだが……。

「横島は良い父になりそうだな」

『ネロアウトー』

「しまつっうッ!?!」

『蛭、琉璃、小竜姫、エレシユキガル、くえす、アウトー』

「……いたいッ!!」

誰かが遊んでいる横島を見て呟き、その呟きで想像してしまい連鎖的に叩かれるという自体が続き、結局横島が帰宅する1時間の間に全員が3回ずつ叩かれてしまうのだった……。

くくえす視点く

横島の日常を見ているだけなのに、こんなにも平常心を保てないというのは私としてもとても予想外でした。

(惚れた方が負けと言うのは本当なんですわね)

何をしていても、どんな過ごし方をしていても心を惹かれてしま

う。恋は惚れた方が負けとは言うけれど、まさにその通りなのだと思います。

『ただいまー』

『……夕食の準備をしているから、その間に風呂に入って来い』

シズクに言われて風呂場に向かう横島、ルイがにやにやしているけどこれでまた興奮するとかそう言うのを見て遊ぶつもりなのだと思います、極めて冷静に務めていたのですが……。

ばおーん

「「「「え?」」」」

「嘘」

思わずスクリーンを2度見した。朝みたいに見せられないよとか言う看板は出てなくて……。

ばおーん

「「「「!!?!?!?!」」」」

私達が状況を認識し、耳まで真っ赤になった段階で「放送事故」と言う看板を持ったデフォルメされたルイの姿が映し出されたが、時既に遅しだった。

『全員猿キツク』

「……これは私も受けるべきかもしれないね」

「……どういう状況なんじゃッ!?!」

困惑しながらも全員の尻に蹴りを叩き込んでいくハヌマンを私は絶対に許さない。

「「「「……」」」」

既に画面は消えているが全員沈黙である、横島の横島が凄すぎた。

「彼ってマールラの加護受けてたっけ?」

「……いえ、そう言う記録はないと思いますけど」

「え?素であれ?やばくない」

「私はルイ様の方が危ないと思いますが……」

黒子の1人がベルゼブルだった。あの偶に容赦ない一撃をくれる小柄な黒子の正体が判って、あれは嫉妬とか怒りとかそう言うのだったのだと理解した。

「あれは下手すると壊れるな、こつちが」

「あれで大きくなるんだろ？大変だよ？え、女殺し？」

「落ち着いてください、目が泳いでいます」

『全員猿キック』

「この状況で蹴りに来るんですの!？」

「あーいやいやいや……あーツ!!」

「痛いッ！」

「死ぬ……死んじゃいます……」

「痛いッ！横島の横島がご立派過ぎるから」

「いたいのだわッ!？」

蹴られたネロの横島の横島がご立派過ぎるの言葉に脳裏に先ほどの光景がフラッシュシユバックした。

『全員猿キック』

「無限ループッ！ふぐうっ!？」

「無理無理無理！お尻壊れるッ！」

「あんなの凶器だしいッ!？」

「ひぎいッ！」

「あだあッ！」

「……ッ!?!？」

痛いとかそう言うレベルを超越し始めている、本当に尻が蹴り壊されるかもしれないと思った。

(……いやでも……)

男女の関係になれば夜の生活もあるわけで……。

(死んじゃう?)

恐れもあるが、それ以上に興味があつて……。

『全員猿キック』

「煩惱ありすぎじゃろ……」

ハヌマンが凄く呆れていたが、女であれそれ相応に性欲と言うものはあると言うもので……煩惱退散と言われても先ほどの横島の横島のインパクトがありすぎて、ルイのストップが入るまで全員が5回ほどハヌマンに蹴りを叩き込まれるのだった……。

くエレシユキガル視点く

思い出すだけでも顔が熱くなるのでさっきの事は忘れようと心に誓った。じゃないと横島の顔をまともに見れないと思ったから。

♪

『みーむう……みふー』

『ぶぎゅー』

『はい、そろそろ寝ようなあ』

籠とダンボールの中に入れられるとチビ達は丸くなって眠り始める。これでこの長かった、悪趣味な明星のゲームも終わると思うと本当に安堵した。

『ノブウー』

『はいはい、おいでおいで』

チビノブを抱きかかえて布団の中に入れて、あやしている横島は少年と言うべき年齢なのに父親に見えた。

『琉璃、小竜姫アウトー 猿キツク』

え？なんでいまここで猿キツク!?と驚いていると2人の顔はトマトみたいに真っ赤だった。

「……いや、ちよつとね?」

「……褥に誘われてるかなあつとか」

『小竜姫、琉璃 猿キツク』

「二ですよねえツ!!」

蹴りが叩き込まれ2人の絶叫が響いた、つまり横島の寝床に誘われていると思つて興奮したと……。その言葉を聞いて全員がその光景を連想してしまった。

『エレシユキガルは2回尻叩き、他の全員4回ずつ猿キツク』

「二「理不尽ツ!!!」」

猿キツクよりかは棒で2発の方が全然ましだと思い、すぐ2回叩かれて椅子に腰掛ける。すぐ隣であーっ!! とか悲鳴を聞きながら私は耳まで真っ赤で、顔全体が熱いを感じながら頬に手を当てた。

(いやいや、早すぎるのだわ)

もう少し恥じらいとかを持って、最初はそう手を繋ぐとか……つとそこまで考えた所で気づいた。妙に周りが静かなのだ。

(あれ?)

その時に気付いた、あちこちから寝息が聞こえ既に起きているのは私と女帝だけで、女帝も見えているうちに頭がかくんと落ちて眠りに落ちる。

「…………ふあ…………」

そして私も瞬く間に眠りに落ちていくのだった。意識が途絶える寸前に明星の楽しかったよと言う声だけがやけに脳裏に強く響いたのだった…………。

〜ルイ視点〜

糸が切れたように眠りに落ちた蛍達を見つめて、痛む尻を思わず摩る。

「ちよつと刺激が強すぎたよ」

「…………ルイ様、何やっていますか?」

「いやあ、横島の横島が強すぎたね。これはマールに頼んで本当に捕まったら、ぴーされる鬼ごっこことかも面白いかもね」

「お願いですから止めて下さい」

「精神態だけでも駄目かな?」

「…………駄目です」

マールが関われば精神だけでも大変な事になると判っているからベルゼブルに止められたけど、横島の横島の戦闘力があれほどならば、さぞかし楽しめると思っただけどねえ。

「腹上死でもさせるつもりですか?」

「全部絞りとつてもいいよね」

「止めて下さい、お願いします、本当に心からお願います」

全く面白みが無い部下だ。あの手の男は女を知ると変わるから、それを見てみたかったのにな。

「まあ、今は止めておこう。ベルゼブル、悪いけど皆を元の場所に運ん

「でおいでくれ」

「はい、畏まりました」

「ああ、判っていると思うけど記憶操作も忘れずに」

「心得ております」

今回の事を覚えられていると都合が悪いからね。ベルゼブルにそう頼んで日傘を開いて劇場を後にする。

「さてと、マールかカーマの所に行こう」

横島の肉欲とか性欲をいつでも掻きたてられるようにしておこう、絶対に面白くなる。私はそう確信し、鼻歌を歌いながらその場を後にするのだった。

「風邪引いた?」

「うーん、どうだろう? ちょっと頭が痛いかな?」

「無理しない方が良いんじゃないか? 神宮寺さんとか、小竜姫様も同じ様なことを言ってたし」

しかし蛍は横島を見ると尋常じゃないほどに顔が紅くなるので、記憶を消しきれず、横島の横島の記憶は蛍達の心に深く刻まれたあとなのであった……。

蛍 18

くえす 18

琉璃 18

エレシユキガル 18

小竜姫 18

ネロ 18

3回目は上記の結果になりました。3回めは全員で助平でしたという落ちでした。参加していただけただけで嬉しいので、最後は参加してくれた皆様全員当選と言う形になります。後日私の方から当選した回数分リクエストの受付のメールを送らせていただきます。今回は参加していただきどうもありがとうございました。

ちなみに記憶処理をされていないと横島君がもぐしやあされます  
たのでルイ様の判断は英断でした。それではトトカルチヨへのご参  
加ありがとうございます！次回の予定は未定ですが、またトトカル  
チヨをする際はどうかよろしく願います。